遊戯王Wings「神に見放された決闘者」

shou9029

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこかの世界、どこかの場所、どこかの時間。

古代エジプトから蘇った王もいなければ、宇宙で破滅の光と正しき闇は争ってはいない。

５０００年周期で行われる神々の争いも無ければ、魂のランクアップは起こらなく、そして世界は４つに分けられてはいない。

そんなどこかの世界。しかし、それでも唯一つ、どんな世界においても中心にあって変わらないものがある。

―デュエルモンスターズ。全てにおいて、そこにあるもの。

―これは、他のどれとも違う「遊戯王」の物語。

そんな世界で、出来損ないと呼ばれた少年が、自分の存在を世界に認めさせる為に戦っていく、反逆の物語。

目次

第1章

ep0「プロローグ」 1
ep1「反逆の物語」 4
ep2「当たり前の日常から」 27
ep3「覚悟と覚醒」 35
ep4「後悔、そして邁進」 66
ep5「目指す頂き」 79
ep6「戦闘開始」 90
ep7「陰謀うごめく」 100
ep8「世界最高峰の決闘者」 117
ep9「閑話ー砺波　浜臣　前編」 129
ep10「閑話ー砺波　浜臣　後編」 140
ep11「交換条件」 167
ep12「認めぬ、認める」 180
ep13「瘴気の敵」 196
ep14「閑話ー高天ヶ原　ルキ　前編」 227
ep15「閑話ー高天ヶ原　ルキ　後編」 244
ep16「夏、天才のある一日」 278
ep17「止まぬ感情」 308
ep18「始まる、代表選抜戦」 324
ep19「轟く悪意」 346
ep20「悪意に染まる、その時に」 401
ep21「起こっている何か」 424
ep22「開幕前夜」 447

ep23「決闘祭、開幕」 466
ep24「鯨の咆哮」 511
ep25「決闘祭、激闘ー猛攻の武士ｖｓ堕天の翼」 531
ep26「決闘祭、熾烈ー歪んだ誇りｖｓ自在なる大蛇」 567
ep27「決闘祭、過熱ー鉄壁の決闘者ｖｓ儚き捕食者」 600
ep28「決闘祭、不穏ー我が道ｖｓ策略の大地」 630
ep29「深遠の闇」 665
ep30「決闘祭、波乱ー渦巻く決意」 685
ep31「決闘祭、混戦ー超越する者」 723
ep32「焦燥と高揚」 768
ep33「決闘祭、決勝・前編ー約束の場所へ」 791
ep34「決闘祭、決勝・後編ー決着の時」 821
ep35「決闘祭、閉幕」 909
ep36「年が、明けて」 929
ep37「蹂躙、満を持して」 969
ep38「希望を掴むために」 989
ep39「抵抗者達の進撃」 1013
ep40「核心の序章」 1036
ep41「神に愛された少女」 1060
ep42「渇いた叫びー前編」 1061
ep43「渇いた叫びー後編」 1120
ep44「底知れぬ恐怖」 1185
ep45「絶望の次章」 1203
ep46「咎人の報い」 1225
ep47「真実の解章」 1260

ep48「閑話ー紫魔　ヒイラギ　前編」――――1384
ep49「閑話ー紫魔　ヒイラギ　中編」――――1336
ep50「閑話ー紫魔　ヒイラギ　後編」――――1300
ep51「第1章最終話ー門出の唄」――――1275
第2章
ep52「第2章プロローグー報いの果てに」――――1475
ep53「新たな季節、異変の序章」――――1480
ep54「ひとときの日常」――――1513
ep55「新たな舞台と不穏の影」――――1533
ep56「感情、渦巻く」――――1551
ep57「終わる、安息」――――1571
ep58「自分が一体何なのか」――――1619
ep59「閑話ー天城　遊良、前編」――――1632
ep60「閑話ー天城　遊良、中編」――――1645
ep61「自分自身の力」――――1676
ep62「陰謀と前進」――――1708
ep63「【白竜】と呼ばれし決闘者」――――1728
ep64「訪れるモノ」――――1795
ep65「デュエリア」――――1808
ep66「少女の思い」――――1856
ep67「邂逅」――――1872
ep68「化物ｖｓ．天才」――――1894
ep69「烈火と業火」――――1960
ep70「出発」――――1951
ep71「開戦前夜」――――2035

ep72「決島、開戦」――――――

ep97「告げられしモノ」――――398
ep98「【裏決島】、決戦―vs.【紫影】」――――373
ep99「裏側の真実」――――334
ep100「終局、そして…」――――357
ep101「決島、終戦」――――589
ep102「閑話ー天城　遊良、後編」――――443
ep103「指名手配」――――364
ep104「決闘市、消滅」――――710
ep105「現れたモノ」――――377
ep106「もう一人の天城　遊良」――――003
ep107「翼」――――380
ep108「終息と真相」――――384
ep109「閑話―劉玄斎、前編」――――387
ep110「閑話―劉玄斎、中編」――――193
ep111「閑話―劉玄斎、後編」――――474
ep112「休話―酒の席にて」――――401
ep113「第2章最終話ー祝福の風」――――408
第3章
ep114「第3章プロローグー忘却の夢」――――140
ep115「新たなる舞台へ」――――081
ep116「チャンピオンズ・リーグ」――――041
ep117「閑話ー天才のある一日、その2（前編）」――――501
ep118「閑話ー天才のある一日、その2（後編）」――――416
437743364278426142 57

第1章
ｅｐ０「プロローグ」

どこかの世界、どこかの場所、どこかの時間。
古代エジプトから蘇った王もいなければ、宇宙で破滅の光と正しき闇は争ってはいない。
５０００年周期で行われる神々の争いも無ければ、魂のランクアップは起こらない。
それに、世界は４つに分けられてはいないが、それでも唯一つ、どんな世界においても変わらないものがある。
デュエルモンスターズ。
例えば、全く同じような世界が二つあったとしても、片方の世界はたった1枚のカードから生まれ、もう片方は1枚のカードから生まれてはいない。そんな似た違う世界であったとしても、世界の中心にあるもの。
それがデュエルモンスターズ。全てにおいて、そこにあるもの。
―これは、他のどれとも違う「遊戯王」の物語。

―…

「先生……、これは……」
「う、うむ……私も初めてだ……」
とある病院内、そのとある診察室でのこと。
その診察室にはドクターらしき白衣を着た人物と、その助手が二人。

…そして、就学前であろう年齢の少年が一人、彼らの方を神妙な顔をして見つめていた。
それはまるで、これから自分の病気の宣告を受けるのを、じっと待っている患者のよう。いや、もしかしたらただの病気の方が、彼にとっては幸せだったかもしれない。
なにせ、この沈黙の原因が病気だったならば、まだ彼には治る可能性もあったのだろうが…
これからの話は、彼にとっては今後の長い長い人生において、一生に渡って付きまとってくる事実かもしれないのだから。

「……天城くん、その…」

そして、意を決したようにドクターが口を開いて…
それは、とても言いづらそうに、そしてとても憐れんだ眼をしていて…

「残念だけど…その…」

今から伝えられることは、この年齢の子供には酷過ぎる事実。
少なくともこの世界に生きる、自我が芽生えている人間ならば絶対に聞きたくない言葉。
このドクターとて、こんなことを絶対に口に出したいわけがないことだろう。
それを、こんな年端のいかない少年に聞かせなければいけないなんて…今この時ほど自分がドクターをしていたことを呪ったことはなかったと言わんばかりに、眉間にしわを寄せて目の前の少年を哀れんで。

しかし、これは事実。この証明されてしまった現実には、例え何度調べ直したとしても逆転することはないのだ。

そして…意を決したようにして、重々しくもドクターが口を開いた。

「君に……ええと……エクストラ…適正は……その…『ない』…みたいだね……」

ー言った、言ってしまった。

その恐るべき事実を、そのあまりの哀れみを。

そして、まさにドクターから言葉が飛び出たその瞬間、少年の目の前は突如として真っ暗になり、腰かけていた椅子から倒れ落ちる。

なにせ、この世界にいて、死刑宣告を食らったのと同じような物を突然突き付けられたも同然なのだ。

とても、就学前の子供が耐えられる宣告ではない。いや、例え誰であっても耐えられるようなものではない。

慌てふためくドクター達の叫びを遠くに感じながら…

少年の意識は、段々と薄れていった。

そして物語は、それから１０年後…

―――

ｅｐ１「反逆の物語」

天城（あまぎ）遊良（ゆうら）は落ち零れだ。少なくともこの決闘学園において、彼のことを自分よりも上だと認める人間は居ない。

「おい、天城が来たぜ。」

「本当だ。あいつ、いつまで学園にいる気だよ。」

そう言った陰口が、隠れずに遊良にまで聞こえる。

しかし、誰もそれを隠そうとはしていない。なぜなら彼らにとって、これはもう日常茶飯事とも言えるからだ。

（はぁ……毎日毎日、飽きずによく言うよ。）

とは言え、遊良自身も特に気にした様子を見せはしない。

何故ならこれは、学園の初等部に入学したときから言われ続けているコト。

当初はいちいち突っかかって行ったが、もうそれから１０年。高等部に入学してもそれは止まず、むしろ見知らぬ顔が増えるわけだから止むわけもないだろう。

…まぁ、遊良にしたってこれだけ言われ続けているのだから、流石にもう慣れたものだろうが。

ここは【決闘市】に４つある学園の一つ。東地区にあることから【イースト校】と呼ばれている学園の高等部の敷地内。

…しかし、決闘市とはよく言ったもの。

この街に住む人間は、決闘市中に点在する決闘学園の初等部から通い始め、中等部を経て…最終的に４つになる高等部のどれかへと進学する。そして、皆プロデュエリスト、あるいはデュエルに関した職を

目指すのだ。

もちろん他の職種もあるが、決闘市だけあってこの街に住む人間の老若男女のほとんどが決闘者。

たとえば、冗談でデッキが住民票と言われてもこの街の住人ならば納得するだろう。

その広い決闘市の中でも、遊良の存在はかなり有名だった。

…もちろん、良い意味ではない。

慣れたとはいえ、毎日毎日同じようなことを聞くにもうんざりした様子で…いっそのこと、『耳が聞こえなければ静かで楽なのに…』と、無意識のうちにそんなことまで考えている様子を、遊良は見せていた。

「おはよ、遊良！今日は早いんだね。」

そんなとき、遊良の背後から透き通る声が聞こえた。他の侮蔑の声とは篭っている気持ちから違う…

親しみが込められた、聞きなれた声が。

「ん、あぁ何だルキか。おはよう。」

「もう、「何だ」じゃないよ。折角起こしに行ったのに居ないんだもん。追いつくのに走ったんだから。朝から汗かいちゃったよ。」

「そうか、それは悪かったな。じゃあお詫びにジュースでも奢ってやるよ。」

「ホント!?じゃあコーラ！あー、この暑い中走った甲斐あったね。」

「あ、でもこの前太ったって言ってたっけ。やっぱ無しで。」

「っておい！なんでだよ！あーもう、コーラ飲ませろー！あーつーいー！」

「うーるーせー。」

遊良に声をかけてきたこの少女は、高天ヶ原(たかまがはら)ルキ。
彼女は他の誰とも違って遊良を蔑んだりしていない。
何故なら、遊良とは初等部に上がる前からの、幼少期よりの仲。いわゆる幼馴染と言ったところだからだ。
容姿端麗で、活発で明るい。
真っ赤な髪を短く切り揃えていて、誰が見ても美少女と答えるだろう。
そしてデュエルの実力も高く、とある事情から、いい意味での有名人でもあるそんな人物だが…幼少期から長い時間一緒に居ただけあって、遊良が気を許している数少ない相手でもある。

「おい、天城の奴、また高天ヶ原さんと一緒にいるよ。」
「あの雑魚、高天ヶ原さんに近づくのもいい加減にしろよな。身の程を考えろよ。」
「ほら、高天ヶ原さん優しいから、きっとあんな雑魚でも可哀想で気にかけてあげてるんだぜ。」

しかし、遊良とルキの関係など知りもしない外野にはそんなことは関係などなく。
わざと遊良に聞こえるように言い、明らかに怨嗟も混ざっているほどにその声は侮辱を孕んではいたものの…
それでも、遊良からしてはこんな事も最早日常茶飯事なのか。特に気にする様子を遊良は見せはせず。

…それとは対照的に、横にいるルキの顔は次第に怪訝になってきているが。
「…もう、今日こそは我慢できないよ。ちょっと私言ってくる！」
憤慨した顔でそう言って、野次を言った外野の方に向かおうとする

ルキ。
しかし、それと同時にルキの体の前に、急に静止を促す手が出てきて彼女はその足を止めた。
…そう、ルキの隣で歩いていた遊良が、咄嗟に彼女を制したのだ。
そんな遊良に唐突に止められたルキは、憤慨した顔を戻さず。遊良へと向かって、悲しげな声で問う。

「ねぇ遊良、なんで止めるの？あの人達、毎日毎日飽きもせず、遊良のこと馬鹿にし続けてるんだよ？いくら遊良が気にしなくたって…私は、悔しいよ…。」
「別に良いよ。言いたい奴は言わせとけ。あいつらに注意したところで、今度は他の奴らが言うだけだって。」
「でも…」

遊良の言う通り、こんなこと、今更止めたって違う誰かがまた言い始めるだろう。
もう彼とて、今更止めるのは諦めているのだと、そう彼女へと向かって何度も何度も諭し続けてはいるのだが…
それでも、ルキは納得のいかない顔をしたまま。
しかし、それもそのはず。遊良が雑魚と言われているのが、どうにもルキには納得できないのだ。
それは、幼少期からずっと遊良と一緒にいるルキならばなおさらのこと。
それに、陰口や野次を言う人間の中には、遊良にデュエルを挑んできて、そしてあっさり返り討ちにあってボロ負けしていった人間が大勢いる。
しかし、その誰もが遊良を認めようとはしていなかった。
…周囲が遊良を認めないのは、単に遊良のデュエルの実力が低いとか、そんな話ではない。寧ろ、遊良のデュエルの実力は高い方だと言える。
この学園でも上位の実力を持つルキだが、遊良とのデュエルの勝率

はほぼ五分五分。幼少期からのデュエルのトータルで、だ。
それに加えて、遊良本人の学園でのデュエル実習成績も勝率自体はかなり高い。
そうだと言うのに、それでも彼は馬鹿にされ続ける。いや、誰もが遊良に負けたという事実を決して認めないと言ったほうが正しいか。
ー無論ルキも、どうして遊良がここまで蔑まされているのかは知っていて…

「ただ…Ｅｘ（エクストラ）適正が無いってだけで…皆で遊良を馬鹿にして…」

―ＥＸ適正。

ルキが言ったその言葉は、この世界に生きる決闘者ならば知っていて当たり前のこと、常識である。
この世界では、人間はＥｘデッキから召喚できる特殊な召喚法のうち、融合・シンクロ・エクシーズ、いずれか一つの適正を持っている。
それは家系であったり、育った環境であったりと様々な要因で決まるが、誰でも持っている物であり、そして各々の召喚法のモンスターを、大量生産されている物なら店で買ったり、特殊なモンスターならば一族で引き継いだりしている。
さらに特殊なケースでは、デュエルディスクがデュエルの最中に稀にカードを生み出したりもする。
無論、それはルール違反ではない。デュエルディスクがカードを創造することは、この世界では偶にあることだからだ。近しい出来事では、タイトル戦の終盤でチャレンジャーのディスクが生み出した新たな切り札が、古豪の王者を下したこともある。
そして、自分のＥｘ適性でないＥｘモンスターは、たとえデュエルに使用したとしてもディスクが反応してくれない。
それはこの世界の人間ならば誰もが知っていること。そして、遊良がことごとく馬鹿にされている理由もそこにある。

―天城　遊良

―皆に蔑まれ続ける彼には、このＥｘ適正がなかった。

遅くても就学前にはほぼ全ての人間に現れるはずのＥｘ適正が、なぜか遊良にだけ現れなかった。

いや、随分過去にもこう言った前例は、実はあったらしいのだが過去にＥｘ適正がないと判定されたその人物達も、遊良の年頃にはＥｘ適正が現れていたらしい。

つまり、未だにＥｘ適正を持たない遊良のケースは前例がない特殊な事例といえる。そういう歴史も相まって、この年までＥｘ適正が現れない遊良のことを、皆口をそろえてこう言った。

―『出来損ない』、と。

遊良が勝てるのは、ただの「メタ張り」と「まぐれ」。Ｅｘ適正の無い出来損ないに「俺（私）」が負けるはずが無い。だから自分は負けてない。

―皆、そう思うのだ。

「ルキ、いいから行こうぜ。」

「でも…」

こんなこと、子供の頃から変わらないのだから反論するだけ無駄。そうした諦めめいたモノが遊良の中にはあるものの…しかし、どうしても納得いかないとルキの顔が俯いて。

「あ、おい…」

そんなルキを見て、なんだか面倒なことになると感じた遊良が、無

理矢理にでもこの場を離れるべくルキの手を引こうとしたが…
しかし、それは時既に遅しと言ったところで…

「おい落ち零れ！いつまでルキさんに付きまとう気だ！」

ー不意に、遊良とルキの間に誰かの声が割って入った。

「彼女が迷惑がっているだろう！自分の身をわきまえろこの落ち零れが！」

そこには、遊良を睨むようにして立っている一人の男子生徒の姿。
少なくとも、遊良の記憶には無い人物。おそらく高等部になってから一緒になった学生で、ルキのファンの一人と言ったところだろうか。
鋭い目をして遊良を睨み、今にも胸倉に掴みかかりそうなほどに危なげな雰囲気を放って。

「大丈夫ですか、ルキさん！」
「…え？な、なに？私迷惑なんかじゃ…」
「安心してください！今、僕がこいつを追い払います！」

そんな男子生徒は、ルキが俯いたのを見て遊良がしつこく付きまとっていると勘違いしたのだろう。
場の状況など考えもせず、またルキの雰囲気も察しもせず。己の見当違いな正義感に則って、思考を停止し遊良に突っかかる。

「落ち零れの癖に…ルキさんに近づくなんてどれだけ図々しいんだ！おい、僕とデュエルしろ！そして負けて二度と彼女に近づくな！いいな！これは命令だ！」
「…はぁ、またこんなのかよ…大体、俺とルキのことにお前は関係ないだ…」

「お前に発言権なんて無い！落ち零れらしく、大人しく僕に従え！」
「…面倒くさ。……まぁ、別にデュエルするのはいいけどさ。」
「ちょ、ちょっと遊良…」
「だから何言ったって無駄だって言っただろ。…こう言う事なんだからさ…」

遊良の嫌な予感が、見事に当たった。
しかも、瞬間的に。
しかし、高等部に入学する前から、こういう事は多々あって、その度に手を焼いてはいたが、その時は今ほど横暴な言い分ではなかったと思う遊良。

―全く持って面倒だ。

この学園にルキのファンは多いが、時折こういった輩がルキに良いところを見せようと沸き始める。こんなこと、もはや風物詩とも言えるだろうと、そう言わんばかりにの顔して。
そう、そこに、ルキに絶賛付きまとい中と思われている遊良は格好の相手といった所なのか。

「許可もなく勝手に口を開くな！さっさと構えろ！」
「…はぁ、わかったわかった。」

こうなってしまったら、自分が何を言っても聞く耳は持たない…そう解釈して、遊良は自分のデュエルディスクを出して展開する。
この街の人間ならば必ず持っているオーソドックスなタイプのデュエルディスク。通信機能やネット端末など、日常生活でも必須アイテムでコンパクトに収まってはいるが、もちろんカードも収納されている万能端末。
腕に添えると自動的にアームロックが腕に巻き付き、デッキが中から現れ…

デュエルを行うプレート部分が機器のサイドから自動的に展開し、ライフポイントが表示される。

ーこれでデュエルの準備が整った。

「行くぞ！ルキさんに付きまとう奴は、この僕か速攻で叩きのめしてやる！」
「はいはい、とっととやろうか。…ルキ、ちょっと離れてろ。」
「え、う…うん。」

遊良とて、こういう輩とデュエルすること自体も慣れたものだが、正直こんな奴と戦ったってテンションは上がらない事だろう。
まぁデュエル自体は好きだから戦うことは別にいい様子ではあるが。でなければ、馬鹿にされ続けているというのに、今の今までデュエルを続けていないのだから。
しかし倒した所で、どうせ皆同じ捨て台詞を吐いてまた同じ様なことをするのだ。
…まったくもって面倒くさいと言うその雰囲気を崩さぬまま、いきり立つ男子生徒と、イマイチやる気が出ない遊良、そしてルキが少し離れたところに下がった所で…

「何々？誰かデュエルしてるの？」
「うん、それがね…あの「天城」なんだってさー。」
「えー、本当？」

唐突な朝の、それも登校時間真っ只中に始まったデュエルだったが、登校途中の生徒も足を止めて観戦を始め、周りにはすぐに人だかりが出来始める。

ーここは、決闘市

デュエルは何においても優先される。
と言っても、道路上の一般車両まで退避しなければいけないレベルではないが。
…それでも、デュエルの優先度は何においても譲れない。それは、周囲から蔑まれている遊良のような決闘者のデュエルでも。
それぞれが向かい合って、戦いの始まりの宣言を交わしたところで…

…それは、始まる

ーデュエル！

「僕の先攻だ！【切り込み隊長】を召喚！そして効果発動！手札からレベル４以下のモンスターを特殊召喚する！来い、チューナーモンスター【ヴァイロン・キューブ】！」

【切り込み隊長】レベル３
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／４００
【ヴァイロン・キューブ】レベル３
ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／８００

召喚からさらに展開することが出来る【切り込み隊長】は優秀なモンスターだ。展開札のほかにも【切り込みロック】といった戦法も有名で、場にはレベル３のモンスターが２体揃うも、ここで召喚したのがチューナーモンスターということは、男子生徒のＥｘ適正はシンクロであり当然だがチューナーを見せてターン終了とは行かないだろう。

「行くぞ！僕はレベル３の【切り込み隊長】にレベル３の【ヴァイロン・キューブ】をチューニング！シンクロ召喚！現れろ、レベル６！【甲化鎧骨格（インゼクトロン・パワード）】！」

【甲化鎧骨格（インゼクトロン・パワード）】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１６００

男子生徒の場に、甲虫のような鎧を纏ったモンスターが現れた。モンスターとチューナーモンスターのレベルを足して現れるシンクロモンスター。

この大型モンスターの登場に観客からも声が挙がった。こういった大型のモンスターの登場は、デュエルの醍醐味ともいえる。

「さらに、【ヴァイロン・キューブ】の効果発動！光属性モンスターのシンクロ素材になったことで、デッキから装備魔法を手札に加える！【団結の力】を手札に加え、【甲化鎧骨格（インゼクトロン・パワード）】に装備！これで攻守が８００アップ！僕はカードを１枚伏せてターンエンドだ！」

男子生徒　ＬＰ４０００
手札５→２枚
場：【甲化鎧骨格（インゼクトロン・パワード）】ＡＴＫ／２５００→３３００
伏せ：１枚

ターンが遊良に移る。いきなりの攻撃力３３００のモンスターの登場に、観客も盛り上がり、男子生徒もご満悦のようだ。

遊良はこの男子生徒と対戦した事は無かったが、しかし実際に今のターンを目の当たりにした遊良の感想は正直に言って、たったこれだけのことしか行っていないのに尊大な態度を立っているところを見るに…

（大した腕じゃなさそうだ。早く終わらせるか。）

「俺のターン、ドロー。」

（…なんて、流石にそう上手くは行かないけども。）

遊良は1枚増えた自分の手札を見るが、その内容から、すぐに決着をつけようとしても厳しいことを瞬時に理解して。

手札事故ではないが、この手札ではまだ相手のモンスターを倒すことは出来ない。精々壁モンスターを出して凌ぐのが筋だろう。

しかし、そんな事すら遊良にとってはいつものことであった。

なにせ、遊良以外のデュエリストは皆、呼吸をするようにＥｘモンスターを召喚してくるのだ。初っ端から大型モンスターを展開されることなんて珍しくもないし、ピンチでもない。

ーそれに、壁モンスターで凌ぐことなんて、遊良はしない。

「…まだ良い方かな。よし、まずは魔法発動【トレード・イン】。手札のレベル８【神獣王バルバロス】を捨てて２枚ドロー。そして魔法カード【闇の誘惑】を発動。２枚ドローし、闇属性の【堕天使アスモディウス】をゲームから除外する。俺は場に２枚のカードを伏せて、魔法カード【手札抹殺】を発動。手札を全て捨てて同じ枚数ドロー。俺は３枚だ。」

「チッ、僕は２枚だ。ドロー。おい、手札交換ばかりしていないで、事故ったなら、さっさとターンエンドしろ！」

確かに、初手から大型モンスターを召喚した男子生徒の展開の後にコレでは、盛り上がりにかけるのも事実。しかし、遊良にとってこのデッキの流れはいつものこと。

Ｅｘ適正が無い自分は周囲の人間と比べて武器が一つ足りない。ならばそれを補ってもあり余る何かを。自分の武器を、無理やりにでも自分のデッキを回して、メインデッキから引っ張ってくるしかないのだ。

「慌てるなよ。捨てられた【シャドール・ビースト】の効果を発動して１枚ドロー。…よし、そろそろ良いか。」

手札の数は劇的に増えていないが、この序盤から遊良は初期手札５枚を含めて１ターンでデッキの３分の１以上を引いたことになる。
しかし、相手の男子学生はこの事実に気付いても居なければ、それに対して危機感も感じていないことに遊良は半ば呆れるが…
ならば、それがこの生徒の実力という事。
ー想像以上に大したことがない。そんな感想が浮かび上がるとともに…これで準備が整った。後は、蹴散らすだけ。

「じゃあ行くぞ。相手フィールドのみにモンスターがいる場合、手札から【カイザー・シースネーク】を特殊召喚！そして効果発動、墓地からもう一体の【カイザー・シースネーク】をレベル４、攻守を０にして特殊召喚する！そして１体目の【カイザー・シースネーク】のレベルも４となり、元々の攻撃力は０となる。」

【カイザー・シースネーク】レベル８→４
ＡＴＫ／２５００→０　ＤＥＦ／１０００
【カイザー・シースネーク】レベル８→４
ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

「ふん、レベル４のモンスターを２体並べたところでＥｘデッキから出すモンスターが居ないだろ！」
「まだだ、魔法カード【死者転生】を発動。手札の【グローアップ・バルブ】を捨てて墓地の【神獣王バルバロス】を手札に戻す。そして今捨てた【グローアップ・バルブ】の効果発動。デッキトップを１枚墓地へ送って自身を特殊召喚！」

【グローアップ・バルブ】レベル１・チューナー
ＡＴＫ／１００　ＤＥＦ／１００

目まぐるしく、間髪いれず。遊良の場に並ぶ三体のモンスター達。

しかし、どれも男子生徒の場の【甲化鎧骨格】に勝てるモンスターではなく…さらに、男子生徒は遊良が出したモンスターをみて、なにやら心外といった顔をしていて。

「おい、【グローアップ・バルブ】はチューナーモンスターだろ！Ｅｘ適正のないお前がなぜチューナーを使う！それにさっきの【シャドール・ビースト】は融合メインのカードじゃないか！」

「…良いじゃんか別に。俺がどんなカード使おうが。」

「ふん、ＥＸデッキが使えないけど、せめてチューナーだけでも使いたかったのか？まったく惨めな奴だ。」

「むっ…」

そんな中、流石の遊良でも今の男子生徒の言葉には少々頭にきたのか。

初対面なのに尊大な態度を取られたからか…はたまた大した実力も持たない癖に、自分のデュエルにそんなに自信があるのだろう。

いつもは聞き流す言葉にも、反論を言いたくもなるかの如く…口を開き、淡々と事実を伝えるのみ。

「何とでも言え。どうせお前はこのターンで終わりなんだ。」

「なっ、お前のその雑魚モンスターで僕の【甲化鎧骨格】に勝てるわけないだろ！」

「誰が今から戦闘するって言った？まだこれからだ。リバースカードオープン！さっき伏せておいた永続魔法、【冥界の宝札】を２枚発動！」

―！

伏せてあった同じカードを２枚発動した遊良。

それは、【手札抹殺】で捨てないように、予め場に残しておいた物。

そして、今発動した【冥界の宝札】はこのデッキの、いわばメイン

エンジン。展開には手札消費が激しいが、このカードがあれば話は別となる。冥界に送られたモンスターの分、プレイヤーに恩恵を与える強力なカードであって。

「俺は場の3体のモンスターをリリース！レベル８【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」

高らかにモンスターの名を宣言する遊良。

それと共に聞こえる雄叫び…

そう、獣の咆哮、震える大気ともに、そのモンスターは現れるのだ。

【神獣王バルバロス】レベル８

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

それは、攻撃力３０００の大型モンスター。遊良が好んで使うモンスターの一体。

…Ｅｘデッキが使えないのならば、それに負けないようなモンスターで対抗すれば良い。

現在、Ｅｘモンスター以外の大型モンスターは軽視される傾向にあるが、決してそのポテンシャルはＥｘモンスターには負けていないと遊良は確信しているからこそ、遊良は今までデュエルを続けているのだ。

そして、デュエル序盤で互いに大型モンスターを並べたことも相まって歓声が上がったが、相手の男子生徒は嘲笑う形で遊良に言った。

「ハッ、何がアドバンス召喚だ！そんな時代遅れの召喚でいい気になるな落ち零れが！たかが攻撃力３０００！僕の場は３３００だ！」

「だから戦闘じゃないって言っただろ。ったく、わざわざ3体もリリースしたのに何見てるんだよ。俺は【冥界の宝札】２枚の効果でデッキから４枚ドロー。そして【神獣王バルバロス】の効果発動、【神

獣王バルバロス】を3体のリリースでアドバンス召喚した場合、相手の場のカード全てを破壊する。」
「……へ？」
「やれ、バルバロス。」

淡々と遊良が効果を言い、それと同時に獣の王が巨大な槍を振り回し、盛大に地面に突き刺した。
…その巨大な衝撃波が、男子生徒のフィールドを襲って。

―！

「うわぁー！ばかなー！」

大きな轟音とともに、男子生徒の場のモンスターと装備魔法、そして伏せカードまでもが全て破壊された。
そう、この男子生徒が馬鹿にしていたとは言え、アドバンス召喚の中でも3体のリリースという大きな代償に伴う、強力な効果。
…これで、男子生徒を守るものは何もなくなった。

「へぇー。伏せカードはミラーフォースか。なんだよ、攻撃された時のことも一応考えてたんだな。」
「…くそっ、け、けど、そのモンスターの攻撃でも僕のライフは残る！次のターンで…」
「だからそんなもん無いって。手札から魔法発動、【死者蘇生】。墓地から【堕天使スペルビア】を特殊召喚する。」
「……へ？」

―！

【堕天使スペルビア】レベル8
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

「【堕天使スペルビア】？そんなカードいつ墓地に…」
「【手札抹殺】の時だ。まっ、スペルビアの効果対象はいないけど。…待たせたな、これで終わりだ。バトル！【神獣王バルバロス】と【堕天使スペルビア】でダイレクトアタック！」
「ちょ、う、うわー！」

―！

男子生徒　ＬＰ４０００→０（―１９００）

黒き天使と、獣の王の一撃が男子生徒に襲いかかる。
自らの命と言うべきＬＰも、この２体の攻撃に耐えられるはずが無く…無情にも、一瞬でデュエルディスクのライフカウンターが０となって。

―ピー…

そして無機質な機械音が遊良の勝利を告げ、終わってみれば後攻のワンショットキルが炸裂した。
終了と同時に早々にソリッドヴィジョンは消え始め、自分のデュエルディスクを閉まう遊良。
しかし、向こう側に立っていた男子生徒は、負けたと言うのに俯きながらブツブツ呟いていて…徐に、遊良に近づいてくるではないか。
「く、くっそ…あんなところで【手札抹殺】さえなければ…いや、そもそも手札を使い切っていたのに、なぜ都合よく【死者蘇生】が手札にあった…そ、そうか！お前、イカサマしたな！どこかに隠し持っていたんだ！」
「…はぁ？…さっき【冥界の宝札】使っただろ。それにお前なぁ、俺がデッキから何枚引いたと思って…」

事実無根、負け犬の遠吠え。
それ程までに、男子生徒の言い分はメチャクチャだ。
実際に、最後の【死者蘇生】も、強力なドローソースで遊良のデッキのエンジンでもある【冥界の宝札】を使って、それで最後に引けたものだというのに。
そうやって、無理やりにでもデッキの中から引き出せたのであって、決して袖の中や、ましてやリストバンドなんかに隠し持っていたわけではない。…まぁ、遊良はリストバンドを着けていないが。
それに、そもそもデュエルディスクにそんな細工など出来ないし、デッキから引いたカード以外がディスクは反応しないことは、誰だって知っているはずだ。
また、遊良がこのデュエルでデッキから引き出したカードは、初期手札を含め１９枚、デッキのほぼ半数。
それだけ引けばあの場に応じたカードは手札に来るだろう。
自分に足りないものを補うためにデッキをフル回転させ、そして無理やりにでもキーカードを引き込む戦術を行っただけだというのに…
どうやら、それをこの男子生徒は理解していないらしい。

「おいおい、イカサマかよ。」
「そうよね…だってあの子って、あの「天城」だし…」

しかし、観客の中にはそんな荒唐無稽な言い分にも賛同する声も出てき始めていて。そんなことできるはずが無いのに、疑いの眼差しが遊良に向かい始める。
…そう、これもまたいつもの事。
誰もが負けても負けを認めず、遊良のデュエルを否定する。目の前で起こったプレーを忘れ、意味不明で荒唐無稽な罵詈雑言を浴び始めるのだ。
…これだから面倒臭いのだ。ここまで直情的に向かってくるタイ

プも珍しいとは言え、周囲の学生達までこんなことを信じ始めてしまえば、後からさらに面倒なことになる。
だからこそ、この場から一刻も早く逃げるのが正解か…と、遊良が感じた…

―そんな時だった。

「一体何の騒ぎだ?この人だかりは。」

不意にギャラリーの後ろから、よく通る男性の声が響き、人だかりが真っ二つに割れて。
そこには遊良達と同じ制服に身を包みながらも、周りの生徒とは体付きが一回り大きい少年が立っているではないか。
周囲にいる生徒達もその男の登場に対しにわかに騒ぎ始め…
それは、この学園で彼を知らない人間は居ない事を示唆していて。

―天宮寺(てんぐうじ)　鷹矢(たかや)

学園随一の実力者として有名な彼は、高等部に入学したばかりだと言うのに、一重に天才として称される。
そして何より、エクシーズ召喚の中でも名門中の名門、『天宮寺一族』の一人。

「あ、て、天宮寺くん!この落ち零れが僕とのデュエルで不正を…」
「不正だと?」

人の輪の中心まで堂々と歩き、遊良と男子生徒の前で止まった鷹矢。
近くに立つと中々の威圧感を醸し出している彼に対し、男子生徒はゴクリと唾を飲み込んで。
…そう、それほどの雰囲気を持ったこの少年は、この学園では皆が

認める実力者、有名人なのだ。
だからこそ、きっと鷹矢なら自分の味方をして、そしてこの生意気な落ち零れを成敗してくれるだろうと、男子生徒はそう思っていた…

そして、一瞬の沈黙の後に、鷹矢は遊良へと向かって口を開く。

「遊良、何故不正なんてしてしまった。お前はそんなことをする奴では無いと思っていたのに。まったく、俺はとても残念でならな…」
「馬鹿なこと言ってんじゃねーよこの低血圧野郎。んなわけ無いだろ。普通にデュエルしただけだっての。」
「うむ。まぁ、そうだろうな。」

しかし、いざ口を開けば鷹矢のその口調は、まるで友人に何気なく聞くが如く、冗談交じりな親しみさえ感じるものではないか。
それに遊良本人も、鷹矢相手に全く臆せずに話していて…
そのあまりの親しげな様子に、男子生徒は見るからに困惑し始める。

「え、えっと…あの…」
「あぁ、遊良は俺の知り合いだ。嘘をつく奴ではないことは俺が保証しよう。それに、ここはひとまず俺の顔を立てて解散してくれないか？もうすぐ始業だからな。」
「え、あ、て、天宮寺くんがそういうなら…」
「うむ。」

その鷹矢の一言で、男子生徒はすごすごと場を離れて。
また、鷹矢が開散と言ったことで、デュエルを見ていた生徒たちも遊良への興味を失ったのか。
誰もが終了したデュエルの事を振り返ることもせず、散り散りになって歩いてゆく。

そうして…

しばらくの後、人がまばらになって周囲に人が居なくなってきたのを見計らって、遊良が言った。

「…何が『俺の顔を立てて解散してくれないか』だよ。どうせお前、今来たばかりで状況もわかってないだろ。この寝ぼすけ。」

「む…折角助けてやったというのに何だその言い草は。大体お前が、俺を起こさず先に家を出るからだろう。」

「『高校生になったら朝くらい自分で起きられる』って言ったのはお前だ。…ったく、でも鷹矢、お前よく起きれたな。あの様子だと絶対遅刻コースだと思ったのに。」

「うむ。それなら…」

「はいはい、私が起こして来ましたよ。家に迎えに行ったらもう遊良は居ないし、鷹矢は爆睡してるし。」

「…カバンのダイレクトアタックを喰らった。…あれは流石に驚いたぞ。」

「それくらいしないと鷹矢は起きないでしょ、もう！それで二度寝したら流石に捨てて行ったけど。」

…まるで壁などなく、彼らにとっては普段と何ら変わりないその会話、

そう、後から合流した鷹矢も、いわばルキと同じで遊良とは幼馴染の関係。

ーしかも遊良と鷹矢の関係は、彼らの親同士の仲もあって、まさに生まれる前からの付き合いといってもいいだろう。

今は事情があって高等部から学園の近くで二人で暮らしているが、それ以前から今まで、まるで兄弟同然に育ってきた二人だ。今さら遠慮など無い。

学園の授業以外では、ほとんどをこの3人で行動していて…それは幼少期から変わらない、遊良にとって、デュエル以外に唯一心を許せ

る時間と言える。

「しかし何でこんな所でデュエルをしていたんだ？朝食を食べていたらルキから早く来いと連絡が来たのでここまで急いだのだが…何だか変なことになっていて驚いたぞ。」
「わかんないよ。いきなりあの人が遊良に食って掛かって来て。」
「あー、まぁ俺をかっこよく倒したかったんだろうな。」
「は？何？かっこよくって。意味わかんない。大体遊良の悪口ばっかり言って。私ああいう人とは絶対仲良くなれない！その癖にあっさり負けてるし、ホント何なの？」
「…ハハ。アイツもし俺に勝ってても意味無かったな。」

ばっさりと切り捨てるルキに、先ほど戦った男子生徒が若干かわいそうにも思えたが…
それでも、向こうから一方的にかかってきたのだ、遊良とて同情の余地はない。

「…なぁお前達、俺にもわかる様に説明してくれ。あと何か食うものをくれないか？朝食の途中だったんだ。」
「お前なぁ…水でも飲んでろ！ほら、そろそろチャイムなるし急ごうぜ。」
「あ、おいこら！」
「ちょっとー！置いてかないでよ！」

何気ない、いつもの会話。
昔と変わらず、自分を認めてくれる幼馴染達と居る時が一番楽だ。
そう遊良は感じ、しかしそれを口には出さない。
駆け出した遊良と、それを追う鷹矢とルキ。

…これは、何気ない日常の始まり。

しかし、これから起こる壮絶な戦いの、始まり。

神に見放された少年が歩む…

ー反逆の物語。

…

ｅｐ2「当たり前の日常から」

「あれ…トレード・イン一枚どこやったっけ…」

決闘学園イースト校。その内一つの教室で、遊良はボソリと呟いた。時間にして午後の最後の授業がもうすぐ終わるという頃だというのに、教室内に遊良以外の生徒は誰一人としていない。

なぜ遊良一人しか教室にいないのかと問われれば、授業がもうとっくに終わっていて遊良が居残っているとか、そう言うわけでは断じて無い。

今の時間は移動教室の時間で、それぞれ召喚別に分かれての授業が行われている真っ最中なのだから。

遊良達の通うこのイースト校では、普通授業やデュエル実技、デュエル理論や基本戦略授業のほかに、各Ｅｘ適正ごとの特別授業があり、自分の召喚法にあった戦術や、苦手な相手の対処法などを鍛えるとても重要な授業である。

たまに、講師として現役のプロデュエリストも来ているらしく、授業内容がとたんに豪華になるのも魅力だ。

無論、鷹矢やルキもその例に漏れず他教室で授業を受けている。鷹矢など、入学して直ぐの召喚別授業で３年生のトップ生徒を倒しているために、まだ一年生だというのに時には教える側に回っているというのだから、本当にデュエルに関しては侮れない。

しかし、そんな幼馴染と違い、遊良は自分の教室に残ったままだ。それは、ＥＸ適正が無い遊良にはどの授業を受けることも許されていなかったために。

別に、ＥＸデッキからの特殊召喚を行えないからといって、シンクロなどの戦術を学ぶこと自体は遊良にとって全くの無意味ではない。相手の対策や、戦術の見破りに大いに使えるのだから、寧ろ遊良は全ての召喚別の講義に出たいくらいなのだ。

しかし、どの教師も遊良が自分の授業を受けることを認めてはくれない。皆口を揃えて「君にとっては意味がないことだろう。」と関わろうとしなかった。

筆記などの学業成績において優秀な成績を取り、デュエル実技の戦績もかなり良い部類に入っている遊良だというのに、教師からの印象も低く見られているのは事実だ。
幼馴染たちは別として、そもそも教師含めて他の誰一人として遊良がプロデュエリストになれるとは思っていない。それなのに未だデュエルを続けている遊良を、哀れな目で見ている教師さえいる。ＥＸ適正、ＥＸデッキを扱うというのはこの世界に住む者にとっては、最も当たり前なことなのだから。
まぁ、初等部の頃からそうなのだから流石にそういう風潮にも慣れた。そういった教師に対しても半ば諦めてもいるが。

「…お、あったあった。よかったぜ、最近ドローソースが高くなってきてるからなぁ。でもトレード・イン３枚は多いか？いや、レベル８多くしてるから逆に無いと事故率があがるなぁ…」
ブツブツと自分のデッキを見直しながら調整をする遊良。遊良が今使っているデッキは「冥界の宝札」を軸にしたレベル８の最上級モンスターを主力にしたデッキだ。
度々調整を繰り返してはいるが、デッキの中のモンスターがほとんど大型のデッキだけあって扱うのが難しい。
しかし、その爆発力は凄まじく、今朝行ったデュエルのように一方的に相手を倒すことも出来る。そうするために常にデッキのバランスを考え、調整を怠らない。
昔、このデッキを鷹矢相手に試したら、「どうして回せるのか不明だ。」とボヤいていたくらいだ。遊良も回すために集中力を切らせないが、最上級モンスターのポテンシャルは決してＥＸデッキのモンスターにも劣らないと考えている。

―『自分に出来る戦いを考えろ、常に思考を切らすな。考えることを止めた時がお前の最後だ。』

遊良にデュエルの基礎を叩き込んでくれた人物も、そう教えてくれ

た。厳しい人だったが、今頃どこにいるのやら。
そして、もう日も落ちてきて授業が終わる鐘が鳴る。しかし、鐘がなったことに気がつかずにまだ自分のデッキをいじっている遊良。
―ザワザワ…
次第に、授業が終わって下校の生徒で外が賑わってくる。特別授業があるときは、その授業が終わると皆自分の教室には戻らず自由に帰宅するため、誰も自分の教室には戻ってこない。
「…あれ、もう終わってたのかよ。…んじゃ帰るか。」
そんなざわつきで、やっと遊良は授業が終わったことを知った。出していたデッキやカードを片付けて、帰り支度を始める。外のざわつきも次第に収まってきて、遊良は教室を後にしようとした。
「今日は魚でも焼くかー。昨日鷹矢が肉バカ食いしたからな。肉は当分禁止だ。」

所帯じみたことを呟いて教室から出ようとする。朝に弱く、料理も出来ない鷹矢の面倒を見るのもこれまた慣れた物だ。今まで一体どれほど迷惑をかけられたことか。
もし鷹矢から決闘を取ったら何が残るのだろう、そんなことを思うと将来が若干心配になる。
…まぁ、プロにでもなって稼いでいるのだろうなと、そんなことを考えながら遊良は教室の扉に手をかけて出ようとする。
まさに、そんな時だった。

―!

「あ…な、なんだ…や、やべ…」
突然、地面が大きく揺れる感覚が遊良を襲う。立っているのも困難なほどの、まるで大地震だ。
ドアの取っ手に捕まり、倒れそうになる体を押さえる。揺れと共に、頭の中をシェイクされたような気持ち悪い感覚が上ってきたが、吐き気を抑えてなんとかその場に踏ん張る。

―始めようか…

そんな最中、揺れる頭蓋内に、直接聞こえてくるような声を感じた。

「…はぁ?…な、なにを…」

―時が来た…

揺れている状態のせいか、思考が回らない。頭の中が真っ白になり、考えることが出来ない。掴まっているとはいえ、もう足に力が入らず倒れてしまいそうだ。

「い、意味が…わからな…」

「どうした遊良。そんなとこに捕まって。二日酔いか?」

「あ…?」

そんな時、不意に聞きなれた声が聞こえた。すると不思議と、スーッと気分も良くなって、揺れも収まった。

そして、遊良は聞こえた声に対して返答する。

「俺は未成年だっての…おい鷹矢、今なんか変な地震が…」

「変な地震?何を言っている。変なのはデッキの中身だけにしておけ。」

キョトンとしたように、遊良の言葉を否定した鷹矢。憎まれ口や冗談を言うのが好きな奴だが、どうやら本気で今の地震を感じていないようだ。あれほどの大地震だったというのに、まるで遊良しか揺れていなかったかのように。

「お前人のデッキをなんだと思って…でもそんなバカな、今確かに…」

「寝ぼけたのか?折角一人で寂しいお前を迎えに来てやったんだ。いいからさっさと帰るぞ。腹減った、肉だ肉。」

「んだとこの馬鹿。あ、お前は肉当分の間禁止だからな。」

夢、ではない。あれほどはっきりと感じたのだ。…そう思うが、しかし鷹矢にこうはっきりと言われてしまっては、これ以上追求するのも面倒だ。

それに、もしかしたらストレスや疲れているだけ、そういうことも考えられる。

なにせ今朝から面倒な奴を相手にしたのだ、気付かずにストレスが溜まっていたのかもしれない。しかし、幻聴まで聞こえてきたとなれば、病院にでも行った方がいいか…そんなことまで考え始める遊良。

「なんだと!?だとしたら俺は何を食えばいいのだ！答えろ遊良！」

「魚を食え！ＤＨＡ舐めんな！文句言うなら飯無しだからな！水でも飲んでろ！」

「…この時期はやはり魚だ。脂の乗りが違うからな、うむ！」

「わかりやすい奴。」

しかし、そんな考えも鷹矢の相手をしていれば瞬間的に忘れてしまった。他愛ない会話をしながら二人で学校を後にしようとし、そこに同じく遊良を迎えに来たのだろうか、ルキが合流した。

「今日の晩御飯はお魚？やったね、昨日私の家もお肉だったから。」

「え、何？ルキも食っていくのか？」

「なーにー？言ってあったじゃん。今日親出かけていないからそっち泊まるって！だから朝に鷹矢起こすついでに荷物も置いてきたんだからね！」

「そうだったか？ルキよ、俺は全く全然、何も聞いていないのだが。」

「え？鷹矢には最初っから言ってないよ？言ってもどうせ忘れるもん。」

「あー…そういえばこの前おばさんから電話来てたっけ。朝のデュエルですっかり頭から飛んでた。」

「もー、しっかりしてよ遊良まで。鷹矢と一緒に住んでからボケが移ったんじゃない？」
「…本気で嫌だそれ。」
「おい、ボケとは何だ。俺はボケてなどいないぞ！」
「そんなことより、私のお魚は一番大きいのね！」
「そんなことだと!?ちょ、おい待てルキ！」
「やーだよ！この寝ぼすけ！あははッ！」

逃げるようにしてキャッキャと駆け出したルキを追う鷹矢。そしてそれをいつものことの様に、どうでも良い顔で眺める遊良。昔から変わらない光景だ。
普通に考えて年頃の男2人が住む家に、これまた年頃の女の子が泊まるなど親に許可されないことだろう。
しかし幼少期からの付き合いのせいか、はたまた幼少期に起こった「ある事件」のせいか、ルキの親は男所帯のこの家に泊まる事を全く心配していない。いや、むしろ親の目の届かないところでも、遊良が見ていれば安心とさえ思っているという。
昔から変わらない空気間、今更変えようなどとも思わない。この3人でいることが当たり前になりすぎていて、年頃にありがちな妙な雰囲気にもならないことが遊良は楽で落ち着いていた。
「おい、俺は買い物して帰るから先帰ってろよ。」
「えー、手伝うよー。あ、でもアイス食べたい！スーパーの横のアイスクリーム屋さん、美味しいって評判なんだよ！」
「遊良、俺はアイスよりもタコ焼きがいい。」
「何が手伝うだよ。ったく、それが目的じゃねーか。これから晩飯だって言ってんだろ。」
「じゃあ食ってるから買い物は頼んだ。」
「頼んだよ！」
「手伝う気すら無くなったか。まぁいいけどさ。」
「ごめんってー。」
「うむ。」

「うむ、じゃねーって。」
そう言って、笑いあいながら一同は買い物に向かった。

―・・・・

「おじさん！私これとこれのダブルで！」
「ソース多め。」
鷹矢とルキは宣言通り、自分の好きな様に食べていた。そんな二人を置いて、遊良はスーパーに入っていく。
本当に自由な二人だと、改めて思う。鷹矢はマイペースで所々抜けていて、ルキは明るく自分のしたいことに正直だ。
昔は、むしろ二人が自由だからこそ、自分のような奴とも幼馴染ができるのかとも思ったことがある。
…今そんなことを言ったら絶対に二人に殴られるだろう。ルキは泣きながら怒って、鷹矢は真顔で怒るだろう。
ＥＸ適正が無いと医師に宣告され、今まで仲が良かった友達とは近づくなと警告され、デュエリストには絶対になれないと大人達に通告された。鷹矢達さえ例外なく遊良との付き合いを控えるように忠告されていたという。
遊良自身も、そんな摂理に生きる気力さえ無くしたこともあった。
しかし、デュエルを続ける希望となった「きっかけ」があったとはいえ、今の遊良が自分を保っていられるのは、あの絶望した幼少期に自分を守ってくれ、傍に居続けてくれて、今では無くてはならない２人の存在があったからだろう。
（まぁ、今さら礼なんて言わないけど。）
常に感謝の意は持っている。しかしそれを今更口にすることは無い。今までも、これからも、３人で居られたら、そう思って。
「よし、こんなもんか。」
買い物を済ませ、スーパーから出る遊良。さっさと２人と合流して家に帰ろう。

いつものように…

—しかし、その当たり前は、突如崩れ去ることになる。

ｅｐ3「覚悟と覚醒」

「よし、こんなもんか。」

買い物を済ませ、スーパーから出る遊良。さっさと2人と合流して家に帰ろう。

―！

「…あ、あれ…な、なんだ…これ…」

まさに、そう思った瞬間のことだった。

急に遊良の視界が…その目の前が真っ暗になり体が動かなくなる。見慣れた町並みが消え、視界が黒く染まってしまって。

今日の下校前に感じた、あのふらつく感覚が…地震にも似た揺れが再び起こる。

―もういいだろう？…

「な、なんだ…？」

そんな時、不意に遊良の耳に聞こえる不思議な音…いや、声が…遊良の心はざわつき、何故か嫌な感じがする声が聞こえる。

―そろそろ始めよう……

「なにを…」

―お前の物語を…

「もの…がたり…？」

一体何のことか、遊良の意識がぼんやりとしてきて、足の力が抜けそうになる。浮いているような不快感が込み上がり、どちらが地面がわからないような…そんな感覚。
そして、倒れそうになった瞬間、反射的に足を踏ん張った所で、急に遊良の体に音と視界が元に戻った。

「あ、い、今のは…？」

下校前、さっきも感じた嫌な声。
ここまでくると流石に気味が悪いが、やはり本気で疲れているのだろうか。あまり深く考えるのはよそう、今日は2人には悪いが早く寝るか…遊良は必死に、そんな風に思うようにして2人を探す。
周りを見渡し、近くに目をやり。買い物袋を片手に、鷹矢とルキを探して回って。

「…あれ、あいつらどこ行ったんだ？」

しかし、何故かいくら周りを見渡しても二人の姿は無かった。
そんな中で、遊良に湧き上がってくる感情…いつもなら、どうせブラブラしているんだろうとか、ちょっと電話してみるかとか、その程度にしか思わないことだが、なぜかこの時に限って胸騒ぎが止まらない様子。
鼓動が早まり、耳に届く心音がうるさい。近くでアイスやたこ焼きを売っていた人に聞いてみても、二人が買った後から姿は見ていないと言われた。
デュエルディスクとなる万能端末を使って電話をかけてみても、コール音だけが響いて繋がらない。
こんなことは今までなかった…いよいよおかしい。遊良が、そう思った瞬間…

「あれ、これって…」

スーパー近くにある路地裏、そこに繋がる入り口に差し掛かったところで遊良は立ち止まりしゃがみこむ。

何故なら、そこに目を引く落し物が落ちていたから。

「間違いない、これ…ルキのだ。」

素早く、迷い無く。

ソレを瞬間的に理解する。遊良がそれを間違うことは絶対に無い為に。

それは、ルキが常に見につけていたネックレスであり、遊良が以前、ルキの誕生日に贈った物だったからだ。羽をモチーフにしたデザインで、かなり気にいってくれたのか、肌身離さず着けていてくれているのを彼もよく知っている。

つまり、これがここに落ちているのはあまりにも不自然と言うこと。遊良の家とは反対方向で、わざわざこんな路地裏に行く必要も用事も無い。

と、いう事は…わざと遊良が気がつくようにここに落としたか。

「この先…か？」

ますます早まる鼓動を抑えて、路地裏に足を踏み入れる遊良。日が傾いているだけあって薄暗く、進む足も重くなってきたのか。

ゆっくりと進むその足で、路地裏を進んでいって。

そして…その先で遊良は自分の目を疑うことになる。

しかしそれは、これから起こることの序章に過ぎず…

―…

「やぁやぁ、やっと来たねぇ。えっと…天城くん、だったっけ？もう、待ちくたびれたよ。」

「…あ、な、なんだよ…お前…」

路地裏の真ん中、立っているのは遊良達とそう年も変わらないであろう男。その男を見て、驚いたような…どこか怯えたような声を漏らす遊良。

まるで作り物のような顔、どこから出ているのか分からない様な声。

しかし、遊良が驚いているのはそんなことでは断じてない。

「鷹矢！ルキ！」

そこには、自分の目を疑う光景があったのだから。目の前の男の影から、上方に黒い巨大な腕が二本伸びていて、その腕の先には気を失った鷹矢とルキの姿。

その巨大な影の腕に、いつでも簡単に握りつぶされそうだ。

「お前…2人に何を…」

「なにもしてないよー…フフッ…まだ、ね。」

「まだ」という言葉に背筋が寒くなる遊良。

眼を疑うような異形の腕、そんな現実も信じられないが、まるで人形なのか、そう思うくらいの男の顔を見ているだけでも気味が悪いだろうに。

早くこの場から逃げ出せ、そんな命令を遊良の脳が送り出すが、なんとか遊良はこの場に踏みとどまっていた。こんな得体のしれない

モノに鷹矢とルキが捕まっている。そんな状態で逃げ出すなんて冗談じゃない。

「何をする気だ…」

「だから何もしないって。でもそうだなぁ…君の返答しだいじゃあ、するかもね。」

「へ、返答？俺に用なら2人は関係ないだろ。」

「あるよー、大有りだって。せっかく待っててあげたのにさ。えっとねぇ…ボクと決闘しようよ。ね？いいでしょ？」

「デュエルだって？そんなことのためにこんな…」

「そんなことー？もう、心外だなぁ。この世界に住んでるんだったら、「決闘」は何よりも優先されることでしょ。あ、「出来損ない」の君には関係ないっけ、あはは！」

一々癇に障る言い方で挑発してくる男の声。その声の質からして、腹立たせようとしてくるのが彼にもよくわかるのか。

しかし、問答無用で危害を加えてくるつもりでないことはわかった。デュエルをするのが目的ならば、こちらにも分があると、浅ましくも勇ましく…後ろからデュエルディスクを取り出して。

「ぐっ、いいぜ！やってやるよ！でもその前に二人を離せ！デュエルはそれからだ！」

「ダメダメ。大事なお友達は人質なんだからさー。助けたかったら僕に勝ってよ。あ、ちなみに負けるとこの二人…死ぬからね。ははっ。」

「なっ!?」

そんな中、男の突然の宣言に…なんの悪びれもなく発せられたその言葉に、思わず動揺する遊良。

そんな話、にわかには信じられないことだ。

しかし、この異常な光景を見る限り、嘘と言い切れないのがもどか

しい。大きな腕につかまれていて、そのまま握りつぶされでもしたら命はないだろう。それを用意に想像させるくらいに、今の状況は異常なのだから。

「…デュエルで…生死をかけるなんて…」

信じられない、信じたくないが、それに反して遊良の心臓はうるさく響く。

「だってそれが【決闘】だろ？大事なものを賭けないと。それにさ、OKしちゃったじゃん？大丈夫、嫌なら勝てばいいんだよ…じゃ、やろっか。」

「…くそっ！」

それでも、こちらに分があると簡単に決闘を受けてしまったことを後悔しながらも、遊良は自分のデュエルディスクを展開し始めた。

―何事においても、決闘者ならば決闘に関して逃げてはいけない。それが決闘者である者ならば。

今朝も使った、オーソドックスなタイプのディスクを腕に固定し、デュエルプレートが機器の中から展開される。

デッキがホルダーから現れオートシャッフルされると、男も同じように展開し文字通りの「決闘」が始まった。

―決闘（デュエル）！

「先攻は俺だ！俺は【トレード・イン】を発動！レベル８の【神獣王バルバロス】を捨てて２枚ドロー！もう一枚【トレード・イン】を発動！【ギルフォード・ザ・ライトニング】を捨てて２枚ドロー！…よし、１枚伏せて【手札抹殺】を発動！俺は３枚捨てて３枚ドロー！」

「僕は5枚捨てて5枚ドローするよ。」
「【シャドール・ビースト】の効果でさらに1枚ドロー！さらに伏せてあった【貪欲な壷】を発動！墓地に捨てた【カイザーシースネーク】・【銀河眼の光子竜】・【シャドール・ビースト】・【神獣王バルバロス】・【ギルフォード・ザ・ライトニング】をデッキに戻して2枚ドロー！そして俺は1枚伏せてターンエンドだ！」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：5→5
場：無し
伏せ：1枚

いつものようにデッキをフル回転させる遊良。
どうしても事故率が高いこのデッキは、先攻に大型を出すことは少なく、こうして回して、回して、回して、そして攻める準備をしてから始まる。これで手札も伏せカードも磐石。次のターンにから一気に攻められるだろう。

「いやぁ、凄い凄い。【出来損ない】の癖にここまで頑張るって。ははっ、必死すぎて笑えるけど。」
「…なんとでも言え。これが俺の戦い方だ。それより、お前のターンだぜ？」
「はいはい、僕のターン、ドロー。僕は【ブリキンギョ】を召喚、その効果で手札から【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！さらに効果で【レッド・ガジェット】を手札に加える。」
「【ガジェット】!?お前、そのデッキは…」

しかし、ターンが移ってすぐに目の前に現れた歯車の機械に、遊良は思わず驚きの声を上げた。
別に、【ガジェット】自体はそう珍しいカードではない。使用者もそれなりにいるし、かなりメジャーなテーマの一つ。

…しかし、遊良が驚いたのはそんな些細なことからでは断じて無い。

そう、このタイミングでわざわざ、見せつけのようにして【ガジェット】というデッキを使用するというこの男の行為に、自分への挑発以外ありえないと、そう確信した為だ。

遊良とて、何度も戦っているからこそわかることだが…

ーこれは紛れもない、鷹矢のデッキなのだから。

「そうだよ、君のお友達の男の子のデッキさ。僕デッキ持ってなくてさぁ。丁度良いからこっそり借りたんだ。」

「…ふざけやがって。鷹矢のデッキを勝手に…」

「まぁまぁ。そう怒らないでよ。ちゃんと返すって。…君が勝てればね。僕はレベル４の【ブリキンギョ】と【グリーン・ガジェット】でオーバーレイ！機械族２体でオーバレイネットワークを構築！」

男の宣言と共に、足元に銀河のような渦が現れその中にモンスター２体が光となって吸い込まれる。

エクシーズ召喚特有のエフェクト。同じレベルのモンスターを素材に、レベルを持たないモンスターを生み出す召喚を。

「エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！【ギアギガントX】！」

【ギアギガントX】　ランク４

ＡＴＫ／２３００　　ＤＥＦ／１５００

その光が弾けると…男の場に、巨大な機械の戦士が現れた。

その体の周りには、円を描くように２つの光球が回っていて。ラン

クを持つエクシーズモンスターは、力の源であるこのオーバーレイユニットによって真価を発揮するのだ。

「そのまま【ギアギガントX】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、デッキから【ブリキンギョ】を手札に加える！」

「いきなりエクシーズ召喚を決めてくるか…」

「君の場にモンスターも居ないし、早速ダメージだ！バトル、【ギアギガントX】でダイレクトアタック！」

そして、機械の巨腕が遊良に迫る。

もしこのまま勢いよく迫るこの腕で殴られて、簡単に攻撃が通ればいきなりＬＰが半分以上引かれてしまうことは必至。

…幼馴染たちの命がかかっていると言われていて、それを易々通すほど遊良は甘くないが。

「リバースカードオープン！罠カード【メタルリフレクトスライム】！守備力３０００のモンスターになって俺の場に特殊召喚する！」

得体の知れない敵とはいえ、デッキ自体は鷹矢のデッキ。

戦いなれている分、何をしてくるかは遊良だっておおよそ理解できる。もしデッキの中身も昨日のままなのだとしたら、彼だって同じデッキでも鷹矢以外に負けてやる気はないのだ。

「へー、そんなの使ってるんだ。じゃあ攻撃はやめよう。カードを２枚伏せてターンエンド。」

男　ＬＰ：４０００
手札：６→４枚
場：【ギアギガントX】
伏せ：２枚

「俺のターン、ドロー！一気に決める、俺は【冥界の宝札】を発動！そして…」

―こんな決闘、すぐに終わらせてやる。

「おっと、ここで永続罠【生贄封じの仮面】を発動！」

そう息巻いた遊良だったが、男のその宣言により場には奇妙な形をした大きな仮面が出現した。しかし、思いもよらない返しに思わず遊良の心臓が大きく跳ねるのを感じてしまう。

「なっ!?【生贄封じの仮面】だって!?そんなカード…」

そう、遊良の頬に、思わず冷たい汗が垂れてきてしまった。

それは、こんな戦いに長々と付き合ってやる気はない、そう思って一気に勝負を仕掛けにいった遊良だったのだが、思いもよらない手が帰ってきた為であって。

そもそも、このカードは鷹矢のデッキには入っていないはずの罠。ともすれば、明らかに遊良の戦術を知った上で対抗策としてこの男が加えた物なのだろう。

「フフフッ、こんな時代遅れのカードを使われるのは予想しなかったのかな。でも効くでしょ？君には特にさ。」

「…お前、くそっ。」

飄々とそう言ってくれる男だが、遊良にとってその制限は効くどころではない。この世界において誰もが見向きもしないようなアドバンス召喚を逆に力に変え、そして活路を見出してきた遊良だ。

ＥＸ適正が無いことも相まって、今まで誰も遊良を対策などしなかった。逆に鷹矢やルキはエース同士での殴りあいを好んだからこそ対策もへったくれも無かったが、今この時点でこの罠はとてつもな

い痛手となるのだから。

「くっ…だったら、それを乗り越えるカードを引けばいいだけだ！【闇の誘惑】を発動！2枚ドローし、【堕天使アスモディウス】を除外する！…よし、速攻魔法【サイクロン】を発動！お前の【生贄封じの仮面】を破壊する！」

「おっと、ここでちゃんと引けるんだ。…なるほどね、未だにしがみついているだけの事はある。」

だが、こういった所謂メタカードと言うものは汎用的な対策カードで突破できる。

…これくらいのことで、踏みとどまるわけにはいかない。なにせ、幼馴染たち二人の命がかかっているのだ。意地でも突破しなければならない。

しかし、遊良を封じるカードを破壊されたというのに表情一つ変わらない男に、遊良は冷や汗が止まらなかった。

このまま動いていいものか、まだ様子を見たほうがいいか…、そんな思考が頭の中でグルグル回って。

得体の知れない相手、負ければ二人は死ぬかもしれない。本当に。

（鷹矢…ルキ…）

しかし、それを無理やり振りほどいて。奇怪な黒い腕に捕まっている二人を見て、迷っている暇は無い、早く決着をつけなければと決心を固める遊良。

「残念だったな！これで動けるぜ！」

「確かに、ちょっと意外だったよ。ここでちゃんと突破できるカードを引く辺りは流石かな。…でもまだダメだ！僕は罠カード【ブービートラップE】を発動！手札を一枚捨てて破壊された【生贄封じの仮面】

を再びセット！そしてこれは伏せたターンに発動できる！再び【生贄封じの仮面】発動だ！」
「なっ!?ば、ばかな！」

そんな時に、折角破壊したというのに再び現れる【生贄封じの仮面】。さっきは運よく突破できるカードを引けたが、もう遊良の手札にはドローソースは無く、その手札には上級モンスターと、今は使い道のない魔法のみ。

「くっ…そ…、い、1枚伏せて…た、ターンエンド…」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：6→3枚
場：【メタルリフレクトスライム】
魔法・罠：【冥界の宝札】・伏せ1枚

「僕のターン、ドロー。【ブリキンギョ】を召喚し、【レッド・ガジェット】を特殊召喚！効果で【イエロー・ガジェット】を手札に！そして2体でオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク4！【ギアギガントX】！」

そして、男の場には2体目の【ギアギガントX】が現れた。
後続を切らさずに戦えるガジェットは、毎ターン安定して展開してくるのが特徴だ。このまま長引けば遊良の方がジリ貧になって手に負えない。

「二体目の【ギアギガントX】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使って3枚目の【ブリキンギョ】を手札に！さらに二体目の【ギアギガントX】の効果も発動！デッキから【グリーン・ガジェット】を手札に！」
「だ、だが、それじゃあ俺にダメージはないぞ！」

「安心してよ。さっきのお返しだ。速攻魔法【ツインツイスター】を発動。手札を一枚捨てて罠カード扱いの【メタルリフレクトスライム】とその伏せカードを破壊する！」
「なっ!?」

そう言って男が発動したのは、遊良が先ほど使った【サイクロン】の上位交換カード。手札コストがあるとはいえ、ここで一気に２枚のカードを破壊されると遊良はこのターンで終わってしまう。

「させるか！リバースカードオープン！速攻魔法【終焉の焔】を発動！黒焔トークン２体を守備表示で特殊召喚！」

しかし、そんなものを簡単に通すわけにはいかない。
遊良が破壊される前に発動した【終焉の焔】によって、場には遊良を守るように揺らめく黒焔の魂が２つ現れた。だが、その揺らめきは今にも消えてしまいそうな物であって…

「でも【メタルリフレクトスライム】は破壊するよ。…しょうがない、このままバトルだ。【ギアギガントX】２体で黒焔トークン２体を攻撃。」

―！

男の攻撃宣言で、二つの黒焔に迫る鉄の拳。
ただ揺らいでいるだけの黒焔は、主人を守るだけで精一杯なのか。
二つの魂はなす術なく吹き飛ばされて消えてしまって、遊良の場には何も残らず。

「く…」
「僕はターンエンド。さっ、君のターンだよ。」

男　ＬＰ：４０００
手札：５→４枚
場：【ギアギガントＸ】【ギアギガントＸ】
魔法・罠：無し

これで、遊良の場にはカードが無くなってしまった。相手の場には２体の【ギアギガントＸ】と遊良を封じる【生贄封じの仮面】。そして手札に起死回生のカードはない。

「く…そ…」

悔しそうに男を睨む遊良。
ここでまたサイクロンを引くか、ドローソースで体勢を整えられなければ…彼とて何も出来なくなってしまう。
そして、そうなってしまえば次のターンは耐えられないことは必至。今まで引いたカードと、残りのドローソース、そして手札のモンスターカードを見比べて…遊良は考える。

（どうする？…このままじゃ、多分、次のターンにあれを突破できるカードは引けそうに無い…。俺の残りのデッキのカードを逆算しろ…罠をくぐって、上級を出すには…）

必死に焦る頭をフル稼働させて考える。こういう時に、思考を止めることは勝負を捨てたに等しいことを知っているから。

ーただのデュエルならばまだいい。しかしこれには命がかかっている。

そんな中で、自分のデッキから考えられる手は…

（…な…い…）

絶望的ともいえる確率が思い浮かび、自分の無力さがひしひしと襲い掛かって来てしまった。多分このままでは、たとえ次のターンを何とか凌いだとしても…じわじわと嬲り殺されることに変わりはない。

「あれれー、どうしたの？早くドローしないの？」

（…どうすればいい…このままじゃ…）

そんな声をよそに、遊良は心が深く沈み、デュエルディスクを支える腕さえも重くなった。

そう、遊良のデッキは、相手のＥＸデッキから出てくる強力なモンスターに対抗するために、必然的にメインデッキの中には上級モンスターが多くなっているが、対抗するにも何をするにもそれは召喚できればの話し。

今、現状のこの手札では…およそ壁モンスターは出せても、相手の男は必ず更なるエクシーズ召喚をしてトドメを指しに来ることだろう。

（こんなときに、俺もＥＸデッキが使えたら…くそ…なんで俺には…）

そう思うと、遊良の手がデッキに伸びなくなってしまう。

そんな心情の中で、遊良には当に諦めていたはずの感情が沸きあがってきていた。

幼い日に宣告されても、それでも後天的にＥＸデッキが扱えるようになるのではないかと微かな期待もあった過去。しかし、いつまでたっても変わらない自分に、期待などは捨てたはずだったのに…

ーそれなのに込みあがるモノが押さえきれない。今にも目から零れそうになる。

…そんなときだった。

「…う…こ、これは…」
「…え…なにこれ！」
「あれれ、起きちゃった？もうすぐ終わるとこなのになー。」
「鷹矢、ルキ！…気がついて…」
「遊良…お前、何をして…なんだこれは？なぜこんな物に掴まれている？まるで意味がわからんぞ！」
「遊良!?なんでデュエルなんか…」

唐突に、目を覚ましたものの状況が飲み込めずに、騒ぎ始めた鷹矢とルキ。しかしこんな状況に置かれてもなお、その目が…力なく腕を下ろして今にも泣きそうな遊良を見たのか、その矛先を男に向ける。

「貴様、遊良に何をしている！」
「何って、ただのデュエルじゃん。」
「嘘よ！ただのデュエルで遊良がそんな顔するわけないから！」
「まあねぇ。ちょっと賭け事をしてるだけだけど。」
「賭け…だと？」
「遊良君が勝ったら、君たちは怪我なく帰れる。でも負けたら…君たちは死ぬ。」
「なっ!?デュエルで命を賭けるだと!?」
「そんな…馬鹿なことって…」

その言葉で、得体の知れない男の、想像もしていなかった返しに…思わず鷹矢とルキは驚いてしまった。
そう、普通ならば、デュエルの勝敗なんかで命のやり取りはしない。しかし、今の自分達の置かれている状況を見て、それが虚言でないことを理解したのか息を呑む。
今、自分達は男の影から出ている謎の黒い腕に捕まって、宙に持ち

上げられている。掴まれている感触も本物で、そのまま握りつぶされでもしたら本当に死んでしまうかもしれない恐怖からだ。

しかし、一瞬の沈黙の後…

「…構うな遊良！サレンダーしろ！」
「そうだよ！遊良だけでも逃げて！」
「なっ!?お前ら何言って…」

それは、捕まっているはずの幼馴染達からの、思いもよらない提案。
遊良とて、そもそも二人を守るために戦っているというのに、今更逃げられるわけがないというのに。
しかし、それに苛立ったのか、対戦相手の男が言った。

「…もー、うるさいなぁ。もう終わるんだし、ちょっと黙っててよ。」
「な…ぐ、うぁぁ…」
「あっ…あぁ…」

不意に男が手をかざすと、まるで従うように鷹矢とルキを掴んでいた黒い腕が力を強めた。
急に力を増した影の腕に締め付けられ、鷹矢とルキが苦しそうな息を漏らしたが、それを聞いたところで男は全く緩めようとはしない。

「やめろ！鷹矢とルキを離せ！」
「だったら早くドローしなよ。２人が苦しんでるのは君のせいなんだから。まぁ、君が負ければ２人も死ぬんだけど。」
「…くそぉ…」

—どうすればいい。

このままでは勝ち目は無い。かといって鷹矢とルキを見捨てて逃

げ出すわけにもいかない。

もう、わけがわからない。ついさっきまで何気ない、いつもと変わらない日だったはずだ。それがなぜ、こんなことになったのか。

「ねぇ、まだー？いい加減早くしてよー。それとも逃げちゃうー？」

男の言葉が耳に届くが、どうしたらいいのか分からない。見たくも無い光景に遊良は目を瞑り、視界が真っ暗になる。

―…

―…ッ!?

その瞬間の出来事だった。

不意に足元が不安定になり、ぐらりと揺れるあの感覚が遊良を襲う。

そう、今日も数回起きたもの。今このタイミングで起こることもそうだが、何より頭の中が直接揺れている気持ち悪いこの感覚。

そのため遊良は目を反射的に開けたが、何故かその先には何も見えず…閉瞼していた時と全く変わらない暗闇が、ただ無限にそこには広がっていた。

遊良のその視界は暗いままで…全く光が無いくらいの、真っ暗闇

が。

そこには鷹矢の姿もルキの姿も、そして対戦していた男の姿すら見えない。

「な、なんだこれ…」

足が地面についている感触すら無い。体が浮いている感覚、奇妙な浮遊感が体を包んでいた。

―『力が欲しいか…』

「な、なんだよ！誰だ！」

そんな時、急にこの暗闇に声が響いた。

それは、今日何度も聞いた声。体の中がザワザワして、嫌な感じがする声。

―『力が…欲しいか？この場を収められる力が…』

これは、夢なのだろうか…。

デュエルの真っ最中にこんなことになるなんて普通はありえない。余程の絶望が現実逃避でも起こしたのか。

「い、意味がわからない…」

そんな事を考えても、全く納得などできはしない遊良。目を見開いて、耳を澄ましても何も感じない。先ほどまでの男の姿も、決闘の喧騒も聞こえてこない。

ーこんな事、ありえない。

しかし、そうは言っても現状このまま決闘を続けていても勝ち目など出てこない事は確定していて、もしこの声がいうような力が得られるのであれば確かに嬉しいことには違いないのだが…

Ｅｘ適正が無い自分に、こんな状態で得られる力など無い。それは彼とて重々承知している。

どうせ、夢か幻…現実逃避の成れの果て…

だったら、もうどうにでもなれと、遊良は胸のうちを開けた。

「力だって?……そんな物、欲しいに決まってるだろ!そんなことガキの頃から何度だって思ってた!…でも、俺はＥＸデッキが使えないんだよ…いくら力をくれるって言っても、ＥＸデッキが使えないんじゃ、デュエルディスクが創造すらしてくれないんだよ!」

今まで隠してきた自分の弱さ。強がっていても、皆が出来ることが出来ない。そんな、今まで溜め込んできたものを一気に吐きだす遊良。

そう…いくら強がっていても、その悔しさは簡単に吹っ切ることが出来ない。

「ＥＸデッキが使えない奴が…今更、力なんて得られるはずが…」

ー!

「ッ!?」

しかし、そう言った遊良の目の前に、突如いきなり明るい光が湧き

上がった。
それは、とても小さな光で今にも消えてしまいそう…
しかしこの暗闇にしっかりと輝いている、1枚のカードであって。
謎の声は、続けて言う。
―『では…貴様が遠い未来に手に入れられるはずだったこの力を捨てても…貴様は今、力が欲しいと願うか？』
「え、な、なんだって!?これ、俺のＥｘモンスターなのか!?お、俺が…Ｅｘデッキを使えるようになる…ってのか？」
―『そうだ。この場を逃げ出し、一人生き延びた末に、貴様は修練の末、神の情けで一つの召喚を与えられる。…そういう未来も確かにある。それはそのカードだ。』
「…う、嘘だ…ほ、本当に俺がＥｘデッキを…」
思いもよらなかったその声。
思わず、咄嗟に、無意識に。遊良は自分が得られるというＥｘモンスターに、手が伸びそうになる。
しかし、その手を遮るかのように声は続けた。
―『再び問おう。それを今、捨ててなお貴様は力を願うか。』
「…あ…俺は…」
…不意に、掴み掛けたその手を止める。
思っても見なかった未来、まだ年端も行かない幼少期に絶望を味わい、周囲の冷たい目に晒されてきた過去。

いくらＥｘデッキに頼らない戦いを磨いても、周りは認めてくれず、それにも慣れてきて諦めすらしていた自分。
一時は、このままデュエルをしていて良いのかと、悩んだりもした。

―それでも、デュエルを諦められなかった。

もしこの声の言う事が本当であれば、今まで惨めに生きてきた自分が、ついにＥｘデッキを扱える未来があるのだと。

眼前に浮かんで輝いている一枚のカードを見つめ、捨てきれない気持ちが大きく膨れる。自分自身の力が、こんなにわかりやすく見せて貰えることが、たまらなく嬉しい。例えこれが、現実逃避の末の幻聴だとしても。

もしそれが本当なのだったら、それは彼にとっては願ってもないことだ。

…正直、Ｅｘデッキを扱う鷹矢やルキを羨ましく思っていたのも事実。

いや、この二人だけではない。
自分以外の人間はＥｘデッキを扱えるのだ。いくら考えないようにしてきても、心の底では一種の羨望があったことに変わりはない。
それは、いくら自分よりも弱いデュエリストであっても。

もし、自分がＥｘ適正を得ることが出来れば、今まで自分をバカにしてきた周囲を見返すことができる。自分の存在を認めさせられる。

もう…「出来損ない」などど言われずに済む。

そう、思った。

「俺…は…」

そう、思っても

「俺は……Ｅｘ適正なんていらない！Ｅｘデッキが使えるようになっても、そこに鷹矢とルキが居ないんだったら、周りを見返したって意味が無い！」

もしここで、一人逃げ出して生き延びても…Ｅｘデッキを使えるようになっても、そこに二人が居なくなっていれば、自分も生きている意味は無い。

二人が居なかったら、きっと自分も生きることをとっくに諦めていただろうから。

「…よこせ！」

泣きそうな声を振り絞って、遊良は叫ぶ。

「力をよこせ！あんたが誰だっていい！どんな力だっていい！」

渇望していた筈の「希望」を捨てなければいけない後悔と、そんな

不甲斐ない自分の力の無さを悔やむ。悔しくて胸を掻き毟りたい、そんな衝動が自分を襲う。

けれど、それでも…

「いつか得られる力じゃ遅いんだ…俺自身の力じゃなくたって！今ここで！鷹矢とルキを守れなくちゃ意味が無い！」

自分の境遇も生い立ちも、願いも未来も渇望も

―そんなもの今はどうでもいい。

どんなことも些細なことだ。今、鷹矢とルキを失うことに比べたら。

声は続ける。

―『では貴様は今、力を得る代償に…これから得られたであろうこの力の一切を捨てる…よいな。』

「構わない。期待を持つのはもう…やめる。俺はＥｘデッキなんて…使えなくていい！」

そう、決心して。遊良は目の前に燦然と輝く自身の未来のカードに手を伸ばすと…

―それを握り潰した。

もう、後戻りはしないために。そして、徐々にその光は消えていき、再び真っ暗な闇が視界を覆う。

―『よかろう。では、神と決別する貴様に与えるのは…』

―…

「ねぇ、まだー？いい加減早くしてよー。それとも逃げちゃうー？」

瞑っていた目を開ける。もう、迷いはない。

「ぐ…ゆう…ら…」

「ゆー…らぁー…」

鷹矢とルキの苦しそうな声が聞こえ、体が熱くなる。今にもあの男につかみかかり、殴り倒してやりたい衝動に心がざわつき体が疼く。しかし、熱くなった体とは対照的に、頭は痛いくらいに冷え、視界は開けていた。

そして、自分が今何をすれば良いのかを理解し、目の前の男をしっかりと見据えて…

―遊良は、叫ぶ。

「逃げはしない！行くぞ！俺の…」

―『同じく神に背く、黒き翼持つ者達だ…』

「タァァァーン！」

勢いよくデッキからドローする遊良。そして引いたカードを一瞥すると迷い無く発動した。

「俺は魔法カード、【堕天使の追放】を発動！その効果で、デッキから【堕天使】カードを手札に加える！俺は【堕天使イシュタム】を手札に！そしてそのまま効果発動！手札のイシュタムと、【堕天使スペルビア】を捨てて…２枚をドロー！」

「…ッ!?堕天使？」

先ほどとは打って変わって迷いの無くなった遊良に、余裕な顔をしていた男の表情が、珍しく険しくなるのが見てわかる。

その動揺からか鷹矢とルキを掴んでいた腕の拘束が緩み、二人の表情からも苦しさが消えた。しかし直ぐに二人も、同じく遊良の発動したカードを見て驚いだ表情をする。

「堕天使だと…遊良のデッキには確かにアスモディウスやスペルビアなんかが入っていたが、あんなカードなんてあったか？」

「見たこと無いよ…あんなカード…」

それは、幼馴染の二人も見たことの無いカード。そのはず、この力は遊良しかその発現を知らないのだから。

しかし、夢などではないと、はっきりわかる。

「もうお前に容赦はしない！魔法発動！【堕天使の戒壇】！墓地から【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚！」

【堕天使スペルピア】レベル８

ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

そして遊良が呼び出したのは、今までも使っていた堕天使の一体。
壷のような特異な形容をしてはいるが、その力は高く、本来ならば墓地からの特殊召喚時に仲間も復活させることが出来るのだが、今までの遊良のデッキでは打点要因か、デッキ回転のパーツの一つであって活躍の場がほとんど無かった。

しかし、今は違う。

「そしてモンスター効果発動！スペルビアが墓地からの特殊召喚に成功した場合、墓地から更なる堕天使を呼び戻す！来い！【堕天使イシュタム】！」

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

遊良の呼応に反応し、本来の力を存分に発揮する堕天使。そして続いて遊良の場には、魅惑の羽を持つ堕天使が現れた。その姿は堕天したとは思えないくらいに神々しく美しい。

しかし、まだまだ。それだけでは終わらない。
彼女らの効果は、主の命を代償に、散っていった力さえ再び発動させるのだから。

「まだだ！魔法カード【おろかな副葬】を発動し、デッキから【背徳の堕天使】を墓地へ！そしてイシュタムのモンスター効果！１０００ＬＰを払い、墓地の【背徳の堕天使】の効果を得る！【生贄封じの仮面】を破壊！そして【背徳の堕天使】はデッキへ戻る！」

遊良　ＬＰ４０００→３０００

「これで制限はなくなった。」
「くっ…あくまでもアドバンス召喚する気か。これだから出来損ないは！」
「黙れ！もう俺を…出来損ないとは言わせない！ＥＸデッキが使えなくても、俺の存在を否定させない！」

その言葉に迷いは無い。淡い期待など捨て去ったから言える言葉を。今まで持っていた僅かな期待も、一切の希望も失くして。

「俺は二体の堕天使をリリース！」

もう二度とＥＸデッキを使えない、使わないと覚悟した者の自負。遊良の宣言で二体の堕天使が渦を纏う。

「現れろ！レベル１１！」

召喚せしは、背徳の責を背負わされても、なお神に反逆する者。

「神に背きし反逆の翼！その姿を今ここに！」

遊良の覚悟が形となりて、姿を現す。

「来い！【堕天使ルシフェル】！」

―！

清廉なる天の光。それを遮る黒き姿。

漆黒の羽を広げ、二振りの刃を携えて降臨する。その姿はまるで神

か悪魔か。神々しくも悲しげなその姿は見る者を魅了する堕天使達を統べる者。

【堕天使ルシフェル】レベル１１
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「すごい…遊良がこんな…」
「あぁ…凄いモンスターだ。」

神々しく天に佇む堕天使に、つい見とれている二人。
神に背く堕天の王は、アドバンス召喚成功時に、更なる堕天使を呼び寄せる力を持つのだ。

「【堕天使ルシフェル】のモンスター効果を発動！アドバンス召喚成功時、相手フィールドの効果モンスターの数だけ、デッキから堕天使を特殊召喚できる！集え、【堕天使マスティマ】、【堕天使テスカトリポカ】！」

【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２６００
【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００

そして、息切れなど感じさせずに次々と堕天使達を呼び出す遊良。そのどれもが見たことのないモンスターであり、鷹矢とルキは驚きを隠せない様子を見せている。
先ほどまでどうすればいいかわからず、泣き崩れそうな姿とは打って変わって。今では負けることなど考えられない、強者のオーラを纏う遊良。

「くっ、一斉召喚だと…でも、総攻撃を受けても僕のライフは残る！次

のターンにまたエクシーズ召喚で…」
「おい、何か忘れてないか？」
「…え？」
「俺は場の【冥界の宝札】の効果発動！アドバンス召喚成功時、俺は強制的にデッキから２枚ドローする！…よし、魔法カード【死者蘇生】を発動！墓地の【堕天使スペルビア】を蘇生！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

「…そうか、こういう始まり方なのか。…、これは想像以上だったよ。」
「何をブツブツ言っている！バトルだ！【堕天使マスティマ】と【堕天使テスカトリポカ】で２体の【ギアギガントＸ】を攻撃！そして【堕天使スペルビア】でダイレクトアタック！」

―！

遊良の宣言で、次々に男の場のモンスターを蹴散らす堕天使達。
突如現れた新たな力と、真なる力を発揮した堕天使によって…その攻撃は、ついに余裕そうだった男にまで届いた。

「…くっ」

男ＬＰ４０００→３００

「これで終わりだ！【堕天使ルシフェル】で、あいつにダイレクトアタック！」

そして、ルシフェルが天高く舞い上がり、二つの剣に光を集め始める。

背徳を、反逆を…神に背きし力の全てを、その力を放つために、相手の男に向けて、狙いを定め…

…それは、遊良の宣言とともに放たれた。

「背徳の一閃、バニッシュ・プライド！」

―！

ルシフェルが振り下ろした、その二振りの剣から放たれた一撃は、一筋の閃光となって男を貫く。

まるでそれは、遊良の怒りその物のようで。

「クッ…」

男ＬＰ３００→０（―２７００）

―ピー…

そうして起こった爆風と共に、無機質な機械音が鳴り響くと、それは、間違いなく遊良の勝利を告げていた。

ｅｐ４「後悔、そして邁進」

―『いやぁ、焦った焦った。まさか堕天使使ってくるなんてさ。ちょっと予想外だったよ。』

―『ケケッ、負けてノコノコ帰ってきやがって。俺様だったら有無を言わさずぶっ殺してたぜ。』

―『ダメよ。それはアタシ達がやることじゃないんだもの。』

―『そうそう。僕たちのやることはひとまずここまで。暫くは彼の物語を楽しむことにしよう。』

―『御意。全ては彼の方の御心のままに。』

―『オメー、固っくるしーんだよ。あっち行け。』

―『…御意。』

―『こらこら。みんな仲良くしなきゃダメじゃないか。フフッ。楽しみだね。彼が今後、どういう風に進むのか。』

―……

「はぁ…はぁ…」

爆風が晴れ、ソリッドヴィジョンが徐々に消えていく。しかし、さっきまでそこに立っていたはずの男の姿もいつの間にか消えていた。

「…どこいきやがったあいつ…鷹矢！ルキ！」

鷹矢とルキを掴んでいた影のような腕も徐々に薄くなり、力なく垂れてくる。そして、拘束が解かれて二人はゆっくり地面に足をつけた。

「遊良！無事か!?」

「…それは俺の台詞だっての…」

「遊良！何で逃げなかったの！あんな危ないことして！」

「…だから…なんでそれをお前らが言う…」

自分達の方が危ない目にあったというのに、いの一番に遊良の心配をするあたり、やはり幼馴染。遊良と考えることが一緒であるようだ。

二人にも怪我はなさそうだ。そう感じ、そこで遊良はホッと一息ついた。

「…よかった…無事で…」

息も絶え絶えに、二人の無事を喜ぶ遊良。今のデュエルはやけに疲れた。二人の生死を賭けた絶対に負けられない決闘。そして謎の声から得た力。今日は一度に色々な事が起こりすぎた。

「…ゆ、遊良？本当に大丈夫？」

「おい、お前顔色が…」

「だい…じょー…ぶ…だって…」

そう強がってはみるものの、不意に遊良の体から力が抜けた。体がフワッと中に浮いていく感じがして気持ちが悪く、意識も遠くなる。

（…あ、これ…やばい…）

そんなことを思った瞬間、遊良の意識はそこで途絶えた。幼馴染達の叫びを、やけに遠くに感じながら。

――…

「なんで捨てた？」

聞こえてくるのは自分の声。ただし怨嗟の篭った、くぐもった声。

「折角、ＥＸデッキがつかえるようになるって分かったのに。お前、あんなに渇望してたのに。」

僅かに残る、ＥＸデッキへの羨望。決心したとはいえ、今の今まで憧れてきたもの全てをすぐに捨てきれるはずもない、という自分の残心。

「出来損ないって言ってきた奴らを、見返すチャンスだったじゃねーか。それなのに、これからはもう絶対にＥＸデッキが使えなくなるなんて。鷹矢もルキも、自分なんて良いから逃げろって言ってただろ。きっと逃げても二人は恨まなかったのに。…それなのにお前はあの場で勝つためだけに、今まで持ってた希望全部を捨てたんだ。」

聞いていて、段々と苦しくなる。確かにあった、自分のもう一つの心。もしこいつが、あの場で勝っていたら、今頃鷹矢とルキを置いて、一目散に逃げていたことだろう。

「どうしてくれる。お前のせいで、俺は…」

そして、次々と溢れてくる後悔の念。あの時の自分の決心を、一番諦め切れていないのは、きっと自分自身なのだ。しかし、それでも…

「逃げられなかった。あそこで二人を見捨てていたら、きっとこれからデュエルなんて出来やしない。」

きっと今、この時以上の後悔の渦が自分を襲っただろう。それに、たとえ逃げ延びたって自分で命を絶っていたかもしれない。

「後悔はある。それでも、決めたんだ。」

きっと、自分がこれから歩む道は決して楽ではない。皆が持っている当たり前を、持っていない自分に対して手を差し伸べてくれるほど、世界は優しくできていない。

「いつか。きっと。俺にもＥＸが使えるようになる。そうしたら皆も認めてくれる。…そう願ってきたよな？…俺は、ずっとそうやって我慢してきたよな？なのにお前…」

「もう、認めてもらうのを待つのはやめる…これからは、認めさせてやるんだ。」

それなら、自分から動いてやる。認めてもらうのを待つんじゃない、無理やりにでも認めさせてやる。自分を否定する世界に、自分の力で認めさせてやる。そう、強く誓った。

――…

「…う…」

見慣れた天井が視界に入り、遊良は目を覚ました。どうやら自宅の部屋らしい。気を失った自分を鷹矢が運んだのだろう。

部屋の中に電気が付いているが、窓の外の暗さから、もういい時間なのが見てわかった。

ベットの横では待っている間に力尽きたのだろう、ルキがベットに突っ伏して寝息を立てていた。薄っすらと涙の痕が付いている。

（そっか、俺あの後気を失って…）

ルキを起こさないようにベットから出て、背中にタオルケットを被せてやる。こうやって自分を心配してくれたのは嬉しいが、季節はまだ春の初め、これで風邪でも引かれたら寝覚めが悪い。

それに、元々泊まっていく予定だったのだからこのまま寝かせてお

いてやろう、と、静かに遊良はそのまま部屋から出て階段を降りていく。
そして、降りて直ぐにあるリビングの扉を開けた。
「あ。」
「む？」
するとそこでは、鷹矢がちょうどカップラーメンを啜っているところだった。あまりにいつも通りの鷹矢の姿に、思わず拍子抜けした遊良だったが、そんな鷹矢を見て半ば呆れた声で言う。
「こんな時間にカップメンか？太るぞ。」
「食ったものは全て筋肉に変わるから問題ない。」
冗談交じりに、いつもと変わらない言葉を交わす遊良と鷹矢。
『あんなこと』があったばかりだと言うのに、よく飯が食えるものだと思ってしまう遊良だが、三代欲求の一つ、食欲を相手にした鷹矢にはそんな事など関係なかったのだろう。彼は何の悪びれもなく言い放った。
「流石に腹が減った。お前は倒れるし、ルキはお前の傍から離れなかったからな。誰が俺の飯を作ってくれるというのだ。」
「…お前は相変わらずだよ。そういえばルキが泣いてたみたいだけど、あいつは随分心配してくれたみたいだな。」
「あの後は酷かったぞ。特にルキがお前にしがみついて泣きじゃくっていた。『死んじゃいやー』って具合でな。正直煩かった。」
「おい、お前は心配しなかったのか？…薄情なやつだな。」
「遊良、もう起きて大丈夫なのか？」
「おせーよ！本当に薄情だお前は！」
そういうものの、遊良には鷹矢のそれが冗談だという事は分かって

いる。言葉だけ聞くと薄情にも思えるものの、付き合いが長いからこそ、微妙なニュアンスすら理解できるのだから。
あまり感情を出さないものだから誤解されることもある鷹矢だが、そのあたりの理解は流石幼馴染だ。伊達じゃない。

「んで鷹矢、お前は何ともないのか？」
「ああ。問題ない。」
「そういえば、お前のデッキ勝手に使われてたぞ。ちゃんと戻ってきたか？」
「やはりか。あの男のモンスターが妙に見慣れた奴らと思ったら。…まぁ問題ない。あの男の立っていた所に奴のディスクも落ちていたがデッキも無事だった。」

鷹矢とルキもあんな目にあった後なのだ。怪我の一つもあってもおかしくなかったのだが、本人が問題ないというのならば一安心だろう。デッキもしっかり戻ってきたというのなら、とりあえずはこちらに被害もない。
そしてもう一啜り、鷹矢がカップラーメンを食べた所で、本題に入ったように鷹矢が口を開いた。

「しかし遊良よ、お前、いつの間にあんな【堕天使】なんてカード手に入れたんだ？凄いカードだったが。」
「…あぁ、そのことなんだけどさ。俺のデッキは？」
「そこの棚に置いてある。全部閉まってきたはずだ。」

そういって、鷹矢の指差した先にある棚の上から、遊良は自分のデュエルディスクを取る。そして、簡単なボタン操作をしてデッキホルダーから自らのデッキを取り出すと、一枚一枚を確認するかのようにして机の上に並べ始めた。
もちろん、鷹矢のカップラーメンが飛ばないように少し離れてだが。

「何故デッキを並べているんだ？」
「……俺もこのデッキの中身がどうなってのか、全然わからないからだよ。」
「…どういうことだ。まるで意味がわからん。」

頭にハテナマークが２つほど浮かんでいる鷹矢だが、その問いはもっともな質問だ。
基本的に、デュエリストは自分で作ったデッキの中身は常に把握している。そんなことは当たり前で、デュエルディスクがＥｘのモンスターを創造するのと違い、メインデッキの中身がわからない状態でデュエルをすることなど通常ありえない。
それにデッキごとに戦略も違うし、そもそもデッキを把握しなければ戦略もへったくれもない。自分が知らないデッキを使うことなど、ほとんどのデュエリストはしないだろう。先ほど戦ったあの男は例外だ。

「それがさ…」

そうして、遊良はあの時のことを話し始めた。朝から感じていた違和感、得体の知れない男との決闘の最中に起きた謎の声と、真っ暗な空間での出来事。

到底、常識では信じられることなど出来ない話だったが、鷹矢は一言も口を挟まず遊良の話を聞いていた。一言も聞き逃さないようにだろう。そして、デッキを整理しながら並び終えたのと同時に遊良の話も終わり、同時に鷹矢が口を開いた。

「なるほどな。うむ、全くわからん。」
「だろうな。俺もわからん。」

予想通りの反応だ。そもそも遊良自身がよく分かっていないことを、鷹矢に理解しろと言うほうが無理がある。

「けど良かったのか？お前、ずっとＥｘデッキを使いたかったのだろう？」

「へ？」

そんな時、鷹矢の問いかけに変な声を漏らしてしまった遊良。まさか、鷹矢がこんな確信を突いてくるとは思わなかったためだ。

何せここ数年はＥｘデッキへの羨望よりも、いかにＥｘモンスターを倒すかを考えて、そして心の奥底に隠したまま忘れていた感情だったから。あの謎の男との決闘で、思わず溢れ出てきた感情だったとはいえ、遊良でさえ忘れかけてたモノを、鷹矢が自分よりも理解しているとは。

「お前…なんで…」

「む？そんなもの、別に見ていればわかる。」

まるで、当たり前のことを当たり前のように。遥か昔から常に一緒にいたのだから、そんな事分かって当然だと言いたげな表情をした鷹矢は、今更何を言っているのだと、その表情で遊良に伝えている。

それを見る遊良もまた、やはりコイツは長年連れ添った相棒なのだと、心の奥底に感じていた。

無論、２人とも照れくさいのか、そんな事など口が裂けても言わないが。

「…なんかむかつく。鷹矢の癖に。」

「なんだと？遊良の癖に。…フッ。」

「ハハッ…」

思わず笑いがこぼれる２人。やはり、笑いは不安を取り除く一番の

薬だ、その声に張り詰めていた気も緩み、遊良も肩の力も抜けた気がした。
そして、安心したような声に変わり、話を続ける遊良。
「まぁ、別にいいよ。…使えなくなったって死ぬわけじゃない。」
「…ふむ。」

遊良の絶望から今に到るまでの全てを知る鷹矢にしても、遊良がＥｘを未来永劫失ったことに関して、無関心ではいられない。
誰よりも近くで遊良の絶望を見てきた鷹矢だ、過去どれほど遊良が渇望していたのかは簡単に思い出せる。自暴自棄になって命すら捨ててしまいかねないこともあったのだから。その時のことを鮮明に、今でも覚えているのだろう。
だが、そんな遊良が本心から「別にいい」と言っているのだ。自分がこれ以上何か言っても、それは遊良の覚悟を否定することになる。ならばもう言葉は必要もないだろう。そう鷹矢は思った。

「まぁ、お前が良いなら良い。しかし、随分デッキの枚数が多くなったな。」
「ああ。元々４０枚丁度でデッキを組んだはずなのに、今はリミットギリギリの６０枚だ。単純計算でも２０枚は増えたことになる。しかも、なくなったカードも何枚かあるみたいだ。」

そう言う遊良の言葉は、新たなカードを得た歓喜の声ではない。むしろ、神妙な面持ちで、苦く残念そうな声が近いかもしれない。
カードが増えただけならまだ良かったが、今ざっと見ただけでも遊良のデッキの中身は、今朝の物とほぼ別物に変わっていた。それは、あの声が与えた力が、Ｅｘデッキに作用したのではなく、メインデッキに作用したことによるものだろう。新しくカードが精製され、それに伴って遊良がデッキ調整でよく入れ替えていたデッキパーツなどは消えてしまっていた。

好んで常に使っていたカードがそのままだったのは、せめてもの幸いか。

「…【シャドール】パーツに、【カイザーシースネーク】…うわ、【銀河眼の光子竜】もない。…手に入れるの苦労したのに。」

「探すのに散々つき合わされたというのにな。しかし、【堕天使イシュタム】に【堕天使マスティマ】か。お前が元々持っていた【堕天使】と違い、こんなカードは見たことが無い。」

「俺もだ。」

極稀に、デュエル中にＥＸデッキに見知らぬカードが精製されることはある。それは既存のカードである場合もあるし、極々稀ではあるが、誰も見たことのない全く新しいカードであることも。

そうでなくても、膨大なカードが溢れているこの世界では、自分が知らないだけと言うカードが多々ある。知識は力とはよく言ったもの、自分の勉強不足で負けました、なんてことはプロでは通用せず、そんな事が無いように決闘学園なんてものがあるくらいなのだから。

「けどまぁ、そんなことはいい。問題は…」

むしろ、自分しか知らないカードを持っているということは逆に、他のデュエリストの不意をつけるという意味では有利かもしれない。

遊良にデュエルの基礎を叩き込んでくれた人物も、相手の裏をかけと、口うるさく言っていた。それに、不正なカードならばディスク自体が反応しない。決闘の最中にディスクが反応したという事は、この堕天使達は問題ないということで大丈夫だろう。

むしろ、今問題なのはそういうことでは無いのだから。

「うむ。このままではこのデッキは使えないということだな。」

「流石にデッキ枚数も多いし、ごちゃ混ぜすぎて回らないだろうな。あの時は丁度ドローしたときに偶然良いカードが引けたから良かっ

たけど…。」

あの男との決闘でも、あんな土壇場でデッキ枚数が増大したというのに、よくもまぁあんなに回ってくれた物だ。今の感じではざっと見ても、事故率が今までの比ではない。このデッキの内容ではシナジーの無いカードが多すぎて満足に回ってくれないことは確実だ。

「一からデッキを組み直すしかないだろうな。折角手に入れたんだ、このまま【堕天使】で行くのだろう？」

「あぁ。取りあえず効果の把握からだな。あと相性のいいカードを考えないと。鷹矢、お前確か【闇の誘惑】余ってただろ？」

「うむ。」

「俺2枚しか持ってないんだ。1枚くれ。」

「わかった。」

遊良の要望に、鷹矢はリビングを出て自室に向かって階段を上っていった。こういう時に何も聞かずに行動に移してくれるところは流石幼馴染。余計なことを言わなくてもいいのは単純に楽だ。逆もしかりなので特に感謝も感じなくていいところも含め。

そして、遊良も広げていたカードを【堕天使】とそうでないカードに分け、そして一つ一つの効果を確認しようとカードのテキスト欄を見る。

「…あれ？」

しかし、テキストを見た瞬間に何やら違和感を感じた。書いてあるテキストを最後まで読まなくても、全ての効果が頭の中で思い浮かぶ。まるで、今までのデッキのように使い慣れた感覚、カードを見ただけでその効果が瞬時に理解できていた。

「…だからあの時の決闘でもすぐに使いこなせてたのか。普通ありえ

ないよな、初めて見るカードを即使うなんて。」

これもあの謎の声から得た力によるものなのだろうか。まぁ、微かな希望だったＥｘデッキをすっぱり切り捨てたのだから、これくらいのことはあっても良いだろう。それにこれなら手間も省ける。そもそも理解の範疇を超えたことが今日一日で立て続けに起こったものだから、今更こんなことに一々驚きもしなくなるというものだ。

「まぁいいか。じゃあ直ぐにでもデッキを組もう。えっと…」

そして、今まで使っていたデッキの中から、相性のいいカードを取り出して、構築を考える遊良。幸い、今まで使っていたデッキパーツとの相性は意外と悪くなく、ドローを多様していく戦術もあまり変えずに済みそうだ。

「この堕天使イシュタムが結構いいな。【堕天使】専用の【トレード・イン】になるからドローソースが単純に増えた。」

そうして、遊良は自身のデッキを新たに構築していくが、その途中でふと、今まで使っていたモンスター達が目に留まった。

子供の頃から使っている、Ｅｘデッキのモンスターではない、ただの効果モンスター達。しかし、遊良にとって絶望していた時期から共に戦ってきた仲間。今までのデッキの中核となっていたモンスターは、謎の力によるデッキ改変の影響を受けずに残っていてくれていた。

そして、その中でも特に思い入れの強い【神獣王バルバロス】を手に取る。多分、ほとんどのデュエルで場に出ていて、フィニッシャーとして活躍してくれた感慨深いモンスター。

最初から今までの、遊良のフェイバリット。

「…ごめんな。今までサンキュ。」

呟く程度ではあったが、自分を支えてくれた仲間に感謝の意を表す。別に、もう使わない、というわけではないが、これからのメインデッキが変わる以上、出番が減ってしまうことに対して、若干の罪悪感が過ぎった。

「…でも、全部捨てたんだ。これからはもう負けられない。絶対に。」

そう強く心に誓った。

―

天城遊良は落ちこぼれだ。しかし、最初からそうであったわけではない。そして、これからも…

―…

ｅｐ5「目指す頂き」

「さてと…、あとは何を入れるか…」

鷹矢がカードを取りにいったのを見て、遊良はデッキ構築に戻る。早くデッキを完成させなければいけないのだ、なにせデッキがなくなったのだから、明日からデュエル出来ませんでは何のために力を得たというのか。このままでは話しにならない。

―ドタドタドタ！

そんな矢先、勢いよく階段を駆け下りてくる足音が響いた。たった今二階に上がって行ったばかりの鷹矢出ないことは確か。それに鷹矢はこんなに急いで降りてくることはないだろう。

とすれば、遊良の頭に浮かぶ人物の顔は一人しかいない。

―！

「遊良！ねぇ起きてたの!?体は!?なんとも無いの!?ねぇってば！」

「…おはよう。」

「おはようじゃないよ！…人がどれだけ心配したと思って…」

「悪い悪い。でも、もう大丈夫だ。」

案の定、ルキが眼を覚まして降りてきたところだった。勢いよく音を立ててリビングの扉を開けたと思うと、起きたばかりだと言うのにルキは大声を上げて遊良を問い詰め始める。

そんなルキの心配をよそに、ヒラヒラと手を振りながら遊良は応えたものの、しかしあんな事があった後に急に倒れた遊良の姿が消えていれば驚きもするだろう。

泣くほど心配してくれたというのに、確かに悪いことをしたと感じる遊良。

「心配かけてゴメンな。」
「…もう…あ、遊良、それって…」

そんな時、不意にルキの視線がテーブルの上に並べられたカードに向いた。
それは、たった今デッキ構築に入った【堕天使】のカードであり、遊良がこれから使って行くことを決意した新たな仲間。黒き翼持つ、遊良の覚悟の証でもある。

「あの時使ったカード…だよね…？」
「あぁ。今後はこれをメインに使っていこうかと思ってさ。」

そして遊良は、鷹矢と話して決まった方針を淡々とルキへと告げる。そのためのデッキを今必死になって構築しているのだが、しかし言われたルキの顔はやや暗くなり、顔をうつむかせ始めた。
何か思うところがあるのだろう。胸の内を開ける前の、考えと言葉を整理する時のルキの癖だ。

「…」
「ルキ？」

しかし、これはまさかルキの地雷を踏んだか…そんな予感が遊良の頭をよぎったが、もう時すでに遅しといったところで。
意を決したようにしてルキは顔を上げると、やや涙目になりながらも遊良に向きなおして、そして言う。

「…嫌だ。」
「へ？」
「嫌だって言ったの！遊良こんなカード持ってなかったじゃん！何か変なこと起きるし、何か死にかけるし、遊良は知らないカード使い始

めるし！」

そうして、捲くし立てるように反対するルキ。

確かに、説明も無しにいきなり得体の知れないカードを使うといわれれば、それは確かに不思議に思うことだろう。遊良がどんな思いで今までのデッキを組んでいたのかをよく知るルキなのだ、それを捨てて違うカードを使うことに違和感を感じても仕方ない。

そうでなくても「あんな目」にあったものだから、余計なことなど聞かずに、単純に賛成をした鷹矢と違って「はいそうですか」とは行かない。

そしてルキは不安げな声で、最後に呟く。目に溜まってきている涙が、溢れそうになる寸前で。

「…何か…怖いよ…」

「…あー…その、さ…えっと…悪い。」

泣く…とまではいかないが、それでもこれは本気で不安がっているのだと、遊良とて嫌でも感じる。この堕天使のことは、あまり他人には言いたい話ではないが、ルキには隠しておきたいわけでもない。きっと、今後この話も当事者であった二人以外には話さないだろうと遊良とて考えている。

それに、ルキの不安な気持ちも痛いほど理解できるのだ、過去のこともあり、遊良が傷つくことを恐れている節があるルキにだからこそ、その不安を取り除いてやるためにも、誤魔化すことなく話しておかなければ…と。

「ちゃんと話すよ。」

そして、鷹矢にした説明と同じことを、再び説明し始めた遊良。

その話を、ルキはしっかりと黙って聞いていたのだが、その顔は疑ってはいても、しかしその目で見て、その体で体験した事でもある

のだから、信じていないわけではなさそうだ。
なにせ、本気で握り潰されそうになった時の感触は、ルキも覚えているのだから。

「…ってことでさ。まぁ信じられる話じゃないだろうけど。」
「…それって、私を誤魔化すためについてる嘘…じゃないね。それくらいわかるよ。」
「あぁ。本当だ。」
「あんな目に遭わなかったら、ちょっとすぐには信じられなかったかも。…それに信じないと飲み込めないし。でも…」

さすが付き合いが長いだけあって、こんな話でも冗談だと切り捨てずに聞いてくれる。しかし、ルキの反応にはイマイチ引っかかりがあるようにも見えた。当然ながら、鷹矢とルキは考え方も違う。
きっとルキにはルキの…鷹矢とは思うところも違うのだろう。

「どうした？」
「…えっと…」
「いいよ。言いたいことがあるなら言えばいい。」
「遊良……状況が状況でもさ…何で迷い無くＥｘ適正捨てちゃったの？…だってあんなに…」

そして心苦しい様子でルキが言った。いくら自分達を救うためとはいえ、過去にあれほど絶望した遊良を近くで見てきたルキに今回のことは罪悪感が残るのだろう。
しかし、それでも遊良にとって終わった話だ。後悔はまだ残っても、今更取り消しも出来ないし、取り消す気もさらさら無い。
文字通り、身を削って得た代償…それに反することは、今新たに得た堕天使達にも背くことに違いない。
「気にするなって。自分で決めたことだから。ルキが気に病む必要は

ないさ。」
「…でも」
「いいんだ。」

強めの口調で、はっきりと言い張る遊良。ここではっきり言っておかないと、ルキは際限なく気にするだろう。遊良自身が誰のせいとも思っていないのに、ルキが罪悪感にかられるのもいい気はしない。
それに、幼馴染の２人を助けるために決めたことが、悪いわけないのだから。

「大体鷹矢の奴は気にも留めなかったんだぜ？大体俺が倒れたってのに、心配すらしないってあの野郎。」
「え？そんなことないよ？遊良が倒れたときに鷹矢…」

―ガチャッ！

「おい、持ってきてやったぞ。む？ルキ、起きたのか。」

そんな時、ガチャッと、わざわざ大きく音を立て話の腰を折るかのようにリビングに戻ってきた鷹矢。まるで外で話を聞いていて、タイミングを見計らったかのようだったが…なるほど、そこは深く触れられたくないのだろうか。
あまりに都合よく入ってきた鷹矢のことは自然に流し、そのまま遊良は会話を続けた。

「サンキュ鷹矢。あー、ルキがさ…俺がＥｘ適正捨てたこと気にしちゃってさ。」
「うむ、遊良が自分で決めたことだ。俺たちが口を出すことではない。」
「でも、私達のせいでもあるんだよ？」
「関係ない。俺たちは逃げろと言ったのに、留まったのは遊良だ。」

「…俺が逃げてたらお前たち死んでたらしいけどな。」
「む!?そうだったのか!?よく留まった！偉いぞ遊良！」
「いやお前も聞いてただろ。」
「…はぁ、ほんとおバカだよね鷹矢。」

しかし下手な励まし方だ。昔からこいつは空気を読んでいるのかいないのかよくわからない。そう感じるものの、ただ今はそれが功をなしたのか徐々にルキの声のトーンもいつもの物に戻っていく。やはりルキは明るくなくては調子が狂う、だから今はこれで良いのだろうと、怪我のなさそうな幼馴染２人を見て、そう遊良は思った。

―…

話しが一段落し、カードを一旦閉まう遊良。そして再び腹が減ったといい始めた鷹矢は再び新しいカップラーメンを食べ始め、遊良とルキはコーヒーを飲んで歓談し始めた。
やっと一息つけて、彼らも少しは心が落ち着いた様子で。

「大体鷹矢はさ、遊良が学校で色々言われているのに何とも思わないわけ？」
「む…色々？」
「ほら、俺が雑魚だとか何だとかっていつも誰かが言ってるだろ。」

そうしてルキが言ったそれは、初等部の頃から散々言われてきたことだったが、流石に、初等部、中等部を同じ学校に通っていた同学年で、今現在の遊良を雑魚呼ばわりする者は少ない。
ー突っかかってきた生徒は返り討ちに遭うのを知っているからだ。
しかし年代が変われば必ず遊良を標的にする者がいるのも事実。学年が違えば直ぐに標的にしてくるし、同学年でも面識が無ければ行動に移す。
馬鹿にするのを辞める生徒よりも、馬鹿にし始める生徒の方が多い

のだ。それを知ってでも、なお鷹矢は言う。

「あぁ、そのことか。全く思わないな。何を今更。」

「何で？ああいう事言ってる人なんかより絶対遊良のほうが強いじゃん！私はそれが許せないの！」

「言いたい奴には言わせておけ。どうせ、勝負を挑んできたところで遊良には勝てん。それに、これは遊良自身がどうにかする問題だ。」

「でも…」

遊良が自分から行動を起こさない為に、ルキも今まで言われ放題だったのを我慢してきた。しかし、今朝遊良に挑んできた男子生徒に口を挟みそうになっていたところを見ると、流石にもう限界らしい。

自分のかわりにこんなに怒ってくれているのは良いが、そんなルキも流石に可哀想だ。そう思い、遊良はルキに言った。それは、重い腰をやっと挙げたかのように。

「確かにな。これは俺の問題だ。だから、これからは俺からも行動を起こそうと思う。」

「…行動？一体何する気なの？」

「馬鹿にする奴は倒す。負けを認めない奴も倒す。今までは『いつかＥｘデッキが使えるようになる』って期待もあったから放っておいたけど、これからは違う。だったらもう、今の俺のことは否定させない。」

「ちょ、それって…」

唐突に言い放つ遊良のそれは、ある意味ルキが一番聞きたかった言葉でもあった。今まで言われるがままだった遊良が、やっと行動を起こそうというのだ。

しかし、そんな遊良の決意に対してルキの表情は優れないまま。

それに反して、鷹矢は表情を変えずにただカップラーメンを一啜りするだけ。そして、ひとしきり咀嚼を終えると、興味無いといった声

色で、鷹矢は言う。

「…そうか。まぁ俺はお前がそのつもりなのだったら止めはせん。好きなようにやればいい。」

「ちょっと、鷹矢はそれでいいの？遊良が不良の喧嘩みたいなことして。それじゃあ何時まで戦えばいいか…」

「大丈夫だ、問題ない。」

「むぅー…」

頬を膨らませて納得していない様子のルキ。鷹矢が簡単に「大丈夫」というのが気に入らないのだろう。

大丈夫だとはっきり断言する鷹矢とは逆に、こういう場合ルキは反対の意を示すことが多い。単純に遊良のことが心配なのだろう。過去の事件のこともあって、ルキは遊良が傷つくことに対して過剰に反応してしまうことがある。

しかし、鷹矢は遊良の行動にほぼ反対はしない。赤ん坊の頃からの付き合いだけあって、下手に会話を挟まなくてもいい。そして今も、遊良がなぜこんな無謀とも取れる行動を起こそうとしているのか、それをなんとなく理解しているのだろう。

鷹矢は、下手な言葉は要らないと言った様子で…

「遊良、とりあえず説明してやれ。何か考えがあってのことなんだろう？」

「あぁ。まぁ、考えっていうかさ…ルキ、とりあえず心配するなって。いつまでもって訳じゃないし、とりあえず目標はあるからさ。」

「目標って？」

「夏休み明けにさ、学年対抗戦やるだろ？」

「え？…あ、うん。年末の「決闘祭」の為の選抜でしょ？」

「俺はそれに出る。」

「…え？」

そうして、遊良が提案した目標。それは、東西南北、４つある決闘

学園が合同開催する決闘市における一大イベント、「決闘祭」と呼ばれる祭典。
　各学園の代表３名、計１２名が争い、その年の頂点となる学園、ひいては４つの決闘学園の中で一番強い決闘者の唯一人を決める戦いでもある。

「まずは学年対抗戦で勝って学年代表になる。んで今度は学校代表になる。最後に「決闘祭」で優勝する。そうすりゃ誰も文句は言えなくなるだろ。」
「…本気？」
「あぁ。」

　しかし簡単に「決闘祭」で優勝すると言い放った遊良だったが、確実な優勝があるわけなく、各校も相当の手錬れを送り出してくるだろう。
　いや、実力自体は申し分ない。周囲の評価を置いておいても、遊良の単純な実力だけで見れば確かに優勝が非現実的でないことも確かなのだ。それを理解しても、ルキには大手を振って賛成することが出来ない様子を見せる。
　ほとんどの場合決闘祭に選ばれるメンバーは３年生が多い。それだけ３年生が出場に必死と言えるが、なぜなら多くのプロデュエリスト、そしてプロ関係者が関わる決闘祭の優勝は、そのままプロ入りの約束を取り付けたのにも等しい。中継も入る為、プロのタイトル戦と同じくらい、この街では一大イベントとなるのだから。
　また、下級生が選ばれている場合も多少あるが、それはその選ばれた学生のレベルが高いということになる。なにせ学園代表なのだ、威信を賭けても弱い生徒など送り出さないことだろう。
　だが、ルキが引っかかっているところはそこではない。むしろ、もっと根本的な部分。

「…先生達、遊良のこと出してくれるかなぁ？」

「まぁ多分ダメだろうな。今のままじゃ。」

そう、このままでは代表選抜以前に教師陣が遊良の参加を認めない。Ｅｘ適正が無いと有名な天城　遊良を出場させることは、決闘祭で笑いものになれと言われているようなものだと考えるからに他ならない。

そもそもいくら代表になれるだけの成績を取ったとしても、教師陣以前に、同じイースト校の生徒が認めないのだ。

ー自分達の代表が、自分達が見下しているあの「天城　遊良」だなんて。

「うむ。だからこそ、歯向かう生徒を全て倒して、無理やりにでも認めさせるということか。」

「あぁ。まずは1年生全員を有無を言わせない位にブッ倒しておきたい。そうすれば、とりあえず1年で文句言う奴は居なくなるだろ。それを教師が見たら、多分1年の代表選抜戦くらいには出してくれるんじゃないか？それに出られればこっちの物だ。学内の代表候補を全員ぶっ飛ばせば、俺を出さないわけにいかないだろ。」

「そんな上手くいくかなぁ…。」

「その一年の中には俺もいるけれどな。」

「鷹矢と当たったときには、その時にはその時だ。手加減しないからな。」

「こっちの台詞だ。」

勝手に盛り上がる男どもをよそに、冷ややかな目になるルキ。こういうとき、どうして男は簡単に考えてしまうのだろう。もっと懸念すべきものは多々あるだろうに。

「…なんか見立てが甘い気がするよ、もう。」

「邪魔する奴は全員倒す。今はそれでいいだろ。」

今までの遊良だったら、こんな現実離れした案は絶対に言わない。しかし、もう後に引く気は無いという遊良の目を見てしまっては、自分が何を言っても無駄なのだろうとルキは悟る。

「やっぱり遊良、鷹矢に似てきた気が…。はぁ…わかったよ。もう止めても無駄なんだね。」

これ以上自分が止めても、どうせ行動は起こすのだろう。本当にこの男どもは無茶ばかりする。昔からそうだ、それに救われたこともあるルキとはいえ、ここまで言って聞かないのだったら、好きにすればいい。そうルキは思った。

「でも、無茶はダメだよ?」

半ば呆れたように溜息をついてから、彼女はそれを渋々ながらも受け入れる。しかし、遊良が目指そうとしている場所は、普通よりも険しい道であることに変わりは無い。だからこそ、今までも、そしてこれからも彼女には心配が絶えないのだから。

「わかってるって。」

それを理解してなお、遊良は不敵に笑った。これから待つ戦いすら、まるで楽しみかのように。

――…

ｅｐ6「戦闘開始」

『…おれに、デュエルを…おじえでぐだざい…』

そう言って、死にそうな眼をして尋ねてきた子供を思い出す。微か残る生きる希望にしがみついて、まるで全世界が敵だと言わんばかりの姿が印象的だった。年月にしたら、つい十年ほど前のことだが、今ではそれよりも随分と経った気もする。

「カカッ…」

笑うつもりなど無かったけれど、なぜか無性に懐かしさが込みあがって来てしまい、思わず声が漏れてしまった。今更だが、なぜあんな子供を鍛える気になったのだろうか。

そのときのことをほとんど覚えていないが、今にして思えば、「あの眼」はあの年齢の子供がしていい眼ではなかった、それだけはハッキリと覚えている。

しかし、まさか自分みたいな奴が教える側に回る日が来るとは。人生何があるか分かった物じゃない。何せ自分の子供だってまともに育てた覚えが無いし、ましてや他人の子供に何かを教えるなど、とてもじゃないがガラではないのに。きっと自分みたいなやつは一人で好き勝手に生きて、そしてどこかで野垂れ死ぬか、または誰かに命を奪われるのではないかと思っていたくらいなのだから。

「どうかしたんですか、急に。」

「あぁん?…いや何、なんてことはねー事だけどな。あー…なんか急に昔のこと思い出してよ。」

それが成り行きで、しかもなぜか追加でもう何人か鍛えることになってしまったのだが、ピーチクパーチク騒いでいたあのガキ共も、弟子として見ればなんとも可愛げがある。恨まれることは多々あれど、慕われることには慣れていない。

まぁ、あいつらにはここ数年会っていないが、特に心配もないし、放っておいても元気にやってるだろう、若いうちは何をしても死なない。

「あなたが…？ふふ、珍しいですね。なにかあったんですか？」

そんな感傷に浸っていたのだが、隣に座っていた若い女性が珍しいものを見たかの様に返した。隣の女性も、この男とは長い付き合いなのだろうが、しかし実際こんなふうに過去を顧みることはかなり珍しいのだろう。

しかし男の方も、何かと言われても思い出せない様子だ。

「…何か…はて、こんなこと思い出すような何かってーと…何かあったか？」

しばらく会っていないとはいえ、連絡など自分からはしないし…あ

「そういやぁ、あったあった。」

そういえば昨日珍しい奴から電話が来ていた。それ繋がりで連鎖的に浮かんできたのかと、男はそれを思い出す。そしてそれを見た女性の方も、まるで何かを悟ったような声で返した。

「だから帰国を早めたんですね。昨日急に帰るって言い出した時は、また無茶なこと言い始めたと思いましたが。」

「それについてきたお前さんも大概だろうが。…それにより、もうこの国でもやることはねーんだし、そろそろゆっくり隠居でもしてーからな。」

「ふふ、あなたが？ご冗談を。まだまだ現役でいてもらわなければ困ります。」

「おぉ怖い怖い。これだから若いやつは。威勢がいいこった、カッ

カッカ。」

上空一万メートルで、それも薄暗い飛行機の中で、初老の男性と若い女性の組み合わせは、傍から見れば異様な組み合わせである。

しかし、誰もそれを気に留める者はいない。

彼らが持つ異質な雰囲気と、近づくだけで苦しくなるような圧力に、誰も彼らを直視できずにいた。まるで本能が、彼らを凝視することを拒むかのように、誰も二人を見ないようにしていたのだった。

―…

「おい天城！お前いい加減目障りなんだよ！」

朝の登校途中、家から出てまだ少ししか経っていないのだが、聞きなれない声で、聞き馴染んだ罵声が遊良の耳に届いた。

もう毎朝恒例のものなっているこの罵倒だが、しかしまだ学校も見えていないこんな場所ではっきりと言ってくる輩も珍しい。いつもはもっと学校の近くで絡んでくる奴が大半だというのに。

なにせ、その方がギャラリーが多いし、それだけ自分の力を周囲に誇示できるのだから。

…そう考えて返り討ちにされた輩は数多いが。

まぁ、しかし今日に限ってなぜかは簡単に予想できる。

「いつもいつも高天ヶ原に付きまといやがって！見ててうぜぇんだよ！」

大方、こんな学園からまだ遠い場所からルキと一緒に登校している

のが気に食わなかったのだろう。
まぁ、いつもはこんなことも予想して、早めに家を出ている遊良なのだが、なるべくルキとかかわらないようにしてきたことも、ルキはそれをあまり良く思っていなかったみたいであるものの。
しかし、それにしてもなんとガキ臭い理由だろう、これだから色恋に染まっている男は面倒くさい。そう遊良は感じた。
だが、男子生徒にそんな事を言われても仕方が無いことだろう。昨日あんなことがあっても学園には登校しなければいけないのだし、昨日はこの家に泊まって今朝も一緒に家を出たのだから。
鷹矢は睡魔に負けて、深い眠りの中にいたため問答無用で置いてきたが。
まぁ遊良にとって、鷹矢が居なくても今は結果的にこの方が都合がいいことは確か。
そうして遊良は自分の代わりに憤慨して、罵倒した生徒に今にも掴みかかろうとしたルキを制した。
そのまま…その因縁をつけてきた男子生徒に対し、今までの自分からは言うことすらなかった言葉を、遊良は発するために。

「誰だお前?…つーかお前には関係ないことだろ。文句があるならデュエルで来い。さっさと蹴散らしてやるからさ。」
「んなっ!?なんで俺がお前なんかと!天城の癖に、俺に勝てると思ってんのか!?」
「なんだ。かかってこないで大声を上げるだけってことは本気で俺にビビってたのか。名前知らないけど、今なら見逃してやるからとっとと消えろ。」
「…テメェ、天城の癖しやがって上等だ!ぶっ飛ばしてやる!」

わかりやすく怒ってくれてやりやすい、こんな簡単に挑発に乗ってくれて助かった。そう、遊良は感じているのだろう。
隣ではルキが若干驚いた顔をしているが、今までの遊良の態度とは正反対の台詞が飛び出してきたのだから当たり前か。

そんなルキを余所目に、遊良はデュエルディスクを展開しながら向かっていった。

―…

「いいの？朝からあんな事して。」

そう遊良に語りかけながら、ルキが振り向いた後ろには男子生徒が５～６人ほど力なく崩れ落ちていた。最初のデュエルから１０分ほどしか経っていないが、既に死屍累々となっている。

これは、いつものように遊良のことを悪く言っていた生徒達だったが、文字通り手当たり次第にデュエルで蹴散らした結果だ。

「むしろ好都合だったよ。昨日言ったじゃん？向かってくる奴は全部倒してやるって。」

「でもなぁ…」

向かってくる生徒は容赦をせず叩きのめし、陰口だけの生徒も許さずにデュエルを仕掛けた。

陰口だけを叩いていた生徒も、いつもは完全にスルーする遊良に油断していたのか、急に挑まれて困惑しそして惨めなくらい完膚なきまでにデュエルで叩きのめされていて。

全員が打ちひしがれている様子は、今までの遊良からは想像もできないことだ。遠巻きにみていたギャラリーも、信じられないものを見たといわんばかりにあっけに取られているのがその証拠となっている。

「なにもあそこまでする事無かったんじゃない？」

「これくらい見せ付けてやった方がわかりやすいだろ。言い訳する余地すら無い方がさ。つーかまだ全然だぞ？回す気ならもっと回せたしさ。」

そんなギャラリーには眼もくれずにゆったり歩き続ける遊良とル

キ。
そういう遊良だったが、終始デュエルを見ていたルキからしたら本当にこれ以上無いくらいに容赦が無かったのだ。
モンスターを召喚すればそれを破壊し、伏せカードをセットすれば、エンドフェイズ時に破壊する。
ターンを終えるときには、相手の場にはカードが存在すら出来ていないという普通ではありえないような状況が、全てのデュエルで起きていた。
対戦相手からしたら、自分が何をやっても無駄という恐怖を覚えさせられたことだろう。
それも、自分達が見下していたはずの天城　遊良にだ。
負けを認めたくなくて言い訳めいた言葉を出そうにも、何もさせてもらえなかったという事実だけが目の前に立ちはだかる。

―単純に、明解に。

天城　遊良との実力差がありすぎただけ、そういわれているのと同義なのだから。こうなってしまっては、これほど屈辱的なことはない。しかし、それを言葉に出来るはずも無い。
ー『さ、最初の手札が悪かっただけだ！この僕が、お前なんかに負けるわけが…』
しかし中には一人だけ、自分の手札が悪かったと言い張った生徒もいたが…
ー『ふーん…手札事故…ね。』
ー『…あっ…あぁ…』
そもそもこの世界でデュエルを行う以上、手札事故なんて敗北の理由にはならない。
手札事故を起こす時点で、そいつの実力はたかが知れている。実力

の有無に関わらず、手札事故を起こすようなデッキを組んだ方が悪い。それが全世界共通の認識。
　そして、その生徒は言ってから自分の失言に気付いて勝手に泣き崩れ落ちていた。

「いやいや、俺が自分でやらなかったらルキがもっと叩きのめしてたんじゃないか？俺より容赦ない癖にさ。」
「…まぁそうだけど。だってムカつくし。」
「…はは。けどさ、これでいいんだって。多分今日は忙しくなるぞ。」
「ん？何で？」

　そんな有象無象には眼もくれず、ワクワクしているような顔をしている遊良の横顔を見ながらルキは若干不安そうに聞き返した。まるで新しく得た堕天使デッキを、もっと試すことが出来るのが嬉しいかの様だ。

「朝からこれだけ大暴れしたんだ。学校に着いたら俺のことが気に食わない奴らが朝の噂を聞きつけて、もっと食いついてくるはず。腕に自身があるやつなら尚更な。それを片っ端から倒しまくってやるってこと。」
「…その内、先生達が出て来そうだけど。」
「決闘学園でデュエルしているだけだ。俺を咎めたら学園のあり方自体に文句を言ってることくらい、教師もすぐ分かるって。」
「あー、確かに。遊良冴えてるー。」
「だろ？」

　そういって、ふざけあって笑いながら遊良とルキは学校への道を歩いていった。
　もう既に倒した、後ろに崩れ落ちている生徒達など気にも留めずに。

――…

「腹が減った。」

開口一番、午前中の授業もまだまだ残っているというのに遊良に救いを求めてきたのは鷹矢だった。案の定寝坊して、折角容易しておいた朝食には見向きもせずにノンストップで学校まで駆けてきたらしい。それでも間に合ってしまうのだから、本当にこの体力バカは侮れない。

例えばこれでデュエルの腕が大したことなかったのならまだ釣り合いが取れると言うのに、3年生を差し置いて既に学園最強クラスのエクシーズ使いだというのが余計に性質が悪い。決闘祭の代表戦も確実と噂されているところがなおさらに。

しかしギリギリ1限には間に合ったが、時間には勝てても腹の限界には負けた様だ。

「そう思ってサンドイッチ持ってきてやったよ。ほらよ、ありがたく食え。」

「でかした遊良！」

まぁ、こうなることは簡単に予測出来た為、先手は打ってあった。幼馴染は伊達じゃない。

遊良がカバンの中からそれを取り出すと、すぐさま嬉しそうにサンドイッチを奪う鷹矢。３０ｃｍはあろうそれを、恐るべき速さで食べ始めた。バケットを丸々一本使ったというのに、このペースなら5分と持たないかもしれない。

「…もっと落ち着いて食えよな。こっちは授業始まるまで連戦で大変だったんだぞ。」

「ふ？ははひひはほ。はいへんはっはんはっへは。」

「いやわかんねーよ。食ってから話せ。」

いきなり謎の言語で会話を目論んできた鷹矢だったが、全く持って聞き取れない。
きっと、「む？ああ聞いたぞ。大変だったんだってな。」と言ったであろうことは理解できるが、口に食べ物を入れながら話すなとあれほど言ったのに直りゃしない。
一瞬、「こんな奴に育てた覚えはないんだが」。そんな台詞が頭に浮かんだが、いくら昔から四六時中一緒だったとはいえ、考えてみれば確かにこいつを育てた覚えはないなと遊良は思い直した。
そして、今口に入っている分のサンドイッチを飲み込んだのか、鷹矢が口を開く。

「…さっきの休み時間に周りが話しているのを聞いた。お前の気が狂って暴れまわっていると噂になっていたぞ。」
「…マジ？そんな残念な話になってんの？」
「うむ。」
「もっと言葉を選ぶべきだったかなぁ。喧嘩腰で行くとそんな風に言われるとは。」

それは、ある意味遊良の予定通りな展開ではあったのだが、噂の広がり方に若干不満が残る。まぁ、噂話に文句をいっても仕方がないが。落ちこぼれから嫌われ者になったところで別に痛くもないか、ふと、そんなことを考えた時だった。

―ガラッ！

「天城ぃ！調子に乗ってんじゃねーぞゴラァ！デュエルだテメェ!!」

勢いよく教室の扉が開き、他教室の生徒が怒鳴り込んできた。素行の悪さが有名な生徒だが、それでもそこそこデュエルの腕は立つため、学園でも名が通っている人物だ。今朝、よほど派手に遊良が暴れ

たのが癪に障ったのか。
　そんな人物の突然の来訪に教室内にもざわめきが走るが、しかし当の遊良はさもカモが走ってきたと言わんばかりに嬉々とした表情で言い返した。

「いいぜー。ちゃんと次の授業にも間に合うように、とっとと片付けてやるからな。」
「んだとゴラァ!!」

　そういって、嬉々としてディスクを持って廊下に出て行く遊良。先ほどの残念そうだった態度が嘘のようだ。そして、そんな遊良を見ながらサンドイッチを再び食べ始めようとして、鷹矢は呟く。

「悪役も案外乗り気な癖に。」
　言い終えてすぐに、その手からはもうサンドイッチの姿は消えていた。

――…

ｅｐ7「陰謀うごめく」

「君、あの天城という生徒が最近騒がしいようですね。…なにやらそう言った報告が入っていますが。」
「は、はい…その、1学年の間で、なんと言いますか…あ、暴れまわっているとの噂が広まってまして…」

一目見て、目の前の人物が相当高い地位にいることがわかるような、そんな高級感に溢れた静かな部屋の一室のこと。こんなだだっ広い部屋の中心で、そして恐縮したように目の前の人物に頭を垂れながら汗を拭いているのは、決闘学園イースト校、1年生の学年主任だ。彼は湧き出る冷や汗をふき取るのに必死になり、その声も若干震えている。

「ならばさっさと退学にでもしなさい。随分前もそう言ったと思うのですが？」
「そ、それはその…問題のない生徒に…簡単に退学を取り付けるわけにも…。こ、今回も…暴れるといいましても、その…暴力行為ではなくデュエルを多々行っているだけのようでありますので…そのぉ、注意をするわけにもいかず、ですね…」

確かにここ最近、天城　遊良の噂が一年生の間で絶えないことは、職員の間でもかなりの話題になっていた。登校時間から下校時間までの、授業以外の時間に誰彼構わずデュエルを行い、そして驚くことに全てに勝っているというのだ。
始めの内は、Ｅｘ適性の無いあの生徒がデュエルで勝ちまくっているという話を、教師の誰もが笑い飛ばして信じていなかったが、その後に何人かの教師がその現場に居合わせている場で、そしてはっきりと見てしまった。
―天城　遊良が、並み居るＥｘモンスターをことごとくなぎ払い、そして有無を言わせないほどの圧勝を他の生徒に突きつけるのを。

見ていた教師も信じられなかったという。しかし、観覧していた周りの生徒達が、「また天城の圧勝だ…」と言ったことで、彼がずっとこんなデュエルを行ってきたのだと理解してしまった。噂通り、天城が「暴れまわって」いるということを。

そんな調子に乗っている天城を、流石に教師陣もその現場で注意しようとしたのだが、しかしいざその瞬間になって教師達は言葉に詰まってしまう。そう、天城を咎める言葉が無いことに気が付いたのだ。

・決闘学園校則「生徒間のいかなる決闘において、第三者が介入することを許さず。」

デュエルを行うことは生徒双方の同意の上。正式なデュエルを行っただけの生徒を咎めることなど出来はしない。明らかな不正や、違法な賭け事などはともかく、デュエルを見ていただけの教師達の目には少なくとも、天城を咎められるような不正を見つけることが出来なかったのだから。

しかし、自分達が召喚別授業で鍛えて、そして育ててきた生徒がまさか天城程度の相手に手も足も出ずに負けていく姿を見ていい気はせず、学年主任にも無茶な相談を持ちかけられていたのだが、その報告を聞いた学年主任も頭を抱えているのが現状だ。

何故デュエルをしているだけの生徒を咎められようか。いくらＥｘ適性の無い天城とは言え、そんな理由で不正な処罰を降せるほど、自分には権限もないし、倫理に反するというのに。

そんな困り果てている学年主任を知ってか知らずか。椅子に腰掛けている人物は、笑い捨てるかのように学年主任に言った。

「はっ、デュエル？あの天城がですか？なぜ天城程度の生徒がデュエルで暴れまわる必要があるというのでしょう。」

「そ、それはその…分かりませんが…」

「まぁ、彼の理由などどうでもいいことです。さっさと取り締まってしまいなさい。彼のようなＥｘ適性の無い人間はデュエリストではないのだから。そこを君も勘違いしないように。デュエリスト以外

は決闘学園には不要なのです。」
「いえ、それは…」
「この私が許可を降します。天城を即刻、決闘学園から退学させなさい。」

およそ、教育機関、そして教育者として似つかわしくない台詞を投げかけて、その人物は学年主任に背を向けて窓の外を見た。学園の到るところで今も色んな生徒のデュエルが行われているが、その場のどれにもＥｘモンスターが存在している。その光景を一目視界に入れてから、また学年主任の方へと体を戻した。

「…いいですね。では、下がりなさい。」
「は…はい…し、失礼いたします…」

そうして、厄介ごとの処理を一手に押し付けられた学年主任は、トボトボと部屋から去っていった。なぜいつの時代も、どんな世界も、中間管理職というのは面倒ごとを押し付けられてしまうのだろうか。痛くなる頭を抱えながら部屋のドアを閉める。その姿を横目に、白い髭を長く蓄えた人物は、苦々しげに言った。

「…困るんですよ。彼のようなデュエリストは。」

椅子に深く持たれかかって、ポツリと呟いたそれを、聞いている者は誰もいなかった。

―…

「あ、おい、天城が来たぞ。」

朝、登校中の生徒が決闘学園イースト校へと歩を進めている最中のこと。そこには、今までとは違った光景があった。

いつもなら、遊良が顔を見せた瞬間に陰口の嵐と、侮蔑の視線が突き刺さるはずなのに、今では遊良の顔を見たら真っ先に逃げる生徒達。

遊良が行動を起こしてから約1ヶ月。流石に、派手に暴れ周り過ぎたせいか、蔑みの対象であったはずの遊良は、今では誰かれ構わず襲いかかってデュエルを行うモンスターのような扱いになっていた。

しかも、完膚なきまでに相手に何もさせず圧勝するものだから、心を折られて学園に来れなくなっている生徒までいる。なまじ中途半端に実力があり、かつ遊良を見下していた生徒が特にそうだ。

「…完っ璧に悪役だ。」

ポツリと呟いただけで、近くの生徒に緊張が走ったのがわかった。多分遊良の呟きを聞き取れてはいないが、影口を言っていたと思われたくないのだろう、その生徒達はそそくさと駆け出していく。

「うわっ、お、俺先に行くからな！」
「ちょっ、置いてくな！」
「俺、まだ天城と戦ってないんだ、今捕まったら確実にやられる！」
「…やられるって、酷くね？」

扱いはまるで通り魔か指名手配犯だ。確かにこの1ヶ月間で陰口を言った生徒や侮辱した人間は、もれなく全員完膚なきまでに倒してきたが、何もしてこない人間まで標的にはしないというのに。

しかし、この1ヶ月のデュエルによって、とりあえずは1年生で遊良に好戦的に向かってくる生徒はほぼ居なくなった。結果はどうあれど、遊良の目的の一つは達したと言えるだろう。

「いやいや、遊良が蒔いた種じゃん。自業自得だと思うけど。」
「ルキだって賛成したじゃん。」
「賛成してません。止めたのに突っ走ったのは遊良です。」

そんな折、隣で歩いていたルキが涼しげな顔で、苦々しい言葉を浴びせる。毎度のことながら、鷹矢は起きられないために問答無用で置いてきてきた。

…まぁ、悪役と言っても、こうやってルキと歩いていても向かってくる奴が居なくなっただけましだろう。先週までは何人かまだルキと一緒に居る遊良にかかってくる生徒もいたが、今週に入ってからはまだ0人だ。

彼らからしたら、今までは高天ヶ原　ルキという高嶺の花に付きまとっている落ち零れのクズを、我先に倒してルキに気に入られようと画策していただろうが、もうそれが出来ないと理解したのだろう。遠めから恨めしそうに遊良を見ていても、即座に完膚なきまでに叩きのめされるからか、誰も近づいて来れない様子だ。

「まぁ、鬱陶しくなくていいけど。それにルキがイライラしなくて済むし。」

「それは遊良が今まで言い返す気無かったからでしょ。でも言い返すんじゃなくてデュエルで叩きのめすってのもなんか乱暴じゃない？」

「いやいや、言い返したってどうせ誰も態度を改めないさ。だったらこうやって力の差を見せ付けてやるのが一番なんだって。それに今じゃかかってくる奴のほうが少ないし。」

「そうかなぁ…。寧ろ敵増やしてる気が。」

確かに、1年生の中で遊良に聞こえるような陰口を投げたり、好戦的に向かってくる生徒は減ったが、そのルキの懸念も最もだ。召喚別の授業でも遊良の噂は広まっていて、その噂は既に上級生や教師にまで届いている。彼らがいつ動き出してもおかしくは無いのだろう。

「何かね、シンクロクラスの先輩も遊良のこと聞きまわってるって。近いうちに挑まれるかもね。」

「ふーん。まぁ上級生でも挑まれればデュエルするけど。その先輩っ

て強いの？」
「んー……強いと思うよ。クラスでもトップレベルだし。」
「じゃあ早く戦りたいかもな。早く挑んでくれればいいけど。」

召喚別の授業に出ているルキや鷹矢と違って、こういう事でもしなければ遊良は上級生とデュエルできる機会はそうそうない。そんな実力者が挑んで来てくれるのなら、寧ろ万々歳と言ったところか。しかし、ルキはそんな遊良をみて不安そうな顔をして言う。

「本当に大丈夫？…って言うかその先輩、むしろ戦った後が大変そうだよ？」
「え、何か面倒なことでもあるのか？」
「先輩、結構人気あってファンクラブまであってさ。その先輩倒しちゃったら、多分ファンの女の子達からのブーイングが凄いと思うよ。」
「…それは…面倒くさいな。」

デュエルで片を付けられる問題ならばいいが、そういう痴情が入ってくる問題は面倒だ。デュエルに勝てばうるさく言われ、負ければ我先にと調子に乗って蔑んでくることだろう。確かにこれでは逃げ場が無い。

「…よし、その先輩とは関わらないようにしよう。」
「それがいいね。」

そんな他愛無い話をしながら、二人は学園へと向かっていった。そんな彼らを遠目から見ている視線がいくつかあるのを気にも留めずに。

――…

「ねぇルキ、また天城君と一緒だったの？」
「え？うん。そうだよ。」

不意に、そう言ってルキに話しかけてきたのは、高等部で一緒になった女生徒達の数人だった。全員クラスは違うが、この中の一人とはシンクロクラスの授業で何度か話したことがある。しかし、教室前の廊下で、まだ中に入ってすら居ないというのに、どうやらルキが来るのを待っていた様子だった。

「大丈夫？何だか最近の天城って危ないって聞くし…」
「あー…あーそれねー…えーっと…」
「今までも付きまとわれてたんでしょ？もうきっぱり振った方が良いって。」
「え？…いやだから、それは…」

どうやら、遊良と朝一緒に登校していることを、遊良のストーキングだと勘違いしているらしい。確かに、周囲に遊良や鷹矢との関係は話していないが、遊良自身が「お前らにとっても面倒なことになるから極力話すな」と念を押してきていたため、ルキも自分から言う事は無く、それがまた話の増長を呼んでいる。

また、一緒に登校していると言っても遊良は朝早く家を出てしまうため、泊まった日を除いて、追いつくのも一苦労なのだ。それに何とか追いついて一緒に歩いているのはルキが自ら行っていることであって、どちらかと言うと付きまとってるのは自分の方かもしれないなとルキは思った。

別に、ルキ自身は周囲に遊良との関係を知られた所で平気だというのに、そういう所で一線を引いてしまう遊良がもどかしい。

しかし、そういった勘違いから同性の友人達が今までも勘違い甚だしい行動を起こそうとしていたことが多々あり、それを落ち着かせるのに一苦労して来たものだ。特にやましいことも無いのだし、それだったらいっその事全部暴露してしまった方が早いというのに。

「特に最近気が狂って暴れてるって話だし…皆で守ってあげるからさ、なんだったらもう追い出しちゃおうよ。」
「…え？な、なに？追い出すって？」
「だってルキが心配じゃない。それにＥｘデッキも使えないのに学園に来てるし。なんだか嫌じゃんそういうの。」
「そうそう、どうせプロにだってなれないんだしさ、それだったらさっさとやめて欲しいじゃん。」
「ちょ、ちょっと待って！何でそんな酷いこと…」

聞き捨てならない話だったが、それなのに話が目の前で次々に進んでいってしまう。これは流石にやりすぎだ、そんなことを許すわけには行かない。しかし、当事者であるルキを放って、女生徒達の話は盛り上がっていってしまう。まるで、初めからルキの話を聞く気はなく、そうすることを決定していたように。きっと彼女らは、ルキも自分たちと同じ気持ちでいると思いこんでいるのだろう。

「どうしようか、デッキ全部捨てちゃう？」
「いいねー、どうせＥｘデッキも持ってないんだし、それだったらデッキなんて要らないでしょ。」
「だ、ダメだよそんなこと！」
「えー？何で？だって天城だよ？あいつＥｘ使えないんだよ？」
「…ッ」

そんな彼女らを必死に静止させようとしたルキだったが、「Ｅｘが使えない」、その一言がルキの胸に突き刺さった。
そんなにＥｘデッキが使えないことがダメなのだろうか。何故、Ｅｘデッキが使えないだけで認めてもらえないのだろうか。そんなこと、遥か昔から思っていたことのはずなのに、何故か今まで以上に深く抉られたように感じる。
それはきっと、【堕天使】を得てしまった遊良が、もう二度とＥｘを

発現させることが出来無くなったからだろう。自分と鷹矢を守るためだったとはいえ、いくら遊良自身が決めたこととはいえ、今までの微かな期待を全て失ったことを含めても、これではあまりにも理不尽ではないか。

―何故、遊良なのだろう、と。

それを思うと、堪えきれなくなってしまう。

―そんな時だった。

「そうそう。大体あいつって天城の癖に…」

「俺が何だって？」

「キャッ!?…あ…」

不意に降ってきた本人の声に、意気揚々と談笑していた女生徒達の顔が瞬間的に引きつったのがわかった。まさか、クラスも違う当の本人がこんな所にいるとは思わなかったのだろう。登校して、自分のクラスに向かっていくのも確認していたというのに。彼女らの表情は、不味いことを聞かれたかのごとくバツが悪そうだ。

「俺が何なんだよ。言いたいことがあるならはっきりしてくれ。」

「な、何よ…、いきなり話に入ってこないで！」

「天城がどうこう言ってたじゃん。じゃあ俺に関係あるんだろ？Ｅｘがどうとかデッキがどうとか。」

「そ、それは…」

敵が目前に居ない時には勇ましいものだが、いざ目の前に現れてはどうしようもないのだろうか、まったく言葉が出ていない女生徒達。

しかし、それもそうだろう。本人の目の前で本人を悪く言っていたのだ、暴力行為に及ばれればＥｘ適性など全く関係無く、腕力でかなうはずもない。そんな女生徒達を他所にして、遊良はルキに向き合った。

「まぁ、慣れてるから別にいいんだけど。…おいルキ。」
「え？な、何？」

思わず溢れそうだった涙を堪えて、遊良の呼びかけに応じたルキ。しかし、今までは極力学園内では関わらないようにしていた遊良自身が、まさか自分から話しかけてくるなんて思わなかったのだろう。そんな驚きがルキの中に起きていた。

「お前、昨日買い物行った時にデッキごと俺のカバンに入れっぱなしにしただろ。授業どうするんだよ。ほら。」
「え？あ…ごめん、そうだった。」

―（遊良ー、これ入れておいてー。）
―（いや、それくらい自分で持ってろよ。）
―（だって今これ邪魔なんだもん。それに今日泊まるんだから今使わないし。遊良のカバンおっきいんだしいいじゃん。）
―（じゃあついでに俺の食いかけのパンも入れてくれ。今腹いっぱいだからな。）
―（汚え！さっさと食っちまえこのアホ！）

そういって、遊良がルキにデッキケースを兼ねている端末機器を手渡す光景を目の当たりにして、わけがわからず固まっている女生徒達。ルキに付きまとっていると思っていた天城　遊良と、当の本人であるルキが、さも当たり前のように話しているのが信じられていないようだ。

「とりあえず、用はそれだけなんだけど。…おいお前。」
「え？あ…な、何よ？」

そして、不意に遊良に話しかけられた女生徒の一人が驚いたように

声を漏らした。気の強そうな生徒で、最後に遊良のことを悪く言おうとしていた生徒だったが、話しかけられるとは思っていなかったのか、やや声が震え身構えるようにしている。

「随分言いたい放題言ってくれたよな。俺とデュエルしろよ。」

「…はぁ？な、なんでアタシがあんたなんかと…」

「じゃあ誰でもいいし、何なら全員まとめてでもいいぞ。舐めた口聞きやがって。俺とお前らの力の差を教えてやるからさっさとしろ。」

「…は？」

その瞬間、そう言った遊良に、女生徒達の何人かがカッとなったのが見て分かった。女生徒達も決闘学園のデュエリスト。格下扱いの天城　遊良に見下されたのが許せないのだ。そんな女生徒達に向かって、遊良はさらに畳み掛けるように煽る。

「どうするんだ？全員口先だけの雑魚か？人のこと言うだけ言って、実は自分の方が弱いから戦えませーんってか？それでよくデュエリストなんて名乗れるもんだな。」

「…あ、天城の癖に…アタシが戦ってやるわよ。」

そして、その中で特に気が強そうな生徒が一人、一歩前へ出てくる。多分この中で一番腕に覚えがあるデュエリストなのだろう。遊良の煽りが、もっともプライドを傷つけたようだ。

しかし、今まで倒してきた1年のほとんどは男子生徒だったが、だからと言って別に女生徒が弱いわけではない。ルキだって、下手したら遊良より強いのだ。デュエルに性別は関係ない。煽っておいても、遊良には油断など微塵も無く、ただ単純に…

—自分を認めない敵を全て叩きのめす。それだけだ。

「ゆ、遊良、言い過ぎだって。」

「いいんだよ、これくらい言わないとこいつらかかってこないし。」

そんな遊良に一応静止はかけるものの、思ったよりも遊良が冷静だったことに思わず驚くルキ。
散々悪い口調で煽ったのも、陰口を言っていた女生徒を戦わせるためだったのを理解したのか。それにしても言いすぎだろうとルキは思ったが、しかし既に両者は臨戦態勢に入っているため止めることは出来ない。

「すぐに片付けてやるんだから。」
「はいはい、いいからさっさと始めろ。」

―そして、始まる。

「「デュエル！」」

「先攻は俺だ。【トレード・イン】発動。【堕天使スペルビア】を捨てて２枚ドロー。そして【堕天使の追放】を発動し【堕天使イシュタム】を手札に加える。そしてイシュタムの効果発動。手札の【魅惑の堕天使】と共に捨てて２枚ドロー。続いて【堕天使の戒壇】を発動し、墓地からスペルビアを守備表示で特殊召喚して効果発動。墓地からイシュタムも特殊召喚。」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

「イシュタムの効果発動。１０００ＬＰ払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る。俺は【堕天使ゼラート】を手札に加え、その後墓地の【堕天使の追放】はデッキに戻る。」

いきなり上級モンスター2体を場に揃えた遊良の圧倒的な展開の速さに、見ているだけの女生徒達は大いに驚き、そしてつい熱くなって挑発に乗った女生徒の頭も、今行われた眼前のめまぐるしい展開によって焦燥に狩られていた。

「ね、ねぇ…コレなんか不味くない？」

「なんか天城ヤバイって…あんな堕天使とか見たことないし。」

「う、うるさいわね！あんなのがなんなのよ。あれくらいアタシだって…」

そう言うものの、実際に対戦しているこの女生徒も自分が見下していたのが本当に天城だったのか不安になっている。何せ、ここまでやって相手の手札消費が実質0枚なのだ。大型複数体を即座に場に揃え、そして手札も減っていないのは、恐怖以外の何物でもない。

「まだ俺のターンは終わってないぞ。俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ。」

遊良　LP4000→3000
手札：5→2枚
場：【堕天使スペルビア】
【堕天使イシュタム】
伏せ：3枚

そして、ターンが女生徒に移る。しかし、ルキにはこの後の展開が容易に想像できてしまった。この1ヶ月、遊良が行ってきたような、相手の行動を許さない、容赦の無い短期決戦のデュエル。

多分、これで決まってしまうことだろう。その光景が、あまりにもはっきりと目に見えた。

「アタシのターン、ドロー！まずは【E・HERO　エアーマン】を召

喚し…」
「罠発動【背徳の堕天使】！手札の【堕天使ゼラート】を墓地へ送り、エアーマンを破壊する。」

―！

爆発音と共に、場に出た瞬間に即座に破壊されてしまうエアーマン。モンスターの存在を許さず、また魔法・罠カードも存在することを許さない。それがこの１ヶ月、遊良の行ってきたデュエルだった。短期決戦型の、まるで全力疾走のように。

「…クソッ、でもエアーマンの召喚には成功しているため、私はデッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン】を手札に加える！そして手札から【融合】を発動！手札のクレイマン２体を素材に融合召喚！現れよ、レベル６【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

２体のクレイマンが神秘の渦で混ざり合い、女生徒の場にさらに大きな巨人が現れた。レベル６と低めだが、融合召喚成功時にその真価は発揮される。

「地紫魔の私に喧嘩を売ったこと、後悔させてやるわ！ガイアの効果発動、ターン終了時まで、【堕天使スペルビア】の攻撃力を半分にし、ガイアの攻撃力に加える！」
【堕天使スペルビア】
ＡＴＫ／２９００→１４５０
【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】
ＡＴＫ／２２００→３６５０

効果が適応されるモンスター相手ならば、こと戦闘において無敵と呼べる効果をもつモンスターだ。その攻撃力の上昇に、女生徒の顔が勝ち誇ったように変わる。
―しかし折角の効果も、戦闘まで入れなければ意味が無いが。
「イシュタムの効果発動。１０００ＬＰを払い、墓地の【背徳の堕天使】の効果を得る。ガイアを破壊。」
遊良　ＬＰ：３０００→２０００

―！

「…は？」

先ほどのエアーマンのときと同じ。出た瞬間に破壊されるモンスター。折角の強力な効果も、それを活かせなければ意味が無い。女生徒の顔は、勝ち誇った顔から一転、あっけに取られていた。

「この効果は相手ターンでも発動できる。そして効果適応後、墓地の【背徳の堕天使】はデッキに戻る。」
「…そ、そんな…」
「どうした、紫魔のＨＥＲＯ使いの癖にその程度か？だったらガッカリなんだが。偉そうなのは名前だけかよ。」
「…くっ、あ、天城の癖に好き勝手言いやがって…アタシはカードを２枚伏せてターンエン…」
「おっと、そのエンドフェイズに罠カード【砂塵の大嵐】を発動！伏せカード２枚を破壊する！」
「はぁあ!?」

カードを残してターンを終えることを許さないという、全く持って容赦をしない遊良。そんな遊良に反して、ギャラリーとなっている他の女生徒達は、遊良をバケモノを見るかのような眼で悲観した顔を

し、対戦している女生徒の顔はと言えば、既に絶望感を漂わせて泣き崩れそう。

「う、うそ…嘘よ！アタシが…こんな…天城なんかに…あ、天城の癖に…」

「そうだ、お前は俺なんかに手も足も出なかった。ただそれだけだ。でも容赦はしない！散々好き勝手言ってくれたからな。…俺のターン、ドロー！」

既にガイアによって下げられたスペルビアの攻撃力も元に戻っている。そして女生徒の場にカードはなく、彼女の呆然とした姿を見るに、手札にさえも彼女を守れる物はなにも無い様子だ。

そんな女生徒を気にせず、遊良は叫ぶ。

「行くぞ！俺は2体の堕天使で…」

—直接攻撃！と叫ぶ、まさにその瞬間だった。

「まて天城！いい加減にしなさい！」

今まさに、攻撃の手を振り下ろさんとするところで、その手を後ろから来た誰かに掴まれた遊良。するとそこには、学年主任の教師が憤慨した顔で遊良を睨んでいた。

「こっちへ来なさい天城。」

「ちょ、先生、ま、まだデュエルが…」

「いいから来い！…何がデュエルだ、お前のような奴のせいで…」

なにやらブツブツと呟いて引っ張って歩き始める学年主任。切羽詰まって、まるで追い詰められている風にも見える。そして、その尋常じゃない勢いに遊良はされるがままに連れて行かれてしまった。

あまりに突然のことに、ルキはと言えば、ただどうしようもなくその場に立っているだけだ。

「ど、どうしよう…遊良が連れて行かれちゃった…」

何故いきなり学年主任が…これなら、上級生に絡まれたほうがまだマシだったろうに。まさか教師が出張ってくるとは。後ろを振り向けば、遊良と対戦していた女生徒は、ヘタリと腰を抜かして俯いていた。それを取り巻きの二人が立たせて、ルキを一瞥してバツの悪そうに逃げていく。

しかし、今はそんなことはどうでもいい。

遊良を何とかしなければ、鷹矢は下手をすればまだ起きていなく使い物にならないだろうし、学年主任が出てきたところを考えると教師陣は頼れない。いや、何もなくても遊良を庇ってくれそうな教師は初めから居なかったかもしれないことを考えると、誰を頼っていいかすらわからなくなってしまう。

しかしなぜ今このタイミングなのだろう。この前も、教師の数人がこの時と同じような遊良のデュエルを見ていた時があったが、何も咎めることが出来ずに引き下がってくれたというのに。

「…ほ、本当にどうしよう…」

「…あん？何がだ？」

「…え？あっ！」

そんな時、不意に話しかけられて、ルキが声の方へと振り返った。するとそこには、ここに居るはずのない、しかしルキが思い浮かべた中でも一番頼りになる人物が、そこには居た。

眼に浮かべている涙が、まさに零れてしまう寸前のこと。

――…

ｅｐ８「世界最高峰の決闘者」

「いいから来い天城！」
「ちょっ、引っ張らなくても行きますって！」

デュエルの最中、急に学年主任に掴まれ、そのまま訳も分からず連れていかれる遊良。もう少しで決着だったというのに。…まぁ、確かにあの女生徒も負けを感じて泣き崩れる寸前の顔をしていたことは確かだが。

「入れ！」

そして、少し歩いて押し込まれるように生徒指導室にいれられる。学年主任もそのまま中に入ってきて、そして遊良の目の前にある机に向かい合うようにして腰かけた。

「…ここ最近の悪評も耳に入ってきているぞ。お前、調子に乗りすぎていないか？」
「…デュエルをしているだけです。」
「デュエル？召喚別の授業を免除してやっているというのに、いったいなぜデュエルを頻繁にする必要がある？Ｅｘ適正が無いお前が辛いだろうと案じて、デュエルを少なくする特別措置までしてやったというのに。」
「…決闘学園でデュエルをすることがいけないのでしょうか？それに召喚別の授業だって…」
「黙れ！せっかく温情をかけてやっているのになぜ大人しくできない！大体Ｅｘ適正が無い癖に、決闘学園に入学することがだなぁ…」

そういって、いきり立ってわめき始める学年主任。その言葉の一つ一つが鋭く、上から目線から押さえつけようとしているのがわかる。ルキや鷹矢には、「教員に目をつけられたら、その時はその時」と言っ

たはいいが、教師なのだからもう少し話くらい聞いてくれると思っていたのに、まさかこうも話にならない状態だとは。
いや、遊良が今まで目立った事をしてこなかっただけで、もしかしたら元からこうだったかもしれない。表向きは「召喚別の授業を免除」と言ってはいても、実際はＥｘ適正のない遊良の放置であって、面倒なことを棚上げしているだけなのだから。デュエル実技に関する授業を少なくされていること自体、遊良にとっては迷惑だというのに。

「…あの、俺は…」
「お前なんかがデュエリスト気取りか？いい加減にしろ。Ｅｘ適正が無い癖にプロになれるわけもないのに。憂さ晴らしで誰彼構わず襲いかかるなんて恥ずかしいと思わないのか!?」
「言いがかりです！」

そして、どんどん口調が荒くなってくる学年主任。これはもはやただの罵声と非難であって、とても教育現場で、教育者が一人の生徒に言っていい言葉ではないはずだと遊良は感じた。しかし、学年主任の態度も、とても平静ではない。
…ともかく、話を聞いてもらわなければ。このままでは、とても正常な判断をしてもらえない。しかし、それはもう遅く。

「とにかく話を…」
「もうお前は退学だ。こんなに悪評が学園中に蔓延っているようでは、流石にもう擁護もできん。」
「ちょっ、退学って!?なんでそんな急に!?」

突然告げられた宣告に驚く遊良。いくらデュエルで暴れまわっていたとはいえ、校則違反であるはずもなく、当然ながら退学になる筋合いなど無い。しかし、いきり立っている学年主任は遊良の話を聞こうともせず、それは怒りというよりもむしろ焦りのようにも見えた。

まるで逆に学年主任の方が追い詰められているようで。

「なんですか退学って！横暴じゃないですか!?」

「黙れ！お前みたいな奴に割く時間すらもったいない！これは決定事項だ！お前は今日限りで…」

―ガラッ!!

しかし、そんな学年主任の言葉を遮るかのように、勢いよくドアが開いた。そこには、只ならぬ迫力を纏った初老の男性の姿。

「おいおい、ちょっと待ちな先生さんよぉ。」

「誰だ！今は取り込みちゅ…へ？」

一瞬の間の後、初老の男性の顔を視界に入れてか、学年主任があっけに取られたような顔をする。それは、まるで目の前で起こったことが現実ではないかの様で。

「…あ、あぁ、あなたは…」

そして、学年主任の顔から血の気が引き、そして言葉と同時に体も微かに震え始めた。男性の只ならぬ雰囲気もそうだが、なにより、この男性が目の前にいること自体も信じられない様子だ。そんな学年主任を傍目に、初老の男性は遊良を見て渇いた笑を挙げる。

「カッカッカッ。退学たぁ穏やかじゃねぇなぁ。せっかく払ってやった授業料も無駄になっちまうよ…なぁ遊良？」

乾いた笑いを響かせて、遊良の名を呼ぶ只ならぬ迫力を纏った男性。がたがた震える学年主任をよそに、ツカツカと部屋の中に入ってきた初老の男性を見て遊良が言った。

「…先生、なんでここに？」
「野暮用で足を運んでやったらよ、ルキが泣きながら飛び込んできやがってな。聞けばお前さんがヤバいって言うもんだからよ。」
「…泣いてません。先生いつも嘘つくんだから。」
「嘘じゃねーだろがぃ。大体おめーさんは昔っから…」
「それはいいから！…遊良、大丈夫？」

男性の後ろからルキの声も聞こえ、その男性が一歩部屋の中に入った後ろから、続いてルキも入ってきた。どうやら遊良のピンチをうまく救ってくれたようで、タイミングの良さに素直に救われた気分だ。いや、今はそれ以上に、全く話を聞いてくれなかった学年主任に対しても強く出れるこの人の登場自体が救いでもある。なにせ、あれだけいきり立っていた学年主任の熱が、もう既に氷点下まで下がっているのだから。

「なぁ先生さん？いったいなんで遊良が退学なのかよぉ…この俺にもわかりやすく説明しておくれや。…なぁ？」
「ひ、ひぃっ！」

そして、遊良とルキから「先生」と呼ばれたこの初老の男性は、まるで威嚇するように学年主任に近づいく。その迫力に、先ほどまでとは違った形で、睨まれている学年主任は全く話にならない様子だ。
…まぁ、それもそうだろう、何せ、自分の力の及ぶはずもない、絶対的強者が目の前にいきなり現れたのだ。下手をすれば首が飛ぶどころじゃ済まない。長年勤めたこの学園すら潰されかねないと言っても過言ではないことを理解している。そんな相手が自分一人を標的にしていること自体が異常なのだから。
「…あ、ああ天城、高天ヶ原！お前らいったいなぜ【黒翼】と…そんな…」

「あぁん？何言ってんだい？ちゃんと入学書類に書いてやっただろーが…俺ぁ保護者だ。」
「ほごっ!?」

信じられないことを聞いたと言わんばかりの学年主任。確かに、この初老の男性と遊良は、苗字も違ければ血の繋がりもない。遊良とは全くもって関係ないと思われても仕方がないだろう。

それに、この男性、どちらかといえば鷹矢の関係者。

―天宮寺（てんぐうじ）　鷹峰（たかみね）

誰もが知る、世界最強のエクシーズ使い。

―

この世界で、各召喚法の、それぞれ頂点に立っている決闘者がいる。その華々しいデュエルと、人々から称賛される功績と、そして他の追随を許さぬ強さを持った彼ら3人のことを、世界はこう呼んでいる。

それぞれ…
【白竜】
【黒翼】
【紫魔】

と。

ただ強いだけではない。その圧倒的すぎる決闘の実力ゆえに、彼らには様々な社会的特権も与えられ、その有り余る財は他の人間の羨望となる。

それに、望むなら世界最大の超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の一員になり、【決闘世界】が運営するこの決闘学園の理事になることだってできる。
こんなもの、ほんの一例に過ぎない。
…その世界最高峰の3人が、この決闘市という一つの都市に拠点を置いていること自体も世界から謎とされているが。
とにかく、個人が持つには大きすぎるくらいの権力が与えられるのだ。無論、その座を狙う者は世界中に数多いがそんなに容易く手に入ることなどありえない。
王者と呼ばれている者を正式に、かつ圧倒的に倒し、その実力を世界に認められるか。または歴戦を戦い抜き、数多くの功績を守り続けて来た者だけがそう呼ばれ、一個人に収まりきらないような力が与えられる。
そして、現在その一角に位置する天宮寺　鷹峰も、およそ知らぬ者などいないであろう人物だった。

―最強のエクシーズ使い

公式に勝敗がつけられる試合において、１０歳のプロデビューから現在まで、およそ５０年近く、彼に勝ち星を挙げた人物は…特別な例であるただ一人を除いて…他の誰もいない。
天宮寺家がエクシーズの名家と呼ばれる由縁となった第一人者。今でも第一線で活躍する彼の伝説は言うに及ばず。
そんな豪放磊落、怪力乱神、国士無双で知られる【黒翼】こと天宮寺　鷹峰。無論、この学年主任とて彼のことを知っている。いや、知らないはずがない。
彼の孫である天宮寺　鷹矢がイースト校に入学すると聞いた時には、学園中の教師陣が飛んで喜んだ。同時に、Ｅｘ適正がない天城遊良も入学すると聞いたときには悲しくもあったが。
そんな彼が、今目の前にいて、そして学園のお荷物である天城をかばっているというのだからこその驚き。実の孫である天宮寺　鷹矢

ならばまだしも、何故に天城なのだろうか。理解が追い付かず、頭の中が真っ白になっている様子だ。

「こいつぁーよ、訳あって俺が保護者の代わりなんだわ。ってことで先生さんよぉ、ちゃんと説明してくれるんだろ？なんで遊良が退学なんでぇ。それに事と次第によっちゃぁ…」

「ひっ！ひぃ!!」

有り余る権力と実力もそうだが、なにより醸し出す圧力が尋常ではない。歴戦を駆け抜けてなお、現役の最前線を突っ走る。衰えなど感じさせず、むしろ今も強くなり続けていると持論している彼とまともに話せる人間の方が少ないだろう。

遊良とて、今でこそ普通に話すことが出来るとはいえ、過去に教えを乞う時に何度この迫力に中(あ)てられて気を失ったことか。もう数えるのも嫌になるくらいだし、昔のルキは顔を見ただけでも恐怖で泣き崩れていたものだから今でもそれをネタにされていた。

鷹峰も、現在ではやっと人と話すことに加減を覚えたようだが、どうでもいい人物に向ける圧力には流石に加減がない。この圧力に中てられている最中の学年主任も、一目散にこの場から逃げ出したい衝動に駆られているはずだ。

「は…あ…あの…」

「あん!?なんだ！言いたいことがあるならはっきり言えってんだ！ごちゃごちゃ言ってんじゃねぇぞゴラァ！」

「ひぃぃ!!」

「いや先生、それじゃ話せませんって。」

しかし、流石に見かねた遊良が仲裁に入った。元々話を聞く気が無く、脅迫まがいのことをしてきたのは学年主任の方であるが、自分の退学云々がかかっている話題だとは言えこれでは脅迫となんら変わりないと遊良は思ったからだ。

それに、あまりの恐怖を感じたのか、学年主任の意識はそこにはなく白目をむいて気絶していた。…よほど怖かったのだろう。しかし当の鷹峰の方はと言えば、してやったりと言わんばかりに口元を上げて笑っている。

「…ちょっと先生ふざけたでしょ。もう、遊良が危ないって時に。」
「カッカッカ。固てーこと言いっこなしだぜ。こいつぁー遊良を脅して退学にしかけたんだろ？ならちょっと脅かしたってバチはあたんねーっての。何せ俺ぁー保護者なんだからな。カッカッカ。」
「いや保護者って言いたいだけじゃん。そういう適当なとこ、本当に鷹矢にそっくりなんだから。」
「…でも先生、何でここに？てっきりまだ海外に居るもんだと。」
「そりゃぁおめーさん、仕事だ仕事。そのついでにここに寄ったら面倒くせーことになってやがっからよ。感謝しろい。」
「はい…ありがとうございます。」
「おう。」

何やら恩着せがましいが、確かにあのまま鷹峰が来なかったら有無を言わせずに遊良は退学になっていたことだろう。幼馴染を除けば唯一の理解者と言っていい、まさに保護者と言えるだろうか。
数少ない味方だが、しかし強大な味方でもある。…まぁ、ほとんど助けてくれることは無いが。なにせ、習うより慣れろ。考えを止めるな、すべてを感じろ。無茶に飛び込め、無謀に挑め。そんな人だ。今回のことはどんな気まぐれだったのやら。
しかし話を戻せば、退学云々とは本当に急な話だ。なぜ今自分が退学の危機に陥れられたのだろうかと、ふと遊良は考える。
確かに派手に暴れまわったとは言え、暴力的にではなくあくまでデュエルを行っただけだ。学年主任が言ったような、襲い掛かったなど単なる言いがかりに過ぎない。
それに悪評と言っても、それは遊良の悪魔的な強さで、有無を言わさず何もさせてもらえないというだけのこと。それに、むしろこの1

か月の後半は遊良の暴走に感化されて、腕に自信のある生徒からの逆挑戦が主だったことを考えると、他の生徒からしたらよほど落ちこぼれが調子に乗っていると思ったのだろう。向こうから挑んできて、遊良に責任も何もあるはずが無い。

ここは決闘学園。いくらＥｘ適正が無い遊良であっても、デュエルを制限されるはずもなく、それに自分の強さを見せつけることなど、決闘学園内ではむしろ認められてさえいることだ。

これではまるで、遊良が強くなることを許さないかのよう。

「遊良…本当に大丈夫？」

「ん？……あぁ。ちょっと考えてて。なんで今更退学にさせられそうになったのかなってさ。この前は教師もうるさく言わなかったのにな。」

少しうつむいて考えていた遊良が心配になったのだろう、ルキが覗き込んで声をかけた、その時だった。

「いったい何の騒ぎですか？」

生徒指導室の外から、やや濁った男性の声が響いた。白い髭を蓄えた、歴戦を感じさせる人物で、その声には微かな怒性が籠っていたが、ここに居るはずのない人物との邂逅に、顔を見て何やら若干驚いた顔に変わる。

「…あるはずが無いとは思いましたが、しかし報告が入ったから足を運んでみれば…まさか本当にあなただとはね。…鷹峰、一体あなたがなぜここに？」

「おぉ砺波（となみ）。久しぶりじゃねーか。お前さんの引退以来だなぁ。会いたかったぜ、カッカッカ。」

「…私は二度と会いたくはありませんでしたが。」

そして、砺波と呼ばれた人物は一言交わすと表情を一転、驚きから呆れたような顔に、そしてとても嫌な奴を見たような顔へと変化させた。

鷹峰と同じくらいの年だろう。圧倒するような鷹峰の雰囲気に負けず劣らず、なかなかの雰囲気を持った人物だ。鷹峰と対等に話せ、そして鷹峰の迫力を受けても全く動じていない。それだけで、この人物がそうとうな地位にいる人物だということがわかる。

―砺波（となみ）　浜臣（はまおみ）

数年前まで、【黒翼】天宮寺　鷹峰と肩を並べる決闘者として数々の名勝負を繰り広げていたことは人々の記憶に新しく、今では【決闘世界】に所属し決闘学園イースト校の理事長を務めている。

そんな彼もまた、世界最高峰の決闘者の一人としてその名を残し、デュエリストとしては知らない者はいないであろう人物。

―前シンクロ王者、またの名を、【白鯨】と呼ばれたデュエリストであったのだから。もっとも、現シンクロ王者である【白竜】に、敗れる前のことではあるが。

―

「おい砺波ぃ、どうせお前さんの指示だろ？遊良を退学に仕向けたのはよ。」

「えっ？り、理事長が!?」

まさか理事長が黒幕とは思っていなかったのか、ルキが驚いた声をあげたが、それを砺波は意にも介さずに言った。鷹峰に見破られたのに、さも当たり前のように。

「それがどうしました。私の学園だ、私が決めて何が悪い。」

「お前さんよぉ、そりゃあちーとばっかし横暴だろうが。なんだっけ、あれ…あぁそう、アレだよアレ、教育委員会ってやつがうるせーぞ？」
「フフフ…まさかあなたみたいな男が教育を語るとは。随分と丸くなった物だ。」
「おう、おかげさんでな。前の俺よりずっとつえーぜ？」
「それは怖い。…興味ありませんが。」
「そう言うお前さんは随分弱くなったか？座りっぱなしで腰も丸くなったんじゃねーのかよ。」
「おかげさまでね。前の私よりもずっと強くなっていますが。」
「そりゃあ興味あんなぁ、カッカッカ。」

聞くだけなら久しぶりの友人の会話。しかし、その光景は一言で言えば「異常」。二人の間にある空気は、仲むつまじい物では断じてなかった。
それは、一触即発、爆発寸前。
お互いが、今すぐにでも胸倉に掴みかかりそうに危なかったのだから。

「せ、先生…あの…」

それに耐えかねた遊良が、鷹峰に声をかける。話しに割ってはいることにも抵抗があるほど、今すぐにでもその場を立ち去りたかったが、しかし自分の退学がかかった話。少なくとも、件の黒幕と自ら言った人物がこの場にいるのだから、話をつけるならここしかないと、そう意を決したかのように。

「あぁ？んだよ。…っと、そういやお前の退学がどうとかだったよな。」
「…はい。」
「君の退学は既に決定事項です。取り消す気もありません。」
「だーかーらー！それをどうにかして止めさせろっってんだろーが

！」
「お断りします。」
「理事長！何で俺が退学なんですか！理由を教えてください！」
「君に話す理由などありません。」
「理事長！」

必死に食い下がる遊良だが、全く聞く耳を持つ様子がない砺波。下手に冷静で、そして学年主任と違って鷹峰にも匹敵する雰囲気を持つ相手だ。そんな人物が話を聞いてくれないことには、このまま遊良は為す術もなくなる。

「…はぁ、どうせアレだろーが。」

そんな砺波を見かねて、頭を掻きながら鷹峰が呆れたように言った。

出来れば、何も知らない子供たちの前では言いたくなかったかのようではあるものの、大の大人が大人気なく子供を突っぱねることが、まるでみっともないと言いたげな表情をして。そして、一瞬ピクリと砺波の眉が動いたのを見逃さずに続ける。

「ランに負けたのを、いつまでも引きずってよぉ。」

それを聞いた砺波の表情は、もう冷静さを保ててはいなかった。

――…

ｅｐ９「閑話ー砺波　浜臣　前編」

―いつでも脳裏に浮かぶ、苦々しい記憶。老いとともに、一緒に消え去ってくれたらどんなに楽になれるだろう。もう結構な年数が経つというのに、今でも簡単に思い出せてしまうのがとても辛い。

世界最高峰の決闘者の一人に数えられ、シンクロ召喚において並ぶ者などいない、まさに、王者【白鯨】と称えられた。

歴戦を戦い抜き、輝かしいタイトルをその手に掴み、彼の【黒翼】・【紫魔】と並ぶ、シンクロ召喚の王者と呼ばれ君臨していた頃。そう、まさしく王者であったのだ。

挑んでくる若者を派手に降し、圧倒的な力の差を見せつける。支えてくれるファンには手厚く接する。そうすることで、自分の存在が世界に認められることが、年甲斐もなく、他の何よりも嬉しかったから。

―栄光に包まれていた。少なくとも、あの時までは。

物語は、一度過去へと遡る…

―…

その日、【王者】として２５年目の節目を迎える少し前のこと。自身が持つタイトルに、歴代最年少の「天才」と名高い挑戦者が挑んでくる、少し前のとある日のことだ。朝早くからの電話で、妻に起こされたばかりの砺波は不機嫌な声で電話に出た。それはきっと、電話を渡してきた妻の機嫌も悪かったからだろう。

「…はい、お電話変わりました…」

『砺波…浜臣さん…ですよね？』

「…はい、そうですが…どなたでしょう？」

それは、とても聞き覚えの無い声だった。とても若く、まだ大人になりきれていないであろう少女の声。自分の娘よりも遥かに若い声だったが、しかし一体、こんな声の主が自分に何用だと言うのだろう

か。
心当たりもない砺波は、妙な胸騒ぎと不信感を抱きながらファンの一人かと考えもしたが、そもそも自宅の番号を知っていることがなんとも怪しい。一方で、そんな雰囲気を察したのか、声の主である少女は一呼吸置いて続ける。

『あぁ失礼…天宮寺　鷹峰さんからこの番号をお聞きしたもので。』
「鷹峰から?……それで、私になんの御用でしょうか?申し訳ないのですが、今は少々忙しくしておりまして…御用でしたら来週以降にしていただきたく思うのですが。」

まさかあの傍若無人な男にこんな女性と関係があったことにも驚いたが、現在自分は大切な戦いを控えている身。自身の節目ということも相って、現在業界は賑わっている最中。こんなことで変な噂が広まってしまうのは面倒だし、そもそも今日とてこれから仕事がある。温和な口調ではあったが、はっきりと断る意思を押し出して話を切ろうとする砺波。
しかし、それに食い下がるように少女も続ける。

『存じております。こんな早朝に電話をかけたのだから、今なら確実にあなたは自宅にいると思いました。…実は砺波さん。あなたと是非決闘がしたくて。世界最強のシンクロ使いと名高い【白鯨】のあなたに。』
「デュエ…」

すると、あろうことかこの少女は【白鯨】の自分とデュエルがしたいと申し出てきたのだ。いや、もしプロデュエリストだったら、この自分が現役であり続ける限りいずれどこかで合間見えることが出来るだろうが、それと異なり一般人とデュエルをする機会はほぼ無いに等しい。
だからこその申し出なのかとも思ったが、それにしては些か失礼極

まりないのではなかろうか。いくら鷹峰の知り合いだとしても、プロとして、一つの召喚法の王者として君臨しているのだ。二つ返事で、はい良いですよ、と受けるわけにはいかない。

「…あの、ええと、なにゆえ私が…？あの、そういう事は事務所を通して正式にしていただかないと…」

まぁそう言った所で、事務所を通しても戦えるとは思えないが。何せ多忙極まりない身だし、次のオフだって早くて1か月後。とてもこの少女だけを特別扱いなどは出来ない。

しかし、次の瞬間、少女の口から思いもよらない言葉が飛び出し、砺波は思わず自分の耳を疑った。

『…そうですか。いえ、そういうことが必要なら別にいいのです。憐造さんと鷹峰さんに勝ったので、今度は砺波さんと、と思っただけですから。また日を改めて…』

「…はい？い、今なんと？鷹峰と憐造に…か、勝った？」

―それは、到底信じられない話だった。

まさか、こんな少女に【黒翼】と【紫魔】の、あの二人の王者が敗れたなど。

天宮寺　鷹峰の実力は言うに及ばず、紫魔　憐造もあの紫魔本家の長であるというのに。その実力は、同じく王者の自分がよく知っている。仲の悪さは置いておいても、長い歴史を共に戦ってきたのだから。

歴戦の二人が、まさかこんな少女に敗れるとは到底思えない。しかし、さも当たり前のようにそれをやってのけたと言う、少女の迷いの無い言葉も笑い飛ばすことが出来ないでいる自分がそこに居た。ただデュエルを取り付けるためだけにつく嘘にしては、いささか大仰すぎる。常人ならば恐れ多くてそんなことはいえないだろう。

半信半疑の砺波ではあったが、思い返してみればこの少女、電話越

しとはいえ全く恐縮していなかった。少なくともデュエルに関わる者で、王者相手にまるで知人と話すかの如く接する人間などあったことがないというのに。

『…ええ。先日お相手いただきまして。とても楽しい勝負でした。』

「そ、そうですか…。」

『しかしさすがに【白鯨】と名高いお方。ご多忙極まりない時期に無茶なお願いをすみませんでした。では、私はこれで…』

「あ、あの、お名前は!?」

そういって、電話を切ろうとした少女を呼び止める砺波。これではどちらが頼んでいるほうか分かった物じゃないと思いながらも、名を聞かずには居られなかった。そして、少女はゆったりとした口調で自分の名を言う。

『あぁいけない、私としたことが名乗り忘れるなど、とんだ失礼を。わたくし、釈迦堂　ランと申します。では、また…』

「まっ…」

静止も聞かず、そういって電話が切れた。すぐさま同じ番号にかけなおしてみてもその番号には繋がらず、単調な機械音だけが受話器越しから聞こえるだけという、奇怪な現象に見舞われてしまう。

もしかして、本当にただのいたずらだったのか?…思い当たる節をいくつか頭に思い浮かべてみても、やはり心当たりが無かい。

「釈迦堂…ラン…?」

それにしても聞いたことのない名だ、身に覚えも無い。しかし、その後の砺波の行動は早く、砺波は一度電話を切るとすぐさま別の番号へと電話をかけた。画面には、天宮寺の文字。

「…だめか、出ない。」

しかし、あの自由奔放なあの男にかけた所で簡単に電話に応じるはずもなく、数回連続でかけては見るものの、一向に出る気配すら無かった。またもや電話を切り、残るは電話をするのも嫌になるあの家。

「くそ…仕方がない。」

そうして、背に腹は変えられぬ砺波は数度のコール音を待つ。多分電話は繋がるだろうが、果たしてこちらの言い分を聞いてくれはするだろうか。砺波は微かな不安とともに、一呼吸置くと、静かな声がその耳に届いた。

『はい、紫魔でございます。』
「朝早くからすみません。私、砺波　浜臣と申します。紫魔　憐造に繋げていただきたいのですが…」
『お約束の方でしょうか?』
「い、いえ、ですが、急を要する案件でして…」
『アポイントメントがございませんのでしたら、お繋ぎはいたしかねます。ご了承くださいませ。』
「ですが、これは【白鯨】として【紫魔】にかけているのです。本当に急を要するので、無理を承知で…」
『いくら【白鯨】と名高い砺波様のお頼みでもご了承いたしかねます。すみませんが、正式なお手続きを経ておかけください。では。』
「あ、ちょ…あぁくそ…」

しかし折角意を決して電話をしたと言うのに、【白鯨】の名を出しても一方的に電話を切られてしまった。…まぁわかっていたことだったが、しかしこうあっさりと門前払いされるのも癪に障るものだ。歴史的な云々、崇高なる云々の紫魔だとか言って、王者相手だと言うの

に電話番すら話を聞こうとしない。

「仕方ない…か。」

とりあえず、紫魔家にはマネージャーにアポを取っておいてもらい、鷹峰にはかけ続ければいつか出るだろう。

そして、仕事の準備に取り掛かるために部屋を出る砺波。何やら妻の機嫌がまだ悪かったが、それよりも多忙極まりない身なのだから。そうして砺波は後ろ髪引かれる思いで仕事に取り掛からなければいけないのだった。

――…

「先生、お疲れさまでした。」

「…あぁ。」

高速を走る車の中。流れる夜景が目に染みる年になって来たのだと砺波は感じていた。一日の仕事を終えすっかり夜も更けている頃、マネージャーが労いの言葉をかけてきたが上の空で聞き流してしまう。なぜなら、今朝の電話の主である釈迦堂という女性のことが頭から離れず、今日一日仕事が手につかなかったのだから。

しかし、流石に【白鯨】として人前に出れば自然と恥ずかしくない立ち振る舞いができたのだが、頭の中ではどうしても違うことを考えてしまう。あの声の少女はどうやって【黒翼】と【紫魔】の二人を倒したのだろうか。扱う召喚法は何なのだろうかとグルグル頭を駆け巡る。

「あ、そうだ、先生に言われた通り紫魔家にアポ取っておきました。」

「…そうか。どうだった？」

「はい、それが…今は立て込んでいるとか何とかで、来月にならないと電話には応じられないとのことでしたが…どうなされます？」

「…全く、足元をよく見る家だ。来月は私が忙しいことを知っているくせに。」
「…ですよねぇ。」

なるほど、紫魔家は憐造と自分を話させる気はないらしい。それを悟れぬほど老いてもいないが、そうなると益々あの少女の言葉の信憑性が上がってきてしまうのも事実。
もし紫魔の当主が負けたとあれば、きっと今頃は紫魔本家がゴタゴタしていることだろう。あの家は本当に面倒事が多いものだ。まぁ、例え本当にそうなのだったら、確かに自分と話しなどしている暇もないのもわかるが。
しかしどうしたものか…そんなことを考えていた、まさにそんな時だった。

―!

懐に閉まっておいた砺波の端末が震え、思わず驚く砺波。仕事の電話などはマネージャーにかかってくるので、自分の端末にかけてくる人間は限られている。自宅には帰りの連絡を済ませているため、今かけてくるとしたら、もしかすれば…
期待と不安を胸に、そして急いで取り出して画面を見ると、そこには件の天宮寺の文字。

「…ッ、も、もしもし!」
『ごらぁ砺波ぃ!テメェ何回も何回もかけやがって!ウゼーんだよ!』
「あ、あなたがすぐに出ないからでしょう!?」

すぐに電話に応じたものの、いきなり耳をつんざくような鷹峰の声に、隣にいたマネージャーも耳をふさいでしまっている。何度かけても電話に出なかった相手から、まさか第一声が文句とはこれいかに。

確かに親しいといえる間柄ではないとは言え、なにもここまで怒ることはないだろう。

『んでなんの用だ？俺ぁ今チョー忙しいんだけど。』
「だったらなぜ今かけてきたのですか…。実は今朝、釈迦堂という女性から電話が来まして。」
『あぁーん？…カカッ、ランのやつ、もうヤるつもりなのか。ったく、若けーやつは威勢がいいねぇ。』
「やはりあなたでしたか。…しかし本当なのですか？彼女が言っていたことは。」
『あん？なんだって？』
「ほら、あなたと憐造が…」
『あぁー、はいはい、そうだぜー、俺も憐造も負けちまってよー。カッカッカ、久々に面白ぇデュエルだったぜ。』

そして、なんの悪びれもなく、恥ずかしげもなくそう言う鷹峰に若干のイラつきを覚える砺波。鷹峰の乾いた笑いが余計に耳に響くが、しかし王者ともあろう者があんな少女に負けて、へらへらしているなどあってはならないというのに。

「面白いってあなたねぇ！」
『だってよぉ、あんなデュエルは久々だったんだぜ？明日もランと遊ぶ約束してんだ。カァー、楽しみだぜ。』
「あそ!?…鷹峰、あなた奥さんも子供も、ましてや孫までいる癖に…」
『あぁん？…カッカッカ。いくら俺でもガキ相手に手は出さないっての。デュエルだよデュエル。まぁ…あいつも近々この町を離れるみてーだからな。今のうちにヤれることヤッとかねぇと。』
「…そうなのですか。」

どうにも胡散臭く感じる言い方だ。しかし、この男の言うことに若干の少女の身の危険さを感じながらも、それよりあの少女が近々いな

くなってしまうことの方に引っかかる。そうか、だからあの少女は確実に自分が家にいるあんな早朝に電話をかけてきたのだろうか。

『…気になるか？』

「え？」

『どうせランに連絡つかねーんだろ？俺が話つけてやってもいいぜ。』

「…それは…ありがたいですが…」

確かに、あれから何度かけても単調な機械音のみで電話が繋がることがなく、どうしようかとも思っていた。しかしまさか鷹峰の方から連絡をとれるとは思っておらず、そうなれば確かに願ってもみないことだ。そういう気持ちも確かにある。

それに反して常識ある王者としてそれをおいそれと受けていいものなのだろうかという気持ちも砺波の胸中にはあった。こういう時は、何も考えて居なさそうな鷹峰が若干羨ましくも感じるが、そんな砺波を感じてか、本来ならばありえない言葉が鷹峰の口から出てきた。

『けどいいのかよ。…下手すりゃ、おめーさん潰れるぜ？』

「はい？それは…一体どういうことですか？」

『まぁ、れんぞーと違って、おめーさんも【白鯨】なんて呼ばれてるから大丈夫とは思うがよ。…んで、どうすんだ？』

「…長く生きてきましたが、あなたに心配される日が来るとは思いませんでした。」

まさかこの男が他人を気遣うことが出来るとは。こいつは自分の息子が産まれる時でさえ、身重の奥さんを放って、朝まで遊び歩いて飲み歩いていたと聞くのに。

しかし、鷹峰が放ったその言葉が砺波の心を深くえぐったのも事実。日々適当が信条のようなこの男が他人の心配をしてくるとは夢にも思わない。この男にここまで言わせる少女への興味が一気に強

くなってしまうではないか。

「…いいでしょう、お願いします。いつでも相手になりましょう。」

『よしわかった。ちっと待っとけ。』

それだけ言うと、鷹峰が電話から離れたのか声が小さくなっていく。…まさかとは思うが、今も一緒に居たのだろうか…いやまさか、いくらあの鷹峰でもそんなことは…そんな不安が砺波を襲う。

『おいラン、砺波がヤってもいいってよー。今からでいいか？』

『私はいつでもいいとお伝えください。』

…前言撤回、少女の身の為にもこの男を即刻通報した方がいいかとも考えたが、しかしそんな暇もなく鷹峰が電話に戻った。

『いいってよー。じゃあ今から行くそうだわ。とりあえず外れにあるスタジアムでいいだろ？どうせ人もこねーだろうし二人でヤりあえ。んじゃ、あとよろしくー。』

「あ、ちょ、鷹峰…全く、あの人は…」

そうして、言いたいことだけ言ってすぐに電話を切ってしまう鷹峰。その行動の早さに一抹の不安を感じながらも、今からという急すぎるデュエルに焦りも感じる砺波だったが、隣を見ればマネージャーがポカーンとした顔で口を開けていた。

「はぁ…すみません。用が出来ました。車を自宅ではなく事務所の方へお願いします。」

「先生…あの、いったい何の話を…」

「個人的なことですので。事務所についたらあなたはもう帰って結構です。」

「いえ…そういうわけには。」

「いいのです。」

意味の分かっていないながらも食い下がるマネージャーを他所に、砺波はそれだけいうと、それ以上口を開くことは無かった。

その瞳に、静かに王者としての火を灯らせて。

――……

ｅｐ１０「閑話ー砺波　浜臣　後編」

町外れにある、使われていないデュエルスタジアム。老朽化から封鎖されていて、今では試合も行われないことから、特に誰も近づかない場所となっている。その建物の外に、砺波は居た。

今では封鎖されているが、若い頃はここでよく試合をしたものだ。全ての入り口の場所もわかるし、一部のスタッフしか知らないような裏通路も教えて貰った。しかし、鷹峰もここを指定したのはいいが、封鎖されているのに一体どうやって中に入れというのだろうか。

そんなことを考えながら、とりあえず砺波はスタジアムの正面入り口の扉に手をかけた。すると…

「…開いている？」

なぜか、入り口の鍵が開いていてそこから中に入ることが出来た。しかし、封鎖されているはずの鍵が開いていたということは、もしかしたらもう相手は中で待っているということか。鍵も壊さずにどうやって中に入ったかは謎だが、まぁ開いているのならば入らないわけにはいかない。

流石に中は真っ暗だったが、砺波はディスクで照らした微かな明かりを頼りに、メインスタジアムの客席の扉を開ける。

開けると同時に中から光が漏れ出してきて、その中にはメインスタジアムだけを照らすようにして照明が付いており、その中心に一人の少女の姿。

「お待ちしておりました。【白鯨】、砺波　浜臣さん。」

砺波の姿を見つけると、電話越しよりもよく通る声で、意気揚々と声をかけてくる少女。しかし、その少女の姿をみて砺波は驚いた。

そう、砺波の思っていた以上にその少女は「若く」…いや、「幼く」と表現した方が適格だろう、まだ中等部にすら入っていないのではな

いかとの印象すら受けたからだ。客席から伸びているスタッフ用の階段を降りて、メインスタジアムに上がって、さらに近くで少女を見ると余計にその印象が強くなる。
浅黒い褐色の肌に、それすら飲み込むほどの黒髪を長く伸ばし、微笑んでいる口元とは裏腹に、砺波を突き刺す鋭い目つきが少女への警戒心を上げていた。

「…あなたが…釈迦堂…」
「釈迦堂　ランと申します。以後、お見知りおきを。」

そう言って、臆した様子もなくそう言うランに、思わず身震いすら覚える砺波。こんな少女が纏う雰囲気にしては、いささか持っている物が大きすぎると感じた為だ。それは、自分が長年かけて積み上げてきたモノに近いのではないかとすら感じる程に。一体何をすればこんな少女がこうなるのだろうか。

「では早速始めましょう。なにぶん貴方も王者としてお忙しい身でしょうから。それに私もゆっくりはしていられませんし。」
「…ええ。」

そう言って、そそくさとランはスタジアムの端まで移動するとデュエルディスクを展開した。砺波も、ランの反対側の位置まで移動するが、しかし、実際に会ってもまだこの釈迦堂という少女が王者二人に勝ったことが、砺波にはまだ信じられていない。
確かに印象としてはとてつもないモノを持っている少女だったが、醸し出す圧力なら天宮寺　鷹峰の方がまだ荒々しいし、底知れぬ恐怖は紫魔　憐造の方がまだ深い。
長年同じ土俵で競い合ってきた砺波だからこそ感じられた印象だったが、ともかく今はこの少女が何者なのか、デュエルをしてみなければわからないことだろう。そんな思いを胸に、砺波もデュエルディスクを展開する。

そうして、観客の誰もいないスタジアムで、それは始まった。

「「デュエル！」」

―先攻は【白鯨】、砺波　浜臣。

「先攻は私です。私は【深海のディーヴァ】を召喚。そして召喚時に効果発動！デッキから【海皇子　ネプトアビス】を特殊召喚する！いでよ、【海皇子　ネプトアビス】！」

【深海のディーヴァ】レベル２
ＡＴＫ／２００　ＤＥＦ／４００

【海皇子　ネプトアビス】レベル１
ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／０

まず最初に、砺波の場に半人半魚の歌姫が現れた。通常召喚時に、その歌声でデッキから更なる海の者を呼び出すこのモンスターは、砺波のデッキにおいて重要な役目を果たすカードに位置している。そしてその歌声に応じて現れるのは、深海を統べる「海皇軍」の皇子。皇子とはいえその秘めたポテンシャルはすさまじく、砺波が好んで使うモンスターの１体。

「ほう、流石は【白鯨】、海の者たちを扱わせたら天下一ということですか。」

「…随分と余裕ですね。」

「はい。まだデュエルは始まったばかりですから。せっかくの王者とのデュエル、楽しませて貰わなければもったいない。…なにか？」

「…いえ、ですがあなたが相手をしているのは、シンクロ使いの頂点ということをお忘れなく。」

どこまでも飄々としている少女だ。まるで自分の方が遥か上から見下ろしているのだとアピールしているかのようにすら感じる。いや、【黒翼】と【紫魔】に勝ったという自負が【白鯨】の自分に対しても同じ態度を取らせているのだろうか。

しかし、いくら二人の王者に勝ったと自負しているとは言え、その態度を簡単に許してやるほど自分は老いてはいない。

「…あまり本気になるのも大人げないと思いましたが…、しかしそんな態度を取られては黙っておれませんね。私はデッキから【海皇の竜騎隊】を墓地へ送って、ネプトアビスの効果発動！デッキから【海皇の狙撃兵】を手札に加える！そしてコストとして墓地へ送られた【海皇の竜騎隊】の効果で、デッキから【氷霊神ムーラングレイス】を手札に！」

先攻1ターン目だというのに、いきなり手札が初期枚数5枚を超える砺波。コストとして扱われることでその効果を発動できる海皇は、まさに海皇軍の為に身を削る兵士の如く。そして、シンクロ使いの頂点は、さらなる展開を魅せるために動き始める。

「…では行きます。レベル1の【海皇子　ネプトアビス】にレベル2の【深海のディーヴァ】をチューニング！シンクロ召喚、現れろレベル3、シンクロチューナー【たつのこ】！」

【たつのこ】レベル3　シンクロチューナー
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／５００

「まだです、【たつのこ】のモンスター効果！手札のモンスター1体とシンクロ召喚を行うことができる！私は手札のレベル3【海皇の狙撃兵】にレベル3の【たつのこ】をチューニング！白き者よ、大いなる海原を遊び巡れ！シンクロ召喚！レベル6、【白闘気海豚（ホワイトオーラ・ドルフィン）】！」

【白闘気海豚（ホワイトオーラ・ドルフィン）】レベル６　シンクロ
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ１０００／

連続的なシンクロ召喚によって砺波の場が目まぐるしく入れ替わり、そうして場に現れた白きシンクロモンスター。白き闘気を身にまとったソレは、目の前の少女を澄んだ瞳で睨んでいた。しかし、砺波の狙いはこのモンスターを召喚することだけではない。

「…ほう、流石は王者の一人。【紫魔】と違って、見た目で侮ってはいただけないようだ。…しかし、こうも容易く墓地に水属性モンスターを５体揃えるとは。」

その狙いにランも気づいたのか、先ほどと比べやや声のトーンが低くなる。どうやら砺波が、幼い自分を侮っているのかどうかを図っていたようだったが、しかし砺波も最初から手加減をするつもりなど無い。海で狩りをする者の如く、相手の身を削って削って消耗させる算段だ。

「さて、では有利に立たせてもらいますよ。私の墓地の水属性モンスターが５体のみの場合にのみ、このカードは手札から特殊召喚できる。」

そして砺波は今から召喚しようとする１枚のカードを手に取った。先ほど手札に加えていた、特異な召喚条件から呼び出されるモンスター。しかしひとたび場に出れば、相手を圧倒できる力を持つが故に、一重に神とも比喩されることもあるモンスターの一体。
その召喚条件の難しさ故に、扱う者などほとんど居ないが、しかしそれすら容易く行えなければ、王者と呼べるはずもなく。

「いでよ、レベル８【氷霊神ムーラングレイス】！」

―！

砺波の場に、荘厳なりし氷の霊神が降臨した。

【氷霊神ムーラングレイス】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

「ムーラングレイスの効果発動！特殊召喚成功時、相手の手札をランダムに２枚を捨てる。」
「…いきなり手札が少なくされてしまうとは。…なるほど、私を好きにさせる気はないみたいですね。」
「もちろん。好きに動けるのは私だけでいいのです。」

そうして、いきなり手札アドバンテージを奪いにかかる砺波。これまでも数々の挑戦者をこれで縛ってきた。相手にとっても、初回から手札アドバンテージが制限されることはこのまま一気に引き離されてしまうことを意味し、それに気が付いた時には取り返しのつかない差となる。

もしここで、後攻のデュエリストが先攻の動きに抵抗するには、手札誘発できるカードを備えるしかない。しかし、砺波の放ったムーラングレイスの効果に抵抗する姿を見せないランは、ディスクが自動的に選んだ２枚を手札から捨て始めた。
（何もしてこない？鷹峰や憐造だったら、こんな効果は絶対に通すはずがないというのに。）

王者を破った少女と息巻くくらいなのだから、これくらいは簡単に逃れてくるはず。そう考えて打つ手を変えていこうと画策していたというのに、こうも簡単に決まってしまっては。
しかし、そんな砺波の考えを嘲笑うかのように、少女は鋭い視線を突き刺して、嬉々として砺波を見ていった。

「…不用意ですね？……【白鯨】。」

――！

少女がそう言ったその瞬間、砺波の全身に震えが走り、無意識にデュエルディスクに力を入れて、腰を落として構え直した。全身の毛が逆立ったような感覚が襲い掛かり、思わず中てられた、殺気のようなモノに飲み込まれまいと抵抗する。

（ば、馬鹿な…？こんなモノを隠していたのか…一体、何をしようと…）

砺波は意識を一気に深いところまで沈めて集中をするが…いや、させられたと言った方が正しいか。それほど、少女が発した笑いが、歴戦の王者の戦闘スイッチを入れたのだ。値踏みしていたのは相手も同じということを理解して。

そして、ランの場には、たった今捨てたカードが浮かび上がり、その効果を発動させていた。

「私は効果で捨てられた【暗黒界の狩人　ブラウ】と【暗黒界の術師スノウ】の効果を発動。ブラウの効果で1枚ドローし、さらに相手の効果で捨てられたためもう1枚ドロー。そしてスノウの効果でデッキから【暗黒界の門】を手札に加え、さらに相手の効果で捨てられたため、あなたの墓地の…なんでもいいですが…じゃあとりあえず攻撃力の高い【海皇の竜騎隊】を貰っておきましょう。」

そうして、優位に立とうとした砺波の行動を軽々と退け、ランの手札が後攻なのに増えてしまう。次のドローを含めれば7枚。いや、砺波にとって問題はそこではなかった。この少女、明らかにおかしいと砺波の感覚が告げている。

「暗黒界とは、これはまた珍しいカードを使いますね…しかし、チューナーを奪わなかったのなら、あなたはエクシーズか融合使い。暗黒界の相性から考えると、おそらくエクシーズ…いえ、魔轟神と一緒ならばシンクロも…」

そういって思考をめぐらす砺波だったが、しかし自分でそう言うものの、歴戦の戦いで培ってきた勘が全く違ったモノを砺波に教えている。そんな砺波を見て、少女は淡々と告げた。

―それは、王者を相手に言う言葉にしては…

「いえ、私はＥｘデッキなんて使いませんよ？」

「…は？い、今なんと…？」

「そんなもの使って勝ったところで、面白くもなんともない。だから私はＥｘを使うのをやめたのですから。」

「な…」

なんの躊躇もなくそう言った少女に一瞬驚いたものの、それに反して嫌な勘はまるで答え合わせをしたかのように腑に落ちていた。そう、この少女からは他のデュエリストから感じるＥｘデッキの感覚を、全然感じないのだ。まるで最初から、Ｅｘデッキにモンスターを入れていないかのように。

「そ…それは…私を…」

しかし、いくら勘が腑に落ちたとはいえ、あろうことかこの少女はＥｘデッキを使わずに自分に勝つと宣言をしてきた。つまり、この少女はわざとレベルを落とすためにＥｘデッキを禁じたと言うことになり、一つの召喚法の頂点に立つ王者に対して、自分の方が上だと言い張ったに等しいのだ。

それはあまりにも…シンクロ召喚の頂点に立った自分を…あまりに酷く侮辱していると感じ…

「私を馬鹿にしているのかぁ!!」

――!

砺波の怒声が会場内に響き渡り、そのあまりの圧力に会場内の古くなった所が軋み始める。ガラス部分が振動して、今にも割れ散ってしまいそうな程だが、それは荒々しい砺波の怒りが外へと放出されていた証拠だ。その怒りは正面に立つ少女に激しく衝突するが、それは常人ならば卒倒してしまいそうなモノ。

しかしそれを喰らったにも関わらず、ランはとてもつまらなさそうに、そう、この瞬間に【白鯨】への興味を失ったかのように、淡々と答えた。

「…はぁ。あなたも憐造さんと同じ反応をするとは。…つまらない男だ。」

冷ややかに言ったそれを聞こえたのか聞こえてないのか。砺波は怒りを保ったまま自分のターンを終えようとする。

「私はカードを2枚伏せてターンエンド!では教えてあげましょう!あなたがやろうとしていることの無謀さと、この私を馬鹿にしたことの罪を!」

そんな怒りが沸き出ている砺波を意にも介さず、手番が釈迦堂　ランへと移り始めた。

砺波　ＬＰ４０００
手札：5→2枚
場：【白闘気海豚】【氷霊神ムーラングレイス】
伏せ：2枚

「…私のターン、ドロー。」

より一層力の入った砺波に反し、より一層やる気をなくした様子のラン。まるで始めた時と真逆の光景だが、そんなことになったとしてもデュエルは続く。

―これは「決闘」。

始めた以上、どちらかの命尽きるまで終わりはしないのだから。ランは手札を見比べ、そして1枚のカードを手に取ると、それを発動した。

「私はフィールド魔法【暗黒界の門】を発動し、墓地のブラウを除外、手札の【暗黒界の龍神グラファ】を捨てて1枚ドロー。グラファの効果で【氷霊神ムーラングレイス】を破壊する。」

「甘い！私は速攻魔法【禁じられた聖衣】をムーラングレイスに発動！ターン終了時まで、ムーラングレイスは攻撃力が６００下がる代わりに、効果対象にならず効果で破壊されなくなる！」

「…ふむ。ならば次は…」

易々と通してやる気などない。そんな気迫が砺波から発せられるが、しかしランは静かに手を進め、さらに手札から1枚のカードを発動させる。何せ、砺波のおかげで手札が充実しているのだから、休める気もないといった様子だ。

「魔法発動【暗黒界の取引】。お互いに1枚引いて1枚捨てる。そして今捨てた【暗黒界の尖兵ベージ】の効果で場に特殊召喚し、そしてベージを手札に戻すことで墓地のグラファを特殊召喚する。」

【暗黒界の龍神グラファ】レベル８

ＡＴＫ２７００→３０００　ＤＥＦ／１８００→２１００

そして、ランの場に禍々しい姿の悪魔が姿を現した。まるで、ランが発した混沌とした殺気が形を得たように荒れ狂うそれは、容易すぎる召喚条件から出現するモンスターにしてはいささか凶悪すぎる力を持っているのではないだろうかとも思えるが、さらにランは止まらずに進む。

「もう一枚の【暗黒界の取引】を発動し、1枚ドローしてスノウを捨てる。スノウの効果発動。デッキから2枚目の【暗黒界の門】を手札に加えて発動。墓地のスノウを除外し、手札の【暗黒界の導師セルリ】を捨てて1枚ドロー。セルリの効果で相手の場に特殊召喚され、そして効果発動。私は手札のブラウを捨てる。この効果は相手の効果によって捨てられたこととなる為、私はデッキから2枚をドロー。魔法カード【アドバンスドロー】を発動し、場のレベル8のグラファをリリースして2枚ドロー。さらに【成金ゴブリン】を発動。相手のライフを1000回復して1枚ドロー。もう一枚発動して1枚ドロー。」

砺波：LP4000→6000

止まらないランの展開に、お互いの場が目まぐるしく変わっていく。ランの手札がまるで減らず、さらに次々と手札を交換していくではないか。流石の砺波も、ランの行動の異常性に、怒性から冷静へと着実に引き戻されて行っていることに気が付いた。

(何だこれは…止まる気配がまるでない…鷹峰を相手にしている気分だ。)

あの傍若無人な強さを持つ男を思い浮かべ、ふと以前の鷹峰との戦いを思い出す砺波。一向に止まる気が無く、自分の思うがままに動いて驚くべき展開をしてきた。しかし、それは鷹峰の「強さ」があってこそデッキが従ったのだ。それと同じ現象を起こしている少女もまた、まるでデッキ自身が従っているかのよう。

「…ではそろそろ行きますか。」
（ッ…来るか？）

より一層警戒心を強めて迎え撃とうとする砺波。アレだけのことをしたのだ、今ランの場にはモンスターは居らず、このままでは攻撃も出来ないが、きっと、もう一度グラファを呼び出してくるか、さらに追加でグラファを呼び出して畳み掛けてくることだろう。

しかし、ランはそれを嘲笑うかのようにして1枚のカードを発動した。

「私は場に2枚のカードを伏せて【手札抹殺】を発動！お互いに手札を捨てる！私は4枚捨てて4枚を新たにドロー！そして今捨てた【暗黒界の尖兵ベージ】、【暗黒界の武神ゴルド】、2枚の【暗黒界の龍神グラファ】の効果をそれぞれ発動する！ベージ、ゴルドを特殊召喚し、グラファの効果であなたの場の伏せカードと【白闘気海豚】を破壊！」
「…クッ！」

1枚の魔法カードから、一気に砺波の場が荒らされる。そしてこのままでは2体のグラファが蘇り、そして伏せカードも破壊されては大ダメージは免れないだろう。

しかし、そんなことは百も承知だ。過去、あの鷹峰と何度も戦ってきた自分だ、このくらいのことを耐えられないようでは王者ではない。

「ならば破壊される前に罠カード【ハーフ・アンブレイク】を【氷霊神ムーラングレイス】に発動！このターンの間、ムーラングレイスは戦闘破壊されずに受けるダメージも半分になる！さらに破壊された瞬間、【白闘気海豚】の効果発動！墓地の【海皇の狙撃兵】を除外し、自身をチューナーとして守備表示で特殊召喚！」
「なるほど、破壊されても何度でも蘇るモンスターですか。ターン制限も無いとはね。…まぁいいでしょう、どこまで耐えられるか。私は

ベージとゴルドを手札に戻して墓地から2体のグラファを特殊召喚。先ほど奪った【海皇の竜騎隊】を攻撃表示に変更してバトル！竜騎隊で守備表示の【暗黒界の導師セルリ】に攻撃！さらに1体目のグラファでムーラングレイスに攻撃！」

―！

「…クッ…」

砺波　ＬＰ：６０００→５６００

「破壊されなくともダメージは通る。まだだ、私は2体目のグラファでムーラングレイスへ攻撃！」

砺波　ＬＰ：５６００→５２００

「私はこれでターンエンド。」

ラン　ＬＰ：４０００
手札：7→6枚
場：【暗黒界の龍神グラファ】【暗黒界の龍神グラファ】【海皇の竜騎隊】
伏せ：2枚

「…私のターン、ドロー！」

圧倒的な回転をし、そして全く息切れすらしていないランの姿に、先ほどまでの怒りはいつの間にか消え去っていた。今まで自分や鷹峰が培ってきた歴戦の「モノ」を、この少女は当たり前のようにその幼い体に宿している。それは到底こんな年齢の子どもが抑えきれるはずがないのに。

…今あったのは、目の前の少女への畏怖。それは、得体の知れない

者への畏怖に他ならないのだから。

「私は魔法カード【貪欲な壷】を発動！【たつのこ】、【海皇子ネプトアビス】、【深海のディーヴァ】、【水精鱗―メガロアビス】、【竜宮の白タウナギ】をデッキに戻して２枚ドロー！」

それでもデュエルを投げ出さないのは、彼が王者であるからだろう。畏怖を感じた程度で逃げ出すのは、もはや恥でしかない。それに、王者とは勝ってこその称号、いくら【黒翼】と【紫魔】に勝ったとは言え、そう易々と負けてやる気は無い。

「速攻魔法【ツインツイスター】を発動！手札１枚をコストにあなたの２枚の伏せカードを破壊！」

「ほう、確実に効果を通す気ですか。」

しかし、そんな砺波を気にも留めずに飄々と言うラン。確かに、相手の布陣は強力だ。攻撃力３０００が２体、これを正面突破することは確かに難しいことではあるが…

「では、参りましょう！」

何も、戦闘で正面突破することだけが手ではない。ランがグラファの破壊効果で一気に片付けようとしたように、砺波もそれができ、それを今召喚するために動いているのだから。

「私は先ほど墓地へ送った【フィッシュボーグ―プランター】の効果発動！１ターンに１度、このカードが墓地に存在する時に１度だけ、私はデッキの１番上のカードを墓地へ送り、それが水属性だった場合に墓地からこのカードを特殊召喚することができる！」

そうして、デッキトップを迷うことなく墓地へ送る砺波。それは、

水属性モンスターを上手く墓地へ送ることができれば、毎ターンのように復活が出来る効果。しかし、水属性モンスター以外のカードが墓地へ行ってしまえば、二度と復活は出来ない諸刃の剣。

これは自身のデッキとの確率の戦いでもあるが、歴戦のデュエリストにはデッキが従うかのように応えてくれる。それは、砺波とて例外ではない。

―墓地へ送ったデッキトップのソレは、当然のように水属性モンスターだった。

「墓地へ送られたのは水属性の【フィッシュボーグ―ランチャー】！私は【フィッシュボーグ―プランター】を墓地より特殊召喚し、レベル2の【フィッシュボーグ―プランター】に、チューナーとなっているレベル6の【白闘気海豚】をチューニング！」

大海を遊ぶ白き姿が6つの光輪に変わり、その中を2つの光球が駆け抜けていく。シンクロ召喚特有のエフェクトにより、砺波の背後に光が弾け…

―呼び出すは、自身が【白鯨】と呼ばれるようになったルーツ。

「悠久を生きる白き潮、大いなる海原から輪廻を巡れ！シンクロ召喚！現れよレベル8、【白闘気白鯨（ホワイトオーラ・ホエール）】！」

―！

そうして、圧倒的巨体を持つ白き鯨が砺波の場に現れた。それは、長き時を共に戦い抜いてきた姿で、見る者全てを圧倒することだろう。そしてその効果は、シンクロ召喚成功時にこそ真価を発揮する。

【白闘気白鯨（ホワイトオーラ・ホエール）】レベル8

ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

「【白闘気白鯨】の効果発動！シンクロ召喚成功時、相手の表側モンスターを…全て破壊する！」

――！

そして激流を起こして白き巨体が荒々しく吼え、それに飲み込まれたランのモンスター達は成す術なく砕け散っていった。強力なリセット効果をもつこの白鯨は、まさに切り札と呼ぶに相応しく、その激流はランを守る者が場に存在できないほど。

「これが噂に聞く【白鯨】そのもの…なるほど、確かに美しいモンスターだ。」

「まだだ！私は【強欲で貪欲な壷】を発動し、デッキから１０枚を裏側で除外して２枚ドロー！【死者蘇生】を発動して墓地から【白闘気海豚】を蘇生する！これで終わりです！バトル、【白闘気白鯨】でダイレクトアタック！」

そして、ランに襲い掛かろうとする白き巨体のモンスター。この後に自分の控えているモンスター達の攻撃が通ればそのまま自分の勝ち。Ｅｘデッキを禁じたことがなんなのだ、そんな者は王者を相手にする資格は無い。砺波はそう確信していた。

しかしそんな砺波をランは…

「…だから不注意だと言ったでしょう？手札の【バトルフェーダー】の効果発動。攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる。」

「なんだと？…そんなものを残しているとは。…私はカードを１枚伏せてターンエンド。」

砺波　ＬＰ：５２００
手札：２→１枚
場【白闘気白鯨】【白闘気海豚】【氷霊神ムーラングレイス】

伏せ…1枚

「いやはや、なんというか。砺波さん、確かにあなたは王者でしたね。憐造さんの方は早々に諦めてしまわれましたので、とてもつまらない決闘でしたが、今回はまぁそれなりに面白い決闘が出来たと言ってあげましょう。」

「…どこまで私を格下に…現に今、この場は私が有利なんですが。」

確かに、ランのＬＰは削れなかったものの、砺波の場には倒されても蘇るモンスターが２体。墓地にも蘇生に必要な水属性が残っており、相手の破壊効果を持つグラファも３枚使い切っている。そして自分には伏せカードもあり、先程のような展開をされても、先程と同じように耐えきれ、ムーラングレイスの破壊によるバトルフェイズスキップが入ったとしても次の展開で逆転でき、持久戦に心得のある砺波はその次でも確実に勝てる自信があった。

―そんなもの、無きに等しいことに変わりないのだが。

そんなランの視線に、砺波は気付いてはいない。いや、その鋭い視線に気付かないようにしている。

「私のターン、ドロー。【暗黒界の門】の効果発動。墓地のセルリを除外、手札のゴルドを捨てて１枚ドロー。自身の効果でゴルドを特殊召喚。」

そして、自分のターンが来たランは、早々にそれだけ行うと一度手を止めた。それを不信に感じた砺波が怪訝そうな顔をしてきたが、次の瞬間にランはクスクスと笑い始める。まるでもう我慢できずに堪えきれなくなった子のように。

「…何がおかしいのです？」

「いえ…まさか王者ともあろうものが、褒めた瞬間に気を抜いたのがまた傑作で。」

「…ではあなたはこれを突破できるとでも？」
「突破？何を言っているんですか。あなたじゃあるまいし、同じ轍を踏むとお思いで？」
「く…」

もう何度目かもわからない、なんとも上から目線の言い方ではあったが、しかし何故か砺波はもうそのことに関して言い返せていなかった。
それは、無意識のうちにランを認めてしまっていることを意味しているのだが…当の砺波はそれに気付いてもいなければ、違和感を感じてすらいない様子で。

「…このターンで終わりにしますとも。【二重召喚】を発動し、私は2体のモンスターをリリース！」
「なっ!?こ、ここでアドバンス召喚だと!?」

2体のモンスターが渦を纏ったことに、驚きを隠せないようすの砺波。
何せ、てっきりまたグラファが蘇るのではと思っていたために身構えたというのに…しかし、ランはその応対すら嘲笑うかのようにして手札から1枚のカードを取ると、二つの生贄を喰らわせてそれを出現させんとするのみ。
ランの宣言により天に召されて行く二つの悪魔が、煌々と輝き闇を光らせ…

「現れろ、レベル8！【Ｔｈｅ　ｓｕｐｐｒｅｓｓｉｏｎ　ＰＬＵＴＯ】！」

―！

暗黒よりも暗き者、漆黒よりも深き者。
途絶えぬ叫びをその身に纏い、光すら飲み込む闇夜の化身。空を超え、天を覆い、宙の深層に佇むまるで『冥の星』。
それは虚無なる星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。
ランの場に現れたのは、そんな天に浮かぶ星すら飲み込むのではないかという漆黒の悪魔。
それはまるで、星そのものの荒ぶりを1体の悪魔に押し固めたような得も言われぬ恐怖を駄々漏れにさせながら降臨し…

【Ｔｈｅ　ｓｕｐｐｒｅｓｓｉｏｎ　ＰＬＵＴＯ】レベル８
ＡＴＫ／２６００→２９００　ＤＥＦ／２０００→２３００

「な、何だこのモンスターは!?」

狼狽える声を砺波は隠せず。
しかし、それもそのはず。王者となるまでのこれまで、そして王者となってから今までの長い長いデュエル生活においても、こんな得体の知れぬモンスターなど砺波は見たことが無いのだ。
全くの未知なるモンスターを前にして、もはやその姿は王者では無くなっているようにも見え…無意識に体が怯え、漏れ出す恐怖に触れていることがただただ怖い。そう訴えているかのような砺波の表情は、こんな感情など今まで味わったことも無いと言わんばかりに震えていて…
しかしランはといえば、目の前の悪魔を見て得意げに微笑んでいるだけではないか。

「フフ…燦然と輝くプラネットの一球、私は【Ｔｈｅ　ｓｕｐｐｒｅｓｓｉｏｎ　ＰＬＵＴＯ】の効果発動！1ターンに1度、カード名を宣言！それがあなたの手札にある場合、私は2つの効果のうち1つを使える！」

「なっ、見てもいないのに私の手札を当てることなど出来るはずがないだろう!?」
「それはどうでしょう。あなたの手札など、私にとっては自分が見ているかのように見えるのだから！」
「なんだと!?」

そして、信じられない言葉が砺波を襲う。
非公開情報であるはずの相手の手札すら、この少女からすれば公然公開されているにも等しいというその言葉。およそ使ったカードから残りの手札の予想は付いたとしても、デュエルでまだ使用していないカードや裏側で除外されたカード、そしてこの世に存在するカードの選択肢を含めて、砺波の手札にある1枚には途方も無い可能性があるというのに…
そんな天文学的な確率をかいくぐって、今まさにこの『冥の星』の恐るべき効果を発動せんとしているランを前にして、もはや砺波の心臓は張り裂けそうに痛くなっているだけ。
…一体、自分は何を相手にデュエルをしていたのだ。これは、関わってはいけない存在なのではなかろうか、と。
そんな恐怖に囚われている砺波を前に、静かにランは続けるのみ。
「…フッ、流石は王者と呼ばれている者。耐え切れれば逆転へと繋げたのですね。まぁそれもすでに手遅れですが。…私が宣言するのは…」

そして、ランが高らかに宣言する…

ーその、名は…

「【深海のディーヴァ】！」

「ば、馬鹿な!?そ、そんなことが!?」

砺波は、手札で逆転を虎視眈々と狙っていた1枚のカードに視線を落とし…そして、そのあまりの衝撃に強く心臓を撃たれた。

…それは、デュエル開始にも使ったモンスター。

確かに砺波の手札にそんするソレは、これまで幾度となく砺波を救い、そして幾度となく砺波を勝利へと導いた歌姫だと言うのに…

今ではソレが、勝利への道を閉ざした。これで次のターン、逆転へと繋げることができたというのに…もう砺波の心からは、その勝てるヴィジョンが消えていた。まるで、ランの宣言によって砺波の心が勝つことを放棄してしまったかのように。

―自分の手に負えないこの少女は、文字通り次元が違ったのだから。

「ＰＬＵＴＯの効果発動！私は【白闘気白鯨】のコントロールを得る！」

「あ…あぁ…あぁぁ…」

そして、自身の象徴とも呼べるモンスターを奪われ、敵対する自分の「名」そのものが今、自分に牙を向いている光景に、もはや王者からはすでに闘気など消えていた。しかし、それでもランはまだ手を止めずに動き続ける。

「ページを召喚し手札に戻してグラファを蘇生。３枚目の【暗黒界の取引】発動。お互いに1枚引いて1枚捨てる。ページを捨てて特殊召喚し、戻して2体目のグラファを蘇生。【死者蘇生】を発動し、あなたの墓地から邪魔な水属性の【フィッシュボーグ―ランチャー】を貰う。」

「そんな…ばかな…」

「最後に速攻魔法【サイクロン】を発動。あなたの伏せカード、【波紋のバリア―ウェーブフォース】を破壊させて貰います。」

手札のみならず、易々と伏せカードまでを言い当てて破壊するラン。流石にもう抵抗する気も無くなったのか、砺波はされるがままになっている。

「ではバトルと行きましょう。ＰＬＵＴＯで【白闘気海豚】へ攻撃！」

―！

砺波　ＬＰ：５２００→４７００

そして、冥王の天撃が白き姿へと襲い掛かり、為す術なく破壊されてしまった。なんとか砺波は己に残った最後の意識で、もう何度目かも分からぬ【白闘気海豚】の効果を使うものの、その声に覇気などは無く…

「ホ、【白闘気海豚】の効果で墓地の【フィッシュボーグ・プランター】を除外して守備表示で…」

「無駄な足掻きを。あなたから奪った【白闘気白鯨】で、守備表示の【白闘気海豚】へ攻撃！【白闘気白鯨】が攻撃する場合、貫通ダメージを与える！」

―！

砺波　ＬＰ：４７００→２９００

続いて、敵に奪われた己の「名」にまで攻撃を受ける砺波。常に信頼を置いていた自身の象徴が、よもや牙を剥く日が来ようなど思っても見なかったのだろう、その一撃が確実に砺波の心を抉っていた。すでに腕はだらしなく垂れ下がり、戦う覇気など微塵もない。

「グラファでムーラングレイスに攻撃！」
砺波　ＬＰ：２９００→２７００

そしてじわじわとＬＰが削られていくその光景。
王者と呼ばれた歴戦の勇士が、心を折られている姿など第三者は絶対に信じることはしないだろう。しかし、それは今確かに起こっていることであって…

「これで終わりですね。【暗黒界の龍神グラファ】で、ダイレクトアタック」

―！

そうして、ランの宣言により最後の一撃が砺波を今まさに襲わんと迫る。

暗き波動が闇となり、暗黒の淵へと吹き飛ばす咆哮。

そんな攻撃に砺波の眼は、迫り来る悪魔の一撃を…

ーただ虚ろな目で、見ているだけだった。

砺波　ＬＰ：２７００→０（―３００）

―…

「…つまらない決闘でした。やはり鷹峰さん、あなただけです。私を満足させてくれたのは。」

スタジアムの外で待っていたのだろうか。ランが、入口にもたれ掛かって煙草を吸っていた鷹峰に話しかける。鷹峰も、煙草を一吸いして煙を吐き出し終わると同時に言った。

「…砺波は…潰れちまったか？」

「さぁ？もう興味ありません。憐造さんも砺波さんも、期待していた割にはあの程度とは。」

「カカッ、俺もあいつらも同じくれーの強さだったろが。」

渇いた笑いを響かせて、鷹峰は己と同じ高みにいた二人を思い出す。王者と呼ばれていても、こんな少女に手も足も出ずに負けてしまうのだ。それを他の二人は耐え切れなかったのだろう。

…遥か高みに上り詰め、本気にさせてくれる奴など居ないと思っていた所で、こんなに面白い奴が突然現れたというのに。勿体無い奴らだ、そう言いたげな顔をして。

「全然違います。あの人達は所詮あそこまでの決闘者でしたが、鷹峰さんは違う。今ではもう【紫魔】と【白鯨】など足元にも及ばないくらいでしょう？」

「おいおい、買いかぶりすぎだぜ？俺もあいつも、皆ただの老害でぃ。」

「何を言いますやら。今までもあなただけですよ、本気で潰しにかかった私相手に楽しんで、その場で進化…いえ、ランクアップし始めた癖に。」

「誰が上手いこと言えって言ったんだよ。…まぁ、砺波も人の子ってことだ。バケモンの相手は…勤まんなかったってこった。ったく、つまんねぇもんだ。」

鷹峰とて、確かにこの化物を相手にしたのは事実。

しかし【黒翼】には心の折れた様子もなく、ただ飄々としているだけだ。鷹峰がランと行った決闘自体に、砺波との差異などなく、ただあったのは、圧倒的恐怖を与えてくるこの化物に対して、楽しめたか折れたか、それだけのこと。

そしてその結果、砺波と憐造は折れた。

それを知った鷹峰の心中は何を思うのかを知る者は本人以外に居らず、またランも他の二人に関してはもうどうでもよくなっている様子で…

「ふふ、私がこの町を離れる時までお願いしますよ？何せ、化物の相手は化物しか勤まらないんでしょう？」

「カカッ、若いやつは威勢がいいこった。こんなジジイをお前さんと一緒にすんじゃねぇってんだ。」

「何を言いますか。私に感化されたとは言え、ここまで自力で上がってきた人間が、まさか人のままでいられるとお思いで？」

「ケッ、違いねぇ。」

「では早く行きましょう。不完全燃焼で今にも始めたいところですからね。」

「今度は何でくるんでぃ？俺は何で行こうか。」

「さてね…フフッ、あぁ楽しみだ。」

「あぁ、楽しみなこった、カッカッカッカッカ…」

そう言って、とても楽しそうにしているランと、鷹峰の渇いた笑いが、ただ虚空に吸い込まれて消えていった。

―…

「そんな…馬鹿な…Ｅｘデッキも使わずに…あんな…」

デュエルスタジアムの一角で、膝を突いてうなだれている砺波。そ

の心は折れ、表情は絶望に染まっていた。
完全に舐められていた、王者である自分を。ただ、あの女は自分が楽しむためだけに王者を利用して、Ｅｘデッキを使わないという暴挙も自分に課したハンディキャップ。恐怖の根源が立ち去ったが故に、悲しみ以上に、怒りが再燃してきてしまう。
しかしそれでも、なお圧倒されてしまったことには変わりないが。
「認めない…Ｅｘデッキを使わないデュエリストなど…私は認めない…」
認めたくない。その思いだけが、砺波の心をぎりぎり繋ぎとめ、そして間違った怒りだけが、砺波の体を何とか立ち上がらせていた。

―…

時を同じくして…
薄暗い部屋、荒れ放題の空間。そしてそれ以上に、絶望に囚われている少年が一人。
「ゆうら。行くぞ。」
「…」
「ゆーらぁ…」
「…」
唯一無二の友の呼びかけにも、今にも泣きそうな少女の呼びかけにも応じず、虚ろな目で空虚な空間だけを見ている少年。その目は、今にも生きることを諦めてしまいそう。それを意に介さず、友が言う。
「じじいが話していたのをたまたま聞いた。」
「…」

「Ｅｘデッキを使わなくても、とてつもなく強い奴がいると。」

生きることすら諦めかねない少年に、友が差し出す僅かな期待。すべてを無くした少年に、わずかに舞い込む生への希望。

「…え」

搾り出すような声を枯らして、微かなモノにしがみつく。

「じじいのところへ行くぞ。」

一人の男の絶望が、一人の子どもの希望となったことを、この時に知る者は、まだ誰も居らず。

――…

ｅｐ１１「交換条件」

「先生…理事長が負けたのって【白竜】じゃないの？」

鷹峰が放った言葉の意味が分からず、思わずルキが聞き返した。

しかし、そのルキの疑問も尤もであり、当時シンクロ召喚使いの頂点に立っていた【白鯨】こと砺波　浜臣が、謎の不調から「天才」と謳われていた今の【白竜】に敗北を喫し、そしてそのまま引退を表明してしまったことは、過去に大きなニュースとなっていたのを覚えているからだ。

それに【白竜】は男性、その名前は鷹峰の言った「ラン」という物では断じてない。

「大人には色々あんだよ。」

「…それは、先生が前に言っていた、「あの人」のことですよね。…まさか理事長にも勝っていたなんて。」

遊良とて、この「ラン」という名は今初めて聞いたが、しかしその人物のことは知っている。何せその人物のことを、絶望していた時期に鷹矢がたまたま鷹峰の話から聞いていなければ、微かな希望を持てずに今まで自分はデュエルを続けていないのだから。

弟子入りしてからも、鷹峰が楽し気に話してくれた化物の話。世界最高峰と名高い【黒翼】である師と、Ｅｘを使わないのに勝ったり負けたりを繰り返すことができる唯一の【化物】のことを。…鷹峰のことも、何度も化物と思ったが。

…まぁ、すでにこの町にはいないことも知っていたため、会うことは叶わなかったが。しかし、まさか鷹峰だけでなく砺波とまで接点があったなんて遊良は知らなかった。

そして、当の砺波はと言えば、苦々しい顔をして鷹峰をにらみつけている。

「私の前でよくその名を口にできるものだ。」
「ケッ、勝手に潰れて、そんで調子崩して琥珀のガキにまで負けて…。そんで今お前さんがやってることは、ただのガキの八つ当たりってんだよ砺波ぃ。」
「減らず口を。それと天城君の事は別問題です。私の学園にＥｘデッキを使わない者は必要ない。」
「カッカッカ。それを八つ当たりってんだ。Ｅｘデッキを使わない奴に負けたのが悔しくて、Ｅｘデッキを使えない遊良を追い出すのはなぁ。」

そして、話が平行線へと流れ始めるが、お互いの主張を曲げる気がない大人二人に対して、現在、遊良とルキにできることは皆無。あまりに格上の人間同士の会話の為、下手に話に入ることもできず、途方に暮れるしかないということか。
—まさに、そんな時だった。

「おい遊良！こんなとこに居たのか！探したぞ！…む？何をしているんだ？」

突如、部屋の外から声が響き、見れば部屋の外には鷹矢の姿。しかし状況を全く理解していない鷹矢は、重苦しい空気にも構わずに部屋に入ってくると、鷹峰を見据えて言い放った。

「なんだジジイ、久しぶりだな。いつ帰ってきたんだ？」
「あぁん？このクソガキ、年上をちゃんと敬えってんだ。ったく、誰に似たんだ可愛くねぇ。」
「親父がキレていたぞ。ちゃんと行先を言ってから行方不明になれクソジジイ。」
「ケッ、てめぇのガキに心配される筋合いはねーってんだよ。」

流石に親族だけあって、鷹峰相手に全く物怖じしていない鷹矢。遊

良が鷹峰に師事したときに、もちろん一緒に鷹矢も鍛えてもらっていたのだが、遊良とルキが「先生」と呼んでいても、鷹矢に敬う気持ちは無い様子だ。

まぁ、昔から悪い意味で問題が多いことで有名な【黒翼】ではあるが、世間に知られている以上に親族にかかった迷惑はその比では無いのだろう。遊良も過去に鷹峰が、鷹矢の父親と会うたび常にガミガミ言われていたのを何度も見ていた。

「…天宮寺くん、今は取り込み中なのですがね。見てわかると思いますが？それに、もう授業も始まっている時間でしょう。」

そんな話の途中で急に割って入った鷹矢に砺波が問いかけた。確かに、もう授業も開始されている時間だし、そもそも今来たのなら完璧に遅刻だ。よく遊良がここにいると分かったものだが、当の鷹矢は鷹峰に話すがの如く、全く物怖じせずに砺波に向かう。

「理事長、外まで聞こえていたんだが、遊良が退学とは本当なのか？そんな馬鹿な話は聞いていないぞ。」

「…これだから天宮寺の人間は…そうですが、君には関係のないことでしょう。いいから教室に戻りなさい。」

「いや関係ある。遊良が退学するなら俺も退学にしてくれないと困るからな。」

「鷹矢、お前何言ってんだ？…ん？」

そして、その鷹矢の言葉が遊良には信じられなかったが、まさか鷹矢がそこまで考えていてくれるなんて、一瞬そう考えはしたものの、ふと考えるとこの馬鹿がそこまで考えているわけがなく…

「大体遊良が退学になったら俺の飯はどうなる。誰が洗濯をして、誰が掃除をしてくれるんだ。」

「そっちかよ！」

「…はぁ、ほんとおバカなんだから鷹矢は…」

敬語も使わずそう答えた鷹矢の呆れはてるような理由に、遊良は思わずツッコまずにはいられず、ルキは頭を抱えた。…まぁ、きっと遊良への横暴な決定に対する、鷹矢なりの抵抗なのだろうが、しかしどうにも話の仕方が下手な奴だ。

それに物怖じしない性格は結構なのだが、どうも的を射ない反論に、言われた砺波も思わずため息をつく。

「…はぁ、いくら君が鷹峰の孫でも君まで退学にはするつもりがありません。それに、君は決闘祭の代表なのですから、今退学されても困ります。」

「む？」

すると、砺波が言った「決闘祭」と言う単語が耳に残ったのだろうか、鷹矢はふと考えるような素振りを見せると、再び砺波に向かった。

「理事長、決闘祭の代表は夏休み明けにまず学年選出してから候補が決定するのではないのか？」

「あぁ、確かに他のクラスはそうですが。しかしエクシーズクラスは担当教員からの推薦で、満場一致すでに君に決まっています。エクシーズクラスのトップを入学すぐに倒していますからね。君もそう聞いているはずですが？」

「お、おい鷹矢、それ本当なのか？」

そんなこと、遊良だって聞いていないことだ。遊良が決闘祭に出たいという話をしたときに、鷹矢だって聞いていたはずなのに。

もしかしたら、その時にはこいつなりに気を使ったのかとも考えたが、しかし先ほどの退学云々の台詞や、普段の鷹矢の性格からして遊良に気を使うはずが無いことを思い出す。そして本人も、まるで初めて聞いたといわんばかりの顔をしていた。

「知らん。そういう事は遊良に伝えてくれないと忘れるに決まっているだろう。俺に言われても困る。」
「…君のことでしょう？」
「このクソガキ誰に似たんだマジで。」

悪びれも無く、ただそう言った鷹矢の言葉に嘘は感じず、ただ単純に…馬鹿なだけだった。

「まぁそれはいい。しかしそれならこちらも条件がある。」
「条件？…一体何を言っているのですか？」

そんな鷹矢の言い分に、疑問しか沸かない砺波。決闘祭の代表にまで選ばれているというのに、むしろありがたく思えばいいものを、まるで取引材料を得たかのような鷹矢の顔は若い頃の鷹峰そっくりに見える。下手に若く、そしていつだって要らないことをしでかして周りを迷惑させていたあの頃の破天荒な男にそっくりだ。

「俺に決闘祭に出て欲しくば、遊良の退学を取り消すんだ。」
「…はい？」
「それが出来ないのであれば俺も退学する。」
「…はぁ…いいですか天宮寺君、全く交換条件になっていないですよそれは。…もっと考えてから物を言いなさい。」

呆れた顔をして言い聞かせるように、砺波は溜息をついた。確かに、鷹矢の言ったソレは取引でもなんでもない。鷹矢の決闘祭の代表選出は、いわば学園から鷹矢への依頼ではなく、学生としての出場権利を学校が与えただけ。別に鷹矢が出なくとも、決闘祭に出たい生徒は数多く、また他の生徒を選出すればいいだけに過ぎない。何せ、鷹矢に敗れた元エクシーズクラストップの3年生も、実力自体なら申し分ないのだから。こんな条件は、砺波からしたら痛くもなんとも無い

ことだ。

―しかし、そんな鷹矢の軽い条件を、重い取引材料に変えられる人間が、ここに一人。

「カッカッカ。面白れぇこというじゃねーかクソガキ。」
「鷹峰…何を考えているのですか。」
「いや何、どうせアレだろ？俺の孫が辞退したって他の生徒出せばいいだけだもんな、お前はよ。」
「そうですが、それが何だというのです？」

含みを持たせてそう言った鷹峰から感じる圧力が、より一層強くなる。この男がこういう顔をするときは決まって、ろくでもない事を仕出かそうとしているときに違いない。それを経験から砺波は感じるが、それを気にせず鷹峰は続けた。

「…じゃあ他の生徒も全員出られなくなっちまったらよぉ、お前さんは困るってわけだ。」
「なっ!?鷹峰、あなた何を!?」

鷹峰の言葉に、初めて焦った声を出した砺波。
しかし、鷹峰の言葉の意味を理解できていない遊良達と違って、砺波にはそれの意味することがはっきり分かってしまう。それは、決闘祭への参加は、いわば生徒からすれば権利でも、運営する学園側には【決闘世界】から課せられた義務であって、それに学生を出さないことは、その決闘学園の必要の無さを意味する。
裏では莫大な金の動くイベント、各界の注目も高く、そして何より超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が、そんな事態になった学園を許すはずもない。そうすれば、下手をすれば責任者である自分自身の命すら危ぶまれることとなるのを、砺波は理解している。
構成員になること自体が生易しい道ではなく、しかし入れれば莫大

な富と安寧。それに反して、望む結果が出ないのならば必要なく消される。
—世界最大の超巨大決闘者育成機関【決闘世界】とは、そういう所なのだから。

「カッカッカ、俺がこの学園の生徒全員に引導を渡してやる。お前さんみてーに、トラウマになるくらいぶっ潰して、んで全員仲良くデュエルなんて出来ねぇ体にしてやんよ。まぁそんな事になったら、確実にイースト校は大変だぁな。」
「そんなことを…私が許すとお思いで？」

馬鹿げた話だ。しかし、それを本当に出来てしまうが故に、それを本当に実行しようとする気があるが故に、笑い飛ばして好きにさせるわけにはいかない。なまじ権力と実力を兼ね備えた悪人ほど、性質の悪いものはない。
何せ、この男と普通に話すことが出来る学生がこの学園に居るはずもなく、学生程度など、本気で中てられればトラウマレベルではない。下手をすれば廃人だ。
圧倒的強者とは、人を導く道に進むものもいれば、人を壊すことになんの抵抗もない者がいる。鷹峰も、今でこそ遊良たちを弟子と言ってはいるが、本来は後者。なんの悪びれも無くそう言う鷹峰を、苦々しい顔で砺波は睨んだ。

「ジジイ、正直引いたぞ。性根が悪い。」
「私も…先生ってば心が汚い。」
「流石にドン引きです。」
「うるせぇ！ガキはすっこんでろ！」

自分の弟子にまで引かれているが、しかしそんなことなどお構いなしにこの男ならやりかねない。虚偽はともあれ、過去にプロで彼に潰され力の差を思い知って、引退はまだしも自ら命を絶った人間もいた

という噂だってある。学生レベルを廃人にしたところで、なんの罪悪感も無いだろう。それを咎められない権力を持っているのが余計に。

「あなたは…こんな少年一人の為に他の子ども達を犠牲にしてもいいと？」

「おう。どうせここの奴のほとんどが雑魚以下だ。俺とは無関係なガキなんて消えたってどうでもいいだろ？それに上がってこれねぇ奴は消し飛ばしても問題ねぇってんだ。上がれる奴を残そうとして何が悪い。」

「フッ…本気で天城　遊良が上がれると思っているんですか？Ｅｘデッキも使うことも出来ないこんな…」

「何言ってやがる。Ｅｘデッキの有無に強さが関係ねぇことはお前さんがよくわかってんだろが。」

そして鷹峰のその言葉に、砺波の口が閉じた。認めたくないが、知ってしまっている。釈迦堂に敗北し、Ｅｘデッキの有無に関係なく強者は強者なのだと。

それでも、認めるわけにはいかなかったのだ。鷹峰と違って、自分の歩んできた道を、考えを、簡単に変えられるほど適当な人生を過ごしていない。だからこそ、王者を引退した後も、ありとあらゆる…考えられる手を全て使ってでも釈迦堂を調べた。その名も、その人生も、その痕跡も、その全てを。

—彼女を否定するために、彼女を降すために。

鷹峰の手は借りなかった。自分がこうなってしまった元凶の一つであったし、元々ソリも合わず仲も悪い。自分で全てを解決したかった。

しかし、いくら調べても知りえたのは表面上のことだけ。家族もおらず、一人施設に居たことしかわからず。またその施設の責任者も、釈迦堂を知る大人の全てがこの世にはいなかったため、それ以上はわからなかった。

【白竜】に敗れた後、折られた心が癒えてきた頃。研鑽を再開し、また

強くあるようにも努めてきた。それでも、再び相まみえることはなかったが。

「…私は、あなたがなぜこの子にここまで入れ込むか不思議でたまりませんね。他人を気遣うなど、あなたらしくもない。」
「カッカッカ。気遣ってなんてねーさ。ただ楽しみなだけだ。」

そう言って、鷹峰は後ろに控える己の弟子たちを見る。
…一人は、言うことを聞かない才能溢れるクソガキ。
…一人は、とある理由から本気を出せない少女。
…そして一人は、Ｅｘ適正が無いのに諦めないガキ。
そんな弟子たちを見る鷹峰が、これまでに見たことのない顔をしていることに砺波は気が付く。不本意ながらも長い付き合いだが、まるで本当に保護者面をしているその顔は、全く持ってこの男に似合っていない。それを感じつつ、砺波は言った。

「楽しみ？一体何をしようとしているのですか。」
「長げーこと決闘してっけどよ、相手になる奴がほとんど居ねーのはつまんねーもんだ。ランだってフラフラどっか行きやがるから偶にしかヤレねーしよ。…んだったら作りゃあいい。俺が鍛えて、俺の相手になるやつをよぉ。それがＥｘデッキを使えねぇガキでも、幸いＥｘデッキが無くても強ぇ奴がいるのは知ってたからな。ついでにもう何人か鍛えたが、相手になる奴が増えれば万々歳ってなもんだ。」

それは自己満足の為の行為ではあったが、そう言う鷹峰も、遊良達からすれば昔から言われてきたことであり、特に今更何も感じていない。理由はどうあれ、過去に自分を見捨てずにいてくれたこの人が、今でも師であることに変わりはないのだから。
…流石に、学生全員にトラウマを植え付けようとするのはやりすぎだと思うが。

「それでどうすんだよ。他のガキ共もろとも遊良を退学させるか？お優しい理事長先生よぉ？」
「…ふむ。」

まさか孫の言った戯言に、下手な力を持った輩が本気になるとは。しかし、それを簡単に笑い飛ばしてしまえば、確実に学生はおろか、今度は【決闘世界】によって自分の命すら危うい。釈迦堂を潰すまでは死ねないというのにと、砺波は思考を巡らせて、そして考えが纏まったのか、鷹峰を見て言った。

「ではこちらからも条件があります。当然呑んでくれるんでしょう？」
「やぁっと同じ土俵まで降りてきやがったな。ったく、椅子の上で踏ん反り返ってやがるから頭までガチガチに固まっちまうんだよ。…何だ？」
「あなたの要求を呑む代わりに、現時点での退学は一旦保留にしてあげましょう。しかし、それも決闘祭が終わるまでです。」

それは、確かに遊良の退学を取り消してはくれている。しかし、単純に退学が即刻か年明けに伸びるかの違いだ。それでは、根本的な解決にはなっていない。鷹峰も、それに食い下がる。

「ダメだ。それなら今退学と変わらねぇ。退学処分を取り消さねぇと、どっちみちヤってやる。…ったく、ホントに遊良を追い出してぇんだな。」
「…ふん、当たり前でしょう。Ｅｘを使わないデュエルなど、見ていて虫唾が走るだけだ。」
「…じゃあもう一個サービスしてやるか。…もし遊良が決闘祭で優勝でもできなきゃ、俺が引退でもなんでもしてやるよ。」
「…なっ!?」
「引退、してやんよ。カッカッカ。」

そして、鷹峰の口から出てきたその言葉に、聞いた砺波も思わず絶句の表情を隠せなかった。いや、砺波だけではない。それを聞いた遊良達さえも、突然の言葉に慌てふためく。

「いったい何考えてるんですか先生!?」
「ちょっと!そんなこと条件にいれちゃっていいの!?」
「そうだ!俺も出るんだから遊良が簡単に優勝できると思うなクソジジイ!」
「鷹矢…今はそうじゃないだろ…」

一人の的外れな心配を除いて、遊良とルキには、師が何の躊躇もなく自身の人生の軌跡を閉じることが信じられなかった。砺波とて同様で、まさか弟子を庇うために出す条件にしては、あまりにも不釣り合い。世界に轟く一人の王者と、出来損ないの学生を天秤にかけるなど、どう見ても条件として釣り合いが取れていないというのに。

「王者の座を降りてでも…そこまでの価値がこの子にあると?」
「さぁな。そこまでかは俺にもよくわかんねぇ。でもまぁ、切り捨てるには早いだけってんだよ。」
「…なるほど。」

それを聞いた砺波は、またもや考える素振りを見せ始める。まさかこの男が他人の為にここまでのモノを賭けてくるとは思ってもみなかったのだろう。しかし、歴戦の王者の一人に、自分の手で引導を渡してやれることも面白くはある。天城が優勝など出来るはずがなく、どうせ退学にしてやるつもりなのだ。それなら、特典が多いことに越したことは無い。

そして、再び向かいあう。

「あなたがそこまで入れ込んでいるのなら、益々退学にしてやりたい

ですね。それと、あなたのデュエリスト人生にも私は終止符を打ってやりたくなった。」
「カカッ、そう来なくちゃぁな。」

そういうと砺波は、渇いた笑いで楽しげな鷹峰を見てから、懐からディスクを取り出すとどこかに電話をかけ始め、一呼吸おいて話し始めた。

「私です。今進めている天城　遊良の退学手続きを一旦止めます。…二度も言わせないで下さい、理由はあなたが知ることではありません。…あぁ、でもすぐに退学させられるようにはしておいて下さい？どうせすぐに必要になりますので。では…。…はい、これで条件は呑みましたよ？まぁ、天城君が決闘祭に出られなかったら、その時点で彼は退学、あなたもそれで引退ですけども。」
「構わねぇぜ。あと残ってる出場枠は2枠だったか？」
「えぇ。我が校きってのシンクロ使いと融合使いを送り出すつもりですが。現在選出中です。」

そう、イースト校では決闘祭の代表を送り出すにあたり、それぞれの召喚法から1名づつを出場させている歴史がある。別に、決闘祭のルールに召喚法での人数制限などなく、全て同じ召喚法のクラスから選出してくる学園だってあるのだが。
それを知ってか、鷹峰は続けた。

「じゃあもう一つ条件だ。代表の選出は平等にやれ。その結果でおんなじ召喚使う奴が被っても、Ｅｘ適正が無い奴が勝ってもだ。」
「おや、条件は呑んだのだし、もうあなたにそこまで決められる筋合いはありませんが。後は学園側の事務ですので。」
「いいからやれ。…テメーも潰すぞコラ？」
「あなたが、私を？…フッ、頭と同じで冗談のレベルまで低いとは。面白くも何ともない。」

―…

「んだゴラァ!!テメェ下手に出てりゃぁ調子乗り腐りやがって砺波ゴラァ!」

「貴様こそいい加減ここから消えろ!私の学園で大きな顔をすることが目障りでならん!」

そして、今まで溜め込んだモノが決壊したように、胸倉をつかんで威嚇しあう大人二人。しかし、鷹峰にしてはよく持った方だ、砺波の態度に最初からキレていてもおかしくはなかったのだから。

そんな師と理事長を見て、呆れながらも遊良達は違った意味で為す術なく固まっているだけだった。

―…

ｅｐ１２「認めぬ、認める」

「大体テメェは昔っから頭がガチガチなんでぇ！」
「適当な貴様に言われたくは無い！」

決壊したダムのように、我慢を溜めた怒りをあらわにして胸倉をつかみあう大人二人。砺波の現役時代から考えてみても、決して仲がいい方ではなかった二人だが、しかしこれで言い合うのも通算して何度目だろうか。年齢が近いこと、実力が拮抗していたこと、性格が正反対だったこともあり、もう数え切れないほどだ。
しかし、ただ言い合うだけならば良いものの、二人して常人では逃げ出してしまうくらいの殺気を飛ばしまくっているのが傍迷惑と感じたのだろう、それを見かねた鷹矢が仲裁に入った。

「ジジイ共落ち着け！見苦しいぞ！」
「んだとゴラァ！テメェ孫の癖して調子乗んじゃねぇぞゴラァ！」
「君はまず口の利き方を直しなさい！」
「…むぅ。」

吠え始めた二人に対して、勇猛に鷹矢が止めに入ったが、しかし耐性があってもかなりの迫力を纏うこの王者と元王者。流石に辛いのか、鷹矢も微かにたじろいでいる。

「どうするルキ？こうなったら先生しばらく落ち着かないよな…」
「はぁ…ホント短気なんだから。」

そんな荒れ狂う王者と元王者に対して、一瞬は驚いたものの、しかし傍から見ている分には殺気を除いて被害は無い。遊良とて、自分の退学がかかった話ではある、しかし自分よりも熱くなっている人間を見ていると逆に冷静になるものだ。そうは言っても遊良とルキは傍観するしかないが、このまま争わせていても埒が明かないのも事実。

他の教師が出て来てもこの二人を止められるわけがなく、それに第一このままでは、先ほどから意識を無くして空気と一体化している学年主任が、駄々漏れの殺気に中てられすぎて精神的に死んでしまいかねない。

―折角退学が取りやめになったというのに、そうなってはきっと退学どころの話ではないだろう。

「…先生！」

そして、意を決して遊良が声をかける。鷹矢でさえたじろいだこの二人の間に割って入ることはとてつもなく緊張したのだが、それよりも絶賛怒り中の師が聞く耳を持ってくれるか心配なのか、不安そうな顔をする遊良。しかし声をかけられた鷹峰は、一瞬だけ砺波を睨みつけた後、遊良へと向き合った。

「んだよ。」

「退学を何とかしてくれてありがとうございます。先生にここまでして貰ったので…後は俺が何とかしてみますから。」

「あん？オメーに出来んのか？何する気だ。」

「…それは…」

そう言われると、具体的な案が遊良にあるわけではないが、しかし全くの無策ではいられないだろう。何とか理事長に話をつけられないかと、必死に考える。

ここは決闘学園、聞く耳を持たない相手にやることと言ったら一つしかないのだが、そんな姿の遊良をみて、鷹峰は言い放った。

「ケッ、どーせ砺波のバカとデュエルでもして片をつけようって腹か？やめとけやめとけ、テメーじゃどうひっくり返っても砺波にゃー勝てねぇよ。」

「でも…」

そう言って鷹峰が頭から止めにかかり、遊良はそれ以上なにも言えなくなってしまった。…いくら相手が元王者【白鯨】と言えども、全く付け入る隙が無いわけでは無いだろうと画策したのだろうが、それすらお見通しのような目つきに、遊良の口が閉じてしまった為だ。
王者の過去のデュエルは公式に映像化していて、いつでも誰でも好きなときに見ることが出来るし、研究すれば一矢報いることも出来なくないだろう。相手だって人間だ……過去、そう算段して散っていった挑戦者の数は星の数、まるで数え切れないのだが。
まぁ、鷹峰が【堕天使】を得る前の遊良までしか知りえないのならばそういうのも当たり前か。遊良がＥｘ適性を手放した代わりに得た、あの力のことは、鷹矢とルキにしか話して居らず、二人しか知らない。
―単純に【堕天使】を得ただけではない。決闘における心の強さ、自信、そして纏うオーラすら、以前の遊良とは違うのだから。

「先生、俺…」
「でもじゃねぇ。お前がいくら【何か】を得ていたんだとしても、それでもダメだってんだよ。それをさせねぇためにわざわざ俺が来てやったんじゃねぇか。」
「…え？」

しかし、まるで遊良の身に起こったことを知っているかのような鷹峰の口ぶりに、思わず驚いた遊良。しばらく会っていなかったというのに、それでも弟子の変化に気付いたのだろうか。
それに意を決したとはいえ、遊良とて幼い頃から師である鷹峰を見ていたからこそ分かるのだが、いくら自分が力を得たと言っても、それでも王者のいる高みというのが、まだ遥かに遠いことは理解していた。
―才能と研鑽と思考をこれ以上無いくらいに積み重ね、その中にいる人と人とが本気で喰らいあっても、それでも王者の高みはまだまだ

見えてこない
それ程までに「王者」と呼ばれる人間がいる場所というのは高い、高すぎるのだから。
それを知る鷹峰とて、自らの弟子をみすみす潰されに行かせるはずがないだろう。目の前に居るこの頑固者が、傷心の末に引退した「元」王者と言えど、その実力がいまだ世界最高峰に位置することを知っているからだ。
最前線で見てきた鷹峰にとって、「歴戦」と言うのは、口で言うほど、頭で思うほど軽くない。それを体験した者でないと、それは理解できない。
想像を絶する戦いを制し、遂にそこへと到達した人間を相手にする為には、今の遊良では圧倒的に足りていない。遊良が得たモノなど、プロの世界という「魔窟」に居る決闘者が基本的に備えているものだ。師から見れば、今の遊良はスタートラインに立つことはおろか、そこに立つ準備すらまだしていないに等しかったのだろう。

「…ったく、バカな弟子見てたら頭冷えたぜ。」
「ふん…例え君がデュエルを挑んできたとしても、私は受ける気など無いですが。」
「ケッ、ホントに好き嫌いが激しい奴だよお前さんは。…しかしよぉ、俺ぁ引退までかけて遊良を残そうとしてんだぜ？お前さんも少しは乗って大人しく引けってんだ。大体なぁ、そんなに自分の生徒がこれ以上遊良に負けるのが辛いのか？だったらお前さんの自慢の生徒はその程度の奴しか居ないってことだぜ。」
けっして煽ろうとしたのではない。冷静になった鷹峰の、何気なく放られた言葉。それは、鷹峰の本音が口から出ただけなのだろうが、しかしそれを聞いた砺波はさも侮辱を受けたと言わんばかりの表情になっていた。
「…減らず口を。この私の学園に、天城君程度に劣る生徒しか居ない

とお思いで？」
「だったら簡単じゃねーか。そのご自慢の生徒をこぞって遊良にぶつけりゃぁいい。そいつらが勝ったなら決闘祭も遊良を出さなくて済むだろーしよぉ。でも公平な選出をせずに遊良を外した時は…わかってんだろ？なにせ俺ぁコイツの保護者だ。どっかの団体のお偉いさんにちっと話をつけりゃぁ、正確な成績だって俺の手元に来るんだぜ？詐欺ったらただじゃあ置かねぇ。今度は教師共も纏めて…」
「はぁ…わかりましたよ。」

このままではまた話が平行線に流れて言ってしまう。そう判断したのだろう。そういい掛けた鷹峰を遮るようにして…呆れた声ではあったが、しかし自身にとっても重い物を賭けた王者に釣り合いを取る意味でも。
また、自分の学園の強者となりうる生徒達を信じた意味でも、砺波はその口を開いた。

「流石にあなたもイカサマで引退させられるのも納得しないでしょうし、下手を打てば本当に死人が出るやもしれない。…不本意ですが、【黒翼】に誓って約束してあげます。いくら私が大嫌いな天城　遊良でも、【決闘世界】に則った選出基準は公平にさせると約束しましょう。私がここまで条件を呑んだんだ、あなたも下手な行動はしないようにしてくださいよ。」
「カッカッカ。やっと纏まりやがったか。手間かけさせやがって。」
「…どうせ、私の生徒が彼を叩き出すことには変わりはない。」

そう言って、砺波はため息をついて部屋を出ようとする。懐かしい顔と、散々言い合っていい加減疲れたか。自分の思惑がこんな馬鹿な男に止められたのも癪だが、しかしこの馬鹿者をさっさと引退に追い込む権限を得たのも思わぬ収穫と、そう複雑そうな顔をして。
なにせあの時、釈迦堂に負けた3人の王者の内、【黒翼】だけが未だ生き残っているのは正直面白くないと感じていたのだから。

「あ、あの、理事長！」

そんな出ていこうとした砺波の背から、急いで遊良が声をかけた。

これ以上何を言うつもりなのだろうか。退学が取り消しになり、師も居るので大きな態度にでも出るつもりなのか。そんな憶測を立てつつも砺波は振り返らずに、その耳で遊良の声を拾おうとその場に立ち止まる。

「…その…退学を…撤回していただいて、ありがとう…ございます。」

思わず遊良の口から出たその言葉。それは本心からの感謝ではないだろう、何しろこの男が自分の退学を進めたのだから。

しかし何故遊良がそう言ったのか、その言葉に秘めた意思はきっと本人にしかわからないだろう。また、それを聞いた砺波が何を思うか、静かに呟いた。

「…あなたの退学も、師の引退も…私の手中にあることを、努々お忘れなく。」

「はい。」

そして、砺波は今度こそ部屋から退出していく。

その姿が見えなくなったからか、一つの大きな気迫が去っていったことで、心なしか部屋の空気も軽くなったように遊良は感じた。なにせ、こんな狭い部屋に収まりきらない程大きな気迫が充満していたのだ、寿命が縮まるという言葉も、比喩でなくなってしまうだろう。

その砺波が去り、少し時間を空けてから鷹峰が口を開く。

「ケッ、退学させようとした張本人に、なーにが『ありがとうございます』だよ、このガキ。」

「でも、先生もありがとうございました。先生がいなかったら有無を

言わせず退学でしたから。…理事長がこんな強引な人だとは思いませんでしたけど。」
「あー…あの野郎はなぁ…大人しぶってやがるが、実はかなり気性が荒れー奴なんだよ…昔っからなぁ。…まぁ、つっても約束は守る奴だ、大丈夫ってんなら大丈夫だろ。いいか遊良、精々俺を引退させんじゃねーぞ。カッカッカ。」
「はい。」

そうだ、目下の問題は退けられたが、しかし自分にとって負けられない理由がもう一つできたのだ。例え死んでも、負けている暇がなくなった、そう遊良は覚悟を決める。
自分の退学だけではない、この世の最強のエクシーズ使いが、自分のせいで王者を引退など、決して許してはいけない。そんな覚悟を決めた遊良の姿が危うくも見えたのだろう、ルキが心配をしつつも遊良に声をかけた。

「…でもよかったぁ…遊良、退学にならなくて…」
「ごめんな、心配かけた。ルキもサンキュ。」
「…ううん。でも、先生ってば本当にすごい人だったんだね。ただの怖い顔じゃないし、ちょっと見直したかも。」
「うむ。よくやったぞクソジジイ。」
「おいクソガキ、お前は後でシメっからな。」
「無理するな、若くない癖に。」
「ケッ、口が減らないガキめ。」

幼馴染二人も安心したのだろう、師なら対しても口調が一気に軽くなるが、しかし遊良とルキに比べて、世界中探しても鷹峰にここまで言える人間は鷹矢とその父親だけだろう。よくここまで言えるものだと遊良は思いつつも、鷹矢にとっても師であることには変わりない、逆にここまで言えるのも信頼している証なのだろうか。
その証拠に憎まれ口を叩いていても、遊良の退学を何とかしてくれ

た祖父でもある師に向かって、鷹矢はホッとした顔をしていた。
「んじゃ俺もとっとと帰るぜ。こんな所にいつまでも居ちゃあガキ臭くてたまんねぇからな。」
「あれ？…そういえば先生、仕事のついでに来たって言ってなかった？ねえ、お仕事の方はいいの？」
「…あぁん？」

そう言って部屋を出ていこうとした鷹峰だったが、唐突なルキからの質問によってその足を止めた。しかしその顔は、珍しく不味いことを突っ込まれたかのようになっている。
「あー…そりゃあ、アレだ。仕事はもう終わってんのさ。俺ぐれーになると仕事なんてモンはとっとと片づけられるんだっての。」
「え…もしかして先生…俺の為に…」
「おっ、もうこんな時間じゃねーか。カァー、忙しすぎて嫌になっちまうなぁ。じゃあなガキども。」

―！

「なんだったんだあのクソジジイ。」
「…アハハ、先生らしいね。」
「…そうだな。」

遊良の言葉を遮るようにして、急いでその場を後にした鷹峰の姿を見て、弟子たち3人は苦笑いを隠せない。
…確かに昔から隠し事が苦手な師だが、しかしガラにも無いことなのは自覚しているのだろう。ならば弟子として、察することが大切か。これ以上何も言うまいと、そう遊良は思った。
「…さて、どうする？今から俺たちも授業出るか？」

「腹が減った。帰って飯が食いたい。どうせ今日は召喚別の授業もないしな。」
「じゃあ私もー。今戻ったら絶対周りが煩そうだし。」
「…そうだな、帰ろう。今日はもう他の先生にとやかく言われるのも嫌だしな。」

そう言って、未だ気絶している学年主任を置いて部屋を出る遊良たち。いずれ意識は戻るだろうし、遊良のバックに【黒翼】がいることを知ったのならこれ以上は何も言ってこないはずだ。
退学云々も、砺波理事長が一旦差し止めを行った。彼が約束を守ると言ったのならば、遊良に出来ることは、それを信じるしかないのだから。
そうして、荷物を置く間もなく連れてこられたことが幸いし、帰るのに支障もないため遊良達は誰にも見つからないように学園を後にした。

―…

『…遅かったな。』

イースト校の敷地を少し抜けたところで、電話越しから聞こえるのは微かな焦りを孕んだ声。それに答えるは、何事にも動じない厳しい声。

「あぁ、着いたらちっと面倒なことが起こっててよ。まぁ野暮用だ。」
『…やはりクロか？』
「いーや、砺波はシロだなありゃ。キレやすいのは昔通りだったし、何も見えなかった。とりあえず今のとこは問題はなさそーだぜ？」
『ふむ。サウス校とウエスト校理事のこともあるが…イースト校は大

丈夫そうということか。』
「まだわかんねーけどな。気配はなくてもガキの方に混ざってる可能性もある。」
『…可能性ならばいい。目下の事案を片付けるのが先だ。…期待しているよ【黒翼】。』
「ケッ、この俺様を顎で使おうたぁ、覚悟しとけよ。」
『覚悟はしているとも。では、失礼するよ。』

そして、電話が切れると同時に、鷹峰はつぶやいた。それは、心の底から嫌そうな声で。

「…チッ。面倒くせーことだぜ。」

先ほどとは打って変わり、鷹峰は冷徹な目をしてその場を去っていった。何が起こっているのかを詳細に知る者は、まだ居らず。

―…

「主任！一体何故天城が候補に!?」

そう言って、職員会議で配られたプリントに目を通した一人の若い教師が詰め寄ったのは、数日前から急に髪が薄くなった学年主任だ。よほどのストレスを受けたのだろうか、たった数日でここまでなるストレスが何なのかを知る教師は居ないが、詰め寄っているのはこの若い教師だけではなかった。

1学年担当の教師も他に数人、一緒に詰め寄っている。彼らが必死に問うているのは、もう直ぐそこまで到来している夏休み、その夏休み明けに行われる決闘祭の学年選抜戦の候補者の中に、Ｅｘ適性が無い天城　遊良の名があることについてだ。

「それだけじゃありません！エクシーズクラスの生徒の名前も入っているじゃないですか！」

続いてそう言ったのは、エクシーズクラスを担当している教師の一人。すでにエクシーズクラスの学校代表者は1年生の天宮寺　鷹矢に決定している為、残りのシンクロ、融合クラスからそれぞれ選出するはずだったのだが、しかしこの配られた候補者の名には、既に決まっていて選ばれることがないはずのエクシーズクラスの生徒の名も載っていた。イースト校の伝統では、各召喚法3つ平等にチャンスを与えるのを忘れたのかと、まるでそう言いたげに。

「うるさい！理事長命令なんだ！俺が知るわけが無いだろう…天城の退学も撤回するし、一体理事長は何を考えているんだ？」

先日の鷹峰と理事長のやり取りの最中、気を失っていた学年主任にことの詳細を知る術はなく、ただ言われるがままに仕事を進めるしかないが、しかし退学させろと圧をかけてきたと思えばそれを勝手に撤回した。それだけではない、あれだけ忌み嫌っていた天城だというのに、今度は公平な選出基準に則って候補を提出しろと来たのだから全く持って意味が分からないと言わんばかりに、薄くなった頭を抱えて学年主任は憤慨している。

「しかし主任、天城が代表候補なんて！あいつ、デュエル実技の回数が少ないんですよ？いくら筆記の成績をクリアしているからって…」

「…デュエル実技の回数基準は…最初に上にそう提出してしまっているんだから仕方ないだろうが…ったく誰だよ、天城の実技回数を少ない基準にしたバカは…」

そういって思い切り悪態をついた学年主任だったが、しかしそれを聞いていた他の教師は知っていた。

天城が入学してきた時に、全ての召喚別授業への参加を希望した、あの身の程知らずの要望を切って捨て、上にデュエル実技の回数基準を少なくするようにかけあったのは、他ならぬこの学年主任なのだから。

確かに自分たちも、自分の召喚別クラスに天城が来るのを嫌がり、誰も天城を引き取りたがらなくて揉めたが、まさかそれがこんな所で仇になるとは。そうしないと、出席不足で学園に来ていても留年となるのだから、最低限残った教師としての倫理的に、仕方がなかったとはいえ。

「他の1年生がこの発表を見たらなんて言うか…暴動が起こりませんか？」

「知るか！もう俺は知らん！文句があるなら理事長に直接言いに行け！」

「そ、そんな…言えるわけないじゃないですか…あの【白鯨】に…」

そんな、もう自暴自棄になっているように見える学年主任を見て、他の教師達も悟ってしまう。

いくら天城の名前を候補に入れたくなくても、筆記成績が上位なのはともかく…Ｅｘ適性が無い癖に、何故か通常デュエル実技の成績もほぼ負けなしと記載されているこの不可解な成績表がある限り、天城を候補から外すわけには行かないのだと。

―あんな落ちこぼれの生徒がこんなに勝てているわけがないというのに。

しかし、無理やり候補から外してしまえば、不正によって自分の首が飛ぶと言われては黙るほかないのも事実。理事長である、あの【白鯨】の決定に異議を唱えられるほど、自分達は強くないと理解していた。

「…なんで天城が…もしこんな奴が代表にでもなったらイースト校はいい笑いものじゃないですか。」

「…あれ、でも天城って最近1年のほとんどに野良で勝ったとか噂になってなかったっけ？」
「あぁ、そう言えば…いやいや、そんな訳ないじゃないですか。どうせ本人が構って欲しくて流したんでしょ。だってあの天城ですよ？そんなこと出来る訳ないですって。」
「ハハッ、確かに。」

そう言って、仕方なく散り散りになって自分の机に戻っていく教師達。遊良のことを、ただのＥｘ適性のない落ちこぼれとしか見ていない多くの教師からしたら、この決定は納得の行くものではないのは確かだろう。
自分達が言っている言葉の意味を、全く理解していない教育者の姿など、生徒達に見せられるはずがないことに気がつかず。

「…あーぁ、間近で見てない奴はいいよな。好き勝手言えて。」
「ですねー。…アレ見ちゃったら、ちょっと他の生徒を選んでいいものかとも思っちゃいますし。…私のクラスの生徒が負けて本気で泣きじゃくってるの見ちゃったら…本当に天城君を相手に手も足も出せなかったんだなーって。…悔しいですけど。」
「アレでＥｘ適性が無いってのが信じらんねーよ。」

しかし、少ないながらも、遊良のデュエルの本質を実際にその目で見た教師だけは、異なる意見を持っていた。それは、この横暴ともいえる理事長の決定に、異議を感じない者がチラホラ出始めてきた証拠でもある。
確かにアレは、実際に見ないことには信じられないだろう、まさか天城が、あんなデュエルが出来るだなんて、と。

「天城が代表になったら凄いな。前代未聞だし、それはそれで面白そうだ。」
「でも可能性がないわけじゃないですよね。私、彼が代表になっても

良いと思いますし。」

それは、この目ではっきりと見てしまったが故に、天城を蔑むことに抵抗を感じている証拠でもあった…

――…

「なっつやっすみぃ！イエスッ！」

照り付ける太陽に負けずに、浮かれた声でルキは跳ねるようにして下校していた。今日は終業式だけだったので、午後からはもう休みなのだろう。

その少し後ろでは、遊良が見守るようにして歩いている。この昼間に学園から帰る事ができるのは、確かに嬉しい事ではあるだろうが、しかし何もこんな太陽が照り付けている中で帰さなくてもいいだろうにと、滲む汗を無視してそんな顔をしながらトボトボ歩いている。

そこに鷹矢の姿は無いが、遊良が帰りがけに聞いた話だと、どうやら決闘祭のことについて鷹矢は教師から呼ばれているらしい。それは、どうやら鷹矢の出場はまだ公にはしておらず、夏休み明けの学年選出時に一緒に発表する予定らしいのだが、それに対する細かい打ち合わせなのだろう。

しかし、あいつ一人にしておいて大丈夫だろうか、また言われた事を忘れて、「だから遊良に言っておいてくれないと困るだろう。」とか言い始めないか、そう心から心配する遊良だったが、帰ってきたらすぐに聞き出して覚えておいてやるかと、そう思ったのだろう。鷹矢に関しては、遊良とてもう半分諦めているのだから。

「あっちぃーな…おいルキ、アイス食いに行こーぜ？」

「おっ、いいねぇ！遊良の奢り？」

「はいはい、奢ってやるよ。期末テストで物理の世話になったし。」
「やったぁ！まぁ私も遊良のおかげで数学助かったけどね。」

そう言って、遊良とルキは帰路を家から馴染みのスーパーへと変え向かい始める。ルキがすっかりその近くで売っているアイスを気に入って、時々付き合わされて一緒に食べていたせいか、遊良もすっかりはまっていたのだ。特に現地直送ミルクフレーバーが本格的でたまらないらしく、この間、ミルクでも貰おうか…とカッコつけて言った所をルキと鷹矢に爆笑されたので、今日は違うのにしようと考えてはいる様子だが。

そして、遊良のほうからアイスに誘われて嬉しかったのか、ルキが笑顔を崩さずに遊良の横に並ぶ。

「へっへー、遊良が学校でもオープンに話してくるようになったじゃん？友達にさ、遊良と鷹矢が幼馴染だって言ったら驚いてたよ。」
「色々うるさく言われなかったか？」
「ううん、むしろ今まで朝一緒に登校してたのもスッキリしたって。それに遊良が最近雰囲気変わったってさ。」
「ふーん。…自分じゃあよくわかんねーけど。」
「あ、でもさぁ、鷹矢無しで二人でいると噂されちゃうかな？」
「…何が？」

心なしか嬉しそうに話すルキだったが、しかし遊良にしてみれば、学園関係で嬉しそうにそういうルキの顔をみるのは、もしかしたら幼等部以来かもしれないと、そう思ったのだろう。

何しろ遊良の就学後すぐから今まで約十年、散々言われ放題だったため、特に学園関係の話だとルキは怒ってばかりだったからだ。

遊良とて、ルキと幼馴染と言うことを隠していたのも、自分なんかと関係があるということが知られれば、二人も何を言われるかわかったものじゃないからであるが、しかしそうやってコソコソ隠れるのも止めた。

今では昔みたいに、何も気にせずに話している。むしろ本気で自分を認めさせに行こうとしている心境の変化からだろう。その雰囲気が、もう隠す必要など無い、文句があるなら直接言いに来いと語っている。

まぁ、それを見せ付けられたルキのファン達からすれば、忌々しいと言うより、驚愕と後悔の方が勝っていることだろう。幼馴染だなんて聞いていないし、てっきりストーカーだと思っていたのだ、遊良に食って掛かってきた人間は、もれなく彼女の目の前で彼女の幼馴染を蔑んでいたことに変わりないのだから。

…だが、二人でいることで何が噂になるというのだろうかと、遊良には心当たりが思いつかなかった。

「もー…遊良のデュエル馬鹿。私のアイスはトリプルでよろしく。」

「…へいへい。よくわかんねーけど。」

—すぐにピンとこないのも、きっとこの暑さのせいだ。

何故か膨れるルキを横目に、二人は帰路をゆっくり歩いていった。

—…

ｅｐ１３「瘴気の敵」

「はぁ…はぁ…おい鷹矢、何人倒した？」
「１５人だな。」
「よし、俺は１６人だ。」
「…む。」

荒廃した工場のような場所に身を隠して、遊良は荒くなった息を整えながら、鷹矢にそう聞いた。まだ夏休みも中盤、本来ならクーラーの効いた部屋でゆっくり過ごしているはずだったのに、こんな見るからに危ない場所に隠れる破目になるとは、彼らも思いもしなかっただろう。

もう夕刻が近いはずなのに、まだまだ照りつける太陽はなんとも暑苦しい。汗の滲んだ体に不快感を覚えながらも、日の入りまで競い合えという師の命令を守る彼らにはもう余り時間がなかった。とはいえ、少しくらい休憩しなければ体が持たないだろうが。

しかし、息切れしている遊良など気にせず、鷹矢は立ち上がると遊良に向かって言った。

「俺はそろそろ行く。お前には絶対に負けん。」
「…ハッ、疲れてつまんないミスすんなよな。」
「お前じゃあるまいし、俺の体力はまだまだ尽きん。もうへばったお前を見ると、どうやらこの勝負、俺の勝ちのようだな。」
「…チッ、お前にだけは負けたくねぇ。」

そう言って、疲れ果てた体に鞭を撃ち、重たい足を無理やりにでも前へと出すと、再び戦いに戻っていく二人。辛い、苦しい、寝転がってしまいたい。そんな誘惑が足を掴むが、それでも、『コイツにだけは負けたくない』という感情が、そんな心を蹴り飛ばして。

何故こんなことになったのか。その発端は、この日の早朝に遡る。

―…

「遊良、帰るぞ。」

「…は？」

夏休みもまだ中盤。規則正しく起きた遊良は、早朝からリビングでせっせと宿題を片づけていたのだが、そこへ唐突に鷹矢が自室から降りてくるなりそう言ってきた。

自分は宿題に一切手も付けず、昼まで寝ては夜中まで起きてを繰り返す自堕落甚だしい生活の癖に、今日に限ってなぜこんな朝早くから起きられたのだろうか。しかし、帰るも何も、見るからに家にいるというのに、こいつは一体どこへ帰るつもりなのだろうかと、鷹矢の言葉の意味の方へと思考を割く遊良。

「お前帰るって…って、あぁそっか。あっちのことか。」

「うむ。」

そうして、一瞬考えさせられたが、鷹矢が言った「帰る」という意味をすぐに遊良は理解した。慣れきっていたせいか、あまりにも違和感がなかったのだろう。すぐに気づけなかったが、元々鷹矢の実家は天宮寺本家なのだから、帰るというならそこしかない。遊良も幼少期に何度も遊びに行ったことがあるし、Ｅｘ適正のことが発覚してからも時々鷹峰に連れられて行っていたからそこの住人とは面識がある。

…まぁ、その頃から全く歓迎されていないのだが。

「でも急だな。どうした？」

「親父から電話が来た。休みに入ったのだったら一度遊良と帰ってこいとな。さっき催促の電話が鳴り続いて、出たらいきなり怒鳴られて目が覚めてしまったんだ。」

「ふーん、お前が起きるって、一体何回かかってきたんだよ。…でも俺

行きたくねーぞ？どうせ行ってもグチグチ言われるだけだし。」
「ツボネ叔母か。俺も好きではない。今でも殴ったことをネチネチ言ってくる。」

そう、天宮寺家において、鷹矢の両親は寧ろ遊良の心配も兼ねて歓迎してくれているのだが、その他の天宮寺家の人間に遊良が歓迎されない大きな理由の一つに、鷹矢の叔母、つまり鷹矢の父の妹が、天宮寺家でもそれなりの発言力を持っていることが厄介となっている。
遊良の顔を見れば常に嫌味を言ってくるし、中等部辺りだったか、遊良を本気で遠くに追いやろうと裏で画策していた所を、鷹矢とその父親に見つかり思い切り殴り飛ばされてからは多少大人しくしていたのだが、どうやら最近また復活したらしい。その態度を見た他の人間達も、Ｅｘ適正が無い遊良への言葉に棘を増やしてくるのだから、遊良からしたら面倒くさい事この上ないだろう。
天宮寺家を代表する、【黒翼】である彼女の父、天宮寺　鷹峰が、Ｅｘ適性の無い天城　遊良の後見人となることにも反対していたという出来事もあって、今では遊良だけではなく、親の同意の上とはいえ本家を出ていった鷹矢のことも疎ましく思っているらしく、鷹矢の両親とも言い争いが絶えないらしい。

「ツボネ叔母は事あるごとに紫魔に対抗したがるからな。天宮寺の名をよほど大事にしたいと見える。」
「はは…変わってねーな。でもやっぱ俺はパス。おじさんには悪いけど、謝っておいてくれ。」
「む…じゃあ俺も行かん。一人で行った所で何も面白くない。行って何しろと言うのだあんなところ。」
「お前の実家だろ。それじゃ意味ねーじゃん。」
「嫌なものは嫌だ。俺は帰らん。」

広い家だが、どうせ行っても見つかって嫌味が飛んでくるのが関の山、進んでストレスを溜め込みに行くのも面倒だ、そう思って断ろう

とした遊良だったのだが、鷹矢が子どもの如く駄々をこね始める。一体何故自分の実家に帰るのをそんなに嫌がるのだろうか、ついこの間までいた場所だし、そんなに嫌がらなくてもいいだろうに、と遊良がそう言いかけそうになる…

…そんな時だった。

―!

「うぉいガキ共!行くぞ!」

「先生!?」

「む、クソジジイか、何しに来たんだ?」

突如、リビングの扉が勢いよく開き、大きな声とともに現れたのは間違えようのない、彼らの師である鷹峰だった。しかし、玄関には鍵とともにチェーンまでかけてあったし、そもそも玄関自体も開けた音がしなかったが、一体この男はどこからどうやって入ってきたのだろうか。それに突如現れたはいいが、何も開口一番の台詞まで孫と似せなくてもいいだろうと、そんなことを感じてしまう遊良。

しかし、あっけに取られている弟子二人が、「行くぞ」の意味をうまく呑み込めない様子を見てもなお、鷹峰は続けた。

「何ボサッとしてやがるんでぃ、さっさと支度しやがれ!デッキさえありゃ問題ねぇ!」

「ちょ、先生、いきなり何を…」

「あぁん!?テメーの弟子に稽古つけてやろーって算段だろうが、いいからとっとと行くぞ!」

「人の家で遠慮のないジジイだ。よほど親のしつけが悪かったと見える。」

「ケッ、俺の持ち物に住んでやがる癖に、ありがたく思えってんだクソガキ!グチグチ言ってっと置いてくぞ。」

「わかったわかった。デッキさえあればいいんだな?」

「そう言ってんだろがボケナス。」

そう言って、口は悪いが無駄口を叩かずに、淡々と自室までデッキを取りに行き始める鷹矢。そんな鷹矢をよそに、あまりに急な状況を上手く呑み込めていない遊良はふと考える。

…久しぶりに鍛えてくれると言うのは願っても無いことだが、しかし今このタイミングで、ということは決闘祭での万が一を起こさないためにだろうか。…まぁ、確かに鷹峰も自分の引退をかけているのだからあたりまえだろう、そんな思考が遊良の頭の中で回り始めたが…

「お前さんが決闘祭で勝とうが負けようがどうでもいいけどよ、砺波のバカに舐められっぱなしってのも癪だかんな。」

「…勝っても負けてもって先生。」

「ケッ、あいつご自慢の生徒どもをギッタギタのメッタメタにしてぶっ飛ばすくれーにしとかねーと、俺様の気が済まねぇってんだ。」

…すぐに思ったことを撤回する遊良。そういえばこの人は引退程度で怯むような人ではなかったし、引退したところで食うにも困らないだろう。もしそうなったとしても、プロアマ問わずの大会なら引退したところで関係ない。どうせ、この人ならどこかの外国を放浪しながら神出鬼没に大会を荒らし回っていそうだと思い直して。

「でも先生、行くってどこへ？」

「あぁん？そりゃお前ぇ…ルード地区だ。」

「へ…るうど…地区？…」

その、突如言い放たれた鷹峰の言葉に、思わず理解が追いつかない様子の遊良。まるで、この単語を飲み込むのを拒絶するかのような頭に、無理をさせて読解させるが、なかなか頭に入ってこない。

「…って、ルード地区ぅ!?何でそんな所へ!?」

しかし、一瞬の間を置いて遊良に驚きの感情が沸きあがり、それと同時に絶対に行きたくないという感情が伴って師へと問いかけた。それは、せっかくの夏休みなのだからとか、まだ宿題が残っているからとか、そんな程度で行きたく無いとかでは、決してないからだ。

―地図(ルード)にない地区

およそ、この国でもかなりブラックな部分。廃墟と無秩序が形成している、国から見てみぬ振りをされている地区。

元々は工場地帯とその住居区であったのだろうが、今では中で何が起こっているのかを外の人間が知ることが出来ず、またその中で起こったことは地区内で処理され決して表に出てくることは無い。そこには浮浪者や無戸籍者と言った人種が集まっているとされ、さらには廃墟となったビル郡が犯罪者の根城にも使われているという噂もある為、そこへ好んで近づく者などよほどの馬鹿か、あるいは何かの犯罪者しかいないという場所。

―そう、よほどの馬鹿か。

「おう、だからルキは置いてこうと思ってよ。あいつが居たらぜってぇー反対すっからな。」
「いや、ルキの身が危ないからじゃないんですか?」
「カッカッカ、それもあるけどよ。アイツにバレたらうるせーだろ。『そんな危ないところに遊良を連れて行くなんて!』ってな具合によぉ。アイツはテメーの母親かってんだ。それに、ガラの悪いゴロツキ共がわんさか居っからなぁ、修行にはもってこいだろ。」
「…デュエルに負けたら身包み剥がされるだけじゃ済まないと思いますけど。」
「勝てば何の問題もねぇ。ようは勝ちゃあいいだけだっての。負けたって…まぁ…死にはしねーと…思うぜ?」

「…それほぼアウトじゃないですか。」
「うっせーなぁ。若いうちは何をしても死なねーから問題ねーって。」

なんと無茶をさせようとする師だろうか、これでは体がいくつあっても足りるか分かったものじゃないと、身の危険すら感じる遊良。
確かに昔も似たようなことをさせられた事があったが、ルード地区にまで行かせられることはなかったという、それはそれで壮絶だった修行時代を思い出すも…確かに今の修行にはもってこいかもしれないが、それでも無茶と無謀には変わり無い。
そして、車でもかなり遠いがそれ以上に、遊良にはもう一つ気になることがある様子だ。

「どうやって中に入るんですか？」

そう、ルード地区というモノ自体は、誰も好んで近づかないだけで、実は世間にはその存在自体は知られている。国が黙認と無関心を貫いているだけ、ルードの肯定をしないだけだ。流石に探すことは禁止されているために詳しい場所を知る人間は少ないが、そこへ簡単に入ることは出来ない。
犯罪者の格好の根城になりやすいということもあって、その地区の境には非公式に警戒態勢がしかれているらしい。無論、国は関与していない体裁をとっているため、警察も中へは入れず、あくまで外で見張っているに留まってはいるという噂だが、近づいただけで犯罪者扱い、そこを探しに行った記者が、国に捕まり帰ってこれないという都市伝説まである。

「あぁん？んなもん、正面から堂々と入るに決まってんじゃねーか。」
「…いや、すんなり通してくれるかどうかですが。先生一人ならまだしも、俺と鷹矢も入るとなると…」
「何言ってやがんだ。入るのはオメーら二人だけだっての。」
「へ？先生は来ないんですか？」

まさか、暴れることが大好物な師であるにも関わらず、来ないとは思っていなかったのだろう、遊良が珍しいことを聞いたかのような顔をしていたが、そんな遊良を尻目に鷹峰は頭を掻きながら続ける。

「俺ぁよ、昔とある依頼であそこで暴れすぎちまってな。今じゃ出禁喰らってんだわ。何せあそこの住人を手当たりしだいデュエルで追い出しちまったからなぁ。カッカッカ、国家権力から裏金の金一封貰ったぜ。」

「…それ、バレたら大問題じゃないですか…スキャンダルどころじゃあ…」

「だからオメーら、俺が居なくても死ぬんじゃねーぞ。」

「…あ、行くのは決定なんですね…。」

「おいジジイ、準備ができた。さっさと行くぞ。」

「ケッ、クソガキの方が行く気じゃねーか。おい遊良、テメーまさかビビってるなんて言わねぇよなぁ？」

「…はぁ、わかりましたよ。俺のデッキはここにあるんですぐに出れます。でも泊りがけになるんだったら色々他にも準備した方が…」

「んじゃあ行くぞ。さっさとしやがれ。」

「ちょ…はぁ…はいはい。」

聞いてはいけなかったであろう事は置いておいて、半ば強引に連れられるように車に乗って出発する遊良と鷹矢。

本当にデッキとデュエルディスクしか持ってきていないのだが、こんな装備でルード地区へ放り込まれるのかと思うと、遊良の心は不安でしかたなかった。なぜこんな時でもこいつは堂々としていられるのだろうかと、隣でいつも通りの腕組みを崩さない鷹矢にも、一抹の不安を覚えて。

また、道中に鷹矢が実家に帰省を断る電話を入れていたが、行く場所を伏せたとはいえ、鷹峰と出かけると聞いた鷹矢の父親が電話越しからでも聞こえるくらいの声で鷹峰のことを怒っていた。

怒り狂う父と、それに応戦する鷹峰があまりにうるさかったのか、鷹矢が途中で通話を切り事なきを得たが、それによって遊良は今後を悟ってしまう。…今度会った時が面倒だ、きっと叱られるだろうな、と。

そして、そのまま暫く鷹峰の車は高速を走ったかと思うと、何故か途中でどこかのビルに止まり、そのビルの中で連れられるがままヘリポートまで案内された遊良達。それも、見るからに民間用のヘリではなく、まるで軍用かと思うくらいのヘリに乗せられて。

そのまま何の説明もなくソレが大空へ飛び始めたときには、流石に鷹矢と二人で師を問い詰めたものの、鷹峰は答えずそっぽを向いて外を眺めている姿勢を貫き通し、そのまま大型ヘリは遊良達を乗せて、猛スピードで大空の彼方へと消えていった。

…これが、事の発端である。

――…

『…本当に大丈夫なのかね黒翼。子供二人を行かせて。』

もう日も暮れてくる頃か、ルード地区の外部の、国家権力の建物の屋上でプカプカと煙草の煙を浮かせて空を見上げていた鷹峰の端末から、事の顛末を心配しているような声が聞こえた。非通知設定、決して名前を挙げられない人物、しかし遊良と鷹矢に、ルード地区に入る許可を非公式に与えた…いや与えさせられた人物。

「大丈夫だっての。心配すんなって。丁度弟子を鍛え直したかったところだ。」

『私は不安でならんよ…いくら君がルード地区に入れないとは言え、

本当にアレが出てきたらどうするんだ。彼らで対処できるのか？』
「あー、大丈夫だろ、多分。」
『多分…か。何があっても責任は取らんぞ。』
「わーってるって。…まぁルードの奴ら程度にとり憑いたところで、大した変化は起きねぇだろうさ。」
『よくもまぁそう楽観できるものだ。…失敗を許すつもりはないからな、黒翼。』
「へいへい。」

そう言って電話を切った鷹峰は、もう一吸い煙草を吸い込むと、溜息とともに煙を吐き出しながら考える。いくら頼れる人物が自分しか居ないからといって、ここまでこき使われるのは性に合わない。この事案が片付いたら、あの電話の奴をどうしてやろうか、と。
新しい煙草へと火を点け直し、煙を吐き出しながら遥かに遠い空を見上げた。今あそこで戦っている弟子達を全く心配せずに待ち、白い煙と浮かぶ雲を、ぼんやりとその目で眺めながら。

―…

「【堕天使スペルビア】でダイレクトアタック！」
「ぐぁー！」
「【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】でダイレクトアタック！」
「ぐっ…」

―ピー…

雑ビルが入り組んではいるが、多少開けた場所に無機質な機械音が二重に鳴り響く。それは、これで２０人目になる相手を倒した遊良と、その後ろで鷹矢が２１人目を倒し終わったところだった。

ここは浮浪者と犯罪者の根城。負ければどうなってしまうか分かったものじゃなく、必死で勝ちに行っているのもあるが、しかし群雄割拠の決闘市で戦い抜いてきた二人にとっては負ける要素の方が少ないだろう。相手だって過酷な生活を送っているのだろうが、それでもどこか子供だと侮っている様子に、負けてやる気も無いと言わんばかりの立ち姿で。

「クソッ…こんなガキに…」

そして、負けたことが恥じと感じたのか、散り散りに逃げていく敵二人がビル影に消えて見えなくなった所で、遊良と鷹矢はそこでやっと一息ついた。

「よし。これで俺の勝ち越しだ。そろそろジジイのところに戻るか？」

「負けたまま帰れるかよ。俺はまだ戦るからな。」

「ふん、負けず嫌いが。まぁいい、ならば付き合ってやるか。」

まだ日暮れまでは時間が多少ある。法が及ばない魔窟とはいえ、ここまで勝ち抜いてくると流石に多少はこの空気に慣れてくるものだろう。ここまで来たら、思い切りデュエルで暴れまわってやるか、そんな気分にすらなっていた遊良であったが、今デュエルしたばかりなので、近くに相手の気配がない。そうして遊良と鷹矢はまだ敵を探しに行こうとしてその場を離れようとした…

そんな時だった。

―！

「…ッ!?おい遊良！」

「なっ!?」

急に、遊良の腕を掴んで、そのまま思い切り引っ張って後ずさる鷹矢。勢い余って転んでしまったが、その直後に今まで二人が居た場所から爆音が響き、そこにはどこから飛んできたのか、大きなコンクリートブロックが突き刺さって土煙が舞い上がっている。
当たっていたら大怪我では済まない。遊良達の背をよりも大きなコンクリートブロックが飛んできたのだ、直撃していたら確実に死んでいたと思われる程の。

「し…死ぬところだった…」
「誰だ！出てこい！」

上空から落ちてきたのでは絶対に無い。明らかに投擲による攻撃だ。そのブロックが突き刺さっている方向からして、遊良達の後方から飛んできたものか。鷹矢がそちらへ向かって叫ぶと、暗い廃ビルの中から浮浪者と思われる一人の男が歩いてきたが、その様子が明らかにおかしかった。

「ア…アガガ…」

暮れ始めの太陽の逆光のせいなのか、男の姿がかすかに揺らいでいるように見え、手には先ほど飛んできた塊と同じくらいのコンクリートブロックを担いでいるその姿に、遊良達は驚きを隠せない。

「…いや、ありえねーだろ。」
「うむ。俺よりもひ弱そうなあの男が、あんな物を担げるわけが無い。俺でも無理だ。」

そう、およそ一人の人間が持てる重量を軽く超えているだろうに、目の前の男は意にも介さず持ち上げて、ゆっくりとこちらに向かって歩いているのだ。まるで豆腐でも担いでいるのではないかと錯覚しそうなくらいだが、塊から所々飛び出ている鉄筋がそれを許さない。

しかし、あの男はまさかソレを素手で投げたのだろうか、遊良は疑問を抱きつつも、大きくソレを振りかぶった男を見て、二人は思わず飛び退いた。

「いやいやいや、ヤバイって！鷹矢、逃げろ！」

「うむ！」

言い終わらない内に、二手に散って逃げ出す二人。投げられたソレが、寸前で二人が居た場所へ爆音とともに突き刺さると、先ほどよりも盛大に土煙が撒き散らされたが、それはある意味好機なのか。その土煙に紛れて、二人はその場を素早く離れ始めた。

「鷹矢！とにかく逃げろ！あとで落ち合え！」

「分かっている！」

「ク…カカ…」

そして、二人の気配がその場から消え砂煙も風に流されて消えると、元凶の男の姿もそこから消えていた。

――…

「…一体なんなんだよ。」

先ほどいた場所から少し離れた廃ビルの陰、路地になっているところに身を隠した遊良は、来た道の様子を伺いながらそこで一息ついていた。鷹矢は無事に逃げられただろうか、あの馬鹿のことだから、敵に向かっていないだろうかとも心配になるが、流石に逃げてくれているだろうと考え直す。

もう少し様子を見て、師の待つ外へ一目散に逃げよう、きっと鷹矢

も追いついてくる…そんなことを考えていた時だった。

「…デュ…アガァ…」

―!

「ッ!?」

不意に背後からうめき声のようなものが聞こえ、思わず背後へと振り向く遊良だったが、するとそこには、先ほどの男の姿。

一体いつ、まるで幽霊だといわんばかりに、どうやって気配もなく近づいたのだろうか。遊良は叫び声よりもまず反射的に飛び退いて距離をとると、男はそれ以上近づきはせず、その場に立ち止まって、虚ろな目でこちらを見てくるだけだ。

「…ビ、ビックリした…」

「ァ…ガガァ…エウ…」

先ほどはいきなりあんなことをしてきたというのに、今度は攻撃してくる気配は無い。しかし、いつ仕掛けてくるか分からない相手に、遊良の心は一瞬の気の緩みも許されていなかった。何か変な行動を起こした瞬間に、すぐに駆け出さなくては、と。

しかし、そうして全集中を目に集めて、一挙手一投足を見逃さないようにしている遊良をまるで意に介さず、男は何故か自分の腕にデュエルディスクを装着し始めた。

「デュ…エルゥ…」

「…は?」

「デュエル…デュエルゥ…」

「直接攻撃じゃなくてディスクをつけたってことは…ここで戦る気か?…どう見ても正気じゃねーんだけど。」

こんな危ない男が、いつのまにか背後に立っていたのも十分ホラーと呼べるレベルなのに、そいつが進んでデュエルをしようとしているのもある意味ホラーだろう。…まぁ、夏には丁度いいかもしれないが、しかし、実際にこんな体験はしたくないというのにと、遊良の思考がそんなことを考えているうちに、男のディスクの展開が終わってしまう。

初めから展開が済んでいた遊良のディスクが敵と見なされたのか、自動的にデュエルモードへと切り替わってライフが表示された。

「…まぁ、あんなモノで直接攻撃してくるより、デュエル挑まれた方がある意味マシだけどさ…しかたない…行くぜ！」

そして、まるでゾンビのようにも思える奇妙な敵とのデュエルが始まる。

―デュエル！

「センコウ…【レスキュー・ラビット】をショウカン…効果で除外ィ…デッキから【ヴェルズ・ヘリオロープ】２タイを特殊ゥショウカン…」

「ゲッ…ヴェルズだって!?」

【ヴェルズ・ヘリオロープ】レベル４
ＡＴＫ／１９５０　ＤＥＦ／６５０
【ヴェルズ・ヘリオロープ】レベル４
ＡＴＫ／１９５０　ＤＥＦ／６５０

先ほどまで呂律が回っていないように思えた相手だというのに、デュエルが始まると中々流暢に進め始める。しかし、その声が遊良の耳には妙に痛く、まるで直接頭の中に向かって話されているようで気持ち悪い。

しかも、敵が使ってきた【ヴェルズ】は、遊良も過去に何度かその使い手ともデュエルをしたことがあるが、そのときよりもどこか禍々しく感じてしまうのだから不思議だ。しかし、そんな表情をしている遊良などお構いなしに男は続ける。

「【ヴェルズ・ヘリオロープ】２体デ…オーバァレェイィ…エクシーズショウカン…ランク４【ヴェルズ・オピオン】…」

【ヴェルズ・オピオン】ランク４
ＡＴＫ／２５５０　ＤＥＦ／１６５０

そして男の場に現れるは、黒い姿をした一匹の竜。元はこんな姿ではなかったのだろうか、突然変異をしたかのように不自然な造りをしており、自らが発する闇に浸食されているのか、その叫びは何とも痛々しい。

「効果発動ゥ…一つ使っテ…デッキから【侵略の浸喰感染】を加えル…カードを２枚伏せてェ…ターンエンドォ…」

男　ＬＰ：４０００
手札：５→３枚
場：【ヴェルズ・オピオン】
伏せ：２枚

「…俺のターン、ドロー。」

そしてターンが移るが、しかしこの男が使ってきたモンスターを見て、どこか違和感を覚える遊良。
今日戦ってきたルード地区の人間は、確かに手強くはあったが、実際ここまで纏まった戦法を取ってくることはなかったはず。カードの流通事情が悪いせいもあるだろうが、他の敵はどこか統一性が無

く、テーマというよりスタンダードに近いデッキだったのだ。
この国で最もデュエルが栄えているとされる決闘市のデュエリストですら、名家と呼ばれている家の人間や、それなりに名の通った実力者は除いて、統一性のあるデッキを組めているデュエリストは思うほど多くない。
実際に遊良も、堕天使を得るまではテーマ統一でないデッキを使っていたのだから。
それなのに、この男のデッキは他のルードの人間とは違う。フラフラとしていて今にも倒れそうだし、モンスターから出る瘴気だろうか、微かに黒い靄がかかっているようにも見える。そもそも様子からして明らかに違うのだからそれも腑に落ちるが。

「…まぁ今はそんなことより、あのオピオンだよな。…特殊召喚が出来ない。」

それに気味の悪い敵といえば、堕天使を得た時のあの人形みたいな男にも言えることだが、あの男のこの敵も、よくもまぁ封殺してこようとするものだと、遊良はそのときのことを思い出した。
今思いだしても腹立たしい男だったが、しかし現状はヴェルズ・オピオンがいる限り、自分はレベル5以上のモンスターを特殊召喚できない。高レベルモンスターを特殊召喚することを得意とする堕天使との相性はかなり悪いと言えるだろうと、その思考を張り巡らせて。

「しかたない…俺は【堕天使イシュタム】の効果発動！手札の【堕天使アスモディウス】と共に捨てることで、デッキから2枚ドロー！続いて【堕天使ユコバック】を通常召喚！その効果で、デッキから【堕天使スペルビア】を墓地へ送る！」

【堕天使ユコバック】レベル3
ＡＴＫ／７００　ＤＥＦ／１０００

遊良が召喚したのは、高レベルが犇めく堕天使達の中では珍しい下級モンスター。敵が召喚した黒い竜には力が及ばないが、墓地に堕天使カードを送ることが出来る優秀な効果を持つ。しかし、遊良の行動が制限されていることに変わりはなく、これ以上行動することはできないため、ここは罠を仕掛けて待つしかなかった。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：6→3枚
場：【堕天使ユコバック】
伏せ：2枚

「ドロォー…永続罠【侵略の浸喰感染】を発動ゥ…手札の【ヴェルズ・ヘリオロープ】をデッキへ戻しィ、新たニ【ヴェルズ・カストル】を手札に加えショウカン。カストルの効果で【ヴェルズ・マンドラゴ】も通常ショウカン！」

ターンが男へと戻り、次々とモンスターを繰り出して来る。そのどれもが漆黒のオーラを漏れさせていて、見ているだけでも禍々しいが、それ以上にこの頭に直接響いてくるような声が段々昂ってきている様子なのがもっと不気味だと感じる遊良。

しかし、ただでさえ【ヴェルズ・オピオン】だけでも厄介なのに、敵の場にはレベル４のモンスターが再び2体揃う。それを嬉々として、敵は不気味な声を荒げて宣言した。

「レベル４モンスター2体でオーバーレイィ！エクシーズショウカン！ランク４【ヴェルズ・タナトス】ゥ！」

【ヴェルズ・タナトス】ランク４
ＡＴＫ／２３５０　ＤＥＦ／１３５０

そして男の場に、これまでより一層強い瘴気を放ちながら現れた一体のモンスター。他と同じく禍々しい姿をしてはいるが、まるで元からこの姿であったかのように佇むソレは、今にも死を運んできそうな程に気味が悪い。

「く…次々と…好き勝手にやらせるかよ！リバースカードオープン、罠カード【背徳の堕天使】！手札の２体目の【堕天使ユコバック】を墓地へ送って発動だ！その効果で…」

「リバァスオォプン！速攻魔法！【侵略の汎発感染】を発動ゥ！このターン、ヴェルズはコレ以外の魔法、罠の効果を受けないィ！」

「何!?」

制限をかけながら自分だけ好き勝手に動く相手に、これ以上好きにさせるわけには行かないと遊良が発動しようとした罠。それは、堕天使１体を引き換えに相手のカードを何でも破壊できるカードだったが、これでオピオンを突破して次のターンに早くトドメを刺そうと考えていたのだろう。しかし、効果を受け付けられなくされては意味がない。

「く…【背徳の堕天使】は対象を取らない。俺が破壊するのは【侵略の浸喰感染】だ…。」

「バトルゥ！【ヴェルズ・タナトス】で【堕天使ユコバック】へ攻撃ィ！」

―！

遊良　ＬＰ：４０００→２３５０

そして、黒く染まった愛馬を駆り、濁った剣の輝きが小さな堕天使へ襲い掛かった。その攻撃に、力の劣る堕天使は抵抗むなしく、為す術無く破壊されてしまう。

しかし、それだけでは終わらない。

―！

「グフッ!?…な!?」

モンスターの戦闘破壊に伴うＬＰダメージに連なって、何故か遊良の体にまで衝撃が巡ってきたのだ。

ＬＰが大きく引かれるが、それだけでは終わらない衝撃が遊良へと襲い掛かり、内臓を直接殴られたような激痛によって口の中に血の味が広がる。それは、体内の何かが喉の奥から飛び出てきそうな程に苦しく、呼吸が一瞬止まる。

「カハッ…か、体が…痛い…ダメージが…実際に?」

「【ヴェルズ・オピオン】！ダイレクトアタックゥ！」

「…ッ!?」

そして、間髪入れずに敵がとどめを刺しに来たが、モンスターを戦闘破壊されただけでこのダメージなのだ、この攻撃でＬＰが尽きてしまうことを考えると、それは絶対に通すわけにはいかなかった。

きっと、今食らった以上のダメージが襲い掛かってくることは、容易に想像できるのだから。

「させるかぁ！速攻魔法【終焉の焔】を発動！２体の黒焔トークンを守備表示で特殊召喚！」

―！

寸前のところで、黒き巨竜の一撃から遊良を守るように、揺らめいた黒焔が立ちはだかった。攻撃はギリギリで遊良まで届かなかったものの、後ろへと抜けていった巨大な衝撃波がもし直撃でもしていた

らと思うと、額に冷や汗が止まらない。
何せ、ソリッド・ヴィジョンに過ぎないはずのモンスターの攻撃で、左右にあるビルの外壁が砕かれているのを見てしまったのだ。
先ほどこの男が投げたコンクリートブロックの攻撃など、足元にも及ばないダメージが襲いかかってきていたことは必至。まさか実際のダメージを受けることなど想像もしてなかったのだろう、ＬＰが残るからと、易々とユコバックを破壊させたことへの後悔を、遊良は感じていた。

「…なんなんだよ一体…ダメージだけじゃ無くて、モンスターまで実体化しているってのか？」

信じられないが、そうとしか考えられないだろう。目の前の非現実的な現象は、確かに起こっているのだから。もし堕天使を得ていなかったら、遊良とてこんなこと、直ぐには信じなかっただろう。あの時も信じられないことが起こったおかげで、今この場で取り乱さない程度の耐性を得ていることが逆に救いか。

「…けど、どうする…まだオピオンがいる限り、俺は特殊召喚が出来ない…」
「1枚伏せてターンエンドォ…。」

男　ＬＰ：４０００
手札：４→１枚
場：【ヴェルズ・オピオン】【ヴェルズ・タナトス】
伏せ：１枚

再び遊良のターンが回ってくるものの、また伏せられたアレが【侵略の汎発感染】だった場合、罠でオピオンを破壊するのことが難しいことに変わりない。ここで何とかしなければ、次のターンで確実に殺られるだろう。

ただＬＰが尽きるのではない、悪意に感染した巨竜の爪が、牙が、想像もできない一撃が襲い掛かってきてしまえば、最悪の場合すら簡単に考えられる。

―それだけは絶対に阻止しなければならない。

「こんなところで、死んでいる暇なんて無いんだ！」

ウジウジしていたって始まらない。自分の進む道を、邪魔させるわけにはいかないのだ、そう言わんばかりに、意を決して自分のターンに入る遊良。

「俺のターン、ドロー！…よし、よく来た！俺は黒焔トークン１体をリリース！」

そして、意を決した遊良の宣言で、先ほど遊良を守った黒焔の片割れが、渦を纏って揺らめき始めた。シンクロでも、エクシーズでも、融合でもない。アドバンス召喚特有のエフェクト。およそ、このルード地区では扱う者などいないのだろう、その光景を初めて見たのだろうか。男の表情が一瞬変わったが、それに気づかずに遊良は続けた。

「ア…ド…バンスゥ…」

「こいつは墓地に闇属性モンスターが４種類以上存在する場合、闇属性モンスター１体でアドバンス召喚できる！レベル８【堕天使ゼラート】をアドバンス召喚！」

―！

【堕天使ゼラート】レベル８

ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２３００

そして遊良の場に現れるは、赤き装束を纏う堕天使の姿。一つ未来を違えば、大天使にも、そして悪魔にもなっていたその道は、堕天を選んだ一つの姿であって。いくら特殊召喚が封じられていても、アドバンス召喚ならば問題ない。遊良の手札で未だ眠る闇を糧にすることで、主の進撃のために舞い上がる。

「ゼラートのモンスター効果を、手札の【堕天使アムドゥシアス】を墓地へ送って発動！相手フィールドのモンスターを全て破壊する！」
「【ヴェルズ・タナトス】の効果発動ゥ！一つ使っテ、モンスター効果を受けなくすル！」
「クッ、でもオピオンだけは…絶対に破壊する！容赦はするな、やれ！ゼラート！」

―！

赤き装束纏う堕天使の、天空へと掲げた剣の一振りにより敵の場に落雷が轟いた。それは、発動コストがあるものの、とある落雷を模した古の魔法カードと同じ効果。そのリセット効果はあまりにも強力だが、その強大な力ゆえに、落雷を操ると最後には自身も力尽きてしまう諸刃の剣。
―だが、ここでトドメを刺しきれればなんの問題もない。

「これで制限は無くなった！俺は手札から【死者蘇生】を発動！墓地から【堕天使スペルビア】を攻撃表示で特殊召喚し、その効果で【堕天使イシュタム】も呼び戻す！羽ばたけ、２体の堕天使よ！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

そして、畳み掛けるように遊良が発動したソレによって、今まで封じられていた堕天使達も本来の力を取り戻して羽ばたいた。散々押さえつけられたのだ、もう容赦などするつもりも無い。主の意思を反映しているかの如く、そう言いたげに。

「イシュタムの効果発動！１０００ＬＰ払うことで、墓地の【背徳の堕天使】の効果を得る！お前の伏せカードを破壊し、その後【背徳の堕天使】をデッキへ戻す！」

―！

先ほど上手く逃れられた破壊の力を、ＬＰを糧にイシュタムが再発動する。ここで攻撃に転じても良かったのだが、念には念を。万が一を察知し、万全を期すためだ。

そして、今度は確実にソレを当てる遊良だったが、男の場の【聖なるバリア―ミラーフォース】が砕け散るのを見て、遊良は心臓が大きく跳ねたのを感じた。

「…【侵略の汎発感染】かと思ったら、そんな危ない物伏せてたのかよ…。念を押して正解だったぜ…」

もしこのまま攻撃していたら、ここまで逆転したのが全て水の泡と消えていたことだろう。それを考えると、ゾッとするどころじゃない。なにせ、遊良のモンスターが逆に全滅し、最後にあの死を運ぶ瘴気の剣で、確実に体を貫かれていたのだから。

遊良　ＬＰ：２２５０→１２５０

「けどこれで終わりだ！バトル！【堕天使ゼラート】で【ヴェルズ・タナトス】へ攻撃！」

―！

男　ＬＰ：４０００→３３５０

遊良の宣言によって、赤き翼の一閃が瘴気の騎士を切り裂き、敵へと初めてダメージが通る。散々苦しめられたが、ようやく相手の場にカードは無くるものの、これで終わりではない。間髪居れずに、遊良は攻撃を控えている２体の堕天使へと命じた。

「トドメだ！【堕天使スペルビア】と【堕天使イシュタム】でダイレクトアタック！」

―!!

今まで封じられていた苛立ちからか、堕天使達の攻撃がいつもよりも激しく炸裂し、無情にもフラフラ立っている男を路地の外まで盛大に吹き飛ばす。遊良が感じた実際のダメージは、あの男にもあるのだろうか。もしそうなら、きっとただでは済まないであろうことを容易に想像させるくらいに、盛大に。

男　ＬＰ：３３５０→０（―２０５０）

―ピー…

そして、無機質な機械音が鳴り響き、遊良の勝利を告げてきた。

終了に伴って堕天使達が姿を消すと遊良は吹き飛ばされた男へと向かって行くが、いくらコンクリートブロックやデュエルで殺されかけたとは言え、それを逆に返してしまっては自分は犯罪者だ。そんな一抹の不安を胸に、遊良は男の傍まで近づくと、その安否を確認し始める。

「…よかった…生きてる。」

吹き飛ばされた男は、若干苦しそうではあったが、かろうじて呼吸をしていることが確認できたのか一安心する遊良。いくらここが無法無秩序のルード地区で、この男が例え犯罪者であったとしても、自分が犯罪者になるのだけは流石に御免なのだろう。

しかし、こんなところで苦しそうに倒れられているのも後味が悪いのも事実。殺されそうになったとは言え、一応どこかへ運んでやるか、もしもの時のために、応急処置を覚えておいて正解だった…戦いが終わった安心からか、遊良はそんなことを考えながら気を失っている男の肩へと腕を回そうとした…

そんな時だった。

―!!

「うわっ、な、何だこれ!?」

突如、男の体から噴出すようにして「何か」が飛び出てくる。目・鼻・口・耳、そしてそれ以外。まるで体の穴と言う穴から勢いよく噴出する黒い靄…いや、まるで闇と言ったほうがしっくり来るか。とめどなく噴出するソレは、栓を抜いた風船の如くの勢いで空へと散って行き、次第に空へ吸い込まれるように消えていく。

しばらくすると出ききったのか、男の体から黒い靄が完全に消えると、先ほどまでだらしなく涎をたらしていた口角も閉じ、表情も心なしか楽になったようにも見えた。

「…何だったんだ…もう、大丈夫か?」

先ほどのアレが体から抜き出て、痞(つか)えが取れたとでも言うのだろうか。しかし、何が起こったのかわからない遊良からすれば、気味が悪くて仕方がない。

呼吸も整って表情も楽になっているのだからと、そそくさと気絶している男を近くの壁へと寄りかからせると、遊良はそこから一目散に駆け出した。

――…

橙色に染まって沈み行く太陽を背に、大空を猛スピードで駆けるヘリの中。無事に鷹矢と、そして師と合流できた遊良は、先ほど受けたダメージも相まってスヤスヤと寝息を立てていた。その隣でも、デュエルし通しで疲れたのだろう、鷹矢も同じく深い眠りについている。

先ほど、遊良が師と合流した直ぐ後に鷹矢も追いついてきたのだが、鷹矢の話によると、あの後別の一人に絡まれてデュエルを行ったのだとか。一刻も早く遊良に合流しようとしてすぐさま片付けたらしいのだが、しかし戻ってみれば遊良は居らず、近くで爆音が鳴ったのでその辺りを探していたらしい。

まぁ遊良とて、入り組んだ路地に逃げ込んだのだから、鷹矢が見つけられなかったとしても何の不思議も無いが。

「ケッ、呑気なガキ共だぜ。」

弟子達の寝顔を見ながらそう言った鷹峰だったが、その表情はどこか嬉しそうにも思える。過去、自分が行ったことを弟子も行ったのが嬉しいのだろうか。その真意は誰にも分かりはしないものの、疲れた少年達を乗せたヘリは、大空へと消えていった。

――…

「おい、ガキ共！そろそろ起きやがれ！」
「…む？」
「あれ…もう着いたんですか？」

もうすっかり日も落ちて、外は真っ暗になっている時間。鷹峰の車が、もう家の近くなのだろうか、すっかり見慣れた町並みを走っていた。

しかし、今日一日で色んなことをやりすぎた。まさか遠く離れたルード地区まで言って、一日中デュエルをして、最後に実態化したモンスターに殺されかけて、空を飛んで戻ってくるなんてそうそうできる体験じゃない…まぁ、もう一度したいかと問われれば、確実にＮＯと答えるだろうと、遊良は思った。

「おら着いたぞ、さっさと降りろ。」
「先生は寄っていきますか？夕食作りますけど。」
「うむ。腹が減った。」
「あぁん？あー…んじゃあ食ってくか。マシなモン作れるようになったんだろーな。」
「遊良の飯は美味いぞ。文句言ったらジジイの分も俺が食う。」
「ケッ、口の減らねーガキだぜ。腹は減らす癖によ。」
「…あれ？」

そんなことを話しながら、遊良は玄関の鍵を開けようと鍵を差し込んだ。

しかし、閉めていったはずの玄関の鍵が何故か開いており、まさか泥棒か、と考えを張り巡らせる遊良。それを不信に思いながらも、ゆっくりと玄関の扉を開けはじめる。

すると、そこには…

「…随分と遅かったね？」

まるで今にも頭から角を生やしそうな形相で、口だけ笑わせたルキが仁王立ちをしていた。目の錯覚か、ルキの背後には炎が見え隠れし、目は笑っていないのがとても不気味なくらいに。

「ルキ…た、ただいま…」
「…うむ。」
「ただいま…じゃないでしょ！もう！連絡しても繋がらないし、デュエルモードで電話に出られません？そんなボロボロになってまで、二人ともどこで何をしてたのよ!?」

一瞬で形相を変え、矢継ぎ早に繰り出される文句に思わずたじろぐ二人。これが単なる外出ならば、ここまでルキも怒りはしない。しかし、一日中危険地帯を駆けずり回ったせいもあって、遊良も鷹矢も擦り傷だらけ、服はボロボロ、しかもどこか怪我をしているようにも見えるではないか。
何の説明もなしに、幼馴染二人がこんな状態になっている姿など、とてもじゃないが容認できるものではないだろう。

「いや、あのさ…せ、先生がさ！そう、先生、先生!?」
「む!?あのクソジジイ！どこへ消えやがった!?」

しかし、二人が助け舟を求めて後ろを振り向いて見れば、先ほどまで居たはずの師の姿は無く、無人の車だけ置いて姿を消していた。なんと偉大な危機察知能力なのだろうか。真似できないソレを遊良は恨みながらも、ルキの怒りを浴び続ける二人。

「二人とも聞いてるの!?ちゃんと説明してもらいますからね！」
「わ、わかったよ…落ち着けって…」
「むぅ…」

―…

『…私だ。報告は聞いている。君の弟子達も中々やるようだね。』
「カッカッカ。たりめーだろ。…んで、どうだったんでぃ？」

怒り狂ったルキの声が、少しはなれたここまで聞こえてくるのは、どのくらい怒っているのかを鷹峰にも容易に想像させる。
しかし、自分の弟子にうるさく言われるのは好きじゃないのだろう。叱られている弟子二人をおいて、やや離れた場所で煙草を吸いながら電話に出ていた鷹峰。その相手は、もう何度も連絡を取っている例の男。

『あぁ…送り込んでいた密偵からの報告だ。君の弟子達が倒した浮浪者2人のデッキは、やはりデュエル時と異なる物だそうだ。…【ヴェルズ】でも、【エーリアン】でも無く、ルードらしい…単なる寄せ集めのデッキに戻っていたそうだよ。』
「…やっぱしな。今までと同じってことだ。勝てば消え、負ければ感染…なんとも分かりやすいねぇ。しかも、何もない奴でも突然憑かれると来たもんだから、手の施しようがねぇ。」
『しかしこれでは埒があかない。ルード程度の人間でさえあのレベルになるんだ、偶々2人しか感染していなかったとは言え、これが強者ともなれば…』
「わーってるって。だから俺様が手伝ってやってんだろーが。心配しなくても片っ端から蹴散らしてやるって。」
『今は現状に対処するしか方法がない…なんとも腹立たしいことだ。…また連絡する。何か分かったら君も教えろ。』
「へいへい。」

この切羽詰った様子の相手との電話も、もう何度目だろう。流石に

慣れたが、それでもウザッたらしい事この上ない。こんな態度を取られては、何かわかっていたのだとしても教えたくは無いというのに。彼の表情はそう言っているのと同義だったが、なによりガキを育てることもそうだが、元来他人に使われることなど性に合わないという、最近よく感じるようになったその感情を、今再び感じながらも、鷹峰は乾いた笑いを漏らした。

「カカッ…まぁ、そこそこ強くなった奴らと戦れるだけまだましか。…ランに全部食われる前に…根こそぎぶっ潰してやんぜ…」

殺気を駄々もれにしながら呟いたそれを、聞いている者はこの空には誰も居なかった。

――…

ｅｐ１４「閑話ー高天ケ原　ルキ　前編」

「おっはよー！おーい、遊良ー？…居ないのー…？」

まだ太陽が活発になる前。とは言っても、買ったばかりのノースリーブのワンピースでも、その肌にやや暑さを感じながら、夏真っ盛りの空気に包まれたルキは、遊良と鷹矢の家の前に居た。

本格的に気温が上がってくるまえに、クーラーの効いたこの家で宿題でもしようと画策していたルキだったのだが、いざインターホンを鳴らしても、いくら外から呼びかけても誰も出てこなかったことを不信に思う。

いつも朝早く起きてせっせと働く遊良にしては珍しい。しかし、そうは言っても夏休みなのだ、もしかしたら昨日夜更かしでもしてまだ寝ているのだろうか。そう考え、ルキは遊良から渡されている合鍵を使って玄関を開けた。

勝手知ったるこの家だ。自分が居るのに、平気でパンツ一枚の格好で歩き回る鷹矢には何度文句を言ったか分からないし、自分よりも家事が出来る遊良は素直に凄いと思うが、それはいつもの変わらぬ日常。ここでは実家と同じくらいの感覚で過ごすこともできるし、今更幼馴染達相手に遠慮など無いと言わんばかりに、ルキは自宅に入るかの如く中へと入った。

「しょうがないなぁー。ルキ様が起こしてあげますよー。…おはよぉございまぁす…」

小声でそう呟いて、こっそりと二階に上がると遊良の部屋の前で立ち止まるルキ。過去、鷹峰の元での修業時代は、よく力尽きて起きられなかった遊良と鷹矢を問答無用で叩き起こしていたものだと、ルキはその時のことを懐かしく思い出すが、そういえば鷹矢は今でも自分で起きられないので物理的に起こす羽目になっていることを思い出し考えを改めた。

「3…2…1…」

—バンッ！

「おっはよ遊良！あっさでっすよー！」

そして、ルキは勢いよくドアを開けて部屋の中へと押し入った。必要最低限の物しか置いていない整頓されたこの部屋も、彼女にとってはもう見慣れたものだろう。

「…ってあれ？」

しかし、てっきりそこで寝ていると思っていた遊良本人の姿はなく、彼がいつも持ち歩いている鞄も机の上に置いてあるのを見ると、どこかへ出かけているはずもないだろうと瞬間的に理解した。…そもそも、そんなことは何も聞いていない、そう言いたげな表情をして。

まさか、鷹矢までいないなんてことはあるのだろうかと、ルキは部屋を出て、隣の鷹矢の部屋の扉を無造作に開ける。

「ねぇちょっと鷹矢ー？…って、もう！鷹矢も居ないじゃん！」

しかし、デュエル関連と筋トレ関連の物でごった返している部屋の中にも鷹矢は居らず、こんな時間に鷹矢まで起きていることへの不信感を抱きながら、二人して連絡もなしに居なくなっていることへルキは苛立ちを覚えた。

一旦リビングへ降りてみると、いつまで居たのだろうか、遊良の物と思わしき宿題が出しっぱなしで置いてあり…鷹矢の物でないことはルキには初めから分かっていたが…しかしやりかけの宿題を出しっぱなしで外出するなど、遊良にしては珍しいのだろう。ルキの様子は、益々不信感が強まっているようだ。

ルキは自分のディスクを取り出すと、遊良と鷹矢に交互に電話をかけてみ始めるが、しかし返ってくる機械音声に圏外と言われて彼らには繋がらない。どこでも連絡がつくこのご時世に、一体どこへ行ったというのだろう、まさか深い海底や、遥か上空とは言うまいに。そんな面白そうなところなら連れて行ってほしいくらいなのにと、彼女の表情がそう言いたげな顔をしているものの…ある意味その予想は当たっているのだが、家にいるルキにそれがわかるはずもない。

「…もー、置いていくなんて酷いなぁ。」

二人が居ないのではやることもないし、朝早く起きたものだからまだ若干眠気が残る。そう感じたルキは、二階に上がって遊良の部屋へと戻ると、何の躊躇もなくベッドにダイブして、そのまま天井へと向き直すと目を閉じた。

小さな金属製のラックに、必要最低限の私物。衣服類は綺麗に畳まれクローゼットに収まり、カード類も整理されて引き出しに入れられている。机の上には教科書と多少のデュエル雑誌が立てられて並んでいるだけ。

無駄な物が無いこの部屋は、まるで余計な事を抱えたくない遊良の心情のようだ。確かにここに住んでいるはずなのに、家の他の場所からは感じられる生活感が、遊良の自室からだけに感じられない。

それはきっと、彼の心の奥底にあるモノが原因だということはルキとて重々承知している。今でこそ開いてくれている心も、絶望していた時期には自分と鷹矢ですらシャットアウトしていたのだから、それを思い出すと今でもやるせない…彼に救われた命なのだから、自分が彼を見捨てることなど有り得ないというのに。どことなく悲しげにも見えるルキの表情がそれを物語っていた。

―今でも簡単に思い出せること、絶対に忘れられないことを、その頭の中に思い浮かべながら。

―…

窓から差し込む日の光と、弱くかけた冷房と、そして窓から聞こえる微かな規則正しいセミの音が耳に心地いい。次第に、ルキの意識は深く沈み、そのまま寝息を立て始めた。

物語は一度過去へと戻る。まだ幼少期、天城　遊良が出来損ないと言われる、その前に…。

―…

「いくぞ！おれのターン！」

自信満々にデッキからドローをしたのは天宮寺　鷹矢だ。まだ幼等部だというのに、その実力は初等部の学生達を倒してしまうくらい強いのだから驚きだ。いつも自信満々にデュエルをするその姿に、幼等部の教諭達も鷹矢の才能とその血筋ゆえに、将来はプロ入り確実といつも噂している。そのドローが勝利へと繋がり、見事に勝利を収めていた。

「たかや！次はおれとデュエルだ！」

「いいぞ、かかってこい！」

そして休むまもなく次のデュエルが始まる。しかし、鷹矢は疲れた素振りを見せず、寧ろ生き生きして戦いに臨んでいた。ギャラリーの子供達も元気に盛り上がり、本当に子供の体力は無尽蔵、大人達がなぜ自分達について来る事が出来ずにすぐ疲れてしまうのか、子供達からしたら不思議でならないだろう。

「…いいなぁ。」

そんな盛り上がる子達を見つめながら、部屋の隅でポツリと呟いたのは、決闘市に引っ越してきたばかりの高天ケ原　ルキだった。真っ赤な長い髪を後ろで一つに縛っているこの少女は、この決闘学園所属の幼等部の一つに、最近転入してきたばかりだったが、転入してきてから今までデュエルをする鷹矢達をいつも遠巻きに見ているだけだ。

羨ましそうな顔をして膝を組んでいるが、本当はみんなと一緒の輪に入って話しをしたり、みんなと一緒にデュエルをしたいのだろう。しかし、とある事情から親にデュエルを禁止されているのだから、それも出来ない。せっかく決闘市に引っ越してきたのに、デュエルを満足にできないことが残念でならない、そんな気持ちが胸中にある様子だ。

「デュエルしたいのかお前？」

「…あ、ゆーらくんだ。」

そんなとき、不意に隣から声をかけられたのでルキが振り返ってみれば、そこには同い年のクラスメート、天城　遊良の姿があった。まだ話したことは無かったが、鷹矢に負けず劣らずのデュエルの実力で、幼等部では鷹矢と並ぶヒーローのような存在。落ち着いていて、どこか大人びている雰囲気の遊良に、密かに憧れている子も多いらしいのだとか。

まだＥｘ適正検査もしていないのに、血筋ゆえ既にエクシーズ召喚を扱うことのできる天宮寺　鷹矢と、まだＥｘデッキを持っていないけれども豪快なデュエルを魅せる天城　遊良。この二人のデュエルが始まるときなど、教諭達もこぞってギャラリーに転じてしまうのだから、幼いながらもその実力が伺える。

戦ってみたい、彼に自慢のモンスターを見せてあげたい。気のせいかもしれないが、ポケットに忍ばせている自分のデッキも彼と戦ってみたいのか、微かに呼応しているようにすら感じるのだろう、しかし

それを許さぬ父の言葉が耳に残り、最後の一歩が踏み出せないルキ。

「デュエルしたいなら相手するぜ、たまがはら。」

「…『たまがはら』じゃないよ、『たかまがはら』だよ、もう。」

「あぁ、ごめんごめん。んでさ、たまがはら。デュエルするのか？しないのか？」

—あ、こいつバカだ。

いくら幼等部のヒーローとは言え、ほとんど話したことがないからか、ルキにとっての遊良の印象が今決まってしまったようだ。しかし、こんな隅にいるのを気にかけてくれたのはルキにとっても素直に嬉しいことなのだろうが、それに応えることはできないと残念そうな顔を見せる。

「ごめんね。私デュエルしちゃダメなの。」

「え、なんで？デュエルくらい誰でもできるじゃん。」

「…えっと…その…」

出来なくないわけがない。むしろデュエルは大好きなのに、それが出来ないわけがあるのだと、人に言えない理由を背負った少女の雰囲気が、幼い遊良にそう告げていた。

「…内緒。言っちゃダメなの。パパがダメって。」

「ふーん。そっか。わかった。」

「…え？う、うん。」

そんな雰囲気を悟ったのだろうか、意外にあっけなく引き下がった遊良に、思わず驚くルキ。バカだと思っていたものだから、てっきりしつこく聞かれるのも覚悟していたのにと、そんな心構えだったのだろう。やや拍子抜けしたように感じている様子だったが、遊良はそれ

だけ言うとそれ以上を聞くことは無く、隅っこで小さく座っているルキに付き合って、そこに立ったままデュエルの最中の鷹矢に野次を飛ばした。

「おい鷹矢！ミスするんじゃねーぞ！」
「うるさい！黙って見ていろ！ゆうらの癖に！」
「ハハハ。あいつ罠カードで妨害されそうになるとすぐ焦るんだ。」
「そうなの？」

可笑しそうに笑う遊良に釣られて、思わずルキまでクスクスと笑ってしまう。そうして、鷹矢のデュエルが終わる時まで、遊良は話を続けていた。自分と鷹矢が幼馴染だということ、プロデュエリストになって鷹矢と大きな舞台で戦いたいこと。デュエルの細かい戦術から、好きなモンスターの話まで様々と。

そして、終始聞き手に回っていたルキだったが、転入してから初めて、こんなに人と話しをしたのがとても嬉しかったのだろうか。遊良との話題がどれも楽しく、笑顔が絶えない様子だ。彼が、どれだけデュエルと鷹矢のことが好きなのかも良くわかったのだろう、話の間に鷹矢がもう2～3戦デュエルをしていたようだったが、あっという間に時間が過ぎたことに気が付かないほど、幼い二人は話し込んでいた。

「よし！ダイレクトアタックだ!!」

―ピー…

そうしている間に、デュエルを終えた無機質な機械音が鳴り響く。どうやら鷹矢は無事すべて勝つことが出来たようで、デュエルディスクを片付けながら遊良に近づいてきた。その表情はどこか満足げで、してやったと言わんばかりの顔だ。

「これで１０連勝だ！見たかゆうら！お前の記録こえたからな！」
「俺は昨日１１連勝だったからまだまだだな。」
「む？…くそ、まだ足りなかったか…明日こそ…」

自信満々の顔から一転、コロコロと表情が変わる鷹矢の顔を見ているだけでも面白いと感じたルキだったが、鷹矢が『明日』と言った所で、今日はもう帰る時間というのを理解した。どうやら時間を忘れるくらいに、遊良の話を聞き入っていたらしい。
―退屈に感じていた幼等部も、今日は全然つまらなくなかった。もう帰らなくてはいけないのが、悔やまれるほどに。

「あ…あの…」

立ち去ろうとする鷹矢と遊良へと向かって…『またお話しよう？』と、そう言いかけて、ルキは口を噤んでしまう。
思えば、まだ全然親しくもないのに、こんなことを言うのは恥ずかしいのだろうか。もしかしたら、楽しかったのは自分だけだったのかもしれないと考えてしまったらしい。しかし、そんなルキをみて、遊良は先ほどまでと全く同じトーンで返した。

「また明日話そうぜ。じゃあな、たかまがはら。」
「え？あ…う、うん…またあした…」

ニカッと笑って手を振った遊良に、思わず驚くルキ。遊良の方からそう言ってくれるとは思わなかったのに、それでもまた話そうと言ってくれたことが、何よりもうれしい様子で。
―明日楽しみになる。
無垢な少女の表情は、言葉にしなくとも、明らかにそう言っていた。

「よくわからんが、また明日な。えっと…たまがはら？」
「…たかや君…たかまがはらだよ…」

それに連れだって去っていく鷹矢に若干の呆れと、ちゃんと苗字を言ってくれた遊良に手を振り返して。

―…

「でね、ゆーら君ってバルバロスってモンスターが一番好きなんだって！見せてくれたけどかっこよかったよ！」

そしてその日の夜、ルキの両親は驚いていた。幼等部に行くことに乗り気でなかったルキが、その日幼等部であった楽しかったことを自ら話してくれていることに。ここまで饒舌になる娘を見るのはどれ程振りだろうか、生き生きと話す娘を膝の上に置いて、父の表情も思わず緩む。

「へぇー…なんだか、なかなか渋いのが好きな子だね。」
「渋い？」
「派手じゃないってこと。」
「ふーん。」

よほど、そのゆーら君との話が楽しかったのだろう、顔も知らぬ娘の同級生に感謝すら覚える父だったが、しかしその後に続いた娘の言葉に、思わず言葉に詰まってしまった。

「私のカードも見せてあげたいなー…ねぇお父さん、なんで私はデュエルしちゃダメなの？」
「…あー、それはね…えっと…」

ルキの問いに、父親の顔が苦い顔に変わる。何度言い聞かせても同

じことを聞いてくるソレは、子供ゆえにしかたがないことだが、しかしあまりに大きい力を持ってしまったことをまだ理解できないのも可哀そうと感じてのことだろう。
　しかし、それでも許してやるわけにはいかない。これは何も娘が嫌いだから禁止しているとか、そんな程度の低い話ではないのだ。下手をすれば、まだ幼い娘の命に関わる問題。たかがデュエルなのにと、それを知った時には思ったのだが、まだそれを自覚せぬ娘の力の片鱗を目の当たりにしてしまっては、いくら父とて信じないわけにはいかなかった。
　だからこそ、許してやるわけにはいかない。このことで、例え娘に嫌われようとも。

「…いいかいルキ、ルキはとっても強いカードを持っているんだ。でも、それをほかの人にバレちゃいけないんだよ。それにね…ルキが本気でデュエルしたら、きっと危ないことが起こるんだ…ルキが危ない目にあっちゃうからさ…」
「…でも…」
「パパもルキがケガをしたら悲しいな。…ね、いいかいルキ。」
「…うん。」

　―明らかに納得はしてくれていない顔だが、しかしこれもルキのためなのだ。
　いくらカードを取り上げても、手に余ることから信用のおける人物に隠してもらっても、まるで瞬間移動でもしたかのように主であるルキの手元に戻ってしまう。
　こんなことになるなら、いくら愛らしい娘にねだられたとは言えどもまだデュエルディスクなんて買ってやるべきではなかった。まさかＥｘ適正検査も受けていない幼い娘が、自分のディスクに触れた瞬間に、突然カードが創造されることなど誰が想像できるものか。この難儀な運命を抱えて生まれてきた娘のことを、そんな風に可哀そうにも思う父だったが、しかし何もできない父親からしてみれば、愛娘に

言い聞かせるほか無いのだろう。
娘に言うのと同時に、父は自分にも言い聞かせるように、その覚悟を思い出していた。

―…

「なぁルキ！これとこれならどっちがいいと思う？」
「んーとねぇ、【トレード・イン】かなー？ゆーらのデッキレベル８が多いから。」
「やっぱりかー。闇属性増やすよりもレベル８増やした方がいいかなぁ…。」
「ゆーら【闇の誘惑】１枚しか持ってないし、その方が絶対デッキも回るよ。」

およそ、大人顔負けなレベルでデッキ調整をしている遊良にも驚きではあるが、それについて行けているルキの方も相当な実力を持っているのだろうと、仕事をしながら二人の話を後ろで聞いていた教諭は感じていた。
ここ最近彼女が明るくなってきているのは感じていたが、今まで教室の隅で隠れるようにして縮こまっていたルキがここまでのレベルにあるなど知らなかったことだろう。子供の仲良くなるスピードは尋常じゃないというが、あの暗い表情をしていた少女がここまで明るく話していることも相まって、その驚きは止まない。

「よしっ、鷹矢相手に試してくる！あいつどこいった？」
「たかやならさっきお外に出てったよ。行こう？」
「おう！昨日はあいつのエクシーズにやられたからなー、今日は絶対勝つ！」
「うん、頑張ってね！」

そして、外に出ていった遊良を追うようにして、話を聞いていた教諭もすぐに同僚を誘って外へと出た。絶対にプロにまでなれる才能を持つ二人のデュエルだ、もしかしたら教員である自分たちも既に叶わないかもしれない、教師とは言え決闘市にいる人間として、そんな二人の拮抗した対決は見逃すわけにはいかないと言わんばかりに急いで。

すでに子供達が取り囲んだ中心には、件の二人が堂々と立っていた。

―…

「甘いぞゆうら！これで終わりだ！ダイレクトアタック！」

「ぐぅ…くっそぉ！」

―ピー…

無機質な機械音が鳴り響いて、デュエルの終了を告げた。お互いに残りライフ１００という、プロでも中々見れない好勝負を、ギリギリ制したのは運に味方された鷹矢だった。

しかし、それは本当にどっちが勝ってもおかしくない勝負。最後に鷹矢が【死者蘇生】を引かなければ、勝っていたのは遊良だったのだから。

「よし！これで８２勝８１敗、俺の勝ち越しだ！見たかゆうら！」

「明日は俺が勝つんだっての。あーあー…俺もＥｘ適性の検査が終わったらお前なんてイチコロなのになー。今に見てろよ。」

「む…、いいだろう、ならばおれはその上を行ってやる！」

何と負けず嫌いな二人なのだろうか。傍から見ているルキからしたら、仲が良い事この上ないのだが、本人たちは照れくさいのか素直になることは少ない。しかし、それでも深いところで分かりあっているのだろう、言い争っていても険悪には絶対にならない。そんな二人を、ルキは羨ましくも感じていた。

「とーさんがエクシーズでー、かーさんが融合だからー、俺はシンクロだったら丁度いいなー。」
「ふん、エクシーズだったらお前には意地でも負けんぞ。」
「どうだか。鷹矢の癖に。」
「なんだと!?ゆうらの癖に!」
「まーまー、落ち着いてよ二人とも。」

―しかし、それでもヒートアップはする。
こういう場面はここ数週間で何度も見てきたのだ、元々引っ込み思案だったルキも、もうすっかり二人の歯止め役に落ち着いており、この3人で行動することが増えてきたせいもあってか、今ではセットで数えられることも少なくなかった。
それに、もうすぐ就学前のＥｘ適正検査が近いということも相まって、現在幼等部のこの学年では誰がどの適正になるか、その話題で持ちきりだ。
鷹矢はすぐに他の相手につかまってそのままデュエルを始めたので、そのまま置いて遊良とルキは教室へ戻り始めた。

「ルキは何だと思う?俺のＥｘ適正。」
「んーとねー…わかんないや。…あ、でもシンクロだったらいいなー。私と一緒だもん。」
「あれ?ルキってシンクロなのか?」
「あっ…今のダメ。聞いちゃダメなの。」
「わかったわかった…ん?」

随分と慣れてきたのだろうか、たまにポロっと口を滑らせそうになるルキだったが、そんな話をしながら部屋の中へと戻る二人。しかし、中へ入るや否や、クラスメートの一人が立ちはだかるようにして立っていた。

どうやらルキを睨んでいる様子だったのだが、それがクラスでも大柄な少年だったのがなんとも怖く感じている様子で。

「おい、たまがはら！お前なんでデュエルしない癖にここ来てるんだよ！」

「えっ!?な、なぁに、急に…。あと、『たかまがはら』だよ？」

「う、うるさい！ここにいたいなら俺とデュエルしろよな！こい！」

なんとも横暴な理由をつけて構え始めた少年だったのだが、そういえばこの少年、どうやったのか、他の誰よりも先駆けてＥｘ適正検査を受けてきたと自慢していたことをルキは思い出した。検査後から適応されるＥｘ解禁に伴って、元々横柄だった態度が、最近より一層強くなったようだ。

そんな大柄の少年は、威嚇するように声を荒げて遊良とルキに近づいてくる。

「やめろ！嫌がってるだろ！」

「うるさいぞゆーら！なんでそいつ庇うんだよ！そいつデュエルもしないんだぞ！」

「だから何だ！デュエルしなくたってルキは強いんだから、そんなの関係ねーだろ！」

そんな少年の前に立って、ルキを庇うように一歩前に出る遊良。

自分を庇ってくれることを嬉しく思い、またデュエルの考察を一緒にしただけで自分の実力をわかってくれていた遊良を、なんとも勇ましく思ったルキだったのだが、デュエルに応じないルキに苛立ちを感じたのか、少年は遊良を押しのけて近づくと力づくでルキの腕を掴ん

だ。

「このぉ…、どけっ！」

「あっ、や、やめてよ！」

「じゃあデュエルしろよ！なんでデュエルしないんだよ！」

そういって、抵抗するルキを力の限り振り回し始める少年。苛立ちを我慢できない子供らしい行動ではあるが、しかしこれは些かやりすぎだ。

「やめろって言ってんだろ！」

―！

「うわぁ！」

「キャッ!?」

そして、見かねた遊良が少年へとドロップキックを食らわした。鷹矢直伝だけあって、その蹴りには遠慮がなければ躊躇もない。

それが少年に直撃とすると共に3人は勢い余って転んでしまったのだが、直撃した少年が苦悶の表情を浮かべているのはどうでもいいとして、何故かそれ以上にルキの表情が慌てていたことに遊良は気が付く。

不安になってルキの視線の方へと目をやると、そこには散らばったカード達が。今の衝撃でポケットから零れてしまったのだろう、部屋の中で盛大に散っていた。

「あ…わ、私のカード！」

「わ、悪いルキ！拾うから！」

そう言って、遊良は散らばってしまったカードを拾い始めた。ルキ

を助けるためとはいえ、少々やりすぎてしまったか、素直に悪いと思いながらも、散らばったカードを拾おうとする姿に周りに居た子供たちも善意から手伝おうとし始める…

—そんなときだった。

「さ、触らないで！」

急に大きな声を出して、あっけにとられていた他の子ども達をよそに、素早く自分のカードを集めるとそそくさとポケットにしまうルキ。まるで、見られることすら嫌だと言わんばかりに。しかし、我に返ったルキは、怪訝な表情を浮かべている他の子ども達と、驚いている遊良へ向かうと、謝罪を述べた。

「…あ…ご、ごめんね…パパに…カードは見せるのもダメって言われてて…」

「そ…そっかー、悪かったよルキ。みんなも驚いたけど気にしてないってさ。な？だ、だろ？」

禁を破ってしまって思わず泣きそうになっているルキを案じ、子供らしからぬ手際の良さで遊良が促すように他の子ども達にそう言うと、皆気にしてない様子で各々の遊びに戻っていった。一瞬険悪になったとしても、下手に拗れることが少ないのも、子供の特権か。

そして、ルキがこっそり自分のカードを確認したが、どうやら無くなったカードなどは無く、全て無事のようだった。

「悪かったなルキ。」

「ううん…助けてくれてありがと。…ごめんねゆーら？」

「いいよ。…あいつのことは放っておこう。また来たら、今度は鷹矢のドロップキック食らわせてやる。」

「それはちょっと可哀想だけど…。」

「いいんだって。あっち行こうぜ？」

「…うん。」

未だに蹲って苦しそうに呻いている少年を他所に、遊良とルキはその場を離れる。そうして、教諭が戻ってきたときに一時的に大騒ぎにはなったのだが、幸いにも近くで見ていた他の子ども達の証言で遊良とルキに嫌疑がかからなかったことはせめてもの幸いか。しかし、この後ルキを迎えに来た父が、このときの事情を聴いた瞬間に怒り狂ったというのは、また別の話であるが。

――…

「ねぇねぇ、今日ルキちゃんのカード見た？シンクロモンスターキレイだったねー。」
「うん！いいなー、私もシンクロ使いたいなー。なんだったっけ？えっとぉー…。」

日も暮れてきた時間帯。おしゃべりに夢中になっている母親達をよそに、公園のベンチで楽し気に話す二人の少女。無邪気なだけのこの言葉が、たまたま後ろを通った誰かの耳に届いているのかも知らずに。

子供達からしたら、すぐに忘れてしまうであろう、この場限りの話題。しかし、何気なく呟かれた一人の子供のソレが原因で事件が起こる事など、この時に予想できる人間は誰も居らず…

――…

ｅｐ１５「閑話ー高天ケ原　ルキ　後編」

「あしたはお泊り会、楽しみだなー。」
「そっかー…明日はルキ居ないのかー…」

幼等部の一大イベント、夏のお泊り会を翌日に控えたルキは、後ろで寂し気な声を出している父を放って、ウキウキしながら準備にいそしんでいた。自分にベッタリだった愛娘が、子どもとは言え他の男と夜を明かすことに、一抹の不安を感じているのだろう。ビール片手に、哀愁を漂わせている。

「パパ寂しいなー…なールキー？」
「ママー？歯ブラシどこー？」
「手前のポケットに入れてあるよー。もう、そんなに何回も見直さなくたって大丈夫よ。あとパパさっきからうるさい。」
「そんなぁ…」

妻からの辛辣な言葉で父が余計に凹むものの、そんなことはお構いなしにルキは荷物の中から自分のデッキを取り出して一番上に置かれたシンクロモンスターを見た。遊良がすぐに取り繕ってくれた甲斐あってか、あれから誰にもうるさく言われることもなく、いつも通りの学園生活を送れている。

さらには根負けした父が、今はまだ幼いために許してくれないが、初等部に上がれば自分が創造したこのカードを使わないことを条件にデュエルをしてもいいと約束してくれたのだ。まだ先のことだが、ルキはそれが楽しみで仕方がないと、待ち遠しい表情をしていた。

「あしたはゆーらとたかやと寝るんだー。たかやは枕が変わると寝れないんだってゆーらが言ってたんだよ？おかしーよね。」
「鷹矢君って意外とデリケートなのね。遊良君の方がそんな感じなのに。」

「でりけーとって？」
「繊細ってことよ。」
「ふーん。」
「…あぁ、ルキが知らない男と寝るなんて…」
「パパちょっと黙ってくれる？」
「パパうるさーい。」
「うぐぅ…」

遂には娘からも辛らつな言葉を浴びせられる父。これでは完璧にワルモノ扱いだ、こんなに娘を思っているというのに、と言わんばかりに酔いも回ったのだろうか、父はテーブルに突っ伏して撃沈していた。

―…

「準備はいいか？」
「へい。そりゃもう。」

太陽がちょうど真上に上っている時間。決闘市のとある喫茶店の一席に居た男二人が呟いた。平日のこんな時間から男二人で喫茶店にいることもそうだが、二人の表情からして碌でもないことを考えているのが見て取れる。少ない客に紛れてはいるが、その雰囲気がどこか危なげだ。
喫茶店もマスターも、そんな雰囲気を感じ取ってはいただろうが、客のプライバシーに深く踏み込むことは好ましくないのだろう。聞き耳を立てないようにしているのが見て取れる。
「へへ…こりゃデカい金になるぜ。車の準備は出来てるんだろうな？暫くどこかに身を隠すんだ、失敗すんじゃねーぞ。」

「もちろんです、アニキ。分け前キッチリお願いしますぜ？…しっかし、あれがまさかこの街にあるなんて驚きですね。てっきり海外の博物館とかにでも大事にしまってあるもんだと…」
「シッ！黙ってろボケ。聞かれたらどうする。」
「へ、へい、すいやせん…」

どこかで聞いた、お伽話の中にあったカード。その名前を聞いたときは半信半疑ではあったが、しかし虚言にしてはリアルな名前だった。実物が存在していることは世界的に有名ではあるものの、それを目の当たりに出来る人間の数は多くない。
もし、実際にそれが本物だった場合、どれくらいの金額が懐に転がりこんでくるかわかったのものじゃないだろう。
少ない情報量ではあったものの、入念に下調べをしてきて準備は万全、横取りされないように、秘密裏にも進めてきた。逃亡ルートも確保してあり、標的の顔だって何度も確認した。あとは実行して、懐が潤うのを待つだけだ。その皮算用に興じながら、見るからに怪しげな男たちは店を出ると街の雑踏へと消えていった。

―…

「みなさーん、手は洗いましたかー？」

教諭がキレイにそろって座っている子供たちへと問いかける。元気のいい返事が返ってきたことに頷くも、全員幼等部に泊まるのは初めてだろう、親と離れて眠ることに心なしか緊張を覚えている様子。しかし、それでも昼間一緒に遊んでいる子達がこんな夜の時間まで一緒に居られることが嬉しいのか、大勢の同級生達と一夜を共にする興奮の方が勝っているようだ。

「はーい、ではいただきまーす。」

そして、教諭の号令と共に目の前に置かれたカレーへと一目散にスプーンを入れる子供たち。今日一日はしゃぎ回ってお腹も空いているのだろう、みるみるうちになくなっていくのが見て分かる。中にはもう食べ終わったのか、お代わりを求めて席を立っている子まで居た。

「鷹矢のやつ、食いすぎて腹壊しても知らないぞ。」
「はは…食べるの早いんだね、たかやって…」

教室の誰よりも早くカレーを平らげた鷹矢を、呆れた顔で見ている遊良とルキ。大盛りにしてもらったのか、隣に戻ってくる鷹矢の顔はどこか満足げた。

しかし、鷹矢はこの年にして元々かなり食べる方ではあるし、食べ盛りの子供と言うのも相まって日中にあれだけ駆けずり回ったていたのだから空腹でもしかたないことだろう。それにしても、鷹矢に付き合って同じくらい走り回っていた遊良と比べても、流石に早すぎではあるとルキは感じていたが。

「どうしたゆうら。お前は食わないのか？」
「そんなに早く食えるか。食いすぎで腹壊しても夜トイレについて行かないからな。」
「安心しろ、平気だ。まだまだ食える。」
「…たかやー。ゆーらが言ったのそういうことじゃ無いと思うよー？」
「じゃあ、もっとゆっくりいっぱい食べる。」
「そういう事でもねーよ。知らねーぞ？」

どこまでも自分のペースを崩さない鷹矢に、遊良は一抹の不安を覚えながらも晩御飯の時間は過ぎていき、笑い声が絶えない。そして、

食事の途中で余ったデザートのバニラアイスを巡って盛大なじゃんけん大会が開かれたのだが、驚異的な運を見せつけた遊良が大勢の中、まさかの一人勝ちを決めたのが一番の盛り上がりとなり終了した。

その後、子供たちは寝るまでのお約束の如く、大規模な枕投げ大会が開かれたのだが、やがて疲れ果てたのか子供たちは電池が切れたように、しだいに布団の中で寝息を立て始めていった。

—夜は…更けていく。

—…

「…ゆうら…おいゆうら…」

「…んぁ？なんだよ…」

誰もが眠りについた頃、教諭すら深い寝息を立てていた中で、揺り動かされるように起こされた遊良は不機嫌な顔でそこを見上げた。ひそひそ声で話しかけてきてはいるが、聞きなれたそれは暗い中でも間違えることはない鷹矢の顔だ。

しかし、一度寝付いたら朝まで起きない鷹矢がこんな夜中に起きたことも驚くべきことではあったが、遊良にしてみればその理由はわかりきっていたことであって…

「…腹が…いたいぞ…」

「7杯も食べるからだって。トイレ行ってこいよ。」

「…ついてきてくれ…」

「…こんなことだろうと思った。ったく、さっさとしろよ？」

「…うむぅ…」

先ほどはトイレについていかないと宣言したものの、どうせついてくるまで煩く言うのだろう。自分の家や鷹矢の家ならまだしも、皆がいる幼等部で盛大にやらかされても面倒だ、ならばとっとと済ませてしまった方が早い、そう判断したのだろうか。

遊良は布団から出ると、枕元に置いてあった自分のデュエルディスクから漏れる微かな光を手掛かりにして、鷹矢を連れ立って静かに教室を出ていった。

―それと入れ違いになるようにして開いた、玄関の扉の音に気が付かぬまま。

―…

「終わったかー？」
「…もう、少しだ…」
「…早くしてくれよなー。」

暗い所、しかもそれが家と違い、幼等部のトイレともなれば流石に怖くも感じてしまうのは、この年の子供ならば何もおかしなことではない。

いくらデュエルディスクを兼ねた万能端末に内蔵されている、このデュエルシミュレーターで遊んで気を紛らわしてはいても、確かに鷹矢でなくてもこれでは誰かについてきてほしくなるとトイレの外で感じた遊良だったが、どうにもそわそわして落ち着かない。

今にも廊下の向こうから何かが走ってこないだろうか、鍵が閉まっている空き教室から何かが覗いていないだろうか、そんな風な嫌な妄想すらわいてくる。しかし、やがて回復したのか鷹矢が出てくると、そんな考えを吹き飛ばして早く戻りたいかのように遊良は促した。

「早く戻ろうぜ、眠いし。今何時だよ…。」
「すまん。」
「お前が謝るなんて珍しいな。そんなに痛かったのか？」
「うむ。だがもう大丈夫だ。」
「そっか。」

すっかり回復した様子の鷹矢を見て、この調子なら今晩はもう起きなくて済むだろう、そう判断する遊良。自分に正直な奴だからこそ、嘘は言わないことは分かっている。…それでも、自分に対して全く遠慮をしてこないこの馬鹿に対して、少しは遠慮して欲しいものだと感じてはいるだろうが。

そんな中、二人は帰路につくが一刻も早く布団に戻りたいのだろう、教室までの道のりは階段を上らなければならず、やや早足で階段を上っていた…

―そんな時だった。

「…ん？なぁ鷹矢、今なんか音しなかったか？」
「変なことを言うな。おれを怖がらせようとしても無駄だからな。本当だぞ。」
「…いや、そんなんじゃなくて…なんか玄関が開いたような…」

微かだが、静かな夜だからこそ聞こえた音。多分、日中に鳴ったら気が付かなかったであろう小さいドアの音。鍵も閉めてあるはずだし、そもそも関係者だったらこんなにコッソリ開ける必要はないはず。だからこそ、気になってしまうのは仕方のない人間の性か。

子供ゆえの好奇心なのか、先ほどまで感じていた微かな恐怖心を忘れて遊良は階段を降り始めた。こんな所に一人で置いていかれたくないのだろう、鷹矢もそれに連れ立って、二人は一階へと向かおうとする。

「ちょっと見てくる。」
「おい、まて、置いていくなゆうら。」

トイレが玄関に近かったことが幸いか、遊良と鷹矢はそそくさと一階へと到達すると、いつも使っている玄関へと向かう。
子供達の背に合わせたのだろう、そこまで高く無い下駄箱が立ち並ぶが、現在幼等部に通っている最中の遊良達にしてみればそれでも十分に高い。そこを通り抜け、ガラス張りになっている玄関の入り口を確かめた。

「お、おいこれ…」

すると、鍵の周辺のガラスにガムテープが貼られ、中心が小さく割られているではないか。そこから針金か何かで鍵がこじ開けられていて傷がついている。まるで、誰かが忍び入ったのことが明らかであるかのようで。

「なんだ、お化けではないのか。お化けなら鍵を開ける必要もないからな。安心したぞ。」
「そういう問題じゃねーだろ…ど、泥棒…か？」
「なに!?泥棒だと!?大変じゃないか！」
「だからそう言ってんだよ！でも、何のために…」

どうにも腑に落ちない様子の遊良。普通、こんなリスキーな場所に忍び込むのはあり得ない、もっと簡単に入れて足が付きにくい民家に入る方が捕まりにくいだろうに。前にコッソリ入った学長室にあった金庫には、こんなお粗末な侵入をしてくるような輩では決して開けられそうにない程の厳重なロックが掛けてあったが、盗むものと言ったらそれくらいしかこの幼等部にはないはずだ。そう必死に思考を巡らせて考える。

「何を狙って…あ、おいあれ！」
「なんだ？」

しかし、そんな疑問を抱いていた遊良の目に、一枚のカードが目に入った。ガラス製の扉の外、しかし常に点いている正面玄関の照明に照らされているソレは、間違いないデュエルモンスターズだ。
違和感を感じてすぐに玄関の鍵を開け、外へと出て目を通す。しかし、それは信じられないことに…

「ル、ルキのカードだ…」
「なんだと!?それは本当か!?」
「この前散らばったときにチラッと見ちゃったんだ、間違いない。それにウチのクラスの奴はこれ持ってないし…」

以前、ルキがまき散らしてしまったデッキの中にあった効果モンスター。それ自体は特別珍しいカードではなかったが、とっさに拾おうとしたその中にこのモンスターがあったのを覚えている。隠したがるルキには何も聞いていないが、他の誰もそれを扱わないことから、その印象は強かったのだろう。
―なぜなら、これはＥｘ適性検査を受けていない子供達が持っているはずも無い、チューナーモンスターだったのだから。

「まさか…ルキが泥棒されたというのか？」
「そ、そうかもしれな…」

信じられないが、ここにこれが落ちているということは『そういうこと』なのかもしれない、最悪の想像をしてしまった遊良と、狼狽えたように振る舞う鷹矢。どうすればいいのだろうかと考え始める…
「…ん？」

必死に考えを凝らしてした遊良の耳に、不意に門の向こうで車のドアを閉める音が聞こえた。ここの近くは確かに住宅が立ち並んではいるが、しかし今は夜も更けた時間。誰かが忍び込んで、そして出て行った音がついさっき聞こえたことを考えると、この音の主が犯人である可能性は高いと、一瞬でその考察へと到達する遊良。
—もしルキが攫われたのであれば、モタモタしている暇はない。

「門の外に誰かいる！…逃げる気だ！鷹矢、お前は先生起こしてこい！俺は泥棒追っかけるから！後でディスクに電話しろ！」
「うむ！」

そう考え、遊良は早くから補助輪無しで乗れるようになっておいてよかったと思いながらも、学園の入り口に常備してある子供達の練習用の自転車に乗り込んだ。不自然に開いていた門から外へ出て、たった今発進したであろう黒塗りのワゴン車を追いかけるために。
子どもが夜に乗ることなど想定していないのであろう、遊良の乗った自転車にはライトが点いていないものの、今はそれが幸いか。車の主は遊良に気付いた様子もなく、入り組んだ道であるため中々スピードがでない車に徐々に離されながらではあったが、一定の距離を保つことが出来ていた。
午前中のデュエルの理想的な初手と言い、じゃんけん大会の一人勝ちと言い、今日は異様にツイている。絶対に逃がさない。そんなことを感じながらも、遊良は必死に逃げていく車を追いかけていった。

—…

「おし、ここから車を捨てるぞ。ガキ持て。」
「へい。どうせ盗難車ですし足はつきませんね。」
「んんっ!?んー！」

「チッ、大人しくしろって。ぶっ殺すぞ！」
「んんっ!?んうう…」

猿轡で口をふさがれ、ロープで縛られながらも暴れるルキを睨みつけながら、二人の男は路地の奥で車を捨て降りた。閑静な住宅街を抜けて、決して人通りの多い街は通らないようにして、そしてこの人気のない路地裏通りへと来たこの男達の計画は、あたかも順調に進んでいるようにも見える。

いきなり攫われて、こんな状態にされたのだ、その恐怖は計り知れないだろう、ドスの効かした声で脅されてルキは恐怖で固まってしまった。ルキを攫った男達はと言えば、下品な表情でニヤニヤとした笑いを隠せず、懐に入ってくるだろう金額を想像している様子だ。

「へへっ、こんなガキがあんなカードを本当に持ってやがったとはな。こりゃ高く売れるぜ。」
「このガキ担保に身代金でも強請りゃあ、もっと儲かりますね。」
「だな。へっへっへ。」
「ん…んんん…」

いきなりで状況も呑み込めないだろうが、しかしこの男たちが悪い事を企んでいるのがよく分かったのだろう。自分のデュエルディスクは、背の高い方の、偉そうに指示を出している男に奪われて、誰にも見せてはいけないという父との約束も無下に破られてしまった。そのこともあり、さらには暗い中で攫われた恐怖も相まって、ルキは体の震えが止まらない。

—誰か、助けて。

塞がれてしまって声を出せない口から洩れた音は、誰にも届かない。そんなことわかっているのに、涙が溢れて止まらない。

「う…んんぅ…」
「ちっ、うっとおしいガキだ。一発ぶん殴っとけ。そしたら大人しくなるだろ。」
「へい。」
「んん!?んー!んぅうー!」

背の高い男の言ったソレによって、より一層恐怖が強くなるルキ。楽しみにしていたお泊り会だったのに、一体なんで自分がこんな目にあうのだろう。誘拐された恐怖と、振りかぶった太った男に殴られることへの恐怖で、喚きが止まらない。殺されてしまうのではないかという恐れが襲ってきて思わず目を強く瞑った…

―その時だった。

「やめろ!ルキを離せ!」
「ゲッ!?バレた!?」
「なっ!?誰だ!?」

深い路地で、急に降って沸いた声に驚きの声を出す男達。慎重に事を運んでいたからだろう、この高い声が子供の物とは気が付かず、逸る心臓を抑えながら車の後ろへと出て、そこに立っていた人影へと視線を向ける。
…恐る恐るではあるが、見られたからには許してはおかないと、そう言わんばかりの顔をして。

「…ってガキじゃないですかアニキ!」
「そうだな。おいガキ、てめーあの学園のガキか?」

すると、そこには全く想像していなかった人間の姿。巡回中の警察官や、へべれけになるまで呑んでいた酔っ払いならともかく、こんな人気のない裏路地に、よもやこんな子供がいるなど微塵も思っていな

かったのだろう。
しかし、怒りの眼をした子供は、勇んだ姿を崩さずに言う。
「そうだ！ルキを泥棒しやがって…酷いことするなよな！返せ！」
なんと無謀な子供なのだろうかと、子供相手とは言え顔を見られたことに危機感も抱かないまま、男たちは張りつめていた緊張の糸を緩め始めた。
―それは、法を犯している最中の人間が一番してはいけないことなのだろう。
それをしてしまっている男達のレベルの低さが見て伺えるが、男達はそれに気が付いた様子もなければ、口元に笑みさえ浮かべているが。
「んぅん!?」
そしてルキも、まさかこんな状態でかけてつけてくれた遊良を、大人の助けではないものの、一筋の希望へ縋るような瞳を向けた。寸前のところで助けに来てくれる、まさにヒーローと感じたのだろう。涙がこぼれる瞳で、精一杯の助けを求めている。
それを目の当たりにした遊良は、大人二人相手だというのに全く委縮した様子もなく言い放った。
「…ルキ…おい！お前ら！俺とデュエルだ！俺が勝ったらルキを離せ！」
「あ？」
「へぇ？」
そして遊良が言ったその言葉で、誰の目にも明らかなくらいに、一気に男達から緊張感が抜けたのが見てわかった。勇ましく助けに飛び込んだ子供が、まさかデュエルを挑んでくるなど思ってもいなかっ

たのだろう。勇ましくデュエルディスクを構えたこの子供が、何を言ったのか理解できなかった様子を見せたが、すぐさまその口から笑いが漏れだし始める。

「ガハハハッ！でゅ、でゅえるだってぇ？お前みたいなガキンチョが、俺たちとデュエルだってぇ!?」

「は、腹痛ぇ！おいおい、本気かよ!?」

自分のＥｘ適正もまだ調べていないこんな子供が、まさか自分たちに挑む気なのにも驚きだが、それでもあまりに突拍子な発言に、笑わずにはいられないといった振る舞いをしている男たち。

別に、腕力に訴えてもよかったのだが、しかし誘拐犯といえども決闘市に居る人間、どっぷりつかったデュエルありきの人生がそれを受け入れたのか、背の高い男が言う。

「おい、お前相手してやれよ。」

「アニキー、でもいいでんすかい？逃げなくて。」

「こんなガキ一瞬で片づけちまえ。ついでにこいつも攫って身代金マシマシだ。」

「了解、ガハハハッ。」

下品な笑いを出しながら、ルキを背の高い男に任せて、太った男が遊良に近づいてくる。必死になって追いかけてきたのはいいが、調子に乗ったガキを黙らせてやることに何の抵抗もなさそうに。

―しかし、そんな中でもルキの希望の視線がより一層強くなる。

なにせ、誘拐犯が相手にしようとしているのは、幼等部の双璧。

大人顔負けの実力を持つ、この天城　遊良なのだから。

―デュエル！

「オレの先攻だぁ！自分の場にカードが無い場合、チューナーモンスター【こけコッコ】をレベル３として特殊召喚！そして【デーモン・ソルジャー】を召喚！いくぜぇ、レベル４の【デーモン・ソルジャー】にレベル３の【こけコッコ】をチューニング！シンクロ召喚！レベル７【ダーク・ダイブ・ボンバー】！」

【ダーク・ダイブ・ボンバー】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／１４００

開幕と同時に、男の場に人型戦闘機のようなモンスターが現れた。それは見るからに厳つく空に浮かび、また太った男はいきなり召喚したＥｘモンスターによって、この子供との力の差を見せつけようという算段なのだろうか、下品な笑いをこぼし始める。

「ガハハハッ！どうだガキンチョ！行くぜ！【ダーク・ダイブ・ボンバー】の効果発動！こいつをリリースして、１４００ポイントのダメージだ！いけっ、射出ッ！」

――！

そして、敵モンスターがその機体をまさしく戦闘機に変えて遊良へと迫ってくる。１ターンに１度しか使えない効果とは言え、先攻でいきなりダメージを与えてくるとは。その驚きもあってだろう、巨大な戦闘機のようなモンスターに突っ込まれ、遊良は苦しそうな声を漏らした。

「いきなりダメージかよ…くそっ…」

遊良　ＬＰ：４０００→２６００

「どうだぁ!?ガキンチョ、悔しいかぁ?」
「チッ、まだまだだ。」
「…へっ、おいガキ!」

しかし、苦々しげな目をしてはいるが、全く焦った様子のない遊良。
まだＬＰは尽きていないのだ、負けていないのだから諦めるわけにはいかない、そう言いたげな表情をしていたのだが、背の高い男はそれが気に食わなかったのだろう。ルキを抱えながらもデュエル中の二人に割って声をかけると遊良に向かって言った。

「なーんか妙に落ち着いてんのがいやらしいガキだねぇ。場慣れてんのか知らねーけどよ、それじゃあ面白くないよなぁ。だったら…」

確かに、Ｅｘモンスターと戦う経験が少ない幼等部生の割に、Ｅｘモンスター相手に焦った様子もなければ、大幅にＬＰが削られたのに焦りもしない。
とは言うものの、遊良とて毎日のように鷹矢を相手にしているのだ、大幅にＬＰを削られるのにも、Ｅｘモンスターを相手にするのにも慣れている。
今更こんな誘拐犯が大きな態度でデュエルに臨んできたところで憶するほど、自分の心は弱くはない。忌々し気に男を睨む遊良の目は、そう訴えていた。

「こうすりゃあ、もっと面白れぇよなぁ!」

―!

しかし、背の高い男がそう言った瞬間に、遊良の目は信じられないものを見たかの如く、大きく見開かれた。

「んぐぅ!!…ぐふっぅ、ぅぅ…」

―そう、ルキを取り戻さんとして戦う遊良の姿を、吐き捨てるようにして男は大きく振りかぶると、まるでアッパーカットを撃つかの如く、抱えていたルキの腹部目掛けて拳をふるったのだから。

「なっ！何するんだ！」

突然発生した痛みに、苦悶の表情が滲み出るルキ。堪えていた涙が溢れかえり、殴られた驚きと恐怖と、あまりの激痛に嗚咽を漏らす。

その光景を、怒りと焦りの声で問う遊良だったが、背の高い男は嘲笑いながら答えた。まるで、ただのゲームのように。まるで、罪悪感がないように。

―遊良のＬＰが直接ルキへと直結しているかの如く、男は言い放つ。

「テメーのＬＰが減るごとにこの娘に一発入れてくぜ？そうすりゃお前ももっと楽しくなるだろう、なあ？」

「ふ、ふざけやがって…殴るなら俺にすればいいだろ!?」

「安心しろぉ、負けたお前はたっぷり身代金頂いてから殴って殴って…んでボロ雑巾にしてから生き埋めにしてやるよ、へへっ。誰もこない山の中でなぁ。おい、一気に倒すんじゃねーぞ？じっくり嬲れ。」

「ガハハハッ！了解ですアニキ。俺は【死者蘇生】を発動して【ダーク・ダイブ・ボンバー】を蘇生！カードを１枚伏せて、ターンエンドだ。」

太った男　ＬＰ：４０００
手札：５→１枚
場：【ダーク・ダイブ・ボンバー】
伏せ：１枚

「…俺の…ターン…ドロー…」

ターンが移り、ゆっくりとデッキからカードを引く遊良。
こんな子悪党が調子に乗っているのと、ルキを傷つけたことへの怒り、それが臨界点を突破し、背の高い男に抱えられたルキが殴られた痛みと恐怖で泣き崩れていが、それが返って冷静にさせてくれていた。絶対に、これ以上ダメージを受けるわけにはいかないということを教えてくるように。

―そんな簡単な事を要求されたことにも、怒りを覚えて。

しかし、遊良の威勢があまりに小さくなった姿を、恐怖にとらわれたと勘違いしたのか、太った男が下品な声で言った。

「ビビってんのかガキンチョ?もっと喚けよな!スタンバイフェイズに永続罠【ゴブリンの小役人】を発動!ＬＰ３０００以下のお前に、スタンバイフェイズごとに５００ダメージを受けてもらうぜぇ!」
「おっしゃあ!もういっぱぁつ!」

完全に遊良を舐めきっているのだろう、ダメージの判定を待たずに、背の高い男が振りかぶった。それをあまりの恐怖と悲しみと痛みで無抵抗にしているルキだったが、そんなことを遊良が許すはずがないというのに。
遊良は瞬間的に手札から1枚のカードをディスクに差し込むと、それを発動する。

「発動と同時に、速攻魔法【サイクロン】を発動!【ゴブリンの小役人】を破壊する!効果が発生する時に場に残っていないため、俺はダメージを受けない!」
「はぁ!?」
「…チッ。」

自分の決めたルールだからか、当たる寸前で拳を止めると、つまらなさそうにデュエルへと目を戻す背の高い男。
なんとも運よくそんなカードが手札にあったものだと言わんばかりの表情だが、しかし遊良からしてみれば当然のことだ。なにせ、今日の自分はツイている。こんな芸当など出来て当たり前、ルキを守ってやることなど出来て当然と、そう思っているのだから。
それに、子供だからと完全に舐めきっているこの男達に怒っているのもある。
大人に歯向かう生意気な子供にプライドを傷つけられたのか何だか知らないが、相手の力量も量れずにじわじわと嬲るつもりだという下らない算段…実力も無い癖に、遊良よりも歳をとっているというだけで、それが実力の差だとでも思っているのだろうか。
ならば、なおさらこの男達を許せないだろう。ルキを攫ったこともちろん、ただで返すことなどしたくないはず。

「俺は【トレード・イン】を発動！レベル８の【鋼鉄装甲虫】を捨てて２枚ドロー！そして【手札抹殺】を発動し、４枚捨てて４枚ドロー！」
「チッ、オレは１枚だ。」
「魔法カード【思い出のブランコ】発動！【鋼鉄装甲虫】を蘇生する！」

【鋼鉄装甲虫】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００

「ガキらしい通常モンスターだぜ。」
「ヘッ、確かに攻撃力は高いが、それだけだ！」
「まだだぁ！魔法発動【ワーム・ベイト】！俺の場に昆虫族がいる場合、【ワーム・トークン】２体を特殊召喚！」

そして、遊良は次々と場をモンスターで埋めるが、男たちの表情と空気はまるで焦っていない。それは、まだＥｘデッキを使ってこないガキ相手に、負けることなど微塵も考えていないからだろう。いくら

攻撃力の高い通常モンスターで突破してこようと、自分の手札にあるカードと、次に引くカードで逆転できる自信がある様子だ。

…しかし、腹部の痛みを堪えながらも、この時にルキは確信を得た。

今、遊良の場にはモンスターが3体。そして妨害する伏せカードはなく、遊良ならば手札の中に確実にアレを持っているはず。恐怖による体の震えが止まり、自分の為に戦ってくれている少年への眼差しが、より一層強くなると同時に…

―遊良は動き出す。

「俺は永続魔法【冥界の宝札】を発動！」

「あぁ!?冥界の…ガハハハッ！そりゃアドバンス召喚のサポートカードか!?こ、これ以上笑わせんじゃねーって！」

「つ、通常モンスターの次はアドバンス召喚ってか!?へへっ、は、腹が痛てーぜ…」

なぜ遊良がこのカードを発動したのかを考えもせず、盤面だけ見て嘲笑う男達。その笑い声がいちいち勘に触り遊良の神経を逆なでしてくるが…

―完全に舐めきっている男達の声をかき消すように、そしてルキの恐怖を打ち消すように、遊良は小さな手を天に掲げた。

「笑ってられるのも今のうちだ！俺は3体のモンスターをリリース！」

それは、彼の一番の相棒。いつのデュエルでも登場するソレは、絶対に遊良の叫びに応えてくれる。

その宣言により大気が震え、暗い路地に獣の咆哮が響き渡ると…

「来い！【神獣王バルバロス】！」

―！

まるで幼い遊良を守護するかのように、ソレは降臨した。

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

「…んあ、攻撃力３０００のモンスター？ガキが持つには過ぎたモンスターだけどよ…、でもたかがアドバンス召喚したモンスターで俺に勝とうたぁ…」
「【神獣王バルバロス】のモンスター効果！３体リリースでアドバンス召喚したバルバロスは、召喚時に相手のカードを全部破壊する！いっけぇ、バルバロスゥ！」

―！

遊良の叫びに呼応して、バルバロスは盛大に吠えながら自身の槍を地面に突き刺した。
最上級モンスターの生贄数よりも多くの生贄を要するソレは、例え何者であろうともフィールドに残ることを許さないかのように。獣の王が繰り出したそれによって、発生した衝撃破が太った男へと襲い掛かると、全てが為す術なく飲み込まれて吹き飛んでいく。

「チッ、なかなかやるじゃねーか。」

しかし、自分フィールドを焼け野原にされたというのに、それにすら焦りをみせない太った男は、まるで遊良がこれ以上動かないと思っている様子に見える。およそ、攻撃力３０００のモンスターの直接攻撃を受けたところでライフは残る、次の自分のターンが回ってくれれば

と、そんな事を思っているのだろう。
―そんな生ぬるい事を、遊良がするわけがないというのに。
「でも調子に乗っててもお前は次のターンに…」
「次のターンなんて無い！【冥界の宝札】の効果で、俺は2枚のカードをドロー！…魔法カード【死者蘇生】を発動だ！墓地の【鋼鉄装甲虫】を特殊召喚！」
「んなぁんだとぉ！」
【鋼鉄装甲虫】レベル8
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００
ピンポイントで蘇生カードを引ける遊良の運にも驚きだが、遊良自身からしてみればここで引けないはずがないだろう。なにしろ今日はツイているのだ、こんなデブに負けるはずがない、その姿がそれを物語っている。
そして遊良の場に蘇るは、先ほども現れた通常モンスター。それは、いくら効果が無いと馬鹿にしていても、有り余る攻撃力を持ったモンスターに違いはない。
すべて吹き飛んでしまった太った男に為す術はなく、２体の怒り狂ったモンスターに睨まれていて動けなかった。
「おい！何やってんだデブ!?」
「う、嘘だろぉ!?こ、ここ、こんなガキに…」
「バトル！【鋼鉄装甲虫】と【神獣王バルバロス】で、ダイレクトアタック！」
「ばかなぁー！」
―！
「ぐぁー！」

そして、鋼鉄に身を固めた甲虫と、獣の王の迫りくる一撃が、太った男に身動きを許さずに炸裂した。
その攻撃は、肥えた体と無傷のＬＰを吹き飛ばすには十分であって、こんな子供にワンショットキルされたのが信じられないのだろう。足元がおぼつかず、あまりの迫力の遊良のモンスターに対して、後ずさりしながら崩れ落ちていた。

太った男　ＬＰ：４０００→０（－１８００）

―ピー…

無機質な機械音が路地に鳴り響き、幼い遊良の勝利を告げる。幼い子供と侮った罰だ、年齢もそうだが、なにより実力の差がはっきりしていたこの戦い。
ルキへの暴行というプレッシャーもあったはずなのに、臆することなく戦った遊良に対して、言い訳など言う余地もなく…

「ア…アニキ…す、すいやせ…ガハッ!?す、すいやせグフゥ！」

負けて座り込んでいる子分に、苛立ったように蹴りを食らわす背の高い男。何度も何度も蹴り出されたソレに耐えきれなくなったのか、太った男は次第に声を小さくすると、そのまま何も言わなくなって倒れ落ちた。

「使えねーデブが！始めっからガキは殴り飛ばして連れて行けばよかったんだよ！…おいガキ…テメーは許さねぇ…ここで殺してやる…」
「…ッ!?」

計画を台無しにされた腹いせか、使えない子分への苛立ちか、血

走った目で完全にキレている男は、遊良に向かって冷酷にも言い放つ。漏れ出る殺気に思わず後ずさる遊良だが、デュエルでかったのにルキを離してくれないのは約束が違うだろう。そう言わんばかりに、逃げ出すことを拒むが、それを意に介さずに男は近づてきた。
…助けてくれた大事な友達が、今度は危ない目にあっている。そんな怒りの視線を向けているルキに、気がつかぬまま。

「覚悟しろよ…このクソガ…」

―!

「ッチィ!?…な、んだってんだ…いきなり…」
「ッ!?ルキ!こっちだ!」

しかし、急に、男が抱えていたルキから手を離してしまった。
それは、まるで持っていられないほどの「何か」が起こったようだったが、しかしルキは地面に落とされるとすぐに立ち上がって駆けだし、男を睨みつけながら遊良が促すままその後ろへと隠れる。

「なんだってんだよ一体…このクソガキどもぉ!」
「くっ!」

片手を痛そうに庇ってはいたが、それよりも怒りが勝ったのだろう。余計な手間を負わせられた小娘にも、偉そうに歯向かってきたガキにも、その怒りのボルテージが上がっているのが見て取れる。
絶対に許さない…そんな風に怒り狂った男のあまりの切れ具合に、おもわず身も竦む遊良達。その遊良達を力づくで捕まえようと手を伸ばした…

―その時だった。

―!

『そこまでだ!お前は完全に包囲されている!大人しくしろ!』
「なっ!?サ、サツ…だとぉ!?」

急に明るくなった路地で、中てられたライトに目が眩みながらも、そこには教諭たちが呼んだのだろう警察が集まって、男を睨みつける。そして鷹矢が案内したのだろうか、警察の先頭に偉そうに立った彼は、ふてぶてしくも仁王立ちをしていた。

―…

「うわぁぁあん!ゆーらぁあ!」
「大丈夫…もう大丈夫だって。」

拘束を解かれ、自由になったルキは、今まで溜まった恐怖を発散させるかのごとく遊良に泣きついていた。あれだけの目に会ったのだ、こんな子供が受けるには酷すぎる仕打ちをよく耐え、また助けてくれたヒーローから離れることを拒む。

「ぶじか二人とも。」
「あぁ。でも鷹矢、お前よくここが分かったな?」
「電話したらデュエルモードだったから、「ばしょさーち」ってのをしてケーサツに乗っけてもらった。どうだ、偉いだろう。」
「そうだな、さんきゅ。」
「グスッ…たかやも…ありがと…」
「うむ。」

臆せず犯人を止めた遊良も、手早く大人への対応をした鷹矢も、

どっちも無ければきっと無事ではすまなかっただろう。もし遊良が追い付かなければ、ルキは手遅れになっていたかもしれず、いくら遊良がデュエルで勝っていても逆上した生き残りが向かってきては力では叶わない。
　それを感じたのかルキは鷹矢へも礼を言い、ルキの親も警察に連れられて今到着したのか、一目散にルキへと駆け寄った。

「ルキ!だ、大丈夫か!?ぶぶぶ無事でよかった…」
「あ…パパ…声大きくて耳痛い。」
「ルキ…よかった…」
「ママ…ママぁ…!」

　あまりに取り乱す父を見てか、恐怖よりも安心が勝ったのだろう、いつもの口調に戻っていたが、母に優しく抱きしめられてソレは決壊し、今まで以上に盛大に泣き出す。
　そして、よもや命すら危ぶまれたという状況が無事に済んだという結果に安堵したのだろうか、ルキの母も同じく泣き出し、宥める父とともに、念のための救急車に乗って高天ヶ原家はそのまま病院へと直行していった。

「よかったよかった。」
「うむ!」

　一件落着。まるで事件を解決したヒーロー気取りでそれを眺めていた二人の少年。いや、ルキにとっては紛れもないヒーローだ。そんな彼らの表情は明るく、とても誇らしげに見える。
　自分達でルキを守れたという自負、大人相手にも実力で引けを取らなかったという自信がそうさせているのだろう。
　しかしその背後に、この世の物とは思えない程の怒りの表情を浮かび上がらせていた、彼らの両親に気が付かぬまま…

―…

「おやじになぐられた…」
「俺も…危ない真似しすぎだって…」
「でも二人ともかっこよかったよ。助けてくれてありがとう。」

翌日、念のための検査入院をしていたルキの元を訪れていた遊良と鷹矢だったが、事の本末を聞いた天城家と天宮寺家の父と母から、盛大に叱られて拳骨を食らったらしい。今にも痛みを思い出せるのだろう、二人して頭をさすりながら。しかし、お見舞いに来てみればルキは元気そうで、打撲以外に目立った外傷もないということを聞いて、二人は素直にホッとした様子を見せた。

まぁ、いくら自信があったとはいえ、誘拐犯相手に子供だけで挑むなど、無謀もいいところ。もし玄関で鉢合わせて居たら二人の身も危なかったのだし、遊良のデュエルに応じず敵が腕力に物を言わせてかかってきていたら、きっとただでは済まなかったのだから。

「おれがデュエルしていたらダメージは受けなかったがな。」
「先攻じゃ無理に決まってんだろ！」
「できるぞ！」
「無理だ！」
「ちょっと、二人ともうるさいよー！」

子供だからか、自分のしたことの危うさに気付かぬまま、三人はふざけあいながらも笑いあう。途中、ルキの両親からこれ以上無いくらいに感謝されたものだから、二人は嬉しそうな顔をして誇らしげに立ち、それを見ていたルキもおかしそうに笑っていた。

―…

…こんな時代も確かにあったのだ。

―だから、忘れられない。忘れることができない。決して…

「なんでゆーらに会っちゃいけないの!?意味わかんない！」

憤慨して父を睨みつけるその目は、まるで、実の父すら敵だと言わんばかりだ。忌々しげに睨まれた父は深く傷ついたのだろうが、しかしルキはそれを悪いとは思わない。それ以上に、彼の方が傷ついているのだからと、それを訴えていた。

「ゆ、遊良君はね…Ｅｘ適性がなかったんだって…そんな彼と一緒にいて、もしルキのＥｘ適性まで消えちゃったら…」

「知らないよそんなこと！だったら、たかやなんかとっくに消えてるし！何でそんなことでゆーらが苛められなくちゃいけないの！意味わかんない！」

誰が流した噂なのか。まるで感染症の原因とでも言わんばかりに、天城　遊良に近づくことを禁じ始める親たち。その姿を、その言葉を聞いてしまった子供たちも、こぞって言いたい放題な現状に、ルキは驚きを隠せない。

一体遊良の何が悪いというのだろうか、Ｅｘ適正など関係ない幼等部で、鷹矢以外は誰も遊良に勝てない癖に、それなのに何で遊良をまるで弱者のように扱うのだろうか、と。

―自分を救ってくれたヒーローの、一体何が悪いというのか。

「私行くから！ゆーらのとこ行くから！」
「あっ、ま、待ちなさいルキ！」
「うるさい！パパなんて大っ嫌い！」

父の制止も聞かず、一目散に家を飛び出すルキ。慌てて父はそれを止めようとするも、妻にそれを止められてしまっては動けないのだろう、素直にその場に足を止めた。

「言っても無駄よ。…それに、私は遊良君が可哀想でならないわ。今あの子の傍にはきっとルキが居た方がいい…」
「で、でもルキの身が…」
「ルキを命がけで助けてくれた子を、私たちが見殺しにする気なの？」
「う…そ、それは…」

妻の放った言葉は真理だ。彼は何も悪くない、それは父とて分かっている。
しかし世間の目は、いやおうにも彼に石つぶてを投げかけるのだ。それに娘が巻き込まれでもしたらと、どうしても思ってしまうのだろう。誰だって、自分の子が一番可愛いはずなのだから。

「私は誰に何を言われても、遊良君の味方をしますから。そうしないと、恩が返せないもの。」
「う…で、でもルキが…」

突如として世界が敵に回ってしまった少年に、自分達まで敵に回るわけにはいかないだろう、と。すでに覚悟を決めた様子のルキの母は、娘の走っていった方向を強い目で見つめていたものの、やはり大人故にどうしても今後を悟ってしまうのか、悲しい目をしている。

きっと娘が選ぶ道は、世間からは白い目で見られることだろう。誰もが見捨てるような少年と我が子が共に歩むことは、本当ならば絶対に許しがたいことなのだから。
それでも、敵に回ることなど出来ない。娘が言うように、たかがＥｘ適正が無いというだけで、天城　遊良という存在を否定できるほど高天ヶ原家にとっての彼の存在は小さくない。
１年にも満たない期間とはいえ、塞ぎ込んでいた娘を変えてくれ、親の目の届かないところでも彼がいるから安心できた程…それ程までに天城　遊良という存在は、ルキにとっても、そしてルキの親にとっても大きな存在になっているのだから。
遊良がもっと子供相応に、我儘や自分勝手であったならば、きっととっくに見捨てていただろう。だからこそ、思ってしまう。
―なぜ、遊良君なのだろうか、と。
例えば、ルキに無理やりデュエルをさせようとした、あの苛めっ子風の男の子ではだめだったのだろうか、そんな風に思ってしまうほど、ルキの母は遊良が不憫でならない。

「あなたが反対したいのならどうぞご自由に。ルキのことを考えているのか何だか知りませんけど、娘に一生恨まれる覚悟があって遊良君を見捨てるんでしょ？」
「うぅ…わ、わかったよ。僕もできる限りのことはするさ…。で、でもルキが危ない目に会いそうになったら、僕は彼よりもルキを優先するからね！」
「あなたよりも遊良君といる方がルキは安全そうだけれどね。」
「そ、そんなぁ…」

―…

「ゆーらぁ…ねぇゆーらぁー…」

なんど呼びかけても彼は応じない。魂の抜け殻になってしまったかの如く、虚ろな目を宙に向けていた彼を、何度も何度も揺り動かす。
あれだけ明るかった遊良が、あれだけ強かった遊良が消えた。そんなこと、信じたくも無いのに。目の前の彼の姿を見ていると、自分まで悲しくなってくるのだと。

「おじさんとおばさんは？…ねぇ…ゆーらってばぁ…」

泣きながら声をかけても、彼の耳には届かない。自分を救ってくれたヒーローが、そこにはいない。でも、彼から離れるわけには行かない。石が投げこまれ、ガラスが散乱した部屋の片隅で、暗い影に覆われながら死ぬのを待っている少年を、絶対に一人にしたくない。できるわけがない。

―絶望に囚われている少年を、決して離さないように…

必死に彼に寄り添うルキの表情は、涙を溜めた瞳で精一杯にそう告げていた。

―…

「…うぅん。」

目が覚め、もう西日が差し込む時間なのだとルキは理解する。流石に寝すぎたと感じたが、頬を伝う水滴が、自分が泣いていることにも気づかせた。…随分と懐かしい夢を見たものだが、なにも夢で見なくても絶対に忘れることなんてないというのに、彼女の表情がソレを物語っている。

「…はぁ。」

突如訪れた、世界が全て敵に回ったあの日。
絶望に囚われていた遊良が、今こうして笑っていられることはある意味奇跡だ。自分の呼びかけにも、鷹矢の叫びも全く聞く耳を持たなかった遊良を救ったのが、彼を見捨てたデュエルだというのだからと、神すら恨んだことを思い出すルキ。
なにせ、自分にはいらないものを与えた癖に、いつも遊良から奪っていくのだから。それでも諦めなかった遊良なのだから、今の力を得たのだろうが。しかし、それでも過酷な道を進んでいるのだ、彼の心が傷つくことに変わりない。それはルキにとって、常々思っている事だろう。

「遅いなぁ…遊良達、どこ行ったのー？」

しかし、そうは言っても彼らは一体どこへ行ったのだろうか。一度も起きずに今まで寝ていた自分が言うのもなんだが、いくら何でも遅すぎだとルキは感じた。寝すぎて気怠い体を起こして電話をかけるが、今度は圏外ではなくデュエルモードに入っていて通話が不可と来たものだから不思議だ。

「はぁ…もう…意味わかんない…。汗かいちゃったじゃん、シャワー浴びよー。」

連絡がつかない二人など放っておこう。そうすることにしたルキは、遊良の部屋から出ると一階に降りて風呂場に向かい、汗で不快感の増えた体へとシャワーを浴びせ始めた。勝手知ったるこの家だ、今更遠慮もなければ不安感もない。元々泊まる気で来ていた為、着替えも問題ないのだから、と。
しかし、長めにシャワーを浴びても、冷蔵庫にある食材で勝手に晩

御飯を作って食べても、一向に返ってくる気配がない二人に、次第に心配が大きくなってくるルキ。何回か電話をかけてみても、繋がりはするが出る気配がないことは明らかにおかしいでのではないか。そんな不安がこみあげてくる。

「何かあったのかな…どうしよう…ん？」

そんなことを考えていた時だった。

家の外に車の音がし、数人の話声が聞こえてくる。しかも、不審者かと思ってよくよく聞いてみれば、それは聞きなれた声で。

「…へぇー…ルキちゃんのこと放って遊んで来たんだぁー…」

先ほどまでの不安はどこへやら。ルキは突如沸き起こってきた感情に任せて、玄関で待ち構えるようにして仁王立ちすると、扉が開くのを待ちわびる。きっと、今の自分は鬼の形相をしているのだろう、だったらせめて口だけでも笑っておいてあげようか、そんなことを考えながら。

そして…

「…随分と遅かったね？」

恐る恐る開けてきたのが丸わかりであり、伺うようにして中へと入ってきた遊良と鷹矢。

しかし、その姿を見てルキは静かに驚いた。てっきり遊びまわって来たと思ったのに、二人して服は砂だらけで擦れてボロボロ。生傷が多くできており、遊良に関してはどこか痛めたのか、どこかを庇っているような立ち方ではないか。

それは、二人の表情からは読み取れず、隠そうとしている雰囲気があまりに妙で。

「ルキ…た、ただいま…」
「…うむ。」
「ただいま…じゃないでしょ！もう！連絡しても繋がらないし、デュエルモードで電話に出られません？そんなボロボロになってまで、二人ともどこで何をしてたのよ!?」

何も聞いていないし、どこでこんな危ない目に会ってきたと言うのだろうか。車の音がしたということで犯人に心当たりは一人しかいないが、何の説明もなしに幼馴染二人がこんな状態になっている姿など、とてもじゃないが彼女にとっては容認できないことなのだから。

「いや、あのさ…せ、先生がさ！そう、先生…先生!?」
「む!?あのクソジジイ！どこへ消えやがった!?」

二人が助け舟を求めて後ろを振り向いたが、そこに犯人と思わしき人物は居らず、どうせ怒っている自分をいち早く察知して逃げたのだろうが、しかし偉大な危機察知能力は流石だが後で絶対に文句を言ってやらねば。ルキはそう心に決め、そうして遊良と鷹矢はそのままルキの怒りを浴び続けた。

「二人とも聞いてるの!?ちゃんと説明してもらいますからね！」
「わ、わかったよ…落ち着けって…」
「むぅ…」

すっかり暗くなった空に、怒りの声が吸い込まれて行く…

―…

ｅｐ１６「夏、天才のある一日」

「どうだい天宮寺君、スピーチの言葉は考えてきたかい？」
「…む？」

夏休みも終盤に差し掛かってきた頃、登校日でもないのに学園へと呼び出されていた鷹矢は、質問を投げかけてきた新人教師へと不可解な声を返した。
もう昼にも近い時間。前もって伝えておいたことが幸いか、遊良に物理的に叩き起こされなければきっと呼び出されていることなど忘れて午後まで寝ていたことだろう。そもそも休みに学園に来るという行為自体に疑問を持っている鷹矢は、それでも学園へ向かうことを拒否して布団に齧りついていたが。
そうして、流石にキレかけた遊良に今日の飯作りを放棄すると言われて渋々学園に来てみれば、この新人教師に意味不明なことを言われて困っている様子だ。
スピーチと言われてもいったい何の事なのか、全く持って心当たりが思い浮かばないのだろう。どうせ思い出す努力もしていないのか、まるで違うことを考えているようにも見える。…それはきっと、遊良が朝から仕込んでいた本格カレーのことに違いないだろうが。
そして、いくら新人と言えども教師もそれを感じ取ったのか、１年生とはいえ彼の【黒翼】の孫であることも相まって、やや腰を低くした声色で再度口を開いた。

「…えっと、夏休み明けのさ、【決闘祭】代表決定に先駆けてのスピーチを…頼んであったと思うんだけど…」

きっと教師としては、ここで一人の生徒にこんな態度は許されない。キッチリと締めるところは締め、毅然とした態度で生徒に接しなければならないことは必至。
しかし、それでも彼らの学園のトップである前シンクロ王者として

名高い【白鯨】と、同クラスという【黒翼】を祖父に持つ鷹矢に対してどうしても遠慮が入ってしまう。新人教師の心の底には、就職して最初に挨拶に行った理事長室で、そのあまりの威厳に思わず腰を抜かしそうになったことが根付いているのだから。
鷹矢にしてみれば、【黒翼】など名ばかりのあの『ろくでなし』の事などどうでもいいと思っているのだろうが、遊良とルキが師と仰いでいるから仕方なく師事してやっているだけだというのにと、彼の心は常にそう思っていた。

「…あぁ、そういえばそんなことを言われた気がするな。」

―嘘だ。

鷹矢の記憶の中には、そんなどうでもいい事に覚えなどない。第一彼の見解では、決闘祭だってどうでもいい事なのだ。
決闘祭への出場を承諾してやったのだって、遊良が出ると言ったから…久しく本気にならない相棒と戦えるのではと考え、そして出る気になったのだけだというのに。
―いつの日か、大舞台で戦いたいと言っていた自分の片割れの言葉を信じて。

「安心しろ。当日までには考えてきてやる。」
「そ、そうかい？だったら安心だね。」

そうして、これではどちらの立場が上かわかったものではないと新人教師も感じながらも、無表情を貫き通すこの無礼者への態度に何の違和感も覚えずに、職員室を出ていく高等部1年生とは思えない程に逞しいその背中をただ見送るだけ。
新人教師は教師生活の行先に若干の不安を感じながらも、隣に座って仕事をしていた先輩教師へと話しかけた。

「先輩…彼みたいなのが…将来とんでもない大物になったりするんですかね？」
「だろうなぁ…、【黒翼】の孫ってだけでも凄いのに、３年の虹村にも入学早々勝ってるし。それに加えて、今も実技成績が無敗だってんだから。」
「天才ですねー。…羨ましい。」
「そう言うな。それだけ努力してるんだろ。」
「…はぁ、僕もデッキ見直してみようかな…」
「そうしろそうしろ。教師になったって、生徒から教わることは結構多いんだぜ？」

新人教師とてデュエリストの端くれ、自分よりも圧倒的に深い才能を持っている鷹矢に対して、妬みが無いと言えば嘘となる。しかし、先輩教師に言われたその言葉が深く心に刺さったのか、先ほどよりは多少表情に明るみが戻っていた。

―…

「おい天宮寺！」
「…む？」

用事が終わったのならさっさと帰ろう。そうしていそいそと玄関へと向かっていた鷹矢だったが、廊下の途中で背後から不意に声をかけられて立ち止まった。
振り返ってみれば、そこには見覚えのある顔が一人。

「なんだ、虹村か。」
「何度言ったらわかるんだ、『先輩』をつけろといつも言っているだろう。」
「何の用だ？俺は急いでいるのだが。」
「…はぁ、相変わらずだなお前も。」

溜息をつきながらも、鷹矢のその態度にも慣れたといった表情をしたのは、エクシーズクラス3年、虹村（にじむら）　高貴（こうき）。
彼は、父母兄弟、家族全員がプロデュエリストだというデュエリスト一家の3男にして、去年の決闘祭にも2年生ながら出場を勝ち取った実力者でもある。
―さらに言えば、昨年のイースト校の代表は全員が2年生という、まさに黄金世代と称された世代の、エクシーズクラスのトップだ。
…今は、『元』トップではあるが。

「いいところで見つけた。どうせお前のことだ、暇なんだろ？ちょっと来い。」

もちろん3年生においても彼の決闘祭代表は確実とされていたのだが、しかし新学期に入ったところで、彼の【黒翼】の孫という新一年生との、初召喚別授業でのエキシビション戦で負けてしまったことは学園でも一大事件として広まっている。
そんな彼は、今では鷹矢を恨んでいるという噂が周囲でも有名になっていた。

「暇ではないのだが。」
「いいから来い。先輩命令だ。」
「…むぅ。」

鷹矢にしてみれば、別に無視して帰ってもよかったのだが、召喚別授業以外にも事あるごとに絡んできて、いつも先輩風を吹かせて絡んでくるこの虹村に対して、どこか苦手に感じているのも事実だ。
―『断っても面倒なことになるんだったら、話を聞いてやる振りをしてやるのも一手だろ？』
遊良に習ったソレをうろ覚えのまま実践する鷹矢は、夏休みだと言うのに何故か学校に来ている先輩に連れられるまま、どこかへと向

かって歩き始めた。

―…

「よし、ここだ。」
「…第一デュエル場…なんだ、また俺とデュエルしたいのか？」
「いいから入れよ。」

そうして、鷹矢が連れてこられたのはイースト校にいくつかあるデュエル場の一つ、主にエクシーズクラスの授業に使われている第一デュエル実技室だった。『実技室』とはいえ、決闘学園だけあってその設備は盛大で、大型ドーム並みの広さを持つスタジアムとなっているこの施設に、これ見よがしに置かれたデュエルフィールドの2つがなんとも贅沢と言える。

そしてその中にはあらかじめ待っていたのだろうか、3人の生徒がデュエルフィールドの上に立って待機していた。

「お疲れ様です虹村先輩。おっ、天宮寺が素直についてくるなんて。」
「珍しいな。あの生意気な天宮寺の癖して。」
「キミも虹村先輩に根負けしたってことね。」
「む？…何の話だ…あと誰なのだ貴様らは。」
「2年の山下と佐藤と川本だろうが。いい加減同じエクシーズクラスの先輩の顔を覚えろ。あと先輩には敬語を使えって何度言えばわかるんだお前は。」

そう言って後ろから虹村に頭を叩かれた鷹矢だったが、そう言われたところでどうしても見覚えのない生徒達に、頭を捻るだけだ。

第一自分よりも弱い生徒だらけのこの学園で、顔を見ればすぐ絡んでくる虹村の顔も、最近やっと名前と一致したというのにそれ以外を全て覚えろと言われても鷹矢にしたら苦痛でしかないだろう。

元々他人の顔など覚える気も無くその必要も感じず、他人に気を

使ったところで良い事など一つもないと言うのが彼の持論なのに。
それを、いきなり自己紹介されたところで記憶に残すことは出来ないだろう。たった今言われた2年生三人の名前など、はなから覚える気もなく、もう忘れている鷹矢は後ろにいる虹村へと向かって言った。

「またこれか。一体こんなことをして何になると言うのだ？」
「いいから上がれ1年坊主。いつも通り3対1だ。それが終わったら俺と続けてデュエルをするんだ。いつも召喚別でやってることだろうが。」

そう、鷹矢が入学初日に虹村に勝った日から、召喚別授業では必ずと言っていいほどに虹村が考案したこの複数対一人のデュエルをやらされている。それだけではない、それが終われば最後に虹村とのサシのデュエルが待っている。
別に、雑魚が何人束になろうが鷹矢からすれば有象無象のようであって全く持って相手にならないのだが、こと虹村においては連戦の後に行うにしては些か厄介な相手でもあった。戦う毎に手の内を分析してくる相手だ。流石はエクシーズクラス元トップというだけあって、虹村相手では気を抜くことが出来ないでいる。

―それでも、負けはしないが。

それが気に入らないのだろうか、上級生でも鷹矢に敬語を使い始める生徒が増え始める中、虹村は何度負けても鷹矢に対して先輩風を吹かせて話すのをやめない。…まぁ、それでも相手になる生徒が少ない中では数少ない実力者なのだから別にいいかと、鷹矢は虹村の要求を呑んですでに待ち構えていた2年生三人へと向かい合った。

「行くぞ天宮寺！」
「覚悟しろよ？」

「今日こそは一撃入れてやるわ！」
「そうか。では頑張ってくれ。」

勇んだ2年生達の言葉の圧に、待ったくもって何も感じていない様子の鷹矢。
そのまま鷹矢は、自分のデュエルディスクを展開すると遊良から入っていたメッセージが気になりつつも…すぐに終わるだろうからと、それを見ずにデュエルモードへと切り替え始め…

―…

「バトル！【ギアギガントX】であの男に！【キングレムリン】でその男に！【恐牙狼　ダイヤウルフ】でこの女に！それぞれダイレクトアタックだ！」

―!!!
「ぐぅっ!?」
「くっそぉ…」
「きゃあ!?」

―ピー…

無機質な機械音が三重に鳴り響き、それは鷹矢が同時に三人の2年生との勝負をつけたところであった。
―まるで相手にならない。
ダメージを一つ負わず、実力差を見せつけるようにして威風堂々と

立つ鷹矢のその姿は、1年生にしては雰囲気がありすぎていて。見る者が見れば、まるで若かりし日の【黒翼】だと評することもあるだろう。

「あーあ。またＬＰ削れなかった。」
「ちっ、どうなってんだお前は。」
「ホント、強すぎて逆に引いちゃうわよ。」

そんな鷹矢に負けた2年生三人は、まるでいつものことのようにしてそそくさとデュエルフィールドから降りると、ディスクを片付けながら虹村の元へと集まった。そして、一言二言彼と言葉を交わすと、何かメモを取り始める。
そうして、それが終わると次に待ち構えていたのだろう虹村が、鷹矢の対面へと立って自身のデュエルディスクを展開し始めた。

「よし、じゃあ次はオレとデュエルだ。少しは疲れたか天宮寺？」
「問題ない。」
「そうか、じゃあすぐに始めよう。」

複数人を相手にしてからの、続けざまの連戦。いくら相手が自分よりも格下だとは言え、全員が自分一人を標的にして全力でかかってくるのだ。三人分の全力を受け切ってから、それ以上の実力を持ったデュエリストが間髪入れずにかかってくることは、ある意味プロデュエリストでも疲れることだろう。
それを踏まえてもなお、鷹矢は全く乱れていない呼吸と思考で虹村に向かう。
まるで負ける気がしないのだろうか。夏休み前だったら、最後に万全の態勢で待ち受けている虹村に対して、多少は焦りもしていた。しかし今現在、その虹村に対してもまるで全然焦らなくなっていることに、鷹矢は気が付いた。
少し前に、祖父に連れられて行ったルード地区。遊良と競い合って

連戦に次ぐ連戦を経験してきた鷹矢にしてみれば、先の2年生三人とのデュエルなどたかが1戦扱いであり準備運動にもなりはしない。どんなデュエルをしたのかも記憶に残していないのか、きっと圧倒的すぎて彼には覚えている価値もなかったのだろう。

「これが終われば帰っていいんだな？」
「…好きにしろ。オレが勝ったら…わかってんだろうな。」
「うむ。虹村に敬語を使えばいいのだろう？」
「違ぇよ！先輩全員にだって言ってんだろ！」

そう、虹村が課してきている条件、それは彼が鷹矢に勝った暁には、鷹矢に先輩を敬えと強制させるものだ。
別に、そんなことに何の価値があるのかを考えたこともない鷹矢だったが、負ける気も無いのだからそんな程度の条件を呑んでやることなど造作もないと、そう言ってデュエルを受けていた。
元々思ったことを包み隠さず、そのまま口に出てくるタイプの鷹矢だ。強制されたところで意識して言葉使いを変えるとも思えないのだが、虹村からすれば意地でも鷹矢を負かしたいのだろう。何度も負けている1年生に、やっきになって挑み続けている。

「いいから始めるぞ。腹が減ってたまらん。」
「この1年クソ坊主が…。調子に乗るのもいい加減にしとけよ？」
「うむ。善処する。」
「…はぁ。もういい、始めるか。」

そうして、口の利き方も知らない1年生と、最上級生のデュエルが始まった。

―デュエル！

「先攻はオレだ！手札から、【聖刻龍―アセトドラゴン】をリリースな

しで通常召喚！その場合、アセトドラゴンの攻撃力は１０００となる。そのままアセトドラゴンをリリース！手札の【聖刻龍―シユウドラゴン】を特殊召喚する！来い、シユウドラゴン！」

【聖刻龍―シユウドラゴン】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／１０００

虹村の場に現れたのは、古代の魂を宿した聖なる刻印を持つドラゴン。神聖なる輝きを放つ龍たちは、進んでリリースされた時にこそ、その真価を発揮することが出来る。

それは、アドバンス召喚でも当然発動できるのだが、一度しか行えないそれよりも、効果でリリースを連続的に繰り返すことこそ彼の得意とする戦法でもある。

「リリースされたアセトドラゴンの効果発動！デッキから【エレキテルドラゴン】を、攻守を０にして特殊召喚する！」

【エレキテルドラゴン】レベル６
ＡＴＫ／２５００→０　ＤＥＦ／１０００→０

そして、さらに現れた通常モンスター。普通ならレベルに似合わぬ攻撃力を持つモンスターなのだが、今は聖刻龍の効果によってその力を封じられていた。雷を纏ったその体も、小さく萎んでしまっている。しかし、それは虹村にとっては常套手段。何も、攻撃力０のモンスターを棒立ちにするために呼び出したのではないのだから。

「行くぞ！オレはレベル６の【聖刻龍―シユウドラゴン】と【エレキテルドラゴン】でオーバーレイ！エクシーズ召喚！来い、ランク６、【聖刻龍王―アトゥムス】！」

【聖刻龍王―アトゥムス】ランク６

ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２１００

聖刻龍を統べる王。虹村が相棒とするそれは、金色に輝く鎧を身に纏う龍王であり、その咆哮によって、未だ眠りしいかなるドラゴン達をも呼び出すことが出来る強力な能力を持つモンスター。その代償に、自身はそのターンに攻撃する力を失うことになるが、どんなドラゴンをも呼び出せるということはただただ脅威だ。

「アトゥムスの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使って、俺はデッキから【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を攻守０にして、守備表示で特殊召喚！」

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／２８００→０　ＤＥＦ／２４００→０

「ほう、良いモンスターだ。」
「ありがとよ！オレは【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】の効果を発動して、墓地の【聖刻龍―シユウドラゴン】を蘇生する！甦れ、シユウドラゴン！」

次々と場を埋めていく虹村。『真紅眼』の名を冠する【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】は、ドラゴン族にとって無くてはならない効果を持ち、もちろん聖刻龍との相性も抜群。攻守が０になっているとはいえ、虹村がそれを承知で残すわけがないと、鷹矢は経験上知っている。
案の定、先ほどオーバーレイユニットとして使われたシユウドラゴンが蘇り、さらに虹村は動き出した。

「魔法カード【召集の聖刻印】を発動し、デッキから２体目のシユウドラゴンを手札に加える！そのまま手札のシユウドラゴンの効果で、フィールドのシユウドラゴンをリリースして手札から特殊召喚！今

リリースされた1体目のシユウドラゴンの効果で、デッキからレベル6の【エメラルドドラゴン】を攻守0にして特殊召喚し、そのままオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク6、【セイクリッド・トレミスM7】！」

【セイクリッド・トレミスM7】ランク6
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２０００

続いて呼び出したのは、星の騎士団として名高い星雲の機械龍。聖刻龍ではないものの、その高い攻撃力とバウンス効果は強力で、セイクリッド使い以外にも扱う者は多いモンスターだ。

多いとは言っても、これだけ強力なエクシーズモンスターはほとんど流通しておらず、虹村とてプロデュエリスト一家の末弟として、家族全員の物であるコレを一時的に借りているに過ぎないが。

それでも、彼がこのモンスターを最大限に使いこなせることには違いない。弱体化させられている真紅の眼の竜へと狙いを定めて、機械龍は咆哮した。

「【セイクリッド・トレミスM7】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使って、【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を手札に戻す！そして、【聖刻龍王―アトゥムス】を除外して、今戻した【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を特殊召喚！一度場を離れたことで、【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】の効果をもう一度発動し、墓地からシユウドラゴンを特殊召喚だ！続けて速攻魔法、【銀龍の轟咆】発動！蘇生するのは【エレキテルドラゴン】！そのまま2体のドラゴンでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク6【聖刻龍王―アトゥムス】！その効果をもう一度発動し、オーバーレイユニットを一つ使って、デッキから【ライトパルサー・ドラゴン】の攻守を0にして守備表示で特殊召喚！」

【ライトパルサー・ドラゴン】レベル6

ＡＴＫ／２５００→０　ＤＥＦ／１５００→０

まるで終わる様子のない虹村の展開。

先攻だと言うのに、すでに場には４体の大型ドラゴン達が出現し、一体は攻守０だとは言え、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンとライトパルサー・ドラゴンの相性の良さは世界的に有名だ。

それ以外にも、高攻撃力を持った２体のエクシーズモンスターが虹村の場にはいて…これを全て突破することは、並大抵の『モノ』では出来ないと断言できるのではないだろうか。

この実力…『元』とは言え、流石はエクシーズクラスのトップに立った生徒と言えるだろう。

「すっげぇ、虹村先輩、また腕を上げたな！」

「ここまでの展開は今まで以上だ！流石虹村先輩！」

「これならいくら天宮寺君だって、ちょっとやそっとじゃ突破出来ないわ！」

そして、その展開を見て２年生の三人は歓喜の声を上げた。

今まで以上の虹村の展開力と、その容赦のない盤面に…思わず嬉しさが勝ったのだろう。なぜなら彼ら三人の表情は、今まで無敗を誇った糞生意気な１年坊主に、初めて敗北を教えてやれるのだと、そう言わんばかりの顔をしていたのだから。

「オレはカードを１枚伏せて、ターンエンドだ！」

虹村　ＬＰ：４０００

手札：５→０枚

場：【セイクリッド・トレミスＭ７】・【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】・【ライトパルサー・ドラゴン】・【聖刻龍王―アトゥムス】

伏せ：１枚

そうして、長い長い先攻1ターン目が終わって、ようやく手番が回ってきた鷹矢。
…およそ、自身が出来る最高の盤面を虹村は作り上げたのだろう。
その虹村は自信満々に鷹矢を見ていたが…しかし当の鷹矢はと言えば、反応が無くただ突っ立っているだけ。
まさかこの男に限って、臆したということはあるまいと、それは虹村とて分かっていたが…いつもならすぐにでもドローをする鷹矢が、まるで動かないこと、それがとても不思議でたまらなかったのだろう。
彼が何かあったのかと、勘繰るのも不思議ではないのだが…

「…おい！どうした天宮寺!?」

—しかし…

「…ぅむ?…あぁやっと終わったのか。すまない、あまりに長かったから寝ていた。」
「…は?」

言い終わると同時に起こった大きな欠伸を隠さずに、鷹矢はいけしゃあしゃあとそう言い放った。
…しかし、何かあったのかと勘ぐってはみたものの、デュエル中の居眠り…
こんなこと、礼儀も何もあったものじゃない。
あまりに舐めた態度を取った1年生を許せるはずもなく、虹村のボルテージは否応にも上がってしまうことは必至。
そうして虹村は、つまらなさそうにして立っている生意気な1年生へと向かって、怒りを隠さずに叫んだ。

「いい加減にしろ！お前、いくら実力があるからと言って、デュエル中

に寝るなんてどういうつもりだ！」
「仕方ないだろう、昨日遅かったんだ。」
「言い訳するんじゃない！いつも言っているだろうが！向かい合ってデュエルをする以上、相手への礼儀は忘れるな！それじゃあいくらトップクラスの実力があっても、プロでは上がっていけないんだってな！」

まるで、出来の悪い後輩の面倒をみる先輩のような台詞で、憤慨したように捲くし立てる虹村。

―そう、虹村が鷹矢に拘る原因として、どうしても鷹矢の態度を許すわけにはいかなかったのだ。

鷹矢がすでに学園でもトップクラスの実力者だということも、虹村は認めていて…
それでも挑み続けたのは、何度言っても聞かないこの生意気な1年生に敗北を教えて、考えを改めさせることが自分に課せられた責任なのだと、そう自分に言い聞かせて。

―過去、プロデュエリスト一家の末っ子として調子に乗っていたとある生徒の鼻っ柱をへし折ってくれた、とある偉大な先輩たち。

相手への礼節と尊敬を大切にすることの重要さを気づかせてくれたソレを次の世代に伝えることは、先に生まれた者として疎かにすることは出来ないのだと、そう理解しているのだから。
いくら『鷹矢を恨んでいるという噂』が蔓延っていても、躍起になって挑んで諦めが悪いと言われても、そんなことは周囲が勝手に言っているだけであって、自分には関係ない。
いつかプロになるだろうこの生意気な後輩を、全力で改心させて、そして成功させてやるのも、先輩としての責務なのだから、と。
もちろん、後輩に実力で劣っているのは、彼にとってはそれはそれ

は悔しいことだろう。だからと言って、妬んでいては始まらないことなど、虹村には分っている。
だからこそ、自身を鍛えることを怠らなかった。プロデュエリスト一家きっての天才と持ち上げられようとも、両親や兄たちを超える才能を持っていると称されようとも、気を緩めることなどなく鍛錬に励んだのだ。
目の前に、自分以上の才能と力を持つ人間がいるのだ、勝てなくても、自分の修練の結果が目に見えて進んでいることがよくわかるし、少しづつ近づいていることも感じ取れているからこそ…
虹村自身の上達のためだけではない。鷹矢に理不尽な連戦を課すのだって、鷹矢のデュエルスキル向上のためだ。かつて自分も同じ特訓を先輩達にしてもらい、それで途切れない集中力と思考力を身につけたのだから。

—だから、今日こそは。

いつもそう思っているからこそ、彼はいつも全力で鷹矢に接するのだろう。それゆえに、鷹矢の態度が…

—虹村は、どうしても…許せない。

「いいか天宮寺！自分より実力が劣る相手だろうと、自分より何か優れた物を絶対に持っているんだ！」

相手を尊敬できない人間は、絶対に大成しない。自身の過去と、家庭の都合で多くのプロと接する機会が多かった経験も相まって、虹村はそれを知っているのであって。
こんなに才能豊かな後輩をそんなことで潰すのは、それこそ自分を変えてくれた先輩たちに申し訳が立たないのだからと言わんばかりに。
しかし、『絶対に勝って鷹矢にわからせてやる』と、そう言いかけて

いる虹村の言葉を遮るようにして…不意に鷹矢が口を開いた。
「だからこそ対戦相手に敬意だな…」
「わかったわかった。だがそれは俺が負けたらの話なのだろう?安心しろ、負けたらちゃんと話は聞いてやる。俺のターン、ドロー。」
「ぐっ!」

先輩の言葉を遮って、思うがままに口走って。
…どうにも聞く耳を持たない、自分の道を突き進む鷹矢。
そんな鷹矢に話を聞かせることが出来るとすれば、鷹矢が言うようにデュエルで勝つしかないのだろう。
しかし、自分の進化した全力を目の前にしても、それでも全く焦りもしない鷹矢の姿は、虹村からも夏休み前よりも大きく見えてしまうのはどうしてなのだろうか。
あれだけ行った修練でも、この1年生には届かないのか。まだ負けていないのに、そんな気分にさせられていることに虹村は気がついて…

「天宮寺、お前…」
「俺は魔法カード、【ナイト・ショット】を発動して、その伏せカードを使わせずに破壊。」
「ぐっ…【デモンズ・チェーン】が!」
「よし。では【ゴールド・ガジェット】を召喚し、効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚。デッキから【レッド・ガジェット】を手札に加える。」

鷹矢お得意のガジェットモンスター達が、早々に彼の場に場に2体揃う。手札消費も少なく、展開力と安定性に優れたこのモンスター達の弱点を挙げるのならば、強いて言えば打点が低いことだろう。
しかしそれも、鷹矢の場にレベル4のモンスターが2体揃ったことで解消される。

エクシーズ名家、天宮寺家の人間として…鷹矢は自身が持つエクシーズモンスターを召喚するために、動きだすのみ。

「2体の機械族でオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】！」

【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】ランク４
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２０００

そうして現れるのは、雪原を生きる狼を模した鋼鉄の列車。どんな荒廃した場所でもたどり着けそうなほどに力強く、その重量級の車体に突撃されては大ダメージでは済まないことだろう。

だが、虹村の場には大型モンスターが４体も犇めき合っている。対して鷹矢は、通常召喚権も使って、出したといえばこの1体のみ。

この重装甲列車が、いくら直接攻撃できる効果を持っていても、群雄割拠のランク４エクシーズモンスターの中には『いかなるモノも全て吹き飛ばす』ことが出来るモンスターだって居るということはエクシーズクラスの人間ならば知っていて当然。

そうだというのに、今鷹矢が召喚したこのモンスターでは、今虹村のライフを半分以上削った所で、次の虹村のターンが回ってくれれば耐え切れずに鷹矢の勝ち目は無いということは必至。

それだと言うのに、無表情の鉄仮面を貫き通す鷹矢に対して虹村は怪訝な顔をして聞き返した。

「どうした？寝ぼけて出すモンスター間違えたのか？」

「そんなわけないだろう。アイアン・ヴォルフの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使って、このターン、アイアン・ヴォルフしか攻撃できなくなる代わりに、こいつは直接攻撃をすることが出来る！」

「…だが、オレのモンスターを避けて攻撃してくるってことは、この場を突破できないって認めたのか？ったく、ようやくお前も…」

「…先ほどから何を言っているのだ？俺は早く終わらせて帰りたいだけだ。速攻魔法【リミッター解除】を発動し、アイアン・ヴォルフの

攻撃力を倍にする。」
「んなっ!?」
【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】ランク４
ＡＴＫ／２２００→４４００

唐突に、かつ無慈悲に。
鷹矢は感情を込めていない声で淡々とソレを発動するだけ。
それは、機械族に限界を無理やり超えさせる魔法カードであり…それに伴う代償として、オーバースペックを課せられた機械がそれに耐え切れるはずも無く…最後には爆発四散してしまう諸刃の剣。
こんな展開方法は、エクシーズモンスターで安定して圧倒してくる鷹矢にしては使う事すら珍しいカードでもある。
普通ならこんな序盤で使うことなどありえなく、最後の切り札として使うのが定石であることは、デュエリストたちには常識であることだろう。しかし、それを全く無視したかの様な鷹矢の姿は、世のデュエリストたちをまるで高みから嘲笑っているかのようであって。

「攻撃力４４００だとっ!?」
「うむ。」

虹村とて、まさか今まである程度喰らいつくことが出来ていた後輩に、後攻ワンショットキルをされるとは思っても見なかったのだろうか。
今までとはどこかデュエルの仕方が変わった鷹矢に、身震いすら起こってくるのをしかと感じていて。自分の今の力を最大限に発揮して作り上げたこのドラゴン達の場を見れば、デュエルが長丁場にすらなるかもしれないと思っていたのにと、虹村は苦虫を噛み潰したような顔をして鷹矢を睨みつけた。
一体、夏休みのこの間だけでこの男はどれだけ成長しているのだろうか。その底知れぬ才能に畏怖すら感じそうだ、と。

そんな虹村など意にも介さず、鷹矢は先ほどの２年生達に止めを刺した時と同じようにして宣言した。

「バトル！アイアン・ヴォルフで虹村にダイレクトアタック！」

―！

「ぐぁあ！」

虹村　ＬＰ：４０００→０（―４００）

―ピー…

ソリッド・ヴィジョンの重装甲列車が、虹村へと躊躇無く激突し…もしこれが本物であったならば、きっとただでは済まないだろう勢いを見せて。

無機質な機械音が鳴り響き鷹矢の勝利を告げると、その機械のモンスターは徐々にその姿を薄くしていき、最後には消えて無くなっていった。

「よし。では俺は帰らせてもらう。ではな、虹村。」

「…くそっ、また負けた！あと敬語はまだしも『先輩』をつけろ！」

「だからそれも俺に勝ったらの話だ。」

「あ、おい！…はぁー…ったくあの馬鹿野郎が！」

既に勝負は決し、本当に早く帰りたかったのだろう、鷹矢は先輩達の制止を聞かずに走り去っていく。

一体、いつになったらあの馬鹿に礼儀を叩き込めるのだろうかと、虹村は盛大な溜息と糞生意気な後輩への怒りを同時に吐き出した。

「あーあ、何か天宮寺の奴、以前にも増して強くなってませんかね？」

「そうねぇ。何か、凄みが増したって言うのかな。天宮寺君、なんだか前より大きく見えたわ。」
「虹村先輩、ドンマイですって。」

2年生達が、口々にそう言って壇上へと上がって虹村に近づいてくる。いくら先輩が連敗しようとも、もう何度目かも分からぬ敗北を見せ付けられても、彼ら2年生にとって虹村が尊敬に値する先輩であることにかわりないのだろう。彼らの眼は負け犬を見る眼ではなく、次こそはやってくれとるだろうと信じている眼だ。
この人は後輩たちの期待を裏切らないということを、彼らもわかっているのだから。

「ちっくしょー…まだ勝てねーのかよ。」
「でも先輩だって腕かなり上げましたよね？次は行けますって。」
「天宮寺に勝てる可能性があるのは虹村先輩だけですからね。」
「お前らなぁ、そんな持ち上げんなよ。」

そうは言っても、全く諦めた様子のない虹村だ。そうでなければ、後輩にここまで負けてもまだ挑めはしないだろうが。
しかし、虹村とてこのまま黙って負け続けるつもりが無いのも事実。来たる決闘祭に、エクシーズ代表として出場するのは自分だといわんばかりに、特訓に精を出すことは忘れない。
噂では、天宮寺が既に決闘祭の代表に決定しているとさえ言われているものの、ある意味それは正解で、既に鷹矢が代表の一人目として決定はしているが今年から召喚別クラスによっての人数制限もなくなっていることは、学生達はまだ知る由もないが。
だからと言って諦める気もないのだろう。だから夏休みだと言うのに、特訓の為に後輩と共に学園にまで来ているのだから。

「お前ら暇か？今日はもう少し特訓に付き合ってくれ。」
「もちろんです。」

「どうせ暇ですし。」
「私もいいですよ。今日デートの約束キャンセルしたんで一日空いてますから。」
「…それは、何かすまないな。」

いい先輩の後ろには、いい後輩がついてくる。それも彼が彼の先輩から教わったことだ。
ソレは一重に、虹村の面倒見がいいこともあるのだろう。どのデュエルでも、彼は後輩たちへのアドバイスを忘れない。先ほどの2年生三人のデュエルだって、改善できる点を見つけてはアドバイスをして、律儀に後輩たちもメモをしていた。それを彼らが次の後輩へと繋げてくれれば…
きっと彼らもいい先輩になって、いい後輩が必ず育つ。
そんな頼もしい後輩たちを前に、立ち止まる暇など無いと言わんばかりに虹村は立ち上がると、後輩たち相手にデュエルを続けていった。

「よし、行くぞ！」

―…

「あ、鷹矢おかえりー…って汗だく!?汚い！早くシャワー行ってきな！」
「むぅ…」

照り付ける太陽にも負けず、全力疾走の後に帰宅した鷹矢だったのだが、冷房の聞いたリビングのソファーに寝転がって悠々自適に雑誌を呼んでいたルキに、開口一番で貶されたために息を切らしながら怪訝そうな顔をしていた。

まぁ、もう昼食の時間など過ぎ去っていたが、寝坊したせいで朝から飲まず食わずだった鷹矢の腹はすでに限界が近かったのだろう。そんな体でも、遊良が準備しているだろう昼食を最後の希望として、走って帰ってきたのだ。鳴り響く腹の音に負けずに、足を止めることは無かったというのに。

しかし、そんなことなど関係ないルキからしてみれば、上半身裸の、汗だくでゼーゼー言っている男子高校生とは同じ部屋に居るのも嫌になることは必至。腹の音で抗議を続ける鷹矢など無視して、先にシャワーを浴びろと言い放った。

それに負けじと、鷹矢はルキに投げつけられたタオルで汗を拭って応戦するが。

「俺は腹が減っているんだ。」

「ダメ！汗臭いし！ご飯なんて後にして！」

「む…。」

こうなってしまっては、ルキは聞く耳を持たない。きっと自分がシャワーを浴びてくるまで意地でも飯を食わせてくれないことを、長い付き合いなのだから容易に分かってしまうのがなんとも残念に思う鷹矢だったが、ふと彼はそこに居るはずのもう一人が居ないことに気がついた。

それと同時に、自分の昼食が準備出来ていないことにも気がついて。

「そういえば遊良はどうした？」

「え？遊良なら上でお昼寝してるよ？」

「珍しいな。遊良が俺の飯を準備せずに昼寝をするなど。」

「いつまでも遊良に甘えないの、もう！疲れてるんだよ、朝から毎日、家事もして鷹矢の世話もして！」

「それと俺の飯は別だろう？」

「いや一緒でしょ…どんな感覚なのよー、もう！」

なんとも食い意地を引かない鷹矢に呆れかえるしかないルキ。
しかし考えてみれば、確かに生まれて直ぐから一緒に居て、年中セットにされていた遊良と鷹矢だ。
今更お互いへの気遣いなど、例え意識したって出来るはずも無く、鷹矢にしてみれば遊良が自分の飯の仕度をしてくれることはもはや呼吸と同じレベルの当たり前なのかもしれない。
なんだかんだ言っても面倒をみる遊良も遊良だが、彼に関しても鷹矢の面倒を見ることが当たり前になっているのも大きだろう。
昔からの習慣というか、『慣れ』を通り越して、それが『普通』になっている。
…それと同時に、遊良にしても鷹矢に対して家族以上に遠慮が無いのだから、それこそお互い様だろうけれど。何せ、過去のこともあって、他の人間にはどこか一線を引く遊良も…鷹矢相手には全く壁など作らないのだ。
それは、鷹矢が遊良を、『一緒に居るのが当然の片割れ』と思っているように、遊良もまた鷹矢を『当たり前に隣にいる奴』だと思っているのだから。

「でも遊良のこと起こしちゃダメだよ？」
「む？なぜだ。俺の飯が無いと言うのに。」
「もー、遊良から頼まれてるからそれくらいやってあげるってば。」
「それなら仕方ない、我慢して先にシャワーに行ってやるか。」
「そうそう。最初から素直にそうすれば私だって直ぐにご飯の準備してあげたのに。」
「頼んだぞルキ。俺は火の点け方も知らん。台所になど立ったことも無いからな。」
「偉そうに言わないの、もう！じゃあカレー温めておくから早く浴びてきちゃいな。」
「うむ。」

…

「上がったぞ！」
「早ぁっ！何その早さ！ちゃんと洗ったの!?」
「うむ！」

そうして、我慢してシャワーへと向かった鷹矢だったが、まるで烏の行水の如く速さで上がって来たのには、流石のルキも呆れかえってしまった。
まだカレーの鍋に火をかけて2分と経っていないのに、一体この男はどこを洗ってきたのだろうかと、そう言いたげな顔をしている。
仕方ないので鷹矢が食べるであろう量を取り、レンジで温めて食わせたルキだったが、その幼等部からまるで変っていない鷹矢の食べっぷりには苦笑いしか出てこない様子。
何せ、鷹矢専用の巨大皿に乗っている、大食い選手権も腰を抜かす量に盛り付けられたカレーが…恐るべきスピードで吸い込まれて行くのは見ていて不思議でならない顔をしていたのだから。これではまるで、いつまでも吸引力の変わらない掃除機だ。
そんな鷹矢のカレーが残り3分の1を切ったあたりで、不意にルキは問いかけた。

「あ、そういえば何でこんなに遅かったの？遊良がメッセージ入れてたでしょ？」
「む？あぁ、そういえばそうだったか。デュエルしていたからな。」
「え、今日は職員室に呼ばれてただけなんでしょ？」
「うむ。それで帰りに絡まれたから遅くなったのだ。」
「ふーん。でも夏休みなのに誰が学校に居たの？」
「あぁ…あいつだ…あの…」

多分、必死で思い出そうとしているのだろう、何があっても食器から手を離すことが無い鷹矢だというのに、腕を組んで天井へと視線を

やって、一生懸命になって記憶からひねり出そうとしているのがルキにも手に取るようにわかる。
そんな、相変わらずの表情の少なさではあったが、ルキにはその鉄仮面の下にある鷹矢の表情が簡単にわかってしまった。
―きっと、本人は全力で顔を歪めて、眉間に皺を寄せて考え込んでいるつもりなのだろう、と。

ルキとて、鷹矢が『天才』と称される他にも、学園で『鉄仮面』や『無表情』と言われていることは知っている。まぁ、それは遊良のソレと違い、陰口ではなく事実なのだから特に何も感じないのだろうが。
しかし、考え込んでいる鷹矢の姿を見ている限り、ルキには彼がいくら学園で鉄仮面だと言われても、いくら他の生徒から無表情だと言われても、この馬鹿に関しては昔から何も変わっていないのだろう。
そんな中でも、ふとルキは思う。確かに昔の鷹矢は、よく表情をコロコロと変え、感情が全面に出ている子供だったのだが、それがいつからか今のように感情を表に出さず無表情でいることが多くなった。
遊良に言わせれば、今でも鷹矢ほどわかりやすい奴は居ないとまで言い放つのだが、流石にルキでも鷹矢の表情の少なさにはたまに何を考えているのか分からなくなる時があるのも事実。
きっと遊良の眼には、今でも七変化のように変わっている鷹矢の表情が手に取るようにわかるのだろうが、それでも少なからず鷹矢が変わってしまっていることには違いない。
それでも、彼女にだってその心当たりはある。…もちろん、遊良が蔑まれ始めてからだ。

―『遊良の敵は、全員許さん。』

昔、鷹矢が言ったことを思い出すルキ。彼が人の顔を覚えることを必要とせず、目上の人間にも敬意など持たない理由も、きっとそこにある。

自分の片割れの事を、蔑み、馬鹿にし、乏し、無視し、見下し、傷つけた人間は、皆等しく同じ『敵』なのだ。
きっと、彼の心には、遊良の敵は全員同じにしか映らないのではないか。
今でこそ、遊良の敵は遊良自身に何とかさせるスタンスの鷹矢ではあるが、幼少期は遊良を馬鹿にした人間には誰であろうと真っ先に噛みついていたのだ。だから、強烈な印象を与えた事件や、強い個性を持つ『敵』ならまだしも、それ以外は有象無象でしかないということなのかもしれない。

「一人は虹村なのだが…後は忘れた。多分どうでもいい相手だったのだろう。デュエル自体もすぐ片づけたからよく覚えておらん。」
「ふーん…って虹村ってそれ先輩じゃんか！でもまあデュエルしただけならいいけどさ。少しは遊良に迷惑かけないようにしないと。」
「む？」

そう言ったルキの言葉の意味を、よく理解できていないのか、鷹矢は先ほどよりも怪訝な声で聴き返す。
迷惑とは、一体どういうことなのだろうか、と。鷹矢にとっては、師の元での修業時代から遊良の飯を食うのは当たり前であって、家事もこなすのは最早日常、彼にとっての『普通』なのだ。それに疑問も抱かなければ違和感もないと言わんばかりに。

「決闘祭で遊良と戦いたいんでしょ？だったら少しは遊良にも楽させてあげてさ、そうしたら万全の遊良と戦えるじゃん。」
「…そうか。善処しよう。とりあえずあいつはこのまま寝かせておいてやるか。」
「そうそう。」
「明日は遊良に宿題を手伝ってもらう予定だからな。」
「っておい！何でだよ！私の話聞いてた!?」
「うむ。聞いていたぞ？だから遊良に迷惑をかけないように、昼寝し

たら少しは自分でやるつもりだ。」
「おぉー…いや全く褒められないけど。でも鷹矢にしては少しは進歩してる気がするのが悔しい。」

そんなこと言って、きっと夜まで寝てそのまま宿題の事など忘れて夜更かしするのが目に見えているルキではあったが、この馬鹿が確かに言葉に出すのは珍しいのだろうか。遊良がこの場に居ないとはいえ、今までは絶対に思っていても照れくさくて言葉にしなかったというのに。
それ程までに、遊良と大舞台で戦うことが楽しみなのだろう。もうすでに食べ終わっているカレーの皿を、自ら進んで流し台に持っていこうと立ち上がっているのが余計にルキには新鮮に見える。

「おかわりだ！足りん！」
「まだ食べるの!?私の感動を返せこのやろう！そんなに食べたら夜の分無くなっちゃうよ!?」
「大丈夫だ、問題ない！」
「いやいや、遊良に怒られると思…」

―！

前言撤回、やはり人間はそんなに急には変われないのか、どこまでも食い意地が優先される鷹矢に思わずツッコまずにはいられないルキだったが、そんなルキの声を遮るようにして、唐突にリビングの扉が開いた。
そこには、まだ眠そうな目をした遊良の姿。

「…何だ鷹矢、帰ってたのか。」
「うむ。」
「あ、ごめん遊良、うるさかった？」
「流石に目が覚めるって。まぁそろそろ起きるつもりだったからいい

けどさ。」

下で騒いでいたために目が覚めてしまったのだろうか、遊良が眠そうな目を擦って一階へと降りてきたのだ。

そんな遊良は、鷹矢が持っている彼専用の巨大皿と、微かに残るカレーの匂いで何が起こっているのかを察したのだろう。

冷蔵庫を開け、ペットボトルのスポーツドリンクを一口飲んで喉を潤すと、立ったまま皿を持っている鷹矢へと促すようにして言った。

「どうせまだ食い足りないんだろ?そんなことだろうと思って冷蔵庫にもう一つカレー作ってあるからさ。昼の分は食っちまってもいいぞ。」

「でかした遊良!おかわりだ!」

そう言って、鷹矢は嬉々とした声で遊良に自分の皿を渡すと、目にも止まらぬ速さで先ほどまで座っていた椅子に腰かけた。

待ちきれないのだろうか、スプーンを離さずに、今か今かと待ちわびる。

それを自然に受け取ってカレーをよそってやる遊良も遊良なのだが、そんな鷹矢の姿にもはやルキには溜息しか出てこないのか。先ほど忠告し、鷹矢も珍しくソレを聞き入れようとしていたというのに、今はカレーのことしか頭になさそうなのだから。

「もう、遊良ってば鷹矢に甘いんだから。」

「む?俺はカレーは辛口だぞ?」

「いや、そういうことじゃねーって。…でもいいんだよ。どうせこいつ、腹いっぱいになるまで腹鳴らすんだしさ。」

「いやまぁそうだけどさ。それにしても遊良準備良すぎじゃない?言ってくれればこんなに騒がなかったのになー。」

「え、寝る前に鷹矢にメッセージ入れておいただろ?『ルキに言い忘れたけど、夜の分はあるからカレー好きなだけ食っていいんだってルキ

に言えよ』って。」
「む？本当だ。」
「ちょっと鷹矢ー、それならそうと早く言ってよねー、もう！」
「別にいいって。今起きないと夜寝れなくなるし丁度良かった。」
「むー。遊良がそういうならいいけど。」

自分の端末を出して、未開封だったメッセージを確認し始める鷹矢だったが、よほど腹が減っていたために見るのをすっかり忘れていたのか。
ルキとて、初めから鷹矢がそれを見ていれば遊良を起こさなくて済んだというのにと、騒いでしまったことを軽く悔やみながらも、完全に覚醒した遊良が気にした様子もないことで安心した様だ。

「けど宿題は手伝わねーぞ。」
「なっ、遊良、お前一体どこから聞いていたのだ!?」
「聞こえてきたんだっての。つーかまだ日にちあるんだからさっさとやっちまえよな。今年こそは手伝わないって決めてるんだから。おかわりやらねーぞ？」
「むぅ…し、仕方ない…」
「あ、やっぱりちょっと進歩してる。」

カレーを人質にされては仕方ないのか。やはり多少素直になった鷹矢に、どこか違和感も感じるルキだったが、それでも2杯目とは思えない程の量をこれまた先ほどまでと変わらぬスピードで食べ始める鷹矢を見て、ルキもどうでもよくなっていった。

…夏が、過ぎていく。
いつものように、変わらぬ日常で。

ｅｐ１７「止まぬ感情」

「眠い…とてつもなく眠いぞ遊良…」
「うるせぇ…俺だって眠いんだ…」

夏休みが開け、始業式ということもあってか、鷹矢にしては珍しく時間に余裕をもって登校していた。しかし、その表情はいつも以上に眠そうであり、それに並んでいる遊良ですら欠伸を隠せずに歩いている。

…まぁ、その理由はわかりきったことではあるのだが。

「結局宿題終わらなくて徹夜コースじゃねーか…。寝てたのに起こしやがって…」
「お前が最後まで見せてくれなかったからだろう…俺は頑張ったぞ…」
「それに喝いれる俺の身になれよな…俺の方が頑張ったんだぜ？」

そう、夏休み最終日まで宿題に手を付けず、夜中に気づいて焦って進めた鷹矢だったのだが流石に一人では限界が来たのか、翌日に備えて安眠していた遊良を無理やり起こして泣きついてきたのだ。実際に涙を流してはいないが、それに近い切羽詰まった雰囲気を全面に押し出して。

遊良とて、計画的に進めず最終日まで宿題を放って過ごしていた鷹矢を甘やかす気などなく、寝そうな鷹矢を物理的に起こし続けて、結局すべて自分でやらせたのだが、それに付き合わされた遊良からすれば、迷惑甚だしいことこの上ないだろう。

案の定、この展開を読んでいたルキは、その日は遊良と鷹矢の家には泊まらずに帰っていった。

「…こんなことならルキん家に泊めてもらえばよかった…ゆっくり寝たかったぜ…」

「む？それならルキにも手伝ってもらえたのか…迂闊だった…。」
「お前は留守番に決まってんだろ！ったく、一人でやってくれよな。」
「うむぅ…」

…まぁ、それでもなんだかんだ言って鷹矢が寝ないように見張っていた遊良も遊良なのだけれども。いくら鷹矢が決闘祭前に問題を起こさないよう教師に念を押されていたからと言って、そんなこと遊良には関係ないというのに無意識に『仕方ない』と思って面倒をみるのは、もはや彼にとって反射レベルとでも言うのだろうか。
しかし、朝からそんな風にしてトボトボ歩いている二人の後ろから明るい声が響き、二人は立ち止まる。振り向いたそこには、間違うはずもない、ルキの姿があった。

「おはよー。…あー、やっぱり徹夜したんだ。」
「うむ…」
「すげー眠い…。今日式の途中絶対に寝るぞコレ…」
「もう、二人してしかたないなぁ。今日は学年代表の発表があるんだからさ、ちゃんと起きててよ？」
「…あ、それ今日だったっけ。」
「…うむ。」
「…はぁ、ダメだねこれ。」

学年代表の発表は、決闘祭に是が非でも出場したい学生のいわば分水嶺。ここで名を残す生徒とそうでない生徒、イースト校での自分の序列が否応にでも貼り出されるのであって、きっと気が張り詰めているというのに。
何せ、決闘祭に出られるか出られないかは、その後の人生に付きまとう『プロ』という一つの選択肢に、大いに関わってくる問題なのだから。まぁ上級生に比べれば、まだ先のある1年生は多少いい方ではあるが。
しっかり者のはずの遊良にも、すでに瞼が下がってきている鷹矢に

も、ルキは一抹の不安を覚える。こんな調子で本当に大丈夫なのだろうか、と。フラフラし始める鷹矢の足取りが、それを余計に駆り立てて。

「立ったまま寝て、式の最中に倒れても知らないからね！」
「…うむ。」
「おい、そっちは電柱だぞ！」
「むぅ!?」

そのまま寝ぼけた足取りで、電柱に頭を強打した鷹矢は、痛そうにして額を擦っていた。

――…

「ほ…本当に大丈夫でしょうか…」
「暴動が起こるぞ…」
「知らん！俺は責任を取らんと言ったぞ！」

苛立ちと不安の混ざった声を上げたのは、太陽に照らされてどこか輝いている1学年の学年主任と、数人の教師だ。彼らは、二階にある職員室から事の顛末を見守っていた。

先ほど始業式が無事に終了し、後は帰るだけ。しかし、生徒たちには帰る雰囲気はなく、誰もがソワソワして落ち着かない空気に包まれている。それはなぜなら、現在多くの学生達がこぞって中庭へと駆け寄ってきていたのだが、全員の意識は中庭の中心にセットされて未だ隠されている3つの掲示板へと向けられていたことに他ならない。

1、2、3年生の、特に自分の名が書いてあるだろうという自信のある生徒達が詰め寄って、これから発表される学年代表の開示を、今か今かと待ちわびている様子で。

「はぁ…天城の名前をみた1年生が一体なんて言うか…。」
「お！そろそろだぞ？」

そんな教師たちの心配も虚しく、非常にも時間は来てしまう。厳重に縛られた覆いを、外しにきた教員が近づいてくるのを見て、生徒たちの興奮も最高潮に達していた。そして、一人の教員が拡声器を手にして言う。

『それでは！【決闘祭】へ向けた！選抜戦の学年代表選手を！これより発表する！』

―！

その呼びかけに呼応して、一斉に歓声が上がるこの中庭。
この日の為に努力してきた生徒達だ、特に3年生にとってはこれが最後の決闘祭。それに賭ける意識は、きっと下級生よりも高いのだろう、待ちわびる表情には鬼気迫るものさえ感じられていて…

―そして、その覆いが、切って落とされる…

「あ！あったあった！オレ、代表候補になれた！」
「…な…ない…」
「やったぁ！私の名前もあったぁ！」
「いいなぁー…私はやっぱりダメかー…」

2、3年生の掲示板の前で、嬉々としている学生もいれば落ち込む学生と、その反応は様々だ。そんな中で、職員室にいる教師たちの視線はこぞって1年生用の掲示板へと向けられている。大きな騒ぎにならないだろうか、職員室まで詰め寄ってこないだろうか、そんな心配をしている顔をして。

それだけではない。遮蔽を落とした教師も、気が気でなかっただろう。順番的に最後の発表となる1年生に、囲まれて暴言を言われないだろうか、引きつった顔で事の顛末を覚悟していた。

—そして…

「なん…で…?」
「うっそ…何よこれ…」

しかし、てっきり大問題になるかと思われた1年生の候補発表の反応はと言えば、何故か皆信じられないものを見たような表情の生徒が多いではないか。中には自分の名前があるにも関わらず、その名前の羅列を見てがっくりうなだれている生徒まで居た。微かなざわめきが起こってはいるが、この空気はとても暴動まで発展しそうではない。

しかしその原因は、生徒達の方からしたら明らかであって…

「何で…天城のヤローが…」
「あ…天城の癖に…なんでここに名前が書いてあんだよ!?」
「無所属…天城　遊良?」

驚きのあと、次第に暗い雰囲気に包まれる1年生たち。噂を吐き捨てている教師陣にも、自分たちには関係ないとしていた上級生たちにも、きっと彼らの気持ちはわからないだろう。

暴れまわっていた調子に乗る落ち零れを、自分を過信して倒そうとしていた者。

高嶺の花に付きまとうストーカーのクズを、我先に追っ払おうとしていた者。

Ｅｘデッキが使えないくせに決闘学園にしがみつく出来損ないを、見下して追い出そうとしていた者。

そう、ここに名前がある1年生は皆、夏休みが始まる前、所構わず・誰彼構わず、思わず引いてしまうぐらい容赦の無いデュエルで、1年生の間を暴れまわっていたあの天城　遊良に、圧倒的敗北を与えられた生徒ばかりだったのだから。

今沸き起こっている恐れと嫉妬と僻みは、卑下や蔑んできた彼らには容認できないモノ。Ｅｘ適性が無いくせに、自分たちと同じ高さに居ることをどうしても拒みたいのだろう。しかし、これまで天城　遊良と言う存在を格下と同義語にしてきた彼らの心には、今ははっきりと刷り込まれている。

―天城　遊良には、敵わない。

「…天城が代表候補…オレダメだ……辞退しようかなぁ…」

「俺も…手も足も出なかったのに…あいつに勝てるわけないじゃん…」

「あ…天城ぃ…天城の癖にぃ…」

漂う悲壮感は、まだ始まってもいない代表選抜戦の結果がもう出ているかのよう。

これに落胆している学生達も、遊良以外であったらここまで落ち込まないはずだ。ここに名があるという事は、自分の実力が1年生の中でも上位にあるという証拠。いくらこの中の誰かに負けたことがあったとしても、本選ではそれに喰らいついてやるといった感情が沸き起こってくるはず。

…しかし、彼らにはそれが出来なかった。

なぜなら、Ｅｘ適性が無い天城に、負けたという事実。Ｅｘデッキを使うことが出来ない落ち零れに、完膚なきまでに負けたという思い出が、彼らのプライドを深く…それは深く削りとっていたことに他ならない。

それは、今まで遊良が暴れた結果なのだが、しかし当の遊良にしてみれば、こんな状態になるとは思いもしていないはずだ。

何せ、暴れまわったのは、自分が代表候補に選ばれても誰にも文句を言わせないようにしてきたのであって、それがここまで他の生徒に刻み込まれているということなど、期待もしていなければ想像もしていないのだから。

本人の知らぬ所で、そのまま散り散りになって帰っていく1年生の違和感を察知した上級生が、1年生の掲示板まで見に来ていたが、1年生の発表時よりも遥かに大きい驚愕が、巨大なざわめきとなって中庭に響いていた。

―…

「ちょっと聞いた!?天城のこと！」

「うんうん！あの天城君が代表候補だってね！信じらんなーい！」

「お前も名前あったんだろ？」

「無理無理…俺あいつにこの前ボロ負けしちゃったんだよ…」

式も終わり、後は帰るだけという時間帯にも関わらず、1年生フロアではその話題で持ちきりだった。しかし、それは入学当初では考えられない空気、蔑みよりも驚愕と悲観が勝っている様子だ。きっと、遊良が暴れまわるという行動を起こさなければ、絶対にこんな空気にはならなかっただろう。…まぁ、それだったらきっと代表候補になんて選ばれてもいなかっただろうが。

そんな校内の空気を他所に、すでに人もいなくなった中庭で盛大な笑い声が上がった。

「あはははははっ！ゆ、遊良が！遊良がガッツポーズしてる！」

それは、すぐさま噂が広まってきて自分の候補入りを知った遊良が、面倒ごとに巻き込まれることを確信していたのでさっさと学園からの帰路につこうとしていたところで、帰り際に自分の名前が書かれた掲示板を実際に見にきて、嬉しさのあまり一人でガッツポーズをし

たところを丁度いいタイミングでルキに見られ爆笑されていたからだ。
　笑い転げるルキの目には笑いすぎて涙が浮かんできているし、その全く遠慮のない笑い方に遊良もポーズを解くことが出来ずに固まっている。辛うじて強がってはみるものの、その姿には全く説得力がない。

「わ、笑うんじゃねー！」
「遊良がっ！遊良のガッツポーズ！こ、これはレアだよう！あはははははっ！」
「…くっそ…」

　赤面していそうな熱さを顔に感じながらも、ゆっくりとガッツポーズを解く遊良。しかし、まるで良い物を見たと言わんばかりに爆笑するルキの声は、もう遊良には一周回って心地よくすら聞こえてきてしまうのもどうなのだろうか。恥ずかしい事には変わりないが、全く遠慮がないことが逆に救いなのかもしれないと言わんばかりに。
　しかし、まだルキだけでよかったものの、もしここに鷹矢が居たら確実に弄り倒されたことに違いないだろう。明日に正式発表される自身の代表決定のスピーチに向けた、細かい打ち合わせがあるらしく鷹矢は呼び出されていたが、それで本当に良かったと遊良は感じてもいた。
　そしてひとしきり笑って落ち着いたのか、呼吸を整えたルキが口を開いた。

「あー、お腹痛い。…でも珍しいね。遊良がここまで喜ぶなんて。」
「仕方ねーだろ？公平に選出するって言ったって、俺がちゃんと候補に挙がるか不安だったんだからさ。」
「えー？先生が大丈夫だって言ってたし、遊良成績良かったじゃん。」
「だってさー…」

そうだ、これは想像通りの結果であって、予定通りのはず。なにせ、これに選出されないことは、そのまま師の引退にまで直結する問題。遊良にとって、決闘祭には何が何でも出場しなければならないのだから。

―そう、覚悟していたはず。それなのに、なぜか沸き上がる感情を抑えきれなかった。

【決闘世界】に則った公平な選出。【黒翼】が取り付け、【白鯨】が約束したことは、確かに行われていて、成績的に見ても遊良が落ちるはずがない。

いくら成績以外にも、学園生活内での総合的な評価が選出基準なのだとはいえ、これでもし遊良が落ちることがあればきっと鷹峰が教育部に殴り込んで行って、改ざんなどされていない純粋な遊良の評価成績を手に入れることだろう。

それで遊良の成績が本当に選出基準に至っていなければ、鷹峰とて暴れないと約束しているのだし、終業式に配られた成績表から控えめに見積もっても遊良が落ちることなど有り得ないであろう成績であったことは確かなのだから。

それなのに、ここまで喜ぶのは遊良にしてはかなり珍しいと言わんばかりのルキの表情。

―しかしその感情の出どころは、遊良にははっきりとわかっていて…

「…ちゃんと認めてもらったのが…嬉しかったんだよ…」

明らかに照れているのだろう。顔をうつむかせて、ルキに見せないように隠している遊良。

―Ｅｘ適正が無いと宣告され、その日から何においても認められなくなった少年。

いくら努力してデュエルの実力を上げても、いくら筆記や実技で好成績を残しても、それでも何も変わらなかった。そんな生活をずっと送って来たのだ、ここに自分の名があるのはある意味師のおかげとは言え、それが嬉しくないはずがない。
そんな遊良の姿と言葉を聞いたルキの胸中には、今にも何かが込みあがってきそうであって…

「…うん…おめでと遊良！今日はお祝いしよっか！」
「…鷹矢に全部食われる気がするからいいよ。」
「もう、そんなこと言わないの！鷹矢と遊良、二人の代表をお祝いしなきゃね！」
「まだ俺は代表『候補』だけどな。」
「でも代表になる気なんでしょ？当たり前だけど。」
「…あぁ。先生のこともあるし、何より鷹矢にだけは負けたくない。」
「だね！じゃあお買い物いこ？ウチのお母さん達にも報告しなきゃ、きっと喜んでくれるよ！」
「…そうだな！」

自分の力が、やっと認められた気がした。Ｅｘ適正が無くとも、デュエリストとして歩んでいいのだ…と。それは、世界から蔑まれていた少年にとって、切望していたＥｘ適正を捨てた彼にとって、何よりも嬉しい事だろう。
そしてルキが言うように、高天ヶ原家にも報告しなければいけないことを理解している遊良。ルキも鷹峰の元で修業していたとはいえ、遊良のことも何かと気にかけてくれていた。態度には出さなくても、大人の世界ではきっとルキの両親も何かと言われていたに違いないのに、それでも遊良の敵には回らなかったのだから。
そうして、確かに感じる嬉しさを胸に、遊良とルキはそのままいつものスーパーへと向かい始めた。

―…

「オレ…辞退します…」
「おい、お前まで…」

もうこれで何人目になるだろう、涙ぐみながら辞退を告げてくる1年生の数の多さに、放課後の遅くまで教師達が対応に追われていた。
何せ、先ほど学年代表者を発表したばかりだというのに、選出された1年生の多くが栄誉ある決闘祭の代表を降りると言うのだ。1年生の辞退は過去の選出時にも数人ほどいたが、しかしいくら2、3年生との実力差があるからと言っても、この数は尋常ではないのだろう。
このペースでは、あの例の問題児を除いて1年生の代表候補がいなくなってしまうではないか。そんなこと、絶対に容認するわけにはいかない。学年代表者に名前を載せることだって反対だというのに、まさかそのまま不戦勝で代表にさせるというなど前代未聞なのだ。辞退を告げに来ている1年生を何とかして繋ぎとめようと、この教師の顔にはそう書いてある。

「か、考え直せ！お前の実力なら上級生にだって…」
「オレ…天城に何も出来ずに負けたんです！だから嫌ですッ！」
「あ！おい待て！…くっ、どいつもこいつも天城天城って…あの落ち零れが一体なんだってんだよ！くそっ！」

しかしその理由は明確で、皆口をそろえて『天城に負けたから』としか言わないではないか。対応に追われる教師達からしたら、そんなバカな話で辞退させたくないというのに、一体何故そんな馬鹿げた嘘までついて辞退しようとするのか不思議でならないと言わんばかりの表情をしていた。

選出した生徒は皆、自分が召喚別授業で育ててきた見込みある生徒たちだ、とてもじゃないが、Ｅｘデッキが使えない天城程度に負けるなんてことがあるはずがない。選出に至った学生達の実力を、その目で見て理解している教師達のほとんどはそう考えているのだろう。

しかし中には、職員室のほんの一画でそんな喧噪など関係ないかのようにのんびりしている人間もいる。それは、辞退の対応などせずにその姿を傍観して話をしている、天城の選出に反対を述べなかった他グループの教師達である。

「はは、暴動よりもこっちの方が面白いな。なんかすげーし。」

「天城君が、１年生のほとんどを倒したって噂が効いているんですかね？」

「まぁそうでしょう、あんな負け方した学生からしたら、二度と天城と戦りたくないでしょうし。しかも今度は舞台の上でですからね。」

そう、今ここに辞退を告げに来ている１年生達とてわかっているのだ。

次に天城と戦うのは学年選抜戦か学校代表戦。ただの野良試合で天城に負けるのではない、このままでは上級生にも、ここには居ない上級生担当の教師にも、もっと上の役員達もいるそんな中で、皆が見下しているあの天城と戦わなくてはいけない。

今までの１年生達からしてみれば、鼻で笑って見下すだけ。図々しく学年代表に選ばれたあのクズに、公衆の面前で無様に負かしてやるだけだと考えることだろう。

しかし、今の彼らでばもうそんな考えなど出来ない程に、天城との実力の差を見せつけられてしまっているのだ。逆に、公衆の面前で天城との有り余る実力差を見せ付けられる学生からしたら、きっと恥ずかしくてその場に立ちたくないことは必至なのだから。

そう思わせるように暴れまわった遊良の目論見は、違う意味で成功していたのだが、本人にそれを知る余地は無いが。

職員室内が暗い雰囲気に包まれていた。

―…

「キャー！泉センパーイ！」
「代表候補、おめでとうございますセンパイ！」
「わぁ、みんなありがとう！」

多数のファンに囲まれて、決闘学園イースト校3年、シンクロクラス所属の泉　蒼人は廊下で手を振る女生徒たちへとほほ笑んだ。
昨日発表された代表候補、3年生の中でも、融合クラスの紫魔より代表確実と噂される彼は、ファンクラブがあることでも有名な、いわゆるイケメン決闘者というのが周囲の反応であり、当然女生徒達からの人気は高い。
去年の決闘祭でも2年生で代表へと上り詰めたことで、その実力が高いことは周知の事実であるし、そのルックスと去年の決闘祭ベスト4という結果でメディアに取り上げられたこともあってか、彼は世間から卒業後のプロ入りを強く熱望されていた。

「おっ！蒼人、選抜戦、頑張れよ！お前なら紫魔なんかに負けないって！」
「うん、頑張るよ！」
「期待してるぜ？泉が代表なら誰も文句ねーからよ！みんな応援するぜ！」
「ありがとう！みんなの為にも、絶対に勝つよ！」
「おう！」

しかし、だからといって男子生徒から僻みを受けるかと言えばそうではなく、裏表のない彼は誰に対しても平等だ。彼を応援する男子生徒も多く、仲間意識が高いのも教師達からの評価の高さにもつながっている。
その誠意が皆にも伝わり、融合クラスの一大勢力となっている紫魔

姓の人間たちを除いて、こぞって彼を応援する学生は多いのだが、それはファンクラブの会員を含めてもイースト校の半数以上は彼の味方と言っても過言ではないだろう。
　その歓声と期待によるプレッシャーを感じず、むしろ奮起に変換できる彼の精神力も、彼を応援する者達からしたら魅力の一つなのかもしれない。

「なぁ蒼人、1年生のＥｘ適正が無い奴、知ってるか？」

　そんな中で、一人の3年生が蒼人に問いかけた。3年生の中でも彼の天城少年の噂は届いており、そんな彼が1年生の代表候補に挙げられたことは、一晩経った今でも学園中で噂となっているのだから。1年生の中には、何故か天城の代表発表と同時に辞退したという意味の分からない後輩がいることも、その噂を助長させる一つとなって。
　そして、それを快く思わない上級生がいるのも確か。自分が選ばれていないのに、どうしてあの落ちこぼれの1年生が選ばれているのか、と。
　もちろん、品行方正なこの泉　蒼人の耳にも、天城　遊良の噂は聞き届いており…

「あぁ！それって…えっと、天城君…だったよね？前にも1年生のほとんどを倒したって聞いてさ、僕、彼と一度戦ってみたかったんだ。」
「うぇ、マジかよ。Ｅｘ適性ない奴だぜ？何か気持ち悪くねぇか？」
「…え？そんなこと無いと思うけど。」

　夏休み前だったか、シンクロクラスの一年生の間で噂になった、急に頭角を現してきた無所属だという男子生徒。
　そんなに強い1年生なら、きっと何か強い信念や考えがあるのだろうと、是非直接会って話しをしてみたり、全力で楽しく戦ってみたりしたいと思っていたのだが、何故か彼に関する話はこれ以外には蔑みや見下しがほとんどを占めていた。そのせいで自分が知りたい彼に

関する良い話は聞けず、公式の大会などにも出場経験が無かったということから調べるにも限界があったことを思い出す蒼人。
実は、我慢できずに直接会いに行ったこともあるのだが、授業が終わると早々に下校するか、どこかでゲリラ的なデュエルを突然行うらしく、生徒会の実務もある蒼人は彼と邂逅することは叶わなかったが。

「僕が3年代表になったら彼と戦えるかな？今から楽しみだよ。」
「…やっぱお前すげぇな。絶対そんな落ちこぼれに負けんじゃねーぞ！」
「あ、でもまずは3年生の紫魔君達と戦わないと。他のみんなも強いから、それに集中しなきゃいけないね。特に虹村とは今イーブンだし。」
「じゃあ放課後、皆でデュエルに付き合ってやるよ！虹村に負けずに特訓しようぜ!?」
「あ！私もやるやる！泉君と一回デュエルしてみたかったんだ！」
「うん！ありがとうみんな！」

いくら強い後輩とのデュエルが楽しみでも、目下を疎かには出来ない。同級生の仲間達からの期待を裏切らないためにも、苦労して自分を育ててくれた祖父母に恩を返すためにも。
そしてプロの世界にいる、とある【王者】と絶対に戦わなければいけないという、絶対の目標のためにも。
自分が憧れる前シンクロ王者、イースト校理事長である【白鯨】のような、凛としたデュエルを志す蒼人は、彼が愛するナチュルの森の仲間達と共に、微塵も油断なく望む覚悟を決めていた。

…その足元に漂う黒い靄に、気がつかぬまま。

ｅｐ１８「始まる、代表選抜戦」

「行くよ！【ナチュル・ガオドレイク】で、【Ｍ・ＨＥＲＯ　ダイアン】に攻撃！」
「ぐっ……っくそがぁ！」

―ピー…

無機質な機械音がデュエルスタジアムの一つで鳴り響き、授業中の1、2年生を除いた、全3年生の見守る中で一つのデュエルが終了した。それに伴い、デュエルスタジアムの観客席にいる3年生からは大きな歓声と黄色い声援が飛びまわり、一部の席で固まった少数からは狼狽した溜息が漏れる。

「い、いずみぃ！お前ぇ！地紫魔の俺に勝つなんてどういうつもりだぁ!?」

悔しさと、恥ずかしさの混ざった憤慨した顔で対戦相手へと怒鳴る紫魔姓の一人の3年生。
観客席とは離れていて聞こえないだろうが、歴史ある自分の姓への誇りと扱うことを許された属性、そしてそれを背負った重圧からか、どうしてもこの敗北を呑み込めない彼は全勝で勝ち抜くことを義務付けられていたと言わんばかりに、たった今自分を降した対戦相手を忌々し気に睨みつけていた。

「お…俺は…紫魔の人間として絶対に負けられなかったんだ！それなのに…お前はぁ！」
「…これはデュエルだからね。八百長はしないし、僕も絶対に勝ちたかった。…対戦ありがとうございました。」
「…うっ、うぅ…くそぉ！」

その怒号を意にも介さず、デュエルスタジアムを降りていくのは同じく決闘学園イースト校3年生、シンクロクラスの泉　蒼人。
彼が自分の名を背負うように、自分にだって背負っているモノがあり、それが相手よりも軽いだなんてことは絶対にない。いくら自分の背負ったモノが大きくとも、それを背負いきることが出来なければ、勝つことが出来なければ意味が無いのだ。いつまでも凛とした彼の姿でそれを理解したのだろう、紫魔と名乗った3年生はそれ以上何も言えずに立ち去るしかなかった。
去年も決闘祭に出場した蒼人にとって、自身の名前にしがみついて嗚咽を漏らしながら下がっていく対戦相手を気遣うことは、自分が背負った大勢の仲間達からの期待、それへの侮辱に繋がることを理解している。
だからこそ、敗者には何も言わずに立ち去る。勝った自分にできることは、それだけなのだと言わんばかりに。

「お疲れ様、泉君！3年代表決定、1番乗りおめでとう！シンクロクラス担当として、僕も鼻が高いよ！」

そして、スタジアムから校内に繋がる通路を抜けたところで、シンクロクラス担当教員の一人が蒼人に労いの言葉をかけてきた。1年生の頃から何かと自分を気にかけてくれた教師で、去年の決闘祭の代表に選ばれた時も、まるで自分のことのように喜んでくれたことを思いだす蒼人。

「ありがとうございます。でもまだ学校選抜戦がありますから。」

しかし、褒められたことは素直に嬉しかったが、まだ代表への道のりへ一つ抜け出ただけだ。
代表候補発表から約1か月、選ばれた多くの候補者との、長い闘いを何とか乗り切ったのは蒼人にしても確かに誇らしいのだが、まだ3年生からはもう一人選ばれる。

戦績から見たら、今倒した地紫魔の3年生も、エクシーズクラスの虹村も、お互いに蒼人に敗れただけでその実力は拮抗している為どちらも最有力候補だが、二人とのデュエルでもギリギリの末の勝利だったので、彼らのどちらが再び上がってきても強敵で気など抜けないのだろう。それに自分が2年生で出場できたのだ、下級生相手でも侮ることは出来ないと、蒼人は担当教師へと向かって言う。

「もしかしたら、また紫魔君や虹村とも戦わなければいけないでしょうし。」

「君なら代表間違いないって！一番層が厚い3年生の中でも、特に抜きんでているんだからね！あの紫魔君に先駆けての代表入りは、きっとプロも注目すると思うなぁ。」

「はは、気が早いですよ。プロにはなりたいですが、今年は特に気が抜けませんから。エクシーズクラス1年の天宮寺君なんて、選抜戦を免除されての代表入りですし、入学早々にあの虹村に勝ってますからね。」

「あー…スピーチ棒読みだった彼ね…まぁ彼は【黒翼】の孫だし、確かにそれだけの実力を持ってたとしても不思議じゃないけど…まだ1年生なんだし、君がそこまで気を付けることは…」

「いえ、油断はできません。」

「そ、そうか。」

自分の言葉をはっきり遮ったその言葉で、なんと頼もしい子なのだろうかと、全く心配する要素がない生徒を寂しくも思いつつ、彼が落ちることなど有り得ないと確信する教師。

いくらあの高名な【黒翼】の孫でも、いくら歴史ある紫魔家の人間でも、きっとそれらを抑えて決闘祭でも大活躍してくれることだろう。いや、もしかしたらあの【白竜】を超える、イースト校始まって以来の【王者】にだってなれるかもしれないとさえ思ってしまう。何せ、蒼人ならば高等部卒業と同時にプロにだってなれそうなのだから。それを期待させるモノが彼にはあるのだと、そう言いたげに。

この教師だって知っている。高等部卒業と同時にプロになれた者は、プロの世界にもそうはいない。しかしその若さでプロになれた者は、タイトルホルダーやランキング上位はもちろんのこと、皆もれなくプロの世界での著名人・有名人ばかりなのだ。

それは、狭き門であるプロへの道の第一歩に位置するプロテスト。【決闘世界】が管理しているソレは、毎年開催地は変わるものの、膨大な数の受験者が世界中から1次試験に向けてそれに受験してくるのだが、その本試験にやっと到達できる者も例年数人というその難しさは世界中でも有名である。

―これは、『誰にでもなれるモノ』ではなく、『誰にでも受けられるモノ』でもない。

ずいぶん昔は、『強さ』だけあれば例え幼児でもプロになれたらしいのだが、もう時代が違う。

今では…特殊例である紫魔家を除いて…普通なら【決闘世界】が運営する、世界中に支部が存在する決闘大学のプロ育成特別学科で基準を満たすことの出来た選ばれた実力者、またはそれに値する結果を持つデュエリストが【決闘世界】に認められれば、受験資格を与えられるプロテスト。

決闘学園に通うということは、こういった決闘大学に進学がしやすいという利点や、必要な結果を普通よりも残しやすいという利点が大きいのだ。

その中で大学ではなく、決闘学園高等部の生徒が卒業と同時にプロの世界に飛び込むには、決闘学園高等部が『本試験を受験するに値する実力』があると認めて与えることのできる本試験への『直接推薦状』が必要なのだが、無論誰でも手に入れられる物ではないことは確か。

決闘学園からの本試験推薦は学生達にとっても絶対に手に入れたい物だろうが、各々の高等部の中でも、数年に1人しか与えられないと言われる厳しい『ソレ』を手に入れるためには『しかるべき結果』を取ることが大前提ではあるものの、すでに蒼人は昨年の【決闘祭】で

２年生ながらベスト４になって注目されているし、群雄割拠の３年生の中でも実力はトップクラス。【決闘世界】が定めた基準も、このまま彼が怠けなければきっと満たすことが出来るだろう。
それを嬉しく、また誇りに思う教師。
「あと候補が決まってないのは３年生から１人と、２年生から２人だけですね。１年生の方は…」
「う…」
そんな中、蒼人が言ったその言葉で教師は思わず言葉に詰まってしまった。
そう、たった今やっと候補者が一人決まった３年生を差し置いて、すでに１年生からは候補者が決まってしまっていたのだから。夏休み明け、始業式に行われた候補者発表日から数日は、そのあまりの大騒ぎに、職員室中が殺伐としていたのだから笑い事ではない。
―なにせ、たった一人を除いて、１年生の候補者が全員辞退してしまったのだから。
辞退していく候補者の誰もが説得に応じず、普段なら２名選出するはずのところを特例として、１人だけの選出をせざるを得なかった１年生の学年主任の苦々しい表情は、担当学年の違うこの教師でさえもよく覚えていた。
「確か、天城君だけでしたね。」
「…で、でも彼は特に問題ないね！確かＥｘデッキが使えないんだから、１年生が上級生に遠慮して辞退さえしなきゃ、きっと上がってこれなかっ…」
「彼ガ残ってくれテよかっタ。」
「え？」
「あ、いえなんでも。…では先生。僕はこれで。まだこの後に試合も

残ってるでしょうから。」
「あ、ああ…お疲れ様…」

そうして、その場を後にしていく蒼人を見送る教師。
これから先ほど負けた紫魔3年生と、エクシーズクラス元トップの虹村の試合が残っており、それの執り行いもこの教師がしなければならなかったのだが、しかしその後ろ姿を見ていた教師は何かが引っかかっていた。

「…泉君って、あんな顔で笑ったっけ？見間違いかな…。」

さわやかな顔が印象的な彼の、どこか見たことのない表情に驚きながらも、きっと自分の見間違いだろう、それか勝ち抜き1番乗りが嬉しかっただけか、そんな風に考えるようにして、教師もその場を後にした。

―…

「天城ィ！お前1人だけ代表候補に選ばれたからって、調子に乗ってんじゃねーぞ！」
「お、まだイキが良いのがいたか！選抜戦まで暇だったんだ、相手してくれ！」
「うげっ、し、しまった…」

焦るくらいなら声をかけなければいいのにと、帰り際だった遊良は遠くから暴言を吐いてきた同級生の一人へと向かって行く。
代表候補発表から1ヶ月と少し。1年生のクラスは遊良の話題で持ちきりで、選出されなかった者の中にはまだそれを快く思わない者たちが若干名居たのか、ごくたまに声をかけてくるのだ。

「お前とはまだ戦ってなかったな。よし、やるか！」

「な、なんで2階までわざわざ上ってくるんだよ！」
「なんでって…馬鹿にしたのはお前じゃん。じゃあぶっ飛ばされる覚悟があるんだろ？いいから構えろよ。」
「ぐ…」

返り討ちにされる覚悟もなくモノを言ってきたのだろうか、それならば余計に無事に済ます気はないと言わんばかりの遊良の表情に、逃げられない事を悟った様子の男子生徒。
しかし、いくらＥｘ適正が無い相手でも、並み居る1年生を退けて1年生代表になったのだ、選抜に選ばれなかった腹いせも伴って暴言を吐いたとはいえ、自分が叶う相手ではないと理解している様子で。

「ぐぐぅ…」
「やっと構えたか。…よし、じゃあ行くぞ！」

苦々しい顔で構えた相手でも容赦はしない、後は宣言を行うだけ。そんなことを思いながら遊良がデュエルを始めようとした…
そんな時だった。

「待って…彼、デュエル嫌がってない？」
「…誰？」

不意に、肩に手を置かれ、デュエルを止められた遊良が振り返ってみれば、そこにはイケメンと感じる顔が近くにあり驚く遊良。
思わず敬語を使わずに返答してしまったが、対戦しようとしていた男子生徒がまるで助け舟を得たかのような顔をしていたことで、雰囲気からして上級生であろうということを理解した。

「えっと…天城君、だよね？3年の泉　蒼人です。」
「あ、ど、どうも。」
「この子はシンクロクラスの僕の後輩なんだ。ここは僕に免じて抑え

てくれないかな？僕も天城君…君を探してたところだったし。」
「まぁ…別にいいですけど。」
「君、大丈夫？」
「…い、泉先輩…」
「すまないね。天城君と話があるから譲ってくれるかい？」
「…は、はい！」

そう言って、蒼人に促されるままにその場を立ち去った男子生徒。しかし、上級生がわざわざなぜ自分を探していたというのだろうか。
それに不信感も覚える遊良だったが、そのまま話を続けようとする蒼人が口を開きかけたところで、急に廊下に黄色い声が上がった。そこを見れば、クラスの一つから身を乗り出した女生徒達が蒼人を見て、目をハートマークにして輝かせているではないか。

「キャー！あ、あれ泉先輩じゃない!?」
「ほんとだ！泉センパーイ！」
「あれ、なんで天城なんかと先輩が？」

およそ、まだ帰らずに残っていた女生徒達だろうが、しかしそれはかなりの数でこちらに近づいてきてしまい、そのあまりの勢いに遊良も思わずどうしていいのか分からず後ずさってしまう。
しかし、蒼人自身はそれに慣れているのだろうか。急いで遊良へと耳打ちして用件だけを手短に伝える蒼人。その時に香った微かな匂いが、なんともイケメン度を向上させて。

「天城君、後で西棟の屋上へきて。鍵は開いてるから。」
「え？」
「じゃあね！絶対だよ？」
「あ、ちょ！」

そう言って、蒼人は早々にその場を離れて駆けていった。女生徒達

が遊良のいる場所へと到達する頃には、もうその姿は遠くまで行っており、追い付くことは不可能だろう。顔だけでなく足も立派だ。
しかし、蒼人を取り逃がした女生徒達の憤りは、そのまま先ほどまで話していた遊良へと襲い掛かり…

「天城！泉先輩に何したのよ！」
「いや何って…」
「天城の癖に！ファンクラブの私だって中々話せないのよ！」
「知るかよそんなこと！」
「きっと失礼な事言って先輩困らせたんでしょ！天城の癖に！」
「はぁ!?」

言いがかりもここまでくると清々しい。しかし、困らせられているのは自分の方なのにと、面倒な事になった事態に遊良も呆れるしかない。
そういえば、前にルキが言っていた、関わるとファンがうるさいであろう先輩はあいつだったのかと、タイミングの悪さを悔やみながらも、うるさく言われ続けるのも面倒なので、急いでその場から駆け出し始める遊良。こういう手合いを相手にするだけ無駄、何を言っても聞かないのだと経験からそれを理解したのだろう。先ほどの蒼人にも負けず劣らずの速さで廊下を駆け抜ける。

「あ、待て天城！」
「あぁ…先輩の残り香がぁ…」

後ろから聞こえてくる言葉は、ファンもここまでくれば変態と何ら変わりない。そんな身震いする謎の恐怖に怯えつつも、これだから痴情のもつれはごめんなのだと言わんばかりに遊良は姿を隠した。
遊良がいたすぐ近くの、曲がり角を曲がってすぐの空き教室であったが、怒り狂う女生徒達の目を欺いて撒くには十分だ。そうして遊良の姿がいきなり消えた事で彼女達も落ち着いたのか、遊良ではなく蒼

人の向かった方向を追いかけるという目的にシフトチェンジしたのだろう。追手の声が蒼人の走って行った方へと遠ざかっていき、そして完全に聞こえなくなったところで、遊良は先ほど蒼人から言われたことを思い出す。

「屋上へ来いって言ってたっけ。…でも何で…」

一応、話の途中だったか、いや、だからと言って自分が行く義理もないだろうと思う遊良だったが、また会いに来られても面倒なことになると思い直し、空き教室から外へと出て、屋上への階段を上がり始める。

幸い、追手が向かって言った方向は蒼人が指定した屋上とは反対方向。…なるほど、これも見越してわざわざ逆へとあの先輩は走っていったのか。用意の良い対応にもイケメンの余裕を感じる遊良だったが、そんな気を使われたのなら行ってやるものいいかと、その足取りを軽くして。

そして、数階上がったところに屋上への扉があり、確かにいつもは厳重にかけられた鍵が開いているのを見て扉を開けた。

「ごめんね天城君。さっきは話の途中で。」

「あぁ、いえ…」

そこで、自分よりも早くここに来ていたのであろう、蒼人は今入って来たばかりの遊良へと話しかけてきた。深い蒼色の髪が屋上の風に靡き、なんとも絵になる先輩だろうかと思わず見とれそうにもなったが、しかし自分にはそんな趣味はないのだと、遊良は頭を切り替えて話を続ける。

しかし、話も何も、自分も相手も学年代表には選ばれていているのだから、この後2年生の代表が決まり次第で行われる学校代表選抜戦で会うはず。急を要する話なら別だが、選抜戦前の候補者のデュエルはご法度であり、接点もないのになぜ今なのかと、遊良が警戒を隠せ

ないのは仕方ないことだろう。

「俺に何の用ですか？今じゃなくても、どうせ選抜戦で顔を合わせるでしょう？」

「いやぁ…どうしても会っておきたくてさ。今噂になっている君に。」

「あんまりいい噂じゃなさそうですけど。」

「そんなことないよ。ずっと…気になってたんだ。1年生で唯一代表になったんだし、どんな子なのかなって。そしたら噂通り強そうで驚いちゃったよ。僕が1年生の時よりずっと強そうなんだもの。」

「…はぁ。」

―苦手だ。

遊良の表情は、歯がゆいセリフを恥ずかしげもなく言ってくる蒼人に向かって、あからさまにそう言っていた。自分のことを蔑んでこない人間自体珍しいし、ここまで評価されていることも、遊良にとってはむず痒くて信用できない。

まぁ、幼いころから悪意にさらされてきた遊良だけあって、この先輩の言葉から悪意は感じ取れず、きっと本心でそう言っているのだろうと想像は出来るが、それにしても物好きな人間だと言いたげな顔をしているのだから、それだけでも遊良の人を信用する基準が相当高いことがわかるだろう。

「シンクロクラスの高天ヶ原さんも、クラスで君の事話してたよ。君たち幼馴染なんだってね。」

「…そうですけど。」

「そっかー…だから彼女、君の話をあんなに嬉しそうにして…」

「へ？ルキがなんかしたんですか？」

「あ、ううん…なんでもないんだ。…でもよかったよ、噂みたいな、荒っぽい生徒じゃなくて。ほら、僕この通りだから、喧嘩になったらどうしようかって思ってたんだ。」

苦笑いしながらその細腕を見せてくる姿は、本気で遊良と話をしたいだけなのだろう。いつもならば、ここらで暴言や蔑みの一言が入ってきてもいいはずなのに、ニコニコしながらそう言ってくる蒼人の表情には敵意はなく、どこか調子が出にくい遊良。

変な偏見を持っていないことは遊良にとっては好都合ははずなのに、幼馴染以外で経験したことのない態度に、どうしても警戒心が勝ってしまう。

「ごめんね。本当に、ただ話してみたかっただけなんだ…選抜戦前に一度話をしておきたくて。Ｅｘデッキを使わないデュエルをするっていう、噂になっている強い１年生が一体どんな人なんだろうかなって…でも中々会えなくて、１年生に聞いてみても、危ない人としか教えてもらえなくてさ。」

「あー…暴れまわってるって言われてましたね。」

「そうそう。」

それなのに、心から笑っていると思われるこの屈託のない笑顔には、いくら警戒している遊良にも嫌でも伝わるのだから不思議だ。最大限に警戒していたはずなのに、誰も居ない屋上で思わずつられて笑ってしまう遊良。きっと、遊良にしても初めてだろう、鷹矢とルキ以外の人間相手に、学校でここまで笑うことなど。

だが、不思議とそれに嫌な感じはせず、この先輩がどうして人気があるのかを今になってはっきりと理解した。

「選抜戦が楽しみだよ。トーナメントになるから戦えるかわからないけど、でもなんだか君とは戦える気がするんだ。」

「…そうなるといいですね。でも俺、負けませんから。」

「もちろん！僕も僕の【ナチュル】達も、君に負けないくらい…」

「ちょ！デッキバラしていいんですか!?」

「…あ。」

普通、これから戦うというのにデッキを教える人間は居ないだろう。もちろん、誰でも対戦相手の研究は行うし、その過程でデッキの想像をつけることは出来る。数多くのデュエルを行えばそれだけ手の内を読まれることは必至だが、なにも自分でバラさなくてもいいだろうにと、遊良も苦笑いを隠せない様子だ。
それを慌てて取り繕うかのように続ける蒼人だったが、遊良も思わずつられてしまう。

「で、でも僕も君のデッキが【堕天使】だって調べちゃったし、これでお相子ってことだよ！うん、そういうことにしておこう？」
「…わかりました。じゃあ泉…先輩。選抜戦でまた。」
「うん。またね、天城君。」

どうにも調子を崩される相手ではあったが、ここまで敵意を感じない人間も珍しい。先ほどルキの話題を出してきたところを見るに、もしかしたらルキに気があるのかとも思ったが、まぁもしルキがまんざらでもないのなら、こんな相手なら信用できるのかもしれないなと、まるで父親のような複雑な感情を抱いてしまうのもどうなのだろうか。
しかし、年が上であることもそうだが、精神的に余裕があった。流石、群雄割拠の決闘学園イースト校で、3年生代表にまで選ばれた生徒だと感じる遊良。

―！

「…ッ!?」
「あれ、どうしたの？」
「あ…いえ…」

そんな瞬間、その場を離れようとした遊良の背に、鋭い針で刺され

たかのような殺気を感じて、思わず振り向いてしまった。そこには先ほどと変わらずに、敵意を感じない蒼人がいるだけで、相手も不思議そうな顔をしていただけだったが。

「すみません。…なんでもないです。」

「うん？じゃあね。」

きっと、普段に敵意を向けられすぎて、気を張り詰めすぎているのだろうと、ニコニコしている蒼人を見てくるとそんな気分にさせられて、遊良は今度こそその場を後にした。

「アマギ…ユウラ。…ギャハッ。」

深い蒼色の髪が風に乗って靡くたびに、微かな黒い靄も一緒になって流されていたことに、気が付かぬまま。

―…

『ただいまより、決闘祭代表候補者の入場です！』

決闘学園イースト校が誇る大デュエルスタジアム。理事長の意向もあって、プロの大舞台さながらの作りをされたこのデュエルスタジアムには、卒業デュエルなどの何かのイベント時に、許可されたデュエリストしか立つことを許されない場所だ。

３年生、そして２年生の候補者も無事に決まってからさらに数日。その中で、各々の学年で厳しい戦いを勝ち抜いた生徒が、今から名前を呼ばれて入ってくる。

これが決闘祭の最終選考。本番に則ってトーナメント形式で行われる戦いは、公平な選出システムによってランダムに決められ、その

勝敗は恨みっこなし。全校生徒が見守る中、彼らの興奮が絶頂に達してから、実況を担当する係の者がマイクを手にして叫んだ。

『3年生代表！シンクロクラス…泉　蒼人！』

まず最初に入ってきた、イースト校が誇るイケメンデュエリスト。ファンクラブと、それ以外でも彼のルックスに惑わされた女生徒達からの黄色い声援に手を振りながら、堂々と入場してくる。

「ねぇルキ！蒼人先輩だよ！ねぇねぇ、かっこいいよねぇ…」
「え？あ、うん。」
「もー、前も先輩の方から話しかけてきてくれたのに、ルキってば天城君のことばっかり話すんだもん。そんなに天城君の方が先輩よりいいってわけ？」
「いや、別にそんなんじゃ…」

ファンクラブに入っていると言っていた同級生の威圧感に、観客席にいたルキも思わずたじろいでしまった。しかし、どっちがいいかと聞かれても、蒼人には別段興味がないと言ってしまったらきっとこの同級生が怒り狂ってあの先輩のことを熱弁してくるだろう。
やれ趣味が悪いだとか、Ｅｘが無い天城相手に何言ってるんだとか。
そんなことになれば絶対にそこで言い返したくもなるが、どう考えても面倒なことになるのは目に見えてしまうため、ルキは話をそらそうとして促した。

「あ、次の人が入ってくるよ！」
『3年生代表！エクシーズクラス…虹村　高貴！』

続いて入ってきたエクシーズクラスの生徒。すでに代表入りを決めた鷹矢に、入学早々に敗れてはしまったが、その実力は折り紙付き。

虎視眈々と代表入りを狙い、学年選抜では粘る紫魔3年生を相手に、実力でねじ伏せていた。

『続いて2年生代表、融合クラス…紫魔　ヒイラギ！』

学年が変わり、融合クラスからの大きな歓声とともに入場してきたのは、この学園でも融合クラスにおいて一大勢力となっている紫魔姓の少女。まだ2年生ながらも、その実力は本家にすら届く才能を秘めていると言われているのだから侮れないだろう。人差し指に付けた黒い宝石の指輪が、ステージのライトに照らされて鈍く輝く。

『2年生代表、融合クラス…紫魔　右京！』

続いて入ってきた男子生徒も、同じく紫魔姓の人間。しかし、ゆっくりと歓声に答えていた先ほどまでの生徒たちと違う、そそくさと入って来たかと思うと素早く2年生代表の紫魔　ヒイラギの隣へと並んだ。

「右京、わかってますわね？」
「はい、お嬢様。」

隣に控えめに立ったその姿は、まるで主人と従者のようだったがそれもそのはず。巨大な一族となった紫魔家において、血筋一つとっても上下関係があり、本家に血が近いほど待遇は良くなる。例え同じ紫魔の名を持っていても、家柄が格下の紫魔をこうして仕えさせることだって可能なのだ。

稀に、本家の紫魔と結婚して本家に入る人間や、王者である【紫魔】を降して本家当主に上り詰める紫魔もいるが、どちらにしても彼女は自分が本家に行くことを疑っていない口調で、従者の答えに満足気そうな表情で隣に並んでいた2人の先輩へと視線を送ると、隣の2人をさも見下したかのように言った。

「ホホ、低俗なシンクロとエクシーズの下民に負けた、あのだらしない男に見せつけてやりましょう？本家に入るのはわたくしだとね。」
「はい、お嬢様。」
「おい、なんだその口の利き方は。」
「まぁまぁ虹村、落ち着いて。次の子が入ってくるよ。」

エクシーズクラス元トップとは言え、後輩にこれ以上舐められるのは彼にとっても癪に障るのだろう。虹村は憤慨した様子で紫魔の二人を睨んだが、それを制した蒼人によって元の位置へと戻る。

「…次は遊良かぁ。」
「うむ。」
「あれ、鷹矢だ。良いの？ここに居て。」
「一人で座っているのも暇だ。だからいい。」
「そっか。」

既に出場が決まっているであろう幼馴染が、指定された自分の席を抜け出してきたことは置いておいて、ルキは入場口へと目を戻した。やっとここまできた、見下され続けた彼が、今、自分の力で舞台に立つことを誇らしく思いつつ、その瞬間を待ちわびる。

そして…

『えー…最後に…1年生代表…むしょぞくー…あまぎゆうらー。』

先ほどまでとは明らかにテンションの違うアナウンスと、言い放たれた無所属という単語に、会場内にもざわめきが走る。全ての候補者が辞退した1年生達からとっては、自分達をことごとく倒してきた忌々しい奴。上級生達からすれば、Ｅｘ適正がないのになぜか選ばれた生徒。

しかし、そんな空気に包まれた中で、遊良はそれを意に介さずに入場し、より一層ざわめきが強くなった雰囲気の中、ほとんどの生徒が上がることを許されないステージへと昇ると、自分の定位置へと立った。

「やぁ、天城君。待ってたよ。」
「泉先輩…どうも。」
「こいつが天宮寺とタメ張るっていう1年か。そんな風には見えないな。」
「えっと…」
「あぁ、エクシーズクラスの虹村　高貴だ。天宮寺には負けたが、これ以上1年に負けるつもりはないからな。」
「…はぁ。」

そうして、全ての生徒が揃ったところで巨大モニターに抽選が映し出され、それに伴うトーナメント表が埋められていく。きっと、各々の今後を左右する大事な抽選。観客席でもそれを固唾を呑んで見守り、次々と決まっていく。
その一つ一つの組み合わせに、一つ一つ盛り上がる学生達。そして、最終試合から名前が映し出されて行き、そして最後まで名前が映らなかったことで、最後の二人は第一試合の出番であることを悟った。

『第一試合！3年生、泉　蒼人ＶＳ、1年生、天城　遊良！』

「ほら、天城君、やっぱり戦えると思った！やった、こんなに早く戦えるなんて！」
「よろしくお願いします、泉先輩。」
「うん！楽しいデュエルをしようね！」
「は、はい…」

これは決闘祭への代表を決める戦い。しかし、師のこともあり気を張っている遊良と違って、まるでこの空気すら楽しんでいるかのような蒼人に、どうしても調子が出ない遊良。
負ければ終わり。しかし、本当に遊良と戦うことが楽しみだったのだろう。お互いに負けるつもりはなくとも、蒼人の方には精神的に余裕もあれば、デュエルへの純粋な待ち遠しさも持ち合わせている。
「じゃあ天城君、また後で会おう。きっといいデュエルが出来るよ！」
「…そうですね。楽しみです。」
「うん！」

ともあれ、第一試合はこの後スタジアムの調整が終わったらすぐ始まってしまうため、そそくさと二手に分かれた学生達は、事前に通達されている通りに左右にある入退場口から出ていくと、通路をしばらく歩いたところにある控室に入り、しばしの待機予定となっている。
ここで自分の名前を呼ばれるのを待つのだが、遊良が入った控室には融合クラス2年の紫魔　ヒイラギも同じく入ってきて、候補者が5人しかいないこともあって、そこでは二人っきりとなっていた。
「あら、こんな下民と同じ控室だなんて。消毒スプレーを持ってこさせるべきでしたわね。」
「…。」

控え室に入るや否や、あからさまな悪口をぶつけられる遊良。しかし、穏やかな蒼人と違い、やはりこういった言葉を向けられる方が性に合っていると、自分の心の荒んだ感覚にむしろ笑いさえ出てきそうな遊良だったが、自分はこれから試合。こんなところで言い合うつもりもないといった表情で入口を見ていた。
それを不審に思ったのだろうか、ヒイラギも続けて口を開くものの、しかし先ほどの遊良の反応の悪さに飽きたのだろうか。本気で挑発してきてはいない様子にも見える。
そうして5分から10分程、ステージの喧騒が多少聞こえるくらい

のしばしの静寂が控え室を包んでいた。

…

「…つまらないわね。アカリが随分と世話になったと喚いていたから、どんな下民かと思っていたのですけど。予想以下の人間でしたわ。固まっていて、本当に無様にしか見えません。」

そのあまりの静寂に痺れを切らしたように口を開いたヒイラギ。遊良があまりにも言葉を発さず、身動き一つ取らずに自分の番だけを待っている様子が癪に触ったのだろうか。

確かに、集中しすぎて扉を見続けている遊良の表情は、見るものが見れば必死になりすぎていて危うく見える事だろう。しかし、そんな気配りをするには見合わぬ相手の言葉は、むしろ遊良の集中を崩そうとも取れる事だ。

そんな中でも、遊良の耳には聞きなれない名前が聞こえてきて、思わず遊良も口を開いた。

「…アカリ?…誰ですか?」

「妹ですわ。なんでもあなたに乱暴されたって言ってたのですけれど、まぁ…いつものかまって欲しさの喚きでしょうけども。本当に見苦しいったら。」

「…妹に良くそこまで言えますね。」

「紫魔では力が全てですので。…あなた程度の下民に無様に負けたあの子を、妹にしておくのも我慢がならないというのに。」

遊良を下民と言い放つくせに会話を続けてくるヒイラギ。相変わらず言葉には棘があり、この挑発がどこまで本気なのかわからなかったが、しかし嫌っている風の癖にこうも話かけてくる事自体が遊良にとっては意味がわからない。

しかし、ヒイラギはその長い艶やかな黒髪を一度掻き上げると、さ

も見下したような目を一層強くして言う。
「ホホッ、あなたも今すぐにでも楽にして差し上げたいところですわ。なにせあの『裏切り者』の子供だと思うと…」
「…ッ！」

―！

それは無意識の物だった。
これから試合で、苦手な雰囲気の蒼人相手に、平常心を保たなければいけないというのに。しかしどうしても体が勝手に動いてしまった。ヒイラギの言った言葉は、遊良にとってはまるで意味の分からないモノ。
どうしても心当たりなど記憶には無いというのに、まるで体がそれを容認できないかのようにヒイラギを拒絶したのだ。振り払うかのように薙ぎ払われた遊良の腕は、少しも届くことなくヒイラギの体の前を通過すると、微かに空気を切る音が鳴る。

「おっと。…ホホ、そんな顔も出来たのですか。」
「…。」
「精々足掻くが良いですわ。どうせこの選抜戦、結果はもうわかりきっているのですから。」
「天城選手！…ッ!?…ス、ステージへお願いします…。」

ヒイラギがそういったところで、第一試合の時間が来たのだろう、係が遊良を呼びに来た。しかし、その時の遊良の表情は果たしてどのようなものだったのだろうか。それを目の当たりにした係も、それを引き出したヒイラギにも…そして言われた遊良にしたって、きっと思うことは違うだろうが、それでもなお遊良はデュエリストとして目の前の戦いへと臨むべく控室を後にする。

―その胸中に沸き起こった、意味も分からぬ、消せぬ感情を渦巻かせて。

「…本当、無駄な戦いですこと。」

誰も居なくなった控室で手に付けた指輪の黒い宝石を見つめながら、とてもつまらなさそうに彼女が言ったそれを聞いている者は、そこには誰もいなかった。

―…

ｅｐ１９「轟く悪意」

大歓声の中、アナウンスと共に入場した遊良と蒼人は、デュエルスタジアムの両端から上がると、その戦いの時を待っていた。
しかし、遊良の表情は微かに暗く、必死に気持ちを切り替えようとしている様子。敵意を持たない相手との戦いなど初めての経験だろうし、先ほど控室で紫魔　ヒイラギに言われたセリフが頭に残っていたのだろう、どこか苦々しい表情にも見える。

「あれ…ねぇ鷹矢、なんだか遊良の様子変じゃない？」

そんな中、誰もが気づかぬ中で、遠目からでもその様子を感じ取れるのはやはり幼馴染か。ルキは、遊良がいつもとデュエルに臨む姿がどこか違うことを見て、自分の待機場所から逃げてきた鷹矢へと問いかけた。
聞かれた鷹矢はと言えば、未だ始まらぬデュエルにどこか眠たそうにしていたのだが、ルキに促されるままに遊良の方を見る。

「…む？…あぁそうだな。集中していないようだ。」
「何かあったのかも…。」
「問題ないだろう。どうせ始まってしまえばどうとでもなる。」
「そんな無責任な。…遊良なら大丈夫だと思うけど…でもあの先輩もシンクロクラスのトップだし、みんな先輩の応援してるしさ…」

そう、周囲の雰囲気は、蒼人の勝利を疑わない空気。鳴り響く声援は全て蒼人の名を呼び、一言も遊良の名前は聞こえない。その他の１年生の視線は忌々し気に遊良に突き刺さり、上級生に至っては遊良を見てすらいないのだから。
だが、こんな中で戦わされるのもよほどのプレッシャーとなるもの

の、元々遊良はそんなアウェーな空気には慣れているはず。それなのに、あんな表情になっている遊良が、ルキにはどうしても気になってしまうのだろう。相手があの泉　蒼人だということも相まって、遊良の身を案じてしまう。

しかし、それを聞いてもなお、鷹矢はまるでつまらなさそうに言った。

「下らん。そんなことで負けるようなら、遊良も所詮そこまでだ。ジジイ共々、さっさと引退でも退学でもすればいい。」
「そこまでって！何もそんな言い方すること…」
「ぬるい。遊良がこんなことで気を抜くような奴なら、俺が戦う価値もない。それが例え、敵意を持たない相手だとしてもだ。」
「え？それってどういう…」
「そんなデュエルなら、見せられるこっちも退屈だ。」
「ちょ、どこ行くの？」

生まれてからのほとんどの時間を共に過ごしてきただけあって、きっと鷹矢の見ている遊良の姿は他の誰とも違うのだろう。およそ、遊良本人が悩んでいることも、鷹矢は理解できていると言わんばかりに、まるで遊良の心苦しさを感じ取っているかのようにしてはいる鷹矢だったが、それを踏まえてもなお、とても退屈そうに、そしてとても下らなさそうにして鷹矢は席を立った。
それをルキが止めに入るが、まるで意に介さずに鷹矢は立ち去ろうとする。

「トイレだ。こんな結果が見えているデュエルを見たって意味がないだろう。」
「どういう意味なの…あぁもう！鷹矢のバカ！」

そう言って、勝手にどこかへと行ってしまう幼馴染の一人にも憤慨

を覚えるものの、かといって心配を切ることが出来ないルキはその場に留まってデュエルを見守しかない。やがて観客席の照明が落ちると、一際歓声が大きく上がってデュエルスタジアムだけが照らし出された。

『それでは始めましょう！3年生、泉　蒼人ＶＳ、1年生、天城　遊良！3年生が圧倒するのか、1年生が必死に食らいつくのか!?一回戦を突破するのは果たしてどちらか!?』

アナウンスがそういうものの、その言い方はまるで蒼人が勝つと決まっているかのような口ぶりであったし、何より会場の雰囲気がそう告げている。直接視線を突き刺されている遊良からしたら、そんな空気の中でデュエルすること自体は予想通りであったためにどうでもよかったが、しかし蒼人が苦手な相手であることには変わりない。

そんな中でも、一呼吸を深く吐ききってゆっくりとデュエルディスクを展開すると、先ほどまで心にあったモヤモヤも晴れてきて、嫌でも目の前の相手に集中せざるを得ないことに安心する遊良。何があってもデュエリストである限り、目の前のデュエルが一番大事なのだ、と。

デッキがオートシャッフルされて目の前の蒼人へと向き合うと、デュエルの準備がすべて整った。

「泉先輩、よろしくおねがいします。」

始まる直前に、蒼人に向かって礼をする遊良。これは決闘祭の代表を決める戦いの始まり。いくら観客が遊良の敗北を望んで疑わなくても、いくら蒼人が苦手な相手なのだとしても、それでも敬意を持たないわけにはいかないのだから。

こんな自分に、偏見も敵意も持たずに普通に話しかけてきてくれたことも、周囲の期待を裏切らずに、かつ正々堂々と戦う精神も、先輩として尊敬できないわけがない。

無論、遊良とて師との約束がある。ここで負けるつもりは端から無いが、だからと言ってこのデュエルを無粋な物にはしたくなかったのだろう。大舞台でも、自分とのデュエルを楽しみと言ってくれた蒼人への、精一杯の意趣返し。今まで行ってきたデュエルで、ここまで思えた相手も他には居ない、そのことも含めて。

しかし、当の蒼人はといえば、無言でデュエルディスクを展開したかと思えば、その表情を下げて、顔を見せないようにしているようにも見える。

「…先輩？」

屋上で会ったそのときも、始まる前の入場時も、けっしてその爽やかな顔を俯かせずに凛としていた彼の様子が、どうにもおかしいと感じたのだろうか。

遠目からというもの相まって、大いに盛り上がっている観客は全くその様子に気付いた感じもないが。ここまで近くで見ている遊良だけが気付いたのだろう。当たって欲しくも無い嫌な予感が頭を過ぎる。

やがて蒼人が顔を上げるが、それはある意味、遊良にとっては残酷な現実で。

「…ッ!?」

—周囲から浴びる敵意よりも、もっと鋭い敵意が、遊良へと突き刺さった。

「ギャハッ！ウるさいんだヨ、落ち零レの分際デ！」

爽やかな顔を歪ませて、悪意を剥き出しにして話すその姿はどう見

ても普通ではない。屋上で話した時だって、先ほど会場で話した時だって、蒼人には少しの敵意も無かったというのに、今は殺気を駄々漏れにして、今にも襲い掛かってきそう。

そして、蒼人から発せられる巨大な敵意に晒されていることに、まるでショックでも受けたというのだろうか。その姿を理解できずに、立ち尽くしてしまうだけの遊良。

「これからやるのハ『僕ガ』楽しいデュエルなんだカラ、お前は派手に負けてレヨ？ギャハハハッ！」

「泉先輩!?」

「話しかけるんじゃねーヨ、この落ち零レ！ちょっと優しクしてやっただけで勘違イしやがっテ。うざったイんだヨ！」

噂で聞いた穏やかな姿は、自分と話した誠実な姿は、彼の演じた虚像だとでもいうのだろうか。無意識とはいえ、初めて幼馴染以外で気を許せる相手が出来たかもしれないという期待もあったのだろうか、まるで裏切られたような感覚が自分にあったことに驚きを感じつつも、遊良は蒼人を見ていた。

幸か不幸か、蒼人の言葉は大歓声に包まれて、インカムでつながれた回線越しの遊良にしか届いていないし、モニターも無いことからその表情も遊良にしか見えていないようだ。対戦相手へプレイングが伝わらなかったら困るとのことでの配慮なのだが、それがまさかこんなところで役に立つとは。

もしも、こんな蒼人をファンクラブの女生徒たちが見れば卒倒では済まない事態になることは必至。彼が築き上げてきたモノが一瞬で崩壊してしまうことになるのだから。

「一体、どうしたって言うんですか!?」

しかし蒼人が、ただ単に遊良を陥れるためだけにそんな手を打つとは考えにくいし、なにより遊良自身はそう言われることに慣れてい

る。
確かに、遊良の中にはなぜか裏切られたかのような感情が沸き上がったことに驚いてはいるものの、多少交流があった程度で相手に気を許すことはまずないし、むしろ蒼人に敵意が無くて苦手だと感じていたくらいなのだ。実力的にも相当な強者である蒼人が、学園での立場もあるのに、こんなイースト校でも落ち零れ扱いの1年生に対してする作戦とは到底思えないのだろう。
それに、もし本格的に騙して陥れたいのなら、それこそ何ヶ月もかけて親友レベルにまで交流を深めないと遊良に本格的なダメージはない。鷹矢あたりがそんなことをすれば、間違いなく命を絶つことを考えるが、今本性を現すにしてはタイミングが悪すぎるとすら感じる遊良。
そんな禍々しい顔をした蒼人はしきりに笑いを漏らした後に、まるで何かが込みあがってきたようにして咳き込んだ。

「ギャハッ、ゲフッ…。」
「ッ!?」

そして、不意に蒼人の口から漏れ出たものを見て、遊良は驚きと共にそれを思い出す。普通、あんな黒い靄は人間の体内組織では作られないし、もし出てきたのなら、それは明らかに異常そのもの。
それに、忘れることなどない。少量ではあったが確かに蒼人の口から漏れ出たソレは、遊良にとっては命を奪われかけた時にも目の当たりにしたものなのだから。

「な、なんで先輩がアレを!?」

―間違うことのない。あのルード地区でも見た黒い靄。
遊良とて、ルード地区で戦ったあの【ヴェルズ】を使ってきた敵に関して、『勝てたからよかった』で済ませていたわけでは無い。ずっとあれから考えていた。確かに気性が荒いルードの人間と比べても、あ

まりにも様子のおかしかったあの敵。
考えられることとして、倒した後に敵の中から噴出したソレが『ああなった』原因であることはきっと間違いないことだろう。しかし、遠く離れたルードで見たそれが目の前の蒼人にまであるというのだから、遊良のその驚きはきっと大きいはずだ。
しかし、ルードの敵は言葉など通じず完全に意識など無さそうであったのに対し、蒼人の意識はしっかりあって会話も成立している。一体その差は何なのだろうか、必死に考えては見ても、急に起こった蒼人の豹変もあって思考が定まらない遊良。

「うるさいヨ。さっさト始めヨウ。」
「くっ…仕方ない…」

それでも、ただ一つはっきりしていることはある。…そう、デュエルで勝てばいいのだ。ルードの敵の時も、デュエルで負かした途端に敵からあの黒い靄は抜け出して、そして顔つきも穏やかなものに戻っていた。
だったら早く蒼人を倒して、原因と思わしきソレを噴出させるしかない。そうして考えをまとめた遊良は、さわやかな顔を歪めた蒼人に向かい合って、自身のデュエルディスクを展開した。
それを確認したのか、実況席にいるスタッフが、二人のデュエルディスクがデュエルモードに切り替わったのと同時に言った。

『さぁ！それでは始めましょう！代表決定戦、第一試合！スタートォ！』

―デュエル！

そうして、始まる。先攻は3年、泉　蒼人。

「先攻！僕ハカードを3枚伏セ、【おろかな埋葬】ヲ発動！デッキから

【ヘルウェイ・パトロール】ヲ墓地へ送ッテ、その効果ヲすぐニ発動！こいつヲ除外しテ、手札ノ【インフェルニティ・デーモン】ヲ特殊召喚！」
「なっ、インフェルニティ!?」

【インフェルニティ・デーモン】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１２００

開始早々に蒼人が召喚したモンスターは、煉獄に潜む悪魔の一体。禍々しいその姿は、不気味な見た目と不穏な雰囲気によって、見ている者に身震いすら感じさせることだろう。
しかし、遊良が驚いたのはそんなことではない。それに遊良だけでなく、離れた観客席で見ている学生達も、蒼人を知る教員達ですら驚愕の声が多発する。

「え、嘘!?何で蒼人先輩デッキ変えちゃってるの!?」
「泉君、いつもの【ナチュル】じゃ…ない？」
「一体どうしたんだ、蒼人の奴…」

そう、彼が愛用しているのは、ナチュルの森に住む可愛らしい見た目が特徴の【ナチュル】モンスター達。昨年の決闘祭でも、今までの授業でも、そして先の学年代表戦でも彼はずっとその【ナチュル】の仲間達と戦い抜いてきて、もはや彼の代名詞とまでなっているというのに。今、彼の場にいるのは似ても似つかぬ禍々しい悪魔。
遊良とて、蒼人と屋上で話した後に彼の今までのデュエルの記録や、去年の決闘祭の録画を見て研究はしていた。無論、蒼人だけでなく他の学年代表者の記録ももちろん見て対策を考えだが、それでも蒼人のナチュルデッキの実力が確かに群を抜いていた印象を受けたのは確かだ。
デッキが彼に答えるように自由自在にカードを操り、そしてその仲間達と楽しそうに戦う蒼人のデュエルに、思わず見入ってしまった事

は遊良も否定できないだろう。
　その印象もあってか、突然のデッキ変更と彼らしくないモンスターの登場に、戦っている遊良自身も、そして見ている他の生徒達からの声援も段々不可解な声質へと変わっていくのだが、それを気にしていないかのように蒼人はさらにターンを続けた。

「【インフェルニティ・デーモン】ノ効果発動！手札０デ特殊召喚された時、デッキから【インフェルニティ】カード１枚ヲ手札ニ加えル！僕ガ加えるのハ【インフェルニティ・ビートル】！そのまま【インフェルニティ・ビートル】ヲ通常召喚！」

【インフェルニティ・ビートル】レベル２
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／０

　そんな空気になっても我感ぜず、お構いなしに手を休めない蒼人の場。早々に蒼人の手札が０枚になるものの、普通ならばこんなに早く手札を使い切ることは好ましくないだろう。何せ、手札は多ければ多いほどアドバンテージとなり、それだけ行動の可能性が多くなっていくのだ。
　だが、ことインフェルニティにおいてはそんな常識は通用しない。プロでもインフェルニティを操るデュエリストは居るが、そのプレイングの特異さは誰もが知っていること。
　―その真価が手札０枚というリスクを負って初めて発揮されることは、あまりにも有名なことなのだから。

「ビートルの効果ヲ発動！手札０ノ時、自身をリリースすることデ、デッキから【インフェルニティ・ビートル】２体ヲ特殊召喚すル！」

【インフェルニティ・ビートル】レベル２
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／０

【インフェルニティ・ビートル】レベル２
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／０

手札が無いのに、次々に場を埋めて効果を使っていく蒼人。手札０というリスクに見合う強力な効果を駆り敵を圧倒するつもりなのだろう。すでにシンクロ召喚に必要なモンスターは揃い、後はそれを行うだけ。

そして、いつもの彼とは違うデッキではあるものの、それでも強力な効果を次々に使っていく蒼人の姿に、観客席の学生達の声援もぶり返してきていた。それはまるで、何においても蒼人を肯定するようで。

「そうか！蒼人の奴、研究してきている１年生の意表を突いたんだな！アイツは本気で勝ちに行ってるんだ！」
「マジかよ!?泉の奴、そこまでして決闘祭に賭けていたのか…」
「空気読めよ１年ボウズー！」
「泉先輩、これが最後の決闘祭だもんね…ガンバレー！泉センパーイ！」
「絶対にそんな奴に負けないでー蒼人先輩！１年を調子に乗らすなー！」
「落ち零れなんかぶっ飛ばせー！」
「可愛いナチュルも見たかったけど、でもこれが蒼人先輩の本気なのね！」
「蒼人センパーイ！そんな雑魚早くやっつけちゃってー！」
「泉センパーイ！そんなクズ野郎なんか早く蹴散らせー！」

どこで誰が言ったのだろうか、蒼人のデッキチェンジが彼の本気と覚悟なのだと、周囲は勝手に思い込む。

しかし、勝手な勘違いでの解釈なのだとしても、一度火が付いた応援は留まることを知らない。あっという間に周囲に広がり、蒼人にとっては最後の決闘祭を賭けた戦いということも相まって、その声援

はまるで地響きのように会場を揺らしていた。

「な…なにこれ…いくらなんでも皆遊良のこと見てなさすぎじゃ…」

この場にいるほとんどの学生が蒼人の勝ちを信じて止まない。その目に写るのは蒼人だけであり、遊良の扱いはまるで学園のヒーローに立ち塞がる雑魚キャラのよう。誰もが遊良の負けを願い、最後の決闘祭に望む3年生の勝利こそが正義なのだと、そういわんばかりに。

そんな渦中にいるルキの耳にはその騒ぎが痛く響き、その中心に立っている遊良のことを思うと胸が痛くなりそうにもなるのだろう、好き勝手に騒ぐ他の生徒達の騒音に困惑の表情をしていた。

しかし、遊良がどれだけ頑張ってきたのかなど、他の生徒達は何も知らない。

—1年生の心の中には、調子に乗り暴れまわって、自分達から決闘祭を奪ったクズ。

—2年生の心の中には、自分の立場をわきまえずに、調子に乗る場違いな落ち零れ。

—3年生の心の中には、自分達の代表に楯突く、空気の読めない迷惑甚だしい1年。

きっと、そうにしか写らないのだろう。それを聞いた蒼人も、周囲の人間には声が届かないのを良い事に、普段の彼からは想像もつかない下品な笑い声と表情で、インカムでつながれた遊良を煽り始める。

「キャハ！良い様だナ落ち零レ！」

「泉先輩…」

「気易く呼ぶンじゃネーヨ！僕ノ事ヲ何にモ知らなイ癖ニ！少シ声かけてやっタだけデ仲の良イ後輩気取りカ？…聞けヨ、誰モお前ノ応援なんテしないんダゼ？キャハハ、普段からチョット良い顔してるだけデこの扱イなんだからラ、馬鹿共ハ扱いやすくテ楽ダヨネ!!お前みたい

ナ出来損なイには出来ない芸当ダロ？」
「自分を応援してくれている人をそんな風に…」

別に、遊良にとってこの声援が羨ましいわけではない。今まで散々貶されてきたのだ、むしろ応援の声が多くなれば逆に困惑してしまうことあろう。しかし、それでも応援してくれる人がいる分、心強くなれることを遊良も知っている。遊良にとって、鷹矢とルキ、この二人が自分の味方でいてくれることが、何よりも心強いのだから。

しかし、声援を向けられているというのに、それすら見下して笑い捨てる蒼人の表情は、前に会った時と比べて明らかに異常そのもの。その時感じた、彼の裏表ない真っ直ぐな言葉からは想像もつかない程の悪意。

「キャハッ！何が『応援してくれる人』ダ！男ハ全員僕ヲ崇めてロ！女ハ全員ケツ差し出せば良イ！それだけデいいんだヨ！」

そのあまりに下品で、横暴で、凶悪な思想。

もし、彼がここまでの悪意を隠し持っていたとして、それを悪意に敏感な遊良が気づけなかったのだとしたら、それは相当な演技力を持った人間となる。遊良自身、そんな人種など見たこともないというのに。

しかし、周囲の歓声にかき消されて聞こえないことを良い事に、蒼人は好き放題言い放ち、その悪意のままターンを続けた。

「レベル４ノ【インフェルニティ・デーモン】二、レベル２ノ【インフェルニティ・ビートル】をチューニング！シンクロ召喚、レベル６【天狼王　ブルー・セイリオス】！続いテレベル６の【天狼王　ブルー・セイリオス】二、レベル２ノ【インフェルニティ・ビートル】をチューニング！」

連続的にシンクロ召喚を行おうとする蒼人。応援してくれている

観客も、目の前の遊良でさえも、今の彼にとってはどうでもいいのか。自分の悪意の感情に任せて、蒼人の悪意に染まった悪魔たちはＴＶなどで見るプロのモンスターたちよりも禍々しく見えるものの、煉獄からソレを呼び出さんとしている蒼人の姿のほうがそれ以上に禍々しく遊良には見えてしまっている。

しかし、それすら今の彼には関係ないのだろう。遊良にどう思われようが知ったことではないと言わんばかりに、高らかに宣言するのだから。

「煉獄ノ底ヨリ飛ビ立テ鬼ヨ！シンクロ召喚！レベル８【煉獄龍オーガ・ドラグーン】！」

―！

そうして、召喚されしは天国と地獄の狭間、無へと誘う焔が世界の全てという、まさに煉獄に住む鬼の龍。無論、このドラゴンも手札０という特異な状態でのみ発揮される力を持っているのだが、その効果はあまりにも凶悪そのもの。

ありあまる暴力的なステータスとも相まって、遊良を忌々し気にその目に写していた。

【煉獄龍　オーガ・ドラグーン】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「くっ…いきなり煉獄龍だって…？」
「キャハハ！僕ハこれでターンエンド！サァ、精々足掻いテ見せロ、コノ落ちこぼレ野郎！」

蒼人　ＬＰ：４０００
手札：５→０枚
場：【煉獄龍　オーガ・ドラグーン】

伏せ…3枚

「お、俺のターン…ドロー…」

そうして大型モンスターを従えた蒼人がターンを終えて、手番が遊良に移った。しかし、こんな自分にも敵意無く接してくれた泉　蒼人への苦手意識、そしてそんな彼の突然の変貌が遊良の思考を鈍らせる。周囲が発する、耳を劈くような蒼人への大歓声…遊良にとっては大ブーイングが、ビリビリと振動して体の中を揺らすような感覚の気持ち悪さも相まって。

そんな遊良の心情を、まさか堕天使達も察しているのだろうか。その遊良の初手は、戦う意思の弱い主に仕える気など無いと言わんばかりに、あの煉獄龍を突破出来そうではなさそうだったのだから。

（…どうする？オーガ・ドラグーンに止められても、ここは一気に展開して早く突破しないと…何も出来ずに負ける。）

手札と、歓声にかき消されそうな思考を必死になって繋ぎ止め、遊良は必至に考える。蒼人の3枚の伏せカードと、手札0の時に魔法や罠を吹き飛ばすあの煉獄龍に対して、今の手札で出来ることと言えば…

「…やるしかない！俺は魔法カード【堕天使の追放】を発動する！」

「無駄ダ！【煉獄龍　オーガ・ドラグーン】ノ効果発動！手札0ノ時、【堕天使の追放】ノ発動ヲ無効にしテ破壊すル！」

デッキから好きな堕天使を手札に加えられる万能サーチ。いくら悪い手札でも、それで無理やり回ることは出来たのだが、しかしそれを許してくれるほど蒼人は甘くない。それは遊良とて想像の範囲内。これを簡単に許してしまっては、何のために煉獄龍を出したのか分からないだろう。

遊良とて、それを止められることなど分かっていた…いや、わざと止めさせにいったのだ。これで、次のカードが使えることに繋がるのだから。

「よし、続いて【トレード・イン】発動！レベル８、【堕天使ゼラート】を捨てて２枚ドロー！さらに手札の【堕天使アムドゥシアス】の効果！【背徳の堕天使】と共に捨ててゼラートを手札に戻す！…【闇の誘惑】を発動し、２枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外！」

流れるようにデッキを回転させていく遊良。ドロー多用戦術の恩恵か、多少初手が悪くても無理やりに言うことは聞かせられるのだ。自分とて負けられない、戦意に迷いが生じても、戦いをやめるわけにはいかないのだと言わんばかりに。

「【堕天使の戒壇】を発動だ！墓地の【堕天使アムドゥシアス】を守備表示で特殊召喚し、効果発動！俺は１０００ＬＰを払って、墓地の【背徳の堕天使】の…」

「馬鹿ガ！そんナ好キ勝手ニやらせるかヨ！速攻魔法発動！【禁じられた聖杯】！【堕天使アムドゥシアス】ノ効果ヲ無効ニ！」

「…くそっ！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００

「見たかよ！天城の奴、無駄にＬＰ１０００も失ったぜ？」

「下手くそぉ！無様なんだよ落ちこぼれがぁ！さっさと負けちまえ！」

そう言ってくるのは一体誰の声だろうか。しかし、あまりに多くのこういった野次が飛んでくるのは仕方ない事であり、誰が言ったのかなど遊良にとってはどうでもいい事ではあるのだが、自分の行動の一つ一つに対して貶されるのは彼にとっても正直言ってやりにくいこ

とだろう。３枚も伏せカードがあるのだから、止められるとは思っていたのだろうが。
遊良にとってこのくらいの妨害も想像済みで、できればこのターンで突破したかったのだろうが、観客の声はそんなことなどお構いなしに遊良の負けだけを願っているよう。
そんな中でも、次にかけてターンを終えようとする遊良。

「俺はカードを１枚伏せてターンエンド。」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：６→２枚
場：【堕天使アムドゥシアス】
伏せ：１枚

「僕ノターン、ドロー！」

そして、再び蒼人にターンが移った。先ほど無様にＬＰを無駄に消費した、あの場違いな落ち零れをこのターンで終わらせて欲しいと、そんな期待の篭った大きな歓声が蒼人を包むが、しかし遊良はこの時を逃さずに声を荒げる。
手札０で発揮される蒼人のモンスターの真価。だからこそ、蒼人の手札がまだ残っているこのタイミングを逃さないために。

「このスタンバイフェイズ！俺は永続罠【闇次元の解放】を発動！除外されている【堕天使アスモディウス】を攻撃表示で特殊召喚する！」

【堕天使アスモディウス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

先ほど闇の誘惑にのまれて次元の彼方に消えていった堕天使の一体。しかし、その力は確かに強く、また自身が破壊されても主の元に

従者を残すことの出来る忠義高いモンスターでもあるのだ。
　そんなモンスターの登場に、観客席からはまたもやブーイングが起こり、またそれを見た蒼人もイライラしたような口調で口を開く。
「チッ、目ざとイ奴ダ。しかモ面倒臭イモンスターを出スなんてネ。どうすル？ついで二オーガ・ドラグーンも破壊しておくカ？」
「…今は動かないでいい。」

　ここでさらに動いて、煉獄龍を破壊することもできる。しかしそれをやらないのは、先ほど止められたこともあり、これ以上無駄にＬＰを消費することが出来ないからでもあった。
　だからこそ、オーガ・ドラグーンと同等の攻撃力をもつ堕天使を出したのだし、次にターンが回って来た時からが勝負、そう考えている様子の遊良。蒼人とて、むやみに制圧効果を持つオーガ・ドラグーンを破壊されてもトークンを残すアスモディウスと相打ちはさせたくないだろう。
　そんな遊良を見てか、歪ませた表情をさらに変えて蒼人は１枚になった手札を使うのだが、その真意は彼にしかわかるはずもない。
　ニヤニヤした顔を崩さずに、蒼人はソレを発動した。
「何調子二乗ってんダ？要ハ破壊しなけれバ良いんだロ？…じゃア『面白イ物』…見せてやるヨ。魔法カード【ソウル・チャージ】ヲ発動！このターン、バトルフェイズを放棄する代わり二、僕ハＬＰヲ１０００払っテ墓地ノ【インフェルニティ・デーモン】ヲ蘇生すル！手札０ノ時、その効果デ、デッキかラ【インフェルニティ・ネクロマンサー】ヲ手札二加えテ、通常召喚！」

　蒼人　ＬＰ：４０００→３０００

【インフェルニティ・ネクロマンサー】レベル３
　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／２０００

「【インフェルニティ・ネクロマンサー】ハ召喚時二守備表示二なル。効果発動！墓地の【インフェルニティ・ビートル】ヲ蘇生する！…じゃア行こうカ…」
「…ッ!?な、何をする気だ？」

そうして、場が整った蒼人が満足気な顔で遊良を見た。バトルフェイズが行えないとはいえ、まるで今から起こることで、じわじわと遊良と嬲れることが嬉しいかのように。
その悪意に飲み込まれないように足の力を強める遊良であったが、しかし一体蒼人は何をしようと言うのだろうか。今の自分の考えられる手を精一杯思考し備える遊良。そんな遊良などお構いなしに、ゆっくりと手を掲げると歪んだ表情を歓喜に変えて…
―蒼人は動き出す。

「レベル3ノ【インフェルニティ・ネクロマンサー】とレベル4ノ【インフェルニティ・デーモン】二…レベル2の【インフェルニティ・ビートル】ヲ…チューニング！」

その瞬間、不意に身震いを覚え始める遊良。自動空調が効いている観客席からでは決してわかるはずもないその変化は、対峙している遊良だからこそ感じる物。夏が過ぎたといっても、この季節では絶対に味わうことなどない『寒さ』…いや、それはまさに『凍え』か。
蒼人の方から感じられるそれは、否応にも遊良にだけ牙を剥き…

「凍テツケ、世界ヨ！飲ミ込メ、全テヲ！シンクロ召喚！レベル9、【氷結界の龍　トリシューラ】！」

―！

―凍気を引き裂き、現れた。

【氷結界の龍　トリシューラ】レベル９
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２０００

それは、あまりの凶悪さと強さから、今では見ることすら叶わぬほどのレアカード。世界中のシンクロ使いがそれを望んでも、手に入れることなど出来はしないモノ。かつて世界を滅ぼしたという御伽話は、誰もが知っていることだろう。
その伝説のカードが、目の前に。

「うおぉぉぉお！すっげぇー！」
「蒼人センパイ凄すぎぃ！幻のシンクロモンスター持ってるなんて！」
「ヤバすぎだろぉコレ！泉すげぇぞぉお！」
「天城相手にサービス良すぎだろぉ！」
「先輩かっこいいーっ！」
「雑魚なんてソレでぶっ飛ばせーっ！」

観客席の学生達も、幻のシンクロモンスターの実物を見れたことへのヒートアップで、蒼人への応援・声援を留めることを知らない様子。トリシューラの凍気が意図的に遊良にのみ向けられていることで、自動空調が追い付かない程の冷気など感じもしていないのか、天城へのアタリをより一層強くする。
吐く息も白く変わってしまうほどの冷気と、より強くなった蒼人の悪意に呼応するように猛る氷龍。
そして、その凍気に晒されたことがきっかけとなって、遊良は『とあること』を思い出していた。

「…ッ!?ま、まさか…」

―そう、このモンスターは、実体化している。

ソリッド・ヴィジョンに過ぎないはずのトリシューラから発せられる冷気はまさしく本物。でなければ、遊良の体感温度がここまで低いわけもないし、このまま放っておけばそのうち凍え死んでしまうだろう。

それに、攻撃でもされればこんな建物は一撃で崩壊してしまうことは必至。遥か昔の御伽噺でも、この龍1体で世界が滅びたという逸話だってあるのだから。絵本の中の話でも、それが実体を得てこの場にいることが相まって、嫌でもそのヴィジョンを否定できない。

まだバトルフェイズが行えないのが幸いか。…遊良にとっては、シンクロ召喚されたこのモンスターの登場自体が、幸いなわけがないのだが。

伝説だけあって、その凶悪な効果はあまりにも有名。遊良を敵とみなしたトリシューラは三つ首の全てでその敵を見据えると、怒りに任せて咆哮した。

「トリシューラの効果発動！シンクロ召喚成功時、相手ノ手札・場・墓地のカードを1枚づつ除外すル！消えちまいナ！手札ノ1枚・場ノ【堕天使アスモディウス】・墓地ノ【背徳の堕天使】ヲそれぞれ除外ダ！」

「く、くっそぉ！」

――！

為す術無く、遊良のカードが3枚も除外されてしまう。手札にあったゼラートも、場で遊良を守っていたアスモディウスも、墓地からの反撃を狙った罠カードも。

…その全てが。

対象を取らないこの除外効果の凶悪性はもちろんのこと、ここで下手に動いては除外されるカードを変更され、この後のターンへの2次、3次被害になることだってあるのだ、満足気に顔を歪めている蒼

人に対して、苦しそうな顔をする遊良。

「コのターン、僕はバトルフェイズを行えなイ。命拾イしたネ落ちこぼレ。」

「はぁ…はぁ…さ、寒い…」

見ている誰も、遊良の吐く息が白く変わっていることなど気付きもしないだろう。蒼人の悪意とトリシューラの冷気、そして観客の敵意の全てをその身に受け続けている遊良は、体力も思考力も、普段よりもずっと消耗が激しい様子にも見えるというのに。

それを対面で見ている蒼人の表情は満足気で、自分に歯向かう愚か者をいたぶれることが何よりも嬉しいのだろう。悪意で歪ませた表情が、より一層下劣に歓喜した。

「キャハハ！良イ顔ダヨ。辛そうデ、泣きそうデ、死にそうデ！男ハそうデなくちゃネッ！僕以外ノ男ハ皆、僕ニ嬲られテ居ればイインダ！」

「くっ…そ…」

「先ずハお前からダ！それデこの学園ノ奴ヲ全員ぶっ飛ばしたラ、最後ニハ【黒翼】ヲ血祭りニ挙げてやル！僕ハこのままターンエンド。」

蒼人　ＬＰ：４０００→３０００

手札：１→０枚

場：【煉獄龍　オーガ・ドラグーン】

【氷結界の龍　トリシューラ】

伏せ：２枚

蒼人の言った言葉の半分も理解が追いつかない遊良の思考、【黒翼】がどうとか言っていたような気がするものの、それを深く考えることが出来ないのだろうか。ターンが移るものの、寒さで悴む手でドローすらままならず、手札も手放してしまうそうなくらいに体全体が痛い

と凍える表情で訴えている。
そして、離れた観客席で自動空調が暖房に切り替わったことにも気がつかない学生達には、そんな遊良の変化など理解する気もなく、ターンが移ったというのにただ立ちつくしている遊良の姿へと苛立ちを募らせた。

「どうしたー！やる気が無いならさっさとサレンダーしちまえ！」
「時間稼ぎなんて見苦しいぞクズが！」
「調子に乗るからだ天城の奴！」
「泉先輩との力の差を思い知れよなぁ！必死になってキモイんだよ天城ぃ！」

幻のシンクロモンスターにびびった腰抜け。3年生に楯突いた身の程知らず。戦ってもいない彼らの目には、戦っている遊良がそういう風にしか映らないのか。
一度は遊良に完膚なきまでに叩きのめされているはずの1年生達ですら、上級生達の態度に則って声を荒げるその姿は、もはや遊良に破れたことなど忘れて、蒼人に追い込まれている落ち零れを、まるで自分が追い詰めているとでも錯覚している様子にも見える。

「遊良…」

その中で、悔しそうに唇を噛み締め、ただ見つめることしか出来ないで居るルキの姿。この騒ぎの渦中に取り残されているルキがいくら声を張って遊良を応援した所で、自分の耳すらに届く前に周囲の歓声にかき消されてしまうのだから、何も出来ない歯がゆさだけがルキにはあった。
こんな時、遊良にしてやれることは何も無い。
幼少期も、ただ自分には遊良の名を呼んで、傍にいてやることしか出来なかった。今はどうだ、傍に居てやることすら出来ないじゃないか。それが、今のルキにはたまらなく悔しいと言いたげな表情で。

ただ、見ているしか、出来ない。

「オイ、サッサとしてくれないカ？コノ後、クソ生意気な天宮寺のガキも始末しなキャ行けないンダカラサ。」

「…は？な、何言ってんだ？」

「この僕ヲ差し置いテ、１年ノ癖シテ代表ニ選ばレやがったアノ野郎ダヨ！アイツはこんなモンじゃナイ！もっと屈辱的ニ！もっと残酷ニ嬲ってヤル！だカラ僕ハ忙しいンダ、早ク負けてくれヨ！」

「…そ、そんなこと…」

寒さで震える思考でも、蒼人の言ったソレをはっきりと理解できる。なぜなら、この男は自分の幼馴染を、堂々と傷つけると宣言したのだ。そんなこと、『はいそうですか、ご自由に』なんて、遊良に許せるわけがない。

それがたとえ、負ける姿など思い浮かばないようなあの鷹矢でも。殺しても死なないようなあの馬鹿であっても。守ってやるのは、当たり前なのだ。

絶望していた頃の自分を守ってくれた鷹矢を、今度は遊良のほうが見殺しにするなんて、出来るわけがないのだから。

「…させるわけ…ないだろっ！俺の…ターン、ドロー！」

かじかむ手が痛むことなど気にも留めず、勢いよくデッキからカードを引く遊良。いくら戦いづらい苦手な相手でも、いくら実体化した伝説による寒さで思考が回らなくても。

幼馴染を傷つけようとする敵相手に、そんなことなど言っている場合じゃない。そんな遊良の闘志に呼応するように…デッキがそれを手助けするかのように応え始めるのか。思考を深く沈めなくとも、今できることが頭に自然に浮かんでくるかのようで。

「【堕天使アムドゥシアス】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の

【堕天使の追放】の効果を得る！」

遊良　ＬＰ：３０００→２０００

先ほど止められて、無駄にＬＰを消費させられた効果を、今度は恐れることなく発動する。

つい先ほどまでは、また止められたときのことが遊良の頭に過ぎっていたが、それで手を休めるわけには行かなくなったのだ。まったく躊躇無く命を削り、それを止める様子もない蒼人を見て、遊良はデッキから1枚のカードを手札に加えた。

「俺が加えるのは【堕天使ディザイア】！その後、【堕天使の追放】をデッキへ戻す！俺は【堕天使アムドゥシアス】をリリースし、レベル１０、【堕天使ディザイア】をアドバンス召喚！」

【堕天使ディザイア】レベル１０
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２８００

そうして現れるは、漆黒の鎧と武器を纏った堕天使。レベル１０という高さでありながら、1体の天使の命と引き換えに降臨するその姿は、いかなる者をも葬り去る力を持つ。

そして、漆黒の鎧に映り込む伝承の氷龍と煉獄の鬼龍を相手にしても臆することなく佇み、主の進撃の為に羽ばたくのだ。

「【堕天使ディザイア】の効果発動！攻撃力を１０００下げ、オーガ・ドラグーンを墓地へ送る！やれ！ディザイア！」

―！

ディザイアの羽ばたきによって、オーガ・ドラグーンの足元に黒き闇が出現し、そして煉獄よりも深いところへとソレを落した。

いくら魔法と罠を吹き飛ばす力を持っていても、モンスター効果までは無効にできない。散々苦しめられた煉獄の鬼龍を消すことに成功し、遊良はさらに動き始める。

【堕天使ディザイア】
ＡＴＫ／３０００→２０００

「チッ、諦めノ悪イ奴ダネ！」
「これで制限はなくなった！魔法発動、【闇の誘惑】！２枚ドローし、手札の【堕天使ユコバック】を除外する！さらに、【堕天使イシュタム】の効果発動！手札の【堕天使スペルビア】と共に捨てることで２枚ドロー！…よし、魔法カード【大欲な壷】を発動だ！除外されている【堕天使ユコバック】・【堕天使アスモディウス】・【堕天使ゼラート】をデッキへ戻して１枚ドロー！」

いつものように、流れるようにデッキを回転させる遊良。それは、戦う意思が戻った主に反応するようにして堕天使たちも遊良の元に集い、倒すべき敵を見定めてその時を待っているかのようでもあって。

負けることなど出来ない遊良にとって、これで終わるつもりもさらさらない。

「今引いた【堕天使の追放】を発動！デッキから【堕天使アスモディウス】を手札に加えて、魔法カード、【トレード・イン】を発動する！アスモディウスを捨てて２枚ドロー！…来た！魔法発動、【堕天使の戒壇】！墓地からスペルビアを守備表示で蘇生して、その効果で【堕天使イシュタム】も呼び戻す！羽ばたけ、２体の堕天使よ！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

続けさまに現れる遊良の堕天使達に、ブーイングしていた学生達の声も段々と小さくなって来たのか。中には次々に出現する漆黒の堕天使達に見惚れ始める者や、遊良に完膚なきまでに叩きのめされたことを思い出している者もいる様子。

実力が足り無い者は、遊良の場で何が起こっているのかわからずに声を静めないが、実力がある者ほど、遊良の行っていることの異常性を理解しているのだろう。

少ない手札からでも、あれだけデッキを操ることは並大抵のことではない。それが上級生ともなれば、馬鹿にしていたのは本当に落ち零れなのか疑問すらわくことに違いないだろう。特に３年生たちの大半が、それを見て声を失っている。

これを理解している３年生は、この群雄割拠の決闘学園で揉まれて生き残ってきたのだ。それを理解出来ないほどデュエルを舐めては居ないし、遊良の行っていることの難しさを知っているのだから。

「ウザッタイんだヨー・イイ加減二したらどうダ！特殊召喚成功時、罠発動！【激流葬】！モンスターを全テ破壊すル！」

――！

そんな空気に変わってきている中で、イライラしたように伏せカードを発動する蒼人。先ほどまで諦めかけていた落ち零れが、息を吹き返したように展開し始めることが相当癪に障ったのだろう。

早くケリをつけて、次は調子に乗っている二人目の１年生を血祭りにしなければ行けないというのに。それが、自身が邂逅を熱望しているあの【黒翼】の、その孫と来たのだから余計にその苛立ちを募らせて。

自身が召喚した伝承の氷龍、幻のシンクロモンスターであるトリ

シューラが巻き込まれることなど気にも留めずに、全てを洗い流す激流が遊良へと襲い掛かった。

「させるか！イシュタムのモンスター効果、ＬＰを１０００払って、墓地の【堕天使の追放】の効果を再び得る！デッキから【堕天使テスカトリポカ】を手札に加えて【堕天使の追放】をデッキへ再び戻す！」

「ハァ!?今更何ヲする気ダ？」

遊良　ＬＰ：２０００→１０００

ギリギリまでＬＰを削って、もう後が無いというのに堕天使を手札に加えた遊良の行動が理解できないのか。蒼人が不快そうな声をインカムで届けてくるものの、遊良はその手に新たな堕天使を加えることに躊躇がない。

そんな蒼人の声など気にせずに、目の前まで迫っている激流が既にトリシューラを巻き込んで堕天使へと襲いかからんとする中で、遊良はたった今加えた堕天使の本領を発揮した。

「手札に加えた【堕天使テスカトリポカ】の効果！堕天使が破壊される場合、代わりにテスカトリポカを墓地へ送ることが出来る！」

「ナッ!?」

「守れ、テスカトリポカ！」

―！

激流が堕天使たちを飲み込む寸前で、激流を割って現れる一体の堕天使。それは、蒼人が操る悪魔に負けず劣らずの風貌をしてはいるが、守ることに長けた堕天使であって。

身を挺して仲間の堕天使と主を守るそのモンスターが発する業火によって、流れ行く激流が水蒸気となって消えていった。

―いや、それだけではない。

テスカトリポカの発した業火により、激流を蒸発させたその熱気が凍えていた遊良の体を包む。伝承の氷龍が激流に巻き込まれ砕け散ったのも相まり、遊良を襲っていた凍気も同時に消えたのだろう。徐々に体の感覚も元に戻っていくではないか。

「い、泉君の場ががら空きじゃない！」
「う、嘘だ！蒼人が1年なんかに!?」
「泉センパイ！負けちゃイヤー！」
「何やってんのよ1年生の癖に！」
「あ…天城が…う、嘘だ！」
「あ、アイツが蒼人センパイに勝てるわけ無いだろ！」

そう、蒼人を守る幻のシンクロモンスターも、遊良を遮る煉獄の鬼龍も、もう既に蒼人の場から消えている。もし蒼人があの罠を使わなければ、遊良の場にトリシューラを超える攻撃力を持ったモンスターは居なかったというのに。状況だけを見れば、結果はそうだろう。

しかし、実際に戦っている彼らには、今の心が全てなのだ。諦めが悪い落ち零れに、苛立って一掃してしまおうとしたのも。状況も思考も、そして心も常に変化するもの。

もしかしたら蒼人がトリシューラを残しておいても、遊良はそれすら突破して、一気にトドメを刺しに来たかもしれない。それを感じさせるほどの遊良の展開が、それを見た蒼人にそう判断させたのかもしれないが、それは彼らにしか分かるはずも無い。

追い込まれていたはずの遊良が今、結果として優位にたったことも、今戦っている彼らのデュエルの全て。

観客が何を喚こうと、遊良の負けを願おうと、戦っている彼らには関係ないのだから。

「これで終わりだ！先ずは【堕天使イシュタム】でダイレクトアタック！」

遊良がこのデュエルを終わらせにかかり、魅惑の堕天使へとそう命じる。いくらモンスターが実体化していようが、きっと自分の堕天使たちなら主の意を汲んで、蒼人を致命傷にはしないだろう。その確信が遊良にあったからこそ、何の躊躇もなく攻撃を命じられた。

そして、一度天へと羽ばたいた魅惑の堕天使は、優美な黒羽を周囲へと見せ付けながら、蒼人に狙いを定めて魔弾を放つ。

悲観と憤怒に塗れた周囲の声など、まるで気にしていないように。主の勝利のために、『敵』を撃つのみ。

…

「キャハッ…」

瞬間。

まさにイシュタムの放った光の魔弾が、蒼人に直撃する瞬間だった。

誰もが蒼人の負けを想像していた時、そう、遊良とてそれを考えていた時の、蒼人の行動。

―顔を歪めて、小さく笑う。

「勝ったト思っタ?甘いんだよネ!」

場に1枚だけ残ったカード。ずっと発動せずにいたソレは、観客にはもちろん、遊良だってその存在を最後の最後に思い出したくらいだ。

何せ、アレだけ遊良が展開した時も、蒼人が動いているときも、最初のターンからソレはそこに鎮座して、頑なに動かなかったモノ。伝説のシンクロモンスターを自分の罠に巻き込んだことすら、遊良の意識をそこに向けさせないための布石にも思われるタイミングで。

満を持して、機を熟して。蒼人はその瞬間を見計らっていたかのように、高らかに宣言した。

「直接攻撃宣言時、罠カード、【王魂調和】ヲ発動！」

「なっ!?」

蒼人の発動した罠。それは、王への危害を加えることなど許さぬ守り。王を守るモンスターが居ない場合でも残った魂だけで王を守りぬく意思を備えた、まさに魂の調和。

いや、守りだけではない。王に危機などあってはならない、それを体現するこのカードは、いかなる攻撃から王を守護したその後に…

…王の剣をも生み出すのだ。

「イシュタムの直接攻撃ヲ無効ニシテ、墓地のレベル6【天狼王　ブルー・セイリオス】ニ、レベル2、闇属性ノ【インフェルニティ・ビートル】をチューニング！シンクロ召喚！現レロ、死ヘト誘ウ冥府ノ竜！レベル8【インフェルニティ・デス・ドラゴン】！」

――！

そして、どこからとも無く響く奇声。その奇怪な咆哮を轟かせて飛び立ったソレは、もう駄目かと観客の誰もがそう思っていたその時に現れた、虚ろな目をした死を呼ぶ亡竜。

…見ている彼らも、きっと思わなかったはずだ。

圧倒的不利に追い込まれていた1年生がここまで逆転したのだ、そ

のまま蒼人が負けてしまう雰囲気もあったというのに。それでも、この泉　蒼人という自分達の代表がさらに上を行くなんて。
底知れぬ才能を確かに感じさせてもおかしくない、なんと恐ろしいタクティクス。
しかし、それは当たり前なのか。
何せ、イースト校全体が遊良よりも彼の勝利を思い浮かべ…一部の紫魔家は除いて、彼の代表入りを強く願っているのだから、ここで蒼人が１年生に負けていいはずが無い。だから、蒼人ならやってくれる。彼らも、そう信じているのだろう。
この土壇場で登場した攻撃力３０００の大型シンクロモンスターに、先ほどまで悲観ムードだった観客席が再び沸きあがり、先ほどよりも大きな地響きとなって会場を揺らし始めた。

【インフェルニティ・デス・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２４００

「キャハッ、残念だったネ！どうすル？バトル続けル？」
「くそっ…俺はカードを１枚伏せて…ターン、エンド…」

遊良　ＬＰ：３０００→１０００
手札：１→０
場：【堕天使ディザイア】
【堕天使イシュタム】
【堕天使スペルビア】
魔・罠：【闇次元の解放（効果なし）】・伏せ１枚

やっとの思いで、ここまで攻めたというのに。それをあっさりと、たった一枚のカードで止めてしまう蒼人に、恐怖心すら覚え始めてしまうのは仕方ないのだろうか。そんな風にすら見える遊良のうなだれる姿は、今までに無いくらいに弱々しいではないか。
そんな姿になった遊良を、満足気に見る蒼人の歪んだ笑顔。ここま

で追い詰めが、しかしこんな物では終わらせない。自分に楯突いた愚か者に、もっと絶望を。そう、感じさせながら蒼人が口を開く。

「僕ノターン、ドロー！…ココでディザイアを攻撃すれバお前ハ終わりだけどサ…それじゃあ面白くないよネ！絶望ヲ見せてやるヨ！」
「…な、何を!?」
「場ニ1枚伏せテ、手札0トなっタ事で【インフェルニティ・デス・ドラゴン】のモンスター効果発動！こいつノ攻撃ヲ放棄する代わり二、さっき僕二攻撃してきタ【堕天使イシュタム】ヲ破壊シテ、その攻撃力ノ半分ノダメージをお前二与えル！」

命無き死の竜が、遊良の命のすべてを葬り去ろうとして発する咆哮。その標的に選ばれたイシュタムが飲み込まれれば、きっと遊良の命はないのではないか。いや、確実に葬り去られること間違いない。
それを予感させるほどの威圧感と、漲る蒼人の悪意が折り重なって、目に見える闇が遊良へと襲い掛かるようにして轟き、そして聞こえてくる。

「じゃあナ、落ちこぼレ！」
「…ッ！罠発動【魅惑の堕天使】！場のイシュタムを墓地へ送って、エンドフェイズまで【インフェルニティ・デス・ドラゴン】のコントロールを得る！」
「アァ!?」

しかし、それを阻止するかのようにイシュタムが天へと舞い上がり、直撃する寸前で死の咆哮を避けたかと思うと、誰もが見惚れるような漆黒の翼を広げて自分を攻撃しようとした亡竜へ向かった。
そうして淫靡ながらも魅惑的な舞を踊ったかと思うと、そのまま静かにその姿を消していき、それに操られるかのようにインフェルニティ・デス・ドラゴンは遊良の場へと移動するではないか。
主を命を守る時、その身を犠牲にして敵の心を一時的に奪うその舞

は、亡竜が放つ咆哮で吹き飛ばされて踊る死のダンスではない。彼女だけに許されたその魅惑のダンスを見たモノは、たとえ神であろうとも見惚れることだろう。

そんな消えていくイシュタムの表情が、怒りに染まっていたことに、遊良は気が付かぬまま。

―そして…

―！

「グフッ!?…ガ…ガハッ…」

急激に、鋭敏に。胸の奥から上ってくるその激痛に、思わず咳き込んで『何か』を吐き出さんとする遊良。イシュタムが消えたその瞬間に、凍気に中てられた時以上の苦しみが遊良を襲ったからだ。

普通なら、遊良が操ることなど出来るはずもないＥｘモンスター。実際のカードをディスクにおいても、うんともすんとも言わなかったソレは、相手が召喚したモノのコントロールを奪うという形でなら場に置くことが出来た。

しかし、今までそれをしたことも無ければ、しようとも思わなかったことであって。

それがこの追い詰められた場面で、仕方なく行ったとは言え、突如襲ってくるこの苦しみに、悶え始める遊良。腕で口を塞いで、喉の奥からこみ上げて来るモノを止めた。

「…はぁ…はぁ…こ、これ…血…か？」

それを確認した遊良が、思わず自分の目を疑ってしまったのも無理はない。制服で抑えたそこには、吐血したソレが付着していたのだから。

普通なら、こんな状態になった原因はすぐにはわからず、吐血したとあれば命に関わることとしてすぐにでも病院に行かなければならないだろう。しかし、それでも遊良にはすぐに理解できてしまう。
自身の胸の奥に確かに感じるそれは、幸か不幸か、今の自分のおかれている境遇をはっきりと遊良に思い出させるモノであって。

「…怒ってるのかよ。…俺がＥｘモンスターを場に置いたことに…」

それは、間違うことのない…怒りそのもの。

とっさとは言え、一時的とはいえ…Ｅｘ適正を捨てた自分が、Ｅｘモンスターを場に置いたことへの怒り。堕天使達が、怒っているのだ。遊良が、何を捨てて自分達を使役してるのか、それを忘れたのか…と。
そんな体でもしつこく食い下がる遊良に、とうとう業を煮やしたかの様に喚く蒼人。イライラを募らせた声を大きく荒げて、さらに遊良に襲いかかる。

「いい加減しつこいんダヨ！さっき伏せタ【死者蘇生】を発動！墓地カラ【インフェルニティ・デーモン】を特殊召喚！効果デ永続魔法、【インフェルニティガン】ヲ手札二加えテ発動！手札０ノ時、これヲ墓地へ送ってテ【インフェルニティ・ネクロマンサー】と【インフェルニティ・ビートル】ノ２体ヲ蘇生！レベル４ノ【インフェルニティ・デーモン】二、レベル２ノ【インフェルニティ・ビートル】をチューニング！シンクロ召喚、レベル６【デーモンの招来】！」

【デーモンの招来】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１２００

「まだダ！【インフェルニティ・ネクロマンサー】ノ効果発動！【インフェルニティ・デーモン】ヲ蘇生シ、デッキカラ【インフェルニティ・

リベンジャー】ヲ手札二加えテ通常召喚！レベル４【インフェルニティ・デーモン】とレベル３【インフェルニティ・ネクロマンサー】にレベル１【インフェルニティ・リベンジャー】をチューニング！シンクロ召喚！レベル８！【ダークエンド・ドラゴン】！」

【ダークエンド・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２１００

休む間もなく次々現れる蒼人のシンクロモンスター達。そのどれもが、他の使い手たちが召喚するモンスターよりも禍々しく感じるその姿は、まるで蒼人の悪意に染まってしまっているかのようにも見える。

このターン、遊良が蒼人のインフェルニティ・デス・ドラゴンを奪ったせいで、直接攻撃による勝利をつけることは出来なくなったものの、それでもここまで粘る遊良に苛立っているのも事実。

遊良の場をこのまま残しておく気は蒼人に無く、一掃して絶望のまま力尽かせてやる算段なのだろうか。

「バトル！ダークエンドで守備表示のスペルビアに！デーモンでディザイアに攻撃ダ！」

―！

「ぐふっ!?」

遊良　ＬＰ：１０００→５００

そして、ついに実際のダメージが遊良へと襲い掛かって来てしまった。コストでＬＰを払うならばまだしも、今まで耐えて、耐えて…そして耐えてきたと言うのに、ダメージという苦痛、その衝撃が痛みとなって遊良の体を突き抜ける。

ただでさえＥｘモンスターを場に置いたことによる、堕天使の怒りで体が蝕まれていると言うのに、それに相まってこんな衝撃を食らってしまっては。まだＬＰが残っているとはいえ、瞬間的に起こった苦痛により、意識が体から飛びかける遊良。

それを必死に繋ぎ止める精神も、もうボロボロになっているのだろう。ぼやける視界で何とか蒼人を見てはいるが、慢心相違に違いない。

「チッ、本当にしつこい奴だヨ。僕ハこれでターンエンド。戻っテ来イ、【インフェルニティ・デス・ドラゴン】。」

蒼人　ＬＰ：３０００
手札：０枚
場：【デーモンの招来】
【インフェルニティ・デス・ドラゴン】
【ダークエンド・ドラゴン】
伏せ：０枚

「くはっ！…はぁー…はぁー…」

そうして、長い長い蒼人のターンが終わり、主の元へと変える亡竜。場からソレが離れたことによって、遊良も怒りによるその苦しみから解放されるものの、やはり自分はもうＥｘモンスターに触れてはいけないことが、コレでよくわかってしまった。

例え他人のモノを一時的に奪ったのだとしても、遊良の場にＥｘモンスターが存在すること自体が罪なのだと言わんばかりに。

…これは、警告。

―あのとき交わした誓約は、こういうことなのだ…と。

それをもう一度、今度は身をもって知る遊良。蒼人に受けたダメージと、自分の罪が相まって、立っていることもままならずに片膝を床につけてしまう。

「やっト諦めたのカ？しつこいクズ野郎だったヨお前ハ。」

「く…くそっ…」

…こんなところで、終わってしまうのだろうか。

既に体力も精神力も限界。周囲の敵意、氷龍の凍気、蒼人の悪意、そして自分の罪。その全てに貫かれ続けた遊良には、もうカードを引く力など残ってはいないのだろう。

諦めてなど居ないのに。まだ戦う意思は残っていると言うのに、体がそれを聞いてくれない。遊良の片膝が地面に崩れついていることを諦めたと勘違いしたのか、観客席の学生もさらに盛り上がって遊良の敗北を煽りたてる。

『まーけーろ！まーけーろ！まーけーろ！まーけーろ！まーけーろ！』

会場が一体となって叫ぶソレを、見ている教師たちも止めはしなかった。一人をここまで標的にして、寄ってたかって蔑むことがまるで正義だと言わんばかりに。その誰もが蒼人の勝利を望んでいたのだから。

ここまで学生達が盛り上がっているのだ。いくら教育者でも、今までの許されていた天城への『卑下という名の一種の特別扱い』にどっぷり浸かっていては。今までも、こうだったから。天城　遊良は卑下の対象、それはこの学園において…いや、この世界においての常識なのだと、そう勘違いして。

少ないながらも、遊良を認め始めた1年生の教師数人からしても、自分達の力ではどうにも止められないのだろう。生徒達より高い位

置にいて観戦している教師たちに出来ることは無く、可哀そうに思いながらも仕方のないように遊良を見ているだけに過ぎない。

…誰もが、彼の敵だった。

―！

「ゆうらぁっー！がんばれっー！」

そんな中で、微かな叫びが遊良の耳には確かに届く。地響きにも間違えるようなこの遊良への卑下の大歓声にかき消されてはいるが、たった一つ、周りとは違う遊良への言葉。

聞き間違えるはずなどない。ルキの、喉がはちきれんばかりの必死の応援。きっと誰も気がついてはいないだろう。誰が天城の応援などするのだろうかと、そう思っているためだろう。誰にも気が付かれずに、しかし遊良には微かに届く。

「ルキ…くっ…」

重たい体を無理やり立たせて、必死になって取り繕う遊良。もう立っていることもままならず、少しでも油断すると倒れてしまいそうだというのに。そんな諦めの悪い遊良に、蒼人の我慢はもう限界の様子。イラつきに顔を最大限歪めて、不快な顔を全面にさらけ出す。

「アァーもウ！うざったいヨお前！いい加減にしてくレ！誰モ！お前なんて見ていなイ！誰モお前なんテ見たク無いんダ！」

「うる…さい…、俺の…勝手…だろ…」
「アァ…？」

そんな、息も絶え絶えになってそう反論する遊良に、蒼人の怒りが頂点に達したのだろうか。
悪意に染まって、顔を歪めて。
そうして彼が嬲ってきた天城　遊良がまだ諦めないことに対して悪態を隠せていない。そんなもの、初めから隠してなどいないのだが、それをさらに加速させたようにして。
誰からも期待されない癖に、誰からも認められない癖に。この男は何でここまでしぶとくしつこく、しがみつくのだろうか…と。
―Ｅｘ適正が無い。それはこの世界において、どうしようもない程に『出来損ない』の証。
普通ならデュエルなどさっさと捨てて、惨めに隠れて生きていれば良い物を。決闘の世界で生き残ろうと、こんなに無様な『デュエルの真似事』をしてまで決闘学園にしがみついているだから。悪意に飲み込まれている蒼人には、今の遊良がどうしようもなく目障りに映ってしまう。

「アァ…ソッカ…高天ヶ原…カ。サッキ名前言ッテタヨネ…」

そして、完全に飲み込まれる蒼人。

…遊良が呟いてしまったルキの名前。確かに感じていたこの少女への特別な感情。

それが、正常な時の蒼人自身では気付いていない感情であったのだとしても、それでもどうしようもなく遊良が憎くなってきてしまうのだから、蒼人自身だって驚いているのだろう。
その募る悪意が嫉妬だとは気がつかずに、蒼人がイライラしたように口を開いた。

「じゃア…お前を倒したラ……あの女ヲ犯ス。」
「…は？」

蒼人の放った言葉の意味を、彼とて直ぐには理解できずに。今だって必死になって意識を保っているのだ、自分の声すらかき消しにかかる大歓声によって体の内部が揺らさせている。どうしようもない気持ちの悪さが渦巻いているというのに、しかしインカム越しで繋がっている蒼人の声は、どうしても遊良に届いてきてしまう。
そんな、理解したくもない気持ち悪い言葉を、蒼人は喚きたてる様にして遊良にぶつけ続ける。

「お前ヲ縛りあげテ！お前ノ目ノ前デ！あの女ヲ犯してやル！泣キ叫ブ女の目の前デ！指咥えてちゃんと見てろヨ！好キナ男の目の前デ！どうでもいい男に孕まされル女の顔ヲ！」
「な…なにいって…」
「泣きわめクあの女ヲ！絶望させテやるんだヨ！殴ッテ、嬲ッテ、犯シテ、殴ル！この僕をシカトして！こんな出来損ないノ話ばかりシタあの女ヲ！ボロボロにシテ種付けしてヤルンダヨ！お前の目の前でナァッ！キャハハハハハハハッ！」

あまりにも酷い、その悪意。人に聞かせられないような、歪んだ思考。人を人とも思わぬのか、自分の思い通りにならない人間がどうしようもなく彼には不愉快で。
好き勝手に暴言を吐く蒼人の目は、もう遊良を見ていない。その先の、倒したあとの、ボロボロになった遊良と、ボロボロにしたルキしか浮かんでいないのだろうか。
…触れてはならない逆鱗を、思い切り蹴り飛ばしたことにも気づかずに。

「お…おま…え…」
「アァ？ンダヨ。」

俯いたままぶるぶると震え、拳を震わせる遊良。凍えていた時以上の振動が、彼の体に起こっていた。怒りを含ませたその声は、インカムで繋がっている蒼人に確かに届いてくる。

―ゆっくりと顔を上げた遊良の表情は、今の蒼人にも負けていないくらいに…歪んでいた。

「おまえぇぇぇぇぇ！」

―！

耳を劈く咆哮が、蒼人を確かに貫いた。客席に届くまでにかき消されるとはいえ、インカム越しでしか声が届かないこの地響きの中でも、それは肉声となって蒼人まで聞こえていて。

聞いたことのない声量で、放ったことのない音量で…遊良は、叫ぶ。

「つざけてんじゃねぇぇぇぇ！」
「キャハッ！調子二乗るな落ちこぼレ！手札０、伏せモ０、ＬＰも僅かデお前二何ガ出来ル！」
「つるせぇぇぇ！俺のタァァアン！ドローッ！」

人には、触れてはいけない場所がある。それはその人にとっての信念であったり覚悟であったり。それを侮辱されることは、その人間において何よりも許せないことであるのだ。

―何が倒れそうか。何が負けそうか。

―そんなこと、関係ない。
―こいつは、言ってはいけないことを言ったのだ。
怒りに顔が歪む遊良の姿がそれを物語っている。遊良にとっての逆鱗を、何においても容認できることではないソレを…この男は、堂々と蹴り飛ばしたのだから。
―幼馴染を、傷つける。
「魔法発動！【貪欲な壺】！墓地のアスモディウス、テスカトリポカ、ディザイア、スペルビア、イシュタムをデッキに戻して2枚ドローッ！」
「ッ!?コノ場面デ手札増強ダト!?」
鷹矢のことも、ルキのことも、傷つける奴は絶対に許さない。世界が全て敵に回ったあの日。周りの全員が敵になったあの時期。
命を捨てる気でいた自分を、その身を挺して必死で繋ぎ止めてくれたルキ。
自分を傷つけようと向かってくる『敵』の全てに、ボロボロになりながら牙を剥いた鷹矢。
―命を懸けて救ってくれた、大事な…大切な存在。
それを傷つけようとする者は、何人であっても…例え自分を見捨てた『神』であっても許さない、許すことなど出来るわけがない。
…彼の姿が、それを物語っている。
「【堕天使の追放】発動！【堕天使イシュタム】を手札に加えて効果発動！引いた【堕天使スペルビア】と共に捨てて2枚ドロー！続けて【死者蘇生】を発動！【堕天使スペルビア】を蘇生し、【堕天使イシュタム】を蘇らせる！来い！堕天使達！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

「チッ！またソイツ等カ！しつこい奴らダネ、今更そんなゴミ共デ何が出来ル！」
「うるさい！俺は２体の堕天使をリリース！」
「アァ!?」

そうして、突如として渦を纏う遊良の堕天使達。
それは見ている学生も、評価をつけている教師達も、気楽に観戦している役員たちの誰もが、その瞬間だけは声を発することが出来なかった。
別に、今更使い古されたアドバンス召喚のための行為。今の時代、そんな古い召喚を好んで使う者などそうは居らず、時代遅れだと誰もが言った。先ほど遊良が他の堕天使をアドバンス召喚したときも、嘲笑と蔑みが聞こえてきたくらいなのだ。
しかし、今回は誰もが声を出せないでいる。まるで、今から起こることを…見逃してはいけないことを、無意識に理解してしまったかのように。

「神に背きし反逆の翼！その姿を今ここに！」

遊良の怒りが形となりて、姿を現す。

「来い！【堕天使ルシフェル】！」

――！

清廉なる天の光、それを遮る黒き姿。神に背く佇まいはまるで天使か悪魔か。儚くも悲し気なその姿は、まるで今の遊良の姿のようでもあって。

堕天使達を統べる背徳の王は、主と認めた者の前にしか姿を現さない。

―静かに、誰にも邪魔されずに、その姿を降臨させた。

【堕天使ルシフェル】レベル１１
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「【堕天使ルシフェル】のモンスター効果！アドバンス召喚成功時、相手フィールドの効果モンスターの数まで堕天使を呼び出す！集え！【堕天使マスティマ】！【堕天使ゼラート】！【堕天使テスカトリポカ】！」

―!!!

【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２６００

【堕天使ゼラート】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２３００

【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００

息もつかせぬ速さで、主と王の元へと馳せ参じる堕天使達。そのどれもが遊良の怒りに応え、雄々しく蒼人を睨みつけていた。

周囲の人間たちも、一瞬のことで何が起こったのか理解できていな

い様子にも見える。間抜けな顔で口を開いて、言葉を出すのも忘れている者までいた。
堕天の王に見とれていたら、いつの間にこんなに呼び出されていたのか、と。
そんなことを意にも介さず、遊良は高らかに宣言する。
「【堕天使ルシフェル】の効果発動！場の堕天使の数だけデッキからカードを墓地へ送る！俺は４枚のカードを墓地へ！」
そうしてルシフェルの剣が掲げられるとき、遊良のデッキから墓地へ送られ始めた。堕天使の名を持つ力の結晶を、主の命へと変えるために。
その墓地へ送られた４枚のカード全てが【堕天使】の名を持つカードであり、天から降り注ぐ光は遊良に染み込むと、優しくその体を包み始める。戦いで傷ついた遊良の体が、精神が微かにだが癒されて、立っているのもやっとだった足に、踏ん張りの利く力が戻るくらいには。そして、それを見た蒼人の顔が信じられないと言わんばかりの表情へと変わる。
遊良　ＬＰ：５００→２５００
「フ、フザケルナ！こんなコトガ!?」
「俺はＬＰを２０００回復！行くぞ！バトルだ！ゼラートでダークエンドを！テスカトリポカでデーモンの招来を攻撃！」
―!!
「ギャハッ!?ブ…ハァ…」
因果応報、苦しそうに衝撃を受ける蒼人の体。
自業自得、遊良に与えた苦痛をその身に返されたのだ。

口から漏れるその呼吸は、微かに黒い靄を含んでいるものの…それを、他の人間が見ることは叶わず。本来のデッキから歪に変貌してしまった今の蒼人のデッキでは、デッキとモンスターの効果も噛み合わずに蹴散らされてしまって。
誰もが蒼人の勝ちを確信していたというのに、ドロー1枚でひっくり返した天城　遊良のことを信じられないモノを見る目をして…彼らは、ただただ言葉を失っているだけ。

蒼人　ＬＰ：３０００→２５００

「行け、【堕天使ルシフェル】！【インフェルニティ・デス・ドラゴン】を攻撃！」

―！

一閃、休む暇も与えずに、堕天の王へと攻撃を命じる遊良。
亡竜と同じ攻撃力を持つ堕天の王が羽ばたき、その双振りの剣に力を集めて切り裂く時…亡竜もそれに喰らいついては噛み千切らんとしていた。
まるで、聖戦。
神々の争いのように。ただのバトルではないその異常な光景に、中には怯えて蹲って泣く生徒までいるではないか。
そうして、死力を尽くした2体のモンスターがお互いに力尽きると同時に爆発四散し、激しい戦いの一つが終わる。
そんな時でも、蒼人は自身を守ることを忘れてはいないが。

「クソガッ！墓地ノ【インフェルニティ・リベンジャー】ノ効果発動！【インフェルニティ・デス・ドラゴン】が戦闘破壊されたコトで！レベルを8にして守備表示で特殊召喚スル！」

【インフェルニティ・リベンジャー】レベル1→8

ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

虎視眈々と反撃を狙うソレは、壁となって蒼人の場に現れた。守備力は０、しかし遊良の最後の攻撃を防ぐには十分だろう。もし、次のドローさえ出来れば、今度こそきっとこのクズを血祭りに引き裂いて、あの女を無様に犯すことが出来るだろう。

何が何でも、負けてやる気はない、と。蒼人に残ったデュエリストの最後の本能なのか。必死になって負けを拒む。

―そんなこと、遊良が許すはず無いというのに。

「足掻くんじゃねぇ！【堕天使マスティマ】の効果発動！１０００ＬＰを払って、ルシフェルの効果で墓地に送られた【背徳の堕天使】の効果を得る！消し飛ばせ！マスティマ！」

―！

そして、何も出来ずに蒼人の壁が弾け飛んだ。主の命を繋いだルシフェルの、残した更なる反撃の一手。

学園中が勝利を望んだ泉　蒼人に、誰もが負けろと叫んだ天城遊良が、最後の時を突きつけているのだ。

まさに、『背徳』。

がら空きになった蒼人の場には今度こそ守る札も無ければ、特異なプレイスタイルゆえに手札も無い。

今破壊したインフェルニティ・リベンジャー以外に、墓地に残っているカードのどれもが蒼人を守れる効果ではなく。もうその壁も蘇ることは無いのだから。

「ク…クソガァァァァ！」

「や、やめろー！蒼人に勝つんじゃない！」

「泉くーん！負けないでー！」

「蒼人せんぱい！そんなやつに負けるなんて嫌です！」
「せんぱいまけないでー！」
「天城ぃ！お前なんて事してるんだー！」
「ふざけんなコノヤローー！」

悔しそうに蠢く蒼人も、悲観の声で泣きじゃくるファンクラブの女生徒も、最後の最後まで悪態をつき続ける観客席の学生も、信じられないものを見ているかのような教師陣も。その、どれもが遊良にとって何の関係も無いこと。

怒りに任せて、憤怒を纏いて。最後に残った獣の堕天使に、その怒りで『敵』を吹き飛ばさせるべく、遊良は宣言した。

「これでトドメだ！【堕天使マスティマ】で、あいつにダイレクトアタック！」

低く、それは低く羽ばたいた獣。地面を擦る寸前で滑空するその白き体躯、豪腕に力の全てを集約させて。何も出来ない蒼人へと向かって、堕天使は飛び立つ。剛毅を纏ったその雷撃が、獣の堕天使の豪腕をさらに大きく見せ始めながら。

そして光り輝くその腕が元の大きさよりもずっと大きくなると同時に、黒い靄に塗れ始めている蒼人へと、それは叩きつけられた。

「憤怒の慟哭！バニッシュ・ラース！」

――！

「ギャァァァァァァァァァッ！」

盛大に、それはそれは盛大に吹き飛ばされる蒼人と黒い靄。ソリッド・ヴィジョンだというのに、まるで本物の巨躯に殴り飛ばされたかのような蒼人の姿は、きっと周囲で見ている彼らからは想像もできな

かったことだろう。
これが、本物の一撃だという事を、彼らは知らないのだから。
低く速く飛び立った獣の堕天使の一撃が蒼人へと直撃し、纏った雷撃に貫かれながら、蒼人は真後ろにあった…自分が入ってきた入場口へと転がっていく。
そしてその姿が入場口に吸い込まれて見えなくなったとき、無機質な機械音だけが会場へと高らかに鳴り響いた。

蒼人　ＬＰ：２５００→０（―１００）

―ピー…

…

『あっ…しょ…勝者…1年生…あまぎ…ゆうら…』

そして忘れていたといわんばかりに、やっとの声でアナウンスをする実況者。先ほどまでの大歓声で、全く聞こえていなかったと言うのに何が実況か。
信じられないモノを見た学生達が、声を失っていたことでやっと聞こえたそのマイク音は、誰しもに事実を突きつけてくる。

―蒼人が、負けた。

「あ…あぁ…蒼人が…」
「嘘！嘘よ！泉君が負けるなんて！」
「テメェコラ天城ぃ！なに蒼人先輩に勝ってんだクズ野郎！」
「先輩の最後の決闘祭を奪いやがってぇ！」
「潔く辞退しなさいよ！先輩に悪いと思わないの!?」

「まぐれで勝って嬉しいのかー！調子に乗るんじゃねー！」
「泉先輩が可哀想よ！天城の癖にぃー！」
「Ｅｘモンスター使えない癖に何が勝ちだ！」

怒りと、滞り。蒼人の負けを受け入れられない彼らは、こうやって遊良に声をぶつけることに何の抵抗も無いのだろうか。勝者になることを許したくない、Ｅｘ適性も無いくせに勝てることが、何よりも信じがたいかのように。

一体感のある地響きではない。各々が好き勝手に、遊良へと罵詈雑言を浴びせているだけなのだ。それは、全力で戦い抜いたデュエリストへの侮辱であることに、誰もが気付かぬまま。

あれほどの戦いを耐えぬいた遊良が、息も絶え絶えでその場に立ち尽くしているのをいいことに、格好の標的へと口を開き続けていた。

―その瞬間

「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

―！

耳を劈く声量で、喉の限り叫ぶ遊良。怒りが治まらない、はっきりした悪意をぶつけてきた蒼人にも、好き放題敵意を投げつける学生にも。

あれだけの敵意に晒されてきたのだ、それを簡単に鎮められるほど、遊良は大人になれていないのだから。これを簡単に我慢できるのが大人なのだというのならば、そんなものにはなりたくないと、そう言いたげな顔をして。

憤怒に塗れた彼の声。怒りに歪んだ遊良の表情は、好き勝手に彼を蔑む学生たちを怯ませるには十分。今まで自分の境遇を受け入れる

だけに過ぎなかった天城　遊良の見たことのない姿に、スタジアムに立つことを許されず…選抜戦に出ることも出来なかった学生たちは口を開けて声を失うのみ。

…

静寂に包まれる会場。先ほど確かに勝利を告げられた遊良は、あっけに取られている観客席の学生達には目もくれずに、フラフラになった体を引きずりながら会場を後にし始める。

姿が見えなくなったことで安心したのか、再び沸き起こった彼への大ブーイングをその背中に感じながら、遊良は控え室へと戻っていった。

――…

「うぷっ…ぼ、僕は…一体…」

全身に走る激痛に耐えながら、泉　蒼人は壁に寄り添いながら立ち上がった。胸の奥、いや全身の奥から湧き出てきそうなこの吐き気に耐えながらも、何故かブーイングに嵐になっている会場からの声量の振動で意識を取り戻した彼は、何が起こっているのかもわからずに困惑するのみ。

あれだけ待っていたはずの天城　遊良との楽しいデュエル。ナチュルの仲間達も、きっと彼と戦うことを待ち望んでいたはずだというのに…記憶が混乱していて、体がボロボロで、もうわけがわからない。そう言いたげな表情をして。

…いや、微かに覚えている。

デュエルをしたはずという感覚と、自分にあるはずの無い悪意の塊。今まさに自分の内から逃げ出そうともがいているコレが、きっと

そうなのだろうか。蒼人は自分の体内から吐き出ようとしているソレを感じ、どうしようもなく…申し訳なくなる。

「あ…天城君…」

彼に酷いことを言ったのではないだろうか。彼を傷つけたのではないだろうか。微かに覚えているからこそ、懺悔の気持ちが溢れかえる。全力で、お互いに納得のいく、楽しいデュエルがしたかったのに。そんな感情で、一杯になる蒼人の心。

先ほどまで現れていた彼がまるで虚像だといわんばかりに、今の蒼人からは悪意は感じず、むしろその悪意も速く蒼人の中から逃げ出そうとしているかのよう。

「はぁ…はぁ…うっ!?うぷっ!?」

しかし、どうにも吐き気が治まらない。それに、全身を強打したかのような痛みが相まって、呼吸をするたびに体が軋むのだがら、自分の身に起こったことを知る由もない蒼人にしてみれば、きっとどうすればいいのかわからないのだろう。

早く、医務室へ…。激痛に軋む体をゆっくり動かして、今にも噴出しそうなその吐き気を耐えて。蒼人が歩き出そうとした…

―その時。

「苦しそうだな。」

「…え?」

突如降って沸いた声に驚く蒼人。この時間、学生達はすべて観客席に居り、教師達もその上で観戦している。いるとすれば、呼び出しの係りの者か、後は蒼人と同じ代表候補者だけ。

だからこそだろうか。虚ろになってくる蒼人の視界にも、その姿が

はっきりと見えている。この場にいないはずの人間の顔を。

「…て、天宮寺…くん？な、何で…？」

「無駄に精神力が強いばかりに、ソイツを中途半端に押さえてしまったのか。」

「…何を…言って…ルンダヨ、コノクソガキィ！…うぷっ…ぼ、僕は…ボクハ…一体」

「逃げ出そうと暴れているのに、お前の中から逃げ出せないでいるのだろう。出てきては乗っ取ろうとして、押さえ込まれて正気に戻る。」

「ゴタゴタ言ッテンジャ…てんぐうじ…くん…に…逃げ…逃が……逃ガスワケネェダロ【黒翼】ノ孫ォ！」

正気と、悪意と。

押さえては飲み込まれるその苦しみの中でも、鷹矢の身を案じられる正気は彼ゆえの優しさ。しかし、彼の中に巣食った悪意はそれを書き換え、自身の絶対の目的である【黒翼】でさえもその目的の内容を書き変える。

苦しい、助けて、楽になりたい。

そんな感情が蒼人に沸き起こるものの、それと同時に沸きあがる鷹矢への、いや全てへの悪意がそれを許さない。口からもれ出る瘴気を飲み込み、一歩、また一歩とボロボロの体を前へすすめる蒼人の悪意。

「…俺は逃げん。お前には感謝しているからな。」

「アァ？」

「遊良の本気の引き出し方を実践してくれた。あいつ、今までルシフェルを一回も出せなかった理由が、まさか本気で戦う意思が足りない為だったとは。迂闊だったぞ、何せあいつ自身が気付いていないことだからな、俺もわからなかった。」

「意味ワカンネー事言ッテンジャ…」

「…まぁ、あれだけ遊良を怒らすことをしたのだ。無論俺とてただで許すこともしないが。」

「ア…アガガ…アガァ…」
「む？」

それを見てもなお、鷹矢は蒼人の前から逃げ出そうともせず、彼を見据えているだけ。堂々と立つ彼は、この危機的状況だというにも関わらず、いつもと変わらない姿でいる。
ただ蒼人を見て…本格的に悪意に乗っ取られ始めた蒼人の姿を見据えて、そしてデュエルディスクを構えて…

「安心しろ。今楽にしてやる。」
「アガガガガ…デュ…エル…ゥ…」
「うむ。」

…淡々と、言う。

「お前ノ闇ハ、俺ガ喰らウ。」

―…

１０分後…血を吐いて倒れている蒼人が、次の選手を呼びに来たスタッフによって発見された。
全身に強い殴打の痕があるものの、何とか応急処置によって一命は取り留めたらしく、すぐに救急搬送されて行ったらしい。

―しかし、それだけでは終わらなかった。

控室に居たはずの虹村と紫魔　右京も同様に、意識不明の重体となって発見されたのだ。部屋は荒らされ、彼らの体にも『何か』強い衝撃を喰らった痕があり、血を吐いて倒れていたという。

―その真実を知るものは、今はここには居らず…

ｅｐ２０「悪意に染まる、その時に」

―時は、少々遡る。

―…

「最初は泉か。１年相手に油断するんじゃないぞ。」
「もちろん、気をつけるよ。でも天城君強いから、ずっと気が抜けないね。」

選手たちが自分の番を待つための控え室。西と東に分かれた二つのうちの一室に、３年生の泉　蒼人と虹村　高貴、そして２年生の紫魔　右京がそこにはいた。
決闘祭に向けた学校代表選抜戦、この戦いが決闘祭に望む候補者にとって最後の戦い。本番の決闘祭を模して総当りではなくトーナメント形式で行われるソレは、負ければその場で脱落を意味しているのだ。
このあと、ステージの準備が終われば直ぐに始まる蒼人と遊良の一戦。すでに会場の雰囲気は蒼人の勝利一色の雰囲気に染まって盛り上がっているとは言え、それを知る由など蒼人には無いが。
しかし、それを例え知っていたとしても、そんなこと蒼人には関係はないことだろう。

―ただ、楽しいデュエルを。

誰でも、何かを背負っている。誰でも、何かを賭けている。しかし、そこに必死になりすぎていてはデュエルの本質など見えてこない。なぜ、自分がデュエルを始めたのか。…それは一重に、デュエルが楽しかったからに他ならない。誰でもそうだろう、楽しくないことを、ずっと続けては来られないのだから。それを理解している蒼人だからこそ、楽しいデュエルに拘るのかもしれない。

「気楽な奴だよお前は。去年の決闘祭も一番自由にデュエルをしていたよな。」
「うん。だって、強い相手とのデュエルは楽しいじゃないか。虹村とも毎回楽しいデュエルを出来ているし。」
「ふん、いつまでも余裕ぶっていないことだ。今回の俺は特に力をつけてきたからな。ヘラヘラしているだけのお前に今回こそ勝たせてもらうぞ。」
「ヘラヘラって、酷いなぁ虹村は。」

辛辣な言葉を述べ全く遠慮のない虹村であったが、しかし蒼人と虹村はこの群雄割拠の決闘学園イースト校で、3年間一緒だったのだ。いや、蒼人が中等部に転入してきた時からのことを考えれば、もっと長い付き合いかもしれない。その長い間、二人は常にトップの座を争って競い合ってきた。

持って生まれた才能は蒼人の方が上。その容姿と他者を惹きつける性格、まるでデッキと会話でもするかのように、カードと共に自由自在にデュエルする彼のプレイングに見惚れる者は多い。

しかし、積み上げてきた自力は虹村の方が上。他人に厳しく、自分にはもっと厳しく。昔と違って、決して妥協せず自らを高めてきた彼もまた、家族がプロと言う一種の魔窟に身を置く一人なのだから。

戦績はイーブン。この学園では、二人は誰もが認めるライバルだからこそ、その決着を着けることを何よりも望んでいるのもこの二人なのかもしれない。

「楽しむことに熱中し過ぎてこけるなよ？俺はお前とも戦いたいんだからな。」
「もちろん僕もさ。でも先ずは天城君とのデュエルが今は一番楽しみなんだよね。」
「天宮寺とタメ張るって奴か？…俺はそんな風には全く見えなかったけどな。確かに必死さは感じたが…アレは危ういかもしれない。」

「…うん、そうだね。」

蒼人とて、遊良に苦手と思われていることを感じていないわけがない。ただでさえ多くの人間の感情に寄り添ってきた蒼人だ。いつも周りに人がいて、各々他者が感じていることは様々。単純に蒼人に好意を持っている者から、蒼人に近づいて利益を得ようとする者まで、だ。

そんな蒼人だったからこそ、少々強引だったとは言え直接話して遊良の印象を肌で感じることが重要だった。Ｅｘ適正が無くとも、強いと噂される程の１年生。誰彼構わずデュエルを申し込むという、そんなデュエル好きな後輩。そんな生徒ならば、自分も相手も、もっと楽しいデュエルが出来ると思ったからだ。

その結果が、『苦手』と思われたのであろうとも。

それでも…

「天城君…どこかで、絶対に負けられない戦いを経験したんだろうね。」

楽しいだけではいられないことくらい理解している蒼人。天城遊良という人生のことなど何一つ知らないものの、それでも遊良から確かに感じられた必死さと危うさ。

生きるための必死さ。それは一重に、デュエルをし続けることが彼の生きる道だったのだろう。Ｅｘ適正が無いと言われて、周囲にデュエルを諦めろと言われても、それをできなかった理由が彼にあることくらい、蒼人には容易に想像できる。

「…お前と同じようにか？」

「…はは。…うん、そうだね。」

しかし、人には言えない過去くらい誰だって持っているものだろう。蒼人が祖父母に育てられている理由も、エクシーズ王者の【黒翼】

に拘っている理由も、その理由はこの学園では虹村しか知らないことだ。それも、本人から聞いたのではない。プロ一家で育って、かつ同い年だったから彼だからこそ偶然知りえた理由であったのだが。
　別に、そんなことを他言する必要も感じていない虹村は無論、誰にも言ってなどいないが。そんな過去は、泉　蒼人というデュエリストを構成する一つの要素でしかなく、今の蒼人の姿が全てだということを理解しているために。

「だからあそこまで必死になって戦おうとしているっていうわけか。…まぁ、Ｅｘ適正が無いんだからそりゃそうだろうけどな。負ければそれだけでデュエルすることを否定されるんだから。」
「うん。だからこそ…、彼にはデュエルが楽しいってことを思い出してもらいたいんだ。このまま戦い続けると、彼は多分…」
「潰れるだろうな。」

　何の躊躇もなくそう言い放つ虹村。しかし、遊良と何の接点もない彼がそう感じている理由も確かにあるのだ。
　プロ一家の末弟というだけあって、幼少期から多くのプロデュエリストと接する機会が多かった虹村　高貴。その中で、栄光に包まれる選手の裏で、必死になってプロの世界にしがみつき、そして一度の敗北で再起不能になっていった選手は数えきれないほど。
　まさに、今の遊良がそれと重なったのだろう。確かに遊良も負けられない理由を抱えているが、それを知らない虹村にしても、それを支え切れる精神がまだ彼には備わっては居ないと感じていた。
　まだ１年生、それもＥｘ適正が無い生徒。無論、周囲が天城　遊良のことを何と言っているのかも虹村は知っている。それに昔からずっと晒されてきたのも。それを耐えてきた天城なのだとしても、それを踏まえてもまだ『若い』のだ、と。

「この選抜戦、お前が勝ったら天城は叩かれまくるだろうな。」
「僕がさせないよ、そんなこと。」

無知の後輩を導くことが、先輩としての役目だと理解している虹村。何も悪くない後輩を守ることは、先輩としての責務だということを知っている蒼人。
その虹村と蒼人の意思は強く、またイースト校を挙げての代表選抜戦の戦いに、Ｅｘ適正がない人間が昇ってきたのだとしても、デュエルをすることが悪いわけがない。蔑みや見下しを跳ね除けてここまで上がってきた天城　遊良を、弱いまま潰していいわけがないのだと、そう言わんばかりに。

「まぁな。本質も知らずに個人を叩くのは俺も許せない。Ｅｘ適正が無いにも関わらず、ここまで上がってきた生徒を乏しめるのは、敬意も何もあったものじゃないからな。」
「うん。だから彼とは全力で、楽しく戦うよ。僕と天城君が楽しめたデュエルを、絶対に…誰にも悪く言わせない。」

もうすぐ直前まで迫っているであろう一回戦。それに向けた最後の意思の表示を固めた蒼人の姿を見て、もはや何も語ることなど無いと悟った様子の虹村。
きっと蒼人ならこのギスギスした会場の雰囲気をデュエルで吹き飛ばして、そして天宮寺と肩を並べると言う天城とのデュエルで盛り上げてくれることだろう。その結果が会場の思っていた通りの結果でも、会場の意にそぐわなくても。蒼人の強い意志ならばきっと、このイースト校に取り巻く天城へのヘイトを解消できるのではないか、と。

―そう思っていた時だった。

「それハ不可能デございます。」
「え？」

突如、今まで沈黙を貫いていた2年生、紫魔　右京が口を開いたのだ。
紫魔家でも下層に位置していると、他の紫魔家にも言われている彼。しかし、上位に位置する紫魔　ヒイラギの従者ということで他の紫魔からの侮蔑や屈服を避けている彼が言ったその突然の言葉に、思わず蒼人も虹村も理解が追い付いていなかった様子で。
3年生二人が込み入った話をしてしまい、完全に蚊帳の外だった右京。しかし、従者の立ち姿を貫き通してしたためか、二人もその存在を今まで忘れてしまっていたのだろうか、思わず口を開けない様子にも見える。

「それハ…不可能なことでございます。低俗なエクシーズとシンクロの輩ニ、世間を変える力などあるはずモございません。」
「…何が不可能だって2年生？低俗低俗って、何がそんなに気に食わないんだよ。」
「ちょ、やめなって虹村。」

今まで黙っていた癖に、紫魔特有の高圧的な言葉が癪に障ったのか。元々上下関係に厳しい虹村にしても、この右京の物言いが相当頭にきた様子だ。
これから試合だと言うのに、面倒を起こすことは好ましくない。それを思ってか蒼人が静止にかかるものの、しかし右京はそんなことなどお構いなしに続ける。
…その手に持った、黒い球体を蒼人に向けながら。

「なぜなラ…代表ハお嬢様とわたくしニ決定しておりますので…」
「はぁ？一体何の話をして…」

―！

「アッ…あぁ…アぁア！」

右京が黒い球体を向けた瞬間、突然頭を抱えて苦しみの声を出し始める蒼人。先ほどまで普通に話していただけに、この突然の苦しみ方は尋常じゃない。膝が落ち、うずくまって悶えている姿は痛々しいなんてレベルではないのだ。

突如として起こった蒼人のこの苦痛。何か理由があるとすれば、虹村の思考の中には不審な言葉を呟いて、怪しい黒い球体を掲げているこの2年生しか思い浮かばなかった。

「泉!?どうした泉!……紫魔!お前か!?泉に何をした!」

「何…ト申されましても。いつまで待っても自我ヲ保っていらっしゃったので。低俗なシンクロ使いの癖に少々精神ガお強いものですから…こうやって無理やりニでもしないと言う事ヲ聞かないのでございます。」

「だから意味がわからないと言っているだろうが!いいからその手を下ろせ馬鹿野郎!」

言う事を聞かせる…それは洗脳と言う意味なのだろうか。しかし、そんな事をして何になるというのだろう。そんな風にして益々疑問が大きくなる虹村などお構いなしの様子の紫魔　右京。

一括りに『紫魔家』と言っても、その人種は千差万別。最強の融合使いを謳って他者を見降すような態度を取る高圧的な紫魔がいても、中には全く偏見なく付き合える良い紫魔もいる。

しかし、姓がそのまま王者の称号になるほどの力を持つ一族だというのに…お伽話に過ぎない『原初の英雄』に拘り過ぎるあまり、中には胡散臭いことをしている紫魔もいるということはプロの世界でも一種の常識ではある。それは主に『紫魔本家』に家柄が近ければ近い程多くなると言うが。

もしもこの紫魔　右京がその一派だからといっても、こんな超常現象が出来ることなど虹村には知りえるはずもないし、そもそも蒼人を苦しめていることが彼に許せるはずも無い。

この男が蒼人を苦しめているのだったら、それをやめさせなければ。そうして無理やりにでも右京に掴みかかった虹村だったが、右京もそれをさせまいと抵抗している。しかし、そうしているうちに蒼人が立ち上がった。

…先ほどの爽やかな彼とはうって変わって、苦痛に表情を歪ませて。

「アァ…アガ…グァア…ボ、僕ハ…」

体に沸き起こる痛み、頭に流れ込む悪意。今まで好きだったものが嫌いに変わっていき、思考が書き換わっていく。自分が自分でなくなっていく気持ち悪い感触が徐々に大きくなっていく蒼人。

今までも、不意に…一瞬だけ意識が飛ぶことがあった。それは、学年代表に確定した後や、邂逅を望んでいた天城　遊良と直接会って話すことが出来た直後などに。しかし、ふと気を抜いた瞬間だけ起こっていたそれが、今はさらなる奔流となって精神に襲い掛かり、蒼人を乗っ取ろうとしていた。

…必至に抵抗しようとも、それ以上の強い『何か』によって押さえつけられる。

「グ…グァ…ア、ガァ…」

「泉！どうしたんだ泉!?」

「無駄デございます。すでにその男ノ自我はありません。」

言葉を無くして呻くだけになった蒼人の姿を見て満足したのか、右京がその手を降ろすと持っていた黒い球体は靄となって消えていき、空気に混ざって散り散りになって行く。

手からその『何か』が消えていく光景は、傍から見たら異常そのもの。しかし、それに意識を向けられるほど今の虹村の思考は正常に働くはずもないし、まるで彷徨う亡者のようになってしまった蒼人をみて呆然としているだけだ。

デュエルディスクを構え始め、本能だけでもデュエリストを気取ろうとしている蒼人のその姿が、余計にその悲壮を増して。
いつでも凛としてデュエルに望むあの泉が、どんな時でもデュエルを楽しむことを忘れないあの泉が…光の消えた目で、虚ろに呻くだけの姿など誰が見たいものか。

「ご心配なさらず。すぐニあなたもこうして差シ上げますのデ。」
「くっ…そんなこと、黙って言う事を聞くバカがどこに…」
「抵抗など無駄デす。…さァ、このエクシーズの下民をデュエルで下しなさ…」

そして、それを見た右京もまた淡々と焦った様子もなく言い放った…

—その瞬間だった。

—!

「ぐぅ!?な、なんだ!?」

瞬間。まさに右京が蒼人に向かって命じたその瞬間のこと。突如として蒼人から発せられる謎の圧力によってどこからともなく黒い靄が吹き出し、控室の中を暴れまわる暴風となって虹村に襲い掛かったのだ。
壁際まで一気に追いやられ、さらに押しつぶそうと圧力をかけてくるこの感触は決して良い物ではなく、内臓を直接潰されているかのように気持ち悪く息が出来ないのだろう。苦しそうに空気を漏らす虹村だったが、先ほどと全く様子の違う蒼人に困惑するばかり。

「がはっ…かっ…い…いず…み…」

…しかし、それだけでは終わらない。

「ナっ!?ば、馬鹿ナ！低俗なシンクロ如きガ歯向かウなんテ!?…は、話ガちがっ…」

何故か、命じたはずの…言う事を聞かせたと言い放ったはずの紫魔右京にまでその暴風は襲い掛かり、自分でこうしておいてまるで予想が外れたといわんばかりの声を漏したのだ。

予想に反して、意に反して。まるで想定外のことが起こったかのように慌てふためく右京だったが、この超常的な黒い靄の圧力の前では身動きが取れずに苦しそうに悶えるだけだ。

そうして、二人を壁際に押し付けるとさらに潰しにかかったかのように蒼人は圧力を増し続ける。歪んだ表情、その見開かれた目から放たれる眼光が黒く光った時、蒼人は呻くのをやめて、自らの声を発した。

「ボ…僕ノ邪魔ヲ…すルんじゃナイ！」

――！

「ぐふっ!?…あ…がぁ…」

「グッ…フ…お…お嬢…さま…」

瞬間的に、まるで弾け飛ばすかのように。暴風のように荒れ狂う圧力を爆発させる蒼人。それに飲み込まれた虹村と右京が無事で済むわけがなく、次第に静かになっていく蒼人からの圧力が解かれると同時に地面に倒れこみ、意識を失ってそのまま動かなくなってしまう。

そして右京が発していた苦しみから解放されたからか、意識を取り戻したようには見えないものの、蒼人は鬱憤を晴らしたかのように呼吸を数回吐ききった。少なくとも先ほどまでの、自我を失って呻くだけの蒼人ではなくなっているようにも見えて。そうして、うつむいた

ままの蒼人は静かに呟いた。

「ハァー…ハァー…イ、行カなくチャ…天城く…アマギ　ユウラ…楽しいデュエルを…楽しイ…僕ガ…楽しイデュエル…ヲ…」

自我と悪意。行ったり来たりする意識の中で、次第にその思考が書き換わってしまっているのだろうか。グルグル回る頭の中で、自分が何を考えているのか分からなくなっている様子だ。

蒼人はそのまま静かに控え室を出ると、デュエルを今か今かと待ちわびている雰囲気の大歓声に引き寄せられるようにして歩き出す。

蒼人の身に起こった異変、悪意に飲み込まれたソレを知るものは、今は意識を失っているために他の誰も居らず。

「あ、泉選手！丁度良かった！たった今呼びに行くところだったんですよ！」

「…アァ…。」

そうして、スタジアムに出るほんの直前で、丁度呼びに来たスタッフと合流した蒼人。侵食され始めたために返事を返すだけで精一杯なのだろうが、それに気付かないスタッフもタイムスケジュールどおりに蒼人をただ案内するだけ。

今の控え室の惨状を知る者はいない。そうして、蒼人は悪意に飲み込まれたまま、デュエルへと向かって行った。

…意識と体を侵食する悪意が、自身のデッキにまで侵食し始めたことも感じられずに。

――…

大ブーイングが鳴り響く中、遊良はフラフラの体をゆっくりと引きずって自身の控室の前へとたどり着いた。
先ほど終えた泉　蒼人との決闘。モンスターの実体化に伴う現実のダメージと、一時的とはいえＥｘモンスターを場に置いたことによる堕天使達の怒り。そして、負ければ蒼人に鷹矢とルキを傷つけられるという怒りによって、もう満身創痍で考えることすら億劫になっている遊良の様子は、ルキ辺りが見れば卒倒してしまいそうなくらいに痛々しい。
それもそのはず。上手く隠して人目に付かないようにはしているものの、制服の袖には吐血した痕が残り、体の内側から殴られたかのような衝撃で今にも倒れてしまいそうなのだ。以前にもルキと鷹矢の目の前で倒れてしまったこともあり、その時の過大な心配を思い出せば、ここで倒れて再び過大な心配をかけるわけにはいかなかった。

「はぁ…はぁ…」

力の入らない手で、何とか控室のドアを開ける。せめて、寝転がって一息つかなければ。控室の中にはシャワーも完備されている為、この制服についた血もすぐに洗って皆の前に出るまでに回復しておくことが第一条件だと言わんばかりに。
そんな遊良がその意識のみで控室の中へと入ると、そこには先ほどと変わらず次の試合の順番を待っている紫魔　ヒイラギの姿が。

「…あら。随分とボロボロですこと。」
「…。」
「それになんと醜い雑音なのでしょう。一体どんな無様な戦いをしてここまでなるのでしょうか。私には皆目見当も付きません。」
「…。」

デュエル前のこともあり、なるべく会話は挟みたくないのだろう。

ぼんやりした思考で頭が回りきらない遊良はヒイラギの横を素通りするとそのまま一目散にシャワールームに入った。ただのデュエルでは絶対にここまでボロボロになることは無いと言うのに、それに異議を全く感じていないヒイラギの様子に気が付かぬまま。
当の彼女はと言えば、そんな遊良に食って掛かるわけでもなく、つまらなさそうに黒い宝石の指輪を眺めているだけ。これから試合だと言うのに全く緊張も準備もしていないその様子は、傍から見れば異常だと言うのに、それに気付く人間がこの場に居ないことが悔やまれるほどに。
そして、遊良がシャワールームに入った直後…その時だった。

――!

「遊良!・大丈夫!?」

大きな音を立ててドアを勢いよく開け、声を荒げて中へと入ってきたルキ。
席を立つことを禁止されているにも関わらず、きっと遊良のデュエルが終わると同時に席を立ってここまで駆けて来たのだろう。蒼人の敗北を受け入れられない観衆が騒ぎ立て、教師陣も対応に追われている混乱に乗じたことは容易に想像できる。
しかし、息も絶え絶えでその目には心配の色が濃く出ているルキが控室の中へと目を通すものの、そこに目的の遊良の姿は無く、代わりにとても不愉快そうな顔をした2年生の代表候補、紫魔　ヒイラギの姿を見て多少冷静さを取り戻したのだろうか。
申し訳なさそうな顔でルキは尋ねた。

「あ、す、すみません!・あの、天城　遊良は…」
「なんと無粋な物の尋ね方でしょう。しつけの悪さが外に出ていますわ。」
「え?」

突然のヒイラギの物言いに、何を言われたのかすぐに理解が追い付かないルキの様子。きっと悪く言われていることはわかるのだが、今はそんなことに一々食いついている場合ではないことくらいわかっているのだろう。

いくら無粋だ何だと言われても、遊良の味方として敵だらけの現状で彼女に出来ることを考えた結果か。遊良をよく見るつもりがない観衆と違い、スタジアムを出ていく遊良の様子があまりにもおかしかったのがルキには手に取るようにわかったのだろう。

今は何を言われても、遊良の傍に。その態度を崩さないルキに呆れたのか、ヒイラギは一つ溜息をついてから後ろのシャワールームへ視線を向けて言った。

「はぁ…。シャワールームですわよ。何やらフラフラしていたから、今頃倒れているんではないですか？」

「そんな!?あ、ありがとうございます！」

言葉ばかりの礼を述べると同時にすぐさまヒイラギの表情を確認することなく横を通り抜けてシャワールームへと駆けるルキ。

普通、いくら幼馴染とはいえシャワー中に突入することは痴女となんら変わりないことだ。

しかし、ただのデュエルの後にシャワーを浴びると言うのもおかしな話ではあるモノの、堕天使を得た後の、あの時の遊良のようなフラフラした姿を見てしまっては。そんな、先ほどの遊良の様子からヒイラギから言われた『倒れている』という姿が容易に想像できたのだろうか。ルキはなんの躊躇もなくソコを開けて中へと入る。

―これで、杞憂で終われば何の問題もない。ただ遊良のシャワーを邪魔して、素っ裸を目の当たりにするだけ。別に、修業時代の幼少期によく一緒に風呂にも入っていたのだから、この事態でなりふり構っていられない。そう言わんばかりの必死な顔をして。

そして…

「遊良！」
「ルキ…聞こえてるよ。」
「だ…大丈…夫…なの？」
「…あぁ、大丈夫だって。」

シャワーに入る前の、ロッカールームの洗面台で、制服の上着だけを脱いで投げ捨てているのは別にいい。ここはシャワールームなのだから、服を脱ぐのは当然。まぁ、ズボンとシャツを着ているため裸というわけでは無いが。しかし椅子に座って休んで、ぐったりして洗面台に突っ伏している姿で大丈夫と言われても、心配しない方がおかしな事ことだ。

ただでさえあんな大ブーイングの中で戦って、勝ったと言うのにバッシングの嵐。精神的に疲れているのはあるだろうが、しかしそれ以上の何かが遊良に起こっているのではないか。卒倒はしないものの、ルキにそれを容易に想像させるくらいに今の遊良の姿は痛々しく見えてしまう。

「ほ、本当に？」
「…ちょっと疲れただけだって。心配すんなよ。」
「でも様子がおかしかったよ？泉先輩も…遊良も…。遊良凄い怒ってたし…なんか怖かったから…。」
「それは…」

ルキの問いに、思わず言葉に詰まってしまう遊良。
遊良とて、蒼人の様子がおかしかったのはきっとルード地区でも見たあの黒い靄が原因であることはわかっている。
しかし、ルキに余計なことを言うなと師に言われていることもあり、詳しくは説明していないからこそルキに今それを説明しても混乱

が大きくなるだけだ。
それに、蒼人が言い放ったあの台詞。いくら様子が変だったとはいえ、自分の前で堂々とルキを傷物にすると宣言したあの男が…遊良にはどうしても許せなかったのだ。
遊良があそこまで怒りを露わにしたことは、絶望していた時期から考えても全く無いくらい。
遊良が鷹矢とルキとの関係を頑なに隠していたこと、それに自ら進んでまで、デュエルもリアルファイトも実力者である鷹矢や、天真爛漫で味方の多いルキに手を出そうとする人間は皆無。そんな二人に手を出すくらいなら、直接見下している遊良に攻撃を仕掛けた方が早いと判断することだろうから。
それを知っているルキだからこそ、下手な隠し事をしてもバレてしまうことは必至。だからこそ、話しておくことに抵抗はない。
しかし…

「…帰ってからゆっくり話そう。…今は…ちょっと疲れたからさ…」
「…うん。」

きっと、今遊良を問い詰めても駄目だということをルキも理解したのだろう。『疲れた』という台詞を吐くこと自体が遊良にしては珍しいものの、いつもと様子の違う遊良が心配で、違反だとわかってでも様子を見に来たとは言え、本当にぐったりしている彼を問い詰めることなどルキには出来るわけが無い。
周囲の野次にも負けず、必死になって勝った遊良。そんな彼を今は休ませることが大切だと、そう理解して。そうして、ルキはぐったりして今にも眠ってしまいそうな遊良の手をそっと取ろうとした…

…そんな時だった。

―!

「天城選手！紫魔選手！ご無事ですか!?」
「…なんですの、騒々しい。」
「す、すみません！しかし、安否の確認に急を要しましたので！」

突如として降って沸いた、焦りを孕んだ声が控え室に響き渡る。ちょうど控え室内で座っていたヒイラギが苦々しく返答するものの、そんな場合じゃないと言わんばかりに焦っているのがシャワールームにいる遊良たちにまで届くのだから、相当切羽詰っているのが分かるだろう。

しかし、安否の確認とは穏やかじゃない。何かあったというのが容易に想像できたため、遊良は重い体を無理やり立ち上がらせて上着を取ると、それを羽織らずにルキを連れ立って控え室内に戻った。

「…どうしたんですか？」
「あ、天城選手！ご無事でしたか！ではお二人は、大至急こちらに来てください！」
「…何を言っているんですの？わたくしはこれから試合なんですけれども。」
「いえ、選抜戦は中止です…。と、ともかく至急こちらに！…ってなんで選手以外が？」
「あ、あの…私…」
「あぁもういいです！とにかくここに居る生徒は全員こちらに！」

そういって、部外者であるはずのルキも一緒になって控え室から連れ出される一同。

突如告げられた選抜戦中止の事実に驚く暇も許されぬまま、遊良は重い足を何とか挙げて歩き出した。

控え室の外…先ほどデュエルを行ったスタジアムの方でもこの決定が告げられたのだろうか、先ほどまで鳴り響いていた遊良へのブーイングよりもさらに大きな不満の声が地響きの様に鳴り響いているのが彼にも容易に分かるようであって。

様子がおかしかったとはいえ…蒼人に負ける寸前で、さらに実際に実態化したモンスターに殺されかけたという、アレだけの思いをして何とか勝てたというのに、その選抜戦が中止とは遊良の心中も穏やかではないだろう。

もし学園側が遊良の勝利を認めようとせず、選抜戦のやり直しなど言い出した日には、きっと先ほど以上の怒りが遊良に起こるはずだ。

多くの悪意や敵意に晒されすぎたからか、遊良はそんなことを考えながらもスタッフに連れられていき、そうしてイースト校の最上階…威厳ある装飾に彩られた荘厳な扉の前で立ち止まった。

「…理事長室？」

「はい、理事長がお呼びです。」

そう言って、スタッフ…もとい決闘学園の若手職員は目の前の理事長室の扉をノックする。分厚い扉らしく鈍い音が返ってきて、そうしてその直後から『入りなさい』という、理事長ではないが…どこか遊良には聞きなれた声が帰ってきた所で、職員が扉を開け始めた。

扉が全て開ききった所で、室内の空気が外に漏れ出してくる。その空気が、遊良の緊張感をより一層強くするものの、しかし急を要する話らしいのだから入らないわけにはいかない。

そうして中に一歩入る一同。すると、その瞬間に室内から驚愕の声が漏れた。

「なっ!?高天ヶ原！お前が何でここにいる！」

「あ、す、すいません…」

それは、理事長室の照明によってどこかが光っている1学年の学年主任の声。

ここに来るはずの無い生徒の顔、騒ぎになるからと席を立つことを禁じているというのに、それでもここに選抜戦関係者ではない人間がいることへの驚きなのか。

それだけではない。2・3年生の学年主任と教頭、そして決闘学園イースト校の校長まで勢ぞろいしているというのだから、それに注目されたルキの心情は穏やかではないだろう。緊張の面持ちが一層強くなったところで、再び1学年の学年主任が口を開いた。

「ま、まさか高天ヶ原…お、お前がやったんじゃないだろうな！」
「え…な、何をですか？」
「とぼけるな！席を立つなと言ったのに移動したお前が一番怪しいってことに…」

そして、唐突にルキに攻め寄る1学年主任。しかし、遊良へのブーイングの嵐に耐えかねて席を抜け出して、遊良のいる控え室まで駆けた彼女にしてみれば、『やった』と言うその言葉がルキには全く心当たりが思い浮かばないだろうが。

初老に差し掛かった1学年主任の焦りと口臭に中てられたルキの表情は苦く、それを見かねたのか、理事長席に座っていた砺波が1学年主任の言葉を遮るようにして言う。

「…鈴木先生。私は高天ヶ原さんにあんなことが出来たとは思えません。…と言うより、人にあんな所業が出来るとも思えませんが。体の内側からのダメージなど、人間技ではない。」
「り、理事長…しかし…」
「この際、高天ヶ原さんが東控え室に居たことは後で追求するとしても…今はそんな場合ではないのですから。」
「は…はい…」
「…理事長、あの…一体何が…」
「天城！誰が喋っていいと言ったんだ！…1年の癖に3年に勝つなんて…これだから空気を読まない生徒は…そのあげくに…こんな奴を…全く…」

どうにも何が起こったのか理解できない遊良。いきなり選抜戦が

中止になり、そして緊急で理事長まで連れてこられて、さぁ現状を理解しろ、といっても無理だろうが。
それなのに、発言すら許してくれず、なにやらブツブツ言い始めた1学年主任の物言いに腹立たしくは思うものの、室内の雰囲気がそれを口にすることを許してはくれず、ただそこに立ち尽くすしかない。
しかし、職員室ではなく理事長室に呼ばれたということは、呼び出したのは理事長しかいないことになる。
いくら先の遊良のデュエルの結果に不満があるのだとしても、師である【黒翼】との約束がある以上それを帳消しにされることは無いというのだけは遊良にも分かるものの、今はきっとそんな話をするために呼ばれたのではないことははっきりと分かっていた。
―でなければ、あれほどまでに1学年主任が部外者のルキを責め立てるはずがないのだから。

そして遊良は、この後の砺波の言葉に耳を疑うこととなる。

「…せめて、君達だけでも無事でよかった…と言うべきでしょうね。これ以上私の学園で事件が起こるのはよろしくない。…襲われたんですよ。紫魔君、虹村君、そして先ほどデュエルを終えたばかりの泉君がね。」
「なっ!?…なんでそんな!?」

いくら1学年主任に口を開くなと言われても、驚愕がそれを上回っては無理な話。
いくら蒼人の様子がおかしかったとはいえ、先ほどデュエルを終えたばかりだというのに襲われたとはただ事ではない。遊良の隣でもルキが本当に驚愕の顔をしており、先ほど1学年主任が問い詰めたのはコレだと知っても、この驚き様からそれがルキではないことは確か。
砺波の話では、医務室に運ばれた3人は現在応急手当中で、まもな

く救急搬送されるというのだが、しかしデュエルでの疲れもあって上手く話を飲み込めない様子の遊良。
思い返してみれば、もしかしたら最後のダイレクトアタックが実際のダメージとなって蒼人を襲ったのだろうか。いくら怒りに任せてしまったとは言え、蒼人にもしものことがあれば決闘祭どころではないのだろうから。

「理事長先生。泉君、虹村君、紫魔君の症状は3人とも同じだということですので、おそらく犯人は同一人物でしょう。しかし一体誰がこんなことを…。」
「それはわかりません。この後警察も捜査をするとのことですので、その報告待ちですが…。」

教頭の言ったその3人とも同じ症状という言葉。それによって、事件が自分の仕業ではないことが遊良には理解できたものの、それでも一体何故西控え室だけが襲われたのだろうか。ここに居る誰もがそれを理解することが叶わない様子で不穏な雰囲気に包まれる。
遊良が横を見れば、先ほどから一切口を開かない紫魔　ヒイラギも、自分の従者が襲われたという事実に驚いているのだろうか、表情を崩さないもののどこか苦々しい顔をしていると感じた遊良。
そうして何も言えずにそのまま視線を前へと戻すと、砺波が指揮を取り始める。

「保護者への対応もしなければなりません。保護者への対応は私と校長が。」
「わかっています。」
「学生へのケアは教頭が指揮をとって各々の学年主任の先生達にお願いします。点呼を取って生徒の安否を確認。学園内を見回った後、安全が確認でき次第、生徒達を帰宅させてください。」
「はい。」

そういって、教師陣が砺波の指示の元に動き出す。こんな事件が起こったとしても、混乱せずに指示の通りに動けるのはさすがは年季の入った教師と言うべきか。遊良とヒイラギ、そしてルキを理事長室に残して教師達が部屋を出て行いった。

退出際に、1学年主任が遊良を見て溜息を吐いていたのが気になったが、残された遊良はどうすればいいのかわからないものの、今出て行くべきでないことくらいは理解できている。

「さて、無事だった君達二人を呼んだのは他でもありません。…本来なら、再度候補者を選出しなければならないのですが…最終選抜ということもありその時間も残されていないのです。」

そうして、再度口を開いた砺波のその視線は、眼前に立つ遊良とヒイラギをしっかりと見据え、蓄えられた白い髭が揺れ動くたびに遊良に緊張が走る。

なぜなら、時間が残されていない。その言葉は、【決闘世界】に課せられた代表者の選出期限が迫っているということに他ならないのだが、これが最終選抜でなかったとしたら、再度候補者を選出して選抜しなおす時間もあっただろう。

しかし、もう近くまで迫っている【決闘祭】。本来なら本日戦い抜いた生徒の2人が選ばれる予定だった代表者なのだが、候補者を再度選出する時間などイースト校には残されていない。

「こんな事態が起こったとしても、【決闘祭】は開催されるでしょう。【決闘世界】の取り決めは絶対です。こんな形は不本意なのですが…」

それは自動的に…

「天城　遊良君、紫魔　ヒイラギさん…決闘学園イースト校理事長、砺

波　浜臣の名において、君達二人を決闘学園イースト校の…決闘祭代表選手に任命します。」

ここに、イースト校の【決闘祭】出場者が決定した。

―…

ｅｐ２１「起こっている何か」

和風のテイストが強く押し出されている美しい庭園。その軒先に腰かけて、決闘学園イースト校２年、融合クラスの紫魔　ヒイラギは優雅にお茶を啜っていた。

その傍らに、先日意識不明の重体となって発見されたばかりである従者…紫魔　右京の、性別は違うものの双子の兄妹ゆえか、右京とそっくりの顔をしたもう一人の従者…紫魔　サキョウを立たせて。

厳選された銘柄から煎れられたソレを静かに啜る仕草には作り物でない確かな気品が溢れており、それはやはり名家「紫魔家」の血なのか。長く艶やかな黒髪を全く乱すことなく、静かに彼女は呟く。

「計画通りですわ。これで私は何の苦労もなく代表入り。本家にまた一歩近づきましたわね、サキョウ。」

「全てお嬢様の思惑通りでございます。」

従者の返事にご満悦の表情を崩さずに、ヒイラギはもう一啜りお茶を吸うと、従者に注ぐように手渡した。

この関係、この立場が、彼女たちのスタンダードなのだろう。傍から見ていても全く違和感のないヒイラギの振る舞いに、手渡されたサキョウも当たり前のようにソレを受け取った。

新たにお茶汲みをするサキョウの仕草もまた手馴れており、主の望む味を把握しているのだろう。時間を計らずともソレを注ぐ時間を体が理解しており、再度手渡した所でヒイラギが口を開く。

「でも右京ったら。まさかしくじって自分まで巻き込まれるなんて。本当に使えない男ですわね。そうは思わなくて、サキョウ？」

「はい、お嬢様。」

「…まぁ流石の私も、まさかここまでの事になるとは思いませんでしたが。…天城　遊良まで代表入りとは少々予定外でしたわ。」

「…あの…お嬢様…右京のことは…」

そんな中でサキョウが主に尋ねるものの、その声は先ほどと比べても若干不安げに変わっていた。
そう、意識不明で見つかった蒼人と虹村、そしてサキョウとそっくりの顔をした紫魔　右京は、数日経った今も救急搬送された病院に入院していた。幸いにも命に別状はなかったものの、ダメージが思いのほか重かったらしく未だに意識は戻らないままで。
そして教師達はその対応に追われ、学生達には真実は隠されたまま。
突然の選抜戦中止と、強引にイースト校代表に決まった天城　遊良と紫魔　ヒイラギへの不信感を募らせている生徒もいるらしいのだが、泉　蒼人を大勢の目の前で倒した遊良と融合クラスの支持が厚いヒイラギに文句を言える生徒は少ないのが現状である。

ーこんな不祥事をマスコミが嗅ぎつければイースト校は【決闘祭】どころではないことは必至。

しかし驚くことにマスコミが嗅ぎつけるような様子もなければ、警察も介入してこないところを見るに、決闘学園よりももっと上の組織…およそ【決闘世界】が世間への情報の隠蔽を行ったことは彼女にだって容易に想像できることだ。

生徒が数名事件に巻き込まれたくらいで【決闘祭】は中止されるはずが無い。何においても開催しなければいけないそれを、あの【決闘世界】が曲げるはずが無いのだから。

「はい？何か言いましたか？…それより、あなたはこんなことが無いようお願いしますわ。これからもっと忙しくなるのですから。…ね？」
「…ッ…ハ…はイ、お嬢様。」
「ホホ…思い知らせてやりますわ。いいわね、サキョウ？」

「…はイ、お嬢様。」

静かに、いつものように主の問いかけに応える彼女の表情は、常に一緒に居るはずの双子の兄がそこに居ない違和感にあふれているものの、ヒイラギは手につけた黒い宝石の指輪を一振りすると、いつもと変わらぬ声質でそういうだけだった。

――…

「元気そうですね、李理事長。」
「これはこれは砺波理事長。あなたもお元気そうで。」
「おかげさまでね。すみません、少々忙しくしておりまして。来るのが遅れました。」
「いえいえ。来ていただけて嬉しい限りです。」

超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が運営する、決闘市にあるとある大型病院。噂では、要人などが秘密裏に使用するというこの病院の、ＶＩＰ待遇ということが見てわかる病室の一つに、決闘学園イースト校理事長、砺波　浜臣は同じく決闘学園ウエスト校理事長である男を見舞っていた。

―李（り）　木蓮（もくれん）

著名な決闘者でない彼のことを知っている人間は少ないだろう。デュエリストとしての実力は、下手をすれば彼の学園、決闘学園ウエスト校の生徒たちの方が強いかもしれないのだから。

それでも、この李　木蓮が【決闘世界】の構成員の一人として活動し、決闘学園ウエスト校の理事まで任せられていることには、一重に

彼がデュエル界に残した数々の功績があるからに他ならない。

ー世界中でも4社しか存在しない、【決闘世界】が管理・許可しているデュエルモンスターズの新規カードの作成。

もう１００年単位で新規会社の立ち上げ許可が降りなかった当時で、この業務を行う目的の会社を新たに一つ立ち上げ、新たなカードの作成を許可された事は当時大きく取り上げられた。

そして他の追随を許さぬ手腕で、厳しい【決闘世界】の製作許可申請を通り続け、一番の新参者だというのに今この世に存在している数えきれないほど膨大な既存のカードの、実に１／５は彼の会社よって世に出回っているといっても過言ではない。

そんな彼が、【決闘世界】の一員になることは最早決まっていたことなのだろう。砺波も現役時代からビジネスライク以上に李　木蓮とは親交を深めており、引退の末に傷心の中に居た砺波を【決闘世界】に誘ったのも友となった彼によるものだ。

「あなたの身に起こったことは私にも報告が来ています。…随分酷いありさまだったのだとか。」
「お恥ずかしい限りです。命があっただけでも良かったと医者に言われましたよ。まさか1ヶ月も意識を失っていたとは。」
「鷹峰…あの男は一体何をしているんだ…。」

そう、砺波の元に舞い込んだ報告。丁度夏に入ったばかりの頃だっただろうか。

ウエスト校とサウス校理事が大怪我をして救急搬送されたのだ。誰かに襲われたのは間違いないのだが、そのあまりに酷い怪我の具合に人間技ではないとさえ【決闘世界】では結論が出ている。

無論、李と深い交流がある砺波もすぐに駆け付けたかったのだが、それでも【決闘世界】からの業務やイースト校の仕事が次から次へと舞い込むものだから砺波も報告を待つ以外にできることがなかったのだ。

それに加えて、先日のイースト校の学校代表選抜戦の最中に突如起こった生徒襲撃事件。被害にあった生徒の家族への説明と対応と、他の学生達への対応、それと【決闘世界】が行った隠蔽工作に、同じく構成員である砺波も時間を取られたことが大きいのだろう。

しかし、李が襲われた相手がなんとあの【黒翼】、天宮寺　鷹峰だというのだから、その報告を聞いた砺波の驚きはあまりに衝撃だった。

…このことも、もちろん警察は知らない。【決闘世界】にのみ伝わっている情報で、そしてソコで止められているからだ。

とは言え、鷹峰が自ら進んで罪を犯したというわけでは無く、むしろ襲われた彼らにとっては救世主らしいのだから、同じ決闘学園の理事長として狙われる可能性のある砺波も、やっと少しの暇を見つけてこうやって直接会って話を聞きに来たというわけだ。

「しかし、あなたをこんな風にした鷹峰を何故摘発しないのです？サウス校の理事まで被害にあっていると言うのに。」

「…いえ、【黒翼】が居なかったらと思うと、正直ぞっとします。」

「…何があったのですか？私の元にも【決闘世界】から厳戒態勢をするように通達が来ていますが…」

「はは。【白鯨】と呼ばれていたあなたに限っては無用の通達でしょうな。」

「それは、どういう…」

一体なぜ王者の名が関係あるというのだろうか。意味が分からないといった顔をしている砺波を見て李は笑みを浮かべはしたものの、すぐにその表情を真顔に戻しやや俯く。

数々の痛々しい打撲痕。傷だらけの腕に、折れた足。内臓にもダメージを受けて、一時は生死の境を彷徨っていたと言うのに、それでもそれを行った【黒翼】にまで感謝を述べる李は、砺波には信じられないのだろう。

元々鷹峰とは相容れぬ仲、しかしあの男が快楽で人を襲うとは考えにくい。そうして、李は少しの沈黙の後に口を開いた。

「砺波理事長…信じがたい話かもしれませんが…私は…私の生徒を襲う所だったのです。」

「なっ!?一体何が!?」

「それを【黒翼】が止めてくれた。それだけならいいのですが…しかしその止め方というのが…」

「と、止め方…」

「デュエルによる敗北、です。それも、普通のデュエルではない…モンスターが…実体化していたのですよ…」

「まさか!?そ、そんなことが!」

「全てお話ししましょう。【決闘世界】から口止めされていますが、あなたももしかしたら他人事ではないでしょうから。」

「は…はい…」

まるで信じられない事実。しかし、そうでなくてはこの大怪我はありえない。そして、次々に語られる李　木蓮からの言葉に、砺波の思考には濁流の様に流れ込んでくることがあったために、口を開くことが出来なかった。

なぜなら、木蓮の話しに被って砺波の脳裏には、フラッシュバックのように思い浮かびあがってきたことがあったのだから。

…先日起こった、とある生徒のまるで暴走とも思えるようなデュエル…その彼らしくないデュエルの内容と、その後に起こった事件があまりに木蓮の話しと似通っていたために。

―…

日が落ちるのが早くなってきた時期。もう少し経てば雪も降って来るだろう。そのせいか、随分寒くなってきたのもあり、決闘市を歩く人の服装も厚着になる季節になってきている。

しかし、もう夜も更けた時間。この時間に外を歩いている人間も少なく、街の光も落ちてかなり暗い。仕事に追われる以外で、この時間に街にいる人間といえば、およそ『何か』事情がある者が多いはずだろう。

そんな時間…決闘市のとあるＢａｒの一つに、大きな気配を持った２つの人影があった。

…一人は初老の男性、一人は若い女性。

「わりぃな。急に呼び出してよ。」

「いえ、別に構いませんよ。」

誰もが知る決闘者、【黒翼】こと天宮寺　鷹峰。

普通なら、こんな決闘界の大物が若い女性とこんな時間に密会しているという状況など週刊誌の大好物。

昔から問題が多いことで有名な【黒翼】といえど、スキャンダルとして取り上げられることは必至。しかし、店内がざわつくことも無ければ、彼らを見ている者もいない。

それもそのはず。今、店内にいる客は彼ら二人だけしか居ないし、鷹峰の若かりし頃からの馴染みの店だけあって、今更バーテンダーも鷹峰に対して言う事など無いのだろう。

呑みなれたウイスキーのグラスをやや傾けて、ソレを体に注ぎ込む。

「…しかし珍しいですね。鷹峰さんから呼び出すなんて。どういう風の吹き回しですか。」
「カッカッカ。なに、ちーと暇になったモンでよ。」

そして鷹峰に問いかけるは、浅黒い褐色の肌に、夜の闇に負けないほどの黒髪を長く伸ばした女性。
鷹峰が呑んでいるものと同じウイスキーの入ったグラスを傾けながら、ゆっくりとソレに口をつける仕草は、店内の薄暗さも相まって誰が見ても見惚れるモノとなっている。もっとも、現在店内には彼女に見惚れる客は一人として居ないが。

―釈迦堂　ラン

１０年ほど前…齢１０歳前後の年にして当時の王者３人を相手にし、非公式ながらもその全てに勝利した決闘者。
今はとある目的のために世界中を放浪しているという、そんな彼女の詳細を知る者はほとんど居ない。
そんな並々ならぬ気配を持つその存在は、隣に座っている【黒翼】の気配と相まって、異常な空間を作り上げていた。
きっと、店内に彼ら以外の客が居ない原因も、彼らが共に居ることが大きいのではないかと思われるくらいに店内の雰囲気は重苦しい。その仕草一つ、言葉一つとっても常人なら逃げ出したくなる圧力だと言うのに、それが二つもあるのだ。長年この仕事で色んな客を見てきたバーテンダーでなければとっくに逃げ出していただろう。

その中で、もう一口グラスに口をつけた所でランが口を開いた。
「仕事はいいんですか?その為に決闘市まで帰ってきたというのに。」
「まぁな。今は向こうからも連絡来ねーし、おかげで商売あがったりよ。」

「あぁ…確か【決闘世界】の依頼でしたっけ。…でも鷹峰さん、プロの試合だってあるでしょう？」
「あぁん？カカッ、試合の方も挑戦者が見つからねーもんだからそっちも暇でよ。」
「ふふ、あなたに進んで戦いを挑もうとする挑戦者を探す方が難しそうですが。」
「カッカッカ。こんなジジイにビビってるようじゃあ、今の若けー奴らも大したことねーな。若けー奴らはもっと威勢が良くねーとよ。」

そう、夏前頃から頻繁にかかって来ていた鷹峰への仕事の依頼。暴走したデュエリストの、沈静化という名目の一種の叩き潰しのことであり、決闘学園ウエスト校とサウス校の理事長が感染したことから始まったこの怪事件のことだ。
元々決闘市にだけ起こっていたこの感染も、まさか決闘市から遠く離れたルード地区にまで突発したことで、感染の可能性が決闘市以外にも広がってしまったらしい。

一応、まだルード地区以外にその感染は見られていないものの、そのせいで依頼主側も調査に時間を取られているのか、時折向こうから定時連絡はあるものの最近はめっきりその依頼の電話が来なくなっていたのだ。
しかし元々は決闘市に限局していた事件だけあって、極稀に決闘市に現れる暴走したデュエリストに関しては連絡が来るために、それを狩ることは忘れていないが。

「つーか何が『仕事はいいんですか？』だ。俺の仕事を横取りしやがって。最近じゃお前さんに獲物を取られてばっかりで俺が退屈ったらねーってんだっての、ランさんよぉ。」
「…それは鷹峰さんの到着が遅いのがいけないんでしょう？こんな面白いゲームを独り占めなんて酷いですからね。…まぁ、まるで相手になりませんが。しかしリミッターが外れた相手と言うのは私を理解

できないのか、遠慮が無いのがいいですね。こちらも好き勝手に出来ますし。」
「カカッ、元々好き勝手にしてる癖になに言ってやがんでぃ。」
「確かにそうですね。フフッ。」

そういって、可笑しそうに笑う鷹峰とラン。
秘密裏に行われているこの鷹峰への依頼…警察も介入せず情報も漏れないところを考えると、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が牛耳っていることは彼女にだって容易に想像できることだ。
無論、鷹峰に電話をかけてきている人物も、公に名前を出すことは出来ない人物ではあるものの、【決闘世界】に所属する人間であることは確か。
…というより、そのくらいの地位にある人物でないと、この【黒翼】に仕事を依頼などできないだろうが。

「この街は私には退屈ですからね。気まぐれで鷹峰さんについて来ましたが、その鷹峰さんもお忙しいみたいですし、コレくらいの暇つぶしが無いと。それも最近は少なくなってきましたし、そろそろまた旅に出たいものです。」
「おいおい、もう行くつもりかよ。ったく、若けーやつはせっかちでいけねーや。せめて【決闘祭】くらいは見てけや。」
「けっとうさい…あぁ、決闘市の祭典でしたっけ。…まぁ、暇つぶし位にはなりそうですが。今更学生レベルのデュエルを見たって…」
「あぁん？いい『暇つぶし』になると思うぜ？カッカッカ。」

渇いた笑いを響かせて、喉にウイスキーを流し込む鷹峰。
それを見たランの表情は、不思議な物を見たかの様になるものの、もう来月に迫った決闘祭、鷹峰はよほどソレが楽しみなのか。
酒の力もあるだろうがその表情は楽しげで、いつもは他者を押しつぶすような圧力を放つ彼も、決闘祭の話しを持ち出したときだけはそれが和らいだことをランは感じ取った。

しかし、たかが学生レベルの『じゃれあい』を観戦したところで、彼女が求める『同類』など見つかるはずがないだろうと思っているランの考えは、鷹峰とて理解しているはず。
かつて戦った、歴戦を戦い抜いた王者とて…彼女の求める存在ではなかった。
いや、ランに感化されて、唯一自力でここまでたどり着いた鷹峰は別にしても…それでも『化物』と呼ばれるくらいの力を持つ決闘者は、世界中を歩き回った彼女でも見つけることは容易ではないのだ。彼女が決闘市を離れて約１０年…その間、鷹峰以外で見つけた『化物』はたった１人。

―それ以上に叩き潰したデュエリストは数え切れないが。

「まぁ今年は珍しく、俺に琥珀に、あと恋介までゲストに来るからなぁ。お前さんにとっても悪い話じゃねーだろ？」
「…世界に名だたる王者３人がゲストとは。ふふ、琥珀君がうるさそうですが、確かに覗いてみるのもいいかもいいかもしれませんね。」
「カカッ、そう来なきゃな。」

決闘市に拠点を置く３人の王者といえども…自由奔放な【黒翼】を除いた二人の王者の話だが…多忙極まりない王者が、普通なら【決闘祭】に顔を出すことはあまりない。
在位約１０年という新参者の若き王者ゆえか、神格化されている【黒翼】と違って世界中の挑戦者から挑まれては日夜飛び回ってデュエルに明け暮れる日々を送る【白竜】と【紫魔】。
そんな【白竜】と【紫魔】、そして他に縛られない【黒翼】が…偶然にも、この時期に拠点である決闘市に戻ってきていて、そして【決闘祭】の観覧を行うことは一種の奇跡だ。
そのくらいの大物が観覧する中でデュエルを行う学生達は果たして幸か不幸か。

中継が行われるだけではない、プロ関係者も多く見に来て、決闘市中の注目を浴びながらの戦い。それに加えて学生達が羨望する王者全員が見ている状況で、自分のデュエルが出来る学生が何人いるか。

「そういやお前さんの探し物もいくつか見つかったのか？」
「いえ、全然。流石にこの私を持ってしても見つけ出すのは容易ではありませんよ。」
「カカッ、そうか。お前さんにも出来ないことがあってホッとするぜ。」
「フフ、何を言いますやら。今更何があっても驚く鷹峰さんでは無いのでは？」
「カッカッカ、そりゃあ買いかぶりすぎだぜ。おう、そろそろ行くか？」
「ええ、そうですね。」

グラスに収まった大きな氷が溶け出して、カランと音を鳴らしたのと同時に、まだ残っているウイスキーを置いて席を立った二人。
小さなＢａｒには収まりきらない程の、二つの大きな気配と圧力がその場を後にしたことで、心なしか薄暗い店内もどこか明るくなった気がするものの、それを感じ取れる人間がこの場にいないことは幸いか。

…きっとこの場に常人がいたら、急に楽になった呼吸で、吸い込みすぎて逆に息苦しくなるだろうから。

薄暗い店内から出た所で、それ以上に暗い決闘市の街に吸い込まれるようにして、二人は歩き出した。

――…

「…このあたりでしょうか。」
「お前さん、本当にわかんのか？」

しばらく歩いただろうか。鷹峰とランが立ち止まったのは決闘市の外れにある、とある開いた場所。ランに連れられるまま、こんな辺鄙なところまで鷹峰が連れてこられたのには理由がある。
別に、このまま一戦始めるというわけではない。いや、この二人が一戦始める場合は確かにこんな場所で、かつ人払いでもしなければ周りが持たないだろうが。
観客などもっての他、この二人のデュエルをまともに観戦しようと思ったら、彼らについていけるくらいの力と精神を持ったものでないと、その戦いを目に移すことなど叶わないだろう。
鷹峰的にはそれでも良かったのだけれど、しかしランが面白い物を見せるというものだから連れられてきたというわけだ。

「一体なにを見せるってんだよ。」
「すぐにわかりますよ。もうそこまで来ていますし。」
「あぁん？」

そう言ってランが指差した方向へと視線をやる鷹峰。風が吹くたびに草が擦れあう音が聞こえるものの、街と違って灯りなど無い場所で、闇の中に目を凝らしても何も見えるはずはない。
—しかし、それでも。確かに感じられるモノはある。

「なぜ私が鷹峰さんよりも『アレ』を多く狩れたのか教えてあげます。…私は、どうにも『アレ』を感じ取りやすいみたいなんですよ。おかげで随分退屈しのぎをさせてもらった。」
「カッカッカ。おいおい…マジかよ。」

それは…

「ア…ガァ…」

ずっと鷹峰が狩ってきた『モノ』だったのだから。

フラフラと足取りを怪しくさせながら近づいてくる存在。きっと一般人なのだろう、醸し出す気配は大したものではなく、この夜のように黒い靄に塗れているものの、それに飲み込まれきっているのは見て明らか。

なぜなら鷹峰が以前に倒したサウス校の理事長は、こんな呻くだけでなく自分の意思表示をしてきたのだから。

かつて、【白鯨】である砺波　浜臣に一歩及ばなかったものの、現役時代は砺波に次ぐタイトルを保持し、そのプレイスタイルと荒い気性で、『烈火』の二つ名を持っていたシンクロ使いの彼女ではあるが、鷹峰が彼女を狩ったときにはそれ以上の『悪意』を撒き散らして襲い掛かってきていた。それでも、こちらの話を理解し会話を取ることが出来たのだから、その差は鷹峰とて想像がついているが。

…きっと、その人間が持つ精神力によるのだろう。

この一般人のようにこの黒い靄に飲み込まれて、言葉無き『モノ』になりさがるか、それを抑えて『悪意』に塗れるか。

「さて、随分久しぶりに出てきた獲物ですが…鷹峰さんにまだ連絡は来ないようですし、コレは私が狩ってもいいでしょう？」

「カカッ、若けーやつは威勢がいいねぇ。好きにしろい、酔ったジジイはここで観戦させてもらうぜ。」

一般人といえども、決闘市の人間。

虚ろな手付きで誰でも持っているオーソドックスなデュエルディスクを展開すると、黒い靄がデッキにまで侵食していく。

そうして常人では絶対に戦おうとする意思すら放棄するであろう、圧倒的恐怖を駄々漏れにして敵を値踏みする、この釈迦堂　ランという『化物』を目の前にしても、『ソレ』はデュエルディスクをデュエルモードに移行させた。

「アガァ…デュ…デュエ…」
「では…」

―デュエル。

そうして始まる。先攻は、虚ろな目をした『ソレ』。

「センコウ…【ヴェルズ・カストル】ヲ召喚シ…【ヴェルズ・ヘリオロープ】モ通常ショウカン…2体デオーバァレイィ…ランク4…【ヴェルズ・オピオン】…。」

【ヴェルズ・オピオン】ランク4
ＡＴＫ／２５５０　ＤＥＦ／１６５０

「効果ハツドウ…一ツ使ッテ…【侵略の汎発感染】ヲ加エル…2枚伏セテ…ターンエンド…」

『ソレ』　ＬＰ：４０００
手札：5→2枚
場：【ヴェルズ・オピオン】
伏せ：2枚

『ソレ』の場に現れるは、悪意に感染した黒き竜。それを見る鷹峰の目には、決闘市から遠く離れたルード地区にも現れたように、他の使い手が使うどのヴェルズ・オピオンよりも凶悪に見えるものの、それに対して何かを感じるわけでもない。

ただ、凶暴に吼える悪意の竜を、酒に酔って楽しげに見ているだけ。

「ほう…ヴェルズかい。最近も聞いたなぁ、カッカッカ。」

「レベル５以上のモンスターを特殊召喚できないというわけですか。…さしあたって問題はありませんが。しかし大したことのない相手でも、私相手に全力で向かってくるのは好感が持てますね。」

「ケッ、どうせデュエルしたことすら覚えてねーんだがな。つーか意識あったらお前さん相手になんか出来ねーだろがい。」

「ふふ、確かに。」

悪意に飲み込まれ、目の前の相手を喰らい尽くす目的だけで向かってくる『ソレ』に狙われているというのに、まるで遊んでいるかのように緊張感も何もない鷹峰とラン。

しかし、それは当たり前なのか。

相手を出来るデュエリストを探す方が難しい、この釈迦堂　ランという女性。自分から向かってくる相手ならば、たとえどんな状態でも好ましいのか。こんな低レベルの相手なのだとしても、暇つぶしにはもってこいと、そう言わんばかりに。

ただ淡々と、ターンがランへと移る。

「私のターン、ドロー。手札から【地帝家臣ランドローブ】を特殊召喚。【ヴェルズ・オピオン】を裏側守備表示にする。」

「ヌゥ!?」

【地帝家臣ランドローブ】レベル４
ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／１０００

そんな中、たったの一枚のカードで制約を無に帰すラン。

【ヴェルズ・オピオン】の永続効果は、高レベル戦略をとる相手には確かに強力な枷となるものの、彼女はこんな制約を課せられた所で足止めにもなりはしないのか。

実力が桁違いな相手には下手な小細工など通用しないというが、そんな次元の話ですらない。まるで呼吸と同レベルで、彼女は当たり前のようにデュエルを続けるだけなのだから。

「魔法カード【汎神の帝王】を発動。手札の【真源の帝王】を捨てて２枚ドロー。【汎神の帝王】を除外し効果発動。私が選ぶのは３枚の【帝王の深怨】。…選ぶ必要も無いですね、私は【帝王の深怨】１枚を手札に加える。【天帝従騎イデア】を召喚し、デッキから【冥帝従騎エイドス】を守備表示で特殊召喚。」

【天帝従騎イデア】レベル１
ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／１０００
【冥帝従騎エイドス】レベル２
ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／１０００

ランの場に現れたのは、従騎と呼ばれる帝王の僕。
天帝と冥帝、２人の帝王に使えるこのモンスター達は、自分達の主を降臨させる力を持つかわりに、エクストラデッキからの特殊召喚を許さないという制約をプレーヤーに課す。
まぁ、元々地帝家臣の特殊召喚時にこの制約は発生しているものの、並のデュエリストではこの制約に苦しむことになるだろうが…

―そんなことなど、この釈迦堂　ランには関係ない。

「このターン、私はエイドスの効果でアドバンス召喚を行える。私は２体の従騎をリリースし、レベル８【天帝アイテール】をアドバンス召喚。」

―！

そうして降臨せしは、夜の闇を引き裂く光を纏った天の帝王。民を

治める偉大なる姿は、まるで霞みの如く消え去ってしまいそうなほどに麗しいものの、その力は強大そのもの。
帝王たちの頂点に立つ天帝が現れる時、その膝元にはさらなる帝が集うのだから。

【天帝アイテール】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００

「イデアが墓地へ送られたことで、除外されている【汎神の帝王】を手札に戻す。そしてアイテールのアドバンス召喚成功時、私はデッキから【真源の帝王】と【帝王の深怨】を墓地へ送って、デッキから【光帝クライス】を特殊召喚する。」

【光帝クライス】レベル６
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１０００

虚竜の制約など、先ほど無に帰したために何の役にもたっていない。
アイテールの後光に呼ばれ、光り輝く帝王の一体が現れた。全属性に存在する帝モンスターの中で地水炎風の帝と異なり、アドバンス召喚時以外にもその効果を発揮するこの光帝は、場に出たターンに攻撃が出来ないものの、その光を放って２枚までカードを破壊できる効果を持つ。
その破壊は自分の場からも選択でき、破壊されたカードを新たなカードへと変換できるのだ。それを自分の場に使えば自分がドロー出来ることはランとて百も承知。しかし、このターンで勝敗が着いてしまうのだから、今更ドローしたところで意味が無いだろう。
ランは淡々と、伏せられて分からないはずの敵の伏せカードを、その名称と共に宣言した。

「【光帝クライス】の効果発動。私が破壊するのは貴様の伏せた【侵略

の汎発感染】と【聖なるバリア―ミラーフォース】だ。」
「ヌァ!?」
「さぁ2枚ドローするがいい。まぁ、引いた中に私の攻撃を止められる物はないがな。…私は墓地の【真源の帝王】の効果発動。墓地の【帝王の深怨】を除外し、このカードを墓地から通常モンスターとして守備表示で特殊召喚する。」

【真源の帝王】レベル5
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２４００

「魔法発動【二重召喚】。このターン、通常召喚権が2回になる。…先ほどのエイボスの効果で得たアドバンス召喚権とは別にな。私は【地帝家臣ランドローブ】と【真源の帝王】をリリースし、レベル8【冥帝エレボス】をアドバンス召喚。」

【冥帝エレボス】レベル8
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００

そして最後に現れたのは、天帝と対を成す冥府の帝王。
敵が放つ瘴気を嘲笑うように冥帝が発する闇が周囲に充満し、ランが持つ圧倒的恐怖にも似た圧力と相まって、この辺り一体だけまるで世界が違うかのように雰囲気が変わっていた。

この場に他の人間が居ないことがどれだけ幸いなことなのか、この場に居ない者に聞いた所で理解など出来ないだろうが。この場に居る唯一の他者、涼しい顔で笑って観戦している鷹峰が異常なだけ。

ランとは根本的な部分が違うものの、自力で同じところまで上り詰めたこの男もまた『化物』なのだから。

「レベル8ノモンスターガ…2体ィ…」

「何を言っている。私はこのターン、エクストラデッキからモンスターを出せない。…まぁ、私のエクストラデッキにはモンスターは1体も居ないがね。ランドローブの効果で墓地の【天帝従騎イデア】を手札に戻す。そしてアドバンス召喚に成功したことで【冥帝エレボス】の効果発動。デッキから【帝王の開岩】と【帝王の烈旋】を墓地へ送って、裏守備表示の【ヴェルズ・オピオン】をデッキへ戻す。」

「ヌゥ!?」

何もさせず、何も許さず。この程度の相手が課した制約では、彼女の手を止めることすら出来はしない。

場で荒れ狂わんとした悪意の虚竜も、その虚竜を守る魔法も、自身を守るためのバリアすら存在することは許されない。

唯一の温情、ドローを許されて2枚増えた手札さえも、帝王の進撃を止めることは叶わない物であって。

―存在からして違う『化物』

この男が感染した悪意の瘴気だって、突き詰めれば謎の存在であるはずなのに。彼女の前ではそれもなきに等しいのだろうか。彼女を見ていると、そんな風にすら錯覚しそうになることこの上ない。

…この場には、それを感じる『弱者』などいないが。

「ふむ。今までの獲物の中では随分と弱い方でしたね。バトル、【天帝アイテール】と【冥帝エレボス】でダイレクトアタック。」

―!

「ヌオォォォオ!?」

天帝の杖から放たれる光、冥帝の掌から吹き荒ぶ闇。その二つに巻

き込まれて盛大に吹っ飛んでいく『ソレ』が放つ悲鳴らしからぬ音などまるで気にも留めずに、実体化しているモンスターをさも当たり前のように操るラン。
吹き飛ばされた『ソレ』が地面に何度かバウンドして動かなくなった所で、無機質な機械音だけがその場に鳴り響いた。

『ソレ』　ＬＰ：４０００→０（―１６００）

―ピー…

「グオォ…ブフォオオ…」

そして、負けたことに連動してか、吹き飛ばされた『ソレ』の体中のいたるところから噴出される黒い靄が夜空へと吸い込まれていく。
夜の黒に負けないほどの黒い靄であっても、その存在ははっきりと感じ取れるのか。ランと鷹峰は噴出されていく黒い靄をただ見ているだけだ。
幾度となく狩った『ソレ』らから、いつものように吐き出されるこの靄など、もう見慣れたものなのだろう。噴出しきるのを待って、ランが再び口を開いた。

「さて、この変な黒いのも抜けましたし、救急車でも呼びますか？」
「…その必要はねぇぜ。随分遅い電話が今かかってきたところだ。」

懐から端末を取り出し、その呼び出しに応じようとする鷹峰。最近めっきりだったこの相手からの電話も懐かしく感じられるものの、それが嬉しいわけでは断じてない。
世界に名だたる【黒翼】をこき使うこの相手を、この仕事が落ち着いたらどうしてやろうか、電話の間中はそんなことを考えているくらいなのだから。

『…仕事だ【黒翼】。随分久しぶりにだが、今度は郊外に…』
「安心しろや。もう終わったぜ、カッカッカ。」
『なっ!?そ、そうか…しかし、連絡よりも早く片付けるとは随分仕事が早いな。』
「おう、感謝しろい。」

開口一番で鷹峰にそう言われ、焦りと驚きの混ざった声で返事を返すこの電話主。

…今までの調査から、瘴気から開放され正気を取り戻した所で、完全に飲み込まれた場合には記憶に何も残らないことが分かっている。

きっと、目を覚ましても感染する前のところまでしか覚えていないのだろう。随分と都合のいい感染だが、何も知らぬ一般人にはそれでいいのかもしれない。

そして、およそ名前を公開できない立場にいるこの相手でも、【決闘世界】の構成員というだけあってこういった後始末を秘密裏に行うことには慣れているのか。

今まで行ってきたように秘密裏に病院に搬送し、息のかかった『わかっている』医者からの、『もっともらしい』説明を受けるのだ。

『こちらで後始末をしておこう。君は下がってくれて構わんよ。また何か分かったら連絡する。それまで気を抜かないでくれ。』
「あぁん?誰に物言ってやがんでぃ。あんまり調子に乗りすぎっと…」
『…わかっている。ではな、【黒翼】。』

鷹峰のイライラした声を遮るようにして電話を切る電話主。

触らぬ神に祟りなしとはよく言ったものだが、すでに逆撫でしまくっているのだからそれも意味は無いだろうが。怒りの矛先を失った鷹峰が端末を再び懐へと入れると、街へと戻るために歩き出した。

「…ケッ、つくづく勘に障る野郎だぜ。」
「さて…片付いたことですし、呑みなおしますか？それとも鷹峰さんは見ているだけだったのでここらで一戦戦りますか？」
「カカッ、ヤッてもいいけどよ、イライラして酔いが醒めちまった。呑みなおしに行くぞ。ヤるのはその後だ。」
「はいはい、お供しますとも。鷹峰さんの奢りは美味い酒が呑めますからね。」
「カッカッカ。若けーくせに酒の味覚えやがって。いいぜ、飛び切り美味い酒呑ませてやんよ。」

異変が起こっている事を一般人は知らずに、いつも通りに生活するのみ。しかし、その裏では確かに、この決闘市で『何か』が起こっている。
もうすぐ始まる祭典に、心躍らせている決闘市の雰囲気の中で、暗躍している人間の心情を知るものは居ない。
この夜の闇に吸い込まれるようにして、ランは姿を消していく。鷹峰も、一度だけ後ろを振り返って『ソレ』が倒れているもう少し先…夜に包まれていて見えない暗がりへと一瞥すると、ランと同じく歩き出した。

「カッカッカッカ…」

その少し離れた安全な場所で、この戦いを見ていたもうひとりの怪しい気配に気づいていたにもかかわらず。しかし、感染の気配ではない、ただの人間の気配。
そんなやつなど相手にする気も起きないのか…その真意はわからないものの、酔った鷹峰の乾いた笑いだけが響き渡って…

――…

ｅｐ２２「開幕前夜」

「いよいよ始まるね。」

食卓を囲んで、そう言ってルキは向かいに座って晩御飯を食べている遊良と鷹矢に向かって話しかけた。

当然のようにルキがこの家に居て、当然のように３人で食卓を囲むこの光景は、彼ら３人にとって違和感などない。と言うよりも、この空気感でなければ逆に違和感を覚えることだろう。

もう随分気温が低くなってきて、もう外には雪が降り積もってきている季節。

―そう、ルキの言ったとおりいよいよ始まるのだ。遊良が待ち望んでいた、【決闘祭】が。

師との約束。そして自分の力を見せ付けるための戦い。熾烈な戦いを乗り越えて、やっと出場を勝ち取った【決闘祭】。そして、今まで以上の戦いが待っているであろう祭典。

出場する他の決闘学園の学生達は手練れ揃い、そして皆プロを目指して必死に勝ちに来るだろう。その中でイースト校以上の、全決闘学園生徒達からの好奇の視線を突き刺される中で戦わなくてはいけない遊良の心情は果たしてどのようなものなのか。

そんな心配をしているルキを他所に、遊良は揚げたての唐揚げを一つ飲み込むと、そっけない返事を返した。

「あぁ。そうだな。」

「うむ。」

「そうだなって…それだけ？緊張しないの？鷹矢はするわけないけど。」

「それはどういう意味だ。俺だって緊張くらいするのだが？」

「ねぇ遊良ってば。」

「無視か？無視なのか？おいルキ、俺だって緊張くらいすると言っているんだが！」
「はいはい、緊張しすぎて食べ過ぎてるんだよね鷹矢は。もうこれで唐揚げ５０個も食べてるんだから、お腹壊しても知らないよ？」
「心配するな。まだまだ食える。遊良、ご飯のお代わりだ。」
「もうねーよ。８合も炊いたのに全部食いやがって。」

最早いつもと変わらぬ彼らの会話、昔から変わらぬ距離感。
明日には始まる壮絶な戦いの前夜だというのに、全く気負いしていない遊良と鷹矢に安心感は確かに覚えるものの、しかしルキにはそれがどうにもむず痒い。
―師の命令で、昔から大きな大会に出場させられては荒稼ぎさせられていた鷹矢と違って、遊良には大会経験が極端に少ない。
無論、幼少期の遊良とて大会などに出場する気はあったのだが、大会運営の方が面倒事を嫌ってそれを許してくれず、また当時の鷹峰も無理強いすることが無かったために、今まで大きな大会などには出たことが無いのだ。
まぁルキからしても、それは別に大会経験が無い遊良に緊張して欲しいとか、不安に押し潰されそうな遊良を見たいとか…はたまた始めての大きな大会前に舞い上がってはしゃぐ遊良を見たいとか、そんなことでは断じてないのだが。
しかし遊良がここまで気分を上げない理由には彼女にだって想像がつくのだろう。
それは…

「ねぇ遊良、泉先輩のこと…まだ気にしてるの？」
「…まぁな。」

遊良と蒼人の選抜戦が終わってから起こった、３名の学生への襲撃。その真相は未だ分からず、公にされないことから追求も難しいこの事件。

襲撃の事実を知っている学生は遊良たち以外におらず、他の学生達には蒼人たちのことは伝えられないまま。蒼人たち3人は、体調を崩して入院という体裁をとってはいるが、それを不審に思う学生がいても不思議じゃない。

中には色々とかぎまわっている生徒も居るらしいが、そもそも学園側は隠蔽していることならば当然【決闘世界】が関わっているのだろう。学生レベルがどうこう出来る問題ではないことは確か。

…そして、遊良が【決闘祭】の代表に選ばれてから、イースト校は大変だった。

—普段の蒼人とデッキが違ったからと、蒼人の負けを認めないファンクラブの女生徒。

—去年の代表だった蒼人や虹村こそ代表に相応しいと、遊良に代表を降りろと圧を駆けてくる上級生。

—遊良に敗北を叩きつけられたにも関わらず、蒼人のためと割り切って陰口を再開する1年生。

そんなイースト校の学生達から敵意を向けられまくっていたのだから。

しかしいくら学生達が声を荒げて抵抗した所で、理事長である砺波浜臣が認めた代表決定を教師陣が覆せるはずもなく、遊良の代表入りに抗議する学生達対、代表入りを認めざるをえなかった教師陣との対立が沸き起こっていたのだ。

それによって、より一層学生達からの敵意の眼差しと明後日な物言いが強まったのはいうまでも無い。

まぁ、そんな敵意を今更向けられた所で怯む遊良ではないのだが。

こんな状況は、昔と比べればなんてことない程度。力も無かった幼少期には、これ以上の敵意に突き刺され、周囲のいいようにされてきたのだ。それを打ち破って、今の力を得た遊良にしてみれば、【決闘祭】の代表は自らが勝ち取った物。

決闘学園で怪我人が出たと言うのに、それでも執り行われる【決闘祭】。

超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の取り決めは絶対で、イースト校理事長である砺波が不本意だと言ったのだとしても、遊良が結果を出して代表に選ばれたことは紛れもない事実だ。

そうだというのに、その後も上級生が特に遊良に直接突っかかって来たりもしたが…所詮それは言葉だけに過ぎず、デッキチェンジがあったとは言えイースト校の実力者である泉　蒼人に勝利した遊良に進んで挑んでくる者は少なかった。

また居たとしても、それを今まで通りに完膚なきまでに倒していただけに過ぎないが。上級生と言えども向かって来る学生はと言えば、蒼人との戦いでまた一つ強くなった遊良の力を、理解もできない有象無象。

また、遊良と蒼人のデュエルを理解できた大半の学生達は、ただ見ていることしか出来なかったのだから。

それなのに、遊良が引っかかっていることといえば…

「泉先輩、まだ意識戻らないんだってさ。」

「でもそれは遊良が悪いわけじゃ…」

「わかってる。…けどさ、俺とデュエルしたことも関係あるかもしれないだろ。…モンスターが実体化してたんだし。」

「…それは。」

そう、遊良にしてみれば、周囲の人間が好き勝手言うのは別にいい。所詮、安全なところから口だけしか出せないのだから。

それよりも襲撃を受けたという3人…特に、直接戦った蒼人に関しては思うところがあるだろう。重体となり、救急搬送された蒼人たち3人の学生は、未だに意識を取り戻さないまま。

体のダメージは回復したという。しかし、何故か意識を取り戻さない彼らに医者も頭を捻って手を上げるのみ。

始めは蒼人の怪我の原因が自分のせいではないと思えた遊良でも、ここまで意識を取り戻さない蒼人を心配できないわけがないだろう。それが例え、自分を本気で潰しにかかって、かつ自分の幼馴染2人を傷つけようとしていた相手でも、だ。

考え直せば蒼人の様子が異常だったことは明白で、それにキレて蒼人を傷つけたことには変わりないのだと、時間が経ってから後悔もでた。

もちろん、あの場であったことはルキと鷹矢にも説明してあるし…それに関連してルード地区で起こったことがルキにバレてしまい、鷹矢と共に盛大に叱られたことは置いておいても…もし蒼人が正気で、かつ彼らしいデュエルで挑まれていたとしたら。

―勝てていたか分からない。

過去の蒼人のデュエルを研究した感想では、遊良の中ではそう結果が出ている。

群雄割拠の決闘学園のトップに上り詰め、去年の決闘祭では2年生ながらベスト4。

周囲からのプレッシャーにも負けない精神力に、誰からも好かれる性格。

それに、なにより心から楽しんでデュエルをする彼と比較すると、遊良とは実力的にも精神的にもまだまだ差が大きいことが歴然だったのだから。

あの場の異常性を加味しても、事情が事情だったとしても…そんな蒼人から意識を奪ったかもしれない…その一端を担った可能性をどうしても考えてしまうのか。

加えて遊良も心の底では、実は蒼人とのデュエルが楽しみだったかもしれないと言うこと思うと…遊良がやるせない気分になるのは仕方ないのかもしれない。

「でもさ、遊良は本番でちゃんと勝ったんだし、泉先輩だけじゃなくて虹村先輩とか紫魔先輩だって状態が同じなんだよ？遊良のせいじゃ…」

「わかってるけどさ。わかってるんだけど…」

辞退など絶対にしないが、きっとこんな気持ちで【決闘祭】になど望むべきではない、そんなことは遊良にだって分かっている。

遠慮や後悔なんかに気を取られている暇など無いし、自身の退学や師の引退もかかっている戦いを前にして、気を張らないわけがない。それでも、どうしても考えてしまうのだろう。

初めて幼馴染以外に理解者になってくれたかもしれない相手の…置かれている現状を思うと。

そんな遊良を見てか、大量に積み上げられた唐揚げをみるみる吸い込んでいた鷹矢が口を開いた。

「何を下らんことを。どうせ明日になれば嫌でも戦わなければ行けな

いのに、今更余計なことを考えたところで始まらんというのに。」
「遊良を鷹矢と一緒にしないでよ。…鷹矢はいいよね。悩みなんて無さそうで。」
「ふん。形がどうあれ、選抜戦で勝ったという結果が出ている以上、代表になったのは遊良だ。虹村たちの意識もその内に戻るだろうし、外野がとやかく言う必要など無い。そんな事に気を取られて、俺と戦う前に他人に負けるのは許さんからな。」
「お前なぁ、簡単に言うけどよ…」

遊良の気持ちを知っている癖に、簡単に言う鷹矢。

遊良とて昔はそれに随分助けられもしたが、年齢を重ねた今もそうであるとは限らないことだ。しかし、余計な言葉にしなくても、鷹矢が放った言葉の真意は遊良に確かに伝わる。

それは、『悩むだけ無駄』、『下らない感情に囚われるな』と言っているにも等しいだろう。

昔から物事を簡単に考える鷹矢ではあったが、それでも確かな強さを持って皆に認められてきたこの馬鹿の言葉は確かに物事を的確に照らすのも事実。…それは、遊良もとっくに理解していること。今更思い出さなくたって、初めからわかっていること。

それでも、遊良の心は考えないわけにはいかなかった。いくら産まれた時から積み重ねてきた絆があっても、いくらお互いがお互いの『片割れ』であっても…『違う個人』には変わりないのだから。

考えることを分かっても、考えた中身は違う。色々と自分の考えに囚われやすい遊良のことを、理解している鷹矢であっても…遊良が考えた末の、心の中身を簡単に否定することは出来ないのだ。

そうだというのに…それを知っていてもなお鷹矢は己の真意を真っ直ぐに言い放つ。

「遊良、忘れるな。お前と本気で戦うために、俺は出るんだ。」

「それは…」

―いつか大舞台で、大歓声の中で全力で戦いたい。

いつか交わした約束。幼い頃、まだＥｘ適性など調べておらず、未来に希望を募らせていたあの頃の。

いつだって、真っ直ぐに。悩んでいても、優先すべきことは何なのかを忘れるな…と。

色々と余計なことを考えても、何よりも大切な事をいち早く思い出させてくれる。それを本当に性質が悪いと遊良は思いながらも、それでも一緒に居ることが当たり前のこの片割れの言葉から、悩むことより進むことが大切だということを教えてくれるのだから、それによって、彼から何かが吹っ切れるのは確か。

やるせなさを感じるのは仕方ない。蒼人の身を案じているのも仕方ない。もしかしたら勝てなかったという考えも、自分が加害者かもしれないという疑惑も。

それを含めて、全てが彼の感情なのだから。それも含めて、彼が出した結果なのだから。

―けれど、それでも…遊良自身にとって、何が一番大切なことなのかは…彼とて忘れていない。

「…わかってるって。お前こそ、俺と当たる前にこけるなよ。」

「ふん、誰の心配をしているのだ、遊良の癖に。」
「んだよ、鷹矢の癖に。…ハハッ。」
「…フッ。」
「はぁ…男ってホント楽そうでいいよね。」

そんな、どうにも単純な男共を見て溜息を吐くルキ。

…いくら自分が悩んだ遊良を励ましても、鷹矢のたった一言に叶わないのは昔から。

それでも遊良がやる気になっているのだからそれはそれで良いものの、しかし彼女の心配事が尽きないわけではない。それに昔と違って、今の遊良がどこか変わっているかもしれないことを、ルキは感じていた。そう、【堕天使】を得てからの遊良はどこか焦っているようにも見えるのだ。

Ｅｘ適性を失ったことで、自分の存在を否定させないことに必死になっているのだろうか。今まで愛用してきた【神獣王　バルバロス】を筆頭に、作り上げてきたデッキを仕舞いこんで、新たな力で必死に戦い続ける彼の姿を見てどうにもやるせない気分になる彼女。

しかし、それでも…

「…でも鷹矢の言うとおり、【決闘祭】に出るのは決まってるんだし、退学までかかってるんだから頑張らないとね。」

遊良が遊良であることに違いはない。もし彼が『何か』を得て変わったのだとしても、彼の中に存在する大切な事は何一つ変わってないのだから。

「そうだな。それに先生を引退させたら大変そうだし。」

「ふん、あのジジイはとっとと引退でもさせて家に閉じ込めておいた方がいいがな。」
「もう、鷹矢はすぐ先生にそう言うんだから。…確かにハチャメチャだけど。」
「親父の苦労も考えずに好き勝手に生きるのも考え物だ。それでどれだけ迷惑をかけられたことか。」
「いやお前も同じ様なもんだろ。好き勝手に振舞う所とか特に。」
「む?それは心外だ。あんな我がままなジジイと一緒にするな。」
「だから一緒じゃねーか。」

—夜は、過ぎていく。戦いの日へと向けて。

—…

「お三方におかれましては、ご足労いただきましたことを真にありがたく存じ上げます。」

年季が入った老人の声で仰々しい挨拶をしながら頭を下げたこの人物。
相当な年だということは一目見てわかるだろう。長い年月をかけてこうなった、皺だらけの顔にくすんだ白い髪と髭。腰も丸まり手も細い…実際の身長よりも随分と小さく見えることこの上ない。
そんな年の人物が、自分よりも遥かに年下の人間に頭を下げて敬語を使っている光景は一言で表せば『異常』そのものだというのに、この豪華で巨大なホテルに居る誰もがその光景を見ることを叶わないのは、果たして幸か不幸か。

その老人の視線の先には、この豪華なホテルのロビーに到着したばかりの…『三人』が居た。

…きっと、強靭な造りのホテルが軋んでいるように感じるのは、気のせいではないはず。

そこにいる『只ならぬ圧力』、『飲み込まれるような恐怖』、『想像を絶する気迫』を持つ人物達のことを、知らないデュエリストは居ない。

…と言うより知らなかったとしたら、デュエリストですらないだろう。

「カッカッカ、そう畏まるんじゃねーや。見知った仲じゃねーか綿貫のジジイよぉ。」

「そうはいきません。ご多忙極まりないお三方が、ご無理を言ってこの日に集まっていただいたのですから。」

…そう、ここに居るのは、誰もが知る世界最高峰の【王者】達。

―…

―【黒翼】、天宮寺　鷹峰…世界最強のエクシーズ使い。

公式に勝敗がつけられる試合…つまりは王者同士の戦い以外で…彼に勝てるデュエリストなど居はしない、まさに規格外の存在として神格化されている存在。

その名はすでに歴史に刻まれている、豪放磊落・怪力乱神・国士無双で知られる、文字通りの『化物』の一体。

―【紫魔】、紫魔（しまれんすけ）　恋介…絶対不変の融合一族。

若干１８歳という若さで王者の座に座っている歴代最年少の王者であり、全紫魔家の頂点に立つ『紫魔本家』の家長。

約１０年前…前【紫魔】が非公式に、誰ともわからぬ相手に敗れた

後…全紫魔家から有志を集わせ行われた『蟲毒』の如き戦いで、当時8歳という幼さにもかかわらず…最下層の紫魔家であったにもかかわらず、生き残って『本家』となった存在。
融合召喚の王者が、いつの世も紫魔家のデュエリストだったことがその『称号』の由縁。一族の姓がそのまま【紫魔】という王者の称号となる強さ、それを保つための厳しい規律からか、王者としての【紫魔】は紫魔家の全てを統べる。

―【白竜】、新堂（しんどう）琥珀（こはく）…世紀の天才シンクロ王者。

当時、【黒翼】と共に生きる伝説となっていた前シンクロ王者【白鯨】を降し、世界に認められた大天才。
常にデュエル界の王道を突き進んできた彼は、まだ若い王者という印象が強いものの、学生時代から築き上げた伝説は、決して他の誰にも真似できる生易しい『モノ』ではない。
彼だけが持つことを許されている伝説のカードの存在も相まって、この世界の新たな伝説となる日を世界中が待ち望んでいる。

―…

そんな人物達が、好き勝手に言葉を紡いでいた。しかし、そのどれもが仲むつまじい物とは程遠く、まさに一触即発。
少しでも歯車がズレたりしようものなら、ここら一体が一瞬で吹き飛んでしまうのではないかと錯覚するほどの空気に包まれながら聞こえてくるのだから、一つのホテルにそれを固めたのは…よほど頭が狂った馬鹿か、はたまた相当な位の高い人間にしか出来ない芸当なのではないだろうか。

―そう、相当な位の高い人間か…

「シシッ、そう言って次に会ったら大目玉食らわせるんだもんね綿貫

のジッちゃん。ホント俺っちみたいな若いモンに遠慮ってのが無いじゃんねー。」
「琥珀さん、それは日頃の行いの問題ですよね。貴方と一緒にしないでいただきたい。私は綿貫様に叱られたことなどありません。」
「ちぇー、いい子はこれだから。つまんねーの。」

―綿貫（わたぬき） 景虎（かげとら）

…【決闘世界】の古参にして幹部。地位は【全世界プロデュエリスト協会会長】兼【決闘祭総責任者】

この王者三人に平気で話しかけてきた人物も、立ち振る舞いを見ただけで相当な地位にある人間だというのがそれでだけで理解できる。
王者３人を相手に会話しても全く物怖じしない風格…長き年月を経て得た『モノ』は、決して彼より若い者たちが出せる物ではない。
プロとして活動するデュエリスト達は皆、彼にとって子であり孫であり曾孫なのか。プロの中でも最年長に近い鷹峰のことすら生まれた時から知っている年齢不詳の彼のことを『妖怪』扱いする者も居るとか。

「綿貫のジジイに敬語使われる日が来るなんてよぉ。こりゃあ今日は美味い酒が進みそうだぜ。」
「あっれー、天宮寺のジイさんさっき酒瓶持ってなかったっけ？もう若くねーんだし止めといた方がいいんじゃね？」
「カカッ、お前さんみてーなガキに心配される筋合いはねーってんだ馬鹿野郎。」
「ちょちょ、俺っちより紫魔っちの方が若けーじゃん！何でいっつも俺っちだけ言われなきゃいけねーの？」
「だから私を巻き込まないで下さい。琥珀さん、貴方も年上扱いされたかったらもう少し落ち着きを持った方が…」
「あーあ、子持ちは言う事が違うわー。独身の俺っちにはわかんねー

けど、紫魔っちみてーな年からガキなんて作りたくねーもんだねー。」
「カッカッカ。ガキ育てんのは楽じゃねーぞ琥珀よぉ、だからお前さんはガキだってんだ。」
「うっざ！天宮寺のジイさんうっざー！自分だって育児放棄してたって噂あんじゃん！」
「あぁん!?俺だってガキくらい育てたことあるってんだこんちくしょう！」
「うっそでー！呑兵衛のジイさんに育てられるガキの方が可哀そうだっての！」
「んだとゴラァ！」

そんな中、さっそく言い争いを始める鷹峰と琥珀。
そもそも、王者にまで上り詰めるほど我が強い人間をこんな一つの建物に集めておくこと自体が間違いだと感じられるのに、それで揉めるなという方が無理なことだ。明日に始まる【決闘祭】のゲストとしてはこれ以上ない贅沢なメンバーだが、先が思いやられてしまうことこの上ないだろう。
琥珀が乗っかると分かっているのにガキと罵る鷹峰も大抵だが、被害を受けないように我関せずでそっぽを向いている恋介も若さゆえのモノ。
恋介もまた近くで騒ぎ立て始めた二人にイライラしてきているようにも見え始め…ホテルで働くスタッフ、他の宿泊者、そして建物自体までもが『３つ』の圧力に中てられて揺れ始めた…

…そんな時だった。

「…コホン。」

小さく、弱々しく。しかし確実に耳に届く咳払い。
それは綿貫が放った、『静まれ』という意味を持ったただの音。
こんな老人が漏らした咳払いなど、街の雑音よりも耳に残らないモ

ノだというのに、しかしそれは他の誰にも真似できない静止と言えるのであって。

…

あれほど始まりそうだった爆発が、その音一つで収まってしまった。そう…誰も、綿貫の機嫌を損ねることをしてはいけない。例え、王者であっても、だ。

開いているのかわからない瞼の奥から、確かに覗く眼光でホテル内が静かになったのを確認したのだろう。

静寂になった中で綿貫が再び口を開いた。

「それではお三方、明日の【決闘祭】は何卒…『何卒』よろしくお願い致します。前途有望な若者の戦いに、王者の皆様が確かな導となりますよう…お頼み申し上げます。」

「…んな心配しなくてもわかってるってー。ジッちゃん、俺っちに任せとけってのの。」

「…心得ております。綿貫様の顔に泥を塗ることは致しませんとも。」

若き王者たちの言葉に頷きながらほほ笑む綿貫の顔は、まさしく幼い孫を見る祖父の目のよう。暖かな言葉からは怖さを全く感じないものの、歯向かってはいけない確かな『モノ』がそこにはある。

琥珀と恋介…【白竜】と【紫魔】と呼ばれる二人の王者と言えど、たった10年ほどしか王者の座にいない二人にしてみれば、綿貫は逆らってはいけない存在に違いない。先ほどまでと声質を変えて返答するのみ。

また、綿貫にとっても若い王者二人が可愛くて仕方ないのか、琥珀は会うたびに叱られているし、2年前に子供が生まれたばかりの恋介のことも何かと気にかけているのだ。

…まぁ、付き合いが長すぎる鷹峰に関しては別だが。綿貫は眼光をより一層厳しくして、鷹峰を見る。

「天宮寺様、よろしいですかな？」

「カカッ、綿貫のジジイは怒らせると怖えーからなぁ。精々ガキ共がやる気になるよう、ありがてぇ言葉ってやつを言ってやるさ。んなセリフは性に合わねぇけどよ。」

そんな視線を受けてもなお、怯んだ様子もなく。他の二人の王者とは違って全く変わらない声で綿貫に話しかける【黒翼】こと天宮寺鷹峰。

培ってきた物が、積み重ねてきた物が…この男だけは桁違い。

そもそも昔から綿貫の言う事を素直に聞くことはしない鷹峰であったし、頼んだ仕事も自己流で片づける彼に手を焼くのは今も変わらないのだろう。【白鯨】、砺波　浜臣が王者だったころは、少なくとも今よりは綿貫だって楽だったことだろうが。

「恐悦ながら、お三方にはこちらでお部屋をご用意してあります。今宵はごゆっくりお寛ぎください。くれぐれも…『くれぐれも』明日に向けて『お休み』下さい。」

「ありがとうございます綿貫様。では私はお先に失礼させていただきます。」

「あ、俺っちは飯食いに行くから一回出かけるよー。すぐ戻っから心配すんなよ？じゃあねージッちゃん。」

「はい、おやすみなさいませ。」

とは言え、綿貫の力でひとまずの爆発は避けられたことに違いはない。鎮められた雰囲気を崩さぬうちに、若き二人の王者はそう言って

好き勝手に行動し始めた。
その場に集まっていた『３つ』の大きな覇気がバラバラに散ったことで空気が軽くなったのか…先ほどまで抑えられて全く聞こえなかった他の雑音が瞬く間に響き始め、空間をみるみるうちに包み込み始めて。

紫魔　恋介はエレベーターで上へ、新堂　琥珀はホテルの外へ。明日に待つ【決闘祭】に向けて、各々の準備を始めるために…他の王者とぶつからないために…だ。

そして、それを見送った綿貫はここに残った鷹峰に向かい合うと再びその重い口を開いた。

「…やれやれ、手のかかるガキ共だわいのぅ。これだから何時まで経っても死ねんわい。」
「カッカッカ、ジジイが死ぬなんて想像できねーがな。」
「お前さんが一番手ぇかかるんじゃ。浜臣と憐造はもっと物分かりが良かったと言うのに。鷹峰…お前さんときたら、何時になったらワシに楽をさせてくれるんじゃ？」
「そりゃあ勝手にガキ共に負けたあいつらのせいだろうが。俺ぁまだまだ現役よぉ。」

ざわめきの大きくなったフロアで、先ほどとは打って変わって…口調を崩して鷹峰と話し始める綿貫。
きっと、全てのプロデュエリストを束ねる綿貫の、素の表情を知っているのは長い付き合いの鷹峰だけなのではないだろうか。それに、きっと鷹峰にここまで親し気に接することの人間も他にはいないだろう。
楽そうに、気軽そうに話す綿貫の言葉に、鷹峰もまた機嫌よく答える。

「フォッフォッフォ、相変わらずの減らず口じゃて。何だかお前さんも段々と鷹斗に似てきたのぅ。」
「おいおい、俺の爺さんの話を持ち出すんじゃねーよ。ったく綿貫のジジイ、一体いくつになったんでぃ？」
「はて…数えるのなど遥か昔にやめてしもうたからの。もうよぉわからん。」
「カカッ、俺のことを『化物』なんて呼ぶ奴もいっけど、ジジイの方が本物のバケモンじゃねーか。」

年齢不詳、出生不明の綿貫をよく知る人物は居ない…それは、もう生きていないと言う意味で。
一説では、気が付いた時にはすでに【決闘世界】にいた翁としても噂される、まさに『妖怪』という言い方がしっくりくるのは仕方ないのか。
それでも、鷹峰にとって綿貫はよく見知った仲。そんなことなど、まるでどうでもいい様に鷹峰は続けた。

「おぅ、今日は付き合ってやっから呑みに行こうや。もちろんジジイの奢りでなぁ。」
「…仕方ないのぅ。付き合ってやるわぃ。…その代わり、お前さんの可愛い弟子達の話でも肴にしながら…のぅ？ガラにもない子育てをした鷹峰よ。」
「ケッ、これだから食えねぇジジイだぜ。」

昔から鷹峰を知るだけあって、数少ない鷹峰の弱みを知っているのも彼の特権。これで、話のネタには事欠かないだろう。
今の綿貫の興味は、人を壊してばかりいた『あの鷹峰』が鍛えたという弟子達の話。
好き勝手に暴れてばかりいたこの男が、如何様にして変わったのか、如何様にして子どもにモノを教えたのか。

—それが大いに気になるのだろう。

「カッカッカ。」
「フォッフォッフォ。」

そうして綿貫と鷹峰もまた、夜の決闘市に消えていった。

明日にも始まる祭典に、確かに心躍らせながら。

—夜は、更けていく。

—…

ｅｐ２３「決闘祭、開幕」

―その日、決闘市は大いに賑わっていた。

まだ午前中だというのに、街中を彩る数々の装飾と、凍てつくような外気温にも負けない程の人々の熱気が相まって、これから始まることを待ち望む雰囲気は…とても今年の終わりが近づいてきているという気を感じさせない。

人々の注目はここ決闘市の…中央地区の最も栄えている都市部に集まっており、街を歩けば…まだ始まりもしていないのに会場の空気を少しでも感じていたいのか、既に至る所で中継モニターに会場やその周囲の映像が流れている。

それ以外にも、各家庭のＴＶには必ずこの中継が映っていて、決闘市内の視聴率が１００％を割ることはないし、食事処や買い物先…果ては病院に至るまで、この祭典の映像が映っているのだから、このイベントに対する人々の注目がどれほど高いか分かるだろう。

―そう、この時期に決闘市がここまで盛り上がる理由など、たった一つしかない。

ついに始まるのだ。

決闘学園の生徒達が、決闘市中の人々が…この街でデュエリストを自負する者達が待ち望んだ『祭典』が。

―【決闘祭】が、ついに開幕するのだ。

たかだか高等部の学生達の戦いと、舐めてはいけない。
ここ決闘市は、全世界でも有数のデュエル大都市。その戦いは、決闘市の外からも大勢のデュエリストが観戦に来るほどなのだ。

そして決闘祭に出場できた学生のほとんどは、この決闘市でも有数の実力者であるということは間違いようの無い事実。
ここで大活躍した学生は卒業後にプロ入りを確約されるが、そもそも出場すること自体が生易しいことではないのだから。

ノース・イースト・ウエスト・サウス…４つある決闘学園に通う、２０万人超の学生達の中から選ばれた、たった『１２人』しか出ることを許されない祭典。

実力はピンキリと言っても、最上位に立つ学生達のレベルは、魔窟と称されるプロの世界においても十二分に通用するもの。それも、ただの実力的な問題だけではなく。

―決闘祭に出場できるだけの『実力』を持つことは、当たり前の大前提。

―決闘市中の注目・期待・視線・応援・歓声・嫉妬・野次…それ以外にも多くの『モノ』の中で、自分の戦いを貫き通せるだけの『精神力』。

―勝負は時の運。それを理解してなお、相手よりも大きな『運』を持っているかどうか。

―相手を倒すと言う意思の『鋭さ』。ささいな隙も見逃さずに、攻め

込むことが出来るか。

―敗北しても決して折れない心。一度負けた相手にも、それを苦にせず次は負けない力を得るために鍛錬できる心の『鈍さ』。

それらを備えた学生が、プロデュエリストと比べても足りないという事は絶対にない。

だからこそ、高等部卒業と同時にプロになった選手達は皆、この世界でも有数の名選手となっているのであって…そんなこと、決闘市中の人間が理解していること。

でなければ、皆が【決闘祭】に注目しないわけがないだろう。

―正午ちょうどに鳴り響く開会宣言を、今か今かと待ちわびるこの決闘市の雰囲気を、ここに居る誰もが感じていた。

―…

「…意味がわかんねーよ。」

「うむ。仕方ないだろう。だがまぁ気にするな遊良。やってしまったことを後悔しても遅いぞ？」

「お前のことだろうが！ホントふざけんなよ！」

寝癖の着いた頭で、制服ではなくジャージ姿のままで。

未だ自宅のベットの上であぐらをかいている鷹矢を、遊良は心の底から叱り飛ばした。

まだ午前中で、正午までは多少時間があると言えども…確かに【決

闘祭】は正午から始まるものの、観戦する学生達や一般人と異なり、参加選手は早朝の決められた時間までに会場入りして、自分の控え室に居なければならなかったのに。
いつまで経っても控え室に来ない、イースト校一年の天宮寺　鷹矢を心配したスタッフが、同じイースト校で…かつ同じ住所登録をしていた遊良の控え室に飛び込んできたときには、彼も相当驚いたに違いない。

―何故なら…

絶対に遅刻しないように叩き起こして、そして一緒に家を出て…寝ぼけているこの馬鹿と共に電車にも乗って…会場にも鷹矢と一緒に入ったはずなのに。
会場に入ってからは別行動だったとは言え、その馬鹿がまさか自宅で寝ているだなんて…そんなこと、遊良にだって思いもしないことだ。

「確かに会場に着いても半分寝てたけど、だからって何で家にいるんだよお前は！」
「知るか。気がついたらお前に起こされていたんだ。俺だってわからん。」
「お前のことだろうが！『わからん』じゃねーぞ！」
「まぁ着替えたような覚えはあるような無いような…きっと睡眠欲が爆発したのだろう。許せ。」
「だからって電車使ってまで…わざわざ家に戻って寝なおすか普通？」
「うむ。」
「開き直るんじゃねー！」

暖簾に腕押し、馬耳東風。まるで反省の色を見せない鷹矢だったが、それが『いつものこと』とは言え、今回ばかりは遊良も容認でき

ない。

そもそも遅刻や欠席など、長い【決闘祭】の歴史の中でもありえないことだ。

この祭典に出場が決まっていて、それに出ないという選択肢など存在しないのだから。そうだというのに、夢遊病の如く平気で自宅まで戻って、わざわざ着替え直して眠りに着くなど聞いた事もない事例。

例えこの馬鹿の、安眠を求めた末の無意識行動だったのだとしても、【決闘祭】に出場する選手が自分の控え室に居ないなんて許される筈がない。

遥か昔に、病気になったり事故にあったりしても、這ってでも出場した学生の前例だってある。逆に言えば、そう言った前例があったからこそ、選手達が滞りなく出場できるようにと、予め早い時間帯から集められているというのに。

「お前のせいで俺と紫魔先輩まで失格になるかもしれないって脅されてるんだからな！さっさと着替えて行くぞ馬鹿野郎！」

「うむ。だがあと５分くれ。」

「つざけてんじゃねー！」

「…むぅ。」

そう言って焦る遊良ではあったが、決闘市中の注目が集まるこの祭典に、全４つの決闘学園の…２０万人を超える学生達から選ばれた『１２人』が出場することは、【決闘世界】が決めた『絶対』の決まり。

だからこそ、鷹矢のせいで遊良とヒイラギが『失格』になるなんてことは『ありえない』ことなのだが、まぁ【決闘祭】が初めてで、そんな決まりを詳しく知らない遊良にしてみればその脅しでも十分なことなのか。

これは絶対に鷹矢を連れて来いと言う【決闘祭実行委員】のスタッ

フ全員の、怒りそのものなのだろう。ありえない失格でも、面倒をかけるようなら『そうしたい』という感情の篭った脅しともとれる。

「さっさと脱げ！早く着替えろ！」
「…なぁ遊良、腹が減ったのだが…」
「うるせぇ！そんな場合じゃないんだって！」
「むぅ…」

すでに家の外には、遊良を家まで送り届けて…鷹矢と共に連れて行くために待機しているハイヤーが待っているし、これでもう少し遅れるようなことになれば、外で待っている『黒服の怖い男たち』が家に乗り込んでくることは必至。

焦る遊良を他所にいつまでもマイペースを崩さない鷹矢のジャージを、遊良は無理やり引っぺがしてイースト校の制服を着せて叩き起こした。

まるで、言う事を聞かない反抗期の子供を相手にする親子のような雰囲気でも、それ自体は呆れ返るほどにみっともない光景だというのに、それを恥じることもなく鷹矢はされるがままだ。

デッキとデュエルディスクの入ったカバンも、なぜかしっかり持って帰っていた鷹矢の荷物を、遊良が代わりに持って…まだ眠そうな鷹矢を引き連れて一階へと降りていった。

「すみません！準備できました！」
「…では。会場まで急いでお連れいたします。」
「うむ。」
「うむ、じゃねーだろ！お前もちゃんと謝れ！」
「ぐぬぅ…」

遊良が玄関で待っていた黒服で大柄な男の一人に頭を下げて車に

乗り込もうとしたものの、依然としてふてぶてしい態度を崩さない鷹矢に苛立ちが隠せないのか、鷹矢の頭を掴んで…無理やりにでも下げさせて。

遊良にとっては自分を賭けた戦いだというのに、鷹矢にとってはただ遊良と戦うためだけの祭典。価値観は違えど、面倒事を起こされる身になって欲しいものだと遊良は感じながらも、とりあえず乗り込んだ二人を確認したハイヤーは、会場へ向けて急いで出発し始めた。

―…

すでに満員になっている会場内。約１０万人超を収容できる、決闘市の中で一番大規模な…いや、世界的に見ても巨大なデュエルスタジアム。

―通称、セントラル・スタジアム。

決闘市の中央地区に鎮座する『ソレ』は、基本的に【王者】が行う戦いか、それに次ぐほどのプロ同士のタイトル戦でしか使用されないモノ。それは、すでにプロの世界にいる選手達でも、そうそう立つことは容易ではない。

超巨大モニターがいくつも配置されていて、満員の観客席のどこにいても戦いを見逃すことはないし、中央に一つだけ現れているデュエルスペースには、至るところからライトアップされていて注目を集めている。

「あと1時間かぁ…」

その中で、各決闘学園ごとに区切られたスペースの、イースト校の

定位置に居たルキは待ち遠しい気持ちを我慢できずにそう呟いた。その近くの席にルキの友人や知り合いは居らず、完璧に他人ばかりの中でやや居心地が悪そうな声ではあったが。

…そう、決闘学園の学生といえど、全員がここで【決闘祭】を見られるわけではない。

決闘学園の関係者以外にも多くのお偉い方が会場に来ているし、超高倍率の観戦チケットを手に入れられた一般人も観戦に来ているのだから、成績やら何やらで選ばれなかった学生達の大多数は会場内にすら入ることが許されず、外で中継を見ているしかないのだ。

まぁ、いくら本気でデュエルが出来ない事情があるルキとはいえ、学園での成績は上位クラスであるために観戦を許されていて、幼馴染二人の応援のためにセントラル・スタジアムに来ているのは当然か。

【決闘祭】に選ばれなかったのではない…出場候補に選ばれないようデュエル実技の成績を調整したのだ。それができる彼女の実力自体は相当高いことに違いない。

そんなルキは、前日は遊良たちの集中の邪魔をしないように夕食後は自宅に帰ったために、今日はまだ遊良と鷹矢に会っておらず、次に彼らの姿を見るのはこのスタジアムに威風堂々と入場してきた時。

居心地の悪さなど関係ない。大きな舞台に入って注目される幼馴染達を、心待ちにしながら彼女は待っていた。

―盛り上がる会場と決闘市の裏で…スタッフに盛大に叱られている鷹矢と、それに巻き込まれている遊良のことなど、知るわけもなく…。

―…

「ったく、何で俺まで…」

セントラル・スタジアムに到着早々、鷹矢だけならまだしも何故か自分まで巻き添えで叱られたことに腹を立てながら、遊良は自身の控え室で時間を待っていた。

鷹矢はと言えば、もう目を離さないように数人のスタッフに入り口を見張られているものだから、トイレに行くのも一苦労だと遊良の端末に文句のメッセージを送って来たものの、『いったい誰のせいだ！』と遊良に突っぱねられてからは大人しくなっている様だ。

しかし、幸か不幸か…初めての【決闘祭】と言う事もあって、今朝会場入りした時には緊張で息をするのも苦しかった遊良だったのだが、鷹矢の一件でそれどころではなくなったのか。

鷹矢への立腹で、緊張等はどこへやら。

動悸と緊張で喉を通らなかった弁当も、怒りで空いてきた腹にやっと収まり始めて。

こうなってしまったら食わなければやっていけないのだろう、遊良は怒りを治めるために、思うがままにソレをかっ込んでいた。

「…今日はあの馬鹿飯抜きだ…うわっ、このハンバーグ旨っ…絶対に今日の飯作ってやらねー…このソースが旨いのか…もしあいつ負けやがったら…このソースだったら家でも作れそうだな…絶対許してやらねー…」

食事と怒りと、どちらに気を向けていいのかわからない様子で。
遊良の思考が好き勝手な方向へと向かい始めるものの、それでもこの後に戦いが始まると言う事は忘れていないだろうが。
きっとあの馬鹿も、今頃控え室に用意されている弁当に舌鼓を打っている頃か。どうせ叱られたくらいでは鷹矢の食欲は抑えられない。
それに、こんなに旨い弁当が用意されているのだ、一目散に飛びついてかっ食らっているに違いない。いやあの馬鹿のことだから、今日の晩飯にこのハンバーグよりも旨い奴を出せと言ってくるかもしれないな…と。
そんなことを考えながら、遊良は食べ終わって空になった弁当の残骸をゴミ箱に捨てて椅子に座りなおした。

「ふぅ…やっと落ち着いた。」

そうして残さず食べて腹も満たされたことで機嫌も若干落ち着いたのか、遊良はお茶を飲みながら一息つく。
その緊張感が無くなってしまった雰囲気で、これから臨む戦いに若干の不安が沸き起こってくるものの、多少は肩の力が抜けたことを確かに感じている遊良。

…まぁ鷹矢が、自分の緊張を解そうとしてこんなことをやった…と言うことでは絶対にない事を、彼も理解しているが。鷹矢がそんな心配りを出来る奴なら、そもそもこんな回りくどい迷惑など、絶対にかけないだろうから。

しかし、鷹矢を迎えに行く前まではいつ呼ばれるのかの不安でガチガチに固まっていたのに、今ではいつ呼ばれてもいいくらいに気持ちが出来上がっている表情をして…むしろ早く始まってほしいとさえ思っているような心持ちで、遊良はその時を待つ。

…

「天城選手！これより開会式の入場となります！」
「はい！」

そうして暫くの後に、遊良は自分を呼びに来たスタッフと共に控室を後にした。

―デッキを持って、デュエルディスクを展開して。

もうすでに、戦う準備は出来ている。
緊張はある…しかし、嫌な緊張ではない。彼にとって初めての『大舞台』…彼が子供のころから憧れた【決闘祭】へ。

Ｅｘ適正など関係なかった幼等部でも、Ｅｘ適正が無いと宣告された後も…ずっと、この戦いを毎年見ていたのだから…彼がそこにかける憧れは、決して軽いものではない。

ずっと…ずっと望んでいた場所を、遊良は自らの手で勝ち取った。
後は、例え野次を飛ばされようとも、例え嘲笑されようとも…

―それを黙らせるほどのデュエルを…

気持ちは切れていない。頭の中のスイッチを、戦いに向けて切り替えて。師との約束のため…鷹矢との約束のため…そして自分のために、負けられない戦いに…遊良は望むのだ。

大歓声が聞こえてくるスタジアム内へと繋がる、暗い『入場口』。

東西南北…それぞれの決闘学園毎に分けられているため、他校の学生とは【決闘祭】が始まってからしか顔を見れないが、スタッフに止められた定位置に着いた遊良はそこですでに待っていた鷹矢とヒイ

ラギの顔を見た。

「来たか、遊良。」

「来たか、じゃねーだろ。…何か俺に言う事は？」

「今日の晩飯はハンバーグがいいぞ！弁当のよりも旨いやつだ！」

「…言うと思った。」

案の定、始まる寸前だと言うのにペースを崩す気がない鷹矢。こんな時でも自分の考えに正直なことは、遊良にはもう一周回って清々しくも思えて来るものの、今この場ではそれは不適切だろう。

ここはセントラル・スタジアムであって、自分たちの家ではない。隣に居るのはルキではなく、上級生の紫魔　ヒイラギ。【決闘祭】が始まれば、全員が『敵』となるのだから。

「…緊張感が無い下民ですこと。少し黙って頂いてもよろしくて？」

「む？まぁいいが…少しとはどのくらいだ？」

「…言葉が通じないのかしら…まるで子供と話しているようですわ。」

「…すいません先輩…お前もう入場まで黙ってろ。」

「う、うむ。」

ヒイラギの冷ややかな鋭い視線と、遊良の微かな怒りを感じ取ったのだろう。流石に悪ふざけが過ぎたと思ったのか、鷹矢もその場で口を閉じて始まりを待つ。

スタッフが時計を見て、小声で連絡を細かく取り合っている姿が、より一層遊良の気持ちをはやらせて。

―そして…始まる…

―――――――

場してくる3人の生徒。
決闘市の北地区に構えられたノース校…昨年出場したノース校の生徒は、惜しくも誰もベスト4までに残れなかったものの、おそらく決闘市でも、ある意味で一番『有名』な決闘学園と言える、そのノース校の生徒達が…

―先頭の女生徒を筆頭に、威風堂々と超大歓声の中を歩いてきていた。

―紫魔　サクラ
―紫魔　亜蓮（あれん）
―紫魔　大治郎（だいじろう）

『説明不要！別名、【紫魔学園】とも言われるノース校から選ばれた実力者たち！昨年の屈辱を晴らすために、堂々の入場です！』

【紫魔本家】がソコにあることから、多くの紫魔家が密集している『決闘市北地区』。
そこに通う多くの学生が『紫魔姓』を持つ人間であり、『融合召喚こそ至高』の考えは北地区が最も強いと言える。
その中で代表入りした、選りすぐりの『紫魔姓』の生徒達。
『紫魔家』の代名詞とも呼べる【ＨＥＲＯ】モンスター達を手に、その注目を集めている。
!!!

二人の女生徒と、一人の男子生徒を包み込むような震える空気は、『攻めこそ全て』のサウス校をまさに象徴していると感じられることのようであって。

そのサウス校で文字通り、己の『攻め』の姿勢で代表を勝ち取った選手たちが入ってきた。

―獅子原（ししはら）　エリ
―大門（だいもん）　ミヤコ
―袴田（はかまだ）　光一（こういち）

『昨年、2年生ながら4位入賞を果たした獅子原　エリ選手を筆頭に、全員がシンクロ召喚の使い手です！今年のサウス校は一味違うと見せつけるのか！』

!!!

2人の初出場者は置いておいても、昨年の並み居る代表選手を、女性ながらも全て吹き飛ばして4位入賞を果たした獅子原　エリが戦闘を歩いて。

サウス校理事長、『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコの孫娘という肩書は伊達じゃないのか。プロ関係者の多くが彼女に注目を集め、また歓声の多くが彼女の名を呼んでいた。

『まだまだ行きましょう！決闘学園イースト校！』

―

その後に、東ブロックだけではない…およそスタジアム内全体が大きく揺れ動き、その注目が東入場口に集中する。

好機の視線が多い中、その中には疑いが籠った視線も混ざっていて。しかしその原因は明らかで、何から何まで前例がないイースト校に、注目しないでくれという方が無理な話。

!!!!!!!!!!!!!!

その中で、件の学生たちが入ってきた。

―紫魔　ヒイラギ
―天宮寺　鷹矢
―天城　遊良

『イースト校選手の2名がまだ1年生！【黒翼】のお孫様と、そしてなんと『あの』天城　遊良です！紫魔家の令嬢と共に、昨年の出場選手を全て一新したイースト校はいったいどんな戦いを見せてくれるのでしょうか！』

―『あの』天城　遊良…その内容は、決闘市でも知らない人間が居ない程に有名な話。

なぜ『Ｅｘ適正が無い』このデュエリストが、【決闘祭】に出場できたのか。

皆それが疑問なのだろうか。しかし、そんな歓声に混ざった疑いの目をものともせず、遊良は歩みを止めない。自分を否定した輩に、己が戦いを見せつけるために。

―自分の存在を、否定させないために。

…

そしてイースト校の面々が定位置に着いたところで、一瞬だけだが歓声が収まった。

…それは、これから入ってくる最後の決闘学園の生徒達を迎えるための静まり。

期待と興奮と、これから彼らが沸き起こす最大限の歓声の為の…

『溜め』の時間。

『そして最後は皆さまのお待ちかね！決闘学園ウエスト校！』

――――――

―竜胆（りんどう） 大蛇（おろち）

昨年の【決闘祭】の準優勝者。全てをすり抜け、全てを捻じ伏せる。

まさに『大蛇』。

まぶしい程に光る金髪を見せつけながら、堂々と歩いてくる。

そして…

『この人の説明はいらないでしょう！昨年度【決闘祭】の優勝者！今、堂々の入場です！』

―

さらに遅れて、一人で。

その超大歓声と歓喜の目を一人で集めて最後に入ってくる生徒。

短く切りそろえられた黒髪は、彼の持つ…揺るがず、『鋼』の如き体と…動じず、『鉄』の如き不屈の精神を現しているかの様。

誰が呼んだか…いつの間にかそう呼ばれるようになった『鋼鉄』のデュエリスト。

―十文字（じゅうもんじ） 哲（てつ）

前回の【決闘祭】優勝者。

現在、もっともプロに近い男が…

有り余る力を発散させに、ここに参上した。

―…

「なんや、泉くんは居らへんのかいな？」

ウエスト校3年、竜胆　大蛇は定位置に着くや否や、隣に立っているイースト校の選手達に向かってそう言ってきた。

語り継がれる昨年の【決闘祭】…並み居る3年生たちを押しのけて、ベスト4に入った学生が全員2年生だったというのは、長い【決闘祭】の中でも一種の伝説。

その中でも、昨年3位入賞した泉　蒼人と、昨年準優勝した竜胆大蛇の準決勝でのデュエル。

…一進一退で、戦況が常に入れ替わってどっちが勝ってもおかしくないという、見ていた観客も大いに盛り上がる…それはそれは盛大で、かつ見ている全員が楽しめたデュエルとなっていた。

それを覚えているのだろう。再び邂逅を望んでいた蒼人が居ないということが大蛇の耳に入り、思わず口を開いた様子。

そして、全く聞く耳を持たないヒイラギと、よく聞こえなかった遊良を他所に…それに返答したのは、鷹矢だった。

「うむ。遊良に負けて代表を落ちた。」

「ホンマか!?うわー、泉くんとまた戦りたかったちゅーのに！何てことしてくれてんのや天城こらぁ！」

「…兄さん、彼に迷惑よ。謝って。」

「せやな、すまんすまん。」

「…はぁ。」

静かな妹に窘められて、すぐに謝る大蛇に思わず返答に困る遊良。
きっと、思ったことがすぐ口にでる性質なのだろう。
ひょうきんな言葉使いがより一層その印象を強くするものの、まったく緊張をしていないのが見て取れる当たりは流石昨年の準優勝者か。
この雰囲気の中、それと同レベルの軽口で応えられる鷹矢も鷹矢なのだが、それを咎めることは今の遊良には出来ない。何せ会場に入ってからの重圧は段違いで、覚悟を決めていたのに一気に体が重くなっているのだから。

「黙れ大蛇。」

その中で、重々しくも低い声で大蛇を咎めた十文字　哲。このセントラル・スタジアム内の重くなった空気よりも、彼の雰囲気から出た言葉はさらに重い。
その言葉を聞いただけで、並みの学生なら足が震えてしまいそうなくらいのプレッシャーを放つものの、それに慣れているのか…大蛇はその言葉を食らったにもかかわらず、先ほどと変わらぬ様子で返答した。

「へいへーい。ホンマてっちゃんは融通利かへんなぁ。自分やって泉くんや虹村くんと戦いたがっとった癖に。」
「…兄さん？」
「おお怖ぁ。ミズチちゃんも怒らんといてーな。兄ちゃんビビッてまうわ、堪忍堪忍。」

口元に浮かべた笑いを崩さず。
遊良にしてみれば、この空気を読まずに周りに叱られる姿はどこぞの馬鹿と重なってしまうのか。どこの場所にもこんな奴がいるのかと思うと、年上とは言え竜胆　ミズチと十文字　哲に親近感が沸いてくるのは仕方ないだろう。

「何なのだあの馬鹿は、まるで緊張感が無い。なぁ遊良？」
「…お前が言うな、大馬鹿野郎。」
「む!?」

にもかかわらず、自分に同意を求めてくる鷹矢には、遊良とて呆れかえるしか表現方法がない。
大同小異、五十歩百歩という言葉を知らないのだろうか…いや、知らないだろうと感じてしまうのも呆れるしかない、と。そんなことを考えながらも、再び前へと向かい合う遊良。
もういい加減、誰も遊んでいる場合ではないのだから。そうして少しの後に、代表全員の入場が済んだ音楽が止んだところでアナウンスが再び鳴った。

『代表選手たちが入場し終わりました。…続いては、この方たちのご入場です！』

…そして、アナウンスがそう言い終わった瞬間に、歓声に包まれている会場の雰囲気が瞬間的に静まった。

―それは、意図して行ったものではない。

誰も、声を出せないのだ。その人物たちが入ってくる入場口から感じる『ソレ』は、言葉で形容しようにも言い表すことなど出来ない重圧。
精々、戦いの場に集まっても2つ。それも、別々の場所から現れるモノだと言うのに。

それが…普通なら交じり合うことのない、大きな3つの『ソレ』が…並んで1つの入り口から入ってくるのだ。

実物の姿を見れば、その重圧もきっとそれ以上の興奮となって立ち上がるであろう観客ではあるが…その姿を目の当たりにするまでの、重圧だけを感じているこの空気では、けっして声を出せるはずなどないのだから。

…そして

―

―まるで、災害の轟音。

いや、それと間違えるような爆音が奏でられながら、『その人物達』の姿と共にここセントラル・スタジアムが揺れ動いた。

それを直に感じている人からしたら、ビリビリと震える空気の音すら、耳に確かな物として感じられて、脳が直接揺れ動いているかのように忍ず痒くなってくることに違いない。

…誰も、そんな感覚など気にも留めないが。

『前代未聞！奇跡の邂逅！今年の【決闘祭】の為に、【黒翼】、【紫魔】、【白竜】の…まさかの３人の王者が揃い踏みです！』

渇いた笑いを浮かべながら…静かに微笑みながら…楽し気な笑みを零しながら…

入ってくる『王者』達。それぞれが、それぞれの召喚法の…全世界にいるプロデュエリスト達の頂点に立つ者達。

その全てが決闘市に拠点を置くという世界の謎と共に、しかし奇跡的なタイミングと偶然の一致で、全員が【決闘祭】の観覧に来るという『大事件』。

用意されたステージに立ってマイクを手に、戦いに臨む学生達へと呼びかける。

『おっす、俺っちだぜ！みんな頑張ってちょ！俺っちの記録抜けるように頑張ってね！』

―【白竜】、新堂　琥珀

言葉は軽いが、彼の残した【決闘祭】における天才的な偉業…ノーダメージによる『決闘祭２連覇』は、決して抜けるような記録ではない。簡単そうにそう言う彼の凄さを、ここに居る誰もが知っていた。

『…私は皆さまと一緒に【決闘祭】に出ることは叶いませんでしたが、素敵な戦いを見せてくださることを期待しています。』

―【紫魔】、紫魔　恋介

『紫魔本家』の長として８歳から【紫魔】を背負った彼は、現在１８歳という高等部３年生に相当する年なれど、王者として…巨大な『紫魔家』を治める者として、戦いに臨む者達へと声をかけるのみ。

『…特に、一部の方々には…。』

…その。『飲み込まれるような恐怖』で、昨年の【決闘祭】…不甲斐ない結果しか出せなかったノース校に、震えが走る。

『まぁあれだ…あーっと…何だ…まぁ頑張れよ。』

―【黒翼】、天宮寺　鷹峰

およそエールなど送るような人間ではない。それは、彼のプロとしての戦いを見たことがある、どの年代の誰もが知っていた。

そんな彼が、不器用な形とは言え学生達に『頑張れ』というのが信じられなかったのか、にわかにざわつくスタジアムで…

『カッカッカ。退屈させんじゃねーぞクソガキ共。』

その空気を一掃するように…渇いた笑いが響いた。

―…

【決闘世界】作詞作曲の、『捻じ伏せろ』とか『撃ち砕け』という歌詞が印象的な、決闘学園の校歌斉唱を終えて…各々の控え室へと戻る遊良達。

今頃、巨大モニターや中継映像ではトーナメントが発表されている頃だろうか。選手たちだって、もちろんそれを見ることが出来るものの、遊良はそれを見ることなくただ待っていた。

ガチガチに固まっているのではない。戦いが待ち遠しくて、気持ちがはやっているのだ。

先ほど師が言った、『退屈させんじゃねーぞ』という言葉。アレは、

何も知らない人間からしたら…遥か高みにいる王者には、この戦いも退屈な物が多いという事にも取られる台詞。

しかし、遊良と…ひいては鷹矢にとっては毛色が違う言葉。

―確かに理解できるソレは、『成長の証を見せろ』という、師からの喝。

後は、師に恥ずかしくない戦いを見せる時を。

…彼は、待っていた。

『天城選手。一回戦第一試合、お時間です。』

そして、すぐに控え室に備え付けられているスピーカーで、試合の順番を告げられる遊良。

学校選抜戦の時も、今回も。

なぜか一回戦の第一試合だということに苦笑いしか出てこない彼だが、記念すべき初めての【決闘祭】で、一番初めに試合をすることが嬉しいことでもあるのか。

何せ、イースト校の学生や教員はまだしも、未だ疑いの目を向けてくる決闘市の人間に自分の戦いを真っ先に見せつけられるのだから。

遊良は意気揚々と、控え室を後にした。

…

「…うむ、まずは遊良からか。」

「あぁ。」

スタジアムに繋がる連絡通路、その入り口ギリギリで。控え室から抜け出して、自らの目で戦いを見に来た鷹矢の姿。

別に、会場内にさえ居ればどこでもスタッフが見回っているし、選手が出て行けばすぐに分かるため、家にさえ帰らなければ問題ないのだろう。

その証拠に、向かい側の通路やその他の入り口にも、他の決闘学園の選手たちがチラホラ見に来ているのだから。

「緊張しすぎてつまらんミスするなよ？」
「何言ってんだよ、お前じゃないんだから。」
「何だと？遊良の癖に。」
「うるせーよ、鷹矢の癖に。」

こういう時でも、いつもと変わらぬ彼らの空気。これから始まる戦いに、確かに遊良には緊張があるものの、初めての大きな舞台に舞い上がってはいない。

自分の戦いを、存在を…見せつけるために。

「蹴散らしてこい。」
「おう！」

拳を合わせ、その歩みを進める。

―暗い通路から、輝くスタジアムへと。

―!!!

ンスが実況と共にスピーカーから放たれた。

『さぁ、いよいよ始まります！【決闘祭】第一試合！サウス校３年、袴田　光一選手ＶＳ、イースト校１年、天城　遊良選手！『シンクロ使い』対、まさかの『Ｅｘ適正無し』！一体この【決闘祭】で、我々にどんな戦いを見せてくれるのでしょうか！』

堂々と立つ遊良のことを誰もが見ているものの、観客の視線の中身は…『Ｅｘ適正が無い』という、デュエリストの出来損ないへと向けた好奇の視線という意味合いがやはり強い。

しかし戦いが始まってしまえば、彼にはそんなこと関係ないだろう。

誰も『見ようとしなかった』少年の戦いを、今は決闘市の人間の誰もが『見ている』。

その雰囲気の中で、遊良は構えた。

「よ、よっしゃあ！やっぱ俺の運は世界一だぜ！一回戦の相手がまさか『あの』天城だとはなぁ！」

「…よろしくお願いします。」

「バハハッ！か、かるーく片づけさせて貰うぜ！」

お互いに構えたデュエルディスクは、それぞれを対戦相手として認識していた。いくつも設置された超巨大モニターには、彼らの実際の戦いの隅に、小さくデュエルシミュレーターの映像が映されていて、デュエルを見逃すことは無い。

これで、開戦の準備は整った。

固唾を飲んで合図を待つルキの姿など、スタジアムに立つ遊良には

見えないものの…それでもどこかで見ていてくれていることを、遊良も確かに感じながら。

―師が、幼馴染達が見ていてくれることに、誇りを持って。

そして…始まる。

『それではっ！【決闘祭】第一回戦、第一試合！かいしぃぃー！』

―デュエル！

「俺の先攻だぜ！チューナーモンスター、【ライトロードアサシン・ライデン】を召喚！」

【ライトロード・アサシン　ライデン】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１０００

サウス校３年、袴田　光一の場に現れたのは、光の次元に住み、悪の勢力と戦い続けているライトロードの一体。

デッキから直接カードを墓地へ送ることが出来る効果を持つライトロードモンスターは、高速で墓地を肥やすことも容易であるし、多種多様な効果を持っているカテゴリーである。

その人気と強さ、更には柔軟な出張性ゆえに、それなりに使い手は多く居るものの、それを使いこなすためには実力以外に…確かな『運』が必要になってくるデッキ。

それを理解してなお、この【決闘祭】で代表に選ばれるくらいなの

だから、自信満々に使ってくる態度からは余程自分の力に自信があるのだろう。袴田　光一はさらに動き出した。

「ライデンの効果発動！デッキから2枚のカードを墓地へ送る！」

―墓地へ送られたカード…【ライトロード・ビースト　ウォルフ】、【ライトロード・メイデン　ミネルバ】

「うぉっしゃあ！やっぱツイてるぅ！ライデンの攻撃力は２００アップ！さらにウォルフを墓地から特殊召喚し、ミネルバの効果でさらにデッキから一枚墓地へ送る！」

【ライトロード・ビースト　ウォルフ】レベル４
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／　３００

―墓地へ送られたカード…【ライトロード・ハンター　ライコウ】

そうして、場にシンクロ召喚の素材を早くも揃えた袴田　光一。確かに、ここまで墓地へ送くられたカードの中には重要な魔法カードなどは無く、無駄がない。

『運がいい』とか、『ツイてる』とか、自分で豪語する辺りは流石か。しかし、何やら言葉が上ずっていることは見ていても明らかで、少々浮足立っているようにも見える。

それでも、彼はさらに動き出そうとしているが。

「光属性レベル４のウォルフに、レベル４のライデンをチューニング！シンクロ召喚！レベル８、【ライトエンド・ドラゴン】！」

【ライトエンド・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２１００

「まだらぁ！墓地に【ライトロード】モンスターが４ひゅ…種類以上いる場合、手札からコイツを特殊召喚出来る！来い、俺の切り札…【裁き（ジャッジメント・ドラグーン）の龍】！」

―！

【裁き（ジャッジメント・ドラグーン）の龍】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２６００

天から舞い降りてくるのは、裁きを下すことの出来る力を持った一体の龍。その力は、ＬＰという命を消費して発動され、この場に居る全てのモノを消し去ってしまう力を発揮出来るほど。
有り余るステータスも相まって、対戦相手である遊良に向かって猛々しく吠えた。

「俺はカードを一枚伏せて、エンドフェイズ時に【裁きの龍】の効果でデッキから４枚のカードを墓地へ送る！」

―墓地へ送られたカード…【光の援軍】、【ソーラー・エクスチェンジ】、【ライトロード・アーチャー　フェリス】、【ライトロード・アサシン　ライデン】

「またまた来たぁ！【ライトロード・アーチャー　フェリス】を墓地からひゅ…守備表示で特殊召喚！これでターンエンドだぜ！」

袴田　光一　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：【裁きの龍】
【ライトエンド・ドラゴン】
【ライトロード・アーチャー　フェリス】
伏せ：１枚

開始1ターン目から登場した2体の大型モンスターによって、会場の熱が一気に上がっていく。まぁ、それもそうだろう、華々しい決闘祭の第一回戦・第一試合…要は決闘祭が始まっての最初の試合だ。

観客も派手なデュエルを期待し、またこのサウス校3年の袴田　光一も、初めて出場できた決闘祭の空気を直に感じて、緊張の中で興奮している様子。

袴田　光一の目に遊良は映らず。自分の召喚した2体のドラゴンに見惚れているのだから。

（…よし、行くか！）

そしてターンが遊良に移り、いよいよ始まったデュエルに心躍らせる遊良。

この大いに盛り上がる歓声の中で、向けられている声援がどちらに向けられているのかを聞き取ることは難しいだろう。

しかし、自分の名前が含まれているかどうかなど分かりはしないし、そんなことは彼にはどうでもよかった。

相手が光の軍団で来ているなら、こちらは闇の勢力。正義に刃向かう堕天の者達を、今にも飛び出させてやりたい…と。

きっと、緊張しているのは遊良も同じ。とはいえ、それは嫌な緊張ではなく、開始前に師の姿を見れたおかげか…はたまた鷹矢の遅刻事件のせいか。

―派手なデュエルが見たいなら、見せてやろうじゃないか。

決闘市中に、その力を見せつけるために…

「俺のターン、ドロー！」

―遊良は動き出す。

「手札の、【堕天使イシュタム】の効果発動！【堕天使の戒壇】と共に捨てて２枚ドロー！魔法発動、【トレード・イン】！レベル８の【堕天使スペルビア】を捨てて２枚ドロー！もう一枚の【トレード・イン】発動！レベル８の【堕天使ゼラート】を捨てて２枚ドロー！【闇の誘惑】を発動し、２枚ドローして【堕天使ココバック】を除外する！もう一枚の【闇の誘惑】を発動！２枚ドローし、【堕天使マスティマ】を除外！」

…引く、引く、引く。

まるで荒れ狂うようにドローを加速していく遊良。止まることのない暴風雨のようにデッキからカードが引かれて行き、その手札が一枚も減っていない。さらに言えば、初期手札を含めてすでにデッキの１／３近くをドローしていることになるこのプレイング。

…一言でいえば、異常。

遊良が使ったドローソースは…そのどれもがカードを引くにあたり、制限やリスクがあるカード。

しかし、まるで当たり前のようにそれを扱い、そして引く。

普通に考えれば、ドロー多用はデッキからキーカードを引き寄せるための手段で、特殊勝利やたった一つの勝ち筋に特化したデッキもあ

れど、遊良のデッキがそう言った物でないことは確か。

…引く、引く、引く。

みるみるうちに手札が交換されていき、デッキ圧縮と同時に墓地も増えていく。

それを今、目の前でそれを見せられている相手からしたら…いや、観客の多くも、まるで終わることのない遊良のデッキ回しを、到底信じられないかの様子で。

なにせ…『あの』天城　遊良なのだ…あの、『Ｅｘ適正が無い』出来損ないの癖にデュエルをしていると言うことで有名な…『あの』天城遊良が…

―こんなデュエルをするなんて。

どうせ大したことも出来ずに、ろくにデッキも回せないで終わるのだろうと、そんなことまで考えていた観客だっているはず。

しかし、普通に考えれば【決闘祭】に選ばれるほどのデュエリストが、その程度なはず無いと言うのに。

その中には、現在遊良の行っていることを理解していない者もいるだろう…ただの、並みのデュエリストにはこの凄さはわからない。しかし、これに脅威を感じられないようでは、戦う資格も…遊良を馬鹿にする資格すらない。

「お、お前、一体何枚ドローする気なんだよっ!?」

先ほどまでの興奮が消え失せて、一回戦の相手が『Ｅｘ適正の無い』

あの天城　遊良だと知った時からの心の気軽さが嘘のように…信じられない様子の袴田　光一。

それを知ったところでもう遅い。すでに、デュエルは始まってしまっていて、彼は自分のターンを終了してしまっているのだから。

「手札の【堕天使アムドゥシアス】の効果！手札の【背徳の堕天使】と共に捨てて、墓地の【堕天使の戒壇】を手札に戻す！」

そして、やっとドローが止まったものの、手札を入れ替えた遊良の表情は満足そう。

何故ならこれで、遊良の準備は整った。あとは蹴散らすのみ。鷹矢が言ったように、自分と鷹矢の戦いの障害を…蹴散らすために…

―堕天使が進撃を始める。

「魔法カード、【死者蘇生】を発動！【堕天使スペルビア】を攻撃表示で蘇生する！」

―！

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

遊良のデュエルでの大きなキーカードの一つ。墓地からの特殊召喚時にさらなる堕天使を蘇らせる力は、どのデュエルでも大いに発揮されている、遊良の進撃にとって開始の一体。

「そしてスペルビアの効果発動！墓地から【堕天使イシュタム】も続けて蘇生する！」

「ッ!?さ、させるかよ！罠発動！【ブレイクスルー・スキル】！【堕天使スペルビア】の効果を無効に！」

それを理解してか、即座に伏せていた罠を発動する袴田　光一。

いくら舞い上がっていた袴田　光一と言えども、易々と効果を使わせてはくれない辺りは流石代表にまでなったデュエリストか。いつもなら遊良の場には、ここでさらなる堕天使が呼び出されるものの、これでは精々敵の場の【ライトロード・アーチャー　フェリス】を破壊してお終いとなるだろう。

しかし遊良の表情は、進撃の一歩目を止められても変わらない。

…もう準備は整っている。たかが一歩目を止められたくらいで、今の遊良は止まらないのだから。

「だったらこれだ！魔法発動、【堕天使の戒壇】！墓地から【堕天使イシュタム】を守備表示で特殊召喚！」

―！

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

漆黒に染まる魅惑の羽で、淫靡ながらも優雅に舞い降りてくる一体の堕天使。盛り上がる会場の熱をさらに上げて、けれどもそれを意に介さずに彼女は佇む。

それを見て、対戦相手である袴田　光一は焦った様子を見せた。そう、彼にもプライドがあると言うのに、せっかく墓地からの更なる展開を止めても、まるで邪魔にもなっていないではないか、と。

「そ、蘇生カードが２枚!?くそっ、けどまだまだ俺の【裁きの龍】と【ライトエンド・ドラゴン】には…」

「【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払って、墓地の【堕

天使の戒壇】の効果を得る！【堕天使ゼラート】を墓地から守備表示で特殊召喚し、その後【堕天使の戒壇】はデッキへ戻る！」

【堕天使ゼラート】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２３００

遊良　ＬＰ：４０００→３０００

「魔法カード、【堕天使の追放】を発動！デッキから２体目の【堕天使ユコバック】を手札に！そして【堕天使ゼラート】のモンスター効果発動！今手札に加えた【堕天使ユコバック】を墓地へ送り…相手モンスターを、すべて破壊する！」
「ぬぁあんだとぉ!?」
「やれ、ゼラート！」

―！

遊良の宣言と共に、守りを固めていた赤き装束纏う堕天使が掲げた、その剣の一振りによって相手の軍勢に大きな落雷が轟いた。

とある落雷を模した古の魔法カードと同じ効果を持つそれは、後には何も残さない程の威力を持つ故に、後には自分すらも力尽きてしまう諸刃の剣。

しかし、同じく裁きの雷を降らせて敵を消し去るという、この【裁きの龍】すらも呑み込まれていく光景は何という皮肉か。
次のターンに殲滅を行おうとしていた袴田　光一の目の前で、落雷で砕けていくドラゴン達は為す術無く消えていくのみ。

「お…俺の切り札が…くそっ、次のターンには…」
「いや、まだだ！これで終わりにする！」

「あ!?だってお前の場で攻撃できるのは【堕天使スペルビア】しか…」
「まだ俺は通常召喚を行っていない！行くぞ！」
「ぬな!?」

そうして、遊良の宣言で突如その身に渦を纏って天に浮く堕天使達。

その光景に、会場の歓声に交じって微かにざわめきが起こるものの、それは誰もが知っているモノであって…今目の当たりにしているアドバンス召喚の為のエフェクト。

そう、ここまで展開しても残る通常召喚の権利で行われる『ソレ』…およそ、それを使う者はほとんど居ないのではないかという召喚を…

…今、ここで。

「俺はゼラートとイシュタムをリリース！レベル８、【堕天使アスモディウス】をアドバンス召喚！」

―！

そうして、スタジアムのライトアップを遮るかのように現れたのは、堕天使の中でも最上位の力を持つ者。

その力ゆえにデッキ・墓地からの特殊召喚を禁じられているものの、一度現れればその力尽きるときに２体の従僕を残すことが出来る高位の存在。

黒き後光を降らせて、ここに降臨した。

【堕天使アスモディウス】レベル８

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

「ばばば馬鹿な…お、俺の『運』が…ツキが…ラッキーが…」

がたがたと震え始め、ブツブツと何やら言い始めている袴田　光一。

よほど自分の運に自信があったのだろうか。緊張の面持ちで浮足立っていても、デッキが応えていたのは確かだが…しかしそれでも使い手が舞い上がっていては意味がないだろう。

―ここは【決闘祭】

ここに出られる『実力』と『運』は相当な物、しかし『心』が弱くては戦うに相応しくないのだから。

「俺の【決闘祭】がぁー！」

「バトル！【堕天使スペルビア】と【堕天使アスモディウス】で、ダイレクトアタック！」

―!!

「ぐぉあー！」

袴田　光一　ＬＰ：４０００→０（―１９００）

迫りくる２体の堕天使の攻撃に、へたり込んで尻もちまでついてしまっている袴田　光一。

およそ信じられなかったのだろう。【決闘祭】にまで選ばれた自身の『運』が、まさか『Ｅｘ適正が無い』出来損ないの、あの天城　遊良に敗北するなんて。

ＬＰの表示が一瞬でＭＡＸの４０００から減っていき、０になった瞬間に無機質な機械音が鳴り響いた。

―ピー…

『決まったぁぁぁぁ！勝ったのはまさかの！イースト校１年、天城遊良選手！』

―

耳を劈く大歓声と、地響きが一層大きくなって。

―記念すべき、【決闘祭】の開幕最初の試合。

それに勝利を飾ったのが、まさか【決闘祭】初出場の１年生だったことも…それが『Ｅｘ適正が無い』天城　遊良だと言う事も相まって、それはそれは大きな反響となりセントラル・スタジアムを…ひいては決闘市を包んでいる。

そのほとんどが、天城　遊良が行ったデュエルに対する驚愕と、信じられないものを見たかの如き興奮で。

―強き者を、決闘市は望む。

その中で、デュエルディスクが響かせた機械音は、確かに遊良の勝利を告げていた。

「ありがとうございました。」

「…俺のツキが…俺の【決闘祭】が…」

終わってみれば、遊良のワンショットキル。

まさか自分が一回戦で負けてしまうことなど考えていなかったの

か、トボトボと重い足取りで戻っていく袴田　光一の背中は小さく、しかしそれを意に介さずに遊良もその場を後にする。

これはデュエル。勝った方が強い、それだけの事。遊良には、負けた相手を気にしている暇もなければ、負けている暇もないのだから。

そして、遊良は勝った。

それは紛れもない事実。意気揚々と、大いに盛り上がる会場を背にして…入退場口で見ていた鷹矢の元へと戻り、ハイタッチを交わして控え室に戻っていった。

――…

「…なぁなぁエリちゃん。君んとこのアレ…一体何なん？えっらい舞い上がっとったけど。」

「…聞かないで頂戴…アレでも、選抜戦は本当に凄かったんだから。」

違う通路から見ていた、ウエスト校3年の竜胆　大蛇と、今負けた袴田　光一と同じサウス校3年の獅子原　エリは、溜息と呆れを隠さずにそう言った。

そう、確かに…サウス校で執り行われた代表選抜戦での袴田　光一の結果は、目を見張るような輝かしい結果だったのだ。

並み居るサウス校の強豪相手をなぎ倒す『力』と、勝ち残れる『運』…その両方を兼ね備えていた彼に唯一勝てたのは、昨年4位の獅子原エリだけだったと言うのに。

あそこまで無様に負けてしまうことは、見ていたサウス校の生徒達の怒りを買うこと間違いないだろう。

「何で先攻でいきなり切り札出してまうん？アレ、後攻に強いカードやのに、先攻で出しても的になるだけやんけ。」

「…緊張してたんだと思うけど…選抜戦だともっとまともなプレーをしていたもの。」

「せやかてアレはないわー。緊張し過ぎにも程があるで。」

「彼…入場の時点でガチガチだったの。それなのに王者が3人も見ているものだから…」

「…これやからお上りさんは。ホンマ可哀そうな奴やで。王者なんかいずれ俺らが倒すモンやっちゅうのに。」

「初めての【決闘祭】だったのよ。そう言わないであげて。」

「へいへい、エリちゃんにそう言われると叶わんわー。」

負けた袴田　光一に、何の情も無く…そう言ってエリに手を振り、その場を後にする大蛇。

誰も、負けた者など気にはしない。興味があるのは、勝ちあがってきた人間のみ。それは観客も、選手もだ。

ひょうきんな言葉からは思いもよらない、金髪から覗かせた鋭い視線を通路に刺して、彼の目は違う者を思い浮かべていた。

「おもろいやっちゃ。泉くん倒したちゅーのは信じられへんけど、どうせならあの天城っちゅーのとも戦りたいもんやな。」

「…兄さん、浮かれすぎないで。」

「へいへい、ミズチちゃんも試合頑張ってーな。」

その後ろにいつの間にか居た、妹の竜胆　ミズチと話しながら、彼らもまた通路の奥へと消えていった。

―…

「…俺の【決闘祭】が…俺の…運が…」

俯いて、ブツブツと呟くしかない袴田　光一。

サウス校でも、1・2年時には芽は出ず…しかし、地道な努力とたぐいまれなる運で、3年生になってやっと芽が出た彼。

まさかその初めての決闘祭で、憧れた王者が3人も観戦しに来て、一回戦の相手が1年生で、かつ『Ｅｘ適正の無い』天城　遊良だったという、袴田　光一本人にとってはこれ以上ない位に整えられた舞台だったと言うのに。

「…くそっ…くそっ…」

緊張で声が震え、思考も上手く回らなかった。

結果が出た今では、こんなこと言い訳にもなりはしないのだけれど…味わったことのない注目と観客の盛り上がりに、調子に乗って大型モンスターをただ棒立ちにした事は、褒められたことでないことは確か。

たまたま買って、たまたま当たった宝くじで得た、それなりの大金をはたいてこの日の為に新調したデッキも、早々に無駄に終わってしまった。それに対して悔しい事この上ないだろう。

「うっ…うぅ…」

だらしなく涙が零れてしまうのは仕方ない。それほど、彼だってこの【決闘祭】を心待ちにしていたのだから。それが、こんなに早く終わってしまっては。

予定では、サクッと1年生に勝って、悠々自適に他の試合を見ているはずだったと言うのに、と。

「…帰ろう。もういいや。」

最早投げやりになった気持ちの彼を、引き留める者は誰も居らず。同じ決闘学園の選手でも、いつ当たるかわからない敵にかける言葉は無いのだから。

勝った選手はもちろん帰ることなど出来ないが、1、2回戦で負けた選手には表彰台も無いことから自由にしていいのだろう。

別に他の試合を観覧していても問題はないものの、傷心の袴田　光一にそんなことが出来るはずもなく。彼は通路をひたすら出口へと向かって歩いていた…

…その時だった。

「…もウいい…ですカ。」

「うわっ!?だ、誰だ!?」

降って沸いた声に、涙を拭いながら視線をやる袴田　光一。

しかし、確かに交差路になっているこの通路の合流口に彼以外の姿はなく、見えない声にただ途方に暮れるだけ。

その中で、声の主も分からぬまま立ち尽くしている彼に向って、声は言う。

「ど、どこから声が…」

「もウいいのなラ…そノ体…頂きまス。」

「は?な、何言って…うっ!うわぁ!?」

―!

そう告げられた瞬間、突如彼の足元から沸き上がる黒い靄。
払っても払っても纏わりついてくる抵抗のないソレに対して、不快感しか覚えず。それでもソレはどんどん昇ってきては包まれて、袴田光一の視界が遮られて真っ暗になってしまう。

怖い。

ただ沸き上がる感情はそれだけ。わけもわからずに暴れるだけの彼の心はパニックになっているのだろう。騒ぐことしかできない声で、大きく叫ぶ。

「うわぁ！い、嫌だ！やめろぉー！」
「ど、どうしたんですか!?」
「ひゃあー！あっ…あれ？」

そんな折、不意に投げかけられたスタッフのモノらしき声で急に彼は正気に引き戻された。気が付けば視界は開けていて、昇ってきていた不快感も消えている。

心臓がバクバクと鳴ってはいるものの、先ほどまでの恐怖はどうやら一気に去っていったようだ。

「何かあったんですか？」
「あ…あの、今…あ、あれ？な、何があったんだっけ？」
「いや知りませんよ。あなたが騒いでいるのが聞こえたから駆け付けたんですから。」
「は、はい…すみません。」
「…どうします？誰か呼びますか？」
「いえ…大丈夫…です。」

目の前で不思議そうに見ているスタッフの顔も分かるし、自分が先ほど負けてしまったことも理解できている。それはとても悔しい事なのも分かっているのだが、不思議なことにたった今何が起こっていたのかを『忘れて』しまっている様子の袴田　光一。

スタッフも、今の試合で負けたショックで気でも狂ったのかと思ったのか、やや心配そうに尋ねて来るものの、選手自身が大丈夫と言うならそれでいいのか。

持ち場に戻るためにその場を後にしていった。

「…あれ…俺何してたんだっけ…あぁ、そうだ、帰ろうとしてたんだよ俺。…はぁ…何かもうどうでもいいや。」

先ほどまでと同じようにトボトボと歩いていく袴田　光一の足取りは重く、そのまま長い会場通路を抜けて、スタッフに許可をもらって外へと通される。

近くにいたタクシーに乗り込んで、そのままセントラル・スタジアムを後にしていった。

「お嬢様…まずハ、一人。」

『ご苦労様サキョウ。引き続きお願いいたしますわ。』

「はイ…お嬢様。」

―大いに盛り上がる【決闘祭】の裏で、暗躍している者達には誰も気づくことが無く。

―戦いは、続く。

―…

ｅｐ２４「鯨の咆哮」

「…バトル、【捕食植物キメラフレシア】で、【Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター】に攻撃。」
「馬鹿が！そんな雑魚で火紫魔の俺に勝とうなんて…」
「…効果発動…この時、ノヴァマスターの攻撃力を１０００下げ、キメラフレシアの攻撃力を１０００アップする。」
「はぁ!?」

―！

「おわぁー！」

紫魔　大治郎　ＬＰ…９００→０

―ピー…

激闘が繰り広げられる決闘祭。
先ほど遊良の試合が終わり、続く第二試合もウエスト校３年の…前年度準優勝者である竜胆　大蛇が、ノース校の生徒相手に全く危なげなく勝利を収めていた。

『第一回戦、第三試合！これにて決着ぅー！ノース校の３年生を破ったのはぁ！ウエスト校２年、竜胆　ミズチ選手だぁー！』

そして今…第一回戦・第三試合で、融合使いの名家として名高い家の学生…ノース校から選りすぐられた３年生を、まるで払い落とすかのように、ウエスト校２年の竜胆　ミズチが勝利を収めたようだ。
まだ２年生と言えど、昨年の準優勝者の妹としてその実力は折り紙

付きであり、さらには『竜胆』という家系…その『名』が相まって、一層その姿を麗しく見せている。
しかし、負けたことが相当癪に障ったのだろうか、ミズチに敗北を喫した紫魔　大治郎は、憤慨を露わにして言い放った。
「お、お前ぇ！紫魔でも無い癖にぃ！なに堂々と融合なんか使ってやがる！」
「…融合は、紫魔だけの物じゃないのよ。」
「ぐぅ…く、くっそおぉ！」
儚くも冷ややかな視線を崩さずに、手にした勝利と共に盛り上がる会場を淡々と後にするミズチ。
ノース校の生徒たちがいる北ブロックの観客席から、何やら野次らしきものが飛んできていたような気がするものの、彼女にとってはそんなことどうでもいいのだろう。たった今降した選手…融合召喚の名家といって尊大な態度を取っていた男の事など、眼中にも入れずに…
負かした相手を一瞥もせずに歩み始めるのみ。
「おっつかれさーん！ミズチちゃんも強ぉなったなぁ、兄ちゃんも安心して見れたでぇ。」
「…兄さん。声が大きい。」
そして、入退場口に入ったところで会場の声援よりも耳に響く彼女の兄…竜胆　大蛇の労いの声を聞き流しながら、ミズチは気だるげな声で即座に返答した。
すでに試合を終えている大蛇も、昨年すでに【決闘祭】を経験しているからか、その気持ちは全く気負いしていない様子…昨年もこんな調子だったことを知るのは、昨年も出場出来た選手だけだが。

彼はいつものらりくらりと、怒りをぶつけられてもすり抜けるようにするだけ。

「そない怒らんといてやー。せっかく兄妹揃って一回戦勝てたんやさかい、もっと兄ちゃんも褒めたってくれや。」
「…勝って当然。」
「おう、兄ちゃん強いでー。ミズチちゃんももっと頑張らんと。」
「…でも、次の私の相手は哲さん…。」
「あー…せやなー。ミズチちゃんお疲れさーん。」
「…兄さんのそういう所嫌い。」
「なんやて!?兄ちゃんショック!」

どこまでも本気ではない大蛇の言葉に、一々イライラなどしないミズチではあったが、それでも軽すぎる兄にどこか参っているようでもあった。
そうは言っても、ミズチとて哲の強さは理解している。明日に戦うシード選手は、各決闘学園でも一番強いと言われている者が出てくるのがセオリーなのだ…そうでなくともウエスト校でその力は何度も見ているため、実力を見誤ることはしないが。

「…兄さんはまた紫魔が相手なのね。」
「せやせや。もー去年も散々蹴散らしたちゅーのに、最初も紫魔、次も紫魔…紫魔紫魔紫魔…嫌なるわホンマ!何でノース校の紫魔はどいつもこいつも!ちっとはウエスト校の紫魔を見習わんかい!」

紫魔でなくても、この世界には多くの融合召喚使いがいる。それでも彼らが尊大な態度を崩さないのは、一重に王者【紫魔】の存在が大きいだろう。
そんな中で彼らにいつだって付きまとうのは、融合召喚の名家を謳って…他の融合使いを貶すことの多い他校の紫魔家の人間だ。

『紫魔本家』に近いからかノース校の紫魔はいつの時だって上から目線。

ウエスト校にいる紫魔の人間は、この竜胆兄妹を含む他の融合使いを貶す人間は居らず、ウエスト校のどの紫魔も人付き合いを好むいい学生ばかりだと言うのに。

王者である【紫魔】を誇るのはいいが、ソレをまるで自分の力のように振る舞う様は、彼らにとっても本当にウザったらしいことこの上ないだろう。

「…本当、他校の紫魔は嫌い。…兄さん、次の紫魔の女に負けたら怒るから。」

「わーっとるわい。せやから【紫魔】の目の前で、精々あのお嬢さんぶっ飛ばして来たるわ。ミズチちゃんはそれ見て腹抱えて笑っとき！」

「…兄さんがぶっ飛ばされたら笑う。」

「っておい！なんでやねん！」

どこまでも調子を崩さない大蛇の声も、彼女にとってはもはや日常なのだろう。兄妹だけあって、口うるさく注意はしても、本気で嫌がってはいないし疑ってもいない。

兄の実力を一番よく知っているのは、誰よりも妹である彼女なのだから。

自分達を舐めてかかってくる紫魔家を蹴散らすために…

―そして、『竜胆』の名を復興するために。

「…次の試合…【黒翼】の孫。」

「せやな…気になるんか？」

「…うん。」

「なっ!?に、兄ちゃんは許さへんで!?あんな馬鹿そうなガキンチョが弟候補やなんて！」
「…違う。兄さんうるさい。」

どうでもいいことで一々騒ぐ大蛇に、とても迷惑そうにして…ミズチは次なる戦いに備えてその場を去っていった。

―…

「バトルだ！【鳥銃士カステル】でダイレクトアタック！」
「そんなっ!?」

―！

大門　ミヤコ　ＬＰ：２０００→０

―ピー…

【決闘祭】第一回戦・第四試合…【決闘祭】初日の最後を飾る試合で。
そのトリを務めるのは奇しくも第一試合と同じ、イースト校１年生とサウス校３年生であり、そのイースト校１年の天宮寺　鷹矢ＶＳサウス校３年の大門　ミヤコの試合も、たった今終了のブザーが告げられた瞬間だった。
どうやら鷹矢の方も、３年生を相手に堂々の勝利を勝ち取った様子。
そのふてぶてしくも、有り余る実力に対して…神格化されているエクシーズ王者、【黒翼】の孫という重圧を乗せてくる観客も、その歓声を盛り上げて鳴りやまぬ音となっている。

「くっ、これが…【黒翼】の孫…」
「その言い方は好きではないのだが…まぁどうでもいい。ではな。」
「あっ、ちょ！…挨拶くらい出来ないのかしら…虹村君の後輩なのに。」

そんな盛り上がる会場の空気を他所に、対戦相手に挨拶もなくさっさとスタジアムを降りて行ってしまう鷹矢。
どうせ、終わった戦いに興味など無く、挨拶をする気も無ければ談笑する気も無い彼なのだ。早々に自分の控え室に戻るか、遊良の控え室に行く気なのだろう。すでに遊良の方も試合も終えているため口うるさい事は言わないはずだと、皮算用をして歩みを緩めない。
鷹矢は早足で入退場口へと入ると、やはりそこから一番近かった遊良の控え室へと向かっていた。

「…天宮寺…【黒翼】の孫。」
「…む？誰だ貴様は。」

すると廊下の暗闇で、先ほども言われた『【黒翼】の孫』という単語が引っかかったのだろうか、降って沸いた声に鷹矢が足を止める。
…他人にとっては、羨ましい程に輝かしいその『出生』。しかし彼にとっては、とんでもない迷惑者と同類に扱われる忌々しい『称号』。
一体誰がそんなことを言ってきたのだろうかと、鷹矢が声の方へと目をやったそこには、前の試合…第一回戦・第三試合に出ていたウエスト校2年、竜胆　ミズチの姿があった。

「……。」
「…む？」

無言で、ただ鷹矢を見ているだけの少女。白髪から感じられる気怠さは、関わる人間にも伝染しそうなくらいの雰囲気なものの、黙っているだけでは何の用があるのか鷹矢にだってわかるはずもない。
そうして少しの間見ていたかと思うと、ミズチは鷹矢の横をすり抜けるようにして、己の控え室の方へと向かっていった。

「…何だったんだあれは。…まぁいい、飯だ飯。」

意味が分からずにいる鷹矢であったが、すぐにその興味が薄れてしまったのだろう。遊良の控え室にまだ弁当が残っていることを期待して、彼もまたそこへ向かうのみ。
儚げな姿に似合わぬ鋭い視線が、『何を』見ていたかなど鷹矢にとってはどうでもいいこと。その見通すような視線が、『何を』映していたのかを知らぬまま彼はその場を後にした。

―…

「なぜ無いのだ！お前のことだから弁当を残しておいてくれていると思っていたのに！」
「あっても食わせるわけねーだろ！朝からお前のせいでイライラしてたんだからな！」

遊良の控え室に入るや否や、弁当が無い事が発覚してご立腹の様子を露わにする鷹矢。
まぁ遊良にしても、今朝にあれだけ鷹矢に迷惑をかけられて、怒りを落ち着けるためには食うしかなかったのだから、その元凶に文句を言われたところで何も悪いとは思わないだろうが。

「つーか終わったばっかでよく食欲あるよな。ホント緊張感が無い

奴。」
「む？何があっても腹は減るんだ。食って何が悪い。」
「悪いとは言わないけどさ、もう少し気合入れとけってことだよ。次は全員シード選手と戦るんだから。」
「そうなのか？」
「そうなのかってお前…、今勝ったから明日は紫魔先輩とデュエルじゃねーか。油断すんじゃねーよ。」

そう、このトーナメントで４名の学生は一回戦を免除…要はシード扱いされていて、翌日の第２回戦は、一回戦に勝った全員がシード選手との戦いとなっているのだ。

―４つある決闘学園に、それぞれ一つずつ与えられるシード枠。

各決闘学園の選手３名のうち、誰がシードになるかは各決闘学園の判断に委ねられているが、どの学園も１回戦で全選手が負けてしまう事を回避するための措置なのか。
トーナメント表によると次の遊良の相手は、前回４位のサウス校３年、獅子原　エリとなっているし、鷹矢に至っては同じイースト校の２年生、紫魔　ヒイラギが相手だ。

「まぁ大丈夫だろう。それより腹が減った。いつ帰れるんだ？」
「油断すんなって言ったろ！…はぁ、お前の試合が最後だったからもう少ししたら帰れるって。」
「うむ！ハンバーグだハンバーグ！」
「あ、お前今日迷惑かけすぎ。飯抜きだからな。」
「む!?」

本日一番の驚愕の顔をして…遊良以外にはそこまで変わらない様にしか見えない表情の変化で…鷹矢は抗議の視線を遊良に送り付けて来るものの、それを聞き入れる気は遊良には無いのだろう。

モニターに映るスタジアムの映像…初日の全ての試合が終わって、司会者が初日の締めの挨拶を観客席に伝えている映像へと遊良は目を戻した。

「餓死するぞ！いいのか遊良！」
「うるせー！水でも飲んでろ！」

横でさらに騒ぎ出した鷹矢を、適当にあしらいながら。

—…

「…何と言うざまだ。まさか去年に続いて、今年も一回戦で2人消えるとは…」

【決闘祭】初日が終了し、熱戦の興奮でまだまだ賑わうセントラル・スタジアムの控え室の一室…残り一人のノース校代表、3年生の紫魔サクラの控え室で…同じくノース校理事長、紫魔　幹春が溜息と共に力なくそう呟いた。

もう後が無い彼…昨年の決闘祭で、誇り高き紫魔の選手達が見せ場も無く早々に敗れて行った様は、紫魔家の中でも汚点として数えられている。無論、理事長である幹春の責任は重く、紫魔の名誉を損なったとして見られているというのに…

—今年も同じく、早々に紫魔の人間が負けてしまっている。

昔は…表彰台の全てを紫魔の人間だけで染め上げたこともある時代だってあったものの、今ではその栄光が見る影も無い。

「あんな下層のガキ共に頼った俺が馬鹿だった。サクラ、頼れるのはお前だけだ…俺を助けてくれ…じゃないと、お前まで落とされて…それどころじゃない…俺が…消されて…」
「わかってるわよ。そんな顔しないで。」

これで今年の【決闘祭】でも、シード選手のサクラが敗れでもしたら…今度こそ幹春は理事長の座を下ろされることは必至。それどころではない…理事長でなくなれば、栄光ある【決闘世界】の構成員の座すら消え去って、下手をすれば命が無い。
それに、例え命が助かったとしても、今まで彼が築き上げてきた紫魔での地位は崩れ去り、一気に最下層の紫魔まで位を落とされるだろう。

力なき者を紫魔は必要とせず。いくら紫魔家に貢献しようと、必要がないと判断されれば何の躊躇も無く落とされる。

…紫魔家とは、そういう場所。

幹春にとって、それだけはなんとしてでも阻止しなければいけないことだ。昨年は詰まれた金に溺れて、賄賂の額が多かった紫魔家の学生を出場させた幹春だったが、それがすぐに間違いだったことを、身をもって理解して。

数多い紫魔の姓を持つ家でも、特に最下層の扱いは酷い物であって…前【紫魔】の例や、自身の過去のことを思い出している幹春は、それを考えただけでも背筋を凍らせていた。

「私が負けるはず無いわ。あんな偽物の融合使いや、低俗なシンクロやエクシーズ使いになんて。そうでしょう？」
「しかし、万が一ということが…」
「万も億も無いわ。父様は安心してみているだけでいいの。」

そんな父の蒼白な顔など気にも留めず、また切羽詰った様子も無くそう言う幹春の娘、ノース校３年の紫魔　サクラ。

―しかし、そんな彼女の自信は確かに根拠のある絶対的なモノ。

次に戦うのが、昨年度の準優勝者だと知っていてもなお、サクラは簡単に言い放つ。

「風、水、炎、地…【紫魔】から４つを許されているこの私が、負けるはずないでしょう？」

そう…普通ならば一人の紫魔に、一つしか扱うことを許されていない融合の属性。

古からの紫魔家の決まり。紫魔として生まれた者にとって、扱うことを許されている属性は生まれたときから決まっているモノなのだ。

そして、その紫魔達の家柄の内、最も位の高い家だけが…『地紫魔』や『火紫魔』など…『その属性を扱う紫魔を統べる家』として属性を名乗ることが出来るのであって、それ以外の下層の紫魔はただの『紫魔姓』を持っているだけに過ぎず、上位の紫魔に従うしかない。

しかし、それは本家に届かない下層の話であって…

本家に『相当近い家柄』で、かつ選ばれた数少ない人物のみ、複数の属性を操ることを許されるのだ。

そして『現本家』の血筋を色濃く受け継いでいるサクラは、末端とは言え父が【決闘世界】の構成員であること、また彼が『紫魔学園』とも呼ばれるノース校の理事を務めていることが大きいのか。

父の要望が、王者である【紫魔】にとって許可されて…娘であるサ

クラには、なんと４つの属性を扱うことが許されていたのだった。
これは、プロで活躍する紫魔姓の選手にもいない快挙。
「火紫魔も風紫魔の奴らもダメだったんだ…サクラ…頼んだぞ？」
「ええ。それにここで優勝すれば、本家に入ることを約束されるのだもの。こんな簡単に私が本家に入ることが出来るなんて、父様は幸せ者ね。」
【紫魔】として積み重ねてきた莫大な富。政界に財界、もちろん決闘界にも多大なる影響を持つ勢力。その全てを統べる『紫魔本家』は、全紫魔家の羨望の的。
誰もが本家入りを願い、その座を我が物とするべく暗躍していることはいうまでもない。
そしてその本家に入るには、【紫魔】を倒して成り代わるか、本家の人間と結ばれるか…【紫魔】に実力を認められて、本家に『引き抜かれる』しかない。
しかし、そのどれもが簡単に行くわけなどなく、王者である【紫魔】を倒すのは実質的に不可能であることを考えると、『認められるだけの実績』を勝ち取ることの方が現実的なのだ。
その中でも、学生だけに許された特権…
―【決闘祭】の優勝は、その一つだけで『引き抜かれる』に値する実績になりうる。
「恋介様も見ているのだし、華麗に優勝を飾って見せるわ。」
まだ一戦も行っていないにも関わらず、まるで優勝するのが決まっているかの如く、サクラがそう言った…
その時だった。

「あら…それは無理なお話ですわ？」
「なっ!?だ、誰!?」

不意に、サクラと父である幹春しか居ないはずの控え室に、他人の声が響く。
しかし、父と自分しか居ないと思っていた室内に突如聞こえてきた他人の声、それに瞬間的に焦りつつ反応するものの、その人物の姿を視界に入れた途端に落ち着いた声で態度を直したサクラ。
何故なら上位の紫魔であるサクラにとっては、尋ねてきたその他人など、焦るにも値しない人物だったのだから。

「あら…ヒイラギじゃないの。…あなた、この私になんて口を聞いているのかしら。」
「いえ、偶々通りかかったものですから。…幹春様、サクラ様、お久しぶりですわ。」

イースト校2年、紫魔　ヒイラギ

彼女もまた、紫魔姓を持つ学生の一人。しかし、イースト校では尊大な態度を取っていた彼女が、他の人間に謙った態度を取っている光景は珍しい。
しかし、それは当然であって…地属性の紫魔家を統べる『地紫魔』のヒイラギの家からしても、サクラは上位の紫魔。もちろん、サクラと幹春に対してはそれ相応な態度を要求されるのだから。

「ホホ、なんだか本家がどうこうと聞こえましたものですから。思わず口を挟んだことをお許しくださいまし。」
「ヒイラギ…まさかあなた、まだ不釣合いな夢をまだ見ているのかしら？」
「ええ、もちろんですわ。…サクラ様と幹春様には悪いですが、本家に行くのは私ですので。」

それを理解していても、いつも従者に言っているヒイラギの目的…本家入りすることを隠さずにそう言った彼女。
普通ならば自分よりも上位に立つサクラにそう言った態度を取ることは許されないものの、その目的を持っているのはこのヒイラギだけでないことをサクラとて知り尽くしている。
これは、『本家』以外の全紫魔の目的でもあるのだ。ある意味、隠しても無駄な感情とも言えるだろうから。

「…『地紫魔』程度のあなたが、この私に勝てると思っているの？この私は４つも許されて…」
「いいえ、何もサクラ様と戦おうとは思っておりませんわ？…それに…決勝に上がれるはずがありませんもの。」
「…ッ!?ぶ、無礼者！」

―！

しかし、いくら『本家入り』の宣言は大目に見てやっても、それ以外の尊大な態度を、サクラが許してやれるわけないのか。
渇いた音が控え室に響き渡って反響し、サクラが苦い顔でヒイラギを睨んでいる。そう、サクラのその華奢な手が、ヒイラギの頬を引っ叩いたのだ。

「私が！この本家に次ぐ家柄の私が、負けると思っているの!?お前みたいな他の下層の紫魔ならばともかく、この私が低俗な者どもに負けるはずがないでしょう！ヒイラギ、お前のその態度が昔から気に食わなかったのよ！」
「…あら…確かに出過ぎたことを言いましたわ…もうしわけありません、サクラ様。」

そうして、ヒステリックに喚きだしたサクラ。まるでタガが外れた

ように、怒りを露わにしてヒイラギへと浴びせ続ける。
こうなってしまっては、何を言っても無駄だということをヒイラギも理解しているのか。年が近いと言う事もあって、昔に色々とあったヒイラギとサクラではあるものの、これでは3年生と2年生とは言え、どちらが年上か分かったものではないだろう。
そして、サクラの喚きが収まりそうもないのを感じたのか、踵を返してヒイラギは控え室から出ようとした。
振り向きざまに、ヒイラギの長い艶やかな髪が揺れて…サクラはさらに言葉を投げつけるが。

「自分の身の程をしりなさい！この恥知らずが！…またその髪を切り刻まれたいの？」
「…滅相もございませんわ。私はサクラ様には勝てません。」
「そうよ！お前はそうやって這いつくばればいいの！本家に行くのはこの私よ！」

ヒイラギが静かに控え室を出るその時まで、全く緩めることをせずに言葉を沈めないサクラ。
その喧噪を背に、静かに控え室の扉を閉めると…ヒイラギはどこへ行くともわからずに歩き出した。

「ホホ…恋介の従兄というだけの…おこぼれの地位でよくもまぁあそこまで。」

誰も居ない会場の通路に呟かれた、小さな言葉。それは、およそサクラには決して聞かせられぬ物言いでもあって。
しかし、そう呟いたソレを聞いている者は居らず。ヒイラギの頭の中には、おこぼれにより家柄が上がって、自分に危害を加えてきた幼い頃のサクラの姿が思い浮かんできており、早々にこの離れようとその歩みを緩めない。

はたかれた頬と…その艶やかな髪を、大事そうに撫でながら。

―…

「…今年は随分と静かな席だ。」

会場内の盛り上がりが嘘のように、この静かで豪華な観覧席で、決闘学園イースト校理事長、砺波　浜臣は呟いた。

セントラル・スタジアムの内部をほぼ一望できるこの席は、他の誰も入ることが出来ない、まさに決闘学園のトップたちのために用意された特別席。

そんな中、昨年の理事長席とは様子の変わった今年のこの席で…未だ入院中で観覧に来られなかったウエスト校理事長とサウス校理事長のことを思いながら、砺波は感慨深げに立ち上がるも、その姿はどうにも気分が優れない様子にも見える。

この後は観覧に来ていたプロ関係のお偉い方達と会食の予定がある砺波ではあったが、せっかくイースト校の学生がまだ全員残っていると言うのに、砺波の胸中はとても食事が通りそうにはないのか。

溜息をつきながら、砺波は立ち上がって帰り支度を始めた。

「…全く、Ｅｘを使わないデュエルなど…やはり見ていて反吐が出る…」

そんな中で再度呟いた砺波の頭には、やっと始まった【決闘祭】の…記念すべき最初の試合に、イースト校の天城　遊良がトップバッターで試合をして、それに勝ってしまったことが浮かんできていた。

シードの紫魔　ヒイラギと、エクシーズクラストップになった天宮寺　鷹矢はともかく、まさかあの天城　遊良が一回戦を勝つなんて思

いもよらなかった様子を見せて。
あの生徒が負けた瞬間に、会場から放り出して即刻退学を突き付けてやるつもりだった彼ではあるが…相手の3年生が舞い上がっていたとは言え、遊良の…ひいてはイースト校の勝利を快く思えないのもどうなのだろうか。
自身の端末に送られてきているトーナメント表を、再度見直して。砺波は明日の試合を思い浮かべて静かに呟く。

「…明日はトウコさんのお孫さんとの試合。フッ…まぁ次で終わるとしても、一回戦を勝ったのなら精々イースト校のために足掻いてほしいものですね。」

そう、新たな選手を選びなおす時間がイースト校に残されていなかったゆえに、天城を【決闘祭】の代表として提出せざるを得なかった砺波。
そのせいで、イースト校の選出を疑問に思ったのか、【決闘祭実行委員】から代表選手を確認する電話が何度もかかってきて来て対応に追われたのだ。
それに【決闘祭】を見ている観客だって、何故『あの』天城が代表として出場しているのかと、不思議に思ったに違いない。それがまさか一回戦を勝ってしまい、挙句の果てには『Ｅｘを使わない』という忌々しいデュエルで、観客が盛り上がってしまった…そのことが、砺波の頭には浮かんでいる。
観客を沸かせること自体は悪い事でないのを理解している砺波ではあるが、彼にとって観客の盛り上がりと天城が勝つのとは全くの別。

天城のデュエルは我慢して見てやる、しかし勝つことは望まない。
とは言え簡単に、あっけなく負けられてはイースト校の評判も落ちてしまうのは確か。ならば精々彼が在校を望むイースト校のために、

必死に観客を盛り上げて…そして負けて欲しい物だ、と。
そんな気持ちを変えないまま、ふと砺波は展望席からスタジアム内をもう一度見た…

…その時だった。

「なっ!?あ、あれは!」

突如、まるで雷に打たれたような衝撃を感じて、砺波は驚きの声とともにガラスに張り付いて階下へと視線を向けた。

心臓が大きく跳ねる感覚、痛いくらいの動悸は砺波を激しく揺らし…一瞬だけ見えた目下の人間の姿を、その網膜に焼きつけて。

見間違えかとも考えるものの、しかしそれが幻覚でない事だけは、彼の心がハッキリと理解していた。

…なぜなら、まだ席を立つことを許されない観客席で…たった一人だけ出口の近くで立っていた女性。そのまま出口から出ていく一瞬の姿は…成長はしていても瞬間的に理解できるほどに、砺波の心の奥から消えないモノだったのだから。

それは、砺波があらゆる手を使って探していた存在でもあって…

「馬鹿な、釈迦堂!?…いやまさか…一体何故…戻ってきていたのか?」

探しても探しても…いくら探し回っても見つからなかった女の名を、その姿を一瞬でも見てしまった砺波の心は、先ほどまでの遊良への感情をどこへやら。

他人の空似とはよく言うけれど、自分がそれを間違えることなど無いという自負。最早砺波の胸中には、10年前に敗北した釈迦堂　ラ

ンへの恨みが、再度沸々と沸き上がってきていた。

「逃がすものか！」

―！

そうして、すぐさま理事長席を飛び出して出口へと向かう砺波。遅いエレベーターにイラつきながら、その怒りに中てられて微かに軋むエレベーターがやっと到着して、即刻ソレを一階へと降ろす。

不思議な表情をしている係の者が、砺波のその迫力に慄いて退き…砺波はランがスタジアムから出ていった場所から、一番近いとみた出口からスタジアムの外に出てその姿を探し始めた。

「ぐ…見当たらない…」

しかしその目を周囲にやって探しても、砺波の目には目的の存在を感じることは出来ない。例えそれが、他者と違う空気を纏う女性であっても、今の砺波にはそれを感じることは出来なかったのだ。

まだ観客の誰も出てきていない出口。しかし、その戦いの空気を味わいたい一般人が多々いるこの場所で、たった一人を探すことは無謀極まりないことは彼とて百も承知。

「どこだ、釈迦堂…どこだぁー！」

雪が降りそうな空に消える、この鯨の咆哮は…今は決して目的に届くことは無い。

それでも、彼は探さずにはいられなかった。今こそ過去を清算し、あの時の自分を超えたことを証明するため…王者であった自身が無様にも感じた、『恐怖』という名のあるまじき失態を払拭するために。

突如叫ばれた鯨の咆哮を、何事かと感じて視線を突き刺す一般人などまるで気にも留めないようにして、砺波は小さく呟いた。

「しかし、見に来ていたと言う事は…また来るのか…釈迦堂…くそ、あの女…明日こそは…」

いつ頃からだろうか…笑うことより、怒っている方が多くなってしまったことにも今の彼は気が付けない。

最早、その姿は誇り高かった【白鯨】ではない…その程度の鯨に成り下がってしまった男など、決して『化物』は相手にはしてくれないと言うのに。

【決闘祭】を楽しむ決闘市の雰囲気に混ざって、ランへの邂逅を望むという砺波の渇望が…

…大きな歪みが一つ、新たに現れたのだった。

――…

ｅｐ２５「決闘祭、激闘ー猛攻の武士ｖｓ堕天の翼」

「おばあちゃん、ごめんなさい。初日でサウス校は私だけになっちゃいました。」

まだ朝も早いと言う時間の、決闘市のとある病院。およそ特別待遇というのが見てわかるほどに豪華な病室に、決闘学園サウス校3年、獅子原　エリがそこに居た。

やや赤みがかった長い茶髪を後ろで縛って、一つに纏めている髪を手で弄りながら…心苦しそうに。

それはきっと、『烈火』と呼ばれた元プロ選手であった、彼女の祖母であるサウス校理事長…獅子原　トウコに、ふがいない結果となってしまったサウス校の戦績を伝えているからなのだろう。

およそ血縁者か、よほどの大物しか入ることを許されないこの病室で…エリは選んだ言葉を紡ぐ。

「二人ともイースト校の生徒に負けちゃって。それが二人とも1年生なんだよ?…袴田君なんて、負けた瞬間にさっさと帰っちゃったんだから。よっぽどショックだったんだろうなぁー。」

一人は、初めての決闘祭と実物の王者に舞い上がって負け…もう一人は、根本的な実力が不足していたために負けて。

いくら昨年4位入賞したとはいえ、一人残されたというその重圧は決して慣れるような物でないことは確か。

シード選手という観客の期待も、サウス校の全生徒達からの声援も、その華奢な体で支えなければいけないのだ。

それに捕まらないように、発する言葉を緩めないエリ。

「あ、聞いて聞いて!袴田君の相手の1年生さ、誰だと思う!?なんと!『あの』天城　遊良だったんだよ?」

話す。

「凄いよねー。最初は絶対に嘘かズルだって思ったけど、デュエル見たらあれでＥｘ適正無いなんて、絶対おばあちゃんも驚くよ。さっすが【白鯨】のいるイースト校だよねー。」

喋る。

「セオリーなんて関係ないって感じ？…なんか私も【白鯨】に鍛えて貰いたかったなー…なんて。あ、嘘だよ、うそうそ。おばあちゃんに教えてもらうのが一番だからね。」

矢継ぎ早に、次々に。

そう、その口から言葉が溢れるように。

エリの祖母…『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコが、現役時代に唯一届かなかった相手…シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣。

その相手とのデュエルの話をしてくれる祖母は、いつも悔しそうで…それでいてどこか楽しそうではあったと覚えているものの、エリにとっての一番は常に祖母なのだ。

プロの世界で活躍していたそんな祖母に、幼いころから鍛え上げられたエリがサウス校でもトップに上り詰めるのは時間の問題だったのか。

「…約束だもん、今年こそ絶対にウエスト校とイースト校よりも上の結果を出すって。」

だからこそ、彼女は今でも気を張り続けている。

昨年の【決闘祭】で、３位決定戦で彼女が負けたイースト校代表の泉　蒼人。若かりし頃の【白鯨】を思い出させるような凛としたデュ

エルに見惚れて…顔にも見惚れたのは言うまでもなく…敗北を喫したこと。
【白竜】を輩出したサウス校にとって、表彰台に上ることはサウス校にとって当然のことだったというのに、表彰台を逃して祖母の名を汚してしまった事…サウス校のトップだった自信が崩れてしまったことが相まって、昨年４位を素直に喜べずにエリは悔やんでいた。

「今日は袴田君に勝った天城　遊良との試合だよ。おばあちゃんも応援宜しくね？私絶対に勝つから！おばあちゃんが見ててくれたら、Ｅｘ適正無い子になんて負けないから！」

祖母に向かって、どこか甘えるように…歳よりも幼く感じるような話し方をするエリ。
セントラル・スタジアムで、竜胆　大蛇と話した時も…それ以外の人間と話すときも、どこか気を張ったように話す彼女ではあるが、そうは言っても祖母の前では甘えたような声を出すことなど仕方ない。
生まれた時から祖母に甘えてきたのだ、今更祖母の前で気取っても遅い事を彼女とて理解している。
だからこそ、思ったことを正直に話すのだろう。

「ＴＶでもいいから絶対に応援しててよ？私、前より超強くなったんだから、おばあちゃん驚いちゃうかも！」

内容を聞いているだけなら、静かに話を聞いてくれる祖母に、甘えて話すかわいい孫のお喋り。
しかし、その言葉はどこか不安げで…強い言葉を使って、一生懸命に何かから目をそらしたいかのよう。
…何故なら、いくらエリが話しかけても、それに対して返ってくる言葉はないのだから。

「…だからおばあちゃん…早く起きて私の試合見てよ…ねぇ…おばあちゃん…」

エリの眼前で、目を開けることなく眠る祖母。
人工呼吸器をつけられ、心電図の音が鳴る病室には、エリ以外の声がすることはない。夏前頃に起こった、唐突な祖母の救急搬送。

今でこそ眠り続ける祖母に話しかけられるようになったものの、当初の祖母の姿を見たエリは気が狂いそうになっていたのだ。
おびただしい怪我の痕と、取り戻さない意識。医者も何者かに襲われたという事だけしか説明せず、いくら家族が問い詰めても何も詳しい事を教えてくれないのだから、それはそれは不安で仕方ない日々を送るしかなかったエリ。
そんなエリが、今こうして【決闘祭】に臨めるのも…祖母が残していた、自分にあてた手紙を読んだからに他ならない。いつ頃用意していたのか、一枚のカードと、手紙に書かれていた孫へのエールを読んで。

―『去年駄目だったら、今年勝てばいい。落ち込むくらいなら、それが出来るように努力しなさい。』

昨年の結果に引きずられず、今年はさらに上がれるように努力すること…祖母の怪我で落ち込む暇があったら、祖母のために【決闘祭】優勝を持ち帰らなければ、と。

先に目を覚ましたウエスト校理事長…李　木蓮と、未だ目を覚まさない彼女の違い。それは一重に、受けたダメージの違いによるところが大きいのだが…【決闘世界】が漏らさぬ情報は、被害者の血縁と言えども教えられることは無い。

―ただただ、エリの心には不安しかないのだ。

「…絶対、絶対に優勝してみせるよ。そしたらおばあちゃんだって寝てる暇ないよね？驚いて絶対に起きちゃうよね？」

返ってこない声を、確認するように。

窓から差し込む朝日を浴びて、祖母の手をやさしく握った彼女はその決意を改めて強くしていった。

もうすぐ始まる【決闘祭】２日目…自身の戦いへと、向けて。

―…

「絶対に帰るなよ？昨日みたいなことしたらもう知らないからな！」

「…うむ…もう呼ばれるまで控え室からは出ん…」

まだ朝も早い時間、【決闘祭】初日と同じ集合時間に向けて、遊良と鷹矢はセントラル・スタジアムの入り口前に居た。

しっかりと睡眠をとって、疲れなどない遊良に対して…鷹矢はと言うと、どこかグッタリしていて元気がないようにも見える。

しかし、その原因は分かりきったことであって…昨日起こった遅刻事件で、遊良の堪忍袋の緒を鷹矢が自ら切り刻んだことに他ならない。

「…まさか本当に飯抜きにされるとは…」

「控え室に弁当用意されているだろ。それまで待て馬鹿野郎。」

「…ぬぅ…腹が…減ったぞ…」

腹部を押さえて、止まぬ腹の虫に耐えて。

昨日の夕食、折角遊良が初戦突破を祝して作ったハンバーグも、目

の前で遊良とルキに食べられてしまって。水しか用意されなかった鷹矢は、とても苦々しい顔で幼馴染二人と美味そうなハンバーグを見ているしかなかった。
流石にそれを見かねたルキが、自らの分を少し鷹矢に分けようとしたのだが…遊良がそれを許してくれなかったものだから、鷹矢も取り付く島がなく泣き寝入りするしかなかったのだろう。
そうして、腹が減りすぎて早く寝るしかなかった鷹矢ではあるが、それが逆に幸いだったのか…あまり熟睡は出来ず、今朝も遊良に起こされる前に起きられたのだった。

「お、ルキはもう会場入ってるってさ。『鷹矢は寝ぼけてない？』って聞いてるぞ？」
「…うむ…腹の虫がうるさくてあまり寝られなかった。」
「いいことじゃねーか。もしこれで今朝も寝坊してたら、【決闘祭】終わるまで飯抜きだったからな。」
「…腹が減っていて助かったぞ…」
「だろ？」
「…うむぅ…」
「つーか、そろそろ気合入れろよ？いい加減ふざけるのも終わりだ。」
「…わかっている。」

思わぬ所で首の皮一枚繋がっていたことを知り、力なく頷く鷹矢。その姿を見た遊良も、鷹矢が多少は反省してくれることを期待していた。
そして、早朝ながらも賑わいつつあるセントラル・スタジアムの…選手専用入り口へと向かって、歩いていく。そろそろ、他愛無い会話で緊張を緩めるのも終わりにしなければ、と。

―【決闘祭】２日目

正午丁度に始まった初日と異なり、２日目の戦いは朝から始まる。

そして2回戦からは、全員が各校のシード選手達との試合となるのだ。組み合わせが【決闘世界】に一任されているとはいえ、中には同じ学園の生徒と戦わなくてはいけない選手も居ることは言うまでもない。

今日の遊良の相手は、昨年4位のサウス校3年、獅子原　エリ。
本日第四試合が出番の鷹矢も、相手は同じイースト校2年の紫魔ヒイラギ。

ヒイラギに関しては、選抜戦であんな事件があったためにその戦いは見られずじまい…しかし、紫魔家の令嬢であるヒイラギも当然【HERO】デッキの使い手と思われ、鷹矢とて対策はしてあるだろうと、遊良は鷹矢に問いかける。

「鷹矢…お前、紫魔先輩とのデュエルはどうするつもりなんだ？」
「む？どうする、とは何だ？」
「いや、対策とか考えてあんのかってことだけど。」
「普通に戦る。それだけだ。」
「お前なぁ…そんな考えで大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない。」

鷹矢のその返答に、全くもって大丈夫とは思えない遊良だったが、ふてぶてしくも実力が伴っている鷹矢がいつも通りにデュエルをすれば…確かに紫魔の令嬢とは言え、引けを取らないことは間違いないだろう。
そもそも鷹矢が緊張に押しつぶされる奴でないことは、遊良もほとほと理解している。

「油断すんなよ。気合だけは入れとけ。」
「うむ。それより遊良、最初の試合はお前からなのだから、お前こそ気合を入れておけ。」

「わかってるって。」

気持ちを入れ替え、遊良と鷹矢は戦いの場…セントラル・スタジアムへと入っていった。

…会場入りした途端に、血相を変えたスタッフに連行されるように控え室に連れて行かれた鷹矢を、遊良は苦笑いで見ているしかなかったことは置いておいて。

―…

「…どこだ釈迦堂。どこに居る…」

セントラル・スタジアムの上層階…スタジアム内部が一望できる理事長席から、イースト校理事長である砺波は、階下を血眼のようにして見ていた。

自身にとって復讐の対象である釈迦堂　ラン。昨日、終わりがけに偶々その後姿を見てしまったせいで、見るのも憚られる天城　遊良の戦いすらも今の彼の頭にはない。

もうすぐ始まる第二回戦のことなどそっちのけで、目的の存在を探す砺波。

「くそ、いないか…しかし始まれば出てくるはず。」

まだ観客の出入りが多い会場内。存在が異なる女とは言え、そこから唯一人の人間を見つけ出すことは容易なことではないだろう。もしランが大勢の人間の熱気に混ざって、その気配を消していたらなお

さらのこと。
未だ現れぬ対象に、砺波は心奪われていた。
―――――――

『それでは、選手の入場です！イースト校1年、天城　遊良選手ＶＳ、サウス校3年、獅子原　エリ選手！』

そうして、実際に名が呼ばれると共に入ってくる2名の選手。
初日と変わらぬ規模の大歓声の中、対面の入場口から堂々と歩いてくる遊良とエリの姿を視界に入れて、会場内がより一層盛り上がりっては熱気が高まり、見ている誰もが冬だということを簡単に忘れ去ってしまうことは間違いない。
シード選手が相手と言う、良い意味での緊張の面持ちをした遊良と、どこか気を張っているようなエリの表情は正反対なれど、お互いに浮き足立っていないことは確かな様だ。

「よろしくお願いします。」
「…よろしく。」

お互いに挨拶を交わして、立ち位置に着く。
しかし、遊良がたった今感じた獅子原　エリの印象は…張りつめた糸が今にも切れそうなくらいに、凄みを帯びた迫力が漂ってきていたというモノ。
中々出せる迫力ではないものの、流石はサウス校の猛者と言ったところか。しかし、自分の容量ギリギリのモノは、危なげすら感じさせるのか。
何か背負っているような、それでいてどこか焦っているような…そんな感情が渦巻いているよう。

（獅子原　エリ…シンクロ召喚の使い手。爆発的な展開力は…多分去年の代表の中でも一番だった。気を抜いたら一瞬でやられる。）

去年の【決闘祭】の中継を見ていた遊良は、今目の前にいる彼女の戦いも覚えていた。サウス校理事長である『烈火』直伝の、隙を見逃さずに一瞬で攻め込んでくる『怒涛の攻め』は、押し寄せる波の様で

あり決して侮ることなど出来ない。

―『攻めこそ全て』…いかなる逆境も、攻めなければ変えられないというのはサウス校の理念であって。

その中で、たった今彼女から感じた印象と合わせて、遊良は戦う心を決める。

―初めから全力で『攻め』にくるであろう相手と、いかにして戦うべきか…どんな手を打つべきか。

（速攻を仕掛けてくるのか？…だったら…）

今にも切れてしまいそうに張りつめた糸、最初から全力で切り込んできそうな雰囲気。

真っ向から向かってくる相手に、恐れている場合じゃない。相手は昨年４位、そもそも最初から気など抜けるわけが無いのだ。それを再確認して、遊良はデュエルディスクをデュエルモードへと移行した。

―【決闘祭】２日目

去年の大活躍した選手のデュエルに、観客の歓声が寄り一層強くなってくると同時に…

『それでは参りましょう！【決闘祭】第二回戦・第一試合！かいしいいいいー！』

―デュエル！

そうして、始まる。先行はイースト校１年、天城　遊良。

「俺のターン！魔法カード、【闇の誘惑】を発動！２枚ドローし、【堕天使アスモディウス】を除外する！続いて【堕天使ユコバック】を召喚！その効果で、デッキから【堕天使スペルビア】を墓地へ送る！」

【堕天使ユコバック】レベル３
ＡＴＫ／７００　ＤＥＦ／１０００

「手札の【堕天使イシュタム】の効果を発動し、【堕天使アムドゥシアス】と共に捨てて２枚ドロー…俺はカードを２枚伏せて、ターンエンド！」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：【堕天使ユコバック】
伏せ：２枚

初日とは打って変わって、静かな立ち上がりを見せる遊良。
昨日の暴風雨のようなドロー加速が鳴りを潜めている様子に、観客が若干ざわめく物の…遊良とて何も考えずにドローを連打するわけがない。

―ただ様子を見るために、遊良がターンを渡したわけでないことだけは確か。

何せ、思考を停止してカードを引きまくるだけでは…何の策も無しにただ展開するだけでは、絶対に勝てない選手が今日の相手。
強靭な『攻め』の姿勢を取ってくる獅子原　エリを相手にするため。
そう、瞬きほどの一瞬でやられないために…ここぞという時に、最大限の引きを発揮するために、初めはエリの『攻め』を何としてでも凌ぐという遊良の意思。
恐れている者の目ではない遊良の視線。それを理解してか、エリも

動き出す。

「…時間がないのよ…すぐに終わらせるわ！私のターン、ドロー！」

そうして素早くカードを引くその所作は、遊良の行った先攻ターンの意味を嘲笑うかのよう…いや違う、嘲笑うどころではない。遊良の思考を頭に思い浮かべた上で、それを意にも介さず攻め潰しにかかるつもりなのか。

朝、祖母の見舞いに行っていた彼女からは思いもよらぬ、『焦り』にも似たその感情を漏らして…初めから全力で向かってくる。

「私は魔法カード【紫炎の狼煙】を発動！デッキから【六武衆の影武者】を手札に加える！続いて永続魔法【六武衆の結束】を発動し、私は【真六武衆―カゲキ】を召喚！」

【真六武衆―カゲキ】レベル３
ＡＴＫ／２００　ＤＥＦ／２０００

エリの場に現れるは、義手を交えた４刀流の武士（もののふ）。その攻撃力は低いものの、通常召喚時に仲間を引き連れることの出来る効果を持ったモンスターだ。

文字通り『過激』な迫力を纏って、エリの場に参上した。

「【六武衆の結束】に武士道カウンターが一つ乗る！そしてカゲキのモンスター効果！手札から【六武衆の影武者】を特殊召喚！それにより、さらに【六武衆の結束】に武士道カウンターが一つ乗る！私は武士道カウンターが２つ乗った【六武衆の結束】を墓地へ送って、デッキから２枚をドロー！…よし！」

エリの声に連なって現れる武士達。

怒涛の攻めと言っても、展開には手札消費が付き物であり、それを

カバーする手も備わっていたエリのスタートは上々といえるだろう。
まだ始まったばかりとは言え、また、早々にシンクロ召喚の素材を場に揃えた隙のない立ち上がりを遊良も理解できるのか。開始早々からエリの張りつめた迫力に対し身構える遊良に、エリは容赦の無い声で堂々と宣言を行う。

「…行くわよ、レベル３のカゲキに、レベル２の影武者をチューニング！」

そして、カゲキが３つの光球に、影武者が二つの輪へとその姿を変えて…

「燃え盛る戦火よ、戦乱を統べる魔王となりて、仇名す敵を打ち破れ！シンクロ召喚、レベル５！【真六武衆―シエン】！」

―！

エリの場に降り注いだ光の柱から現れるは、紫炎に染まりし鎧をその身に纏った武士（もののふ）の姿。戦乱の場にこそ相応しいその姿は、安寧など求めない…まさに魔王と呼べる者。
敵を圧倒するために培われたその力を発揮すべく…今、この場に。

【真六武衆―シエン】レベル５
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１４００

「やっぱり、いきなりエースで畳みかけるつもりか。」
「まだよ！手札から永続魔法、【六武の門】を発動！」

続いて、手を休めないエリの場の背後に現れたのは、家紋が輝く厳かな門。
エリが発動したこの永続魔法…【六武の門】は、六武衆デッキにとっ

て一番のキーカードと言えるモノ。
しかし…先ほど追加でドローした2枚の中にあったのだとしても…その発動タイミングにはいささか疑問が残ると思われる。
普通なら、カウンターを稼ぐ意味合いでもシエンをシンクロ召喚する前に発動しておくのがセオリーだというのに。それを観客も思ったのか、エリの行動に若干ざわめくものの…

―エリの思惑を感じた遊良は、それを苦い目で見ていた。

「ここで【六武の門】を!?…それを許すわけには!罠発動、【背徳の堕天使】!場のユコバックを墓地へ送って、相手の場のカード1枚を破壊する!」
「無駄よ!【真六武衆―シエン】の効果発動!1ターンに1度、魔法・罠の発動を無効にして破壊する!」

そう、シエンをシンクロ召喚する前に【六武の門】を発動していた場合、遊良が発動したこの罠によって厳かな門は無残に破壊されるはずだった。
それを即座に感じ取って…いくら焦った様子の彼女でも、培った嗅覚まで鈍っていない様子。戦乱を統べる魔王に命じ、遊良の反逆を無に帰す。

「くそっ…」
「【背徳の堕天使】は無効!残念ね、コストに使ったユコバックが無駄に終わって!」

いくら『発動』自体を無効にされても、それを扱う目的で『支払った』堕天使の魂が帰ってくることは無い。
遊良の場で侍を睨んでいた小さな堕天使が少しずつ消えていく様を、エリが嬉々として見ていたものの…

―それが消えきる前に、遊良は『守り』を怠らないが。

「でも、ただじゃ消えさせない！永続罠、【奇跡の光臨】発動！除外されている【堕天使アスモディウス】を攻撃表示で特殊召喚！」

「なっ!?」

【堕天使アスモディウス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

黒き光を降らせて、突如として遊良の場に現れる高位の堕天使。
除外されていたと言うのに…悠々と戦場に光臨する姿は、堕天していても神々しさすら感じさせる存在。徐々に消えゆく小さな堕天使を見て、断罪の羽で主を守る。

「シエンの効果にチェーンしてそんなカードを…くっ、時間が無いのに！」

１ターンに１度とは言え、魔法・罠カードを止めるシエンはまさしく脅威だ。遊良とて、罠の発動順を逆にすればエリのキーカードである【六武の門】を破壊することは出来たものの、それでは遊良の場はがら空き。
獅子原　エリ、一瞬の展開力は【決闘祭】参加選手で一番…ならば、ここは攻めにも守りにも力を発揮出来るこのアスモディウスは、今の遊良の状況で出来る最善策。

（くそっ、【六武の門】は仕方ないか…まずはこのターンを凌がなきゃ。）

「でも【六武の門】は残っている…場に【六武衆】モンスターがいる場合、手札から【六武衆の師範】を特殊召喚！【六武の門】にカウンターが２つ乗る！続いて同じ条件で、手札から【真六武衆―キザン】も特

殊召喚！場にキザン以外の【六武衆】が２体存在するため、キザンの攻守は３００アップ！さらに【六武の門】にカウンターが２つ乗るわ！」

【六武衆の師範】レベル５
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／８００

【真六武衆―キザン】レベル４
ＡＴＫ／１８００→２１００　ＤＥＦ／５００→８００

「まだまだ！【六武の門】の効果発動！武士道カウンターを２つ取り除いて、【真六武衆―シエン】の攻撃力を５００アップする！私はもう一度【六武の門】の効果を発動し、シエンの攻撃力をさらに５００アップ！」

【真六武衆―シエン】レベル５
ＡＴＫ／２５００→３０００→３５００

一瞬で、エリの場に現れて参戦する侍達。遊良の場に突如現れた堕天使にも怯まず、さらに次々に自身のエースの力を上げていくエリには、立ち止まるつもりなどないことを遊良に沸々と感じさせてくるのか。

シエンの攻撃力を大台に乗せ、怯まずに攻撃へと打って出るつもりなのだろう。相手モンスターの攻撃力を悠々と超えた自身のエースへと、攻めることを命じた。

「バトル！【真六武衆―シエン】で、【堕天使アスモディウス】に攻撃！」

―！

そうして…真紅の鎧纏う侍が妖しく光る刀身に焔を纏わせて、高位の堕天使へと切りかかり、断罪の黒き翼を切り落とす。
戦乱を生きる武士には、神も天使も悪魔も…堕天使すら切り裂くことに躊躇がないのか。
己の力を戦場で存分に振るい、そのまま成す術なく…燃え盛る烈火に焼かれて堕天使は地に落ちていった。

遊良　ＬＰ：４０００→３５００

「よし、これでがら空き！」
「…ッ！まだだ！【堕天使アスモディウス】が破壊され墓地へ送られたことで、【アスモトークン】と【ディウストークン】を、それぞれ守備表示で特殊召喚！」

【アスモトークン】レベル５
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１３００
（効果で破壊されない）
【ディウストークン】レベル３
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００
（戦闘で破壊されない）

「【アスモトークン】は効果で破壊されず、【ディウストークン】は戦闘で破壊されない！」
「あくまで守りきるつもりなのね…バトル続行よ、【六武衆の師範】で【アスモトークン】へ攻撃！」

休むまもなく、アスモディウスが遊良を守るために残した従僕の一体が、侍の一閃で切り裂かれていく。いくら高位の堕天使の従僕と言えど、その力は主には遠く及ばないのだろう。
しかし、アスモディウスのそれは無駄に終わったわけではない。もう片方の従僕は、いくら撃たれても切られてもその身が消えることは

無いのだから。
まだ攻撃権の残るエリのもう一体の侍は、その刃が遊良に届かないことを知ってか、どこか悔しそうにも見える。
「戦闘耐性…手間取らせてくれるわね…」
―それは、きっとデュエルをしているエリも、同じ表情をしていたからだろう。
何故かデュエルが始まる前から焦っていたようにも思える彼女が、猛攻を凌いだ遊良を忌々し気に睨んでターンを終えようとした。
「時間が無いっていうのに…私はカードを一枚伏せて、ターンエンド。【真六武衆―シエン】の攻撃力も元に戻るわ。」

獅子原　エリ　ＬＰ：４０００
手札：6→1枚
場：【真六武衆―キザン】
【真六武衆―シエン】
【六武衆の師範】
魔法・罠：【六武の門】
【伏せ1枚】

「俺のターン、ドロー！」
そうしてデュエルが一巡し、再び遊良にターンが移る。
しかし遊良はすぐには動き始めず、最初から飛ばしてきたエリの速攻・猛攻を何とか耐えることが出来たものの、遊良は一枚増えた手札を見て思考を巡らし始めた。
そう、エリの場に居る【真六武衆―シエン】…1ターンに1度とは

言え、魔法・罠の発動を無効にしてくるその存在は、ただただ脅威。

猛攻を凌いだと言えども、それでもギリギリだったことには変わりないのだ。攻めに転じようとも、今遊良の手にある３枚の魔法カードを、順番も考えずに無駄に連発するわけにはいかず、エリがどれを止めてくるかにもよって戦況・戦法は大きく変わってくるのだから。

―彼女が、これらの魔法のどれを脅威の策と考えるだろうか。何を思って無効にするかを、遊良は考えて…

「…よし、俺は魔法カード、【堕天使の戒壇】を発動！」

「それは…確か昨日も使ってた蘇生カード…」

そうして動き出した遊良の第一手。墓地から堕天使を守備表示で蘇生するこの【堕天使の戒壇】は、エリとて昨日の一回戦で見ているために、その効果を覚えているのか。

その中で、墓地に送られている堕天使から特殊召喚されるモンスターは、エリにだって容易に想像がつく。【堕天使の戒壇】に対して、エリはまだ動かずシエンは佇むのみ。

「俺は墓地から【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚！そして、スペルビアの効果で、【堕天使イシュタム】も続けて特殊召喚する！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

「続いて魔法発動、【堕天使の追放】！デッキから【堕天使】カードを手札に加える！」

「それも一回戦で見た！ここよ、シエンの効果発動！【堕天使の追放】

の発動を無効にして破壊する！」

【堕天使】カードなら何でも手札に呼び込める万能サーチ…それを脅威と取った獅子原　エリ。命じられたままに、シエンから発せられる烈火によって遊良の魔法カードは焼け落ちていく。

エリが脅威と取った可能性…それはきっと、デッキから加えられる高レベルの堕天使の中でも、昨日も召喚した【堕天使ゼラート】を警戒したのだろう。敵を一掃できるゼラートは、それだけで戦況をひっくり返すことが出来るのだからそれも当然だろうが。

しかしそれを止められても、遊良の手はまだ止まらない。遊良の場に居る【堕天使イシュタム】…彼女の効果は、主の命を削って散っていった力を再現するのだから。

「まだだ！【堕天使イシュタム】のモンスター効果！ＬＰを１０００払って、墓地の【堕天使の追放】の効果を得…」

「無駄よ！リバースカードオープン！永続罠、【デモンズ・チェーン】！イシュタムの効果を無効にする！」

遊良　ＬＰ：３５００→２５００

「これも止めてくるのか…」

「足掻いても無駄！２回戦なんかで手こずっている場合じゃないの…それに、私はこんなところで時間を食ってるわけにはいかないのよ！」

先ほどから、何かと時間を気にしている彼女。入場してきたときから『そう』だったが、どうにも焦りが先行して気持ちが逸っている様子。

それでも、そんな心の状態とはいえ…いくら焦った様子でも遊良の手を次々に止めてくる辺りは流石と言えるだろう。

効果を使えなくとも発生するコストで、遊良のＬＰがさらに減り…

徐々にエリに引き離されていく状況に、流石は昨年の猛者と囃し立てる観客達。初めて【決闘祭】に望んだ一年生…『あの』天城　遊良との、経験の差を誰もが感じている様子を見せる。

―それでも…

「…でも、これで終わりじゃない！サーチが出来ないなら引けばいいだけだ！魔法カード、【アドバンスドロー】発動！」
「え!?ここでドローカードですって!?」

最後に残ったその魔法、遊良の最後の手札の一枚。レベル8以上のモンスターを2枚のドローへと変えるソレを見て、エリは予想外な表情を見せた。

そう、エリに止められたとはいえ、慎重に『コト』を進めるべき戦況では…こういった不確かなドローに賭けるよりも、的確にデッキからキーカードを選んだ方が安全と言う事は、もちろん遊良だって理解していることであって。

しかし当の遊良にしてみれば…手札にあったこのカードは、ドロー戦術を得意とする自分が何としてでも発動したかったモノ。

―何の躊躇もなくドローを選択できる遊良には、不安など微塵も無い。

これが、自分が一番得意な戦法…ずっと磨いてきて、ずっと頼ってきたモノが…【決闘祭】で発揮されないわけがないのだから。

「いくぞ！【堕天使スペルビア】をリリースして2枚ドロー！…よし、

続いて【闇の誘惑】発動！2枚ドローして、2枚目の【堕天使ユコバック】を除外する！まだだ！【トレード・イン】を発動して、【堕天使ゼラート】を捨てて2枚ドロー！そして【貪欲な壺】を発動だ！【堕天使スペルビア】、【堕天使ゼラート】、【堕天使アスモディウス】、【堕天使ユコバック】、【堕天使アムドゥシアス】をデッキに戻して2枚ドローする！」

水を得た魚の如し、解き放たれた鳥の如し。

初日を思い出させるかの様な遊良のドロー加速に、待っていたと言わんばかりに沸くセントラル・スタジアム。

遊良とて先攻ターンにも引こうと思えば、初日の様にドローを加速することは出来ていたのだが…昨年の猛者相手に、初めから流れも考えずただ引きまくるだけでは決して勝てないことを直感して、そして初めは耐えたのだ。

そう、『ここぞという時』まで。

—それが、今。

「最後の【闇の誘惑】を発動！2枚ドローし、【堕天使ディザイア】を除外する！」

至極当然、凡事徹底。当たり前のように、引いて、引いて。

必要なカードならば、引けばいい。運に任せるだけでは決してない、信念を持ったデュエリストに、デッキは応えてくれるものであって…

「…あんな少ない手札から、何て引きなの。」

エリがそれを見て呟くものの、観客席や中継映像でデュエルを見て

いるイースト校の面々は知っている…以前の代表選抜戦で、遊良の『ソレ』はすでに証明されていることを。
Ｅｘ適正など関係ない。主の進撃のために…堕天使達が、遊良に応える。ただそれだけのこと。

「俺は【堕天使イシュタム】と【ディウストークン】をリリース！レベル９、【堕天使テスカトリポカ】をアドバンス召喚！」

【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００

そうして現れるは、まるで悪魔のような風貌をした一体の堕天使。眼前で構える武士たちを視界に入れ、不敵に佇み宙に浮かぶ。

「【堕天使テスカトリポカ】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【背徳の堕天使】の効果を得る！俺が破壊するのは、【六武の門】だ！」

―！

そうして会場に響いたその音は、誰の耳にも確かな破壊音。悪魔のような堕天使が放った炎撃で、厳かな門が粉々に崩れ去っていった音。
場にあれば多大なるアドバンテージをエリに与える、そのキーカードをやっと破壊して…苦い表情をしているエリを意に介さず、さらに攻撃をしかける遊良。

遊良　ＬＰ：２５００→１５００

「バトルだ！【堕天使テスカトリポカ】で、【真六武衆―キザン】を攻撃！」

―！

「くっ…一年生の癖に、ここまで…」

獅子原　エリ　ＬＰ：４０００→３３００

そうして、悪魔のような堕天使の炎撃で、侍の一人が砕け散った。
ＬＰには差があるものの、まさか初出場の１年生が昨年の猛者相手に引けを取らず渡り合っているその光景に、興奮が大いに沸き上がってくるのを観客の誰もが感じているのか。大いに盛り上がる会場の雰囲気は、一進一退のデュエルをさらに奮い立たせて。

強き者を、観客は望む。それは、『Ｅｘ適正の無い』遊良であっても。

簡単には…一朝一夕では立つことを許されない、このセントラル・スタジアムで戦う事こそがその証拠。
昨年の４位入賞者にも臆せず、遊良は堂々とターンを終える。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」
「…ホント粘るわね…」

遊良　ＬＰ：１５００
手札：3→0枚
場：【堕天使テスカトリポカ】
伏せ：2枚

「私のターン、ドロー！」

そうして再びターンがエリへと移り、彼女は素早くカードを引いた。
逸る気持ちがもはや雰囲気だけでなく、その行動にも出てきている

のか。予想外に粘る一年生に、苛立ちと焦りを覚えながら…それでも彼女は自分が勝つことを疑っていないが。

―彼女にあるのは、『勝つ』ヴィジョンではない。『早く勝つ』という…そう、『早く勝ってこの場を後にする』というヴィジョン。

２回戦開始前に、控え室でエリに届いた『とある』メッセージが、彼女をここまで焦らせていることを、誰も知らない。

「一年生でここまで出来たことは褒めてあげる！でも、それももう終わりよ！魔法カード、【増援】を発動！デッキからチューナーモンスター、【影六武衆―フウマ】を手札に加える！そのまま【影六武衆―フウマ】を通常召喚！」

「『影』？…『真』じゃないのか？」

【影六武衆―フウマ】レベル１
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／１８００

エリが召喚したのは、今まで召喚した六武衆とは容姿がことなる戦士。

昨年は使っていなかったソレは、乱世で戦う侍ではない。影に生き、影となる忍者。変幻自在の術を操り、その姿を変えるために…

『烈火』と呼ばれたエリの祖母、獅子原　トウコの…それを受け継いだエリの、最大の『攻め』の姿へと、その身を変えるために。

「いくわよ、これが私の切り札！レベル５の【真六武衆―シエン】と【六武衆の師範】に、レベル１の【影六武衆―フウマ】をチューニング！」

侍たちが１０の光球へと姿を変え、一つの光輪を潜り抜ける光景は…まるで姿を変えるというよりは、ソレを呼び寄せているかのようで

あって…
　ソレが宙へと駆け上がっていき…祖母から受け継いだ口上とともに、エリが叫ぶ。
「烈火、舞い上がりて宙（そら）をも焦がす！燃える星々を喰らいつくせ！」
　それは、星を喰らいし宙の存在。巨大な、星と見間違うほどに巨大な龍。
　星の核にも似た灼熱の体を持つソレは、いかなるモノでも降臨の邪魔することは許されず…
「シンクロ召喚！現れなさい、レベル１１、【星態龍】！」
　―！
『烈火』と呼ばれた選手の、最大最強の切り札がここに降臨した。
【星態龍】レベル１１
　ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００
「で、でかい…」
「これが私の…おばあちゃんの切り札！もう構ってあげられないの、これでお終いよ！【死者蘇生】を発動し、墓地から【真六武衆―シエン】を特殊召喚する！バトル！【星態龍】で【堕天使テスカトリポカ】を攻撃！」
　―！
　そうして、セントラル・スタジアムの天井を埋め尽くすほどに巨大な龍から放たれる灼熱の咆哮。いくら神に歯向かう堕天使といえど、小さき存在の一つを消し去るには有り余る威力。

とても耐えられるモノではないのか、悪魔のような堕天使が為す術もなく砕け散っていった。

「くっ！」

遊良　ＬＰ：１５００→１１００

遊良の場には、他にモンスターは居らず。先ほど蘇った真紅の侍にこのまま直接攻撃をされれば、そこで遊良は一巻の終わりだ。

流石は昨年の猛者か。『烈火』の如き猛攻を見せる彼女に、観客が…いや決闘市中が興奮のボルテージを最高潮まで上げていき、その決着を叫ぶ。

「これで終わり！【真六武衆―シエン】で、ダイレクトアタック！」

迫る刃、猛る雄叫び。

戦乱の世を刀で治めし侍が、エリの命令で遊良へと襲い掛かった。今にも勝敗が着きそうな状況に、観客の大歓声が『重さ』を持って振り落ちてくるものの、それをシエンは意にも介さず。

…ただ、己に歯向かう愚か者に、一筋の刃で切り伏せるために。

「させるか！永続罠、【リビングデッドの呼び声】を発動！墓地の【堕天使テスカトリポカ】を攻撃表示で特殊召喚する！」

しかし、それでも遊良は諦めない。

自分を守るモンスターが居なくなろうとも、寸前まで侍の刃が迫ってこようとも、僅かに残る可能性に、必死になってしがみつく。

例えそれがみっともなくとも、諦めが悪いと哀れられても…『勝つ』ヴィジョンを考えているのは遊良とて同じ。最後の最後まで、『負け』

など受け入れるわけにはいかないのだから。

「無駄だって言ったでしょう！【真六武衆―シエン】の効果発動！【リビングデッドの呼び声】の発動を無効にして破壊するわ！」

「だったらそれを超えればいい！さらにリバースカードオープン！永続罠、【デモンズ・チェーン】！」

「なっ!?」

そうして最後に残った一枚が、シエンを縛って抑え込む。

そう、それはエリも使っていた、敵を封じる悪魔の鎖。攻め焦るエリに、これ以上ないくらいの遊良の防御。

敵の策を無慈悲に燃やし尽くすシエンの焔が消えていき…遊良の場に再び、悪魔のような堕天使が蘇った。

「シエンの効果は無効となり、これで【リビングデッドの呼び声】は有効！蘇れ、【堕天使テスカトリポカ】！」

【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００

「ど、どこまでも粘って…いい加減にしてよ！くそっ…ターンエン…」

「まだだ！そのエンドフェイズに、俺はＬＰを１０００払い、【堕天使テスカトリポカ】の効果を発動！墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！」

「このタイミングで!?少ないＬＰを削ってまで一体何を…」

遊良　ＬＰ：１１００→１００

遊良の行動に驚くように、疑問の声を上げたエリ。

確かに、吹けば消えてしまいそうな遊良の残りＬＰは、まさしく風前の灯火で…そこまでして何を手札に加えようとするのだろうか。

次の自分のターンで、引いたカードを確認してから発動した方が、事故率は少なく確実性があるというのは誰の目にも明らかだと言うのに。

「俺が加えるのは【堕天使イシュタム】！その後、【堕天使の追放】はデッキへ戻る！」
「…ターンエンドよ。」

獅子原　エリ　ＬＰ…３３００
手札…２→０枚
場：【星態龍】
【真六武衆―シエン】
伏せ…なし

「俺のターン！」

そうしてデッキに手をかけて…一瞬止まった遊良のその姿勢は、今まさにドローを行おうとする者の所作。

ＬＰ残り１００、エリと遊良の場の戦力差は一目瞭然であって。

おそらくこの一枚で、勝負が決まるであろうことは、この戦いを見ている誰もが感じていること…当然遊良にもそれはわかっていて。…微かに震える手が、引くことへの覚悟を試しているのだろうか。

―それでも、覚悟は決めてある。

先ほどのエリのターンの最後に削ったＬＰ…それは遊良の覚悟の証。堅実の方に逃げたのでは、絶対にこの獅子原　エリには勝てないと、遊良の心が理解したために。

『引き』に、『頼る』のではない…覚悟を持って『引き寄せる』のだ。それが出来ることを、信じている遊良。自分に仕える堕天使を、信じて、信じて…

観客たちの視線が遊良の手に注目し…

「ドローー！」

―そして…

「…来た！俺は手札の【堕天使イシュタム】の効果発動！引いた【堕天使マスティマ】と共に捨てて２枚ドローー！そして今引いた【トレード・イン】を続けて発動！【堕天使スペルビア】を捨てて２枚ドローー！」

「なっ！なんなのよ!?なんなのよ、その引きは！」

土壇場の戦況で、驚きの目で遊良のドローを見ているエリ。

ＬＰは大幅に差が開いていて、場の戦闘力だってエリが圧倒的に上。シエンが鎖に繋がれていても、ボードアドバンテージ自体はエリに分があるというのに。

それでも、昨年の【決闘祭】を経験している彼女にだって信じられないのだろう。２回目だからこそ、『焦って』いるエリでも何とかデュエルが出来ているというのに…経験の浅い筈の一年生が、この異常な興奮に包まれている【決闘祭】で、こんなデュエルをしてくるなんて。

そう、安全な、確実な…堅実な手を打ってこその勝利だというのに、それに歯向かうようにドローしてデュエルする遊良が、まるで信じられないかのように。

「…よし！魔法カード、【死者蘇生】を発動だ！【堕天使スペルビア】を

攻撃表示で特殊召喚！その効果で、【堕天使マスティマ】も続けて特殊召喚！羽ばたけ、２体の堕天使達よ！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２６００

「レベルもバラバラ…チューナーもなしで融合先もいないっていうのに…」

一瞬で３体の堕天使が揃い、神々しくも背徳的に宙に佇むその姿。
Ｅｘデッキが使えない癖に…『相手を圧倒する怒涛の攻め』を信条とするサウス校に、引けを取らないこの遊良の展開力と攻めの姿勢…ギリギリとはいえ、怒涛の攻めを凌いだという状況を…エリは、信じられない。こんな…こんなデュエルが出来ると言うのに…

―この男に、『Ｅｘ適正が無い』という事実が、まるで信じられない。

「そ、それでも【星態龍】の方が攻撃力は上！このまま押し切って…」
「いや、このターンで決着をつける！コレが最後のカードだ！手札から永続魔法、【一族の結束】を発動！俺の場の堕天使たちの攻撃力が…８００アップする！」

【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００→３６００
【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００→３７００
【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００→３４００

「こ、攻撃力３０００オーバーが３体!?そ、そんなことって…」

持てる力を吐き出して、出来る限りの手を尽くして。背徳心を束ねた堕天使の力は、星をも喰らう巨大な【星態龍】をも超えるのか。

文字通り身を削って、そうして決して諦めない遊良が導いた、最初で最後の『勝利』への道しるべ。

絶対にそれを逃さぬよう、遊良は攻撃を命じた。

「バトル！【堕天使スペルビア】で【星態龍】を攻撃！」

星の核にも似た燃え盛る身体へと、力を増した堕天使が襲い掛かる。いくら星をも喰らう巨大な龍と言えども、堕天使は決して恐れない。

―何せ、彼らは神に歯向かっているのだ。今更こんなモノに、恐れなど抱くはずもない。

―！

その巨体をも超える背徳の力によって、破壊される【星態龍】。無残にもその光景は、星の消滅の爆発にも似ていて…

「お、おばあちゃんのカードが…そんな…」

エリ　ＬＰ：３３００→２８００

祖母から受け継いだ切り札を破壊され、勝つことを信じて疑っていなかった彼女は呆然とそれを見ていた。

祖母のため、負けるわけにはいかなかったと言うのに。このターンの、遊良の引きさえ許さなければ…次のターンで勝っていたのは自分だったと言うのに。

そんな気持ちが沸々とエリの胸中に湧き上がってくるものの、さらに遊良は攻撃の手を緩めない。

―負けられないのは、遊良も同じ。

誰にどんな理由があろうとも、それで遊良が負けていい理由にはならないのだから。

「続けて【堕天使マスティマ】で、【真六武衆―シエン】に攻撃！」

―！

「あぁっ！」

エリ　ＬＰ２８００→１９００

彼女を最初から最後まで守っていた真紅の鎧が、獣の堕天使によって縛られた鎖ごと吹き飛ばされていった。

…一瞬の出来事、怒涛の攻撃で攻め抜く気でいた獅子原　エリの、隙を見逃さないようにした、まさに一瞬の閃光の様。

焦りもあったのだろう。彼女が『勝ち』を逸り、どこか攻めを急いでいたようであっても…それでも微かなチャンスを掴み損ねないようにして。

相手は昨年４位、元プロ選手『烈火』の孫娘。当然、侮ってはいなかったが、恐れてもおらず…師の教え、どうすれば勝てるのかを、『考えて』、『考えて』…そして『考えた』のは、まさしく遊良。

奇しくも、プロに鍛えられた同士…遊良の過去など知る気もない観客達には、その感想を抱くことも許されないが。

―この戦いを見ていた誰もが、思いもよらぬ表情で…驚愕と興奮が

混ざった歓声で、昨年の猛者を歯牙にかけた遊良へと、その盛り上がりをぶつけて…

「これで終わりだ！【堕天使テスカトリポカ】で、ダイレクトアタック！」

―それを背負っても、軽々と舞い上がって手を広げる堕天使に…遊良は、命じる。

「革命の業火！バニッシュ・グリード！」

―！

「きゃあーっ!?」

天と地に…縦横に左右に…十字に放たれた業火が、エリを確かに貫いて…

―そして、鳴る。

―ピー…

デュエルの決着を告げる無機質な機械音。熱気で沸き上がるここセントラル・スタジアムの中でも…それは確かに響き渡り、勝者を讃える音となるのであって。

エリ　ＬＰ：１９００→０（―１７００）

『き、ききき決まったぁー！ななんと！昨年４位の獅子原　エリ選手が２回戦で姿を消してしまうという結果ぁ！大事件だぞこれ

はぁ!!!

ｅｐ２６「決闘祭、熾烈ー歪んだ誇りｖｓ自在なる大蛇」

「ま…負け…た？」

歓声が鳴り止まぬセントラル・スタジアム。

そう、前回の【決闘祭】で４位入賞を果たしたサウス校３年…獅子原　エリの、まさかの２回戦敗退に驚愕の歓声が鳴り止まないのだ。

昨年の猛者に勝ったというのが…一年生だという事も、Ｅｘ適性の無い天城　遊良だということも相まって、盛大な地響きを奏でていた。

「あ、ありがとうございました。」

「…あ…ぅ…」

声にならない呻きを、決して漏らさないようにして。その目から、今にも零れてしまいそうな雫を堪えて。

祖母に誓った勝利が、サウス校の選手としてのプライドが…まさかこんな男に打ち破られることなど、考えてもいなかったエリ。

―！

終わりの挨拶も出来ずに、彼女は一目散にその場から駆け出して行き…すぐさま入退場口へと入って、その姿を消していった。

負けた悔しさにもあるだろう。しかし、それ以上に彼女をこの場から離れさせたのは、デュエルが始まる前から何かと気にしていた『時間』。

「おばあちゃん…おばあちゃんっ！」

そう、彼女の『焦り』の原因は、デュエルが始まる前…控え室で精神統一をしていた獅子原　エリの端末に、突如届いた祖母の『病状悪化』の知らせ。
無論彼女とて、すぐにでも控え室を飛び出して病室へと駆けつけたかっただろう。しかし、それだけは、絶対に出来なかった。

―【決闘祭】を棄権だなんて、【決闘世界】が絶対に許さぬコト。

そうだとしても、普通ならとてもデュエルどころではなかったエリではあったが…それでもデュエルへと臨めたのは、祖母が自分に当てて書いていたエールの手紙を思い出したことと…その中に一緒に入っていた、祖母の【星態竜】のカードがあったから。

だから、なんとしてでも彼女は勝つつもりだったのだ。遊良にだけではない、この【決闘祭】で優勝するという意味で。
だからこそ、今の天城　遊良とのデュエルだって、勝って…『早く』勝って、一刻も早く祖母の下に向かうために逸っていたというのに。

―その『焦り』が彼女の落ち度だったことは、言うまでもない。

当然、負けたことは悔しい…悔しくないはずが無いだろう。ここまで賭けていた優勝の気概が、よもや『あの』天城　遊良に阻まれたことが。
こんな泣き崩れそうな表情で、祖母に会えるはずがない。しかし、それでもエリは祖母の元に向かわないわけには行かなかった。
そんな心に残る負けたことへの不甲斐なさと、祖母への申し訳なさに押しつぶされながら…彼女は急いでセントラル・スタジアムから出て、祖母のいる病院へと駆けていった。

―…

『あれだけの深い負の感情…取り付かせるにはもう十分…いい仕事をした。』
「はイ。」

そんな…誰も、知らぬところで。
何かは、進む。

―…

「うーわ。俺っちの母校がもう全滅かよ。つっまんねーの。獅子原のバアサンの孫ってゆーから期待してたのに。こんなもんとかレベルひっくー。」

セントラル・スタジアム内が一望できる、特別に用意された観覧席の一つで…【白竜】、新堂　琥珀はとてもつまらなさそうにそう言った。
その視線の先には、たった今試合が終わったばかりのスタジアム。悔しさが余ったのか、逃げ去るように走り去っていった獅子原　エリのデュエルを、同じサウス校出身という義理で見てやっていた琥珀。
およそ自分が【決闘祭】に出ていた時のことでも思い出しているのだろうか。
当時から根本的な『モノ』が違っていた彼と比べられた、その当時の学生達が可哀想に思えるものの、それを感じる者など…ここには居ない。
居るのは、王者。他人を下して、下して。遥か高みに上り詰めた者たちのみ。

「つかＥｘ適性無いって言うあの子さー、すげー必死でちょー笑えんね。」

「カッカッカ。トウコの孫くれーに負けてるようじゃあまだまだだからな。」
「おん？天宮寺のジイサン、あれと知り合いなん？」
「…おっと、なんでもねーってんだこのクソガキ。」
「ひどっ！ジイサンひっど！マジでぶっ飛ばすよマジ！」
「ケッ、やってみろってんだ、こんちくしょうめ。」

およそ、この男から聞いた事の無いような…どこか嬉しそうに、しかしいくら弟子とは言え、他人にはあまり触れられたくないコトなのだろうか。暴言で琥珀を退けようとする鷹峰。
それに簡単に乗ってくる琥珀も琥珀なのだが…いくら我が強くて一触即発な王者達といえども、壁を挟んですぐ隣の特別席に『妖怪』、綿貫　景虎が居る手前、本気でやりあうことは無いのだろう。
彼らにとって、暇をもてあました末の単なるじゃれあい。鷹峰の暴言にもすぐに興味を無くしたのか、琥珀はさらに言葉を緩めずに、隣に座っていた紫魔　恋介に絡み始めた。

「ねーねー紫魔っち、この後って誰だっけー…あ、また紫魔の子なんだねん。つーかさー、紫魔家多すぎね？紫魔っちが何か根回しでもしてんの？」
「…いえ、そんなことはありません。出場選手は全て、その学園の理事に一任されています。」
「でもさー、紫魔って全員同じ名字だから誰が誰だかわかんねーつーの。使ってるデッキもみーんな【ＨＥＲＯ】とかさ、個性無さすぎぃ、って感じ？」
「…それも紫魔家のしきたりですので。私にどうこうできる問題ではありません。」
「つまんねー！紫魔ってマジつまんねー！」

遥か昔から、変わらぬ決まりを守る紫魔家。
確かにプロにも紫魔姓の選手は多々いるものの、その全てが【ＨＥ

ＲＯ】を使うことは最早世界の常識。扱う【ＨＥＲＯ】の属性は多種多様なれど…確かに代わり映えしないのは否めないだろうものの…

―『紫魔本家』、古の決まりが全て。

本家の長、融合召喚の王者である【紫魔】と言えども…とても、今更変えられる問題ではない。

「もっとさー、融合っつったって色々あんじゃん？」

「…はぁ、琥珀さん…紫魔家の問題はあなたには関係ないでしょう？あなたの物差しで計るのはやめていただけませんか。」

「あ、そろそろ次始まんね。今日はあと3試合かー。辛いわー、ケツ痛てーわー。」

「…はぁ。本当に人の話を聞かない人ですね。」

恋介に冷ややかな視線を送られていることを意に介さず、どこまでも自分のペースを崩さない琥珀。

この華やかで賑やかな祭典でも、遥か高みに居る王者達にしてみれば、連続的に見せられる学生たちの戦いに、どこか退屈も感じるのだろう。

母校であるサウス校の選手が全て負けてしまった琥珀も、残り一人となったノース校の選手の試合を見る恋介も。

不甲斐ない後輩や一族を見る彼らの目は、この部屋の雰囲気以上に冷ややかなものだった。

「カッカッカ、若けー奴らは威勢がいいねぇ。」

【決闘祭】で戦う選手に向けたのか、それとも他の若い2人の王者に向けたものか…または、その両方か。

その呟かれた鷹峰の言葉に、返事は返ってこなかった。

―…

「…兄さん、いってらっしゃい。」
「おっしゃ！」

第一試合が終わって…少し経た頃。
次の試合のための、スタジアムの準備が整ったのだろう。盛り上がる会場へと続く通路、輝くスタジアムと正反対に暗い通路で…それでも輝く金髪を揺らしながら、ウエスト校３年、竜胆　大蛇は意気揚々と戦いに望もうとしていた。
期待から、昨年よりも強いプレッシャーを乗せてくる観客も、対戦相手である紫魔家の令嬢の気負いすら…この竜胆　大蛇にはまるで応えない。

―全てをすり抜け、全てを捻じ伏せる、まさに『大蛇』

昨年の猛者の一人が、早々に２回戦で消えて行った第一試合。その逆転劇で、大いに盛り上がっているセントラル・スタジアムに発生している、この更なる『重圧』すら…この竜胆　大蛇は心地良さそうな様子を見せているのだから。

「…油断しちゃ駄目よ。いくら紫魔の女でも。」
「わかっとるわ。兄ちゃんに任しとき、かるーく捻って来るさかい。」
「…うん。」

いつものように、のらりくらり。
圧し掛かる重圧も、立ちはだかる壁も、彼はただ…『蛇』のようにすり抜けるだけ。

悠々自適に、その歩みを進めるのみ。

――――――

「…ふん、この犯罪者め…」
「…ソレかて俺らには関係あらへん。ちゅーか俺らかて、お前ら紫魔は気に入らへんのや…いい加減、融合の王者は『竜胆』が貰うで。」
「偽物が…どの口で…」

お互いに秘める『名』への確かな誇り。
遥か昔…それこそ御伽噺として伝わる伝承で、祖先に何があったかなど彼らに知る由は無く…残っているのは、王者の名を一族の物として繁栄を極めた紫魔家と、それ以外の融合使いと言う縮図のみ。
それを、他の融合の名家が黙っているわけも無く…この【決闘祭】の場であっても、それが収まることは無いのか。他の融合使いを偽物と言い放つサクラに対して、大蛇とていい気持ちがしないのは確か。
『第一試合はまさかの結果となりましたが、この第二試合ではいかなる戦いが繰り広げられるのでしょう！ノース校の融合召喚が炸裂するのか、前回の準優勝者が意地を見せるか！』

一人は、紫魔本家に近い者として…
一人は、紫魔に貶められた『名』と、自らの『名』の復興ため…
今、誇りを賭けた戦いが…
『それでは参りましょう！第二回戦、第二試合…かいしぃぃぃぃ！』

―デュエル！

今、始まる。先攻はノース校3年、紫魔　サクラ。
「私のターン、魔法カード、【E―エマージェンシーコール】を発動！デッキから【E・HERO　エアーマン】を手札に加える！そのまま【E・HERO　エアーマン】を召喚！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　３００

サクラの場に現れたのは、大きなファンで空を飛び回る風のＨＥＲＯ。およそ、ＨＥＲＯ使いならば必須のモンスターであり、切り込むように場に呼び出されることの多い戦士。

「召喚成功時、デッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドーミスト】を手札に加えるわ！続いて【融合】を発動し、手札の【Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドー・ミスト】と、水属性の【Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン】を融合！現れなさい！レベル８、【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ】！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ】レベル８
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

続いて、開始早々に融合召喚を決めるサクラ。
極寒を操り、全てを凍らせることの出来る絶対零度を持つ英雄の力は…プロで活躍する紫魔も使っているからか、その強力な効果はあまりにも有名なことであって…
現れて早々に、大蛇の場を凍てつかせんと、堂々と立ちはだかった。

「シャドー・ミストが墓地へ送られたことで、デッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】を手札に加える。そして魔法発動、【融合回収】！墓地の【融合】と【Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドー・ミスト】を手札に戻す！カードを一枚伏せて、ターンエンドよ！」

サクラ　ＬＰ：４０００
手札：５→３枚
場：【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ】
【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】

伏せ：一枚

大型モンスターを序盤から融合召喚し、激しい手札消費もカバーすることを怠らないのは、流石は紫魔家でも上位の人間なのか。
尊大な態度を取ってはいても、油断はしていない様子。伏せカードが一枚だからと言えども、アブソルートＺＥＲＯの存在は相手にとってもまさしく脅威そのもの。
場を離れるだけで、相手モンスターを全て凍結させて砕くその力は、極寒の英雄にこそ相応しい能力と言えるだろう。

「ほぉー、アブソルートＺＥＲＯちゅーことは、お嬢さんは水の紫魔さんちゅーわけやな。中々厄介なモンスターやで。」
「ふん、偽物と話すことなどないわ。」
「…なんやかなぁ、まぁええか。俺のターン、ドロー！」

それでも、極寒の英雄にも全く臆さず。悠々自適とドローをする大蛇とて、流石は前回の準優勝者。
…昨年だって、水紫魔の人間とも戦った彼。そう、前年度の【決闘祭】を最後まで戦い抜いた彼にしてみれば、この程度で立ち止まるはずが無い。
今まで吹き飛ばしてきた紫魔の人間と同じように、サクラも降すべく動き出すだけ。

「行くでぇ！【サイバー・ドラゴン・コア】を召喚！」

【サイバー・ドラゴン・コア】レベル２
ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／１５００

そんな大蛇の場に、文字通り『何か』の核となりそうなモンスターが現れた。
妖しく動くそのうねりは、目の前のＨＥＲＯたちに比べれは弱々し

く感じられるものの…昨年の戦いを覚えている観客達からしてみれば、これから始まる自由自在を今か今かと期待している様。
そう、コレはあくまでコア。この中核が今まさに自由に、いかなる装甲を纏って、どんな機竜に変化してくのか、と。

「コアの効果で、デッキから【サイバネティック・フュージョン・サポート】を手札に加えるで！そして手札から魔法カード、【パワー・ボンド】発動！フィールドの【サイバー・ドラゴン・コア】と手札の【サイバー・ドラゴン】を融合や！」

そうして大蛇が発動した魔法…
それは、通常の融合魔法ではないモノ。
強引な溶接力で機械族を繋ぎ合わせるその魔法は、普通にモンスターを混ぜ合わせるよりも、その力をさらに引き出すことが出来るものの…
その結果として、最後には発動者にもダメージを与える諸刃の剣。
普通ならば、こんな序盤に使うべきモノではなく。逆転への切り札としての立ち位置が強い、一発逆転のカードではあるものの…そんなことは、この竜胆　大蛇には当てはまらない事実であって。
そう、いかなる時も、どんな状況でも。彼は何にも囚われずに、したいように振舞うだけ。

「双頭！猛りあって現れろ！融合召喚！レベル８、【サイバー・ツイン・ドラゴン】！」

―！

この歓声にも負けない程大きな、その二重の咆哮をかき鳴らして、猛々しく現れるは双頭の機竜。
無理やりに上げられた力によって通常の状態よりも荒ぶっているようにも見え、今にも弾けてしまいそうに漏電しているものの、その

力は強大で…二つの頭から放たれる光線を、それぞれ異なった敵へと放つことが出来る存在。
敵対する英雄達を全て吹き飛ばすべく、ここに吼える。
【サイバー・ツイン・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００→５６００　ＤＥＦ／２１００
「ふーん、攻撃力５６００…下民にしては頑張るじゃない。」
「そりゃどうも！でも余裕ぶっこいとる場合やないで？【サイバー・ツイン・ドラゴン】は２回攻撃出来るんや！ワンショットキルかまさせて貰うでぇ！」

そう、攻撃力５６００の二回攻撃。
いくらアブソルートＺＥＲＯの強力な効果があっても、エアーマンから最初に攻撃を加えられれば、サクラのＬＰは跡形も無く吹き飛んでしまう代物、一気に試合が決まってしまうほどの攻撃だ。
初っ端から繰り出される容赦の無い大蛇の攻撃に、ソレを見に来たといわんばかりの観客たちも大いに興奮を盛り上げ…歓声とは違う悲鳴めいた声を上げたのは、昨年、散々大蛇の機竜に吹き飛ばされたことを覚えているノース校の学生達。
まさか、選ばれた紫魔の令嬢でさえも、こんなに早く終わってしまうのではないかという、そんな悲観に満ちた表情をして。
「バトル！【サイバー・ツイン・ドラゴン】で…」
「無駄よ。伏せカードオープン、速攻魔法【マスク・チェンジ】！【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ】を【Ｍ・ＨＥＲＯ】にする！」
「ぬな!?」
しかし、そんなものを簡単に許すはずもなく。
双頭の機竜が今にも咆哮を放とうとした瞬間、サクラの宣言によって、極寒の英雄が天井高く飛び上がった。サクラが発動した速攻魔法

…ＨＥＲＯ達の頭部を守るマスクを、別の力を宿したマスクへと変えるソレは、まさに変幻自在の変身召喚の布石か。
いくら機竜を強化して一掃しにかかった大蛇でも、極寒のＨＥＲＯはそれを意にも介さずに変身を試み…そうして、降りてくる。青き仮面を被る、深海のＨＥＲＯとなって。
…その最後に、極寒の絶対零度を…吼える双頭の機竜へと喰らわせながら。

「マスクチェンジ！現れなさい、レベル６、【Ｍ・ＨＥＲＯ　ヴェイパー】！」

【Ｍ・ＨＥＲＯ　ヴェイパー】レベル６
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２０００

水属性の紫魔がよく扱う戦術。相手モンスターの一掃効果を持つアブソルートＺＥＲＯを同族性のＭ・ＨＥＲＯへと変身させて、相手の手も表情も凍らせんとするこの戦法。
当然、複数の属性を扱う事を許されているサクラも、その戦法は基本的なものであって。

「そしてアブソルートＺＥＲＯが場を離れたため、【サイバー・ツイン・ドラゴン】を破壊する！壊れなさい、偽者の融合め！」

―！

そうして、絶対零度の永久氷壁に閉じ込められた双頭の機竜がその中で盛大に爆発してしまった。
元々漏電するくらい無理に力を引き出したせいか、その爆発は通常の破壊エフェクトよりも大きく、また爆発音すらも歓声に負けないほどの轟きを聞かせてくるのか。
元々アドバンテージを失いやすい融合召喚だというのに、自身のモ

ンスターをあっけなく破壊されてしまった大蛇の心境は、一体どのような物なのだろうか。
『苦々しい顔』でサクラを見ているものの、折角召喚した高攻撃力モンスターをあっけなく破壊され…彼に残るのは、【パワー・ボンド】によるダメージだけ。

「くぅー…や、やるやんけ。」
「残念ね。無駄にダメージを受けて終わりよ。この偽物の融合使いが…さっさとターンエンドなさい！」
「偽物偽物ってさっきからうっさいわ！魔法発動、【サイバー・リペア・プラント】！デッキから【サイバー・ドラゴン】を手札に加えるで！俺はカードを3枚伏せてターンエンドや！…くそう、でも２８００のダメージを受けるで…」

大蛇　ＬＰ：４０００→１２００
手札：6→1枚
場：無し
伏せ：3枚

この序盤で…攻撃されてもいないのに、もうＬＰが半分をきってしまった大蛇。
型にはまらないデュエルを魅せるこの竜胆　大蛇といえど、まるで『勝負を急いだかのような』ミスに、観客席でも思わずざわめきの声が挙がるのは仕方ないことだろう。
そう、観客達の目にも明らかな…大蛇本人が『本当に悔しそうな顔』をしていたからか、誰もそれを疑うことが出来なかったが…まさか、本当に昨年の2位がこんなあっけなく負けてしまうのだろうか、と。
「…ふん、無様ね。みっともない。この程度が昨年の2位なの？…3枚伏せるって言ったって、その内の一枚は現状役に立たない速攻魔法じゃない。そんなもので本当に防げると思ってるのかしら。」

「ぐぬぬ…ば、バレとる…」

伏せカードは多くとも、あくまで冷静にソレを見極めるサクラにはまるで隙が無いようにも見え…昨年の準優勝者らしくないプレイングを魅せられている観客からしたら、盛り下がるなと言うほうが無理な話か。

昨年、散々蹴散らされたノース校の生徒達から発せられる、この野次以外の声は変わらないものの、その他の観客たち…特にウエスト校がいる西ブロックのボリュームが落ちてきてしまっている。

そう、このままでは第一試合と同じように、昨年の活躍選手がまた負けてしまうではないか、と…まるで信じられないモノを見ているかのような雰囲気を見せていたのだから。

それを感じ取ったサクラにしても、まるで『手ごたえの無い』この竜胆　大蛇が、昨年の2位である事実からも、己の実力の高さを自分の中で再確認しているよう。

「いい気味だわ。昨年のレベルがコレだったら、私の優勝はもう確実じゃないの。行くわよ、私のターン、ドロー！」

そうして嬉々としてカードを引いて、すでに勝利を確信した様子のサクラ。今の彼女の心境は、最早『偽物』と罵っていた大蛇の事は見ていないのか。

とは言え、今のこの場を見ればそれも当たり前だろう。場を見れば戦力差は歴然、紫魔家とそれ以外だというのに…同じ融合使いと数えられていることが彼女にとっては何よりもの侮辱なコト。

観客のほとんども、デュエルが始まる前までは竜胆　大蛇の活躍見たさに沸いていたようであったし、どこまでも紫魔家のプライドを逆撫でしてくるこの【決闘祭】と言う場に、最早ストレスしか感じていない振る舞いを見せる。

「全く、どいつもこいつもわかっていないわ。紫魔家以外は全て偽物

！見せ付けてあげるわ、融合召喚は紫魔家の物なのだと！行くわよ、【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】を召喚！その効果で、デッキから【融合】を手札に加える！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】レベル４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１８００

そうして彼女が召喚した、燃える鎧のＨＥＲＯ。召喚時に【融合】を手札に加えられるこの効果は、まさに融合召喚の名家を謳う紫魔にちょうど合っている効果であって。

―誰も、何も。全く理解していない。

融合召喚は紫魔家の物、紫魔家こそこの世界で最も優れた一族。なぜそれを他の人間達は理解していないのだろうか、と。

本家になまじ近いばかりか、その誇りが『本来』あるべき思想から外れた歪んだモノだとは、彼女は考えもせずに…いや、遥かな時がたった現在では、それを理解している者の方が少ないことを知れずに。

「私を水紫魔かって言っていたわね…見せてあげるわ！この私がどの紫魔よりも優れていることを！」
「な、何をする気や!?」

たった今手札に加えたばかりの【融合】を手に取り、発動しようとしているサクラ。

きっと観客の誰もが…目の前のこの男でさえ驚くであろう事実を…今、見せ付けてやるために。

下層の紫魔とは、存在からして違う立場なのだと分からせてやるため…自分が、選ばれた特別な存在だと、愉悦に浸って。

「【融合】発動！手札の【Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドー・ミスト】と場の【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】を融合！融合召喚！【Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ２１００

そして、何の前触れも無くいきなり起こった、その巨大な火柱の中から現れるは炎のＨＥＲＯ。
場に、異なる属性の融合ＨＥＲＯが現れるという、学生レベルでは見られないこの光景にノース校の興奮が大いに高まり、また他の観客達もその事実に素直に驚いている様子を見せ始め…

ざわざわと、揺らめく会場。

そう…何せ、プロで活躍している紫魔姓の選手ならばまだしも…今年が初出場の紫魔が、まさか複数の属性を操ってくるなんて。
去年だって見られなかったその光景は、大蛇にだって驚きなのか。驚愕の声を漏らした。

「なにい!?プロでも無いのに２属性やて!?」
「いい声ね！でもまだよ！シャドー・ミストが墓地へ送られたことで、【Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン】を手札に加える。さらに【融合】発動！手札の【Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン】と場の【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を融合！融合召喚！レベル８、【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

続いてスタジアム内に、何故か沸き起こった竜巻。その中から旋風のＨＥＲＯが、荒々しく吹き荒ぶソレを引き裂くようにして現れた。
周囲の歓声と自分のデュエルに酔いしれているかのようなサクラの気分は向上していき、また偽物と罵った大蛇が驚きの声を上げていることも、それを増す要因となっている。

「ちょお!?三種類扱うなんて聞いたことないで!?」
「もっとよ！もっと喚きなさい、この下民が！さらに【ミラクル・フュージョン】を発動、墓地の【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】と【Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン】を除外して、融合召喚！現れなさい、レベル６、【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

――！

そして最後には地属性まで。
次ぎ次ぎに、休み無く。いたる物から現れるＨＥＲＯ達が…『普通』ならば同じ場に揃うことがない英雄たちが一堂に。

その異常な光景に、見ている誰もが信じられない。

そう、全属性を操ることが許されている【紫魔】以外に、ここまで複数の属性を操る紫魔が居ただろうかと…瞬間的に驚愕的に、沈黙がスタジアムを包んだものの、ソレは一瞬で崩壊して即座に興奮と歓喜の声に包まれ始めた。

それは、対戦している大蛇とて同じようであって…

「そ…そんな…アホな…４つの属性扱うやなんて…【紫魔】以外で…んなアホな…」

「どう？これが私の力！他の誰にも真似できない、私だけに許された力よ！」

「お…俺が馬鹿やった…こ、こんな奴に偉そうにしてたやなんて…今までの紫魔と…実力が全然ちゃうやんけ…」

去年も、そしてそれ以前からも。

彼が蹴散らして、吹き飛ばして、勝ち続けてきたほかの紫魔達と比べても、その『実力の違い』は…たった今、肌を合わせて戦っている大蛇だからこそ感じる確かなモノ。

そしてその大蛇の言葉に、彼女も大いに満足したのか。恐れをなして自分の立場を思い知らせた偽者の融合使いに、特別な自分がトドメを刺さんと…

場に並ぶ４体のＨＥＲＯたちに、サクラは攻撃を命じ始める。

「今さら分かっても、もう遅いのよ偽物め！行くわよ！バトル！」

ー先ずは、一体目から

大蛇のＬＰは先ほどの自ダメージで大きく減っており、これで終わりになるはず。もし何かしらで耐えたとしても、他にも３体ものモンスターがいる自分が負けるはずがない。

その様にサクラは確信しているのだろう。猛る彼女の叫び声は、すでに勝負が決していると言わんばかりの轟きとなりて…

ーそう

その結末を、彼女は確信していたからこそ…

「…え?なんで!?何で動かないの!?ちょっと!バトルよ!バトルだってば!」

何故かサクラの命令を聞かず、構えもしない英雄達。
大蛇に攻撃を仕掛けようとしないＨＥＲＯたちは、その場を微動だにしないままであり…
また、主人の宣言を聞いていないかのようなＨＥＲＯたちの佇まいに、サクラも意味がわからず驚愕の表情を見せていて。
そして、何が起こっているのかわかっていないサクラを見て…

―先ほどの、『うろたえていた顔』が嘘のように。

サクラの正面に立っていた大蛇は、どこか『つかみどころの無い笑顔』になっていた。

「…なーんてなぁ。」

そう、デュエルディスクの故障などありえなく、何の理由も無くモンスターは命令を無視などしない。
また、サクラのＨＥＲＯが言う事を聞かない理由は、ＨＥＲＯの影に隠れたサクラには見えにくいモノなのだろうが…周囲で見ている他の観客たちからすれば、一目瞭然かつ明々白々。

―まだ、サクラのメインフェイズは終わってはいない。

「メインフェイズ終了時に罠カード、【威嚇する咆哮】を発動や！このターン、お嬢さんは攻撃宣言できへんで！」
「なっ…そ、そんな悪あがきを…」

そう、サクラがバトルフェイズに移る前に、大蛇の場では堂々と一枚の罠カードが発動されていたのだ。
それは、モンスターではなくプレイヤーに効果が及ぶ罠。フリーチェーンで発動出来る防御札で、一体どころではない…全てのモンスターの攻撃を封じる威嚇の声。
大蛇の先ほどまでの『焦り』は、一体なんだったのだろうかと疑いすら抱くだろう。それほどまでに、先程とはまるで別人のような…どこまでも『余裕を醸し出している』大蛇。
しかし、自分の力を疑わないサクラは、たった一ターン猶予が出来ただけと…大蛇の余裕をまるで意に介していない様子にも見える。押しているのは自分なのだと言い聞かせるように…それが彼の掌の上だったということに気がつかぬまま…
大蛇のその表情の度重なる変化が、一体『何』を意味しているかを理解しようともせずに、そのターンを終えた。

「くそっ、ターンエンド。運がいい奴ね…」

サクラ　ＬＰ：４０００
手札：４→０
場：【Ｍ・ＨＥＲＯ　ヴェイパー】
【Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター】
【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ】
【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】

「俺のターン、ドロー。…なぁお嬢さん、あんた、何や偉そうに色々言

うとるけど…まだまだやなぁ、デッキに振り回されとる。」
「なっ!?に、偽物の分際でこの私に!偽物にこれ以上何が出来るって言うのよ!実力の違いを認めたんじゃなかったの!?」
「さっきから偽物偽物って、お嬢さん同じことしか言えへんのかい。ちゅーか…確かに実力は段違いやよ?…去年の紫魔の方がもっと強かったさかい。」
「はぁぁぁあ!?今なんて言った!?こ、この私が!ほ、他の紫魔に劣っているとでも言いたいの!?」

その中で、静かに口を開いた大蛇。
突きつけるように放たれたソレは、サクラと直に肌を合わせて感じた彼であったからこその言葉。
先ほどまで『うろたえていた』様に見えていた大蛇の言葉など、サクラとて飲み込めるはずも無いのだろう
…最初は威勢がよく…続いては焦ってうろたえていて…そして今は、どこまでも落ち着いたような声で。そんな『変化』し続ける彼の本当の声が、いったいどれなのかを彼女に判断することは難しいことは間違いない。
しかし、ただ一つ。誰の心にも刷り込まれている確実なコトがある。
そう、昨年の準優勝者という肩書きは…決してサクラが言ったような軽いものではない、ということだ。

少なくとも、根本的な実力自体が違うことを、その雰囲気だけで伝えてくる今の大蛇。それに気がつきもしないサクラなど、最初から彼の相手にすら…ならないのだから。

「この私には４つも属性が…」
「属性だけ多くても全く扱いきれてへん!これなら一つの属性に秀でた他の紫魔の方が、突き詰めてくる分もっと強かったわ!」

大蛇の言葉を必死に否定しようとサクラが声を荒げるものの、それを許さぬ大蛇の遮り。

…自分の扱える属性の多さに、愉悦を感じて。

調子に乗って、ただ違いを見せ付けるためだけに次々に融合召喚した彼女と比べれば…『水紫魔』や『風紫魔』と言った、その属性しか許されていないからこその、戦術の『突き詰め』が…

―サクラには、足りていなかった。

それを、先ほどの攻防で既に見切っている大蛇。確かに並のデュエリストでは、『紫魔の常識』に囚われてサクラの展開に驚愕の顔を見せるのだろうが…

それでも、竜胆　大蛇は慄かない。

「ぐ…ぐぐぅ…わ、分かったような口を聞いて…偽物のくせにぃ…犯罪者の竜胆の癖にぃ…ア、アンタなんかにこの場をひっくり返せるわけないでしょ！」

それでも、彼女には納得など出来なかった。そう、選ばれた自分の…他の紫魔より上位に立つこの自分の、どこが劣っていると言うのか。紫魔の事など何も知らないこの男の言葉など、全く持って聞き入れてたまるかと、そう思っているのだろう。

それに、場の戦力差は歴然。いくらこの男が大型融合モンスターを出そうと画策しているのだとしても、あの手札からではこの戦況を一発でひっくり返せる物などではしない…と。

何せ、この男は『竜胆』…

遥か昔に、原初の英雄に忠誠を誓って力を与えられた紫魔の下僕であり…

世界最悪の犯罪者を輩出した家だと、そう思っていたから。

だからこそ、サクラは知らない…いや、知ろうともしていなかっただろう。この竜胆　大蛇が、一体『何』と呼ばれているのか。

―全てをすり抜け、全てを捻じ伏せる…まさに、『大蛇』

「出来るんやなぁ、それが！行くで！永続罠、【ＤＮＡ改造手術】を発動や！場のモンスターを全て機械族にする！」

「なっ!?」

与えられた力に振り回され、自分の力を過信している紫魔など…最初から相手ではなかったかのように、伏せていた罠を発動させる大蛇。

その効果と大蛇の宣言によって、サクラの場に揃っている４属性の英雄達が、勇猛なる戦士から造り物の機械へとその体を変えられていく。

「だ、だから何だって言うの！種族を変えたからって出来ることなんか…」

しかし、あれだけ威勢のいいことを言った割には、種族を変えた程度が何になると言うのだろうか…そんなサクラの声がその口から小さく漏れていたものの、大蛇の思惑を考えもしないその思考では、最早その言葉は彼の神経を逆撫ですることすら叶わないのか。

サクラのどの喚きにも、大蛇は反応しない。

―そう、悠々自適に、意気揚々に。

まるでこうなることが最初から決まっていたかのように、大蛇は動

き出すのだから。

「相手の場にのみモンスターがいる場合、手札から【サイバー・ドラゴン】を特殊召喚！」

【サイバー・ドラゴン】レベル５
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１６００

大蛇の場に現れるそれは、彼が扱うどの機竜たちからしても、まさに進化の出発点となる機竜。
ゆえに、いつの頃からか、こう呼ばれ始めたモノ。

―始まりの機竜。

「そ、素材も融合魔法も無いのに…い、いまさらそんなモンスターを…」
「別に魔法使うだけが融合やあらへんで！お互いのフィールド上の機械族を全て墓地へ送ることで、このモンスターはＥｘデッキから特殊召喚できる！俺は全ての機械族を墓地へ！」

大蛇の宣言によって、融合魔法も無しに上空に現れた神秘の渦へと、場の機械族が吸い込まれていく。それは、普通ならば見ることが叶わぬ光景。
なにせ、融合召喚とは基本的に、魔法効果によって執り行われるモノである。しかし今目の前で起こっているソレは…確かな融合召喚に違いなく、また決して抗えぬものであって。

「そ、そんな!?私のモンスターまで!?」

自分が召喚した４属性のＨＥＲＯ達まで吸い込まれていく事実が、より一層サクラの心を抉るのか。

彼女とて思いもよらなかったのだろう。サクラが絶望交じりの声を出すと同時に…

「要塞！出でませ！融合召喚！レベル８、【キメラテック・フォートレス・ドラゴン】！」

―！

神秘の渦が光り輝き、這い出るようにして出てくる要塞の機竜。妖しく蠢くソレは、融合体であるにもかかわらず…媒体だけあればどこからでも現れる奇異なる存在。

神出鬼没、出没自在。

目の前の少女を嘲笑うかのように、ソレは現れた。

【キメラテック・フォートレス・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

「どや！形勢逆転！」
「な、何よ！こ、攻撃力０のモンスターの癖に、あんな偉そうに…」
「あかんあかん、攻撃力０を舐めてちゃあかんでぇ！【キメラテック・フォートレス・ドラゴン】の元々の攻撃力は、素材の数×１０００となる！よって攻撃力は…」
【キメラテック・フォートレス・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／　０→５０００
「こ、攻撃力…５０００？」

そう、吸い込んだ機械は、全てこの要塞の機竜を構成する部品となる。
まさに、全てが思惑通り。
挑発に『乗って』いたのも、『うろたえて』いたのも…全て思い知らせるため。扱う属性が実力だと思い込んでいる、この世間知らずのお嬢様に、現実を突きつけるため。
攻撃もせず、直接除去するような魔法や罠を使ってもいないのに…自分のＨＥＲＯ達を逆に利用され、敵のモンスターの力をわざわざ上げたという事実が、ひしひしと彼女に圧し掛かった。
「う、嘘よ嘘よ嘘よ！あんたみたいな偽物に！４つ許されているこの私が…」
「そう、これで仕舞いや！バトル！【キメラテック・フォートレス・ドラゴン】で、お嬢さんにダイレクトアタック！」
―！
「あぁーっ！」
紫魔　サクラ　ＬＰ：４０００→０（―１０００）
―ピー…
まさに、一瞬の攻防。サクラがあれだけ揃えた英雄達を、一瞬で消し去って…まるで、すり抜ける様にして、竜胆　大蛇が捻じ伏せただけ。
会場内に、無機質な機械音が鳴り響いて。
終わってみれば、大蛇が圧倒的な実力差を見せ付けたというデュエル…それは、これを見ていた誰もが感じていて、サクラも呆然とその場に崩れ落ちていた。

「あ…この私が…な…なんで負けなくちゃいけないのよ…」
「なんでも何も、コレが現実や。まっ、根本の実力からして違ったんやし、こうなるのも当たり前やで。」
「なっ!?だ、だって最初は私が押して…」

確かに見せ付けるためとは言え、無理やりに多種多様なＨＥＲＯを融合召喚したのは彼女だが…それでも、納得がいかない様子のサクラ。

しかし、そのまま声を荒げようとして立ち上がるも、向かい側に立っている大蛇が、未だ理解できないサクラに対して、まるで哀れんだ目をしていたのが見えたのだろう。

すぐに、その意味を感じ取った様子を見せて…

「あ…わ、わざと…追い込まれたフリを…」
「まぁな、いくら気に入らへん紫魔やーちゅーても、ノース校もお嬢さんで最後やし。少しくらい見せ場無いと可哀想やろ?すぐに終わったら盛り上がらへんやんけ。」
「あ…あぁ…」

そう、最初から大蛇の思惑通り。一々サクラの挑発に乗ったのも、追い込まれたフリをしたのも、すべて彼の演技。

…そんなもの、この竜胆　大蛇というデュエリストの本質の『ほんの一端』に過ぎないが。彼が何を考えているのか。彼が何を思っているのか。

誰も、彼の本当の思惑を見抜ける者など、居はしない。

「ほな、さいなら。」
「あぁーっ!」

最初から掌の上で踊らされていたことを、負けてから知る。
与えられた力を誇って。紫魔以外の融合使いは偽物だと教えられてきて。そんな彼女にとって、今のデュエルがどれだけの屈辱か。
そんな泣き崩れるサクラのことなど、まるで意にも介さずに…もう興味をなくしたように、大蛇はその場を去っていった。

―…

「サ…サクラ…お前…なんてことを…」
「父様…う…グスッ…」

歪んだ誇りを捻じり折られ、最初から相手にされていなかった。そんな意気消沈しているサクラが何とか引き下がってきたところに、詰め寄ってきたのは彼女の父、ノース校理事長である紫魔　幹春。
怒りではない、恐怖に塗れた顔をして。
彼にとって最後の希望だった娘が…４つも属性を許されているサクラが…敗北するなんて。その娘を特別視し、一人だけ選抜戦を免除して出場させたことが、まさかこんな結果になるなんて、と。
その幹春の後ろには、黒服を来た大柄の男が３人。そう、昨年の失敗から何も学んでいないと思われる幹春に…処罰を下すため。

「…さて、では幹春様。今後の進退を決めに行きましょうか…当主様は現在、【紫魔】としてここを離れられませんが…他の本家の方々がお待ちです。では、こちらへ…。」
「い、いやだ…いやだいやだいやだぁ―！サクラァ―！助けてくれぇ―！」
「あ…と、父様…」

引きずられていく父を、力なき目で見ているしかないサクラ。その

父の断末魔を、何も出来なかった自分は見ているしか出来ないと、無意識に理解して。
涙を流しながら立っているだけの彼女の頭の中では、もう何も考えられず。
竜胆　大蛇への悔しさと、負けたことからの逃避と…父を助けられなかった後悔がグルグルと駆け回り…まるで今にも倒れてしまいそう。

…当然、その足元から昇ってきた黒い靄には、反応も出来るはずがなく。

―瞬時に、飲み込まれる。

「…ホホ。ですから言ったでしょう。『おこぼれ』程度では、決勝に上がれるはずもない、と。」
「おいヒイラギ、いいのかよ。サクラ様にまでこんな…」
「そうだぜ…もしこんな事がバレたら…」

そして、暗い通路の暗闇から現れた、紫魔　ヒイラギと…一回戦で負けたノース校の紫魔　亜蓮と紫魔　大治郎。
後ろに控える彼らがそう言うものの…その彼らとて、されるがままに飲み込まれて、目の光を消された上位の紫魔に恐ろしくなったのか。
そんなことなど気にも留めず、何の躊躇も無くサクラを飲み込んだヒイラギは、指につけた黒い宝石を撫でながら言葉を投げるだけだが。

「あら、今更何を怖気付いているのかしら。亜蓮、大治郎、負けたあなた達はプランBでしょう?さっさと行ってくださらない?」
「ぐ…まだ残っているからって偉そうに…」
「お前も早く負けてこっちに加われよな。」

「ホホホ、そっちは任せましたわよ。」

誰が、何を。

起こっている事は、未だ…深い闇。

――…

「【ＤＮＡ改造手術】に、【キメラテック・フォートレス・ドラゴン】…だって？」

入退場口へと繋がる暗い通路で、この戦いの一部始終を見ていた遊良が焦ったような声を出した。

そう…この戦いの勝者が、次の自分の当たる相手。トーナメント表からそれを知っていたからこそ、少しでも近くで食い入るようにデュエルを見ていた遊良だったのだが…ウエスト校３年、竜胆　大蛇のデュエルで、去年は出していなかった戦法…その思いもよらぬ危機を感じ取ったために。

「ま、まずい…俺のモンスターまで融合素材にされたら…」

それは、経験こそ無いが…確信があるからこその焦り。

イースト校の代表選抜戦でも、遊良がＥｘモンスターのコントロールを一時的に奪っただけで堕天使たちの怒りを買ったこと。

間接的にＥｘモンスターと関わるだけでコレなのだ。もしこれで、堕天使たちがＥｘモンスターの糧にでもされたら…

「竜胆　大蛇…ヤバイぞこれ…」

自分の罪に貫かれ血を吐き、立つこともままならぬほどの痛みが

襲ってくる。
あの時はルキの声で何とか持ちこたえられたが、規模が桁違いのセントラル・スタジアムでは、その微かな声も届かないだろう。
―倒れでもしたら、そこで終わり。
デュエルが続行不可能になってしまえば、その場で棄権とみなされてしまうことは必至。それだけは、絶対に阻止しなければならないことだ。
それに、一回戦も二回戦も。まるで本気では無い彼の姿から否応にも感じる、その不気味さ。
相手を手玉に取って、思うが侭にデュエルを進めるのは、『相当の実力』を持っていないと出来ない芸当だというのに、その実力がそれほどのものなのか…遊良でさえ全く感じ取れない。
「つーか鷹矢が当たってたら、あのバカ絶対に負けてたじゃんか…」
何の因果か、偶然逆ブロックに入った鷹矢は幸運だったのだろうか。
機械族を主体にして戦う鷹矢が、もし竜胆　大蛇と当たっていたら…何も出来ずに負けていたのではないかと言う様子が、簡単に目に浮かぶ遊良。
しかし、だからと言って遊良が当たって良かったと言うわけでは絶対にない。
そもそもの実力…昨年の【決闘祭】準優勝者の肩書きから感じるモノとしては、この竜胆　大蛇に感じた印象が、遊良にとってもありえないモノであって…
「…何だ…全く底が見えない。あんな相手は初めてだ…」
心のどこかから沸く、そのえもいわれぬ不快感に耐え…遊良は明日

の戦いへと気持ちを繋いでいた。

――……

ｅｐ２７「決闘祭、過熱ー鉄壁の決闘者ｖｓ儚き捕食者」

「待て、大蛇。」

重々しく、そしてとても強い意思が込められた言葉が、暗い通路に放たれた。その言葉の主は…前年度【決闘祭】優勝者、ウエスト校３年の十文字　哲。

そう、たった今終了した第二回戦・第二試合…歓声に沸くスタジアムから暗い通路へと戻ってきた同じウエスト校３年、竜胆　大蛇へと声をかけたからに他ならないのだが…

その言葉は、彼の黒く短い髪型と同じで、どこまでも厳しく…たった今試合を終えたばかりの友へと向ける言葉にしては、些か不釣合いな雰囲気を纏っているだろう。

しかし、並の学生では足が竦んでしまいそうな…そんな重い言葉を投げつけられたと言うのに、当の大蛇の態度はどこまでも軽く、また哲相手に全く気後れしていないように声を返す。

「ん？おー、てっちゃん。何か用？」

「お前、いつまであんなデュエルをする気だ。」

「うわぁ、『あんな』て…てっちゃんも酷いわぁ。勝ちは勝ちやん。確かにちょっと最初の手札危なかったけどもな。」

「そういう意味ではない。」

「じゃああの演出か？観客も盛りあがっとったからええやんけ。」

「そういう意味でもない。」

どこか、噛み合わない会話…それは、大蛇が意図的に会話をずらしていることは一目瞭然であって。

何故なら、大蛇の『表情』はどこかそっぽを向くように…

…いや、それが大蛇の本心からの『演技』かどうかなど、本人以外

にはわからないのだからその考察も意味の無いモノか。
その金髪で隠すように…他人にその心内を探らせぬ演技力、確かな実力を持っているのにそれを悟らせぬ奥底の深さ。彼の唯一の妹である竜胆　ミズチでさえ、ときに兄の本心を見失うことがあるというのだから、およそ他人には決して分かるはずもない彼の心。

―とは言えそんなことは、十文字　哲には関係の無いことなのだが。

「いつまで『あんなデュエル』を続ける気だ。」

再び同じ台詞を…『あんなデュエル』という言葉を、強調して発した哲。その言葉の重みは、大蛇がいくらすり抜けようとも隙間が無いのか。

「むぅー…」

―逃げられず、捕まる。

そう、昨年に大蛇がギリギリで届かなかった相手である哲だからこそ、大蛇を捕まえることが出来るのはきっとこの十文字　哲だけなのだろう。
別に、長い付き合いではない。高等部に入学して、そこで知り合っただけの浅い仲。しかしお互いが、近年稀に見る程の…それこそ並のプロと比べても『相当に高い実力』を持っていたからこそ、デュエルで分かり合えた二人。

…そんな哲相手には、大蛇とて逃げられない。哲の言葉で、その雰囲気で…無理やりに、引き出される。

「…てっちゃんには関係あらへんやろ。これは『竜胆』の問題や…紫魔

家は許さへん。それだけや。」
「相手の女、折れていたぞ。」
「そんなん、あのお嬢さんが弱かっただけやん。去年の紫魔はもっと手ごたえあったさかい。弱かったから負けた…それが『ここ』やろ？」
「それでも、折っていい理由にはならない。」
「だーかーら！てっちゃんには関係あらへん！俺もミズチちゃんも、紫魔と争そわないかん理由があるんや！ほっといてくれや！」

誰にも、戦うべき理由がある。それが、偶々彼ら『竜胆』においては紫魔家だった。だからと言って大蛇のデュエル自体に落ち度は無いだろう。先ほど彼と戦った紫魔　サクラだって、一回戦でミズチと戦った紫魔　大治郎だって…『紫魔』という誇りを過大に膨らませて、そして竜胆兄妹を見下してかかって来ていたのだ。
それを、紫魔達は打ち砕かれた。ただ、それだけなのだから。

「関係ある。友が茨の道へ行くのを止めるために。」
「うわ、てっちゃんクサいで。そんなクサいセリフよく言えるわ。」
「そうか。」

きっと、プロになるだろう二人。ソレが現実味を帯びているほどに、他の学生たちとはそもそものレベルからして異なる実力を持っている彼ら。

竜騰虎闘、おそらく全決闘学園の中でも、最もデュエリスト達の実力の『質』が高く拮抗しているウエスト校においてさえも…双璧と呼べるべき、抜きん出た存在の二人。文字通り、他の学生達とは次元が一つ違う実力の彼ら。

その異質な雰囲気に加われる学生など、昨年3位の、『誰よりも広い心』を持つイースト校の泉　蒼人だけしか思い浮かばないほどに、この場の雰囲気は重々しいモノに変わっていた。

その中で言葉を発せられるのも、『彼ら』だからこそ。

…十文字　哲と普通に話している竜胆　大蛇だって、傍から見れば異常なのだ。

…竜胆　大蛇を逃がさない十文字　哲だって、他人からすれば異常なのだ。

そんな彼らが醸し出す異質な空間…その空気の中にいることがまるで心地よさそうに、再び大蛇は口を開く。

「てっちゃん…俺の事、友達やと思っとるんやったら、わかってくれや。」

「大蛇。『いつまで』あんなデュエルを続ける気だ。」

「決まっとるやん…【紫魔】を倒すまでや。」

三度、同じ言葉を発する哲。

しかし、最後のその言葉で強調された部分は異なるモノ。戦う理由、目的への覚悟。それは、この世界で戦う誰もが持つ決意であり、それぞれが異なる理由を持っていて。

哲とて、大蛇の『名』に賭ける思いは感じている。

だからこそ全力で、友を止めるのだろう。その力を持って、自ら茨の道へと飛び込もうとしているこの『強敵』を…永遠の『友』と認めているから。

「俺を倒せないのなら、それは無理なことだ。」

「…それはどうやろな。今年こそ優勝は貰うで?」

—絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト

—全てをすり抜け、全てを捻じ伏せる、まさに『大蛇』

その異名が示すとおりの振る舞いで、目的の高みへと突き進まんと

する彼らもまた…譲れぬ決意を持っていた。

―…

「うむ、やはりここの弁当は美味い。このローストビーフも絶品だな遊良！」

「…なんで俺の弁当まで食ってんだよ。」

竜胆　大蛇との戦いを見終わって、いざ昼食を取ろうと自分の控え室に戻ってきた遊良は、その部屋で起こっている光景に呆れていた。

そう、自分の控え室の弁当だけでは足りず、腹の足しを求めて遊良の控え室に入って弁当を食い漁っていた鷹矢に、どうにも溜息しかでてこないのは仕方のないことであって。

先ほど試合が終わった遊良ならばまだしも…試合がまだ残っている鷹矢が、こんなにも緊張感が無くていいものなのだろうか…と。

「む？腹が減ったからに決まっているだろう。何を言っているんだお前は。」

「『何言ってんだ』はこっちの台詞だ！俺の飯食ってんじゃねー！」

「お前が俺の晩飯を抜いたからだろう！俺は腹が減ったんだ！」

暖簾に腕押し、糠に釘。鷹矢の主成分でも大部分を占めるこの『食欲』をむやみに刺激すると、こうなってしまうだろうという予測は、もちろん遊良だって想定していたことだ。

だからこそ、勝手に遊良の昼食を食った鷹矢にも、本気で怒るということは無いのだが…それでもこの【決闘祭】と言う場であっても、本当に好き放題に生きる鷹矢に対して、一抹の不安を感じてきてしまう遊良。

まぁ、これから試合だというのに、空腹のまま向かわせればどんな

ミスを犯すか分かったものじゃないことくらい、遊良も理解できているが。

「はぁ…こんな事だろうと思ってたからカップ麺持ってきてあるけどよ…他の人に迷惑かけるんじゃねーぞ。いくらなんでも他の選手の弁当まで食ってたら流石に庇いきれ…」

「安心しろ、俺だって他人の飯を盗み食いせん。精々お前かルキのだけだ。」

「いや、それでも大概じゃねーか。…中等部の時にルキのプリン食って殺されかけたの忘れたのか？」

「…忘れてなどいない。だからルキのデザートにだけは未だに手をだせんのだ。」

過去、鷹矢の食い意地から発展した大惨事…それを今思い出しても、その時喰らった痛みが蘇ってくるのか。珍しく鷹矢が食べているその手を止めるものの…これでは緊張感もへったくれもないことに、遊良もつい忘れてしまっている様子。

遊良は本日の試合が終わった緩み、鷹矢は空腹ゆえの緩み。

他の出場選手と比べてもまだ若い彼らに、それを咎めるのは酷なことか。

今この時、別の暗い通路で『攻防』を繰り広げている3年生の十文字　哲と竜胆　大蛇の雰囲気と比べても…まだまだこの1年生二人は『若い』、若すぎる。

それは、彼らがこれから…自分自身で感じ取って、そうして『知って』、変えていかなければいけない事なのだから。

「でも次の試合は絶対に見とけよ。次にお前が勝てたら、その試合の勝った方と戦るんだからさ。」

「うむ。」

「つか、今は紫魔先輩との試合の事を考えなきゃいけない時間だけどな。」

「大丈夫だ、問題ない、俺は負けん。」
「油断すんなってことだよ。」
「うむ。」

どこまでも不敵に振舞う鷹矢の、その自信の裏には…確かな実力が伴っていることは知っている遊良。
だからこそ、鷹矢の2回戦の心配をしているわけではないのだが…相手は紫魔家、油断だけは禁物。それだけは絶対にさせないように、鷹矢に言い聞かせるように、遊良は言い聞かせていた。

―…

『皆さま！午前中の二試合はいかがでしたでしょうか！』
【決闘祭】2日目の、試合の半分が過ぎて。昼休憩と称した自由時間を終えた決闘市に鳴り響いた、午後の試合を告げる実況。
その実況の声に、このセントラル・スタジアムに詰め掛けている観客達がレスポンスを返し…午前中の試合で見せた興奮を思い出させるかのように、彼らもまた『音』を響かせる。

―そう、昨年の猛者が、『あの』天城　遊良に敗れ去ると言う一大事件を巻き起こした『第一試合』

―前代未聞、学生の身分でまさかの4属性を扱ってきた紫魔家の令嬢が、それ以上の圧倒的実力差で降される結果となった『第二試合』

そのどれもが、決闘市が盛り上がるに足りる興奮を生み出しており…また、この後に続く第三試合と第四試合も、午前中の試合に劣らぬ予感を感じさせていたのだから。

『波乱が起きた第一試合！力の差を見せ付けられた第二試合！そのどれもが【決闘祭】に相応しいデュエルだったこと間違いなし！しかし、それだけでは終わらない！皆さまも分かっているでしょう！第三試合に出てくる選手が、一体誰なのかを！』

――――――

ウエスト校の中でも、嫌と言うほど見せ付けられてきたのだから。

…昨年の【決闘祭】優勝者、その有り余る力を発散させに…

絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト、ここに降臨。

―…

「…哲さん。」
「なんだ。」
「…さっきは、兄さんがごめんなさい。」

向かい合って…戦いに望む前に、まずは謝罪を述べたミズチ。
ソレは、先ほどの哲と大蛇の『攻防』に対しての…兄の比に対しての言葉に間違いないだろう。
しかし、兄と哲が何を話して話していたのかなど、控え室で昼食を取りながら待っていたミズチが知るはずは無いのだが…彼女の持つ『何か』を見通す目が、ソレを感じ取ったからか。
だからこそ、彼女は述べずにはいられなかったのだろう。いくら兄の数少ない友人である哲といえど…迷惑をかけたのならば、それを謝るのは妹である自分の務めだと、そう理解しているから。
そんなミズチの、その言葉を聞いてもなお…哲は全く気にしていないように言った。

「気にするな。慣れている。」
「…うん、ありがと。」

哲の返答を聞いて、どこかホッとしたような顔を見せるミズチ。その白い髪が地響きで微かに揺れているものの、その揺れにも負けないほどに、今の彼女の心は安定していた。
そう、今まで…それこそ、紫魔と小競り合ったり、その他の人間とぶつかったりしてして『敵』の多かった兄を、ここまで理解してくれた人間は居なかった。
…だからこそミズチは嬉しい。兄に負けない才能と実力、そして何事にも動じない不屈の精神を持つ十文字　哲が、兄の友人になってくれてよかった…と。

「…でも、デュエルは別…今日は、哲さんに勝ちたい…兄さんと同じ景色を、私も見たいから。」
「いいだろう、かかってこい。」

無駄な言葉は発さない、哲の少ない口数。弱き者は並べない、哲の強い雰囲気。
それを感じ取ってもなお、ミズチとて気後れはしていなかった。何故なら…彼女の兄が、唯一『素』を見せる瞬間が、この十文字　哲とのデュエルをしている時なのだ。
妹であるミズチでさえ、時にその本心を見失う兄、竜胆　大蛇…そんな兄が見ている、この相手との戦いの景色を、自分も見るために。

―友を止めるため、兄に近づくための戦いが…

『それではぁ！【決闘祭】第二回戦、第三試合ぃ！かいしぃぃぃぃー！』

―デュエル！

ここに、始まる。先行はウエスト校３年、十文字　哲。

「俺のターン。【武神―ヤマト】を召喚。」

【武神―ヤマト】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　２００

開始早々、哲が召喚したのは、遥か昔に神として扱われていた存在。
妖しく光り輝く体はどこか神々しいものの、天界を追われたこの武神は、かつての力を失っている。
しかし、そんなモンスターなれど…目の前でそれを見るミズチの表情は…いや、全ての観客たちの目は、微塵も見下す目などしていなかった。そう、その登場に会場内も大きくざわめきを響かせて、まるで待っていたと言わんばかりに。
なぜなら、このモンスターが哲のスタートとなるべき存在であり、決して侮ることをしてはいけないと知っているから。
失われし武神の力が其の身に戻った時、其の真意が発揮されること…昨年の優勝者の、その力が発揮されることは、決闘市中が既に理解していることなのだから。

「俺はカードを２枚伏せ、このエンドフェイズに【武神―ヤマト】の効果発動。デッキから【武神器―ヘツカ】を手札に加え、今加えた【武神器―ヘツカ】をそのまま墓地へ送る。ターンエンドだ。」

十文字　哲　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：【武神―ヤマト】
伏せ：２枚

「…私のターン、ドロー。」

そんなざわめく会場の雰囲気の中で、静かにカードを引くミズチ。
まるで隙のない立ち上がりと、観客たちの多大なる重圧を受け止めてもなお涼しい顔をして立っているこの十文字　哲の実力は、もちろん彼女も身を持って理解していることであって。
ウエスト校の中でも、彼と互角の勝負が出来るデュエリストなど…彼女の兄である竜胆　大蛇を除いて、誰も居ない。

「…私は【捕食植物（プレデター・プランツ）オフリス・スコーピオ】を召喚。」

【捕食植物オフリス・スコーピオ】レベル３
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／　８００

それでも、他の学生たちと比べても次元が一つ違う哲相手に、恐れを抱かずに戦う彼女。それは…兄と、同じ目的を持つ彼女だからこそ。兄の見ている景色を感じ、兄と並びたいがために。
他人には儚く映るミズチの姿、しかしそれを感じさせないほどに彼女の心は強く…気怠るげな立ち振る舞いは、デュエルのときには違った姿となるのか。
そう、届かない相手と分かっていても、彼女の戦う『理由』に則って…逃げずに戦うだけだ。

「…召喚成功時、効果発動。手札のモンスター一体を墓地へ送って、デッキから【捕食植物ダーリング・コブラ】を守備表示で特殊召喚。」

【捕食植物ダーリング・コブラ】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１５００

「…ダーリング・コブラの効果発動。デュエル中に１度だけ、【捕食植

物】の効果で特殊召喚に成功したため、私はデッキから【融合】を手札に加える。そのまま【融合】を発動。場の【捕食植物ダーリング・コブラ】と【捕食植物オフリス・スコーピオ】を融合し、レベル7、【捕食植物キメラフレシア】を融合召喚。」

―！

【捕食植物キメラフレシア】レベル7
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

ミズチの場に現れるは、凶暴化した毒花の一房。
禍々しく蠢くソレは、敵を『飲み込む』ことも出来るし、敵を『捻じり切る』ことも出来る、まさに捕食者。
様子見などしている場合でないことを、ミズチとて心の底から理解しているだろう。ならば、持てる力を全力で、哲へとぶつけるのみ。

「…キメラフレシアの効果発動。レベル４の【武神―ヤマト】を除外する。」
「ならば、俺は墓地の【武神器―ヘツカ】を除外して効果発動。【武神】が効果の対象になった時、ヘツカを除外することで【捕食植物キメラフレシア】の効果を無効にする。」

そうしてキメラフレシアが哲の場の武神を、獲物を消化する花弁の奥底へと吸い込むために…まさしく『飲み込み』にかかった。
しかし、即座に。そんなことを哲が簡単に許すわけはないだろう。哲の墓地から現れた亀の武神器が、其の姿を鏡へと変えてソレを跳ね返す。

―武神器

神話に生きる武神たちの、刃・鎧となるそれらの武具。その武具た

ちもまた、八百万の神のように生き…主のために力を発揮するモノ。

「…知ってた。装備魔法、【捕食接ぎ木（プレデター・グラフト）】発動。さっき墓地に送った【捕食植物サンデウ・キンジー】を蘇生する。サンデウ・キンジーは融合魔法無しで融合召喚出来るから、私は場の【捕食植物サンデウ・キンジー】と手札の【捕食植物セラセニアント】を融合。２体目の【捕食植物キメラフレシア】を融合召喚。」

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

それを知っていてもなお、諦めずに融合召喚で畳み掛けようとしているミズチ。

そう、哲相手に長期戦は禁物。まだエクシーズモンスターが出ていないこの内に、哲のキーカードである【武神―ヤマト】を早く処理しなければ…勝つ気概以前に、何もさせてもらえないだろうから。

自分のレベル以下のモンスターを除外する効果を持つキメラフレシアの効果だって、エクシーズの適正を持つ十文字　哲に通用するのはこの序盤だけ。

「…２体目のキメラフレシアの効果発動。【武神―ヤマト】を除外する。」

―だから、逸る。

なんとしてでも、『鋼鉄』のデュエリストに傷を入れるために。

―それでも…

「無駄だ。永続罠発動、【デモンズ・チェーン】。キメラフレシアの効果

を無効に。」
「…むー、やっぱり止めるんだ。」

キメラフレシアの効果を、簡単に届かせてくれるほど…十文字　哲は甘くない。
不撓不屈。
何人ものデュエリストが束になってかかっても…全て受け止め、全く動じず真正面から捻じ伏せる『強さ』は、まさに安定の重厚。その分厚い壁を突き破るには、一体どれだけの力を発しなければいけないのか。
…ただ『見て』、そして『考える』だけでは絶対にソレはわからない。

それを感じるためには、直接向かっていくしかないのだ。

「…じゃあバトル。1体目の【捕食植物キメラフレシア】で、【武神―ヤマト】に攻撃…攻撃宣言時、キメラフレシアの効果発動。ヤマトの攻撃力を１０００下げ、キメラフレシアの攻撃力を１０００上げる。」

妖しくうねる毒花の一房が、武神が立つ大地から養分を吸い取って。
その茎、蔓、花弁までをもみるみる太くし…養分の抜けた大地に立つ武神は逆に、己の力まで大地と共に吸い取られてその輝きを淡くしてしまう。
元々の攻撃力は２５００なれど、攻撃力４５００までのモンスターと単体で勝負できるキメラフレシアの攻撃は、ミズチの攻撃宣言と共にその荒振りをより一層強くして。

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００→３５００

【武神―ヤマト】レベル４

ＡＴＫ／１８００→８００

今まさに沸き起こらんとする強い衝撃に対して、ヤマトが身構えた…

―その時だった。

「ダメージ計算時、手札の【武神器―ハバキリ】の効果発動。ハバキリを手札から墓地へ送り、ヤマトの攻撃力を元々の倍にする。」

【武神―ヤマト】レベル４
ＡＴＫ／　８００→３６００

哲の宣言と共に、彼の手札から飛び立った武具の一器。天空で一度翻り、その鳥の姿を剣へと変化させて…ヤマトの手の中へと収まるソレはまさしく神剣の一振りか。

ヤマトが武神帝と呼ばれていた、全盛期の力には及ばない物の…主の奪われた力を元に戻すだけでなく、さらにその力を倍増させる。

「迎え撃て。『神代三剣（かみよさんけん）・天羽々斬（あめのはばきり）』。」

―！

太く長く伸びたキメラフレシアの茎も蔓も、その花弁すらも細切れに切り裂く武神の一閃。

かつて八岐の首持つ化け蛇すら、一首残らず切り裂いたと言われるその太刀筋は、現代に再現されても全く見劣りしていないほどに鋭く…暴れる毒花を見事に砕けさせた。

そして、こうなることもミズチには分かっていたのだろう。彼女の

この程度の攻撃で、簡単に哲に傷をつけられるとは思っていなかっただろうから。

「…やっぱり、それも持ってたのね。」

竜胆　ミズチ　ＬＰ：４０００→３９００

「…バトルフェイズは終了。【融合回収】を発動して、墓地の【融合】と【捕食植物セラセニアント】を手札に戻す。カードを１枚伏せて、ターンエンド。」

竜胆　ミズチ　ＬＰ：４０００→３９００
手札：６→２枚
場：【捕食植物キメラフレシア】（デモンズ・チェーン）
伏せ：１枚

「俺のターン、ドロー。」

ターンが一巡し、重々しくカードを引いた哲。
２度に渡るミズチの『飲み込み』を押さえつけ…著しく変動する攻撃力による、激しい攻防すら当然の様に彼は切り伏せた。その戦いを見ている観客の目は、この目まぐるしい状況の変化を見逃さないようにして見開かれているし、少しの戦況も見逃さない様に息を呑んで釘付け。
とても…見ているほうも気が抜けないデュエルに、一瞬遅れてその歓声を爆発させるものの…その声の中でも、静かにミズチは宣言を忘れないが。

「…そのスタンバイフェイズ。前のターンに墓地に送られた、キメラフレシアの効果発動。デッキから【再融合】を手札に加える。」
「いいだろう。ならばメインフェイズだ。俺は【武神器―ムラクモ】を

召喚。そして、レベル４の【武神―ヤマト】と【武神器―ムラクモ】の２体でオーバーレイ。」

しかし哲も、そんなミズチの宣言を意に介さず。

哲の声に連動して、光の筋となる２体のモンスターが…哲の前方に現れた、まるで宇宙の一欠片のような渦へと吸い込まれていく。

そう、エクシーズ召喚のためのエフェクト。レベルを持たぬモンスターを生み出す召喚。およそ、決闘学園の全学生の中で最も強いエクシーズ使いと謳われている十文字　哲の、最も好んで使うというモンスターが…

今、ここに。

「天界より出でし戦神、下界の闇を切り伏せろ。エクシーズ召喚。剣現せよ、ランク４、【武神帝―スサノヲ】」

―！

そうして顕現…いや剣現しようと天から降りてくるのは、かつての力を取り戻した【武神―ヤマト】の本来の『名』。

羽持つ鎧、二振りの神剣、その身を守るは鏡の神器。

他の神々の陰謀によって下界に落とされたが故に知った、薄汚れた天界の穢れを斬るために。武の神々に戦いを挑む、彼もまた武神。

「…出た。哲さんのエース。」

「ミズチ、差を広げさせて貰うぞ。」

「…それは嫌。カウンター罠、【ポリノシス】発動。キメラフレシアをリリースして、スサノヲのエクシーズ召喚を無効にして破壊する。」

…しかし、哲のエースと知っていて…その剣現を簡単に許すほど、ミズチの腕は低くは無いだろう。

スロースターターである哲でも、このターンに畳み掛けてくること

は想定内、だからこそ張っていた罠。即座にエクシーズ召喚を無効にして、哲のエースを無に帰すために。
古の武神がその足を地に着ける前に…花粉の嵐に巻き込まれて砕け散っていった。
「そうか。ならば次だ。【強欲で貪欲な壷】を発動。デッキから１０枚裏側で除外し、デッキから2枚ドロー。墓地の【武神器―ハバキリ】を除外し、手札から【武神―ヒルメ】を特殊召喚。」
【武神―ヒルメ】レベル４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１０００
それでも、怯まず。
自身のエースが簡単に終わってしまったと言うのに、全く恥じず、落ち込みもせず。不屈の心を持つ哲からすれば…エースに信頼を寄せても、全てを賭けて頼りきることはしないのだろう。
そんなことで一々落ち込むことほど哲の心が弱いはずないし、落ち込んでいる暇も無いのだから。
武神達の中でも最上位に位置するという、女型の武神を携えて…畳み掛けるように攻撃を仕掛ける。
「バトルだ。【武神―ヒルメ】でダイレクトアタック。」
「…ダメ。直接攻撃宣言時、手札の【捕食植物セラセニアント】の効果発動。セラセニアントを守備表示で特殊召喚。」
【捕食植物セラセニアント】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　６００
それでも、ミズチとて諦めているわけではない。
相手モンスターに噛み付く小さな草蟻を、哲の攻撃を防ぐために特殊召喚するその手は…高い実力を持つ哲を、より近くで見てきた彼女

だからこそ出せた防御札。
小さき体であっても、相手モンスターを道連れにも出来るし、後続を呼ぶことも出来るこの草蟻に、哲とて即座に手を止めた。
「なるほど、厄介なモンスターだ。防御を怠らないとは腕を上げたな、ミズチ。」
「…うん。」
「バトルは中止する。ターンエンドだ。」

十文字　哲　ＬＰ：４０００
手札：２→１枚
場：【武神―ヒルメ】
魔法・罠：伏せ１枚
　　デモンズ・チェーン（効果なし）

「…私のターン、ドロー。このスタンバイフェイズ、リリースしたキメラフレシアの効果で、デッキから２枚目の【再融合】を手札に加える。そして装備魔法、【再融合】発動。ＬＰを８００払って、墓地からキメラフレシアを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。」

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

ミズチ　ＬＰ：３９００→３１００

「…キメラフレシアの効果発動。【武神―ヒルメ】を除外。」

何度でも、繰り返す。この十文字　哲に、３度目となる毒花の『飲み込み』を試みるミズチ。
その諦めない心が幸をなしたのか、先ほどまで躱されていた効果が、やっと哲の武神を『飲み込み』…そして無残に消化していく光景

は、遥かに届かない相手だと思っていた哲の、その後姿を捉えたのだろうか。
その儚い表情にも、微かに高揚が見られ始め…この好機を逃さないために、ミズチは動く。
「…チャンス。２枚目の【再融合】を発動。またＬＰを８００払って、さっきとは違うキメラフレシアを蘇生…そして【融合】発動。キメラフレシアとセラセニアントを融合…融合召喚、現れて、レベル８…【捕食植物ドラゴスタペリア】。」

―！

彼女の場に現れるのは、卑しくうねる茨の体、敵を突き刺す棘の爪を持った…まるで竜を模したかのような植物。
次々に融合召喚を決めて、どうしてもこのターンで決着をつけたいのだろう。実力の違う相手に勝機を見出すには、僅かな隙に全力で突き進むしかないことを、ミズチは理解しているからこそ。
がら空きになった哲に、自分の持てる最大の攻め込みを行うためだ。

【捕食植物ドラゴスタペリア】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１９００

ミズチ　ＬＰ；３１００→２３００

「…セラセニアントの効果で、デッキから【捕食接ぎ木】を手札に…そしてバトル、【捕食植物ドラゴスタペリア】でダイレクトアタック。」
そうして茨の体の植物竜が、奇奇怪怪な声を放ちながら飛翔する。その赤く濁った目で見据えて狙いを定めているのは、主の前に大きな壁となって立ちふさがる男を串刺しにするためか。

耳を劈く咆哮を放ちながら滑空し、後続に控える毒花もソレに感化されて蠢いて…

早くなる鼓動を感じながら、ミズチは哲を見据えていた…

見据えていたのだが…

「まだだな、ミズチ。攻撃宣言時に罠カード、【神風のバリア―エア・フォース―】を発動。」

「…あ。」

「お前の2体のモンスターを手札に戻す。ＥｘモンスターはＥｘデッキへ。」

彼女がいくら策を張り巡らせ、何とか見つけた隙に全力で攻め込んでも…それを簡単に受け止めてなお涼しい顔で佇む、この十文字　哲と言う男。

昨年、そして今年の【決闘祭】の、他の選手たちと比べても…目を見張るような展開力は、哲には無い。

そう、展開力は、ミズチが上。モンスターの攻撃力だってミズチの融合モンスター達の方が高く、戦いを見ている観客達からしても、終始押していたのはミズチに映るはずだと言うのに…

それでも、届かない。

「…むー…さすが哲さん。全然喰らってくれない。」

そう呟いたミズチの言葉は、この広いセントラル・スタジアムの中では絶対に響かず。

また、観客の誰にも届くようなモノではなかったのだが…このデュエルの攻防の、一部始終をその目に焼き付けている観客達の脳裏に

は、哲のある異名が浮かび上がってきていたことに間違いないだろう。

昨年度【決闘祭】優勝者、ウエスト校３年の十文字　哲が、一体何と呼ばれているのかを。

―絶対防御、『鋼鉄』の　デュエリスト。

ＬＰが、削れない。

「…装備魔法【捕食接ぎ木】発動。セラセニアントを守備表示で特殊召喚…私はこれでターンエンド。」

竜胆　ミズチ　ＬＰ：３９００→２３００
手札：３→１枚
場：【捕食植物セラセニアント】
伏せ：無し

先ほども防御に使った草蟻を、壁とするべく召喚したミズチ。このモンスターに対して、哲が先ほど攻撃をやめたことに僅かな期待を繋げたのだろうか。

敵モンスターを道連れにでき、耐えた後に後続を繋ぐことの出来る優秀なモンスターに、まだ希望をつなげようとして。

「俺のターン。ドロー。」

それでも、およそこの戦いを見ている誰もが…今対戦しているミズチですら、無意識に理解できたことがあった。

―このターンで、決着となる。それも、哲の勝利で。

―そう、堂々とカードを引いた哲の姿があまりにも…勝者と呼ぶに相応しいほどに、あまりにも様になっていたのだから。

「魔法発動、【武神降臨】。墓地の【武神―ヤマト】と、除外されている【武神―ヒルメ】の2体を特殊召喚する。」

【武神―ヤマト】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　２００

【武神―ヒルメ】レベル４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１０００

「いくぞ、2体の獣戦士族モンスターでオーバーレイ。」

先ほどは止めた哲のエクシーズ召喚も、もうミズチには止める術は残っていない。残っているのは、小さな草蟻。不屈の男を相手にするには、どこか頼りない彼女の防ぎ。

そして神々しく、輝いて。まるで燃えている鎧を纏って現れるソレ。

降臨せしは、天界に歯向かう武神帝の一体。

「現れろ。ランク４、【武神帝―カグツチ】」

―！

紅き焔をその背後に、対照的な蒼き姿をその身に…ここに降臨する。

【武神帝―カグツチ】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
「墓地の【武神器―ムラクモ】の効果発動。メインフェイズにこのカードを除外し、【捕食植物セラセニアント】を破壊。切り裂け、『神代三剣、天叢雲剣（あめのむらくも）』。」

続いて哲の墓地から飛び出したのは、獣の姿に身を変えた神剣の一振り。
その哲が放った一振りの剣によって、ミズチの場に残った防ぎの草蟻が切り裂かれていき…いくら次のターンのために後続を準備しようとも、もう時既に遅し。

次のターンなど、巡ってこないことは…もうミズチにだってわかっているのだから。

「…やっぱり、哲さんに勝てなかった。セラセニアントの効果で、デッキから【捕食接ぎ木】を手札に…もう遅いね。」
「あぁ、これで終わりだ。【武神帝―カグツチ】でダイレクトアタック。」

―！

「…うぅ。」

竜胆　ミズチ　ＬＰ：２３００→０（―２００）

―ピー…

『試合しゅうりょぉぉぉぉ！見よ！コレが強者の貫禄！一回戦でノース校の紫魔相手に、圧倒的な勝利を見せ付けた竜胆　ミズチ選手を相

手にしても！微塵もダメージを受けずに勝利を収めるこの姿！』

観客たちの大いなる盛り上がりを、更に沸き上がらせる実況の声。

力の差を見せつけて、堂々たる勝利を掴むその姿は…誰よりも輝いていて、それでいて誰よりも落ち着いていて。

見ている誰もに、その存在を印象付ける彼の戦いは、決して色褪せることなど無いかのように。

『【決闘祭】第二回戦、第三試合い！勝ったのは！ウエスト校３年、十文字！哲選手ぅー！』

―…―

「…はぁ。また哲さんに負けた。」

試合が終了し、やや重い足取りで暗い通路へと戻ってきた竜胆　ミズチ。

実力の差は分かっていた事とは言え、敗北したからかその表情はどこか重く…最初から負ける気で戦ってなどいなかったのだからソレも当然か。

とは言え、いつまでも敗北をずるずると引きずることも無い彼女だからか、思いつめた様にはならずにその場を後にしようと歩き始めようとした…

その時だった。

「…ねぇ、そこに居る２人、コレあなたたちの？」

今まさに一歩踏み出そうとしたミズチがその足を浮かせて止め、その足を一歩後ろへと引いて立つ。
そう、何故なら彼女が踏み抜こうとした床には、ピンポイントで黒い靄が漂っており…そして彼女の目がそれを『見た』からに他ならない。
そんなミズチの視線の先には誰も居らず。だだ暗い通路が続いているだけだというのに、まるでソコに誰かが居るかのごとく、彼女はソコへと話しかける。

「…なんで俺たちが見えてんだコイツ？」
「知らねぇよ…話が違うじゃねぇか。」

突如。
そんな、何もない通路の空間から沸き起こった黒い靄の中から、現れた2人の男。
紫魔　亜蓮
紫魔　大治郎
ヒイラギに、『プランB』と命じられていたノース校代表だった3年生だ。そんな彼らは、まるで信じられないといった表情でミズチを見ていた。
そんな腑抜けた顔をして驚いている2人の男に、ミズチは淡々と言い放つ。

「…だって、そこに居るの見えてたもの…ニヤニヤして私の足元見てたし、気持ち悪かったから。」
「なっ!?」
「…き、気持ち悪い…」

女生徒に気持ち悪いと言われたのがショックなのか。まぁ、年頃の男子生徒が見目麗しい女生徒から無下に突き放されては、そうなるの

も当たり前だろうが。
しかし、彼らが今気にするべきはソコではない。命じられている目的を遂行しなければいけないことを、彼らも忘れてはいない…待ち伏せて仕掛けた罠がダメなら、次に取る手を行うのみ。

男のうちの一人がその懐から、『靄』を固めたような鈍い輝きを放つ黒い球を取り出すが…

「…っておい、この女…」
「あぁ、たった今負けたばかりだってのに、負の感情がないじゃねぇか。」
「これじゃあ、どっちみち罠仕掛けても意味なかったんじゃ…」
「そうだな…やべぇぞ。」

その球を見て、何かを相談している様子の亜蓮と大治郎。
『見られた』ことも、『球』の事も、まるで想定外の事態が起こったかの様な振る舞いを見せて。
およそ、こうなることを考えていなかったのだろう。慌てふためき始め、最後の手段しかないことをその脳裏に浮かべて…

「…やるしかない…のか？」

先ほどミズチが見た、ニヤニヤしていた表情から一転し。今はやや強張らせたような表情を見せてデュエルディスクを構え、デッキをセットする紫魔　亜蓮。
そう、手を汚さずに済むと思っていた最初の手段が意味を成さないことを知って…コレを取り付かせるには、デュエルで負かすしかないと、彼らはそう聞かされているからだ。
亜蓮が、隣にいる大治郎にも手を貸すように促し、ミズチを見据えた。

「…2人でかかってくるの？…別にいいけど。」

しかし、それを全く意に介さず。ミズチは淡々と目の前の男2人を、儚げな目で見ているだけだ。

そう、およそ2人がかりで向かってこられても、彼女には負ける気がしないのだろう。

なにせ、片方の男は一回戦で圧倒しているし、もう片方の構えている男だって、彼女の兄に瞬殺されている。

手もバレていて、実力もバレている。そんな相手が2人で来ても、ミズチにとっては問題ないと、そう言わんばかりに。

「…わるい、俺無理だ。」

「ちょ！大治郎！」

「だって俺ら2人で勝てると思うか？」

「いや命令だし…」

「ここで揉めて大事になったら、消されるのは俺らだぜ？…いったん引くぞ。」

「…くそっ、この女…偽物の癖に…」

そう言って、彼らも置かれた状況が理解できたのだろう。

ミズチに向かっていくようなことはせず、その場を後にするべく黒い靄を出現させると、その中へと足を入れて姿を消した。

まるで、瞬間移動。傍から見ても完璧な姿の消し方に、きっと他の人間がこの場に居たら大騒ぎになったであろうことは間違いないような光景を見せて。

…ミズチの目には、姿を消した気になってふてぶてしく歩いていく2人の男の姿が、はっきりと『見え』ていたのだが。

「…ホント、紫魔って迷惑。」

静かに、そう呟いたミズチの声は…
暗い通路に吸い込まれていくだけだった。

―…

ｅｐ２８「決闘祭、不穏ー我が道ｖｓ策略の大地」

「よし、では行ってくるか。」

暗い通路で最後の準備を終えたイースト校1年、天宮寺　鷹矢は、デュエルディスクを展開させながら自分の名前が呼ばれる時を待っていた。

盛り上がりが最高潮に達しているスタジアムの裏。

先ほどの第二回戦・第三試合、昨年優勝者である十文字　哲が、貫禄の勝利を見せ付けた結果となったウエスト校同士の対決が先ほど終了し…その圧巻のデュエルに沸き続ける会場の雰囲気を感じていても、なお緊張は彼には無く。

「いいか、油断は絶対にするんじゃないぞ。お前は昔っから焦るとつまんないミスするんだか…」

「わかっている。そんなに心配するな遊良。俺が負けるはず無いだろう？」

意気揚々。

昨日の晩御飯抜きのダメージは、2人前の弁当を平らげたおかげで回復している様子だし、控え室を出る直前までデッキの確認をしていたから戦う気持ちも削がれていない様子。

それに鷹矢のその自信とて、彼の才能と築いてきた錬磨ゆえのモノ。

確かに相手は融合召喚の名家の令嬢…とは言え鷹矢もエクシーズ召喚の名家、天宮寺一族の一人にして、彼の【黒翼】の孫であり弟子の一人なのだ。

彼にとって、ここで負けるイメージなど微塵も沸かないのだろう。いくら相手が同じイースト校の選手で、いくら紫魔家の令嬢であっても。

「いやその自信が信用ならねーんだって。」

「む、それは心外だ。」
「少しは相手を観察しろよ。紫魔先輩のデュエル、学園で一回も見てないんだからさ。」

しかし、どこまでも楽観的な振る舞いを見せる鷹矢に対して、遊良に心配をするなと言うほうが無理な話か。
紫魔　ヒイラギ…昨年はわざと押さえていたのかと思えるくらいに、その成績は目立っておらず。
デュエルを研究しようにも、不気味なくらいにデータが少なかったこと。イースト校での代表選抜戦でも、その戦いは見せず仕舞いになってしまっていることから、どうしても遊良の警戒心が勝ってしまっているのだ。

「とりあえず…地属性の紫魔だってことはわかっているけど…後は何をしてくるのかわからないし、どんな戦法でくるのかが問題だよな…」
「うむ。わからん相手を警戒しても始まらんという事だな。だったら俺はいつも通りにやる、それでいい。」
「違げーよ！警戒しろって言ってんだ！…はぁ、何で俺の方が色々考えてるんだよ。」
「今日の晩飯のメニューについてか？」
「紫魔先輩についてだよ！お前が考えることだろうが！」
「今日こそハンバーグをだな…」
「うるせぇ！負けたらまた飯抜きにするからな！」
「ぬぅ…」

いくら遊良が心配をかけても、本当にいつも通りの鷹矢。
このふてぶてしさも、ここまでくると逆に立派なステータスと勘違いしそうになるものの…あくまでソレはこの【決闘祭】にかける思いの低さを露呈しているだけとも取れる。
ココにいる全員が、何かしらの思いを抱いて戦っていて…その思い

が強ければ強いほど、土壇場で何が起こるのかは誰にも分からないというのに。

「ふん、お前が先に準決勝に進んだんだ。俺が進めぬわけがない。」

しかし、それでも彼がここまで振る舞えるのには、その才能以外にも理由がある。

そう、彼の【決闘祭】にかける思いが低いなど、誰も言っていないのだから。

「ここで負けるなど、お前に負けを認めたようなものだ。俺は絶対にお前には負けん。つまり俺はこんなところで負けん、そうだろう？」

「いや、何なんだよその理論は。」

「天宮寺式、高等計算術だ。」

「…は？お前が…計算？天宮寺式…なんだって？」

「…失言だ。忘れろ。」

戦いに臨む鷹矢の理由、それは一重に遊良との戦いのため。それも、ただ普通に戦うのではなく…大舞台で、大観衆で、大歓声で。ただ純粋に、幼い頃の約束を。

そこへ向かって戦うだけ。

…彼の失言は置いておいても。ともかく、今に始まる戦いに気負いしていない分、普段通りの戦いを行えることには違いないだろう。

心配はある。それでも、確かにこの男が負けるイメージが沸かないことを感じながらも…遊良は戦いに臨む自分の『片割れ』を、冷ややかな目ではあるが静かに見ていた。

――…

「それで…おめおめと引き下がって来たと言うことですのね。」
鷹矢と遊良がいる通路の、丁度反対側。暗い通路で一人佇んでいるヒイラギが、何もない空間に向かって声をかけていた。
いや、何も無くはない。
暗い通路よりも黒い靄が微かに漂い、その中に薄っすらと見える一人の男が、ヒイラギに向かい合って話し合って…話し合いというよりは、一方的にヒイラギに言いくるめられているようにも見える。
「ぐ…し、仕方ないだろ…俺たち二人だけじゃ…」
「それで、竜胆　ミズチは今どこに？」
「亜蓮が見張っているけど…あいつ、隠れてる俺たちが見えてるみたいだったから中々近づけないんだよ…今は自分の控え室だ。兄の方は十文字と一緒みたいだぜ。」
先ほど、思わぬ障害によって計画を遂行できなかった彼ら2人。
その進展をヒイラギに伝えているようなのだが…これから試合に臨む彼女に泣き付くようにしてココに来ている紫魔　大治郎を、彼女とてどうにも情けなく思えてしまうのだろうか。
溜息混じりに、ヒイラギは整った顔の小さな口から、その声を漏らした。
「はぁ、そうですか、わかりましたわ。とりあえず、この試合が終わってからどうするかを決めましょう。本当に、不甲斐ない男たちですわね。」
「くそっ、さっさとお前も『プランB』に加われよ。一人だけ残りやがって気にくわねぇ。」
「ホホ、考えておきますわ。」
そう言って大治郎がその場を後にしたのか、その気配を消して。
何か目的を持っている紫魔達、その真意は未だ明らかではない。し

かし、着実に進んでいく状況は果たして誰にとってのモノなのか。

「…では行きますか…本当に面倒ですわね。」

黒い指輪を一撫でし、ゆっくりとスタジアムへと視線を戻すヒイラギ。

地属性の紫魔を統べる『地紫魔』の令嬢である彼女も…向かい側の通路に見える、同じイースト校の天宮寺　鷹矢と比べても、全く気負いしていないのは同じな様子。

「ホホホ…」

果たしてそれが自信から来るものなのか、それとも別の要因があるのか。

あくまで、堂々と。

彼女も、その歩を進め始めた。

―――――――

第三試合と同じく、同校同士の戦い。そして、両者が【王者】に関係する『名』を持っているという、まさに整えられた展開。

イースト校1年、天宮寺　鷹矢
ＶＳ
イースト校2年、紫魔　ヒイラギ

これで、彼らが盛り上がるなと言うほうが無理な話だろう。入ってきた2人の選手を歓声が包み、今からの戦いに期待を乗せる。

「あれ？そういえばあの1年生ってジイサンの孫だっけ。やっぱ似てんね。」
「あぁん？どこが似てるってんだ。俺の方が男前だろうが。」
「いやいや、ちょーそっくりじゃん。」
「カッカッカ、あんなクソガキと一緒にすんじゃねーっての。」
「つーかもう一人ってまた紫魔じゃん。ねーねー、紫魔っちはあの子のこと知ってんの？」
「えぇ。もちろんよく知っています。」

無論、スタジアムが一望できる特別展望席にいる王者たちとて、その話題を出すのは当然か。
しかし、だからと言って【黒翼】と【紫魔】、彼らの目は、およそ身内の闘いを見守る目ではない様にも見える。
昨年と同様に、不甲斐ない結果しか残せなかったノース校…いや、紫魔姓の人間に対して、呆れているような目をした恋介。孫という肩書きなど関係なく、この決闘祭において初めから己の教え子達の戦いの過程を、厳しい目で見極めている鷹峰。
その視線は、盛り上がる観客達の期待の視線に混ざっても、戦いに臨む2人の学生を確かに見据えていた。

「さて、では始めますか。」
「うむ。」

そんな中で、スタジアムで向かい合った選手二人の雰囲気は…無駄な会話は挟まない、別に見知った仲では無いのだし、そもそもお互いに興味は無いと、そう言っているかのよう。

―だからこそ、淡々と。全く気負い無く戦えるのか。

既に展開されているデュエルディスクがデュエルモードへと切り替わり、それを確認した実況の声が再度響き渡ると…

『戦いの準備が整いました！それでは張り切ってまいりましょう！【決闘祭】第二回戦、第四試合い！かいしいいいいー！』

―デュエル！

そして、始まる。先攻はイースト校1年、天宮寺　鷹矢。

「俺のターン、【ブリキンギョ】を召喚。その効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚。グリーンの効果で【レッド・ガジェット】を手札に加える。」

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

開始早々、早くも場に2体のモンスターを揃えた鷹矢。
お得意のガジェットモンスターを扱い、後続を切らすことなく戦えるこの歯車達の安定性は観客達もよく知っていることだろう。

手札消費も少なく、展開力と安定性に優れたこのモンスター達の弱点を挙げるのならば、強いて言えば打点が低いことなのだが…場に揃った同レベルのモンスターを見れば、彼が早々にエクシーズ召喚を決めてくることは想像できる。

―天宮寺　鷹矢、【黒翼】の孫。

そんな彼に込める期待を、観客達も抑えきれない。一回戦でも、サウス校の３年生相手に圧巻の勝利を見せた彼なのだからこそ、余計に。

「行くぞ、俺は２体の機械族でオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ギアギガントＸ】！」

―！

【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

そうして鷹矢が召喚したのは、彼にとってのスタートとなる歯車の機械巨人。多種多様なランク４エクシーズモンスターなれど、およそ鷹矢が好んで使うモンスターの一体。
うなる豪腕と重厚な足音を響かせてここに現れるのは、主の策を整えるために。

「【ギアギガントＸ】の効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、デッキから２体目の【ブリキンギョ】を手札に加える。２枚伏せて、ターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：５→３枚

場：【ギアギガントX】
伏せ：2枚

「私のターン、ドロー。」

先行で、先ずは準備を整えるかの如く静かな立ち上がりを見せる鷹矢に対して、続く後攻、ヒイラギにターンが回り…彼女はすぐさまカードを引いた。

その佇まいは既に戦闘態勢に入っているのか。参加選手の紫魔の内、彼女だけが2年生…しかし、その風格は他のどの年上の紫魔達よりも余裕を醸し出しているようにも見えていて。

淡々と、決まっている動作のようにして…先ずは始まりとなるモンスターを召喚するべく動き出す。

「私は【E・HERO　ブレイズマン】を召喚し、その効果でデッキから【融合】を手札に加えます。そして【融合】発動。場の【E・HERO　ブレイズマン】と手札の【E・HERO　エッジマン】を融合！」

紫魔における基本戦術。【融合】や素材となるモンスターをサーチし、その激しい手札消費をカバーしつつ、様々な融合体を使い分ける彼ら紫魔家。

先に鷹矢がエクシーズ召喚をしてきたように、ヒイラギも最初から融合召喚で対抗してくるのか。

地属性を統べる『地紫魔』の彼女、折り重なった大地の如く進撃するHEROを、召喚するために。

「融合召喚！現れなさい、レベル6！【E・HERO　ガイア】！」

――！

地を割き、深い原石の塊を抉って現れるのは、磨き上げられた鉱石よりもなお硬き英雄の姿。
大地の恵みの恩恵をその腕に集め、機械の巨人を粉砕すべくその磨き上げられた腕槌を振るわんとしたその姿は、まさに地殻そのものが人型に形作られた様にも見える。

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

「ホホ、ガイアの効果発動ですわ！融合召喚成功時、【ギアギガントＸ】の攻撃力を半分にして、ガイアの攻撃力に加えます！」
「…む。」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００→３３５０

【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００→１１５０

そして、大地の巨人がその腕槌を地面に突き刺し、母なる地中からその力を吸い上げて。
融合召喚時にのみ扱えるその真価を、余すことなく発揮するに目の前に敵がいてこそ。歯向かう敵を押しつぶす、その大地の鉄槌で…早々にダメージを稼ぐべく、彼女は宣言するだけだ。

「行きますわ！バトル！【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】で【ギアギガントＸ】を攻撃！」
「ふん、攻撃宣言時に罠発動、【くず鉄のかかし】！ガイアの攻撃を無効にし、そのままこのカードはセットされる！」

しかし、鷹矢とてこうも簡単にＬＰの半分以上のダメージなど受け

るなど無いのか。
　主を守るように現れた壊れかけの鉄案山子が、迫り来る腕槌をその身で受け止めて…大きな軋みが響くものの、壊れることなく敵を退けた後に、再びその場にセットされた。
　この１ターンに１度しか使えない攻撃の無効化なれど、場に伏せられている限り何ターンでも使いまわせる効果は、相手にとっては邪魔な事この上ない効果となるに違いないはず。
　そうだと言うのに、攻撃を止められたヒイラギの表情は全く応えておらず…小さな口に変わらずの笑みを浮かべているだけ。

「残念だったな。ガイアは不発だ。」
「ホホ…いいえ、まだ安心するのは早くてよ。速攻魔法、【マスクチェンジ】発動！ガイアを墓地へ送り、【Ｍ・ＨＥＲＯ　ダイアン】を特殊召喚！」

【Ｍ・ＨＥＲＯ　ダイアン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／３０００

　そう、ここで立ち止まるような彼女ならば初めから代表として出場すらしていない。
　変身、速攻、無情の追撃。
『地紫魔』の家において、妹である紫魔　アカリ、兄である紫魔　幹斗と比べても…彼女の力はおそらくその誰よりも上。
　だからこその自信なのか、一度防がれてところで彼女にとっては何の障害にもなりはしないと、そう言わんばかりに。

「…追撃か。」
「ええ。まだバトルは終了していませんの。続けて【Ｍ・ＨＥＲＯ　ダイアン】で【ギアギガントＸ】を攻撃！」

―！

「むぅ…」

鷹矢　ＬＰ：４０００→２３５０

そうして、大地の仮面を得た英雄の一撃で、始めから鷹矢にそれなりのダメージが発生してしまった。

まだ特に慌てるようなダメージでは無いゆえに、焦りなど沸き起こるはずは無いものの…特に警戒もしていなかった相手に先手を取られたのが、どこか癪に障るのだろうか。

鉄仮面は崩さない、しかしどこか眉を潜め…潜めたような雰囲気だけを醸して。

彼とてただの無知ではない。破壊されていった機械の巨人をただ見て、そしてヒイラギの更なる追撃へと気を入れ直す。

「ダイアンの効果は確か…」

「ホホホ、まだまだ終わりませんわ。ダイアンの効果発動！モンスターを戦闘破壊したため、私はデッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を特殊召喚！そしてエアーマンの効果で、更にデッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドー・ミスト】を手札に加える！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　３００

「行きますわよ！エアーマンでダイレクトアタック！」

休むまもなく、間髪入れず。

持久戦に強い鷹矢相手に付き合ってやる気など、毛頭無いかのようなヒイラギの迫る連撃は、そのどれもが本気で鷹矢を崩しにかかっていて。

この【決闘祭】に置いて、不甲斐ない結果しか残していない他の紫

魔家の戦いぶりからは、予想もつかないほどの鋭い攻めを見せるヒイラギ。

―全力で、削りにかかる。

「させん！罠カード、【エクシーズ・リボーン】を発動！墓地の【ギアギガントX】を攻撃表示で蘇生し、このカードをオーバーレイユニットにする！」

「…あら。流石に防いできますか。いいですわ、攻撃は中止、バトルフェイズを終了します。」

そんな、まさに攻撃が届く寸前で…鷹矢が先ほど破壊された機械兵を蘇らせて事なきを得たものの、その言葉はどこか苦々しげにも聞こえるだろう。

別に、鷹矢とてまだ若く…その才能だけがどこか先走る時もあるのだろう。合理的に見えても、まだまだ付け入る隙が多いことも確かであって。

「…ぬぅ、こんなに早く使わされるとはな。」

「ホホ、序盤は様子を見るとでも思っていたのかしら。あなたのデュエルは学園でも有名ですのよ。先攻ターンを最低限で済ませることは織り込み済みですわ。」

速攻に弱い、と言うわけではない。しかし万全の防御を取る、と言うわけでもない。

鷹矢にとって、無傷に拘る必要は無く…自分のＬＰが残っていて、相手のＬＰを削りきればいいだけ。

そこを、上手く突かれて。

焦っては居らず、手を抜いているわけでも無いものの、対戦相手であるヒイラギの評価は彼も考え直さなければいけないだろう。相手

のスタイルがわからない現状で、早くもライフアドバンテージを広げられた鷹矢の心情は、彼にしか分からないが。

「ではメインフェイズ2で、私は【手札抹殺】を発動します。3枚捨てて3枚ドロー。」

「…HEROで、【手札抹殺】だと?…よく分からん回し方をするのは昔の遊良みたいだな。俺も3枚捨てて3枚ドロー。」

「さらに、今墓地へ送られたシャドー・ミストの効果を発動。デッキから【E・HERO　エアーマン】を手札に加え、私はカードを1枚伏せてターンエンドですわ。」

ヒイラギ　LP：4000
手札：6→3枚
場：【M・HERO　ダイアン】
【E・HERO　エアーマン】
伏せ：1枚

「俺のターン、ドロー!とりあえず、遠慮は要らないようだ!【ギアギガントX】の効果発動!オーバーレイユニットを1つ使い、デッキから【ゴールド・ガジェット】を手札に加える!」

それでも、ここからが彼のエンジンの駆け所なのか。
攻撃を許されていない、先攻ゆえのスロースタート。…しかし、ここからは違う。先ほど好き勝手に暴れられたからこそ、そのダメージを返済することなど鷹矢にとっては容易いこと。

受けたダメージを、ただでは返さない。

「【ゴールド・ガジェット】を召喚!ゴールドの召喚時効果に連ねて【カゲトカゲ】を特殊召喚し、ゴールドの効果で【シルバー・ガジェット】を特殊召喚!更にシルバーの効果で【イエロー・ガジェット】も特殊

召喚！イエローの効果で２体目の【グリーン・ガジェット】を手札に！」
「なっ!?」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【カゲトカゲ】レベル４
ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１５００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【イエロー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

瞬間で…鷹矢がまさに、一瞬で場を埋めるほどのモンスターを展開し、その素早くも圧巻の光景に会場内が盛り上がりを見せ始める。
全てのモンスターの攻撃力は低く、到底ヒイラギの場のＨＥＲＯに叶うモンスターは居ないものの…全てのモンスターのレベルは４で統一されていて…
そう、ここからの連続的なエクシーズ召喚で、先ほどのヒイラギの攻めを超える連撃を見せようとしているのだ。

「行くぞ！レベル４の【ゴールド・ガジェット】と【シルバー・ガジェット】でオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【恐牙狼　ダイヤウルフ】！」

【恐牙狼　ダイヤウルフ】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１２００

「更に！レベル４の【カゲトカゲ】と【イエロー・ガジェット】でオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ダイガスタ・エメラル】！」

【ダイガスタ・エメラル】ランク４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　８００

そうして召喚されしは、宝石の名を冠する２体のエクシーズモンスター達。
多種多様なランク４戦術、状況に応じて様々な動きを可能にする柔軟性は、ひとつの事に囚われない、まさに自由奔放に飛び回る鷹矢自身を現しているかのような戦い方であって。
先ほど彼が言ったように…遠慮はしない、こちらも全力で叩き潰すのみと、そう言っているかのような雰囲気を出していた。

「【恐牙狼　ダイヤウルフ】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、俺のダイヤウルフとお前の【Ｍ・ＨＥＲＯ　ダイアン】を破壊する！」

――！

金剛の体持つ狼の…その美しき体を持って炸裂させるは、大地の仮面の英雄を道連れにする咆哮。
いくら攻撃力では叶わなくとも、別にバトルだけが戦いではないことを証明するかの様に。
その効果を選択的に扱うことで敵を圧倒していく鷹矢の戦い。それに、激しく展開して手札を消費しても、それを簡単に補うことだって鷹矢には簡単なことなのか。

「続いて【ダイガスタ・エメラル】の効果を発動！オーバーレイユニットを一つ使い、墓地の【ゴールド・ガジェット】、【シルバー・ガジェット】、【グリーン・ガジェット】をデッキに戻して1枚ドロー！」
「…アレだけモンスターを出しておいて、抜け目の無いですこと。」
「まだだ、【貪欲な壷】を発動！【ブリキンギョ】2体、【レッド・ガジェット】・【イエロー・ガジェット】・【恐牙狼　ダイヤウルフ】をデッキに

戻し、２枚ドロー！」

手札を補充し、場を覆して。

若さゆえに己に振り回されることがあるとは言え、だからと言ってソレを使いこなせないほど、軟な鍛えられ方もしていない鷹矢。

世間からは【黒翼】の孫として見られていても、その本質は受け継いだ才能だけでは無い。

そう、祖父譲りと思われる才能に加えて…師である祖父から課せられてきた、それに溺れぬ鍛錬をしてきたからこその実力は、決して飾りでは終わらぬ確かなモノとなっているのだ。

面倒くさがりで、食い意地が張って、朝にとことん弱い彼。しかし、ことデュエルでは別の姿を見せるのは、鷹矢をよく知る人間からすれは最早当たり前のこと。

「バトルだ！【ギアギガントＸ】で【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を攻撃！」

―！

そうして、うなる機械の豪腕が、旋風の英雄を吹き飛ばす。

先ほど簡単に戦闘破壊されたからか、その攻撃に並々ならぬ威力を纏わせて。英雄は成す術なく軽々と吹き飛ばされていき、そのまま砕け散っていった。

ヒイラギ　ＬＰ：４０００→３５００

「続けて【ダイガスタ・エメラル】でダイレクトアタック！」

―！

更に、間を開けずに攻める。

深緑の宝石騎士の放った緑風の一撃は、がら空きになったヒイラギに確かに直撃して。受けたダメージを返すどころか、それ以上のダメージで返すその攻撃に容赦はなく…ヒイラギの評価を考え直した所で、それでも鷹矢には全く負ける気など無いのだろう。

「…くぅ。」

場を一掃され、連続的に繰り出された攻撃に対して、ヒイラギはどこか苦々しそうな声を漏らすものの、ソレに対して鷹矢が何か感じることも無い。

ヒイラギ　ＬＰ：３５００→１７００

「うむ、とりあえずこんな所か。ダメージは返したぞ。」
「…やはり、流石に1年程度ではここまでですか…」
「む？何か言ったか？」
「ホホ…こちらの話ですわ。それより、このターンで勝負を着けなくてよろしかったのかしら。」
「問題ない。それに、どうせ追撃出来ていたとしても、貴様はそれを防いできていただろう？」
「…あら…」

一見すれば、展開の仕方を変えていればこのターンで決着となっていたかもしれないだろう鷹矢の連続召喚ではあったが…その言葉は、まるでヒイラギをこのターンで倒すことは出来なかったと聞こえるモノ。
ヒイラギの言葉に、鷹矢はそっけなくも淡々と答えるものの…しかし、鷹矢が戦い方を間違えたわけではない。

だからこそ手札を補充しにかかり、次に備えようとしたのか。
それを聞いたヒイラギも、どこか鷹矢の印象を勘違いしていた素振

りを見せて…まぁ、初日の開会式前に、アレだけの『コト』をやらかしていたのだから、それも仕方ない事だろうが。

「遊良に口うるさく言われたからな。油断はせん。」

「…ただのお馬鹿さんとも思いましたが、中々場慣れしてらっしゃるようですわね。いいですわ…戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて罠カード、【ダメージ・コンデンサー】を発動！私がデッキから特殊召喚するのは【Ｖ・ＨＥＲＯ　ヴァイオン】！」

【Ｖ・ＨＥＲＯヴァイオン】レベル４
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１２００

そんな中で、ヒイラギの発動した罠によって現れたのは、深紫に投影された英雄の姿。

受けた戦闘ダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスターを、デッキから特殊召喚できるこの罠…相手の攻撃力依存な部分はあるものの、それでもヒイラギのデッキに居る下級戦士達ならば、どれでも選択肢になりえる防御札であって。

別にこのヴァイオンとて、ここで召喚しなければいけなかったというモンスターではない。

受けたダメージと、鷹矢のエクシーズ召喚したモンスターによって、その時に出すべくモンスターを選択的に変えられたヒイラギの一つの策に過ぎないが…だからこそ、今この場面でコレを出したことに、意味のあるモンスターといえるモノとも考えられる。

「ヴァイオンの効果発動、特殊召喚に成功したため、デッキから【Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ】を墓地へ送ります。」

「やはり壁を出してきたか。」

「ええ。…まぁ何でも良かったんですけれど、あなたの攻撃も終わりましたし。」

「うむ。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：２３５０
手札：４→３枚
場：【ギアギガントＸ】
【ダイガスタ・エメラル】
伏せ：２枚

「私のターン、ドロー！ヴァイオンの効果を発動し、私は墓地からエアーマンを除外して、デッキから【融合】を手札に！」

融合使いの必須魔法、【融合】を手にする方法に抜かりのないヒイラギ。

先ほど鷹矢が、このヒイラギのターンに備えるといって前のターンを終えたものの…果たしてそれは善手であったのだろうか。

そう、一瞬だって気は抜けない、ヒイラギが先ほど言ったように、場合によっては先ほどのターンで倒しておかなければ手遅れにだってなり得るのが、この【決闘祭】のステージ。

最初からヒイラギは鷹矢を倒しにかかっていた。それは、今だって変わらない。

「そして【ミラクル・フュージョン】発動！墓地の【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】と【Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン】を除外して融合召喚！再び現れなさい！レベル６、【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

「またそいつか。」

「ええ、これが地紫魔の象徴の『一つ』なのですから。ガイアの効果発

動！【ギアギガントX】の攻撃力を半分にして、その数値分、ガイアの攻撃力に加える！」

そうして、自身の家…地属性の紫魔を統べる、『地紫魔』を現す象徴の『一つ』を、何度でも召喚して。

積み重なった大地にも似た、重厚なる一撃を信条とする地紫魔の教えに従い、ヒイラギはそれを喰らわせようとしているのか。

しかし、一度喰らった効果を易々と受けてやるほど、向かい合っている鷹矢とて甘くは無いだろう。

「無駄だ！【ギアギガントX】を選択して罠カード、【スキル・プリズナー】発動！ガイアの効果は無効となる！」

「だったら【E・HERO　エアーマン】を通常召喚！その効果で、邪魔な【くず鉄のかかし】を破壊しますわ！」

「…ぬ。」

鷹矢が大地の吸収を防いだかと思えば、すぐさまヒイラギもやり返す。

いくら攻撃力を上げてその一撃を重くしても、崩れかけの案山子に防がれるのはヒイラギとて織り込み済み。だからこそエアーマンの2つの効果を状況に応じて使い分け、自身の邪魔を少しずつ消していって…

―そして、何度でも。

扱う属性を限定されているからこその、その戦法に特化した紫魔家の攻撃が、こんな中途半端で終わるはずがない。

「魔法カード、【融合】を発動！場のエアーマンとガイアを融合！三度現れなさい！【E・HERO　ガイア】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

何度でも現れる、大地の英雄。
こと戦闘において、無敵とも呼べる能力を持つガイアの効果で、歯向かう敵に重厚なる一撃を。
防いでも防いでもソレを狙ってくるヒイラギの戦法…それを貫き通してくるヒイラギの、執念にも似た繰り返しは、たとえ誰が対策していても乗り越えんとする気概を発していた。

「ぐぅ…しつこいな。」
「ガイアの効果を発動！【ギアギガントＸ】にはこのターンの間は意味がありませんので、【ダイガスタ・エメラル】の攻撃力を半分にし、その分をガイアに加えますわ！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００→３１００

【ダイガスタ・エメラル】ランク４
ＡＴＫ／１８００→９００

深緑の宝石騎士に狙いを変えて、その大地の腕槌を炸裂させるガイア。
元々エメラルよりも攻撃力は高かったというのに…それ以上に吸収した力は、磨き上げられた宝石を粉々に砕く岩と化していく。
しかし、まだまだ。融合召喚に伴う激しい手札消費をカバーし損ねるほど、ヒイラギは楽観的ではない様子。残った最後の手札からカードを取ると…さらなる追撃を行うために、それを使う。

「魔法発動！【ＨＥＲＯの遺産】！墓地のガイア２体をＥｘデッキに戻し、デッキから３枚ドローします！さて、このままではあなたのＬＰを削りきれませんので…」

「…む？」

一呼吸おいて、ヒイラギはたった今引いたカードの一枚を見た。

さも当然のように手札に加わったソレ、まるでコレが引けることを分かっていたかのように、下準備も怠らず。

…別に、このドローに賭けたと言うわけではない。

しかし紫魔として、生まれたときから宿命付けられてきた融合召喚を、物心ついたときから扱ってきた彼女なのだから…または、それ以外にも『何か』が彼女の自信となっているのか…もう少しで決着となるべきこの状況で、最後の詰めが出来ないはずがないと、そう言わんばかりに…

―それを、発動する。

「行きますわよ！魔法カード、【ダーク・コーリング】を発動！墓地の【Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ】と【ブロックドラゴン】を除外融合！融合召喚！現れなさい、【Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア】！」

―！

そうして現れたのは、地殻を纏いし悪魔の英雄。

禍々しくも、その姿一つで『重厚』を現している佇まいは、まさに『地紫魔』の象徴と言えるほどの雰囲気を醸し出していて…歯向かう者を圧倒する重圧を放つ、まさにもう一つの『大地の英雄』と言える代物。

【E―HERO　ダーク・ガイア】レベル８
ＡＴＫ／　？　ＤＥＦ／　０

―『ガイア』と、『ダーク・ガイア』

当たり前のように、その『２つ』の象徴を降臨させた光景に、会場内の数多い紫魔姓の人間も…その双璧の大地の登場に、大いに沸き立っている様子を見せていて。

「ブロックドラゴン…【手札抹殺】か。」
「ホホ…『２体』のガイア、コレこそが地紫魔の象徴たちですわ！ダーク・ガイアの攻撃力は、融合素材の攻撃力の合計となります！よって攻撃力は…」

【E―HERO　ダーク・ガイア】レベル８
ＡＴＫ／　？　→５１００

「攻撃力、５１００か…」
「ホホホホホ！ここまでの攻撃力は予想していませんでしたか？…【くず鉄のかかし】なき今、あなたにこれを止める手があって？」

そう、先ほどヒイラギに破壊されたことによって、この状況で鷹矢を守る伏せカードは無く…
彼の残っているＬＰ２３５０だけでは、攻撃力の下がった【ダイガスタ・エメラル】だけでなく、【ギアギガントX】を攻撃されただけでもソレが消し飛んでしまう程。
彼女から止めどなく繰り出される一撃は、まさに『重厚』といえる代物となっていて。
その状況を作り、今にも攻撃を喰らわせんとしているヒイラギの力は…『ここ』に出場しているどの紫魔よりも、その実力の違いを証明しているのが一目瞭然だ。

「では行きますわ！バトル！ダークガイアで…」

先走るように鷹矢に迫る、その重厚なる大地。

威圧と重圧を放ちながら力を増していくその姿に、観客席で見ている者達の誰もが、この一撃で勝敗が決まったと思ってしまった…

―その時であっても。

「防ぐ手はある！墓地の【超電磁タートル】の効果発動！バトルフェイズにこのカードを除外し、このバトルフェイズを終了させる！」

鷹矢の墓地から飛び出して、寸前で進撃を止めたのは…目に見えるほどの磁力を放つ機械亀。

―反発し、相殺する、その有り余る斥力で。

その超電磁力を開放させ、迫りくる大地を弾き飛ばした。

「なっ!?…【超電磁タートル】…そんなカードなんて…あっ、【手札抹殺】を利用して…」

「うむ。」

「…本当に、どこまでも抜け目ない男ですわね…私は【Ｖ・ＨＥＲＯ ヴァイオン】を守備表示に変更。１枚伏せて、ターンエンドですわ…【Ｅ・ＨＥＲＯ ガイア】の攻撃力も元に戻ります。」

ヒイラギ　ＬＰ：１７００
手札：３→１枚
場：【Ｖ・ＨＥＲＯ　ヴァイオン】
【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】
【Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア】
伏せ：１枚

「行くぞ！俺のターン、ドロー！」

誰の期待も、いい意味で裏切って。危機を難なく乗り切った鷹矢の振る舞いは、ヒートアップする観客の興奮に呼応したように昇っていくのか。

意気揚々と、鷹矢が何の迷いも無くカードを引けるのは、先ほどのヒイラギの攻撃を防ぎきったことで確信した勝利への道筋を、彼の目が確かに捉えているからだろう。

大地の『重厚』など、意に介さずに攻めの選択肢を増やすことの出来るランク４エクシーズモンスターを駆使する鷹矢の戦法ならば、おそらくコレで決着となることは必至。

千差万別、多種多様。

悠々自適にカードを引き、トドメの一撃を喰らわせるモンスターを、頭の中で無意識に選別して。

「これは…不味いですわね…」

静かにヒイラギがそう呟くものの、その小さな声は大歓声に飲み込まれていき、決して誰の耳に届くようなものではない。

そう、ヒイラギとて理解しているのだ。

いくら大地の如き『重厚』な盤面を揃えた所で、それを『鷹』のように空から軽々と飛び越えられれば、全く意味を成さないと言うこと

を。

「俺は…」

今にもソレを宣言しようと手を掲げている鷹矢。

このまま現状を変えられる札がなければ、このまま勝敗が決してしまうことは決定事項…成す術なき者は、何も出来ずにそれを受け入れるしかなかった。

—…そう、何も出来ない者ならば

「ホホ…でも、知っていますのよ…」

「ぐむっ!?」

しかし、突如としてその手を止める鷹矢。

—言葉を詰まらせるように、咳き込むことを拒むように。

鍛えられた肩に起こっているその震えは…自分の身に突然起こった『何か』を、まるで押さえ込もうとしている様子にも見えて。

—何も無しに、鷹矢が手を止めるわけがない。

鷹矢の目の前で、指にはめた指輪の黒い宝石を隠すように…ヒイラギがソレをゆっくりと撫でていた。

「ホホホ、天宮寺　鷹矢…押さえ込んでいる精神力は素晴らしいです

が…付いている者を操ることは容易いですわ。」
「ぐ…グぁ…」
鷹矢の足元に、微かに漂う『黒い靄』。
こんな微かな『靄』など、観客達から見えるはずも無く…例え何か見えたとしても、デュエル中のエフェクトとしか感じないだろう薄さのソレ。
ほんの僅か、鷹矢の口から漏れ出る、『黒い靄』。
こんな僅かな『靄』など、向かい合っているヒイラギにしか見えないであろう量のソレ。
―言葉は要らない。要るのは、命じる者の念じと、『黒い靄』だけ。
ヒイラギは、知っている。ソレに関しての、『何か』を知っている彼女にとって…今の鷹矢に憑いているモノが『何』なのかを。
そして、それを操る術も…。
「ぐ…グ…お、俺…ハ…」
「さぁ、そのままターンエンドなさい！」
自我を押し込め、意識を乗っ取る、侵食してくるソレに対して…『自分』を持って行かれるのを拒む苦しみ。
…そもそも持っている『才能』だけならば、おそらくこの広い決闘市においても類を見ないこの天宮寺　鷹矢。
そんな、放っておいても強くなったであろうこの男が…『片割れ』の生きる指標ためと、その『片割れ』に張り合うために、嫌々師事した祖父である【黒翼】に鍛え上げられたのだから、その地力が相当なモノとして出来上がっているのを…当然対峙しているヒイラギが感じないわけがない。

―だからこそ、命ずる。

手の届かない実力を持っていた相手であろうとも…目的遂行を掲げて勝利するために。

「オレハ……」

そうして…鷹矢が振り上げていたその手をゆっくりと降ろし始め…

ヒイラギがそれを見て、隠していた手を再び露にし始めたが…

「…俺ハ！俺は【ゴールド・ガジェット】ヲ召喚！」

―！

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００

「なっ!?」

それを振り払うかのようにしてディスクに叩きつけられた１枚のカードと、そこから召喚されし黄金の歯車が鷹矢の場に現れて。

ヒイラギに誘発され、無理やりに増大された悪意と、ヒイラギの頭の中から発せられる『ターンエンドしろ』という念が、彼の頭の中で痛いほどに反響していると言うのに。

―飲み込んで、堂々と。

この、ヒイラギによって増強・誘発された、自我を保つことなど難しいであろう『悪意の侵食』と、思考を停止させんとする『念の嵐』を喰らっている中であっても。

「【ゴールド・ガジェット】ノ効果デ【グリーン・ガジェット】ヲ特殊召喚！その効果で【レッド・ガジェット】を手札に加えル！」

「な、何で…何で言う事を聞かないんですの！」

驚愕を抑えきれないかのようなヒイラギの、その悲鳴めいた声の塊。

…きっと、彼女だってこんなことは予想していなかったことなのだろう。

彼がアレを自我で押さえていたのはとっくに知っていて、それに対する精神力の評価も確かにあったというのに…

それでも、命じ手の意に反する行動など、彼女の経験には全く無いこと。そう、今までこんなことなど無かったのだから。

―悪意に、飲み込まれない。

どんなに精神力が強い人間であっても、沸きあがる悪意には染まるしか道は無いこの『侵食』。

そうだというのに、完全に悪意を押さえ込む人間など、見たことが無いと言わんばかりの彼女の表情は…今目の前で、彼女の意思に逆らう鷹矢の振る舞いが、まるで信じられないかのように。

「うるさい！誰モ…誰にモ邪魔はさせン！」

あくまで変わらぬ鷹矢の言葉、彼の強い意思の現れ。

そう、誰よりも…誰よりも強く、重い…この【決闘祭】に賭ける鷹矢の思い。
しかし、鷹矢よりも強い実力や精神力を持つであろう元プロの人間だって、完全にコレに逆らうことは出来なかったこという事実があるというのに…普通ならば、一人の人間の意志で、人外の現象である『黒い靄』を押さえ込むことなど出来るはずがないことだ。

―その影に隠れているのは、誰も知らない事実。

鷹矢がコレに逆らえる理由…彼のＥｘデッキの中で、『靄』に反発するように妖しく輝いている１枚のカードがあることを…

鷹矢自身も、気付いていない。

―それでも、叫ぶ。

「俺ト遊良ノ…邪魔をするなぁ！」

―！

「きゃあ!?」

彼の鍛え上げられたその体から発せられる覇気…それを受けて、ヒイラギの指にはめられていた指輪の、その黒い宝石が砕け散った。そう、まるで鷹矢の心の爆発に、巻き込まれたかの様に。

―誰にも、邪魔はさせない。

彼にとっては、コレが何よりも大事なこと。
誰の命令も、誰の指図も受けない、【決闘祭】に臨む鷹矢の思い…そう、遊良との戦いの約束が、他の誰の『思い』よりも軽いはずがない。
「2体のモンスターでオーバーレイ！エクシーズ召喚！現れろ、ランク4！【鳥銃士カステル】！」

―！

【鳥銃士カステル】ランク4
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

彼の叫びに呼応して現れるは、邪魔者を消し去る天空の銃士。
いくら重厚なる大地の力を持った英雄と言えども、その狙撃で急所を打ち抜かれれば…有無を言えずに消し飛ばされるだけ。
鷹矢の思いに立ちふさがる、まさに壁となっている『地紫魔』の象徴の一体を、打ち抜かんとソレを構えて…今、放つ。

「カステルの効果発動！オーバーレイユニットを2つ使い、【Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア】をデッキへ戻す！」
「そんなっ!?…まずいですわ、これでは…」
「そんな猿芝居はいらん！【ナイトショット】発動！貴様の伏せカードを、使わせずに破壊！」

焦りを誘発させたいような、そんなヒイラギのうろたえのモノすら見抜いている鷹矢。
鳥銃士の放った一発のすぐ後に、自身もまた暗闇からの一発を命中させて。
相手の死角から放たれるこの弾に狙われてしまっては、ターゲットは逃げることも、隠れることも許されない。
それに無残に貫かれて…ヒイラギの伏せカード、【砂塵のバリア―

ダスト・フォース―】が破壊され砕け散っていった。

「くっ、ダスト・フォースが破壊されましたか…」

「まだだ！貴様はまだ策を残しているのだろう？俺はそれを超える！【死者蘇生】発動！蘇れ、【ゴールド・ガジェット】！」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００

そして、再び蘇る黄金の歯車。

およそ、【鳥銃士カステル】のエクシーズ召喚で勝敗は決していたようにも思えるものの…

最後の手を残しているヒイラギの策すら、鷹矢は見抜いているようであって。

そう、直に戦りあったからこそ感じられたヒイラギの『欺き』を、否応にも鷹矢は理解できていた。

後は、それを越えるだけの攻撃を…鷹矢は繰り出すだけ。

「…もう、ここまでですわね。」

「バトル！【ギアギガントＸ】で【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】へ攻撃！」

―！

ヒイラギ　ＬＰ…１７００→１６００

「続けて【ダイガスタ・エメラル】で、守備表示の【Ｖ・ＨＥＲＯ　ヴァイオン】を攻撃！」

―！

場を一掃し、敵を葬送し。

がら空きになったヒイラギを守るものが、これで本当になくなってしまった。
頼みの綱にしていた『靄』も駄目で、彼女にとって今の状況は、もう逃れられない状況になっていて…
ヒイラギの墓地には、先ほど鷹矢が仕込んでいた【超電磁タートル】のような防御札があるにはあるものの…決して慢心せず、最後の最後まで打てる手を使って展開しきった鷹矢を止めることなど出来ないのだから。

「【ゴールド・ガジェット】でダイレクトアタック！」
「墓地の【ネクロ・ガードナー】の効果発動…【ゴールド・ガジェット】の攻撃を無効にします…」

【手札抹殺】で送っていた、ヒイラギの最後の防御を使わせて。そう、カステルの召喚だけで鷹矢が展開を終えていれば、鷹矢とて決してヒイラギには勝てなかっただろう。
無駄にターンを終了させられ、返しのターンでヒイラギの手にある【平行世界融合】を発動されれば…絶対にヒイラギは『地紫魔の象徴』である、大地の英雄で止めを刺しに来ていたはず。

―だからこそ、油断しない。
試合前に、あれだけ遊良に『釘を刺されていた』ことを…自分の『相棒』の言葉を、この鷹矢が蔑ろにするわけがない。
「うむ！やはりそうだろうな！だが、これで終わりだ！【鳥銃士カステル】で、ダイレクトアタック！」

―！

銃士の放った弾丸が、確かに彼女を貫いて。それを避けることなど

できないヒイラギは、ただ立ってそれを受け入れるのみ。
最後、どこか心苦しそうにして声を漏らしてから…それは鳴り響いた。

「くっ…」

ヒイラギ　ＬＰ：１６００→０（－４００）

－ピー…

『激しいデットヒートがついに決着ぅー！何という事か！準決勝に進んだのはこれまたイースト校の１年生！』

本日、幾度も鳴ったその無機質な機械音は、勝者にのみ送られるファンファーレの如く。
この音に呼応して猛る実況と、観客達の目には【決闘祭】２日目の最後を飾るに相応しく映ったこの試合への興奮が、まるで鳴り止まない音を醸し出している。
堂々たる勝利、祖父に劣らぬ佇まい。そんな、誰もが知っている【黒翼】の偉大さを受け継ぐ一人の男を、ここに称えるように。

『流石は王者、【黒翼】の孫！コレが受け継いだ才能だぁー！勝者！イースト校１年、天宮寺　鷹矢選手ぅー！』

－－－

ｅｐ２９「深遠の闇」

「…ふぅ、少し疲れたぞ。」

【決闘祭】２日目、最終試合。

たった今勝敗が決した第二回戦・第四試合の、観客達の興奮が冷めやらぬここセントラル・スタジアムの中心で…沸きあがって盛り上がる観客たちを他所に、鷹矢が珍しく一息ついていた。

いつもはどんな激しいデュエルを行っても、何食わぬ顔でいるはずの鷹矢ではあっても…ヒイラギが増大・誘発させた『侵食』に抗って、さらにそれを押さえ込んだのだから、それもある意味当然といえば当然なのだが。

「天宮寺　鷹矢…あなた、一体…」

「む？」

「…一体、何をしたんですの？」

「気合だ。」

「…はい？」

「気合で頑張っただけだ。」

未だ、鷹矢を信じられないかのような目で見てくるヒイラギに対する、まるで子供の…意味のわからぬ説明の様な鷹矢の言い分。

しかし鷹矢とて、それ以上に詳しく説明しろと言われても、これ以上の的確な説明など思い浮かぶはずもないのか。

普通ならば取り付かれている人間が、侵食してくる『悪意』に抗えるはずも無く…強大な精神力を持ったものであっても、増大した『自分の悪意』に飲まれてしまうはずだというのに。

「気合…ですか…」

「うむ。」

そう言うのにそれを押さえて、そして『自分』のままでいる鷹矢の

存在が、どうにもヒイラギには信じられなかったのか。
返す言葉も見つけられず、ただ鷹矢の返答を飲み込むしかない様子。
『悪意』を持たない人間など、この世に居ないはずがない。生きている限り、何においても、微かなことでも…少なからず『悪意』は起こるはず。しかし、現実に鷹矢はそれを押さえ込んだ。
…『悪意』が増大したときに、鷹矢のＥｘデッキの中で反発していた『何か』があったことなど、ヒイラギは知る由もないことだが。
―それは、鷹矢自身とて気付いていないこと。
「…『プランＡ』はここまでですか…仕方ないですわね。」
「む？何か言ったか？」
「いいえ、何でも。敗者は大人しく去ってあげますわ…では。」
他の紫魔の選手とは違い…負けたことに関して『無駄な文句』など零さずに、その場を後にし始めるヒイラギ。
紫魔達の何人かが、何かの目的を持って【決闘祭】に出場していることは明らかなことなのだが…負けたことに対して『悔しがって』いたノース校の男たち２人と比べても、ヒイラギの考えていることは何か異なっているのか。
鷹矢を称える鳴り止まぬ歓声と、最終試合が終わったことに対してのアナウンスが響くスタジアムからヒイラギは降りていき…そのまま暗い通路へと歩いていった。
「…『プランＢ』へ移行ですわね。」

―…

「本日のお勤め終わったぁー！つーか紫魔の子負けちゃったねー。紫魔っちざーんねーん。」
「…ええ、そうですね。」

【王者】のために用意された特別展望席で、【決闘祭】２日目の全試合が終了したことによる開放感からか…【白竜】、新堂　琥珀は隣に座る【紫魔】へと声をかけた。
これで、【決闘祭】に出場していた全ての『紫魔姓』の人間が敗北し、昨年に引き続いて『紫魔家』の戦績の低さを露呈する結果となった今大会…それを見た、『紫魔本家』の長が何を思うのだろうか。

―声質は変えず、雰囲気も変えず。

そう、『飲み込まれるような恐怖』を最初から、少しも緩めずにいる【紫魔】、紫魔　恋介によって…その部屋の中は異質な空間と化していた。

「紫魔っち怖えー。超怖えわー。紫魔の子たちマジで雑魚かったけどさ、まぁドンマイだし。」

そんな空間の中であっても、軽口を叩ける琥珀はどこまでも飄々としていて。
彼にとって、今大会の出場選手の中で、思い入れのある選手など居るはずも無く。初めから退屈していた彼にとっては、【紫魔】の心情など全く気にする必要はないだろう。
そのまま琥珀は逆側を向くと、反対側に座っていた【黒翼】へと向かい合おうとした。

「つーかさ、天宮寺のジイサンも良かったねー、可愛い孫が勝ててさ…って、あり？」

しかし、琥珀が振り向いたその先に【黒翼】は居らず。

試合が終わったばかりだというのに、突如として姿を消した鷹峰に、素直に驚いている様子を見せて。

「紫魔っち紫魔っち、ジイサンどこいったの？」

「…さぁ。試合が終わった途端に、急いで何も言わず出て行かれましたので。」

「シシッ、天宮寺のジイサンも可愛いとこあんじゃん。孫の勝利が嬉しくて飛び出していくなんてさー。」

「…どうでしょうか。なにやらそんな雰囲気ではありませんでしたが。」

【黒翼】らしからぬ行動に、明後日な考察を張り巡らせている琥珀ではあったが…しかし当の本人が居ないことには、その真意は分からずじまいだろう。

からかうにも、本人不在。

それにもすぐに興味を失ったのか、立ち上がると帰り支度をし始めた。

「んじゃ、俺っちホテル帰るから。はー、あと2日もあんのかー。マジだりぃわー。」

「…お疲れ様でした。」

琥珀が部屋を出て行き、そこに一人取り残される恋介。

彼も琥珀と同じ様に、明日の準決勝に備えてホテルへ戻ってもいいのだが…広く静かになった特別展望席に深く座りなおすと、懐から取り出した本を静かに読み始めた。

「…さて、面白くなってきましたね。」

小さく呟いたソレを聴いている者は…誰も居らず。

―…

「あぁくそっ、あのガキどこ行きやがった。」

暗い通路に木霊する、焦っているかのような声を出した鷹峰。

珍しく、まるで急いでいるかのように暗い通路へと降りてきた彼だったのだが…その雰囲気は、琥珀が思っていたような、『孫を労う』とか、そんなモノで無いことだけは確か。

目を凝らして、視線を回して、周囲に圧力をまき散らかして。

この場にスタッフが居ないことだけが、何よりの幸いで…いや、『居ない』のではなく、この場から『逃げ出している』と言った表現の方が正しいか。

「出てこいってんだよこんちくしょうがぁ！」

手当たり次第にぶつける咆哮、触れただけで気を失いそうな圧力…なにせ、怒りにも似た鷹峰の醸しだす雰囲気が、こうもこの狭い通路に充満していては。

…スタッフとて、命からがら逃げ出すことは必至。

誰も居なくなっている通路に、【黒翼】の怒声だけが響いて、この通路一体を軋みあがらせていた。

「どこ行きやがったぁー！」

先ほどの試合で見た、己の弟子である孫の、変調の兆し。

それを見て何も感じぬほど、鷹峰は老いぼれては居ない。彼が依頼と称してずっと追ってきた『ソレ』を、先ほどの試合中に確かにその目に捉えて。

鷹峰が、『孫』の鷹矢の方ではなく、反対側の通路に来て探している人間など…一人しかいない。

先ほどスタジアムから引き下がって行った、その目に映らぬ対象を…鷹峰は探して、そして見つからぬその苛立ちを暗い通路内へとぶつけていた。

―…

「あのー、すいません。竜胆選手ですよね？」

「ん？せやけど、あんた何？」

薄暗い通路の、どこかの一つで。ウエスト校3年の竜胆　大蛇は、後ろからかけられた声に反応して振り返った。

本日の試合も終わったことから、妹であるミズチを控え室まで迎えに行って、そしてそのまま帰ろうとしていた矢先に、顔も知らぬ人間から声をかけられれば誰だって不審に思うだろう。

そんな怪訝そうな顔をした大蛇は…いや、その怪訝そうな顔が本心からのモノかなど誰にも分からぬが…とにかくそんな顔をした大蛇は、声をかけてきた男へと向かい合う。

「あぁすみません。私、『週刊決闘』の記者です。昨年に引き続いて準決勝進出を危なげなく決めた竜胆選手に、是非取材をさせていただきたくて。」

「なんや、記者さんかいな。まぁ別にええけど、何で俺に？」
「いえいえ、他の選手にもこの後インタビューをさせていただくつもりですとも。特に同じウエスト校の十文字選手からは、是非コメントが欲しいですからね。」
「うーん、てっちゃんそう言うのあんまり向いてへんからなぁ。記者さん絶対苦労するで？」
「えぇー…本当ですか？だったらその分竜胆選手からコメントを多く頂きたいので是非お願いします。」
「ハッハッハ。記者さんも中々ニクい事言うもんやな。ええで、俺の意気込みから何からたくさん記事にしてくれや。」
「もちろん。」

記者と名乗った男に、どこか警戒心が緩んだのだろうか。先ほどの不審感を孕んだ声から、その声質がいつもの物へと変わり、その口を軽くする。
そう、昨年の【決闘祭】でも、同じような『取材』を多々受けた彼だからこそ、この記者に対して不審感を消せたのだろう。

そうして記者に促されて、大蛇はその場で記者と話しこみ始めた。

…それを見て、陰に隠れた誰かが…端末でどこかに連絡を取っていることに、気がつかぬまま。

――…

「…ここですか。竜胆　ミズチの控え室は。」
「あぁ。アレから出てきてないから、今も中にあの女は居るぜ。」
「兄の方の足止めもバッチリだそうだ…頼んだぜヒイラギ。」

男2人を脇に立たせて。
たった今試合が終わったばかりのヒイラギが、自身の控え室とは全くの別方向にある竜胆　ミズチの控え室の前に居た。
先ほど鷹矢に負けたことで、新たに彼女に課せられた『プランB』を早速遂行するためなのか。その佇まいは、負けたばかりだというのに、全く落ち込んでも居ない様子であって。
大きな口を叩くだけの、この不甲斐ない男たちを呆れるように。
「本当に情けないことですわ。年上の癖に、最後はやっぱり私頼みですのね。」
「ぐ…し、仕方ないだろ…俺たちじゃどう足掻いたってあの女には勝てそうにないんだからよ…」
「ホホ、女だからと舐めているからでしょう？」
「ちっ、お前だって『プランA』に失敗したくせに。」
「1回戦負けの男に言われたくありませんわ。」
「ぐぅ…」

苦言を漏らしてくる大治郎と亜蓮を、まるで相手にせず。
まだ仕事が残っているかのようにして、ヒイラギは何の躊躇も無く扉に手をかけると…静かにソレを開いていった…

この中に居る目下の標的に、狙いを定めて。

「…誰？」

開いてすぐに、目が合って。
控え室内で椅子に座っていた、ウエスト校2年の竜胆　ミズチが突然入ってきた他人に不審感を含んだ声を漏らすものの…それを全く意に介さずに堂々と中へと入り、すぐにドアを閉めて邪魔が入らないようにするヒイラギ。

その光景を見て、ミズチはより一層の警戒心を露にした。
そう、たった今2回戦の全試合が終わって、後は帰るだけだというこの状況で…突然他人が押し入ってきたのだ。随分落ち着いている様子のミズチではあっても、絶対に気を抜いていないことだけは確か。

「…何か用？」
「えぇ、もちろん。」

構える。
そう、ヒイラギがミズチを見据えて、戦いを終えたばかりのデュエルディスクを構えたのだ。
それを見たミズチが、更にその警戒心のレベルを上げていき…意味のわからぬヒイラギの行動に対して一瞬考える素振りを見せたものの…
すぐにその理由を理解したのか。その考えをヒイラギへとぶつける。

「…デュエルして、私に『何か』しようとしているのね。」
「えぇ、まぁ。先ほどはウチの男共が恥を晒してしまいましたので、その尻拭いですわ。」
「…でも、今度はあなた一人なの？外の男達と一緒じゃなくて。」
「ホホ、あんな男共など、居ない方が戦りやすいので。」

部屋の外に待機させている、亜蓮と大治郎はヒイラギに入るなと言われているために、この戦いには参加せず。
先ほどは、男たちが2人がかりでも戦うことを躊躇したこの竜胆ミズチだというのに、今回のヒイラギは一人で。
そして、その不思議な自信に不審感を抱きながらも…ミズチとて、紫魔の人間程度に負ける気など全く起こらないのか。机の上に置いていた端末を腕に装着し、デュエルディスクを展開した。

「…あなたのデュエルは、今見てた。男たちと同じ、あなたじゃ私に勝てない。」
「ホホホ、そうですか。それは楽しみですわ。」

それを聞いても、なお態度を崩さぬヒイラギ。
誰も近づかぬように整えられた場で…静かにソレを始めようとして…

―…

大歓声の中を、一足先に帰って行ったヒイラギから遅れて。
勝利を決めた鷹矢が、悠々自適にその歓声に応えながらスタジアムを下り始めた。当時を知る者が見れば分かる、若かりし頃の【黒翼】を思い出させるようなその立ち振る舞いを、本人は気付きもせず、また意識もしていないが。

そうして、暗い通路へと戻って…自身の控え室へと戻ろうかと歩を進めていた…

―その時だった。

「待て鷹矢！」

―！

「むっ、どうした遊良よ、そんなに血相を変えて。」
「お前！『どうした』じゃないだろ！」

突如、強引にその腕を遊良につかまれ、壁際へと押しやられる鷹矢。
たった今戦いが終わったばかりで、先ほど彼が言っていたように『少し疲れて』いるような鷹矢に対して取る遊良の態度にしては、些か労いが足りないと思われるものの…
その遊良の顔は険しく、せっかく鷹矢が勝ったというのに、それどころでは無いと…そう言いたげな顔をしていた。

「さっきのアレ…お前、大丈夫なのか!?」
「…む?」
「黒い靄みたいなやつだよ!」

その遊良の心配の原因…それは、先ほどのヒイラギとの戦いで、鷹矢の足元に漂っていたあの微かな『黒い靄』のことに違いないだろう。
それに気付いていた観客は居らず、いくら微量で人の目に映るかギリギリの薄さだったとは言えども、鷹矢の真後ろの通路で戦いを見ていた遊良には…そう、過去に2度もソレを見て、ソレを持った相手と戦ったことがある遊良だからこそ、先ほどの鷹矢の足元のソレに気付けたのだ。
だからこその、鷹矢への心配。あの泉　蒼人の変貌ぶりを、嫌でも思い出してしまう遊良には…先ほど鷹矢に漂った『黒い靄』に対して、過剰に反応してしまう。

「うむ、何だかいきなり頭が痛くなったが、気合で乗り切った。」
「いや気合って…そういうんじゃ無くて、どこか変とか、何か苦しかったりとか…イライラしたりとか…」
「大丈夫だ、問題ない。どこか変わったように見えるか?」
「…見えない。」

それでも、どうにも普段通りに振る舞い、全く変わった様子を見せない鷹矢。遊良の心配を他所にした、いつもと変わらぬ鷹矢の雰囲気。

それは遊良とて、鷹矢を目の前にしていれば嫌でも感じるのか。イースト校で蒼人と対峙したときに感じた、あの嫌な感じはまったくせず…本当にいつも通りの幼馴染というだけ。

「…本当に何とも無いんだな？」

「むぅ、しつこいな。大丈夫だと言っているだろう。」

―それでも、心配せずにはいられない。

蒼人が変貌した原因が、あの『黒い靄』にあることは遊良にも容易に想像できている。そしてそれが先ほど遊良の目の前で、鷹矢の足元に漂っていたのを見てしまえば…どうしても、どこまでも心配が沸きあがってくるのは仕方のないこと。

鷹矢の『大丈夫』が信用できないとか、そんな話では断じて無い。関係の無い他人ならば、遊良だってここまで心配はしないだろう。そう、『他人』ではないからこその心配を、どうしてもしてしまう。

「そんなことより、お前にはもっと心配すべきことがあるだろう？」

「…何だよ。」

「明日の試合だ。お前はあの、ウエスト校の馬鹿者との試合の事だけ心配していろ。あいつに勝たないと俺と決勝で戦えないからな。」

「いや、なんで自分はもう決勝に行ける気満々なんだって。お前だって準決勝あるだろうが。」

「うむ、まぁ成るようになる。俺だって考えくらいあるからな。」

「…お前のソレが一番信用できないんだっての。」

しかし、会話を重ねていればソレが和らいでくるのも確かなのか。遊良の心にあれだけ沸きあがっていた心配も、『本当』に普段通りの鷹矢を見ていれば、どこか軽くなってきているのを遊良も感じている様子を見せて…その口調も徐々にいつもの調子に戻り始めていた。

もしかしたらデュエルの最中に、鷹矢に『何』か起きていたのだとしても…この馬鹿のことだからそれを振り払って、そうして何事にもなっていないのではないか、と。

―『何も知らない』からこそ、遊良はそう感じていて…

「とりあえず腹が減った。勝ったから飯抜きは無しなんだろう？今日こそハンバーグだ。」

「…はぁ、わかったわかった。作ってやるって。それより、その『考え』ってやつ…本当に大丈夫なんだろうな。」

「うむ！」

明日に待っている強敵を忘れてはいなくとも、それでも不安が無さそうな鷹矢と共に…遊良は掴んでいた鷹矢の腕を離して、その場を後にするべく歩きはじめた。

―…

「…な、何で？…あなた、地紫魔なんでしょ？」

締め切られた控え室で。突然押し入ってきたヒイラギとデュエルを行っていた竜胆　ミズチが、目の前に召喚されたモンスターに対して驚いたような声を漏らした。

しかし、それもそのはず。先ほどの第四試合を見ていたミズチからすれば、ヒイラギの手は既に読めていて…そこから感じられた実力から考えれば、この紫魔の女は自分には勝てないと、そう結論が出ていたというのに…

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８

ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

先ほどの第四試合でヒイラギが見せていたデッキとは全くの別物。デッキも戦法もテンポも、別人かと思うくらいに変わっていて…何かを『見通す目』を持つ彼女を持ってしても、その変化をまるで読ませない紫魔　ヒイラギ。

気がつけばミズチが押されていて、もう後が無いくらいにギリギリに立たされているではないか。

そんな焦るミズチを見て、ヒイラギはゆったりとその口を開くのみ。

「ホホ…別に、融合体の属性は『地』に限定されていますが、メインデッキのモンスターまで制限はされておりませんの。」

「…その【Ｄ―ＨＥＲＯ】…それって…」

「えぇ、あなたも知る通り、もちろんこれらは全て借り物ですわ。私の本来のデッキではどう足掻いてもあなたに勝てそうではありませんでしたので…。まぁ、亜蓮と大治郎にも見せるわけにはいかないので、こうして締め切らせていただいたわけですが。」

「…で、でも…まだ私は負けていない。」

しかし、いくらギリギリに立たされているとはいえ…ヒイラギのデッキが、彼女もよく知った強者のデッキだったとしても、それで勝負を諦めるミズチでは無いだろう。

ミズチの目の前にいるこの紫魔の女が、『何か』よからぬ目的を持ってココに来ていることは確実で、『竜胆』にとって敵である紫魔に負けるなど、絶対に彼女のプライドが許さぬこと。

その手札にある防御札と、伏せているカードを持って、それを耐えれば返しのターンで逆転を。そう、強く思っていて…

―それを感じ取ってもなお、まるで嘲笑うかのように。

ヒイラギは一枚のカードを手に取り宣言して。

「いいえ、これで終わりですとも！【ミラクル・フュージョン】発動！墓地の【Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン】と【Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン】を除外融合！」

―突如

これまで放っていたヒイラギのプレッシャーが、その融合魔法によって異質なモノへと変貌を遂げる。

それは地響きにも似た、しかしそのプレッシャーは大きすぎるが故に、逆に人が感じ取れる容量を大幅に超えて

その中で、ヒイラギは高らかに『その名』を叫び…

「融合召喚、現れなさい、レベル８、【Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース】レベル８
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

幾千の命を宿すモノ、無限の命を背負うモノ。

果てなき海と大地を生み出し、進化を続ける生命の化身。マグマを噴き上げ、空をを支え、命を育むまさに『地の星』。

それは湧き上がる命の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって…

「…何…このＨＥＲＯ…こんなの、見たこと無い…」

「ホホホ、燦然と輝くプラネットの一球ですわ！…まぁ、これも所詮借り物なのですが、あなたを倒すにはコレで十分。」

静かに、漏れ出すように呟かれるミズチの言葉。それは、彼女が今

まで戦ってきた紫魔が使っていた、どの【ＨＥＲＯ】とも違ったモンスター。
いや違う、この世に溢れている、どの【ＨＥＲＯ】とも異なった姿をしていて…姿だけではなく、モンスター自身が発する存在感からして、彼女が今まで戦ってきたどんなモンスターとも異なっていた。
…そんな、見たことの無いモンスターを操るヒイラギに対して、どこかミズチの心が恐怖感を覚えたのだとしても、それは仕方のないこと。
じりじりと無意識に、ミズチが壁際まで後ずさってしまっていて…座り込んでしまうことを必死になって拒否しているものの、その背を壁につけて、何とか寄りかかっている。

―そう、星の荒ぶりにも似たこのモンスターの圧力に、心が直接押しつぶされているかの様なのだから。

「あら、なに気を抜いていらっしゃるのかしら！【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】の効果発動！【捕食植物ドラゴスタペリア】を、Ｂｌｏｏ―Ｄの装備カードとします！そしてＢｌｏｏ―Ｄの攻撃力を、ドラゴスタペリアの攻撃力の半分だけアップ！」

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００→３２５０

「…攻撃力が、３２５０…」
「まだですわ！【ハーピィの羽箒】を発動！あなたの伏せカードを全て破壊！そして【手札抹殺】を発動！」
「…あ…し、しまった…」
「ホホ、セラセニアントを持っていたことは織り込み済みですの。１枚捨てて１枚ドロー！そしてＢｌｏｏ―Ｄがいる限り、あなたのモンスター効果は無効となります！バトル！【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】で【捕食植物キメラフレシア】を攻撃！鮮血の…ブラッディ・フィ

ニッシュ！」

―！

「…くぅ。」

ミズチ　ＬＰ１５００→７５０

ミズチのドラゴスタペリアをその身に宿した、青き血持つ竜頭手のＨＥＲＯが迫り、そのまま無残に切り裂かれる毒花の一房。

いくらキメラフレシアが、こと戦闘において強靭な効果を持っていたのだとしても…この運命の英雄の一体を前にしては、その効果は無駄と化してしまう。

それは彼女とて重々承知していたこと。しかし今の彼女には、そんなことを気にする余裕など既に無くなっており…彼女の震える華奢な体に残るのは、後ろに控えた星の荒ぶりをその身で体現している存在に対しての、まさに恐怖感しかないのだろうか。

…まるで、このモンスターによって…恐怖を感じることしか、彼女には許されていないかのように。

「トドメですわ！【Ｅ・ＨＥＲＯジ・アース】でダイレクトアタック！」

―！

まるで押し付けられるような圧力は、意図的に強くされた重力にも似ていて。

第四試合を見ていたのだから、ヒイラギの手は読めていた。その実力も測れていた。そうだというのに、今ミズチ本人の目の前に立つこの紫魔　ヒイラギは、先ほどとは全く違った雰囲気を放つ、演じられた別人のよう。

そんなヒイラギの宣言によって迫りくる星の一撃を、ただただ呆然

と見ているミズチには…そう、壁を背にしていてどこにも逃げ場など無い彼女には、その一撃を避けることは出来ないのであって。

「…あ…う…」

ミズチ　ＬＰ５０→０（―２４５０）

―ピー…

控え室内に響いた無機質な機械音は…確かに竜胆　ミズチの敗北を知らせていた。

「さて、では竜胆　ミズチ…」

そしてすぐにソリッド・ヴィジョンが消えていき、それに連動して発生していた、押し付けられるような重力にも似た力が消えて…同時にミズチの体を支えていた彼女の力も抜けたのか、背を壁に擦り付けるようにしてその場に座り込んでしまう儚い少女。

それを見たヒイラギが、ミズチに向かってゆっくりと近づいてきて…急に力の抜けた足では、ミズチも到底逃げ出すことなど出来ないのだろう。ボンヤリとした頭で、迫るヒイラギを見ているだけ。

そして、ヒイラギは座り込んでいる少女に近づいて立ち止まると、ポケットから『何か』を取り出し始める。

―ソレは、先ほど砕け散った…ヒイラギがいつもつけていた『黒い宝石』の指輪。

新しいソレにやや違和感を感じるように、はめた指輪を一撫ですると…座り込んで立てない、儚げな少女の頭上からその手をかざした。

「…な、何をするつもりなの…」

「ホホ…これから消える意識には、聞いても無駄なことですわ。」

―！

「…ッ!?」

その瞬間…ミズチに昇る黒い靄。

体が強張り、息が苦しい…そんな、まるで生きたまま丸呑みにされているかの如き不快感が、ミズチを包んで締め上げて。

思考が奪われ、意識が薄れる…そんな、まるで自分が自分でなくなっていくかの如き恐怖感が、ミズチの自我を飲み込んでいく。

その、深遠から湧き出てくる闇が。

…もしも、通常のミズチであったならば…絶対にコレに憑かれることはなかっただろう。儚げに見えても、精神力が強いこの少女には負の感情が少なく、例え憑かれたとしても…その自我を持って押さえられたに違いない。

だからこそ、ヒイラギは仕掛けたのだ。デュエルで負かし、そして誰もその存在を知らぬ、この『プラネット』が放つ深い圧力で追い討ちをかけて。

それは、きっと誰にも抗えぬモノ。当然、竜胆　ミズチとて、例外ではないのだから。

―抗えず、飲み込まれる。

「…あ…に…兄…さ…」

そうして…消え行く意識の中で、最後まで兄の顔をその脳裏に移しながら…

―彼女の意識は、そこで途絶えた。

「やはり、あの天宮寺　鷹矢がおかしいのかしら…まぁいいですわ。これで『プランB』は予定通りですし。」

意識を失って、倒れている少女を見下ろして。着々と計画が進行していることを確認しながらも、やはり先ほどの第四試合での天宮寺鷹矢の例は彼女にとっても特殊なのか。

『何か』の目的のために、『何か』を起こしている紫魔達。しかし、その真意は彼女らにしか、未だ分からず。

…そうして、ヒイラギはやや怪訝な顔をしながら、ミズチの控え室から出て行った。

――…

ｅｐ３０「決闘祭、波乱ー渦巻く決意」

「…よし。」

まだ選手達の集合時間まで時間に余裕があるという時刻。まだ観客も会場入りできない時間に、自身の控え室で目を瞑っていた遊良がその目を開けて一息ついていた。

…その頬に微かに汗を滲ませ、まるで一試合終えたあとのような疲労感を見せて。

もうコレで何度目になるだろうか。

ウエスト校３年の竜胆　大蛇…彼の一回戦・二回戦の戦いを、何度も何度もその脳裏に反芻して…そして、ソレに対して自分が取るべき対策や戦法を思い浮かべ、そのイメージトレーニングを重ねていたのだろう。

師の教えである、常に『考える』ことを、決して怠らぬように。

―【決闘祭】３日目、準決勝当日。

試合は午後から始まるとはいえ…まだ集合時間にも早いというだけあって、自分の試合までも相当の時間があると言うのに。

…既に臨戦態勢を整えるかのように、全く集中を切らさぬ遊良の頭の中には、対戦相手である竜胆　大蛇のデュエルへの対策で一杯になっている様子。

当然、まだ眠そうだった鷹矢もこの時間から一緒に連れてきていて…会場入りしてすぐにスタッフが『逃げ出さない』ように連行していたから、初日のような心配などなく。

「…もう一度だ。今度は違うパターンで…」

再びその頭の中に、これから戦う対戦相手を思い浮かべて。

「…爆発的な攻撃力、どれも油断できない豊富な融合体、出てくる前に止めるか、攻撃する前に破壊するしかないか。」

昨年の【決闘祭】準優勝者。その称号は、決して軽いものなどではないだろう。

この広い決闘市の、２０万人を超える学生達の中で…双璧を成している高い壁。当然、簡単に勝てるような相手では絶対になく、自身の力を全て持ってしても…勝てるかどうかなど、遊良自身にも全く分からないのだ。

そう、ソレほどまでに、遊良が対戦相手である竜胆　大蛇から感じた印象は凄まじく…

相手の戦意や感情の起伏と言うモノは、デュエルの中において戦況を読み取る重要な要素であるのだが…それが全く感じられないというのは、対戦していても恐怖心しか生み出さないこと。

本当の姿を見せぬ『演者』、実力の底を悟らせぬ『強者』。

竜胆　大蛇にとって、その振る舞いの全ては戦況をコントロールするためのツールであり…心の内が表に現れる、このデュエルという戦いにおいて、その本心を隠れさせて出さないということ自体が異常そのもの。

「とりあえず、防御に徹するのだけはダメだ。【ＤＮＡ改造手術】…十文字さんクラスならまだしも、いくらこっちが守りを固めてもソレを簡単に抜けてくる。かといって、攻撃力での殴り合いじゃあ絶対に勝てないし…」

昨年優勝者の十文字　哲が、絶対防御を持つデュエリストだとすれば、竜胆　大蛇が撃ち出す攻撃は…神出鬼没に現れて、そして他に類を見ないほどの巨大な力で、一撃で敵をへし折る威力を持っているモノ。

―全てをすり抜け、全てを捻じ伏せる、まさに『大蛇』

この【決闘祭】において、渦巻く決意の大きさや思いが、一体何を巻き起こすのかは誰にも予想できない。当然遊良だって自身のためや師のために、絶対に負けるつもりなどは無く…何が何でも勝ちに行くために、こうやってイメージトレーニングに余念が無い。

そんな、今日も自身の前に立ちふさがる高い壁を目の前にし、己の負けられない理由を遊良は胸に刻みこんで…戦う意思、その決意をより一層強くして、戦いの時を待っていた。

―!!!

イースト校1年、天城　遊良
ＶＳ
ウエスト校3年、竜胆　大蛇

その2名の選手の名前がスクリーンやモニターに映し出されると同時に、会場内へと入ってくる選手を見て…誰もが一回戦・二回戦以上の地響きを沸きたてていた。

「…よろしくお願いします。」
「おう。」

その中で、お互いにスタジアムの壇上で向かい合う二人。
相変わらず、過去の試合の映像だけでは大蛇の実力は測れず、何を考えてどんな手を取ってくるのかも分からない遊良ではあったものの…始まる寸前までイメージトレーニングを行っていたおかげか、探れぬ相手である大蛇を見ても、遊良の気合は十分で気後れしていない様子にも見える。
それに対して、大蛇は金髪を地響きに揺らめかせて、いつもと変わらぬ態度を見せているだけだ。
その絶えない笑みを浮かべている口元からは、絶対に本心を覗くことは出来ず…実力を探ろうと遊良が視線をぶつけても、抵抗の無い川の流れのように、いとも簡単に受け流されてしまっている。

（…ダメだ、全然この人がわからない…こんなことは初めてだ。）

幼少期から、他人に敵意や悪意をぶつけられ続けてきた遊良にとって、『他人』の印象や、敵意のレベルを感じ取るのには慣れていて…きっと常人以上に、観察眼というモノの錬度は高いだろう。
しかし、その遊良をもってしても、まったく測れぬ相手が目の前に立っている。

戦ったことのない人種を相手に、いくらイメージトレーニングを重ねて気後れは無いとは言え…寄り添える安心感など生まれるはずは無いというのに。
準決勝と言う舞台ゆえに、一回戦・二回戦とは比べ物にならない重圧が圧し掛かってきているものの…大蛇はソレを感じていない振る舞いで飄々と立っているのみ。
そんな相手を前にしても、遊良とて今更泣き言など言って入られないことは分かっているだろう。

そんな中で、これから始まる戦いのゴングが、今…

『それではぁ！【決闘祭】準決勝第一試合ぃ！かいしぃぃぃぃー！』

―デュエル！

切って、落とされた。先行はウエスト校3年、竜胆　大蛇。

「俺のターン、何もせずにターンエンドや！」
「なっ!?」

大蛇　ＬＰ：４０００
手札：5→5枚
場：無し
伏せ：無し

始まってすぐに、そのターンを終えた大蛇。
その意味のわからぬプレイングに、期待をこめていた観客達もあっけに取られた様子を見せて…にわかにざわめきを起こすものの、多分それ以上に、驚いているのは対戦している遊良自身に違いない。
竜胆　大蛇、確かに何をしてくるのか全く予想がつかない男ではあるが、伏せカードも何も出さずにそのターンを終えることなど誰が想

像できようか。
ここまでの道筋を、その実力でもぎ取ってきた男が…よもや手札事故など起こすはずが無いという事は、誰の目にも明らかな事実。しかし、ただターンを渡された遊良にしてみれば、不気味としか言い様がない。
（…な、何を考えている？【速攻のかかし】…それとも【バトルフェーダー】でも持っているのか…）
確かに、竜胆　大蛇の扱う【サイバー】は後攻に強いと言えるデッキではあるものの…だからと言って、先行をこんな蔑ろにするわけがないだろう。
そのプレイング一つとっても、何か裏を感じずにはいられないのか。そんな考えが遊良の頭の中でグルグルと動いては消え、思考の邪魔をしていた。
「お前のターンやで？」
「…俺のターン、ドロー。」
そんな遊良を見透かすように、大蛇に促されて自分のターンを向かえる遊良。
しかし、その手は重く…ここで一気に行ったほうがいいのか、まだ準備を整えた方がいいのか。そんな迷いすら生じている様子を見せている。
大蛇の場はがら空きで、遊良にとってネックな永続罠である、【ＤＮＡ改造手術】は伏せられておらず。例え攻撃が止められても、次のターンに堕天使たちが融合素材にされるという事はないだろう。
それでも、下手に動いては一瞬でやられることには違いない。ソレを理解してか、遊良は自分の取るべき手を考えたのか、やっと動き出す素振りを見せて…

「魔法カード、【トレード・イン】発動！レベル８の【堕天使ゼラート】を捨てて２枚ドロー！続けて【堕天使の追放】を発動し、デッキから【堕天使イシュタム】を手札に加える！そのままイシュタムの効果発動！手札の【堕天使アムドゥシアス】と共に捨てて２枚ドロー！…【堕天使ユコバック】を通常召喚！その効果で、デッキから【堕天使スペルビア】を墓地へ送る！」

流れるような動きで、次々にデッキを回転させていく遊良。

場に現れているのが、小さく力の弱い堕天使だけとは言え…相手の出方が分からぬ以上一気に展開してトドメを刺しに行くのは危険だと、そう感じ取ったのだろう。

気を抜かずに、見極めを。

何もわからぬ状態で、漠然と攻めることだけは避けなければいけないことを理解し…その警戒を怠らぬまま、遊良はバトルフェイズへと入った。

「バトル！【堕天使ユコバック】でダイレクトアタック！」

「何や、一気に来ぉへんのかいな。」

―！

大蛇　ＬＰ：４０００→３３００

「…何もしないでダメージを受けた？」

「別にライフは残るんやし、一気に来ないんやったら、たった７００くらい受けたるわ。」

大蛇のその口ぶりから、やはり攻撃を防ぐ手を残しているのだと遊良は確信を持って…いや、それもこの男の『演技』かも知れないこと

を思い出すと、ここでの正解は一気に展開してトドメを刺しにいくことだったのではと、すぐに後悔が押し寄せてくるのか。

大蛇の考えが、策が、心が…影も形も全く見えてこない。

それを改めて目の当たりにし、そうして退治している遊良の心情は如何なるモノなのだろうか。そんな気味悪さのみを感じながらも、早々に攻撃を終えた遊良は、自身の場を整え始める。

「…く、俺は【堕天使の戒壇】を発動。墓地から【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚し、その効果で更に【堕天使イシュタム】も守備表示で特殊召喚。」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

「ふーん、守りを固めるっちゅーわけやな。」
「【堕天使イシュタム】の効果発動、ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る。俺はデッキから【背徳の堕天使】を手札に加え、その後【堕天使の追放】はデッキへ戻る…俺は2枚伏せて、ターンエンド。」

遊良　ＬＰ４０００→３０００
手札：6→3枚
場：【堕天使ユコバック】
【堕天使スペルビア】
【堕天使イシュタム】
伏せ：2枚

大蛇への警戒が益々険しくなってきつつも、遊良には考えられる相手の手に対して、取れる手を打つしか、今は出来ることがないだろう。

すり抜けてこようとも、なんとしてでも止めるために。

十文字　哲クラスの絶対防御は無理でも、一瞬だけでもそれに近い鉄壁を何としてでも作らなければと、そう言わんばかりの遊良の表情は…大蛇が如何なる手を取ってこようとも、それに対応しきれると言う自負を纏っているのか。

しかし、そんな遊良を見ても、大蛇の態度はまるで変わらず、遊良がいくら持てる力で鉄壁を再現しようとも、まるで応えぬ佇まいを見せていて…

観客の誰にも、対戦している遊良にも…その真意を悟らせぬよう。

そう…今、彼の頭に浮かんでいる、一つの出来事。

…大蛇の脳裏には、試合が始まる直前の、自身の控え室での出来事が浮かび上がってきていた。

――…

「…お前ら…もっぺん言ってみぃ…」

およそ、『その感情』を全く隠すことなく声をあらわにして、ウエスト校3年の竜胆　大蛇は自身の控え室内へと言葉を放った。

もうすぐ試合が始まるであろう時間、セントラル・スタジアムの観客席もざわめきが大きくなってきているのが、控え室にいる大蛇にだって感じ取れているというのに…

戦いに向けて気持ちを入れ替えていた彼の元に、突然入ってきた来

訪者が言い放った言葉が、彼の神経を逆撫でしたかの様子。
そんな大蛇の眼前には、彼が最も嫌いな『名』を持った3人の人間が立っていた。

「…あら、聞こえなかったのかしら、今言った通りですわ。」

紫魔　ヒイラギ
紫魔　亜蓮
紫魔　大治郎

すでに負け去って、【決闘祭】から弾かれているはずの学生達が…何故か、勝ち残っている選手とスタッフしか入れない場所へと入ってきていることだって彼には疑問だというのに。
それ以上に、彼の『敵』として認識されている『紫魔姓』の人間達が、偉そうに上から目線で放ってきた言葉に憤慨を見せている様子。

「竜胆　大蛇…この試合、あなたには是非とも負けてもらわないといけませんの。」
「…ちっ、ふざけんなや…お前ら何様のつもりや？」
「…ホホホ、り、『竜胆』程度が何を吼えているのかしら…大人しく紫魔に、尻尾を振っていれば…」
「あぁ!?調子乗りすぎとちゃうか自分ら！舐めた口聞いとるんやないぞワレ！」

舌打ちを交えた、いつもの飄々とした彼からは想像もつかない怒気をぶつけて、控え室内に充満しているこの空気は…大蛇の声と同調してビリビリと紫魔達の肌を弾いているのが見て分かるだろう。
今大蛇に向かって声を発しているヒイラギだって、その空気に当てられているのだろうか、いつもの彼女の声と比べてもどこか上ずっているかのよう…
この控え室内に入ってきた紫魔達3人のうち、亜蓮と大治郎はその

空気の中で声を発することすら出来ておらず、ただ立っているだけのウドの大木。
しかし、それは当たり前なのか。
【決闘祭】に出場している以上、勝つことを放棄している選手など居らず…そして、それ以上に大蛇には勝ちあがりたい理由だってあるというのに。
彼が目の敵にしている『紫魔姓』の人間から、無理やりにそれを投げ捨てろと命令されてしまっては。聞くつもりも無ければ、ただで済ます気も大蛇には無いことは必至。

「そこのビビッとる男二人と一緒に、お嬢さんも今すぐにボッコボコにしてやってもええんやで？3対1で襲われたわけやし、正当防衛や。【決闘祭】で負けてった選手と、勝ち残っとる選手…どっちが大事にされると思てんのや？」
「…ッ、それは怖いですわね…」

伸ばした金髪から除く大蛇の目は、まるで蛇のように鋭く…やや細身ではあるが、幼少期に地獄を見た事もある経験からか、こういった喧嘩事だって彼は相当に場慣れしているのか。
当然、役立たずに突っ立っているだけの男2人など相手になる筈も無く、唯一声を出すことが出来ているヒイラギとて、その華奢な体では最初から戦力には数えられないだろう。

「…でも、聞いて貰うしかないですわ。私達の目的のために…」
「あぁ!?何ゴチャゴチャ言っとるんやこのアマ！」

そうだと言うのに、ヒイラギは引く様子を見せず…ソレに対して、大蛇は更に苛立った声を出して。
いつも本心を隠し、その考えを他人には出さない彼。
しかし、目下の『敵』に対して、その敵意をぶつけて威嚇している今の彼は、きっと偽物ではないはず。全て倒すべき敵である紫魔家の

人間に対して威嚇する蛇の如く、その感情を剥き出しに。
ヒイラギの後ろに控えている亜蓮と大治郎が、その圧力に耐えかねて一歩後ずさった…

…その時だった。

「…では、こちらもカードを切らせて貰いますわ。」

そう…その時、静かに…控え室の扉が静かに開いて…

そこには、ヒイラギの声に促され、ゆっくりとその中へ入ってきた一人の姿。

…それは、虚ろな目をした少女であって。

「…な、何でお前がココに来とんねんミズチ、家で寝とったはずやろ？」

その顔を視界に捉えてしまっては、流石に大蛇と言えど、ソレを静めしまうのは仕方ないのか。紫魔達に躊躇無く当てられていた怒気が一瞬収まり、控え室内の空気もやや戻って。
驚いたような声を漏らして、大蛇が再度口を開く。

「おいミズチ！聞いとんのか！おいっ！」
「…」
「何とか言わんかい！何でお前が紫魔なんかと一緒に居んねん！」
「…」

いくら兄が問いかけても、それに対して帰ってくる妹の声は無い。
思いかえしてみれば…昨日の帰りに控え室に迎えにいったときから、どこか様子のおかしかった彼の妹、竜胆　ミズチ。

兄がいくら話しかけても、一言も発せずに無視し、昨晩も何も食べずに早々に寝てしまったものだから…きっと哲に負けたことでふてくされているのだろうと、大蛇はそう思っていたというのに。
そんな、兄の声が全く聞こえていないかのようなミズチの振る舞いは、昨日の帰りから全く変わっていないものの…ヒイラギに促されるまま歩いてきて、そのままヒイラギの隣で立ち止まった姿は異常そのものであって。
そんな、意味が分からぬようにして妹を見ている大蛇に向かって、まるで形勢逆転したかのようにしてヒイラギは言った。

「妹を人質にとられては、あなたといえども流石に言う事を聞くしかないのではなくて？」
「…妹に…何をしたんや…」
「ホホ、少々強引な手を使わせて貰いましたわ。おかげで今では私のいう事を聞く人形と言うわけですの…妹を無事に帰して欲しければ…後は言わなくても分かりますわね？」
「…お前らぁ…」

大蛇の怒気が収まったのをいいことに、後ろに控える男二人もその表情を崩して。ニヤニヤと気色悪く緩めた口元が、大蛇にとっては苛立ちしか感じないモノとなっている。
当然、何が起こっているのかなどわからぬ大蛇ではあったが、今密室になっているこの控え室内で、多勢で迫ってきているこの紫魔達を、今すぐにでも殴り倒してやりたい衝動が起こっているのか。
拳を握り、肩を震わせ。
およそ『演技』とは思えぬ怒りを込めてなお、大蛇は口を開く。

「…こんな程度で…俺が怯むとでに思とるんか？」
「なっ？お、お前、妹がどうなってもいいってのか…」
「うるさいわ三下がぁ！臭い口開くなボケェ！」
「ひっ！」

「大体なぁ！妹人質に取ったくらいで調子のんなやカス共！誰がお前ら紫魔の命令なんて聞くかっちゅーねん！」

大蛇の返答に、思わず驚いたように口を開いた紫魔　亜蓮を一蹴し。こんな卑劣な手を使ってくる紫魔の言う事など、誰が聞いてやるものかと、そう言わんばかりの大蛇の雰囲気。

…それは彼と妹の掲げる『名』の復興が、例え家族を犠牲にしても成し遂げたい目標が故の猛りなのか。

しかし、そんないつキレてもおかしくない大蛇の現状を見てもなお…さらにヒイラギは、言葉を発するのみ。

「…せ、精々考えることですわね。あなたにとって、『名』と『家族』…どちらの方が大切なのかを…」

「あぁ⁉…ってどこいくねん！まだ話は終わってへんで！」

「…ホホ、もう私達の話は終わりましたので…後は、あなた次第ですわ、妹がどうなるかは…」

そうして…

最後まで役に立たなかった男たちと、虚ろな目をしたままのミズチを連れて…ヒイラギが最後にそう呟くと、紫魔たちは引き下がろうと部屋を後にしていった。

…そんな中で、果たして一人残された大蛇の心情はいかなるモノなのだろうか。

たった一人の妹を人質に取られたとは言え、憎き紫魔の言う事を聞くような真似だけは出来ない彼。

きっと妹とて、兄が紫魔に従うくらいなら喜んで犠牲になるだろうが…ヒイラギが最後に残していった言葉が、どこかその心に引っかかっていて…

―『名』か、『家族』か。

世界最大の犯罪者の所為で、地に落ちてしまったかつての名家の『名』か…共に地獄を生き抜いた、たった一人の『妹』か。
残酷にも、彼に考える暇を与えないように…刻一刻と、準決勝の開始時刻が近づいてきていた。

―…

「俺のターン、ドロー！俺はカードを3枚伏せて、ターンエンドや！」

大蛇　ＬＰ：３３００
手札：6→3枚
場：なし
伏せ：3枚

自分のターンに入った途端、またもやそのターンをすぐに終えてしまった大蛇。
確かに伏せカードは3枚あるが、それでも遊良の場の3体のモンスターに対して、そのフィールドの静けさは遊良と比べても圧倒的に差があるだろう。
型にはまらぬデュエルで、何をしてくるかわからないのが竜胆　大蛇のデュエルの醍醐味と観客達も知っているとは言え…【決闘祭】の準決勝という場で起こすそのあまりの静けさには、誰の目にも不審に見えるのか。
さらに不可思議なざわめきを大きくしていく会場内ではあったものの…それ以上に、目の前に立つ遊良自身が、ソレを感じている様子にも見える。
「…一体、何を考えて…」

「ほらほら、チャンスやでー。とっとと攻めてきぃ。」
「ぐ…」

簡単にそう言ってくる大蛇に対して、思考の警戒レベルが益々上がっていくのを遊良も感じていた。
あえて隙だらけに魅せてくることで、遊良が自身の思考の渦に挟まって、攻めあぐねることを読んだのだろうか。
…だとすれば遊良の目の前に立つこの男は、相当な精神力の持ち主ということになるだろう。
何せこの【決闘祭】において、相手の思考やテンポすらその手中で転がすような真似をすることは、自分のスタイルを貫き通す以上に難しいことなのだ。
揺らめく金髪の奥に隠れたその視線は、果たして遊良の攻撃を誘っているのか…または遊良が手を拱くことを見越したブラフなのか…

「…壁モンスターは居ない、だったら攻めてやるさ！【闇の誘惑】発動！2枚ドローし、【堕天使アスモディウス】を除外！そして【堕天使ユコバック】をリリース！レベル10、【堕天使ディザイア】をアドバンス召喚！」

【堕天使ディザイア】レベル10
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２８００

それでも、遊良とて手を拱いているだけでは、決して大蛇には勝つことなど出来ないだろう。
煌く鎧を纏った堕天使を呼び出し、その攻め手を増やして。得体の知れぬ相手ではあっても、意を決したようにして攻撃を宣言した。

「そして【堕天使スペルビア】と【堕天使イシュタム】を攻撃表示に変更し、そのままバトル！先ずは【堕天使スペルビア】でダイレクトアタック！」

「おっと、ダメージ計算時に罠カード、【パワー・ウォール】を発動！俺は6枚のカードを墓地へ送って、その戦闘ダメージを0にするで！」

そんな、まさに堕天使が放った光弾の当たる寸前で…大蛇の前に出現した聖なる力の壁がそれを防ぎ、主への手傷を無に帰して。

相手の攻撃力依存とはいえ、防御と同時に墓地肥やしを行えるこのカードを上手く利用して…高い攻撃力を持ったスペルビアの攻撃によって彼の墓地が潤沢に越えていく様子は、遊良にとっては不気味そのものだろう。

そんな気持ちを払拭するように…さらに遊良は攻撃の手を休めずに仕掛けるのだが…

「くっ、だったら【堕天使イシュタム】でダイレクトアタック！」
「もういっちょ罠発動！【ガード・ブロック】！ダメージを0にして、デッキから1枚ドロー！」
「まだだ！【堕天使ディザイア】でダイレクトアタック！」
「おっとぉ！直接攻撃宣言時、手札から【速攻のかかし】を捨ててその攻撃を無効に！そのままバトルフェイズは終了や！」
「くそっ…やっぱり持っていたのか…」

十文字　哲の『絶対防御』とは、また違った毛色を見せてはいるものの…遊良の連続攻撃を、いとも簡単に止めてみせた大蛇の防御の振る舞い。

遊良の連続的な猛攻すらすり抜け、涼しい顔で立っていた。

そう、彼が最後に使った【速攻のかかし】とて…大蛇が引き抜いた手札から見ても、おそらく最初からその手札にあったモノ。

もしも遊良が大蛇の伏せカードを破壊してから攻撃をしていたとしても、結果的には墓地肥やしとドローを防いだだけに留まって、結局はＬＰを削りきることは出来なかっただろう今の攻防は…

ただ単に、大蛇の『底』が見えないプレイングを、まじまじと見せ

付けられただけの攻防になってしまって…遊良が歯痒さを覚えていても、苦々しい顔でそのターンを終えるしかないのか。

（残ったあの1枚…あれが【ＤＮＡ改造手術】なのか？…いや、ここで【背徳の堕天使】を無駄撃ちするわけにはいかない…）

「…俺は1枚伏せて、ターンエンド。」

遊良　ＬＰ：３０００
手札：４→２枚
場：【堕天使ディザイア】
【堕天使スペルビア】
【堕天使イシュタム】
伏せ：３枚

「俺のターンや、ドロー！」

そんな遊良を意に介さず、堂々とカードを引いた大蛇。
ボードアドバンテージ的には遊良が上で、猛攻を防いだとは言え、ここまでそのターンをすぐに終えている大蛇が、次に何をしてくるのかなど誰にも想像がつかないだろう。
懐疑と期待の篭った視線と声援を大蛇に乗せてくるものの、彼の表情はあくまで飄々としている。

…1年と3年

勝ちたい気持ちの大きさも、勝たなければいけない理由の重さも…きっと遊良と大蛇に大差は無いはず。
しかし、そんな戦う理由に加えて、妹を人質に取られているという『枷』がある大蛇の佇まいの方が遊良よりも堂々としていて…経験や年齢が2年違うだけで、ここまでの差を見せ付けてくる大蛇のほう

が、圧倒的な余裕を『演じて』いた。

（若いなぁ天城ぃ…迷っとるのがバレバレや…ちゅーても、俺もどないなもんか…）

1枚増えた手札を見て、先ほどの罠で墓地へ送られたカードを思い出して。

その内容からこれからの展開を思い浮かべると、どうしても彼の思考の中に刻まれる確かな事実があった。

―そう、『名』か『妹』か。

その、どちらも譲れぬ選択を迫られている大蛇にとっても、考えざるを得ないようなモノが。

（あかんなぁ…これやったらどうあがいても…）

遊良が取るであろう妨害を考え、自分が取れるだろう策を考え…そうして浮かび上がってくるモノ。

『名』か『妹』か…

その、どちらも守りたくとも自分では選べない、しかしどちらを取るべきなのかを彼の『デッキ』自身が導いてくれているようであって…

「…俺が勝ってまうやんか。」

「…え？」

「行くで！永続罠、【ＤＮＡ改造手術】を発動！俺が宣言するのは『機械族』や！」

「…ッ!?やっぱり来たか、けどそれを許すわけにはいかない！罠カード、【背徳の堕天使】を発動！場の【堕天使スペルビア】を墓地へ送って、【ＤＮＡ改造手術】を破壊する！」

発動際に『何か』大蛇が呟いた気がしたものの、それを遊良が聞き取れるはずもなく。遊良にしても、ずっと対策していたカードを破壊して、まずは一つの脅威を取り去ったといえるだろう。
しかし、昨日勝負を決めたカードを無残に破壊されたというのに、大蛇の表情は全くそれを気にしていないように…遊良からすれば、ソレすら『演技』に見えてしまっている。
絶対に気は抜かない。まだ残る大蛇の手札から、捻じ伏せに来るだろう攻撃へと備えて…遊良はその集中を再度入れ直した。

「【オーバーロード・フュージョン】発動や！墓地から【サイバー・ドラゴン・コア】と【サイバー・ドラゴン・ドライ】を除外融合！」

そうして、始めの静寂が嘘のように大蛇が動き出した。
自身の名前その物の、まさに『大蛇』の異名で呼ばれる彼が繰り出す多種多様な融合モンスター達を呼び出すために発動した【融合】で、『何』が呼び出されるのか期待を乗せる観客の声援を割くように…
猛る機械音を掻き鳴らして、ソレは吼える。

「暴竜、轟け！融合召喚！レベル５、【キメラテック・ランページ・ドラゴン】！」

―！

【キメラテック・ランページ・ドラゴン】レベル５
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１６００

神秘の渦で混ざり合い、特異な核から猛り狂うようにして顔と尾を出し暴れるは轟く機竜。
レベル５と低めのレベルを持つものの…おそらくその単体だけでもゲームエンドまで持っていける性能を持つであろうコトは、昨年の

【決闘祭】を覚えている者ならば否応にも知っている。
もちろんその情報は、遊良だって折込済みであって…

「【キメラテック・ランページ・ドラゴン】は融合召喚時、素材の数だけ相手の魔法・罠カードを破壊できる！つまり、お前の残っている伏せカード２枚のことや！」
「知っている！永続罠発動、【デモンズ・チェーン】！【キメラテック・ランページ・ドラゴン】の効果を無効に！」
「ほう、中々やるやんけ！ほな手札から速攻魔法、【サイクロン】発動！【デモンズ・チェーン】を破壊するで！」
「くっ…」

遊良の放った悪魔の鎖から、即座に大蛇の機竜が抜け出して、その咆哮を再び轟かせた。
遊良の防御をいとも簡単に抜け出す様子は、まさに彼の『異名』そのものであって…涼しい顔を崩さずに立つその姿は、彼がこのターンの始めに言った『ソレ』を確実のモノとしているかの様。
まだまだ攻撃力の高い遊良の堕天使達を前にしても、慄いた様子もなく宣言するのみ。

「これで【キメラテック・ランページ・ドラゴン】の効果は邪魔されんと使えるから、残りの伏せカードもコレで破壊や！」
「…キメラテック・ランページのもう一つの効果は確か…３回攻撃!?…ッ、【リミッター解除】か!?それだけはダメだ、その破壊の前に罠カード、【迷い風】発動！特殊召喚されたモンスターの効果を無効にし、元々の攻撃力を半分にする！」

【キメラテック・ランページ・ドラゴン】レベル５
ＡＴＫ／２１００→１０５０

何としてでも喰らいついて、決勝戦へ進むために。激しい攻防を積

み重ね、何とか大蛇の狙いを思考し続けて。
一瞬たりとも気を抜かない遊良の防御で、何度もその効果を止められる機竜が儚く吼えるものの…それは遊良にとっては成功の証。
残る大蛇の手札は2枚。ここで遊良の読み通り【リミッター解除】を使われても、その攻撃力は元の数値へと戻るだけで、決して堕天使達には勝てるわけが無いだろう。

そう、無いだろうと言うのに…

（…あぁもう、押しているのは俺のはずなのに、なんでこんなに不安が残って…）

それでも、どうしても上ってくるソレが、否応にも遊良に圧し掛かってきているのか。
警戒心を解かぬ様子は、流石は準決勝にまで残ったデュエリストではあるのだが、優位に立っているはずの彼が感じているその『不安』は…大蛇の底が見えないとか、本心を隠しているからとか、遊良が大蛇に最初から感じていた印象から来るものでは断じて無い。

…この、たった今遊良が心に感じているソレは、彼にとってもその出所が確かな、原因の明らかなモノ。

（…くそっ、やっぱこの人、物凄い強いってことじゃねーか。）

―単純な、実力差

同じ学生で、その年齢は2つしか違わないとは言えども…自分よりもレベルが一つ高い事実を、直に戦ったゆえに遊良は感じ取ってしまったのだろう。

遊良が2回戦で戦った、サウス校3年の獅子原　エリとて…彼女に謎の『焦り』があったとは言え、ここまでのレベルにはまだギリギリ達していなかった印象があった。
だからこそ遊良も喰らいついて、その『焦り』から来る隙を見逃さなかったからこそ掴めた勝利ではあるのだが…
今、遊良の目の前に立つこの竜胆　大蛇は、『今、遊良達がいるこの段階』よりも一段高い場所に居る。
だからこそ状況的に優位に立っていても、遊良には不安しか出てこないのか。
頬に伝う冷たい汗が、その真実を強く告げていて…

「…1年の癖に、確かによぉやるわ。ホンマにこれで『Ｅｘ適性』が無いんやもんなぁ。大したやっちゃ。」
「ぐっ…」

『こんな状況』に立たされているはずだというのに、大蛇の言葉は…あくまでも軽く。
しかし、その真意は果てしなく重く。
この準決勝という場においても、妹を人質に取られているという状況に置かれていても、こんなに飄々とした自分を『演じて』いる大蛇。それは、そもそも他の出場者とは、実力的にも精神的にも…文字通り『レベル』が違ったことに由来しているのだろう。

―昨年の経験、または彼にとっての負けられない『理由』。

『この段階』にいる遊良にしてみれば、この壁をどうやって乗り越えればいいのか想像もつかないのか。
ただ大蛇から感じる、底知れぬ実力の怖さを今、ひしひしと感じていた。

「…さぁて…どうしても俺のデッキは、俺に勝たせたいみたいやし

なぁ…」

彼の負けられない理由…昨年と同じく、【決闘祭】に出場していた紫魔姓の選手達は全て負け去っていったことは、彼の目的のほとんどを達成したと言えるのだが…まだまだ彼にとって、ここが終わりでないことは明らかなこと。

大蛇の目的…そう、『紫魔家』を打ちのめし、現在この国において不当に貶められている他の融合名家の復興を目指す故に。

その為に、【決闘祭】に出場してきた紫魔姓の学生達との力の差を決闘市中に見せ付けて…かつ、大蛇自身が【決闘祭】でも相応たる結果を残すため。

大蛇の野望…そう、世界最大の犯罪者の所為で、地に落ちたかつての名家、『竜胆家』の復興のために。

その為に、負けるわけには絶対にいかない。

いずれはプロへと進んで、王者である【紫魔】を打ち破って王者の名を手にするという、財界・政界・デュエル界において、巨大な一大勢力となっている『紫魔家』の全てを敵に回すという…彼のその覚悟と決意。

かつて幼少の頃に味わった、世界の大多数が敵に回るという地獄のような恐怖をも乗り越えて。今の力を手にした大蛇にとっては、今ココで一瞬でも立ち止まるわけにはいかないのだ。

それだというのに、彼に乗せられた一つの『枷』。

―『竜胆』の名の復興か…妹か…

「どうにも迷ってしゃーないからなぁ…デッキに決めてもらおうとデュエルしてたんやけど…俺のデッキは『勝て』ゆーとるし。」

「…え？」

「まぁきっと、ミズチも許してくれるやろ。紫魔なんかに従ったら、後から絶対に怒るやろうし…」

「な、何言って…」

何かを言い始めた大蛇の言葉の意味が分からずに、疑問符を浮かべる遊良。

きっと、ココで戦う大蛇と…暗い通路から誰にも姿を見せないようにしている紫魔達にしか分からぬソレは、今まさに大蛇に課せられている『選択』の時なのだろう。

竜胆　大蛇…彼にとって、一番大切なモノがなんなのか…

その『選択』を、今…

「行くでぇ！ＬＰを半分払って、【サイバネティック・フュージョン・サポート】発動！融合素材を墓地からも選んで除外できるようにする！」

「【リミッター解除】じゃない!?…ここで融合サポートってことは…あっ!?」

「せや、いい読みしとるな！【パワー・ボンド】を発動！」

遊良の張り巡らせた策を軽々とすり抜け、遊良が予想していた戦法を易々と欺いてきて。

そうして大蛇が発動した最後の手札は…頑なに隠してきた彼の真意と、主に従う彼のデッキの強い意思によるものなのだろうか。

―攻撃力を上げる『代償』に、ダメージを『要求』する【パワー・ボンド】

―融合召喚を援護する『代償』に、半分ものＬＰを『要求』する【サイバネティック・フュージョン・サポート】

『目的』のために、付きまとう『代償』…彼の置かれた状況に対する、その真意を表すであろう２枚の魔法カードを大蛇が発動して、彼の

デッキが『勝利』を『要求』する。
そう、彼の『デッキ』が、彼のために導き出した結論を携えて…降臨するは、大蛇の最大の機竜。
「俺は墓地の【サイバー・ドラゴン】３体を除外融合！」

―！

その時…光が、弾けた。
一体いつからか、誰がそう呼んだのか。誰も知らぬうちから、ソレは『そう』呼ばれていて…

―終焉をもたらす、究極の機竜

「終焉、煌け！融合召喚！レベル１０、【サイバー・エンド・ドラゴン】！」

他の追随を許さぬ、圧倒的な力で敵を消し飛ばすソレに、誰もが…見惚れていた。
【サイバー・エンド・ドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／４０００→８０００　ＤＥＦ／２８００
―
その最強の機竜の登場に、会場内はまさに興奮の坩堝と化してい!!!

る。
　最後の最後で現れた、竜胆　大蛇『最大』のモンスター。その登場に、誰もが声を上げずには居られないのか。
「こ…攻撃力８０００!?」
「どや！コレが俺のデッキの切り札！どんな敵でも一撃で捻じ伏せる、俺の最強の機竜や！」

…圧倒的存在感、絶望的威圧感

　今、遊良に突きつけられているソレらは…遊良がどう足掻いても届かぬモノとなっており…ダメージもデメリットも、その力を倍にまで膨れあがらせて無に帰している姿は、まさに圧巻の一言。
　決闘市中で叫ばれている地響き以上の『轟音』が、サイバー・エンドにぶつかっては、それを弾き返して反響していた。
「…でもそのモンスターに耐性はない！イシュタムの効果で、【背徳の堕天使】を使えば…」
「あ、一個ゆーとくわ。【パワー・ウォール】で墓地に落ちたカードの残り１枚なぁ、【ブレイクスルー・スキル】やねん。」
「なっ!?」
「【リミッター解除】を警戒したのは偉いで。でもなぁ、頼みの【迷い風】が墓地から戻っても、セットされたターンには使えへん…勝負あったな。」
「ぐ…くぅ…」

　この、誰の目にも明らかとなった勝敗。
『Ｅｘ適性』の無い、『あの天城　遊良』が準決勝にまで進んだこと自体が、【決闘祭】を見ている観客達にとっては最早『奇跡』と感じられるモノとなっていて…
　何か手を打とうとも、ソレすら大蛇には障害になりはしないのか。

遊良の目の前で吼える巨大なサイバー・エンドが、ひしひしとソレを告げてきた。

「くっそぉぉぉぉぉ！」

悔しげに吼える遊良の叫びは、『轟音』にかき消されて誰の耳にも届かない。

昨年の【決闘祭】準優勝者。その肩書きは、決して軽いモノではなく…彼の『異名』と重なってその実力を確かに照らすのみ。

―全てをすり抜け、全てを捻じ伏せる、まさに『大蛇』

彼が持っている『モノ』の大きさを、誰もが再確認したことだろう。いずれは本当に王者【紫魔】へと届くのではないかという、その秘めたポテンシャルは…

いつかの未来に、ここセントラル・スタジアムで…彼が王者として立っているかのごとき幻覚を、観客たちに魅せているのか。

そう、自分にとって、『どちら』が大切なのかという、最大の『選択』を決めたであろう大蛇が。轟音の中で揺れ動く金髪を、どこまでも余裕を持ってたなびかせて言う。

「俺は決して許さへん…紫魔家を…【紫魔】を…奴を…俺の『大事なモン』を汚そうとする奴らは絶対にや！」

およそ『演技』ではない彼の言葉がその口から発せられるものの…既に敗北を感じ取っている遊良にはソレは届かず。

大蛇の目の前に立つイースト校1年生は、悔しさと不甲斐なさで一杯になっていて…実力の差に崩れ落ちそう。

しかし、大蛇とてそんな遊良など既に見てはおらず。彼の頭の中にあるのは、自分の『一番大切なモノ』を汚そうとしている者達への怒りのみ。

昇る怒り、湧き起こる憤慨。

そんな感情を目一杯に込めて…

―大蛇は、叫ぶ。

「俺の散り様、よぉ見とけや！ターン…エンドぉぉぉ！」

―!!!

…

……

……

「…え？」

それは…誰にも理解出来なかった。
既に決していた勝負、後は攻撃を行うだけと言う場面で…観客達の興奮がＭＡＸまで引き上げられ、圧倒的な攻撃で決着となるのを、誰もが思い浮かべていたところに…

突然、爆発した大蛇の機竜が…その『代償』を主に与えるなど…誰が想像出来ようか。

爆発のソリッド・ヴィジョンによる、盛大な『煙幕』がスタジアムを…ひいては観客席にまでも及んで、その姿を正確に確認することは困難になってはいるものの…

興奮の坩堝から一転、一気に静寂まで引き落とされた中に鳴り響いた無機質な機械音が…その事実のみを皆に伝えていた。

当然、それは目の前に立っていた遊良だって同じことであって…

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

盛大な大爆発に連動して起こった、ソリッド・ヴィジョンの煙幕が晴れてきた頃には…そこに大蛇の姿は無かった…

【決闘祭】準決勝・第一試合

勝者

イースト校1年、天城　遊良

―…

「やはり、『名』よりも『妹』を取りましたか…人間味があって少々安心しましたわ。」

未だ混乱が収まらぬ会場内を差し置いて、姿を隠すようにして暗い通路まで帰ってきた竜胆　大蛇へと向かって、その通路で見ていた紫魔　ヒイラギはそう声をかけた。

そのヒイラギの後ろには、虚ろな目をして立っているミズチと、そ

れを挟むようにして立っている紫魔　亜蓮と紫魔　大治郎が、ニヤニヤと口元を緩くしていている。
　そんな男たち二人は、たった今敗北を喫して戻ってきた大蛇に対して、どこか油断をしている様子を見せていて…
「ははっ、調子に乗っててても、所詮『竜胆』程度が俺たちに逆らえるわけないよなぁ。」
「そうそう、これでお前も俺たちのいいなりに…」
　大蛇を見下したような視線でそう言った…
　―その時だった。
　―！
「かっ!?……」
　一瞬。
　まさに蛇の狩りの如く、大蛇が瞬間的に男二人との間合いを詰め…油断していた意識の外から、先ずは大治郎を殴り飛ばしたのだ。そのまま顎を綺麗に打ち抜かれて、大治郎がその意識を手放して。
「なっ!?お、お前妹がいるのに…ぎゃ!?あ…げふっ…がっ!?げばっ…」
　続けてミズチを避けて、亜蓮のわき腹を貫くようにして突き抜いた大蛇。
　呼吸が一瞬止まってしまい、苦しさで蹲った亜蓮の腹部を蹴り上げるようにして弾き飛ばすと…そのまま彼も後ろに倒れこんで、意識を失ったように声を発さなくなってしまう。

「お前らぁ…」

地獄を生き抜いた過去から、こんな喧嘩事に慣れている彼なのだ、その細腕からは予想出来ぬ程の力を乗せて攻撃を加えれば、油断しきっている男2人を鎮めることくらい…大蛇にとっては、至極簡単なことなのだろう。

試合前の控え室では、あまりの突然の事であったのと、ミズチの突然の状態に驚いてしまって手を出すことが出来なかったが。しかし今の彼にすれば、油断しきって立っている雑魚にその苛立ちの全てをぶつけることに何の躊躇もないのか。

そのまま意識を手放して倒れこんだ男2人を意にも介さず、振り向いたヒイラギの首を掴んで持ち上げる。

「あ…かっ…り…りんどうおろち…」

「女やからって…ただで帰れると思ってんやないで…ボッコボコにされる覚悟あってこんな事しとるんやろ…」

ドスの効いた声でヒイラギを睨みつけて、呼吸の出来にくい苦しさを少女に味わわせる大蛇。

そう、妹を人質に取られた怒りと、試合での敗北を選択せざるを得なかった苛立ちからか、大蛇はその手を緩めることなく少女に苦しみを与えているのだ。

地に貶められた『名』の復興…それは、大蛇とミズチにとっては、何よりも重要なコトであり…

虚ろな目でそこに佇むだけの、こんな状態になっている妹だって、ソレの為ならば見捨てたとしてもきっと納得してくれるはずの選択だったのだが…

—それでも彼は、『妹』を取った。

無理やりに捻じ曲げた自身の信念と、自分の『デッキの意思』すら捻じ伏せた彼の選択。
そんな強引で絡まり合った葛藤に苛まれている大蛇に対し、苛立つなと言う方が無理な話だろう。

「かはっ…」

そして…

肺に入る酸素を急に少なくされて、今にもヒイラギがその意識を遠のかせていきそうな嗚咽を漏らし…

「覚悟しいやぁ…このクズ共がぁ…」

なお大蛇がその手に力を込めなおそうとした…

…そんな時だった。

―!

「がっ!?…な、なん…や…コレ…あっ!ぐあぁっ!?」

急に苦しそうな声を出して、ヒイラギを持ち上げていたその手を離した竜胆　大蛇。
ヒイラギがその場に蹲り、苦しそうにその呼吸を整えているその眼前には…足元から上る『黒い靄』に締め上げられて、辛そうに宙に浮かべられた大蛇の姿が。

「かはっ…はぁっ…はぁ…り、竜胆…大蛇……わ、私や…そこの男…2人程度では…げほっ…はぁー…あなたを、従えることなど…で、出来ません…」

息も絶え絶えで、必死に酸素を取り込みながらそういうヒイラギのソレは…負け惜しみだとか、苦言だとか、そう言った類のモノではない『事実』の言葉。

そう、精神的にも実力的にも、大勢の学生レベルよりも『一つ上』に立つ竜胆　大蛇に対しては、ヒイラギやその他の紫魔が『何か』をしようとも、簡単に跳ね除けられて…泉　蒼人の例から、逆に暴走して自分達に被害が及ぶことは必至。

そんなヒイラギにとって、何故かそこまで至っていない天宮寺　鷹矢に跳ね除けられたのかは置いておいても、ここで竜胆　大蛇を支配下に置こうとするならば、『それ相応』の準備はしているだろう。

分けも分からずに宙に浮かべられている大蛇へと向かって、彼女はまだ苦しそうに言った。

「…なので…あなたでも…けほっ、『絶対に』敵わない手を…打たせてもらいましたわ…」

「なっ、なにを意味のわからんことを…ぐあぁあっ!?」

意識の中に直接入り込んでくる『闇』、悪意に塗れた『何か』が自我を支配してこようと頭の中で暴れ、必至に抗ってもそれを上回る力で簡単に押さえつけられるのが分かるのだろう。

どんどん薄くなっていく自身の意識の中で

宙に浮かべられたまま、大蛇はかろうじて首を回して…

自分の背後に立っている人間を見ようとして…

そして…

「なぁっ!?なんでコイツが……ぐぁぁぁあ…ああ…あ……」

大蛇の意識は、そこで途絶えた。

「…ホホ…これで…けほっ、『プランB』は…達成いたしました…」

「…」

「ご命令どおり…天城　遊良を…決勝へ…これは…お返しいたしますわ…」

意識を無くして床に倒れている大蛇を見下ろしながら、ゆっくりと立ち上がったヒイラギは…まだ戻らぬ声で、目の前に立っている人物へと、そう声をかけた。

大蛇を『支配』した人物へと、借りていたデッキを返して…その人物は何も言わぬまま『闇』を出現させると、その場から一瞬で消えうせる。

亜蓮や大治郎が見せたような、『姿を消す』程度ではない。まるで瞬間移動のように、闇の中へと入り込んで、完全にこの空間から消えてしまっていた。

「ホホホ…後は…決勝が終わるのを…待つだけですわね…『最後のプラン』は…もうすぐ…」

そう言って、すぐさま指にはめていた黒い宝石の指輪を一振りさせると、その場に『靄』を出現させるヒイラギ。

既に終了した計画の後始末、ここまで進めた『プランB』ではあるものの…こんな場所に大勢の人間が意識を失って倒れていることを隠すためか。

倒れこんでいる紫魔の男2人が意識を失っているのが、彼女にとって幸いなのか、2人の男と竜胆　大蛇、そしてその妹のミズチを包み込むと…彼女もまた、先ほどの人物と同じようにして、その場から姿を消したのだった。

―…

「くっそぉぉぉお！」

―！

「なんなんだよっ！」

―！

「意味わかんねーよっ！」

―！

苛立ちと不甲斐なさからか、控え室に戻った遊良はその八つ当たりを控え室内の机や椅子、ゴミ箱へとぶちまけていた。

叫んで、蹴り飛ばして、叫んで、蹴り飛ばす。

この感情を発散するためには、こうする他無いのは若い証拠ではあるのだが…

それ以上に『あんなこと』をされてしまっては、遊良以外の人物でもこの苛立ちを押さえられるはずが無いだろう。

明らかに勝敗の決していた試合で、突然とった大蛇の行動。

力の差を見せ付けられて、完全に負けていた試合で…譲られたかの勝利など、誰が喜べようか。

『勝手に負けてくれた、だからラッキー』…そんな無様なことを、遊良

が考えられるはずがない。
遊良がそんな考えを持てるような人間だったとすれば、そもそもＥｘ適性が無いと宣告された時点から今まで、こんなにも『デュエル』にしがみついていないだろうから。

「はぁー…はぁー…はぁー…くそっ！」

最後に地面を蹴って、もう蹴る物もなくなってしまった控え室で…床に倒れこんで、天井を静かに見ている遊良。
その表情は、『やるせなさ』と『恥ずかしさ』で一杯になっていて…そのまま悔しさと混乱を抱いたまま、その目を宙に泳がせる。

（完全に負けていた…今の俺じゃあ、竜胆　大蛇に勝てなかった…）

ひしひしと感じた事実、『一つ上』の段階に進んでいた竜胆　大蛇に対して、手も足も出なかったという戦いを思い出して…その胸中には、どうしても不快感が渦巻いているのか。
自分の妨害を意にも介さず『すり抜け』られ、完全・完璧に『捻じ伏せ』られた。
そんなデュエルが出来る相手が、一体何故あの状況で自ら敗北を選んだのか。あの時の、あの瞬間まで、ステージに立っていた遊良の感じていた大蛇の闘気は、確かに勝利へと向かって襲いかかってきていたというのに。
意味のわからぬ大蛇の行動と、事実上の敗北ゆえに胸の内に上ってくる気持ち悪さに耐えながら…遊良は不快感を胸に渦巻かせながらも、静かに立っているだけだった…

次に始まる戦いにすら、気を回せないまま…

――…

ｅｐ３１「決闘祭、混戦ー超越する者」

未だ、ざわめきが収まらぬセントラル・スタジアム。
先ほど行われた、誰が見ても意味のわからぬ結果に終わってしまった第一試合を終えて…
昨年の【決闘祭】の準優勝者、ウエスト校３年の竜胆　大蛇が、あとは攻撃をするだけで勝てたと言う、そんな状況で自ら敗北を選んでしまったことに対しての疑問符を、誰もが胸の内に抱いていた。
確かに大蛇はデュエルの最初から、観客達の誰もが予想できないプレイングを魅せてきてはいたものの…だからと言って、勝利が確実だった試合において高笑いを響かせながら自ら敗北を見せ付けてくることなど、一体誰が予想できようか。
更に言えば、挙句の果てにそれで決勝戦に進んだのが、『あの』イースト校１年の天城　遊良と来たのだから、見ていた誰もが驚きとともに異議を感じても仕方ないだろう。
そう、彼らも思い返せば、あの『Ｅｘ適性の無い』天城　遊良が【決闘祭】に出場してきたことと、最初に行われた一回戦はともかく…
これでは、二回戦の試合で昨年４位のサウス校３年、獅子原　エリに打ち勝ったことにも、天城　遊良のこの快進撃に何か『裏』があるのではないかと勘ぐる人間がいても不思議ではない
確かに『Ｅｘデッキが使えない』というのに目を見張るようなデュエルを魅せてきていたことには変わり無いものの、それでも大蛇のあんな『不自然』な敗北を目の当たりにしてしまっては。
―今までの遊良の戦いが、『本物』なのか『偽物』なのか。
これから第二試合が始まると言うのに、その不審感を抱きながらも…彼らは次なる試合を、ただ待つしかなかった。
―…

「む…遊良の奴、どこへ行ったのだ。」

遊良の控え室へと足を運んだ鷹矢が、開口一番にそう呟いた。

先ほどまで行われていた第一試合を、自身の控え室のモニターで見ていた鷹矢であったのだが、試合終了に伴って一足先に決勝へと駒を進めた遊良へと、わざわざ声をかけに来たと言うのに…

いざ遊良の元へ来てみれば、そこは荒れ放題の部屋となっていて…壊れた椅子、倒れた机がそこに転がって、細かな雑貨が散乱しているだけで、そこに自分の片割れは居らず。

まぁ、あんな結果となってしまったのだから、無論この鷹矢とて遊良の今の気持ちは理解できるのだろう。それゆえに、遊良が控え室内で暴れたのだとしても、ソレに対して『みっともない』と思うわけでもないのか。

「…ふん、確かにあの馬鹿者が自滅しなければ負けていたが…結果は結果だろうに。」

そう、デュエルの中身だけを見れば、遊良が敗北していたであろう事実に変わりは無い。しかし、最終的に導き出された結果は…遊良が決勝へと進み、竜胆　大蛇が敗退した。

…だた、それだけのこと。

確かに状況を見れば、竜胆　大蛇の謎の自爆には多大なる謎が残っていると言うものの…

彼に如何なる理由や、その時の感情があったのだとしても、それで紡ぎだされた『結果』が、今の全てに違いないのだ。

【決闘祭】準決勝・第一試合は、遊良が『勝った』…それが、今の全て。

「まぁいい。あいつが決勝に言ったのなら、俺が行けないはずが無い。」

その天宮寺式・高等計算術により導き出された『解』を携えて、鷹矢もまたこの後の試合に臨む決意を固めて。
無論彼とて、昨年優勝者であるウエスト校３年の十文字　哲を舐めているわけがないとは言え、それでも溢れてくる自信はゆるぎないモノなのか。
決闘市随一の才能を受け継いでいる鷹矢にとって、十文字　哲の２回戦のデュエルを一目見て、その実力が『この段階』には居ないことを理解してもなお、彼はただ不敵に振舞うのみ。
「ふん、精々今はイジけていろ。明日には嫌でも俺と戦わなければいけないのだからな…あいつにだけは絶対に負けん。」
戦う意思を更に強め、勝ちたい意思を一層深める。
―誰よりも、何よりも負けず嫌いなその性格は…彼の嫌悪する『祖父』譲りのモノ。
そう、生まれたときから一緒にいる『相棒』を、最大の好敵手と思っているからこそ…自分の片割れには、絶対に負けたくない彼の意思が導く、その決意が表に出ているのであって。
「遊良ヨ…待ッテいロ…。」
靄など漏らさず、悪意に塗れず。
完全にソレを支配下に置いて従えたまま…強い意思を携えて、鷹矢は遊良の控え室を出て行った。
…
「あ！天宮寺選手がいたぞ！」

「む!?しまった…見つかったか…」
「もうすぐ入場だ！逃がすな！捕まえろ！」
「ぐぅ…俺の好きにさせろ！堅苦しくて息が詰まるのだ！」
「ダメだ！これ以上行程を狂わされてたまるか！絶対に自由行動させるな！」

とは言え、控え室から出た途端に…
自身の控え室に居なかった鷹矢を探し回っていた大勢のスタッフによって、入場待機場所まで連行されて、逃げ出さぬよう囲まれてしまったことは置いておいて。

―…

「そうか、じゃあ試合が終わったら向かうとしよう。」
自身の控え室でのこと…ウエスト校3年の十文字　哲はディスクで誰かと電話をしながら、もうすぐ始まる自分の出番を待っていた。
先ほどの試合は、もちろん哲も見ていたけれど…その勝敗には彼として確かに思うところがあるだろう。しかし、あの大蛇が何も無しに『あんな事』をするわけが無いことを彼は理解しているからこそ…
実力的にも精神的にも、大蛇がイースト校の1年生を上回っていたことは明らかであって、とすれば哲には、あのような行動をとった原因の心当たりが何かあるのだろうか。
余計な言葉は発せず、無駄足に終わる詮索はせず。
きっと今大蛇に会いに行った所で、『捕まえられず』に逃げられてしまうことは必至。2回戦終了時にアレだけの啖呵を切っておいて、『結果的に』敗北をしてしまっては、大蛇とて哲と話したがらないだろうから。
「…あぁ、わかっている。それより、あの天城って奴の方はどうするん

だ？……そうか、ならばいい。任せる。」

今この電話で『天城』という名前を出してはいるものの…別に、大蛇の相手をしていたあの天城と言う1年生に対して、哲は知っているわけでもなければ、気にしているわけでもない。

しかし、ここまで勝ち上がってきて…『決着』がどうあれ、大蛇を差し置いて決勝へと進んだ『結果』を出したことに関して、哲とて文句も無ければ異議もないのか。

…『Ｅｘ適性が無い』という事で何やら騒がれているらしいが、『Ｅｘデッキが使えない』程度で『決闘者』の価値が決まるわけではないということを…彼はとある『過去』からよく知っているから。

「…あぁ、じゃあ後でな。」

電話を切って、気を入れなおして。

友が茨の道へと進むことを、自分の手で止めてやりたかったのは確かなコトでも、大蛇の自らの敗退…その裏には、何か隠されている理由がきっとあるからと、そう思って。

ならば自分が今すべきことは、次の試合に集中するだけなのだ、と。

相手は王者【黒翼】の孫。まぁ、今更その肩書きに慄く十文字　哲では無いが、1回戦、2回戦のデュエルは、【黒翼】譲りの才能の片鱗を感じさせるには十分なモノだったのか。

まだまだ荒削りで不完全。しかし、もう少し鍛錬を積めば、絶対に近い将来に『ここ』まで上ってくるであろう才能。

そんな迫り来る下の世代の躍進は、哲にとっても心躍るのだろう。鎬を削る相手が増えれば増えるほど、今後に訪れる楽しみが増えていくのだから。

彼の一番の理解者である男の言葉を借りるならば、『楽しいデュエルを』…と言ったところか。

「では、行くか。」

もうすぐ始まる戦いに、この男もまた心躍らせていた。

―…

『皆様ッ！第一試合は驚くべき結果となってしまいましたが、気を取り直して第二試合と参りましょう！この選手達の戦いは、誰もが目を離せないこと間違いないし！』

―――――――

勝者を相手に…この才能豊かな怖いもの知らずが、一体どんな戦いを見せてくれるのだろうか、と。

「天宮寺…か。やはりいい力を持っている。流石は【黒翼】の孫というわけか。」

「どいつもこいつも…その言われ方は好きではないといっているのだが…」

「確かに。王者の孫かどうかなど、お前自身に関係はないか。悪かったな。」

「…む？」

そんな中で不意に哲の口から出たそれは、今まで鷹矢が対峙してきたどの相手からも出なかった言葉。

そう、これまで、幼馴染を除いて、鷹矢を見た誰もが彼を『王者【黒翼】の孫』としか見てこなかったというのに…哲の口から出た言葉は、本心から最初の言葉の謝罪と、鷹矢を『ここ』まで上がってきた一人のデュエリストとして見ている様子を見せていて。

それが昨年の優勝者としての『余裕』なのか、または『ここより上』に立つ者としての自負なのか…それらと全く別のものからくるモノなのかは、哲にしかわからないが。

「始めるか。」

「うむ。」

これ以上、無駄な会話は要らない。それをお互いに理解したのか。

ここに立って対峙している以上、王者の孫という出生も、昨年の優勝者という肩書きも関係なく…ただ、デュエルを行うしかないのだ。

お互いに、展開したデュエルディスクを構えて。２つのディスクがお互いを相手と認識して、デュエルモードへと切り替わると同時に…

『それではっ！【決闘祭】準決勝、第二試合ぃ！かいしぃぃぃぃぃぃぃぃ

い！』

―デュエル！

戦いが、始まる。先攻はウエスト校３年、十文字　哲。

「俺のターン。永続魔法【炎舞―天璣】を発動。その効果でデッキから【武神―ヤマト】を手札に加える。そのまま【武神―ヤマト】を通常召喚。」

【武神―ヤマト】レベル４
ＡＴＫ／１８００→１９００　ＤＥＦ／　２００

開始早々から哲の場に現れる武神の一体。
哲のデュエルの中核を担うこのモンスターで、彼は常に鉄壁を作り上げてきた。それは、この準決勝という舞台でも何ら変わらず。
いつだって、どんな時だって。
相手からすれば、必ず現れる哲の【武神―ヤマト】を見て、そしてこの簡易ながらも完成された布陣を目の当たりにして、一体どのような心境となるのだろうか。
このヤマトを軸にして築きあげる、『鋼鉄』の如き絶対防御の始まりを…その場に鎮座させて、哲は早々にターンを終えた。

「俺はカードを１枚伏せて、このエンドフェイズに【武神―ヤマト】の効果を発動。デッキから【武神器―ヘツカ】を手札に加え、そのまま手札から【武神器―ヘツカ】を墓地へ送る。ターンエンドだ。」

哲　ＬＰ：４０００
手札：５→３枚
場：【武神―ヤマト】
魔法・罠：【炎舞―天璣】・伏せ１枚

「俺のターン、ドロー！俺は【ゴールド・ガジェット】を召喚！その効果で【シルバー・ガジェット】を特殊召喚し、更にシルバーの効果で【レッド・ガジェット】を特殊召喚！レッドの効果で【イエロー・ガジェット】を手札に加える！」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【レッド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００

そんな、哲の揺らがぬ初ターンを見てもなお、臆することも慄くこともせず…彼にとっても始まりとなる展開を始める鷹矢。
そう、こんなことで、この天宮寺　鷹矢が怯むわけが無いのだ。いつだって変わらないのはこの男も同じ、いくら相手が『上』に居ようとも…いや『上』に立っているからこそ、そこへと向かって突き進むのみ。
ソレを見ている観客達の目には、この十文字　哲の絶対防御に怖いもの知らずのルーキーがいかにして挑んでいくのか、その期待で一杯になっている様子。
その期待の視線を一身に受けてもなお、鷹矢はソレすら意に介さず宣言を行う。

「俺はシルバーとレッド、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚！現れろ、ランク４、【ギアギガントＸ】」

【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

そうして現れるは、彼にとっての始まりを担う機械兵。
相手の場の、神々しく煌く武神に対して…唸る鉄腕を振り回して対峙しているその姿は、哲のヤマトに引けを取らぬ佇まいを醸し出していた。

「【ギアギガントX】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、デッキから2体目の【ゴールド・ガジェット】を手札に加える！続いて【アイアンコール】発動！【レッド・ガジェット】の効果を無効にして特殊召喚する！そのままゴールドとレッドでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク4、【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】！」

【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】ランク4
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２２００

しかし、それだけでは終わらない。
間髪いれず、休む間もなく。さらに続けて、重厚なる到着音を響かせる鉄狼列車を、鷹矢は召喚して。
そう、既に哲が2回戦で見せている手であるとは言え…重圧と羨望が飽和しているこの【決闘祭】のステージで突破することは、誰であろうと簡単なコトではないのだ。
いくら鷹矢の召喚したエクシーズモンスターが、哲の武神の攻撃力を超えていようとも…彼の手札にあるかもしれない多種多様な武神器によって鷹矢のモンスターが返り討ちにあってしまうこと。
また、効果による除去を行おうとも、墓地へと送られている武神器により、その効果すら無効にされてしまうことを考慮したためだろう。
柔軟に攻め手を変え、どこからでも勝利を狙う『鷹』…天宮寺一族のその名において、鉄壁の綻びを探し目掛けて狙いを定める。
「そして【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】の効果も発動！オーバーレイユニットを一つ使い、このターン【ギアギガントX】でしか攻撃で

きない代わりに、直接攻撃出来るようにする！」
「なるほど…ヤマトを避けたか。」
「行くぞ、バトルだ！【ギアギガントX】でダイレクトアタック！」

そうして唸る鉄腕が、ヤマトを避けてその後ろに立つ哲へと襲い掛かった。
戦闘では返り討ち、除去しようにも押さえ込まれる…ならば、いくらヤマトを守る手を揃えて鉄壁を築こうとも、ソレを飛び越えて攻撃すればいい。そこに着眼しての鷹矢の攻めなのだろう。
この攻撃で哲のＬＰを０まで削りきれるわけではないが、そもそもＬＰを削らせぬスタイルをとっている哲に対して、こんな序盤でダメージを与えられるのならば万々歳。
見ている誰もが鷹矢の速攻へと目を見張り、その攻撃が寸前まで迫ったことで息を呑んだ…

―その時だった。

「罠発動、【攻撃の無敵化】。このバトルフェイズ中の戦闘ダメージを０にする。」

攻撃の当たる寸前で、哲が発動した罠により発生した衝撃波で…鷹矢の機械兵が弾かれ、そのまま自軍の場まで吹き飛ばされる。
モンスターの戦闘・効果破壊無効、またはダメージを０に。
その二つから効果を選択できる罠を哲が使用したのだ。

―堅牢なる鉄の扉を、幾重にも重ねて。

そう、不意をつくような鷹矢の奇襲も、堅牢な鉄壁を前にしては小さな傷にもなりはしないのか。それは、単なる言葉にするにはおこがましい程に重く、対峙している鷹矢へと圧し掛かってきていた。

「お前は機械族レベル４を多用してくる。それで直接攻撃してくることを、予想していないわけがない。」
「…むぅ。」
「もう攻撃は出来ない。どうする？」
「…バトルフェイズは終了だ。魔法カード、【エクシーズ・ギフト】発動。【ギアギガントX】と【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】のオーバレイユニットを一つずつ使い、デッキからカードを２枚ドロー…俺は１枚伏せて、ターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：６→４枚
場：【ギアギガントX】
【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】
伏せ：１枚

「俺のターン、ドロー。では行くぞ、【武神器―サグサ】を召喚。そして２体のモンスターでオーバーレイ。」

奇襲が失敗に終わった鷹矢を意に介さず。ターンが一巡してすぐに、その動きを加速させ始める十文字　哲。
絶対防御を信条としているせいか、最初から２回のエクシーズ召喚を決めた鷹矢と比べれば…いや、【決闘祭】参加選手達の誰とも比べても、哲のデュエルは決してハイスピードに攻め抜くモノではないだろう。
しかし、全力で攻め抜くことだけが『デュエル』の全てではないことを知っているからこそ、彼はこんなにも堂々と佇んで敵の攻撃を受け止めぬくスタイルをとっているのか。
哲の足元に現れた銀河に、二つの光が吸い込まれてくその光景は…自身のエースを呼び出すために。

「天界より出でし戦神、下界の闇を切り伏せろ。エクシーズ召喚、剣現せよ、ランク４、【武神帝―スサノヲ】！」

―！

その神々しさを一気に増して、天より出でしは武の戦神。
先の試合では、最大限に警戒していたミズチの手によってその姿を一瞬だけ見せるだけに留まったものの…この戦いにおいてはそれに阻まれること無く。
煌く武神器を装備に変え、かつての力を取り戻した【武神―ヤマト】の真実の名が、ここに剣現した。

【武神帝―スサノヲ】ランク４
ＡＴＫ／２４００→２５００　ＤＥＦ／１６００

「スサノヲの効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、デッキから【武神器―ツムガリ】を墓地へ送る。バトルだ、スサノヲで【ギアギガントＸ】に攻撃。」

―！

「く…」

鷹矢　ＬＰ：４０００→３８００

そうして鷹矢に守る暇を与えず。
奇襲とはこうやるのだと見せ付けているように、スサノヲの剣の一振りが鷹矢の場の機械兵を両断して。
『絶対防御』を謳っているものの、守りを固めるだけが『防御』ではないということを体現している自身のエースを、易々と携える姿はまさに強者。

そう、『防御』の真髄は『守り』に在らず。相手を圧倒する『攻め』で戦況を支配することもまた『防御』の一手なのだと、そう言わんばかりに。

「スサノヲは相手モンスター全てに攻撃出来る。続けてスサノヲで【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】へ攻撃。そしてこのダメージステップ開始時、墓地の【武神器―ツムガリ】の効果発動。ツムガリを除外し、スサノヲの攻撃力をこのダメージステップの間だけアイアン・ヴォルフの攻撃力分アップする。」

【武神帝―スサノヲ】ランク４
ＡＴＫ／２４００→２５００→４７００

彼の宣言によって墓地から飛び出した、獣の武神器がその姿を剣へと変えてスサノヲの手に収まった。
神代三剣と呼ばれる神器の一つを自在に操り、自身を決して打ち破れぬ一振りの剣と化して攻撃する姿は、まさに戦神の名に相応しい立ち振る舞いを見せ付けてくるのか。

―！

鷹矢　ＬＰ：３８００→２５５０

「ぬぅ…全体攻撃とはな…」
「ただし、お前のダメージは半分となる。」
「…ダメージを稼ぐのならば、ハバキリで無くてよかったのか？」
「あぁ。まだその時じゃない。」
「…む？」

ＬＰが大幅に削られ、その差を見せ付けられているかの如き鷹矢の声は重く。

まだまだ哲は余裕を感じさせているし、圧力で押さえつけるというよりは、どこか戦い方を魅せてくれているかのような雰囲気を彼に感じさせていて。

それでも、怯むことは許されないだろう。次なる手を思考し、それに供えて鷹矢は動く。

「…破壊されたアイアン・ヴォルフの効果発動。相手によって破壊されたため、デッキから【シルバー・ガジェット】を手札に加える。」

「いいだろう。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

哲　ＬＰ：４０００
手札：4→2枚
場：【武神帝―スサノヲ】
魔法・罠：【炎舞―天璣】・伏せ1枚

「俺のターン、ドロー!」

「このスタンバイフェイズに罠カード、【和睦の使者】を発動。このターン、俺はダメージを受けず、スサノヲは戦闘で破壊されない。」

ターンが鷹矢に移ってすぐに、『攻め』から『守り』へとその手を変えた哲。

まだ鷹矢の動きを見てから手を考えてもよかったと思われるものの、それは鷹矢がよく使う魔法カード、【ナイト・ショット】の警戒なのだろうか。

ソレに狙われれば逃げられぬ銃弾の一発を、撃たれる前に行動したのだと、そう捉えられる。

「…ぐっ、だったら武神器を使わせてやるだけだ!【ゴールド・ガジェット】を召喚!その効果で【イエロー・ガジェット】も特殊召喚!イエローの効果で【グリーン・ガジェット】を手札に!」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【イエロー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

「俺はゴールドとイエロー、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【鳥銃士カステル】！」

【鳥銃士カステル】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

哲に先に手を打たれてしまっては、鷹矢とてこのターンの攻撃を諦めるしかないだろう。
ダメージを与えられないならばと、多種多様なランク４戦術を駆使して、『鉄壁』を少しでも削って、哲の手を消費させる算段か。
空から狙いを定める銃士へと命じ、その銃口を戦神へと向けさせて、この場から消し去るためにソレを命じた。

「カステルのモンスター効果！オーバーレイユニットを２つ使い、スサノヲをデッキへ戻す！」
「墓地の【武神器―ヘツカ】の効果発動。ヘツカを除外し、カステルの効果を無効に。」
「まだだ！【死者蘇生】発動！墓地から【シルバー・ガジェット】を特殊召喚し、その効果で手札から【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！グリーンの効果で【レッド・ガジェット】を手札に加え、２体のモンスターでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【恐牙狼　ダイヤウルフ】！」

【恐牙狼　ダイヤウルフ】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１２００

銃士の一発が塵となって消えても、手を止めることなく次なる手を呼び出して。
初めから防がれることなど、鷹矢もわかっていた。だからこそ、この後に確実に邪魔となる武神器のほうに狙いを変えて、あえてソレを使わせにかかっているのだ。
金剛の体持つ銀狼が吼え、その威力でスサノヲへと襲いかからせんとした。

「ダイヤウルフの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、ダイヤウルフとスサノヲを破壊！」
「墓地の【武神器―サグサ】の効果発動。サグサを除外し、スサノヲの破壊を無効に。」
「これで墓地の武神器は使いきらせたが…くっ、ダメージは与えられん、１枚伏せてターンエンド。」

鷹矢　ＬＰ：２５５０
手札：６→３枚
場：【鳥銃士カステル】
伏せ：２枚

一応、哲が墓地に溜めていた武神器をこれで全て消費させたものの…それ以上の手を打てないと判断しターンを終えた鷹矢。
彼の場に残ったカステルは守備表示で留まり、いつもの柔軟な『攻め』を見せている鷹矢にしては、その防戦の光景は珍しいだろう。
しかし、それも当たり前なのか。
相手は昨年の優勝者。その肩書きは、きっと鷹矢が思っている以上に重く…またそれを背負う十文字　哲というデュエリストの力も、彼が想像していた以上に高いのだから。

「俺のターン、ドロー。まずは【武神帝―スサノヲ】の効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、デッキから【武神器―ムラクモ】を墓

地へ送る。そして【強欲で貪欲な壷】を発動。デッキから１０枚裏側で除外し２枚ドロー。」
「…来るか。」
「あぁ。墓地の【武神器―ムラクモ】のモンスター効果、ムラクモを除外して、【鳥銃士カステル】を破壊する。」

神代三剣の一振りが、鷹矢の銃士を切り裂いて。
鷹矢がいくら哲の手を消費させても、すぐにそれに対応して圧倒してくる進撃は流石としか言い様がなく…ターンが進むごとに手を揃えて、確実に鷹矢との差を広げていくその光景はまさに圧巻の一言。
「【死者蘇生】発動。【武神―ヤマト】を攻撃表示で特殊召喚。」

【武神―ヤマト】レベル４
ＡＴＫ／１８００→１９００　ＤＥＦ／　２００

続けて再びヤマトを場に呼び出し、その本来の姿を肩を並べて佇む姿は異常な光景なれど、それに違和感や不快感を覚える人間はここにはいないだろう。

一蓮托生、大同小異

姿形は違えども、同一の魂を持った二人の武神を従えて。
すでに決したのではないかという決着を、見ている誰もに感じさせながら…哲は攻撃を得宣言した。

「バトル、まずはスサノヲでダイレクトアタック。」
「くっ！攻撃宣言時に罠発動、【戦線復帰】！墓地から【ゴールド・ガジェット】を守備表示で特殊召喚！そして、そのままゴールドの効果で、手札から【レッド・ガジェット】も守備表示で特殊召喚し、レッドの効果でイエローを手札に加える！」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【レッド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／　１３００　ＤＥＦ／１５００

だからと言って、簡単に諦めるような鷹矢では無いことも確か。
自身が操る歯車たちを戦線に復帰させ、守りを固めて攻撃を防いで、虎視眈々と鉄壁の綻びを探しているものの…それが見つからぬ内はこうして守りに徹するしか他無いだろう。
しかし、鷹矢のこの行動も見透かしていたかのように、哲は怯むことなく攻撃を続けた。

「ならば全て破壊するだけだ。スサノヲで【ゴールド・ガジェット】を攻撃。更に【レッド・ガジェット】にも続けて攻撃。」

―！

息もつかせぬスサノヲの連続攻撃が炸裂し、いくら鷹矢が守備モンスターで守ろうとも、場に残ることを否定されているかの如く全て切り伏せられていくこの光景は…
まるで迫り来る壁に、徐々に押しつぶされていくような錯覚を覚えさせることだろう。
相手の攻撃を受けきり、相手の場を削りきる。そうして相手の次なる攻め手を無くすこともまた、彼の防御の一手を多大に表現していて。
ＬＰを一気に削りきるような真似を、十文字　哲はあまり行わない。
それは、少しの隙を突くような、『相手の綻び』に頼るような戦い方

などしなくても…鉄壁のスタイルを貫くことで、相手との格の違いが明らかになるからだ。
…生半可で、中途半端な戦術では、到底この十文字　哲に傷一つ付けられはしない。

「ダメか…モンスターを並べても一層されてしまう。」
「その程度で耐え切ることなど出来ない、ヤマトでダイレクトアタック。」

―！

「ぐ…」

どこか悔しそうに、それでいてどこか苦しそうに…鷹矢とて、今更ながら再確認している様子。
確かにこの十文字　哲のデュエルは、他の出場選手と比べても、その実力以上に『何か』が違うと感じさせてくる戦いを見せていて…

鷹矢　ＬＰ：２５５０→６５０

そう、十文字　哲が立つ、『ここよりも一つ上』のレベルというモノが…よもやここまでの落差を生み出していることを、戦いの中で初めて理解していたのだ。
今まではその才能に着いてこられる学生など居らず、少し本気を出せば全て吹き飛んでいたというのに…祖父以外に、初めて対峙した『上』の段階に立つ者との『差』を、今ようやく飲み込んだのか。
普段表情を崩さぬ鷹矢が、本当に珍しく…近くで見なければ分からぬほどではあったものの、苦々しい顔をしていた。

「柔軟な戦法、状況に合ったエクシーズ召喚…それも立派な戦術だ。しかし、そこに確固たる信念も無く、ただ漫然とデュエルをするだけでは、決して脅威には成りえん」
「むぅ…」
「…天宮寺　鷹矢…今のお前はどこを見て、誰とデュエルをしている？」
「…む？」
「何のために…デュエルをしている。」
「何の…ため…だと？」

そんな鷹矢に対して、哲が問いかけるようにそう聞いてきた。

―ソレは、鷹矢とのデュエルを通して哲が感じたモノであって。

確かに鷹矢のデュエルは合理的で、目的のために一つ一つを遂行し、そうしてどこからでも勝利を狙うというスタイル。
そして、それを行うために確かな実力が必要であり、その才能と実力に着いてくる気概が無い者は、絶対に鷹矢には勝てないに違いない…いや、実際に今までそういった心の弱い者が鷹矢に勝った試しは無いのだ。
けれども、今鷹矢が対峙しているのは…精神的にも実力的にも、学生レベルを軽く超えている『強者』。その言葉は、どこまでも重い。

「俺は…」

そんな相手からの言葉は、意図せずして…そう、ソレを聞いた鷹矢自身すら意図せずして、鷹矢の心の奥にまで届いてしまったのか。
きっと鷹矢も、今までこんなことを考えたことは無かっただろう。
今まで彼が戦ってきた理由など、聞かれなくても決まっている。

「何のため…だと？」

…もちろん、遊良との『約束』のためだ。ただ戦うだけならば、家でいくらでも行える。しかし、彼らが『かつて』誓ったソレは、もっと重く、もっと想いの篭ったモノ。

大舞台で、大歓声で、大観衆の中で戦いたい。幼い頃に交わした約束を、実現させるために。

「決まっているだろう…」

…今、この時。

再度その意味を深く考えさせられた鷹矢に浮かぶ…

その『解』は…

「…お前に…勝つためだ！」

―！

覇気を纏って、闘気を飛ばして。

そう、遊良との『約束』も何も…今、目の前に立ちはだかるこの男に勝たなければ意味が無いモノ。

―ここで勝たなければ、そんなモノなど叶わない。

そんな、今まで漠然と捉えていた『強者』との戦いを、鷹矢はこの時を持って『重く』捉えたのか。

彼が遊良との戦いを望むあまり、どこか【決闘祭】を軽く考えてい

たことは否めない。しかし才能ゆえか、それでも勝ててしまっていたために今の状況となっていることを再確認した様子。
その受け継いだ才能と、鍛えてきた実力で、状況に合わせてただ漫然と戦いを進めるのではなく…確固たる決意を持って、勝ちをもぎ取りに行くという、そんな意志を固めて。
その雰囲気は、向かってくる相手を打ち払う鷹矢ではなく…改めて、『強者』へと向かっていく姿となっていた。

「俺はカードを３枚伏せて、エンドフェイズにヤマトの効果発動。デッキから【武神器―サグサ】を手札に加えて、そのまま墓地へ送る…ターンエンドだ。」

哲　ＬＰ：４０００
手札：３→０枚
場：【武神帝―スサノヲ】
【武神―ヤマト】
魔法・罠：【炎舞―天璣】・伏せ３枚

「俺の…ターァァァーン！ドローッ！」

強い意思で、カードを引き…確固たる決意で、敵を見据える。
―相手に、勝つために。
そんな、デュエリストであるならばおよそ持っていて『あたりまえ』のモノを、鷹矢はこの時になって初めて手に入れた。
それは幼馴染以外で、今まで彼が少し本気を出してしまえば抵抗も無く簡単に吹き飛んでいた『学生レベル』に…窮屈にも押し込められていた鷹矢が初めて出会えた、全力でぶつかれる相手が目の前に居るからだろう。
相手になるデュエリストを探す方が難しかった彼において、幼馴染以外に初めて心から勝ちたいと思える相手が出来たからか…

「十文字　哲…覚えたぞ、しかとこの頭にな！お前は強い、今の俺よりも圧倒的に。今の俺ではお前には勝てん…『ここ』に居たままでは、絶対に。」

ソレに出会えたことと、それでも心から『勝ちたい』という気概が鷹矢を包み、スタジアムの熱気と相まって、まるで陽炎のように揺らめいているかの如き錯覚を起こさせているその光景は…今まさに殻を破らんとする者の足掻きを見ているかのよう。

―そう、それは、『何か』を決意した者の証。

哲のいる『一つ上』のレベルには、どう足掻いても勝てはしない。それは『運』とか『気迫』とか…そういった不確かな気合云々でどうにかなる事象を遥かに超えているのだ。

それを、たった今…理解したからこそ。

「…しかし、他人に到達できる境地が…この俺に到達できないはずが無い。そこに至らねば勝てないと言うのならば…」

何かを決意し、『何か』を使って。
その体の内で渦巻いている、この謎の『力の塊』を抑えこんでいる強靭なる精神力による『封』を、鷹矢は徐々に緩め始めて。
そう、全ては、勝ちたい相手である十文字　哲が立つ『そこ』に、なりふり構わず向かうため。
その脳裏にまで少しづつ昇ってくる『ソレ』を、確かに感じながら…

―鷹矢は、叫ぶ。

「…無理やりにデモ…昇ッテヤル！」

―！

先ほどよりも強い闘気を放ち、そこに溢れる力を一身に受け止めはじめた鷹矢。
溢れてくるソレが体から出て行くのを防ぎ、内側から侵食してくるのを拒んで。

「ぐ…ぐグ…」

苦しそうに『何か』を咳き込むことを拒んでも…絶えず昇って、悪意を増幅させてくるソレの増超を、鷹矢自身が自ら委ねてしまっては…いくら彼に『押さえているモノ』があるとは言え、その侵食は勢いを増すだろう。
しかし、それでも。

「グォ…オ、オトナシク…」

決して緩めようとはしない鷹矢の振る舞いは…一重に、目の前に立つ十文字　哲を『強者』と認め、何が何でも勝ちたいがために他ならない。
そんな鷹矢なのだ、きっと強くなる為に利用できるモノは何だって利用するのだろう。自身の内で暴れまわっている『何か』すら、鷹矢にとっては自身の力のために利用しているだけのモノ。
『力』を得るために、自ら進んで受け入れたソレを…ただ、利用して…支配して…

「ウォォォオ！言ゥ事ヲ聞ケェ！俺ハ！【シルバー・ガジェット】ヲ召喚！」
「…急に雰囲気が変わった？…ならば罠発動、【威嚇する咆哮】！この

ターン、お前は攻撃宣言を行えない！」
「構わン！そノ効果デ【イエロー・ガジェット】ヲ特殊召喚！【グリーン・ガジェット】ヲ手札ニ！」

【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【イエロー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／　１２００　ＤＥＦ／　１２００

急に、その雰囲気を変貌させた鷹矢。
普段から押さえ込んでいる侵食を、ヒイラギに増超させられても押さえ込んでいたソレを…自らの意思で、ソレを許したのか。
体に巡る力と共に、ソレの意思が流れ込んできていて…これ以上侵食を許せば、すぐにでもその意識を手放してしまいそうであって。
彼の『Ｅｘデッキにある何か』が抑えているとはいえ、鷹矢自身の意思で侵食を許してしまっているこの状況では、それも限界があるのだろう。
『ソレ』が体の自由を奪おうと暴れているし、少しとは言え解き放たれたことで調子に乗っているよう。

一向に手を緩めようとはしない哲になりふり構わず、ただ『そこ』へ昇ることだけを考えて展開するのみ。

それは、他の人間には見えぬような薄さの『ソレ』が鷹矢のデッキにまでジワジワと染み込んでいて…宿主以外に、そのデッキまで変貌させてしまうのだろうか。

「２体ノモンスターでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ガガガガンマン】！」

―！

【ガガガガンマン】ランク４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／２４００

現れるは、砂塵に佇む銃士の一人。その表示形式によって効果を変え、相手をどんな角度からでも狙えるのだが…このターンの攻撃を封じられている鷹矢が取る効果は一つだけに違いない。
守備表示で哲を狙い、その銃口を突きつける。

「【ガガガガンマン】ノ効果発動！オーバーレイユニットを一ツ使イ、相手ニ８００のダメージを与えル！」
「次は効果ダメージを狙ってきたか。だが、それも無駄だ！永続罠【デモンズ・チェーン】発動！【ガガガガンマン】の効果を無効にする！」
「チィッ！」
「…そんな中途半端な勢いでは俺には届かん。」

そんな、今まさにその引き金を引こうとした寸前で…哲が放った鎖に縛られて、身動きを封じられてしまったその銃士。
いくら鷹矢がその攻め手を『戦闘ダメージ』から『効果ダメージ』に切り替えてきた所で…所詮付け焼刃のモノでは到底十文字　哲には届きはしないだろう。
柔軟に戦況に合わせ、多種多様な手を繰り出す鷹矢のデュエル。
しかし、それは言い換えれば一つの事に『本気』にならないと言っているのにも等しい。…そんなことは、鷹矢だって理解している。

しているからこそ…

「分かッテいル！…だからこそ、『本気』で行くノダ！【貪欲な壷】発動！」

それでも、何が何でも足掻いて、勝利へと突き進もうとする鷹矢の

その姿勢。
攻撃を封じられ、彼に残されている手は効果ダメージに頼るしかないということは、もちろん哲だって想定しているコト。

そんな鷹矢が今、召喚したばかりのこの【ガガガガンマン】が、どこか他のデュエリストたちが扱うモンスターとは異なった雰囲気を醸しだしているものの…それ以上に急に雰囲気の変わった鷹矢を見て、哲は何かを感じている様子ではあって…

「この雰囲気…天宮寺　鷹矢…壁を、越えたのか？」

そう、鷹矢を見る哲とて、すでに鷹矢が『このレベル』の限界に到達していることは、対峙していたときから分かっていたこと。
だからこそ燻っていた鷹矢を鼓舞し、『上』に昇るきっかけを与えたとは言えども…まさか哲も、鷹矢がこんなに簡単に『壁』を乗り越えてくるなど想いもしなかったのか。
いや、正攻法で『上』へと昇るには、この天宮寺　鷹矢にはまだまだ色々なモノが足りないだろう。
だからこそ、鷹矢は『何でも』利用し、無理やりに『壁』を乗り越えて…いや飛び越えたのだ。

―それが、彼の最も嫌悪する祖父、【黒翼】こと天宮寺　鷹峰が【化物】となった行動と、同じコトを行っていることも…鷹矢は、知らずに。

「【ゴールド・ガジェット】、【シルバー・ガジェット】、【恐牙狼　ダイヤウルフ】、【鳥銃士カステル】、【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】をデッキに戻シテ…」

既にデッキの中に侵食を始めているソレが、一体鷹矢に何を引かせるのか。

それは、鷹矢自身にだってわからぬこと。

…鬼が出るか、蛇が出るか。

ここでデッキから何を引いても…いやデッキに『引かされても』、きっと今までの鷹矢からでは想像もつかないモノが出てくることは必至。

それにも臆さず、怯むことなく。

ただ、勝利へと向かって引ききるのみ。

「2枚ドロー!……ム!?……こ、これハ…」

そんな、デッキから引いたカードを見て、一瞬その行動を止めた鷹矢。

何やら『引かされた』カードを見て…驚いていると同時に、悔しがってもいる様子を見せていて…

いや、別にこのドローが失敗に終わったわけでは断じてない。『壁』を一つ越えた、『今いる場所より一段上』のレベルに無理やり昇ってきた者が、こんなことをしくじるはずが無いのだから。

「グ…コ、こんなモノに頼ラなければいけナイとは…」

「どうした、お目当てのカードじゃ無かったのか?」

「…仕方あるまイ、行くぞ!」

そうだと言うのに、鷹矢がどこか悔しそうな理由は…

「【ＲＵＭ―レイド・フォース】発動!」

―！

鷹矢の発動した魔法カードを見て、会場内のざわめきも一層大きくなって。

なぜなら、彼の場で燦然と輝きを放つそのカードは、その使い手がほとんど居ないであろう希少性を持ち、使いこなせるデュエリストはほとんどいないであろうモノと位置づけられているモノに他ならないから。

エクシーズモンスターのランクを上げて、更に上位のエクシーズ召喚を行わせるソレは…およそプロの試合であっても見ることはほとんど叶わないだろう。

―しかし、『この魔法』のことは、誰もが知っている。

そう、王者【黒翼】の…彼が好んで使うデッキの一つに入っているこのカードの事は、デュエリストである者ならば知っていて当然なのだから。

「その【ＲＵＭ】は…【黒翼】の？」

「【ガガガガンマン】１体でオーバーレイィ！エクシーズ召喚！現レロ、ランク５！【ＲＲ―ブレイズ・ファルコン】！」

―！

燃え上がりながら翻るは、天を泳ぎし一羽の隼。

王者【黒翼】が、『好んで使うデッキの一つ』であるこのカテゴリーによく召喚される赤き鳥獣が猛々しく吼え、その存在感を持って哲の『鉄壁』へと狙いを定める。

【ＲＲ―ブレイズ・ファルコン】ランク５
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２０００

「ブレイズ・ファルコンの効果発動！オーバーレイユニットを一ツ使ッテ、貴様のスサノヲとヤマトを破壊シ、１０００ポイントのダメージを与エル！」
「させん！速攻魔法【禁じられた聖杯】発動！ブレイズ・ファルコンの攻撃力を４００上げる代わりに、その効果を無効にする！」

しかし、怯むことなく鷹矢の手を何度でも止める哲とて、目の前に急に現れた【黒翼】も使うモンスターにも恐れを抱かず。
絶対防御を信条とし、相手の全てを受けきってもなお勝利を収めるその姿勢は揺らぐことがなく…鷹矢も、今出せる全力で戦っているというのに、それでもまだ届かないのか。
相手モンスターの攻撃力を上げようとも、既にこのターン【威嚇する咆哮】によって鷹矢の攻撃は禁じられているからこその攻撃力上昇を簡単に許して。
威風堂々と鷹矢を見据えていた。

「…ならバ、それモ超えルだけダ！手札ノ【ＲＵＭ―ソウル・シェイブ・フォース】ヲ捨テ…ブレイズ・ファルコン1体でオーバーレイイ！」
「…何、まだ動くつもりか？」

それでも、怯まないのは鷹矢も同じ。
無理やりに昇った『ここ』の不安定さに全身を揺られながらも、決して敗北することなど考えていないからこそ。
その特異な召喚条件で現れるエクシーズモンスター達を駆使し、休む暇無く哲を狙うのみ。

「来イ！ランク６！【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン・エアレイド】！」

―！

【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン・エアレイド】ランク６
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／３０００

「エアレイドの効果ヲ発動！エクシーズ召喚成功時、スサノヲを破壊シ、攻撃力分のダメージを相手ニ与エル！」

空高く舞い上がり、その翼から落とす数多くの爆撃をもって、哲に手傷を与えんとする鷹矢。

何度止められようとも、何度防がれようとも。

決して諦めぬよう、強い意志と『本気』をもって、ひたすらにソレを目指す。

「させん！墓地の【武神器―サグサ】を場外し、スサノヲの破壊を無効にする！そのためダメージも発生しない！」

「グゥ…クソッ！」

―それでも、届かない。

鷹矢が多種多様なランク４に拘るのを止め、戦闘ダメージを与える選択肢を捨て…『本気』で効果ダメージを狙いに行っているというのに。

その異名の真意を…この戦いを見ている誰もが再確認したことだろう。この異常とも言える光景を目の当たりにして。

その実力の高みを…この戦いを見ている誰もが思い知ったことだろう。観客席で見ている人間が、中継を見ている人間が…この戦いを

見ている誰もが、その興奮を抑えきれずに声を荒げた。

—絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト。

ＬＰが、削れない。

「止まッテたまるカ！罠発動、【エクシーズ・リボーン】！蘇レ、【ギアギガントＸ】！」

そんな哲への興奮を切り裂くように、力の限り叫ぶ鷹矢の声が木霊して。

そう、哲の実力が高い場所に位置していることくらい、戦っていれば嫌でも身に染みていて。今更ソレを再確認した所で、鷹矢には弱気になっている暇も、立ち止まっている時間も無いのだ。

「そしテ【エクシーズ・ギフト】発動！エアレイドのオーバーレイユニットを二ツ使イ、デッキかラ2枚ドローすル！【ギアギガントＸ】ノ効果モ発動ダ！オーバーレイユニットヲ一ツ使ッテ、デッキかラ【ブリキンギョ】ヲ手札に加えル！」

終わらぬ攻防、留まらぬ進撃。

同じ『壁』を越えた者として、絶対に引いてなるものかと、そう言わんばかりに鷹矢が吼えて。

決して立ち止まらぬ彼の猛攻を、哲が何度押さえ込んで無に帰そうとも…それを跳ね除けて立ち上がる姿は、最早『執念』に近いだろう。
決して勝利を疑わない姿勢を鷹矢も崩さず…まだまだ行動を止めないのは、可能性を繋げるためなのか。

「手札2枚ヲ捨て、魔法カード、【魔法石の採掘】発動！墓地から【ＲＵＭ―レイド・フォース】ヲ手札へ戻ス！」

そう、目の前の『鋼鉄』を砕かなければ、決してたどり着けぬ頂を…『約束』を、絶対に鷹矢が諦めるはずが無いのだから。

「【ＲＵＭ―レイド・フォース】発動！【ギアギガントＸ】1体でオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク5！【ＲＲ―エトランゼ・ファルコン】！」

―！

そうして、赤鋼の翼持つ異形の隼が羽ばたいて。
天宮寺　鷹矢のデッキからは、およそ予想できないようなモンスター達が次々現れては消えていき、その目まぐるしい展開の速さに、一体何人の観客達が追いついてきているのだろうか。
そのあまりのデッキの変化に、誰もが息を呑んで心躍らせ、興奮のボルテージを上げていく。

【ＲＲ―エトランゼ・ファルコン】ランク5
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２０００

そう、いくら扱うモンスターが突如変貌しようとも、これらはルール違反などではない。
例えデュエル中であっても、Ｅｘデッキから新たなモンスターが創造されることは、この世界に住む誰であっても『稀に』起こりうるこ

とであるのだし、そもそもメインデッキが変貌しようとも、デュエルディスク自体がエラーも違反も告げないのであれば…

それは、ルールに則っていると言えるのだ。

—どんな形でも、如何なる勝ち方でも構わない。

その、まるで何が何でも勝利を掴むという意思を具現化し、鷹矢はその砲撃を、驚くほどに硬い『鉄壁』へと向かって放つために、叫ぶ。

「絶対ニ諦めテたまるものカ！エトランゼ・ファルコンのモンスター効果！オーバーレイユニットを一ツ使イ、スサノヲを破壊シ元々ノ攻撃力分ノダメージヲ与えル！」

—そして…

あまりにも大きな炸裂音が、セントラル・スタジアムに弾け…響き渡った。

誰も聞いたことのないような音を発する爆発と、耳を劈くような破壊音。

そう、まるで、幾重にも重ねられて厳牢に形作られて築かれたモノ

が…

それは、『鉄の扉』が…壊れた音のようで。

哲　ＬＰ：４０００→１６００

絶対防御が、崩れた音。

ソルは、誰も見たことが無い光景。

何せ、昨年の【決闘祭】においても、決して傷つけられることが無かった哲のＬＰが…

昨年の準優勝者である竜胆　大蛇ですら…ギリギリまで『すり抜けて』哲の喉元まで喰らいついた、あの大蛇にすら1ポイントの傷も許さなかった哲のＬＰに、鉄壁に、その『鋼鉄』に。

傷を付ける程度ではない。貫いて、こじ開けて、風穴を開けたのだ。

およそ、信じられる光景では無いものの…その確かな証拠に、それを観戦している誰もが信じられないモノを見たような眼で、驚愕の声

を鳴らしていた。

「ぐっ!?…天宮寺　鷹矢、ここまでとは…」

よもや、ここまで鷹矢が攻め抜いてくるとは想像以上だったのだろうか。

やや驚いたような声で哲がそう声を漏らすものの、それは決して中途半端に終わるモノではなく、持てる限りの『本気』を持って、全力でダメージを与えにいったからこそのダメージ。

誰がこんなことを予想しただろうか。十文字　哲の『絶対防御』が、まさか1学年という学生に傷つけられようなんて。

しかし、まだまだ声は止まらない。

それだけでも快挙、それだけでも賞賛に値する功績だというのに…鷹矢はこれで終わらせるつもりでは無い様子を見せていて。

「まだダ!まだ諦めン…このターンで…これデ!絶対に貴様ノＬＰヲ０にすル!これガ最後ノ手札ダ!手札ノ【ＲＵＭ―デス・ダブル・フォース】ヲ捨テ、エトランゼ・ファルコン1体でオーバーレイイ!エクシーズ召喚!羽ばたケ!ランク6、【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン・エアレイド】!」

―!

何度止められようとも、何度防がれようとも。

あふれ出る執念で狙い続けた鷹矢が最後に召喚したのは、先ほどと同じ革命の隼の一羽。

そう、『革命』を。

圧倒的強者と位置づけられているこの十文字　哲を追い詰め、そして勝利を掴もうとする鷹矢の…まさに革命の灯火。

【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン・エアレイド】ランク６
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／３０００
「…そうか、天宮寺　鷹矢…お前は、ここまで…」
「エアレイドのモンスター効果！エクシーズ召喚ノ成功ニより！【武神―ヤマト】ヲ破壊シ、攻撃力分のダメージを…貴様ニ与えル！」

この瞬間を、誰もが息を呑んで見守っていた。

何度も、何度も…一度も立ち止まることなく戦いに臨んでいた、この天宮寺　鷹矢の…

―この時を。

「ふっ…見事だ。」

哲　ＬＰ：１６００→０（―３００）

―ピー…

『き…きき決まったぁぁぁぁぁぁ！誰が！誰が予想したこの展開！昨年の優勝者、その絶対防御を打ち砕いたのはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！まさかのイースト校1年生だぁぁぁぁぁぁぁ！』

実況の声が鳴り、静まり返った会場に響き渡ると…息をするのも忘れていたらしい観客達が、思い出したかのようにその声を荒げて盛り上がりを見せていて。

『【決闘祭】準決勝、第二試合！勝者ッ！イースト校1年、天宮寺　鷹矢選手ぅぅぅぅぅぅぅーっ！』

―――

まるでこの無機質な機械音の高鳴りが、その興奮をさらに増超させているよう。そう、セントラル・スタジアムと決闘市中の『音』が重なって、地震と間違うかのような蠢きと轟きを、勝者となった天宮寺　鷹矢へと届けているのだから。

イースト校1年、天宮寺　鷹矢

―決勝戦、進出

―――

「…予想以上だったよ。流石は【黒翼】の…いや、流石はイースト校の生徒だ。」

『ふふ、お疲れ様。でもこっちも驚いたよ。まさか君が負けちゃうなんて。』

まだ覚めやらぬ興奮を後にし、輝くスタジアムからこの暗い通路へと戻ってきたウエスト校3年、十文字　哲。彼は自身の端末の形状をデュエルディスクからいつもの形へと戻すと、そのままどこかの誰かへと電話をかけている様子だ。

たった今行われていた中継を見ていたのだろう。その電話の相手も、知り合いである哲が負けたと言うにも関わらず、とても落ち着いた声で哲へと返答をしている。

―それはまるで、会場内や決闘市内の雰囲気や興奮とは正反対。

今、最もプロに近いと言われていた十文字　哲。

過去、【白竜】こと新堂　琥珀が学生時代に打ち立てた伝説、『ノーダメージでの【決闘祭】2連覇』に、今まさに迫ろうとしていた彼の戦績に、まさかダメージを与えただけではなく…その哲を1年生が打ち破って決勝に進んでいくなど、誰にも想像していなかったことだと言うのに。

しかし、そんな決闘市の雰囲気を意に介さないかの様に哲が言った。

「何を言っているんだ。俺の負けっぷりなんて、お前はもう見飽きているだろ。」

『そんなこと無いって。凄くいい勝負だったよ。でも、中々やるでしょ？『今』の子も。』

「まぁな、これもお前の言っていた、次の世代の奴らってやつか…安心したよ、これで俺も気兼ねなく『ここ』で生きていける。」

『ふふっ、これでアイに合わせる顔が出来たね。』

「あぁ、そうだな…そんなことより、お前も起きたばかりなんだからおとなしく寝ていろ。体に障るぞ。」

『わかったわかった…じゃあ哲、待ってるね。』
「あぁ、すぐに見舞いに行ってやるさ…蒼人。」

そう言って電話を切り、自身の端末を懐へと仕舞い始める十文字哲。

—これは…決して、『この物語』では語られることの無い、彼と、その相棒の物語。

彼らの過去に何があったのか。
それはまた、別の物語。

「さて…じゃあ行くか。」

負けたことは、哲にとっても悔しいことには変わりない。負けたことに関して、簡単に容認出来るような者はデュエリストとは言えないだろう。
どこか天宮寺　鷹矢が、『今の段階』と『一つ上』の境界ギリギリで燻っているように感じたからこそ、『昇るきっかけ』になればと喝を与えたつもりではあった哲なれど…
『何か』を使ってそれを無理やりに超えて、自分に傷をつけて来るとは想像以上だったのか。
けれども、落ち込みはしない。負けはもちろん悔しくとも、デュエル…いや『決闘』で人が成長したことは、彼にとっても嬉しいことなのだから。
その歩をゆっくりと進め始め、暗い通路の奥へと進んでいって。

—その足元から、『黒い靄』が這い登ってきて…

「…ふん、人を支配する『悪意の塊』か。ヤツの造りそうなモノだ…くだらない。」

その『黒い靄』を素手で剥がし、粉々に握りつぶして塵と消した哲。

周囲に人の気配は無く、何かが隠れている感覚も彼には感じず。

とすれば、先ほど戦った天宮寺　鷹矢がコレを『表に出して勝利』したことで、敗者に取り付こうと自然に漂ったのだろう。天宮寺　鷹矢がコレを支配下に置いていたのだとしても、コレを操っているわけではないことを理解し、またソレを意に介さず。

「こんな物に取り憑かれるなど、蒼人も随分平和ボケしたらしい…見舞いに行ったら説教だ。」

ここでは語られぬ物語を紡いできた彼。今更こんな物に取り憑かれることなどなく…そのまま哲は堂々と、『悪意の塊』に憑かれることなく、暗い通路へと消えて行った。

――…

「グ…グフッ…」

時を同じくして、哲のいる反対側の暗い通路でのこと。

自身の控え室に戻ることも出来ず、鷹矢は壁に寄りかかるようにして、その体が倒れるのを拒んでいた。

咳き込むたびに口から漏れて、表に出て乗っ取ろうと暴れる『黒い靄』を無理やりに飲み込んで…調子乗って飲み込もうとしてくるコレ

を再び支配下に置こうとしているのだろう。
未だ止まぬ歓声を耳に感じながらも、誰も居ないこの通路。
そんな時、珍しく苦しそうに悶えている鷹矢に対して…
突如別の声が通路に響いた。
「よぉ、随分苦しそうだなぁクソガキ。」
「…ジ、ジジイ…」
「いっそ一思いに楽にしてやろうか？まぁそしたら、明日の決勝にゃあ間に合わねーだろうがな。」
鷹矢の祖父、【黒翼】こと天宮寺　鷹峰。
この『黒い靄』に関して、何らかの依頼を秘密裏に受けている彼が、先の戦いを見て降りてきたのか。
既に本日の試合は全て終了していて、選手達もゲストの【王者】たちも、もうこのセントラル・スタジアムでやることは無く、もうどこへ行って何をしようとも、明日の決勝戦にさえ間に合えばいいとは言えるだろうが…
よもや彼が追っている『黒い靄』が、孫に憑いていたのだ。明日に迫った決勝戦を前にして、『この依頼』に則って孫を始末しに来たといわれても、この男ならば何ら不思議なことでは無いだろう。
そんな鷹峰の声に反するようにして、鷹矢も声を発する。
「…イ、要らン…コの程度…押さエ…押さえ込める…」
「カッカッカ。しかし随分な量を『使っちまった』もんだなぁ。折角夏から遊良との戦いのために『溜めて』おいたってーのによぉ。それにメインデッキが【ＲＲ】に変化するたぁ、これも血筋かねぇ…」
「うるさい…グフッ…決勝では【ＲＲ】など…使わん…俺自身のデッキで…遊良と戦う…」

そんな、まるで鷹矢にこの『黒い靄』が憑いていたことを、最初から知っていたかのような鷹峰のその口調。
それに鷹矢も驚いたような様子を見せないことから、彼らが初めからコレに対して何かの情報を共有していたことは間違いなく…
自身の『好んで使うデッキの一つ』を扱った孫に対して、何か思うようなことを感じさせはするものの、すぐにソレもどうでも良くなったのか。
苦しむ孫…いや弟子の一人に対して言葉を放つ。

「まぁいいか、お前さんにゃ『あのカード』をくれてやったんだし…どうだ、『壁』を一個越えた気分は。」
「…悪くない…あとはこの感覚を忘れぬうちに、慣れるだけだ。」
「おうおう、若けー奴は威勢がいいこった。馬鹿は怖いもの知らずでいけねーやい。」

それは、この男が一番言ってはいけないセリフだろう。
何に対しても恐れなど抱かず、我が道を突き進みすぎて既に【化物】の領域へと到達しているにも関わらず…ソレを何の躊躇も無く受け入れ、どこまでもこの世界で『生』を謳歌しているという彼は、絶対に。

「それより…遊良だ。もしも明日アイツが使い物にならないなど…絶対に許さん…。」
「カカッ、そりゃ俺様もつまんねーなぁ。まっ、クソガキは自分の事だけ考えてろい。遊良の方は俺様が何とかしておいてやるからよ。」
「う…うむ…」

そう言って立ち去っていく祖父、いや師に対して一瞥も無く、更にコレを押さえようと力を込める鷹矢。
苦しそうに…しかし、徐々にその『侵食』を押さえ込んで、その身

を持って縛り付ける。
逃げ出さぬよう、暴れださぬよう。
「やっとだ…俺もたどり着いたぞ遊良。明日が楽しみで仕方ない。」
立ち去る祖父、師である【黒翼】の足音が暗い通路に響いているのと同時に…鷹矢もまた、明日への戦いへ…
ついに到達した『壁』の向こうと、相棒との戦いへと向けて…その胸の内から溢れる期待を感じていた。
―…

ｅｐ３２「焦燥と高揚」

「…鷹矢が…勝ったのか…」

セントラル・スタジアムの外、決闘市中の人間全員がこのデュエルに夢中になっているのだろう、およそスタジアム周辺に人気は無く…その巨大なセントラル・スタジアムの外壁に寄りかかった遊良が、そう小さく呟いた。

中継映像も、デュエルシュミレーターによる映像を見なくとも…実況の声がここまで響いてきていたし、決闘市中から轟いてきている空気で、ソレは遊良にも理解出来ていて。

確かに遊良は決勝へと進んだ。それは、自分の『退学』と師の『引退』を打ち消すことが出来るまで、後一つの勝利というところまで辿り着いたという事であるものの…

「俺は…このまま戦っても良いんだろうか…このまま…鷹矢と…」

勝利した者の雰囲気ではない。まるで敗北した者が醸しだす雰囲気を纏っている遊良。

そう、鷹矢も自分と同じ、およそ『上』のレベルにいる相手との戦いで…自分は実質負けていたというのに、鷹矢のほうはソレを打ち破って堂々と勝ったのだ。

それに加えて、『わざと』大蛇が負けを選択したプレイングを、遊良はどうしても受け入れられないのか。

…いくら試合には勝利したとは言え、その立場はまるで逆。本来ならばソコに立てていなかったことを考えると、鷹矢との『約束』にだって、どこか申し訳なさが浮かんできている様子。

こんな気持ちでは、とても戦いの場へと臨むことなど出来ない…と。

その時。

「おいおい、ゴチャゴチャ考え込んでんじゃねーよ。」

そんな、気落ちしたように小さくなった遊良へと向かって、唐突に力強い声が放たれた。

遊良が瞬間的に振り向いてみれば、そこには師である鷹峰の姿。

しかし、急に声をかけてきたとは言え、鷹峰に限ってよもや落ち込んでいる弟子を励ましに来たのでないことは確か。

「…せ、先生。何でここに？」

「どうせ、しょーもねぇことでウジウジ悩んでんだろーと思ってよぉ。大方、本当は負けていたのに決勝を戦っていいのか、ってとこか？」

「…はい。」

その本心を、師に簡単に見抜かれて。

幼少の頃から面倒をかけているだけあって、隠しても無駄なことを遊良も理解しているのか。下手に隠すことは無いとは言え、だからと言ってそれに甘えて縋るということは無いが。

何せ、この男のことだ。

縋った所で、答えをくれるはずが無く…どうすればいいのかを、自分で『考えて』、更なる試練を与えてくるだけだろうから。

そんな鷹峰は、先ほどと変わらぬ声質で、気落ちした弟子の一人へと言い放った。

「さぁて、お前さんもわかってんだろ？今のクソガキは遊良、お前がいる場所よりも『上』にいった。その『壁』の高さは、ルキでよぉーく身に染みてるはずだぜ。」

「…はい、わかってます。」

「今のお前さんじゃあ、クソガキにゃあ絶対勝てねぇな。」

唐突に、しかし遊良も感じていたソレを…

そう、圧倒的になりすぎてしまった鷹矢との実力差を告げてくる鷹峰。
『上』へと無理やりに上がったその勢いと、謎の『何か』の相乗によって十文字　哲の絶対防御を打ち破ったことは…確かな鷹矢の血肉と変わっていて。
その戦いの過程を見ていない遊良と言えど、正面からぶつかって勝利をもぎ取った鷹矢と『今のまま』戦えば…

「このままじゃあ…明日の決勝戦はすげーつまんねーモンになるだろうなぁ。」
「…ッ！」

師のその言葉が、遊良の心へと深く突き刺さった。
なぜなら、師が開会式のときに言った、『退屈させるんじゃねーぞ』という言葉を、遊良が思いだしたからだろう。

―成長の証を見せろという、師の渇。

ソレを、鷹矢は見せたのだ。
本来ならば勝てなかった自分と違って…今更ながら、それをひしひしと遊良も痛感しているのか。
偉そうな事を鷹矢に言っていても、惨めなのは自分の方ではないか…いや、もしかしたら惨めな自分をひた隠しにして、その鬱憤を鷹矢にぶつけているだけなのではないのか…と。
そんな、実体のない負の感情がのしかかり…

「…んで、どうするんだ？」
「…え？」
「このままテメーの小せぇプライドに拘って、尻尾巻いて逃げ出すのか…みっともねー姿で、負けるって決まってる戦いに行くのかって…そういうことだよ。」

「…俺は…」

そう、そんな中で現在遊良に出来ることは、師の言った通りのこの二つしかない。

【決闘祭】から逃げ出すことは、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が許さぬだろうが…

それでも、このまま決勝に臨んだ所で…

―鷹矢を、失望させるだけ。

いくら『約束』の舞台に上り詰めたとは言え、それは遊良と鷹矢、二人で鎬を削るような戦いをしてこその『約束』。

こんな精神状態と、こんなに開いた実力差でデュエルをした所で、自分も鷹矢も納得が出来るはずが無いと、そう言わんばかりの顔をしている遊良。

だとすれば…選択肢は一つしかないだろう。

…一つしか、ないのだが…

「たった…一日で…鷹矢の居る場所まで強くなるのは…」

そう、遊良に残された選択肢…弱いのだったら、鷹矢と同じ場所に…鷹矢が到達し、ルキの『本気』が位置している場所へ、自身の『壁』を越えるしかないという事。

…それが出来なければ、明日の決勝戦で今日と同じく、無様で何も出来ないデュエルを魅せるしかないことは必至。

―しかし、そんなことが無理なことくらい、遊良にはわかっている。

鷹矢がどうやって『壁』を越えたのかを遊良は知らないが、『Ｅｘ適正』が無い遊良にはそもそも、普通のデュエリストたちがレベルアップしていく段階と比べても、その努力の量が桁違いに多くかかってくるのだ。

今の力を得たのだって、師との想像を絶する修行があったからこそのモノ。

それは【黒翼】の弟子という、他人が聞いたら羨ましがられるような称号であっても、その実際の修行の中身は並のデュエリストが想像しているような、軟で生半可な鍛え方でないことだけは確かな事実であって。

それを経験してきた遊良だからこそ、理解できる事がある。

そもそも普通のデュエリストだって、この『壁』を越えること自体が簡単ではないのだから、鷹矢がどれだけ無理やりにソコまで昇ったのか…

その異常性を考えれば、より彼の無茶苦茶加減が目立つというものだ。

そんな事を、考えてしまうのだろう。再び顔を落としてしまった遊良に対して、再び鷹峰は言った。

「チッ、いつまでもウジウジしやがって胸糞悪りぃ。１日じゃ上がれねぇ？何寝ぼけたこと言ってやがる。」

「いや、だってたった一日しかないのに…」

「何もこの後すぐ試合でもねー癖に、ごちゃごちゃ言ってんじゃねーぞコラ。１日もあんじゃねーか。じゃあ直ぐやりゃあいいだけだってんだよこのガキが。」

「…せ、先生…でもどうやって…」

「あぁん？んなもんひたすらデュエルしやがれ。強ぇヤツとひたすら

デュエルして、んで自分でどうすりゃいいのか考えろ…俺は最初に何を教えたよ。」
「…考えるのを止めるな…」

そう、どうすればいいのか分からなかった幼少期に、『考えることを止めた時が自分の最後だ』と、先ず始めに教えてくれた師。
『Ｅｘ適正』が無いという…普通のデュエリスト以下の境遇に居た遊良に、どうすればデュエルを続けられて…どうすれば『生きていられる』のかを、鷹峰はデュエルを通して教えたのだ。

「俺が…今やるべきこと…」

考えて、考える。
捕まらぬよう、囚われぬよう、落ち込んでいた感情、止まりそうだった思考をフル回転させて。

「…くっ」

…それでも、どうしても遊良の脳裏に浮かぶのは、大蛇に見せ付けられた『壁』の分厚さと、『負けていた』試合の後悔。

ー当たり前だ。
負けた時が自分の最後…自分が負けた途端に、『Ｅｘ適正が無い』のにデュエルをするのは間違いなんだと、声を荒げる連中がこぞって出てくることは…遊良だけでなく、誰の目にも明らかな事。

…存在を、『否定』される。この世界において、デュエルをしてはいけないというレッテルは、それだけで生きている事を否定されているようなモノ…

ー『Ｅｘ適正が無い』と言うことは…そう言うことなのだから。

考えないようにしても襲ってくるソレが、否応にも自分の実力の低さと、理事長と交わした『取引』の実質的な失敗と…鷹矢への申し訳なさと、師への申し訳なさを混ぜ合わせて…次々に遊良の心へと突き刺さってきている様子。

「こりゃ重症だな。ったく、昔みてーな顔しやがって。弱ぇからウダウダ悩むたぁ、それじゃ昔と同じだろーが。」

「…俺は…絶対に負けられなかったんです。でも、さっきの試合…勝負には負けていた…だから…」

「戦う理由に迷いが出来たってか？ケッ、学生レベルの雑魚共がピーチクパーチク…んな大層なモン、背負うにゃ１０年はえーってんだ。」

「…ッ！で、でも俺は…」

いくら思考を切り替えようとも、負けられないモノを背負ったゆえの危うさ…

思い返せば、鷹矢とルキの命を賭けた『あの時』のデュエルの後から、デュエルが常に負けられないモノと言う認識が、より一層強くなりそれに囚われていた遊良。

今までは、勝っていたからこそ保てていた境界…それが今回のデュエルをきっかけに、決壊してしまっているのだろう。

いつか誰かが言っていただろうか、必死さゆえの『危うさ』は、いつか遊良を潰してしまう、と。

「あーわかったわかった。つまりアレだ、こんな弱い自分に、もう一度戦う理由が欲しいってことだろ？」

「…いやそんなんじゃ…」

師の言葉の意味を上手く飲み込めないのか。遊良も、自分でもどう

すればいいのか分からない感情に飲み込まれていて。
渦巻く後悔の念が今にも押し寄せて、彼を押しつぶそうと向かっている中で…

―そんな状態の遊良の言葉を遮るようにして、鷹峰が口を開いた。

「…俺様はよぉ、まだ引退したくねぇ、どうしても引退したくねぇ、絶対に引退したくねぇ。こんな弱っちい弟子なんかに、俺様の輝かしいプロ生活の全てを賭けたのが間違いだった。今からでも取り消してぇくらい、俺様は引退がちょー怖ぇ。」
「え、せ、先生!?」

不意に鷹峰の口から溢れ出した弱音の数々。
留まらぬソレが次々に遊良の耳に届き、周囲に他人が居ないことだけが救いか。
こんな言葉がもし他の誰かに聞かれでもしたら、【決闘祭】の盛り上がりと同じくらいのスキャンダルになることは必至。
その、この男が絶対に口にしてはいけない様な言葉の数々に…この男からは絶対に出てこない様な言葉の数々に、遊良に驚くなと言う方が無理な話。

「あー引退こえーぜー。それに折角お前ら2人に払ってやった学費も全部パーになるかと思うとすげー勿体ねーぜー。こんなことになるんならもっと稼いでおくんだったぜー。あー無一文になんの超こえーぜー。」
「…あ、あの…」

そんな、どれもが棒読みであるのを気にしなければ、およそこの男からは絶対に出て来ないであろう言葉の数々は…
いくら気落ちしている遊良であっても、その気落ちを一瞬でも忘れさせるには十分過ぎるほどの威力を放ち…

ソレを見た鷹峰は口角を上げた『したり顔』で、あっけに取られた表情を見せている遊良に向かって口を開いた。

「…っと、こんなモンか？まさかこの俺様にこんだけ言わせておいて、まだウジウジ言いてぇなんて言わねぇよなぁ、遊良。」

「…は、はい…」

師の言葉に、思わず返事を返すしかない遊良。

先ほどまで脳裏に浮かんでいたマイナスイメージが、突然のその言葉で吹き飛んでしまうくらいに、たった今鷹峰から放たれた言葉の衝撃は大きく…

今更、たかが引退程度で怯む師ではないことは、遊良だって嫌と言うほど理解している。

どうせ引退になった所でプロに何の未練も無いだろうし、一生どころか五生は一族揃って遊んで暮らしても使い切れないほど稼いでいるこの男が、金に困るなど口が裂けても言えない言葉だ。

…しかし、それをまさか一人の弟子のために、恥ずかしげも無く口に出すなんて。

「…で、どうすんだよ、やるのか、やらねーのか。」

「…やります。俺も先生を引退させたくありませんし…退学もしたくありません。」

「おう、わかってんじゃねーか。」

驚愕と強制が彼を包み、『そう』言わざるを得ない雰囲気が場を支配して。

先ほどと変わらず、不敵な笑みをどこまでも崩さない鷹峰に対し…遊良は困惑したまま、ただ鷹峰を見ているだけ。

…しかし、そんな遊良と言えども、唐突にこんな言葉を言った鷹峰の真意を確かに感じているのか。

負に囚われている弟子を鼓舞し、迷いの生じた弟子に対して、何故遊良が戦うのか…その、遊良の戦う理由を、わざとらしい『言葉』にして、そこに向かわせてくれているのだろう。

その意味を理解できないほど、遊良は弱者ではいないのだから。

―弱かったら、『強く』なればいいだけ。

どこまでも、単純明快な答え…しかしどこまでも、複雑怪奇な答えを…

「負けてた自分が許せねーんだったら、その自分より強くなりゃいいだけだろ。ったく、これぐれー自分で気付きやがれってんだ…どいつもこいつもよぉ。」

師の示したその言葉は、一体『誰』に向かって言ったのか。

その真意は鷹峰にしか分からぬものの、この言葉から感じる師の『喝』を、遊良は確かにその心に受け止める。

―そう…師も、見たいのだ。

この【決闘祭】という大舞台にまで上り詰めた、己の弟子達の戦いを。

弱者同士の戦いなど、誰が見たいものか。

程度の低い、呆れるような戦いなど、始めから鷹峰は期待していない。ソレを、もっと『おもしろいモノ』とするために。

それに加えて、今の遊良の言葉は…彼の本心からくるモノに違いない。師の引退も、自身の退学も…遊良にとっては心から回避したい目的であって。
その過程がどうあれ、ここに至った『結果』がある限り…逃げ出すわけには行かないことを、迷いながらもその旨に刻む。

「…あの頃を思い出せよ。お前さんはどうしたかった？」
「…強く、なりたかったです。」
「じゃあ強くなりゃあいい。一回やってんだ、出来ねぇなんて言わせねぇぜ。」
「…はい。」

有無を言わせず、御託を並べず。
世界全てが敵に回り、自分が弱かったからこそ言われ放題、傷付けられ放題だった過去。
それを今、少しでも変えられたのは一重に『強く』なったからだ。

やるべきことは、昔となんら変わりない。

―『弱い』自分から、『強く』なる。

ただ、それだけのこと。

「行くぜ。」
「…はい。」

渦巻く後悔を吹き飛ばされ、その下に沈んでいた戦う理由を思い出させられて。
まだ、迷いは確かに彼の胸に残っている。しかし、先に『壁』を一つ越えた相棒に一刻も早く追いつくために…

明日に迫る戦いを、『約束』の舞台とするために、遊良は師と共にその場を後にしていった。

―…

「おかわりだ！まだ足りん！」
「ちょっと、まだ食べるの!?」
「腹が減って仕方ないのだ！明日空腹で力が出なかったらどうするのだ！」
「いや決勝って夜からじゃん！絶対また食べる時間あるし！」

激闘だった準決勝を終え、自宅に戻ってきていた鷹矢は、どれだけ食べても満たされぬ空腹と戦いながら、水を飲むかのようにステーキを次々に飲み込んでいた。

遊良が隠しておいたであろう、取っておきのステーキ肉を見つけ出して…ルキに焼かせたソレを、なんの遠慮も無く食べ進める。

その空腹が、一体『何』を押さえ込んでいるから起こっているのか、鷹矢とて理解できていないはずが無いのだが…
それ以上に、自らの手で勝ち取った『約束』の舞台が待ち遠しすぎるのか。

まるで遠足前の子供の如き興奮。いつまで経っても冷めることはないソレが、彼の消化に一役買っていることは先ず間違いない。

「遊良の苦労がよくわかるよ…もう。」

ポツリと呟いたその言葉を、鷹矢が聞いているはずもなく。
人の世話をやく大変さ、子育てをしている様なその苦労を…
自分の母ではなく、まさか幼馴染の男の子からソレを理解する事になるなんてルキも思っていなかっただろう。
いくら遊良から頼まれたとは言え、鷹矢の晩御飯の世話を一人でしなければいけない自分の気持ちも考えて欲しいモノだと…鷹矢の引くくらいの食べっぷりを見ているルキは、小さな口から静かに溜息を吐いた。

「…はぁ、遊良は帰ってこないし鷹矢は馬鹿だし。明日って本当に決勝戦なんだよね？」
「む？何を言っているんだルキよ、ボケたのか？もう一度日程を確認したらどうだ。」
「いやわかってるし！あと鷹矢にボケたなんて言われたくないし！」
「…むぅ。」

試合でデュエルしている時には、どこか怖さすら感じさせていたと言うのに、まるで今日の試合の鷹矢とは別人のような、『いつも通り』のその振る舞い。
今日のデュエルで鷹矢の実力が跳ね上がったのは、もちろんルキだって見ていたのだから分かっているだろう。
雰囲気がガラリと変わって、使ってもいなかったカードを次々に使って…
その結果、昨年度の優勝者である十文字　哲を破ってしまったのだから、もう街中は今日の鷹矢の噂で持ちきりとなっていた。
しかし、いくらルキがソレについて鷹矢を問い詰めても、黙り込んで何も話してくれないものだから、ついに根負けして晩御飯を食べさせているのだ。
帰ってこない遊良に、どこか不安そうな声をしながら、ルキは再度口を開く。

「…ねぇ、遊良は本当に大丈夫かな…」
「大丈夫とは…どういう意味だ？」

ルキの問いに、本気で意味がわからぬといった声で返す鷹矢。
明日に迫る『約束』の戦いで、遊良が来ないことなど微塵も考えていないからこそ、いつもと変わらぬ調子でそう言えるのだろう。
そんな鷹矢に反して、納得できないであろう『勝ち方』をした遊良の気持ちを考えると、ルキがこう言うのも無理は無いのだが…

「だって遊良、今日の試合は実際負けてたでしょ？その後いくら電話しても繋がらないし、メッセージ来たと思ったら『鷹矢の飯を頼む』ってだけだし。」
「一番重要なことを忘れていなかったな。遊良は偉い奴だ。」
「こんなどーでもいい事だけ連絡入れて…遊良はちゃんとご飯食べたかな…」
「どうでもいいだと!?おいルキ、俺の飯のどこがどうでもいいんだ！」
「うるさい、この腹ペコ星人！カップ麺でも食べてれば！」
「うむ！お湯をくれ！」
「あぁもう！」

どこまでも自分のペースを崩す気が無い鷹矢を前にして、ルキに苛立つなと言うほうが無理な話だ。
どうしてこの男はここまで物事を楽観して考える所があるのか不思議でたまらないと、そう言いたげな表情をして、ルキは鷹矢を睨む。
落ち込んでいないだろうか、自分を責めていないだろうか…自分がこんなに遊良の心配しているというのに、遊良との付き合いが一番長い鷹矢がこんな態度でいいのだろうか、と。
しかし、そんな不機嫌なルキを見てもなお、鷹矢は心配するだけ無駄だと言わんばかりに、ルキに向かって言った。

「ふん、遊良の事だ。落ち込んでいる暇など無いことにすぐに気付くだろう。こっちがウダウダ考えたところで、あいつ自身が答えを出さなければ前へは進めん。」
「…そうかなぁ。」
「何を言っているんだお前は。あの頃もそうだっただろうが。」
「むー…まぁそうだけどさ…」

ルキに反論の余地を与えずに論破するなど、鷹矢にしては珍しいことだ。
確かに、遊良の周りが全て敵だった頃、ソレに怯えて殻に閉じこもっているだけでは決して生きていけないことを…
鷹矢の『言葉』があったとは言え、あの時に遊良自身が自ら決意していなければ、今の遊良は居ないと言うこと。
それは、ルキも目の当たりにしてきたのだからもちろん身に染みて理解していることだろう。

…それでも

「でも、何だか…遊良がどんどん変わってくみたいで…」

声のトーンが弱くなっていき、ルキの言葉が次第に空気中に消えていって。
それは、彼女もまたこれまでの遊良を見てきたからに他ならない。

…自信に満ち溢れて、常にみんなの中心にいて頼られていた遊良。
…周囲全てが敵となり、自分の殻に閉じこもって命を終えようとしていた遊良。
…たった一つの生きる希望にしがみついて、我武者羅に強くなろうとしていた遊良。
…いくら強くなっても認めてくれない世界に、どこか諦めていた遊良。

…命を賭けて、未来を捨てて。そうして得た力で、後戻りが出来なくなった遊良。

そのどれもが、確かに遊良であることに変わりないとは言え…彼のこれまでの全てを見てきたルキだからこそ、不安が押し寄せてくることにも変わりない。

しかし、そんなルキの気持ちを意に介さず。鷹矢は全く別の意見をぶつけた。

「変わった…あいつが?…フッ、笑わせる。俺に言わせれば、やっと『帰って』きただけだと言うのに。」

鷹矢の放ったその言葉。

それは、ルキが感じていたモノは確かに事実で、彼女がこれまで見てきた遊良のどれもが、彼が苦しみながら出してきた答えによるモノだということを、鷹矢も理解しているからこその言葉。

それでも、鷹矢が感じていたモノは、他の誰にも感じることなど出来ない、彼だけの感覚に違いない。

何せ、生まれた時から一緒だったのだ。

遊良のことを誰よりも…下手をすれば、遊良自身よりも理解出来ているのではないかと思うくらいに、鷹矢の感性による遊良の見方は、他の誰にも出来ない見方となっていて…

「帰ってきたって…だって昔の遊良はもう…」

「ふん、達観したフリで上手く隠して来たようだが、俺とルキに引け目を感じていたアイツが、【堕天使】を得たことでソレを蹴り飛ばしたのだ。」

「引け目!?だ、だって遊良そんなこと一言も…」

「事実だ!それがどうだ、綺麗さっぱりＥｘ適正を捨てたことで、あの頃の俺と同じ景色を見ていたアイツが、ようやくここまで帰ってきた。だから許さん、遊良が再び殻に閉じこもることなど、絶対に!」

鷹矢の言う『引け目』…それはＥｘ適正が無いゆえの、遊良の無意識の感情から来た、彼でもどうしようも無いモノなのか。
遊良自身も、絶対に感じないように隠してきたソレは…生まれたときから隣にいた鷹矢だからこそ感じ取っていたモノであって。
たかが『Ｅｘデッキが使えない』ことが分かった程度で、あの『強かった遊良』が消えたことを…一番諦め切れていなかったのは、何を隠そう遊良自身ではなく、鷹矢の方なのだろう。

「遊良はジジイに任せてある。何も心配はいらん…明日の試合も、遊良の事も。」
「…いやそれ余計に心配なんだけど。落ち込んでる遊良に、よりによって先生って。」
「だから良いのだ。ここで遊良が潰れるのなら、その程度の奴、俺が戦う価値もない。」
「そんな言い方って！鷹矢は遊良と戦いたいの!?戦いたくないの!?」
「戦いたいに決まっているだろうが！だから俺にはわかっている、あいつは絶対に戦いに来るとな！あの負けず嫌いの大馬鹿者はそういう奴だ！」
「馬鹿が遊良を馬鹿って言うな！」
「うるさい！ゴチャゴチャ抜かすな！」

お互いに感情が昂ぶり、その苛立ちをぶつけ合う二人。
お互いに思うところが違うからか、その思想は決して相容れぬモノとなっているのは仕方ないこととは言え。
命を捨てる気でいた遊良を、その身を持って繋ぎとめた少女と…常に遊良と肩を並べて生きてきたと言うのに、唐突にソレを奪われた少年の…その思想を合わせるなど、誰であっても出来ないことなのか。
それでも必ず訪れる戦い…彼らにとっての『約束』の場所へと…

―いや、『訪れる』のではない。

彼らの強い意思が、明日の決勝の舞台を『約束』の場所へと昇華させたのだ。

「むぅー、鷹矢の超馬鹿！寝ぼすけ！明日起こしてあげないんだからね！」

「いらん！寝られる気がせん！」

明日の夜、【決闘祭】の決勝の日。

長い歴史の中でも、絶対に満月となり…街の街灯よりも明るい月光が照らすスタジアムで、大勢の目の中、自分の片割れとの戦いを全員に見せ付けられる。

それを考えただけでも、鷹矢の興奮は今から押さえきれるものではないのか。

いくら食べても満足できず、全く襲ってこない眠気を意に介さず。

およそ、最低とも思われる『最高のコンディション』の中で、その猛りを沈める方法など、一つしかないだろう。

「そんなことよりルキ、今晩付き合え。デッキは持ってきているだろう？」

「持ってきてるけど…え、まさか徹夜でデュエルする気!?」

「うむ。」

「嫌だよ！私だって明日の試合ちゃんと見たいのに！」

無理難題を押し付けてくる鷹矢ではあるものの…彼とて、今日を持って『壁』を越えた、その感覚が忘れられないのだろう。

別に、一度ソコへと『昇った』者が、下に落ちるという事などありえないのだが…ソレを確実なモノとしたいのか、またはその時の高揚と歓喜が渦巻いているのか、ともかく鷹矢が到底眠れそうでは無いことは確か。

ソレに付き合わされるルキからすれば、この提案はたまったものではないのだが…

「別に良いではないか！俺の調整に付き合え…それに今の俺なら、お前の『本気』を受け止めても平気そうなのだ。」

「…は？」

「何なら、『全力』を出してもいいんだぞ？ソレくらいしてもらわんと調整にならん。」

「いや何言って…」

唐突にそう言ってきた鷹矢の言葉に、思わず返答に困った様子を見せるルキ。

彼女の学園での成績が…調整しているとはいえ…決してトップクラスに上がってこられない理由は確かにあって。

軽々しく『本気』のデュエルを行えない『葛藤』と『もどかしさ』に耐えてきたルキが身につけた、今の彼女が出せる実力もまた…『今』の彼女の本気に違いないのだろう。

しかし、現状の『押さえられる限界』を超えた途端に、彼女に襲いかかるソレ。

師に、そして何より彼女の親に禁じられているその『本気』…ルキ自身の体に危険が起こるというその怖さのことを知っている鷹矢も、ソレは十二分に理解していると言うのに。

そんな、鷹矢とて身に染みて理解しているはずのルキの『本気』と、それを超える『全力』は…師を相手に、修行時代にたった一度しか見ていないとはいえ…

「…鷹矢、それ本気で言ってるの？」

「当たり前だ…遊良に勝つ、その為には、お前の『本気』を受け止めるくらいのことをしないと意味が無い。きっと今頃、遊良はジジイ相手に必死になって修行しているはずだからな。」

「でも…下手したら、鷹矢の方が明日の決勝に出られないかもなんだ

よ？…それでもやるの？」
「うむ！」

それを覚えていてもなお、簡単にそう言い放つ鷹矢に、ルキの顔が険しくなるのは仕方ないこと。
―それでも…馬鹿にはしていない、本気でそう思っている鷹矢のソレを、ルキも感じたのか。

「…はぁ、私の方が『危なく』なったらすぐサレンダーするからね。それでもいい？」
「うむ。」

ルキとて、遊良と鷹矢、どちらにだって負けて欲しくない。しかし、勝敗が確実に着く『デュエル』というモノにおいて、それを願ったって無理な話だということは、ルキだって理解していること。

ならば、少しでも洗練された戦いを…ソレを見たい彼女もまた、遊良が強くなる為に必死になっているのだからと…
同じく必死になろうとする鷹矢の姿勢を、常に二人の男共（バカ）を見てきた彼女が否定できるはずもなく。

「もう、わかったよ。仕方ないんだから。」
「でもその前に腹ごしらえだ！カップ麺をくれ！」
「…はぁ、ホントおバカだよね鷹矢って。」

とは言え、どこまでもペースを崩さぬ鷹矢に、ルキは再び溜息を吐くのだった。

―…

暗い空間、何も無い部屋。

そこに居るのは3人の紫魔と…地面に倒れた男性が一人。

「チッ、明日は決勝戦か。あーあ、俺も『コイツ』が調子に乗って出場してこなきゃ、『プランA』は俺の仕事になってたのによ。オラッ、このクズがっ！調子に乗ってたって、最後は俺に従うしかないんだよお前はっ！」

そこで、ノース校3年の紫魔　亜蓮は、地面に倒れて物言わぬウエスト校3年、竜胆　大蛇を踏みつけながらそう言った。

今の大蛇では決して敵わぬ人物によって、『黒い靄』に飲み込まれた彼が物言わぬのは当たり前なのだが…それに気を良くしたのか、特に、大蛇に直接敗北した亜蓮の態度は、誰が見ても度が過ぎていると言えるものであって。

「…亜蓮の奴、竜胆にボロ負けしたからって容赦ねーな。『あの方』に飲み込んで貰ったってのに。」

「ホホ、負け犬の遠吠えとはこの事ですわね。」

「あぁ!?お前らだって竜胆妹と【黒翼】の孫に負けたじゃねーか！」

「だからってそこまではしねーよ。八つ当たりにしか見えねーし。」

「そのみっともない振る舞いはさっさと止めてはどうかしら。」

「チッ、面白くねーな。なんだったら竜胆妹も今すぐ呼び出して、ひん剥いて好きにすりゃ良いんだよ。」

上流階級を謳っている紫魔家中でも、特に上位の人間だというのに、その下衆な思考を恥ずかしげも無く言う亜蓮。

ヒイラギに止められ、一応大蛇から足は除けるものの…気に食わな

いといった表情で大蛇を睨んでいるその顔は、公衆の面前でプライドを砕かれたことと、紫魔に楯突く融合使いが、心の底から目障りなのか。
それを聞いたヒイラギと大治郎が、亜蓮をやや引き気味に見て口を開いた。
「物言わぬ人形に性的欲求をぶつけるなんて、本当に気持ち悪い男ですわ。」
「きもっ!?」
「そこまで言うとか正直引くぜ。気持ち悪い」
「んなっ!?」

賛同を得られなかったことだけでは足りず、仲間からも怪訝に扱われたことが相当ショックだったのか。
亜蓮はその場で表情を固めて、口を開けたままその場で棒立ちになっていた。

「そんなことより、十文字の方は良かったのか?」
「ホホ、竜胆を下僕にした時点で『プランB』は達しましたし、表彰台に上がる人間に『アガアガ』言わせるわけには行かないでしょう?」
「まぁそうだけどさ。でも戦力的には…」

そんな亜蓮を意に介さず。彼を他所に話し合いを続けるヒイラギと大治郎。
彼らが何らかの目的を持ってこのような行動をしていることは間違いようのない事実ではあるものの、それが碌でもないことだけは確か。
人を支配する悪意の塊、それを誘発する『黒い靄』…既に彼らの手中には大勢の手駒が揃っていて、彼らが躍起になっていた『プランB』というモノも、既にソレは終えていて。

【決闘祭】の大詰めに伴って、彼らの目的も大詰めに来ていると言わんばかりな様子。

「…戦力ですか。まぁ操れたら、ですけどね…」
「ん？なんて言ったんだ？」
「ホホホ、何でもありませんわ。『プランＡ』を全員しくじった時点で、もう【決闘祭】に用はありません。」
「最後は決勝後に…『最後の一人』を『あの方』が飲み込めば計画の方も大詰めか。後は『あの方』のご期待に沿えるよう、しっかりやるさ。」
「お、おう、俺に任せとけよ。」

その口ぶりから、いよいよ彼らの目的が、その最終段階に入っているよう。
明日の、『最後の一人』が一体誰なのか。そして彼らが従う、竜胆大蛇を飲み込んだ『あの方』の目的が一体なんなのか。
明日に迫った決着に、興奮と熱狂が覚めやらぬここ決闘市で…暗躍している者達も確かにいて…

「では、明日の戦いは高みの見物をさせていただきましょうか…『最後のプラン』と…『計画』のために。」

暗い、どこかの部屋の一室から…
『何か』が、起ころうとしていた…

――…

ｅｐ３３「決闘祭、決勝・前編ー約束の場所へ」

―その日、決闘市は異様な空気に包まれていた。

それは【決闘祭】が始まった時とは、まるで正反対の雰囲気。

雲ひとつ無い、どこまでも透き通るような空へ…冷たい大気が抜けていき、およそ崩れることのなさそうな天気は、『この日』の天気としては例年通りのモノ。

そんな決闘市中から充満してくる空気は、４つある決闘学園から、一体どんな選手が選りすぐられて、一体どんな戦いを見せてくれるのか分からなかった開幕当初と比べれば…

その雰囲気はどこか洗練されていて、最後の戦いへの期待を、より一層鋭く研磨している様子。

―そう、いよいよ決まるのだ。

この広い決闘市における、２０万人を超える学生達の中から…

激しい戦いを繰り広げ、鎬を削りあってきた者たちの中から…

決闘学園の学生達が、決闘市中の人々が、この街でデュエリストを自負する者達が全員見守る中で…

―【決闘祭】、決勝戦

決闘市最強の、たった一人の学生を決める戦いに…ついに終止符が打たれるのだ。

例年を見ても、決勝戦のデュエルは絶対に簡単には終わらない。

ここまで上り詰めた学生達が織り成す戦いと、その実力が生半可なモノでないことは、決闘市に住む誰もが理解していることであって。

―【決闘祭】は、結果が全て。

ここまで上り詰めたのが、二人とも1年生だという事も…それが王者【黒翼】の孫と、あの『Ｅｘ適正の無い』学生だという事は、『良い意味』でも『悪い意味』でも、誰の興味も惹かれないわけが無いだろう。

とは言え、確かに昨日の準決勝で、優勝候補であった竜胆　大蛇のプレイングには…誰の目から見ても、懐疑を感じずにはいられないモノに違いは無い。

果たして、ソレが意味する物がなんなのか。そして大蛇に、『結果的に』勝利した天城　遊良の力が本物なのかどうか…

―今夜に決する勝敗を、今か今かと待ちわびるこの決闘市の異様な雰囲気を…

ここに居る、誰もが感じていた。

―…

まだ人もまばらだという、午前中も早い時間。
決闘市内のとある大きな病院の…およそ、一般人では利用も出来ないような上階の、整えられた病室の一室の前に遊良は居た。

―緊張の面持ちをして、どこか落ち着かない様子を見せて。

清潔と潔癖に包まれている、この独特の匂いがそれをさらに誘発しているのだろうか。外の明るさよりも、なお明るい病院の廊下は…健康な人間をことごとく、この建物内から除外したがっている雰囲気を感じさせるのであって。
目の前の閉まっている扉と、その横に書かれている入院患者の名前を見てしまっては…遊良の心臓は、より一層その鼓動を大きくしている様子。

「…よし。」

やがて、小さくドアを叩くというその覚悟を決めたのか。意を決したようにその手を持ち上げ始め…遊良はその中に居る人物の顔を思い浮かべると同時に…

…一回…二回…三回

白く硬い病室のドアから…小さく、小さく、小さく響いたノック音に連動し、自分の心臓も小さく跳ねるのを感じている遊良。
その奥から聞こえくるであろう声を想像して、入室を躊躇う気持ちが彼の足をリノリウムの床へと押し付けているのだろう。

「…どうぞ。」
「…ッ、し、失礼します…」

やがて、そのノックの音のすぐ後に聞こえてきた想像通りの声に促

されて個室の扉を開けると…遊良はその歩を進めて…

「やぁ、天城君。わざわざありがとう。」

「い、泉先輩…本当に、目が覚めたんですね。」

「うん、ごめんね、心配かけたみたいで。」

そして遊良の目は、中に入ってすぐにその声の主の顔を視界に入れて、緊張と共にどこか安堵したような表情を見せ始めた。

その声の主、ベッドに入って、体だけを起こしている人物…イースト校3年、泉　蒼人。

秋頃に行われた、イースト校における【決闘祭】の代表選抜戦にて…その様子を突如変貌させて、悪意を持って遊良に襲い掛かってきた学生だ。

整った顔立ちと爽やかな雰囲気は、世の女性達が放っておくわけが無いものの…怪我の影響か、どこかやつれている様にも見えるのが、彼の受けたダメージを確かに遊良へと伝えてくる。

そんな彼は、そのデュエルの直後に誰かに襲われたのか、血を吐いて気を失っているところを発見され…【決闘祭】が始まる前夜も意識が戻らずに、今もこうして入院を続けていたのだった。

「いつ…目が覚めたんです?」

「一昨日の夜になんだ。でも驚いたよ、こんな長い間眠っていたなんて。もう【決闘祭】も始まっていたから。」

「俺も驚きました。まさか泉先輩の方から電話が来るなんて。」

「実は…君の番号は随分前に教えてもらって知っていたんだ。でも直接会ってないのに、電話するのは失礼かと思って。」

そんな蒼人の目が覚めたのは、【決闘祭】の第2回戦が行われた日の夜。

そうして準決勝の試合を見た彼は…目が覚めたばかりだというのに、準決勝で大蛇と遊良の戦いを見て、その勝敗の着き方から遊良を案じて、わざわざ電話をかけてきたのだ。
師との修行中だったとは言え、その身を案じていた遊良が蒼人からの連絡を蔑ろに出来るわけがないだろう。すぐに電話に出て、その声を聞いて遊良の心がどこかホッとしたのは言うまでも無い。
また、蒼人の声は軽く、その時の怪我も良くなった様子。
あの時の歪んだ表情をしていた蒼人とはまるで別人のような、本来の優しい表情をしていることが、より一層遊良の安心へと繋がっているのか。再び遊良がその口を開いた。

「…でも先輩、何だかあまり驚いているようには見えないですけど。」
「ハハ、昔色々あってさ。実はこう言う事にちょっと慣れてて…あ、でも内心は凄い驚いているんだよ？」

そう言う蒼人であったが、彼の過去を何も知らない遊良からすれば、とてもずっと眠っていて、突然目が覚めたにしては落ち着きすぎであろうと感じていて。
しかし、代表戦前はあれだけ『苦手』に思えた蒼人の雰囲気が、今ではソレをあまり感じていない様子にも見える。
遊良の、蒼人に対する口調も軽く、とてもアレだけの死闘を行った雰囲気にはとても見えないだろう。

「準決勝も見たよ。竜胆君を相手によく戦っていたね。」
「いえ、あの試合、俺は実際には負けてました。それは言い訳出来ません。」
「…でも、思ったよりも大丈夫みたいだ。てっきり、もっと落ち込んでいるかと思っていたけれど…僕が思っていたよりも、やっぱり君は強いよ。」
「…あ、ありがとうございます。」
「うん、これで安心した。これで君と天宮寺君の決勝戦を心置きなく

見られるって。君が落ち込んだまま戦っていたらどうしようかと思ったけど…僕が心配しなくても、君はちゃんと戦いに臨めそうなんだもの。」

蒼人の口から出てくる優しき言葉、それはどれも遊良には優しく届いていて…今ならはっきりと遊良にも理解できる、以前に遊良に会いに来てくれたときの蒼人の言葉が、間違うことの無い彼の本心であったのだと。

敵意の無い、優しい言葉に慣れていなかったせいで…今だって、別に慣れているわけでは無いが…蒼人を『苦手』だと思ってしまったことに対して、今更ながら申し訳なさすら出てきてしまっている表情を見せる遊良。

誰の目にも明らかになっていた、遊良と大蛇の試合内容と、その後についても…

この試合が遊良の心を強く抉り取ったことは変えようの無い事実であり、またそれで遊良が戦う気持ちを無くしかけたことも確かなこと。それは、遊良を何かと気にかけていた蒼人ならば気が付かないはずが無く。

それでも、戦いに臨もうとしている遊良を否定するわけでもなく…その言葉は、遊良にとって何よりも嬉しいことに違いない。

「…ありがとうございます…俺は…立ち止まるわけにはいきませんから。…でも、他の人達はそうも行かないみたいですけど。」

「何か…言われた？」

「…まぁ、はい。」

しかし…全員では無いにしろ、昨日の準決勝であんな試合を見せられた者達の中には…大蛇の敗北が遊良の根回しによるモノだと考える人間も居る様子であって。

まだ朝が早い時間とは言え、ここに来るまでも、遊良は街にまばらに居た人間達からの嫌疑の視線や心無い言葉を投げられたりした

のだ。

『天城　遊良は、金を積んで八百長試合をした』とか、『やっぱりＥｘ適正が無いのに勝てたのはインチキだった』とか。

そんな、根拠も事実も知らない人間達からの、卑下の言葉を。

そんな敵意ある言葉は聞き流すことが一番であることを、これまでの経験から身に染みて理解している遊良。

だからこそ、今更そんな言葉を投げつけられた所で、これまでの過去からそんなモノに怯む彼で無いのだが…

それでも、準決勝であんな勝ち方をしてしまった遊良からすれば、決勝戦を前にソレに対して良い気分になるわけが無いことだけは確かだろう。

そんな、どこかソレから目を背けようと苦笑いをしている遊良の表情から、彼はそれを感じ取ったのか…蒼人が再びその口を開いた。

「天城君…君は、どうしてデュエルをしているんだい？」

「え？」

「プロになる為とか、ただ好きだからとか。皆デュエルをするのには理由があるんだ…それは、君だって同じでしょ？」

「…はい。」

彼の口から出てくる言葉は、そのどれにも裏など無く…選抜戦で遊良と戦ったような、悪意に塗れた彼などでは断じてない。

「だったら何も気にする必要は無いよ。誰に何を言われたって、君がデュエルをしたいんだったら…」

ソレは、ただ純粋に先に立つ者として、後に続く者へと教える言葉であって…

「他の誰のためでも無い。君は…君のために、デュエルをしていいんだ。」
「…ッ！」

蒼人の口から伝わる言葉。
それは、およそ幼馴染達以外の、誰からも出てこないような言葉。

これまで、幼馴染以外の誰からも認められていなかった遊良からすれば、赤の他人であるこの泉　蒼人から、まさかこんな答えが聞こえてくるなど、想像もしていなければ期待もしていなかったというのに。
蔑むわけでなく、陥れるわけでもなく。
―自分の存在を、『肯定』してくれている。

その、本心から遊良を案じてくれているのが彼の言葉から伝わってくるのは…誰であろうと否定しようの無い事実であって。

存在を『否定』され続けてきた過去…いや、今だって同じだ。
『Ｅｘデッキが使えない』という理由で、その人生すら否定された幼少期。
デュエルすること自体が間違いだと、嘲笑され蔑まれ続けてきた過去。
『Ｅｘ適正』を持たないことが『悪』だと決め付けられ、在学すら危ぶまれている今。

全てが彼の敵であり、全てが彼を認めていないというのに。

他人からソレを聞いた遊良の心が何を思うか、それは彼にしかわからない事ではあるが…それでもその『肯定』の言葉は、遊良が何よりも欲していたモノであるという事は、何にも変えがたい事実なのだ。
たった一人からとは言え、他人から『肯定』されたことに…遊良が何も感じないわけが無く…

「…俺、先輩から【決闘祭】の代表を奪ったって言われているのに…泉先輩は…それでいいんですか？」
「その時のことは…ごめん、全然覚えていないけれど…でも、デュエルして勝ったのは君なんだから。だったら僕には何の文句もないよ。」
「…でも、もし先輩がいつも通りだったら…俺、勝てていたか…」
「そんなことは関係ない。やってみないとわからないことを、今あれこれ考えて悩んだって仕方が無いでしょ？」
「…は、はい…」

引っかかっていた雑念を、悩んでいた勝敗を…そのどれにも『答え』をくれる蒼人の言葉は、確かに遊良に深く届いていて。

【決闘祭】の前夜まで、遊良が気にしていた事を…

学生生活最後の【決闘祭】を、まさか病室で過ごす羽目になっているというのに、その当事者かもしれない疑いがある遊良に、何の文句も無く…それだけで、この泉　蒼人という人間がどれだけの『強さ』を持っているのか、わからない遊良ではないだろう。

「…なんだか、随分楽になった気がします。」
「うん？そっか。それならよかったよ。」

遊良が楽になったと感じたのは、何も蒼人から『励まされた』からだけではない。

代表選抜戦の時の、『ありえたかもしれない勝敗』の可能性に関しても、蒼人の答えを聞いたことから。

―あれだけ悩んでいた勝敗に関しても、『今の結果』が全てだということを…遊良は今この時を持って…『肯定』をくれた人物の言葉で、心からソレを理解したのだ。

―本来の蒼人に、負けていたかもしれない…けれども、『結果』は遊良が代表になったこと。

―竜胆　大蛇に、勝負で負けていた…けれども、『結果』は遊良が決勝へ進んだこと。

それに至る過程は紆余曲折あれど…そこへ辿りついたことに対しては、何を悔やむ必要があるというのだろうか。

―その全てが折り重なって、今の『結果』へと結びついているのだ、と。

…それは誰のためでもない。遊良自身が、自分のために進んできた過程の軌跡。

それを恥じる必要をなど無いことを…蒼人は確かに教えてくれた。そんな蒼人を、今の遊良が『苦手』だなとど感じているはずも無く…

「泉先輩、俺、やっぱり先輩が【決闘祭】に出るべきだったんじゃないかって、今改めて思いました。」
「ははっ、でも今日がその決勝だからなぁ。」
「それに、本気の先輩と、もう一度ちゃんと、デュエルしたいって。」
「うん…じゃあ、僕が退院したら、その時にもう一回デュエルをしよう。僕の【ナチュル】達も、君と戦いたいはずだから。」
「はい、絶対に。」

心は軽く、迷いを振り切り。

―【決闘祭】、決勝戦

その当日に、本来の戦うべき理由を思い出した遊良に…既に迷いなどない。

「決勝戦、頑張ってね。」
「はい。」

―ここに来て良かった。

そう感じながら、遊良は静かに病室を出てその場を後にした。
まだ午前中で、夜、月明かりに照らされて始まる決勝戦に向けて…
まだまだやることは山積みだとは言え…
それでも、昨日から圧し掛かってきていたモノは全て消えている。

…後は、自分のやるべきことをするだけだ、と。

その中で、ディスクを取り出し電話をかけ始める遊良。ディスクに表示されている名は、間違うことの無い、師の名前。

『用事ってのは済んだのかぃ？』
「はい。先生、決勝までもうしばらくお願いします。」
『…何の用事か知らねぇが…随分とマシな声になったじゃねーか。おぅ、時間がねーぞ、さっさと戻ってこいや。』
「はい、今すぐに。」

まだまだ、『壁』は越えていない。それは遊良も自分で分かっているだろう。

しかし、微かな迷いを持ったまま我武者羅に修行していても、全く見えてこなかった『その上』が…
今なら何かが掴めそうだと、そう言わんばかりに逸る遊良の表情は明るく澄んでいて。
―夜へと迫った戦いに、不安と焦燥は既に無く。
ただひたすらに、そこへ向かうだけなのだと…遊良はその足を更に速めていった。

「…天宮寺君が相手か…本当に…頑張るんだよ…天城…君…」
誰にも聞こえることの無いその言葉を、蒼人もまた、宙に向かって呟いていて…
再び彼は、その意識を手放したのだった。

―…

「おぅ、後はお前さん次第だ。行ってこい。」
「先生、ありがとうございました。」
「カッカッカ。クソガキ共々、俺様を退屈させんじゃねーぞ?」
「はい。」
日が暮れてきて、決闘市中が夕焼けに染まって。
決められた集合時間が迫っていたため、鷹峰の車から降りた遊良は

…そこで師と戦いの前の最後の言葉を交わしていた。
これよりセントラル・スタジアムに足を踏み入れれば、待っているのは戦いのみ。
決闘市内が暗くなり始めてきているというのに、街中のあらゆる場所から決勝戦へと向けられた興奮の声が聞こえていて…それは今年の【決闘祭】の最後の試合を、決して見逃さぬよう、今から中継に食いつくようにして見入っている証拠なのか。
２０万人を超える決闘学園の学生達の中から、たった１２人しか選ばれることを許されぬ祭典の…

―最後の、２人

これまで分散されていた注目度も、最後の二人ともなれば…その期待度や重圧が、どれほど大きく、また重く圧し掛かってくるのか想像もつかない。

そう、戦いが始まってしまっては他に縋るものなど何も無く…己のデッキと、己の実力のみにしか頼る物など在りはしないのだ。

（よし、行くか！）

―それでも、覚悟は決めてきた。

ウジウジと考え込むのは師によって粉砕され…残っていた迷いも、蒼人によって消し去られ。

ならば、何の不安も焦りもない。これより始まる鷹矢との戦いを、『約束』の舞台へとするために。
この世界で唯一の相棒、何があっても隣にいるあの馬鹿と…

―最高の戦いを、するだけだ。

そんな決意に包まれて、セントラル・スタジアムへと歩いていた遊良だったのだが…

―不意に、その後ろから大勢の人間が遊良に向かって走ってきて、遊良を取り囲んでしまった

「天城選手！昨日の竜胆選手とのデュエルで八百長が噂されていますが、その真相はいかかがなんでしょうか！」
「え!?」
「何でも２回戦の獅子原選手とのデュエルでも八百長が行われていたとか！」
「は？な、何言って…」
「一体【決闘祭】をなんだと思っているんですか！一言！一言！」
「いや、えっと…」
「そもそもＥｘ適正が無いのにどうやって代表に選ばれたんでしょうか！真実を教えてください！」
「いや真実も何も…」
「Ｅｘ適正が無いっていうのに、ここまでの戦績はおかしいじゃないですか！学園では特別待遇を受けているとお聞きしましたが！」
「はぁ!?」
「真実を！【決闘祭】を見ている全ての人達に真実を！」
「我々には知る権利があるんです！真実をおっしゃってください！」
「天城選手！一言！一言！」
「【決闘祭】を汚したことについて！見ている人達の前で謝罪を！全ての選手達に謝罪を！」
「天城選手！」

「天城選手！」
「天城選手！」
「天城選手！」
「天城選手！」
「天城選手！」
「天城選手！」

…

スタジアム前で、突如記者たちに囲まれる遊良。
質問どころではない、我先にぶつけようとしているその心無い言葉の数々は、これから【決闘祭】の決勝が始まるのだというのに、どこまでも醜いモノとなっていて。

誹謗中傷、罵詈雑言

およそ、『あの頃』と同じ。大衆のためという名目に酔いしれ、好奇の目でしか遊良を見ない彼ら報道陣。
その心無い報道と、隠す気の無い悪意で…『あの頃』の遊良が、一体どれだけの被害を被ってきたというのか。
それを知るつもりも無ければ、知りたいとも思っていない彼らからすれば、この【決闘祭】の疑惑はまさに飯の種と言えるのであって。

（な、なんだよ一体…）

ただ面白く、ただ大衆の興味のために。

個人を標的に、それがどれだけ醜悪な行為なのかということを…考えることも出来ない彼らにとって、言い返せない遊良はまさに恰好の的、好き勝手に言葉の暴力をぶつけていた…

―そんな時だった。

「散れぇこのゴミ共がぁ！」

―！

意識の外から、視界の外から。

不意に放たれたその威嚇と、卒倒する程に圧縮された誰かの圧力が…記者たちを確かに貫いて。

唐突に、かつ突然に。他人を食い物にして、真実を捻じ曲げることをに何の罪悪感も持たぬ弱き人間達が、次々に意識を手放していくその光景は…

傍から見たら地獄絵図、傍から見なくても異常な構図。

そんな輩が、容赦の無いこの圧力に耐え切れるはずが無く…次々にその意識を手放して硬い地面へと激突していく。

かろうじて人の壁に救われた結果を得た、『極少数』の記者は、一体何が起こったのかを理解できていないまま、呆然とするしかなかったのだが…

すぐにその出所を視界に入れたのか、または自分たちの立場を理解したのか。驚愕の声を漏らして口を開いた。

「こ、【黒翼】ぅ!?なんでここに!?」

「王者の入り口って確かあっち…」

「誰が喋れなんて言ったぁ！このゴミ共がぁ、目障りだからとっとと

消えうせろってんだ！」
「ひっ、ひぃぃぃ！」
「たすけてぇ！」

蜘蛛の子を散らすように、『生き残った』数人の記者が一目散に逃げていくその阿鼻叫喚の振る舞いは…まるで『命ながら』という言葉のお手本を見せてくれているよう。
彼らも、まさか天城　遊良という、面白おかしく扱っても誰にも『迷惑にならない』ただの『話のネタ』へと攻撃していただけだというのに…まさか『コレ』に対して、王者【黒翼】が何故それを邪魔してきたのかを、理解できるはずがないだろう。

既に意識が無く、泡を吹いて倒れている記者には何の興味も無さそうにして…鷹峰はソレをいくつか蹴り飛ばすと、遊良へと向かって言った。

「チッ、このゴミ共はいくら払っても出てきやがる。」
「あの…先生、わざわざありがとうございます。」
「手間かけさせんじゃねーよ、ったく。いい顔して見送った俺がバカみてーじゃねーか。」
「…す、すみません。」
「いいか？ゴミが沸くのはテメーが弱ぇーからだ。『力』を見せ付けろ、そうすりゃ嫌でも周りは黙る。」

その、あまりにも横暴ではあるが、確かな『真実』である師の言葉。
さすがはソレを体現してきた人の言葉だ。過去、何があっても堂々と、またあまりにも圧倒的な『力』を見せ付けてきて、周囲を黙らせ続けてきた【黒翼】こと天宮寺　鷹峰。
彼の人生においても、『敵』が多かったのは言うまでも無く…しかしそれを『力』で捻じ伏せて来た人間の教えは、遊良にとっても到達したい目標となっているだろう。

―恐れず、怯まず、媚びず、腑抜けず。
弱いままでは変わらない、強くなければ変えられない。その教えは、姿形からソレを現している鷹峰が、その佇まいだけで教えてくれていて。
「後は自分で何とかしな。精々足掻いて俺様を楽しませろ。…あばよ。」
「はい！」
立ち去る師を見送って、倒れている記者を意に介さず。
遊良もまた、師のおかげで静かになったセントラル・スタジアムへの道筋を歩き始めた。
暮れ始めた太陽が、刻一刻と開戦の瞬間を彼に感じさせていて…

―…

「シシシッ、やぁーっと決勝戦かぁー。なーんか懐かしいじゃん。」
「ようやく最後の試合ですか。…なんだか、最後ともなると感慨深さを感じますね。」
王者のために用意された特別展望席。【白竜】、新堂　琥珀と、【紫魔】、紫魔　恋介がそこに居た。
少しずつ観客達が入場してきているのか、にわかに会場内がざわつきを見せてきていて。
もうすぐ始まる最後の戦いには、これまでの戦いの全てを見てきた

【王者】達と言えども『何か』を感じているのだろうか。
口で退屈とは言っていても、【決闘祭】で決勝まで昇ってくる学生は…プロの世界においても、間違うことなき強者として数えられているのだ。まだ新参者の王者だからこそ、若い存在の成長を、怖く感じてもそれは何ら不思議なことではないのだから。

「カッカッカ、待たせたなガキ共。」
「あ、天宮寺のジイサン遅かったねー。どこ行ってたのさ。」

そんな中で、遅れて特別展望席へと入ってきたのは…【黒翼】天宮寺　鷹峰。

もう開戦が迫り、集合時間も過ぎていると言うのに…王者が席に居ない事は論外と言えるだろうけれども、この男を縛り付けられる鎖などこの世界には存在しないのだから、仕方が無いとは言え。
やりたいように、振舞いたいように生きる彼は、いつだって自由なのだと、そう言わんばかりにその口を開く。

「俺がどこへ行ってようとお前さんには関係ねーだろうがクソガキ…っと、いけねぇ、つい癖でまた琥珀をガキ扱いしちまうところだったぜ。」
「いやいや、もうしてるって。遅いって。」
「カッカッカ、決勝前に揉める気はねーよ。ちっと野暮用を片付けてきただけだ。…あと、客も連れてきたぜ？」
「客？…客っつったって、こんなとこにくる客なんて…」
「…おい、入ってきていいぜ。」

そう言って、琥珀の言葉を遮り…特別展望席の入り口へと手招きを行う鷹峰。

【王者】のためだけに用意された席、【王者】以外に入ることは許され

ぬ席。それを知らぬ鷹峰ではないと言うのに、それでも他人を連れてくるという行為は、彼にとっては何の躊躇も感じないモノ。
そうして促されるままに、入ってくる一人の人物。

「お邪魔するよ、琥珀君、恋介君。」
「ちょ!?ま、マジ？」
「これは…」

やや驚いた声を出して、特別展望席へと入ってきた人物へと目をやる若き王者の二人。
その目の前には…その鮮やかな浅黒い肌と、夜空の暗さよりもなお深い黒色の長い髪と、放つ空気が周囲にいる人間を容赦なく押しつぶそうとしているのが『見て』わかるくらいに、異質な雰囲気を持っている女性が…

―釈迦堂　ラン

他に染まらぬ、他の追随を許さぬ、【化物】。
かつての王者、【白鯨】と【紫魔】が、デュエル界から消える原因を作った張本人。彼女の詳細を知る人間は居らず、また彼女の真意を知る人間も居らず。
自分の『同類』と、『とあるモノ』を探して世界中を放浪している…まさに神出鬼没の存在と言えるだろう。
その、規格外の人物を目の前にして、現代の王者達は一体何を思うか。

「あっれー!ランちゃんじゃーん、おひさー!」
「これは釈迦堂様…お久しぶりでございます。」
「あぁ。ところで恋介君は、一体いつになったら君の娘に私を会わせてくれるんだい？…紫魔始まって以来の【化物】と…」
「…ご勘弁を。娘はまだ2歳…あなたに潰されてはたまりません。」

「ふふ…潰されるのは私かも知れないというのに、謙虚なモノだ。」

楽しげに笑みを浮かべるランに、とても親しげに話しかけた琥珀に対して…冷や汗をかいて応える恋介。

その反応は三者三様であるものの、彼らが親しい間柄であるわけが無く…その雰囲気を例えるならば、『強者』を喰らおうとしている獣のソレに近いだろう。

ランにとっては【王者】とて『獲物』、琥珀にとっては【化物】へと至る『道しるべ』、恋介にとっては娘に近づけさせたくない【敵】という、異様な捕らえ方となっている。

「でもいくらランちゃんでもここ来ていいの？」

そんな中で口を開いた琥珀の疑問ももっともで、かつての【王者】を倒した【化物】と言えど…それは非公式に行われ、決して表舞台には出てこないモノなのだ。

要は、一般人にとっては彼女は無名の人間と言えるのであって…

そんな女性が、公式に決められたこの席へ入ってくることなど、いくら【黒翼】の一存であっても容認されるには時間がいることであるというのに。

その決まりを、自分の一存で好きに出来る人間など、この場には一人しか思い浮かばない。

「フォッフォッフォ、ワシが許そう。なんせ責任者だからのぅ、ワシってば。」

「カッカッカ、責任者って言いてぇだけだろうがジジイ。」

「フフッ、ありがとうございます景虎さん。」

―【妖怪】、綿貫　景虎

そう、【決闘世界】の重鎮、【決闘祭総責任者】である彼ならば、こ

んな決まりを一声で変えられる。
　彼と彼女の関係性は、誰が知るモノでもなく。ソレは彼らにしか分からぬが…
　その人物が『良し』と言うのならば、誰であっても反対意見を述べることなど許されない。また、この場にいる人間…いや人間と【化物】の誰もが、ソレに対しても何か言うという無粋な真似をすることはなく。

「何やら…この会場には私を付けねらう暴漢が居るみたいで。そんな輩、私のようなか弱い美女にはたまったものではありませんからね。2回戦と準決勝は街で中継を見ていました。」
「いやいや、ランちゃんが『か弱い』って言っちゃダメじゃね？ランちゃんでか弱かったら世界中の女は皆死んでるって…まぁいいや。それより綿貫のジッちゃん、もう敬語って使わねーの？」
「他に見ている者が居らんのじゃ。誰が好き好んでお前に敬語なんか使うかい。」
「ひっでー！ジッちゃんひっでー！さっさと自分の席戻ったら⁉」
「フォフォ、あんな堅っ苦しいとこよりもこっちの方が面白そうじゃわい。だからええんじゃ。」
「カカカッ、相変わらず好き放題のジジイだぜ。」

　おそらく鷹峰だけは口にしてはいけない言葉を、何の躊躇も無く口にして。
　これより始まる戦いを、待ち望むのは【王者】とて同じ。それは【化物】であっても【妖怪】であっても。

　次第に大きくなっていく会場のざわめきを感じながら…全員がその時を待っていて…

「何やらまた殺気を感じますが…まぁいいでしょう。そちらにはまるで興味が沸かない。」

「ああ？何か言ったかラン？」
「いいえ…何でもありませんよ。…何でも、ね。」

自らをか弱いと冗談を言いつつも、どこからか放たれている、確かに自分へと向けられていても…その目的を探しきれていないモノをはっきりとランは感じ…

ソレを全く意に介してはいなかった。

―…

「天宮寺選手！対戦相手である天城選手に八百長疑惑が囁かれておりますが！」
「天城選手の行為は【決闘祭】の在り方に反していると思われます！何か裏で取引があったのでしょうか!?」
「天宮寺選手はこの件に関与しているんですか!? 一言お願いします！」
「天宮寺選手！コメントを！天宮寺選手！」
「天城選手の八百長に関して何か聞いていませんか!?」

それよりやや遅れて。
選手専用口へと繋がる道筋にて、ソコへと向かっていた鷹矢もまた、待ち構えていた記者達に取り囲まれて、言葉をぶつけられていた。

遊良に面倒を頼まれているルキに連れられ、遅れないように早めに着いたというのに…

一体どこから沸いて出てきたのか、この少し前に鷹峰に吹き飛ばさ

れた記者たちがまだ倒れているこの状況で…ソレを気にしていない様子の記者たちは、きっと先ほどの鷹峰と記者たちのやり取りを隠れて見ていたに違いない。
遊良に向かっていかなかった彼らは、確かに幸運ではあったのだろうが…それでも、どこまでも遊良に対する好奇の感情を隠す気の無い彼らに、付き添いで来ているルキも怪訝な顔をしている。

（な、何この人達…なんで遊良が八百長したって決め付けてるの？）

遊良のこれまでの戦いを見ていたにも関わらず…いや、見ていてもこんな程度の低い見方しか出来ない人間だというのに、『あの頃』と同じように遊良を玩具にしようとしていることが、ルキにとってはに不快なモノでしかないだろう。
やがてその怒りが頭に昇ってきたのか、ルキがその口を開いて記者たちへと叫ぼうとした…

―そんな時だった。

「ふん、黙って俺と遊良の戦いを見ていろ！貴様らが知りたい答えはそこに在る！」

記者に何を言われても、一向に口を開こうとしなかった鷹矢が、記者たちを追い払うかのようにしてそう言ったのだ。
その佇まいは威厳に溢れ、低俗な表現でしか戦いを見ることの出来ない輩に、その雰囲気だけで全てを見せ付けているよう。

威風堂々、英姿颯爽

そう、『言葉』で真実を捻じ曲げるような無能な輩に、『言葉』を持って対抗したところで無駄だという事は…
過去、遊良に向かってくる『敵』の全てに牙を剥いていた鷹矢には、

嫌と言うほど心に刻まれていることであって。
何を『言って』も無駄なのなら、真実を『見せ付ける』しかない。
奇しくも祖父である鷹峰が体現している道を、無意識に辿っている鷹矢のあまりに堂々とした佇まいに…
それ以上、誰も声をかけることなど…許されては、いなかった。

―…

「よう、ちゃんと寝坊しないで来たな。」
「遊良！もう、心配したじゃん！」
「うむ。」

選手専用口から入ってすぐの所で、まだ控え室には行かずに鷹矢を出迎えた遊良は、堂々と入ってきた鷹矢と、それに付き添ってきたルキに対して声をかけた。
これから開戦だというのに、どこかその雰囲気は軽く…
それは当たり前か、お互いがお互いを倒すべき『敵』ではなく、コイツにだけは負けたくない『相手』と捕らえているのだから。

「寝坊などありえん。寝ておらんのだから、俺が寝過ごすはずが無い。」
「は!?いや寝て無いって…まさかルキに付き合わせたのか？」
「はいはい、夜通しデュエルしてあげましたよ、もう。おかげで私まで眠くて…私は夕方まで仮眠したけど。」
「フッ、昂ぶりすぎて寝られるはずがない。おかげで飯も１０杯しか喉を通らんのだ。」

「おかげでお米空っぽになっちゃったよ…」
「いや食い過ぎじゃねーか。ったく、直前で腹痛起こしても知らねーからな。」
「いらん心配だ、遊良の癖に。」
「んだと、鷹矢の癖に。」

いつも通りの雰囲気、いつも通りの会話。
これより戦いが待っているのだとしても…彼らには、これでいい。

—それでも…

「迷いは無くなったようだな、遊良。」
「あぁ。全力でお前を倒すつもりだ。」
「安心したぞ。それでこそ、俺が倒す価値がある。」
「言ってろ、お前には意地でも負けてやるもんか。」

これから戦いが待っているということを、彼らが忘れているはずが無い。
…遊良には、師の『引退』と自身の『退学』がかかっているデュエル。
…鷹矢には、これまで我慢して溜め込んできた『約束』と、本気の『相棒』と戦える待望のデュエル。

秘める気持ちは違えども、お互いの戦う理由がどちらかより劣っているという事など、決してあるわけがなく…

「遊良よ、俺に手加減など期待するんじゃないぞ。」

「いや、してねーよ。」
「俺が勝ってお前が退学したところで、俺も同じく退学するだけだ。ならばお前に遠慮する気など起きん。」
「だからいらねーって。俺もお前に勝って退学なんか突っぱねてやる。」

決意を再確認し、お互いに遠慮はありえないことを心に刻み直し。
今にも爆発しそうな興奮を抑えて、普段通りの振る舞いを見せている彼ら3人が…
こんな事でお互いを気遣うことなど、例え天地がひっくり返ったって、例え世界が滅ぶ寸前であったって起こるはずが無いということは…
幼少の頃から常に3人で居た彼らだからこそ理解できているモノ。
もう、これ以上無駄な会話は要らない。後は決着をつけるだけ。その、全力を持って。
「次に顔を見るのはスタジアムか…じゃあな。」
「うむ。」

そして遊良がゆっくりと振り返り、その場を離れようとした…

そんな時だった。

「遊良！」
「ん？何だよルキ。」

不意にルキに止められ、思わず顔だけで振り返る遊良。
戦いに向かう前、最後の最後に…ルキは遊良に向かって言葉をかけようとしているのだ。

そう、いくら戦いは必ず始まってしまうモノだと理解していても、その戦いに加わることが出来ないルキにとっては、後は二人を見ているしか出来ないのであって…

「…鷹矢…強いよ？」

一回戦から見てきて、昨晩から続けてデュエルしてきて。
数回、ルキの方が『危なく』なって中断したとは言え…だからこそ、今の鷹矢の実力をより一層理解出来ているのは、何を隠そうルキ自身なのだ。
滅多に出さない…いや出せない彼女の『本気』を受け止めたというのに、平気な顔をして立っている鷹矢に驚きすら感じているのは確か。

そんなルキの雰囲気を察していてもなお…

「あぁ、知ってるよ。だから戦うんだ。」

—遊良は、不敵に笑うのみ。
そうして、それだけ答えた遊良が…その場を後にし、暗い通路に吸い込まれていき…

その姿が見えなくなってきた頃、鷹矢が再び口を開いた。

「やはり帰ってきたのだな…あの遊良が。」
「ねぇ鷹矢…」
「何だ？」

どこか嬉しそうにそう言った鷹矢に対して、遊良を最後まで見届けたルキが、今度は鷹矢に問いかける。

…これから始まる戦いに、水を差すわけでは断じてない。

それは、今の遊良を実際に見て、彼女が確かに感じた印象でもあり…また、これまで遊良というデュエリストを、ずっと見て支えてきたルキだからこそ感じた感情を…

包み隠さず、鷹矢へと伝えるのみ。

「遊良…強いよ？」

感極まっているかのような声を発して、また嬉しそうな表情をして。

鷹矢の言った、『帰ってきた』という言葉の意味を、今の遊良の顔を見て理解できたのか。

過去、自分の命を救ってくれた少年が…あの『強かった』遊良の片鱗が、彼の言葉から確かに感じられた様子のルキ。

それを聞いた鷹矢もまた、どこか嬉しそうにして、ルキへと言葉を返す。

「フッ、そんなこと…誰よりも、この俺が一番知っている。」

もうすぐそこまで迫った戦いに、遠慮も躊躇も何も無く。

お互いが、お互いには絶対に負けたくないのだ。生まれた時から一

緒にいて、嬉しさも悔しさも、寂しさも苦しさも常に一緒に感じて育ってきた遊良と鷹矢の…

プライドと意地の張り合いか、譲れぬ意思のぶつけあい。

二人とも男だ、互いの力を比べたい気持ちに…嘘は、つけない。

天井を突き抜けるような盛り上がりを見せる決闘市内と、ここセントラル・スタジアムの興奮の全てが…

たった二人の、1年生へと向けられていた…

―開戦の時は…もう、すぐ。

―…

ｅｐ３４「決闘祭、決勝・後編ー決着の時」

…そこに、音はなく。

光もなく。

ただ、『黒い』空間が広がっているだけ。

―静寂、閑静、無音の空間

まるで、『音が無い』と空間を表すのに、これほど適した状況があるのだろうかという程に、この光が無い場所には『無音』が響いていた。

…それでも、何も無いというわけではない。

確かに感じる多くの気配は、この場所に人がいることを周囲に教えてくれている。

次第に聞こえ始める身じろぎの音、微かに擦れる呼吸音…瞬き一つとっても、鋭敏になった聴覚に、『音』としてソレを伝えているようにも感じているのか。

そんな感覚の約９０％を視覚に頼っている人間が、光届かぬ場所に押しやられると…ここまで鋭い他感覚を得られるのかと思うと、誰もが不思議で仕方が無いだろう。

『ここ』にいる全員が…その異様で不思議な感覚に包まれている中で…

―突如、ソレは響く。

『皆様！とうとうこの瞬間がやってまいりました！』

―

慣れ親しんだ実況の声、それに付随して沸き起こる歓声。

先ほどまでの静寂は一体なんだったのかと勘違いする程に、一瞬でこの暗闇が『無音』から『興奮』に包まれた光景は…視覚などでは見えないはずなのに、確かな『景色』となって誰の目にも映っていると言うのだろうか。

まるで、その歓声にこじ開けられるかのようにセントラル・スタジアムの天井が開いていき…

―そこには、眩しいくらいに輝いた月光。

その街灯よりも光り輝いたソレが垂直落下して、中心に鎮座したデュエルスタジアムを照らしていた。

『【決闘祭】！ついに決勝戦！ここまで辿り着ける学生の名を！よもや

忘れたとは言わせない！彼らの織り成す戦いを！見逃すことなど許されない！さぁ！その勇ましき姿を！その目に焼き付けろ！』

―――――――

決闘界のスターダムを駆け上ってきた【白竜】こと新堂　琥珀にとっても、この決勝戦の舞台というのは、決して忘れることなど出来ないのか。

―それも辺り前だ。２度に渡る【決闘祭】の決勝を戦った琥珀と言えど…その戦いは、決して楽に終わったわけでは断じてないのだから。

【紫魔】の名を受け継いだ紫魔　恋介にとっても、感じている思いは特別なモノ。王者在位１０年と言えど、未だこの輝かしいステージへと彼は立ててておらず。

紫魔本家の長、世界に誇る王者であっても彼とて１８歳で高等部３年に値する年齢…そこへ立つのが、自分ではなく年の近しい他の学生というコトに、何も感じないはずがない。

「カカッ、相変わらず壮大な演出だねぇ。」

「育ち盛りの子供達にはのう、こんな舞台が必要なんじゃよ。子供達の…成長のためにはの…」

「フフ、では見せて貰いましょうか。鷹峰さん、あなたの弟子二人の対決と言うものを。」

「おぅ、退屈させんじゃねーって言ってあっからよぉ…面白れぇモンが見られると思うぜ?カッカッカ…」

決勝戦で戦う二人の弟子、その師である鷹峰の渇いた笑いが会場の暗闇へと吸い込まれていって…

誰もが見ているその戦いへ、向けているのは果たして期待か別の物か。

観客の興奮、王者の視線、妖怪の慈愛、化物の仰望…

―そして、師の…

全てのモノが混ざり合って、このセントラル・スタジアムが…引いては決闘市が世界の中でも『異次元』なモノとなっている空間の、その中心で…

―ソレは、始まる。

『それでは、選手の入場です！』

―

興奮の坩堝という比喩が、これほど的を射ている表現があるのかと言うくらいに、声を超えた『轟き』が会場内に反響し、全ての人間の耳を劈いて。

これより入場してくる二人の学生を迎え入れる、その地響きは決して緩まることはないのだろう。

―これが…この戦いが

この年最後の、最大の舞台。その時を、盛大な『モノ』で迎えているのだから。

『誰が想像した！誰もが知る１０年前！世界にただ一人、『Ｅｘ適正』を持たない人間として世に知られた名を！それが、その人物が！今夜この！【決闘祭】の！決勝のステージへと昇ってくることなど！誰が想

像したというのか！』

―Ｅｘ適正を、持っていない。

それは、世界に類を見ない…どうしようもない『出来損ない』の証。

その人間が、まさかデュエルをしているなど、世界中の人間の誰が思い浮かべているというのだろうか。

この決闘市においてもその存在は、悪い意味で有名で。

…しかし、その彼が

その、暗く惨めな世界の隅で震えて、誰にも認められずに…生きているのか死んでいるのかすら、誰にも興味を持たれないだろうと、この決闘市の誰もが思っていたその彼が…

その人間が、よもや本物の『強者』しか立つことを許されない、この煌びやかな舞台に駆け上ってくることを、一体誰が想像出来たのだろう。

『しかし彼はその戦いを我々に見せつけた！Ｅｘデッキを使わない戦いで！それでも彼はここまで進んできた！』

一回戦、二回戦の戦いは、確かに人々を驚かせた…しかし、準決勝の戦いは誰が見ても疑問が残る戦いであったことは間違い無く。

―それでも、あくまで堂々と。

弱いままでは変わらない、強くなければ変えられない。その教えを体現するために、その歩を…進めるのみ。

『決闘学園イースト校1年！天城い！遊良選手うううううう！』

―――――――

かに刻まれることだろう。

『その血に違わぬ才能と！他を追随を許さぬ実力！この男に出来ぬことなど無いというのかぁ！いずれは【王者】となろうその風格をぉ！』

【王者】黒翼の孫、誰もが羨むその出生…彼にとっては忌まわしき血筋。

それを背負う彼が、この『轟き』の中でも涼しい顔をしていることに、何の違和感も起こり得ないように…その威風堂々とした立ち振る舞いは、彼の未来の展望を現している様でもあって。

天上天下、唯我独尊

観客達の誰もが、およそ並ぶ者など思い浮かべられないかのように…今の彼の立ち振る舞いはこれまでのどの戦いよりも輝いて見えているゆだから。

…誰もが呼ぶ

その歩を、進める…彼の名を。

『決闘学園イースト校1年！天宮寺ぃ！鷹矢選手ぅぅぅぅぅぅ！』

――

耳を劈き、内臓を揺らして。様々な感情が複雑に絡み合い、決して静まらぬ喧騒となっているセントラル・スタジアム。

期待と興奮、否定と肯定。

多種多様なモノが渦巻く、この混沌としたスタジアムで…各個人が抱くソレは、誰もが異なった物であるとはいえ…

それでもこの場において、絶対に他人とは似ても似つかないモノを感じている少女が、ここに一人。

「遊良…鷹矢…頑張って…」

手を合わせ、目を瞑り。会場の響きに呼応するように震える小さな少女の姿は、この場における誰の感情とも異なるモノ。

大切な、大事な幼馴染達。

別に、いがみ合って戦うとか、お互いに憎んで戦うとか、そう言ったモノで無いことは…小さく震えているルキとて、十二分に理解していても…

それでも、自ら進んで険しい道を登ることを選び、観客の誰もが想像できないほどに傷つきながらここまで来た遊良と…その遊良と並び立つことを望んで、傷つきながらも無理やりに『壁』を越えた鷹矢。

そんな馬鹿な男達に振り回されるのが、いつだって彼女なのだ。

だからこそ…いつでも、どんなときも…

彼女には、心配が絶えない。

―そんなルキの視線を確かに感じている二人が、盛大な歓声と、天上からの月明かりに照らされているセンタースタジアムへと上がっ

て…

—視線を、合わせた。

「よう。」
「うむ。」
「ルキが見てる…先生も。お前の事も、随分と待たせちまった。」
「…うむ。」

次々と遊良の口から出てくる言葉。
こんな時には、お互いに言葉などいらないと思っていたのに…自然に言葉が出てくるのは、どうしようもなく自分が高揚しているのだと、そう言わんばかりの遊良の表情と…
それを理解しているのだろう。同じ言葉で返す鷹矢も、『その一言』に全ての感情をこめている様子。

それを理解できるのは、世界中探したって遊良だけだろう。だからこそ、鷹矢は無駄な言葉を挟まない。

それだけで、遊良に全て伝わることを…鷹矢は、知っているから。

「コレでお前に負けて、退学になっても後悔は無い。誰かの許可を得るためじゃなくて…俺は、好きにデュエルを続けていいんだってわかったからさ。」
「うむ。」

「でも、絶対に退学だけはしたくない。まだ俺はイースト校に居たい。」
「…うむ。」

蒼人から自分自身の『肯定』を貰い、すでに迷いは無くなっている遊良。
その中で彼が再び出した結論は…
自身の『退学』を、絶対に覆したいというモノであった。

そう、他の学生からは学園に居ることを否定され、教師陣からはデュエリストを諦めろと諭され…挙句の果てに理事長からは、不要な存在とまで言い放たれても。

…それでも、遊良の中にある、彼にしか抱くことを許されぬ感情は…自分自身を、『イースト校から退学させたくない』と、確かに心に訴えていて。

「何か、また俺に対して色々言われているけどさ…お前がさっき記者たちに言った言葉、アレ聞こえてたけど…嬉しかったよ。」
「うむ。」

戦う理由は人それぞれ。戦いに臨む気概も人それぞれ。
彼にしか抱けぬその感情に任せて…遊良は次々に言葉を発するのみ。

「弱いままじゃ変わらない、強くなければ変えられない。先生が教えてくれたように、色々言われるのは…俺がまだまだ弱いからだ…俺は、もっと強くなりたい。」
「…うむ。」

いくら回りに否定されても…彼が師の教えに則って、自由に戦うこ

とは悪いわけが無いのだ。
誰に、何を言われてもいい。
誰に、何を笑われてもいい。
それを変えるのは他人ではなく、変えられるのは自分だけ。
八百長、イカサマ、嘲笑、嫉妬…そんな言葉の鈍器をぶつけられても構わない。この舞台に上がってしまえば、ソレは全く関係ないのだから。
―見せ付けるだけ、嘘では無いということを周囲に。
嘘はつかない…有無を言わせない程に洗練された力は…絶対に。
―強き者を、決闘市は望む
―『力』を、見せつければ…
―それは、正しくなる。
「とうとう戦える。誰に何を言われようとも、誰に何を思われようとも…」
「…」
「全力で、お前と戦う!」
「うむ!」
声が上ずり、気持ちが飛び出る。
もう待ちきれないと言わんばかりの二人の表情は、この決勝戦のステージにおいて何よりも輝いていることだろう。

「行くぞ鷹矢、お前にだけは…」
「ゆくぞ遊良、お前にだけは…」

デュエルディスクを構え…

今にも、弾けてしまいそうな声で…

「お前にだけは、絶対に負けねぇ！」
「お前にだけは、絶対負けん！」

―決意が弾けて、感情が溢れて。

―二人は、叫ぶ

『それではぁぁぁぁぁあ！【決闘祭】、決勝戦っ！かいしいいいいいいいい！』

―デュエル！

先攻はイースト校1年、天宮寺　鷹矢。

「俺のターン！【ブリキンギョ】を召喚！その効果で【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚！更にその効果で【シルバー・ガジェット】を特殊召喚！またその効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！【レッド・ガジェット】を手札に！」

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　　ＤＥＦ／２０００
【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

『おぉっとぉ！天宮寺選手！一瞬で４体のモンスターを揃えた！これは流石の展開力ですっ！』

開始早々…瞬間的に、場に４体のモンスターを揃えた鷹矢。
お得意のガジェットモンスター達を駆り、その勢いは一回戦から何も変わってはおらず…いや、明らかに変わっているだろう。

準決勝での十文字　哲との戦いが原因か、勢い一つとっても今の鷹矢の魅せる圧力は凄まじく…
哲の持っていた、生半可なデュエリストならば押しつぶされてしまいそうな圧力に似たソレを、彼のモンスターからは感じられて。

元々留まることを知らない才能に、『壁』を越えたばかりの勢いと実

力…それに加え、人知を超えた『何か』を持って戦いに望んでいる鷹矢だ。
序盤からの、まるで手札を使い切らんと言う馬鹿げた勢いも、彼にとっては何の戸惑いにもなりはしないのか。
「いきなり４体のモンスター…来るか？」
「うむ！俺は【ゴールド・ガジェット】と【シルバー・ガジェット】でオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【ギアギガントＸ】！」
―！
【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００
彼にとって始まりとなる機械兵を、先ず鷹矢は呼び出して。
いつのときも、どんなときも…彼のデュエルはここから始まるのだ。
微かに歴戦を感じさせるような雰囲気が、確かに機械兵から漂い始め…しかし、今までの先攻ならばこれで様子を見ていた鷹矢も、この場においてはこの程度で終わらせる気など毛頭無いのか。
場に残った残りのモンスターにも命じるために、鷹矢は更に動き出す。
「更に【ブリキンギョ】と【グリーン・ガジェット】でオーバーレイ！エクシーズ召喚！【ギアギガントＸ】！」
―！

【ギアギガントX】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

そうして…今までは先行でも１体しか呼び出していなかったソレが、今や２体も出現し。

―唸る豪腕、轟く体躯

それが、二つ。攻めることが許されていた後攻ならばまだしも、どこか適当さを残していたこれまでの鷹矢とは違う展開方法を見せて…

さらに消費した手札すら、『壁』を越えた者ならば当たり前にリカバリー出来て当然と言わんばかりに余裕な空気を醸し出している鷹矢と…

彼の２体の機械兵に、多大な興奮がぶつけられていた。

「【ギアギガントX】２体の効果発動！オーバーレイユニットを一つずつ使い、デッキから【ゴールド・ガジェット】と【シルバー・ガジェット】を手札に加える！更に魔法発動、【エクシーズ・ギフト】！【ギアギガントX】２体からオーバーレイユニットを一つずつ使い、デッキから２枚ドロー！」

鷹矢の織り成す一挙手一投足に、会場の『轟き』が勢いを増していくのが、誰の目にも明らかな事となっている。

―しかし、それも当たり前なのか。

開始すぐに４体のモンスターを場に呼び出し、続けさまに場に２体の機械兵をエクシーズ召喚したこと…

さも当たり前に行われる、これだけ激しい展開を行ってもなお、そ

の手札消費が『実質０枚』なのだ。

全く減っていない、デュエル開始直後と同じ枚数の手札をその手に握っている鷹矢の振る舞いが、あまりにも彼に合っているのだろう。観客達のソレを更に増長させていて…

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：5→4枚
場：【ギアギガントＸ】
【ギアギガントＸ】
伏せ：1枚

余裕綽々、彼の祖父を思わせるような風格を微かに漂わせながら、鷹矢はそのターンを終えた。

「さぁ来い、遊良！」
「あぁ！俺のターン、ドロー！」

―！

観客達が盛り上がり、盛大な賞賛の嵐を降らした鷹矢のターンから一転、遊良のターンに入った瞬間に、声援の中にも批難の言葉が混ざり始めるものの…

しかし、そんな雰囲気の中で、まったく萎縮した様子も無く自らのターンを迎える遊良。

そう、遊良とて分かっている。

鷹矢の才能も、実力も…ソレが、既に賞賛に値するモノとなっていることなど。
そんな鷹矢を前にしたとことで、今更誰が萎縮したりするものか…歓声の中に混ざる確かな『否定』の言葉の数々も、今の遊良と鷹矢には届いては居らず…

―進撃を、始める。

「…魔法発動、【堕天使の追放】！デッキから【堕天使スペルビア】を手札に加える！そして【堕天使イシュタム】の効果発動！今加えたスペルビアと共に捨てて２枚ドロー！続けて【闇の誘惑】を発動！２枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外する！」

だからこそ、有無を言わせない鷹矢の佇まいに負けるわけにはいかないのだ。周りが煩いのならば、黙らせればいいだけ。

そう、批難の声も、賞賛に変えるほどの戦いを。

あるのは、目の前の『相手』へと向けた、感情の昂ぶりのみ。自分のターンに入った途端に、今にも場を爆発させたいくらいに昂ぶった自分のデッキを、遊良が押さえるはずも無く…

「２枚目の【闇の誘惑】も発動し、２枚ドローして【堕天使マスティマ】を除外！【トレード・イン】発動！【堕天使ゼラート】を捨てて、更にデッキから２枚ドロー！」

『来た来た来たぁ！天城選手の連続ドロー！流れるように、一瞬でカードが入れ替えられていくぞぉ！』

暴風の如しそのドロー、止まることなきその回転の連続は…一回戦、二回戦で彼が魅せ、観客達が大いに沸いた、遊良の基本戦術。

コレは決勝戦。となれば、必然的にここでの進め方は慎重さを求められているはずだと言うのに…

とは言え、別に遊良にとっては、何も考えていない回転などでは断じてない。

強者となった鷹矢を相手にしてもなお、いや幾度も戦ってきた鷹矢だからこそ、考えるよりも感じているのだ。

今必要な戦い方を、今取るべき戦術を。

―決して、負けないように。

「魔法カード、【堕天使の戒壇】発動！墓地から【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚し、そのまま効果で【堕天使イシュタム】も特殊召喚する！来い、堕天使達！」

―!!

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

鷹矢がいきなりモンスターを２体並べたのなら、遊良も負けじと２体のモンスターを場に召喚して。

そのどれもが妖しく空に浮かび、一つ間違えば謀反を起こしてしまうのではないかという危うさを見せているとは言え…黒き翼をはためかせ、今はただ主の進撃の命に従うのか。

人々を魅了しそうな美しき翼、誰もがその黒き羽ばたきに見惚れて

いて…

神に歯向かい天から追放されたとは言え、目の前で唸る2体の機械兵へと、その神秘なる天誅の力を炸裂させるべく軽やかに翻る。

「相変わらず、よくもまぁ簡単に高打点を揃えてくるものだ。」

「あぁ、お前に引き離されるわけには行かないからな！」

「…む？」

「まだまだ行くぞ、【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！俺が手札に加えるのは【堕天使ディザイア】！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００

目まぐるしい遊良のデッキ捌きに着いてきている人間が、一体ここには何人居るのだろうか。

否定の言葉を投げる人間が居るとは言え…この大歓声を聞けば遊良に賞賛を与えている人間が大勢居ることは確かであって。

『これは凄い！これが決勝戦に昇ってくる選手の本領っ！天宮寺選手と天城選手！互いに2体の大型モンスターを場に揃えたというのに、全く息切れしてません！』

そう、先ほどの鷹矢と同じ、場に2体の大型モンスターを揃えておきながらも…ＬＰが１０００減ったとは言え…ここまで派手に動き回っても、遊良も手札消費が『実質的に０枚』なのだ。

鷹矢と同じだというこの状況を見れば、天城　遊良というデュエリストのデッキを操る力は、およそ鷹矢に負けていないのは誰の目にも明らかなこと。

だからと言って、遊良がこのままターンを終える様な真似をするわけ無いだろう。たった今加えた一枚を手札から取り、鷹矢へと攻撃を

しかけるために、再び動き出すのだから。

「ディザイアか、なるほど…」

「【堕天使の追放】はデッキへ戻り…俺は【堕天使スペルビア】をリリース！レベル１０、【堕天使ディザイア】をアドバンス召喚！」

―！

【堕天使ディザイア】レベル１０
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２８００

「【堕天使ディザイア】の効果発動！攻撃力を１０００下げ、【ギアギガントＸ】一体を墓地へ送る！やれ、ディザイア！」

堕天使の羽ばたきに呼応して、一体のギアギガントＸが作り出していた影が伸び上がり…そのまま機械兵を飲み込まんとし暴れまわって。

いくら足掻こうとも、高位の存在の天誅を受けては、いくら機械の巨人でも成す術が無いのか。

【堕天使ディザイア】レベル１０
ＡＴＫ／３０００→２０００

足元から湧き出た影に飲み込まれ、そのまま機械兵の一体が成す術なく砕け散り…

間髪いれず、休ませる気などなく。遊良は、さらに攻撃をしかけるのみ。

「バトルだ！【堕天使イシュタム】で【ギアギガントＸ】に攻撃！」

―！

「ぬぅ…」

鷹矢　ＬＰ：４０００→３８００

『先制を取ったのは天城選手！これは意外な展開か!?』

前評判の高かった鷹矢に対して、微量ながらも『ダメージ』自体を与えた遊良に、どこか意外性を感じているかのような観客たちの雰囲気の中で…

猛々しくも麗しく飛び立つ堕天使達は、その攻撃の手を緩めるつもりなど一切無いだろう。

―まだ、止まらない。

「続けて、【堕天使ディザイア】でダイレクトアタック！」

「させん！罠発動、【戦線復帰】！墓地より【ゴールド・ガジェット】を守備表示で特殊召喚する！」

【ゴールド・ガジェット】レベル４

ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００

しかし、そんな遊良の進撃を簡単に許すほど今の鷹矢は甘くは無く。

先行を重視せず、ＬＰに頓着しないスタイルをとっているとは言え…こんな始まってすぐにＬＰを大きく削らせることは、鷹矢とて２回

戦で既に味わっているために。

「ゴールドの効果で、手札から【シルバー・ガジェット】を守備表示で特殊召喚し、更にシルバーの効果で【レッド・ガジェット】も守備表示で特殊召喚！効果で【イエロー・ガジェット】を手札に！」

そうして、今は遊良のターンで、更に攻撃を仕掛けたのは遊良のはずなのに…

『天宮寺選手！何と相手ターンにも関わらず、罠一枚からの大量展開を魅せるっ！全く、一歩も引きません！』

自分のターンを終えた時よりも場のモンスターを増やし、その守りをより一層強固な物にしてしまった鷹矢。

たった一枚の罠から、いとも簡単にモンスターを並べて攻撃も防御も自由自在に操っているかのようなその振る舞いは…微塵も油断など感じさせない、まさに『壁』を越えた者のソレ。

―隙など無く、驕りも無く。

当たり前のことを、当たり前にやっているだけ…その当たり前のレベルが、当然のように高すぎるだけなのだから。

「まさか…伏せカード1枚でここまでしてくるなんてな…」

「ふん、甘いな遊良！この俺が、手ぬるい防御で様子を見ることなど最早ありえん！さぁ、どうするのだ？」

「くっ、ディザイアで、【ゴールド・ガジェット】を攻撃！」

黄金の歯車が、鎧の堕天使の攻撃に耐え切れずに成す術なく砕け散ったものの…それでも鷹矢の場には遊良が攻撃を仕掛ける前と同

じ、２体のモンスターが揃ったままだ。
およそ遊良が操る【堕天使】の力、それは単純な攻撃力一つ、秘めた能力一つ取っても、鷹矢の操る【ガジェット】と比べても能力的に高いことはまず間違いないだろう。
しかしそんなモノなど、この戦いにおいては何の指標にもなりはしない。
どんなデッキを扱おうとも強者は強者。それは、この世界に生きる人間にとっては当たり前の事。

「くそっ、カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

そう宣言する遊良の声は、持久戦に強い鷹矢に一刻も早くダメージを与えておきたかったと言わんばかりに響いて…それでもこれ以上の攻撃を行うことは出来ないのか、そのターンを終えた。

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：6→3枚
場：【堕天使イシュタム】
【堕天使ディザイア】
伏せ：2枚

「俺のターン、ドロー！先ずは【シルバー・ガジェット】と【レッド・ガジェット】でオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】！」

【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】ランク４
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２２００

ターンが一巡して早々に、機械族を直接攻撃させられる効果を持つ鉄の狼列車が勢いよく現れるも…

「やっぱりソイツで来たか！けどそいつはダメだ！罠発動、【奈落の落とし穴】！アイアン・ヴォルフを破壊し、除外する！」
「むっ!?」

―！

すぐさま奈落へと落下してしまい、破壊による爆発音すら、奈落の底から除外されたためにソレは響かず…
相手に破壊されても後続を呼べるアイアン・ヴォルフの効果も…墓地へ送られなかったために、全くその意味を成してはおらず。
『何と！天宮寺選手のエクシーズモンスターが召喚と同時に大破！これは痛いか!?』

誰だってそう、折角召喚したモンスターを何の見せ場も無く片付けられたことは、この鷹矢にとっても気分がいいものでは決して無いだろう。
口惜しげに、遊良へと向かって口を開く鷹矢。

「…読んでいたか。」
「あぁ、お前のいつもの攻撃パターンを、俺が忘れるわけがないだろ。悪いけどお前に好きに攻撃させるつもりはないぜ。特にソイツは危ないからな。」
「…ぬぅ。」

これまで長い間、一緒に過ごして競い合ってきたからこその勘。
鷹矢の多種多様な攻撃の手、場に応じたエクシーズ召喚も、その全てを知る遊良にしてみればそれは全て想定内なのか。
確かに先ほどは鷹矢に攻撃を止められた。だからといって、鷹矢の攻撃まで簡単に許すつもりも遊良には無く。

「次は何だ？カステルか、ダイヤウルフか…それともまたギアギガントで次に備えるか…何が来ても喰らいつけるように、俺だって想定しているんだ。確かに今のお前は強いけど、俺だって引き離されるわけには行かない！」
「…そうか…なるほどな。」

『壁』を超えた者の怖さは、遊良とて分かっている。それは、いくら戦いなれた鷹矢であっても。
いや、だからこそ気を緩めず…鷹矢が何をしてこようとも、それに応じて喰らい付くために、常に思考を切らさないようにしているのだ。

それを聞いた鷹矢が、一体何を思うか。その遊良の言葉を聞いてもなお、気落ちした様子を見せずに続けて手札からカードを取るのみ。
「ならばこれだ！【ゴールド・ガジェット】を召喚！その効果で【イエロー・ガジェット】を特殊召喚！【グリーン・ガジェット】を手札に！」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００

【イエロー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

「レベル４のモンスターが２体…」
「ゆくぞ！２体のモンスターでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【励騎士　ヴェルズ・ビュート】！」

―！

【励騎士　ヴェルズ・ビュート】ランク４
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／０

鷹矢が召喚せしは、光り輝く騎士の一体。
大きな戦を幾度も生き残ってきたかのような佇まいは、歴戦で培われし風格を纏っているかのようであって…
全てを、吹き飛ばす。
相手より劣勢であろうとも、その剣の一振りで全てを無かったことにするその力は、相手にとってはただただ脅威に映る事だろう。

「お前のうっとおしい考えなど、全て吹き飛ばすのみ！」
「くっ…ダメージを捨てて、全体除去で来たか！けど…」
「ふん、考えすぎるのがお前の悪いところだ！全て吹き飛ばせは済む話だろうに！ヴェルズ・ビュートの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、全て破壊する！」

――！

遊良の言葉を遮るように、全く容赦の無い言葉が鷹矢の口から放たれて。

『す、凄まじい大爆発だ！天城選手の場が一掃されていくぅ！』

励騎士を中心にして爆発が起こり、この歓声をも飲み込みさらに巨大な衝撃波となりて遊良へと襲い掛かった。

「くっ、面倒だからって一気に来やがって！破壊の前に永続罠、【奇跡の降臨】発動！除外されている【堕天使アスモディウス】を特殊召喚する！」
「構わん！全て吹き飛ばせ、ヴェルズ・ビュート！」

まるで、襲いかかる衝撃波から主を守るかのように堕天使の一体が復活するも、そのまま衝撃波に飲み込まれていく光景は…
このターンのダメージを放棄したとはいえ、鷹矢の放った爆発の大きさを、より一層強調しているかのようにも見える。

しかし、遊良とてただ何も考えずに堕天使を呼び出したわけでは無いだろう。

衝撃波が収まり、観客の声が歓声となって戻ってくるのと同時に…
遊良はこう宣言したのだから。

「アスモディウスの効果発動！破壊され墓地へ送られたため、【アスモトークン】と【ディウストークン】を、それぞれ守備表示で特殊召喚！」

【アスモトークン】レベル５
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１３００
（効果で破壊されない）

【ディウストークン】レベル３
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００
（戦闘で破壊されない）

『あ、天城選手も一歩も引かない！場が一掃されても、すぐさま立て直してきたぁ！』

転んでもただでは起きないように、絶対に場を開けないように。
きっと、ここで引き離されたら鷹矢の攻撃は一気に押し寄せてくることだろう。

それだけは絶対に阻止すべく、気を抜いたら一瞬で持っていかれる怖さを常に醸し出している鷹矢相手に、遊良も一歩も引かずに応戦して。

「無駄だ！ヴェルズ・ビュートの効果を再び発動！オーバーレイユニットを一つ使い、もう一度全て吹き飛ばす！」

―！

しかし、遊良のソレは鷹矢にとっても想定内のことなのか。

主を守る思念のように佇んでいた、２体の従僕が再度爆ぜた衝撃波に巻き込まれていき、その内の一体が原型を保てずに吹き飛ばされていって…

かろうじてソレに耐えたトークンが一体だけ残るものの、この衝撃波を喰らっては最早虫の息のようにも見えるだろう。

そんな従僕を見てもなお、鷹矢はそれすら存在することを許さぬかのように、さらに励騎士へと命じる。

「バトルだ！ヴェルズ・ビュートで【アスモトークン】へ攻撃！」

―！

「ぐっ…けど、このターン俺にダメージは無い！」

「ふん、モンスターを残したくなかっただけだ。魔法カード、【貪欲な壺】発動。【ギアギガントX】２体、【ゴールド・ガジェット】、【シルバー・ガジェット】、【ブリキンギョ】をデッキへ戻して２枚ドロー…俺は１枚伏せて、ターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：３８００

手札：４→３枚

場：【励騎士　ヴェルズ・ビュート】

伏せ…1枚

『凄まじい攻防の応酬！これぞ決勝戦に相応しい戦いと言えるでしょう！お互いに一歩も引かずに全力で攻め抜いているぞぉお！』

一進一退の攻防と、互いに引かぬせめぎ合いは…見ている誰も、息のつけぬ応酬となって繰り広げられていて。

持てる力を出し、互いが互いを全力で攻めに行っているこの戦いの光景に、観客に興奮するなと言うほうが無理な話か。

目まぐるしく変わるフィールドの状況に、誰もが目を奪われ声を放って…

「俺のターン！ドロー！魔法カード、【貪欲な壷】発動！【堕天使イシュタム】、【堕天使スペルビア】、【堕天使アスモディウス】、【堕天使ゼラート】、【堕天使ディザイア】をデッキへ戻して2枚ドロー！続けて【堕天使の追放】を発動！【堕天使ゼラート】を手札に加え、【トレード・イン】を発動だ！今加えた【堕天使ゼラート】を捨てて2枚ドロー！…よし！【堕天使イシュタム】の効果発動！手札の【背徳の堕天使】と共に捨てて2枚ドロー！」

その中でも、遊良の勢いが益々増していくのが、誰の目に明らかになっているのか。

整えた場を一掃されようとも、止まること無きこのカード捌きと、流れるようにデッキを回転させているこの光景は…

『あ、天城選手！再び怒涛の勢いでデッキを回しております！ほ、本当にこれがＥｘデッキを扱えないデュエリストの実力なのか!?』

まるでこの男にＥｘ適正が無いことを、今にも忘れさせるかのようにも見えるのだろう。

「【堕天使ユコバック】を通常召喚！その効果で、デッキから【堕天使スペルビア】を墓地へ送る！３枚目の【闇の誘惑】を発動し、２枚ドローして【堕天使アムドゥシアス】を除外！そして【堕天使の戒壇】を発動！【堕天使スペルビア】を守備表示で蘇生し、【堕天使イシュタム】も再び呼び戻す！」

【堕天使ユコバック】レベル３
ＡＴＫ／　７００　ＤＥＦ／１０００

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

―そう、ここまでデッキを操れるというのは、彼らが思い浮かべるような天城　遊良と言う『弱者』では、絶対に出来ぬ芸当。

Ｅｘ適正が無い…だったら大したモンスターなど出せるはずがない…そうだ、そんな雑魚はデッキだって満足に回せるわけが無い…だってあの男は、Ｅｘ適正を持っていないのだから…

全ての思考は、そう巡る。それが、この世界に生きる『普通』の人間の認識。

しかし、確かにＥｘデッキから突如現れる煌びやかなモンスターは居ないものの…

彼の操る堕天使の羽ばたきに、目を奪われないと言う者の言葉など嘘にしか聞こえないことだろう。

鷹矢が切れることなくモンスターを呼び出したように、遊良もまた途切れることなく堕天使を羽ばたかせるのか。

イカサマや積み込みを疑って声を荒げる人間もいるだろうが、そもそもデュエルディスクに細工は出来ず、デッキから引いたカード以外は反応しないことは世界中の人間の常識であって。

「行くぞ、バトルだ！【堕天使イシュタム】で、【励騎士　ヴェルズ・ビュート】に攻撃！」

「むぅ…【背徳の堕天使】が墓地に…これはまだ使えんか。」

魅惑の堕天使の放った光弾が、光り輝く励騎士を撃ち抜いて。

相手のバトルフェイズにもその衝撃波を弾けさせられるヴェルズ・ビュートと言えども、先ほど『２回』も遊良に場を一掃させられては、その衝撃波を再度打ち出すことは叶わず。

鷹矢　ＬＰ：３８００→３２００

「まだだ！【堕天使ユコバック】でダイレクトアタック！」

―！

「ぬぅ…」

鷹矢　ＬＰ：３２００→２５００

『凄い！！！

前評判や、『あの天城』の噂に振り回されていた人間からは絶対に想像できないような展開が繰り広げられていることは…最早誰の目にも確かなことであって。

―確実に、かつ着実に。

少しずつとは言え、その攻撃によってＬＰを削って、優位に立っているのは確かに遊良の方なのだ。

誰がこんな流れを想像できただろうか。『Ｅｘ適正』を持たないデュエリストが、よもやここまで王者の孫を超えんとする気概を見せ付けて来るだなんて。

彼らの関係など、観客たちは知らない。ずっと、知ろうともしなかった。

そんな彼らの中にあった喧騒は、次第に興奮の坩堝へと変わっていき…それを、嬉々として遊良に降りかからせていた。

「【アドバンスドロー】発動！スペルビアを墓地へ送って２枚ドロー…よし！俺はカードを２枚伏せて、ターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：３０００
手札：４→２枚
場：【堕天使イシュタム】
【堕天使ユコバック】
伏せ：２枚

勢いも戦況も、今押しているのは確実に遊良。
その勢いに感化され、観客たちの盛り上がりもより一層大きくなっ

ていくのが誰の目にも明らかなモノとなってきているのか。

そんな中…

「フッ…やはり、か。」

遊良がそのターンを終え、再び鷹矢にターンが回ってきたというのに…突如その手を止め、鷹矢は静かにそう呟いた。
その言葉は、どこか納得したようで、それでいて少し嬉しくもあり寂しくもありと言った様子にも見えて…
急にその手を止めた鷹矢の言葉に、にわかに会場がざわつき…その姿が遊良にとっても不思議だったのか、聞き返すようにして遊良も口を開く。

「…どうした？劣勢に追い込まれて焦ったか？」
「そんなわけあるか。…分かったのだ。今の攻防ではっきりと。先ほどからお前が言っている言葉で確実に。」
「…あ？」

何かを理解したかのような鷹矢の言葉…それは、ここまで手を合わせて感じたからこそ感じた彼の言葉。

「何度蹴散らしても蘇り、お前の場に集う堕天使達。その無茶苦茶なドロー…やはりお前のデッキはおかしいと言わざるを得ん。俺には絶対にお前のデッキは回すことは出来んだろう。」
「…なんだよ、急に。」
「急ではない。昔から、お前のドローは特に馬鹿げていたからな…なぜそのデッキで回るのか不思議でならん。」

「それは…」

そんな鷹矢の口から綴られる言葉は、今このバトルを含めて、更に『あの頃』の遊良を思い出してもいるのだろうか。

Ｅｘ適正など関係なかった幼等部の頃。好きなカードを好きに繰り出して、思うが侭にデュエルしていたからこそ、誰もが『ここぞ』という時にキーカードを引けていた幼少期の勢い。

誰もが成長の過程で『Ｅｘ適正』を得て、効率化を求め、デュエルにかける『何か』を忘れていくのに…ソレを、そのまま『今』も続けているような遊良のデュエルは…

「だからこそ、俺にはわかるのだ！」

いや、『Ｅｘ適正』を得られなかった遊良だからこそ、今もソレに頼っているようにも感じるのだろうか。

「さっきからお前が言っている、『引き離されない』とか、『喰らいつく』とか…そんな言葉を並べているのがいい証拠！」

「…何が言いたいんだよ、お前は。」

「俺に『きっかけ』を与えるために、あえてダメージを減らしていた十文字　哲ならばまだしも…このターンのダメージ量、俺を仕留めきれなかったことで確信したぞ。」

「…あ？」

「…遊良、お前はまだ…『壁』を超えていないな？」

「…ッ!?」

別に、隠していたことではない。

師との修行…いや、一方的な蹂躙を一晩中耐え、夕方までそれを繰り返しながら考え抜いたとは言えども。

今の遊良の実力は、まだ『壁』を乗り越えるには至っていないのだろう。

確かに『壁』を乗り越えにかかっていることは確かなのだが、それでもソコに立っている者と比べれば…

まだ、足りない。

「いや、超えていないというよりは…体半分ぶら下がっていると言うべきか。堕天使の『底上げ』があるのか、瞬間的に『ここ』を乗り越えて俺を歯牙にかけようとする怖さはある。しかし…」

「あぁ、確かにまだ足りないのはわかっているさ！けどな、だからこそ一瞬！一瞬あれば十分だ、お前が隙を見せたら…」

「隙など無い！お前のその爆発的な強さを知っているのは、誰よりもこの俺なのだからな！行くぞ、俺のターン！ドロー！【ブリキンギョ】を召喚！効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！【レッド・ガジェット】を手札に！」

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００

【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

遊良の言葉を遮って、勢いよくデッキからカードを引き、その場に２体のモンスターを並べた鷹矢。

遊良の力がまだ『壁』を超えるに至っていないことを感じつつも…それでも、瞬間的に『ここ』に足を踏み入れる鋭さも、鷹矢には十二分に理解出来ていて。

それが、彼が身を削って得たモノによることも、一番付き合いが長い鷹矢だからこそわかるのだろう。

ずっと、彼と共に生きていたのだ。だからこそ、誰よりもその怖さも諦めの悪さも…遊良の、一瞬を抜けるような攻撃を知っているからこそ、油断はせず隙も見せず。

一切手を抜くつもりなど無い鷹矢…遊良の『今』の実力を感じ取ったくらいで、呆れることなど絶対にしないはず。

隙を見せたときが自分の最後。『Ｅｘ適正が無い』というハンデを背負っても、ここまで『生き』抜いてきた遊良の強さは、鷹矢が一番よく知っているのだから。

「なぁ遊良…この大会で、お前は何を得た？」

「…は？な、何って…」

「二回戦、準決勝はまさに俺にとって収穫が多かったぞ。」

そんなこの男が、素直にこう言う台詞を吐くのは遊良にとっても珍しいのか。

唯我独尊を貫かんとしている普段の彼からは、およそ出てこないであろうその言葉に…遊良とて、『成長』という言葉と共に驚愕を禁じえない様子が浮かんでくるのは仕方がないことだろう。

そう、鷹矢にとっては、本当に心から『収穫』が多かったのだ。

そんな驚いた顔をしている遊良を意に介さず、鷹矢はさらに言葉を紡ぐ。

「なぜなら紫魔の女には、一つの信念を貫く強さを…それを知らなければ、十文字　哲には勝てなかっただろう。…そして、その十文字哲からは『壁』を越えるきっかけと、そこに至った者の強さを知った！おかげで、俺はまだまだ強くなれることがわかったのだからな！」

鷹矢が、どこかその才能に身を任せ、【決闘祭】を舐めていたことは否めない。
しかし、そんな鷹矢だったからこそ、これまで【決闘祭】を通して彼が得たモノは大きく、また彼の確かな血肉へと変えられているのだろう。
祭典の前よりも、一回りどころか二回りは大きく成長した鷹矢。元々の才能と受け継いだ血筋…それが大いに覚醒し、今の彼を形作っていると言っても過言ではなく。
「全力で戦うと約束したからには…見せてやろう！この俺の全力を！」
―！
「うぉぉぉぉお！」
鷹矢から放たれる覇気が一層激しくなり、観客たちの轟きを押し返して。
これまでの鷹矢のモノではない、遊良の知らぬ領域の実力を見せようというのか。これより行おうとしている現象に備えて、力を込めている鷹矢の雄叫びが木霊し…
―そして
「お前ガ【堕天使】ヲ得タのナラバ、俺モ新たナ『力』ヲ得ヨウ！…コノ『闇』ヲ利用シテ！ウォォォォォオ！」
「なっ!?た、鷹矢！そ、それは！」
…その時、鷹矢の雄叫びを受け、遊良が驚いたような声を漏らした。
なぜなら遊良にとってコレは、何があっても忘れることなど出来な

いモノ。

―忘れるわけが無い、忘れられるわけが無い。

遊良の表情が段々と険しくなるに連れて、鷹矢の叫びが更に大きくなっていき…

鷹矢の姿が仄かに揺らめき、彼の周りに『何か』が漏れ出して漂っている様子は、まるで彼がソレを纏って、己の血肉へと変えているかの様でもあって。

「なんでお前がソレを!」

絶対に容認など出来ない、遊良の脳裏に焼きついた『悪意の塊』。

地図に無いルード地区で見て、選抜戦で蒼人と争って…どれも命をかけた、絶対に負けられないデュエルをしたからこそ、遊良は『コレ』だけは何があっても見逃すわけには行かないのに…

―そう、鷹矢の雄叫びに呼応して、彼の足元から漂い始めるソレは、まさしく『黒い靄』だったのだから。

「鷹矢…お前…」

「これガ遊良、お前ト戦ウ為ニ隠シテ置いタ、俺ノ『取って置き』ダ!準決勝デ仕方無ク『少し使って』しまッタが…しかシ!マダマダ十分!」

猛り大きくなる鷹矢の覇気に反比例し、遊良の姿が小さくなってきていて…

…その事実が、遊良には信じられないかの様。

「それ…俺、話したよな?ルードで死に掛けたってことも…泉先輩の

ことも…お前に…」
「ウム！ソレガどうしタ！」
「危ないって…教えてたよな？なのに…なんで…」
「フッ、知れタ事ヲ。お前ガ何か分からなイ物カラ【堕天使】ヲ得タと言うノに、コノ俺ガ何モ得ラレてないノハ『不公平』でハないカ！」
「…は？」

鷹矢の口から語られる台詞は、まさしく彼の本心で。
何と言う単純な考え、何と言う負けず嫌いな思考。

「ダカラ俺モ『力』ガ欲しかッタ！お前がソレを、己ノ身ヲ削ッテ得タならバ、俺モこの身ヲ削ッテ『力』ヲ手ニ入れルだけダ！」
『黒い靄』を纏っているとは言え、悪意に塗れてはおらず、その心から『力』を欲している様子は、遊良だからこそ考える前に理解出来たのか。

…それでも

「グッ！…コイツ…昨日少シ開放シタせいカ…調子ニ乗リおッテ…」
「鷹矢！」

遊良にも見て分かるくらいに、徐々にソレが鷹矢を蝕み始めていて…

昨日までは体内に留めているに過ぎなかった靄を、今は表に出しているのだ。その暴れようは昨日までの比ではなく、容赦なく鷹矢を乗っ取りにかかっているかのよう。

—せっかくの、決勝戦だったのに

やや苦しそうに胸を押さえている鷹矢の姿に、遊良にはその不安がはっきりと押し寄せてきていて

お互いに、納得のいく戦いが出来ると思った…全力で、ただデュエルが出来ると思った…コレの怖さは遊良もよく知っていて、コレの不条理さだって理解できている…

焦ったように声を漏らし、悔しそうに鷹矢の名を呼ぶ。何故もっと早く気付いていなかったのか、と。

―その時

「調子ニ…のるなぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

―！

「なっ!?」

鷹矢が盛大に吼え、それに伴って彼に纏わり付いていた『黒い靄』の勢いが増し…

―放出、開放、体内からの噴出

『な、ななななななんだこれはぁぁぁぁぁ！コレも何かの演出なのかぁぁぁ!?』

実況の混乱したような声が響き、それに伴い観客達の声も歓声から

驚愕のモノとなって木霊して。
まるで鷹矢が、己の体内からソレを追い出しているかの様子。頭上でソレが集まり膨らみ、一気に巨大な球となりて妖しく輝き始めた。
靄の集まりだと言うのに、月明かりに照らされているソレはまるで黒い宝石。
突如として現れたこの『黒い宝石』に、観客達もあっけに取られて上を見上げ…皆が皆、意味のわからぬ唐突な光景を飲み込めていない様子。
そして…静かに…

―ソレは、響く

―テングウジ　タカヤ…『何』ヲ望ム…

「『力』だ！遊良が得た『力』に負けないモノを！俺は欲する！」

直接頭の中に響いているような、脳を直接揺らされているかのような、そんな不快感のある『振動』が誰の耳にも届き始めて。
急に聞こえ始めたその気味の悪い声に、実況は口を開けたまま、観客の中には悲鳴を上げたり怯えたりしている者までいる始末…

―ヨカロウ…貴様ニ望ムモノヲ…

「うむ！」

―シカシ…ソノ『代償』ニ…

その中で、『代償』を要求してくるこの『声』に対しても、いつもと変わらず何の恐れも怯えも見せない鷹矢に対して、遊良は声を荒げて、ソレを止めにかかる。

「やめろ鷹矢！お前、自分が何言ってるのかわかってるのか!?」
「わかっている！黙って見ていろ！」

しかし、そんな遊良を意に介さず。
鷹矢は自らが弾き出した『ソレ』に対しても、どこまでも堂々と声を交わすのみ。

―『代償』ニ…オマエ自身ヲ…頂ク…

声が最後の審判を下した…

―その時だった。

「…何を言っている？俺は、何も差し出さん！」

―…ナニ？

「俺が欲する力とは…己の『身』を削り！『心』を磨り減らし！そうして得る確かな『力』だ！お前に貰うのでは無い！お前を喰らい、俺の血肉として変えるのみ！俺からお前に差し出す代償など何も無い！」

この得体の知れないモノに対しても、どこまでも引かず、省みず。

全て、彼の思うがままに。

コレが『悪意』だと言う事は置いておいても、他人から善意で『与えられた』モノでは、彼が手に入れたい『力』では無いのだ。

それは遊良が得たのと同じ…何かを我慢し、プライドを捨て、思いを諦め…

そうして『身を削って』得た力でないと、鷹矢自身が納得できないのだから。

「…すでに、ジジイから『身を削って』ソレは得ている。お前からは、一向に言う事を聞かん『ソイツ』を操るための実力…『壁』を超えるきっかけを掴ませてもらったまで！それを随分と調子に乗ってくれたものだ…もうお前に用は無い！」

神をも恐れぬその所業。鷹矢にとって、利用できるモノはなんだって利用するだけ。それは祖父であっても『コレ』であっても…そして、『それ以外』であっても。

ただ、遊良と…高き力で、全力で戦うために。

鷹矢は己のデュエルディスクのＥｘデッキ部分を開いて、中から1枚のカードを取り出すと…

―ソレを、掲げ始めた。

それは…

「は…白紙の…カード？」
「うむ！…さぁ、調子に乗った用済みの闇よ！己の罪の大きさを悔やみ！俺の糧となりて、その力を…俺によこせぇぇぇぇ！」

―！

―グォォォォォォォ!?

その瞬間、突如セントラル・スタジアムの中に暴風が巻き起こり、観客席までも飲み込んで暴れまわった。

―その中心にいるのは紛れも無い鷹矢自身。

巨大な黒い宝石の真下で、白紙のカードを掲げ…
妖しく輝くそのカードは、これまでも鷹矢を蝕もうとして暴れていたこの『闇』の勢いを、頭ごなしに押さえつけるかのよう。
いや、実際にこれまでも『このカード』が押さえていたのだ。その正体など、鷹矢自身すら分からぬモノであるし、そもそも興味も無いかのように…
自分を守っていたことなど気付いてもいない鷹矢は、『このカード』が暴風を巻き起こし、それに付随して謎の『声』が呻きとなって響いくことなど、まるで意に介さず。

―ただ、力とするだけ。

その暴風に巻き込まれ、宝石が再び『靄』となり散り散りになって

砕けていくと…鷹矢の掲げているカードに吸い込まれるようにして、その巨大な姿を消してい行き…

―そして…その暴風が消えゆくと同時に…

「俺は2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築！」

突如響き渡る鷹矢の声、デュエル続行を告げる彼の宣言。
およそ演出では無いであろう『暴風』に混乱している観客と実況すら、その意に介すことはまるで無く。
こんな超常現象が、大勢の観客の前で起こったと言うのに、それすらデュエルを中断するには至らない程度と嘲笑うかのように…その声は、澄んでいて。

―オーバーレイネットワークを、構築

およそ、この世界で行われるエクシーズ召喚のための宣言からは、聞き覚えることが無いであろうその『単語』が、鷹矢の口から放たれた。

しかし、遊良にとってはどこか聞いたことのあるような、その『単語』…誰が言っていただろうか、少し前に聞いたような…そんな、驚きの顔、驚愕の声。

「エクシーズ召喚！出でよ、ランク4！」

そんな目で片割れを見る遊良の視線を突き刺されていてもなお、鷹

矢はその声を静めることなく言い放つ。

―ここに、現れるは…

「【Ｎｏ．８０　狂装覇王ラプソディ・イン・バーサーク】！」

―！

夜の空から、静かに降りるは叙事的な装様をした黒き覇王。

悲鳴を奏で、狂気を演じ…自由奔放に響き渡りしは何にも形容できない『コレ』独特のモノ…

【Ｎｏ．８０　狂装覇王ラプソディ・イン・バーサーク】ランク４
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／１２００

「な、【Ｎｏ．】!?何だよこのエクシーズモンスターは!?」

突如現れた、謎のエクシーズモンスターに、遊良がそんな声を漏らした。

いや、遊良だけではない。誰もが、この見たことの無い新たなモンスターに驚き、そしてその誕生に、驚愕と共に興奮が戻ってきている様子。

その正体も、その原因の出自も…およそここに居る『人間』には、決して理解出来ぬ現象が起きていて。

その名前にある、何かを現す数字の意味…それが『８０』ということは、他にもこんな見たことの無いカードがあるのだろうかと憶測するのがやっと。

…この世界で、デュエルの最中に新たなカードが創造されることは稀にあるコト。

それは誰かが知っているモンスターであったり、誰も見たことのないモンスターであったり。

これは、後者。この世界に創造された、誰も知らぬ新たなカードは、紛れも無い鷹矢だけしか知らぬ『力』だ。

「うむ…何が出来るのか分からなかったが…しかし成功のようだ。」

「な、なんだよコレ！お前、一体何して…」

「む？お前も見ていただろうが。『創った』だけだ、『闇』を糧に、新たなカードを！お前は複数枚の【堕天使】のカードを得ただろう？だったら俺も一つでは足りんからな！」

「だったら、コレを造ったあの『白紙のカード』は何だ！俺の知らないカードを、お前が持っているはずが…」

今目の前に現れた、誰も知らぬ【Ｎｏ．】よりも、今の遊良の疑問は、一重に先ほど鷹矢が掲げて、妖しく輝いていた『白紙のカード』に注がれていて。

そう、準決勝の鷹矢の戦いを見ていないとは言え、それ以外に遊良が鷹矢の持っているカードを把握していないことなど、彼らにとってはありえないことなのだ。

…すぐに散らかす鷹矢の部屋の片付けを、普段からしているのは遊良だし…鷹矢の持っているカードを整理して、整頓してやっているの

だってもちろん遊良。

しかし、鷹矢が先ほど掲げていた『白紙のカード』の存在など、遊良は知らない。その出自も、その存在も。

しかし…

「…あったのだよ遊良。俺が、お前の知らぬカードを得られた時が！」
「なっ!?い、一体いつ…」
「考えてみろ、俺のデッキに、お前の知らぬカードが入っていた時は…一体いつだ？」
「いつって…そんなことは…」

鷹矢に起こったであろう事を、鷹矢に促されるまま考える遊良。
…いつだ、一体。自分のあずかり知らぬ場所で、あの鷹矢がデッキに、自分も知らないカードを入れられた時は…と。

そんな時があっただろうか、そんな場面があっただろうか…

考えて、考えて。思考を止めずに、考えて…

「あっ…」

—すぐに、至る

―『そうだよ、君のお友達の男の子のデッキさ。僕デッキ持ってなくてさぁ。丁度良いからこっそり借りたんだ。』

…デッキを、借りた。デュエルディスクではなく、『デッキ』を。

―『あの男の立っていた所に奴のディスクも落ちていたがデッキも無事だった。』

…奴のディスクが、落ちていた。デッキだけでなく、『デュエルディスク』が。

「お…お前が今してるデュエルディスクって…まさか、『奴』の…」

「うむ！遊良よその通りだ！俺とルキを襲った『奴』のディスクに、この『白紙のカード』が入っていたのだ！お前にバレると煩いからな！俺が今まで隠して置いただけのこと！」

忘れもしない、忘れられるわけがない。

鷹矢とルキが死にかけ…自分にとって、最大の選択を迫られた『あの時』のことを、遊良が忘れられるわけがない。

人形のような『あの男』とのデュエルで、『鷹矢のデッキ』を勝手に扱われ…

『Ｅｘ適正』を捨てるという、持っていた希望を捨て、文字通り『身を削って』まで堕天使を得た、あの時の戦いを。

市販されている、オーソドックスな形で見分けは付かないとは言え…いくらなんでも、自分を殺しかけた『奴』のデュエルディスクを、何の躊躇も無く扱うことすら遊良には信じられないことであって。

「その後、コイツが『闇』を吸い込むことをルード地区で知り…【決闘祭】まで市内で集めていたのだが、それがこんな形で現れることまでは知らなかったがな！」
「だ、だからって…あんな奴のディスクと、よくわからないカードを使うなんて…って、『闇』を集めてたって!?」
「うむ！特に夏休みは動きやすかったぞ。何せお前は夜１０時には寝てしまうからな！おかげで夜出歩くのに苦労はしなかった！」

遊良の驚愕すら意に介さず、なんの躊躇いも無くそう言い放つ鷹矢。

…そう、規則正しい生活を送る遊良の目を盗んで、夜な夜な街へと繰り出して…

時折市内に現れる『飲み込まれた人間』を相手に、その『闇』を己の糧として喰らい続けて溜めていたのだ。

―夜中まで起き、闇を集めて。昼まで寝て、闇を抑えて。

また、闇がイースト校の内部にも現れたこともあるのだが…いままで惨事になっていないのは、この男が迅速に喰らっていたことも大きいのでは無いか。

―全ては、この時のために。

無論、その裏で修行と称して鷹矢に指示を出していたのが彼の祖父であるのことも、遊良は知る由もないが。

「じゃ…じゃあ、泉先輩のあの変貌は…」
「お前を怒らせたあの３年生か。うむ、確かにあの華奢な男からも『闇』を喰らった！お前に負けて、既に放出寸前だったからギリギリで

危なかったがな！」
「なっ…お、お前って奴は…泉先輩に、なんてことを…先輩に、あんな怪我を…」
「ふん！そんなことなど知らん！俺の糧とするために喰らったのみ！寧ろ感謝して欲しいくらいだ！」

反省の色も無く、謝罪の心も無く。
その彼らの交わす言動にどこか『ズレ』が生じているような気がするものの、あっけらかんとそう言い放つ鷹矢の言葉に、遊良の心には確かな怒りが積もってきていて。
また、それと同時に蒼人にも申し訳なさが浮かび上がってくるのは、どうしても仕方のないことなのか。

「…も、もっと早く気付いていれば…」

鷹矢を、止められていれば。きっと、蒼人はあんな怪我をしなくても済んだのではないだろうか、と。
まるで、鷹矢の保護者のような観念でそう思ってしまう遊良の心には、今目の前に現れたばかりの、見たことも聞いたことも無い【Ｎｏ．】という新種のエクシーズモンスターなどどうでもいいと言わんばかりに曇ってきていて。

―そんな遊良の感情を吹き飛ばすかのごとく、鷹矢が口を開く。

「…遊良、何を気を抜いている！まだデュエルの途中だ、そんな暇などお前には無い！」
「何を…この馬鹿やろ…」
「言ったであろう！この俺の『全力』で、お前と戦うと！俺はまだ、『全力』を出していないのだぞ！」
「なっ!?」

言葉を遮り、声を荒げて。
『壁』を超え、才能も実力も己のモノとしている鷹矢のその言葉は、確かな真実となって遊良に届いたのか。
申し訳なさや驚愕と言った、およそデュエルにおいて『どうでもいい感情』に囚われそうになった自分の片割れを鼓舞するように…
または、デュエルの最中で気を抜きかけた愚か者を叱りつけるかのように、鷹矢はその手札から1枚のカードを取ると、それを発動した。

「どうせお前の事だ、その伏せカード…【デモンズ・チェーン】でも伏せているのだろう？魔法カード、【ナイト・ショット】を発動！お前の伏せカード一枚を破壊する！」
「し、しまった！」

幼馴染は伊達じゃない。遊良が鷹矢の手を読んでいるように、鷹矢だって遊良の手は読める。遊良の防御の手を軽々しく打ち抜く鷹矢の策もまた、遊良にとっては脅威そのもの。

打ち抜く弾丸、死角からの一発。

鷹矢の宣言どおり、デモンズ・チェーンが成す術なく破壊され…さらに鷹矢はその手を止めずに動くのみ。

「うむ、狙い通りだ！【死者蘇生】発動！墓地から【シルバー・ガジェット】を特殊召喚し、更に【レッド・ガジェット】を特殊召喚！【イエロー・ガジェット】を手札に！」

【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【レッド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００

「では、見せてやろう…遊良、お前に！この俺の『切り札』を！」
「はぁ!?お、お前が切り札!?」

その瞬間、鷹矢の放ったその『単語』が、何よりも衝撃的であるかのように振舞う遊良。

準備が整った様に…その体を構えなおすかの様に。

―まるで2体のレベル4モンスターを揃えることなど、どんなことよりも簡単だと言わんばかりに。

遊良だからこそ知っていること…

…そう、今までの、どんな鷹矢の言葉よりも衝撃的な単語。感じた怒りすら、一瞬忘れてしまいそうな、そんな衝撃。

一枚のカードに拘らない鷹矢なのだからこそ、多種多様・自由奔放が信条の彼が口にした、その『切り札』という単語は凄まじく革新的で衝撃的な言葉であって。

「そ、そんなモノ、俺は知らないぞ！お前が、『切り札』に拘るなんて！」
「うむ！今まではそうだろうな！」

しかし、これといった『切り札』を持たず、その状況に応じて戦法を変え…天高く飛び回る『鷹』の如き戦いを魅せる彼だからこそ、『砦』を持たないその才能を、どこか持て余していたのも事実。

―そんな中で、彼を変えた十文字　哲との戦い。

そう、『なんとなく』で多様な戦術を行うのでは無い、確かな信念を持って戦う強さを…鷹矢にとって、『壁』を超えるきっかけを得られたあの戦いの、その後のこと。

―『やはり、俺にはコレが性に合っているのだろう。一つの戦法に拘ることは、どうにも窮屈でたまらん。』

ルキの『本気』を幾度も相手にし、その中で見つけた鷹矢の答え。自由自在の戦術を、『なんとなく』から『本気』に昇華させたからこそ言える言葉。

『切り札』であっても、『頼る』のではなく『象徴』として。

…彼の取るべき戦術の、『砦』となるべく存在を。

「…屈辱的だったぞ…無念だったぞ！決して頼らぬと決めた相手からの施しは！」

「な、何言って…」

「しかし、それも最早どうでも良い事！お前が『プライド』を捨てて得たのならば、この俺も『プライド』を捨てよう！そうして得た力だからこそ！この俺の『切り札』と呼べるモノとなるのだ！ゆくぞ！２体のモンスターで、オーバーレイ！」

鷹矢の足元に現れる銀河、その中へと吸い込まれていく２体のモンスター。

同じレベルを持つモンスターを使い、レベルを持たぬモンスターを生み出す召喚。

エクシーズ名家、天宮寺一族の一人…その筆頭である祖父に倣うかのように、鷹矢はその手を掲げ…

そして…

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれ！」

およそ、世界で知らぬ者など居ないであろう口上を放ち、その勢いを増していく鷹矢。

それを聞いた誰もが、絶対にこの戦いに…いやどの戦いにも現れることの無いであろうソレを想像し…

「なっ!?鷹矢！その口上は…先生の!?」

「うむ！これがプライドを捨ててまでジジイから得た…俺の…『切り札』だ！エクシーズ召喚！」

――…

黒翼が…現れる。

今、ここに。

「【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―!!!

新たに生み出された【Ｎｏ．】の誕生すら霞む程に、このステージにエクシーズ召喚されたこのモンスターのことは…
ここにいる誰もが知っていて、そして誰もがその『強さ』を理解している。

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

―この世界に、たったの１枚。

彼がこのモンスターを駆るからこそ、天宮寺　鷹峰は【黒翼】の名で呼ばれ…このモンスターが彼を選んだからこそ、【ダーク・リベリオン】は【黒翼】となるのだ。

…世界に轟く王者【黒翼】が操り、他の追随を許さぬ圧倒的な『強さ』をもってして、世界にその名を知らしめたそのモンスターの内の『一体』。

―【黒翼】の『片翼』…

―神にすら、歯向かう者（ダーク・リベリオン）

「…これは驚いた。まさか鷹峰さんともあろうお方が、『片翼』とは言えあのカードをまさか孫に渡していたとは…」
「カカカッ、どーだ言ったとおり、面白れぇ展開になっただろうが。ちっと前にあのガキ共を競わせたことがあってよ…孫の方が勝ち越しやがったから、ちっとその褒美になぁ。」

その予想だにしなかったモンスターの登場に、王者達の居る特別展

望席ですら驚きの雰囲気がただよっていて。
以前、鷹峰がルード地区で弟子達を競わせ…そして鷹矢が勝ち越したために、秘密裏に鷹峰が渡していたのだろう。
鷹矢とて、そのとんでもない『希少価値』ゆえに他言は出来ず。この日、この時、この瞬間のために隠しておいた、紛れも無い鷹矢の切り札…鷹峰の、祖父の『名』。
【王者】の『名』そのものとなる、たった一枚の特別なモンスター。

―誇りと称号、強さと信念

その全てを、その一枚で全て体現するのだ。長い長い世界の歴史で見ても、その名を持った【王者】以外に、【王者】のカードを操った者は居らず。

「…いやいや、『ちょっと』どころじゃないっしょ！いいのかよジイサン、【ダーク・リベリオン】っていやぁ、下手したら国が２つは買えるカードじゃんか。いくら孫だからって、そんなカードやって…」
「あぁん？…んなもん、レプリカに決まってんだろーが。李の会社に無茶言って、渋る奴に無理やり作らせたんだってーの。何せアイツは俺様に恩があっからなぁ。」
「いやいや、レプリカっったって、あんなガキンチョが召喚できているのが不思議なくらいじゃん…」

そう、絶対にありえない例えではあるが…一般人が【王者】のカードを持った所で、けっして彼らは言う事など聞かず。
【王者】以外がデュエルディスクにおいても、条件が整っているはずなのに全くソレは反応しないのだ。
まるで、選ばれし【王者】の『名』そのものになるようなカードには、確かな魂が宿っているのかと思うくらいに…かつてのたった一つの『例外』を除いて、他の誰の言うことも聞かない。

…誇り高き【王者】の名は、そうして紡がれるものなのだから。

「…ちなみに、おいくらしたん？」

「カッカッカ、なーに、たった国家予算ぐれーよ。…二度と作らねーけどな。」

…

「ま、まさか鷹矢…お前が…【ダーク・リベリオン】を…」

「うむ！まさに呆れるほど言う事を聞こうとしなかったコイツだが、しかし今の俺ならば違うということか！」

鷹矢も、ただ『希少』だからと言う理由で今までこのカードを使わなかったのでは無い。

今までの鷹矢では【ダーク・リベリオン】は全く言う事を聞かず、召喚したくても出来ない状況が続き…

無理やり力を得るために『闇』を喰らい続け、己の精神を鍛え抜いてきたこと。無理やりに『壁』を超え、召喚できるだけの力を身につけたことが…ようやくこの時になって身を結んだのだ。

今、この時にこうして【黒翼】が現れていることは、最早一種の奇跡とも呼べるのだろう。

まるで、この『約束』の舞台の戦いを、【黒翼】自身も見たかったかのように。

―ソレは、吼える。

「くっ…」

「コイツの効果はお前とてよく知っているだろう！ゆくぞ遊良！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】の効果発動！オーバーレイユニットを二つ使い！【堕天使イシュタム】の攻撃力を半分にして、【ダーク・リベリオン】の攻撃力に加える！吸い尽くせ、紫電吸雷！」

黒翼牙竜のその漆黒の翼から放出されし、深紫の猛る雷が魅惑の堕天使へと襲いかかって。

対象の力を吸い取り、己の牙の鋭さを半永久的に増さんとするその能力は、鷹矢が2回戦で戦った、一瞬しか力を留めて置けない地紫魔の象徴とくらべても比べ物にならないコトは必至。

「くっ、それだけは！【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【背徳の堕天使】の効果を…」

その怖さをよく知る遊良も、好きにさせるわけにはいかないと言わんばかりに行動へと移そうとしたのだが…

「無駄だ！永続罠発動、【デモンズ・チェーン】！」

「なっ!?」

先ほど鷹矢が破壊した、遊良と同じ悪魔の鎖。

相手モンスターを縛り、その効果まで封じて身動きを取れなくするこのカードの恐ろしさは、それをよく扱う遊良だからこそ理解していることだろう。

「フッ…イシュタムの効果を先に使ってくれて助かったぞ！おかげで安心して発動することが出来た。」

「くっ、くそっ！」

「これで【ダーク・リベリオン】の効果を邪魔する者はいなくなった！さあ、思うがままに吠えるがいい！」

遊良　ＬＰ：３０００→２０００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００→１２５０

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→３７５０

悪魔の鎖の上から、その抵抗も空しくさらに成す術なく黒翼の紫電に縛られてしまい…力を奪い取られてしまった魅惑の堕天使。
他の追随を許さぬよう、その攻撃力を大台に乗せ吼える黒翼牙竜の猛りは一向に収まることを知らず…

確かに鷹矢が召喚してはいても、まるでその関係性は主従では無い。
従わず、思うが侭に振舞う。本来の、主のように。

しかし、それでも召喚出来たのは鷹矢自身。その勝利を確実のモノとするために、更にその手を休めることは無く。

「しかし、いつまでもその危ないカードを残しておくつもりもない！俺は、ラプソディ・イン・バーサークの効果を発動！」
「こ、ここでソイツを!?」

その時…今まで沈黙を貫いていた、鷹矢が創造せし【Ｎｏ．】が突如動き出した。
沈黙からいきなり狂奏を響かせんとするその振る舞いに、得体の知れない怖さが込みあがってくるのは誰であっても仕方の無いことなのだろう。
誰も知らぬ、たった今生み出されし新たなカードには、誰も対処す

ることなど叶わぬかのように…

「オーバーレイユニットを一つ使って、お前の墓地から【背徳の堕天使】を除外する！」

「なっ!?」

無慈悲な旋律、悪魔の調べ。

背徳の力を宿した、神にすら傷を負わせるのではないかという堕天使の力の一端が、遊良の墓地から消えていく。

邪魔するものは許さぬように、決して棘など残さぬように。

…まだ、終わらない。

「さらにもう一度ラプソディ・イン・バーサークの効果を発動！そこの危ない【堕天使ゼラート】も除外させてもらうぞ！」

「何!?」

奏でる恐怖の旋律は、天を舞う堕天使にとっても不快なモノなのだろうか。

この盤面を、その剣の一振りで返すことの出来るゼラートを、最大限に警戒することも鷹矢は忘れず。

新たなカードを創造し、身を削って得た『切り札』を召喚してもなお、その心には驕りなど微塵も感じていない様子。

「…まさか1ターンに二回も使えるなんて…」

「まだだ！ラプソディ・イン・バーサークのもう一つの効果を発動！コイツを【ダーク・リベリオン】に装備し、攻撃力を更に１２００アップする！」

その身を輝く鎧へと形態変化させ、【黒翼】の猛りを更に持ち上げる【Ｎｏ．】の一体。その出自も、正体も、真意も知らぬ遊良にしてみれ

ば、この【Ｎｏ．】だって得体の知れない怖さを放って。

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／３７５０→４９５０

「こ、攻撃力４９５０…一体、いくつ効果があるんだよ！」

恐るべき値にまでその力を底上げし、一瞬で敵を貫き吹き飛ばすつもりなのだろう。
攻撃力の下がった魅惑の堕天使はもちろん、遊良の場に残る小さき堕天使すら、触れただけで消し飛ばされそうな力を駄々漏れにし…

「ゆくぞ！バトルだ！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】で…」

―黒翼牙竜が、吼えると同時に。

「遊良の場の…【堕天使イシュタム】を攻撃！」

歴戦を切り伏せしその牙が、【王者】と呼ばれしその黒翼で空へと羽ばたく姿は、まるで如何なる存在もこの竜の前には、存在すること自体を許されてはいないかのよう。

『凄まじい攻撃力は流石【黒翼】だぁあ！これで！このまま！決まってしまうのでしょうかぁぁぁぁぁ！』

―迫りくる牙突、猛り狂う黒翼

その麗しき牙が月光を反射して煌く時、それは神の体すら貫く強靭な意志と化すのだ。

―このままでは、やられ…

「つかよぉぉぉぉ!速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動ぉぉ!」

しかし、その攻撃が魅惑の堕天使を貫く寸前で、遊良も伏せていた最後のカードを発動して。

…ここまできて、簡単にやられるわけにはいかない。己の持てる力を最後の最後まで絞りだし、必死になってくらい付く。

「ユコバックとイシュタムをリリース!神に背きし反逆の翼、その姿を今ここに!」

黒翼の牙突を避けるかの如く、2体の堕天使達がその身に渦を纏って天へと浮かび、その姿を更なる存在へと捧げ消えていくと同時に…

「来い、【堕天使ルシフェル】!」

―!

清廉なる天の光、それを遮る黒き姿。

神に牙剥く黒き竜にも、引けを取らぬ佇まいはまるで天誅か大罪

か。儚くも猛るその姿は、まるで今の遊良の姿のようでもあって。

『あ…こ、これは…』

―目を奪われ、声を出せない。麗しき孤高の存在に見惚れていて、言葉を失っている実況と観客達。

しかし、そんな彼らの心など遊良には関係の無いこと。

絶対に、やられるわけにはいかない。他のどの堕天使でも触れただけで消し飛ばされてしまうのなら、遊良の残されたのは己の持てる最大の切り札だけなのだ。

―主の身を守るために、その姿を降臨させるのみ。

【堕天使ルシフェル】レベル11
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「出たか！そのモンスターが！」
「【堕天使ルシフェル】のモンスター効果！アドバンス召喚成功時、デッキから【堕天使テスカトリポカ】を、守備表示で特殊召喚！」

―！

【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００

「構うものか！【ダーク・リベリオン】よ、ルシフェルを断ち切れぇ！」

しかし、誰もが目を奪われた堕天の王の降臨にも、続けて呼び出された悪魔のような堕天使の登場にも、鷹矢はまるで意に介さず。

―勝利を、確実な勝利を。

己の全力、やっと得た『切り札』を駆使して、ただソコを目指すだけなのだから。

「斬魔黒刃、ニルヴァー・ストライク！」

―！

「ぐぁぁぁぁぁぁ!?」

遊良　ＬＰ：２０００→５０

しかし、己の切り札である堕天の王の力を持ってしても…一太刀の許しもなく【黒翼】の牙がルシフェルを貫いて。

そう、いくら神に背く存在であろうとも、同じく神に歯向かう竜が、先ほど【堕天使】の力の半分を取り込んだのだ。

さらに纏った【Ｎｏ．】の鎧で底上げされた、他の追随を許さぬ圧倒的な攻撃力の前では…背徳を統べる堕天使の抵抗すら無に等しいのだろうか。

―それだけではない。

「ぐはっ…い、痛みが…な、何で…」

今まで遊良がルシフェルを召喚したデュエルにおいて、相打ちでは感じなかった痛みが遊良を襲っていた。

これは、ルシフェルがやられたことによるモノなのか…それとも何か別の原因によるものなのか…それを今の遊良に知る権利はなく。

「テスカトリポカが残ったか。しかし、お前のＬＰは残り５０…堕天使の効果はもう使えず、切り札を失い伏せカードも無い…うむ！どうだ遊良！」

言う事を聞かなかった【黒翼】の片翼を操り、その才能に任せることが多かった実力も『壁』を超えたことで確かなモノとなっているのか…

そう言葉を発する鷹矢の姿は、まるで小さい頃にお互いに競い合ってデュエルし、そうして競り勝った後の様でもあって。

誇らしげに、かつ大胆に。

「俺の全力！俺の本気！俺の培ってきた全てをぶつけて！遊良…俺はお前に勝ってみせるぞ！」

先に『壁』を超えたが故に、未だ足踏みしている己の『片割れ』へと向かって、その言葉を紡ぐのみ。

「どうする遊良！お前がこの程度なのか、それともまだ喰らいつくの

を諦めないのか！そのドローで、答えを見せてみろ！ターンエンド！」

鷹矢　ＬＰ：２５００
手札：４→１枚
場：【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】
魔法・罠：【Ｎｏ．８０　狂装覇王ラプソディ・イン・バーサーク】
（装備状態）

「はぁ…はぁ……げほっ…」

手が止まり、デッキに向かわせるべきその手が伸びず…その謎の痛みからか、遊良のその意識が一瞬飛びかけて。

ルシフェルが一瞬で吹き飛ばされたのが幸か不幸か…ジワジワと襲い来る痛みでなく、瞬間的に突き抜けるような痛みであったために、まだ何とか立っていられるのだろうか。

それでも、数秒の間呼吸が止まってしまったのは確か。観客席の轟きと、決闘市内の興奮と…目の前の片割れに見られているにも関わらず、今にもその膝が揺れて付いてしまいそうなくらいに、今の遊良の足には力が抜けていきそうであって。

彼の目の前で吼える黒翼牙竜の威嚇が容赦なく遊良に遅ってきているし、勝敗が決したかのような戦況は、既に鷹矢を勝者として称えているかのよう…

ーこのままでは、喰らいつけない。引き離されて、見えなくなる。

認めたくない感情、今までずっと隣に居た相棒が、己の手の届かな

い場所へと行ってしまうことが、遊良は怖い。
それを隠すために強がって、負けず嫌いと言われようとも、諦めが悪いと言われようとも…何かを『失う』怖さは、もう二度と味わいたくない、彼の『弱さ』。

―それでも…

「…ゲホッ…俺の、知らないカードを創り…先生のカードまで…操って…本当に…お前が羨ましいよ、鷹矢…」
「…む？」

息も絶え絶えで、足元もおぼつかない立ち方だというのに…目の前に立つ強き相手へと声をかける遊良。

それは、心からの賛辞。今まで絶対に述べなかった『相棒』への羨みと…その類稀なる才能への嫉妬とも言えるのか。

この歓声の嵐が、何よりもの証拠。誰からも認められ、師からも認められ…

およそ、自分が欲しがったモノの全てを、望まずとも手に入れている鷹矢へと感じる、確かな羨望。

この絶望的とも言える戦況で、思わず彼の口からそんな言葉が漏れ出てくるのは仕方のないこと。こんな時でもなければ、絶対にこんな事を遊良は言わないだろうから。

「遊良…お前…」
「…でも…俺は、負けたくない！お前に負けても悔いは無くたって…だからって負けていいわけじゃ絶対にないんだ！俺は…俺は！」

―負ければ、終わり。

その存在が『否定』される恐怖は、遊良とてもう二度と味わいたくは絶対に無く。

己の『弱さ』を吐き出し、声にして届けて。

今このステージに立って、こんな歓声を浴びて戦いを行えているのだって、遊良にとっては一種の奇跡。
遊良が決して生きることを諦めなかったからこそ、戦うことを止めなかったからこその彼の軌跡。

誰に何を言われようとも、自分のために戦っていいと理解出来ているとは言え…皆が持っている『当たり前』を持っていない遊良に対して、手を差し伸べてくれるほど世界は優しく出来ていないのだ。

―だから、戦う。

赤の他人からの『肯定』を勝ち取るためには、勝つしかないのだから。

―まだ、デュエルを諦めたくは無い。

「Ｅｘ適正なんか無くたって、俺の存在を否定させないために！俺は！お前に勝ちたい！先に行ったお前に！俺は！」

痛みを放り投げ、意識を結んで。
声を張り上げ、自分を奮って。

その手を自身のデッキへ伸ばし、ドローを行わんとしている姿は…誰もが見向きもしなかったあの『落ち零れ』などでは断じて無く。
この選ばれた者しか立てぬ舞台、輝かしいステージの上で争う彼ら2人の戦いは、決して偽物などと罵られることは無いだろう。

―『弱さ』を認めて、『覚悟』とする。自分の『弱さ』も『強さ』に変える。

都合よく『何か』が起こることを、期待する程度ならば所詮はここまで。何かを変えたければ、自分自身でその壁を越えるしかなく。

「鷹矢…これが、このドローが！俺とお前の最後のバトルだ！」
「うむ！」

おそらくこれが最後のドロー。

遊良に次のターンなど無く、かと言って切り札である【堕天使ルシフェル】も無く…堕天使の効果を使うためのＬＰもほぼ尽きていて。
形勢逆転を狙える【堕天使ゼラート】は、鷹矢が早くに警戒をして対策を取ったために最早その手は狙うことも出来ず。

最早遊良に勝ち目が無いことは、誰の目にも明らかなこと。

「行くぞ！俺の…」

それでも、遊良は最後まで己の引くカードに対しての希望は捨てない。

いや、遊良だけでは無い。デュエリスト…『決闘者』は、決して戦いを諦めてはいけないのだ。

ーその自分自身の『答え』を、絶対に『逃げ』にしないために。

自分自身の出した答えを、自分の引いたカードで現すことが出来るのは『決闘者』のみ。今遊良に迫られているのは、その『答え』を出せるか否か。

引きに『頼る』のではない、決意を持って、『引き寄せる』のでもない…

「…タァァァァァン！ドロォォォォォォォォォォォ！」

—自分を超えて、ただ『引く』のだ。

それが出来ぬようならば、『壁』など一生超えられない。『あの頃』と同じで殻に閉じこもるか、周りを羨んだまま生きていくしか未来は無く…

歴戦の決闘者にデッキが従うように。

ただ当然に、ただ当たり前に。

—今ここで、それを…『弱い自分』を打ち破るために…

―遊良は、引く。

「俺は！」

―引いた、カードは…

「【死者蘇生】発動！」

「なっ!?」

…これが、遊良の辿り着いた決意の現れ。

自分・相手問わず、条件の揃ったあらゆるモンスターの全てを蘇らせられる魔法カードは、この世界のデュエリストならば持っていて当然の、一番の汎用カードと言えるモノであって。

「ここで…蘇生だと!?遊良！これが…お前の出した答え…だと…」

―まさかこの場面で、守りを固めるのか。

誰もが、そう思ったことだろう。

こんな苦し紛れな壁など無いも同然。鷹矢の操る強大なる【黒翼】と、その類稀なる才能と実力と…あらゆる場面に対応する多種多様な戦術をもってすれば、その程度のデュエリストなどまるで相手にすらされず。

ー天城　遊良は、『逃げ』たのだ。

そんな程度のデュエリストならば、最早勝負にもならない。決着の着いた戦いに、悲観と終了を感じて誰もが息を吐き…

「俺は【堕天使スペルビア】を蘇生し、その効果で【堕天使イシュタム】も呼び戻す！羽ばたけ！2体の堕天使よ！」

—!!

そんな中でも、決してその声を緩めることの無い遊良。その場には、幾度と無く彼の場に召喚された…

—異形の堕天使と、魅惑の堕天使

遊良のデュエルにとって、始まりはいつもこの2体で…そして何度も召喚されては、彼のデュエルを支えた存在…

しかし今の戦況では、鷹矢にとってなんの脅威にもならない存在。

それが、誰の心にも浮かび上がる…確かな『答え』…

―そうだと、言うのに。

「ま、まさか遊良…ここで！この場で！そのデッキだというのに!?」

こんな雰囲気の中で、誰も想像できないことでも…鷹矢とルキには、確かに『わかった』ことがあった。

そう、今から遊良が、行おうとしていることを。

「何故！まさか！『最初』から持っていたと言うのか！」

遊良の残った最後の手札。それを見て、理解し、そして声を上げずにはいられない鷹矢の言葉が木霊して。

あれだけ派手に動き回って、夥しい枚数のカードを次々に入れ替えていたと言うのに。

…それは、このデュエルが始まってから、ずっと遊良の手札にあったモノ。

…それは、鷹矢とルキだからこそ理解できるモノ。

…ここで見ている誰も、『知らない』なりし『覚えていない』…または『忘れている』モノ。

―しかし、彼ら幼馴染２人は絶対に忘れることなどありえないモ

ノ。

それを、大多数の一人に埋もれた少女が見て…

その目に、涙を浮かべて…

「…あ…た、鷹矢の言うとおりじゃん…遊良、本当に…」

最後の最後だというのに、不意に少女の目に溢れる涙。

そう、かつて自分の命を救ってくれた、あの強かった少年は…鷹矢の言っていた通り『消えて』などいなかったのだ。

誰もわからぬ、誰も思い浮かばぬ…しかし彼女には絶対に理解できること。

「…どこも…変わってなかったんだ…」

自分の悲観も不安も、全て取り越し苦労だったというのか。あの…負けず嫌いで諦めの悪い、常に皆の中心に居た、あの『強い』遊良は、『最初』から居なくなってはいなかった。

—あの、『遊良』ならば…

—今、遊良の場には、『モンスターが三体』

―そう、常に遊良を支えてきたのは、何も【堕天使】だけではない。

もっと古くから、もっと昔から。

ずっと遊良と共にあった、この1体のモンスターを。

―『このモンスター』だけは…絶対に、遊良を裏切らない

「俺は3体の堕天使をリリース！」

歓声が木霊するセントラル・スタジアム、興奮が渦巻く異質なステージ。

その異様な空間となっている『ここ』であっても、それは猛々しく吼えるのみ。

―震える大気、獣の咆哮と共に…

―それは、現れるのだから。

「【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

「なん…だと…」

勝ったと思った…確実に勝ったと思った。
遊良のＬＰは残り５０で、形勢逆転の目も潰して。この強大なる力を纏った自身の『砦』となった象徴を、今の遊良では突破することは叶わぬと確信していて、次のターンで確実に決着となるはずだったのに。

―消えていない、死んでいない、何度否定されても諦めない。
遊良を体現してきた確かなカード。どんな時でも彼と共にあった、強き者。

「俺が『壁』を超えるためには…【堕天使】達に頼るだけじゃ駄目だったんだ！俺の！俺自身の力じゃないと！ここから先には絶対に行けないってわかったんだよ！だからこそ、俺は！俺の原点で鷹矢、お前

を超えたい！」
「ぐっ！お、おのれぇぇぇぇぇ！」
『なぁあ!?ここで！この場面で天城選手っ！まさかの【堕天使】では無いモンスターを召喚したぁぁぁあ!?』
―ここで、この場で、この戦いで。
そう、【堕天使】と何のシナジーもない、この【神獣王バルバロス】が飛び出てくることなど、一体誰が想像できようか。
「こいつの効果は…教えるまでもない！わかってるだろ、鷹矢ぁ！」
そう、遊良のために進撃を行う【堕天使】の力は、確かに遊良に必要で…【堕天使】がいなければ、きっと遊良はここまで到達すら出来ていなかっただろう。
―だからこそ、彼らに支えられるだけでは駄目。
自分に仕える堕天使に、甘えたままでは到れない。甘えたままターンを迎えていた所で、起死回生のカードなど引けるはずも無く。
そこから更に超えるために…遊良には、このモンスターの存在が絶対に必要だったのだ。
絶対に自分を裏切らない、最初からの相棒と共に…その『壁』を、超える時のために。
―それは、今

「バルバロスの効果発動！3体のリリースでアドバンス召喚した時！相手の場のカードを…全て破壊する！」
「ぬぅ!?」
「やれぇ！バルバロス！」

―！

その槍を地面へと突き刺し、そこから放たれる凄まじい衝撃波がフィールド全体を包み込んで。
先ほどのヴェルズ・ビュートとは比べ物にならないほどの、かつて遊良が最も得意としていたこの『破壊』の光景を…もう、何度この衝撃波を鷹矢は喰らってきたというのか。
幼少の頃から…修行時代も…果ては遊良が【堕天使】を得る直前まで。
そう、鷹矢にとっては【堕天使】を操る遊良よりも、【バルバロス】を操る遊良の方がしっくり来る程に見慣れた、戦いなれたモンスターに違いない。
―『折角手に入れたんだ、このまま【堕天使】で行くのだろう?』
そうだと言うのに…遊良が【堕天使】を得た時に、鷹矢が自分で遊良に『そう言った』ことで、まさか『このカード』のことを考えから外していたなんて。
常に遊良と共にあった、この【神獣王バルバロス】のことを選択肢から外していただなんて…そんな思いが鷹矢を飲み込んでいるのか。

『が、がら空き！天宮寺選手の場ががら空きに！【黒翼】も！新たなエクシーズモンスターも！な、何もなくなってしまったぁ！』

その一掃された場、【神獣王バルバロス】以外には、何も存在しなくなってしまったこの光景に、信じられないモノを見ているかのような観客達と実況の声がセントラル・スタジアムに反響し続け…

―まるで、誰もがこの事実を飲み込め切れていないよう。

まさか、たった一枚の『Ｅｘモンスターでないモンスター』によって、この光景が形作られるだなんて。

しかし、現実。誰の目にも明らかな『現実』の光景。

そう、遊良にとっては、コレしかないのだ。Ｅｘ適正の無い自分に出来る、Ｅｘモンスターすら圧倒するような『有り余る武器』を。

「バトルだ！【神獣王バルバロス】！」

―駆け、猛る

獣の王がその足で、ずっと一緒に戦ってきた相棒のために。

「鷹矢に……ダイレクトアタック！」

―狙い、爆ぜる

昔と同じ。常に競い合ってきた相棒の片割れを、その槍を持って降すために。

何度蔑まれようとも、何度嘲笑われようとも。

何度馬鹿にされても、何度見下されても。

そんな世界の『決まり』など、絶対に認めてやらないと言わんばかりの相棒の…

反逆の為に…

―それは、響く

「天柱の崩壊！ディナイアー・ブレイカァァアッ！」

―!!!!!!!

「ぐっ…ゆうらぁぁぁ

―ピー…

…

誰もが、口を開けていた。

無機質に鳴り響く機械音は、デュエル終了を告げる全世界共通の合図。

それは、確かに『勝者』と『敗者』を分ける、絶対不変の決まりの『音』。

誰でも知っている、子供でも知っている。ソレが鳴り響くとき、『命』が残っている方が、『決闘』の勝者ということを。

それを知っていてもなお、誰も信じられてはいなかった。

ー今、彼らの目の前にいる…その、『勝者』とは…

『な……ななななんとおおおおおおおおおおお！ついに決まったぁぁぁぁぁぁ！』

忘れているように、思い出したように。その『感情』を爆発させて、全ての人間を現実へと引き戻すは実況の声。

この勝敗は、きっと見ている誰にも思い浮かべることすら出来なかったモノだろう。

Ｅｘ適正を持たず、準決勝でも実質的に負けていて…

デュエルが始まる直前までは、いやデュエルの最中だって、【黒翼】の孫である天宮寺　鷹矢の方が佇まいは間違いなく勝者に近いものだったと言うのに。

『誰が予想した!?この展開を！誰が想像できた!?この男を！世界にただ一人！『Ｅｘ適正』を持たないこの男がっ！』

世界中探したって見つかるはずが無い、『Ｅｘ適正』を持たないたった一人の人間。およそデュエリストになることなど出来ず、また誰にも認められることなど無いであろうと思われていた…

よもやそんな『出来損ない』のレッテルを貼られて…あらゆる他人に、どうしようもないくらい惨めな人間だと思われていたこの男が。

『【決闘祭】の頂点に立つことなど！一体誰が思い浮かべられたぁぁぁぁぁぁ！』

―――――――

セントラル・スタジアムその物を壊してしまいそうなくらいに轟くその音は、確かに彼を包んでいて。

…嫉妬、悲観、否定、侮辱

そんな言葉も少数あれど、それを掻き消す勢いで弾けているのは、間違いなく『それ以外』の感情に違いない。

―称賛、羨望、興奮、喝采

勝者を褒め称え、戦い抜いた選手へと…『決闘者』へと送られる、この戦いへの素直な感情。

これを見て、この戦いを見て…それでも彼らを否定しているような人間は、デュエリストからかけ離れた、低俗な存在だと知らしめているかのようでもあって。

拍手喝采、一唱三嘆

誰に何を言われ、その存在を否定されてたにも関わらず…

勇猛果敢に戦い抜いた少年へと向ける、確かな『肯定』の嵐がいつまでも彼を証明していて。

―強き者を、決闘市は望む

それは…例えどんな決闘者であっても。

『【決闘祭】！優勝はぁぁぁぁぁっ！激しい戦いを勝ち抜き！その頂点に立ったのはぁぁぁぁ！』

文句のつけようが無い決着の証明は、無機質な機械音が勝者を称えるファンファーレとなりて…どこまでも高らかに鳴り響く。

ソルがいつまでも彼を包み、その功績は決して嘘ではないと、彼自身が見せ付けたのだ。

【決闘祭】・決勝戦…

―優勝は…

『イースト校いちねぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！天城いいいいいいいいいい！遊良選手だぁぁぁぁぁ

⋮

ｅｐ３５「決闘祭、閉幕」

未だ大歓声が鳴り止まぬセントラル・スタジアム。

歓声の爆発が立て続けに起こり、到底すぐには収まる事の無いだろう喧騒が荒ぶりとなりて、このセントラル・スタジアムを壊さんとする勢いで鳴り響いていた。

たった今勝敗の決した、今年最大、最後の祭典…

―【決闘祭】、その決勝で

Ｅｘ適正を持たない、『あの』天城　遊良が…まさか世界に名だたる【黒翼】の孫を打ち破って優勝を飾るということなど、一体誰が想像できたのだろうか。

誰も、信じられていなくて…しかし誰もが目の当たりにして。それを信じるしかないと言わんばかりに。

今、彼らの胸から飛び出ている、この押さえきれない『興奮』がその証拠。

自分の目で見て、そして見せ付けられた。自分達が見下して、自分達が蔑んでいたその少年の戦いが『偽物』ではなく、認めるしかない『本物』だということを。

「カッカッカッカッカッ！あのガキ共、笑わせてくれるぜ！」

その中で、他の群集からは切り離された特別展望席…世界に名だたる【王者】達が集まった席にて、特徴的な渇いた笑いが響き渡った。

その声は楽しげに、かつ嬉しげな様子。その戦いは、彼らの師から

見てもその『成長』を感じさせるには十分だったのだろう。
己の弟子、それも手間をかけて鍛えた孫と、手塩にかけて育てた少年。その二人がこの盛大な舞台に立ち、お互いが己の限界を超え続けて魅せた戦いに、師として嬉しくならないはずが無いのだから。

「順調順調、この調子で上って来りゃ、いずれ俺様の相手になる日も来っかもなぁ。」
「フフ、鷹峰さんの孫と、Ｅｘ適正を持たない『決闘者』…なるほど、確かに余興とするならこれほど面白かったことは無い。流石は鷹峰さんの弟子と言ったところでしょうか。」
「カカッ、時間かけて鍛えてやった甲斐があるってもんだ。…ったくよぉ。」

そんな師の脳裏に映るのは、幼い頃の彼らなのか。
本来ならば、弟子など取るつもりなど無かった鷹峰。それが例え『孫』であっても、いくら自分の息子の親友の子供であっても…そんなことは自分と何の関係も無く、また面倒事だけが増えるような天城遊良を引き取って鍛えるという思考が生まれたことだって、鷹峰にとっては一種の奇跡であって。
無論、弟子に取ってもいいと言う『きっかけ』がありはしたのだが…それでも、手塩にかけて鍛えた二人の弟子が、大歓声の中で賞賛されている光景を見せられていて、不愉快に感じるわけも無く。

「…いやいや、ジイさんの【黒翼】思いっきり吹き飛ばされてたじゃん。それに関してはいいわけ？」

しかし、その姿を他人が見れば、疑問を感じずには居られない様子に違いないことなのか。
そう、傍から見れば…鷹峰自身の名、【黒翼】を関するモンスターを弾き飛ばされ、さらにそのまま孫が負けたというのに…それを悔やむ素振りなど見せず、むしろ珍しく機嫌を良くしているのだから。

「あぁん？カカッ、生意気なクソガキ程度じゃあ、まだまだ俺様のカードを使いこなすのは無理ってこった。精々鍛え直してやんねーとなぁ。」
「ふーん、まぁ、Ｅｘ適正無いってのに、あの天城ってガキンチョも中々やるじゃんね。」
「カッカッカ、あのビービー泣いてたガキが…随分とまぁ、大層な場所まで来たもんだ。」
「フォフォッ、良きかな良きかな、本当にいい勝負じゃった。少年達の成長は目に見えるほどに著しいことじゃわい。」

遥か高みに位置する【王者】達の視線も、たった今決着となったスタジアムへと注がれていて…
その心に浮かぶのは各々異なったモノであるとは言え、戦い抜いた少年達に向けられているのは、『退屈』でも『無関心』でもなく。『実力』と言う点ではまだまだ及ばなくても、これほど観客を沸かせた戦いは…既にプロに居る人間でも容易く起こせるモノでは無いだろう。
そんな、いつまでも鳴り止まぬセントラル・スタジアム内の喧騒を見下ろして、彼らもまたこの喧騒を、いつまでもその耳に入れていた。

「ところでさ、紫魔っちどこいったの？」
「さぁな。興味ねぇ。」

――…

「…よし、じゃあ説明してもらおうか。」

「む…むぅ…」

観客たちの喧騒から解き放たれ、自身の控え室にまで戻ってきた遊良は、そのまま休む間もなく反対の通路にある鷹矢の控え室まで大急ぎで飛び込んで、事の顛末を聞きだそうと詰め寄っていた。

たった今戦いを終えたばかりだというのに…いや、戦いを終えたばかりだからこそ、うやむやになる前に話をつけておきたかったのだろう。

―椅子に座ったままの鷹矢を見下ろすように、また有無を言わせぬように。

そう、己の『壁』を越え、鷹矢にギリギリで競り勝ったとは言え…先ほどの戦いで鷹矢が言ったことを、遊良は決して忘れてはいないのだから。

「…泉先輩の事と、さっきの『闇』の事。ちゃんと白状してもらうからな。」

「…いや、あれはだな…その、アレだ…何と言うかだな…」

「誤魔化したら今後一切、お前の飯は作らねーからな。」

「あの『闇』はルードで得たのだ。お前とはぐれた後、別の『飲まれた奴』にまた襲われたのだが、速攻で倒した。その直後に噴出した『闇』を、偶々間違えて持ってきたこのデュエルディスクに入っていた『白紙のカード』が、『闇』を吸い込んだのが知ったきっかけなのだ。」

そんな、遊良に最大級の『脅し』をかけられた瞬間、先ほど口ごもったのが嘘のように流暢に話し始める鷹矢。

その様子は、鷹矢の扱い方を、この世の誰よりも理解している遊良だからこそ…鷹矢の誤魔化しも隠蔽も無駄だというコトを、強く彼に訴えているようでもあって。

そう、鷹矢にとって遊良の飯が出てこなくなる事は、何よりも恐る

べきことなのだ。
【決闘祭】の1回戦の日に、実際に飯抜きを経験したからこそ、その恐ろしさは身に染みて理解していて。

―『おいクソガキ、お前さん、遊良に負けたくねーんだろ？』
―『うむ。』
―『じゃあソイツに飲まれない様に精々鍛えるこった。そうすりゃあ、遊良が得たモンに劣らねーモンが手に入るだろうからよぉ。』

「お前はヘリに乗った瞬間にすぐ寝てしまっただろう？あの後ジジイにすぐバレた。それでジジイに言われるまま、夏休みの間『闇』を集めていたのだ。」
「先生も…『闇』のことを…って言うか、今はどうなんだよ？」
「む？集めていた『闇』は全てこのカードで吸い込んだせいか、今の俺には微塵も『闇』は残っておらん。暴れることも無く、【Ｎｏ．】に変わってしまっているようだ。まぁ、『白紙のカード』や【Ｎｏ．】のことは俺だってよく分からん。」
「…本当に、世界で始めて創造されたカードってことか…」

この世界で、誰も知らぬカードが創造されることは稀にあることからか、その特異な【Ｎｏ．】と言う括りにも、特に驚きを感じていないとは言え…
それでも、あの危険な『闇』が『白紙のカード』に吸い込まれ、こうして新たなカードが創られたという事実は確かなモノ。
鷹矢自身にだってその正体が分からぬのなら、今ここで考察を張り巡らせた所で無駄なのか…
「まぁいいや。俺の【堕天使】も似たようなモンだしさ…よし、じゃあ本題だけど。」
そう思い至った遊良は、再度鷹矢へと向き直ると、最も聞きたかっ

たことを白状させるべく、その口を開いた。

「…で？一番大事なことは？」

「む？あぁ、今日の晩飯は豪勢に寿司がいいんだが…」

「…あ？」

「…冗談だ。」

ここで下手な冗談を言う余裕が鷹矢にあったことに、遊良とていつもなら呆れるしかないのだが…

それ以上に、今の遊良にそんなことを言ってはいけないことを、その表情と声質だけで知らしめている遊良の表情は、鷹矢にとっては怖さ意外を感じないことだろう。

有無を言わさず、嘘を許さず。

今遊良の怒りを買うことは、鷹矢にとっても芳しくないことに違いない。

「事と次第によるけど…とりあえず、すぐにでも泉先輩の病室に行って土下座させてやる。」

「む！何故だ!?何故俺が土下座など…」

「うるせぇ！先輩をあんな目にあわせやがって！未だに犯人見つかってないって先生達も騒いでるけど、犯人はお前だったんじゃねーか！」

そんな遊良の声は荒く、鷹矢を攻め立てるように捲くし立てていて。

それは当たり前だろう、幼馴染達以外で自分に『肯定』をくれた蒼人の、入院してやつれた姿を目の当たりにして…その犯人が未だ見つかっておらず、あろうことかその原因となったのが、今目の前にいるこの馬鹿なのかもしれないのだ。

「3人も被害にあってるんだ！謝って済む問題じゃねーけど、精一杯

謝り倒すしかねーだろ！俺も一緒に行って謝るから、お前も心から謝罪するんだぞ！いいな！」

いや、今の遊良の中では、十中八九その原因が鷹矢だと決めつけている様子。

遊良の言う通り、イースト校の3人の学生達が被害にあっていることは、到底本人達に謝って済む問題では無いだろう。学園にかけた迷惑や、保護者達にかけた心配…それがどこまで彼らを苦しめたのかを、考えただけでも恐ろしいというのに。

この謝ることを滅多にしないこの馬鹿と共に、それを遂行しなければいけない遊良の心情は、おそらく決勝戦以上に気を張らなくてはいけないのでは無いだろうか。

―そんな事を考えている遊良に対して、鷹矢が心の底から怪訝そうな表情を遊良に見せながら、その口を開いた。

「…いや、お前は何を言っているんだ？」

「あ？」

「俺はデュエルディスクに入れてあったあの『白紙のカード』を介して、あの3年生から『闇』を喰っただけだ。怪我などさせた覚えは無い。」

「…は？」

鷹矢の口から放たれた言葉…その言葉は、鷹矢が自分を守ろうとしている嘘…と言うわけでは断じて無く。

彼のその口調に迷いはなく、心の底からの真実を遊良に伝えているようであって。

「…だって、先輩のあの怪我は…」

「そんなことは知らん。誰が何を言おうと俺はアイツに危害など加えていないし、そもそもあの男はお前に負けて、『闇』は放出寸前だった

のだぞ?あのまま『飲まれる』か『放出』するかで苦しんでいるあの男から、『闇』だけを喰らって楽にしてやったというのに、むしろ感謝して欲しいくらいだ。」
「じゃあ…先輩は何で怪我なんて…」
「知らんものは知らん。それに虹村とその他には会っておらんし、あいつらが怪我をして運ばれたということも、俺だって他の奴らと同じタイミングで知ったのだぞ。」

その様子は、ただ単純に…遊良から聞かれたとおりにその時の真実を述べているだけのよう。
真っ直ぐに、遊良を見て。曇りの無い目で、そう訴える。

「俺はやっておらん。」
「…そうか…」

にわかには信じられないような話。きっと、他人が同じ説明を受けたところでそれをそのまま飲み込めるはずはないだろう。
しかし、遊良だからこそ、鷹矢の言葉が真実であることを直感で理解できていて。
冗談を言ったり誤魔化したりはしても、この男は絶対に自分に対して、『嘘』はつかないと言うことを…遊良は、知っているから。

「…わかった。お前がそう言うならそうなんだろ。」
「うむ。しかし、今日は負けたが、次の舞台では俺が勝つんだからな。覚えておけ。」
「ふん、次も俺が勝つんだっての。」
「む、調子に乗るな、遊良の癖に。」
「んだと、鷹矢の癖に。」

今日の決着は、彼らにとってはあくまで一つの勝ち負け。

誰のためでもない、『自分自身』のためにデュエルをすることに誇りを持った遊良と…この戦いを通して、己の才能以上の強さを持つ人間と、『本気』になることを知った鷹矢。

この勝敗一つで、彼らの実力に優劣などつけられない。まだまだ強くなれることを互いに理解しているからこそ、それがまた『次の約束』になるのだ。

これで終わらぬ決着、『次の約束』へと向けて、彼らはまた強くあろうとするのみ。

「でも、泉先輩のお見舞いには連れて行くからな、文句言っても。」

「ぬう!…何故俺が見舞いなど。正直面倒臭いのだが…」

「…あ?」

「うん、しっかり見舞ってやらんとな。」

―…

戦いの歓声とは、また違った意味合いを持った歓声がセントラル・スタジアム内に木霊して。

今年最後の、最大の戦い…激闘が繰り広げられた【決闘祭】を、最後まで戦い抜いた少年達へ送る賛辞を、誰もが盛大な『音』に変えてそれを届けようとしているよう。

―これより執り行われる【決闘祭】の、最後の舞台…その、表彰式のために。

『決闘祭、第三位!決闘学園ウエスト校3年!十文字　哲!』

燦然と輝く月光が光の柱となりて、その中心に造られた表彰台に昇る３人の学生達を賞賛しているかのごとく煌いている中で…

彼らの称えるべき功績を告げる実況の声に、観客席から多大なる歓声が上がるものの…誰もが今年最後の祭典の終わりを感じているのか、その賞賛の声の中にどこか寂しさを感じさせていて。

そう、本来ならば決勝戦の前に行われるべきだった三位決定戦は、何故か執り行われることが無く…十文字　哲の、不戦勝と言う形に終わってしまっていたのだ。

…こんな事は、【決闘祭】始まって以来の事。

例え世界のどこにいても隠れられないと言われる【決闘世界】の情報網を持ってしても、『何故か』ウエスト校３年の竜胆　大蛇を、準決勝に連れてくることが出来なかったのだ。そんな失態を【決闘世界】が公表するわけもなく…決勝戦の前に【決闘祭実行委員】によって、観客達には、一方的に竜胆　大蛇の棄権とだけ告げられていた。

決勝戦の最中にも遊良に対して、『否定』の言葉が多少なりとも上がった裏には…この発表も関係があったのではないだろうか。

（大蛇…）

そんな、友が戦いの場に現れなかったことに対して、彼は何を思うのだろう。

観客たちの目があるためか、あくまで堂々とその台に昇る彼の姿は堂に入っているとは言え…昨年、その頂点に立ったこの男が、２段も下にいる光景が観客達には違和感を感じていても仕方がないのか。

そんな光景の中で…

『【決闘祭】、準優勝！決闘学園イースト校1年！天宮寺　鷹矢！』

――

観客達の声も、その直後に聞こえてきた名前で先ほどまでの雰囲気が吹き飛んで。

そう、昨年度の優勝者に、真正面から勝利したこの男…世界に名だたる王者【黒翼】の、その孫。有り余る才能をデュエルの中で進化させてきた戦いぶりは、その未来の展望を感じさせてもおかしくは無く…

誰もが、堂々と台に昇る彼を称えていた。

「十文字　哲。貴様はプロに行くのだろう？」

「あぁ。そのつもりだ。」

表彰台の、哲よりも一段高い場所に昇って…一つ下に立つ哲に向かって、そう口を開いた鷹矢。

そんな彼の口調は、哲よりも一つ上に立っているとは言え、決して哲を見下しているとか、自分の方が強かったとか、そんな驕りのような声質では断じて無く。

どこか悔しそうなモノすら感じるような口ぶりで、声を止めずに話しかける。

「ならば待っていろ。2年したら俺も『そこ』へ行く。その時は今度こそ、俺自身の力だけで貴様に勝ってみせる。」

「…そうか、ならば期待して待っていてやる。」

「うむ。」

そう、確かに一発勝負では鷹矢が勝った。

しかし、精神の強さや経験、果ては培った『実力』自体で比べれば、

鷹矢が全て哲に勝っているとは言いがたいことを、鷹矢自身も理解していて。

『闇』の底上げと、祖父が好んで使う『ＲＲ』…そして何より哲とのデュエルは、一種の指導を受けていたと鷹矢は感じているのか。

『壁』を超える『きっかけ』を掴めずに燻っていて、遊良との『約束』以外にはどこか冷めていた鷹矢を鼓舞する、強者からの『教示』…それが！！！

言葉が続かず、視線が泳いで。

…人、人、人。

人の海と、止まぬ歓声。『否定』の罵倒とは違う、『肯定』の賛辞。

こんな光景を夢見てきて、しかし自分には届かぬ景色なのだと、どこか諦めた時期もあっただろう。

しかし、それでも諦めずに戦い続け…そうして、自らの手で勝ち取った紛れもない『本物』の景色。彼の戦いを見せ付けられて、『偽物』では無いと信じるしかない周囲から送られる、賞賛の嵐。

こんな渦中に放り込まれて、遊良に何も感じるなと言うほうが無理な話か。先ほどまでの、戦いの顔でもなく…鷹矢に向けていた真意を問う顔でもなく…

―感極まった、嬉々の表情。

誰かに与えられたモノではない。自らの戦いでそれを勝ち取ったのだ。それが、嬉しくならないはずがない。師の引退も、自身の退学も、これで無効。この歓声が、何よりもそれを認めてくれているのだから。

―そんな彼に対して、向けられている視線が一つ。

「ぐ…」

イースト校理事長、砺波　浜臣。

苦い顔をし、怒りを漏らし…絶対に認めたくは無い、『Ｅｘデッキを使わぬデュエル』が…よもやこの輝かしい【決闘祭】の頂点を取り、まさかソレが大勢の観客達も認めているだなんて。

「ぐぐ…あああ！不愉快だ！心の底から不愉快だ！」

――！

椅子を蹴り飛ばし、部屋を荒らして。

決闘学園の理事長達専用の特別展望席に、他の人間が居ないことを良い事に…その怒りの矛先を物にぶつけて発散しにかかるイースト校理事長、砺波　浜臣。

いくら会場内を探しても目当ての少女は見つからず、挙句の果てにさっさと退学を突きつけてやるつもりだった天城　遊良が【決闘祭】の優勝を飾ったのだ。

そんな光景を見せられて、彼の中に燻っている『憤慨』が冷めることなどあるわけがなく。

「天城が優勝だと！こんな馬鹿な話があるか！鷹峰の孫もあの程度だと！一体何をやっていると言うんだ！」

自分が理事長を勤めるイースト校から優勝者と準優勝者が出たという、この上なく名誉な結果を少年達に与えられたというのに…

それが、誰のせいでもない、自分勝手な怒りではあるものの、その怒りの責任を放棄し、勇猛果敢に戦い抜いた少年達にソレを転嫁して自分の心を保とうとしているのだろう。

これほど神経を逆撫でされた経験も無ければ、何故か胸の内に沸き起こる『憤慨』が彼を飲み込んで。

「こんなことならっ！」

―！

「あの時無理やりにでもっ！」

―！

「天城を退学させておくべきだったっ！」

―！

今にもこの特別展望席を、木っ端微塵にしてしまいそうな覇気が部屋の中に充満し…それを抑えるつもりも無いまま暴れまわる砺波。

確かに不愉快な生徒だった。自分が敗北した釈迦堂　ランと同じ、『Ｅｘデッキ』を『使わない』デュエル…それを見るたびに釈迦堂から受けた屈辱を思い出してしまうのだから、本当に早く自分の学園から追い出したかったのにと、そう言わんばかりの形相をして。

…『使わない』と、『使えない』の違いにすら、目を向けることを彼はせず。

この後、【決闘祭】を戦い抜いて表彰台へと上がった３名を称えるパーティがあるというのに、それに出席するつもりも無ければ、今天城の顔を見れば殴りかかってしまいそうな怒りに囚われたまま、したいがままに部屋の中で暴れまわっていた…

―そんな時だった。

「ホホ、いい怒りですわ。」

「誰だっ!?」

不意に、部屋の入り口から放たれた声に反応し、瞬間的に振り向く砺波。

他の誰も近づかぬ、近づくことを許されぬ理事長専用席だというのに…他3校の理事長も居らず、他人の声が聞こえてくることなど決して無いこの席に、突如放たれた声に対して驚愕を隠せていないよう。

振り向いた、ソコには…

「ホホホ、ごきげんよう、砺波理事長。」

―紫魔　ヒイラギ

二回戦で同じイースト校の天宮寺　鷹矢に負け、そのまま【決闘祭】から姿を消したはずの紫魔姓の女生徒。

よもや砺波にとっても、天宮寺　鷹矢と同じブロックではなく、天城　遊良と同じブロックに入ればよかったのにと対戦カードを見たときには思ったことだろう。

そんな、この時に顔を見るまでその存在を忘れていた彼女が…裏で何をやっていたかなど、砺波は知るわけもなく。

「紫魔さん…あなたが、なぜここに?」

「憤慨、恐怖、絶望、敗北…そのどれもが、人の心に巣食う『負の感情』…天城　遊良を決勝へと進めれば、それだけであなたは、飲み込まれるだけの『怒り』を出してくれるだろうと思っていました。」

「一体、何を言って…」

天城の決勝戦と、この女生徒と、一体何の関係があるというのだろうか。

そんなヒイラギが羅列する意味不明な言葉を、怒りが湧き起こっている砺波の頭ではソレを処理しきれず。

静かに紡がれる彼女の言葉を、ただ聞くことしか出来ぬように、砺波はその場に立ち尽くしている。
そんな彼を見て、ヒイラギは止めることなくその口を開き続けるのみ。

「まぁ、優勝までするなんて、こちらも思っていませんでしたが…どうでもいいですわ、これで『最後のプラン』もようやく終了できます。さぁ…頂きますわよ…」

そして、彼女が声を止めずに、ゆっくりとその足を一歩後ろに下げて…その背後に、もう一人の人影が見えたと思った…

―その時だった。

「…最後の一人、王者【白鯨】を！」

―！

「がっ!?こ、これは!?…ぐっ！ぐぶぅ!?」

突如、彼の足元から吹き出る『闇』。
どこからとも無く噴出し、その勢いのまま天井へとぶつかり…誰も近づかぬこの理事長席に充満すると、誰の目も表彰式に向いていることから、その部屋の変化に気が付く人間も居らず。
苦しそうに悶え、そのまま『闇』に持ち上げられて宙に浮き…より一層の苦痛が彼を襲って、今にも彼の意識を断ち切ろうと締め上げて。
それが砺波を縛り上げ、彼の内部…果ては精神にまで入り込んでこようと暴れまわっているのだろうか。

「ホホホ…怒りに囚われているとは言え、元【王者】ともなればその精神は計り知れません。」
「ガ…これ…は…り、李の言っていた……ガが…」
「所詮、私達程度ではあなたに跳ね返されてお終い…ですが、同じ【王者】クラスならば、例えあなたと言えども抗うことは出来ない…」

意識を断ち切ろうと暴れ回り、精神を乗っ取ろうと飲み込みにかかる。
薄れ行く意識の中で、確かに思い出すのは…ウエスト校理事長、李木蓮の言っていた、『黒い靄』の話。
それに必死になって抵抗する砺波ではあっても、まったく容赦のない暴れっぷりと、先ほどまで彼が沸きあがらせていた『憤慨』が増長し、自分でもどうしようもない『負の感情』が彼を包み込み始めて。

「グァ…ワ、私ハ…」

剥きだす本能、欲望の解放。

破壊衝動や蹂躙欲求と言った、およそ『理性』という強靭な防壁に守られているモノが、止めどなくその脳裏に溢れてきているのを、飲み込まれている人間は感じずにはいられないことだろう。
ボンヤリとしてきた意識の中で、この『闇』が見せる映像は…復讐を誓った釈迦堂　ランの憎むべき顔と、それに連なって浮かび上がってくる…

―天城　遊良の顔。

消え行く意識の中で、一体いつから釈迦堂と天城を同列に『敵』だと認識していたのかすら『忘れて』しまった砺波には…復讐の相手である釈迦堂はともかく、いつからか感じていた天城への『憤慨』の理由すら思い出すことはなく。

「ガ…」

―静かに、その意識を手放した。

「ホホ、これで目的は達しましたわね。」
「…」
「えぇ。これで全ての『プラン』が終わりましたもの。…しかし、流石は元王者【白鯨】…これだけの純度の『闇』をその身一つに収めてしまう器は賞賛に値しますわ。『…様』で無ければ、決して【白鯨】を飲み込むことなど叶わなかったでしょう。」

静かに、締め上げていた『闇』に離されて、冷たい床へと倒れこんでしまった砺波。
部屋の中にあった『闇』が、そのまま砺波の体内へと吸い込まれていって。あれだけ部屋の内部を満たしていたこの純度の高い『悪意の根源』が、たった一人の男に納まったという事実は…ヒイラギにとっても、『敵』に回らずに済んでよかったのだろうか。
静かに倒れている砺波を見て、やっと一段落が着いたように…

「…しかし、やっとここまで来ましたわ。」
「…」
「はい、わかっております。あとは『邪魔者』を他所へ追いやり次第…『実行』いたしましょう。私達の、悲願のために。」

ヒイラギがそう呟いた瞬間、その『返答』に満足したかのような雰囲気だけを彼女に伝えて、彼女の背後に居た人物の姿が消え去って…
ソレと同時に倒れこんでいる砺波を『闇』が包むと、その場から大

きな気配が二つ消えてしまった。

—そこに残されたのは、ヒイラギ一人。

「…はぁ、とうとう始めるのですね。本当に…面倒ですわ…」

消え入るような声でそう呟いた声は、決して誰にも聞かれることは無く。

理事長席の下で沸き起こっているこの歓声に包まれたまま…彼女もまた、これから起こるであろう惨状を思い浮かべながら…『何か』の感情のまま、その部屋を後にしていった…

—…

ｅｐ３６「年が、明けて」

冷たい風が吹き荒び、静かな街の中を抜けていく。

その風の音を聞くだけで、どこか心身が洗われるような、どこか体中の空気が入れ替えられていくような、誰もがそんな気持ちになるだろう。

年末に行われた、激闘が繰り広げられた【決闘祭】の興奮も冷めやらぬ中…

―年が明け、決闘市中の住人の全てが心機一転の中、新年を迎えていた。

微かにざわめきを感じさせる街並ではあるものの、前の年を終えた寂しさか、それとも新たな年に入った実感が無いのか。

どこか例年と比べても『静かな』決闘市。それが『意図的』に引き起こされている静寂なのか、または昨年末の【決闘祭】、その結果に対する驚愕が未だ残っているのか…

その中で、ソレに対して疑問を抱く人間は居らず。誰もが、昨年の年明けと同じような気持ちでいる様子を見せていた…

―…

「遊良、よく来たな。ご苦労さん。」

普通の人間ならば緊張に飲み込まれてしまいそうな、そんな『巨大』と言う表現が似合う御屋敷でのこと。

決闘市の中でも、これほど豪華な屋敷は他を探しても『紫魔本家』を除いて見つけることは難しいであろう、その大きな屋敷の玄関で、遊

良の目の前に立つ『鷹矢に似た』…いや『鷹峰に似た大人』が、全く慄いている様子を見せない遊良に向かってそう言った。

「おじさん、久しぶり。」

「全くだ。夏休みに帰ってこいって言ったのに、一向に来やしないんだからな、お前たちは。」

「ごめんごめん、鷹矢が帰らないのに俺だけ行くのも悪いしさ。」

そう、この豪華絢爛な屋敷は遊良からしてみれば、今となっては最早自分の『実家』よりも見慣れた家に違いない。

決闘市が世界に誇る、超巨大な一族からなる融合名家『紫魔家』に、人数的な面では圧倒的に及ばないものの…その功績や有名度合いで言えば、『紫魔本家』に並ぶとも劣らない、エクシーズ名家の筆頭。

その屋敷の玄関に掲げられている表札には、『天宮寺』の文字。

―『天宮寺家』の、その本家。

幼少期の遊良にとっては、下手な遊び場よりも遊び慣れた場所。修行時代も師に連れられて時々来ていた場所。

また遊良の前に立つこの鷹矢の父…当主の留守を長く預かる『天宮寺　正鷹』も、遊良の父母とは唯一無二の親友であることから、遊良も昔から何度も顔を合わせている人物であって。

そんな遊良と話している正鷹に向かって、遊良の隣に立つ『ふて腐れた』雰囲気を出している鷹矢が口を開いた。

「むぅ…遊良の御節料理をまだ食っていないのに、なぜ実家に帰らねばならんのだ。」

「おい馬鹿息子、お前は正月くらい文句言わずに帰って来い。いつもいつも駄々こねて帰ろうとしないくせに。」

「ふん、こんな所に居るよりマシだ。息苦しくてたまらん。」

「今日位は我慢しろ。お前の【決闘祭】準優勝の祝勝会も兼ねてるって

言っただろ。」
「ぬぅ…」
「じゃあおじさん、鷹矢もつれてきたことだし、俺そろそろ行くから。」
「む、だったら俺も帰るぞ。帰って御節だ御節！」
「いや鷹矢は残れって。お前の祝勝会だってんだから。」
「ぐぬぅ…」

自分の実家だというのに、そんなに帰りたくは無いのかと思うくらいに引き下がり、どこか父の言葉に対しても、どうにも納得のいかない様子を変えない鷹矢。
実際に、渋りに渋る鷹矢を無理やり『ここ』に連れてくるのは遊良でさえ苦労を要することだったのだが…それでも【決闘祭】を終え、誇るべき成績を残した鷹矢の祝勝会を天宮寺本家で行わないというのは、この家においても些か体裁に関わることに違いなく。
正鷹の頼みで、遊良がこうして鷹矢をわざわざ連れてきたというわけだ。

「なぁ遊良、お前の優勝のお祝いも兼ねようと思ってるんだが…どうだ？」

そんな中で、自分の息子だけでなく、共に激闘を戦い抜いた遊良にも声をかける正鷹。
心からの親友の息子、自分の息子の幼馴染…それこそ、生まれる前から遊良の事を知っている正鷹なのだから、その気持ちは鷹矢へ向けるモノと比べても、何ら遜色ないモノに違いなく。
この決闘市における大祭典、【決闘祭】の優勝と準優勝を飾った、誇るべき二人の息子達を心から祝ってやりたいという気持ちからの言葉に嘘偽りはないことは…もちろん、声をかけられた遊良にだってわかっていることであって。
「…だから俺のことはいいって。俺なら【決闘祭】の後のパーティで

祝ってもらったから大丈夫だよ。」
「しかし…」
「それに、俺が居たら鷹矢の祝勝会の雰囲気が壊れるじゃん。おじさんにも苦労をかけたくないし。」
「…そうか…」
「うん、それにこの後行くところもあるから。」

どうにもやるせない表情をしている正鷹を他所に、ソレを理解していてもなお誘いを断り遊良はその場を後にしようとしているのか。
別に遊良にとっても、正鷹に祝われたくないわけでは断じてない。きっと鷹矢の父も母も、鷹矢と同じようにして自分のことも祝ってくれるであろうことは、遊良からしても容易に想像がつくことには違いないのだ。
それでも、それを断って。
いくら自分が鷹矢の父母と旧知の仲で、いくら現在鷹矢と共に暮らしているとは言え…それ以外の天宮寺家の人やその使用人たちからすれば、自分は『本家』の息子に勝って優勝を掻っ攫った身の程知らずのガキという認識。
きっと、自分がこの『玄関』以外に顔を出しただけで、不穏な雰囲気が沸き起こってしまうことは、遊良には簡単に想像できることなのだから。

…昔から、そうだったから。

だからこそ、遊良は振り向いて、今にもこの家を後にしようとした…

—そんな時だった。

「ええ、そうしてくれると助かるわ。いい加減、玄関が臭くて臭くてたまらなかったの。」

突如として『悪意』塗れの言葉が屋敷の奥から放たれて、話していた遊良達の耳にまで届いて。
その声の方へと目をやれば、煌びやかな着物を着た女性の姿が。
「…ツボネ、誰が来いなんて言った。」
「あら、私の家を私がどう歩こうと勝手じゃない。」
「…お久しぶりです、ツボネおばさん。」
「汚い声で私の名前を呼ばないで！視界に入れるのも不愉快だわ！」
遊良を見ないようにして、しかしその言葉だけはしっかりと敵意を孕ませて遊良へと向かわせている女性。
…天宮寺　ツボネ
王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰の娘であり、鷹矢の叔母であるこの女は…最早、清清しいほどにはっきりと遊良の『敵』であることを見せ付けてきていた。
遊良に対する、昔から一向に変わらぬその物言い。
Ｅｘ適正を持たない遊良を、汚らしいモノだと認識し、その考えを絶対に変えようとせず…また、遊良が【決闘祭】に優勝に優勝したことで、決闘市の人々の視線が変わりつつあるも、それでもツボネは決して認めようともせず。
「汚物の分際で【決闘祭】に優勝なんて、一体どんな不正を働いたのかしら。」
「…いや俺は不正なんて…」
「お金？どうせお金でしょう？お金なら余ってるものね。汚物らしい、汚い汚い腐ったお金が。」
「おいツボネ！お前はいい加減にしろ！最近また調子に乗ってきやがって…」

「また殴り飛ばす？・ええいいわよ。そうしてくれると今度は法的にこの家の実権は私のものになるんだから。」
「お前…」

過去、遊良を本気でどこか遠くに追いやろうと画策していて、その企みを正鷹と鷹矢に、文字通り『力ずく』で止められた彼女。
一体遊良の何がそんなに気に食わないのか、それは彼女にしか分かりえぬモノではあるとは言え…それでも、絶対に遊良を認めないその姿勢は褒められたものでないことだけは確か。
遊良の事を心配する正鷹と、遊良の事を心から嫌うツボネのそりが合うことは決してない。
過去、正鷹が彼女を力の限り殴り飛ばしたことが未だ尾を引いていることもあるのだろう、顔を合わせるたびに口論になる二人は、この場においてもそれが変わることはなく…

「テメェ調子に乗ってんじゃねーぞゴラァ！」
「うっさいのよクソ兄貴！この才能無しが！」
「んだとゴラァ！」
「何よ！」

―！

―お互いに感情を顕に、兄妹…いい歳をした大人二人が、怒号が飛び交わせ始めた。それは、どこか彼らの父に似た喧騒で…
「…はぁ、また始まった。じゃあ鷹矢、俺は行くから帰るときに連絡入れろよ。」
「うむ。」

それを、まるで見慣れた光景かの如く…やや冷めた目で出て行こうとする遊良と、やや呆れた声質でそう言う鷹矢。

そう、ツボネが遊良への態度を改めないのも、その所為でツボネと正鷹が口論になるのも、子供達にとっては最早見慣れた光景。
遊良とて当事者とは言え、自分以上に熱くなっている大人たちの争いを見ては…話しに加われる気も、加わる気も起こらないのだから、彼が逆に冷静になったとしても不思議ではないだろう。
玄関の外に出ても聞こえてくる大人たちの怒声を耳に入れながら…遊良は寒い風の吹く外へとその足を運んで、天宮寺家から遠ざかっていった。

「…だから帰りたくないのだ、こんな家。」

そんな大人二人にうんざりした雰囲気を醸しだしながら、ソレらを避けるようにして仕方なく屋敷の中へと入っていく鷹矢の声は…

大人たちの怒声に掻き消されて、誰にも聞こえることは無かった。

―…

「あっけましてー!」
「あぁ、おめでとう、ルキ。」
「ねぇねぇ遊良、この着物どう?どうどう?」
「いいじゃん、良く似合ってる。」
「へっへー、ありがとー。」

一般家庭と言う表現が、丁度良く当てはまる大きさの、その家の玄関でのこと。新年の挨拶にと、遊良は高天ヶ原家へと挨拶に足を運んでいた。

勢い良く飛び出してきたルキが、その赤い髪に負けないくらいに映える紅い晴れ着を着飾って見せ付けてくるものの、遊良がソレに対しても何の戸惑いも無く褒められるのは、本当にその晴れ着がルキに似合っていたからなのだろう。
恥ずかしげも無く、照れもせず。
年頃にありがちな妙な雰囲気にならないのが、彼らの関係を良く現しているかのようでもあり、またお互いを大切に思っているかのようでもあり。

「やぁ遊良君。あけましておめでとう。」
「【決闘祭】優勝もおめでとう。本当に凄かったわ。」
「はい、ありがとうございます。」

そしてルキにやや遅れるようにして、落ち着いた雰囲気をしたルキの両親が家の中から出てきて、そう遊良へと声をかけてきて。
先ほど遊良が受けた、ツボネの敵意の孕んだ言葉とはまるで正反対の優しい言葉。それだけで、ルキの両親が心から遊良を迎えてくれていることが、はっきりと理解できるほどにそれは優しかった。
そう、遊良がイースト校の代表候補に選ばれたときには、一緒になって喜んでくれて祝ってくれたルキの両親。
過去、彼らも色々と思うことはあっただろうが、それでもこれまで遊良の敵に回ることは無く…またその所為で、周囲から色眼鏡で見られたこともあったことに違いないものの、それでも味方で居てくれたことは、遊良にとっては感謝しかないことだ。

「いやー、あの遊良君が優勝なんて、未だに信じられないよ。」
「…あなた？」
「…お父さん？」
「あ、ご、ごめんごめん。今のはそんなつもりじゃ…」
「大丈夫ですよ。全然気になりませんから。」
「そ、そっか。」

だからこそ、ルキの父の口を滑らした言葉にも、今更遊良が特に何かを感じることなど無く。
『あの』という言葉が、その他大勢の人間のよく言う『あの』という意味合いとは違うことを、遊良は知っているから。
しかし、常日頃から口を滑らせることの多いルキの父は、自分の失言をやや悔やんだ様子を見せて…取り繕うようにして、その口を再度開いた。

「ど、どうだい遊良君、この後初詣に行こうと思っているんだけど、君も一緒に？」
「いえ、せっかくですけど…」
「えー、遊良来ないの？」
「あぁ、新年の挨拶に寄っただけだからさ。」

本来ならば家族と過ごし、そこに他人は入ることを許されない新年の行事に、何の建前も無く遊良を誘ってくれることは…それだけ遊良の存在を邪険に思わず、かつ家族同然のように思ってくれているからに違いない。
しかし、そんな彼らの気持ちを汲んでいるからこそ…だからこそ遊良はその誘いを断るのだろう。
先の天宮寺家の誘いもそう。
いくら【決闘祭】で優勝したとはいえ、今までの遊良に対する見方の『全て』が変わったわけではないのだ。

だからこそ…

「いいじゃん、遊良も一緒に来ればいいのに。」
「そうよ遊良君。なんなら、【決闘祭】のお祝いも兼ねてこの後一緒に食事でも。」
「でも、おじさん達には代表候補に選ばれたときに祝ってもらいまし

たし…俺はそれだけで、十分ありがたいですから。」

―あえて、断る。

確かに、これまでのような遊良への偏見は減った…いや『減った』どころではない。

今まで、顔を見れば嘲笑と卑下の眼で見られていた彼が、【決闘祭】を経たことでその視線を『覆しつつ』あることは、紛れもない彼の力による功績であって。

…それでも少なからず残っているのは、今の遊良の功績を認めたくない中途半端な有象無象達の脆いプライドと、これまでの遊良のイメージを変えることが出来ず、また変えることを拒む弱者達の意地の残滓。

だからこそ、自分と一緒に行動した所為で、よくしてくれた親しい人たちに迷惑がかかることを考えると、どうしてもその誘いを受けるわけにはいかなかったのだろうか。

「…それにこの後行くところがあるから。じゃあ、お邪魔しました。」

「…あ、遊良、また明日にでもそっち行くね？」

「あぁ。鷹矢が御節食わせろってうるさいから、たくさん作って待ってるよ。」

「うん。」

それだけ伝えて、その場を後にする遊良。

【決闘祭】に優勝したからと、『改めて』見方を変えて寄ってくる他の周囲とは違う、昔からの確かな遊良の味方。その存在がなければ、きっと今以上に遊良は荒んでいただろう。

―そんな人たちだから、巻き込みたくはない。

それは、過去から変わらぬ遊良の『線引き』。幼馴染以外に大切にしたい繋がりだからこそ、どこか距離を置かなければと考えてしまう、彼の気遣い。

遊良がそう思っていることを理解出来ないほど、彼をずっと見てき

た大人たちは馬鹿なはずがなく…その遊良の気持ちを汲んだからこそ、何も言わずに遊良を見送るのだ。
そのまま遊良は、冷たい風の吹く街へと…目的の場所へと向けて、その足を進めていった。

―…

広い広い決闘市の外れ。
風に揺られた草が擦れ、サラサラとした音が耳に心地良く聞こえてくるこの場所には…
およそ、新年が明けたばかりで『ここ』に来る人間など居ないだろう程に、ざわめきがある街中と比べても、この場所には冷たい冬の風の流れる音しか聞こえてこなくて。

「父さん、母さん、久しぶり。高等部の入学式以来かな。…【決闘祭】、優勝したよ。何とか退学も取り消せた。鷹矢は相変わらず納得いってないみたいでさ、『次は絶対に負けん』ってうるさくて。」

その中に聞こえてくる遊良の声は、どこか寂しさを思わせているものの…他に『人』は居らず、誰にも聞かれることが無いからだろう、どんな感情も遊良は隠す気は無いのか。
眼下に視線を落とし、『ソレ』へと向かって言葉を投げかけるのみ。

「…って、聞いてるわけないけど。」

そう、遊良がいくら『墓前』で声をかけても、返ってくる言葉など在るわけが無く。また、普通ならば『そこ』に眠っている故人が聞い

てくれていることを信じて話しかけるのだろうが…
遊良には、それを『信じる』ことも無駄だということを知っている。

―ここは、『霊園』

故人の眠る場所。

そう、『本来』ならば。

遊良は知っている。遊良の、例の『宣告』と同時期に『行方不明』となって、如何なる捜索網にも引っかかることが無くそのまま『死亡』扱いとなった父母…その父と母の亡骸が、ここに『眠っていない』ことを。

「…はぁ、何となく街に居づらくてここに来たけど…」

家族たちの賑わいが溢れる新年の決闘市の雰囲気は、もう慣れたつもりだった遊良の心に、未だに爪を立てようとしている。

…これでも、随分と慣れてきたのだ。

当時はあまりの絶望に、命を捨てる気でいたのだが…それでも僅かに残った『希望』と、自分を見捨てずにいてくれた幼馴染達の思いと…師となってくれた人にしがみついて、どうにかここまで生きてこられたこと。

それに加えて、【決闘祭】の優勝という功績によって…今までの『蔑み』の視線が、突如として『驚き』と『称賛』に変わったこと…そんな急激に変わった人々の態度は、かつてのモノと『逆』とは言え、彼の過去に起きた人々の『変貌』を彼に思い出させるのか。

だからこそ、全く人の居ない場所で、やっとその声に寂しさを含ませる遊良。聞かれる事の無い場所で、聞かれる事の無いようにと。

「カッカッカ。随分とまぁセンチメンタルじゃねーか。」
「…え？」

しかし、そんな気を緩ませていた遊良へと、突如聞きなれた声が向けられた。
よもや、新年の初めから『こんな所』に人が来るだなんて、想像もしていなければ想定もしていなかった遊良なのか、自分へとかけられた声を即座にその耳に入れ、その声の主の顔が瞬時に頭に思い浮かんで。
そう、この冷たい風と、乾燥したこの空気に負けないほどに渇いた笑い…ソレは、遊良が間違うはずもない、紛れもない彼の師のモノ。
そうして遊良が背面へと振り向けば案の定、丘を登ってくるようにして鷹峰が歩いてきていた。

「せ、先生？なんでここに？」
「あん？年明け早々に『仕事』だっつって連絡来やがってよ。これから海外に飛ぶところなんだっての。」
「そ、そうなんですか…」
「まっ、その前にお前さんにちっと用があってよ。」
「え？」

鷹峰の『仕事』の中身は、もちろん遊良だって知っている。試合の後に鷹矢を問い詰め、あの『闇』に関して鷹峰が動いているということを。
しかし、それは秘密裏な依頼であって、おいそれと他人に公言など出来ない代物だということが分からぬほど、遊良とて幼いわけがない。それが、時間も場所も選ばぬ…つまり可及的速やかに片付けなければいけない事案であることも。
そうだというのに、わざわざ自分の元へと出向いてくれたことに関して、遊良は驚きを感じている様子を見せて。そんな遊良を見て、鷹

峰は口元に不敵な笑みを浮かべながら言った。

「用って…」

「おぅ、前にルードで競わせたときにゃクソガキが勝っただろ？その『褒美』をクソガキにやったってーのに、【決闘祭】で勝ったお前さんに褒美がねーのはちっと『不公平』だと思ってよぉ。」

「え、ほ、褒美!?先生が!?」

そんな時、思わず言葉に詰まってしまった遊良。

そう、褒めるとか労うとか、そう言った類のコトを滅多にすることのない師から出た、『褒美』と言う言葉…それが、遊良の思考を一瞬フリーズさせ、その意味を見失わせたのだ。

夏休み、師に連れられて鷹矢と訪れたルード地区。

忘れえぬ『闇』に飲み込まれた浮浪者と、文字通り『死にかける』ほどのデュエルをして…そうして倒した人数を競い合って、そこで鷹矢が勝ち越したからこそ、鷹峰が自らの名である【ダーク・リベリオン】を渡していたこと。

―『普通』ならば、ありえない程の…この師だからこその、『褒美』の意味。

普通ではありえないことを、平然とやってのけるこの男が与える『褒美』と言うモノなど、弟子が到底想像など出来るはずもなく…

「おぅ、来ていいぜ？」

―鷹峰が促すかのようにして手招きし、その後ろからもう一人の誰かが歩いてきて…

「…え……あ……」

そこには…

「始めまして。君の戦いは見せてもらったよ…天城　遊良。」

先ほどの、師の『褒美』という言葉を聞いた時以上の驚愕と、ソレに伴う動悸が激しく遊良の心臓を打ち鳴らし。

口を開き、空気を吸い込むことだけを強要するかのような脳の指令は…紛れも無く、遊良が動揺していることを、誰の目にも明らかにさせていることだろう。

しかし、それも仕方のないことなのか。目の前に歩いてきた人物の姿を見れば、例え如何なる『強者』であっても同様に動揺してしまいそうなのだから。

―釈迦堂　ラン

冬のどこまでも澄み切った空気が、その褐色の肌をより鮮明に目に映し…夜よりもなお黒いその髪は、見た全ての人間の視線を吸い込んで離さないかのように艶やかな代物。

しかし、誰もが見惚れてしまいそうに整った顔立ちを、直視できる『人間』など存在しないかのように漏れ出す迫力は…まさしく『人外』のモノなのか。

けれども、遊良が驚いているのは、そんな一般人が感じるような『単純』な理由からでは決してなく。

それは、遊良の『人生』においても、とても重要な存在として位置

づけられていて。

「釈迦堂　ランだ。よろしく。」
「カカッ、お前さん、ランに憧れてんだろ？丁度いいから連れてきてやったんだ、感謝しろい。」
「フフッ、こんな少年すら虜にしてしまう私の美貌も考え物ですね。」
「あ、あの…」
「うん？何かな？」
「…お、俺…」

遊良は彼女に会った事など無く、ましてや姿も見たことすらない。全て師の話しから聞いただけで、イメージでしか固めることの出来なかった彼女ではあるものの…

…自分の、生きる『希望』となった人物。

その姿を見ただけで彼女が『そう』なのだと…ランが名乗るよりも早く、鷹峰が教えるよりも早くこの女性が釈迦堂　ランなのだと、その心が遊良にソレを即座に理解させたのか。
まるで『釈迦堂　ラン』と言う人物を現すのに、これほど適した雰囲気と姿をした女性など、他にはいないかのように。
…霊園に吹き抜ける冷たい風が、ランの長い漆黒の髪を揺らしていた。

「あ…えっ…と…」

―言葉が、出てこない。
それは、この目の前の【化物】2体が放つ、この霊園の墓石すら軋んでいると錯覚するような『雰囲気』に中てられているとか…憧れの人物が目の前にいることで萎縮しているとか、そんなことでは断じてない。

…ただ、単純なこと。何と言っていいのか、遊良にはわからないのだ。

過去、『Ｅｘ適正』が無いと宣告されて、生きる意味すら見失っていた自分の最大の指標。自分に残された『デュエル』という『最後の希望』に、確かな光と絶対の肯定を与えてくれた、最大の功労者。

そう、ちょうど『あの時期』に、【王者】相手にＥｘデッキを『使わずに勝利』したという彼女が居なければきっと遊良はデュエルなど続けていられず。この世界の片隅でひっそりと隠れて暮らしているか…とっくに命を消していただろうから。

「お、俺…」

だからこそ、言葉が見つからない。

今述べるべき言葉が、『感謝』なのか『賛辞』なのか…『羨望』なのか『憧憬』なのか…

次々に出てきそうな言葉が詰まり、逆に飛び出て来れないかのように。

「…ふむ。」

そんな混乱の中にいる遊良を見てか、ランがその艶やかな口を開いた。

「よし、では私とデュエルだ。」

「…へ？」

「言葉が選べないのならば、戦えばいい。うん、そうしよう、その方が早い。」

「でゅ…でゅえる…デュエル!?お、俺と…あなたが!?」

突然のランの申し出に…そのあまりの突然のことに、一瞬だけ『デュエル』と言う意味が思い浮かびあがって来れないほど、それほどまでに今の遊良の頭には様々な感情が渦巻いているのだろうか。
瞬間的に固まって、何と返せばいいのかを無意識に考えてしまう。
そんな緊張の面持ちでいる遊良へと、ランは声をかけて。
そう、下手に口を開いて言葉をかわすよりも、一度のデュエルから得るソレらの方が圧倒的にお互いのことを分かり合えることなのだから。

「カッカッカ、ただテメェがヤリてぇだけじゃねーか。」
「いいでしょう別に。ずっと見ているだけだったのですから。それとも、祭りの優勝者ともなれば、私とのデュエルなんてお断りかな？」
「い、いえ…お、お願いします！」

それでも、この【化物】と呼べる程の圧力を容赦なく放ってくる存在からの提案に、何の躊躇も無くソレを受け入れたのは、遊良に恐れも怖さも無いことの現れからなのだろう。
今、彼が感じているのは確かな高揚。
まさしく生きる道標となり、心から憧れた…自身の目標の最高位が、今この場にいて。そして、まさかその人物とデュエルが出来るだなんて。
鷹峰の言った『褒美』という言葉が、コレほどまでに豪華絢爛な代物だということを、遊良も今更ながら理解したのか。師は想定通りと言わんばかりに口元をニヤケさせ、浮つく弟子を見ているのみ。
そんな遊良の表情は、戸惑いと同時に嬉々を顕にしていて…己のデュエルディスクを取り出して、ソレを腕に装着して展開して。

「フフ…では、天城　遊良…」

ランも同じく自らのデュエルディスクを展開し、口元に不敵な笑み

を浮かべながら…

「潰れて…くれるなよ？」

―デュエル！

それは、始まる。先攻は、遊良。

「俺の先攻！【堕天使イシュタム】の効果発動！手札の【堕天使アムドゥシアス】と共に捨てて２枚ドロー！続いて【トレード・イン】発動！レベル８、【堕天使スペルビア】を捨てて２枚ドロー！【闇の誘惑】を発動！２枚ドローして【堕天使ユコバック】を除外！魔法発動、【死者蘇生】！墓地から【堕天使スペルビア】を攻撃表示で蘇生し、その効果で【堕天使イシュタム】も守備表示で呼び戻す！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

「まだだ！【堕天使の追放】を発動し、デッキから【堕天使ゼラート】を手札に加える！【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！俺がデッキから加えるのは【背徳の堕天使】！【堕天使の追放】はデッキに戻り、更に２枚目の【トレード・イン】発動！【堕天使ゼラート】を捨てて２枚ドロー！…よし！【堕天使の戒壇】を発動！墓地から【堕天使アムドゥシアス】を守備表示で特殊召喚！」

【堕天使アムドゥシアス】レベル６
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／２８００

己に出来る事を全力で撃ち出し、言葉の代わりにデュエルで応える。
いくら発するべき言葉を失おうとも…『決闘者』である限り、戦いの中では言葉を失うわけも無く。憧れた存在にかける言葉は、自らのデュエルが伝えてくれるのだ。それを、全力で見てもらうのみ。

「ふむ、いいデッキ捌きだ。迷い無く回り、まるで手足を動かすかのようにデッキが動いてくれている。…デッキとの繋がりが強くないと出来ない芸当だ。」
「俺は【堕天使アムドゥシアス】をリリース！レベル１０【堕天使ディザイア】をアドバンス召喚！」

【堕天使ディザイア】レベル１０
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２８００

黒き翼持つ、神に抗う者達。神に見放された遊良だからこそ、彼らの力は最大限に発揮されるのだろう。
次々に現れる堕ちた天使達の、その羽ばたきが伝えてくれる。己が仕える主と共に、自らの進撃の、その意味合いを。

―熱く、滾る。

遊良自身が憧れて、あの絶望の中での確かな希望となってくれた人物と、まさか本当にデュエルが出来るだなんて…と。

「２枚目の【闇の誘惑】を発動！２枚ドローし、【堕天使アスモディウス】を除外！俺はカードを２枚伏せて、ターンエンドだ！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：５→１枚

場：【堕天使イシュタム】
【堕天使スペルビア】
【堕天使ディザイア】
伏せ：2枚

「では私のターン、ドロー。【隣の芝刈り】発動。デッキから３０枚を墓地へ送る。」
「…え？」

しかし、そんな熱くなった遊良の興奮が、ランのその一言で突如現実へと引き戻されて。
恐るべき勢いでランのデッキからカードが減っていき、踊るように墓地が肥えていくその勢いは…まるで遊良の先行での盛大なるドロー加速が、ランの今行っている墓地肥やしにまで加速を与えているかのよう。

「い、いきなり３０枚!?デッキの半分も…」

そう、そのデッキが減っていく勢いから見ても、ランのデッキがリミットギリギリの６０枚であったことは一目瞭然。
デッキ枚数を多くすればするほど、行える戦法に幅が増えることには変わりないものの…
それだけ必要なカードを引きにくくなるデメリットがあるというのに、さも当たり前のように『そのカード』を引き当てている辺りは流石【化物】。
駄々漏れにしている圧力自体も、容赦なく遊良を押し潰しにかかっているというのに、その行動一つで『格』の違いを見せ付けられているかの如く迷いが無く。

「この程度で何を驚いている。墓地の【インフェルノイド・ベルフェゴル】３体を除外し、墓地から【インフェルノイド・ネヘモス】を特殊

召喚。」

―！

【インフェルノイド・ネヘモス】レベル１０
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

うねる悪魔の咆哮は、遊良に驚く暇を与えないかのように燃え上がり…その凄まじい炎圧は、行く手を遮るモノの全てを吹き飛ばすのか。

欲望の化身、自らの存在以外を許さぬ、まさに悪魔。

そんな盛大に燃え盛る悪魔へすら何の恐れもなく、それ以上の【化物】は、己が使役する悪魔へと命じるのみ。

「ネヘモスの特殊召喚成功時、ネヘモス以外のフィールドのモンスターを全て破壊する。」

「なっ、全体除去!?させるか！手札の【堕天使テスカトリポカ】の効果発動！コイツを手札から捨て、【堕天使】達の破壊を防ぐ！」

しかし、悪魔の破壊の咆哮程度でその身を砕かせるほど、堕天使達とて決して華奢ではなく。神に立て付く堕天使なのだ。例え相手が悪魔であろうと、怯みもしなければ恐れも抱かず。

敵の悪魔の風貌に負けず劣らずの、悪魔のような堕天使が…遊良の宣言によって迫り来る蒼炎へと立ちふさがり、その十字に放たれる革命の業火によってソレを遮った。

攻撃力３０００…その力は、デュエル開始直後に繰り出すモンスターにしては些か強大すぎる力を持つであろうが…いくら煉獄の悪魔達がランの墓地に大量に眠っていようとも、【インフェルノイド】の誓約によってこれ以上の悪魔たちは現世に出ては来れず。

「よし！」

―こんな早くから、潰されるわけにはいかない。

「ふむ、ではネヘモスをリリースし魔法カード、【モンスター・ゲート】を発動。通常召喚可能なモンスターが出るまでデッキをめくる。」

そんな中で、遊良の希望的観測など無いも同然かのように、次なる手を繰り出すラン。

そう、いかなる悪魔の誓約と言えど、彼女にとっては何の制約にもなっていないのだ。燃え盛る悪魔がランの場から消えていき、再びデッキが怒涛の勢いでめくられて…その厚さを無くしていって。

「なっ、デ…デッキが無くなっていく…」

その『異常』とも言える光景は、命知らずの馬鹿の暴走にも似ていることだろう。

しかし、その馬鹿の爆走と大いに異なるのは…この女が、『馬鹿』ではなく【化物】であるということ。

命知らずなどでは断じてない。デッキが無くなると言うことなど、この女にとっては些細なこと。

…

…そして、決して止まることの無かったそのデッキの…『最後の一枚』がめくられた所で、それはようやく止まった。

それは、もうめくるカードが無いという意味で止まったのではない。その最後のカードが、ランが発動したカードの条件を満たす唯一のモノだっただけなのだから。

「ふむ…こんなところに居たのか。【インフェルノイド・デカトロン】を特殊召喚。」

【インフェルノイド・デカトロン】レベル１
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／　２００

「デッキが…もう０に。」
「ふふ、このターンを耐え切れば君の勝ち。耐え切れなければ君の負け。随分と分かりやすい勝敗だろう？」
「…ぐっ。」

目に見えるほどの、分かりやすい勝敗。
そう言って、簡単に決着の行方を発現するランではあったものの、遊良の方からしてみれば、ランが言うほどこの『勝敗』の着き方は簡単ではないことは必至。
遊良も、己の希望となった女性の『本性』を再確認したことだろう。ただただ、彼女から感じる圧力が増しただけ。
このターンを『耐え切れば』自分の勝ちという事は…このターンで決着を着けに来る【化物】の攻撃に、真正面から耐えなければならないということであって。
何せ、【化物】の領域。
幾度も師である鷹峰との、デュエルと言う名の『蹂躙』をされてきた遊良だからこそ感じる。今こうやって佇んでいる釈迦堂　ランという女性にとって、遊良相手に…いや【化物】以外の相手に、こうも容易く『勝ち筋』を見せてくれるわけがないのだ。

「永続魔法、【煉獄の虚夢】を発動。これより場の【インフェルノイド】のレベルは１になる。」
「なっ、そ、それは駄目だ！罠発動、【背徳の堕天使】！【堕天使スペルビア】を墓地へ送って、【煉獄の虚夢】を破壊する！」

もしその効果を許せば、それだけで勝敗が決してしまいそうな、その『虚ろなる夢』のカード。

受ける戦闘ダメージが半分になるとはいえ、それでも悪魔たちの制約が無に帰すのだ。もしそうなってしまえば、際限なく眠りから目覚め始める悪魔達を止める術は無く…ランのデッキがなくなり、その分だけ墓地が蓄えられたからこそ、それを遊良も即座に理解したからに他ならない。

―だからこそ、抗う。

「いいぞ、その調子でもっと抗え。私は2枚目の【煉獄の虚夢】を発動。」

「2枚目!?くそっ、【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【背徳の堕天使】の効果を得る！【煉獄の虚夢】を再び破壊し、【背徳の堕天使】をデッキへ戻す！」

遊良　ＬＰ：３０００→２０００

たった今破壊されたカードと同じカードを、さも当たり前のようにして再度発動させるラン。

それにすかさず反応する遊良の対処の速さも驚くべき反射ではあるものの…この女の、全く容赦のない手に、思わず遊良が冷や汗をかいたとしても不思議では無いだろう。

自らの師と同じ、【化物】の境地に立つ彼女。いくら自分が全力で抗ったとしても、その恐ろしさの片鱗すらまだ見えていないことは、重々承知しているのだから。

「それでこそだ、そうでなくては面白くない。３枚目の【煉獄の虚夢】を発動！」

「は!?え…はぁ!?」

そして、そんな遊良の抵抗も空しく、ランから『ありえない』宣言が飛び出した。

…同じカードが、３枚。それも、初期手札に揃って。

何らかのカード効果でデッキから手札に加えたとか、遊良のようにドロー加速で手に入れたとか、そんな次元の話しではない。

何の因果か、何の必然か。

―至極当然、当たり前のように『そこにある』。

不確かな確率によるものでは断じてなく、偶然が重なった結果でも決してないのだ。これをあえて言葉に表すとすれば…やろうと思って出来る事ではない、やろうと思わなくても出来るのでもない…

―やろうと思ったときには、既に出来ていなければならない、まさに【化物】の領域。

そして、ソレが意味する答えは…

「墓地から【インフェルノイド・シャイターン】３体を除外し、再び墓地から【インフェルノイド・ネヘモス】を特殊召喚！」

―！

【インフェルノイド・ネヘモス】レベル１０→１
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「またネヘモス!?」

「再び、ネヘモス以外の全てのモンスターを破壊する！」

再び現れる、蒼炎纏いし欲望の化身。

このタイミングで現れることも、再び己以外の全てを無に帰さんと

する咆哮も…遊良からすれば、その恐ろしさを再び直撃させられることに違いなく。
　そう、このモンスターの効果を使わせるわけには行かないのだ。いくら『虚ろなる夢』に囚われている悪魔達の攻撃であっても、いくらその戦闘ダメージが半分になるのであっても…今自分の場をがら空きにされれば、沸き出てくる悪魔たちによって、抵抗すら出来なくなってしまうことを即座に理解する遊良。

「永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！ネヘモスの効果を無効に！」

　炎に焼かれず、咆哮に砕けず…悪魔を縛る、悪魔の鎖。
　そうして遊良の発動したその罠によって、うねる体を縛りつけられ、地に落としてその力を封じるこの鎖は、遊良がよく使用する罠の一枚で、汎用性に富んだ防御札。
　如何なる状況にも対応してこその強者という師の教えに則って…【化物】が相手であっても、決して遊良は引かず、折れもせず。
　…抗う。そんな遊良を見て、ランがその艶やかな唇に微かな笑みを浮かべながら口を開いた。

「ネヘモスの効果で無効にしても良かったが…まぁいいだろう。フフ、ここまで粘ろうとする相手も久しぶりだ。ではこうしよう、私は墓地の【インフェルノイド・アスタロス】2体を除外し、墓地から【インフェルノイド・アドラメレク】を特殊召喚。」

【インフェルノイド・アドラメレク】レベル8→1
　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／　０

「更に墓地の【インフェルノイド・アスタロス】と【インフェルノイド・ベルゼブル】を除外。墓地から2体目の【インフェルノイド・アドラメレク】を特殊召喚。」

【インフェルノイド・アドラメレク】レベル８→１
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／　０

次々とランの場に、悪魔達が目覚めていく。何の制限も無くなった悪魔達による蹂躙が、今まさに始まろうとしているのだ。
それは、本来ならば悪魔達の誓約によって、そのレベル・ランクの合計が８以下出なければ目覚めることが出来ないはずなのに…それをいとも簡単に破り捨てたランによって、止めどなくソレらは押し寄せてきて。
しかし、いくら煉獄の悪魔達が多数目覚めても、遊良の場にいる【堕天使ディザイア】の攻撃力３０００を超えるモンスターは居らず。本来ならば、その攻撃力の壁すら疾うに壊れていたはずではあるものの…その思惑は、彼女にしかわからず。
…そう、こんな少年の『抵抗』など、この女にとっては無きに等しいことに変わりないのだから。

「うん、その年にしては良い才能を持ち、私相手に折れない心も良い。流石は鷹峰さんの弟子と言えるだろう。」
「…え？」
「カッカッカ、この程度で折れてるようじゃ破門だ破門。まっ、ちょっと前の遊良じゃあ折れてたかもしれねーがなぁ。」
「それほど君の生きてきた人生が濃かったというわけか。まぁ、この程度の状況で折れる程度の人生ならば、デュエルを続けているわけもないが。」

この攻防で、何かを把握したかのようにしてそう言ったラン。
この世界において、デュエルとは『言葉』よりも鮮明に相手の事を教えてくれるのだ。この世界の『Ｅｘ適正』というモノの意味と見方は、ここに生きるランにとっても理解しているコト。
そしてそんな世界で、『あえて』Ｅｘデッキを『使わない』デュエルを行っているランだからこそ、今目の前で戦っている少年の、その『選

択』の意味も理解したのだろうか。

―Ｅｘデッキを『使わない』デュエル。それは言わば、この世界の『神』への冒涜にも等しい行為。

無論その意味も真意も、この場においてはランにしか分からないことではあるが。

「フフッ…では、そんな君に良い物を見せてあげよう。コレは、言わば私からの『褒美』だ。」

「…え？」

「ゆくぞ、私は墓地の【インフェルノイド・ヴァエル】３体を除外！」

そんな遊良へと向ける、ランの言葉はどこか楽しげで。

ランの墓地で未だ眠りし煉獄の悪魔達が、蒼炎では無い紅き爆炎の渦に包まれて、その姿を彼女へと捧げる。

…鷹峰に倣い、『褒美』と言う単語をその口から出して。

先ほど、ランは勝敗の着き方を、とても分かりやすく遊良に告げた。しかし、そこへ到る道は膨大であり、遊良にしても目の前の【化物】が織り成すであろう蹂躙に対して身構えていたほど。

…だからこそ、彼女は魅せる。

己の手札の最後の一枚。『ソレ』を使って勝つことを、この時の彼女は選んだのだ。

それはまるで、意味合いは違えど自分と同じコトをしようとしている少年への鼓舞か…または、遥かな実力の違いにも折れずに向かってこようとしている少年への先導にも聞こえ…

ここに、現れるは…

「手札よりレベル８、【Ｔｈｅ　ｂｌａｚｉｎｇ（ブレイジング）　ＭＡＲＳ（マーズ）】を特殊召喚！」

―！

【Ｔｈｅ　ｂｌａｚｉｎｇ（ブレイジング）　ＭＡＲＳ（マーズ）】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

赫炎よりも紅き者、爆炎よりも燃ゆる者。
灼熱の炎をその身に纏い、煉獄すら燃やす紅焔の化身。空で燃え、天を焦がし、宙で輝くまさに『火の星』。
それは灼熱に燃える星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

「おぅおぅ、お前さんがここまでするたぁサービスがいいねぇ。」
「フフ、燦然と輝くプラネットの一球。コレをその目で直視出来るだけでも大したモノだが…」

そんな星の荒ぶりにも似たこのモンスターの圧力は、対峙している人間の心を直接押し潰しにかかっているかの如く…それは、コレを操る彼女と同じモノを駄々漏れにしていて。
そう、見ているだけで『物理的に』押し潰されてしまいそうな圧力が遊良に襲い掛かり、容赦なく彼の心にまで『折れろ』と命じているのだ。

「す、凄い…凄いモンスターだ…こんなモンスター、見たこと無い！」

―それでも、折れない。
Ｅｘモンスターではないモンスター。荒ぶる星の圧力が襲いかか

る恐怖。それ以上にランから感じる、更なる得体の知れない恐怖。
きっと、今まで彼女の相手をしてきたデュエリスト達は、そのどれかに押し潰されて、そして散っていったのだろう。
それは、確かに遊良も同じ。このモンスターから感じる得体の知れない恐怖とか、まるで背中も見えないランとの実力差とか…色々なモノが遊良の心に傷をつけようと向かってきてはいるものの…
遊良は、折れない。今目の前にいるこの怖いほどの圧力を持つモンスターよりも、『もっと怖いモノ』を、遊良は過去に経験してきたから…今目の前に立つ釈迦堂　ランとの実力差にだって、絶望はしない。過去に、『もっと深い絶望』を味わってきたのだから。

「ほう、プラネットを前にしても折れないのか…益々いいぞ。」

だからこそ、ランの声もどこか楽しげなのだろうか。
相手をしている少年は、実力的に見ればまだまだ不十分。学生達の戦いを制し、段階的に力を伸ばしてきているとは言え、それでも【化物】を相手にするには足りないモノが多すぎる。何せ、【王者】と呼ばれる存在すら【化物】には届かないのだ。
しかし、『相手になる』ことと『相手をする』ことは違う。
彼女にとって相手にならなくとも、それでも心が折れずに向かってくること、その遊良の気持ちが真っ直ぐであるからこそ、ランの声もどこか楽しげに感じられていて。

…それでも、この戦いはもう終わる。そう、彼女にとっては、『相手にならない』のだから。

「私はこのメインフェイズ1に、【Ｔｈｅ　ｂｌａｚｉｎｇ　ＭＡＲＳ】の効果発動！」

荒ぶる火の星、その化身の、悪魔のように大きな口が開く時…自らの場の悪魔達をその口に吸い込み、纏う炎圧をさらに強くしていっ

て。
狙うは、少年。
他に勝ち方は数あれど、魅せ付けるべき勝利の一つ…圧倒的実力差と、己の目指すべき頂の高さを、身を持って彼に教えるために。
「ＭＡＲＳ以外の私のモンスターを全て墓地へ送り、一体につき相手に５００のダメージ…つまり、２０００のダメージを君に与える！」
「なっ!?」
―！
「ぐ…ぐあぁぁぁあ！」
遊良　ＬＰ：２０００→０（　０　）
―ピー…
燃える炎の勢いが、確かに遊良を飲み込んで。
「フフッ、ジャスト２０００のダメージ。綺麗に決めさせてもらったよ。」
「くっ…」
デュエルの終了を告げたのは、この霊園に鳴り響く無機質な機械音。
遥かに『高い実力』…そんな言葉では形容できるはずも無い『事象』を、いとも簡単に引き起こす【化物】との戦いは、果たして遊良に何を感じさせ、また遊良に何をもたらすのだろうか。
容赦も無ければ、敗北も無い。釈迦堂　ランにとってはいつもと同じ、相手の心を圧し折ることに何の抵抗も無く、ただ自らの欲求を満たすために戦うだけ。

ソレに対して、『勝手』に相手が折れたのならば、彼女の興味はそこまでで途切れることだろう。

「カカッ、おぅ遊良、どうでぃ【化物】の相手は？」

「…」

だからこそ、師は問う。

己の弟子が、自らの目指そうとしている頂を真近で見て、その姿も見えないくらい場所の恐怖のみを味わった、その心を。

「手も足も出なくて悔しいか？それとも届くはずがねーって折れたか？どっちなんでぃ。」

「…凄い…」

「…あん？」

「Ｅｘデッキなんて無くたって、こんなに…『先生と同じくらい』強いなんて！やっぱり凄い！先生から聞いていた以上に凄い！」

それでも遊良から飛び出したのは、『頂』を目の当たりにしても折れることの無い心の現われ。

ランからすれば勝ち筋は今のコレだけではなく、膨大な数に及ぶ勝ち筋からの、その内の一つ。

例えば、もしもランがネヘモスの効果で、遊良の発動した【デモンズ・チェーン】を無効にしていれば…遊良の場はがら空きになり、直接攻撃によってもっと簡単に勝つことが出来ていただろう。それも、彼女にあった選択の一つ。

しかし、彼女はソレをしなかった。別に、舐めていたとか手加減していたとか…いや、多少の手心は、もしかしたらあったのかもしれないが…

先ほど彼女が言っていたように、『ここまで粘ろうとする相手も久しぶり』という言葉。

それは、彼女がこれまで叩き潰してきた有象無象達は、Ｅｘデッキ

を使ってこないランに対して、もっと早い段階で諦めを見せていたと言うコトに他ならないことであって。
他の大勢の…それこそ、今の遊良よりも強いであろう相手でさえも、ランの前に心が折れ、諦めて散っていった。
そうだというのに、Ｅｘ適正の無いこの『出来損ない』と呼ばれ続けてきた少年が、圧倒的実力差を見せ付けられても、折れる素振りも無く向かってくることに対して…彼女が何も感じないと言えば『嘘』になるだろう。

「おぅおぅ、威勢がいいこった。ったく、若いねぇ。」
「フッ、ここまで圧倒的な差を見せ付けられても、折れるどころか奮起するとは。流石は鷹峰さんの弟子だ。師と同じ道を違わずに昇って来る。」
「カッカッカ、それぐれーしてくれねーと、俺様の相手なんぞ務まるわけねーからなぁ。」

そんな『出来損ない』と呼ばれ続けた少年の姿を見て、２匹の【化物】が何を思うのか。
人間的な思想か、はたまた己の欲求のための利己的な思惑か。まぁ、今の遊良からすれば、そんなことなどどうでも良い事ではあるのだが。
世界の邪魔者として扱われ、希望も無くただ呼吸だけをしていたあの時期に、自らの『希望』となった人物と、自らの『師』となった人物から、こんなにも盛大な『褒美』という名の優勝祝いを貰ったのだから。

「天城　遊良。」

そんな遊良に、ランが静かに近づいてきて。
霊園の冷たい風に揺れる漆黒の髪が揺らめき、その髪を手でたくし

上げる仕草は、きっとこの場にギャラリーが居たら、その誰もが目を奪われることに間違いなく。
まぁ、この女性の姿を『まとも』に見られる人間の方が少ない現状では、それは『ありえない』ことではあるのだが。

「私も君が気に入った。Ｅｘ適正の有無なんてどうでもいい、要は強いか弱いかだ。いつか君が、鷹峰さんの相手が務まるくらいに強くなったら…私の相手もしてくれると嬉しい。」
「…え…」

少年の心臓が跳ね、思わず息を吸い込むことを忘れそうになるほどに言葉をなくしそうになって…

「……は、はい！」

その直後に彼の口から飛び出したのは、今ランが言ったモノに対する確かな反応。
目標としている存在からの鼓舞。今まで周囲に『否定』ばかりされてきた少年に与えられた、頂からの『肯定』。それは遊良にとって、これ以上ない程に嬉しい言葉だっただろう。
その返事を聞き、ランは微かに笑みを浮かべると…デュエルディスクではなく、己の懐に手を入れ一枚のカードを取り出して、ソレを少年へと差し出した。

「フフッ…では、君に『コレ』を預けておこう。私にとっても大切なカードの1枚なのだが…」
「え…こ、コレって!?」
「いずれ私が直接に取りに行くか、それとも君の方から返しに来るか…どちらにしても、いずれそのカードが私達をまた引き合わせてくれるはずだ。その時まで…」

ソレを受け取った遊良が、その『見たことも無いモンスター』に対して驚愕の声を漏らし、またランが『大切』と言う程に、そのカードは彼女にとっても特別なのだろう。
そのカードを受け取る遊良の手が震えていたのは見間違いではなく、またソレを手にした遊良に、コレまで以上の『希望』と『重圧』が圧し掛かったのは言うまでもない。

―これは、『約束』

【化物】から少年への、『ここまで来い』という確かな導。

「きっとまた会える。君に預けておくよ。」
「あ、ありがとうございます！」

―！

遊良がそう言った瞬間に、この霊園にヘリの音が轟いて。
上空を見れば、巨大なジェットヘリが待機しているように空中に浮遊しその場に留まっているではないか。次第に降下し始めてその足を降ろし、ヘリの爆音が静かだった霊園に響き渡って…そのまま、誰かを向かい入れるかのようにして大きなドアが開いた。
そんな突然現れた、どこか見覚えがあるようなヘリに思わず困惑の表情を見せた遊良に対して、言葉を投げかけるのは彼の師、天宮寺鷹峰。

「おっ、迎えが来やがったか。ってわけでよぉ、俺様とランはまたしばらく留守にすっから精々クソガキ共と元気でやれや。」
「ではまたな、天城　遊良。」
「は、はい！…あ、せ、先生！」
「あん？」
「ありがとうございました！」

そんな騒音に言葉を遮られながらも、思わず遊良はヘリに乗ろうとした師に対して必至に荒げた声を投げかける。
そう、これ以上無いくらいの『褒美』を師から貰い、またソレと同等の『希望』をランから貰ったのだ。それが自ら勝ち取った結果からくるモノだとは言え、今まで誰からも認められなかった少年が感極まるのは仕方のないことだろう。
だからこそ、幼少の頃見捨てずに鍛えてくれた師に、感謝の意が込みあがってくるのも、不思議でも何でもない。
決して振り向きはしない鷹峰に、その背中へと向けた弟子の言葉。

「…おう。んじゃ、あばよ。」

そう言ってそのまま鷹峰がヘリへと乗り込むと…二人を乗せたヘリが天高く上昇していき、一定の高さまで上った所で上昇から推進へと力を変えて移動していく。
恐るべきスピードで、見る見るうちにその音と姿を遠くにしていき…

—やがて、見えなくなった。

「そう、ヘリが出ますか…では、これより始めます。」

その瞬間に、誰かがどこかで。
誰かに向かってそう言ったこの言葉は…この決闘市に居る他の誰にも…

—聞こえてはいなかった。

―…

「…よし。」

帰ろう。

次にやるべきことが決まって、【決闘祭】の優勝で浮かれている場合ではない。そう遊良は決意を新たに、ランから『預った』カードを仕舞う。

このデュエルが、遊良に次なる『目標』と『希望』と…そして『約束』を与えてくれたのだ。それが何時になるのか…今の遊良には全く想像がつかないことではあるものの、しかし足踏みもしていられないことを心に刻んで。

…もっと、強くなる。

師と、そしてランに並べる日を夢見て。Ｅｘ適正が無い…つまりそこへと到る道筋は、常人のソレよりも遥かに険しいというコト。まぁ、常人ならばソコへと到ることすら出来ないのだが。

しかし、決してソレを諦めるはずもない遊良。かつて味わった絶望が、こんな形で希望となったのだ。自ら勝ち取った功績と結果、それが、今の遊良の自信へと繋がっていた。

…静かに、霊園に吹く風を浴びて。静かな、風の流れる音だけを耳に入れる遊良。

霊園の澄んだ空気が、丘の上から微かに見える決闘市をより鮮明に見せていて…

―そして…

「…あれ？」

何かがおかしい。
より鮮明に見えるからこそ、そのおかしさに遊良は気が付いた。
目を凝らし、その『異変』を必死になって目に映す。決闘市の外れ、市内からもやや遠くにあるからこそ、その異変は小さく見えるものの…この場にいてそれに気が付いたというコトは、その異変の中心はもっと大きいということ。
しかし、この霊園に居たからこそ、遊良の網膜にははっきりとソレが映っている。

「け、煙!?それも、あちこちから!」

それは、通常の火事などではありえない光景。
決闘市の外れと言っても、やや遠く離れて、高い丘になっているこの霊園だからこそ見える現実。

一箇所ではない。

決闘市の、北地区、西地区、東地区、南地区…

そのあちこちから、まるで示し合わせたようにして同時に煙が上がり、そして新年の明るい喧騒ではない、どこか『争い』のような音が、この遠く離れた霊園にまで聞こえ始めているではないか。

「い、一体何が…鷹矢、ルキ!」

その異常とも言える光景を見た瞬間に遊良の脳裏に映ったのは…紛れもない、大切な幼馴染達の顔。
何があったのか。想像もつかなければ、得体の知れない不安だけが遊良の心に浮かび上がって。
真っ先に鷹矢とルキの顔を思い浮かべながら…その現実を一刻も

早く知るべく、遊良はその足を動かして霊園から駆け始めた…

何も分からぬまま…『異変』へと、向けて…

―…

ｅｐ３７「蹂躙、満を持して」

轟音、壊音、衝撃音…
悲鳴が響き、泣き声が飛び交い、新年の賑わいが突如として阿鼻叫喚の嵐へと変わっていく。
ついさっきまで、浮かれた人々の賑わいだけが街の中にざわめていたのに…あちらこちらから聞こえる人々の声は、焦りと危機感、そして身の危険にさらされていることを否応なしに伝えているのか。
街中から上がる煙と、ソレと同時に轟く破壊音。
それは、何か『ありえない』ことが現実となって、決闘市の人々を『襲って』いるということを、誰の目にも明らかにしていて。

…その中心には、虚ろな目をした『何か』が。

「ア…ガァ…」
「ガァ…デュ…」
「デュエ…ルゥ…」
「アガァ…」

ソレも、始めは少なかった。
混みあう場所の、ほんの一角。人混みで溢れ帰る『一般人』の中に居た、ほんの少数の『人間』だった者が…『何か』に合図されたかのようにして、突如その様子を変貌させたのだ。
それを真近で見てしまった一般人も、何が起こったのか理解できなかっただろう。

…いや、理解できなかったのも当然か。

何故なら、その変貌が起きた瞬間を覚えている人間など存在せず…ソレが起こった瞬間に、溢れ爆ぜる『黒い靄』…

『闇』に飲み込まれてしまった周囲の彼らもまた…物言わぬ虚ろな目をしたソレとなって、今ここで呻いているのだから。

「ひっ、ひぃぃ！」
「来るなぁ―！」
「いやぁ―！」

そんなソレらに追われて、運良く飲み込まれなかった人々は逃げるのみ。
人を押しのけ、物を乗り越え。泣き声と悲鳴だけが街中に木霊するかのように。何が起こったのか全くわからないこの状況で、まるで自分だけが我先に助からんとしているかのよう。

「デュ…デュエ…ルゥ…」
「くそがっ、気持ち悪いんだよ！デュエルディスクなんか構えやがって！俺とやろうってのか！ぶっ飛ばしてやるよ！」

しかし中には、デュエルディスクを構えて追って来るソレに対して、応戦しようとしている人間が居るのも事実。
こんな状況下であっても、デュエルを挑んでくるということは、それに勝てば助かる可能性があると言う事。もしそうならば、彼らも決闘市に生きる人間、その選択肢を迷い無く選んだとしても不思議ではない。
路地に追い込まれた一人の男が、自らのデュエルディスクを構えて…虚ろな目をしたソレと対峙し、デュエルにて生き残ろうと足掻きを見せる。

…それで、本当に助かるのならば。

「デュエ…ルゥ…」
「アガ…デュエ…」

「ガァ…」
「は!?ちょ、ま、な、何でこんな一斉に!?同時に相手できるわけないだろ!おい!聞いてんのか!おい!おいってば!」
「アガァ…」
「ガガ…」

対峙していた一体の後ろから、他の虚ろな目をしたソレらが数体現れて。
そのどれもがデュエルディスクを構え、まるでたった一人の獲物に対して大勢で襲い掛からんとしているよう。
男が急いでその場から再び逃げ出そうにも、何故か『強制的』にデュエルモードに入ってしまったデュエルディスクがデュエル開始を告げてしまって…逃げ出す暇も与えられないまま、そして『手札を引く暇』も与えられないまま…

―ソレらが、襲いかかる。

「ちょ、まっ…」

―エクシーズショウカン!
―シンクロショウカン!
―シンクロショウカン!
―ユウゴウショウカン!
―エクシーズショウカン!
―エクシーズショウカン!
―シンクロショウカン!
―ユウゴウショウカン!
―!!!!!!!!

「あ…や、止め…て…」

まるで目の前に召喚された敵のモンスター達が、その存在感を容赦なく突きつけ…男に与えてくるのは、ただただ純粋な恐怖。

たかがデュエル…しかし、そう考えていた男の脳裏には、最早このデュエルに対する絶望しか昇って来ず。

―まるで、モンスターが実体化しているかのよう。

負けたら、どうなってしまうのか。普段ならば考えもしないような思考に対しても、今目の前の恐怖によって、疑問すら抱くことを許されもせず。

普通なら、ありえない考え。多勢に無勢、全くもって身を守ることも出来ない絶望が男を包み…そして恐怖によって震える膝が折れ…

「止めてくれーっ！」

「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」
「ダイレクトアタックゥ！」

―
!!!!!!!!

「ぎゃぁぁぁぁぁっぁぁー！」

男　ＬＰ：４０００→０（―１７３００）

鈍痛、鋭痛、ありとあらゆる衝撃と暴力。
それによって、男が放った悲鳴は紛れもない本物の痛みからくるモノ。
普通のデュエルではありえない衝撃。一体、誰が想像など出来るだろうか。モンスターの攻撃が『実体化』しているだなんて。
血を吐く衝撃と、切り刻まれたかのような傷だけが、この瞬間の男に許された、唯一つの感覚。

「ぁ…」

それに貫かれた人間の意識が、そこで切り離されたのだとしても仕方ないことだろう。

倒れ、動かなくなる。その体から滴る血が地面に広がり、彼の受けたダメージの総量の大きさを物語って。

そして…

「ァ…ァァァ…」

ゆっくりと男が起き上がったかと思うと、その目には光が無くなっていた。
血を滴らせながら、意識を手放したまま。…いや、意識など取り戻せるはずが無いだろう。
何故なら、たった今負けてボロ雑巾のようになった男に…彼を吹き飛ばした『敵』から伸ばされた『闇』が、まるで取り憑くかのようにして男を包んでいたのだから。

「アガァ…」

そうして、今まで『立ち向かった男』だった人間が、虚ろな目をしたソレへと変えられて…その他大勢のソレに加わって、ただ蠢くだけの人形となり歩き出して。
意識があっても、到底動けそうな傷ではないのに…まるで『闇』がその傷口を埋め立てるようにして体内に入り込み、『男』だったソレの体から傷が消えていくではないか。
そう、こうして着実に動ける『雑兵』の数を増やして…他の人間を襲うのだ。
感情もなく、『闇』に操られるままにして。老若男女など関係ない、大人も子供も、皆『平等』に…

―襲って、飲み込むために。

―これが、決闘市の到るところで起こっていた。街中から聞こえる、悲鳴の数だけ。

実体化したモンスターよる衝撃が、街の建物へと爪を立て…虚ろな目をしたソレらが、何の感情も無く人々を襲っていた。

―まるで『何か』に、操られているかのように。

―…

「ガァァ！ダイレクトアタックゥ！」
「喰らうかよ！罠発動、【魔法の筒】！お前が喰らえぇ！」

―！

「これで終わりよ！ダイレクトアタック！」

「ヌゥァ!?」

―!

「アガァーッ!」
「ヌァァァー!」

『ソレ』 ＬＰ：１８００→０（―２００）
『ソレ』 ＬＰ：２２００→０（―５００）

―ピー…

決闘市の南地区…その街中の一角で、悲鳴が木霊する中でのこと。
虚ろな目をしたソレらに対して、腕に覚えがあるであろうデュエリストが二人、勇敢にも立ち向かっていた。
年齢と見た目からして、成人したての大学生くらいであろうか。
若いカップル、この新年の雰囲気に浮かれて外出していたことに違いないものの、まさか彼らもこんな事態に巻き込まれるだなんて思っても見なかったはずだ。
突如として襲われて、なし崩し的に身を守るためにデュエルに応じてはいても…物言わぬ雑兵に対して優位に立って蹴散らせるだけの実力を持っていることは明らかだろう。

「ウブォァーッ!」
「きゃあ!?」
「ガガ…ガァ…ブハァ…ァ…」
「うわっ、び、ビックリした…」

そんな中で、彼らがたった今倒した『敵』が何かを吐き出すようにして苦しみだし…そして、その体内から『闇』を一気に放出し始めた。
そのあまりの勢いの良さに、カップルの心臓が跳ねたのも仕方がな

く…やがて放出しきったのか、動かなくなった『敵』を見下ろしながらも彼らは口を開いて、その不安な気持ちを吐き出して。

「い、一体なんなんだよコイツら。」
「知らないわよ。でも気持ち悪いわ、早く逃げようよ…」
「逃げるったって、どこにだよ…」
「知らないわよ…」

街が壊され、敵が溢れて。こんな非常事態に巻き込まれた経験などあるわけがないこのカップルにしても、突然の混乱の中に沈んでいても不思議では無いのだが…

今こうやって彼らが冷静に話していられるのだって、デュエルという最も『身近』な行為があったからこそ。しかし、デュエルによって多少の冷静さを取り戻したとは言え、突然のこの状況を飲み込めていないのも事実。

一種の、災害。避難をしなければ…しかし、どこへ…そんな状況下での『普通』の思考が彼らの頭に浮かんだ…

—その時だった。

「デハ…逃がしテあげましょウ…」
「きゃっ!?」
「なっ!?だ、誰だ!」

…勝負を終えて、完全に気の抜けていたカップルへと放たれた声。

彼らがその声の方へと目をやれば、そこには従者のような格好をした一人の『少女』の姿。

—紫魔　サキョウ

地紫魔に仕える、下層の紫魔家。もっとも、そんな『その他大勢』に

過ぎない紫魔の一人の事など、関係者でもなければ知っている人間の方が少ないが。

「だ、誰だよお前…」

しかし、普通ならばこの危機的状況下において『助け』となるような言葉を投げかけられられでもしたら、誰だってすぐにでもソレに縋りつきたくなるだろう。

…そうだと言うのに、カップルの表情は見る見るうちに青ざめて…とてもじゃないが、救助が来たというような顔では無い。

―何故なら…

「アガァ…」

「ガァ…」

言葉を投げかけたサキョウの後ろには…虚ろな目をしたソレらが大量に待機していたのだから。

「…ね、ねぇ…私達、逃がしてくれるんじゃないの？」

「そ、そうだぜ…お前、その後ろの奴らはなんなんだよ…」

自分の置かれた状況が、最悪だというコトを即座に理解するカップル。

見ただけでも新たに5人ほど現れた『敵』に、ソレを引き連れてきたのが得体の知れない『少女』と来たのだ。

この目の前の少女の言った、『逃がす』という単語の意味と…このカップルの置かれている状況にはあまりにも正反対。到底、少女が逃がしてくれるとは思えず…重々しくも、サキョウは言葉を続ける。

「心配しなくてモ、勿論逃がしテあげまス…『闇』ノ中ヘト…」

「なっ!?」

やはり、この少女は『敵』。その雰囲気だけで、即座にソレを理解するカップル。寒気がして、恐怖心が沸き起こって。

…腕には覚えがある、だから全てに勝って逃げ出すことは無理ではない…

そう考えるカップルではあったものの…腕に覚えがあっても、この数を一気に相手をするとなれば、ソレ相応のリスクが伴うことは、カップルとて重々承知していることであって。

「…やるしかないの?」

「くそっ、俺が攻めるからお前は守りに入れ!頼んだぞ!」

「わ、わかったわ!」

一応、この二人も決闘市では多少名が知れた実力者。高等部時代には、【決闘祭】には出られなかったものの、それに近いところまでは行ったのだ、と。そう自らを鼓舞し、目の前の『雑兵』へと立ち向かう決意をする二人。

―そんな自信など、この状況下においては何の意味も成していないことを、理解しているのはサキョウだけ。

「無駄…デス。」

サキョウが合図をするようにをしてその手を掲げると、その後ろに並んでいた『雑兵』達が道を開け始めた。

そう、数に物を言わせた、戦略など到底扱えないような『雑兵』達では…どうしても敵わないような相手が出てくることは、無論この『異変』を巻き起こした存在の想定内なことだろう。

だからこそ、ソレに対する『手』を、用意してあるのは当然のこと。

そこには、ゆっくりとおぼつかない足取りで歩いてくる、虚ろな目をした『2人』が…

「なっ!?け、【決闘祭】に出てた奴らじゃないか！」
「うそっ！な、何でそんな子たちが!?」

―獅子原　エリと、袴田　光一

先日行われた【決闘祭】にも出場していた実力者。そんな彼らのことを、【決闘祭】を見ていたこのカップルが知らないわけがなく…

まるで、信じられないモノを見ているかのようにして驚愕の声を漏らす男女。

そう、『信じられない』のだ。

いくら『雑』なデュエルを仕掛けてくる『雑兵』とは言え、そのあまりの多勢にやられてしまい、飲み込まれる者も居る中で…この決闘市には、それに抵抗できる実力の者もいる。

多少腕に覚えのある者ならば、虚ろな目をした『雑兵』は相手にならず。だからこそ、この混乱の街の中でも、少なからず抵抗している人間達がいるのだから。

世界でも有数のデュエル大都市である【決闘市】

…ここに拠点を置く3人の【王者】に憧れて、多くのプロが在籍していることでも有名ないこの街のデュエルの平均レベルが高いことは、世界の中で見ても明らかなこと。

だからこそ、【決闘祭】に出場する程のレベルを持ったデュエリストが、こんな『雑兵』程度に混ざって敵として現れることなど、この時のカップルには想像もできなかったのだが…

「群集にハ、『雑兵』ヲ…手練れにハ、『駒』ヲ…コレも命令ですのデ…」

サキョウの淡々とした声が、カップルの絶望をさらに込み上げる。

自らに与えられた命令をこなす彼女の思惑など、この『異変』においては小さな一つでしかないことを、十分に理解しているからこそ、

下層の紫魔としての役割をこなすことだけを、彼女は考えて。
「ど、どうするんだよ、こんな奴ら相手って…」
慈悲はなく、例外もなく。
ただ、『蹂躙』するだけ。彼女が知りえぬ、『目的』へと向けて…ソレは、進むのみ。

―そして…

「い、いやだぁー！」
「ダイレクトアタックゥ！」

―！

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー！」
大学生の男　ＬＰ…２９００→０（―１００）
「…いやよ…いや、やめて…」
「ダイレクトアタックゥ！」

―！

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
大学生の女　ＬＰ…３８００→（―１０００）

―ピー…

無機質な機械音が二つ、この壊れた街中に響き渡った。
実体化したモンスターに吹き飛ばされ、そのあまりの衝撃に地面に叩きつけられたカップルが無残に転がっていくその光景は…如何なる抵抗も、この『異変』の中では無意味なのだと、決闘市の住人に見せ付けているかのよう。
物言わぬ、粗雑な『雑兵』と…手練れを降すは、名のある『駒』達。

―多勢で襲って、『雑兵』を増やして。
―手練れは『駒』で、兵を増やして。

今のこのカップルに限ったことではない。こんなことが、決闘市の全域で沸き起こっているのだ。

「アア…ガァッ…」
「ァ…」

負ければ、『闇』に飲まれてしまう…

…逃げられはしない。

まるで地獄絵図のように広がるこの『異変』の中で、人々の悲鳴だけが、街中に響き渡っていた。

「お嬢様…右京……グッ…アガ…ワ、私…ハ…ア…お、嬢…様…」

ソレは使い捨ての『一つ』である彼女にも…
『例外』は、無く…

―…

「止めろ！中へ入れるな！」
「はっ！」
「裏に８人向かえ！おいそこのジジイども！テメェらもとっとと奥に引っ込みやがれってんだ！」
「す、すまん正鷹…」
「女と子供は避難だ！グズグズすんじゃねぇ！」
「は、はい！」

悲鳴に包まれている決闘市の東地区、その中で最も巨大な屋敷、『天宮寺家』でのこと。
突如現れた謎の『雑兵』達がこの巨大な屋敷に攻め入り…その家の祝勝のムードを一転、瞬く間に混乱の渦へと叩き落した。
しかし、その混乱も最初のみ。
そう、この天宮寺家における家長代理、鷹矢の父である天宮寺　正鷹が、門番や使用人であるデュエリスト達に命じ、その『雑兵』達と応戦させて戦線を即座に立てさせたのだ。
流石は破天荒で他に縛られない無茶苦茶な父、【黒翼】こと天宮寺鷹峰の『息子』。その父に倣うかのような荒い口調ではあったものの、的確に指示を飛ばせるのはまるで過去にそう言った経験があったかのようでもあって。

―それでも…

「正鷹様！正門が突破されました！門番が飲み込まれたようです！」
「中庭で止めろ！他は非常シャッターを下ろせ！離れへの道を確保するんだ！」
「はっ！」
「警備隊の出動を急がせろ！」

「わ、わかっています！ただいま！」

―急襲

とてもじゃないが、手が追いつかず間に合わない。

まるで暗中模索。情報も無く原因もわからない。

何とか女子供、そして老人をシェルターとなる『離れ』へと避難させる手筈だけは確保しつつも…多勢に物を言わせて襲ってくる『雑兵』達が容赦なく攻撃を加えてきては、この屋敷とていつまで耐えられるか。

「モ、モンスターが実体化して襲ってくるなんて…」

「何ブツブツ言ってやがんだ！んな暇があんだったらテメェも応戦しねぇか！」

「は、はいぃ！」

守備についていた一人がそんな弱音を吐きつつも、そんなことを言っている場合でないことは誰の目にも明らかなこと。

正鷹とて、この『ありえない』状況に驚いて叫びたい気持ちを押しとどめて指示を出しているのだ。大勢の安全を預る天宮寺家の家長代理としての責務から、なんとしてでもこの戦線を維持しなければ、と。

徐々に攻め入られていることには変わりなくとも、それでも何か情報が入るまでは、せめて避難が完了するまでは…ここを崩されるわけには行かないのだと、そう皆に言い聞かせていた。

「親父、俺も出るぞ！」

「テメェは引っ込んでろ馬鹿息子！それより遊良に連絡は付いたのか？」

「いや、電話が一向に繋がらん。遊良のことだから無事だとは思うが…」

「ならテメェはさっさと避難しやがれ。ガキが出てる場合じゃねーん

だっての。」
「むぅ…しかし…」

そんな中、鷹矢もこの防衛網に加わろうと提案したものの…すぐにソレを父に却下されてしまって。
いくら天宮寺家においても類稀なる才能を持つ鷹矢であっても、『親』として息子を戦わせるわけにはいかないのだと、父がそういわんばかりの顔をしていたことを理解できない鷹矢ではないが…
それでも、誰もが状況を飲み込めないこの場において、彼だけがコレを体験したことがあるのだ。
ならばなおさら鷹矢には立ち向かわなければいけない理由があり、また少しでも状況を改善できる可能性があるのは、この『家』において最も強い自分なのだと、そう言いたげな雰囲気をかもし出して父にぶつけている。
負ければ『闇』に飲み込まれて『敵』となる。
こうしている間にも、守備に付いている人間が少しずつ負けていっており…倒しても倒しても後から湧いてくる『雑兵』達に追い込まれて、既に正門は半壊の一途を辿っているのだから。

「親父…俺はコレを知っている。」
「あぁ?テメェ何言って…」
「俺は、コイツらと戦った事がある。ジジイに連れて行かれたルード地区でだ。」
「ルードっておい…あぁ、夏休みのアレか?」

だからこそ、鷹矢も戦う意思を見せているのか。
いくら好きではない実家とは言え、こうも破壊されていく光景を見ているだけなのは彼にとっても許しがたいことには違いなく…
その自分の知りえる情報を、父に伝えようとして口を開く。
「うむ。その時の奴らよりも、今のこいつらは明らかにおかしい。…

何だか、その、アレだ。とにかく何かおかしいのだ。」
「いやわかんねぇよ。」
「知らん、そんなことは遊良に聞いてくれ。俺は上手く言えん。」
「その遊良に連絡が取れねぇんだろうがこのアホ！」
「ぬぅ…」

しかし、元々難しい話は苦手だからこそ、こういった込み入った話は全て遊良に任せてきていた鷹矢。
今までのソレが災いし、この危機的状況下においても何の役に立っていないのは最早仕方のない事なのだろう。
まぁ、鷹矢からすれば戦った『だけ』ではないのだれけども。
父には伏せているが、鷹矢はルード地区だけではなく、祖父である鷹峰の指示で、この決闘市に時折現れていた『闇』に取り付かれた人間達を相手にしてきたこと。
彼のＥｘデッキに眠る、創造されし【Ｎｏ．】がソレを物語り…またその経験がこの『雑兵』達の粗雑さを彼に鮮明に教えてはいても…それを上手く伝えられないのだから、最早何の意味も無いが。

「…まぁいい。ってことは遊良も何か知ってんだな？」
「うむ。」
「わかった。でもテメェはここに加わるんじゃねぇ。」
「親父！しかしだな…」
「いいっってんだろ！それより馬鹿息子、テメェはもっとやるべきことがあんだろうが。」
「ぬ？」

そんな鷹矢を見て、父は言葉を投げかけて。
『何か』知っているという息子の言葉を信じるのは、『親』であるならば頭よりも早く心が理解できるのだろう。上手く説明出来ていなくとも、その雰囲気だけで父は何かを察した様子。
ならば…

「テメェはさっさと遊良と合流しやがれ。遊良のことだ、どうせ無事なんだろ？」
「うむ。」
「…じゃあ行け。ここは俺が何とかすっからよ。…気をつけろ、鷹矢。遊良にも言っとけ。」
「うむ！」

本当ならば、危険な外へなど息子を行かせるわけがないのが『普通』の親。しかし、それでも行かせるのは…
偏に、外には『遊良』がいるから。
そして、その遊良も『何か』知っているのならば、心配ではあっても賭けるしかないのだろう。何も分からぬ自分よりも、信じるモノは2人の息子たち。

―！

「チッ、ここも持たねぇ。さっさと行け鷹矢！」
「うむ！」

その瞬間に爆ぜた音が正門から響くも、ソレと同時に走り出した鷹矢が土煙と共に一瞬の隙を突いて外へと駆け出した。
―物言わぬ『雑兵』の反応が悪いことが幸を成して。
目指すは、自分達が住む家。きっと遊良ならば、まず安全の確保のためにそこへ戻るだろうということを、鷹矢だからこそ理解したから。

「正門！大破しました！こ、このままでは持ちません！」
「んなこたぁ見ればわかるってんだ！守備をここに集めろ！避難が終わるまで食い止めんだよ！俺のデュエルディスク持ってこい！」
「は、はいぃ！」

阿鼻叫喚の嵐、悲鳴と泣き声が木霊しているこの決闘市の一角で、僅かな希望を持って立ち向かう者達がいる。
それがどんなに無駄なことなのかを、きっと戦っている人間達も勘付いてはいるだろうが…

「チッ、鷹矢、遊良…」

それでも、『期待』せずにはいられない。
こんな状況下において、子供たちに『何か』を期待するということは、親として許容するわけにはいかず…いくら信じているとはいえ、それでも進んで危険な目に合わせることを喜ぶ親がどこにいようか。
それでも、自分の息子と、息子同然の少年ならば…血の繋がりよりも、もっと強い『モノ』を持っている彼らならば…どこか『やってくれる』と思ってしまうのも事実。
こんな状況下なのだ、何も知らぬ役に立たない自分よりも、行動を起こせる人間に託すという『希望』を抱かないと正鷹とて戦うことすらできないだろうから。

「ア…ガァ…」
「あ…ツ、ツボネ様まで…」
「…ツボネの野郎、本当に役に立たねぇ女だぜ。」

裏門が突破されたのだろう、屋敷の奥から歩いてくる『雑兵』の先頭に立って呻く天宮寺　ツボネに溜息をつきながら…

「すまねぇな…頼むぜ、馬鹿息子共…」

—地獄は、続いていく。

⋮

ｅｐ３８「希望を掴むために」

悲鳴が鳴り止まぬ決闘市。
その全域に溢れ返る『闇』に飲み込まれた人々と、デュエルによって実体化したモンスターの攻撃が街を壊し…それに抵抗するデュエリストが居るとは言え、徐々にその数は減っていることは確か。

「た、助けてくれぇー！」
「いやぁー！」
「ぎゃぁあーっ！」

襲われ、囲まれ、戦い、負ける。
次々に人が吹き飛ばされ、減ることなく『敵』が街に増え続ける…その繰り返しが至る所で起こっていて、数にものを言わせて襲いかかる物言わぬ『雑兵』と…
その『雑兵』では敵わない手練れを潰すための、決闘市でも有数の実力を持った『駒』たちの進撃は留まることを知らず。
―そんな中を、鷹矢がひと時も休むことなく走り抜けていた。

「酷い有様だ…こんなに大勢が急に現れることなど、今まで無かったというのに。」

鷹矢の言葉は、夏休みに彼が師である祖父と共に、『闇』に飲み込まれた人間を相手にしていた時と比べているのか。
そう、確かに少し前まで決闘市に現れていた『闇』は、少なくとも同時に複数人など現れてはおらず…しかし、それが今では大勢が急に現れ、そして好き放題に暴れているのだ。
まるで意図的に、その存在を隠されていたかのように。
それに対して鷹矢の感じている違和感は益々強くなり、またその違和感が彼にこの状況に対する『心当たり』を感じさせてはいても…
それを今じっくりと考察する時間など鷹矢には無く、またそれを追

求できる相棒も不在のこの状況では、鷹矢一人だけではどうにも出来ないことは必至。

「…むっ!?」

そんな東地区の一角でのこと。突如として、虚ろな目をした『雑兵』が駆けていた鷹矢の前に立ちふさがった。

…見たところ鷹矢と同じ位の歳の女子学生だろうか。

まぁ、多勢に物を言わせて、この決闘市中に溢れかえったソレらが無作為に人々を襲っているのだから、誰が何時どんな状況で『敵』として現れるかなど誰にも分からないが。

無論、その中を駆けている鷹矢とて、彼らにとっては獲物に過ぎず…足を止めてしまった鷹矢に、他の『雑兵』も近づいてきてしまう。

ゆっくりと鷹矢に近づいてきた『雑兵』は3人。鷹矢へと向かって、そして意識のない呻きでデュエルディスクを構え始める。

「アガァ…」
「デュエ…」
「デュエ…ルゥ…」
「しまった、囲まれたか…」

そうして、鷹矢が装着していたデュエルディスクが、強制的にデュエルモードへと移行してしまい…ディスクが自動的に展開され、デッキが現れ画面の表示がデュエルの状況を示すモノへと切り替わって。

そんな目の前の『雑兵』3体に対して、鷹矢の記憶の片隅には、どこか彼らと戦ったことのあるような気がするものの…元々、この状況で思い出す気などさらさら無い鷹矢なのだから、囲まれたと言うのに全く焦った様子もなく自衛のために手札を引くだけ。

「どこかで見たことのある顔だが、まぁ仕方ない…ゆくぞ!」

そう、どうしたって始まってしまうデュエルは、誰であっても拒むことを許されない。
デュエルモードに入ってしまえば、たとえ逃げ出してもモンスターは襲ってきて…それに対抗できなければ、物言わぬ『雑兵』の仲間入りするしか道はなく。
また、デュエルディスクを装着せずに逃げれば、確かにデュエルには応じずに済むものの…もしそんなことをすれば、単純に襲い来る『闇』を巻き散らかす敵に、『抵抗』する手段そのものが無くなり、何も出来ず無慈悲に飲み込まれてしまうだけなのだから。

―負ければ終わり、『敵』となり…しかし勝てば何とか生き残れる。

だからこそ戦える者にとって、デュエルは出来る唯一の『抵抗』。
鷹矢もソレを分かっているのだろう。囲まれた3人の『雑兵』を相手に、全く引かずに蹴散らすのみ。

そして…

「俺の邪魔をするな！【リミッター解除】を発動し、3体の【ギアギガントX】でそれぞれダイレクトアタック！」

―!!!

「ヌブォァー！」
「アガァー！」
「ブハァ…」

『雑兵』×3　LP：4000→0（―600）

始まって間もなく…それこそたった今始まったばかりだというのに、自身のターンに入った瞬間に鷹矢の速攻が炸裂し、その実際の衝

撃で『雑兵』達が成す術なく吹き飛ばされていって。
そう、これまでも『闇』に取り付かれた人間を相手にしてきた鷹矢にとって、たとえ一般人であろうとも蹴散らすことに手加減は無いのだろう。
また、いくら実体化したモンスターによる攻撃によって実際のダメージが発生しようとも…
『闇』の放出時に『ある程度』の致命的なダメージもソレと一緒に消えていくことをこれまでの経験で知っている鷹矢だからこそ、自らの邪魔をする者を何の躊躇もなく蹴散らして先へ進むのだ。
それは幸か不幸か、彼の行っている行為の合理性を否応なしに証明していることに違いなく。
こんな『雑兵』数人の相手にもたついてしまっては、次々に現れる他の『雑兵』達に瞬く間に取り囲まれてしまうことは必至。
もしそうなってしまえば、そのまま終わることのないデュエルを延々と続けさせられてしまい…
そして、力尽きて飲み込まれるだけなのだから。

「うむ、虹村に『多対一』をやらされていて助かったぞ。今度会ったら礼くらい言っておいてやるか。」

人生、何が役に立つか分かったものではないとはよく言うが…まさか鷹矢も、入学当初から虹村にしつこく行わされていた『多人数』相手の経験が、よもやこんな所で生きてくるとは思ってもみなかったことだろう。
そうして、吹き飛ばした3人の『雑兵』達が吐き出すようにしてその体の内から『闇』を放出し…意識をその体に戻せぬまま、その場に倒れこんでしまった。
たった今吹き飛ばしたのが、同じイースト校の上級生だということも、それが夏休みのとある一日に蹴散らした上級生であったことにも彼は気が付けぬまま…
再び蔓延っている『雑兵』達に囲まれる前に、一刻も早く自らが住

む家に戻るため、鷹矢はその場から駆けだし始めて。
示し合わせたわけでもなく、また決めてあったわけでもないが、それでも遊良とルキの『無事』を疑っていない鷹矢にとって、連絡が取れない場合には『そこ』に向かうことが最善なのだと感じているからこそ、その足を緩めずに駆けるのだ。
…今まさに起こっている『異変』に対して、少しでも改善の手を見つけるために。

――…

「亜蓮、西地区１０―Ａに『駒』を出せ。抵抗している奴がいるみたいだ。」
「言われなくてもわかってるよ。」

この決闘市の、どこかの場所。
誰にも邪魔されぬその広い空間に、この『異変』に対して『何か』をしている二人の男がいた。
…紫魔　大治郎と紫魔　亜蓮
ノース校代表として【決闘祭】に出場していたが、しかしその裏で何やら暗躍をしていた彼ら。その手を頭上に掲げ、その手に『黒い球』を持って。
「お前こそ南地区をサキョウに任せきりで手薄じゃないのか？『雑兵』の数も南が一番少ないぜ。」
「わかったわかった、今補充する。」
そんな彼らの口ぶりは、まるで今この決闘市で暴れている『闇』に飲み込まれた人々に対して、指示を出しているか、または操っている

かのようにも聞こえ…そんな彼らが手を掲げている頭上には、超巨大な『闇』の球体が。

…それは鷹矢が【決闘祭】で見せた、あの謎の黒い宝石の何倍もありそうなほどに大きなモノ。

二人はソレに対して、手に持った『黒い球』を向け…彼らにだけ見えるのであろう何かの光景を確認しては、『雑兵』や『駒』達を動かしている様子。

「チッ、間に合わなかった。西の『駒』が2体倒れちまったじゃねーか。これだからウエスト校の奴らは使えねーんだよなぁ。大治郎、南から少し回せ。」

「あぁ？何で先に手を打っておかないんだよ。」

「しょうがねーだろ。今北地区で手一杯なんだからよ。」

「はぁ…じゃあサキョウに指示を出しておいてやる。」

とは言え、この広大な決闘市の全てをたった2人だけで把握できるわけもないのだろう。現に彼らが出している指示は、大まかな区分に分けられた街に『雑兵』を大まかに動かして…『駒』と呼ばれるそれなりの手練れを、意図した場所へと向かわせることだけ。

だからこそ『雑兵』と呼んでいる一般人は戦術と呼べるような手を取ることが出来ず、ただ蠢くようにして目的も無く『雑』に獲物を襲っているのだ。

「プククッ、サキョウをこき使うねぇ大治郎。」

「ヒイラギのとこの召使いだからな。それに、下層の紫魔の癖に使ってもらえるだけありがたいと思って欲しいね。」

「確かに。しかし…こうも動かしっぱなしじゃ疲れるぜ。少しは休みたいもんだ。」

「馬鹿。サボると後からどうなるか…」

「わかってるって。でも、『隔離』が完了するまでこのままってのも

なぁ…さっさと『制圧』完了しねーかなぁ。」
「ヒイラギから連絡が来ないことにはな。コレも俺たちの仕事だ。亜蓮も文句言わずに働けよ。」
「へいへい。」

こんな大混乱が決闘市に起こっているというのに、その口ぶりはどこか他人事で…まるでゲームでも楽しむかのように、自らが指示した『雑兵』と『駒』が街を制圧していくのを見ているだけ。
そう、この『異変』の当事者である彼らにとって、外でどんな騒ぎが起ころうとも何も思わず。彼らが居るこの『安全な場所』から、ただ出された指示に従って任務をこなすだけなのだから。

「…おい亜蓮、東地区３８―Ｃ　に近い『駒』を向かわせろ。…天城遊良だ。」
「あ?…本当だ。プククッ、『出来損ない』の癖に【決闘祭】に優勝なんかしやがって。痛い目見せてやる。」

―…

「全て吹き飛ばせ！【神獣王バルバロス】！」

―！

豪快な衝撃音が炸裂し、遊良の行く手を遮ってデュエルを挑んできた『雑兵』が数体吹き飛ばされていく。
ＬＰを０にするまでとは行かずとも、モンスターが実体化していることが功を成したのか…獣の王の効果によって、敵のモンスターが破壊される衝撃と共に、それを召喚した『雑兵』達もソレに巻き込まれて吹き飛ばされて、そのままデュエル続行不可能となってモンスター

が消えていって。
そう、戦う気が無い者は、無抵抗に『闇』に飲まれる。攻撃に耐え切れず、途中で力尽きた者もそこで終わり。デュエルに負けた者は問答無用、その時点で『敗者』となるのだ。
だからこそ、デュエル自体が終了していなくても、プレイヤーが戦えなくなった時点でその人間は負け。
そうして一気に『雑兵』を吹き飛ばし、街からやや離れた霊園から一目散に駆けて決闘市まで戻ってきた遊良が…止まらぬようにして、再びその場から駆け出した。

「ハァ…ハァ…くそっ、何だよこれ…」

そんな遊良の目に映るのは…無残に破壊された街並と、物言わぬ虚ろな目をした、全く減らぬ『雑兵』達。
今朝までは決闘市がこんな有様になるなんて、きっと誰だって思い浮かべてはいなかっただろう。
どこかで女性の悲鳴と、子供の泣き声と、男の叫び声に混ざって…モンスターの咆哮と、建物が壊れる音と、声になっていない呻きが混ざり合って遊良の耳にまで聞こえる。
それがどんなに人の耳に不快感を与えるのか、彼の心の中にもソレがグルグルと吐き気が渦巻いて…どうにもやるせない気持ちが遊良に沸き起こり、一刻も早くその場を立ち去りたい衝動に駆られている様子。

「鷹矢は…きっと無事だ。くそっ、ルキ！何で繋がらないんだよ！」

そんな中で駆けだした遊良の中には、初めから鷹矢の心配など無く、今の心配は全てルキへと向けられていた。
そう、あの馬鹿が簡単にやられるわけがないし、夏休みに修行と称して師に連れられたルード地区でも遊良と鷹矢の二人はこんな休みの無い混戦を経験しているのだから、ある程度の身の守り方もお互い

に分かっている。
その経験が今生きていることを考えると、確かにあの無茶苦茶な修行も身になっているのだろう、ソレを今更ながら実感している遊良。
だからこそ、デュエルでしか身を守る方法しかないこの『異変』において、『本気』でデュエルが出来ないルキの身が遊良にとっては一番の心配なことなのだ。

「回線がパンクしてるのか?ああもう、こんな時に!」

遊良が走りながらもルキに絶えず電話をかけ続けているものの、それでも一向に電話が繋がる気配がない。
こんな混乱なのだから仕方がないとは言え、それでも遊良にとっては気が気でないことは必至。
こうしている間にもルキが襲われていたら…いや、ルキの実力を考えれば、こんな『雑兵』などにやられるなんてことはありえないことなのだが。
それでも遊良が心配しているのは、『敵の実力』ではなくルキのデュエルの回数が増えてしまうことだ。
もしルキが連戦を強いられるようなことがあれば…彼女の身に『最悪』の事態も考えられるからこそ、遊良の心にはその不安が昇ってきていて。
そう、それこそこんな『闇』に飲まれるよりも、もっと最悪の事態が。

「とりあえず家に向かうか…鷹矢と合流してルキを捜しに行かないと…」

この混乱の決闘市、そこに住む一般人が大混乱の中にあっても…遊良は今自分のすべき事を頭に思い浮かべては整理し、そうして冷静さを保とうとしているのか。
それは偏に師の教えがあったからこそだが、それ以外にもここ最近

彼の周りに頻発している超常現象の多さが、彼に一種の慣れを与えているのだろう。
…ルキもきっと無事でいるはず、そう信じて。
そうして東地区を駆け抜けていた遊良は、学園の近くにある自身が住む家の近くの通りへと差し掛かった所で、その足を急に止めた。

「…くそっ、こんなところにも…」

静かにそう呟いた遊良の眼前には、2体の『敵』が彼の家の近くをうろついていて。
何時どこに現れるか分からぬ敵、そしてデュエルでのダメージが実体化して襲ってくるその恐怖は…
彼がルード地区で味わったものよりもさらに大きく、その時の恐怖をより一層強くして思い出させること間違いなく。
…とはいえ、今の遊良にしてみれば、街に溢れかえっている『雑兵』が束になってかかってこようとも別に突破できない人数ではない。
およそ戦術と言えるような手を取れぬ『雑』な相手、一気にケリをつければ問題はなく、目的地がもう目の前にあることを考えれば、その足を止めている場合ではないだろう。
しかし、彼はその足を止めたまま…

「しかもあれって…まさか!」

…そう、それは遊良の目の前にいるソレらが、本当に『雑兵』だったのならばの話。

「アガァ…」
「ガガ…」

そこには…

「に、虹村…先輩…虹村先輩がなんで…」

イースト校3年、虹村　高貴。

遊良も代表選抜戦の開会式のときに会った、エクシーズクラスの元トップの3年生。

彼の事をよく知るとまでは行かないが…それでも見知った顔が突然虚ろな目をして目の前に現れたのだから、きっと遊良のその驚きも当然とも言えるだろう。

質実剛健、文武両道…素行に問題のある鷹矢よりも、イースト校を代表するエクシーズ使い。

昨年の【決闘祭】にも2年生ながら出場していた、イースト校における強者の一人に数えられている彼が…

「それと…確かサウス校の…えっと、大門選手だったか…」

そして、そんな虹村に連れ立って呻いているのは、今年の【決闘祭】にも出場していた、サウス校3年の大門　ミヤコの姿。

綺麗な程に真っ直ぐな髪を長く伸ばした彼女が、鷹矢と一回戦で当たっていたことも遊良は覚えている。

速攻が得意のシンクロ使い、1回戦で鷹矢に負けはしていたが、それでも【決闘祭】に出場した程の実力を持ったデュエリストであることに変わりはなく。

「なんで二人が…まさかあんな二人が、敵に負けたってわけじゃないだろうし…」

実際にそのデュエルを見た大門　ミヤコもそうだが、遊良も虹村に対して、代表選抜戦で対戦していたかもしれないことから、過去に彼のデュエルを研究をしていて。

最近の虹村は、鷹矢とのデュエルのときにどこか焦りを含んだデュ

エルをすることが多かったものの…
昨年までの彼の戦法は、腰を据えて相手を押し潰すような『重厚』なスタイルが特徴。
もし彼が鷹矢と戦うときにもこのスタイルを常に貫き通せていれば、鷹矢との実力差は思ったよりも短いというのが遊良の印象だった。

…そんな『敵』が、まさかの二人。

そこらを徘徊している『雑兵』とは一線を画す、遊良にとっては厄介な存在に違いないだろう。

―『雑兵』では手に負えない、抵抗者を潰すための敵の『駒』。

しかしそれだけではない。
『駒』2体が立つ道の奥から、わらわらと『雑兵』達の姿が見え隠れしだしたのだ。
…このまま遊良がここに立ち止まったままでは、いずれ夥しい数の敵に囲まれて身動きが取れなくなってしまうことは必至。
終わらぬデュエルを強いられて、力尽きてしまうか…それとも『駒』である虹村と大門　ミヤコに吹き飛ばされてしまうか…

「や、やるしかないのか…」

―だからこそ、遊良に考えられる選択肢は一つ。そう、無理やりにでも、ここで一気に突破するしかないだろう。
とは言え2体1、それも【決闘祭】に出場するほどの実力者が2人。例えその成績がどうであれ、『闇』に飲まれた敵が厄介な状態になることには変わりなく…
またそのデュエル自体も普段の彼らからは一変してしまっていることを考えると、敵の手も読めず。

言わずもがな、遊良も今までの経験から、闇に侵食されたデッキがその構築すら変えてしまうことを理解しているのだ。

―無論、【決闘祭】を戦い抜いた今の遊良であれば、『駒』２体が相手でも惨敗なんてことはしないはずではあるのだが…

「デュエ…ルゥ…」
「アガァ…」
「くそっ…行くぞ！」

それでも時間を取られ、その後の状況にも響いてくることを考えると…いや、焦って戦い方を間違えると、それこそ取り返しが付かない程に手が付けられなくなってしまうのだから、遊良にとっては分が悪いどころではないだろう。
そうして時間の無い遊良に対して、ゆっくりとデュエルディスクをこちらに向けた『駒』２体が歩いてきて…

それに対して、覚悟を決めた遊良がデュエルディスクを力を込めて構えた…

―その時だった。

「待って、一人で無茶はしちゃいけない。」
「…え!?」

気を張って身構えていた遊良の背後から、急に誰かの声が聞こえ

て。
それは『敵』の呻きでは断じてなく、また遊良がその声を聞き違えるなんてことはありえない。
紛うことなきその声と、遊良の焦りを止めるかのようにして肩に置かれたその手は…
その人物がはっきりと遊良の味方であるということを、確かに彼に伝えているのか。
こんな…そう、まさにこんな状況下で、まさか『この人』の声が聞こえてくるなんて。

―そう、そこに居たのは

「やぁ、無事で何より、天城君。」
「なっ!?泉先輩!?な、何でこんなところに!?」

爽やかに整えられているその容姿は、この混乱の中にあっても確かに輝いていて…
その実力に疑う余地は無く、冷たい風に揺られて流れるその青い髪は、彼の存在をより一層証明していた。

―イースト校3年、泉　蒼人

そう、この迅速を要する状況に対して、これ以上無いくらいの増援でもある蒼人の存在は、今まさに覚悟を決めて戦いに臨もうとしていた遊良にとって、まさに救いでしかないだろう。

―誰もが認める、イースト校における確かな『強者』。

しかし、退院できるほどに回復したとは言え…それでも壮絶なダ

メージを負っていたはずの彼の体は、未だ絶対安静を医師から告げられていて…

「先輩、まだ安静にしてないといけないんじゃ…」

「街が大変なことになっていたからね、居ても立ってもいられなくて。…そんなことより話は後に、急ぐよ天城君。もっと面倒なことになる前に、虹村達を早く倒さないと。」

「は、はい！」

それでも、はっきりと戦う意思を見せる蒼人に、後輩が口出しなど出来るわけがない。

その甘い容姿と裏腹に、どこかこういった混乱に対して場慣れしているような蒼人の立ち振る舞いは…この突然勃発した『異変』に対して、不安を感じていた遊良を落ち着かせるのに十分な様子。

また、その実力の高さを、遊良とて考える前に理解出来ていて。

何せ、代表選抜戦で蒼人が『闇』に飲まれていない、普段の彼のままだったら…遊良とて、勝てていたかわからないのだから。

そんな遊良と蒼人は『敵』へと向けてデュエルディスクを構え、そして目の前の２体の『駒』を見据えて…

「虹村の相手は僕に任せて。大門さんの相手は頼んだよ。」

「はい！」

―有無を言わせぬこのタイミングで、突如、それは始まる。

―デュエル！

「センコウ！４枚伏セ、ターンエンド！」

虹村（『駒』）　ＬＰ：４０００

手札５→１枚

場：無し
伏せ：4枚

始まって早々、『駒』となった虹村はその手札のほとんどを場に伏せてターンを終えた。
それは今までの虹村からは見られないような組み立て方であり、そのあまりのスタイルの変貌は、彼が『闇』に飲まれていることを、否応なしに蒼人にも見せ付けているよう。

「僕のターン、ドロー！」
「スタンバイフェイズゥ！罠発動【バージェストマ・ピカイア】！」

そうして蒼人のターンに入った瞬間に、罠をすかさず発動する虹村。
彼が使い慣れているはずの【聖刻】とは、似ても似つかない【バージェストマ】…罠カードを主体とした、特異なカード群。
太古の生物、ソレよりも更に原始の生物を模したその罠カードは…自らが罠を張り巡らせれば張り巡らせる程に暴れ回り、そして相手を滅ぼすまで続く代物。
それに、『駒』となった虹村が使うソレは、他のデュエリストが扱う【バージェストマ】よりも激しく荒ぶり、まるで『闇』に塗れている所為で、悪意をダダ漏れにして蒼人へと襲って来ている様にも見える。

「虹村、本当に今の君は『君』じゃないみたいだ。」

そんないつものデッキと異なるデッキを扱う虹村に対して、蒼人は一体何を思うのか。
以前自分も飲まれた『闇』…その凶悪さと不快感、そしてその苦しさを知っている蒼人だからこそ、虹村を見据えるその目は真剣で…
誇りと信念、デュエリストの最も大切な『心』を、無理やり変貌させるこの『闇』のことを…絶対に蒼人は許すことができない。

「カカ…【バージェストマ・ピカイア】ノ効果デ…手札ノ【バージェストマ・エルドニア】ヲ捨テ2枚ドロー…」
「虹村先輩、【聖刻】じゃなくて、【バージェストマ】に。やっぱりデッキが変わって…」
「天城君、君は自分の相手に集中して。油断なんて出来る相手じゃないし、そんな状況でもないでしょ？」
「は、はい！す、すみません…」

そんな中で、遊良にも厳しい言葉を投げかけた蒼人。
―そう、タッグデュエルでもなければ、バトルロイヤルでもないこのデュエル。
己自身が目の前の敵を、『1体1』で倒さなければならないこの状況においては…小さなミスなど絶対に許されず、またピンチに陥ったとしても誰も助けることなど出来ないのだ。

…敵が溢れているこの状況で、自分が『敵』になるわけにはいかない。

動揺なんてしている場合ではないのだし、また可及的速やかに勝負を着けなければ、こちらへとゆっくり向かってきている『雑兵』に取り囲まれて手遅れになることは必至。
今目の前に立ちふさがっている相手を、責任持って迅速に倒す。
凛とした蒼人の立ち振る舞いは、それをまだまだ未熟な後輩へと教えているようにも見え…

「僕はフィールド魔法、【ナチュルの森】を発動！」
「罠発動ォ！【バージェストマ・オレノイデス】！ソシテ墓地ノ【バージェストマ・ピカイア】ノ効果発動ォ！【バージェストマ・ピカイア】ヲ守備表示デ特殊召喚シ、【ナチュルの森】ヲ破壊ィ！」

―!

【バージェストマ・ピカイア】レベル２
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／　０

『闇』の意思に飲まれたままの虹村が更に発動した罠によって、蒼人の発動したカードを破壊しながら、更に先ほど発動した罠がモンスターとなりて虹村の場に蘇った。

そう、相手への罠となって敵を捕食し、その後の罠に連なり次々と現れるこの【バージェストマ】達の、その真価。
それは、こうして二重にその存在を示すことで相手に多大なる圧力を与え、更にエクシーズ召喚という進化を経ることで、その本領が発揮されるのだ。

無論、そんな特異なカテゴリーである【バージェストマ】のことを、イースト校随一の成績優秀者として知られるこの泉　蒼人が知らないわけもなく。

だからこそ、突如変貌した虹村相手にも、怯む姿など絶対に見せずに蒼人は戦うのみ。

「虹村、今の君はデュエルを楽しむことが出来ないみたいだ。そんなの君だってつまらないはず。だったら…僕は【ナチュル・パンプキン】を召喚！その効果で、更に手札から【ナチュル・コスモスビート】を特殊召喚！」

―!!

【ナチュル・パンプキン】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　８００

【ナチュル・コスモスビート】レベル２
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　７００

敵となった虹村の呻きを意に介さず、怯むことなく自身の場に次々とモンスターを召喚していく蒼人。
そのどれもが愛くるしい見た目をしているとは言え、その秘めたポテンシャルの高さは昨年の【決闘祭】で既に証明されていて。
昨年の【決闘祭】も、今年に劣らないデュエルが一回戦から決勝戦まで繰り広げられていたが…
その中でも明らかに群を抜いていたのが、ウエスト校の双璧とイースト校の泉　蒼人だったことは、ソレを見ていた人間ならば誰しも感じたことだろう。
蒼人の操る、聖なる森に棲みしモンスターと、その森を守護する獣達の戦い。
相手と拮抗しながら鎬を削りあって行われるからこそ、その戦いは誰の目から見ても楽しいモノとなるのだ。

「行くよ…僕はレベル４の【ナチュル・パンプキン】に、レベル２の【ナチュル・コスモスビート】をチューニング！」

そんな蒼人の声によって、１体のモンスターが４つの光球へと姿を変え、ソレを包むようにして２つの光輪が天へと舞い上がって。
小さな力を紡ぎ、さらなる存在へと昇華するシンクロモンスター。
それを、今ここに呼び出すために。

―それは、輝く。

「聖なる森の守護竜よ、蔓延る悪意を噛み砕け！シンクロ召喚、レベル６！【ナチュル・パルキオン】！」

―！

【ナチュル・パルキオン】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１８００

そうして現れたのは、森を守護する３体の守護神…その内の一体、敵の卑劣なる罠から、棲獣達を守りし誇り高き竜。
敵へと向けたその視線は猛々しく、まるで古代の生物を震え上がらせているかのようにも見え…
かつて主を飲み込んだ『闇』を、決して許すわけがないと言わんばかりに怒りを顕にしているのか。

「ヌゥ！特殊召喚時二罠カード、【奈落の落とし穴】発動ォ！ソシテ墓地ノ…」
「無駄だよ！【ナチュル・パルキオン】の効果発動！墓地の【ナチュルの森】と【ナチュル・コスモスビート】を除外して、【奈落の落とし穴】の発動を無効にして破壊する！」

―！

虹村の罠に対し、蒼人の宣言と共に放たれた守護竜の咆哮は、主へと害をなすモノを決して許さず。
そう、罠カードが主体となる【バージェストマ】というカテゴリーにおいて、この竜の存在は…

純然たる『脅威』、強大なる壁。

―とはいえ、単なる封殺の一手として蒼人はこのモンスターを召喚したのではない。

もしも『相手』となる人間が本当に『デュエリスト』であるならば、

きっと蒼人が用意した壁を何とかして乗り越えようとして自らを高めてくるはず。
そうしてお互いが鎬を削りあうからこそ、そのデュエルはまさに『お互いに楽しい』モノとなるのだが…今の相手は『デュエリスト』ではなく、悪意しかない『敵』。
例え級友が相手でも、ソレを割り切れる彼の経験値がそうさせるのか。
…一刻も早く虹村を解放するために、容赦などしない。
「【ナチュル】が効果を発動したターン、僕は手札から【ナチュル・ハイドランジー】を特殊召喚！そして【死者蘇生】を発動！墓地から蘇れ、【ナチュル・パンプキン！】」
―!!
【ナチュル・ハイドランジー】レベル５
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／２０００
【ナチュル・パンプキン】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　８００
『楽しいデュエル』を信条としている彼ではあったものの、その手を止めることなく蒼人は展開を続けて。
そんな蒼人に呼び出されるのを待っていたかのようにして、彼の場には咲き誇る花の一輪と、カボチャを模した小さな命が芽吹いた。
その奮起は、まるで初めからこんな状況になるのが分かっていたようでもあり、モンスター自らが初めから攻撃の準備していたようにも見える。
カードが煌めき、まるでデッキが己の一部の如く応えてくれる。
そう、蒼人を守り、蒼人と共にある【ナチュル】達…その真価は、この『泉　蒼人』であるからこそ輝くのだ。

「魔法発動、【テラ・フォーミング】。デッキから2枚目の【ナチュルの森】を手札に加え、それをすぐに発動。…行くよ、バトル！【ナチュル・パンプキン】で、【バージェストマ・ピカイア】を攻撃！」
「罠発動ォ！【聖なるバリア―ミラーフォース―】！ソシテ墓地ノォ…」
「駄目だ！再び【ナチュル・パルキオン】の効果発動！墓地の【死者蘇生】と【テラ・フォーミング】を除外して、その罠の発動を無効にして破壊するよ！」

―！

―通じない。
再度響く竜の咆哮、たった一体のモンスターの存在で、虹村は完全にデッキの動きを封じられてしまっている。
そして、『そうなる』と分かっているはずなのに、それでも同じ手を取ってしまうしかないのが、『闇』に飲まれた者なのか。
その『闇』に飲まれた者のデュエルは…普段何気なく、それこそ当たり前のように行っている駆け引きやせめぎ合いを、完全に『デュエリスト』達からそぎ落としているかのよう。

「【ナチュルの森】の効果で、デッキから【ナチュル・マロン】を手札に加える。…虹村、いつもの君だったら…君にしか出来ない手を考えて、僕を相手に罠一辺倒のデュエルはしないはずだ。」
「ガ…ガ…」
「だから、このデュエルはカウントしないでおくよ。僕達の決着は、楽しいデュエルじゃないと意味が無いから。」

そう、もしも普段の虹村であったならば、きっと別の手で目の前の壁を何が何でも越えようとしてくるはず。
場を見て、手を考え、そして己の力を最大限発揮して、なんとして

でも純粋に勝利を目指すために。
だからこそ、こんな『駒』となり下がった虹村を、どうしても蒼人は許せなかった。
同じイースト校で今まで鎬を削りあってきた仲間に対し、こんな姿を強要している『闇』のことを、絶対に。
虹村の場の罠も、森を守る守護竜の牙によって駆除され…
また攻撃を受けた古代の生物は現代に残骸を残すことも出来ず、そのまま除外と言う名の消滅をするのみ。
「…これで終わりだ、【ナチュル・ハイドランジー】と【ナチュル・パルキオン】で、虹村にダイレクトアタック！」

—!!

「ガァァァァァァアッ！」

虹村（『駒』）　ＬＰ：４０００→０（—４００）

そうして、２体のモンスターの突撃を正面から喰らい、虹村の体が吹き飛ばされていって。
その衝撃は、確かに実体化したモンスターの攻撃から来るモノではあったものの…それでも他の容赦の無い『敵』達の攻撃と比べると、その衝撃はどこか手心の加えられた小さいモノにも感じられることだろう。

—ピー…

混乱の街に起こったこの無機質な機械音は、一般人を襲っている『敵』が打ち鳴らすモノとは異なっているように鳴り響き…
「ガ…ガハァ…」

…虹村から放出されていく【闇】が、彼を深い闇の中から解き放って。

もし虹村がこの戦いを知れば、きっと彼は自分を許さないだろう。だからこその、蒼人から出たノーカウントの宣言。

それは、本来の戦いたい相手ではない存在、その本来の実力を発揮出来ないのは、デュエリストである人間ならばどれほど悔しいことなのかを、代表選抜戦で『闇』に囚われてしまっていた蒼人は理解しているから。

虹村を見る蒼人の表情は、誰かに強要されたデュエルでは、自分達が本当にしたい戦いではないのだと、そう言いたげな顔をしていて…

希望は捨てない、『闇』に囚われた人々を必ず救い出す。

…そんな1人の男の気概と、街に吹く風が…ここに一人の男の『闇』からの解放を告げていた。

――…

ｅｐ３９「抵抗者達の進撃」

「バトルだ！【堕天使スペルビア】で【獣神ヴァルカン】に攻撃！そして【堕天使ユコバック】と【堕天使アスモディウス】でダイレクトアタック！」

—!!

「アガァァァァァ！」

大門　ミヤコ（『駒』）　ＬＰ：４０００→３１００→０（—６００）

蒼人と虹村のデュエルによって鳴った音からほんの数瞬遅れてのこと。

敵の『駒』となっていたサウス校３年の大門　ミヤコが、遊良の操る堕天使達の総攻撃によって吹き飛ばされていた。

—ピー…

どうやら、『駒』の一人を相手にしていた遊良も無事にその猛襲を打ち破って、無機質な機械音がそのデュエルの終了を告げたよう。

速攻を得意としてくる相手にさらなる速攻で勝利を収めるという暴挙とて、蒼人という心強い増援によって心の冷静さと余裕を得られた今の遊良ならば難なく行えることに違いなく。

流石は【決闘祭】の優勝者。

以前と戦い方が変貌した敵とは言え、激闘によって心身ともに鍛えられた今の遊良の実力があれば、ソレに惑わされることなく戦うことなど造作も無い様子を見せている。

そして遊良と蒼人、二人の速攻が項を成したのか。こちらへと向かってくる『雑兵』達との距離もまだ余裕があり、この様子だと倒れ

ている虹村たちを担いでも逃げられそうなほどに距離があった。

「ア…ガバファァ…」

「ブハッ…アババ…」

そうして、たった今そのＬＰをほとんど同時に０にされた敵の『駒』、虹村と大門　ミヤコが苦しそうにその体の内から『闇』を噴出し…

敵にデュエルで勝った解放の証となって、ソレが靄となって空に四散して消えていって。

―負ければ、『闇』に飲まれ…しかし、勝てば『闇』から人々を解放できる。

敵に操られるままに、ただデュエルを強いられるだけの存在にされていることなど、一体誰が喜ぶというのだろうか。

虹村たちの苦しそうな様子から見ても、流石にその意識をすぐには取り戻せそうに無いが、それでも虚ろな目で呻くだけの存在と成り果てていた虹村達の表情は『闇』から解放されたおかげか、多少ではあるもののどこか安らいだようにも見える。

そして思いのほか早く方を着けられたことに安心したのだろう、今デュエルを終えたばかりの蒼人は、同じくデュエルディスクを閉じていた遊良を見て口を開いた。

「流石は天城君。よし、じゃあ虹村と大門さんを安全な場所に運ぼう。ここに置いたままじゃ、また敵になってしまうかもしれないからね。」

「はい、だったら俺の家に運びましょう。すぐそこですから。」

「うん、お願いするよ。しかし…本当に酷いね、一体街に何が起こったんだろう。」

「…わかりません、とにかく、今の現状を把握しないことには…」

そう、抵抗するデュエリストを狩るための、厄介な敵の『駒』は確かに倒した。
しかし、現状が改善したとは言いがたい事を遊良とて理解していないはずがないだろう。
敵の数は時間を追うごとに増えていき、また一度倒して『闇』から解放した敵も、そのままにしておけば何時また『闇』が侵食して動き出すか分からないのだ。
何せ、街には溢れるほどに『闇』が渦巻いていて、今こうしている瞬間にも誰かがどこかで襲われているのだから。
そんな『闇』のことを少しでも知っている遊良だからこそ、何か行動を起こさなければという気持ちが沸き起こってきていて…
そうして『雑兵』達がゆっくりと遊良達に向かって歩いて来ているものの、それに捕まらない内にその場を離れようと、遊良と蒼人がすぐさま倒れた2人を担ごうとした…

―その時だった。

「邪魔だと言っているだろうが！全て吹き飛ばせ、【励騎士　ヴェルズ・ビュート】！」

―！

突如として巻き起こった巨大な衝撃波、ソレと同時に聞こえる声。
その盛大な衝撃波によって、遊良達へと向かっていた『雑兵』達が全て吹き飛ばされていくその光景は…冷徹無比で遠慮が無く、『敵』とは言え一般人をただ無慈悲に吹き飛ばすだけの代物。
そして、その後ろから聞こえてきた声を遊良が聞き間違えるわけが無く、視線をそちらへとやれば、ソコには間違えるはずも無い鷹矢の姿が。

「鷹矢！」
「む、遊良！やはり無事だったか！」
「あぁ、なんとかな。でもお前も無事でよかった。」
「フッ、俺がこんな奴らにやられるわけがないだろう。いらん心配だ、遊良の癖に。」
「んだと!?折角心配してやったってのに、鷹矢の癖に！」
「ま、まぁまぁ二人とも。それより、早く虹村たちを運ばないとまた敵が来るよ？」
「む!?確か貴様はこの前見舞いに行ってやった…それにそこで倒れているのは虹村ではないか。なぜ虹村がここに？」
「はぁ…後で説明してやるよ。」

突然こんな状況に巻き込まれたとは言え、焦った様子もなければ普段通りの振る舞いを当然のように見せる鷹矢の図太さをどうかと思いつつも…
それでも、示し合わせたわけではないのにほぼ同時に家に戻ってきたタイミングの良さと、片割れの無事な姿を確認できて、どこか安堵の表情を見せる遊良。
駆け寄ってきた鷹矢が、地面に倒れて気を失っている虹村を見て意味が分からないといった雰囲気を遊良に伝え…それでも、すぐさま街の現状を考え何が起こったのかをすぐに察したのか、遊良へと向かい直すとその口を再度開いた。

「…なぁ遊良、お前に相談したいことがあるのだが。」
「あぁ、この『闇』のことだろ？」
「うむ。俺に一つ心当たりがあるのだ。」
「…心当たり？…そうか、わかった。」

鷹矢の言った『心当たり』。
それは、一度この『闇』をその体に押しとどめていた鷹矢だからこそ感じたモノに違いない。

しかし、突如何の前触れもなく巻き起こったこの『異変』に対して、その背景も何も知らぬ遊良からすれば鷹矢のその『心当たり』とて、『勘』に頼った不確かなモノだというコトが分からないはずがないのだが…

それでも、その言葉を単なる馬鹿の戯言と切り捨てない辺りは流石幼馴染か。

鷹矢の言葉を否定せず、彼の感じたモノを疑わず。遊良にとって、鷹矢の言葉を素直に信じることなど造作も無いことであって。

…普段は気の抜けるようなことばかり言う癖に、ここぞという時には確信をつける感性を鷹矢が持っていることを、遊良は知っているから。

「…それより、今は先輩たち運ぶの手伝え。家に入れて、休ませてあげないと。」

「うむ。」

幸いにも先ほど鷹矢が『雑兵』達を盛大に吹き飛ばしてくれたおかげで、この地区の周囲の敵の数は少なくなった様子。

とは言え街に溢れている敵の数を考えると、何時また湧き出てくるかわかったものではないことは確か。

鷹矢がすぐさま気を失って倒れている虹村と大門　ミヤコの二人を軽々と担ぐと、遊良と鷹矢、そして蒼人の3人は急いでその場を後にし始めた。

鷹矢の趣味である筋トレが大いに役立ちつつ、いつも学園へと通うため歩く並木道を抜け、普段何気なく通る曲がり角を警戒しながら曲がって。

その時にも倒れている人間は多少目に入るものの、敵の姿は見えず。3人は目的の場所、遊良と鷹矢が現在住んでいる家へと向かう。

―例え不確かな『勘』であっても、僅かに光った希望から、少しでも進撃を目指すために。

「よかった、家は無事だったみたいだ。虹村先輩たちを休ませたら、すぐにまた出よう。ルキを探さないと。」
「うむ。」
「僕も手伝うよ、何かあったら大変だ。」
「はい、ありがとうございます。」

そうして、今やるべきことを常に考えながらも住みなれた家の前に着いた所で、遊良が玄関のドアの鍵を開けた…

―その時だった。

「遊良！鷹矢！」

遊良が玄関のドアを開けた、その瞬間のこと。
誰も居ないはずの家の中から、不安を弾けさせたような声が響き…
そこには、先に家に着いていたのだろうルキがリビングの方から顔を出して、遊良と鷹矢の顔を泣きそうな目で見ていた。
今朝会ったときに着ていた晴れ着ではなく、この家に置いてあった普段着に着替えたらしい。
そのままルキは遊良と鷹矢の二人に飛びかからんとする勢いで飛び出して二人に抱きつくと、泣きそうな声を漏らして口を開く。

「よかったぁ…二人とも無事で…」
「ルキ…先に避難してたのか…でも、ルキも無事でよかった…」
「うむ。」

3人が3人とも無事であったことをようやく確認でき、彼らのその声のトーンが安心からか一つ落ちたのが誰の耳にも明らかであったものの…

いつ敵が襲ってくるか分からぬ状況で大切な幼馴染が無事な姿を見せたのだ。彼女が張り詰めていた気持ちが思わず緩んでしまったとしても、それは仕方のないことだろう。
それにルキがここに居るということは、この地獄のような街の様子を当然彼女も見ているはず。それがどんなに悲惨な状況なのかは、彼女も理解していることであって。

「初詣に行こうとしてたら、急にこんなことになって…」
「…おじさんとおばさんは？」
「…逃げるときにはぐれちゃったよ…。私はこの家のすぐ近くに居たからすぐに逃げてこられたけど…お父さん達にも連絡が取れないし、もう何が何だか…」
「そうか…とりあえず、話は家の中に入ってからだ。虹村先輩たちも休ませたいし。」
「え、虹村先輩って…あ、泉先輩もいる。」
「やぁ、無事で何より、高天ヶ原さん。」

そこで初めて蒼人の存在に気付いたのだろう、抱きついていたその手を遊良と鷹矢から離すルキ。
そこに何故蒼人が居るのかを彼女には想像ができず、また鷹矢が軽々と抱えていた他の二人の存在にも同時に驚きつつも…彼女もこの家に来るまでに見た状況を思い出すと、遊良が教えるまでもなくその理由は理解できているのだろう。
そして何時までも外には居られず。
…４人はそのまま家の中へと入ると、遊良が客間に布団を用意し…
そこに気を失っている虹村と大門　ミヤコを寝かせると、そのまま彼らはリビングへと集まった。
テーブルを囲い、各々が見てきたモノを話し合うために。

「一体急に何が起こったと言うのだ…ここに来るまでに街の様子を見てきたのだが、建物が壊され人は襲われ…とにかく物凄く酷かった

ぞ。」
「襲われてる中にも、襲ってる中にも小さい子がいたよ…」
「…俺は煙が上がった時、街の外から見てたけど…でも突然すぎて何が起こったのか…」
「ねぇ遊良、先生は？先生ってこれに関して何か仕事してるんでしょ？」
「先生は…海外で仕事だって言って行ってしまった…騒ぎが起きたのも、先生達が出発して暫くしてだから急には戻って来れないだろうし…連絡なんて取れないし、そもそも簡単に連絡なんて取れる人じゃない。」
「むぅ、こんな時に使えんジジイだ。」

そんな少年達の表情は暗く、今起こっている事への不安と焦燥が表立って溢れてきていて。
それもそのはず、新年が明けたばかりであんなに平和だった街が、急に混乱の渦へと放り込まれたのだ。
その渦中に取り残されてしまった少年達はまだ若く…いや、まだ幼く、またソレに関して特別な情報を知りえているわけでもない。
彼らの師がこの現象に関わっていることを知ってはいても、ソレに対しても何かを伝えられているわけでもないのだから、下手に動くことも出来ず。
外の敵に見つからないようにカーテンを閉めて、電気系統の一部ががやられてしまったのか停電になっているためにこの部屋も暗く…
まるで今落ち目にある気分が、部屋の暗さに相まってさらに重くなりそうなほどに、今の彼らに容赦なく圧し掛かってきていた。
「どうやら被害は街の中心部にかけて酷くなっているようだ。決闘市の中心に行けば行くほど、操られた人の数が増えていくらしい。」
「…え？」

そんな時、急に蒼人が口を開いて。

その口調はまるで、この状況においても萎縮などしておらず、情報を冷静に飲み込んで何かを考えているようにも見える。
適当な事を言っているわけでもなさそうで、彼は自身の端末の画面を見て、何かを確認しながら言葉を述べているよう。

「逆に街の外へ向かうほど襲ってくる人の数は少なくなるようだけど…その分、手強い相手に襲われる場合が多いらしい…街の外に逃げようとした人も、その所為で街から出られないみたいだ。…まるで意図的に配置を調整しているようにも見えるね。」
「…泉先輩、何でそんなことが？って言うか、その情報はどこから…」
「…この状況下でも、何とかしようと動いている人達もいるってことさ。僕の場合は、十文字　哲と連絡を取り合ってて。混乱が起きても、一応連絡が取れるようにしているんだ。」
「む、十文字だと…何故貴様があの男と？」
「昔ちょっと…でも、そうやって動いている人達も一体いつまで持つか…何せ敵の数が多すぎるし、この調子だと持って3日…いや2日も掛からずに決闘市は壊滅してしまうかもしれない。」
「か、壊滅って！」
「そんな…酷い…」

この混乱の中でも、冷静に対応して行動している人間がいるというコトに若干の驚きを見せつつも…それでも蒼人から冷静に導き出された最悪の結果に対して、益々不安の気持ちが大きく膨れる遊良達。
こんな非現実的な現象と被害、そして人が突然変貌して襲ってくるという恐怖が相まって、とてもじゃないが改善の策など少年達に思い浮かぶわけが無いだろう。
何せ、今起こっているこの混乱も、真相を知らぬ少年達からすれば超常現象の類。その原因も分からないのだから、なにを持って解決するのかなど分かるはずもないのだから。
そんな不安と焦燥に駆られている遊良達を見て、再度蒼人が口を開く。

「落ち着いて、ここで取り乱したって何も解決しない。だからこそ、無事な僕らが何かを考えないといけないんだ。慌てふためく元気があるなら、なおさらそれを思考に回すようにしないと」

こんな突然の混乱に放り込まれたのは蒼人とて同じ。しかし、彼がここまで冷静にしているのも、彼自身の過去の経験があってこそ。

蒼人の過去など何も知らぬ遊良達からすれば、信じられない程に場慣れしている蒼人にただ驚くしかないものの…

それでも、こういった状況で一人でも冷静な人間が居てくれるだけで、不安に駆られていた心に落ち着きと安堵が生まれたとしても不思議では無い。

「情報が少なくてもいい。でも、とにかく今の僕達で何が出来るのかを考えよう。」

「考える…考える、か。」

「うむ。」

その安堵の程度も、ソレが年上の人間であればなおさらのこと。

たった2歳の差とは言え、この年代の少年達からすればその『2年』とは驚くほどに『子供と大人』の境界線を分け隔ててくるモノなのだ。

蒼人の態度がより冷静でいてくれることが、どれほど遊良達の安堵に繋がっているのかは…切羽詰っていた先ほどの少年達の表情と比べて、今のこの表情を見れば一目瞭然であって。

「…幸い、僕達はこの『闇』について無知じゃない。僕は一度この『闇』に飲まれたことがあるし、天城君と天宮寺君は『闇』と数回戦ったことがある。」

「うむ。それに俺は『闇』を狩っていたからな。誰よりもコレのことを知っているぞ。」

「いやいや、鷹矢のそれ自慢じゃないから。大体私達にも内緒にして

て。」
「あぁ、本当に心配ばっかりかけやがって。」
「ぬ…」

そして、まだその言葉に少々の不安を孕んではいても、それでも少年達には多少の冗談を言える位にまで心に落ち着きが出てきたのだろうか。
しかし、今この状況ではその少しの余裕が大切。心に余裕も持てず、ただ不安に押し潰されたまま街を逃げ回っていれば、いずれ早い内に敵の前に倒れていたことも考えられるだろう。
だから寧ろ、ここで多少の軽口を叩けるくらいが丁度よく…その方が頭を回転させやすいことを蒼人は知っているからこそ、こんな状況下でも穏やかに後輩たちを見ていて。
現状を考えれば、まだまだ街は悪化の一途。
下手に希望を持たせたわけではないが、それでも今街に溢れている『闇』に対し、その良し悪しは別にしてもソレに関わったことのある人間がここに集まっていることを活かさなければと、そう言わんばかりに。

「よし、じゃあ状況を整理しよう。さっきの哲からの情報が本当だとすると…」
「人を街から出さないように…でも街の中心には近づけさせないようにしている…ってことですか?」
「うん。もしそうなら、これは突発的に起こった災害じゃなく…何か目的があって、人為的に引き起こされた可能性が高い…もし誰かが『闇』を操っているのだとしたら、きっとその中心にいるのが…」
「ふむ、黒幕と言うわけだな。」

先ほどの悲観的な考えしか出てこなかった少年達とは打って変わって、多少生まれた冷静さのおかげか言葉が紡ぎやすくなっている様子。

蒼人から提示された情報で、考えられる状況を頭に思い浮かべ…現状の把握をすることで、目的が明確にわかるのだ。
まぁ、だからと言って状況が改善しているわけでは無いのだが。実際に街中には未だ敵が溢れていて、敵の中枢と考えられる『部分』に目安が着いたからとは言っても、それも単なる状況から見た憶測に過ぎず…
その正確な場所がわからなければ、大量の敵の中にただ飛び込んでいくだけ。
また、鷹矢も敵の黒幕と簡単に言うが、その正体には影も形も想像がつかないのだから…一か八かで打って出るわけにはいかないだろう。

「…あぁそうだ遊良よ、その黒幕のことなんだがな。」
「…さっきの心当たりか？」
「うむ。」

だからこそ、鷹矢は己に浮かんでいた『心当たり』を遊良へと伝えて。

「…俺が【決闘祭】で戦ったあの紫魔の女…なんと言ったか？」
「紫魔　ヒイラギ先輩だろ？」
「あぁそうだ、その紫魔の女なんだが…俺はあの女が怪しいと思っている。実は今まで黙っていたが、あの試合…その紫魔なんとかと言う女が、試合中に俺に何かをしてきたのだ。」
「…は？な、何かって…」
「うむ。『付いている者を操ることは容易い』とか、『何で言う事を聞かない』とか…とにかく、あの女の声が妙に頭に響いて煩かったのを覚えている。」
「…は？」

それは、たった今遊良達が辿りついた結論が…

この混乱が『人為的』に引き起こされている『可能性がある』という程度のものだったのに…

その段階を軽々と飛び越えるような鷹矢の言葉が部屋に放たれ、それと同時にここに居る鷹矢以外の人間が、同じイースト校の生徒で【決闘祭】の代表でもあったその名前を耳にして、何と反応していいのか困っている様子を見せていた。

誰もが鷹矢の言葉を、ただの『勘』と切って捨てることは容易いけれども…鷹矢が【決闘祭】で実際にヒイラギと戦って、そして実際に『何か』されかけたことは紛れもない事実。

「だからこそ、俺にはあの女がコレに関係が無いとは思えんのだよ。」

「お、お前…」

この男が『闇』にずっと関わってきて、さらにソレに対してヒイラギが『何か』をしてきたという、鷹矢にしか分かるはずもない感覚と経験を得ているからこその、彼のその言葉。

いくら何でも、鷹矢のソレだけで彼女を黒幕だと判断するには早計…それでも街に溢れている『闇』が、もし鷹矢の言う通り紫魔　ヒイラギによって操作されているのだとしたら…

―ただの『勘』と言うにはあまりに的を射ている。

この緊急を要する事態で、その可能性が怖いほどに真実味を帯びているのだ、解決への光明が現れたというのに、見知らぬフリなど出来ないだろう。

…だからこそ…

「そんな大事なことはもっと早く言えよこの馬鹿野郎！」

「ぬ!?」

「そうだよ！大体なんでこんな時までそのこと黙ってたの!?それが

もっと早く分かってればこんな事態になる前に何とか出来てたかもしれないのに！」
「いや、それはだな…」

遊良もルキも、今更になってこんな重要な事実を言ってきた鷹矢を叱りつけて。
いくら鷹矢が遊良と戦う時用にずっと隠していたのだとしても、『闇』の事以上に、ヒイラギの動向の怪しさがもっと早くに発覚していれば、この事態を防げていたかもしれない可能性は大いにあるのだ。
当然、鷹矢もこんな大事が起こるだなんて予知していたはずもなく。
大体、彼が『闇』を集めていたのだって、【決闘祭】で遊良と戦う時の隠し玉としてしか考えていなかったのだから、その正体も黒幕も知っているわけが無いのだ。
だからといって鷹矢が悪いわけでないと言うことは、遊良達にだって分かっているのだが…それでも、この最悪の状況が少しでも無かったかもしれない可能性を考えるとキリがないのか。

「…でもさ、鷹矢の言う通りだったらこれを引き起こしたのは紫魔家ってこと？ってことは、紫魔家の人間を見つけて情報を得たら…」
「…いや、襲われている中には紫魔の人間も大勢いたから…一概に紫魔家の全てがコレに関わっているわけじゃなさそうだね。寧ろ紫魔家の総勢を考えると、ここまで計画的に隠れて動いてきたのなら、敵は少人数の可能性が高いかもしれない。計画を知る人間が増えれば増えるほど、計画が漏出する可能性が高くなるから。」
「『闇』を操れるであろう紫魔の女が、まさかこの混乱で襲われているとも考えられんしな。だったら裏で操っている可能性の方が高い。」
「…じゃあ紫魔先輩が怪しいってのはわかった。泉先輩、何とかして紫魔先輩を見つけ出すのが優先ってことになりますか？」
「…天宮寺君の話が本当ならそうなるだろう。それに、僕もボンヤリではあるんだけど…『闇』に飲まれた瞬間に、２年生の紫魔　右京君

が僕に何かしたような覚えがあるような無いような…確か、『お嬢さま』がどうとかって…選抜戦の時に彼がヒイラギさんをそう呼んでいたから、多分間違いない。」

それでも、目指すべきモノが全く分からなかった時点から考えると、驚くほどに点と点が繋がっていく遊良達。

その考えが間違っている可能性も大きいとはいえ、それでもここまで納得のいく可能性まで辿り付けた彼らからすれば、ここで足踏みしているわけには行かないだろう。

…見つけるべき『人間』に、目星はついた。

あとは、その場所。

おそらくは、敵が固まっているらしい決闘市の、中心街のどこかなのだろうが…

しかし、そこに居るのではないかという『可能性』だけでは、そんなところに飛び込んでいくわけには行かず、ただ闇雲に向かっていくわけには行かない。

何か他に考えられることは無いか…彼らが思考をフル回転させようとしていた…

―その時。

―！

急に震えた、メッセージの受信を告げるバイブレーション。テーブルの上に置いていたものだから、硬いテーブルと端末が細かく打ち合って…

静かで暗いリビングの中に、振動音が響き渡った。それも一つではない、遊良と鷹矢の端末に、それぞれ同時に。

「ビックリした…誰だこれ…知らないアドレスからだ…」

「む？俺の方に届いたのも同じ奴からみたいだぞ。」
「…え？い、一体誰が…」

予期せず鳴り響いた振動音に若干の驚きを見せる遊良。
この混乱の中で、何か特別な連絡網を持っているらしい蒼人は別にしても…回線がパンクしているのだから、到底メッセージの受信など起こるはずが無いと思っていたためか。
しかも鷹矢と同時にメッセージが届き、それが同じ相手からと言う…怪しさも危険度も多大に匂ってくるソレに対して、遊良にはどうしても警戒心が勝ってしまうのだろう。
何か考えるようにしてそのメッセージを見て、今まさに意を決してソレを開けようとして…

「む!?『敵はセントラル・スタジアム』…たった一言、これだけだ……む!?そうか、敵はセントラル・スタジアムに居るのか！そういえば街の中心部に黒幕がいると言っていたな！そうに違いない！よし、場所が分かった！一刻も早く行くぞ遊良！」
「…罠でしょ、それ。」
「あぁ、罠だろうな。」
「罠の可能性が高いね。」
「ぬ!?」

そんな遊良などお構いなしに、何の警戒心も無しにそのメッセージを鷹矢は読んで。
何より出所のわからぬそのメッセージを、何故そこまで鷹矢が素直に信用出来るのかが全員の疑問ではあるものの…それより遊良達が欲しかった情報が、こんなタイミングよく、しかもこんな状況下で届くというコトなど普通はありえないことだ。
だからこそ、『罠』の可能性が高すぎるこんなメッセージなど、遊良達が信用できるはずも無く。

「でもこんなモノ、一体誰が何のために…？」
「わからない…でも罠の可能性が高いのに、わざわざ出向くのは危険すぎる。確かに街の中心部に黒幕がいるんじゃないかって考えてはいたし、街のほぼ中心にあるセントラル・スタジアムが怪しくないとは言えないけど…」
「しかし、本当にセントラル・スタジアムにいるのかもしれんのだぞ!?ならば逃げる前に行かねば意味が無いのだ、ここでグズグズしている暇はない！」
「いやどっから来るんだよお前のその自信は…」

全く信用できない謎のメッセージだというのに、どうして鷹矢がここまで確信を持っているのかは、遊良達からすれば不思議で仕方ないことだろう。
確かに自他共に認める、鋭い『勘』を持つ鷹矢。彼の直感が時折、それこそ本人すら理解していない物事の本質まで届いていることもあるのだが…それでも、この状況でその『勘』にだけ頼って動くわけにはいかない。
多数決を取れば、このメッセージは罠。例え鷹矢が頑なとしてコレを推したとしても、他の3人が許しはしないだろう。
そんな訝しげな顔をしている3人へと向かって、鷹矢は再度、自信満々に口を開く。

「俺には分かる。何せ【決闘祭】の最中、会場内のいたるところで『闇』が消えたり現れたりしていたのを俺は感じていたのだ！だからあそこに何かあるのだとしても不思議では無い！」
「…は？」
「『白紙のカード』を通して感じたことだからな、間違いない。少なくとも、試合が終わるたびに会場のどこかに『闇』は出現していた。うむ、あの時のソレが敵だったのだろう！」
「……だからお前は！そういう大事なことはもっと早く言えこの馬鹿！何で昔っから大事なことを言い忘れるんだ！」

「む!?折角真実味を帯びてきたと言うのに何だその言い草は！今言ったからいいだろうが！」
「良いわけあるか馬鹿野郎！」
「なんだと!?遊良の癖に！」
「うるせぇ、鷹矢の癖に！」
「ちょっと二人とも！こんな時になに喧嘩してるの！」
「そ、そうだよ、天城君も天宮寺君も落ち着いて！確かにコレは大きな情報かもしれないんだからさ！」

そのメッセージの出所がどうあれ、何も分からなかった最初の時点から考えれば鷹矢の言う通り、敵の形が見えてきたことは明らかではある。
鷹矢がもし『闇』に固執せず全くの無関係であったならば、少年達はここまでの考えに至ることすら出来なかっただろう。敵の正体に目星などつけられず、またメッセージが届いても罠としか思えずに。
それでも、このメッセージが罠である可能性の方があまりにも高いことには変わりないのだが…そう、これはあくまで予測の範疇、誰が送信したのか分からないアドレスから、こんなに都合よく敵の居場所が来ていいのか…と。
だからこそ…

「…罠かもしれんという事は俺もわかっている。だから俺一人で行く。お前たちはここに居ろ。」
「いや駄目だろ、危険すぎるし、第一本当に敵がセントラル・スタジアムに居たとしても、お前一人で何とかなるはずないって。」
「敵は少人数なのだろう?だったら俺一人でも何とかなるかもしれん。」
「…でも鷹矢の言ってるソレってあくまで想定の話でしょ?それに連絡も取れなくなるし、無事かどうかもわからなくなるんじゃ、危険すぎるよ…。」
「…むぅ」

敵が溢れているらしい中心部、確かに大勢で行くよりは身動きを取りやすい鷹矢一人で向かう方が、合理的ではある。…それに、もし鷹矢がやられたと仮定しても、残っている人間が多い方が建て直しも効くことは確か。
それでも、遊良もルキも、鷹矢が自ら進んで危険な場所へと突っ込もうとしていることに対して、大手を振って勧められるわけがないだろう。
…いくら馬鹿で勝手なことばかり言う奴だとは言え、遊良とルキにとっては代わりなど居ない唯一無二の存在。
とてもじゃないが、無謀に突っ走らせるわけにはいかないのだと…その様子を崩すことなど出来ない姿を見せていて…

「…セントラル・スタジアムには、哲にも行ってもらうよう頼もう。それなら連絡も取れれるし、ああ見えて彼も相当こういったことに慣れているから、何かあっても彼と二人なら確実に逃げられるはずだ。」
「え、泉先輩!?」

それでも、微かに輝いた光明を見逃さない蒼人。
無謀な策と不確かな情報…しかし、確実性が無いわけでもなく…もしこれらが一致した時には、それこそ事件の核心にまで近づけることを感じ取ったのだろうか。
確信は無い。それでも、賭けるには値すると言わんばかりに。
少なくとも、鷹矢の実力ならば街に溢れている『雑兵』達に負けることは無いだろうし、この家まで駆けてきた鷹矢なのだ、身の守り方も分かっていることだろう。
そこに蒼人が信頼を置く十文字　哲が合流してくれれば、おそらく最悪の事態にはならないはずだ、と。

「確かに危険には変わりないし、天宮寺君が感じたモノは彼にしか分からないけれど…でも、ソレは無価値じゃない。無闇に突っ込むん

じゃなく、ここまでイメージ出来ているなら、行動してみる価値はあると、僕は思う。」
「そうだろう？ならば行くしかあるまい。それに、まだ何かあると決まったわけでは無いのだ。何も無ければ、『セントラル・スタジアムには何も無かった』と言うことが分かる。街の中心部の『どこか』に敵がいると仮定しているのだから、それもある意味収穫だろう？」
「…まぁそうだけどさ。」
「でもさ、どうやってセントラル・スタジアムまで行くの…？敵も多いし、電車だって止まってるんだよ？」
「うむ、それなら考えてある。」

そう言うと鷹矢は立ち上がって、リビングにある戸棚の一つを開けると、その中から鍵を二つ取り出した。
何の変哲も無い、どこかの鍵と何かの鍵…およそこの家に置いてあるのだから、この家のどこかの鍵であることは確かなのだが…
それを見て、遊良だけは鷹矢が何をしようとしているのかを理解したようで。

「鷹矢、お前まさか…ガレージの車出す気じゃ…」
「いや、バイクだ。ジジイの物だが、この事態でそうも言っていられんだろう？どうせガレージで眠らせているだけなのだ、走らせても問題ない。」
「バイク!?鷹矢って免許持ってたっけ!?」
「何を言っているんだルキよ、俺が持っているわけないだろう。だが操縦の仕方は分かっているから安心しろ。道も覚えているしな。」
「えぇー…そういう問題じゃないと思うけど…」

王者【黒翼】の持ち物だけあって、一般家庭よりも大きな造りとなっているこの家にある、大きなガレージ。
そこに鷹峰が趣味で買い集めた車やバイクなどが置いてあることは、無論この家に住んでいる遊良と鷹矢も知っているコト。

そんな中、この際『車』でも『バイク』でもどちらでもいいのだが…確かに敵よりも早く動け、かつセントラル・スタジアムまで一気に素早く移動できるモノであることは確か。
しかし、無免許運転など普段であれば絶対に許されるわけが無く…こんな状況でも、許されるかどうかは甚だ疑問ではあるが…それでも、手立てが揃ってきてやるべきことも固まってきたのならば、動かないわけには行かないのだと、そういわんばかりの雰囲気をしている鷹矢。
そんな鷹矢を見て、遊良とルキは苦い顔をせざるを得ないものの…覚悟を決めたかのようにして、鷹矢は二人を見て…

「俺は行くぞ。」
「…本当に無茶ばっかしやがって、鷹矢の癖に。」
「む？お前には言われたくないぞ、遊良の癖に。」
「危なくなったらすぐに逃げてよ？何かあってからじゃ遅いんだからね？」
「ふん、俺にそんな心配などいらんと言っているだろうが。」
「…天宮寺君、哲にはもう伝えておいた。街からここまで辿りついた君なら問題ないとは思うけど…何かあったらすぐに僕も助けに行くから。」
「うむ。」

覚悟は決めた、『もしも』の場合でも、被害は最小限。それに、捨て駒になるつもりは初めから無く、本気で事態をなんとかしようと鷹矢は考えているからこそ…もう誰も鷹矢を止めることなど出来ない。
そうして裏口の方からガレージへと向かおうとしている鷹矢へと、彼らは言葉をかけて…
カーテン越しに家の外を確認すると、今のところは幸いにも近くに敵は居ないようで。確かに、打って出るなら今しかないだろう。これ以上時間を置くと、敵の数は更に増えるだろうから。

―!

確かにかかったエンジン音が鷹矢の出発を伝え…

運転などしたことが無いはずなのに、一体いつ操作を覚えたのだろうと思いつつも、そういえば前に鷹矢の部屋を掃除した時にバイク雑誌を発見した事を思い出して、妙に納得してしまう遊良。

いつの頃だったか、鷹矢が、祖父のバイクが欲しいと言っていたことがあったと、幼少の頃のソレも同時に思い出して。

…その一台一台の価値が、実は途方もない金額であり…下手をすれば住宅一軒の値段よりも高い物もあるという事実を、遊良は知らないが。

そんな鷹矢の走らせたバイクのエンジン音がみるみる内に遠ざかっていき…やがて遠くなりすぎたのか、その音が聞こえなくなった所でルキが口を開いた。

「…そういえば、遊良の方も同じ人からメッセージ来てたんだよね？内容も同じだったの？」

「まだ見てないな、多分そうだと思うけど…」

「一応見てみたら？」

「…そうだな、えっと…」

そんな中でルキに促され、遊良は自身の端末を取り出すと未開封のメッセージを開くための操作をし始めて。

たった一言、『セントラル・スタジアム』という単語を頭に思い浮かべながら、どうせ鷹矢に届いたのと同じモノだろうという思いが彼の頭の片隅に残ってはいるものの…

その文字列を目に入れて、その意味を頭が瞬時に彼に理解させ…

…そこには

「…え!?…セントラル・スタジアムじゃ…ない…これって…」

そこに書かれていた場所は…鷹矢に来たモノとは、異なった場所が示されていた。

ｅｐ４０「核心の序章」

「…どういうこと？鷹矢に届いたモノと違う場所って…」

鷹矢がセントラル・スタジアムへと出発してすぐのこと。遊良の言葉を聞いたルキが、不可思議な感情を表に出した声でそう聞いてきた。

それは、つい先ほど同じタイミングで同じアドレスから届いた、遊良宛のメッセージを彼がたった今確認したところ…その中身が、鷹矢に届いた『敵はセントラル・スタジアム』と言う一言とは異なっていたからに他ならない。

その所為で、遊良もルキも、そして蒼人も驚いている様子を見せていて。

その内容を見るに、鷹矢を出発させてしまったことを早計だったかと誰もが後悔するも、回線がパンクしているために既に行ってしまった鷹矢に連絡など取れないのだから、『戻ってこい』と伝えることも出来ず。

鷹矢が向かったセントラル・スタジアムも、遊良に届いた『別の場所』へのメッセージにも…やはり罠なのかという不審感が再び彼らには募ってきている様子。

「…俺と鷹矢を離すための罠だったってことか？」

「どうするの？鷹矢はもう行っちゃったし…」

「…でも、天宮寺君がセントラル・スタジアムまで行ってくれれば、そこで哲と合流できるはずだから…すぐに戻ってくるように伝えよう。多分、天宮寺君なら絶対にセントラル・スタジアムまでは辿り付けるはずだから。」

いくら鷹矢の『勘』が働いて、また鷹矢にしか分からぬものの信用できる情報が集まったからとは言え…これはやはり、まだ不確かな憶

測だけで打って出るタイミングではなかったということなのだろうか。
遊良達を混乱させるための、本物の罠。なぜ遊良と鷹矢なのか、その目的は全くの不明なれど、もし本当に敵が何かを企んで遊良と鷹矢を分断させようとしていたのならば、まんまと『罠』に引っかかってしまったということになるだろう…
どうする…そんな思いが誰の胸の内にも出てき始めた、そんな時…
遊良が、自身の端末を見たままで口を開いた。

「…泉先輩、俺、ここに行ってみようと思います。」
「え!?ど、どうしたんだい天城君!?」
「遊良まで急にどうして!?駄目だよ、罠かもしれなくて危険だって遊良も言ってたじゃん！」

先ほどの鷹矢に向けていた、『罠』かもしれないのに向かうことへの心配を遊良だってかもし出していたと言うのに…
その態度を変え、今度はあろうことか遊良まで指示された場所に向かうと言ったのだ。
それに対して、蒼人とルキが反対を示してもそれは当然であって…まさか遊良も、敵の目星を一つ一つ潰すために自ら危険な場所へと向かおうとしているのだろうか、と。

「…いや…ルキ、これ見てくれよ。」
「…え？」

しかし、鋭すぎる『直感』に頼った鷹矢とは違って、遊良には何やらこのメッセージから思い当たるモノがある様子。
自身の端末に届いたメッセージをスクロールさせ、たった一言の『場所』を示す画面から下に移動させると、それをルキへと見えるように差し出して。
そこには、たった一言…

―『任せた』

「…なにこれ?『任せた』って…まさか遊良、これだけで行こうって?」
「あぁ。怪しいことには変わりないけど、堂々とした誘い文句じゃなくて、わざわざ気付きにくい所に、頼むみたいに書いてあるだろ?…なんだか、気になってさ。」
「…確かに。誘い出すとかなら、もっとこちらが食いつく様にするだろうね。」
「それに、『この場所』は東地区の外れだ。街の中心部じゃないけど…こんな『いかにも』って場所を指定して来たんだ、まだ街の外側には敵は少ないみたいだし、確認してみるだけでも行ってみようって…」
「…でも…」

確かに遊良の言う通り、『雑兵』の数自体は鷹矢が向かった中心部と比べてもまだ少なく、示されている場所へと辿りつくこと自体は、今居るこの家からでも十分に行ける距離ではある。
また、街の壊滅まで時間が無いことを視野に入れると、確かに足踏みしている時間が勿体無いことは確か。
…ただでさえ鷹矢のことが心配なのに、遊良まで危険なことをしようとしているのかと言う事態に、ルキの顔は曇ったままではあるが。

「…僕も行こう。天宮寺君の事は哲に頼んだんだ、だったら、ここは僕と天城君の2人で見てくるのが得策かもしれない。…もちろん、危険なことには変わりないけれど…本当にこのメッセージに意味があるのなら、天宮寺君の方も『罠』では無いのかもしれないし。」
「…じゃあ、私も一緒に…」
「いや、ルキはここに残っててくれ。虹村先輩たちもいるし、それに…ルキまで戦う羽目になったら…」

ルキが心配している理由だって、遊良はもちろん理解している。遊

良が鷹矢にした心配のことを考えると、ルキだけに心配するなと言う方が酷で無理な話だろう。
だからこそ、ルキが着いてくると言っても、遊良はそれを遮って。遊良からすれば、鷹矢の心配とは別ベクトルでの心配がルキにはあるのだから。
そう、敵の数が中心部よりも少ないとは言え、それでも戦わなければいけない敵がこの先にいることには変わりなく。自分の身を守ることで手一杯になってしまえば、ルキとて自らが戦うしか道はない。
彼女の実力から言って、『雑兵』相手には『本気』を出さずに済むかもしれないものの…
街の外側に行けば、より強い敵と戦う可能性が高いらしいのだから、もしそんな手強い『駒』達が襲ってきてしまえば、彼女とて『本気』を出さないといけない状況が出現するかもしれない。
それが1度や2度程度ならばいいかもしれないが…もしも連戦を強いられでもすれば、万が一が起こるかもしれない、と。
それでも…

「遊良…私だって、戦えるよ?」
「…それは…わかってるけど。でも、もしルキが『本気』を出さなきゃいけなくなったら…」
「…決勝の前日に、鷹矢とずっとデュエルしてみたけど…私だって、前よりもかなり大丈夫になってたし…だから…」
「…駄目だ。」
「でも!」
「駄目だ!」

遊良とて彼女の気持ちは分かっているし、その実力も理解しているつもりではあるだろう。
…しかし、どうしても遊良には、ソレを許すわけには行かなかった。
幼い頃に、その目で見てしまったルキの『崩壊』。無論、師のおかげで大事に至る前に事態が収まったとは言え、自分自身でコントロール

しきれないモノが彼女自身に危険を及ぼす怖さは、遊良とて二度と見たくは無いのだろう。
　また彼女も、その力を抑えられるように今まで師に鍛えられては来たものの…限度を超えてしまえば、『最悪』の事態は簡単に彼女を襲うのだ。
　少しでも事態の悪化を防ぐためだということは、ルキにだってわかってはいるものの、それでもお互いに譲れないのか、感情的な言葉が飛び出し始め…

「ま、まぁまぁ二人とも。ここで言い争ってる時間だって勿体無いんだ。それに、僕も高天ヶ原さんはここに残った方がいいと思う。」
「ど、どうして…」
「僕達に『もしも』のことがあった時に、哲たちに状況を伝えて、そして新しく手を考えて欲しいんだ。きっと哲達は無事に帰ってきてくれるし、その方が建て直しが効くことはわかるよね？」
「…はい。」
「もしそうなったら、今度は君達が僕達を助けて欲しい。もちろん、『そう』ならない様にするつもりだけど、これも万が一ってことなんだ。」
「…」

　それを蒼人が冷静に制して。
　常に最悪の状況を考えておかなければ、事態が悪化したときに手がつけられなくなってしまうのだ。少しでも対抗策を残しておこうと言う、客観的な見方をしての諭しをルキへと伝えて。
　だが、彼女が聞きたいのはそんな言葉ではないのだろう。不満な顔を崩さず、また事態も理解はしていても…それを飲み込んで納得しろと言うには、まだまだ彼女も幼く…
　だからこそ、暗く沈み始めた表情のルキをしっかりと見て、ソレに遊良がはっきりとした口調で応えた。

「大丈夫だ。必ず無事に戻ってくるから。」
「…むぅー…わかった。」

無論、彼女は納得などしてはいない。けれども、ここで遊良がはっきりと強い口調で『そう』伝えないと、ルキは何をしても着いて来てしまうことを知っているからこその、その言葉。
遊良とて、この状況で『必ず』だなんて約束出来ないはずなのに…それでも、単なる上辺だけの言葉ではなく、心から『無事に戻ってくる』ことを貫き通すと、言葉にして届けたのだ。
そんな遊良の気持ちを、彼女が理解出来ないはずがないだろう。…だからこそ、ルキもここは我慢することを選んだのか。

「…よし、じゃあ僕達も行こう天城君。」
「はい。」

そうして遊良と蒼人が、敵の居ない内に家を飛び出して。
遊良に届いた『その場所』が東地区の外れに位置していることから考えても、ここから向かうとしてもそう遠くはないだろう。
しかし、移動手段が自身の足しかないことと、何時どこで敵が現れるか分からない状況を考えると…それでもかなりの時間はかかってしまうことは必至。
しかし、行くと決めたからには行くしかない。少しでも、『何か』を掴まなければいけないのだから。…そうして、目的の場所へと向かうために遊良と蒼人は駆け出し始めた。

「…ホント、天城君には敵わないな。」
「え、泉先輩、何か言いましたか？」
「ううん、何でも無いよ。気をつけて行こう、罠かもしれないんだ。」
「…はい。」

静かにそう呟いた蒼人の言葉は、遊良には聞こえず。

その意味もその感情も、遊良には知る由も無いが…それでも、今はただひたすらに走るしかなく。
誰が、何のために自分と鷹矢にこんなメッセージを送ったのかを遊良はわからず。
また、これが罠なのか、それとも意味のあるものなのかもわからないままではあったものの…しかし、自分達のこの行動で、少しでも事態の改善が図れる可能性があるのならば一刻も早くそうしなければと、そう言わんばかりに彼らはその足を速めていくしかないのだろう。
敵の居ない場所は一目散に駆けて、最小限の敵は速攻で倒して、時間を食いそうであれば、捕まらないように回り込んで避けて。
…そして、足早に駆けぬけながら彼らは向かう。
鷹矢に届いたモノとは異なる場所が示されていた、『その場所』を目指して…

―『街外れの、古びたスタジアム』、へと。

―…

街の中心部に近づくにつれて、悲鳴の数よりも敵の呻きの方が大きくなってきている決闘市。
この『異変』が起こった時に、街の中心部に居た住人は全員既に『闇』に飲み込まれたのだろうか。夥しい数の『雑兵』が、徘徊するように中心街を蠢いてはいても…まるで持ち場を離れることを許されないかのように決まった範囲をはみ出さず。
また、何とか無事な人間達は、決して敵に近づかないようにして街の外へと逃げようとしているか、それともどこかに隠れるか…また

は、抵抗を続けている人間に守られながら、避難所へと駆け込むかしか出来ていなかった。
しかし、その抵抗も何時まで持つか。
増え続ける敵に圧倒され、『雑兵』の侵略を防いでいれば『駒』が現れるのだ。誰もが不安な気持ちに押し潰されそうになり、決して納まらぬ悲鳴が街の絶望となりて降りかかっていて…

「邪魔だ！蹴散らせ、【恐牙狼　ダイヤウルフ】！」

―！

―そんな悲鳴と被害の音に紛れることなく…決闘市の高速道路の一本を、猛スピードで駆け抜けていくバイクがあった。
紛れもない、先ほど出発した鷹矢が操るバイク。
デュエルディスクを着けたまま運転をしているらしい鷹矢のそれは、猛スピードの中だというのに、まるでそのままデュエルでも始めてしまいそうな装いにも見えるが…
高速道路に入り込んだらしい、中心部に近づくに連れてどんどん増えていく『雑兵』など一人ずつ相手などしていられない鷹矢は、実体化したモンスターに命じてソレを吹き飛ばしていて。
…こんな状況下で、敵が溢れる決闘市の中心部を目指している人間など他には居らず。
【決闘祭】の初日に、盛大にやらかした鷹矢を迎えに来た黒塗りの高級車で通った道ゆえか…迷うことなく鷹矢はセントラル・スタジアムを目指していた。
「…よし、確か、ここを降りれば…」
そうして、バイクに乗ったまま敵を蹴散らし、目的のインターへと

辿りついた鷹矢。
目的のセントラル・スタジアムまで、一本道の直通道路になっているからか、既にソコは鷹矢の目でも見えているらしく…夥しい数の敵がいようとも一気に駆け抜けれそうな、そんな距離。
だからこそ、鷹矢はアクセルを吹かして、敵が自分に気付いて襲ってくる前に一気にかけぬけ始める。
予想通り、あちこちから敵が出現しては鷹矢を追いかけようとしてくるものの…加速の波に乗っているバイクに、自らの足で蠢く『雑兵』が追いつけるはずも無く。
…そのまま運良く囲まれることは無く、鷹矢は目的地であるセントラル・スタジアムの外側まで駆け抜けてきた。

—そしてすぐさまバイクを止め降りて、つい最近まで通い詰めだったスタジアムの入り口へと向かって。

じっとしていれば、敵はどこからでも湧いてくるのだ…ここまで来て、やられるわけには行かないのだと、そう言わんばかりに彼は走って。

「む…やはり敵が居ないわけがないか。しかし…やはりな…」

しかし、スタジアム入り口へと繋がる、段数の多い階段を駆け上がった鷹矢は…勢い良く登っていたその急にその足を止め、階段の影にその身を隠して『見つからない』ようにして隠れてしまった。
…そう、彼が見たものは、紛れもない『敵』の姿。
それぞれ東西南北に複数個ある入り口を、まるで守っているかのごとく。蠢くことなくその場に立って、身じろぎ一つしないその『敵』の姿はまるで門番のようにも見えるだろう。

—それは、街中に溢れている『雑兵』達ではない。

「…【決闘祭】で見た奴もいるな。名前は思い出せんが。…しかし、どうするか…」

誰も彼も、決闘市ではそれなりに名の通った実力者達。

そんな人間達が、まるで侵入者をセントラル・スタジアムに入れないようにして立っているのだ。これでこの場所が怪しくないと言われても嘘にしか聞こえず…

また、鷹矢がこの場所へとたどり着いたときから感じている『モノ』も、セントラル・スタジアムで『当たり』だと、確かに彼に伝えていた。

無論、鷹矢が彼らの名前を覚えているわけがないが…見つからないように階段の影に隠れて、どうやって入り込もうかと鷹矢は画策している様子。そう、どこか一つの入り口から進入しようと走った所で、見つかって戦うしかなく…どうせその間に『雑兵』やら他の門番やらに囲まれてしまうことだろうから。

時間を食うだけでなく、厄介な相手にまで一斉に襲われれば、とてもじゃないが手が回らなくなりそうだと、そう理解して。

「…仕方あるまい。時間が無いのだ、一気に行くしか…」

しかし、彼とてこんな所に何時までも隠れているわけには行かないことなど理解しているだろう。

先ほど『雑兵』の中を無理やり突っ走ってきた所為で、敵がわらわらとセントラル・スタジアムへと向かってきているのだ、一刻の猶予もないからこそ、全力で一転突破をして中へと行くしかないのだと、そう覚悟を決めた…

—そんな時だった。

「待て、天宮寺。」

「…む？」

不意に聞こえた自身を止める声によって、今まさに出しかけたその足を無理やりに止めた鷹矢。

とっさに鷹矢が振り向くものの、その様子はまるで焦ってはおらず。その声を聞いた瞬間に、声をかけてきた人物の声と顔が、鷹矢の脳裏には映っていて。

そう、まともな人間の声など聞こえないこの決闘市の中心部で、この重々しく屈強な声の主を、鷹矢が聞き間違えることなどないだろう。人の顔と名前を覚える必要性を感じていない鷹矢が、自らの意思で『覚えた』人物なのだから。

「十文字か。…そういえば合流しろと言われていたな。」

「あぁ。」

…ウエスト校　3年、十文字　哲

昨年の【決闘祭】の優勝者、その実力と功績は言うに及ばず。この広い決闘市において、彼と言う決闘者を知らぬ人間など居ないことだろう。

そんな彼は、この混乱の中でも圧倒的強者の雰囲気を崩さず。寄せ来る敵の全てをなぎ払い、この『異変』と戦っていたのか。

傷一つなく、疲れてもおらず。

その鍛え抜かれた体と、何事にも動じない心を持った姿一つ見ただけで、彼がいかに場慣れしているのかを誰もが理解することだろう。

彼の重厚なるその佇まいは、それだけで周囲の人間に心強さを与えるのだ。無論、それは鷹矢とて同じことであって。

「スタジアムに入りたいのだ。」

「わかっている。だから囮になりに来た。お前は進め。」

「うむ。」

こんな場面におかれていると言うのに、彼らには余計な言葉を交わす必要も無く。最低限のやり取りだけで、何をするのかを即座に決定して。

自身が街で戦って得た情報と状況。そしてセントラル・スタジアムを守るようにして立っている門番達。ソレから導き出された結論を、哲も説明されずとも理解した様子を見せ…

後は、蒼人から来た連絡の通り、『何か』を感じ取っている天宮寺鷹矢を、セントラル・スタジアムに入れてやるだけだと、そう言わんばかりの雰囲気をしていた。

「任せたぞ、十文字。」

「あぁ。」

哲の言った『囮』と言う言葉にも、迷うことなくソレを容認する鷹矢。

そう、哲の心配など、鷹矢は初めから感じもしていないのだ。

それは、数回顔を合わせた程度ゆえの、浅い仲から来る薄情な『切捨て』とか…自ら進んで囮になるという哲を『使い捨て』の道具として見ているとか…そんな陳腐で程度の低い弱者のような理由などでは断じてない。

…【決闘祭】で実際に戦って感じた、哲の『強さ』。

ソレを嫌と言うほど知っている鷹矢なのだからこそ、哲に心配などする必要すら無いというコトを、彼は知っている。

先の試合では無理やりに『壁』を超えた勢いで、何とかギリギリで鷹矢が勝てはしたものの…哲が鷹矢に『喝』を与える目的を持たず、何の躊躇もなく彼が向かってきてれば…鷹矢には、勝てる要素は皆無だったのだから。

―決闘市に轟く、十文字　哲の異名。

それを、こんな『闇』に飲まれた人間が打ち破れるはずがない。

「よし、行くぞ。」

「うむ！」

まずは哲が飛び出して、敵の注意を引く。

案の定、スタジアムに近づいてきた哲を発見して、即座に近くにいた『駒』が数人、哲へと向かっていって。

それを引き付けるようにして遠くへと走っていく哲へと、さらに他の場所の門番をしている『駒』もそれに引き寄せられていくその光景は…まさに『囮』そのものであって、やれと言われても誰にでも出来ることではないだろう。

―絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト…そう呼ばれる彼以外には、いくら鷹矢とて心から任せることなど出来ない策。

―！

そうして、やや時間を置いて、鷹矢が一番近い入り口へと突入して…その直後に戦いの音が聞こえてくるものの、何の心配もなく鷹矢は突き進むのみ。

…

「…やはり、スタジアムに入った途端に、【Ｎｏ．】がまた反応したぞ。」

そんな、扉を開けてその内部へと入りこんだ鷹矢が先ず感じたのは、自身のＥｘデッキに仕舞いこんである、『闇』を喰い創造された【Ｎｏ．】の鼓動であって。

これではまるで、飢えから来る衝動の如く、自身の『餌』に喰らいつかんと振るえているようではないか。街に溢れる『雑兵』達が持つ、少量の『闇』になど興味が無いようで、…もっと大きなモノがこの場所あるのだと、確かに持ち主である鷹矢に伝えているよう。
だからこそ、鷹矢は走る。その鼓動が更に大きくなる、その場所を目指して。

…そう、もう何度そこに行ったことだろう。

つい最近まで、戦いに明け暮れていたその場所。自身の相棒と最高の勝負をした、『約束』の舞台となった場所。
重い扉を押し、二重になっている故に中との圧によって内部の嫌な空気が外へと漏れ出してくるその匂いは…紛れもない、悪意が漏れ出しているに違いなく。

—そこには…

「…っ、これは…」

その光景を見て、思わず息を呑んだ鷹矢。
それは、この世界的に見ても、類を見ない程に超巨大に建設されしセントラル・スタジアムの…収容人数１０万人超のそのスタジアム内部に…

—圧迫しそうなほどに膨れ上がった、『黒い宝石』のような球体が一つ。

無論、観客席に他に人間など居らず。『黒い宝石』が響かせているらしい、金属を擦るような耳に響く嫌な音と…その真下辺りから、下品

な笑い声のようなものが二つ、聞こえるだけ…

「む!?そこに誰か…」

だからこそ、鷹矢はソレらに向かって再度駆けて。

観客席を駆け下りて、かなりの高さがあるというのに手すりやフェンスを飛び越えて…

全身のバネを上手く使って、着地の衝撃を地面へと逃がしながらそのまま一階部分へと飛び降りた彼の行動は、高い場所から飛び降りたというのに、全くダメージを感じていないかのよう。

そのまま、中央に設置されているデュエルスタジアムへと向かってその足を向かわせるのみ。

…逃げる暇など与えない、ここまで来たからには一気に叩くと、そう言わんばかりの気概を持って。

―そして

「貴様らが黒幕か！ついに見つけたぞ！」

「て、天宮寺　鷹矢!?お前、一体どうしてここに!?」

「おい大治郎！東地区はお前の担当じゃねーか！何やってんだよ！」

「し、知らねーよ！大体、表には『駒』だって居るってのに…」

紫魔　亜蓮と、紫魔　大治郎。

ノース校に所属する3年生である彼らは、突如この場に現れた鷹矢を見て、信じられないモノを見たような顔をして驚愕を顕にしていた。

そう、街の中心部に来るには、『壁』の如く蔓延る夥しい数の『雑兵』達を相手にしなければならないはずだし、スタジアムの入り口には決闘市における手練れを『駒』として配置していたのだ。

いくら広大な決闘市の全てを把握しきれないとはいえ、まさか彼らもこんな場所をピンポイントに突き止めて乗り込んでくる奴など存

在しないだろうと思っていたのだろう。
―そんなことなどお構い無しに、鷹矢は二人へと向かって叫ぶ。
「む？俺の名前を知ってるんだと？…どこかで見た顔だな。誰だ貴様らは！」
「誰だって…【決闘祭】で会ってるだろーが。」
「知らん！…だがまぁいい。これで貴様らが『闇』を使って『異変』を起こしていたのは明らかになったのだ！大人しくしてもらうぞ！」
「…はぁ？」
「…ぷっ！ぷぷっ、お、大人しくだってぇ？お、お前この状況が分かってそんなこと言ってるのかよ？」

しかし、単身乗り込んできた鷹矢に対して、驚愕から一転、余裕の態度を見せ始めた亜蓮と大治郎。
確かにこの場所へと乗り込んでこられたことは驚きでも、ソレは彼らにとっては痛手でも何でもないと言うのだろうか。
そう、このスタジアム内に充満しているこの『闇』の濃度は、街中に溢れているソレとは比べ物にならない比率で漂っていて…また、それに飲み込まれぬ亜蓮と大治郎には、この場所自体が、彼らにとって『とてつもなく安全な場所』だというコトを知っているのだ。
彼ら2人が持っている、『黒い宝石』へと掲げているその『黒い球』…『闇』の塊であるソレは、『闇』に飲まれた者を操ったり、また正常な人間へと『闇』を取り付かせることの出来る『闇の欠片』。
「ここまで来たことは褒めてやるよ。でもキャラがゲームマスターの部屋に来ちゃ駄目だろ？」
「ククッ、さしずめお前はバグってとこだ。だからお前も飲み込んで、『駒』として使ってやる。」
「…む？」

そうして、手前にいた亜蓮が、『黒い球』を頭上から鷹矢へと向けて。

この中枢となっている場所へと無作法に突っ込んできた、この礼儀知らずを飲み込もうとニヤニヤした顔を崩さず…スタジアム内部に漂っている純度の高い『闇』を、鷹矢へと憑かせようとしてるのか。
そして、鷹矢の足元に漂い来る『闇』が、彼に侵食しようとして昇ってきて…
今まさに、有無を言わせぬ深遠の『闇』へと彼を落とそうとした…

―その時だった。

「いい加減うざったい…喰え、【Ｎｏ．】！」

―！

突然鷹矢の周囲に起こった突風によって、彼を飲み込もうとしていた『闇』が四散して消え…
そう、瞬間的に鷹矢がディスクから取り出した、創造されし【Ｎｏ．】が、鷹矢に昇ってきていた『闇』を蹴散らしたのだ。
それは、この溢れる『闇』のあまりの純度に、飢えた獣が歓喜の咆哮を放ったようにも見え、スタジアム内部に漂っている闇が、少しずつ鷹矢の持っている【Ｎｏ．】に吸い込まれ始めているではないか。
「なっ!?なんで『闇』が消え…天宮寺！お前何したんだ!?」
「そ、そういえばコイツ！【決闘祭】でも『闇』で何かしてたんだ！で、でもあんな少量の『闇』しか持ってなかったお前が、何でそれより大きい俺たちに歯向かえるんだよ!?」

その予想外の出来事に、流石に驚きを禁じえない様子を見せ始める亜蓮と大治郎。

彼らとて、鷹矢が【決闘祭】の決勝において『闇』を使って『何か』をしたことは知ってはいたが…所詮、鷹矢が集めた『闇』など、彼らからしたらごく少量に過ぎず。
だからこそ、彼らの『黒幕』もそんなコトなど気にも留めずに計画を進めていたわけだというのに。
まさか、そんな男がこんな予想外のコトをしでかしてくれるだなんて、と。

「ふん、そんなことなど知らん！それより…コイツは腹が減っているらしいからな、そのデカイ『闇』を食わせろと言って聞かんのだ。だから餌になってもらおうか。」
「はぁぁぁあ!?テ、テメェ、自分が何言ってんのかわかってんのか!?」
「そ、そんなこと…やらせるわけねぇだろうが！」

その鷹矢の、あまりにも横暴かつ凶暴な『歯向かい』。
鉄仮面を崩さないその表情は、相手をしている者からすればかなりの圧力を感じるコトに違いないだろう。まさに大胆不敵、その堂々たる物言いに、亜蓮と大治郎が思わず鷹矢への警戒心が突如として大きくなった様子を見せていて。
鷹矢を飲み込めないことと、彼の持つ【Ｎｏ．】の危険性を、今更になって理解したのか。
頭上に掲げたその手と『黒い球』は降ろさず、しかし雰囲気だけは焦ったモノを孕ませて…

「け、けどよ…どうせデュエルで負ければお前も『闇』に飲み込まれるんだ…」
「そうだぜ、こんな大事な場所には、最も良い『駒』を配置するもんだろうが…」

それでも、彼らは鷹矢を排除できることに疑いを持たず。
手に持つ『黒い球』と、その頭上にある巨大な『黒い宝石』に念を

込め…幾重にも張った防衛網、なんとしてでも己の身と『黒い宝石』を守るのだと、そう言わんばかりに諦めの悪い声でそう言って、とある『駒』を呼ぶのか。
物言わぬ従順なる『下僕』、それがいくら自分達の手に負えないデュエリストでも、それを超える『存在』に飲み込んでもらった、守らせる『駒』を。
それを視界に入れた鷹矢が、その『男』を見て珍しく声を大きく漏らし…

そうして、現れるは…

「む!?き、貴様は!」

―竜胆　大蛇

無残にも心を無理やり落とされた彼が…虚ろな目で、鷹矢へと向かってきていた。

―…

…決闘市の東地区の郊外に位置する、街外れにある古びたスタジアム。
セントラル・スタジアムが建設される前までは、このスタジアムが決闘市におけるデュエルの最大拠点として運営されていて…
かつて数多くのデュエリスト達がこのスタジアムで激闘を繰り広げていたことから、決闘市に長年住んでいる者達の中には、ここでの思い出が数多くある者も多いだろう。
そんな、栄枯盛衰をその姿で現しているこのスタジアムも、長年激

闘をその内に留めたことからか老朽化が進み、立ち入り禁止となって既に行く年月…取り壊すには惜しいとの声もあり、今の若い世代が生まれるよりも前に閉鎖だけしていて。

「こっちだ天城君！ここに隠れて！」

「は、はい！」

―！

そんな、かつての夢の跡へと、自らに届いたメッセージを信じて、敵の間を潜り抜けてきた遊良と蒼人が…スタジアムの敷地内に入った途端、急に数が増えた敵から、物陰に身を隠して敵を見ていた。

まだスタジアム内へ入るには敵の多い外側を駆けなければならないし、スタジアムの正面入り口には門番のようにして立っている敵もいることから、戦いは避けられず…その怪しさとメッセージの信憑性が上昇し、ソレに応じて遊良の心臓の鼓動も大きくなっていく。

「はぁ…はぁ…や、やっぱりここ、怪しいですね。街の外側だっていうのに敵が多いし、それに、中に入れないようにして敵も立って…」

「うん、それに、スタジアムの正面入り口に立っているあの人を見て。…サウス校の獅子原さんじゃない？」

「ほ、本当だ！なんであの人が!?」

その人物の姿を視界に入れて、驚きの声を漏らした遊良。

蒼人の言う通り、遊良も【決闘祭】で戦ったからこそ、その姿を見間違えることは無いだろう。視線の先、正面入り口に門番の如く立っていたのはサウス校３年、獅子原　エリに間違いはなく。

元プロ『烈火』の孫娘、昨年度の【決闘祭】の第４位…今年は惜しくも２回戦で遊良に敗北して姿を消していたが、それでも遊良にとって強敵だったことは事実であって。

試合の時、どこか焦った様子を見せていた彼女。もしも彼女に焦り

が無く、攻め急がずに遊良の出方を冷静に見極められていたら…その勝敗はまさに、やってみなければわからなかっただろう。
　そんな、サウス校でもトップの実力を持っている獅子原　エリが、まさか敵として現れるだなんて。彼女の実力ならば、街に溢れる『雑兵』程度に敗北を喫したとは考え辛く…一体いつ彼女が『闇』に囚われたのかなど知らない遊良からすれば、その驚きも当然とも言え…

「…仕方ない、ここは僕が引きつけるから、その間に行くんだ天城君。」
「え!?で、でも泉先輩一人じゃ！」
「ここに何かがあるのは確実だ。じゃなきゃ、こんな場所にこんな守りはしないよ。だからこそ、君一人でも『何か』を知らなきゃいけない。無駄足で二人ともやられるわけにはいかないんだ。」

　それ以上に驚きを禁じえない言葉が、蒼人の口から飛び出して。
　確かに蒼人の言う通り、このままここで立ち止まって隠れたままでは、二人とも囲まれて逃げるのも困難になることは必至。
　そうこうしている内に決闘市は壊滅してしまうだろうし、下手をすれば自分達までやられてしまうことは容易に想像できるのだ。
　このスタジアムが街の外側で、ただでさえ人が立ち入ることは無いと言うのに…敵の数の多さと、そして中に入れないようにして入り口を守っている敵までいるという状況が、怪しくないと言われても嘘としか思えず。
　だからこそ、遊良とて進まなければいけないことは理解しているし、その役目はこういった混乱に慣れている蒼人の方が向いているのでは無いかと言った表情をしていて。

「だ、だったら先へ行くのは泉先輩の方が適任じゃ…」
「…約束してただろう?高天ヶ原さんに、無事に帰るって。だったら、君は何が何でも無事に帰ろうとしないと。」
「…泉…先輩…」
「行くんだ。慣れているからこそ、僕が引きつける役をする方がいい。

…それに、僕だってやられるつもりなんて無いから、君は君のやるべきことを。僕もソレをするだけさ。」

それでも、どこまでも蒼人の決意は固く。

有無を言わせないほどの決意によって彼の口から出てくる言葉には、優しさがあっても反論を許さないほどに強く…

並大抵の『強さ』では出来ない、心身ともに相当なモノを持っている彼だからこそ、何の躊躇もなく策を打てるのだ。

蒼人は真っ直ぐな目で、悪意に塗れていた時からは考えられないほどに透き通ったその目で…未だ不安な表情をしている後輩をしっかりと見据えて…

「…だから、頼んだよ、『遊良』君。」

「…ッ！は、はい！」

その、たった一言によって、遊良の迷いを確かに吹き飛ばした蒼人。

そう、唐突ではあるが、強い意思ではっきりと自分の名を呼ばれたことで…その決意を無駄にするわけにはいかないことを、自分がこの人に『認めて』もらっているということを、心の底から遊良も理解したのだ。

この状況下では皆、自分が第一に助かろうとして逃げ回っていると言うのに…

赤の他人のためにここまで言い切れる蒼人の『強さ』を、裏切るわけにはいかないのだ、と。

並大抵の精神ではない。ここまではっきりと言い切れる芯の強さ…本当に、『強い人』なのだということを。

「…はい、『蒼人』先輩も…ご無事で…」

「うん。…じゃあ、行こう！」

―！

だからこそ、敵をひきつけるために飛び出した蒼人から、しかと目を離さない遊良。
認められているからこそ…その決意に応えるために、幼馴染や師以外に、始めて遊良も『他人』に心を開いたのだろうか。
…きっと、この正面入り口だけではなく、他の入り口にだって門番をしている『駒』は存在するはず。また、それが分からぬ蒼人では無いだろうし、それを想像していても自ら囮を買って出たのだ。
―その蒼人の思いを、無駄にするわけにはいかず。
蒼人が真っ先に正面入り口に駆け、そのまま『駒』となっていた獅子原　エリを引き寄せ…他の『雑兵』達と共に蒼人を追って、一瞬スタジアムの正面入り口が手薄になるこの瞬間…
即座に飛び出した遊良は、手薄になった正面入り口目掛けて駆け抜け…そのまま飛び込むようにしてスタジアム内部に入り込んだ。

―！

その直後に戦闘を知らせる衝撃音が外から聞こえてきて、蒼人が戦いを始めたのだということがソレで分かったものの…だからと言って、助けに行くわけには行かず。
…ここまで連れてきてもらって、『何もわかりませんでした』では話しにならない。
ならば、少しでも早く、『何か』を掴まなければと、そう言わんばかりに逸る気持ちを抑えて入り口すぐにある正面エントランスを素早く見回し始めた遊良。
幸い、スタジアム内部に侵入者が入ることは想定していなかったのか、外のような敵の姿は中には無い様子。
そうして、更なる行動を起こそうとした遊良が正面エントランスから、メインスタジアムへと向かおうとした…
―その時だった。

「…あら、ここに侵入してくる者がいるなんて、思いもしませんでしたわ。」
「…ッ!?」

エントランスの奥、メインスタジアムの客席へと繋がる階段の上から『その人物』の声が、遊良の耳に確かに届いて。
間違えるわけがない。代表選抜戦の時も、決闘祭の時も…どこか高飛車を装うその声は、いつだって自分以外に向けた『敵意』を放って、その口から飛び出ていたのだから。

―紫魔　ヒイラギ

「ホホホ、下民風情が一体どういったご用件かしら。」
「紫魔…先輩…」

遊良達が辿りついていた、最も怪しい人物の一人が…

―そこには、居た。

…

ｅｐ４１「神に愛された少女」

「紫魔先輩…やっぱり、あなたが…」

自分に届いたメッセージを頼りに、遊良が蒼人の助力によってこの『古びたスタジアム』の内部へと到達した、その直後のこと。

エントランスからメインスタジアムへと繋がる階段の上から、こちらを見下ろすように現れた紫魔　ヒイラギへと向かって、思わず遊良の口からも言葉が漏れ出してしまった様子。

それは、自分達が憶測した『敵』の正体に間違いがなかったことを意味しており…当然彼女がこの場所にいるということは、この『古びたスタジアム』で『当たり』と言うことであって。

―ヒイラギが『敵』だという考えに、『答え』を貰ったようなもの。

ただの憶測と勘と、そして誰が送ったのかわからないメッセージの怪しさもまだ拭いきれてはいないものの、それでもここまで順当に辿りつけたことは事実。

遊良も、これで益々足踏みをしている時間は無くなったのだ。すぐにでも行動を起こし、ヒイラギを問い詰めるしかないだろう。

「ホホホ…一体どうやってここがわかったのかは知りませんが…しかし、大詰めに入った計画を邪魔させるわけにはいきません。」

「どうしてこんなことを！街は酷い有様だし、怪我人だって出ている！こんなことをして、一体何を…」

「あなたには関係ありませんわ！これは、復讐ですの…この腐った世界に対する、私達のね！」

「…復…讐？」

そんな遊良の問いに対して、怨嗟の篭ったような声で返したヒイラギ。

彼女にここまで言わせる理由など、遊良にはとても考えつかないだろうが…それでも、普通ならば出てこないような『復讐』と言うこの言葉も、この街の現状を見ればそれが本気なのだということは、遊良にだって理解できるのか。

—けれども、こんなことが許されるはずがない。

いくら彼女の過去に何かがあり、『復讐』と言わせしめる理由があるのだとしても…それでも、ここまで無差別に街を混乱に陥れていることに対しては、ソレは正当化される理由にはならないのだ。

そんな、意味がわからないと言った表情で見ている遊良に対して、ヒイラギが口を開こうとその整えられた小さな口を開いた。

…それは、遊良には信じられないような言葉でもあって。

「えぇ、その文字通りです…あぁそうですわ、もし宜しければ、あなたもこちら側に来まして？」

「…は？」

「あなたも、この腐った世界に復讐心があるのではないかしら？…何せ、『Ｅｘ適正』が無いんですもの、地獄を見てきたことは知っています。…辛かったでしょう？悔しかったでしょう？弱者の烙印を押され、蔑まれ…掌を返すように、周りが全て敵になる苦しみは。だから、あなたの心に『恨み』が無いなんて言わせませんわ。」

「…ッ!?そ、それは…」

そう、それは思ってもみなかった言葉。

今、敵として対峙しているこの場面で、あろうことかヒイラギは遊良に『寝返れ』と言ってきたのだ。

…それも、単なる誘い文句ではない。遊良の『痛み』を知った上で、それを共感しての誘い。

—過去、遊良が受けてきた境遇。

この世界に、『普通』に生きる人間からすれば、わかるはずもなく、また分かりたくも無いモノに違いなく…

誰からも認められず、誰もが敵になり…自分の全てを否定され、存在すること自体が罪なのだと言われ続けてきたような、そんな過去…いや、つい最近までそうだったコト。

—だからこそ…彼の中に、少しも復讐心が『無い』と言ったら嘘だ。

今でこそ、【決闘祭】の優勝と言う、遊良が自らの力で勝ち取ったモノのおかげで街の意識は『変わりつつ』ある…けれども、それでも『あの時』と同じ、自分に対する急な掌返しを、遊良が快く思えないのも事実。

…今更…何を…

そう、思ってしまう心だって、彼には存在していて…

「…『どうして、自分がこんな目に…』。何度そう思ってきたのでしょうね。…その気持ちは、私にだって覚えがありますわ…。ホホ、だからこそ、『力』を手に入れられたのならば、それを使って何が悪いと言うのでしょう。」

「けど…あんなことをするなんて…」

「あら、散々傷つけられて来たと言うのに、そんな奴らに躊躇をする必要がありまして？」

「…」

「…あぁ、そうですか、わかりました。『あの方』の意向でもあったのですけれど…しかたありませんわ。」

—交渉決裂

遊良の中にある『痛み』を知り、その復讐の機会を与えられているのだとしても…それでも街の惨状を見てきた遊良が、ヒイラギの誘いに対して首を縦に振らないことでソレは決していて。

…彼女とて、初めから遊良が『こちら側』に来るなんて考えていなかったのだろう。

自らの受けてきた境遇を忘れていなくとも、それでも今決闘市に起こっているような混乱を自ら執行など出来ないと、遊良はそう言いたげな苦い顔をしているのだから。

だからこそ、そんな遊良へと向かって悠長に話すつもりも無いといった雰囲気のまま、ヒイラギは指にはめている『黒い宝石』のついた指輪を向け始めた。

その手の動きに合わせて、遊良の周囲には次第に『黒い靄』が視認できるほど集まってきて…

「な、一体何を!?」

「自らの意思でこちらに加わらないと言うのでしたら、無理やりにでも言う事を聞かせるだけですわ。曲がりなりにも【決闘祭】の優勝者、いい『駒』として使って差し上げます。」

そのまま、遊良を飲み込まんとしてその『闇』が彼へと襲いかかろうとした…

—その時だった。

「…ッ!ふざけるなぁ!」

—!

遊良の咆哮と同時に、吹き飛ばされて消し飛ばされる周囲の『闇』。
突如としてその突風が『闇』を消し去り、そのままヒイラギへと向かって遊良の反抗を伝えるのか。
…ただの気合云々では、こんなことなど出来はしない。
抵抗など出来るわけがなく、いくら精神の強い者であっても一度襲った『闇』の侵食から逃れる術は無いのだというコトは、もちろんヒイラギだって理解していて。

「…なるほど、これが聞いていた…」

きっと、遊良自身は気付いていないのだろう。
上から見下ろすようにして全体を見ていたヒイラギだからこそ見えていた、『闇』を掻き消したソレを。
—遊良から『闇』を弾き飛ばすようにして、視認が難しい程に薄く現れていた『黒き翼』が消えていったことなど。
それが、どこから現れたモノなのかを知る者は居らず…『異物』の侵食を拒むかのように、麗しきその翼のことを…遊良は気が付いてない。

—それでも。

「絶対に…お前の仲間になんてなるもんか！それに俺は自分の力で！自分自身の力で、否定した奴らに俺の存在を認めさせてやるんだ！…あんな、ただの『暴力』で街を滅茶苦茶にしてまで復讐したいだなんて…絶対に思わない！」
「…ホホ、良く吼えますこと。これだからあの女の血は嫌なんです…でしたら…」
まるで遊良の反抗を、想定内だと言わんばかりにしてヒイラギはデュエルディスクを構え始めて。

―反逆者には、制裁を

言う事を聞かぬのならば、無理やりにでも倒して『闇』を侵食させるだけ。

デュエルを介さない侵食を行おうとしても、その人物よりも『高位』に立つ人間が『闇』を取り付かせなければ、完全に飲み込むことが出来ない。また、対象の精神力が強靭であればあるほど、完全に飲み込むことは難しくなる。

それを、これまでの経験でしっている故に、有無を言わせぬようデュエルによる敗北…『絶対』の服従を、彼女は行おうとしているのか。

「ホホホ！所詮はＥｘ適正のない『出来損ない』、さっさと身の程を教えて差し上げますわ。」

「させるか！お前を倒して、全部吐いてもらう！」

―…

「…何故この男が？仮にも十文字に次ぐ実力を持った男だと言うのに…」

虚ろな目をして、呼び出されるようにして歩いてきた人物、敵の『駒』…

―ウエスト校３年、竜胆　大蛇

昨年度の【決闘祭】の準優勝者。その実力は十文字　哲に並ぶ、彼

とは正反対の攻めの持ち主。
その実体の掴めぬ、如何なるモノもすり抜ける彼の強さは…今年の【決闘祭】でも十分に発揮されており、準決勝においては自ら敗北を選択していたとは言え、『実質的』に遊良にも勝っていた人物であって。
そんな力を持つ人物が、よもや敵の手に落ちているなど考えられもしないと言うのに…
事実、『闇』が充満するこのセントラル・スタジアムにおいても煌いている金髪と共に、こちらへと歩いてきてデュエルディスクを構え始めている竜胆　大蛇は、紛れもない本物に違いない。

「ひゃはは！竜胆は既に俺らの手駒だ！コイツの実力はお前も知ってんだろ!?あの間違って優勝した『出来損ない』だって、コイツには勝てないんだからな！」
「そいつに負けてたお前程度じゃ、竜胆にゃ勝てねーんだよ天宮寺ぃ！お前も『駒』にして使ってやるぜ！」

だからこそ、そんな人物を『駒』として扱う彼らも、その余裕が蘇っているのだろうか。
ただでさえ高い実力を持つ人物だと言うのに、ソレに加えて『闇』による凶暴化をしているのだ。たとえ十文字　哲が現れたとしても、今の竜胆　大蛇には勝てるはずが無いという雰囲気を彼らは前面に押し出していて。
また【決闘祭】で、大蛇に『実質的』に負けていた遊良に、決勝戦で勝つことの出来なかった鷹矢がこの場に現れたからこそ、その余裕も更に大きくなっているのだろう。
いやらしく口元を歪め、自分達の手駒が鷹矢を吹き飛ばせることを信じて疑っていないかのよう。

…そんな彼ら紫魔達に向かって、鷹矢は静かに口を開く。

「…今、何と言った？」

「ああ?何って…」

普段は感情を顔に出すことをしない、けれども本人は出しているつもりの表情…それはこの場においても、怖いほどに冷たい鉄仮面となっていることに違いない。

―しかし、静かに。そして、確かに。

隠す気が無い『怒り』その物を、鷹矢はこの場にいる全ての人間へと向けて、勢い良くデュエルディスクを構えて。

「貴様らは今、遊良を『出来損ない』と言ったな!名も知らぬ男達よ、貴様ら程度の雑魚が調子に乗るなど断じて許さん!」

「な、名も知らぬって…」

「ざ、雑魚だと!?低俗なエクシーズ使いの癖に、調子に乗りやがって!いけ竜胆!そいつを倒して飲み込んじまえ!」

「邪魔だ大馬鹿者!俺は貴様も許してはいない!遊良を馬鹿にしていた、あのふざけたデュエルを!」

そう言う鷹矢の怒りの矛先は、紫魔二人だけに留まらず。

そう、『結果』としては、遊良が勝利を得たあの【決闘祭】での準決勝。

準決勝の時点までの実力では、大蛇の方が遊良を圧倒していた事には疑う余地は無く…

そのままの実力差で遊良が負けてしまっていたのならば、所詮は遊良もそこまでだったということを鷹矢も思い違いなどしてはいない。

だからこそ、もしそうなっていたとしても、過程がどうあれ『結果』が全てであるコトを鷹矢とて納得しているゆえに、『結果的』に決勝へ進んだ遊良との戦いに何の憂いもなく望めてはいたのだが…

けれども、実力差がある故に大蛇が遊良に対して行っていた、あの

ふざけて小馬鹿にしていたような『デュエル自体』は、鷹矢にとっても許容など出来るはずがないのだ。

―遊良の敵は、全員許さない。

それが、例え遊良自身に何とかしなければいけない問題なのだとしても…今この場に置いて、鷹矢に見過ごせる状況では断じてないのだから。

「ガ…ガガ…」
「ゆくぞ！」

―デュエル！

「俺のターン！【ゴールド・ガジェット】を召喚し、その効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！【レッド・ガジェット】を手札に！」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００

【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

「そのまま２体でオーバーレイ！エクシーズ召喚！来い、ランク４！【ギアギガントＸ】！」

―！

【ギアギガントＸ】ランク４

ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

彼のデュエルの基本となる、鋼鉄の機械兵を素早くエクシーズ召喚した鷹矢。

相手はあの竜胆　大蛇、ただでさえ強敵ということは分かっているし、その相手が『闇』に飲まれて凶暴化して襲ってきているこの状況下において…

大蛇のデッキが、一体どんな変貌を遂げているのかまだ分からないままでは、対策の仕様がないことは鷹矢も重々承知しているからこその、いつも通りの展開にて彼も場を構えるのか。

先行で攻撃を許されていないが故の、後攻への備えを怠るわけにはいかないのだと、そう言わんばかりに…

「【ギアギガントＸ】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、デッキから【シルバー・ガジェット】を手札に加える！カードを２枚伏せて、ターンエンドだ！」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：５→３枚
場：【ギアギガントＸ】
伏せ：２枚

「…ドロー…」

そうしてターンが相手へと移り、大蛇は虚ろな目のままカードを引いて。

今までの竜胆　大蛇のデュエル…全てをすり抜け、全てを捻じ伏せるような彼のデュエルを、鷹矢とてもちろん【決闘祭】で見てはいる。

しかし、それから得られた情報が今のこの場においては、全くの役に立たないことも、鷹矢は理解していて。

そう、一体『闇』に飲まれた彼のデッキが、如何なる変貌を遂げて

いるのか…これまでの当人からは想像もできない変化が、今の大蛇には起こっているのだ。
そんな鷹矢を意に介さず、大蛇は手札からカードを取ってソレを発動した。
「【歯車街】ヲ発動シ、【古代の機械射出機】ヲ発動！」
「む!?」
―！
フィールドと通常、２枚の魔法カード。
『闇』に飲まれた大蛇が発動したソレは、場全体に効果を及ぼすフィールド魔法だというのに…それを即座に、そして何の躊躇もなく２枚目に発動した通常魔法で砕き始めた彼のその戦法。
それは、やはりこれまでの竜胆　大蛇というデュエリストの戦い方とは、まるで異なっているものとなっていることの証明のよう。
―【古代の機械】
確かに、大蛇はそう言った。
鷹矢も、このカテゴリーについてはもちろん知っている。壊れかけにも見える、太古から動き続ける機械兵達の進撃は、プロの世界においてもその有無を言わせない破壊力に魅せられた者がいる程に凄まじく…
また、相手の策を踏みにじりながらの一撃は、下手をすれば一切の抵抗も許さずに敵を殲滅してしまうのだ。
「…ふむ、やはり【サイバー】では無いのだな。」
「ガガッ、【歯車街】ヲ破壊シ、デッキカラ【古代の機械巨人】ヲ特殊召喚！ソシテ【歯車街】ノ効果デ、デッキカラ【古代の機械飛竜】ヲ特殊召喚！【古代の機械融合】ヲ手札二！」

【古代の機械巨人】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００
【古代の機械飛竜】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１２００

そうして、たった2枚の魔法カードから、次々に場にモンスターを召喚していく大蛇。
そのどれもが他のデュエリスト達が扱う【古代の機械】とは異なった畏怖を鷹矢へと与えてくるものの…それが『闇』に飲み込まれたが故に起こる荒ぶりだということは、この場にいる誰もが理解している事だろう。
通常であれば特殊召喚出来ない機械の巨人も、召喚条件を無視すると言う荒業で早々に登場させて鷹矢へと向かって。
また場に出ただけで【古代の機械】のあらゆるカードを手に加えられる機械の飛竜によって、大蛇は更なるモンスターを呼び出そうとしているのか。
―先ほど加えた融合魔法によって…『闇』の言うまま、鷹矢を襲う。
「【古代の機械融合】発動ォ！デッキノ【古代の機械巨人】２体ト、場ノ【古代の機械巨人】デ融合召喚！【古代の機械超巨人】！」

―！

【古代の機械超巨人】レベル９
ＡＴＫ／３３００　ＤＥＦ／３３００

「…さっそく大型モンスターを呼び出してくるか…」
「ひゃはは！さっさとくたばっちまえ天宮寺！」
「『出来損ない』に負けたお前程度じゃ、竜胆には勝てねぇんだよ！」

自分達が手駒として扱っている大蛇が、大型モンスターを召喚したことによる優勢で亜蓮と大治郎も気を良くしたのだろうか。
自分達が戦っているわけではない癖に、その口調を益々強め、鷹矢へと向かって敵意を放る彼らの佇まいは…
虎の意を借る狐の如く、ただ与えられただけに過ぎない『駒』の尻馬に乗っているだけだというのに…ソレを、全く恥じることをしていないどころか、まったく気付いてもいないよう。
…だからこそ、そんな輩に何を言われたところで、鷹矢が動じるわけもなく。

「ふん！だからどうしたと言うのだ！罠発動、【威嚇する咆哮】！このターン、お前に攻撃宣言はさせん！」
「…ガ…」

だからこそ、大蛇が召喚した巨大なモンスターと対峙しても、全く慄いた様子もなく鷹矢は立ち向かうのみ。
そう、確かに竜胆　大蛇の本来のデッキである、【サイバー】に対しての策がこの戦いでは意味を成さなくとも、そんなコトは鷹矢には関係ない。
そう、いかに【古代の機械】のモンスター達がその攻撃時にこちらの策を封じてくるのだとしても…だったら、それより前に動いてしまえばいいだけ。
これまで先行は中途半端な守りで終えていた鷹矢とは違う、十文字哲との戦いで学んだ守りの策を、今この場において発揮するだけなのだから。

「ちっ、諦めの悪いガキだぜ。」
「…ターン…エンドォ…」

大蛇（『駒』）　ＬＰ：４０００
手札：６→４枚

場：【古代の機械超巨人】
【古代の機械飛竜】
伏せ：無し

「俺のターン、ドロー！【シルバー・ガジェット】を召喚し、【レッド・ガジェット】を特殊召喚！【イエロー・ガジェット】を手札に！」

【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

【レッド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００

そうして紫魔達の野次にも、そして動くことを許されずにターンを終えた大蛇すら意に介さず、自らのターンに入った瞬間に、素早く動き始める鷹矢。

途切れることなく場にモンスターを並べるその様は、まるでレベル４モンスターを場に揃えることなど、どんなことよりも簡単なのだと言わんばかりの勢いを見せていることだろう。

…繰り出すは、先ほど紫魔の二人が『低俗』と馬鹿にしたエクシーズモンスター。

いかに彼ら紫魔が融合召喚に誇りを持っているのだとしても、その間違った思想を打ち崩すことなど、鷹矢にとっては造作もないことに違いない。

自らが背負う天宮寺の名において…エクシーズを馬鹿にされたままでは終われない。

「２体のモンスターでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【恐牙狼　ダイヤウルフ】！そしてそのまま効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、ダイヤウルフと貴様の【古代の機械超巨人】を破壊する！」

「ヌガァ！【古代の機械超巨人】ノ効果発動ォ！場ヲ離レタ瞬間、Ｅｘデッキカラ【古代の機械究極巨人】を特殊召喚！」

―！

【古代の機械究極巨人】レベル１０
ＡＴＫ／４４００　ＤＥＦ／３４００

そんな鷹矢の手に食い下がるようにして、すかさず新たな機械の巨人を召喚した大蛇。
いかに機械巨人達の召喚条件に制約がついていようとも、その召喚無視して守りを固めようとしているのだろうか。先ほど鷹矢が自らの攻撃を防いできたように、次々と攻撃力の高い後続を呼び出して。

…とはいえ今の彼の姿は、竜胆　大蛇をよく知る人間からしたら、まるで鋼鉄の箱の中で身を守っているようにも思えるだろう。

すり抜けるように躱すのではない。今までの大蛇の信条であった『身軽さ』を、自ら閉ざしてしまっていることにも、『闇』の中にいる今の彼は気付くこともできず。

「無駄だぜ！いくらお前がモンスターを破壊したって、モンスターが途切れることなんてねぇよ！」
「身の程を知れガキが！お前程度じゃ『駒』には…」
「知ったことか！罠カード、【エクシーズ・リボーン】発動！ダイヤウルフを蘇生し、このカードをオーバーレイユニットにする！続いて魔法カード、【エクシーズギフト】を発動！ダイヤウルフとギアギガントＸのオーバーレイユニットを１つずつ使い、デッキから２枚ドロー！」

だからこそ、鷹矢もその手を止めない。

『闇』に飲まれて自らを失っている相手など、所詮敵では無いかの如く。
今まさに正面から打ち破らんとしているその雰囲気のまま、亜蓮と大治郎の野次など意にも介さず、鷹矢は次々と手を進めて立ち向かうのみ。
「【死者蘇生】を発動し、【ゴールド・ガジェット】を蘇生して効果発動！手札の【イエロー・ガジェット】を特殊召喚し、その効果で【グリーン・ガジェット】を手札に！２体のモンスターでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【鳥銃士カステル】！」
―！
【鳥銃士カステル】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００
止まらぬ展開、鳴り止まぬ召喚音。
祖父から受け継ぎし才能を思う存分発揮し、【決闘祭】で鍛え上げられた地力によってまるで留まることを知らないかの様。
『闇』に飲まれた竜胆　大蛇に、全く恐れを抱かず。
「おい、て、天宮寺の奴、一体いつまで動く気なんだ!?」
「チッ、なんで諦めないんだよぉ、このクソガキィ！」
「ふん、カステルの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、【古代の機械究極巨人】をＥｘデッキへ戻す！」
―！
【古代の機械超巨人】から始まった、次々に大型の後続を呼びだすこの守りも…
究極巨人のトリガーが破壊だということを見逃すはずが無い今の

鷹矢にとっては、いかに巨大な鋼鉄の箱とてただの『的』にしか過ぎないのだろう。
天空から標的を狙いし銃士の一発がその『的』を射抜くとき、大蛇の墓地に眠りし３体の【古代の機械巨人】は、一体たりともこの大地に蘇ることは叶わない。
そうして大蛇の場に残ったのは、鷹矢のモンスターと比べても小さな、機械仕掛けの飛竜のみ。

「バトルだ！【ギアギガントＸ】で【古代の機械飛竜】に攻撃！」

―！

「グォッ!?」

大蛇（『駒』）　ＬＰ：４０００→３４００

そうして、鷹矢の駆る機械兵の一撃によって、成す術なく機械飛竜が破壊されていって。
生み出された衝撃によって、思わず大蛇がその片膝を崩して体勢を崩しかるその光景は、それに連なって大蛇へと襲いかかる実際のダメージと相まって、『闇』によって実体化した故に起こるモノに違いなく。

「お、おいおい大治郎！なんで竜胆が押されてんだよ!?」
「くそっ、天宮寺の奴…調子に乗りやがって…」

それが、その光景が。
彼らの用意した竜胆　大蛇という最大級の『駒』が、まさかの高等部１年生に押されているというこの状況が、この場にいる彼ら紫魔達にとってもあまりに衝撃的だったのだろうか。

抵抗する者へと浴びせるはずの実際のダメージが、まさか先に大蛇に襲いかかるだなんてと、そう言わんばかりに声を漏らして。

【決闘祭】では大蛇に、『実質』負けていた遊良に…

その遊良に、決勝戦で負けたはずの鷹矢が、何の怯みもなく大蛇に向かってくることに対して、この時になってやっと危機感を抱き始めたかの様でもあって…

それでも、鷹矢は全く手を緩める気など無い。

そのまま攻撃を控えている自身のエクシーズモンスター達に命じるのみ。

「終わりにしてやる！先ずは【鳥銃士カステル】でダイレクトアタック！」

「手札ノ【速攻のかかし】ノ効果発動ォ！攻撃ヲ無効ニシ、バトルフェイズヲ終了スル！」

「…むぅ。では仕方ない、俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：４→２枚
場：【ギアギガントＸ】
【恐牙狼　ダイヤウルフ】
【鳥銃士カステル】
伏せ：１枚

それでも、寸前のところで大蛇はソレを防いで。

…それは、相手の攻撃を涼しい顔で躱す彼本来のスタイルでは無い、追い詰められてのギリギリの防御。

閉じ込められて、隙間から手を伸ばして。

『闇』の中にいても敗北を拒む姿勢だけは、まだ彼がデュエリストであろうとしている様にも見えるだろう。

「ガァァ、ドロォー！・【古代の機械飛竜】ヲ召喚！・【古代の機械騎士】ヲ手札二加エテ【融合】発動ォ！【古代の機械飛竜】、【古代の機械騎士】、【古代の機械合成竜】、【古代の機械獣】ヲ融合オオオオオ！」

そうして、ターンが鷹矢から移ってすぐに、まるで苦しみながら吼えるようにして【融合】を発動した大蛇。

そう、いくら『闇』に飲まれて意思を消されているとは言え、押さえつけられているが故の窮屈さは彼にとっては何事にも変えがたい苦痛であるに違いなく…

先ほどのダメージの所為か、その口から『闇』を漏れ出させながら。

この悪意と敵意に塗れて、必死になってデュエルだけは続けている大蛇の姿は、到底彼を知る人間には見せられたものではないことは必至。

「ユウゴウショウカァァァァン！【古代の機械混沌巨人】！」

―！

【古代の機械混沌巨人】レベル１０
ＡＴＫ／４５００　ＤＥＦ／３０００

きっと今の大蛇の姿は、彼自身も許しはしないはずだ。

こんな、使い捨ての『駒』として他人に顎で使われながら、縛られながら意味の無いデュエルをしている自分を…

―彼のデッキだって、許しはしない。

だから、こそ。

「無駄だ！・罠発動、【和睦の使者】！・このターン、俺のモンスターは戦

闘では破壊されず、俺へのダメージも０となる！」
「ァ…ガ…」
「くっそっ、何チンタラやってんだよ竜胆ぉ！」
「何で…何で天宮寺程度に押されてんだよ！テメェ、【決闘祭】の時はもっと…」

ウエスト校における双璧、竜胆　大蛇と肩を並べる、『鋼鉄』の異名を持つ十文字　哲が、好んで扱う守りのカードに倣って…
巨大なる混沌の機械兵に対しても、鷹矢は引かず、慄かず。
きっと紫魔達２人も信じられないのでは無いだろうか。
そう、先の【決闘祭】では、出場選手の中でも十文字　哲と並んで郡を抜いていた大蛇のその実力の片鱗が、今では見る影も無いことに。
ソレを信じられない亜蓮と大治郎が声を漏らしたものの、その理由など、ただ大蛇を操る『権利』を与えられただけの彼らになど分かるはずも無く。
それを見かねたようにして、鷹矢が声を発した。

「…どうやら貴様らは一つ思い違いをしていたようだな。」
「…お、思い違い？」
「さっきも今も、俺が防御に使ったのはこの大馬鹿者の『好敵手』のカードだ。しかし、全くソレに対応出来ていない。…どうやら、完全に『闇』に飲み込んだことによって実力ごと押さえつけてしまい、本来の力を発揮出来ていないようだな。」
「…はぁ？そんなわけねーだろ！『闇』でデッキごと『強化』されてんのに！」
「ふん、何が『強化』だ！この男の実力は『機竜』があってこそ！…だと言うのに、ガチガチに押さえられている『力』の所為で『機竜』を使えぬ大馬鹿者など、今の俺の相手にもなっていない！」
「なっ…」
「んな、馬鹿な…」

そう、ここまでの大蛇の『変貌』が、闇によるモノだということは誰の目にも明らかではあるものの、ここまで実際に戦ってきた鷹矢だからこそ感じたモノがあった。
それは、【決闘祭】で見せていた竜胆　大蛇の【サイバー】デッキ…変幻自在に姿を変え、誰にも捕まらぬ『機竜』を、竜胆　大蛇という人物が扱うからこそ、彼の力が最大限に発揮されていたと言うのに…
また、竜胆　大蛇という、この癖の大きい人間が唯一『友』と認めた十文字　哲が好んで常に使っている防御札に対しても、全くと言っていいほど対応が出来ていないのだ。

ーこれは、普段の大蛇では絶対にありえない。

そう、だからこそ…竜胆　大蛇という、自由に振る舞うはずの決闘者が、『闇』によって無理やりに『捕まえられている』所為で…

―身動きが、取れていない。

「『駒』だか知らんが、元より弱くしてどうする。」
「はぁあ!?」
「嘘だろ…そ、そんなことが…俺達の、『駒』が…」

きっと本来の大蛇であったならば、ここまで優位にデュエルを進められるわけがなかったことを、鷹矢とて重々承知しているだろう。
だからこそ、鷹矢も許せない。
大蛇の『本来』の実力が『壁』を超えたところにあって、【決闘祭】

準決勝の時点の遊良を凌駕していたことは良いとしても…

ー遊良をコケにした報いとして鷹矢が倒したいのは、その時の大蛇なのだ。

決して、『闇』に飲まれて窮屈にしている彼では無い。

「お、おい大治郎！どうすんだって！このままだとやばいぞ！」

「くそっ、くそっ！エクシーズのクソガキがぁー！」

「ターン…エンドォ…」

大蛇（『駒』）　ＬＰ：３４００

手札：３→０

場：【古代の機械混沌巨人】

伏せ：無し

「ゆくぞ！俺のターン、ドロー！」

そうして、最終防衛ラインとして用意しておいた、取って置きの『駒』が何の役にも立っていないということにショックを受けている紫魔達などお構い無しに、自分のデッキから勢い良くカードを引いた鷹矢。

―既に、勝敗は決している。

何時までもこんな奴らに付き合ってやるつもりなどないと、そう言わんばかりのその勢いは…

鷹矢が『壁』を超え、自ら勝ち取った実力が後押ししていて、留まることを知らないかのよう。

「…調子に…乗りやがってぇ…」

もしも竜胆　大蛇が押さえつけられていないまま敵として現れていれば、鷹矢もどうなっていたかは分からなかっただろう。
まぁ、この場にいる紫魔達の精神力では、彼らよりも強者である大蛇を操ることなど出来はしないのだから…大蛇が『こうなる』ことは、ある意味必然ではあったのだろうが。
恥辱に体を焼かれ、わなわなと震えて顔を歪めている大治郎が何かを呟いたことにも、鷹矢は全く気にも留めず。
そうして、そのまま鷹矢は最後の一撃を食らわせんとして、己の手札からカードを取ろうとした…

―その時だった。

「…ちょっと待ったぁ！これを見やがれ天宮寺！」
「…む!?」
「だ、大治郎？急にどうした!?」

突然、デュエルを遮るかの様にして大治郎が大声をあげ、それによって鷹矢がその手を止めて。
隣に立つ亜蓮には、突然の大治郎の大声の理由がわかっていないのか、不意を突かれて驚いているままではあったものの…
そんな亜蓮を他所に、彼らが持つ『闇の欠片』、大治郎はその球を数度宙で振ると、彼らの頭上へと『闇』が集まり始めたではないか。

―円を描いて、輪を作って。

次第にその円の中に作り出された中に、このセントラル・スタジアムとは異なった情景が映し出され始め、まるで中継画像の如くその景色を鷹矢へと見せ始める。

そこには…

「…あれは…俺達の家か？…む!?貴様ら、一体何を！」

鷹矢にとっては見慣れた、自分達が住む家を上空から見た景色がそこには映し出されていて…それに伴って、鷹矢の口からは驚愕を孕んだ声が漏れだしていた。

…しかし、ただの家の映像を見せられた程度では、鷹矢が驚いたような声を挙げるはずがないだろう。

なぜなら…鷹矢が思わず『そう』言わざるを得ない状況が、そこには映し出されていたのだから。

「敵が…あんなに大量に!?」

「へっ、近くに居た『雑兵』を全部集めてやったぜ！いくらガキのお前でも、この状況を見たら俺達の言いたい事はわかるよなぁ天宮寺ィ！」

そう、見せられたその景色には、数えるのも嫌になるほどの、夥しい数の『雑兵』達。

…デュエルディスクを構え、今にも攻撃を加えそうな程に荒ぶっている姿を見せつけていて。

その不気味なくらいに集合した敵の一団が、彼らの住む家を取り囲むようにして蠢いているのだ。

まだ命令が下らないのか、その足を家の敷地内には入れては居ないものの…一声挙がれば、すぐにでも攻撃を加えてしまうことは必至。

「貴様ら…一体どこまで腐れば気が済むのだ！」

「知るかよそんなこと！お前が俺達に逆らったのがいけないんだぜ！」

「お…おぉぉお、流石大治郎だぜ！ひゃはははは！形勢ぎゃく

てええええん！」

そう言って鷹矢へと脅迫まがいの台詞を吐く大治郎の言葉は、本気で鷹矢たちが住む家を、中にいる虹村、大門　ミヤコ、そしてルキごと吹き飛ばすことに、なんの罪悪感も抱いていないようであって。

これは、いわば人質。いくら鷹矢がデュエルで優位に立っているのだとしても、このまま続行することを許さないという、彼らの脅し。

通常、こんな場面に追いやられてしまえば、手が止まってしまうことは必至。

まともな精神の持ち主であれば、この危機的状況で迷いが生じることと間違いないだろう。だからこそ、形勢逆転と言わんばかりの口調のまま、大治郎は鷹矢へと向かって言葉を続けて。

「へへっ、今ここで俺がちょっと命じれば、あんな家なんて一瞬で焼け野原に出来るんだ、確か家の中にはまだ人が居るんだよな？」

「…む？」

…そんな大治郎の『中に人が居る』という言葉を聞いた鷹矢が、その瞬間にこの光景から『興味を失った』ような雰囲気になったことにも紫魔達は気がつかぬまま…

「…な、何これ…何でこんなに沢山居るの!?」

突如、ルキの声が『闇の円』の向こうから聞こえて。

きっと、敵に家を囲まれた危機感からだろうか。

玄関から飛び出してきたルキが、門の外から『命令』を待って呻いている『雑兵』達の、その数のあまりの多さに顔を引きつらせて驚いた様子を見せていた。

１００や２００では済まない、もっと多くの『敵』が虚ろな目をし

て家を取り囲んでいるのだ。その気持ち悪さと圧迫感は、きっとこの場にいるルキにしか感じ得ない感情だろう。
　また、その光景を見て気を良くしたのだろうか。２人の紫魔達はいやらしく口元を歪め、ただ鷹矢の敗北だけを命じ始めて。
「ひゃははは！これで俺達の負けは消滅したってことだ！」
「お前が今ここでサレンダーしたら攻撃は止めてやるよ！でもそうしたらお前もあの女も仲良く俺達の手駒になるだけだけどよ！」
「…ふん。」
　そんな彼らだったからか、鷹矢がうんざりしたように…まるで呆れ果てたかの様にして息を吐いたことにも気がつけない。
　―ゆっくりと手を動かし、手札から一枚のカードを取って…
「俺は【ブリキンギョ】を召喚！」
　―！
【ブリキンギョ】レベル４
　ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００
「なっ!?」
「はぁぁぁあ!?」
　幼馴染を『人質』に取られ、住む家すら焼け野原にするという脅迫を受けているにも関わらず…

サレンダーしろという命令など聞こえなかったかのようにして、鷹矢の場には機械仕掛けの魚が跳ね、先ほどと同じようにデュエルを続行し始めた鷹矢。

―その、突然の鷹矢の行動。

…まさか、この状況下においては少人数の犠牲よりも、『異変』自体の解決を選んだというのだろうか。

紫魔達には、鷹矢の態度が『そう』としか思えないのだろう。

そんな、信じられないようなモノを見る目で、目と口を開けている亜蓮と大治郎が、鷹矢を見て叫ぶ。

「なっ!?ななななんでお前サレンダーしないんだよ!あの女がどうなってもいいってのか!?」

「…無駄な事を。あの程度の敵をいくら揃えようとも、全く持って意味など無いというのに。」

「ぐっ…ま、まさかお前がそこまで非情になれるなんてな…で、でも天宮寺ィ、こ、これでお前も俺達と同類だぜ!所詮、自分さえ良ければ他人なんて、ど、どうなっても構わないって思ってるんだよお前も!」

そう、紫魔2人からすれば、鷹矢はどこまでも非情に徹していると思えるのだろう。

確かに、人は自分一人では手に負えないような厳しい状況に追いやられたときに、とてつもなく非情な選択を迫られる時がある。

そこでどんな選択が取れるかによって場面は常に変化し、時には大勢のために最も大切な一人を犠牲にしなければならない場面が存在することは、疑いようのない事実なのだ。

しかし、いくら幼馴染を人質に取られたからとは言え、大勢のために一人を犠牲にすることに躊躇すらしないこの鷹矢の立ち振る舞いは…

到底、『異変』に巻き込まれた一般人が取れる態度ではない。

一体どうして何の迷いも無く、即座に幼馴染を切り捨てる選択が出来るのだろうか、と。

—彼らには、不思議でたまらない。

そんな、どこまでも腐った思考で鷹矢を考えている2人へと、鷹矢は向かって…

「貴様ら、また一つ思い違いをしているぞ？」

「…は？」

「テ、テメェ…な、何言って…」

「あんなモノが、ルキに通用すると思っているのか？」

…

—!!!

そんな、鷹矢が言葉を放った瞬間に、同時に聞こえてきたモノがあった。

紫魔達が作り出した『闇の鏡』の向こうから…決して聞き間違えることなどない、誰も聞いたことのないような、そんな『音』…

―これは、咆哮。

神聖なりしその響き。

竜の声、それも、透明にも感じるほどに透き通った、畏怖すら感じる天上のモノ。

目が眩むほどに眩く光り輝いた天空から、後光と共に降り立つように…巨大な『何か』が決闘市の東地区、そのほんの一角へと向かって降臨しているのだろうか。

眩き光を降り注がせ、下賤なる『闇』など近づいただけで蒸発して消えていってしまいそうなほどに、それは決闘市に降り注いでいて…

【アルティマヤ・ツィオルキン】レベル０（１２）

ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

「な…え…？…は？…うぇ!?」

「…え……え？……えぇ!?」

声にならない音とともに、言葉を忘れてしまっているかのような振る舞いを見せる紫魔達二人。

動揺し、困惑し、混乱し、狼狽える。

その冷静さを失い慌てふためき始めた様は、彼らによって引き起こされたこの『異変』の中にいる一般人と同じ振舞いと言われても当てはまるほどに、今の紫魔達二人は取り乱していて。

そして二人同じタイミングで息を吸い込み、まるで示し合わせたかのようにして、同時にその口を開いて叫んだ。

「何で神のカードがぁぁぁぁぁ!?」
「何で神のカードがぁぁぁぁぁ!?」

…きっと、紫魔達だけではない。

誰であっても、この光景を一目視界に入れてしまえば…絶対に彼らと同じコトを言うだろう。

―【神】のカード。

―知らない人間など居ない、知らなかったら人間ですらない。

それほどまでにこの世界における【神】と呼ばれる『現存』する存在は、誰もが知っていて…

そして誰もが手にすることを『絶対に』許されない存在。

―神話で語られ、伝承で紡がれ…

太古の昔から人々が恐れおののき、決して人間程度の手に負える存在ではない天上の力…

他の追随を許さぬ、文字通り【神】として崇め奉られる、唯一無二なる孤高の姿。

そんな彼らが今見ているのは、誰もが知る御伽話の…誰もが知っている、逆らうことを許されない存在。

―『竜の伝承』に描かれた…

―赤、それも、深紅に染まりし竜の【神】。

…それが、今彼らの目の前に。

―!!!

…ルキを守るかのようして、高らかに鳴り響く咆哮。

少女の真っ赤な髪がその声に揺られ、それに伴い意識が無いはずの『雑兵』達も、その場で呻くことすら許されてはいないかのようしてただ立ち尽くしているだけ。

その『声』を、一体何人が聞いているのだろうか。

その姿を、一体どれだけの人間が目にしているのだろうか。

それでもこの『現実』は、決闘市に突如として起こった『異変』などよりも、更に『非現実』な事実となっていて…誰の信じられる範疇をも超えていることだろう。

—それは、絶対にありえないコト…絶対に、理解出来ないこと。

それがこの決闘市の、その東地区の…この片隅に確かに起こったのだ。

そう…

—たった一人の少女のために、神が降臨するなど。

—絶対に、理解できるはずがない。

「行くよ…場にカードを1枚セットして、【アルティマヤ・ツィオルキン】の効果発動。…おいで、【レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト】！」

―！

【レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

そして、竜の【神】に呼び出され現れる、更なるモンスター。
悪魔を宿したとも言われるその雄叫びは、『竜の伝承』の中で語られる姿と相まり、『闇』よりも荒れ狂っているかと錯覚するほどに熱く燃えていて…

―彼女の内に眠る『力』の、ほんの一角。

しかし全てをさらけ出せぬ彼女の、文字通り『傷だらけ』を表した…精一杯の力の放出が形作った一体の【神】の眷属。
まるで、その体の内側から弾き飛びそうに溢れ出んとして暴れる『神』の力を、この少女の体一つで抑えているのだ。

…幼少の過去、師のほんの出来心と好奇心から、師を相手に『力の欠片』の放出を試したあの時…

その小さな体が『崩壊』しかけた恐怖は、当人であるルキはもちろん、それを見ていた遊良と鷹矢の心にもトラウマとして刻まれていて。
それでも、師の特訓と体の成長に伴い、何とか『力』に対抗出来るだけの自意識を持つことは出来てはいるが…あれから１０年経った

今でも、回数を重ねる度に彼女の体が『危なく』なることには変わりなく。

――だからこそ…

「ビックリしたけど…でも一気にきてくれて助かったよ。【レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト】の効果発動！全部吹き飛ばして！スカーライト！」

――

――爆音と、轟音。

弾け、爆ぜ、轟き、燃える。

そして、それよりもなお高らかに決闘市に鳴り響くは…気高き魔竜の轟きと、深紅に輝く竜神の咆哮。

敵がルキ目掛けて召喚していた、そのモンスター達のほとんどが原型を留めていることを許されず…

そのあまりに大きな衝撃は、ソレを召喚していた『雑兵』を飲み込んで燃え上がるのか。

轟音を掻き消す神聖なる竜の咆哮は、如何なる下賤な『闇』をも消滅させる、まさに【神】の声となって街に響いていて。

「ガアアアアアア！」

「ギバアアアア！」

「ブッバァァァァァァ！」
「ギョボォォォォォア！」
「ビバァァァァァァッ！」
「ルヴォオアァァァァ！」

―…

破壊されたモンスター一体による相手へと響く衝撃は少なくとも…

ここに集まった『雑兵』の数を考えると、その衝撃波はかり知れないことだろう。

―全てが『相手』。

そう、ここに居る高天ヶ原　ルキを除いて、全ての『雑兵』が【神】の敵なのだ。

中には破壊耐性を持ったモンスターも居るようだが、そもそもモンスターが残っていようがプレイヤーへと与えられたダメージを回避する方法など、雑な手しかとれない『雑兵』達が対応できるはずも無く。

…一瞬の轟音によって、全ての敵が吹き飛ばされていく。

―!!!

そして、再び竜の【神】の咆哮が響いた時…

ＬＰが強制的に０となったことにより倒れた人間達から放出された、その凄まじい量の『闇』が…

その咆哮の響き一つで、全て蒸発してくではないか。

これはまさに、そこに一人立っている少女を守っている以外に、その言葉を形容などできるはずがないだろう。

また、敵は一人残らず爆炎によって吹き飛ばされてはいるものの、建物自体に被害は無く。それが神の力によるものなのか、はたまたルキの意思によるものなのかは不明ではあるが…

「…痛ッ…あぁもう…痛ったいなぁ…体中痛くなるんだから来ないでよ…もう…」

それでも【神】が、たった『一人の少女』のために降臨したという…

この『ありえない』状況に勝る光景など…悲鳴の中にある決闘市と言えども存在しないだろう。

…

「だから言ったのだ。無駄だとな。」

「……な…何が…起こったんだよ…あの数を…一瞬で…」

「な、何で…神…が…」

「ふん、貴様らに知る権利などない！それにまだ、デュエルは終わってはいないのだぞ！【ブリキンギョ】の効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚し、レッドを手札に！2体のモンスターで、オーバーレイ！」

そんな光景がたった今目の前で繰り広げられたというにも関わらず、先ほどと同じ、デュエル続行の姿勢を崩さない鷹矢。

『ありえない』光景を目の当たりにして、現実の中に居ないかのように

放心し始めていた大治郎と亜蓮に対し…
そんな彼らには、話すことなど無いかの如く。
ルキが持つ…いや、与えられた【神】の力の一端…
そう、ルキの『本気』を知る鷹矢が、あんな状況に追いやられた程度でサレンダーなどするわけがないのだ。
ルキならば、あの程度の危機など地力で脱出できる。
それを理解しているからこそ、鷹矢も自分のやるべきことを、見失うことはありえない。
「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれ！」
呼び出すは、己の身を削ってまで得た『切り札』。
世界に轟くその異名、【黒翼】の名の通り…
―祖父の名、王者の姿。
天に羽ばたく雄雄しき翼と、神すら切り裂く鋭き牙が『闇』の中でも輝いて。
最も嫌悪する相手に倣い、無意識にその姿をなぞらえるかのようにして…
―鷹矢は、叫ぶ。
「エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」
―！
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４

ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

「ガ…ァ…コク…ヨク…」

「…け、【決闘祭】のはマグレだったんじゃ！なんで【黒翼】が呼べ…」

「お、お前ぇ！俺たちに逆らったらどうなるか…」

「聞く耳など持たん!!【ダーク・リベリオン】の効果発動！混沌もろとも吸い尽くせ！紫電吸雷！」

そうして、このセントラル・スタジアムに充満している『闇』よりもなお深い漆黒に輝いている翼が舞い上がり…

その叫びによって『闇』が散り、牙によって引き裂かれていく。

今大蛇の場にいる混沌の巨人が…いや、彼に憑いている『闇』本体が、先ほどこの決闘市に降臨した【神】によって慄いていると言うのに…

その『異質』なる存在の気配を知っていても、なお嬉々として獲物を狩る牙竜の姿はまさに神にすら歯向かう者の姿であって。

…紫電を纏い、混沌を喰らう。

神をも恐れぬ立ち振る舞いは、まさに彼の主とその孫を現していることだろう。

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４

ＡＴＫ／２５００→４７５０

【古代の機械混沌巨人】レベル１０

ＡＴＫ／４５００→２２５０

「ガガ…ガァ…」

「ゆくぞ、バトルだ！【ダーク・リベリオン】よ、あの大馬鹿者の『闇』

を断ち切れぇ！」

混沌を己の糧として、漆黒の翼を広げて飛び立つ牙竜。
荒々しいその咆哮は、まるで目前の壊れかけの機械人形ではなく…決闘市に降臨した、【神】そのものを狙っているかのよう。

何も恐れぬ、誰にも媚びぬ。

邪魔するものを、全て貫く牙とともに…

ーそれは、轟く。

「斬魔黒刃、ニルヴァー・ストライク！」

―！

「ギャアアアアッ！」

大蛇（『駒』）　ＬＰ：３４００→９００

そうして混沌に染まりし機械巨人が、神をも恐れぬ黒翼牙竜の雷牙によって貫かれ、その衝突が凄まじい衝撃となり、プレイヤーである大蛇へと襲いかかった。

…吹き飛ばされ、転がっていく。

単純な戦闘ダメージではない。『闇』をも己の供物として喰らった、牙竜の一撃がそのまま沸き起こるのだ。
『闇』に飲まれて意識の無い者でないと、まず耐え切れる衝撃では無いし…そもそも意識が無いのだから、耐え切るどころの話しではないだ

ろう。
　鷹矢とてそれをわかっているからこそ、フラフラになりながらも『闇』によって無理やりに立ち上がらせられた大蛇の痛々しいその姿を目にして…
「…大馬鹿者よ、今楽にしてやる。これでトドメだ、【鳥銃士カステル】でダイレクトアタック！」
―！
　宣言とともに、天に浮かぶ銃士が放った小さく鋭い一発が、満身創痍であるにも関わらず、無理やりに立たされている大蛇に最後の一撃を食らわした。
「ガッ…ガフッ……」
　大蛇（『駒』）　ＬＰ…９００→０（―１１００）
―ピー…
　静かなる、解放の音。
　そう、セントラル・スタジアムに鳴り響いた無機質な機械音が、深遠の『闇』に囚われている男の解放を、確かに鷹矢へと知らせていた。
―…

「くっ、『出来損ない』の癖に、まさかこれほどとは…」
「バトルだ！【堕天使ルシフェル】で、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を攻撃！背徳の一閃、バニッシュ・プライド！」

―！

「きゃぁーッ！」

ヒイラギ　ＬＰ：８００→０（―３００）

―ピー…

古びたスタジアムの、そのエントランスに鳴り響いた無機質な機械音。
デュエルが始まってから、そう時間は経っておらず。
つまりそれは、意気揚々とデュエルを仕掛けてきたヒイラギの健闘も空しく、ほんの少しの時間遊良の足を止めたに過ぎない結果となっていることに他ならない。

それが例え、【決闘祭】で見た地紫魔である紫魔　ヒイラギのデュエルとは、全く異なる戦い方であっても。

また遊良も同じ、セントラル・スタジアムで大治郎が鷹矢に見せた、ルキを人質に取るという『光景』と、全く同じ映像を彼女に見せられたというのに…
鷹矢と同じく、全く怯まずに向かってきた遊良に、ヒイラギは負けたのだ。
『闇』による実際のダメージ。
それは、ヒイラギとて条件は一緒。ＬＰが０となるダメージをその華奢な身に受けたことで、息も絶え絶えな様子。

「…ゲホッ…ま、まさか【神】とは…ど、どうりで、人質にも…怯まなかったわけですわ…」
「…怯まなかったわけじゃない。ただ、すぐにでもお前を倒して戻りたかっただけだ。…幸い、もうルキの近くには敵が居ないみたいだけど。」

鷹矢がルキの心配をしていないのは、鷹矢がルキの実力の高さを知っているからではあるが…
それに対して、遊良が心配しているのはまた違う部分。敵ではない、彼女自身の『力』その物に対する心配が、遊良にはある。

―『遊良…私だって、戦えるよ？』

ルキのその言葉を、遊良とて疑ってはいない。
彼女がどうしても戦わなければいけない状況に陥った時には、彼女自身の手で切り抜けねばならないのだし…それだけの力が彼女にあることは、遊良もよく知っている。

だから、こそ。

無駄で危険で、不必要で得にもならない戦いを、ルキに強いるわけにはいかないのだ。

神と言う存在が本当に居るのだとしても…所詮、当に見放されている遊良からすれば、【神】のカードなどどうでも良く。
何においても幼馴染のルキを守りたい一心、ただ、それだけのこと。
それでもヒイラギが見せてきたあの光景のその後を見るに…ルキの手によって、彼らの家付近にいた全ての『雑兵』が吹き飛ばされて『闇』を放出した様子。
周囲に敵は居らず、この『核心』に迫った状況まで辿りついたこと

を視野に入れると、今急いで戻るよりもこのまま進んで『異変』の解決を図るのが先決だということを、遊良は即座に理解したのか。
満身創痍のヒイラギへと詰め寄り、口調を荒くし問い詰める。

「さぁ、全部吐いてもらうぞ！お前がこの混乱の首謀者なんだろ!?それに、大体何でお前が【Ｄ―ＨＥＲＯ】を持っているんだ！それは【紫魔】の…まさか『黒幕』って!?」
「…ホホ…グフッ…た、ただの借り物ですわ…そ、それに…何を、言ってらっしゃるの…かしら…私も、ただの手駒に過ぎませんの…よ…」
「…ぐっ、だったら黒幕は誰だ！どうやったら混乱を解決できるんだよ！」
「…」
「おい！紫魔　ヒイラギ！おいっ！…くそっ！」

しかし、遊良の切羽詰ったような問い詰めに、ヒイラギからの返事は無く。
実際に受けたダメージによって、その意識を失ったようだ。
その様子に、やっとの思いで辿りついた核心だというのに、その真相を知るであろう彼女が物言えぬ状態になってしまったことに対して遊良が苛立つのも無理は無いだろう。
人質にすらなっていなかったとは言え、何よりも大切な幼馴染であるルキを引き合いにだされたことと…
何の成果も得ることができず、ただヒイラギを吹き飛ばすだけの結果に終わってしまったことに対する不甲斐なさが、この先の不穏さを良く現しているようであって。
これでは、外でこの古びたスタジアムに敵が入らないように食い止めてくれている蒼人にも申し訳が立たないのか。

…それだけでは無い、セントラル・スタジアムに向かった鷹矢の様子もわからなければ、ルキの身から危機が去ったわけではないのだ。

…まぁルキに関しては、【神】の神聖なる咆哮によって、ルキがいる家の周囲から彼女に害をなす下賤なる『闇』が根こそぎ消し去られているのだが…

そんなことは遊良だけでなく、ルキ自身にだって知りえたことではないのだろうけれども。

…しかし、どうしたものか。

ここで気絶している様であるヒイラギを、一度家に連れ帰って…拷問ではないにしろ、意識が戻った時に色々と情報を聞き出すのがいいのか…それとも、そんな時間など無いのだから、他の場所を探す方が先決か…

そんなことを、遊良が考え始めた…

―その時だった。

―!

「なっ、何だこれ!?」

突然、古びたスタジアム全体が振るえ…いや揺れ始めて、老朽化した建物が軋み始めて悲鳴を上げて。

まるで地震の如きその揺れが、ここにいることの危険さを遊良へはっきりと伝えてくれてはいたものの…

それと同時に遊良の目には、その振動の正体がはっきりと見えていて…その原因の場所を教えてくれている。

「ス、スタジアムの方から…『闇』が…」

そう、ソレを遊良が、見間違うはずが無い。何せ、ついさっきソレに囲まれて飲み込まれそうになっていたのだから。

遊良が戦っていたエントランスから見える、今では使われていないはずのメインスタジアムへと繋がる巨大な扉の間から…

―漏れ出す『闇』、潰れそうな圧力

そう、この古びたスタジアムの、その中心にかけて振動が強くなり…メインスタジアムの扉の奥から、溜まりきれなくなった『闇』が漏れ出しているのだ。

「…他の場所…じゃない。こ、ここが…この奥に…」

この階段の上、メインスタジアムに…

黒幕が…いる。

鷹矢ほどの超直感力は無いものの、漏れ出してきている『闇』の純度と重さから、『そう』感じた遊良。

―そう、この先に核心があると、確信したのだ。

「…い…行くしか…ない…」

先ほど遊良が考えていた、ヒイラギを連れて戻るという選択肢が即座に消滅し…

外で耐えてくれているであろう蒼人と、罠かもしれないセントラ

ル・スタジアムに向かってくれた鷹矢と、家を守ってその身を傷つけてくれたルキのためにも…

最も核心に近づいたであろう自分が、何が何でも真実を突き止めなければと、そう言わんばかりの遊良。

ヒイラギから離れ、ゆっくりと階段を昇り始め…

そうして、『闇』が溢れているメインスタジアムに繋がる扉へと向かい始めた。

―…

「全て…計画…通り…ですわ…」

誰にも、決して聞こえぬ声で…そう呟かれた一人の少女の声は…

この古びたスタジアムに吸い込まれて…

静かに、消えていった…

…

ｅｐ４２「渇いた叫びー前編」

深い、それは深い『闇』の中。決して誰にも見つけてもらえぬような、そんな果てしない深淵の闇の中に…

―そこに、疲れ果てた男が一人…倒れていた。

眠い…とても眠い。

その困憊しきった虚ろな表情からは、今までの抵抗も空しく体力の全てを使い果たしたと言わんばかりに憔悴し…

暴れ、叫んで、もがいて、果てる。

既に若くなく、老体に近いその体から力が抜けたのだろうか、その場に崩れて瞼が落ち…その意識さえも手放しかけては、ソレを必死になって繋ぎとめて。

…深淵に囚われながらも、ずっと抗い続けてきたというのに。

それでも、もうその限界が近いのか、深淵に蔓延る闇があちこちから、自分の全てを飲み込もうとして這い回っているのを、この男も感じている様子。

そんな男の脳裏に映っているのは…それとも、『闇』がわざと見せているのだろうか…

男に見えるは、若かりし頃の輝きと、積み重ねてきた過去の栄光と…そして、立ち直れそうに無いほどの挫折が、目まぐるしく映っては消えていくその光景…かつての記憶。

まるで、無理やりに自分が何者なのかを忘れさせようとしているよう。

…このまま、もう少し歩んでいたかった。

自ら歩んできたこの道で、果たしてどれほどの消え行く夢を数え…一体、何人の共に歩んできた仲間が枯れるのを眺めてきたのだろう。夢と希望に溢れた、あの若き日にこの世界を知り…それにも随分と慣れた頃に、更なる上を知りこの世界の深さに迷い込んで…

—そうして頂点を極めたと思っていた、その矢先に現れた【化物】。

屈辱だった、無念だった。恥辱に体を焼かれ、自分を構成しているモノが足元から全て崩れ去っていくような、そんな感覚にずっと襲われ続けて…

どうにか立ち直ってはみても、自らの『誇りと称号』は自分を許してはくれず。

強さを失い、その信念にまで裏切られたかのように…称えられ、認められることで制してきた自尊心すら保てなくなり、そうして【王者】とはかけ離れた存在にまで落ちて、その全てを失って。

…だからこそ、彼には許せない。

全ての元凶、自分をこんなふうにしたその存在も…今まで積み上げてきた誇りを砕き去った、そのふざけた決闘も。

—僅かに残った男の意識には、既に『その思い』しかなく。

…決して、許さない。奴を…そのデュエルを…『Ｅｘデッキを使わない決闘』を…

それだけを思ったその瞬間…そこで、男の意識は途切れた。

…『闇』に、喰われる。

――！

しかし、そのまま飲み込むようにして『闇』が男を包み、全身を喰らいつくさんとして纏わりついた、その瞬間に…

その寸前の所で男は目覚めて、疲れ果てた体に鞭を打って、無理やりにでも奮い立たせようとしているのか、再び必死になって自我を保たんとして立ち上がる。

…もう、それを何度繰り返してきたのだろう。

そう、こんなことを、最初に飲まれたあの時からずっと男は繰り返してきたのだ。

僅かに残った自我を少しずつ喰われ、全て飲まれる瞬間に抵抗するかのようにして目を覚まし…再びもがいては倒れるという、その繰り返しを。

男は、常に感じている。

少しずつ無くなっていく自分を感じるとともに、喰われた『自分』が『闇』に染まって、自分とは別の意識となって離れていくことを…

先ほどまで抱いていた『何か』…その強い『怒り』も、今目覚めた男にはそれがなんだったのかが曖昧になってきている様子。

今喰われた『怒り』、そしてそれ以前に喰われたモノが相まって…『悪意』しか持たぬ『誰か』が造られていって…

―『闇』が、もう一人の…自分を、造る。

―…

「ア…ァ…」

無機質な機械音がデュエルの終了を告げると同時に、己に巣食った『闇』を全て放出し始める大蛇。

確かに鷹矢の最後の一発が、彼の胸の中心を実際に貫いたものの…ＬＰが０になったのと同時に大蛇が吐き出し始めた『闇』が、彼が負ったダメージをある程度一緒には吐き出させることを鷹矢は知っているからこそ、何の躊躇もなく大蛇にトドメをさせたのだ。

大蛇の内に巣食った『闇』が、彼の体から全て吐き出されていき…そのままセントラル・スタジアム内に充満した『闇』と混ざって、そのまま消えていって。

「あ…あぁ…や、やべぇよ…大治郎…こ、このままじゃ…」

「うるせぇな！少しはお前も考えろよ！お、俺だってどうしたらいいか…」

「そ、そんなこと言ったってよぉ…」

そして、よもや自分達がこのような状況に追い込まれるなんて考えもしていなかったのか。大蛇がその場に倒れこむと同時に、大治郎と亜蓮の動揺が益々大きくなり…

彼らが常にスタジアム上部へと掲げていた手も、もはや『雑兵』や『駒』を操っていた『黒い宝石』のような闇の塊へと伸ばすことも出来ておらず。

呆然と、立ち尽くしているだけ。
きっと想像できていたはずも無い、多勢を持つ自分達を今追い詰めているのが、たった一人の高等部1年生の手によるものだなんて。
そうして、街の人々を嬉々として追い詰めていた彼らもまた、自分達も危機的状況に追い込まれたのだということを、やっと理解していた。

「さて、では話してもらおうか。貴様らの『黒幕』をな。」
「ぐっ…こ、こんなガキに…」
「うむ。こんなガキに追い詰められているのだ。さっさと吐いた方が身のためだぞ。」
「…うぅ…くそっ！」

いくら危機管理能力の薄い彼らと言えども、流石にこの状況を察したのか。既に鷹矢から逃げられるような状況でもなく、かといって彼らの実力では鷹矢をデュエルで敗北させることも敵わず。
そう、単純にデュエルが強いだけではない。常日頃から筋力トレーニングで鍛えていることに加え、遊良のバランスの取れた食事をほぼ毎食欠かさず摂取している鷹矢なのだ。
体の出来上がり方からして2つ年上の紫魔達と比べても大きく鍛え上げられ、彼らが2人がかりで向かった所で、鷹矢を押さえつけることなど無理な話だろう。
また、ここまで恐れも無く突き進んで来た、そのふてぶてしい態度の鷹矢の精神力から言って…デュエルを介さない侵食を鷹矢へと試みた所で、弾き返されて無駄なのだということは、もちろん彼らも理解している。

「…しかし、いい加減煩くてかなわんな。」

彼らの頭上高くで怪しく光り輝く『黒い宝石』のような闇の塊が、未だにその蠢きを衰えさせず、静かな地響きをスタジアム内に響かせて

いるものの…
　そう言った鷹矢の意識は、頭上にある『黒い宝石』に向かっているわけでは無い様子。
　そのまま展開しているデュエルディスクのＥｘデッキ部分を開けると、その中から1枚のカードを取り出しはじめて…鷹矢は、まるで手裏剣を投げるようにして、勢い良くソレを飛ばした。

　すると、それがすぐさま頭上にある『黒い宝石』へとぶつかり、『闇』の中に吸い込まれていって…

「なっ!?天宮寺！お前何して…」
「コイツが腹が減ったと煩いのだ。まったく、食うことしか考えていない奴はこれだから面倒臭い。」
「違ぇよ！お前今何投げ…」
「【Ｎｏ．】だ。」
「…は？」
「俺の持っている【Ｎｏ．】が、腹が減ったと煩かったからな。丁度いい『餌』を与えたのだ。」
「え…えさ？」
「ちょっと待て…え、餌って…」

　鷹矢の言った言葉が理解出来なかったのか、ゆっくりと自分達の頭上を見上げ始めた亜蓮と大治郎。
　鷹矢の言った言葉を理解したくもなければ、絶対に見たくも無い光景がどうしても脳裏に思い浮かぶのだろうか…
　首を反る行為に相まって荒くなる呼吸を、彼らは止めることも出来ず。
　そこで繰り広げられている光景が、ただ純粋に彼らへと圧し掛かってきて…

―!!

彼らが見上げたその瞬間に、まるで雷雲が弾けたかのような轟きがセントラル・スタジアムに響き渡った。

―それと同時に、恐るべき勢いで小さく萎縮していく、『黒い宝石』のような『闇』の塊。

鷹矢の言った『餌』という表現そのままに、超巨大な『闇』の中心にある【Ｎｏ．】のカードが、彼らの『闇』を食い尽くしているのだ。

その食欲の勢いは先の【決闘祭】の比ではない。『闇』の塊だけではなく、スタジアム内に充満している薄い瘴気すら全て吸い込んでいるのが見て分かるくらいに、それは激しく。

「な、なにしてんだよ！やめろよぉ！」

「言っただろうが。喰っているのだ、『闇』を。」

「や…やめてくれぇ…た、頼む…」

「うむ、断る。」

その、セントラル・スタジアムの天井を埋め尽くさんほどに大きかった『闇』の塊が、たった一枚のカードに吸い込まれているこの光景を…コレを使っていた彼ら紫魔が見て、その声を荒げて。

先ほどの、彼らの余裕はどこへやら。慌てふためいて、敵であるはずの鷹矢に懇願までし始める始末。

それに対して、聞く耳を全く持とうともしない鷹矢の態度はふてぶてしくも堂々としていて…自らが請け負った仕事を見事完遂し、きっと今晩のメニューのリクエストでも考えているのでは無いだろうか。

未だ街の混乱は大きく、遊良が彼のリクエストなど聞くはずもないだろうに…それでも、『異変』の中心まで乗り込んで、それを自らの手で解決した自負は、紛れもなく彼の功績に違いないだろう。

―！

そうして、あっという間にアレだけ巨大だった『闇』の塊が【Ｎｏ．】

に吸い込まれ尽き…ゆっくりと天から落ちてきて、ソレは鷹矢の手に収まった。

「…ようやく満足したか。…む？カードが変わっている…だと？…ふむ、『闇』を喰って、違うカードへと変わったようだが…まぁ、今はそんなことはどうでもいい。」

「…あ、ど、どうすんだよ…」

「まだ…『隔離』が完了してないってのに…『制圧』が失敗に終わったって『あの方』に知れたら…」

「さて、では吐いてもらおうか。この混乱の全てをな。」

自らが持つ【Ｎｏ．】の数字が、ラプソディ・イン・バーサークを示す【８０】から新たな数字と姿へと変わったことなど意に介さず。事の顛末を手に入れるべく、センタースタジアムで立ち尽くしている紫魔２人に近付き始める鷹矢。

そう、亜蓮と大治郎が、この『異変』に関して重要なモノを知っていることは既に明白なのだ。

そんな『元凶』であろう彼らに対して、如何なる手を施すこともやぶさかではない鷹矢にとっては、彼らの慄きを理解できるはずもないだろう。

「あ…あぁ…」

「やべえよ…やべぇよぉ…」

「…む？」

目の前の紫魔２人が、『闇』が消えた瞬間の彼らの取り乱しっぷりに異様なモノを感じつつも、そうしてゆっくりと鷹矢が紫魔達に近づき…

力ずくでも真相を吐かせようとその腕に力を込め始めた…

―その時だった。

「うっ!?うぶっ!?」

「おがっ!?な、なんで…」

亜蓮と大治郎が突然もがき始め、苦しみだして膝が折れ、たまらずその場に崩れ落ちて。

そんな苦しそうに嗚咽を漏らし始めた彼らの口からは、紛れもない『闇』が吐き出され始めているではないか。

「む!?貴様ら、それは…」

「ウボッ…うげぇ…」

「ど、どうじで…俺達がら…『闇』が…」

「い、いやだ…ぐ、ぐるじぃ…だ、だずげ…」

「アヴァ…ご…ゴガ…」

自らの体の内から溢れてくる『闇』を目の当たりにして、まるで信じられないかのような表情をして苦しんでいる二人。

まさか、与えられた『黒い球』で『闇』を操っていた自分達に、『闇』その物が取り憑いていることを知らなかったのだろうか。

彼らの体内から溢れる純度の高い『闇』は、今まで『闇』を『扱う側』だった彼らに対しても、何の抵抗を許すこともせず瞬く間にもがく亜蓮と大治郎を飲み込んでいく。

…『闇』に飲まれる苦しみを、自らが味わう。

そう、自分達が行ってきた非道な行為を、その身を持って体験している彼らの表情は…息苦しさと遠のく意識、そして自分が自分でなくなっていく恐怖を、その心のありとあらゆる場所に切り刻まれているかのようにも見える。

今、この決闘市で『闇』に飲まれた人間の全てが感じた…いや、彼

らによって、無理やりに味わわされたコレが、この瞬間に彼らに自身に襲い掛かっているのだ。

「アァ…ガァ…」
「グガ…ガ…」
「…『闇』に飲まれたか。くそっ、後一歩だったというのに。」

自我を失い、段々とその目から光が消えて行き…虚ろな目へと変わって、物言わぬただの人形へと変えられてしまって。
…それも、ある程度の力を残した、強者が操られた末の『駒』ではない。

「アァァ…」
「アガァ…」

―ただの、『雑兵』
物言えぬ、策も取れぬ、統率も意思疎通も出来ぬ、本能のままに呻いて蠢くことしか出来ない、『闇』に飲まれて意識を消された、ただの『人形』。
倒した所で、深い闇に囚われた人間はしばらくの間、目を覚ますことも叶わず。
折角辿りついた真相への近道が、あっという間に鷹矢の目の前から消え去ってしまったことに違いない。
しかし、何故『闇を扱う側』であった彼らにまで『闇』が侵食してきたのか。確かに下手な拷問で口を割られるよりは『闇』で完全に飲み込んでしまった方が、確かにその場は凌げるだろうけれども…
それでも、その犯人の思惑がどうであれ、仮にも仲間であるはずの亜蓮と大治郎を何の躊躇もなく深淵の底に沈めてしまうその容赦の無さが、ある意味この異変の黒幕らしいと言えばらしいのだが。
ゆっくりと鷹矢を見た『雑兵』2体が、虚ろな目のまま鷹矢へと近づいてきて…それを見た鷹矢が、己に浮かび上がってきた苛立ちを隠

す素振りもなく言い放って。

「…本当に苛立たせてくれる奴らだ、全く。」

「デュ…デュエ…」

「アガァ…」

「ならば貴様らにもう用はない…さっさと消し飛ばしてくれる！」

―…

「こ、これは…」

先ほど、古びたスタジアムのエントランスで立ちふさがってきた紫魔　ヒイラギを、あっという間に降して突破した遊良が…

たった今、メインスタジアムに繋がる大きく重い扉を開けて、その光景を見て驚きの声を挙げていた。

それは、彼の目に映る光景が、とてもじゃないがすぐに信じられる様なモノではなかったからに他ならない。

ゆっくりとデュエルスタジアムに近づくと、その異常な光景がより一層『異常』だということが理解できるのか。

先ほどから鳴り止まぬ、この古びたスタジアムに沸き起こっている地響きと、スタジアムの中心から天井にかけて…いや天井を突き破って空へと噴出している『闇の塔』の勢いが、この古びたスタジアムの揺れを起こしていて。

…まるで、止まる様子のない間欠泉の如きその勢い。

このままでは崩れてしまうのでは無いかというほどに荒ぶる『闇の塔』の噴出の勢いは、老朽化した古びたスタジアムに軋みを生み…

天を覆う勢いで噴出し続ける『闇』が、決闘市の『空』全域を飲み

込まんとして広がっていって、今にも落ちてきそうな恐怖と重圧を与えている。

「何が…起こっているんだ?と、とにかく、何とかしてコレを止めないと…」

いくら状況を飲み込めぬ遊良とは言え、彼の目の前で決闘市全域を飲み込まんと勢いを増している『闇の塔』を、このまま放っておくわけにはいかないことくらい理解できているだろう。

そう、このまま『闇』が決闘市の『空』を覆ってしまい、そしてもしも天からその『闇』が落ちてくるようなことになってしまえば…誰であっても、『闇』から逃げることが出来なくなってしまうのだから。

そう思うと、敵の配置を考えたときに浮かんだ、『まるで決闘市から人が出ないようにして配置されている』と言う理由にも納得がいくのか。

決闘市内でまだ抵抗している人間がいても、コレを落とされれば誰であっても津波のようにして押し寄せる『闇』に、一人残らず飲み込まれてしまうことは必至。

「くそっ、でも止めるって言ったってどうやって…」

そんなこと、させるわけにはいかない。そう言わんばかりの遊良の勢いとは裏腹に、彼の心には『闇の塔』の噴出を止める策など思い浮かんでは居らず。

…それも当たり前だ。

いかなる『闇』をも【Ｎｏ.】に喰わせることが出来る鷹矢や、神聖なる咆哮で『闇』を浄化出来る【神】に守られているルキならばまだしも…今の遊良には、『闇』を自身の手で止めることなど出来はしないのだ。

第一、鷹矢は今セントラル・スタジアムにいて、遊良が古びたスタジアムにいることを知らず…ルキにしても、彼女の思いが如何なるモノであったとしても、【神】は決して遊良を守ってくれるはずが無い。

だからこそ、時間がない今この場においては、何とかできる可能性があるのは自分だけ。

それを重々承知している遊良だからこそ、何か出来ることが自分に無いか思考を巡らし、その視線を周囲に交わし始めた…

―その時だった。

『…誰だ…』

「ッ!?」

突如、この地響きと聞き間違えるほどに重々しい『音』が古びたスタジアム内に響き、一気にスタジアム内の重圧が他のどことも比べ物にならない程に重く圧し掛かってきて。

―それと同時に、『闇の塔』の中からこちらへと歩いてくる人物。

小声ではない、しかし普通の話し声であるにもかかわらず、崩壊しかけの古びたスタジアムの揺れと地鳴りの中でも決して掻き消されないほどに、その存在感を持った確かな『声』。

「あ…な、何故あなたがここに!」

そんな、突如として現れたその『覚えのある人物』に対して、思わず遊良が声を荒げてしまったのだとしても、それは仕方のないことだ

ろう。
何せ、この敵の本陣であろう『古びたスタジアム』で出会う可能性のある『黒幕』には、今の声の人物とは『全く違う人物』を遊良は想像していたのだから。
それは、遊良にとっては聞き覚えのある声。
それは、遊良にとっては間違えるはずのない声。

そう…そこに、居たのは…

「砺波理事長！何であなたが！」
「…理事長？…あぁ、そうか、理事長…か。この私が。」

―砺波　浜臣

紛れもない、決闘学園イースト校の理事長を勤めるこの男が…
約１０年前まで、王者【黒翼】、【紫魔】と並ぶシンクロ召喚の王者、【白鯨】と呼ばれて称えられていたこの強者が…
【黒翼】とともに神格化されている決闘者の一人である、残してきた伝説や功績の度合いで言えば現シンクロ王者である【白竜】とて未だ及ばない、そんな誰もが知るこの圧倒的強者である人物が…

―『闇』の中から、現れたのだ。

―…

ｅｐ４３「渇いた叫びー後編」

「…はぁ、はぁ…くっ！」

古びたスタジアムの外、正面入り口のすぐ前でのこと。
自分へ向かってきた『駒』となった獅子原　エリを倒し、その他の『雑兵』を相手に、決してスタジアムの中へと入れないようにして立ちふさがっていた蒼人が、息も絶え絶えに苦しそうな声を漏らしていた。

しかし、それもそうだろう。

遊良がスタジアムの中へと突入していってから、『駒』を倒したとは言え溢れ出る『雑兵』達の足止めを、その身一つで引き受けていたのだから。
もう、何戦したのかすら覚えていない蒼人。数人がかりで向かってくる敵を倒し、ソレを倒しても倒しても後に控える意思の無い『雑兵』達が向かってくるのだ。
少しずつダメージが蓄積し、その病み上がりの体が徐々に悲鳴を上げてくる。今すぐにでも膝が折れ、倒れこんでしまいそう。
それでも…

「ぐっ…こ、ここは…通さないよ…」

デュエルディスクを構え、未だ減る気配がしない『雑兵』達の数をその目に入れても、戦う意思を手放すことを決してせず。
つい先ほど古びたスタジアムが地響きと共に揺れ始め、スタジアムの天井を突き破って『闇』が物凄い勢いで噴出し…
今すぐにでも中へと突入して遊良の無事を確認したい蒼人ではあったものの、この場を空けることもまた、取り返しのつかない状況になるということを彼とて理解してしまっているからこそ、蒼人はこ

の場を離れることが出来ないのだ。
溢れる敵が、自分を追って中に進入してしまえば…例え遊良が無事であっても、追い詰められて逃げ出すことが出来なくなってしまうから。
だからこそ、姿形は見えずとも、蒼人は遊良の無事を信じている。
きっと無事でいてくれて、自分の足で戻ってきてくれるはずということを。その彼の逃げ道を守り、彼だけでも無事に逃がしてやるのだと、そう言わんばかりの気概のまま…

決して、折れずに戦っているのだ。

「アァガァ…」
「ガッ、ガガ…」
「デュ…エル…ウ…」
「はぁ、はぁ…い、行くよ…」

そうして、終わることの無い戦い戦いが再び始まろうとしていた…

―その時だった。

「邪魔だカスども。」

―!

溢れる敵の遥か後方。
蒼人からも見えないような敵達の蠢く壁の向こうから…突然弾き起こった爆音と、それに伴う凄まじい衝撃波が古びたスタジアム内に居たであろう全ての『人間』へと襲いかかって。
その衝撃が建物まで届き、反響するようにしてその威力を増して次々に敵を飲み込んでいくではないか。

そして、その衝撃の襲撃はスタジアムの正面で立ちふさがっていた蒼人であっても例外ではなく…

「なっ!?い、一体何が…ッ、あぁぁあ!?」

吹き飛ばされ、転がる蒼人、

敵と一緒に、この暴風と見間違えるような衝撃に襲われ…そのまま、限界が近かった蒼人の意識は地面に激突した痛みと共に消えかけていく。

―!

そんな消えゆく意識の片隅で、確かに聞いた竜の咆哮が…

何時までも、蒼人の耳に響いていた…

―…

「と、砺波…理事長?」

やっと辿りついた、敵の本陣と思われるその場所。

謎の発信元から届いたメッセージを頼りに、この『古びたスタジアム』の中心部へと辿りついた遊良は、たった今、目の前のありえない事象の中から平然と歩いてきた人物をその目に入れて、思わず驚きの声を上げていた。

まるで止まる素振りのない、間欠泉の如き勢いで噴出している『闇の塔』の中から現れたこの人物…

―イースト校理事長、砺波　浜臣

かつて王者【黒翼】と共に、生きる伝説とまで称えられていた歴代最強のシンクロ使いとの呼び声も高い元王者、【白鯨】と呼ばれていた人物。

そして現在では、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の一員で、遊良が通う決闘学園イースト校の理事長も勤めている人物である。

無論、遊良にとってもつい最近まで一悶着あったことは、彼の記憶にも新しいことだろう。

そんな人物が、一体何故敵の本陣であろうこの場、そして『闇の塔』の中から現れたのだろうか…全く違う人物の『黒幕』を想像していた遊良からすれば、それが不思議でたまらないことに違いなく。

「い、一体何故あなたが！」

「…誰だ…貴様は…」

「誰って…あ、天城です、砺波理事長！」

「気安く私の名を呼ぶな！貴様さえ居なければ私は今頃…今頃？ど、どうすればよかったと言うのだ…何故、お前は私に応えない…グッ！」

「な、何を言って…」

しかし、その様子はあまりにもおかしい。

支離滅裂な言葉を発し、意識が朦朧としているかのようにふらついていて。

虚ろな目をして、自分自身が何を言っているのかを理解出来ていないようでもあるし…まるで、彼が『彼自身ではない』かのように、今の砺波の言葉には纏まりがない。

―これではまるで、街に溢れる『闇』に憑かれた者のよう。

いや、実際にそうなのではないだろうか。

『闇』の中から砺波が現れた時には、まさか彼が『黒幕』なのかとの疑惑が少々遊良にも巻き起こってはきていたものの…今の砺波のこの

様子では、おそらく違うことは必至。

「どうしたんですか！どうしてあなたが『闇』の中から!?それに、意識もハッキリしていないようだし…」

「…何だ？なぜ私はこんなところに…黙れ…わ、私は貴様を認めん！私は…『私』…は…？グッ…ワ、ワタシ…ハ…」

そんな彼の漏れ出している怒りは、まるで遊良を見ているのに『遊良』に向いていないかのよう。

ただ湧き出す感情によって口を開いてはいるものの、苦しみもがくその様子は、自分では無い『何か』と戦っている様子にも見える。

また、その言葉にも纏まりなど感じられず、考えていないにもかかわらず、勝手に言葉が口から出ているようにしか思えない程に、今の彼の言葉は安定せず。

「決着ヲ…着けて…ヤル…過去ヲ…清算…スル…」

「ッ!?まさかデュエルを!?」

そう言った砺波の腕には、確かにデュエルディスクが装着され…僅かに彼に纏わりつく闇がその腕を持ち上げて、今にも遊良に襲い掛かりそうなほどにソレは荒ぶっていて。

ウエスト校理事である李　木蓮から聞いた話と同じ、自らが襲いかかろうとしているのが、己の学園の生徒であるということにも、今の砺波には気付くこともできず。

自動的、そして強制的にデュエルディスクがデュエルモードへと切り替わり、デッキが現れオートシャッフルされて。

「そんな…ぐ…くそっ！」

逃げることを許されぬ、強制的なデュエルが今、始まろうとしてい

た。

しかし、並の相手では断じてない。

今、遊良の目の前にいるこの男が『元』とは言えかつての【王者】で、既に歴史に名を刻むほどの伝説を打ち立てている人間であることに変わりはなく…

…『才能』、そんなモノ、初めから持っているのが当たり前。『運』、そんなモノ、嫌でも発揮されるのが前提。『実力』、そんなモノが他の誰よりも高いのは、誰に言われるまでもないのだ。

才能と研鑽と思考をこれ以上無いくらいに積み重ね、その中にいる人と人とが本気で喰らいあっても…それでも王者の高みはまだまだ見えてこない。

しかしそこへと『辿りついた』、文字通りの【王者】、文字通りの歴戦。

言葉で簡単に言い表せるほど、ソレは断じて軽くなく…

「や…やるしか…ないのか…？」

―逃げたい、去りたい、勝てるわけがない。

砺波から感じる畏怖、果てはその醸しだす圧力が、いくら引退したとは言え彼が元【王者】であるということを、確かに遊良に教えてくれているのだろう。

幼い頃から【白鯨】のデュエルを見てきた遊良からしても、その実力が今の自分では想像することすらできない、絶対的に遥かな高みにあることを理解していて。

かつて砺波と肩を並べていた、【黒翼】を師に持つ遊良だからこそわかること…

今のこの男が放つ圧力は、師と比べても遜色ない絶対的な畏怖を、確かに孕んでいるのだから。
それでも、そんな常人ならば一目散に背中を向けて逃げ出している雰囲気の中で…苦しそうな声を漏らしながらも、遊良は何とかデュエルディスクを構え始めて。

遊良とて、砺波の様子のおかしさから彼が『闇』に囚われているのはわかっている。

―デュエリストを『変貌』させてしまう、この『闇』。

それは意識や思考、そしてプレイスタイルや実力…果ては、デュエリストの命その物である、デッキまでをも『変貌』させてしまうのだ。
…それが、良い方に傾くのか悪い方に傾くのかなど、この場で狙われている遊良には分かるはずがないとはいえ…

「行く…ゾ…」
「ぐっ…」

決して、逃げられはしない。
けれども、投げ出せもしない。

今遊良の中にあるのは、砺波が『闇』の中から出てきたことから、彼を何とかすれば『闇の塔』も何とか出来るかもしれない希望と…
普通に戦りあって何とかできる相手のレベルを、軽々と超えている人物と対峙しなければならない恐怖と…

その両方が天秤にかかって、そしてその全てが混ざり合って。

今何とか出来るのは自分しか居ないという重圧が、遊良の肩に圧し掛かってきているのだ。

このまま逃げ出せば、街は終わり。けれども立ち向かっても何とか出来るのだろうか…そんな感情がグルグルと遊良の頭を巡っている中で…

—…それは、始まる。

—デュエル！

先攻は、遊良。

「お、俺の先攻！【堕天使の追放】を発動し、デッキから【堕天使イシュタム】を手札に加える！そのままイシュタムの効果発動、【堕天使マスティマ】とともに捨てて2枚ドロー！魔法発動、【トレード・イン】！【堕天使スペルビア】を捨てて2枚ドロー！【闇の誘惑】を発動！2枚ドローし、【堕天使エデ・アーラエ】を除外！」

なりふり構っていられない。まさにその焦りとともに、最初から全力でデッキを回転させにかかる遊良。

そう、街の惨状と砺波の様子を見るに…ここで立ち向かわずに逃げ出すことが、遊良にはどうしても出来なかったのだ。

相手は腐っても、元【王者】。

目の前に立つこの男がそう呼ばれるに到るまでに、一体どれほどの戦いを経験し…一体、どれほどの死線を潜り抜け、そして自らソコに戻って行ったのだろうか。

自らの力でも、どこまで耐えられるかわからない。しかし、決して諦めてはいけない…だからこそ、遊良は持ちうる全ての『力』を持って立ち向かわなければならず…

「【堕天使ユコバック】を通常召喚！その効果で【堕天使ゼラート】を墓地へ送る！魔法カード、【堕天使の戒壇】を発動！【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚し、その効果で【堕天使イシュタム】も特殊召喚する！【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地にある【堕天使の戒壇】の効果を得る！【堕天使マスティマ】を守備表示で特殊召喚し、その後【堕天使の戒壇】をデッキへ戻す！」

―
!!!!

【堕天使ユコバック】レベル３
ＡＴＫ／　７００　ＤＥＦ／１０００

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２６００

遊良　ＬＰ：４０００→３０００

そうして、自らのＬＰを犠牲にしながらも、遊良は一瞬にして４体の堕天使を場に揃えて。
麗しく煌く黒き翼は、圧倒的な圧力を持って遊良を潰しにかかるであろう元【王者】と、勢いを増していく『闇の塔』の蠢きを前にしても怯むことなく羽ばたくのか。
妖しくも美しい漆黒の翼で、主の進撃のために今飛び立つ。

「俺はカードを１枚…いや２枚伏せて…タ、ターンエンド！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：５→１枚
場：【堕天使ユコバック】
【堕天使スペルビア】
【堕天使イシュタム】
【堕天使マスティマ】
伏せ：２枚

「私の…ターン、ドロー…」

遊良のターンが終了して、ゆっくりとカードをドローした砺波。
それを見て、『闇』に飲まれた者は皆そのデッキを『本来のデッキ』とは似ても似つかない、全く脈絡の無いデッキへと『変貌』させられていたを遊良は思い出して。

（い、一体…どんなデッキに変わっているんだ…いや…）

とは言え、そもそも砺波のデッキが『本来のデッキ』であった所で、立ち向かえるかどうかなど遊良には全く分からず。
そう、対策や対応を考えたところで、【王者】と、そして【王者】の名となった『特別なモンスター』の前では、如何なる奇策も駄策と終わってしまうのだ。
思わず身構え、その一挙手一投足を見逃さないように最新の注意で、一時の油断もしないようにしている遊良に対し、砺波は虚ろになりかけの眼で手札を見て…
ふらつく足と纏わり憑く『闇』で体を支えて手札から１枚のカードを取ると、それを召喚した。

「私は…【深海のディーヴァ】を召喚！」

「ッ!?」

【深海のディーヴァ】レベル２
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　４００

そうして砺波の場に現れた、人魚の歌姫。それを見て、遊良は驚きの声を上げて。
別に、レベルが低く攻撃力も低い水属性のチューナーモンスターの内の一体。
特別な価値があるようなカードではなく、かといって滅多にお目にかかれないといったような希少なカードでもないというのに…
だと言うのに、遊良が漏らした驚きの声は、そんな『一般論』から来るモノでは断じてない。
そう、まさか『変貌』しているであろう、何が出てくるか分からない砺波のデッキから…まさか『このモンスター』が飛び出てくるなんてと言ったような、そんな声となってスタジアムに放たれたのだから。

「し、【深海のディーヴァ】!?…か、変わっていない？」

もちろん、遊良にしたって彼のデュエルを幼少の頃から見てきているのだから、砺波のデュエルを形作るこの最も有名なモンスターである歌姫のことを知らないわけがないだろう。
―王者…『元』王者【白鯨】、砺波　浜臣という決闘者を語るにあたり、絶対に欠かすことの出来ない最重要として、世界中の人間に知られているモンスターの内の一体。
彼のデュエルを遥かな昔からずっと支え、その歌声で数多の仲間を呼び出し…海のような無限にも思える展開を執り行ってきたことで知られる、この人魚の歌姫…

しかし、『闇』によって変貌しているであろう砺波のデッキから、彼を代表するこのモンスターが現れたことはあまりにも妙だ。それに対して、遊良が驚きを隠せないのも無理はなく…

「【深海のディーヴァ】の効果発動！デッキから…」

「え、永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！ディーヴァの効果を無効に！」

そんなモンスターの効果を、焦りながらも冷静に食い止める遊良。

悪魔の鎖に縛られて、深海の中に響き渡る歌声を無理やりに止められた人魚の歌姫が苦しそうにもがくものの…

それでも安心なんてモノが、遊良には決して浮かんでは来ていない。

こんな初動の抵抗は、過去に数多の挑戦者が仕掛けて、そして軽々と打ち破られてきたモノ。

歴戦を戦い抜いた【王者】からすれば、初動を止められたことなど意に介す必要すらないのだから。

「場に水属性が存在する場合、手札から【サイレント・アングラー】を特殊召喚！そしてレベル４の【サイレント・アングラー】に、レベル２の【深海のディーヴァ】をチューニング！シンクロ召喚、レベル６！シンクロチューナー、【瑚之龍】！」

【瑚之龍】レベル６

ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／　５００

「私は【瑚之龍】の効果発動！１ターンに１度、手札を１枚捨てることで相手フィールドのカード１枚を破壊する！伏せカードを破壊！」

「くっ、罠発動【背徳の堕天使】！【堕天使ユコバック】を墓地へ送り、【瑚之龍】を破壊する！」

珊瑚の海龍が咆哮を轟かせたその瞬間、小さき堕天使が素早く飛翔しソレを躱して。
そのまま背徳の力をその身へ纏わせ、今襲い掛かってきた海龍を返り討ちにせんとして、煌く光弾を放ち弾き飛ばした。
そう、ここで砺波に無駄に攻め入られるわけにはいかず。相手の動きの一つ一つを的確に見極め、気を抜くことなく対応するしか遊良には出来ないのだ。
油断などできぬ、畏怖すら与えてくる相手。この程度で防ぎきれたなんて甘い考えを抱くことも、今の遊良には許されてはいない。
現に攻め手を躱されているというのに、砺波は全く衰える素振りも止まる様子も見せず…

「破壊された【瑚之龍】の効果で1枚ドロー！…魔法カード、【死者蘇生】を発動！墓地より【超古深海王シーラカンス】を、攻撃表示で特殊召喚する！」

―！

【超古深海王シーラカンス】レベル7
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

「なっ、シーラカンスだって!?…た、確かそのカードは！」
「私は手札を1枚捨て、シーラカンスの効果発動！デッキより、【フィッシュボーグ―ランチャー】、【白鰹】、【ビッグ・ジョーズ】、【竜宮の白タウナギ】を特殊召喚！」

―!!!!

【フィッシュボーグ―ランチャー】レベル1
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　１００
【白鰹】レベル2

ＡＴＫ／　６００　ＤＥＦ／　２００
【ビッグ・ジョーズ】レベル３
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　３００
【竜宮の白タウナギ】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１２００

先ほどコストとして墓地へ送った太古の魚王に砺波が命じ、彼の場には一気に４体もの魚族モンスターが姿を現して。
階段上にレベルが連なるものの、そのどれもが遊良の場の堕天使に勝てるような攻撃力を持つ魚類ではなく、またどれもが効果を使うことも攻撃も許されてはいないというのに…
それでも、チューナーとそれ以外のモンスターをそれぞれ呼び出したのだから、連続的なシンクロ召喚で一気に攻め入る気でいることには違いないだろう。
それに、砺波が今効果を使った【超古深海王シーラカンス】に対しても、遊良はどうにも違和感を覚えたのか。

「…や、やっぱり様子がおかしい！それに、シーラカンスって…」
「ガキ…ディーヴァを止めたことは褒めテヤル…だが、それデ『私』の…ワ、ワタ…グッ!?…オ、『オレ』の展開ヲ止めタ気ニなってんじゃねーだろうナァ！」
「なっ!?」

遊良がそんなコトを考えたその瞬間に、突然その口調を荒々しいモノへと『変貌』させた砺波。
そう、自身の呼称も『私』から『オレ』へと…まるで若返ったのかと錯覚するほどに、それは放たれ…
（…【深海のディーヴァ】を使ってきたから正常なのかと思ったけど…理事長のデッキも、『闇』で変わってしまっているみたいだ…）

また、抗ってはいるようだが、やはり『闇』の侵食が少しずつ進んでいるようにも見えるその様子から、遊良にとある可能性が芽生えたのか。

―それは、やはり砺波が扱うデッキは『変貌』している可能性があるというコト。

砺波の長いプロ活動において、晩年でこそ【海皇】というカテゴリーを好んでよく扱う場面が多かった砺波　浜臣。

しかし、彼のデッキは【海皇】のみではない。

こと『水属性』を扱うことに関しては、まさに召喚法問わず『世界一』の腕前を誇るほどにその才能を駆使してきた彼だからこそ、若年から往年にかけて、扱うデッキやエースも常に変化してきたのだが…

…若かりし頃の砺波のデュエル映像をも見たことのある遊良は覚えている。

そう、この【超古深海王シーラカンス】。

このモンスターは、『近年の砺波』は扱うことが無かったものの…『若かりし頃の砺波』のデッキの中核を担っていたことは、あまりにも有名なことなのだから。

「身ノ程知ラズガ！『力』ノ差ヲ教エテヤル！『オレ』ハ、レベル２ノ【白鰉】二、レベル１ノ【フィッシュボーグ―ランチャー】ヲチューニング！シンクロ召喚、レベル３！シンクロチューナ、【たつのこ】！ソシテ、レベル３ノ【ビッグ・ジョーズ】二、レベル４ノ【竜宮の白タウナギ】ヲチューニング！シンクロ召喚、レベル７！【白闘気一角】！」

【たつのこ】レベル３

ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　５００

【白闘気一角】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１５００

「【白闘気一角】ノ効果発動！墓地ノ【サイレント・アングラー】ヲ特殊召喚！レベル４ノ【サイレント・アングラー】二、レベル３ノ【たつのこ】ヲチューニング！」

そうして、まったく手を止める様子を砺波は見せず。
荒々しい手で休むことなく、そうして己に浮かぶ『感情』のまま、ただ遊良へと襲いかかるのみ。
『闇』による実体化で、本物のモンスターが場に現れることに連動する恐怖が今、砺波のシンクロ召喚しようとしているモンスターから感じる圧力と混ざりあい…
遊良へと襲いかかる、耐えられそうに無い『凍え』となってこの場に召喚されようとしていて…

「凍テツケ、世界ヨ！飲ミ込メ、全テヲ！シンクロ召喚、レベル７！【氷結界の龍　グングニール】！」

―！

【氷結界の龍　グングニール】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１７００

「【氷結界の龍】!?それも今の理事長が持ってないカードじゃないか！やっぱり間違いない！」

…はっきりしない意識と、定まらない口調。そして扱うモンスター…いやデッキが、間違いなく『変貌』していることへの確信を、この瞬間にはっきりと遊良は得て。
そう、凍気を引き裂き現れた、この伝承の三龍の内の『一体』は…

砺波が、プロとしての『晩年』に、使用することが許されていたモンスターは…

その希少性と伝わる伝承から、世界中のシンクロ使いが望んで、そして手に入れることを許されないカードの内の、所在が分かっている最後の一枚。

歴代のシンクロ王者にのみ使うことを許される、神話の槍。

他の誰でもない、それは一重に、シンクロ召喚の王者、【白鯨】であった砺波　浜臣だったからこそ、かつて彼に与えられていた特別な一体なのだ。

そんな今では【白竜】が持つ封印されしソレが、『若年の頃の砺波』のエースであるシーラカンスと並ぶことは、現役時代の砺波ではありえなかった光景でもあって。

「【サルベージ】ヲ発動シ、【白鱓】ト【サイレント・アングラー】ヲ手札ヘ戻ス！グングニールノ効果発動！手札ヲ２枚捨テ、【堕天使イシュタム】ト【堕天使マスティマ】ヲ破壊！」

「くそっ！【堕天使マスティマ】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！【堕天使テスカトリポカ】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキヘ戻す！テスカトリポカは手札から捨てることで【堕天使】の破壊を防ぐことが出来る！守れ、テスカトリポカ！」

――！

遊良　ＬＰ：３０００→２０００

それでも『変貌』しながら襲いかかる砺波の怒涛を、ギリギリのところで何とか防いでいる遊良。

悪魔のような堕天使の、革命の業火が氷龍の咆哮を相殺し…悪手だけは引かないように、必死になって思考を動かして。

いや、この手が好手だったのか悪手だったのかなど、一つ一つに必

死になるしかない遊良には考える余裕すら浮かんでは来ていないだろう。
現に、砺波はまだまだ余裕すら醸しだしているのだ。そのまま一呼吸の休みも入れずに、砺波はまたもや口調を『変貌』させながら口を開く。
「…ふむ、中々粘る挑戦者だ！ならば見せてあげましょう、この『私』の力を！」
「ッ!?」
そうして、再び『変貌』するその口調。
先ほどの荒々しいモノから、その目は未だ虚ろなままではあるものの…余裕と穏やかさを兼ね備えた今の彼の態度は、今まで彼が嫌悪していたはずの天城　遊良へと向けていた『敵意』を全く孕んではおらず。
記憶が混在し、意識が朦朧し…
とは言え『闇』に取り憑かれているはずではあるものの、その雰囲気はどこか歴戦を感じさせる、まさに【王者】と呼ぶに相応しいモノなのだろうか。
突如として変わった、『全盛期』の雰囲気…どこまでも広く、またどこまでも深い『海』のような余裕のまま…
「墓地の【フィッシュボーグ―ランチャー】の効果発動、墓地のモンスターが全て水属性の場合に、このカードは墓地から特殊召喚できる！【フィッシュボーグ―ランチャー】を、守備表示で特殊召喚！」
【フィッシュボーグ―ランチャー】レベル１
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　１００

いかなる遊良の抵抗も、栄光を歩んできた砺波には何の障害にもなってはいない。

—砺波の場に、次々に消えては現れる、輪廻を泳ぎし『海』の者達。

遊良の必至の抵抗も空しく、ソレをまるで流水の如く泳ぎ抜けて展開を行うその様は…まさしく、【王者】のモノに間違いは無く。

…そう、高みに上り詰めた者の余裕。

先ほどから再び『変貌』した、『今』の砺波の雰囲気は…彼の晩年に魅せていた、神格化されていた【王者】そのもののようであって。

「こ、この展開は…まさか!は、【白鯨】!?ここで!?」

そんな焦りを伴って、遊良が身構えたのも無理は無いだろう。

ここまで何とか砺波に抗い、どうにか封印されし氷龍の一体を凌いだというのに…

まだまだ【王者】の雰囲気を出している砺波にとっては、如何なる『挑戦者』の足掻きもあってないようなモノということを、その醸しだす雰囲気だけで遊良は理解したのか。

「そんな…て、手も足も…出ないだなんて…」

—もう、防ぐ手立てがない。

そう、ここで王者の名その物である、白く煌く【白鯨】を呼ばれでもしたら、もう遊良にはどうすることも出来なくなってしまうのだ。

そのシンクロ召喚と同時に巻き起こる、全てを洗い流す怒涛の激流によって…臨戦態勢を取っている堕天使が遊良もろとも飲み込まれてしまうことだろう。

…そして、それだけではない。

【白鯨】の持つ更なる効果、貫通と連撃を受けてしまえば…激流に打た

れてダメージを受けた遊良に、追い討ちの如く襲いかかるだろう衝撃は計り知れないモノになってしまうことは必至。

『私』はレベル７のグングニールに、レベル１のランチャーをチューニング！悠久を生きる白き潮、大いなる海原から輪廻を巡れ！」

「ぐっ…くっそぉ！」

やはり、いくらなりふり構っていられない状況であろうとも、遥かな高みにいる砺波と戦うことなど、所詮は無謀なことだったのだろうか。

逃げ出したい気持ちを抑え、震える手足を無理やりに勇ませて立ち向かったというのに…

―抗えず、飲み込まれる…

そう、自分の持てる全てで、必至になって立ち向かっているというのに…

それは砺波にとっては、食うに値しない小魚と同義。

自分の必死の抵抗すら、気に留める必要すらない…例えここで背徳の力で争ったとしても、ＬＰが減ることはそれこそ文字通り、命をただ縮めることと同じなのだから。

…全くと言っていいほど障害にすらなっていない。

そんな感情が沸き起こっている遊良に、何の躊躇もなく。虚ろな目のまま砺波はそう宣言して。

呼び出そうとしているのは、彼の歴戦を駆け抜けし、輪廻を巡る巨大なる【白鯨】。

およそ、【黒翼】と呼ばれし牙竜と並んで、この世界で知らぬ者など存在しない、まさに彼だけに許された唯一無二なるシンクロモンスター。

世界で最も有名なその口上と共に、砺波の2体のモンスターが天へと舞い上がりその姿を【白鯨】へと捧げ…
それに対して、襲い来るであろう凄まじい衝撃に対して、硬く目を瞑った遊良が身構えて…

…

「…え？」

…しかし、何も起こらず。
想像していた透き通るような鯨の咆哮も、召喚と同時に繰り出される全てを飲み込む激流も…

―高らかに宣言したはずだというのに、何故か【白鯨】はこの場には現れず。

その有り余るほどに巨大なその姿も、決してこの古びたスタジアムへと現れることは無かった。
その身を捧げたはずの水属性モンスター達も、シンクロ召喚へと繋がる輪廻の輪を崩して…その身を、元の位置へと戻していて。

「…グッ…な、何故だ…何故お前は…私を許してくれない…」
「ど、どうしたって言うんだ…砺波理事長だったら…【白鯨】だったら、この場面で必ず【白闘気白鯨】を呼んでいるはずなのに…」
「ガッ…ワ、私ハ…イ、1枚伏セテ…ターン…エ、エンド…」

砺波　ＬＰ：４０００
手札：６→０枚
場：【超古深海王シーラカンス】
【氷結界の龍　グングニール】
【白闘気一角】
【フィッシュボーグ―ランチャー】
伏せ：１枚

そうして苦しそうに、そして非常に苦々しそうにしてターンを終えた砺波。

「攻撃もしてこない？変だ…おかしすぎる…けど、こ、これだったらまだ何とかなるかもしれない！」

砺波が【白鯨】を召喚しなかったことに対して引っかかりを覚えるものの、しかし彼の様子が『闇』によっておかしくなっていることは確実なのだから、自分が歯向かえるとしたらこの隙に賭けるしかないことを遊良は即座に理解したのか。

―『闇』に憑かれたデュエリストを正気に戻すには、デュエルで勝つしか方法が無い。

蒼人の時と同じ。この場で何とかできる可能性がある自分が、『勝つ』ことで砺波を解放しなければと、そう言わんばかりに遊良はその勢いを加速させ始めて。

「俺のターン、ドロー！」

…普通に戦っていれば、勝てる見込みなど０よりも低い相手。
そんな相手に、なりふり構っていられない。全ては勝つため…勝って、『闇』から解放するために…圧倒的な差がある相手が見せた、ほん

の僅かな隙を目掛けて…

「魔法発動、【アドバンスドロー】！【堕天使イシュタム】をリリースし、デッキからカードを2枚ドロー！続いて魔法カード、【トレード・イン】を発動！【堕天使アスモディウス】を捨て、更にカードを2枚ドロー！…よし、【貪欲な壷】を発動だ！墓地ノ【堕天使イシュタム】、【堕天使ユコバック】、【堕天使アスモディウス】、【堕天使テスカトリポカ】、【堕天使ゼラート】をデッキへ戻して2枚ドロー！行くぞ！スペルビアとマスティマをリリース！」

「グッ…ア、アド…バンス…召喚…」

次々とデッキを回転させ、自由自在に手札を入れ替え…ターン開始時に2枚だった手札が、倍の4枚にまで増えている遊良のこの所業。

畏怖と圧迫が充満しているこの古びたスタジアムにおいて、【決闘祭】を経験する前までの遊良だったならば、きっと立ち向かうことすら出来ずに逃げ出していたはずだ。

先ほど砺波が【白鯨】をシンクロ召喚していれば勝敗は既に決してはいたのだが…それでもあの激戦を戦い抜いたからこそ、今の遊良が恐怖に潰れず、何とか砺波と対峙できていることには違いない。

「神に背きし反逆の翼、その姿を今ここに！」

…必要なのは、『心』

弱いままでは変わらない、強くなければ変えられない。師の教え、それは周囲の評価も、自分自身の『心』もそう。

—『心』を強く、恐怖に潰れず。

—遊良の希望が形となりて、姿を現す。

「来い、【堕天使ルシフェル】！」

―！

清廉なる天の光、それを遮る黒き姿。
世に名立たる王者の前でも、引けを取らぬその佇まいはまるで謀反か背反か。
儚くも果敢なるその姿は、まるで今の遊良の姿のようでもあって。

【堕天使ルシフェル】レベル11
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

砺波の様子がおかしいのも、何故か勝てた場面で彼が手を止めたことも…今この戦いではどうでもいいこと。
『闇』に囚われた者を倒す、ただ、その為だけに…

―遊良は、叫ぶ。

「相手の場には効果モンスターが４体！【堕天使ルシフェル】のモンスター効果！アドバンス召喚成功時、デッキから【堕天使】を呼び出す！集え、【堕天使アムドゥシアス】、【堕天使ゼラート】、【堕天使テスカトリポカ】、【堕天使イシュタム】！」

―!!!!

【堕天使アムドゥシアス】レベル６
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／２８００

【堕天使ゼラート】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２３００

【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００
「【堕天使ルシフェル】の更なる効果発動！俺はデッキからカードを５枚墓地へ送る！墓地へ送られた【堕天使】カードは３枚、よってＬＰを１５００回復！」

遊良　ＬＰ：２０００→３５００

先ほど砺波が深海の王の力で一斉に場を埋めたように、堕天の王に命じてこの状況を一変させた遊良。
仕える主の希望の元に、集った堕天使達の煌きは…堕天したとは思えぬほどに神々しく、また漆黒の翼が妖しくも麗しく羽ばたきを見せていて。

「貴様の所為で…私ハ…貴様さえ…居ナケレバ…」
「【白闘気一角】は何度でも蘇るモンスター…でも、蘇るんだとしてもダメージは受ける！バトルだ！【堕天使アムドゥシアス】で【フィッシュボーグ―ランチャー】を！【堕天使ゼラート】で【氷結界の龍グングニール】を！【堕天使ルシフェル】で【超古深海王シーラカンス】をそれぞれ攻撃！」

―!!!

「グッ…」

砺波　ＬＰ：４０００→３７００→３５００

「まだだ！【堕天使テスカトリポカ】で、【白闘気一角】に攻撃！革命の業火、バニッシュ・グリード！」

――！

砺波　ＬＰ：３５００→３２００

堕天使達の猛攻によって、次々と一層されていく砺波のモンスター達。

僅かながらのダメージであっても、遥かな先に位置する元【王者】にダメージを与えたというコト自体が遊良にとっては奇跡に近いのか。

…例えそれが、砺波の様子の『異常さ』からくる奇跡なのだとしても、この状況にまで到った結果もまたこのデュエルの軌跡。

そして墓地に水属性がある限り何度でも蘇るはずの白き者も、『何故か』砺波の場には蘇っては来ず…ただ虚ろな目をしたまま、砺波は呆然と立ち尽くしていた。

「【白闘気一角】の効果を使わない!?さっきからどうしたって言うんだ…【白鯨】も召喚してこないし、今だって…」

「グッ…こ、ここは…？私は…い、一体何をして…」

「ッ!?砺波理事長！意識が戻って…」

「…あ、天城？…グッ、天城ィ…ワ、私ハ認メヌゾォ！釈迦堂ト同ジ、Ｅｘヲ使ワヌ決闘ナドォ！…釈迦堂、ソウダ、釈迦堂！私ハ絶対ニ許サヌ！『貴様』ヲ！釈迦堂ォォオ！」

「と、砺波理事長！」

実際に起こったダメージからだろうか、一瞬だけその意識が戻ったかに見えたものの、再び『闇』の悪意によって砺波が『変貌』し、その口調が益々荒々しさを増していく砺波。

その叫ぶ言葉から、一瞬だけ遊良の姿を確認したというのに…

ランへの有り余る程の恨みからか、遊良の姿をランと混同させてい

るかのようではないか。
…今の彼は、理事長となっている『現在』の砺波その物。
ランに負け、自暴自棄になり、ランへの恨みを曲解して、Ｅｘデッキを『使わない』ことへの怒りが彼を飲み込んでいるようであって。
「くそっ、早く決着を着けないと！【堕天使イシュタム】でダイレクトアタック！」

そうして遊良の命令を受けた魅惑の堕天使が、天へと向かって羽ばたいた。
このダメージで一瞬意識を取り戻したのならば、更に大きいダメージを与えれば再び意識が戻るのではないだろうか。そう確信した遊良の意思を受け、魅惑の堕天使が天から砺波へと狙いを定め始めて。

―狙うは、彼を包む『闇』。

天誅の力を光に変えて、黒き翼に闇の刃を纏わせる【堕天使イシュタム】。
そのまま、荒ぶる砺波目掛けて…
「魅惑の麗刃、バニッシュ・ラストォォオ！」

今まさに、『闇』を断ち切らんとして羽ばたいた…

―その時だった。

「私を舐めるな釈迦堂ぉ！罠発動、【波紋のバリア―ウェーブ・フォース―】！」
「なっ!?し、しまっ…」

―時すでに遅し。

遊良が後悔の言葉を発する間もなく、魅惑の堕天使が放った麗刃が砺波を守るようにして広がった波紋によって防がれ…

振動が水を伝わるように、人の目にも留まらぬ速さで遊良の場の臨戦態勢の堕天使達の全てを飲み込んでいく。

…早計だった。

まだ自分のＬＰには余裕があり、墓地には伏せカードも破壊できる【背徳の堕天使】があったというのに…砺波へのダメージを優先するあまり、ソレを怠って攻撃を仕掛けてしまうだなんて。

―今、遊良の心にはその後悔が渦巻いて止まらない。

会心の一撃を狙った故の、大きすぎる痛恨のミス。

微塵も油断を許されない相手に対して、こうもあっさりと大きすぎるミスを犯してしまうだなんて、と。

「デッキへ戻れ！釈迦堂のモンスター共よ！」

「くっそぉぉぉお！デッキへ戻る前に【堕天使イシュタム】の効果発動ぉ！ＬＰを１０００払い、さっき墓地へ送られた【堕天使の追放】の効果を得る！【堕天使アスモディウス】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキへ戻す！」

遊良　ＬＰ：３５００→２５００

波紋の広がりが【堕天使】達を飲み込む寸前で、先ほど堕天の王が与えた遊良への恩恵を、どうにかギリギリの所で発揮した遊良ではあったものの…

たった一枚の罠によって、遊良の場に溢れていた麗しき漆黒の翼が一翼の羽ばたきも残さずに消えてしまったではないか。
一刻の猶予も無いこの状況で、いくら気持ちが逸ったからとはいえ、こんなことは、決して犯してはいけないミスに違いなく。
しかし、そんな遊良を意に介さず…いや、決して遊良に向けているモノでは無い、別方向への怒りを露にしながら、砺波はその口を開いた。

「許さん…決して…釈迦堂、お前だけは！」
「砺波理事長、しっかりしてください！俺はランさんじゃない！そ、それにどうしてあなたがこんなデュエルを!?王者だった…【白鯨】だったあなたが！」
「黙れ！わ、私を…私を【白鯨】と呼ぶなぁ！あの日から…『貴様に敗れた』あの日から！私は、私の名は！私を【王者】と認めてはくれん！」
「…え？」

そんな堕天使達が消えていく中で、突然に放たれた砺波のその言葉が、対峙する遊良へと突き刺さって。
苛立ちと怒り、その全ての憤怒の感情を『ラン』へと…正確には、今対峙している遊良へと向けて、それを解き放つ砺波。

—それは、遊良からすれば到底信じられたモノではなく。

【王者】の『名』その物となった、世界にたった一枚の特別なモンスターが…まさか、それを駆った【王者】が扱えないだなんて、そんな馬鹿な話があるのだろうか、と。

「敗れた日からって…それってまさかランさんとの!?じゃあ、【白竜】との一戦で【白鯨】を召喚しなかったのって…」

それと同時に、遊良は思い出す。
絶望に包まれていた『あの頃』には気がつかなかったが、数年経ってから師の元で【白鯨】のデュエル映像を見ていて気がついた、その違和感を。
当時、天才を謳われていたもののまだまだ若く、果敢ではあるものの我武者羅な挑戦者であった新堂　琥珀との、あの運命を分けた一戦で…

―ただの一度も【白鯨】を召喚しなかった砺波　浜臣の、その違和感。

不調と言われて落ち目にかかっていた【白鯨】であっても、その歴戦の勘から琥珀にリードを許すことなくデュエルは終始砺波が押していたというのに…
最後の最後、【白鯨】を出せれば勝利という場面で『何故か』そのまま【白鯨】を召喚せず…
最後はその隙を琥珀が、新たに創造した『名』となったモンスターで制し…伝説の中に居た王者【白鯨】が、新たに【白竜】と呼ばれるようになった挑戦者に敗北を喫した、引退に追い込まれたあのデュエル。
それがまさかメディアの言う『不調』でも何でもなく、砺波自身が『名』を召喚出来なくなっていたことによるだなんて。
「貴様が奪った『あの時』から…あの夜から私の『誇り』は傷つけられたのだ！…だからこそ許さん…ゼッタイニ許サン！貴様ダケハッ！」

―！

憤怒と遺恨に飲み込まれ、雰囲気が再び変わった砺波。
漏れだす『闇』の純度も深くなり、一層この場の恐怖と圧が増していく。

「ぐっ…や、【闇の誘惑】を発動！２枚ドローし、【堕天使アスモディウス】を除外する…【堕天使の戒壇】を発動、【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚し、ルシフェルの効果で墓地へ送られた【堕天使ユコバック】も守備表示で特殊召喚…デッキから【堕天使ゼラート】を墓地へ。カードを２枚伏せて…タ、ターンエンド…」

遊良　ＬＰ：２０００→２５００
手札：２→１枚
場：【堕天使ユコバック】
【堕天使スペルビア】
魔法・罠：伏せ２枚、【デモンズ・チェーン（効果なし）】

「私のターン、ドロー！【貪欲な壷】発動！【たつのこ】、【瑚之龍】、【氷結界の龍グングニール】、【サイレント・アングラー】、【深海のディーヴァ】をデッキへ戻して２枚ドロー！【強欲で貪欲な壷】を発動し、デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！【グレイドル・スライムＪｒ．】を通常召喚！その効果で墓地から【グレイドル・アリゲーター】を、手札から【グレイドル・コブラ】を特殊召喚！」

―!!!

【グレイドル・スライムＪｒ．】レベル２
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／２０００
【グレイドル・アリゲーター】レベル３
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／１５００
【グレイドル・コブラ】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

遊良がターンを終えてすぐに、砺波が連続的にモンスターを召喚して。

寄生する異星の者に飲み込まれた原生の生物達。このモンスター達も、プロ時代の砺波が扱ったことのある水属性モンスター達に違いなく…

「グ、【グレイドル】…それも昔の映像で見た。一体、どれだけのカードを操れるんだ…」

「釈迦堂…奪われる苦しみを…貴様もその身に味わえ！永続魔法、【グレイドル・インパクト】発動！【グレイドル・アリゲーター】と伏せカード1枚を破壊する！」

「なっ!?」

―！

悪魔の鎖を道連れに、爆散していく寄生生物の一体。

気まぐれな海流と錯覚するほどに、突然『変貌』する戦術にはいくら砺波のデュエルを研究したことのある遊良であったとしても、とてもじゃないが対応出来るモノではないだろう。

手が追いつかず、頭がついていかず。

普通ならば『水属性』であっても、ここまで多種多様なカテゴリーのカード達をここまで自在に操ることなど出来ないはずだというのに。それをいとも簡単に操っている砺波の力は、およそ他の誰も並ぶことの出来ぬ地平に位置していることは間違いない。

「ククク…【グレイドル・アリゲーター】が魔法効果で破壊されたとき、貴様のモンスター1体のコントロールを奪う！」

「え、コントロールって…ま、まさか!?」

砺波のその言葉と同時に、爆散した異星生物の残骸が遊良の場にいる小さき堕天使の周囲から這い上がってきて。

身動きを奪われ、意識を奪われ…

遊良の声は、堕天使にはもう届かず。そうして連れて行かれるよう

にして、小さき堕天使が砺波の場へと移動してしまうではないか。
「貴様の【堕天使ココバック】を私の元へ！行くぞ！レベル３の【堕天使ココバック】と【グレイドル・コブラ】に、レベル２の【グレイドル・スライムＪｒ．】をチューニング！」
「し、しまっ…」

そうして響く、無慈悲なる宣言。

奪われる…モンスターが、変わる…

―そう、Ｅｘモンスターへと、【堕天使】が。

「シンクロ召喚！レベル８、【グレイドル・ドラゴン】！」

―！

【グレイドル・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２０００

無慈悲な砺波の宣言が、寄生せし生物達を混ぜ合わせた竜へと『変貌』して。
不気味な咆哮と異様な姿は、見る者全てに畏怖を与えることだろう。
…しかし、それだけではない。

―！

「ぐっ…あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

足から支える力が抜け、体ごと倒れそうになる遊良の叫び。

―これは、『罪』

Ｅｘモンスターに関わったという、堕天使達が与える、遊良の『罪』。
たとえ自分が召喚したＥｘモンスターでなくとも、【堕天使】がＥｘモンスターに変わってしまうという、決して許されることの無い自分の『罪』に貫かれながら…
血を吐き、その身を持って代償を払わされているのだ。
まるで自らが決意し、そうして捨ててまで得た『力』とは何なのかを教えているかのように。

「ガハッ…ち、血が…」
「貴様には、何も残してはやらん！【グレイドル・ドラゴン】の効果発動！釈迦堂、貴様の【堕天使スペルビア】を…最後の伏せカードもろとも破壊してやる！」
「ッ!?…え、永続罠、【奇跡の降臨】発動っ…除外されている、【堕天使アスモディウス】を特殊召喚…」

そんな痛みに貫かれながらも、遊良は声を振り絞って最後の手を発動して。
先ほど除外されていた高位の堕天使、その高い力ゆえにデッキ・墓地からの特殊召喚を禁じられているからこそ、除外からの帰還という手によって主の前に現れ出でるのか。
しかし、グレイドル・ドラゴンの咆哮が高位の堕天使を呼び出した奇跡を、異形の堕天使ごと飲み込んで引き裂いていき…堕天使達はその姿を保っていられず、破壊されてしまう。

「破壊された時、ア、アスモトークンとディウストークンを…ぐふっ…守備表示で…と、特殊召喚…」

【アスモトークン】レベル５
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１３００
（効果で破壊されない）

【ディウストークン】レベル３
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００
（戦闘で破壊されない）

それでもただでは転ばない遊良ではあるものの…
ダメージを何とか受けないようにしているというのに、自らの『罪』ですでに遊良は満身創痍。
他のどんなダメージよりも、自らの『罪』は重いのだと、そう言わんばかりの痛みに貫かれながら。
…このままではデュエルによる敗北の前に、自らの痛みで気を失ってしまう危険があるだろう。
そんな遊良の姿が、砺波には『ランを追い詰めている』と見えているのだろうか。憤怒に染まった口調のまま、砺波は荒々しげに叫ぶのみ。

「バトルだ、【グレイドル・ドラゴン】で、【アスモトークン】を攻撃！」

―！

だからこそ、寄生の竜が堕天使の眷属を撃ち抜くことに、なんの感傷も砺波は抱かず。

「ターンエンドだ。」

砺波　ＬＰ：３２００
手札：１→０
場：【グレイドル・ドラゴン】
魔法罠：【グレイドル・インパクト】

ランに見える遊良の姿に悦を得ながら、砺波は今悠々とそのターンを終え…

「…いい様だな、釈迦堂。貴様に復讐することだけを考えて今まで過ごしてきたが…その願いが、ついに成就しそうだ。」
「お…俺は…ランさんじゃ…ない…」
「何を寝ぼけたことを。…貴様がこの場所で！私にした事は決して忘れん！『Ｅｘを使わない』という、この私を舐めた貴様を！大体、この状況で何故Ｅｘを使わない！まだ私を馬鹿にする気か！」

そんなターンを終えた砺波の心に浮かんでいるのは、１０年前にこの古びたスタジアムでランに敗北を喫した残映と…
彼女への復讐心が歪曲した、大いに間違った偽りの大義。

…決して許すことの出来ぬ、プライドを圧し折られた鯨の悲痛なる咆哮。

それを、己の生徒にぶつけているのだ。それにも気付くことが出来ていない今の砺波の姿はきっと、他の誰にも誇れるような姿をしていないことだけは確かではあるのだが…

「…ッ…っ、『使わない』んじゃ、ない！…っ、使いたくったって、どう頑張ったって！俺には『Ｅｘ適正』が無いんだ！」

「…は？」

それでも…

声を振り絞り、気力を絞り出し。必死になって我武者羅に、遊良は子供のように叫ぶ。

…そう。いくら今の砺波が他人に誇れるような姿をしていなくとも、遊良にとってはそんなことは関係ないのだ。

その言葉を聞いた砺波が、虚ろな目のまま怪訝な顔に表情を顰めるも…『罪』による痛みと、今の砺波の状態になりふり構っていられない遊良は、その言葉を止めることが出来ず。

砺波と同じ、感情のままに漏れ出す言葉を。まるで子供の我儘のように、己の口から発するだけ。

「お、俺だって！…あ、あなたみたいに、シンクロ召喚が使いたかった！なのに、グフッ…そ、それがどうやっても…で、出来ないんだよ！」

「な、き、貴様…何を言って…わ、私を馬鹿にしているのか！…一体、どの口がそんなコトを…あれほど私を称えていた癖に、引退後には掌を返して私を扱き下ろした『奴ら』のように！」

しかし…それを聞いた砺波の怒りは、ラン以外にも向けられていて。

挑んでくる若者を派手に降し、圧倒的な力の差を見せ付ける。支えてくれるファンには手厚く接する。そうすることで自分の存在が世界に認められることが、年甲斐もなく、他の何よりも嬉しかったから。

だからこその、敗北の後。

それでもここまでのし上がったのは、紛れも無い彼自身の功績だというのに…周囲の人間達からすれば、転落した【王者】をまるで笑いものの様にして扱ったことが、どうしても彼には許せなかった。

…虚栄心の塊と、強すぎる承認欲求ゆえの崩壊。

ソレがあったことも、ランへの復讐心…ひいては遊良を巻き込んだ、『Ｅｘを使わないデュエル』の否定に磨きがかかったと言っても過言ではなく…

「それをＥｘが『使えない』など、まるで天城のような言葉を…そうだ、天城だ…奴を見てると、釈迦堂のデュエルを思い出す…だから奴が目障りでならん！」

「…ッ！」

「何故奴はイースト校に来たのだ、何故奴が躍進を続けるのだ！『Ｅｘデッキを使わない』デュエルで、勝ち続けている姿がどうしても我慢ならんのだ！釈迦堂に敗れた私を、嘲笑いに来たとしか思えんのだ！」

強靭な精神力によって押さえ込んでいたその怒りも、今では『闇』によって表に出されてしまっている。いや、砺波の『負』の感情を喰らった『闇』が、表に出てきて感情を露にしているのか。

―学園でも、悪い意味で有名な天城　遊良。

別に、身の程をわきまえ大人しくしていれば見逃してやるつもりだったあの生徒の躍進が、どうしても砺波には苛立ちへと変わってしまっていて。

心無い、頭ごなしの否定の言葉を、自らの生徒にぶつける砺波。

そんな言葉の鈍器を直接ぶつけられた遊良の心は如何なるモノなのだろう。

「それ…でも…」

そうだと、言うのに。

「そ…それでも！」
「…何だ？」

無理やりに立ち上がった遊良が倒れそうになる体に鞭を打ち、震える足で地面を掴む。
自らの『罪』に貫かれて、血を吐き昏睡しそうだというのに…ずっと認められず、彼の学園から不必要なモノだと言われて切り捨てられそうになっていたのに。
それでも遊良の中に浮かんでいるこの感情は、決してこの場から逃げ出すことを拒んだ時と同じ意思を、確かに彼に思い出させているのだろうか。
遊良は、叫ぶ。憤怒の中にいる砺波目掛けて、己の感情も…ぶつけるために。

「…た、退学させられそうになっても…潰されそうになっても……あ、あなたに認めてもらえなくたって！…あなたが…お、俺の憧れた…【白鯨】であることに変わりはないんだ！」
「なっ!?」

心を晒し、感情を露に。
幼き日、父に連れられて観た初めてのプロの試合。歴戦を巡りし【白鯨】の、威風堂々と戦う彼の姿に…その凛とした佇まいに、幼き遊良が憧れたのは嘘じゃない。
―『とーさんがエクシーズでー、かーさんが融合だからー、俺はシンクロだったら丁度いいなー。』

いつかの幼き日、ルキと鷹矢だけに吐露した自らの希望の言葉…
親の扱うＥｘ適正のどれとも違う、他のどのＥｘ適正よりも『シンクロ』に憧れたのは紛れもない、彼の存在が大きいのだから。

「ゴホッ…ぅ…」

吐血する遊良の体はすでに限界で、吐き出した血の量はすでに立っていることすらままならないであろう程だと言うのに…
それでも彼の中にある、彼にしか抱くことを許されぬ感情…自分自身を、『イースト校から退学させたくない』と、必死になって戦い抜いた【決闘祭】の、その真意。

…誰にも言ったことのない、誰にも言うつもりもなかった遊良の心。

他の『どこ』でもない。『烈火』の元でも『紫魔家』の中でも、そして『猛者』が集まるウエスト校でもない。

―自らが憧れた、【白鯨】の治めるイースト校に、何が何でも居たかったのだ。

それがどんなに下らないと揶揄されても、それがどんなに軽いと呆れられても…
これは、この感情だけは…遊良にしか抱くことは許されない、彼だけのモノ。

「…だから…俺は…ッ！…ゴホッ…」
「なっ…貴様は…釈迦堂では…ない？貴様は一体…」

未だ『闇』の中に捕らえられているにも関わらず、己が今体験して

いるこの『異常』な言葉と空間に、砺波は疑問を抱き始めた様子を見せて。
そう、聞こえる言葉と見える景色、その双方が相違して、思いがけない混乱として彼に襲い掛かっているのだ。
…何が何なのか、何が起こっているのか。それが、今の砺波には分からない。
そんな虚ろな意識、定まらぬ視界の中で…自分が今何をやっているのかも、靄の中に押し込めれられそうな意識のまま砺波が呆然と立ち尽くしかけた…

—その時だった。

「チッ、見ちゃいらんねーぜ。」
「…え？」

突然、『居るはずのない』人物の声が聞こえてきて、思わず自分の耳の機能を疑ってしまった遊良。
震えるスタジアム、放出する『闇』、ソレらが織り成すこの地鳴りの中であっても。確かに聞こえるこの声は、間違うことの無い存在のモノに違いなく。
—だって、この人は遥か遠くに行ったはずだ。こんなにすぐに、戻ってこられるわけがない。
そう、思っていたから。そんな痛みが治まることがない遊良が、どうにかその首を後ろにやってその人物の姿を見て…

「先…生？」
「た、たかみね…？な、何故ここに…」
「あん？何だってんだよ馬鹿どもが。」

―天宮寺　鷹峰

眉を潜め、眉間に皺を寄せ、普段の口調とはまた違う、苛立ちを織り交ぜたような雰囲気を醸しだしながら彼は現れて。
遊良の師、そして砺波とかつて肩を並べていた彼もまた【王者】の一人。
しかし、仕事と称して迎えと共にこの決闘市を離れたはずのこの男が…一体何故、この場に現れ、そして何故口を挟んできたというのだろうか。
そんな意味のわからないといった表情をしている遊良を他所に、鷹峰はその口を開く。

「…ったく、無様だなぁ砺波ぃ、んな『闇』に憑かれるなんてよぉ。」
「…突然現れて、一体何を言っているのだ貴様は…」
「ケッ、自尊心の塊みてぇなテメェがこうなるってのはわかっちゃいたが…こんなガキ相手に欲求をぶつけるなんざ、随分落ちぶれたもんだぜ。もう少しマシな奴だと思ってたってのによ。」
「だ、黙れ！貴様に何が分かると言うのだ！釈迦堂に敗れた癖に、一人だけ王座に残っている貴様に！」
「んなもんテメェが勝手に潰れたからだろーが！ガキに負けた腹いせを、違うガキにぶつけるなんざみっともなくてありゃしねぇ！」
「なっ!?」

今の砺波を見る鷹峰の目は、以前イースト校で邂逅したときのような『同等』の者を見る目ではなく…

どこかつまらなさそうにして、かつての好敵手を残念に思っているかのよう。
…まぁ、それもそうだろう。ウエスト校理事である李　木蓮の犯しかけた罪、『自らの生徒を襲いかけた』という大罪を、今では砺波が遂行してしまっているのだ。
いくら彼がランへの復讐心を持っているとは言え…それでも、ギリギリの所で遊良への『譲歩』を出来るくらいには『まとも』だと、そう感じていたと言うのに。

「わ、私が…み、みっともない…だと…グッ、ワ、私ハ…ミ、認メヌ…認メヌゾォ！『貴様ラ』ヲォォォォォオ！『全テ』ヲォォォオ、決シテェ！」
「チッ、この程度じゃ逆効果か。まだ『闇』に捕まってやがる。」
「…せ、先生…どうして…」
「んなこたぁテメェには関係ねぇだろうが！…んなことより、何ちんたらやってやがんだ。呻いてねぇで、とっととケリつけやがれこの馬鹿弟子が。」
「グッ…は、はい…」

鷹峰の言葉を持ってしても、未だ砺波は『闇』に囚われたまま。ここまで感情を露にする、『闇』が造りしもう一人の砺波が吼えて。
そんな中でも意識を手放しそうだった遊良にとっては、師の姿と声だけで少しは体に力が戻った様子。厳しい言葉の中にある、確かな鼓舞を感じられないほど今の遊良の意識は混濁してはおらず。

「グヌ…ワ、私ハ認メヌ…」
「…ドロー！…カハッ!?…ッ、だ、【堕天使の追放】を発動！【堕天使ディザイア】を手札に加えて…ぐっ、ディ、【ディウストークン】をリリースッ！レベル１０、【堕天使ディザイア】をア、アドバンス召喚！」
【堕天使ディザイア】レベル１０

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２８００

『罪』の中とは言え、戦う意思を捨てていない主の元に、確かに堕天使は現れるのか。
武器を持ち、漆黒を纏いし、断罪を執行せし鎧の堕天使。
寄生の竜に囚われた、小さき堕天使の魂を解放すべく…その力を、天へと掲げて。

「ディザイアの…効果発動！こ、攻撃力を１０００下げ…【グレイドル・ドラゴン】を…墓地へ送る！」

―！

破滅を誘う天誅の『黒』が、遊良の宣言と共に【グレイドル・ドラゴン】の足元から這い出て、その身を掴んで引きずり込む。
そう、破壊された時に残骸を残す寄生生物たちも、天誅の力によって破壊を介されずに『墓地へ送る』というコトをされてしまえば、その意思を星に残すことは出来ないのだ。
足元から捕らえる、『闇』よりもなお暗い場所へとソレは『堕』とされて…小さき堕天使の魂と、そして主の『罪』を清算した鎧の堕天使は優雅に天に佇むのみ。

「くはっ…はぁー…はぁー…よ、よし…【アドバンスドロー】を発動し、ディザイアをリリースして２枚ドロー！　」

そうしてようやく己の『罪』の痛みから解放されて、その呼吸を整えられた遊良。
これで、やっとまとも動くことが出来る。残った手札の最後の一枚を使い、『闇』に抗う砺波へと進撃を始めるために…遊良は、動く。

「【堕天使アムドゥシアス】の効果発動、手札の【堕天使イシュタム】と

共に捨てて、墓地から【堕天使の戒壇】を手札に加える！そのまま【堕天使の戒壇】を発動！墓地から【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚し、その効果で【堕天使イシュタム】も呼び戻す！羽ばたけ、２体の堕天使よ！」

―!!

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

「バトル！【堕天使イシュタム】でダイレクトアタック！」

―！

「グォォォオオッ!?」

先ほど砺波に止められたからか、魅惑の堕天使の一撃が一層激しさを増していたものの…今の砺波には、この大きい衝撃が必要なのだ。体内に直接ダメージを与え、内に潜みし『闇』を無理やりにでも追い出すために。

しかし『闇』が体内に潜むとはいえども、そのダメージ自体は本人の体に行くことには変わりなく。

体に起こるダメージで、抗っている精神自体がやられてしまえば砺波はそこまで。『闇』に喰われ、『悪意』を撒き散らす化物となるだけだろう。

…コレは、賭けだ。

誰もが飲まれる『闇』であっても、ここまで『抗えている』のは彼が彼だからこそ。デッキが突拍子の無いモノではなく、彼の軌跡を再現したモノに『変貌』したことがその証拠。

―まだ、抗っている。

深淵の『闇』の中で、意識を喰われて『悪意』となった『もう一人の自分』を内から見つつも…囚われて出てくることが出来ず、『闇』が感情を露にして勝手に暴れているのだ。

砺波　ＬＰ：３２００→７００

「ウ…ゴォ…ァ…」
「理事長！しっかりしてください！」
「ワ…私ハ…認メヌ…ケ、決シテ…」
「理事長！」
「ア…ガガ…ガァ…」

…それでも、足りない。

確かにダイレクトアタックで、砺波と『闇』の双方にダメージを与えたまでは良かったのだが…

ここまで完全に飲み込まれないように抗ってきた、砺波の強靭すぎる精神力自体も賞賛に値するほどの代物ではあるものの、【決闘祭】の決勝が終わったあの日からずっと飲み込まれないように抗い続けてきた砺波の精神も、既に限界が近いのだろうか。

これ以上は危険だということを、砺波の様子から遊良は察して。

「くっそ…ターン、エンド…」

遊良　ＬＰ：２５００

手札：2→0
場：【堕天使イシュタム】
【堕天使スペルビア】
伏せ：無し

「ワ…タシノ…ターン…ドロォ…」

虚ろな目をしていた砺波の視線が、更に深淵に沈んでいき…

宙をさまよい始めて、本格的に彼が『闇』に喰われて行ったことを証明しているかのよう。

もう少し早く対峙していれば、もしかすればまだ解放のチャンスは残っていたのかもしれない。

そんな後悔など、したところで既に後の祭り。まぁ、その時に砺波と対峙していれば、こんなに遊良が抵抗出来ていたかも怪しくはあるが。

―これは、結果論。

この場、この時、この瞬間に、ようやく辿りついた『ここ』で砺波と対峙したということが、全ての結果。

精神が喰われ、意識が乗っ取られ…かつての、『海』よりも深い余裕を持っていた砺波　浜臣という決闘者が、『夜』よりも深い『闇』に飲まれて行く。

そうして砺波が『闇』に負け、『闇』が造りしもう一人の砺波に挿し変わって行くのも…そうやって彼が飲み込まれていくのも…

…全て、『結果』なのだ。

…

「つざけてんじゃねえぞゴラァ！」

―！

「ッ!?せ、先生!?」

しかし、そんなもう駄目かと思われた、その時。
突如、遊良の後ろで見ていた鷹峰が、激しい荒ぶりとともに雄叫びを上げて周囲に圧をまき散らかし始めた。

―それは、まるで小さい子供の癇癪のよう。

普段から気性が荒いことで知られる【黒翼】ではあるが、ここまでの本気の『圧力』を出すことは、普段ならば絶対にありえないこと。
そのあまりの急激なる雰囲気の重さは、弟子である遊良でさえすくみ上がりそうになるほど。
それでも、そんな弟子の状態など意に介さず。鷹峰は感情のままに、その口から『言葉』を轟かせるのみ。

「テメェゴラ砺波ぃ！何あっさり飲まれてんだ！んな『闇』程度に飲まれるような奴だったのかテメェは！俺の知ってるテメェは！見栄っ張りで喧嘩っ早くて、どの誰よりも負けず嫌いな奴だろうが！」

言葉を荒げ、叫びをぶつけて。

他のどんな人間よりも砺波という人間を、『決闘』の中で見てきた鷹峰だからこそ、今の砺波の姿がどうしても我慢ならないのだと、そう言わんばかりに鷹峰はその圧力を更に凄まじくしていく。
己の内に浮かぶ砺波への、あらん限りの不満を叫びに乗せて…

「それを上り詰めたからってお堅くとまりやがって！何が【王者】の品格だ！自分こそみっともねぇくれぇ見栄っ張りな癖してんのによぉ！その癖、世界一になるまで張り続けたテメェの見栄は！その程度だってのかぁ！」

かつて自分と肩を並べ、同じ景色を共に見て…相容れない性格とスタイルで、決して仲睦まじい間柄ではなかったものの…
決して…それこそ、己の家族にすら見せなかった砺波の『本質』を、より深く理解しているのは紛れもない鷹峰なのか。
普段穏やかな体裁を取ってはいるが、砺波の気性が本当は荒いのも…砺波の性格が見栄っ張りだけれども、その見栄を張り続けて【王者】にまで上り詰めた、その誰よりも負けず嫌いな本質も…
全て、戦いの中で見て感じてきた鷹峰だからこそ知りえているモノ。

「おい砺波ぃ、テメーにとってデュエルはランへの復讐の道具か!?家族を養うために我慢する仕事か!?操られたから仕方なく戦ることか!?…違げーだろ！昔のテメーは、ただ戦いが好きな馬鹿だっただろうが！俺と…『俺達』と戦う事が楽しかったんだろーが！忘れたとは言わせねぇんだよ！」

だからこそ、鷹峰には許せない。
姿形は違えども、自分と同種・同類・同等だったこの男が…
歴戦を戦いぬき、多くの才能ある決闘者達を降して散らせてきた自分と、『同格』の位置で戦い合えたこの【白鯨】が…

―同じ景色を見てきて、同じ場所に来られると思っていたこの砺波浜臣が、こんな『闇』に負けるような奴だなんて。

鷹峰には…絶対に、許せない。

―ゆえに、叫ぶ。

「俺の『ダチ』なら！この程度ぐれぇとっとと吹っ飛ばさねぇかぁ！」

―！

それは、決して出てこないような言葉。

これは、決して聞くことがなかった言葉。

まさか孤高を貫く天宮寺　鷹峰の口から、他人を『対等』と認める『その言葉』が飛び出して来るだなんて。

「ワ…私…ガ…貴様ノ…ダ『ダチ』…ダト…」

だからこそ『闇』に喰われかけている砺波にも、そのあまりにも衝撃的な言葉が確かに届いたのだろうか。

鷹峰の言葉は、砺波の残る潜在意識に訴えかけ、飲まれかけた自意識を引っ張り出そうとしているようにも聞こえ…

いや、豪放磊落の鷹峰からして、ただ単純に砺波が『闇』に敗北を喫することが許容できなかっただけだろう。

それでも、深淵の『闇』に沈みかけていた砺波が、自分の言葉を発せられるだけの衝撃はあった様子。

…それもそうだろう。

他に誰も聞いていないとは言え、世界中の誰もが想像も想定もしていなかった言葉が天宮寺　鷹峰の口から飛び出してきたのだから。
その衝撃は、この場に居た者しか理解できるはずがない。

「ググッ…ド、ドコマデモ…私ヲ…馬鹿ニ…シテ…」

それを聞いた砺波の意思は、果たして『闇』か『彼』なのか…はたまた、その両方か。
震える砺波の体からは、今凄まじい速さで雰囲気が入れ替わっては消えていき、今の彼が発する言葉に『悪意』があるのかどうかなど、到底誰にも感じることなど出来ない状況となっていて。
そんな中でも決して怯まず。鷹峰はその口から発せられる言葉を止めることなくぶつける。

「あぁそうだ、今のテメェはただの馬鹿だ！ガキをボコして、復讐に取り乱して、そんでランへの怒りを勘違いしてやがるだけだ！テメェを慕うガキをボコすのが、テメェの正義なのかぁ？随分惨めになっちまったなぁ！あぁん!?」
「グッ、ミ…惨メ…ダ…ト…？」

―その言葉が、何よりも嫌いだった。

―他人より優れていたい。最初はただその一心で戦っていて…

―高みに上って、ようやく他の誰よりも優れていると自信が持てた。

―そんな『惨めさ』とは無縁を極めたと思っていた矢先に、自分の

器を思い知らされるような屈辱を味わい…

―それでも、どうにか『惨めさ』を押さえて後進を育てるという、人を導く立場を自分で選んだというのに…

―それが今はどうだ。こんなに感情をさらけ出し、自分を保つためだけ…ただそれだけのために、こんな子供を傷つけているのだから。

―今の自分が…どうにも『惨め』でたまらない。

―こんな思いをさせているのは誰だ…

―こんな目に合わせているのは誰だ…

―絶対に許さない…

―自分を『惨め』にさせる者は、決して…

「絶対ニ…許サァァァァァァン！」

―！

砺波が叫んだ雄叫びと共に、彼が纏う『闇』が先ほどとは比べモノにならない程に、その勢いを増して大きくなっていく。

―肩を震わせ、目を血走らせ、怒りに身を任せて声を荒げて。

心に巣食った深淵の『闇』が、絶対に砺波には容認できない感情を捕らえ…その憤怒を嬉々として、自らを増幅させているようにも見えるではないか。

「ッ!?と、砺波理事長の『闇』が、あんなに大きく!?」

「チィ、砺波ィ!この馬鹿野郎がぁ!」

もう、砺波を救うことはできないのだろうか…

その思いが遊良を貫き、それと同時に砺波が高らかに吼え…

「【ダブルフィン・シャーク】を召喚!【竜宮の白タウナギ】を墓地から蘇生!」

―!!

【ダブルフィン・シャーク】レベル４
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１２００

【竜宮の白タウナギ】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１２００

しかし、そんな遊良の思いとは裏腹に、砺波の宣言は紛れも無い形となってからの場に現れた。

虚ろな目でない、濁った声でもない、厳しさと鋭さを纏った凛とし

た声で。
そう、『闇』などではない、今の砺波は紛れも無い彼自身。
『闇』が造りしもう一人の砺波ではない。膨らんだ『闇』は、増幅したモノではなく…彼のうちから追い出されたモノに違いなく。

「許しは…しない…私を馬鹿にする者は…誰であっても許しはしない！それが例え、『私自身』であってもだ！レベル４の【ダブルフィン・シャーク】に、レベル４【竜宮の白タウナギ】をチューニング！」
「…え!?」

そうして、その砺波の宣言と共に、天へとその身を捧げる『海』の者達。
水属性以外を特殊召喚出来なくなる制約を受けてもなお、この召喚条件でシンクロ召喚出来るモンスターは遊良の知る限りでは世界にたった『一体』しか存在せず。

しかし、それは今の砺波では召喚など出来ないはずのモンスターのはず。

何しろ先ほども『闇』に命じられるままに呼び出そうとして、そうして『そのモンスター』に拒まれていたと言うのに…

「いつまでも…拗ねているんじゃない！悠久を生きる白き潮、大いなる海原から輪廻を巡れぇ！シンクロ召喚！」

軋むスタジアム、震える室内、唸る『闇の塔』の前であっても、ソレは高らかに吼えるのみ。
―かつてこの場で心を折られた、『自分自身』がどうしても許せずに姿を消した。

その『自ら』が、再度自分を取り戻して吼えているのだ。それに応えぬというコトは、【王】たる自身すら否定するということ。

―澄んだ咆哮を響かせて…

―巡りし歴戦は彼の者と共に…

…それは、現れる。

「出でよ、【白闘気白鯨】！」

―！

【白闘気白鯨】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

「は…【白鯨】…子供の頃に見た時と同じ…本物の…す、凄い！」

かつての輝きと同じ、『闇』が蔓延るスタジアムの中においても、一片の穢れもなき純白の海王。

遊良が憧れ、誰もが憧れ、世界の頂点に立っていた本物の【王者】の姿が、今ここに蘇ったのだ。長らくその姿を隠していたとは言え、その咆哮は他の追随を許さぬほどの透き通りを響かせていて…

「カカッ…この馬鹿野郎が、やりゃあ出来んじゃねーか。弱ぇ自分が許せねぇんだったら、今の自分よりも強くなりゃいいだけだろ…この程度のことぐれー自分で気付きやがれってんだよ、ったく…どいつもこいつも。」

そして、静かに呟かれた鷹峰のそれは、以前傷心の中に居た弟子にかけた言葉と同じモノ。

そう、かつて自身と肩を並べて、『歴戦』を共に戦い抜いて同じ高みに座していた男へと、その言葉を投げかけたのだ、

…砺波が許せなかったのは、あの時ランに折られた『自分自身』

それが１０年と言う長い時間の中で曲解し、自分を保つために自らへの怒りを周囲に転嫁してしまっていたことはまぎれもない事実。

しかし、囚われていた『闇』の中から見てしまった、感情を露にして取り乱す『もう一人の自分』…

そのあまりの『惨めさ』が、どうしても『本来』の砺波には許せなかった…

だから、こそ…

「【白闘気白鯨】の効果発動！シンクロ召喚成功時、『敵』の全てを…洗い流す！…この意味が、分かっているでしょう！『天城君』！」

「…ッ！あ、は、はい！」

もう、『闇』に喰われてはいない。【白鯨】を召喚した今の砺波は、まさしく王者【白鯨】そのモノ。

自分自身をその内側から、客観的に見つめなおしたことによる己の回帰。

『海』よりも深い彼の自意識が、『夜』よりも深い『闇』よりも…更に『深く』なったのだ。

ずっと感じていた天城　遊良への苛立ちも、常に抱いていたＥｘデッキを『使わない』デュエルへの憤慨も…

その全てを『超越』した心意から感じる、今の砺波の言葉は確かに遊良へと届いていて。

「【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！【堕天使テスカトリポカ】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキへ戻す！再び守れ、テスカトリポカ！」

―！

襲い来る激流を割き、無情に飲み込む激浪を耐え…悪魔のような堕天使の、再び起こす革命の業火が【白鯨】の凄まじい怒涛を蒸発させんとして立ちはだかった。

しかし、王者【白鯨】のその波動。

その威力はかつての【激流葬】や先ほどのグングニールの破壊とは比べ物にならない程の威力を持っており…悪魔のような堕天使が、最後には耐え切れずに飲み込まれて消え去っていって。

遊良　ＬＰ：２５００→１５００

それでもどうにか飛沫に塗れた遊良と堕天使達を守りきり、その意思を紡ぐ。

「…フッ…そうだ、それで…いい…」

「と、砺波理事長！」

そうして、最後の力を振り絞ったのか…砺波が、その膝を崩して力を抜いた。

…本当に、凄まじい精神力。

きっと彼が砺波　浜臣でなかったならば、絶対に『闇』に打ち勝つことは出来ず。自分の『負』の感情を認められず、飲み込まれて喰われているだけだったはずだ。

…認めるわけにはいかなかった。自分の歩んできた道を、考えを、簡単に変えられるほど適当な人生を過ごしていない。そう、思っていた…

それでも、ここで『惨めさ』を巻き散らかして、己の『卑しさ』を正当化し続けられるほど、軽い人生を送ってきてもいないのだ。

そんな砺波の意思は確かに、【白鯨】となりてこの場に現れていて…

砺波の言った、その『敵』と言う言葉の中には…もう、遊良は含まれてはいない。それを感じられないほど、今の遊良も弱くは無く。

「…一つ、貸しておいてあげましょう…グフッ…は、【白鯨】に勝つという、名誉を…ね…」

「ッ!?」

「タ、ターン…エンド…」

砺波　ＬＰ：５００

手札：1→0

場：【白闘気白鯨】

魔法・罠：【グレイドル・インパクト】

もう、自らを【白鯨】と呼ぶことへの戸惑いは砺波には無い。

己を超え、己を見つめ直せたからこそ、今改めて誇り高き『その名』を名乗ったのだろう。

だからこそ、攻撃を加えられたこの場面においても、砺波は遊良に攻撃を加えず。エンドフェイズに寄生生物を手札に加えられる効果すら、砺波は発動しなかった。

嫌悪『していた』天城　遊良でさえも…『退学』という圧力すら自らの力で打ち破ってみせた『自分の生徒』を…これ以上、傷つけないために。

「グ…ググッ…こ、これ以上…は…」
「お、俺のターン、ドロー！早く、ＬＰを０にしないと…」
「おい遊良、テメェどうやって砺波のＬＰを０にする気だ？」
「…え？」

そんな場面だからこそ、焦って【白鯨】に立ち向かおうとした弟子へ対して、鷹峰が声を投げかけて。

「どうって…【白鯨】を【背徳の堕天使】で破壊して…ダイレクトアタックを…」
「馬鹿野郎！それじゃあ永遠に蘇るだけだろうが！」
「えっ!?で、でも、今の理事長だったらそれは命じないはず…」
「チッ、いいかよく聞け馬鹿弟子！砺波が命令しなくたってなぁ、【白鯨】の奴ぁ勝手に蘇んだよ！アレはそういうモンスターだってんだ。【王者】の『名』ってのはよぉ、どうしようもねぇほどに、死ぬほど負けんのを拒むんだよ！」
「…そ、そんな…じゃあ、どうすれば…」

師である鷹峰から告げられた、【王】たる由縁の衝撃の事実。
それは、到底今の遊良にとっては信じられない話なのだろうが…それでも、同じ高みに居た鷹峰の言葉だからこそ、それが確かな事実なのだと師の言葉からどうしても遊良は理解してしまう。

…【王者】は、勝ってこその【王者】

そう、遊良には知る由も無い話ではあるが、かつての釈迦堂　ランとの戦いでも、実際に負けることを【白鯨】は拒んでいた。

…砺波　浜臣と同じ…いや、砺波　浜臣自身である【白鯨】だからこそ、負けることを絶対にしたくなかったのだ。
あの時、心を折られた【王者】を許せずに…そして負けを拒む【白鯨】自身が、決着の時に『勝者』となった【化物】である少女のフィールドにいた事も、『偶然』などでは断じてない。

「…おい、そんなに痛ぇのが嫌か？」
「…え？」
「さっきみてぇな痛ぇ思いすんのは、もう嫌なのかって聞いてんだ！いいからさっさと答えろクソガキ！」
「…ッ、い、嫌です！」

とは言え、遊良にはこの状況を打開して決着を着けられるヴィジョンが一つ、どうにか浮かんではいる。

―そう、砺波のＬＰを０にして、かつ【白鯨】に勝たせるコトの出来る、唯一の方法が。

しかし、ソレをするには覚悟がいる。
いや、覚悟しても、それでも自分が駄目になってしまうかもしれない、その恐怖が遊良にはあるのだ。
それを見抜いている師、鷹峰が言葉を荒げながらも遊良に問いかけるが…ストレートに投げかけられたからこそ、遊良も直線的に言葉を返してしまって。

「…だよなぁ、嫌だよなぁ。痛くて、血ぃ吐いて、気ィ失いかけて、苦しいのはよぉ。」
「…う…」
「けどよぉ…テメェが昔味わった『痛み』と比べて、今テメェが受ける『痛み』は一体どっちが痛ぇ？覚悟して受ける『痛み』と、覚悟もなかったガキん時の『痛み』は、一体どっちがテメェには辛ぇってんだ！あぁ

ん！」
「…昔です！昔の方が辛かった！」
「そうだろうが！だったら四の五の言わずに、とっとと片ァつけやがれ！この俺様の弟子なら、ちっと痛ぇくれぇで泣き言いってんじゃねぇぞコラァ！」
「は、はい！」

それでも轟く喧騒が、取るべき道を示してくれる。
師の言う通り、地獄のような『あの頃』に受けた痛みと比べれば…今これから喰らうであろう痛みは、決して耐えられないモノではないはず。
覚悟し、決意し、忍んで、決断してー
「…やってやる！それしか道が無いのなら！俺は…【堕天使イシュタム】の効果発動！」
それしか道がないのなら、そこへ進むしかないのだと、無理やりに自分を言い聞かせるしか遊良には後は無く…
「ＬＰを１０００払い…墓地の…【魅惑の堕天使】の効果を得る！」

―！

遊良に残された最後の手。その決意の宣言ともに。
遊良の場の魅惑の堕天使が、妖艶なる舞いを踊り始める。
…【堕天使ルシフェル】の効果で墓地へ送られていた、３枚の内の最後の１枚。
自身の身を代償にする『罠』ではなく、主の命を糧として繰り広げられるその舞踊は…

堕天使達の怒りに塗れたモノではなく。おろかな主の決断に、仕方なしではあるものの、呆れながら魅せているようにも見えるだろう。

神をも見惚れさせる魅惑のダンス。如何なる存在も抗えない、種としての本能に覚醒をもたらす淫靡なる美しき舞いに【王】が包み込まれていって…

そうして歴戦を巡りし輪廻の【白鯨】が、その場を離れて対峙する少年の場へと、その巨躯を移動させ始めたではないか。

「グッ…また…ゴホッ、く、くっそ…」

抗うことは許されない『罪』に再度貫かれながらも、唇を噛み締めてそれを耐え忍ぶ遊良。

血が上り、喉を焼き、肺を押し上げ外に出る。

それでも…

「こ、この一撃で…終わらせるんだ！理事長を縛っている『闇』も、こんな戦いも！バ、バトル！【白闘気白鯨】で！グッ!?と、砺波理事長に…ダイレクトアタック！」

それは奇しくも。

…いや、必然的に。

この状況はかつてこの場所で行われた、釈迦堂　ランと【白鯨】の戦いと同じ。

己の名が自らに牙を剥き、今こうして敵対している構図で襲い掛かってくるというこの状況は…

あの時、【白鯨】が【化物】に完敗を喫して心折られた戦いの最後と、同じ状態であったに違いない事だろう。

…それでもあの時と違うのは、砺波が【白鯨】足り得ているか。

「…受け入れよう…この敗北を…『今』は…」

きっと、彼はもう折れない。

一度折れて、１０年という長い年月をかけて気付いた、より強く昇華した彼の『心』ならば…きっと。

それを、【白鯨】も知っているからこそ。

決して聞くことのない他人の命令を、今この時は甘んじて受けているのだ。

歴戦を駆け抜けし【白鯨】が吼え、その激流を波動に変えた咆哮によって…

長い長い彷徨いから帰ってきた、より昇華した『自分自身』へと向けて…

ー今、放つ

「怒涛のタイダル…ストリィィィィム！」

―！

「ぐっ…ぐおおおおおおおおおおっ！」

砺波　ＬＰ：７００→０（―２１００）

軋みを沈めぬ古びたスタジアム、轟きを収めぬ『闇の塔』が呻く中で…

放たれし怒涛、逆巻く激流、その全てを集約させた波動の波濤が…

砺波を、ひいては砺波を縛って捕らえて飲み込まんとしていた深淵の『闇』を、その根本から全て吹き飛ばしたのか。

ーピー…

デュエル終了を告げる無機質な機械音よりも、より一層響き渡るは【白鯨】の咆哮。

高らかに、鳴り響き…それは間違いなく、深淵の『闇』の中で抗っていた自分自身の…

王者と呼ばれた砺波の、真なる解放を告げていた。

――…

ｅｐ４４「底知れぬ恐怖」

「グッ、グフッ…オ…オォォォ…」

自らの『名』、【王】たる白き鯨の怒涛の咆哮を砺波がその身に受けて、無機質な機械音がこの古びたスタジアムに響いた、その直後のこと。

デュエルが終了したことで、ゆっくりと消え行く【白鯨】の咆哮が高らかにこの古びたスタジアムに反響し…

また【白鯨】が消えていくことに伴い、一時とは言え【白鯨】を場に置いていた遊良に起こっていた、彼自身の『罪』による痛みも消えていって。

それと同時に、自ら選んだデュエルによる敗北によって体内から溢れん限りの『闇』が砺波の体内から放出されていき、惨めに感情を巻き散らかす『闇が造ったもう一人の砺波』も同時に消えていく。

「がっ、はっ……はぁ…はぁ…ふ、再び『この場所』で…敗北することになるとは…ね…」

鷹矢のような『例外』を除いて、如何なるモノであっても抗うことなど許されないはずのこの『闇』。

その『闇』に飲まれていた者が『解放』された時、その意識を回復させるまでには時間を要するはずであっても…満身創痍の中、未だその意識を健在させて声を発することが出来ている砺波の意識は、ただ単純に彼の精神力が強靭だということに他ならないだろう。

そんな砺波の言葉は、かつてこの場所で釈迦堂　ランに敗北した、あの時のデュエルを思い出してでもいるのだろうか。

…齢幾つの少女に得体の知れない恐怖を与えられ、Ｅｘデッキを『使わない』デュエルで心を折られた、あの屈辱的な敗北を。

―しかし、今の砺波の声は歪んでは折らず。

そう、『あの時』と今回とでは、同じ『敗北』でも全く意味が異なっているのだから。

「ぐっ、ご、ごほっ…」

「砺波理事長！だ、大丈夫ですか！」

きっと…いや間違いなく、遊良だけの実力では、絶対に砺波のＬＰを０にすることは叶わなかっただろう。

―『闇』の中で本来の砺波が、『もう一人の自分』とせめぎ合い『まとも』なデュエルが出来ていなかったこと。

―遊良の本心からの叫びが、幻を見ていた砺波の精神に強く響いたこと。

―突然現れた【黒翼】こと天宮寺　鷹峰の、衝撃的な言葉による揺さぶりがあったこと。

そのどれかが欠けていれば、きっと砺波のＬＰが０になる前に遊良は吹き飛ばされていたはずだ。それでも自らの『過ち』と『曲解』を恥じた今の砺波は、甘んじて『敗北』を受け入れたのか。

「…し、心配して欲しくなど…ありません。まったく…君なんかに助けられることになるなんて…激しく屈辱です…」

「カカッ、その割には随分とまぁスッキリした顔してんじゃねーか。」

そうして、倒れこんだ砺波へ駆け寄った遊良と、ゆっくりと歩いてきた鷹峰に対して、『普段』と変わらぬ言葉を砺波は放って。

その言葉は相変わらずの憎まれ口ではあったものの、しかし『今』の砺波の言葉の雰囲気からは、以前のような遊良への『敵意』は含まれておらず。

―そう、砺波の心には、最早遊良への怒りなど存在すらしていない。
己の抱いていたあの『憤怒』が、『Ｅｘデッキを使わないデュエル』への怒りや『天城　遊良への苛立ち』から来るモノではなく…ランに負けた、『弱い自分』への憤りであったことに、砺波はやっと気が付けたから。
ならば、その怒りは『己』へと向ければいい。弱い自分を許さず、強くあろうとした若き日のように、と。
「…フッ、先ほどの言葉は…聞かなかったことにしてあげますよ、鷹峰…」
「あぁん？俺ぁ何か言ったか、なぁ遊良？」
「…いえ、何も…」
「だろうなぁ、カッカッカ。」
また、あのなりふり構っていられない状況だったとはいえ、先ほどの鷹峰の叫びはここに居る誰もが信じられないワードであったことに変わりなく。
彼が先ほど放った『衝撃的な言葉』に関しては、およそ鷹峰とて二度と口にすることはないだろう。
「…でも先生、どうしてここに？確か仕事だって言って…」
「…ガキにゃ関係ねーって言ったろ。俺にも色々と事情ってモンがあんだっての。ったく、その癖突っ走って砺波と戦ってんだからよ。まだテメェじゃ勝てるわけねーって言ってただろーが。」
「…す、すみません…」
そんな中、師が突然現れたことに対して、そう問いかけた遊良。
何しろこの異変が起こる少し前に、巨大なジェットヘリの迎えによって遊良の目の前から、果てはこの決闘市を離れたはずの師がこの

場に舞い戻り…あの限界ギリギリの場面で、まるで遊良と砺波の双方の為とも思えるような言葉を発したのだ。
その師の言葉に遊良が救われたことは事実ではあるものの、それでも何故この場に師が現れたことに関して遊良が疑問に思わないわけがないだろう。
しかす真意を明かす気など無い師の言葉に、遊良の口はひしひしと感じられる『察しろ』という師の圧力によって閉じられるだけ。

「まっ、どうせ勝てねぇんだとしても腑抜けちゃいねぇようだしよ、ちったぁ褒めてやるぜ、カッカッカ。」
「…え？」
「あ？褒めてやるっつってんのに何だその顔は。」
「い、いえ…先生が…ほ、褒めてくれるなんて…珍しいな、と…」
「おうおう、勘違いすんじゃねーぜ。褒めるったって『ほんの少し』だけだ。まだまだテメェは俺様の相手にもなんねぇ雑魚だって事を忘れんじゃねーぞ。」
「は、はい…」

そんな先ほどから鷹峰らしくない言葉の数々に、圧力とは違う意味で遊良の口が上手く回らず…
それでも師の言葉を受けて、遊良の雰囲気がどこか安堵を含んでいるのも確かなこと。

そう、いくら師から発せられる言葉が普段と違うとは言え、現状の『結果』において、これ以上無いくらいの成果が得られたことには違いないのだ。
先ほどの【白闘気白鯨】の実体化した咆哮によって、砺波を縛り付けていた『闇』は根本から消え去り…その衝撃はそのまま、砺波の後ろで轟いていた『闇の塔』をも飲み込んで散り散りにしてしまったのだから。
さすがは【王】の一撃。決闘市の空を覆いつくさんとして、恐るべ

き勢いで放出していた『闇の塔』がこれで消えたことで、地鳴りのようなスタジアムの揺れも今は収まっていて。
ならば一刻も早く、動けなさそうな砺波を連れてこの場を離れるのが先決だろうと、遊良がそんなことを考えた…

―その時だった

―!

突然の轟音がスタジアム内に轟き、それと同時に先ほどまで感じていた揺れと同じモノが今再びこの場に巻き起こり、地響きとなりて遊良達へと襲いかかった。

「なっ!?ま、また『闇』が噴出した!?」

それと同時に、先ほど【白鯨】の一撃で消し飛ばされたはずの『闇』が、再び間欠泉の如き勢いで噴出し始めたではないか。
先ほどと寸分違わぬ同じ場所から、先ほどの勢いをそのままに。
一旦途切れたとは言え、またもや決闘市の空へと向かって『闇』が立ち昇って行き、太陽の光を遮らんとして決闘市から光を奪わんと広がっていくその光景は…まるで、今にも堕ちてきそうな絶望を、これほど分かりやすく具現化する方法があるのかと言うほどに禍々しく。

「そんな…たった今消えたはずなのに…」
「チッ、たりめーだ。アレがあんなんで消えるわけねぇだろ。」
「じゃあ…一体どうすれば…」
「あぁん?…んなこた、決まってんだろーが。」

そんな中で再度口を開いた鷹峰の視線は、地面より昇る巨大な『闇

の塔』へと向けられていて。
未だ収まる気配の無い、恐るべき勢いで噴出し続ける『闇の塔』。
それが今もなお決闘市の空を覆いつくさんと、その地響きを反響させて古びたスタジアムを揺らしているというのに。
一体、鷹峰は何をしようとしているのだろうか。その手立てなど全く持って思いつかない遊良からすれば、簡単にそう言い放つ鷹峰の言葉が不思議でたまらないことに違いないだろう。
そんな訝しげな目で師を見る遊良に対して、その視線を感じたのか鷹峰はおもむろに口を開いた。

「アレを吹っ飛ばしても止まんねーってんなら、張本人をぶっ飛ばすしかねーってんだ。」
「…え、張本人って…？」
「この『異変』を巻き起こした奴だ。ついでに言やぁ、ルードでテメェが戦った奴も、街で暴れてる奴らも、全部操ってんのは『奴』だってこった。いくらその他の奴ぶっ倒したって、大本叩かなきゃキリがねぇ。」
「それが、『黒幕』…でも、それは…」
「お前さんもここまで『見て』来たんだ。もうソイツが『誰』なのか…テメェにだって見当はついてんだろ？」
「ッ!?」

鷹峰が告げる解決方法は確かに真理で、この古びたスタジアムに来る前に遊良達が出していた結論と同じモノに違いないのだが…
それでも最初と異なっているのは、始めは影も形も思い浮かばなかったその『黒幕』の予想が、今この段階では遊良にだって思い浮かんでいるということ。
遊良がここまで戦ってきて…それこそ、最初に『闇』に襲われたルード地区の経験と、【決闘祭】で見たモノ…そして、先ほど戦った紫魔ヒイラギの使っていた『特別』なカードの存在が、遊良に『黒幕』の姿を鮮明に見せ始めたのだから。

それは…

「…は、はい…紫魔　ヒイラギ、あいつはさっきのデュエルで【Ｄ―ＨＥＲＯ】のカードを使ってきていた…」

【決闘祭】で見た、『地紫魔』であるはずの彼女のデュエルが、先ほどエントランスで戦った時には根本からして異なるモノを繰り出してきていたこと。

更に、元とは言え【王者】を『闇』に飲み込むことの出来るほどの人物…それだけでも、『黒幕』となり得る人物には限りがあるのだ。

それが、遊良の思い至った『黒幕』の予想へと繋がったことは先ず間違いなく。

また『ＨＥＲＯ』と言うカテゴリーを使うことを、古よりの『掟』で決められている紫魔家だからこそ、【Ｄ―ＨＥＲＯ】と言う『特別なＨＥＲＯ』を彼女が使ってきたことも拍車をかけたのだろう。

「…あれは…あ、あのカードは【紫魔】のカードだったはず！それを、どうしてあいつが…借り物だって言ってたけど…」

「そうだ、世界広しと言えど、この世界で【Ｄ―ＨＥＲＯ】を使える奴なんざ、俺様の知る限りでも『一人』しか居ねぇんだよ。」

「【Ｄ―ＨＥＲＯ】…その名を再び聞くことになろうとは…にわかには信じられた話ではありませんが…しかし、『あの子』が【Ｄ―ＨＥＲＯ】を使ったとなると…」

そう、この世界において紫魔家にだけ許された『ＨＥＲＯ』と言うカテゴリーの中でも、多くの紫魔達が扱う『Ｅ（エレメンタル）』とも『Ｅ（イービル）』とも、『Ｍ（マスクド）』とも『Ｖ（ヴィジョン）』とも全く違う存在であるソレは…

―この世界の歴史上でも、扱った人間は『たった一人』しか存在しない。

悠久の遥か昔から記されている長い長い紫魔の歴史、ひいては膨大な枚数を持つ『ＨＥＲＯ』というカテゴリーの中でも…

『運命』の名を冠するその英雄達の姿は、特に近年になって初めて確認されたモノであるからに他ならない。

それは近年、『ある一人の人間』の、まさに『運命』を決める一戦において創造された代物であることは、世界の歴史に刻まれていることであって。

「で、でも『その人』は…」

…しかし、どうにも遊良にはソレが信じられていない様子。

何せ、今遊良の中に浮かび上がってきている『黒幕』の存在は…遊良からすれば、到底信じられた人物ではないのだ。

先ほど紫魔　ヒイラギと戦ったことによって、遊良にはヒイラギの上にいるであろう『その人物』の姿が、確かにその脳裏に浮かび上がって来ていることは事実。

それでも、鷹峰が言っているであろう人物が遊良の思い浮かべている人物と『同じ』なのだろうが…しかし、それはありえないと言うことを遊良は『知っている』からこそ、ソレがどうしても信じられない様子を見せていて。

…もしそんな人物がこの『異変』を巻き起こしたというのならば、それこそ『神』にでもなったというのだろうか。

そんな、決して『ありえない人物』のことが浮かび上がっている遊良の頭が、その『名』を口走りそうになった…

―その時だった。

「…ホホ、そうは…さ、させません…わ…」

「ッ!?」

突然、この地鳴りの中であってもはっきり聞こえるキーの高い声がスタジアム内に聞こえてきて…ボロボロの姿をその身で支え、息も絶え絶えになって現れたこの少女。

―紫魔　ヒイラギ

つい先ほど、遊良を足止めしようとして返り討ちに会い…そのまま意識を手放したはずの地紫魔の少女が、スタジアムの入り口の一つから突如現れたのだ。

しかし、先ほどのデュエルで受けたダメージが回復しているはずもないというのに、一体どうしてこの場に現れることが出来たというのだろうか。

ＬＰを０にされるような実際のダメージは、到底すぐに意識を取り戻せるような代物では無いはず。その痛みを知っている遊良だからこそ、今こうしてヒイラギが現れたことに対しても驚きを禁じえない様子を見せていて。

「ッ!?し、紫魔　ヒイラギ!?お、お前、な、何で…」

「邪魔はさせませんと…い、言ったはずでしょう?…くっ、わ、私には、やることが…あるんですの…」

「…チッ、ガキが…」

「…さっき言ってた、『復讐』ってやつか?」

遊良に思い浮かぶのは、先ほどエントランスでヒイラギと戦ったときに彼女が放った、『復讐』と言う名のその言葉。

ダメージを負った体を無理やりに、ヒイラギがよろけながら遊良達に向かってきて…呻る『闇の塔の』前に立ち、まるで立ちはだかるようにしてデュエルディスクを構える彼女。

―『あら、散々傷つけられて来たと言うのに、そんな奴らに躊躇をする必要がありまして？』

先ほど、紫魔　ヒイラギはそう言った。

決闘市の空を覆う『闇』がこの街に落ちる時、今無事で居る人間であっても『闇』から逃れられる術は無く…全ての住人が『闇』に囚われてしまえば、一体どれほどの被害が出るのか想像すら出来ないだろう。

街を壊し、人を操り…

はたしてそれが、彼女の言った『復讐』なのだろうか…

「…やっと…ここまで来たんですの…だから…最後の最後まで…邪魔はさせません…」

その彼女の言葉の真意が何なのかなど遊良には到底思い浮かびもしないものの、それでも高飛車でプライドの高そうな彼女がここまでボロボロになってまで抵抗しにきたということはそれだけ彼女が本気なのだということに違いない。

―呼吸を乱し、微かに震え…

その華奢な体から感じるのは、もう後には引けない場所まで来ているという彼女の追い詰められている雰囲気と、何が何でも『自分の目的』を達するという強い意思。

「…どけクソガキ。邪魔なんだよ。」
「…お、お断り…します…」
「チッ、テメェごとフッ飛ばしてやろうか、あぁ！」
「うっ!?ぜ、絶対に、どきませんわ…」

だからこそ、彼女は『闇』に対して『何か』をしようとしていた【黒翼】の前に立ちふさがり、意識を吹き飛ばされそうな威嚇を受けていてもなお、意地でもその場に立ち止まるのか。
常人ならば卒倒してしまうほどに荒々しい鷹峰から発せられるこの圧力を、正面から華奢な体にまともにぶつけられていると言うのに…
何か決意を持った様子の彼女の足は竦みあがる程の迫力を持つ【黒翼】を前にしても、決して逃げ出そうとはしておらず。

「邪魔だっつってんだよこのクソガキがぁ！」

―！

そうして鷹峰の叫びが木霊して、その圧力がこの古びたスタジアムを更に軋ませて。
…容赦の無い、意識を強引に吹き飛ばすような鷹峰の『威嚇』
鬼気迫るほどの鷹峰の迫力が並大抵の人間に耐えられるようなモノでないことは、過去に幾度も証明されており…
『闇』の轟きによるスタジアムの崩壊と相まって、逃げ出す暇も与えられない程の恐怖が浮かんでくるというコトは、誰の目にも明白だというのに…
「く…ぅ…」

意思を意地でも維持して…息も絶え絶え、ふらつくほどに体も傷ついているその痛々しい姿で、一体何がここまで彼女を動かすのだろう。

轟音を奏で、絶望を増していく『闇の塔』の勢いが更に大きくなっていくのに連なって、ヒイラギへと向けて放たれる鷹峰の圧力も増していき…

「…はぁ、これでもどかねぇか…じゃあ仕方ねぇ、マジでそろそろ時間もなくなってきやがったしなぁ…ガキ一匹なんざ無理やりフッ飛ばしてでも…」

「ッ!?」

それでも意識を無理やり繋げ、その場に意地でも踏みとどまる少女に対して苛立ちを含ませた鷹峰は歩みを少女へと進め…

デュエルディスクを構えているヒイラギ目掛けて、鷹峰もまたその手を上げてデュエルディスクを構えようとした…

—その時だった。

『…待て』

—!

鷹峰が無理やりにヒイラギを掴もうとしたその瞬間。

轟音が響くスタジアムの中のどこからか、突然『何か』が反響し…まるで聴覚に直接響かせているのでは無いかと錯覚しそうになる不協和音と共に、誰の鼓膜にもむず痒さを感じさせて。

『闇』よりもなお深い場所から響いてくるこれは『恐怖』、聞く者全て

を飲み込まんとする深淵の『闇』…底知れぬ恐怖。
—しかし、それだけではない。
突如として、鷹峰とヒイラギの間に割って入るようにして地面から別の『闇』が噴出し始め…
まるで鷹峰を遮るようにして、その足を一歩後ずさりさせたのだ。
「おっと、危ねぇ危ねぇ…」
ソレに触れないように反射的に手を引っ込める鷹峰ではあったものの、しかしその顔は焦りを見せるわけでもなく。
突如聞こえてきた『何か』に対して、どこか苛立ちを含んだ顔を見せるのみ。
「チッ、『相変わらず』胸糞わりぃ声だぜこんちくしょうが…」
「…こ、この声は…ま、まさか本当に『奴』なのか？」
「初めっからそう言ってんだろーが！砺波よぉ、テメェは『奴』の声も忘れちまったのか、あぁん？」
「しかし…いや、紫魔　ヒイラギ…この子が関わっているのなら、確かに納得は出来るが…」
「だろうなぁ。カカッ、何たってこの小娘が【Ｄ—ＨＥＲＯ】を使ったってだけで、『奴』は自分から俺らにネタばらしをしているようなもんなんだからよぉ。」
そして、この『声』のような音に対して、どこか聞き覚えがあるかのような振る舞いを見せる鷹峰と砺波。
遊良が得た半信半疑の確信とは異なった…【王者】である彼らだからこその確信。
—砺波ほどの者を深淵の『闇』に飲み込めるような人物

―『紫魔　ヒイラギの関係者』

たったこれだけの情報から…いや、鷹峰と砺波にはたったこれだけの情報でも十分なのか。

今の『声』と、鷹峰を遮った『闇』に向かって…いや、『闇』に守られているかのような紫魔　ヒイラギへと向かって、砺波が口を開く。

「…にわかに信じられる話しではありませんが…しかしヒイラギさん、あなたがこの『異変』に関わっているのを知った今…『彼』しか思い当たる人間は居ません…なぜなら私も鷹峰も…ヒイラギさん…あなたのことを、遥か以前から知っているんですから。」

「カツカツカ、あのガキが随分とまぁデカくなったもんだぜ。」

「でしょうね…は、【白鯨】と【黒翼】であるあなた方には…隠せるモノでも…ありませんですし…」

「…え？昔から知っているって…何で紫魔　ヒイラギの事を…先生達が？」

そんな鷹峰と砺波から発せられる言葉には、遊良からすれば全く持って理解が追いつかないことだろう。

何故ここで鷹峰と砺波が紫魔家の一人に過ぎない少女の事を言葉に出すのかも理解の範疇を超えている遊良からすれば、【黒翼】と【白鯨】のその言葉には疑問を思い浮かべることしか許されておらず。

それでも、一々遊良の疑問に答えている暇など無い大人たちは『闇』の後ろに隠れた紫魔　ヒイラギへと向かって、その言葉を投げかけるだけ。

「あなたが私の学園に入学してきた時には何の縁なのかと思いましたが…しかし今考えれば、それも初めから仕組まれていたという事なのでしょうか？」

「…ホホ…どうでしょうね…どこからが私の…」

何かを『知っている』様子の砺波が、そうヒイラギに問いかけるも…どこかはぐらかすようなヒイラギの言葉は、新たに地面から噴出した『闇』の勢いにかき消されていき、対面している3人に届くことはなく。

今にも倒れそうなヒイラギは、ふらつきながらもその場に立っているだけ。

「チッ、今はこんな小娘のことはいいだろうが！それよりいい加減にしやがれ！ガキ共を動かしてテメェは『闇』の中で見てるだけか!?もうネタは上がってんだよ！」

そして、最早ヒイラギなど視界にも入れていない鷹峰がその纏う圧力を更に大きくしながらそう叫び…その叫びは、先ほど聞こえてきた『声』へと向かっているのか。

未だ姿を『闇』の中に隠しているソレへと…目の前の、常人ならば卒倒しそうなほどに恐ろしい深さの『闇』へと向かって…

―『底知れぬ恐怖』へと向かって、叫ぶ

「出てきやがれ！そこに居んだろうが！」

―その、『奴』目掛けて。

「れんぞぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

…

『…流石だ、【黒翼】…』

ゆっくりと、深い深い『闇』の中から歩いてきた人物。
その声は確かな振動となって遊良達の耳へと振るわせられるものの、それが人の口から出ているとは到底思えない『音』となって届けられているのは果たして現実か虚構か。

「あ、あぁ…や、やっぱり！で、でも何で!?『あなた』は…じゅ、１０年前に…」

そして、その『信じられない』黒幕の姿を目に入れてしまった遊良が思わず声を荒げて叫ぶのも、仕方なく…

「１０年前に！し、死んだって公表されたはずだ!!」
『ここに居ることが全てだよ天城　遊良。私は死んでなどいない、今もこうしてここにいる。』
「ッ!?」

その言葉の一つ一つから漏れ出るモノは、聞いている者の耳に嫌と言うほどはっきりと聞こえてきて…

―与えられるのは、『底知れぬ恐怖』

口から出る『音』が、気持ちの悪いくらいに透き通っているからこ

そ、その人物の声は他人からすれば、抗うことの出来ない畏怖の対象でしかないだろう。
自らの名を呼ばれたことすら、遊良にとっては竦みあがることしか許されないほどに、その声からは恐怖しか感じられず…

誰もが『知っている』。
『闇』から現れた、この男のことを…

「やはり貴様か、【紫魔】…いや！」

―いや、『知っていた』。

遊良が思わず叫んだ通り、そして砺波が言葉を選びなおそうとした様に、公式に発表された情報では彼はもう『故人』として扱われているはずなのだから。

―紫魔　憐造

【紫魔】…いや、先代【紫魔】であるはずの男が…

―『闇』の中から、現れたのだ。

!

ｅｐ４５「絶望の次章」

―かつて、決闘界の歴史の中でも並ぶ者など存在しない、『鬼才』と謳われた人物が居た。

６歳という異例の幼さで王座に着いた才覚も然る事ながら、彼だけが持つ特別な英雄達の織り成す、次々に繰り出される容赦の無い彼の圧殺に誰もが目を奪われ…

数多の挑戦者たちに底知れぬ恐怖を与えて、まさに立ち直ることを許されないほどの『才能』の違いに、世界中の人々が熱狂していたのは歴史上でも証明されていることだろう。

政界、財界、官界…そして決闘界の全ての中に強い繋がりを持つとされている、世界にも類を見ない程の巨大な一家系である、『紫魔家』。

その全てを統べるその男から発せられる気迫は、有象無象のような他の英雄使い達とは一線を画する凄まじい決闘と相まって、まさに恐怖そのものと言えたのであって。

だからこそ、３０年もの長きに渡り【紫魔】の名を守ってきた『その人物』の急逝が報じられた時には、世界中の人間達が憐れみ、悲しみ、不安に駆られてその訃報を信じようとしなかったものの…

それでも時の流れと、新たに８歳で【紫魔】となった者の存在と相まって…人々の記憶から消えて行き、二度とこの世に現れることの無かったからこそ、その訃報は１０年と言う歳月をかけて『真実』となっていたはずだというのに。

「そんな馬鹿な！本当に、ほ、本物の【紫魔】だって言うのか!?」

未だ轟音を響かせて立ち上る『闇の塔』の前に、突如として現れた

この『異変』における『黒幕』の姿を前にして、まるで信じられないようなモノを見る目で思わず声を上げてそう問いかけた遊良。
しかし、遊良のその驚きも当たり前だろう。
何しろ、年が明けたばかりだというのに決闘市のあちこちから人を飲み込む『闇』が街中に溢れ出て…人々が凶暴化して暴れ回り、街が壊され阿鼻叫喚の嵐となっているという誰もが信じられないような非現実的なこの『異変』。

その黒幕を、一体誰が予想出来たのだろうか。

いや、誰であっても予測することなど出来なかったはずだ。

―紫魔　憐造

それは１０年前に『急逝』が報じられたはずの人物だったのだから。

そんな現実を目の当たりにした遊良からすれば、頭が追いつかない問題が次々に溢れ出ていることに違いなく。
死んだはずの人間が今この場に現れたことも、その人物がまさか今決闘市に起こっている『異変』の黒幕だったということも…
そして、その人物がまるで『人間』では無いかの如き気配を纏っているということも。
何せ、享年３０半ばと言う当時の彼の姿から、今現在の１０年という歳月を微塵も感じさせない程に今の憐造の姿は若々しく。
それは遊良からすれば、恐怖を感じる以外の何物でもない。

『先ほどもそう言ったはずだろう？今ここに私がいることが全てだ。』
「憐造…貴様、本当に生きていたのか…」
『生きていると言うのも語弊があるが…しかし、こうして話すのは久

しいな【白鯨】。お前が今も意識を失わずに話せると言うことだけでも賞賛に値するモノだ。おかげで随分と早く計画を進めることが出来た、礼を言う。』

開いているのか、閉じているのか、まるでその声が『口』から発せられてはいないのでは無いかと錯覚するほどに、紫魔　憐造の形をした『何か』から届けられる『音』の響きは不気味はモノとなってこの場に居る者の耳に届けられ…

ソレが人の感情に直接作用し、嫌悪感を煽られているかのようなむず痒い揺れとなって、聞いている者の心になんとも言えないざわめきを覚えさせることはまず間違いないだろう。

「計画…だと?貴様、こんな禍々しい『闇』を使って、一体何を考えているんだ…一体私を使って何をしようとしていた!」

そして、無理やりに『闇』に閉じ込められてずっと苦しめられていたからこそ、声を荒げて憐造へと強く問いかけた砺波。

憐造の思惑も、その真意も、きっと他人に理解できるようなモノでないことは確かではあるものの、それでもこの『異変』の全てを率いているであろう憐造への怒りを露にして。

しかし、そんな砺波の怒りを受けてもなお、全く動じた様子を見せない憐造が…耳を疑うような言葉を持って、その口の辺りから『音』を発して…

『おや、さっき『娘』が言わなかったか?これは…『復讐』なのだよ。』

「む、娘!?し、紫魔　ヒイラギは『地紫魔』なんじゃ!?何でそいつを『娘』だなんて!?」

その憐造からの返答に対し、再び声を荒げずには居られない様子を遊良は見せて。
そう、何故ならたった今憐造から発せられた『言葉』が、遊良にとっては驚き以外の何物でもなかったからに他ならない。
『地紫魔』という、『紫魔本家』に継ぐ地位の家の子であるはずの彼女が、『紫魔本家』の家長でであった【紫魔】の『娘』と言う矛盾…学園でも、彼女が『地紫魔』だということは広く知られていることだというのに。

「…簡単なこと…ですわ…本家を追い出された後…今の家に養子として引き取られた…だけです…」
「追い…出された？」
「ホホ…思い出したくもない事ですわ。」
『そう、紛れもない私の血を分けた娘…それがこの子、ヒイラギだ。私と同時期に王座に居た【黒翼】と【白鯨】は無論知っていることだろうがな。そして、君も大いに私の役に立ってくれたね天城　遊良。』
「…え？」

しかし、そんな答えなど何の意味も無いかのような言葉が、再び憐造の口から放たれた。
それに伴い、遊良も思わず声を詰まらせて…突然自分へと向けられた言葉の意味を飲み込むことが出来ないのか。
そう、この場にいる、【王者】と元【王者】達の醸し出している異様な雰囲気の中で、ただ一人の部外者のような空気に包まれていた自分が、まさかそんなコトを言われるだなんて、遊良とて身構えてもいなかっただろうから。

『初めから期待などしていなかったが、君がここまで出来る子だったとは予想外だったよ。わざわざ君のために手間を割いた甲斐があっ

たというものだ。』
「そ、それって…どういう…」

そんな、意味のわからないといった表情で固まっている遊良へと向かって、憐造は言葉を続けるのみ。

『…わからないか？天城　遊良、何故君が【決闘祭】に出場出来たのか。本来ならば…『本史』ならば、【決闘祭】に出ることすら【決闘世界】に許可されないはずの君が。』
「ほ、本…史？」
『何故イースト校で代表戦が行われたあの日、君だけが襲撃を受けずに無事で居られたのか。ヒイラギを除く他の候補者は、全て大怪我をして入院する羽目になったというのに。』
「ッ!?」

淡々と、綽々と。

まるで憐造から発せられる言葉には、何の感情も篭っていないのではないかと錯覚するほどに、その『何かの口』から響く『音』は冷たく…
不快感と寒気を同時に感じさせるような、ただ純粋な恐怖感から来る言葉の羅列に、遊良の手が震え始めたのも仕方がないこと。
聞きたくない、考えたくない…それでも聞こえてくる『音』に、どうしても目を背けたい想像が遊良の中に沸き起こってきて。
恐怖感と相まって、憐造から告げられるであろう事実が遊良の震えを更に加速させ…

『全て、私の指示の下だ。【決闘世界】の重役を操り、君の【決闘祭】イースト校代表を無理やりに承認させたのも…君が小石に躓くことなく、滞りなく【決闘祭】に出場出来るようにしたのも。』
「なっ!?そ、そんな馬鹿な!?」

憐造の形をした存在から告げられた、あまりにも衝撃的なその事実。
これまでの自分の功績や、自ら考えて選んできたはずの道筋が全て無に帰すかのような言葉と…自ら切り開いてきたはずの『今まで』が、全ては敵の思惑によるものだという、信じられない…信じたくないような衝撃が遊良を襲って。

「…ど、どうして…そんなことを…」

…だからこそ、信じたくない。
全ては、自分で選んできたはずのモノ。これまで歩んできたあの険しい道が、自らが選んできたこの自分の意思が…
まさか、他人に利用される為だけに用意されていただなんて、絶対に信じるわけには遊良にはいなかい。
しかし、そんな遊良など全く持って意に介さず。告げられたことを飲み込めていない様子の遊良へと向かって、憐造はただ言葉のような音を発するのみ。

『考えてもみろ、君が躍進をすることでイースト校は簡単に荒れる。だからこそ他の学園のどれよりもイースト校に『闇』を蔓延らせることは簡単だった。…まぁ、どこぞの孫の所為で多少憚られたが。』
「…どうりで…【決闘祭実行委員】が天城君の代表に対して、再三『確認』を取ってきても、『撤回』まではしてこなかったはずだ…。疑問に

思ってはいたが…それがまさか、憐造、貴様の仕業だったとは…」
『フッ、そして【決闘祭】は感情の坩堝。君が勝ってくれるおかげで、随分と簡単に負けていった者達に『闇』をばら撒くことも出来た。何せ、君よりも戦績が下になる不名誉など、誰もが必死になって回避したいはずだからね。』

淡々と告げられるは、全て憐造の思惑通りのモノ。
…遊良は知らない、【決闘祭】での紫魔達の暗躍。『プラン』と呼んでいた計画の実行を、行っていた彼ら紫魔達。
負けていった選手達に、『闇』を取り憑かせるという行為…【決闘祭】に出場出来るほどの実力を持った学生達を『手駒』にし、街の『制圧』の兵隊にするという…ただソレだけのために。
しかし、【決闘祭】に出場する程の学生達には、そう簡単に『闇』が取り憑くはずもなく。
単なる実力の問題ではない。信念や目的や運や精神力、誰もがそれらを、初めから備えている者ばかり。いくら暗躍していたのが『火紫魔』や『風紫魔』や、『地紫魔』と言った紫魔家の中でも上位にあるヒイラギ達とは言え…
そう簡単に、操れるわけがないことは、先のイースト校の泉　蒼人の件で証明されていることなのだから。
だからこそ、遊良が勝ち残っている状況で他の学生達が負けていくことが彼ら紫魔達には必要だったのだ。
全ては、この『異変』のため。

『それに君と【白鯨】との取引は知っていた。だからこそ君が決勝へと進み歓声を浴びることで、【白鯨】の激昂を高めることの何と簡単なことか。おかげで【白鯨】に反撃も無く『闇』を取り憑かせられ、予想通りこれだけ『抗ってくれた』のだから。』

―そして、更なる憐造の思惑のため。

【決闘祭】で遊良が優勝できなければ、その場で遊良は退学、鷹峰は引退をするという、あってはならないような代償を天秤にかけてまで戦い抜いた、鷹峰が取り付けた砺波とのあの取引。
激闘を繰り広げ、痛みを乗り越え。
そうしてその約束を撤回したのも、全て自分自身で勝ち取った『結果』なのだという自信が、確かに遊良にはあったというのに…

「…じゃあ、準決勝で竜胆　大蛇がわざと俺に負けたのも…」
『全て、私の指示だ。』
「…そ…んな…」

自分の躍進も進撃も、全て黒幕の掌の上だったというのだろうか。
告げられた事実は、遊良にとっては信じられず、また信じたくもないような言葉であるに違いなく。
自分で選んで勝ち抜いて、傷付きながらも勝ち取ってきたモノだという自信が、全て崩れ去っていくような…足の力が抜け、今にも膝を突いてしまいそうな喪失感が今、遊良を襲って止まない。

「…で、でもどうして、お、俺なんかを…」

それでもギリギリの所で自分を保って、何とか崩れることを拒む遊良。
紆余曲折はあったものの、『過程』はどうあれ辿りついた『結果』は遊良が自分で勝ち取ったモノ、自分の力で撤回したモノ。
それが今の遊良の実力に繋がっていることは確かに事実で、またアレだけの険しい道を自ら選んで進んできたことが、今の遊良の自信にそのまま繋がっているのもまた事実であるはず。
それに、確かに自分がイースト校で躍進を続ければ続けるだけ他の

学生達の不満が募り、それが直接的に憐造が起こした『異変』の増長に繋がったことは事実かもしれない。
いや、もし仮に憐造の言うソレが本当なのだとしても…それでも、遊良にはソレが憐造の思惑の根幹を担っているとは到底思えないのか。

そう、いくら憐造が裏で糸を引いていたとは言え、それでも世界というモノは、遊良の全てを簡単に受け入れて認めてくれるほど優しく出来ていないのだ。

遊良には知る由もないことではあるが、憐造が無理やりに遊良の【決闘祭】出場を承認させたとは言えギリギリまで遊良の出場に反対意見が出ていたことは事実だし…仮に遊良がどこかで力及ばずにあっさりと負けてしまっていれば、砺波の激昂もここまでのモノにはならなかったはず。

だからこそ、遊良には信じられない。

ここまでの被害を出すほどの『異変』を起こそうとしていた存在が、一体何故、Ｅｘ適正を持たない『出来損ない』と呼ばれていた遊良へと、真っ先に白羽の矢を立てたのかを。
ここまでの力をつけたとは言え、今よりも遥かに弱かった【決闘祭】前に…こんなにも障害や不確定要素の多い自分を、一体どうして利用しようと考えたのか、と。

そんな表情をしている遊良に対して、憐造は『声』を投げかけるように…

『別に、誰でも良かったのだが…だったら血を分けた『甥』に、少しばかりの良い夢を見させてやっても良いと思っただけだよ。』

「…え？」

そして、先ほどの衝撃とは比べ物にならない程の言葉が、確かに遊良を貫いた。

『その単語』が果たして何を意味しているのかすら、すぐには思い浮かばず。

遊良の思考が、憐造のその言葉を聞いた瞬間に思考することを放棄してしまったかのように冷えていき…

しかしそのあまりの言葉の威力に、思考を捨てることすら許されないこの空間の雰囲気が、即座に遊良の口を動かしたのか。

搾り出すように、ひねり出すように…遊良が、口を開く。

「い、今…『甥』って言ったのか!?俺と…あなたが？そ、そんなことあるわけが…」

『もっとも、君とはこれが初対面だが。何せ紫魔を捨てた、あの『裏切り者』の女とは随分と関わりを断っていたからね。』

「ッ!?」

ソレを聞いた瞬間に、冷えた頭とは反対に、一瞬で遊良の体に熱が篭って熱くなって。

―いつだったか、以前に紫魔　ヒイラギにも言われた『その言葉』。

決してソレを言う者を許してはいけないと、記憶にも無いその単語を耳にしただけで体が勝手に激昂するよう設定されているとさえ感じてしまう、無意識に熱くなって行く遊良のその体。

しかし、そんな熱くなった体を無視して、彼の思考力はさらに高速で氷点下まで冷えていき…

憐造の放った言葉の辻褄を、必死になって記憶の中から探しているかのよう。

そして…

―『とーさんがエクシーズでー、かーさんが融合だからー、俺はシンクロだったら丁度いいなー。』

憐造の言葉と、母のＥｘ適正…
融合、シンクロ、エクシーズの、３つあるＥｘ適正の中で、偶々、偶然、母の適正が『融合』だっただけだと思いたい遊良の思いを蹴り飛ばすかのように…
しかし、ソレがまた紛れもない『可能性』の一つであるという事実のみが、遊良の口を無理やりに開いた。

「か、母さんの旧姓って…まさか…」
『そうだ、君の母…紫魔　スミレは…いや、今は天城　スミレだったな。彼女は紛れもない、私の妹…『紫魔本家』の地位を捨て、下民との小さな幸せを選んだ紫魔家の裏切り者だ。まぁ、今となっては最早、関係も無い間柄だが。』

信じたくない、信じられもしない、しかし記憶の片隅で確かに遊良は知っている。
覚えていない、思い出せもしない、しかし物心着く前に目に焼きついた、勝手に体が激昂を促すようになった、その原因を。
遊良にとっては誰とも知らぬ人間…当時の、『紫魔本家』の関係者に、母が一方的に『裏切り者』と罵られ悲しんでいた記憶が、確かに物心着く前の遊良の心に焼きついていたのだから。

『しかし、まさか私の血を分けた『甥』がＥｘ適正を持っていないなんて、先日に知った時は驚いたよ。そんな君が優勝までするとは思わなかったが…随分と良い夢が見られただろう？なぁ、可愛い可愛い我が『甥』よ。』

「そ、そんな…ことって…」

言葉の羅列とは裏腹に、全く感情の篭っていない『声』と表情で、淡々と事実だけを告げてくる憐造のような『何か』。

そう、憐造にとって、遊良のことを『甥』と言葉で言っていても、『情』や『血の繋がり』と言ったモノを全く感じてすらいないのだろう。

それに伴って、今までギリギリで耐えていた遊良の心に、彼の足元から這い上がってくる絶望感が染み渡り始め…喉の奥から感じる、ツンとしたような痛さが胸を刺して少年を苛み始めるのか。

―随分と慣れたはずだった、血の繋がった者のいない『孤独』

押さえようとしても、押さえられるモノではないこのどうしようもない孤独感は…大切な人達がずっと支えてくれたことでどうにか和らぎ、そうして今まで生きてこられたというのに。

しかし、両親を失い他の血の繋がりを知らぬ文字通りの『天涯孤独』だと思っていた自分の前に、突如現れた『血の繋がり』が…

―まさかこの『異変』を起こした張本人だなんて。

「あ…ぁ…」

それに加え、自分の存在を認めさせるために必死になって戦い抜いた【決闘祭】も…自分の手で勝ち取った戦績や功績のその全ても…

―倒すべき『敵』に、ずっと利用されていたというコトが…遊良の心に傷をつけ、更に深く爪あとを刻ませて。

目の前が遠くなり、意識が遠のく。

…悔しさと無力さ、喪失感と虚無感。

微かに搾り出された嗚咽のような声も、足の力を更に脱力させて、容赦なく遊良の膝を折る手助けをしているだけ。

…そうして、力なくその場に膝を突いてしまった遊良は…頭を垂れ、うなだれたまま肩を振るわせ始めた。

「…憐造、貴様ここまでして一体何をしようとしているんだ！『復讐』と言ったが…私と同じ、釈迦堂への恨みか!?ならばなぜ関係の無いこんな子どもまで巻き込んだ！」

そんな遊良を一瞥して、憐造へと向かって砺波が口を開いて。

確かに砺波も、遊良へと向かって理不尽な物言いを数多く行ってきた。

しかし、今まで抱えていた『Ｅｘデッキを使わないデュエル』への否定も、ランへの『復讐心』を拗らせた遊良への的外れな怒りも…その全てを吐ききることが出来たから今だからこそ言える言葉を発して。

己を回帰したからこそ、そのあるまじき失態を今になって悔やんでいるかのようでもあり…たった今、憐造が遊良の心を躊躇無くへし折ったことに対しても否定を見せるのか。

そんな砺波へと向かってもなお、憐造は無感情な声質で淡々と言うのみ。

『フッ…お前と一緒にするな【白鯨】。負けた言い訳を続けてきたお前と。』

「…なんだと？」

『私にとって釈迦堂などどうでも良い、全てはあの日負けた私が原因なのだから。紫魔家とはそういう場所だ…だが私にも…どうしても許すことの出来なかったことがある。』

「許せなかったこと…だと？」

彼らに忘れられるわけがない、運命を分けたあの日。

そう、１０年前…時の王者３人が、まだ年端も行かないたった一人の少女…否、【化物】を相手に敗北を喫したあの日。

決して世に出ることは無いであろう事実とは言え、しかしその時の【化物】が残していった傷跡は大きかった。

だからこそ、１０年という長きにわたって砺波は恨みを糧に過ごしてきたのだし、逆を言えば『１０年間ずっと忘れることの出来ない程の恨み』を、釈迦堂　ランという女は王者たちに与えたはず。

そうだというのに、憐造の口から発せられるのはランへの恨みにあらず。

憐造は纏った恐怖を増していき、全く別の方向へと向けた怒りを露にし始め…

『…私にはどうしても許せない…私の娘というだけで、この子にまで害をなした『この世界』が、私にはどうしても許せないのだ！』

「なっ!?」

『何故世界はこうも醜い！敗北した私ならばともかく、何の罪も無い我が娘が、何故私の娘と言うだけで虐げられなければならないのだ！傷つけられ、弄ばれ、嬲られ、辱められ！何故!?私の娘が、何故こん

な恥辱を味わわなければいけないのだ！』

憐造のような存在から語られるは、ただ一点の思いだけ。
年端も行かない、自分で生きていくことすら困難な歳で社会に放り出された自分の『娘』が味わった、醜い人間達からの羞恥と侮蔑。
かつて、『そこ』で何があったのかを知る者は、きっと当事者であった者達だけであろうが…それでも、溢れん限りの怒りを露にして、憐造は更なる憤慨を見せるのみ。

『娘の身の安全を約束する代わりに、『奴』に命まで渡したというのに…『奴』との約束は果たされず、死に行く寸前に見てしまったのだ。世界に絶望し、悲嘆に打ちのめされた娘を。』

過去、憐造とヒイラギに何があったのか…
ここまでの復讐心を得られるまでの『何か』があったことには変わり無いものの、憐造の凄まじい復讐心は、全て『娘』に代わって執り行われる彼の本意。
『娘』を嘲笑った人間を、関係の無い者まで全て含めて飲み込むのも…『娘』を厳しく突き放した世界を、関係の無い場所まで含めて全て滅ぼそうとするのも。

―全て、彼にとっての『復讐』…ひいては、『娘』のために執り行われる、理不尽な蹂躙の仕返しなのだ。

『だから私は蘇った。失意のうちに今にも消え行く命だった私の魂と、ばらばらになった私の体を【神】が繋ぎ合わせ…私に、娘の『復讐』を実行できるだけの力をくれた！だから私は世界を飲み込む！釈迦堂も、『奴』も！全ての人間を私は許さん！娘を絶望させた人間など全て消し去り、娘一人のために世界を造り変えてやるのだ！』

砺波のような『個人』へと向けた怒りではなく、『娘』を見限った『世界全て』への怒りとともに憐造の言葉は益々狂気を纏い始め…
今にも世界全体を一瞬で飲み込まんとするほどに狂い始めて。

…そう、狂っている。

全ては『娘』のためなのだと、邪悪な力によって歪んだ愛情を間違った形で世界にぶつけているだけ。
しかし、人知を超えた力によって『闇』を使役している憐造は、最早誰にも止めることなど出来ないのか。

…憐造にとって、世界の全てがどうでもいい。

娘以外の人間がどうなろうとも、全ては娘のためになればそれでいいのだと、その思いだけでこの世に留まっているのかと錯覚するほどに、今の憐造の気配は禍々しく…

「そんな馬鹿げたことを…ヒイラギさん！君はそれでいいんですか!?世界中から人々が消えた世界で、たった一人になることを！」
「…ホホ、こ、こんな腐った世界……消えるなら…本望、ですわ…」
「くっ！」

当の『娘』本人がソレを望んでいるのならば、益々止められるはずがなく。
…いや、例え本人がソレを望んでいなかったのだとしても、最早人ではなくなってしまった憐造の形をしたこの存在が、ここまで狂ってしまっていてはきっと誰の言葉も届かないだろう。
きっと憐造の内に潜む、『娘』への歪んだ愛情のみで動いている『闇』が…ひとりでに、世界を飲み込んでいただろうから。

『計画は最終段階だ。『闇』による『隔離』が完了した今、外からの手はこの街には届かん。【白鯨】の中で育てた『闇』で、先ずは娘を絶望させたこの腐った街を飲み込む。そして増大した『闇』で『この国』を飲み込む…そして最後には、『世界』の全てを飲み込む！そうすれば、全ての人間はこの世から消え去るのだ！』

増大していく憐造の『闇』、勢いを増していく『闇の塔』。
決闘市全域を包み込んだ、空を覆いし『闇』が今にも自重を崩して降り注ごうと荒ぶり…

「ホホホ…こうなってはもう誰も、父様を止めることなど…出来ません…」

今にも『闇』が弾けそうに、雷雲にも似た音が鳴り始めた…

―その時だった。

―！

突然、黒き火球が室内で弾け、爆音と共に熱風が当たり一面にまき散らかされて。
瞬間的に『闇』が地面から噴出し、その火球が憐造へと届くことは叶わなかったものの…しかし、明らかな怒気を孕んだ圧力がスタジアム内に蔓延しだしたことを、ここにいる誰もが感じたことだろう。
そうして、その声の主が明らかな苛立ちを隠さぬ声で口を開いた。

「さっきからゴチャゴチャ抜かしやがって…いい加減こっちはイラついてんだよ、テメェコラれんぞーがぁ…」

そこには、誰の目にも明らかなほどに苛立ち…怒気を隠さぬ迫力を前面に押し出して、心の底から憤怒を放出している鷹峰の姿が。

『フッ、弟子を利用されて怒るとは随分人間らしくなったものだ。』

「あぁ!?んなこたぁどーでもいいんだよこのクソが！勝手に利用されて、勝手に潰れんのはこいつの勝手だ！んなことより…俺の方もテメェにゃ晴らしてぇモンがたっぷりあんだ。忘れたとは言わせねぇ…」

『はて、そんなモノがあったか？なんだったか…』

絶望を与えられ、心を折られた弟子を一瞥することもなく。

ここで折れたまま終わるのか、それともまた立ち上がれるのかは弟子しだいなのだと、過去の経験から鷹峰は知っているからこそ、あえて彼は何も言わな…いや、鷹峰にとっては、今この時には『そんなこと』などどうでもいいのか。

ただ鷹峰に浮かび上がっているのは、憐造へと放ちたくて溜まらない、純粋なモノに違いなく。

「とぼけんじゃねぇ！俺ぁ確かに言ったぜ？『俺様を顎で使おうたぁ、覚悟しとけよ。』ってなぁ…テメェが【決闘世界】の人間を裏で操ってたネタは上がってんだ！」

以前から幾度も、『仕事』と称して鷹峰に指示を出していた【決闘世界】の重役の一人。

確かに鷹峰のような人物とコンタクトが取れ、また彼に仕事を依頼できるような人物は限られているとは言え…しかし、その裏にいた憐造のことを、『事の初め』から知っていたかのような物言いは、決して誰かのための怒りではない。

―それは、本当に周りの事などどうでもいいと思っているかのよう。

鷹峰に許せないのは、唯一つ。

「この俺様を…よくも散々こき使ってくれたなぁ！れんぞー如きが調子に乗りやがって…こっちはもうイライラしっぱなしで爆発寸前なんだよ！」

『フッ、どこまでも自分本意の人間だ…いや、貴様も既に人ではなかったか。いいだろう【黒翼】。貴様にはまだ利用価値はあったが、ここで弟子諸共消してやる。…ヒイラギ、デュエルディスクを私に。』

「なっ!?憐造、公的に故人になっているお前は『決闘権』が無いはず！それではディスクが反応するわけが…」

『フッ、そんな『人の理』など私には関係ない。…では、始めようか、【黒翼】…』

どす黒い狂気と、爆発寸前の怒りが…

…ここに、ぶつかろうとしていた。

―…

「何が…起こってるの？」

先ほどから決闘市の空を覆い始めた、曇天よりもなお暗い『闇』の広がりをその目に入れながらのこと。

先ほど守った『家』の窓から決闘市の空を見ていたルキが、不安げな声を漏らしながらそう呟いた。

家の外には、先ほどルキに一瞬で倒されて未だ意識を失っている住人たちが大勢倒れて居て…
また、未だ街の中の所々から悲鳴と争音が聞こえてくるとは言え、この辺り一帯の敵と『闇』は先ほどルキを守るために降臨した竜の【神】が消し去ったために静かになっており…しかし、今となってはこの静けさが逆に不気味にもルキは感じているのか。

「何だか…嫌な感じがするよ…遊良…鷹矢…」

そんな彼女の心配は、罠である可能性の高い場所へと自ら飛び込んでいった幼馴染達へと向けられていて。
どうにも昔から無茶を絶やさない男共を、こうして待っているだけしか出来ない自分と合わせて腹立たしく思うものの…それでも無事だけを願う彼女からすれば、どうにも心配が絶えないことに違いなく。
街に広がる『闇』から感じる、狂気染みた悪意に寒気を感じながら…ルキが再び窓の外へと目をやった…

―その時だった。

―！

静けさの向こう側から、ブルブルと震わせられる機械音が確かにルキの耳へと届けられ始め…
出て行くときにも聞いた、間違えようの無いエンジン音は紛れもない、鷹矢のモノ。
そうして、どんどん近づいてくるエンジン音が『家』の前で止まったとき…鷹矢の足音が地面に着いたと共に、勢い良く家の扉を開けたルキが飛び出してきた。

「鷹矢！」

「うむ、帰ったぞ。」
「『帰ったぞ』じゃないよ、もう！心配したんだからね！」
「心配など無用だと言っただろう。しかしこっちはあらかた片付けておいてくれて助かった。おかげで帰りが楽だったぞ。」
「…大変だったんだけどね。」
「うむ、見ていたから知っている。」
「…え？」

ルキからしてみれば、鷹矢が何故ここであったことを知っているのかが疑問ではあるだろうが、しかし詳しく話す気も時間も無い鷹矢からすれば、ここで悠長にしている場合ではないのだろう。
エンジンも止めず、バイクからも降りず。まるで、今にもどこかへと向かおうと逸っているかのようにも見える。
そんな鷹矢は、手招きをしてルキに後ろに乗るように促した。

「十文字から聞いたのだが…どうやら遊良ともう一人の男が、街外れのスタジアムに行ったらしい。」
「え、う、うん。そうだけど…」
「とりあえずセントラル・スタジアムの方は十文字に任せて先に帰ってきたのだが…しかし、十文字がそのもう一人の男との連絡が途絶えたと言ってきたのだ。遊良にも何かあったのかもしれん。」
「え!?そ、そんな！は、早く行かないと！」
「そう言っているだろうが！だからグズグズするな、早く乗れ！」
「う、うん！」

そうして、帰ってきたばかりだというのに、間髪いれずに再度別の目的地へと向かって発進し始めた鷹矢とルキ。
住み慣れたはずの決闘市から感じる、どうにも居たくないような嫌な感覚と共に鷹矢とルキが感じるのは、今ここに居ないもう一人の幼馴染が傷付いているような…そんな、言葉には形容しがたい心の内。

「十文字の方も後始末を片付けたら向かうらしいが…しかし、どうにも嫌な予感がする…」
「私も…遊良、無事でいて…」
「…ふん、この俺が無事なのだ、遊良の奴が無事でないはずがない。」

まるで、自分にそう言い聞かせるようにして…天宮寺高等計算術によって導き出された答えと共に、鷹矢は一層エンジンを吹かして疾走し始めた。
空に広がる『闇』への嫌悪と、胸の内に渦巻いた遊良の安否を感じながら。

―…

ｅｐ４６「咎人の報い」

―…

今よりおよそ１０年前。
記録的な雨が降り続き一向に止む気配のない雨音が誰の気持ちをも沈めているような、そんなとある日の、とある場所。
薄暗くなった街の中、地に額を擦りつけ、体裁など全て捨て去って…雨にその体を打たれて、無様な格好で必死になって懇願している男が一人、そこには居た。

「景虎さん、頼むよ…どうか…どうかこの子だけは…」

…全てを奪われ、全てを失った。

ソレが油断だったのか、それとも恐怖だったのか…『底知れぬ恐怖』と謳われていた自分が、よもや他人から『恐怖』を与えられるなど、この男も思ってもいなかっただろう。
それでも、起こってしまった事はもう変えられるわけがなく、名を失い、力を失い、金を失い、そして全てを失った男に、どうにか残った『たった一つ』の、何よりも大切なモノを必死になって守ろうとしているその姿は形容しがたいほどに痛々しく…
その、必死になって懇願しているその姿を…

彼の目の前に立っている、傘を差した老人は厳しい目で見つめているだけ。

「憐造…お前は紫魔家のしきたりで、既に【紫魔】ではなくなった男じゃ。…名も無くした貴様とワシには、もう何の関係も無いはずじゃ

ろ？」
「頼む…お、お願いだ…」
「知らん、全ては負けたお前が背負う罪。ソレに対して、ワシが手を貸す理由にはならんよ。」
「ヒ、ヒイラギは違う！ま、負けたのは俺だ…だ、だから娘には何の罪もないんだ…」

雨の冷たさのせいか、または全てを失った故の自棄か…震える声で、最後の最後に頼ることの出来る綿貫に、必死になって懇願し続け娘の安否を願うこの男。

…紫魔　憐造と、呼ばれていた『男』

そう、『呼ばれていた』のだ。

少なくとも、ほんの数日前までは全世界の融合使いの頂点に立っていたはずの男であり…その風貌は世界中に知られている程の有名人で、またそのデュエルに世界中の誰もが憧れたほどの決闘者であるはずなのに…

いや、デュエリスト『だった』と言った方が正しいか。

【紫魔】という、一つの家系の苗字がそのまま【王者】の名になるほどに、世界中でも類を見ないほどに巨大な富と権力を持つ『紫魔家本家』。
そして、外からの介入を許さぬ古のしきたりを『絶対』としている彼ら『紫魔本家』だからこそ、先日起こった当主の『不祥事』に対しても、少しの酌量も無く『罰』を与えるのみ。
そして、【紫魔】として長年紫魔家に貢献してきた憐造が、その座を無理やりに降ろされて追放された理由など…『この時』においては思い浮かぶ理由など一つしかない。

「…はぁ…【王者】ともあろう者が全員、小娘一人に完全敗北とは…何と無様なことじゃ、全く。」
「ち、違う、あれは小娘なんかじゃ…」

『この時』に起こった大事件。
この紫魔家の不祥事の少し後に、【紫魔】と【白鯨】、二人の王者が揃って表舞台から姿を消すこととなるこの世紀の大事件は…後の世まで語られることになる出来事となるも、その真相を知る人間は極少数の限られた者のみ。

—まさか、たった一人の少女に、世界が誇る【王者】達が敗れたなど、一体誰が公表できようか。

そして、それは紫魔本家においてもただ事では済まされず。

…負けた者は、【王者】ではない。

古より続く絶対の決まり。
自らの限界を感じた引退や、不慮による急逝以外に、『召喚法』という区切りがある故に同じ高みに立つ【王者】との戦いはまだしも…『それ以外の者』に負けるということなど、悠久の遥か昔からデュエリスト達の頂点を謳う紫魔本家においては何があっても許されることではないのだ。

…『蟲毒』を生き延びた者が【紫魔】となり…【紫魔】でなくなった者は『孤独』へと送られる。

今こうして憐造が娘を連れて紫魔家から『逃げ出して』きたはいいものの、いくら元王者とは言え巨大なる紫魔家の追跡から一個人が逃れられる術は無く。きっとすぐにでも連れ戻され、有無を言わせず地

下深く幽閉されて、二度と日の光の当たる場所へと帰ることは叶わなくなるだろう。
そして、それは【紫魔】の血を引く子であっても同じ。
関係を断った者ならばいざ知らず、憐造に一人残された幼い娘であっても、その血を引いているのならば例外なく父と同じ判決を下されるのが紫魔家の掟なのだ。
弱者はその血から絶やし、次なる『蟲毒』を生き抜いた強者を長として置いておく。そうして弱者を排除し、強者を常に維持しておかなければ紫魔家が封印している【紫魔】を抑えることが出来なくなってしまうからと、紫魔家の開祖である原初の英雄が定めた古の掟で、そう決まっているから。

「な、何でもする、何でもするから…だから頼むよ…景虎さん…」
「何でも…か。随分と意味のなさない『何でも』じゃ。本当に哀れな男に成り下がったものじゃのぅ。野心に満ち、人を人とも思わぬ暴力でここまでのし上がってきた男が…たった一人の娘のために頭を地に擦り付けるなぞ、決して褒められた姿では無いわい。」
「た、頼むよ…お、お願いだから…」

地に頭を擦りつけ、もう何度目かわからぬ懇願を、必死になって頼み込む男の姿は決して【王者】とは呼べない姿。
そんな姿を見てもなお、いくら【妖怪】と言われる綿貫　景虎が数多くのデュエリスト達に慈愛を注ぐ先導者とは言え、目の前で懇願する最早『人』としても扱われないこの哀れな男と関わることが、どれほど『紫魔本家』の怒りを買うかを理解しているのだろう。

―超巨大決闘者育成機関【決闘世界】

その規模は全世界にまで及び、またその組織が持つ権力の大きさだけで比べれば、『紫魔本家』よりも上位に位置していることは事実ではあっても、一つの『家系』が『ここ』に次ぐ権力を持っていることが

恐るべき事実。人間一匹消すことなど、紫魔家にとってはささいなことなのか。
また、紫魔家の上層部にも【決闘世界】に所属している人間が少数いることから、【決闘世界】の重役である綿貫　景虎であったとしてもおいそれと勝手な判断を下すことは出来かねる様子を見せていて。
娘とはいえ勝手な慈悲をかけることが、紫魔家との間にどれほどのいざこざを生むのかを、綿貫は知っているから。

「なぁ景虎さん…あ、あんたならヒイラギ一人くらい何とか出来るだろ？…俺はもう無理だ…もう追っ手がすぐそこまで来ている……け、けど娘だけは…まだ子供なんだよぉ…」
「…それはのぅ…確かに可哀想じゃとは思うが…はぁ、貴様もまた、人の親…か。」

それでも自分の事よりも娘の安否を第一に考えられるだけ、野心に満ち溢れていたこの男もまた人の親だったのだと、幼き頃より憐造の活躍をずっと見てきた綿貫の心に浮かぶのは、それもまた親心に近いものなのだろうか。
既に【王者】では無いからこそ、恥も外聞も捨て去って、自分に残されたたった一つの大切なモノのためにここまで体裁を投げ捨てられる憐造のその姿と…

「…はぁ…」

雨に打たれながら懇願する男の後ろに、何が起こっているのかを理解出来ていないかの様に…
無気力な顔で絶望だけを露にしている一人の少女の姿を綿貫が見て、その口から重々しい溜息をついた。
しかしその少女からすれば、状況が分かるはずが無いのも当然だろう。
昨日まで広い家に住み、人の愛に包まれ、何一つ不自由なく暮らし

ていたはずの子どもが、その全てを急に失ったのだから。美しく伸びた髪が雨に打たれ、その表情をより一層暗く見せ…

そんな、希望しか見えていないはずのこの歳の子どもがこんな顔をしていいものかと…憐造を冷たく突き放したとは言え、後進達を育ててきた景虎からしても確かに胸打たれるモノがあるのか。

嫌そうに…それはもう心の底から嫌そうな声で…憐造だった男へと、再び綿貫は声をかける。

「…何でもすると…そう言ったかいのぅ憐造や…」

重々しく、苦々しく。

綿貫もまた、自ら被るであろう面倒と負担、そしてそれ以上に起こるであろういざこざを考えたからこそ、それでも最後の譲歩を与えてやるために。

「…じゃったら、お前の娘を何とかしてやる代わりに、お前はワシに何をくれる？紫魔家に睨まれることになるであろう、このワシに。」

「…な、なんでも！…何でも、差し出すよ…なんなら、い、命だって…」

「命…最早、死人同然と扱われるお前の命に、一体どれほどの価値があるというのじゃ。全く持ってワシには何も残らん。そんな意味の無い差出物では、ワシは動かんよ。」

これまで長い間、ずっと見てきたはずの憐造であっても、突き放すような言葉と厳しい物言いを崩さない綿貫の態度は依然として頑なで。

【妖怪】のその真意は果たして何を思っているのか。

本気で哀れなこの男と関わるのを嫌がっているのか…はたまた、憐造の親としての残滓を問うているのか…その深淵にある翁の意思は、決して本人にしか分からぬ物。

そうして、自身の命すら差し出すに値しないと告げられた憐造がソレを聞いて何を思ったのか。思いつめた顔で、今にも崩れ落ちそうな

顔で…
ゆっくりとその懐からあるモノを取り出した憐造が、その手を綿貫へと向けて伸ばして。

…そして、そこにはデッキが、一つ。

「…だ、だったら…こ、これを…何とか持ち出せた俺の、い、命と…同じくらい大切な…このデッキを…」
「…ほう、お前以外に使える者の存在しない哀れなカード達か…なるほど、お前自身と違い、相当な文化的価値はあるかいのぅ…ま、それならよかろう。」

己の命で足りぬというなら、命と同列、またはこのデュエルが全ての世界では命よりも優先されることのある、『カード』を差し出すという憐造のこの行為。

それも、ただのカードではない。

世界中の決闘者たちの、頂点に立ち続けてきた男を体現する【王者】のカード。かつて、たった一枚のソレを巡って国家間での最終対立すら起きかけたことはこの世界の歴史においても証明されてることなのだ。
―その、【王者】のカード…ひいては、デッキ一つが持つ価値が如何ほどのモノなのかは言うに及ばず。

それを自ら手放してでも、男は娘を助けることを選んだのだ。

命を差し出すのと同じ…そう、はっきりとした形を持って差し出されたまさに『命』を憐造は手放して…そうして、それを受け取った綿貫。

「…確かに受け取った。このカードに誓って、お前の娘の暮らしを保障してやるわい。」

—契約は、結ばれた。

「…父様…」

そんな見たことの無いような父親の必死な姿と…全てを失ったことだけを理解している少女の口から零れた悲しい呟きだけが…

—雨の音に、掻き消されていった

…

そうして、どれほどの月日が経ったのか。

…娘と引き離され、地下深く幽閉され。

光届かぬ場所で力なく地面に横たわり…見えない『闇』の中で、開いているのか閉じているのか分からない『名も無い男』が、その意識を閉じようとしていた。

…娘は、無事だろうか…

最早男の脳裏に浮かび上がっているのはその思いだけ。幽閉された当初は喚く力もあったものの、時間も知ることの出来ないこんな場所では、すぐにその力すらも暗闇に溶けていって無くなっていて。

それでも、今この時までこうして何とか命を繋げていられたのは、【紫魔】として生きてきた人生の中で常に世話になってきた綿貫という信頼の置ける相手に、娘を預けることが出来たからこそ。

あの人に任せたのだから、きっと娘はこれからの人生を取り戻して

生きてくれるだろうと、それを確信できただけで男の心残りは既に無く、あとはここで力尽きるのを待つだけ。

―そうして、そのまま男の意識が安らかに、そして静かに闇の中に消え始めた中で…

―男は、見た。

(…なっ…何なのだ…これは!?)

それは、体だけでなく、心まで傷付き、絶望の淵に立たされているかのような少女の目。

下層の者達からの鬱憤なのか、肌理細やかだった柔肌に殴られた跡が痛々しく体中に残って…受け止めきれない年齢にも関わらず汚い大人たちの慰み者として扱われ、恥辱にのたうち苦しむその姿…

(何故だ、何故だ…何故だ!)

―そう、傷つけられ、痛めつけられ、嬲られ、辱められている、自分の娘の姿を。

それは走馬灯などでは断じてなく、消えていく意識が見せた幻などでもないことを名もなき男はどうしても理解してしまっていて。

もし無意識が見せている深層心理であったならば、もっと娘は幸福に過ごしているはず。それに、これほどはっきりと娘の苦しむ姿が見えているというのに、それは眼で見ている景色ではなく、『何か』に見

せられているのだと感覚から男は理解してしまっていたのだ。
最早先に逝ってしまった体を動かすことなど叶わず。声を荒げたくとも何も響かず。

（何故ヒイラギがあんな目に!?景虎さんは！景虎さんとの約束は!?）

これが単なる幻だったならば、男にとってどれほど良かったことなのだろう。
夢幻に散り行く間際に、地下深い『孤独』が見せる最期の絶望…そんな時分の虚言と妄想の果てであったならば。

―しかし、どうしても男には分かってしまっている。

この光景が、天に召され行く魂が見ている『本物』の…今、現在、この時に、確かに起こっている光景なのだと。
それがどうして見えているのか。そんな事にまで意識を割くことなど男には出来ず。しかし、『何か』によって見せられていることだけを理解させられているからこそ、その身得ている光景に対して、さらに絶望を募らせるのみ。

（何故…ヒイラギがこんな目に遭わなくてはならない…）

恥辱、屈辱、汚辱、困辱。
まだ年端もいかない我が子が受ける、これほどまでの辱めに対して昇ってくる男の感情は果てしなく重く。
そして、安全を与えられたはずの娘が傷付いているという、それに対するどうにも出来ない歯がゆさと怒り…綿貫　景虎に、己の命よりも価値があると言わせしめたデッキを渡し、そうして彼が約束したはずの娘の暮らしが、全くなされていないという事実に対して感じる、どうしようもない怒りと悲しみ…最早、召されかけている男はその感情しか感じられず。

―シマ　レンゾウ…『何』ヲ望ム？

その時、どこかからか聞こえてきた謎の声。
人の声のようでもあり機械の声のようでもあり…心の深層へと直接響いているような、そんな不可思議なモノではあったものの、それに対して違和感を感じるような命は、最早男の中にはなかったのだが。

驚きはしない、そんな『些細』な超常現象などどうでもいいくらいに、今の男の中には怒りしかないのだから。

閉じる口も、既に持ち合わせていない男の意識は…己に浮かび上がっている、『ただ一つの感情』だけを思い浮かべて、声に応えるのみ。

（…復讐を…娘をこんな目に遭わせる物全てに…復讐を…）

一体この声が何なのか。そんなことなど、既に事切れている男にとっては無用の疑問。

ただ単純に、ただ純粋に。

望むのは、ただそれだけ。

――ヨカロウ…望ムモノヲ…与エテヤル…シカシ…ソノ『代償』ニ…

そうして、『声』が最後の審判を下して…

―オマエ自身ヲ…頂ク…

光届かぬ地下深くのこの場所に、さらに湧き上がるはっきりとした深淵の闇。

光がなければ影は出来ぬと言うけれど、そんなことは人の常識。光など無くとも影は出来る。そう、この場の暗闇よりも、更に深い暗闇さえあれば…『孤独』と呼ばれる地下深い場所にある『闇』よりも、なお暗き『闇』がそこに生まれれば…そこには、確かに影が出来上がり…

その中に命尽きていた男が飲み込まれていき、消えていくだけだった魂と朽ちかけていた体を『闇』が繋げて隙間を埋めていく。

…そうして、そのまま、男は姿を消した。それは丁度、男の死が世間に公表された時期と重なっていて。

…

そうして、再びどれほどの時間が経ったのか、そのまま長い年月をかけて、命消えた体に再び魂が宿った。

それが果たして『人』なのか。それとも『別の存在』なのか、それ

はこの時には誰にもわからないことであり…
前の命の時とは比べ物にならない程の力と怒り。今にも弾け飛びそうなほどに煮えたぎった復讐心と、内に蠢く『闇』だけが彼を動かすのだろうか。

その目に映るは、腐った世界。
世界全てへと向ける怒りと、たった一つの大切なモノだけが彼を再び立てるように仕向けたのだ。それは丁度、彼の娘と同じ名を冠した花が散り始める時期であり…

『復讐を…娘を傷つけた世界に…復讐を…』

湧き上がる、『ただそれだけの感情』と共に…『闇』は、その場から姿を消した。

―…

「大体俺ぁテメェの、他人ばっか顎で使うその態度が昔っから気に入らねぇんだ！【超銀河眼の光子龍】と【超銀河眼の光波龍】で攻撃ぃ！」

絶えることの無い爆発音と、『何か』と『何か』がぶつかり合う激突音が響いているスタジアムの中。
『人』の形をした、【化物】達が叫びあう音が木霊して反響し…そのあまりの激しさと、実体化した本物の攻撃と爆炎が周囲に飛び交ってい

るためか、２匹の【化物】は決して一箇所に留まることなく、常に動き続けて激闘を繰り広げていた。

『自分の事しか考えない貴様に言われる筋合いは無いよ、カウンター罠、【攻撃の無力化】！』

「ちっ、だったら２体のレベル１０モンスターでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク１０！【超弩級砲塔列車グスタフマックス】！」

『その特殊召喚成功時、墓地の罠カード、【迷い風】を再びセットする！』

「それがどうしたぁ！グスタフマックスの効果発動！吹っ飛べ、れんぞぉぉぉぉお！」

『甘いな、速攻魔法【痛魂の呪術】発動！吹き飛ぶのは貴様だ【黒翼】！』

…いや、これを『激闘』と言ってもいいのだろうか。

互いが互いの手を限りなく潰しあい、互いが互いを全力で喰らい尽くしにかかって。

全く脈絡の無いように見えるカード達が全て繋がり、およそシナジーを見つけることすら困難であるだろうカテゴリーの組み合わせをいとも簡単に行い、ひとつ間違えれば悪手に終わるような妨害手を、確実にピンポイントなタイミングで揃えて対応する。

そしてそのターンすらも、今がどちらのターンを行っているのかを見失うほどの速度で決闘と【化物】達が動いているのだ。

一体、このデュエルが始まってからどれほどのターンが経過し、またどれほどの鬩ぎ合いを繰り広げたのか…それを理解出来ている者が、果たしてこの場にいるのかどうか。

およそ常人では理解できるはずも無い。そう、この狂った鬩ぎ合い

は、決して常人が真似など出来る代物などではなく。
…きっと、同じ場所にいる【化物】でしか分かり合えることはないモノなのだろう。

『全ては『娘』の受けた苦しみを、全ての人間に返すだけだ！この腐った世界の全ての人間に！【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】を召喚し【融合】を手札に加えてソレを発動！場のバブルマン、ブレイズマン、ディアボリックガイの３体のＨＥＲＯでユウゴウショウカン！出でよ、【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】！』
「知るかってんだ！罠発動、【奈落の落とし穴】ぁ！」
『ならば【ミラクル・フュージョン】を発動！墓地のソリッドマンとバブルマンを除外融合！出でよ、【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】！更に速攻魔法【マスク・チェンジ】発動！アブソルートＺｅｒｏを素材に変身召喚！【Ｍ・ＨＥＲＯ　アシッド】！』
「だったら罠カード、【エクシーズ・リボーン】を発動だぜ！墓地から【真紅眼の鋼炎竜】を特殊召喚！」

爆ぜては収まり、収まっては爆ぜるカード達の応酬。
その終わらぬ攻防と、潰されても防がれても、決して止まることのない猛襲の折り重ねが場の状況を常に混沌と化しており…
この、いとも容易く行われるえげつない行為の数々と、狂った【化物】たちが織り成す互いへの饗宴は、ここで見ているしか出来ないその他の『人間』からすれば文字通り『次元が違う』と言う他ないことは必至。
目で追えない程に目まぐるしく場が入れ替わり、手札にもデッキにも墓地にも場にも、いつの間に『そう』なったのか分からなくなるほどに戦況が簡単に変化して。
常に動いているために、攻撃の直撃はないものの、それでも発生す

るダメージによって、ＬＰの増減は確かに起こっている。

…そんな目まぐるしく入れ替わるターンが、今の戦況をより理解しがたいモノと変貌させていることはまず間違いないだろう。

倒されては呼び出され、次々に繰り出されるモンスター達。矢継ぎ早に続けられる、全身全霊の打ち合い。

およそ常人程度では回すことも出来ないようなデッキをさも簡単に扱い、その全ての行動が確実に相手を屠るために繰り出され…殺気の塊と殺意の鈍器をお互いに遠慮も無くぶつけ合って、お互いがお互いを葬り去ることしか考えていないかのよう。

「この俺様を顎で使った代金は高付くぜ、ただで済むと思ってんじゃねぇぞゴラァ!!【ＲＵＭ―デス・ダブル・フォース】発動ぉ！墓地から【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン】を呼び出し、コイツ一体でオーバーレイ！エクシーズ召喚！来い、ランク１２！【ＲＲ―ファイナル・フォートレス・ファルコン】！さらに【ＲＵＭ―ラプターズ・フォース】を発動だ！墓地から【ＲＲ―アーセナル・ファルコン】を呼び出し、コイツ一体でオーバーレイ！エクシーズ召喚！来やがれ、ランク８！【ＲＲ―サテライト・キャノン・ファルコン】！テメェの魔法・罠を全部破壊してやんぜ！」

そうして戦況を何とか理解しようとして目を凝らしている内に、ターンが終わってターンが始まって、またターンが終わってターンが始まって…

鷹峰が次々にエクシーズモンスターを繰り出し、決して弱めることなく行われる憐造への猛襲は…そこら辺に多々いる『最上位レベル』の決闘者とて、一瞬で消え去りそうな代物だというのに、その猛襲すら涼しい顔で憐造は捌き切っているだけ。

『貴様もさっさと神の『闇』に沈むがいい！罠発動、【Ｄ―フュージョン】！【Ｄ―ＨＥＲＯ　デッドリーガイ】と【Ｄ―ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】を融合！ユウゴウショウカン！出でよ、レベル１０、【Ｄ―ＨＥＲＯ　ダスクユートピアガイ】！そして効果で連続融合！手札の【Ｄ―ＨＥＲＯ　ディバインガイ】と【Ｄ―ＨＥＲＯ　ドリームガイ】でユウゴウショウカン！出でよ、レベル８、【Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ】！ＬＰを８００払い、装備魔法【再融合】発動！蘇れ、【Ｄ―ＨＥＲＯ　デッドリーガイ】！』

また、その逆も然り。

そして繰り返す応酬の果てに、さらに始まる憐造のターンでまた途切れることなくモンスターを繰り出し、鷹峰へと向かって『闇』を向かわせ爪を立てて。

その『歴戦』を潜り抜けてきた強者すら、嘲笑いながら葬り去らんとする猛攻に次ぐ猛襲を、いとも簡単に捌き切る鷹峰もまた【化物】に違いなく。

「…一体、な、何がどうなっているんだ…」

そんな中、それを漠然と眺めていた遊良からすれば、全く持って理解出来ない戦いを繰り広げている２匹の【化物】達へと感じるのは絶望や恐怖ではなかった。

恐怖をも通り越した、与えられた絶望すら霞んでしまっているような…

―ただ、意味がわからないだけ。

これまで師を相手に、修行と称した一方的な蹂躙を経験はしてきた遊良ではあるものの、それでも【化物】同士の戦い、ソレらの持つ『本

気』と言うモノなど、今この時まで全く持って理解していなかったという事実を、まざまざと見せ付けられているのだから。
　また、先ほど受けた絶望的な事実すら軽く忘れてしまいそうなほどに禍々しいこの戦いを見て、鳴り響く爆音と、建物が崩れていく音だけが遊良の耳に反響し…そうしている内に、また戦況が変わっては動き出す【化物】達に、目が追いつかずに思考が停止しそうになるのを感じていて。

「…よく見ておきなさい天城君。あの二人の戦いを。」
「…え？」
「…君が鷹峰の相手を務めると言うのならば、君もあのレベルにまで到達しなければならないのですから。それがＥｘ適正を持たない君にとってはどれほどの苦行なのか、今の君ならもう理解しているでしょう？」
「あ、は、はい…」

　そんな遊良へと向かって…力なく座り込んではいても、この戦いを『何とか』目で追えているらしい砺波がそう言ってきた。
　しかし、あれほど自分の言葉を曲げようとしなかった砺波が、その怒りと復讐の矛先を『正しい相手』へと向けることが出来たとは言え、それでも今までの砺波の攻撃的な雰囲気に慣れてしまっていた遊良からすれば、突然のこの砺波の優しさすら感じる言葉に一瞬たじろいでしまった様子を見せていて。

　突然のその言葉に、何と言葉を返していいのかも遊良には分からず…

　確かに彼に巣食っていた、拗れた故の『間違った復讐心』は先ほど『闇』と共に放出された。とは言え、それがここまで砺波の態度を変えたことが、どうにも遊良には違和感を感じて止まないのか。
　確かに今まで生きてきて、他人から『敵意』を向けられている時間

の方が長かったとは言え…どうにも悲しいくらいの遊良の『慣れ』が、すぐにその砺波の態度を受け入れられずにいる様子だ。

「…フッ、今更私がこんなことを言うのもおこがましいですが…私だって理解していたのですよ…Ｅｘ適正の有無に関わらず、強者は強者なのだと。…それを、どうしても許すことが出来なかったが…しかし、今なら鷹峰の言っていたことが少しは理解出来るような気がします。」

―『王者の座を降りてでも…そこまでの価値がこの子にあると？』

―『さぁな。そこまでかは俺にもよくわかんねぇ。でもまぁ、切り捨てるには早いだけってんだよ。』

「【決闘祭】を優勝するほどの才を持っていたのだ、Ｅｘ適正を持っていないというだけで、確かに『切り捨てるにはまだ早い』のかもしれませんね…」

かつて砺波に、抵抗する間もなく退学させられそうになったあの日…遊良に『価値』があるのかという砺波の問いに、師が飄々と言い放った、『切り捨てるにはまだ早い』という言葉…

今現在、こうして【決闘祭】を優勝することが出来たからこそ、その言葉は『本物』となって世間に見られ始めたのは事実。

そんな今までの砺波からは思いもよらない言葉をかけられた遊良の心境はいかなるモノなのか。何と言って良いのかわからずに言葉に詰まってしまったまま、次に繋げる言葉を遊良が探し始めた…

―その時だった。

「テメェら何ぼさっとしてやがんだ！墓地から罠発動！【ＲＲ―レ

ディネス】！ダメージを全て０にする！」

――！

…寸前

まさに、目の前に迫り来た凄まじい衝撃波を纏った『闇』が、崩れかけた壁にもたれかかっていた遊良と砺波を飲み込む寸前だった。

その間に割って入った鷹峰が、また寸前で発動した罠カードによって遊良達の目の前で衝撃波が弾かれ…『闇』が辺りに散らばって、そのまま霧散していって。

『他人まで庇う余裕があったとは驚きだ。…随分と優しくなったものだな【黒翼】。』

「せ、先生…」

「ケッ、俺の行ったところに偶然こいつらが居ただけだっての。勘違いしてんじゃねーぞテメェら。」

「すまない、鷹峰…」

「チッ、謝る元気があんならとっととどっか行きやがれってんだ。ったく、邪魔なんだよ何時までもへばりやがって。」

鷹峰の真意が何なのか、それは鷹峰にしかわからない事ではあるものの…それでも、結果的に砺波と遊良が戦いに巻き込まれずに助かったことには変わらないだろう。

『私はカードを１枚伏せて、ターンエンドだ。』

憐造　ＬＰ：１０５００

手札…6→3
場：【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤ】レベル１０
【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤ】レベル１０
【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤ】レベル１０
伏せ…1枚

そうして、もう何度目かも分からぬターンの応酬の果て、目まぐるしく行われていた『デュエル』らしき行動の果てに、ようやく一時その場に立ち止まって、そのターンを終えた憐造。
生きているのか死んでいるのか分からないほどに不気味に漂うその姿は、もう既に人間技で無いのは誰の目にも明らかであり…
これまで世間が知っていた、『紫魔　憐造』という人間とは最早かけ離れた存在となってしまったことを、この場にいる誰もが理解せざるを得ないことは必至。
そんな、不気味な雰囲気の中で佇むその存在は、未だ体力が戻らず動けない様子の砺波へと向かって声をかけた。

『随分とすっきりした顔をしているじゃないか【白鯨】…フッ、お前のおかげで『闇』はコレほどまでに高まったのだから、それも当然といえば当然か…』
「…先ほど追い出した『闇』か…確かに、『闇』に取り憑かれている間、私の中でどんどん『闇』が大きくなっていくのを感じていたが…」
『そうだ。『闇』に抗えば抗うだけ、それだけその人間の中で『闇』は増える。負の感情が大きければ大きいだけ、精神力が大きければ大きいだけ、その精神を喰らい尽くせるだけの大きさに膨れ上がろうとするのだよ。どうだ？お前を支えていた復讐心が全て食われた気分は。それでもお前は再び立ち上がれそうか？』
「…それだけのために…私を利用したのか…」
『それ以外にお前に価値などあるのか？小さい復讐を拗らせていたお前に程度に。それらも全て餌として食わせてもらったがな。』

「憐造…貴様…」

ここまで回帰できたとは言え、確かにこの１０年もの長きにわたって砺波　浜臣と言う人間を支えていたのが『復讐心』には違いなく。
いや、厳密に言えば、砺波の中には今だってランへの復讐心は確かに残っていて。
だからこそ、砺波は折れてはいない。普通の人間であったならば、今まで自分の中にあった『根幹の感情』の喪失と、『闇』によって膨れ上がった『負の感情』がいきなり外へと喪失してしまったその虚無感によって、心が埋まるまで『目を覚ます』ことは困難になるはずだというのに…
それでも砺波に残っている『今』の復讐心は、拗れに拗れた間違った方向へのモノでは断じてない。
負けた自分が許せないからこそ、自分を下した少女に対して『次は勝利を』と言う、リベンジという名の復讐心へと思い直せたからこそ砺波は回帰できたのだ。それに伴って、釈迦堂　ランと言う存在と、全く何も関係の無い少年へとぶつけていた不快感も消えたことは事実。

今もこうして意識を保っていられるだけの精神力によって、己を保っていられるのだから。

それを理解しているからこそ、憐造もまたわかりきったことを話しているに過ぎず…

『まぁ、その感情がまた『闇』の餌でもあったのだから、いい養分となってくれたことだけは褒めてやるよ。…完全に飲み込んだ時、またはそれが放出された時に私に還元される『闇』もまた大きくなる。しかし流石は私と同じ元【王者】、まさか街一つ飲み込むまでに成長させてく

れるとはな。』
「…貴様に…貴様達に何があったというのだ。どうして世界を消さなければいけない、ここは…貴様も生きた世界のはずだ。それを、たった一人の娘のために…」

そんな中、砺波には未だに引っかかりを覚えることがあるのか。
かつて紆余曲折な多々あったものの、およそ３０数年という長きに渡って共に王座に着いていた【白鯨】と【紫魔】と【黒翼】。年齢的な面では８歳から王座に居た憐造が一番若いとはいえ、年齢と強さがイコールでは無いことは誰しもが理解しており…
いがみあってはいても、人生の半分以上を共に戦ってきた男達にとっては言葉よりも確かな決闘と言う行為で語り合ってきたはず。
だからこそ、砺波には信じられていない。幼い頃から野心に満ち、紫魔家の力を持って世界を治めるなどと豪語していたあの男が…暴力的な力で他人を屠ってきたあの憐造が、たった一人の血縁のために手中に収めようとしていた世界の全てを消し去ろうとしていることが。

『何度も言っている、全ては娘のためだ。それ以外に世界を消す理由など無い。私はこんな世界に未練など無いし、娘だってこんな世界は嫌がっているに決まっている…ならば、この子のために世界を消すことは、れっきとした理由となる！』
「その為に、他の人間達全てを犠牲にするのか！自分の子ども以外の大切な人間達も全て…」
『自分の子ども以外に、大切な者など存在しない！その他は全てが虚像、私を含めて全ての人間が虚像に過ぎない！』
「余所見してんじゃねぇぞゴラァ！俺のターン、ドロー！」

そして更に激しさを増してく戦いは、留まることをまるで知らず。

憐造から発せられる、復讐心に塗れている言葉と…鷹峰から発せられる、苛立ちを隠さない雰囲気と…その両方が混ざり合って、さらに戦いを混沌とさせていくのが目に見えて分かるほどに、この戦いの行方を更に不可思議なモノへと変えていって。

…モンスターの攻撃、魔法の打ち合い、罠の掛け合い。

一時もその場に立ち止まらず、モンスターと共にスタジアムであったこの崩れ壊れた場所を駆け回ってはお互いを本気で潰しにかかっている二人の行方もまた、常人には捕らえられないモノとなっていた。

「…ヒイラギさん！」

そんな中、この戦いの中にあっても父の行く末を見守っているのだろうか、戦いから目を離さないヒイラギへと向かって、呼びかけるようにして叫んだ砺波。

「あれから君に何があったのかは分かりませんが…それでも、君はこれで良いのですか!?苦しくても、君がこれまで生きてきた世界が、全て消えてしまうんですよ!?」

「…ホホ、何を言っているのでしょうか。これこそが虚像、こんな理不尽な世界が、私の生きる世界なわけがないのですもの！父様のおかげで、私はかねてよりの復讐を遂げることが出来るんですの。私を痛めつけた世界を、父様が消してくださいますのよ！」

まるで自分に言い聞かせるかのように、父の思いへと賛同の意を表す言葉を発するヒイラギ。

かつて彼女が味わった、世界に絶望するほどの過去を理解出来る者が、果たしてこの場にどれほどいるのか。世界が急に敵に回る恐怖など、およそ普通に生活している者が理解できるはずが無く…砺波の言葉が届いていないかの様に振舞うヒイラギもまた、その痛みを受けて

来たということに他ならないだろう。

「…これほど嬉しいことはありませんの…そう、これほど…」

そうして、爆発音が止まらないこの戦いの中で、始めてヒイラギがその顔を地面へと向けて俯きを見せた…

—その時だった。

「いい加減消し飛びやがれぇ！【黒炎弾】発動！」

戦いの最中、鷹峰の宣言と共に、その後ろから真紅の眼を持つ黒き竜が巨大な黒炎の弾を放ち…

『フッ、どこを狙っているのだ！そんな的外れな所を…』

全く狙いを外れて逸れていく黒炎を、憐造が一瞥もなく気にも留めなかった…その瞬間…

—小さく、少女の『声』が漏れた。

「…え？」

―!

「きゃぁぁぁ

己の持つ『異質』な『闇』を持ってしても、何故かその『闇』は命令を聞けず。娘への感情のみでこの『異変』を起こした存在であるが故に、何事よりも優先されるべきモノが娘なのだと、そう言わんばかりのその取り乱しようは既に彼の意識が決闘へと向いていないことを意味していて。

燃え上がる火柱を消す事も、火柱の中で苦しむ娘を救出することも出来ない焦りだけが彼を追い詰め始めていた。

『け、消せ！今すぐこの炎を消すんだ【黒翼】！』

「あぁ!?このガキが勝手に邪魔くせぇ所にいたからだろうが！クソガキが！邪魔した罰だ！」

そして、全く悪びれる様子もなく、そして慌てる様子もなく。戦いを邪魔されたからなのだろうか、ただ怒りの篭った口調と感情のみで言葉を発しているかのような鷹峰。

まさか人一人を燃やしてしまったというにも関わらず、己の戦いが第一なのだと言うその態度は…とてもまともな人間から発せられる言葉とは思えず、この男が改めて【化物】なのだと、その異常性を明らかにしているしか思えないことだろう。

…そんな鷹峰は、さも興冷めだと言わんばかりに、とてもつまらなさそうにして口を開いて。

「…それにこんな燃えてんじゃあ…もう助からねぇよ。」

『なッ!?ふざけたことを言うなぁぁぁぁ！』

その原因を作ったにも関わらず、怯むことなく火柱の前に立った鷹の目が見据えた状況は…残酷にも、燃え盛る火の勢いから感じた感想を、淡々と述べるのみ。

発狂にも似た憐造の叫びを意に介さず。
何よりも優先されるべき娘が、こうもはっきりと助からないと言われてしまえば、その怒りの矛先がどこへ向かうか分からないというのに。そうして、鷹峰は手札から一枚のカードを取ると…ゆっくりとソレをデュエルディスクに向かわせ始めて…

「どうせ、もう助からねぇんだったらよ…」
「なっ、ま、まさか先生!?」
「やめろ！やめるんだ鷹峰！」

弟子と砺波の静止にさえ聞く耳を持たず…

「とっとと…楽にしてやんぜ！【黒炎弾】発動ぉぉぉぉぉ！」

――！

「ッッッ

『やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！』

それに伴い、憤怒と焦燥を同時に孕んだ異質な声が火柱の轟きと共鳴し、一層このスタジアム内に…既に崩れて原型を留めていない、『スタジアムだった』この場所に響き渡り、悲鳴を掻き消してさらに響いて。

…そうして、天まで燃え上がった火柱が燃えつくして消えたとき…

…その場所には、『人が居たであろう焦げ跡』と、焦げた『黒い宝石』の付いた指輪だけを残して…

…誰も…居なくなっていた。

『あ…あぁ…』

「これで邪魔者は消えたぜ。おら立てよれんぞー。とっとと続きだ。やっと温まってきたところだってのによぉ…」

『あぁ…あ…あ…』

「…おいふざけんなよ？他の奴全部消そうとしてた癖に、自分のガキが消し飛んだからってなんだその態度は…」

『ヒイラギ…ヒイラギ…あ、あぁあ…』

「あん？何ぼさっとしてやがんだ！とっとと立てこのクソ野郎が！ガキ一匹消し飛んだぐれーで止めるなんざ認めねぇぞゴラァ！テメェ

コラれんぞー！・とっとと続きだ！・こんな中途半端で終われるかってんだテメェ！・ふざけんなってんだよ！」

たった今一人の少女を消し飛ばした鷹峰と、自分の全てであった娘を目の前で消し飛ばされた憐造の態度はまるで真逆で。

娘を失ったショックからか、憐造のその体もどこか透けて散り始めたようにも見え始めたのは錯覚ではないはず。

彼を支えていた、たった一つの感情の根幹が、たった今彼の目の前から消し飛ばされたのだ。それがどういう状況を生むのかは言うに及ばず、最早戦意など消失した様子で、ただ呆然とその場に崩れ落ちているだけ。

また、その状況を作った張本人である鷹峰は、人を一人消し飛ばしたというのに全く焦りもしなければ悪びれもせず。

途中だった戦いが、これほど鬩ぎ合った戦いが、こんな形で中断したことへの怒りしか面に出していないかのようであって。

…そうして、鷹峰がその苛立ちからか、憐造を決闘ではなく己の拳で直接殴りかかろうとした…

―その時だった。

「そこまでじゃ！・全員動くな！」

突如スタジアム内…いや、既に天井も崩れ、壁も壊れ、スタジアムであった原型をとどめていないこの場所に響いた老人の声。

聞き間違えるはずもない、街の雑踏にすら掻き消されそうな声だというのに、やけにはっきりと聞こえてくるこの歴史すら感じるような声の主。

―綿貫　景虎

些か登場のタイミングが良すぎるとも思われるような【妖怪】の登場に際して、その姿を見た遊良と砺波は驚きを隠しきれない様子を見せているものの、鷹峰はさらに苛立ちを募らせて口を開くのみ。

「あぁ!?ジジイ、何しに来やがった！」
「煩い！貴様が今何をしでかしたのか！ワシにもわかっておるのじゃぞ！貴様もここで取り押さえる！入って来い！」

そして綿貫の命令と共に、それに連なって屈強な男たちが次々と中へと現れ始めて。
【決闘世界】の、実務部隊。
一説には、一国の軍隊ほどの戦力を持つといわれる超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の私設部隊。一体どうして一つの育成機関がこんな暴力的な部隊を抱えているのか、それは決して開いてはいけない社会の闇であり、またこの場においてもそんなことは些細な問題であって。

「…綿貫さん…どうしてここへ…」
「浜臣や、失態じゃったの。お主ほどの男がまんまと利用されるとは…」
「…申し訳…ありません…」
「ふん、今はそれ所じゃないわい。…憐造、本当にコレを起こしたのがお前じゃったとは…残念じゃよ。」
『ヒイラギが…あぁぁ…』
「…無駄、か。感情の根幹が無くなった所為で、既に戦意は無い…取り押さえろ！」

綿貫の命令と同時に、男たちが憐造を取り囲み…そして、なにやら『特殊な器具』を持ってして、『闇』となって散り散りになって消えかけていた憐造の存在を、確かにこの場に押し固めて。
一体綿貫がどこから準備していたのか。そんなこと、誰も知ることなど出来るはずも無く…しかし、もしも彼がもっと早くこの場に来てくれていれば、先ほどの少女は消し飛ばされることもなかったのではないかと思えるほどに、その光景の衝撃はこの場にいる最年少である、遊良の心に深く印象付けられていて。

「おいこらまてクソどもが！こっちの勝負はまだ着いてな…」
「黙らんかこの小童が！大体、子供一人消し飛ばしておいてなんじゃその態度は！」
「あぁ!?知るかってんだよそんなこと！俺様の戦いを邪魔しやがって、歯がゆいったらありゃしねぇ！あぁクソ！不完全燃焼だってんだよ！帰るぜこんちくしょうが！」
「む、待て！待たんか鷹峰！」

また、苛立ちを全く隠すことなく。反省の色も見せずに豪語をやめない鷹峰。
あまりの苛立ちからなのだろうか、この場を立ち去り始めようと綿貫に背を向けて、その足を前へと進め始めて。
普通ならばありえない状況で、ありえない態度で立ち去るその姿は、立った今人間を一人、この世から消し飛ばしたとは思えぬような立ち振る舞いであり…

「せ、先生！ま、待ってくださ…」
「うるせぇ！俺様の指図すんじゃねぇよクソガキが！オラ、どけってんだよボケどもがぁ！」

―！

己の弟子の制止すら、全く持って聞く耳を持たず。
また、いかに屈強な男たちが集まっているとは言え、この怒りと苛立ちを纏った一匹の【化物】を取り押さえられるような精神の持ち主など、この場所以外にだって探しても見つかるはずがないのか。
そうして、鷹峰の歩の先に居た数人の男達を、その威圧のみで気絶させた鷹峰は…

―その場から、姿を消していった。

「…先生…どうして…」

見たくはなかった光景を、意図せず見せ付けられた弟子の心に傷跡を残して。

…そして、憐造の戦意が消失…いや、己の『全て』が喪失したことによるのだろうか。

天に向かって噴出していた『闇の塔』がいつの間にか…

その根元から、消えていた。

―…

そうして、街に溢れていた『雑兵』と実体化したモンスター達は、黒幕であった憐造の心が折れたためか人々に取り付いていた『闇』は全て消え去り…実体化したモンスターも、それに伴って姿を消していった。

また、【決闘世界】の実務部隊の介入によって、避難していた人々は全員救助され、怪我をして街で倒れていた住人たちも救出され…

デュエルによって倒されて気を失っていた元『雑兵』達も、【決闘世界】の指示の元に色々な病院へと搬送され、壊れた街の復旧も迅速に対応すると報告がなされていて。

またその調べによると、これだけの被害と混乱があったにも関わらず、この『異変』における怪我人は多数いても、死者までは確認されていないのだという。

それは敵が『兵』を増やすためだったのか、デュエルで負けて大怪我を追っても、その後『闇』が取り付いた瞬間にある程度動けるまではその怪我を『闇』が補修したらしく…

また、『雑兵』が狙ったのはあくまで『逃げる人間』か『戦意のあるデュエリスト』だけだったことが幸いしたのか、気を失っていた怪我人たちは追撃を受けることなく救助されたためと思われる。

決闘市に残した爪あとは大きく、街が完全なる復旧を遂げるにはまだしばらくかかるだろうが…それでも、表向きに『犠牲者』が出なかったという報告は、この街の人々からすれば安堵しかないころだろう。

怪我はいずれ癒える。そして『闇』に飲まれていた人々も、その大元である『黒幕』の悪意と復讐心が途切れてしまった今、眼を覚ますまでにはそう時間はかからないはず。

【決闘世界】が中心となって進められる復旧活動も迅速で、新年度を向かえる頃には普段の生活が送れるようにまで回復する見込みだという。

…そうして、新年早々に起こったこの壮絶なる『異変』は、【決闘世界】と連携した国による、迅速なる救助活動も功を奏し、たったの一日と言う短い期間で終焉を迎えた。

…報告には上がらぬ、『たった一人の犠牲者』を除いて。

――…

ｅｐ４７「真実の解章」

暗闇…どこかも分からぬ『とある場所』。

ここが『決闘市のどこか』であるということ以外には情報は無く、薄暗さゆえに、かろうじて部屋の中が視認できるかというような室内…

そんな完全に外界からシャットアウトされ、この『部屋』の外には誰の気配も感じないような、そんな空間。

このような場所を一体誰が用意したのか。何の目的で使われるのか…そんなことは、ここを使うであろう当人たちしか決して知りえることのないであろう場所なれど…

こんな、注意して探しても、決して見つけることが出来ないような場所の、そんなどこかの一室に…

―静かに、少女の声が響いた。

「父を止めていただき…ありがとうございました。」

少々焦げて痛んだ髪。肌も熱に当てられたのか、少し赤くなっていて…

それを一目見ただけで、彼女が受けた『モノ』が想像出来るほどに痛々しい姿をした少女が、そこに一人。

―紫魔　ヒイラギ

古びたスタジアムで、【黒翼】こと天宮寺　鷹峰によって…

実体化したデュエルによる、黒き炎が弾けた理不尽な爆発をその身に受けたはずの…

―問答無用で『消し飛ばされた』はずの少女が、そこには居て。

これまでの彼女の様子とは違う、高飛車でもなければ高圧的でもないその態度。

悔やみ、省み、そして落ち込んでいるかのようなその態度は、とてもこれまでの紫魔　ヒイラギとは思えぬほどに大人しく…

まるで、これが本来の彼女かのようにしっくり来ているかの様にも見えることだろう。そんな小さく小さく縮こまっている少女が醸し出している雰囲気は儚げであり、一吹きすれば今にもどこかへ飛んでいってしまいそうであって。

「カッカッカ。なーに、これも仕事だからよ。」

「うむうむ。お前さんはよぉやったのぉヒイラギよ。」

そして、この場所にいたのは彼女だけではない。

この少女と比べるにはあまりにも大きい、それはそれは大きすぎる程の雰囲気を持った『もう二人』の他人の気配が、この部屋には存在していた。

特徴的な渇いた笑いと、穏やかさの中にも威厳を持った古めかしいこの声。声を聞いただけで、その風貌が勝手に頭の中に思い浮かぶのでは無いかと思えるくらいにこの声とその雰囲気は噛み合っていて…それを聞いた少女が、彼らの声を聞き間違えることは決して無いだろう。

―天宮寺　鷹峰

―綿貫　景虎

そして、その二つの気配は、敵意は無く彼女の目の前に立ち、ただ穏やかにヒイラギを見ているだけ。

しかし、まさかヒイラギを問答無用で『消し飛ばした』はずの鷹峰と…

その鷹峰を叱り飛ばして、全ての後始末を行う葉目になった綿貫が、一体何故『異変』の中心にいたヒイラギに対してこう言っているのか。

今こうしてヒイラギが『生きている』ことは別としても、主犯格とは言え一人の少女を師が目の前で焼き消し飛ばしたあの光景は、あの場で一番の最年少であった遊良からすればとてもじゃないが信じられたモノではなく。

まさか目の前で、一人の少女が焼かれているというとてつもなく衝撃的な光景を見せられた少年の心に果たしてどれだけの傷をあたえたというのだろうか。

また、その『黒幕』であり前【紫魔】であった紫魔　憐造も、己の生きる目的であった愛娘を目の前で消し飛ばされたことで心が真っ二つに折れていたのは疑いようの無い事実であって。

「いいえ…私のやった事は許されません…多くの人を傷つけ、街にも大きな被害が…」

「…仕方なかろうて。憐造の持っていた『力』のことを考えると、死者が出なかっただけでも上出来なくらいじゃ。お前さんの尽力が無かったら、もっと被害が大きくなっておったじゃろうからのぅ。」

「それでも…私は父様と同罪です…私のせいで…」
「ケッ、自分の手に負えないことを無理してやろうとすっからだぜ、これだからガキってのは。大体、テメェ一人で背負い込める問題じゃねーって言っただろうが。」

そんな、先に起こったことあの『異変』…ソレに対して、真実を知っているのは極少数の限られた者のみ。
あの場に居た、憐造に利用されていただけの『砺波　浜臣』と、それを果敢にも止めるために奮闘した『天城　遊良』…
そして、そこに『何故か』駆けつけてきた『天宮寺　鷹峰』と、決闘世界の実務部隊を引き連れて混乱を治めにかかった『綿貫　景虎』だけが知りえているコト。

―真実…

…10年前、たった一人の少女…いや【化物】による、当時の【王者】達全ての敗北。
それにより紫魔本家から『全て』を奪われた前【紫魔】が起こした、娘を迫害した世界への『復讐』と言う、歪み間違った愛情。
また、前【紫魔】の娘と言う過去を持つ、この紫魔　ヒイラギがソレに加担したことによって起こった最悪の事態…『主犯格』という名目から表向きの報告には上がっていないものの、国と【決闘世界】の上層部のみに送られた報告において、この街で起こった『異変』の『たった一人の犠牲者』として彼女が扱われていること…

何も知らぬ街の住人達の中に怪我人はいても、『犠牲者』となった者はいないというのに…何の因果か、『異変』を起こした『咎人』が犠牲者となってしまっているという真実。

―そう…ここまでが事の顛末。

…『表面上』で起こっていたことの。

―これよりは、この場に居る者以外に、他の誰も知らぬ本当の真実。

目に見えるものだけが全てではない。見えるけれども見えないモノがこの世界には多々あって。

「大体もう全部終わったんだぜ。それを今になってウジウジウジウジ…」
「…それは…分かっていますが…」
「…鷹峰、もうその辺にしてやらんか。ヒイラギとて、たった一人で頑張ってくれたんじゃぞ。この子が居らんかったらと思うと…」
「うるせぇってんだよクソジジイ。俺ぁ、コイツが自分一人だけ犠牲になるつもりだったっつーその態度が気にいらねぇんだ。」
「いえ…私は…」
「あぁん？口答えすんじゃねぇよクソガキ。」
「…はい…」

ここにいるは、『本当』の事の顛末を知る唯一の3人。

誰の邪魔も入らないこの場所で、全てのコトが終わったからこそ、自らの行った『混乱』に対する重圧に押し潰されそうになっている少女に対して…

それに優しく寄り添う綿貫　景虎と、それを厳しく見ている天宮寺　鷹峰。

どうにも態度が真逆な大人二人ではあるものの、そんな二人がどうしてヒイラギに対してこんな言葉をかけているのか。

そうして…鷹峰がゆっくりとヒイラギに近づき…

その手を、静かに持ち上げ始め…

「少しは泣けってんだ、この馬鹿弟子が。」

「…ッ！…せ、先生…ッ！」

鷹峰の大きな手が、他の誰の言葉よりも優しくヒイラギの頭にそっと置かれた…その瞬間のこと。

今まで溜め込んでいたモノが決壊したように、鷹峰に力いっぱい抱き着いて泣きじゃくり始めたヒイラギ。

安心からか、安堵からか。

その姿は、まるで幼い子どものようであり…聞き間違えること無く、鷹峰のことを『先生』と、そう呼んだヒイラギの両の眼と瞼は、溢れ出す雫を抑えることなど決して出来ず。

―感情のままに涙を流し、嗚咽を混ぜて全てを吐き出し。

「ぜんぜいっ、わだしっ…わだしはッ…」
「おぅおぅ、ガキはガキらしく、そうやって泣いてりゃいいんだっての。…大人の真似してカッコつけやがるから潰れんだ。」
「…まったく、不器用な男じゃのぅお前も。」
「カッカッカ、弟子の面倒を見るのが師匠ってなもんよ。なぁジジイ？」
「…そうじゃの…ガラにもない子育てをした鷹峰よ。」

この三人の間に流れる空気に関して、疑問に思うような人間はこの場には居らず。

―誰も知らない、彼の弟子である遊良と、鷹矢と、ルキでさえ知らない『真実』が…ここにある。

―そう…

…鷹峰は弟子の話をする時、一度たりとも弟子の数を『3人』と言ったことは無い。

―『ついでにもう『何人』か鍛えたが』…

必ず、そう言う。

それはつまり、彼の弟子が『天城　遊良』、『天宮寺　鷹矢』、『高天ヶ原　ルキ』の『3人』だけでは無いということ。

それが意味している唯一つの事実。

それは、この少女、『紫魔　ヒイラギ』も…鷹峰の弟子の『一人』であるという真実。

遊良達も知らない、彼女の父である『黒幕』であった、紫魔　憐造ですら知らなかった真実。

いかにしてヒイラギが鷹峰に出会い…そして『弟子』となり得たのか…

その全ての真実と、今回起こった『異変』の真実。

それは切っても切れないモノで繋がっていて、その全てが『過去』のあの日から続いているからこそ、何の因果か複雑に絡み合った『現在』においてこの『異変』の終結へと繋がることが出来たのだ。

『過去』から続く誰かの『今』が、どれか一つでも狂っていたとしたら…きっと、引き起こされたこの『異変』を解決することは決して出来なかっただろう。

「本当に苦労したわい、あれからこの子の所在とお前の罪をもみ消すのは。浜臣と天城君が目撃しておるんじゃから、下手な情報操作も意味を成さなくなってしまうからのぅ。」
「カカッ、あいつらなら言わなくたって分かるだろうぜ、何せこの俺のダチと弟子なんだからよ。…それに、ジジイも同罪みてーなもんだからな、それ位ぇしっかりやってくれなきゃ困るぜ。」
「…わかっておるわい。全てはあの日…ワシがヒイラギを紫魔家に返してしまったことから始まったのじゃから…」

…周囲は、全員『敵』だらけ。

『現在』の話ではない。ずっと『過去』から…それこそ、絶望を突きつけられた『あの雨の日』から、彼女の絶望の物語は始まったのだ。

—そして、『現在』においても。

…『復讐』と言う名目で決闘市の人間達の『敵』となり、高圧的な態度と言葉で『あえて』悪役を演じて。
そうしなければ『父』はおろか、他の誰かに気付かれていただろうから。

全てを父の計画に沿って、『黒幕』である父に従って己の復讐を遂げ

る『フリ』をしていて。
しかし、その真意を『父』どころか全ての人間に隠し通して行動せざるを得なかった彼女。
何故、憐造はあれだけ世界への『復讐心』を持っていたにも関わらず、蘇ってすぐにでも『闇』によって決闘市を飲みこまなかったのか。
何故こんな時間をかけてまで、『準備』をしてきて混乱を起こしたのか。
何故、街の人間達に怪我人は居ても…死者は居ないのか。
―その理由は、単純明快
―全てが、彼女の行動による『結果』なのだから。
本来ならば、蘇ってすぐにでも世界を消そうと暴走しかけた『憐造』に、唯一耳を傾けるであろう存在は…この世においては、ヒイラギ一人だけ。
だからこそ、『復讐』と言う名の名目で街の人間達をすぐに『消す』のではなく、己の駒として『利用』させて欲しいと…彼女がそう『父』に頼み込んだ。
そうすることが、この世界に対する『自分の復讐』なのだと、『父』に言い聞かせて。
…そして、少しでも父の復讐を…『遅らせる』ために。
とは言え、ヒイラギ自身がこの世界に復讐心を持っていたのもまた事実。
痛めつけられ、辱められ、殴られ、嬲られ…そういった過去を確か

に持つ彼女だからこそ、この世界には理不尽が溢れているということを、誰よりも理解していて。そんな彼女の復讐心に、彼女の『父』が応えようとしていたのも、また事実であって。

…しかし、『父』が感じ取れたのは、娘の『復讐心』というソレその物だけ。

…そのために、娘への歪んだ愛情のみで動いていた『父』は最後の最後まで気がつくことが出来なかった。

…ヒイラギの持っていたモノが、世界への『復讐心』であっても…世界そのモノを、『恨んではいなかった』ということに。

『父』は知らない。これまでの娘の『過程』を。それは、『闇』の中で己の再起に費やしていたから。

誰も知らない。これまでの過去から、絶望を味わってきた彼女が世界に復讐心を持ってはいても、どうしてこの世界そのモノを恨まずにいられたのか。

—それは偏に、師の存在があったから。

それは、解決に向けて翻弄していた遊良達はもちろん、彼女とともに計画を進めて利用されていた紫魔　大治郎や紫魔　亜蓮、そして『黒幕』であった紫魔　憐造も含めて、他の誰にも知られてはならないことに違いなく。

そんな状況に身を置いていたからこそ、『敵』も『味方』も、その全てが彼女にとっての『敵』となっていて。

また、誰の話も、誰の訴えも全く聞く耳を持とうとしなかった『憐造』…

【化物】としての力を持つ【黒翼】と、ほぼ互角に渡り合えるほどの『闇』

を持った、現世と冥界の逆転が起きていた憐造だからこそ、誰であっても正面から向かったところでソレを止められるわけがなかったのだ。

…だからこそ、憐造に『ヒイラギが死んだ』と思わせる必要があった。

何をやっても止められないのならば、憐造の根幹を成している感情を…蘇った理由、守るべき『たった一つの大切なモノ』を、彼の目の前から消し飛ばす必要が。

…だから鷹峰は戦いがヒートアップしたあの場面で、『あえて』黒き炎弾の狙いを外した。

いくらこの世のモノではない『闇』を纏った憐造とて、【化物】となった鷹峰を相手にしていては、ソレに集中する他なかったから。

…だからヒイラギは2発分の【黒炎弾】による火柱に紛れて、激闘で『崩壊していた』スタジアムから姿をくらました。

憐造に常に察知されている『黒い宝石』のついた指輪を、まるで『消し飛んだ』かのように見せかけられたおかげで、ソレを自然に外すことが出来て。

…だから綿貫はあれほどのタイミングの良さで、あの場に現れることが出来た。

前もって準備をしていた、『闇』を抑える『特殊な器具』を用いて憐造を取り押さえるために。

…だから憐造はヒイラギを助けることが出来なかった。

『闇』に命じたのは『炎の中からヒイラギを救え』というモノ。実体化したデュエル故の思い込み…火柱の『外側』にのみ放出されている本物の炎に騙され、【黒翼】の思惑をそのまま反映した『ただの炎の映像』

の中にいたヒイラギにまで『闇』は届かなかった。
…【黒翼】の放った炎が『闇』を弾いていたのもあるが、そもそもヒイラギは『炎の中』にはいなかったのだから。

ソレに伴って憐造が『暴走』してしまう危険性は確かにあったものの、憐造に残っている唯一の感情が『娘への思い』だけしか無かったことを考えると、『暴走』よりも『消沈』する可能性のほうが遥かに大きかっただろう。
現に憐造の戦意は驚くほど簡単に消え、今では【決闘世界】の監視の下、影も造れぬ場所に投獄されておとなしくなっていて。

…もしも彼女が居なければ、今回の『異変』を止めることなど、絶対に誰にも出来はしなかった。

それだけではない、今回の『異変』が最悪のケースで進んでいれば、決闘市だけではなく世界の全てが憐造の手に堕ちていたかも知れなかったのだ…いや、堕ちていたのは確実か。
何せ、世界的に見ても巨大な都市である決闘市を、丸々全て残らず飲み込んでその住人全てを『闇』に変えてしまえば…
その膨れ上がった『闇』が、今度はこの国全てを飲み込み…一国を『闇』に変えたその膨れ上がった『闇』によって、今度はこの星全てが『一瞬』で飲み込まれていただろう。
人間の持つ『闇』というのは、無尽蔵に膨れ上がるモノ。それが連鎖的に混ざり合い繋がれば、この星程度を飲み込む『闇』が生まれるのは必至。
そうなってしまえば、誰も抵抗することなどできず。誰もが戦う前に飲まれて、負けてしまうという…最悪な状況に。

—だから、こそ。

…たった一人で、少女は戦った。

周囲を騙し、周囲を欺き…そして、周囲に嫌われても。

過去から、そして今、現在も。

しかし、これまでの状況においてソレが仕方なかったとはいえ、それでも彼女のしたことは許されることではないだろう。

…傷ついた人がいて、傷ついた物があって。
…利用された人がいて、利用された思いがあって。
…夢を壊された者がいて、夢を潰された者がいて。

「今は泣け、思う存分よ。」
「うぅ…うぁ…」

—それでも、今この時だけは。

嗚咽を漏らし、感情を吐露し…師の言葉にあやされるかのようにして、たった一人で他の全てと戦っていた少女は…

師に抱かれ…

—小さく、小さく震えて…泣いていた。

…

―物語は、これより一度過去へと遡る。

全ての事の発端。

―１０年前の、あの日へと。

―……

ｅｐ４８「閑話ー紫魔　ヒイラギ　前編」

…現在より１０年前、世界が震撼した大事件が起きた。

それは過去を幾ら遡っても前例が無く、その『事件』の真相を求めて世界中の人間達が声を荒げて情報の提示を訴えたほどであったことは誰の記憶にも留まっていることだろう。

何せ、当時の決闘界の歴史においても類を見ないその『事件』…

―世界に名立たるシンクロ王者【白鯨】と融合王者【紫魔】が、揃って表舞台から姿を消した、あの世紀の大事件を。

いや、当時の事件はそれだけでは終わらない。

何せシンクロと融合の王者の引退のみならず、エクシーズ王者【黒翼】までもが同時期に組まれていた試合の全てに現れることなく、その全てに不戦敗していたというその怪事件。

この召喚法の頂点に立つ3人の王者達が揃って表舞台から姿を消したことは、後世の歴史にも既に刻まれており…後に【黒翼】が何食わぬ顔で復帰したとは言え、この世界の根幹をなしている決闘界が崩れかけたことは言うに及ばない事実であって。

また、全世界が真実を得ることを望んでいたソレの詳細も、決闘界の全てを司る超巨大決闘者育成機関【決闘世界】によって、決して表に出ることは無く。

『何があった』のか、その真実を知ることの出来た存在は、本当に限られた者しか存在していない。

…そして、世界中が震撼したというのは、何も『物の例え』などでは断じてない。世界中の人間達が襲われた不安と言うのはそんな単純なこととは程遠いものであり、時間が解決してくれるようなモノでは決して無いのだ。

この世界における、『決闘者の頂点』と言うのは下手をすれば国のトップよりも重要な立ち位置を占めているのと同義。

単に次の王座を決めて新たな王者を置けば収まるといったような、そんな和やかに終わる程度の話であったならば、最初からこの世界で『決闘』がここまで重要視されるはずがないと言うことは、説明するにも及ばず。

だからこそ、決闘界の頂点の、全ての決闘者たちの象徴…言い換えれば、この世界に生きる全ての人間達の象徴である【王者】の『空白』は…

―そのまま放っておけば世界経済や国家間の均衡が崩れ、たちまち『世界崩壊』へと繋がる恐れがあると言うことは、最早誰の目にも明らかなこと。

それを防ぐために、【決闘世界】の迅速な対応の下、前シンクロ王者に挑戦した者の中で唯一彼に勝利した【白竜】、新堂　琥珀と、『紫魔本家』の蟲毒により新たに選別された【紫魔】、紫魔　恋介という王者が制定されたのだが、それでも着任当初は二人への風当たりもまだ強く、それを黙らせるために彼らもまた終わらない戦いに身を投じなければならなかった。

そうして、今でこそ新たな2人の若き【王者】も世界に認められ、そして最早その存在そのものが伝説となっている【黒翼】が継続して王座に健在してくれたおかげで、なんとか世界は均衡を取り戻したものの…

ここまで世界を、文字通り『震撼』させたその責任と鬱憤が『その原因達』へと向けられたことは止めようのないモノだろう。
だからこそ、王者の中の王者とまで言われ称えられた人格者である元王者【白鯨】を、メディアがこぞって扱き下ろしたのも…

全て、世界の『流れ』なのだ。

…そして、その『流れ』は【王者】だけに襲いかかるモノでもなく。

—無情にもその中に落とされて、巻き込まれた少女が…ここに、一人。

…

「おら！何か言ってみろよ、この『本家落ち』が！」
「…い、嫌…」
「きっこえねーなー！ははっ！おらっ！泣け！おらっ！」
「もっと腹のとこ蹴っちまえよ！吐かせた奴が勝ちな！」
「おい石持って来い！でっかいやつな！」
「やめ…」
「うるせぇな！黙ってろよクソ女！おらぁ！」
「本家落ちー！最下層ー！」

暴言と暴力が闊歩し、なすがままに暴行を受けるだけの毎日。

同じような年頃の子どもからも、そしてそれよりもやや年上の子どもからも、遮ることのできない暴力をただ受けるだけの日々に、その小さい体が耐え切れるわけがないは当然であり…

胃の内容物を吐ききるだけでは飽き足らず、その吐瀉物の中に赤く鉄臭い体液が混ざっているというのに、それでも止まることのないこの痛みはただただ少女を蝕んでいて。

しかし、自分たちの置かれている境遇が『最下層』だったからと言って、その中身も無く『紫魔本家』に抱いていた燻った劣等感を、これほどまで的確にぶつけられる相手が出来た子ども達からすれば、その感情を暴力に変えることにも何の疑問を持つわけがないだろう。

…傷が絶えず、その傷も癒えるはずが無く。

子どもの回復力が高いというのは、栄養管理された食事を取っていてこそ。碌に食べる物も与えられず、毎日の少ないおこぼれを齧ることしか出来ない少女の華奢な体が、この毎日の暴行に対してその体を強くしてくれるわけが無い。

痣と傷とが混在する痛みに対し、ソレに抵抗する術を持たぬ少女は…それを受ける毎日だけを過ごし、それに耐えるしか出来なかった。

…

「やめ…て…い、いやっ、やめ…」

「んー？聞こえないなぁ…そんな声よりも、もっと良い声で鳴いてくれなきゃ困るよぉ。」

「いっ!?あぐっ!」
「はははははははは!元本家の女はやっぱり体からして違うねぇ!」
「女つったってガキだってのに、お前も好きだねぇ気持ち悪い。」
「ひひっ、お前も一緒だろうが。」
「ぁ…ひっ…ぐっ…」

大人と子供、抵抗できないほどの体格差で抑えられ、碌な生活を送れていないらしい汚い体と、咽かえりそうなほどに臭い体臭の多くに囲まれ…
…無理やりに、一方的に…尊厳もなく、ただただ甚振られるのを耐えるしかない少女の悲鳴と悲嘆が狭い部屋に零れていて。
たった一人の少女を数人がかりで押さえつけ、その行為の意味すら理解出来ていない歳の子どもへと腐った劣情をぶつける大人たちのこの醜さは…およそ常人のまぐわりとはかけ離れたモノとなっていて、とても見ていられるような光景でないことだろう。
それに対して、涙を流しながら苦痛のみを感じている少女の嗚咽は、この汚い部屋にただただ悲しく響くのみ。
痛みと苦しみしかないから『苦痛』と言う。それを、その姿と泣き声だけでこうもわかりやすく表現できるのかと思えるくらいに今の少女の姿は痛々しく…またその行為を受け止めるにはまだまだ成長が足りない少女の小さい体は、揺り動かされるその度に傷つくだけ。
そんな少女の傷ついた姿に、汚い大人たちの劣情は更に募るばかり…

…始めは、もっとまともな生活を送れるモノだと思っていた。
少女の心に浮かぶのは、そんな始めに抱いていた思いとは裏腹の、暗く重い思い。

…父が目の前で連れて行かれ、自分も連れて行かれそうになった時に父となにやら取引を行った老人が掛け合って、どうにか自分だけは連行を免れた。そうして、すぐに『紫魔』の名を持った家の一つに引き取られると決まった時には、父がすぐにでも迎えに来てくれるものだと思っていたのに、と。

それが幻想だと少女が知ったのは…この引き取られた家が、いわゆる最下層に近い紫魔家であったことに、引き取られてすぐに気が付いた時のこと。

生活レベルが低く、この地域一帯の治安も悪い。辛うじて紫魔家が多く集まる『決闘市北区』には居られたものの、最下層の家の多くがここに『集められている』所為か、歴史ある名家の名残すら感じさせない下劣な者共のスラムとなっているこの一帯は最早、決闘市の外れも外れにあることから治外法権にも近い扱いで。

そうして、すぐに少女は理解した。

『紫魔本家』から追放された自分を、上位の紫魔家が引き取ってくれるわけがないことを…『紫魔本家』から遠い、本家すら把握を放棄したような『最下層』でないと、こんな自分を引き取ってくれるわけがないということを。

あの老人も、『紫魔本家』との諍いが増えるだけの自分を、何時までも手元に置いておきたいわけがないからこそ、金を積んでこんな最下層へとさっさと自分を引き渡したのではないか、と。

…その結果がこれだ。

劣情と劣等感による最下層たちの鬱憤を、幼いその身に受け耐えるだけの日々。

人としての尊厳など無い…殴られ、嬲られ、叩かれ、辱められるだけの毎日。

言葉と暴力による支配だけが彼女を襲い、血と汗と涙と汁と液に塗

れるだけの日常。

父に名付けてもらった『ヒイラギ』と言う自分の名前すら、ここに来てからは一度も呼ばれたことがなく…そんなに日数が経っていないはずなのに、少女の中には毎日受ける痛みの所為で、もう長いことずっと苦しみの中にいるような感覚があるだけなのか。

…何時まで続くのかわからないこの苦痛の日々に、文字通り『身』も『心』も痛めつけられていた…

―そんな、ある日のこと。

「いいザマね…本家だからって今まで下層をバカにしてきた罰よ。」

「…う…」

「ほら、何か言ってみなさいよ!ねぇ、今どんな気持ち?本家から落ちたあんたと、下層だからってバカにされてきた私が本家に近い地位まで行って!ねぇ悔しい?悔しいでしょ?ほらほら、何か言ってみなさいってば!」

幼少期において特長的な、一際甲高い子どもの声が小さく汚い納屋に木霊して…ソレに伴って、苦痛から気を失いかけている少女の頭を無理やり踏んづけて悦に浸っている、綺麗な格好をしたもう一人の少女。

紫魔　サクラ

このボロボロの少女がまだ本家に居た頃には、とても会ったことすら無いような元々は下層だった紫魔の子どもの一人。

何やら最近、彼女の親類が本家に呼ばれたとか何とかで、その地位を一気に上位のモノまで引き上げられてこの場所を去っていったら

しい、同じくらいの歳の少女。
しかしここで傷付いている少女からすれば、幼いとはいえ今までの人生の中で下層の者達を見下したこともなければ、馬鹿にした覚えもなく。例え会った事が無くても、同じ紫魔の名を持った親類を馬鹿にしたことなど無かったというのに。
…サクラは感情的に、一方的に、直情的にボロボロの姿の少女を捲くし立てるだけ。
ソレに対し、体中に傷が耐えないこの少女がサクラの言葉を返せるわけがないだろう。体中に傷が絶えず、体の中も痛めつけられているのだからそれも当然で…
そんな苦痛によって気を失いかけている少女に対し、己の感情と言葉をぶつけているだけのサクラは少女の態度にとても詰まらなさそうな顔をしたかと思うと、ポツリと言葉を漏らした。

「…もう、何も言わないからつまらないじゃない…あ、そうだ、あんたのその髪、前からずっと邪魔そうだと思ってたのよねー。」
「ッ!?や、やめて!」

そのサクラの言葉を聞いた瞬間、声を出す事もままならなかった少女が、一瞬でその後に起こるであろうことを理解してしまったのか。
突如として焦ったような声と表情を見せ、またそれに連なってサクラの表情もいやらしい笑みを零して。
…なぜならサクラの手には、納屋に落ちていたらしい大きな鋏が握られていたのだから。
しかし、既に体は日々の暴力によってボロボロで、とても抵抗できるような力は残っては折らず。抵抗しきれない少女の髪を持ち上げ、その顔を無理やりにサクラは引き起こして。
—そして…

「あら、まだ喋れるんじゃない！ねぇこれ邪魔よね？最下層のあんたにはこんな物必要ないわよね⁉」
「やめ…」

―！

無残に散りゆく、少女の髪。
痛んでいるとはいえ、長く伸ばした髪。少し前までは手入れが行き届いていて、艶やかで美しいその髪が本家の間中でもてはやされるほど、少女の自慢だったモノ。
それが、ジョキジョキと響く鋏の嫌な音だけが少女の耳に木霊して、その絶望感をさらに加速させていくのか。
父に褒められた自慢の髪、全てを無くして汚れてしまった少女に、最後に残った誇れるモノが…

…目の前で、散っていく。

「あはははは、気持ち悪ーい、何その頭！ほらここ禿げてるじゃない！こっちももっと切ってあげるわね！あはははは！」
「あ…ぁ…」

その行為が、彼女の最後の柱を折った。
…たかが髪、いずれまた伸びる。
そう言ってしまえば済む話ではあるものの、それでも少女に残っていた最後の自信を、ものの見事に散らせたこの行為は彼女の心を折るには十分すぎたのだろう。
甲高い高笑いと、感情的な行動が子どもらしさを更に増長させてはいるものの、これが子どものいたずらと片付けるには悪ふざけが過ぎているし、他人の大切なモノを意図も簡単に奪い去っていくこの理不

尽な行為も、それがどれだけ少女を傷つけているのかをサクラは気付いてもいない。
父に褒められた、艶やかに伸びた髪。それが彼女の何よりの自慢であり、それが彼女に残されていた最後の自信であったというのに。

―涙も出ず、声も出ず。

サクラの手が動く度に、心の奥底から昇ってくる『絶望感』だけが…少女を、取り巻いていた。

「…ふん、いい気味だわ、気持ち悪い。」

そんな泣き喚かない少女に飽き飽きしたのか、または自分の劣等感を埋めることに成功したのか。無残なことになってしまった少女の頭髪を再び嘲笑して、その場から立ち去っていくサクラ。
その姿を見る事も出来ずに、汚い納屋の中に散乱している自分の髪を呆然と見て、少女の中にはさらにその悲しみが募ってくるだけ。

「…どうして…私が…こんな…目に…父…様…」

嗚咽と絶望、消沈と困惑。
少し前までは綺麗な部屋と、温かい食事と、優しい従者と、大好きな父と、何不自由ない生活の中に居たはずだというのに…
それが今では汚い納屋に押し込められ、碌な食事も無く、暴力しかしてこない子ども達と、汚い大人に囲まれて、抵抗の出来ない理不尽を受けるしかない。

…だから、少女は理解した…いや、理解せざるを得なかった。

…この世界が、元から理不尽に溢れていたことを。

今までの生活は、全て『父』がいてくれたからこそ暮らせていたに過ぎない。そこにあったモノは全て当たり前などではなく、全てが『父』に守られていたからこそ、自分に与えられていた生活だったのだ。

…だからこそ、ソレがなくなったときに自分に残されたモノは無く…力も無く、デュエルも出来ない自分は、ただただ世界の理不尽に飲まれるしかないのだ、と。

日が落ち、外が薄暗くなってくるのに比例して、灯りなどないこの汚く狭い納屋にも『闇』が広がり始め…

そして、こんなにも汚れてしまって、傷ついてしまった自分を…何故か今、『父』がどこからか『見ていた』ような気が、少女は感じていて…

「あは…はは…は…」

そして、不意に…少女の口から笑いが零れた。

それは、果たしてどんな精神が引き起こしたモノなのだろう。

苦痛からの異常か…

現実からの逃避か…

それとも、悲嘆からの狂いか…

『父』がいなければ、こんなにも自分は無力。何も無い、何も出来ない、何もすることが出来ないこんな自分に価値などないのだと思い知ら

されたこの現状に、ただただ少女は笑うしか出来ず…

きっと明日にはまた子ども達から暴力を振るわれ、大人たちから劣情をぶつけられ…そして、そのまま…

「あははは！」

…その夜、決闘市北区の一地区から一人の子どもが行方不明となったが…

その地区の治安も治安であったためか、ろくな報告も捜査もなく…その件はすぐに、下層たちの手によって明かされぬ闇へと追いやられていった。

…

刺すように痛い夜の冷えた空気と、容赦なく襲いかかる地面の硬さ

が少女の柔肌を幾度と無く傷つけているその中で…そんな些細なことに気を向けている暇など、少女には無かった。

…逃げ出した。己の足で。

あの場所から、逃げるために。

―狂いたかった、逝きたかった。

そんな、きっと父が疾うに逝っているであろう『この世』では無い場所へと、すぐにでも逃げてしまいたかったはずの少女だというのに…それでも、自らの足であの場所を飛び出したその少女の足は、決して止まることを知らないかの様に走り続けていて。

―死にたくはなかったから。

最後の最後に見えた『父』の姿が、少女にソレ思い出させたのだ。あの『雨の日』、父が連れて行かれる間際に言った、『生きてくれ』という、その言葉を。

…それを、最後まで少女は覚えていた故に。

だから、少女は逃げた。

閉じ込められていたのが、古く汚い納屋だったことが幸いだったのか。腐って壊れそうだった壁板の隙間から、やせ細っていた小さい体を上手く通して…その場所を、乱雑に散らばっていたガラクタで隠して、少しでも追っ手から逃れようとして。

全て、あの『雨の日』に父が本家から逃げ出すときの行動を真似しただけ。それでも何とか走って走って、あの臭く汚く醜い一区から抜け出すことが出来た少女は、落ちた体力を無視してただただ走り続けることしか出来ず。

…しかし、行く当てなどあるはずが無い。

この広い決闘市の各地区に多く散らばっている、『紫魔』の名を持つ家にはそもそも期待など出来ないし…こんなに汚い自分を匿おうとするような奇特な人間が、この世に存在するはずも無いことは少女は疾うに理解していて。

そして、警察も当てには出来ない。

政界や財界に強大なパイプを持った紫魔本家においては、たかが国家権力の上層部など頭を垂れて紫魔本家のご機嫌を取りに来るしか能が無いのだと言うことを、ソコに住んでいたときから少女は知っているから。

だからこそ、助けてくれる者など居ない、手を差し伸べてくれる者も居ない夜の街が、どうしても少女の絶望を更に加速しかさせてこないのか。

つまり言い換えれば、行くところなど無い少女は臭く汚く醜いあの場所から、暗く冷たく残酷な場所へとただ『移動』をしただけに過ぎないのだろう。

そんな力のない少女が行き着く場所などたかが知れている…

決闘市の『裏』、一般人は見向きもしないような、気が付きもしないような暗く汚い路地に身を隠すことしか出来ないのだ。

日を跨ぐ度に、いつ捕まるかも分からぬ恐怖から逃れるために隠れ、全ての人間が眠りに落ちたような時間にしか行動が出来ない少女の体は、更に傷付き壊れるのをただ待っているだけ。

…残飯を漁り、泥水を啜って。

やっていることは野犬と変わらぬ、およそ『人間』の生活では無いモノ。暖かく豪勢な食事が運ばれてきていた、心配など無い豪華な屋敷に住んでいた、何不自由していたあの頃とは全く違う。

金など無い、家など無い、デュエルディスクも無い。

…少女は悟った。

すべてを持っていたはずだというのに、ソレらがすべて奪われるのはまさに一瞬。

社会はこんなにも理不尽で、力のない者を誰も助けてはくれない。すべてを『与えられていた』だけの自分に対し、救いの手を差し伸べてくれるほど、世界は優しく出来ていないのだ、と。

「…父…様…」

世界は、こんなにも残酷で…世界は、こんなにも醜くて。

元々、父と一緒にこの世から消えるはずだった自分なのだから、きっとこの世界は自分を救ってくれないだろう。それを理解しているからこそ、『父』の残した『生きてくれ』という言葉を最後の時まで実行するしか、最早この少女に『生き続ける理由』は無くなっていて。

ぼろ切れを纏い、ガラクタを重ねて身を隠す…それが出来たのは、もっと汚く酷い場所に居たから。

胃に入れられるモノをただその口から入れて、どうにかその日の命を繋ぐ…それが出来たのは、もっと臭く醜いモノを口に押し込まれていたから。

そうして、小さく幼いその身が削られていくだけ…

…

そんな、世界から隠れて生きていた少女は…

―ある日、出会った。

逃げ出してからどれほど経った頃だったのか。逃げることに必至で、日を数えることを忘れた少女からすれば『すぐ』であったかも知れぬし『悠久』の果てであったかも知れぬが…

夜の街、小さい体を隠しながら、臭い箱の中から喰えるモノを漁り探していた時…

身震いするような寒気と絶望感、そんな泣き喚きだしてしまいそうな『圧力』と…ただの純粋な『恐怖』が、少女の居た路地の『表』を通ったのだ。

その今にも世界そのものを壊してしまうのでは無いかと錯覚するほどに荒ぶった、単なる純粋な『力』が、今にも消えてしまいそうな一匹の少女に気付くはずも無く。

そして、少女はすぐに理解した。その怖いくらいの気配の内の一つに、昔に数度『会った』ことがあったから。

そう、それが父と同じ王座に着いていた、【黒翼】なのだと。

子どもの記憶力の中にも刷り込まれるほどの圧力と気配。それが、人通りのない路地…いや、彼らのせいで人が居なくなっていたその路地を、我が物顔でただ通り過ぎていくだけ。

…その瞬間に、少女の中に芽生えた新たな感情。

―復讐心

…自分をこんな目に遭わせた世界を壊したいという、禍々しい感情。あれほどの力が自分にあれば、きっと紫魔家を壊し、世界を壊し、そして自分を傷つけた人間を全て壊してやることが出来るだろう、と。

それは、まだ幼い子どもだったからこその短絡的な思考だったのだろう。しかし、こんな歳の子どもにそう言った感情を芽生えさせてしまったこともまた、あるべき世界の理に違いなく。

しかし、少女には分かっている。ソレの為には、力が足りないことを。

だからこそ、すぐに少女は後をつけた。

常人ならば近づいただけで気を失ってしまいそうなほどに張り詰めた空気感と、重く圧し掛かるような雰囲気の圧力が好き勝手に決闘市の一角を闊歩しているというのに…

それに怯むことなく、己の復讐心だけでソレら【化物】の後をつけている少女の表情からは、恐怖もなく絶望もない。何せ、恐怖はすでに通り越し、絶望はすでに少女を襲っていたのだから。

その内の一つ…『純粋な恐怖』は途中でどこかへと去っていったものの…少女の目的、潰されるような『圧力』の方へと、少女は歩みを続けて。

―そうして…

…

「テメェ、今なんつった？」

街のはずれの一角にある森の中、そこにまるで隠されているかのように建っている、とある『古家』。

マスコミにもパパラッチにも、そして自身の家族にだって知られていない、【黒翼】が若かりし頃から『何か』ある度に隠れ家として利用しているアジトの一つの、その玄関口でのこと。

苛立ちを隠していない表情のまま、【黒翼】はいきなり玄関に現れた小汚い子どもへと向かって、その言葉をぶつけていた。

全力でぶつかっても壊れない【化物】相手に一暴れしてきて、とても気分良くこの隠れ家で酒を引っ掛けようと意気揚々と帰ってきたというのに、その矢先に誰も知らないはずのこの隠れがの玄関口が叩かれたのだから、その苛立ちも当然といえば当然ではあるが…

その眼の前に立っているのが、ぼろぼろの布切れを纏い、痛々しいほどに痣だらけの体と折れそうなほどに痩せ細った体をした汚い子どもだったのだから、それがその苛立ちを更に加速させたのは言うまでもないだろう。

そんな汚い格好をした子どもが、王者である【黒翼】へと向かって放った一言に対して…常人ならばすくみ上がりそうな声のトーンで聞き返した【黒翼】へと向かって、先ほどと同じように子どもは返すだけ。

「…おれに、デュエルを…おじえでぐだざい…」

「あぁ!?テメェ自分が何言ってんのかわかってんのかぁ！あぁん!?」

「…お、おれに、デュエルを…おじえで…ぐだざい…」

泣きそうな顔で固まっている表情と、絶望だけに染まった濁りきった目。

喉を痛めているのか声は掠れ、病気かと思えるほどに乱雑に生えている髪はより一層この子どもから人間らしさを失わせていて。
ソレが到底この歳の子どもには表現できないであろう表情だというコトは、一目みて【黒翼】も理解していただろうが…
子どもが繰り返す同じこの言葉は、それ以外に発する言葉を知らないのではないのかと思うほどに痛々しく。
ソレに加え、ガキ一匹程度、彼が本気で圧をかければ一目散に逃げていくか気を失うはずだというのに…それでも同じ言葉を投げてくるこのボロボロの子どもに対して、力ずくで追い出すと言うのも気が引けるのか。

「チッ…なんで俺様がテメェみてぇな汚いガキにデュエルを教えなきゃいけねぇんだよ。他当たんな。」
「…他は駄目。父様と同じくらい強い人間じゃないと…意味が無い…」
「あぁん？父様って誰の…つか、俺と同じぐれぇ強いだと？」

初めからこの子どもの申し出など受ける気すらなかった【黒翼】に対し、始めて少女が発した『異なる言葉』は彼の興味を引き出すには十分だったのか。
この広い世界において、【王者】と同じくらい強いとなれば同じ座にいる者しか居らず。…いや、つい最近になってソレを超える者が目の前に現れたのだから、『例外』は確かにあるにはあるのだが…
それでも【王者】として世界中を飛び回って強者を捜し求めていた【黒翼】と、同じくらい強いと言わせしめるような人間など…彼にはそれこそ同じ【王者】くらいしか思い当たらず。
…それに加え、こんな歳の子どもがいるような奴といえば、彼に思い当たるような人間などたった一人しか居ないだろう。
「…カカッ、クソガキ、テメェもしかして、れんぞーのガキか？随分とまぁ汚くなっちまったもんだなぁ。見るに耐えねぇぜ、おー汚ねぇ汚

ねぇ。」
「…おれに…デュエルを…おじえでぐだざい…」
「つか何が『おれ』だ。男みてぇなマネしたってよ、テメェ確か女だったろ。今じゃ見ちゃいられねぇナリだなぁおい。」
「…おれに、デュエルを…おじえでぐだざい…」

大人たちに非道な扱いを受けた少女だというのに、それでもその恐怖を抱えながらまた『大人』の元に訪れるというのはどれだけの思いが少女にあったのだろうか。
【黒翼】に言葉を放つ度に少女の眼が更に濁り、より一層そのどす黒い感情を深くさせていくのが誰の目にも明らかであり…それに伴って、悲痛な声が更にその掠れ具合を増加させていく。

「やなこった。テメェにデュエル教えたって、俺にゃ何の得もねぇ。大体俺様は忙しいんだっての、やぁっと相手になるような奴が見つかったってーのに、もうすぐどっかいっちまうってんだからよぉ。俺様も一緒に行くつもりだってんだから、んな暇が俺様にあるかってんだ、ったく。」

それでも、【黒翼】にとって何のメリットもないもの申し出を、彼が簡単に引き受けるはずもなく。
彼にとっては所詮、負けて折れた人間の子ども。関係もなければ義理もなく、面倒をみる責任もないのだ。それが例え、同じ王座に着いていた旧知の間柄の人間の子どもであっても、彼の欲求…有り余るほどの『決闘欲』を満たしてくれるはずが無いことは一目瞭然。
そして、それはこの少女とて疾うに理解していたこと。誰も手を差し伸べてくれるような優しい世界でないことは、これまでの痛みに既に教えられていたから。
…だからこそ、少女はずっと考えていた。それは、父と老人の取引を見ていたからこそ、何かを得るには見返りが必要なのだと思い知らされていて…

「得なら…ある。」
「あん？…なんだってんだよ。」
「おれが強ぐなる…そうじだら、まだ相手になる奴が増える。」
「…あ？」
「…強ぐなっで、ぶっどばじであげる…だがら…デュエル…教えで…」
「…」

それは、単なる子どもの戯言。
例え元【紫魔】の娘であっても、世界に名立たるエクシーズ王者【黒翼】を相手に発言するには過ぎた言葉。
その自殺行為にも似た発現を聞いた【黒翼】が黙ったものの…彼が言葉を失ったのではなく、言葉が彼から逃げ出したことは容易に想像ができ…
復讐に塗れたそんな眼で、汚さに塗れたそんな姿で…そう『なれる』保障などどこにも無く、こんな子どもの軽い言葉一つで対価になるはずもないというのに…

「カカッ…」

しかし…【黒翼】はふと、思う。

釈迦堂　ランという【化物】に、まず一番初めに負けたのが【黒翼】。
もしそこで彼が他の王者と同じく、その心をランにへし折られていれば、きっとこの時に世界はここまで混乱はしなかっただろう。
何せランに負けた【黒翼】が、気を良くして他の【王者】たちに取り次ぎをしなければいかに【化物】とはいえ年端もいかない少女の申し出を誰も受けなかっただろう。現に【紫魔】も【白鯨】も、ランの

最初の申し出を簡単に切って捨てていたのだから。

しかし、彼は嬉しかった。

頂点まで上りつめ、体裁と威厳だけが一人歩きして、他の『王者』相手にも好き勝手に暴れることも出来ない退屈さに飽き飽きしていたそんな時に、今までの自分を笑い飛ばしてくれるような【化物】が現れたことに。

だからこそ、他の【王者】たちにも同じ場所に来て欲しかったのだ。そうすればこんな退屈な世界など早く壊して、もっともっと【化物】を増やして…そうして、自分の長年の退屈を埋めようと、そう思ったから。

「…そうだよなぁ、確かにそりゃそうだ。」

…そんな彼だからこそ、思い至れるモノがある。

「何で今まで気がつかなかったんだろうな、相手になる奴がいねぇんだったら、俺で作りゃいいだけじゃねーか。」

まるで『当たり前』の事を、世紀の大発見のようにして思い至った彼の思考は、先ほどまでの苛ついた雰囲気から一転…どこか腑に落ちたように、悪巧みをする時の顔をして立っていて。

…それは、形こそ違えど彼が他の王者にしようとしたことと似ているだろう。

相手が居なくて退屈していた所に、突如現れた【化物】。

それが心の底から嬉しくて、己もまた【化物】の壁を飛んで…そこ

で見た景色が、何にも言い表せない程に素晴らしい景色だったものだから、ランの手で他の【王者】も【化物】にしようとしたのだが…

―しかし、ソレは失敗だった。

所詮、自分とは違う人間に、同じ思考を持って同じ立ち位置に来て『貫おう』という考えが甘かったのか…それとも、自分の考え方自体が異端だったのか…まぁ、おそらく後者であるコトは確実なのだが、それでもその経験を経た彼だったからこそ、思い至れるモノであることには違いなく…

「ランに着いていくのも面白そうだけどよ、こっちで一手間加えてからランのとこに行くのもアリっちゃーアリか。これまで随分長けーこと退屈だったけどよぉ、だったらもう少し程度退屈が伸びたって大したことねぇよなぁ。我慢すればそれだけ、その後の見返りが大きくなるってなもんだ。」

先ほどまでの苛立ちを嘘のように消し去り、目の前に立つ得体の知れない汚い子どもへと向かいなおした【黒翼】。

まさかソレに思い至らせてくれたのが、こんなに汚れた薄汚い子どもだったのだからこそ、彼の面白みを更に倍増させて。己がやっと出会えた【化物】と饗宴することを、我慢してでも後の楽しみを増やそうというのだ。

長年に渡る退屈が、彼の思考回路を複雑かつ迷宮にしてはいるのだが…その思考が行き着く先は、いつだって単純なモノ。

―見た目も臭いも生い立ちも、彼にとってはどうでもいいこと。要は強いか弱いか…ただそれだけ。

常人ならば逃げ出したくなるほどの【黒翼】の圧力にも、気を失わせるほどの覇気にも、この少女は屈しなかった。それだけでも、彼と

話す権利は確かにこの少女にはあり、さらにこの少女はいずれ自分をぶっ倒すと言い放ったのだ。
絶望に塗れた悲痛な眼。世界に見捨てられた孤独な体。この汚い子どもにそれだけの才能があるようには到底思えなく、途中で潰れる可能性のほうが大きいとは言え…

「おもしれぇガキだな、俺には他人を鍛えたことなんてねぇし、ガキの扱いなんて知らねぇからよ…どうなっても知らねぇぞ？」

彼が何を思ってソレを『承諾』したのか、それを知っているのは【黒翼】自身のみ。
そして、絶望を味わったからこそ、誰の圧力にも屈することなく…この少女に芽生えているのは、この世界へと向けた復讐心だけ。
自分を傷つけた人間も、自分を見放した世界も…その全てを壊したいと思う濁った思いからなる、歪んだ感情。
それを感じ取ってもなお、【黒翼】はソレを引き受けるのか。
ただの己の欲求を満たすためだけの道具。もしかすれば自分の所為で、世界がこの少女の手で壊れるかもしれない可能性だってあるというのに…『そんなこと』など、どうでもいいかのように。

「うん…それで…も……ぁ…」

そして、【黒翼】の承諾を得た瞬間に、少女の中で『何か』が切れたのか…

…静かに、その場で意識を失った。

「…おいおいマジか。いきなりぶっ倒れるとか聞いてねぇぞコラ…

やっぱ止めときゃよかったか…」

自分の子どもすら扱ったことのない、渋い顔をしている【黒翼】をその場に残して…

――…

ｅｐ４９「閑話ー紫魔　ヒイラギ　中編」

―およそ人は寝静まったような、そんな静寂が街を包んでいるような時間帯でのこと。

とても見つからないような決闘市の外れにある森の中、その中に隠れるようにして建っている一軒の古い屋敷のその一角で、白衣を着た医師らしき人間がたった今処置を施し終えた少女を思い出しながら、その口から悲痛な声を漏らしていた。

「…酷いものだ。体の傷もそうだが、性的暴行を受けた痕跡もある…とてもあの歳の子どもが抱えられるダメージではないよ。」

「んなこた見りゃわかんだよ。だからテメェを呼び出したんだろうが。」

「…全く、こんな時間に呼ぶから一体何事かと思ったが…しかし、どんな目に遭えばあんなことになるんだ…鷹峰さん、一体あの子をどこで拾ったんだい？」

「テメェにゃ関係ねぇだろ。いいからとっとと治せ。後、余計な詮索はすんじゃねぇぞ…無事に今後を過ごしたきゃな。」

経験豊富なこの医師から診ても、見た目の痛々しさは言うまでもなく。そしてこんな歳の子どもが抱えるはずの無いような体の内側のダメージまで見てしまった医師の表情はどうしても重くなってしまうのか。

また、医師に診断されるまでもなく、鷹峰とてこの少女の姿を見れば少女が一体どんな目に遭ってきたかは容易に想像できるのだろう。

命があっただけでも褒められるような体の傷の具合、そしてそれ以上に張り詰めていたのであろう心の傷が、更にこの少女に起きた事態を深刻なモノなのだと想像させてくるものの…

それでも、何かと問題の多い人間として知られている天宮寺　鷹峰の『事情』に深入りすることがどれほど危険なことなのかを、この医

師とて古い付き合いから理解していて。

「…わかったわかった。ではまた3日後に経過を見に来るよ。…失礼する。」

「おぅ。」

―…

「…ぅ…」

…寒くない、硬くない、うるさくない。そんな、どこか懐かしさすら感じるとても温かで柔らかい『当たり前』の感触を体で感じながら、ぼやけた目とボンヤリした頭でその景色を目に入れた少女は、小さな呻き声を漏らして目を覚ました。

いつの間に気を失ったのだろうか。周囲は照らされているように何故か明るく、また体の上に『何か』が乗っているかのように身動きが取りづらいこの包み込まれるような安心感によって、再度このまま意識を失ってしまいたい欲求が少女の体を昇ってくるものの…

逃げ出してきた身で、もし『誰か』に見つかってしまえばまた捕まってしまうのでは無いかという強迫観念が少女を襲い、その意識を無理やりに覚醒させて。

「…え!?」

しかし、意識が覚醒したその瞬間、驚きの声を漏らしてしまった少女。

その視界に突然飛び込んできた景色、この綺麗な模様の描かれた見慣れぬ天井が、少女の意識を一瞬の混乱に陥れたのが誰の目にも明らかで…これまでずっと、『汚い納屋』か『狭い空』しか見えなかった少

女の両の目に見えたソレが、少女の意識を混乱に向かわせていたのだから。
また、今自分が寝ているこの懐かしい感触…もう随分と寝転がっていなかった、柔らかく暖かなこのベットとシーツの感触にも、今の少女からすればもう違和感しか感じておらず。それだけで、こんな歳の少女がどれほどの苦労をその身に浴びてきたのかは容易に想像がつくことだろう。
そうして、混乱の中でも辛うじて身動きを取れる体を無理やりに起こして、現状の確認のため、周りを見渡そうとその手を天井へと伸ばした少女は…

—そこで、気がついた。

「…あ…包帯、巻いである…」

傷だらけの肌がむき出しになっていたはずの、酷く痩せ細った腕に巻かれた包帯。
その少女の腕に綺麗に巻かれた包帯は、汚れた少女の体とは対照的に一目見て『治療』されているのだと理解できる程にどこまでも純白で。
そしてソレを見た瞬間に、包帯が巻かれているのが片腕だけではないことを少女は体感で理解したのか。
反対の腕も、両の脚も、果ては頭部にまで巻かれた包帯。
ずっと消えなかった体中の痛みも、どこか痺れたようにして滲んでいて…傷口に塗られた薬の匂いが少女の鼻腔を刺激し、あれだけ汚れていた体も清拭されたのか消毒液の匂いが微かに漂っている。
また、痛めた喉にも何か薬が付いているのか、呼吸する度に薬臭い匂いが口に広がり、喋りにくいもののどこか痛みも鎮まっているかのような痺れを少女は感じていた。

そして、その混乱に少女が巻き込まれた数瞬の後…

閉められていたドアが金属音と共に開き、一人の男性の姿がそこにはあった。

「…おぅ、起きてんじゃねーかクソガキ。いきなりぶっ倒れるとか意味分かんねーぞコラ。」

「…あの…どうじで…」

「あ？」

「包帯どが…その…おれ、お金無い…」

「カカッ、ガキの癖に一人前に金の心配か？生憎、こちとら金は腐るほど余ってんだよ。ガキの癖に馬鹿なこと言ってんじゃねぇぜ、ったく。ガキはガキらしく、テメェの心配だけしてればいいんだっての。」

「…でも…」

部屋に入ってきた家主である天宮寺　鷹峰に対し、子供らしからぬ心配を鷹峰へと投げかける少女。

しかし、ソレはこの少女が受けてきた境遇の惨たらしさを物語っていることに違いなく。暴行と暴姦に挟まれて、常に悪意に晒されてきた故なのか。裏表の無い行為に対してであっても、少女にはどうしても警戒心が勝っている様子。

しかし、この少女の受けてきた境遇を考えるとそれも当たり前で…そうでもなければ、前【紫魔】の娘である温室育ちのこんな子供が、こんなにも濁った目をして誰かに縋ることなど無いのだから。

「チッ、一度鍛えてやるって引き受けちまったんだ。面倒臭ぇが、俺様は一度言ったことは撤回しねぇ主義なんだわ。わかったらさっさと治れ、治らなきゃ鍛えるもクソもねぇだろうが。」

「…あ…お、おれ…」

「後、その『おれ』ってのはやめろ。そんなナリしてるってこたぁ、どうせ面倒臭ぇ事情があんだろ？小娘の癖に、気ぃ張って男のフリなんてしてんじゃねぇよクソガキ。いいな、命令だ。」

「…う、うん…」
「カッカッカ、よかったなぁ俺様がそれ以上に面倒抱えてる奴でよぉ。おう、引き受けちまったからにゃ匿ってやんよ。」

それを踏まえてもなお、鷹峰は強い言葉で少女を否定して。
身も心も傷付いているはずの少女に対しても、少しも態度を改めることなく、『あえて』押さえつけるような強い言葉をぶつけるのみ。
どうせこの少女が己の内に芽生えた『負』に任せて、後先考えずにここに現れたのだろうことは、この少女の濁った目を見ればある程度の死線を潜ってきた大人ならば誰だって容易に想像がつくことではあるのだが…
しかし、一体鷹峰も何を思ってこの少女を鍛えるなどと思い至ったのだろう。

―鷹峰からしてみれば、知り合いの娘とは言え赤の他人。
いくら少女の言葉によって、『鍛えて相手になる奴を自分で作る』という考えに至れたとはいえ…とんでもなく面倒くさい『事情』をこの少女が抱えているのであろうことは、鷹峰とて言われるまでも無いこと。
ソレをこの少女で実戦せずとも、他の後腐れない才能溢れる子供を選りすぐって鍛えた方が遥かに効率も体裁も良いだろうに。

「そういやガキ、テメェ自分のデッキ持って…るわきゃねぇよな、そんなナリして。」
「…もっでない…」
「デッキ持ってねぇんじゃ、鍛える云々以前の問題じゃねーか。…ったく、ちょっと待ってろ。」

それを分かっていても、迷うことなく少女へと声をかける鷹峰。

見るに耐えない濁った目。『復讐心』と言う微かな生きる希望にしがみついて、まるで全世界が敵だと言わんばかりの姿で居たことが、果たして鷹峰にはどう映っていたのか。
決して見せぬ彼の本心。しかし確かな彼の本意。
己のやりたい事を、ただやりたい様にして振舞ってきた天宮寺　鷹峰と言う存在が見せているコレは果たして優しさか我が侭か。単純なる気まぐれで少女を拾ったということも十分ありえ、興味が他へ向いてしまえば容赦なく切り捨てることもあるだろうが…

「ほらよ。」
「…え？」

…そうして、鷹峰はクローゼットの中を漁り、その中から一つのデッキを取り出すと少女へと向かってソレを投げ渡した。

「…ごれ…って…」
「昔適当に作った【ＨＥＲＯ】だ。無礼にもこの俺様に挑んでくる紫魔家の奴らを適当におちょくる為にな。まっ、俺は融合なんて使えねぇから、もちろん【融合】なんて一枚も入っちゃねーが…カカッ、融合しないでエクシーズしてくる【ＨＥＲＯ】にぶっ飛ばされた奴らの顔はマジで傑作だったぜ。」
「…」
「…なんだよ、いらねぇのか？もう飽きて俺様には必要のねぇカードだからやるっつってんだ。テメェら紫魔は【ＨＥＲＯ】しか使っちゃいけねーんだろ？デッキが無えと鍛えるもクソもねーだろ、ついでに古いディスクもやるからよ、いいから持っとけ。」
「う、うん…」

少女へと投げ渡された、【ＨＥＲＯ】の名を冠するモンスター達のデッキ。
およそ、この世界において『紫魔家』の代名詞とも言えるその英雄

達を、動機はどうあれ鷹峰がデッキとして持っていたことにも驚きではあるのだが…それでも、何の考えも無しに押しかけた少女に渡されたソレは、確かにこの少女を鍛えるという確約を少女へと与えていて。

…施しなど受けた覚えが無く、ずっと傷つけられるだけだった日々とは違う。

少女の手に収まっているデッキ、もう懐かしさすら感じる見慣れたソレらと、デュエルを行うには必須であるデュエルディスクを手渡された少女は…濁った目でただ見つめているだけ。

そんな、『何か』に囚われている少女を見て…一体何を思ったのだろうか、少女へと向けて、鷹峰は再度口を開く。

「おい、テメェ名前は？」
「な…まえ…？」
「犬や猫にだって名前があんだ、れんぞーのガキなんだから名前ぐれぇあんだろうが。『おい』とか『ガキ』でもいいけどよ、ここに置いてやるんだから名前ぐらい知っといたって損はねぇだろ？いいから教えろ。」
「あ…わだじの、名前…」

…そして、その言葉が少女の濁ったままの目に、微かな光を差し込んだ。
『人』として生まれたのならば、『当然』持っているモノを、鷹峰はただ当たり前に聞いただけだと言うのに…まるで、その言葉をかけられたことが何よりも想定外だったと言わんばかりに、少女は意外そうな顔をしていて。

放り込まれた『あの場所』では、たった一度も呼ばれたことの無かった自分の『名前』。

逃げ出した孤独の中では、呼んでくれるような人間すら居なかった自分の『名前』。

果たしてそれが計算なのか偶然なのかは鷹峰にしかわからぬものの、およそ人間扱いなどされずに、家畜同然のような扱いをされていたからこそ何気なく『名』を聞くことがこんなにも少女に『生きている』という感覚を持たせたのだ。

―そうして、痛めた喉を労わりながら、掠れた声で少女は言葉を発し…

「ひ…いら…ぎ…」
「ヒイラギか…お？そういや前にれんぞーがそんな名前呼んでたな。カカッ、精々潰れんじゃねーぞ、いいな、ヒイラギ。」
「…う、うん…」

―契約は、結ばれた。

久しく呼ばれた自分の名。他人に名前を呼んでもらうことが、こんなにも嬉しいことだったのかと思えるくらいにソレは懐かしく…自分の名と、その名に込められた父の意思を思い出すと、今にも涙が込み上がって来そうになるのを何とか堪えるヒイラギ。

世界が憎い…自分を傷つけた人間も、父を奪った紫魔本家も、抗うことすら許してくれなかったこの人間社会も。
壊したい…力ある者しか認めてくれないこの世界で、全てを壊せるだけの力を手に入れて、全部、全部壊してやりたい。

そんな、この世界に抱くヒイラギの憎しみは薄れることのない本物ではあるのだが…

―それでも、今この瞬間だけは。

「俺様をぶっ飛ばしてくれるって奴を、この俺が自分で育てるっても中々面白ぇじゃねぇかよ、カッカッカ。」

やっと『人間』に戻れたような奇妙な感覚と、師となった【化物】の渇いた笑いが…これまでずっと傷付くだけだった少女を包んでいた。

―…

人格者で知られていた【白鯨】や、巨大なる紫魔本家を率いていた【紫魔】と違い、傍若無人で知られた【黒翼】の、『修行』と言う名の『暴虐』は熾烈を極めた。

時々来る老医師に診てもらいながら、ヒイラギの幼い体は確かに回復の一途を辿ってはいたものの…

少女の体のダメージが深刻で、酷く痩せ細って衰弱していたにも関わらず『若い内は意識があれば何をしても死なない』という【黒翼】の持論から修行がすぐに始まったのだ。

しかし、人にモノを教えることはおろか、自分の子供にだってまともな教育をした覚えのない天宮寺　鷹峰というこの存在。

そんな男が、他人にモノを教えようとしているのだ、それは到底常

人が思い浮かべているような代物になるわけがないだろう。
―彼が求めるのは、己の相手が務まるような、そんな【化物】のような決闘者。
常人が考えているような『まとも』な教育を受けるだけでは、きっとそのレベルに到達するずっと前に人間としての寿命が尽きてしまうことは、誰に言われるまでもない真なる事実。
だからこそ、【化物】となった存在が織り成す、まさに『傍若無人』を体現したかのようなこの『暴虐』は…常人の思い浮かべているような、生易しい行為程度では断じてなく。

「これとこれとこれと…あとこれもだ、午前中に全部読んで頭に叩き込め。ついでにコレも一緒に見とけよ、本読みながらだって映像くらい見れるだろ。」
「…こんなに…」
「どうせ体調が改善するまで寝てるだけだってんなら、頭を使わねぇと時間が勿体ねぇ。カカカッ、実戦よりも先にテメェにゃ覚えることが山ほどあらぁ。知識のねぇ奴は絶対に強くなんてなれねぇ、だから決闘学園なんてもんがあんだからよ。」

積み上げられた書籍や資料。過去のプロデュエリスト達の試合データ。
どこに隠し持っていたのか、感覚派で世に知られている【黒翼】の持っていた書物や映像、この過去から紡がれてきた先人たちのデュエルの軌跡は…まだヒイラギの幼い頭や足りない知識では、何が起こっているのかすら理解することすら難しい物ばかりだと言うのに。
しかしソレを許さぬ鷹峰は、あえてとてつもない『量』の情報をヒイラギに読み込ませて覚えさせたのだ。
早朝から、深夜まで。
それこそ、起きてから寝るまでの全ての時間を、膨大なるデュエル

の知識や定石、そして戦術やカテゴリーごとの特色を叩き込むことに費やし…その全てを、ヒイラギは余すことなくその幼い頭に叩き込まれた。

「俺はこれから飲みに…じゃねぇ、用事で出かけるけどよ、帰ってくるまでに全部やっとけ。」
「う、うん…」
「『うん』じゃねぇ、返事は『はい』だ。わざわざ鍛えてやってんだから俺様を敬って気を使え。」
「…う…は、はい。」
「お、そうだ、これから俺様の事は敬意を持って『先生』と呼べ。カカッ、いいねぇ、他人に上からモノ言うのはよぉ、わかったら返事だ。」
「…はい…先生…」

甘えは無く。それは、およそ同年代の子ども達が受けている、生易しく低レベルな『教育』と言う名の『並列化』とは、根本からしてかけ離れた代物。
容赦も無く。とてもまだ初等部に上がったばかりの幼い歳の子供に施す教えとは、到底思えないほどに厳しいモノとなっていて。
そこら辺に居る有象無象のような子ども達では、即座に音を上げて泣き喚いてしまう厳しさと、反論を許さぬ圧倒的な威圧を持ってして、無理やりにヒイラギの力の底上げを図っているのか。

凝視のしすぎで網膜が焼けきれる様な錯覚と、知識の詰め込みすぎで痛む頭蓋内を無視し…夥しい量の基礎知識を余すことなくその頭の中に詰め込む毎日。

しかし、この厳しい修行の『始まり』に対し、頭が破裂しそうになるのでは無いかと言う知識の奔流を、ヒイラギはどこまでも深い『復讐心』でどうにか押さえ込んで飲み込んで喰らい続けて。

どこかで遊び歩いているのか、時折鷹峰が帰ってこない夜もありはしたのだが…それでもヒイラギが読ませられる量は日に日に増え続け、目と耳から入ってくる情報量の多さに吐き気を催すこともあったものの、それでも耐えて、耐えて、耐えて耐えて耐えて耐えて貪欲に『力』をヒイラギは求め続けた。

…それは『紫魔本家』と言う温室で育ってきた子どもからは到底考えられないような尽力あっただろう。

【黒翼】の重圧に耐えながら、何が何でも強くなって自分を傷つけた世界に復讐したいというソレに任せ、得られるモノ、喰らえるモノを喰らって、己の血肉に変えるという意思のみでソレを飲み込んでいたのだ。

「知ったことを総動員しろ。相手のデッキ、手札、場、墓地、それを把握して、自分のデッキ、手札、場、墓地の全部から打てる手を常に用意して、敵の使ってきたカードの効果からデッキの回し方を考えろ。」

—また、その詰め込んだ知識をそのままにしておくことなど【黒翼】がするわけも無く。

「あと足りないカードはデッキから引け。どれか一つ足りないモンがあったら勝てるわけがねぇんだからよ。」

「…引けって…そんな簡単そうに…」

「それ位やってのけねぇと話になんねぇってんだよ、このボケが。」

「【融合】…無い…」

「あぁん?テメェの頭はスッカラカンか?俺は何を教えてきたよ、Ｅｘデッキなんざ使わなくたって遣り様はいくらでもあんだろーが。いいから次だ、さっさと構えろ。」

「うぅ…」

今にも膝を突いて気を失いたい衝動に駆られながらも、どうにかその場に立って意識を保とうとしているヒイラギ。
適切な治療を受けている子供の回復力は素晴らしく、ヒイラギの傷が回復した頃合を見計らって鷹峰は詰め込ませた知識を総動員させて『実戦』を行い始めたのだが…

歯が立つわけもなく、抵抗できるはずも無く。

まともに対峙することすら困難な圧力を持つ【黒翼】と、終わることの無いデュエルを延々と行い…寄せ来るただの一方的な暴力に対して、いかに身じろぎが出来るかを繰り返して『蹂躙』を耐えるだけ。

「おい何気ぃ失ってやがる。とっとと起きねぇか。」
「…ぅ、げほっ…」
「オラ、次だ次。時間が勿体ねぇってんだ。」

しかし、世界に轟くエクシーズ王者【黒翼】と、これほどの回数デュエルを行えるのは果たして幸か不幸か。

一戦毎に襲い来る容赦の無い圧力に中てられて、その度にヒイラギは気を失いそうになり…それすら更なる圧力で無理やりに意識を覚醒させられるその様は、下手をすれば罪人への拷問よりも苦しいモノとも言えるだろう。

昇り来る吐き気を無理やり飲み込み、力が抜けて倒れそうになる足を無理やり踏ん張り…

「常に考えろ。頭使って、思考を捨てんな。戦いの途中で考えるのを止めた奴は絶対ぇに勝てねぇ、いいか、考えるのを止めたときがテメェの最後だ。」
「うぷっ…はぁ…はぁ…か、考える…」

「よし、じゃあ次だ。次は3手は耐えてみろ、いいな。出来なきゃ明日の量を倍にすっからな。」
「は…はい、先生…」

そうして、有無を言わさぬ、そもそも有無など言えぬ『暴虐』の日々が続いていく。
毎日が苦しく、毎日が辛い。
鷹峰が出かけている時はずっと資料や映像を見続けて知識を飲み込み、鷹峰が居る時はずっと戦いを繰り返して考え続ける『修行』の日々。
また、何不自由無い『紫魔本家』と言う温室で育ってきた少女も、ここでは事情があって外に出歩けないただの居候。
匿ってもらっているこの『隠れ家』の炊事、洗濯、掃除、家事…修行で疲れきった体を無理やり動かし、不慣れなその全てを師の満足のいくようにこなさなければ、『修行』が更に厳しくなると脅されて。
自身のＥｘ適正である融合を使えぬジレンマもあっただろうが、その度に鷹峰に『Ｅｘデッキの有無』では強さは決まらないことをぶつけられ…痛め苦しめられていたかつての日と同等か、またはそれ以上に襲い来る苦しさを何とか耐え忍ぶのみ。

「ちっ、こんな事も出来ねぇのか。まだまだだな、次だ、休んでる暇なんてねぇぞ。」
「…は、はい…」

―それでも、ヒイラギは折れなかった。

辛くとも、苦しくとも。
それでも今こうして感じているこの厳しさは、甚振られるだけだったあの時、死んでいるような日を送っていたあの時とは全く持って違うものだったから。
力も無く何も出来なかったあの時とは違い、日に日に『復讐』へと

向けて力を増していく感覚がヒイラギを支え…また、己に巣食うのが『復讐心』とは言えど、苦しさの中に妙な充実感が芽生えていたのだから。

—そうして…

—修行と言う名の『暴虐』を耐える日々を送り、数ヶ月程経った頃だろうか。

「ついでによ、もう何人か鍛えることにしたぜ。」
「…え？」

いつものように夜遅くになってから帰ってきた鷹峰が、出された課題と師の晩酌の準備を終えて帰りを待っていたヒイラギへと、唐突にそう言ってきた。

「テメェの言う通り、相手になる奴は多い方が面白ぇ。でもまぁ、そこまで全員上がってくるとは限らねぇからな。だったら頭数は多い方がいいだろ。」
「…えっと、それって…あの、先生…」

しかし、それはヒイラギからすれば、耳を疑うような話に違いなく。
ヒイラギの事を紫魔家の人間と知りつつ、その『事情』すらも黙認して今まで過ごして来たとは言え、今しがた師が言い放ったその言葉は、ヒイラギの中にとある焦りを芽生えさせたのか。
こんな感情を浮かび上がらせてしまったこと自体、ヒイラギからす

れば違和感を覚えるのであろうが…そんなことを意に介さず、鷹峰は更に言葉を続けるのみ。

「一人は俺の孫、これがまた小生意気なクソガキでよ。んでもう一人は何か妖しい小娘だ。カカッ、下手に隠そうとしてやがるが、ありゃ『神』の気配だな。昔似たようなのと遣り合ったことがあるから間違いねぇ。…あと、Ｅｘ適正が無ぇっつー面白そうなガキもついでによ。まっ、ランの事とテメェの事が無きゃ、あんなガキンチョ達なんざ鍛えるなんてことも思い浮かばなかっただろうがなぁ。」

「あ、あの…」

「つーかガキの面倒見るっつーのも楽じゃねーな。面倒臭ぇ事ばっかだぜ、カッカッカ。」

「…わ、私は…」

「あ？何言ってやがんだ、元々はテメェが言い出したことだろうが。それを途中で止めて逃げ出すなんざ許すわけねぇだろこのボケ。」

「…あ…」

しかし、そんなどこから来たのか分からないようなヒイラギの焦燥感を、易々と蹴り飛ばす鷹峰。

…このヒイラギの中に浮かび上がったその焦りは、捨てられる恐怖と一人になる虚無感を既に経験しているからこそ。

『復讐心』というモノによって押さえつけられているとは言え、彼女にここまでのモノを抱かせた根幹の感情が消えるわけが無いのは当たり前ではあるのだが…それでも、さも当たり前のようにして言い放たれた師の言葉によって、その『負』がどこかへと消えていく。

それは、消えることの無い傷で汚れた少女を、再び『人間』たらしめていたことの証明でもあり…

「カカカッ、んだその顔は、安心した面しやがって。テメェも随分と人間らしい顔つきに戻ったじゃねーの。ここに来たときとは大違いだぜ。」

「…それは…」
「まっ、今まで通り夜はこっちだ。今と何ら変わり無え、昼はあっちのガキ共、夜はちゃんとテメェの面倒みてやんよ。ったく忙しいったらありゃしねぇが、まぁ仕方ねぇよなぁ。なんてったって俺ぁ保護者なんだからよ、カッカッカ。」
「ほご…しゃ…？」

およそ天宮寺　鷹峰という男を昔から知っている人間からすれば、絶対に信じられないような言葉が鷹峰の口から飛び出してきたものの、ここにその言葉に衝撃を受ける他人など存在しない。
また、その言葉を発した鷹峰の心の内は決して他の誰にも分からぬモノに違いないだろう。
自分の子供すらまともに子育てをした覚えの無い天宮寺　鷹峰という男が、こうやって子供たちの面倒を見つつ修行をつけているという行為でさえ、一体何のきまぐれかと思えるほどに似合わない行為に違いなく。

「わかったらさっさと寝ろ。明日からもっとビシバシ行くからよ。」
「はい…先生。」

そして、ほとんどの人間が持っているであろうその『安堵』の正体にも今のヒイラギは気付けぬまま…再び、益々厳しくなっていく修行に身を投じていった。

―…

「おいヒイラギ、まだ世界が憎いか？」
「…はい…」

ヒイラギが鷹峰の元へと来て、この生活を始めてから随分と経ったとある夜。『隠れ家』でいつものようにヒイラギが用意した晩酌を機嫌よく呷っていた鷹峰が、何を思ったのかヒイラギへとそう声をかけてきた。

しかし、ヒイラギはこれまで一言も鷹峰に向かって、自身の『復讐心』を言葉にしたことは無いというのに…

それでもこれまで共に生活をしてきたからか、または鷹峰にも何か思い当たる節があるのか。まぁ、未だにヒイラギの目がどこか濁ったままだということを考えれば、似たような経験をした者ならば、言われなくとも容易に想像がつくことではあるのだが。

それでも、ヒイラギとて鷹峰の言葉に別段驚いた様子も無く。

これまでヒイラギの『事情』を黙認してきた師なのだから、今更自分の『本心』が師に筒抜けだったとしてもどうでもいいのだろう。鷹峰がソレをとっくに理解していても、これまでずっと自分を鍛えてくれていたのだから、と。

「カカッ、そうだよなぁ。ひでぇ目に遭ったみてぇだしよ。まぁ、その気持ちはわかんぜ、俺様も昔は随分敵が多かったからよ。まっ、今も似たようなもんだけどな。それに相手になる奴も少ねぇんだからよ、こんなに年取ってからも退屈でしょうがねぇ。」
「先生は…」
「あ？」

しかし、今こうして師が改めて自分の『本心』を問うてきたからこそ、ヒイラギもまた鷹峰に対し疑問に思っていた己の心の内を投げかけようとしているのか。

それは、天宮寺　鷹峰と言う男が、自分のやりたい事を、ただやりたい様に好き勝手にして生きてきたからこそ生じた疑問でもあり…

「先生は…こんなに強いのに…復讐、したくないんですか？それだけ強かったら好きに暴れられるんじゃ…何で我慢してまで…」

世界に名立たるエクシーズ王者【黒翼】。

一説には、一国の王よりも世界に与える影響力が大きいとまで言われているのが、この世界における決闘の【王者】という存在。

決闘こそ全てのこの世界において、己の身一つだけでここまで上り詰めた存在の持つ『力』と言うモノは、果てしない『暴力』と同義であることはまず間違いないだろう。

それほどまでの力を持った彼が、ヒイラギの抱いている『復讐心』に対して『気持ちはわかる』、『退屈でしょうがない』と、確かに、そう言った。

それは間違いなく、鷹峰もこの世界に対してヒイラギが抱いているモノに近いモノを抱いたことがあるということ。だからこそ、その言葉を聞いたヒイラギが一体どうして師が今まで己の『負』を爆発させていないのだろうかと疑問を抱いたとしても仕方なく。

コレほどまでの『力』を持つ師が、本気で世界に対して喧嘩を売ればすぐにでも世界には大混乱が起き、こんなふざけた世界などすぐにでも壊れてしまうのに、と。

まぁ、その考えと妄想とてヒイラギがまだ幼い故の過大構想ではあるのだろうが…それでも、ソレが『不可能』では無いことを鷹峰もまた知っているからこそ、胸の内に『復讐心』を抱く弟子の問いかけに、いかにして鷹峰は答えるのか。

子育てなどしたことが無く、他人にモノを教えた事も無いこの天宮寺　鷹峰の…

―ここで、師としての力量が問われる。

「復讐…ねぇ…したいぜ？俺も復讐ってやつ。」
「…え？」
「退屈でつまんねぇ、こんな弱ぇ奴らばっかのイラつく世界を、一回ぶっ壊して生き残った強ぇ奴らだけで、強ぇ奴らだけの世界を造る…って話をよ、前に俺も賛成したんだわ。」
「…世界を…ぶっ壊す…」

そんな鷹峰から発せられたのは、紛れも無い本心からの言葉。
彼がこの世界に抱いてきた『退屈』、『憤怒』…そして、『見限り』。その全てから来る【黒翼】の思いもまた、ヒイラギが抱いているモノとは趣旨が違っても、世界を壊すという根本的な部分では同じモノであって。

―世界を壊す。

やり方はどうあれ、こんな気に入らない世界を壊してしまおうとしているという、この男故に感じる『現実味』のあるその言葉。
きっと、やろうと思えば簡単に出来てしまうのだろう。気に入らないモノを壊して、気に入らない奴を消して…
今まで鷹峰がここまで歩んできた人生の中で出した結論がそう言っているのだ。それは、到底『普通』に生きてきただけの『人間』に理解できる代物ではないだろう。
また、それはヒイラギからすれば願っても無いことではないだろうか。自分を見捨てた世界が壊れていく様は、今の彼女が見たい唯一つの景色なのだから。

「でもよぉ…」

—それでも…

「いいじゃねーか、弱くたってよ。今弱いってのは、後から強くなれるってことだ。テメェや他の弟子共みてぇにな。」

それでも、先ほどの自身の『思い』すら簡単に否定してしまう師、鷹峰。

グラスに注がれている上等な酒を呷り、ますます上機嫌になり声の大きさを上げていきながら…透き通った酒とは正反対に『濁った目』をしている己の弟子に対して、更に言葉を続けるのみ。

「相手になる奴が居ねぇ?カカッ、わざわざ選別なんてしなくたって、俺が自分で相手になる奴を作りゃあいい。その方が頭数だって増えるし、その過程も退屈なんてしやしねぇ。…ヒイラギ、テメェが俺にそう言ったんだろ?」

「…それは…」

「おいヒイラギ、テメェがこんな世界に復讐したって別にいい、テメェのことだ、テメェで決めろ。」

「…」

「でもよ…少しだけ見方を変えてみな、確かにこの世界は退屈…いや退屈だったけどよ、それは俺が自分で退屈にしてただけだ。ちょっと見方を変えて面白ぇことを探せば、まだまだこの世界にゃこんなに面白いことがあるんだぜ?」

「見方を…変える…？」
「おう、ランもそうだ、テメェらガキ共鍛えんのもそうだ。見たことねぇ強ぇ奴や、やったことねぇ事がまだまだゴロゴロしてやがる。」

果たして鷹峰がそこまで至るまでに、一体どれほどの退屈や見限りを費やしてきたのかは想像することすら憚られることに違いなく。
しかし、この歳まで生きてきた『強者』が、自分の固定観念に囚われることなく自由にモノを見られるということもまた、鷹峰を今も【黒翼】たらしめていることには違いないだろう。
まだまだ幼い自分の弟子に対し…この歳で想像を絶する絶望を味わった少女に対し…『何か』を伝えられるのは、師となった者だけ。

「楽しめよヒイラギ。辛ぇのも、苦しいのも、全部全部味わって楽しんじまえ。そうすりゃ、世界の方からテメェに、悪かったって自分から頭下げに来るってなもんだ。…テメェの人生なんだ、辛いより、楽しい方が…ずっとずっと、楽だろうが…なぁ？カッカッ…カ……ガー…グォー…」
「あっ…」

そうして…言いたいことを言い終えて、酔いつぶれて眠ってしまった鷹峰。
酔っていたとは言え、鷹峰がこうも饒舌に話しをすることも珍しくはあるのだが…どこまでも好き勝手に振る舞う師を見て、会った事の無い弟弟子達もきっとこの奔放な師に振り回されているのだろうと、名前しか知らぬまだ見ぬ弟弟子たちの苦労を慮るヒイラギ。
…しかしヒイラギには、痛めつけられ、甚振られ、殴られ、嬲られた、あの地獄の様な日々を、今も決して忘れることなど出来ない。
逃げ出し、隠れ、誰からも認識されずにただただ無意味に生きていただけの、あの無駄で空虚な日々を、決して思い出したくも無い。

それほどまでに、ヒイラギの中にある『復讐心』は大きく、またそれが今の彼女を形成している大部分であることには違いないのだが…

「私は…」

―それでも…

この時の師の言葉が、これまでのヒイラギの『何か』を変えたのは、言うまでも無かった。

―…

そうして一年が経った頃だろうか。

「おうヒイラギ、テメェに客だ。」

「…え？」

この日、珍しく日が高く上っている内に『隠れ家』に帰ってきた鷹峰が、ヒイラギへと唐突にそう言ってきた。

その傍らに、ヒイラギの知らない人物を連れ立って。

師である鷹峰よりも年がかなり上であろう見るからに老人であるその人物。立派な服を召し、出で立ちからして相当な家柄のご老公なのだというのが見ただけで理解できるような、まさに上品と言う言葉を体で表したような雰囲気で…

しかし、そんなことなど考えずとも…ヒイラギは、一目見ただでけ直感してしまった。

—それが、紫魔の人間なのだと。

「…あの、先生…これは一体…」
「おぅ、こいつだ。間違いねぇだろ。」
「…なるほど、確かに紫魔　ヒイラギに間違いない。まさかこんなところに居たとは。」

そんな驚きと警戒を見せているヒイラギを他所に、何かを話し始める大人二人。
突如表れた紫魔家の人間に対して、ヒイラギもその全てが『平気』になっているはずなど無いというのに…
恐怖が昇る、1年前に味わっていた『嫌な事』を、思い出すには充分なくらいに。
足が震える、まさか再び『同じ目』に遭わされるのではないかと、思わせるには充分なくらいに。
それに、一体どうして師は紫魔の人間をここに連れてきたのだろうか。その疑惑も相まり、ヒイラギの頭からは血の気が引く感覚が益々強まり、その目は更に濁っていって…

「始めまして…と言った方がいいでしょうな。私は『地紫魔』の紫魔春樹と申します。君がまだ本家に居た頃に一度だけ会ったことがあるのだが…まぁ、今よりも幼かったのだから君は覚えていないでしょう。」

「…」
「しかし探しましたよ、あれだけ探しても見つからなかった君が、まさか鷹峰君のところに居たとは。」

昇り来る恐怖に耐えながらも、何とか紫魔の老人の声を耳に入れながらその意味を聞き取るヒイラギ。
その声と雰囲気から、この老人もどうにかしてヒイラギを警戒させないようにしてくれているのが手に取るようにわかるものの…
最初に引き取られた時も、現れた紫魔家の人間はこうやって優しそうな顔をしていたのだ。それが、引き取り先の家に着いた途端に豹変し、蹴り飛ばすようにしてヒイラギを前の家に押し込んだのだから、おいそれと目の前の他人を信用など出来るはずもなく。
また、『自分を探していた』と言ったこの老人の言葉が引き金となって、あの頃のことがどうしてもヒイラギの頭に昇ってくるのか。
逃げだした後、追っ手に怯えて隠れていたあの頃。いつ見つかってあの場所に戻されるかも分からぬ恐怖は、今でもはっきりと思い出せるほどに、ヒイラギの心に消えない傷を残しているのだから。

連れ戻されて…また辛い目にあう。殴られて、嬲られる、あの苦しさしかない日々が…

そして、そんな状態のヒイラギを見たまま…老人は、その目をとても悲しそうなモノへと変えながら声を続けた。

―しかし、それはヒイラギにとって耳を疑いたくなるモノに違いなく…

「…何せ、本来なら『地紫魔』である私の家に来るはずだった君が、何故か最下層に引き取られていたというのだから。」

「…え？」
「何時まで経っても消息がハッキリせず、綿貫さんを問い詰めたら彼も間違った報告を受けていたというじゃないか。」
「まっ、ジジイも忙しい身だからなぁ。敵も多いんだろうぜ。」
「慌てて君を連れて行った者を探し出して自白…いや問い詰めて探したのだが、誰も知らないの一点張りで一向に消息が掴めず…ようやく君が行方不明になっていることを白状させたと言うのに、その君もまたどこへ消えたのか分からず仕舞いで本当に心配したよ…」
「あ、あの…ど、どうして最初に私を引き取ろうと？本家から追い出された私を…」
「…私たち『地紫魔』はどうにも本家の人間とはソリが合わなくてね…ほぼ絶縁状態に近いんだ。しかし、君の父上、前【紫魔】の憐造君だけは違った。彼の尽力が無ければ、『地紫魔』はとっくに決闘市から追いやられていただろう。」
「…父様が…」
「他の本家の人間とは違い、彼だけには多大な恩がある。だから君の事を知ったときには、本家の怒りなど関係無しに真っ先に君を引き取ると決めたというのに…それがまさか、こんなことになるとは…」

老人が告げる言葉の数々に、ヒイラギの頭は理解が追いつかず。
もしソレが本当だったのならば、自分が受けてきた扱いは全てが間違いだったということになるのだ。人としての尊厳を奪われたのも、心と体に消えない傷を負わされたのも…全て、ただの『間違い』から始まった取り返しのつかないことに。
それが今になってわかったところで、ヒイラギには納得と理解など出来るはずも無いだろう。
何を言っていいのか分からず、また何を思っていいのかも分からず。

…助け舟を求める形で、ヒイラギは師へと顔を向けた。

「あ、あの…先生…」
「あ？」
「それで…どうして、紫魔の人が…？」
「おう、テメェが無事だって知ったから、テメェの事を引き取りてぇんだってよ。」
「え!?」

…それでも、師から放たれた言葉は、ヒイラギの驚愕を下手に強めただけ。
ここに現れたのが紫魔家の人間だというコトが分かった瞬間に、薄々そうなのでは無いかと思ってはいたものの…それでも、こうもはっきりと恐れていたことを言われてしまっては、ヒイラギに驚くなと言う方が無理な話だ。
そんなヒイラギのその驚きを知りながらも…ここにいる大人二人は構わずに話しを続けて…

「…すまない、君が受けてきた事は調べさせてもらったよ…すまなかった、随分と酷い目に遭わされたようで…」
「カカッ、酷ぇなんてモンじゃなかったぜ？よくもまぁ抜け抜けとそんなコトが言えるってなもんだ。」
「…本当に、君にはなんて詫びたらいいのか…」
「あ、あの…」
「約束しよう。『地紫魔』の名にかけて、君の安全を保障すると。正式に『地紫魔』に養子として迎え入れ、これまでの非を詫びて君が紫魔に戻れるように尽力するつもりだ。」

しかし、老人から語られる謝辞は、紛れも無い本心で。
醜い程の人の『負』を見続けてきたヒイラギからすれば、この老人の言葉が『嘘』なのか『本当』なのかを見分けるのは簡単なことでは

あるのだが…

「先生…私は…行きたくな…」

―今更、紫魔家になど戻りたくはない。

そう思っているのがヒイラギの本心。例え、ここから外に出られなくてもいい、ここに居て、師に鍛えられ、師の居る【化物】の巣食う場所へと行くことを、彼女は望んでいるのだ。

…それが、師と交わした契約。途中で逃げ出す事も許さないと言い放った師の元に居ることが、自分の意思なのだと、ヒイラギが言葉を発しかけた…

―その時だった。

「…おい、まだわかんねーのかテメェ。」

「…え？」

「俺様がわざわざ紫魔の人間連れてきたってことは、テメェの事を見限ったってことだろうが。ったく、いくら教えても全然成長しやしねぇじゃねーか。もう飽きたんだよ、テメェの面倒見るのはよ。」

「そんな!?…せ、せんせ…」

「ケッ、何が先生だ。もう師匠でも弟子でも何でも無ぇ。…おぅ、せめてもの選別だ、そのデュエルディスクはくれてやるから、さっさと出てけってんだ。どうせ他に荷物も無ぇだろうが。」

「あ…」

いきなり言い放たれた、突き放すような鷹峰の言葉。

次々に襲い来る師からの恫喝と、見限ったかのような放却に…込み上げてくる『何か』がヒイラギを襲い、少女は言葉を無くして呆然と立ち尽くすだけ。

別に、ヒイラギが今もただ『復讐心』にのみ心を囚われていただけならば、彼女もここまで呆然としてしまうことは無かっただろう。しかし、ヒイラギもそんな上辺だけの生活を送れるほど、この1年間の修行の日々は軽くないのだ。

…一体、どうして。

匿ってやると言ってくれて、鍛えてくれると言ってくれて…今までこうして共に過ごしてきて、初めて信頼をおける大人となっていたはずの師から突きつけられた、あまりに重く苦しい言葉の数々に…

…頭が痺れ、何かが込みあがる。

「…鷹峰君、いいんだね。」

「あ？いいも何も今言った通りだ。コイツとはもう二度と会う事もねぇだろうぜ。どうせこのガキにゃ他に行くとこも無ぇんだ、とっとと連れてきな。」

「…わかった。…絶対にヒイラギの安全は保障しよう。約束する。」

「…好きにしやがれ。」

―あぁなるほど、またこうして捨てられるのか。

今のヒイラギの頭に浮かび上がった感情は、ただそれだけ。今ここで師から突きつけられた現実に対して…『子供』みたいに泣き喚いたり叫び暴れたりしていないのは、偏に彼女が同じことを経験してしまっていたからに他ならないだろう。

やはり、口で何を言おうとも、人は裏切り見限るモノ。

この軽くない1年間を師の元で生きてきて、やっと人を信じられそうになっていた少女ではあったのだが…所詮、人などそういうモノだったということを再び再確認できたのか。

この地紫魔の老人の謝辞が本物であったとは言え、それ以外の紫魔の人間が『こう』とは限らない。裏でまた殴られるかもしれない、裏でまた嬲られるかもしれない…裏でまた、捨てられるかもしれない。

―今だって、そうなのだから。

だったら、もうここには居られない。殴って追い出されないだけマシなのか、それとも力ずくで連れて行かれないだけマシなのか…
そんなことヒイラギには分からなかったものの、それでも既に用は無いと言わんばかりにして背を向けている鷹峰の態度が、既にここがヒイラギの居場所では無いと示しているかのようでもあって。
何も分からなかった最初とは違う、それを今から分かっておけばある程度は耐えられるだろう。だったら、もうこれ以上の人への期待など抱くことも無く過ごしていけばいいのだ、と…そうしてヒイラギはもう何もかも諦めようとして、ただ促されるまま呆然とした足で老人に従うまま歩き出そうとして…

「ッ、あ、あの…」

しかし、すぐにその場でヒイラギは振り返った。
こうして師に見限られ、1年間自分を匿ってくれた『隠れ家』を離れようとしたその瞬間に…彼女は、一体何を思ったのだろうか。
背を向けて、『隠れ家』の中へと入っていきそうな師へと向かって…ヒイラギは、声を残して。

「…今まで、お世話に…なりました…」

それは、搾り出したような少女の声。
もう居場所ではないこの『隠れ家』と、見限られたとは言え今までこうして共に過ごしてくれた師に対して…
―言わずには、居られなかった。

悲痛にも聞こえる少女の声がそう言っていることは、最早誰の耳にも明らかで。
そう、今ヒイラギの目の前で背を向けている師が、この1年間匿ってくれ、他のどの『人間』よりもヒイラギのことを人間扱いしてくれていたことは…消せるはずも無い、紛れも無い真実なのだから。
『その言葉』を発したヒイラギが、思わず自分の言ったことにすら驚いたような顔をしてはいたものの…自然に口から出てしまった、言わざるを得なかったかのような言葉は、確かに少女の口から発せられていて。

「…」

―しかし、師は一瞥も無く。

もう何も言うことなど無い、さっさと消えろ…と、その背中から発せられる雰囲気だけでそれを察することが出来るかのように鷹峰から感じられるのは厳しさだけ。
だからこそ…ヒイラギも、それだけで理解してしまった。もう、ここにしがみついてはいけないのだ、と。
期待は無い、これから行く場所にも。『この場所』からでさえ、捨てられてしまったのだから。きっと、本家を追い出されたあの瞬間から、この世界に自分の居場所なんてなくなってしまったのでは無いか…そんな思いにヒイラギは囚われながら…

…そうして、歩き出す。

これからどうなってしまうのかはわからない。いくらこの老人が優しい人なのだとしても、他の人間はどうかわからない不安がどうしてもヒイラギに募っているのか。
いくら大人を信用できず、自分の手で『復讐』を遂げたいという思

いが彼女にあるとは言え…それでも、ヒイラギとてまだ歳の幼い少女に過ぎないのだから、世を捨てた大人のように振る舞えるはずもなく。

…そんな、痺れる足を引きずるようにして歩きはじめた、いかにも落ち込んでいるという姿でいるヒイラギを見かねたのだろうか。

隣で共に歩きはじめた地紫魔の老人が、見るからに消沈してしまっているヒイラギへと向かって、その口を開いた。

「…ヒイラギ、彼から貰ったデュエルディスクを見て見なさい。」
「…え？」
「デュエルディスクの…そうだな、電話番号のところだ。」
「…でん…わ？」

すると、ヒイラギは促されるまま、老人のいう通りにして鷹峰から最後に貰った、デュエルディスクを立ち上げた。

出会った日に、【ＨＥＲＯ】デッキと共に手渡され…この１年間、ずっとヒイラギが師との修行で使用してきた、型は古いが使い慣れたデュエルディスク。

しかし、貰ったときには初期化されていた、その後もデュエル以外では何も操作などしていなかったデュエルディスクの、『初めて』触る機能の部分を開いた所で、一体何があるというのだろうか。

まるで意味の分からないといった表情で、ただ言われるままにして…ヒイラギはその画面を開いて…

―そこには…

「え、こ、これって…先生の…名前？」

紛れも無い、他には何も登録などされていない番号の欄に、確かに記されている番号の羅列。
そして、たった一つだけそこに登録されていた名は…

間違うはずも無い、『天宮寺　鷹峰』という、たった一つ。

「天宮寺　鷹峰という人と連絡が取れる者は、世界中捜してもそうは居ない。俗世を嫌うからか番号を知っているのも限られているし、そもそも自分から番号を教えるような人でもないのは君が知っている通りだ。そんな彼が…わざわざ『自分の所持品』だったデュエルディスクに、『自分の番号』なんて入れておくと思うかい？」
「…それは…」
「…君には言うなと言われたんだが…彼は、言っていたよ、『ヒイラギはここにずっと一人で居るよりも、もっと居るべき場所があるはずだ』と。それを今の君自身が見つけることは困難だろうから、それを私が作れ、ともね。」
「…」

老人から告げられる言葉はどれも優しく、まるで混乱の中にいるヒイラギを諭しているかのよう。
しかし、鷹峰は一体何を考えて自分の番号など残したのだろうか。
厳しい言葉であれほどはっきりと突き放し、痛いくらいに中てられたあの雰囲気から、師が本気で自分を追い出そうとしていたのを確かに少女は感じていたのだ。
そう、師の言った『見限った』という言葉は、誰が思うよりも深くヒイラギに突き刺さり…師から放たれる圧力は、本気でこの場所から出て行けと簡単に理解できるほどに痛いものだったとうのに。
そんな感情に囚われているヒイラギへと向かって、老人は更に言葉を続けて…

「その番号の意味はわかるだろう?それは、君と彼の繋がりだ。」
「繋…がり?」
「もしもまた君に居場所がなくなったとき…君を、一人にしないための…ね。本当に、不器用な人だよあの人は…昔から。」
「ぁ…」

…

「うぅ…ぁ…」

—涙が、溢れる
『繋がり』…こんな自分がそんなモノを持ってはいけない。ずっと、少女はそう思ってきた。

…だからこそ

紫魔本家から追放されたあの日から…
痛みだけが支配する地獄のようなあの日から…
逃げ出して世界全てが腐って見えたあの日から…

ずっと…ずっとずっと流すことの無かった涙が、確かに少女の目から溢れ始めたのだ。
汚く淀んだ『濁った目』、およそこんな歳の子供が見せるような目ではない、絶望と復讐に囚われた深い悲しみの目。
そんなヒイラギの『濁った目』から溢れる『涙』が、師からこれまで与えられた教えと言葉をヒイラギに思い出させ…まるで、その目の淀みごと洗い流し始めたようにも見え…

―『チッ、一度鍛えてやるって引き受けちまったんだ。面倒臭ぇが、俺様は一度言ったことは撤回しねぇ主義なんだわ。わかったらさっさと治れ、治らなきゃ鍛えるもクソもねぇだろうが。』

―『カカッ、精々潰れんじゃねーぞ、いいな、ヒイラギ。』

―『楽しめよヒイラギ。辛ぇのも、苦しいのも、全部全部味わって楽しんじまえ。そうすりゃ、世界の方からテメェに、悪かったって自分から頭下げに来るってなもんだ。』

最後に突きつけられた、師からの拒絶…しかし、あの痛いくらいに厳しい迫力で『無理やり隠されていた』師の本意に、ようやくヒイラギは気がついたのだ。

これまで貰った、師からの言葉…それが次々と、少女の中で木霊し始め…

―人の気配などない、この決闘市の片隅の深い森の中で…

静かに、微かに…

―少女の泣き声が、響いていた。

「…あばよ、ヒイラギ。」

そして、誰も居なくなったこの場所に、ポツリと漏らされたその言葉が…

静かに、静かに風に乗って…

―どこかへと、飛んでいった。

⋮

ｅｐ５０「閑話ー紫魔　ヒイラギ　後編」

―それからの人生は、本当に幸せだった。

「ヒイラギ、これから私達『地紫魔』が君の家族だ。憐造君には及ばなくとも、君のことを家族としてちゃんと守ると誓おう。『地紫魔』の名にかけて。」
「え、は、はい…」

紫魔本家を追放された、こんな自分に対しても新たに「家族」と呼んでいい存在が出来た事。
『地紫魔』当主である義祖父を筆頭に、家の人間達はその使用人まで含めて誰一人として突如家族となったヒイラギに対して何かを言うわけでもなく…
そんな人達が、行方不明だったヒイラギに心からの心配の意を示し、またヒイラギの無事を喜んで家族に迎え入れてくれたというその光景。
本来ならば、どの紫魔家にも厄介な存在であるはずの少女が、『地紫魔』という『紫魔本家』とは疎遠となっている家に引き取られたという『幸運』は…
そのどれもが確かな温かさに包まれた言葉であり、これまでの環境とはまるで正反対の優しいモノであって。

「姉さま！アカリにデュエル教えて！」
「え？で、でも私より…」
「姉さまの方が兄さまより強いから！姉さまがいい！」
「なっ！お、おいヒイラギ！も、もう一回勝負だ！今度は手加減しないからな！」
「あ、は、はい…」
「くっそー…今度こそお前に【融合】使わせてやるからな…」

また、『地紫魔』という家の子ども達…
こんな自分を、姉と慕ってくれる無邪気な義妹。少々横暴なところがあるが、あの頃と違い、傷つけてくることなく接してくれる義兄。
そう、歳がヒイラギとそれぞれ一つずつ離れた、義兄と義妹となった新しい家族達が、何の抵抗も無くヒイラギのことを家族として受け入れてくれたことが、ヒイラギにとっては何よりも驚きとなっていた。
…まぁ、これまでの約1年間を師である【黒翼】の下で壮絶な修行に費やしてきたヒイラギと義兄とでは、同じ紫魔家のデュエリストと言えども根本的に実力自体が異なってはいたのだが…
それでも、妬くことなく素直にヒイラギの実力の高さを認めてくれていることには変わりないこと。
しかし、同世代の子どもから傷つけられる毎日を送っていたヒイラギからすれば、同じ歳の子どもと触れ合うことに最初は抵抗があったのか。どこか戸惑いを残しつつも、一体どうやって『新たな家族』に触れ合えばいいのか分からない様子を見せているヒイラギ。
…とは言え、これまで紫魔家の人間から傷つけられるだけの日々を送っていたヒイラギにとって、この歳の近い兄妹達のその接し方はこれまでの何よりも彼女の『絶望』してきた心を溶かすには十分であって…
そんな『兄妹』達との触れあいは、これまでの生活で無くした『何か』をヒイラギに思い出させていた。

「お嬢様！お茶なら私達が煎れますので！」
「え？でも自分の分くらい自分で…」
「いいからお嬢様は座っててください！」
「あ、ありがとう…」

また、正式に『地紫魔』の養女となったヒイラギには、義祖父の計らいで2人の従者が付けられた。
それぞれ性別は違うものの、同じ顔をした紫魔　右京と紫魔　サ

キョウの2人。
しかし、本家に住んでいた頃には当たり前だったはずの従者も、今となっては身の回りの世話を焼こうとしてくることに対して…どこか違和感を覚える様子をヒイラギは時折見せていて。
…『地紫魔』に来るまでの約1年を、師の元で『自分の面倒を自分で見る』という生活をしていたのだからそれも当たり前だろうが。
まだ幼いと言える年齢だというのに、何かと自分の事を自分でやろうとするヒイラギを慌てて止める従者の光景はどこかほほえましくもあり…そう言ったふれあいが、より一層ヒイラギの心を溶かしていたのはまず間違いないことだろう。

…更にヒイラギには、決闘学園の初等部に通う事まで許された。
編入と言う形を取り中途の入学ではあったものの、元々師の元で高レベルの修行を行っていたヒイラギからすれば決闘学園初等部で行われる『教育』などあってないようなモノではあったが…それでも、同じ歳の子ども達と過ごす日常は、これまでの生活の中で彼女が得られなかったモノを埋めるには充分であって。

それは、『普通』の子どもが送るような、『普通』の生活。
これが、『普通』の家族が過ごすような、『普通』の日常。

—地獄のようなあの日々に傷つけられた心が、ここで癒されていく。
『地紫魔』という、紫魔家の『上位』の一角を担う大きな家に引き取られたということもあるが、そんな待遇などなど関係ないほどにヒイラギが『地紫魔』に来てからの生活は心の底から幸せと呼べるようなモノとなっていて。
それは、これまで『人間』に裏切られ続けて、傷つけられてきたヒ

イラギにとってはどれも想像すらしていなかった優しさに溢れていたことだろう。

―何をするでもない。ただ新しく出来た、『家族』という繋がりが、彼女を取り巻いていた『絶望』を消していく。

地獄のような『あの日々』と、『修行』と言う名の『暴虐』の中でいつしか忘れてしまっていた『笑顔』という表情が、時折ヒイラギの頬に自然に浮かんでくる程にどこまでも優しく彼女を包んで。

―特別なことは必要ない。ヒイラギにとって、『普通』の生活を送れるというこの『暖かい場所』が、忘れていた感情を思い出させるのか。

彼女に必要だったのは、『暖かい場所』と『家族』

そう、あの『冷たい雨の日』に『家族』を奪われた故に、どうしても彼女の目は深い絶望に落ちてしまっていたのだ。

きっと彼女もあんな目に遭わなければ、『家族』という繋がりをこれほどまでに重要視することはなかっただろう。

以前に師に言われた通り、『見方を変えて』世界を見れば、あれだけ寂しく映っていた世界の裏に、こんなにも優しい世界もあったのだ…と、それを今、改めて実感しているヒイラギ。

これまで世界全てが醜く見えていた、ヒイラギの濁っていた眼と…

乱雑に切り刻まれていた髪は…

しばらくの後、元の綺麗なモノに…戻っていった。

―…

―そして…

そんな『普通』の幸せな生活が、『１０年』ほど続いた頃だろうか。

「お嬢様、まだ起きてらっしゃったのですか？」
「あらサキョウ…ええ、何だか眠れなくて。」

何気ない穏やかな、暖かい風が吹くとある夜。
決闘学園の、この春休みが終われば『高等部２年生』という年齢にまで成長したヒイラギは…
夜も深い時間、そこに輝く夜の月明かりに照らされながら、もう随分と住み慣れたこの『地紫魔』の屋敷の軒先に腰掛け、夜空に光る月を見ていた。

「でしたら、何か温かい物でもお持ちします。」
「気を使わなくてもいいわ。もう少ししたら私も休むから大丈夫。」
「しかし…」
「大丈夫。サキョウ、あなたも早く休んで。」

そんなヒイラギに従者であるサキョウが声をかけてきたものの…ヒイラギから発せられた言葉は優しく、従者と言う名の使用人に対しても分け隔てなく心使いを感じさせるモノ。
『地紫魔』の家に引き取られて、もう『１０年』。
今まで過ごして来たどの場所よりも、この『地紫魔』の屋敷はヒイラギにとって『家』と呼べる場所となっていた。

夜風に揺られ、月明かりに煌く艶やかな髪はかつて無残に切り裂かれたあの頃と比べて、随分と元の美しさを取り戻し…傷だらけのやせ細った少女だった体は、歳相応の成長を遂げて紫魔家の令嬢と呼ぶに相応しい、とても美しい女性へと成長していて。

こうして未だに従者からあれこれ言われることもあるが…同じ歳と言うこともあってか、従者と主のその関係はとても良好なモノ。また、従者という括りはあるものの、特に同性であるサキョウとは、どこか友人のような絆さえ芽生えているのか。

―もう、あの地獄のような日々で受けていた傷も随分と癒えた。

この家に引き取られてこなかったら、きっと未だ彼女の目は濁ったままであったはずだし…こうして、同じ歳の友人さえ持つ事もなかっただろう。

それを忘れていないからこそ、こうして声をかけてきた従者に対しても、ヒイラギはどこまでも優しい口調のままで接しているのだ。

「…わかりました。ではお先に失礼いたします。おやすみなさい、お嬢様。」

「えぇ、おやすみ、サキョウ。」

そう言って、サキョウが屋敷の奥へと歩いていくのを見送って、その視線を再び月へと戻したヒイラギ。

…『今』の彼女がこうして、穏やかな目をして他人を見ることが出来るだなんて『あの頃』の自分が見ても絶対に理解できるはずがないだろう。

こうして、ただぼんやりと『月』を見ている彼女の目は、狭い路地に閉じこもり隠れていた『あの頃』とは違い濁ってはおらず。きっと、澄んだ目でこうして空に浮かんでいる月を見ているだけの行為は、確

かにここで生きているという『生』を彼女に実感させていることだろう。

…とは言え、あの頃に受けた屈辱と絶望を、ヒイラギは決して忘れてはいない。

彼女の中に今も確かに残っている『復讐心』は、形を変えたとは言え『今』の彼女を構成しているモノに違いなく…その思いは彼女に、『とある目的』を抱かせていて。

消えない傷を負った心と体。それは、これから先の人生においてもずっと彼女に付きまとってくるモノなのだから。

…それでも

「…もうすぐ、先生の弟子達が入学してくるんでしたわね。」

この春休みが終われば、彼女も決闘学園高等部イースト校の2年生に進級するこの時期…ヒイラギには、他の誰にもない密かな楽しみを抱いていた。

それは、今イースト校で広まっている…いや、決闘市中で広まっている、『とある話』と大いに関係のあること。

—そう、新入生の中に、【黒翼】の孫がいるという、そんな話で。

何せ、神格化されている【黒翼】の孫。幼少期から数々の大会に出場してその力を見せ付けていると言うことはこの決闘市では有名な話であり、そんな【黒翼】の才覚を受け継いでいる孫が一体どの決闘学園高等部に入学するのかについて、街中で騒ぎになっているほどなのだから。

…それだけではない。

さらに今、決闘市を多いに賑わせている噂の中には先の『良いニュース』の他にもう一つ、『悪いニュース』も騒がれていて。

…それは、新入生の中に『あの天城　遊良』まで入学してくるというモノ。

【黒翼】の孫という歓迎されるべくして騒がれているのならばイースト校も手放しで喜んでいたものの…『天城　遊良』という歓迎できない存在まで一緒についてくるものだから、『良い意味』でも『悪い意味』でも今のイースト校は大騒ぎとなっていた。

…無論、外の情報を知る由もなかったあの頃とは違い、今のヒイラギもこの決闘市で『天城　遊良』という存在がどういった言われ方をしているのかは知っている。

―Ｅｘ適正の無い出来損ない、デュエリストの成り損ない、この世界で意味の無い存在…

そんな卑下と侮蔑の言葉を、誰もが何の恥ずかしげも無く一人の少年にぶつけているのだ。

何の疑問も持たず、何の戸惑いも無く。まるで『天城　遊良』という少年は、『そう』言われることが義務なのだと、そう言わんばかりにそれは止まず。

しかし…

「会えるのが楽しみね。今までずっと先生に鍛えられているんだから、凄く強いはずですし…」

ヒイラギからしてみれば、例え街中で『天城　遊良』が何を言われていようとも関係は無く。
同じ師の元で学んだ弟弟子。いくらＥｘ適正が無くとも、『その程度』でデュエリストの強弱など決まらないということはヒイラギとて嫌と言うほど師に教え込まれているのだ。
そんなヒイラギにとっては、この社会が天城　遊良というデュエリストを認めていなくとも関係など無い。

…きっと、『あの時』とっさに行動を起こした自分と同じ。

『天城　遊良』という少年も、Ｅｘ適正が無いというハンデを背負ってでも師の元へと辿りついたのだから、決して周囲が噂しているような『弱者』のままでいるはずが無い。
…いや、あの師が、Ｅｘ適正が無いという恰好の『面白い素材』を、そのままの『弱者』で終わらせているはずがないということを、ヒイラギはその身を持って知っているのだ。
天城　遊良だけではない、師の孫である天宮寺　鷹矢もそう、【神】の気配を持っているという少女もそう。
師の元を去ったこんな自分が、今更同じ弟子面をして彼らと接することなど出来ないが…それでも同じ師を持った身であるのだから、彼らと高等部で会えるのが楽しみで仕方がないと、そう心躍らせているヒイラギの口にはいつの間にか微かな笑みが零れていて。

…確かに世界は非情なままで、今でも世界は醜いまま。

しかし、師が教えてくれた『見方を変えてみろ』というその言葉の通り。世界全てを『醜い』と思ったままではなく、少し見方を変えてみれば…こんな醜い世界の裏には、まだまだ面白いと思えるモノだって沢山あったのだ。

一つ見方を変えてみれば、世界にあったのは絶望だけではなかっ

た。

今見ている月もそう、この平穏な夜もそう。地獄を味わわせた紫魔家もいれば、こうして救ってくれた紫魔家もいる。世界に見捨てられたと思えば、拾ってくれた師もいた。

今の彼女がこうして笑えているのだって、彼女の行動が起こした一種の奇跡。

必死になって逃げ出したあの時、あの地獄に絶望してただ腐るのを受け入れてしまっていれば、きっとこうして笑える前に死んでいたはず…

「…早く、明日が来ないかしら…」

そんな思いに包まれながら、暖かな夜風が平穏を感じているヒイラギの頬を優しく撫で…

未だ見ぬ弟弟子達との邂逅を、今から心待ちにして心躍らせていた…

—その時だった。

—ミツ…ケタ…

「…え？」

静かな夜の庭園に、僅かに『音』が聞こえたかと思った、その瞬間のこと。

―！

それが幻聴か雑音かと思って耳を疑ったヒイラギの眼前に、突如としてこの『夜』よりも暗い『闇』が噴出したのだ。

…それだけではない。

『闇』はそのままヒイラギを覆うようにして広がったかと思うと、まるで大口を開けたかのようにして彼女を飲み込み始め…彼女を照らす月明かりを遮り、光届かぬ深淵へと引きずり込み始めたではないか。

そんな突然巻き起こったこの現象は、ヒイラギの理解の範疇を超えたモノに違いなく…あまりに突然だったのか、彼女から声を奪ってしまい悲鳴を上げることを忘れ…

―ミツ…ケタ…ヒイ…ラギ…

そのままヒイラギの体を飲み込んだかと思うと、彼女の足元に広がっていた『闇』へと、ヒイラギの体が沈んでいくこの光景は、決して信じられないような超常的なモノ。

「…な…何…これ…」

理解できるはずもない。

たった今、住み慣れた屋敷の縁側に座って月を見ていただけだったというのに…それが突如として、光を届かぬ『闇』の中に引きずり込まれただなんて。

まるで冷たい溶岩の中に放り込まれたかのような君の悪い感触。ソコに体が沈んでいく嫌な感覚は、彼女が今までに体験したことのないような不気味なものに違いなく

また、先ほど聞こえてきた『音』にもならぬ響き、『声』にも聞こえぬ呻き。それは、この世のモノではないかのように響いていたのだ。そんな得体の知れない声の主が確かにヒイラギの名を呼んだというそんな現象を、とても彼女がすぐに理解できるはずもないだろう。

そしてヒイラギが完全に『闇』の中へと沈み、地面に足がついていないような、そんな気味の悪い浮遊感に彼女が包まれたと思ったその時…

…再び、ソレは響いた。

『ようやく…見つけたよ…ヒイラギ…』

「えっ!?」

…それは、ヒイラギには到底信じられるような光景ではなかった。いや、この光届かぬ深淵の『闇』の中で、『光景』が見えるのかすら怪しいことではあるのだが…それでもこんな『闇』の中で、ヒイラギの目に飛び込んできた紛れも無い『光景』は確かに彼女の目に映っていて。

見間違うはずも無い『あの時』のままの姿。響いている『音』も見えている姿も…

ソレは、彼女の記憶の中に残っている当時のまま、全く変わっていないモノだったのだから。

「…あ、そ、そんな…と、父…様?」

『あぁヒイラギ…会いたかった、こんなに大きくなって…』

…『闇』を纏い、悲しみを漏らし、『声』とは思えぬ『音』を響かせ。

ソレをヒイラギが見間違うはずがない。記憶に焼き付いた気高き姿、頂点に立った誇り高き振る舞い…自分にだけ向けてくれた、優しい声。そこにあったのは、『あの時』連れていたはずの唯一の肉親の姿。

―そう、当に死んだはずの、『父』の姿。

『済まない、随分と酷い目にあわせてしまって…こんなにお前を待たせてしまった…』
「ど、どうして……ほ、本当に…父様…なの?だ、だって父様は…」

…だからこそ、ヒイラギは信じられない。これが、こんなモノが、本当に自分の父なのかを。
何せ、今見えている父は最期に見た時の若々しいままの姿。自分だけが１０年の歳月を年取ってこんなにも成長したというのに…父は『あの時』連れていかれたままの、『１０年前』の姿のままに見えたのだから。
まさかソレが、こんな『闇』の中から現れるだなんて。

「だって父様は、１０年前に…」
『あぁ、一度死んでしまったよ…しかし、今こうして蘇ることが出来た…間違いなく、私はお前の父だ、ヒイラギ。』
「よ、よみがえ…った?」

…そして、到底信じられるような現象ではないことを、いとも簡単にヒイラギに伝えてきたこの『闇』。
死んだ人間は生き返らない。そうだと言うのに、この世の理を無視したような目の前の存在は、確かにヒイラギの記憶の中にあった、優しい父の姿のままであり…
確かに姿は紫魔　憐造、声も形も当時の父のまま。しかし、『それ以

外』は明らかにヒイラギの理解の範疇を超えたモノ。

―それが確かに今、彼女の父を名乗っているのだ。

そんな、あまりの衝撃から思考することを放棄してしまったかのようにして放心しているヒイラギを他所に、『闇』は言葉を続けるのみ。

『そうだ。ヒイラギ、お前をあんな目に遭わせた世界がどうしても許せなくてね。…あぁ、私がこうして蘇るまでに、お前がこんなに大きくなるまでに、一体どれほどの屈辱を味わわされたのだろう』

「いえ、その…父様、私…」

『しかし、積もる話は後だ。やっと会えたのだからゆっくり話しもしたいが、それよりも先にやるべきことがある。』

「え?やるべき…こと?」

『…今までずっと見てやれなくてすまなかった、だが安心してくれ、こんな世界、すぐにでも私が消してあげよう。』

「なっ!?け、消すって!?」

まだ状況を飲み込めていないというのに、そんなヒイラギを他所に衝撃的なその言葉を『闇』は発して。

憎しみと怒りの感情から発せられるその言葉は、今にもこの世界そのモノを文字通り消し去ってしまいそうなくらいに荒々しく…

到底『物の例え』では終わらぬと思わせる程に、ソレは現実味を帯びた圧力で発せられ今にも爆発してしまいそうな恐怖が迸っていて。

…そう、本気で消し去ろうとしているのだろう。

この目の前の『異常』な光景を見てソレが理解できぬほどヒイラギとて愚かではないし、そもそも既に死んでいるはずの父がこうして現れたこと事態が既に信じられないような光景なのだから。

何が起こったのかわからない驚きも、折角『父』に再び会えた感動も、その全てを忘れてしまいそうなくらいに荒々しく猛り狂った

『闇』。
そんなモノがこうして、怒りを今にも爆発させようとしているのだ。状況が飲み込めていないヒイラギが驚きの声を上げたものの、『闇』はさも当たり前のようして言葉を続け…
『言った通りだ、感じるよ、お前の中にある『復讐心』を。お前もこんな世界が憎いんだろう?だがもう心配は要らないよヒイラギ、お前以外の人間を全て消せば、もうお前を傷つける人間は居なくなる。』
「全て!?そ、そんなっ、でも父様…」
『お前を傷つけたこんな腐った世界を、私が余すところなく飲み込んでやる。誰も残さず、一人残さずだ!』
「あの、話を聞いて!」

聞く耳を持たず、有無を言わせず、考える時間すら与えてくれず。思ってもみなかった『父』との邂逅で混乱に襲われているヒイラギからすれば、何がどうなっているのかを飲み込めてすらいないというのに…
まるで、ずっと我慢していたモノを押さえきれないかのようにして矢継ぎ早に『言葉』を繰り出す父に、ヒイラギは言葉を交わす余裕すら貰えていないではないか。
『さぁ、すぐにでもあの時助けてやれなかった償いを始めよう。全て飲み込むには少し時間がかかるだろうが、必ずこの世の全てを飲み込んで消し去ってやるからね。お前を傷つけた人間は、一人残らず全て…先ずは、お前を傷つけたこの決闘市からだ!』
「待っ…」

そうして、娘の制止など耳にも居れず、先走る怒りと逆る歪み、漏れ出す『闇』が憐造のような存在から溢れ出し…
そうして…この不気味な空間の中で『闇』はその存在を膨らませた

かと思うと、その身に『闇』を纏いその勢いを一気に増し始め…

今にも、ソレを爆発させようとした…

―その時だった。

「まっ、待って父様！待ってください！」

『…どうした、ヒイラギ？』

決してどんな声も聞き入れないような『闇』に対し、それでも必至になってその声を上げて叫んだヒイラギ。

…それが届いたのは偶然か、またはヒイラギだったからこそ届いたのか…または、その両方か。

しかし、それは今はどうでもいいこと。今にも爆発しそうだった『闇』がヒイラギの叫びに呼応して、一瞬の後にその唸りを止めているのは紛れも無い事実…どうにか届いた叫びによって、憐造のような『闇』がその荒ぶりを止め、ゆっくりとヒイラギの方へと向かい合い始めて。

そんな『闇』は、さも不思議そうにしてヒイラギに向かい合うと、どこからとも無く不可思議な『音』を言葉に変えてヒイラギに届け始めた。

『…どうしたヒイラギ？何故止めるんだ…お前だって早くこんな世界は消え去った方がいいだろう？』

「い、いえ…あ、あの…」

今のこの『闇』の昂ぶりを見ていれば、ヒイラギとて嫌でも理解できる。

…父は、本気でこの世界を飲み込んでしまうのだ、と。

こんな不可思議な『闇』の中に放り込まれたというのに、彼女が取り乱したりせず『父』と向かい合えるのは、一度地獄を味わったから

こその精神力から来るものではあるのだが…
今こうして、蘇った父の中ではきっと自分は傷つけられていた『あの頃』のままなのではないか。
傷つけられ、殴られ、嬲られ、甚振られていた、あの小さい頃のまま。
そう、憐造はヒイラギの中にある、『復讐心』というそれ『そのモノ』だけを感じ取ったのか、自分の行動がそのまま娘の本意なのだと錯覚してしまっている様子なのだ。
漏れ出してくる恐怖の圧は、かつての父の比ではなく…きっと、すぐにでもこの世界を飲み込んで、しまうことだろう。

「その…と、父様…」

…だからこそ、ヒイラギは考える。

…どうすれば、父を止められるのかを。

『…どうしたんだいヒイラギ、お前だって、こんな世界を消し去りたいと、壊したいと思っているんだろう？お前の中にある『復讐心』をこんなにも容易く感じ取れるというのに。』
「…そ、それは…」
『お前が何をされたのかは知っている。とてもじゃないが、許すことなど出来ないはずだ。』

確かに父の言った通り、今もヒイラギには世界に対する『復讐心』が渦巻いている。自分を見捨てた世界、自分を傷つけた人間、自分を切り捨てた社会に対する、どうしようもない怒りと悲しみが。
そう、いくらこの１０年であの時の『傷』が随分と癒えたとは言えども…あの時に傷つけられた尊厳や痛みは、とてもじゃないが忘れることなど出来ない代物となって彼女に刻まれているのだ。
それは今だって消えることなく彼女の記憶の奥底に潜んでいて、時

折顔を出しては今もヒイラギを苦しめていて。

『だからお前の望みを、この私が叶えてあげるよ。その為に私は蘇ったのだから。』

「あ、わ、わたし、は…」

―だからこそ父の言った通りの『復讐心』が、確かに彼女の中に渦巻いている。

この世界に対する彼女の恨みは、簡単に許して消し去れるほど浅いモノであるはずがないだろう。この世界は『弱者』を決して助けてはくれず、力ある強者にしかその笑みを見せないほどに腐っていて…

それを痛いほど…いや、痛みを持って理解したヒイラギだからこそ、こんな理不尽で腐っている世界など壊しつくしてやりたいと思っていた事もまた真実に違いなく。

―それでも…

(世界を消すなんて…駄目…)

―それを、その思いを。今一度、自身の心へと思い直したヒイラギ。

…そう、唯一つ、父と娘の思いには大きな違いがあった。

父の言った、『世界を消す』という行為を…ヒイラギは、望んでなどいなかったという、唯一の違いが。

―ヒイラギに渦巻く『復讐心』…

ソレは、あの汚く腐った場所に放り込まれていた時代に抱いていたどす黒いモノからは…大きく、そして全く異なった代物へと変化していたのだ。
あの場所から逃げ出し、師と出会い、そしてこの『地紫魔』という新たな家族を得たからこそ変化した…
世界に対する『見方を変えた』からこそ抱けた、彼女の真なる『復讐心』。

―生き抜いて、生き抜いて…

―そして最後には、幸せに笑って死んでやる。

それが、自分を見捨てた世界に対する、彼女の真なる『復讐心』。
世界そのモノが見捨てたはずの小さく汚いこの命が、与えられた絶望に負けず幸せに笑って最後を迎えられたら…それは一体、どれほど大きな『世界』への復讐となるのだろう。

押し寄せる絶望に決して負けず、押し付けられた理不尽にも決して負けず…最後の最後まで幸せに笑っていられたらなら、さぞこの世界はヒイラギを見て悔しがるだろうから。

だからこそ、その復讐を遂げるその時まで、この世界には壊れずにいてもらわなければヒイラギが復讐を遂げる意味が無いのだ。

…そうして、ヒイラギは考える。

今、どうしたら父を止められるのか…
いや、ここで全てを止めなくともいい。今すぐの暴走を、今すぐの消滅を少しでも留まらせることは出来ないか…

それを、必死になって考えるヒイラギ。

…思考を止めず、考えを消さず。

訝しげにしている父を、何時までも待たせは出来ない。ヒイラギの沈黙が続けば、きっとすぐにもで『行動』を再開してしまうだろうから。

―そして…

「あ、あの…父様…」

『何だ？やはりすぐに消し去ってしまいたいのだろう？』

「い、いえ…父様に、お、お願いが…」

『お願い？』

意を決したように、父と向かい合ってそう言ったヒイラギ。

そして、娘からそんなことを言われるのを全く想定していなかったのか、憐造はますます訝しげな表情を見せながら娘の顔を覗きこんで、その真意を問おうとしている様子。

それは、生半可な嘘やその場凌ぎの言葉などではその心の内をすぐに見破られてしまいそうなほどに不気味な感触をヒイラギに与えていて…

それでも、ヒイラギはまるで、ソレが『本意』かのように強く思いながらその口を開いた。

「す、すぐに消し去ってしまうだなんて…も、勿体無いですわ…」

『勿体無い？どういうことだ？』

「な、長い間私をこんな目に遭わせ続けてきたというのに…父様が一瞬で飲み込んでしまっては、他の人間達に苦しみなんて、与えられな

いでしょう？ですから…他の人間達にも、苦しみを与えてやりたいのです。私の苦しみを味わわずに消えていくなんて、ゆ、許せませんもの…」

残虐性を醸し出すような言葉を選び、被虐から抱いたモノを漏らすような…そんな言葉をヒイラギは発して。

―本心ではない。しかし、さも本心かのように感情を込めて、そう『演じる』ヒイラギ。

どこか声も上ずって、心臓が爆発しそうなほどに煩く彼女の胸を乱暴に叩いていたものの…それを無理やり押さえつけて、『父』が思っているような『可哀想な娘』を演じているのだ。

そう言って、少しでも『父』の暴走を止められるのならば、と。

『…なるほど、確かにそれはそうだ。』

「で、でしょう？ですから…」

『ではすぐに街を壊そう！お前のために、今すぐこの街を悲鳴で埋め尽くしてやる！』

「ま、待って！ま、まだ！まだです！今はまだ時期が悪いかと…」

『時期？では何時にする？明日か？明後日か？ヒイラギ、お前のためなら何時だってこんな街など壊してやるよ。』

「あ、え、えっと…」

ヒイラギが少しでも言葉を間違えれば、今にも暴走を起こしてしまいそうな今の『父』はまるで『その衝動』だけに支配されているかのよう。

他の追随を許さなかったあの頃よりも、今の『父』から感じるプレッシャーは比べ物にならないくらいに酷く歪んでいて…

―そう、これは【王者】を越えた、【化物】の領域。

死から本当に蘇ったからこそ、もう既に人間ではない本物の【化物】。そんな存在が暴れまわってしまえば、止められるような者などこの世には存在しないのでは無いかという恐怖が何時までもヒイラギに着いて回っているのだ。
そんな存在と言葉を交わしていることすら、ヒイラギの恐怖をどこまでも煽っているだけ。

「そ、そうですわ！ね、年末に『決闘祭』がありますでしょう!?その時期は街の外からも多くの人間がこの街に来ます！そ、その方がより多くの人間を苦しめられますわ！」
『…そんなに後か？我が娘ながら、随分と悠長に居られるものだ。』
「わ、私だって…こんな世界早く壊したいですが…こ、これまで耐えたのですから、あと少しくらい、どうってことないですもの。」
『…そうか。随分と酷い目に遭って来たものだ、本当に…』

そうして、まるで情に訴えるかのようにして少しでもヒイラギは『事』を先延ばしに出来ないかと画策して。
深く思慮した結果ではない。何とか思考をフル回転させ、即興でどうにか父を食い止めているのだ。
まぁ、こんな『闇』に情などあるのかは怪しいことではあるのだが…この『闇』が確かに『父』であるのならば、他の誰よりも娘であるヒイラギの言葉を聞き入れるというのは当たり前のことなのか。
「そ、それまでに準備をいたしましょう？父様もせっかく蘇ってくれたんですもの、お話したいことが沢山…ですから、具体的にどうしていくかはこれから…」

そうして、少しでも暴走を遅らせてその間に『父』を説得できないか。こうして自分の話しを聞いてくれているのだから、話合いを重ねればきっと…

そう、ヒイラギが考え言葉を続けようとしたその時…

『…いや、すまな……イラギ…』

一瞬、ヒイラギがいるこの深い『闇』が揺らぎ…にわかに『父』の声がノイズをまとい始めた。

「…え？」

『…私にはもう…まり時間が…無い…うだ。こ…して…姿を現せ…のも…僅かな…間しか…』

「そ、そんな…」

『大…夫だ…私は一度眠…が、明日…良いモノを…あげ…う。そ…があれば…眠って…ても…ずっとお前の居る…所を…感じ…られ…』

そうして、『闇』の中に消えていく憐造。

次第に薄れ始める『父』の姿と、途切れ途切れになり始めるその声が周囲を覆っている『闇』と同調し、『闇』の空間に裂け目が入り始めて。

「あ、と、父様！」

今何が起こっているのかをヒイラギは理解できないのだろうが、そんな聞き取りにくくなる声は、再び『父』が居なくなるというコトをヒイラギに思い出させたのか。

この空間と、父のような『闇』に恐怖を抱いていたはずなのに…

薄れ行きながら消えていく父の姿は、確かにヒイラギの心にどこか寂しさを覚えさせている様子。

そう、いくらここが『闇』の中で、いくら父が『得体の知れない存在』となってしまったのだとしても…死んでしまった父と再び会えるとは思わなかったが故に、父が消えていくという微かな空しさは、彼女にとっては決して嘘などではなく…

「待っ…」

―そうして、彼女が思わず父に手を伸ばしたその瞬間…

囚われていたはずの『闇』が砕け、綺麗な月明かりだけがヒイラギの伸ばした手を照らしていた。

それは、喧騒の無い静かな夜の中で…

―…

自室に戻り、恐怖と混乱で暴れる心臓を押さえてヒイラギは考える。

―公にこのことを発表し、人々の危機感を上げるか…

いや、一体誰が既に死んだはずの人間が蘇ったなどと信じてくれるだろう。

―『紫魔本家』に事情を話すか…

いや、すでに父は『紫魔家』から除名されている身。いくら蘇ったことを理解させても、あの古の決まりに雁字搦めに縛られている『紫魔本家』が、今更父のことで腰を上げようとしてくれるばずもない。

―力ずくで止めるか…

いや、前【紫魔】である父、憐造の実力は歴代最強とまで謳われたモノ。全盛期の真っ盛りで引き摺り下ろされた父の実力の高さは、彼女自身が最も理解しており…それは現【紫魔】である『紫魔　恋介』も

まだ追いつけていない領域にあると言うことは、全世界の人間が感じていることなのだ。

そんな『父』が、そのままどころか更に得体の知れない『何か』を増して戻ってきたということを、到底他人に信じてもらえるわけもなく。また、誰であろうと立ち向かえるはずが無いことを意味していて。

それは例え、今この世界で頂点に立っている【王者】でさえ同じ…そうやって考えを巡らせれば巡らせるほど、ヒイラギは逃げ道が残されていないことを理解し始め…

そんな絶望が彼女を包み始めた…

—その時。

「…あっ…」

唐突に、閃いた。

—そう、歴代最強と謳われたかつての全盛期の父と、『同じくらい強かった』存在を。

—他の二人の若き【王者】と違い、たった一人だけ立ち向かえそうな歴戦の【王者】の存在を。

—本物の【化物】となってしまった『父』と、同じ部類の圧力を持つ存在を…

そんな存在など、ヒイラギの頭の中のどこを探してもたったの一人しか思いつかないだろう。

…しかし

「…い、今更…連絡なんて…」

そこまで至ったというのに、不意に止まってしまったヒイラギの思考。

ヒイラギが思い出した確かな『繋がり』。その手には無意識のうちに操作してしまったのか、縋るように握り締められていたヒイラギの手にあるデュエルディスクには、とある男の名が表示されている。

―『天宮寺　鷹峰』の、その名が。

『全盛期の父』と、『同じくらい強い』存在。同じ【化物】の圧力を持つ、彼女の師。

もう止まってしまったヒイラギの思考には、彼以外の選択肢が浮かび上がってこないかのようにその存在への希望があふれ出ていたものの…

それでも、この一刻を争う危険な場面であってもヒイラギの手はそこで止まってしまっていて。

…そう、いくら師から『繋がり』を与えられたとは言え、もう１０年近くも連絡はおろか、まともに姿さえ見られていないのだ。

もちろん『地紫魔』に引き取られてから師と話をすること機会も無かったし、何より彼の口から師弟関係を切られ追い出された形で今の『地紫魔』の家に引き取られたのだから自分から連絡など取っていいものなのかと、そう思ってしまう心が今の彼女には浮かび上がっているのだろう。

―『１０年』と言う歳月は長い。

ヒイラギが『復讐心』をどす黒いモノから純粋な目的へと変化させられた様に、師の思いだって変わってしまっている可能性が高く。

また、他の弟子達と違い、たったの『１年』しか師の元に居られなかったのだから、既に師からしても自分は他人のような関係性なのではないだろうか。そんな自分が今更師に連絡を入れたところで、あの人に迷惑をかけるだけなのでは無いだろうか…そんなことを、どうしても考えてしまい小さく震え始めたヒイラギ。

「でも…あの人しか…」

それでも、頼れる者は彼しかいない。今ここで行動を起こせるかどうかで、これから先に起こってしまうコトは大きく変わってくるのだ。

どこにいても『父』は自分を見つけてくるだろうから、堂々と師に会いに行く事もできないし…何よりどこに居るのかも分からない相手に、会いにいけるはずも無いこの状態ではこの『繋がり』に頼るほか彼女にはもう選択しは残っておらず。

何が起こってしまうのかを知っているのは自分だけ、ここで自分が諦めてしまえば、世界は取り返しの着かないことになってしまうのだから。

震える指先をどうにか制御し、震える心をどうにか押さえて。

意を決したように、ディスクを耳に当て…

―そして…

「…で、出ない…」

無機質なコール音がディスクに響き続け、電子回線の向こう側で確かに師を呼び出す音が響き渡っているはずだというのに、コールが１５回を超えても一向に繋がる様子を見せない電子音。

…やはり、連絡など取れないのだろうか。

自由奔放で知られる【黒翼】と連絡が取れる者は、世界にもそうは居ない。それは、彼を知る者からすればかなり有名な話であり…

自分から連絡をしてくることも稀な天宮寺　鷹峰という男の所在を詳しく知っている者など、この世界に存在しないのでは無いかと言われる程に、彼を縛り付けることなど出来はしないのだ。

そんな彼が、ヒイラギからの電話に出る事も無いのだろうか。師から貰ったディスクは老朽化で寿命を迎えてしまい、今ヒイラギが電話をかけているデュエルディスクだって過去に師に貰ったモノではなく『地紫魔』に来てから新しく貰った物なのだから。

そうして…

３０回ものコール音を聞き終えた時。

ヒイラギが諦めと悲観を交えて電話を切ろうとした…

―その時だった。

『…俺だ。』

「ッ!?」

長い長い…悠久にも思えるコール音の後…

突如、厳しくもどこか老いを感じさせた、とても懐かしい声がヒイ

ラギの耳に届いた。

「…あ、あの…」

—お久しぶりです、覚えてますか。

そう、言うつもりだった。

しかし、出だしの言葉をずっと考えていたはずだというのに、唐突に襲われた緊張がヒイラギの思考を奪い、その言葉を全て消し去ってしまっていて。

何せ、一向に出ない気配を見せていた電子音の向こう側に諦めて、彼女はたった今電話を切ろうとしていたのだ。そんな瞬間で、そんなタイミングで、思いもよらぬ形で飛び込んできた彼の声に、その思考が持ってかれてしまってもそれは不思議でも何でもないこと。

—声が出ない、言葉が続かない、何を言っていいのか分からない。

連絡など取れるはずが無かった相手、折角繋がった希望の電話。

そうだと言うのに、このまま声を失って黙ってしまっていては、不審がられて切られてしまう。そうなってしまえば、二度と彼はこの電話には出てはくれないだろう。

焦りと恐怖、混乱と迷走。

何が何だか分からなくなってしまったヒイラギが、言葉と一緒に空気を呑んでしまったような音をその口から発してしまった。

すると…

『…カッカッカ、随分とまぁ久しぶりじゃねーの…なぁ、ヒイラギよぉ。』
「え、あっ…え!?」

唐突に呼ばれた自分の名に、思わず息を吐き出しながら驚きの声を漏らしたヒイラギ。
１０年前、１年間もの間毎日のように師に呼ばれていた自分の名…人間に戻してもらったあの時の呼び方そのままに、懐かしい声と響きと聞こえ方がヒイラギの耳と思考を振るわせ始めるのか。
「…ど、どうして…」

しかし、声を取り戻したヒイラギが発した最初の一言は、彼女の混乱をそのまま疑問の言葉へと変えてしまっていた。

…何せ、もう１０年も経っているのだ。

成長期を経験して声だって変わっているし、そもそも師から貰ったデュエルディスクも既に老朽化で壊れてしまい、番号だけは真っ先に避難させたとは言え今彼女が電話をかけているのは師が番号を知るはずも無い全く別のディスク…
そうだというのに、それでも鷹峰は間違うことなく彼女に声をかけ、迷うことなくヒイラギの名を呼んだのだ。
そんな驚きに支配された彼女の声を聞いたはずだというのに、鷹峰はソレを軽く笑い飛ばしながら声を発して。
『あぁん?おいおい、テメェの弟子の声がわからねぇ師匠がどこにいるってんだよ。』
「ッ!?い、今…で、弟子…って…」

『あ?何も間違っちゃいねぇだろうが。』
「だ、だって…わ、私の事…は、破門だって…」
『カカッ、んな昔のこたぁ忘れちまったなぁ。…ったく、すぐに泣き言いって泣きついてくっかと思ってたってのに、随分とまぁ良くしてもらってたみてぇだしよ。』

そう言って、先ほどまで少女が抱いていた悲しさと申し訳なさを、いとも簡単に吹き飛ばし笑い飛ばしてくる師、鷹峰。
この『１０年』という歳月のとてつもない暴力を持ってしても、【黒翼】を変えることなど出来はしなかったのか。
ヒイラギの心に芽生えた、確かな温かさ…それは、この世界で最初にヒイラギを認めてくれた『師』という、絶対不変の裏切らない象徴からかけられた言葉によるモノに違いなく。
確かに呼ばれた『弟子』という、これ以上無いくらいの安心感をヒイラギは確かにその言葉から与えられ…

『…んで、どうした?テメェが今更かけてきたってこたぁ…何か、あったんだろ?』
「あ…」

アレほど焦りと不安に包まれていた彼女の心に、微かな安定をもたらしたほどにソレは確かな繋がりとなっていて。
自分のことを忘れずにいてくれたことも、まだ自分のことを弟子と言ってくれたことも…
ヒイラギにとっては、どれもが心の底から安堵を呼び起こすものであり…師の元に居た時の感情を、彼女の心に呼び起こさせたのだろうか。
それは、これまでずっと押さえてきた、塞き止められていた少女の感情の奔流が一気に崩壊した音でもあり…

「せ、せんせい…た…だず…げで…ぐだざい…」

涙を流し、鼻水を垂らし…嗚咽が混ざった声で、必死になって弱さを晒けだす。

…たった一つの、縋れる希望。

たった一年間とは言え、ずっと一緒に暮らしてきて、ずっと自分を見ていてくれた心からの師。

どうしていいかわからない、自分ではどうやっても止められない。

そんな絶望が、幸せを感じていた少女の目の前に現れたのだ…そんなモノを目の当たりにしてしまったのだから、唯一残された『最後の希望』にそんな弱さを見せてしまったとしても、誰も彼女を攻められるはずがないだろう。

いや、誰も彼女を攻める資格などない。

事後であるが、彼女がこうして師に頼らなければ、世界は確実に終わっていたのだから…

『…おう、わかった。』

そうして、詳細も、感情も、何も聞かずにソレを、いとも簡単そうに二つ返事でそう引き受けた鷹峰。

どんな事情も、どんな現象も…この男には全く持って関係ないかの如く、それは力強くも確かな自身と共に弟子への優しさを孕ませた言葉を持って発せられ…

見えない電話の向こう側で、確かに流れた弟子の涙は師の目にはいかに映ったのだろうか。

『この俺に全部任せろ。ガキはガキらしく、そのまま泣いて俺様に頼ってろってんだ。』

ヒイラギの耳に力強く届けられたその短い言葉が…

師の真意を、全て少女へと伝えていた。

―…

もうすぐ、日が昇る。

あれほど待ち遠しかった朝、しかし今では来て欲しくない『明日』。

「父様は、何があっても世界を壊してしまうつもり…私が、止めてと言っても…」

今『父』が何とか留まっていてくれているのは、制止が効いた結果ではないことをヒイラギは理解していて。

きっと、誰の声であっても制止など出来ないはずだ。それほどまでに憐造から漏れ出す怒りと憎しみはこの世界の大きさをゆうに超えているのだから。

例え、愛娘であるヒイラギが訴えかけたところで…その思いに囚われてしまっている憐造の歪んだ愛情は、この世の全てを消し去ってしまうまでとまるはずがない。

―今、『父』が止まってくれているのは、娘が『父』の思いに賛同の意を示したから。

あえて『父』の『復讐』を肯定し…

しかし、そこに自分の意思を乗せた『我が侭』を言って、そうして『今は』何とか先延ばしにすることに成功しているだけ。

「…だったら、父様の思い浮かべる『娘』を…どこまでも演じよう。それで、父様を止められるのなら。」

―決意は固めた。

街中の人を、全て敵に回しても『父』を止めるという、その決意を。

―覚悟は決めた。

例え関係の無い多くの人を傷つけることになっても、世界を壊させないというその覚悟を。

昇り来る太陽を睨みつけ、本当の自分の思いを心の底に隠して壁を作って。

「父様を止められるのなら…私の『復讐』を遂げるられるのなら…そして、先生の愛したこの世界を守れるのなら…」

決して…父にも、誰にも悟られないように。

―そうして、少女は…

「…ホホ…」

師がよく漏らす、あの特徴的な渇いた笑いに倣い…
ヒイラギもまた、己の中でスイッチとなる笑いを、『あえて』漏らして。

―高飛車で、高圧的で。

他人を見下しているような、自分が一番かのような…
そんな、腐敗して腐敗して、腐りきった世間知らずの、実力のない勘違いに身を投じた、狂った勘違いを繰り返しているような『紫魔本家の娘』に似合うような、そんな笑いを。

『ホホ』というその笑いを発した時がその合図。
彼女の中で、父の求める娘像を『演じる』為の…自分へと向けた、スイッチを入れる為の『合図』なのだ。

―その『笑い』より後に発せられる彼女の言葉は、全て『虚構』で『懺悔』の裏返し。

決闘市の人間達の敵を『演じ』、父の求める娘を『演じ』…誰にも見破られないための『本当の自分』を隠すための。

―誰に何を言われてもいい、誰に何を思われてもいい。

例え、同じ師を持つ弟弟子達から恨まれてもいい。

それで、この世界を壊さずに済むのなら…

―そうして…

たった一人の、彼女の戦いが…

こうして、始まったのだ。

―…

―『ホホッ、今すぐにでも血祭りにして差し上げたいところですわ。なにせ、あの女の血が混ざっているかと思うと…』

―『…ッ!?』

…こんなこと、言いたいわけが無かった。

折角会えた弟弟子…それも、実は血の繋がりまであったと言う喜ばしい事実すらあった、この会える時を心から待ち望んでいた、そんな天城　遊良を酷く傷つけてしまった。

―『ホホホ、天宮寺　鷹矢…押さえ込んでいる精神力は素晴らしいですが…付いている者を操ることは容易いですわ。』

―『ぐ…グぁ…』

…こんなこと、したいわけが無かった。

折角の【決闘祭】で、師の孫に対して『演技』とはいえこんなにも苦しめてしまったことを。

いくら天宮寺　鷹矢に『闇』が効かないことを、ヒイラギも『前から知って』いたとはいえ…それでも弟弟子で師の孫という存在が、こんなにも苦しんでいたことを彼女が喜んでいたはずが無いというのに。

―『うわぁ！い、嫌だ！やめろぉ―！』
―『…あ…に…兄…さ…』
―『なぁっ!?なんで…こんな奴が……ぐぁぁぁあ…ああ…あ……』
―『ガ…これ…は…り、李の言っていた……ガが…』

…大勢の人を傷つけた。いくら父に怪しまれないためとはいえ、いくら父に常に見張られていたとはいえ…
大勢の人の夢もプライドも傷つけ、全く関係の無い多くの人々を飲み込んで操って。
街を混乱に陥れるという、口から出任せの言葉を実行してしまったという罪悪感と、巻き込んでしまった人々の悲鳴と苦痛が、いつまでも耳に残って木霊している。

一体、自分から提示した『お願い』の所為で、一体どれだけ多くの関係の無い人が傷付いたのだろう。

こんな…『不本意』な『復讐』を、『無理やり』に叶えられてしまったが故の罪悪感。
ずっと…それこそ、この『異変』が起こったときから少女の耳には、ずっと人々の悲しみの声が止まずに反響しているのだ。

―聞きたいわけがない、鳴らしたいわけがない。

自分の望んだ『復讐』は、自分自身の手で、『何が何でも』幸せな最後を幸せに笑って迎えてやるという代物…
こんな、関係のない人々を傷つけたいわけでもなければ、悲鳴掻き鳴らしてまで混乱を巻き起こしたいなどと思っているわけがないというのに。
それが仕方がなかったとはいえ、全てを見てきた少女の行動と言葉の裏には、常にこのような心を締め付けられる思いが遅いかかってき

ていて。

そして…

最後の時が、訪れる。

前持って師から提示されていた指示。

天城　遊良を『古びたスタジアム』へと呼び出す為のメッセージを送り、そんな天城　遊良と戦って彼を自然に『異変』の中心部まで通したところで、彼女の『作戦』は全て満了した。

自分の力量では、これ以上のことは出来ない。

後は、頼れる弟弟子…Ｅｘ適正を持たないハンデを背負いながら、【決闘祭】を優勝したという心から誇らしい彼に、コトの全てを託す他ないのだ。

師からすれば、天城　遊良が【白鯨】と戦うのも『修行』の一環なのだと言うのだから…全く、本当に弟子に無茶をさせる師なのだとその時のヒイラギは思ったものの…

それでもヒイラギの危機以外には決して表へと出てこない『父』が、【白鯨】と天城　遊良が激突の衝撃で出現すれば…

あとは、師が片付けて全て終わり…

まぁ、そう上手くは行かなかったからこそ、ヒイラギは最後のあの場面で痛む体を引きずって顔を現し、鷹峰もまたヒイラギを必要以上に追い詰める『演技』をしたのだが…

おかげで憐造を出現させることに成功し、ヒイラギの『犠牲』という名目の最後の手段を持ちいてこの異変は終了を迎えた。

―全ては、たった一人で強大な『闇』に立ち向かった少女の奮闘。

—全ては、絶望を味わっても『生』を諦めなかった少女の生き方。
その全てがどこか一つでも狂っていれば、きっとこの異変は収束をせずに世界は簡単に滅び…そして、一人の『父』の感嘆に沈められていたことだろう。
こうして今も決闘市が存在し、死者の一人も出なかったこの『結果』は、とても他の人間がやろうと思って出来る『結果』では無いのだから。

—…

…そうして、物語はようやく現在にまで戻ってくる。

「…本当に…ありがとうございました。」
「…すまんのぅヒイラギや。仕方なかったとはいえ、お主を故人としてしまったが故に…この街から追い出すような形になってしもうて。」
「…いえ、これもまた私の罪なのです。後悔はしていません。」
「ケッ、さっきまでビービー泣いてた癖に、またそうやって強がりやがって。眼ぇ腫れてんぞ。」
「先生も…ありがとうございました。」
「…おぅ。」

場面は変わり、深く更けた夜の街。

船の前。それも客人を迎え入れる入り口ではない。
裏、『コンテナ』が積み上げられている、暗く重苦しい圧迫感のある隅。
この場面から察するに、きっと今からヒイラギはこの『船』に忍び込んで、知っている者など誰も居ない場所に、自らその身を追いやろうとしているのだろう。
…故人となってしまったが故の、表には出ることの出来ない今後。
それは、ここまでの騒ぎを起こしてしまった咎人の『罪』であり…いくら綿貫が懇願しようよも、この世界の理に従うしかない彼にはどうしようも変えようの無いこと。
「もうコンテナが積み込まれる時間です。先生、綿貫さん…もう二度と会うことは無いでしょうが…ここまでして頂いて、本当にありがとうございました。」
「…さよならじゃ。元気での。」
「チッ、湿っぽいのは嫌いなんだよ、とっとと行けってんだ。」
「…はい。あ、そうだ、先生…」
「あ？」
そうしてコンテナに忍び込もうとしたヒイラギが、最後の最後で師へと声をかけて。
その手にたった一枚のカードを持つと、ソレを師へと差し向けて…
「あの、これを…」
「んだこりゃ？…『ジ・アース』…あぁ、プラネットの一枚か。」
「はい、祖父が【決闘祭】前に私に預けてくれた『地紫魔』のカードな

のですが…もう私はデュエルなんて出来ませんし、今更紫魔家に返してもややこしくなりそうなので…先生が持っていてくれれば…と。」
「カカッ、そういやランがコレ集めてたっけな。おう、貰っとくぜ。」

そうして、最後のやり取りを終えて、積み上げられる予定のコンテナの一つに忍び込んだヒイラギ。
これで、この決闘市ともお別れ。
もう二度とこの地を踏むことも無いだろうし、これから行く当ても無い文字通りの『逃避』生活が始まるのだ。
明日をも知れぬ身、明日をも知れぬ命。
どこへ行くのかもわからないし、これからどんな目が待っているのかも分からない。きっと『普通』の少女だったならば、簡単に発狂してしまいそうな今後がこれからまっているというのに…

それでも…

「…『あの頃』よりは、随分マシですわ。」

力が無かったあの頃…甚振られ嬲られる日々だったあの頃、泥水を啜りゴミを喰っていたあの頃よりは比べるまでも無いと、そうヒイラギは自分に言い聞かせ…
どうなるかはわからない…しかし、何も出来なった『あの頃』よりはマシな生活を送る自信が彼女にはあって…
いや、今の『強い』彼女ならばきっとどこへ行ってでも『あの頃』よりもマシな生活を送れるはず。

そう、必死に自分に言い聞かせているのだ。

そうして…

しばらくの後、コンテナが積み込まれ始めたのかクレーンの動作に

よってヒイラギの隠れたコンテナが大きく揺れ…

貨物室に乗せられた酷い揺れ、体全体を揺さぶられるかのような気持ちの悪い振動に耐え…

船が決闘市を出発したのか、波に揺られる気持ちの悪い感触が彼女の身を昇り始めて…

これからは誰も知る人の居ない、誰も頼れる人の居ない場所で、必至に生きていかなければいけない。

しかし今まで『師』と『家族』から受けた多大な恩を思うと、これまでが出来すぎだったのだろう…と、少女がこれまでの人生とこれからの人生への思いを馳せた…

―その時だった。

―！

「え!?」

突如、ヒイラギの隠れたコンテナの壁が開き…

真っ暗な闇だった彼女の視界に、急に電光の明るさが注ぎ込まれたのだ。

それは、ヒイラギには到底理解できなかったこと。何せ、海外への『貨物船』だと聞いていたこの船の『貨物室』に詰まれた一つのコンテナが突如開かれるだなんて、思ってもみなかったのだから。

そんな明順応が追いつかない彼女の目が、どうにかして状況を理解しようと目を凝らし始め…

理解が追いつかない少女の目に映った…

―そこには…

「お待たせいたしましたお嬢様。お部屋のご準備が整いました。」
「お疲れでしょう、どうぞこちらへ。」
「え？あ…な、何で…あ、あなたたちが…？」

完全に理解が追いついていない様子のヒイラギの声。

彼女が間違うはずも無い声と、背丈も顔もそっくりな、まるで従者のように整った姿をした者が…

―そこに、『二人』。

「右京…サキョウ…ど、どうして…？」

―紫魔　右京
―紫魔　サキョウ

唯一つ『性別』が違うという差異を除いて、どこまでもそっくりなヒイラギの従者が…そこには居た。

「はい、私達は『地紫魔』ではなくお嬢様ご本人にお仕えしていますので。」
「お嬢様の行くところにご一緒するのは当たり前です。」
「そうではなくて…ど、どうしてここが？」

ヒイラギが驚きの声を漏らしたのも不思議ではない。

何せ、従者の二人であった右京とサキョウの双子…この、『同年代』で『友人』のように思っていた従者二人でさえ、ヒイラギは『駒』として操ってしまっていたのだ。

いくらそれがこの世界全てを救うためだったとは言え…自分のやったことを考えると、どうしてもヒイラギにはこの光景が信じられないのか。

そんな混乱の表情をしているヒイラギへと向かって、従者二人はどこまでも『いつもの顔』を崩さず…

「本来は…口止めされているのですが。」
「全ては、お嬢様の師からの命です。」
「え!?」
「【黒翼】から全てを聞きました。お嬢様の過去も、そしてお嬢様が一体何をしていたのかも。」
「お嬢様がどれほど私達の事を思っていてくださったのかも、お嬢様がどれほど悲しんでこられたのかも。」
「そ、それは…でも、私はあなた達を…」
「はい、それを知ってもなお、私達はお嬢様にお仕えすることを選んだのです。」
「さぁ、参りましょうお嬢様…決して、一人には致しません。」
「あ、サ、サキョウ…右京…」

『地紫魔』に引き取られてからこれまでの１０年間…ずっと共に居た従者二人の顔を見たヒイラギの顔が、この時一体どんな表情をしていたのか。

それは、きっとこの場にいた従者二人にしか見ることを許されない

表情なのだろうが…きっと、今までで一番安心した表情をしていたことだろう。
従者に手を引かれ、狭く息苦しい閉鎖されたコンテナから飛び出て…
これまでずっと『頑張ってきた』少女に与えられた、暗い場所からの脱出。
それは、いくら『罪』を与えられた少女であっても、決して奪われることのない確かな『暖かさ』を孕んでいたことにまず間違いはないだろう。

「あぁそうだ、お嬢さま、お渡ししなければいけないモノが。」
「これを…お嬢様の師、【黒翼】からの預り物です。」
「え？先生が…？」
「はい…これを。」
「手渡すように、と。」

そして、明るい場所へと出てすぐに…従者からヒイラギ手渡された、布に包まれた一つの物。
何も持たず…それこそ、自分のデッキすら手放すことを余儀なくされた、『何も持っていない』ヒイラギへと与えられた、師からの贈り物。

「あ、こ、これって…」

—それは…

「デュエル…ディスク…」
「渡せば分かるとのことです。」
「お嬢様に渡してくれ、と。」
「…え？」

一見すれば、型の古いもう販売されていないデュエルディスク。
機能性も低い、あるのはデュエル機能と電話機能程度の、この世の中では時代遅れの旧型のデュエルディスク…

―しかし、彼女にはわかる。

従者の言った、『渡せば分かる』という意味も…なぜ師が、コレを渡してきたのかも。

慣れた手付きで、数度画面を操作して。

こんな、今の子どもでは見たことの無いような時代遅れのデュエルディスクでも、ヒイラギには操作の仕方がわかっているのだ。

…そう、これは紛れも無い、彼女が師の元に居た時に使っていたデュエルディスクと、同じ型のモノだったのだから。

―そして…

「…ぁ」

―そこには。

「これ…先生の……ばん…ごう……」

ただ一つ登録されている番号。

何気ない、ただの電話番号。

しかし、ヒイラギにだけは理解できる唯一つの番号。

―これは、『繋がり』

師の元を去った『あの時』と同じ。

言葉と態度で突き放しても、『コレ』がある限り繋がっているのだという…

最後の最後に、『頼っていい』のだという…

師から弟子への、紛れも無いメッセージ。

「あ…ぁぁ…」

涙が、溢れる。

全て無くして…

何とか生き延びて…

そして再び得た『大切な人達』を、再度無くす覚悟までしたこの紫魔　ヒイラギという少女。

そうまでして自分を犠牲にし、全てを守りきった少女の目に、止めどなく溢れる純粋な『涙』。

―誰も、この少女の涙を止めることなど出来ない。

―誰も、この少女を責めることなど出来ない。

静かな夜の海と、鈍く響き渡る汽笛の音と…

「あばよ…ヒイラギ…」

静かに放たれた小さな師の言葉が…

全ての感情を乗せて、雄大な海へと、消えていった…

―こうして、決闘市を騒がせた『異変』の全ては収束した。

誰も犠牲になど…そう、『本当の意味』での犠牲など出ずに…

…季節は、変わる。

―冷たく寒い冬から、暖かな春へと。

―…

ｅｐ５１「第１章最終話ー門出の唄」

午後も数時間を過ぎ、決闘学園での授業も既に午後の最終授業の終盤に差し掛かっているような、そんな夕日が暮れ始めてきた時間。

決闘学園イースト校の教室には、学生達の姿は一人として見当たらず…

人の気配だけは学園内から多数感じられるものの、まだ授業が終わってないというにも関わらず教室内に一人も学生が居ないというこの状況は珍しいといえるだろう。

しかし、他の３つの決闘学園のカリキュラムとは違い、このイースト校だけが特別に行っている『とある授業』に関してであればこの状況とて当たり前とも言えるのか。

そう、この曜日、この時間から察するに…

今のこの時間は学生達が各々持つ『融合』、『シンクロ』、『エクシーズ』の『Ｅｘ適正』毎にクラスを分けて、その召喚法の特性や他の召喚法を使ってくる相手への対策などを教える授業。

『召喚別授業』を行っている最中なのだ。

そんな、『Ｅｘ適正を当たり前』のように持っている学生達が各々、『Ｅｘデッキの活用法』について学園の教師陣に習っているこの時間。

今日は他の誰も使用予定の無い、どのクラスの授業でも使われていないはずのイースト校にあるスタジアムの一つで…

激しい、戦いの音が打ち鳴らされていた。

「バトル！【白闘気海豚】でダイレクトアタック！」

「くっ、カウンター罠、【攻撃の無力化】発ど…」

「甘い！更にカウンター罠、【カウンター・カウンター】！【攻撃の無

力化】を無効に！」
「なっ!?」

―！

「…ぐっ、くっそ…」

遊良　ＬＰ：１４００→０

―ピー…

その、他の誰も居ないたった『２人』だけのスタジアムに、突如としてデュエル終了を告げるべく鳴り響いた無機質な機械音。
それは、ここで行われていた一つの戦いが終わったことを知らせていて。
そんな他に見ている者など居ないこのスタジアムで圧倒的なオーラを持って悠然と立っている勝者に対し、完膚なきまでに叩きのめされた様子の遊良は『もう何度目』かも忘れてしまったほどの敗北をひたすらに噛み締めている様子。

そうして、ゆっくりと消え行くソリッド・ヴィジョンに合わせ、たった今敗北を喫した遊良へと向けて『勝者』の方がその口を開いた。

「全く、そんな見え見えの守りで本当に凌げると思っていたのですか？何度言えば分かるのでしょうかね君は。」
「ぐ…」
「もっと相手が取ってくるであろう手を深く読みなさい。何をされると自分にとって悪手なのか、常に最悪の事態を想定して動いておかないと手遅れになります。」
「は、はい…」

そんな、どこか厳しい言葉をかけながらも、以前のような『私怨』など今ではもう全く抱いていない様子の声を響かせて、目の前に居る遊良へと声をかけたこの『勝者』。

―砺波　浜臣。

そう、たった『２人』の人間しか居ないこのスタジアムで遊良とデュエルをしていたのは、イースト校理事長であり、元シンクロ王者【白鯨】と呼ばれた存在。

しかし、少し前まで間違った『私怨』を拗らせて、執拗に遊良を敵視していたはずの…決して分かり合えるような雰囲気ではなかったはずの圧倒的強者、世界最高峰の決闘者の一人。

しかし、そんな砺波も先の『異変』を経てその憤りの矛先を正せたからこそ、こうして遊良と対峙していても『私怨』など全く抱かずに接することが出来ているのか。

その歪に１０年来の『憎しみ』を、『停留』ではなく『その先』へと向ける決心が、砺波にもようやく付いたのだろう。

そうして砺波もまた、もう『何度目かの反省点』を遊良へと伝えると、再度遊良へと向けて立ち上がるように促して…

「さて、わかったらさっさと立ち上がりなさい、休んでいる暇なんてありませんよ。返事は？」

「…はい…砺波先生。」

「よろしい。では次は3ターン耐えてみなさい。出来なければ次のレポートの量を倍にします。」

「なっ!?」

「それくらい出来なければ話にならないと言っているんです。ぐずぐずしていないで、早く構えなさい。」

「は、はい！」

そうして、再びデュエルを行おうとして立ち上がった遊良と、それを見てデュエルディスクを再び構えなおした砺波。
そう、遊良の言った『砺波先生』という呼び名の通り…
なんと、遊良には元シンクロ王者【白鯨】の教えを請うことを許されていたのだ。

それは、他の学生達からすれば到底信じられないような『特別待遇』。

世界中の誰もが憧れ、その誰もが彼の教えを請いたいと思っていても、これまでは絶対に叶わなかった元王者【白鯨】に、あろうことか直々に鍛えてもらえるという、誰もが『羨む』特別授業。
無論、遊良とて自分へのこんな『特別待遇』に対して周囲からまた色々と言われることを覚悟はしていたのだが…
一応、表向きには遊良の【決闘祭】の優勝という功績を称えた特例中の特例という名目であったために、遊良のこの『特別待遇』に対しても変に声を荒げるような者はイースト校には存在しなかったのか。
…いや、そんなことよりも今も決闘市には『異変』の爪痕がまだまだ大きく残されているのだから、街や人がこんな状態だというのに遊良に対して『何か』文句をつけようとしてくる元気の有り余っている学生など居ないと言った方が正しいだろう。

「【超古深海王シーラカンス】でダイレクトアタック。」

―！

遊良　ＬＰ：２００→０

―ピー…

…とは言え、１年生ながら【決闘祭】の優勝という偉業を成し遂げ

たこの遊良でさえ、【白鯨】の『厳しい』という表現すら生温いと感じるレベルの『教え』には着いて行くことすら大変なほどなのだ。
例え他の学生達が同じように教えを受けることが出来た所で、何も得ることなど出来ずに早々に潰れてしまうのが関の山だろうが。

「ふむ、まぁ最後の抵抗は及第点でしょう。アレくらい出来るなら最初からやって欲しかったですが。」
「す、すみません…」
「では今の場面を忘れないよう、次回までにレポートにまとめて提出すること。あそこからどう対処すれば更に耐えられたのか、または考えられる違う手を調べ、書けるだけ書いてくるのも忘れずに。いいですね？」
「…はい、砺波先生。」
「よろしい。もうすぐ『召喚別授業』も終わる頃だ、今日はこの辺りで終了としましょう。」
「はい、ありがとうございました。」

しかし、【白鯨】のこの過酷な『教え』に対しても、頭を使いすぎて憔悴した様子は見せていても、全く『嫌な顔』をすることなく遊良は返事を返して。

そう、遊良からしても自分へのこの『特別待遇』は、願っても無いこと。

【白鯨】の教えと容赦の無い課題は、確かに日々の学業と家事と、そして鷹矢の世話をこなさなければならない遊良からすれば確かな負担となってはいるのだろうが…
それでも、今までイースト校で行われていた『召喚別授業』の時間に、自分だけ『放置』という名の『特別扱い』をされていたこの時間が、まさか本当の意味での『特別扱い』となったのだ。
確かに元【王者】の教えだけあって、それはそれは厳しくも辛い課

題を多々押し付けられてはいるものの…エクシーズ王者【黒翼】を師に持つ遊良にとっては、この程度の『過酷』など最初から想定内。
幼少の頃に憧れたシンクロ王者【白鯨】に、まさか直々に鍛えてもらえるというこの夢のような時間。それ故に、遊良も最初から生易しい教えなど期待していないのだから。
求めるのは、更なる高みへと向けた壮絶なる修行。
今の自分よりも、更に強くなる…ただ、その為に。

…あの年明けに起きた『異変』から、およそ1か月半が過ぎた。

甚大な被害が起きた決闘市は国と【決闘世界】の迅速な対応の元、早急に居住区である東西南北地区から復旧作業が開始され…住人達は何とか元の生活を取り戻しつつ、あの時の混乱もどうにか落ち着いていて。
しかし、死者は出なかったとは言え、まだまだ怪我の癒えていない住人も多く居るというのが街の現状。
それほどまでに今回この決闘市に起きた『異変』の規模は凄まじく…
決闘市の象徴であったセントラル・スタジアムも、『何やらとてつもない力を持ったモンスターが内側から好き勝手に暴れたような』壊れ方をしてしまっていて、決闘市が完全に復旧するにはかなりの時間を要すると言われているのだ。
未だ怪我が癒えずに入院を余儀なくされている住人も多く、あの時の混乱がトラウマとなって心に傷を負ってしまっている者も居る。
…そして、遊良もまた、その例に漏れず。

「しかし、君もまだまだ荒削りで甘いですねぇ。全く、大雑把な鷹峰なんかに師事するから詰めが甘くなるんです。」
「それは…でも、先生は…」

そんな、今しがた砺波からの『授業』を終えて、帰り支度を始めた遊良に対して砺波が放った一言が…遊良の心に、微かな虚無感を覚えさせた。
しかし、遊良にはその原因もはっきりしている。
そう、あの『異変』の最後…
まさか自分の目の前で、あろうことか師である天宮寺　鷹峰が、『敵』であった少女を爆散させて吹き飛ばしたというあの残酷かつ無情な光景…
―少女の悲鳴と苦痛、そして師の無感情。
それが今もまだ、遊良の目に焼きついて残っているのだ。

信じたくない。いくら少女が『敵』だったとは言え、師があんなにも非情に人を消し飛ばしてしまっただなんて。
信じられない。あの師が、厳しくも尊敬できるあの師が、あんなにも残酷なことをあんなに簡単に実行してしまうだなんて。
今、遊良の心にはそんな思いが溢れてきてしまっているのか。今まで信じてきた師から、どこか裏切られてしまったような、そんな悲しみが。
…それだけ、あの時の光景が遊良にとっては衝撃的だったのだろう。
こんなことを、鷹矢とルキには言えない。言ってはいけない。そんな思いもまた遊良の中にあるからこそ、一人でソレを抱え込まなければいけない辛さの所為で、更に遊良の心は重くなってしまっている様子。
「…はぁ、まだ鷹峰の事を引きずっているのですか？」
そんな遊良を見かねたのか、砺波は一つ溜息をつきながら遊良へと声をかけて。
彼もまた、いくら『敵』であったとはいえ自分の学園の生徒を鷹峰

に消し飛ばされたというのに…
その口調は遊良のように沈んだ様子のモノではなく、まるでソレを気にしていないかのように、気持ちの整理が出来ているのかはっきりとした口調で遊良へと声をかけるのみ。
それは、遊良と同じ光景を見せ付けられたはずの彼のその目に映るモノは、遊良とはまるで別のモノに映っているとでも言うのだろうか。
今まで囚われていた『私怨』を吹き飛ばした、鷹峰の衝撃的な砺波への言葉。
それを聞いた砺波の心境は、果たして…

「実際に起こってしまったことは、今更変えたくともどうしようもありません。目の前で起こったこと、それもまた仕方のない事実なのです。」
「でも、俺には先生があんなことをするなんて…」
「確かに私も、鷹峰があんなことをする奴だったとは思えませんが…君が鷹峰の事で何時までも落ち込んでいるのも今後の『授業』に支障が出ますので言わせて貰いましょう。」
「…え？」
「『あの時』に見た光景と、『今まで』君が見てきた鷹峰を比べてみなさい。本当に鷹峰があんなことを出来るのかどうか。『あの時』の一度と、『これまで』の鷹峰…君にとって、どちらの彼が本物なのか。」
「…比べて…みる…」
「後は自分で考えなさい。私から言えるのは以上です。」

砺波から発せられた言葉は穏やかなモノで、まるで生徒へと向けた教師の言葉のような…いや、事実として遊良と砺波の関係は『そう』なのだから、ソレに対して違和感を覚えるのも不思議な話ではあるのだが。
それでも、これまでの砺波からは思いもよらない言葉が遊良の耳に届けられ…どこか意外そうな顔を見せている遊良に対し、もう本当に

砺波の中には遊良への個人的な『私怨』などは残っていない様子。
…目に見えたモノだけが真実ではない。その裏で、一体何が起こっていたのか。

その、見えるけれども見えないモノをいかにして感じ取ることが出来るかは、この長い人生という経験において、ソレを深く積んだ者にしか得られない感覚なのだろう。
無論、何が起こっていたのかという、『本当の真実』を今の遊良が知ることは叶わないものの…それでも、砺波からかけられた言葉は、遊良の沈んでいた心に確かに響いていて。
あの時の師と、今までの師。それぞれを思い出し、一体師が何を思っていたのかを考える遊良。これまでの師の教えは、全て遊良の中にある。ならばその師の教えこそ、遊良にとっての『天宮寺　鷹峰』と言う存在その物のはず。

「…どうやら、後は自分で答えが出せそうですね。ではもう下がって結構ですよ。」
「…はい、ありがとうございました…砺波先生。」
「はい。」

…

どこか寒さも去り、暖かな風が吹き始めた静かな決闘市の中。
そんなイースト校からの人気の無い帰り道を、遊良は一人で歩いていた。
鷹矢は学園が終わると実家の再建の手伝いに借り出されていて最

近はいつも帰りが夜遅くなり、ルキも今日は家族と過ごすらしく、本当に久々の一人となったこの夕暮れの中で…遊良のその物憂げな目は、一体どこを見ているのだろうか。
遊良のそのゆっくりとした足取りは、先ほど砺波から言われた事を頭の中で反芻している様にも見え…目まぐるしく入れ替わる思考とは正反対に、自分の思考を無意識の内に邪魔しないようにしているのだろう。

…確かに自分で答えが出せそうで、確かに自分で乗り越えられそうな問題。

しかし、だからと言って砺波のように直ぐに何かしらの結論が出せるほど、遊良はまだまだ大人ではないのだ。
そう、【決闘祭】に優勝したからとはいえ、『異変』を収束させようと奔走していたとはいえ、まだ遊良は高等部の1年生。人生という長い旅路において、ほんの少ししか歩いてきていない遊良には、まだまだ『経験』というモノが足りていない。
とは言え、悩み、苦しみ、理不尽、絶望…この人生において常に襲い掛かってくるソレらを、時間をかけて乗り越えるからこそ子どもとは成長していくもの。それを砺波もわかっていたからこそ、簡単に答えを教えずに遊良に自分で考えさせたのだろう。
だからこそ、遊良もわかっている。
これは、自分で乗り越えなければいけない問題なのだ、と。

「先生の…真意…か。」

消えていった命は戻らない。それは、言われるまでもなくこの世界の真理。
いくら『憐造』のような異例があったとは言え、遊良とて師が『命』と言うモノを軽んじた、あんな下衆な行動を取ったなど簡単に信じられないのだろう。

きっと、何か理由があったはず。
でなければ、あの人があんなことを簡単にするわけがない…遊良の頭の中で巡るその思い、それは遊良が『これまでの師』という存在の生き方を見てきたからこそなのか。
幼少の頃、『Ｅｘ適正』が無いという、ただそれだけの理由でほぼ全ての人間達から見下され、蔑まれ、まるで厄介者を弾くかのようにして扱われていた、あの地獄のような時期…
しかし、人々からの風当たりが今よりもっと酷かったあの時期に、こんな自分を『面白い』と笑い飛ばして拾ってくれた存在が師、鷹峰。
それが例え、自分の決闘欲を満たすための素材だったのだとしても…ここまで自分を見てきてくれたそんな師を、遊良は何があっても信じたいのだ。

師の真意と世の真理。

何が起こって、何が本当で、何が嘘なのか…そんなモノ、『真実』を知らない遊良が考えたところで全貌が分かるはずないというのに。
その相反する現状を目の当たりにしてしまったが故に、どうしてもそんなことを考えてしまう遊良が、己に浮かび上がってくる様々な思いに自らの頭を悩ませて歩いていた…

―その時だった。

「天城！ま、待ちなさい！」
「…ん？」

不意に背後からかけられた甲高い声によって、その足を止めた遊良。
どこかで聞いたことのあるような、しかし心当たりが思い浮かばないようなその声。
声質から言って女性であることは確かなのだが、しかし声と顔が一

致しないような感覚を浮かばせながら、遊良は声の方へと振り返って。

「えっ、と…」

そして、その顔を見た瞬間、戸惑ったように、そして困ったような表情を遊良は見せた。

それは、その顔を見た所で誰だったのかを思い出すことなど叶わず…

その女生徒が自分と同じイースト校の一年生であることだけはその持ち物から即座に察知できたものの、きっと今までに倒してきた一年生の中の一人なのではないだろうか。

きっと理事長である【白鯨】の『特別授業』を受けられる遊良に対して、何か的外れな妬みを持った生徒がこうして声をかけてきたのだろう。

だったら、そんな相手など思い出すだけ無駄だと、遊良が思考を止め思い出すのを止め…

…と、声をかけてきたのが『他の生徒』だったならば、遊良もそう言った対応を取っただろう。

しかし『この女生徒』に対してだけは、遊良とてぞんざいな対応は許されない。

何故なら『この女生徒』だけは、遊良に対して他のどの学生の感情とも違うモノを持っているはずなのだから。

「…何か用？」

「あ、あんたに聞きたいことがあるのよ！ちょっと顔貸しなさい！」

―紫魔　アカリ

かつて、遊良のデッキを捨て去ろうとルキに持ちかけ、そして遊良に簡単に返り討ちにされた紫魔家の女生徒。
取るに足らない遊良への文句を持った、遊良とて相手にする必要すらないような…
そんな、どうでもいいような関係の同級生。

―しかし、この場においては『そんなこと』が問題なのではない。

そう、『問題』なのは、もっと別の話…

―それは彼女が、『紫魔　ヒイラギの義妹』なのだというコト。

「俺に…聞きたい、こと？」

…嫌な予感がする。以前会った時の、余裕を持って自分を見下しているような表情ではなく…どこか、切羽詰まったようなこの紫魔　アカリの表情を見て、遊良はそんな確信を得て。
そんな遊良の予感など意に介さず。紫魔　アカリは遊良へと早足で近づいてくると、ますますその表情を険しくさせ…それと同時に、一刻も早くこの場から逃げ出したい衝動に駆られ始めた遊良。
しかし、それよりも早く紫魔　アカリがその甲高い声を発して…

「…姉様の事よ！あんた、姉様がどこに行ったのか知ってるんじゃないの!?」
「…え？いや、何で俺が…」
「とぼけても無駄よ！あんたが姉様と何か関係があるってこと、私知ってるんだから！」
「…え？」

予感的中。わざわざヒイラギの妹が自分を名指しで声をかけてきたというこの状況を理解したその時から、遊良の中には『こんな事』を聞かれるのでは無いかという、とてつもなく嫌な予感が浮かんできていたのだ。

このヒイラギの妹である紫魔　アカリという少女が、果たしてどういった理由で遊良へと目をつけたのかは知らないが…それでも、遊良が確かに『ヒイラギの最後』を見てしまったが故に、そう言った予感が昇ってしまったのは仕方のないことだろう。

…それに、確かに遊良自身も、ヒイラギと『無関係』だとは言えない。

―『最後』を見てしまったという意味でも…実は、彼女と自分が『従姉弟』だったという意味でも。

そんな、自分の心ですらまだ整理出来ていないこの状態で、ヒイラギの妹からこんな追い討ちをかけられてしまった遊良の心境は果たしてどういったモノなのだろうか。

ざわつく遊良の心などお構いなしに、紫魔　アカリは癇癪を起こしたように言葉を続けるだけ。

「騒ぎが起こった前の日、姉様が誰かと電話してたのを聞いたの！そしたら姉様、『天城　遊良、彼ならきっと…』って言ってた！それなのに、あんたが姉様のことを知らないなんて言わせないから…少し前から姉様変だった…優しかったのに、急に厳しくなって…それに、騒ぎが起こった日の朝、『絶対に家から出るな』って言ってきて…」

「…」

「そしたら街は大変なことになるし、姉様は帰ってこなくなるし、右京もサキョウも帰ってこなくなるし、お祖父様に聞いても悲しそうな顔するだけで答えてくれないし！もう何が何なの！何で姉様帰ってこ

ないのよ!?」

捲くし立てるように、攻め立てるように。

矢継ぎ早に言葉を荒げて、感情のままに遊良へと言葉をぶつける紫魔　アカリ。

しかし、それを静める方法など遊良にとっては簡単なことだ。遊良が自分の見たヒイラギの『最後』を、その目で見たままに伝えればいい。

…それで納得するもしないも彼女の勝手だし、それで何を思うのかも彼女の勝手。

それに、実際にその光景を見たのだから遊良にはソレに答えられる権利があるだろう…

「…」

—しかし、言えない。

—言えるわけが無い。

一体、どんな顔をすれば『家族の最後』という残酷な『事実』を、言葉に変えて彼女に伝えられるというのだろうか。

紫魔　アカリの、この切羽詰った表情と態度を見ていれば…遊良とて、彼女が『本当』にヒイラギの事を姉として慕っていたということを、それはそれは痛いほど理解できているのだろう。

それが例え、以前に一悶着あって衝突した同級生であったとしても…遊良とて、こんな残酷な事を嬉々として話せるような外道では決してないのだから。

そんな相手に、淡々と見たままを伝えられるほど遊良とて無感情にはいられず…家族を失う悲しみを、遊良ほど理解している者もそうは居ない。

だからこそ、自分の感情すら纏まっていないこんな状態で、下手な

ことは言ってはいけないのだ。それは、何を知っていようとも。

いや、何も知らないからこそ…

「ふざけないで！何で黙ってるのよ！」

そんな、何を言って良いのか、または答える気が無い様子の遊良を見かねたように、更に遊良へと詰め寄って、紫魔　アカリはその表情を今まで以上に追い詰まったようなモノへと変える。

焦りと苛立ち、怒りと困惑。

妹である自分が何も知らないというのに、一体どうしてこの男が何かを知っているというのか…

そんな言葉が、声に出されなくとも手に取るように態度から発せられ…

「何か知ってるんでしょ!?だったら黙ってないで話してよ！」

そうして、紫魔　アカリは衝動的に遊良の胸倉を掴み…

「私の姉様なのよ…だから…」

我慢が効かなくなった子どもの様な声を、小さく漏らして…

「わたしのねぇさま…かえしてよぉ…」

悲痛な叫び、溢れる涙。
いくら『義理』の家族だったとはいえ、これまで彼女達が過ごして来た時間はまさしく『本物』だったのだろう。
吐露される彼女の感情を見れば、嫌でも遊良には伝わってくる。心の底から彼女達は『姉妹』であったこと。血の繋がりの濃さなど関係なく、本当の『家族』となっていたこと。
その全てが『本物』であったことは、誰であっても容易に想像がつき…溢れる少女の涙がそれを確かに物語り、心の底から『姉』の行方を心配している真意が遊良にだって伝わってくるものの…

「…」

それでも、何も言ってはいけない。
『現実』の裏で、どんな『真実』があったのかを遊良は知らないのだから。ソレを知ることが許されるのは、あそこに居た『事実』を知る者だけ。

…疑惑はある。自分の知る『師』から考えられうる、何か自分の知らない『真実』があるのでは無いかという、そんな疑惑が。
…疑問もある。他の人間達の【黒翼】のイメージは知らないが、自分の見てきた師からは考えられないようなあんな『らしくない』行動を、一体どうして師は取ったというのだろうかという、そんな疑問が。

しかし、その『真実』を知らない遊良は、これ以上の言葉を言うこともなく…

「…ごめん…」

それだけ言って、掴まれたその手を振りほどくと遊良は一目散にその場から駆け出し始めた。

その後ろで、少女が泣き崩れたであろう『音』が静かな夕暮れの中響き渡り始めたが…

ただの一度も、振り返ることなく…

―遊良は、その場を後にした。

…

夜も更け、街中で鳴らされていた復興の喧騒も聞こえなくなったような、そんな遅い時間でのこと。

人々の多くも既に寝静まっているであろう時間帯、通行人もほとんど見かけないような暗い道。そんな、決闘市の外れにある小さいながらも立派な佇まいのＢａｒの入り口を…

その前に立った一人の男がその扉を開いた。

「…いらっしゃいませ。お待ちしておりました、砺波様。」

「こんばんわ。ここに来たのも随分と久しぶりですね…彼はもう来ていますか？」

「はい、既にお待ちになられております。どうぞあちらへ。」

着ていたコートを預けると、Ｂａｒのマスターに通され慣れた足つきで店の奥へと歩いていくイースト校理事長、砺波　浜臣。

若かりし頃…それこそ、王者【白鯨】となり多忙を極める前まで、幾度となく通いつめた行き着けであるこのＢａｒに今、彼がこんな夜も

更けた時間にわざわざ足を運んだのにも理由があった。
酒を嗜む者ならば、まだまだ飲み明かすであろうこの休日前の深夜だというのに…不思議なことに、普段は常連で一杯になっているこのＢａｒには砺波と『もう一人』の他に、誰も客は居らず。
その代わりに、たった一つの大きな気配が店のカウンターから放たれていて…それはまるで、意図的にこの店に他人が入ってこられないよう圧力をかけられているかのよう。
そんなとても重苦しく異質な雰囲気が、このＢａｒの中には充満していて。
そんな、声をかける事も憚られるような『只ならぬ圧力』を持った人物に対し、砺波は全く気後れした様子もなく声をかけた。

「もう来ていたんですか。あの遅刻魔が珍しい。」
「カッカッカ、俺ぁ酒飲むときゃ早ぇんだよ。」

そう、砺波がわざわざこの時間にＢａｒにまで足を運んだその理由…【決闘世界】構成員であり、決闘学園イースト校理事長を勤める、元シンクロ王者【白鯨】に声をかけて呼び出せるような人物など、この世を探してもそうは居ないだろう。

―天宮寺　鷹峰。

それは紛れも無い、あの『異変』の中心で暗躍していた【黒翼】からの、直々の呼び出しだったのだから。

「…それで、わざわざ私を呼び出して何の話ですか？」
「そう急ぐこたぁねぇ。一杯ぐれぇ飲んでからでもいいだろうが。まぁ座れ。」
「…いいでしょう。すみません、マスター…」
「一杯目はいつもの…ですね。」
「…流石ですね。覚えていたとは。」

現役時代の過去、幾度と無く通いつめただけあって常連客のルーティーンを完璧に把握しているＢａｒのマスターに敬意を表しながらも、即座に作られ届けられた酒を一口頬に含み、その味を懐かしみながら砺波は深く一息ついて。

こうして、【黒翼】と【白鯨】が一緒のカウンターに座って共に酒を飲んでいるという場面はかつての彼らからでは想像すら出来なかった光景だろう。

その珍しくも希少な光景を、Ｂａｒのマスター以外は見ることが叶わないのが悔やまれるものの…しかし、そんな彼らが一同に介したということは、とてつもなく厄介な『事情』があってこそだということをマスターも当に理解しているのか。

聞く耳を立てないようにして、【黒翼】と【白鯨】に酒の御代わりを差し出すと…誰に言われるまでも無く、店の奥へと姿を消していく。

完璧なる個室、他の気配も無い絶界。

完全に外界と隔離されたこの空間において、【王者】達の話を聞ける者など既に存在しておらず。

そんな、完璧なる人払いが済んだところで…

静かで荘厳な音楽に隠れるようにして、砺波が問いかけるように再度その口を開いた。

「…ヒイラギさんは…無事に出ましたか？」

「カカッ、やっぱ気付いてやがったか。」

「フッ、伊達に長い付き合いではないですからね。貴方が『あんな行動』を取るなんて、誰だっておかしいと思います。」

それは、いきなりの話の本題。

しかし、『異変』の裏で起こっていた『真実』に、誰に教えられるわけでもなく地力で辿りついた砺波だからこそ踏み入れる領域。

きっと、他の誰であってもその『本筋』に辿り着くのは容易では無

いはず。また辿りついたとしても、【黒翼】相手にそんな命知らずな台詞を吐ける様な猛者もこの世界には少なく…

それは、いがみあったり衝突しあったりしてきても、この数十年という永きに渡り共に競り合ってきた彼らだからこそ交わせる会話なのだろう。

余計な問答はいらない。確信に踏み入れる覚悟のある者同士だけが、この場に居られるのだ。

「お前さんの想像通りだ。…俺様にだって、事情ってもんがあったんだよ。切り捨てられねぇ、切り捨てる気もねぇ面倒臭ぇ事情がな。」

「全く、本当に昔から不器用な男だ。その事情の所為で、あなたの弟子の一人は傷をかかえてしまったようですが。」

「カカッ、遊良のことなら問題ねぇ。わざわざテメェに任せたんだからよ、なぁ、お優しい理事長先生よぉ。」

「…しかし、まさか貴方の弟子を私が見ることになるとは。」

「それがテメェの罪滅ぼしだ。これまで散々遊良につっかかった、大人気無ぇテメェのなぁ。」

「…わかっています。逆恨みとはいえ、あんな歳の子どもに随分と酷い扱いをしてしまいましたからね。」

先の『異変』を経て、『正気』を取り戻したことで砺波も今まで自分が行ってきた行動の愚かさを思い知ったのだろう。

あまりに酷く、あまりに醜く…そして、あまりにみっともなかったあの態度。

それは、かつて世界最強のシンクロ使いとまで称された【白鯨】のとっていいような態度ではなく…あろうことか、自分の学園の生徒『一人』に向けていい感情では決してなかったのだから。

「しかし、確かにアレは貴方の弟子だが、今は私の生徒でもある。つまり、私の好きなように鍛えてもいいんでしょう？」

「あ？…あー、そうだな、好きにしろい。その方があのガキにもいい刺

激になるだろうからよ。」
「フッ、アレは叩けば叩くほど光る素材だ、今日も面白いモノを見せてもらった。」
「だろ？カカッ、あんな面白ぇ素材を放っておくにゃ勿体無ぇってんだ。」
「アレだけの素材を貴方のような大雑把な男一人に任せておくのも勿体無いですが。だから私がしっかりと矯正しておいてあげましょう。」
「おうおう、言うねぇ。流石は理事長先生様だ。ちなみに、他２人のガキも結構面白ぇぜ？」
「…貴方の孫は少々口の聞き方がなっていませんが。全く、誰に似たんだか。若い頃の誰かにそっくりだ。」
「知らねぇなぁ、カッカッカ。」

…

そして、再び流れる静寂の音。
お互いに同じタイミングでグラスを傾け、その苦味と輝きを口の中に広げて流し込み…Ｂａｒの中に溢れる異質な雰囲気が、微かに流れるジャズの音色と重なってより一層この空間を外の世界と切り離している。

これまでの長い間…それこそ、お互いに知り合った頃から数えてもう数十年。

本当に色々な事があった。ぶつかって、ぶつかって、ぶつかって…そしてぶつかってきた、そんな相容れない存在であったはずのエクシーズ王者とシンクロ王者が、今こうして席を同じにして酒を飲んでいるという、このあまりに非現実的な光景を映し出していることすら一種の奇跡。
とは言え、コレまでの人生の大半を『決闘』によって語り合ってき

た世界最高峰の決闘者である【黒翼】と【白鯨】にとっては…これ以上、上辺だけの言葉を多く重ねる必要すらないのだろう。

そうして…

しばらくの静寂が響いた後…

「チッ…」

徐に鷹峰が椅子から降りて、その場に立ち上がったと思うと砺波を背にコートを羽織り始め…そのまま、砺波に背を向けたままでその口を開いた。

「…俺様はまたしばらくこの街を離れる、ガキ共の事は頼んだぜ。…今回の事で、色々と『勘付いた』奴もいるだろうからよ。」

「わかっています。特に…高天ヶ原さんですね。」

「…おう。やっぱわかってやがったか。」

「【神】を持つ少女…【決闘世界】にも、今回の【神】出現の報告は上がっていますが…まさか、それが高天ヶ原さんからだとは思いませんでした。…ひとまずこの情報は私のところで止めていますが…しかし、『奴ら』にまで情報が行けばどうなることか…」

「カカカッ、流石はお優しい理事長先生だ、手が早いこった。…おう、任せたからよ。ランも待ってっし、そろそろ俺様は出る。これで言う事は全部言ったからな。」

誰に聞かれることもない空間で、誰にも聞かれてはいけない言葉を交わした二人の【王者】。

この世の『裏側』には、まだまだ子ども達が知らない『闇』が多く存在していることは事実…しかし、その『裏側』から忍び寄る魔の手は、決して遠慮も配慮もすることなくいつどこからでも『表側』へと向かって忍び寄ってくるのだ。

それを守るのもまた大人の務めなのだということは、人を教える立場にある砺波にとっては至極当然なのだということを含めた返事を返して。

砺波もまた、決して鷹峰の方など見ずに…

酒のグラスを手に、顔を俯むかせたままで。

「…お気をつけて…なんて、貴方には不要でしょう。精々野垂れ死なないようにしてください。」

「カッカッカ、テメェに心配されるようじゃあ俺様もお終いだぜ。似合わねぇこたぁ言うもんじゃねーぞこら?」

「おや、私達は『ダチ』なのでしょう?少なくとも、私にはそう聞こえてましたが?」

「チッ、あんな状態だった癖に、面倒なことだけはしっかり覚えてやがる。」

背を向けたままではあるものの、この時の鷹峰は一体どんな表情をしていたのか。

誰にも見られることはないからこそ、ソレを知ることが出来るのはこの場には居らず…しかし、その纏った雰囲気の変化で、少なくとも砺波にだけは理解できたはず。

そうして鷹峰はその手を軽く上げ、砺波へと言葉をかけて…

「あばよダチ公。次会うときゃ、もしかしたら戦りあってっかもな。」

「フフッ、そうなったら派手に散らしてあげますよ。…【白鯨】の名にかけてね。」

「…カカッ、言うじゃねーか。…まっ、楽しみにしてっぜ。」

静かに…その場を後にした。

「…全く、本当に不器用な男だ。」

その瞬間、唐突に軽くなった雰囲気と、異質な空間となっていたＢａｒの中に放られた砺波の言葉が…

薄暗いライトに照らされ輝く酒の雫と、グラスの中で静かに溶けゆく氷と混ざり合い…

…これからの行く末を、憂いていた。

―…

雲ひとつ無い晴天、満開に咲き誇った桜の花。

どこか寂しさを孕ませたこの暖かな街の雰囲気は、今日という『この日』を確かな一つの『区切り』とするべく街中に広がっているに違いないだろう。

そんな決闘市中に光り輝く別れの涙と、これからの少年達の未来を写し照らすであろう唄が決闘市の東西南北から鳴り響き…

この街に居る誰もが新たな旅立ちを迎える少年達を称え、今日と言う『この日』をこれ以上無い程に盛大に祝していた。

これまでの３年間、彼らには本当に色々なことがあった。

―人々の上に立ち続け、常に最前線でその強さを街中に見せ付けてきた者。

―己の目的を強く持ち、常のその強さを磨いてきた者。

―人々との輪を保ち、常にその輪の中心で明るく輝いていた者。
―後続たちの先頭に立ち続け、常にこれからの未来を照らそうと勤めてきた者。
―そして…輝くことは叶わなかったものの、自分の持てる全てを持って、全力で立ち向かってきた者。

千差万別、多種多様。

そんな色取り取りの原石たちが、これまでの長く厳しかった…しかし短く楽しかった学生生活を終え、これから新たな『道』へと向かって飛び立とうとしているのだ。
涙を流す者がいる、笑顔で巣立つ者もいる。誰もがその心に浮かべている感情は異なるモノで、しかし誰もが同じ気持ちで『この日』を迎えていたはず。
そんな東西南北で響き渡る泣き声の混ざった歌声が、決して終わりたくないという感情を前面に押し出し…
しかし確かに迎えなければいけない終わりに、静かに辿りつき始めた…

―その『東地区』で、それは叫ばれた。

『卒業生!退場!』

―!

決闘学園イースト校が誇る、大きくも荘厳な造りをしている巨大なるデュエルスタジアム。
そのメインゲート、正面入り口が堂々と開き…3年間の長きに渡る、しかしどこか短かった学生生活を修めた『卒業生』達が、晴れ晴れとした顔、崩れた泣き顔、様々な表情を持ってこの場から退場を始めた。

「泉せんぱーい!!私達のこと忘れないでくださぁぁぁぁぁい!」
「やだぁー!泉先輩卒業しちゃやだぁぁぁぁ!」
「虹村先輩!ありがとうございましたぁぁぁぁぁぁぁ!」
「プロに行っても頑張ってくださぁぁぁぁぁぁぁぁい!」

その瞬間、外で『卒業生』達を待っていた在校生たちが、歓喜と悲観の混ざった様々な泣き声漏らして『卒業生』達を包みこんで。
『個人』に向けた歓声から、『全員』に向けた賛辞までその声の質は多岐に渡り、そのどれもがこれから巣立つ先人たちを大いに称える言葉となっていることだろう。
そんな在校生たちの感極まった奔流が一瞬にして『卒業生』達を飲み込こみ…何時までも別れを拒むかのようにして、これまであった色々なことと、そしてこれからの行く末と不安が混ざり合い飛び交いあって、何時までも収まらぬ『言葉』の渦となっているかのよう。

「おい泉、皆お前に卒業して欲しくないみたいだぞ。もう一年ここに居てやったらどうだ?」
「はは、それも楽しそうだけど…でも、僕達の先輩たちがそうだったように、僕達が何時までもここに居ちゃいけないよ。そうだろ、虹村。」
「…あぁ、そうだな。」

その歓喜の悲嘆の暴風の中で、人一倍大きな歓声を浴びせられている『卒業生』の内の『2人』が…祝福と感涙の嵐に掻き消されることなく、互いに言葉を交わしていた。

一人はその爽やかな容姿と分け隔てない性格、そして確かなデュエルの実力を揃え、周囲からの羨望を集めてもなお折れることのない屈強な精神を持った、芯の強いデュエリスト。
一人は他人に厳しく、そして自分には更に厳しさを求めるものの、常に後進のためを思い、そしてその思いを確かに受け継いだ後輩たちから絶対の信頼を寄せられる、重厚なる佇まいの持ち主。

―シンクロクラス3年、泉　蒼人

―エクシーズクラス3年、虹村　高貴

1年生の頃から頭角を現し、2年生で【決闘祭】出場を勝ち取り…そして3年生になってからは色々あったものの、それでもこの『決闘学園イースト校』が誇る双璧であり、学外でも有名となっている強者の2人。
無論、そんな彼らに与えられる言葉の数々は歯止めが聞かないかのようにして感涙に塗れており、誰もが彼らの『卒業』という門出を祝っていることには違いないだろう。そう、誰もが彼ら2人の『これから』の展望を称え、その声を大にして我先に賞賛を与えようとして詰め寄ってきているのだ。
何せ、彼らが成し遂げた偉業…
その過去に類の無い『特例』を知った在校生たちが、その興奮を押さえきれないとしてもそれは仕方ないことなのだから。

そう、イースト校始まって以来…いや、【決闘市】の歴史から見ても特例中の『特例』を知った在校生たちからの賛辞…

何と、泉　蒼人と虹村　高貴…イースト校史上初めてとなる、次年度から『2人の学生が同時にプロ入り』するという、その賛辞を。

あの『異変』の後、【決闘世界】の厳正なる審査の元…

特例中の『特例』として、各学園において数年に一人与えられれば良いというレベルであるプロテストの『本試験への推薦』が、何とイースト校の『泉　蒼人』と『虹村　高貴』、ウエスト校の『竜胆　大蛇』、サウス校の『獅子原　エリ』へと与えられたのだ。

無論、昨年度【決闘祭】優勝者であり今年度第3位という輝かしい成績を刻み込んだ、絶対防御、『鋼鉄』のデュエリストと呼ばれたウエスト校3年、十文字　哲においては、これもまた【白竜】以来となる『プロ試験免除』にてプロ入りが既に決まっていて。

…それは、表向きには昨年度の成績を加味した厳正なる審査の元。

…その実は、混乱を起こしてしまったとある『少女』の懇願と謝意が、【妖怪】へと聞き入れられて実装された結果なのだという真実は、決して誰にも知られていけないこと。

また余談ではあるが、ノース校においては誰にも『推薦』は与えられず…寧ろノース校においては、『何も無かった』というのが果てしない『温情』となっていることは、最早説明するにも及ばないことだろう。

とは言え、先日行われたプロテストの『本試験』においても、高等部の学生である彼ら『全員』が、見事その『実力』を持って正々堂々と『合格』を叩き出したモノだから、もう決闘市中はその驚愕と賞賛で溢れかえっていて。

2年生時、そして3年生時に巻き起こした【決闘祭】での盛り上がり。まさに『黄金世代』と称された中でも中心となっていた学生のほとんどが、なんと同時期に『プロデュエリスト』として活躍するとい

うのだから…それで盛り上がれない住人など、この【決闘市】には存在しないと言える。

そうして2人は共に並んでゆっくりと歩き、いつまでも止まぬ歓声と賞賛の竜巻の中で、蒼人と虹村は静かに言葉を交わして…

「虹村、頼みがあるんだけど…いいかな？」
「あぁ、わかっている。ここは任せておけ。」
「…ありがとう。何も聞かないで分かってくれるなんて、流石は虹村だ。」
「まぁお前とも長い付き合いだからな。いいからさっさと行ってこい。…俺も、最後にここでやることがある。」
「そっか、『君も』なんだね…頑張って。」
「…お前もな。」

そうして喧騒の中で、何やら短く言葉を交わした二人の卒業生たち。

…彼らが何を話していたのか、それを聞き取れた者はここには居らず。

誰もが、様々な思いを抱きながらこの学び舎を巣立っていく今日という日。ソレを見送る在校生達もまた、これから訪れる虚無感と責任感の重圧に耐えていかねばならず…しかし、必ず訪れるこの別れもまた、決して繋がりの終わりではないことを全員が知っているからこそ、今こうしてこの時にしか交わせない言葉を飛び交わせているのだ。

―轟く喧騒、飛び交う賛辞。

何時までも鳴り止まぬ、誇るべき『卒業生』たちへの言葉の雨。

そんな歓喜の喧騒の動乱を…

上階の教室の窓から、遊良と鷹矢とルキが見下ろしていた。

「…先輩たち、卒業しちゃったね。」
「あぁ、そうだな。」
「…寂しくなるね、もう先輩たちには会えないなんて。」
「む？別に会えないことは無いだろう。街に出ればそこらに居そうではないか。」
「違うよ、もう。これで先輩たちはイースト校の学生じゃなくなるから、これまでみたいに授業とかで一緒になることはないんだなーって思って…」
「って言っても俺は元から『召喚別授業』受けてないからよくわからないけどな。」
「…もー、遊良までそんな事言って。」
「はは、悪い悪い。でも確かに、今まで居た人達が居なくなるっていうのは何か…寂しいな。」

ほぼ全ての生徒が『卒業生』達の元に集っているこの光景の中で、3人だけ教室内で『下』の喧騒を見下ろしている遊良達。
そんな彼らの声も、含ませた感情は『下』にいる在校生たちと同じく…鷹矢は除いてだが…どこか寂しさを孕んだような、微かな虚無感を発している様子。

ルキからすれば、交流の多かった先輩たち。
鷹矢からすれば、戦い慣れた先人たち。
…そして遊良からすれば、『色々』と一悶着も二悶着もあった先達たち。

そんな人々が、これから綺麗さっぱりいなくなるのだ。
各々思うことは違っても、その根本に浮かび上がる寂しさという感情は、鷹矢を除いてきっと同じはず。

そうして未だ静まらぬ、寧ろどんどん大きくなる喧騒を見下ろしながら…遊良は、鷹矢へと向かって口を開いた。

「おい鷹矢…そろそろ行くか？」
「うむ。」
「あ、二人ともやっぱりやるんだね。」
「あぁ…『約束』、だからな。」
「うむ。」

秘めたる思いと確かな『約束』。
先ほど鷹矢が言ったように、これからも『卒業生』たちには『どこか』で顔を合わせる機会はたくさんあることだろう。
…しかし、ルキの言葉の通りこの『イースト校』で、同じ制服を着て、同じ授業を受けて、同じ時間を共有することは、これから先には決して無いのだ。

—これが、最後…

だからこそ、遊良も鷹矢も己の内に秘めた『何か』を持って、『約束』を果たそうとしていて。

そんな遊良へと向かって、ルキが少々ふて腐れたような顔をして…
「…ねぇ遊良、私本当に付いてったらダメ？私も見たいよ。」
「ダメだ。ルキは鷹矢に付いていってくれ。」
「むー…」

「頼む。」
「…わかった。でもちゃんと後で詳しく教えてよ？」
「あぁ、わかってるって。」
「…じゃ、後でね。」
「あぁ。」

しかし、遊良の思いを理解しているからこそ、ルキも無闇に食い下がることなく引き下がったのか。
そのままルキが教室を出て行き、一足先に教室を出て歩き始めていた鷹矢に追いついて、２人が何か話し始める様子を見送った遊良。

この後、きっとこの『下』で起こる喧騒はこれまで以上に盛大に盛り上がることだろう。
これから『何』が起こるのかを知っている遊良からすれば、それは容易に想像できるものの…
しかし、この『門出』の場においても、鷹矢へと向けた『違う意味』での心配がどこか遊良の心には募ってきている。

「鷹矢の奴、下手なこと言わなきゃいいけど…じゃ、俺も行くか。」

…しかし、ずっと鷹矢への心配もしてはいられない。
鷹矢のことは、ルキに任せた。
これから先、自分は自分の心配をしなければならない。
それを心に刻みなおし、『約束』の場へと向かって誰一人として居ない校舎の中を、急ぎ足で遊良は歩き始める。
その心に、押さえきれない『感情』を溢れさせながら。

―心が躍る。

―この日、この時、この場所で。

—こんなにも楽しいことが出来るだなんて。

歩みから、早足へ…早足から、駆け足へ。

その思いとともに、遊良は目的の場所へと向かって、その足を速めていって…

そして…

「…まだ、来てない…よな。」

遊良が扉を開けた瞬間。

暖かな風がこの『屋上』に吹き、頬を掠める桜の花びらが、遊良の心をより一層囃し立てた。

普段は、あまり生徒の来る様な場所ではないこの場所。しかし遊良からすれば、色々と思うところがある場所。

何も感じないわけが無い。この『屋上』で、初めて遊良は幼馴染たち以外での『味方』を得たのだから。

そして、感情が溢れそうになる『この場所』に遊良が足を踏み入れたその瞬間…

—!!!

『卒業生』たちと在校生たちでごった返している『下』から、先ほどの喧騒とは比べ物にならないほどの轟きが響き始めた。
それは、どこか【決闘祭】で掻き鳴らされた人々の歓声と言う名の轟きに似ていたことだろう。

…どうやら、鷹矢は上手くやったようだ。

『下』からは死角となっていて、決してその光景を見ることは叶わないこの『屋上』からでも…ソレが、まるで手に取るように分かる遊良。
後は、自分。
今か今かと待ち人を待ちわびる遊良の心が逸り…
その時を永遠とも錯覚するほどに心臓の鼓動が回転を上げていき…

そして…

「…やぁ、待たせたね、遊良君。」

他の誰も居ないこの屋上に…静かにもう一人の声が放たれた。

「蒼人先輩…よく抜けられましたね。」
「うん、ちょっと大変だったけど、虹村が何とかしてくれてさ。…天宮寺君がね、来てくれたから。」
「はい。鷹矢の奴も、虹村先輩とデュエルをするんだって言って、昨日から張り切ってて。」

それは、初めて会ったあの日と同じ。

この『屋上』で交わした会話の時と同じような…敵意など無い、心から自分を認めてくれているのだと、遊良にだってはっきりと理解できるような蒼人の声がこの屋上に広まり始めて。

アレだけの観衆の中を、蒼人はこうして誰にも見つからずにここまで来たのだ。

『下』に突如現れた鷹矢が、虹村へと放った言葉によって起こった一瞬の喧騒に紛れて…自分への注意が一瞬だけそれたその瞬間に、即座に『下』を離れてこの屋上まで駆け上がってきたのだろう。

そうまでして、蒼人が『屋上』にまで来た理由。

それは決して他の学生たちには、わかるはずもない遊良と蒼人、2人だけの確かな『約束』のためであって。

「僕が入院していたり、その後も混乱でゴタゴタしていてそれ所じゃなかったけど…遊良君、これでやっと君との『約束』を果たせる。君には随分と迷惑をかけた…選抜戦のときも、その後も…」

「いえ、俺の方こそ、先輩には随分と助けてもらいました。だから、謝って欲しくなんかないです。御礼を言うのは俺の方なんですから。」

「…ははっ、やっぱり君は凄いよ。この一年間で『あんなこと』が沢山起きたのに…いや、ずっと辛い目に遭ってきても、それでもこうして強くいられる。それは君にしかない、君だけの強さだ。」

「…あ、ありがとうございます。」

どこまでも優しく、しかしはっきりと自分の『本心』を包み隠さず伝えてくれる蒼人の声。

決して、初めからわかりあえた関係ではない。

…突然の邂逅に、戸惑うこともあった。

…あまりの変貌に、ぶつかって傷つけ合った。

…悩み苦しんでいたところを、支えてもらった。

…最後の最後まで、信じてくれた。

遊良にとって、幼馴染以外で初めて出会えた自分の『味方』。

―Ｅｘ適正が無い…

それは、この世界においてどうしようもないくらいに『出来損ない』の証。

ただ、呼吸をしているだけの存在。こんな不出来な人間は、『決闘者』ではないと言い放たれたほどに…天城　遊良という、たった一人の少年の本質を『見ようともしない』人間たちは、簡単に遊良の『敵』となっていたというのに。

世界から蔑まれていたこんな自分を、偏見なく見てくれて…

…そして、心から信じてくれた、信頼出来る唯一の『味方』

幼馴染とは違う繋がり。師弟とも違う繋がり…ようやく出来た、『他人』というカテゴリーの中で唯一の遊良の理解者となってくれた人。

いや理解者ではない、遊良を認め、遊良が認め、そして遊良と認め合った、そんな『対等な仲間』という、この世で初めて出来た遊良の『味方』が、今ここにいるのだ。

「…よし、じゃあ始めようか。誰も見ていないけれど、そんなことは関係ない。ここで…初めて話し合ったこの場所で…」

「…よろしく、お願いします。」

そんな先輩に出会えたことが、遊良にとって誇らしくないわけがない。

遊良に溢れる感情は、これまで敵の多かった自分に芽生えることが無かった、そんな『異質』なモノを確かに心に覚えさせていることだ

ろう。

—世界は確かに残酷だ。

弱者を簡単に見捨ててしまい、弱者を簡単に切り捨ててしまう。
しかし、自ら成長しようと足掻き続けた者が決して報われずに終わる『わけがない』ということも、紛れもないこの世の真理。

これが、このデュエルが…

—そう、この『決闘』が。

『イースト校の学生』と言う、遊良と蒼人が同じ所で戦える、最初で最後の約束の機会。

「いくよ、遊良君…」

デュエルディスクを転開し、デッキが現れ手札を引いて…

「僕達にしか出来ない戦いを…『約束』の決闘を…」

言葉が溢れ、感情が弾け…

「さぁ、楽しいデュエルをしよう！」
「はい！」

二人は、叫ぶ。

―デュエル！

そして、始まる。

先攻は、蒼人。

「僕の先攻！僕は【ナチュル・アントジョー】を通常召喚！」

【ナチュル・アントジョー】レベル２
ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／　２００

開始早々、蒼人の場に現れた可愛らしい見た目をした蟻のようなモンスター。

攻撃力も低く、守備力も低い…かつて遊良が蒼人と戦った時の【インフェルニティ】とは、まるで真逆の、蒼人の操るモンスターの内の一体。

しかし、その可愛らしい見た目に騙されてはいけない。これこそ、この【ナチュル】たちこそ泉　蒼人というデュエリストの本来のデッキなのだ。

彼が『闇』に憑かれていた時の実力と、『今』の蒼人の力は本質からして強さが違う。あの選抜戦の時に、本来の蒼人と遊良が戦っていれば…遊良に勝ち目など無かったはずなのだから。

「そしてカードを２枚伏せてターンエンドだ！」

蒼人　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：【ナチュル・アントジョー】
伏せ：２枚

「来い、遊良君！僕と、僕の【ナチュル】達の全力を！君に見せてあげるよ！」
「はい！蒼人先輩、俺も…全力で行きます！俺のターン、ドロー！」

そうして、静かな立ち上がりではあるが、決して油断など出来ない雰囲気のままそのターンを終えた蒼人を見て…遊良もまた、初めからその勢いを爆発寸前まで高めて戦いに望んでいる様子。

―油断などしない、油断など出来るわけがない。

選抜戦の時のデュエルなど、参考にもならなければ勝ったとも遊良は思っていないのだ。
こうして【決闘祭】を経たからこそ、真正面から蒼人に立ち向かえる強さを得たとはいえ…それは、こうしてようやく『同じ立ち位置』に辿りついたということを遊良に理解させたと言うことで、蒼人の過去のデュエルを研究していた遊良は既に気が付いている。

…それは紛れも無い。

蒼人も既に、一つ上のレベルである『壁』を、遊良と出会うよりも遥か昔に超えていたということであって。

「【堕天使の追放】を発動！デッキから【堕天使スペルビア】を手札に加える！続いて魔法カード、【トレード・イン】発動！スペルビアを捨てて２枚ドロー！【堕天使イシュタム】の効果発動！手札の【堕天使

ゼラート】と共に捨てて２枚ドロー！【闇の誘惑】を発動し、２枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外！２枚目の【闇の誘惑】も発動だ！２枚ドローし、【堕天使ユコバック】を除外する！」
「…流石、凄いドローだ。」

宣言どおり、初めから全力でデッキを回転させにかかる遊良。
微塵も油断できない相手、しかし戦うことを心から楽しみにしていた相手。そんな相手と、ようやく戦うことが出来るのだ。それなのに、生半可な様子見でターンを終えることなど勿体無いと言わんばかりに、その勢いを増していき…

「行きます！俺は手札から【堕天使の戒壇】を発動！墓地から【堕天使スペルビア】を、守備表示で特殊召喚！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

最初に現れたのは、遊良のデュエルにとって無くてはならない異形の堕天使。
展開の要であるこのスペルビアを蘇生させ、ここから一気に展開して畳みかけるのが遊良の戦法の一種。

「そしてスペルビアの効果で…」

そうして、遊良が異形の堕天使の効果を発動させようとした…
その時…

「おっと、【堕天使スペルビア】の特殊召喚成功時、僕は【ナチュル・アントジョー】の効果を発動！デッキから、２体目の【ナチュル・アントジョー】を守備表示で特殊召喚するよ！」

【ナチュル・アントジョー】レベル２
ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／　２００

蒼人の場に飛び出てきた、２体目の蟻のモンスター。
相手の特殊召喚に呼応して、その逞しき顎を打ち鳴らしてデッキという聖なる森から仲間を呼び出すその共鳴は…
攻め寄る敵から蒼人を守る、堅牢なる盾となろうとしている様。

「特殊召喚反応型のモンスター…前に映像で見た…でも、ここで止まるわけには行かない！スペルビアの効果発動！墓地から【堕天使イシュタム】を攻撃表示で特殊召喚する！」

【堕天使イシュタム】レベル９
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

しかし、ソレを見てもなお遊良は怯んだ様子を見せず。
そもそもスペルビアの効果は止まらないし、こんな序盤で手を止めるような自殺行為など出来るわけがないのだから。
いつもと同じ、遊良の戦いの始まりの形。
異形の堕天使と魅惑の堕天使…いつも、いつだって、遊良の進撃はここから始まるのだ。
一気に攻め切れるわけがないが、一気に攻めきる気持ちを持っていなければ一瞬でもって行かれる。それは『壁』を超えた者達の戦いを間近で見てきて、そして『壁』を超えた者達と戦ってきたからこその遊良の感覚。

「【ナチュル・アントジョー】２体の効果を再び発動だ！僕はデッキから【ナチュル・コスモスビート】と【ナチュル・フライトフライ】を、それぞれ守備表示で特殊召喚！」

【ナチュル・コスモスビート】レベル２

ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　７００
【ナチュル・フライトフライ】レベル３
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／１５００

そして、蒼人もまた自分と同じ領域に辿りついた遊良を前にして、遠慮も油断もする様子は見せず。遊良の堕天使の羽ばたきに負けず、次々と聖なる森の仲間を呼び出してはその勢いを増していく。

そのどれもが遊良の堕天使と比べると攻守も低く、また遥かに小さきモンスター達ではあるものの…しかし、攻守の高さだとか効果の強さだとか、そんな『些細』なことなど『決闘』と言うモノには関係ない。

どんなデッキを扱おうと強者は強者…いや、強者が自分の『魂』とも呼べるデッキやカードに出会い、そしてソレを扱うからこそどんなカードであってもそのカードにしか出来ない『強さ』が発揮されるのだ。

例え強いだけのカードを持っていたとしても、それが自分の『魂』とならなければただのカード。例え他人には弱いカードだとしても、そのカードと自らの『魂』が合致した者がそのカードを扱えば、それはとてつもなく強いカードと化けるのだから。

「【ナチュル・フライトフライ】がいる限り、僕の場の【ナチュル】の数まで、君のモンスターの攻守は下がる！この場合、君のモンスターの攻守は１２００下がるよ！」

「色んな効果を状況に応じて使い分ける戦法…研究した通りだ。けど、まだ俺はモンスターを通常召喚をしていない！【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！デッキから【堕天使ディザイア】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキに戻す！行くぞ！【堕天使スペルビア】をリリース、レベル１０、【堕天使ディザイア】をアドバンス召喚！」

―！

【堕天使ディザイア】レベル１０
ＡＴＫ／３０００→１８００　ＤＥＦ／２８００→１６００

天から堕ちし漆黒から、静かに現れるは鎧の堕天使。
闇に煌く鎧を纏い、敵を深黒へと引きずりこまんと武具を構え…目の前に群がる敵達を、厳しく睨んで宙に佇む。
例え攻撃力と守備力を下げられていても問題ない。そう言わんばかりに、遊良は悠々自適に浮かんでいる鎧の堕天使へと向かって命令を下すのみ。

「まだディザイアの攻撃力は１８００！【堕天使ディザイア】の効果発動！攻撃力を１０００下げることで、【ナチュル・フライトフライ】を墓地へ送る！」
「くっ…流石にすぐに対処してくるか…」
「よし、これで攻守は元に戻った！行くぞ、バトルだ！まずは【堕天使イシュタム】で、攻撃表示の【ナチュル・アントジョー】に攻撃！」

そうして蒼人の繰り出す多彩な戦法を掻い潜り、一時も攻める気持ちを捨てない遊良の宣言によって魅惑の堕天使が空へと飛び立つ。
狙うは、蒼人の繰り出したモンスターの中でも唯一の攻撃表示の蟻の一匹。
確かに、『決闘』において攻撃力の差など関係は無い。しかし、ソレはそこに至るまでの過程の話であり…幾重にも張り巡らされた攻防を経てソコに至ってしまえば、後は攻守の差によってＬＰが削られるのだ。
これは、『決闘』…遠慮など、している暇は無い。

「でもそうはさせないよ！攻撃宣言時に罠カード、【緊急同調】を発動

！レベル２の【ナチュル・アントジョー】２体に、レベル２の【ナチュル・コスモスビート】をチューニング！」
「なっ!?俺のターンにシンクロ召喚!?」

だからこそ蒼人の方もまた、簡単には攻撃を許さない。
彼が発動した罠カードによって、２体の蟻が花の輪を潜り抜けて星へと変わっていく。
相手のターンに行われる、シンクロ召喚によって…蒼人を守りし守護獣を、この場に呼び出すために。

「聖なる森の守護竜よ、蔓延る悪意を噛み砕け！シンクロ召喚、レベル６！【ナチュル・パルキオン】！」

―！

【ナチュル・パルキオン】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１８００

「あれは罠を封じるモンスター！…くそっ、攻撃は中止だ。俺はカードを３枚伏せて、ターンエンド！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：６→２枚
場：【堕天使イシュタム】
【堕天使ディザイア】
伏せ：３枚

攻撃を止め、ターンを終えた遊良にとって、ここで蒼人の守護竜と自分の魅惑の堕天使を同士討ちさせる手もあっただろう。
そうすることで、がら空きになった蒼人に鎧の堕天使の攻撃を喰らわせることが出来たのだから。

しかし、遊良はソレをしなかった。
それは、相手のターンに自発的に動くことの出来るイシュタムを残しておいた方が返しのターンでの蒼人の巻き返しに対応できると判断したのか…
それとも過去に痛い目を見た、蒼人の場にあるたった一枚の伏せカードを警戒したのか…
そんなこと、今ここで戦っている遊良本人にしかわからないものの、それでも今この状況においては彼らの全てが、この『決闘』の全て。
その心境など、戦っている彼らにしかわかるはずもない。

「僕のターン、ドロー！」
「このスタンバイフェイズ！速攻魔法、【禁じられた聖杯】を発動！【ナチュル・パルキオン】の効果を無効にし、攻撃力を４００アップさせる！」

【ナチュル・パルキオン】レベル６
ＡＴＫ／２５００→２９００

「このタイミングでパルキオンの効果を無効に…」
「はい、このままただ待っているだけだと、俺は何も出来なくなりますからね。…特に、先輩のシンクロモンスター達は。」
「流石の洞察力だ、やっぱり一筋縄じゃいかないね…僕は【ナチュル・パンプキン】を召喚！その効果で手札から、【ナチュル・ナーブ】を特殊召喚！…じゃあ行くよ、レベル４の【ナチュル・パンプキン】に、レベル１の【ナチュル・ナーブ】をチューニング！聖なる森の守護獣よ、寄せ来る敵を打ち払え！シンクロ召喚、レベル５！【ナチュル・ビースト】！」

―！

【ナチュル・ビースト】レベル５
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／１７００

続いて蒼人の場に現れるは、聖なる咆哮を轟かせる深緑の獣。
神聖樹を脅かす邪な者を、決して許すことのないように…主である蒼人の元で、その存在を大いに示す。

「やっぱり来たか、今度は魔法を封じるモンスター！」
「魔法カード、【貪欲な壷】発動。【ナチュル・アントジョー】２体、【ナチュル・コスモスビート】、【ナチュル・パンプキン】、【ナチュル・ナーブ】をデッキに戻して２枚ドロー！そして【強欲で貪欲な壷】も発動！デッキを１０枚裏側除外して更に２枚ドロー！…よし、【死者蘇生】を発動するよ！【ナチュル・フライトフライ】を墓地から特殊召喚！」

【ナチュル・フライトフライ】レベル３
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／１５００

【堕天使イシュタム】レベル９
ＡＴＫ／２５００→１６００
【堕天使ディザイア】レベル１０
ＡＴＫ／２０００→１１００

そうして蘇った羽虫の共鳴が、再び遊良の堕天使達を弱体化させて。
遊良もかつて、蒼人のデュエルを必死に研究していたからこそ理解しているのだが…状況に応じて様々な効果を持つ仲間達を繰り出して、その時に応じて攻め方を変えるからこそ、蒼人のデュエルには弱点という弱点が見当たらないのだ。
攻撃力が低いのならば、相手の力を下げれば良い。
連続攻撃を仕掛けられても、次々に現れる仲間達が守ってくれる。

相手がどんな強力な効果をぶつけてこようとも、聖なる森の守護獣達が必ず蒼人を守る。
その全てのモンスターが蒼人にとっての切り札であり、その全てが頼れる仲間。どんな戦法で相手がかかってこようとも、その全てに対応してみせるまさにオールラウンダー。

「また攻撃力を下げられた…くそっ！」
「じゃあ行くよ！バトルだ！【ナチュル・ビースト】で【堕天使ディザイア】を攻撃！」

そうして迫る獣の姿が、力を奪われた鎧の堕天使へと襲い掛かる。先ほど自らを犠牲にしたためか、より一層その力を奪われた鎧の堕天使は今にも地に足がついてしまいそうな程に羽ばたきが弱いではないか。
そんな鋭利な爪撃が、今にもディザイアの鎧を切り裂こうとして…

「させるか！罠発動【神属の堕天使】！【堕天使ディザイア】を墓地へ送って、【ナチュル・フライトフライ】の効果を無効にし、ＬＰを８００回復！」

遊良　ＬＰ：３０００→３８００

それでも簡単に攻撃を許してやるほど、『今』の遊良とて甘くは無いだろう。
いくら蒼人が様々な攻め方で遊良へと向かってこようとも、これまでの戦いで色々な相手と鎬を削って戦ってきた遊良なのだ。今まで培ってきた戦いの記憶は、確かな遊良の戦術の引き出しとなって行動すべき時を遊良へと教えてくれているのか。
遊良が発動した堕天使の力…かつて神の元に居た天使達の、与えられていた力の残滓が蒼人のモンスターを飲み込んで鎮めて。

「これで攻撃力は元に戻った！」
「なるほど、これを使うためにパルキオンの効果を無効にしたのか。だったら…【ナチュル・ビースト】の攻撃は中止！続いて【ナチュル・パルキオン】で【堕天使イシュタム】を攻撃だ！」
「がら空きにはしない！【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の戒壇】の効果を得る！【堕天使ゼラート】を守備表示で特殊召喚し、その後【堕天使の戒壇】をデッキへ戻す！更に永続罠、【奇跡の降臨】発動！除外されている【堕天使アスモディウス】を攻撃表示で特殊召喚！」

―!!

遊良　ＬＰ：３８００→２８００
【堕天使ゼラート】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２３００
【堕天使アスモディウス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

がら空きになりかけたにも関わらず、一瞬で堕天使達で溢れ変える遊良の場。
―入れ替わり、立ち代り。
次々に状況が変化して、幾度も場面が変わっていくこのデュエル。蒼人が場を変化させれば、遊良だって次々に堕天使達を呼び出し応じて、蒼人相手に一歩も引くことはなく。
…果たして、この場にギャラリーが居たとしても、『壁』を超えた者同士のこの戦いに付いてこられる学生達が一体イースト校には何人いるのだろうか。
そんなこの目まぐるしい遊良の状況の変化にすら、蒼人はまるで焦りもなく。更なる追撃の手を休めることもせず…

「でも攻撃は止めないよ！行けパルキオン、【堕天使イシュタム】に攻撃！ガイア・ファング！」

――！

「ぐぅ…」

遊良　ＬＰ：２８００→２４００

そして…

このデュエルでの初のダメージが、遊良へと襲い掛かった。

それは、たかが『４００』のダメージだったかもしれない。

しかし、このたった４００のダメージが、今はっきりと流れがどちらに傾いたのかを分けたのだ。それは、お互いに一歩も引かずにここまで攻め合ってきた均衡が、僅かに崩れた証とも言えるのではないだろうか。

確かに遊良の場には、強力な力を持った堕天使が２体…しかし、２体ともこのターンが終了すれば弱体化してしまい、更に蒼人の場には魔法と罠を封じる強力な守護者が２体も君臨しているのだ。

「な、何とか場をがら空きにはしないで済んだけど…」

崩れた均衡、喰らったダメージ。攻めきられたが故に漏らしてしまった、遊良の静かな焦りの吐息。

たった４００のダメージが、ソレをはっきりと自覚させてしまうほどに今の『僅かな』ダメージは『大きく』遊良に襲い掛かってきて…

想像していた以上に高く、想定していた以上に深い。

これが、この姿こそが、選抜戦の時のような『闇』に操られていた

姿ではない、蒼人本来の実力。
いくら同じ場所へと辿りついたとは言え、ずっと前から『ここ』に立っていた者の心の余裕は、『壁』を超えたばかりの遊良にはまだまだわからないモノ。
それを、今まさにその肌で実感している様子を遊良は見せて。
「強い…攻めても守っても優位に立てないなんて。これが蒼人先輩の本気…まるで底が見えない…」
「どうだい遊良君、これが僕の守護獣達だ！」
きっと、【決闘祭】を最後まで戦い抜いた遊良でなければ、ここまで蒼人とは戦えるはずもなかったはずだ。
学園に多々いる、並みの実力程度のデュエリストならば…きっと、蒼人の外面だけしか見ることができずに、その実力の深さを測ることすら出来ないだろう。
自分が何をされているのかすら分からない内に、手も足も身動きも出せなくなってしまって…簡単に、ＬＰを０にされていることだろうから。
爽やかで、誰にでも対等で、どんな時でも笑顔を絶やさない泉　蒼人という、この遥かな清流の如き精神を持った強大なデュエリストの…これが本来の力であり、これこそが本来の姿。
そんな蒼人は、均衡を崩して優位に立ったにも関わらず微塵も油断などした様子も無く…静かに、その口を開いて遊良へと声をかける。
「…遊良君、君は確かに強くなった。最初に出会ったときから比べて、比べ物にならないほどに。沢山の戦いを経験し、沢山の辛い目に遭ってきた…」
果たして、今こうして遊良へと声をかけた蒼人の心意はいかなるモノなのだろう。
ＬＰが勝っている故の安堵か、先輩としての心の余裕か…それと

も、もっと別の『何か』か。
　きっと、蒼人の言った『辛い目』の中には、選抜戦での自分との戦いも含まれているのではないだろうか。
　最初に約束したことを、果たせなかった申し訳なさ。折角分かり合えたというのに、それはお互いに傷つけ合った後だった…そんな、悔しさが。

「だからこそ！『今』なら君はどうやってこの場を突破する？君はこのくらいで諦めるほど弱いデュエリストじゃないはず、いくら追い詰められても、デュエリストだったらどんな状況でも逆転することを諦めちゃいけないんだ！僕はカードを1枚伏せてターンエンド！そしてフライトフライとパルキオンの効果は戻り、パルキオンの攻撃力も元に戻る！」

蒼人　ＬＰ：４０００
手札：3→1枚
場：【ナチュル・パルキオン】
【ナチュル・ビースト】
【ナチュル・フライトフライ】
伏せ：2枚

「これからは君が先輩になっていく。君の【決闘祭】での活躍は、決闘市の全ての人が知っているからね…これからのイースト校は、君と天宮寺君が背負っていくことになるだろう。」
「はい…」
「でもきっと、まだ君を認めようとしない人も沢山いる。だからこそ僕が学園を去る前に、君には先輩として伝えておかなければいけないことが沢山あるんだ！」
　きっと相手が遊良でなければ、蒼人もここまでの『枷』を遊良には与えなかっただろう。

蒼人から送られる言葉は全て、彼がこの3年間という『時間』をイースト校で過ごして来たからこその言葉。

―今日を持って、自分はこの学園を去ってしまう。

だからこそ、次なる世代に自分の思いと、そして自分が受け継いできた思いを残していかなければならないのだと、そう言わんばかりに今の蒼人は優しくも厳しく遊良の前に立ちふさがり…

まるでこの最後の機会、この『約束』のデュエルで、蒼人は『何か』を遊良に伝えようとしているかのよう。

「さぁ遊良君、君の強さをもっと僕に見せてくれ！」

「…わかっています。魔法も罠も封じられて、その上モンスターも弱体化させられてる…でも、こんな状況今までいくらでも経験してきた！だから、まだまだ俺は諦めてなんかない！」

叫びは奮起、呼応は決意。

この状況に置かれても、流れを蒼人に持っていかれても…遊良は決して諦める様子を見せず、更に自らを高めようとするべく自らを奮い立たせて。

遊良にとってこのデュエルは、蒼人と『対等』に戦える最後の機会。

これよりプロとなる蒼人と学生のままの遊良では、次の機会ではどう足掻いても社会的な『壁』が存在してしまうのだ。

それを、遊良がこんな程度で終わらせられるはずもなく。

「このまま…終わってたまるか！俺のターン、ドロー！…よし！」

だからこそ、こんなにも全力でぶつかっているというのに、ソレを超えて立ちふさがってくれる蒼人という偉大な先輩との最後のデュエルを、この程度で終わらせるわけにはいかないのだと言わんばかりに遊良は勢い良くデッキからカードをドローして…

今の自分が出せる以上の、持てる力の全てで遊良は蒼人にぶつかろうとするのみ。

―それが、そうすることが。

今日を持って『ここ』を飛び立つ蒼人への、盛大なる門出の唄になることを、遊良は知っているから。

「魔法も罠も封じられた…でも、モンスター効果は封じられていない！まずは【堕天使ゼラート】の効果を発動！手札の【堕天使ユコバック】を墓地へ送って…」

「そうはさせないよ！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！【堕天使ゼラート】の効果を無効に！」

「くっ、やっぱり通らないか…」

流石に、一瞬で状況を一変させられる力を持った赤き装束の堕天使の効果を、こんなにも簡単に蒼人が通してくれるはずがないだろう。

神をも封じる悪魔の鎖。その力により堕天使の羽ばたきが封じられ、抗う間もなく地に落とされる。

蒼人が『あえて』残したであろう『モンスター効果』という抜け道を、遊良とて何とか潜り抜けようとしたとは言え…そう易々と、そこを通り抜けられるわけもなく。

―この程度じゃ、まだダメだ。

蒼人言いたいことが遊良へと手に取るように伝わり、益々遊良の行動が制限されていって。

「でも…これで終わりじゃない！蒼人先輩、行きます！これが…これが俺の切り札だ！俺は2体の堕天使をリリース！」

「ここでアドバンス召喚!?まさか、今引いたのか!?」

それでも…いや、だからこそ遊良は更に自らを奮い立たせるのか。
…初めから、ゼラートの効果が蒼人に届かないことなど遊良はわかっていた。
だから一つでも蒼人の守りの手を、ここで消費させるべく遊良はあえてゼラートの効果を発動したのだ。
いくら『枷』を提示されても、それを超えて立ち向かう姿を蒼人へと見せ続けるため…

「現れろ！レベル１１！」

この状況下で来てくれた、この状況下だからこそドローした…

「神に背きし反逆の翼、その姿を今ここに！」

自らの『切り札』を、今こうして降臨させる…

…そのために

―遊良は、叫ぶ。

「来い、【堕天使ルシフェル】！」

―！

清廉なる天の光、それを遮る黒き姿。
聖なる森の守護獣達にも、決して引けを取らぬその佇まいはまるで神か悪魔か。
儚くも奮えるその姿は、まるで今の遊良の姿のようでもあって。

【堕天使ルシフェル】レベル１１
ＡＴＫ／３０００→２１００　ＤＥＦ／３０００→２１００

「来たか…遊良君の切り札！そうだ、それが見たかったんだ！君の全力が！」
「召喚成功時、【堕天使ルシフェル】の効果発動！相手モンスターの数まで、デッキから堕天使達を呼び起こす！来い、【堕天使マスティマ】、【堕天使テスカトリポカ】、【堕天使エデ・アーラエ】！」

―！

【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００→１７００　ＤＥＦ／２６００→１７００
【堕天使テスカトリポカ】レベル８
ＡＴＫ／２８００→１９００　ＤＥＦ／２１００→１２００
【堕天使エデ・アーラエ】レベル５
ＡＴＫ／２３００→１４００　ＤＥＦ／２０００→１１００

そうして…堕天の王の呼びかけによって、場に君臨したその瞬間にデッキに眠りし他の堕天使達が突如として出現し始めて。
悪魔のような堕天使と、獣の堕天使と、そして悪鬼の堕天使。
瞬きほどの一瞬の後に、堕天使達が遊良の場に参上してその黒き翼を広げ、主を守らんと宙に羽ばたき始めるのか。
…もしも、遊良がルシフェルを引いたことで気を緩めて、すぐにでも王を召喚をしてしまっていれば、きっと蒼人は遊良のこの宣言を許

してはくれなかっただろう。

それをわかっているからこそ、緩みも無く、驕りも無く。

いくら魔法・罠を封じられていようとも、わずかに残されたモンスター効果という『抜け道』を『いくつも』掻い潜り、必死になって喰らいつく。

…いや、喰らいつくのではない。

残った微かな希望を目掛けて、己の持てる全てを賭ける。己の放てる『切り札』で、最後まで逆転を諦めないこれが、これこそが遊良のデュエルなのだから。

「一瞬でこんなにも多くの堕天使達を…やっぱり、凄いモンスターだ…」

「まだだ！【堕天使ルシフェル】の更なる効果発動！俺はデッキからカードを４枚墓地へ送る！墓地へ送られた堕天使カードは２枚！よって更にＬＰを１０００回復！」

遊良　ＬＰ：２４００→３４００

「【背徳の堕天使】は落ちないか…けど、まだだ！俺は【堕天使テスカトリポカ】の効果発動！ＬＰを１０００払い、今墓地へ送られた、【堕天使の追放】の効果を得る！デッキから【堕天使アムドゥシアス】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキに戻す！そして【堕天使マスティマ】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地にある【神属の堕天使】の効果を得る！【ナチュル・ビースト】の効果を無効にし、俺はＬＰを２２００回復！その後、【神属の堕天使】はデッキに戻る！」

遊良　ＬＰ：３４００→２４００→１４００→３６００

「これだけ展開しながら、ＬＰがほぼ元通りにまで回復…ドローに頼るだけじゃない、モンスター効果だけで、なんて凄い回転力なんだ。」

形勢逆転、たった一体のモンスターの降臨によって、この盤面の優位性が入れ替わった。

蒼人の言葉があったとはいえ、アレだけ行動を制限された遊良が決して諦める姿をみせなかったからこそ堕天の王は遊良の元へと現れ…そして切り札を引いたとは言え、遊良が行動を起こすその最後まで驕りを見せなかったからこそ、今この状況が転換したのだ。

それは、今まで大量の魔法カードや罠カードを駆使してデッキを回転させ、無理やりに相手の場をこじ開けて攻め立てていた遊良に、一つ違う可能性が見つかったということ。

モンスター効果だけでもこれほどの展開力。魔法に頼って、逸って焦ってデッキを回転させるという戦い方とは違う戦い方が、遊良は出来るということでもあって。

「蒼人先輩…先輩は強くて、頼りになって…そして、とても優しい人だ。こうして俺の魔法と罠を封じてくれたおかげで、俺は残されたモンスター効果だけでもこうして戦うことが出来た。それは、今までドローや罠を多用してきた俺に、違う戦い方を考えさせてくれたってことでもある。」

そうして遊良が発したその言葉が、尊敬の意を持って蒼人まで届けられて。

それは、ここまでの蒼人との戦いを通じて、蒼人が伝えたかったことの一つを遊良は感じ取ったからなのだろうか。

「…うん。ドローに目が行きがちだけど、君のデッキにはまだまだ多くの戦い方が出来る道がある。だから今こうして自分の殻を一つ破った君は、これからもどんどん強くなっていくだろう。…君は、まだまだ発展途上なんだから。」

油断ではない。そして驕りでもない。
確かに蒼人はデュエルを行うとき、相手の行動を制限するカードで自らを守る。
しかし、それはガチガチに固めて相手を封殺するのではない。僅かな可能性を残し、そしてそれを打ち破ってみせた強者と全力で鎬を削り合うという、泉　蒼人という決闘者にしかできない代物。

…別に、蒼人にとって相手を完全に封じるのは簡単だ。

けれども、そんな自分本位で相手を蔑ろにするだけのデュエルが自分と相手には何も生み出さないことを蒼人は知っているからこそ、相手となったデュエリストが自らの殻を破ってどんどん強くなっていくその光景が、蒼人は見たいのだ。
楽しいデュエルを信条とする蒼人の戦い。それは遊良がたった今行ったような、僅かな可能性という『殻』を貫き破って更なる成長をした相手と、全力で高め合いぶつかりあうことで行われる一進一退の戦いなのだから。

「俺は…まだまだ強くなれる！蒼人先輩、ありがとうございました！本当に…色々と…だから…ここで、決めきります！」

今、この時、この瞬間。
この戦いにおいて、デッキがどんな動きをするかなど誰にもわからない。
だからこそ、この瞬間に行動を起こしたデッキの動きと、この瞬間にどう動くかを『考えた』デュエリストの思考が、このデュエルの全て。
蒼人が終始余裕を持って優位に立っていたのもまた事実。蒼人に優位に立たれても、逆転を信じてドローした遊良が己の持てる切り札でこの形勢をひっくり返したのもまた事実。

何故この行動に到ったのかも、全て含めて彼らのデュエル。
それは、この場で戦っている彼らにしかわからない、彼らだけのモノ。

「バトルだ！【堕天使ルシフェル】で、【ナチュル・フライトフライ】を攻撃！」

そうして遊良の宣言が、堕天の王へと届けられ。
全力で戦い、そして己の全力を賭けた切り札で一気に決めきることこそが、色々な大切な事を教えてくれた蒼人へ返す、精一杯のメッセージとなることを遊良は理解したのか。
一斉攻撃のまずは初め、この一閃を合図に、堕天使達が総攻撃をしかけるそのために…
狙うは、堕天使達の攻撃力を下げている羽虫のモンスター。いくら敵を弱体化させる共鳴波を響かせていようとも、元々の攻撃力自体が低く、とても堕天の王の背徳の一閃に耐え切れるはずがないだろう。

「決めろルシフェル！」

そしてルシフェルがその漆黒の翼を広げ、その二振りの剣を掲げてその刀身に背徳の光を集め…

「やっぱり…君は凄いよ、遊良君…」

今にも解き放たれそうな閃光が、蒼人へ確かに向けられていて。
今にも爆発しそうなソレを見て、一体蒼人は何を思うのか。

「君は、とても強い…Ｅｘ適正なんて、全く関係ないほどに…」

逞しく鍛えられた後輩…きっと、自分が去った後のイースト校を、任せても良いと思えるほどに、今の遊良の姿は堂々としていた事だろう。

…もうこれで、この学園に思い残すことは無い。

そんなホッとしたような表情が、蒼人の顔から零れ、迫る背徳の一閃を受け入れたかのように、その手から力を抜いて…

「背徳の一閃、バニッシュ・プライドオオオオオオオオ！」

―！

そして…

果て無き背徳の剣閃が、今にも蒼人を貫かんとして蒼人が微笑んだ…

―その時だった。

「ははっ…」

―顔を綻ばせ、爽やかに笑う。

「でも僕だって負けたくない！速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動！」
「なっ!?」

それは、まさに一瞬だった。

蒼人の場に残っていた、最初から伏せられていた最後の一枚。

自分、相手の『バトルフェイズ』に、手札からモンスターを『召喚』することの出来るこのカードは、かつて【決闘祭】でも遊良が使ったことのある、まさに『ライバル』とのギリギリの勝負にこそその真価を発揮するカードであって。

「僕は場の3体のモンスターをリリース！」
「あ、蒼人先輩がアドバンス召喚!?そ、それも3体で!?」

堕天の王の剣閃を、寸前で交わした羽虫の一体。

…それだけではない。

蒼人を守りし『守護竜』と『守護獣』もまた、羽虫とともに渦を纏って空へと浮かび上がるではないか。

―遊良にとっては見慣れたエフェクト

―しかしこの世界の他のデュエリストからすれば使う選択肢すら浮かばないようなエフェクト

それが今、泉　蒼人という『清流』のシンクロ使いから堂々と宣言されたのだ。

その思いもよらぬ光景、想像すらしていなかった現象、そして勝利を確信していた遊良が驚愕の声を漏らしたことにも蒼人はあくまでも堂々その場に君臨し…

―そして、『何か』が煌びやかに現れ…

「アドバンス召喚！現れろ、レベル８！【Ｔｈｅ　ｔｒｉｐｐｉｎｇ　ＭＥＲＣＵＲＹ】！」

―！

その時…

何かが、宙より現れた。

それは清流よりも青きモノ、青嵐よりも強きモノ。

果て無き奔流をその身に纏い、青天すら洗い流す瀑布の化身。

空にたゆたい、雨を生み出し、宙に逆巻くまさに『水の星』。

それは激しく流れる星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｔｒｉｐｐｉｎｇ　ＭＥＲＣＵＲＹ】レベル８
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２０００

「どうだい遊良君！これが僕の持ってる『とっておき』だ！確かに君にはこのデュエルで多くの事を伝えられた…でも！だからって僕も負

けるつもりは全然無い！強くなった君に、益々強くなる君に！僕は！心の底から君に勝ちたい！」
「なっ!?こ、これは…プラネット!?ど、どうして蒼人先輩が!?」

一体、どうして蒼人が『プラネット』の一枚を持っているのか。
それは今の遊良には知る由もないことであり…また、蒼人からしても『取っておき』であるこのカードまで使うことになるとは思ってもいなかったのか。
荒ぶる星、のしかかる重力、恐ろしいほどの圧倒的な圧力。
それが対峙している者にも、そしてソレを操っている者にも容赦なく襲い掛かってくるのだ。精神力の弱い者にはとても扱えないカード、そして心が弱い者は対峙した瞬間に折れてしまうようなモンスター。
―だからこそ蒼人は躊躇わない。
それは、『プラネット』を使っても遊良が折れないことを確信していたからこそ。

「ふふっ、昔ちょっとね。でも流石は遊良君だ、まさかプラネットまで使うことになるなんてね！…さぁ行くよ、燦然と輝くプラネットの一球、【Ｔｈｅ　ｔｒｉｐｐｉｎｇ　ＭＥＲＣＵＲＹ】のモンスター効果！３体リリースでアドバンス召喚したこのカードが場にいる限り、君のモンスターの攻撃力はその元々の攻撃力分だけ下がる！つまり…」

【堕天使ルシフェル】レベル１１
ＡＴＫ／３０００→０
【堕天使テスカトリポカ】レベル９
ＡＴＫ／２８００→０
【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００→０
【堕天使エデ・アーラエ】レベル６

ＡＴＫ／２２００→０

「だ、堕天使達の攻撃力が０に!?まずい、こ、攻撃は中止だ！」

先ほどの【ナチュル・フライトフライ】の弱体化の比ではない。

堕天使達が持つ『力』の全てが、この果て無き清流によって無理やりに鎮められているかのようにその波紋は静かに広がり…ソレに反して、荒ぶる『水の星』から放たれる圧力は益々その凄まじさを増していくではないか。

―遊良とて、今のこの状況をはっきりと理解できている。

これは、かつて戦った、いや手を合わせてもらった釈迦堂　ランの扱ってきた『火の星』と同じ部類の圧力。

それが導く唯一つの答え。それは蒼人が繰り出してきたこの『水の星』も、ランの持っていたプラネットと同種、同じモノ、まさしく本物の『プラネット』の一体だということを、はっきりと遊良へと伝えていたのだから。

「あ、蒼人先輩も本物のプラネットを…す、凄い！ランさんのと同じ…」

それでも、この人の心を簡単に折ろうとしてくる『星』の重力にも、遊良の心は決して下を向かず。

―なんて…なんて楽しいデュエル。

今、遊良の心には全く終わらせられる気配のないこの決闘に対しても、そして『プラネット』から容赦なく襲いかかるこの恐ろしいほどの迫力に対しても、心躍る感情がとめどなく沸きあがってきているのか。

確かに自分の場には、４体もの堕天使達がいる。

しかし、その総力を持ってしてもまだ蒼人を降すには足りないとい

うのだから、この人の持つ『実力』には果てと言うモノが無いのではないかと錯覚するほどに、今の蒼人から感じる強者のオーラは、遊良へと向かって燦然と放たれていて。
　こんな、どこまでも堂々と立ちふさがり、どこまでも正面から全力でぶつかり合えるこのデュエルが、遊良にとっても楽しくならないわけがない。

「うん、君ならプラネットを前にしても折れないってわかってたよ！さぁ、まだまだデュエルはこれからさ！行くよ、遊良君！」
「は、はい！」

―終わらない、終わりたくない。

そんな感情が遊良と蒼人、そのお互いに芽生えて消えないかのように二人は今、心の底からこのデュエルを楽しんでいるのだ。

お互いを認め、お互いが認め、そしてお互いに全力でぶつかりあってもまだ終わらないこの戦いの『楽しい』声だけが…

どこまでも、この屋上に響き渡っていて…

―…

「装備魔法、【巨大化】をエネアードに装備！そしてバトルだ！【聖刻神龍―エネアード】で、【ギアギガントX】に攻撃！」
「むっ!?速攻魔法、【リミッター解除】発動！【ギアギガントX】の攻撃力を倍にする！」
「無駄だ！それでもエネアードの方が攻撃力が上！行けエネアード！

シャイニング・ノヴァ！」

―！

「ぐっ!?」

「まだだぜ！【聖刻龍王―アトゥムス】でダイレクトアタック!!喰らえ、ドラゴニック・ソル・バースト！」

―！

「ぐぅ…い、今までの虹村よりも…遥かに強い…」

鷹矢　ＬＰ３９００→２５００→１００

大歓声の中、大観衆の中。

―『卒業生』も、在校生も…そして教師陣から保護者に至るまで。

まるでどこかで戦っている『２名』を除いた、このイースト校にいる『全員』がこの戦いを見ているのでは無いかと思われるほどにこの『広場』に集まったギャラリー達の注目はその中心へと注がれていて…

そんな大観衆が集まったこの中で、鷹矢は虹村との激闘にその身を投じていた。

―『さぁ式も終わったぞ！虹村よ！この俺とデュエルだ！』

―『…待ってたぜ天宮寺…おう、これが最後のデュエルだ！お前に負けっぱなしで卒業してたまるかよ！』

先ほど、『卒業生』達へと向けられた歓喜の渦の、その中心に堂々と現れてそう言い放った鷹矢。

そんな鷹矢に注目が集まったのは必然で、またその挑戦を堂々と受けた虹村に対してもこの日一番の歓声が上がったのは言うまでも無

く…その戦いの開催と同時に、彼らの周囲が開けていくその光景はまさに【決闘学園】の名に相応しい行動であっただろう。

―ここは【決闘学園】。『決闘』は、全てにおいて優先される。

そうして始まったこの戦い。

『天才』の名を欲しいままにして入学してきた、エクシーズ王者【黒翼】の孫である天宮寺　鷹矢に、この1年間『一度』も勝ったことが無いというエクシーズクラス元トップの虹村　高貴。

他の学生達が早々にその才能の違いに心を折られ、鷹矢に立ち向かうこと自体が『無謀』とまで言われていたこのイースト校において…これまで、彼は決して折れずに鷹矢と接してきた。

それは見方によっては『悪あがき』、見方によっては『年功序列』、見方によっては『身の程知らず』とまで言われた事もあったという。

…それでも、虹村は鷹矢に『絡んだ』。

それは力があっても『無知』な後輩を放っておけなかった、まさに『先輩の意地』。

そんな虹村を前にして、鷹矢もまたこれまでの1年間ほぼ毎日顔を合わせて『絡まれた』彼にデュエルを通して何か伝えたいことがあったらしいのだが…

しかし、どうやら『今』の虹村を相手にしている鷹矢の様子は珍しくどこか苦しそうな雰囲気を醸し出していて。

「まるで隙が無い…十文字を相手にしている気分だぞ。」

鷹矢にしても、今まではどこか『余裕』すら感じていた虹村　高貴との戦いだというのに…今までの彼とは、戦い方がまるで違う。

…それは、これまで鷹矢と虹村の戦いを見慣れたエクシーズクラスの学生達は信じられなかっただろう。

―いや、エクシーズクラスの学生たちだけではない。

何せ、先の【決闘祭】で堂々の準優勝を果たした天才、天宮寺　鷹矢に対して、虹村は一歩も引かずに互角にぶつかっていたのだから。

「す、すげぇ！虹村先輩、あの天宮寺を押してるぞ！」
「こ、この調子だといける…いけるぞ虹村ぁ！最後に天宮寺に一泡ふかせてやれぇ！」
「いけぇ！虹村くぅぅぅん！」
「虹村せんぱぁぁい！」

後輩、同級生、そして教師に至る全てが虹村へと声援を送って。
そしてソレに答えるかのように、虹村は益々その雰囲気を『重厚』なモノへと変えていくではないか。

それは、鷹矢が今まで経験したことのない虹村のスタイル。
これが、鷹矢が入学してくるまで前までの虹村のスタイル。

ウエスト校の『鋼鉄』、十文字　哲のような絶対防御ではないものの…重い攻撃と硬い防御、これこそが虹村にしか出来ない、打たれても撃たれても崩れぬ、まさに『重厚』なる佇まい。
鷹矢が入学してきてからは、その責任感と焦りでどこか逸っていた虹村ではあるものの…『卒業』という門出と、『プロ入り』を決めたという自信によってかつての力を取り戻したのか。
それは、鷹矢とてこれまでと同じように戦っていては、決して勝てない程に洗練されているモノ。

「全く、随分と強くなってきたではないか虹村よ。」
「まぁな、プロテスト行った時に思い知ったからよ。…俺が十文字の真似事をしたって、上手くはいかない…だったら、俺は俺のやりやすいようにやればいいんだってな！」

「むぅ…もしや吹っ切れたことで超えたのか？…元からかなりの腕ではあったが…」
「はっ、一年ボウズが生意気言ってんじゃねぇ！先輩の意地だ、最後まで負けっぱなしでいられるかよ！」

それは学生達よりも一つ上のレベル、プロの世界では基本的な実力…この『壁』を超えた鷹矢と同種、今までとは違う虹村の雰囲気。
気を張って、無理をして、『立派』を演じることを捨てて自分本来のスタイルへと回帰したが故に吹っ切れたのだろう。まさしく、彼の心が一つ上へと到ったということ。

―それはまさしく、彼もまた『壁』を超えたということであって。

「最後の最後にやってくれるぜ虹村先輩！」
「これならいける！頑張れぇぇぇ！虹村せんぱぁぁぁい！」
「最後に天宮寺に勝ってください！先輩ファイトォォォオ！」

盛り上がる観衆、燃え上がるテンション。
今までの虹村とは一味違う。これより『プロ』となる虹村に向けた更なる期待が、この戦いを見ている誰しもに燃え上がっているのだ。
偉大なる、尊敬に値する先輩へと向けた後輩たちの、文字通り『最後』の勇姿へと向けた賞賛の嵐。
それが決して収まらぬ賛辞の雨となって、今まで彼と接してきた全ての後輩たちから届けられていて。

「…ふん、どいつもこいつも最後最後と…」

しかし、その雰囲気の中でも鷹矢の中に芽生えているとある感情は、この場に居る他の誰とも違うモノとでも言うのだろうか。
この場に溢れる『別れ』の雰囲気を、とても不愉快そうにして立っている鷹矢の表情は相変わらずの鉄仮面ではあったものの…それで

も、誰もが口にしている『最後』という言葉を、鷹矢自身は認めてはおらず。

「何が…何が『最後』だ！今までも、そしてこれからも！『決闘』を続けている限り俺達はどこででも出会う！これが今生の別れでも無い癖に、俺達の戦いに軽々しく『最後』と区切りをつけるな！」

「あ!?天宮寺、お前何言って…」

「虹村、お前はプロに行く！そして！この俺もいずれプロとなる！ならば、俺達はこれからも戦う運命にあるということ！つまり俺達の戦いに『最後』など無い…あるのは、これからも続くであろう果て無き戦いの『道』のみ！」

―響く。

この大歓声の中、鷹矢の声が高らかに。

それは【決闘学園】という『小さい』世界ではなく、人生という『大きな』世界を視野に入れている鷹矢だからこその言葉。

一体、この観客の中にどれだけ居るのだろうか。鷹矢の言った言葉の意味を、己の心に響かせられた者は…鷹矢の言った言葉を笑わず、己の心を震えさせられた『弱くない者』は。

―この『決闘』は、『最後』じゃない。

今のこの門出すら、鷹矢にとってはこれからも続く戦いの『一つ』に過ぎないのだ。

誰がどんな気持ちでこの戦いを見ていようとも関係ない。今この場で、実際に戦っている鷹矢が虹村との『決闘』を『最後』だと思って居ない限り、どこまでも、どこであっても戦い続けられるのだと、鷹矢の迫力はそう虹村に伝えていて…

「…それでもなぁ、俺は今！天宮寺！お前に勝ちたいんだよ！『先輩』としてな！俺は1枚伏せてターンエンド！さぁこい、一年ボウズ！」

虹村　ＬＰ：２４００
手札：４→１
場：【聖刻龍王―アトゥムス】
【聖刻神龍―エネアード】
魔法・罠：伏せ２枚、【巨大化】（【聖刻神龍―エネアード】装備中）

それでも、虹村のこれまでの考え方全てが消えたわけでは断じてない。

プロ一家の末弟という立場をひけらかしてた、愚かだった自分を変えてくれた偉大な先輩達の尽力のおかげで今の自分があるのだ。その思いを受け継いで自分も『先輩』となったのだから、今度は自分が『後輩』達のために『何か』を残さなければいけないと、そう言わんばかりに吼える虹村。

これは、意地。後輩達に残す、そして後輩達に伝える次への『意地』。

…そんな虹村を見て、鷹矢は一体何を思うのか。

誰もが、色々と世話になった虹村へと視線を集めているこの中で、静かにその口を開いた。

「ふん…先輩先輩と、貴様は口を開けばすぐそれだ。一体、先に生まれたからといって何が偉いというのだ！」

「あぁ!?当然だろうが！俺は、お前よりも先にイースト校に来た！そして、お前よりも先にプロになる！だったら、お前よりも【世界】を見ているってことだ！そんなお前よりも世界を知ってるこの俺が！何も知らないお前を放っておけるわけないだろうが！」

「む!?」

「俺は先輩として…イースト校だけじゃねぇ、人生の先輩として、天宮

寺！後輩であるお前の面倒を見る義務があるんだよ！誰が何と言おうとお前は俺の後輩だ！お前が認めなくても、それが俺の生き方だ！俺の信念なんだ！」

この場にいる全ての『在校生』達にとって、どこまでも後輩達の『導』となるべく行動してきた虹村　高貴という決闘者。

誰よりもこの『導』の重要さを理解していた彼だからこそ、後輩よりもこの学園で長く過ごしているという『自負』と『責任』…それを背負って、次の世代の『導』となってやるという意地を、ここまで貫き通してきた。

…そんな彼だったから、鉄仮面で【王者】の孫と言う、誰もが関わることを恐れる鷹矢に対してもこうして同等に接してこられたのか。

その言葉はどこまでも『重厚』で、誰よりも『屈強』で…彼ほどこの学園で慕われている者も居ないだろう。

どこまでも誇り高く放たれる虹村の叫びを、鷹矢は聞いて…

「…全く…」

どこか迷惑そうな…しかし嬉しそうな声を漏らして…

「どこまでも暑苦しい奴だ。」

「あぁ!?」

「…だが、そんな貴様のおかげで…まぁ、アレだ…この一年、退屈せずに済んだ。それだけは、礼を言っておいてやろう。」

「なっ!?天宮寺が…礼!?…お、お前…」

「だが！この戦いも遠慮はせん！俺のターン、ドロー！…よし！まずは速攻魔法、【ツインツイスター】発動！手札を1枚捨て、貴様の伏せカード2枚を破壊する！」

「チィッ、速攻魔法【サイクロン】発動！俺の場の【巨大化】を破壊して、エネアードの攻撃力を元に戻す！」

そうして、まるで自らの言った言葉を掻き消すかのように、無理やりに戦いへと意識を戻した鷹矢。

また、聞き間違えかと思われた鷹矢のソレに虹村は一瞬だけ驚いたような顔をしたものの、それでもデュエルへの意識を切っていない辺りは流石と言え…伏せていた【スキルドレイン】が破壊されても鷹矢の行動にすぐさま対応を見せる。

「虹村よ、有象無象しか居ないこの学園において、貴様は数少ないこの俺の『好敵手』となった！だからこそ、『壁』を超えた今の貴様だったら申し分ない。見せてやろう虹村、貴様にも！この俺の『切り札』を！」

「あ!?…『切り札』…ま、まさか！」

「うむ、この土壇場で…このギリギリの状態でのドローで条件が整ったからこそ、まさにこれこそが俺の『切り札』と呼べるモノとなる！魔法発動、【死者蘇生】！」

「こ、ここで【死者蘇生】を引いただと!?」

「俺は墓地から【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚し、その効果で手札から【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！【レッド・ガジェット】を手札に！さぁ…ゆくぞ！2体のモンスターでオーバーレイ！」

そんな、これまでどこまででも立ちふさがってきた虹村　高貴という決闘者に対し…鷹矢はその身を鼓舞し始めて、これまで以上に気迫を纏って。

虹村も『壁』を超えた以上、生半可な決着は着けられない。こんなにも追い込まれたギリギリの状況に置かれても、まるで2体のレベル4モンスターを並べることなど、どんなことよりも簡単だと言わんばかりに鷹矢の場に並び立った2体の歯車が光となって銀河に吸い込まれていく。

簡単には言うことを聞かない己の『砦』、しかし本物の『決闘』の舞台には嬉々として現れるまさに『切り札』を今、鷹矢はこの場に呼び出そうとしているのだ。
世界に轟くその異名、祖父である王者【黒翼】の名の通り…最も嫌悪する相手に倣い、無意識にその姿をなぞらえるかのように。

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれ！」

天に羽ばたく雄雄しき翼と、神すら切り裂く鋭き牙が歓声の中でも輝いて。
誰もが知る王者の姿、誰もが慄く王者の姿。
世界で最も有名な、語り受け継ぐその口上と共に…

―鷹矢は、叫ぶ。

「エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

「こ、これが【黒翼】…本物の…」
「うむ！【ダーク・リベリオン】の効果発動！オーバーレイ・ユニットを２つ使い、【聖刻神龍―エネアード】の攻撃力を半分にし、【ダーク・リベリオン】の攻撃力に加える！喰らい尽くせ、紫電吸雷！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４

ＡＴＫ／２５００→４０００
【聖刻神龍―エネアード】ランク８
ＡＴＫ／３０００→１５００

神に近づきし刻印も、神を切り裂く牙の前にはなす術もないのか。
王者の翼から放たれる、紫電の嵐によってその力を吸い取られていき…それに呼応して【黒翼】が吼え、その咆哮を歓喜に変えてこの場に君臨するのみ。

「しまっ…」
「さぁゆくぞ！バトルだ！【ダーク・リベリオン】よ、エネアードを断ち切れぇ！」

―猛りし牙突、羽ばたく黒翼

雄雄しき【黒翼】を翻し、歴戦を切り伏せし牙を持ち、【王者】と呼ばれしその翼で天へと羽ばたく竜の姿はまるで如何なる存在も邪魔すること自体を許さない我が道のよう。

―狙うは、神龍。

その麗しき牙が太陽を反射して煌く時、それは神の体すら貫く強靭な意志と化すのだ。
歓喜と共に風を切り、雷電纏し牙を持て…

―ソレは、轟く。

「斬魔黒刃、ニルヴァー・ストライク！」

―！

「ぐっ、ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

虹村　ＬＰ：２４００→０（－１００）

－ピー…

…

そして…

決闘の終了を知らせる無機質な機械音が、この広場に高らかに鳴り響いた。

それは、決着の音。この『門出』の舞台で打ち鳴らされた戦いに、一つの終止符が打たれたのだと誰しもに伝えていて。

自らの殻を破り続け、誰よりも厳しくあった虹村　高貴と言う誇り高き決闘者の奮闘は、きっとコレを見ていた全員の心に刻まれたことだろう。

また、こんな『門出』の舞台であっても、決して『決闘』に手加減も遠慮もせず、誰よりも真っ直ぐに戦い抜いた鷹矢に対しても、心無い言葉を投げかける者はこの場には居らず。

「く…くっそぉ！また負けた！」

「うむ、しかし今までで一番強かったぞ。流石に危なかった。」

「チッ、全然そう思ってなさそうな顔しやがって、この１年ボウズが。」

「フッ、何を言うか。こんなにも分かりやすく表情を崩しているというのに。」

「…いやわかんねーよ。…あーあ、結局勝てなかったじゃねーか。ったく、少しは先輩を敬う気はないのかお前は。」

「む？手を抜いたところで貴様にはすぐにバレるだろう？それに手を抜きでもしたら…」

「まっ、ブチ切れるけどな。」
「…うむ。」

そうして戦いが無事終わり、互いに近づいてその口を開いた鷹矢と虹村。
しかし、口では『そう言う』虹村ではあったものの、たった今戦いが終わったばかりだというのに、彼らの間に確執など無く。
『卒業生』にとっては『門出』の舞台。この戦いに賭けた虹村の思いは本物であったものの、しかし鷹矢の言ったとおりこれが『最後』では無いことが虹村にも心から伝わったのだろう。
まだまだ、生意気盛りの心配が多い後輩。しかし、これからのイースト校を背負うであろう、屈強な精神と確かな実力を持った後輩。

「…ったく…おい天宮寺！」
「む？」
「お前によ、これからのこと…」

だからこそ、これからイースト校を巣立つ故、虹村にも最後までこの問題児を見ていられないことにどこか物悲しさを覚えてしまったとは言え…

「任せたからな。」
「…うむ。」

それでも信じた後輩に、絶対に『やってくれる』と信じてここを去ることも先輩としての仕事なのだと…彼もまた、そう自分に言い聞かせているのだろう。

「別れは言わんぞ虹村よ。いずれまた相見える、今度は…プロの舞台でな。」
「あぁ、その時にはもっと強くなっててやるからよ。今度こそ天宮寺、

お前に土つけてやるから覚悟しとけ。」
「ふっ…しかし、これが『最後』などでは決して無いが…まぁ、アレだ…あー…今日は一応、『卒業式』だからな…」

そんな虹村に対して、珍しく気恥ずかしそうに鷹矢はその口から言葉を詰まらせて。

一体、彼が何を思ったのか。

それは確かな言葉と変わり、良き『好敵手』であったここを巣立つ先人へと、確かに向けられて…

「次も俺が勝つ。」
「いや『卒業おめでとう』じゃねぇのかよ！」

それでも、最後の最後まで『いつも通り』の鷹矢と虹村の楽しげな声が…

―どこまでも、いつまでも

―この広場に、響いていた。

―…

―ピー…

『どこか』で一つの戦いが終わったのとほぼ同時に、この『屋上』に響き渡った無機質な機械音。
それは紛れも無い、たった今この場で繰り広げられていた、永遠に続くと思われたこの『決闘』が『終わり』を迎えたということ。

―果たしてどちらが勝ったのか。

この場にギャラリーが居ないように、このデュエルの勝敗は決して第三者が知ることを許されない。
これは、この戦いの勝敗は…戦っていた遊良と蒼人、彼ら2人だけのモノ。

唯一つ言えるのは、この決着の着き方も彼ららしい、彼らにしか起こせない戦いの軌跡の末のモノだったというコトだけ。

「蒼人先輩…ありがとうございました。」
「うん、こちらこそ。すっごく楽しいデュエルだったよ。」

アレだけ激しい戦いを繰り広げた後だというのに、彼らの気持ちはどこまでも晴れ晴れとしていて。
きっと、この戦いにおいて『勝ち負け』はさほど重要ではない。遊良と蒼人、彼ら2人がこの戦いに対して、どこまでも満足しているように…ここまで至る『内容』が、彼らにとっては大切だったのだから。

「これで…これで安心して卒業できる。今の君には、僕から伝えられ

ることの全てを伝えられたから。」
「…本当にありがとうございました。蒼人先輩…卒業、おめでとうございます。」
「ありがとう…今度は、プロの舞台で勝負だ。君も、いや君だったら、例えどんなに困難でも絶対にプロになるんだろう？」
「…はい、絶対に！」

力強く遊良は答え、決意を持って蒼人に応える。
きっと、この別れは別れではない。
例え一時離れることになろうとも、この空の下で繋がっている限り…そして決闘者であるかぎり彼らは『決闘』というモノで繋がっていて、その道は個人個人で違えども決して違えることなくどこかで繋がっているのだから。

―きっとまた会える。今度は、もっと大きな舞台で。

例えばこの先、プロを目指す遊良に心無い言葉を投げかける輩も出てくることだろう。それは【決闘祭】を優勝したとはいえ、遊良のことをまだ認めてない人間だっているから。
それでも『約束』のこの場所で、『約束』の戦いを果たしたように…今交わした『約束』もまた、彼らに新たな『約束』の舞台を絶対に用意してくれるはず。
「まだまだ君は強くなれる。君は…君なら、どんな逆境も絶対に打ち破ってくれるって、僕はそう信じてるから！」
「はい！」
交わす『約束』、交し合う手と手。
次に相見えることを誓い合い、そうして交わした思いがこれからも

ずっと繋がって行くのだ。

そうして…

『屋上』に吹き抜ける爽やかな風がどこまでも…どこまでも優しく…

彼らを、包んでいた…

…

…舞い散る桜の花びらが、彼らの行く末を華やかに彩る。

卒業とは別れではない、新たなステージへの通過点。新たな道へと進むために、誰もが通る分岐点。

きっとこれから先、これまで以上の困難が彼らを待っていることだろう。

それは卒業生にとっても、在校生にとっても。

渡されたバトン、受け継がれた思い。

上の者が下を育て、下の者が新たな上となって更に下を育てる。そうして連綿と紡がれた確かな教えが、今こうして次世代の上の者達へと渡されたのだ。

これからも生きていく人生の中で、この時代とは決して忘れることのない大きな経験。きっと、これからどんなことがあったとしても、何物にも変えがたい宝物となって彼らの中に輝き続けることだろう。

これから先、どんな困難が待ち受けていようとも…この時代で得た

モノがきっと彼らを支えてくれるはず。

―季節が、変わる。

別れの季節から、出会いの季節へと。

―世代も、変わる。

先人から受け継いだ思いを胸に、彼らが新たな先人となるのだ。

こうして、彼らの物語は続いて行く。

…これからも、ずっと。

―まだまだ、ずっと。

遊戯王Ｗｉｎｇｓ「神に見放された決闘者」

第一章

『完』

…

影もなく、闇もなく、光しかない『どこか』の場所。

まるで意図的に『暗い』部分を作らないかのように、この場所には『光』だけが溢れていて…

他には何もなく、ただの『白い』空間だけが作られているかのよう…

「ヴゥ…ゥ…」

いや、それでも眩しきこの場所に、『たった一つ』だけ『置かれている』不純物があった。

全ての角度から照らされて、影すら作ることを許されない…縛られて、拘束されて、押さえ込まれて転がされている『不純物』。

呻き、悲しみ、苦しみ…そして、ゆっくりと消えるのだけを待っている存在。

―紫魔　憐造

先の決闘市における『異変』の黒幕。

目の前で『蘇った理由』である最愛の娘を、まさか守れもせずに消し飛ばされたことでその行動意識を消失させ…

そして【妖怪】、綿貫　景虎が引き連れてきた【決闘世界】の実務部隊によって、『闇』を封じ込められて捕まった『人外』の存在と成り果てた者。

そんな彼は、【決闘世界】に捕まってから極秘裏にこの『光』だけの空間に放り込まれ…あれからずっと、決して消えぬ『光』によって照

らされ続けていたのだ。
…そうすることが、『闇』その物と成り果てた憐造を、『あるべき姿』に戻す唯一の手段だったから。
一体、綿貫がどうしてそんなことを知っていたのか。それはここで語るべきことではないものの…現にあれからずっと拘束されて、光を浴び続けてきた憐造の体の表面には確かに細かい『闇』が少しずつ粒子となって消えていっている。
この調子だと、後『数年』もこうしていればきっと憐造は粒子となって完全に消え去り、再びこの世界の均衡は保たれることだろう。

…これは、定め。一度死んだ人間は、決して蘇ってはいけないのがこの世界の決まり。
…これは、けじめ。世界その物を滅ぼせるだけの『力』を持った『大人』が、起こしてしまったことへの責任をとっているだけなのだから。

「ヴゥゥ…イ…ラギ…」

また、憐造とて目の前で娘を失った衝撃で、最早その内には復讐心よりも『喪失感』しか湧き上がってきていない様子。
蘇った理由を失ったこの『闇』を、例えば放置しておいたって勝手に消えて逝ったことだろうが…もしも何かの拍子で『真実』を知ってしまったときのことを考えると、こうして『人』の手で葬ってやることが一番なのだろうという綿貫の指示の元、今のこの状況が作られていて。
無論、このことは最重要機密。
この『異変』に関わった『上層部』の、ほんの一部しかこのことは知らされておらず…【決闘世界】最古参である【妖怪】、綿貫　景虎が責任者である以上、この『光』のことは決して明るみには出ないことだろう。

…そんな、決して影も生まれないこの空間

…『闇』すら消し去る『光』の中に…

―突如として、『闇』が出現した。

「フフッ、こんな所に居たとは…本当に探させてくれる。」

そして、この特別に準備された超極秘施設の、最重要機密である警戒態勢の『光』の中であるにも関わらず…

まるで散歩でもしにきたかのような女性の声が聞こえ始め、『闇』を消し去るこの『光』よりも更に深く暗く覆いつくさんとして出現したこの『更なる闇』。

そんな、突如として出現した『闇』の中から、これもまた突如として一人の女性がその姿を見せ始めて…

―釈迦堂　ラン

かつて世界に君臨していた【王者】達を、全て倒して世界を一度混乱させたその元凶。自他共に認める絶対強者、【王者】を越えたまさに【化物】。

そんな彼女が一体なぜ、この場にこうして『出現』したというのだろうか。

その心意も素性も実体も、全てにおいて謎という釈迦堂　ランとい

うこの女性…そんな彼女は、とても人間技ではない現象をさも当たり前のようにして操ると、他の誰にも向けないような冷徹な微笑を艶やかな唇に浮かべてゆっくりと歩き初めた。

「全く、鷹峰さんも綿貫さんも人が悪い。わざわざ私から『コレ』を引き離そうとして、こんなにも『無駄』なことをするのだから。」

ゆっくりとその歩を進めて、呻くだけの憐造へと近づいていって。

「しかし本当に探したぞ。この１０年、世界中を探し回って来たというのに、これでは見つかるはずもなかったじゃないか。」

他に聞いている者など居ないというのに、まるで我慢が押さえきれない子どもような声を漏らしながら憐造の前へと立って。

「まさか…この世界の『外』にあったなんてね。これでは流石の私も見つけられるはずがなかったよ。」

そうして、一体『何』を言っているのか誰にも分からない言葉の数々を、ランは口にして手を伸ばす。

―憐造へと向けて…

―そして…

「では…貰うとするよ！ソレは私のモノだ！」

―！

「ヴッ!?ヴゥゥゥゥゥゥゥゥ!?ヴヴヴヴゥ！」

伸ばされたランのしなやかな『腕』が、憐造へと『突き刺さった』その時。

悲しみに呻くだけだった憐造から、『苦痛』による叫びにもならぬ『音』が叫ばれはじめて。

―血は出ない。肉も無い。ただの『闇』の塊である憐造へと差し込まれている、ランの『腕』。

それは苦しみ悶える憐造の『中』をまさぐり、まるでその中で『何か』を探しているかのようではないか。

「ゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ!?ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッ！ヴヴヴッ!?」

「煩い、耳元でキャンキャン吼えるな人形が。…どうせ貴様には扱いきれぬ『力』なのだ。その証拠に、『この程度の光』でも消え始めていたじゃないか。」

「ヴッ！ヴヴッ…ヴ…」

「あぁ、ええと…そう言えば何て名前だったかな貴様は。前の【紫魔】だったとは言え、どうでもいい男だったからいかんせん名前が思いだせんよ…『コレ』をこの世界に持ってきてくれたのだから、一言礼くらい言っておこうと思ったのだが…まぁいいか、所詮は人形だ。」

一応、憐造に言葉を投げかけてはいるものの、一向にランのそのまさぐる腕は止まる気配を見せず。

想像を絶する苦痛なのか、呻きを漏らしている憐造から次第にその声すら失われていき…それに伴って、彼を形成している『闇』が恐るべき速度で散り散りになって消えていく。

そうして…

「あっ、あったあった…」

―！

目当ての『モノ』を見つけたのか、憐造の中に差し込まれていたランの腕が、勢い良く憐造から引き抜かれたと同時に…

「ヴゥゥ…」

―憐造の姿は、この世界から完全に消え去っていった

「やった！やっと手に入れた！」

しかし、そんな憐造になど興味も無いかのように、まるで子どものような声ではしゃぎ喜び始める釈迦堂　ラン。
これまでの彼女を知っている者には、見せた所で到底信じることなど出来ない程に、今の彼女の姿は年不相応に幼く見え…
その豊満で妖艶な体を目一杯に使って飛び跳ねて、ようやく手に入れられた喜びを体全体を使って表現しているかのよう。

「これでやっと『2枚目』だ！長かった…10年、10年もの間ずっと探していたよ！もうすぐ、もうすぐ私の願いも成就させられる！あと少し！あと少しだ！やっと手に入れられた！」

歓喜に震える彼女の笑顔は、屈託の無い子どものよう。

無邪気に振舞う彼女の姿は、邪気しか感じぬ『闇』の中に消えていって。

この世界は、何がどうなっているのか。
この世界で、一体何が起こっているのか。

全てが『闇』に包まれたこの場所で、それらを知る者など居るはずも無く。

…唯一つ

―ランの声だけがこの場に響いて。

「【邪神アバター】のカードだ！」

―物語は、終わらない。

―……

第二章へ……

続く。

第２章
ｅｐ５２「第２章プロローグ－報いの果てに」

―荒廃

それを、ここまで的確に表すことが出来るのかと言えるほどに…
かつて『街』であったであろうこの場所には、崩れた瓦礫と壊れた建物の残骸、そして悲しげに降りしきる濁った雨しかそこにはなく。
人の気配が一つも感じられないほどに、くすんだ空気だけが漂っているかつて街だった今の『ここ』は、もう既に人の生きられない世界なのだと…誰の目にも、そうはっきりと示しているようにしか思えないだろう。
…まぁ、今の『ここ』には、ソレを視認出来る命を持った者すら見当たらないのだが。

それは、まるで壮絶な戦いの後のような…または一方的な蹂躙のような…

そんな、この『灰色』だらけのこの場所には、空に浮かぶ雲すら白さを保てないかのよう。

一体『ここ』で、何が起こったのか。

それを聞こうにも、この場所には人どころか獣も虫も草も…最早、生物と呼べそうなモノが見当たらず。
今にも全てが消え去ってしまいそうな不穏な空気と、崩壊した『灰色』の世界しか『ここ』にはありはしないのだ。

―そんな『崩壊』したこの世界の真ん中に…

静かに、『人』の声が響いた。

「終わったよ…やっと…」

どこか悲しげな…それでいてどこか儚げに呟かれたこの声。
しかし、その感情の全てをその声から感じ取ることは出来ない。何故なら、辛うじて『男』だと分かるような、そんな『ノイズの入った声』だけがこの荒廃した『ここ』に放たれていたのだから。

…黒いフードを深く被り、決して顔を見せないようにして。

その声を漏らしたところで、返ってくるモノなど無いというのに…それでもフードの人物は、まるで独り言のようにして声を出すだけ。

「ようやく終わった。…でもまだだ…まだ消さなくちゃいけないモノが残ってる…まだ、終わらない…まだ、終われない…」

手を広げ、天を仰ぎ、悲しげに落ちてくる濁った雨すら心地よさそうにして、静かにこの滅びた『街』を哀れんで。

いや、哀れんでいるのは『街』では無いのか。

足元に転がっている瓦礫の海や、周囲で崩壊している建物の残骸や…

これだけ大きい街だというのに、生命の気配が全く感じられないこの場所にただ一人立ってはいても、このフードの奥から発せられる声には『街』への感情など篭ってはおらず。

もっと、別のモノへと向けたような…しかし、他の誰にも決して分

かるはずも無いその感情は、他人など居ないこの世界でただ漏れ流しているだけ。

『…未練が、ありますか？』
「…いや、未練なんて無い。こんな……こんな『……』がいない世界なんて。」
『…そうですか。』

そして、フードの男のノイズの声に応えるようにして、突如として『誰も居ない』空間から聞こえてきた、この実体の無い空虚な『もう一つの声』がフードの男へと届けられたものの…
フードの人物は、ソレとの会話がまるで当然の事のようにして、ただ自らの空虚な感情を虚無の空間へと向けて吐露するだけ。
聞いている者など他には居らず、聞かせたい者など他には居らず。
人が居らず、命もあらず、生きとし生ける者の気配が全て消え去ってしまっているこの空間で…
フードの人物はとても悲しそうに、しかしとても憤慨したように、ただ空虚な『声』にノイズの言葉を返しているのみ。

「…疲れた。もう、疲れたよ。でも、終わることなんて出来ないんだ。終わらせることなんて出来ない。だって…それが…オレの…」
『努々忘れることなかれ…自分が一体何なのか…』
「…またそれか。いい加減、それはもう聞き飽きたよ。」
『…では、参られますか？『……』へ。』
「あぁ、すぐにでも始めよう。ソイツの事を考えると虫唾が走るんだ…憎い…不愉快…とても、我慢なんて出来ない。」
『…わかりました。』

—そして、消える。

―消え、始める。

『声』がそう言ったその瞬間、そしてフードの人物がそう言ったその瞬間に、この場から跡形も無く、『何もかも』が塵となって無くなっていくではないか。

その、この場に立った男だけを残して、見えるもの全てが細かな粒子となって消えていくその光景は…

まるで男の声に反応して、この世のモノというモノが存在していることを『否定』されているかのようにして、塵よりも微細な粒子となってその形を崩していくのみ。

―それは文字通りの、『消滅』

そして、『全て』が消え去った後…

『何もない空間』に、立っているのか浮いているのか…

とにかく、全てのモノが消滅したただの『虚無』に一人だけ居たフードの男は…

無感情に…しかし、怒りと悲しみ、絶望と怨嗟が溢れ出ているかのような声で、再び静かに口を開くだけ。

「アイツを…消し去る…全てを…消し去る…絶対に…許さない…」

―そうして…

その男もまた、ゆっくりとその姿を消し去っていった…

―…

何が起こり始めているのかを知る者は…

―未だ、誰も居らず

―…

ｅｐ５３「新たな季節、異変の序章」

天城　遊良は落ち零れだ。
少なくともこの決闘市において、去年まではそう『言われていた』。
この世界の住人ならば、誰だって当たり前のように持っている『Ｅｘ適正』を、世界でただ一人だけ『持っていない』デュエリスト。
この世界でだた一人だけ。皆が出来て当たり前のこと、呼吸をすることと同義のことが、どう足掻いても出来ない、そんな人間の底辺。
そんな彼のことを、世界中の人間は口を揃えてこう言っていたのだ…

―『出来損ない』と。

…『融合召喚』も『シンクロ召喚』も、そして『エクシーズ召喚』も出来ないという、デュエリストの成り損ない。
いくらデュエリストの真似事をしていても、所詮はただの出来損ない。

そんな奴が勝てたとしても、ただのまぐれかイカサマか八百長…
勝手にそう決めつけて、まるで天城　遊良という人間はそう言われ続けることが義務付けられているのだと、そう言わんばかりにこの天城　遊良という少年はずっと世界中から蔑まれてきたのだ。

―しかし、昨年度に彼が起こした一つの『偉業』

ソレはとてもじゃないが、イカサマや八百長が入り込む隙など無い、純然たる彼の力をこの決闘市の全てに見せ付けたほどの戦い。
壮絶なる戦いの果てで、決闘市の全てに己の存在を見せ付けたほどに…そこで繰り広げられた彼の戦いは、誰もが想像を絶するモノだった。

その戦いを見て、それでもまだ彼を蔑むような者がこの決闘市に居たとしたら…そんな人間は、最早デュエリストでは無いとまで言わせしめる程の戦いが、そこでは繰り広げられていたのだ。
それはこの広大な世界の中でも、デュエリストのレベルがトップクラスを誇るここ決闘市で毎年繰り広げられている、『決闘学園』の学生達における最高峰の舞台での出来事。

群雄割拠。２０万人を超える決闘学園高等部の学生達の、たった『１２人』しか出場することが許されないその『祭典』の、ただ一人の頂点を決めるその戦いで…
孤軍奮闘。周りの全てが敵であっても、ソレに決して押し潰されることなく戦い抜いた、その姿を、この広い決闘市の全てに見せつけたその戦いで…

―そう、その【決闘祭】に、１年生ながらも優勝を果たしたのだ。

紆余曲折あったものの、それぞれの決闘学園で選りすぐりの学生達の内、たったの１２人しか出場できない【決闘祭】で、昨年度の優勝者や準優勝者、第４位だった学生達がさらにその強さを増して出場していたというのに…
それでも、彼は戦った。己の持てる力全てで、有無を言わせない戦いをして。

見せ付けた、己の存在をこの街に。思い知らせた、自らの力を住人達に。

誰もがその『偉業』を成し遂げることを、並大抵の実力では決して叶うはずが無いということを知っているからこそ…誰もが『あの』天城　遊良がソレを成し遂げたその瞬間を、現実のモノとは信じられなかった。
しかし、それでも決闘市の住人の全てが『その瞬間』を、自らの目

であれほどはっきりと見てしまっては…誰であろうとソレを信じる他なかったのだ。
そんな天城　遊良の力を思い知らされた決闘市の人間達は、今まで自分たちが抱いていた『天城　遊良という弱者』に対して、一体何を思ったのだろうか。

未だに天城　遊良という少年の力から目を背け、彼を認められない弱者も居る中で…確かに天城　遊良を認め始めた者も、この決闘市に多々現れ始めたのもまた事実。

今まで培ってきた感覚はすぐには消えないとは言え、それでも決闘市に流れ始めたその空気は、紛れも無く天城　遊良という存在を卑下できないモノとなっていたのは先ず間違いなく。

そんな、昨年までとは違う、どこか新しく『変化』した風が…

―この街に、吹き始めていた。

―…

別れの季節を経て、新たな出会いの季節となったこの暖かな朝日の照らす道を…遊良は、どこか感慨深げに静かに歩いていた。

新学期が始まってから、既に数週間。

年明けに起こった『異変』の傷跡も随分と癒え、決闘市の人々もほぼ以前の生活を取り戻しているその様子は、誰もが新たな年度の始ま

りに心機一転で新生活を迎えて賑わっているかのよう。
決闘学園イースト校へと続く通学路には、散り始めた桜の花びらと騒がしい新入生達が所々に見られるものの…
その光景をどこか懐かしんでいる遊良の表情は、彼も自分が一つ上の学年に上がったのだということを改めて実感しているのだろうか。

「…一年生見てると、年取ったって気がするな。」
「一年しか違わないじゃん。ねぇ遊良、そのセリフ、何か年寄り臭いよ？」
「良いだろ別に。去年は【決闘祭】のこととか退学のこととかで慌しかったし、それに『あんなこと』があったけど無事に2年生になれたんだなーって思ってさ。」
「…まぁそうだけど。」

そんな感慨を見せた遊良に対し、隣で一緒に登校しながらも、的確に遊良へとツッコミを入れたルキ。

…確かに遊良の言った通り、昨年度の彼の身に起こったことは、とても高等部に入りたての一年生が受けるにはあまりに酷いことが多々降りかかっていたことだろう。

誰もが出場を夢見る【決闘祭】に、出場どころか優勝できなければ即座に『退学』させられるという理事長からの脅し。
ソレに加え、師である【黒翼】の引退までをも背負わされて…周囲の学生達が全員『敵』というその重圧。
また、【決闘祭】が終わった直後の年明けに起こった、決闘市全土を巻き込んだ謎の『異変』。

その渦中に巻き込まれた遊良は、それでも必死になってその全てと戦ってきたのだ。
自らの力でその『退学』を撤回させたことは紛れも無い遊良の自信

になっていることに違いなく、それと同時に『異変』の最深部まで踏み込んで知り得た『真実』は、遊良を確かに成長させていて…
それが新しく出来た後輩達の姿と、2年生への『進級』という形となって、ようやく彼に実感を与えている様子。

「あ、天城が来たぜ。」
「本当だ…アイツ、また高天ヶ原さんと登校してるよ…」

そして、ルキと並んで学園への道を歩いていた遊良に、周囲からそんな声が飛び込んできた。
いつものような、いつもの言葉。取るに足らない、それでいて構うことのない周囲の大きな陰口。

しかし、たった今遊良に届いた会話の声質は、『以前』までのモノとはどこか異なっている様子であって…

去年まではこうしてルキと歩いている所を見られれば、遊良の方がルキに付きまとっているストーカーなのだと決め付けられて横暴なことを言われ放題ではあったものの、そんな去年のモノとは違う雰囲気を確かに孕んでいたようにも聞こえるだろう。

「…いいよなぁ、天城の奴。高天ヶ原さんと幼馴染だってんだから。」
「高天ヶ原さんに告りたかったら、天城と天宮寺を倒さないといけないって噂だぜ…？」
「…無理…あいつら、【決闘祭】の1位と2位じゃんか。」
「高天ヶ原さんに言い寄っただけで天城と天宮寺が黙ってないって聞いたんだけど…怖すぎだろあいつら…」

そう、今の遊良に向けられた会話の言葉は、以前までの『嘲笑』などでは断じてなく。
確かな『羨望』を含んだ、嫉妬のようなモノとして呟かれていて。
彼らとて今までは、『高天ヶ原　ルキ』という自分達の高嶺の花に纏わり付いていた『天城　遊良』という汚い蝿を、颯爽と払うかのごとく意気揚々と遊良へと向かっていたというのに…
遊良とルキの、『本当の関係性』を知った今では、そして遊良の『実力』をその身を持って思い知っている今では、彼らも下手に遊良に喧嘩を売ることが出来ないのだ。
ルキの目の前で遊良を蔑めば、彼女からの心象は最悪。
遊良と鷹矢に真正面から勝負を挑んだところで、その実力が本物だということは【決闘祭】で証明されているのだから、今の自分たちの実力では勝てないだろうということを彼らとて理解しているのか。
そんな、どこか去年とは違う空気感と聞こえてくる会話を聞いて、遊良はルキへと向かって口を開いて…

「…なぁルキ、お前そんな事言ってるのか？俺初耳なんだけど…」
「…私も知らないよ、そんなこと。」
「だよなぁ…んなこと誰が言い出したんだか。」
「あ、でもさ、これはこれで楽だから別にいいかもね。」
「…え？」
「こうして遊良と一緒に歩いてても、もう何も言われなくなったじゃん。今まで酷かったもんねー。遊良だってもっと早くこうすればよかったのに。」
「…簡単に言うなよ。」

こんな勝手な噂が飛び交っているこの状況とて、ソレはソレで都合が良いかの如くそう言ったルキに対し…苦笑いしながら、ルキに言葉を返した遊良。

…そう、『結果的』に言えば、遊良に対する周囲の見方は随分と変

わった。

【決闘祭】に優勝したことで自分の実力や存在を認めてくれる人間が増え、これまで向けられていた嘲笑や侮蔑の視線が少なくなった。もちろん、未だに認めようとしない人間達も居るものの、それでも以前よりもその数が随分と少なくなったのは確かなこと。

全ては、彼が苦しみながらも自ら勝ち取ったモノ。

…しかし、これまで常に蔑まれてきて、いくら訴えても変わる素振りすら見せなかった周囲に、どこか諦めすら感じていた遊良がここまでの決意に至るのも簡単ではなかったのだ。

それは、今まで己にあった『弱さ』を捨て、自らの存在を否定させないために戦う決意をしたからこその遊良の心境の変化。

これまでは『Ｅｘ適正』の無い自分の所為で、鷹矢とルキにまで迷惑がいくことを恐れていた遊良だったのだが…

―昨年、遊良の身に起きた『とある事件』。

鷹矢とルキを目の前で人質に取られ、いずれＥｘデッキが使えるようになると希望を抱いていた遊良が、【堕天使】の力を得ることと引き換えに『Ｅｘ適正』を自ら『捨て去った』あの運命の分かれ道で、もう二度と後戻り出来なくなったからこそ選んだ道。

何も、隠す必要など無い。もう希望を抱くことすら許されないのだったら、『今』の自分を絶対に認めさせてやるという、遊良の決意の態度の現れ。

強くなって、強さを見せて、強さを思い知らせて…

鷹矢とルキに、『迷惑』をかけないようにではなく、自らの力で『守る』という…

―その為に。

「…でもいいのか？」
「ん、何が？」
「いや、俺と鷹矢に勝った奴じゃないとルキに言い寄れないってことはさ、ルキに彼氏が出来るのは一体いつになるのかなーって思って。」
「……は？」
「悪いけど、俺全然負けるつもりないからな。」
「……はぁ…」

そんな遊良の言葉に対し、大きく溜息をついたルキ。
遊良とて、ルキのことを大事な幼馴染と思っているからこそ、生半可な男にルキを渡すつもりが無いという『意』を込めて発言したつもりだったというのに…

「…」
「な、なんだよ…」

突き刺すような、無言の責め。
遊良の予想に反し、ルキの視線が明らかに呆れたモノを見る目となり自分に向けられたことを遊良は理解したのか。
ルキのその『溜息の理由』とて、遊良からすれば全く心当たりも実に覚えも浮かばないようなモノではあったものの…
ルキの視線はまるで、自分が『悪者』なのだと無言で言われているような、そんな感覚に陥りそうな程に強く放たれている無言の圧力と後ずさりしそうな程に痛い冷ややかな目力となって、遊良へと向けられていて…

「ふーんだ、遊良のバーカ、鷹矢レベルの大ボケ大臣！」
「…おい、それはいくらなんでも酷くないか？」

「知らないよ、もう。遊良のバーカ、バーカ、バーカ！」
「意味わかんねー…」

「…うぅ…高天ヶ原さん、あんなに天城と仲良く…」
「天城の癖に…『Ｅｘ適正』無い癖に高天ヶ原さんと…」
「…でも今それ関係なくね…」
「う…」

そんな二人のやり取りも、周囲からみるとただの痴話喧嘩かじゃれあいにしか見えない様子。
…そう、『Ｅｘ適正が無い』ということしか、彼らには遊良を責める口実が見つからないのだ。
ずっと彼らはそうやって、意味も無く、意味も考えず、意味も理解できずに『天城　遊良』という少年を見ようともせず、ただただ無意味に見下してきただけ。

―だからこそ、彼らは『今』の遊良を何と言って貶していいのかわからない。

今までの『常識』が通用しなくなった瞬間、自分達の置かれている状況を今改めて理解させられたかのように、自分たちではどうにも出来ない無力の脱力で、彼らはただ恨めしそうに遊良を見ていることしか出来ないらしく…

―私怨の視線と、嫉妬の発言

ただただ恨めしく、二人のじゃれあいを見ているのみ。
何せ、言い合っている当人達の思いはどうあれ、周囲の人間達からすれば遊良とルキのソレは…決して手の出しようの無い、到底入り込めない二人だけの世界のような雰囲気を纏っていたのだから。

そんな、高嶺の花の前にして、手の届かない『壁』が立ちふさがっているこの状況。何も出来ない、これまでとは『異なる』状況にただ流されるようにして…

周囲の学生達が、二人のソレを怨嗟の目で見つめて呟いていた…

―その時だった。

「おい天城！お前みたいな落ち零れが何調子に乗ってんだ！」

「…ん？」

唐突に響いた、明らかに敵意の篭った幼い声

しかしどこか聞きなれたような、遊良にとっては『言われ慣れた』であろう、横暴な言葉の羅列。

最近ではあまり言われなくなったために、久々に聞いたソレに対してどこか懐かしいような気持ちになってしまった自分を遊良はどうかとは思いながらも…

その場で足を止めて立ち止まり、声がした背後へと振り返って。

…そこには

「なんだ、一年生か。」

遊良の視線のその先には、新たにこの決闘学園イースト校に入学してきたばかりの新入生の姿があった。

『着ている』というよりも、どこか『着られている』と言った方が正しいような真新しい制服に身を包み…汚れの無いカバンを背負い、目つきを鋭く遊良を睨んで。

…しかし、いくら目つきを鋭くさせて凄んでも去年まで中等部の学

生だった彼の姿は、どこか遊良の目には幼さを残した子どもにようにも見えてしまっているのか。

—自分も、昨年の先輩達にはこんな風に見えていたのかもしれない。

目の前で堂々と貶されて喧嘩を売られたというのに、遊良の心はそんなことをふと思ってしまっていたのだから。

「俺に何か用か？」
「な、何か用か…じゃない！いっつも高天ヶ原先輩に付きまといやがって！見ててウザいんだよ！」
「…どっかで聞いた台詞だけど。でも別に、俺とルキが一緒に居ようとお前には何も関係ないだろ。」
「あ…か、関係あるんだよ！出来損ないの癖して、いいから高天ヶ原先輩に付きまとうのはやめろ！」
「…ふーん…で、それで？」
「え？そ、それでって…あ、み、皆わかってるんだぞ!?お前みたいなクズに付きまとわれて、高天ヶ原先輩だって迷惑してるって！」
「いや、私別に迷惑してないけど…」

所々言葉を詰まらせて、どこか聞く耳を『持たないように』努力している様子の新入生。
入学したての一年生だというにも関わらず、仮にも先輩である遊良へと向かって強気な言葉を悪びれた様子もなく必死に投げかけているというのに…

全く怯んだ様子を見せない遊良を前に、新入生の勢いがどんどん小さくなっていく。

…まぁ、この新入生の態度を見ていれば、遊良にだって彼が一体どんなイメージを抱いて自分に喧嘩を売ってきたのかは容易に想像できるのだろう。

―きっと、今まで彼が抱いていた天城　遊良のイメージは、『蔑まれて当然の雑魚』というモノだったのではないだろうか。

何が【決闘祭】の優勝者。『あの天城　遊良』の癖に、そんな事が出来るわけがない…と、そう思って。

しかし新入生もいざ喧嘩を売ってみれば、目の前に立つ天城　遊良の実物は自分の抱いていたイメージとは似ても似つかぬ、全くの『別物』であったと理解したのか。

驚いた様子を隠せておらず、まるで喧嘩を売る相手を間違えたかのような振る舞いになっていくではないか。

（…なんか、喧嘩売られるのも懐かしいな。）

…とは言え、遊良の方にしても自分を受け入れ始めた今の決闘市の雰囲気よりも、こういった敵意を向けられている方が性に合っていると感じている辺りはまだまだ自分へと向けられる『変化』には慣れていない様子。

―出来損ない、落ち零れ、クズ…

それは遊良にとって、長年言われ続けてきて聞き慣れた…そして、もう聞き飽きた台詞。

それこそ『Ｅｘ適正』が無いと知られてから１０年余りの永きに渡り、遊良はずっとそんな敵意に晒されてきたのだ。今目の前に立つこの新入生が、必死になってその『テンプレート』のような暴言を吐いてきた所で、遊良にダメージなど負わせることなど出来るはずがな

く。
…しかし、いくら言われ慣れたとはいえ、ソレを容認して黙っててることをやめたからこそ、遊良は全く引く様子も無くただそこに佇むのみ。
そうして意気込む新入生へと向かって、遊良は静かに、しかし意気揚々とデュエルディスクを取り出しながら口を開いて…
「…まぁいいや、俺とルキの事はお前には全く関係ないけど…俺に、言う事を聞かせたいんだったらさ、わかってんだろ？」
「…へ？」
「デュエルで来いよ一年生。ここは決闘学園、自分の主張を押し通したいなら、デュエルで決着を着けるのがルールだ。」
「なっ!?」

予想に反し、想定と違う。
目の前に立った『出来損ない』の天城　遊良が、目の前でどんどん大きくなっていく。
まさか想像していた『Ｅｘ適正の無い雑魚』と、ここまで『天城遊良』の実物が放つ雰囲気が異なっていることを、彼も今になってようやく理解出来たのか。
…まぁ、この決闘市に住む『平均的な実力』を持ったデュエリストならば、【決闘祭】での激闘を見ていれば遊良の力をとっくに理解出来ているはずなのだが…
それでも、この新入生が遊良へのイメージを変えられていないということは、『最早』この新入生に関しては語るにも及ばないことに違いないだろう。
しかし、わざわざ正面切って喧嘩を売った天城　遊良に、逆に真正面からデュエルを挑まれて逃げるという『恥さらし』を、この新入生とてこんな公衆の面前で出来るわけがないことだけは確か。

「あ、何々!?誰かデュエルするの？」
「うん、それがさー…あの天城君がデュエルするんだってー！」
「うっそー！見たい見たい！【決闘祭】の決勝凄かったもん！」
「…おいおい、あの一年は馬鹿か？自分から天城に喧嘩売るなんて冗談だろ？」
「あぁ…あの一年は天城の『アレ』を知らないんだろうぜ。…入学早々に心折られなきゃいいけど。」
「無理だな。俺達だって今だにアイツの『アレ』引きずってるってのに。」

そして『デュエル』と言う言葉に連なって、次第に通学途中だった学生達がわらわらと遊良と新入生を取り囲むようにして輪を作り始めて。
口々に呟く台詞は多種多様なれど、その全ての台詞は今から始まるデュエルに対する期待と哀れみを含んだモノ。

―そう、ここは決闘市…デュエルは、何においても優先される。

「な…なんだよ皆して天城天城って…くそっ、なんだってんだよ！」

また、いよいよ逃げ場がなくなった新入生も、どうにか腹をくくったのか。
周囲を囲む学生達が、哀れみの視線を自分へと向けていることにも気付かずに…先にデュエルディスクを展開していた遊良に続いて、ゆっくりではあるものの新入生も自分のデュエルディスクを取り出して展開し始めて。

「や、やってやるよ！何が【決闘祭】の優勝者だ！あんなの、ただの八百長かまぐれだってことを俺が証明してやる！お、お前なんか…お前なんか！『東一中のグレートデビル』って言われた俺に勝てるわけな

いんだ！」
「…デビッ!?…へ、へぇー…か、かっこいいじゃん…」
「…だっさ…」
「おいルキ…まぁいいや、とりあえず下がっててくれ。すぐに終わる。」
「はいはい。…はぁ、折角遊良と一緒だったのにまた邪魔されたよ、もう。」

そうして、不貞腐れながら溜息をついて後ろに下がっていくルキを横目に、改めて新入生へと向かい合う遊良。

「でもまぁ、わざわざ名乗ったってことは、それなりに『やる』ってことなんだろ？…楽しみだ。」
「うっ…」

少々大人気ないとは感じながらも、昨年暴れすぎた所為かこうして外で野試合をすることも減った今では、面と向かって挑んできてくれることが遊良にとっても嬉しいことなのか。
春の暖かな風を背に感じながら、二人がデュエルディスクを構えたところで…

―デュエル！

それは、始まる。

先攻は、遊良。

「俺のターン、【トレード・イン】を発動！【堕天使ゼラート】を捨て

て２枚ドロー！続いて【堕天使の追放】を発動！デッキから【堕天使イシュタム】を手札に加える！今加えた【堕天使イシュタム】の効果を発動！手札の【背徳の堕天使】と共に捨てて２枚ドロー！【闇の誘惑】を発動し、２枚ドローして【堕天使マスティマ】を除外！２枚目の【トレード・イン】を発動！【堕天使スペルビア】を捨てて更に２枚ドロー！」

開始早々、遊良はいつものように自分のデッキをフル回転させていく。

止まることのない暴風雨、止められない嵐の如く。

恐るべきスピードで手札が入れ替わっていくその光景は、瞬く間に減っていくデッキと急速に増えていく墓地の圧力と相まって、対峙している者に恐るべきプレッシャーとなって襲い掛かっているのは先ず間違いないことだろう。

「お、おい！どんだけ引くんだよ！引きすぎだろ！」

「まだだ！俺は【死者蘇生】を発動！墓地から【堕天使スペルビア】を特殊召喚し、その効果で【堕天使イシュタム】も特殊召喚！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

「【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！【神属の堕天使】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキへ戻す！更に【アドバンス・ドロー】を発動！【堕天使スペルビア】を墓地へ送って２枚ドロー！」

「あ…な、何で先攻なのに手札が増えてるんだよ…」

また、入れ替えるだけでは飽き足らず。
先攻の初期手札は『5枚』だというのに、あれだけ連続して動いてデッキを回転させたというのに、遊良の手札がいつの間にか『6枚』へと増えていて。
好き放題に動いたにも関わらず、手札が減るどころか逆に増えているというのは一体相手からすればどれだけ恐ろしいことなのだろうか。

―誰かが言った…手札とは可能性だ、と。

『とあるイレギュラー』を除いて、手札が多ければ多いだけ自分の取れる選択肢が増えていくのはデュエリストにとっては当たり前のことであり…
ソレに加えて、遊良の場にはただならぬ圧力と魅力を混ぜ合わせた上位の堕天使が君臨しているのだから、遊良から感じられるあまりに落ち着いたその余裕は、新入生からすれば恐怖以外の何物でもないことに違いなく…

「よし、俺は【堕天使ユコバック】を通常召喚!その効果で、デッキから【魅惑の堕天使】を墓地へ送る!カードを3枚伏せて、ターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：5→2
場：【堕天使イシュタム】
【堕天使ユコバック】
伏せ：3枚

「伏せカードが3枚…お、俺のターン、ドロー…」

そうしてあまりにも激しい遊良のターンの後に、ゆっくりとカード

を引いた新入生の手は遅く。
…まぁ、目の前であれだけ自在にデッキをフル回転させられたのだ。
好き放題に暴れ回し、これだけ磐石に固められた遊良の場を前にして、今改めて【決闘祭】の優勝者と戦っている事実を目の当たりにしている新入生の手がここで止まってしまいそうだとしても、それは仕方のないことだろう。

「くそっ、この俺が雑魚の天城なんかにビビるはずないだろ！【マスマティシャン】を召喚！」

【マスマティシャン】レベル３
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／　５００

それでも強い言葉をあえて発して自分を鼓舞する辺りは、この新入生も勝負を捨てているわけでは無い様子。
とは言え新入生の手は震え、おどろおどろにモンスターを召喚し精一杯になって自分の取れる手を模索し、必死な自分に気付かずに遊良へとただ向かっているだけ。

「【マスマティシャン】の効果発動！召喚成功時、俺はデッキから…」
「罠発動、【神属の堕天使】！【堕天使ユコバック】を墓地へ送り、【マスマティシャン】の効果を無効に！そしてＬＰを１５００回復する！」

遊良　ＬＰ：３０００→４５００

「くそっ！で、でもまだ動ける！魔法カード、【増援】発動！デッキから【マジック・ストライカー】を手札に加える！墓地の【増援】を除外して、手札から【マジック・ストライカー】を特殊召喚だ！」

【マジック・ストライカー】レベル３
ＡＴＫ／　６００　ＤＥＦ／　２００

「レベル３のモンスターが２体…」
「見せてやるよ…Ｅｘ適正が無いお前に！『東一中のグレートデビル』の！この俺のエースを！レベル３のモンスター２体で、オーバーレイ！」

焦燥を振り切るかのようにして、遊良を煽るようにして。徐に手を振り上げて、その勢いを増さんと叫ぶ新入生。
足元に広がる銀河の渦に、２体のモンスターが光となって吸い込まれていくその光景は…

―レベルではない、ランクを持つモンスターを新たに生み出す召喚法のエフェクト。

それは自らの持つ、エクシーズの『Ｅｘ適正』を駆使するために…

「エクシーズ召喚！来い、ランク３！【弦魔人ムズムズリズム】！」

【弦魔人ムズムズリズム】ランク３
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

独特の音色を奏でながら現れるは、楽器を構えた小さき悪魔。
帽子の奥から覗き込む、鋭き眼で遊良を睨む。

「攻撃力３０００になれる俺のエースだ！お前のモンスターなんて、こいつでふっ飛ばして…」
「罠発動、【奈落の落とし穴】！ムズムズリズムを破壊し除外する！」
「なっ!?」

―！

…しかし、意気揚々と繰り出した新入生のエースモンスターが、場に出たその瞬間に奈落からの悪魔によって落とし穴へと引きずりこまれてしまった。

相手の攻撃力１５００以上のモンスターを、容赦なく破壊し除外するこの罠カードは遊良も【決闘祭】で使ってはいたのだが…

新入生が堂々とエースなのだと自負して召喚したそのモンスターを、少しの見せ場も無く退場させてしまう辺りは遊良には全く容赦がないだろう。

誰だってそう。自分のモンスターが召喚と同時にいきなり片付けられてしまってはいい気分ではいられないはず。

それが自分の中核となるモンスターだったならば尚更のことであり…

「そ、そんな…俺の…エースが…」

「どうした、もう終わりか？」

「く、くっそぉ…天城の癖しやがってぇ！【死者蘇生】発動！【マスマティシャン】を守備表示で特殊召喚！」

「【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【背徳の堕天使】の効果を得る！【マスマティシャン】を破壊して、【背徳の堕天使】をデッキへ戻す！」

「ぐっ!?だったら魔法発動！【ブラック・ホール】！お前のモンスターも破壊されろぉ！」

「手札から【堕天使テスカトリポカ】の効果発動！テスカトリポカを手札から捨て、堕天使の破壊を防ぐ！」

「なっ!?」

―何も、出来ない。

攻める以前の問題、モンスターを場に出す事も、その効果を使う事

も…守りを固めることも、遊良のモンスターを破壊することも出来ず。
全く持って容赦の無い遊良の立ち振る舞いに、見る見るうちに新入生の威勢が弱くなっていき…手も足も、かすり傷の一つも遊良に負わせることの出来ないこの状況で、新入生もようやくソレを理解出来たのか。

―実力が、違いすぎる。

相手に『何もさせてもらえない』ということは、それだけ自分と相手の実力に『差』があるということ。
今までこの街の常識として広まっていた、天城　遊良というＥｘ適正の無い出来損ないのデュエリストのイメージが…霧となって、彼の中から消えていく。
まるで、自分と天城　遊良との間にはとてつもなく大きな『壁』が立ち塞がっているかのように思えてしまっているのだろう。
それと同時に、自分の目ではっきりと見てしまっている『本物』の天城　遊良の姿に、新入生の焦燥感と恐怖感がどんどん大きくなっていくではないか。

「あ…う、嘘だ…俺はカードを2枚伏せて、タ、ターンエン…」
「そのエンドフェイズ！罠カード、【砂塵の大嵐】を発動！」
「はぁ!?」
「その効果で、今伏せた2枚の伏せカードを破壊する！」
「そんな…何も…出来…ない…カ、カードを伏せることも…」

「…相変わらずえげつねーな、天城の『アレ』…」
「でもあの一年も自分から喧嘩売ったんだし。自業自得っちゃ自業自得だけど。」
「…俺は二度と『アレ』やられたくねーけどな。」
「俺も…」

周囲で見ている2年生以上の学生達は覚えている。

…去年の、夏前辺りからだろうか。

『いつも』のように天城　遊良を馬鹿にして蔑んでいたら、今まで手を出してこなかった遊良から一転、これまでの言われたい放題だった遊良からは考えられない程に嬉々として戦いを挑んでくるようになり…

『Ｅｘ適正』が無い癖に、えらく挑発的にして振舞う天城　遊良に逆上してしまって、返り討ちを目論んだらこのデュエルのような『何もさせてもらえない』デュエルを、戦った全員が喰らったという、それはそれは恐るべき出来事があったと言うことを。

それを未だに引きずっている学生は多く、その時のトラウマと遊良の【決闘祭】優勝という事実と相まって、今では遊良を貶すことは『実力差を測れない馬鹿』のすることだという認識が、ある程度の力のある学生達の間では常識となっているのだ。

「あ…あぅぅ…」

だからこそ、この新入生が『自分が正しい』と思って遊良を蔑みながら挑んだことも、周囲の学生達からしたらただの『無謀』。

自分の実力と相手の実力の差を測ることが出来ない、その程度のレベルのデュエリストが息巻いて逸っただけという、ただの『無知』。

自分の実力を過信して、天城　遊良の力を理解出来なかっただけという…ただの無力という認識としてしか見られていない。

「ターン…エン…ド…」

そんなこととは露知らず。果たして、見下していたはずの天城　遊

良に何もさせてもらえないこの状況は、新入生にとってはどれほど屈辱的なのだろうか。
強い言葉で言い負かして追っ払うか、デュエルで吹っ飛ばして高天ヶ原先輩に気に入られようとしていた彼の算段が、その根元からどんどん崩れていく。

―これが、本物。

ＴＶで見ていた【決闘祭】が、紛れも無い本物の激闘であったことを、今更ながらに新入生が思い知らされ…

「俺のターン、ドロー！よし、俺は【堕天使の戒壇】を発動！」

そうして、遊良がこのデュエルに決着を着けようとして、手札から一枚のカードを発動した…

…その時だった。

…

反応が、ない。

確かに宣言された遊良の声と、デュエルディスクに差し込まれたはずのカードは全く反応を見せず。
ソリッド・ヴィジョンすら現れず、その効果を発揮すらせずに静寂が広まるだけ。
墓地から堕天使を守備表示で呼び出す遊良のソレは、彼が自らの

デュエルで必ずと言って良いほど良く使う【堕天使】専用の蘇生カードなのだが…

「え、どうしたの？天城君、何で急に止まったの？」

「おいおい、どうしたんだ天城の奴、何でこの状況で手を止めてんだ？」

「考える必要あるか？もう勝負は着いてるだろ？」

「あぁ、そのはずだけど…」

そして、テンポ良く進んでいたデュエルに突如としてざわめきが広まり、周囲がにわかにざわつき始めて遊良の手が止まったことに対し疑問を抱き始めて。

「…まただ、本当に最近ディスクの調子悪いな…」

また、周囲の反応とは違い、反応しない自らのディスクを見て、そして差し込んだカードを引き抜いて見つめながらそう言った遊良。

そう、最近、遊良がデュエルをしていると偶に起こるのだが…

頻繁にではないものの、時折こうしてカードを発動したりモンスターを召喚したりしても、中々デュエルディスクが反応してくれないことがあるのだ。

数度再発動してみたり、別のカードを使用すると問題なかったりするため、遊良も特に気にはしていないものの…

別に、精密機械であるこの万能端末のディスクをブーメランみたいにして乱雑に扱ったりだとか…違法で悪質な改造を施したりだとか、そんな事など遊良は断じてしていないのだから、その原因など心当たりすら思い浮かびあがるはずがなく。

もしもコレがデュエルディスクの故障だったならば、早めに修理に出さなければならないなと、そんなことを遊良は考えつつ…

「…まぁいいか、だったらコイツだ！俺は【神獣王バルバロス】を妥協

召喚！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００→１９００　ＤＥＦ／１２００

そうして、一瞬のざわめきの中で手を変えた遊良の場に現れたのは、天柱崩せし獣の王。
【決闘祭】の決勝を経て、古くからの相棒を再び暴れさせることを選んだ遊良の声に応え、轟く雄叫びで敵を見て。

遊良の扱う【堕天使】というデッキにおいて、この【神獣王バルバロス】とにシナジーがあるかと問われれば誰にだって疑問が浮かぶであろうが…

―それでも、どんなデッキを扱おうと強者は強者。

確かな信念と強さを持った決闘者にデッキとは必ず応えるモノなのだからこそ、どんなカードをデッキに入れていても本物の決闘者は『必ず』戦える。
生贄を捧げていない分、力を押さえられているとは言え…獣の王の咆哮は、大気を震わし周囲に轟く。

「そ、それ、【決闘祭】で使ってた…」
「これで終わりだ！バトル！【堕天使イシュタム】と【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！」

―!!

「うわぁー！嘘だぁー！」

新入生　ＬＰ：４０００→０（－４００）

－ピー…

そうして、獣の王と魅惑の堕天使の一撃によって無機質な機械音が周囲に鳴り響き、デュエル終了の合図を知らせて。

誰の目から見ても容赦の無い、圧倒的な勝敗の着き方。

２年生以上の学生達はもう幾度と見た、馬鹿にしてきた相手に何もさせない遊良のデュエルは、遊良の力がその他大勢の学生レベルを当に超えていることを、ここにいる誰しもに思い知らせていることだろう。

「うっ…うぅ…何も…させてもらえなかった…」

膝を折り、手を付いて、うなだれるようにして地面に体を近くしている新入生には少々酷なデュエルとはなったものの…

彼も自ら勇んで向かっていって、逆に返り討ちにされてしまったのだから…誰からの同情の余地もない。

「あーあ、また天城の圧勝か。」

「アイツ、ホントに喧嘩売ってくる奴に容赦ねーよな。」

「…俺達も返り討ちにされたしな。」

「ソレを言うなよ…」

そうして、デュエルが終了したことで周囲を囲んでいた学生達が、その輪を崩して各々再び登校を始めだして。

ギャラリーとなっていた者の内、幾人かの足取りはやや重く。最近ではめっきり行われなくなったソレを久々に目の当たりにしたことで、彼らもまた思い出したのだろう。

…天城　遊良を、もう馬鹿には出来ないことを。

先ほど遊良の言っていた通りこの学園、ひいてはこの世界で自分の主張を押し通したいのならばデュエルで勝つしかなく…

それが出来ないのならば、相手よりも必死になって『強く』なるしかないのだ。

そして…

今倒されたばかりの新入生を他所に、もうギャラリーも居なくなったデュエルの跡から遊良とルキも歩き始め…イースト校へと向けて、再び歩き始めた。

「…遊良ってば、一年生相手に大人気ないよ。」

「売られた喧嘩を買っただけだって。去年だって同じコトしてたろ？」

「去年と今は別でしょ！今は下手に喧嘩売らなくたって皆遊良の強さ知ってるじゃん！同級生ならまだしも、後輩泣かしてどうするの！」

「…お、おう…悪い…」

そう言うルキの言葉はどこか荒く、今のデュエルが売られた喧嘩だったとは言え、思わず反射的に謝ってしまった遊良。

確かに、考えてみれば入学したばかりの後輩を相手にするにはやりすぎたかもしれないと、そう思いなおして。

…そう、今の自分はもう最下級生ではない。

同世代と年上しか居なかった昨年までと比べても、年下の後輩が出来たという今となっては、今まで通りの振る舞いをそのままするわけにはいけないのではないかという気持ちが、遊良にもやっと浮かんできたのだろうか。

それを考えると、昨年度卒業していった蒼人は先輩として何とも『出来て』いたのだろうと、遊良も先輩となった今になって改めてソレを感じている様子を見せながら…

自らの力でどうにか周囲の評価を『変え始められた』とは言え、周囲の全てが敵だった今までの事を考えると、この『慣れない変化』に対して彼もまだまだ成長しなければならない事だろう。

「そう言えば、鷹矢はまだ寝てるのかなぁ…」

そんな中、学園へと向かって歩きだしてすぐに、寝ていたために放置してきた鷹矢のことをふと思いだした様子で声を発したルキ。

そう、今ここに遊良とルキが学園への道を歩いているというのに、この場に鷹矢が居ない理由など、たった一つしかない。

それは、二年生に進級したというのに鷹矢の『寝坊癖』は相も変わらず全く改善する様子を見せず…

いつもは仕方なく無理やりに起こして学園まで連れてきている遊良ではあったものの、とうとう今回こそは流石の遊良といえども我慢の限界が来たことに他ならない。

…何せ、先日も始業式の日に盛大に寝坊した所為で、遊良まで巻き添えで遅刻しそうになっていたのだ。その所為か、流石の遊良もとうとう堪忍袋の緒が切れて、今日こそは一向に起きる気配のない鷹矢を放置してきたというわけだ。

「まぁでも、いくらあの馬鹿でもそろそろ起きて向かってるんじゃないか？今度遅刻したら飯抜きだって言ってあるからさ。」

「…【決闘祭】の時にご飯抜きにされたこと、相当応えてたもんね。」

「あぁ。」

―…

…時は少々遡り、丁度遊良が新入生に絡まれてデュエルを始めた頃。

「…むぅ、このままでは遅刻だ。」

遅刻ギリギリの時間に奇跡的に覚醒した鷹矢が、遊良から言い渡されている『飯抜き』という、彼にとって『最大限の罰』への焦りから長距離走の選手も真っ青なスピードで学園への道筋を駆け抜けていた。

いつも遅刻ギリギリに学園に駆け込んでいるからこその勘、その長年の感覚に則り、誰にも全く誇ることの出来ないその体内時計から、学園への道筋を計算して更にそのスピードを上げていって。

…あの鷹矢が、朝食を食べる間も惜しんで学園へと向かっているのだ。彼にとって、よほど遊良の『飯抜き』は応えているらしい。

しかし、いくら鷹矢とてこのままスピード上げていってイースト校へと走っても、大通りを大回りしなければいけないこの通学路を走っていては、ギリギリで始業のベルには間に合わないと踏んだのか。

「流石にまずいか…ならば近道だ！」

長年の遅刻癖は伊達じゃない。ソレを即座に鷹矢は理解して。

意を決したように前方へと向かわせていた体幹を思い切り反り、地面を蹴るために溜めていた足の力を急遽止まる為の力へと変え…全力疾走の勢いをフルブレーキによって無理やりに停止させた鷹矢。

地面との摩擦によって靴底が磨り減る音がしたものの、そんなことに構っていられない鷹矢は即座に進む方向を通学路の大通りから一転…その目を、狭く入り組んだ裏路地へと向ける。

「確かここを抜ければ学園前のはずだったな…よし！」

そうして、鷹矢はそのまま裏路地へと侵入すると、幅一人分しかない程の建物の間の裏通りを、先ほどと同じ位のスピードで再度駆け抜け始めた。

以前にも同じような時期に、遅刻寸前だったところを、この裏路地を抜けたおかげでどうにか始業に間に合ったのだ。

そのおかげで遊良が揉めている場面を助けることも出来たのだが、基本的に人が通ることを想定されていない通りのためか、流石に道筋も狭くゴミやその他の綺麗とは言いがたいモノも多々あるために、鷹矢とて自らソコを駆け抜けることにはやや抵抗があるのか。

普段ならば絶対に通ることはしないものの…こういった後の無い場面だったらば仕方がないと、そう意を決して。

…建物の角を左に曲がり、その後すぐさま右に曲がって。散乱しているゴミを飛び越え、汚れた壁に制服が擦れても構うことなく。

狭くなったり広くなったりする、人が通ることを想定されていないはずの裏通り、建物の隙間を、止まることなく鷹矢はどんどん進んでいく。

そうして、一目散にイースト校へと向かって走り、この調子だと何とか間に合いそうだと、そう安堵して一瞬だけ気を抜いた…

…その時だった。

「…ッ!?な、何だ!?」

唐突に、突然に。

前へ前へと進んでいたその勢いを、全身全霊を持って無理やりに止めて…まるで何かを感じた様子で、警戒心を最大限に顕にした様子の鷹矢。

思わずその場に立ち止まり、背中に走った電気のような寒気が鷹矢の緩んだ気を一瞬で引き締め…

息を潜め、運動のモノとは違った嫌な汗が一つ、鷹矢の額から流れ落ち…聞き耳を働かせ、即座に警戒レベルを最大にまで引き上げて。

「…何なのだ…これは…」

鷹矢の感じた気配…それは、殺気の入り混じった、感じるのも憚られるような禍々しい気配。

冗談などでは断じて無く、気のせいなどでも決して無い。

臨戦態勢に無理やり引き込まれたかのような、そんな一瞬の油断さえ許されないような気配を、鷹矢は感じたのだ。

そして鷹矢の耳に、どこか学園の方向から『獣の王の雄叫び』が聞こえた気がしたのと同時に…

その野生染みた感覚を頼りに、鷹矢は学園の方向とは『逸れた方向』の路地へとルートを変えると、気配のする方へと足を進め始めた。

そのまま鷹矢が進んでみると、建物と建物の間の、やや開けたスペースの通りに出て…

そこに顔だけを覗かせて、建物の影から気配の様子を伺おうとして目を凝らして…

「誰だ…む!?」

そこには…

「だ、誰もいないではないか…いや、確かに居た…居なくなったのか？」

何もなく、人もなく。

自分が覗き込む寸前まで確かにあった『何か』の気配が、覗き込んだその瞬間に綺麗さっぱり消え去ってしまっていた。

しかし、一瞬だけ自分が感じた気配が気のせいだったのだろうかという思いが鷹矢に浮かび上がったものの、しかしすぐさまソレがおかしいことだということを、鷹矢は『嫌でも』理解させられてしまったのか。

―そう、そこには、確かに誰かがいたと言う『おかしな証拠』が落ちていたのだから。

「ありえん…服だけが…綺麗に人の形になって落ちているなど…」

そう、確かにここに『人が居た』証拠…

―男性物の上下の服から下着類、そしてアクセサリーなどの装飾品といった、およそ『人』の身につけるモノが、そこには落ちていたのだ。

意図的に『そう』置いたとしか思えないような置かれ方、先ほどまでこの服が確かに『纏われていた』と感じる温かみと、作り物では決して表現出来ない躍動感に溢れた服の皺と膨らみ…

それはまるで、服だけが残り『肉体』だけが消滅したかのよう。

…それだけではない

置かれている『服』の左腕の部分を中心に『カード』が散らばり、まるで先ほどまでここでデュエルが行われていたようではないか。

「何が…起こっているのだ…」

年始に起きた『異変』から、やっとこの決闘市の復旧も終わってきたというのに…

新たに感じてしまった異変の予感と、唐突に消えた禍々しい気配が…

…鷹矢の心臓の鼓動を、逸らせていた。

―…

ｅｐ５４「ひとときの日常」

「…んで、何か変な場面に遭遇したから遅刻した…と。」
「うむ。」

決闘学園イースト校、その２学年のとある一クラスでのこと。
自分の席で呆れた顔をした遊良が、出席の点呼に間に合わなかったにも関わらず何やら開き直った様子で入ってきた鷹矢に対し、苦い顔をしながらそう言っていた。
一応遊良が、鷹矢の『言い訳』を聞いてやったところによると…
何やら裏通りを駆け抜けていたら突然危ない気配を感じたらしく、道を外れて様子を見にいってみるとそこには『人』が居たらしい『形跡』だけが残っていたという、にわかには信じがたい摩訶不思議な現象が起こっていたのだと言うではないか。
そして、そこを偶然通りかかった他人に頼み、警察を呼んでもらってそのまま後を任せてきたらしいのだが…

「本当に驚いたぞ。何せ、本当に肉体だけが『消滅』していた様だったのだからな。」

しかし、そのあまりに堂々とした鷹矢の態度に、誰もが鷹矢は遅刻などしていないと勘違いしてしまいそうではあったものの、遊良の前の席で開き直ってふんぞり返ってそう豪語している鷹矢に対し、遊良はどこまでも目の前の馬鹿を見て呆れ果てているのみ。

「だから俺は悪くない。うむ、俺に非が無いと言うことは、今日の飯抜きは無しということに…」
「いや、それとこれとは別問題だろ。結果的に遅刻はしたんだ、鷹矢、お前今日飯抜きだからな。」
「む!?い、いやちょっと待て遊良！それだけは…お、おいルキ！お前からも遊良に何か言ってくれ！」

「…往生際が悪いよ鷹矢。だって遅刻は遅刻だし。」
「ぬ!?」

無情に、無慈悲に。
ふんぞり返っていた鷹矢の態度が一転。
遊良の出した判決に、その声が焦りを含んだ言葉へと変わって。
また鷹矢が、遊良の隣の席に座っていたルキにどうにか助けを求めたものの…彼女もまた、鷹矢の寝坊癖と遅刻癖を知っているために、甘やかして助け船を出すようなことはせず。
…別に、遊良とルキも昨年から現実味の無いような事件に何度か巻き込まれたのだから、一概に鷹矢の『言い訳』を最初から嘘だと断定はしないとはいえ…

―あくまでも『約束』。

事情がどうあれ、鷹矢が『遅刻』したことには変わりないのだという態度を遊良が変えるはずがないのだ。

「大体さー、鷹矢だってもう少し早く起きれば遅刻なんてしないわけでしょ?」
「何を言っているんだルキよ、この俺が朝早くに起きられるはずないだろうが。」
「情けないことを偉そうに言ってんじゃねーよ。早めに寝ればいいだけじゃねーか。」
「無理だ!大体、遊良こそ就寝が早すぎるぞ。9時半時になったらスイッチが切れるなど、幼児と対して変わらんではないか。」
「俺はいいんだよ、ずっとそれで生活してきたんだから。その時間になったら勝手に眠くなるんだし。」
「先生厳しかったもんね…『ガキはさっさと寝ろ!飲みに行けねぇじゃねえか!』って。」
「始めの内は朝に帰ってきたら行きと服が変わっていたこともあった

な。あのジジイのことだ、本当に飲みに行っていたのか怪しいものだ。」

ここはイースト校の教室で、周囲には他の学生たちも居ると言うのに…彼らの間にある雰囲気はまるで、いつも『家』に3人で居るときのような距離感。

そう、昨年まではルキだけが違うクラスだったために、こういった場面などありえなかったものの、2年生となった今年にようやく3人ともが同じクラスとなったのだ。

ーまぁ、遊良は知る由も無いことではあるのだが…

クラス分けの職員会議が行われた際に、鷹矢を唯一コントロールできる遊良が速攻で鷹矢と同じクラスになることが、砺波を含めた教職員全員の満場一致で決まったという事実は…最早教師陣の中で語り継がれる話となっていることは置いておいて。

また、彼らの距離感を見慣れぬ周囲の学生達からすれば、遊良と鷹矢、そしてルキの3人が近い距離でこうして集まって話しているというこの光景自体が不思議でたまらないことだろうが…

今までは、学園でも『あえて』鷹矢とルキに対して距離を取っていた遊良が、こうして学園でも全く気にする事無く幼馴染二人と話しているということも、遊良の心境の大きな変化の現れとなっていることは間違いないだろう。

そして、もうすぐ始まる最初の授業を、にわかにざわつきながら待っている教室の中で…

どうにか『飯抜き』を回避しようと画策している様子の鷹矢が、唐突に思いついたかのようにして幼馴染達2人に向かって口を開いた。

「うむ、まぁジジイのことなどどうでもいい。それより遊良、今日の晩飯は肉が食いた…」

「だからお前は飯抜きだって言ってんだろ！何しらばっくれようとしてんだ！」

「むぅ…そうだ！俺の見たアレは、今ニュースでやっている失踪事件

と何か関係があるのかもしれんのだぞ？重要な発見かもしれんのだ！うむ、だったらお手柄というコトで飯抜きは無しということにだな…」
「…お前が…ニュース？」
「どうしたの鷹矢!?まさか具合でも悪い…わけないよね。だって鷹矢だし。」
「熱がある…わけないか、鷹矢だしな。」
「お前ら…一体俺をなんだと思っているのだ！」

しかし、起死回生を狙った鷹矢の言葉を切って捨てた遊良とルキの言葉に、どこか憤慨したようにして鷹矢は声を発して。
鷹矢が言った、今この決闘市でにわかに騒がれている失踪事件。
被害者に何の関連性も無く、この年度の初めから既に2～3人の行方不明者が出ているこの事件のことは、夕食時に遊良が見ているニュースを鷹矢だって一緒になって聞いているのだから、無論鷹矢だって知っていることなのだが…
ソレに関する重大な発見かもしれない場面に遭遇したというのに、遊良とルキのあまりの台詞にどこか心外だといわんばかりの雰囲気を顕にする鷹矢。
そんな鷹矢を尻目に、遊良とルキが顔を見合わせて。アイコンタクトをし、一呼吸置いて同時に口を開き…

「馬鹿。」
「馬鹿。」
「…むぅ…」

遊良とルキもこれまでの鷹矢の振る舞いを知っているからこそ、遊良とルキから同時に放たれた言葉は上手くシンクロして鷹矢へと届けられ、何の躊躇も無く鷹矢の態度を切って捨てる。

ぐうの音も出ず、反論も出来ず。
こうもはっきりと切って捨てられては、鷹矢とて返す言葉も無く口を噤むしかないのか。
また、それ以上何も言えなくなってしまった鷹矢の『飯抜き』が確定し、彼もこれ以上の抵抗は無駄だと悟ってしまったのだろうか…
鷹矢の『表情』は、過去に一度経験した恐るべき『罰』へと向けてどこか意を決したように…

「そんな顔しても無駄だからな。飯抜きは飯抜きだ。」
「ぐ…遊良の頑固者め…」

…いや、他人からしたら表情など分からぬ鷹矢の『鉄仮面』など、誰が推測した所で遊良以外には絶対に分からないのだから、その憶測を立てる事すら無意味な事だろう。
鷹矢が今どんな表情なのかを知ることが出来るのは、最早この場に置いては遊良一人だけなのだから。

そして、授業を始めるべく入ってきた教師が声をかけたことで学生達が各々の席に戻っていき…

ーこれから始まる一日に向けて、ざわめきを押さえ始めるその光景はまさに、『日常』

…そう、これから始まるのは、いつもの日常。

やっと戻ってきた、穏やかな日々。

決闘市を襲った先の『異変』の混乱と傷跡も、やっと皆の記憶から薄れ始めてきたからこそ、こんな日がずっと続けばいいと誰もが思っていることだろう。

そうして…

暖かな日差しが気温を上げ始めていくその中で、『いつも通り』の日常が、再び始まろうとしていた。

…

「なるほど、話はわかりました。」

豪華な装飾が施された応接間。

そのイースト校の来客用の一室で、元シンクロ王者と呼ばれた決闘者、そして今はイースト校理事長である【白鯨】砺波　浜臣が、目の前に座っている役員風の『細身の男』と、厳かな雰囲気を持った『大柄な男』の2人に対してそう言った。

しかし、来客を前にしているというのに砺波の表情は険しく…

明らかに苛立ちを隠していないその雰囲気は、今にもこの部屋を軋ませてしまいそうなほどに怒りを孕んでいて。

「【決闘祭】の中止は仕方ありません。少し前に【決闘祭実行委員】からも報告を聞いていますし、何よりセントラル・スタジアムがあの有様では。」

「ええ、ですから昔から親交の深い『我々』が、決闘市の為に一肌脱がせていただきました。既にノース校からは『賛成』…ウエスト、サウス校の理事長達からは、『前向き』なお返事を頂いています。あとは砺波理事長のイースト校さえ『賛成』していただければ『上』も納得せざるを得ず、一気に『この話』も現実的になるかと。」

「親交が深い…ですか…」

目の前に座った『細身の男』の、異様に鼻につく声を耳に入れる度に、その眉間の皺を深くさせていく砺波。
そして、それに気付いているのか気付いていないのか。『細身の男』は噤む気もなく、ただ淡々と癪に障る声質で言葉を述べていくだけ。
その会話の内容から、この『来客』達もまたどこかの『学園』の者なのだろうということだけはわかるものの…
今はそのことよりも、この一触即発の空気がまさにこの応接室を、『普通』のモノとは異なる空間へと変化させていた。

…そう、今、彼らが話しているのは学生達はおろか、教師陣にだって極秘の話。

超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の中でも、上層部でのみ話が進んでいる、それはそれは重大な話の、ほんの一部。

それは紛れも無い、先ほどの会話にあった通り…

―【決闘祭】の『中止』と、その『代替案』について。

「砺波理事長、何を迷う必要が?これは学生達のためではないですか。現にこの『案』には他の3校も賛同されていますし、『我々』の方も決闘市の学生達と競い合えるのならば、『我々』にとっても『いい刺激』になると考えております故…」
「えぇ、それには私も賛成です。確かにその『祭典』の案ならば、これまで【決闘祭】に出場したくても叶わなかった学生達にとっても現実的な目標となるでしょう。それに【決闘祭】が中止のままでは、こちらの学生達のモチベーションにも影響が出てくることは間違いないですし。」

「ええ、『我々』の方も同じ意見です。せっかくの競演…たった数名の選ばれた学生達だけではなく、『出来るだけ多く』の学生達に良い経験を与えてやりたいではありませんか。」
「…そうですね。」

苛立ちながらも事務的な話し方を崩さぬ砺波の口調は、流石に一校の理事長か。
しかし、砺波のその苛立ちの原因がなんなのかはさて置いても…【決闘祭】は絶対に開催しないといけない『決まり』。
いくら『決められている会場』が使用不可能になっているからと言っても、絶対の『決まり』を設けている超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が、【決闘祭】の中止など絶対に許すはずもないということは【決闘世界】に所属している砺波も重々承知していることであって。
だからこそ、突如通達された【決闘祭】の『中止』という『大惨事』を前に、砺波が頭を悩ませていたこともまた事実。

…そんな悲嘆に暮れかけていたところに、舞い込んできたこの『良い話』。

まだまだ『この話』が、『向こう側』が提示しているだけの机上の構想段階とはいえ…
決闘市にとっても決闘学園にとっても、そして主役である『双方の学生達』にとっても、こんなメリットしかない話には乗らない以外に手は存在しないことだろう。

そうして…

「ありがとうございます。さすがは【白鯨】と呼ばれたお方だ。『烈火』と違って、話しが早くて助かります。では…」

砺波の苛立ちを『不自然』に無視しながら、『細身の男』がこのまま

話をまとめにかかった…

―その時だった。

「待ってください。まだ大事なことを聞いていません。」
「ッ!?…だ、大事なこと…ですか?」
「とぼけないでください。【決闘祭】が中止せざるを得ない決闘市に、救いの手を差し伸べてくださったことは感謝しています。…しかし、先ほどあなた方が述べた『条件』について、まだ私には異議を唱えたいことがあるんですよ。」

【決闘世界】から降りかかるであろう自身の処罰を天秤に賭けても、砺波は迷う事無く言葉を発して。
この『良い話』を纏めにかかった『細身の男』の言葉を遮り、苛立ちを隠そうともせず砺波は面と向かって目の前の2人へと言葉を向かわせるのか。

…確かに、決闘市にとっても決闘学園にとっても、そして学生達にとってもこの話は『メリット』しかない。

―そう、良いところばかりが強調されていて、『メリットしか』ないのだ。

しかし、世の中にはそんな美味い『だけ』の話などあるわけが無いということを理解している砺波だからこそ、どうしてもこの話に対しては手放しで飛びつくことなど出来はしないのか。
…何せ、話の最初に目の前の2人から砺波へと提示された『条件』を聞けば、例え普段は穏やかな鯨であっても『怒るな』と言う方が無理のあることなのだから。

そう、先ほどから砺波が、目の前の来客に対して感じている『怒り』の原因…

話の初めに提示されていた、その条件とは…

「はて…あぁ、掛かる『費用』に関してでしたら…」

「違う！『天城　遊良を出場させるな』という条件は！一体どういう事なのかと聞いているんです！」

―！

放たれし怒号の圧で、応接間全体が軋みを上げて。

それでも砺波はその怒りを隠すどころか、益々激しいモノへと変え…

目の前の『細身の男』と『大柄な男』へとぶつけ始め、この一触即発の均衡を保つことを自ら捨ててでも、今提示されているこの『条件』に対して砺波は異議を申し立てる。

しかし、砺波のその怒りの理由ももっともで…

告げられたその『条件』を聞けば、ここまで砺波が怒った事に関しても、それはそれは仕方ないことだろう。

ーそう、砺波へと告げられていたのは紛れも無い…

『Ｅｘ適正の無い』天城　遊良を、今思案されている『祭典』に出場させるなと、堂々と言われていたのだから。

「他の学園の理事長達ならばともかく…この私の前でよくそんな妄言

が吐けたモノだ！一体何を考えているつもりでそんな馬鹿なことを口にしている！」

それは、【決闘祭】を戦い抜いた遊良への侮辱。

先に起きた決闘市における『異変』の罪滅ぼしとは言え、ここまで遊良を直々に教え鍛えてきた砺波からすれば、こんな『条件』など絶対に容認できるわけがなく。

それは、他の３つの決闘学園とは違って、遊良が通っているイースト校の理事長を務める砺波からすればなおさらのこと。

「…で、ですからお話したでしょう？今回の『祭典』は、『世界中』が注目するほどの規模となるのです！決闘市だけならばまだしも、『我々』まで恥をかくわけには行かないでのすよ！ましてや、『あの』天城　遊良が出場するなとなれば、きっと世界中から『祭典』自体が笑いモノにされて…」

「私の教え子の出場が、どうしてあなた方の『恥』となるのでしょう！仮にも天城　遊良は前回の【決闘祭】の優勝者、彼が出場しないなどありえません！笑いモノ？そんなもの、実際に『祭典』が始まってしまえば、誰もが自分の考えを改めるはずだ。」

「…全く、獅子原理事長といい李理事長といい…そして今度は砺波理事長まで。一体どうしたというのですか？【白鯨】とまで呼ばれたあなたが、何故に天城　遊良の肩をお持ちになるなど…」

「その名は今この場では関係ありません。今の私は【王者】ではなくイースト校の理事長。その分、天城　遊良の実力は私が一番よく知っているつもりです。」

「じつりょ…ぷっ、いやいや、『Ｅｘ適正』も持って無いのに『実力』と言われましてもねぇ…」

平行線を辿りかけているこの言い合いは、『実際』を見た者とそうでない者が故に起こっている、かけ離れた価値観ゆえの見解の相違。

…確かに遊良への『見方』は変わっては来ている。
しかし、それはあくまでこの『決闘市』の住人達と、【決闘祭】を見ていた外部の者達のみの話。
決闘市の『外』の人間である、この『細身の男』からすれば…
いや、まだまだ『世界』において天城　遊良は、『Ｅｘ適正』を持たないただ一人の出来損ないという認識なのだ。
とは言え、きっと少し前までの砺波であったならば遊良の出場を拒否されたことに対しても、嬉々としてソレを承認していたことだろう。
いや、砺波だけではない。
昨年の【決闘祭】以前の決闘市の状態では、『Ｅｘ適正の無い』天城遊良というデュエリストを、『認める』という選択肢など存在すらしていなかったのだから。
―しかし、『今』は違う。
その風潮に対しても、遊良が決して諦めることなく『真正面』からソレに立ち向かったからこそ…彼が自らの手で勝ち取った【決闘祭】の優勝という、誰にも『有無を言わせない』ほどの力の証明を、確かに認めている人間達がここに存在していることもまた事実。
それは、理事長が変わったばかりのノース校はともかくとして…
元プロデュエリストである『烈火』と呼ばれたサウス校理事長の『獅子原　トウコ』や、決闘界に深い繋がりを持つ『元カードデザイナー』だったウエスト校理事長の『李　木蓮』が、今ここで激昂している砺波と同じく『天城　遊良を出場させないこと』という『条件』に異議を唱えていることが証明していることであって。
「あなた方がいくら自分達の『学生』に自信を持っているのかはわかりませんが…その程度の見聞では、『そちら』のレベルも知れたモノだ。

よほど『自分達の学生』が天城　遊良に敗北していく姿を見たくないようですね。」
「なっ!?あ、『あの天城』が優勝する程度の学生のレベルで！『我々の学生』を侮辱するつもりですか!?」
「先に私の教え子を馬鹿にしたのはそちらだ！これ以上こんな馬鹿な話を続けるつもりなら、『この話』は私が潰してもいいんですよ！」
「うっ…そ、そんなことをすれば、【決闘世界】が黙っては…」
「それがどうした！私は【白鯨】！例え【決闘世界】が相手となろうが、私はそんなことを認める気は無い！」
「…いや認める気は無いって…そんな無茶苦茶な…」

怒号を奏でる鯨の咆哮。しかしその真意は果てしなく深く。
まさか砺波も、あれだけ『嫌悪していた』はずの遊良のことでここまで激昂出来るなど信じがたいことではあるだろうが…
それでも、【決闘世界】から降りかかるであろう恐るべき『処罰』よりも、今第一に『優先すべき事』を履き違えていない辺りは、砺波もまた以前よりも確かに変化しているのか。

―始めは、確かに『罪滅ぼし』だった。

しかし、その懺悔の感情の中でも日に日に強くなっていく教え子を一番近くで見ているのだから、砺波とていつまでも同じ所に立ち止まっているわけにはいかないことを、自らの教え子にまた教えられているのだろう。
一度は頂点に立った人間。今もなお、弱いままで居るわけがない。

そうして…

「こ、これだから【王者】は話が通じなくて困るんだ…」

砺波から発せられる、常人には堪えられない怒りを受けて、『細身の

男』が今にも根負けして脱力してしまいそうになった…

—その時だった。

「クハハ…」

今まで沈黙を貫いていた、『細身の男』の隣に座っていた『大柄な男』が…

重々しく、その口を開いた。

「いいじゃねーかぁ。あの砺波がここまで肩入れしてるんだぜ？流石に天城がどんなモンか気になってきたじゃねーかよぉ。」

早口で喋る『細身の男』とは対照的に、とてもゆったりとした喋り方。

しかしその言動の一つ一つが、比較対象など思いつかない程に…この世のモノのどれよりも、ただただ重く鼓膜に響く。

砺波から発せられる圧力を真正面から受け止めてなお拮抗させているこの雰囲気からして、この『大柄な男』が只者ではないことは誰の目にも明らかなことだろう。

「りゅ、劉玄斎（りゅうげんさい）学長…しかし…」

「『烈火』のババアが天城の肩を持ったときにはよぉ、一体全体どうしたことかと思いもしたが…【白鯨】まで天城を買ってんだ。クハハ、いいぜぇ砺波ぃ、お前がそこまで言うんだったら、『天城　遊良』の出場を認めてやっても…」

―劉玄斎（りゅうげんさい）

この世界においてその名は、【王者】に次いで知らぬ者など存在しない程の『名』。
これほどまでに『名』が『体』を現している男など、世界広しと言えどもエクシーズ王者【黒翼】を除いて他には見当たらないと思えるほどに…
歴戦を感じさせるこの『重々しい雰囲気』と、まるで世紀末に生きているのかと見間違うほどの『巨躯』。
そして、本物の戦場を裸で歩いてきたのかと錯覚するような、全身に大きく残った『古傷』だらけのその体は…

まさにこの男が元プロデュエリスト、『逆鱗』と呼ばれたほどの男、『劉玄斎』なのだということを誰しもに思い知らせていることだろう。

「劉玄斎……貴様、何を考えている？」

また、先ほど『細身の男』と話していた時よりも更に砺波は纏う空気を『臨戦態勢』へと変化させていくものの…
砺波とて、この大柄な男を前にしてはそれも致し方ないことに違いなく。

…かつての現役時代、幾度となくその暴虐性を持って、決闘界を『力』で荒らし回った歴戦の男。

【黒翼】との『殴り合い』…お互いにＬＰを投げ捨てながら、正面衝突で殴り合った伝説の戦い。
【白鯨】との『潰し合い』…お互いに相手の手を潰し合い、常に戦況が一転を繰り返して張り詰めていた伝説の試合。

【紫魔】との『殺し合い』…お互いに相手の息の根を止めにかかり、一瞬の油断でＬＰが湯水の如く消え去っていった伝説の一戦。

その【王者】達との伝説の決闘は、最早語り継がれる『歴史』の一部となって語られているのだ。

【王者】の名に最も近づいた男。

【王者】に最も拮抗した男。

もしも歴史が一つ違えば、例えば微かでも運が傾いていれば…

きっと、彼もまた【王者】と呼ばれていたであろう、伝説に数えられる決闘者の一人。

そんな見知った、しかし決して相容れぬ劉玄斎の声に触発されたのか。砺波の表情がより一層険しくなっていくものの…

そんなコトなど、劉玄斎はまるで意に介さず。

徐に立ち上がったと思うと、劉玄斎は砺波に背を向けながら再度その重々しい口を開いた。

「別にぃ?あのお前らにそこまで言わせる天城　遊良だ…ちっとばっかし、そのガキに興味が出てきただけだぜ。まぁ俺とお前の仲だ、老害共には、こっちから言っておいてやるからよぉ。じゃあなぁ砺波ぃ。精々恥かかないように、せっせと天城　遊良を鍛えておくんだなぁ…」

「心配には及びません。今の彼の実力は、学生レベルをとうに超えている。」

「…あぁ?…そうか…クハハッ、そりゃ楽しみだぜ。てめぇらがやけに拘ってる天城　遊良が、あっという間にくたばっちまったら…こっちとしても、つまらねぇからなぁ…何せこっちにゃ…」

「劉玄斎様！それは！」

「おっといけねぇ！クハハハハ…」

「あ、ま、待ってください！劉玄斎学長！」

そして、言いたいことを言い終わり、重々しい巨躯を軽々しくその足で支え、ゆっくりと応接室を出て行く劉玄斎。
それを追う『細身の男』が、焦ったようにして劉玄斎の後に続いて出て行き…
応接室に一人残された砺波は、『異質』なモノから開放されたこの空間で深く溜息を吐いたと思うと…
静かに、しかし懸念を深く絡ませたように言葉を漏らした。
「全く、何が『親交』だ…劉玄斎、あの男は一体、何を考えている…」
それは、決して相容れぬ仲だからこそ。『過去』の劉玄斎を、その身をもって確かに知っているからこそ…
そして過去の対戦において、劉玄斎の『逆鱗』に触れたことのある砺波だからこその勘。
そんな、絶対に劉玄斎を信用できぬ砺波の表情と雰囲気は、益々険しく厳しいモノへとなっていった…

―…

「劉玄斎学長…本当にコレでよかったのですか?」
「おぅ、上出来だぜ…クハハハハハ、これで砺波の奴ぁ、天城　遊良を絶対に『出場させなきゃいけなくなった』んだ…どうなるかも知らないでよぉ…」
イースト校の敷地内から出てすぐの場所。
そこに待たせておいた迎えのリムジンを、走らせてからすぐに劉玄斎へと向かってそう言葉を述べた『細身の男』。

そしてソレに応える劉玄斎もまた、何かの『思惑』が成功したことを喜んでいるのか。
外からわざわざ決闘市へと足を運び、数日かけて４つの決闘学園に働きかけをした甲斐があったという態度を全面に押し出して。
その巨躯を車に揺らし、心地よさそうに腕を組んでいるのみ。

「しかし学長の言ったとおり、本当に決闘市の中で天城　遊良が認められ始めているとは…」
「少しはてめぇも自分で調べるくらいしろよなぁ。それでも秘書のつもりかぁおい？」
「す、すみません…しかし、何ゆえ天城　遊良を『祭典』に出場させようなどと？確かに【決闘祭】に優勝したという報告はこちらにも届いておりますが…決闘市の決闘学園のレベルは年々落ちてきていると聞きますし、八百長や不正があったとの噂も聞いています。」

しかし『細身の男』からすれば、いくら長年使えている劉玄斎とはいえ『天城　遊良を出場させる』という思惑に対してどこか嫌疑的になってしまうのか。
自身の知る天城　遊良という『デュエリストの出来損ない』が、決闘市でいまだにデュエルを続けているということだって『細身の男』には信じられないことなのだから。

「…それに、そもそも『Ｅｘ適正』も無いのに『優勝』など絶対におかしいではないですか。私には、天城　遊良の力が本物とは到底思えません…」

それは、この世界のデュエルは自らが持つ『Ｅｘ適正』をどこまで使いこなせるか最重要であると『学生』達に教えている『細身の男』だからこその価値観。

―『Ｅｘ適正』が無いという事は、デュエリストでは無い証拠だと

いうのに

…そんな出来損ないを『烈火』や【白鯨】が買いかぶっている理由もわからなければ、劉玄斎が出場させたがっている理由すら『細身の男』には思い浮かばず。

「全く…天城　遊良、『Ｅｘ適正』の無いクズの癖に、一体どうやって優勝など…」

そして…

『細身の男』が、遊良に『Ｅｘ適正』が無いというあまりの嫌悪感から、心の底から不快を押し出してその口から拒絶の言葉を漏らした…

その時…

「おい…」

先ほどまでの緩んでいた空気が一転。

突如として、リムジンの中の空気が瞬間的に張り詰めたモノへと変わった。

「…てめぇ、そろそろ口閉じて黙ってろ。いい加減うるせぇ。」

「…へ？」

震える空気、張り詰めた周囲。

少しでも身じろぎをすれば、こんなリムジンなど一瞬で弾け飛んでしまいそうな程に息苦しくなってしまったこの車内の雰囲気。

何の前触れもなく劉玄斎から放たれたその怒りに、『細身の男』の体が自発的に身の危険を感じて全身をすくみあがらせて。冷や汗を垂らすことすら許されず、全身から噴出する鳥肌の不快感すら『細身の

男』は感じている暇が無いのか。

「わかったなぁ、あぁ？」

「は、はひ…」

しかし、一体どうして劉玄斎の『逆鱗』に触れてしまったのかも、どうして急に劉玄斎が怒りを発したのかも…

その理由も何もわからぬ『細身の男』からすれば、劉玄斎に言われた通りに呼吸する以外ではその口を閉じているしかないのだろう。

何も言えず、悲鳴も出せず。

気付かぬままに触ってしまった暴竜の『逆鱗』を、これ以上刺激しないようにしているしか『細身の男』には取るべき行動が無いのだ。

そうして…

決闘市の『外』へと向けて、張り詰めた静寂に包まれながらもリムジンは走り抜けていった。

突如噴出した劉玄斎の怒りの理由も、『細身の男』には分からぬまま…

――…

ｅｐ５５「新たな舞台と不穏の影」

『いいな、『神』を持つ者を探し出すのだ。これは我々の…』
「へいへーい、わーってるってしつこいなー。」

どこかの場所、どこかの建物、そこがホテルの一室だということがわかる程度の装飾の施された、そんなどこかの一室でのこと。
電話越しでもわかるその面倒事の物言いに、電話を取っていた男は椅子にもたれかかりながらさも面倒くさそうにしてそう返答していた。
電話越しでは姿が見えないのを良い事に、まるでやる気の無い態度。
しかし、その言葉だけで電話越しにも態度が見えてしまうかのようなその言霊では、いくら音声だけの通話とは言え意味がないだろう。
とは言え電話の向こう側にいる人物も、相手側を良く知っているからこそソレすら許容しているのだろうか。先ほどから全く変わらぬ口調で、再度面倒臭さそうに生返事をしている男へと向かって、再び言葉を続けるのみ。

「必ず…『赤き竜神』を我らの手に。」
「だからわかってるって言ってんじゃん。もう目星もついてっし。」

一体、誰が何の目的のために。
それは、この場で話している者にしか分からぬ現状。深い闇の中で暗躍する者の意図など、到底それ以外の人間には理解出来ないようなことなのだ。
—しかし、唯一つわかっていることは…

『この話』が、何も知らぬ少女にとっては『害』しか及ぼさぬことだというコト。

そうして…

「シシシッ、俺っちに任せとけっての。」

電話を取っていた男…【白竜】新堂　琥珀は、さも簡単そうにそう言った。

―…

「今年の【決闘祭】は中止です。」

「え!?」

大型連休も随分と前に過ぎ去り、新入生たちも既に学園生活に慣れてきた様子を見せ始め、夏の訪れがゆっくりと近づいてきたそんな頃。

週に一度イースト校にて行われる『召喚別授業』の終盤の時間、理事長である砺波　浜臣からの『特別授業』を受けていた遊良に対し…何やら話があると言われて耳を傾けた遊良へと向かって、唐突に砺波がそう告げてきた。

しかし、そのあまりに突拍子の無い『通達』に、遊良の思考は一瞬だけ考えることを停止をしてしまっていて…

「少し前から決まっていたことです。こんな話、本来だったらまだ学生達に通達など出来ないのですが…君は昨年度の優勝者ですからね、一応、『今後』のために早めに伝えておいた方がいいと思いまして。」
「でも砺波先生、【決闘祭】が中止って…あの、どうして…」

これまでどんなことがあろうとも必ず開催されてきた歴史ある【決闘祭】が、まさか『中止』になるなんて遊良には到底信じられないのか。
何せ、決闘学園の学生達が一年間待ちわびる決闘市における一大イベントがこんな学期の始めからいきなり『中止』だと伝えられたのだ。それは、例え遊良でなくとも誰だって同じリアクションを取ったに違いなく…
また、その大舞台を目指す全ての学生達の『目標』が開催されないことは、そのままこの決闘市の学生達全員のモチベーションに大きく関係してくることは間違いないこと。

「先の『異変』で、セントラル・スタジアム…もとい決闘市全域に甚大な被害が起きたことは知っていますね？」
「…は、はい。」
「復旧は街の生活圏が最優先だったため、まだセントラル・スタジアムの復旧にはかなりの時間を要するそうです。しかし、まだまだ街の復旧も全てが終わっているわけではありません。その関係で、とても年末の【決闘祭】までにはセントラル・スタジアムの復旧が間に合いそうにないのですよ。」
「そ、そうなんですか…」

目の前であからさまにショックを受けている遊良を目の前にしても、淡々とそう告げてくる砺波。
遥か過去…世界全土を巻き込んだ大戦時にだって、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の定めた絶対の決まりによって、【決闘祭】が無理

やりにでも開催されたということは歴史の教科書にも確かに載っている事だというのに。
　その口調は、とても【決闘祭】の開催を義務化されている【決闘世界】の人間が発するモノとは思えないものの…しかし、それを知る砺波とて単に遊良にショックを与えるためだけにこの『悪い話』を伝えてきたわけでないことは確かだろう。
　そう、肩を落としている遊良に対して、砺波はこう告げてきたのだから。

「まぁでも、『悪い話』ばかりではありません。」
「…え？」
「もう２つ。『良い話』と『どちらでもない話』があります。先に『悪い話』をしておいた方が気が楽だと思いましてね。さて、どちらから聞きたいですか？」

　静かに笑う砺波の表情、白い髭のその下では、遊良の焦りの反応を明らかに面白がっている様子にも見えるものの…砺波のソレは以前のような悪態と敵意に塗れたようなモノでは断じて無く。
　でなければ、まだ学生達に伝えられるはずのない『機密事項』を、わざわざ先んじて遊良にだけ教えてくれるはずがないだろう。
　そして、遊良が与えられた選択肢の中から一つを選んだのか。静かに、砺波へと向かって言葉を返して…

「えっと…じゃあ、『良い話』から…」
「はい、今年の、『決闘市で行われる【決闘祭】は中止』ですが…しかし、【決闘世界】の名において、【決闘祭】は絶対に開催しなければならない決まり。…そこで、今年の【決闘祭】は、『合同』で執り行うことに決まりました。」
「…え…ご、合同!?でも合同って…一体、どこと…ですか？」
「【決闘世界】が運営している『決闘学園』は、決闘市にある４つの学園以外にも、この世界中に多々あります。…ですが、【決闘祭】レベル

の『祭典』を執り行っている場所など、この決闘市を含めてもたった『2つ』だけしかありません。一つはこの『王者の集う街』である決闘市…そしてもう一つの街、『決闘発祥の地』である『デュエリア』で毎年行われている【デュエルフェスタ】は、この街の【決闘祭】となんら遜色ないレベルなのですよ。」

―デュエリア…

それは、この世界でも『決闘市』と同じ知名度と、そして世界一の大きさを誇るデュエル大都市。

この世界で『初めて決闘が行われた地』として伝承に伝わり、一説には『神のカード』が眠っているとさえ言われている、この世界の中心として位置付けられている国の、その首都の名。

遊良達の住むここ決闘市が、世界最強の【王者】達3人が拠点を置いているという世界最大の謎に包まれているのならば…『決闘発祥の地』であるデュエリアには、【王者】に次ぐ数え切れない程の実力者達が、日々群雄割拠で喰らい合っているのだ。

―『王者の街』と『決闘発祥の街』

共に古から常に比較されてきた街ではあるものの、『例外』である【王者】を除いた今の決闘界のプロにおける世界ランクで言えば、決闘市出身の選手達よりも圧倒的にデュエリア出身の選手達の方が多く名を連ねているのは紛れも無い事実。

…とは言え、だからと言って別にデュエリアの方が決闘市よりも『デュエルレベル』が高いのかと言われれば、それは一概に比べられないというのもまた世界の常識だろう。

何せ、この世界最強の決闘者である【王者】達3人は、全員が『決闘市出身』であり…また、全員が決闘市に拠点を置いているということは、デュエリアとしても威信に関わる問題として取り上げられているらしく…

そんな歴史も相まって、デュエリアと決闘市は遥か昔からぶつかり合ってきたというわけだ。
無論、そんな世界的に有名な大都市のことは遊良だって知らないわけがなく…

「デュエリアって確か…【決闘世界】の本部があるっていう…」
「えぇ、その通りです。…生憎、決闘市ではこの『祭典』を開催出来ません。なので今のところ開催地は、決闘学園デュエリア校が所有する『無人島』にて開催される予定らしいですね。広大な島で、多くの学生達による『サバイバルバトル』をするそうです。」
「サバイバル…バトル？」
「決闘市とデュエリア、１００ｖｓ．１００による混戦になるそうです。まぁ、１００ｖｓ．１００と言っても同じ街の者と戦ってもいいそうですけれども…まだ詳しいルールは届いていませんが、両校の代表１００名ずつによる大規模な混戦となるみたいですね。」
「…す、凄い…島、サバイバルっていうのも凄いのに、そんな人数の混戦って…規模が大きすぎる…」

次々と飛び出してくるその『良い話』を聞く度に、心臓の鼓動がどんどん大きくなっていくのを遊良は感じているのか。
しかし、それも当たり前で…何せ、遊良にとってはこれまでに体験したことのない『祭典』の規模。世界の中でも1、2を争うデュエル大都市である決闘市とデュエリア、その決闘学園同士が今ここにぶつかり合おうとしているのだから。
まだ見ぬ強敵とのデュエルもそうだが、前回の【決闘祭】の時のような、『後に引けない切羽詰った理由』も特には無い今回の『祭典』は…

—まさに、心置きなく暴れられる格好の舞台。

「この世界にある、二つのデュエル大都市…決闘市とデュエリア。昔から何かと比べられてきた街同士ですが、これを機に一つの決着を着けようとしているのです。」
「決着…」
「ええ、どちらの【決闘学園】が、より有能な学生を育てているのかを。」

逸る鼓動、迫る期待。
良い意味での緊張と高揚が、ますます遊良の心臓の鼓動を激しくさせて。体の内側から激しく打ち鳴らされる止まらぬリズムは、迫り来る『祭典』に対する期待がますます大きくなっていることを現しているのか。

そうして…

どうにも落ち着かない様子を遊良は見せ、それを見た砺波はどこか苦い顔をしながら更に言葉を続けて…

「そしてその『祭典』の開催名。その名も…【決島】。」
「え…？けっ…とう…？」

しかし、その『祭典』の名を聞いた途端に、どこか気が抜けたような声を漏らしてしまった遊良。
まぁ、あれだけ逸っていた期待に反して、こんな安易なネーミングが飛び出してきたのだから、遊良が思わず拍子抜けしてしまった様子を見せてしまっても、それは無理のない事だろう。
そう、その『祭典』の名を口にした砺波も、遊良と同じように顔をしかめているのだ。一体どういった経緯でこの『開催名』に決まったのかなど遊良は知らないのだから、今はただ固まって砺波の話の続き

を聞くことしか、遊良には出来ず。

「なんですかその顔は。確かに私だってこの開催名はどうかと思いましたよ。しかし、『祭典』の開催名を決めたのは【決闘世界】の上層部ですので、私には関係ありません。」

「は、はい、それはわかってますけど…」

「…話が逸れましたが、その【決島】に出場する選手に関してです。…本来ならば、【決闘世界】が各校の成績や戦績などを考慮し、両校の全ての出場者を【決闘世界】側が決めるとの通達があったのですが…実は少々『事情』がありまして、既にイースト校からの出場者の内の２名に、君と天宮寺君を先駆けて推薦しておきました。」

「推薦!?…あ…も、もしかして、その事情って…」

イースト校からの出場者に既に推薦されているということは遊良にとっては嬉しい限りではあるのだが…それよりも、その『事情』という言葉を聞いた瞬間に、遊良に昇ってきた嫌な予感。

―今までも、これまでも

常に『同じような目』にあってきたからこそ、遊良には砺波が言葉を続けるよりも前にソレが何なのか遊良にはわかってしまっていて…

「ええ、察しの良い教え子で助かります。…わざわざ丁寧に通達が来ましたよ。『天城　遊良の出場に異議を唱える者がいる。天城　遊良に出場する資格があるのならば、これを証明せよ。』…とね。」

「…やっぱり…」

それは、遊良の【決闘祭】優勝という功績を、未だに認めていない

者が決闘界の上層部にも多々いることの証。
遊良とて、未だに一部界隈で『【決闘祭】に不正や八百長があった』と言う荒唐無稽な噂を流している者が居るということも知っている。
…まぁ、遊良からすれば既に結果が出ていることに対して、今なお反感を示している者などに興味などないため、そんな噂話などどうでも良いとさえ思っているのだが。
それでも公式的にあれ程の『結果』を残してもなおこうした反対意見が出るということに対して、遊良が悔しくないわけないだろう。
そんな遊良を見て、砺波は全く口調を変えずに口を開く。

「心配しなくとも、そんなモノはこの私が撤回させました。それに君の『出場』が他の誰よりも先駆けて決定したのは、私だけではなくサウス校の獅子原理事長と、ウエスト校の李理事長の推薦もあってのことです。」
「他の学園の理事長まで…」
「後は…決闘学園デュエリア校の、劉玄斎学長のことは知っていますか？」
「劉玄斎!?それって『逆鱗』の…は、はい、父が『逆鱗』の試合をよく見ていたので…」
「君の代表決定には、決闘市の理事長達だけではなくデュエリア校の劉玄斎学長の口添えもあったそうです。」
「え!?た、対戦相手の学長までも…ですか？」

純粋なる驚愕の声、驚きを隠せず息を呑んで。
砺波だけではなく、サウス校・ウエスト校の理事長からの推薦まであったことは遊良にとっては驚くべき事だというのに…それだけではなく、まさか『相手側』であるデュエリア校の学長までもが自分の出場に賛同を示してくれていたというその事実は、遊良を更に驚愕させていて。
しかし砺波からすれば、劉玄斎が【決闘世界】側に話を通しておく

と言ったにも関わらずこうして遊良の出場を認めようとしない通達が来た辺りは、やはり劉玄斎など信用ができないと再確認している様でもあるが…

「奴が何を考えているのはしりませんが…まぁ、他校の理事長たちまで推薦してくれたということは、それだけ君の昨年度【決闘祭】優勝という『実績』はこの決闘市にとっても大きいということです。放っておいても選ばれる天宮寺君はさて置き…いや、彼みたいな自由すぎる学生を放っておいたら、どうなっていたかは分かりませんが…ともかく、君達は昨年度の【決闘祭】優勝者と準優勝者。イースト校にとっても、君たち二人が出場しないなんて選択肢は初めからありません。他の出場者達よりも先に、君と天宮寺君の出場はもう決定させました。これは既に決定事項です。」

「あ、ありがとうございます…」

それは、どこか以前までの砺波からは考えられない言葉。

しかし、確かに遊良のことを認めてくれているからこその言葉ということを、遊良とてこれまでの砺波から受けた教えから理解しているのだろう。

…また、【決闘祭】が中止と初めに知らされたときの遊良の落ち込み様はどこへやら。

未だに自分を認めない者が居るということなど、心の底からどうでもいいほどに…過程はどうあれ、他校の理事長達が自分を推薦してくれたということは、きっと『過去の遊良』に言ったとしても信じては貰えないことだろう。

…世界の全てが彼の『敵』だった、地獄のような幼少の頃と比べれば…今この時、自らが勝ち取った『結果』を認めてくれている者も確かに居て。

―それは、遊良にとっては何よりも嬉しいこと。

「全く、この私にここまで手間をかけさせたのだ。来月には【決島】のことも大々的に発表されるでしょうし、【決闘世界】からもうすぐ各校に全ての出場者が通達されるでしょう。これまで以上に多くの学生が出場する【決島】は、それだけ多くの学生達が奮起して臨むことが考えられますが…前回の【決闘祭】に優勝した触れ込みもありますし、【決島】でもさっさと全員負かして、軽く優勝を掴み取ってきなさい。」

「え、いや…それは…」

「仮にも【白鯨】の教えを受けているのだ、間違っても【決島】で無様な姿は見せないでください？……天宮寺君もそうです、何度も言いますが君たちは前回の【決闘祭】の優勝者と準優勝者。イースト校からの代表者の内、君たちのどちらかがもしも【決島】で簡単に負けるようなことがあれば…それは私だけではなく、君達を推薦してくれたサウス校とウエスト校の理事長たちにも迷惑がかかることだと知りなさい。」

「それは…わかってますけど…」

「くれぐれもこの私に恥をかかせないよう。そんなことになったら私は絶対に許しません。いいですか？」

「いいですかって…あの、砺波せんせ…」

とは言え、簡単にそう言放ってきた砺波の言葉に、焦りを持って遊良は返して。

【決闘祭】で、あれだけ苦しい戦いをしてきたのだ。そのどの試合も簡単に進められたわけではなく、『強者』のみが集うような『祭典』で勝ちを拾うというその大変さは、今の遊良には身に染みて分かっていること。

きっと、未だ見ぬ実力者達が…それこそ、学生レベルの『壁』を超えた恐るべき猛者が、一体どれほど居るのだろうか、と。

しかし、そんな遊良を意に介さず。砺波はソレが確定事項のようにして遊良へと言葉を返して…

「返事は？」

「…は、はい、砺波先生…」

「よろしい。それくらいやってもらわないと困ります。年末に行われる【決闘祭】と違い、【決島】の開催はデュエリア校の都合もあるため『秋の初め頃』となります。もうすぐこちらも夏休みだとは言え…決して怠けることなく、常に精進を忘れないようにしなさい。」

「はい…」

「あぁそうだ、もう一つ…来週の『召喚別授業』の時間ですが、天宮寺君もこちらに来るように伝えておいて…いや、連行してきてください。一応、彼も見ておかないと不安でしかない。」

「鷹矢も…わかりました。」

例年よりも早い時期に『祭典』が行われるということは、決闘市側はこの夏休みをいかに有意義に過ごすかによって変わってくることだろう。

いつも通りでは居られない。目先に迫った目標に対して、益々その準備を怠ることなく自らを高めておかなければ恥をかいてしまうであろうことを遊良は理解して。

「あ、それでその…『どちらでもない話』っていうのは…」

そして、これで話が終わったかと錯覚しかけたその時、遊良は急に思い出したようにして砺波へと問いかけた。

「あぁ…実はこれが本題でもあるのですが…」

しかし砺波の物言いは、本題が『良い話』でも『悪い話』でもなく、『どちらでもない話』という些か疑問に思われるような返答であり…

一体どういう意味なのか遊良には理解出来ないものの、どこか言い辛そうに口を閉ざしかけている砺波の様子はより一層この『どちらでもない話』が碌でも無い話なのでは無いかという不安を遊良へと浮かび上がらせていることだろう。

そうして…

苦い表情のまま、砺波は閉じかけていた口を開いた。

「…近々、君のクラスに転入生が来ます。」

「…え？転入生って…こんな中途半端な時期にですか!?でも転入生が来るってだけで、それをどうして俺に…」

砺波から告げられた『本題』に、思わず気の抜けたような言葉を返してしまった遊良。

しかし、その遊良の反応ももっともで…まさか【決闘祭】中止という『悪い話』と、その代わりに開催されるという、これまで以上の祭典となる【決島】の『良い話』を差し置いての本題が、まさか『転入生』に関することだったなど遊良にだって思いもよらなかったことなのだから。

こんな『何もなさそうな』時期に来るということも、そして同じクラスに来るとは言えソレをわざわざ自分にだけ告げてくるということも…

遊良からすれば、砺波の意図が全く読めない。

—しかし…

「別に、コレがただの転入生だったら私だって君をわざわざ呼び出したりしませんが…問題なのは、その姓です。」

「姓…？」

その表情を一層強張らせ、砺波は益々その苦々しい口調を強めていく。
まるで、ソレを口に出すのも憚られているような…ソレを、思い出したくも無いような…
そんな心の底から『嫌』そうな態度を、遊良にもわかるよう全面に押し出しながら、それでも遊良にソレを伝えようとしているのだ。

―そして、砺波から告げられるその『名』…

それは、遊良も耳を疑うような名であって…

「転入生の名は…『釈迦堂　ユイ』。」
「え…しゃ、釈迦堂!?そ、それってランさんと同じ…」
「ええそうです。…流石に、私も自分の目を疑いましたよ。何せあれだけ手を尽くして探した『釈迦堂』という名の痕跡が、こんなところで見ることになるとは。」

…過去、思いつく限りの手を尽くして釈迦堂　ランの痕跡を追った砺波。

―彼女を否定するために、彼女を降すために。

その名も、その人生も、その痕跡も、その全ても…およそ考えられる手段を全て使ってでもランを調べ、それでも砺波が知りえたのは釈迦堂　ランという女性の、ほんの表面上のことだけ。
家族もおらず、幼少期に一人施設に居たことしかわからず。またその施設の責任者も含めた、釈迦堂　ランを知る全ての大人が既にこの世から去っていたため、それ以上はわからなかった。
だからこそ、その砺波を持ってしても『たったそれだけ』しか知りえなかった釈迦堂　ランの『手がかり』かもしれない少女が、明日こ

のイースト校に転入してくるという事実に対しても、砺波にはどうしても警戒心を解くことが出来ないのか。
どこまでも懐疑心を隠さず…

砺波は、話を続けて…

「だが、釈迦堂　ユイ…彼女はあまりにも不自然すぎる。この時期の転入手続きもそうだが、彼女の家族構成や経歴があまりに『普通』過ぎるのです。…まるで、意図的に『普通』を作ってきたかのように『何』もなさすぎる…これでは私に疑ってほしいと言っているようなモノだとすら感じましたよ。」
「で、でも確かに珍しい苗字ですけど…単に偶然ってことも…」
「この私が、単なる『偶然』という言葉でコレを片付けるとでも?…釈迦堂　ランを心の底から憎み、世界中から釈迦堂という人間の『痕跡』を調べ上げたこの私が。…残念ですが、あの頃調べた結果では該当するのは地名ばかり…この世界に、『釈迦堂』と言う姓を持つ人間はあの『釈迦堂　ラン』を除いて『誰一人』として見当たらなかったのです。そうだと言うのに、ここにきてこんなにも『普通』の経歴しかない『釈迦堂』の姓を持つ人間が現れるなど、偶然などでは断じてないでしょう。それも、その家族含めて全員が『普通』。こんなこと、ありえるわけがない。」
「…そ、それはそうですけど…」

そのあまりの砺波の熱弁に、思わず後ずさりをしてしまう遊良。
しかし、遊良の『嫌な予感』が益々その勢いを増して彼の体へと警告を促してくるものの…どうしてもここから逃げ出すことが出来ず、ただただ襲いかかる砺波からの『嫌な予感』に対して、耐えることしか遊良には出来ないのか。
「じゃあ砺波先生、もしかして俺を呼び出した理由っていうのは…」

「ここまで言ったのだから分かるでしょう？天城君、君には近々転入してくる釈迦堂　ユイと、我々が良く知る釈迦堂　ランの関係性を探ってもらいたい。無論、嫌とは言わせません。」
「や、やっぱり…でも探って貰いたいって…砺波先生、それはいくらなんでも…」
「いいですね？我が教え子よ。」
「え、あ…」
「いいですね？」
「…は、はい、砺波先生…」
「よろしい。」

有無を言わせてくれない砺波の圧力に負けてしまっては、遊良もただ頷くしか出来ない様子。
全く気乗りしない砺波の命令に、ただただ肩を落として溜息を吐くしか遊良には許されてはおらず…
遊良とて、いくら砺波が尊敬している元シンクロ王者【白鯨】とは言え、ランのことになるとまるで『以前の砺波』に戻ったかのように回りが見えなくなってしまうのだから、それが無ければ完璧なのにとどうしても思ってしまってもそれは仕方のないことだろう。

そうして…

丁度、今週の『召喚別授業』の終了時刻が来たのか。
学業を終わらせるベルの音と共に、色々と複雑に絡まった感情の足取りで砺波の元を去っていく遊良の後姿は、どうにも哀愁漂う歳外れの背中にも見える。
確かに『良い話』だった【決島】と、遊良にとっては『悪い話』であった『転入生』…その複雑に入り混じった感情を背負い、足取りを更に重くして。

そんな遊良を黙って見送った砺波の表情は、どこか先ほどまでの苦

いモノとは打って変わってこれまた複雑な表情をしいて…

そして、遊良の姿が完全に見えなくなったところで、砺波は、ポツリと言葉を一つ落とした。

「…しかし、天城君がもし予選を通過できなければ、こちらの理事長たち全員が罰せられるということは…伏せておいたほうが良いでしょう。彼への余計なプレッシャーにしかならない。」

昨年度の遊良に降りかかった…いや砺波が自ら遊良へと押し付けた『余計なプレッシャー』が、若い学生達にどのような作用をもたらすのかは…

これまでの遊良の戦いぶりを見てきた砺波には、もう充分に理解出来ているのだろう。

果たして、戦いが激しくなればなるほど後に引けず、自ら進んで傷付くことを選ぶ教え子の姿は一体今の砺波の目にはどのように見えているのか。

絶対に負けられない戦いに身を置くには、遊良はまだまだ若すぎるということを今ならはっきりと理解できているからこそ…

昨年とは正反対の輝きを放つ鯨の瞳は、ただ優しく教え子を見送っていた。

『努々忘れることなかれ…自分が一体何なのか…』

「…え？」

不意に聞こえた空耳に…

「何だ…今のは…気のせいか？」

思わず、寒気を感じてしまいながら…

…

ｅｐ５６「感情、渦巻く」

『決闘市で多発している失踪事件の原因は未だわかっておらず、行方不明者は１０名と未だ増え続け…』

一日の終わり、既に日も暮れて各家庭から様々な食事の匂いが漂い始めている頃。

「最近物騒だよね…まだ事件の手がかり見つかってないんでしょ？」

「あぁ、捜査が難航してるんだってな。」

夕方のニュースを見ながら、遊良達３人は今もなお被害者が続出している決闘市の不可解な事件の情報を耳に入れていた。

…ソファに３人腰掛けて、見るからにくつろいでいる様子を見せていて。

行方不明者に何の関連性もなく、事件が起こった場所もこの広大な決闘市の全域におよび、その所為で警察も何の手がかりを得ることが出来ないというこの不可解かつ恐るべき事件…

そうだというのに、どこかリラックスしてソレを見ている彼らからは、全く危機感を感じられず。

漂ういつもの雰囲気は、自分達が住む決闘市で起こっている事件だというのに、どこか自分とは関係の無いことだと感じているのだろうか。

しかし、それは遊良達だけではない。

ここまでの事件だというのに、決闘市に住む者達が明日は我が身かもしれないというこの事件に対しても…

誰もが日常を崩さずに居て、それはまるで自分だけは大丈夫だと言うような、根拠の無い錯覚を無意識に信じきっているようでもあって。

「…それより遊良よ、その【決島】とやらに出てくる『何とか校』にはどんな奴が居るのだ？」
「『デュエリア校』だ。って言っても俺もよく知らないんだけど…あ、そう言えばルキはデュエリア出身なんだっけ？」
「…生まれたのがデュエリアってだけだよ。幼等部の時にこっち引っ越してきたんだから、向こうのことなんて知ってるわけないじゃん。」
「だよなぁ…」

そんな鷹矢の興味は、既にニュースから先ほど遊良から聞いたばかりの【決島】についてのことに切り替わっている様子。
遊良も、先ほど砺波から聞いたばかりのこの機密事項、まだ教員達にすら通達されていない【決島】の事を、早々に鷹矢とルキに話してしまっているのも問題があるとは思われるものの…
とは言え、砺波から【決島】に関しての事を口止めはされていないのだし、何より鷹矢も出場が決定している当事者なのだから、遊良も幼馴染達二人にこの機密事項を話すことには何の抵抗もないのか。
どうせすぐに通達される話題。だったら、その事を先に相談しておいても問題ないだろう、と。

「一応簡単に調べた感じだと…決闘市には東西南北に学園が４校あるけど、デュエリア校は中心部にある１校だけらしい。でも、学生の総数は決闘市の４校とほぼ同じ…一つの学園に、物凄い数の学生達がいるってことだな。」
「ふん、まぁどんな奴が相手でも構わん。俺が全員吹き飛ばすだけだ。」
「…簡単に言ってんじゃねーよ。こっちはお前が一番研究されてんだぞ？」
「む？」

さも簡単そうにそう言い放った鷹矢に対し、呆れたようにしてソレを返した遊良。
…デュエルとは、ある意味情報戦でもある。
それは、高名な実力者であればある程、戦績が高い選手であればある程、それだけ周囲に自分のデュエルを知られているということでもあり…それだけ、相手をする場合に対策をされているということなのだ。
だからこそ、過去の修行時代に師である祖父の命によって、大小様々な大会に放り込まれていた鷹矢は、その戦績と自身の祖父の名も相まって、世間からの注目度も認知度もかなり高いというのに…
「お前、昔から先生に言われて色んな大会に出まくってたから、デュエルの戦績もかなり出回ってるだろうが。それに去年の【決闘祭】で先生の【ダーク・リベリオン】なんて召喚したもんだから、デュエリアでもかなり噂になってるらしいし。」
「うむ、とうとう他国にも俺の名が轟き始めたというわけだな。ならば見せ付けるだけだ、この俺の強さを。」
「…ホントお気楽なんだから。相手に一番警戒されてる鷹矢が、本番だと一番不利になるってことじゃないの？」
「ルキの言うとおりだ、大体お前は【黒翼】の孫ってだけで注目されてんのに。」
「む…あんなクソジジイなど関係ない。俺は俺だ。例え相手が国外の誰であろうと、負けるつもりなど無い！俺の敵は遊良、お前一人だけだ。」
「いや敵ってお前…」
それを理解してもなお…いや、理解しているのか怪しいものの、鷹矢は『いつも通り』に豪語するのみ。
…鷹矢にとって、戦う舞台が【決闘祭】でも【決島】でも関係ない。
全ては、遊良と戦える大舞台であることには変わりないのだ。
だからこそ、そこに他人がどれだけ居ても問題はなく…ただ自分と

遊良が全力でぶつかりあえる格好の舞台であるのならば、立ちはだかる者を全て蹴散らすだけなのだろう。
昔からそう…遊良の力を誰よりも知っているからこそ、遊良だけには負けたくないのが、鷹矢の信念。
他のデュエリストなど関係ない。ただ、遊良と大きな舞台で戦う、ただそれだけのために。
まぁ、そんな鷹矢だからこそ昨年度の【決闘祭】で元ウエスト校の絶対防御、『鋼鉄』のデュエリストである十文字　哲から学んだことは、鷹矢にとっても大きかったはずなのだが…
ソレを承知してもなお、鷹矢は自らの言葉をただ正直に放つだけなのか。

「今回こそは俺が勝つ。遊良の癖に、まさか【決闘祭】で一度勝っただけでもう俺より強い気になっているわけではあるまいな。」
「んだと…鷹矢の癖に、次も俺が勝つに決まってんだろ。」
「ふん、次こそ勝つのはこの俺だ！」
「いや俺だ！」
「俺だ！」
「俺だって！」
「はぁ…また始まったよ、もう。」

…とは言え、そんな『いつもの喧騒』の板ばさみになるのは、いつだってルキ一人なのだ。
彼女もまた、この男共の決して引かない意地の張り合いに、いい加減うんざりしてきているのもまた事実であり…
言い合う男共を尻目に、若干冷えた目でソレを見ているルキ。
昔からそう。どうしてこの二人はこんな簡単な事でしょっちゅう張り合い、こんなにもお互いに対して意地でも自分の負けを認めないのか。
かと思えば、互いの弱点となるような所では当たり前のように…それこそ、互いが互いの足りない部分を無意識に支えることが当たり前

となっているという、不可思議なくらいに当たり前のその『矛盾』を、ルキはこれまでの人生で何度見てきたのだろう。
その矛盾をずっと見てきたルキからしても、遊良と鷹矢、二人の繋がりは羨ましさを感じると共に…理解出来ない男共の生き方など、理解するつもりもなければ理解したいとも思わないのだろう。
確かに、生まれた時からずっと一緒に居る二人。
しかし、そこには血の繋がりもなく、あるのは『幼馴染』と言う絆だけ。
そうだと言うのに、血の繋がった家族以上にお互いの事を理解しているというのだから、遊良と鷹矢の関係性は不安定でありつつも絶対的な安定を持ったモノというまさに矛盾。
そんな、男共の奏でる『いつもの喧騒』を、ルキは呆れたように聞き流しながら…
ふと、思い出したようにし、て彼女はその口を開いた。

「あ、そう言えばさー、デュエリア校の学長先生まで遊良の出場を推してくれたって、ホントビックリだよねー。」
「大体お前はいつもいつも……ん？…あー…そうだな。まさか『逆鱗』の劉玄斎が、って俺も驚いたよ。」
「む？『逆鱗』…げきりん…どこかで聞いた名だ…」
「物凄い有名な元プロデュエリストだろうが。現役時代には先生とも何度か対戦してるんだぞ？」
「そう言われてもな…駄目だ、思いだせん…ここまで顔が出掛かっているのだが…」
「もう、ホント人の顔と名前覚えないよね鷹矢って。あんなに特徴的な人なのに、『逆鱗』って。」
「むぅ…どうでもいい人間の顔など覚えて何になるというのだ。」
「いやどうでもよくは無いだろ…ったく、ちょっと待ってろ。部屋に『逆鱗』の試合の映像があるから、それ見て思い出せ。」
「うむ。」

そうして、先ほどの喧騒など忘れたように、徐にソファから立ち上がってリビングの外へ向かって歩き出す遊良。
それは、昔からプロの試合を見るのが好きだった遊良の『父』が、昔から集めていた古今東西の色々なプロデュエリストの試合の映像の中に、『逆鱗』の試合の物があったことを覚えていた為だ。
「確か父さんの遺品の中だったっけ。すぐ持って来てやるよ。」
「…え？」

しかし、二階にある自室へと向かい始めた遊良を、いつもと変わらぬ様子で見送った鷹矢とは対象的に…
確かにルキの表情は、遊良が出て行った瞬間にどこか『曇った』様子を見せていて。

何故なら今、遊良は言った…

―『父さんの遺品』、と。

遊良が何気なく言った『父の遺品』と言う言葉。
ソレ自体には、特に何の感慨も見せていない様子の遊良と鷹矢ではあったものの…
何気ないその単語、確かに真実であるはずのその単語、その『遺品』と言う単語を何事も無いかの様にして言い放った遊良に対して、思わず言葉が漏れてしまった程に、ルキにはどうしても感じてしまうモノがあったのだろうか。

…そう、ルキは決して忘れてはいない。

『遺品』と言う言葉を、遊良が簡単に口に出せるようになるまでの…ここまで遊良が立ち直るまでの、その軌跡を。
遊良にＥｘ適正が無いと分かったその日に、突然姿を消してしまっ

た遊良の両親。遊良への誹謗中傷が増長した中には、きっと遊良の両親が消えてしまったことも大きかったはず。

デュエリストの出来損ない、生きている価値がない。そんな言葉に混ざって遊良へとぶつけられた…

―『親に捨てられた』、『親から見放された』という、心無い言葉の数々。

それは、これまで順風満帆な生活を送っていた幼い遊良の、そのあまりに小さい心を圧し折るには充分過ぎる暴力となっていて…

世間から絶望を突きつけられた直後に、無償で愛してくれるはずの親すら目の前から消え去ってしまった幼少の子どもが受けるには、とてもじゃないが過ぎた言葉の暴力だったのだ。

―ルキは決して忘れない。あの時の遊良の、絶望に塗れた顔を…この世のモノとは思えない、あまりに惨い遊良への仕打ちを。

…そして、そんな表情の曇ったルキを見て、一体鷹矢は何を思ったのか。

鷹矢はルキの方を向いて、ただただ無言で彼女を見ているのみ。

「…何？」

「いや、お前が変な顔をしていたからな。」

「鷹矢に変な顔って言われたくないし。自分だって鉄仮面じゃん。」

「む、それは心外だぞ。こんなにも分かりやすい顔をしているというのに。」

「…遊良以外にはわかんないよ、もう。」

いつもと変わらぬ鷹矢の声質だというのに、どこかとぼけた様な感

じでルキの耳に聞こえてくる辺りはルキも流石は長い付き合いか。
まぁルキとて、鷹矢という男を良く知っているからこそ…一瞬曇った表情を見せた自分を、下手に励まそうとした…と言うわけでは絶対に無いことを、彼女もまた理解していて。
そんな、この後に鷹矢からかけられるであろう言葉を想像しているルキへと向けて…
鷹矢は、更に言葉を続けて…

「ふん。どうせ、遊良に対する要らん心配でもしているのだろう？だが無駄なことだ。遊良が吹っ切れている以上、お前がソレを気にする必要など無い。」
「無駄なことって…だって遊良のお父さんとお母さん、見つかってないってだけで亡くなったかもわからないのに。」
「だとしてもだ。遊良を放って居なくなり、今も音沙汰が無いというのは、既に竜一もスミレも、遊良には関係が無いも同然ではないか。」
「呼び捨て…」
「昔からそう呼んできたのだ、今更畏まってどうする。…それに、遊良が親に縋っていないのならば、俺達がそれを気にする必要も、アイツに遠慮する必要も無い。」
「でも…」

鷹矢の言う言葉の意味は、もちろんルキにも理解は出来ている。
いや、理解出来ているからこそ、どうしてもルキには鷹矢の言葉を簡単に飲み込むことが出来ない。
…遊良の両親の事は、ルキだって良く知っている。
全てが上手く行っていた『あの頃』、幾度となく遊良の家に泊まって過ごした、あの優しかった遊良の両親が…
遊良の事を、とても大切に思っていたはずの遊良の両親が、たかが『Ｅｘ適正』が遊良に無かったからといって、簡単に遊良を見捨てて居なくなるはずが無いと、どうしてもルキは思ってしまうのだ。

―何せ『幼馴染』の自分達が、ずっと遊良と共に居ることを選んだというのに…

また、遊良とは血の繋がっていない自分と鷹矢の『親』も、遊良を決して見捨てていないのに、まさか血の繋がった遊良の『親』が、自分の子を簡単に見捨てることがあるのだろうか…と。

そうして、どこまでも遊良を理解しているかのような鷹矢の口ぶりに…

「…私達には家族が居るのに、遊良には…」

遊良には言えない感情を、思わずルキが吐露しそうになった…

―その時だった…

「それ以上言うな。…『ソレ』は、お前もよく分かっているだろうが。」

「あ…」

いつものふざけた口調では無い、『本気』の鷹矢の放った口調。

それを聞き、ルキも思わず自分が『何を』言いかけたのかを唐突に理解したのか。

…それは、彼女も十分に理解しているはずだったこと。

いくら遊良が両親以外の他の血の繋がりを知らず、天涯孤独となってしまっても…自分と鷹矢のことを、『家族と同じくらい』に大切にしてくれていることくらい、彼女とて確かに知っているはずだったと言うのに。

―今、自分は何を言おうとしてしまったのか…

ソレを少しでも考えてしまっては、遊良の傍に居続ける資格など無くなってしまう…と、そう言わんばかりにルキの表情は沈んでいき…

「…ごめん…」
「俺に謝ってどうする。お前が何を思おうと勝手だが…これまで遊良を見てきたんだ。それを、お前が否定するのだけは駄目だ。」
「…うん。」
「大体、お前は遊良と同じでゴチャゴチャ考え過ぎだぞ。どうせ今も、『一緒に居る資格が無い』などと、無意味なことを考えているのだろう？」
「……鷹矢、何か気持ち悪いよ？」
「ふん、お前の顔にそう書いてあっただけだ。しかし図星のようだな。」
「う…」
「全く資格だの何だの…本当に下らん。」

はっきり言ってくれるのはありがたいが、核心を突いている分、言われれば言われるだけ自分の情けなさが浮き彫りになってきそうな鷹矢からの言葉の数々。
それを聞く度により深く沈んでいくルキの表情は、自分から漏れ出しそうになった言葉をどこまでも後悔しているようであり…
また鷹矢から発せられるその核心を突く言葉には、いつもの通り少しの遠慮もないものの…今はその遠慮の無さが、どうにもルキには堪えている様子。
絶望に塗れた遊良を見た、幼少期のあの時…自分の命を救ってくれた遊良を、今度は自分が共に居て、ずっと守ると誓ったはずだった。
それでも思わず口に出そうとしてしまったということは、ルキの中に微かでも遊良を哀れんでいる感情があったということなのだろうか。

それを、鷹矢の言葉で考えてしまったのだろう。際限なく沈んでいくルキの目には、微かに込みあがるモノが浮かび…
…そのあまりのルキの落ち込みようを見かねたのか。
ルキへとむかって、鷹矢が再度口を開いた。

「全く…仕方のない奴だ。おいルキ、一つ言っておいてやる。例えお前が遊良のことを何と思っていたとしても…一緒に居る事を決めるのは、お前ではなく遊良自身だ。」
「…え？」
「お前が遊良から離れようと、お前の身にどんな事があろうと…遊良の奴は、間違いなくお前と居ることを選ぶ。とりあえず、遊良の中での『お前』は、お前が思っているほど小さくはない…と、一応言っておいてやろう。」
「…」

唐突に鷹矢から飛び出してきた、彼から発せられたとは思えないその言葉。

確かに耳に入ったはずだと言うのに言葉の理解が追いつかず、ルキも思わず言葉をなくしてしまっていて。
悩みなど何も無いように振舞う癖に、こちらの悩みを簡単に吹き飛ばしてくる馬鹿。だからこそこれまで…それこそ、この歳まで関係を拗らせる事もなくずっと3人で居られたのだろうが…
いつもは好き放題に言い放題の癖して、どうしてこの男はこういった所で欲しい言葉を投げかけられるのだろうか。そんな不思議そうな顔をしながらも、こういう場面で一番大人びた言葉を放つことが出来るのは、意外にも鷹矢だったというコトをルキは再確認していて…

「う、うん…ありが…」

「何話してたんだ？」
「わっ！え、あ、遊良!?…う、ううん！別に何も！」
「うむ。」
「何だよ、気になるじゃんか…」

そして、自室から戻ってきた不意の遊良の声に、思わず心臓が跳ね上がった感触をその胸の内に感じたルキ。

そんな遊良の表情は、見るからにどこか落ち込んでいるルキの…先ほどとは、どこか違うルキの表情を見て、まさに不思議そうな顔をしていて。この短時間で何があったのかを知らぬ遊良からすれば、今まさに若干の疎外感を感じているのだろう。

「まぁいいや、鷹矢、これ入れて再生してくれ。」
「うむ。」

しかし、すぐに目的を思い出したのか。持ってきた映像ディスクを鷹矢へと手渡すと、立ち上がる前まで座っていたソファの…ルキの隣へと、遊良は腰掛けた。

「で、何話してたんだよ。」
「だから何でもないって。あ、それよりさ、デュエルディスクの調子って…」
「遊良！再生ボタンはどれだ!?」
「右端にスイッチあるだろ。」
「うむ。」
「あ、悪いルキ、何だったっけ？」
「…いいよ、やっぱり何でもない。」
「ん？そっか、じゃあいいや。」

自分がソファを立つ前と、戻ってきた今ではどことなく違うルキの

様子。しかしルキが自らそれを話さないと言う事は、今自分が聞くべきことでは無いのだと、すぐさま思い直して遊良は話を打ち切る。
―話せないことは、無理に話さなくてもいい。きっと、ルキにだって隠したい感情はあるのだろう、と。
そして、鷹矢が映像ディスクを再生機器に無事入れられたのか。映像ディスク独特の回転音が機器から聞こえ始めた…
―その瞬間…
―
『クハハハハ！オラァ！行くぜぇ！』
―再生したその瞬間に、あまりの爆音がテレビから放たれ、遊良達3人の耳を劈いた。
「うるさっ！ちょ、ちょっと音量下げてよ！」
「わかってるって！……はぁ、テレビが壊れたのかと思った…」
「ぐぉ…耳が…やられた…」
巨大なモンスターによる激しすぎる衝突音と、相手を容赦なく叩き伏せる暴力的なデュエル。そして、ソレに魅せられた熱狂的ファン達からの大歓声が音撃と化し、到底収まらぬ爆音となってスピーカーから解き放たれていて。
また、再生されたその瞬間にテレビの一番近くに居た鷹矢へのダメージが最も大きかったのか。
振動の余波で痛む耳を押さえながら、鷹矢はフラフラとした足取りでソファへと戻ってきた。
「き、気絶するかと思ったぞ…」

「もー、ビックリしたじゃん！音量上げすぎてたんじゃない？」
「普通にしてたはずなんだけどな…こんなに爆音で再生されるなんて思うわけないだろ。」
「…むぅ、まだ耳鳴りが収まらん…む？…あぁそうだ、『逆鱗』とはこんな顔だったな。思い出したぞ、何と言うか…アレだな。」
「…えっと…クマ？」
「うむ。」

そのルキの提示した例に、迷う事無く即答する鷹矢。
いや、誰だってソレを見れば、鷹矢で無くとも頷くだろう。…何せ、目の前で再生されている映像の中で響く、この轟音の中にあってもより一層轟き渡る低い轟声は、この巨漢がまさしく若かりし頃の『逆鱗』、劉玄斎であるのだと遊良達に思い知らせているのだ。

はっきりと分かるほどの、世紀末に生きているのかと見間違うほどのその体躯。
戦場を散歩してきたのかと錯覚するほどに刻まれた体の古傷と、そして何の衣装なのか『逆鱗』が纏った毛皮の姿は、ルキの言った通り確かに『獣』のソレに見えていて。
誰の目にも明らかなこと。名が体を現すと言う言葉を、これほど的確に表現している男は、世界中探したってそうそう見つからないはず。

『天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれぇ！エクシーズ召喚！来い、ランク4！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！』

――！

そんな中、ターンが入れ替わったその瞬間に、遊良達にとって聞きなれた声と、『その口上』がテレビの向こう側から聞こえてきた。
それは、現在のモノとはどこかキーが異なるものの…
彼らにとってその声は、幾度となく聞いてきた声であり…

「あ、先生だ…って、じゃあこれって先生との試合!?」
「あぁ、『殴り合い』って言われてる【黒翼】と『逆鱗』の試合の映像。俺達が生まれるずっと前の試合だけど、父さんによく見せられたから全部覚えてる。」
「ジジイ…若いな。髪の色が特に。」
「ホントだー、全然白髪じゃないねー。」
「お前ら…どこ見てんだよ。」

今よりも若々しさと荒々しさを全面に押し出した師の見慣れない姿に、鷹矢とルキの声がどこか明るくなったのは仕方のないことだろう。
何せ、天に羽ばたく【黒翼】の咆哮に重なり、観客達が今まで以上の盛り上がりを見せているこの若かりし頃の師の、こんなにも生き生きとした戦いぶりは鷹矢もルキも今まで見たことすらないのだ。
また、自分達の知らない師の姿に興味を示している幼馴染二人に、若干呆れながらも遊良もまた視線をテレビから動かさず。
そう、若かりし師が召喚した、天宮寺　鷹峰の代名詞とも呼べる【黒翼】が今ここで降臨したというコトは…
この直後に、この『殴り合い』と呼ばれている伝説の試合の、最大最上最高の見せ場と盛り上がりが巻き起こることを、遊良は知っているから。

そして…

『怒りに震える逆鱗よぉ！歯向かう愚者を消し飛ばせぇ！』

その口上が唱えられた瞬間に、より一層『逆鱗』を包む歓声が大きくなっていく。

「あ、これだ！劉玄斎が『逆鱗』って呼ばれるようになったモンスター！」

いつも父が力説していた、劉玄斎が『逆鱗』たるその由縁。

ー『見ろ遊良！これが『逆鱗』のモンスターだぞ！』

…よほど『逆鱗』のファンだったのか。

あの頃の、楽しげに話しかけてくれていた『父の姿』を、遊良は記憶の底の底に、微かに微かに思い出しながら…

『エクシーズ召喚！来やがれぇ、ランク7！【撃滅龍　ダーク・アームド】！』

―！

―【黒翼】と『逆鱗』

奇しくも黒き翼と黒き体を持つ竜同士、そしてその牙と腕のぶつかり合いは、他では見ることなど決して叶わぬ程の、遥か高みでしか行われない天上の決闘。
そんな『殴り合い』と呼ばれる【黒翼】と『逆鱗』の戦いは、各々が自身の『名』を繰り出したことによって益々その激しさを増していく。
お互いがお互いを嬉々として殴り続け、常にマウントを取り合い狂気の笑みでぶつかり合うその姿は…最早、ただの喧嘩と言うよりも更に性質の悪い、まさに『殴り合い』となっていて。

…きっとこの時の師は、本当に相手を殴り倒すことだけを考えているのだろう。

いや、【黒翼】天宮寺　鷹峰を師に持つ彼らには分かる。本当に、実際に、紛れもなく『そう』なのだ、と。
守ることなど考えず、負けず嫌いの馬鹿同士が、逃げることを先ず初めに捨て去って。
正面から衝突することを、ただただ無邪気に楽しんでいるだけなのだと、嫌でも理解してしまうのだから。

そうして…

一つの伝説となっている試合を見終わって…
まるで疲れたかのようにして、ルキがその口から言葉を漏らした。

「何か…先生らしい試合だったね…」
「うむ、馬鹿の一つ覚えのように殴り合っているだけだったな。これだからあのジジイは…」
「いやお前だって馬鹿だろうが。お前が一番先生のスタイルに似てるんだから先生のこと棚に上げてんじゃねーよ。」

「む…それは心外だぞ。俺とクソジジイのどこが似ていると言うのだ！」
「えー…【ダーク・リベリオン】使えてる時点でそっくりだと思うよ？先生以外に【ダーク・リベリオン】使える人なんて、世界中探したって鷹矢しか居ないんだし。」
「ふん！俺は俺だ、誰の孫だろうと関係無い！」

憤慨した様子でそう言う鷹矢を、呆れた目で見ている遊良とルキ。
祖父を引き合いに出されると、どうして鷹矢はこうも反発してしまうのだろうか。
また、反発しているのかと思えば祖父の『名』である【ダーク・リベリオン】を切り札に据えていたり、祖父の事を一応『師』としていたりするのだから…それは鷹矢が祖父と家族が故に、どうしても起こってしまう複雑な感情の入り乱れなのだろうと、今では特に遊良もルキも気にしてはいないが。

…リビングに木霊する、いつもの声。
このゆったりとした時間の流れと、とても居心地のいい雰囲気が溢れている彼らだけの空間は…今は誰にも邪魔されない、彼らだけの世界。
誰かの感情はどうあれど、根本的に今までずっと3人で一緒に過ごして来たのだから、もうこの雰囲気で日常を過ごすのは反射レベルで生み出せる独特の空気なのだろう。

…夜は、更けていく。

…

【決島】の事は二人には話したものの、もうすぐ転入してくるという『釈迦堂』という名の新入生のことは、遊良も二人には伏せてある。
それは、遊良からしてもあの【化物】である釈迦堂　ランと、近々

転入して来る釈迦堂　ユイという転入生に、何かしらの関係があるとはとても思えず…
それは、一度だけ実際に邂逅したことのある、遊良だからこその感覚。
あの孤高で孤独で、それでいて強すぎるが為の『孤立』すら心地よさそうに振舞うあのランと関係のある者が、こんなに簡単に見つかるとも現れるとも思えないために。
砺波の考えすぎだったならばそれでいい。それとなく本人と話してみて、何事も無く話を終わらせて、そして砺波に当たり障りなく報告して、それで終わりにする、と。

…

『日常』が過ぎてゆく。

目に見えている今の現状が、全て上手く行っていると錯覚するほどに…
今の遊良の周囲に流れる雰囲気は、どこまでも彼の日常、穏やかな日々その物。

…しかし、遊良は知らない。

この、全てが穏やかに過ぎてゆく日々の…

―その裏で、その先で、その向こうで

一体、何が待っているのかを。

未だ、何も知らず。未だ、何もわからず。

目に見えるモノだけが全てじゃない。見えるけれども見えないモノが、この世界には多々あって。

…しかし、今この時は、まだ何も見えていない。

今は、ただゆっくりと…

—日常が、過ぎてゆく。

—…

ｅｐ５７「終わる、安息」

「【竜巻竜】の効果を発動！オーバーレイユニットを一つ使い、理事長の伏せカードを1枚破壊！」
「ほう、ウェーブ・フォースを破壊してきますか…」
「よし！続いて俺は【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】の効果発動！オーバレイユニットを一つ使うことで、このターン、アイアン・ヴォルフはダイレクトアタック出来る！そしてバトルだ！そのまま【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】でダイレクトアタック！」

イースト校にある実技用スタジアムの一つ。
しかし実技用と言っても、かなりの収容人数を誇るそのだだっ広いスタジアムだというのに…この場にあるのは『たった3名』の人間の姿と、そしていくつもあるデュエル場の内、使われているのはたった一つのレーンという光景が広がっていた。
だが、この広い実技用スタジアムでこんな光景が繰り広げられる原因など、たった一つしかないだろう。
…そう、この今週の召喚別授業が行われていたそこでは今、砺波と鷹矢による激しい攻防が行われていたのだ。

「…しかし、【リミッター解除】を使うのがバレバレです。そんなモノが簡単に通ると思っているのですか？直接攻撃宣言時に罠カード、【波紋のバリアーウェーブ・フォースー】を発動！君の場の【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】と【竜巻竜】をデッキへ戻す！」
「ぬ!?同じ罠を伏せていただと!?」

…いや、応酬と言うよりは猪突猛進的に向かっている鷹矢を、砺波が難なくあしらっていると言った方が正しいか。
【超古深海王シーラカンス】を筆頭に、幾重にも群れを成した砺波の堅牢なフィールド。
その堅牢な砺波の場を、前のターンに【励騎士　ヴェルズ・ビュー

ト】を対処され攻め手を欠いた鷹矢が、持てる手札を使い切ってようやく切り開いたチャンスだったというのに…

まるで自分の攻撃の手立てが読まれていたと思える砺波の二重の罠に、自分からぶつかりに行ってしまったような錯覚に襲われている様子。

「天宮寺君、君の柔軟な攻めは確かに評価に値します。…だが、状況に応じた戦法を取るということは、裏を返せばそれだけ相手に誘導されやすいと言うことでもある。」

「…この俺が…誘導されていた、のか？」

「えぇ、私がこれだけ場を整えれば…この後の君は、直接攻撃するしか残された手は無いですからね。まぁ、攻撃を優先せずに1枚でも罠を破壊してきたのは褒めてあげましょう。」

「ぐ…」

簡単そうにそう言い放つ砺波ではあったものの、そもそも決まった戦法しか取ってこないＣＰＵとは違いその時その時の感情が入り乱れる対人戦において、相手をコントロールするような真似はほぼ不可能に近いと言えるだろう。

何せ『デュエル』とは、双方が同じカードや戦法を使っているわけでもなければ、相手の手札や伏せカードの情報が開示されているわけでもなく…

この世界にある膨大な数のカードから、デュエリスト達が各々自分自身で考え選んだカードを常に調整してデッキとして組み立て、それがドローという不確定要素によって混ざり合い、その結果として『無限大』とも呼べる戦術が一つ一つの状況ごとに存在しているのだ。

ゆえに、今置かれている状況を打破するべく全力で動いてくる相手が、どのカードを使ってくるのかもわからないというその状況で…相手を自分の思った通りに動かすなど、よほどの実力差と先見が無ければ不可能。

「…では私のターン、ドロー！このまま【白闘気海豚】でダイレクトアタック！波濤のアクア・ソニック！」

―！

「ぐぅ…」

…とは言え、元シンクロ王者【白鯨】を持ってすれば、その『実力差』と『先見』の双方を兼ね備えることなど、出来ていて当然のレベルではあるのだろうが。

鷹矢　ＬＰ：１４００→０（―１０００）

―ピー…

他の誰も居ないスタジアムに鳴り響く無機質な機械音。

それは、大海を遊び泳ぐ白き者が無慈悲にも放った、その水の波動によって鷹矢のＬＰが底を突きデュエルの終了を告げたことを示していて。

しかし、本来ならば鷹矢は召喚別授業が行われているこの時間、自身の持つエクシーズのＥｘ適正の授業が行われている他のスタジアムへと出席していなければならないはず。

その、遊良にのみ許されているはずの、この【白鯨】からの『特別授業』を鷹矢もまた受けているというこの状況は…

「ふむ、改めて君の力を測らせてもらいましたが…とりあえず、この辺りにしておきましょう。これならば、一応及第点と言った所でしょうか。」

「…ほとんどＬＰを削れなかったぞ…」

「当たり前です。全く、私を誰だと思っているんですか。」

それは先週言いつけられた通り、『次回の召喚別授業の時間に鷹矢を連れてくること』という通達を遊良が守ったために他ならない。
それも偏に、既に【決島】に参加が決まっている遊良と鷹矢を、砺波が直々に鍛えなおすという名目のため。
しかしその真意は、遊良が【決島】の本選に進めなければ、遊良を推薦した『決闘市側の理事長達』全員が処罰を受けてしまう事の回避の為と…
放っておいては何をしでかすか分からない鷹矢の、現状の実力の把握と今後の行動の制御のためと言うことは、今の遊良と鷹矢は全く持って知らないことではあるのだが。

「ぐぅ…不完全燃焼だ！理事長！もう一度だ、もう一度俺と戦え！」
「いいえ、もう時間です。…君が遅刻してこなければ、もう一戦くらいは出来たんですがね。」
「ぬぅ…」

…まぁ、前もって伝えてあったにも関わらず、それを忘れて堂々とエクシーズの召喚別授業に参加していた鷹矢を大慌てで遊良が連行してきたことは…また、別の話。
そして、砺波はその視線を鷹矢へと一度向けたかと思うと、ゆっくりとその口を開き始め…

「…しかし、そのふてぶてしい態度はさて置き…流石は【決闘祭】の準優勝者。そこの後ろに居る誰かさんよりも、随分まともなデュエルが出来るようで安心しましたよ。」
「む？」

そう言い終わった砺波の視線は、たった今デュエルを行っていた鷹矢を越え、スタジアムの端で鷹矢の後ろで今のデュエルを観戦してい

た遊良へと、呆れたようにして突き刺されていた。
…また、鷹矢の後ろで棒立ちになって立たされていた遊良も、砺波からのその突き刺すような視線を痛いほど感じたのか。
砺波がどうしてそんな言葉を吐いたのかも、遊良は確かにその理由を理解しているのだろう。どうにも苦い顔をして、冷や汗をかきながらバツの悪そうな目線を、ただ宙に彷徨わせている。

「それに比べて天城君、今日の君はどうしたのですか？流石に、今日のプレイングには酷いとしか言い様がありません。攻めるべき場面で動いて来ず、守るべき場面で全く動かないとは。」
「ち、違うんです砺波先生…あの…」
「違う？何が違うと言うのです。まさか、事故を起こしていたとは言うまいに…仮にもこの私の教えを受けている君が、事故を起こして動けませんでしたなど、言い訳にすらなりはしません。」
「い、いえ、その…」

砺波から繰り出される言葉の数々に、遊良の冷や汗は止まる気配を見せず。
…そう、今日の砺波の『特別授業』で、遊良もまた今までと同じように砺波と何度もデュエルを行った。
しかし先ほど砺波が言った通り、今日の遊良のデュエルはお世辞にも出来がいいとは到底言えず。同じ回数デュエルを行った鷹矢と比べても、その差は誰の目にも明らかなほどに、今日の遊良のデュエルは『酷い』としか言い様がなかったのだ。

攻めも守りも、そしてカード捌きも中途半端で…いつもなら勢い良くデッキを回転させる遊良の面影が、今日は全く見られていなかったというその出来の悪さ。
この姿を他人が見れば、【決闘祭】の優勝など本当に何かの間違いであったのではないかと錯覚するほどに…とても同じデュエリストとは思えないくらいに、見ていられない程のデュエルの出来栄え。

どうして、そうなったのか…

その原因は、もちろん遊良にはわかっていて…

「今日は、その…デュエルディスクが…全然、反応してくれなくて…」

弱々しい言葉で、しどろもどろな返事で。

そう、今日の遊良のデュエルでは、遊良の行動の要である【堕天使の追放】や、守りの要である【背徳の堕天使】といった、遊良にとっての主要なカードがここぞという場面で全く反応していなかったのだ。

幸い、まだモンスター効果を使ったり他のカードでその場を凌いだりは出来たものの…おかげで、今日の遊良のデュエルは自他共に認める『酷い』の一言。

あれだけちぐはぐで噛み合っていないデュエルを行ってしまっては、砺波も呆れて物を言えない様子なのは仕方ないだろう。

そんな砺波は、焦って言い訳がましく言葉を続ける教え子に何を思ったのか。少々苛立ちを見せながら、遊良へと向かって再度その口を開いた。

「だったらさっさと修理に出してきなさい！全く、こんな調子では【決島】すら危ぶまれます！大体、君の結果にはただでさえ…」

「…え？た、ただでさえ？」

「…何でもありません。…とにかく！君は早く調子を取り戻すことだけを考えなさい。くれぐれも、【決島】で無様な敗北だけはしないように。相手側を、全て自分が倒すくらいの勢いで望みなさい。いいですか？」

「は、はい、砺波先生…」

いくら遊良には伝えられない『裏』の事情があるとはいえ、砺波も

今日の遊良の調子を見てしまってはその不安が大きくなってきてしまうことも仕方ないことだろう。
何せ、遊良が『予選』を突破出来なければ自分だけではなく、遊良をわざわざ【決島】に推薦してくれたサウス校理事の獅子原　トウコや、ウエスト校理事の李　木蓮までもが処罰を受けてしまうのだから。
…自分だけならばまだいい。しかし、自分の教え子を認めて、そして信じてくれた『盟友』達にまで迷惑をかけるわけにはいかず。
戦うのは、自分ではなく教え子。
今日の遊良の『酷い』様子を見て…砺波は、この時ほど戦いに臨むのが自分ではなく教え子だということが、ここまでのプレシャーとなるのだと言うことをより深く理解したことは言うまでも無く。
そして、次に砺波は、未だ不完全燃焼な態度を崩さずに居る鷹矢へと向かいなおすと…

「さて、では天宮寺君。今日の君を見てよくわかりました。君は今後、私の授業には参加しなくても結構です。」
「む？」

鷹矢へと告げられた、砺波からの突然の物言い。
【決島】でのイースト校の威信がかかっているからこそ、砺波はわざわざ鷹矢を呼び出したというのに…たった一日で授業に来なくてもいいという言いつけは、少々横暴が過ぎるとも取れてしまうことだ。
―とは言え、流石に今日の授業に遅刻してきたから…とは、砺波だって言いはしないはず。
何せ、先ほど遊良へと向けられた苛立ちを含んだ言葉と違い、今の鷹矢へと向けられている砺波の声は、もっと別の感情を含んでいたのだから。

「…理事長よ。自分で呼びつけておいてもう、来なくても良いとは一体どういうことだ。」

「…話は最後まで聞きなさい。今日は君の力を改めて確認しましたが…君には、天城君とは別の鍛え方が必要のようです。」
「別の鍛え方…だと？」
「ええ。もしかしたら、君も昔、鷹峰に同じような事をやらされていたのではないですか？」
「ジジイと同じような…む!?ま、まさか…」

そんな砺波の含みのある言葉に、鷹矢は何故かその『心当たり』があるかの如き様子を見せていて。

…どうにも感じる、嫌な予感。

そう、幼少の過去、祖父の元での修行時代に、『似たような事』をさせられていたからこそ、鷹矢には心の底から面倒事のソレが、どうしても思い浮かんできてしまうのだろうか。

しかし、そんな鷹矢を意に介さず。

身構えている鷹矢へと向かって、砺波は言葉を続けるのみ。

「そうです。天宮寺君、君はもうすぐ始まる夏休みの間、大小様々な大会に片っ端から出場しなさい。決闘市の内外、またプロアマも問いません…いえ、寧ろプロが出場するような大きな大会を狙って行くのです。無論、出場費と交通費は私が出しますし、プロオンリーの大会には私から推薦をしてあげましょう。」
「…ぬぅ、やはりジジイと同じことを…しかも今度は規模がでかい。だが、流石にそれは面倒臭過ぎでは…」
「いいですね？」
「…う、うむ…わかった、わかったからそんなに圧をかけるな。」
「…全く、一体君の口の聞き方はいつになったら直るんでしょうか…本当に鷹峰にそっくりです。」

いくら傍若無人の鷹矢と言えど、師である祖父と同じ部類のオーラと圧を放ってくる人種を相手にしては、流石の鷹矢を持ってしても抗うことを許されてはおらず。
珍しく怯んだ様子で観念したように、自らに言いつけられた砺波からの面倒事を嫌々ながらも承諾し…かつて祖父にやらされた修行を思い出しているのか、心の底から面倒臭がっている態度を見せている鷹矢。
また、その一向に直る気配のない鷹矢の大きな態度に、砺波は一つ溜息をついたかと思うと…
その視線を再度遊良へと戻し、さらに言葉を続けて…

「あぁそうだ、天城君、君は今後も変わらず私が直々に見てあげましょう。とりあえず、今日の反省として今回のレポートは5倍です。」
「ごぼっ!?ちょ、砺波先生、それは流石に…せめて3倍くらいに…」
「いいえ、これは罰です。期限通り、次回までに提出すること。デュエルディスクもさっさと修理に出してきなさい。異論は認めません、それとも、10倍の方がお好みで？私はそれでもいいんですがね。」
「う…」

遊良には、今日の罰としてかつてない程の量のレポートを砺波は襲い掛からせた。
その判決には遊良も思わず焦りの声を漏らしてしまったものの…
しかし、今日の彼の出来栄えを考えれば、レポートが5倍で済んだのはある意味遊良にとっては幸運には入るのではないだろうか。
…何せ、これで鷹矢の出来栄えまで砺波の想像以下であったならば、きっと遊良に降りかかる罰の量は考えられないほどに跳ね上がっていただろうから。
どうせ、鷹矢に追加でレポートや課題を出された所でその全ての面倒は遊良が請け負うことになるのだ。それを加味すれば、鷹矢に出さ

れた言いつけが彼自身で行動する問題でよかったと言う事になるのだが…ソレを、今の遊良は気付くことも出来ていない。

「では今日はここまで。これで下がって結構ですよ。」

「あ、ありがとうございました…」

「うむ…」

そして、砺波の言葉の終わりと同時に、イースト校全土に鳴り響く鐘の音。

それは本日の授業の全てが終了したことを、イースト校の全学生達へと教えていて…また、ソレと同時に砺波がこの特別授業の終了を宣言したことによって、遊良と鷹矢も自分の荷物を纏め、スタジアムを去ろうと下がっていく。

「腹が減ったぞ遊良！帰って肉だ！肉が食いたい！」

「昨日も肉食っただろうが、ったく。わかったわかった、俺は帰りにディスク修理に出しにいくから、ルキに買い物頼んどくよ。その代わり、お前は先に帰って夏休みにやってる大会調べとけ。」

「うむ！」

…そんな彼らのやり取りは、迫っているとは言えまだ【決島】の開催もやや先のためか、どこか緊張感や切迫感等といったモノは感じられないことだろう。

気が抜けている…とは言いがたいが、それでも昨年のような『後に引けない』ような理由が今の彼らには無い以上、その歳相応の楽観している様な反応も、また仕方がないことではあるのだろうが…

しかし一方の砺波は、教え子達がスタジアムを出て行って、その話し声が完全にスタジアムの中から消え去ってから…

「しかし、どうして昔の鷹峰が『自分の孫だけ』を数々の大会に放り込んでいたのか…今日のことでよくわかりました。天宮寺君…彼は…」

静かに…それはそれは静かに呟かれた鯨の声。
それは、決して他の誰にも聞かれてはならないかの如く、とても小さく反響した音波ではあったものの…砺波以外には既に誰も居なくなったスタジアムなのだから、他の誰にも気遣う必要すらないはずだというのに。

それでも、その砺波の言葉はまるで自分自身にすら聞こえないように、その白き髭の間から漏れ出して…

その、虚空へと向かって呟かれたその言葉の続きは…

―それ以上、【白鯨】の口からは出てこなかった。

―…

「じゃあ一通り見たらまた連絡しますから。それまではその代用器を使ってください。」
「はい、よろしくお願いします。」

決闘市の東地区にある、デュエルディスクの販売を行っているとある店。その、丁度帰宅路の途中にある店に、遊良はデュエルディスクを点検に出していた。
今年度に入ってから、確かに度々カードが反応しなかった遊良のデュエルディスク。
電話機能やネット機能などには異常がなく、また今までのデュエルでもそこまでデュエルに支障はなかったために遊良も今まで点検に

は出してはいなかったのだが…
とうとう今日の授業ではデュエルに支障が出てしまい、あれほど砺波に口うるさく色々と言われてしまっては、流石に遊良もこれ以上問題を先延ばしにするわけにはいかなくなったのだろう。
…だが、とりあえずはこれで問題はないはず。
精密検査と点検をしてもらえば、もうカードが反応しないといったような不具合はでないはずであるし、それまでは新品に近いこの代用器のディスクで事足りるはずなのだから。

そうして…

ほぼ新品に近いその代用器のディスクにひとまずデッキを仕舞い、そのまま遊良は店を出たその足で、鷹矢とルキが待つ自身の家へと向けて歩き出した。

「代用器だから番号入ってないし、電話もできないからさっさと帰らないと。」

…店員と話し込んでいたら、少し遅くなってしまった。ルキには買い物を頼んでいるし、鷹矢は先に帰っていて腹を空かせている。早く帰らなければ。

そんな『いつもの』感情を浮かべて、街を歩き抜けていく遊良。

帰宅の時間と重なるこの夕暮れ時。
すれ違う人々から以前にも増して『視線』を向けられ、時には声もかけられながら。
しかし以前と違うのは、その人々から向けられる視線や言葉が、『昔』のような暴力に塗れたモノでは無いということ。
幼少の頃はこうして街を歩いていただけで、好奇の視線と侮蔑の言葉、そして無関心と無価値をぶつけられ続けていたというのに…

好奇の視線は微かな羨望を持ったモノへ。侮蔑の言葉は何気ない挨拶へ。無関心と無価値は関心と功績へ。
今の自分に向けられるのは、昔のような否定や侮辱とは違う。確かな『肯定』を持った新しい感触で、ソレに慣れていない遊良へと向けられているのだ。
…それを考えると、今の決闘市に吹いているこの『新しい風』は、遊良からすればどこか不思議な感覚に陥っていることに違いなく。

―随分と、街は変わった。

いや、街だけでは無い。人々から向けられる言葉もそうだが、自分を取り巻く環境や、自分自身のデュエルその物まで、何もかもが絶望に塗れていたあの頃とは違う。

…師である鷹峰の元に辿りつく以前には、まるで自分が人間では無いかのように物を言われ、時には直接的な暴力を向けられることもあった。
嘲笑と軽蔑の視線を刺され、視界に入ることさえ否定されたこともあった。
食品から衣服、果てはカードに至るまで何も売ってもらえず、基本的な人権すら否定されたこともあった。

その頃は…本当に、命を絶とうと考えていた。

そんなあの頃と比べて、今は何と充実しているのだろうか。

自らの行動の結果とは言え、この『新しい風』が吹き始めた決闘市の雰囲気を自らの肌で直に感じている遊良の表情は今…ソレを改めて実感して、自分が自分ではないかのような戸惑いにも似た雰囲気を見せていて。

…確かに、『Ｅｘ適正』は捨て去った。

ずっと渇望していた力を捨てる、ずっと抱いていた希望を捨てる。そのあまりの苦渋の選択を、遊良が後悔していないと言えば…それは、間違いなく嘘になる。

―しかし、あの日、あの時、あの場所において

自分が取ったあの選択は、絶対に間違ってはいなかったはず。何せ、Ｅｘ適正を捨てた代償に得た【堕天使】の力がなければ、あの時鷹矢とルキを助けることなど出来なかったのだし、【決闘祭】の優勝も『異変』の真実も、そこに辿りつくためには偏に【堕天使】の力があったからこそなのだ。

きっと今の遊良の雰囲気は、そう思っているに違いないことだろう。

―昨年までとは違い、全てが上手く行っているというこの今。

【決闘祭】を越える規模で行われる【決島】という祭典。それが、自分が学生である現在に開催されるというタイミング…ソレに加え、『他校の理事長』や『他国の学長』と言った決闘界の実力者や有識者が、自分の祭典への出場を後押ししてくれているという事実。

憧れていた王者【白鯨】からの『特別授業』もそう、それは『これまで』の遊良にとっては、決して考え付かないような『幸運』に違いない。

足が軽く、体が軽い。あんな目にあっていた自分が、こんな『幸運』を得て良いのだろうか。きっと、一昔前の自分にソレを伝えた所で、絶対に信じてはくれないだろう…と、そんな感覚を覚えながらも遊良の足取りは、益々帰宅路を軽やかに進んでいく。

これから待ち受ける【決島】の事を考え、そしてソレが楽しみで仕方がないといった表情で、遊良の心臓の鼓動は更なる高鳴り始めながら。

―そうして…

もうすぐ家へと到着する、その人通りの少ない路地に遊良が入った…

―その時だった

『努々忘れることなかれ…自分が一体何なのか…』

「…え？」

曲がり角を曲がってすぐに、不意に聞こえた誰かの『声』。
聞きなれない人の声、少なくともソレは遊良の知る者の声ではなく、また時間も時間のためか遊良が周囲を見渡しても、人が誰一人としてその周囲には影の形すら見当たらず…
その声の出所が不明という不気味さが、先ほどまでとは全く異なる鼓動となって遊良の胸を内側から叩き始めているのか。

「だ、誰の声だ…？周りに人なんて居ないし…」

しかし今、確かに聞こえたのだ。
これを気のせいと言うには、あまりにもハッキリとしすぎている程に…遊良の耳には今の『声』と『言葉』が、どうしようもなく頭の中で反響していて。

―自分が、一体何なのか…

そんな不可解で、どこか不快にも感じてしまう様なフレーズに…逸り始めた心臓の鼓動を、遊良はどうしても抑えられず。

不快、不愉快、不可思議、不安。

その言葉から、どうしてここまで心がざわつき始めるのか。
その理由など遊良にはわからず、辛うじてその『声』が女性的なモノなのだと理解は出来たものの、それが遊良の記憶の中には存在しない人の声だったからこそ、その異質な幻聴がより一層異常なモノだということが際立っていて。
これが単なる気のせいだと思えたら、一体どれほど楽だったのだろう。しかし、これを単なる気のせいだと切り捨てることなど出来ない程に、先ほどの『声』は『誰か』の声だったのだと理解してしまっている。

そんな感情と共に、他の誰の気配も感じない道路の真ん中で、遊良は流れ出てくる冷たい嫌な汗を拭い…

一つ深呼吸をしようとして、息を吸い込もうとした…

―その時…

「…おい。」

背後から、突然『別の声』が放たれた。

「ッ!?」

周囲に人が居ないと完全に油断していた遊良に、先ほどとは比べ物にならない程に湧き上がった寒気と鳥肌。

しかし、ソレを気にする間もなく瞬間的に振り返り、今さっきまでは絶対に人が居なかったであろう方向へと、急いで視線を動かす遊良。

…それは再び耳に飛び込んできた『別人』の声の方。その気持ち悪さを覚える『ノイズ』が入ったような声の主の方へと。

―そこには…

「見つけた…あまぎ…ゆうら…」

「…だ、誰だ!?」

―漆黒の装束、ノイズの声

そこに居たのは、まるで誰なのか分からぬ者の姿。

顔が見えぬ怪しい『フード』を深く被り、全身が漆黒のコートに包まれていて。少し離れた場所から放たれる、恐ろしいほどの怒気と圧

倒的な怨嗟、そしてそこに居るのに『居ない』と錯覚するほどの気配の無さ。

…この平穏な今の決闘市には、まるで不釣合いなその怪しき者。

たった今周囲を見渡したときには居なかったはずの、いつの間にか目の前に佇んで立っていたこの『フードの男』の虚無感は、遊良にとっては恐怖以外のどんな感情も与えては来ないことに違いなく。

…先ほど聞こえた女性的な『声』と、このフードの男の声はまた別物。

ノイズ交じりのその声は、本当にその漆黒のフードの奥にあるであろう口から漏れ出しているのかすら怪しいことだ。

そんなフードの男は、その憤怒をまるで弱める事無く遊良へと向かわせ…

…更に猛ったようにして、ソレをぶつけ始めた。

「…誰でもいい…あまぎ…ゆうら…オマエを…許さない…」

「な、何言って…お前！一体誰なんだよ！」

「うるさい…うるさい煩い五月蝿い！オマエの声を聞いていると虫唾が走る！オマエの顔を見てると！イライラするんだよ！」

―！

フードの男の叫びに応じ、怨嗟の篭った憤怒の圧力が遊良へとぶつけられ…遊良の内なる本能が、一刻も早くこの場から逃げ出せという警笛をその体へと鳴らして。

誰かも知らぬ目の前の男に、こんなに恨まれるような覚えすらない遊良からすればこのフードの男の声も気配もその全ては、遊良にとっては畏怖そのモノ。

…まるで、怒りに狂った獣のソレ。

そんな狂ったフードの男は、その腕を静かに持ち上げ始めたかと思うと、長く伸びた袖の下から、自らのデュエルディスクを見せ始め…

「…デュエルだ…オマエを…消し飛ばしてやる！」

—！

「ッ!?」

再び中てられる、容赦の無い怒号の圧力。

—意味のわからないままに、わけのわからないままに。

顔の見えない漆黒のフード、その奥から轟いてくる有り余る程の憎しみの重圧に、思わず遊良も後ずさりしてしまって。

—尋常じゃない、常人じゃない。

いきなりこんな危ない者からデュエルを挑まれた所で、それを受ける義理など遊良には無いだろう。一刻も早くこの場から駆け出して、身の安全を確保することが最優先。

（くそっ、何だってんだよいきなり…や、やるしかない…のか？）

…しかし、それが出来ないであろうことを、どうしても理解してしまう遊良。
その見るからに危ない雰囲気を纏ったフードの男を前にしては、遊良は嫌でもそう悟るしかないのだろう。
そう、このフードの男から感じる謎の『怒り』と圧力は、遊良が逃げた所で、決して許してはくれないことを証明していて…例えこの場から一目散に逃げ出したところで、どこまでも追ってきそうな恐怖を遊良の心にまざまざと与えてきていたのだから。
…幸い、調子の悪かったデュエルディスクは修理に出したばかりで、今自分が持っているのは新品同様の代用器。とにかく一瞬で、全力で片を付ける。
持てる力の全力で、この場を切り抜けて逃げるしかない…と、遊良がその決意を深く固めて…

「な、何だってんだよ一体…けど、そっちがその気ならやってやる！」
「いくぞ…」

そうして…
お互いにデュエルディスクを展開し、今にも暴れだしそうなほどに狂った様子のこのフードの男を前にして…
住宅街だというのに、周囲に全くと言っていいほど通行人の気配を感じないことにも、遊良は違和感を覚えることも出来ずに…

―デュエル！

突如、始まる。

先攻は、フードの男。

「…魔法カード、【儀式の下準備】発動。デッキから【祝祷の聖歌】と【竜姫神サフィラ】を手札に加える。」
「なっ!?ぎ、儀式!?」

いきなりフードの男が発動したそのカードを見て、思わず驚愕の声を漏らさずにはいられなかった遊良。

…それは、今フードの男がデッキから手札に加えた、その『2枚のカード』が遊良にとってはあまりにも聞きなれぬ、しかしあまりにも見知った…そして、あまりにも意表を突かれたカードであったため。

―儀式召喚

この世界には、古の時代から確立されていた『儀式召喚』と言う召喚法が存在している。
それは、『融合魔法』とは異なる、専用の『儀式魔法』を用いて『特別』なモンスターを異界から降臨させる、Ｅｘ適正を必要としない召喚法。

…しかし、それを専門に扱う者など、この『Ｅｘデッキ主義』の現代には存在すらしていない。

様々な戦術が繰り広げられるプロの世界においても、アドバンス召喚よりも太古の召喚法である儀式召喚を扱う選手など決闘界には存在しないほどに…
時代の流れに置いて行かれたという意味では、遊良が進んで扱うア

ドバンス召喚と似たようなモノではあるものの、この『誰もが知る召喚法』である儀式召喚は今のこの『Ｅｘデッキ主義』である現代においては、誰もが使え、しかしアドバンス召喚よりも人々の選択肢には浮かび上がらないほどの太古の召喚法となっているのだ。

…それは、悲しき時代の成れの果て。そして、哀しき時代の無情な流れ。

確かに、『儀式』に関連したカードはこの時代にだって存在していて、そして新たな儀式に関連したカードだって僅かながらも製造されてはいる。

しかし、プロの世界においても扱う者の居ない儀式召喚と違い、今のこの時代においてもアドバンス召喚を扱う者が世界中に少なからず居るということは、『儀式召喚』と『アドバンス召喚』は進んできた道が違うということ。

また、『Ｅｘデッキ主義』のこの時代。

世界の人々の関心は『儀式』には向かず、Ｅｘデッキから飛び出してくる様々なＥｘモンスターにのみ注目を集めていて…

だからこそ、今の時代において『儀式』に関連したカードの流通はとても低く、そしてこの時代においてその存在は、その物すら見ることがほぼ皆無というのがまた現状。

—それもまた、この世界の流れ。

「儀式…お前、本当に何者なんだ…？」

それ故に、この現代に生きる遊良も儀式関連のカードを実際にその目で見た事も無ければ、ソレを使う者すらその脳裏には浮かんでは来ない。

それほど儀式召喚というモノはこの世界では零細な存在であり…また、ソレを使おうと考えている者も、この世界には全くと言っていい程存在しないというレベルであって。

「うるさい…うるさい煩い五月蝿い！誰でもいい…誰だっていい！オマエなんかに名乗る名なんて無い！オレは儀式魔法、【祝祷の聖歌】を発動！手札の【デーモンの降臨】を生贄に、【竜姫神サフィラ】を儀式召喚！」

―！

【竜姫神サフィラ】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２４００

そんな召喚法を、まるで当然のようにして意のままに操ってくるこの目の前のフードの男の場に現れるは、神光を纏いし竜の姫。

―知ってはいる、知識として。

しかし遊良はソレを実際に見たことが無ければ、その力を喰らったことすらないのだ。
そんな戦ったことすらない儀式モンスターを繰り出してくるこの相手は、対峙している遊良からすれば本当に誰かもわからず、また心の底から不気味であることに違いなく。

「…オレはカードを一枚伏せて、このエンドフェイズに【竜姫神サフィラ】の効果発動。デッキから２枚ドローし、その後手札を１枚捨てる。ターンエンドだ。」

フードの男　ＬＰ：４０００

手札：5→3枚
場：【竜姫神サフィラ】
伏せ：一枚

「お、俺のターン、ドロー！」

そうしてターンが遊良へと移り、嫌な鼓動をかき鳴らす心臓を押さえて遊良はデッキからカードを引いて。

しかし、その見慣れぬ青きカードと、得体の知れぬフードの男のノイズ混じりの声を前にしては…どうしても呼吸が浅くなり、また痛いほど跳ねる心臓の鼓動がその手を宙に固まらせているのか。

「どうした？恐怖でデュエルの仕方も忘れたのか？」

「くっ…魔法発動、【トレード・イン】！【堕天使スペルビア】を捨てて2枚ドロー！【闇の誘惑】を発動し、2枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外する！」

しかし、いざ始まってしまったデュエルの最中で、ただ棒立ちに成っているわけにもいかないだろう。

この直接耳に響いてくるようなノイズの声を、必死に掻き消すかのようにして遊良は『いつもの様に』ドローカードを用いてデッキと手札を回し始める。

―確かに、戦ったことのない儀式召喚。しかし、それに驚いてばかりもいられない。

見るからに怪しいこのフードの男の雰囲気と、そして狂ったような怨嗟の憤怒を直接目の当たりにしてしまっては…遊良とて、一刻も早くこの場を切り抜けて去ってしまいたいだろうから。

そうして、迫り来る恐怖と焦燥を振り切るかのような遊良の手が、

自身の手札から一枚のカードを発動させようとして…

「よし！俺は【堕天使の追放】を発動！」

…

しかし、反応が無い。

「お、おい！代用器なのにどうして反応しないんだよ！【堕天使の追放】発動！発動だってば！おい！」

何度差し込んでも反応しない、遊良の発動したそのカード。

交換したばかりで、新品同様の代用のデュエルディスクだというのに…

先ほど点検にだしたばかりの本来のデュエルディスクと同じように、何度差し込んで何度発動を宣言してもソレは反応する素振りすら見せてはくれず。

…一体、コレはどういうことなのか。

発動のエフェクトすら場には現れず、効果処理すらされずに墓地へもカードが送られないこの状況には、遊良も意味が分からずに焦りの声を漏らすしかなく…

「…何をしている…遊んでいるならさっさとターンエンドしろ！」

「ぐ…だ、だったらモンスター効果だ！【堕天使イシュタム】の効果発

動！【魅惑の堕天使】と共に捨てて…おい！何でイシュタムの効果まで発動しないんだ!?さっきまで使えてただろ!?【堕天使イシュタム】！効果発動だ！」
「…惨めだな、一人で騒いで。」
「なっ!?」

また、今日の『特別授業』の時には使えていたはずの、堕天使の『モンスター効果』までもが、今は反応すら見せる様子がない。
発動もせず、反応もせず。
いつものように、イシュタムと他の堕天使カードを何度も墓地へと送ろうとするも…デュエルディスクは全く効果処理を進めてはくれず、カードが墓地に吸い込まれてくれない。
その原因すらわからぬ遊良からすれば、この切羽詰っている現場でこの不具合は、その思考を白紙にするには充分であり…
下手をすれば身の危険すら感じているこの状況において、フードの男の煽りと遊良のその苛立ちは、まさしく彼の焦燥から来るものに違いないだろう。

「何でだ……いい加減にしろ！【堕天使イシュタム】！効果発動！【魅惑の堕天使】と共に捨てて……2枚をドロー！…よ、よし、発動した！続いて2枚目の【トレード・イン】を発動だ！【堕天使ゼラート】を捨てて2枚ドロー！」

しかし、このあまりに追い詰められている現状で、反応の鈍いデュエルディスクに遊良は業を煮やしたのか。その声を荒げ、切羽詰った叫びと共に、強引に2枚の堕天使カードを墓地へと押し込んで。
…そして、どうにか発動したイシュタムの効果を使い、詰まりながらも何とかデッキを回転させにかかる。

—こんな所で、もたついている暇なんてない。

焦りに焦った遊良の姿は、言葉にしなくてもソレを体現しているのだ。下手をすれば命の危険すら感じさせるこのフードの男の憤怒は、決して自分を無事には済ませないと体現しているのだから。

「来た！【死者蘇生】発動！【堕天使スペルビア】を蘇生し、その効果で【堕天使イシュタム】も呼び戻す！羽ばたけ、２体の堕天使達よ！」

―！

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００

そうして…どうにか加速したドローによって、欲しかったキーカードを発動させた遊良。

―墓地より羽ばたくのは、遊良のデュエルにてその展開の要となる異形の堕天使。

しかし、いつもならここで魅惑の堕天使も同時に蘇って大空へと飛び立つというのに…

「ど、どうしてスペルビアの効果まで発動しないんだ!?たった今特殊召喚は出来ていたのに！」

異形の堕天使の蘇りに、魅惑の堕天使が連なることはなく。
たった一体だけの堕天使の羽ばたきが遊良のフィールドに反響するも、その羽ばたきはいつにもまして緩やかで弱々しいではないか。
それはまるで、遊良の焦りを見て見ぬ振りをしているかのようであって…

「…いい加減にしてくれ。オマエのそのお粗末なデュエルを、これ以

上オレに見せないでくれ。本当に不愉快でたまらない。」
「くそっ！だ、だったらこのままバトルだ！【堕天使スペルビア】で、【竜姫神サフィラ】に攻撃！」

―そして、動かない。

猛々しくも宣言した遊良の声すら、異形の堕天使はソレを聞き入れてはくれず。

これまで以上の不調のデュエル。これまでとは比べ物にならないほど異常なデュエル。先ほどまで行っていた『授業』の時の方が、まだ『マシ』なデュエルが出来ていたと思えるほどに…
この、まともにカードを扱えていない遊良の今のデュエルは、とても『酷い』の一言では収まらない。

「こ、攻撃もしてくれないなんて…何で、何で俺の声に反応してくれないんだ！スペルビア！攻撃だ！【竜姫神サフィラ】に攻撃だ！」
「はぁ…醜いデュエルだ…醜い、醜い、酷すぎる…」

そんな一向に動こうとしない異形の堕天使に、声をぶつける遊良を見て…とても不快そうに、そしてとても不服そうにしてそう言葉を漏らしたフードの男。
彼が一体、何の目的で遊良に近づいたのかは未だに深い闇の中。しかし、あれだけ憤慨して遊良に叫びかかった割に、今の遊良のあまりに『醜い』デュエルに、彼はどこか『落胆』している様子を見せているではないか。

「くそっ、こ、こんなことって…俺は、カードを2枚伏せて…ターン、エンド…」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：６→３枚
場：【堕天使スペルビア】
伏せ：２枚

成す術なく、取る手がなく。
カードの発動も、効果の発動も…そして攻撃すら言う事を聞いてくれない堕天使を前にしては、遊良とて何も出来ずにそのターンを終えるしかないだろう。
『敵』は、目の前のフードの男一人のはずなのに…今の遊良の落胆は、自分のデッキすら『敵』に回ってしまっているような錯覚に襲われている様子。
まるで、『異常』があったのは『デュエルディスク』本体ではなく、自分の持っている『カード』の方だと言わんばかりのその反応は…いや、その反応の無さは、まさしく遊良が今思い浮かべてしまったその『最悪の想定』を、今まさに肯定しているかのようでもあって。

「ふん…無様、無様、無様だ！こんな…こんなデュエルしか出来ない癖に！そんな顔してデュエルなんてしてるんじゃない！」
「な、なんだってんだよ一体…」

また、フードの男の、その湧き上がる怒りの理由すら遊良には分からず。
時間を追うごとに増していくその怒りの矛先が、自分に向いているのか『それ以上』のモノに向いているのか。ソレすら曖昧になって来そうな程に、遊良へとぶつけられているその憤怒の圧力は、ターンを追う毎に益々その鋭さを増していくのみ。
そして、再度自分のターンを迎えたフードの男は、怒りに任せてその勢いを更に増していき…

「オレのターン、ドロー！【魔神儀―タリスマンドラ】の効果発動！手札の【終焉の覇王デミス】を見せ、手札からタリスマンドラを、デッキから【魔神儀―キャンドール】を特殊召喚！キャンドールの効果で、儀式魔法【エンドレス・オブ・ザ・ワールド】を手札に！」

【魔神儀―タリスマンドラ】レベル６
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

【魔神儀―キャンドール】レベル４
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

「ま、また儀式…」
「…まさかオマエが、こんなに無様で低レベルだとは思わなかったよ…オレは儀式魔法、【エンドレス・オブ・ザ・ワールド】を発動！【魔神儀―タリスマンドラ】と【魔神儀―キャンドール】を生贄に！レベル１０、【終焉の覇王デミス】を儀式召喚！」

―！

【終焉の覇王デミス】（終焉の王デミス）レベル１０
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

そうして降臨せしは、破滅を与えし終焉の覇王。
その禍々しいオーラを駄々漏れに、破壊衝動を隠さず遊良へと向かって佇む。

「デミス!?……こ、効果は確か…」

「デミスの効果発動！ＬＰを２０００払い、デミス以外のカードを全て破壊して、破壊した数一枚につき…お前に２００のダメージを与える！吹き飛べ！天城　遊良！」
「ッ!?さ、させるか！罠発動、【神属の堕天使】！手札の【堕天使ユコバック】を墓地へ送って…なっ!?【神属の堕天使】まで!?ど、どうしてだ！」

―まさに終焉の覇王がその斧を持って、崩壊の判決を下そうとしたその時であっても
遊良が発動を宣言したにも関わらず、遊良の声に全く反応を見せてはくれないその罠カード。

―迫る衝撃、轟く波動、その勢いはまるで『本物』。

…『モンスター効果』も、『魔法』も、そして『罠』も駄目。
自分のカードが全く反応してくれない遊良へと、その容赦の無い破壊衝動がまさに怒涛となって遊良へと襲いかかって…

「くっそぉぉぉぉぉぉ！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！」

―！

そんな、まさに遊良が飲み込まれかけた、その瞬間だった。
解き放たれた悪魔の鎖によって、波動を放った悪魔の覇王が幾重にも縛られ地に倒れ伏し…大きな倒落音が場に響き、実体化したが故の土煙が空へと舞い上がる。
…それは、遊良が張った二重の罠。

彼が好んで使うその永続罠によって、終焉の覇王が身動きを封じられたため。

「はぁ…はぁ…い、今の衝撃は本物だった…お、お前は一体…」

焦りに焦った遊良の呼吸、止めどなく溢れ出してくる嫌な冷や汗。
どうにかギリギリで『最悪の事態』を回避した遊良ではあったものの…今の『本物』の衝撃波は、かつて『実体化』したデュエルを経験したことのある遊良だからこそ嫌でも理解出来てしまったのか。
アレにあのまま飲み込まれていたら、例えＬＰが残っていたとしてもデュエルを続行することは出来なかっただろう。それを瞬間的に悟ったからこそ、悪魔の鎖を保険で伏せておいてよかった、と。
また、その破壊の衝撃波が自分を貫くまさに寸前で、何とか身を守ることに成功した遊良を見て…フードの男は、ＬＰを無駄撃ちしたにも関わらず鼻で笑うようにして声を投げかけるのみ。

「へぇ、意外と意地汚く動くじゃないか。じゃあオレはこのままターンエンドだ。」

フードの男　ＬＰ：４０００→２０００
手札：４→２枚
場：【竜姫神サフィラ】
【終焉の覇王デミス】
伏せ：１枚

「俺のターン、ドロー…」

何とかターンを凌ぎきった、遊良のその手は鉛よりも重く。
それもそのはず…どうにか１枚増えた手札を見比べるものの、カー

ドが言う事を聞かないという事と、『実体化』したデュエルという『最悪』の組み合わせがどうしようもない恐怖と重圧となって、今まさに遊良へと襲いかかって来ているのだ。
それ故に、かつての『異変』で味わったあの痛みが、どうしても遊良の脳裏には浮かび上がってきてしまって…

「…【堕天使の追放】発動！デッキから…くそっ、やっぱりコレは駄目か…だったら【堕天使ユコバック】を通常しょうか…ッ!?つ、通常召喚まで!?」

一向に、遊良の場に現れない堕天使達。
何度も何度も、それこそ叩きつけるようにして遊良が小さき堕天使のカードをディスクに置いても、反応もしなければ召喚権の処理すらされないこの状況。
先ほど、異形の堕天使は墓地から確かに蘇った。しかし、それすらもう幻影だったかのように…何度も叫ぶ遊良の呼びかけに、小さき堕天使は応じることが無いのか。

これまで共に戦ってきたはずの堕天使が、Ｅｘ適正を捨ててまで得た堕天使が…

もう後戻りしないと覚悟を決めてまで選んだその力が、全て無くなってしまったかのよう。

「【デモンズ・チェーン】は発動した…さっきの【死者蘇生】や【トレード・イン】も普通に発動できたのに…どうして…」
「おい、まだかかるのか？いい加減にしてくれ。そろそろ本当に不愉快でキレそうだ。」
「ぐ…」

発動したカードとしないカード、ソレを思い出しながら、最悪の想像が遊良を襲う。
何をした覚えもない。ここまで言う事を聞かなくなるまで『罪』を被った覚えもなければ、『罰』を受けた覚えもない。だというのに、ここまで『反応』してくれないということは、不調なのはデュエルディスクではなく、本当にカードの方なのだろう。
その『まさか』の悲嘆に遊良が浸かって行くのと同時に、対面に立つフードの男の苛立ちは益々増えていって…

「た、頼む…お前だけは…」

―このままでは、何も出来ずに吹き飛ばされるだけ。
ダメージが現実となっているデュエルの危険性と、その痛みを実際に身に染みて分かっている遊良だからこそ、ソレだけは絶対に阻止しなければならないこと。
故に、負けるわけにはいかないこの状況で、しかしカードが言う事を聞かないこの状況で…
遊良は手札にあった1枚のカードを見つめ、ソレに、一縷の望みを託して…

「…俺は…【神獣王バルバロス】を妥協召喚！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００→１９００　ＤＥＦ／１２００

震える大気、獣の咆哮。
遊良の場に轟いた、天地を揺るがす獣の王のその姿。
叫んでも叫んでも、一向に言う事を聞こうとしなかった堕天使達とは打って変わり…即座にこの場に現れては、遊良の前に立ち吼える。

「…よかった、バルバロス…お、お前だけは…」

フィールドに現れし獣の王の、昔と変わらぬその佇まいはまるで、獣の王に守られているかのような安心感を遊良に与えていることだろう。

…あれだけ逸っていた遊良の心臓の鼓動が、その咆哮によって僅かながらも抑えられていく。

この切羽詰った状況に置いても、絶対にこの獣の王だけは裏切らないという核心が、遊良には残っていた。
幸いにも先ほどのユコバックの召喚宣言は遊良のデュエルディスクには認証されておらず、遊良にはまだ召喚権が残っていて…
だからこそ、遊良は叫ぶ。
一縷の望みをかけてでも、ここで流れを取り戻さなくては、と。

「…行くぞ！バトルだ！バルバロスで、デミスに攻撃！」
「攻撃力が低いまま…なるほど、『聖杯』か…」
「手札から速攻魔法、【禁じられた聖杯】を発動！バルバロスの効果を無効にし、攻撃力を４００アップ！」

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／１９００→３４００

聖杯より落ちし雫を受けて、本来の力を取り戻した獣の王。
その甘美な雫は獣の雄叫びを増長させ、本能を刺激し悪魔へと向かわせるのか。

「墓地から【祝祷の聖歌】の効果発動！【祝祷の聖歌】を除外し、デミスの破壊を防ぐ！」
「くっ…だが、ダメージは通る！貫け！ディナイアル・スピアー！」

―！

また、とっさにフードの男が天からの聖歌によって、悪魔の鎖に縛られし覇王を守ったものの…その衝撃は覇王を通り過ぎ、このデュエル初のダメージとなってフードの男へと襲い掛かって。

フードの男　ＬＰ：２０００→１６００

しかし、少量とは言え実体化したダメージの痛みは想像を絶するモノだというのに…
フードの男は何事もなかったかのようにして、鼻で笑うようにそのノイズの声を響かせるだけ。

「ふん…たったこれだけか。」
「くっ…タ、ターン…エンドだ…」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：４→２枚
場：【神獣王バルバロス】

【堕天使スペルビア】
伏せ：1枚

本来であれば、今手札にある【堕天使の追放】や【堕天使ユコバック】で、返しのターンの守りを整える手筈だった今の遊良のターン。
しかしソレすら出来ない今のこの状況は、フードの男の涼しい余裕と恐るべき憤怒とが相まって、遊良に焦りしか与えては来ない。
条件は整っているというのに、遊良は先ほど発動してくれなかった、場に伏せてあるその罠カードを見て…
いくら自分の場には高い攻撃力を持ったモンスターが2体いるとは言え、たったそれだけの守りしか出来ずにターンを受け渡すしかなかった遊良の心臓の鼓動は、まるで留まることを知らないのだろう。

…また、そんな遊良の表情を見て、一体フードの男は何を思うのか。

静かに、激しく、冷ややかに、猛り…

それはまるで、この世のモノでは無いかのような『虚無感』。
その矛盾しながらも相混じる異質な感情を爆発させて、ただただ遊良へと向かって放つのみ。

「下らない…下らない下らない本当に下らない！この程度で！この程度の実力で！どうしてオマエはまだ生きていられる！」
「な…何言って…」
「どうしてオマエが生きていて、何故こんなにも無様なデュエルを続けられる！こんなにも弱くて、こんなにも無様な癖に…不愉快だ…天城　遊良！オマエの存在が！どうしようもなく不愉快だ！」
「なんだよ…一体、俺がお前に何をしたって言うんだ！」
「うるさい！オマエに知る権利なんて無いんだ…オマエみたいなクズ野郎なんかが！」

声のノイズを更に増し、痛いほど冷たいその怒りを益々増していくフードの男。
狂乱怒涛とは言いがたいものの、その爆発寸前の怒りはまさにもう我慢の限界だということなのだろう。
ノイズの向こうの声からは怒りと共にどこかへと向けた哀しさすら感じ…それを隠す気すら見せず、寧ろ遊良へと向けて正面からソレをぶつけるだけ。

「…もう限界だ…オレのターン、ドロー！【儀式の下準備】を発動！オレはデッキから【イリュージョンの儀式】と【サクリファイス】を手札に加える！そして儀式魔法、【イリュージョンの儀式】を発動！場のデミスを生贄に…」

そうして…静かに、そして奮えながらフードの男はソレを発動して。
それは、これまで彼が発動してきた『儀式魔法』とは、どこか形質の異なったモノ。
これまでの2度に渡って『高レベル』の儀式を行ったフードの男の場に現れるは、ソレとは違うたった『一つ』の命の灯火。
彼がソレの発動を宣言したことより空気が震え、どこからとも無く異様な雰囲気が辺り一面に広がっていくこの光景は…

「儀式召喚！現れろ、レベル1！」

―まるで、この街全体がこのフードの男と、そして彼が発動したその儀式魔法によって、無理やりに怯えさせられているかのようでもあって。

「来い、【サクリファイス】！」

―！

【サクリファイス】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

「サ…クリ…ファイス…？」

闇の中から降臨するは、真理を見通す異形の眼。
悪魔よりもなお異質、悪鬼よりもなお異物。その形容しがたい異界の瞳は、一体遊良を見て何を考えているのだろうか。

…その目から、目がそらせない。

怖いはずなのに、見ていられないはずなのに…
何故か伝わってくる、自分へと向けられたその怒り、憎しみ、悲しみ、妬み…

―そして、何故か、哀れみが…

―遊良を貫く

「オレは許さない…あまぎ…ゆうら…オマエを絶対に！」
「くっ!?」
「【サクリファイス】の効果発動！そこの汚いケダモノを吸い込んでしまえ！」

「さ、させるか！罠発動、神属の堕天…ッ!?罠発動！どうして!?罠発動！どうしてだ！どうして発動してくれない!?」

それでも、反応しない堕天の力。

今まで、これまで、この時まで共に戦ってきたはずの『力』が、どう叫んでも応えてくれない。

それは遊良にとって、どれほど信じがたいことなのだろうか。

…信じられるわけがない、信じたいわけがない。

しかし、これまでの事を思い起こせば、ソレはもう間違いないこと。

何度発動を宣言しても動かないこの状況と、声を荒げても羽ばたかないソレが否応にも遊良へとソレを自覚させてしまう。

そう、これまでのデュエルで…それこそ、この不調が出始めた頃からのデュエルを思い返すと、それ以外の『事実』は考えられないのだ。

それは『デュエルディスク』の不調でも、ましてや『カード』の不調でもない…

―【堕天使】のカードだけが、発動しないということ。

「どうして発動しないんだよぉぉぉぉぉぉぉ！」

「飲み込め！【サクリファイス】！」

「待て！バルバロス！行くな！行くなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

異形の眼が開いた『何か』へと、獣の王が身動き一つ取れず吸い込まれていく。
苦しげに響くその咆哮は、遊良の悲痛の叫びも空しく完全に飲み込まれてしまった瞬間にこの世から消え去ってしまって…

【サクリファイス】レベル１
ＡＴＫ／　０→３０００　ＤＥＦ／　０→１２００

「そ…んな…」

遊良を守るはずのその力の全てが、よもや敵の手に落ちて牙を剥くということなど誰が想像出来ようか。
消え去ってしまった獣の雄叫びは、このデュエルにおいてはもう遊良を守ることすら出来はしないのだ。
これまで自分を支えてくれた、【堕天使】の力を全く使えず…
今までずっと共にあった相棒のカードすら自分の前から消えてしまっては…

「バトルだ！【竜姫神サフィラ】で【堕天使スペルビア】に攻撃！そしてこのダメージステップ開始時！手札から【オネスト】の効果を発動し、サフィラの攻撃力を２９００アップさせる！木偶を消し去れ、サフィラ！」

―！

「ぐ、ぐぁぁぁぁあ!?」

遊良　ＬＰ：４０００→２５００

そうして、神光を増した竜の姫の一撃によって、跡形も無く崩れ去っていく異形の堕天使。
その有り余る衝撃波はそのまま遊良への痛みと変わり、ＬＰの減少に伴って遊良へと襲い掛かって…

「かはっ…ぁ…」
「…トドメだ！【サクリファイス】で天城　遊良…オマエに！ダイレクトアタック！」
「…ッ!?」

間髪入れず、息つく暇も無く。
異形の眼が怪しげな輝きを纏い、その不穏なる光が異物を吸い込むであろう空虚な穴へと収束していく。

…否定、憤慨、怨恨、哀憐

その形容しがたい様々な感情が混ざり合い、その全てを遊良へとぶつけようとしているのだ。

―フードの男が常に放つ、限りない憤怒を代行し…

―それは、放たれる

「消え去れぇ！天城　遊良ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

―！

「ぐっ　　…　　う　　わあああああああ

おくことも許されず…

その体が宙を舞い、気持ちの悪い浮遊感と味わったことの無い痛みとなって遊良の全身へと襲いかかって。

そして…

デュエルの終了を告げてしまう無機質な機械音が鳴り終わると同時に、遊良の体は大きな衝突音を立てながら、無情にも固いアスファルトへとそのまま叩き付けられた。

「う…ぁ…」

呼吸も出来ず、身動きも取れず、痛みにのたうち回ることすら出来ず。

体が冷たい…全身に走る痺れにも似た痛みは、指先一つ動かすことを許可してはくれない。

また、ソレと同時に沸き起こる、実体化したモンスターの攻撃による現実のダメージ。

体が熱い…まるで、体の肉が外側と内側、その両方から溶け始めているかのような感覚が、遊良を襲っているのか。

―声にならぬ呻き声、意識すら朦朧としてきて。

薄れゆく意識の中で、辛うじて自分が負けたのだということが理解できたものの…全身が『溶けていく』様なこの感覚の中では、既に遊良の脳は考えることすら放棄してしまっている様子。

「…いい気味だ。この程度の癖に、今の今までヘラヘラ笑って生きていた罰…」

また、いつのまにか見下ろすようにして立っていたフードの男が、遊良へと向かって何か言っているようではあったものの…

もう遊良の耳は機能を働かせてはいないのか、全く持ってソレを聞き取ってはくれない。

憤怒を纏った怨嗟のノイズ。しかしもう興味を失ったかのような無関心の声。

そんなフードの男は、衝撃によって辺り一面に散らばっていた『遊良のカード』の中から、一枚のカードを拾い上げると…

―それを、遊良へと向かって、投げ捨てた。

「こんなケダモノのカードに縋って惨めな奴だ…本当に惨め過ぎて気持ちが悪い。だが、よほど今のオマエはコイツに縋って生きてきたみたいだし…ほらよ、せめて最後はコイツと一緒に居させてやる。」

そうして投げ捨てられた獣のカード。発熱している遊良の体の上に舞い落ちて。

「じゃあな天城　遊良。このクズが、とっととこの世から…」

そのままフードの男は踵を返すと、倒れて呻いている遊良へと向かって…

怒りの感情をそのままに、顔元の見えないその装束の中から…

ーソレを、放つ。

「消え去れ。」

―!

「あぁぁぁ

…見えない、聞こえない、匂わない、感じない。

本当に『溶けて』いるかのような『痛み』が絶えず遊良へと襲いかかり、自分が消えていくような感覚だけが今の遊良を取り囲んでいるのだ。

一体、今の遊良は第三者からはどういったように見えているのだろう。住宅街だというのに、『何故か』全く人の気配が無いこの場においては、ソレは決して分からぬことではあるのだが…

唯一つ言えることは、苦悶に悶えのた打ち回る遊良を見下ろすフードの男は、もう既にこの場から居なくなっているということだけ。

そうして…

次第に薄れゆく遊良の意識は…

―そこで、途絶えた。

⋮

ｅｐ５８「自分が一体何なのか」

締め切られた薄暗い部屋。そこが一体どこなのかも分からないその一室に、一人の女性が居た。

…何をするでもない、ただ椅子に腰掛け、何にも興味が無いかのようにして、その虚ろな目をただただ虚空に向かって開いているだけ。

その容姿は部屋の薄暗さと相まって見えないものの、『何もしていない』を『している』その女性は、気配を感じさせずに身動き一つ取らず座っている椅子に体を固定していて。

まるで、心臓すら動いていないかのようなその静かな姿勢。微動だにしないという言葉を、これほどまでに体現できるのかと思える程に、この女性は眉一つ、身じろぎ一つ、瞬き一つせずに座っているのだ。

…そして、それからどれほどの時間が経ったのか。

部屋の薄暗さが外の時間の経過と共に更に暗くなっていき、益々女性の姿を闇へと隠していくのが手に取るように物音一つなく、気配一つなく、静かに『夜』が近づいてくる。

それは、このまま部屋の中が『夜』に包まれればこの室内に居る女性も共に『夜』の中に溶けて消えていきそうな、そんな形容しがたい虚無感が徐々に迫ってきているような静かな儚さ。

そうだと言うのに、女性はこの世の無常がそのまま人の形をしているかのような、まるでソコに存在していないような気配の無さのまま…物音一つ立てずに、ただ『夜』に飲まれるのを待っているだけ。

そうして…

輝き始めた微かな月明かりが、カーテンの僅かな隙間からこの薄暗い部屋に中に漏れ入った…

―その時だった。

「…おかえりなさいませ。随分とお疲れのようですね。」

近づいてくる『夜』に流されるままに、これまでずっと沈黙を貫いていた女性が急に、突然、徐に立ち上がったかと思うと、このどこかの部屋の中心へと向けて、今まで閉じていたはずの口を開いて声を発したのだ。

音一つ無かったこの暗い部屋に、この時始めて女性の声が響いたその瞬間…まるでこの世界に存在していないのでは無いかと錯覚するほど存在感の無かったこの部屋に、確かに存在感が生まれて。

とは言え、この女性は一体『誰』に向かって言葉を発したのか。少なくともこの部屋には、見た限りだとこの『女性』しか居なかったはずだというのに。

―!

「…はぁー…はぁー…くそっ…『力』を使いすぎた…」

しかし、女性が口を開いたその刹那。彼女の視線上の空間が突然裂け、その空間の裂け目からこの薄暗い部屋の中心に、落下音と共に突然『フードの男』がその姿を現した。

…いや、姿を現したというよりは、やっとの思いで帰ってきたと言った方が合っているだろうか。
何せ、フードの男は息も絶え絶えになりながら今にも倒れこんでしまいそうなほど苦しそうに息を吐き…その雰囲気は誰の目にも明らかなほどに弱々しく、漆黒のフードの奥から誰の物かも分からぬノイズの声を漏らしながら、どうにか意識を保っているだけのようにも見えるのだから。
そんな憔悴しきっている男は、滝のように流れ落ちる汗もそのままにどうにか立ち上がったかと思うと、そのフードを脱いで『声』から『ノイズ』を取り払い、荒い呼吸と脱力していく体を支えることなくそのまま女性へと向かって倒れ込んだ。

「…う…は、吐きそうだ…」
「…ですから言ったでしょう。努々忘れることなかれ…あなたの器ではこの『力』は大きすぎる。ここ数日で『目的』の他にも度々力を行使しておられたようですし…このままでは…」
「…わかってる！そんな事わかってるんだよ…でも、オレはこうするしかないんだ…今更、やめる事なんて…」
「…存じております。」

女性の胸に抱き寄せられ、その細腕に抱きしめられた男の口から、今にも泣きそうな声が漏れ出し部屋の中に響き渡る。
男と女、やはりその容姿はこの部屋の暗さの所為で全く分からないものの…今の男の声はフードを被っていた時の様な、ノイズに阻まれていた声とは違う。この男の、どこか幼さすら感じる本来の声は、悲痛な叫びを歳相応のモノへと変化させていて。

―満身創痍、疲労困憊

この男が行使した『力』とは何なのか。それを知るのはここにいる男と女の二人だけであり…この男の様子を見るに、男の持つ『力』と

は自身を削って行使される代物であることに先ず間違いないだろう。
そうして、女性は己の胸の中で憔悴しきっている男を一瞥したかと思うと…
静かに、今にも部屋の暗さに吸い込まれて消えて行きそうな声で、男へと声をかけて…

「…一度、帰られますか？しばらく休息が必要でしょう？」
「あぁ、頼む。…ユイ、後のことは任せた。オレはしばらく眠る。」
「…承知いたしました。では、お送りしましょう」

そして、女性がそう言ったその瞬間のこと。
再び、裂けるはずのない空間の一部がひび割れ始め、突如として空間に裂け目が入り始めて。そのままひび割れはみるみる広がり、人が通れそうな幅までその裂け目を大きく広げ始めるではないか。

…普通ではありえない。ありえるわけがない。

しかし、そんな超常的な現象すらさも当たり前のようにして、女性とフードの男はその裂け目へと足を進めるのみ。

「…帰りましょう、デュエリアへ。」
「あぁ…」

―そうして、消える。

二人が空間の裂け目へと完全に入り、その裂け目が完全に閉じた時。まるで、この場に初めから居なかったかのようにして、男と女、その存在全てがこの小さな部屋から一瞬にして消え去ったのだ。
それは、フードの男がこの部屋に現れた時と同じ。まるで瞬間移動したかのように、まさに瞬間移動したかのように。

今までこの部屋にあった2つの息使いが…

…一瞬にして、どこかへと消え失せた。

―…

「遊良…遅いなぁ…」

日も暮れ、すっかり辺りが暗くなった夕食時。

デュエルディスクの修理に行っただけだと言うのに、未だ家に帰ってこない遊良の身を案じたルキが、小さな溜息と共にそう呟いた。

いくら店が混んでいるのだとしても、ただ修理に出すだけならばそこまで時間がかかるはずもなく。あの遊良がこの時間まで何の連絡もよこさずにいるということが、ルキにはどうにも引っかかるのか…落ち着かないその様子は、心配にざわめく胸の内をどうにか押さえているかのよう。

またルキの居るリビングには、ソファーにだらしなく寄りかかり、襲い来る空腹と戦っている様子の鷹矢の姿があった。

しかし、その無気力に天を仰いでいる鷹矢の姿は、いつもならば既に食べ始めているはずの夕食を、未だに食べられていないことに伴う脱力に違いなく…『飯抜き』という鷹矢への最大の罰の時と同じ、鳴り止まぬ腹の音が鷹矢の体力を奪い続けていて。

そして、そんな鷹矢の腹の音に少々苛立ちを感じながら…ルキはコーヒーを一口啜ってから、空腹ゆえに脱力しきっている鷹矢を一瞥し、少々不安げな声でその口を開いた。

「ねぇ鷹矢、やっぱり遊良探しに言った方がいいんじゃない？」

「…子どもじゃないんだ、放っておいても帰ってくる。それより腹が減ったぞ…」

「もう、どうして鷹矢はそんなに呑気なの？だってあの遊良が連絡一つ入れないんだよ？ちょっと電話入れるくらい…」
「…この俺が生きているのだ、遊良に何かあったわけないだろう。…いいから早く飯を作ってくれ…」
「何そのトンデモ理論…はぁ、本当にお馬鹿なんだから。」

しかしルキの心配を他所に、どこまでも自分の空腹との戦いに明け暮れている鷹矢。
いくら遊良が同年代と比べてしっかりしているとは言え、遊良がこの時間まで何の連絡もしないで遅くなるようなことなど今までなかったというのに…
そう、この家からそう遠くないショップの位置を考えると、ここまで遊良の帰りが遅くなるのは明らかにおかしい。いくら代用器で連絡が取れないとは言え、家の固定電話の番号にかけるくらいは出来るだろうし、鷹矢の『食欲』を把握している遊良が、『飯抜き』でもないのに鷹矢をこの時間まで食べさせずに放っておくことなどないのだから。
また、先ほどからどうにも胸騒ぎが収まらないのもルキの心配に拍車をかけているのか。不穏…とまではいかないものの、いつもは感じないような胸騒ぎがルキには浮かんできている様子。

「遊良の帰りを待っていたら餓死してしまう…」
「もう！じゃあカップ麺でも食べてれば！」
「今日は肉なのだぞ！肉で腹を満たさないでどうする！…うっ、大声を出したらまた腹が…」
「はぁ…」

しかし、そんなルキの心配すら鷹矢の空腹の前では無力と化してしまうのか。
まるで遊良のことを心配していない様子の鷹矢に、どうしてそこまで気楽で居られるのか不思議で仕方がない表情をしたルキには鷹矢

に対する呆れの感情しか浮かび上がってはこず…
どこまでもペースを崩さぬ鷹矢を前に、ルキは募る心配に溜息をつくばかりだった。

今、遊良の身に何が起こっているのかも…

…二人は、知らずに。

――…

闇、暗闇、無明…

『何もない』という表現をそのまま形にしたかのように…『無』しかないこの場所には、音も光も匂いも何も、本当に何から何まで存在してはおらず。
まるで、世界の裏側。
存在というモノが無く、まるで『無』という概念の広がりのようなこの空間は…およそ人の理では言い表せぬ、理解の範疇を超えた『無』その物に違いなく。
虚無と深淵、『何』も無いただの暗闇。いや、この『暗闇』すら、この『無』の中には存在しているのかすら怪しいと言えるだろうこの場所。

ここがどこなのか分かる者など居らず。ここがどんな空間なのか分かる者など居らず。

そんな、『無』だけが広がっているこの場所で…

—遊良は、ただ漂っていた

（う…）

体が動かない。

どこかを動かそうとしても、『意識』が『体』と繋がっていないような感覚だけが走り抜けるだけで…頭の先から指の先まで、何から何まで動かすことが出来ず、また意識と体のその気持ち悪い乖離感に、声を漏らすことも出来ないでただ彷徨っている。

それは、確かに『そこ』にあるだろう身体の実感を感じることも出来ず。この真っ暗な世界の中に、まるで意識だけが放り込まれたかのよう。

…また、何も考えられない。

頭の中が痺れているような、思考が抜け落ちていくかのような…

自分が自分であることは理解出来ていても、先ほどまで自分が何をしていたのか、何を考えていたのか、『何があったのか』すら遊良は思い出せないでいるのだ。

それ故、ここがどこなのかも遊良には分からず。どうしてこんな場所に浮いているのかも理解することが出来ずに、この『無』だけがある真っ暗な世界で、浮遊感に流されているしかないのだろうか。

—そして、そんな虚無感に、遊良は一体どれほどの時間流されていたのだろう。

音すらないはずのこの『無』の中で、徐々に遊良の耳に振動が届き始め…痒くなりそうなほどに微細なその振動は、少しずつ『音』となり始めて、遊良の耳に反響し始める。

そして…

徐々に大きくなっていくその『音』は、確かな『声』となってこの『無』の空間に響き渡った。

『努々忘れることなかれ…自分が一体何なのか…』

（…あ…また…この声…）

それは、どこかで聞いたような、でも思い出せないような…どことなく心がざわつく声。不安を煽られ、不安を掻き立てられているかのような錯覚が、何も考えられない遊良の頭の中に否応にも響き渡って反響していて。

…自分が一体、『何』なのか。

そんなことを聞かれたところで、ソレに対する答えを持っている人間などそうは居ないはずだというのに…まるで、ソレが分からないことを攻めているかのような『その声』は、音など響かなさそうなこの『無』の中に、益々大きくなって響き渡るのみ。

（俺が…何なのか…）

そして、『その声』を聞いて、遊良の意識も無意識にその答えを探し始めたのか。
しかし、今の遊良の痺れた思考では、到底その答えなど浮かび上がるはずがないというのに…
自分は一体、『何』だというのだろうか。一体、『何』であろうとしているのか。

（俺…は…）

遊良には、分からない。自分が一体、『何』なのかが。これまで、何をして過ごしてきたのか。自分は、人から『何』として見られているのかが。
鳴り止まぬ反響、繰り返す問答。
この空間にも、この感覚にも、この『無』の中に漂っていることにすら違和感を感じられない今の遊良では、『わからない』という唯一の答えのみしか導き出せぬ今の遊良には…ここから先の思考に、至ることすら出来ず。
そんな何も出来ない遊良が、ただ無意味に『無』の中に流されていた…

―その時だった。

『…とーさん…かーさん…』

―突然、闇の中に浮かび上がった、とある光景。

どこかの暗い部屋から、泣き声が聞こえる。とても小さい、子どもの泣き声。
絶望に塗れ、悲しみに潰れ…
世界の片隅で震えて怯え、一人孤独に襲われながら小さく小さく縮こまり、酷い恐怖と絶望に包まれているその姿は、縋る者も居ないと

いう孤独に感情が溢れているのか。

（あ…れは…）

そして、それを見た…いや、見てしまった遊良の心に、不意に浮かび上がった悲痛な感情。

すすり泣き、むせび泣き、暗い部屋の片隅で嗚咽を漏らすその姿を見て、遊良は思い出す…いや、無理やり思い出させられる。

（…あ…ぁぁ…）

それが、自分だということに。

ソレを理解してしまったその瞬間、遊良の心の奥底からまるで塞き止めていたモノを開放するかの様にして『何か』が溢れだし…胸の奥から冷たい痛みを心の表面へと浮かび上がらせ、閉じ込めていたはずの『あの頃』の痛みを我が身に蘇らせているのか。

ここまで生きてこられて、『あの頃』の絶望をどうにか押さえ込めていたというのに…これまで思いださないようにして記憶の奥底に仕舞いこんでいたはずの『あの頃』の記憶が、その封を破って浮かび上がってきているかのよう。

―否定された、侮辱された、嘲笑われた、貶された。

世界の全てが『敵』となったあの頃。神を呪い、世界を恨んだ…突然襲ってきた絶望に、生きることすら諦めようとしていた。

自分の存在を否定され、『出来損ない』と言われ続けた彼の過去。それは、幼い少年が受けるにはどれほど酷な日々だったのだろう。きっと、周囲から蔑まれ続けるという人生は誰が思っているよりも、決して楽な人生ではなかったはず。

…全ては、Ｅｘ適正が無かったから。

（…い…やだ…やめ…くれ…）

―見えるのは、記憶

虐げられ続けた過去、蔑まれ続けた過去。

愛してくれる人が突然目の前から姿を消し、あまりの絶望に自ら命を絶とうと考え、自分と一緒に居た所為で大切な人達が傷付く場面を何度も目の当たりにし、それでも必死になって生きてきた彼のこれまで。

幸せだった日々が、突如として絶望の日々へと変貌を遂げたあの頃…生きることすら否定され、壊された世界の片隅で、静かに一人隠れて命を捨てようとしていたあの時期の、あの地獄のような日々など思い出したくも無いと言うのに。

世界の全てが敵になり、世界の全てから蔑まれ…

それがまるで映像のようになって、今までコレを意識的に思い出さないように努めてきた遊良の意識へとわざわざ見せ付けているのか。

それは、自分が一体『何』なのか…それを、思い知らせているかのように。

そうして、遊良は思い出す。

自分が一体、『何』と呼ばれていたのかを…

―物語は、一度過去へと遡る。

幸せだった日々の何もかもを失った、世界の全てが敵となった…全てが始まった『あの頃』…

―10年前の、あの頃へと。

―…

ｅｐ５９「閑話ー天城　遊良、前編」

その日、少年にとって世界の全てが敵となった。
たった一言告げられた医師の言葉。将来を明るいモノだと信じていた少年にはどうしてもソレが信じられなかったものの、『誰もが出来る事』をいくら試しても、何も起こらないという現実が少年へと無慈悲にも襲い掛かるだけで…
また、少年の『事実』を知った周囲の人間達は、それまでの少年のことなど簡単に忘れてしまったかのように突如としてその態度を変貌させ、瞬く間にその少年へと襲い掛かったのだ。
…才能の全てを無価値と決め付けた。
将来はプロ確実と勝手に盛り上がって、ただ勝手にもてはやしていた癖に…ソレが発覚した瞬間に、少年のことなどもう価値が無いものだと決め付けて離れていったこと。
…近づくことすら毛嫌いした。
荒唐無稽な噂話が一人歩きし、少年がまるで病原体かの如く人々は少年のことを避け始め…年齢の割に大人びていた、子ども達の中心に居た少年の周りから人々は離れていったこと。
―それが、どれだけ残酷なことなのか。
それすら考えることをせず、自分達の意思が世間の周知なのだと言わんばかりに寄って集って幼い少年を攻撃し、当たり前のことが『出来ない』という奇異の少年を、『自分達と違う』というただそれだけの理由で人々は少年には未来など無いと言う事を決め付けたのだ。

―全ては、少年にＥｘ適正が無かったという、ただそれだけのことで。

これは、確かにあった過去の話…

―…

「おいゆうら！お前！Ｅｘ適正無かったんだってな！パパが言ってたぞ！」
「うわっ、そんな奴いるのかよ！気持ちわりーな！人間じゃないんじゃねーの？」
「ママがゆうらには触るなって！Ｅｘ適正消えちゃうからって！」
「お前、Ｅｘ適正無いからパパとママに捨てられたんだってな！」
「ゆうらのざーこ！でっきそっこなーい！」
「生きてる意味無いってみんな言ってるぞ！早く死んじまえー！」

先日までは仲が良かったはずの幼等部生達から、容赦なく浴びせられる侮蔑の言葉。
それは大人達の振る舞いを、ただ真似しているだけではあるものの…人を見下すその快感に身を委ね、無自覚な悪意をそのままに、ついこの間まで憧れを向けていたはずの『強かった少年』をただ感情のままに寄って集って見下し蔑むその姿は、子どもとは言え決して許されるようなモノではないだろう。

それは、言葉を選べぬ子どもらしい振る舞い。しかし、子どもらしからぬ言葉の暴力。

先日まで皆の中心に居た、天城　遊良という『強かった少年』の事など既に忘れ去っているかのように振る舞うその態度。あまりに醜いその立ち振る舞いは、幼等部生という幼い歳にも関わらず、人の醜

悪な部分を嬉々としてさらけ出しているかのよう。
その言葉が持つ暴力も理解出来ずに、その言葉の威力を考える事も出来ずに。無知な振る舞いをそのままに、深く傷付いている少年の傷口を、嬉々として更に深く抉ろうとしているだけ。

「ねぇ、あれって天城　遊良じゃない？ほら、ニュースでやってた…」
「確か親にも捨てらたんでしょ？だって自分の子どもにＥｘ適正無かったらそりゃ嫌よね。私も絶対捨てるわ。」
「近づいたらＥｘ適正が消えるって話じゃない…あんなのが決闘市にいるなんて本当に迷惑よね。何でまだ居るのかしら…」
「一人でウロウロして気持ち悪い…早く駆除してもらいたいわ。」

そして、ソレは子ども達だけではない。
自分達が『何』を言っているのかを理解出来るはずの大人達でさえ、わざと聞こえるようになのか、それとも意図せず漏れているからなのか。道行く大人達の全てが少年の姿を見ただけで口々に悪意を吐き出し、侮蔑の視線で少年を貫いて。
…Ｅｘ適正が無かったという宣告が、一体どこから漏れたのか。
病院の情報管理の甘さと間抜けさを嘆こうにも時既に遅く。孤独に苛まれている少年に対し、汚い大人の間接的な暴力が力の無い少年を食い物にするためだけに面白可笑しく伝えられているというこの現状。
真実を伝える事を謳っているメディアにはまるで見当外れで根も葉もない、事実無根で虚偽に溢れた報道を決闘市中に、そして世界中に勝手に発信されてしまっていて…ソレを信じた世間から直接的な暴力を受けてしまっているということは、絶対にあってはならない事だというのにも関わらず、今のこの決闘市においては少年に『不憫』や『可哀想』などと言った感情を持ち合わせているモノなど居はしないのか。

「Ｅｘ適正無い癖に生きてんじゃねーよ！」

「死ね！この出来損ない！死ね！死ね！」
「何でお前生きてんだよ！さっさと死んじまえこのクズ！」
「決闘市からさっさと出ていけ！どうせ親にも捨てられたんだろ！」

住み慣れたはずの決闘市は、街を歩いただけで『敵』だらけ。会うモノ、見るモノ、全てのモノが突如として『敵』へと変貌してしまったこの街は、少年にとっては一体どれほどの恐怖となっているのだろう。

…日に日に強くなる侮蔑の嵐は、逃げても避けても隠れても抗えぬまさに地獄。

自分達とは違うという理由だけで、『ただ一人の異物』をここまで嫌悪し…たった一人の少年をゴミ同然のようにして痛めつけている今の街の姿は、誰の想像をも絶する地獄と化しているというのに、誰もがソレに気付こうとすらしていないのだ。

『あの宣告』を受けた後、突然居なくなりそのまま迎えにも来なくなった親を探して、幼いながらも数日もの間たった一人で家を出て必死に両親を探していただけだというのに…

絶望のままにふらつく足で、街を彷徨い歩いていただけの少年の事など、まるで汚物か害虫とでも思っているかのようなその視線は、とてもじゃないが深く傷付いている幼い少年へと向ける様なモノでは絶対に無いはず。

しかし、守ってくれるはずの両親すら居なくなってしまっては、少年を守る者など居らず。まるで汚らわしいモノを見る目で、同じ人間とは思えないような非道な言葉をたった一人の幼い子どもへとぶつけている今のこの街の現状は、まるで世界に唯一の『Ｅｘ適正』を持っていない天城　遊良など自分達と同じ人間としてすら見ていないかの様にしか感じられないことだろう。

―デュエリストの出来損ない、生きている価値が無い、親に捨てられた惨めな子ども。

下等で、劣種で、低レベルで底辺。そんなＥｘ適正の無い少年など、自分達と同じ世界に住む資格など無い。まるでそう言わんばかりに侮蔑と侮辱に塗れた言葉の嵐は、誹謗中傷と罵詈雑言の津波となりて少年を簡単に飲み込んでしまっていて…

子ども達は皆こうした大人の真似事をし、そして子ども達の見本とならなければいけないはずの大人達がコレでは、遊良への批難の嵐が止むわけがない。

…それがどれだけ醜悪なことなのかも、大人達は考えることも出来ずに。

「店に入ってくるなこのクソガキが！」

「お前なんかに売る物なんてあるわけないだろ！とっとと消えろ！」

「おい！さっさとこのガキつまみ出せ！客が寄り付かなくなるだろ！」

また、決闘市内にある数多くの店の、そのどこもが遊良を受け入れようとはしれくれなかった。

『何』も…そう、生きていく上で必要不可欠な食べる物すら、どの店であっても売ろうとはしてくれなかったのだ。これまで母と訪れた時には友好的だったはずの通いなれた店であっても、店側は今の遊良の姿を見ただけで嫌悪の態度を表に出して…それは、到底モノを売る商売人の取っていいような態度ではなく。

追い出し、追い返し、摘み出し、弾き出し…

食事を作ってくれるはずの親が居なくなり、何も食べていない空腹に襲われ、一人孤独に落とされた幼い子どもをまるで病原菌かの如く忌諱して誰もが救いの手を差し伸べようとしようとはしなかったのだ。

―そして、ぶつけられるのは『言葉』だけではない。

「こっちに来るなよ出来損ない！気持ち悪ぃんだよ！」
「うわっ、こっち見たぞ！うわー、Ｅｘ適正消されちまうー！」
「じゃあ俺があのゴミ虫駆除してやるよぉ！おらぁ！」

―！

「…う…」

夜の街を、力無くふらつきながら歩いていた遊良へと、無常にも投げつけられる石のつぶて。
それは夜の街に屯していたらしき素行の悪い若者達による、面白半分の直接的な暴力であり…次々にぶつけられる石の雨は、遊良の限界が近い体を容赦なく傷付け、それに呼応し若者達の下品な笑い声が更に大きくなっていって。
辛うじて小さな手で頭を庇っているとは言え、鈍い音が遊良の体中のあちこちから奏でられるとその箇所から痛みが傷となり、そこから血が出て更に痛みが増していく。
…別に、決闘市に居る全ての人間が暴力を振るうわけではない。
しかし、こういった素行の悪いモノも少なからず居るということが、決して許されるはずの無い直接的な暴力を黙認してしまっているのもまた事実なのだ。
そして…素行の悪い若者達は薄ら寒い笑みと共に遊良へと近づき始めると、狭い路地に遊良を追い詰めていき…下品に歪んだ笑いを収める事無く、怯えている遊良へと向かって口を開いた。

「へへっ、こりゃ良いサンドバックになるぜ。」
「あ…」
「いひひ…逃げんじゃねーぞ害虫野郎…おらぁ！」

―!

「…あぐ…ぁ…」
「おらおらぁ!駆除だ駆除!」
「この害虫が!目障りなんだよこのゴミが!ゴミ野郎が!」

―!

直接的な暴力、子ども相手にいい年をした若者が寄って集って甚振るその下劣な光景。

「ふぐっ…や、やめ…げふっ…」
「うるせぇ!勝手に喋ってんじゃねーよ!おらおらおらぁ!」

顔を殴られ、腹を蹴られ…されるがままに抵抗も出来ず、幼い遊良は倒れた体を上から踏みつけられ続けて。
嘔吐と嗚咽が遊良の小さな口から漏れだすも、素行の悪い若者達はまるで遊良を痛めつけることをやめようとはせず。更に嬉々として暴行を続けるだけで…それは自分達の日々のストレス発散か、自分達よりも不幸な者を見つけた歓喜の狂喜なのか。

意味も無く、意味など持たず、意味など考えず。

ただ単に、それこそ無意味に暴力をぶつけているだけのようにも見えるソレは、まるでゲームでもしているかのように、憂さ晴らしをしている姿にも見えるだろう。
…また、理由も無く暴力を振るわれている遊良を、周囲を歩く他の大人達は誰も助けようとはしなかった。
狭い路地で行われる、あまりに非道なコレを見ても誰もが見てみぬ振りで無感情で…時には嘲笑混じりで見下しながら、鼻で笑って立ち

去っていく。
　それはまるで、この少年は暴力を振るわれて『当然』なのだと言わんばかりの醜悪な態度。Ｅｘ適正を持っていない方が悪いのだと、そう言いたげな醜い表情で、誰も遊良を助けようとはせずに立ち去っていくだけ。

「はっ、いい気味だぜ。Ｅｘ適正が無いとか生きてる意味ねーだろ。」
「テメェみてぇな害虫は目障りなんだよ、この出来損ない。」
「ペッ、さっさと死んじまえクズが。」

　そして…
　好き勝手に甚振ったことで、遊良が倒れて動かなくなったことに飽きたのか満足したのか。傷だらけになって蹲り、苦痛と恐怖と絶望に震えている遊良に対し…素行の悪い若者達は、倒れている遊良に唾を吐くと、下品な笑い声と共にその場を立ち去っていった。

「う…ぁ…とー…さん…かーさん…」

　悲痛に苛まれ、絶望に蝕まれ…姿を消した両親のことを思い浮かべる遊良の声は、声にもならない悲痛な声。
　捨てられた、Ｅｘ適正が無かったから。そんな赤の他人の無責任な言葉など、遊良とて信じられるわけが無いとは言え…それでも確かに失踪してしまった両親の顔を思い浮かべると、幼さが故の辛い孤独感と酷い痛みが浮かび上がって遊良をどこまでも追い詰める。
　容赦なく襲いかかる数日間の空腹感は、一人で街を彷徨い歩いていた遊良の体力を無慈悲に放出し…めまいを引き起こし遊良の視界をぼやけさせ、動かなくなった体から漏れ出す涙が決して薄れぬ寂しさとなって体だけではなく心にも深く傷を作って。

「うっ…うぅ…」

仲が良かったはずの子ども達も、自分の事を褒めてくれた大人達も…相棒だと思っていた幼馴染すら助けには来てくれない。

それはまるで、一人だけ世界に取り残されてしまったかのような感覚。その孤独感は、一体どれだけの寂しさを遊良へと与えていると言うのか。

誰も、助けてはくれない。

これほどまでに変貌した人々の態度とぶつけられる様々な暴力の嵐は、ソレを遊良に理解させるにはあまりに充分であり…人々の言う通り、自分は本当に生きる価値の無い人間なのだろうか、決して認めたくはないのに、傷付いた幼い遊良の心がそう思ってしまったとしてもそれは仕方のないことだろう。

そのまま…

小さく小さく震えながら、遊良はその場から動かなかった。

…

夜が更け、街にはもう人の気配が無くなった頃。

狭い路地に倒れていた遊良は、痛めつけられた体がどうにか動かせるまでになったのか…かすかに動かしただけで軋みを上げる体にゆっくりと力を入れ始めると、その場から静かに起き上がり始めた。

限界の近い小さな体を、壁伝いに支えてゆっくりと立ち上がり始め…ふらつく足を何とか踏ん張って、敵達に見つからないようゆっくりとその場から歩き始めて。

既に限界、満身創痍。

この数日間、ずっと両親を探してこの広大な決闘市を歩き回っていたのだ。それに加えて、素行の悪い若者達から受けた酷い暴力によるダメージによって、最早遊良の体は歩くだけで精一杯の様子。

しかし、悲鳴を上げる体を押してでも歩きはじめた遊良の向かう方向は、街の方ではなく『自分の家』へと帰ろうとしている様子であり…

もしかしたら両親が家に帰ってきているかもしれないという淡い期待と、これ以上の地獄から逃げ出したいという衝動だけを支えに、どうにか足を前に出し続けるその姿は決して幼い子どもが見せるような姿では断じてないことだろう。

それは、敵だらけの世界からの逃避、怖い『外』からの脱出。

小さな世界の片隅で、傷付いた体をこれ以上傷付けられないように。生まれ育った自分の家へと、この世界で唯一の安全な場所、唯一残った自分の逃げ場所を目指して遊良は歩き続けて…

しかし…

「…あ…」

暗い夜道をふらつく足で、ぼやける視界で何とか『家』へとたどり着いたというのに…今まで以上の絶望と悲嘆が、身も心も傷付き果てていた遊良へと襲い掛かった。

それは、数日間留守にしていた『自分の家』が…

―原型を忘れたかのように『酷い』有様となっていたから。

誰かによって外側から割られ、家の中に散乱しているガラスの破片。
床に倒れ放題になっている、家電製品の数々。
意図的に壊されたのだろう、原型を留めていない家具や寝具。
引き裂かれたり破かれたり、燃やされたりした様子の衣類だったモノ達。
新築に近かったはずだというのに、まるで廃墟と見間違うほどに折られ壊された柱や壁。

汚され、焦がされ、壊され、崩され…

それは、『酷い』と言うにはあまりに過ぎた惨状。不特定多数の者達に『意図的』に荒らされたかのようなその惨状は、心を持っている人間が行ったとは思えないほどに…到底、人が住めるような状況では断じてなかったのだ。
まるで、天城　遊良というＥｘ適正の無い存在に、こんな『人間らしい家』など必要ないだろうと、そう言わんばかり壊れ果てたこの家の状態。遊良には、逃げる場所すら与えてはならないのだと、そう告げているかのよう。

「どう…して…」

この飛び込んできた光景に、このあまりに酷い家の有様に…どうにかここまで保っていた意思の糸が切れ、胸を突き刺す鋭い痛みが深く深く遊良の心へと突き刺さって。
唯一残っていたはずの自分の『逃げ場所』。ソレが奪われ、この世界にはもうどこにも自分の居場所など無くなってしまったのではないかと言う錯覚が、傷付いた遊良の心を包み始め…
将来の展望も、これから先に思い描いていた未来も、守ってくれる両親すら奪われたこの地獄のような世界。

…一体、自分が何をしたと言うのだ。涙に溺れた遊良の瞳は、それ以外の感情を最早一切持つことは出来ず。

何をした覚えもない。ただ普通に生きていただけ。

そうだと言うのに、突然医師から信じられないような宣告をされ、これまで抱いていた未来へのヴィジョンが壊れて崩れ落ち、他者からまるでゴミ同然のように扱われるこの屈辱と仕打ちはあまりに酷いのではないか。遊良の目に浮かぶ大粒の雫がソレを哀しく物語り、溢れる孤独と迫り来る虚無感が、涙となって地面に落ちる。

怖い、人々の目が、人々の動向が。自分の事を容赦なく汚いモノとして扱ってくるその目も、何もしていないのに汚物の駆除と言って暴力を叩きつけられるその心の無い行動も。

大人達から汚らしいモノを見る目で見られた事も、仲の良かった子ども達が全て敵になった事も…Ｅｘ適正が無かったと言う、ただそれだけの事でどうして人間はこれほどまでに唐突に、こんなにも醜く変われるのだろう。

―世界の全てが、自分の敵。

その、あまりに突然に地獄に叩き落とされたその恐怖は、どこまでも幼い遊良を追い詰めだけで…

「うっ…うぅ…ひぐっ…」

しかし、親の親など誰も知らず、他に行く当も無いが故に、酷く壊された家であっても、重い足取りでその中へと入っていくしか遊良には取れる選択肢がないのか。

荒らされた家、壊された居場所。

あまりに酷い有様となっている室内を見わたすと、この世界のどこにも居場所がなくなってしまったかのような錯覚と孤独感だけが遊良の心に浮かび上がり…

小さな部屋の片隅、荒らされた家の隅っこに力なく座り込むと、遊良は小さく小さく縮こまってその幼い体を必死に握り締めて。

次第に、脱水から来る眩暈と痛めつけられたダメージによる吐き気が、幼い遊良の意識を朦朧とさせその命を奪い始め…ゆっくりと動く心臓の鼓動が更に遅くなっていくその感覚は、遊良の生きる意志が徐所に消え始めてしまっているかのよう。

…このまま、生きるのをやめてしまおうか。

これから先に希望など無いということは、あんな目に遭えばこの歳の子どもであっても嫌でも理解してしまうのか。

誰からも必要とされず、このまま生き続けても『出来損ない』と言われ続けるだけの人生。人々から忌み嫌われ、人々から見下され…そして、人々から傷つけられるだけの日々を送るくらいならば、と。

それを理解させたのは紛れも無い、無自覚の悪意を大衆の総意と勘違いした心の汚れた大人者達であるということには、当の大人達は誰も気付いていないが。

そして、忍び寄る絶望だけを感じながら…

幼い遊良の小さな体は…

—その意識を、静かに手放していった…

…

ｅｐ６０「閑話ー天城　遊良、中編」

「なんでゆーらに会っちゃいけないの!?意味わかんない！」

突如として父から告げられた忠告に、憤慨の意を明らかにしながら、ルキはその幼くも曇っていない眼で父を睨みつけていた。

それはまるで、実の父すら『敵』なのだと言わんばかりの剣幕。

今にも家を飛び出して行きそうな危うさを滲ませているルキの勢いは、つい先日、世界中に駆け巡った『Ｅｘ適正を持たない少年』のニュースに対する驚きと相まって、じっとしていることが出来ないかのようにも見えることだろう。

また、そのニュースの直後から決闘市中が、コレまでの遊良の事を全て忘れてしまったかのように掌を返して遊良の事を蔑み馬鹿にし始めたことが、更に少女の驚愕となっていて…

そんな、未だ納得のいかない鋭い剣幕のままでいる幼い娘へと向かって、父はしどろもどろになりながらも再度その口を開いた。

「ゆ、遊良君はね…Ｅｘ適性がなかったんだって…そんな彼と一緒にいて、もしルキのＥｘ適性まで消えちゃったら…」

…事実無根。

誰が流した噂なのか、まるで感染症の原因とでも言わんばかりに天城　遊良に近づくことを禁じ始めた親たち。その噂は瞬く間に決闘市中に広まり、今ではその噂を本物だとして信じきっている者も居るというではないか。

無論、これまで遊良と深く親交があった高天ヶ原家からすれば、そんな噂など取るに足らない、下らない妄言に過ぎないということは充分に理解はしているのだが…

今この決闘市で、いや世界中で騒がれている『Ｅｘ適正の無い』ただ一人の少年に対する批評や批判、憶測や推測、噂や嘲笑が途絶える

気配も無く、寧ろどんどん大きくなって来ているというその事実。
このまま天城　遊良と自分の子を一緒に居させれば、我が子にまでその被害が及ぶかもしれないというその畏怖。
ここまで世間を騒がせているという今の決闘市の現状を見れば、遊良本人だけではなく彼を取り巻く周囲にまで酷く影響を及ぼす可能性があると言うことは遊良と仲の良かった子を持つ親ならば容易に想像出来ることであり…
…それに対して、ルキの父が急遽考えることの出来た対応はその他大勢の親と同じ。
他の親達のように遊良の事を悪く言って嫌わせるか、遊良に近づくことは危険な事なのだと言うことを、どうにかして娘に言い聞かせるしかルキの父には娘を守る手段が思いつかないのだ。
ルキを、遊良に近づけさせないようにすること…ルキを、遊良から出来るだけ離させることだけしか。

「だ、だからさ、ルキ…しばらくは他のお友達と…」

言いたくも無い警告、したくも無い忠告。ルキの父のその苦悩は、言葉に出せなくとも表情として確かに滲み出ている。

―それが、娘とは全く関係の無い少年だったならばどうでも良かった。

その少年が自分達とは全く関係の無い、面識もなく見捨てることに何の抵抗も覚えない、心の底からどうでもいいと思える少年だったならば、こんなに心を痛めずに済んだと言うのに。
…どうして、ソレが天城　遊良だったのだろう。
全ては自分の子どもを守る為とは言え、これまでの遊良をルキと一緒に近くで見てきたルキの父もまた、忠告の言葉の一つ一つに胸を刺されるような痛みを覚えており…
言いたくも無い娘への忠告は、自分の心までをも裏切っている感覚

となって突き刺さり続けていて。

…それでも、言うしかない。

それが例え、娘の命の恩人なのだとしても…今の街の『天城　遊良を排除せよ』という風潮の中に、父が手放しで娘を放り込めるわけがないのだから。

「知らないよそんなこと！だったらたかやなんかとっくに消えてるし！何でそんなことでゆーらが苛められなくちゃいけないの！意味わかんない！」

「だ、だから…こ、このままだとルキだってまた危ない目に遭うかもしれな…」

「じゃあゆーらは危ない目にあってもいいの!?どうして私はダメでゆーらは良いの!?どうして!?」

「だ、だからね、それは…」

しかし、ルキは決して怒りの剣幕を緩めることなく父へと攻寄り、益々その怒りを増していくだけ。

そう、いくら父が言いくるめようと尽力した所で、ルキが遊良を見捨てることは決してありえないのだ。

例え世界中が遊良の敵に回ったとしても、自分だけは絶対に遊良の敵に回るつもりは無いと言わんばかりにルキの決意は固く…

以前自分が誘拐された時、命の危険を冒しても自分を救い出してくれた遊良のことを、ルキが見捨てられるわけがないのだから。

…遊良にＥｘ適正が無かったことが、一体何だと言うのだ。

Ｅｘ適正など関係のない幼等部では、鷹矢以外は誰も実力で遊良には勝てない癖に。どうして、皆は遊良を弱者のように扱い、どうして遊良の事を悪く言うのだろう。

悔しさと哀しさに挟まれたルキの瞳は、目元に薄っすらと浮かび上がる小さな雫と共に、遊良を弱者として見放す街の人間達へと怒りと

なって今にも零れ落ちそう。

—自分を救ってくれたヒーローの、一体何が悪いというのか…と。

そうして…

「ゆーらは私の事助けてくれたじゃん！私行くから！ゆーらのとこ行くから！」

「あっ、ま、待ちなさいルキ！」

「うるさい！パパなんて大っ嫌い！」

父の制止を振り切ったルキは、感情のままに家を飛び出すと…

そのまま、全速力で街の方へと駆け出していった。

—…

「ゆうら！おい！おきろゆうら！」

あまりに酷い惨状となっている室内、その荒れ果てた『天城家』の中でのこと。そこで意識を失い倒れている遊良を発見した鷹矢は、大声を上げて遊良へと呼びかけていた。

この『騒ぎ』が起きてから、一向に連絡が取れなくなった遊良とその両親。その双方の身を案じた鷹矢と父が、家の者が止めるのも聞かずに共に屋敷を抜け出してここまで様子を見に来たのだが…

しかし、まさか彼らも『天城家』がここまで酷く荒らされているとは思いもよらず、その中で遊良が衰弱して倒れているだなんて考えもしなかったことだろう。

…体温が低く、呼吸も弱く、傷と痣だらけのその体。

遊良のその状態は、幼い鷹矢の目から見ても明らかに危険だというのが見てわかる程に傷付いていて…今にも命の灯火が消えてしまいそうな程に衰弱したその姿は、鷹矢が見知った遊良の姿とはかけ離れたモノだったに違いなく。

そんな変わり果てた遊良へと、鷹矢は必死になって呼びかけ続ける。

「ふざけるな！おいゆうら！寝るな！寝たらしぬぞ！」
「おい馬鹿！そんなに揺らすんじゃねぇ！」
「じゃあどうすればいいと言うのだ！どんどん冷たくなっているのだぞ!?このままゆうらを放っておいたら…」
「わかってんだよそんなことは！おい、どういうことだ！なぜ救急車をよこさない！」
『で、ですから…あ、天城　遊良の搬送は許可出来ないと…その、上から言われていまして…』
「あぁ!?それが病院のやることか！いいからさっさと…」
『し、失礼いたします！』
「あ、おい！…ぐっ、ヤブ医者共がぁ！」

また、その後ろで苛立った様子を隠さずに電話越しに声を荒げた鷹矢の父、天宮寺　正鷹。

この混乱が生じてすぐに遊良の身を案じた彼もまた、鷹矢を伴い明らかに危険な状態である遊良を見つけ、すぐに手を打つべく救急の電話をかけていたのだが…

いくら救急車の要請をしようと、病院側から帰って来る返事は常に同じモノ。『天城　遊良の搬送は許可出来ない』の一点張りで、話が通じず、許可が出せないからと救急車を寄越すこともしてくれない病院側の対応に怒りと焦りで声を荒げはするものの、現状は刻一刻と悪くなっていくだけ。

それが、医療倫理から外れた非道な行いであることはまず間違いないのだが…それ以上に頑なに、誰も遊良を助けようとする意思が医師

たちからは全く感じられず、どの病院も決して遊良の受け入れを容認しようとはしてくれなかった。

「ゆうら！おい！どうしたのだ！はやくおきろ！起きて俺とデュエルだ！まだお前とはけっちゃくがついていないだろうが！おい！」

そんな中、このまま黙って遊良を見殺しになど出来るはずがないと言わんばかりに、その幼い声で必死になって遊良へと呼びかけ続ける鷹矢。

…家の者や親戚から、遊良との付き合いを止めるようにも言われた。

…いかに遊良がデュエリストの出来損ないか、嫌と言うほど熱弁された。

―しかし、それが何だというのだ。

他人が語る遊良など、自分には全く関係がないと言わんばかりに全てを突っぱねた鷹矢の心には、遊良にたかが『Ｅｘ適正』が無かったからと言う程度で今更変わるような柔な代物では無い。

生まれた時から一緒に居たのだ、一人で勝手に居なくなるなど許さない…と。

そう、いくら遊良の事がニュースとなって騒がれ、周囲の人間達が遊良への見方を突如として変貌させ好き勝手に遊良を語ろうとも…これまで遊良と過ごした時間と、遊良のその強さが無くなるはずないのだと知っている鷹矢だからこそ、他人に何を言われようと鷹矢が遊良を見捨てることなど絶対にないのだから。

「おい！おやじ！はやく医者をよべ！」
「わかってるって言ってんだろ！この辺りの医者は全滅だ…デカい病院はなおさら受け入れるわけがねぇし…」

そんな鷹矢の声に応えるように、どうにか遊良を助ける術が無いかと模索する父、正鷹。
しかし、こんな時だというのに頭の中には取るべき手段が何も出てこず。生まれた時からずっと見てきた盟友の子を、このまま見殺しになど絶対に出来ないというのに…そんな鷹矢と正鷹の声は益々焦りを孕んだモノへと変わって行き、それに伴い遊良の呼吸は弱くなっていく一方ではないか。
このままでは、遊良の命の灯火が消え行くのをただ見ているしかない。
名家だ何だともてはやされても、こういった非常事態に何の役にも立たない自分の家の名を悔やんでいるかのように父、正鷹の表情は苛立ちを深くしていくのみであり…自分の力の無さに苛立ちが募り、名ばかりの名家に憤りを感じ…
何がエクシーズ名家、天宮寺家。所詮は【黒翼】ただ一人の財と功績によってなりあがっただけの名の癖に…と。
そう…【黒翼】の…

「…いや待て…アイツなら…」
「おやじ！まだか!?ゆうらがしんでしまう！」
「…くそっ、もう悩んでいる時間はねぇ…」

そうして『自分の』力の無さに打ちひしがれそうになった正鷹の脳裏に、何かが唐突に思い浮かんだのか。
出来れば思いつきたくなかった手だと言わんばかりに苦々しい顔をしながらではあったものの、しかしもう後に引けないこの状況だからこそ自分の心苦しさなど気にしている場合ではないとして、その最

後の『手段』を取るべく再度どこかへと電話をかけ始めて。
どこかの病院の番号ではない、個人的な番号の羅列を選び回線を繋げ…相手を呼び出すコール音が淡々と続き、一向に繋がる気配を見せない回線に苛立ちを感じながら。

そして…

「くそっ、さっさと出……ッ!?おう！俺だ、頼みがある！」
『…』
「チッ、黙って協力出来ねぇのか！こっちは非常事態なんだよ！」
『！』
「あぁ!?うるせぇ！いいからさっさと何とかしやがれ！テメェならどうにか出来んだろうが！」
『！』

やっと電話が繋がったと思ったその刹那、回線越しに喧騒が交差して。
頼みごとをしているのは正鷹の方だというのに、その言葉使いはお世辞にも頼みごとをしている方が取るような口調ではないものの…しかし、その相手が普段から話すら聞く耳を持ってはくれない相手、絶対に頼みごとなど聞いてくれるような相手ではないからこそ、正鷹もどうしても言葉を強くしてぶつかるしかないのか。
決して相容れぬ相手、犬猿の仲の相手であっても、今ここで遊良を救える可能性があるのならば何が何でもここで引くわけにはいかず。
そう、正規のルートでは全く話しを聞く気のない病院側に、自分程度がいくら正面から無理を言っても聞いてくれるわけがないことを正鷹は理解しているからこそ、無理やりにでも無茶を押し通せる力を持った人間にこうして恥を忍んで頼むしかないのだろう。

「さっさとしやがれ！このクソオヤジが！」

その電話越しからでも伝わる【黒翼】の暴力的なまでの声に、正面から立ち向かいながら…

――…

「…う…」

ぼやけた視界に飛び込んできた、見慣れぬ白い天井。

重い体と鈍い思考の所為で、自分が今どうなっているのかなど幼い遊良には理解出来ないままではあったものの…独特の薬臭さと定期的に鳴る機器の音が、『ここ』がどこなのかをぼんやりと伝えてくる。

…どうして、こんな場所にいるのだろう。

体が動かないのが暴行と栄養失調による体内へのダメージの所為だということも思い出すことが出来ず、自分が何故病院で寝ていたのかを理解することが出来ないでいる遊良。そのまどろんだ気分は、自分の身に起きた出来事をわざと思い出さないようにしているのか。

そして…

遊良は何とか上半身を捻じり、鈍い痛みが走る体を少しだけ起き上がらせた…

…その時だった。

「あ…ゆー…ら?」

遊良の動きとほぼ同時に、小さな声が静かな病室内に落ち…その声が発せられたのとほぼ同時に遊良が声のした方へと視線をやると、そ

ここには紛れも無いルキの姿があった。
…ベッドの脇の椅子に座り、驚いた表情をして。
そんな幼いルキは遊良が目を覚ましたことに驚きを見せつつも、徐に椅子から飛び降り一目散に入り口まで走り扉を開けると、外にいるであろう誰かへと大きな声をかけ始める。

「た、たかや！ゆーらが！ゆーらが起きた！」
「む！本当か！…まったく、やっと目がさめたのか！本当にひとさわがせな奴だ！」
「もー、たかやはまたそうやってイジワル言うんだから。」
「ふん、たすけてやったのだから感謝してほしいくらいだぞ。」
「えー…たすけてくれたのはお医者さんでしょ？」

そして、ルキの声に応じて部屋の中へと入ってきた鷹矢。
どこか軽口を叩いている鷹矢ではあったものの、その声からはにわかに安堵が滲み出ており…遊良が目を覚ます直前まで、鷹矢も病室に居たのだろう。平静を装ってわざと憎まれ口を叩いている鷹矢の言葉も、それが本心ではなく照れ隠しだというのがルキにも手に取るように理解できている様子で鷹矢へと声を返している。
そんな鷹矢は起き上がった遊良に近づいていくと、そのまま遊良へと向かって再び口を開いた。

「しかし、目がさめてよかったと言っておいてやろう。お前とはまだけっちゃくがついていないのだからな。」
「…」
「…む、ゆうら？どうした？」

しかし、安堵の声で話しかけてきた鷹矢とルキとは対照的に…

—遊良の表情は固まったままで…

「あ…あぁぁ…」
「ゆうら？おい、どうしたのだ…」
「…ゆーら？」

手が震え、汗が滲み、宙を彷徨う遊良の視線。
どこも見ていないような虚ろな目で、目まぐるしく視線を痙攣させている遊良の顔色がみるみる青ざめていき…

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

突然に、唐突に、発狂の如き声で叫びだしてしまった遊良。
その声は怯えに怯え、あまりの恐怖に自我を保てていないのが誰の目にも明らかなほどに悲痛なモノとなって放たれていたことだろう。
近くにあるモノを手当たり次第に、目の前に居る二人へと向かって投げつけ始め…

「いやだ！いやだいやだいやだ！」
「お、おい！どうしたのだ!?」
「きゃっ!?ゆ、ゆーら！落ち着いて！ねぇってば！」
「やめろ！どうしたというのだ！ゆうら！」
「い、いやだ！こっちに来るなぁ！」

何を言っているのかわからない。誰が話しかけているのかわからない。
今目の前にいるのは鷹矢とルキで、向けられている言葉も感情も自

分を案じてくれているモノだというのに…今の遊良の濁った目には、見慣れたはずの友の顔すら自分を傷つけてくる敵としか認識できないのか。

怖い…ただ、怖い。

会うもの、見るもの、全てが敵。幼い遊良の負った傷は、体だけではなく心の奥深くまで傷付けてしまったかのように遊良へと食い込んでいて。

まるで、自分以外の全てを『敵』と認識することでしかその幼い心を守ることが出来ないかの如く暴れ、自分ではどうしようもない恐怖に必死になって抗おうとしているだけ。

そして…

「うわぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ま、まて！ゆうら！」

「ゆーら!?」

…半狂乱の叫びで混乱のままに、ボロボロの体を無理やりに動かして暴れたことでベッドから落ちた遊良は、怯んだ鷹矢とルキの間をすり抜けるようにして一目散に駆け出したかと思うと…

…恐怖に怯えた声で悲痛な叫びを漏らしながら、病院から逃げ出してしまった。

―…

行く当ても無い。味方も居ない。希望も無ければ未来も無い。

そう言われ続けた遊良の心は、既に原型を保っていないほどにボロ

ボロであり…全ての人間が『敵』に見えてしまうその錯覚は、この幼い歳の子どもの目からすれば想像を絶する恐怖であったことに違いないだろう。
いや子どもでなくとも、例え大人であったとしても遊良の受けた恐怖は誰の心でも耐え切れるかどうか怪しいとも言える。
何せ、今まで生きてきた常識が反転し、味方だと思っていた者が全て敵へと回り…逃げ場も無くずっと傷つけられる日々を送らなければならないと考えただけでも、この先の未来に待っているのは純粋なる絶望しかないのだから。
…そして、その渦中にいきなり放り込まれ、右も左も分からない上に守ってくれるはずの両親まで無くし、挙句の果てに逃げ続けた果ての代償が『壊れる』ことなど、一体誰が味わいたいと言うのか。

…そんな時代が、確かにあった。

全てを拒絶し、生きることに意味を見出せず、何もせずに命を絶とうとしていた時期が。
鷹矢とルキにさえ拒絶を示し、もうどうしようもならない程に全てに怯えて拒んでいた、そんな時が。

これは遊良の身に起きた、紛れも無い事実。

この『無』の世界の中に浮かんだままの『今の遊良』が思い出させられた、確かにあった『過去』の出来事。
忘れていたわけではない。しかし、決して思い出さないよう心の奥底に仕舞いこんでいた記憶。
その後、鷹矢とルキの必死の訴えで、どうにか幼馴染二人にだけは拒絶を示さなくなったものの…

―あの頃、鷹矢が自分へと向かってくる『敵』の全てに牙を剥いて守ってくれていなかったら…

―あの頃、ルキが必死になって自分の命を繋いでくれていなかったら…

きっと全てを拒絶したまま、今まで生きてはいなかっただろう。

そんな思い出したくもなかった記憶を刻み付けられ、わざわざ思い出させるかのように見せ付けられ、かつて味わった絶望を再び思い知らされた遊良の心にはあの頃の痛みが再び蘇ってしまっているのか。

『努々忘れることなかれ…自分が一体何なのか…』

そして、『無』の中で浮遊している遊良へと再び聞こえてきた同じ台詞。

それは、先ほどは考える事も出来なかった自分自身が何者なのかという問いに対し、わざわざ『こんなモノ』を見せたということから、世界にとって『天城　遊良』とはどういう存在なのかということを嫌でも刻み込もうとでもしているのだろうか。

（俺は…）

しかし、決して思い出したくも無かった、心の奥底へと封じ込めていた果てしない絶望を思い出し、あの頃の悲痛を無理やりに見せられた遊良には『一つ』の答えが浮かび上がってきている様子。

決して認めたくない事実。しかし思い知らされ、思い出させられ、思い込んでしまいそうな解が今、遊良の心に浮かび上がってきて…

（俺は…Ｅｘ適正の無い…）

今までずっと抗って、絶対に認めたくなかったその思い。
馬鹿にされ、蔑まれ、罵られ、侮辱され、いくらデュエルの腕を磨いてもＥｘデッキを使えないということだけで実力を認められなかった過去。それでもそれに抗うように、未来永劫Ｅｘ適正を捨てる代償に【堕天使】を得て、もう後戻りすら出来なくなったからこそ前に進むしか遊良には出来なかったというのに…
否応にもその『答え』を遊良が自覚してしまった時、得も言われぬ虚無感が遊良を包み始め…まるでこの『無』の世界の中に、『自分』という存在全てが飲み込まれ霧散していくような錯覚が昇ってくるではないか。
徐々に『無』の中へと溶けていく意識。それに対する恐怖は最早遊良には無く、心に穴の開いた虚無感が昇り、まるで自分が消えていくような感覚に飲み込まれていく。

そうして…

（デュエリストの…出来…損…）

見せ付けられた絶望から、遊良が己の全てを諦め認めかけた…

―その時だった。

―！

（…あ…この…声…）

全てを諦めかけたその時、全てを受け入れかけたその時。
決して『音』など聞こえないようなこの『無』の中において、遊良の耳に確かに聞こえた『咆哮』。

（…これ…は…）

ずっと聞いてきたような、とても懐かしいけれども常に傍にあったと思えるような…それはきっと、絶望を思い出し、全てを受け入れ、何もかも諦めて『無』の中に消えていこうとした遊良の『諦め』を、否定しているようにも聞こえたことだろう。
自分を呼んでいるその叫び、諦めて消えることなど許さないかのように轟く咆哮。
その『獣の咆哮』が遊良へと届いた時、遊良の溶けかけていた意識は徐々に形を取り戻していく。そして、自分の体の感覚が少しずつ戻ってくると共に…

（…落…ち…）

―不意に生じた重力が、『無』の下へと落ちていく感覚となって遊良の意識を引き寄せていた。

―…

（……ら…。ゆ…ら…）

暗闇の中。とても遠いところから、確かに自分を呼んでいるような

気が遊良の耳へと届いていた。

—何度も何度も、必死になって呼びかけているような…そんな声。

どこから呼んでいるのか、そんなことなど遊良には理解出来ないものの、その声がする方へと意識を向け始めると徐々にその声が近くなってきているのが分かり…

それが『誰』の声なのかを判別できるほどに意識が声へと近づいた時、感覚を感じなかった自分の体が『誰か』に揺さぶられていることを遊良ははっきりと自覚して。

「…ね……ゆ…ら…」

そして…

その声の主が『ルキ』なのだと遊良が認識できたその瞬間。

自分を呼び続けているルキの声に従い、靄のかかっていた意識がはっきりとしてくるのを感じながら、遊良はゆっくりとその重い瞼を開き始めた。

「…う…」

「遊良!?目が覚めたの!?」

「ル…キ…?」

「あ…よ、よかった…よかったよぉ…」

小さな呻きと共に目を開けたその瞬間に、遊良の目に飛び込んできたルキの顔。

その緩んだ声を漏らしたルキの表情は、遊良が目を覚ます直前まで不安と動揺で涙を流していたのだろうか。

薄っすらと見える涙の跡は、まだ渇ききっていないことからどれほどルキに心配をかけてしまったのかを遊良に理解させるには充分であり…そんな目を覚ました遊良を見て、気を張り詰めていたであろう

ルキの顔が急速に安堵に崩れていく。
「ねぇ大丈夫なの!?どこも痛くない!?気持ち悪かったりしない!?ねぇ!」
「…大…丈夫…。うっ…」
そして、目を覚ましたばかりの遊良に対し、ルキは心配そうな声を矢継ぎ早に繰り出して。
そのルキの声に応えるようにして、起き上がろうと身を捩ると全身に鈍い痛みが走ったのか遊良は小さく呻きを漏らしてしまい…
「だ、駄目だよまだ寝てないと!遊良倒れてたんだよ!?」
「…倒れ…あ…俺…倒れてたのか…ここは…?」
その痛みが自分の身に起きた『何か』を思い出させ、先ほどまで見ていた『昔』の夢の所為で、『今』の現実との境界がどこか曖昧になっている様子の遊良。
自分が寝ていた『ここ』が、これまでずっと暮らしてきた『家』のリビングだということを認識するまで数瞬遅れてしまっていて…ソファ越しに窓の方を見ると、薄暗くなってきている外が見え、壁の時計の針と日付から『あれから』そんなに時間が経っていないということを何とか認識したのか。
そんな起きたばかりで上手く思考が回らない様子の遊良を、心から心配しているであろうルキが痛い程に真っ直ぐな視線を向けて覗き込んでくる。
「…中々帰ってこないから探しに行ったら、家の近くで遊良倒れてるんだもん…事故にでもあったのかって…大きな怪我はないみたいだけど、何かずっと苦しそうにうなされてるし…」
「それは…」

「周りにデッキまで散らばってたし…ねぇ遊良、何があったの？」
「…」
今にも涙を流しそうなほどに潤んだルキのその瞳は、遊良が目を覚ましたことで『最悪』の事態を回避したとは言え…遊良の身に『何か』が起こったことを悟り、再び不安を募らせてしまった様にも見えたことだろう。
…しかし、その真っ直ぐに見つめてくるルキの目に対し、遊良はとっさに目を背けてしまって。
…それは、無意識の反応。
そう、いつもならば直視できるはずのルキのその目が、何故かどうしても遊良には見ることが出来なかったのだ。
胸の内に渦巻く靄のような嫌な感覚が、どうしてもルキの顔を見ることを阻んできてしまい…その嫌な『違和感』が、何故か見慣れているはずの『今』のルキの顔を見ようとすることすら躊躇させてしまっているかのようであって。
…言えるわけが無い。何があったのか、自分の身に何が起きたのか。
―『負けた』…だなんて。
突然現れたフードの男と、デュエルをして…
しかも、ただの負けじゃない。
正体不明のフードの男、使い手を想像することすら出来ない『儀式

召喚』を使ってくる相手、果て無き憤怒と空虚な虚無感が入り乱れた不気味な敵。
そんな相手と『実体化』したデュエルを行い、そしてあろうことかデッキが言う事を聞かず…いや、【堕天使】達が言う事を聞かず、何も出来ずに負けてしまったという事実。

…あの敗北の痛みは、遊良とてはっきりと覚えている。

全身が焼ける感覚、体が溶けていく感覚。
あれだけの苦痛が襲ってきた割には、今自分に残っているダメージの少なさには遊良も些か疑問を感じている様子ではあるが…味わったことのない『本物』の苦しみは、あの燃えるような痛みの連鎖となって、本物の死の恐怖が迫ってきていたのだ。
それでも、余計な心配をかけてしまったことも、数ヶ月前におきた『異変』と同じような現象が再びこの決闘市で起きてしまったということも…いたずらにルキの不安と心配を煽ることになってしまうからこそ、どうしても遊良は言えないのだろう。

「…な、なぁ、そういえば…鷹矢は？」

そして、どこか無理やりに話を変えようとでもしているかのような口調で、この場に居ない鷹矢の事を思い出したかのようにルキへと問いかけた遊良。
…そう、ルキの力では自分をここまで運び込むことなど無理なことであり、外で倒れていた自分をこの家のリビングまで運んだのは間違いなく鷹矢だと言うことは言われるまでもなくわかっていること。
そうだと言うのに、この場に居るのはルキ一人だけであり…シャワーの音や二階の自室に居る気配も無いことから、まさか外食よりも遊良の飯を食うことが生きがいのあの食いしん坊がこの時間に居ないということがどこか遊良には引っかかったのか。

「…え、あ…遊良を家の中に運んだ後、急いで外に飛び出て行っちゃったよ…何か、凄く怒ってるっぽかった…」
「……そうか…」

…しかし、ルキからそう聞いた瞬間に、遊良は嫌でも理解してしまった。
きっと鷹矢は、カードをばら撒いて倒れている自分を見て、ここで何が起こったのかを直感的に理解してしまったのだろう、と。
生まれてからずっと自分と共に過ごしてきたのだから、詳細まではわからなくともその『異常』な場面から遊良の身に起きた出来事とその『異常性』を、鷹矢が断片的に理解してしまったとしてもそれは鷹矢であれば何の不思議でもなく…
そして、先日鷹矢は言っていた。登校途中に遭遇した、人が『消えていた』という場面に、偶然遭遇してしまったというあの話。
デュエル直後の様な残り香と、周囲にカードが散らばり服だけが人の形となって残り…まるで人間だけが『消滅』していたと思われるようなその『異様』な場面を、鷹矢は見たらしいのだ。

―その鷹矢から聞いた話と、自分が倒れていた場面のあまりの酷似。

そう、それは今この決闘市に起きている不可解な失踪事件の根幹。あの全身が焼けるような痛みと、体が溶けていくような感覚はきっと錯覚ではなく…デュエルに敗北したことによって、本当に『消えかけていた』のだろうということを遊良は悟ってしまって。

証拠もなければただの憶測、しかし推測と言うには過ぎた確信。

それがあの『フードの男』によって引き起こされたことは先ず間違いなく、どうして他の失踪者と違い自分だけが無事で居られたのかなど遊良にはわからないものの…それでも、再びこの決闘市に『何か』が

起こっているというこの事実と、自分が負けてしまったという事実は変えられないことだろう

「…ねぇ、遊良…あ、あのさ…」

そんな沈んでいく遊良の雰囲気を察したのか、再度自分から遊良へと言葉を発したルキ。

その言葉は明るいモノではなく、目を覚ましたばかりの遊良へとかけるには少々暗い雰囲気を纏っているようもにも聞こえたことだろうが…そのルキの言葉の中には、多少暗い言葉でも遊良へと伝えなければいけないという意思が宿っていて。

「遊良が倒れてた場所に落ちてた…その…遊良のカード、なんだけど…」

「…あぁ。」

「その…全部、回収してきたんだけど…えっと…」

「…悪いな…サンキュ。」

「そ…それで…その…ちゃんと…さ、探したんだけどね…」

…それは、遊良が倒れていた周囲に散らばっていた彼のカードを、余すことなく全て回収してきたというルキの報告。

言いにくいことではあるのだが、それでも遊良自身に関わることなのだから伝えておかなければならないのだとしてその声はどこか言いにくそうにして発せられ、言葉を詰まらせながらも慎重に遊良へとかける言葉を選んでいるかのようにも聞こえ…

どうにか、ルキは言葉を繋げるのみ。

「あのね…【堕天使】のカードだけ…どこにも無いの…」

悲痛と沈痛、配慮と苦悩。
…そのあまりの言い難さを全面に押し出しながら発せられるルキの言葉は、彼女自身からしてもソレが信じられないと言わんばかりに遊良へと伝えられていたことだろう。
ルキにしてみれば、遊良が何者かに襲われ、そして【堕天使】のカードが盗まれたのかもしれないという不安ももちろんだが、そうでなくとも『今』の遊良の要のカードである【堕天使】は、自分と鷹矢を助けるためとは言え遊良がこれから先に得られたかもしれない『Ｅｘ適正』を捨て去った代償に、文字通り身を削って得たモノ。
『今』の遊良の思いはどうあれ、過去に遊良がどれほど『Ｅｘ適正』を渇望していたのかを見てきたルキからすれば…遊良の【堕天使】のカードが無くなってしまった事に対し、どうしても平静ではいられない。

「…そうか。」
「え？そ、『そうか』って…」
「…別にいいんだ。もう…別に。何となく、そんな気がしてたから。」

そんな心苦しそうにそう言ったルキに反し…
遊良はまるでソレが分かっていたかのような顔で、静かに俯いたままルキへと言葉を返すだけ。

「そんな気がって…ね、ねぇどうしたの？だってどれも遊良の大事なカードじゃん！それを別にいいなんて…だってさ！【堕天使】が無いと遊良のデッキ無くなっちゃうんだよ!?」
「…そうだな。でも、もういいよ。もう、どうでも…」
「遊良…」

その諦めが混ざっているような遊良の声は、ルキに驚きを隠せない表情を顕にさせてはいたものの…まさか彼女も遊良の口から、『こんな言葉』が飛び出してくるなんて信じられなかったのだろう。

…そう、今の遊良の雰囲気は、ルキの目から見ても明らかに『異常』。

師となった【黒翼】のおかげで、その『諦め』がどれほど無意味で無価値なモノなのかを思い知ったはずだと言うのに…その全てを『諦めて』しまっているかのような今の遊良は、まるで『昔』に戻ってしまったかのようではないか。

「だ、駄目だよそんなの！やっぱり遊良おかしいよ！だって…だって【堕天使】は遊良が…」

過去の遊良の絶望を、これまで一番近いところで見続けてきた彼女からすれば今の遊良の姿ただただ悲痛。

その全てを諦めかけている今の遊良の雰囲気は、まるで遊良が遊良で無くなっていくような恐怖をルキへと与えていて。

そんな、とっくに振り切ったはずの過去に再び囚われそうな遊良など、絶対に認めるわけにはいかないのだと言わんばかりに…ルキは、沈んでいくばかりの遊良へと向けてその声を荒げるのみ。

「私、もう一回外いって探してくるね？風で飛ばされちゃったのかも知れないし、近く探したら絶対に…」

「いいって言ってるだろ！もう放っておいてくれ！」

「あっ…」

…しかし、突然放たれた遊良の怒号の大声に中てられ、思わずたじろいでしまったルキ。

心臓が跳ね、息を呑み、体が急速に冷たくなる嫌な感覚を感じながら…その遊良らしからぬ、あまりの苛立ちを孕んだ大声はルキの心に

鋭い針となって突き刺さり、その目に涙を浮かばせてしまう。

「…ご、ごめ…私…」

「あ…いや、その…ち、違うんだ…なんて言うか…その…ど、怒鳴るつもりなんて無かったのに…俺…」

とは言え、そんなルキに対し、遊良の方も自分で出した声に驚いた様子を見せていて。

…今、自分はルキに何を言ったのか。

大声なんて出す気はなかった。ルキに怒鳴りたいわけもなかった。しかし『過去』の夢なんて見た所為か、何故か嫌な感情が溢れ出し…自分で自分がわからなくなる感覚が遊良を苛み、どこまでも自分の心を沈ませようと纏わりついてきているこの嫌な感情。

見たくも無かった『過去』の夢が、『今』にまで浸食しているような不快感、ソレがどうしても遊良の心をざわつかせ、涙を浮かべているルキへの罪悪感と共に更に遊良を追い詰めるだけ。

そうして…

決して認めたくないはずの醜い感情が、容赦なく遊良の心を苛み始めた…

—その時だった。

「…何を騒いでいるのだ、騒々しい。」

喧騒が沸いたリビングに、静かで重い聴きなれた声がドアの方から響き…

ドアが開いたそこには、外から帰ってきたらしい鷹矢が立ってい

た。

「鷹矢…」

「遊良、目が覚めたのか。随分とうなされていた様だった…が…む？」

そうして、静かにリビングの中へと入ってくる鷹矢。

目が覚めた遊良の顔を見た瞬間、一瞬だけ顔をしかめたような雰囲気を鷹矢は醸したものの…ゆっくりと、遊良へと向かって近づいてくるのみ。

しかし、鷹矢の無表情のその奥に、どこか静かな怒りが渦巻いていることを遊良は感じたのか。ソファから降りて立ち上がり、近づいてくる鷹矢と目線を同じくして遊良は声をかけて…

「鷹矢…悪いな、迷惑かけ…」

そう、遊良がそう言いかけたその刹那…

―鷹矢の拳が、振り上げられた。

―！

「ぐっ!?」

突然の殴打、いきなりの急襲。

鷹矢に盛大に殴られてしまし、その勢いのまま遊良は後ろへと殴り飛ばされてしまって。

「鷹矢!?い、いきなり何するの!?」
「煩い！…それより遊良！何だその目は！何故お前はそんな目をしている！」
「…目？」
「その目は…ガキの頃の目だ。そんな弱い目で…そんな目で俺を見るんじゃない！」
「何なんだよいきなり…意味わかんねーぞ…」

それに驚いたルキがすぐに遊良へと駆け寄ったものの…鷹矢の拳は確かに遊良を弾き飛ばし、遊良を貫くその怒号は抑えられるはずのない代物となってリビングを軋ませるほどに重く放たれていたことだろう。
…しかし、この鷹矢の叫びの中に、微かな遺憾があったことをこの時の遊良は気付けていたのだろうか。
鷹矢が、何故ここまで怒りを顕にしているのか。
あれほど手に取るように分かる鷹矢の感情すら『今』の遊良は理解することが出来ず、それすら理解できぬ今の自分の『異常さ』にも、遊良は気付けていないままで…
そんな遊良を怒りの目で、鷹矢は更に言葉を連ねるのみ。

「ふん！倒れているお前と、今のお前を見て何が起こったのかは大体予想が付いた。だが、この際『何』が起こったのかなど問題ではない！」
「…」
「『何』が起ころうとも、『誰』が現れたのだとしても！そんなことよりもお前がそんな目をしていることが何よりも気に食わんのだ！…今更、そんな目に戻ることなど…そんな目をしている奴の顔など、これ以上見たくも無いわ！」
「ちょっと鷹矢!?ど、どこ行くの!?ねぇ!?」
「黙れ！こんな目をしている奴とはもう暮らせん！俺は出て行かせてもらう！」

そうして…
遊良の思考が追いつかぬまま、怒り狂った勢いのままに鷹矢はこの家から出て行ってしまった。

…

流れる沈黙。
頬を脈打つ鈍痛は、鷹矢の怒りがまだ『そこ』に残っているかの如く…いつまでも、遊良の頬を痛ませたまま。
―鷹矢は言っていた、『その目は…ガキの頃の目だ』、と。
鷹矢も、ルキも…その他も全て拒絶し、世界から逃げ出した濁った目。絶望に捕まり、逃げ出すことが出来なかった弱かったあの頃。全てに絶望していたあの頃には、確かに鷹矢とルキのことさえ拒絶し、『Ｅｘ適正』を持っている二人のことを恨めしく思ったことさえあった。
そう、それを、その目を、『今』の遊良がしていたからこそ鷹矢は激昂したのだ。しかし、もうソレを克服したと頭では分かっているからこそ、遊良は今の自分が一体どんな目をしているのか分からない。
そして、しばらくの沈黙の後…
遊良は頬を押さえていた手を下ろし、すぐ横で同じく沈んでいる様子のルキへと向けて声を発した。

「…なぁ、ルキ…」
「…何？」
「俺の目…そんなに酷い目してるか？」

胸に渦巻く感情が、ルキの顔を見ることすら憚ってくるものの…
『今』の自分の状態を、主観的にも全くわかっていないからこそ遊良は

ざわつく心を抑えて、ルキの顔を真っ直ぐに見据えて。
　気を失っている間に見た、『昔』の夢の自分がしていたあの目…鷹矢もルキも、その他の全ても拒絶していた、世界を映さぬ濁った目。そんな目を今の自分がしているだなんて、遊良には信じられないのだ。
　そんな遊良の目を見つめて、ルキは静かに言葉を選ぶ。

「…うん。鷹矢の言った通り…遊良の目…凄い悲しい目をしてる。」
「…」
「何か、本当にあの頃の遊良に戻ったみたい…私の事も、鷹矢の事も見てない目をしてるよ…」
「そうか…」

　ルキから告げられた言葉が、遊良の心を更に苛む。
　確かに、とっくに打ち勝った『弱さ』に再び遊良が捕まっていれば、鷹矢が激昂するのも無理はないだろう。
　ルキの目から見ても、今の自分の目は酷く濁ったモノとなっていると言うのだから…鷹矢の激昂とルキの言葉から、目が覚めてから胸の内にざわついて離れないこの『嫌な感情』の正体が遊良にもボンヤリと理解出来てきたのか。
　…そう、気を失っている間に見た『昔の夢』が、再び鷹矢とルキのことを拒絶させようとしているのだと言う事を。既にあの頃の絶望など、克服したはずと言うことを遊良も頭で理解しているからこそ自我と無意識が混ざり合い、心がこんなにもざわついてしまっていたのだ。
　それが『フードの男』に負けたから見たモノなのか、それとも夢の中で何度も聞いた『ある声』の所為なのか。そんなことは遊良には分からないままではあるものの、だからこそこんな『昔』の弱さに『今』になって再び捕まってしまった自分など、戦うに値する存在ですらない。だから傍に居るつもりもないと言わんばかりに、鷹矢は出て行ってしまった。

（どうすりゃいいんだよ…）

鷹矢が出て行き、ルキには怒鳴ってしまい…その上【堕天使】のカードまで無くし、まるで全てを失ってしまったかのような錯覚に陥りながら、これから先のことが何も考えられなくなってしまう遊良。

【堕天使】のカードが消えた。それはきっと、『フードの男』とのデュエルで【堕天使】が使えなかったことにも関係があるのだろう。そして鷹矢が自分に激昂し家から出て行ってしまったことと、ルキにも感情のままに苛立ちをぶつけてしまい拒絶しかけたことが相まって、どんどん世界から締め出されていくような錯覚すら覚え始めてしまって。

…全てを失う絶望は、もう嫌と言うほど身に染みている。

また『あの頃』のように一人になってしまったらと思うだけで、更に深い恐怖が遊良を襲い…

「傍に居るから。」

「…え？」

「私は…傍に居るから。…遊良を一人にしないって、子どもの頃に決めたから。だから、私…私は…」

「あ…」

しかし、そんな沈んでいきかけた遊良にかけられた、ルキの言葉。

濁りかけている遊良の目を真っ直ぐ見据え、決して逸らすことなく見つめてくるその強い決意が篭った目は、遊良が今どんな言葉をかけて欲しかったのかをわかっていたのだろうか。

また、そのあまりに強いルキの目は、彼女の言葉が単なる口先だけのモノではなく…何があっても遊良の傍に居るという強い意思を、遊良に分からせるには充分なモノ。

その心からのルキの言葉が、絶望の中にあった『あの頃』の中でも

ルキがずっと横に居てくれたという記憶を遊良に思い出させ、真っ直ぐに見てくるルキの目は、『あの頃』とは違うのだということを確かに『今』の遊良に示している。
…もしもあの頃、ルキが居なかったらとっくに命を投げ捨てていただろう。
だからこそ、こんな自分の傍に居てくれる人の存在はどこまでも遊良の心に支えとなっていて…そんなルキの顔を今度は逸らすことなく、遊良は泣き出しそうになるのを必死に押さえながら…

「…ありがとな。」
「うん。」
「あと…怒鳴ってごめん…」
「…うん。」

…思い出したくも無い『過去』の夢を見た。
けれども、絶望の中にあった『過去』とそれを乗り越えた『今』は違う。
いくら『あの頃』の記憶が再び自分を絶望の中に落とそうとしてきても、一度乗り越えたのだからまた捕まるわけにはいかない。これからの事への不安が募る中で、先の見えない不安が圧し掛かりながら…何とかそう思うことで、『過去の絶望』に引きずり戻されそうな恐怖から遊良は必死に抵抗し、靄のかかっていた思考が少しずつではあるが晴れてくる。
そんな。もう決して『あの頃』に戻りたくない、戻ってはいけないという意思を強く持ちながら…
…遊良は、どうにかこれから先のことを考え始めていた。

――…

ｅｐ６１「自分自身の力」

「ねぇ、本当に体は大丈夫なの？」

昨日の遊良の身に起きた事件から、一夜明けたいつも通りの朝。
あんな目に遭ったばかりだと言うのに、体は大丈夫だと言っていつも通りに登校し始めた遊良へと、心配そうな声をしたルキがそう言葉をかけていた。

「あぁ、今の所どこも痛くないし。気分も…まぁ、良いとは言えないけど、とりあえずは大丈夫だろ。」
「…でもモンスターの攻撃受けたんでしょ？一回病院行って診てもらったほうが…」
「本当に大丈夫だって。それより、昨日鷹矢に殴られたところの方が痛いくらいだし。」

ルキの心配そうな声に対し、どこか冗談混じりにそう言葉を返した遊良ではあったものの…
実体化したモンスターのダイレクトアタックを受け、そして吹き飛ばされて地面に叩きつけられ、更にその後に謎の苦しみが襲いかかってきた割には自分の体にダメージがほとんど残っていないことに、遊良も若干の違和感を感じているのか。
…死ぬかと思った。冗談ではなく、本気で。
そうだと言うのに、体を動かせば多少の鈍痛が走るだけで、日常生活にはほとんど支障をきたさない程度のダメージ残ってはいない。
まぁ、あれだけの苦痛を受けたと言うのに、どうして体がほぼ無傷に近いのかなど知る由もない遊良からすれば、今ソレを考えたところでどうしようも無いことではあるのだが。

「…ならいいけど。…でも、寝たらちょっとは顔色も良くなったね。目も、昨日より少し戻ってる気がするよ。」

「…そうか。」

…それよりも、心に負ったダメージの方がどちらかといえば深刻と言えるだろう。

【堕天使】のカードを失い、『昔の夢』を見た所為か、心の奥底へと封じ込めていたはずの過去の絶望を思い出したかのように『あの頃』のような濁った目へと戻ってしまった昨日。

目が覚めたとき、どうしてルキの顔を直視することが出来なかったのか。

それはきっと、『過去』の全てを拒絶していた頃の感情が表に出てきてしまっていたために、『過去』と『今』の混濁と乖離が起こっていたと考えられ…だからこそ、もしも昨日ルキが『傍に居る』という言葉を遊良へとかけていなければ、きっと遊良はあのまま深い絶望の中へと沈んだままになり、そのまま戻っては来られなかったに違いない。

…一度は克服した感情。今更、そんなモノに囚われてはいけない。

ルキの言葉によって、どうにか遊良は『今』の自分を繋ぎ止める事ができ…そのおかげで、心なしか沈んだ気持ちと濁った目も一晩経って少しは薄れた様子。

少なくとも、ルキへと向ける言葉には軽く冗談まで言える程に、ルキへと向ける瞳には拒絶している様子は見受けられず『今までの遊良』へと戻っていて。

…絶望を味わった『過去』と、それを乗り越えてきた『今』は違う。

これから先の不安は、まだ拭えぬままではあるものの、しかし『過去』の弱さを再び思い出してしまったのだとしても『今』を生きている以上、これからも日々は過ごさなければいけないのだから。

「…でもさ、理事長には何て言うの？」

「正直に言うしかないだろ。【堕天使】が無くなってしまったので、【決島】は辞退させてください…って。」

「…本当に…それでいいの？」

「…仕方ないだろ。正直、これから先どうやってデュエルすればいい

のかも不安なんだ。こんな状態じゃ、出場したって砺波先生達に迷惑をかけるだけになる。」
「遊良…」
「…あと、フードの男の事も伝えなきゃ。警察に届けるよりも、砺波先生に言って【決闘世界】に動いてもらった方がきっと早く片付くだろうし…」

しかし、いくら自身が無事だったからとは言えども事態はまだまだ深刻なまま。
こんなにも不可解な事件が起こっていると言うのに、いつもと変わらぬ決闘市の雰囲気。
誰もがこの失踪事件のことを、『自分とは関係のない事』と認識しているかの様に…今の街には焦りや不安と言った感情の欠片が微塵も流れてはおらず、年初めに起こった先の『異変』のショックから誰もが暗い話題から話を逸らしたがっているかのよう。
当の遊良も、昨日実際に自分が『フードの男』に襲われなかったら、このまま事件に無関心のままだったことだろう。
しかし実際に危険な目に遭遇し、事件の被害者になりかけたからこそ、もう『無関心』ではいられないことを痛いほど理解させられてしまっているのだ。

…それは、実際に『対峙』したからこその危機感。

鷹矢の遭遇した『デュエル後に人が消えてしまっていた』という場面と、自らが受けた敗北の痛み。あの『フードの男』が放つ怒りと憎しみと悲しみと哀れみは、『実体化』したデュエルの危険性と相まって遊良へとこの異変に対する警笛をずっと鳴らしていて。
一応今朝のニュースでは、『失踪事件』の被害者は増えては居なかったものの…一つ事態が違っていれば、その被害者に自分の名前も入ってしまっていたと言う恐るべき事実。
あの『フードの男』の危険性は、先の『異変』の復興を今も進めて

いる決闘市の『平穏』に上手く紛れてしまい、余計に殺気を隠してしまっているのだ。
それが遊良の危機感を強く打ち鳴らしてはいるのだが…
【堕天使】が消えてしまったことが災いし、どうしてもこれから先の戦っていける自信をなくしてしまっている今の遊良の姿は、【決闘祭】を最後まで戦い抜き成長した彼とは見間違えてしまうほどに小さく見えてしまっていることだろう。

「…ごめん。弱音吐いて。」
「…ううん。今は仕方ないよ。」

気を抜いたら迫ってくる、過去の恐怖。
最初に鷹矢とルキを、『謎の男』から助けることが出来たのも…
『闇』に操られた蒼人を倒し、【決闘祭】に出場出来たのも…
強者が犇めき合う【決闘祭】で、最後まで戦い抜けたのも…
先の『異変』の中心部まで、どうにか踏み込めたのも…

―すべては、【堕天使】があったからこそ。

どうにかルキが傍に居てくれるおかげで、『完全に』囚われることなく自分を保っては居られているものの…
自らの『心』がそう思い込んでしまっている以上、自らを削ってまで得た力を無くしてしまったことは遊良の『心』を深い所まで抉っていて。
得た『力』を無くしてしまった今、これからどうやって戦っていけばいいのか…と。
一晩経ち、このままでは居られないことは重々承知しながらも、コレばかりは時間をかけて、一人でどうにか乗り越えるしかないと遊良は自分の心に言い聞かせながら…
非常に重い足取りで、学園への道を歩いていた…

―…

始業を待つ朝の教室。授業前と言う事もありにわかにざわめき合う教室内で、遊良は一人自分の席に座り、手を組んで下を向いていた。どこか落ち着かない様子で、少しの息苦しさを見せながら。

（大丈夫だ…もう昔じゃないんだから…）

幼少期、師のおかげで絶望を少しだけ乗り越えられ、学園へ通うことを再開できた遊良。しかし黒翼の後ろ盾があったとは言え、一度『敵』に回った周囲の他人達に再び囲まれることは、遊良には苦痛で仕方がなかった。

また、鷹矢は未だ姿を見せず…まだ怒っていて、顔を合わせたくないのか、それとも普段の鷹矢の事を考えると遊良に起こされなかったために、単純にまだ寝ているとも考えられはするものの…

いつもならば簡単に分かるはずの鷹矢のことが、得も言われぬ不安が押し寄せている今の遊良では分からないのか。

（大丈夫…大丈夫だ…）

『普段通り』にざわつく教室に、どこか遊良の心は落ち着かず…

昨年度の【決闘祭】での優勝を経て、少なくとも同学年の中では誰も遊良を見下したり蔑んだりしてくる生徒は居ないはずだということは遊良にだってわかっている。

しかし、にわかに潜む『あの頃』の絶望が、昨日まで何とも無かった教室の雰囲気すら『居難い』環境にしてこようと忍び寄ってくるのだ。

『今』と『昔』は違う。そう強く思うことで、どうにかソレを押さえつけてはいるものの…どこか逸る心臓の鼓動は、遊良の精神に負担をか

けてきていることに違いないだろう。
隣の席で未だ心配そうにこちらを見ている、ルキの視線を心の支えに…どうしても始まる一日を、どうにか乗り越えなければとして落ち着くことを自分に言い聞かせていた。

―…

午前の授業が終わり、昼休みとなり校内がにわかにざわめき始めた時間。
どうにか午前の授業をやり過ごした遊良は、疲労の見える表情をしながら荘厳なる造りをしている扉の前に立っていた。
イースト校最上階のとある一角。普段ならば学生が絶対に立ち寄ることなどありえない、少々重苦しい空気が充満している静かな場所。
一度来たことのある…確か、昨年度の【決闘祭】に向けた校内選抜戦の直後に、緊急で呼び出されて連れてこられた…

―『理事長室』の、その前で。

無論、通常であれば学生が足を運ぶことなど許されないこの部屋。
また学生に限らず、教師達すら重役以外にはここへと足を運ぶことは出来ず…となれば、理事長である【白鯨】から直々に教えを受けている遊良であっても、この『理事長室』に足を運ぶには相応の理由を持っていたとしても簡単には許されないはず。
…しかし今の自分の現状と、自分の身に起きたことを早く伝えなければいけないという理由から、遊良は教師達に見つからないようここまで無断で立ち入ってきたのだ。
昼休みという限られた時間。そして多忙を極める砺波の過密なスケジュールを考えると、早く話をしなければという焦りがこの最上階

の張り詰めた空気と相まって、遊良の緊張の糸を更に強く引っ張っていて。
そうして…
遊良は、【決島】の辞退と『異変』の情報、それを砺波へと告げるべく荘厳なる扉を三度ほどノックし始めて…

「入りなさい。」
「…し、失礼します。」

扉を叩いたその音の直後、扉の向こう側から聞こえた重々しくも静かな声に従い、重い扉を開けた遊良。
その扉を開けた瞬間に、張り詰めた雰囲気だった最上階の空気よりも、更に重厚なる雰囲気が部屋の中から漏れ出し…
その視線の先には何かの業務中だったのか、視線を手元の書類に落としたままのイースト校理事長、砺波　浜臣が机に向かっていた。

「…珍しいですね。君がここへと来るなんて。何の連絡も入っていませんが…」
「すみません…あの、そ、相談したいことが…」
「相談…ですか。生憎、私はこれからすぐに別の仕事で出なければいけません。どうしてもと言うのならば、来週の召喚別授業の時まで待っていただきたい。」
「あ…」

どこかピリピリとした砺波の言葉。
それは理事長室の異質な空気と交わり、より一層遊良の言動に緊張感を持たせていたことだろう。
…遊良とて、以前の『特別授業』の時に砺波のスケジュールを簡単に伝えられたために理解している。
イースト校理事長としての業務と、【決闘世界】の構成員としての仕

事…そして、引退したとは言え未だ世界中の決闘界に多大なる影響を与えている元シンクロ王者【白鯨】としての責務が、砺波の生活をより多忙なものとしていると言う事を。
…事態は急を要する。
『平穏』を装う決闘市に忍び寄る『失踪事件』への恐怖と、自身のデュエルに対するこの喪失感。ソレを早急に何とかしなければ、手遅れになるであろうことは遊良にだってわかっているのだ。
しかし、一応遊良の方にも砺波に直々に鍛えてもらっているという大義名分があるにはあるとは言え…世界が誇る元王者【白鯨】に、自分一人の我が侭を無理やりに通せるなどと自惚れてもいなければ、思い上がってもいないからこそ、どうしてもそこから遊良は言葉に詰まってしまって。
こんな時、鷹矢ならばきっと砺波の予定などお構い無しに、無理やりに話しを続けることだろう。
そのあまりにふてぶてしい態度が疎ましくもあれば、何にも臆さない自我を羨ましく思ってしまうものの…昨日鷹矢に殴られた頬が不意に痛み、その痛みが自分の不甲斐なさを更に際立たせて来るではないか。

「…ふむ。」

しかし、そんな異質なモノとなっている遊良の雰囲気を察したのか…
それとも、初めから『そのつもり』だったのか。
重くなっていく理事長室の雰囲気を一蹴するかのように、いつもの特別授業のような口調で砺波はその口を開いた。
「…いつもならばそう言うのですがね。わざわざ先生達の許可も取らずに私の元へと来たと言うことは、本当に緊急の用なのでしょう？」
「…え？」
「…それに、今の君の目を見れば『何か』あったのだろうと言うことく

らい察しが付きます。昨日の今日で何があったのかは知りませんが…いいでしょう、話しなさい。」

静かに伝えられる砺波の言葉。

そのどこまでも真っ直ぐに見据える鯨の眼差しは、『過去の絶望』に纏わり憑かれている遊良の心を見透かしているかの如く、鋭くも優しく遊良へと向けられていて。

…そんな砺波の言葉と視線に、遊良は急に体が軽くなるのを感じたのか。

「あ、あの…昨日の、事なんですが…」

ゆっくりと、昨日自分が遭遇した事を話し始めた遊良。

デュエルディスクの不調の理由…

帰りに何が起こったのか…

…そしてデッキが、いや【堕天使】が言う事を聞かなかったことも。

普通であれば突拍子も無い話。決闘市で起こっている『失踪事件』の核心と、『実体化したデュエル』。その遊良の身に起きたことを、普通の大人であれば誰も信じようとはしてくれないことだろう。

…しかし、砺波は静かに聴いていた。

それは、昨年度の『異変』に中心部まで関わった砺波だからこそだったのか、それとも以前は毛嫌いしていたものの今では己の教え子となった少年への慈悲だったのか。

それは砺波自身にしかわらかぬ答えではあるものの、少なくとも一人の少年の言葉を簡単に切って捨てずに傾聴している今の砺波の姿は、昨年度のあの態度からは考えられない佇まいであったことだろう。

そうして…

…

「…なるほど。話はわかりました。君の主観だけでは、その『フードの男』が本当に『失踪事件』の犯人かどうかは判断しかねますが…君が嘘を吐いていない事くらい分かります。とにかく、君が無事でよかった。」
「…ありがとうございます…」
「まぁ、私も前に『実体化』したデュエルを体験していなければ君の話も到底信じられなかったでしょうが…少なくとも、この街に良くない事が起こっているのは事実。再びこの街に『何か』が起こっている可能性があるのならば、【決闘世界】としても動かざるを得ないでしょうね。この件は私から【決闘世界】に報告し、迅速に調査を進めさせましょう。」

遊良の話を聞き終わったタイミングで、早急に手を打ってくれると言い放った砺波。
その手際の良さと話の飲み込みの早さは、彼も昨年度の『異変』を経験したからこその手腕なのか。
その話を持ってきたのが、同じく先の『異変』に関わっていた遊良だったことも関係あったのだろうが…あくまでも先に遊良の身を案じる言葉をかけた砺波の言動は、かつての復讐に囚われていた姿とはかけ離れたモノとなっていて。
そんな砺波は、街に起こっている『異変』についての話を伝え終わった遊良へと向かって、更にその口を開いた。

「それで…話したいことはそれだけでは無いのでしょう?」
「…は、はい…その…実は…【堕天使】のカードが消えてしまって…デッキが、無くなってしまいました…それで…その…」

まるで遊良の話が『失踪事件』の事だけでは無いことを分かっていたかの様な砺波の言葉に促され、詰まりながらも言葉を続ける遊良。
しかし、遊良の言葉は『失踪事件』の事を話し始めた時よりも、言

葉の勢いを無くし徐々に弱々しくなっていき…それもそのはず。遊良にとっては『こちら』の話題の方が切り出し難く、砺波には言い出しにくいことなのだ。
そう、【決闘世界】が動いてくれるという『フードの男』の話よりも、『自分自身』の進退に関わるこちらの方が…

「【決島】を…辞退させてください…」

…言った。

—言ってしまった。

口にしたくは無かった言葉。
わざわざ面倒を被ってまで出場を推してくれた砺波にも、昨年度の【決闘祭】の功績を考慮し推薦してくれたウエスト校とサウス校の理事長達にも…
その気持ちを裏切ってしまうこんな言葉なんて、遊良だって言いたかったわけがないだろう。
しかし、『今』の自分の状態では満足にデュエルなど行えないことを遊良は理解しているからこそ、これ以上迷惑をかけるまえに自ら辞退を申し出たのだ。

…デュエルが出来ない。それはこの世界において、自らには価値が無いのだと言っているも同然。

デュエルが全てのこの世界では、老若男女全ての人間がデュエルと関わって生きていると言っても過言ではなく。
そんな世界の中で、『Ｅｘ適正』を持たない自分へのあまりに非人道

的な扱いを、遊良は過去に嫌と言うほど味わってきた。
降りかかってきた絶望と、蔑まれ続けたその痛みは遊良に自らの価値を曇らせるのには充分であり…そんな自分を推薦し出場させたとなれば、砺波を含む理事長達の信用問題にも繋がることだろう。
ならば先に自ら身を引いて、砺波たちに迷惑をかけないようにするのが良いだろうと遊良が考えたとしても、それは何の不思議でもなく…

…そうすれば、少なくとも砺波達に見限られるだけで済む。

—そう、思ったから。

「なるほど…」

そんな遊良からの言葉を聞いた砺波は、一体何を思ったのだろう。
静かに漏らされたソレは、理事長室内の空気を再び引き締めるには充分過ぎるほどの重さを持って砺波の口から発せられ…
失望、落胆…そんな呆れを砺波に感じさせたのではないかという不安が胸の内に込み上がってくるものの、それも当然だろうという一種の諦めを受け入れているかのような遊良。
…しかし、その長く延びた白い髭の奥から消沈している遊良へと向かって…
砺波は意思の篭った言葉を鋭く発して…

「駄目です。」
「え？いや、でも…」
「言い訳は聞きません。全く、神妙な顔をして何を言い出すのかと思えば、たかが『そんな事』であれだけ思い詰めた顔をしていたとは。」

「たがか…そんな…事？」
「いいですか？君の出場は既に『決定事項』だと言ったはずです。そうだと言うのに、この私が君の勝手な都合で辞退など許すはずがないでしょう？」
「で、でもデッキが…【堕天使】が無いと、俺はデュエルが…」

自分の心のダメージを、『たかがそんな事』と切って捨てた砺波の言葉は一体何を考えての事なのか。

…堕天使が消えた。

それは遊良が、【決闘祭】に優勝したときの様な戦い方がもう出来なくなったと言っているも同然のようなモノなのだが…
元々自身に『Ｅｘ適正』がない時点で、ソレに頼らない戦い方を師である鷹峰の元で磨いては来ていたものの…【堕天使】を得てからの自分の戦い方が、それまでの自分のモノとは根本的な部分から一変したのは遊良にだって分かっている。

―しかし、今の遊良の現状はそんな簡単な話では断じて済まないのだ。

対融合、対シンクロ、対エクシーズ…『Ｅｘ適正』の無い自分に出来る、幼少期からこれまで師である鷹峰の修行の元で作り上げた、【冥界の宝札】を主軸にしていた『以前のデッキ』。
鷹矢に『なぜ回るのかが分からない』とまで言われた事もあるソレは、構築が上手く行かずに幾度も苦渋を舐め続け、自らの力の無さに打たれ続ける苦痛の中で、それでも必死になって一から遊良が作り上げてきたモノ。
【堕天使】がなくなってしまった今、現状で遊良が頼ることの出来るのは、その『以前のデッキ』しか無いのだが…

―『…【シャドール】パーツに、【カイザーシースネーク】…うわ、【銀河眼の光子竜】もない。…手に入れるの苦労したのに。』

―『…探すのに散々つき合わされたというのにな。』

そう、遊良が【堕天使】を得たあの時、その裏で…『以前のデッキ』から『消えてしまったカード』が、一体何枚あったことだろう。

遊良が持っていた『以前のデッキ』の中には、鷹矢と一緒に決闘市内を散々駆けずり回ってやっと一枚だけ見つけられたようなカードや、今はもう生産されていないが故に【黒翼】の伝手でやっと手に入れることの出来たモノもあった。

それ以外にも、よく遊良が使用していたカードの中でも【神獣王バルバロス】や【冥界の宝札】と言った重要なカードは何とか残ってはいたものの…

消えてしまったカードの中には、それまでの遊良のデッキの中核を担っていた重要なモンスターやカードが多々あったという事実。

…ソレらが軒並み消えてしまったからこそ、遊良は『あの時』にルキにいくら反対を示されようとも、もう『後には引けない』思いで【堕天使】のカードを使うことを決めたのだ。

故に、消えていったカードの方が多過ぎて、『以前のデッキ』を【堕天使】を得る前までと全く同じように組むことなど今更出来ない。

―だから、戦えない…

「…天城　遊良、我が教え子よ。よく聞きなさい。」

そんな遊良の雰囲気を、知ってか知らずか無視してか。
肘を重厳なる机に突き、手を組み口元を隠すようにして、遊良へと再度声をかけた砺波。
…その口調は諭すようではあったものの、どこか苦々しいモノにも聞こえた事だろうか。
しかし、はっきりと『教え子』と宣言したその言葉には、深海よりも深い意思が確かに込められていたことに違いなく…その意思を崩さぬまま、砺波は気落ちしている己の教え子へと言葉をかけるのみ。
「…君は、その目で見ているはずです。『力』を無くし、そのまま自分を見失い…あまりに『惨め』な姿を晒した、ある大馬鹿者の立ち振る舞いを。」
「え…？そ、それは…」

…何を思ってか。
砺波が唐突に語ったのは、何を隠そう今遊良の『目の前』に居る人物の話。
１０年程前…当時、歴代最強のシンクロ使いだと謳われていた王者【白鯨】が、まだ年端も行かない釈迦堂　ランと言う少女に、手も足も出せずに敗北してしまったその過去のこと。
また、公にはされていないが、彼が自身の『名』の象徴であった【白鯨】を召喚出来なくなり、そのまま自分を見失って引退してしまったことは砺波にとっても思い出したく無い出来事のはずだと言うのに。

…また、その後の彼の姿は言うに及ばず。

ランへの『復讐』に取り付かれ、ソレによって拗れに拗れた復讐心によって、何の関係も無かった遊良にまで『ＥＸデッキを使わないデュエル』をしているという理由で酷い態度をみせ、あろうことか遊良の人生そのモノを潰しかけた以前の砺波。
その全ての『負』の感情を、先の『異変』で精算でき、それに対し

て当人達が納得しているからこそ以前に一悶着あったとは言え…
今こうして砺波と遊良が師弟関係になっている事は、様々な出来事が折り重なった一種の奇跡。
そんな砺波が、一体どういった思いでこの話を始めたのか。
そのまま、砺波は話を続けて…

「だからこそ、そんな男の様にはなってはいけない。例え一つ『力』を無くしたのだとしても、君にはまだ『力』が残って…いや、残っているのではない。【堕天使】よりも誇ることのできる『力』を、君はずっと持っているじゃないですか。」
「…誇ることのできる…力？」
「…少なくとも、私は『その力』が【堕天使】に劣っているとは微塵も思いません。【決闘祭】の決勝…最後にあれだけ人の心を揺らし、そして君の勝利を誰にも文句など言わせない代物にしたのは…一体『何』でしたか？」
「あ…」

砺波にゆっくりとそう告げられて、思わず息を呑んだ遊良。
最初に鷹矢とルキを『謎の男』から助けることが出来たのも…
『闇』に操られた蒼人を倒し【決闘祭】に出場出来たのも…
強者が犇めき合う【決闘祭】で戦い抜けたのも…
『異変』の中心部まで踏み込めたのも…

―全ては、【堕天使】があったからこそ。

しかし、【決闘祭】の決勝で遊良は気付いたはずだった。

―『俺が『壁』を超えるためには…【堕天使】達に頼るだけじゃ駄目だったんだ！俺の！俺自身の力じゃないと！ここから先には絶対

に行けないってわかったんだよ！だからこそ、俺は！俺の原点で鷹矢、お前を超えたい！』

―そう、『自分自身の力』に。

どうして、ソレを今まで忘れていたのか。
希望に満ち溢れていた幼少の頃も、絶望に塗れていた年少の頃も…立ち直り、前へと進むことを決めた時も、ずっと一緒に居てくれた存在は、一体『何』だったのかと。
デュエルを始めたときから、ずっと共にあった存在。
修業の中でいくらデッキのスタイルを変化させてこようと、使うカードをどれだけ変化させてこようと…例え扱うデッキが変化しようとも、ずっと自分と共にあったモノを。

「…例え【堕天使】が無くなって、弱くなってしまったとしても…俺は…俺には…まだ…」

『無』の中に囚われ、そのまま塵芥となって消えていきそうだった時に聞こえた『獣の咆哮』…

それが…

―それこそが、答え。

「…あぁそうだ、仮にも師となった者として…あと一つ、君に教えておいてあげましょう。」
「…え？」

そんな『何か』に気付いた遊良に対し、更に砺波は声をかけ続ける。
いまだ未熟な教え子へと、高みに立つ者として先導のために。

「一度自らの『壁』を越え、それまでの自分を超えた者は決して弱くはなりません。その高みに立った者は、例え何があろうとも弱くなることなど『ありえない』。…それを、胸に刻みなさい。」
「…弱くなることは…ありえない…」
「そうです。でなければ、一度【白鯨】を無くした私が、今もなおこの地位に居ることなど許されませんからね。地位や名誉のみで携われるほど、【決闘世界】は甘い所ではない。」

それは『仮にも』などと言ってはいても、砺波の伝えは紛れも無い、師から弟子への経験の教示。
その言葉の通り、昨年度に起きた『異変』の時、【白鯨】を使えなくなっていたままの砺波を相手に何も出来ず、手も足も出なかったことを遊良は思い出したのか。
そう、例え、何か一つ『力』を無くしたとしても…
それでも『己』自身が揺るがない強さを持ったままだったことは、何を隠そうこの砺波　浜臣自身が証明しているのだ。
語り継がれる【王者】の『名』とは、それだけに頼った故に語られるわけではない。

…あくまでも、『象徴』。

一辺倒に繰り出すのではない、何も考えず頼るのでは無い。
自らを誇り、自らが誇り…そして、自らが誇られる力を持っているからこそ、その魂とも呼べる『象徴』が、そのまま【王者】の『名』となるのだから。

「まぁ、【白竜】となった新堂君に敗れ、私がプロを引退したのは事実ですが…それでも、【白鯨】だけが私の力ではない。その他に『己』を

磨き、その全てを持って【王者】となった私も紛れも無い『私自身』。その私自身の力は、例え私が『名』を無くしても揺らぐモノではありません。」

「砺波先生…」

「…と、鷹峰もきっと同じ事を言うでしょうね。あの男が良い例だ。何せここ数年間は、【黒翼】を出すこともなく全てを蹴散らしているのだから。」

「…た、確かに先生が【黒翼】を召喚するのは…もう何年も見てません…」

「ええ、【黒翼】を出さずとも、あの男の力は桁違いに大きい。逆に、同じ【黒翼】を召喚できる天宮寺君は、私からみてもまだまだ鷹峰の域には達してはいません。…『力』とは、ソレを操る者によって姿も形も何もかも変わるモノなのです。」

伝えるべきことを丁寧に選び、飲み込みやすく伝えようとしているのが手に取るように分かるほどに…

今の砺波の言葉は、どこまでも慈愛に包まれていたことだろう。

一度は世界中のデュエリストの頂点に立った存在。

その果て無き人生の歩みの道筋は、今の遊良では想像することすら憚れるほどに険しく、そして厳しいものだったに違いない。

しかし、それを確かに経験してきた元シンクロ王者【白鯨】だったからこそ、他の誰にも出来ない『教え』を今ここで伝えることが出来るのだ。

そうして…

「だからこそ…」

己の思いの、最も大切な事を遊良へと伝えるべく…

砺波は、一呼吸置いて…

「【堕天使】という『力』を一つ無くした程度で…私の知る、天城　遊良と言う『デュエリスト』は、戦う事を決して放棄しないはずですがね。」

「あ…」

今、砺波は確かにこう言った。

―天城　遊良と言う『デュエリスト』、と。

…以前、『Ｅｘデッキを使えない者』は、『デュエリスト』ではないと切り捨てられた。

…自分の存在が、目障りで仕方がないと言い捨てられた。

そんな砺波が、今確かにはっきりとそう言ったのだ。

それは紛れも無い『本心』からの言葉。自分の全てが否定されていた子どもの頃に、ずっと『誰か』から言って欲しかった、その言葉を…

「砺波…先生…」

…子どもの頃、決して他人から認められなくなった自分を師や幼馴染が認めてくれた時、一体どれほど嬉しかったか。

その時と似た気持ちが、沈んだままだった遊良の心の底から湧き上がり始め…何にも変えがたいその言葉は、上辺だけのモノでないからこそ、確かに遊良の心を引き上げ始めるのか。

…一時は、その存在を否定されてしまった。

しかし遊良と砺波、お互いがお互いの『わだかまり』を乗り越えた

からこその『肯定』は、何物にも変えがたい確かな存在の証明。

―認めてくれている。自分自身の存在を。

【堕天使】が使えなくなった事で、自分の価値が無価値となってしまったのではないかという大きなその不安を、いとも簡単に軽々しく吹き飛ばしてくれるその言葉の力は他の誰にも伝えることの出来ない代物。

思わず込みあがってくるモノが、塞き止められずに決壊しそうになり…

ソレを必死に堪える遊良へと向かって、更に砺波は言葉を続けて。

「…さて、もうこれ以上の説教は必要ありませんね？ではもう行きなさい。デッキが無いのならば、新たに作ればいいだけのこと。来週の召喚別授業までに新たにデッキを作り、戦えるようにしてきなさい。もう【決島】まであまり時間もありません。こうなった以上は、これまで以上に厳しく鍛えてあげましょう。」

「…は、はい…よろしくお願いします。」

「…あと、みっともなくウジウジと弱音を吐いた罰です。次回までに、レポートを通常の１０倍書いてきなさい。期限は同じく来週までです。」

「じゅ!?…え、いや…あの、砺波先生…デッキ作りもありますし、い、いくらなんでもレポートは…」

話を始める前とはまるで真逆。いつもの召喚別授業の様な雰囲気へと変わった理事長室の雰囲気。

先程までの気落ちが嘘の様に、『いつも通り』に言葉を返せる遊良を見て…

砺波もまた、慈愛に満ちた先程の声から、『いつも通り』の厳しげな声へと口調を戻して。

「１０倍です。異論は認めません。…返事は？」
「…は、はい…砺波先生。」
「よろしい。では下がって結構です。早くしないと時間がなくなりますよ？デッキも課題も、時間がいくらあっても足りませんからね。」
「は、はい、し、失礼します！」

そうして…
部屋から出て、扉を閉めて、そのまま遊良は駆け出し始める。
その足取りはどこまでも軽く、先程までの心の重さが嘘の様ではないか。
…そう、砺波からの言葉を受けて、遊良は気が付いた。

―何故、ここまで戦う気持ちが折れていたのか。

それは、過去の絶望から目が昔のような『濁った目』になってしまったのと同時に、心まで子どもの頃の『折れていた心』に戻っていたから。
しかし、あの絶望していた幼少の過去…
師となった【黒翼】天宮寺　鷹峰が、自分を一人の人間として見てくれ、そして自分の存在を認めてくれていたからこそ、遊良はここまで立ち直ることが出来た。
それは、今だってそう。
過去を悔やみ、過去を乗り越え、止まっていた『今』を再び進めることが出来た【白鯨】砺波　浜臣だったからこそ。同じく『過去』に囚われかけた遊良を、今再び立ち直らせることが出来たのだ。
…ソレは誰にでも出来ることではなく、これは遊良一人で乗り越えられるモノでもなかった。

周囲よりも多少大人びた考えを持つであろう遊良とて、『本当の大人』からすればまだまだ子ども。

悩み、苦しみ、迷い、立ち止まり…

もしもソレが自分一人で乗り越えられない程に険しいモノだった場合、『子ども』を導けるのは『大人』だけ。

だからこそ、一見簡単に吹っ切ることが出来た様に見える遊良の心も、本当の大人の正しい導きが無ければここまで乗り越える事も出来なかっただろう。

一人じゃない。自分が絶望に捕まりそうな時に、助けてくれる人が居る。

それは世界全てが『敵』だった遊良にとって、どれほど嬉しいことなのだろうか。

―『以前のデッキ』が組めないのならば、『今』だからこそ組める新たなデッキを、再び一から作り上げるしかない。

それは簡単な答え。

しかし絶望に包まれていた遊良からすれば、途方もなく難しい答え。

それに気付けなかったほど、遊良の心は傷付いていた。しかし、今こうして正しい導き手によって、遊良は自身がするべき行動を飲み込むことが出来たのだ。

…もう、迷いは無い。

「ルキ!」

勢い良く飛び込んだ『教室』の入り口で、叫ぶは大切な幼馴染の名前。

もうとっくに昼休みは終わっていて、午後の授業が始まっているが故に…あまりに勢い良く飛び込んできた遊良への注目は言うまでもなく。
すぐにざわめきが教室内に広がり、誰もが遊良の行動の理由を理解出来ずにただ混乱をみせていて…
それは名を呼ばれたルキも同じく、授業に遅刻してきたにも関わらず、突然こんな行動をした遊良にただただ驚いている様。

「ルキ、今すぐ来てくれ！」
「えっ!?ちょ、遊良!?」
「お前の力が必要なんだ！時間がないし、今すぐ来て欲しい。」
「おい天城！お前遅刻してきた癖に何を勝手に…」

しかし、ルキの手を強引に引いてそのまま教室を出て行こうとした遊良へと、授業を行っていた中年の教師が怒りと焦りの声を上げて。
以前と違い、遊良が【決闘祭】に優勝したことによって教師達からの遊良への態度は比べ物にならないくらい改善した。しかし、だからと言って授業に無断で遅刻してきた学生を叱ることは教師としては当たり前の事であり…
なんの言い訳も弁明もなしに勝手な行動を取ろうとする学生への対応においては、例え遊良でなかったとしてもこの教師は同じことをしただろう。

「だいたい授業が始まってるのに今までどこに…」
「すみません！でも理事長の許可は取ってあります！」
「理事…はぁ!?お前何言っ…っ!?え?…も、もしもし!?」

そんな中、遊良の説明に異を唱えかけた教師の元に、タイミングを見計らったかのようにかかってきた一本の電話。
遊良の述べた言い訳を、戯言と捉えようとしていたからこそこのタイミングで公用の電話にかかってきた一本の電話に示されている名

前が、より一層この教師の焦りを大きくしてしまったのか。

「あ、え?り、理事長!?な、なんで…は、はい…え、いやあの…」

「よし、じゃあ行こうルキ。手伝って欲しい事があるんだ。」

「え?あ……う、うん、わかった!」

そして、呆気にとられているクラスメイト達と、突然の理事長からの電話に取り乱している教師を他所に、自分の荷物を素早く持って教室から駆け出していく遊良とルキ。

手を引かれるままに、駆け出すままに。

遊良に引っ張られているルキとて、未だに状況が飲み込めてはいないものの…突然の混乱の中でも、迷いなく遊良の誘いに応答したのはルキの反射行動的なモノだったのだろう。

そう、それは声をかけたあの時の、理事長室から戻ってきた遊良の目が…

―昔の、濁った目では…無くなっていたから。

また、力強く引っ張る遊良の手からは、何か強い意志の様なモノをルキは感じたのか。

引かれるままではあったものの、『前』へと迷いなく進んでいる遊良の足取りには先程までの暗い迷いが全く感じられないではないか。

…理事長室で何があったのかを、彼女は知らない。

しかし、遊良が『昔』の様な雰囲気から、『現在』の自信溢れる姿へと自分を取り戻した事は紛れも無い事実。

それを嬉しくも思い、かつ簡単に遊良を元に戻してしまった理事長への複雑な感情をその胸の内に感じながら…

辿り着いた玄関、外へと繋がる正面出入り口。

午後の授業中であるこんな時間には、誰も居ないはずのこの場所…
そこで、不意に立ち止まった遊良とルキの目の前には…

―間違えようのない、鷹矢が待っていた。

「…随分と遅かったな。待ちくたびれて腹が減ったぞ。」

まるで、遊良が来ることを初めから分かっていた様な口ぶりの鷹矢。
昨日のような怒りはなく、ソレを忘れたかのように平然と遊良へと声をかけてくる鷹矢の態度と声質は間違えようも無くいつものモノ。
そんな鷹矢を見て、昨日の今日でここまで態度を変えられる鷹矢の立ち振る舞いに、何かまだ思っていることがあるのでは無いかという勘ぐりを一瞬だけしかけた遊良とルキではあったものの…

「…第一声がそれかよ。つーか、何堂々と遅刻してきてんだよお前は。」
「待ちくたびれたって…どうせ鷹矢、今来たところでしょ?さっきまで教室に居なかったし。」
「む…」

…寝起きですぐに焦って着替えてきたかの様な鷹矢の格好と、走ってきたのか少々荒い呼吸と、疲れからか額に滲んだ汗が、どうしようもなく『いつもの鷹矢』なのだと言うことを間違いなく二人へと伝えていたことだろう。

…どれだけ格好つけて取り繕っても、鷹矢が『たった今到着した』と

いう事は、遊良とルキには既にバレている。
そんな、『いつもの』鷹矢へと向かって…
遊良もまた、『いつもの』様に言葉をかけるのみ。

「まぁいいや。それより、昨日殴られた事…まだ謝って貰ってねーんだけど。」
「ふん、あんな目を俺に向けた罰だ。全く…俺がお前の敵となることなど、例え天地がひっくり返っても『ありえん』と言うことはお前が良く分かっていることだろうが。」
「わかってるって。…悪かったな。」
「うむ。何があろうと、今後は俺にあんな目をすることは許さん。…しかし、ようやく振り切れたようだな。」
「まぁな。ウジウジ立ち止まるんじゃなくて、次に俺は『何』をすれば良いのかわかったからな。」
「うむ。」

そう言葉を交わす二人からは、昨日のような拗れは無く。
いつもの遊良と、いつもの鷹矢。
昔の目を向けてしまったり、勢いで殴ったりしたとしても、その間にわだかまりや燻りなどは存在せず。
そんな二人を見るルキの視線は、お互いにいつもの二人へと戻ったからこそ例え喧嘩をしていても、すぐに何事も無かったかの様に振舞えるこの男達の関係をどこか羨ましく思っているかのようにも見え…

「よし！では早く帰って飯だ飯！」
「いやデッキ作るのが先だろ。」
「ふざけるな！俺は昨日から何も食っていないのだぞ！」
「知るかよ！お前が勝手に出て行ったからだろ！大体、鷹矢の癖に何の考えもなしに出て行くから…」
「煩い！大体お前こそ、遊良の癖に飯の用意もせずに俺を待たせるな

ど…」
「ちょっと二人とも！仲直りしてすぐに喧嘩しないでよ！もう！」

しかし、『いつも通り』に戻ったからこそ、すぐに衝突を始める男共に少々うんざりした声を漏らした彼女もまた、『いつも通り』の３人の関係性なのだということを証明していて。

良くも悪くも、『いつもの通り』。

ずっとこうして３人で過ごして来たからこそ、例え『何か』が起きて衝突したとしても彼らの関係は揺るがない。これまで十数年間共に過ごして来た『日常』は、横から何かが襲ってきたとしても崩れることは無いのだろう。

そうして…

「時間が無いからな。早くデッキを何とかしないと、【決島】どころか砺波先生の授業に間に合わなくなる。…そんな事になったら、課題がとんでもないことになりそうだ。」
「…むぅ、ならば仕方がない。手伝ってやるとするか。」
「もう、本当に素直じゃないよね鷹矢って。最初から手伝うつもりだった癖に。」
「ぬぅ…」
『やるべき事』へと向けて、彼らは学園を後にし始めた。

―どこまでも軽い、足取りで。

―…

「…まったく、手のかかる教え子だ。しかし、昔の鷹峰もよく天城君を立ち直らせたものですね…きっと、今よりもっと酷い状態だったでしょうに。」

イースト校の最上階から、階下を眺めつつそう呟いた砺波。
その厳しくも穏やかな視線の先には、まだ午後の授業の最中だというのにも関わらず、学園から立ち去っていく3つの人影があり…
そんな3つの人影を優しく見守りつつも、どこか憂いを帯びているその眼差しは遊良だけではなく何か『他』の事にも心配事を感じているかのよう。

「しかし、【決島】では彼が戦わないわけにはいきませんからね…」

そうして、先ほど手元に届いたばかりの『とある資料』に目を落としつつ、砺波は分厚いページをめくっていく。
まだまだ他の教師陣たちにも話していない、【決闘世界】から各校の理事長達だけに通達された最も早い【決島】に関する決定事項。近いうちに教師と学生達に情報が解禁されるソレには、決闘学園『デュエリア校』の代表者達の名前と、決闘市側の4つの学園の代表者達の名前が記されていて。

そして…

『イースト校代表選手』と書かれた名簿欄の、そのページに書かれていたイースト校の学生達の名前の羅列の中をなぞっていく砺波。
その中には先に推薦しておいた通り、『天城　遊良』と『天宮寺　鷹矢』の名前も当然記されており…そして、その他にも成績などを考慮して選出されたイースト校の実力者達の名前が載っている。

…しかし、砺波が憂いているのは傷心していた教え子の事でも、言

うことを聞かない盟友の孫の事でも、ましてや他の代表者達のことでもなく…

「…何せ…」

不意になぞっていた手を止めた…

その、『一番下』にあったのは…

―『高天ヶ原　ルキ』

「…一体、どうして高天ヶ原さんが代表に…彼女の成績では、選出基準から確実に外れていたというのに…」

【決闘世界】に提出した、厳正なる基準を満たして選ばれたイースト校の成績上位者達の中には、ルキの名前はギリギリで入ってはいなかったはず。

それはもちろんイースト校理事長として砺波も確認済みの事であり、例え『事情』を知らない他の教師がルキを選んでいたとしても、砺波はルキの代表入りを許さなかったことだろう。

それは、昨年の遊良への『蔑視』のような感情から来るものでは断じて無く…

…一部の人間しか知らない、『赤き竜神』を持つ少女の事情。

その『ルキの事情』を知っている砺波だからこそ、鷹峰と交わした『約束』もあって、ルキを守るために密かに裏で動いていたというの

に。

「…考えたくは無いが、『裏』で手を回している者がイースト校にも居る…と言うことか。全く、私も舐められたモノだ。」

…しかし、すでに決定してしまった【決闘世界】の選出は、例え元シンクロ王者【白鯨】と言えどもどうにも出来ないのか。

こうなってしまう前に、どうにかしてルキを【決島】から遠ざけるつもりだったというのに…しかし、こうなってしまった以上、【決島】の最中に『何か』が起こる懸念は十二分に考えられること。

【決島】の最中に、何が起こるのか。

―誰が、何の目的で、『赤き竜神』に近づこうとしているのか。

得も言われぬ不安の中で、それでも進んで行く事態に細心の注意を払いつつ…舞台で戦う教え子を信じ、確かに居るであろう『敵』に対し、決して屈するわけにはいかないのだと、そう自分を言い聞かせて。

「『赤き竜神』を持つ少女…【決闘世界】に、【神】を狙う者達の噂…そして劉玄斎…」

静かに呟かれた鯨の声は、どこまでも、どこまでも深く…

「私の生徒を好きにはさせせん…【白鯨】の名に懸けて」

―決意に、溢れていた。

…着々と、時間は進む。

―ただ、無常に。

―…

ｅｐ６２「陰謀と前進」

「『逆鱗』…何故あのような勝手を？」
「…あぁ？」

暗闇に包まれた部屋、その室内に充満する重々しい空気の中で…二人の男が会話を交わしていた。
片方は辛うじてその声質から男だと言うのがわかりはするものの、暗闇の中にその姿を完全に隠してしまっていて…気配のみが部屋の中にあるだけであり、どこか威厳を感じさせながらも少々捻れた苛立ちのような声を出している。
もう片方は、まるで世紀末に生きているのではないかと錯覚する程巨大な体躯に、数多の傷が窓から差し込む月明かりに照らされている男。
決闘学園『デュエリア校』学長。かつては『逆鱗』の決闘者と呼ばれた元プロデュエリスト…

―劉玄斎、その人。

その劉玄斎は、かけられた言葉に少々苛立ちを覚えたかのように一つ溜息を吐くと…
とてもゆったりとした喋り方で、しかしその言動の一つ一つがとても重く鼓膜に響く声で、姿の見えない相手へと声を返した。

「勝手ってのは…一体何の事だ、あぁ？」
「お戯れを…天城　遊良の出場を【決闘世界】に後押ししたではありませんか、ええ。」
「…それが何か問題だったか？たかが『Ｅｘ適正』が無えガキ一匹ぐれえ、増えた所で問題もクソも無えだろうがよぉ。」
「大有りです。…いくら『Ｅｘ適正』を持っていないとは言え、仮にも

【決闘祭】の優勝者。万が一と言う事もありますし、少しでも『不安要素』は減らしておきたいとお話ししたはずですが？」
「クハハハハ、随分と気の小せぇ事を言うじゃねぇか。折角の『祭り』なんだしよぉ、盛り上がるならその方がいいだろうが。」
「しかし…『赤き竜神』の解放の為には少しの失敗も…」
「失敗なんか無ぇ。『祭り』は盛大に、『計画』は微細に…『表』が騒げば騒ぐほど、『裏』が動きやすくなるってもんだぜぇ？」

果たして、彼らが何を話しているのか。
その話の内容の全貌を知る者はここに居る彼らだけではあるものの、しかしその話は決して『良い』モノでは無いことは確かだろう。
表沙汰に出来ないこと。それがよからぬ事であることを理解しつつ、それを撤回などするつもりも無いという態度のまま…
大人達は、暗闇に包まれた部屋で話を続けるのみ。

「…失敗は許されません、ええ。『赤き竜神』の解放…いくら綿貫様のお気に入りである貴方とは言え、もし失敗したりこの計画が『表』に漏れたりすれば…【決闘世界】諸共全てを敵に回すことになり、待っているのは死…」
「んな事はわかってんだよ。けど【決島】はデュエリアの領内…いや俺の島で開くんだぜぇ？俺の持ち物で起こる事を、この俺が決めて何が悪ぃんだ。」
「…わかりました。ですが目を瞑るのは今回だけです。貴方には、『人質』があるということをくれぐれもお忘れなく…。これ以上の勝手は、私の方で止めさせていただくのでご理解しておいてください、ええ。」
「…おぅ。」
「では、私はコレで失礼させていただきます。」

そうして…
あくまでもお互いの立場をハッキリさせるかのような不穏な言葉

を劉玄斎に投げかけつつ、言いたいことを言い終えたのかこの暗闇の中で最後まで姿を見せなかった男は…
ドアを開ける音と共にこの部屋から気配を持ち去っていった。

「…クハハ。」

そして、気配が完全に消え、この部屋に自分一人になった瞬間…

「『Ｅｘ適正』が無ぇ…か。」

静かに…そしてどこか空しい笑い声を漏らした劉玄斎。
しかし、一体劉玄斎というこの男が『何』を思ってその言葉を選んで発したのか。『その言葉』自体は同じでも、先ほど発した時とはどこか声質が違うようにも聞こえたことだろう。
この歴戦を駆け抜けてきた巨漢が何を考えているのかなど、劉玄斎自身にしか分からぬモノに違いないものの…起ころうとしている『何か』の全貌が、この部屋の様に暗闇の中に隠れてしまっている限りこれから先に『何』が起こるのかなど誰にも分からないのだ。
そうして、劉玄斎もまた己の巨躯を動かし部屋を出て行く。

「もう、後にゃ引けねぇんだ…悪いな、こんな……でよぉ…」

彼もまた、どこか後が無いような感情を、漏らしながら…

…

「鷹矢、【ワン・フォー・ワン】を持ってきてくれ。お前の部屋の押入れの下の引き出しの一番奥の束にあったはずだ。」
「うむ。」

リビングに木霊する慌しい喧騒の中、遊良達３人はデッキ作りに勤しんでいた。
再現できなくなった『以前のデッキ』を超える、『今』だからこそ作れる新しいデッキを一から作り上げる為に、お互いに色々なアイデアを出し合いつつ調整を繰り返して。

「あ、ねぇ遊良、これなんかいいんじゃない？前のデッキでも使ってたし。」
「うーん…でも一緒に使ってたアレが消えちゃったしなぁ…」
「そっかー…あ、だったらこれは？これとこれにさ、【地獄の暴走召喚】使ってみるとか。」
「それいいな。使おうと思ってたこれともシナジーあるし…試してみるか。」
「おい遊良、ついでに【成金ゴブリン】も持ってきてやったぞ。使うのだろう？」
「お、サンキュ。」

遊良がこれまで試行錯誤して作り上げた『以前のデッキ』には、確かに戦術的に重要なカードやもう手に入らないようなカードも入ってはいたのだが…
砺波の言葉によって、『過去の絶望』を完全に振り切れた遊良には、その事に関しての憂いは既になく。
その目に迷いは存在せず、ただひたすらに『先』を見据え、実力の『壁』を超えた今だからこそ作れるであろう『新たなデッキ』をひたすらに考えているのだろう。

「…駄目だ、これじゃあまだ前のデッキに及ばない。」
「ぬぅ…ならば【闇の誘惑】を減らし、【手札断殺】に変えてみるのはどうだ？」
「でもそれじゃあ【大欲な壷】が使いにくくなるんじゃない？遊良のデッキだと、除外ギミックも結構重要なんだし…」
「でもとりあえず試せるだけ試そう。時間も無いし、まだまだ試したい戦法は沢山あるんだ。…もうＥｘデッキを意識しなくていいんだし、やれることは前のデッキよりも多い。」
「む？…そうか。」

浮かんでは消え、詰まっては進みながらデッキ作りは進んでいく。
そんな中で、鷹矢は遊良の言葉の一つに少々引っかかりを覚えたような声を漏らしたものの…それは遊良にもわかっていて、あえてソレを言葉にすることによって『以前のデッキ』への未練を綺麗に断ち切ろうとしているのか。
…思えば、『以前のデッキ』はいずれＥｘデッキが使える様になるのではないかという、希望的観測という名の『甘え』が混ざっていたように感じている遊良。
それは融合、シンクロ、エクシーズ…そのどれが発現してもいいようにという、不明確だった未来ゆえの希望の残滓。
そう、いくら『Ｅｘデッキに頼らない戦い方』を磨いてきていたとは言え…自分の心の奥底にＥｘデッキへの憧れがあったことは否めないのだろう。
しかし【堕天使】を得たあの時、その希望を全て『捨てる選択』をしたことによって、自分はこれから先の未来において『Ｅｘデッキ』は絶対に使えない契約をしたのだ。
…それは、【堕天使】を無くした今も変わらない。
【堕天使】が無くなったからと言って、再び『Ｅｘ適正』が得られる保障が生まれるわけでも無ければ…【堕天使】を得る前までの状態に、これで戻ったというわけでもなく…

―あの時の『誓い』は、そんな簡単なモノではない。

人形のような『謎の男』が襲ってきたあの時の戦いが、自分一人だけの問題だったならば遊良もまだその希望を持てたのだろう。しかしあの時、自分の『希望』の一切を捨てる覚悟をしたからこそ、捕まり命の危機に瀕していた鷹矢とルキを救うことが出来たのだ。

―今もこうして鷹矢とルキが無事でいる以上、あの時の『誓い』は成されているということ。

とは言え、別に『Ｅｘ適正』を捨てた事に関して、遊良が鷹矢とルキに恨みを感じているわけでもなければ、あの時の選択を後悔しているわけでもないのだ。

そう、遊良にとっては『Ｅｘ適正』と『幼馴染二人の命』、どちらが大切なのかなど初めから決まっている。

だからこそ、今この現状で自分に『Ｅｘ適正』があれば…などと言った甘い考えなど遊良には無く…後悔をしていなからこそ、遊良は自分の『甘え』を言葉にして外へと吐き出すことによって『先』へと進もうとしているだけ。

「…そうだ。なぁルキ、【継承の印】って持ってなかったか？」
「えっと…確か家に一枚だけあった気が…取ってこようか？」
「頼む、一枚欲しいんだ。」
「わかった、ちょっと行ってくるね。」
「あぁ。」

そうして…

ルキが頼まれたモノを自宅へと取りに、リビングから一旦退出したのと同時に…

デッキの構築に唸っている遊良へと向かって、徐に鷹矢が口を開い

た。

「遊良よ、そういえば次のデッキは大きく戦略を変えるのか？」

「あぁ、ちょっと迷ってるけど…でも、昔から【冥界の宝札】をずっと使って来たんだ。前のデッキとは中身もかなり変わると思うけど、とりあえず戦術を丸ごと変えるよりは慣れてる【冥界の宝札】をベースに組み立てていこうと思ってる。」

「そうか…しかし、【冥界の宝札】をベースにすると言ってもだぞ？前のデッキの上級モンスターがほとんど消えてしまっていては、以前のように大型を連打する戦術は難しいのではないのか？」

「…そうなんだよな。」

鷹矢が漏らしたその疑問は、遊良の今の『事情』を理解しているからこその言葉。

そう、以前の遊良の戦術は、【冥界の宝札】を主軸に最上級モンスターをアドバンス召喚し、『Ｅｘモンスター』にも劣らない力を持った大型モンスター達の複数展開で、相手を上から数で吹き飛ばす戦い方が主流であり…

その為、『以前のデッキ』にはフィニッシャーである【神獣王バルバロス】の他にも、【ギルフォード・ザ・ライトニング】や【銀河眼の光子竜】と言った、切り札級の最上級モンスターが数多く存在していた。

―しかし、そう言った『切り札』と呼ばれる超大型クラスのモンスターを、メインデッキに複数投入することはあまり推奨されていないこの現代。

それは言いかえれば、『Ｅｘデッキ』至上主義かつ、高速化した現在のデュエルではこうした構築法はあまりにデッキが『重く』なりすぎてしまい、まともにデッキが回らなくなるのではないかというのが世間の認識なのだ。

そんな『Ｅｘデッキ』至上主義の時代の中で、そのセオリー外とも言われている戦術を頼りに…いや、寧ろ時代に逆らうかのように、

デッキの殆どが最上級モンスターで占められたようなデッキを用いて遊良はこれまで活路を切り開いてきた。
だからこそ、鷹矢を始め周囲のデュエリスト達は皆、遊良の以前のデッキの回転が『理解出来ない』とまで言い放つ始末となっていて…
その為、鷹矢の言ったとおり『今の遊良の現状』では、その戦術を取ることすら難しいと言えるだろう。

「【堕天使】が全部消えたから、前のデッキから使ってた『スペルビア』も『ゼラート』も、『アスモディウス』も今はもう無いし…その他の大型も厳選して選んだモンスターばっかりだったから、予備なんて持ってないし替えも利かない。」
「うむ…流石に、今手元にあるバルバロスの一体だけではこの先戦っていくのはキツイだろうな。」
「…まぁな、他にも手を考えないと。」
「何か良い大型があったか…少し部屋のカードを見てきてやる。」
「サンキュ…あ、でもさ…実は一つだけ考えてた事があるんだ。」
「む？」

とは言え、その事に関しては遊良にも何か考えがあるのか。
遊良は胸ポケットに手を入れると、予め部屋から持ってきていたのかその中から一枚のカードを取り出し…
それを、鷹矢へと見せて…

「…『これ』を、使おうと思う。」
「む!?…なんだソレは!?そんなモンスターは見たことがない…お前、ソレを一体どこで…」
「【決闘祭】が終わってすぐにさ、ちょっと色々とあって…人から預ってるカードだけど、この状況だからこそ今の俺にはコレが必要だと思う。それに…戦術も少しずつ思い浮かんできた。前みたいに、色んなフィニッシャーを連打するのは無理だけど…『壁』を超えた今だからこそ、出来る戦い方もあると思うんだ。」

「…全く想像がつかん。」

遊良の見せたそのカードに、衝撃を受けたような声でそう返した鷹矢。

鷹矢も見知らぬそのカードと、遊良の言った『壁』を超えた今だからこそ出来る戦い方…昔から遊良とずっと共に居た鷹矢でさえ、『今』の遊良が一から作り上げるデッキの底が全く持って見えてこないのだと言わんばかりに言葉を漏らし…

鷹矢も、遊良が己の『壁』を超える瞬間を見て…いやその瞬間に『対峙』していたからこそ理解している。『今』の遊良と『昔』の遊良、その実力も心も、比べ物にならないくらいに強くなっているということを。

だからこそ、己を超え続ける遊良へと向かって、鷹矢は一つ問いかける。

「…お前、次のデッキで一体どこまで『行く』つもりだ?」

それは別に、不安や焦りと言った感情から来た言葉では無い。

遊良が先へと進むのなら、自分も当然のように進むだけ。自分が先へと進んだならば、遊良も隣に立つのが当たり前だと鷹矢は思っているのだから、過去を振り切った『今』の遊良が目指そうとしている高みは鷹矢にとっても当然の如く目指す目標であることに違いないのだが…

鷹矢が疑問に思ったのは、遊良の目指す場所の、その『先』。

遊良が今やろうとしていることは、何も【決島】だけに照準を合わせたモノでは無い。例え【堕天使】が無くなったとしても立ち直り、新たなデッキを『本気』で作っているからこそ、その気持ちがどこにあるのかが鷹矢は気になったのだ。

しかし、鷹矢にそんな言葉を投げかれられても…

遊良は、不敵に笑うのみ。

「決まってるだろ？お前よりも『上』にだよ。」

「…フッ、ウジウジしていた奴が偉そうに言うではないか。遊良の癖に生意気な。」

「んだと？鷹矢の癖に、勝手に出て行って餓死しかけたのは誰だよ。そう言う台詞は自分の面倒を自分で見られるようになってから言えよな。」

「ぬ！俺の飯はお前が作る！それは当たり前の事だろうが！」

「何が当たり前だこの野郎！砺波先生の課題で俺も大変だってのに、少しは俺に感謝しろこの大飯喰らい！」

「なんだと!?」

「なんだよ！」

「ちょっと！何でこの短時間で喧嘩出来るのよ！もう！」

「あれルキ？もう戻って来たのか？」

「忘れ物したから一回帰ってきたの！それより！私が居なくなった途端に喧嘩するのやめてよ！次喧嘩してたら本気で怒るからね!?遊良も鷹矢も！次喧嘩してたら本気でぶっ飛ばすからね！」

「ぬぅ…それは…勘弁して欲しいぞ…」

「わかった…わかったから落ち着け？な？」

完全に『過去』を乗り越え、『いつも通り』の3人に戻ったからこそ、常に起こる彼らの喧騒が止むわけも無く。

何度も試行錯誤を重ね、何度も何度も失敗し…その度に遊良と鷹矢は衝突を繰り返し、ソレを少々うんざりしたように止めるルキ。

―そうして、デッキ作りは進んでいく。

まだまだ戦術も固まっていなければ、デッキの基礎も不安定であり改善点も多い。しかし、自分を取り戻した遊良だからこそ、鷹矢とル

キの助けもあって少しずつデッキが汲みあがっていって…
その刻一刻と過ぎる時間の中で、何度も汲みなおしてはデュエルを行い、デュエルを繰り返しては調整し、そうして過ぎていく日々。
砺波に言い渡された一週間という期限の中で、自分に出来ることは『何』なのか、自分の力量はどうなのか、自分には何が出来るのかをとにかく考え…与えられた課題もこなしつつ、とにかく休む暇も無く遊良達は動き続けた。
褒められたことでは無いが、時には授業を欠席し、決闘市の中を走り必要なカードを探したりもして…

そして…

―新たなデッキを作り始めてから、一週間の時が過ぎた。

「…さて、では見せて貰いましょうか。君の出した答えを。」
「はい。」

約束の期限、一週間ぶりの『召喚別授業』のその時間。
授業では使われない決闘学園イースト校のメインスタジアム、その中心に立った遊良へと、砺波が威厳のある声でそう告げてきた。
与えられた一週間と言う期限の中で、遊良が一から作り上げてきた新たなデッキ。
【堕天使】という、遊良にとっての力の『一つ』を無くしたとは言え…

【決闘祭】や先の『異変』を経験し、実力の『壁』を一つ超えた遊良の力は、一年前とは比べ物にならない程に強くなっていることは先ず間違いなく。
そんな『今』の遊良だからこそ作り上げられるデッキが、どんな代物になっているのか…
それを、その目で確認するために。

「あの、砺波先生…その前に一ついいですか？」
「はい、なんでしょうか。」

しかし、そんな折に遊良は砺波へと一つ問いかけて。
それを解決しておかなければ、授業に集中しきれないのだと言わんばかりの雰囲気で声を発し…それに対し、砺波もソレを理解しているからこそ遊良の疑問をすんなりと聞き入れたのか。
そう、このまま砺波との授業を始める前に、遊良にはどうしても確認しておきたいことがあったのだ。
それは、遊良の『隣』に立っている人物の事で…

「どうして…今日はルキも一緒に？」

そう、遊良が感じたその疑問。遊良が立つその隣には、シンクロクラスの授業に出ているはずのルキの姿があったのだ。
無論、ルキをここに連れてきたのは遊良なのだが…
今日の召喚別授業の前に、遊良のデュエルディスクに届いた一本のメッセージ。紛うことなき砺波からのソレは、この前の召喚別授業の時に鷹矢を連れてきたのと同じ、本日の召喚別授業に、高天ヶ原　ルキを連れてくることという文面が書かれていたのだ。
しかし、【決島】に出場することが決まっていた鷹矢ならばまだしも、どうして今度はルキなのか。

【決闘祭】の時もそう。彼女が『本気』でデュエルをすることが出来ない『事情』を遊良も理解しているからこそ、ルキがあえてソレに選ばれないよう戦績を調整していることを遊良は知っている。故に、ここに鷹矢ではなくルキが呼ばれたことに、遊良は疑問の意を示していて。

そんな遊良と、【白鯨】の厳かな雰囲気に少々萎縮している様子のルキに対し…

砺波はその場で半回転し、二人の生徒に背中を向けるとそのまま言葉を続けた。

「正式な発表はまだなのですが…不測の事態と言うことで、当事者である君たちには早めに伝えておいた方が良いと思いまして。」

「不測の…事態？」

「【決島】のイースト校代表選手の一人に…高天ヶ原さん、あなたが選ばれました。」

「え!?」

「砺波先生！ど、どういうことですか!?だって、ルキの成績だと…」

「えぇ、今の高天ヶ原さんの成績では、代表選出にギリギリ届いてはいませんでした。それは私も確認済みです。…しかし、どういうわけか【決闘世界】の選出に高天ヶ原さんの名があった。それも事実です。」

砺波にそう告げられた瞬間に、驚きの声を上げた遊良とルキ。

…なぜなら、ルキがこうした学校を代表するような祭典に選ばれることは絶対に無いと、遊良もルキも思っていたために。

ルキの身に関係する、デュエルをするにあたってどうしても避けられないその『事情』。彼女の『命』にも関わってくるソレは、幼少期からの鷹峰の修業と、彼女自身の体の成長に伴って昔よりも遥かに制限は無くなってはきているのだが…

それでも、未だ『力』を抑えきることが出来ないために、ルキはあえて『上』へといける力を持っているにも関わらず、ソレに選ばれないようにわざと勤めているのだ。

故に、いくら各校から二十数名選ばれる【決島】であっても、【決闘祭】の代表候補にすら選ばれなかったルキが他の候補者達を差し置いて選ばれるということは明らかにおかしいと言えるだろう。

「ちなみに、私は高天ヶ原さんの『事情』についても知っています。…君が、『赤き竜神』のカードを持っている、と言うことを。」

「なっ!?ど、どうして砺波先生がそのことを…」

「去年の『異変』の時に、決闘市に『神』の目撃情報が上がりましたからね。伝説上の『神』のカード…いくら混乱の中であっても…いや、あの混乱の中だったからこそ目撃者が出てしまったのでしょう。無論、その情報は【決闘世界】にも上がってきます。」

「…あ、あの…理事長先生…私の事は…」

「ええ、君の事情が『内密』だと言う事も承知の上ですので、『神』のカードを持っているのが高天ヶ原さんだと言うことは少なくとも私しか知らないはずなのですが…しかし、こうなってしまった以上、【決闘世界】の中に『神』を狙っている者達と『繋がっている者』が居るのはまず間違い無い。」

「そんな…」

砺波の告げるその話に、遊良は焦りの声を漏らし…当人であるルキは、どこまでも不安げな声を漏らしてしまって。

そう、いくら先の『異変』が非常事態だったとは言え、これまでどうにか自分の『事情』を隠し通してきたルキからすればソレが他人に知られてしまったことに対して危機感を抱かざるを得ないのか。

幼少の頃…その所為で、一度危険な目に遭ったのだ。

遊良と鷹矢に助けてもらったとは言え、その時の恐怖を彼女は今でも覚えていて…あの時の遊良と鷹矢、どちらかの助けもあと少し遅かったら命の危険すらあったのだから、ルキも自分が持っているモノの危険性については身に染みて理解している。

世界中がその存在、ひいてはこの世界の『神話』を知っているからこそ、『神』のカードと呼ばれる存在は世界中にとっての宝と言っても

過言ではなく。
　いつまでも隠し通せるモノでは無いのかもしれないが、それでも今このタイミングで何者かが『神』を狙っている可能性がある以上…ルキの身が確実に危険だと言うことにも繋がってしまう。

「どうにかしてルキを棄権させることは出来ないんですか？」
「残念ですが、【決闘世界】によって既に決定してしまったことは誰にも撤回出来ません。…寧ろ、高天ヶ原さんの事がバレている以上、向こう側がソレを許してくれるはずもない。」
「でも、罠だと分かっていてみすみすルキを出させるなんて…」
「それは私もわかっています。何か出来ることは無いか、私もただ手を拱いているわけではありません。」

　未だ背を向けたまま話し続ける砺波の真意は分からぬものの、例えそれが無理なことだとは分かっていても、それでも僅かな可能性を考えるしか遊良に出来ることはないのか。
　ルキだって、好きで『神のカード』を持っているわけではない。偶然、偶々、神の気まぐれで手にしてしまったその力の所為で、一体彼女がこれまでどれ程の苦労を被ってきたのだろう。
　好きなデュエルを好きに行えず、常に制限が付きまとうもどかしさに耐え、事情が事情なだけに隠し通すように勤めては来たものの、時には命だって狙われたこともあった。
　遊良も、ルキが己に付きまとう『神』の事を快く思っていないどころか、邪魔で仕方がないとまで思っていることをコレまで何度も聞いているのだ。そんな要らない力を、何も知らない者達の勝手で狙われ、そして自らにはどうしようも出来ないモノに翻弄される幼馴染の身を案じたとしても、それは仕方ないことに違いなく。

「…あ、あの、理事長先生…」
「はい、なんでしょうか。」

しかし、そんな遊良を押しのけるかのように、唐突に自らの感情を表に出してそう告げたルキ。
一体、彼女自身が何を思ったのか。
自分の境遇と、遊良からの心配を痛いほど理解している彼女から発せられたその言葉の心意は彼女自身にしか分からぬモノではあるものの、今、この場で、はっきりと己の意思を砺波へと伝えようとしているルキの声には少しの迷いも存在していないようにも聞こえ…

「…あの、わ、私…出ます！私、【決島】に出て戦います！」
「ルキ!?で、でもお前…」
「わかってる！…わかってるんだけど…でも…」

そして、己の意思を今、言葉にしてはっきりと表明してみせたルキ。
…危険なことは分かっている、罠である可能性も分かっている。
それを理解出来ぬほど彼女とて馬鹿では無いし、それによって浮かび上がる身の危険は既に経験しているからこそ誰よりも理解している。
これは自分だけの問題ではない。それならば今まで通り、表立った舞台には決して姿を見せないようにし、遊良と鷹矢の戦いを後ろから応援し続けることが最良である…と。

―そんな事は、わかっている。

―しかし、それでも…

「わ、私だって遊良と鷹矢と…同じ場所で戦いたいの。先に行っちゃう二人を、後ろから見てるだけなのは…もう…」

自分の体のことを分かってはいても、それでも己の感情を表に出し

てそう訴えるルキの意思。
それは、これまでずっと『何か』を我慢してきたが故のモノとも取れるだろう。幼少の頃も、これまでも…遊良と鷹矢が全力で戦った【決闘祭】だって、彼女はずっと見ている側だったのだ。
故に、どんどんと先に進み続ける幼馴染達を、彼女とてどこか羨んでいたのだろうか。
置いていかれたくない、2人の見ている景色を自分も見てみたい…と。

「それに私だって昔よりも強くなってるんだよ?前に鷹矢と一晩デュエルした時だって大丈夫だったし…」
「何度か『危なく』なったって鷹矢から聞いてる…それに、どんな奴が襲ってくるのか分からないんだぞ!?いくらルキの実力があっても、何が起こるのかわからないんだ!」
「でも…」
「駄目だ!」
「やだ!」
「やだってお前…」

…遊良とて、ルキの『実力』があれば下手に逃げ隠れるよりも、現れた敵を返り討ちにした方がある意味では安全かもしれないことは考えてはみた。
どうせ、どうにかして【決島】を辞退できたとしても、ルキの事が敵にバレているのならば同じ事。
師である【黒翼】が街に居ない今、この状況でルキを決闘市に1人残して自分も鷹矢も、そして事情を知っている【白鯨】までもが【決島】の為に居なくなりでもしたら…
敵は、寧ろ好都合だと言わんばかりに1人になったルキを狙ってくる事だろう。
ならば、危険な罠だと言う事を始めから承知で、向かってくる相手

を自分と鷹矢で守りながら、ルキも己の身を戦いによって守ると言うのも一つの手ではある、と。
いくら『本気』を出せないルキとは言え、幼少の頃から遊良と鷹矢と共に、【黒翼】である天宮寺　鷹峰に同じように鍛えられてきたのだ。『神』の力に頼らなくとも、彼女自身の持っている『実力』は当に『壁』を超えたところに位置しているのは遊良とて承知の上であり…

ーしかし、それも遊良からすれば回避したい事に違いなく。

どんな敵が狙っているのかわからない今、【決島】の間中、ずっとルキを守る事ができるのかという不安もある以上…【決島】では何が起こるのかわからないのだ。
また、回数を重ねる毎に、彼女が白熱する度に、その力が拮抗を見せる度に、その体の内から漏れ出す『神』の意思。
少女の意思では完全に抑え込むことなど出来ないソレは、いとも簡単にルキの体を文字通り『崩壊』させてしまう。
それを、その眼で目の当たりにしたことがある遊良だからこそ…どうしても、ルキに無茶などさせられないと言わんばかりに焦燥を見せていて。

「【決島】の最中は『危なく』なっても相手は待ってくれないんだ！もし敵を倒したって、お前が抑えきれなくなって『暴走』でもしたら…」

そして…

遊良があまりの心配から、ルキを言い聞かせるようにそう言いかけた…

―その時だった。

「うんうん、それでそれで？」
「……え？」
「……へ？」

突然現れた第三者の声と、突如組まれた肩に感じた他人の感触。
そのいきなり降って湧いた誰かの気配に、思わず気の抜けたような声を漏らしてしまった遊良とルキ。
まるで初めからそこにあったかのように自然に、かつ聞きなれないはずなのに聞いたことのあるようなその声は、より一層遊良とルキの意識を硬直させてしまっていて。
また、振り返った砺波も、そこに居た『人物』に少々驚いたような顔をしたものの…
すぐに怪訝な顔を見せ、突然現れたその人物へと声を返す。

「新堂君…どうして君がここに？」
「おっす！【白鯨】のジーサンお久しー！つか『どうして』ってドイヒーじゃね？折角俺っちが久々に【白鯨】のジーサンに会いに来てやったつーのにさ、ジーサン『授業』だっつって部屋に居ないんだもん。でも何々、ジーサンなーに面白いことやろうとしてんのさ？」

その、決してこの場に居るはずの無い人物に…
いや、この場に何気なく現れた事すら信じられるはずのない人物の突然の声に、肩を組まれている遊良とルキも思わず言葉を失うしか取れる行動がないのか。
何せ、昨年の【決闘祭】の時に一時的にここ決闘市に帰ってきてはいたものの、その他の時間は常にプロとしての戦いに臨んでいると

言っても過言ではない程に多忙を極めるこの人物。
世界中を飛び回り、頂点に立つ者として戦いに明け暮れているはずの者。
発する言葉は軽いものの、その戦いには少しの軽薄さも見られない『想像を絶する気迫』を持つ決闘者。

―新堂　琥珀

天才の名を欲しいままにしている現シンクロ王者。【白竜】と呼ばれし王者の一人が…

何故か、今ここに…

―突如、現れたのだ。

―…

ｅｐ６３「【白竜】と呼ばれし決闘者」

―『天才』

人は、彼の事をそう称える。

学生時代から築き上げてきた数々の伝説。その比類なき功績の山は、羨んだ所で真似出来る代物でもなければ、誰もが妬む事を忘れて称えることしか出来ぬ代物であり…

彼が紛れも無き『天才』だということを世界中に知らしめるほどに優れたその伝説は、この世界の歴史に既に刻まれていることだろう。

そう、彼の築いたその伝説…

―決闘市における学生最大の祭典、【決闘祭】を『ノーダメージ』で２連覇するというその偉業。

他の追随を許さぬ圧倒的な存在感で、同じ年代で比べられる学生など存在すらしなかったその力で…まさに同じ年代の学生達に格の違いを見せ付けるかのごとく、彼はその時代を自分一色に染めてしまった。

また、当時は学生の身でありながら、４年に一度開かれるプロデュエリスト達の祭典ー

世界中のプロデュエリスト達の中でも、世界に名立たる上位ランカーのみが出場することの出来る、【王者】への挑戦権を賭けた『チャンピオンズ・リーグ』に、学生の身でありながらも特別推薦され…

世界トップレベルの名立たる『異名』を持った上位ランカー達を相手に、学生という身分で並み居るプロの上位陣を次々と打ち破っていき。そのまま、世界で初めて学生がチャンピオンズ・リーグの『優勝』を飾ったというその快挙。

世界中が沸き立ったその衝撃は、年々学生のデュエルレベルが下がっていると不評を受けていた決闘市への、数多くのバッシングを全て吹き飛ばす程の代物となりて…改めて、決闘市が世界でも有数のデュエル大都市だったということを、その戦いで世界中に思い知らせ

たのだ。
そのまま彼は決闘学園サウス校を卒業し、当然の如く『プロ試験免除』にてプロの世界に身を投じると…
決闘界のスターダムを最短距離で駆け上るかの如く、出場した全ての大会や組まれる試合に全勝していき、『通常』であればその『頂』に至るまでに十数年から数十年はかかると言われている場所に、彼はプロ入り1年と言う歴代でも最年少でその手をかけた。

それは、あまりに早すぎる頂点への挑戦。
それは、あまりに無謀すぎる新鋭の気鋭。

通常であればその『権利』を得ても、実際に『実行』に移すまでには相当の年月と鍛錬を要すると言われているソレを、彼は歴代最年少で実行に移すという一見無謀とも思われる行動を取ったのだ。

―そう、世界中の人々の目に焼きついている『特別』な一戦…

―当時、歴代最強とまで謳われていたシンクロ王者【白鯨】に、怖い物知らずの若き『天才』が挑戦するという、あの世紀の一戦を。

あの政権交代の一戦が行われた夜の事は、今もなお語り継がれる歴史の一節となって世の人々の脳裏に刻まれていて…
当時、謎の不調と言われていた王者【白鯨】ではあったものの、その歴戦の経験から終始に渡り挑戦者を圧倒していた不動の王者。必死に食らいつく『天才』を、迸る激流の如く怒涛の攻めで圧倒し…攻めあぐねる若き天才に、格の違いを思い知らせるかの如く最後まで優位は覆らないと思われた。
しかし、そのまま決着が着くと誰もが思ったその最後…
【白鯨】の不調とその一瞬の隙を見逃さなかった若き天才は、なんとその土壇場で新たな切り札を『創造』し、窮地からの大逆転を魅せたのだ。

【白鯨】に何があったのかも知らず、若き天才の底力を見誤っていた観客達からすれば、その瞬間の事は、世界中の誰もが目を疑ったことだろう。

そして、その戦いの後…彼は、新たな【王者】と呼ばれるようになった。

世紀の一戦で新たに創造したカードを『名』に、決闘界の最短距離を駆け抜けた勢いをそのままに。特殊な血筋の人間でもなければ、特別な指導を受けてきたわけでもなく、己の生まれ持った『才能』一つで…

―そう、『決闘』一つで、彼はここまでのし上がってきた。

それはまるで、この時代に不意に現れた特異点の如く。

成るべくして【王者】となったその才覚は、軽すぎる言葉と若すぎる年月が故に未だ風格を伴ってはいないものの…そのデュエルが魅せる『想像を絶する気迫』は、他のどの歴戦のプロデュエリスト達も醸しだす事が出来ない、まさに【王者】に相応しい代物になっていることは言うまでもないことであって。

…故に、彼はこう呼ばれる。

―世紀の天才シンクロ王者、世界に認められた『大天才』

―【白竜】、新堂（しんどう）　琥珀（こはく）

現在は【王者】として世界中を飛び回り、若き【王者】を狙ってひっ

きりなしに現れる挑戦者との戦いに明け暮れたり、デュエル以外にも【王者】としての激務に追われる日々を送っていたりと、およほ世の中の誰よりも多忙を極めているであろう、世界中のシンクロ使い達の頂点に立っている決闘者。

「新堂君…どうして君がここに？」

そんな彼が、何の用か唐突にこの決闘学園イースト校に現れたのだ。それは例え、イースト校理事長である元シンクロ王者、【白鯨】砺波　浜臣でなかったとしても同じ事を彼に問いただしただろう。

何せ、ここに現れるはずのない人物。サウス校出身の彼からすれば、イースト校は母校でもなければ知り合いがいるわけでもなく…【王者】を呼び出せる人物も居なければ、何か特別な用があるとも思えない。まるで、そう言わんばかりに怪訝な顔をしている砺波へと向かって…

琥珀は、両隣で固まっている2人の学生の肩を組んだまま、あまりにも軽い口調で言葉を返した。

「おっすー！【白鯨】のジーサンお久しー！つか『どうして』ってドイヒーじゃね？折角俺っちが久々に【白鯨】のジーサンに会いに来てやったつーのにさ、ジーサン『授業』だっつって部屋に居ないんだもん。」

「…私は来てくれなどと頼んではいませんが？」

「ツレねーこと言わねーの。相変わらず堅物なんだからさー。でも何々、ジーサンなーに面白いことやろうとしてんのさ？」

砺波の重い言葉とは対照的な、宙にまで浮いていきそうな軽い声。

きっと世界中を捜しても、威厳ある元シンクロ王者【白鯨】にここまで軽い言葉を投げかけられるのは【白竜】である彼だけだろう。

その言葉の真意は彼の心のように宙へと浮かび、誰にも捕らえられることなく好き勝手に飛び交っている。

…しかし、放つ言葉は軽くとも、その纏う空気はとてつもなく重い

のか。
何せ、何気なく肩を組まれている遊良とルキが、琥珀の纏う雰囲気に触れて声を出す事も出来ずに固まっているのだ。
何が起こったのかを瞬間的に理解出来なかったというのもあるだろうが、それでも遊良とルキが、自分が『何』をしたらいいのかを考える事もできないこの場の空気は、まさに2人の王者クラスの人間が放つモノの所為で異質な雰囲気となっていることに違いなく…

「ちょっと用事で近くまで来たもんだからさー。ついでに【白鯨】のジーサン元気かなーって。」
「…そんな理由で【王者】がわざわざ来るはずも無いでしょう？少しは自分の立場を自覚してください。もし他の学生達がここに居たらパニックに…」
「へいへいすんませーん。まっ、ジーサンにも用があったんだけどさ。」
「…と言うと？」

そして、砺波の説教染みた声を遮り、自らの声のトーンを一つ落とした琥珀。
いつも軽すぎる言葉しか発さない彼にしては珍しい、どこか重みを含ませた息使い。そのまま琥珀は何気なく組んでいた遊良とルキの肩を離すと、一歩前へと砺波に近づき…
怪訝な顔を崩さないままの砺波へと向かって、琥珀は構わずその口を開いた。

「聞いたぜジーサン。俺っちと戦った時…【白鯨】、使えなくなってたんだって？」
「……どうしてソレを？」

その琥珀が放った言葉によって、砺波の眉間の皺がより一層深く刻まれて。

…それは、砺波が公表していないはずの事実。あの『世紀の一戦』で、王者【白鯨】が自らの象徴である【白鯨】を召喚しなかった、世界最大の謎の真実。
思い出したくも無いだろうソレを今改めて聞かされ、砺波のその怪訝な表情が更に険しくなっていき…益々琥珀への警戒心を増していく様子を砺波は見せながら、纏う空気だけが重くなる。
…しかし、どうしてソレを琥珀が知りえたのだろうか。
自らにとって『恥』とさえ思っていたソレを、砺波は自分から言いふらすことなどしはしないし…
【白鯨】を失っていたと言うその事実は、先の『異変』の中心部で自分と戦った遊良や、何故かソコに居た【黒翼】天宮寺　鷹峰にしか聞かせていないはずだというのに。

…いや、一度だけ。

たったの一度だけ、ソレを他人に漏らした時のことを砺波は瞬間的に思い出したのか。
そして、砺波がソレを思い出したその瞬間に…琥珀もまた、ソレを口に出し始めて…

「シシシッ、この前さ、綿貫のジッちゃんからちょろっとねん。」
「…やはり綿貫さんですか。あの方は本当に君に甘い。」

そう、砺波がプロを引退する時に、事情を問い詰めてきた【決闘世界】最高幹部、『妖怪』と呼ばれる翁、綿貫（わたぬき）　景虎（かげとら）に根負けし、砺波は自らの事情を話したことがあったのだ。
砺波自身も、幼少の頃から世話になっている綿貫　景虎の心配を無下にするわけにはいかず。もう数十年前にもなる初めての出会いの時から、少しも容姿が変わっていないあの老人があまりの心配を呈してきた為に、彼にだけは自分からソレを伝えていたことを思い出しつつ…

あの『妖怪』と呼ばれる【決闘世界】の重鎮は、何かと若手に甘いことでも有名であり、他言無用と言ったはずのソレもどうせ孫の様に可愛がっている琥珀にせがまれて、そして根負けして教えてしまったのだろう。

「でもさー、俺っちの方もよーやくスッキリしたんだぜ？あん時のジーサン強ぇーのになーんか様子おかしかったし、【白鯨】出させてもねーのに世間は【白鯨】のジーサンの事堕ちたの何だの言ってっし、俺っちはそのまま【白竜】なんて呼ばれるようになっしさぁ…」

「…あの試合で負けたのは私です。世間がどう言おうと、君が新たな【王者】となったことには変わりありません。」

「あ、いーのいーのそう言うお堅いのは。まっ、俺っちもこのままじゃさ、ジーサンに勝ったとか言われてるのが正直気持ち悪いのね。こっちからしてみれば、『本気』のジーサン倒してねーってのにさ。」

あの世紀の一戦と呼ばれている下克上の裏の、交錯していたそれぞれの思い。

【白鯨】の方には、【化物】の少女に敗れたショックと『名』を無くしていた喪失感。不調と騒ぎ立てるメディアからの執拗な粘着と、好き勝手に囃し立てる一般人からの好奇の目。

『天才』の方には、大きな目標であった【白鯨】の様子のおかしさと、自身が納得していないにも関わらず盛り上がる周囲との不協和音。

新たな王の誕生と言われても、自分の中では未だ【白鯨】の影が大きくちらついているというのに…頂点に立ったと言われ続けるこの年月を、果たして琥珀はどのような思いで過ごして来たのだろうか。

「つまり俺っちは、まだジーサンに勝ったなんて思えてないってわけ。だからさ…」

そして…何やら言葉を潜めながら、言葉を溜め始めた新堂　琥珀。

自ら重くしたこの状況で、彼は一体何を言おうというのか。更に怪

訝に琥珀の真意を勘繰ろうとしている砺波を他所に…
そのまま琥珀は一呼吸置くと、すぐさま砺波へと言葉を放った。

「プロに戻って来なよ【白鯨】のジーサン。んでさ、今度こそガチで【王者】賭けて戦ろうぜ？」

手を差し出して、言葉を発して。
…己の真意を琥珀は向けて。
一見すると、自らが降した元王者【白鯨】を煽っているとも取れるであろうその言葉ではあったものの…その言葉に嘘偽りが紛れていないことは、言葉を差し出された砺波が一番よく分かっていたことだろう。
吐き出す言葉は軽いものの、琥珀がサウス校の学生だった時から砺波は琥珀の事を知っている。
琥珀がどれだけ【白鯨】であった自分の事を慕ってくれていたのか、ソレをその眼で見てきた砺波もまた、彼が今もなおシンクロ王者【白鯨】を望んでくれていることは砺波自身が誰よりもよく知っているのだから。
…そう、誰よりも【白鯨】の引退にショックを受けていたのも、間違いなく琥珀自身。
砺波が引退を表明したその当時…勝者の身でありながら、必死に砺波へと『引退の撤回』を懇願してきた琥珀の姿を…
砺波は今も、覚えているから。

「…ふむ。」

…そんな気持ちを今もなお持っていてくれる現【王者】にここまで言われて、一体【白鯨】は何を思うのだろう。

深海よりも深いこの鯨の闘争心と実力が、未だ現役の【王者】達と比べても全く遜色無いレベルにあるということ、はここに居る誰の目にも明らかであり…

闘争心を剥き出しにして迫る【白竜】の気迫に中てられ、言葉を発せられない遊良とルキが息を飲む中…

―砺波は、己の意思をその口から放った。

「お断りします。」

「いや何でさ！ここはカッコよくノるとこでしょーが！」

「何と言われようとも私は当に引退した身。プロにも王座にも、もう未練はありません。」

「えー…ジーサンそんなノリ悪かったっけ…」

「私にはここでやるべき事があります。それを放り出して自分の為だけに動くことなど…君には悪いが、するつもりは微塵もない。」

「…つまんねーのー…」

現【王者】の言葉を受けてもなお、鯨の意思はどこまでも深く。そのまま砺波の視線は琥珀を越えて、その先に立っていた遊良へと向けられている。

―そう、砺波からすれば、【白鯨】を失っていたこと、【王者】を陥落したことなど、当に乗り越えた過去の出来事。

自らの『名』を取り戻し、今再び【白鯨】の名を名乗ることに誇りを持てたからこそ…その全ての時代の『流れ』を受け入れた砺波の心には、【王者】の座にも琥珀との再戦にも興味が沸かないのだろう。

【王者】ではない、『今』の自分に出来ること。
ソレが何なのか、そしてソレがどれだけ面白いのか。この時代の流れと、教え子や【白竜】を含めた新しい世代への達観と傍観、そして『力』を持った者の責任と責務を十二分に把握している鯨の眼差しは、きっとどの生物の眼よりも優しかったに違いなく。

…しかし、ソレを見た琥珀が何を思ったのか。

琥珀は静かに振り向くと、砺波の視線の先へと自らの視線も向け始めた。

「ふーん、このガキンチョがねー…」
「ッ!?」

言葉と共に、琥珀は不意に遊良の肩に片手を置き…
吐き出されたその言葉が、遊良の背筋に謎の悪寒を走らせ…溜息とともに向かったその声が遊良の耳に届いたその瞬間、体を竦みあがらせるような寒気となりて、遊良の全身へと襲い掛かってくるではないか。
ソレに触れた瞬間に、一刻も早く『琥珀から離れろ』と言う命令が脳から遊良の全身に発せられたものの…

―時既に遅く。逃げられない、逃げ出せない、逃げることが出来ない。

まるで張り付いたように、地面に張りつき動こうとしない遊良の両足。
琥珀に軽く肩を掴まれているだけだというのに、まるで圧倒的な腕力で押さえつけられているかのような錯覚を感じる感触の所為で、遊良はその場から動くことすら出来ないのだ。

「遊良!?」
「な、何を…」
「待ちなさい新堂君！天城君に何をするつもりですか！」
「いやジーサンはさ、このボウヤ育てるのに夢中ってわけなんでしょ？じゃあさ…」

そして…
砺波の制止を振り切り、琥珀の表面から出現し始めた『想像を絶する気迫』が遊良を飲み込みかけた…

―その時だった。
「やめなさい！」

―！

砺波の放ったその怒号が、遊良を飲み込まんとした『想像を絶する気迫』を打ち消し相殺して。

―鋭い怒りと、鋭い眼差し。あまりに猛った鯨の咆哮。

瞬間的に琥珀の肩を掴んだその手は、確かな怒りを纏い琥珀を引き離しにかかっていて…
轟きを放つ鯨の眼差しは、果て無き深海よりも更に深いのでは無いかと勘違いするほどの剛毅を纏い、それはそれは重く琥珀へと突き刺されていたことだろう。

「…んだよジーサン、全然弱ってねーじゃん。寧ろ前に戦った時より強くなってね？引退してから強くなるとかちょーウケんだけど。」
「…今、『何』をしようとしていた？」
「おっ!?シシッ、ジーサン超こえー。ってか冗談だよ冗談、別にこのガ

キンチョ『壊したら』ジーサンが戻ってくるなんて思っても無いってのー。」
「君のしようとしていたことは冗談では済まされない。…これ以上私の学園で勝手なことをするつもりなら…」
「へいへい、わかりましたよー。つーか早く離してくんね？肩痛いんだけど。」

しかし、竦みあがる程の砺波の威嚇を物ともせずに、あっけらかんとそう言放つ琥珀。
…しかし肩を離された遊良はと言えば、急に収まった琥珀のプレッシャーと、突如噴出した砺波のプレッシャーとの寒暖差の所為で、その額から冷や汗が滲み出ているではないか。
激しく打ち鳴らされる心臓の音が遊良の耳に痛く反響し、激動している心臓に反して体温がみるみる下がっていくのを遊良は感じ…
たった今、自分が琥珀に『何』をされかけたのかを今更ながら理解したのか。遊良の脳裏には、不意に師、【黒翼】がかつてふざけ半分で放っていた言葉が急に浮かび上がってきて…

―『カッカッカ、俺がこの学園の生徒全員に引導を渡してやる。お前さんみてーに、トラウマになるくらいぶっ潰して、んで全員仲良くデュエルなんて出来ねぇ体にしてやんよ。まぁそんな事になったら、確実にイースト校は大変だぁな。』

…それはかつて、【黒翼】天宮寺　鷹峰がイースト校で学生相手にやろうとしていた事に似た行為。
【王者】クラスの決闘者が持つ圧倒的な『圧力』。人を簡単に壊すことの出来るソレ。圧倒的強者の中には、他人を導く道に進む者も居れば…他人を壊すことに何の抵抗も覚えず、嬉々として他人を壊そうとしてくる者も居る。
そんな遠慮も手加減も無い『圧力』に、学生程度が『本気』で中て

られれば…

―上手くやっても心が折られ、下手をすれば廃人。

いくら遊良が【黒翼】を師に持ち、似たようなモノにある程度中てられ慣れているとは言え、手心のある師のモノと容赦の無い琥珀のモノでは、確実に勝手が違ってくるだろう。

また完全に蚊帳の外に居た所為で、今何が起ころうとして、今何が起こったのかを理解出来ていないルキを余所目に…まったく抵抗する事も出来なかったことで、改めて遊良は【王者】と呼ばれる人種の危険さを思い知った様子。

どうにか砺波のとっさの怒号でソレが掻き消されたからよかったものの、逆に砺波がもしこの場に居なかったら…と、ソレを考えるだけで遊良の背筋に更に寒気が走り、心臓の鼓動が更に大きくなる。

…しかし、そんな遊良の冷えていく表情を意に介さず。

更に琥珀は、淡々と言葉を続けた

「ま、いっか。ねぇＥｘ適正の無いボウヤ。」

「…え？」

「俺っちとデュエルしよーぜ？」

「…は!?いや、あの…」

突然、唐突、突如、突発。

たった今『あんなこと』をしでかそうとしたばかりだというのに、琥珀からの突然すぎるデュエルの誘い。

…まさか遊良も、この状況と【白竜】という王者を前にして、こんな言葉をかけられるなんて思ってもなかったことだろう。

縛ることなど出来ない唯我独尊である【黒翼】と、引退して決闘学園の理事長を務めている【白鯨】という特例は別として…素行はどうあれ、世界に轟く【王者】が自分から他人をデュエルに誘うということなど、本来ならばあってはならない事。

【王者】の責務と地位と実力、その一戦によって数え切れない額の金が動き、数え切れない程の人間が関わってくるのが王者のデュエルなのだ。
　だからこそ、ソレは一介の学生に対する言葉などでは断じてなく、こんなにも軽んじて行うモノでは絶対にないはずだと言うのに。

「新堂君！勝手は許さないと言ったはずですが⁉」
「えー？いいじゃん別に。ちょっと戦るだけだって。」
「…君は【王者】の自覚が足りなさ過ぎる。一体何を企んで…」
「シシッ、企んでるて人聞きわりーね。だからあれは冗談だって。ほらなんてゆーの？胸を貸してあげましょう！的な？」
「…君がたった今天城君にしようとしたことをもう忘れたのですか？仮に君に他意が無いのだとしても…『あんな事』をしかけた君を、天城君を戦わせることなど出来るわけがないでしょう。」
「えー？大丈夫だって。つーかさー、【白鯨】のジーサンだって俺っちが学生ん時、自分から戦ろうっつって誘ってきたじゃん。だからジーサンにとやかく言われる筋合いもねーし。」
「…また古い話を…」

　また、怪訝な顔を崩さぬ砺波へと、何やら言葉を投げかけた琥珀。

　…それは、まだ砺波が王者【白鯨】であった頃。

　旧友であるサウス校理事長、『烈火』と呼ばれた元プロデュエリスト、獅子原　トウコに用があってサウス校を訪れた時…トウコから、学生の枠に収まらぬ程の才能の持ち主だと紹介されたサウス校の学生であった琥珀に興味を持ち、王者【白鯨】として胸を貸すつもりで一戦交えた、その過去の出来事。
　しかし、当時は好調の中にあった所為か、それともその時の自分が琥珀と同じオフの時だった為か…
　その時の自分を少々気が緩んでいたとは砺波も思い返しているも

のの、今のこの場と過去のあの場は決して同じ状況ではない為に、砺波も簡単に琥珀の言葉を容認することは出来ず。
琥珀が何を考えてこの場に現れたのかわからない以上、砺波も琥珀に好き勝手に振舞わせるわけには行かないのだろう。

「いーじゃんいーじゃん。大体、【白鯨】のジーサンも綿貫のジッちゃんも紫魔っちもさー、王者がどうこう煩すぎんだよねー、立場がどうだの自覚がなんだのっつって。天宮寺のジイサンくらいだぜ？面白いことやりたがんのはさ。」
「…あの男は論外です。鷹峰のような奴を参考にすること自体が間違っている。」
「別にいーじゃんか。それにさ、【白竜】とデュエル出来るなんてボウヤにとってもイイけーけんになると思うぜ？」
「しかし、天城君の力では…」
「砺波先生！や、戦らせてください！」

しかし、そんな渋る砺波の声を遮り、遊良は突発的に声を荒げて。
自分が先ほど琥珀に何をされかけたのか、それを忘れたわけではないだろうが…それでも真意の読めぬ琥珀を前に、恐怖よりも戦意の方が勝っている様子。
そんな、言葉を遮られて視線をこちらへと向けている砺波へと向かって、遊良は更に言葉を続けた。

「は、【白竜】とデュエルできるなんて機会、逃したら次はどれだけ先になるか…」

—そう、これはチャンスだ。

【王者】とデュエル出来る機会など、常人が普通に生きていたら０にも等しいことなのだ。そもそも【王者】と戦うどころか、プロデュエリストに成れる人間すら才能を持った強者の中から更に選ばれた猛者

だけだと言うのに…

【黒翼】を師に持ったこと自体が奇跡。
【白鯨】に鍛えてもらっていること自体が奇跡。
その重なり合った奇跡の中で、更なる奇跡が舞い降りたこの幸運。

こんな自分の前に、あろうことか現役の王者である【白竜】が現れ、あろうことかデュエルをしてくれると言うのだ。
今先ほど危うく『壊され』かけたと言うのに、その恐怖などすぐさまどこかに行ってしまったかのようにして振舞うその遊良の姿を、傍目から見ている砺波もルキも信じられなかったことだろう。
…しかし、そんなことは遊良からすれば些細なことなのか。
なにせ琥珀の行動や言動にやや難があるとは言え、そんなモノは師【黒翼】のソレと比べればまだマシなこと。
琥珀の『想像を絶する気迫』は、確かに容赦なく自分を壊そうとしてきていたものの、遊良とてこれまでの修業で幾度となく師、【黒翼】の圧力を受けてきているのだ。
だからといって、【黒翼】のソレと【白竜】のソレを比べられることなど出来ないものの…ある程度同種のモノに慣れているとも自負できるからこそ、遊良にとってこれは紛れも無いチャンスなのだから。

「君まで何を言いだすのですか…天城君、私は今の君の実力をよく分かっています。正直、今の君では新堂君の相手が務まるとは到底思えない。」
「…それは…」
「シシッ、そんなの当たり前のことじゃん。俺っちだって学生の時、【白鯨】のジーサンにボッコボコにされたんだし。」
「…あの時の君はまた別です。君はあの時点で、既にプロでも充分に通用する実力があった。」
「でもさー、『どっかの誰かさん』みたいにこれで何か掴むかもしれねーんだし、やっといても損にはならなくね？」

「ぬぅ…」

そうして、不意に言葉を止めた【白鯨】の、その思考は何を思っているのだろう。

今でも鮮明に思い出せるであろう、過去に手合わせをしたその一戦では、当時は不調どころか絶好調の中にあった王者【白鯨】を相手に、他の学生とは一線を画する才能を持っていた琥珀を持ってしても敵うはずもなかったのだが…

それでも、砺波との交戦が琥珀の内に眠る『天才』の実力と感覚を大いに刺激し、琥珀の才覚を完全に目覚めさせたのもまた事実。

現に、琥珀が急に頭角を現し始めたのは、【白鯨】との一戦の直後からだと言うことを琥珀自身も砺波自身も分かっているのだ。

だからこそ、強者との『一戦』は、普通の『一戦以上』の価値を持っていることを砺波とて理解している。

特に伸び盛りのこの年代は、少しのきっかけを与えただけで驚くほどに成長を見せるものであり…

「砺波先生、俺…」

「…私は、君の実力がまだまだ足りないことをよく分かっています。…しかし、君が自分自身の実力を、過信していないことも分かっている。」

「…え？」

故に、叩けば叩くほど磨くこの教え子の、更なる成長の為には今は確かに良いチャンスといえば良いチャンスと言え…

「…仕方ありません、打ちのめされてきなさい。」

「ッ!?…は、はい！ありがとうございます！」

至った結論は至極単純。

全ては教え子を、強くするため。

「…何かジーサン、ちょっと丸くなった？」
「新堂君、何を企んでいるかは知りませんが、君の行動の何か一つでも危険だと感じたら、私が即刻デュエルを中止させてもらいます。」
「だから大丈夫だっつってんじゃん。別に取って喰うつもりなんてないし。『ごしどーごべんたつ』ってやつ？シシッ。ふつーにデュエルするだけだよん。」

また、真意の知れぬ琥珀への警戒も怠らず。鯨のあまりに鋭い警戒心の網が張り巡らされている内は、いくら琥珀とて遊良に下手なことは出来ないはず。
何か起ころうとした瞬間に、先ほどと同じように無理やり止めればいい。そうして何かあればすぐに察知できるように気を張りつつも、デュエルを行うためにスタジアムの両端に歩いていく遊良と琥珀を尻目に…
砺波は話に加わることが出来ずに蚊帳の外で傍観していたルキを連れてスタジアムを降りていく。

「あの、理事長先生…」
「はい、なんでしょう。」
「あの人…遊良をどうするつもりでこんな…」
「…わかりません。ですが、どうなるかは天城君次第でしょう。」
「…え？」
「実力の差は歴然。しかし、新堂君が『何』を仕掛けてくるのだとしても…あくまで、天城君が折れるかどうかは彼次第。それに…」

それは現状を把握しきれていないルキの不安を払拭しようとして放った言葉ではなく、あくまで砺波自身の意思と思考。
自らがこれまで鍛えてきた中で見てきた、天城　遊良という教え子の実力と精神力を誰よりも理解している砺波だからこそ至れるモノ。

ここまで至るまでに紆余曲折はあったものの、『Ｅｘ適正』を持たないこの教え子に対し、自分がここまで思えることに何の疑問も感じる事無く…

砺波は、更に言葉を発して…

「この私の教え子が、実力差程度で折れるはずがない。」

―…

「シシシッ、良かったねボクちゃん。【白竜】とデュエル出来るなんて一生モンの記念になるぜ？」

「…よろしくお願いします。」

「あり？ノリわりーね。もっとこうさー、『きゃー』とか『わー』とか『恐縮です』とか無いわけ？」

「…」

「ってアレか、そういやボクちゃん天宮寺のジイサンの弟子なんだっけ？妙に場慣れしてると思ったけど…シシッ、『次はどれだけ先になるか…』って、記念に一戦なんて微塵も思ってないじゃんね。食って掛かる気満々じゃん。」

遊良の言動や雰囲気が、そこらに居る並みの学生とは違うと言うことは【決闘祭】の決勝を見ていた琥珀にだって分かってはいただろう。

しかし、それでもこうして直に対面しているからこそ、先ほど不意に仕掛けたときとデュエルをしようとしている今では、目の前の少年の雰囲気は全く異なるモノだということを改めて琥珀は感じたのだろうか。

この年代にありがちなミーハーな感情もなく、あれだけ動揺していた立ち姿がこうしてデュエルのために対峙した瞬間に、歳相応のモノ

から『決闘者』が纏う戦いの雰囲気へと即座に切り替えられたのだ。
果たしてこの天城　遊良という『Ｅｘ適正』の無い【決闘祭】の優勝者が、一体どれほどのモノなのか。その些細な変化と、『決闘者』としての重要なモノを持った少年への興味で…
琥珀もまた、笑みを浮かべている。

（【白竜】…先生や砺波先生と同じだ、遠すぎて実力の差が全く分からないけど…でも、最初から全力で行かなきゃいけないことに変わりはない。）

また、遊良の方も【白竜】を相手に、意気込んではいるものの大きすぎる壁に対して、気負いすぎてもいない様子。
『今』の自分の実力が、現役の王者相手にどこまで通用するのか…
いや、通用なんてしないかもしれないが、【堕天使】を失ってから組み上げたこの『新たなデッキ』が、一体どれほどのモノとなっているのか。
それを、はっきりさせるために。

そして…

デュエルスタジアムの準備が整ったのか、遊良と琥珀のデュエルディスクがそれぞれデュエルモードへと切り替わり、腕に装着するとディスクが展開しデッキが現れる。
そのまま二人はデュエルディスクを構え、デッキから手札を引くと…
唐突に決まったこのデュエルで、各々の心情の元…

「まっ、気楽にいこーよ。」
「…はい。」

ーそれぞれの想いを胸に…

二人は、叫ぶ。

—デュエル!!

そして、始まる。先攻は、琥珀。

「俺っちのターン！【魔轟神レイヴン】を通常召喚！」

【魔轟神レイヴン】レベル２
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１０００

デュエルが始まってすぐ、禍々しい光を纏う悪魔を召喚した新堂琥珀。

彼の操る【魔轟神】というカテゴリー、その神にも等しい光の悪魔と言う、相反した混沌を統べる彼のデュエルスタイルは彼の【王者】の名と相まってあまりにも有名であり…

その始まりとなるモンスターを呼び出し、すぐさま琥珀は動き始めるつもりなのか。

頂点に立った、【王者】となった…

—シンクロ王者の決闘が、今…始まる。

「続いて手札の【魔轟神グリムロ】の効果発動！場に【魔轟神】が居る時、自身を墓地に送ってデッキから【魔轟神】を手札に加えるよ！俺っちは【魔轟神クルス】を手札に加え、続けて【魔轟神レイヴン】の効果発動！手札の【魔轟神クルス】と【魔轟神ルリー】を捨てて、レイヴンのレベルと攻撃力をそれぞれ上げる！その後捨てられたクルスとルリーの効果がそれぞれ発動！クルスの効果で墓地の【魔轟神グリムロ】を！ルリーの効果でルリー自身をそれぞれ守備表示で特殊召喚するぜ！更に手札から【魔轟神獣ガナシア】を捨て、同じく手札からチューナーモンスター、【魔轟神獣チャワ】を特殊召喚！ついでにガナシアも、自身の効果で特殊召喚！」

―
!!!!

【魔轟神レイヴン】レベル２→４
ＡＴＫ／１３００→２１００　ＤＥＦ／１０００
【魔轟神グリムロ】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１０００
【魔轟神ルリー】レベル１
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／４００
【魔轟神獣チャワ】レベル１
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　１００
【魔轟神獣ガナシア】レベル３
ＡＴＫ／１６００→１８００　ＤＥＦ／１０００

止まることなき展開で、一瞬で琥珀の場に並んだモンスター達。
始まったばかりだというのに、５体ものモンスターを場に揃えたこの流れるような展開こそ新堂　琥珀というデュエリストの真骨頂。
この掴み所の無い自由な展開は、彼の軽すぎる言葉のように敵のいかなる抵抗もすり抜けてしまうかの如く、他の追随を許さぬ圧倒的物量となって途切れる事無く行われるのだ。

相手がいかに喰らい付いてこようとも、追いつくことを決して許さぬように引き離しにかかるその圧倒的速度を持って…

―更なる展開を、琥珀は魅せる。

「シシシッ、じゃあ行くぜ？レベル１、【魔轟神ルリー】に、レベル４となった【魔轟神レイヴン】をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ＴＧハイパー・ライブラリアン】！」

【ＴＧハイパー・ライブラリアン】
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１８００

「続けてレベル４、【魔轟神グリムロ】に、レベル１の【魔轟神獣チャワ】をチューニング！」

一回だけでは飽き足らず、一体だけでは収まらず。琥珀の宣言によって、空に飛び上がる悪魔と魔獣。

琥珀の宣言によって、一つの光輪に吸い込まれるように怪しき女神がその輪を潜り…

「混沌渦巻く異界の王よ、轟きと共に姿を現せ！シンクロ召喚！」

女神の祈りと、獣の叫びが宙に消える時、異界の王が姿を現す。

「降臨！レベル５！【魔轟神レイジオン】！」

―！

【魔轟神レイジオン】レベル５
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１８００

禍々しい光を纏い現れるは、轟く神々が住まう異界における、混沌

を統べる謀略の王。
新堂　琥珀という『天才』が操る、【魔轟神】というカテゴリーが持つその圧倒的な物量と加速し続ける展開は、全ての手札を使い切ったとしても一度その波に乗ってしまえば、世界中の誰にも止める事のできない嵐の如く暴れ続けるのだ。
…激しい展開には付き物である手札消費すら、琥珀にとってはあって無いようなモノ。

―何せ、【王者】

世界の頂点に立つ決闘者。

常人ではこの目まぐるしさに、ついていくことすら出来はしないし…あまりの加速と物量は、例え目で追えたとしても気付いた時には手遅れになっていることに違いなく。
故に、こんな物では終わらないし、この程度で終わるはずも無い。

「レイジオンとライブラリアンの効果をそれぞれはっつどう！まずはレイジオンの効果で２枚ドローし、その後ライブラリアンの効果で更に１枚ドロー！そして俺っちは手札から、【魔轟神獣ノズチ】の効果を発動だぜ！手札の【魔轟神獣ケルベラル】を捨て、ノズチを特殊召喚！その後、捨てられたケルベラルも自身の効果で特殊召喚されるよ！」

【魔轟神獣ノズチ】レベル２
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／　８００
【魔轟神獣ケルベラル】レベル２
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　４００

「ノズチの効果は発動しないで、レベル３のガナシアに、レベル２のケルベラルをチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【Ａ・Ｏ・Ｊ

カタストル】！ガナシアは除外されっけど、ライブラリアンの効果で1枚ドロー！更に更に更にぃ！魔法カード、【死者蘇生】発動！墓地から【魔轟神獣チャワ】を特殊召喚して、レベル5のカタストルとレベル2のノズチに、レベル1のチャワをチューニング！」

（止まる気配がまるで無い…一体、どこまで…）

終わらぬ展開、止まらぬ召喚。加速し続けていく琥珀のデュエル。

並み居るプロでもついていける者の方が少ない、この【王者】の圧倒的な展開力と回転力。

まるで終わりが見えてこないソレを、今ここで見ているしかない遊良の目には…

果たして、このゴールの見えない地平の果てに待つモノが一体何なのか。それを想像することすら憚られるに違いないことであって。

「混沌逆巻く異界の神よ！深淵を纏いて姿を現せ！シンクロ召喚！降臨、レベル8！【魔轟神ヴァルキュルス】！」

――！

【魔轟神ヴァルキュルス】レベル8
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／１７００

場に現れしは、轟く神々が住まう異界における、混沌を操る策略の神。

その禍々しい威厳たるや、これまで遊良が体験したことのない代物であり…その禍々しい見た目と神々しさすら感じる後光には、微塵も油断が出来ない。

「シンクロモンスターが3体も…」

「シシシッ、ライブラリアンの効果で1枚ドロー！【貪欲な壺】を発動

して、墓地のグリムロ、クルス、ケルベラル、チャワ、ルリーをデッキに戻して2枚ドロー！…おっ、いいカード引いたじゃん。【魔轟神ヴァルキュルス】のモンスター効果！今引いた【魔轟神クルス】を捨てて、俺っちは更に1枚ドローするよ！そして今捨てられたクルスの効果が発動し、墓地から【魔轟神レイヴン】を守備表示で特殊召喚してその効果発動！手札の【魔轟神獣ガナシア】を捨て、レベルと攻撃力をアップさせる！今捨てられたガナシアも、自身の効果で特殊召喚だぜ！レベル3のガナシアに、レベル3となったレイヴンをチューニング！シンクロ召喚、レベル6！【スターダスト・チャージ・ウォリアー】」

―！

【スターダスト・チャージ・ウォリアー】レベル6
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１３００

「ガナシアは除外され、チャージ・ウォリアーとライブラリアンの効果で2枚ドロー！魔法発動、【ソウルチャージ】。墓地から【魔轟神レイヴン】を守備表示で特殊召喚しとくよ。…うーん、まだまだ行けっけど、まっ、もういっか。とりあえず最初はこんなトコにしといてやんよ。俺っちはこれでターンエンド。」

琥珀　ＬＰ：４０００→３０００
手札：5→3枚
場：【ＴＧハイパーライブラリアン】
【魔轟神レイジオン】
【魔轟神ヴァルキュルス】
【スターダスト・チャージ・ウォリアー】
【魔轟神レイヴン】
伏せ：なし

始まったばかりのデュエル、その最初のターンから怒涛の展開を見せたにも関わらず、まるで息切れをしていない新堂　琥珀。
５体ものモンスターが並んだその場から発せられるプレッシャーは、生半可なデュエリストでは戦う気持ちすら折れそうになるくらいに荒々しいモノとなっており…
まだ動けたという琥珀の宣言通り、琥珀の場にはチューナーモンスターである【魔轟神レイヴン】が存在し、【ＴＧハイパー・ライブラリアン】のドロー加速を合わせるとまだまだ琥珀は加速し続けられたのだ。
しかしソレをしなかったということは、琥珀の言った『最初はこんなトコにしといてやる』という言葉通り、まずは遊良の出方を見るのにこの盤面で充分と言っているのと同義。
舐められていると思うにもおこがましい。こんな中途半端に止めた展開でも、この程度をどうにかして来ないようでは期待はずれも良い所だと、そう言われているようなモノなのだから。

「俺のターン、ドロー…」

そんな果て無き琥珀のターンが終わり、どこか気負ったような声で自らのターンを向かえた遊良の心情どのようなモノなのだろう。
あまりに有名すぎるシンクロ王者【白竜】のデュエルは、もちろん遊良だって何度もその映像を見ているし、その実力が頂のその上にあることも理解している。
琥珀の最初から激しい展開を見てもなお【王者】の果てなど見えては来ないからこそ、砺波の言った通り、今の自分の実力では【王者】と渡り合えるだなんて思ってもいないし、そこまでうぬぼれてもいない。
（新しいデッキで出来ること…『今』の俺に出来る、最善の戦い方…）
やるべき事は唯一つ。

【堕天使】を無くした今だからこそ出来る戦い方。琥珀の状況を逐一考え、自分が出来ることを即座に考え、自らが組み上げてきた新たなデッキの力を信じ…

そうして、遊良はその手札の中から、一枚のカードを取ると…

「俺は…」

―進撃を、始める。

「魔法カード、【成金ゴブリン】を発動！ＬＰを１０００与え、俺はデッキから１枚ドロー！続けて【トレード・イン】を発動！レベル８の【鉄鋼装甲虫】を捨てて２枚ドロー！魔法発動、【テラ・フォーミング】！デッキから【チキンレース】を手札に加えそのまま発動！ＬＰを１０００払い、俺はデッキから１枚ドロー！更に【闇の誘惑】を発動！２枚ドローし、闇属性の【クラッキング・ドラゴン】を除外する！…よし、２枚目の【成金ゴブリン】を発動だ！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！まだだ【手札断殺】を発動！お互いに手札を２枚墓地へ送って、新たに２枚をドロー！」

「シシッ…めっちゃ引くねー。しかも【抹殺】じゃなくて【断殺】かよ。じゃあ俺っちも２枚交換っと。」

それはまるで止まる事のない、琥珀に負けず劣らずのドローの嵐。【堕天使】を失っているというのに、ソレを微塵も感じさせないこの怒涛のドローは…【堕天使】を得る『前』と得た『後』、幼少の頃よりずっと貫き通してきた遊良『本来』の姿、遊良『本来』のスタイル、遊良『本来』の戦い方。

琥珀　ＬＰ：３０００→４０００→５０００

それに『本来』のスタイルとは言っても、確実にこれまでのデッキとこの『新たなデッキ』はどことなく『違う』とも言えるだろう。
例えば、遊良の以前のデッキでは無闇にＬＰを減らすことを嫌ってか、ＬＰと引き換えにドロー出来る【チキンレース】など選択肢にも入ってなかったのだが…今のこの最初の動きでは、ソレを全く気にした様子もなく、当然のように引いていた。

―それは、以前のデッキを失い、その後に【堕天使】を使って来たが故の遊良の成長。

ＬＰを多量に削る効果を持つ堕天使達を操ってきたからこそ、以前のデッキと【堕天使】、それぞれのデッキから得られた経験がこの新たなデッキと化していて。
必要なカードは引けばいい、直接サーチが出来ないのならデッキの中から無理やり引っ張り出せばいい。ＬＰを減らしても出来ることを全力で行い、出来る手、取れる手、考えうる自分に出来る全ての手を持って…
遊良は更に、進撃を始める。

「魔法発動、【ワン・フォー・ワン】！手札からモンスター１体を捨て、デッキからレベル１の【サクリボー】を特殊召喚！」

―！

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／２００

そうして遊良の場へと、非力で無力な小さき毛玉が現れて。
琥珀の場に並んだモンスター達のどれと比べても見劣りするであろうソレもまた、以前の遊良のデッキには入っていなかったモンスターの一体。

しかも、その手足や背に纏う『異形の眼』は、つい先日の『フードの男』が操ってきたモンスターにも似たモノだと言うのに。
…しかし、これこそが遊良の新たなデッキのエンジン。
突き詰めてきた自分のスタイル、それを更に加速させるであろうソレは、先日の『トラウマ』をも乗り越えるという遊良の気概と共に、このデッキにおいて重要な役割を果たすのだ。

「ふーん、サクリボーねぇ…ってかまだ引く気？」
「まだだ！【サクリボー】1体の特殊召喚に成功したこの瞬間！速攻魔法、【地獄の暴走召喚】を発動！」
「ほ？」

そして、果て無きドローの嵐の後に、遊良の発動した一枚の魔法。
その攻撃力１５００以下のモンスター一体のみの特殊召喚に成功した時のみ発動できるこの速攻魔法は、敵も味方もお構い無しに、手当たり次第にモンスターを召喚しにかかるまさに暴走の如く光を発し…
しかし、相手フィールドにモンスターが居ないと使えず、敵も味方もお構い無しにとは言え、あくまでソレは『メインデッキ』から呼び出せるモンスター限定のモノ。
また、そもそも琥珀の場は先ほどの驚異的速度と圧倒的物量によって５つ全て埋まっていているのだ。
つまり、今暴走の如く飛び出てくるのは、遊良の場のみであって…
「俺はデッキから、【サクリボー】を2体特殊召喚する！来い、【サクリボー】達！」

―!!

【サクリボー】レベル1
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／２００

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／２００

場に並んだ３体の【サクリボー】は、いずれも琥珀の場にいるシンクロモンスターを倒すことなど出来ない非力な毛玉。
いかに自分達よりも巨大なモンスター達に勇んで睨みつけてはいても、その体格差と威厳の差は到底覆ることはないだろう。
…しかし、何も遊良とてそのまま攻撃を仕掛けることなどやりはしない。その毛玉の名の通り、彼らは『生贄』に捧げられた時にこそ真価を発揮するのだ。

「行くぞ！俺は永続魔法【冥界の宝札】を発動！そして３体の【サクリボー】をリリース！」
「冥界の…うっわ、懐かしいカード出すもんだねぇキミ。まだ使ってる奴居たんだソレ。」

迷い無きその手に掲げられしは、迷うことなき遊良の魂。
…誰に何を言われようとも、例え誰かに笑われようとも。
―これが、これこそが自分に出来る戦い方。

震える大気、獣の咆哮と共に…
それは、現れるのだから。

「来い！【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

「おー！それ【決闘祭】で見た奴じゃーん！マジあがるぅー！」

遊良の叫びをどこまでも軽い表情のまま、軽い言葉を放つ琥珀。
しかし、それもどこまでしていられるか。持てる力の全てをぶつけて、その表情を変えてやると言わんばかりに猛る遊良の気迫が獣の王の叫びと相変わりて、獣の王がその槍を猛々しく振り回し始める。
例え相手が【王者】であろうと、例え強大なＥｘモンスターが相手であろうと。

―全てを、吹き飛ばす。

「バルバロスの効果発動！３体リリースでアドバンス召喚した時…相手のカードを、全て破壊する！やれ、バルバロス！」

―！

そうして…
轟々なる爆裂音を放ち、琥珀のモンスター達が全て凄まじい衝撃波に飲み込まれていく。
その壮絶なる断末魔の叫びは、到底堪えきることなどできないモノとなって自らが受けている波動の凄まじさを叫び表していたことだろう。
―相手は【王者】、世界の頂点。
最初から全力で行くつもりでなければ、相手にすらしてもらえな

い。琥珀の場を一層したものの、手札を全て使い切ったその遊良の姿は勇む立ち姿と相まって、言葉に出さなくともソレを体現していたに違いなく。

…しかし、遊良が作り上げてきた新たなデッキは、何もこの激しい手札消費をそのままにしておくほど柔な代物ではない。

そう、普通ならば手札を全て使い切った果ての展開はピンチにもなるのだろうが…

「これで終わりじゃない！【サクリボー】３体と、【冥界の宝札】の効果発動！俺はデッキから…５枚をドロー！」

琥珀の場を一掃し、獣の王を召喚しつつも、手札を５枚まで回復させた遊良。

微塵も、欠片も、舞い上がってはおらず。

いくら相手が【王者】であろうと、遊良は同じ【王者】やそれと同格の師達に鍛えられてきたのだ。天上の実力を持った相手であろうとも…自らの力の全てを賭け、一点を鋭く狙うのみ。

「お、ちょっとはヤルじゃんね。シシッ、必死すぎてちょー笑えっけど。」

「まだだ！【死者蘇生】発動！墓地の【鉄鋼装甲虫】を攻撃表示で特殊召喚だ！」

【鉄鋼装甲虫】レベル８

ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００

遊良の墓地から蘇るは、遊良が幼少の頃に使っていた『通常モンスター』。

懐かしさすら感じるソレを今ここで呼び出し、出来る限り盤面を固めようとしているのだろうか。

ここまでしても手札を補い、次に供えることが出来る遊良の実力は

紛れもなく『壁』を超えた者のソレ。遊良が自ら発動したチキンレースの所為で、このターン琥珀のＬＰを削りきることは出来ないものの…

それでも、これで琥珀が何もしなければ獣の王の攻撃によって、遠慮のない大ダメージが琥珀へと襲いかかることだろう。

そして…

「行くぞ、バトルだ！行け、バルバロス！【白竜】にダイレクトアタック！」

琥珀の隙を貫くように、獣の王が勢いよく【白竜】へと襲い掛かった…

―その時だった。

「ま、甘々の甘過ぎだけどねん。【バトルフェーダー】の効果はつどー。こいつを場に出してバトルフェイズを終了するよ。」

「…くっ。やっぱり…」

琥珀の手札から飛び出してきた小さな悪魔が、獣の王の槍をその身で受け止め弾き飛ばした。

…そう、【王者】がこんな簡単に攻撃を通すはずもなく。

あれだけ整えた場を一瞬で崩壊させられようとも、一瞬の隙を鋭く狙っている少年の視線が痛いほど突き刺さってこようとも…

至極当然、まるで何事もなかったかのようにして振る舞い、さも当たり前のようにして防ぐだけ。

まだまだ甘いという琥珀の言葉どおり、そんな程度では隙を突くことすらままならないと、琥珀の雰囲気がそう言っていて…

…しかし遊良からしてもそれは織り込み済みで、結果的に『こうなる』とわかっていても、ソレを乗り越える気概で遊良は強攻策を取っ

たのだ。
確かにあのままバルバロスの効果を使わずに、鋼の甲虫と共に琥珀のモンスター2体へと攻撃を仕掛けた方が琥珀の少なからずＬＰを削ることは出来ただろう。
しかしソレをした所で、強力なシンクロモンスターが並んだ琥珀の場を一時的に綻ばせることは出来るだろうが、だからと言ってそんな小さな傷などこのデュエルにおいてはあってないようなモノ。
どうせこのまま何もしなければ、次のターン一気に流れを持っていかれ…
いや、流れと言う生易しいモノではない。このデュエルの全てを持っていかれ、何も感じることすら出来ずにただ【王者】に蹂躙されるのを待つしかなかったのだから。
だからこそ、最初から全力で。
一気に決めきれるとは思ってなかったが、一気に決めきる気持ちがなければそもそも対峙することすら許されない。
例え当然のように防がれるのだとしても、琥珀の強固な盤面を一掃しきるのと出来ないのではこれから先の『未来』は雲泥の差。
…それはこのデュエルにおいても、これから『先』においても。

「…俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：6→2枚
場：【神獣王バルバロス】
【鉄鋼装甲虫】
魔法・罠：【冥界の宝札】、伏せ2枚

「俺っちのターン、ドロー！…ねーねーボクちゃん、そういやさー…」

そしてターンが一巡し、不意に手を止めた琥珀は一体何を思ったのか。徐にその口を開いたかと思うと、遊良へと向かって言葉を放り始

めた。

「【決闘祭】ん時使ってたアレ、どうしたのよアレ。」

「…アレ？」

「なんだっけー…あの珍しい奴…そうそう！【堕天使】よ【堕天使】！何か【決闘祭】ん時とデッキちげーしさー、何でいきなりデッキ変えたのかなーって。」

「…ちょっと、色々ありまして…」

「ふーん。…まっ、デッキ変えるなんてこの業界じゃよくあることだけどさ。【決闘祭】優勝したのになんか勿体ねーなーって思っただけ。まーいいや、ボウヤの【チキンレース】の効果を使わせて貰うよん。ＬＰを１０００払って、更に１枚ドロー！」

琥珀　ＬＰ：５０００→４０００

しかし、それも単なる気まぐれだったのだろう、再びデュエルへと意識をすぐさま二人は戻して。

遊良の発動していたフィールド魔法は双方のプレイヤーに効果が及ぶが故に、当然のように琥珀もソレを利用してくることは遊良にはわかっていた。また、それを利用されても構わないと吹っ切れているからこそ、その後のターンへと向けて遊良は更に気を入れ直し…

しかし、そんな遊良を意に介さず。

琥珀は更に動き始める。

「魔法カード、【手札抹殺】を発動！俺っちは３　捨てて３枚ドロー！」

「…俺は２枚捨てて２枚ドロー。」

「オラオラ行くぜぇ？ついて来いよな！今捨てられたクルスとケルベラルの効果発動！クルスの効果で墓地の【魔轟神レイヴン】を、ケルベラルの効果で自身を！それぞれ特殊召喚！」

【魔轟神レイヴン】レベル２
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１０００
【魔轟神獣ケルベラル】レベル２
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　４００

「手札の【魔轟神グリムロ】の効果発動！グリムロを墓地に送って、デッキから【魔轟神クルス】を手札に加える！んで【魔轟神レイヴン】のモンスター効果！手札のクルスとガナシアを捨てて、レイヴンのレベルと攻撃力をそれぞれ上げるぜ！クルスの効果で、墓地から【魔轟神グリムロ】を、ガナシアの効果で自身を！それぞれ特殊召喚！」

【魔轟神レイヴン】レベル２→４
ＡＴＫ／１３００→２１００　ＤＥＦ／１０００
【魔轟神グリムロ】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１０００
【魔轟神獣ガナシア】レベル３
ＡＴＫ／１６００→１８００　ＤＥＦ／１０００

１ターン目からあれだけ動いたにも関わらず、全くスピードを落とす気配のない琥珀の展開。
遊良に場を一掃されたにも関わらず、先ほどのバトルフェーダーと合わせてすぐさま５体のモンスターを場に揃え、落ちるどころか益々加速していくこの【白竜】のデュエルには、『底』というモノが無いのかと言うほどに激しい勢いとなっていて…
しかし、並のプロとは比べるのもおこがましい【王者】という存在の実力は、底など存在しないまさに天上のモノとも言えるからこそ、この程度は琥珀にとって造作も無いこととも言えるだろう。

「おいおい、じーっと見てるだけかいボクちゃん？」
「…」

「まっ、いいけどねん。何もする気が無いなら好きにやらせてもらうよ！レベル２のケルベラルに、レベル４のグリムロをチューニング！シンクロ召喚、レベル６！【瑚之龍】！」

【瑚之龍】レベル６
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／　５００

そうして琥珀が召喚したのは、竜宮から出でしシンクロチューナーの一体。

【白鯨】砺波　浜臣も好んで扱うことでも有名なソレは、遊良にとってもある意味見慣れたモノには違いないものの…砺波が使うのと琥珀が使うのでは、例え同じモンスターであっても異なる存在と役割を持ったモノとなるのか。

砺波のモノとはどこか異なった雰囲気で、遊良を睨んで優雅に浮かぶ。

「どんどん行くよ！【瑚之龍】の効果発動！手札を一枚捨てて、【神獣王バルバロス】を破壊する！」

「くそっ、永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！【瑚之龍】の効果を無効にする！」

「でもコストで捨てた【魔轟神ルリー】の効果は強制的に発動すっからね！ルリーを墓地から特殊召喚！レベル１の【バトルフェーダー】に、レベル６のシンクロチューナー、【瑚之龍】をチューニング！シンクロ召喚、レベル７！シンクロチューナー、【シューティング・ライザー・ドラゴン】！」

【シューティング・ライザー・ドラゴン】レベル７
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１７００

「【瑚之龍】の効果で１枚ドロー！そして【シューティング・ライザー・ドラゴン】のシンクロ召喚成功時！デッキから【魔轟神獣ノズチ】を

墓地に送って、シューティング・ライザーのレベルを２下げる！手札を１枚伏せて、レベル１の【魔轟神ルリー】に、レベル４となった【魔轟神レイヴン】をチューニング！」

止まらない、止まれない、加速し続ける新堂　琥珀。

ブレーキが壊れているのでは無いかと錯覚するほどのその勢いは、轟く悪魔達の存在と相まって、益々得体の知れないモノへと自らの雰囲気を変えていくではないか。

ー何をされても、どれだけ阻まれようとも、走り出したら止まらない。

学生時代から築き上げてきた伝説、プロになってからの破竹の勢い、そして【王者】と呼ばれる様になってからも更にその強さを上げ続けている琥珀の目指す場所は果たして『何』なのだろう。

頂点に至った者、その高みに辿りついた者。【王者】となっても飽き足らず、果て無き『そこ』へと嬉々として向かおうとしている琥珀だからこそ、その深淵の淵が今、顔を出し始めて…

「シンクロ召喚！降臨、レベル５！【魔轟神レイジオン】！」

―！

【魔轟神レイジオン】レベル５
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１８００

「レイジオンの効果で２枚ドロー！伏せてた【貪欲な壺】を発動し、墓地のヴァルキュルス、レイジオン、グリムロ、ルリー、ノズチをデッキとＥｘデッキに戻して２枚ドロー！そして今引いた【魔轟神グリムロ】の効果！自身を墓地に送って、デッキから【魔轟神獣キャシー】を手札に！魔法発動、【暗黒界の取引】！お互いに一枚引いて一枚捨てる！そして今捨てられた【魔轟神獣キャシー】のモンスター効果が発動するよ！【チキンレース】は破壊だぜ！」

「なっ!?」
「いっくぜぇ！レベル３の【魔轟神獣ガナシア】に、レベル５となった【シューティング・ライザー・ドラゴン】をチューニング！」
天に昇りし光の柱、その純白の先に待つのは果たして一体何なのか。
益々上がって行く琥珀のギアと、その雰囲気が纏う気迫がさらに凄みを増していき…
「深淵に煌く輝きよ、果て無き輪廻の光となれ！シンクロ召喚！光臨、レベル８！【ライトエンド・ドラゴン】！」
【ライトエンド・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２１００
現れしは、【白竜】が統べる数多の『白竜』の内の一体。
今でこそ一般のデュエリストにも使い手が多いこの白き光竜だが、その全てはこの新堂　琥珀が幼少の頃から好んで使用し、その存在を一躍世界に知らしめたからこそ琥珀に憧れた全てのシンクロ使いがこぞって真似して扱うようになったと言っても過言では無いのだ。
そんな歴史の一つを作ってきた歴戦の竜が、全てを掻き消さんとする光を纏い…
無謀にも【王者】に挑もうとしている少年へと向けて一つ、大きな咆哮を放つ。
「ライト…エンド…」
「シシシッ、俺っちの昔からの相棒だぜ。その効果くらい知ってんだろ？」
無論、遊良もこれまでの人生で数度、この白き光竜を相手にしてきたことはあるものの、琥珀を模して扱っているデュエリスト達と【白

竜】自身が召喚した光竜の放つプレッシャーは同じモンスターであっても全くの別物。
　また、最初にドローするために利用し、今こうしてわざわざしっかりと【チキンレース】を破壊してきたと言うことは、このターン確実に遊良にダメージを与えに来たに違いないだろう。
　それを遊良もはっきりと察したからこそ、身構えるその心をコレまで以上に強く持とうと意識はするものの…
　琥珀の纏うオーラが、『想像を絶する気迫』となって遊良の肌を刺すように…

「待たせたなぁ！行くぜ、バトルだ！【ライトエンド・ドラゴン】で【神獣王バルバロス】に攻撃！攻撃宣言時、ライトエンドの効果発動！ライトエンドの攻守を５００下げ、バルバロスの攻守を１５００下げる！」
「バルバロスに!?ぼ、墓地の【サクリボー】のモンスター効果！バルバロスが戦闘破壊される場合、代わりにサクリボーを除外する！」
「けどダメージは受けるかんね！喰らいなぁ！光輪のライトニング・パニッシュ！」

―！

遊良　ＬＰ：３０００→２４００

「ぐっ…」
「まだまだ！レイジオンで【鉄鋼装甲虫】に攻撃！」
「攻撃力が低いレイジ…ッ!?」
「察しがいいねぇ！ダメージステップ開始時、手札の【オネスト】の効果発動！レイジオンの攻撃力を【鉄鋼装甲虫】の攻撃力分、２８００ポイントアップさせるよ！」

―！

「ぐぅ…」

遊良　ＬＰ：２４００→１００

光の悪魔の一撃が、身を守っている鋼鉄の虫へと炸裂して。
それに伴い、遊良のＬＰが勢いよく減っていってしまい、どうにか０となるそのギリギリの所で足を止める。
どうにか首の皮が一枚繋ったものの、ライトエンドの攻撃先をバルバロスではなく【鉄鋼装甲虫】にされていたら…
【オネスト】と合わせてこのターンで勝負がついていた。ソレを思うと、どうしても琥珀の『意図』が遊良に嫌でも伝わってきてしまうのか。

「サ、サクリボーを除外することで…【鉄鋼装甲虫】は破壊されない…」
「うんうん、その必死さに免じてわざわざライフ１００残してやったんだし、頑張ってもう１ターン足掻いてきてよねん。最後の【貪欲な壷】を発動。墓地のグリムロ、クルス３体、ライブラリアンをデッキとＥｘデッキに戻して２枚ドロー。俺っちは２枚伏せて、ターンエンド。」

琥珀　ＬＰ：５０００→４０００
手札：２→１枚
場：【ライトエンド・ドラゴン】
【魔轟神レイジオン】
伏せ：２枚

「お、俺のターン…ドロー…」

…手を抜かれている。
ＬＰを意図的に１００残されたこともそう。チャンスを与えているといえば聞こえはいいが、その実は掌の上で転がして遊んでいるだけとも思われるその行為。
【黒翼】の蹂躙とも、【白鯨】の指導とも違う。こうもあからさまに手を抜かれていることを実感してしまったが故に、いくら相手が【王者】であっても遊良の心にはどこか小さなざわつきが生まれている様子。

「…俺は魔法カード、【アドバンスドロー】発動！バルバロスを墓地に送って２枚ドロー！魔法カード、【死者転生】発動！手札を１枚捨ててバルバロスを手札に戻す！そして今墓地に捨てた【グローアップ・バルブ】の効果発動！デッキの一番上を墓地に送って、自身を特殊召喚！永続罠、【量子猫】を発動だ！地属性獣族となり、守備表示で特殊召喚する！」

【グローアップ・バルブ】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　１００
【量子猫】レベル４
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／２２００

それでも遊良はあくまでも、ただ全力で動くのか。
…手を抜いて、気を抜いて、油断していたいならば油断していればいい。

「…行くぞ！俺は３体のモンスターをリリース！」

相手は【王者】、世界の頂点。
そんな相手と相見えることなど、中々巡ってくるチャンスではない。だからこそ、相手がどんな態度をとってこようと、相手がどんな

ことを言ってこようと…遊良にとって、この険しすぎる大きな『壁』を必死になって喰らい付くしか強くなる道は無いのだ。

…何度でも、何度でも、何度だって。

『今』の自分に出来る戦い方。己の魂のカードを駆使し、相手を全力で吹き飛ばす…

その為に。

「レベル８、【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

轟く咆哮を響かせて、猛り狂うは獣の王。
先ほど攻撃を食らわせてきた、目の前に鎮座する白き光竜を睨みつけ…
その全て壊さんと、その槍を鋭く振り回し始める。

「アドバンス召喚成功時、【神獣王バルバロス】の効果発動！」
「またそれかよ。つーか流石に同じ手はイカンでしょーが。破壊の前に罠発動、【貪欲な瓶】。墓地からキャシー、レイヴン、ノズチ、シューティング・ライザー、死者蘇生をデッキに戻して１枚ドロー。」
「くっ、…でも、全て吹き飛ばせ、バルバロス！」

猛り狂った獣の王の槍が地面へと突き刺され、轟音を伴う衝撃波となって琥珀の場へと襲いかかる。
また、何やら遊良へと向かって言葉を発していた琥珀ではあったも

のの、その態度とは裏腹にそれ以上琥珀は動こうとはせず…
されるがままに飲み込まれ、光の悪魔も、白き光竜も、残っていた伏せカードもろとも全てが衝撃波に飲み込まれていくではないか。
しかし、その光景とは裏腹に…
琥珀は一つ、冷たい笑みを浮かべて…

「更に【冥界の宝札】の効果で２枚ドロー！」
「ダメだねぇ…全くダメダメ…ダメダメのダメ！伏せてた【やぶ蛇】の効果発動！相手に破壊されたため、俺っちはＥｘデッキからモンスターを特殊召喚するよ！」
「なっ!?」

一瞬の不敵な冷笑の後、いつもの表情に戻った琥珀。
止まらぬ加速と、軽やかな声。どこまでも変わらぬその軽口は、まるで格の違いを思い知らせるとでも言うのだろうか。

「鋭き翼の煌きよ、輪廻を貫く光となれ！光臨、レベル８！【クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン】」

―！

【クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

遊良の効果を逆手にとって、遊良の破壊を引き金にして。
現れるは、水晶の翼持つ白き翼竜。
シンクロ召喚を『名』に刻み、そのあまりの神々しさを放つ透き通る翼は、まさに形容しがたい美しさを醸し出していることに違いなく。

…古の時代、神話の時代。かつて『あった』とされる、『シンクロ召喚』だけが世界の全てだった、『竜の伝承』に現れし神話を紡ぎし竜の一体。

新堂　琥珀が学生時代、『チャンピオンズ・リーグ』に学生の身でありながらも優勝を果たした際に…【決闘世界】から特別に与えられた、世界でも有数の特別なカード。【黒翼】の持つ『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』との関係性は依然として不明だが、同じく『召喚法の名』を呈するだけあって、その存在感は計り知れない。

「クリスタルウィング!?…け、けど、ここで引くわけにはいかないんだ！行けバルバロス！バトルだ！」

…しかし、そんな伝承の白き竜を前にしてもなお、遊良は攻める気持ちを折る事無く前へと向かうのみ。

「は？クリスタルウィングの効果知らないわけじゃないっしょ？」
「わかっている！だから、こうするんだ！攻撃宣言時に墓地から罠カード、【ブレイクスルー・スキル】発動！」
「おっ…」

いくら相手が古の神話を持つ竜であろうと、そんなモノに怯む遊良ではない。

そう、最初のターン、【手札断殺】を使い予め墓地に送っていたこのカード。その効果により、琥珀の場の白き翼竜がその輝きを落としていくではないか。

「これでクリスタルウィングの効果は無効！まだだ！速攻魔法、【禁じられた聖杯】発動！バルバロスの攻撃力を４００アップさせる！行け、バルバロス！クリスタルウィングに攻撃！」

駆ける獣王、轟く咆哮。

天へと大きく飛び上がり、その槍の切っ先で狙うは水晶の両翼。
舐めているなら舐めていればいい。落胆したければ落胆していればいい。そんなモノなど、相棒と共にこれまで常に吹き飛ばしてきたからこそ、相手がどれだけ強大な伝説を持とうとも恐れも何も抱かずに、獣の王が力の限り吼え…

「天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

―！

「…シシッ、ちったぁ足掻くじゃんね。」

琥珀　ＬＰ：４０００→３６００

僅かについた王者への傷。
小さな傷だが、それでも油断の隙を逃さずに与えた、確かなダメージ。
微々たるモノではあるものの、琥珀の思惑を確かに外して与えることの出来たそのダメージは、ダメージ量とは裏腹に衝撃的には大きかったことだろう。

（…ッ!?い、今一瞬、【白竜】の感じが…）

しかし、ダメージが入ったその瞬間…
琥珀の笑みがコレまでとはどこか違った冷たいモノになっていたことを、遊良は見逃さなかった。
不意に遊良に、震えが走る。

「カ、カードを一枚伏せ、タ、ターン…エンド…」

遊良　ＬＰ：１００
手札：４→２枚
場：【神獣王バルバロス】
魔法・罠：【冥界の宝札】、【デモンズ・チェーン】（効果なし）、伏せ１枚

「俺っちのターン、ドロー。」

いつも軽い言葉しか吐かぬ琥珀の口調が、ほんの少し…言われても気付かぬ程の、ほんの少しだけ冷たさを持っていたことはきっと、目の前で対峙している遊良にしかわからなかったことだろう。
ドローを行う琥珀の所作の一つ一つが、形容しがたい気迫に塗れていくその一部始終をじっくりと見ている遊良の肌に不意に鳥肌が立ち始め…
しかし、そんな遊良を見てか見ずか、琥珀は徐にその口を開いた。

「…最初とおんなじ手を押し通してきた時はさー、正直ガッカリしたけどさー…クリスタルウィング突破して、俺っちに傷つけたことだけは褒めてやんよ。」
「…え？」
「まっ、テキトーに遊んでやるだけのつもりだったけど、ここまで必死になられちゃ俺っちも少しだけアツくなってやっても良いかもってこと。…だからコレはサービスねん！皆には内緒にしとけよ!?ホントだったら！学生相手にコレ使うつもりなんて無かったんだしさ！」

遊良の感じた震えと違和感を嘲笑うかのように、一瞬で今までのどの口調よりも軽やかに宙に舞い始める琥珀の声。
軽やかにとは言いつつも、その全身からあふれ出る『想像を絶する気迫』と、琥珀の持った1枚のカードから今にも飛び出しそうな『神々

しさ』すら感じるオーラが、容赦なくその勢いを増していく。
…しかし一体、何をしようと言うのか。
少々落胆を見せた先ほどとも、どこか冷たさを見せた先ほどとも違う。
琥珀の声がどこまでも軽く、熱く、そして空へと上昇していき…
「俺っちの墓地の光属性は、ライトエンド、レイジオン、ケルベラル、オネスト、ソルキウスの５体！コイツは墓地の光属性モンスターが５体の場合に、手札から特殊召喚できる！」
「なっ!?そ、その召喚条件は!?」
そんな琥珀の口から飛び出した、その『特異』な召喚条件。
その召喚条件によって呼び出されるモンスターなど、遊良の記憶と知識には、この世界に『６体』しか存在しない。
「そうさ！しかと見やがれ！来い！【光霊神フォスオラージュ】！」
――！
【光霊神フォスオラージュ】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００
煌き輝く雷光を放ち、古の眠りから目覚めし光。
偏に『神』とも呼ばれることのあるソレは、その特異な召喚条件による扱いの難しさと、まるで意思を持っているかの如く並の決闘者に扱われることを嫌い…
その事から現代では、【決闘世界】がその所持者を選び、そして扱うことを許されるという、まさに神にも準ずるカード。
「れ、【霊神】…新堂君、まさか君もソレを…」

そう、同じく【霊神】の一体…【氷霊神】の所持を許可されている元シンクロ王者【白鯨】は、【霊神】の所持が許可されることが一体どれだけの責務を持つのかを知っている。
一つ扱いを間違えれば、自分の身に何が起こるのか。それは【霊神】自身の効果であったり、現実での自分の体のことであったり。
デュエルで【霊神】を扱いきれなければ、圧倒的不利に陥ってしまうことは必至であり…精神で【霊神】を制御できなければ、『神』の力にも似た怒りが自らの身に降りそそぐのだ。
だからこそ、誰にでも簡単に扱えるカードでは無いが、簡単に扱うことが出来なければ【王者】にあらず。
先ほどの遊良の【手札断殺】をも逆手にとって、まるで5体の光属性モンスターが墓地に揃っていることは琥珀にとっては決定事項だったかのように…
今この場を丁度誂えたかのように、琥珀の場に【霊神】が現れたこともまさに必然であって。

「こ、【光霊神】…光の、神…」
「じゃあ行くよ!【光霊神フォスオラージュ】のモンスター効果!特殊召喚成功時に、相手のモンスターを全部破壊する!」
「なっ!?」
「全体破壊はボクちゃんの専売特許じゃないんだぜ?行くぜフォスオラージュ!サンダー…ボルトォォォォオ!」

―!

轟く雷鳴が遊良の場を襲い、成す術無く破壊されてしまう獣の王。
…それは落雷を模した、とある古の魔法カードの効果その物。あまりに激しいその『魔力』を、己の身一つに内蔵しているからこそこの神々しさを放つ存在は『神』とも称して表されるのだ。
今の時代、世界中探しても【霊神】を公式的に扱う許可を持っているのは【白鯨】の名を持つ元シンクロ王者、砺波　浜臣しか存在せず

…

公式記録では、【白竜】が【霊神】を扱った記録などない。故にこの光景は、誰も知らぬ、世も知らぬ。まさに今ここにいる者だけが知りえる光景とも言えるのか、

「くそっ！れ、【霊神】なんて…」

「おいおいおいおいおいおいおいおいぃ！なーにこの程度で驚いてんのさ！」

「…え？」

「言ったろ？サービスだってさぁ！仮にもこの【白竜】が！オーディエンスをこれっぽっちのサービスで満足させるわけねーだろうが！魔法カード、【ネクロイド・シンクロ】発動！墓地から【魔轟神ソルキウス】と【魔轟神獣ケルベラル】を除外！」

しかし、そんな【霊神】の衝撃すら嘲笑うかのように、さらに気迫を増していく【白竜】、新堂　琥珀。

発動した一枚の魔法カードの効果によって、琥珀の墓地から光の悪魔と眷属が天へとその身を捧げ始め…

「瞬く星の煌きよ！輪廻を断ち切る風となれ！」

「な!?そ、それは！」

「そう！これこそが、この俺っちのエースモンスター！さぁ、震えて見やがれ！シンクロ召喚！」

世界に轟くその口上、空を超え、天を超え、まるで宇宙にまでも届きそうなその光の柱は、一体何を連れてこようとしているのだろうか。

降り注ぎしは天上の光、星から零れる麗しき煌き。

シンクロ王者、新堂　琥珀が誇る白き竜…

その煌きが、今ここに…

「光臨！レベル８！【スターダスト・ドラゴン】！」

―！

現れるは星々の煌き。

【白竜】、新堂　琥珀が世界に誇る、輝きを纏う白き星竜。

古の時代、古の神話、『竜の伝承』に現れしその姿は、伝承のみで伝わっていたモノなれど…新堂　琥珀という『天才』が、学生時代にその伝承を現代に蘇らせたかの如く創造し、そうして世界に初めてその姿を見せたという、世界に一枚しかない彼だけのカード。

【スターダスト・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

「す、凄い…【白竜】の…」

「シシシッ、俺っちのエースモンスター…効果は無効になってっけど、学生の癖にコイツ引っ張り出せただけでも儲けモンだぜ？…でもボクちゃんも抜け目無いねぇ、その伏せカード、また罠モンスターだろ？速攻魔法、【墓穴の指名者】発動！サクリボーを除外してそのままバトルだ！【光霊神フォスオラージュ】でボクちゃんにダイレクトアタック！」

「くっ!?ト、罠発動！【量子猫】！地属性、獣族となり、守備表示で特殊召喚！」

【量子猫】レベル４（罠モンスター）
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／２２００

また、宙に漂う星竜に見惚れかけた遊良を意に介さず。

すぐさまその意識をデュエルへと無理やりに引き戻すかの如く、琥珀が遊良の伏せカードを見抜いてバトルをしかけ…
不意に、とっさに、反射的に。遊良もまた轟く光の霊神の攻撃を先ほども発動したその罠モンスターで防ごうとするも…
「ほらほらやっぱね！そのままフォスオラージュで攻撃！」
―！
光り輝く【霊神】の、轟く雷撃が遊良の場に飛散して鳴り響く。
その攻撃の激しによって、成す術なく遊良の罠モンスターは破壊されて粒子に消えていくしかないのか。
「これで終わりぃ！【スターダスト・ドラゴン】で、ダイレクトアターック！」
飛翔せしその両翼から、零れ落ちしは星々の光。
そのあまりの美しさには、この場に居る誰もがその白き星竜から眼を離すことが出来ず…
―星々の威光が今、放たれる。
「喰らいなボウヤ！星嵐の…ステラバーストォォォォォォ！」
―！
「ぐ、うわぁぁぁぁぁぁ!?」

凄まじい勢いで放たれた星光の嵐が、遊良を飲み込み吹き荒ぶ。
纏し伝説と紡がれし伝承、そして新堂　琥珀の持つ『想像を絶する気迫』とが混ざり合い、ソリッド・ヴィジョンではあるもののまるで実体化しているのではないかと錯覚しそうなほどの真実味を持ってその光が弾けて…

遊良　ＬＰ：１００→０（―２４００）

―ピー…

透き通る様な白き星竜の咆哮と、無機質な機械音が…

―スタジアムに、響いていた。

―…

「ほいっ、こんなトコっしょ。」
「あ、ありがとう…ございました…」
「うんうん、ま、そこそこセンスあったと思うぜ？シシシッ。」
「は、はい…」

デュエルを終え、微塵も疲れた様子を見せない琥珀と、どこか疲れた様子の遊良がスタジアムから降りてくる。
…手を抜かれていたとは分かっていても、デュエル中ずっと琥珀の気迫に中てられ続けていたのだ。いくら鷹峰や砺波に鍛えられたと

は言え、その疲労は実際に対峙した遊良にしか分からないモノだろう。
　重い足を持ち上げ、少々ふらつきすら感じさせる足取りで下まで降り…階段下で待っていた砺波とルキの前まで行くと、遊良へと向かってルキがその口を開いた。

「遊良…大丈夫？」
「あぁ…。」
「シシッ、中々頑張った方じゃんね。少なくとも学生で最後まで戦れるとは思わなかったぜ。」
「…新堂君、本当にただデュエルをしただけでしたが、一体何を考えて天城君とデュエルを？」
「ん？だから最初っから言ってんじゃん。『ごしどーごべんたつ』って奴だよ。ジーサンと一緒の事しただけだし。」
「…そうですか。」

　何かが起きようとしてもすぐに対応できるよう気を張っていた砺波の心配をすり抜けるように、あっけらかんとそう言い放つ琥珀。
　砺波もまた、琥珀の雰囲気が普段通りすぎることにどこか違和感を感じているような表情を見せているものの…
『何』も起こらなかったことと、琥珀の言動が軽すぎるが故の普段の振る舞いを思うと、これ以上の追求も無駄だと理解したのか。
　腑には落ちない、しかしこれ以上はわからない。
　ならば、今のところは詮索は無駄だ、と。
　そうして…
　デュエルの後の余韻から、不意にスタジアムに静寂が流れかけた…

　―その時だった。

「あー！やっと見つけたで！」

静かな声のみがあったスタジアム内に、いきなり特徴的なイントネーションの言葉がスタジアムに木霊し…

瞬間的にこの場にいた全員が入り口の方へと眼をやって。

そこには、天井のライトの光を反射し、眩しいほどに光る金髪を揺らした青年が一人。

憤慨と困憊の表情を顕に、大きな荷物を背に遊良達の居るスタジアムへと向かって歩いてきた。

「やっ、おろっち遅かったねー。待ちくたびれたよ。」

「何が『遅かったねー』やねん！どんだけ探したと思っとんのや琥珀さんコラァ！」

「シシッ、付き人の癖に固いこと言いっこ無しだぜおろっち？イライラしてっと禿げんよ？」

「誰の所為や誰の！大体好きで付き人やっとんのや無いで！」

煌く金髪を靡かせて、琥珀への怒号を撒き散らしながらこちらへと歩いてくる青年。

少なくとも決闘市に住む人間だったならば、知らない人間など居ないであろうその人物。最近ではＴＶで見ることも増え、新人ながらも知名度を増している、決闘市が誇るプロデュエリスト、その強者。

―竜胆（りんどう）　大蛇（おろち）

昨年まで決闘学園ウエスト校の学生だった彼は、昨年度の【決闘祭】でも遊良と戦ったことのある決闘者の一人であり…

その時点ではまだ『壁』を越えていなかった遊良では手も足も出なかったという、今では新人としては破竹の勢いで勝率を上げているプロデュエリストの新人である彼が、何故か琥珀の名を怒りと共に呼びながら現れたのだ。

「え、り、竜胆…さん？」
「おー、久しぶりやなぁ天城ぃ。【決闘祭】以来か？」
「えっと…付き人って…」
「そやねんそやねん、事務所の命令で仕方なくなぁ…でもホンマ疲れる人やでこの人。」
「おいおいおいおい、仕方なくって言われたらいくら俺っちでも傷付くよマジで。大体さー、前の付き人が２週間で逃げちまうからいけねーんじゃんね。俺っち全く悪くない。」
「ソコやで!?琥珀さんそう言うトコ！俺かて琥珀さんが【白竜】やのーたら一発入れてとっとと付き人なんか辞めとるわ！」
「シシシッ、言うねー。でもおろっちのそーゆートコ、俺っちけっこー好きだぜ？」
「嬉しないっちゅーねん！ほら、さっさと行かんと！飛行機出てまうやないか！」
「へいへーい。」

そんな遊良も見知った人物である大蛇が、琥珀の付き人をしているということにも驚きを隠せない遊良ではあったものの…
言葉とは裏腹に、新人ながらも琥珀の扱いにどこか手馴れているような大蛇と琥珀の会話もまた、遊良にとっては過去に味わった『つかみどころの無い大蛇の凄さ』を思い出させているとでも言うのだろうか。
【王者】に付きっきりで行動を共にし、得られるモノも多いからこそプロ１年目という新人であっても大蛇の勢いがあるのかと思うと、改めてこの竜胆　大蛇の凄さを再認識した様子を見せていて…
そんな琥珀と大蛇を見ていた遊良へと向かって、不意に琥珀がその口を開いた。

「えっとさー、あまぎくん…だったっけ？忘れなかったら覚えといてやっからさ、とりあえず頑張んなよね。」

「…え？」

その言葉は、先ほど感じた一瞬の冷たさを微塵も感じさせない、軽いながらも確かに届いた【白竜】の賛辞。

普通に暮らしていたら絶対にかけられることは無いであろうその言葉は、伝説となって挑戦者が見つからない【黒翼】のモノとも、引退して前線から去っている【白鯨】のモノとも違う。

今なお最前線で戦い続ける若き王者【白竜】からの、遊良へ向けた手向けの言葉であって。

「【白鯨】のジーサンが入れ込んでんだし、また戦ろってこと。シシシッ、【白竜】がこんだけ言うなんて大大大大大サービスだぜ？」

「は…はい！」

「シシシッ、じゃあ縁があったらまた会おうね。ジーサンもまたねー。」

「ほな！忙しいんでこの辺で！またな天城！天宮寺にもよろしゅう！」

「…あ、『ルキちゃん』もまたねー。シシッ。」

「…え？」

「ほら行くで琥珀さん！何でまたすぐ油売るねん！」

「へいへいすんませーん。」

しかし、すれ違い様に、ルキにだけ聞こえるような声でささやかれたソレを、遊良も砺波も気がつくことが出来なかった。

…それが、遊良との戦いの時に一瞬だけ見せた冷たさを、持っていたことに。

またルキの方も、なぜ見知っても教えても、ましてや自分に興味も無かったであろう態度の琥珀が、どうして自分の名を呼んだのか。

その意図もその意思も、その言葉の全てが空中に舞い上がり飛散してしまった今では琥珀の真意など…

ルキには、わからない。

―！

そして、まるで一瞬の喧騒だったかのような琥珀の来訪が終わり、丁度『召喚別授業』の終了を告げるチャイムが鳴り響いて。

砺波はふと手元に目線をやると、時間を確認したのか遊良へと向かって声を発した。

「…ふむ、もうこんな時間ですか。まぁこの後は下校するだけなので、少々反省会をしましょう。天城君には言いたいことが沢山ありますので。」

「は、はい…」

「新堂君が必ずと言っていい程呼び出すライトエンドはいいとして…君がクリスタル・ウィング、それにスターダストまで引っ張り出せたのは予想外でした。しかし…」

「はい…それでも、【白竜】までは遠く及ばなかった…」

「そうです、要は手を抜かれと言うにもおこがましい。新堂君の誇る数多の『白竜』の内、『3体』も出させたのは…まぁ、褒めてあげてもいいですが、それでも新堂君の本気、彼の『名』となった【白竜】を見ることもなく、圧倒的に差がありすぎたということです。」

少々厳しめの声でそう言う砺波と、ソレを素直に聞き入れる遊良。

そう、遊良もよく理解しているのだ。ライトエンドもクリスタルウィングも、その他に琥珀が操る『白き竜』達のどれも…

…スターダストも、【白竜】にあらず。

王者の名を持つ【白竜】は、更にその先の先にあるのだ。今の遊良の実力では、ソレを出させることなどまだまだ出来かったということだろう。

「いいですか?常に頭を回転させていなさい。ただ漠然とデュエルをしてはいけない。努力は嘘を吐かないとよく言いますが、何も考えずにただ漠然と行動するだけでは努力は平気で嘘を吐きます。」
「…」
「今回は特に防御面が浮き彫りになりましたね?ドローと展開に特化しすぎて攻撃的過ぎます。罠モンスターで場を繋いで空けないようにするのも良いですが、それではまだ敵の攻撃を受けきるには甘すぎる。攻撃面に関しても、バルバロスに頼りすぎていてまだまだ甘い。【決島】まで課題は山積みです。」
「は、はい…砺波先生。」

一から作り上げた新たなデッキ、その試運転としては確かによく回転していた方だろう。しかし、砺波の厳しい言葉の通り、このデッキもまだまだ未完成。
やることは多く、成す課題も多い。【決島】までまだ少々時間はあれど、常に気を張っていかなければこのまますぐに時間は過ぎ去ってしまうに違いなく…

(フッ、しかし未完成であの『キレ』とは…これだから面白い。)

遊良の焦燥とは裏腹に、砺波の心意はどこか違ったモノとなっていた。

「…それと、高天ヶ原さん。」
「え、は、はい!?」

そして、急に名前を呼ばれ、驚いたルキ。
琥珀が現れたことで、完全に蚊帳の外に追いやられてしまっていたが故に、今こうして砺波に声をかけられたことが彼女にとっては完全に意識の外だった様子で…

しかし、そんなルキをお構い無しに、砺波は更に言葉を続けるのみ。
「新堂君の所為で話が大きくずれてしまっていましたが、今日君を呼んだのは君にも大切な話があったからです。」
「大切な…話…ですか？」
「はい。天宮寺君には既に別の特訓を言い渡してありますが…この際です、来たるべき【決島】へと向けて高天ヶ原さん、君も天城君と同様に、この私が直々に鍛えてあげましょう。」
「…え？…え、えっと…え!?」

それは、ルキには到底信じられないであろう話。
遊良に強く反対され、また先ほどは出場したいと駄々をこねたとは言え、自分の事情もありどこか諦めすら感じていたという【決島】に…
まさか理事長からこんな言葉を貰えるだなんて、ルキとて思ってもみなかった事だろう。

「砺波先生！ま、待ってください、鍛えるって言ったってルキは…」
「それも分かっていると最初に言ったでしょう？彼女の『事情』も既に織り込み済みです。私も『神』に近いモンスターを従える身。鷹峰の様な雑な教え方よりも、もっと良い力のコントロールを私なら教えられると…そう言っているんですよ。それこそ、『全力』を出せるまでに。」
「そ、それって…私…」
「はい。君も天城君、天宮寺君と一緒に、【決島】に出場していただきます。無論、我が校の代表として恥ずかしくない戦いをしてもらいますよ？…『全力』でね。」

また遊良も、思わず焦りの声を漏らしたものの、あまりに自身たっぷりにそう言い放つ砺波の威厳には遊良とて口を紡ぐしかないのか。
そして、心配からか遊良が瞬間的にルキの方へと目をやると…

そこには、肩を震わせているルキが…

「や…」
「…ルキ？」
「やったぁぁぁ！遊良！私も出られるって！私も！遊良と鷹矢と！おんなじ大会出られるって！」
「お、おいルキ…お、重…」
「やったよぉ！はじめて！はじめてだよ大会にでるの！ゆうらと！たかやと！いっしょの！」
「わかった、わかったから落ち着け…重…」

歓喜のあまり、全体重をそのままに遊良へと抱きつき、そのまま倒れそうになってしまう遊良とルキ。
どうにかルキを支える形で遊良も踏ん張ってはいるものの、ルキのあまりのはしゃぎようは彼女がこれまで抑えてきた何かが堪えきれなくなったが故のモノなのか。

…遊良も、ここまではしゃぐルキは久しぶりに見た。

思えば、ルキは子どもの頃から何かと制限をかけられて過ごして来たのだ。
力が足りずに、自らの内に眠る『神』の力が暴走してしまう危険のあった幼少期も…師である【黒翼】に鍛えられたとは言え、突発的にどこかへとフラフラ消えてしまう師、鷹峰のガサツとも言える鍛え方では、今のような『全力を出さない様に気をつける』という対処法しか取れなかった。
それを、砺波は確かに言った。『全力』で、戦えるようにする、と。
例え『同じ言葉』でも、並の猛者からかけられた言葉だったならば遊良とてソレを信じようとは到底思えなかっただろう。
しかし、遊良もこれまで直々に【白鯨】の教えを受けてきたからこ

そ、厳しさの中にあるその教えの適切さと、激しさの中にあるその指導の正確さが身に染みて分かっている。

「…まぁ、君が出てくれないと私が【決闘世界】に叱られることにもなるんですが。とにかく、これからは天城君や天宮寺君同様、高天ヶ原さん、君にも厳しく指導させてもらいます。覚悟はいいですね？」

「うん！」

「…『うん』？」

「あ、ご、ごめんなさい！よ、よろしくお願いします！理事長先生！」

「…よろしい。」

…きっと【白鯨】がそう断言したのならば大丈夫。

紆余曲折あれど、ここまで信頼を置いている砺波がそう断言したのだ。確かに【霊神】の一体を完全に従えている砺波が、その力のコントロールを教えることが出来ればルキのデュエルに関する制限も飛躍的に変わることだろう。

遊良も、先ほど直に【霊神】の圧力が、幼少の頃目の当たりにした『神』のソレに近しいモノだったと体験したからこそ、今の砺波の言葉を心から信じられる確信を得られていることに違いなく。

色々なことが起こり過ぎている最近の目まぐるしい日常に不安はあれど、どこか高揚も感じられる今の遊良の心情が…

これから先に待つ戦いへの期待を、膨らませていた。

――…

「…んで、天城はどないでした？」

「ん？どうだったって何が？」

決闘学園イースト校の敷地外。

他の学生や教師に見つかる事無く学園から出た琥珀と大蛇が、少々小さめの声で会話を交わしていた。

しかし、その口調は先ほどスタジアムで遊良達と話していた時のモノとは全くの別物。

琥珀は相変わらず軽い口調なれど、大蛇の口調は先ほどとは打って変わって琥珀の行動を咎めてはおらず。

「何がって、琥珀さん、最初っから天城が目的で顔出したんやないんですか？わざわざ相手側に試合延期までさせといて…それに天城に【スターダスト】まで見せとるし、そんなに天城が気に入ったんですかいな？…ってことですわ。」

「えー？俺っちが興味あんの可愛い女の子だけだし…ってか、おろっち最初っから見てたんじゃん。」

「そりゃあんなおもろいコトやっとったら、止める方が無粋ちゅーもんやないですか。」

「シシッ、おろっちのそういうトコ、やっぱ俺っち結構好きだぜ？」

決闘祭のときもそうだったが、彼は自分の本心を他人に悟らせることをせず、その言葉も態度も簡単に演じ分けられる『演者』なのだ。

…全てをすり抜け、全てを捻じ伏せる、まさに『大蛇』。

故に、先ほど遊良達と交わしていた琥珀への不満も、それが彼の本心かどうかは彼自身にしかわからず…

（…しっかし天城の奴、【決闘祭】で俺と戦った時より『キレ』が増しとった。琥珀さんは難なく躱しとったけど、天城のあの調子やと毎ターン『バルバロス』の効果狙っとる感じやったし…）

その心の内で、先ほどの琥珀と遊良のデュエルを思い返しているの

だろうか。
【決闘祭】で戦った時とは全くの別物、それはデッキそのモノもそうだが、何より大蛇が気になったのは遊良のデュエルのその『キレ』であり…
　琥珀の実力が高すぎて目立った印象は無かったとは言え、そもそも遊良の行った行動自体、傍から見たら『異常』そのモノなのだ。
（正直、あんだけ展開する癖に手札も減らさへん奴が毎ターンぶっぱなして来たら…こっちも手が足りんくなるわマジで。アレでＥｘ適正無いんやもんな…【堕天使】を使わへんかったんは何でか知らんけど、もしあのキレに【堕天使】が加わったら…）

　遊良の勢いから察するに、毎ターンの大量ドローに加えて毎ターンの全体破壊、それが途切れる事無く襲いかかるその恐怖。
　それは学生レベルには到底収まるモノでは無く、下手をすればプロの中でも対処しきれる決闘者の方が少ないだろう。
　それをはっきりと自覚できる大蛇だからこそ、ソレをあっさりと躱して翻弄した琥珀への『遠さ』と、その琥珀にあそこまで言わせた遊良への興味が尽きず…

「…ホンマにおもろいやっちゃ。」
「ん？おろっち何か言った？」
「いーえー、なんにも。それより琥珀さん、急がんと本当に飛行機に間に合わへんで？」
「えー、俺っち疲れてるからゆっくり行くわー。車こっち回しといてー。」
「またそない我が侭言って！これだから困るっちゅーねんこの大人子どもは！また綿貫さんに叱られるやないですか！」
「ちょちょ、付き人の癖に俺っちにそんな口の聞き方していいと思ってんの!?マジ怒っからねマジ！」

「勝手に怒っとってください！その間に俺は車手配してきますんで！」
「…おろっちマジで有能過ぎね？仕事出来るし才能あっし、今までの付き人の誰よりも楽。」
「はいはいさいですか！ほな、ここでじっとしとって下さいよ！ホンマやで⁉絶対やで⁉フリやないで⁉」
「へいへーい。」

そうして、琥珀にそう言い付けて離れていく大蛇。
電話片手に忙しそうに、しかし確かに仕事が出来るからこそ、琥珀もまた無茶を言いながらもどこか楽しげに大蛇を付き人として置いているのか。
そんな大蛇を見送りながら、琥珀は一体なにを考えているのだろう…
周囲に誰の気配も感じぬソコで…
静かに…琥珀はその口を開いた。

「シシッ、とりあえず【決島】の間は劉玄斎のじーさんにまーかせた。ルキちゃんの顔も見れたし、とりま俺っちは高みの見物ってねー。」

誰にも見せぬ、誰も知らぬ、誰も見ることの出来ぬ琥珀のその表情は、一体どのようなモノとなっていたのだろう。
先ほどまで発していた声の、どれとも違う。
軽い、確かに言葉は軽い。しかし、その軽い言葉に包まれた中身、その真なる琥珀の言葉には、誰も持つことの出来ないであろう重さが確かにあったのだ。
そんな琥珀は、いつもと変わらないように見えるその表情の中で…
不意に、不穏な笑みを浮かべ…

「最終的に、ルキちゃんも『赤き竜神』も俺っちのモンってね。」

吹き抜けた一瞬の突風が、これから起こる事への憂いと共に…

琥珀の言葉を、空へと舞い上げていった…

――…

ｅｐ６４「訪れるモノ」

もうすぐ夏が本格的になるであろう、猛暑が続くとある日のこと。
いつもと同じ日、同じ日常が流れるはずの決闘市の雰囲気が、この日だけはどこか落ち着かない様子を見せていた。
それは、最近めっきりと音沙汰の無くなった『失踪事件』に関すること…ではなく、つい先日発表されたばかりの、特別な『２つのニュース』に関係することに先ず間違いないだろう。
何せその決闘市の住人全てが驚いたであろうニュースは、この長い長い決闘市の歴史においても初めての出来事。
ソレが発表された時の衝撃は、住人達の声となって決闘市が冗談ではなく本当の意味で震撼し…
誰もが経験したの事のない事例だからこそ、誰もがソレに対してどう振舞っていいのかわからずに、明らかに戸惑いを隠せてはいなかった。

そう、その決闘市始まって以来の衝撃的なニュース…

―今年度の【決闘祭】が、『中止』と報じられたのだ。

これまで何があっても開催されてきた【決闘祭】の歴史から見れば、今回の『中止』はあまりにも異常な事態。
かつて起きた大災害や戦争時にも、その日、その時だけは絶対に開催されたあの歴史ある祭典が、『セントラル・スタジアムの修復』などという小さな綻びだけで中止となってしまうなんて誰もが信じようとはしなかったことだろう。
そんな去り行く歳末の一大イベントが開催されないそのショックは、住人達の心に大きな風穴を開けたことは言うまでもなく…

…しかし、今の街の雰囲気は、決して落ち目を見せているわけではなかった。

寧ろ、決闘市にとってはマイナスとなるはずのそのニュースを皆知っているはずだというのに、【決闘祭】が開催されないショックを覆い隠すような興奮、ソレを超える更に大きなモノが、今の決闘市内には溢れていて。

まるで、【決闘祭】の時のような盛り上がり…いや、それを実際に超えた盛り上がりが、今の決闘市から湧き出ているのだ。それは、【決闘祭】の中止と同時に発表された、『もう一つ』のニュースのことであり…

…そう、【決闘祭】の中止という衝撃的なニュースと同時に発表された、ソレを超える更なる衝撃。

史上初、決闘学園デュエリア校との合同開催となる祭典…

―【決島】が、この秋にデュエリア領で開催されるというのだから。

世界有数のデュエル大都市、『決闘市』と『デュエリア』。

昔からその何かと衝突の多かったことでも有名なこの2つの都市ではあるものの、まさかその2つの都市の決闘学園が『合同』で祭典を開催するだなんて、誰もが己の耳を疑ったことに違いなく…

そして、学生達が夏休みを間近に控えた本日、今日、この夏の日に、ノース、イースト、サウス、ウエスト4校が同時に【決島】の出場者を発表するというのだから、決闘市内にはもうその祭典への期待でごった返していた。

―学生達の実力の層が最も厚い、『ウエスト校』への注目

―シンクロ王者【白竜】を排出した、『サウス校』への新たなるスターの待望

―紫魔学園と呼ばれる、『ノース校』の復権を望む声

そんな様々な思いが交錯している決闘市内ではあるものの…
その中でも特に、元シンクロ王者【白鯨】率いる『イースト校』への期待が最も大きいということは先ず間違いないことだろう。
何せ、波乱が多く起こった昨年度の【決闘祭】を最後に、『鋼鉄』のデュエリストと称された元ウエスト校の十文字　哲を始め…『黄金世代』と称されていた、昨年度の名のある【決闘祭】の出場者達は皆、軒並み学園を卒業して今年度からプロとなっているのが今年度の決闘学園。
しかし、他のどの校とも違い、昨年度の【決闘祭】の優勝者と準優勝者がそのまま在校しているイースト校は、まさに他のどの校よりも幸運と言えるだろう。

…それは例え、昨年度の【決闘祭】の『優勝者』が、あのＥｘ適正の無い天城　遊良だったのだとしても。

昨年度の【決闘祭】の決勝は、これまでの天城　遊良という『Ｅｘ適正の無い』デュエリストへの認識を変え…決闘市に蔓延っていた一つの常識を根本から覆し、この街に多大なる衝撃を与えた。
それほどまでに彼ら街の住人達が受けた衝撃は凄まじいモノであり、これまで自分達が形作っていた『弱者』の定義は最初から間違いだったのだと、彼らも認めざるを得なかったことだろう。
故に、エクシーズ王者である【黒翼】の孫への期待と共に、決闘市内の人々の天城　遊良への期待値は全く落ちる気配を見せてはおらず。
世界最大規模の祭典、誰も見たことのない【決島】への興奮が膨れ上がる中で、一体学生達がどんな戦いを見せてくれるのかへの期待が高まりを続け…
異様な盛り上がりを見せている決闘市内の熱気は、夏の日差しよりも更に熱くなっていく様子を見せていた。

―…

夏休みがもう目前まで迫った、この夏の日。

決闘市内の雰囲気に漏れず逸れず。先日のニュースから決闘学園イースト校もまた【決島】の話題で一杯となっており、来たるべき【決島】への期待と興奮から、本日発表されるという代表選手の噂話で学園内は大いに賑わっていた。

午後の発表を待ちきれないかの如く、誰が出場できるのか、誰が活躍しそうなのか、誰がライバルになりそうなのか、そんな話題が途切れる事無くずっと続いていて…

誰もが皆、例年の【決闘祭】よりも出場できる選手の多さと、合同開催と言う事もあり『祭典』自体の規模の拡大と、そしてその注目度が『世界』全土にまで及んでいるというスケールの大きさに対し、全員がその巨大なチャンスを逃すまいとして奮えているのだ。

そう、注目度が大きいということは、そこで活躍できればプロ入りは最早確実と言うこと。

例年では【決闘祭】の出場選手は各校『3名』という規定もあってか、候補には挙がっても学内の選抜戦において、あと一歩と言う所でそのチャンスを逃してしまった学生達が一体何人居たことだろう。

そんな【決闘祭】にギリギリで出場できなかった学生達にとっては、この【決島】はまたとないチャンス。

故に、そんな祭典が自分達が学生の内に開かれるという幸運と、巡ってきたこのチャンスを確実にモノにしたいという学生達の士気は、留まることを知らないかの如く上昇し続けていることに違いなく…

特に現2年生達は、昨年度の自分達の失態を挽回すべく。現3年生達は、この祭典が最後のチャンスと言う事もあってか、ただ話題に

乗って盛り上がっている者が多い新一年生達とは、どこか込めている気迫は別物となっていて。
午後に行われるという【決島】の出場選手の発表への期待で、イースト校の全てのクラスが賑わう中…

そう、その異常な興奮の中で…

唯一つ、遊良のクラスでは、ソレとはまた違った現象が起こっていた。

「では釈迦堂さん、挨拶をしてください。」

教室内の学生全てに注目されながら、教壇の前に立つ少女。
夏休みを目前に控えたこんな時期に転入してくるというその疑問と、不思議と吸い込まれるようなその立ち姿に教室内の学生の誰もがその少女を誰もが見つめ、誰もが息を飲み…
その静寂はまるで、この教室だけが騒がしい学園内から隔絶されているかのような静けさとなり、言葉を発することを許可されていないかのよう。
そして、そんな静まり返った教室内で…
少女は、その口を静かに開いた。

「…釈迦堂　ユイです。よろしくお願いします。」

―!

先ほどのまでの静寂が嘘のように、少女が声を発したその瞬間、まるで壮絶な試合のクライマックスを見たかのような盛り上がりを見

せる学生達。
【決島】への興奮などどこへやら。まるでソレを忘れてしまったかのように、学生達の誰もが釈迦堂　ユイという転入生の少女への興味と興奮で声を荒げていて…

「やべぇ！あの子すっげぇ可愛い！」
「背ぇ高けぇ…モデルみたいだ…」
「凄っごいクールな感じ！髪も真っ黒で凄く綺麗！」
「ホントホント！どうやったらあんな良いスタイルになれるんだろう…」

興奮と歓声が教室内に響き渡り、誰もが目の前の転入生の少女へ向かって声を上げている。
それはまるで、誰もが今まで見たことのない美麗を目の当たりにしたかのような盛り上がり。男女ともに口を揃えてそう言っている今のクラス内の雰囲気は、他のどのクラスにも無い幸運だと言わんばかりの空気となっていたことに先ず間違いないだろう。

しかし、誰もが声を抑えきれていない興奮の中で、２人だけ…

そう、遊良と鷹矢の２人だけが、その盛り上がりに対して他の学生達とは異なった表情を見せていた。
いや、厳密に言うと、昨晩夜更かしをしすぎた鷹矢はこのあまりの喧騒の中でも机に突っ伏し、登校直後からずっと我関せずのまま惰眠を貪り爆睡を決め込んでいたのだが…
遊良だけは今目の前で歓声を浴びている少女に対し、表情を凍りつかせ鳥肌を立たせ、眼を見開いて心の底から驚愕の表情を見せているのだ。

何故なら…

（何だコイツ…ラ、ランさんにそっくりだ…いや、そっくりって言うか…）

そう、一度だけ実際に対峙したことがあるが故に、遊良にだけはどうしてもわかってしまった。

夏の日差しに良く映える、闇に溶けるその褐色の肌。

どこまでも綺麗に長く伸びた、夜よりもなお深いその漆黒の髪。

そっくりだとか似ているだとか、他人の空似どころの話ではない。それはランと実際に一度だけ対峙し、会話し、そしてデュエルをしたからこその直感。

…忘れられるわけがない。自分の生きる目標となった、その女性との邂逅を。

【決闘祭】が終わった直後、師の計らいで始めて顔を合わせた釈迦堂ランの顔は、今でも鮮明に思い出せるほどに遊良の脳裏に焼きついているのだ。

だからこそ、遊良には信じられない。

…まるでクローン。今自分の前に立つ少女が、釈迦堂　ランの顔のパーツをそのままに、やや幼くしたような容姿をしているだなんて。

遊良とて、目の前の転入生がランと別人だと言うことなど、誰に言われなくともわかっている。そもそも酒の呑める年のランとこの転入生は、年齢からして違うのだから。

しかし、どうしても目の前の釈迦堂　ユイと言う少女と自分の知るあの【化物】の女性が、遊良には自分でも不思議なほどに他人とは思えず…

別人だということは頭では分かっていても、同一人物とさえ思えてしまうくらいに今教壇に立っている釈迦堂　ユイという転入生は、あまりにも…そう、鏡に映したかの様に、あまりにも釈迦堂　ランという女性と瓜二つだったのだ。

そんな少女を前にして、遊良も感情はクラス内の盛り上がりとは益々かけ離れていき…外の高気温と学園の興奮、そしてクラス内の異様な熱気に相反するように、冷や汗をかきそうなほど遊良は寒気すら感じているのか。

「じゃあ釈迦堂さんは一番後ろの席に。」

「…はい。」

そして、誰もが興奮を露出している中を、教師の提示した席へと向かって釈迦堂　ユイが悠然と歩き始め…

徐々に近づいてくる釈迦堂　ユイの姿に、遊良の心臓が益々鼓動を逸らせ始めた…

―その時だった。

「…努々忘れることなかれ…」

「ッ!?」

釈迦堂　ユイが隣を通ったその瞬間、あまりに騒がしいこの教室のどこかから、確かに遊良の耳に『何か』が響いて。

誰も気付いた様子もない。誰にも聞こえた様子がない。きっと、遊良にだけ聞こえたモノ。

咄嗟に、瞬間的に、反射的に。遊良は声のした方向へと首を回し、たった今横を通り過ぎて言った釈迦堂　ユイの後姿へと視線を突き刺し…

…ソレが何のか、遊良には思い出せない。しかし、確かに耳に残っている、どこかで聞いたことのあるその台詞。

心がざわつくような、嫌な感じがしたソレが遊良の耳を通り過ぎ…

ソレが何だったのかなど遊良にも思い出せぬものの、先ほどから煩

いほど警笛を鳴らしている己の警戒心が、更に喧しくなったのを遊良も感じたのか。

「…あまぎ…ゆうら…努々忘れることなかれ…自分が一体何なのか…」

教室の最後尾、自分の席に着いた少女がその後に発した、あまりに煩い教室内に静かに呟かれたソレを…

―聞いている者は、誰も居なかった。

―…

『それではこれより！【決島】の代表を発表する！』

―!!!!

決闘市内にある全ての決闘学園で、一斉に起こったその歓声。

午前だけの本日の授業が終わり、午後になったばかりのこの時刻。超巨大決闘者育成機関【決闘世界】から使わされた役人が、同時刻に各校の代表者２５名ずつの名前が書かれたその巨大な掲示板の前に立ち…

厳重に封をされたその覆いを今にも切って落とさんとして宣言を掲げ、それに呼応して我先にその発表を見ようと駆け寄っている各校の実力者達が人だかりとなって叫んでいた。

無論、それはイースト校も同じであり…

特に、昨年度は暴風の如く暴れまわっていたあの天城　遊良を前

に、前一年生のほぼ全てが敗れ去ったというそのショックから、全員が代表候補を辞退するという不甲斐なさを見せてしまった現２年生達の今回の祭典への期待は留まることを知らず。

…昨年度、天城　遊良は誰にも否定することの出来ない、【決闘祭】の『優勝』という結果を残した。

自分達が見下して、蔑んで、侮辱していた、あの『Ｅｘ適正の無い』天城　遊良が、だ。

それは、遊良の進撃を最も近くで目の当たりにしてきたイースト校の学生達にとってはどれ程の屈辱だっただろう。それは遊良が【決闘祭】に優勝したことよりも、【決闘祭】で優勝するほどの力を持っていた天城　遊良の力を見誤っていた『自分達』の力の無さと不甲斐なさに対して。

全学生たちが望んでも到底手に入らないその輝かしい功績と、ソレを達成できる事がどれだけ険しいモノなのか。

それを理解していない学生など決闘学園には一人としておらず、誰もが【決闘祭】の頂点の意味を知っているからこそ、イースト校の学生たちが今回の【決島】に賭けている心持ちは他のどの校とも異なるモノ。

…きっと、昨年度の【決闘祭】で優勝・準優勝した天城　遊良と天宮寺　鷹矢は当然代表に選ばれているはず。

だからこそ、各校から3名しか代表になれない【決闘祭】と違い、各校から２５名ずつも選ばれる今回の【決島】は、自分達を見つめなおすことの出来たイースト校の多くの学生達にとってはまたとないチャンス。

故に、昨年度の自分達の不甲斐なさを撤回する為に、今回の祭典に賭けるイースト校の学生達の奮起はどの学園よりも凄まじく…

―しかしそれとは裏腹に、教室から階下を見下ろしている遊良のテンションはあまりに低かった。

「ふむ、その転入生はジジイの言っていた釈迦堂　ランと言う女にそ

んなに似てるのか。」
「…あぁ。そっくりってレベルじゃない。まるで本物かと思ったくらいに瓜二つだったんだ。」
「むぅ…ならば俺も見てみたかったぞ。どうして起こさなかった。」
「いや、俺もあの転入生の事で頭が一杯だったんだよ…って言うか、むしろ何で午前の授業全部寝てるんだよ。先生も呆れて諦めてたぞ?」
「仕方ないだろう。眠かったんだ。」
「…そうかよ。」

階下の盛り上がりとはまるで真逆。窓から体を乗り出して、その盛り上がりを眺めている遊良と鷹矢。
しかし視線は階下の中庭を向いてはいても、その意識は全く別の所に向いていて…
それは既に代表入りしていることを知っているが故の余裕か、それとも心配事が違う所にあるが故に気が散っているのか。
ともかく、たった今代表が解禁され、そのあまりの爆音の歓声を見下ろしている遊良の意識は、ここ最近立て続けに襲い掛かってくる様々な事象に対し、心休まらずにどこか疲れを見せているかのよう。

「…罠だってのにルキは【決島】に出るし、転入生はランさんにそっくりだし…何がなんだか、もうわけがわかんねーよ。」
「ルキならば大丈夫だろう。自分の身くらい自分で守れる。」
「…はぁ…大体なぁ、ルキが狙われてるってのにお前は楽観的過ぎなんだって。」
「そんな奴ら、ルキならば自分でどうにかすると言っているのだ。お前こそルキを見くびり過ぎだぞ。ルキの強さはお前も知っているだろうが。」
「それはわかってるけど…でも心配だろ?もしルキに何かあったら…」
「お前は保護者か恋人か?そんなに心配なら、【決島】の間もずっと付

きっきりでルキを守っていることだ。…ふん、お前が上を目指さんのなら、俺も【決島】になど興味が沸かんがな。」
「はぁ…」

そう言い放つ鷹矢の声は、彼をよく知らない者が聞けば薄情なモノとも勘違いしそうなほどに厳しい言葉だったことだろう。
しかし鷹矢の心意など、意図せずとも嫌でも理解出来てしまう遊良だからこそ、鷹矢の言葉の意味の先にあるモノを分かっている。
鷹矢とて、ルキを心配していないつもりは無いのだ。先の『異変』の時もそう、ルキ自身の実力を、誰よりも信用しているのも間違いなく鷹矢。
だからこそ、自ら戦いの舞台に上がろうとしているルキの気持ちを汲み、鷹矢もあえてルキのしたいことを肯定しているのだ、と。
…また、ルキへの心配とは別に、鷹矢が固く誓っているある気持ちも遊良は理解している。
そう、昨年度の【決闘祭】の決勝での勝敗に対し、自分へのリベンジを鷹矢が固く心に誓っていると言うことを。
幼い頃に交わした、大舞台で、全力でぶつかり合うというその『約束』。
ルキへの心配もあっていい。しかし、ソレばかりに気を取られていては、【決島】は『約束』の舞台にはならないというその暗示。前回の【決闘祭】では遊良に軍配が上がったとは言え、次の『約束』…
そう、今回の【決島】で、再び遊良と頂上で相見えようとしているそのために、遊良が自分との戦いの他に気を取られることなど鷹矢が許すはずも無いのだ。
ルキへの心配、鷹矢との『約束』、そして自分の身に起こっている様々な事象。そんな交じり合うモノに挟まれている遊良が、疲れからか一つ大きな溜息を吐き…
今日は家庭の事情で休んでいるルキの不在も伴って、鷹矢の呆れるほどのふてぶてしいその態度に対してももどこか遊良の返しはキレが悪く…もうすぐ夏休みだというのに、待ち受ける【決島】への不確

定な不安と、ここ最近立て続けに起こった不可解な異変の数々が、遊良の心を落ち着かせてはくれなかった。

…夏が、始まる。

—戦いの前の、一時の夏が。

ｅｐ６５「デュエリア」

―デュエリア

それは、世界で初めて『決闘』が行われたとして知られる聖地の名。
きっとこの世界で、誰もが知る最も有名な都市。超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の本部を要し、古の時代の『神』が眠る地としての伝説が残る、世界に名立たる巨大なデュエル大都市の一つであり…
多種多様な人種が集まり、最早一つの国家と言ってしまっても遜色無いと言えるほど巨大な規模の都市に存在する、この決闘学園デュエリア校もまた、世界中で一番学生数の多い決闘学園として知られていることに違いないことだろう。

―実力が全て、強さが全て。

切磋琢磨と言う表現など生温い、蹴落とし合いが日常の修羅の場所。
そんな場所に建てられた決闘学園デュエリア校もまた、実力一つによって生徒達の待遇が変わる、教育機関としては珍しい完全実力至上主義であり…
実力不足で退学は当たり前、強ければ全てが許され、弱者が悪者になるまさに弱肉強食の世界。
また、東西南北の４つに分けられた決闘市の決闘学園とは違い、決闘学園デュエリア校は中央部に位置する超巨大な学園１つのみ。その超巨大な学園に、決闘市の全学生数に匹敵する数の学生達が日々鎬を削っているのだ。
そんなデュエリアの中央部に位置する、あちこちでデュエルの音が鳴り響いている決闘学園デュエリア校の最上階…
広大な学園を一望できる、特別に建てられたタワーの最上階の、最も高い場所にある学長室のその中で…

重々しい声が一つ、鳴り響いた。

「すまねぇなぁ二人とも。忙しいってのに、わざわざ足を運んでもらってよぉ。」

厳格なる雰囲気に包まれたその部屋に広がる、どこまでも重々しく響く声。

ゆっくりとした声ではあるものの、しかしその言動の一つ一つがこの室内の雰囲気を更に重くしているにではないかと錯覚するほどに、この部屋の中央に位置する豪華な椅子に腰掛け、堅牢なる机に片肘を突いてそう言った男の声はどこまでも重く鼓膜に響いていて…

そんなこの世のどんなモノよりも重い声を発せられる人物など、この世界にはたった一人しかいないだろう。

その重い声に負けず劣らずの、世紀末に生きているのではないかと錯覚するほどの隆々とした巨大な体躯。

戦場を駆け抜けたかのような傷跡に、歴戦を感じさせる重厚なオーラを纏う初老の男。

決闘学園デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と呼ばれた元プロデュエリスト…

―劉玄斎、その人。

最も【王者】と拮抗した男と知られ、その実力は歴戦の【王者】達と比べても何ら遜色無いモノであることはこの世界では有名であり…

獲得した『タイトル』だけならば【王者】を含めたプロの中でも歴代一位。

しかし、本気で望めば【王者】にだってなれる実力と才覚を兼ね備えていたと言うのに、若輩の頃から全くと言っていい程その座に興味

も持たず、まるで自分をわざと傷つけるかの如く、まさに狂った様に戦いに明け暮れる日々を送っていた『逆鱗』、劉玄斎。
どうして彼が【王者】の座を望まなかったのかなど、劉玄斎自身にしかわからぬ事実ではあるものの…
そんな激動の歴戦を駆け抜け、決闘界の伝説となり、平穏とは無縁の人生を歩んでいそうなこんな人物が、よもや幼・小・中・高等部の、デュエリアの全ての学生達を纏める『学長』という地位に就いているというのも、聞く者が聞けばおかしな話であることには違いないだろう。
…まぁ、『デュエリア校』という、この世界で最も巨大な決闘学園の『トップ』に就いているということ事態、この男の決闘界に残した功績が比類なきモノなのだということは間違えないようのない事実であり…
そんな劉玄斎は自分の目の前の立った『2人』の学生らしき少年と少女に対し、その重々しくもゆったりとした声で話しかけたかと思うと、軽く手招きをしながら再び彼らへと声をかけた。

「しかしまぁ、アイの方はともかく、刀利までちゃんと来るなんて驚いたぜ？何せ、お前は呼び出してもいっつも無視するからなぁクハハハハ。まぁアレだ、立ち話もなんだからよぉ、とりあえず座ってくれや。」

そして劉玄斎は室内にある応接用のソファへと座りなおすと、2人の学生に対し座るように促して。
名を呼び、労い、近況すら知っているかのようなその口ぶり。
高等部だけでも膨大な数の学生が居るというのに、わざわざ学長自らが特定の学生に対しこんな対応をすると言うだけでも、この2人の学生がそれだけ劉玄斎にとって何かしら特別なのだということを示していることだろう。
…しかし、劉玄斎の声に応じることなく。

呼び出されたこの2人の学生達は、学長に座るよう促されたというのにその場に立っているだけではないか。

「…学長…」

そして…

耐性の無い人間が踏み入れれば、その雰囲気だけで全身が竦み上がるであろう劉玄斎の重々しいオーラが充満しているこの学長室に、『少女』の方の高い声が零れたかと思うと…

自分達の学園の学長を前にしても、全く萎縮した様子も無く。劉玄斎へと向かって、華奢な体の『少女』がその口を開き始めた。

「…何でコイツも一緒なんです?ウチ、コイツと一緒だけは嫌やって、前に言うたはずですけど。」

お世辞にも発育が良いとは言えない、その小さい体を目一杯に伸ばし…

煌く金色の髪と、透き通るような白い肌を差し込む日差しに輝かせながら…はんなりとではあるが、劉玄斎へと堂々とそう言い放った少女。

―アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン

アイという名称で皆から呼ばれる、その真っ直ぐ伸びた立ち姿が何とも眩しく美しい少女ではあるものの…

下手をすれば初等部の子ども達の中にも居そうなほどに小柄で華奢な体格をしている彼女は、この決闘学園デュエリア校においては彼女の事を知らない者など存在しないほどの『有名人』。

そんな見た目に反して紛れも無い高等部の学生である彼女は、隣に立っている少年への嫌悪感を駄々漏れに、心の底から嫌そうな言葉を

漏らしていて。
　その小鳥のさえずりのような高い声で、隣に立つ少年を親指で指差し…はんなりとした、しかし厳しい雰囲気で、そのまま続けて言葉を放つのみ。
「鍛治上(かじがみ)が居るんやったらウチは帰ります。話は個人的に、また今度してください。」
「…そう言うなよなぁアイ。お前もいい加減、刀利に対してだなぁ…」
「嫌や！学長には悪いですけど、鍛治上と一緒だけは絶対に嫌です！ウチは下がらせてもらいますわ！」
「あ？おいアイ！テメェちょっと待っ…」

―！

　そして、全く聞く耳を持とうともせず。
　そう言い放ったアイナは、劉玄斎が止めようとしたにも関わらず、いきなり憤慨して部屋の出口へとツカツカと大股で歩き始めたかと思うと…
　学長室の重々しい扉を、その小さい体のどこにそんな力があるのかと思える程の勢いで蹴り開け放ち、そのままどこかへと歩き去ってしまった。
「…ったく、アイツは相変わらずだなぁおい。」
　扉の閉まる音の余韻がまだ収まらぬ内に、頭を乱雑に掻きながら劉玄斎がそう呟いて。
　…普通であれば学生の身分で、学園の全てを統べる劉玄斎に対してあんな口を聞くことは絶対に許されることでは無いこと。
　しかし、去っていった少女の先ほどの態度を、まるで『いつもの事』のようにそう言う劉玄斎の口ぶりは、先ほどの彼女の態度もまた『当然』だのだと言わんばかりの呆れを含んでいたに違いなく…

そんな劉玄斎は一つ溜息を吐いたかと思うと、嵐が去った部屋に一人残った少年へと向かって、再びその重々しい口を開いた。

「すまねぇなぁ刀利(とうり)。お前にも、無理させちまってよぉ。」

「…いえ。」

先ほどは応じなかった劉玄斎の声に今度は応じたものの、甲高い叫びを上げたアイナとは裏腹に、今にも消えてしまいそうなほどに弱々しい声。

長い前髪で視線を隠し、肩だけではなく声のトーンまで落とし…

今にも消滅してしまいそうな存在感で、この重々しい空気の充満した部屋にはまるで似つかわしく無いと思える様な少年。

―鍛治上(かじがみ)　刀利(とうり)

その姿まで見失ってしまいそうな気配もまた、この学長室の雰囲気には…いや、下手をすればこのデュエリア校の雰囲気にもまるで不釣合いなほどに弱々しいモノ。

その弱すぎる気配は、まるで自分の存在をわざと消そうとしているのでは無いかと思える程に覇気と言うモノが感じられず。

…先ほど唐突な憤慨を見せたアイナと比べ、自信無さ気に俯いたままの少年。

しかし、この気弱にしか見えないこの鍛治上　刀利もまた、アイナと同じくこの決闘学園デュエリア校においては『とある意味』で有名とも言えるだろうか。

…まぁ、『良い意味』で有名なアイナと違って、刀利の方は『悪い意味』で有名ではあるのだが…

そんな鍛治上　刀利という少年に対して、劉玄斎はさらに言葉を続けて。

「お前の要望通りよぉ、【決島】の代表にゃお前の事もエントリーさせ

ておいたが…本当によかったのか？綿貫の爺いも心配してたぜ、お前、まだ…」

デュエリア校の代表も、決闘市側と同じく超巨大決闘者育成機関【決闘世界】に一任されているはずだと言うのに、さも当たり前のように刀利へと向かってそう言い放った劉玄斎。

劉玄斎の放ったその言葉は、ソレだけならば『不正』とも取れるようなモノであったことだろう。

…しかし、この少年に関してだけ言えばそれもまた不正にもならず。

そう、【決闘世界】の重鎮、『妖怪』と呼ばれている綿貫　景虎も『この件』に関与しているということもあってか、少なくともデュエリア校がこれで不正と言われることはないのだから。

…それは言い換えれば、それだけこの鍛冶上　刀利という少年が劉玄斎達にとっても『特別』なのだと言うこと。

それは彼の『過去』…いや、このデュエリアでかつて起きた『ある出来事』に関わることであり…先ほどのアイナの憤慨や、今にも消えてしまいそうな刀利の気配もまた、彼らの『過去』が今の彼らの関係に大きく関わっていることなのだ。

そして、その事情を知る劉玄斎の声に応じるように…

刀利は、再びその口から弱々しい言葉を発する。

「…劉玄斎学長。この前、電話が来たんです。…哲君と、蒼人君から。」
「あ？…おぉ、そうかぁ！あいつらぁ……何かぁ、言ってたか？」
「…【決島】に、面白い子達が出てくるから…きっと、僕も『楽しめる』はずだ…って。」
「…楽し…あぁ、そうかぁ…あいつらが、お前になぁ…」
「…プロになって、前に進んだ哲君と蒼人君がそう言うのなら…僕も…少しだけ、前に進んでみようと思います。」
「あぁ、わかった。あいつらがそう言ったんだったら…きっと…『大丈夫』なんだろうぜ。だったら、お前の好きにすりゃあいい。」

「…はい。」

刀利が発したその名。それは、今年度に決闘市からプロになった2人のデュエリストの名前。

その名が決闘市ならばまだしも、遠く離れたこのデュエリアの地で出てくること自体不思議な話ではあるものの…

その名を聞いて、どこか感慨深い表情をした劉玄斎に対し…依然として弱々しい声ではあるものの、刀利はどこか決意を決めたかのような言葉で劉玄斎へと意思を伝えて。

…かつて、このデュエリアの地で起こった、『とある出来事』。

簡単には言い表すことなど出来ないその出来事が、当時中等部の学生だった少年達に残した傷跡は計り知れず。

壮絶な戦いを経て、時には命をやり取りをしてきて…

—そして、失ってしまった命もあって…

そんな形容しがたいような、信じられないような出来ない事件を経験してしまったからこそ、少年達は今も苦悩し続けていて、そして感情を捩れさせてしまっているのだ。

そうして…

「…じゃあ、僕もこれで。」

「あぁ。」

伝えることを伝え終えたのか、学長室から出て行こうとする鍛冶上刀利。

そんな刀利を見送る劉玄斎の目は、その巨体に似つかわしくない程の優しさに溢れていたことだろう。

かつて、この地で何が起こったのか。

学長としてその全てを知る劉玄斎だからこそ、アイや刀利、そして『その出来事』に関わった少年達が負った、心の傷の深さに対しても何か思うところがあるのか。

そして…

刀利が学長室から完全に出て行き、その厳牢なる扉が閉まり…

学長室が完全に外界と隔絶された…

―その時だった。

「ずいぶんとお優しいではないですか。アレが『逆鱗』と呼ばれた貴方とは到底思えませんねぇ、ええ。」

「…あぁ？何か文句あんのか？」

刀利が出て行った正面の入り口とは別の、学長室の隣の部屋と繋がる壁のドアが徐に開いたかと思うと…

その陰から、形容しがたいあまりに『普通』の風貌をした、役人風の見知らぬ男が姿を現した。

―違和感を覚える程に整えられた身なり。口元とは裏腹に全く笑っていない目。劉玄斎に対する不遜な態度。

一言で表すと、『捻れた』と言う表現があまりにぴったりな…そんな、突然現れた胡散臭さと言う名のスーツを纏った男の、その不快感すら覚えそうな渋い声を聞いて…

劉玄斎の表情もまた先ほどの穏やかなモノから、徐々に怪訝を交えた『不穏』なモノへと変わっていくではないか。

「いいえ、文句などありませんよ。生徒達に信頼されていた方が、我々も貴方も仕事がしやすいですからねぇ、ええ。しかし忘れないで下さい、【決島】の『本当の目的』は…」

「…あぁ、言われるまでもねぇ…わかってる。」

学生達に向ける優しい顔と、今この男と話している不穏な顔。

一体、どちらの顔が劉玄斎の本当の顔なのか。

それは劉玄斎自身にしか分からぬモノではあるものの、少なくとも今の劉玄斎の表情と雰囲気は学生達に見せられるような代物でないことだけは確かだろうが…

「ならば良いのです。しかし、くれぐれも変な気は起こさないように…我々の悲願のためには、多少子ども達が犠牲になるのもやむを得ませんからね、ええ。」

一つ一つの言動が、劉玄斎の神経を逆撫でするようなざらついた声。

劉玄斎のその丸太のような巨腕で一発でも入れれば、即座に力関係など逆転してしまいそうだというのに…そんな苛立ちを覚えそうなスーツの男の声に対し、劉玄斎は言い返さずに言葉を落としているだけ。

それはまるで、わざと劉玄斎に立場の違いを思い知らせているかのようであり…

「貴方には、我々に従わなければいけない理由があることをお忘れなく…ねぇ、お優しいお優しい学長先生？」

「…あぁ。」

静かに零れた『逆鱗』の声は、いつまでも低く、重く…

―部屋の中に、響いていた。

―…

「…待てや鍛治上(かじがみ)。」

学長室から出た通路、学科と繋がっているその連絡通路の、まるで神殿か何かと錯覚しそうな神秘的な柱が建ち並ぶ天空の回廊でのこと。

どう見ても教育機関には見えないであろうその場所で、唐突に小鳥のさえずりのような高い声が響いたかと思うと…刀利の通り過ぎた柱の影から、憤慨から先に学長室を出て行ったはずのアイナが突然刀利へと声をかけてきた。

―その小学生かと見間違う程の小さい体を痛いほど伸ばし、限界まで反った背筋で刀利を上目使いで睨みつけて。

しかし、先ほどはあれだけ嫌っていた素振りを見せていた刀利へと、どうしてアイナが声をかけてきたのか。

一緒に居るだけでもあれだけの憤慨を見せていたというのに、わざわざ待っていたというのもおかしな話と言えるだろう。そんなアイナの雰囲気は先ほどと同じで、刀利への不快感と憤怒を駄々漏れに、今にも殴りかかりそうな雰囲気で刀利へと近づいて来て…

「話は終わったんか?…ええなぁ学長のお気に入りは。みんな出たい出たいゆーて頑張っとったんに、自分は学長に一言言えば【決島】に出られるんやから。…また言われるで?お前がまた卑怯な手つこて学長に取り入ったんやって。」

まるで、刀利と劉玄斎の話を聞いていたかのようなアイナの口ぶり。

…まぁ、アイナが学長室の外で刀利を待ち構えていたことを考えると、学長室の外で聞き耳を立てていたことも充分に考えられるのだが…あの学長室の重々しい扉の防音性を考えると、ソレも非現実的とも言えるだろうか。

「…どうして、その事を？」

「ふん、引きこもっとったお前がわざわざ外に出てきたんや。どうせ、【決島】関連で何か学長に頼みに言ったんやってことくらい簡単に分かるわ。…お前、人に取り入るのが上手いもんなぁ。」

「…僕は…別に…」

「口答えすんな！虫唾が走るわ！」

「…」

そのアイナの口調は、本当に刀利の事を心の底から嫌っているということが誰の耳にも明らかなほどの声質。

少女の口から飛び出してくる、その憎悪と憤怒の塗れた言葉の全てが鋭い棘となり、弱気な少年へと突き刺され…

…過去、彼らにあった『とある出来事』の記憶を彼女が思い出す度に、アイナは益々その憤怒を増していく。

「鍛冶上…ウチは絶対にお前を許さへん。…ウチから大事な人を奪った…ウチの大切な人の命を奪ったお前を…」

「…うん。わかってる。」

「あぁ!?何がわかってるんって言うんや！大体、お前の所為でてっちゃんも蒼ちゃんも出ていって…それに『アイツ』も…最初っからお前と関わらんかったら、皆バラバラになんてならなかったんや！それやのに…全部！全部全部全部お前の所為や！」

「…ごめん…」

「謝って済む問題やない！大体、お前はいっつもウジウジウジウジ…デュエルもせんで、【デュエルフェスタ】にも出ようともせんで！そんなやから『雑魚上』なんて呼ばれねんで！」

そして…
刀利へと向かって、この実力至上主義の決闘学園デュエリア校においてあまりに『致命的』とも言えるその仇名を言い放つアイナ。
…しかし、そんな最大級の侮蔑を込めた歪名をぶつけられたというのに、刀利は何の反応も見せず。
多少でもプライドを持つデュエリストだったら、逆上してもおかしくないような忌み名だと言うのに…刀利はただただそこに立ち尽くすだけで、ソレが心に響いた様子も全く見せないのだ。
その雰囲気と反応は、この修羅の地であるデュエリアの空気にはあまりに不釣合いで相応しくないモノだと言うのに…
まるで、刀利の態度はソレを聞き慣れ、そしてソレを受け入れているかのような代物。

…そう、このデュエリアの地において、刀利の立ち位置はあまりに不自然。

―デュエルをしないデュエリスト。

このデュエリア校において、殆どの生徒から刀利はそう言われているのだ。
実際に、鍛冶上　刀利というデュリストのデュエルをその目で見たことのある生徒は、この高等部には殆ど存在せず。
授業にも出ず、大会にも出ず…ずっと姿を見せずに寮の自室に引きこもっているだけ。
挙句の果てには、このデュエリア最大規模の祭典…
高等部の全ての学生が強制参加で、例えのっぴきならない事情があってもソレに参加しかなった者は強制的に『退学』になるはずの【デュエルフェスタ】の『予選』に、何故か彼だけが参加しなくても何のお咎めもないのだ。
そんな彼のデュエルを知らない生徒達からすれば、刀利のその存在

は疑問でしかないことだろう。
鍛冶上　刀利の事を何も知らない学生達から見れば不思議も不思議。デュエルもせず、姿も見せず…たまに姿を見たときにデュエルを挑んでも、逃げるようにしてどこかへと行ってしまうのだから。
故に…刀利は後輩にすら鍛冶上という苗字を捩った、『雑魚上』などと呼ばれている始末。
無論、刀利のその態度もまた、彼らの『過去』が深く関わっていることなのだが…そんな、どこまでも弱い存在感の刀利へと向かって、アイナは更に棘だらけの言葉を投げつけるのみ。

「鍛冶上…ウチはお前を絶対に許さへん。…あの約束、忘れてへんやろな。ウチに負けたら、今すぐデュエリアから消えるってゆー約束。」
「…うん。」
「お前も久々に外に出てきたんや、逃げようとしても逃さへん。今すぐにでもここから追い出したるわ。嫌やなんて言わせへんで。」
「…いいよ、それでアイナの気が済むな…」
「名前を呼ぶな！胸糞悪い！」
「…ごめん。」

どこまでも好戦的なアイナの声と、どこまでも自棄的な刀利の声。
デュエルをしないデュエリストと呼ばれ、普段であればデュエリア校のどの生徒に挑発されたり挑まれたりしても決してソレに応じようとしない刀利ではあるものの…今この場面と、そして相手がアイナである以上、ソレを受け入れるしかないのだろう。

…刀利の雰囲気はまるで『贖罪』。

過去のとある出来事に対する、懺悔のような態度でアイナへと向かい…

「ここでええわ、早よぅ構えろ。いくら引きこもりでも、デュエルディ

スクくらい持ってきとるんやろ？」
「…うん。」

そうして…
正反対の二人の声が交わり、刀利とアイナは徐にデュエルディスクを取り出して。
いくらデュエルが日常のこの決闘学園デュエリア校とはいえ、本来ならば生徒が近づかないであろうこんな場所でデュエルが行われることは先ずありえないことだろう。
しかし怒りを顕にしているアイナの声は、そんなことなど関係ないかのようにして刀利を睨み付けたままであり…二人のディスクがデュエルモードに切り替わると、同時に二人のデュエリストが対峙し合うだけ。

そうして、生徒など来なさそうなこの天空の回廊で…
それは、あまりに突然に…

―デュエル！

突如、始まる。
先攻は、刀利。

「…僕のターン…ターンエンド。」

刀利　ＬＰ：４０００
手札：５枚
場：無し
伏せ：無し

デュエルが始まってすぐ。何も行動を起こさず、即座にターンを受け渡した鍛冶上　刀利。
普通であれば、何もせずにターンを終えるという自殺行為など余程の『手札事故』か、逆に何か深い考えがあっての事でしか実行する者は居ないはずだというのに…
そして、刀利がどちらの方なのかと問われれば、その弱々しい雰囲気と今にも消えそうな声、そして静か過ぎる気配が混ざり合い、誰の目から見ても『前者』としか思えないことに違いなく。

「ウチのターン、ドロー！…ふん、相変わらず、やる気の無いデュエルやなぁ。あの頃から何も変わっとらん。どうせ手札に、【バトルフェーダー】か何か居るんやろ？」
「…」

しかし、そんな刀利の態度に目もくれず。まるで戦い慣れた相手の如く、さも当然のようにアイナはそう言い放って。
…あれだけ厳しい言葉を突き刺しているというのに、アイナの態度に『油断』は無い。
その理由は、アイナ自身が最も良く理解していること。そう、他の生徒達から『雑魚上』と言われている刀利に対してでも、アイナは己の憤怒と経験に任せてその怒りを増していくのみ。

「まぁえぇ。せやったら、こっちは好きにやらせてもらだけや！ウチは魔法カード、【魔玩具補綴】を発動！デッキから【融合】と【エッジインプ・チェーン】を手札に加える！そんでそのまま【融合】発動！手札の【ファーニマル・ペンギン】と【エッジインプ・チェーン】を

融合！」

静かな立ち上がりの刀利とはまるで真逆。喚きのような勢いで、激しくカードをディスクに叩き付けて発動していくアイナのデュエル。

神秘の渦が少女の背で蠢き、天使と悪魔という相反する存在がそこに吸い込まれ…

「氷上を走る天使の羽よ！悪魔の鎖をその身に縫い付け…目に付く全てを引き千切れぇ！融合召喚！」

無理やりに交わっていくその様子は、まるで彼女から漏れ出す憤怒そのモノが混ざり合っているかのよう。

「来い、レベル５！【デストーイ・チェーン・シープ】！」

―！

【デストーイ・チェーン・シープ】レベル５
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２０００

そうして彼女の持つ『融合』のＥｘ適正によって呼び出されしは、悪魔の鎖に縛られた、羊を模した不浄の玩具。

擦れ合う鎖の金属音、その不快な音を鳴き声へと変え…玩具とは思えぬ奇怪な姿で、怪しくソコに佇むだけ。

「【エッジインプ・チェーン】の効果で、ウチはデッキから２枚目の【魔玩具補綴】を手札に加える！さらに【ファーニマル・ペンギン】の効果発動！デッキから２枚ドローして、その後手札を１枚捨てる！そんで今捨てた、【トイポット】の効果発動や！ウチは更にデッキから、【ファーニマル・マウス】を手札に加える！まだや！【ファーニマル・マウス】を召喚して効果発動！デッキから【ファーニマル・マウス】２

体を、守備表示で特殊召喚！」

―!!!

【ファーニマル・マウス】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　１００
【ファーニマル・マウス】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　１００
【ファーニマル・マウス】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　１００

「魔法カード、【融合回収】発動！墓地から【融合】と【エッジインプ・チェーン】を手札に戻し、もいっかい【融合】発動や！場のマウス２体と、融合モンスターの【デストーイ・チェーン・シープ】を融合！」

手札消費が激しいと言われている融合召喚を行いつつも、手札を減らさないどころか逆に手札を更に増やしながらその展開を止めないアイナ。

しかし、まだまだこんなものでは少年への憤怒は収まらないのだと言わんばかりに、少女はその小さく華奢な体で、更に怒りを刀利へとぶつけ続け…

アイナが連続して【融合】を発動していくそのデッキの回転は、紛れも無く彼女の実力が相当高い場所にあることの証明とでも言えるだろうか。

天使と悪魔が混ざり合い、最後には悪魔となってしまう不浄の玩具たちで遊ぶかのように…

「小さく転がる天使の羽よ！悪魔の玩具をその身に縫い付け…鋭い牙で全てを引き裂けぇ！融合召喚！来い、レベル８！【デストーイ・サーベル・タイガー】！」

―！

【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／２４００→２８００　ＤＥＦ／２０００

場に現れしは、体内から刃を剥き出しにした猛獣の玩具。
その不気味な視線と咆哮は、壊れた玩具を今一度この場に無理やり立たせ…再び壊れるまで、この遊び場で暴れさせる。

「サーベル・タイガーのモンスター効果！融合召喚成功時、墓地から【デストーイ・チェーン・シープ】を蘇らせる！…ふん、どうせ止めるんやろうけど、まぁえぇわ。バトル！【デストーイ・サーベル・タイガー】で、鍛冶上にダイレクトアタック！」

そして…少女が己の金髪を靡かせ、荒々しく攻撃を宣言して。
相手の行動を封じる羊の玩具からではなく、あえて牙獣の玩具から攻撃を宣言したことアイナの狙いは明らかにダメージを稼ぐことではなく…どうせこのターンでトドメをさせないのならば、ダメージなど有って無い様なモノだと思っているのだろう。
そんなアイナの憤怒を纏う、その淀み無い牙獣の牙は鍛冶上　刀利という少年への嫌悪感を、そのまま形に表しているかの如く轟き…

―迫る刃牙、金切りの遠吠え。

悪魔へと変貌した不浄の玩具の、その鋭い牙が刀利へと襲い掛かった…

―その時だった。

「…【バトルフェーダー】の効果発動。手札から特殊召喚し、攻撃を無

効にしてバトルフェイズを終了する。」

―！

【バトルフェーダー】レベル1
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

鈍い衝突音が突如として響き、弾き飛ばされた不浄の玩具がよろけながらもアイナの場に退いた。
…そう、先ほどのアイナの考察通り。刀利の場に響き渡った小さな悪魔の鈴の音が、アイナの玩具の一撃を防いで、弾いて、そして跳ね返したのだ。
アイナに『やる気が無い』と形容され、刀利本人の雰囲気からも戦意など感じられないと言うのに…反射運動のように自らの身を守るその行動は、ある意味でデュエリストの端くれとでも言えるのか。
そんな態度と行動の一致しない刀利のデュエルに対し、アイナはうんざりしたような声で冷たく言い放ち…

「ほらな、やっぱ持っとった。ウチはカードを1枚伏せてターンエンド。」

アイナ　ＬＰ：４０００
手札：6→5
場：【デストーイ・サーベル・タイガー】
【デストーイ・チェーン・シープ】
【ファーニマル・マウス】
伏せ：1枚

「…僕のターン、ドロー。…モンスターをセット…カードを2枚伏せてターンエンド。」

刀利　ＬＰ：４０００
手札：5→2
場：【バトルフェーダー】
【セットモンスター】
伏せ：2枚

しかし、再びターンが回ってきても、最低限の行動のみでターンを受け渡してしまった鍛冶上　刀利。
先ほどは反射的に自らの身を守ったとは言え、今の彼は攻める気を全く見せようとはせず…益々その雰囲気を暗いモノとし、その視線を地に落としていくだけではないか。

「…やっぱ変わらんなぁ、お前のデュエルは。戦っとってホンマにイライラするわ。」
「…。」
「ふん、言い返せもせん臆病モンが！ウチのターン、ドロー！2枚目の【魔玩具補綴】発動！デッキから【融合】と【エッジインプ・シザー】を手札に加える！そんで【融合】を発動や！フィールドの【ファーニマル・マウス】に、手札の【ファーニマル・キャット】と【エッジインプ・シザー】を融合！」

しかし、そんな刀利を意に介さず。
アイナは益々その勢いを増していき、荒々しく吼える少女の叫びは、彼女の玩具達を更なる狂気で奮い立たせるのか。
その初等部の生徒と見間違えそうな程に小さく華奢な体の、どこにそんな力を持っているのかと思えるほどの憤怒を纏い…

…呼び出すは、更なる融合モンスター。

何が何でも刀利を降すというその憤怒に任せ、艶やかな金髪を振るわせ、華奢な体で荒々しく吼え…

「小さく転がる天使の羽よ！気ままに走る天使の羽よ！悪魔の刃をその身に縫い付け…目に付く全てを切り刻めぇ！融合召喚、レベル６！【デストーイ・シザー・タイガー】！」

―！

【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／１９００→３２００　ＤＥＦ／１２００

そうして遊び場に現れたのは、腹から刃を剥き出しにした歪な猛獣。

自らと、そしてもう一体の牙獣の玩具の効果によってその刃の鋭さを更に磨き上げ…耳が痛くなりそうな金属の擦れ合う音を鳴き声にして、刀利を睨んで鈍く吼える。

「…攻撃力…３２００…」

「融合素材になった【ファーニマル・キャット】の効果で、墓地から【融合】を手札に戻す！そんで融合召喚成功時、【デストーイ・シザー・タイガー】の効果発動！融合素材の数までお前の場のカードを破壊したるわ！」

「…速攻魔法、【禁じられた聖杯】発動。【デストーイ・シザー・タイガー】の攻撃力を４００アップし、その効果を無効に。」

「チッ！じゃあ【融合】を発動して、手札の【ファーニマル・ウィング】と【エッジインプ・チェーン】を融合や！空に浮かぶ天使の羽よ！悪魔の鎖をその身に縫い付け…鋭き刃で敵を断ち切れぇ！融合召喚、レベル８！【デストーイ・ハーケン・クラーケン】！」

―！

【デストーイ・ハーケン・クラーケン】レベル８

ＡＴＫ／２２００→２６００　ＤＥＦ／３０００

刀利の防御に目もくれず。続けざまに現れる、アイナの融合モンスター達。

ぬいぐるみには到底見えぬ、その身に縫い付けたおぞましい刃の奏でる音が多重に混ざり合い…それは彼女の憤怒を更に増強させながら、不気味なうねりとなって刀利を襲い続ける。

「【デストーイ・ハーケン・クラーケン】の効果発動！鍛冶上のセットモンスターを墓地へ送る！目障りや！消えぇ！」

「…手札から、【エフェクト・ヴェーラー】の効果を発動。【デストーイ・ハーケン・クラーケン】の効果を無効に。」

「あぁ!?」

…しかし、刀利はそれでも自らの身を守り続けて。

攻める兆しを見せないというのに、一体どうしてその身を守るのだろう。行動と雰囲気が一致しない刀利のその静かな雰囲気は、誰にも理解することなど出来ない程の深さを持って、更に刀利の存在感を『薄く』していき…

…そんな刀利を見て、アイナは一体何を思ったのか。

その憤怒を纏ったまま、そして先ほどよりもその言葉の棘を更に鋭く研ぎ澄ましながら、アイナは今にも消えそうな刀利へと声を投げつけ始めた。

「…お前、ホンマやる気無い癖に抵抗だけはいっちょ前やな。昔からそうや…意地汚く足掻く癖に、『最後の最後』で何も出来ひんこの役立たず…お前、昔からずっと変わっとらん。この数年間何をやっとった？」

「…」

「…ウチは去年『フェス』で優勝した。…お前だけやで、昔のまんまで止まっとる奴は。」

刀利へと向かって、激しくも突き放すような声質でそう言い放つアイナ。

また、彼女の言った『フェス』という単語…

―フェス…正式名称、【デュエルフェスタ】

それはこのデュエリアの地における、【決闘祭】にも匹敵する盛り上がりを見せる学生達の祭典の名。

高等部の、『特例』を除く全ての生徒が必ず予選という名の潰し合いを行い…厳選に厳選を重ね選ばれた者達による、命を削るにも等しい戦いが行われるこのデュエリアきっての一大イベント。

無論、決闘市で行われる【決闘祭】と同様に、その注目度は言葉では言い表せない程の規模であり…

そしてアイナの言葉通り、昨年度執り行われたデュエリアにおける学生達の祭典、【デュエルフェスタ】において、数万人を超す決闘学園デュエリア校の頂点に立ったのは紛れも無い…

―この華奢な体をした少女、アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンなのだ。

それは疑う余地など無い、今の決闘学園デュエリア校高等部で『最も強いデュエリスト』の証。

そんな自尊と自負と自信と自敬。己の全てを憤怒へと変え…アイナは、刀利へと叫び続ける。

―刀利の全てを、否定するために。

「お前だけは絶対に許さん！何が何でもや！行くで、バト…」
「…バトルフェイズの前に罠カード、【ブレイクスルー・スキル】発動。【デストーイ・チェーン・シープ】の効果を無効に…」
「足掻くなこのタコ！バトルや！シザー・タイガーで【バトルフェーダー】に！ハーケン・クラーケンでセットモンスターにそれぞれ攻撃！」

―！

そして、次々に襲い掛からんとするアイナのモンスター。
主の憤怒をそのままに、刀利への嫌悪を形にし…まずは先ほど刀利の身を守った【バトルフェーダー】が、悪魔の鋏に切り落とされた。
墓地にも行けず除外されていくその消滅のエフェクトは、まるでこれからモンスターに攻撃されるであろう刀利の未来を現しているようにも見えたことだろう。
…そして、追撃。
深海から出でし悪魔の触手が、追撃のためにその双斧をセットモンスターへと振り下ろした…

―その時だった。

「…セットモンスターは【メタモルポッド】。リバース効果発動。」
「…あ？」

刀利のモンスターが反転したその瞬間。
刀利の場の反転した怪しい壷から、突如として発せられた怪しい光がフィールドに広がり…
それは紛れも無い。双斧の当たる寸前で、反転した怪しい壷のようなモンスターが、自らへの攻撃を一瞬だけ食い止めたのだ。

―更に、それだけではなく。

反転されたその壷から湧いた、見るからに怪しげな鈍い光が刀利とアイナ、双方の手札へと伸びていくではないか。

「…その効果で、お互いに手札を全て捨て…新たに５枚ドローする。」

「あぁ、そう言えばそんなモンスター使っとったなぁ。懐かし過ぎて忘れとったわ。…けどそれがどうした！５枚ドローし、【メタモルポッド】は破壊される！そんでまだ、ウチのバトルフェイズは終わってへん！サーベル・タイガーで鍛冶上にダイレクトアタック！」

しかし、刀利の抵抗など気にも留めず。怪しい壷を躊躇無く木っ端微塵にした後に、攻撃の手を緩めることなく刀利へと襲いかからんとするアイナ。

悪魔を宿した不浄の玩具が、その牙を刀利に突き立てんと荒々しく吼え…

「…２体目の【バトルフェーダー】の効果発動。」

「あぁ!?」

「…特殊召喚し攻撃を無効…その後、バトルフェイズを終了する。」

―！

【バトルフェーダー】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

―しかし、止める。

アイナの更なる追撃も、それでも刀利は何故か防いで。
先ほどのターンと同じ、【バトルフェーダー】による直接攻撃の無効。そのあまりに自然すぎる手の動きは、たった今【メタモルポッド】の効果でドローした5枚の中に、偶々【バトルフェーダー】があったとは思えぬほどの落ち着き様であり…
それはまるで、ここで【バトルフェーダー】が引けることが分かっていたかのような刀利の雰囲気。
…それに対し、アイナは益々その苛立ちを増していくだけ。

「鍛冶上ぃ…お前、ホンマにムカつく奴やなぁ。どこまでもウチの事を舐めくさってからに…」
「…僕は別に…舐めてなんか…」
「チッ、ウチはカードを2枚伏せてターンエンドや。そんで、無効になっとった3体の効果も元に戻る。」

アイナ　LP：4000
手札：6→3
場：【デストーイ・ハーケン・クラーケン】
【デストーイ・シザー・タイガー】
【デストーイ・サーベル・タイガー】
【デストーイ・チェーン・シープ】
魔法・罠：伏せ3枚

このターンのアイナの猛攻を、どうにか全て防ぎきった刀利。
しかし、この状況をだけを見ればアイナの有利は揺るぎないモノに違いないだろう。何せ、防戦一方に見える刀利と、攻め続けるも手が絶えないアイナの盤面。この差を見れば、誰にだってここからの刀利の勝利を思い浮かべることなど出来はしないはず。
そう、普通のデュエルだったらここからの巻き返しは簡単にはいかない。何せ、アイナには3枚の伏せカードに加え…

【デストーイ・ハーケン・クラーケン】レベル８
ＡＴＫ／２２００→３８００
【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／１９００→３５００
【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／２４００→４０００
【デストーイ・チェーン・シープ】レベル５
ＡＴＫ／２０００→３６００

全ての玩具の攻撃力が３０００を超え、さらに一体は４０００の大台に乗っているのだ。
これほどまでに高められた攻撃力は、まさに彼女の憤怒の象徴。アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンというデュエリストの持つ力の大きさが、このデュエリア校の頂点に立つに相応しいモノであるということの証明。
また、妨害の為の複数のリバースカードは、刀利の全てを否定せんとして伏せられたモノであり…まさに全てが整い、全てに備えたアイナの盤面。それはまさに、用意周到すぎる強大の防御となりて、生半可なデュエリストではここで戦う気持ちすら折れてしまっているに違いないことだろう。

…そんなアイナの場と、そして憤怒に塗れ続けているアイナを見て…刀利は一体、何を思うのだろうか。

―落ち続ける少年の気概と、今にも消えそうな存在感。

そんな、まるで空気と一体化でもしてしまいそうな鍛冶上　刀利という少年が…

一呼吸の後、静かに…

そう、静かに、その口を開いて…

「…アイナ…ごめんね。」
「…あ？」
「…君がまだ…僕を許してくれないことはわかってる。…僕の犯した『罪』は、決して許してもらえるようなモノじゃない。…いくら『あの時』は仕方なかったって言っても…僕が『彼』にしたことは、絶対に君に許してもらえることじゃないから…」
「…ぐ…そう…そうや…全部…全部全部お前が悪い！全部お前さえおらんかったら！『アイツ』だって死ななくて済んだんや！せやのに…」

…今にも泣き出してしまいそうな刀利の声と、今にも狂ってしまいそうなアイナの声。
それが歪に混じり合い、彼らの過去にあった悲しい出来事の記憶を、今まさに鮮明に思い出させているようでは無いか。
一体彼らの過去に、何があったというのだろう。
その異様な雰囲気となっていくこのデュエルの場において、『不純物』とも言える感情を吐露しながら…それでも、それぞれの思いのままに戦いに望んでいる今の彼らの姿は、決して他人に見せられるような『綺麗』なモノでは断じてなく。

「…でも…僕はまだ…ここを出ていけない。まだ、僕には外に出る資格なんて無いから…」

搾り出すような刀利の声は、彼の必死の訴えの証。
今にも消え去りそうな存在感を搾り出し、静かにそう言う少年の声はどこか震えていて…

贖罪、後悔、罪悪、懺悔。

自責の念に囚われてしまっているが故に、刀利はここまで己の気配を小さく小さく留めるように自らを責め続けているのだろう。

そうして…

どこまでも憤怒に狂った少女へと、少年はどこまでも自暴自棄にも似た態度で…

―ただ、淡々と…

刀利は、呟く。

「…だから、僕が勝つよ。…ドロー。…フィールド魔法、【スクラップ・ファクトリー】発動。」

―！

そして、このデュエルが始まって初めて。

―そう、初めて自発的に行動を起こした鍛冶上　刀利。

発動したのは、【スクラップ】の名を冠する魔法カード。

フィールド全体に効果が及ぶソレは、この天空の回廊の景色を一転、古めかしき工場のような景色へと変えていくではないか。

「あぁ?何今更やる気になっとんねん!好きにさせるわけあらへんやろ!リバースカードオープン!速攻魔法【サイクロン】!【スクラップ・ファクトリー】を破壊!」

しかし、そんな刀利の突然の行動にすら照準を合わせていたかのだろうか。未然に刀利の手を防がんとして伏せておいた妨害札を、狙い通りのタイミングで発動したアイナの手には何の迷いも見られず。

そう、昔から…

それこそ、中等部入学の時に出会ってから今まで、紆余曲折はあれど戦い慣れた相手。

刀利の力も、刀利のカードも、そして刀利の行動の全てを憎み続ける少女の読みは素晴らしく的確であり…その全てが刀利を降す為のモノとなりて、どこまでも少女は刀利を睨み続けている。

―しかし、そんな少女の睨みを受けてもなお…

刀利は、淡々と言葉を紡ぐだけ。

「…うん、君がそうしてくるのはわかってた。…【バトルフェーダー】をリリース、【スクラップ・ゴーレム】をアドバンス召喚。」

―!

【スクラップ・ゴーレム】レベル5
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１４００

しかし、それは刀利にも言えることなのだろう。

自分が動こうとすればするだけ、アイナはそれを意地でも否定してくることは刀利もまた理解している事。だからこそ、先ほどの不遜すぎる宣言をこの程度では撤回するつもりもなく…

刀利もまた、行動を止めずに…

「…ゴーレムの効果はつど…」
「せやからさせへんゆーたやろが！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動や！【スクラップ・ゴーレム】の効果を無効に！」

しかし、否定する。
…どこまでも、どこまでも、どこまでも。先ほどの誇張にも聞こえる刀利の宣言を受けてもなお、アイナはどこまでも刀利の手を止めにかかって。
嫌っていても長い付き合い、刀利の操る【スクラップ】の名を冠するカードの効果を、彼女もまた熟知しているのだ。どこまでも的確に刀利の手を止めにかかるアイナのカード捌きは、心の底から刀利のことを否定していることに違いなく。

「ウチは…鍛冶上、お前の全てを認めへん。お前のデュエルも、お前の存在も…全部全部許してなんかやらへん！いつまでも現実から逃げて、自分だけ被害者面しとるお前を絶対に！」
「…うん、わかってる…わかってるんだ！…君が、どれほど僕を憎んでいるのか…」
「…ッ!?せやったら！」
「…でもごめん。もう、決めたんだ…僕はもう、前に進むって…あの頃のまま、ずっと立ち止まってる『君』を一人置いていくのは忍びないけど…」
「…なんやと？」

―『…ウチは去年『フェス』で優勝した。…お前だけやで、昔のまんまで止まっとる奴は。』

そんなアイナへと向かって、先ほどアイナが自分へと言い放った『止まっている』という言葉とはまるで『真逆』の言葉を言い放った刀利。

その言葉を聞いたアイナの表情が、更に険しく苛立ちを帯びたモノへと変わっていき…その言葉の意味を一人だけ理解している刀利は、アイナを置いて更に手を進めるだけ。

「…【死者蘇生】発動。墓地からチューナーモンスター、【スクラップ・ゴブリン】を特殊召喚。」

―！

【スクラップ・ゴブリン】レベル３
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　３００

現れしは、鉄屑を集めた小さき存在。
先ほどの【メタモルポッド】の効果で墓地に送られていたのだろう。今にも崩れそうなその見た目に反し、アイナの玩具を前にしても怯むことなく勇ましく奮えている。

そして…

「…行くよ…レベル５の【スクラップ・ゴーレム】に、レベル３の【スクラップ・ゴブリン】をチューニング！」

己の持ちうる『シンクロ』のＥｘ適正を駆使するかのように、刀利は今ここに高らかに宣言を天へと捧げて。
先ほどの消極的なターンが嘘のように、突如として攻撃に転じ始める鍛冶上　刀利。その宣言によって、悪魔の鎖に縛られた鉄屑の巨人が天に昇り…ソレを追うかの如く鉄屑の小さき存在が３つの光輪へとその身を捧げ…

「…打ち磨かれし玉鋼(たまはがね)、その咆哮で天を撃て！」

天から落ちる光の柱。
そこから響くは大いなる咆哮。
それはまるで、ここに降り立ったことへの歓喜の如く。荒々しくも、神聖すら感じるようなその響きは、地響きにも似たモノとなってこの地に轟くのか。
今ここに現れしは…

「…シンクロ召喚、羽ばたけ、レベル８！【スクラップ・ドラゴン】！」

―！

【スクラップ・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

天を裂く咆哮を轟かせ、弾ける電光をその身に宿した、蒸気を纏いし鉄屑の虚竜。
歪な命をその身に宿し、錆びついた体の悲鳴を軋ませているというのにも関わらず…神聖にすら思えるその姿は、まさに打ち磨かれた歴戦の刀そのモノ。
少女の玩具を怯ませんとし、主の元で羽ばたき吼える。

「…チッ、久々に見たわお前のソレ。この忌々しいガラクタが！今更ソイツ一体で何が出来る言うんや！」
「…魔法カード、【テラ・フォーミング】発動。デッキから２枚目の【スクラップ・ファクトリー】を手札に加える。」

「なっ!?」
「…フィールド魔法、【スクラップ・ファクトリー】発動。そして【スクラップ・ドラゴン】のモンスター効果。【スクラップ・ドラゴン】自身と…君の伏せカードを破壊する。」

そして、間髪入れず。
鉄屑の竜の咆哮が、お互いの場に響いて弾けた。
その強大な衝撃波は、お互いの場のカードを容赦なく破壊してしまう咆哮。無論、刀利の選択したスクラップ・ドラゴンもまた、自らの破壊の咆哮によってその身を壊してしまうものの…

「クソッ、【魔法の筒】が…相変わらず勘の良い奴や、このボケが。」

アイナもまた、刀利へと直撃させるために伏せておいた最後の伏せカードを破壊されてしまい、その言葉を荒げてしまう。
…また、それだけでは終わらず。
先ほどはアイナに破壊されてしまったフィールド魔法の効果を、今度は邪魔されることなく刀利は宣言して。

「…【スクラップ・ファクトリー】の効果で、デッキから2体目の【スクラップ・ゴーレム】を特殊召喚。…もう止める物は何も無いね。…【スクラップ・ゴーレム】の効果発動、墓地から【スクラップ・ゴブリン】を特殊召喚するよ。…レベル5の【スクラップ・ゴーレム】に、レベル3の【スクラップ・ゴブリン】をチューニング!」

その淀みのないカード捌きは、まるでこの展開が全て彼の想定どおりの如き正確さ。
あの劣勢におかれていても、簡単に『勝つ』と宣言してしまうその気概と合わせて今一度鍛冶上　刀利を見てみれば、とてもじゃないが彼が『雑魚上』などという呼び名で呼ばれていることを根底から疑問

に思わなくてはならないことだろう。
そんな刀利の宣言に対し、周囲の大気が震え、その宣言によって今一度ここに呼び出されしは…
「…打ち磨かれし玉鋼(たまはがね)、その咆哮で天を撃て！シンクロ召喚、再び舞い上がれ、レベル８！【スクラップ・ドラゴン】！」
―！
【スクラップ・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００→３０００　ＤＥＦ／２０００→２２００
再びこの地に響き渡りし、天を撃ち抜く鉄屑の咆哮。
―壊れても、砕けても、崩れても…
その轟きは決して消えぬ叫びとなりて、再び主の前でその羽ばたきを魅せるのか
しかし…突然やる気を出し始めた刀利に気を悪くしたのだろう。今更連続して行動を起こした刀利を見据え、アイナは狂乱にも似た声を荒げた。
「ぐ…せやから何回言わせんねん！お前の自慢のその鉄屑１体で！今更この場をどうにか出来ると思っとんのか!?このターンでどうにか出来んかったら、次のターンに勝つのはウチ…」
「…出来るよ。」
「あ？」
「…僕のデュエルを、アイナは絶対に認めてくれないけど…でも、僕のデュエルを一番知っているのも…君だから。」
「…なんやと？」
しかし、そんなアイナの叫びを聞いても、静かに言葉を漏らす刀利。

少女の悲痛な否定の叫びと、少年の投げやりで不遜な言葉。その相反する感情に現された彼らの心は、お互いにお互いの言葉をどこまでもどこまでも否定し続けていただろうが…

デュエルが始まった時とは真逆。

悲痛な叫びを続ける少女の声はどこか切羽詰ったようなモノへと変わってきており…逆に、今にも消えそうだった少年の声は、益々その存在感を増していくではないか。

それは、デュエリアにおいてトップの実力を持ったアイナの纏うオーラとはどこか別物。

刀利から感じるソレはどこか、得体の知れぬ『人外』の如き気配を匂わせているようにも感じられ…

「…だから、このターンで僕の勝ちだ。…手札から速攻魔法、【デーモンとの駆け引き】発動。」

「なっ!?お前!ソ、ソレは…!?」

そして…

刀利の発動したその魔法に、思わず驚きの声を上げたアイナ。

確かに、今発動されたそのカードは【スクラップ】というカテゴリーを使用している刀利のデッキから発動されるような魔法カードでは無かったであろうけれども…

しかし、今のアイナのあまりの驚き様は、そういった一般論的な驚き方では断じて無く。

―焦燥と、動揺。

思わず心臓が跳ね、まるで信じられないモノを見たかのような驚きのまま、アイナは焦りの言葉を漏らして…

「お前!ソレはもう絶対に使わへんって!」

「…ごめんね、でも僕も前に進むって決めたんだ。だから…僕はもう、恐れない。…屍を喰らい舞い上がれ。レベル８、【バーサーク・デッド・ドラゴン】！」

―！

【バーサーク・デッド・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／３５００　ＤＥＦ／　０

不気味な咆哮を轟かせ、闇より出でしは骸の虚影。
屍を喰らいし狂乱の魔獣、自我を無くした永遠の骸。それは、過去…彼らの心に、『大きな傷』を作った存在。
思い出したくもない、忘れたくても忘れられない。そんなトラウマを持つ不穏の虚影だと言うのに…
それを今、あえて召喚したという刀利の宣言はまさにその言葉の通り…『過去』を乗り越え、『前』に進むという意思を見せた事の表れ。
…そんな骸の虚竜を見て、アイナは何を思うのだろうか。
目の前で吼える忌々しい骸の虚影へと向かって、アイナはその口を開いた。

「いけしゃあしゃあと、よくもウチの前にソイツを出せたモンや…」
「…ごめん。でも…僕は…僕たちは、もう前に進まなきゃいけないんだ。…これで、僕の勝ちだ。」
「ぐ…け、けど…いくらソイツでも、まだ攻撃力はウチのモンスターの方が…あっ!?」
「…墓地から罠カード、【ブレイクスルー・スキル】を除外して効果発動。君の【デストーイ・シザー・タイガー】の効果を無効にする。」

そうして…
刀利の静かな宣言によって、アイナの場の悪魔の玩具たちの攻撃力が下がっていく。

まるで、最初からこうなることが決まっていたかのよう。このターンの始めに『勝つ』と言い放った刀利の言葉は、確かな真実となって今ここに実現しようとしているのか。

「ぐっ…」

「…バトル。【バーサーク・デッド・ドラゴン】で、アイナのモンスター全てに攻撃。」

飢餓の牙を剥き出しに、空へと舞い上がった骸の翼。

漏れ出す狂乱の咆哮は、世界全てを壊してしまいそうな不穏さを駄々漏れにしていて…狙うは、アイナの場の不浄の玩具の、その全て。

その虚ろな眼差しに映った、目に付く全てのモノを喰らわんとして、その咆哮を轟かせ…

「…狂乱の…ワールドエンド・ストリーム！」

—!!!!

「そんな…ぐっ、うあぁぁぁあっ!?」

アイナ　ＬＰ：４０００→３１００→１９００→１２００→１００

爆散していく不浄の玩具達に連動し、みるみると減っていくアイナのＬＰ。

あれだけの場を整え、そして考えられうる全ての刀利の手を予測し備えていたというのに…

自ら蘇るはずの羊の玩具も、その恐怖からか何故か蘇らず。３体の玩具を使って融合した【デストーイ・サーベル・タイガー】だけはどうにか戦闘破壊されることなく場に残ってはいるものの、その壊れか

けたぬいぐるみもまた、今にも体から綿を噴出して崩壊しそうではないか。

「…これで最後。【スクラップ・ドラゴン】で、【デストーイ・サーベル・タイガー】に攻撃。」

そして…

最後の攻撃の宣言を、鉄屑の虚竜へと告げた刀利。

咆哮と共に羽ばたいた鉄屑の竜の、その翼が羽ばたく度に軋みを上げ…体外で弾ける電光を体内へと収束させ、崩壊しかけのぬいぐるみへとその狙いを定め…

―それは、放たれる。

「崩壊の…デストロイ・ブラスター！」

―！

「くっ…か、鍛冶上いいいいいい！」

アイナ　ＬＰ…１００→０（―１００）

―ピー…

空で響いた天を裂く咆哮に混じり、デュエルの終了を告げる無機質な機械音がこの天空の回廊に響き渡り…

それは紛れも無い、ただ一人の勝者を称えていた。

―…

「…なんでや…なんで『まだ』勝てへんのや…『また』お前に負けて…」

デュエルが終わってすぐ。膝を突きはしないものの、視線を下げてアイナは力なくうなだれていた。

その小さく肩を落とした少女の姿は、華奢で小さな背丈と相まり、より一層その体を小さく見せてしまっていて…そんなアイナの口ぶりは、確かに今刀利に敗北は喫したものの、これまでも何度か同じようなことを行ってきたかのような雰囲気。

そんなアイナへと向かって…あれだけ嫌われているにも関わらず、刀利は静かに近づき声をかけた。

「…アイナ…大丈…」

「名前を呼ぶな言うたやろ！胸糞悪いわ、お前なんかに名前を呼ばれることが、この世の何よりも！」
「…ごめん。」

しかし、相も変わらず刀利の言葉を、どこまでもアイナは否定して。
伸ばされかけた手を思い切り弾き、どこまでも刀利のことを拒否し否定する。一見すれば意地を張っているだけのようにも見える少女のその姿は、その小さい容姿と相まって、とてもじゃないが歳相応のモノには見えないことに違いないことだろう。
一体、どうしてそこまで刀利の事を拒絶するのだろうか。
デュエルが終わっても収まらぬその憤怒のまま、アイナは喚きのような言葉を発して…

「あぁもうムカつく！ムカつくムカつくムカつく！お前みたいな奴が！ウチは一番ムカつくんや！昔っからそうや…何食わん顔で、自分だけ逃げて、ただ謝っとればいい思とる！そうやって全部…全部全部全部見下しとるんやろ！」
「…僕は別に…見下してなんか…僕なんかが…」
「あぁーもう！そういうトコがムカつくんや！」

何を言っても無駄、何をしても無駄。
アイナが刀利へと抱く感情は、刀利が絡んでいる限りは絶対に収まるモノでは無いのか。寧ろ、刀利が少女へと向かってその口を開くたびに、アイナの憤怒は増していくだけではないか。
無論、そんなコトは刀利だって理解しているはずではあるのだが…
それでも、アイナの憤怒を受けることを己の贖罪だとでも思っているかのようにして、刀利はただただそこに立っているだけ。

「もう限界やこのタコが…歯ぁ食いしばれぇ！」
「…」

そして…

アイナが徐に刀利の服を掴んだかと思うと、その小さい手で怒りのままに勢いよく刀利へと殴りかかった…

―その時だった。

「Ｈｅｙ、アイ！そこまでにしときな！」
「あぁ!?誰や！」

他の生徒など居ないはずのこの天空の回廊に、突然誰かの声が響き渡って。
また、突然かけられたその声に、アイも思わず刀利に当たる寸前でその手を止め…
声のした方へと顔を向けてみれば、そこには刀利たちの方へと向かって歩いてくる『２人の男女』の姿が。

「…チッ、またお前らか。」
「Ａｈ…『また』って何だよ『また』って。それはこっちの台詞だぜ。」
「また痴話喧嘩して、仲が良いことネ。」

そう言いながら近づいてきたのは、どこか歯の浮く口調で喋る、長身で金髪の体格の良い男子生徒と…
見るからに学園の制服では無い、体にピッタリと張り付いた特徴的な造りをした艶やかな赤いドレスを着た女生徒。

―リョウ・サエグサ

―王（ワン）　ミレイ

彼らの事を知らぬ生徒はこのデュエリア校には存在せず、この学園において、強者に数えられる実力者の２人。
何せ昨年度の【デュエルフェスタ】における『準優勝者』と『第３位』。それはつまり、この実力至上主義の決闘学園デュエリア校における完全なる上位のデュエリストと言うことでもあり…
昨年度『優勝』を果たした、この小柄なアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンと共に、決闘学園デュエリア校の頂点に立つデュエリスト達なのだ。
そんな彼らは、刀利たちの傍でその足を止めたかと思うと…
まずは長身で金髪の男子生徒、リョウ・サエグサが目下の小さな少女を見下ろしながらその口を開いた。

「学長に呼ばれたから来てみれば…アイにトーリ、お前らなーに派手にヤッてんだ？真昼間からそんなに盛んなよ。」
「…気安く話しかけんなゆーたやろ、この変態。」
「Ｏｈ、相変わらず随分な言い草だねぇアイちゃん。まっ、俺は構わないぜ？レディのお小言はご褒美だ。」
「キモいわ変態。」
「ＨＡＨＡＨＡ、もっと言ってくれてもかまわないんだぜレディ？」
「…話が通じん。これだから変態は…」

アイナの厳しく荒い口調をまるで意に介さず…いや、介してはいるが、『どこか違った解釈』をしているリョウ・サエグサ。
彼らのその様子は、その身長差と似ている髪の色も相まってどこか兄妹のような掛け合いにも見えるものの…
明らかに会話することを嫌っているアイナのその表情は、刀利へと向ける憤怒ではなく、心の底から軽蔑しているような眼差しでリョウを見ていて。

また、アイナに掴まれ殴りかかられていた刀利を、今度は王　ミレイがその豊満な肉体を揺らしながら引き剥がし…
そのドレスのスリット部分から、とても高校生には見えぬほどに育った艶やかな太ももを覗かせながら…刀利の崩れた制服を直しつつ、どこか呆れたような溜息と共に口を開く。

「…刀利君もムキになりすぎネ。アイのアレは子どもの癇癪、もうこれで何度目ヨ？」
「…ごめん。」
「ウンウン、いつまでもお子様の相手するコト無いネ。」
「…おいコラ待てや乳袋。誰がお子様やて？」
「ぺったんこは黙る良ろシ。」
「あぁ!?」

とても同じ学年とは思えぬ体型の差をした少女達の掛け合い。それにはアイナとて、思わず憤怒の矛先を変えてしまうしかないのだろう。
まるで条件反射のようにしてその怒りの矛先をミレイへと向け…今にも噛み付きそうなアイナの姿は、意地悪な年上にからかわれているかのよう。
そんなアイナの憤怒は、先ほど刀利に向けていたよりもどこか蒸発している様でもあり…横から他人が来たことによって、アイナ自身も水を差されたと感じているのか。
苛立ちからか、リョウとミレイ、そして最後に刀利を強い視線で睨みつけた後…

「…チッ、邪魔が入りすぎたわ。…、お前だけは絶対に認めんからな。【決島】でも、お前を一番に消したる。」

そう言い残したかと思うと、刀利にたった今負けた事などもう忘れてしまったかのようにして、アイはそのままどこかへと歩いて行って

しまった。

「…アイ、まだ中等部の時の事引きずてるノ？」
「…うん。」
「Ｂｕｔ、それはトーリもだろ？いい加減吹っ切ればいいってのに、いつまでも自分の所為だって。」

そして、アイナの姿が見えなくなった後。刀利へと向かって、どこか気を使っているような口調でそう声をかけた王　ミレイとリョウ・サエグサ。
その言葉はアイナのような憤怒でも、ましてや他の生徒のような侮蔑でも無く。
昨年度行われたデュエリアにおける一大イベント、【デュエルフェスタ】で上位を占めた彼ら。しかし、そんなデュエリアにおけるトップレベルの彼らの誰も、他の生徒達のように刀利を『雑魚上』だなどとは言っておらず。
…中等部の頃から、刀利の事を知っているからこそ。彼らも、刀利のその実力を知っている。
そして…その『過去』に何があったのかも。
そんな彼らは顔を見合わせて小さく溜息を吐いたかと思うと、更に刀利へと言葉を続けて…

「せっかくアオトとテツが全部『持っていって』くれたんだぜ？いつまでも引きずってると、『ホムラ』の奴も浮かばれないじゃん？」
「そうそう、アレは仕方無いコト…だからラ、刀利君だけの責任じゃ無いネ。」
「…うん。」

―『何で…何でこんな事に…刀利く…鍛冶上ぃ！お前の…全部お前

の所為でぇ！』

かつて、このデュエリアで起こったとある出来事。
果たしてそれがどんなモノだったのか、そして何が起こったのか。
それを知っているのはこのデュエリアに居る限られた者達だけとは言え、それでも確かにその戦いが、少年達の心に小さくない傷を残したことは先ず間違い無く…
その小さく無い出来事が、年月を経ても未だ少年達へと重く圧し掛かっていて、何時までも何時までも少年達を苦しめ続けていて。
彼らにとって、『大切な友』を一人失ったその出来事が、一体どんな結末をもたらしたのかは…

…また、別の物語。

—戦いの時は…もう、すぐ。

—…

「…あの子のあの憤怒…使えそうですね、ええ。」

小さく開いた扉の隙間から、視線だけを天空の回廊に覗かせてそう呟いたスーツを着た捻れた男のその言葉を…

「…ふふ…【赤き竜神】を我らの手に。」

聴いている者は、誰も居なかった。

――…

ｅｐ６６「少女の思い」

「…それで、転入生の釈迦堂　ユイを一週間ほど見てきたわけですが…どうです？釈迦堂　ランと何か関係はありそうでしたか？」
「いえ…その…」

終業式が先日行われ、夏休みに入ったばかりのとある日。
【決島】へ向けた修業のために、ルキと共にイースト校のスタジアムにまで足を運んでいた遊良へと、イースト校理事長、【白鯨】砺波　浜臣がそう問いかけていた。
…それは、先週転入してきた釈迦堂　ユイという、あの【化物】、釈迦堂　ランにそっくりな少女のこと。
終業式間近という変なタイミングで転入してきたということも不可解ではあるものの、それ以上に遊良や砺波にとっては、ランと血縁的に何の関係性も無い釈迦堂　ユイの容姿が釈迦堂ランにそっくりだったことの方が驚きだったことだろう。
何せ、驚異的な情報網を持つ砺波の手でさえ、釈迦堂　ランと転入生である釈迦堂　ユイには何の繋がりも見つけられなかったというのに…
まるで、釈迦堂　ランという存在その物をそのまま少々幼くしたかのようにそっくりな釈迦堂　ユイを見れば、それが他人だとは砺波には到底思えず。
そんな砺波の問いかけに対し、遊良はやや気落ちしたような声で返答して。

「…全くわかりませんでした。話しかけようとしても、探すとどこにも居なくて…気がついたら視界には居るんですけど、どうにも話しかけるチャンスもなくて…」
「ふむ…では高天ヶ原さん、女子の目線から見て釈迦堂　ユイはどう見えましたか？」

「え?･えーと…そう言えば誰とも一緒に行動してなかったし、いつも一人だった気が…」
「これと言って友人を作る素振りも無し…と言うわけですか。親しくなった学生から情報も得ることも出来なさそうですね。…となると尾行をつけるか…それとも、監視を強化するか…あれだけそっくりで名も同じ…あれで釈迦堂　ランと関係が無いなどありえない…」

何やら思考を始めた砺波ではあるものの、修業の合間、休みに入ったばかりで他の学生の気配もない学内で、その過激とも取れる砺波の思考は決して教育者としてのモノではなく…
しかし、他の学生や教師たちに聞かれることもないこの静かなスタジアムの中では、砺波もその『釈迦堂絡み』の過激な言葉を押さえるつもりもないのか。
まぁ、かつて苦渋を舐めさせられる所か、頭から思い切り苦渋をぶっ掛けられた相手と全く同じ容姿、同じ苗字をした存在が、急に手の届くところにあまりに唐突に現れたのだ。いくら先の『異変』を経て、己の『歪んだ憎悪』を正すことの出来た砺波とて…
本来の標的の手がかりが突然手元に舞い込んくれば、ソレをなんとしてでもモノにしようと躍起になったとしても、それは仕方のないことなのだろう。

「ねぇ遊良…理事長先生、何かちょっと怖い…」
「砺波先生、ランさん関係の事になると回りが見えなくなるからなぁ…」
「…何か言いましたか?」
「え、あ、その…」
「…何でもありません。」
「ふむ…まぁいいでしょう。これが君たちで手に負えるようなことでないことは確かだ。後はこちらで調査を進めておきます。」

…とはいえ、そんな姿いつまでも教え子に見せているわけにもいかず。
砺波はそう言った後に、咳払いを一つ零したかと思うと…どこか言葉を濁しつつも修業の続きに戻るかのように、目の前にいる教え子2人へと向かって再度その口を開いた。

「さて、釈迦堂　ユイの事はひとまず置いておいて…天城君、自分でも分かっているとは思いますが、君のデッキはまだまだ完成度が低い。」
「は、はい…」
「特に先日の新堂君との一戦を引きずっているのか、最近は防御面に力を入れすぎていて攻撃の手が甘い。確かに、以前よりは断然君のデッキも安定するようにはなってきましたが、ただでさえ君のデッキはバランスを取るのが難しいと言うのに、これではただ単にデッキの回転を落としているだけです。」
「それは…わかってはいるんですけど…」
「…最近の君には焦りも見えます。ですが、【決島】まであまり時間が無いとは言え焦りに囚われては己を見失うだけ。君のデッキはどういうデッキなのか、それを今一度考え直すこと。焦りは禁物です。いいですね？」
「…はい、砺波先生。」

先ほどまで行っていた修行の振り返りなのか。少々厳しい言葉をかけながら、遊良へと向かって淡々と告げる砺波。
そう、目下の目標はあくまで【決島】。
いくら目先に敵の手がかりが現れたとは言え、あくまでも遊良達の事を優先して考えている砺波の言葉は毅然として厳しく。
【決闘祭】に優勝したという触れ込みと、【決闘世界】側からの遊良への不審、そしてルキの『赤き竜神』を狙っているであろう『敵』の事を考えると…いくら成長著しい教え子とはいえ、砺波から見ればまだまだだということなのだろう。

「…逆に高天ヶ原さんの成長は目を見張るモノがあります。飲み込みも早く筋も良い。さすがは『神』に選ばれた者といえますか。」
「え!?あ、ありがとうございます…」
「まだ荒い部分もありますが、この調子だと『神』の力も暴走すること無く【決島】を戦い抜けるでしょう。いえ、寧ろかなりの成績を残せそうな勢いです。…もっと早くに鍛えていれば、【決闘祭】の結果も分からなかったかもしれないというのに…勿体無いことをした。」
「…えっと…」

対して、これまであまり実力を発揮することも許されなかったが故に、褒められ慣れていないのか思わず戸惑いの声を漏らしたルキ。
砺波も、ルキを褒めたことは決して遊良への皮肉と言うわけではないのだが…
『神』のカードを持っていることが関係しているのか、それとも元からかなりの才能を持っていたのか。ルキの持つ才覚が、遊良や鷹矢と比較しても相当なモノなのだと言うことを砺波もこれまでの修業で把握したのだろう。
元シンクロ王者【白鯨】の目から見ても、目を見張るほどのセンス。『事情』があったとは言え、これまで埋もれていたのが悔やまれるほどに…修業を通じて、ルキの持つ潜在的な実力の片鱗を深く感じ取った様子で。
「後は天宮寺君ですが…彼はまぁ、特別何かを教えずとも、放っておいても勝手に強くなるでしょう。アレはそういう『人種』だ。…本当に鷹峰にそっくりです。」
そして最後に、この場に居ないもう一人の教え子のことを、やや呆れた声で砺波はそう呟いて。
遊良やルキのように、自らが直接鍛えるのではなく。夏休みの期間

に開催される各地の大会に、片っ端から出場させて鍛えるという、どこか趣旨の変わった鷹矢の修業。
その意図は砺波にしか分からぬモノではあるものの、【白鯨】に何らかの思惑があって鷹矢にソレを課しているというのは明白であり…
また、砺波が零したその言葉は、好敵手であったエクシーズ王者【黒翼】の姿を重ねているかのようにも聞こえるモノ。
まだまだ荒削りで祖父ほどの力は無いとは言え、鷹矢のあまりの傍若無人ぶりと他人を恐れぬ唯我独尊な立ち振る舞いは、祖父に匹敵するほどのモノとも砺波は感じているのか。
鷹峰に頼まれたとは言え、あの【黒翼】が鍛えた3人の弟子を、今度は自分が教えているということに対し…
砺波は、どこか複雑な感情を織り交ぜながら、更に続けて言葉を発した。

「…しかしこの私が、まさか鷹峰の弟子を3人も鍛えることになるとは。人生何があるか分からないモノです。」
「あの…理事長先生って、せんせ…えっと、鷹峰先生と仲が悪いの？」
「そうですねぇ…難しいですが、決して仲が良い…と言うわけではないでしょう。何せ、昔から顔を合わせれば衝突ばかりしていましたから。あの傍若無人な馬鹿は自分勝手に振る舞いすぎる。おかげで、過去に私が何度あの馬鹿の所為で被害を被ったことか。」
「あー、先生らしい…鷹矢も遊良に対しておんなじ感じだもんね。」
「…そうだな。」
「…まぁ、私の事はどうでもいいでしょう。それより問題は君たちです。天城君はデッキの完成度を高めること。高天ヶ原さんは『神』の力のコントロール。当面は、それを更に鍛えていく予定です。」
「はい。」
「はーい。」

目前まで迫った【決島】へと向けて、まだまだやるべき事は多い。
暑い夏の日差しが、迫り来る【決島】への不安を掻き立てるかのよ

うにして更に熱く燃え上がり…
『赤き竜神』を狙ってくるであろう『敵』の事。【堕天使】を失ったことによる遊良の焦り。順当には見えるものの、まだ己の内なる力を抑え切れていないルキの力の暴走の懸念。
各々がそれぞれの課題と向き合いつつ、来たるべき【決島】へと向けて…
その意思を、向けていた。

―…

「あ、そういえばさ、鷹矢っていつ帰って来るんだっけ？」
「明日一回帰って来るってさ。んで一日休んだら、また一週間色んな大会に行くって。」

今日の修業を終え、イースト校からの帰り道。
夕刻だと言うのに未だ太陽の日差しが健在の暑い住宅街の中を、遊良とルキはそれぞれの自宅へと向けて歩いていた。

「でもビックリだよねー。あの鷹矢がさぁ、大人しく理事長先生の言う事聞いて、色んなところに一人で修業に行くなんて。子供の頃も先生に文句ばっかり言ってさ、よく大会すっぽかしてたじゃん。」
「…修業に出る前も結構文句は言ってたけどな。でもどうにも砺波先生には逆らえないんだって。『身内じゃない分、ジジイよりも性質が悪い。』…ってさ。」
「ふーん。…あ、でもさ、遊良も鷹矢の面倒見なくて済むから、少しはゆっくり出来るんじゃない？ほら、遊良いつも家事とか鷹矢の世話とかで忙しいから。」

「…いや、夏休みに入ってから砺波先生の課題が増えてるから、寧ろ学校ある時とそんなに変わってない気がする…それに、あの馬鹿が一人で宿題終わらせるとは思えないし…はぁ、また最終日に徹夜で宿題させないと…」
「…今年はウチに泊まる？遊良が居なかったら鷹矢もさすがに焦るんじゃ…」
「…そうなったら、宿題抱えてルキん家に突撃してくるだろあの馬鹿。」
「あー、やりそう。『ルキにも手伝ってもらえて今年は楽勝だな！』とか言いそうだし。」
「まぁどうにかするさ。ルキの親にも迷惑かけるわけにはいかないしさ。」

鷹矢への愚痴と他愛の無い日常の会話を織り交ぜ…いや、ほとんど鷹矢の話題を繰り広げながら、ゆっくりと帰路を歩く二人。
一人だけ別の修業を言い渡されている、ここに居ない鷹矢の事を口々に。
その足取りがどこかゆっくりしたモノとなっているのは、果たして暑い日差しの所為か、それとも激しい修業の疲れからなのか、それとも無意識に会話を長く続けたいが為なのか。
暑い日差しの中を、ゆっくりと並んで歩いて話し続ける。その距離は近く、お互いがお互いに気を使っていないことの証明とも言える距離で。

「ここでいいよ。送ってくれてありがと。」
「あぁ。それじゃあな。」
「うん、また明日ね。」

そうして…
ルキの家の門の前で別れの挨拶を交わし、そのまま更に自らの帰路へと戻った自分の背中を…ルキが静かに見つめていたことに、果たし

て遊良は気が付いていただろうか。
一体、少女のその瞳には遊良の背中がどう映っているのだろう。
夏休みが始まってから…いや、それこそ先日に【堕天使】を失ってから、これまでずっと修業と課題を繰り返しているために、一向に気を休める暇が無い遊良。
その遊良の背中には、確かに強い疲労の色が見えており…
少なくとも遊良を見つめているルキの目には、【決島】への焦りもあるのかこれまで以上に疲弊している遊良の姿が、どこまでも心配なのだと言わんばかりの感情が浮かんでいる。
…まぁ、未だ完成には至っていないデッキの調整に、レポートという名の砺波からの課題。明日には帰って来る鷹矢のための飯の仕度に加え、主婦張りの毎日の家事と、とにかく一介の学生以上に働いている遊良なのだからそれも当然ではあるのだが…
…Ｅｘ適正が無いと宣告されてから、地獄のような生活を送ってきた所為か。色々な事を一人で無理に背負い込む節がある遊良。
それでも来たるべき【決島】に向けて遊良自身が『やる』と決めてしまっている以上、自分が何を言っても無駄なのだと言うことは、彼女だってこれまでの経験から身に染みて理解していて…
だからこそ、心配こそすれ無理にソレを止めることをルキは好まず。そんな遊良の性格を誰よりも理解してあげたい彼女だからこそ、どこまでも遊良の身を案じながらも共に同じ世界を見たいと思ってしまうだろう。
―幼馴染としてこれまでずっと共に過ごして来た、共に生きてきた、そして命を救ってくれた大切な存在。例え、世界の全てが彼を見放しても…自分だけは遊良の傍に居続けると、そう誓ったのだから。
故に、そんな無茶を続ける遊良のことが、どうしても心配でたまらないといった表情をルキは崩すことが出来ず。
そのまま遊良が曲がり角を曲がって、その姿が完全に見えなくなってから…ようやく、ルキは自宅の扉を開け、家の中へと入った。

「…ただいまー。」
「あら、おかえり。今日は早かったのね。」
「うん、理事長先生がこの後仕事だから今日は早く終わったの。」
「…そう。あれ、遊良君は？今日も晩御飯一緒に食べていくと思ってたんだけど。」
「帰ったよ？鷹矢が明日一度帰って来るから、今からご飯の準備しておかないとうるさいんだって。」
「…遊良君も大変ね。じゃあ先にお風呂入ってきなさい。汗かいてるでしょ？」
「はーい。」

迎えてくれる母のいつもの声に安心感を覚えつつ、荷物をリビングのソファーへと投げると、そのまま浴室へと向かうルキ。
夏真っ盛りのために、夕刻とは言えまだ明るい外界と浴室との対比にどこか違和感を感じながら…デュエルの疲れと外の気温の所為で纏わり付いたそのジメジメとした不快感から体を解放して。
一糸纏わぬその姿で、そのままぬるいシャワーを全身に浴びその不快感を洗い流し、真っ赤な髪を湯船に浮かしながらゆっくりと湯に浸かり…
そのままほっと一息つきながら、今、少女は一体何を思い浮かべているのだろう。

「はぁ…疲れたぁ…」

湯船の中でその零れたその吐息は、意図して漏らしたモノではなく…
一息つけた安堵からか、湯に包まれている暖かさからか。
浴槽の中で手足を伸ばして思わず零れてしまったソレは、今日の修業の疲れからだけではなく、最近になって立て続けに起こる様々な出来事への疲れも含まれているようにも聞こえる溜息。
しかし、ルキが意図せず吐息を漏らしてしまったのも仕方がないこ

とだろう。

…何せ、去年から本当に色々な事がありすぎた。

高等部に入学してまもないと言うのに正体不明の人形のような男に命を奪われそうになったと思えば、遊良が突然それまで持ってもいなかった【堕天使】のカードを使うようになり…

何もしていないのにも関わらず遊良が【白鯨】から一方的な敵意を向けられて退学にさせられそうになったり、遊良が【決闘祭】に優勝してソレを撤回したのも束の間、決闘市に実体化したモンスターと凶暴化した住人で溢れ、新年から街が混乱の渦に巻き込まれたりもした。

…また、それだけでは終わらず。

そんな激動の一年をどうにか終え、やっと落ち着いたと思った矢先に、今度は遊良が何者かに襲われ【堕天使】を無くしてしまった。

その所為で、一時的とは言え自暴自棄になってしまった遊良の姿は、ルキにとっても辛い出来事だっただろう。そんな遊良も、新たに遊良の師となった【白鯨】のおかげで何とか立ち直ったかと思えば…

今度は中止になってしまった【決闘祭】の代わりに、他国『デュエリア』と合同開催で【決島】という名の祭典の開催が決まり、そしてまさかソレにルキまでもが代表としてエントリーされたのだ。

「【決島】…かぁ。」

欲しくもなかった『神』の力の所為で、自分には縁が無いとまで思っていた『祭典』に、まさか自分が出場できるだなんて。その知らせは、彼女にだって思いもよらなかったことに違いなく。

—初めての大会
—初めての試合
—初めての舞台。

遊良と、鷹矢と。幼馴染二人と『一緒』に参加できる初めての機会。
子どもの頃には考えられなかった…いや、つい先日まで考えることすら許されなかったその夢が、ついに叶うというのだ。

…それが例え、自分が持つ『神のカード』を狙った企みの末の一手だったのだとしても。

これまでずっと我慢してきた、これまでずっと耐えてきた、これまでずっと抑えてきた気持ち。自分だって遊良や鷹矢のように、思い切りデュエルがしたいという彼女自身の意思。
この時になってソレが『初めて』叶うかもしれないという僥倖、その二度は無いかもしれないこんなチャンスを、欲しくも無かったこんな『神』の力の所為で無碍にされるだなんて、彼女自身が納得できるはずも無いのだから。

まぁ、案の定【決島】への出場の意思を両親に伝えたところ、父と母が口を揃えて表情を変えて猛反対をしてきたのだが…
幼少の過去に一度誘拐されたという出来事もあり、『神のカード』を狙っている敵がいるかもしれないということは両親にとっても容認できる問題ではなかったのだろう。
しかし、娘のあまりの熱意に負けたのか、それとも全ての事情を知る【白鯨】からの直々の説明が効いたのか。
【白鯨】の特訓の元、『神』の力をコントロールしながらデュエルが出来るようになるという保障と、体が『危なく』なった時には何があっても棄権すると言う約束。そして『絶対』に安心できる警備体制を【白鯨】が取るという盟約の下で、最後まで出場を許可しなかった両親もどうにか渋々娘の参加を許可してくれたのだ。
故に…

「…楽しみだなぁ。」

「ルキー、いつまでお風呂入ってるのー？そろそろお父さん帰って来るからご飯にするわよー。」
「あ、はーい。」

大きな戦いの前、もしかしたら自分の身に危険もあるかもしれないと言うのに。
どこか心が躍る感覚と共に、ルキの言葉にはあまりに目まぐるしく過ぎる濃い日々にも負けない意思が宿っていた。

――…

『…それで鷹矢のヤツ、帰って来るのが一週間ぶりだからって、『カレーを大量に用意しておけ！』ってうるさくてさ。おかげでまだ仕込みが終わらないんだぜ？』
「…遊良もスパイスから仕込むからでしょ、もう。ホント昔から料理に凝るんだから。」

太陽も完全に姿を落とし、すっかり夜も更けた時間。
あとは寝るだけという格好で自室のベッドで寝転がっているルキは、一日中一緒に居たというのにも関わらず、遊良とデュエルディスクの電話越しで話しをしていた。
『いや、だって先生が『市販のルーなんか食えるか！』ってうるさかったじゃんか。おかげで鷹矢まで味にうるさくなりやがって。』
「確かに遊良のカレー美味しいけどさ。でも理事長先生の課題もある

んだし、いい加減にしときなよ？」
『…そうだな。』

他愛ない会話、目的の無い通話。ただ、二人で話しをしているだけ。
まるで、時間がとてもゆっくりと過ぎているかのような錯覚を覚えながら…会話を続けるルキの心には、回線の向こうに居るカレー作りに夢中になっている遊良の姿を、いとも簡単に思い浮かんでいる。
…【白鯨】との修業が始まってから、以前にも増して遊良とこうして話す事が増えた。
確かに以前は無かった変化。ずっとこれまで共に過ごして来た幼馴染達とは言え、鷹矢が居ない二人だけの時間がこれほどまでに存在するなんてルキにとっても初めてのことであり…
別に鷹矢が邪魔だとか、そう言った類の話ではないのだが、常に遊良と共に居る鷹矢が一週間もこの地を離れていること自体が珍しいことなのだ。
だからこそ、どんな他愛ない話でも、きつい修業の話でも。
うつぶせになって足をバタつかせながら、遊良とこうして緩やかに通話している時間に、いつも以上の安心を感じている様子をルキは見せていて。

『まぁでも、釈迦堂　ユイの事は砺波先生が自分で調べるって言ってくれたし、これで少しは楽になったけどな。一つやることが減っただけで随分と楽になった。』
「…あー、うん。…そうだね。」

しかし…
遊良の口からある人物の名が出たその瞬間。今までスムーズに出ていたはずの言葉に、少々の引っかかりを覚えてしまった様子のルキ。
それが決して意図して発した声ではなかった分、ルキ自身も今の自分の言葉の変化に少々の驚きを覚えたのだろう。

その証拠に、電話の向こうで喋っている遊良の言葉が頭に入ってこず、ルキは何やら頭の中で何かを考えている様子を見せており…
そう、最近の遊良は、転入生の釈迦堂　ユイという少女の事で砺波と話していることが多々あるのだ。
『ソレ』が理事長からの命令だと言うことはルキとて分かってはいるものの、何故か遊良が一人の少女のことを追いかけているというこの現状が、どうにも彼女の心に上手く言い表せないモヤモヤとしたモノを与えているのか。

「…なんだろ、何か変な感じ。」
『ん？何か言ったか？』
「え!?あ、う、ううん、なんでも…なんでもないから！」

以前は感じなかった、最近になって感じるようになった奇妙な感覚。
ソレが一体何なのか。遊良と鷹矢と『３人』で一緒に居る時には感じないこの不思議な感覚が、一体どこから来るモノなのか。
その感情の正体が何なのかを知らぬ少女の心には、この感じたことのなかった感情にただ戸惑うしかなく…

『…まぁいいや、じゃあまた明日な。夜更かしして寝坊するなよ？』
「鷹矢じゃないんだから大丈夫。遊良こそ、料理に夢中になって課題するの忘れないでよね？ただでさえ１０時にはスイッチ切れちゃうんだから。」
『…おう。』
「あ、でももし遊良が寝坊したらちゃんと起こしに行ってあげるから心配しないでね。ほら、昔から鷹矢起こすの得意だったし。」
『…ルキの起こし方は雑なんだよな。』
「何か言った？」
「いや、別に。じゃあおやすみ。」
「はーい、おやすみー。」

そうして…
通話を切り、ディスクをベッドの端へと投げると、そのまま天井を見上げるようにして仰向けになったルキ。
途切れた通話の余韻の所為か、急に静かになった部屋の中で感じる、耳鳴りにも似た『静けさの音』が彼女の耳に反響し…
そんな静けさの音と、不意に感じたモヤモヤとした感情を無意識に掻き消すかのようにして。
他には誰も居ない自分の部屋の中で一つ…
ルキは、ポツリと言葉を漏らして…

「…はぁ。ホントなんなんだろ。」

一体、いつからこんな感覚が襲いかかるようになったのだろうか。
…確か、遊良が『フードの男』とやらに襲われて、【堕天使】を失って自暴自棄になってしまったのを見た後からだった気がする…と、ゆっくりと感情の出所を探る少女の頭の中には、過去の絶望していた遊良の姿がどこまでも痛々しく浮かび上がってきているのだろう。
哀れみではない。遊良は、ちゃんと自分の足で立ち上がったのだから。
嫌悪でもない。例え遊良が再び孤独になりかけても、傍に居続けたいと思う気持ちは変わらないから。

故に、これまでの人生で感じたことの無い不思議な感情に戸惑いつつ、その感情をゆっくりと考えているのか。
切ったばかりの電話の画面を見つめつつ、彼女自身も気付いていないその呟きを、聞いている者はこの部屋には誰も居らず。
幼馴染として、傍に居ることが当たり前だったが故なのか…このモヤモヤとした気持ちが何なのか、最近になって特によく感じるようになったその感情の名前を未だ知らぬ少女の心には…
上手く言葉に出来ないモノが、その胸の内で渦巻いていた。

ｅｐ６７「邂逅」

夏も本格的に始まり、太陽がその日差しを激しく燃やし街の気温を上昇させている、そんなとある日のこと。

『ななな…何と言うことでしょう！今だかつて、こんな事があったでしょうか!?』

決闘市と国を同じくしている『とある都市』のスタジアムから、焦りのようなモノを孕んだ実況の声が鳴り響いていた。

その実況の声は、どこか大げさなようにも聞こえるモノではあったものの…

――――――

「そんなわけ無いだろう！速攻魔法【リミッター解除】発動！」
「な!?」
―!!!
「ぐ…うぉっ!?」
新人プロ　ＬＰ：３６００→１８００→１２００→１０００
そして大きく削られる新人プロのＬＰの減少音に呼応するように、更に盛り上がりを見せていく観客達。
先ほどまでは、確実に新人プロが押しており…
それこそ、このデュエルが始まってからずっと、新人とは言えプロらしく相手の学生を圧倒し続けていたというのに…
しかし、プロとは言え新人だったからか。一瞬だけ見せてしまったその油断の、僅かに生まれた隙をこの『学生』は見逃さず。
その隙を逃さず突くことによって、今まさにプロが押していたというこの戦況が、全てひっくり返りそうになっているのだ。
―!!!!!!!!!!
そんな怒涛の攻撃を見せるこの『学生』のデュエルには、観客達も盛り上がりを押さえきれないかのようにして更にその歓声を大きくしていき…
観客達のその視線は、『学生』にも関わらずその高名な苗字と相まって、あまりに堂々とした立ち振る舞いを魅せる一人の少年へと注がれていて。
「くそっ、【黒翼】の孫だからって、学生の癖にここまで…」
苦々しくそう呟いた新人プロの言葉は、その『名』と相まって学生

相手に押されていることを悔しがっているかのよう。

…そう、『学生』とは言え、彼の視線の先に居るその少年の、生まれ持ったその『名』はあまりにも高名。

昨年度の決闘市にて行われた【決闘祭】において、1年生にしてその『名』に恥じぬ成績を残したこの学生。

その『名』が決闘市から遠く離れたこの『とある都市』だけではなく、世界中にその『名』を知らぬ者など居ないからこそ…

誰もがその『名』を持つこの学生の躍進に、これだけの歓声を上げていることに違いなく。

そう、今この大会で、プロを相手に引かないどころか優勢を見せているのは紛れも無い。

エクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰の孫として知られる…

―決闘学園イースト校2年、天宮寺　鷹矢だったのだから。

「ぐっ…でも残念だったな！いくらお前が【黒翼】の孫って言ったって、これでお前のバトルフェイズは終…」

「まだだ！更に罠カード、【ワンダー・エクシーズ】発動！このバトルフェイズ中にエクシーズ召喚する！俺はゴールドとシルバー、二体のガジェットでオーバーレイ！」

「なんだと!?」

押されていたにも関わらず、プロ相手に恐れも無く。

鷹矢のあまりに堂々としすぎている立ち振舞いは、この若きプロだって思いもよらなかったことだろう。

いくらこのプロデュエリストが、デビュー2年目の未だ新人と言える立ち位置に居るとは言え…

この若きプロデュエリストだって、あの厳しいプロ試験をクリアし

てその道に踏み込んだ、自他共に認める確かな強者であるはずというのに。
プロに『なるだけ』でも、相応の実力や相当の運を必要とするにも関わらず…
まだ学生の、それもまだ2年生という若さでここまでの勢いを見せつけてくる天宮寺　鷹矢のその姿は、このプロの目から見てもただただ『脅威』の一言であって。
「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれ！エクシーズ召喚！来い、ランク４！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」
―！
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
そうしてこの場に現れしは、祖父から受け継ぎし鷹矢の『切り札』。
天に轟く牙竜の咆哮は、圧倒的熱気に包まれているこのスタジアムの空気を切り裂くようにその黒き翼を広げ…
空に咆哮を轟かせながら、その牙を高々と煌かせていて。
新人とは言え、相手はプロデュエリスト。
鷹矢も、自分のＬＰが残り『２００』というギリギリの場面まで追い込まれているからこそ。やっと巡ってきたこの最後のチャンスで、一気に攻めきり勝負を決めにかかるつもりなのだろう。
「ぐっ!?ま、孫が【黒翼】を召喚できるって噂は本当だったのかよ！けど罠カード、【激流葬】発動！全てのモンスターを破壊する！」
―！
しかし、学生相手に一瞬の隙を突かれたとは言え、【黒翼】に呑まれ

ることなく反撃の一手を放てる辺りはさすがにプロか。
即座に激しい奔流のうねりを呼び出し、鷹矢の場のモンスターの全てを飲み込み破壊していく若きプロ。
世界に名立たる王者【黒翼】の、象徴とも言えるその『名』が目の前に降臨しても…その相手が覇道を歩む【黒翼】本人ではなく、その『孫』だったからこそ、【黒翼】に気圧される事無く手を打つことが出来たのだろう。

「よし！これで次のターンに…」
「うむ！最後の伏せカードを使うのを待っていたぞ！これで全ての邪魔が消えた！罠発動！【エクシーズ・リボーン】！」
「なにっ!?」
「貴様がやっと隙を見せたのだ、ここで終わらせる！蘇れ！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

しかし…そんなプロの抵抗を、鷹矢は更に超えにかかって。
墓地から再び舞い上がる、天に羽ばたく漆黒の翼。
バトルフェイズの為にその効果を発動することは叶わぬものの、しかし既に場は激流の後のために、【黒翼】以外のモンスターは存在すらしておらず…
また、最後に賭けていた罠を躱され、もう守る札の全てを使い切ってしまった若きプロには、最早目の前の【黒翼】の攻撃から身を守ることは敵わないことなのか。
「ぐ…ぐぐっ、くっ…そっ…」

この男もプロとは言え、未だ経験の浅い新人。
歴戦には程遠い、まだ若いが故の焦りと共に…

プロの身としては絶対に出してはいけない、どこか諦めめいた声が新人プロの口から漏れ出てしまい…

「これでトドメだ！【ダーク・リベリオン】でダイレクトアタック！」

翼を広げ、紫電を纏い、牙を轟かせ羽ばたく【黒翼】。
たとえ使い手が孫だったとしても、風を切りながら敵へと迫るその迫力は世界に名立たる【王者】の姿そのまま。
神すら喰らわんとする、唯我独尊なる咆哮と共に…

―鷹矢は、叫ぶ。

「断ち切れ！斬魔黒刃、ニルヴァー・ストライク！」

―！

「ぐ…ぐあぁぁぁ!?」

新人プロ　ＬＰ：１０００→０（―１５００）

―ピー…

『決まったぁぁぁぁ！まさかのプロを押しのけ！優勝したのは決闘市からエントリー！決闘学園イースト校２年！天宮寺　鷹矢選手だぁぁぁぁぁぁ！』

―!!!!!!!!!!

無機質な機械音が鳴り響いたと同時に叫ばれた、興奮に塗れた実況の声。
それに呼応するかのように観客達もまたその興奮を坩堝へと押し上げていき、学生ながらもプロをどうにか打ち破った天宮寺一族の若き天才へとその歓声を届けていて。

「くそっ、学生相手に負けちまった…【黒翼】の孫だからって…」
「その言われ方は好きでは無いのだが。…まぁいい。とりあえず良い経験にはなった。」

興奮に包まれたスタジアムの中央であるにも関わらず、不遜な態度を鷹矢は崩さず。
驕っているわけではない。彼にとっては、例え相手がプロであっても…そう、誰であっても、その態度を変えるつもりはないのだ。
…そんな鷹矢の姿は、たった今対戦していた若きプロの目にはどのように映ったのだろう。
大歓声の中、どこまでも堂々と立っている鷹矢へと向かって…
若きプロは、苦々しげにその口を開いた。

「…お前、プロになる気はあるのか？」
「うむ。」
「ちっ、ただでさえ怪物の巣窟だってのに、お前みたいな新人がどんどん入って来るし、今年の学生上がりの奴らも軒並み成績上げてきてるし…あーあ、【黒翼】の孫ってだけで羨ましいってのに、ホント嫌になりそうだぜ。」
「…ふん。」

若き新人プロの放った、そのプロが故の『後がない』様なその言葉に対し…
鷹矢は、一瞥のみで背を向けてその場を後にし始めて。

その後姿は、優勝したというにも関わらずどこか不機嫌そうにも見えるモノであり…それはきっと、たった今新人プロが放った言葉が鷹矢の癪に障ったからだろう。

―王者【黒翼】の孫

それは、世間の他人からしたら羨ましくも輝かしい称号。
天宮寺　鷹峰が【黒翼】と呼ばれる由縁である、【黒翼】にしか召喚出来ないはずの『ダーク・リベリオン』のカードも直々に渡されていて、そして何より祖父から受け継いだ才能の高さは世間の目から見ても明らかなほど。
…しかし、それは鷹矢からすれば忌むべき称号。
世間が抱く【王者】とその家族のイメージなど、その『本人達』からすれば全くの虚像。
勝手すぎる筆頭の所為で、これまで多大なる迷惑を被ってきた天宮寺家の人間からすれば…
世間が羨むようなモノなど何一つとして存在しないのだということを、声を大にして言いたいことなのだから。

「…ジジイなど関係ない。俺は俺だ。」

プロに勝ったというにも関わらず、どこか不機嫌そうに呟かれた鷹矢のその言葉はこの場の大歓声に掻き消されていき…
ソレを聞いている者は、この場には誰も居なかった。

―…

「…うむ。夕方の便で帰るから着くのは夜になる。」
『はいはーい、じゃあ遊良に伝えておくね。』

表彰式も終わり、興奮の残響も落ち着いてきたスタジアムの、その控え室でのこと。
昼過ぎと言うこともあり、選手用に用意されていた弁当を余分に3人前ほどたいらげた鷹矢は、修行中で電話に出られないと言う遊良に変わってルキと電話越しで話をしていた。

「晩飯の準備もしておけと言っておけ。夜は食わずに帰るつもりだからな。」
『え!?どうしたの鷹矢！鷹矢がいつもの時間に晩ご飯食べないで帰ってくるなんて!?』
「…わめくな。さすがに外食も飽きただけだ。量も少なく味も似たようなモノばかりでいい加減食い飽きた。」
『理事長先生にお金出してもらってるくせに贅沢なんだから、もう。』
「ふん、この俺が嫌々言いつけを聞いてやっているのだ。それくらい当たり前だろう。」

そんな鷹矢の声は、彼にしては珍しく疲れを含んだような声質となっていて…
まぁ、前日行われた予選、そして二日目に行われた本選の全てがプロ、そしてプロに近い相手だったのだから、鷹矢のその疲労も至極当然なことなのだが。
しかし、それ以上に我が道を突き進むことを信条としている鷹矢にとっては、命令とは言え他人に強制されたことをさせられていることが最も我慢ならないことなのか。
幼少の頃、祖父に同じ様な修業を強要されていたからこそ、その面倒臭さは重々承知しており…

それでもその命令を下した相手が、祖父と同じ頂に立ったあの【白鯨】であったからこそ、鷹矢と言えども今は大人しく言う事を聞いているのだろう。

―それは、【王者】を祖父に持っている鷹矢だからこその勘。

あのレベルの者達が、遊良やルキに課した修業とは違う方法を自分に課すという事は…それ自体に、何かしらの『意味』があるのだろうということをなんとなくの感覚で察知している様子。

『おわぁぁぁぁぁぁ!』
「…なぁルキよ、今…遊良の悲鳴のようなモノが聞こえたのだが…」
『あー…えっと、今サウス校に来ててね、サウス校の理事長先生と遊良がデュエルしてるんだけど…ちょっと凄いことになってて。』
「…そっちも相変わらず無茶をやっているようだな。まぁいい、カレーは先週食ったから今日は肉がいい。ハンバーグが食いたいと遊良に言っておいてくれ。」
『はいはい、遊良がイイって言ったらね。じゃあ鷹矢も気をつけてねー。』
「うむ。」

そうして…
電話の向こうの遊良の悲鳴から何かを察しつつも、小さく息を吐きながら鷹矢は電話を切って。
ゆっくりと溜息を吐いた彼のその顔色は、確かな疲労を感じさせており…重い体をどうにか動かし、一週間ぶりにやっと家に帰れるということだけを支えにして前日と本日の試合をどうにか乗り切ったのか。
しかし、鷹矢の疲労も尤だろう。

―夏休みが始まって二週間。

休み前に理事長に言いつけられていた通りに、自らの『修業』と称して決闘市内外のあらゆる大会に片っ端から出場していた鷹矢。
…その姿は、無尽蔵とも思える体力を持つ流石の鷹矢を持ってしても限界が近い様子。
まぁ、どの大会もプロ、もしくはソコに近いプロ候補生達が実力を試すために出場するような大きな規模の大会ばかり。
故に、体力だけではなく精神の磨耗も今までの比ではなかったことに違いなく…
また、夏休みが始まってからこれまで、家に帰れたのは先週にたったの一日だけ。
幼少の頃から、枕が変わるだけでも寝つきが悪くなる鷹矢からすれば、ここまで家に帰れないことは本当に苦痛で仕方がないことと同義。
食事と睡眠とデッキ調整以外の時間は、ほぼ全てをデュエルに費やしているのだ。
オマケに、家に帰れば遊良に宿題をさせられてしまい…こんなスケジュールでは、例え鷹矢とは言えその顔色に疲労の色を見せてしまっても、それは仕方のないことだろう。
「…やっと帰れる…ホテルはもううんざりだ。枕が変わるだけでも不快だというのに、肌に合わんベッドでなど休んだ気もせん。」
そして一言そう呟いた後、鷹矢は控え室から出るために、少ない荷物をさっさとまとめ始める。
心の底から早く帰りたいという気持ちを全面に押し出しながら、一刻も早く自宅のベッドで眠りたいという気持ちを万遍に抱きながら。
控え室を出て、疲労が重なり重くなった体を前へと進め…遠く離れた決闘市にある自宅へと帰るために、関係者入り口から外へと向かおうとして。
幼少の頃にも、数々の大会に無理やり出場させられるといった、ど

こか腑に落ちない修業方法を祖父に取らされたことがある鷹矢ではあるが…今回の【白鯨】からの修業内容はわ大会の規模も大きく実力も段違いに高いモノばかりであると言う、幼少の頃とは比較にならないくらいに多忙なもの。

まぁ、それだけ幼少期と今では鷹矢の実力も格段に上がっているということなのだろうが…

それでも渦中の鷹矢の気分は、自分一人だけが決闘市を離れて色々と大変な目に遭っていることが不満も不満で仕方がない様子。

遊良の飯も食えず、自宅のベッドでも寝られず…更には出場するどの大会でも【黒翼】の孫と言う肩書きの所為で、主に新人プロ達から苦言を漏らされているのだから、それを聞かされる鷹矢からすればストレスが溜まって仕方がないのだ。

「帰ったら次の出発までは絶対に起きんぞ。遊良にもそう言っておかねば。せっかくの休みにまた宿題をさせられてはたまらん…」

それゆえに、疲れに疲れた鷹矢が文句を口々にしながら…

会場の関係者出口から、外へと出ようとした…

—その時だった

「…む？」

唐突に、突発に、突然に。

ついさっき電話を切って仕舞ったはずのデュエルディスクから感じた、微かで不可思議な一瞬の『疼き』。

その一瞬の『疼き』に気が付き、鷹矢は思わずその場に立ち止まってしまって…

それは、着信やメッセージの通知と言った、機械的な震えの類ではない。
心に直接訴えかけてきているかのような、心臓を直接くすぐられているかのような…そんな形容しがたい不思議な感覚が、デュエルディスクの中から急に沸き起こったのだ。
まぁ、普通だったらそんな一瞬の疼きなど、勘違いか気のせいと切り捨てて気にも留めないことなのだろうが…

…しかし、その疼きの『正体』を、鷹矢は知っている。

なにせ、今でこそ『大人しく』はなったものの、昨年の夏休みはこの『疼き』と全く同じモノを鷹矢は常に感じていたのだから。

それは…

「…【Ｎｏ．】のカードが…震えている？」

デュエルディスクを取り出し、そのＥｘデッキの部分を開け、一枚のエクシーズモンスターのカードを取り出した鷹矢。
それは、この世に存在しているどのエクシーズモンスターとも違う『名』を持つモノであり…
昨年度の【決闘祭】において、鷹矢が『闇』を用いて『白紙のカード』から創造したモノ。

―【Ｎｏ．】

人を飲み込む『闇』、そしてソレを餌として欲し、鷹矢が己の身の内に溜め込んだ『闇』を喰らって生まれたカード。
その正体も、ソレが何故『闇』を喰らうのかも全てが不明ではあるものの、決闘市から『闇』が消えた今ではすっかり大人しくなってい

た、世界中でも鷹矢だけが持つエクシーズモンスター。
しかし、一体何故このタイミングで再び【Ｎｏ．】が胎動したのか。
一時は鷹矢すら飲み込まんとして暴れたソレではあるものの、決闘市で起きた先の『異変』で紫魔家の者たちが所持していた大量の【闇】を喰らって満足したのか、最近では全くと言っていい程静かになっていたというのに…

「ふん、今更また腹が減ったとでも抜かすつもりか？今の俺なら貴様など簡単に抑え込め…いや、違う…これは…」

そして…【Ｎｏ．】の疼きを餌の催促と切り捨てようとしたその刹那。
何かに気が付いた様子を鷹矢は見せて。
それは、鷹矢にしか分からぬカードの訴え。
以前の時にずっと感じていた、『餌』を求める訴えではなく…
確かに以前にも感じていた『餌の催促』にも似ているものの、今【Ｎｏ．】が発している訴えは、以前のモノと比べても全くの『別モノ』だということを即座に鷹矢は理解したのか。

「引っ張っているのか？自分の指し示す方向へ行けとでも言っているようだが…」

きっと、鷹矢の今発した言葉を一般人が聞いたら笑い飛ばすことだろう。

ーカードがモノを言うものか、と。

しかし、鷹矢にはわかってしまうのだ。得体の知れない存在である【Ｎｏ．】を、完全に手なずけているということもあるのだろうが…それ以上に、鷹矢はこのカードと一年近く共に居て、そして『餌』と言う名の『闇』を与えてきた。

それゆえか、まるで手のかかる飼い犬の如く、鷹矢には【Ｎｏ．】の発している意思を汲み取ることができ…
生意気にも主人を引っ張ろうとしているこの飼い犬から感じる疼きは、良くないモノへと引きずり込もうとしているよりは、見せたいモノがあるから逸っているかのような、どこか無邪気さすら感じるモノ。

「…うむ。何のつもりかは知らんが、今ここで貴様が目覚めたということは…また、『何か』が近くにあると言うことなのだろう？…いいだろう、まだ帰りの便まで時間もある。付き合ってやろう。」

久々に鼓動した【Ｎｏ．】のカードに応えるかのように、カードが示すままスタジアムの外へと出た鷹矢。
街外れに建てられたがゆえか、四方を森に囲まれたデュエルスタジアムの…
その裏手に広がっている、立ち入り禁止の看板が立っている広大な森へと、鷹矢は当然のように足を踏み入れて。
…【Ｎｏ．】が引っ張るままに、木々の間を散歩するようにして足を進める。
街自体はそれなりに栄えているのに、こうした街外れには山々に隣接した森などが無造作に広がっているあたり、まだまだこの街も発展途中の街なのだろう。
手入れなどされておらず、普段から人の手など入れていないであろう木々の連なり。
至るところに落ちている枝や葉を踏みしめながら、その音を森に響かせて歩き…また日差しや虫の声や風の音と言った夏の音が、あちこちから木霊してこの暗い森の中に広がって…
人の気配など感じない、野生の森。
また、例えこのままこの先に進んだとしても『何』があるのかなど全くもって予想もついていない鷹矢を他所に。その手に持たれた【Ｎｏ．】は、このまま真っ直ぐ進めと主人に訴えているだけ。

そうして…

３０分ほど、鷹矢が歩いた頃だろうか。

「…む？」

不意に。

これまでずっと止める事無く進めていたその足を急に止め、突然その場に立ち止まった鷹矢。

…別に、ここが【Ｎｏ．】の示した場所というわけではない。当の本人、いや本カードはまだ先へ進めと先ほどから変わらず煩く疼き続けているのだし、鷹矢もまだ歩き続けようと思っていたのだから。

…しかし、徐に鷹矢がこの場で足を止めたのは理由がある。

それは、鷹矢も己の耳を疑うような情況が沸き起こったからであり…

…音が、消えた。

そう。不意に、急に。

今までうるさいくらいに聞こえていた夏の音が、何の前触れも無く突然全て消え去ったのだ。

それだけではない。生い茂る木々の影が深くなった所為もあるのだろうが、何故か真夏だというのにも関わらず…その肌に感じる温度もまた、どこか寒気すら感じるような冷たさを帯び始めたではないか。

それはまるで、人が入ってはいけない境界に足を踏み入れてしまっ

たかのよう。

「…なんなのだ、これは…」

得体の知れぬ不思議な感覚。

これ以上先に行くのは危険だという、鷹矢の野生の勘が幾度も警告を鳴らしているこの状況。

それとは裏腹に、鷹矢の手に持たれた【Ｎｏ．】は更にその先へ進めと、先ほどよりも更に煩く『疼き』を鳴らしていて…

…進むべきか、戻るべきか。

そんな選択を迫られた時、大抵の人間は戻る選択をすることだろう。本能が告げているのだ。これ以上進むのは危険だ、と。

…しかし、鷹矢はその場に留まり続ける。

そう、ここで鷹矢が戻ることを躊躇っているのは、偏に己の持つ【Ｎｏ．】がこの先にあるモノを欲している意思を見せているからこそ。【Ｎｏ．】が久々に鼓動を見せたということは、この飼い犬が再び何かしらの変化を起こそうとしているということ。

【決闘祭】の時も、先の『異変』の時もそう。【Ｎｏ．】の訴えを聞いてやったことが、そのまま遊良に対抗できる自分だけの『力』と変わったのだから…

『修業中』の身としては、少しでも自身を強化して遊良をまた驚かせたいと考えたとしても、それは鷹矢ならば十二分にありえることであり…

「…うむ。」

本能を無理やり黙らせて、境界の奥へと更に足を進め始める鷹矢。
鬼が出るか、蛇が出るか…いや、鬼や蛇で済めば良い。得体の知れぬ『闇』から生まれた【Ｎｏ．】が欲しているモノは、きっと鬼や蛇以上に危ないモノであるはずなのだから。
…そう、この先に進まない方が良いということは、鷹矢だってわかっている。しかし、それでも先へと進むのは、この先のモノが己の『糧』となりえると思っているからこそ。
時に強欲、しかし無謀とも思える鷹矢の意思。
その全てを喰らうことに何の抵抗も持たない彼だからこそ、得体の知れぬ【Ｎｏ．】もまた、鷹矢に懐いているとも言え…

―先へ先へと、歩き続ける。

先ほどまでとは打って変わって、あまりに静かな野生の森。
まるで全ての自然が、意図的に己の気配を隠しているかの如き静けさは…
この先に待っているモノが、野生の自然すら畏怖するモノであることをまざまざと証明していて。
そんな静かな森の中を我が物顔で歩き続ける鷹矢も大概だが、しかしそれ以上に、『森』を黙らせているその存在への興味の方が鷹矢にはある様子。
そして、暗い森の奥深くに進み続けるにつれ、何故か暗いだけだった森に次第に明るさが差し込んできて…

「…あれは…」

こんな森の中腹で、何故か開けた場所に出たかと思えば…
その先に見えた『モノ』をその目に捉えて、鷹矢は思わず再び立ち止まる。

そこには…

「…あぁ、不思議な気配が近づいてきていると思ったら…これはまた珍しい顔が来たものだ。」
「…む!?き、貴様は!?」

木々の影に溶け込んでしまいそうな浅黒い肌と、木々の影よりも深い漆黒の髪。
冷たい風にその長髪を揺らし、豊満な体を惜しみなく見せ付けながら…
森の澄んだ空気よりも凛とした声を発しながらも、触れたモノ全てを飲み込んでしまいそうなほどに底の見えない雰囲気を纏っている女性が、そこには居て。

「貴様…は…」

…そこに居たのは、鷹矢からすれば会った事など無い人間、名前も知らないはずの人間。
何故この女性がこんな場所にいるのかなど、彼女にしかわからぬことではあるのだが…しかし、今この場に確実にその女性は存在しており…
また、驚くほどに他人の顔を覚えられない鷹矢ですら、『その女性』

の事を見たその瞬間にソレが誰なのかを、本能で即座に理解してしまって。

「…言われずともわかる…知っているぞ、貴様を！」

対面したことが無くとも、その細胞が知っている。
それもそのはず。何せ、『この女性』にそっくりな少女が、少し前にクラスに転入してきているのだし…
何より祖父や相棒から、『この女性』の事を耳にたこが出来る程に聞かされていたのだから。
また、その姿を一目見れば、彼女以外に『彼女』らしい女性などこの世には存在しないと思えるほどにイメージ通り。
その女性の仕草や見た目は、鷹矢がずっと思い浮かべていた彼女の姿そのままに…

そう、あまりに『あの女』に想像通りであって。

—それは…

「…会いたかったぞ、釈迦堂　ラン！」
「…フフッ、初めましてと言うべきかな？初対面だと言うのに、お互いに知っていると言うのも妙な気分だが。」

―釈迦堂　ラン

過去、当時の王者であった【紫魔】、【白鯨】、そして【黒翼】の全てを降したという、恐るべき力を持つ決闘者。
ただ『強い』と言うこと以外に、彼女のことを知る者は居ない。その行方もその詳細も、全てが謎に包まれた謎の女性。
誰もが見惚れてしまいそうな程に整った顔立ちと、見る者全てを魅了しそうな艶やかな肉体を持っていると言うのに…
ソレを直視できる『人間』など、この世には存在しないかのように漏れ出すその迫力は、まさしく人ならぬ『人外』のモノ。

そんな、正真正銘の【化物】と…

「私も君を知っているよ。【決闘祭】で天城　遊良とデュエルをしていた、鷹峰さんの孫…」

天宮寺一族の、最も若き天才が今…

―邂逅を、果たしたのだ。

⋮

ｅｐ６８「化物ｖｓ．天才」

「…会いたかったぞ、釈迦堂　ラン！」

決闘市から遠く離れた『とある街』。その街外れに広がっている広大な森の奥深く。

何の因果か、【Ｎｏ．】に導かれた鷹矢はそこで…『出会うはずの無かった人物』と、何の前触れも無く邂逅を果たしていた。

…それは、かつて当時の王者であった前【紫魔】である紫魔　憐造と、【白鯨】と呼ばれる砺波　浜臣、そして鷹矢の祖父である【黒翼】、天宮寺　鷹峰までをもその手で降したという、正真正銘の【化物】。

浅黒い肌と、漆黒の髪。誰もが見惚れるほどに美しい顔立ちと、誰もが魅了されるであろう魅惑的な肉体を惜しみなく全面に見せつけながらも…

その高圧的過ぎる存在感の所為で、常人では直視することなど出来ないであろう圧倒的なオーラを纏った、全てが謎につつまれたこの女性。

―釈迦堂　ラン

「…フフッ、初めましてと言うべきかな？初対面なのにお互いに知っていると言うのも妙な気分だが…私も君を知っているよ。【決闘祭】で天城　遊良とデュエルをしていた鷹峰さんの孫。確か、天宮寺　鷹矢といったか。」

「うむ。」

まさか鷹矢も、理事長である【白鯨】から言い渡された『修業』のために、偶然訪れていたこんな辺境の街で、こんな人物に出会えるなんて思っても見なかったことだろう。

何せ、つい先ほどまではさっさと決闘市にある自宅に帰る気持ちで一杯で、こんな『野生の森』の、こんな奥深くまでは来るつもりもな

かったというのに…
それが何故か、突然数ヶ月ぶりに鼓動した【Ｎｏ.】の導きによってこの森の中まで案内され、ずっと邂逅を望んでいた相手と、今こうしてようやく相見えることが出来たのだ。
―偶然か、必然か。
こんな突然な邂逅でも、どこまでも平然としている二人の決闘者が出会うことを予想できた者など、この世のどこにも存在しないことに違いなく。
…しかし、ここで出会うはずもなかったこの二人が、ここで邂逅を果たしてしまったことは紛れも無い真実。
そんな、依然として腕組をして仁王立ちしている鷹矢へと向かって…
ランは、あくまでも凛然とした態度を崩さぬまま、艶やかなその口をゆっくりと開き始めた。

「…さて、ここに来たというのも偶然と言うわけでは無いんだろう？偶然などでは『この場所』へ来られるはずもないからな。何やら妙な気配を持っているようだが…なるほど、君のデュエルディスクの中にあるそのカードが私の元へと導いたのか。」
「うむ。よくわからんが、とにかく探す手間が省けたのだ。用件は唯一つ！」

まるで全てを見通しているかのようなランの発言。それに対し、鷹矢は相も変わらず唯我独尊に言葉を紡いで。
この邂逅が鷹矢にとって、幸運か不運のどちらなのかと言うことはこの時には到底誰にも知りえないことではあるものの…
それでも鷹矢が、己に秘めていた『ある思い』から、釈迦堂　ランという女との邂逅を強く望んでいたこともまた事実。
…遊良の生きる目標になった女であり、自分もルキも立ち直らせることが出来なかった子どもの頃の遊良を立ち直らせた女が、一体どんな存在なのか。

そんな、祖父と相棒の話でしか知らぬ、この強き女へと向かって…

―どこまでも強い言葉で、鷹矢は言い放つ。

「俺と戦え、釈迦堂　ラン！」

「…ほう？」

恐れもなく、遅れもなく。

あくまでも堂々と、そしていとも簡単にその宣言をランへとぶつけた鷹矢。

こんな圧倒的な存在感を放つ【化物】を前にしても、普段通りの振る舞いをどこまでも貫く鷹矢のその姿は、虚勢を張っていると言うよりかは状況が飲み込めていない愚者のソレにも見えたことだろう。

…しかし鷹矢とて、ランの居る『この場所』と、なにより釈迦堂ランという女が普通ではないことくらい、その肌で感じて理解している。

そう、木々のざわめきや風の音、草の揺れる音や生き物の鼓動まで、ありとあらゆる自然の音が消え去っているような『この場所』に足を踏み入れておいて、何も感じ取れない程鷹矢は馬鹿ではないのだ。

…そして、その原因が、この釈迦堂　ラン自身であるということも。

それを理解してもなお、鷹矢がこの場に留まり、釈迦堂　ランに挑もうとしている理由には、彼にとって譲れない『ある思い』があったからこそ。

「あのジジイと理事長が負け、遊良が手も足も出なかったという相手だ。今の俺の力を測るには丁度良い。」

…遊良が【決闘祭】に優勝した褒美として、祖父の手引きにより戦ったという相手。
そのデュエルでは手も足も出なかったと遊良本人から聞かされてはいるものの、そのたった一回のデュエルの経験が遊良のデュエルに何かしらの影響を与えたということは、遊良のことを最も近くで見続けてきている鷹矢からすれば一目瞭然。
遊良がこの女によってまた一つ強さを得たのならば、自分もソレを得なければいけない。
『この場所』が異様であったとしても、釈迦堂　ランが【化物】だったとしても…

―早く自分も戦っておかねば、不公平ではないか…と。

「ほう、この私を目の前にして、臆する事も無く『丁度良い』とまで言い放つか。なるほど、鷹峰さんの孫と言うだけはある。そういうところは本当にそっく…」
「ジジイのことなどどうでもいい、俺は俺だ！それよりどうするのだ？俺と戦うのか、戦わないのか！はっきりしろ！」
「…鷹峰さんが君の事をぼやいていたのが良く分かる。中々どうして、良い度胸をしているじゃないか。」

命知らずか、ただの馬鹿か。
艶かしくも恐ろしい、とてもこの世のモノとは思えぬ異様な雰囲気を全身から醸し出し、直視することすら難しい圧力を放ち続けているこの正真正銘の【化物】を前にしているというのに…
その【化物】の言葉さえ遮り、普段と全く変わらぬ立ち振る舞いで礼儀も作法も何も持たず、堂々と言葉を紡ぎ続ける鷹矢の態度は正に自分勝手、自分本位。
まぁ、誰もが恐れ誰もが憧れ、そして誰もが敬いを忘れぬあの【黒翼】、天宮寺　鷹峰に対しても、普段から不遜な振る舞いをしている鷹矢なのだ。

例えソレが、【化物】のような雰囲気を纏う釈迦堂　ランだったとしても…その態度を変えるつもりなど、鷹矢には更々無いのだろう。
…そんな鷹矢の言葉に対し、【化物】は一体何を思うのだろうか。

「…フフッ、良いよ。どんな相手だろうと、自分から向かってくる者は好きだ。ここ数年は面と向かう前に逃げていく者が殆どだったものだから、相手をしてくれる者も少なくなってきていたからね。」

自分勝手な鷹矢の雰囲気を全て見通しながらも、それでもどこか嬉しそうな声を発した釈迦堂　ラン。
そのランの言葉の端々に感じられる、隠しようのない確かな退屈。しかし、その退屈そうな声の中に、微かな嬉しさが混ざっていたことを鷹矢は気が付いていただろうか。
そう、人の理から外れた様なランの存在感は、およそ一般人から見れば畏怖以外に何の感情も抱くことは出来ないことに違いなく…
そのランからすれば他のデュエリスト達が自分を見ただけで…いや、大半が見る事も出来ずに怯えて逃げていくのは、本当に退屈で仕方のないことなのだ。

…【化物】の相手が務まる存在など、同じ【化物】の領域に至ったモノだけ。

自ら嬉々としてその場所に足を踏み入れた【黒翼】や、１０年かけた長い旅の末に見つけたもう一人の【化物】と言った、ほんの一握りのモノしかランの退屈を紛らわせることをしてくれない。
…だからこそ、以前決闘市に現れていた、『闇』に呑まれた一般人を狩っていた時だって、全く相手にならない雑兵だろうと『自ら向かってくる』その敵の存在に、彼女は嬉しさすら覚えていたのだから。
故に、実力的には、およそ自分の相手など出来るか怪しいレベルの学生であっても…

「フフッ、喧嘩を売られるなんていつぶりだろう?少し楽しくなってきたじゃないか。」
「ならばすぐ始めるぞ。俺も帰りの時間があるからな。グズグズしていられれん。」
「…私を前にデュエルを逸る者など、鷹峰さんだけだと思っていたよ。本当に血気盛んな一族だ。まぁ、だからこそ面白いのだが。」
「ふん、あんなジジイと一緒にするな。」

そうして…
他の音が消えた、その異質な空間となっているこの場所で…これより始まる戦いのために、【化物】と少年がお互いにやや距離を取り始める。
人の手が入っていない野生の森、人間など近づかぬ深奥の森の中。その中におあつらえ向きに準備されていた…いや、あらかじめ準備されていたかのような、この森の中でも開けた場所にある、木々に囲まれた自然のリングの中で…
二人は互いに向かい合うと、その腕にデュエルディスクを装着し、デッキが現れディスクがデュエルモードへと切り替わって。

「では、天宮寺　鷹矢…」

出会うはずのなかった二人。それが『何か』の導きでこうして出会ったことは、果たして世界にとっては正か負か。

そのまま…

唐突に売られた喧嘩に対し、ランは自分の目の前に立っている、この命知らずの少年に対して…

静かに…

そう、まるで、願うかのように…

「潰れて…くれるなよ?」

―デュエル!!

そして、始まる。

先攻は、鷹矢。

「俺のターン!俺は【シルバー・ガジェット】を召喚し効果発動!手札から【グリーン・ガジェット】を特殊召喚し、その効果で【レッド・ガジェット】を手札に加える!更に魔法カード、【アイアンドロー】発動!俺の場に機械族が2体のみのため、デッキからカードを2枚ドロー!」

―!!

【シルバー・ガジェット】レベル4
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【グリーン・ガジェット】レベル4
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

開始早々、お得意のガジェットモンスター達を即座に場に揃えた鷹

矢。
どんな時でも変わらない、彼の立ち振る舞いをそのままに…どんな時もここから始まる、鷹矢のデュエルには欠かせない歯車達が、目の前に立つ【化物】へと向かって奮起に震えている。
…レベル４のモンスターが、２体。
そう、デュエルが始まってすぐにでも。己の持つ、エクシーズのＥｘの赴くままに。
エクシーズ名家、天宮寺一族の名の下に…鷹矢は、早々に手札も整えそのまま手を天に掲げ…
「ゆくぞ！レベル４のモンスター２体で、オーバーレイネットワークを構築！」
高らかに放たれた鷹矢の宣言により、フィールドに現れた銀河の渦に飲み込まれていく２体のモンスター達。
―オーバーレイネットワークを、構築。
およそ、この世界のエクシーズ召喚のための口上ではないソレを、鷹矢は口にして。
「出でよ、【Ｎｏ．４１】！戒めから解き放たれし魔獣の力！己が欲望のままに、饗宴を妨げし者共を沈めよ！」
呼び出すは、彼だけが持つ特別なエクシーズモンスター。
昨年度の【決闘祭】の決勝戦、その最中に彼自身が創造した、先の『異変』にて『闇』を喰らいその姿を変えた存在を…
―今、ここに

「エクシーズ召喚！ランク４！【Ｎｏ．４１　泥睡魔獣バグースカ】！」

―！

【Ｎｏ．４１　泥睡魔獣バグースカ】ランク４
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／２０００

―最初から、初めから。
普段のデュエルではあまり使用しない、この【Ｎｏ．】を用いてまでランを威嚇する鷹矢。
現れたのは、その腹に【Ｎｏ．】の証である数字、『４１』を刻み込んだ獏のようなモンスター。
酒瓶片手に酔いつぶれ、欲望のままに惰眠を貪っているその姿はとても戦いの場に呼び出されるようなモンスターとは思えないものの…
しかし、守備表示で快眠しているその体から漏れ出した、その得体の知れぬ謎の霧が言葉にし難い鈍重な雰囲気を醸し出しているではないか。
「【Ｎｏ．４１】が守備表示で居る限り、お互いのモンスターは全て守備表示となり、発動した効果は無効となる！」
「…ほう？」
「俺はカードを１枚伏せて、ターンエンドだ！」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：５→４枚
場：【Ｎｏ．４１　泥酔魔獣バグースカ】

伏せ…1枚

そうして…

鷹矢は、まるでランの出方を伺うように、その先攻のターンを終えた。

アイアンドローの制約により、このターンは一度しかエクシーズ召喚出来なかったとはいえ…相手を封じる力を持った【Ｎｏ．】を呼び出し、ランの行動を封じる算段なのだろう。

…しかし、そんな【Ｎｏ．】を前にしていても、ランは少しも感情を波立たせてはおらず。

勇んで立っている鷹矢へと向かって、ランはゆっくりとその口を開き始めた。

「【Ｎｏ．】…確か、【決闘祭】で見たときは違うモンスターだったと思うが？」

「うむ。色々あって姿が変わった。」

「…なるほど。異界のカードらしい、随分と使い勝手が悪いカードだ。」

「…いかい？何を言っているのだ？」

溢れ出る余裕を一時も崩さず。

このカードを生み出した鷹矢でさえ知りえぬ『何か』を、まるで知っているかのような雰囲気で言葉を漏らした釈迦堂　ラン。

普通、自らの行動を封じてくるようなモンスターを先攻で出されれば、その対処に手が取られるか後攻の攻め手が滞るはずだと言うのに…

それすら些細なことなのだという雰囲気で、ただただ異様な立ち振る舞いでソコに立ち、彼女にしか分からぬ言葉を静かに漏らすだけ。

「いいや、こっちのことさ。しかし天宮寺　鷹矢…相手を封じるモンスターを出したとは言え、ソレ一体だけでターンを終えるとは。…天

城　遊良は、初めからもっと全力で動いて来たと言うのに。」
「…む？」

そう、今このデュエルの場においては、彼女にしか知りえぬその『何か』など、ただの無粋でしかないのだろう。
以前戦った少年の名を出しつつ、そのまま言葉を変えるかのように、鷹矢の意識を無理やりにデュエルへと戻すかのように。
早々にターンの終了宣言をした鷹矢へと、ランは冷たくも不敵に微笑みを見せて…

「…まずは様子見と言った所か。とは言え、これではいくら鷹峰さんの孫でも…」

そして…
ランが、静かに言葉を紡ぎ始めた、その時のこと。

「…む？」

デュエルが始まる直前までは他の『音』など一切感じなかった、この静かな『野生の森』に、急に冷たい風が吹き始めたではないか。

それだけではない…

ランに呼応するかのように、徐々に変わっていく周囲の雰囲気。
…木々がざわめき、風が吹き始め、空が曇り気温が下がっていく。
また、少しずつ紡がれていくランの言葉は、先ほどの嬉しさの混じったモノから徐々に、ゆっくり、段々と、冷徹な重さを帯び始めた無常なモノへと変わっていき…

「…木々が…騒ぎ始めた？」

そんな周囲の変化と、ランの声質の変化には、流石にこれまでずっと普段通りに立ち振舞ってきた鷹矢でも気が付いたのか。

ランの言葉と共に、少しずつ変容してきている周囲の空気を強く感じたのだろう。真夏だというのに、震えすら感じそうなほどに冷えてきた空気と…

先ほどまで少なからず熱が篭っていた、そのランの纏う空気が突如として…

―変わる。

「…あまり、舐めるんじゃあないよ？」

―！

「…なっ!?」

張り詰める空気、切り詰める大気。

ランの発した一言で突風が吹き荒れ、真上から抑え込むような重力の奔流が鷹矢を跪かせようと襲いかかってきて。

常人ならば、とても立ってはいられないであろう風圧と重圧。

…尊大な言葉使いや、怖い者知らずの立ち振る舞いはまだ良い。しかし、デュエルが始まってもなおランの力を測ろうとしていた鷹矢の微かな緩んだ気持ちが、釈迦堂　ランの琴線に触れたのか。

「…ぐぅ!?こ、この女…」

「この私を相手に、何を思ってそれだけでターンを終えたのかは知ら

ないが！その程度で牽制をしたつもりならば随分と甘い！私のターン、ドロー！私はフィールド魔法、【ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント】を発動！そして君の場の、『泥睡魔獣バグースカ』をリリース！」

「何!?」

そして…

急激に重くなった体と、吹き飛ばされそうな威圧を耐えている鷹矢をまるで嘲笑うかのように。

―そう、当然のように、ランは相手のモンスターを生贄に捧げ始めたのだ。

…アドバンス召喚のためのエフェクトではない。あくまでも、特殊召喚のためのエフェクト。

通常であれば、相手の許可なく相手のモンスターを勝手に使うことなど、先に何かしらのカードの効果を使用しないと許されないはず。

しかし、何の前触れもなく。堂々と相手のモンスターをリリースするとランは宣言し、そしてソレに呼応して現れる天の渦が、ランの宣言を正当なモノだと証明していて。

そのまま、鷹矢の呼び出した牽制を骨の髄まで喰らい尽くすかのような咆哮が森の中に響いたかと思うと…

その命を、天に捧げて…

―ソレは、現れる。

「君の場に、【海亀壊獣ガメシエル】を特殊召喚！」

―！

【海亀壊獣ガメシエル】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／３０００

鷹矢のモンスターを糧として、ランの手札から鷹矢の場に現れしは、巨大な亀にも似た海の化物。

―壊獣

それは、そのカテゴリーの持つ名の如く。敵の場すら己の本能のままに壊しつくし、そして欲望の赴くままに暴れ果てる生物達の総称。
その力は、いかなるモンスターであっても餌と変え…

「まだだよ！相手フィールドに【壊獣】モンスターが居るため、私は手札から【怪粉壊獣ガダーラ】を特殊召喚！」

―！

【怪粉壊獣ガダーラ】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１６００

また、全てのモンスターが大型であるにも関わらず、敵の場に壊獣が居ればまるで本能で襲いかかるかのようにして、いとも簡単に手札から自分の場にも飛び出してくるのだ。
ランの宣言によって呼び出されしは、巨大な羽から鱗粉を撒き散らし浮遊する奇怪な蛾獣。
声にならぬ咆哮と共に、巨大な壊獣達のその轟きはただただ己の本能に従い…その姿は、戦いを求め続ける哀れな獣の姿その物。
…血に刻まれた本能のまま、目の前の敵へと威嚇をぶつけている。

「俺のモンスターをリリースしただと…壊獣…かなり珍しいカードだが…」
「私を少し舐めすぎじゃないかい？あの程度の牽制など無いも同然だ！行くぞ、バトルだ！【怪粉壊獣ガダーラ】で、【海亀壊獣ガメシエル】に攻撃！」

そして…
ランの命令の赴くままに、先ほど鷹矢のモンスターを喰らい無理やり鷹矢の場に現れた飛亀へと、突風を巻き起こしながら巨大な蛾獣が羽ばたき突撃を始めて。
そのまま声にもならぬ雄叫びを双方ともに爆裂させたと思えば、この世のモノとは思えぬ叫びと共に取っ組み合いの闘いを始めたではないか。

「ぐっ!?」

鷹矢　ＬＰ４０００→３５００

しかし、いくらお互いが巨大な壊獣を従えているとはいえ…この戦いは、全てランによって仕組まれた偽りの怪獣大決戦。

―まるで映画の大海戦。しかし全ては自作自演。

鷹矢のＬＰだけが減少し、全てがランの掌の上で転がされているかのようなこの壊獣達の大混戦は、鷹矢の策など塵の如く簡単に吹き飛ばしてしまうのか。
鷹矢の妨害など、少しの足止めにも感じていないランはただただ身震いすら感じそうなその冷たい空気と共に…駄々漏れにした恐怖を纏って鷹矢へとソレをぶつけるだけ。

「こうもあっさりと攻撃をしかけてくるとは…」

「フッ、別にこのターンで片付けてもよかったのだけどね。天宮寺鷹矢、君にもう一度だけチャンスをあげよう。自分から喧嘩を売っておいて、この程度で終わることなど君もしたくはあるまい？」
「ぬぅ…」
「フフフ…これは特別大サービスだよ？鷹峰さんの孫、そして天城遊良の友人と言うのだから…そうだな、２ターンほど特別にね。魔法カード、【アドバンスドロー】発動！場のガダーラを墓地へ送り２枚ドロー！そして壊獣カウンターが３つ以上あるため、【ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント】の効果も発動！デッキから【怒炎壊獣ドゴラン】を手札に加える！私はカードを３枚伏せて、ターンエンドだ。」

ラン　ＬＰ：４０００
手札：６→２
場：なし
伏せ：３枚
フィールド魔法：【ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント】

そのターンの終了とともに、常人ならばとっくに逃げ出すか恐怖で気を失っていそうなランの雰囲気がこの森の中に充満して広がっていく。
…震え、怯え、恐怖し、諦める。
きっと、これまでランと戦ってきた殆どの者達が、この桁違いの恐怖を放つランの威圧に負け精神を傷つけられるか、圧倒的に次元の違うランとの実力差に心を折られるか、はたまたその両方によって、『そうなった』に違いない。
…故に、ランは願いはしても、期待はしない。
相手が潰れないよう願うことは出来ても、相手に期待することが無駄だということを…これまでの人生において、理解してしまったから。

「…ふざけているのはどっちだ！貴様こそ、俺に向かっていつまでもそんな偉そうな口を叩くんじゃない！俺のターン、ドロー！」

しかし、そんなランを前にしていても。鷹矢はどこまでも闘気を燃やすのみ。

表情など読み取れぬ鉄仮面、しかしその奥にある確かな闘志の燃え上がり。

押し潰そうとしてくるランの圧力にも負けず、言葉が荒ぶり感情を燃やし、ただ【化物】へと歯向かって。

「…ほう、私の威嚇を受けてもなおその闘志を失わぬか。フフッ、やはり鷹峰さんの孫ならそうこなくては…」

「ジジイと比べるな！【ブリキンギョ】を召喚！その召喚時に手札から【カゲトカゲ】を特殊召喚し、ブリキンギョの効果で【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚！更にゴールドの効果で【レッド・ガジェット】を特殊召喚！」

―!!!!

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００
【カゲトカゲ】レベル４
ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１５００
【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【レッド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００

ランの気当たりに心を折られず。一瞬で場に４体のモンスターを揃えた鷹矢。

…確かに、最初のターンは鷹矢の『悪い癖』が出てしまい、ランの気分次第では先ほどのランのターンで完膚なきまでに吹き飛ばされていた可能性が大きいことは言うまでも無い。
そう、連日の『修業』の疲れもあったのだろう。元々、スロースターター気質のある鷹矢の『悪い癖』…
例え対峙していたのが【化物】であっても、次のターンの余力を残すように展開を抑えてしまったというのが、これまでの鷹矢の『悪い癖』なのだ。
しかし、ソレがどれだけ命取りになりえるか。
それは鷹矢もランの威嚇によって、骨の髄まで思い知ったことだろう。目の前の相手はこれまでのような、自分より格下か、自分と同じくらいか、自分よりもやや強いといった相手ではない。
自分よりも遥かに強い存在。過去に【王者】達を降した【化物】。遊良が手も足も出なかった紛れも無い強者。
…だからこそ、こんな無様なままでは終われない。鷹矢の召喚したモンスター達のどれもが、その鷹矢の闘志に応えるようにランを見据えて闘気を光らせ、主と同じく心を燃やす。

「ほう、中々の展開力だ。」
「まだだ！レッドの効果で、俺は【イエロー・ガジェット】を手札に加え…」
「ならばそれにチェーンして永続罠、【リビングデッドの呼び声】を発動！墓地より蘇れ、【怪粉壊獣ガダーラ】！」

―！

【怪粉壊獣ガダーラ】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１６００

しかし、そんな鷹矢の気概に割り込むように。ランもまた、先ほど自ら墓地へと送った巨大な蛾獣を再びこの場に飛び立たせるのか。

…先ほど、ランは言った。
―『別にこのターンで片付けてもよかったのだけどね。天宮寺　鷹矢、君にもう一度だけチャンスをあげよう。』…と。
その一言は、一体鷹矢のプライドをどれだけ傷つけたのだろう。
しかし、鷹矢のプライドが高いであろうと言うことを、ランもまた彼の祖父の姿から理解していたからこそ、あえて鷹矢に対しそう言った言葉を投げかけたのは言うまでも無く…

「ぬぅ…だったらゴールドとレッド、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【ギアギガントX】！さらにレベル４の【カゲトカゲ】と【ブリキンギョ】でオーバーレイ！エクシーズ召喚、来い、ランク４！【鳥銃士カステル】！」

―!!

【ギアギガントX】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００
【鳥銃士カステル】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

そんなランの言葉に触発されたのか。勢いを止めず、更に加速し、鷹矢は連続してエクシーズ召喚を決めていく。
…鋼鉄の巨兵と、天空の銃士。
そのどれもが鷹矢が好んで扱うランク４のエクシーズモンスターであり、鷹矢のデュエルの要の存在。
相手の出方を伺うためでは無く、このいつものモンスター達を呼び出したと言うことは…彼もまた次への準備を怠ることなく、更に一気に攻撃に転じるためにその勢いを増していく算段なのか。

「一気に叩く！まずは【ギアギガントX】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、デッキから【ゴールド・ガジェット】を手札に加

える！そして【鳥銃士カステル】の効果も発動！オーバーレイユニットを２つ使っ…」
「いいや、そちらは許さないよ。罠カード、【蟲惑の落とし穴】発動！【鳥銃士カステル】の効果を無効にし破壊する！」
「ぐっ!?いやまだだ！罠発動、【戦線復帰】！墓地から【シルバー・ガジェット】を守備表示で蘇生し、その効果で手札から【イエロー・ガジェット】を特殊召喚！【グリーン・ガジェット】を手札に！シルバーとイエロー、２体のガジェットでオーバーレイ！」

ランの妨害に手を休めず。まだまだ鷹矢は展開を止めず。
鷹矢とて、ランが妨害してくることは予想済み。だからこそ、ここで止まってしまっては、全てが終わりなのだと悟ったかのような勢いで。
飛び出させしは、銀と黄色の歯車の闘士。
まるでレベル４のモンスターを並べることなど、どんなことよりも簡単なのだと言わんばかりのその勢いのまま。
エクシーズ名家、天宮寺一族の一人、その筆頭である祖父に倣うかのように…
鷹矢は、その手を掲げ…

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれ！」

呼び出すのは、祖父から受け継ぎし【王者】の名。身を削って得た自身の『切り札』。
己の取るべき戦術の、その『砦』となるべく存在を呼び出すために。足元に現れる銀河へと、２体のモンスター達を導きながら…

「エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天に羽ばたく雄雄しき翼と、神すら切り裂く鋭き牙が陽の光に輝いて。
紛うことなき、鷹矢の『切り札』。
この異質となっている森の中であっても、己が思うままにただ咆哮を轟かせ…身の程知らずにも威嚇してくる巨大な蛾獣に対し、その苛立ちを真正面からぶつけている。

「ほう、ここまで自在に鷹峰さんの【名】を呼び出すか…」
「【ダーク・リベリオン】の効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、相手モンスターの攻撃力を半分にし、【ダーク・リベリオン】の攻撃力に加える！吸い尽くせ、紫電吸雷！」

黒翼牙竜のその漆黒の翼から放出されし、深紫の猛る雷が巨大な蛾獣へと襲い掛かる。
…縛り上げ、絞り上げ、封じ込め、締め上げる。
そのまま自由を奪われた巨大な蛾獣は、その羽を広げることも叶わずに苦しげな声を発しながら地に落ちて来たではないか。

【怪粉壊獣ガダーラ】レベル８
ＡＴＫ／２７００→１３５０
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→３８５０

「よし！バトルだ！【ダーク・リベリオン】で、【怪粉壊獣ガダーラ】へ攻撃！」

そしてそのまま間髪入れず。
猛り狂う牙竜へと、叫ぶようにして攻撃を命じた鷹矢。
そう、押し潰そうとしてくる巨大な圧力を、ここで一気に振り切るため。己の切り札を用いてでも、全力でランを攻めに行くために。

「断ち切れ！斬魔黒刃！ニルヴァー・ストライク！」

そして…

黒翼牙竜のその鋭牙が、地に叩きつけた巨大な蛾獣の喉元に突き刺さりそうになった…

―その時だった。

「だが、まだまだまだな。罠カード、【ドレインシールド】発動！」
「なっ!?」

―！

牙と蛾獣の喉元の、刹那と紙一重の小さな隙間。
今にも牙竜の牙が、蛾獣を喉元から真っ二つに断ち切ってしまいそうになったその僅かな隙間に…
目に見えない不思議な力が働き、勢い良く突っ込んで言った牙竜は自らの勢いを跳ね返され、攻撃を弾かれて鷹矢の元へと吹き飛ばされてしまったではないか。

ラン　ＬＰ：４０００→７８５０

「すまないな、こんなにＬＰをプレゼントしてもらって。」
「ＬＰが７８５０だと…？」
「不用意に突っ込みすぎだよ？フフッ、他の罠だったら、これで終わっていたかもね。」
「ぬぅ…」

また、蛾獣の頭上では、その力を発している小さな盾が上空で怪しく光り輝いていて。
プロの試合でもあまり使われることの無い、かなり古い時代に作られた罠。どうしてランがここで『この罠』を使用したのかなど、到底ランにしか知りえぬ戦略ではあるものの…
しかし、今のランの態度とその言葉の雰囲気から、鷹矢は今はっきりとランの言葉の心意を嫌でも読み取ってしまったのか。

―『舐められている』

そう、嫌でも伝わってくる。ランが与えたこの『チャンス』という名の手加減の嵐は、この【化物】からしたら指先一つで遊んでいるようなモノなのだと言うことを。
人間的には最悪でも、実力は最高峰である祖父を含めた、怪物揃いのあの【王者】達と…自分と拮抗している遊良を瞬殺したというこんな【化物】が、よもやデュエルを長引かせるようなこんな罠を自分に使ってくることがその良い証拠。

「…ぐっ…この女…」

体が熱い。
まるで、煮えたぎるマグマを、頭の天辺から噴出してしまいそうな

程に熱く熱く煮えくり返った腸の熱と…
　自分の人生で初めて、『舐められる』という屈辱を味わっている鷹矢の頭の中には、今まさにランへの怒りがふつふつと渦巻いていて。
「ならばすぐに減らしてやるだけだ！【ギアギガントX】！【怪粉壊獣ガダーラ】に攻撃！」
「…熱くなって不用意に突っ込みすぎだ。【怪粉壊獣ガダーラ】の効果発動。場の壊獣カウンターを３つ使い、相手モンスター全ての攻守を半分にする！」
「なっ!?」

―！

【ギアギガントX】ランク４
ＡＴＫ／２３００→１１５０
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／３８５０→１９２５

…しかし、そんな鷹矢の熱に呆れ返った声で。
　ランは淡々と蛾獣に命令を下し、蛾獣がそれに応じて巻き起こす燐粉の竜巻。
　ソレがそのまま攻撃してきた鋼鉄の機兵と、鷹矢の場の黒翼牙竜を飲み込んだかと思うと、２体のエクシーズモンスターの力がどんどんと吸い取られてしまったでは無いか。
「しまっ…」
「鷹峰さんの孫ともあろう者が、熱くなって相手の効果を忘れ攻撃をしかけるとは。…つまらん、返り討ちだ。」

―！

「ぐうっ…」

鷹矢　ＬＰ：３５００→３３００

ＬＰの減少音が、無常にも鷹矢の熱を奪う。

…一体、何をしているのだ。舐められた挙句に、相手の効果も忘れ、無駄に攻撃をしてダメージを食らうなど…

きっと、今の鷹矢の脳内には、そうした自己嫌悪の嵐が渦を巻いて襲い掛かってきているに違いないだろう。

…しかし、そんな鷹矢を気遣うわけも無く。ランは、そのまま鷹矢へと静かに言葉を続けるのみ。

「勢い良く喧嘩を売ってきた割にはこの程度か？…それでは、せっかくの鷹峰さんの【名】も宝の持ち腐れだな。」

「…【貪欲な壷】発動。カステル、【Ｎｏ．４１】、レッド、グリーン、イエローのガジェット達をデッキに戻して２枚ドロー…【強欲で貪欲な壷】も発動し、デッキを１０枚裏側で除外し２枚ドロー…カードを３枚伏せて、ターンエンドだ…」

鷹矢　ＬＰ：３３００
手札：５→２
場：【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】
伏せ：３枚

どことなくトーンを落とした鷹矢の声は、自らの失策に自分自身を許せていない証拠。

…ランのＬＰを不用意に増大させてしまっただけではなく、本来ならば攻撃を仕掛けてはいけない場面で熱くなって攻撃をしてしまい、自分のモンスターを自滅させてしまった。

そう、もしもランが鷹矢に『チャンス』を与えず、【ドレインシールド】ではなく【魔法の筒】と言った類のカードを伏せていたら…手も

足も出ないどころか、一方的に遊ばれた挙句、プライドをズタズタにされて負けていたことは確実。

…もしそんな事になっていたら、鷹矢の心が折れていた可能性もある。

そんな心の折られた鷹矢の姿など、鷹矢自身にだって想像も出来ないというのに。ソレを簡単にやってのけるであろうランの異質な立ち姿が、どこまでもどこまでも深い恐怖を纏い、鷹矢を飲み込まんとしていて…

「私のターン、ドロー！2枚目の【アドバンスドロー】を発動！【怪粉壊獣ガダーラ】をリリースし、更にデッキから2枚ドロー！【ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント】の効果も発動し、壊獣カウンターが３つ以上あるため、私はデッキから【雷撃壊獣サンダー・ザ・キング】を手札に加える！」

…そんな鷹矢を意に介さず。簡単に手札を増やしつつ、更にその圧力を増していく釈迦堂　ラン。

ランにとっては、自ら勇んで喧嘩を売ってきた鷹矢とて、『天宮寺鷹峰の孫』としか見ていないのだろう。

それは、単なる雑兵よりも少しばかり興味を持っている程度。故に、鷹矢がこの程度で終わるのならば、例え鷹矢が天宮寺　鷹峰と言う【化物】の血を分けた孫であったとしても…

何の感慨もなく、ただ葬ってしまうことになるのだから。

「魔法カード、【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側で除外して2枚ドロー！そして【紅蓮魔獣　ダ・イーザ】を通常召喚！」

――！

【紅蓮魔獣　ダ・イーザ】レベル３
ＡＴＫ／　？→４０００　ＤＥＦ／　？→４０００

「攻撃力…４０００…」
「フフッ、壊獣の次は魔獣と行こう。しかし君も抜け目が無いな。その伏せカードは【くず鉄のかかし】に【貪欲な瓶】、そして【戦線復帰】か。…ガジェット達と【くず鉄のかかし】でこのターンをどうにか凌いで、次のターンに繋ごうという算段だな？」
「貴様…なぜ俺の伏せカードが分かるのだ。」
「なに、造作も無いコトだよ。伏せカードだけではない、君の手札も…なんなら、君がこれから引くカードも、私には全てが既に見えているだけだ。」
「なっ!?」

そして…
重圧を増し続けるランの口から飛び出してきたのは、到底信じられないであろう言葉の数々。

「ばかばかしい！ふざけるな！」

またソレを聞いた鷹矢も、思わず声を荒げずにはいられないのか。
そう、鷹矢のその声も当然であり…出来るはずの無い、荒唐無稽な事象を、まるで当然のようにランはその口から呟いたのだから。
…何せ、この世界に溢れている、数え切れない程のカードの種類。そして、この世界に生きているデュエリスト達は、皆その性格もそのスタイルも、そしてそのＥｘ適正によっても取るべき戦術や採用するカードが違ってくるというのに。
その無限とも言えるカードの組み合わせからドローされる、姿の見えないはずの手札。
その星の数とも言える戦略から伏せられる、形の見えないはずの伏

せカード。
　そのデュエリストの未来を映す、誰にも見えないはずの次に引くカード。

　―その全てを、釈迦堂　ランは堂々と『見える』と言い放ったのだ。

　それは、『人間』には絶対に出来るはずのないこと。いや、いくら目の前の女が【化物】であったとしても…そんな超常現象、誰であっても信じられるはずもなく。

「そんなこと、出来るはずが…」
「いいや、出来る！この私には、自分だけでは無く相手のカードが見えている！立っている『高さ』が違うからか、それとも存在からして異なるからか！相手の過去も、今も、そしてこれからでさえも！私には見えてしまうんだ！」
「ぬぅ…」
「…天宮寺　鷹矢。それが私にとって、どれだけ退屈かわかるかい？まぁ、鷹峰さんやもう一人の【化物】相手ならばこんな芸当も出来やしないが…しかし、それ以下の者共を相手にすると、どうしても見えてしまう！まるで、生きている次元が異なっているのではないかと錯覚するほどに！」

　しかし、鷹矢の声すら遮り、どこか癇癪にも似た声でランは更にその言葉をヒートアップさせていく。
　纏う雰囲気もまた異常、放つオーラもまた異質。
　一度ソレに中てられてしまえば、到底信じられない超常現象であってもこの女が『出来る』と言い放つのならば、本当に出来てしまうのではないかと錯覚してしまいそうなほど。
　そんな退屈と倦怠を味わいすぎた【化物】の、鬱憤に塗れた悲嘆の叫び。その言葉が歪曲した重圧を更に増し、どんどん周囲の空気を重い物へと変化させていき…

「だからこそ、せめて少しは抵抗して私の退屈を紛らわせてくれ！君の場の、【ダーク・リベリオン】をリリース！」
「むっ!?」

無常に、無慈悲に。
祖父から受け継いだ鷹矢の『切り札』でさえ、何の抵抗も出来ずに生贄に捧げられてしまう。その光景は鷹矢にとって、一体どれほどの屈辱となっているだろうか。
そんな鷹矢を嘲笑うかのように、ランは己の鬱憤をただ晴らすためだけに…

「君の場に、【怒炎壊獣ドゴラン】を特殊召喚！」

―！

【怒炎壊獣ドゴラン】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

「おのれ…またしても…」
「歯痒いかい？しかしまだだ。相手フィールドに【壊獣】が存在する為、手札から【雷撃壊獣サンダー・ザ・キング】を特殊召喚！」

―！

【雷撃壊獣サンダー・ザ・キング】レベル９
ＡＴＫ／３３００　ＤＥＦ／２１００

「そいつは!?くっ、特殊召喚時に罠カード、【戦線復帰】を発動！墓地

から【シルバー・ガジェット】を守備表示で特殊召喚し、その効果で手札からゴールドを、ゴールドの効果でグリーンを、それぞれ手札から守備表示で特殊召喚！【レッド・ガジェット】を手札に！」

「うん、『今度は』いい判断だ。サンダー・ザ・キングの効果は、相手の魔法、罠、モンスター効果の発動を封じるモノ。…さぁ、もっと足掻いてくれ！壊獣カウンターを３つ使い、サンダー・ザ・キングの効果発動！このターン、相手の効果を全て封じ、モンスターへの３回攻撃を可能とさせる！」

先ほどの失態を取り返すかのように行動を起こした鷹矢とは言え、これもまたランの掌の上。

きっと、ランはこのターンで鷹矢にトドメを刺すことなど考えてはいないのだろう。ソレは、恐怖と重圧に襲われ続けている鷹矢にだって嫌と言うほどわかっており…

何せ、攻撃力が１９２５まで下がった【ダーク・リベリオン】を残しておいた方が戦闘ダメージは大きかったにも関わらず、プライドを傷つけ、そしてただ煽るためだけに『切り札』をリリースして【壊獣】を出したこと。

そして、自分の伏せカードによる抵抗など簡単にどうとでも出来たはずだと言うのに、『あえて』何もせず雷撃の三頭竜を出したことは…

―『フフフ…これは特別大サービスだよ？鷹峰さんの孫、そして天城　遊良の友人と言うのだから…そうだな、２ターンほど特別にね。』

自分に、抵抗の『チャンス』を与えたのだ…と。

―ただの気まぐれ、ただの暇つぶし、ただの自分の退屈凌ぎ。

鷹矢が抵抗することも出来ずにここで終わるのならばソレでも構わない。天宮寺　鷹峰の孫と言っても、所詮はその程度だったと言うことで鷹矢への興味などなくしてしまうだけなのだから。

しかし、必至の抵抗を続けてどうにか生き残ることが出来るのならば…まだ多少は遊べるという、正に自分勝手な強者の暴論。
ソレを隠そうともしていないランの矜持は、まさに悪魔その物のようでもあって。

「バトル！サンダー・ザ・キングよ、３体のガジェットを葬れ！」

―!!!

雷獣から放たれし白雷が、三叉の雷となりて歯車を砕く。
その衝撃は計り知れず、いくら守備表示でダメージがないからと言っても、異質な空間となっているこの場所の雰囲気が、まるでモンスターを実体化させているかのような錯覚を鷹矢に覚えさせているのか。

「ぐっ!?」
「まだだよ！【紅蓮魔獣　ダ・イーザ】で、【怒炎壊獣ドゴラン】を攻撃！紅蓮の…エンド・オブ・バースト！」

―！

「ぐおぉっ！」

鷹矢　ＬＰ：３３００→２３００

そして…
怒炎を纏いし壊獣が、紅蓮を生み出す魔獣の煉獄に焼かれ朽ち果てて。
そのまま流れた灼炎の余波が、森の中の異様な空気を益々淀ませていき…ランの姿を陽炎に包ませるその熱は、灼熱の余波を直に受けてしまった鷹矢に、ランの姿を本物の【化物】のように歪ませて見せて

しまっているのか。

「ぐ…釈迦堂…ラン…」

「私は退屈でつまらない。私と、私について来られる人種以外の、その他大勢の『人間』達はどうしてこんなにつまらないんだ。もういっその事、私達以外の雑魚など全て居なくなれば良いとまで考えた事もあったが…まぁ、今はそんな事どうでもいいか。さぁ、君に上げた２ターンの『チャンス』も終えるとしよう。私はカードを２枚伏せ、ターンエンドだ。」

ラン　ＬＰ：７８５０
手札：３→１枚
場：【雷撃壊獣サンダー・ザ・キング】、【紅蓮魔獣ダ・イーザ】
魔法・罠：伏せ２枚、【リビングデッドの呼び声】（効果なし）
フィールド魔法：【ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント】

そして、思うままに言葉を放ち続けたランが、その自分のターンを終えた時…

あれだけ日が刺していた森の空が薄く暗くなり始め、それに連動して更に彼女が纏うオーラが変化してゆく。

…それは彼女が言った通り、これで鷹矢に与えた２ターンの『チャンス』が終わったということ。

この数ターンの攻防でランが感じた鷹矢の力では、これ以上の楽しみは増えないという無慈悲な判決を下したのか。

並みの精神力ならば、とっくに泡を吹いて倒れているであろうこの重圧。

鷹矢の心を折ることになんの抵抗も無いランからすれば、もうこのデュエルに欲するモノなど何もないのだと言わんばかりに立っているだけ。

「…意味のわからんことを…何時までも喋るな！俺のターン、ドロー

！」

しかし、この本物の【化物】の異常性を目の当たりにし続けているというのに。

どこまでも、どこまでも…どこまでも鷹矢は叫び続ける。

心が強いだとか、精神が強靭だとか、そんな類の理由では決して説明がつかないほどの鷹矢の奮起。

今の鷹矢より実力も精神も上位に位置しているはずのデュエリストですら、釈迦堂　ランのプレッシャーに勝てず…無常にも心を折られていった者達が、この世界には大勢いるはずだと言うのに。

「よし！俺は【ブリキンギョ】を召喚！その効果で、【レッド・ガジェット】を特殊召喚！【イエロー・ガジェット】を手札に！」

迷う事無くデッキからカードを引くその勢いは、まさしく真正の決闘者である証。

たった一枚の次に引くカードに、悲観など微塵も感じていない、正に戦いを諦めていない鋼の精神。

―折れない精神、折れない自信、全く持って折れない心。

一体、何がそれほど鷹矢を【化物】へと立ち向かわせているのだろうか。

【化物】に対し、未だに奮起を忘れぬ鷹矢へと向かって…既に鷹矢への興味など完全に無くしたであろう様子を見せていたランが、徐にその口を開き始め…

「…良い足掻きっぷりだ天宮寺　鷹矢。私にここまでされて潰れなかった人間は初めてだよ。…しかし、一体何が君をそこまで突き動かす？」

他人の心になど全く興味など示さないであろう釈迦堂　ランが、この時初めて鷹矢へと一つ、言葉を投げかけて。
…思えば、存在自体が周囲に重圧を与えてしまう自分にも、同じ【化物】の領域に至った祖父にも、この少年は全く畏怖するということを覚えていないのだ。
その折れる気配など全く無い鷹矢の姿は、ランにとっても意外であっただろう。ランの思考の中には、そんな鷹矢の態度がようやく不思議と思えてきた様子。

…それは、彼女が今まで戦ってきたどのデュエリストとも違うモノ。

そう、枝を折るように葬ってきた数多の有象無象とも、嬉々として自ら【化物】に足を踏み入れた【黒翼】とも…そして自分に憧れているという【黒翼】の弟子と比べても、そのどれとも違う。
それは、単なる本人の精神力の問題ではない。心の底から【化物】など恐れてなどいない、類稀なる畏怖への鈍さと…
この少年にとって、【化物】などよりも、もっと『恐怖』に値するモノが他にあるということに他ならず。
そんな、ランからの問いかけに対し…
鷹矢は、この【化物】の重圧の中で、搾り出すようにその声を発して…

「俺には…力がいるのだ！遊良との『約束』を叶えるために、邪魔者どもを全て黙らせる力が！」
「…約束？」
「ガキの頃…あいつと、もっと強くなり、世界の頂点で戦うと、そう『約束』をした！だが遊良に『Ｅｘ適正』が無いという、そんな下らん理由だけで俺達の邪魔をする馬鹿共は数多い！そんな馬鹿共を一人残らず黙らせる為には、ジジイのような力が要る…だが、俺にはまだ

『力』が足りん！」

搾り出される鷹矢の叫びは、まさしく彼の必死の叫び。
それは幼い頃に遊良と交わした、何よりも大切な彼らの『約束』のため。世界の頂点を賭けて、最も高い場所で、最高の決闘をするという…子どもらしい、しかし誰もが一度は夢見る頂点への憧れ。
所詮は子どもの絵空事。しかし彼らにとっては大事な『約束』。
常識という名の諦めに染まった大人達が聞けば、笑い飛ばされ身の程を知れと言われそうなその絵空事でも…遊良も鷹矢も、ソレを全く諦めてはいないからこそ。自分が最も嫌悪する祖父であっても、その祖父の持つ『本物の力』が、どうしても鷹矢には欲しいのだ。
…いくら不本意でも、いくら不愉快でも、いくら自分が不甲斐なくとも。
そんなプライドなど関係ない。
遊良と交わした『約束』は、鷹矢にとってはこの世の何よりも大切なことなのだから。

—だからこそ…

「だから俺は…こんな所で、お前などに折れている暇などない！俺はまだまだ強くならねばならんのだ！…俺の力、俺だけの力！【Ｎｏ．】よ！俺の望むままに、この女にも立ち向かえる強さとなれ！俺は２体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築！」

—だからこそ、鷹矢は叫び続ける。

…オーバーレイネットワークを、構築。

およそこの世界のモノではないエクシーズ召喚の為の、この世界に

おいては彼だけに許されたそのキーワード。
【化物】なんかに怯えている暇など無い。自分と、遊良の道筋を邪魔する者達を、一人残らず黙らせるほどの圧倒的な『力』をひたすらに欲し…
子どもの頃の、ただ一つの『約束』のためだけに。

「来い、【Ｎｏ．１０３】！」

願うように、ではない。縋るように、でもない。
自分の我が侭を、無理やり押し付けるかのように。Ｅｘデッキに眠る【Ｎｏ．４１】では無く、異なる【Ｎｏ．】の名を叫ぶ鷹矢。
それは、Ｅｘデッキに戻った【Ｎｏ．】のカードが、今再び『白紙』へと戻ったからこその轟き。
…別に、ルール違反ではない。デュエル中にＥｘデッキのカードが、全く新しい別のカードに進化することなど、この世界には稀にあることなのだから。
鷹矢の咆哮に呼応するかのように、デュエルディスクが反応していることがその証拠。
誰も知らぬ、全く新しいカードであっても…デュエルディスクが、そのカードを正規のモノだと言っている限り、誰にも文句など言えないことなのだ。
故に…

「紅蓮をも葬る薄氷の刃！驕りし者よ、己の罪でその身を滅ぼせ！エクシーズ召喚！」

自分のやるべき事のために、ただひたすらに求める強さ。鷹矢の叫びに応え、鷹矢の魂を映しだし、鷹矢の力を具現化し…

―ここに、現れるは…

「ランク４！【Ｎｏ．１０３　神葬零嬢ラグナ・ゼロ】！」

―！

【Ｎｏ．１０３　神葬零嬢ラグナ・ゼロ】ランク４
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１２００

現れたのは、儚げな凍気を纏う麗しき令嬢。
そのあまりに透明感のある立ち振る舞いは、猛る鷹矢とは正反対なモノではあれど…鷹矢の闘気に呼応して、その凍気を更に強大なモノへと変えていく。

「ほう…デュエルの最中にまた姿を変えるとは。」
「【Ｎｏ．１０３】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、元々の攻撃力と異なる、【紅蓮魔獣　ダ・イーザ】を破壊する！」

そして…
凍りし微笑の令嬢が、驕りし者を裁く双刃を振るい…恍惚と燃える紅蓮を切り裂き、その命を凍らせ断ち切って。
自らの力を貪欲に増し続けたその欲望が、己の身を滅ぼすことを身を持って思い知らせるかの如く。
先ほどの相手の出方を封じる、【Ｎｏ．４１】とはまるで違う。怒涛の好戦を体現するかのようなその力は、まさに鷹矢の執念の表れとも言えるだろうか。

「更に破壊と同時に、カードを１枚ドロー！…よし！【貪欲な壷】発動！【ダーク・リベリオン】、【ギアギガントＸ】、【カゲトカゲ】、【ブリ

キンギョ】、【ゴールド・ガジェット】をデッキに戻し2枚ドロー！」
「ほう、【死者蘇生】を引いたか。先ほどの【ブリキンギョ】と言い、今の【貪欲な壷】と言い…その強運だけは賞賛に値するが…」
「更に手札から、今引いた【死者蘇生】を発動！墓地から【シルバー・ガジェット】を蘇らせ、その効果で手札から【イエロー・ガジェット】を特殊召喚！グリーンを手札に！」
「諦めはしないと…フフッ、そうこなくては。天城　遊良同様、中々歯ごたえがあるじゃないか。」
「諦めるつもりなど毛頭ない！ゆくぞ！2体のガジェットで…オーバーレイ！」

少ない手札をフル活用し、一つのドローに命をかけて。
並のデュエリストならば、とっくに諦めている場面。並の強者ならば、とっくに心折れている盤面。
たった一枚のドローにデュエルの行く末がかかっているこんな状況では、誰であってもその手が伸びなくなってしまうはずだと言うのに…
しかし、鷹矢は恐れない。
それは、己のデッキへの絶対の信頼。それは、『約束』のための恐怖の忘却。
そう、引くカードが一つ違えば、そのまま何も出来ずに終わってしまうであろうこの場面においても…鷹矢が、この程度で折れるはずが無いのだ。
なぜなら、次のドローに逆転をかけることも、少ない手札から驚異的な展開を続けることも…

―どれもこれも、既に遊良が当たり前のようにやっていること。

あの馬鹿に出来るのであれば、自分に出来ないはずが無い。
圧倒的な力の差を見せ付けられても、遊良がこの【化物】に折れていないのであれば、自分も【化物】程度に折れてやる道理などないの

だと、そう言わんばかりに鷹矢は猛る。
まさに、自分勝手な思いのままにに。彼もまた、【化物】を相手にも絶対にデュエルを諦めるはずもなく…

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれぇ！」

何度でも、何度でも…何度だって鷹矢は叫び続ける。
世界で最も有名な口上、祖父より受け継ぎし王者の『名』。
己の取るべき戦術の、『砦』となるべく存在を。多様なランク４を使用する『鷹矢のデュエル』の、その象徴と呼べる彼だけの『切り札』。
今は例え、模倣でもいい。最も嫌悪する存在でも、その頂に立つ者の強さを、嫌でも体で理解させられているからこそ…
その祖父の『強さ』をも、喰らうために…

「今再び…俺の元で羽ばたけ！エクシーズ召喚！」

―鷹矢は、叫ぶ

「【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天に轟く王者の咆哮。自らの前に立ち塞がりし、全ての愚者を貫く

その牙。
鷹矢の叫びに応えるように、黒翼を翻し牙竜は轟く。
例え相手が何であろうと…例えソレが神であろうとも。戦の匂いがある限り、その咆哮は全てを貫く牙と化すのだ。

「あくまでも『切り札』に拘るか。だが、いくら鷹峰さんの真似をした所で…」
「うるさい！何と言われようと…これが俺のデュエルだ！【ダーク・リベリオン】の効果発動！サンダー・ザ・キングの力を取り込め、紫電吸雷！」
「無駄だ！罠発動、【ブレイクスルー・スキル】！【ダーク・リベリオン】の効果を無効に！」
「ぬぅっ！ならば永続魔法、【強者の苦痛】を発動！サンダー・ザ・キングの攻撃力を９００下げる！」

―！

【雷撃壊獣サンダー・ザ・キング】レベル９
ＡＴＫ／３３００→２４００

折れない、潰れない、諦めない鷹矢。
例え起死回生の『切り札』を止められようとも、先ほど貪欲に引いた２枚の内の、手札に残った最後のカードを発動して再びランに喰らい付く。
類稀なる才覚と、恐怖に打ち勝つその精神。
その『強者の証』を兼ね備えていてもなお、更に『力』を求め続ける鷹矢が発動したのは、以前に遊良も使っていた本物の『強者』相手だからこそ効果のある永続魔法。
ソレを見事に引き当てられたのは、一度は実力の『壁』を越え、貪欲に己を超えたからこそ…デッキもまた、鷹矢の闘志に応えそのカードを引かせたのか。

「性懲りも無い。いくら君が足掻いても、それは無駄な維持と言うモノだ。」
「それがどうした！例え無駄な意地なのだとしても、俺のデュエルは俺だけのモノ！お前に否定する権利などない！ゆくぞ、バトルだ！【ダーク・リベリオン】で、【雷撃壊獣サンダー・ザ・キング】へ攻撃！」

恐れはなく。
先ほども全ての攻撃をいなされ、どんどんと状況が悪化していったことを鷹矢は忘れたわけではない。
しかし、普通であればこの圧倒的な【化物】のオーラと手も足も出せていないデュエルの内容で、並のデュエリストならば攻撃するどころかデュエルを継続することすら困難になっているにも関わらず…
ここで守りに入っては、一生『約束』は叶わない。遊良が通ったこの道を、自分も突っ走ってこそ意味があるのだと、鷹矢は猛り攻めるのみ。
…あの【化物】の喉元に、この牙を突きたてるまでは。

しかし…

「だから甘いと言っている！攻撃宣言時に罠カード、【砂塵の大嵐】を発動！【強者の苦痛】と君の伏せカード、【くず鉄のかかし】を破壊する！」

初めから分かっていたかのように…いや、初めから分かっていた通り。

鷹矢の、『この攻撃のため』に予め伏せられていた双頭の竜巻を、ランはきっかりと発動して。
【ダーク・リベリオン】の効果を止めても、【強者の苦痛】まで発動してくることを予見していたからこその対策。最初から、鷹矢がここまで攻めてくることを先見して見通していたが故のカウンター。
攻撃反応系の罠でもなく、反射ダメージを与える罠でもなく…ただの竜巻。しかしランにとっては、この場面ではコレが正解であり最適解。
―ただ強いだけの『罠カード』で迎え撃つことなど、全くもってつまらない。

相手の全力を、わざとギリギリの所で返り討ちにする底意地の悪い悪魔の戦術。
鷹矢が必死になってドローを繋ぎ、そうして転じた必死の攻撃を上から潰すからこそ、自分の退屈が多少なりとも紛れるのだと、ランはそう言わんばかりに…

「天宮寺　鷹矢、どうやらここが君の限界のようだ。今の君では、これ以上の抵抗など出来はしない！」
「限界だと!?…お、俺の限界を……俺の限界を！お前が勝手に決めるな！まだだ、【砂塵の大嵐】にチェーンして罠カード、【貪欲な瓶】を発動！」

それでもあくまで最後まで、その足掻きをやめない鷹矢。
全て見破られ、全て見通され…そしてランに『ここが限界』なのだと言われても、それでも最後まで自分を信じきれる鷹矢のその自信は、一体どこからくるのだろう。
どう足掻いても絶体絶命、どう逆らっても崖っぷち。
デッキの中を逆算しても、ここで起死回生の手を引ける可能性は０にも等しい。しかも既に攻撃宣言は終了し、雷撃壊獣の攻撃力もこのままでは確実に元に戻ってしまうと言うのに。

「最後まで諦めずにドローに賭けるとは面白い。…だが無駄だ。次に君が引くカードは罠カードの【エクシーズ・リボーン】。それでは引いたところで…」
「うるさい！俺の限界を決めるのはお前でも…ましてや俺自身でもない！俺の限界は、俺のデッキが決めるのだ！」
「…ッ…その台詞は…」
「ゆくぞ！【死者蘇生】、【ブリキンギョ】、【ゴールド・ガジェット】、【戦線復帰】、【グリーン・ガジェット】をデッキに戻し…」

賭けるのは、自分の『運』にではない。
カードを引くことをまるで恐れない鷹矢の言葉には、今までどうして彼が折れなかったのかが全て詰まっていて。
そう、己の限界など、鷹矢は知らない。
己の限界を知っているのは、自分でも相手でもなく…デュエルを行っている、自分自身の『デッキ』だけなのだ。
戦えなくなるのは、自分が折れたときではない。デュエリストにとって戦えなくなった時と言うのは、己の魂を宿した『デッキ』が折れてしまったときだけであり…

―『カカッ、俺様の限界を決めるのはお前さんでも俺でもねぇ！俺の限界を決められんのは、俺様のデッキだけだぜ！』

それは、ランとの初勝負で心を折られることもなく、寧ろ嬉々として自ら【化物】の頂に足を踏み入れた【黒翼】、天宮寺　鷹峰が放った言葉と同じモノ。
直系の血の繋がりか、それとも師弟の伝承か。
己が掲げるその言葉と信念が、己の最も毛嫌いする祖父、天宮寺鷹峰が放った言葉と同じモノだということを…

―鷹矢は、知らない。

「1枚…ドロー！」

それでも…

「だが無駄だ、私には全て見えていると言ったはず！君が引いたのはやはり【エクシーズ・リボーン】！それではこの場は何も変わらない！これで、サンダー・ザ・キングの攻撃力は元に戻る！」

【雷撃壊獣サンダー・ザ・キング】レベル９
ＡＴＫ／２４００→３３００

―無常にも。

鷹矢がカードをドローしても、その場の流れは何も変わらず。
双頭の竜巻が場を荒し、鷹矢の必死の抵抗の証を無慈悲にも砕いていき…
雷撃壊獣の攻撃力が、ただ【黒翼】を大きく上回るのみ。

「さぁ、返り討ちだ！サンダー・ザ・キング！」

―!!!

解き放たれた３つの白雷。そのまま鷹矢の【黒翼】へと命中し、ソレに伴い激しい爆発と炎上が巻き起こって。
…周囲へと広がる黒い煙。鷹矢を飲み込む煙幕の奔流。

撒き散らかされたその黒煙と、周囲へと弾けた電流の残滓は…まさに、圧倒的な力による蹂躙その物。
いくら折れない心を持った少年とて、その実力ではここが限界だったのか。

「…フッ、最後まで折れないその心は気に入ったが…」

しかし、ここまで心折れること無く最後の最後まで必死になって、どうにかデュエルを繋げようとしていたその心意気だけは立派だったのだと、【化物】の目には少年がそう映っていたことだろう。
不遜な態度と言葉使いに、多少は退屈が凌げたか。そんなことを思っている様子を、ランは見せていて。

そして…

「やはり、ここまでだったよう…」

何も変わらなかった攻防の緩みから、ランがそう言いかけた…

―その時だった。

―！

黒煙を切り裂き、爆炎を超え、天へと羽ばたき現れたモノ。

―ソレは見間違うはずも無い、正真正銘本物の【黒翼】。

そう、壊獣の雷撃によって破壊されたはずの【黒翼】が、黒煙の中から羽ばたき轟きながら現れたのだ。

怒りの咆哮にその身を奮わせ、自らに歯向かってきた雷撃壊獣へとその憤怒を炸裂させていて。

「なにっ!?ば、馬鹿な！」

…珍しく。

本当に本当に珍しく、その口から驚きの声を上げた釈迦堂　ラン。

それはまるで、目の前で起こった事象が信じられないかのよう。そんなランは、これまでの彼女からは想像も出来ない程に似合わない歳相応の声を漏らし…

…また、それを切り捨てるかの如く。黒煙の向こうに見える鷹矢の足元には、発動され光り輝いている一枚のカードが。

「…俺の引いたカードは【エクシーズ・リボーン】ではない！速攻魔法、【コンセントレイト】発動！【ダーク・リベリオン】の攻撃力を、その守備力分アップさせる！」

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４

ＡＴＫ／２５００→４５００

…そう。
壊獣の攻撃によって、【黒翼】は破壊されてはいなかった。
それは鷹矢がダメージステップに発動させた、攻守を増化させられるその速攻魔法の効果によるもの。
雷撃壊獣の白雷を、逆に牙竜へと纏わせ…限界を超えた力を、一時的に【黒翼】に与えたのだ。

…それは守りを捨て、意地でもランに一矢報いるという鷹矢の強い意思の表れ。

ランの先見を超えたドロー。【化物】に無駄と切り捨てられたその『意地』は、鷹矢に意地でも無理やりに『何か』を掴ませたのだろうか。
牙竜がその咆哮で壊獣を貫き、鋭き牙を更に唸らせ轟き続け…

「まだバトルは終わってない！ダーク・リベリオンよ！奴を断ち切れぇ！斬魔黒刃！ニルヴァー…ストライィィィィィィク！」

―!!!!!

…それは、とても小さな傷だった。
膨れ上がったランのＬＰからすれば、かすり傷にもなりはしない、本当に小さく微かな傷。
しかし、これまでＬＰに触れることすら出来なかった少年からすれ

ば…いや、例え過去の【王者】であっても触れることの出来なかった、この釈迦堂　ランという【化物】のＬＰに…

―まさか実力的にも能力的にも、全く届いていないこの少年が触れたのだ。

同じ【化物】以外に、ＬＰを触れられる。それは、ランにしてみればどんな感覚だったのか。

過去の【王者】でさえ、彼女の相手にはならなかったと言うのに。例え酷く侮った所で、自分に触れることなど天地がひっくり返っても出来ない運命にあったはずのこの少年が、まさか求めていた『片鱗』を見せ付けてくることなど、一体誰が予想できようか。

「…ぐっ！」

釈迦堂　ラン　ＬＰ：７８５０→６６５０

「ば、馬鹿な…確かに【エクシーズ・リボーン】が見えたはず…いや、こんなことが前にも…」

そんな鷹矢の攻撃を受け、明らかな動揺を見せた釈迦堂　ラン。

それは別に、攻撃を受けたことで取り乱すとか、ＬＰを傷つけられて怒るだとか、そんな程度の低いレベルでの話では断じてない。

普通であればありえないその【化物】の動揺は、まるで何かを思い出しているかのような雰囲気であり…

「フ……フフッ…」

「…む？」

「フフッ、ハハハハハハッ！良い…良いよ天宮寺　鷹矢！これほどの衝撃はいつ振りだ!?これはそう、鷹峰さんと初めて戦った時や、裏

決闘界で【無垢】と戦ったとき以来の衝撃だった！鷹峰さんなら今の攻撃で私のＬＰを０にしていただろうから、まだまだ実力では祖父に遠く及ばない。…だが、しかし、良い！本当に今の攻撃は良かった！よもや私が相手のカードを見誤ったり、見えなくなったりするのは本当に良い『モノ』を飼っている証拠だ！」

「…か、飼っている？何を言っているのだ…」

『片鱗』を見せた鷹矢へと、歓喜の声をランはぶつけて。

矢継ぎ早に繰り出される言葉の数々は、ランが感情を抑えられていない証拠。感情を激しく起伏させ、歓喜に震えているその様子は、まさしく彼女が心の底から笑いを抑えられていないからなのだろう。

一体、今の鷹矢の必死の抵抗に、【化物】は何を感じたというのだろうか。

ソレを知らぬ鷹矢からすれば、ランのこの異様な態度の変わりようが本当に不気味で仕方なく…

「そうこなくてはな！私の相手を出来そうな決闘者が、『こんな時』にまだ見つかるとは！資格も持たない、実力も足りない、しかし君はその定めを無理やりこじ開けた！フフフフッ！これだから世界は面白い！」

感極まっているランのテンションは、今までのどれとも異なる異質なモノ。

不穏を交えた歓喜の羅列と、定まっていない感情の爆発。

今までのように、退屈に塗れ呆れ果てた言葉ではない。むしろ、これまでの鷹矢へと放っていた言葉とはまるで正反対の、賛辞と興味に溢れた言葉となっていて。

「…タ、ターン…エンドだ…」

鷹矢　ＬＰ：２３００
手札：２→１
場：【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】
【Ｎｏ．１０３神葬零嬢ラグナ・ゼロ】
伏せ：なし

「私のターン、ドロー！【ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント】の効果発動！デッキから【多次元壊獣ラディアン】を手札加える。更に【貪欲な壷】も発動。『ガメシエル』、『ガダーラ』、『ドゴラン』、『サンダー・ザ・キング』、『ダ・イーザ』の５体をデッキに戻し２枚ドロー！」

そんな鷹矢などお構い無しに、歓喜と共にみるみる手札を増やしていく釈迦堂　ラン。

また、先ほどと同じくランの言葉のテンションに呼応して、周囲の空気がランの鼓動にあわせるかの如く更に変化していくではないか。

…もっと重々しく、もっと異質的な、もっと終末的なモノへと。

この森の自然の方が彼女に合わせているという事実など、到底信じられないこと。しかし、ソレを今、実際に目の当たりにしているからこそ。本当にこの女が、人間の枠を超えた【化物】なのだと言うことは、最早誰の目にも明らかなこと。

鷹矢もまた、実際に対峙しているからこそ…その周囲の空気の悲嘆な変化が、手に取るようにわかってしまい…

「…早くここまで来たまえ天宮寺　鷹矢。早く祖父と同じ道を辿り、私ともっと遊ぼう。」

「ぬっ、ぬぅ…」

「フフッ、まさか『こんな時』に、こんなにイイ拾い物をするとはね。だから、これは君へのご褒美だ。君を煽り続けたことを詫び、鷹峰さんの孫としてではなく、一人の決闘者として君を称えることをここに誓おう！君の場のラグナ・ゼロをリリース！再び君の場に、【怒炎壊獣

ドゴラン】を特殊召喚！」

―！

【怒炎壊獣ドゴラン】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

鷹矢の『力』を喰らい現れしは、先ほども鷹矢の場に召喚された、怒炎を纏いし竜の壊獣。
いくらランへと吼えてはいても、それがランによって作為的に作り出された舞台だということに、この竜獣は気付いていない。

「ぐっ、またしても…」
「そして私は手札から、【多次元壊獣ラディアン】を特殊召喚！更に壊獣カウンターを２つ使い、その効果を発動！自分フィールドに【ラディアントークン】を特殊召喚する！」

―!!

【多次元壊獣ラディアン】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００
【ラディアントークン】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／　０

そしてそれに続くかの如く呼び出されしは、黒く靄のかかった不気味な壊獣。
そしてその影が実体化した、もう一体の同じ壊獣。
その壊獣の周囲の空間が捻じ曲がり、歪曲した狭間から不気味な眼光を光らせていて。
…しかし、どうしてランはわざわざ攻撃力の低い多次元壊獣を自分の場に呼び出したのだろうか。

確かにその効果によって手数は増えるとは言え、ただ攻撃するだけならば鷹矢の場に呼び出した怒炎壊獣の方が攻撃力は上のはず。
そして何より、怒炎壊獣の効果で鷹矢の場を一層すれば、トドメをさせないとは言え鷹矢を更に追い詰めることが出来たかもしれないと言うのに。

「同じモンスターが…2体？」
「…このトークンはシンクロ素材には出来ない。もっとも、私のＥｘデッキには元々モンスターは居ないがね。まだだ、【死者蘇生】を発動し、君の墓地の【シルバー・ガジェット】を私の場に特殊召喚！」

―！

【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

それだけでは飽き足らず。
ランは貴重な【死者蘇生】を使ってまで、鷹矢のモンスターを奪い自らの場に呼び出したのだ。
…益々、意味が分からない。
手札に【死者蘇生】があったのならば、こんな回りくどいやり方をしなくとも、簡単に鷹矢にトドメをさせたはず。

「…俺のモンスターを…一体何をするつもりだ！」
「フフッ、だから言っただろう？これはご褒美だと。本来ならば、少しの抵抗も出来ないはずだった君に…一瞬でも運命を乗り越えた君に、良いモノを見せてあげるよ。…私はラディアンとラディアントークン、そして【シルバー・ガジェット】の…」

しかし、そんな鷹矢を意に介さず。

ランの言葉と雰囲気が、益々不気味さを増して行き…

「3体のモンスターをリリース！」

「なにっ!?さ、3体リリースだと!?」

高らかに宣言を行うランと、それに驚きを隠せない様子の鷹矢

…これは、壊獣などのための特殊召喚のエフェクトでは無い。

そう、鷹矢がソレを見間違うはずもなく。

この天に捧げる生贄と、その身に纏う天の渦。この世界でも扱う者など殆ど居ない、そして遊良が扱うために、鷹矢にとってはあまりに見慣れたそのエフェクトは…

―紛れも無い、アドバンス召喚のためのエフェクト。

しかし3体の生贄を必要とする存在など、遊良の持つ獣の王を含めても、この世界には極限られたモノしか存在しないはずだというのに…

その突然のランの行為に対し、あっけにとられている鷹矢へと向かって。

ランは、まさに見せ付けるかのように…

「いでよ！」

無駄な詠唱など必要なく。無駄な口上など存在せず。

あまりに純粋な恐怖と共に、高々とその手を天に掲げた釈迦堂　ラン。

大気が暴れ、大地が揺れ、星その物が怯えながら…

―ここに、呼び出されしは…

「【邪神ドレッド・ルート】！」

…

―それは、『何か』の影だった。

人間が立ち入ってはならない領域。人間が見てはいけない存在。

存在そのモノがただの『深淵』で、存在そのモノがただの『恐怖』。

…木々を枯らし、命を奪い、星その物を震え上がらせる純粋なる恐

怖の塊。
あまりに巨大で、あまりに絶大で、あまりに膨大な恐怖の根源。その巨大なる姿は、まさしく神性を纏った人の理解の追いつかぬ存在とも言えるのか。
この世にこんなモノが存在することなど、誰にも信じられないかのように…
その巨大すぎる影に覆われただけで、森の木々が次々と枯れていくその光景は、この存在から駄々漏れているただ純粋なる『恐怖』そのモノであって。

【邪神ドレッド・ルート】レベル１０
ＡＴＫ／４０００　ＤＥＦ／４０００

「…な…なんだこのモンスターは…」
「フフッ、モンスターじゃないよ…これは…【神】だ。」
「か、神…こ、こんなモノが、【神】のカードだと…？」

ランの言葉に反応し、身じろぎ一つで大気を揺らす巨大な邪神。
それは、この世界の伝承にある、どの【神】のカードとも違うモノ。少なくとも鷹矢が知るこの世界の御伽噺の中には、こんな邪なる力を持った神の存在など語られてすらいなかったはず。
…また、鷹矢が幼少の頃に見た、ルキの持つ『赤き竜神』の存在感とは全くの別の神性を持ったこの存在。
その巨大な体が生み出す深淵の影によって、鷹矢の周囲にある木や草と言った命という命の息吹が、自らその生命を閉じて枯れていくではないか。
それは紛れも無い、この【邪神】から漏れ出ている純然たる『恐怖』によるモノ。
怯えすぎた木々たちが、介錯されるよりも早く楽になるために、自

らそうしているとしか思えない程に…
この世界のどんなモノとも比べることの出来ない恐怖が、あの【邪神】から発せられている、ただそれだけのこと。
「…こんなモノ…見たことが無い…」
「そうだろうね。…これは私のため、私だけの【邪神】。コレを見たことがあるのは、おそらくこの世界でも鷹峰さんだけだろう。しかし、君は誇ってもいい！鷹峰さんでも経験したことの無いこと！そう、実際にコレと対峙したのは、この世で君が始めてなのだから！」
「ぐっ!?」

ランの言葉に呼応して、【邪神】はさらにその恐怖の暴雨を増していく。
ランが今言った通り、確かにランはこの『神のカード』を鷹峰に見せたことがある。しかし、それを実際に場に出したことなど無く…今この時、この恐怖の根源たる【邪神】をこの星に呼び出したこと自体、ランにとっては『想定外』のことだったのだろう。
…それは、過去にエクシーズ王者【黒翼】を相手にした時よりも、裏決闘界の皇【無垢】を相手にした時よりも、そのどれよりも感情が昂ぶってしまった証拠。
実力的には全然【化物】に届いても、かすっても、ましてやその姿すら見えない程に下層に居るであろう少年。
しかし、そんな矮小な存在であっても、全く折れずに喧嘩を売り続け、そして最後には自分にその牙の先端を触れさせたこと…
…そう、全く期待すらしていなかった存在が、運命に逆らえるはずのない少年が。まさか無理やりに世界の定めをこじ開けて、こんなイレギュラーを巻き起こすなんてランは想像すらしていなかったのだ。
だからこそ、今のランの昂ぶりは、これまでの人生で1、2を争うほどの気分の高まり。
故に…
ランは、退屈が飽和したこの世界の中で、よもやこんな面白い事を

しでかしてしまう少年が現れたことに対するその賛辞を込めて…
彼女自身が持つ、圧倒的な恐怖の、その『根源』かつ『正体』であるこの邪なる【神】に、今まさに命を下して…

「さぁ、これで終わりだ！バトル！【邪神ドレッド・ルート】で、【ダーク・リベリオン】に攻撃！」
「ぐっ!?だ、だが邪神の攻撃力は４０００！この攻撃では…」
「無駄だ！【邪神ドレッド・ルート】の効果！その恐怖により、邪神以外の攻守は…全て半分となる！」
「なっ!?」

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→１２５０　ＤＥＦ／２０００→１０００

たとえ神を喰らう【黒翼】であろうとも、ソレは一つの例外も許さない。
純然たる恐怖が生み出すその重圧は、例え歯向かう者が神に怯えていなくとも、その力をいとも容易く奪い去ってしまうのか。
恐怖に怯えているわけではないというのに、その力が見る見るうちに飛散していくその重圧に…
神を喰らうはずの黒翼牙竜が、苦しげな咆哮を天へと叫び…

―迫る拳、響く轟音、追憶すら許さぬその絶望。

逃げ場のない巨大な拳に、もう誰も恐れを感じる暇も無く…

…だが、悲観することは無い。

―ただ、次元が違うだけなのだから。

「砕け散れ！フォール…パンドラァァァァァ！」

―

「ぐ？！ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

めり込む拳と、空を覆う神の体。

周囲の木々が拳の風圧でなぎ倒され、あたり一面が爆撃を受けたかのように吹き飛ばされているこの光景は、紛れも無く【神】の一撃により生じた地獄の光景。

ソッド・ヴィジョンの常識ではまるで説明が付かないこの事象。実体化を伴い現れた【神】の存在は、誰にも理解できるようなモノではないのだろうか。

「ぐ…はっ…ぁ…」

鷹只　ＬＰ：２３００→０（―４５０）

そして…
直接攻撃ではなくモンスターへの攻撃だった為に、どうにか寸前で直撃だけは免れた鷹矢ではあったものの…
それでも今まで経験したことの無い風圧によって吹き飛ばされ、全身を強く打ち付けてしまったが故の苦しみが、今まさに鷹矢を襲っていて。
それはかつて味わった、実体化したモンスターの攻撃など比較にならないほどの衝撃。
直撃でもないというのに、今すぐにでも意識が飛んでしまいそうなこの一撃は、まさに【神】による神罰そのもののよう。
また、デュエル終了を告げる無機質な機械音すら、そのシステムが仕事を忘れているかのように沈黙を貫き…

「あぁ、やはりイイ…邪神の攻撃を受けてもなおその意識を手放さぬとは。益々君が気に入ったよ天宮寺　鷹矢。」
「っ…釈迦…堂…ラ…ン…」

そんな悶え苦しんでいる鷹矢へと、ゆっくりと近づいてくる釈迦堂ラン。
どうにか繋いでいる意識の欠片が、ランの名と彼女の言葉をどうにか鷹矢の耳に届けてはいるとは言え…そのあまりの衝撃に、鷹矢は今にもその意識を手放してしまいそう。
そんな吹き飛ばされ倒れた鷹矢を見て、一体ランは何を思うのだろうか。
デュエルディスクを仕舞いながら、消え行く【邪神】を背に向けながら…
ランは、ゆっくりとその口を開いて…

「そんなすぐ動こうとしてはダメだ。しばらく横になっているがいい。…あぁ、そういえば帰りの時間を気にしていたか。フフッ、だが心配することはない。私が何とかしてあげるから、今はこのまま眠る

といいさ。」
「ぐ…う…」
興味の無い他人のことなど、塵か道端の小石程度の認識しかしていなかったランの口から語られる、紛れも無い鷹矢への優しい言葉の数々。
…それはランの言葉のそのままに、本当に鷹矢の事が気に入ったのだろう。
そこら辺で繁殖している、有象無象の雑魚とは違う。自分が気にかけるに値する存在、いつか地力でここまで上り詰めるであろう、その内に良いモノを『飼っている』少年。
「そうだ、君は天城　遊良がどうとか言っていたね？うん、確かに彼にだけカードを預けておいて、君にも預けないのは不公平だ。…コレを、君にも預けておこう。いつか私が取りに行くか、君が返しに来るまで預っておいてくれ？」
そんなランは、今まさに気を失いかけている鷹矢へと向かって、その豊満な胸の内の上着の内ポケットから、一枚のカードを取り出して。
ソレを鷹矢の制服のポケットに入れたかと思うと、その手を徐に鷹矢の顔の上…視界を隠すようにして、その冷たい掌で鷹矢の目を覆い隠し始めたではないか。
「天宮寺　鷹矢…君の中の【化物】が育ったらまたやろう。フフッ、その時は、きっと世界はもっと『面白いこと』になっているはずだから。」
そうして…
ランが、そう鷹矢へと声をかけたことを最後に…

「じゃあ…おやすみ。」

鷹矢の意識は…

―そこで、途切れた。

―…

「…むぅ。」

目が覚めると、鷹矢は見慣れた座席に座っていた。

この夏休みの間中、ずっと移動のために使っていた『新幹線』の、その座りなれた柔らかい、そして一向に尻に馴染まぬ座席の一つに。予め取っておいたチケットの、指定された座席。決闘市に到着する時間も前もって決めておいた時間ピッタリで。

…しかし、今しがた目覚めた鷹矢には、その光景がどうしても信じられなかった。

…そう、鷹矢にしてみれば、どうやって新幹線に乗ったのかも覚えておらず。また、車掌や隣の席の老人に聞いても、『そういえばいつの間にか乗っていた』としか答えてはくれないのだ。

痛みは無い。疲労もない。あれだけ派手に吹っ飛ばされたにも関わらず、体の調子はとても好調。

これまでの『修業』で積み重なった疲労感も、3日間ほど熟睡した

かのように体の中には疲労の欠片も残ってはおらず。
…まるで、【化物】との邂逅など、夢のまた夢だったかのよう。
「…意味がわからん。森の中に居たと思ったら、帰りの新幹線には乗っているとは。」
しかし、鷹矢にはソレが夢ではなかったのだと、あまりにもはっきりとわかっている。
…森の中での、【化物】との邂逅。そして純然たる恐怖の塊であった、【邪神】の存在。
あの衝撃は、夢や妄想と言った類の言葉で片付けられる代物ではない。
そして、その出来事の証拠を確かめるかのように…
鷹矢は、己の懐から取り出した２枚のカードをまじまじと見つめ、その２枚の『異質』なカードを見比べながら呟いて…
「…また【Ｎｏ．】のカードが『白紙』に戻っている。…それに、奴から貰った『このカード』は…」
ランが呼び出した【邪神】に中てられたのか、それとも何か他に理由があるのか。
戦いの前の姿である【Ｎｏ．４１】や、戦いの最中に変化した【Ｎｏ．１０３】から、再びその姿を『白紙』へと変えた鷹矢の【Ｎｏ．】。
しかし以前の『白紙』と違うのは、この『白紙』の【Ｎｏ．】はその鼓動を失っていないということ。
以前はその力の源である『闇』が足りないが故の『白紙』ではあったものの、今の『白紙』の【Ｎｏ．】から感じるのは溢れ出そうなほどの闘争欲と、今にも飛び出してきそうな剥き出しの戦意。
それだけではない。鷹矢は遊良と同じように、ランから『あるカード』を手渡されたのだ。そのカードが今、鷹矢の手の中にある以上…
…あの出来事は、夢などでは断じてないのだから。

（釈迦堂　ラン…確かに【化物】だった。それにあの『神』のカードは…）

実際に見たことのある、ルキの『神』のカードから感じられた神性とはまるで違う、全く異質の【邪神】の力。

それを目の当たりにし、そしてソレと実際に戦った鷹矢は一体何を思うのか。

（…面白い。ジジイ以外にも本当にあんな【化物】が居たとはな。他人に至れる境地が、この俺に至れぬはずがない。待っていろ釈迦堂　ラン、そしてジジイ…俺もソコへ行って、いずれ貴様らを叩きのめしてやる。）

【邪神】と【化物】に吹き飛ばされても、それでも鷹矢の闘志は未だ消えず。

あんな目に遭ったばかりだというのに、今すぐにでもデュエルをしたいその闘争心は彼が生粋のデュエリストである証とも言えるだろうか。

まだまだ、世界は広い。

自分の求める、誰にも有無を言わせないほどに洗練された『力』の目標は、あまりに遠いところにあるのだということがわかったから。

ならば、まだ足踏みをするような時ではない。立ち止まっている暇などなく、心を居っている場合でもないのだ。

…まだまだ、強くなれる。自分よりも強い者の存在は、自分の力がどれだけ足りていないかを測るに丁度良い指標なのだ…と、そう言わんばかりにふてぶてしい鷹矢の思考は留まることを知らないのか。

そんな、どこまでも自分本位な鷹矢の思いは…

「待っていろ…遊良…」

決闘市、そして『約束』を共に目指す片割れの少年へと向けて…

―静かに、放たれていた…

―…

「…カカッ、どうだったよクソガキは。」

どことも分からぬ暗闇の空間。
そこに響いた渇いた笑い。
相手の姿など見えないその空間で、その声だけで存在を認識しているであろう『その人物』は、不意にこの暗闇へと『帰ってきた』人物へと、そう声をかけて。
そして、その声に反応するかのように…ここへと帰ってきた人物もまた、渇いた笑いの持ち主へと声を返す。

「えぇ、全く期待していませんでしたが、予想外の事が起こったので楽しめましたよ。」
「そうだろうなぁ。なんせ、お前さんが【神】を出すことなんざ人生で初めてだっただろうに。クソガキに中てられて昂ぶるたぁ、一体どういう気まぐれだい？」
「仕方ないでしょう？初めて私よりも年の若い少年が私に傷をつけた

のだから、これで昂ぶらないと言ったら嘘になる。流石は貴方の孫だ、寸分違わず貴方と同じ道を辿っていた。」
「ケッ、クソガキなんかと比べられるのも癪だぜ。一緒にするなってんだ。」
「フフッ、本当にそっくりな一族だ。」

世間話をしているかのような気軽さ。しかしこの暗闇の所為もあってかその雰囲気は全くの別物。
彼らが『ここ』にお喋りをしに来たわけでは無いコトは明らかで、その目的も思想も全く分からないままではあるものの、それでも彼女らにしか知りえぬ『何か』を持って、ただ淡々と会話を続けるだけ。

「さて、【神】の力も把握できた。あとは残りの『一枚』が私の元に来れば…」
「『時が来る』…って奴かい？おうおう、若ぇ奴は危なっかしいったらありゃしねぇぜ、ったくよぉ。」
「フフフッ、その時はよろしくお願いしますよ？着々とピースは揃いつつある。それに、その時には彼らも『育っている』かもしれませんし。」

不穏な空気と、不穏な言葉。
決して常人には理解出来ぬであろう言葉を持って、掲げる『何か』への思いを女性は連ねる。
そのまま、女性が静かに呼吸を一つ、吸い込んだかと思うと…
期待を込めた雰囲気で、その口から言葉を発して…

「…さぁ、世界が面白くなるのはもうすぐだ。」

誰が聞いているのかもわからぬ、誰も聞いていないかもしれないこ

の『闇』の中で…

ポツリと呟かれたその言葉は、誰にも止められることも無く…

―闇へと、吸い込まれていった…

―…

ｅｐ６９「烈火と業火」

「あっついよー…なんでこんなに駅から遠いのー…」
「知るかよ…」

夏休みも中盤を過ぎた頃。
決闘市を騒がせていた『失踪事件』もその鳴りを潜め、既に太陽が真上に昇り暑さも本格的に厳しいこの昼の時間に…
遊良は、ルキを連れ立って決闘市の南地区、その『とある場所』まで出向いていた。
しかし、最寄りの駅から徒歩でそれなりに時間のかかる場所にある為か、炎天下の街の気温は例年を大きく上回って灼熱の一途を辿っており…
それに反比例し、遊良とルキのテンションは大きく下降の一途な様子を見せていて。
また、いつもならばイースト校で通常通りに、来たるべき【決島】に向けた『修業』の真っ最中であるはずの時間。
その一刻の猶予も無いこんな大事な時期に、遊良とルキがイースト校を離れ、この決闘市の『南地区』にまで足を運んだのも理由があって。

―『明日は仕事が立て込んでいましてね。外部の知人に君たちの修業を頼んであるので、明日はそちらに行ってください。』

…そう、それは決闘学園イースト校理事長、【白鯨】と呼ばれた元シンクロ王者である、砺波　浜臣にそう言い付けられていたが故の遠征。
遊良が謎の人物に襲われた後から、すっかりとその影を消した『失踪事件』の捜査も行き詰っているとのことから砺波もやや警戒を緩めているのか。
砺波クラスの実力者が、わざわざ『外部』の人間に信頼を預け己の

教え子たちを託すということは、それだけその『外部』の知人の力が砺波も認める程の実力者であるとも言えるだろう。
そう、言い換えれば、あの自尊心の塊のような砺波が認めている人物に、わざわざ特別に教えを請えるという遊良にとってはまたとない経験。
そんな、どこか暑さに参っているルキとは裏腹な期待を持っている遊良へと向かって…
ルキは、弱々しい声で遊良へと言葉を続けた。

「鷹矢は今頃涼しい会場で大会でしょ？…いいなぁー…」
「そうか？毎日毎日レベルの高い大会に出続けで、この前帰ってきたときもかなりヘロヘロになってたぞ？…あの鷹矢が。」
「…うぅ…やっぱ良くない。…どっちもよくないよぅ、もう…」

外のあまりの気温の高さに、ルキが弱音を吐きつつも。二人は砺波に指示された場所を目指して、この猛暑の中を歩き続ける。
【決島】の本番も近づいてきているというのに、少々緊張感に欠けた様子のルキではあるものの…それでも、この暑さの前では多少の弱音は仕方がないのか。
…まぁ、一生に一度しか訪れない高等部2年の夏休みを、毎日毎日修業漬けで過ごしているのだから、ルキが弱音を吐いたとしてもそれは当たり前の事ではあるのだが…
しかし、来るべき【決島】へと向けた準備の為には、彼らには少しも休んでいる暇は無いのだろう。
そう、決闘市とデュエリアという、犬猿の仲とは言え世界が誇る二大デュエル大都市にある決闘学園同士が、その雌雄を決するという歴史上初めての大規模な学生達の祭典。
そんな世界中が注目している祭典に、【決闘祭】の優勝者として出場する遊良へのプレッシャーは生半可なモノではなく…
今でこそ【決闘祭】での活躍もあって、ようやく決闘市内においては『Ｅｘ適正』を持たない遊良への偏見が収まってはきているものの、

しかし一度決闘市の外に出ればまだまだ世界は遊良の事を切り捨てたままだと言うこともまた事実。
…負ければ終わり。
もし遊良が【決島】で不甲斐ない戦いを見せれば、世界中が遊良を笑いモノとして騒ぎ立て…
自分を推薦してくれた決闘学園の理事長達の顔に泥を塗ることになり、そんな事になれば世界は幼少の頃以上に自分の存在を頭から否定してくるに違いないのだ。
それに加え、『赤き竜神』を持つルキを狙っている『敵』が居るかもしれないという懸念と、あの鷹矢でさえ文句を言いつつも着々と砺波に言いつけられた修業をこなし今この時も確実に強くなっているのだから、そんな鷹矢に負けないためにも、そして自身とルキの事を守るために強くなる為にも。
…『修業』のために、この暑さの中を歩き続けるだけ。

そうして…

目的地までの一本道、綺麗に舗装された熱く燃えたアスファルトの道を超え。
目的の場所を目指して、遊良とルキは歩き続け…

―目的地であるこの『校門』の前で一度、二人はその足を止めた。

「…初めて来たけど、イースト校とそんなに造り変わんないんだね。」
「まぁ姉妹校だからなぁ。でも一番実戦派なだけあって、スタジアムの数がイースト校よりも断然多い。」
…そう、遊良達が訪れたのは、この決闘市に４つある決闘学園の内の一つ。
効率良く学生達の実力を引き伸ばして、実力の層が最も厚いと言わ

れているウエスト校や、各召喚法の専門授業を行っていて、時折突出した実力者が現れることで有名なイースト校や…
融合召喚至上主義を掲げ、別名『紫魔学園』とも呼ばれるノース校とも、そのどれとも違う学園の形で有名な場所。

―決闘学園サウス校

『烈火』と呼ばれた元プロデュエリスト、獅子原　トウコを筆頭とした、実技授業の多さが有名な実践主義を掲げる学園。

―攻めることこそ美学なり。いかなる逆境にも立ち向かう、『攻めてこそ全て』を学風に。

押し寄せる波の如く攻撃を重視してくるサウス校の学生達の特色は、まさに理事長の思想をそのまま反映していることに違いなく。

「何か他校に入るのってちょっと緊張するかも。」
「…そうだな。」
「このまま入っちゃっていいんだっけ？」
「あぁ、話は通してあるから、特に許可取りに行く必要も無いんだって。」

そして、このサウス校へとわざわざ足を運んだ遊良とルキが、指示されている時間通りにサウス校の敷地内へと足を踏み入れていく。
この夏休みのど真ん中で、他に学生も居ないために…余計なことに足を止められることもなく、他校へとやってきた遊良達へ挑発的な物言いを食らわすような学生も居らず。
そのまま指定されていたサウス校のスタジアムの中でも、最も大きなメインスタジアムへと正面からその足を踏み入れ。そのまま、指定されているその場所へと二人は向かって。

そして…

遊良とルキが、通路から一歩、メインホールへと入った…

—その時だった。

「よく来たねぇ、待ってたよ！」

デュエルステージの上から、遊良とルキに向かって届けられた快活な声が、この広いスタジアム全体に響き渡って。

…すぐさま遊良とルキがステージの上を見上げれば、そこには赤みがかった茶色い髪を揺らした、スタジアムの上で仁王立ちした壮年の女性の姿が。

この広いスタジアムの中でも、よく響きよく通る快活な声で。心に直接響くようなその真っ直ぐな声は、紛れも無く本心と言葉が一致している証拠。

それは、あの元シンクロ王者【白鯨】砺波　浜臣が、わざわざその頭を下げてまで教え子の遠征を頼んだ、【王者】も認める確かな『力』を持った豪傑であり…

女性らしからぬ荒々しい攻撃と、そのあまりに好戦的なスタイルは、彼女の豪胆な態度と合わせてあまりにも有名。

一説には、【黒翼】も【白鯨】も…そして彼女の教え子であった、【白竜】と言ったあの歴戦の【王者】達でさえ彼女には頭が上がらないと言われている、決闘界きっての姉御肌の御仁。

…燃え盛る女傑。『烈火』と呼ばれた元プロデュエリスト。

—獅子原　トウコ

「獅子原理事長、今日はよろしくお願いしま…」
「ハッ、固っ苦しい挨拶は無しでいいさね！」
「え、いや、そういうわけには…」
「なぁに、浜臣の奴…じゃなかった、砺波理事長が直々に鍛えてるって言うから、ちょっと気になって声かけてやっただけさよ。エリ…ウチの孫娘も、去年の【決闘祭】でアンタに『色々と』世話になったみたいだし、どんなモンなのか気になってたからねぇ。」
「はぁ…」
「だから今日はアタシがみっちり鍛えてやるさ！アンタを【決島】に推薦したアタシの面子もかかってるからねぇハッハッハ！」

ステージに上がり、礼儀と共にそう頭を下げた遊良に対し…どこまでが冗談で、どこまでが冗談ではないのかを掴みにくいその口調で、更に言葉を返す獅子原　トウコ。
混じり気の無い快活な声、裏表の無いストレートな感情。
決闘界きっての大家族で知られる『獅子原家』の、その筆頭とも呼ぶべき彼女の人徳がなせる技なのか。しゃきしゃきと話すその言葉使いには、この高位に達した人物にありがちな重圧やプレッシャーと言った、他者を圧倒してくるような雰囲気が含まれておらず。

…しかし、笑いを織り交ぜながら話していながらも、その声の中には確かな威厳と得も言われぬ迫力が存在していることに、遊良は気がついたのか。

そう、元とは言え、歴史に名を残すほどの『異名』を持つプロデュエリストであった彼女の実力は、王者に次ぐとも言われる世界最高峰に位置するモノ。
いくら『烈火』と呼ばれたこの女性の態度に、親しみすら感じさせる優しさがあるとは言え…
その立ち振る舞いは、遊良に歴戦の重みを感じさせるには充分過ぎる程なのだから、いくら彼女の声が快活であろうとも遊良が緊張を崩

せないのは当然のことだろう。
　そんな『烈火』は、まだサウス校に着いたばかりで戸惑っている様子の遊良達へと向かって…
　何やら少々考えたような素振りを見せた後。徐に、その口を開き始めた。

「それに…アンタに会わせろって煩いヤツも居たからね。まっ、色々と丁度良かったってだけさよ。」
「…え？」
「ほら炎馬！入ってきな！」

　そう言って…トウコが、反対側にある通路の入り口へと声をかけたその瞬間。
　入り口の影に隠れていたのか、ゆっくりとその入り口の影から、サウス校の制服を着た少年が姿を見せたではないか。
　…それは、獅子原　トウコや彼女の孫娘である獅子原　エリと同じ赤みがかった茶色い髪を、まるで獣のたてがみのようにして後ろへと流した髪型をした、どこか幼さの残る少年。
　しかし、今日のこのサウス校への遠征は急に決まったモノだと言うのに、一体何故この少年は遊良が今日この場に来ることを知れて、そしてここに来ることを許されたのだろうか。
　そのまま『炎馬』と呼ばれたその少年は、ゆっくりと大股でこちらへと向かってくると…
　目を細め、遊良を睨み、肩で風を切るようにして。ステージへの階段を上がって、そのまま遊良の傍まで近づいてきたではないか。

「ふーん…アンタが天城　遊良か。去年、姉ちゃんに勝った奴…」
「…姉ちゃん？」
「コイツは獅子原　炎馬。ウチの一年で、15人いるアタシの孫の一番の末っ子さね。…エリの弟なんだが、エリが去年の【決闘祭】でアンタに負けたのを根に持ってるんだとさ。」

「別に根に持ってるとかじゃねーけど。…でも、あの姉ちゃんが下級生に負けたっておかしいじゃん。だからどんな奴なのか気になってただけだって。」
「…えっと…」
「…すまないねぇ、末っ子の所為かどうにも小生意気で。洟垂れの癖して、ウチの1年で唯一【決島】の代表にも選ばれちまったもんだから余計に調子に乗っちまって。今日アンタがサウス校に来るって聞いたら、『自分も行く』って言って聞かなくてねぇ。」

初対面であるにも関わらず、あまりに不遜な態度で遊良へと言葉をぶつける獅子原　炎馬と…
それに少々困ったような顔をしてはいるものの、末の孫と言うだけあってどこか炎馬への態度が甘い獅子原　トウコ。
しかし、歴戦のデュエリストが鍛えてくれるという、この誰もが羨む特別な場所にこの少年が無理を言って現れたのも、『烈火』の孫という立場ならば納得せざるを得ないだろう。
また、炎馬の不遜な物言いは、遊良にどこぞの馬鹿を思い出させるには充分であり…また彼のその不遜なる物言いも、ソレを裏付けるほどの経験と自信を持っていると言うことなのか。
…とは言え、一体どうしてこの少年は遊良に会いたがっていたのだろうか。
確かに昨年度のサウス校3年、今年から新人としてプロデビューを果たした彼の姉である獅子原　エリと遊良は、昨年度の【決闘祭】で戦った間柄とは言え、その勝敗は【決闘祭】における正式なモノであり、もしもその結果が不満だとして彼が憤っているのだとしたら、それは完全にお門違いであると言うのに。
そんな炎馬は、未だ戸惑いを感じているであろう遊良へと向かって…
どこか喧嘩腰にも聞こえる口調のまま、言葉を続けた。

「…なぁ、天城　遊良。俺とデュエルしようぜ？」
「…え？」
「一回さぁ、【決闘祭】の優勝者ってのがどんなモンなのか見ておきたかったんだよね。それに、アンタがあの姉ちゃんに勝ったってのもどうにも信用できないしさ。なぁ、ばあちゃんもイイだろ？」
「アタシはまぁ…手っ取り早くこの子の力も見れるから構わないがねぇ。でも天城君、アンタはいいのかい？こんな洟垂れの頼みなんて別に断ってくれてもいいんだよ。元々はアタシが直接アンタを鍛えるつもりだったんだし。」

唐突に、しかし決闘学園の学生らしい好戦的な物言いで。まるで挨拶代わりだと言わんばかりに、どこか高圧的な言葉使いで遊良へと勝負を挑んできた炎馬。
その尊大な態度は、よほど自分の実力に自信があるのか、それとも『烈火』の孫だという後ろ盾に甘んじているのか。もしくは、その両方を遊良に感じさせたことに違いなく…
彼にとって、姉の敵とも言える自分が歴戦のデュエリストである祖母の指導を受けることが彼には気に入らなかったのだろうか。
つまり少年の言いたい事は、自分に花を持たせろということか、それとも『Ｅｘ適正を持たない者』らしく身の程を知れということとも取れるモノ。
―歴戦の決闘者である『烈火』に鍛えてもらいたいのならば、それ相応の『空気を読め』…と、遊良には目の前の少年がそう言っているようにも聞こえ…

しかし、ソレを把握してもなお…

遊良は、不敵に笑うのみ。

「…いえ、やらせてください。こっちも、どうせなら本番前に相手の手の内を見ておいた方が得ですし。」
「ハッ、言うじゃないかボウズ、アタシを前にして中々の度胸だ。いいだろ、威勢のいい男は好きさ。好きに戦りな。」

遊良の口から放たれるは、炎馬に花を持たせる気など更々無いと言わんばかりの雰囲気と言葉。
そう、あまりに堂々とそう言い放った遊良の言葉からは、例え目の前の少年が歴戦の決闘者の孫であろうとも、微塵も臆した様子を感じさせず。
それは、別にこの獅子原　炎馬という少年が誰の孫であったとしても、そしてその少年の祖母が歴戦に名を連ねた伝説の決闘者であったとしても…そして、他人がどれだけ高圧的な態度で向かってこようとも、今更、遊良が『そんな圧力』程度で怖気づくわけが無いと言う事の証明。
…何せ、遊良は生まれた時から王者【黒翼】の孫である鷹矢と共に過ごしているのだし、王者【黒翼】と元王者である【白鯨】に直々に鍛えられているのだ。
それに加え、まだ自分の力が認められていなかった昨年の決闘市の雰囲気の中で、見事【決闘祭】を最後まで戦いぬいた遊良の精神力は、およそ同じ年代の少年達の胆力と比べても桁違いに鍛えられているのだから。
…そして、ソレは無論『烈火』の方も始めから承知していること。
故に、デュエルの為にステージの端へ移動していく遊良の背中を見送りつつ…
その反対側のデュエリストゾーンに歩いていこうとしている末孫へと向かって。『烈火』は、やや怪訝そうな顔をしながらその口を開いて…
「炎馬…アンタまさか、天城　遊良を見くびったり、わざと負けさせよ

うとしたりしているんじゃないだろうね？【決闘祭】の優勝者ってのは生半可なモンじゃない。もしアンタがそんな馬鹿な事考えてるんだったら…」

「わかってるよばあちゃん。…あの姉ちゃんでも出来なかった、【決闘祭】の優勝を果たした『あの人』がどれだけ凄い人なのかってことくらい…俺にだって…」

「…ほう？」

…しかし、遊良に聞こえないように呟かれた炎馬のソレは、先ほどまで遊良へと向けていた喧嘩腰の態度とは一変。

真逆の態度と、正反対の対応。

呼び捨てていた遊良の事を『あの人』と言い、疑っていたその功績を素直に認めているかのような言葉が炎馬の口から語られ始めたではないか。

「それに俺が『烈火』の孫だからって、あの人が手を抜いたり勝ちを譲ったりなんかするもんか。じゃなきゃ、アレだけのプレッシャーの中で【決闘祭】に優勝なんか出来っこない。」

先ほどようなの、含みのあるような言葉ではない。どこか敬意すら感じさせる言葉で語られる、これが炎馬の本音だとでも言わんばかりに。

その口から語られるのは、少なくとも遊良を陥れたいだとか蔑みたいだとか、そんな低俗で浅はかな未熟者が言うような言葉では断じて無く。

その孫の変わり身に、彼の祖母も思わず虚を衝かれたかのような表情を零していて…

そんな祖母へと向かって、そのまま炎馬は更に言葉を続けるのみ。

「…だから、俺が一度も勝ててない姉ちゃんに勝ったあの人と…今の俺にどれだけの差があるのか。一度、この目でちゃんと見ておきたい

んだ。」
「ハッ、あの甘えん坊が、生意気言うようになったもんさね。ばあちゃんちょっと驚いたよ。」
「…ちゃかすなよ。」
「でもデュエルしたいだけだったら、あんな態度取らずに普通に頼めば良かったんじゃないかい？わざわざ挑発するような事まで言って。」
「…本人見たら緊張して…あぁでも言わなきゃ上手く喋れなかった…」
「…何だい、まだまだ洟垂れじゃないか。」

…

「…いいの？本番前に【堕天使】が使えなくなったこと、他の学生にバレちゃっても。」
「あぁ、どうせバレるのが早いか遅いかだろ。それに、【決島】じゃ嫌でも全員にバレるんだしさ。」
「…そういうことじゃないんだけど。」

デュエルステージの端。今まさにデュエルが始まろうとしているそんな矢先に、どこか怪訝そうな声でそう遊良へと声をかけてきたルキ。
どこか心配そうに呟かれたソレは、先ほどの『烈火』の孫の高圧的な態度と…
遊良が【堕天使】を失った事実を知っているのが極限られた人物のみと言うことからなのだろうか。
「もし遊良が【堕天使】を使えないって事が広まったら、【決島】の前にまた色々言われそうじゃん。」

…そう、ルキの懸念は、遊良にとって【堕天使】というカード達があまりにも重要なモノだということを理解しているからこそ。
遊良の【堕天使】達の力は、【決闘祭】でも証明されているものの…逆に言えば、ソレが使えなくなったと周囲に広く知れたら、周囲の心無い人間達がまた何を言い出すかわからないのだ。
―いくら【決闘祭】の優勝者とは言え、その優勝の要となった【堕天使】がなければ…所詮、天城　遊良は『Ｅｘ適正』の無いデュエリストのなりそこないじゃないか…と。

「大丈夫だって。…『前』と、やることは何も変わらないんだし。」
「…え？」

しかし、そんなルキへと静かに届けられた、確かな力強さが込められた遊良の言葉。
それは、先日に失ってしまった【堕天使】と言う力に、微塵も未練を持っていない証拠なのだろうか。いや、やはり昨年度にずっと一緒に戦ってきた【堕天使】達を失った事は、遊良にだって辛いことではあるものの…
失ってしまったモノを今更嘆いても仕方が無いのだし、そもそもそんな気持ちなどとっくに振り切れている遊良だからこそ。今の自分にしか作れないデッキを胸にデュエルへと挑むしかないと切り替えている証拠に違いないだろう。
弱いままでは変わらない。強くなければ変えられない。
幼い頃に師、鷹峰から教えられたその言葉の通りに…

「【決闘祭】の前と一緒だ。…邪魔する奴は全員倒す。疑う奴も全員倒す。…無理矢理にでも、認めさせてやるんだ。」
「…あの時とは事情が逆じゃん、もう。」
「いや一緒だよ。見せ付けるだけだ、例え【堕天使】が無くても…俺の、『力』を。」

―見せ付けるだけ。嘘では無い事を、周囲に。

例え、どんなカードを使おうとも…自分自身の『力』が、偽物では無いのだということを、疑う者全てに。

そうして…

獅子原　トウコとルキがそれぞれスタジアムの端に寄り、遊良と炎馬、それぞれが対面で向かい合うと、お互いにデュエルディスクを装着して。

唐突に始まるこのデュエル。それぞれの思惑は交差をせずに相手へと向いている。そのままディスクがデュエルモードへと切り替わると、デッキが現れＬＰが表示され…

「天城　遊良！言っとくけど、こっちだって手加減はしねーからな！」

「…」

どこか、自らを鼓舞するかのように叫ばれた少年の声を合図に…

―２人は、叫ぶ。

―デュエル！

そうして、始まる。

先攻はサウス校１年、獅子原　炎馬。

「俺のターン！俺は永続魔法、【炎舞―天璣】を発動！デッキから【速

炎星―タイヒョウ】を手札に加える！そのまま、【速炎星―タイヒョウ】を通常召喚！」

―！

【速炎星―タイヒョウ】レベル３
ＡＴＫ／　０→１００　ＤＥＦ／　２００

たてがみの少年が早々に呼び出したのは、天速の定めをその身に刻んだ炎豹の化身。

―【炎星】

それは獣の魂を宿した古の時代の武人の集団。
その切り札には、シンクロモンスターとエクシーズモンスターが存在するものの…そのどちらを扱うかによってデッキの内容もガラリと変わる、『Ｅｘ適正』によってそのスタイルが異なるというプロでも使用する者の多いテクニカルなカテゴリ。
またその一番の特徴は、【炎舞】と呼ばれる武人達の兵法を使い分け、その戦を更に激しいモノへと変えることにあるのだ。

「【速炎星―タイヒョウ】の効果発動！タイヒョウをリリースし、俺はデッキから【炎舞―天枢】をフィールドにセット！そしてそのまま【炎舞―天枢】を発動し、獣戦士族の召喚権を一回増やす！俺は手札からチューナーモンスター、【炎星師―チョウテン】を通常召喚！その効果で墓地から、【速炎星―タイヒョウ】を守備表示で特殊召喚する！」

―！

【速炎星―タイヒョウ】レベル３
ＡＴＫ／　０→２００　ＤＥＦ／　２００

【炎星師―チョウテン】レベル３
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／　２００

現れては消え、消えては現れ、正に陽炎の如き炎の武人。
【炎星】の切り札にはエクシーズモンスターとシンクロモンスターが存在するとは言え…歴戦のシンクロ使い、『烈火』と呼ばれた獅子原トウコの孫らしく、彼もまたその血に違わぬ存在をこの戦場に呼び出しにかかるのか。

「いくぜ…レベル３のタイヒョウに、レベル３のチョウテンをチューニング！」

轟炎の導師が３つの天輪へとその身を捧げ、導かれる様に昇りしは、炎豹の定めを刻まれし天速星。
天輪が燃え、炎が弾け、空から落ちる光の柱と共に爆音が轟き…

「燃え盛る業火よ！戦場を駆ける紫炎を纏い、仇なす敵を焼き尽くせ！シンクロ召喚！来い…レベル６！【炎星侯―ホウシン】！」

―！

【炎星侯―ホウシン】レベル６
ＡＴＫ／２２００→２４００　ＤＥＦ／２２００

現れしは、紫炎の猛馬を駆りし武人の王。
轟々と燃える炎圧を背負い、武人達の先頭に立ってその威光を激しく燃やす。

「【炎星侯―ホウシン】の効果発動！シンクロ召喚に成功したため、俺はデッキからレベル３の、【立炎星―トウケイ】を特殊召喚する！来い、【立炎星―トウケイ】！」

―！

【立炎星―トウケイ】レベル３
ＡＴＫ／１５００→１７００　ＤＥＦ／　１００

また、武人の王に呼び出されるように、立て続けに現れる新たな武人。

目まぐるしく、休む間もなく。

サウス校の信条の通り、そして『烈火』の孫らしく。最初から激しい展開を魅せる炎馬の場には、どんどんとカードが増えていくではないか。

「まだだ！【立炎星―トウケイ】の効果発動！【炎星】モンスターの効果によって特殊召喚に成功したため、デッキから２体目の【炎星師―チョウテン】を手札に加える！そしてトウケイのもう一つの効果！場の【炎舞―天璣】を墓地に送り、デッキから永続罠、【炎舞―天璇】をフィールドにセット！俺はカードを１枚伏せて、ターンエンドだ！」

炎馬　ＬＰ：４０００
手札：５→３枚
場：【炎星侯―ホウシン】
【立炎星―トウケイ】
魔法・罠：【炎舞―天枢】、伏せ２枚

そうして…

まだデュエルも始まったばかりだと言うのに、サウス校の学生らしく激しい先攻のターンを終えた炎馬。

…あれだけの展開を行ったにも関わらず、まるで息切れもせず。

サウス校の一年生で、唯一【決島】の代表に選ばれたと言うのも頷けるほどの錬度。

『烈火』の孫という肩書きに溺れず、高等部に進級したばかりとは言え彼のこれだけのデッキの回転を見れば、この獅子原　炎馬という少年がかなりの実力を持っていると言うことは遊良の目にだって明らかなことだろう。

それでも…

「俺のターン、ドロー！」

炎馬の場に、圧倒されることも無く。遊良は意気揚々と己のターンを迎えるのみ。

…そう、相手が誰であろうとも、どんな思惑があろうとも。

自分のやるべき事は変わらない。【堕天使】を失ってしまってからこれまで、【白鯨】の元で磨き上げてきた自分のデッキを、今ここに爆発させるだけ。

そんな遊良は、一枚増えた手札を見て、そしてここから何をするべきなのかを即座に頭の中に思い浮かべながら…

―進撃を、始める。

「俺は魔法カード、【トレード・イン】を発動！レベル８の【クラッキング・ドラゴン】を捨てて２枚ドロー！更にフィールド魔法、【チキンレース】発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！【闇の誘惑】も発動！２枚ドローして【サクリボー】を除外！２枚目の【トレード・イン】を発動し、レベル８の【モザイク・マンティコア】を捨てて２枚ドロー！…よし、【成金ゴブリン】を発動だ！ＬＰを１０００与え、更にデッキから１枚ドロー！」

「え、だ、【堕天使】じゃない!?」

ターンを向かえて早々に、巻き起こりしはドローの乱舞。

【堕天使】の影も形も無いそのドローの嵐に、驚いた様子の少年の声を無視して…まるで止まることのないそのデッキの回転は、遊良に【堕天使】を失っているという事実を微塵も感じさせないほどに激しいモノ。

…そう、例え【堕天使】を失ったのだとしても、自分のやることは何も変わらない。今まで信じてきた戦い方、今まで培ってきた戦い方、今まで磨き上げてきた戦い方を。

【堕天使】を得る前と、得た後。幼少の頃よりずっと貫き通してきた、遊良『本来』のスタイルと、【堕天使】と共に戦ってきた昨年度の経験が生み出した、遊良の『新たなデッキ』における更なる戦い方を、今ここに爆発させて。

炎馬　ＬＰ：４０００→５０００

「まだだ！　２枚目の【チキンレース】を発動し、ＬＰを１０００払って更に１枚ドロー！永続魔法、【冥界の宝札】を発動し、更に【手札抹殺】発動！俺は４枚捨てて新たに４枚ドロー！」

「…でも映像で見た通りだ…一体どれだけドローするんだよ…３枚捨てて３枚ドローだ！」

「…よし！手札を１枚捨て、装備魔法、【Ｄ・Ｄ・Ｒ】発動！除外されている【サクリボー】を特殊召喚し、その特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！墓地とデッキから、２体の【サクリボー】を特殊召喚する！来い、サクリボー達！」

―!!!

【サクリボー】レベル１

ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

そうして遊良の場へと呼び出されしは、小さき毛玉の悪魔の使い。
必要なカードなら引けばいい。直接サーチが出来ないのなら、デッキの中から無理やり引っ張り出せばいい。
怒涛の勢いで減っていくデッキと、ソレに比例し増えていく場と墓地がそのスタイルを証明していて。
ＬＰを減らしても出来ることを全力で行い、出来る手、取れる手、考えうる自分に出来る全ての手を持って。始めから怒涛の展開を魅せる遊良のデュエルの激しさは、先のターンの炎馬の激しさにも劣らぬ怒涛の勢い。

「ぐっ、トウケイは【地獄の暴走召喚】じゃ効果を発動できない。俺は【炎星侯―ホウシン】を選択する！」

また、デッキから呼び出せ防壁に出来る天立星ではなく、あえて武人の王を選択した炎馬。
【地獄の暴走召喚】では特殊召喚出来ないシンクロモンスターをあえて選択したということは、まだ天立星はデッキに残しておきたいということでもあるのだろうが…
しかし、今の炎馬の意識はそんな事よりも、遊良の理解出来ない程のデッキの回転へと向けられているではないか。
そう、決闘祭で使っていた、あの凄まじい存在感を放つ【堕天使】達ではないと言うのに…
まるで寄せ集めのようなバラバラなデッキが、統一感の無い滅茶苦茶なカード達が。普通であれば、到底回ることの無いようにすら思えるカード達の集まりが、あんなにも激しい回転を見せ付けてくるだなんて…と。

「ど、どうなってんだ？【堕天使】を使ってこないなんて…それに、あんな小さいモンスターを並べて何を…」
「行くぞ！俺は3体の【サクリボー】をリリース！」
「え、3体リリース!?ま、まさか!?」

そんなあっけにとられている炎馬を意に介さず。
堂々と高らかに、遊良は『その宣言』と共に、その手を天高く掲げ始めて。
この『Ｅｘデッキ至上主義』の世界では、見向きもされないような召喚法のエフェクト。生贄に捧げられし体が渦を纏い、天へとその魂を捧げながら…

「来い！【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

轟かせしは獣の雄叫び。
全てを粉砕するその槍を持って、戦乱に挑む武人へと衝動をぶつけ…目の前に立て付く全ての者を粉砕せんとして、猛々しく吼えるのみ。

「【決闘祭】の決勝で見た奴…くそっ、こんな『序盤』に出てくるなんて！」
「【冥界の宝札】と【サクリボー】3体の効果で、俺はデッキから5枚ドロー！そしてバルバロスのモンスター効果！3体リリースでアドバンス召喚した時、相手の場のカードを…全て破壊する！」

「くそっ、罠カード！【ブレイクスルースキル】発動！バルバロスの効果を無効に！」

しかし、炎馬の方も意表を突かれたとは言え、こんな早々に遊良に好き勝手にさせるわけにはいかないのか。

炎馬の放った鈍い光が、獣の王の放った破壊の衝撃波とぶつかり相殺され…

…あれだけの攻め気を見せてはいても、自分を守る手立てを忘れていない当たりは流石一年生で【決島】の代表に選ばれていることはあるだろう。

焦りを交えつつも、獣の王が今まさに放たんとした槍の衝撃に即座に反応し、守りの一手で武人達の身を守り、幼さの残る表情で遊良を見据える。

「…よし、【堕天使】じゃないのは想定外だったけど、でもバルバロスは止めた！これで…」

「だったら魔法カード、【アドバンスドロー】を発動だ！バルバロスをリリースして２枚ドロー！」

「またドロー!?…でも召喚権も使い切ったって言うのに、わざわざ攻撃力３０００のモンスターをリリースしてフィールドをがら空きに？一体何を…」

「こうするんだ！【死者蘇生】発動！墓地から【サクリボー】を特殊召喚し、２枚目の【地獄の暴走召喚】発動！」

「えっ!?」

「俺は墓地から、再び２体の【サクリボー】を特殊召喚！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１

ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

驚き続ける炎馬を置き去りに、再び３体の毛玉の悪魔を呼び出した遊良。
一撃必殺の効果を持つ獣の王を止められ、もう召喚権も使っていると言うのにも関わらず…
先ほどと同じ盤面を作り出した遊良の意図は、まさか３体の毛玉を守備表示で出し、次の炎馬の攻撃に備えようと思っているわけではないだろう。

「お、俺は同じく、【炎星侯―ホウシン】を選ぶ…ま、まさか！」

それを炎馬も感じ取ったからこそ。
先ほどと同じく武人の王を選択しながら、『先ほどと全く同じ』と言うこの流れに対して、懸念と疑念が収まらない様子を見せていて。
そんな炎馬へと、遊良は更に見せ付けるように…

「そのまさかだ！魔法カード、【二重召喚】発動！そして【死者転生】を発動し、手札を１枚捨てて墓地から【神獣王バルバロス】を手札に戻す！行くぞ！再び３体の【サクリボー】をリリース！」

…

「…驚いたね。」

ステージの横でデュエルを見ている『烈火』から思わず呟かれたそ

の言葉は、彼女にだって予想外だった光景故に漏れ出してしまったモノ。
それは、『Ｅｘ適正』が無いとは到底思えぬ…
いや、Ｅｘデッキを扱えないことなど、本当に些細なことだと思えるほどに。今目の前でデュエルを行っている少年が見せる、この怒涛の展開とその迷い無きデッキ回しは、まさに学生レベルには収まらぬ程の力の証。
研ぎすぎて鋭くなり過ぎたかのような綱渡りの連続だと言うのに、微塵も迷いを感じさせないほどに分厚いデュエルの展開。
扱うデッキが変わることなどこの業界ではよくある事とは言え、【決闘祭】であれだけ活躍したデッキを封印し…
よもや全くの新しいデッキで、【決闘祭】の時よりも更にキレの増した戦いを見せてくる遊良のデュエルは、一体『烈火』と言う歴戦の決闘者の目にはどう映ったのか。

「あの歳であれだけのキレを見せるとは。…鷹峰と浜臣の悪ガキ共、一体あの子にどんな鍛え方したってのさ。」

【決闘祭】で自分の孫娘を倒した、そして今自分の末孫を圧倒する勢いを見せている少年の実力は、疑いようの無い純粋なる本物。
獅子原家の１５人いる孫の中でも、最も才能に溢れたエリを押さえてあの天城　遊良が【決闘祭】に優勝したと聞いた時点で、そんなことは『烈火』とて十二分に理解していたとは言え…
天城　遊良と言う、『Ｅｘ適正』の無いデュエリストのデュエルを実際にその目で見たことにより、それが更に納得できたのだと言わんばかりにその口から言葉が漏れ出てしまった様子。
そのまま『烈火』はその記憶の中にある、学生時代に同じように凄まじいキレを見せていた、『似たような人物』を今デュエルを行っている遊良へと重ね合わせながら。
再び、静かにその口から言葉を漏らして…

「…琥珀のバカを思い出すねぇ全く。」

…

「行くぞ！再び3体の【サクリボー】をリリース！」

轟かせしは不退の雄叫び。
例え一度防がれようとも、決して止められぬ衝動をぶつけんとする強い意思。
遊良が掲げしそのカードから、形容しがたい『力』の波動が溢れ…

―震える大気、獣の咆哮と共に…

―それは、現れる

「来い！【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル8
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

激しい咆哮を轟かせ、再び場に現れし獣の王。
その豪咆は大気を揺るがし、先ほど止められた鬱憤を晴らすかのごとく…先ほどよりも更に猛りながら、炎の武人達を見据えて激しく吼える。

「【冥界の宝札】とサクリボーの効果で、再びデッキから5枚をドロー

！」
「い、一ターンに二回もバルバロスを出すなんて…そ、それに！何て枚数ドローすんだよアンタは！」
「まだだ！今度は邪魔されない！再び【神獣王バルバロス】の効果発動！やれ！バルバロス！」

―！

そして…
あまりに激しい爆発音を轟かせながら、炎馬の戦場の全てを破壊の衝撃波が飲み込んでいく。
獣の王が地面へと突き刺した槍から発せられる凄まじいその衝撃波は、瞬く間に炎馬の場の武人達と炎舞が粉々になっていくではないか。
…また、あまりにデッキからカードを引く遊良のデッキを見て、炎馬は『ある事』に気が付いたのか。
そう、1ターン目とは言え、普通であればあれだけドローを繰り返していれば、遊良のデッキは既に底を付いていてもおかしくないはずだと言うのに…
当の遊良は、デッキが切れる恐怖など微塵も感じさせず、まだまだその回転を止める素振りも見せないのだ。
それは、通常、デッキの枚数はその回転を考慮して、リミットギリギリの４０枚にそろえているデュエリストがほとんどだと言うのにも関わらず。
―そんな定石に歯向かうように、まるで時代に逆行するかのように。
遊良のデッキは、まだまだ厚さを保っていたのだから。
「な、なんて奴だ、こんな滅茶苦茶なデュエルをしてくるなんて…」

何枚引いたか分からなくなるほどの、相手を圧倒するドローの嵐。一度しか許されていないはずのアドバンス召喚を、無理矢理に増やしてでも貫き通してくるその気概。揃える事も大変なはずの『3体』の生贄を、さも当然のように揃える技量と度胸。

デッキの中身が大迷宮であるにも関わらず、多大なるドローを繰り返し…そのデッキの枚数すら常識を大幅に超えた枚数で作り上げ、そしてソレを使いこなしている遊良の姿は、まさに学生レベルには収まらぬモノの証明。

それは紛れも無く…

学生の枠組みから飛び出た力、一つ上の段階に至った者の実力。

—まさに、実力の『壁』を超えた者のソレ。

「よし、バトルだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！」

「くっ!?」

故に、この攻防だけを見て炎馬が戸惑いを感じたのも最もであり…『烈火』の孫という立ち位置から多くのプロデュエリスト達の力を近くで見てきた彼からしても、この歳でソコに届いていてもおかしく無い勢いを持っている遊良の力は、まさに規格外にも等しいことであって。

「天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

—！

「ぐぅっ!?」

炎馬　ＬＰ：５０００→２０００

だからこそ、炎馬には到底信じられない。

いくら【決闘祭】の優勝者と言えど、こんな滅茶苦茶な構成をしたデッキをどうすればあそこまで回転させられるものなのだろうか。

少なくとも自分が知るどの有名な学生達も、皆それぞれが自分にあったカテゴリを見つけ、その中で洗練された動きをしているというのに…

あんな出鱈目な構成をした、あんな統一感もないバラバラなカード達の集まりで、一体どうすればこんなデュエルが出来るのだろうかと、自分の理解の範疇を超えた凄まじさに彼もまた襲われ続けている様子で…

「一回目のバルバロスを止めてなかったら、【クラッキング・ドラゴン】なんかが蘇生されててワンショット？…あ、あんなデッキで？」

…とは言え、大きく削れるＬＰの減少音は、遊良と炎馬の『差』そのモノ。

ソレをそのまま表しているとでも言わんばかりに鳴り響くその音は、『運』などでは説明の付かないほどの力。まるで自分と天城　遊良の間には、大きな『壁』が存在しているのではないかと思えるほどの『差』。

そんな遊良のデュエルのあり方を、どうにも信じられないといった目で見ている炎馬の視線の先には…

あまりに重々しい雰囲気を醸し出している獣の王が、主の前に鎮座しているのみ。

…しかし遊良の方も、以前までの遊良だったら『こんなデッキ』など回すどころか構築することすら思い浮かびはしなかったに違いない事だろう。

それは、以前砺波に言われた、『自分のデュエルを今一度考え直しなさい』という厳しい言葉を深く深く考え抜いた末の結論。
デッキの枚数を減らして回転を重視し、攻撃と防御が中途半端になってしまうのならば…
もういっその事、回転を落とす事無く全てを成し遂げるために、デッキの枚数を増やしてやりたいことを全てやるという、矛盾しつつも無理矢理な、しかし遊良にしか出来ない暴挙の結論。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

遊良　ＬＰ：４０００→２０００
手札：6→4
場：【神獣王バルバロス】
魔法・罠：伏せ2枚、【冥界の宝札】
フィールド魔法：【チキンレース】

そうして…
遊良のターンが終了し、ＬＰが並んで再びターンは炎馬へと移る。
…しかし、いくらＬＰが並んだからと言っても、それは勝負が拮抗しているという意味ではないことを炎馬もまた理解しているのだろう。
その証拠に、先程から遊良のデッキの凄まじさに圧倒されっぱなしの彼の額からは冷や汗が垂れており…まだターンが一巡したばかりだと言うのに、既に息が上がりそうな程の疲労感が炎馬へと襲いかかってきている様子ではないか。

「…このまま終われるかよ！俺のターン、ドロー！…よし！先ずは【炎舞―天璣】を発動し、デッキから【速炎星―タイヒョウ】を手札に加える！更にタイヒョウを召喚して、その効果発動！タイヒョウをリリースし、デッキから【炎舞―天枢】をセット！そして…」

それでも、己に芽生えかけた弱気を吹き消すかのように。自らの勢いを加速させんとして、次々と炎を燃やしていく炎馬の叫び。
攻めることこそ美学なり。如何なる逆境であっても、攻めなければ変えられないというサウス校の理念に則り。
例え【決闘祭】の優勝者が、自分の想像以上にとんでもない力の持ち主であったとしても…先のターンと同じ展開を行っていても、先ほどとは状況が異なっているからこそ。その手に握られた一枚のカードを掲げ、圧倒してくる遊良へと反逆の一手をぶつけるかのように。

「魔法カード、【真炎の爆発】を発動！俺は墓地から、守備力２００の【速炎星―タイヒョウ】２体と、【炎星師―チョウテン】２体を、それぞれ特殊召喚だぜ！」

―!!!!

【速炎星―タイヒョウ】レベル３
ＡＴＫ／　０→１００　ＤＥＦ／　２００
【炎星師―チョウテン】レベル３
ＡＴＫ／　５００→６００　ＤＥＦ／　２００
【速炎星―タイヒョウ】レベル３
ＡＴＫ／　０→１００　ＤＥＦ／　２００
【炎星師―チョウテン】レベル３
ＡＴＫ／　５００→６００　ＤＥＦ／　２００

今再び燃え上がりしは、２対の天速星と天導師。
がら空きだった場が一瞬で４体のモンスターで埋まるその光景は、劣勢など乗り越えんとする少年の気概が生み出したモノ。
この爆発力こそ、自らの持ち味なのだと言わんばかりに。炎馬は、更にその叫びを続けるのみ。

「一気に４体のモンスターを…」

「いくぜ！レベル３のタイヒョウに、レベル３のチョウテンをチューニング！シンクロ召喚！来い、レベル６！【天狼王　ブルー・セイリオス】！」

―！

【天狼王　ブルー・セイリオス】レベル６
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１５００

「まだだ！レベル３のタイヒョウに、レベル３のチョウテンをチューニング！シンクロ召喚！来い、レベル６！【獣神ヴァルカン】！」

―！

【獣神ヴァルカン】レベル６
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１６００

終わらぬ炎馬の展開と、止まらぬ獣の雄叫びの嵐。
呼び出されしは、蒼く輝く天狼の星と、火を司る炎虎の化身。そのどれもが炎馬の攻め気に応えるように、雄叫びを上げて遊良を睨む。

「【獣神ヴァルカン】の効果発動！シンクロ召喚成功時に、俺の場の【炎舞―天璣】と…アンタの場の、【神獣王バルバロス】を手札に戻す！」

そうして…
燃え猛る炎の獣神が、その重槌を振り下ろしたその刹那。
その槌による大地の振動が遊良と炎馬、双方の場に広がっていき、無理矢理に二人のカードが一枚ずつ手札へと吹き飛ばされてしまったではないか。

「よし！ヴァルカンの効果で手札に戻したカードは、このターンの間

効果を発動できない！これで【ライバル・アライバル】なんかでバルバロスを出しても、破壊効果は使えないぜ！」
「…へぇ、よく調べてきてるな。」
「まだまだいくぜ！さっきセットした【炎舞―天枢】を発動し、獣戦士族の召喚権を１回増やす！俺は更に【炎星師―チョウテン】を通常召喚し、その効果で墓地から【速炎星―タイヒョウ】を再び特殊召喚！レベル３のタイヒョウに、レベル３のチョウテンをチューニング！燃え盛る業火よ！戦場を駆ける紫炎を纏い、仇なす敵を焼き尽くせ！シンクロ召喚！再び現れろ、レベル６！【炎星侯―ホウシン】！」

―！

【炎星侯―ホウシン】レベル６
ＡＴＫ／２２００→２３００　ＤＥＦ／２２００

「シンクロ召喚成功時、【炎星侯―ホウシン】の効果発動！俺はデッキから、【立炎星―トウケイ】を攻撃表示で特殊召喚だ！」

―！

【立炎星―トウケイ】レベル３
ＡＴＫ／　１５００→１６００　ＤＥＦ／　１００

遊良のＬＰは残り２０００で、炎馬のシンクロモンスターの攻撃力もソレを超え、そしてモンスターの居なくなった遊良のＬＰなど一度の攻撃で確実に０に出来るというに…
それでも展開をやめない炎馬の勢いは、まるで対峙している【決闘祭】の優勝者相手に攻め焦って展開を中途半端にすることがどれだけ危険な事なのかを本能で理解しているかのよう。
…そう、それは例え、遊良の使っているデッキが【堕天使】ではなかったとしても、先のたった１ターンの攻防で遊良の持つ鋭さの片鱗

を味わった炎馬だからこその勘。
例え遊良の場を空けたとしても、微塵も油断してはいけないことをその身に刻んだからこそ。自分の墓地に【ブレイクスルースキル】があるとは言え、ソレに頼りきれないことを先のターンの身に染みて理解したが故に、細心の注意と対策を遊良へとぶつけるのか。
それは、先ほど彼が放った言葉からも容易に想像できることであり…

―『【決闘祭】の決勝で見た奴…くそっ、こんな『序盤』に出てくるなんて！』

先程、彼は言った。
遊良が【神獣王バルバロス】を使ってくるかもしれないということを、最初から予想していたかのようなその台詞を。
更には、遊良が【決闘祭】の決勝で使っていた【ライバル・アライバル】と言った、奇襲性の高いカードへの対策や警戒もしている様子。
…遊良の事を、よほど研究してきていたのだろうか。このターンの炎馬のデュエルへの態度は、およそ先ほどまで遊良へとぶつけていた挑発的で好戦的な態度からは一転。
どこまでも、遊良を確実なる『強者』として見ている様子で…

「アンタのＬＰは残り２０００…一撃が通れば勝ちだけど、でも油断はしない！トウケイのモンスター効果！【炎星】モンスターの効果で特殊召喚されたため、俺はデッキから【暗炎星―ユウシ】を手札に加える！そしてトウケイのもう一つの効果発動！場の【炎舞―天枢】を墓地へ送って、デッキから【炎舞―天璇】をセット！」
「がら空きの場からここまで…」
「まだだ！俺は【チキンレース】の効果を使い、ＬＰを１０００払って【チキンレース】を破壊する！更に魔法カード、【貪欲な壷】を発動！【炎星師―チョウテン】３体と【速炎星―タイヒョウ】、【立炎星―トウケイ】をデッキに戻して２枚ドロー！」

怒涛の攻めを信条とする、サウス校の信念をそのままに。『烈火』の孫の名に恥じぬこの攻め気。
全てを破壊され、０からのスタートになったこの場から…
これだけの怒涛の展開を見せ、さらに相手への対策を抜かる事無く万全を整えたこの少年の力は、紛れも無く学生の中でも高位に位置するモノだということの証明。

「よし、バトルだ！【天狼王　ブルー・セイリオス】でダイレクトアタック！」

満を持して、場を整えて。
今まさに遊良に襲い掛からんとする蒼き天狼の牙の轟きが、フィールドに一度木霊して遊良へと向かい駆け始める。
…一撃が通れば勝ち。
例え、遊良がよく使用している【デモンズ・チェーン】と言った類の守りのカードを伏せていたとしても…
自分の場にはモンスターが４体も居るのだから、生半可なことでは止められはしないという、その攻め気に溢れた自負を纏いながら堂々と最初の命令を炎馬は下して。
守りに入り弱気になるくらいなら、最後の最後まで攻め抜くのみ。そうして勝ちに向かって走ることを幼い頃から祖母に叩き込まれている炎馬の叫びは、まさにサウス校の代表に相応しい程の闘気を纏っていたことだろう。

そして…

炎馬の叫びに呼応した、天狼の猛る牙が今まさに遊良へと襲いかからんとした…

―その時だった。

「罠発動、【鏡像のスワンプマン】！闇属性、悪魔族となり、俺の場に守備表示で特殊召喚する！」

―！

【鏡像のスワンプマン】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

そんな炎馬の叫びを断ち切り、さも当然のように、遊良が発動した一枚の罠。
地面からドロドロと、徐々に人型に形作られていくその様は形容し難い狂気を孕んではいるモノの…その呻きとともに、天狼の前へと立ち塞がって。

「罠モンスター!?で、でも守備力は１０００だ！そのまま砕け、ブルー・セイリオス！」
「墓地の【サクリボー】のモンスター効果！【鏡像のスワンプマン】の戦闘破壊される場合、代わりに【サクリボー】を除外する！」
「なっ!?くそっ、だったら続けてトウケイで攻撃！」
「再び墓地の【サクリボー】のモンスター効果！スワンプマンを戦闘破壊から守る！」
「１ターンの制限が無い!?くっ、ヴァ、ヴァルカンで攻撃だ！」
「３体目の【サクリボー】の効果で、再びスワンプマンの破壊を防ぐ！」

激しさを増し続ける炎馬の攻撃。それでも、その攻撃は遊良本人に

届くことはなく。
守備表示で特殊召喚された、たかが守備力１０００の罠モンスターが炎馬の怒涛の攻撃を連続して受けていると言うのに…
天狼の牙を、天立星の剣を、そして炎虎の魔槌を喰らっても。
それでもその人型の『何か』は、毛玉の力を借りてどこまでもその泥の身を固く硬く堅くして主を守りきっているではないか。

「くそっ！ホウシンでスワンプマンを攻撃！」

―！

そして…
ようやく遊良の場の『何か』を破壊することに成功した炎馬ではあったものの…
どこか悔しげな言葉と共に呟かれたその攻撃の宣言は、確かに遊良の場を空けることには成功したとは言え、それ以上の攻撃の音を轟かせることは叶わず。
…まさか炎馬も、４体ものモンスターによる一斉攻撃を、たった一体のモンスターで防ぎきられることなんて思ってもみなかったのか。
…攻め手が多いのは自分の方。モンスターの数も、攻撃の回数も。
デッキが【堕天使】でないとしても、あの伏せカードはこれまでのデュエルで遊良が好んで使っていた【デモンズ・チェーン】と言った類のカードが伏せてあるのではないかと読んでいたと言うのに。
そんな炎馬の思考を軽々と躱すように、天城　遊良はたった一枚の伏せカードから自分の攻撃の全てをいとも簡単に躱したのだ。
また、伏せてあるのが【デモンズ・チェーン】ではなかったとしても…
自分の場のモンスターの攻撃力の最大値が２４００と言うことから、遊良が罠モンスターではなく攻撃力３０００の【クラッキング・ドラゴン】などを墓地から攻撃表示で特殊召喚していれば、【ブルー・セイリオス】の効果による弱体化によってこのターンで遊良のＬＰは

尽きていたはず。
それをも見越して蒼き天狼から攻撃を仕掛けたというのに、ソレすら見透かされていたのではないかと思えるほどに…
「…あ、あれだけの連続攻撃を、たった一体のモンスターで止めた…伏せカード一枚だけで？」
そう、当然のようにして、遊良は二枚ある伏せカードの内のたった一枚だけで、４度の攻撃を全て受けきったのだ。
…ソレが意味する、一つの答え。
それは、自分と天城　遊良の間に、単純なる力の『差』があると言うことに他ならない。
状況の把握、先見も明、そして咄嗟の判断に戦況の予測も。遊良にかすり傷一つ負わせることが出来なかった事で、炎馬は嫌でも『ソレ』を理解してしまって。
…確かに、炎馬の実力は学生レベルの中ではかなりの高位。それは中等部から進学したばかりの一年生としてみれば、これ以上無い破格の才能に違いないこと。
しかし、それはあくまでも『学生レベル』での話であり…
そう、今この一年生が対峙しているのは、その『学生レベル』には収まらぬ程の実力者なのだ。
【決闘祭】で猛者達と鎬を削り続け、そしてボロボロになりながらもその実力の『壁』を必死に超えた、紛うことなき強者の姿。
その目に見える程の力の『差』と言うモノは、例え学生レベルの頂点の力を持っていたとしても簡単に届くうなモノではなく。
そんな炎馬もまた、これだけの怒涛の攻撃が全く届かなかったことで、ソレを理解してしまった様子で…

「くっそ…さっき【手札抹殺】で墓地に送られた、【シャッフル・リボーン】の効果発動。トウケイをデッキに戻して1枚ドロー。…カードを2枚伏せて、このエンドフェイズに【シャッフル・リボーン】の効果で手札の【暗炎星―ユウシ】を除外する。ターンエンドだ…」

炎馬　ＬＰ：２０００→１０００
手札：４→２枚
場：【獣神ヴァルカン】
【天狼王　ブルー・セイリオス】
【炎星侯―ホウシン】
魔法・罠：伏せ３枚

（…たった一枚の伏せカードからあれだけの攻撃を全部防ぐなんて…でも、俺の伏せたカードの一枚は【炎虎梁山爆】。ＬＰ残り２０００のあの人が、またバルバロスの効果を使ってきたら…このカードでトドメだ。）

…しかし、そんな胸中でも。決して炎馬はデュエルを諦めてはいない様子。
密かな画策、逆手の抵抗。
普通であれば、己の全力が全く届かないような相手との戦いに陥れば、早々にその闘争心を折ってしまう者が殆どだと言うのに…それでも最後まで負けてやるつもりも無く、僅かな勝ち筋へと手を伸ばすのは彼もまた本物のデュエリストの証。
それは、歴戦の決闘者、伝説の女傑である『烈火』の孫の彼だからこそ。自分の理解の範疇を超えた者を相手にしても、最後まで勝利へと続く道を模索し続けるだけなのだから。

「俺のターン、ドロー！【大欲な壷】を発動！【サクリボー】３体をデッキに戻して１枚ドロー！更に【闇の誘惑】も発動し、２枚ドローして

闇属性の【イービル・ソーン】を除外！」
「ぐっ、あれだけドローしててまだ引くのか…」

そんな炎馬の思惑を知ってか知らずか。依然として失速する様子など見せず、遊良は更にデッキを回転させていくのみ。
…それは、対峙した相手からするとどれだけのプレッシャーなのだろうか。
手札も減らず、デッキも減らず。そして幾度も悪夢のような破壊の衝動が襲い掛かってくるソレは、並大抵のデュエリスト達からすれば到底耐え切れもしない、喰らいつけもしない代物。

（で、でもバルバロスへの対策はした！いつバルバロスが襲ってきたって…）

「速攻魔法、【緊急テレポート】発動！デッキから【サイコ・エース】を特殊召喚！更にその特殊召喚成功時！速攻魔法、【地獄の暴走召喚】を発動だ！」
「またそのカード!?」
「デッキから、【サイコ・エース】２体を特殊召喚する！来い、【サイコ・エース】達！」

―!!!

【サイコ・エース】レベル２
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　０
【サイコ・エース】レベル２
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　０
【サイコ・エース】レベル２
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　０

そして…本当に暴走しているかのような勢いの遊良が呼び出した

のは、先程の小さき毛玉の悪魔とは異なった、浮遊する乗り物に乗った戦闘機乗りのようなモンスター。
再びドローを加速させるのではなく、ここで新たなモンスターを呼び出したということは…
先程の動きとは違う展開を見せるということでもあり、それはすなわち本気で攻めにいくということ。

「俺は【炎星侯―ホウシン】を選択する！…また新しいモンスター？でも、ソイツで一体何を…」
「こうするんだよ！【サイコ・エース】２体をリリースし、レベル８、【闇の侯爵ベリアル】をアドバンス召喚！」

―！

【闇の侯爵ベリアル】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

「バルバロスじゃない!?で、でも今更攻撃力２８００のモンスターなんか…」
「【冥界の宝札】の効果で２枚ドローし、リリースされた、【サイコ・エース】２体のモンスター効果！こいつらはリリースされた場合に、フィールドのカードを1枚破壊する！俺はお前の…【炎星侯―ホウシン】と、さっき伏せてた【炎舞―天璇】を破壊！」
「そんな効果が!?くそっ、だったら破壊される前に永続罠、【炎舞―天璇】発動！【獣神　ヴァルカン】を対象に、その攻撃力を７００アップ！」

重なる攻防、交差する声と声。
この【決闘祭】で行われても不思議ではない対戦カードが、こんな観客も居ないだだっ広いスタジアムで野良試合のように行われているのが悔やまれることではあるものの…

遊良の変化した呼吸にも、炎馬は咄嗟に反応し、そうしてカードとカードの効果が幾重にも重なって、その攻防の激しさは更に上昇の一途を辿っていて。

「あんな効果があるなんて…でも、どうして他の伏せカードじゃなくてホウシンを…」

「バトル！【闇の侯爵ベリアル】で、【天狼王　ブルー・セイリオス】に攻撃！」

「え!?」

そうして…

先程あれだけドローして、そして頑なに獣の王の破壊の一掃を貫いてきたのにも関わらず。

遊良の手札にバルバロスがあることは最早公開情報で、先程と同じくバルバロスによる破壊の一掃が襲い掛かってくると予想していた炎馬の思考の、その斜め上を避けるかのように悪魔の貴族に攻撃を命じた遊良。

…当然、この攻撃では炎馬のＬＰを削りきることなど出来ず。

このままバトルが終わってしまえば、返しのターンで再び炎馬が怒涛の攻撃を仕掛けてくることなど容易に想像できるはずだと言うのに…

―！

炎馬　ＬＰ：１０００→６００

それでも悪魔の貴族の剣が、止まらずに天狼を切り裂いて。

そのまま天狼の断末魔が、最後に悪魔の貴族にその牙を突きたて、ベリアルの攻撃力を大きく下げていくではないか。

「な、何を考えてるのか知らないけど、でもこれでアンタのバトルは終わりだ！破壊された【天狼王　ブルー・セイリオス】の効果発動！【闇の侯爵ベリアル】の攻撃力を２４００下げる！これで次のターンのバトルで…」
「まだ俺のバトルフェイズは終わってない！手札から速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動！」
「あ、そ、それは!?」

しかし、そんな炎馬の呼吸を乱すかのように。遊良は、一枚のカードを発動して。
バトルフェイズに『召喚』を行えるそのカードは、遊良が【決闘祭】の決勝でも使っていた、好んで使用するカードの一枚であり…
「俺は【闇の侯爵ベリアル】と【サイコ・エース】をリリース！」

そして…
ソレは炎馬もまた、先程のターンに最大限に警戒していたカードの一枚であって。
「レベル８、【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

三度轟く、獣の咆哮。
何度も、何度も、何度だって現れるソレは、例え全てを破壊する衝動を放たなくとも…圧倒的存在感を持って、炎馬へと向かって天高く吼える。

「こ、今度は2体リリースで?」
「【冥界の宝札】の効果で2枚ドローし、リリースされた【サイコ・エース】のモンスター効果!…【獣神　ヴァルカン】を破壊!」

―!

そうして、最後まで炎馬の場に残った、燃える魔槌の炎獣神までもが成す術なく破壊されてしまう。
しかし、バルバロスの攻撃力はヴァルカンをゆうに超えていて、炎馬の場にはまだ伏せカードが2枚残っているにも関わらず…
その伏せられたカードには、攻撃反応系の罠の『可能性』もあると言うのに。炎馬の仕掛けた罠が、まるで『見えている』かのようなその攻め方は、炎馬からすれば不可思議の一言。

「ぐっ、伏せカードに目もくれないなんて…」
「これで最後だ!【神獣王バルバロス】で、ダイレクトアタック!」
「ま、まだだ!永続罠、【デモンズ・チェーン】はつど…」
「それにチェーンして手札から速攻魔法、【禁じられた聖槍】発動!バルバロスの攻撃力を800下げ、【デモンズ・チェーン】の効果を受けなくする!」
「そんな!?」

そして…
炎馬の最後の抵抗も、遊良は軽々と超えていく。
獣の王が、遊良の場から放たれた聖槍を受け取ると…自らへと向かって伸びてきた悪魔の鎖を、自身の螺旋の槍と聖なる槍、その二振りの槍を振るい力ずくで切り裂き始めたではないか。
…そのまま、襲いかかる鎖を切り裂きながら炎馬へと向かって駆け出す獣の王。

幾度も修羅場を潜り抜け、幾度も場数を踏んできたこの咆哮は、こんなモノでは止められないと言わんばかりに…
自らの前に立ち塞がる全てを、その槍で降す為に…

「鎖もろとも断ち切れ！断罪の聖槍、ディナイアー・ブレイカー！」

―！

「ぐっ、ぐあぁぁぁぁぁ!?」

炎馬　ＬＰ６００→０（―１６００）

―ピー…

「よし！」
「…い、意味が分からないまま終わった…何が、どうなったんだよ…」

無機質な機械音が鳴り響いたと同時に、尻もちをつきながらもその口から戸惑いの言葉を漏らした炎馬。
…それは、実際にデュエルを行っていた炎馬でさえ理解しがたい、本当に嵐のような激動が襲い掛かり続けていた証拠。
何せ、【決闘祭】で見た【堕天使】達の進撃ではなく、最初から最後まで脈絡の無いカード達が遊良の手で暴れまわるかのように交差し続け…
そして何より全ての攻撃の主となった【神獣王バルバロス】の轟きは、今まで炎馬が戦ってきたどのデュエリスト達の切り札よりも凄ま

じさを見せたこと。
また、【決闘祭】の時に見たときと同じ…いや、下手をすればソレ以上の遊良のドローの嵐は、凄まじく炎馬にプレッシャーを与えていたのだ。
それは外から見ている以上に、対峙した炎馬には衝撃だったことだろう。
『Ｅｘ適正』の無い、全くＥｘデッキを使ってこない人間が、こんなにも最上級モンスターを繰り出しつつその手札も全然減らず、自分の場を常に焼け野原にしてくるのだから。

「まさか最後に…あんなカード使ってバルバロスを守るなんて…」
「あぁ、アレは最後の【冥界の宝札】で引いたんだ。あれが無かったら、まだ勝負は着いてなかったけどな。」
「いや引いたって…それにしてもドローしすぎだろ。…あ、でもどうして最後のターンにバルバロスの効果を使わなかったんだ？もし伏せてたのが【炎虎梁山爆】じゃなくて、攻撃反応系の罠とかだったら…」

そして…
その心に引っかかった微かな疑問を、炎馬は食い入るように遊良に呈して。
そう、遊良は最後のターン、炎馬が仕掛けていたバルバロスの全体破壊効果に対する一撃必殺の罠を、まるで見透かしたかのように躱していた。
…それは、先のターンに一貫してバルバロスの効果を貫き通していた遊良にしてみれば、確かに彼らしからぬ突然の戦術の変化。あれだけの迫力で炎馬の場を一掃したにも関わらず、あの突然の攻め方の変化は炎馬の伏せていたカードが分かっていたのでは無いかと思える程に的確なモノだったのだ。
…そんな炎馬の疑問に対し、遊良は何を思うのか。
…もしもここにギャラリーが居て、このデュエルが一昔前だったら

すかさず遊良の変化を『イカサマ』だと喚きたギャラリーも居たことだろう。しかし、真っ直ぐに遊良の方を見てソレを聞いてくるあたり、少なくとも炎馬はイカサマを疑っている…と言うわけでは断じてない様子。

―ただ、なぜ遊良が自分の仕掛けた罠を見透かし、攻め方を変えられたのか…それを、ただ知りたいだけ。

そんな、炎馬の疑問に対し…

遊良は、炎馬を一瞥した後、やや考えるような素振りの後にその口を開いて…

「…あぁ、あれだけ俺の事を研究してきて、バルバロスの警戒もして来たんだから、バルバロスの効果で吹き飛ばされる攻撃反応系は伏せないんじゃないかって思っただけだよ。…それに、何かあの伏せカードからは『嫌な感じ』がしたから。」

「嫌な…感じ？」

「なんて言うか、こう…破壊しちゃいけないって言うか、変な匂いって言うか…」

それは、他人には伝わらぬ感覚。それは、上手く説明の付かぬ嗅覚。

形容し難いことをどうにか口にしている遊良の様子は、元々相手の伏せカードへの警戒心が鋭い遊良ではあったものの、先日の『とある一戦』からそう言った危ないカードへの『嗅覚』が増してきていることに関係しているのか。

…そう、確かに【神獣王バルバロス】の効果は強力なモノで、遊良も絶望していた幼少の頃からこれまでずっとデュエルを続けてこられたのは、自分だけの武器とも言えるバルバロスの力があったからこそ。

しかし強力な効果だからこそ、ソレを考えも無しにただ『乱発』することがどれだけ危険なのかと言うことを…

遊良も、先日の【白竜】とのデュエルで身に染みて学んだのだ。
闇雲に突っ込むのでは無く、無闇に乱発するのではなく。
危険を嗅ぎ分け、怪しさを感じ、その肌で感じ取った違和感を乗り越えて、そうしてその先へと踏み込めるようにならければ…
コレより『先』の段階へと、進むことなど出来はしないのだから。

…そんな『立っている場所』が違う遊良のことを、炎馬はどう感じるのだろう。
自らの疑問への答えに、炎馬はどこか釈然としないような表情をしたまま…
遊良へと向かって、徐にその口を開いた。

「よくわかんねーけど…まぁいいや。『Ｅｘ適正』が無くたって、アンタはちゃんとスゲー強いんだってのが分かったし…想像通り…いや想像以上に凄い強かった。」
「え？」
「…悪かったよ、姉ちゃんに勝ったのが信じられないとか言って。」

それは、デュエルが始まる前の態度とは一変。
ゆっくりと語られる炎馬の言葉は、祖母に見せていた態度と似た、そして遊良に向けていた態度とは異なった…
紛れも無い本心から語られる、少年の本音の謝意の証。
他人の悪意に敏感な遊良だからこそ、目の前のたてがみの少年の発する言葉が彼の心からの言葉なのだと言うことを心で理解でき…

「だから、その…」

言葉を詰まらせ、視線を泳がせ。
釈然としないような表情から、真っ直ぐな表情に変わり、そして炎馬はどこか恥ずかしそうに…
そのまま、遊良へと向かって…

「…また、俺とデュエルしてくれないか？…なぁ……天城先輩。」
「ッ!?」

顔を背け、淡々と言い捨てるような言い草にも関わらず…
どこか照れを隠しているかのようなその素っ気無い物言いは、彼もまた素直じゃないということの表れ。

…また、炎馬がそう言ったその刹那。

目を見開き、息を飲み。心から驚いたと言わんばかりの顔を遊良はしていて…
それは、イースト校の1年生にすら『そう』呼ばれた記憶も無い遊良からすれば…
いや、初等部も中等部も、『Ｅｘ適正が無い』と宣告されてからこれまでの学生生活において、一度だって『そう』呼ばれたことが無い遊良からすれば、たった今炎馬が放ったその呼び方に、あまりに衝撃を受けたことの証。
そう、ソレを初めて言ってくれたのが、同じイースト校の学生では無く他校であるサウス校の学生であるというのもどこか皮肉めいてはいるものの…
それでも『その呼び方』は、昨年度のイースト校の先達であり、そして自分を認めてくれた去年の3年生である泉　蒼人の偉大さを見てきた遊良からすれば…

―どこか、『憧れ』すら抱いていたモノであって。

「あ…あぁ、俺からも、何度だってお願いするよ。」
「あ、でも【決島】の本選じゃあこうはいかないからな！もっと対策

練って、今度はもっといい勝負するからな！」
「…おう。」

しかし、そんな照れをすぐさま乗り超え。食いつくように遊良へと言葉を続ける炎馬の声は、対抗心や闘争心と言うよりは、どこか『懐いている』と言った方が正しいだろうか。
負けん気に溢れるたてがみの少年の闘争心と、その真っ直ぐに伝わる言葉は…
紛れも無く、心から遊良を認めている証でもあった。

―…

「あ、ごめんさなさい、電話が来ちゃって…ちょっと席外しても良いですか？」
「あぁ、構わないさね。」

遊良と炎馬のデュエルの後。
あれから小一時間ほど、『烈火』の指導の下で代わる代わるデュエルを行っていた遊良と炎馬、そしてルキの三人だったのだが…
「…さて、じゃあそろそろアタシとも戦ろうか天城君。」
「は、はい、お願いします！」

丁度、ルキに電話がかかり席を外したタイミングで、唐突に『烈火』が遊良へと向かってそう言ってきた。
そんな反射的に応えた遊良の声は、少々緊張を孕んだ様なモノともなっていて…

しかし、それも仕方の無いことなのか。
何せ、その誘いは遊良からすれば願っても無いこと。【白鯨】や【黒翼】と言った、歴戦に名を連ねる伝説の【王者】達と共に歴史を紡いできた、『烈火』の名で呼ばれし圧倒的強者と直々にデュエルが出来るのだから。
…ステージに上がり、『烈火』の正面に立って対峙し直すと改めて分かるそのオーラ。
並大抵の人生を歩んできていない、歴戦に名を残した風格を持つその佇まい。一つ歴史が違えば、彼女もまた【王者】と呼ばれていた程に練磨されたその力は…今の遊良には、想像することすら出来ない程の高みにあるに違いないのだ。

そして…

そんな緊張の面持ちでスタジアムへと昇っていく遊良とを尻目に。
一人、スタジアムの入り口の影に入ったルキが、ディスクに示されたその見慣れた名前の主へと向かってその電話を取った。

「もしもーし。」
『…俺だ。』
「鷹矢？どうしたの？」
『うむ。さっき試合が終わったのだが、遊良の奴にかけても出なかったからな。』
「あー、今遊良のディスク、ずっとデュエルモードだったから。」

聞きなれた声が回線の向こうから聞こえてきて、ルキもまた慣れた様子でその声に言葉を返して。
そう、ルキへと電話をかけてきたのは、この場に居ない鷹矢。
一人だけ異なった修業を【白鯨】に言いつけられ、ここ一週間ずっと決闘市の外に出っぱなしだった鷹矢が…ようやく今日帰ってこられるということで、帰る前に電話をかけてきたのだろう。

「今日帰って来るんでしょ？」
『…うむ。夕方の便で帰るから着くのは夜になる。』
「はいはーい、じゃあ遊良に伝えておくね。」

そんな電話の向こうの鷹矢の声は、彼にしては珍しくやや疲れたような声となっていて。
それは、彼の修業もまた厳しいモノなのだという証拠。
…まぁ、夏休みに入ってからの二週間、殆ど休みも無しでレベルの高い大会に出続けなのだから、あの体力には自信のある鷹矢でさえこれだけ疲弊する修業の厳しさは相当なモノに違いなく。
そんな、電話をしているルキの後ろ。『烈火』と遊良がデュエルをしている、そのデュエルステージの上から…

燃え上がる様な声が、スタジアム全域に響き渡った。

「烈火！舞い上がりて宙をも焦がす！燃える星々を喰らい尽くせぇ！」
「え、ちょ、これって…」
「シンクロ召喚！レベル１１！【星態龍】！」

―！

【星態龍】レベル１１
ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００

まだデュエルが始まったばかりだというのにも関わらず、これが後攻の一ターン目だというのにも関わらず。
まだ心の準備が終わっていなかった遊良の目の前に突如として現れた、この広い広いスタジアムの天井を多い尽くしてもなお収まらぬ

程に巨大な体躯と…
燃え盛る星々に類似したその異質な雰囲気は、遊良が【決闘祭】で見た『ソレ』などとは比べ物にならない程に練磨された、まさに歴戦のオーラそのモノ。
…しかも、それだけでは終わらない。
「ボーっとしてんじゃないよ！・まだまだ行くさね！・シンクロ召喚！」
―!!
【星態龍】レベル１１
ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００
【星態龍】レベル１１
ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００
そのまま、遊良が状況を飲み込む間もなく。
…光が弾け、空気が燃え、次々と轟く『烈火』の咆哮。
それは彼女が、獅子原　トウコという女が、『烈火』と呼ばれるようになった由縁。
彼女がこのカードを己の切り札に選び、そして【星態龍】自身が彼女を主に選んだからこそ…獅子原　トウコは『烈火』の名で呼ばれ、そして【星態龍】というモンスターもまた彼女と共に歴戦の中で『烈火』となったのだ。
星を模した、星に擬態した、星を喰らいし宙の龍。燃え盛るその巨体の迫力と、本来の使い手によって召喚された３体の『烈火』の圧力は凄まじく…
「…あーあ、ばあちゃん、まーたあんな馬鹿やって。相変わらず誰かを鍛えるってのが下手なんだよなぁ。だから新堂さんと姉ちゃん以外

は着いていけないんだよ。」

まるで遠慮の無い怒涛の展開。サウス校理事長が自ら見せる理念の投影。

孫の苦言など聞こえるはずも無く。その積み重なった歴戦の重みは、彼女の孫娘が【決闘祭】の一回戦で遊良相手に召喚した【星態龍】とは、比べ物にならない程の圧力を放っていて…

「アタシは手加減ってヤツがどうにも苦手でねぇ！とりあえず全力で抵抗しな！何かを教えるのはその後さ！」

「いや、その…」

「どんくさいねぇ！男がコレくらいでビビってんじゃないよ！バトル！【星態龍】達、蹴散らしちまいなぁ！星痕のぉ…グランド・ノヴァァァァァァ！」

―!!!

「おわぁぁぁぁぁぁあ!?」

世界は広い。

【王者】とは呼ばれなかったものの、彼女もまた歴戦に名を残した伝説のデュエリストの一人。頂点に手をかけた、世界でも有数の実力を持った最高峰の決闘者。

同じ決闘市内でも、【白鯨】以外にもこんなにも高すぎる壁を見せてくれる歴戦の決闘者がまだまだ沢山居るという事実と…

世界の全てに見放されていた、あの頃の自分では想像も出来ないであろう、その幼少の頃から憧れていた人物と今、正面に立ってデュエルが出来ているだなんて。

『…なぁルキよ、今…遊良の悲鳴のようなモノが聞こえたのだが…』

「あー…えっと、今サウス校に来ててね、サウス校の理事長先生と遊良がデュエルしてるんだけど…ちょっと凄いことになってて。」
『…そっちも相変わらず無茶をやっているようだな。』

また遊良のソレは、ルキの電話の向こうに居る鷹矢にも聞こえたのか。
その遊良の声を聞いただけで、何が起こったのかを察したのだろう。少々呆れたような声でそう返した鷹矢ではあるものの、電話越しのその声は確実に強くなってきている遊良への期待も篭っているようにも聞こえ…

…本来ならば、『Ｅｘ適正』が無いと言う理由だけでデュエリストとしても認められなかったはずの人生。
しかし、今こうして遊良が子供の頃から憧れていた歴戦の決闘者と対面していることは、夢などではない確かな現実。
…確かに世界は残酷で、『Ｅｘ適正』が無いと言う理由だけで簡単に見捨て、そしてその絶望から立ち直っても中々認めてはくれなかった。
しかし、それでも。
【白鯨】に『烈火』、幼少の頃に憧れていた歴戦の決闘者たちに鍛えてもらえることが、どれだけ遊良にとって幸せなことなのか。
それは、これまで諦めずに、必死に世界に抗ってきた遊良だからこそ、少しずつでも周囲を変えて、そして自らの運命を乗り越えてこられたのだろう。

「ほらほら！休んでる暇なんて無いさね！さっさと立ちな、もう一戦行くよ！」
「は、はい！」

激しく、厳しく、荒々しい『烈火』の猛攻に飲み込まれながらも…
どこか嬉しそうな、その遊良の表情が…

―それを、証明していた。

―戦いの時は、迫る。

―もう、すぐそこまで。

―…

ｅｐ７０「出発」

そこがどこかも分からぬ、どこかの場所の暗い部屋。
その、ずっと閉め切っていたと思われるほどに暗く、そして空気もまた淀んでいるかのように重々しく沈殿しているこの部屋には…
およそ人が充分に住める設備と空間が『豪華』に用意されているというのにも関わらず、誰かが立ち入った様子もなく。
時折、カーテンの隙間から差し込む日の光だけが、寂しく部屋の中を一瞬だけ照らしはするものの、誰かが住んでいる様子などもない。

「…、…、…」

…しかし、こんな誰も居なさそうなこの部屋にも、微かに、静かに、そして僅かに、生き物の寝息のような呼吸音が零れていて…
それが、この暗い部屋のどこから漏れ出しているのか。外の太陽の光に反抗して閉め切られたこの部屋の中では、その寝息の出所を探すことすら困難であるに違い無い事だろう。

そんな、暗い暗いこの豪華な部屋の一室に…

「…目が覚めましたか？」

―静かに、『何か』の声が突如として現れた。

「……あぁ。俺は…どれくらい寝ていた？」
「…はい。およそ一月程かと。」
「そんなにか…」

そして、規則正しい呼吸音が、乱れたと思ったその刹那。
意識を覚醒させたばかりの眠そうな声を『誰か』が漏らし、そして当然のようにして、その『何か』とその『誰か』が言葉を交わし始めて。
しかし、この暗闇の中では、ソレが誰と何なのかは誰にも分からず。そのまま他の誰にも聞かれることのないためか、『何か』と『誰か』は更に言葉を重ね続ける。

「よほど『彼』とのデュエルに力を使ってしまっていたということでしょう。…それでも、完全に消滅させることは叶わなかったようですが。」
「…だろうな。あの時、オレの力に抵抗する『何か』を感じた。だから分かっていたよ、あいつは消えていないって。」
「あの方も心配されておられましたよ?目を覚ます様子が無かったものですから。…よほどお疲れだったのでしょう。『向こう』で全ての力を使い果たしていましたし、『こちら』に来てからも殆ど眠っておられなかったようですね。」
「…そんな事はどうでもいい。それより現状を教えてくれ、ユイ。」
「…はい。」

ここが一体どこなのか。そして彼らは一体誰なのか。
そんなこと、この場に居るこの二人しか知りえぬことなのだろう。
しかし、少年が『何か』の名前を述べたその瞬間。カーテンの隙間から差し込んだ光が、褐色の少女の顔を一瞬だけ部屋の中に浮かび上がらせて。

「もうすぐだ…次は無い、全部、全部消す。アイツも、アイツの大事なモノも、アイツの大事な場所も…」
「…努々忘れること無かれ。自分が一体何なのか。」
「あぁ、わかってる。…力が戻ったら…全部、全部全部消し去ってや

る。それが…オレのやるべき事だ…」

目覚めた不穏が、今再び…動き出そうとしていた。

―…

その日、決闘市はにわかにざわめいていた。

長くも短かった学生達の夏休みも終わり、本来ならばすぐに【決闘祭】へと向けた学内選抜戦がこれから各決闘学園で行われるであろう、まだまだ盛り上がるには早いこの時期に…

【決闘祭】がすぐそこまで近づいてきているかのようなこの落ち着かない街の雰囲気は、年末のような寒さこそないものの、残暑の中で確かに浮き足立っていて。

…いや、浮き足立っているのは決闘市だけではなく。

そう、学生達の夏休みが終わり、すぐに始まるソレへと向けて、世界中がにわかにざわめきあっているのだ。

それは、先日発表された『祭典』が、世界においても初の試みだったからに他ならない。

…世界有数のデュエル大都市として有名な、決闘市とデュエリア。

昔から何かと衝突し合っていることでも有名であるこの『王者の集う街』と『決闘発祥の地』である二大都市が…

―まさか今年に合同で『祭典』を執り行うだなんて、一体誰が予想出来ただろうか。

学生の数も大体同じで、学生のレベルも両都市ともに引けを取らず。
元シンクロ王者【白鯨】を筆頭に、決闘界の重鎮達が理事長を勤める決闘市か…【王者】となんら遜色無い力を持っていたと言われる、歴戦の決闘者『逆鱗』が率いるデュエリアの、果たしてどちらの決闘学園が優れているのか。

―そんな世界中が注目しているその渦中。

夏休みが開けた初日。その期待に溢れた決闘市の街の雰囲気は、【決闘祭】の中止という憂いを吹き飛ばすかのような奔流となって…

―決闘市内にある、国内でも有数の飛行場に集まっていた。

『全員、各校の集合場所を離れないように！これより点呼を取り、確認でき次第ウエスト校から順に搭乗する！』

手持ちのスピーカーから発せられた、教員らしき男の声がこの『飛行場』のロビーに木霊して。
その声に反応した他の一般客達が、この場に集まっている多くの『学生』達の屯しているその姿を野次馬の如く見てくるものの…
その視線は好奇と言うよりも、寧ろこれから始まるデュエリア領にて行われる世界最大級の学生達の祭典、【決島】への期待と応援に満ちた後押しするモノとなっていることは先ず間違い無いことだろう。
そう、これよりノース、ウエスト、イースト、サウス、それぞれの決闘学園から選りすぐられた２５名ずつの学生、『計１００名』が一挙に介し、今まさに【決島】へと向けて旅立とうとしているのだ。

―決闘市にて行われる祭典、【決闘祭】の出場者が各校３名の、計１２名だったことを考えると破格の出場者数。

これで決闘学園デュエリア校の参加選手１００名を合わせた、計２００名による超大規模な戦いが巻き起ころうとしている興奮は、これまで【決闘祭】に出場したくともギリギリで出場できなかった学生達にとってはどれ程の幸運と言えるのだろうか。
また、一部界隈では、参加者が多すぎるために『祭典』のレベルが例年と比べて下がるのでは無いかという意見も中には出てはいるものの…
そもそも決闘市の学生だけでも２０万人以上の学生が居るのだから、ここにいる決闘市側の代表『１００名』もまた、厳選されて出場資格を得た強者に違いなく。

…そう、何も【決闘祭】に出場する『３名』だけが特別に強いというわけではない。

勝負はあくまでも時の運。
その時に選ばれた『３名』は、確かに各学園が誇る代表者には違いないものの…それでも、その時の【決闘祭】の代表者達と、ほぼ同じ力を持った学生達が各校にはまだまだごろごろ存在していることを忘れてはならないだろう。
故に…この場にいる『１００名』は、２０万人を超える決闘市の学生達の中から、厳正なる審査を経て選び抜かれた栄えある代表者。
この場にいる全員が、すぐそこまで迫った【決島】へと向けて奮起を起こしていて…

そんな、学生達の闘争心に溢れているこの空港のロビーの…
イースト校の学生達が、教師を先頭に屯している、もうすぐ点呼が始まるであろうその集団の最後尾で…

「…疲れた…それに、眠すぎて…倒れそう、だ…」

「…だから、早く寝ろって、言っただろ…大体、出発の前日に、徹夜する馬鹿が、どこに、居るんだ…」

—遊良と鷹矢が、息も絶え絶えになりながらそう呟いていた。

「…時間には、間に、合ったのだ…問題、なかろう…」
「ふざけんな…おかげで、俺まで遅れるところ、だったじゃねーか…この、馬鹿野郎が…」

…額に汗を浮かばせ、肩で息をして、言葉の合間に細かく酸素を取り込んで。

まだ決闘市から出発すらしていないと言うのに、既に疲弊しきっているこの彼らの姿。
…これではまるで、この空港に到着したのが集合時間ギリギリ、たった今到着したかのような息の切れ具合ではないか。
…いや、彼らの話しぶりと、彼らの疲れ具合から察するに、確実に『そう』なのだろう。
その理由も、遊良の疲弊しながらも苛立っている姿と、ソレに反し鷹矢の何の悪びれもしていない姿を見れば一目瞭然であり…
そんな、イースト校の学生達が集まっている場所に合流した遊良と鷹矢を見つけたのか。
先に時間通りに到着していたルキが、息を整えている二人へと向かって、やや怒ったような声をかけてきた。

「遅いよ二人とも!こんなギリギリに!何してたの!?」
「…悪い、この馬鹿が寝坊して…」
「ぬぅ…徹夜などするんじゃなかったぞ…」
「え!?本当に徹夜したの?でも夏休みの課題は全部終わってたんでしょ?鷹矢なのに。」

「『なのに』とはなんだ、『なのに』とは。俺だってその気になれば課題くらい片付けられる。」
「…修業の合間に帰ってきた時にみっちりやらせたからな。すぐサボろうとするから本当に大変だったけど。」
「じゃあ夜更かしする理由なんて何もないじゃん。なのに何で寝坊したの？ねぇ何で？ねぇ！」
「む…」

眉間に皺を寄せて詰め寄るルキの迫力には、流石の鷹矢を持ってしても一歩引いてしまうのか。
…まぁルキからしても、デュエリアへと向けて出発するというこんな大事な日に寝坊する鷹矢に対して、怒るなと言う方が無理な話だろう。
また鷹矢にしてみても、寝坊して遅刻しかけたのは自分自身なのだから、返す言葉も無いのだろうが…
それでも、どこか鷹矢はバツが悪そうに。ルキから目線をわざとらしく逸らしながら、静かにその口を開いて…
「…修業に課題と、夏休みは全然遊べなかったのだ。休みが無かったのならば、何もない最終日くらい好きに遊ばせるのが普通だろうが。」
「えぇー…でもそれで遅刻しかけるって本末転等な気が…」

少しも悪びれずにそう言い放つ鷹矢。
それは、誰もが奮起と緊張に包まれているこの空港のロビーにおいて、どこまでも平常運転の鷹矢であるという証拠ではるのだが…
「早く寝ろって言ったのに、俺が深夜にトイレに起きたらまだ起きてんだぜ？それで今になって眠いとか言ってんだから自業自得だろ。」
「ほんとお馬鹿なんだから、もう。」
「ぬぅ…」

しかし、そんな鷹矢を見る遊良とルキの視線は鋭く。
そう、決闘市だけではなく、世界中が注目をしている【決島】にこれから出場するというのに…あまりに緊張感が無い鷹矢のその態度には、遊良とルキに心配とは別の、何か違った不安を襲いかからせてしまっているのだから。

「…おい見ろよ、天城　遊良だ。」
「…ほんとだ、アレが本物の…」

…そんな時、不意に遊良に、小さな声が聞こえてきた。
聞こえるか聞こえないかギリギリの…いや、これまでの人生でずっと陰口を聞いてきた遊良の耳だったからこそ、聞く気も無かった、聞こえないはずだったその小さい声を捕らえてしまったという、そんな気にするつもりも無かった声。
それはこの場に介した大勢の他校生達の内の、ほんの一角の数人が遊良を見てそういった声であり…
流石に【決島】の代表に選ばれた実力者達だけあって、その声質は遊良を蔑んだり馬鹿にしているモノとは異なってはいるものの、それでも遊良に聞こえないように呟いているつもりになっている当たり、彼らは自分達の声を遊良に届けたいと思っているわけでは無い様子。
…まぁ、遊良を見慣れている同じイースト校の学生は別としても、遊良もこれまで何かしらの用事が無ければこの広大な決闘市の他の地区に行くということも稀であったために、これまで殆ど交流も無かった学生達の中には映像ではない本物の遊良を初めて見た学生も居たのだろう。
その証拠に、その声質はどちらかと言うと蔑みや貶めと言うよりは、【決闘祭】の優勝者である遊良に対し、どういった感情を向ければいいのか分かっていないようではないか。

…蔑んでいい相手ではない。しかし実際に対峙したことが無いために、その力を手放しに認めるには気が引ける…

そして、その声に触発されたのか。
これまで対峙した事もない他校の学生達が、映像ではない本物の天城　遊良を次々に見始め、ソレに呼応して少々空気がざわつき始め…
また、遠目からヒソヒソと自分の事を言われる感覚は、遊良にしてみてもあまりいい気はしなかったのだろう。思わず、無意識に、反射運動にて遊良の眉間に皺が寄ってしまった…

―その時だった。

「あ、いたいた！天城せんぱーい！」

響く…とまではいかないものの、一人の学生がこの場にいる学生達の多くに聞こえたほどの声を放ち、早足で遊良達へと近づいてきて。

「…お、おい、アレって『烈火』の孫じゃなかったか？去年の全中の試合で見たぜ…」
「あ、あぁ…サウス校の一年で唯一代表に選ばれたって奴だろ？で、でもどうしてそいつが、あの天城　遊良とあんなに親しげに…」

周囲の視線などお構いなしに、たてがみの様な赤みがかった髪を揺らし。

―決闘学園サウス校一年、獅子原　炎馬

遊良の名を呼ぶ炎馬の声には、周囲のような怪訝さなど少しも感じられず。寧ろ、一種の懐きのような雰囲気が含まれていたことだろう。
…そのまま、炎馬は周囲の目線など気にした様子もなく遊良へと声をかけた。

「はよっす、天城先輩。」
「…あぁ、炎馬か。おはよう。どうしたんだ？」
「いやさ、デュエリアに着いたら学校毎の行動になるって聞いたからさぁ。今の内に話しとかないと【決島】始まるまで会えないかなーって。さっき探しても居なかったから、ちょっと心配してたんだぜ？」
「…悪い。」
「お、アンタ天宮寺先輩だろ？【決闘祭】の映像見たけどやっぱ背ぇデカイんだな。あ、高天ヶ原先輩もはよっす。」
「おはよう炎馬君。」
「…何だこの馴れ馴れしいのは。」

怪訝な顔した鷹矢を他所に、どこまでも明るい顔で笑みを浮かべながら言葉を綴る炎馬。
…遊良とルキが夏休みの中盤に、サウス校へと遠征に行った時に妙に懐かれたのか。あの遠征の後にも数回程会ってデュエルをした為に、最初に会った時のような下手な緊張感や妙な距離感などは既に跡形も無く。

「夏休み中は天城先輩にも高天ヶ原先輩にも一度も勝てなかったけど、俺本番に強いタイプだから気をつけた方がいいぜ？油断してると足元すくうからな！」
「あぁ、分かってるよ。こっちだって一度も手を抜けなかったし、お前は飲み込みが早いから油断なんて出来ないさ。」
「へへっ、じゃあ今度は【決島】で会おうぜ！高天ヶ原先輩と天宮寺先輩も、【決島】で戦う時は全力で行くからな！」

そうして…
言いたい事を言うだけ言って満足したのか。
炎馬は意気揚々と、サウス校の集団の方へと戻っていった。

「…誰だ？あの小僧は。」

「サウス校の獅子原先生の孫の炎馬だ。…ってか、昨日説明しただろうが。サウス校に行ったときに知り合ったって。」
「…覚えておらん。今初めて聞いた名だ。」
「どうせ、夜更かしした所為で忘れてたんだろ？」
「ふん。覚えるつもりもないがな。そんなに『やる』ようには見えん。」
「でも油断してるとホントに足元すくわれるよ？炎馬君、遊良とデュエルしてから何か掴みかけてるみたいだし。」
「…そうだな、炎馬も強敵の一人だ。」
「…ふん。」

そう言って炎馬の方を見ようとしない鷹矢の目線は、彼にしては珍しく先程の炎馬の態度が少々気に障ったかのような振る舞い。
…怖いもの知らずのように言葉を放ってくる炎馬が、どうにも鷹矢には気に食わなかったのだろうか。
…まぁ、炎馬の態度は決して鷹矢がどうこう言えるモノではないのだが…
それでも自分が知らぬ所で、これほど遊良に親しげに話しかけて、そして自分に尊大な態度を取ってきた学生は鷹矢にとっても初めてのことだったのだろう。
鷹矢にとっても初めての経験であるが故に、己の感情をどうやって始末すればいいのかを彼もまた測りかねている様子。

そうして…

息も整い、炎馬が去って、ようやく遊良がホッと一息つきかけたその瞬間…

「…ちょっと、いい？」
「え!?」

静かに、そしてあまりに薄い気配が背後から突然かけられた。
…少々驚いたかのような声と共に遊良が反射的に振り向いたそこには、この気配に溢れた空港のロビーに己の存在を溶かしてしまったかのように…
そう、まるで水の中に隠れるかの様にその気配を消しながら、背後から遊良へと話しかけてきた女性の姿が。

「あ…えっと…竜胆…さん？」

そして、その顔と声を一度だけ間近で見て聞いたことがある為に、反射的に遊良は話しかけてきた女性の名をその口から呟いて。
…透き通るような白色の髪。線が細く、気怠くも儚げに見える少女。

―ウエスト校3年、竜胆　ミズチ

【決闘祭】の準決勝で遊良が戦ったあの『機竜』使いの、そして先の決闘市で起きた『異変』の時に鷹矢が戦ったあの金髪の、今ではプロデュエリストとして活躍している元ウエスト校の実力者、竜胆　大蛇のただ一人の妹。
…しかし、遊良や鷹矢と直接的に関わっていないはずの、今では3年生となってウエスト校のトップに立っているという彼女が、一体どういった用件で遊良達へと話しかけてきたのだろうか。
その、全てを見透かしているかの様な、どこまでも透き通った目で…ミズチは、ただじっと遊良の顔を見つめていて。

「あの…俺に何か…」

直接話した事もなければ、殆ど面識も無いミズチと遊良。
故に、声をかけられたとは言え、遊良も彼女に対して何を言えばい

いのかがわからず。
　ミズチが何の目的で自分に話しかけてきたのかも分からぬ遊良からすれば、ただ黙ってこちらを見てくるミズチの意図はただただ不明。
　そんな、ミズチに対して何を言っていいのか分からない様子でいる遊良を他所に…
　そのままミズチは、静かに遊良達へと向かって…ゆっくりとその気怠げな口を開け、小さく声を発した。

「…先日、兄さんが貴方に会ったって言ってたから。…また余計なことを言って、何か迷惑をかけたんじゃないかと思って。」
「え？あ…あぁ、夏休みにそういえば一度会ったっけ…いや、迷惑なんて特に何も…」
「…そう。ならいいの。」

　空港のざわめきに溶けていってしまいそうなミズチの声は、どこまでも透き通っているからこそ鮮明に遊良の耳にだけ届けられて。
　確かに、遊良が夏休みに入ったばかりの頃。何の気まぐれか、現シンクロ王者、【白竜】と称えられる新堂　琥珀と戦った後に、琥珀の付き人として現れた竜胆　大蛇がイースト校に現れたことがあった。
　しかしその場では彼女が言うような『何か』など、遊良には無かった覚えしかなく…

「…」

　しかし、まだ何か用があるのか。
　ミズチは帰る素振りを見せず、そのまま遊良の顔を…いや、遊良の『後ろ』の方へと視線を刺し続けて、じっと見続けているのみ。

「あの…まだ何か…？」

「…天城　遊良。…『翼』が、消えてるわ。」
「…え？」
「…でも、抜け落ちてるわけじゃなさそう。…それと、天宮寺　鷹矢。」
「む？」
「…貴方は、また増えてる…【決闘祭】の時にも思ったけど、どこまで背負い込めるの？」
「何を言っているのだ貴様は。まるで意味がわからんぞ。」
「…そう。」

まるで、言語が異なっているかのように、淡々と意味の通じぬ言葉を並べるミズチと…ソレらを全く理解出来ず、頭に疑問符を浮かべている遊良と鷹矢。
こうして面と向かって会話をすることは始めてとは言え、ここまで兄と妹の性格が異なっていることは彼女の兄を知る遊良や鷹矢にとっては、不思議でたまらないことに違いなく…
そう、彼女とは見ている世界そのモノが違うのではないかと思えるほどに、会話が全く噛み合わないのだ。
しかし、遊良や鷹矢が自分の言った言葉を全く理解していない事など、彼女にとってはどうでもいい事だったのか。
そのままミズチは踵を返すと、その真っ白な髪を揺らしながら…
「…じゃあね。【決島】で会いましょう。…そこの、赤い子も。」
「え、あ、はい…」

何か含みのある言葉を言うだけ言って、ミズチはどこまでも気怠げにその足を進めつつ己の学園の方へと戻っていって…
「…天城　遊良。…兄さんが言ってた通り…面白い事になってる。」
遊良達には聞こえない、彼女だけにしか聞こえないであろう小さな声で、静かにそう呟いたミズチ。

…それは、彼女の持つ『全てを見通す目』が何かを見たと言うことなのか。
しかし、彼女の気怠げな表情からは、一体彼女が何を考えているのかなど誰にも知ることは出来ないことだろう。
そんなミズチが、ウエスト校の方へと戻ってその姿を集団に隠してしまったのとほぼ同時に…
鷹矢が、疑問符を浮かべ続けながらも徐にその口を開いた。

「一体何だったのだあの女は。」
「…さぁな。でも『翼』が消えてるって…【堕天使】の事か？でも何であの人が…」
「あ、お兄さんに聞いたんじゃない？ほら、【白竜】とデュエルした時、あの人のお兄さんが後から来たじゃん。」
「でも竜胆さんが来たの、デュエルが終わった後だったしなぁ…鷹矢にも何か言ってたし。」
「うむ。全く意味がわからなかったぞ。」
「…まぁいいか。とりあえず、あの人も【決闘祭】の代表にも選ばれてた人だし、決闘市側にも強敵が沢山居るんだ。油断は出来ないな。」
「ふん、誰であろうと蹴散らすだけだ。」

ミズチの言った言葉が気にはなりつつも、遊良はすぐさま意識を戻して。
そう、ミズチの心意はどうであれ、あくまでも目下の意識は【決島】。『烈火』の孫である炎馬や、竜胆　大蛇の妹であるミズチ以外にも、決闘市にはまだまだ自分の腕に覚えのあるデュリスト達が存在しているはず。
それを証明するかのように、遊良へと突き刺されている視線の中には、【決闘祭】の優勝者を食って掛かろうとしているような好戦的な視線もいくつかあり…
昨年度の【決闘祭】の戦いに触発されたのか。自らを鍛えなおしたことによって、メキメキと頭角を現し始めたデュエリストも多々現れ

ており、年々学生のレベルが下がってきているとまで言われていた以前までの決闘市と今年の決闘市は、どこか違う意識の高さがあるのだ。
無論、『Ｅｘ適正の無い』デュエリストへの見方が、良い方向へと変わった事も関係しているのだろう。
故に、油断など微塵もしている場合ではなく、意識を他に取られている場合でもない。

しかし、それを分かっていてもなお…

鷹矢は、堂々と言い放つのみ。

「今回は俺が優勝してやる。遊良の癖に、去年に続けて今年も優勝できるなどと思っているわけではあるまいな。お前は俺が倒す。」
「あ？鷹矢の癖に、今回も俺が勝つに決まってんだろ。つーか、今回は寝坊して開始に間に合わなくても俺は知らないからな。」
「なんだと！」
「なんだよ！」
「ちょっと！何で二人が喧嘩始めるのよ！もう！」

鷹矢にとっては、いくら周囲が奮起して向かってきても関係ない。いくら強くなった他人がかかってこようとも、自分が負けるヴィジョンなどこの男が思い浮かべているはずも無いのだから。
…鷹矢にあるのは、あくまでも遊良との戦いのヴィジョンだけ。
それは幼い頃に交わした『約束』のための…いつか大舞台で、大歓声の中で全力で戦いたいという、二人が交わした『約束』の、その礎とする為に戦いに臨むだけであり…
…そして、そんな鷹矢の意思はもちろん遊良だって理解していること。
だからこそ、いつもの如くじゃれあいつつも、決して戦意を途切れさせぬ遊良の意思は自らもまた負けるつもりなど毛頭ない自負の表

れ。
仲裁に入るルキの声に遮られつつも、お互いがお互いには絶対に負けたく無いという遊良と鷹矢の声がぶつかりあい…

そんな遊良達の事を…

少々離れて、砺波たち各決闘学園の理事長達が、その様子を眺めていた。

「はぁ…これから【決島】に向かうと言うのに、まるで緊張感が無い。」
「ハッ、いいじゃないか。下手に緊張しているより、子どもはあれくらい元気があった方がいいさね。」

…まぁ、理事長達とは言っても、何故かこの場に現れないノース校の新理事長と、ウエスト校の校長たちと話しこんでいるウエスト校理事長、李　木蓮を除いた、たった二人だけではあるのだが。
そう、この場にいるのは、決闘学園イースト校理事長、【白鯨】と謳われた砺波　浜臣と、決闘学園サウス校理事長、『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコの、歴戦を駆け抜けし元プロデュエリストの二人。
しかし、教え子達のあまりの緊張感の無さに溜息を吐く砺波とは対象的に…トウコの態度はどこか、『祭典』を純粋に楽しみにしているような飄々としたモノとなっていて。

「それより浜臣、お前んトコの子達、結構面白いじゃないか。アタシに琥珀の馬鹿を思い出させるなんて、あの天城って子は中々筋が良い。それにあの赤い嬢ちゃんも、『何か』持ってそうだしねぇ。」
「…獅子原理事長、夏休みに何度か遠征を引き受けてくださったのは感謝していますが…どれも仕事だという事をくれぐれもお忘れなく。彼には言っていないとは言え、天城君の結果には我々の進退がかかっていると言うことをですね…」
「お堅いことだねぇ相変わらず。あの調子に乗ってた聞かん坊だった

頃が懐かしいったらありゃしないよ。」
「…獅子原理事長？」

元から細かい事を気にしない性質だったトウコに、珍しくどこか振り回されているかのようにも見える砺波。
いくらプロデュエリストだった時代からの知り合いとは言え、あくまでも決闘学園の理事長としての立場を貫き通さなければ学生達に示しが付かないというのに…

「はいはいわかってるさ。…でもねぇ、わざわざ【白鯨】のアンタが学生を個人的に鍛えるなんて、『仕事』の枠を大きく超えてるだろう？プロの時にだって、星の数ほどいた弟子入り志願者を片っ端から無視していたあのアンタが。それに、その弟子をわざわざアタシんトコにまで送ってくるなんて、よっぽど気に入ってる証拠さね。」
「…」
「まっ、あれだけの才能だ。鷹峰の孫も相等なモンだが…アレを一から鍛える楽しさは、アタシもよく理解してるつもりさよ。だから琥珀が学生の時に、無理言って【白鯨】のアンタに引き合わせたりもしたんだからねぇ。…何か反論はあるかい、砺波理事長？」
「…フッ、トウコさんには、何時まで経っても敵う気がしません。」
「ハッ、デュエル以外でアタシに勝とうなんて１０年早いさ。」

しかし事務的な砺波の言葉と態度も、トウコの前では保つことすら出来ないのか。
…まぁ、いくら元シンクロ王者【白鯨】でなくとも、この決闘界の名立たる猛者の全ての姉貴分と言われるトウコを相手にしては、例え砺波で無くともソレは難しい事と言え…
何せ、若き日の『荒くれ』と呼ばれた、あの少々恥ずかしい振る舞いをしていた頃から自分を知られているのだ。
だからこそ、今更取り繕ったところで、その過去を簡単に持ち出してくるトウコには勝てないと砺波も踏んだのだろう。

近くに他の人間が居ないことも幸いしてか、心意を簡単に見透かされている砺波は早々に言葉から硬さを取り払い…
そんな砺波へと返すように、更にトウコは言葉を続ける。

「…しっかし、浜臣に木蓮にアタシ…んでデュエリアに行きゃあ『小龍（シャオロン）』も合流するとなると、気分はまるで同窓会さね。」
「…トウコさん、くれぐれも向こうで劉玄斎の事を『小龍（シャオロン）』と呼ばないでください…下手をすれば国際問題になりかねません。」
「ハッ、何が悲しくて小龍なんぞを怖がらなくちゃいけないってんだい。アタシはアイツがプロ入りする前のガキの頃から知ってるってのに。」

そんな中、何気なくトウコが徐に口にした『その名』…
それは紛れも無く、決闘学園デュエリア校学長、『逆鱗』と呼ばれた劉玄斎の、知る人ぞ知る彼の幼少の頃の通り名。
しかし、あの砺波が焦りつつも少々声を潜めて咎めた事が証明しているように、かの有名な『逆鱗』と呼ばれた決闘学園デュエリア校学長、劉玄斎その人が全く気に入ってもいないその『小龍（シャオロン）』という呼び名は、この業界に携わる者の中では一種の禁句でもあり…
過去、謝ってその名を口にしてしまった命知らずが、文字通り彼の『逆鱗』に触れてしまい…取り返しの付かない事態に陥ってしまったと言うことは、最早今この場では語るにも及ばないことだろう。
…まぁ、歴戦に名を連ねる伝説の決闘者達、その全ての姉貴分であるこの女傑、『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコに限って言えば、ソレはまた別の話となるのだが。

「楽しい祭りになりそうさねぇこりゃ。」
「…そうですね。」

そんな、心から楽しそうな笑みを浮かべる『烈火』とは裏腹に…

（劉玄斎…何を企んでいるのかは知らないが…この私が居る限り、貴様の好きにはさせん。）

己の教え子の結果によって決闘市側の理事長達全員の進退が決まることへの重圧と、【赤き竜神】を狙ってくるかもしれない敵の影。

ソレに加え、『逆鱗』、劉玄斎の読めぬ心意が、戦いの前に幾重にも砺波の心に重く重なり合い…

―【白鯨】の表情には、やや怪訝な曇りが浮かんでいた。

―…

ｅｐ７１「開戦前夜」

―デュエリアの街は、ざわめいていた。

もう日も落ち、これより本格的に夜が始まると言うのにも関わらず。落ち着き無くざわめきが木霊している街の中には、眠ることすら勿体無いと言わんばかりの喧騒が今もなお止む気配も無く交わされ続けていて…

そのざわめきは、人々の興奮度が上昇し続けているのが目に見えて分かる程のモノ。夜が更けるに連れて、時間が進むに連れて…

そう、ソレが近づくに連れて、どんどんヒートアップし続けているのだ。

しかし、その熱狂の理由など単純明快。

これ程までにこの『決闘発祥の地』であるデュエリアが熱気に包まれることなど、『デュエル』に関する出来事以外にありえないこと。

…いや、熱気に包まれているのはデュエリアだけではない。

デュエリアを飛び出したこの熱気は、瞬く間に『熱狂』へと変わって全世界を包みこんでいるのだ。

それは、夏の前辺りに突如として世界中に発信された、とあるニュースの衝撃が世界を多いに驚かせたからに他ならない。

そう、世界中が注目している、その熱狂の原因…

―【決島】が、いよいよ明日開催されるのだ。

世界有数のデュエル大都市である、『決闘市』と『デュエリア』。

そのライバル関係とも言える、常に衝突を繰り返してきた『王者の集う街』と『決闘発祥の地』の２つの大都市が、まさかの『合同』で祭典を執り行うというそのビッグニュースを、一体だれが予想できたと言うのだろうか。

…世界でも初めての試み。
歴史上類を見ない程の規模で執り行われる学生達の『祭典』は、長きに渡り競い合い衝突しあってきた決闘市とデュエリアの、直接的なぶつかり合い。
明日にも迫ったその盛大なる祭りの開戦の為に、世界中のメディアが注目しその盛り上がりを全世界に伝えようと躍起になっていることからして…
世界初となる、決闘市とデュエリアが合同で執り行う【決島】には、世界中が大注目をしていると言っても過言ではないことだろう。
故に…先程流れた、決闘市側の学生達が無事にこのデュエリアに到着したというニュースもまた、デュエリアの街の興奮を多いに増す要素となっており…
その世界最大の学生の『祭典』を、最も近くで見ようとデュエリアまで押しかけた他国の観光客や、次世代のプロ候補達を見定めようと集った多くのデュエリスト達が、口々に【決島】の事を話し続けている今のデュエリアの街の熱気はとにかく凄まじいの一言。

―始まるのは、明日の朝。

絶対に見逃さないために、興奮を途切れさせない為に。
眠ることすら拒んでいるこの街に、集った全ての人々が…いや、世界中の人々が、その世紀の開戦を今か今かと心待ちにしていて…

―そんな、眠らぬ街と化したデュエリアの一角…

この街の中央に位置する、『決闘学園デュエリア校』の、さらに中央部に位置する特別に建てられたタワーの最上階。
この広大な決闘学園デュエリア校を一望できる、そのデュエリア校の中でも最も高い場所にある『学長室』の中で…

―2つの男の声が、交わされていた

「悪ぃなぁ木蓮、着いたばっかりだってのに、わざわざ理事長先生様に足を運ばせちまってよぉ。」

「いえ、これも仕事ですから。それに、今の私はウエスト校の理事長ではなく、わが社の一人の社員と思っていただいて結構ですよ。」

「クハハハハ、何が一人の社員だ。世界トップクラスの大会社の会長だってぇのに。」

学長室に用意された、応接用の豪華なソファに座りながら…親しげに声を交わしている二人の壮年の男達。

一つは、厳格なる雰囲気に包まれたその部屋に広がる、どこまでも重々しく響く声。

一つは、その重々しい声に全く物怖じしていない、巨大な樹木のように芯の通った低い声。

それは、この二人の男達が数え切れない程の修羅場を越えてきたと言う事を証明しているかのようでもあり…

一人は、元カードデザイナーとして一世を風靡した、決闘市の他にも世界の各地に支社を持つ巨大なカード製作会社の、その元締めとなる巨大組織、『樹龍会』の創設者。

今この世に出回っている、あまりに膨大過ぎる数のカードの実に1／5を生み出したとも言われる、決闘界においては広く名の知れ渡った超が付くほどの大物の一人…

―決闘学園ウエスト校理事長、李　木蓮。

そしてもう一人は、戦場を駆け抜けたかのような傷跡に、まるで世紀末に生きているのではないかと錯覚する程の隆々とした巨大な体躯を持った、重厚なオーラを纏う初老の男。

かつて最も【王者】と拮抗した男と知られ、その実力は世界に轟く

【王者】達と『同格』とまで謳われた、歴戦に名を刻む伝説の決闘者の一人。
決闘学園デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と呼ばれた元プロデュエリスト…

―劉玄斎、その人。

しかし、全く接点の無いようにも思える劉玄斎と李　木蓮の二人が、一体どうしてデュエリア校の学長室で話をしているのだろうか。
明日に迫った【決島】では、お互いの学園の学生達がぶつかり合うと言うのに…
今こうして話している彼らの姿を見るに、裏で『何か』共謀している…と言うような、醜い大人の雰囲気ではないと言う事だけは確かなのだが。

「…では、これが頼まれていたモノです。確かに渡しましたよ？」
「おう。手間ぁかけさせて悪かったなぁ。」
「…しかし劉義兄（りゅうにい）さん、このご時勢に何故『儀式』関連のカードの作成依頼を？あまりにデータが少ないので、復元できなかったカードもありましたが…」
「なぁに、ちーとばっかし、ガキ共の授業で使うだけだぜ。」
「…それにしては随分と個人的な依頼に思えましたが。全く、鷹峰さんと言い劉義兄（りゅうにい）さんと言い、少々私をいいように使いすぎでは？私は既に会社の経営から退いているのですがね。」
「クハハハハ、こんな無茶な頼み聞いてくれる奴ぁ、他探したって居ねぇからなぁ。いい義弟（おとうと）を持って俺ぁ幸せだぜ。」

そうして…
幾つも言葉を交わしつつ、木蓮から受け取り『何か』を懐に仕舞った劉玄斎。
そう、二人の間にあった親しみの正体。

【決島】の開戦を前に、仕事上の付き合いを超えた、親しみすら感じられる二人の声の正体は紛れも無い…
今彼らが言った通り、ウエスト校理事長である李　木蓮と、デュエリア校学長である劉玄斎が、『義兄弟』であるからに他ならない。
…劉玄斎の妹を、妻に持つ李　木蓮。
彼らが超巨大決闘者育成機関【決闘世界】に所属する前の、若かりし頃からの付き合いであるからこそ。
【決島】の前夜であるにも関わらず今こうして親しげに声を交わせるのだろう。
そんな木蓮は、目の前に座っている劉玄斎へと向かって…
一つ溜息を零した後、ゆっくりとその口を開き始めた。

「…リィファが心配していましたよ。最近、義兄さんの様子がどこかおかしいと…」
「あぁ？…チッ、妹に心配されるような俺じゃあねぇよ。」
「しかし…」
「いいからテメェは自分の学生の心配だけしてろよなぁ。余計な事に首つっこむんじゃねぇ。」

しかし、そんな木蓮の言葉を無理矢理遮り。劉玄斎は突然、まるでそれ以上の問答を拒むかのような振る舞いを見せて。
…そんな劉玄斎を見て、付き合いの長さからかその雰囲気がどこかおかしいようにも木蓮は感じ取ってしまったのか。
そう、学生の為に…と言えば聞こえがいいが、この『Ｅｘデッキ至上主義』の時代に、既に失われた『儀式』関連のカードを、秘密裏にかつ直々に新たに作成させたり復元させたり依頼してきた事がその証拠。
…そもそも今この時代において、『儀式召喚』というモノは教科書に載ることさえ稀なモノなのだ。
そんな失われた、忘れられた、見向きもされないソレを、わざわざデュエリア校の学長自らがこっそりと作成させて来たこと自体が不

可思議な思想。
電話越しでは分からぬほどの微細な変化とは言え、劉玄斎から確かに感じたソレは、これまで幾度となく修羅場を潜ってきたこの李　木蓮を持ってしても思わず鳥肌を感じてしまったモノであり…
…そう、木蓮の目には、今の義兄の雰囲気が今すぐにでも荒れ果て、そして暴れ回りたい程の苛立ちを、その巨大な体躯で無理矢理に抑え込んでいるようにも見えたのだから。

…昔、もっと自分達が若さに溢れていた頃…今の雰囲気とよく似た、危うさすら感じる劉玄斎の『荒れ』を、木蓮は見た事がある。

そう、アレは確か…若かりし頃に、最愛の女性を失ったショックで、目に付く全てを破壊しつくしてしまいそうな程に荒れ果ててしまった、あまりに壊れかけた一人の男の姿。
…今の義兄から感じる雰囲気は、その時の『暴龍』の苛立ちにも似たオーラその物。
『その時』の劉玄斎と唯一つ異なるのは、その発散させなければ爆発して自我を失ってしまいそうな、そんな自分ではどう使用も出来ない苛立ちを、年齢という積み重ねた理性で彼はどうにか保っていると言う事だけ。
その時の劉玄斎の『荒れ』を、木蓮は強く覚えているからこそ…
その時の雰囲気を微かに匂わす劉玄斎の苛立った雰囲気に、木蓮の胸の内にはどうしても胸騒ぎを感じてしまい…

「明日んなりゃあ、俺んトコのガキ共が大暴れするんだからよぉ。精々今から、ガキ共慰める台詞でも考えとけ。」
「…ご心配なく。私の学園の子達は皆、強い子達ばかりですから。」

それでも、世界中が注目をしている『祭典』を前に…
木蓮は、言葉と共にその不安を飲み込むしかなかった。

―…

デュエリアの中心、その都市部のとある一角。
明日の【決島】の開戦に向けて、学生達は皆英気を養う為に既に寝静まっているであろう、もうすっかり夜も更けた深夜とも言えるようなそんな時間。
その富裕層の観光客向けの、豪華なホテルが幾つも立ち並んでいるそのホテルの内の一つ…およそ一介の学生が泊まるには、不相応な位に豪華に装飾された、そんな絢爛なるホテルのロビーに…

「珍しいね。遊良が１０時過ぎても寝れないなんて。」
「…あぁ。悪いな、こんな時間に呼び出して。」

―遊良と、ルキの姿があった。

しかし、いつもは遅くとも夜１０時にはスイッチが切れて眠りに付いているはずの遊良が、一体どうしてこんな時間まで起きているのか。
幼少期からの癖で、こんな時間まで遊良が寝付けかずに起きていると言うことは、彼にとってはかなり珍しいことだと言うのにも関わらず…
それをルキもわかっているからこそ、明日の【決島】へと向けたデッキの最終調整を終え、そろそろ寝ようとしていたところに突然かかってきた遊良からの呼び出しの電話にはルキだって相等驚いたのだ。
だからこそ、遊良からの呼び出しに応えてこうしてロビーにまで来たルキの表情は、先程からどこか落ち着かない様子の遊良の姿を心から心配しているかのようでもあり…

学園毎に異なるホテルに泊まるということで、このホテルにはイースト校の者しか居ないとは言え、部屋からの外出禁止を言い渡されている学生が、こんな時間に自分の部屋から出ている所を見られたら確実に大目玉は逃れられないと言うのに。

「でもどうしたの？直接話せないかって。」

「…いや…その…さ。」

そんなルキからの問いに対し、遊良は目線を泳がせ、言いにくそうに言葉を詰まらせるだけ。

…今の遊良から感じる雰囲気は、どこかバツが悪そうな、そしてどこか気恥ずかしそうな雰囲気。

一体、遊良に何があったのか。

神妙な面持ちで遊良からの言葉を待つルキの視線は、真っ直ぐ遊良を向いていて。

その、普段とどこか様子が違う今の遊良の姿は、明日にはいよいよ【決島】が始まると言うのに、まさか今更になって怖気づいた…などとは、口が裂けても遊良が言うわけがないと言うことはルキにだってわかってはいるとは言え…

それでも、こんなにもソワソワとして落ち着かない様子の遊良の姿は、ルキだって今まで見たことが無いのだろう。

…そして、しばらくの沈黙の後。

ようやく意を決したのか、逸らしていた目をどうにかルキの方へと向けた遊良は、とても言い難そうに…

そして、とても気恥ずかしそうに。静かに、その口を開き始めた。

「…夏休みの間さ、ずっと夜寝る前に電話してただろ？」
「うん。」
「…あとさ、夏休みはほぼ毎日一緒に居たじゃんか。」
「うん。」
「…それに慣れちゃったのか…その…どうにもルキの声聞かないと落ち着かなくて。」
「…へ？」
「…いや、自分でも変な事言ってるってわかってるんだ。でもベッドに入っても全然眠れなくて、明日の試合の事考え始めたらなんだかどんどん落ち着かなくなってきて…んで何でか分からないけど、急にルキの声が聞きたくなって…」

遊良の口から飛び出してきた言葉に、思わず思考を一瞬手放してしまったルキ。
…また、自分が述べている言葉が自分らしくないという事を、遊良も十二分に承知しているのだろう。
まるで言い訳をするかのように、次々と発せられる焦りを孕んだ遊良の言葉は、自らの逸る心臓の鼓動と相まって、言葉を零す毎に自らの焦りをみっともなくルキへと伝えるだけであり…
いつもは本当に高等部の2年生なのかと疑われるくらいに『しっかり者』として振舞っている、その遊良らしからぬ言動はまるで本当に怖気づいたかのような振る舞いではないか。
…そんな今の遊良の姿を見て、ルキは一体何を思うのだろう。
遊良からの言葉を全て静かに聞き、そして遊良の顔をじっと見つめていたルキは…

―言葉を吐き出し終えた、遊良へと向かって…

「…ぷっ。」
「…笑うなよ。」
「ごめんごめん。でも何を言うのかと思ったらそんなコトだったん

だって。…珍しいね。遊良も緊張してるんだ。」
「…まぁな。」

思わずルキが噴出しつつも、遊良の落ち着かない感情の正体を、的確にルキは見抜いていて。
確かに一瞬だけその思考を手放してはしまったものの、決して嘲笑の吹き出しとは異なった、それでいて遊良の今の心情を深く理解している幼馴染である彼女だからこその噴出し。
そう…
ルキには、今の遊良の落ち着かない感情の正体と立ち振る舞いの正体を、遊良に聞くまでもなく理解出来ている。

―遊良は、とてつもなく『緊張』しているのだ。

慣れぬ土地、慣れぬ寝床、慣れぬ雰囲気に慣れぬ空気。
その全てが遊良に『緊張』を与え、その全てが遊良を落ち着かせてくれない…と言うことを。

…他人が聞けば、『たかがそんな事で』と思うかもしれない。

しかし、住み慣れた決闘市での戦いならばまだしも、両親が居なくなり師である【黒翼】に引き取られてから、修業の日々に生活の自立と、これまでの人生においてまともに旅行になんて行く機会など遊良には全く無かったのだ。
…だからこそ、この全てが慣れぬ未開の環境は、遊良にどれほどのストレスを与えているのだろう。
それをルキも知っているからこそ…いや、ソレを深く理解しているルキだからこそ。
遊良が零した『弱音』にも似た本音を、決して馬鹿になどする事も無く…

「でも遊良の緊張してる顔ってちょっとレアだね。ほら、【決闘祭】の時は色々切羽詰ってたから、寧ろ後に引けないって感じだったし。」
「…ルキは緊張してないのか？初めてだろ、こういう祭典に出るの。」
「うーん…私はあんまり…って言うか、遊良だって去年の【決闘祭】が初めての祭典じゃん。」
「…そう言えばそうか。」
「もう、しっかりしてよね。緊張しすぎて鷹矢みたいなボケしないでよ。鷹矢は最初から緊張なんてしてなさそうだけど。」
「あぁ、昨日徹夜した所為でもう爆睡してるみたいだな。枕変わるだけで寝られないって煩かったアイツが。」
「ねー、夏休みの間中、ほとんどホテル暮らしだったもんねー鷹矢。それで慣れちゃったのかな。でもさー、だったら電話の方が良かったんじゃない？いつも寝る前に電話してたんだし。」
「…ホテルの部屋だと落ち着かなくて。あんまり居たくなかったんだよ。」
「えー、何か遊良、ちっちゃい子どもみたい。」
「仕方ないだろ。ホテルになんか泊まった事も無いんだから。」

…『いつもの通り』に、会話を続けるルキ。
幼馴染故に、幼少期から共に過ごした時間が長いからか、それが今の遊良に最も必要だと言うことを、彼女自身が誰に教わるまでもなく知っているから。
また、そんな『いつも通り』のルキと会話を重ねる遊良の言葉も、徐々にいつも通りの彼の言葉に戻ってきている様でもあり…

…頼れる親も居らず、頼れる親族も居ない。

しかし、今こうして隣に幼馴染の少女が居てくれると言う事は、遊良にとってはどれだけ安心できる事なのだろうか。
…明日の朝には、【決島】が開催される。そんな戦いの前に、乱れた精神状態は悪影響以外の何物も与えてはくれない事を遊良も理解し

ているからこそ…

「大丈夫、デュエルが始まっちゃえばいつもの遊良に戻るよ。だって遊良だもん。」

「…そうだな、サンキュ。」

僅かでも、少しでも、そして、今すぐにでも。

心落ち着ける、『いつもの』環境に触れたいと…遊良も、どうしても思ってしまったのだろう。

そんな焦りと動揺に引きずり込まれそうだった遊良の表情は…

―ルキの声を聞き、どこか落ち着きを取り戻しかけているようでもあった。

―…

「ホンマか!?ホ、ホンマに…ウチの願い、叶えてくれるんか…?」

「えぇ、もちろんです。我々に不可能はありません、えぇ。」

街のざわめきから隔離された、決闘学園デュエリア校の敷地内にある森の中。

夜のとばりに包まれたこの閑散とした木々の揺れる気配だけが広がっている、そんな静かな森の中に…

決闘学園デュエリア校の、アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンの姿があった。

お世辞にも発育が良いとは言えない、その小さい体を目一杯に伸ばし。
煌く金色の髪と透き通るような白い肌を、木々の間から差し込む月明かりに輝かせていて。
しかし明日の朝には【決島】が開戦していると言うのにも関わらず、参加選手でもある彼女が一体どうしてこんな夜更けに寮の自室を抜け出してこんな森の中へと足を運んだのだろうか。
そんな、どこか鬼気迫る表情でいる彼女へと向かって…
アイナの目の前に居る、夜の闇に溶け込みそうな黒いスーツを着込んだ男は、再び少女へと向かってその声を続けた。

「しかし、その為には先程お伝えした『条件』をしっかりと達成していただかねば。まぁ、【デュエルフェスタ】の優勝者である貴女には簡単なお仕事でしょうが、ええ。」
「せやかて…」
「何を躊躇する必要がありますか。貴女に何の関係も無い、名前も知らぬ見ず知らずの他校生と…貴女がもう一度会いたいと願う、とても大切なお方。一体貴女にとって、どちらの方が大切なのか、ええ。」
「…」

決して明るい話ではない。不穏を孕んだ、狂気にも似た鈍い言葉を流れるように発するスーツの男の言葉からは、誰の耳にも言葉にしがたい冷たさと捻れしか感じられず。
しかし、そんな見るからに怪しいこの男と、信用など出来そうにないこの捻れた男の言葉を前にしても、アイナはその小さい体をプルプルと震わせて、己の中の『何か』と戦っているかのようでもあり…
この捻れた男が一体、『何』をアイナに吹き込んだのかなど、今この場にいるこの二人にしか分からぬ事。
とは言え、今のアイナの姿を見るに彼女にとって引くに引けない『何か』を引き合いに出されたことは既に明白か。

…己の心の理性の壁と、剥き出しにしたい欲望の葛藤
この男から提示された条件が、倫理的に『良くない事』であると言うことは彼女にだって分かってはいるものの…
それでも彼女がこうして葛藤に飲まれていると言う事は、全てを投げ出してでも叶えたい願いがこのアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンにはあると言うこと。

「まぁ、どうしてもと言うのならば強制は致しません、ええ。なのでこの話は無かったモノとして…」
「わ、わかった…やる…やるわ、ウチ。」
「…ふふ、そうこなくては。なぁに、大丈夫ですよ。劉玄斎学長もこちらの味方ですし、先程貴女にお貸しした『そのカード』と、デュエリア校トップの貴女の実力があれば失敗はまずありえません、ええ。」
「…ホンマに…願いを叶えてくれるんやろな？」
「ええ、ええ。神に誓って。何せ本物の『神』の力が手に入るのですから、ええ。『赤き竜神』…その力があれば、人を一人生き返らせることなど簡単でしょうとも。」
「…わかった。」

にわかには信じがたい言葉を重ねる、アイナと捻れたスーツの男。
しかし、当の本人達がソレに何の疑念も持っていないということから、彼女らも本気で自分達が話しているその『内容』が紛れも無い『本物』であると理解しているかのようでもあり…
それは、過去に『とある出来事』に巻き込まれて超常的な体験を幾度も味わったアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンだからこそ理解出来ていること。
そう、『神』と言う呼ばれ方をしている、その理不尽な化物達の人知を超えた力の奇跡を…

ー彼女は、その身を持って知っているから。

「…ではでは、貴女の願いが叶うことを我々も祈っております、ええ。」
「…」
そんな、明日への期待にはちきれそうなこのデュエリアの街の興奮の空気とは裏腹に…
（…ホンマに…死んだアイツに…もう一度…）
少女の心は、深く…
—どこまでも深く、闇に包まれかけていた。
—…

ｅｐ７２「決島、開戦」

初秋のその日。
全世界から向けられた、数え切れない程の視線がこのとある『無人島』に一挙に集まっていた。
時差もあり、世界中の時間がバラバラであるにも関わらず。
これより始まる大きな戦いへの期待が、はちきれんばかりの興奮となって、この名も無き『無人島』へと注がれていて。
それは、未だかつて誰もが見たことも無いような規模の混戦が、これよりこの『無人島』に集められた２００名の学生達の間で始まろうとしている事への期待。
中継を通して、世界中の人々がこのデュエリア領内にある『無人島』の映像を、今現在リアルタイムで眺めているという…
まさに、世界中の人々の興味と視線の全てが、この決闘市とデュエリアの学生達へと向けられている証明とも言えるだろうか。
そんな、世界中の人々の視線が集まるこのデュエリア領内の『無人島』の…
その中心で…
―それは、叫ばれた。
『…をここに宣言します！決闘学園デュエリア校代表、リョウ・サエグサ！』
中継を通して全世界に響き渡った、開会を告げる高らかな宣言。
それがたった今、昨年度の【デュエルフェスタ】で堂々の準優勝を飾ったデュエリア校３年、金髪で長身の男子生徒、リョウ・サエグサの口から全世界へと向けて発信されたのだ。

その宣言と同時に、この『無人島』へと向かって放たれた世界中の熱狂は、確かな声となってこの『無人島』にいる全ての学生の耳に幻聴の様に聞こえたことだろう。
…そう、これ程までに世界が熱狂する理由など、今この時において唯一つしか存在せず。
ソレは紛れも無い。世界中の人々が待ち望んでいた、決闘市とデュエリアにおける事実上最強の学生を決める、超大規模での『祭典』の開催が…

―【決島】の開催が、ついに宣言されたのだから。

これは決闘市ｖｓ．デュエリアと言う、単なる都市同士の争いでは無い。これがそんな単純な話ではないからこそ、世界中の人々はこれ程までに注目していて。

…全員が、敵。

先日、全世界に大々的に取り上げられたように、この『無人島』に集められた大勢の学生達による、２００名入り乱れての大混戦。
それは、混戦の中では例え決闘市とデュエリアという括りの中にあっても、全員が全員の首を狙う敵となるという事でもあり…
決闘学園デュエリア校が所有する…と言うよりも、決闘学園デュエリア校学長、『逆鱗』と呼ばれた劉玄斎が個人で所有しているこの島で行われるのは、敵味方など無い生き残りを賭けた、まさにサバイバル・デュエルと呼ぶに相応しい代物。
…故に、自分以外の１９９人全てが敵と言うこの現状は、この島に居る限りは絶対に気を抜くことなど許されないと言えるだろうか。
決闘市とデュエリア、合わせて４０万人を超える全学生達の中から選ばれた『２００名』は、全員が各学園を代表する紛れも無い『強者』。
そんな逃げ場の無い『無人島』の中、この『強者』ばかりの環境で…

学生達は皆、混戦に次ぐ連戦を強要されるのだから、一度のデュエルにおける彼らの消耗もそれはそれは激しいモノとなるに違いないことだろう。

…だからこそ、世界中は熱狂している。

―『無人島』を、【決島】へと変えるその戦いを。

そんな世界中の熱狂が、轟きとなってこの【決島】に響き渡っている中…

―再び、運営の声が響き渡った。

『続きまして選手宣誓！決闘市代表！決闘学園イースト校２年、天宮寺　鷹矢選手！』

公平を期すためか、はたまた２つの都市が互角だということの証明か。

デュエリア校のリョウ・サエグサの開会宣言の後に、決闘市側からは昨年度【決闘祭】準優勝者、天宮寺　鷹矢の名が高らかに天へと響き渡り…

そして、それに応じるかのように。

２００名の学生達が整列した、その大行列の真ん中を壇上へと向かって歩みを進め始めたのは、世界に轟くエクシーズ王者、【黒翼】天宮寺　鷹峰の孫として知られている一人の少年。

―決闘学園イースト校２年、天宮寺　鷹矢

強者の中を恐れもなく、見えない観客の視線にも強張らず。

胸を張り、肩で風を切り、あまりに威風堂々とした鷹矢の立ち振舞

い。
それは先程の開会宣言をしたリョウ・サエグサの風格に、負けず劣らずの雰囲気を放っていたに違いないことだろう。
…歴史の一つを築き上げし、世界に轟くエクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰の孫。
その血筋を色濃く受け継いでる、直系の一挙手一投足には…ＴＶの前の誰もが瞬きを忘れ、期待と興奮で画面に見入っていることは、最早説明するまでも無く。
―しかし、そんな世界中の期待に満ちた視線とは裏腹に…
壇上に立つ鷹矢を見つめる遊良とルキの視線には、他の誰とも異なるモノが浮かび上がって来ていて…

「本当に鷹矢が選手宣誓するんだね…大丈夫かなぁ…」
「嫌な予感しかしねぇ…」

そう、期待に満ちた世界中の観客の視線と、好戦的な学生達の視線に反し…
遊良とルキの視線は、それらとは全くの正反対の、どこまでも心配と焦燥に満ちたモノ。
それは、たった今『あんな事』があったと言うのにも関わらず、あまりに『堂々とし過ぎている』鷹矢へと向けられた、心配に心配を重ねた心配の過剰とも言えるだろうか。
夏休みに入る前…【決島】の代表が発表されたその当日に、決闘市側の選手宣誓の代表が鷹矢であると言うことは、当然本人にも直接伝えられていたらしいのだが…
―「天宮寺選手！そろそろ選手宣誓の準備をお願いします！」

―「…む?…何の事だ?」
―「…え?」

案の定、鷹矢は前もって伝えられていたソレを、記憶の中からすっかり忘れ去っていたのだ。
当然、先程スタッフが鷹矢を呼びに来た時に、初めて鷹矢が選手宣誓を行うという事実を知った遊良とルキもその事実には心から驚いてしまって…
また、世界中が注目しているが故に、失敗など許されないスケジュールに駆られていたスタッフの、あの世界の終わりの様な青ざめた顔は、遊良も生涯忘れることは出来ないだろう。
…しかし、当の鷹矢本人はそんな事など何処吹く風。
今の今まで、その重大なる責任を綺麗さっぱり忘れ去っていと言うのに…
そんな事など、まるで些細な事のように感じている様子の鷹矢の姿は、遊良からしても心臓に悪い事に違いなく。

―「遊良よ、選手宣誓とは何を言えばいいのだ?」
―「知るかよ!と、とにかく何かこう…いい感じの抱負とか、当たり障り無い事とか…」
―「抱負か…うむ。とりあえず行ってくる。」
―「おい、下手なこと言うなよ!?絶対だぞ!?」
―「うむ。」

全くもって安心できないその言葉と共に、列を離れていく鷹矢を見送るしかなかった遊良の表情は、心配に塗れた焦燥そのモノ。
まだ【決島】が開戦してもいないのに、どうして今から焦燥を感じなければならないのか。
そんな腑に落ちない感情を抱きつつも、今の遊良には鷹矢の背中を視線で突き刺しつつ、余計な事を言わない様に念を送ることしか出来ず。

そんな遊良の視線を、果たして鷹矢は理解しているのだろうか。壇上へと上がっていく鷹矢の振る舞いは、遊良の眼にはどこまでもいつも通り映っており…

そして、一歩…二歩…

ゆっくりとその歩を進めていた鷹矢が、壇上の最上段に到達した時…

形容し難い静寂が無人島を包み、世界もまた一瞬だけ静寂をあらわにし始め…

『宣誓…』

…一体、あの馬鹿は何を言うつもりなのだろう。

決闘市中が注目していた【決闘祭】とは、注目度の規模が違うこの【決島】。

この映像が、世界中に中継されて注目されている以上。いくら王者【黒翼】の孫であろうとも、下手を言うことは許されず…

いや、王者【黒翼】の孫であるからこそ。下手を言えば笑い者で、もっと言えば袋叩き。どうしたって鷹矢には、『上手く言う』しか道はないのだ。

…それを、あの馬鹿はちゃんと分かっているのだろうか。

その、過剰とも思える遊良の心配と…そして、世界中からの期待の視線にさらされているという重圧の、その中で…

今、あまりに堂々と…

—鷹矢は、言い放つ。

『俺が優勝する。』

…

……

……

誰もが、その言葉の意味を理解出来ていなかった。
そう、この場に居る、全ての学生達が今の鷹矢の言葉の意味を全く理解出来ておらず…
それ以上に、ＴＶの前でこの中継を見ている世界中の人々の方が、今鷹矢の放った言葉を理解出来なかったに違いないだろう。

それは、あまりに不敵すぎる物知らずの物言い。
それは、あまりに不遜すぎる馬鹿者の豪語。

何せ、世界中に中継されている大舞台の、開戦の前の選手宣誓のマイクの前で…
栄えある決闘市の学生達を代表しての、選手宣誓を承ったエクシーズ王者【黒翼】の孫が…

―『こんな事』を言い放つなど、一体誰が予想出来たというのだろうか。

!!!!!!!!!!!

そして一瞬の後に、島中へと学生達のブーイングが轟いて。

参加者達のほぼ全員から発せられるそれは、誰もが自分の力に自身があると言うことの証明と、あまりに勝手な鷹矢の言葉にプライドを傷つけられたということの証明。

そう、この【決島】に出場している学生達の誰もが優勝したいと思い、誰もが優勝してやるという気概で望んでいるのだ。

…いくら鷹矢が昨年度の【決闘祭】の準優勝者で、いくら鷹矢が王者【黒翼】の孫であったとしても。

この【決島】に集った学生達は、全員が腕に覚えのある猛者達ばかりであるが故に、誰一人として負けるつもりなどないのだから、鷹矢のあまりに不遜な言葉と独尊な態度を目の当たりにしてしまっては学生達に苛立つなと言う方が酷な話であって。

「…やりやがった…あの大馬鹿野郎…」

「はぁ…ほんとお馬鹿なんだから、もう…」

そんな中、ブーイングの嵐を起こしている学生達の最後尾で頭を抱え、呆れ果てている様子の遊良とルキの表情はどこまでも重く。

頭を抱え、頭痛を抑え、寄せ来る非難の嵐に溜息を吐き…

…確かに、鷹矢ならば何かを『やらかす』のではないかという懸念はしていた。

しかし、あれだけ念押しをして、あれだけ心配したにも関わらず。どうしてあの馬鹿は悪い意味で予想を裏切らずに、『こんな事』を平気でやらかしてしまうのだろうか。

…きっと、遊良とルキはそう思っているに違いない。

「…あの子、随分と怖いもの知らずネ。」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ、流石は【黒翼】の孫ってだけはあるじゃねーか。…面白れぇ。」
「…リョウが男に興味持つなんて珍しいネ。どういう風の吹き回しヨ？」
「俺はレディからのお誘いと、野郎から売られた喧嘩は断らないのさ。それより…」
「…」
「Ｈｅｙ、アイ。今日はどうした？随分と大人しいじゃねーか。」
「こういう時は一番にキレるのに珍しいヨ。テンションまでぺったんこになたカ？」
「…うるさいわ、ちょっと考え事してるだけや。」
「Ｏｈ…」
「…これは重症ネ。」

また、デュエリア校の中でも上位に位置する者の中には、鷹矢の宣戦布告を受けても憤慨とは別の感情を抱いている者達もおり…
鷹矢の挑発にあえて乗る者、全く乗る気がない者、そして全く聞いてもいない者。
各々がそれぞれ、異なった感情と共に…もうすぐ始まる開戦へと、それぞれの面持ちで臨んでいるだけ。

「…やると思いました。だから彼を決闘市代表になんてしたくなかったんです。」
「クハハハハ！アレが鷹峰の孫かよぉ！あの馬鹿そっくりの大馬鹿野郎じゃねぇかよおい！」
「ハッ、我が強すぎる所なんかホント鷹峰の奴にそっくりさね。」

更には、鷹矢の宣誓を『特別観覧席』で見ていた各学園の理事長達からは、一名を除いて笑いが起こっていて。
そう、今この場にいる決闘界の重鎮達は皆、全員が鷹矢の祖父であ

る【黒翼】天宮寺　鷹峰を良く知っている。
　それ故、若かりし頃の【黒翼】を思い出させるかのような鷹矢の物言いと態度は、彼ら重鎮達からすればどこか懐かしくもあるのか。

「フォフォッ。血は争えんのぅ、若い頃の鷹峰にそっくりじゃ。のぅ浜臣や。」
「綿貫さん…笑い事では無いのですが。」
「いいや、最近の子ども達はどうにも大人しいからの。あれくらい豪語する小僧が一人くらい居た方が面白いわい。」
「…ですが世界中に中継されていると言うのに、彼の言動には協調性がですね…」
「そんなモンあるわけなかろう。鷹峰の孫じゃぞあの小僧。」
「…返す言葉もありません。」

　そして何故か特別観覧席に潜り込んでいた、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】最高幹部…
『妖怪』と呼ばれる翁、綿貫　景虎もまた、鷹矢の若すぎるが故の豪語に、気分を良くした様子を見せており…

（…しかし、今の天宮寺君の雰囲気…私の課した修業の意味を、彼はよく理解しているようだ。…もう少し上手くやってほしかったですが…）
「フォッフォッフォ。」

『何か』を考えている砺波とは裏腹に、この特別観覧室に最も木霊しているのは、しわがれた『妖怪』の笑い声。
　鷹矢が『ああ言った』理由など、鷹矢自身にしか分からぬ事とは言え…
　少なくとも、誰よりも歴戦の決闘者達を見てきた綿貫だからこそ。『天宮寺　鷹峰の孫』という少年を、押さえつける事自体がそもそもの間違いであると言うことを誰よりも知っていたのはこの綿貫　景虎

なのかもしれないだろう。
　そんな綿貫は、壇上から降りて列へと戻っていく鷹矢をぼんやりと眺めつつ…
　その長く伸びた白い髭の奥に隠された、皺だらけの口から再びゆっくりと言葉を零し始めた。

「…ま、お主ん所のイースト校には、もう少し『言った方が良い』小僧も一人居るがの…」
「と言いますと？」
「…なに、良いチャンスと言うことじゃ。何せ【決島】は、世界中から見られておるからのぅ…随分と痛い目にあったのに、ここまで自力で辿りついた『あの子』にとっては【決島】は良いチャンスじゃろうて。」
「それは…まぁ、確かにそう言えば聞こえが良いですが…」
「…のぅ浜臣や、ちと頼まれ事を一つ引き受けてくれんか？」
「構いませんが…しかし何を…」
「フォッフォッフォ、簡単な事じゃよ。ちとコレをな…」

―…

「うむ、やはり選手宣誓と言うモノは緊張するな。」
「何が『緊張する』だこの馬鹿野郎。」
「む!?」

　壇上を降り、ブーイングの嵐の中。
　周囲の突き刺すような視線に全く応えても居ない様子で、意気揚々と遊良達の元へと戻ってきた鷹矢に対し…

自らが放った言葉の重みを全く理解出来ていない馬鹿に対し、呆れと憤りで一杯の表情を見せ、鋭く言葉を突き刺した遊良。
…しかし、遊良のその表情も最もだろう。
何せ、世界に轟く王者【黒翼】の、『孫』という後ろ盾があっても先程の鷹矢の宣誓の言葉は、あまりに擁護のしようがないのだ。
…いや、いくら鷹矢がどう思っていようとも、鷹矢の言葉の一つ一つには天宮寺家の看板とエクシーズ王者【黒翼】の名が重く圧し掛かっていることは避けられない事実。
だからこそ、世界中が注目しているこの【決島】においては、言葉選びには十二分に気をつけなければいけないというのに…
言動行動全てが世界中に見られている『この場』が、一体どういうモノなのか。ソレを、この大馬鹿者は全く理解しておらず。
世界中へと向けて言ってしまったことは、取り消す事などもう出来ず。また、先程の宣誓とも言えないただの豪語は、この場に居る全ての学生達に喧嘩を売ったにも等しいモノ。
もしもこれで鷹矢が【決島】で芳しい成績を残せなければ、天宮寺家どころか、王者【黒翼】の『名』すらも汚してしまうという恐れがあると言うことは明白であり…
これで、この場にいる全員が鷹矢を真っ先に標的にする事は先ず間違い無いだろう。
ソレを証明するかのように、この場に集った全ての学生達が鷹矢を鋭く睨んでいて…

「馬鹿とは何だ馬鹿とは！お前が抱負を言えと言ったから俺は抱負を言ったのだぞ！」
「俺はあんな事言えなんて言ってねぇ！」

…しかしそんなコトなどお構い無しに。
どこまでも自分本位な言葉を連ね、遊良と口喧嘩を始める鷹矢。
…遊良と言い合い、ルキに呆れられ、周囲の学生達から睨まれているというのにも関わらず。

恐れを知らぬ鷹矢の言葉は、あくまでもどこまでも大胆不敵に不遜な振る舞い。

「俺が代表なのだ！俺の思った事を言って何が悪い！」
「それにしたって言って良い事と悪い事があるだろ！」
「大体鷹矢ってば、何で出来もしない選手宣誓なんて引き受けたの!?最初から全員に喧嘩売ってどうするのよ！もう！」
「ふん！どうせ全員蹴散らすのだ！雑魚がいくらかかってこようと何の問題も無い！」

―――!!!!!!

そして…

再び鷹矢の口から放たれた『その言葉』によって、更にこの無人島中に憤慨と怒号が轟いて。

…まぁ、全員が腕に覚えのあるこの猛者達の中で、その出場者達へと向かって『雑魚』呼ばわりをしたのだ。

そのあまりに酷い物言いでは、『この場』がこうなるのも当たり前なのだが…

「おまっ、何言ってんだ！」
「ちょっと！火に油注いでどうすんの!?」
「言った通りだ！全員蹴散らせば俺が優勝する。…その『全員』の中には遊良、お前も含まれているのだぞ？」
「…あ？」

…しかし、『敵意』を超えた『殺意』を、学生達から多大にぶつけられている中にあっても。

鷹矢は突然、遊良へと向かって述べたその言葉の中に…また一つ、『違った雰囲気』を含ませて始めたではないか。

「この夏休みの間で俺は強くなった。それこそ、今までの比では無いくらいにな。だからこそ、【決闘祭】での借りはこの【決島】で必ず返す。…俺はそう決めていたと言うのに、今のお前からは【決闘祭】のような必死さが無いではないか。」
「ッ!?そ、それは…」
「退学がかかって無いからか？ジジイの引退がかかって無いからか？遊良よ、何故もっと張り詰めんのだ。お前ともあろう奴が、緊張で寝不足とは情けない。」
「…なんで俺が寝不足だって知ってんだよ。」
「ふん、お前の顔を見れば大体分かる。緊張で眠れなかったことも、夜中にルキに泣きついたこともな。」
「…いや、泣きついてはねーけど。」
「…え、って言うか鷹矢なんで知ってるの？夜寝てたんだよね？」
「見れば分かると言ったはずだ。」
「…何か怖いよ？」
「なんとでも言え。分かるモノは分かるのだ。」

鋭い言葉で見透かしたように、唐突に遊良へと向かってそう言ってきた鷹矢。
…それは遊良の微かな心の緩みを、鷹矢が感じ取ったからに他ならない。
確かに鷹矢の言った通り、この【決島】における遊良の気持ちが、昨年度の【決闘祭】と比べてもどこか張り詰めが足りなかったことは否めない事実。
それを、遊良自身も心のどこかでわかっていたからこそ…鷹矢の突然の核心の追求に、反論の言葉を放つ事が出来ないでいるのか。
そう、決して気を抜いていたわけでは無いのだが…
それでも師の引退や自身の退学がかかっていた【決闘祭】に比べると、どうしても遊良には失うモノが無いという微かに緩みが心に浮かび上がってきてしまっているのだろう。
負けていいわけは断じてない。全てのデュエルに勝利する気持ち

でここに立っている事は嘘では無い。しかし昨年度に比べると、どうしても僅かな緩みが遊良には生じてしまっていて。
そんな、自分でも必死に感じないようにしていた心の僅かな緩みを、隠す間もなく暴かれた遊良へと向かって…
鷹矢は、更に言葉を続けて…

「忘れたのか？俺とお前の『約束』は、まだまだ途中なのだぞ？」
「いや、それはわかってるけど…それにしたってさっきのは言いすぎだろ。」
「ふん、折角各校の猛者が集まっているのだ。…どうせなら、お前以外にも本気で俺の首を取りに来る者が居らんと張り合いがないからな。」
「…張り合い？」
「うむ。今までは【黒翼】の孫だの何だの、要らぬ評価を勝手に押し付けられて、勝手に遠巻きにされていたが…【決島】に居る者共は、皆自分が一番強いと思っている奴らばかり。そんな奴らとの、本気のデュエルが今の俺には必要なのだ。」
「お前…」

そして…
続けて放たれた鷹矢の言葉に、思わず言葉を失ってしまった遊良。
何せ、先程まではモノを知らぬ、ただの大馬鹿者の振る舞いを見せていた鷹矢だと言うのに…

―纏う雰囲気を一変し、言葉に重みを含ませ始め。

周囲の奮起と憤慨を、まるで最初から狙っていたと言わんばかりの今の鷹矢の風格は、まるでこの殺気だっている【決島】すらどこか愉快に感じているようではないか。
…今までの鷹矢からは、考えられないようなその雰囲気。
何も考えずに周囲を煽ったのではない。自分の言った言葉の意味

を理解しつつ、それでいてわざと周囲に発破を掛けたのではないかと思えるくらいに…
今の鷹矢からは、今までの彼からは考えられない空気が感じられるのだから。

「俺がもっと強くなる為には、多くの強敵との戦いが必要不可欠。だからこそ、この【決島】は良い機会と言えるだろう。俺はまだまだ強くなる…いや、強くならなければならん。」

…だからこそ、遊良は今、驚いている。

鷹矢がデュエルをしているのは、幼い頃に遊良と交わした、世界の頂点という大舞台で思い切り戦うという、その『約束』のため。
それ以外の為のデュエルには、例え何があっても…
そう、例えば昨年度に決闘市で起きた、あの大混乱が起きた『先の異変』のような非常事態であっても、鷹矢は決して熱くなるような姿を見せなかったのが、今までの鷹矢。
ここ数年で考えても、鷹矢が熱くなったデュエルなど、【決闘祭】の準決勝での十文字　哲とのデュエルか、決勝の遊良とのデュエルだけであり…

故に、遊良には信じられない。『約束』の為にデュエルを続けていると言っても過言では無い、頑固な程に偏屈屋だったあの鷹矢が…
才能がありすぎるが故に、デュエルと言うモノをあまり重んじなかったあの鷹矢が…
―あろうことか、自ら嬉々として強者との戦いを待ち望んでいるだなんて。

「だから遊良よ…」

…一体、『何』が鷹矢を変えたのか。
夏休みの序盤と中盤に各一日ずつと、夏休み最終日である出発の前日の、合計『3日間』しかこの夏休みは直に顔を合わせていないからか。
夏休みに鷹矢に何があったのかを知らず、彼の変化の『きっかけ』を知らぬ遊良からすれば…これまでずっと一緒にいたはずの鷹矢の、その心情の変化にただただ戸惑うばかり。
そんな鷹矢は、どこか腑に落ちない表情をしている遊良へと向かって…
ブーイングの嵐の中で堂々と、更に続けて言葉を放った。

「お前ももっと俺に張り合え。でなければつまらん。」
「…」
「ちょっとー、私も居るんだけど。簡単に優勝するとか言わないでよね。」
「うむ。全くもって問題ない。ルキも俺が倒す。全力でかかってこい。」
「…何かムカつく。ふんだ、なら私が真っ先に鷹矢倒すんだから！」
「うむ。」

自分を追い込み、周囲を煽り…更なる強さを求める鷹矢。
それは、今までの鷹矢からは考えられない程の心境の変化。
元々、あまりに突出した才能を持っていたために、こういった勝負事にはどこか冷めていた見方をしていたあの鷹矢が…今は、本気で強くなるために貪欲さを滲み出している。
—学生達を煽ったのも、世界中に堂々と宣言したのも…全ては、自らを追い込むため。
しかし、他人からすれば当たり前の、そして今までの鷹矢からすればありえなかったであろう、その『強くなりたい』というその気持ち

が…
そう、才能がありすぎるが故に、これまで鷹矢に欠如していた、その『当たり前の気持ち』が今の鷹矢からはひしひしと感じられるのだ。
それは、これまで常に鷹矢と一緒に居た遊良だからこそ感じ取る事の出来た、これまでの鷹矢からは絶対に出てこないであろう言葉と気持ち。
今の鷹矢は、『本気』で【決島】の優勝を狙いつつ…自分の首を本気で狙ってくる猛者達との凌ぎ合いに心が躍っていると言う事を、遊良は嫌でも感じ取ってしまっていて。
『せ、静粛に！皆さん静粛にー！こ、これより学生達は全員、所定の初期位置へと移動を開始してくださーい！』
そんな遊良が感じた違和感を掻き消すかのように、そして他の学生達の鷹矢への不満をも掻き消すかのように。
開始時間が迫っているからか、選手宣誓での『アクシデント』によるタイムロスを取り返すかのごとく…
島中へと向けて張り巡らされたスピーカーから、学生達の中心へとスタッフの焦燥の放送が放り込まれて。
「うむ。では遊良よ、俺に負ける前に倒されるんじゃないぞ。今のお前だと大いにありえる。」
「…その言葉、そっくりそのままお前に返してやるよ。全員に喧嘩売っといって、早々に袋叩きにあっても知らねーからな。」
「ふん、要らぬ心配だ。遊良の癖に。」
「んだよ、鷹矢の癖に。」
確かに鷹矢の言った通り、遊良がどこか【決島】に対して、『絶対に負けられない』という『必死さ』が足りていなかったのは否めない事実。
それを、あえて考えないようにしてきたと言うのに…鷹矢に一瞬で

見抜かれた事で、今更になってその『緩み』が表に漏れ出してきてしまっているとでも言うのだろうか。
…この開戦直前で、すぐに取り返せる心の緩みではない。
自分も必死にならなれければ、自分よりも必死なデュエリストには絶対に勝てない。
それは昨年に、遊良自身が証明している事だからこそ…
鷹矢がここまで『本気』でいると言うことと、鷹矢に触発された猛者達が更に奮起しているというこの現状では、この僅かな緩みこそが取り返しの付かない命取りになってしまう危険があると言うのに。

そして…

鷹矢への不平不満がまだざわついてはいるモノの、各々の学生達が、それぞれ決められた最初のスタート地点へと向かって歩き出していく。

―これより始まるのは、２００名の学生達によるその『混戦』。

この険しい自然が群生している島中で、生き残りを賭けたデュエルが多々繰り広げられるからこそこの『無人島』は【決島】へと変化する。
そう、最初のデュエルを皮切りに、２００のデュエリスト達がこの『無人島』を縦横無尽に駆け巡り…
明日の決勝へと進む、たったの『４名』を決める為に。
生き残りを賭けて戦うサバイバルデュエルの、その始まりとなる１００のデュエルが、コレより一斉に始まろうとしていて。

「じゃあ私スタート位置あっちだから、二人とはここでお別れだね。」
「うむ。」
「あぁ、ルキも頑張れよ。…何かあったら、すぐに駆けつけるからな。」
「…うん、ありがと。」

比較的スタート位置がここから近いために、それぞれ島の中へと向かって歩いていく幼馴染二人を見送る遊良。

―その瞳に映るのは、自ら嬉々として強敵との戦いを求めている鷹矢の背中。

…鷹矢の突然の心境の変化に、僅かな動揺を隠せない。

それは、コレまでずっと一緒に居たはずの相棒が、突然自分の知らぬ場所に旅立って行きそうな不安を遊良に与えているから。

―そして、もしかしたら『敵』に狙われているかもしれないと言う、ルキへの心配。

…ルキはとても強くなった。それはデュエルの腕前にしても、『神』の力の抑制にしても。

夏休みの間、ソレをずっと傍で見てきた遊良だからこそ。例え休む間もなくルキがデュエルを行ったとしても、『神』の暴走は起こらないという事を理解出来ている。

…しかし、最大の懸念はルキを狙っているかもしれない『敵』がこの【決島】に居るかもしれないということ。

一応、砺波が私財を使用して用意した『防衛措置』と、そして何かあった時にすぐに迷わずにルキの元へと駆けつけられる『準備』は揃えてある。

だからこそ遊良もまた、どうにか今こうして【決島】に望めていると言っても過言ではないのだが…

それでもこの【決島】に対する緩みと共に、あまりに目まぐるしく動き続け変わり続ける周囲には、遊良とてどこか言葉にならない不安を感じているのか。

―そうして…

僅かな迷いを抱えつつ、そして『何』も起こらないことを祈りつつ。
いよいよ始まる『祭典』に、遊良の心臓もその鼓動を早め始め…
自らも、反対方向にあるスタート位置へと歩き始めようとした…

―その時だった。

「…天城、待ちなさい。」
「…え？」

もうすぐ試合が始まろうとしているその矢先。
背後から突発に、呼び止めるように突然に…
自分を呼んだ声が聞こえ、思わず前へと差し出しかけたその足を、
無理矢理に地面へと押し付けた遊良。

…開戦時間も迫っているのに、一体誰が何の用なのか。

どこか『聞き覚えのある声』、そして何やら面倒事の予感。そんな感情が渦巻きつつも、声の方へと向かって遊良が振り向いた…
そこには…

「なんだ…またお前か。」
「『なんだ』とは何よ、失礼な奴ね。」

高飛車そうな鋭い目つき。しかし日の光に反射するほどに艶やかな黒い髪。
その髪型を、『姉』そっくりに後ろで一つに纏め…棘のある口調とは裏腹に、どことなく気品を感じさせる一人の女生徒の姿が。

―イースト校２年、紫魔　アカリ

昨年度に【堕天使】を得たばかりの遊良とデュエルをしたものの、手も足も出せずに敗北を喫したはずの紫魔家の少女。
…遊良からすれば、あまり関わりたくはないであろう、そんな少女。
しかし、昨年までの彼女の実力では【決島】の代表に選ばれるかどうかも怪しかったであろうこの少女が、一体どうしてこの開戦間近になって、突然遊良へと声をかけてきたのだろうか。
そんな鋭い視線をした少女を、遊良はあまり刺激しないように意識しつつ…
目の前の少女へと向かって、ゆっくりと言葉を漏らして…

「…もうすぐ開戦の時間なんだけど。」
「わかってるわよ!…その前にハッキリさせておきたかったの。アンタ、アタシとの『約束』…忘れてないでしょうね。」
「約束…」

拗ねた子どもの喚きにも似た、攻め寄る少女の鬼気迫る圧力。
それは遊良からしても、思わず後ずさりしそうなほどの圧力を放つ代物であり…
この『混戦』が予想される【決島】においても、あくまでも狙いは遊良ただ一人なのだと言わんばかりのその気迫。
それはとてもじゃないが、昨年度までの『地紫魔』である事をひけらかしていた、遊良に簡単に返り討ちにされたはずのあの彼女からは想像も出来ない程に膨れ上がった、まさに鬼気迫るオーラとなっていたことだろう。
そう、鷹矢との『約束』とは別の、『約束』と言うよりは彼女の一方的な物言いとも言える…
彼女が、どうしても遊良に執着する、その理由…

「とぼけないで!アタシがアンタにデュエルで勝ったら…」
「…あぁ、俺が知ってる、紫魔　ヒイラギの情報…全部教えるって奴だろ?…忘れてないよ。」

「…ふん、ならいいわ。」

それは紛れも無い。

昨年度に決闘市で起こった、甚大なる被害を決闘市へともたらした先の『異変』の中核であった…

そしてその『異変』の後にこの街から姿を消した、公式的には既に『死亡』扱いとなっている、『先の異変』の『ただ一人の犠牲者』として数えられている彼女の義姉…

―『紫魔　ヒイラギ』の事について、遊良からその全てを聞き出すためだったのだ。

…師である【黒翼】が、自分の目の前でその少女を文字通り『消し飛ばした』と言う、遊良からすればあまり思い出したくはない出来事。

しかし義姉の『死』を全く信じていない彼女からすれば、何かを知っているであろう遊良は逃がすわけにはいかない絶対の獲物。

そんな『捻じれ』が、彼らの間にあるからこそ。この【決島】という、世界中が注目している『祭典』の、その最中であっても…

「【決島】じゃ逃げも隠れも出来ないわ…絶対に逃がさないから。」

「…あぁ。」

…昨年までの、『地紫魔』であるコトをひけらかしていた彼女だったならば、絶対に【決島】の代表には選ばれなかっただろう。

しかし今の彼女からは、絶対に遊良を逃さないという狂気にも似た雰囲気と、後に引く気など無い鬼気迫るオーラが漏れ出ていて。

―そう、昨年度に起こった先の『異変』のその後…『何か』が彼女を変えたのか。

先程遊良が放った、『またか』という言葉のその通り。

春休みが終わり新学期が始まってからと言うもの、彼女はあまりにしつこく遊良に付きまといその首を狙ってきていたのだ。
そのあまりのアカリのしつこさに、デュエルで勝つことを条件にしたのは遊良とは言え…ここまで遊良に全敗を喫しているアカリは、それでも諦めることを全くせず。
更には精神面以上に、昨年までの彼女からは考えられない程のデュエルの鍛錬を積んだらしく、2年生になってからメキメキと頭角を現し始め、今ではこの紫魔　アカリは『地属性』の紫魔家の統括である『地紫魔』の名に恥じない、イースト校を代表出来る程の実力者となっていて。

…それはすなわち、その実力は今やイースト校でも上位に数えられるモノであると言う事。

そんな、言いたいことだけを言い終えて、遊良の元から去っていくそんな彼女もまた…
何よりも第一に、遊良の首を『本気』で狙っており…

「はぁ…」

だからこそ、これまでの彼女とのデュエルに、全て勝利しているとは言え。
誰もが戦いに貪欲さを見せているこの【決島】の空気と、自分の心の僅かな緩み、そして彼女の鬼気迫る必死さが相まってしまえば、その場の勝負では何が起こるか誰にもわからないことなのだ。
それを、遊良も感じ取ったからこそ…
この隔絶された【決島】で、誰もが皆それぞれ譲れない思いで『本気』で戦いに臨んでいるというのにも関わらず。
自分がその必死さに辿り着く、最後の僅かな心の鍵が、今の自分にとっては『何』なのか。

…それが、今の遊良にはどうしてもわからない。

そんな、戦いの前だと言うのに決心がつききらない遊良へと向かって…

再び、背後から近づいてきた人物が、徐に声をかけてきた。

「天城君、少々いいですか？」

「…砺波先生？」

紫魔　アカリが去っていった矢先。

今度はイースト校理事長であり、自身の師である【白鯨】、砺波　浜臣から呼び止められた遊良。

…砺波とて、もう開戦寸前だという事を分かっていない訳がない。

それなのに、いくら直属の教え子とは言えイースト校理事長でもあり元シンクロ王者でもある【白鯨】が、ある特定の一人の学生へと声をかけていること自体、あまり周囲には見せてはいけないような光景であるはずだというのに…

「どうしたんですか？もう始まる寸前なのに。」

「いえ、少々君に用があったのですが…それより、戦いの前だと言うのに随分と迷いが生じているようですね。」

「…え？」

「今の君を見れば誰にだって分かります。…あれこれ考え過ぎるところが君の悪い癖だ。何を悩んでいるのかは…まぁ、大体想像がつきますが。大方、先程の天宮寺君の選手宣誓に秘められた『覚悟』と、高天ヶ原さんの心配…と言ったところでしょうか？」

「は、はい…」

遊良の心に渦巻いた、複雑に絡まった感情をまるで見透かしたよう

にしてそう言葉を発した砺波。
…何やら用があるらしいのだが、それよりも今の遊良の迷いの方が砺波には目に映ったのか。
「高天ヶ原さんについては、何があってもすぐに対応できる手筈を整えたのは君もしっているはずです。」
「それは…わかってますけど…でも、その…さっき、鷹矢に言われたんです…気が抜けているって。」
「戦う理由が足りないと？」
「いえ、そういうわけじゃ…」

中途半端な煮え切らない言葉と、心に渦巻く迷いと緩み。
…弱音など、吐いている場合じゃない。
それは遊良とて、重々承知していることとは言え…後に引けない焦燥が常に背中に張り付いていた昨年度の【決闘祭】と比べると、どうしても【決島】に対する戦いへの熱が低い事は遊良にとってもどうしようもないのか。
…そう、いくら同じ年代の学生達よりも大人びているであろう遊良とて、まだまだ高等部の２年生で、大人には程遠い部類の少年。
そんな少年が、ただ『Ｅｘ適正』が無いと言う理由だけで、これまでずっと負けてはいけないデュエル『だけ』をし続けてきた方が異常なのだ。
それは『Ｅｘ適正』が無いと宣告を受けてからこれまでの間、ずっと過酷を味わい続けてきた遊良にとっては…
今この時、ある意味『初めて』何も賭けるモノもなく戦いに臨めると言う、にわかには信じがたい違和感を感じる状況とも言え…
「ふむ…なるほど、少々重症のようだ。」
開戦間近のこんな時に、消沈してきている教え子が砺波には如何様に映ったのか。

そんな、自分ではどうしようもない感情に囚われている遊良へと向かって…

砺波は、周囲に言葉が漏れないよう。やや溜息を吐きながら、その白い髭の奥から再び重々しく言葉を発した。

「…この際仕方ありません。…終わるまで言うつもりはなかったのですが、覚悟して聞きなさい…この【決島】で、君が『それ相応』の結果を出せなければ…君を【決島】に推薦した決闘市側の理事長…すなわち、私と、獅子原理事長、そして李理事長の3名はクビになります。」

「え!?」

唐突に。

遊良の耳に、突然の雷鳴のように砺波の言葉が飛び込んできて。

ソレに伴い、驚きと共に遊良の心臓が大きく跳ね…今まで隠されていたあまりの事実に、遊良の思考は混乱の一途を辿り始めたではないか。

「な、ど、どうして…」

「当たり前でしょう?君の出場に懐疑的だった【決闘世界】の上層部の決定に、真っ向から反論したんですから。同じく君を推薦した劉玄斎がどうなるのかは知りませんが…少なくとも君の【決島】の結果には、昨年の【決闘祭】の時よりも多くの人の進退がかかっていた…という、ただソレだけの事です。」

「そ、それだけの事…って…」

あまりに突然の砺波の言葉に、遊良の思考が付いてこない。

それに比例し、今の今までひた隠されていたが故に…突如として自分の肩に圧し掛かってきたあまりの責任が、さらに遊良の焦りを助長するだけ。

…失うモノが無いなどと、思い上がっている場合ではなかった。

考え直せば当たり前の事で、思い直せば当然の事。何故これまで

ずっと賭けてきたモノが、今回だけは『無い』などと思い上がってしまっていたのだろう。
幼少の頃から憧れて、昨年は紆余曲折あったとは言え…今ではこうして師となってくれた、イースト校理事長である元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣。
夏休みに初めて邂逅したとは言え、こんな自分に全く偏見も持たずに修業をつけてくれた…歴戦の決闘者、『烈火』と呼ばれるサウス校理事長、獅子原　トウコ。
そして、これまで接点が無いにも関わらず、他校の学生である自分を信じて、そしてそのリスクを負ってまで自分を【決島】に推薦をしてくれた、元カードデザイナーであるウエスト校理事長の李　木蓮。
そんな【決闘界】の大物達の進退が、こんな自分のデュエルの結果にかかってくるということは、昨年の【決闘祭】で師である【黒翼】の引退と自身の退学を賭けて戦ったあの時よりも、更に過酷な重圧とも言えるだろうか。
ただ自分が知らなかっただけで、水面下では『いつもと同じ状況』が今まで通りに進んでいただなんて。今の遊良の頭の中には、突然告げられたソレらの重みが、今更になってひしひしと圧し掛かってきている様子で…

「本来ならば、開戦の直前にこんな事など言いたくはなかったのですがね。さて、この事実を聞いて迷っている暇がありますか？これまで世話になった人達の進退が、君の肩に全てかかって来ているのですから。」
「あ、ありません…」

それにより…
『Ｅｘ適正』の無いと言うその『意味』を、遊良もようやく思い出したのか。
そう、いつもと違う環境という『緊張』の所為か、至るのも気付くのも遅れてしまったが…自らを取り巻く状況は、いつもと全く変わっ

てはいなかったのだ。

―【決闘祭】の優勝者として【決島】に出場するという、これまでの人生において経験した事のない『プレッシャー』…

―住み慣れた決闘市を離れ、土地も人も雰囲気も空気も何もかもが初めての場所で戦わなければならないという『緊張』…

―これまでの人生において、常に聞こえていた野次や否定、侮蔑や嘲笑といった、遊良にとってはある意味『聞き慣れていた』いつもの状況が、この【決島】には存在していなかったからこそ生じてしまっていた心の僅かな『緩み』…

その、いつもとは異なる状況の『全て』によって、これ程までに遊良の心には必死さがそぎ落とされてしまっていたのだろう。

…しかし、自分が気付けなかっただけで、状況はいつもと全く同じだった。

―ここは自分を認め始めてくれていた『決闘市』ではない。未だに『Ｅｘ適正』の無い自分を認めていない、決闘市の『外』の世界。

自らの力で、決闘市における『その常識』を覆したとは言え…まだまだ『外』の世界にとっての自分は、『Ｅｘ適正』の無いデュエリストの成り損ないという認識。

だからこそ、この【決島】が全世界へと向けて中継され、自分の全てのデュエルが見られている以上…

―『観客』は居る。

―ただ、見えないだけ。

そして聞こえないだけで、『ソレ』はきっと今もＴＶの前などで言われているのだろう。『Ｅｘ適正』の無い、天城　遊良というデュエリス

トの成り損ないに対する、いつものような数々の否定の嵐は。
…何の関係も無い他人だったら、こんな事で悩む必要などない。
しかし、関係のある者達、それもこんな自分に対して、温情を向けてくれている人達の事だからこそ。昨年の、師【黒翼】の『引退』を背負っていた時と同じ…いや、下手をすればソレ以上の重圧が遊良を襲っていて。

―忘れていたわけではない…【決島】への参加も、初めは上層部からは否定されていたと言うことを。
―忘れてはいけない…『Ｅｘ適正』が無いと言う、その意味を。

焦りに塗れながらも、それを今一度遊良も思い出したのだろう。
そんな、冷や汗を垂らしながら表情を一転させている遊良の顔を、砺波は一瞥したかと思うと…
懐から、一枚のカードを取り出し始め…ソレを、徐に遊良へと手渡してきた。

「…よろしい。そんな君に『預り物』です。」
「え？と、砺波先生！…こ、これって…」

砺波から直々に手渡されたソレに、思わず驚きの声を上げた遊良。
…しかし、それもそのはず。
砺波から手渡されたそのカードは、遊良からすればどうして自分に渡してくるのか…その理由すら分からないような代物だったのだから。
しかし、この開戦間近になって、突然『そのカード』を渡された意味すら全く分かって居ない様子の遊良に対し…砺波はその白い髭の奥から、更に静かに言葉を続けるのみ。
「ある方からの預かり物です。『その時』が来るまで、君に預っていて

欲しいと…」
「『その時』…で、でも何でコレを俺に?こ、こんなカード、俺が持っていていいようなモノじゃ…」
「…さぁ?私には、あの方がどうして君に『そのカード』を預けたのかなどわかりません。…しかし、このカードを君に渡すように言ってきたお方は、そのカードを君が使用するのも良いと言っておられました。」
「え、お、俺が!?…俺が…このカードを…」

…意味が、わからない。
先程は砺波の言葉に驚いて、思わず焦っている暇は無いと言ってしまったとは言え…心の緩みが消えはしても、今度はそれ以上の『何か』が心に生じている様子の遊良。
何せ、自分の肩に決闘市の理事長3人の進退がかかっているという重圧と、そのすぐ後に『こんなカード』を渡されてしまっては…
「…まぁ、私はあまりオススメはしませんが。ソレが君にとって、あまり良い意味を持っているわけではないことを私も知っていますので。…ですが、君が『そのカード』を預けられたという、その意味をどう捉えるか。それもまた君次第です。」
「…」

昨日感じた『緊張』もそう。否定が聞こえなかった事による『緩み』もそう。
開戦直前になって襲い掛かってくる、自分ではどうする事も出来ないソレらに、振り回され続ける遊良の心が戦う前から疲弊し始めているのは決して錯覚ではないはず。
しかし既に疲弊している己の教え子を、鯨の瞳はただ見下ろしているだけであり…
「…迷いなさい。今の君には、その迷いが必要だ。」

「え…」
「焦って、迷って、悩んで…そして自分自身で解決策を見つければいい。こんな状況ですが、君にはソレが出来ることを…とりあえず、今は信じておいてあげましょう。何せ、この【白鯨】の教え子なのだから。」
「砺波先生…」

人生においては自分ではどうしようもない『壁』が突然出現することなど日常茶飯事。
…それ故、子どもではどう足掻いても越えられないモノが、いきなり目の前に立ち塞がってしまう事があるのも、また変えようの無い人生の流れ。
だからこそ、そうした、『子ども』がどうしようもない迷いに囚われたときに、導けるのは『大人』だけ。
特に今回は遊良の結果に、決闘界の重鎮3名もの進退が背負わされているのだから、今ここで迷いに囚われかけている遊良を師として導くのは、砺波の当然の役目とも言え…
しかし、ソレをわかっていてもなお。今ここで遊良に助け舟を出すことは、彼の為にならないという結論に【白鯨】は至ったのか。
これまで自分が築き上げた、輝かしい功績を賭けてでも。
そして自分だけではなく、自分の教え子を信頼して進退を預けてくれた、決闘界の重鎮達の今後を勝手に賭けてでも。
その全てを賭けるに値すると、砺波自身も信じているからこそ。あえて迷いを持たせたまま、砺波は遊良を送り出そうとしている様子で…

「さぁもう行きなさい。くれぐれも、自分のデュエルの全てが世界に見られていると言うことだけは忘れないように。それだけを理解していれば、自ずと答えは出てきます。」
「は、はい、砺波先生。」

そうして…
迷いに囚われたままで初期地点へと向かって歩いていく教え子を、遠い眼で見送る鯨の眼差しは果たして一体何を思っているのだろう。
（…全く、自分が戦わず教え子に全てを預けるなど正気の沙汰ではない。鷹峰も…あの時はよくもまぁ簡単に言えたモノだ。）

そんな砺波が今思い浮かべていたのは、昨年に己の弟子に自身の『引退』を簡単に預けた、古い付き合いでもあるエクシーズ王者【黒翼】の…
あの憎たらしくもふてぶてしい、それでいて自信たっぷりに発せられた、後先を考えていなかったであろう約束の豪語。
…きっと、あの頃の自分に言っても絶対に信じることはないだろう。まさか、ソレと同じ事を、今度は自分がすることになるだなんて。今の砺波は、そう思っているに違いなく。
しかもソレが、世界中からその存在を全否定されたあの『Ｅｘ適正の無い』天城　遊良だというのだから…
…ここまで変化した自らの心情に、最も驚いているのは砺波自身なのかもしれず。

（さて、ちゃんと気付いてくれるでしょうかね。…天城君、君にとって、最も優先するべき事は何なのかを。）

…けれども今の砺波には、教え子を疑っている様子など微塵もない。
そう、自分達の進退よりも、あくまでも遊良自身の事を考えているかのような砺波の思考は、遊良自身に『何か』を気付いて欲しいと言っているかのよう。
それは、最初はいくら罪滅ぼしの為だったとはいえ、これまで遊良の事を見てきたが故に至った結論。
歴戦を戦った王者【白鯨】が、一人の少年を鍛えてきたが故に変化

した、【白鯨】自身にも予想しなかったであろう心境の変化。

そう、あくまでもやるべきことは唯一つ。

全ては、自身が認めた教え子を…

—更に、強くする為。

そして…

『各選手！所定の位置へと到着しました！それではいよいよ！一斉にデュエルが開始されます！』

開戦直前に色々あったとは言え、ようやく始まろうとしている【決島】を盛り上げるべく島中に響き渡ったのは実況の声。

それに伴い、今か今かと開戦を待ちわびていた世界中の観客達は、その興奮の熱を今まで以上に上げ始め…

各チャンネルには、それぞれの局がそれぞれ別の学生達のデュエルをリアルタイムで映し出すべく、開会式の映像から島中の映像へと切り替わり始めたではないか。

『各選手達のデュエルの様子は、元シンクロ王者【白鯨】のご好意により、各チャンネルより全てのデュエルがリアルタイムで映し出されます！』

普通だったらこんな大規模な混戦において、『全員』のデュエルが取り上げられることなどプロの世界でも皆無の事。
しかしこの【決島】においては、２００名全員のデュエルが同時に世界中に放映されるのだ。
それは、砺波が私財を使って特別に用意させた、各学生達について回るデュエルドローンが個人個人のデュエルを逃す事無く映し出すからでもあり…
それとリンクした、世界中の放送局が学生達のデュエルを余すこと無く放送する為。

…表向きは、【決島】を盛り上げるための建前と、出場している各校の猛者達のデュエルを、広く世間に見せ付ける為。
―しかしその実は、【決島】全域を常にリアルタイムで映し出し、外から現れるであろう『赤き竜神』を狙ってくる『敵』を、自由に動かさない為。

また、公にはされていないが、この周辺海域には砺波が依頼し手配した警備隊による、魚一匹抜け出せないであろう警戒網と…
空域には、いつでも飛び立てるジェットヘリを、近くの『島』に待機させてある。
これで、『赤き竜神』を狙う『敵』がこの【決島】で行動を起こそうとしても、『侵入』する事も出来なければ、『脱出』することも『隠密』で行動する事も、更には『逃走』する事だって困難であるはず。
…自分の教え子を狙ってくる不逞の輩には、この【決島】に入れも逃げも行動もさせない。
そんな砺波の、過剰とも思える警備網が張り巡らされていることなど、件の当事者達以外には知る人間など誰も居らず。

『更にはデュエルを盛り上げる要素として、【決島】ではリアル・ダメージルールを採用！学生達が腕に嵌めているリングによって、デュエルでのダメージに応じて実際に衝撃が起こりますので、学生達がいかに

ダメージを受けずにデュエルを進めるのかも見所の一つと言えるでしょうか！』

「…アタシは反対したんだけどねぇ、そんな危ないモン、子ども達につけさせるなんてさ。」

「衝撃つっても死ぬほどじゃあねぇよ。まぁ、ワンショットでも喰らえば気絶する位にゃビリビリ来るけどなぁ。」

「…ソレにしたって限度ってモンがあるさね。」

「安心しろ、ウチの優秀な医療班が待機してんだ、それにこんなモン、デュエリアじゃあ当たり前の事だぜぇ？それとも、軟弱な決闘市のガキ共にゃキツいってかぁ？クハハハハ！」

そんな中、学長、理事長達の為に特別に作られた特別観覧室の中に呟かれた『烈火』のぼやきと、ソレに対して木霊する『逆鱗』の重々しい声。

―プロの世界でも賛否両論の、実際の衝撃を伴うリアル・ダメージルール。

しかし、その『烈火』のぼやきに反し。倫理的に問題があるかのようにも思えるこのリアル・ダメージルールに対して、反対の声はひとつも聞こえてこないでは無いか。

…それは、危険を伴うであろうこのルールですら、世界最大規模の祭典を更に盛り上げるためのスパイスと言う程度にしか観客達も思っていないという証拠なのか。

そう、プロの世界には、実際にコレと同じルールが適応されている耐久レースも存在する為か…世界最大規模の『祭典』の興奮と相まって、このルールに異議を唱える者など、観客達の中には誰も居らず。

また【決島】のルール上、何度デュエルに敗北しても『失格』にはならないとは言え…

それはあくまでも『意識がある場合』でのみ適応されるルールであ

り、連戦に次ぐ連戦が予想される【決島】の混戦の中では、その場その場の細かいダメージよりもデュエルを重ねた事によるダメージの『蓄積』の方が深刻と言えるだろう。
…何せ、受けたダメージに比例して、流れる電流の強さも変わる。
それは、もしもワンショットキル級のダメージを受けでもすれば、人間の意識など簡単に断ち切れる程の代物であり…

—カードを引けぬデュエリストに、ターンは回っては来ない。

もしも途中で意識を失えば、その場で即『失格』となってしまうのだ、
だからこそ、何度デュエルを重ねるか分からないこの【決島】では、勝ち負け以上にどれだけダメージを食らわずに戦い抜けるかも重要となってくる。
そう、新たなデュエルを開始する時に、いくらＬＰが４０００まで戻ろうと…それまで体に『蓄積』されたダメージは、簡単に元には戻ってくれないのだから。

故に…【決島】における、ルールは簡単。

—最後まで立って、デュエルをするだけ。

—…

「…最初の相手は君か…ヌフッ、こりゃあ幸先良いね。」

砺波と別れ、森へと足を踏み入れてすぐの場所でのこと。
自らの初期スタート位置に到着した遊良へと、その場に居たもう一人の学生が徐に言葉を投げかけてきた。
…それはじめじめと湿った笑いを漏らし、どこか耳に纏わり付くような声をした、遊良の見知らぬ男の学生。
デュエリア校の制服を着ていることから、当然その相手がデュエリア校の生徒であると言うことは遊良とて瞬時に理解したとは言え…
まるで、最初の相手が遊良だという事を知り、既に勝利を確信しているかのような相手の学生のその言葉に、色々あって疲弊し始めていた遊良の心も思わず高まりを始めてしまって。

「ヌフフッ、僕はデュエリア校3年のダニー・K。」
「…イースト校2年、天城…」
「あぁ自己紹介はしなくても大丈夫だよ？ヌフフフフ、君の事ならちゃーんと知ってるからね…よろしく、『Ｅｘ適正無し』クン。」

そんな遊良の精神を、察してか見透かしてか見通してか。
このダニー・Ｋと名乗った湿った笑いを漏らすデュエリアの学生は、更に遊良の癪に障るような言葉を続けるのみ。

『各選手！所定の位置へと到着しました！それではいよいよ！一斉にデュエルが開始されます！』

しかし、遊良の精神状況などお構いなしに。突如鳴り響いた実況の声に連動し、この場に集まった総勢２００名のデュエルディスクが同時に展開されていく。
これより始まる戦いを皮切りに、学生達はこの日、島中を縦横無尽に駆け巡り…
そして終わる事の無い連戦に身を投じ、その戦いの全てが世界中に見られているというこの逃げ場の無い戦場で、決闘市とデュエリアと言う、世界が誇る二大デュエル大都市の学生の頂点が決められるの

だ。
…迷いはある。焦りもある。未だ吹っ切れていないこの状況が、【決島】では大きな命取りになることを遊良は理解している。
―それでも、戦わなければ生き残れない。
ここは自分を認めはじめてくれていた決闘市ではない。自分の存在を未だ認めてくれていない、決闘市の『外』の世界。
だからこそ…そう、自分だけではなく、師達の命運をも背負っているからこそ。
自分の負けは、自分一人の負けではない。自分だけの戦いではない事を思い出したが故に、いくら精神状態が最悪だからとは言え自分に負けることは許されないのだ。
それを、遊良も戦いの寸前に思い出したからこそ…
『ルール説明は以上!それでは、これより開戦です!デュエルディスク展開!デュエルモードオン!』
見えない観客達へと向けてルール説明をしていた実況の声が、いよいよ開戦の時を告げる。
総勢２００名の学生達による混戦。実際のダメージが襲いかかるリアル・ダメージルール。
逃げ場の無いこの無人島が、本当の意味での【決島】へと、その姿を変えていき…
それに呼応し、世界中の熱狂がこの島を覆い始め、世界中で轟いている聞こえないはずの熱狂がその勢いを増すごとに、見えないはずの観客の声が【決島】にいる学生達にも聞こえ始めてくるではないか。
…錯覚か、実体か。
しかし今この場に集った臨戦態勢のデュエリスト達は、誰もそんな

モノになど気をとられる事などなく。
そう、臨戦態勢に入った学生達の耳には、周囲の熱狂など既に聞こえない。
…２００名の学生達全員が、それぞれの相手を前に手札を引く。
それは戦いの準備が整った合図であり、これより完全にランダムに決められたというこのスタート位置で、今一斉にデュエルが始まろうとしていて。

「ヌフフッ、【決闘祭】の優勝者だろうと、デュエリアの敵じゃ無いって事を思い知らせてあげるよ。」
「…」

…迷いと焦りが残りつつも、開戦の時は待ってはくれない。
『Ｅｘ適正』が無いと言うことは、負ければ終わりという事。
それを、遊良は今一度己の心に刻み込み…

『さぁ！生き残りを賭けて戦いぬけ！』

世界の全ての視線が、【決島】へと注がれたところで…

『【決島】…スタァァァァアトオオオオオオオオオオ！』

—デュエル
!!!!!!!!!!

ついに、始まる…

―今、一斉に

―……

ｅｐ７３「運命を切り裂く者」

『さぁ、生き残りを賭けて戦いぬけ！【決島】…スタァァァァァアトオオオオオオオオオ！』

―デュエル！

今一斉に鳴り響いた、学生達による開戦の狼煙。
【決島】と言う、決闘市とデュエリアによる世界最大級の学生達の祭典が、ついにその叫びを上げたのだ。

「俺のターン！」

そんな【決島】の一角。
島の中心に程近い、木々が生い茂る森の中のとある場所で、遊良のデュエルもまたここにスタートして。
…相手は、決闘学園デュエリア校３年のダニー・Ｋと言う男子生徒。
じめじめと纏わり付くように湿った声と、全身を嘗め回して来るようなその視線で…遊良の前に対峙して、今開戦の時を迎えたのだ。

―先攻は、遊良。

「魔法カード、【成金ゴブリン】を発動！相手にＬＰを１０００与え、俺はデッキから１枚ドロー！続けて【闇の誘惑】を発動し、２枚ドローして闇属性の【クラッキング・ドラゴン】を除外！魔法発動、【テラ・フォーミング】！デッキから【チキンレース】を手札に加え、そのまま【チキンレース】を発動してその効果発動！ＬＰを１０００払い、更にデッキから１枚ドロー！…よし、【手札抹殺】を発動だ！４枚捨てて４枚ドロー！」

デュエルが始まって早々に、ドローの乱舞を弾けさせる遊良。
その勢いはまさに嵐。恐るべき勢いでデッキからカードを引き、目まぐるしく手札のカードが入れ替えられていく。
…そう、迷いが生じていようとも、やるべき事は変わらない。
明日の決勝へと進む為の上位４名に入るには、負けないように勝ち続けることが第一条件。
先の長い【決島】では、これから一体どれだけデュエルを繰り返すか分からないとは言え…
そのどれにも勝つつもりでいなければならない事には変わりは無くのだから、まずはこの相手に勝たなければならないのだ。
だからこそ、遊良は最初から全力でデッキを回転させ…

「ヌフッ…そんなに気負ってて大丈夫？これから先長いんだよ？僕は５枚捨てて５枚ドロー。」

そんな遊良の気負いを、湿った笑いで返してくるダニー・Ｋの視線は遊良からすればどこまでも煩わしく。
…デュエルが始まる前から、どこか遊良の事を舐めているかのような節のあるこのダニー・Ｋ。
いくら遊良が『Ｅｘ適正』を持たないとは言え、【決闘祭】の優勝者という前情報はデュエリア校にだって伝わっているはず。
そうだと言うのに、これ程までに余裕を見せている相手の立ち振る舞いは、あまりにも不自然なモノであると言うのに。

「…【トレード・イン】発動！レベル８の【闇の侯爵ベリアル】を捨てて２枚ドロー！…俺はカードを２枚伏せて、ターンエンドだ！」

だからこそ、煩わしさすら感じるダニー・Ｋの物言いと、不快感を覚えそうな湿った笑いを耳に入れても、遊良には苛立ちよりも先に警戒心が浮かび上がってきていて。

…この戦いには自分だけではなく、決闘市の理事長たち３人の進退が自分の背にかかっているからこそ。
いくら開戦の前に『色々』な感情が圧し掛かってきたとは言え、初戦からつまずくわけにはいかないのだと言わんばかりに。
これまで培ってきたモノを頼りに、遊良は次のターンに繋げる準備を終え…今、身構えるかのようにしてそのターンを終えた。

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：５→２枚
場：無し
伏せ：２枚
フィールド魔法：【チキンレース】

「僕のターン、ドロー。ヌフッ、あれれー？そういえば【決闘祭】の時とはデッキが違うみたいだけどー？」
「…」
「しまったなぁー、てっきり【堕天使】が出てくると思って対策してたから、目論見が外れちゃったなぁー。」

しかし…遊良のあからさまな警戒心を、察知しているのかしていないのか。
挑発的な視線で遊良を見つめるダニー・Ｋの言葉からは、相も変わらず湿った笑いと、神経を逆撫でするようなその声でどこまでも遊良を煽るように…

「まぁいいけどね！僕は【魔導戦士　ブレイカー】を召喚！召喚成功時、ブレイカーに魔力カウンターを一つ置くよ！」

―！

【魔導戦士　ブレイカー】レベル４

ＡＴＫ／１６００→１９００　ＤＥＦ／１０００

「さて、このままじゃダメージを与えられないからぁ…僕は【チキンレース】の効果を使うよ！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！そしてブレイカーのモンスター効果！自身に乗っている魔力カウンターを一つ使って、【チキンレース】を破壊する！」

―！

遊良のフィールド魔法の効果を抜け目無く利用した後、召喚した深紅の鎧に身を包んだ魔法騎士の効果で、いとも簡単にソレを葬り去ったダニー・Ｋ。

如何なる戦場でもその真価を発揮できるその力を持って…更に増えたその手札から、更に動き始めようとしているのか。

ダニー・Ｋ　ＬＰ：５０００→４０００

「ヌフフッ、いいカード引かせて貰っちゃった！魔法カード、【死者蘇生】発動！さっき【手札抹殺】で墓地に捨てた、【怪鳥グライフ】を特殊召喚！」

【怪鳥グライフ】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１５００

そうして…

続けて彼が召喚したのは、深紅の羽毛を持った巨大なる怪鳥。

怪しげな鳴き声を掻き鳴らしながら、場にモンスターが居ない遊良を嘲笑うかのように低く羽ばたく。

「【怪鳥グライフ】…」

「効果くらい知ってるよねぇ！特殊召喚成功時にグライフの効果発動

！…そうだなぁ、右側の伏せカードを破壊しようかな！」
「だったら破壊される前に罠カード、【戦線復帰】を発動！墓地から【闇の侯爵ベリアル】を、守備表示で特殊召喚する！」

―！

【闇の侯爵ベリアル】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

しかし…相手に馬鹿にされたような立ち振る舞いをされてはいても、遊良の一手は淀まない。
怪鳥の起こした竜巻よりも早く、遊良は伏せてあった罠を発動して悪魔の侯爵を呼び戻し…
深紅の魔法騎士と、深紅の怪鳥の怪しげな雰囲気を前にしても、悪魔の侯爵は少しも気圧される事もなく、その大剣で主を守護する。
「おっとっと、てっきり【闇次元の解放】なんかで【クラッキング・ドラゴン】でも出してくると思ったのになぁ…残念残念。まっ、あのまま２体のダイレクトアタックを受けてくれるわけもないよね。…じゃあ僕は、レベル４のモンスター２体で…オーバーレイ！」

それでも、悪魔の侯爵に少しも臆さず。
遊良の場に現れたモンスターを見て、即座にダニー・Ｋは次の手を打ちにかからんと高らかに宣言を行うのみ。
それは、この序盤から遊良を仕留めにかかる為に、切り札を出そうとしているのだろう。また遊良も、その次なる一手を繰り出さんとしてくるダニー・Ｋに対し身構え…

…

しかし、ダニー・Ｋの宣言に反し…

彼の場には、何も起こらず。

「…え？」

そう、エクシーズ召喚のエフェクトである、足元に広がる銀河も。
そしてそこに吸い込まれるはずの、レベルの揃った2体のモンスター達も。
その姿を保ったままで、彼の場には何も起こる気配が生じないのだ。

「…ヌフッ、『エクシーズ召喚！』って言いたいところだけど、残念ながら僕の『Ｅｘ適正』はエクシーズじゃなくてシンクロなんだよねー。あ、シンクロ召喚ってわかる？チューナーって言う…」
「…馬鹿にしてるのか？」
「いやいやー、『Ｅｘ適正』が無いっていうからさぁ、もしかしたらシンクロ召喚って知らないかなーって思っただけだよ？悪気は無いよ？ホントだよ？ヌフフッ。」
「…」

先程までの笑いよりも、さらにその声の質を挑発的なモノへと変え…その言葉の節々から、明らかに遊良の事を馬鹿にしているであろうモノを放ち続けるダニー・Ｋ。
この世界に生きるデュエリストとして、そして【決島】の出場選手に選ばれた者として、遊良が『シンクロ召喚』を知らないなんて事は『ありえない』事だと言うのに…
…そして、そんな事はダニー・Ｋだって承知している以前の問題であるにも関わらず。
わざとこうした物言いをぶつけてくるという、どこまでもふざけたその言動。それは間違いなく、遊良を小馬鹿にしていると言う事であって。

「さっきから一々何なんだよ。挑発するにしたってもう少し…」
「人聞きが悪いなぁ、挑発なんかしてないって。【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側で除外して２枚ドロー！…とりあえず手札にチューナーもいないし、僕はカードを３枚伏せてターンエンドかな。」

ダニー・Ｋ　ＬＰ：５０００→４０００
手札：６→３枚
場：【魔導戦士　ブレイカー】、【怪鳥グライフ】
伏せ：３枚

「俺のターン、ドロー！」

攻め気があるのか全く無いのか、どうにもはっきりしないままそのターンを終えたダニー・Ｋの宣言により、再びターンは遊良へと移る。
しかし、いつもならばこのまま、更なるドローへと手を伸ばす遊良だと言うのにも関わらず…
一枚増えた手札を見て、そして何かを考えるかのようにして、一旦その手を止めた遊良。

（ブレイカーに、グライフ…）

思考を巡らせ、記憶を手繰り…それは、あからさまに舐めてかかって来ている相手のペースに、乗せられぬようにするための呼吸の入れ替え。
そう、【怪鳥グライフ】と言うカードは、ある特殊なデッキでその真価を発揮できるカードではあるのだが…
それよりも遊良には、ダニー・Ｋが最初に召喚した【魔導戦士　ブレイカー】とグライフが並んだ姿を見て、ある意味で『特徴的』な相手のデッキのスタイルがある程度その頭の内に浮かんできているのか。

（多分、アイツのデッキは決まったテーマのデッキじゃない…あの2体のモンスターは…じゃあ、伏せカードは…）

…それは相手のデッキが、いわゆる【スタンダード】と呼ばれるデッキに近いモノだということ。

―良く言えば『究極のバランス』を持ったデッキ、悪く言えば『速攻性に欠けた』デッキ。

決まったスタイルを持たず、決まったカテゴリに属さず…『寄せ集め』とも違う、ドローしたカードの一つ一つがそれぞれの役割を持ち、確実で堅実な動きで相手との差をゆっくりと広げる戦法を取る、一つの戦いのデッキの形。

過去、遊良は何度かこのタイプのデッキを相手にしたことがあり…引くカード全てがその場に応じた働きを見せるこのタイプのデッキは、デュエルが長引けば長引くほどジリ貧にさせられる事を知っていて。

そう、ダニー・Kのようなアドバンテージを重ねて徐々に差を広げてくるようなデッキは、引くカードの一枚一枚がそれぞれ単体で役割を持っている、持久戦に長けた手強いデッキなのだ。

「…よし、2枚目の【闇の誘惑】を発動！2枚ドローし、闇属性の【イービル・ソーン】を除外する！更に魔法カード、【アドバンスドロー】発動！【闇の侯爵ベリアル】をリリースして2枚ドロー！」

だからこそ、これまでの経験からこうしたデッキが相手の時に、己が取るべき行動が何なのかを遊良もすぐに思い至ったのか。

相手のデッキのスタイルから、伏せられているであろうカードを予測し…

遊良のデッキのような、一瞬の爆発力で攻めるピーキーなデッキだ

と、このままデュエルが長引けば長引くほど勝ち目がどんどんと薄くなってしまうからこそ。
　ドローを加速し、勢いを増し。再び、恐るべき速度でデッキを回転させにかかって。

「魔法発動、【トレード・イン】！レベル８の【モザイク・マンティコア】を捨てて２枚ドロー！そして永続罠、【リビングデッドの呼び声】を発動だ！墓地から【サイコ・エース】を…」
「おっと、それにチェーンして速攻魔法、【墓穴の指名者】を発動！【サイコ・エース】を除外しちゃうよ！」
「ッ！まだだ！永続魔法、【冥界の宝札】発動！」
「それを待ってたんだよね！リバースカードオープン、速攻魔法【コズミック・サイクロン】！ＬＰを１０００払って、【冥界の宝札】を除外する！」
「これも除外!?だ、だったら！魔法カード、【死者蘇生】発ど…」
「手札の【増殖するＧ】のモンスター効果！このカードを捨て、相手の特殊召喚に応じて１枚ドローするからね！」
「くっ…でも、ここで止まるわけには行かないんだ！【死者蘇生】の効果で、墓地から【サクリボー】を特殊召喚！そしてその特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！」

　止められても、防がれても、更にその上を超えるように。
　どこまでも行く手を阻もうとする、その包囲網を掻い潜り…
　攻める遊良の気概はどこまでもその回転を落とす事無くデッキを回転させ続ける。
　そう、持久戦になれば、相手が優位に立ってしまうことを察知しているからこそ。
　速攻性に欠けた相手のデッキを、自らのデッキの爆発力で一気に葬り去ってやろうという気概とも言え…
　諦める事無く展開を続ける遊良の勢いは、まさに何度阻まれてもソレを超える攻撃で無理矢理に押し通ればいいという、ある意味無理矢

理な攻め気の爆発。
それは、自分の事を完全に舐めきっているであろう輩に、力ずくでも思い知らせてやるために。
「俺はデッキから、更に2体の【サクリボー】を特殊召喚する！来い、サクリボー達！」
―!!!
【サクリボー】レベル1
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル1
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル1
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
小さき毛玉の悪魔を従え、更にその勢いを増していく遊良。
その昂ぶりは、まるでこんな初戦から躓いているわけにはいかないのだと言う、一種の焦りにも似たモノであったとは言え…
―あれだけ妨害されたにも関わらず、遊良の場には『3体』のモンスター。
…これで、準備は整った。
舐めてかかっているのなら、その油断を抱えさせたまま降してやる。後はいくら【地獄の暴走召喚】の効果で相手が壁モンスターを並べてこようとも、いくら伏せているであろう攻撃反応系の罠で備えていようとも。
―油断しきっている相手の全てを、完膚なきまでに粉砕してやるだ

けなのだと、そう言わんばかりに…

「最初の【死者蘇生】での特殊召喚成時に1枚ドロー、そして【地獄の暴走召喚】の効果で、僕は【怪鳥グライフ】2体をデッキから守備表示で特殊召喚！同時召喚の為、更に1枚ドロー！…勿体無いし、グライフ1体の効果で【リビングデッドの呼び声】は破壊しておこ…」

「よし！俺は3体の【サクリボー】をリリース！」

そうして…

深紅の怪鳥の羽ばたきが、まだ遊良の場の残った永続罠に『到達していない』と言うのにも関わらず。

あまりに逸った遊良が、早々に次なる宣言を行おうとした…

―その時だった。

「おっとっと、まだダメだよ！僕はここでグライフの効果にチェーンし、手札を1枚除外して罠カード、【終焉の指名者】発動！」

―！

逸る遊良を止めるかの如く、遊良のリリースの前に一枚の罠を発動したダニー・K。

手札一枚を除外して発動されるソレは、【スタンダード】タイプのデッキで無くともあまり使用する者の居ない、ある意味珍しいカードの一枚ではあるのだが…

「【終焉の指名者】!?効果は確か…」

「ヌフッ、【終焉の指名者】のコストで除外したカードは、このデュエル中いかなる場合においても効果を発動することが許されなくなる。

僕がコストとして除外するカードは…【神獣王バルバロス】だ！」
「なっ!?」

そして…
まるで、遊良に見せ付けるように。
ダニー・Kが宙に放った手札の、そのある一枚が終末を思わせる黒天へと吸い込まれていく。

…それは紛れも無い、遊良も見慣れた『獣の王』のカードその物。

遊良のカードでは無い。何せ、遊良はたった今ソレを召喚しようとして、ソレを今もその手に握っているのだ。
故に、ダニー・Kが己の手札から除外したのは、正真正銘彼のデッキに入っていた【神獣王バルバロス】のカード。
あまりに見慣れたカードであるソレが、今確かに遊良の目の前で除外されていき…

「ヌフフフフッ！一時的な封印じゃないよ？このデュエル中、永遠にだよ！これで、もうお前はバルバロスの破壊効果を絶対に使えないんだよねぇ！」
「そんな…ど、どうしてお前がバルバロスを…」

驚きと共に滲み出る、遊良の悲痛かつ唖然の表情。

…別に、遊良が驚いたのは相手が【神獣王バルバロス】を『持っていた事』に関してなどではない。

そう、【神獣王バルバロス】と言うカード自体は、世界に多々あるカードの一枚。その為、遊良以外にもこの『獣の王』のカードを持っている者が居たとしても、それは何らおかしな話では無いのだ。
だからこそ、遊良が驚愕を隠せなかったのは相手がバルバロスを

『持っていた』事に関してではなく、相手がバルバロスを『デッキに入れていた』事に対してであり…
『Ｅｘデッキ至上主義』であるこの時代においては、アドバンス召喚でその真価を発揮する【神獣王バルバロス】と言ったカードを、扱おうとするデュエリストなど居ないも同然であるからこそ。
　この相手が『あえて』バルバロスをデッキに『入れていた事』と、そしてソレをあまりにピンポイントに『狙い打ちしてきた事』が、遊良の心にこれ以上無い程の衝撃を与えていて。

「あれれー？『何でアイツがわざわざバルバロスをデッキに入れてたんだ？』って顔してるねー？…ヌフッ、そんなの決まってるじゃないか！【神獣王バルバロス】…このカードが、お前の『唯一』の切り札だからだ！」
「…え？」
「いやぁ、こうも綺麗に罠に引っかかってくれると気持ちいいねぇ！手間隙かけて調べて準備した甲斐があったってモノだよ！バルバロスさえ封じれば、後の君のデッキにある他の上級モンスターは攻撃力が高いだけで、特に警戒する必要も無い奴らばかりだし。」
「…お前…俺を舐めてたんじゃないのか？何で俺のデッキがバルバロス主体だって事を…だって、デュエルが始まった時は【堕天使】じゃないのかって…」
「はぁ？……天城　遊良、まさかとは思うけど…『Ｅｘ適正』が無いからって、僕が本気でお前の事を舐めきってるって思ってたの？」
「それは…」
「いやいやいやいやいやいやいや！ちょっと考えればわかるでしょ？仮にも【決闘祭】の優勝者を、対策こそすれ舐めてかかるわけないじゃん！そんな馬鹿が【決島】に出てくるとでも!?」

　先程までの、遊良の事を完全に舐めきっていたあの態度から一転…
　遊良を研究し尽くしたかのような言葉と共に、その纏う雰囲気を、どこか浮ついたモノから一種の『怖さ』を持ったモノへと変え始めた

ダニー・K。
それは、先程の雰囲気とは全くの正反対の代物であり…
「で、でも、だったら何で俺のデッキが【堕天使】じゃないって事まで知って…」
「ヌフッ、そこは企業秘密かなー?でもまぁ、僕にかかれば、お前のデッキが【決闘祭】の時の【堕天使】じゃなくて、【神獣王バルバロス】のワンマンなデッキだって事も既に調査済みー!さーて、【闇の侯爵ベリアル】はさっき見たし、この後に君が出せる上級モンスターには何が残ってるのかな?【クラッキング・ドラゴン】?【モザイク・マンティコア】?…あ、通常モンスターの【鉄鋼装甲虫】なんてのも使ってたっけ。…それに最近のデュエルじゃ使ってないみたいだけど、去年は確か【ギルフォード・ザ・ライトニング】に、【銀河眼の光子竜】なんかも使ってたよねぇ…でも知ってるよ!ソレ、今は持って無いんでしょ?」
「昔のデッキの事まで…そ、そこまで調べて…」

遊良のデッキの状況を、全て見透かしているような言動で。矢継ぎ早に早口で、ダニー・Kは堂々とそう言い放つ。
…湿った笑いと共に繰り出される、怖さすら覚えるあまりに的を射た分析と解析。
それは、TVの前の世界中の観客達の全員が、遊良のデッキが【堕天使】では無い事に対して今もなお驚きを感じていると言うのに…

今さっき初めて顔を合わせたはずのこの男から、寸分の狂いも無い的確な分析が放たれてきているのだ。
…それが、遊良には到底信じられない。
遊良のデッキが【堕天使】では無いと言うことを知っているのは、決闘市でも限られた人物だけ。
それは、遊良が【堕天使】を無くした原因が決闘市で多発していた、今では何故か鳴りを潜めている『失踪事件』に何か関係がある可能性

があったからこその情報の秘匿であり…
日常を生きる者達からすれば、カードが突然消えたという事象など経験したことも無いはず。
そんな、【決闘祭】の優勝に大きく貢献した、天城　遊良の代名詞とも言える【堕天使】のデッキ…
その輝かしい功績を持つデッキを、まさか【決闘祭】の優勝者がこの【決島】で使ってこないだなんて、どうしてこの男が予想出来たと言うのだろうか。
しかし、あっけにとられている遊良へと向かって…
ダニー・Kは、まるで『してやったり』と言わんばかりに。湿った笑いを零しながら、更に続けて言葉を発した。

「ヌフフフッ、知ってるよ？もう他に使えそうな大型モンスターなんて持ってないんだよねぇ？思い通りにデュエルを進めてたのはどっちだろうねぇ！」
「でも、だったら何でお前は俺の対策『だけ』をしてきてるんだよ！【決島】でデュエルするのは俺だけじゃないってのに！」

また、相手がここまで自分のことを警戒してきていることにも驚きの事実ではあるのだが…
それ以上に、ダニー・Kの突然の雰囲気の変貌とその言葉に、どこか引っかかりを覚えてしまっている様子を見せる遊良。

…それは、遊良が今放った言葉の通り。

参加者が『２００人』も居る、このあまりに大規模で行われている【決島】においては、相手は遊良だけではなく他に１９８人も居ると言うのにも関わらず…
これから先のデュエルにも支障が生じるであろう、まるで遊良一人にだけ照準を合わせてきているかのような彼のデッキ構築が、遊良からすればあまりに不自然であり非効率ではないかと感じたのだ。

しかし、あまりに『過剰』とも思える『遊良一人』への対策を見せたダニー・Kは、その頭に疑問符を浮かべ続けている遊良へと向かって…

「不思議かい？僕がお前だけに照準を合わせていることが…けど一つ違うね！僕が照準を合わせているのは、お前だけじゃなくて【決島】の参加者全員だ！」

「ッ!?全員!?」

「そう、僕の天才的な頭の中には、他の参加者１９９人全員の顔と戦術、スタイルや切り札、それに普段から使っているカードの情報が全て詰まっている！…見ろ！」

そんな遊良へと、まるで見せ付けるように。

ダニー・Kが勢い良く広げたその制服の、内側に備え付けられたホルスターには…

『調整用』と言うにはあまりに膨大なカードの束が、まるで銃を収めるように幾つも揃えられているではないか。

「それは…デッキ調整用のカード…なのか？」

「そう、これが僕の武器だ！僕が調べ上げた相手の情報と、準備していた『このカード達』があれば！【決島】に参加している誰が相手だろうと、瞬時にデッキを調整をして優位に立てるデッキに仕上げる事が出来るのさ！」

「…そ、そんな事、出来るはずが…」

「いいや、僕になら出来る！相手を見た瞬間に、どのカードを抜いてどのカードを入れればいいのかを完璧に準備できている僕なら…デッキを最低限の形に保ったまま、瞬時にデッキを調整する事なんて、朝ごはんを食べるより簡単な事だからねぇ！」

…別に、ルール違反ではない。

ルール上、デュエルとデュエルの合間にデッキの調整を行う事は認められているし、なんならデッキを丸ごとチェンジする事だってルール上は認められてはいる。
しかし、こんな大規模で行われる戦いにおいては、使い慣れていないデッキを使用すること程危ない事はなく…
また、さも簡単そうにそう言うダニー・Kの言葉とは裏腹に、誰と戦うのかが直前までわからないこの【決島】においては、相手を見た瞬間にデッキを『調整』すると一口に言っても、それは限りなく不可能に近い事だろう。
何せ、相手を見た瞬間と言っても、その相手はいつまでも待ってはくれず…相手に合わせたデッキなど、ゆっくりと仕上げる暇など存在しないはずなのだ。
いくらダニー・Kのデッキが決まったカテゴリに属さない、幅広い構築が可能な【スタンダード】タイプのデッキであったとしても。
相手を対策したデッキと言うのは、長い時間と実戦を経て、そうしてようやく戦えるレベルのバランスとして完成するモノなのだから…
即座に組み立てたようなデッキでは相手のデッキへの『対策』と自分のデッキの『中核』がバランスを崩してしまい、まともに回す事すら出来なくなってしまうはずだと言うのに。

「だからデュエルが始まる前に、対お前用にデッキを調整しただけの話さ！…まっ、けど安心していいよ。こんな芸当が出来るのも、デュエリアじゃ僕だけだからねぇ！」

にわかには信じられないようなソレを、自信満々に出来ると言い放った彼の言葉はまさしく本物。
２００名もの学生が参加している【決島】の、その全ての相手に対応できる『調整』が『瞬時』に出来ると…彼は今、はっきりとそう言い張っている。

…そう、猛者がひしめくデュエリア校で、上位に立つという事は生易しい道ではない。

―１００／２０００００…２０００００００を超える生徒の中の、選ばれた上位『１００』人。

そんな戦乱と蹴落とし合いが日常のデュエリア校で、『上』へと昇りつめる為には他の生徒達に負けない、『自分だけの武器』を手に入れることが必須条件であり最低条件。

一芸に秀で、個性を突き詰め…他者には到底真似できない、自分だけにしか出来ないデュエルを磨き上げた者達だけしか、デュエリア校では『上』へと昇っては行けず。

―そう、２０万人超の中から、【決島】に出場できるたった『１００人』に選ばれるという事は『そういう事』なのだ。

そして、それはプロの世界においても同じ事。決闘学園デュエリア校が、プロの環境に最も近いと言われているその由縁…猛者達が互いに喰らい合う、プロの世界にも似た競い合いを学生の頃から行っているからこそ。

デュエリア校の上位者達は、その『デュエルランキング』に応じてそれぞれ学生の頃からその『異名』と共に称えられ…学生の頃に培った力を持って、プロの道へと身を投じているのだ。

―故に…

今遊良と対戦しているこのダニー・Ｋも、デュエリア校においてはこう呼ばれている。

「僕は僕だけの武器を磨いた！情報網を広げ、相手を徹底的に調べ上げ、分析し、そして誰が相手でも瞬時にデッキを調整出来る力を手に

入れて！ソレがこの僕、決闘学園デュエリア校、デュエルランキング４３位！『アナライザー』のダニー・Ｋだ！」
「ア、『アナライザー』…」
「ヌフッ、『Ｅｘ適正』が無いお前を、小馬鹿にしているだけの雑魚だと思った？残念だったねぇ！デュエリアの『アナライザー』と呼ばれるこの僕にかかれば、お前のデュエルがバルバロスに頼り切っていたってことも既に見切っている！バルバロスの効果を完全に封じられ、後は馬鹿みたいに殴る事しか出来ない今！もうお前に勝ち目はないよ！」
「くっ…」
「まっ、僕の知らない『Ｅｘデッキ』のモンスターでも使えばまだ分からないけど…あ！でも無理か！だって『Ｅｘ適正』無いんだもんねぇヌフフフフッ！」

…舐められていると思っていた。油断されていると思っていた。
挑発的に、簡単そうにそう言ってくるダニー・Ｋではあるものの…彼がここまで到達するまでには相当のモノを費やしてきたに違いない。
…何せ、相手を徹底的に調べ上げ、それに見合った対策とそれを実行できる実力を手に入れるというのは生半可な覚悟では出来るはずがないのだ。
彼の纏う雰囲気から発せられる、『本物』の猛者のオーラがその証拠。それこそ２０万人を超えるデュエリアの学生の中でも、ここまで上位に上り詰めるために彼も血反吐を吐く思いもしてきたのだろう。
―ここまで遊良のデッキを解析でき、最低限でも最大限の対策を講じる事の出来る彼の実力はまさに本物。
…見誤っていたのは、遊良自身。
煽っているかのような挑発的な言葉も、小馬鹿にしているかのようなこの態度も…全ては、仕掛けた罠を遊良に悟らせないようにするた

めの虚言と虚構。
戦いは、デュエルの外でも起こっていたのだ。巧妙に隠された相手の雰囲気に惑わされ、相手の張った罠への『嗅覚』を遊良が鈍らせていたのがその証拠。
まさか舐められていると思い込んでいたが故に、【決島】に出場している猛者の実力を、遊良自身が見誤っていただなんて。

「…スタンダードじゃなくて、ロックデッキ…ってことか…」
「んんん？いやいや、僕のはロックデッキじゃない。単なるロックデッキじゃ、僕のしたいデュエルじゃないからねぇ…僕がしたいのは、相手の『最高』の動きを『最低限』の罠で封じて、悪あがきを一つ一つ潰して仕留めていくデュエルだからね。」
「…アンタ、性格悪いな…」
「ヌフッ、僕には最高の褒め言葉だよ！ほらほら、どうするの？ターンエンドしちゃうの？」
「くそっ…俺はサクリボー3体をリリースし、【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル8
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

効果の発動を禁じられ、大気を奮わせる事も出来ずに呼び出された獣の王。
一応、召喚の為の3体のリリースは出来る為に…毛玉の悪魔3体を生贄に、どうにか場に現れる事は出来るものの、その咆哮に力は無く。
「…バルバロスの効果は発動出来ないけど、リリースされた【サクリボー】3体の効果で3枚ドロー！」

「いいねいいねぇ…ヌフフッ、その元気はどこまで続くかなぁ？」
「…破壊効果が使えなくても、伏せカードが無い今ならダメージは通る！バトルだ！【神獣王バルバロス】で、【怪鳥グライフ】に攻撃！」

それでも…どこか失態を取り返すかのように、遊良はその叫びと共に獣の王に攻撃を命じて。
バルバロスの全体破壊が封じられ、これから先ジリジリと追い詰められていく事を危うんだのか。
それは、どこか焦りにも似た叫びで…

しかし…

「無駄だよ！攻撃宣言時に手札から、【工作列車シグナル・レッド】の効果発動！シグナル・レッドを守備表示で特殊召喚し、攻撃対象をこのカードに移し変える！」

―！

【工作列車シグナル・レッド】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１３００

遊良の攻撃を阻むが如く。
ダニー・Ｋの場に、突如出現した朱色の列車によって…獣の王の槍が止められ、少しのダメージすら生じさせる事も出来ずにその攻撃が弾かれてしまって。
そのまま、遊良の場へと弾かれたバルバロスが悔しげに唸りを零すものの…

それ以上に今の遊良の表情は、相手の術中にまんまと嵌ってしまっていた事と、『本物』の力を持っていたこの相手の事を見誤っていた自分を恥じている様。

「ほらほら、だから言ったでしょ？馬鹿みたいに殴る事しか出来ないお前に、もう勝ち目は無いって。」

「くそっ、…魔法カード、【アドバンスドロー】を発動。バルバロスをリリースして２枚ドロー…カードを２枚伏せて、ターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：３０００
手札：３→２枚
場：無し
伏せ：２枚

「僕のターン、ドロー！このメインフェイズ１の開始時に、僕は魔法カード、【強欲で金満な壷】を発動！Ｅｘデッキから６枚をランダムに裏側除外して、２枚ドローしちゃうよ！」

しかし、そんな遊良を意に介さず。

術中に嵌った遊良を、あとは嬲り殺しにするだけだと言わんばかりに連続してカードを引くダニー・Ｋ。

Ｅｘデッキのシンクロモンスターが、コンボ用や展開用やキーカードではなく、どれを出しても一定の働きを持つモンスターで固められているからこそ、ランダムに除外されるこのカードを使うことにも、何も恐れることもなく。

「ヌフフフフッ、その伏せカードは何かなぁ？【量子猫】？【鏡像のスワンプマン】？流石に【デモンズ・チェーン】だけじゃあ僕のモンスターの連続攻撃は防げない事なんて分かってるだろうからー…蘇生系のカードを使って、【サクリボー】で耐え切ろうって考えなのかなぁ？」

「…」
「でもまぁ、【サクリボー】で延命なんてさせないんだけどね！魔法カード、【魂の解放】発動！お前の墓地から、【サクリボー】３体、【神獣王バルバロス】、【闇の侯爵　ベリアル】を除外する！」
「【魂の解放】!?」
「まだだよ！装備魔法、【月鏡の盾】を【魔導戦士　ブレイカー】に装備！更に２体の【怪鳥グライフ】を攻撃表示に変更！」

遊良のデッキを、完璧に解析しきっている自信から。この状況から導き出される、遊良の守りの手を全て見通しているような言動を放ちつつ…
３体の深紅の怪鳥と、月鏡の盾を構えた深紅の魔法騎士の、遊良の３０００のＬＰを削りきるには充分過ぎるソレらを構え、一部の隙も無く遊良にトドメを刺しにかかる算段なのか。

「さぁて、これで例え【メタル・リフレクト・スライム】を出してもブレイカーは止められない…じゃあ行くよ！バトル、僕は【魔導戦士ブレイカー】で…」
「ま、まだだ！墓地から永続罠、【光の護封霊剣】を除外して効果発動！このターンの相手の直接攻撃を封じる！」

―！

しかし…今まさに、ダニー・Ｋが深紅の魔法騎士に直接攻撃を命じかけたその寸前。
バトルフェイズのその前に、最後の守りの一手をギリギリで発動した遊良が、どうにかその身を守ることに成功して。
「…あぁそっか、最初の【手札抹殺】か。流石にしぶといねぇ。…まぁいいや、僕はカードを２枚伏せてターンエンド。」

ダニー・K　LP…3000
手札…3→0枚
場：【怪鳥グライフ】
【怪鳥グライフ】
【怪鳥グライフ】
【魔導戦士　ブレイカー】
【工作列車シグナル・レッド】
魔法・罠：伏せ2枚、【月鏡の盾】（魔導戦士　ブレイカー装備中）

その、遊良の悪あがきにも似たソレを見て、溜息を吐きながらもダニー・Kはそのターンを終える。
そんな決着のチャンスを止められたのにも関わらず、少しも焦った様子を見せない彼の胸の内には…一体何が思い浮かんでいるのだろうか。

（…ヌフッ、後は攻撃力が高いだけの大型で殴ってくる事しか出来ないんでしょ？【サイコ・エース】だって【墓穴の指名者】がある…後は悪あがきで攻撃してきたら、このミラーフォースで終わりさ。）

それは、持久戦に長けている己への自負と…
遊良のデッキを完全に、かつ想定どおりに麻痺させる事が出来た事で、にやけたい気持ちを必死に抑えているようにも見え…

「…俺のターン、ドロー。」

そんな中、少しずつ失っていく守りの手段に、心臓の鼓動が更に逸り続けているのだろうか…自分のターンを向かえ、ゆっくりとカードを引いた遊良の手には力が無い。

…相手が取ってきた行動は、バルバロスを『一時的』に封じるのではなく、このデュエルにおいて『永遠』にその効果の発動を封じてし

まうというモノ。
―バルバロスの効果を何度止められても、何度だってソレを乗り越えて全てを粉砕できる自信があった。
―例えバルバロスを除外されたとしても、例えデッキに戻されたとしても、例え破壊されたとしても、何度だってソレを乗り越えて全てを粉砕できる自信があった。
そうだと言うのに、【堕天使】を失ってからあれだけ悩み苦しみ、そしてやっとの思いで組み上げたこの新たなデッキが…
まさかバルバロスの効果の発動を永遠に封じられた位で、ここまで麻痺させられるだなんて、遊良とて思ってもみなかった事なのだ。

「どうするのかなー？バルバロス以外に、この状況を打破出来るような上級モンスター持ってるのかなー？ヌフッ、持ってないよねぇ、持ってたら色んなデュエルでもっと使ってるはずだもんねぇ！」
「くっ…」

昔のデッキも、今のデッキも、そして遊良に【堕天使】が無い事も、この男には見破られている。
これまで自分のデュエルを見下される事はあっても、ここまで研究されて対策を講じられた経験など無い為か…
どこか言葉にしがたい『やりにくさ』を感じている様子もありつつ、それ以上に遊良には自分のデッキにここまで『脆い』弱点があった事に、今まで気付く事も出来ていなかった自分自身への怒りすら感じているかのようでもあり…

（どうする…バルバロスの全体破壊が使えないこの状況で、あいつの5体のモンスターと伏せカードを切り抜けて攻撃するには…【サイコ・エース】…ダメだ、絶対に読まれている…何か、打つ手は…）

迷いが渦巻き、混乱が生じて。
この男に勝つためには、この男が知らないモノを使うしかない。

【決島】以前の遊良のデュエルを、全て調べ上げたというこのデュエリアの『アナライザー』に勝つためには。

…デッキの中を逆算し、何か打つ手が残っていないかを考える遊良。

こんな時、【堕天使】を得た時に同時に消えてしまった、『以前のデッキ』に入っていた厳選に厳選を重ねた最上級モンスターが残っていれば…少なくとも、バルバロスを止められても打つ手はまだ確かに残っていたというのに。

…しかし、今更になって無いモノには頼れない。

【堕天使】を得る前まで使っていた『以前のデッキ』の、バルバロスを除く切り札級の最上級モンスター達が消えたからこそ。遊良の『今のデッキ』は、バルバロスに最大限特化した代物へと昇華させられたのだから。

だからこそ、今この時に、遊良は必死に考える。

ここまで完璧に遊良のデッキを読んできている相手の、その逐一の行動は遊良の行動を先読みした厄介なモノであり…

バルバロス以外に、この状況を打破できるようなモンスターを、遊良が持っていない事を調べ上げてきているからこそ。

そんな奴を相手に、裏を取る事など出来るはずが…

（いや…あるにはあるけど…）

しかし、そんな状況下においても。何か、ある考えが浮かび上がった様子の遊良。

…それは、一応遊良のデッキの中には、『アナライザー』でも絶対に知らないであろうカードが、『2枚』だけ存在していると言う事を思い出したが故なのか。

…そう、これまでのデュエルで、一度も使っていない『2枚』のカード。

―昨年度の【決闘祭】の後に、釈迦堂　ランから預っていて欲しいと言われ渡された『あるカード』と…

―開戦直前に砺波から渡された、『その時』が来るまで預っておけと言われた、『とあるカード』が。

この状況を打破するには、『アナライザー』すら知りえぬそのカードを使うしかない。

また、ソレらが今は手札には無いため、ソレらを手札に加えるには再びドローを加速するしか方法が無いと言うことだって遊良は分かってはいる。

…そうだと言うのに、ソレをわかっていてもなお遊良は未だ『迷い』を生じているかのような雰囲気のまま、ドローを加速せずにただ立ち尽くしているだけで…

(俺に…引けるのか?だってランさんから預ったあのカードは、今までどうやっても引けた事が無い…それに、砺波先生から渡されたアレも、きっと今の俺じゃ…)

今ここで、ソレが自分に引けるだろうか。

ランから預ったカードは、修業の時にどれだけドローしても全く引く事が出来なかった。それはまるで、カード自体が今の遊良の実力では引かせる事を拒んでいるかのようでもあり…

…いや、実際にそうなのだろう。

今の自分の力では扱わせるに値しないと、カード自身がそう言っているのだ。そしてそれは、砺波から預ったカードの方もそう。

この世界において『特別な意味』を持つそのカードも、果たして今の自分に従ってくれるかどうか…

「ちょっとー、何時まで待たせる気？戦意喪失したんなら早くターンエンドしてよ。」

頭の中でグルグル回る、悲観的な思考と無謀な賭け。

そんなイメージが渦巻いては消えている遊良の心には、多くの戦いを強いられる【決島】の、こんな初戦からこんな無茶なデュエルをしていてはこの先の戦いに身が持たないのではないかとさえ思ってしまっている。

更には、張り詰めが足りず、僅かな緩みのあるこんな状況で、もし初戦から手も足も出せずに負けてしまったら、きっと負の連鎖が濁流のように襲いかかって、そのまま普段の実力の半分も出せずに惨めな成績に終わってしまう可能性だってあるのだ。

…これは、『祭典』。

世界中から見られている祭典。

それに、自分の結果は自分だけのモノではなく。もしもここで初戦を落とし、そのまま不甲斐ない結果に終わってしまえば…

砺波を始め、散々世話になった決闘市側の理事長達から受けた恩を仇で返すだけでは収まらず。

…彼らの顔に泥を塗り、コレまで築き上げてきた彼らの経歴その物を潰してしまうことになる。

（どうすればいい…まだ先は長いし、このデュエルは落として気持ちを一旦入れ替え…）

そして…

そんな弱気な考えが、遊良の脳裏に走り始めた…

―その時だった。

―『遊良よ…お前ももっと俺に張り合え。でなければつまらん。』

（…ッ!?）

こんな状況下で突然に、フラッシュバックしてきた鷹矢の言葉。
それは開戦の前に鷹矢に言われた、不遜かつ呆れを含ませた片割れからの期待の言葉。
思い出そうとして思い出したのでは無い。別の感情が募ってきていた所に、無意識が突然ソレを見せたのだ。
そんな絶望を感じているこの場面で、不意に思い出すのがあの馬鹿の不遜な言葉であるコトに対し、遊良も少々自分の『無意識』へと驚きを感じつつ…
その時の光景が今まさに頭の中に蘇り、あまりに鮮明に思い出せるその光景は、鷹矢があの言葉に含ませた『感情』を、今更になって遊良へとひしひしと伝えているようではないか。

（そうか…だから鷹矢の奴は…）

「…」

―!

突然、突飛、突如、突発。あまりに不意に、周囲に響いた渇いた音。

それは、思い切り自分の頬を叩いた遊良から発せられた、あまりに力強い自分への一喝。
よほど力強く頬を叩いたのだろう。叩かれた遊良の頬は、遠目からでも分かるほどの赤みを帯びていて…
何を考えているのだろうか、突然自分の頬を思い切り叩いた遊良の行動は、目の前に対峙しているダニー・Kにも驚きを感じさせた様子。

「ちょっ、え、何してるの？気でも狂った？」
「…いや、ちょっとイライラしただけだ。馬鹿な事ばっかり考えている自分に…」

しかし、突然の遊良の行動に面を喰らったダニー・Kを他所に…
遊良は、今一度考える。
先程までの、ぐらぐらと揺れていた弱気の思考は、針を刺しているかのような頬のヒリヒリする痛みによって、一時的にどこかへと無理矢理に消し去った。
…だからこそ、この隙に遊良は今一度、己にとって最も優先すべき事は何なのかを、頭の中で再度思い浮かべ始めるのか。

デュエリアの学生達は皆、このダニー・Kのような『本物』の実力を持った猛者達ばかり。そして決闘市側の参加選手達も皆、本気で勝ちを狙いに来ている実力者達ばかり。
そんな強者ばかりの環境で、今自分がやるべき事とは何なのか。
『Ｅｘ適正』の無い自分の保身か、理事長達の進退の確保か…自らに課せられた、その重圧を思い出しつつ。それ以上に、『覚悟』が足りない今の自分にとって、その『覚悟』を持つ為には果たして一体何をすればいいのかを。

そうして…

「…よし。」

一つ息を吐きつつ、何やら自分の中での結論を出せた様子の遊良。
頬の痛みと鷹矢の言葉のおかげか、その吐かれた一つの息からは、先程までの弱々しさに塗れた重々しいモノではなく…
確かにこの初戦を皮切りに、これから数え切れない程のデュエルを重ねることを考えると、初戦を落としてもまだまだ取り返せるチャンスはあるだろう。
…しかし、そんな程度のコトを思っているようでは、例え砺波たちのクビを繋げられたとしても、そこから『先』へは辿り着けないと言う結論に遊良は至ったのか。
守りに入り保身を考えているようでは絶対に辿り着けない、背負わされた重圧を乗り越えるだけではまだ足りない。
もっと『先』にある、最も大切なモノに辿り着くには…それを超える『覚悟』を、自分自身で見つけるのではなく、自分自身で『作り出す』しかないのだ。
そう、今の遊良にとって、一番大切な『覚悟』…
それは、『Ｅｘ適正』を持たない自分自身の存在を思い知らせる事でも、砺波たち決闘市側の理事長達の進退でもなく…

―『俺が優勝する。』

…張り合って欲しいなら、張り合ってやろうじゃないか。

「…速攻魔法、【大欲な壷】を発動！除外されている【神獣王バルバロス】と【サクリボー】2体をデッキに戻して1枚ドロー！そして永続罠、【メタル・リフレクト・スライム】発動！発動後モンスターとなり、守備表示で特殊召喚！更に【マジック・プランター】を発動し、【メタル・リフレクト・スライム】を墓地へ送って2枚ドロー！」
「んんん？今更何必死になってんだい？」

先程までとは全く違う、どこか決意を決めたかのようなドローの乱舞。

…ゴチャゴチャ考えるのはもう辞めた。駄目なら駄目でその時の事は、その時の自分に任せよう。

そんな悲嘆の未来に囚われていた自分と決別し、あくまでも『今』この時だけの事を考えているかのような遊良の表情は、どこか吹っ切れたような、それでいてヤケになっているかのような複雑な代物。

しかし、それでも…

「魔法カード、【闇の誘惑】発動！2枚ドローし、闇属性の【イービル・ソーン】を除外！」

少しも緩まぬ遊良の手には、迷いも淀みも既に無く。

そう、遊良にとって、何よりもまず『優先』すべきモノ…それは自分自身の風評でも、理事長達の進退でもなかったのだ。

遊良にとって、何よりも優先するべき事。それは、他の何と比べても釣り合いはしない、幼少の頃に鷹矢と誓った、頂点で戦うという幼き日の『約束』ただ一つ。

…その鷹矢との『約束』と比べたら、どれも優先すべき事ではないのだと、遊良自身が区切りをつけたのか。

それはあの時の鷹矢が、自分との約束を更なる高みに昇華させんと

して、天宮寺家も【黒翼】の名も、そして自分自身の逃げ道も全て捨て去ったという意思を遊良も感じ取れたからこそ。
あの馬鹿ほど馬鹿になるつもりなど毛頭無いが、あれくらい馬鹿馬鹿しいことを豪語した鷹矢に張り合うには…自分は一体どうすればいいのかを、理解し直したかのような吹っ切れた表情。

―そう、お互いが、お互いには絶対に負けたくないからこそ。

物心ついた頃からずっと共に育ってきたあの馬鹿に、一人だけ先に行かれることは遊良にとっては何よりも癪な事。
片割れとも言える相棒に、心から負けたくないという意地を張り合い、常に隣に立っているのが遊良と鷹矢の『普通』であるからこそ、常に向かい合っていることこそが二人にとっての『当たり前』の事と言えるのであって。

「【トレード・イン】発動！レベル８の【鉄鋼装甲虫】を捨てて…」

だったら、自分の行動にかかる責任も、今この時は忘れよう。
今ここで、このデュエリアの『アナライザー』に勝つことが出来なければ全てが終わる。それはこの先のデュエルにおいても、そしてこの先の人生においても。
…鷹矢は、世界中に見られているというあの中で、あえて自らの退路を断った。
それは自分の覚悟を形にするため。そしてソレを体現出来ると本気で思っているからこその自負と、自分の目指す先に当然遊良も来ると信じているからこそ言えた言葉。
そんな一人だけ先に進もうとしているあの馬鹿に並び立つには、鷹矢のような馬鹿馬鹿しい豪語と、それに伴う『覚悟』が今の自分には必要なのだ。
遊良に必要なのは、今この時、この瞬間、何が何でも勝つのだという、後先を考えていては踏み込めない領域へと踏み込むための決意と

覚悟。
だからこそ…
その覚悟を決めた今の遊良にあるのは、鷹矢に並び立とうとする意思と、そこへと到達する為に強敵であるデュエリアの『アナライザー』を倒すと決めた戦意のみ。

―見せ付けてやろう。自分の事を、全て調べ上げたと豪語する『アナライザー』に…

―思い知らせてやろう。Ｅｘ適正の無い、天城　遊良のデュエルを。

「２枚…ドロー！……ッ！来た！」

そうして…
遊良が今一度、『覚悟』を決めたからなのか。
デッキの中から無理矢理に、ドローを重ねて引っ張り出してきた一枚のカード。それは遊良が覚悟を決めたからこそ、デッキがソレを引かせたようでもあり…
果たしてソレは、『２枚』の内のどちらなのだろう。

（こっちか…でも、確かに今の俺にはこっちのカードの方が…）

…覚悟は決めた。
世界中から見られているこんな場所で、『このカード』を使う事が、果たしてどれだけの『意味』を持つのかなど、遊良にだって分かってはいる。

しかし、そんな頭の中に浮かび上がる『常識』という名の抑制を捻じ伏せてでも、今の自分が『先』へと進む為には『このカード』が必要なのだと言う覚悟の元に…

きっと自分がこのカードを使う事で、コレまで以上に世間は大きく騒ぎ立てるだろう。

それは、『Ｅｘ適正を持たないデュエリスト』への騒ぎと同じくらいの…いや、一部にとってはソレ以上のことを、遊良は言わんとしている。

ソレを、遊良はわかっていてもなお…

「…よし！俺は【神獣王バルバロス】を妥協召喚！この時、攻撃力は１９００となる！」

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００→１９００　ＤＥＦ／１２００

「はぁ？今更バルバロスを召喚して何を狙うんだい？【禁じられた聖杯】？でも少しくらいダメージを稼いだって、もう勝負はついてるっていうのにさぁ。」

（【激流葬】は無い…これなら！）

「永続罠、【リビングデッドの呼び声】を発動！墓地から【鉄鋼装甲虫】を特殊召喚する！」

「…蘇生するのは通常モンスター…まだいいか…」

「よし！俺は更に魔法カード、【ワーム・ベイト】発動！俺の場に昆虫族の【鉄鋼装甲虫】が存在する為、ワーム・トークン２体を特殊召喚する！」

――!!!

【鉄鋼装甲虫】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００
【ワーム・トークン】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【ワーム・トークン】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

次々と現れるは、装甲に身を包んだ鋼鉄の虫と、小さな小さな幼体の昆虫。
それは幼少の過去、よく遊良が使用していたリリース確保の為のコンボ。
【鉄鋼装甲虫】を墓地より呼び出すときに相手が妨害してこなかったという事は、相手にとっては【鉄鋼装甲虫】など恐れるに足りぬという事でもあり…
これだけピンポイントなカード同士を組み合わせる事が出来るのも、幼少の頃に誰もが持っていた後先を考えないからこそ出来る勢いと、それを今一度使いこなせるだけの力を『壁』を超えて手に入れたからこそ。

…これで、準備は整った。

…召喚権は既に無い、手札に召喚権を増やすカードもない。
遊良のデッキに、バルバロス以外に3体のリリースでアドバンス召喚出来るモンスターが他に居ないであろう事も、既に相手にはバレているはず。
しかし、そんな絶望的な状況下でも覚悟を決め、決意を改め、そうして今出来る唯一の勝利へと、遊良は必死になって手を伸ばしながら…

「…俺は【鉄鋼装甲虫】と、2体の【ワーム・トークン】の…」

―今、決意の『先』へと進む為に…

「3体のモンスターをリリース！」

―！

天に捧げし宣言と、天に掲げしその手。
アドバンス召喚のモノとは違う、特殊召喚のための生贄のエフェクト。
その、召喚権が無いはずの遊良の宣言によって…天にその身を捧げる虫達の、その身に纏うは渦では無く。

「はぁ!?もう召喚権なんて無いのに何を…って言うか、お前のデッキにはもう3体でアドバンス召喚できるモンスターなんて居ないはずだろ!?」
「これはアドバンス召喚じゃない、特殊召喚だ！行くぞ！」

迷いは無い。
このカードを、世界中から見られているというこの状況下で呼び出すということは、先の鷹矢と同じく自らの退路を断つという事と同義であり…
また、このカードは遊良にとって、あまりいい思いのあるカードではなく、寧ろ忌々しいとすら思えるカードであるはずだと言うのに。

しかし、それでも…

「運命を切り裂く英雄よ！」

迷い無く上げられた声と手には、少しの迷いも淀みもない。
…退路は断った。もう、後に引くわけにはいかない。
…覚悟は決めた。もう、迷っているわけにはいかない。

「青き誓いをその身に刻み！」

自分の事よりも、理事長達の事よりも。
『先』で自分を待っている、生まれた時から隣に居る絶対に負けたくは無い自分の片割れに並び立つ為に。

「天を喰らいし覇者となれ！」
「なっ、お前！そ、それは!?」

世界中の人間が知っている、世界に轟くその『口上』と共に。
全世界へと向けて、その存在を思い出させる為…

―遊良は、叫ぶ

「【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！」

―！

その瞬間…

―天が、震えた。

血霧と共に降臨し、剥き出しの牙を刃へと変え…混沌渦巻く天より出でし、竜頭を纏いし運命の英雄。

纏いし竜の咆哮で、双翼を広げ地に降りることなく空に佇み。下界を見下ろすその瞳は、一体何を映しているのか。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

「な、ななな…そ、それって…」

そんな運命を切り裂く英雄の出現に、言葉を無くし声を震わせるデュエリアの『アナライザー』。

しかし、彼のその驚きも最もであり…

…この世界で『このモンスター』の事を知らぬ者など、世界中探しても見つけることなど出来はしないことだろう。

何せ、それまで世界に存在すらしなかった、全く新しい『名』を持つ英雄のカード…

その、たった一人の若き男が文字通り自らの『運命』を賭けた一戦で創造したというこのカードの事は、知らない人間を探す方が難しいほどなのだから。

そんな、文字通り世界の『頂点』を見た一体の英雄の姿を…

理事長・学長達の為に特別に作られた特別観覧席の中で見ていた者達が、どこか感慨深げに言葉を発して…

「おやまぁ…こりゃまた、随分と懐かしい奴じゃないさね。」
「…おい砺波ぃ、ありゃあ、憐造のカードじゃあねぇか…なんでお前んトコの学生がアレを持ってやがんだ？」
「…少々訳ありでしてね。」
「フォッフォッフォ。」

―…

『あ、天城選手ぅー！な、何でソレを持って…って言うかそれ以前に！何で『召喚』出来ているんだぁー!?』

また、遊良の目の前に居る、このデュエリアの『アナライザー』ことダニー・Kだけではなく…
他のデュエルを実況していた実況の声も、演技などでは無い『本気』の驚愕の声と素の反応を見せていて。
…それだけではない。
ダニー・Kと、実況と、そしてソレを見ていた世界中の見えない観客達と…
そして実況の驚愕の声が聞こえていたであろう、【決島】で戦っている全選手が同じ事を思ったに違いない。

そう、天城　遊良が召喚した【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】。

それは、この世界中探してもソレを持っている者など…

―いや、それ以前に。

この世界において、運命の英雄といわれる【Ｄ―ＨＥＲＯ】と名の付いたソレらを扱える者など…

「そ、それは前【紫魔】の…し、紫魔　憐造にしか召喚出来ないはずのカードだろ!?何でお前が召喚出来ているんだ？」

そう、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を扱うことなど、ソレを『創造』した前【紫魔】である元融合王者、紫魔　憐造にしか出来ないはずなのだ。

普通であればありえない。前【紫魔】以外に、この竜頭持つ運命の英雄を扱える者が存在しているというこの事実を。

「…いや、俺には、このＢｌｏｏ―Ｄを召喚出来た理由がある！」

しかし、誰もが知るその世界の『常識』に反してでも、遊良の声はどこまで響いて。

…何故なら、遊良には、半ば確信めいたモノがあった。

運命の英雄達のカードを創造した、前【紫魔】である紫魔　憐造以外にも…このカードを、『召喚』する事は、不可能ではないのだ…と。

それは紛れも無い。

前【紫魔】以外にも、この【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を『召喚』していた者が居た事を、遊良は知っているからこそ得られた確信。

そう、前【紫魔】以外にも、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を従えて自分と戦った人物…

―『あら…つまらないわね。アカリが随分と世話になったと喚いていたから、どんな下民かと思っていたのに。』

―『ホホッ、今すぐにでも血祭りにして差し上げたいところですわ。なにせ、あの女の血が混ざっているかと思うと…』

―『ここに侵入してくる者がいるなんて、思いもしませんでしたわ。

ホホホ、下民風情が一体どういったご用件かしら。』

―紫魔　ヒイラギの事を、遊良は覚えているから。

前【紫魔】、紫魔　憐造の血を引いた、血の繋がった彼の娘。その『前例』を見ているからこそ、ソレを操れる事が出来るのだという自負が、遊良にはあった。

そう、他の誰にも出来ないことでも、紫魔家の誰にも出来ない事でも…

絶対に自分には出来ると確信していた、いや、出来なければおかしいという確信が…

―『か、母さんの旧姓って…まさか…』

―『そうだ、君の母…紫魔　スミレは…いや、今は天城　スミレだったな。彼女は紛れもない、私の妹…『紫魔本家』の地位を捨て、下民との小さな幸せを選んだ紫魔家の裏切り者だ。まぁ、今となっては最早、関係も無い間柄だが。』

それは嬉々するよりも、嫌忌すら感じるようなある事実。

しかし事実であるが故に逃げられない、どうしようもない確かな真実。

…世界中が見ている。何故『Ｅｘ適正』の無い天城　遊良が、Ｂｌｏｏ―Ｄを所持しているのかという疑問と共に。

…納得がいっていない。どうして他の紫魔姓の者が操れないソレを、遊良が従えているのか。

だからこそ、世界中から発せられるこのプレッシャーの中では、遊良に沈黙は許されない。

運命の英雄を従えているこの光景に、つじつまの合う言葉を述べな

ければ、当然の事ながら世界に少なからず混乱が起こるのだから。
そして、それは遊良もわかっているからこそ。
世界中に見られているという、こんな場面においても…
それが例え、先の決闘市の『異変』で思い知らされた、嫌悪すら覚える真実だったとしても…

今、全世界へと向けて…

―遊良は、解き放つ

「前【紫魔】、紫魔　憐造を！【王者】を『伯父』に持つ俺が！Ｂｌｏｏ―Ｄを召喚出来ないわけがない！」
「なっ…は…はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

見ている者が、聞いている者が、この世界中に一体どれだけ居るのかなど、膨大すぎて数えられもしないと言うのにも関わらず。
たった今世界中へと放たれた、あまりに信じられないであろう遊良の叫び。

…それは、世界中に発信された。もう、取り消す事など出来はしない。

しかし、取り消す気など遊良には無い。
そう、今の自分の宣言が、この『世界』にとってどんな意味を持っているのかなど、遊良にだって分かっているのだ。
『Ｅｘ適正』の無い天城　遊良が、『紫魔本家』が隠し続けてきたその裏側の事実を公表することは、一体どれだけ『紫魔本家』の怒りを買うというのだろうか。
それに伴い、目の前で対峙しているダニー・Ｋはもちろん…その言

葉を聞いていた、世界中の見えない観客達から発せられた驚愕の轟きが、今一斉にこの【決島】へと降りかかって。

「し、【紫魔】が…紫魔　憐造が伯父ィ!?し、知らないぞ!お、お前が、お前がそんな血筋だなんて!僕が調べた中にはなかったのに!」

演技などでは断じてない、心からの驚きを隠せないダニー・K。

…それもそのはず。

これは、遊良の事を調べ上げることの出来たデュエリアの『アナライザー』、このダニー・Kを持ってしても到達する事など出来ないであろう、隠蔽され続けてきた裏側の事情。

…そう、いくらデュエリアの『アナライザー』を持ってしても、政界・財界・決闘界に強い繋がりを持つ『紫魔本家』が過去に切り捨てた『事実』は、知ることなど許されない。

いくら前【紫魔】である紫魔　憐造が、公的に『死亡』したとされ、既に紫魔本家においては過去の人物となっているとは言っても…

その『名』が持つ影響力は今もなお『決闘界』に、ひいては紫魔本家が強い繋がりを持っている『政界』や『経済界』において、今でも多大なる影響力を持っていることは紛れも無い事実。

―何せ、紫魔家の歴史上、歴代最強とまで謳われた伝説の【紫魔】。

長い長い決闘界の歴史の中でも、融合召喚の使い手として並ぶ者など存在しない、『鬼才』とまで称えられた伝説の【王者】。

その魅力に取り付かれた者達はこの世界に未だ数多く、死してなお彼の『名』に未だ陶酔している者達が政界、財界にも多々存在している事もまた確かであり…

しかし、それを承知で、ソレを覚悟で。

そんな事に怖気着いていては、『先』に行った鷹矢には絶対に追いつけなどしないと言うことを、今ここで覚悟したからこそ。

これから先のことなどお構いなしに、遊良は先の鷹矢と同じく、自

らを後先に引けぬ状況へと追い込んだのか。

「行くぞ！Ｂｌｏｏ—Ｄの効果発動！１ターンに１度、相手のモンスターをＢｌｏｏ—Ｄに装備できる！いけ、Ｂｌｏｏ—Ｄ！【魔導戦士ブレイカー】を喰らい尽くせ！」

—！

【Ｄ—ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ—Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００→２７００

そうして…

暴食の巨竜のその牙が、深紅の魔法騎士を無残に食い荒らす。

【王者】にしか操れぬはずのモンスターが、本来の主以外の者の命令を聞いているその光景は…疑う余地も無く、遊良の放った言葉が紛れも無い真実であると言うことの証明でもあるのか。

「くそっ、【月鏡の盾】の強制効果で、ＬＰを５００払ってデッキの１番下に戻す…でも、なんでアイツが【紫魔】のモンスターを…」

…確かに遊良にはＥｘ適正が無い。

しかし前【紫魔】、紫魔　憐造が好んで扱っていたエースであるこのＢｌｏｏ—Ｄは、紛れも無くＥｘモンスターではなく、メインデッキから現れるモンスター。

だからこそ、ソレが例え、【紫魔】のモンスターであったとしても…

Ｂｌｏｏ—Ｄ　がＥｘモンスターでない以上、その血筋を誰よりも色濃く受け継ぎ、そして実力の『壁』を超え、更には後先を省みない『覚悟』を決めた遊良に…

Ｂｌｏｏ—Ｄが、扱えぬわけがない。

「け、けどいくら【紫魔】のモンスターだからって、操ってるのがアイツじゃ…」
「魔法カード、【強欲で貪欲な壷】発動！」
「なっ、まだ引くのか!?」
「あぁ、まだ引くんだ！デッキを１０枚裏側で除外して２枚ドロー！…来た！速攻魔法、【サイクロン】発動！…右側の伏せカードを破壊！」
「そんな!?」

―！

そうして…
放たれし一陣の竜巻が、ダニー・Ｋの策を粉々に砕いて。
あとは殴ってくる事しか出来ないと思っていたが為に、遊良の攻撃に備え伏せられていた【聖なるバリア―ミラーフォース―】が…その輝きを放つこともなく砕け散って。

「なっ、ど、どうしてこっちのカードを!?」

ソレをピンポイントで打ち抜かれた事に、驚きを生じるダニー・Ｋ。…しかし、今の遊良には分かる。
ダニー・Ｋの伏せていたカードから感じた、このまま攻撃してはならないという『嫌な臭い』を。
先程まではダニー・Ｋの事を見誤っていた為に、巧妙に隠されていたその『嫌な臭い』が…
今こうして、戦いに望む覚悟を入れなおしたからこそ。遊良には、確かにカードへの『嗅覚』が蘇っていて。
だからこそ、Ｂｌｏｏ―Ｄを召喚して、それで慢心せず満足せず見誤る事もなく。
攻撃をより確実なモノとするために、繰り返すドローによって再び無理矢理にデッキから必要なカードをその手に加えるだけ。

「ど、どうしてここで引けるんだ!?どうしてこの状況で引こうと思えるんだよ!?どうしてここで、そのカードが引けるんだお前は!?」
「決まってる!これが俺のデュエルだからだ!」
「し、調べたから知ってはいたけど…な、なんて無茶苦茶な…」
「アンタには言われたくないけどな。よし、行くぞ、バトルだ!【神獣王バルバロス】で【怪鳥グライフ】に攻撃!そして攻撃宣言時に速攻魔法、【禁じられた聖杯】発動!バルバロスの効果を無効にする!」

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／１９００→３４００

迷いを全て、吹っ切ったが故に。
勢いを増した遊良に連なり、獣の王が本来の力を更に超え、大気を震わすその咆哮を轟かせながら地を駆け出し飛び上がる。
…最後の手札まで全て使用し、迷っていた先程までとは比べモノにならない程の全力で。
『壁』を超えたその力と、『覚悟』を決めた心にデッキは答える。それは、全てを破壊する力を封じられようとも、そんな事では自らの進撃を止められないのだと言わんばかりの響きとなりて…

「吼えろ、【神獣王バルバロス】！天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

―！

「ひぎっ、う、うわぁぁぁぁぁぁ!?」

ダニー・Ｋ　ＬＰ…２５００→６００

爆音響かせ、轟音轟かせ、獣の王のその槍が、深紅の怪鳥へと爆音と共に突き刺る。
そのダメージに連動し、リアル・ダメージルールに乗っ取りダニー・Kにダメージ相等の衝撃が走り…
ＬＰを大幅に削るその衝撃は、さしものダニー・Kも想像以上の鋭痛だったのか。
痛みに顔を歪ませて、足をふらつかせ肩を落として。
「あぐ…な、何で…じ、授業の時より…痛…」
「これで終わりだ！Ｂｌｏｏ―Ｄで、【怪鳥グライフ】に攻撃！」
「ひっ!?」

しかし、そんなダニー・Kへと、今度は遊良が見せ付けるかのように。
…続けて舞い上がりし英雄の、広げられし双翼から造られし血霧の槍雨。
それを見て、ダニー・Kは逃げようの無い『恐怖』にも似たモノを、今この時になって感じているのか。

…覚悟は決めた、もう迷わない。

天に佇む英雄に、決着の一撃を遊良は命じて。
…例えこの【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】が、遊良にとっては目を背けたくとも変えようの無い血筋の証明だとしても。
その真実から逃げないため、そしてソレを受け入れてでも自らの運命を切り開くために、遊良は猛る。
それは自らを追い込み、自分にとって最も大切な『約束』の為に…
この力が、自らには必要なのだと、そう言わんばかりに…

「喰らい尽くせ！鮮血の…ブラッディ・フィニッシュ！」

―！

「わぁぁぁぁぁぁ！」

ダニー・Ｋ　ＬＰ…６００→０（―６００）

―ピー…

深紅の怪鳥ごとダニー・Ｋを飲み込み、その命の全てを断ち切る運命の英雄。

その衝撃と共に無機質に響く機械音は、デュエルを終わらせる合図と共に、たった今始まった壮絶なる戦いの始まりの合図とも言えるのか。

「ひっ！ぎ、ぎぴゃぁぁぁぁぁぁぁ!?」

また、ＬＰが０となった事に連動し、その腕につけられた装置によってリアル・ダメージがダニー・Ｋへと襲い掛かって。

いくらこの【決島】がトーナメント方式で無い為に、例えいくら負けても『失格』にはならないとは言え…このリアル・ダメージルールにおいては、例外的に『失格』になってしまう条件が、たった一つだけある。

…それは、戦う意思の無い者には、ターンは回ってこないと言う、プロに適応されているルールと同じ。

そう、デュエルでのダメージが実際の衝撃となって襲いかかるこの

リアル・ダメージルールの条件下では、その衝撃によって気を失ってしまえばその場で即失格となってしまうのだ。
　与えられたダメージによって、実際に受ける衝撃も変わる。それは、もしもワンショットクラスのダメージを食らってしまえば、人間の意識など簡単に奪い去ってしまえるような代物。

「あっ…うっ…ぐ、ぐっ…」

　しかし、まだ一度もダメージを食らっていない『初戦』だったことが幸いしたのか。
　大量にあったＬＰが０となるダメージを一気に食らっても、どうにかその意識を繋ぎとめたダニー・Ｋ。
　あまりに大きなダメージだったと言うのに、どこか執念めいた表情を浮かばせながら…地に伏せながらも、忌々しげに遊良を睨んでいて。

「初戦で、し、失格になるわけには…いか、ないんだよ…ぼ、僕だって…本気で…」
「あぁ、わかってる。…強かったよ、あんなに本気で対策されたのは初めてだった。」
「…Ｂｌｏｏ…Ｄ…お前が、そのカードを持っている、なんて…僕が調べた中に、な、無かったはず…い、一体、何時お前が、ソレを…」
「ついさっきだ。」
「…は？」
「さっき、デュエルが始まる前に突然渡された。だから、俺もこのカードをデッキに入れるかどうかギリギリまで迷っていたけど…でも、結果的に入れておいて良かった。このカードがなかったら、アンタに勝つことなんて出来なかったから。」
「…ぐぐっ…お、お前なんか嫌いだ…僕の…分析にないカード使う…お前なんか…」

「…気が合うな。俺も、アンタとはもう戦りたくない。」

言葉ではそういいつつも、ソレがデュエリアの『アナライザー』にとっては褒め言葉となる事を、遊良もこのデュエルで理解したからこそ。

冗談ではなく、少々本気でそう言う遊良の表情は、本当に強かったこのデュエリアの『アナライザー』であるダニー・Kを心から賞賛していたことだろう。

…遊良が【鉄鋼装甲虫】を蘇生したあの時、ダニー・Kがソレを止めてきていたら…勝敗は、まだ分からなかった。

それはあくまでも、ダニー・Kが遊良の思惑とは『別の対策』をしていたからこそ出来た、思考の交錯による一瞬の隙間。

…一歩間違えれば、倒れていたのは遊良自身。

故に…一つのミスが負けに繋がる、こんな強敵がこの【決島】にはごろごろしていると言う事に対し、遊良は改めて戦いに臨む決意を固め始めて。

―!

そして、遊良のデュエルから間髪入れず。

あちらこちらから次々に、決着を告げる無機質な機械音の嵐が掻き鳴らされ始めた。

それは全てが強敵であるこの島において、誰かが勝利し誰かが敗北していると言うこと。

この初戦の戦いの結果が、そのまま最後の結果に繋がるわけではないものの…

誰もが皆、敗者になどなる気はないからこそ。戦意と闘志が混ざり

合い、この島を本当の意味で【決島】へと変え始めたのだ。
だからこそ、この【決島】におけるルールは唯一つ。
―最後まで立って、デュエルを続けよ。
そうして…
「…うぐっ…さ、さっさと行けよ…いつまでも…見てんじゃない…」
「あぁ…じゃあな。」
ふらつきながらも、どうにか立ち上がり始めたダニー・Kに背を向けて、遊良は激しい戦場へとその足を一歩踏み出し始める。
誰もが皆、『本気』で勝ちに来ているこの戦場では、余計な感情を相手に向けている暇などありはしないのだ。
それは、誰もが皆分かっていることで、そして誰もが覚悟していることであるからこそ…
…覚悟は決めた、もう迷わない。
…決意は固めた、もう悩まない。
遊良もまた、誰もが本気で臨んでいる【決島】で、相手の本気を乗り越えて、そして相手の持つ『渇望』を捻じ伏せてでも、本気で自分の勝利へと突き進むと言う『覚悟』が必要だということを、今改めて心に刻みなおす。
そう、遊良にとって、『本気』で【決島】を戦うべきその理由…それは、開戦の前に豪語した鷹矢と同じ、幼き日の『約束』のため。
その為には、気を緩めている暇も無ければ、迷いに囚われている暇も無い。
―それを、『頭』では無く『心』で理解したからこそ。

今ここに、遊良の戦いもまた、これより本格的に始まったのだ。
多岐に渡る戦いの、その始まりとなる最初の戦いを超え…壮絶なる戦いの序章が、この島の全土から轟き響く。
これより初期位置でのデュエルを終えた者達が、島の全土を縦横無尽に駆け巡り始め…島の全てを戦場として、生き残りを賭けたサバイバル・デュエルが行われようとしていて。

…全ての相手が敵となり、休む間もなく戦いに明け暮れる。

…そう、戦いの火蓋は、切って落とされた。

―今、これより…

―【決島】、開戦

―…

ｅｐ７４「天翔ける雷」

煌びやかなシャンデリアが煌々と煌いた、どこか優雅な気品の中に醜い狂気を孕んでいるとさえ思えるような、そんなどこかの国にある豪華な『カジノ』の一つ。

―『バトルだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！』

―！

―『ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ!?』

その『カジノ』に、今もなお激しい戦いが繰り広げられている【決島】の、リアルタイムの映像が『超大型モニター』で映し出されていた。

…しかし、ただ【決島】の『映像』をＢＧＭ代わりに流しているのではない。

あまりに巨大な賭場だと言うのに、この場に居る客達の誰もが超大型モニターにその目を釘付けにしているこの現状は…

ただ単に、世界最大規模の祭典を、大勢の人間達で観覧している…といったような、生易しい目線ではないと言う事は言うに及ばず。

…そう、『カジノ』で行われる事と言ったら唯一つ。

その超大型モニターの前には、一目で特別な賭けなのだとわかる程に大きなテーブルと、熟練のディーラーが一人。たった今終了したデュエルの結果を確認した後、テーブルのあちらこちらに置かれた大量のチップを、『ある一人の男』の前へと移動させ始めたではないか。

「…驚いた。大穴中の大穴じゃないか。まさか『彼』の言った通り、3連続で『Ｅｘ適正』の無い少年が勝つとは…」
「こうなるなら私も『彼』の読みに乗っておけばよかったですわ。だって『Ｅｘ適正』の無い子がこんなに勝つだなんて、普通だったら信じられませんもの。」
「今のデュエルも危なかったですものねぇ…こんなギリギリな勝利なら、いくら『Ｅｘ適正』の無い子が前【紫魔】の甥だったからとは言え、到底賭ける気にはなりませんねぇ…危なっかしくて、憐造氏のデュエルとは全然似てないですものねぇ…」

そこに居たのは、世間に良く知られた各界の著名人達や、各国の要人と言った…この煌びやかな空間にあまりによく似合う、狂気と言う名のドレスを纏った、外面を無害なモノで厚く塗り固めた大人達の姿。

子ども達の戦いを、自分達の娯楽へと変え…
狂気を孕んだ金のやり取り、しかし純粋なるゲームの雰囲気。『表』の人間達には見せられない、世界の裏側で行われている一つの遊びに嬉々として身を投じている者達が、そこには居て。
巨額の金がたった一つの読み違いで消え、たった一つの大番狂わせで人生を変える程の金額が移動するこのゲームを、顔に貼り付けた笑みと裏しかない言葉で優雅に見せてはいるものの…
その狂っているような重苦しい雰囲気と、狂っているような嘘と嘘の交わし合いは、とてもじゃないが子ども達の戦いを『楽しんでいる』様には到底思えない事だろう。

そんな、一筋縄ではいかない曲者達のど真ん中に。
この大掛かりな賭けで、まさかの大穴中の大穴を3連続で的中させチップを総取りしたと言う『ある男』の…
この中の誰よりも機嫌のよさそうな声と、その特徴的な渇いた笑いが響き始めた。

「カッカッカ！気分がいいねぇ！まーた総取りじゃねーか！」

大振りのワイングラスを片手に、行儀悪くカジノテーブルの上に両足を乗り上げ…一杯が一般人の年収額を軽く超えるほどのワインを、何の迷いも無くその喉に通して機嫌を良くして。

常人が下手を一つでも言えば、命をも危ぶまれるような異様な空間となっているこの『裏』のカジノだと言うのに…

全く恐れることも無く、渇いた笑いを響かせて、彼らから大金と言うにもおこがましい程の金額が示されたチップを、まるで小銭でも巻き上げるかの如く手元に積み上げたこの男。

各界の著名人達や世界の要人達のど真ん中に陣取っているというのに、まるで自分がこの中で最も偉いのだと言わんばかりの言動を放つ、あまりに不遜なるその態度。

そんな態度を取れる男など、この広い世界においてもたった一人しか該当する人物は存在しないことだろう。

…豪放磊落、天下無双、世界最強のエクシーズ使い。

―【黒翼】、天宮寺　鷹峰

「どうしたどうしたお偉さん方よぉ、手ごたえ無さ過ぎじゃあねぇかい？」

「流石はエクシーズ王者【黒翼】の読みと言った所か。…しかし、一体どうして3回も連続であの子に賭けようだなんて思えるんだ？確かに3連続で『Ｅｘ適正』の無いあの子のデュエルを賭けの対象にしたのは私だが…」

「あぁん？…カカッ、んなモン決まってんだろーが。あのガキはこの俺様の弟子なんだからよぉ、師匠の俺様を勝たせるのは当たりめぇだろうが。」

「あらあら、ふふっ、面白い冗談ですわね【黒翼】。もしソレが本当なら…」
「…前【紫魔】の甥であると同時に、【黒翼】の弟子と来たか…ククッ、これでもし【白鯨】が絡んでいたらもっと面白いんだがなぁ…」
「おうおう、良い線行ってんじゃねーか大統領。政治の読みは下手糞な癖によぉ、カッカッカ。」

少年達は知らない。『表』で行われている輝かしい『祭典』のその『裏』で、汚い大人達が一体『何』をしているのかを。
少年達には、知る由もない。自分達の戦いが、大人にとっては『何』と思われているのかを。

「んなことより、今日の俺は負ける気がしねぇんだ、さっさと次の賭けにいこうじゃねぇか。次の親はお前さんだぜ？なぁ、銀幕の大女優様。」
「…そうですわねぇ…では、次はチャンネル３１のデュエルに致しましょう？流石に、【黒翼】にこれ以上勝たせるわけにはいきませんもの。」

そうして…
新たな賭けの対象に『Ｅｘ適正』の無い少年ではない別の者のデュエルが選ばれたのと同時に、超巨大モニターの映像が切り替わる。
少年達の事などお構い無しに、賭けはまだまだ続くのみであり…自分達の娯楽の為、一時の快楽の為、余りに余った金を使った、世界の裏側で行われているこの賭けはまさに一種の狂宴の場。
…そんな狂った宴の席に新たに映しだされたのは、これより戦いに臨まんとして対峙している一組の少年と少女の姿であり…
デュエルが始まるまさに寸前。この場に集まった大人達が、それぞれ各々の直感の元、悩みながらも少年と少女の勝敗を予想し金を賭け始めて。
『Ｅｘ適正』の無い少年の勝利を誰も信じていなかったが故に、この３

回の賭けで大損した者達が、次の賭けではどちらが勝つのか頭を悩ませ続けているのだろう。狂気のドレスが金への欲望で更に濁り、薄っぺらい言葉で取り繕ったこの場の空気が冷たく変わっていく。
しかし、そんな中であっても…

「…カカッ。こりゃまた、考えるまでもねぇな。」

…慎重になっている周囲の悩みを、まるで嘲笑うかのように。
まだ誰も賭けていないと言うのにも関わらず、全く考える素振りを見せず。
先程、『Ｅｘ適正』の無い大穴中の大穴の勝利をただ一人予想し、一人勝ちで大儲けをした【黒翼】、天宮寺　鷹峰はさも簡単そうに…
この賭けで巻き上げた巨額のチップの、その全てを惜しげも無く目の前へと押し出しながら…

「ほらよ。高天ヶ原　ルキの勝ちに…全額だ。」

―…

「ＹＯ！天城　遊良！こ、ここまでやるとは…」
「バトルだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！」

―！

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

―ピー…

光差し込む森の中に響き渡った、勝敗を決めた無機質な機械音。
それはつい先程本格始動した、世界最大規模の学生達の祭典、【決島】における一つの戦いが終了した事を告げる決着の合図であり…
…それに伴い、【決島】に採用されているリアル・ダメージルールに則り、敗者に実際のダメージが衝撃となって襲い掛かって。

「うぼぉぉぉぉぉぉぁあっ!?」

…演技などではない、本物の衝撃による苦痛の声。
そう、デュエルディスクとは別の方の腕に装着された、衝撃発生の為の特殊な装置から発せられる電流と衝撃が、否応無しに敗者となった少年にその牙を思い切り剥いたのだ。
４０００を超えるダメージによる、容赦の無いワンショット。ソレを喰らったことで、意識を断ち切るほどの衝撃が敗者へと襲い掛かり、そのまま敗者となった少年は体を支える事もできずその場に倒れ込んでしまう。

「…あ、危なかった…まさかバーンダメージに特化した奴だったなんて…デュエリアの『ボマー』…な、なんて恐ろしい奴なんだ…」

そんな、たった今自分が降した相手に対し…
心の底から畏怖したかのような言葉を漏らし、冷や汗を垂らしながらそう呟いたのは決闘学園イースト校２年、天城　遊良。

…しかし、遊良の焦燥の声もそのはず。

何せ、たった今勝敗が決したこのデュエル。
決闘学園デュエリア校、デュエルランキング８２位。巨大なアフロ

が特徴的な『ボマー』と名乗った男子生徒との今の一戦は、相手が効果ダメージに特化した奇襲性の高いデッキの使い手だったと言うこともあり、後攻一ターン目から容赦の無いバーンダメージが襲い掛かって来ていたのだから。

…ＬＰ４０００など、一瞬で消し去れる程の火力と炎圧。

一応デュエリアの『ボマー』が仕掛けてきた奇襲は、念押しで伏せておいた【メタバース】と、あと1枚だけデッキに残っていた【チキンレース】のおかげでどうにか防げたものの…

もしも先攻で【チキンレース】を使い切っていたり、【メタバース】を伏せていなかったりしたら…後攻の相手ターンに、自分は何も出来ずにバーンダメージの爆発によって負けていた…

ソレを考えると、遊良も勝利したとは言え流石に溢れ出る冷や汗を止められないのか。

「…これで…3勝…うっ…」

戦いの後に、気を緩める暇も無く。

どこか苦しげに息を吐いた遊良の表情は、今の『ボマー』とのデュエルの時に受けたバーンダメージによる衝撃の余韻だけではない。

初戦の『アナライザー』とのデュエル、次の『グラップラー』とのデュエル、そして今の『ボマー』とのデュエルと、あまりに異質で突出した戦い方をしてくるデュエリアの生徒達に対して、まるで畏怖にも似たモノを感じているかのよう。

「…これが今日一日ずっと続くのか…流石にキツイな…」

…これまで戦ったデュエリア側の生徒とのデュエルは、全員が気を抜く事など許されなかった猛者達ばかり。

今の所、とりあえずは全勝出来ているとは言え。その全てのデュエルが一瞬も気を抜けない、一手読み違えば取り返しのつかない、一つ間違えれば倒れていたのは自分という、常に気を張り詰め続けていな

ければならないデュエルだったのだから…たった3戦とは言え、遊良のその心労は相当なモノになっていることに違いないだろう。
一応、こういった休みなく戦いに明け暮れる修業も、以前に師である【黒翼】、天宮寺　鷹峰にさせられていたおかげで、どうにかペース配分や精神面の保持は出来ているとは言え…
この3戦は、全てが1戦以上の緊張感を齎すほどに厳しかったモノばかりだったのだから、リアル・ダメージルールによりデュエルのダメージが実際の衝撃となって襲いかかるというプレッシャーも重なって、たった3戦でもすでに10戦以上をこなしたかのような疲労感を遊良へと与えているのか。

…しかし、だからと言って休んでいる暇など無い。

明日の決勝へと進める4人の中に残るには、負けない事ももちろんなのだが、どれだけ多くのデュエルを行ったのかも重要なポイントとなるのが【決島】の掟。
多くの猛者と戦い続け、そして勝ち続けた者しか次なるステージへと進む事は許されない、猛者が犇めくこの魔境となっている島で最後まで戦い抜いた者しか、これより『先』へは進む事を許されないのだ。

…戦わなければ生き残れないというのは、そういう事なのだから。

そうして…

弱音を程々に、気を張りなおして。
気を失って『失格』となってしまった、デュエリアの『ボマー』を回収しにくる救護班をこの場で待つ事も無く…
次なる相手を求めて、遊良がその場を離れ始めようとした…

―その時だった。

「あ、遊良だ。」
「…え？」

今にも歩みだしそうだったその刹那。
自分の名を呼ぶ女性の声が背後から響き、その不意に背後から聞こえた声に、思わずその足を止めてしまった遊良。
それは、戦い溢れる【決島】における、戦意溢れる声ではなく。その声を聞いただけで、声の主の正体が瞬間的に頭の中に浮かび上がるほどに、それは遊良にとっては聞きなれた声でもあり…
そのまま反射的に、背後へと振り返って声の主の方へと視線をやった…
そこには…

「…なんだ、ルキか。」
『なんだ』じゃないよ、もう。何かふらついてるじゃん。大丈夫？」

よく見慣れた赤い髪、よく聞き慣れた優しい声。
そう、声をかけてきたのは、紛れもない高天ヶ原　ルキ本人。
初期位置は確かに比較的近かった方ではあるのだが、戦いを求めて島を歩いている内にこうして森の中で鉢合わせでもしたのだろう。
彼女が何戦したのかはわからないが、少々疲労を感じている遊良とは違い、まだまだルキは元気であるという雰囲気を醸し出している。
そんなルキは、戦いが終わったばかりで少々ふらついている遊良へと向かって…
その体を心配する素振りを見せつつ、この戦いの空気の中でもいつも通りの声質のままその口を開いた。

「何かデュエルの音するなーと思って来てみたら遊良だったんだ。何か凄い疲れてるけど…今終わった所？」
「あぁ、とりあえずこれで３戦して３勝だ。…毎回キツいデュエルばっかりだから休む暇も無い。」

「え、もう3戦もしたの？私まだ最初の1回しかデュエルしてないんだけど…ずっと森の中歩いてたけど、全然人と会わないんだよね。」
「…そうか？森の中に行けば行くほど戦ってる奴多いみたいだぞ？」
「でも遊良と会うまで全然人に会わなかったよ？…あ、私の初期位置、森抜けた先の崖のとこだったんだ。島の端っこだったから周りに人が全然いなかったのかもね。」
「崖…」

そんな明るいルキの言葉に対し…まだルキの身に何事も起こっていない事への安堵と同時に、ルキの言った『崖』と言う単語に、少々寒気を覚えた様子を見せた遊良。
島の端、周囲に人が居ない、後ろが崖という逃げ場の無い状況…取り越し苦労なのかもしれないが、もしもルキの事を狙っている『敵』がそんなところで襲いかかって来ていたら…と、どうしても考えてしまったのだろう。
一応、ルキの身に僅かでも『神』の力の暴走の兆しが見られた場合はすぐにでも体調不良などの理由から棄権する約束になっており…また、ルキの身に僅かでも危機が生じた場合は、特別観覧席で常にルキの事を監視している砺波から迅速に連絡が来る手筈となってはいる。
だからこそ、遊良は今もこうして気兼ねなく戦いに望めているというわけなのだが…

「あ、でも聞いて聞いて？えっとねー、最初の相手ね、デュエリア校のデュエルランキング33位って人だったんだけどね？かなり強かったんだけど、全然暴走とかしなかったからアレももう完璧に押さえられてるみたいだよ。」
「…でも一戦しかしてないんだろ？これから回数増えたらわからないし、危なくなったらすぐに棄権するって約束は絶対だからな。」
「むー…ちょっとは褒めてくれてもいいじゃん、もう。」

それでも、誰がルキの事を狙っているのか分からぬ、もしかしたらそんな『敵』など居ないのかも知れぬこの【決島】においては、こうしたルキの何気ない一言であっても遊良の張り詰めている意識の糸に引っかかってしまうのか。
言葉を交わし、顔を見合わせ。こうして、ルキの無事であるという様子が、何よりも遊良にとっては安堵できることであるとは言え…
…何かがあってからでは遅い。
それはルキを狙っている『敵』に対しても、そしてルキの身の内に潜んでいる『神』の暴走に対しても。
何も起こらなければ、それはそれでとても良い。ルキは人生初の『祭典』で、今まで制限されていたデュエルを思い切り行えるのだから、ルキが楽しく祭典を過ごして、そして何事も起こらなければ、それは遊良にとっても良い事であるのだから。
しかし、その懸念が少しでも拭えない今の段階では、遊良とてルキの身を気にしていなければならず…

「なぁ、ルキ…」
「んー？」
「俺とデュエルするか？」
「…え？」

…しかし、ルキの身を心配してはいても。
抗えぬ戦いの定めに従い、ルキに対してそう言葉を投げかけた遊良。

「まだ一戦しかしてないんだろ？折角【決島】で鉢合わせたんだ、ここでルキと俺がデュエルしたってルール通りだし。」
「…遊良と？」
「あぁ。ルキならワンショットで気絶するなんて事はしなそうだし

…って言うか、下手すれば俺がワンショット喰らって気絶させられそうだから、俺も本気で行かせて貰うけどな。」

…そう、ここは【決島】。

今こうしている場面も世界中から見られていて、終わらぬ戦いを続けなければいけないのがこの島のルールなのだから、いくら身の安全を案じているルキに対してであっても『ここ』で出会ったのならば戦いに臨むのが常と言えるのだ。

故に…遊良は、ルキへと問いかける。

幼少の頃から戦い慣れた、その実力も思考もデッキも戦術もエースも何から何に至るまで、その全てを知り尽くした幼馴染の少女。

これは『祭典』。あくまでもルキの身に何事も起こっていないのならば、もちろん遊良は全力でルキと戦うつもりだし…それはルキも同じ気持ちだからこそ、ルキも相手が遊良だろうと鷹矢だろうと、全力でデュエルを楽しむことだろう。

彼女にとっては初めての『祭典』。これまでデュエルを制限されて、抑圧してきたからこそ誰よりもこの【決島】を心待ちにしていたのは何を隠そうルキ本人。そんな生き生きとデュエルを行おうとするルキと戦う事は、遊良にとっても待ち望んでいた事でもあり…

―ルキは強い。

それは、幼少の頃から彼女の事をよく見てきた遊良が最も良く知っている。

いくらルキがデュエルを制限をされているとはいえ、それはあくまでも彼女の内に眠る『赤き竜神』を目覚めさせないための、ルキがヒートアップしてしまわぬようにするための回数の制限。

その回数制限に抗う為に、彼女は何時だってどのデュエルだって全力でぶつかってくるのだし…数少ない許されたデュエルを目一杯楽しむために、彼女がどれだけ『力』を磨いてきたのかも遊良は知っている。

また、その『神』の力のコントロールも、イースト校理事長である【白鯨】が直々に教えを授けたことによって、以前とは比べ物にならない程に改善されており…以前までの彼女とは比べ物にならない程に強くなって…いや、元々持っていた力をようやく発揮できるようになっている事も相まって、今ではその力は遊良や鷹矢と並び立っても何ら遜色無いレベルとなっているのだ。

—だからこそ、そんな今までの彼女を超えた、これまでの彼女の中で最も強いであろう今のルキと、全力で戦いたいという遊良の気持ちは嘘ではない。

そして、そう思ってくれている遊良の気持ちは、もちろん彼女自身だって理解しているからこそ。

「…遊良と…本気で…」

戦いを持ちかけてきた遊良へと向かって、ルキはその赤い髪を風に揺らしながら。

ゆっくりと、考える素振りを見せつつ…

「うーん…まだ、戦らなくてもいいかなぁ。どうせなら遊良と鷹矢とは、最後の方にデュエルしたいし…それに、出来れば二人とは明日デュエルしたいんだよね。３人とも生き残る前提だけど。」

「…そっか。」

しかし…遊良からの申し出を、悩みつつも断ったルキ。

それは別に、怖気ついたとか戦いたくないとか、そんなネガティブ

な感情から来る断りではなく…ルキの言葉からは、こんな序盤から遊良と戦うのは勿体無いという気持ちが切実に漏れ出ていたことだろう。

…出会った者と戦うのが、この島におけるルールの一つ。

しかし、それは出会った者と『絶対』に『その場』で戦わなくてはいけないルールでは無い。

ダメージが溜まっていて満足に戦えないと自分が判断したら、見つかった瞬間に一目散に逃げる事だって可能ではあるのだし…相手が了承さえすれば、一時休戦して手を組む事だって許されてはいる。

まぁ、徒党を組む事がこの島において有益なのか無益なのかは、その場にいる彼らにしか判断がつかないことではあるのだが…それでも、一度デュエルした相手とは二度デュエルを行えないルールとなっている【決島】においては、ライバル同士が終盤、そしてそれより『先』で満を持して戦いを行いたいという感情を持っていたとしても、それは何ら不思議な事ではないだろう。

本番は明日の『決勝』。２０万人の中から選ばれた２００人の中で、生き残った上位たったの『４人』が準決勝を行い…そしてその勝者二人だけが決闘市とデュエリアの『頂点』を決める戦いに望める。

だからこそ…ルキもまた、遊良と鷹矢が二人で交わしている、『頂点』で戦うという約束のように、二人とはもっと大きな舞台で戦いたいのかもしれず…

そして、そんなルキの気持ちは、遊良とて理解出来ているからこそ。

ルキの身を案じつつも、砺波が見ていてくれているという安心感から、始まったばかりのこんな時間ではまだ戦う時ではないのだというルキの気持ちを尊重してやろうとして…

「わかった。じゃあルキも頑張れよ。俺は向こうの方に次の相手を探しに行くから。」

「うん。私はこのまま森の中歩こうか…」

遊良が、ここでルキと別れようと言葉を交わしかけた…

―その時だった。

「おお!?次の相手みっけたぜ!…って、取り込み中かぜ?」
「…ん?」
「え?」

遊良とルキの間に突然、割って入った第三者の男の声。
思わずその声の方へと、遊良とルキが瞬間的に目をやったそこには…
森の中から飛び出てきたのか、デュエリア校の制服に身を包んだ男子生徒が一人、デュエルディスクを構えてこちらへと向かってきているではないか。
森の中から、木々の隙間から、体中に葉っぱをくっつけて飛び出てきた言う事はおそらく彼も次なる戦いの相手を求めて、この森の中を縦横無尽に駆けずり回っていたのだろう。
…デュエルディスクを展開し、臨戦態勢の空気を駄々漏れに。
遊良とルキを見つけるや否や、今にもデュエルを行わんとする勢いのまま。デュエルを行っていない二人へと向かって、弾けるような言葉遣いで力強くその口を開き始めて。

「見た所戦りあってた…ってわけじゃなさそうだけど、お前ら今からデュエルするのかぜ?」
「…いや、そういうわけじゃ…」
「じゃあ丁度良かったぜ!どっちでもいいからよ、俺とデュエルだぜ!いやー、ドンパチ聞こえる方に来て正解だったぜ!相手が2人も見つかるなんてよ!…んお?…おぉ!そこに倒れてるアフロは『ボマー』の野郎じゃねーかぜ!?」
「…知り合いか?」

「おうとも！同期の奴なんだけどよ、俺とは相性が最悪的に最悪過ぎたから倒してくれててマジで助かったぜー！…って、そんなことはどうでもいいんだぜ！『ボマー』の奴を片付けてくれてた事は感謝するけどよ、ほらほらお二人さん、どっちから俺と戦るんだぜ？俺を待たせるんじゃないぜ！」

遊良とルキがデュエルをしないと聞くや否や、語尾の力強さを更に高め、更にその闘気を増していくデュエリアの男子生徒。

一触即発の空気を纏い、爆発寸前の熱さを放ち…今にも噛み付いてきそうな剥き出しの戦意は、戦いに飢えた獣のソレにも近いだろう。

…少々テンションがハイになっているところを見るに、きっと彼は【決島】が始まってからこれまで、ずっと休まずに戦いを続けてきたのではないだろうか。

ランナーズハイにも似た、デュエリスト特有のデュエルによる快感を求める飢餓行動。そんなデュエリアの男子生徒は益々荒くなる口調と共に、目の前の獲物へと向かって更に逸る。

「さっさと決めてくれだぜ！どうせ二人とも俺の餌食なるんだからよ、とりあえず先に倒されたい方から前に出てくるんだぜ！」

じりじりと攻め寄ってくる男子生徒の迫力は、その力強い言葉遣いと相まって奇妙な圧力を放っていて。

…理性ではなく本能でデュエルをするタイプのデュエリストには、時折こうした興奮状態に陥る事が多々あるという研究結果も出ているとは言え…

こんなにも戦意をだだ漏れにしている、今にも噛み付いてきそうな激しさを持った相手と戦うのは誰であろうと一瞬の戸惑いを感じる事に違いないだろう。

特にデュエリアの生徒達は、全員が一癖も二癖も持った厄介な実力の持ち主達ばかり。どんな戦法を繰り出してくるのか分からぬそんな相手が、こんな興奮状態で戦いを迫ってくるという事は、傍から見

たら危なさしか感じられないはずであり…
だからこそ、ルキが己の目の届く範囲に居る内は、ルキに迫る危険の芽を少しでも摘まなくてはという奇妙な義務感を抱いたのか。
たった今一つの戦いを終えたばかりの遊良が、まだ少々気怠さの残る体を押してルキの前へと一歩出ながら、デュエルディスクを構え始め…

「ルキ、ここは俺が…」
「私が戦る！」
「…え？」

…しかし、そんな遊良を押しのけて。
勢い良く遊良の前へと飛び出て、勇んでこのデュエルを買って出たルキ。

「だって遊良、今一戦終わったばっかりって言ってたじゃん。だからここは私が戦るよ。」
「いや、でも…やっぱりここは俺が…」
「ずるい！遊良はもう3戦もしたんでしょ？私これが2戦目なんだから私に譲ってよ。」
「ずるいってお前なぁ…」

相手の戦意に触発されたのか、それとも相手とは正反対のデュエルへの飢えからか。
遊良の過剰とも思える心配を跳ね除け、自らがこのハイテンションな相手と戦うと買って出たルキもまた…
まだ最初の1戦しかしていないが故のデュエルへの欲が滲み出ているかの様でもあり、遊良の言葉を遮ってデュエルに向かうルキの戦意も、相手のソレに決して負けておらず。

「だってずるいよ。折角相手が見つかったのに、遊良ってば対戦相手取ろうとするんだもん。」
「まぁ、そう言われれば確かに…」
「でしょ？それに、こんなトコ鷹矢に見られたらまた『過保護』だって言われるよ？私だってちゃんと選手なんだから、私にだってデュエル戦らせてよね。」
「…」

そんなルキの訴えを聞いて、遊良は少々考えるような素振りを見せ始める。
…思わずいつもの調子でルキの身を案じてしまったが、確かにルキも【決島】のれっきとした参加者の一人。
ルキの身を案じる事も、確かに遊良にとっては必要なことではあるのだが…だからと言って、祭典を楽しんでいるルキのデュエルを奪うと言うのもまた、ただの自分の厚意の押し付けになっているだけだと言う事を遊良も今になってやっと自覚し始めたのか。
鷹矢ほど放置・放任も決して良くは無いが、あまりに過剰な心配もまた、祭典のただの不純物。
それは幼少の頃からこれまで、ずっと一緒に修業してきたルキの実力を知っているはずの遊良からすれば…いくら無意識だったからとは言え、ルキの力を信用していないと、そう彼女に言っているにも等しいモノなのだから。

…ルキを戦わせないと言う事は、彼女の持つ実力への多大なる侮辱にも繋がる行為。

どうせ、【決島】の間は否応にも離れ離れになって戦わなければいけないのだから、自分が過剰に心配しすぎてもそれはルキの邪魔になるだけ。
誰よりも【決島】への参加を楽しみにしていた彼女にも、【決島】を大いに楽しむ権利は確かに存在している。ならば、いくらルキの身を

案じ警戒するとは言っても、それには限度と言うモノがあると言うことを遊良も考えなければいけない事だろう。

—だからこそ、遊良は今。

既に臨戦態勢に入っているルキに対し、再度向かい合いつつ…

どこか戦場へと兵士を送り出すような気持ちを抱きながら、再びゆっくりとその口を開き始めて…

「…わかった。じゃあここはルキに譲るよ。」

「やった！」

「お、最初の相手は女か！こりゃ5勝目も頂きだぜ！俺はデュエリア校3年、デュエルランキング25位のアキレス・ニコラス・マクスウェル・トリメリアーノ・ダニエル・リンドリン・フェイネス…」

「なが…えっと、イースト校2年、高天ヶ原　ルキです！」

「…チェスター・ビーコヌ・マキシマ・マキシマム・ヤクモ2世だぜ！…えっと、イースト校の…なんだって？」

「…高天ヶ原　ルキでーす、よろしくー…」

そうして…

ルキと、あまりに長い名前を名乗った男子生徒がお互いに名乗りあったところで。

森の中の木の一本にもたれかかるようにして観戦へと移行し始めた遊良を他所に、相手と対峙したルキは、意気揚々と己のデュエルディスクを展開し始める。

興奮状態の男子生徒の勢いに押されぬよう。ルキもまた、徐々にその戦意を上げようと戦いに集中し始め…

彼女にとっては初めての『祭典』。そしてそれ以上に、これまでやり

たくてもやりたくても制限されてきたデュエルを、こんなに大きな規模の大会で行えるという、待ちに待った初めての『公式戦』。
そんな場所で、思い切りデュエル出来ることが、彼女にとってはどれだけ嬉しい事なのか。

「女だからって手加減なんかしないぜ？」
「いらないよ、そんなの。」

遊良が見ている、砺波が見ていてくれる、そして世界から見られているという、この未知の場所であるこの公式戦の場で、緊張よりも躍動が勝っている彼女もまた生粋の決闘者。
…折角の『祭典』で、まだ1戦しかしていないことに彼女も少々物足りなさを感じていたのだろう。
そんな待ちに待った祭典の、自らの真価が問われる2戦目。初戦と同じく、デュエリア校の生徒を前に…
今ここに、戦いのゴングが…

―デュエル！

今、鳴り響く。

先攻はデュエリア校3年、アキレス・ニコラス・マクスウェル・トリメリアーノ・ダニエル・リンドリン・フェイネス・トーマス・チェスター・ビーコヌ・マキシマ・マキシマム・ヤクモ2世。

「俺のターン！俺はモンスターを裏側守備表示でセット！このままターンエンドだぜ！」
「…え？」

アキレス・ヤクモ２世　ＬＰ：４０００
手札：５→４枚
場：『裏側守備表示』
伏せ：無し

傍から見ても、あまりの興奮状態だと言うのにも関わらず。
モンスターのセットだけで行動を終え、あまりに早くルキにターンを明け渡したアキレス・ヤクモ２世。
それは、高速化した近代のデュエルにおいては滅多に取られない行動であり…
対峙しているルキの目には、ランナーズハイにも似た一種の興奮状態にある彼の勢いと、彼が取ったその行動の離反はとんでもなく不可解に映った事だろう。

（…手札事故？…そんなわけないよね。だって…）

しかし、それはモンスターのセット以外にとれる行動が無かった…というわけでは断じて無い事をルキもまた感じ取ったのか。
リバース効果を狙っているのか、それとも早く墓地にセットモンスターを送って欲しいのか…
何せ、【決島】の代表に選ばれるような生徒が手札事故を起こすはずもなく。あまりに早くターンを受け渡したにも関わらず、自信に満ち溢れている相手の表情から、相手が何かを狙っているのだろうという警戒心がルキには浮かび上がってきている様子であり…

「…まぁいいや！私のターン、ドロー！私は魔法カード、【魔獣の懐柔】を発動！自分フィールドにモンスターが居ないから、私はデッキからレベル２以下の獣族モンスターを３体特殊召喚するよ！おいで、『森の聖獣』！ヴァレリフォーン、カラントーサ、ユニフォリア！」

―!!!

【森の聖獣　ヴァレリフォーン】レベル２（チューナー）
ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／　９００
【森の聖獣　カラントーサ】レベル２
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／１４００
【森の聖獣　ユニフォリア】レベル１
ＡＴＫ／　７００　ＤＥＦ／　５００

しかし、相手の狙いを考えようとしても、そのあまりに情報が少なすぎるために。
相手の出方を警戒はしつつも、いくら考えても相手の狙いが読めぬ以上…こんな後攻１ターン目から手を拱いている暇も無いという考えを彼女は抱いたのだろう。
そのまま自らのターンを向かえたルキが発動した、一枚の魔法カードによって彼女の場に現れたのは『３体』もの森の聖獣たち。
それは、幼少の頃から彼女が好んで使用している『獣族』の仲間達であり…
デッキから３体が同時に現れ、森の中に溶け込んでしまいそうな程に自然と一体となったその姿で、少女の元で遊び跳ねる。

「…へぇ、一気に３体も呼び出すのかぜ。」
「わからないのに考えてても仕方ないよね。いくよ！レベル２のカラントーサと、レベル１のユニフォリアに…レベル２のヴァレリフォーンをチューニング！」

相手の行動が少なかったために、相手が何を企んでいるのかは分からない。
だったら最初から警戒心に囚われて慎重になりすぎるよりも、相手が何を狙っていようが先ずは自分のデュエルを貫いて、先攻して優位

に立つことが重要であると言う結論に彼女は至ったのか。
…いつもの通り、いつものように。
自らのデュエルの始まりとなる『エース』を、今ここに呼び出さんとして少女はその手を天へと掲げ…

「蒼穹の彼方へ鳴り響け、天翔ける雷よ！シンクロ召喚！」

天へと昇る葉兎と草馬、それを追う花の小鹿が２つの光輪に姿を変える時。
…轟く雷鳴、瞬く稲妻。
晴れ渡る晴天の空に、突如として雷音が鳴り響き…少女の叫びに呼応して、ソレは大地に降り立つ一筋の雷光となりて…

―ここに、現れる。

「おいで、レベル５！【サンダー・ユニコーン】！」

―！

【サンダー・ユニコーン】レベル５
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／１８００

天から落ちる光の柱を貫き、今ここに呼び出されたのは、蒼き雷が化身となった幻想の一角獣。
真っ赤な髪をした少女の髪色と比べ、青天の空を纏ったような雷馬の体色はあまりに対照的かつ正反対ではあるものの…
この【サンダー・ユニコーン】こそ、彼女が幼少の頃からずっと共

に過ごして来た、ルキにとっては『エース』とも呼べるシンクロモンスター。
雷角を槍に、その身を奮わせ…赤き髪の少女を守らんとして吼え、雷鳴を唸らせ少女の前に勇み立つ。
「…ルキの奴、相変わらず早い…」
そんな、驚くほどに対照的な色を持つ少女と守護獣を見て…ポツリと、思わずそう言葉を漏らして遊良。
何せ、デュエルを見ている遊良からすれば、幼少の頃からあまりに見慣れたルキとユニコーンのこの組み合わせには何度痛い目に遭わされたか数え切れたモノではないのだ。
…遊良にとっての【神獣王バルバロス】同様、鷹矢にとっての【ギアギガントX】同様。
ここから始まる自分のデュエルを、飾るに相応しい始まりのモンスター。それを早々に呼び出したルキは、先制攻撃を仕掛けるために早々に蒼き幻獣へと攻撃を命じ…
「裏側守備表示だから【サンダー・ユニコーン】の効果は使えないけど…でも、その守備モンスターは破壊しとくよ！バトル！【サンダー・ユニコーン】で、裏側守備モンスターに攻撃！」
―駆ける。
まるで、天を翔けるように軽やかに。
相手の思惑など、情報も少ないこんな序盤から分かるはずも無いという吹っ切れからか。相手がどんな戦略を持ってモンスターをセットしたのかはわからなくとも、この攻撃でその片鱗が判明する事だろうという思考のもとに。
…リバース効果か、破壊されたときに発動する効果か。
どちらかはまだ分からぬが、それを見て相手の戦術を見抜いてやろうと言うルキの宣言によって、そのままユニコーンが蒼き雷をその身

に纏い始め…

「貫け！蒼雷の、ライジング・ブレイヴァー！」

自らを巨大な雷槍へと変えた蒼き雷馬が今、ルキの場から勢い良く放たれた…

―その時だった。

「不用意に突っ込み過ぎだぜ！俺の守備モンスターは【ビッグ・シールド・ガードナー】！その守備力は２６００だぜ！」
「え!?」
「跳ね返すぜ、その雷！」

―！

森に轟く衝突音と、微かな雷馬の悲鳴の前に反転して現れたのは、ルキの予想のどれにも当てはまらぬ、まさかのただの効果モンスター。
…巨大な盾を構えた戦士、防御に長けた守りの兵士。
それはただの効果モンスターとは言え、その守備力はレベル４のモンスターにしては破格の数値を持っており…その盾に激突した衝撃で、蒼の雷馬は無慈悲にも弾き飛ばされてしまったではないか。
「いっ！…つつ…や、やっちゃった…」

ルキ　ＬＰ：４０００→３６００

自身の攻撃力を超える守備力を持ったモンスターに攻撃した事により、反射ダメージが生じたことに連動した実際の衝撃がルキを襲う。

…そう、リアル・ダメージルールに則って、このわずかなダメージにも腕の装置からわずかな衝撃がルキへと襲いかかったのだ。

まぁ、衝撃と言っても大したダメージではなく、少しビリッとした程度の衝撃だった為にさしてデュエルに支障は無いのだが…

「伏せカードも無いからって不用意過ぎたなお嬢さん。【ビッグ・シールド・ガードナー】はダメージステップ終了時に攻撃表示となるが…追撃は出来ないだろ？」

「むー…私はカードを２枚伏せて、ターンエンド…」

ルキ　ＬＰ４０００→３６００
手札：６→３枚
場：【サンダー・ユニコーン】
伏せ：２枚

しかし、それ以上にルキの目には、まさか相手が伏せていたモンスターがただの高守備力のモンスターだったという事実に少々驚きを感じているかのよう。

―油断した…

セットされたモンスターは、リバース効果でも狙っているのか、破壊待ちの守備力の低いモンスターだと思い込んでしまっていて…ここまで極端な守備力を持った、ただの効果モンスターのみで相手がターンを終えていたとはルキとて考えていなかったのだろう。

何せ、『何か』を狙っているかのような相手の熱くなっている目と、相手があまりに早くターンを渡してきたモノだから。ソレに釣られて、ルキもこのターンは相手の動きを様子見しようと、【サンダー・ユニコーン】だけの展開に留めてしまったのが不味かった。

まだ召喚権も残っていたと言うのに、場慣れしていない『祭典』の空気と、初めて戦う相手の手の内を探ろうとしてしまったのが彼女にとっての手痛いミス。まぁ、手札にあった通常召喚可能なモンスターは、攻撃力１００の【キーマウス】だけだったのだから、召喚権を使っていたところで追撃は出来なかったのだが…

いくら実力もあるとは言え、まだこうした『公式戦』の勝手がつかめていないルキもまた、実戦の経験が極端に少ない悪く言えば経験不足。

それはこの戦いの場において、致命的なモノへとなりえる危険性があり…

「俺のターン、ドロー！【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側除外して２枚ドローだぜ！更に俺は魔法カード、【手札抹殺】を発動するぜ！手札を全て捨てて、５枚ドローだぜ！」

しかし、そんなルキを意に介さず。

再び自らのターンを向かえ、早々に連続して魔法カードを発動したアキレス・ヤクモ２世。

それは先程のターンの少ない動きとは打って変わって、このターンから行動を起こそうとでもしているかのような勢い。

先のターンのルキの出方を見て、次なる行動を彼は既に確定していたのか。そのまま、彼はルキの手札交換を囃し立てるかのような素早さを持って…

「…わ、私は３枚捨てて３枚ドロー。」

「よし、良いカードを引いたぜ！魔法カード、【増援】発動！デッキから戦士族の【ミドル・シールド・ガードナー】を手札に加えて通常召

喚！」

―！

【ミドル・シールド・ガードナー】レベル４
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／１８００

「ビッグ・シールドに…ミドル・シールド？」
「いっくぜぇ！レベル４の【ミドル・シールド・ガードナー】と、【ビッグ・シールド・ガードナー】でオーバーレイ！エクシーズ召喚、来るんだぜ、ランク４！【ダイガスタ・エメラル】！」

―！

【ダイガスタ・エメラル】ランク４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　８００

勢い良く呼び出したのは、鮮翠煌く宝玉の騎士。
…鷹矢が好んで使用しているため、その鮮翠の体躯はルキも見慣れている。
しかし、血気盛んな彼のテンションとは裏腹に、現れた【ダイガスタ・エメラル】は守備表示で現れた為に攻める気配を全く見せず…
勇むアキレス・ヤクモ２世の勢いに反し、その身を静かに固めているのみ。そんな守備表示で現れたモンスターに、自らの勢いを何の躊躇もなく乗せる彼は一体何を狙っているのか。
「まだだぜ！俺は【ダイガスタ・エメラル】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使って、墓地から俺のエースを守備表示で特殊召喚するぜ！さぁ、現れろ！」

そして…

ルキが良く知る、鷹矢がよく使用しているドロー効果ではなく。もう一つの効果を選択し、今ここに高らかに宣言するアキレス・ヤクモ2世。

―『エース』

それはデュエリストがデュエルの流れを預けるに相応しい、自らにとっての頼れる1枚のカード。

そんな自らが『エース』と呼ぶあるモンスターを、墓地から蘇らさんとしてアキレス・ヤクモ2世は益々その勢いを増していき…

―ここに、現れるは…

「来るんだぜ、レベル5！【千年の盾】！」

―！

【千年の盾】レベル5
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／３０００

墓地より蘇ったのは、進撃を許さぬ威圧的な守備力を持った、身を隠すほどの巨大な『盾』。

壁と見間違いそうなほどに、あまりに大きな盾であり…生半可な攻撃を少しも通すことのない３０００という破格の守備力を携え、主の前に守衛の陣を取っていて。

しかし…

「え？エースって…通常モンスター？」
「おうさ！コイツが俺のエースモンスターだぜ！通常モンスターだからってバカにすんじゃないぜ？俺はカードを２枚伏せて、ターンエンドだぜ！」

アキレス・ヤクモ２世　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：【ダイガスタ・エメラル】
【千年の盾】
伏せ：２枚

興奮状態である相手の勢いと、あまりに意気揚々と呼び出したにも関わらず現れた通常モンスターに、思わずどこか拍子抜けにも似た声を漏らしたルキ。
何せ、アキレス・ヤクモ２世はあれだけ逸っているにも関わらず、まったく攻撃をしかける素振りを見せずに、ただ守備表示のモンスターを並べるだけで行動を終えてばかりなのだ。

「２体とも守備表示…ねぇ、攻撃してこないの？」
「ん？…あぁ、別に構わないでくれだぜ。これが俺のデュエルなんだからよ。」
「…」

だからこそ、ルキは不思議でたまらない。
折角エクシーズ召喚した【ダイガスタ・エメラル】も、そして彼がエースだと言っている通常モンスターである【千年の盾】も…
守備表示で呼び出し守りを更に固めるだけのデュエルに、何故あそこまで自信満々に熱くなれるのか。
更に上がっていく彼のテンションと、彼の取る行動との乖離が激しい彼のデュエルに、ルキは違和感しか感じていないようでもあり…

―しかし、そんなルキの視線を真っ向から受け止めてもなお。

怪訝な表情を崩せぬルキを他所に、再び意気揚々とそのターンを終えたアキレス・ヤクモ２世は、どこか満足気に自ら築いた牙城に守られ、その戦意を更に上げていくのみであり…

そんな、思惑が全く掴めない相手に対し、対峙しているルキは一体何を思うのか。

「ふーん…まぁいいや。でも、守ってばっかりじゃ勝てないよ？私のターン、ドロー！私は【レスキューキャット】を召喚！そのまま【レスキューキャット】の効果発動！【レスキューキャット】を墓地に送って、私はデッキから獣族の【マイン・モール】を２体特殊召喚する！おいで、２体の【マイン・モール】！」

―!!

【マイン・モール】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　１２００
【マイン・モール】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　１２００

「まだだよ！魔法カード、【エアーズロック・サンライズ】を発動！私は墓地から【森の聖獣　ユニフォリア】を特殊召喚して、そのままユニフォリアをリリースしてモンスター効果発動！私の墓地が獣族だけの時、墓地から獣族モンスターを特殊召喚できる！私は【森の聖獣　カラントーサ】を、守備表示で特殊召喚！」

―!

【森の聖獣　カラントーサ】レベル２

ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／１４００

自らのターンを迎えてすぐに、多量な展開を始めるルキ。
相手のモンスターは全てが守備表示であるために、【エアーズロック・サンライズ】の弱体化効果は全く活用できないものの…
『盾』や『シールド』と名の付いたモンスターを多様していたり、守備力の高いモンスターで守りを固めていたりしていたの見るに、相手のデッキは徹底的な『防御タイプ』だとルキは睨んだのか。
ならば、取るべき手は『２つ』…
攻撃してこない相手ならば、相手の隙を突けるカードが引けるまで自分も守りに入ってひたすら『待つ』か…
今ここで、相手の守りが完全に完成する前に、今出来る全力で一気に叩くか。

しかし、そんな『待ち』の一手など性に合わない彼女にとっては、取るべき手はあくまでも『１つ』のみ。

そう、いくら相手から違和感を感じようとも…相手の守りを超える攻撃で、その違和感ごと吹き飛ばせば済む話。
攻めの一手、待ちを嫌って。全力で、全開で、攻めることが得意であると自負しているからこそ。
様子見で終わらせた先のターンとは、比べ物にならない程のスピードと勢いを持って…
更にその手を、前へと進めるのみ。

「カラントーサのモンスター効果！獣族モンスターの効果で特殊召喚に成功した場合、フィールドのカード１枚を破壊できる！…私が破壊するのは、【千年の盾】！」
「おおっと、そうは行かないぜ！永続罠、【スクラム・フォース】発動！守備表示の【千年の盾】と【ダイガスタ・エメラル】は相手の効果の対象にならず、相手の効果で破壊されない！」

「流石に防がれるよね…だったら伏せてあった罠カード、【戦線復帰】を発動！墓地からチューナーモンスター、【キーマウス】を守備表示で特殊召喚！いくよ！レベル３の【マイン・モール】２体に、レベル１の【キーマウス】をチューニング！」

止まらない、収まらない、流れるようなルキのデュエル。
連続して展開を行うルキの手には、少しの淀みも停滞もなく…
いくら相手が守りを固め、城壁を築き身を守ろうとも。防御重視の相手ならば、ソレを越える展開と攻撃をするのみなのだと言わんばかりに。
今度は相手の牙城を突き崩す為、先程よりも更に激しく展開を続けんとして、彼女は再びその手を天へと掲げるのか。

「地平の彼方を駆け巡れ、天翔ける雷よ！シンクロ召喚！」

天へと昇るは大地を穿つ、２体の小さな土竜の獣。そしてそれを追う鍵鼠が、その身を１つの光輪に姿を変える時。
…唸る雷音（らいおん）、走る稲光（いなびか）り。
晴れ渡る晴天の空に、突如として２つの雷雲（らいうん）が現れ…少女の叫びに呼応して、ソレは大地に降り立つ二筋の迅雷となりて…

―今ここに、現れる。

「おいで、レベル７！【ボルテック・バイコーン】！」

―！

【ボルテック・バイコーン】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天から落ちる光の柱を貫き、今ここに呼び出されたのは、黒き雷が化身となった幻想の二角獣。
真っ赤な髪をした少女の髪色と見比べ、雷雲を纏ったような黒き雷馬の体色はあまりに相違的かつ注映的ではあるものの…
【ボルテック・バイコーン】もまた、【サンダー・ユニコーン】と同じく彼女が幼少の頃からずっと共に過ごして来た、彼女の『エース』と言えるであろうシンクロモンスターの一体。
双角を斧に、その身を昂ぶらせ…赤き髪の少女を守らんとして唸り、雷轟を糧に少女の前に聳(そび)え立つ。

「ユニコーンにバイコーン…随分と綺麗なモンスターを使うモンだぜ。だが、それだけじゃあまだ俺の『盾』は崩せないぜ？」
「まだだよ！シンクロ素材になった【マイン・モール】２体の効果で２枚ドロー！…よし！装備魔法、【団結の力】を【サンダー・ユニコーン】に装備！ユニコーンの攻撃力を、２４００アップする！」

【サンダー・ユニコーン】レベル５
ＡＴＫ／２２００→４６００

…それだけで終わらず、それだけでは留まらず。
新たに手札に加わったカードの中から、一枚の装備魔法をエースである蒼の雷馬に装備したルキ。
バイコーンに装備した方が、攻撃力は更に高値を刻むにも関わらず…相手に破壊されたときにその効果を発揮するバイコーンを、あえてこのまま攻撃力を抑えておこうとでも考えたのだろうか。
先程は不用意にもそのまま突っ込んでしまった所為で、喰らわずに済んだダメージを食らってしまったが…

「へぇ…攻撃力４６００…」

ユニコーンの力を更に増し、これで相手の自慢の『盾』の守備力をこれで大きく超えた。

後は、先程のお返しなのだと言わんばかりに。ルキはそのまま、牙城に閉じこもった相手へと向かって、その手を攻撃へと転じ始めるのみ。

「これで【千年の盾】の守備力は超えたよ！更に永続罠、【吠え猛る大地】発動！私の獣族は全員、貫通効果を得る！これで大ダメージ与えちゃうからね！…バトル！先ずは【ボルテック・バイコーン】で、【ダイガスタ・エメラル】を攻撃！砕け！黒雷の、ブリッツ・ボルテッカー！」

「けど甘いんだぜ！攻撃宣言時に墓地から罠カード、【仁王立ち】を除外して効果発動！俺は【千年の盾】を選択し、このターン、お嬢さんは【千年の盾】にしか攻撃できない！」

しかし…

黒雷の双角のその前に、攻撃を阻む壁のようにして。突如として【千年の盾】が文字通り、『仁王立ち』の如く立ち塞がった。

先程、【手札抹殺】で墓地に送っていたのだろう。あえて場に残さずに墓地へと送っていた準備の良さと、先を見越した先見は流石はデュエリア校の代表とも言えるだろうか。

あまりに急に前方へと飛び出してきた為に、【ボルテック・バイコーン】もまた急ブレーキをかけるが如く。

その身に静止を訴えかけて、勢いを無理矢理に押し留め…

「おらおら、どうするんだぜ？そのまま【ボルテック・バイコーン】で攻撃するかぜ？」

「むぅー、【ボルテック・バイコーン】の攻撃は中止…だったら【サン

ダー・ユニコーン】で、【千年の盾】に攻撃だよ！」

しかし、それでもなおルキは怯む姿を見せることなく。

それは、ここで立ち止まるわけには行かないのだと言わんばかりの奮起。自分のミスで受けたダメージは、自分で取り返すしかない事を彼女もまた理解しているからこそ…

【団結の力】によって、その攻撃力を４６００までアップさせた蒼き幻獣が、蒼雷を纏い雷角を光らせ、まるで大地を貫くが如き勢いで大地を駆け抜ける。

「今度こそ！貫け、蒼雷のライジング・ブレイヴァー！」

そして…

主の叫びに呼応して、ユニコーンが蒼雷を纏い巨大な盾へと激突をしかけた…

―その時だった。

「だから甘過ぎだって言ったんだぜ！罠発動、【Ｄ２シールド】！【千年の盾】の守備力を、元々の倍にするぜ！」

「え!?」

―！

【千年の盾】レベル５

ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／３０００→６０００

「守備力６０００!?」

「今度は攻撃を止められないぜ?その雷、また跳ね返すぜ!」

―!

「くぅぅうっ!?」

ルキ　ＬＰ：３６００→２２００

それでも届かぬ敵の牙城。それでも崩せぬ相手の城壁。
いくら防御主体の相手がルキのエースである【サンダー・ユニコーン】の効果との相性が悪いとは言え、いくらルキがデュエルの回数を制限されてきたが故に単純に経験不足であるとは言え…
攻めているのはルキの方で、モンスターの数も攻撃回数もルキの方が多いと言うのにも関わらず。
徹底的な相手の『守り』にＬＰの差は開いていくばかりで、リアル・ダメージルールに則って生じる実際の衝撃を受けているのもルキばかりではないか。

「おいおい、たかが攻撃力４６００で超えられると思ってたのかぜ?仮にも俺が『エース』って言ってるモンスターによ、考え無しに攻めすぎだぜ!」
「うぐ…か、堅い…」
「まっ、『堅い』っったって、俺の『盾』の真価はこんなモンじゃあねーけどよ!けど危なかったなお嬢さん。もし俺がさっき【仁王立ち】を捨てずに伏せてたら、この攻撃で終わってたかもしれなかったぜ?あーあ、ちょっと勿体無い事しちまったぜ。」
「う…」

もしも相手言う通り、【手札抹殺】で【仁王立ち】を捨てていなかったら…あまりに膨れ上がった守備力に自分から激突していて、そのまま成す術なく自分はこのデュエルに敗北していた。

…それをルキも感じ取ったからこそ、初戦で戦ったデュエリア校のデュルランキング３３位の相手は、偶々自分のデュエルとの相性が良かっただけのラッキーパンチだったということを今になってようやく理解した様子。

真価が問われる２戦目で、こんなにも相性の悪い相手にぶつかった事が、ここまで攻防の遅れを取らされる事になるなんて彼女だって思いも寄らなかったことであり…

装備魔法、【団結の力】の強化値は、決して少なくない値であるにも関わらず。それでも到底届かないモノへと、自らの『盾』をあっさり強固したアキレス・ヤクモ２世の自負はあまりに大きいモノ。

だからこそ、ルキもまた相手のその雰囲気から目の前に立つアキレス・ヤクモ２世の『異質』な雰囲気を感じ取り始めていて…

…そう、デュエリア校で『上』へと昇る為には、他人には真似できない自分だけのデュエルを作り上げる事が大前提であり必須条件。

猛者がひしめくデュエリア校で、上位に立つという事は生易しい道ではない。

１００／２０００００…２０万を超える生徒の中の、選ばれた上位『１００』人。一芸に秀で、個性を突き詰め…他者には到底真似できない、自分だけにしか出来ないデュエルを磨き上げた者達だけしか、デュエリア校では『上』へと昇っては行けず。

…２０万人超の中から、【決島】に出場できるたった『１００人』に選ばれるという事は『そういう事』なのだ。

故に…

このアキレス・ニコラス・マクスウェル・トリメリアーノ・ダニエル・リンドリン・フェイネス・トーマス・チェスター・ビーコヌ・マキシマ・マキシマム・ヤクモ２世もまた、デュエリア校においてはこう呼ばれている。

崩せぬ牙城に守られた、城壁の如きデュエリスト。決闘学園デュエリア校、デュエルランキング２５位…

―『シールダー』

「どうだいお嬢さん！これが決闘学園デュエリア校、デュエルランキング２５位！『シールダー』のアキレス・ニコラス・マクスウェル…」
「…シ、『シールダー』!?」
「む……人が名乗ってる時に口挟むのは良くないぜ。でもその名の通り！俺の盾は最強の盾！どんな攻撃だろうと、俺の盾を突破できる奴なんて居ないんだぜ！ほらほら、まだバトル続けるのかぜ？」
「むぅー…バトルフェイズは終了…【貪欲な壷】を発動して、マイン・モール２体、キーマウス、ヴァレリフォーン、ユニフォリアをデッキに戻して２枚ドロー。…カ、カードを１枚…ううん、２枚伏せてターンエンド…」

ルキ　ＬＰ：３６００→２２００
手札：４→２枚
場：【森の聖獣　カラントーサ】
【サンダー・ユニコーン】
【ボルテック・バイコーン】
魔法・罠：伏せ２枚、【吠え猛る大地】、【団結の力】（サンダー・ユ

ニコーン装備中）

意気消沈、疲弊落胆。

相手が一手違う手を取っていれば、そこで自分は負けていた…

それをルキも分かっているからこそ、ただ単に運が良かっただけの、ただ単に命拾いしただけの、相手のスタイルもまだわからないまま不用意に突っ込んだことがどれだけ危険だったのかを今になって理解したのか。

デュエリアの生徒達は、全員が一癖も二癖も捻じれたデュエルをしてくる猛者ばかり。いくら初戦のデュエルランキング３３位の相手が、自分のデュエルと相性が良かったからとは言え…

手の内が分からぬ相手に、真正面から向かって行ったことを今なって後悔している様子にも見えるだろう。

…だからこそ、一旦攻めることは待ったほうがいいだろうか。そんなコトを、ルキはおぼろげに考え始め…

「俺ターン、ドロー！…なぁお嬢さん、さっき言ったな？守ってばかりじゃ勝てないと。」

「…え？」

そんな、どこか意気消沈しつつあるルキを見て。徐に、そう言葉を投げかけてきたデュエリアの『シールダー』。

ソレは、先程のターンの始めにルキが『シールダー』へと向けて放った言葉であり…守りを固めているだけの相手へと、自らの攻めの姿勢を見せ付けんとして放った言葉。

それを、どうして今になって『シールダー』は持ち出してきたのか。

一枚増えた手札を見ながら、沈んでいるルキを見ながら。アキレス・ヤクモ２世は、その手に一枚のカードを取りつつ、更にその口を開き始め…

「なんでそう思うんだぜ？現に、ＬＰは俺よりお嬢さんの方が減らさ

れてるってのに。」
「…だ、だって、このダメージだって私が自分で攻撃したから受けたダメージだもん。それに、さっきからずっと守備表示でしかモンスター出してないじゃん。いくら反射ダメージ狙ってても、私も守備に回ったら…」
「いいや！その考えは俺の大大大好きなチョコレートよりも激甘だぜ！俺から言わせれば盾ってモンは身を守ると同時に、巨大な武器にだってなれるってのによ！お嬢さんにソレを今から見せてやるぜ！」
「…え？」

そのまま、アキレス・ヤクモ２世その言葉の力を増しながら、更に勢いを荒々しいモノへと変え始める。
…守り一辺倒だと思われている事への否定か、それとも一旦守りに入ろうと考えているルキの心情を見抜いたのか。
その手に握られし１枚のカードからは、彼の戦意が篭っているかのような圧力が放たれていて。

「お嬢さんがバカにした『盾』もなぁ、このカードを使えば『最強の盾』になれるんだぜ？【千年の盾】を攻撃表示に変更し、手札から装備魔法、【最強の盾】を【千年の盾】に装備！その攻撃力を、元々の守備力分アップさせるぜ！」

―！

【千年の盾】レベル５
ＡＴＫ／　０→３０００　ＤＥＦ／６０００

そして、『シールダー』が発動した１枚の装備魔法によって、『盾』を装備された巨大な『盾』がその形状を変えていく。
守りに長けた大きな盾が、相手を突き刺す凶暴で鋭利な刃を纏い…
まるで一本の巨大な『槍』の、切っ先と化した【千年の盾】がレベ

ル５の通常モンスターとは到底思えぬステータスを持ったモンスターへと化け始めたではないか。

「守備力６０００なのに…こ、攻撃力が３０００…」

「そう！たった一枚の装備魔法で、通常モンスターがとんでもないモンスターに早変わりだぜ！バトル！【千年の盾】で、【ボルテック・バイコーン】に攻撃！」

「そ、そうはさせないよ！リバースカードオープン！速攻魔法、【コンセントレイト】発動！バイコーンの攻撃力を…」

「だから甘過ぎだって言ってるんだぜ！それにチェーンして手札から速攻魔法、【コンセントレイト】発動！」

「おんなじカード!?」

しかし、『攻撃力３０００』だけでは飽き足らず。

獣の叫びのようにして、迎撃をしかけたルキと『同じ速攻魔法』を発動し…彼は更に『盾』を巨大化させ、到底追いつけぬ高みから恐々と襲いかかったのだ。

「おうとも！俺も【千年の盾】の攻撃力を、その守備力分アップさせる！…『元々』の守備力じゃないぜ？『今』の守備力だぜ！」

【千年の盾】レベル５

ＡＴＫ／　３０００→９０００　ＤＥＦ／６０００

「攻撃力９０００!?」

「これで終わりだぜ！蹴散らせ、【千年の盾】！」

―響く落音、落ちる巨星。

ソレは抵抗できぬ頂から、雷馬を少女ごと押し潰そうとしているのか。生半可な『強化』や『弱化』では、到底抑えきれぬ圧力が今まさ

にルキと黒の雷馬に襲い掛かる。

このままでは、やられ…

「ま、まだだよ！罠カード、【スノーマン・エフェクト】発動！【ボルテック・バイコーン】の攻撃力を、私の他のモンスターの元々の攻撃力の合計分アップさせる！」

―！

【ボルテック・バイコーン】レベル７
ＡＴＫ／２５００→４５００→６９００

それでも最後まで抵抗を止めず、ギリギリで１枚の罠カードを発動したルキ。

…伏せてあった最後の罠。

相手が攻めてこないであろう事を予定して、次のターンの為に伏せておいたソレを使いどこまでも抗おうとしているのか。

蒼の雷馬と草兎の力が、黒の雷馬に流れ込み…

その電圧を、更に上昇させ…

「だがまだ俺の方が攻撃力は上だぜぇ！喰らえぇ、ブレイドオオオ…ブレイクゥゥゥ！」

―！

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ルキ　ＬＰ：２２００→１００

しかし…必死の抵抗も空しく。
巨大な盾の鋭利な刃に粉砕され、爆散してしまったバイコーン。
その衝撃波はかり知れず、どうにか主のＬＰをギリギリ１００残せたとは言え…２体の獣の力で超強化された、巨大な戦斧と化したその双雷角を持ってしても、決して届かぬ巨大な盾の衝突をその身で一挙に受け止めたのだ。
そのダメージはそのまま、リアル・ダメージルールに則ってルキへと無慈悲に襲いかかり…
それぞれが破格の攻撃力を持っているモンスター同士の激突は、例え２１００程度のダメージでも強大な爆発と化してこの辺り一帯に煙を撒き散らかしていて。
…果たして、その衝撃をまともに喰らっていたらルキもどうなっていたかわからない。
まぁ、見かけ以上の大きな爆発だったとは言え、一応ダメージ自体は『２１００程度』に留まったおかげで、どうにかその意識を断ち切る事無く立っていられるのだが…
それでも、初期ＬＰの半分以上を削るほどのダメージは、ルキにとっては相当の衝撃だったに違いなく。

「うぅ…い、痛い…」
「へぇ、あれだけの衝撃を耐えるたぁ、ちょっとは肝が座ってるぜお嬢さん。…それにしても【コンセントレイト】とは…さっきの攻撃で使わなかったところを見ると、【貪欲な壷】で引いたんだろうけどよ、まさか俺と同じカード伏せてるとは思わなかったぜ？」
「つ、次のターンに使おうと思ってたんだけど…何か嫌な予感したか

ら一応伏せておいてよかったよ…破壊された【ボルテック・バイコーン】の効果で、お互いにデッキから７枚を墓地に送るよ…」
「まっ、なんとなく生き延びる気はしてたんだけどよ。俺もデッキから７枚を墓地へ…。さて、バトルフェイズはこれで終了。このメインフェイズ、さっき【手札抹殺】で墓地に送った、【ＡＤチェンジャー】を除外して効果を発動。【千年の盾】を守備表示にするぜ。」

【千年の盾】レベル５
ＡＴＫ／９０００→６０００　ＤＥＦ／６０００

「また…守備表示に…」
「おう、『シールダー』の俺にかかればこの程度、お茶の子さいさいなんだぜ。それにお嬢さんのバイコーンはいいカードを墓地に送ってくれたぜ？【ダイガスタ・エメラル】を選択し、墓地の【ネクロ・ディフェンダー】を除外して効果発動。次のお嬢さんのターン終了まで、【ダイガスタ・エメラル】は戦闘では破壊されず、エメラルの戦闘によって発生するダメージも０にする。更に【ダイガスタ・エメラル】の効果も発動。オーバーレイ・ユニットを一つ使い、墓地の【ビッグ・シールド・ガードナー】、【シールド・ウィング】、【ジャンク・ディフェンダー】をデッキに戻して１枚ドロー！…よし、【サイクロン】発動だぜ！【団結の力】を破壊する！更に俺はカードを１枚伏せて、ターンエンドだぜ。」

アキレス　ＬＰ：４０００
手札：３→０
場：【千年の盾】
【ダイガスタ・エメラル】
魔法・罠・伏せカード１枚、【スクラム・フォース】、【最強の盾】（千年の盾装備中）

…強固な防御、鉄壁の牙城。

それは、『守り』一辺倒でデュエリアの代表１００人の内の一人に入れるはずも無いと言う事を、まざまざと証明しているかの如き激しいデュエルであり…

防御こそ最大の攻撃と自負するだけあって、彼のデュエルはまさに『攻防自在』…と言うよりは、『防攻一体』となったスタイル。

攻めても駄目、守っても駄目。そんな、どこまでも自分のデュエルと相性が悪い相手を前にして…ルキの心には今、一体どんな感情が渦巻いているというのだろうか。

「わ、私のターン、ドロー…」

…【団結の力】は破壊され、折角の【貪欲な壷】で引けた【コンセントレイト】も、まさかの同じカードを使われてあっさりと超えられてしまった。

まだルキのデッキには、モンスターを強化するカードが多々眠っているとは言えども…

その強化値を計算しても、【千年の盾】の守備力６０００を超える程の強化値をたたき出すカードは限られている。それにギリギリ守備力６０００を超えたところで、相手は更なる守備力強化を施してくるだろう。

…ＬＰは残り１００。次の攻撃に失敗は許されず、守りに入ったところで次の『シールダー』の攻撃は防げない。

…だからこそ、崖っぷちに追い込まれてしまったルキの心には、大見得を切ってデュエルに挑んだというのに、あまりの自分の不甲斐なさに胸を突き刺されるような冷たい痛みが浮かび上がっていて…

（ルキ…）

そんな追い詰められているルキを見て、遊良は何を思うのだろう。

ルキのデュエルは、『獣族』特有の展開力と攻撃力強化を大いに駆使し、エースである【サンダー・ユニコーン】の弱体化効果も活用して

相手を一撃の下に葬り去る『力』のデュエル。
それは遊良のような、ドロー加速と獣の王による『進撃』のデュエルとも…鷹矢のような、多様なランク４エクシーズによる掌握と【黒翼】による『覇道』のデュエルの、そのどれとも違うモノ。
そのルキの強さを良く知る遊良からしても、いくら相性が悪いからとは言えここまで一方的にルキを追い詰めるデュエリアの『シールダー』は…まさしく本物の力を持った、デュエリア校の猛者の一人なのだと言う事を、遊良にもひしひしと伝えている事に違いなく。

―また、それだけではなく…

（うぐ…だ、だめ…出てきちゃ…だめだって、言ってるじゃん、もう…）

実際に生じたダメージのみならず。それ以外の『何か』を、抑えているかのようにして息を吐いたルキ。
…それは、彼女の体の内に潜む『神』の力が漏れ出そうとして、彼女の体内を蝕んでいるが故に生じる軋みの痛み。
通常であれば、たった２戦で漏れ出そうとしてくる事は無い。しかし、今確かに滲み出ようとしてくるソレは、『シールダー』とのデュエルの相性の悪さとも相まって否応にも生じつつあるモノであり…
今こうして『微かな』力の奔流の兆しを感じ取っているルキの様子を見るに、この１戦はただの１戦以上のモノをルキへと与えているのだろう。
ダメージを受けるということは、彼女の体が傷付くと言う事。それに伴い、彼女の体内に留まっている『神』の力が、外に出ようとでもしていると言うのだろうか。
…そう。デュエルの熱が昂ぶったり、自身の危機に勝手に反応して漏れ出てくる『神』の力は、簡単に彼女の体を食い破ろうとし、そして容赦なく彼女を傷付けてしまう。
まだ、一応抑え込める範囲であるとは言え…操れるのは力の残滓。『赤き竜神』の眷属である竜の、一体までしか制御は出来ず。

力が漏れ出すたびに、我先に容赦なく飛び出てこようする他の眷属達。同じ『傷だらけ』の仲か、まだ言う事を聞きやすい【レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト】はまだしも…一度『枷』が外れれば、自分の意思とは関係なく『赤き竜神』やその眷属達は暴れようとしてくるのだ。

…それが『暴走』。逆らう事の出来ない、『神』の力の器の崩壊。

以前は師である【黒翼】がなんとかしてくれた為に、どうにか死なずに済んだとは言え…その幼少の過去に一度だけ起こった、文字通りの体の『崩壊』が今再び始まってしまう事になれば、今度こそ命が危うい状態に陥ってしまうだろう。

また、ルキがどうしても『赤き竜神』を抑え込もうとしているのには、他にも理由があって…

―『…分かっているとは思いますが、【決島】では『赤き竜神』はもちろん、【レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト】のカードは使ってはいけません。』

それは、【白鯨】砺波　浜臣からの言いつけ。

…ルキとて砺波の言葉の意味など、言われるまでも無く理解出来ている。世界中から見られている【決島】で、もし間違って『神』のカードが現れてしまえば…

どうやっても隠し通せるはずもなく、言い訳など出来ずに今まで隠してきたことがばれてしまう。

そして、それは『神』のカードのみならず、『赤き竜神』の眷属である【レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト】や、その他の眷属のカードもそう。

この世界において、1枚1枚が伝説となっているソレらのカードの、たった1枚でも自分が召喚してしまえば…『神』のカードを持っているのが自分だと言う事を世界中に発信してしまう事になり、それはそのまま『敵』の狙いを自分自身に注目させるようなモノ。

まぁ、彼女のとっておきである【レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト】も、そもそも『赤き竜神』が降臨した時しかＥｘデッキに現れないのだから、抑え込んでいる内はどうやっても呼び出せはしないのだが…

それでも、誰が見ているかわからない、誰が狙っているのかわからないこの場においては、絶対に『神』の力を発現させてはならないと、固くルキは誓っていて。

それに…

―『ルキ…『神』の力に頼らなくたって、お前が強いって事は俺が一番良く知ってる。だから…見せ付けてやろうぜ。お前がこれまで磨いてきた…ルキ自身の『力』を。』

―『ふん。ごちゃごちゃ考える事もなかろう。…全てぶっ壊せ。それがお前のデュエルだろうが。』

―遊良と鷹矢にそう言われたからには、『神』の力なんかに頼ってたまるものか。

子どもの頃から、デュエルを覚えた頃から…ずっと一緒に居てくれた、幻想の雷馬達こそ自分自身の力。

デュエルが出来ない自分を救ってくれた遊良。デュエルが出来ない自分に全く偏見なく接してくれた鷹矢。

そんな大切な幼馴染２人が居たからこそ、彼女はここまで来る事が出来た。そんな、『先』に進み続ける男共に、決して置いていかれたくない彼女もまた生粋の決闘者なのだから。

「しっかし、不用意に突っ込んできたり読みが甘かったり…お嬢さん、ちょっと手ごたえ無さ過ぎじゃないかぜ？」

「…え？」

そんな、必死に『何か』を抑えているルキに対し…

少々乱暴な言葉使いで、どこか偏見に満ちた言葉をつらつらと並べつつ、ルキを煽ってくるアキレス・ヤクモ2世。

「けどまぁ、気を落とす事無いぜ？『シールダー』の俺の敵じゃなかったってだけなんだからよ！まっ、女にしてはさっきの【コンセントレイト】と【スノーマン・エフェクト】は中々根性があったが…今の所、俺に真正面から土をつけることが出来た女はアイ先輩だけだし、悪いが女の小手先のテクニックなんて俺には通用しないんだぜ！ガチンコでぶつかってくる『漢』しか、俺の相手は務まらないんだからよ！」

「…こ、小手先…」

「おう！ちまちま攻撃力上げても所詮は小手先！小手先も小手先の小手先過ぎる小手先だぜ！所詮、『女』は非力って昔から決まってるんだからよ！とっとと押し潰されちまうのがいいぜ！」

「…」

ランナーズハイにも似た、デュエリスト特有の決闘への快感からテンションが上がっている所為なのか。

女性軽視とも思える持論を展開し、自らの荒々しく猛る決闘への欲望を発散させ続ける彼の言葉からは、裏表もなければ留まる事も無い。

…自分よりもデュエルランキングが高いデュエリアの生徒達の中にだって、女生徒が確かにいるはずだと言うのに…

「いつの時代も女は逃げるか避けるか回り込むかで、小手先の技術を使う奴ばっかたぜ！それはお嬢さんも同じ、男も女も超えた、真の『漢』じゃなきゃあ、俺には絶対に勝てはしないんだぜ！」

「さっきから女女って…それに、わ、私のデュエルを小手先って…」

アキレス・ヤクモ2世の言葉に、ルキは肩を震わせわなわなと声を絞り出す。

【白鯨】の修業により、力のコントロールを多少なりとも覚えたからこ

そ。満足にデュエルをすることも出来ず、燻り続けるしかなかった自分が、今こうして全力でデュエル出来ることが、彼女にはどれだけ嬉しいことなのか。
…それを、この男は貶した。
いくら事情を知らぬとは言え、いくら事情など教える気は無いとは言え…
相性が悪いだとか、公式戦が経験不足だとか…そんな言い訳などする気は無いし、今ここで行っている戦いの経過と結果がこのデュエルの全て。
それを、ルキ自身も分かっているからこそ…

(デュエリアの『シールダー』…アイツ、ルキが一番嫌がる事を…何せ、ルキのスタイルは…)

悔しい。ただ純粋に悔しい。
幼少の頃から大好きなデュエルを制限されてきて、時には死にそうな目に遭わされて、そうしてようやく出場出来た『祭典』。
夢にまで見た、遊良と鷹矢と一緒に出場出来る、待ちに待った待望の舞台。
そこで、そんな舞台で。この男は、あろうことか自分のデュエルを性別ごと全否定してきたのだ。

許せない。許せるわけがない。

回数を制限されているからこそ、そんな自分に出来る最大最高のデュエルを突き詰めてきた高天ヶ原　ルキに対し、アキレス・ヤクモ2世の言葉あまりに不遜かつ無作法な代物。

だったら…そこまで言うなら、見せてやろうじゃないか。

小手先などと言われたままで、黙ってなんていられるか。自分を馬

鹿にするデュエリアの『シールダー』に…自分の戦いを貶したこの『男』に、高天ヶ原　ルキと言う『決闘者』の力を。

―売られた喧嘩は、買ってやるのみ。

「もう怒った！私は【森の聖獣　ヴァレリフォーン】を通常召喚！更に【死者蘇生】発動！墓地から【レスキューキャット】を特殊召喚して、そのモンスター効果も発動！自身を墓地に送り、デッキから再び【マイン・モール】２体を特殊召喚する！」

―!!!

【森の聖獣　ヴァレリフォーン】レベル２（チューナー）
ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／　９００
【マイン・モール】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　１２００
【マイン・モール】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　１２００

「そんなに馬鹿にするんなら見せてあげるよ、私のデュエルを！レベル３のマイン・モール２体に、レベル２のヴァレリフォーンをチューニング！」

ルキの叫びが天に呼応して、３体のモンスターが天に舞う。
それはまるで、雄叫びを上げるが如く。
全身全霊、持てる力を全て出してでも。絶対にあの男の喉元に、雷の刃を突き立てんとしているかのようにも見え…

「無窮の空に光り輝け、天翔ける雷よ！シンクロ召喚！」

天へと昇る土竜の獣。そしてそれを追う花の小鹿がその身を２つの光輪に姿を変える時。
…嘶(いなな)く霹靂、迸る雷霆(らいてい)。
晴れ渡る晴天の空に、突如として３つの雷影が瞬き…少女の叫びに呼応して、ソレは大地に降り立つ三筋の雷電となりて…

―ここに、現れる。

「おいで、レベル８！【ライトニング・トライコーン】！」

―！

【ライトニング・トライコーン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

天から落ちる光の柱を貫いて、今ここに呼び出されたのは金色の雷が化身となった幻想の三角獣。
真っ赤な髪をした少女の髪色と並び、雷が命を得たかのような煌く雷馬の体色はあまりに壮麗的かつ幻想的ではあるものの…
【サンダー・ユニコーン】、【ボルテック・バイコーン】…そして、この【ライトニング・トライコーン】もまた、彼女の幼少の頃からの仲間であり『エース』の一体であるシンクロモンスター。
三叉の角を雷剣に、その身を天に轟かせ…赤き髪の少女を守らんとして、少女の前に猛り立つ。

「トライコーン…三本目の剣って奴か。だが、いくらモンスターを並べた所で…」
「まだだよ！シンクロ素材になったマイン・モールの効果で２枚ドロー！続いて【エアーズロック・サンライズ】を発動して、墓地から【ボルテック・バイコーン】を特殊召喚！私の場に獣族が２体以上居る為、墓地の【チェーンドッグ】のモンスター効果で、【チェーンドッグ】自身も守備表示で特殊召喚するよ！そして…」

５体の獣を場に並べ、あまりの戦意を剥き出しにするルキ。
彼女の場には守備表示の【森の聖獣　カラントーサ】と【チェーンドッグ】がいて、更には彼女の『エース』である…

―蒼の雷馬【サンダー・ユニコーン】
―黒の雷馬【ボルテック・バイコーン】
―金色の雷馬【ライトニング・トライコーン】

その計５体の獣達が赤き髪の少女を守っているこの光景は、生半可なデュエリストでは見ることさえ叶わぬ壮厳な状況であると言えるだろうか。

…しかし、それだけでは勝てない。

そう、ただモンスターを並べるだけでは、デュエリアの『シールダー』には届かない事をこれまでの攻防で味わわされたからこそ。
ルキは最後に残った手札の一枚。命運を賭けたその一枚に、最後の最後の希望を託し…

「魔法カード、【貪欲な壷】発動！　」
「あん？ここにきて手札補充って…ハハン、やっぱり意地っ張りなお嬢さんだぜ！最後のドローに起死回生を賭けるってのは、真の『漢』に

しか出来ない芸当なんだぜ？それを女のお嬢さんがやろうだなんて…」
「うるさい！私は【マイン・モール】2体、【レスキューキャット】、【トレジャー・パンダー】、【虚栄の大猿】をデッキに戻して…」
（ここで引かなきゃ勝てない…）

啖呵を切っても、大見栄を張っても。
ここであの男に勝つためには、手札に最後に残ったこのカードに全てを賭けて、絶対に『起死回生』のカードを引くしかない。

―デッキに乗せた指は震え、恐ろしいくらいに速度を上げ続ける心臓の鼓動。

この【貪欲な壷】の2枚のドローに、全てがかかっている。今試されているのは、自分のデッキの中にある『シールダー』の『盾』を超える事の出来るであろう、たった1枚の起死回生のカードをここで引けるかどうか。
ここで起死回生のカードが引けなければ、攻められずに返しのターンで潰されて終わり。
それを少しでも考えると手が震え、たった1枚のデッキの中のカードに全てを賭けるという、今まで経験した事のないギリギリの状況に少女の心臓が飛び跳ね続け…
（怖い、怖いよ…で、でも…）

それでも…
こんなギリギリの状況でのドローに全てを賭けるという状況にすら、彼女の心の中には恐れの他に少しばかりの『躍動』が生まれつつあるのか。
…そう。彼女は知っている。

例えギリギリの状況でも、次なるドローに全てを賭けて戦う決闘者が一人居る事を。

（でも、遊良なら引いてる…遊良なら、こんな状況でも絶対にドローしてるから…）

そう、もしも同じ状況に陥った時、きっと遊良だったら迷い無くカードを引いているはず。

ーそれを、ルキは知っているからこそ。

こんな状況でも、自分のデッキを信じカードを引ける決闘者の存在を誰よりも近くで見てきた経験が、彼女のドローを後押しするのか。

…恐怖はある。『起死回生』のカードを引けないのでは無いかという恐怖が。

…不安もある。極端にデュエルをする機会が少なかった為に、デッキが応えてくれるかわからぬ不安が。

それでも…

「2枚…ドロー！」

ここで臆してしまっては、これから『先』で絶対に遊良と鷹矢の横に並び立って歩いていく事など出来ないと分かっているからこそ。

ールキは…引く

ただ、デッキを信じて。

ー引いた、カードは…

「…ッ!?き、来た！まずは装備魔法、【団結の力】発動！【ライトニング・トライコーン】に装備して、攻撃力を４０００アップ！更に魔法カード、【野生解放】も発動だよ！【ライトニング・トライコーン】の攻撃力を、その守備力分…２０００ポイントアップする！」

―！

【ライトニング・トライコーン】レベル８
ＡＴＫ／２８００→６８００→８８００

高らかに響く雷馬の咆哮、それに呼応し獣たちもまた、天に向かって大きく吼える。
…この場、この時、この瞬間に、何を考えてどう行動するのかは全て彼女の思考の果て。
デッキが何を引かせるのかも、カードがどう応えるのかも…今ここで戦っている彼女らにしにか味わう事の出来ない、戦っている者にしか分かりえぬデュエルの真理。

「おいおいおい、ここで引いてくるかよ…貫通に加えて攻撃力『８８００』とは、随分と意地っ張りなお嬢さんだぜ。」
「…悪いけど、私も真正面からの殴り合いが好きなんだよね！絶対にその盾、破ってみせるから！」

だからこそ…
今この状況において、ルキが連続して攻撃力を上げ続ける事が出来たのも、彼女のデッキが導き出した１つの答えなのだ。

…デッキが何を思い、主に何を引かせるのか。
それはデッキを操るデュエリスト自身にも分からぬモノではあるのだが、それでも今こうして確かに『起死回生』のカードをルキが引いたと言う事実のみが、このデュエルの確かな現実。

「行くよ、バトル！」

…故に、猛る。
【ダイガスタ・エメラル】の方は先のターンに相手が発動した【ネクロ・ディフェンダー】の効果によって、攻撃しても全く意味が無い。
故に狙うは【千年の盾】一択で、相手もソレを狙わせる為に【ダイガスタ・エメラル】を守っているのだろう。
それはつまり、自身が『エース』と呼ぶ【千年の盾】によほどの自信がある証拠。
絶対に打ち砕けぬ、自慢の盾だと自負しているからこそ。彼は、デュエリアにおいて『シールダー』と呼ばれているのだ。
…だからこそ、何が何でもルキは【千年の盾】に狙いを定める。

「【ライトニング・トライコーン】で…」

（…けど、俺の伏せた罠は【仁王立ち】。いくらお嬢さんが攻撃力を上げようとも…次のお嬢さんの攻撃宣言が、このデュエルの終わりの時だぜ。）

自分のデュエルを馬鹿にした、あの男になんとしてでも思い知らせてやる為に。
ここで、この場で、この状況で。
『シールダー』の思惑など知る由もなく、ソレを引けた事で更に少女は猛り吼え…

「【千年の盾】に攻撃！」

「ふはははは！いくら足掻いたって無駄なんだぜ！攻撃宣言時に罠カード、【仁王立ち】発動！【千年の盾】の守備力を、更に倍の１２０００にアップさせるぜ！」

【千年の盾】レベル５
ＤＥＦ／６０００→１２０００

燃える興奮、逸る発動。
そんなルキの攻撃の宣言に対し、まるで反射運動のようにして一枚の罠を発動したデュエリアの『シールダー』。
攻撃力が５桁に及ぶ事は稀にあれど、まさか守備力をここまでの頂にまで到達させられるデュエリストなどプロの世界においても皆無だろう。
待ちきれぬと言わんばかりの、あまりに速い即行の発動。
ルキの攻撃力の上昇を、更に超える彼の鉄壁はまさに牙城と呼ぶに相応しい、比類なき守りの化身となりて…

「折角攻撃力を８８００まで上げたのに無駄になったな！そぉら、コレで終わ…」
「だったらそれを超えればいいだけだよ！これが最後の手札！速攻魔法、【死角からの一撃】発動！」
「はいぃ!?」

しかし…
―意地でも、無茶でも、無理矢理でも。
その不条理に真っ向から立ち向かう為、たった一枚の速攻魔法によってトライコーンのその猛りを更なるモノへと昇華させたルキ。
それは攻撃力を上げるカード。しかしそれは、相手モンスターの『守備力』を参照するという一風変わった強化のカード。
…それは文字通り、相手が予想だにしていなかったであろう『死角』

からの一撃。
ここで【死角からの一撃】が引けるかどうかなんてルキにだって分からなかったことではあるのだが…しかし、この相性が最悪の相手に『自分のデュエル』で打ち勝つには、彼女もここで『このカード』を引くしか残された道はなかったのだ。
それは、何が何でもデュエリアの『シールダー』の誇る『盾』を、真正面から突破してやるという負けず嫌いの少女の信念が引かせたモノ。
守り主体の相手に対し、それを超える為の起死回生の一手を持てという…砺波との修業の時に出された課題に対する、ルキの答えの一つのカード。

「【ライトニング・トライコーン】の攻撃力を、【千年の盾】の守備力分アップさせる！…『元々』のじゃないよ？『今』のだよ！」

【ライトニング・トライコーン】レベル８
ＡＴＫ／８８００→２０８００

「攻撃力にまんはっぴゃくぅぅぅぅ!?」

煌く雷剣携えし、天翔る雷の化身が戦場を駆ける。
ここで彼女が【団結の力】と共にソレを引けたのは、まさしく自分のデッキを信じて『ドロー』したからこそ。『神』になど負けぬと、前へと進むためと、彼女のデッキ自身が主にソレを引かせたのか。
弾ける白雷をその身に纏い、三叉の幻獣が天を翔け…

（ルキのスタイルは、昔から正面から一点突破で殴り勝つデュエル。どれだけモンスターを並べたって、いくら守りを固めたって…ルキは、何が何でも突破しようとしてくる。だからルキは…）

果て無きドローを繰り返し、全てを吹き飛ばす遊良とも…状況に応

じて、多様な戦術を取る鷹矢とも違う。
一撃必殺の雷の武具。槍と、斧と…そして剣と。
天に轟く神鳴りの雷剣。全てを切り裂く武勇の天剣。
どれだけ相手が強かろうとも、どれだけ相手が固かろうとも。ソレを正面から貫き、砕いて、切り裂いてでも押し通るのが高天ヶ原　ルキと言う少女のデュエルの形であり…

（単純に…強い。）

【黒翼】に鍛えられた『力』のデュエル。
そして【白鯨】の教えを受け、更にソレを昇華させた『武勇』のデュエルこそ、今の彼女の…高天ヶ原　ルキという少女のデュエルであって。

「だから言ったじゃん、その『盾』、絶対に破ってみせるって！行くよ、【ライトニング・トライコーン】！【千年の盾】を攻撃！」

…いくら阻まれようとも関係ない。どれだけ防がれようとも気にも留めない。
止められても、押さえられても、それを超える『攻撃』を繰り出すのみなのだとして、全ての壁を切り開かんと前へ前へと突き進むのみ。

猛る雷、轟く雷声（らいせい）。

鳴神の化身が空を疾る。天翔ける雷の化身足り得る、神鳴りの雷剣がここに煌き…

「切り裂けぇ！白雷の…ランページ・テンペスター！」

「ぐぅ―――――――

に、そのまま地面へと倒れこんでしまったではないか。

そして…

「…はぁ…はぁ…か…勝てたぁぁぁぁぁ…」

緊張感の糸が切れ、その場にへたりこんでしまったルキ。

…彼女も、デッキにたった1枚入れいた、このカードが引けなければ負けていた。

そう、相手の挑発に乗っかったとは言え、最後の最後に、【死角からの一撃】を引けなかったら、このデュエルは勝つ事など出来なかったのだ。

…多少守備力を上げてくるだろうとは思っていたが、まさかまた『倍』にしてくるとはルキだって想定外だったのだろう。

【団結の力】で強化していたとは言え、【野生解放】でその本能を呼び覚ましていたとは言え…守備力１２０００となった【千年の盾】に、そのまま激突していればその反射ダメージは反対にルキに襲いかかって来ていたという避けようのないその事実。

そんな、あまりに怖いデュエルをしてきたデュエリアの『シールダー』に、確かな畏怖を覚えつつ…

「ルキ、大丈夫か？」

「…最後のドロー、手ぇ震えたー…」

「…あぁ。見ててちょっとひやひやしたよ。お前がここまで苦戦するなんて思わなかった。」

「だってー、ずっと授業か遊良か鷹矢としかデュエルしてこなかったから、あんな戦法してくる相手なんて始めてだったんだもん。」

「でもその割にはよく殴り勝てたな。【死角からの一撃】なんていつ入れたんだ？」

「…理事長先生から出されてた課題だったんだよね。『守備力の高い相手を前にした時の、確実な突破法を考えておきさない』…って、ずっ

と前から言われてて。【決島】の直前に見つけたんだけど…一応、デッキに入れておいて正解だったよ。あー、でも楽しかったー。すっごいドキドキしたよ、もう。」

しかし、それ以上に。

この【決島】に出場しているのが、こんな強さを持った猛者だらけだという事実に、彼女もまた恐怖に良く似た興奮を覚え始めているのか。

…楽しい。

初めて参加する大会、初めて出場する祭典。今までデュエルを制限されていた所為で、これまで味わう事の出来なかったギリギリのデュエルを行うという経験は、彼女にとってはどれだけ楽しい事なのだろう。

「私だって理事長先生に鍛えられたし、結構強くなってるんだらかね。もう遊良と鷹矢だけに先には行かせないから。」

「…あぁ。凄かったよ。攻撃力２０８００なんて自己ベストだろ？」

「うん。相手の守備力のおかげでもあるけどね。…でもあの人も強かったー。攻撃力０のモンスターを９０００にまでしてくるし、守備力だって１２０００にまで上げてくるなんて普通思わないじゃん。ホントびっくりしたー。」

「…あんな相手がゴロゴロしてるんだよな、【決島】には。」

だからこそ、遊良もまたルキの『本来』持っていた力に加え、自分と同じく【白鯨】に鍛えられたが故に昇華したルキのデュエルに、戦慄と共に興奮を覚え始めている様子。

…ルキも紛れも無い強敵の一人。

今までずっと傍に居たからこそ、彼女の力がここまで昇華されていたことに、遊良もどこか嬉しさが生じ始め…

「お、見つけたぜ！お前が次の対戦相手か！」
「ん？」
「…って取り込み中だったか？でもデュエルはしてないし…まぁいいか、とりあえず、出会ったら迷わずデュエル！さーて、どっちが俺の相手だ？」

…しかし、そんなデュエルの余韻に浸る暇も無く。
再び、先ほどと同じような台詞で後ろから声をかけられた遊良とルキが、その声の方へと顔だけを回して視線を動かし…
そこには今現れたであろう、白と黒のメッシュを髪に入れたデュエリアの生徒が一人、デュエルディスクを展開してこちらへと向かってきていたではないか。

「遊良が言ってた事よくわかったかも…休む暇が全然無いってこう言う事なんだね。」
「…あぁ。」
「あれ？そこに倒れてるリーゼントはアキレスの野郎じゃねーか？…プハハハハ！おいおい、『シールダー』の癖にもうやられたのか！ざまぁねぇな、俺からランキング奪った罰が当たったんだ！厄介な奴を一人減らしてくれて礼を言う！俺は決闘学園デュエリア校３年、デュエルランキング７８位！人呼んで『レーサー』、ミハエル・ハイウェストだ！さぁ、どっちが俺の相手だ!?」

戦いの前に休みは無い。戦わなければ生き残れない。
終わらぬ戦いに身を投じた彼らを待つのは、止めどなく襲い掛かる戦いの連鎖。
休んでいる暇も無く、次々に現れる対戦相手と、戦意がある内は戦いを続けるしか彼らに道は無いのだ。
「…この相手は俺が貰うぞ？今度は『ずるい』なんて言わないよな？」
「…うん、おっけーおっけー、任せたよ。」

…まだ足に力が入らないのか、ルキは地面にへたり込んだまま。
だったら、ここは自分が戦う番だと言わんばかりに。
遊良はデュエルディスクを展開し、『レーサー』の前に立って名乗りを上げ…

「俺が戦ってやるよ。決闘学園イースト校2年、天城　遊良だ！」
「天城!?…あの『Ｅｘ適正』が無いって…へっ、こりゃ大物だ！【決闘祭】の優勝者の実力、しかと見せてもらおうじゃねーか！」

まだまだ『祭典』は始まったばかり。まだまだ【決島】は続くのみ。
…全員が全員、強敵ばかりのこの島で、戦いに明け暮れ続ける子ども達を全世界が見ている。
故に…
遊良もまた、終わらぬ戦いの音に包まれながら…

―デュエル！

―激闘は、続く

―…

ｅｐ７５「デュエリアの猛者達」

激闘が続く【決島】。
開始から何時間たったのだろう。
今もなお、止む事のない戦いの音が島中に鳴り響き…まだまだ世界中の興奮がヒートアップし続けていることに比例し、太陽は島の真上で燦々と燃え上がっていて。
…しかし、開始直後と全くの同じと言うわけではない。
開始時に２００人も居た選手達は、リアル・ダメージルールによって現在では決闘市側『８５名』、デュエリア側『７９名』となっており…
既に３６名もの失格者が出てしまっているこの現状は、それだけ学生達の戦いが激しいモノなのだと言う事をＴＶの前の者達に証明している事だろう。
…ワンショットを喰らって気を失った者も居れば、激戦を繰り返した事によるダメージの蓄積で倒れてしまう者も居る。
一応、気を失い失格となった者は速やかに救護班に回収され、全員が救護テントに運ばれて手厚い看護を受けている為に命に別状は無いのだが…しかし、それでもなお選手達の勢いは留まる事を知らずに、更に戦いへの熱意を増大し続けている事に違いなく。
そんな、人数が減ってもなお激しい戦いが繰り広げられている【決島】の…
各学園の理事長・学長のために用意された、超巨大モニターが設置された『特別観覧席』に…

―この世の誰よりも重々しい、重厚な声が響き渡った。

「おいおいい、ウチのガキ共の方が減ってんじゃあねぇかよ。」
「ハッ、鍛え方が足りないんじゃないのかい？」
「…チッ、自分の孫が調子いいからって偉そうによぉ…」
「何か言ったかい小龍？」

少々苦々しげに声を漏らしたのは、デュエリア校学長…かつては、【王者】と同格とまで謳われた『逆鱗』、劉玄斎。
そして、それを愉快そうにからかい半分で声をかけたのはサウス校理事長…『烈火』と呼ばれた元プロデュエリスト、獅子原　トウコ。
各校の責任者ではあるのだが、若かりし頃からの顔なじみである分、他に見ている者が居ないこの空間では彼らもどこか昔のような雰囲気で会話をしてしまうだろう。
その言葉の掛け合いを見ているイースト校理事長とウエスト校理事長、そして決闘世界最高幹部の『妖怪』、綿貫　景虎もまた彼らの会話にどこか懐かしさのようなモノを感じている様子であもあり…
…しかし、親しき仲にも確かなる対立の雰囲気が漂うこの一室においては、彼らもただ単に昔話に花を咲かせるつもりなど無いのか。
そう、『何故か』この場に居ないノース校理事長の事はおいておいても、各校の理事長・学長の声は絶対に選手達からは外れてはおらず…
「…とは言え、勝率自体はデュエリア校の方が上ですか…今の所『全勝』を保っているのは決闘市１０名、デュエリア１３名。順当に各校の上位陣が成績を伸ばしていますが…」
そう呟いたイースト校理事長、元シンクロ王者【白鯨】と呼ばれた砺波　浜臣の視線は、中盤に差し掛かった【決島】においてもいまだに『全勝』をキープしている者達の映像を追っていて。
…各校でも、上位の実力を持つ者達。
各校を代表する実力者だけあって、その顔ぶれは双頭たるモノ達ばかり。その中にある学生の例を出せば、プロデュエリストを兄に持つウエスト校３年の竜胆　ミズチや、『烈火』の末孫であるサウス校１年、獅子原　炎馬…
そして、【白鯨】率いるイースト校２年の天宮寺　鷹矢、天城　遊良、高天ヶ原　ルキなどの姿があり…

また、例に挙げた者達の他にも、猛者ばかりの【決島】で未だ勝率を伸ばし続けている者達が居るという現状は、年々レベルが下がってきていると言われている決闘市の学生達の実力が、昨年度までとは比べモノにならない程に上がってきているという事を世界中に思い知らせているに違いないことだろう。

「ノース校は全勝者がおらんのか…また恋介の機嫌が悪くなりそうだわい。」
「ハッ、【紫魔】も難儀なモンだねぇ。ノース校の成績が落ちると、そのしわ寄せが全部【紫魔】に行くだなんて。…まっ、憐造が生きてた頃の方がノース校も強かったんだがねぇ。」
「そう言わんであげとくれトウコちゃん。恋介の奴も【紫魔】として頑張っとるんじゃからのう…ただ、憐造が異常な程に『出来』が良かったんじゃて。」
「おいおいぃ、今更死んじまった憐造の事なんてどうでもいいじゃねぇかよぉ。つーか、全勝って言やぁ、砺波んトコの、『Ｅｘ適正』がねぇっつーガキも全勝か…おい、よかったなぁ砺波ぃ、お気に入りのガキが勝ち続けてるみてぇでよぉ。」
「えぇ…まぁ、この私の教え子なのですからこの程度は当然ですが。」

これだけ激しい戦いの中で、未だ『全勝』をキープしている学生達が居ることは、そのまま明日の決勝へと進める４名への厳選の結果が次第に明確になってきている証拠。
…『全勝者』が１３人も残っているデュエリア側の力もまさしく本物。
【決島】もまだまだ中盤も中盤。油断を許さぬ拮抗したこの状況。明日の『決勝』へと進める４人は、全員が決闘市側かもしれないし、全員がデュエリア側かもしれない。
別に、学園同士の戦いでは無いとは言え…この場に居る決闘市の理事長達の誰もが、自分の学園の学生に『先』へ進んで欲しいと願っている事に先ず間違いは無く。

明日の『決勝』へと進む４人は、決闘市側で唯一『全勝』をキープしている者達の中から現れるであろうと言う希望的観測の元、決闘市側の理事長達の誰もが皆、自分の学園の学生に各校の威信を賭けており…

…そんな、【決島】も中盤に差し掛かった中。

じっと超巨大モニターを眺めていた、デュエリア校学長の劉玄斎は決闘市側の『全勝者』を一人一人その重々しい瞳に映した後…

「鷹峰んトコの孫も全勝かぁ…クハハハハ、アレだけ大見得切っただけはあるなぁおい。こりゃあ、楽しくなってきたぜぇ？」

「…やけに余裕じゃないさね小龍。いくらデュエリアの方が勝率良くたって、アンタん所の生徒の方が残り少ないってのにさ。…この調子だと、本当に鷹峰の孫が優勝しちまうんじゃないかい？」

「そいつぁどうだろうなぁ。数は多ければ良いってモンじゃあねぇ。頭数が多くたって、同士討ちだってあるんだからよぉ。それに…」

誰よりも重々しい笑いを漏らしながら、まるで楽しくなってきたとい言わんばかりに。

そのまま、劉玄斎は決闘市側の全勝者達のモニターを見つめつつ。重く響く、笑いと共に…

「…真打は後から目立つモンだ。特に…ウチのガキ共の上位陣は半端ねぇからなぁ…ほぉら、そろそろ、『全勝』同士のガキ共がぶつかる頃だぜ？」

――…

「…見つけたヨ。」
「む？」

森と隣接した、潮風が吹き荒ぶ海岸線。
倒れているデュエリアの生徒３人を背に、今まさに一仕事終えたかのような雰囲気を醸し出していた鷹矢へと…その背後から、一人の女子生徒が声をかけていた。
あまりに艶やかなるその体を、これ見よがしに見せ付けているかのような、高校生離れした妖艶なる雰囲気…
その高校生離れした美しき体を彩る、見るからに学園の制服では無い体にピッタリと張り付いた特徴的な赤いドレスを着た女生徒…

―決闘学園デュエリア校３年、王（ワン）　ミレイ

「開会式で偉そな事ゆてた【黒翼】の孫アルか…かなりハデに暴れたみたいネ…途中経過確認したけド、ウチの生徒大半失格させてくれてたネ。」
「…その言われ方は好きではないのだが…まぁいい、匂うぞ…貴様…強いな？」
「女の子に匂うなんて言たら駄目ヨ？…でも強いのは否定しないネ。王　ミレイ。デュエリア校の３年生アル。戦りたがてたリョウには悪いケド…【黒翼】の孫…ここで、私が狩らせて貰うヨ。フフ…さ、お姉さんが遊んであげるネ…」

一つ一つの言葉遣いが、男の耳を擽っているかのような色気を放つ王　ミレイ。
撫で回す様な潤んだ視線と、小さく開かれた唇から漏れ出す小さな吐息が、はっきりと男の耳に届けられ…
男女の経験の浅い男ならば、彼女の有り余る艶やかさに目と心を奪われて、デュエルどころではなくなってしまう事だろう。

自身の武器の使い方を熟知しているかのような彼女の立ち振る舞いは、まさに百戦錬磨と言うに相応しい雰囲気となって、ありあり彼女の身体から滲み出ているに違いなく…

―しかし…

そんな、目に見えるほどの色気を前にしても。

「うむ。『サイレンサー』だか『パニッシャー』だか『ボクサー』だか知らんが、丁度デュエリアの奴らに手応えが無くて退屈し始めていた所だ。だが、貴様は他の奴らとは違う匂いがする。…貴様のような奴を待っていたのだ！楽しませて貰うぞ！」

「へェ…そんなに女に慣れてる様には見えないけド…まぁいいネ。【黒翼】の孫がどんなモノ持てるか、見せて貰うとするヨ。」

―…

島の中に群生する生い茂った木々の中の、その森の中腹でのこと。

「…なんで初等部の学生が居るんだ？おい、ここは高等部のお兄さん達の祭典だぜ…」

「ハァ!?今なんつったこのガキャア！」

獣のたてがみのような髪型をした、サウス校1年、獅子原　炎馬へと向かって放たれた、小鳥の鳴き声のような高い声。

それは炎馬の前に立つ、あまりに『幼く見える』女生徒から発せら

れたモノであり…
　その声を発したのは、お世辞にも発育が良いとは言えない小さい体を目一杯に伸ばし、下手をすれば初等部の子ども達の中にも居そうなほどに小柄な一人の女生徒。

―アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン

「ガキッ…!?お、おい、子どもだからって、口の聞き方には気をつけ…」
「気をつけんのはどっちや!デュエリア校のアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン!アンタよりも年上やぞこんアホ垂れ!」
「え!?」

　煌く金色の髪と透き通るような白い肌を、差し込む日差しに輝かせ…炎馬の声を遮って、怒りと共にそう言葉を投げつけるアイナ。
　確かにその真っ直ぐな立ち姿は、美術品の彫刻の様に何とも眩しく美しいとは言え…
　炎馬から見ても…いや、アイナの『本当』の歳を知らぬ者からすれば、例え誰であってもアイナの姿を見ただけで彼女が自分よりも年上だとは分かるはずが無いだろう。
　そのままアイナは、あまりに荒い言葉遣いと、小さい体からは想像もできない程の気迫を持って。
　小鳥のさえずりのような…と言うよりは、怒りを込めた小鳥の喚き声のような甲高い声で、目の前の炎髪の少年へと向かってただただ口を荒げるのみ。

「い、いや、だってどう見たって初等…いや、精々中等部くらいじゃ…」
「何が中等部やねん!お前よりも人生歩んどる先輩やぞコラァ!人を見た目で判断すんなやクソガキ!」
「う…こ、こんなちっこいのに、ね、姉ちゃん並に怖ぇ…つか口悪ぃ…」

―…

小川のせせらぎが木霊する、戦場とは思えぬ穏やかさと静けさを放つ森の奥深く…

「…ウエスト校3年…竜胆　ミズチ。」
「…鍛冶上　刀利…です。」

そこに、この森の空気よりも更に静かな雰囲気を持った2人のデュエリストが対峙していた。
そこに居たのは、ウエスト校の筆頭を飾る3年生の竜胆　ミズチと…デュエリア校の、鍛冶上　刀利。
お互いに口を開く事が少ない、ある意味静かなる者同士の対峙ではあるものの…しかし、ある一定の強さの『壁』を超えている者同士でもあるためか、彼らの間には何か不思議な空気が漂っていて。

「…貴方…何か、持っているの？…雰囲気が…凄く変。」
「…君、『見える』の？」
「…ええ。貴方の周り、歪んでるわ。いえ…歪んでいるのは…『貴方』？」
「…」

…そしてそれ以上に、目の前の不可思議な雰囲気を漂わせている気弱そうな男へと向かって、そう言葉を紡ぐ竜胆　ミズチ。
それは、彼女の持つ『全てを観ることが出来る眼』に、常人には見えぬ『何か』が映った所為なのか…
また、他人が聞いても何を言っているのか分からぬであろう、彼女

の意味不明にも聞こえるその言葉に対しても…刀利は全く動じる事もなく、彼もまたミズチの言った言葉を自分でも理解しているのか、ただただミズチの方を見ているだけ。

「…まぁいいわ、戦えば分かることだもの。貴方が、『何』を持っているのか…」

「…うん、僕にも分かるよ…君は強いから…僕も、隠し通すつもりもない。」

あまりに静かな森の静寂と、あまりに静かな二人の決闘者。

しかしその間にぶつかる言葉は、彼らの静けさからは想像もつかないほどの激しさを交え、それはそのまま彼ら2人の持つ実力が、他の参加者達とは一戦を画す『高み』にあるということを証明しているかのよう。

彼らにしか分からぬ言葉を交わし、彼女らにしか見えぬ『何か』を見据え。

【決島】のルールに従って、静寂のデュエリスト達が今静かにデュエルを始めようとしていて…

―…

「バトル！【E・HERO　ガイア】で【電光千鳥】に攻撃！」

―！

「ぐあああああ！」

崖を背にした海岸の砂浜でのこと。
岩礁に打ち付ける波の音に混ざって、無機質な機械音と一人の男子生徒の悲鳴が鳴り響いた。
…それは紛れも無い、1つの戦いが終わったことを証明しており…
そのデュエルの終了に伴い勝利を決めた大地の英雄がゆっくりとその姿を消していくその光景は、まさに、ＨＥＲＯ使いの一族として知られている『紫魔家』のデュエリストがここで戦っていた事の証とも言えるだろう。
「はぁ…はぁ……な、何なのよ、デュエリアの奴らって。全員変な戦術する奴らばっかりなの？」
そんな荒波が舞う海岸に立っていたのは、『大地の英雄』を象徴に据える、紫魔姓を持つ一人の少女。
―イースト校２年、紫魔　アカリ
「…くそっ、さっさと天城を見つけなきゃいけないってのに…次から次へと沸くんだからキリが無い…」
倒れているデュエリストを睨みつつ、ゆっくりとデュエルディスクを下ろしつつ。
一戦を終え、乱れた息を整えようと深く息を吐いた、地属性の紫魔家を統べる『地紫魔』の、末の娘である彼女。
昨年度までは、これ程の実力など持っていなかったはずだと言うのに…地属性の融合召喚しか許されぬ身ではあるものの、『姉』に習いその属性に極めて特化した戦術を磨いてきた彼女の実力は、まさしく【決島】でも未だ１５戦１５勝という『全勝』をキープし続けられている本物のモノであり…
そう、鬼気迫る表情と、張り詰めた糸ような彼女の雰囲気は、まさ

しく彼女が身につけた『本物』の力に違いなく。

「Ｂｏｏ―Ｄ…【紫魔】のカード…いえ、姉様に関係があるカードを何で天城が…もう言い逃れなんてさせない。今度こそ逃がさないわ…」

そんな彼女の口から零れた、【決島】の勝敗よりも重要な彼女の絶対の『目的』の名。

…昨年度から相当の修練を積んだのか、それとも『誰か』に相当の執念があるのか。

デュエリアの生徒も、決闘市の学生も、前に立ち塞がる者を全て倒してでも。自身の『目的』を早く見つけるため、この島のどこかにいるその最重要かつ絶対の獲物へと狙いを定めている彼女の雰囲気は、穏やかさをまるで知らず…

そして…

次なる標的…彼女にとっては【決島】の優勝よりも重い、他の参加者の誰よりも狙うべきたった一人のイースト校の男子生徒を探すべく。

１つの戦いを終えたアカリが、整わない呼吸をそのままに自らの『目的』へと向かって、再度その足を進めようと砂浜を踏みしめかけた…

―その時だった

「Ｗｏｗ！こいつはＬｕｃｋｙだ！」

「…え？」

彼女の背後から、突如響いた男の声。

岩に打ち付ける荒波の音に混ざってもなお甲高く耳に届くその男の声は、まるで声が自ら周囲の雑音を押しのけてアカリの耳に届いているようでもあり…
アカリが瞬間的に振り返ったソコには、太陽に煌く金髪を潮風になびかせた一人の男子生徒の姿が。
「むさくるしい野郎ばっかりだったってのに、ここへきてこんな美しいレディに出会えるなんて！」
「…は？」
「これはまさに運命だ！この島に来て、初めて出会ったレディがこんなに美しい人だなんて…嗚呼、これを運命と言わず何と言う？」
「な、何なのこいつ…あれ…でもコイツ確か、開会宣言してた…」

その煌く金髪には、アカリも見覚えがあり…
休まらぬ戦場のど真ん中だというのにもかかわらず、規則正しい波音と潮風をＢＧＭにしてアカリへと向かって軟派な言葉を投げかけるこの男子生徒の事は、アカリも開会式のときに見ている。
その名も…

「俺はデュエリア校３年のリョウ・サエグサ。皆からは、『太陽の王子』、『女神に愛された男』、『変態』とも呼ばれているぜ。」
「最後のはただの悪口じゃない…」
「なぁレディ、君の素敵な名前を是非とも教えてくれないか？」
「…イースト校２年、紫魔　アカリよ。」

会話が噛み合っているのか噛み合っていないのか。本能のまま、思ったままの言葉をただ口からつむぎ出しているかのように、ただただ言葉を続けるデュエリア校のリョウ・サエグサ。
…歯が浮くような言葉を、体が痒くなるような台詞を恥ずかしげも無く。
戦いに塗れた島の、全員が敵だというこの状況にも関わらず、アカ

リに言葉を投げかけ続ける彼の頭の中には、一体どんな感情が溢れていると言うのだろう。
　そのまま…
　彼はアカリの名をその耳に入れて、更に言葉を続けるのみ。

「アカリ…美しい名だ。全く、ここが戦いの場所じゃなかったら、今すぐ君とベッドの上で熱く燃え上がりたいところだってのに、どうして戦場で出会ってしまったんだろうな、俺達…」
「え？ちょ、ちょっと…アンタさっきから一人で何言って…」
「きっと俺達、心だけじゃなくて体の相性だって抜群なはずだろ？こうして話しているだけで、君の燃え上がる様な情熱をビシビシ感じてくるんだから。嗚呼、なんて情熱的なレディなんだ…俺もアツくなってくるぜ…」
「…ね、ねぇ、聞いてるの？」
「全く、ここがベッドの上じゃなくて戦場だってことを恨むぜ神様…けど安心してくれ？ベッドの上と同じくらい、君に俺の情熱をぶつけてあげるからＳＡ。」
「…キモッ…」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ、そんなに褒めないでくれよ、レディ。」

　身の毛もよだつ言葉を聞いて、一瞬で警戒心を別の意味でＭＡＸまで引き上げる紫魔　アカリ。
　しかし、当のリョウ・サエグサはアカリに何を言われ、どんな態度を取られても、まるでソレすら彼にとってはご褒美なのだと言わんばかりに更にその感情を喜びで満たすだけ。
　…好き放題の言葉を述べる彼の意思は、まるで下半身と口が連動でもしているかの様に欲望に忠実なモノであり…

　…しかし、彼もただ欲望の言葉を羅列しているわけではない事だけは確かだろう。

何故なら、アレだけアカリに警戒させる程の言葉を並べてはいても、デュエリストの本能が勝っているのか、彼はデュエルディスクをしっかりと胸元へと構え始めているのだ。
軟派な言葉を綴っていても、【決島】に選ばれたデュエリスト同士。この島で出会えば、始まるのは肉体のぶつけ合いではなく純粋なる戦いのみであり…

「アカリ…これは運命だ。今すぐにでも君に出会えたことを神に感謝したい所だが…俺達は男と女の前にデュエリスト同士…どうしても戦うしかないってのが皮肉なモンだ。…さぁレディ、情熱的なデュエルをしよう。」
「…」

…戦いは終わらない、戦わなければ生き残れない。
だからこそ、アカリもまた、身震いを感じさせる言葉を投げかけてくるリョウ・サエグサを前にしても、逃げださずにデュエルディスクを構えなおすのか。
そう、目の前の男がどんな変態であったとしても、この島の中で出会ったのならば戦うのが学生達の定め。
故に…アカリもまた、倒すべき『目的』に辿り着く為に。今はただ、目の前に現れる敵を倒し続けなければならず…
波が打ちつける岩礁の、潮風が吹きつける海岸で…
少しの、休む暇もなく…

―デュエル!!

それは、始まる。

先攻はデュエリア校3年、リョウ・サエグサ。

「俺のターン！俺は魔法カード、【カップ・オブ・エース】を発動！」
「え!?」

デュエルが始まってすぐ。
手札から、ある一枚の魔法カードを発動したリョウ・サエグサ。
…それは運が良ければ自分がドロー、悪ければ相手がドローと言う、純粋かつ分かりやすい、ただの運試しとも言えるようなカードであり…
運否天賦に全てを任せた、この世界では扱う者の方が珍しい、ギャンブル性が高いリスキーなドローカード。

「…こ、こんな始めからそんなギャンブルカードを？アンタ、一体何考えて…」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ、ただの運試しさ！俺とアカリ、どっちに運が向いているのか！最初にハッキリさせておいた方が戦りやすいからＮＡ！さぁ…天に舞え、運命のコイン！」

そして…
リョウの宣言によって、天に浮かぶ金の杯から飛び出した一枚の巨大なコインが宙を舞う。
表―『太陽』のマークが出れば、自分が２枚もドロー出来るという破格の効果を持ってはいても…
裏―『月』のマークが出れば、相手に２枚もドローさせてしまうと言う恐れがあると言うのにもかかわらず、宣言を行うリョウから放たれるその溢れる自信は、彼から何の恐れも感じさせず。
それは、このカードを扱う事など、彼にとっては日常茶飯事なのだと思わせるほどに…

―出た、マークは…

「Ｙｅｓ、ラッキー！マークは太陽！コインは表！俺はデッキから２枚ドロー！」

「…チッ、運がいい奴ね…」

「続いて魔法カード、【予想ＧＵＹ】を発動！自分フィールドにモンスターがいない為、俺はデッキから【クィーンズ・ナイト】を特殊召喚する！更に手札から【キングス・ナイト】を通常召喚し、召喚成功時に【キングス・ナイト】の効果発動！場にクィーンがいる時、デッキから【ジャックス・ナイト】を特殊召喚できる！Ｃｏｍｅ　ｏｎ！絵札の三銃士！」

―!!!

【クィーンズ・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００
【キングス・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００
【ジャックス・ナイト】レベル５
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１０００

…そうして続けさまにリョウが呼び出したのは、絵札の三銃士とも呼ばれる３体の凛々しきナイト達。

通常モンスターが２体に、それぞれのステータスもそれほど高くは無いとは言え…

３枚の絵札がその身を一つに重ねるときにこそその真価が発揮されるとされているソレらを、今の一瞬で揃えたリョウの素早くも淀みない展開は、まさに洗練されたカード捌きとも言えるだろうか。

…そのまま、リョウはこれで終わる気など無いのだと言わんばかりに。
絵札の三銃士へと向かって、一枚のカードを掲げ始め…
「まだまだ行くぜ？俺は手札から魔法カード、【融合】を発動！フィールドの絵札の三銃士を融合させる！さぁ、その身を束ねろ、騎士達よ！」

彼の背後に現れた神秘の渦に、身を投じ始める3体のナイト達。
それはアカリにも見慣れた、『融合』のＥｘ適正を持つ者だけが呼び出せるモンスターとモンスターを重ね合わせることが出来るエフェクトであり…
３枚の絵札の力を超える存在を、今ここに降臨させる為。騎士達が剣を束ね、身を重ねてここに現れるは…

「Ｉｔ⊠ｓ　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ！現れろ、レベル９！【アルカナ　ナイトジョーカー】！」

―！

【アルカナ　ナイトジョーカー】レベル９
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／２５００

天衣無縫の彼方から、剣を引き抜き現れしは天位の称号を持つ究極の融合騎士。
…騎士達の束ねられた力を剣に。荘厳なりし魂を盾に。
あまりに強大な攻撃力と、他を屈服させる威厳を放つ最高位のナイト。

その騎士が放つ有り余る威厳は、３体もの正規素材を必要とする融合モンスターをこれほど容易く呼び出せるリョウ・サエグサというデュエリストの力を、目の前の少女へと知らしめているかのようにも見えたことだろう。

…威風堂々と天に佇み、厳しい目線でアカリを睨む。

「…こんな序盤から攻撃力３８００のモンスター…」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！さぁレディ、君の力を俺に見せてくれ？俺はカードを２枚伏せてターンエンド！」

リョウ・サエグサ　ＬＰ：４０００
手札：５→１枚
場：【アルカナ　ナイトジョーカー】
伏せ：２枚

そして…

天位の騎士から放たれる、他人を屈服させんとするあまりの存在感に守られるかのようにして。

アカリを見据えたリョウ・サエグサは、今静かにそのターンを終え…

「アタシのターン、ドロー！アタシは魔法カード、【ＨＥＲＯアライブ】を発動！デッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を特殊召喚する！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　３００

しかし…リョウの場に佇む天位の騎士にも全く怯まず。

ターンを迎えて即座に、紫魔家の代名詞とも呼べる『英雄』の名を

持つモンスターをデッキから呼び出す紫魔　アカリ。

アカリ　ＬＰ：４０００→２０００

ＬＰを投げ打つ事に、何の恐れもなく。

この程度で怯んで入られないのだと、そう言わんばかりに吼える少女の轟きは、天位の騎士が放つ重圧を全く感じてなどいないかのように、今高々とこの海岸に響き渡って。

「攻撃力３８００がどうしたってのよ！エアーマンの効果発動！デッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン】を手札に加える！続けて【Ｖ・ＨＥＲＯ　ヴァイオン】を召喚し、ヴァイオンの効果でデッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドー・ミスト】を墓地へ送るわ！墓地に送られたシャドー・ミストの効果も発動！更にデッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン】を手札に加え、ヴァイオンの更なる効果！墓地のシャドー・ミストを除外して、デッキから【融合】を手札に加える！」

留まらず、淀みなく。

流れるようにカードを捌き、迷いなくデッキを回転させ続けるアカリの力は、疑いようのない『本物』の力。

…昨年度に遊良の【堕天使】に手も足も出なかった紫魔家の少女が、まさかここまでの力をつけているだなんて誰が想像出来ていただろうか。

ここまでデッキを回転させているにも関わらず、手札が逆に増えているというその暴挙は、彼女の『義姉』の動きにも似たモノでもあり…

「いくわよ…魔法カード、【融合】発動！手札のスパークマンとエッジマンを融合！融合召喚！現れなさい、レベル８！【Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２３００

大地の裂け目を飛び出し現れたのは、黄金の鎧を纏った雷地の英雄。
地属性の融合召喚しか許されていない『地紫魔』なれど、だからこそ『地属性』に特化しているのだと言わんばかりに…
雷電流れる体を奮わせ、天位の騎士へと猛りをぶつけ。ありあまる力を雷撃へと変え、今ここに大地に立つ。

「いくわよ！プラズマヴァイスマンの効果発動！手札を１枚捨てることで、相手の攻撃表示モンスター１体を破壊する！【アルカナ　ナイトジョーカー】を破壊！」
「おぉっと、そうはさせないぜ！【アルカナ　ナイトジョーカー】の効果発動！手札の【ブローバック・ドラゴン】を捨てる事で、プラズマヴァイスマンの効果を無効にする！」

しかし…
雷地の英雄が、天位の騎士へと向かって雷撃を放たんとしたまさにその瞬間。
リョウもまた、アカリの狙いを呼んでいたかのごとく天位の騎士に守りを命じて。
…大地を走る雷撃を掻き消し、電流の余波を盾で薙ぎ払い。
魔法・罠・モンスター…相手が、その３つの内の『何』の効果で天位の騎士を狙ってくるのかと言う事を読み、そしてソレに備えておく為のコストをしっかりと確保しておかなければならない博打を、彼もまたしっかりと読みきっていたのだろう。
「残念だったなレディ、折角の効果が無駄になって。」

「いいえ、これでアンタの手札は0！そして【アルカナ　ナイトジョーカー】はこのターン、もう効果を使えない！これで終わりよ！」
「…へぇ？まるでこのターンで決着を着けるみたいな言い方だな。せっかちなレディだ、また手札を減らしてプラズマヴァイスマンの効果を使うのかい？」
「そんなの必要ないわ！魔法発動、【融合回収】！墓地から【Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン】と【融合】を手札に戻す！再び魔法カード、【融合】発動！場のエアーマンと手札のエッジマンを融合！」
「ほぅ…」

しかし、アカリもまた雷撃を防がれた事を気にも留めず。
まるでリョウが天位の騎士を守る事を、初めから予想していたのだと言わんばかりにアカリは更に動き始めたではないか。
…そう、確かに【アルカナ　ナイトジョーカー】が、いかに強力な効果と攻撃力を持つモンスターであろうとも。
今の自分には、例えどんなモンスターが相手だろうと、まるで障害にすらならないのだとして。
かつて傲慢なだけだった少女が、今では戦意の牙をむき出しにしてただただ激しく吼えるのみ。

…猛る轟き、止まらぬ叫び。

更なる融合を発動し、英雄をここに交わらせ…地属性の紫魔家を統べる、『地紫魔』の象徴を…

―今、ここに。

「融合召喚！現れなさい、レベル6！【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

大地を砕いて姿を現し、岩盤の奥底から目覚めしは、地属性の紫魔を統べる『地紫魔』の象徴とも言える、大地の英雄の正の半身。
…磨き上げられた鉱石よりも、なお硬き英雄のその姿。
岩盤の塊を抉って現れ、大地の恵みをその腕に集め…
天位の騎士を粉砕すべく、その巨大な腕槌を天に向かって高らかに掲げる。

「Ｗｏｗ！こいつぁＧｒａｔｅなモンスターだ！…わかるぜ、こいつがレディのデッキのエースだってな。ビシビシ感じるぜ、君のアツいオーラでイっちまいそうだ…」
「…いちいち気持ち悪い奴ね…【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】の効果発動！融合召喚成功時、【アルカナ　ナイトジョーカー】の攻撃力を半分にして、ガイアの攻撃力に加える！今度は防げないわよ、行け、ガイア！」
「いいや、まだだ！リバースカードオープン！速攻魔法、【融合解除】！【アルカナ　ナイトジョーカー】を分離し、墓地から絵札の三銃士を守備表示で特殊召喚する！」

―！

【クィーンズ・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００
【キングス・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００
【ジャックス・ナイト】レベル５
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１０００

それでも悉く(ことごと)、須(すべか)らく、アカリの打つ手を華麗に交わし続けるリョウ・サエグサ。
効果と効果が応酬し、入れ替わり立ち代りモンスター達が現れては消えるこのデュエルの勢いは、とても後攻1ターン目とは思えぬ代物となりて世界中へと発信されており…

「残念だったなアカリ！君のＨＥＲＯもＧｒｅａｔだが、このターンの攻撃じゃあ俺をイかせる事は出来な…」
「まだよ！魔法カード、【ミラクル・フュージョン】発動！さっきコストで捨てたワイルドマンと墓地のエッジマンを除外融合！」
「Ｗｈａｔ!?」

しかし、それでもアカリは止まらない。
激しく、激しく…
それはまるで、爆発し続ける火山のような激しさ。
ソレを止める気配のない彼女の激しい展開は、一種の執念にも似たモノを放っており…
それは彼女の実力もまた、学生レベルを超えた…実力の『壁』を一つ超えたところにあるからに他ならない。
元々、地属性を統べる『地紫魔』の末娘として、才能も血筋も充分なモノを持っていたとは言え。『義姉』を失った事で、今まで彼女の中にあった甘えや驕りを捨て去り、実力の『壁』を超えるために彼女もまた血反吐を吐く思いをしてきたのだろう。
まるで『執念』。その彼女の執念を体現して、今ここに現れしは…

「融合召喚！現れなさい、レベル８！【Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン】」

――！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２３００

黄金の鎧を身に纏い、蛮族の大剣を背に乗せて…大地の裂け目より飛び上がりしは、野生の力を解放した英雄の姿。
その巨大な大剣の一撃は、目の前に立ち塞がる全ての者を切り裂く刃となりて。少女の叫びに応えんと、今ここに大地に立つ。

「Ｏｈ…難しい指定融合をこうも簡単に…まさかここまでとは…」
「減らず口もこれで終わりよ！ワイルドジャギーマンは相手モンスター全てに攻撃出来る！これで…」
「そいつはちとマズいな…だったら罠カード、【強欲な瓶】発動！俺はデッキから１枚ドロー！」
「そんなヤケクソのドローで何が出来るってのよ！行くわよ、バトル！ワイルドジャギーマン！絵札の三銃士を蹴散らしなさい！」

―!!!

そして…飄々とアカリの攻気を躱し続けていたリョウの場に、ついにソレは届くのか。
守りを固める三銃士の真ん中に飛び込んで、野生の英雄がその大剣を荒々しく振り回し…
その野蛮なる剣撃はとても洗練された剣技では無いものの、あまりに強大な腕力で振り回される蛮剣は、３体のナイト達の剣技の応酬を受けてもなお止まらぬ勢いとなりて、一瞬で３体の絵札の三銃士を蹴散らし粉砕してしまって。
「これで終わりよ！先ずは【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】で、アイツにダイレクトアタック！」

絵札の三銃士を蹴散らしたその刹那。
間髪いれずに、次は即座に大地の英雄に攻撃を命じた紫魔　アカリ。
相手の抵抗を全て押さえつけ、相手の壁を全て粉砕し、相手に反撃の余地を残さぬ今の彼女のその容赦の無い戦い方は…
過去、憎き少年に、完膚なきまでに自分が叩き潰された時のモノに似ていた事に、彼女自身は気付いているのだろうか。

…しかし、今の彼女にはそんな事を考えている暇など無く。

唸りを上げる地殻の豪腕、地面を揺らす大地の鉄腕。
一枚だけの、やけっぱちのドローをした事が一体何になると言うのだ。まるでそう言わんばかりの少女の叫びは、あまりの猛りとなりて大地の英雄へと伝わり…
その昂ぶる双腕が、灼熱と化した地熱を纏い、今まさに丸裸となった少年の場へと向けて大地の英雄が駆け出し始めた…

―その時だった。

「…いいやアカリ、どうやら女神は、俺に祝福にキスをするようだぜ？…手札から、【煌々たる逆転の女神】の効果発動！」
「なっ!?」
―突如
大地の英雄のその眼前に、唐突に現れた一人の女神。
それは、絶体絶命の危機にこそ真価を発揮すると言われる女神であ

り…見目麗しい煌々の美神が、その眼を見開いたと思ったその刹那。

「惜しかったな。俺が女神以外のカードを持たない時！女神を手札コストに…アカリのカードを全て破壊する！」

―！

女神の背後から後光が煌き始めたと思うと、目を開けていられない程の光が当たり一面を包み込み…

それに連動して、周囲で『何か』が爆発していく音だけがこのデュエルを見ていた者達の耳に確かに届き始めたではないか。

「まだだぜレディ！女神が全てを破壊した後、俺はデッキからモンスターを１体特殊召喚出来る！Ｃｏｍｅ　ｏｎ！俺のマグナム、【リボルバー・ドラゴン】！」

―！

【リボルバー・ドラゴン】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

それだけでは終わらず。

眩んだ目を押し、痛む眼球に涙を浮かべながら、無理矢理に目を抉じ開けたアカリの視界に飛び込んできたのは、砲音を咆哮とする漆黒の銃竜。

…鈍く光る３つの銃身、怪しく回る１８の弾倉。

命を撃ち抜く形をしているソレは、禍々しい狂気を孕みつつ…あまりに洗練された銃器として、一種の美しさすら醸しだしていて。

「【煌々たる逆転の女神】って…あの時の【強欲な瓶】で…？で、でも何で都合よくそんなカード引けるのよ…それにまたギャンブルカード…どうなってるの、コイツのデュエルは…」
「形勢逆転！さぁどうするアカリ、このままじゃ、次のターンを乗り切れないぜ!?」
「ぐ…ま、まだよ！バトルフェイズを終了し、魔法カード、【ＨＥＲＯの遺産】発動！墓地のガイアとプラズマヴァイスマンをＥｘデッキに戻して、デッキから３枚ドロー！…よし、魔法カード、【地砕き】発動！【リボルバー・ドラゴン】を破壊する！」
「Ｗｈａｔ!?」

―！

それでもどうにか勢いを止めず、即座に動きだす紫魔　アカリ。
地属性に長けた彼女が引き寄せた、敵を地の底に引きずり落とすそのカードを使用し。すぐにでも、体制を立て直さんとして…

（アイツの手札は０…）

アレだけの展開を全て破壊され、突如現れた漆黒の銃竜を前にしているにもかかわらず、まだまだ戦意を失わず動きを止めない彼女。
こうなってしまうなら、雷地の英雄の貫通効果で少しでもダメージを与えておくべきだったのだろうか。
今更そんなコトを後悔しても時既に遅く…リョウの理解しがたいデュエルを前にしても、戦況を見てどうにか最後まで希望を繋ぎ…

「更に【死者蘇生】を発動し、墓地から【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を守備表示で特殊召喚！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　３００

「エアーマンの効果で、デッキから2体目のエアーマンを手札に加えるわ！…カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

紫魔　アカリ　ＬＰ：４０００→２０００
手札：6→1枚
場：【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
伏せ：1枚

果たして…このターンで、一体何体のモンスターが現れては消えていったのだろう。
とても後攻1ターン目に行われるような攻防とは思えぬ効果と効果の応酬が繰り広げられ、目まぐるしい展開の嵐と激しすぎるカードの連続使用によって、既にリョウの手札は0でアカリの手札は1枚。
…しかし、一時は勝利を掴み掛けたアカリの意地が、ここへ来て勝ったのか。
そう、手札も、モンスターも、伏せカードも。何も残ってはいないリョウに対し、アカリの場には一体の英雄と一枚の伏せカードが存在し、このデュエルをＴＶで観ている誰もが既にアカリの勝利は確実なモノと思っているに違いない事だろう。
…まさにアカリにとっては正念場で、リョウにとっては崖っぷち。
このデュエルを観ている見えない観客達の誰もがアカリの勝利を確信しており…
そんな、誰が見ても勝利に近いであろうアカリを見て…

「Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ！最後まで勝負を諦めない君は何て美しいんだ！」
「アンタ…さっきからアタシの事バカにしてんの？レディレディって煩いのよ！女だからって見下してるわけ!?」
「そいつはＮｏだ。最後まで諦めないレディを誰がバカになんてするもんか。…それに、俺は俺より強いレディがこの世に居ることを知っ

ている。だからこそ、俺は一人のデュエリストとして、君を倒したいと心からそう思っているだけ！そしてあわよくば、ベッドの上で夜のデュエルをしたいと思っているだけＳＡ！」
「ぐ、こ、この変態！さっきからいちいちキモいのよ！」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！レディからのお小言はご褒美さ！もっと言ってくれても構わないんだぜレディ。」
「…は、話が通じない…」

追い込まれているにもかかわらず、何も残っていないにもかかわらず。
言葉を改めるわけでもなく、全くもって焦りを見せはしないリョウ・サエグサ。
…誰が見ても崖っぷちであろう状況だと言うのに、彼のその余裕は一体どこから出てくるのだろうか。
根拠の無い自信と言われても仕方が無いような、誰の目にも明らかな絶体絶命だというのに。
どこまでも飄々とした態度と軟派な言葉で、彼はアカリの琴線に素手で触れ続けるだけ。

「俺はどんな時でもレディへの敬意は忘れない。存在自体が美しい、レディと言う全ての女性を愛するのが俺の使命なんだからＮＡ！」
「…なんなのよコイツ…」
「まっ、それでもあくまでデュエルはデュエル。夜のデュエルも好きだが…こうして、アカリみたいな強いレディと本物のデュエルをするのも俺は好きなのさ。俺は今、心から楽しんでいる！君みたいな素敵なレディとのデュエルは、俺にはこれ以上ない至福なのＳＡ！」
「ぐ…け、けどアンタの手札は０でモンスターも０！どう足掻いても、次のドローじゃこの場は突破できな…」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ！行くぜ、俺のターン、ドロー！」

恐れを出さず、迷いを見せず。
このドローが全てを決めると言うのに、リョウはまるで恐怖を感じさせる事も無く当然のようにドローをするだけ。
…その態度はまるで『異質』。
そう、手札は0、モンスターも伏せカードも無いというこの状況は、例えプロデュエリストであったとしても乗り越える事は用意ではない。
特に今の彼のような、たった一枚のドローにこのデュエルの全てを賭けなければいけないという重圧は…常に修羅場に身を置くプロであっても、並大抵の精神では乗り越えられないはずだと言うのに。
それでも、彼の雰囲気はその重圧を全く感じていないかのよう。
…いや、実際に感じてはいないのだろう。リョウのその形容し難い楽観は、どこまでもアカリには理解し難い代物となりて…

―引いた、カードは…

「Ｙｅｓ！【カップ・オブ・エース】発動！」
「なっ、ま、またギャンブルカード!?」

ここへ来て、この場において、この状況にもかかわらず。
…あろうことか彼の引いたカードは、先のターンの初めにも使ったギャンブルカード。
普通であればありえない。常人であれば発動も出来ない。この状況におかれて、ギャンブルに命を預けるなんて。
…しかし、彼はソレを発動することになんの恐れも抱いておらず。
リョウはただただ高らかに、その発動を宣言するのみ。

「な、何なの…何なの、アンタのそのデッキ！そんなギャンブルが何時までも上手く行くわけないでしょ！」

「心配してくれてありがとよレディ！でも大丈夫！俺はここで終わる男じゃないってのを、今君に証明してみせる！さぁ天に舞え、運命のコイン！」

そうして…

アカリの言葉を聞いているのか、それとも全く聞いてないのか。

全てが決まる瞬間であっても、何かが狂ったようなリョウ・サエグサの宣言により、金の聖杯から飛び出したコインが天に舞う。

普通に考えれば、彼はここまで全ての博打に打ち勝ってきたのだから、『運の流れ』的にはそろそろ『負』の方に傾いてきていてもおかしくはないはず。

…そうそう上手くいくわけがない。

そんなコトを考えているかのようなアカリの視線は、固唾を飲んでコインを見つめていて…

—出た、マークは…

「Ｙｅｓ！ラッキー！マークは太陽！コインは表！俺はカードを２枚ドロー！」

「また表!?さ、さっきから全部当たってるじゃない！一体どうなってるのよ！」

「言ったろ？今日の俺には、勝利の女神がついてるってな！【死者蘇生】発動！墓地から【リボルバー・ドラゴン】を特殊召喚！」

—！

【リボルバー・ドラゴン】レベル７

ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

「まだだ！続けて【リボルバー・ドラゴン】の効果発動！【リボルバー・ドラゴン】はコイントスを３回行い、２回以上『表』が出れば相手モンスターを１体破壊できる！さぁ、またまた運命の時だ！天に舞え、３枚の運命のコイン！」

そして…

休む間も無く、気を抜く暇も無く。

再び天に、３枚のコインが現れる。

ギャンブルに次ぐギャンブルの連続、まったく恐れず博打の継続。

ソレらが三砲の銃竜の、それぞれの砲門の上で勢い良く回転を始め…ソレに連動しているかのように、【リボルバー・ドラゴン】の弾倉も唸りを上げて回り始め…

―出た、マークは…

「Ｙｅｓ！コインは３枚とも全て『表』だ！」

「なっ!?」

「神よ！俺を愛してくれる勝利の女神よ！アカリという、強くて素敵なレディと戦わせてくれた事に心から感謝するぜ！【リボルバー・ドラゴン】の効果発動！アカリのモンスターを打ち抜け！」

―！

あまりに信じがたいリョウの豪運。あまりに人間離れした狂気の強運。

普通であればありえない。これまで彼が出したコインのマークは

全て『太陽』。全てがいい方に傾いている『表』を指しているこの現状は、アカリにしてみれば全く持って理解し難い現象であることなど最早言うまでも無く。
…デュエルディスクが下す判定は絶対で、実際のコインを使ったギャンブルと違いイカサマなんて入り込む余地など無いにもかかわらず。
今目の前で確かに起こっている現象には、アレだけ戦意を尖らせていた流石のアカリもその表情がみるみる引きつらせていくだけ。

「おっと、まだだぜレディ?その伏せカードもきっちり破壊させてもらう!速攻魔法、【サイコロン】発動!」
「ま、またギャンブルカード…なんなのよ、一体何なのよアンタ!普通にデュエルできないわけ?!」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!そんなに褒めないでくれよレディ!さぁ、コレが最後のギャンブルだ!天に舞え、運命のダイス!」

そしてリョウの最後の手札から飛び出してきたのは、突風を生み出すことが出来る『可能性』を秘めた一個のダイス。
…しかし、この状況で、リョウが発動した【サイコロン】でアカリの伏せカードを破壊するには、２・３・４の数値を出さなければ意味が無い。
そう、こんな博打を打たなくても、普通に考えれば【サイコロン】よりも【サイクロン】をデッキに入れたほうが確実であるというのに…
…最初の【カップ・オブ・エース】でのコイントス。
…【アルカナ　ナイトジョーカー】の効果の３種の博打。
…【強欲な瓶】による窮地のドローに加え、ここへ来ての連続したコイントスにダイスロールと、まさにリョウ・サエグサのデュエルは常人では理解など全く出来ない、ギャンブルに狂った者のソレ。
普通の精神では、とても入れようとは思えないであろうソレらのカードを、彼はさも当たり前のようにデッキに投入しているのだ。
常人では戦う事すら難しいであろうソレらを、手足のように操る彼

の精神は一体どうなっているのだろうか。
精神をすり減らすことに快感を覚えているかのような、強欲渦巻く深い目の奥で見つめる先にあるダイスから…

出た、数字は…

「Ｙｅｓ！ダイスは４、伏せカードを１枚破壊できる！」
「そんな!?」
「俺はアカリの伏せカード…【砂塵のバリア―ダスト・フォース―】を破壊するＺＥ！」
「は!?う、嘘よ！なんで伏せカードがダスト・フォースって事まで!?」
「ただのカンさ！でも予想的中のようだな！そら、バリア粉砕！」

―！

そして…
天に浮かぶダイスを軸に、突如として巻き起こった竜巻がカードを砕く。
…『カン』などとは言っていても、リョウにははっきりとアカリの伏せカードが『何』なのかが見えていたのだろう。
でなければ、全くのノーヒントでアカリが伏せていたカードを的中させる事など、イカサマでもしなければ出来はしない。
…それは単純に、彼がアカリとは見ている『高さ』が違うから出来る芸当であり…

「…こんな馬鹿なことって」

…言葉選びに難があっても。女癖が悪くとも。
持って生まれた類稀なる強すぎる『運』と、それを完全に飼い馴らせる『度胸』。

『先』の地平に辿り着いた者からすれば、『壁』を超えた所に居る者は文字通り『レベルが違う』と言う事であり…
多少、自分の欲望に正直ではあっても、『運』と『度胸』、その双方を己のカッコたるモノとして昇華させているリョウ・サエグサの『実力』は、疑いようの無いまさしく本物。

故に…

相手が誰であろうとも。どんなカードが相手でも。
己の『運』と『度胸』を持って、如何なる敵にも『勝機』を見出す彼の事を、このデュエリアはこう呼び称えている。

―勝利の女神に愛された、命知らずの決闘者

―決闘学園デュエリア校、デュエルランキング『第1位』

―『ギャンブラー』

―リョウ・サエグサ

「Ｇｏｏｄ　Ｂｙｅ、レディ。今度はベッドの上でお相手願うぜ？【リボルバー・ドラゴン】で、アカリにダイレクトアタック！鋼鉄の…フルメタル・ジャケット！」

―！

「きゃあぁぁぁあ!?」

紫魔　アカリ　ＬＰ：２０００→０（―６００）

―ピー…

渇いた発砲の銃声と、無機質な機械音がこの海岸に鳴り響く。
ソレと同時に、撃ち抜かれた少女はまるで本物の銃弾に撃たれたかのように後ろへと吹き飛んでしまいって…
そのまま慈悲は無く、リアル・ダメージルールに乗っ取り、容赦の無い電流が砂浜に倒れた少女を襲う。

「あっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「許してくれアカリ…これはデュエル…俺は本気で君を傷つけたいわけじゃない。」
「あっ…ぐ…ぅ…」

砂浜がクッションになったのか、弾き飛ばされてもどうにか気を失わずに済んだアカリを見て…
慈愛に満ちた視線を向けるリョウの表情は、狼ではなく紳士の顔にも見えるモノ。
…しかし、ここで『男』として『女』に手を差し伸べる事は『デュエリスト』の礼儀では無い事を彼も分かっているからこそ。
戦いの場であるこの【決島】では、あえてアカリには手を差し伸べず、彼は哀しみを感じさせる背中をアカリに向けて歩き出すだけ。
そんな、紳士でもあり狼でもあり、なおかつ本物の決闘者でもある

リョウ・サエグサを観て…

「リョウ・サエグサのあの『運』…まさかあの子、学生で『極』の頂に到達してるってのかい？」

「いいや、学生の間に『極』に辿り着ける奴ぁ、姉御ん所の琥珀ぐれぇだろうぜぇ？…まぁ、琥珀の野郎はバグみてぇな突然変異だったけどよぉ…けど、リョウの『運』も、ソコに近いレベルだって事は否定しねぇ。何せ、アイツは既に『壁』を超えた『先』に到達してるんだからよぉ。」

「…確かにあの年代の子どもらの中には、時々『先』に到達できる小僧どもが現れるけれどもねぇ…」

「…実力の『壁』を超えたその『先』…プロのトップランカーが身を置く段階に、まさか学生で到達している者が居るとは…」

彼の狂ったような『運』を見た『烈火』と【白鯨】が、思わず声を漏らしたのも無理は無い。

—実力の『壁』を超え、その『先』を更に越えた、『極』の頂…

それすなわち、世界に轟く【王者】達や、彼らに次ぐ力を持った『異名』を持つ決闘者だけが辿り着ける、常人では足を踏み入れる事すら叶わぬ天上の場所。

この長い世界の歴史で見ても、学生の段階でその『極』の頂に至れた者など現シンクロ王者【白竜】である新堂　琥珀しか存在しておらず…

まだその『極』の頂には程遠いとは言え、リョウが今居る場所は学生レベルとプロを分ける実力の『壁』を、更に超えたその『先』の段階。

実力の『壁』を超えてプロとなった者達が、才能に溺れず鍛錬を積み…

果てしなく続く苦行を乗り越え、そこからさらに果てしない戦いを

経て、ようやく選ばれた者だけが進むチャンスを与えられるかどうかという、永遠に彷徨える『先』の地平。
しかし、まさか選ばれたプロ達ですら到達できる者の少ないその『先』の地平に、学生の身分で到達している者が居るというのは、同じ年代の学生達を預る決闘市側の理事長達からすれば本当に心から驚愕に値する事なのだろう。
…恐るべき才能と、恐るべき実力と、恐るべき運に恐るべき精神。
それらをありありと見せ付けたリョウ・サエグサというデュエリアの男子生徒に対し、決闘市側の理事長達の視線が一層鋭くなり…

―そんな、決闘市の理事長達を見て。

「…おいテメェら、一応言っとくがよぉ…ウチで『先』に辿り着いてんのは、何もリョウだけじゃあねーんだぜぇ？」

―…

「ぐっ、ち、ちっこいのに強ぇ…」
「調子乗んなやクソガキが！身の程を知らんかい！【デストーイ・サーベル・タイガー】、【デストーイ・シザー・タイガー】、【デストーイ・チェーン・シープ】で攻撃ぃ！」
―!!!
「うわぁぁあ！」
炎馬　ＬＰ：３８００→０
島の中に群生する生い茂った木々の中の、その森の中腹でのこと。

昨年度のデュエルフェスタの優勝者の猛攻を、もろに喰らった炎馬のＬＰが一瞬で溶けてしまって。

―…

「…貴方…どうして、それを…？」

小川のせせらぎが木霊する、戦場とは思えぬ穏やかさと静けさを放つ森の奥深く…

言葉を失っているミズチの眼前には…

【地霊神グランソイル】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

轟き揺れる地響きを放ち、古の眠りから目覚めし大地。

偏に『神』とも呼ばれることのあるソレは、その特異な召喚条件による扱いの難しさと、まるで意思を持っているかの如く並の決闘者に扱われることを嫌い…

その事から現代では、【決闘世界】がその所持者を選び、そして扱うことを許されるという、まさに神にも準ずるカード。

「馬鹿な…学生が…【霊神】を操るなど…」

「クハハハハ、どうだぁ砺波ぃ。刀利はウチでも特に特別な奴でよぉ。」

「フォッフォッフォ、よくぞここまで持ち直したモノじゃ。…死にそうな目をしていたあの子がのぅ…」

そう、同じく【霊神】の一体…【氷霊神】の所持を許可されている元シンクロ王者【白鯨】からすれば、【霊神】の所持が許可されることが一体どれだけの責務を持つのかを知っているからこそ…

誰にでも扱えるカードでは無いソレを、たかが一介の生徒がこの場に呼び出しているその光景は、あまりに不自然かつ不思議な光景であり…

「…バトル。【地霊神グランソイル】と【スクラップ・ドラゴン】で、ダイレクトアタック。」

―!

…島の中のあちこちから、響き渡るは猛襲の戦音。

それは猛者が集うデュエリア校の、選ばれた１００人の中でも更に上位の生徒達による、決して留まらぬ進撃の音。

中盤にさしかかった【決島】で、デュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサを筆頭に、実力の『壁』を超え、更にその『先』の地平へと足を踏み入れているデュエリアの生徒達による進撃は留まる事を知らず。

また、リョウやアイナ達が戦っていた場所とは別の場所でも、デュエリア校の『全勝者』達による猛襲は巻き起こっている。

中にはリョウやアイナ、刀利のように、決闘市側の『全勝者』を倒した者も居り…

決闘市側の実力者達が次々とやられていくその猛攻は、デュエリアの上位陣の力を知らしめているかのように激しくも高位のモノ。

序盤は勢いを保てていても、長期戦になればなるほど自力の差は明確になってくる。

特に中盤にさしかかった現時点では、戦いへの疲れを覚えてしまっ

た者から順に黒星を与えられてしまい…
今の一度の戦いで、決闘市側の『全勝者』が１０名から一気に３名にまで減ってしまったこの一瞬の出来事は、まさに決闘市にしてみれば悪夢としか言い様の無い出来事と言えるだろう。

―しかし…

「…ちぇっ、私だけ貧乏くじ引いたネ…」
「何をブツブツ言っている！俺は２体のガジェットで、オーバーレイネットワークを構築！」

その中においても一人だけ、高らかに轟く怒涛の咆哮。
昨年度のデュエリアで開催された【デュエルフェスタ】の第３位であり、デュエルランキング『第２位』、慈悲なき『マフィア』と呼ばれる王　ミレイを相手にしているにも関わらず…
森と隣接した、潮風が吹き荒ぶ海岸線で。
デュエリア勢の猛攻の流れに逆らうどころか、一人で押し返すかの如き勢いで叫ぶは、唯我独尊の男の雄叫び。

―オーバーレイネットワークを、構築。

およそ、この世界のエクシーズ召喚のための口上ではないソレを、鷹矢は口にして。
…呼び出すは、彼だけが持つ特別なエクシーズモンスター。
昨年度の【決闘祭】の決勝戦、その最中に彼自身が創造したソレを…この世界において、彼にだけ許されたその宣言の通りに。

「現れろ、『Ｎｏ．４４』！」

世界に轟く王者【黒翼】の、遺伝子を色濃く受け継ぐその立ち振る舞いはまさに唯我独尊。

祖父である王者【黒翼】から受け継いだ才能と、元王者【白鯨】による壮絶なる修業…

―そして何より、夏休みに遭遇した【化物】との一戦の経験により、その力を更なる高みへと上昇させた鷹矢の叫びが…

―今、ここに。

「天に広げし純白の翼！今大地を蹴り上げ、大いなる天空を駆け巡れ！エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！【Ｎｏ．４４　白天馬スカイ・ペガサス】！」

―！

【Ｎｏ．４４　白天馬スカイ・ペガサス】ランク４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１６００

現れたのは、混じり気の無い純白の羽を広げた、天に飛び立つ白き天馬。

先のターンに召喚されていた、鷹矢の切り札である【ダーク・リベリオン】と並び立ち…

「さっきと違う【Ｎｏ．】…もう無茶苦茶ネ…」

「【Ｎｏ．４４】の効果発動！オーバーレイ・ユニットを一つ使い、貴様の場の【ＸＸ―セイバー　ガトムズ】を破壊する！」

―！

そして…

降り注ぐは無数の鋭い白羽。

雨の如しソレらによって、ミレイのモンスターが成す術なく切り裂かれ…

ＬＰが残り９００の王　ミレイにはもう、スカイ・ペガサスの効果を止めることも許されておらず。

「ここまでネ…全く、とんでもない奴ヨ…」

「これで終わりだ！バトル！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】で、あの女にダイレクトアタック！」

先のターンに、その攻撃力を３７５０まで上昇させた【黒翼】が天に舞う。

…世界に轟く翼を広げ、鋭き牙を煌かせ。

自らの前に立ち塞がりし、全ての愚かなる者を一撃の下に粉砕せんと、猛り狂った咆哮が今、【決島】に響き渡り…

「残魔黒刃！ニルヴァー・ストライク！」

―！

「くっ、アァァァァァ！」

王　ミレイ　ＬＰ…９００→０（―２８５０）

ピー…

艶やかや悲鳴と交わるは、勝敗を決める無機質な機械音。
デュエリア校の猛襲など、知る由も無ければ知ったことでもないからこそ。
どこまでも唯我独尊に、天上天下に咆哮を轟かせる【黒翼】を従え…
自らの進撃は誰にも止めさせるつもりも無い鷹矢の猛りは、勝負を重ねる毎に更に上昇の一途を辿っていた。

――…

【決島】の中の大きな森の、そのどこかとある場所。
この島の中心に聳える大きな休火山に面した、森と山の境目の場所で…

「…デュエルをしましょう、高天ヶ原さん？」
「え？ど、どうしてあなたが？」

デュエルの相手を探し森を迷い歩いていたルキは、そこで思いも寄らぬ人物と対面を果たしていた。
それは、ルキにとってはあまりにも意外な人物であり…
夏の日差しに良く映える、闇に溶けるその褐色の肌。どこまでも綺

麗に長く伸びた、夜よりもなお深いその漆黒の髪。
それは遊良が生きる指標となった、『とある人物』に瓜二つだという謎の女生徒。

―釈迦堂　ユイ

「…どうして…とは？」
「え？…だ、だって…その…」

一応、『クラスメート』として夏休みの直前に転入してきた彼女の事は、ルキだって知ってはいるものの…
しかし、ルキの記憶が正しければ、釈迦堂　ユイがこの場に居ることは絶対にありえないと彼女も分かっているからこそ言葉に詰まってしまっていて…
そう、ルキが今驚いているのは、釈迦堂　ユイという転入生が今こうして【決島】の場に『居ること自体』についてであり…
それは何故なら…

「釈迦堂さんって確か…その、だ、代表じゃなかったはずじゃ…」
「…そうでしたか？…けれど、よく思い出してみてください高天ヶ原さん。代表者の発表の時、代表者の送別会の時、出発の時…開会式の時を…」
「え…」

しかし…
不思議がっているルキを見て、徐にそう言葉を告げる釈迦堂　ユイ。
…そして、釈迦堂　ユイが口を開いたその瞬間。
突然ルキの頭の中に、耳鳴りにも似た金切り音が頭に響き…まる

で、頭蓋内に直接手を入れられたかのような不思議な感覚がルキを襲い始めて。

「…私は最初から…居ましたよ？」

「あ…えっ…と…」

…頭が、痛い。

目の前の転入生は、一体何を言っているのだろう。

頭がボーっとしてくるような、視線が遠くに持っていかれるような…そんな不思議な感覚がルキの中に現れ始め、それに伴いルキの耳に目の前の釈迦堂　ユイの声だけが嫌に耳の中に酷く反響し始める。

…それと同時に、『何か』がルキの記憶の上を覆い始め…

―そうして…

「……う、うん…そ、そうだったかも…ごめんなさい…」

「では…デュエルをしましょう、高天ヶ原さん。」

「…そうだね、イースト校同士だけど、出会ったら戦わなきゃいけないんだもんね。」

先ほどまで、一体何に対して自分は不思議がっていたのだろう。

そんな、何を考えていたのかすら思い出せなくなってしまったルキは、目の前に現れた『次の相手』に対してデュエルディスクを構え始めるしかなく。

それに倣い、ルキの前に立つ黒い少女もまた、徐に自らのデュエルディスクを構え始め…

「…フフッ、お手柔らかに。」

「う、うん…よろしくお願いします…」

―とうとう、不穏が動き始めた。

―……

ｅｐ７６「這い寄るモノ」

「…なぁ木蓮。アンタ、どう思う」
「…どう、とは…何に対してでしょう？」

各校の理事長、学長の為に特別に用意された、超巨大モニターが設置された『特別観覧席』での事。
つい先ほど同時に起こった、デュエリアの猛者達の進撃に対し…
サウス校理事長である獅子原　トウコは、隣に座っていたウエスト校理事長、李　木蓮に対して、そう声を投げかけていた。

「さっきのデュエリア校の上位陣のあの強さに決まってるさね。学生の間に『先』に辿り着けるガキなんて、数十年に一人出てくるかどうかだってのに…それがざっと見ただけでも３～４人は居るなんて、はっきり言って異常さよ。」
「…そうですね。私もウエスト校で最も強いミズチ君が負けてしまうとは思いませんでした。彼女も来年度には確実にプロになれる力を持っていたのですが…まさか劉義兄さんの学園の子ども達がここまでとは。」
「それに鷹峰の孫も、どうやら大口叩くだけの事はあったみたいさね。…全く、ウチの孫もやられちまったし、一体どんな育て方してるってのかねぇ小龍の奴。」

それは、先ほど行われたデュエリア校の『全勝者』達と、決闘市側の『全勝者』達とのデュエルの結果について。
そう、両校の実力者達は皆、学生レベルの上…実力の『壁』を超えた、プロになれる素質を持った者たちばかりだったというのにもかかわらず…
そんな決闘市側のデュエリストを、『一人』を除いて一方的に吹き飛ばしたデュエリアのデュエリスト達の力は、まさかプロのトップレベルの者達が居る領域…

―実力の『壁』を超えた、『先』の地平に辿り着いた者達だったのだ。
…普通であればありえない。学生の内に、『先』の地平に辿り着ける者が現れることなど。
何せ、実力の『壁』を超え、魔窟と呼ばれるプロの世界に立ち入った者達の中でも、そこから更に『先』の地平に足を踏み入れられるモノは極僅かな限られた者達だけ。
才能に溢れ、己を磨き…他人には真似できない自分だけのデュエルを確立し、苦行とも思える果てしない戦いの果ての果てに、ようやく踏み入る事を許される『壁』を超えた更なる地平。
それは、この場に集った決闘界の重鎮達…各学園の理事長達の目からみても、デュエリア校の上位陣の『数人』がその『先』の地平に到達しているという見解に至ったことは、長年多くの学生達を見てきた彼等からしても異常事態であり非常事態とも言えるのか。
まぁ、そもそも実力の『壁』を超えられる者でさえ、数年で数えられる程度現れればいい方。それが、各学園にこれ程の人数も居るという事態でさえ、例年に無い珍しい黄金期ではあるのだが…

「これで決闘市で『全勝』なのは浜臣んトコのガキ共だけかい。アタシが鍛えてやった天城と高天ヶ原はともかく、鷹峰の孫が勝率トップってのもなんだか癪さねぇ、なぁ浜臣。」
「…」
「おい浜臣、聞いてんのかい？」
「…はい？…あぁ、すみません、少々考え事をしていました…」
「…アンタ、さっきから何怖い顔して考え込んでんのさ。」

トウコに、大きめの声をかけられたにもかかわらず。
イースト校理事長、元シンクロ王者【白鯨】と呼ばれた砺波　浜臣は、何やらソレらが全く耳に届いていない様子で、難しい顔をして黙り込んでいて…

「いえ…劉玄斎学長の戻りがやけに遅いと思いまして。」
「そういや随分と長いトイレさね。まっ、その内戻ってくるさよ。…つーか珍しいね、アンタが小龍の事を気にかけるなんて。アンタ、小龍のこと苦手だって言ってなかったかい？」
「…昔の話です。」

先ほどから、用を足しに外に出て行った劉玄斎が中々戻ってこない事に対し、何やら怪訝な顔をしているイースト校理事長、砺波　浜臣。
そんな砺波を見て、サウス校理事長、獅子原　トウコは少々不思議そうな顔を浮かべており…
―過去…『荒くれ者』と呼ばれていた、若かりし頃の砺波　浜臣と…触れる者の全てを傷つけていた、若かりし頃の劉玄斎。
トウコからすれば、過去に『色々』と感情を剥き出しにしてぶつかりあっていた、あの砺波と劉玄斎を知っているからこそ。
そんな、歳を取ってお互いに少々落ち着いたとは言え、これまでだったらなるべく劉玄斎には関わらない様にしていたあの砺波が、今わざわざ劉玄斎の事を気にかけているというその態度には少々の驚きを感じてしまうのか。
何せ、歳を取った弟分たちの心境の変化といえば微笑ましいが…【白鯨】と『逆鱗』がそんな簡単な仲では無い事を、『烈火』は知っているが故に。
あくまでも仕事の場である以上、それ以上のことを追求する事はしないものの…それでも、何かが引っかかるような違和感をトウコは感じていて…
しかし、そんなトウコに怪訝な顔を向けられていてもなお、砺波は一体『何』を考えているというのだろうか。
…眉間に刻んだ深い皺、思考を巡らせすぎて考えが二転三転し続けている脳の電位。
この場にいる誰もが知らぬ、砺波にしか感じられぬ感情を持って、どこまで砺波は怪訝な顔をし続けて考え込んでいるだけ。

「そう言えば砺波理事長…」

…そんな、どこまでも怪訝な顔を崩さぬ砺波へと向かって。

ウエスト校理事長である李　木蓮は、唐突に何かを思い出したかのように、徐にその口を開き始めた。

「ついさっき気がついたのですが…先ほどから３１番のモニターが映っていないようですね。」

「なっ!?３１番のモニターが映っていない!?い、いつからですか!?」

「え？いえ、あの…本当についさっき気がついたのです。電波でも悪いのかと思い…」

「そういえばそうさね。まっ、すぐに直るんじゃないかい？」

「馬鹿な…」

考え込んでいた顔から一転。

木蓮にそう告げられたその瞬間に、砺波はあまりの焦りと共に、絶句とも言える表情を浮かべて眼を見開いて。

…それは、いつもの冷静な彼にしては、あまりに珍しい取り乱し。

ごくありふれた機器の不調。たかだたモニター１つの不調。そんな許容範囲なアクシデントに対し、一体何が彼をここまで焦らせているのだろう。

【決島】では２００機もドローンを同時起動させ、その全てが同時に全世界に向かって映像を中継しているのだから…大量の機械を同時に動かせば一機くらい調子の悪くなるドローンが出たとしてもそれは何の不思議でもない事だというのにもかかわらず…

この当たり前のイレギュラーを、どうしても容認できていない様子の砺波の慌てている姿は、トウコや木蓮からしてもあまりにも不自然にも映ると言え…

「２００個も画面があるから気がつかなかったよ。まっ、大方ドロー

ンのカメラの調子でも悪いんじゃないかい？」
「い、いえ、そ、そんなはずは…」

しかし…この中継用ドローンを用意した砺波は知っている。
何せ公には出来ぬ事ではあるのだが、その３１番モニターのドローンは砺波が直々に状態のチェックを行い、念入りに調子を調整させた、確実に故障など起こりえないことを断言できるほどに注意深く仕上げられた『特別』な一台。
…他の量産機が故障をしていない中、あれだけ状態を確認したこの特別な一台だけが不調を起こすだなんてありえない。
それを、砺波自身もわかっているからこそ。この映っていない『たった一台』の突然の不調は、砺波に焦りと驚きを誘発させるには充分な事態となりて【白鯨】に襲い掛かっているのだろう。

…とは言え、砺波の焦りはなにも、『機器の不調』に対して生じているのではない。

そう、砺波がこれ程までに焦りと驚きを見せているのは、『映像が映らない事』に対してなどではなく…
映らない映像の先にいるであろう『対象の学生』の方が、砺波にとっては重要な事であり…

―何を隠そう、砺波が気にしている、その３１番のモニター…

それは紛れも無い。

イースト校２年、高天ヶ原　ルキを映しているはずのデュエルドローンだったのだから。

「失礼します！少々所用が出来ました！」
「お、おい浜臣！アンタどこ行くつもりだい!?」

「すぐに戻ります！」

そうして…

まるで飛び上がるようにドアを跳ね開け、勢い良く外に飛び出した砺波　浜臣。

…そのあまりの勢いは、いつもの冷静沈着なイースト校理事長とは真逆の態度。

一校の責任者が、これ程までに取り乱している場面など、到底学生達には見せられたモノではないものの…

しかし、そんな体裁など気にしている場合では無いのだと、そう言わんばかりの今の砺波は、行動を起こさない選択が出来ない程に追い詰められているとも言い換えられるだろうか。

そのまま、砺波は『特別観覧室』を飛び出すと、海岸に停泊していた大きな船からも飛び出し…

その足を緩めることなく、深い森の中へと駆け出し始めて。

…ただのドローンの不調で済んでいれば何も問題ない。しかし、ルキのモニターだけが映っていないという今の状況を楽観視出来るほど、砺波も楽天家では決して無い。

何かが起こってからでは遅いのだ。ルキの身に『何か』が起こっているかもしれない『可能性』を考えると、例えソレが僅かなモノだとしても砺波は走らずにはいられず…

…学生達がどこに居るのかは、常にデュエルディスクの起動で確認されている。

だからこそ、砺波は自身のデュエルディスクを取り出すと、即座にルキの今居る位置を確認し…

その走りを緩めぬまま、別の端末へと向けて電話をかけ始める。

「…私です。恐れていた事態が起こりました。位置データを送るので、すぐに現場に向かってください。」

―…

「…デュエルをしましょう、高天ヶ原さん？」
「え？ど、どうしてあなたが？」

【決島】の中の大きな森の、そのどこかとある場所。
この島の中心に聳える、大きな休火山に面した…その、森と山との境目の場所で、ルキは思いも寄らぬ人物と対面を果たしていた。
それは、デュエルの相手を探して島中を迷い歩いていたルキにとっては、あまりにも意外で驚愕を覚えるような人物であり…
夏の日差しに良く映える、闇に溶けるその褐色の肌。どこまでも綺麗に長く伸びた、夜よりもなお深いその漆黒の髪。
それは遊良が生きる指標となった、『とある人物』に瓜二つだという謎の女生徒。

―釈迦堂　ユイ

（え？な、何で釈迦堂さんが…？）

しかし、一応『クラスメート』として、夏休みの直前に転入してきた彼女の事はルキだって知ってはいるものの…
突然現れて声をかけてきた釈迦堂　ユイに対し、心から驚いた表情をしているルキ。
それは、己の記憶が正しければ釈迦堂　ユイという転入生は、絶対に『この島』には居るはずが無いと言うことを、ルキも知っているが故の驚愕の表情でもあり…

…そう、この釈迦堂　ユイという転入生の女生徒が、今確かに自分の目の前に居るという事実が、どうしてもルキには信じられない。
なぜなら、夏休みの前…【決島】の代表者を発表するその『当日』に、急に転入してきた釈迦堂　ユイがこの【決島】に『居る』と言うこと自体が、そもそも『ありえない』事実。
そもそもルキの記憶が正しければ、イースト校の【決島】の代表者２５名の名簿の中には確かに釈迦堂　ユイと言う名は無かったはず。
それをルキ自身も分かっているからこそ、森を抜けたところで偶然にも遭遇した謎の転入生に対して、ルキはこれ程までに言葉に詰まってしまっていて…

「…どうして…とは？」
「え？…だ、だって…その…釈迦堂さんって確か…その、だ、代表じゃなかったはずじゃ…」
「…そうでしたか？…けれど、よく思い出してみてください高天ヶ原さん。代表者の発表の時、代表者の送別会の時、出発の時…開会式の時を…」
「え…」

そんな、心の底から不思議がっているルキに対し…
徐に、そう言葉を放った釈迦堂　ユイ。
…一体、彼女は何を言っているのだろう。
自分の記憶が確かなら、今目の前の彼女が言った言葉は、全くの荒唐無稽な作り話にもならない非現実の羅列。それを分かっているルキからすれば、釈迦堂　ユイの言葉は現実味の無いただの理解できぬ妄言であり…

しかし…
周囲に流れる不穏な空気。周囲に漂う淀んだ湿気。

―それらが急速に重みを増して、ルキを包み込んだと思ったその瞬

間。

いやに頭に響く彼女の言葉がルキの耳に入り込み、それに連動して突然ルキの頭の中に、耳鳴りにも似た金切り音が頭に響き始め…

（あれ…？何か…ボーっとしてくる…）

…頭が、痛い。

目の前の転入生は、一体何を言っているのだろう。

頭がボーっとしてくるような、視線が遠くに持っていかれるような…

そんな不思議な感覚がルキの中に現れ始め、それに伴いルキの耳に目の前の釈迦堂　ユイの声だけが嫌に耳の中に酷く反響し…

それと同時に、『何か』がルキの記憶の上を覆い始め…

―『…釈迦堂　ユイです。よろしく。』

―『釈迦堂さんは既に【決島】の代表に選ばれているんだ。他の者も頑張るように。』

―『時間だ！それではこれより各校毎に出欠を取る！イースト校、釈迦堂　ユイ！』

―『…はい。』

思い出すのは、記憶の『どれ』にも、釈迦堂　ユイが『居た』という光景。

…何故彼女が【決島】に居ることに違和感を覚えていたのだろう。だって、『最初』から彼女はここに居たではないか。

…確かに思い返してみれば、釈迦堂　ユイは『最初』からイースト校の代表だった。

…詳しい事情は知らないが、元々【決島】の代表者である事が確定している状態でイースト校に転入してきた事を、『思い返せば』説明されていた『気』もする。
そして壮行式の時も出発の飛行場でも、【決島】の開会式のときも彼女は居たと言う光景がルキの記憶の中にはある。
…それを覚えているのに、一体どうして彼女の事を疑ってしまっていたのだろうか。
そんな自分でも何故かは分からないが、どうしても『腑に落ちている』感情がルキの心には浮かび上がってきていて…

—そうして…

「…私は最初から…居ましたよ？」
「あ…えっ…と……う、うん…そ、そうだったかも…ごめんなさい…」
「では…デュエルをしましょう、高天ヶ原さん。」
「…そうだね、イースト校同士だけど、出会ったら戦わなきゃいけないんだもんね。」

先ほどまで、一体何に対して自分は不思議がっていたのだろうか。
そんな、何を考えていたのかすら思い出せなくなってしまったルキは、【決島】のルールに則って、目の前に現れた『次の相手』に対してデュエルディスクを構え始めるしかなく。
それに倣い、ルキの前に立つ黒い少女もまた、徐に自らのデュエルディスクを構え始め…

「…フフッ、お手柔らかに。」
「うん…よろしくお願いします…」

…不思議を不思議と思う事もできず。
…自分の記憶が曖昧な事にも気がつけず。
【決島】の定めに則った、不穏を孕んだソレは…

―デュエル！

唐突に、始まってしまう。
先攻はイースト校２年、高天ヶ原　ルキ。

「私のターン！私は【デスマニア・デビル】を召喚！」

―！

【デスマニア・デビル】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１４００

デュエルが始まってすぐ。
純黒の体毛に覆われた小さな獣を、即座に召喚したルキ。
悪魔のささやき声のような、奇妙な鳴き声を漏らし…全身の体毛を逆立たせて森の中から飛び出してきたソレは、小さいながらも確かな獣の形をした荒々しさを醸し出している。

（えっと…そう言えば釈迦堂さんってどんなデッキ使ってるんだっけ…）

そして、クラスメートと言う事から、ルキは目の前に立つ釈迦堂ユイのデュエルを思い出そうと記憶の引き出しに手をかけ始めるが

…

（…あれ？）

いくら思い出そうとしても、いくら考えてみても。
いくら記憶を辿ってみても、彼女がデュエルをしていたというその場面を、ほんの少しもルキは思い出せず…
…いくら釈迦堂　ユイの転入が、夏休みの直前だったとは言え。クラスメートである以上、一度くらいはクラスのデュエル実技などで彼女のデュエルを見ているはずだと言うのに。
また、彼女がどの『Ｅｘ適正』を持っているのかも、どの召喚別コースに振り分けられたのかも。クラスメートとして知っていても良い筈の事が、不自然なほどにルキには何も思い出す事が出来ないでいるではないか。

「…まぁいいや。私はカードを２枚伏せてターンエンド！」

ルキ　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：【デスマニア・デビル】
伏せ：２枚

しかし…そういった事を、考えようとすればするほど。
釈迦堂　ユイの事を深く思い出そうとすればするほど、ボンヤリとした靄のようなモノがルキの頭の中を覆い始め、何故か考えていた事がどうでもよくなってくるのをルキは感じているのか。
そのまま、何も疑問に思う事もなく。ターンは、釈迦堂　ユイへと移り変わり…

「…私のターン、ドロー。【王立魔法図書館】を召喚。」

【王立魔法図書館】レベル４
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／２０００

そんな釈迦堂　ユイが召喚したのは、視界を覆いつくすように現れた、無数の本が並び立つ不思議な空間。
魔法を発動すればするだけ、知識の恩恵とも言い換えられるドローを所有者に与えるソレは…モンスターと言うよりは、フィールド魔法と見間違う程に大きな存在であり…
あまりに大きすぎる存在感で、周囲の森や山と言った景色を飲み込み鎮座する。

「…図書館？」
「…続いて【成金ゴブリン】を発動。ＬＰを１０００与えて１枚ドロー。フィールド魔法、【チキンレース】を発動して効果発動、ＬＰを１０００払って１枚ドロー。【トレード・イン】を発動し、レベル８の【クラッキング・ドラゴン】を捨てて２枚ドロー。更に【王立魔法図書館】に乗った魔力カウンターを３つ使い１枚ドロー。【闇の誘惑】を発動し、２枚ドローして【闇の侯爵　ベリアル】を除外。」
「え!?」

そして…
ルキにとってはあまりに『見慣れたカード』の組み合わせを次々に使って、ドローの乱舞をし始めた釈迦堂　ユイ。

…それはまるでドローの嵐、それはまるでドローの乱舞。

そう、それはまさに、遊良のデッキのような多量のドロー。
遊良は【王立魔法図書館】を使ってはいなかったものの、その止まる事のないデッキの回転と止む事の無いドローの嵐は、まさにそっく

りだとルキの目には映っており…

ルキ　ＬＰ：４０００→５０００
釈迦堂　ユイ　ＬＰ：４０００→３０００

「…モンスターまで遊良のデッキにそっくり…」
「…まだですよ。２枚目の【成金ゴブリン】を発動し、ＬＰを１０００与えて１枚ドロー。【手札抹殺】を発動し、手札を全て捨て５枚をドロー。」
「わ、私は２枚捨てて２枚ドロー！」
「…更に【王立魔法図書館】の効果発動。魔力カウンターを３つ使い１枚ドロー。２枚目の【チキンレース】を発動し、ＬＰを１０００払って１枚ドロー。…カードを３枚伏せて、ターンエンド。」
「え？な、何もしてこない…の？」

釈迦堂　ユイ　ＬＰ：４０００→２０００
手札：６→３枚
場：【王立魔法図書館】（魔力カウンター：①）
伏せ：３枚

…果たして、彼女はこのターンだけで一体何枚のカードを引いたのだろう。
初期手札と合わせて、実に２０枚を超える枚数のドロー…
ソレを流れるように行ってきた釈迦堂　ユイが発する雰囲気は、一言で言えばただただ異常。しかし、ソレは彼女の行った『ドロー』という行為に対してではなく、彼女が使ってきた『カード』に対して言えることであり…

（攻撃してこない…何で？あんなにドローして墓地にも大型モンスターが揃ったのに…）

そう、２０枚以上のカードをドローしたにもかかわらず、遊良のデッキにそっくりな戦術を使用してきているのにもかかわらず。
それ以上動く気配を見せず、釈迦堂　ユイはただただ攻撃力０の【王立魔法図書館】を棒立ちにさせて、ターンをルキに受け渡しただけなのだ。
…遊良であれば、アレだけドローした後攻には絶対に攻めにくる事だろう。
それこそ、このターンで終わらせるほどの勢いでワンショットを狙ってくるだろうし…トドメをさせないにしても、何かしらこちらの場を荒らすアクションをしてくるはず。
また、遊良でなくとも２０枚以上のカードをドローしていて、何も無くターンを終えるというのは傍から見ていて明らかにおかしい。
だからこそ、『異常』。こうもあからさまに極端なデュエルを見れば、ルキでなくとも何かあると思ってしまうことは普通であり…
それ故、目の前の少女が一体何を考えてこのようなデュエルを仕掛けてきているのかを、ルキは慎重に見極めなくてはならないのだが…

（攻撃してこないってことは、あの伏せカードが危ないのかな？…私の攻撃を誘ってるんだったら、あの伏せカー……あれ？伏せカードが…何なんだっけ？…えっと…次は私のターンだから…）

…しかし、釈迦堂　ユイの、読めぬ思惑のその先を、深く考えようとしても。
釈迦堂　ユイの事を少しでも考えようとすると、途端に何故かその思考に靄がかかり…寸前まで何を考えて、何をしようとしていたのかが曖昧になってきてしまうルキ。

「…どうしました？貴方のターンですよ？」
「あ、わ、私のターン、ドロー！」

「…このスタンバイフェイズにＬＰを１０００払って罠カード、【活路への希望】を発動。そしてそれにチェーンして【ギフトカード】も発動。高天ヶ原さんのＬＰは３０００回復し、ＬＰの差が８０００となるため私は４枚をドロー。」
「う…またドローカード…」

ルキ　ＬＰ：６０００→９０００
釈迦堂　ユイ　ＬＰ：２０００→１０００

そんなボンヤリしているルキを他所に、ＬＰを削りに削って多量のドローを繰り返す釈迦堂　ユイ。
ＬＰを削ってまで、ＬＰ差を大きく広げてまで。
一体、彼女の狙いは何なのか。それを考えようとしても、どうしてもルキの思考には靄がかかり、デュエルに集中する事が出来ず…
また、そんな多量のドローを行う釈迦堂　ユイを見ているルキの表情には、少々渋いモノが滲み出てきて…

（…なんだろ…釈迦堂さんのデッキが遊良のデッキと似てるの…何か嫌だな…）

…そう、使っているカードがあまりに似ているからか、ドローする枚数があまりに異常であるからか。
使っているカードに差異はあれど、彼女のあまりのドロー多さは、ルキにはどうしても遊良のデュエルと重なってしまうのだ。

…遊良と『全く同じ』ではないからこそ、なおさら余計に性質が悪い。

遊良と使うカードが全く同じであったならば、釈迦堂　ユイが自分を動揺させに来ていると明確になる。
しかし、差異があるからこそ遊良と釈迦堂　ユイのデッキが『似て

いる』事に、ルキの心は鋭いほどの過敏を示してしまい…

―『まぁでも、釈迦堂　ユイの事は砺波先生が自分で調べるって言ってくれたし、これで少しは楽になったけどな。一つやることが減っただけで随分と楽になった。』

―『…あー、うん。…そうだね。……なんだろ、何か変な感じ。』

―『ん？何か言ったか？』

―『え!?あ、う、ううん、なんでも…なんでもないから！』

ルキの頭に唐突に蘇るのは、夏休みに遊良と電話をしていた時にも感じた、自分でも『正体』のわからぬ謎の感情。

『正体』が分からぬ、やけに熱く心を傷つけるソレ。心の中がモヤモヤするような、心の壁を針でチクチク刺されているような、言葉にし難い黒く重い渦巻き。

…夏休みに、遊良が釈迦堂　ユイの事をよく話題に出していたときにも感じたアレ。その、胸の内がモヤモヤする経験した事のないソレが、今再びルキの心を覆いつくさんと広がってくるではないか。

「…意味分かんない。何で変な事思い出すんだろ、もう…」

「…どうしました？」

「え？あ、う、ううん…何でもないよ！まだデュエルの最中だもん！私は【レスキューキャット】を召喚！」

―！

【レスキューキャット】レベル４

ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　１００

しかし、そんな感情が飛び出してくる寸前に。

そんな意味のわからぬ感情に、囚われている暇などないのだとして、『何か』を振り切ろうとしてヘルメットを被った小さな猫を呼び出

したルキ。

「何狙ってるのか知らないけど、何もしてこないならこっちからいくよ！【レスキューキャット】の効果発動！【レスキューキャット】を墓地に送って、デッキから【マイン・モール】と【森の聖獣　ヴァレリフォーン】を特殊召喚！」

そう、いくら釈迦堂　ユイが、遊良と似たデッキを使っていようとも。

今はデュエルの最中なのだから、あくまでも目の前の相手に向かい合わなくてはならない。

だからこそ、ルキは無理矢理にでも、このモヤモヤした感情を振り切ろうと吼え…

「いくよ…レベル３の【マイン・モール】に、レベル２【森の聖獣　ヴァレリフォーン】をチューニング！」

その感情の『名前』を知らなければ、その正体に気付く事もできないルキは更に激しく動くのみ。

「蒼穹の彼方へ鳴り響け、天翔ける雷よ！シンクロ召喚！」

天へと昇る地を穿つ獣、ソレを追う華の小鹿が２つの光輪に姿を変える時。

…轟く雷鳴、瞬く稲妻。

晴れ渡る晴天の空に、突如として雷音が鳴り響き…少女の叫びに呼応して、ソレは大地に降り立つ一筋の雷光となりて…

―ここに、現れる。

「おいで、レベル５！【サンダー・ユニコーン】！」

―！

【サンダー・ユニコーン】レベル５
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／１８００

天から落ちる光の柱を貫き、今ここに呼び出されたのは、蒼き雷が化身となった幻想の一角獣。
真っ赤な髪をした少女の髪色と比べ、青天の空を纏ったような雷馬の体色はあまりに対照的かつ正反対ではあるものの…
雷角を槍に、その身を奮わせ…赤き髪の少女を守らんとして吼え、雷鳴を唸らせ少女の前に勇み立つ。

「シンクロ素材になった【マイン・モール】の効果で１枚ドロー！…遊良のデッキに似てるんだったら、なおさら負けるつもりなんてないからね！」

どこか無理矢理に吼えている、空元気のようなルキの叫び。
…それは遊良と似たデッキを使ってくる釈迦堂　ユイに、意地でも負けたくないと思うが故の少女の叫びなのか。
そう、この意味のわからぬモヤモヤを、ルキも早く発散させたいのだろう。いくら似たデッキであろうとも、相手が遊良でないのなら絶対に負けたくないとルキが感じてしまうのは当たり前の事。
そうして、何故かはわからないが、どうしても釈迦堂　ユイには負けたくないという気負いの下。
そのままルキは、更にその勢いを増し…

「いくよ！バト…」

幼少の頃からずっと共に過ごして来た、彼女にとっては『エース』とも呼べるこの蒼の雷馬と共に…

ルキが、勢い良く攻撃に転じ始めた…

―その時だった。

「…いいえ、もうこれで大丈夫です。メインフェイズ終了時に罠カード、【自爆スイッチ】を発動。」

「…え!?」

…一瞬。

ルキの意識の外から、あまりに突然発動されたその1枚の罠カード。

「え、な、何で!?」

…それは、必ずと言っていい程『勝敗』がはっきりする『デュエル』という行為においては、あまりに珍しい『引き分け』となるカードであり…

―言葉が続かず、思考が止まる。

意味のある言葉が連想できぬルキの思考では、釈迦堂　ユイの発動したそのカードが光る目の前の光景に、全く追いついてこられず…

―何故、引き分けを狙うのか。
―初めから引き分け狙いなら、何故あれだけドローしたのか。
―そもそも初めから【自爆スイッチ】を狙っていたのなら、もっと早いタイミングで発動しても良かったはず。

デュエリストであれば誰もが皆『勝つ』事を最優先にするはずだと言うのに、まるで最初からこの自爆の巻き込みを狙っていたかのような彼女のあまりに早いデュエルの放棄は、ルキにとっては全く理解できぬことであって。

「デュエルは終わりです。…自分のＬＰが相手より７０００以上少ない時！お互いのＬＰを０にする。」
「待？…」
「…ライフ…あまり時間はかけられませんから…では…爆発です。」

―

そして…

瞬く間に、当たり一面にあまりに凄まじい爆発音が響き渡った。

―轟音、衝音、激音、狂音。

…それは自分も相手も巻き込んでの、命を捨てる相打ちの爆発。
敵も無い。味方も無い。ただ単純に全てのプレイヤーに襲い掛かる無慈悲なる爆炎は、いくらソリッド・ヴィジョンとは言え、相当たるリアリティを持ってルキと釈迦堂　ユイを飲み込んでしまって。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

「…」

ルキ　ＬＰ：９０００→０
釈迦堂　ユイ　ＬＰ：１０００→０

デュエルの終了を告げる無機質な機械音すら、尋常ならざる爆発音に掻き消されて辺りには響かず…

…たった、２ターン。

そう、たった２ターンという、あまりに早く、そしてあまりにあっけなく終わってしまったこのデュエル。

それは時間にして、数分もかからなかっただろう。

『あまり時間をかけてもいられない』と言った釈迦堂　ユイの思惑など、全く持って知る由もないルキには、彼女が何を考えてこのカードを使ったのかなど考える暇も無く…

…リアル・ダメージルールの所為か、それともまた『別の要因』の所為か。

あまりにリアルで凄まじい爆発に、身構える間もなく飲み込まれたルキは…

―その場で倒れて、気を失っていた。

そんな中…

「…予定通りですね。」

ソリッド・ヴィジョンなどではない、本物の土煙が周囲を覆いつくしている中。
…ルキと同じ爆発に巻き込まれたにもかかわらず、何事も無かったかのようにしてゆっくりとルキの方へと歩いてくる釈迦堂　ユイ。
―土に塗れ、気を失い、倒れこんでいるルキとは全くの真逆。
ただただゆっくりと歩を進め、感情の無い冷たい眼でルキを見下ろしているだけ。
「…動揺、困惑、嫉妬、奮起…人間の心は脆い。例え微かなモノでも、綻びから亀裂を生じさせるには充分。…後は【赤き竜神】が出て来易い様に、『裂け目』を作るだけで済むんですから。」
…一体、彼女は何を言っているのだろうか。
誰も居ないこの森と山の境目では、釈迦堂　ユイが呟いたその言葉を聞いている者など誰もおらず…
しかし、何の思惑があるのかなど分からぬ釈迦堂　ユイの言葉からも、微かに感じ取れるモノがあるとすれば、今のデュエルは全て釈迦堂　ユイの思惑通りに進んでいたと言う事だけ。
…そう。
ドローを激しく繰り返したのも、使うカードを『誰か』と似せたのも…
ルキがエースである蒼の雷馬をシンクロ召喚して、これから気持ちを切り替えようとしたその瞬間を狙ったかのような、不自然すぎる【自爆スイッチ】の発動も…
それは、ルキの心を大きく揺さぶらんとして、『わざと』使うカードや発動のタイミングを狙ったということに違いなく。

そして…

釈迦堂　ユイが、ルキの真横に立ってピタリと足を止めたその時。

「コホッ、コホッ…いやいや、計画通りですねぇ。仕事が速くて助かります、ええ。」

土煙の向こうから、咳き込みながら一人の男が現れた。

…それはスーツと言う名の胡散臭さを着込んだ、細身で長身の一人の男であり…以前に何度も、劉玄斎と不穏な会話をしていた男と同一人物。

立ち振る舞いからして怪しさの塊。仕草一つとっても悪意の塊。

それだけで、突然現れた『この男』が決して良い人物では無い事は明らなことではあるものの…

しかし、他の人間が居ないこの場においては、倒れているルキを見下ろしている『この男』を止めるような者など居はしないのか。

「いやはや、【白鯨】の奴が中継用ドローンをつけるなんて余計な事をしたせいで、動き難くて仕方なかったですからねぇ、ええ。」

そんな、『捻じれた』という表現があまりにぴったりな『この男』が、なぜ釈迦堂　ユイとこうも親しげに…いや、親しげとは言い難いだろうが、それでもどうしてこの捻じれた男が学生達しかいないこの島に現れたのだろう。

そのまま、捻じれた男は絵に描いたような作り笑いと、笑っていない瞳の奥から滲む濁った光を漏らしつつ…

倒れて動かないルキを見下ろしながら、釈迦堂　ユイへと向かってその怪しげな口を開いて…

「しかしえげつないですねぇ。心を揺さぶり、浮き沈みを激しくした瞬間に意表を突いて意識を奪うなんて、ええ。ですが、こうも簡単に

何とかしてくださって助かりますたよ。流石は『せ…』
「…では後は任せましたよ。私はこの後、別の仕事がありますから。」
「畏まりました。お手間を取らせて申し訳ありません、ええ。」
「…努々忘れる事なかれ…自分が一体何なのか…」
「ええ、ええ。充分に分かっておりますとも。我らはただの駒。あくまで【無垢】の為…ただそれだけの為に、私はこうして動いているのですから、ええ。」
「…わかっているならいいのです。では…」

誰にも分からぬ彼等の会話。
誰にも知りえぬ捻じれた思惑。
この捻じれた男が何を考え、そして釈迦堂　ユイが何モノなのかなど、見ている者がこの場に誰も居ない以上は、この周囲を包んでいる土煙の様に虚ろな靄の中。

そのまま…

「…努々忘れる事なかれ…自分が一体何なのか…」

たった、一言。
釈迦堂　ユイは、先ほど捻じれた男に投げかけた『ある一言』を再び呟いたかと思うと…

一陣の風が吹いた、その刹那。

文字通り…その場から、一瞬で消え失せていた。

―そして…

「さてさて、必要な素材は揃いました。後は【赤き竜神】を少女の身の内から解放し、私が捕らえなおすだけですねぇ、ええ。…まっ、この

少女には申し訳ないですが…私たち…いえ、私の計画の為、尊い犠牲となってもらいましょう。…さっ、この少女を運んでください、劉玄斎殿？」
「…あぁ。」

…土煙が晴れ、捻じれた男が徐に背後へと声を投げかけたその時。
森と山との境目、後ろの森の木の陰から現れたのは、決闘学園デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と呼ばれた元プロデュエリスト…

―劉玄斎、その人。

…それだけではない。
劉玄斎の後ろには、あまりに『小柄』な一人の少女の姿もあって…
「どうせ抵抗する者も来る事でしょうし、護衛は任せましたよ二人とも。その為に手伝ってもらっているのですから、ええ。」

―…

「行け、バルバロス！ダイレクトアタックだ！」

―！

小川がさらさらと流れる渓流の近く。
そこに、まさにデュエルの勝敗を決める一撃が轟いた。
…それは紛れも無い。たった今、遊良がこの一撃によって決着を着

けたという、無機質な機械音と同時に轟いた獣の王の咆哮であり…
吹き飛ばされたウエスト校の3年生がそのまま、リアル・ダメージルールによって生じた衝撃によって気を失って倒れこんでしまっていて。

「…よし、これで31戦31勝…鷹矢の奴は…」

そんな中、たった今一戦を終えたばかりだと言うのにもかかわらず…
徐にデュエルディスクの画面を、デュエルモードから誰でも見られる【決島】の途中経過画面に切り替えると、乱れた呼吸を整える事も後回しにして、その暫定の勝率ランキングの上位を見始める遊良。

…探しているのは、あまりに見慣れた相棒の名であり、絶対に負けたくないライバルの名前。

開会式であれだけの大口を叩いたにもかかわらず、先ほど途中経過を確認した時に…いや、【決島】が始まってから先ほどまで、ずっと勝率1位で対戦数も1番多い鷹矢。
そんな鷹矢を狙う者は、決闘市側にもデュエリア側にも数多く存在しているものの、遊良と同じくここまで『全勝』を貫いている鷹矢の結果が、【決島】にいる誰よりも気になるのは、鷹矢に意地でも張り合ってやると決めた遊良だからこそなのだろう。
そのまま勢い良くデュエルディスクの画面をスクロールし、目当ての名前を探して眼を滑らせ…

「くそっ、アイツまだ勝率1位キープしてるのか…それに37戦全勝…」

鷹矢の結果が、先程と比べても全く不動のモノとなっている事を確認し、遊良も思わず苦言を漏らしてまって。

…開会式であれだけ大口を叩いただけあって、その勢いは【決島】が始まってから留まる事を知らない鷹矢の進撃は、遊良からすれば『まだ負けていない』ことへの安堵と同時に、自分よりも戦績を伸ばしている事に対して煽られているような気分になってしまうのか。

…何せ、意地でも張り合ってやる事を決めた遊良にとっては、鷹矢が好調なのは嬉しくありつつも焦りを生み出すモノ。

【決島】で相対した時には、もちろんその場で戦う事はするつもりもあるのだが…

何故かは分からないが、この２００人の混戦の中では鷹矢と戦う事は無いだろうと感じている遊良からすれば、お互いに上位４人だけが進める『決勝』でしか戦えぬであろう鷹矢との戦いに向けて、少しも鷹矢に離されるわけには行かないと感じている様子もあって。

そうして…

「…よし。早く次の相手を見つけよう。これ以上、鷹矢の奴に引き離されてたまるか。」

戦いに飢え始めた遊良が、疲れを押して次なる相手を探しにこの渓流から歩き出そうとした…

―その時だった。

「…ん？」

不意に…『何か』を感じたのか、思わずその場に立ち止まってしまった遊良。

それは、制服の内ポケットに入れていた、『もう一つのデュエルディスク』から生じた震えを感じた所為であり…

選手のデュエルディスクは常時デュエルモードになっているため、

【決島】の間は電話など出来るはずも無く。だからこそこれは、『もしもの時』の為に用意された…そう、遊良や鷹矢などにだけ渡されていた、『緊急連絡用』の小型デュエルディスク。
…別にルール違反ではない。
そもそもルールにデュエルディスクを持ちこめるのは一台だけとは明記されてはいない為、もしもの時の為、緊急時の為に砺波が用意し、遊良と鷹矢とルキに渡していた小型のソレにかかってきた電話に遊良が出たとしても、その行為は咎められることはせず。
…まぁ、祭典の最中に電話をかける余裕など普通であれば学生達にはありはしないのだから、ルールに明記する必要すらもないのだが…

―それでも、電話のバイブレーションに連動し、無性に嫌な予感が遊良を襲う。

…この端末に電話をかけてくる人物など、『たった一人』しかいない。
『もしもの時』…本当に万が一の時にのみ…それこそ、【決島】の途中に割り込んででも緊急の用があると言う知らせの震え。
しかし…緊急時の連絡用に渡されていたもう一つの端末に電話がかかってくると言う事は、ソレすなわち『緊急』の何かが起こったと言う事でもあり…
だからこそ、言葉にならない嫌な予感が、遊良の心に渦巻き始め…

「は、はい、天城です！」
『…私です。恐れていた事態が起こりました。』
「え!?…と、砺波先生、それってもしかして…」
『説明は後です。位置データを送るので、すぐに現場に向かってください。』

それだけ言われて、すぐに切れた砺波からの電話。
…そう、緊急で電話をかけてきたのは、イースト校理事長、砺波浜臣。
…嫌な予感が当たってしまった。…いや、そもそもこの緊急時用の小型デュエルディスクに電話がかかってきた時点で、嫌な予感は的中していたのだ。
…今こうして、『緊急』で砺波が電話をかけてきたのは、『そう』言う事なのだろう。
あまりに短い電話ではあったものの、砺波の焦った様子の口調から、遊良には一体『何』が起こったのかが容易に想像できてしまって。

「ッ！…ルキ！」

思わず口から飛び出てきたのは、『何か』があったであろう大切な幼馴染の名。
先程の、勝負に飢え始めた雰囲気から打って変わって…砺波の焦りが乗り移ったかのように、暑さとは別の冷や汗が頬を伝い始め…
…幸いにも、砺波に指定された場所は遊良が今居る渓流を更に奥に進んだ、島の中心に聳える休火山と森の境目の場所。
近くにデュエリストの気配は無く、このまますぐに森の中へと向かって駆け出せば障害も無く到着できるはず。
だからこそ、遊良は砺波に指定された、向かえと支持されたその位置データを頭に入れて、すぐさま渓流から駆け出そうして振り向いた…

―その時…

「…ま、待ちなさい…天城…」

「…え？」

小川の流れる静かな音を遮って、突如聞こえたか細い一人の女性の声。

思わず遊良もその声に呼び止められ、今にも駆け出そうとしていた足を無理矢理止めた勢いで足を滑らせそうになってしまい…

聞こえたのは、随分とか細い、今にも消え入りそうな弱った声。

…この時間の無いときに、一体誰が声をかけてきたというのだ。しかし、確かに自分へと向けられた、はっきりと聞こえてしまった声の方へと遊良が振り向いた…

そこには…

「お、お前は…」

「み、見つけたわよ…やっと…やっと捕まえた…」

遊良に確かな執着を持っているであろう一人の女生徒の姿が。

―紫魔　アカリ

相当のダメージを受けているのか。フラフラした足取りをしていると言うのに、それでも遊良を睨みつつ、強い憎悪の念を持ってゆっくりと迫る彼女。

…しかし、いくら彼女が遊良に執着を持っていようとも、今ここで彼女と戦っている時間など遊良にはない。

…時間が無い。

砺波があれだけ焦って電話をかけてきたと言う事は、本当に緊急の事態がルキの身に起こったと言う事。

だからこそ、一応【決島】のルールでは出会ったデュエリストが必ず戦わなければならない決まりは無いために、遊良も今は戦っている時間など無いのだとして紫魔　アカリへと向かい…

「も、もう逃がさないわ…やっと見つけた…こ、今度こそ、アンタを倒して…姉様の事…」
「紫魔　アカリ…悪い、今お前と戦ってる暇は…」
「黙れ！…に、逃げるなんて許さないから…ア、アタシと、戦え…」

しかし…
絶対に遊良を逃がさないという殺気を駄々漏れにした彼女の視線は、その眼光だけで人の肉体を穿ちそうなほどに鋭いモノ。

…逃げられない。

執念に塗れた鬼の形相。マグマの如き殺気を糧に。
後先を考えておらぬ、今にも断ち切れそうな意識を無理矢理に繋げ…アカリはただただ遊良へと向かって、憤怒という名のデュエルディスクを構えるのみ。

「逃がすものですか…絶対に…」
「くそっ…こ、こんな時に…」

…逃げられない、逃げ出せない、逃がしてくれない。

一秒でも早く向かわねばならない、切羽詰ったこんな時に…

―遊良の前に、分厚い地の壁が立ち塞がった。

―…

ｅｐ７７「立ちはだかる地の壁」

「お、お前は…」
「み、見つけたわよ…やっと…やっと捕まえた…」

ルキの身に『何か』が起こったであろう、砺波から連絡を受けた直後の事。
今すぐにでも砺波に指示された場所に向かって、駆け出そうとしていた遊良の前に…唐突に現れた一人の少女が、その行く手を遮っていた。

…それは、遊良に確かな執念を持っているであろう一人の少女。

相当のダメージを受けているのか、フラフラした足取りで。それでも遊良を睨みつつ、強い憎悪の念を持って、ゆっくりと遊良に迫りくるのは…

―決闘学園イースト校２年、紫魔　アカリ

「も、もう逃がさないわ…やっと見つけた…こ、今度こそ、アンタを倒して…姉様の事…」
「し、紫魔　アカリ…」

しかし、彼女が【決島】での戦績などよりも、遊良個人に怨念の如き相当な執着を持っていると言うことは、遊良とて痛いほど理解しているものの…
遊良には、今ここで彼女と戦っている時間など無い。

…そう、時間が無い。

たった今遊良にかかってきた、『緊急事態』を告げる砺波からの電話。
『何』が起こったのかはわからないが、『何か』がルキの身に起こった事を告げる緊急の電話が、イースト校理事長、砺波　浜臣から遊良へとかかってきたのだ。
…あの冷静な砺波が、あれだけ焦って電話をかけてきたと言う事は、本当に緊急の事態がルキの身に起こったのだろう。
それだけで、遊良の心は居ても立ってもいられない程に焦燥を感じており…
だからこそ、【決島】のルールでは出会ったデュエリストが必ず戦わなければならない決まりは、一応は無いために遊良も今は戦っている時間は無いのだとして。
どうにか説得を試みようと、紫魔　アカリへと向かい直すが…

「悪い、今お前と戦ってる暇は…」
「黙れ！…に、逃げるなんて許さないから…ア、アタシと、戦え…」

それでも…
絶対に遊良を逃がさないという殺気を駄々漏れに、どこまでも声を荒げて遊良の行く手を遮ってくる紫魔　アカリ。
…それはまさに、鬼の形相。
デュエルディスクを構えた彼女の視線は、その眼光だけで人の肉体を穿ちそうなほどに鋭いモノとなりて、遊良を容赦なく貫いていて…

「逃がすものか…絶対に…」
「ぐ…こ、こんな時に…」

…逃げられない、逃げ出せない、逃がしてくれない。
不透明だった、ルキを狙う敵…正しくは、ルキの身に宿りし『赤き竜神』を狙っている『敵』が、本当に動き始めたこの現状で、ルキに

『もしも』の事があれば遊良とて【決島】どころではなくなってしまうと言うのに。
…土に塗れた汚れた顔で、今にも倒れそうな立ち姿で。
少女は後先を考えず、今にも断ち切れそうな意識を無理矢理に繋げているだけであり…
…時間が無い遊良の事情など、全く持って聞く耳を持たず。
己の望みのためだけに、切なる望みを叶えるために。彼女にとって、何にも変え難い自らの目的の為には例え遊良にどんな事情があったとしても、そんなことなど自分には関係ないのだと言わんばかりにその憤怒を燃やし続けるだけ。
…それは、今にも倒れてしまいそうな程にダメージを受けているというのにも関わらず、遊良への執念のみで意識と身体を繋いでいるかのようにも見え…

「いくわよ…」
「くそっ！」

憤怒という意地でデュエルディスクを構えるアカリを前にしては、遊良もこのままではどうしても戦うしか道は無いと言うことを否応無しに理解するしかないのか。
時間の無いこんな時に、突如目の前に立ちはだかった地の壁を前にして。
それは、今にも倒れそうな少女の叫びと共に…

—デュエル!!

—容赦なく、始まってしまう。

先攻はイースト校２年、紫魔　アカリ。

「アタシの…ターン！【Ｅ・ＨＥＲＯソリッドマン】を召喚！その効果で、手札から【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を特殊召喚する！」

―!!

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ソリッドマン】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１１００
【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　３００

デュエルが始まってすぐ。紫魔家の代名詞と言える『ＨＥＲＯ』の名を持つモンスターを、２体同時に呼び出した紫魔　アカリ。

…それは堅き鎧を纏った地の英雄と、要と言える旋風の英雄。

『ＨＥＲＯ』使いの紫魔家にとっては基本となる、その２体の英雄達を場に揃え、アカリはそのままふらつく足取りをどうにか堪えつつ…

「エアーマンの効果で、アタシはデッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン】を手札に加える！カ、カードを１枚伏せて…ターン、エンド…」

紫魔　アカリ　ＬＰ：４０００
手札：５→３枚
場：【Ｅ・ＨＥＲＯ　ソリッドマン】
【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
伏せ：１枚

やはり、相当のダメージを負っているのか。どうにか意識を繋げたまま、今、そのターンをどどうにか終える。

しかし…

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード、【トレード・イン】を発動！【闇の侯爵ベリアル】を捨てて２枚ドロー！続けて【闇の誘惑】を発動！２枚ドローし、【クラッキング・ドラゴン】を除外する！更にフィールド魔法、【チキンレース】も発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！魔法発動、【成金ゴブリン】！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！」

そんな満身創痍なアカリを前にしても、遊良はあくまでも意に介さず。

自らのターンを向かえて即座に、焦りを全面に押し出しつつも…

いつもの様にドローの嵐を巻き起こし、一気にアカリを引き離しにかかり…

遊良　ＬＰ：４０００→３０００

アカリ　ＬＰ：４０００→５０００

「２枚目の【闇の誘惑】を発動！２枚ドローし、闇属性の【サイコ・エース】を除外する！…よし！カードを１枚伏せ、【手札抹殺】を発動だ！俺は手札を全て捨てて４枚ドロー！」

「…３枚捨てて３枚ドロー…」

「そのまま今伏せた【死者蘇生】を発動！【手札抹殺】で墓地に捨てた【サクリボー】を守備表示で特殊召喚！」

―！

【サクリボー】レベル１

ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

そう、自分には時間が無いと、遊良もソレを分かっているからこそ。

そのドローの勢いは何時にも増して激しさを伴っており、相手が手負いの少女だとしても自らの行く手を阻むのならば、全く持って遠慮などするつもりはないのだと言わんばかりの激しさとなりて、遊良はデュエルを素早く進めるだけ。

…また、それだけではない。

…『義姉』への思いと、遊良に勝つというその執念だけで、実力の『壁』を超えた彼女の怖さを誰よりも理解しているのは何を隠そう遊良自身なのだ。

何度倒しても、何度破っても、何度負かしても諦めを見せず…負けるたびに力を増して挑んでくる紫魔　アカリと、幾度となく戦ってきた遊良だからこそ。

これだけ心が焦ってはいても、いつもの様にデッキを回す事が出来なければ危険だと言う事を彼も本能で理解していて…

「そして【サクリボー】の特殊召喚成功時に手札から速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！デッキから2体の【サクリボー】を特殊召喚する！来い、【サクリボー】達！」

―!!

【サクリボー】レベル1
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル1
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

墓地とデッキから、勢い良く飛び出してくるのは遊良のデッキのエンジンとも言える小さき3体の悪魔の使い。

小さいながらも悪魔だけあって、鬼気迫る表情の紫魔　アカリに対しても、微塵も臆せず立ち向かう。

「…アタシは【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を選択し、デッキから２体のエアーマンを特殊召喚するわ。そしてエアーマン２体の効果で、デッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】と【Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ】を手札に加える。…エアーマンが居るのを分かって【地獄の暴走召喚】を使うなんて、随分と焦ってるじゃないの。これで次のターンで…」

「いや、このターンで決着をつければいいだけだ！手札から永続魔法、【冥界の宝札】を２枚発動！そして俺はサクリボー２体をリリース！レベル８、【鉄鋼装甲虫】をアドバンス召喚！」

―！

【鉄鋼装甲虫】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００

そうして場に現れしは、遊良が幼少の頃から使用している鋼鉄の虫獣。

通常モンスターであれど、その高い攻撃力と『昆虫族』という利点を持った、今の遊良のデッキにおいては展開にも攻撃にも欠かせないモンスターであり…

「【冥界の宝札】２枚と、【サクリボー】２体の効果で…６枚ドロー！」

「くっ…手札０から一気に６枚とか…相変わらず馬鹿げたドローね…」

「まだだ！魔法カード、【二重召喚】発動！このターン、俺はもう一度召喚を行える！更に【ワーム・ベイト】も発動！俺の場に昆虫族の【鉄鋼装甲虫】が存在するため、【ワームトークン】２体を特殊召喚！」

―!!

【ワームトークン】レベル1
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【ワームトークン】レベル1
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

しかし、まだまだ。
現れては消え、消えては増えてと、一瞬の内に多くのモンスターが入れ替わり続けているというのにもかかわらず、遊良は更なるドローを持ってアカリを一気に引き離しにかかるのか。
…そう、アレだけ動き続けているのに、遊良の手札は一向に減らず。
夥しいほどの枚数のカードをドローしているにもかかわらず、増え続ける場のカードと、分厚さを保ち続ける遊良のデッキと、必要なカードをデッキの中から無理矢理に引っ張り出し続けるそのデュエルが、相手に与えるプレッシャーは果たしてどれほど重いのだろうか。
…この光景を、紫魔　アカリは幾度となく見てきた。
だからこそ、ふらつきながらもアカリには、次の遊良のヴィジョンが見えていて…

「弱小モンスターが3体…来る…」
「行くぞ！手札を一枚捨てて魔法カード、【死者転生】を発動！墓地から【神獣王バルバロス】を手札に戻す！そして俺は【ワームトークン】2体と、【サクリボー】の…3体のモンスターをリリース！」

轟かせしは獣の雄叫び。
主の焦りを払拭せんと、英雄達に牙剥く不退の叫び。
何度も何度も戦った。何度も何度も立ち塞がった。そんな諦めの悪い少女の感情を、存在ごと吹き飛ばさんとして響くソレは、まさに天を揺るがす王者の咆哮。
幾度となく立ち塞がる地の壁を、何度でも粉砕せんとして…
ソレはあまりに大きな咆哮となりて、この森の中に響くのか。

―震える大気、獣の咆哮と共に…

―それは、現れる

「来い！【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

激しい咆哮を轟かせ、場に現れし獣の王。
その豪咆は大気を揺るがし、焦る主の鬱憤を晴らすかの如く。猛々しく轟きながら、少女の場の英雄達を見据えて激しく吼え…
更には【冥界の宝札】の強制効果と、【サクリボー】のドロー加速によって再び手札を７枚にまで増やした遊良の叫びがそれに相まって、静かなはずの渓流に戦いの音を撒き散らし始める。

「出たわね…」
「アドバンス召喚成功時、【冥界の宝札】２枚と【サクリボー】の効果で５枚ドロー！」
「…チッ、ホントに手札が減らない…」
「そしてバルバロスのモンスター効果！３体のリリースでアドバンス召喚した時、相手のカードを全て破壊する！」

そして遊良の叫びに呼応して、その槍を勢い良く地面へと突き刺し

た獣の王。
…遊良の戦術の最大の要。敵の全てを粉砕せし、逃れる事の出来ぬ破壊の波が轟音を鳴らしながら地面を走り…

「やれ！バルバロス！」

―！

そのまま…
時間がなく焦りを押し出す遊良の叫びと、獣の王の破壊の衝撃波が紫魔　アカリの場のカード全てを飲み込まんとした…

―その時だった。

「ぐっ!?…け、けど…読んでたわ！今アンタに破壊された、【ミラーフォース・ランチャー】の効果発動！」
「なっ!?」

全てを破壊する獣の王の、解き放たれた衝撃波がアカリの場の英雄達を伏せカードごと飲み込んだその瞬間。
砕け散ったはずのアカリの場に、一枚のカードが蘇り光を発し始めたではないか。

「相手によって破壊された為、墓地から今破壊された【ミラーフォース・ランチャー】を、デッキから【聖なるバリア　―ミラーフォース―】をセットする！」
「【ミラーフォース・ランチャー】!?そんなカード、今まで使ってなかったはずだ！」
「…今まで…今までアタシがどれだけアンタに苦渋を舐めさせられたと思ってるのよ！あれだけアンタとデュエルしてきたんだから…馬

鹿みたいにバルバロスの効果を使ってくるアンタに、カウンター仕掛けるなんて当然じゃない。」
「くっ…で、でも、お前の伏せカードからは何も嫌な感じはしなかったのに、まさか【ミラーフォース・ランチャー】なんてモノを伏せてたなんて…」

焦りからくる心臓の鼓動が、その速さを更に増して遊良を襲う。
…まさか、何も『感じなかった』紫魔　アカリの伏せていたカードが、遊良の破壊効果を逆手に取ったカウンターだったなんて。
…それが遊良には信じられない。
そう、これまでの彼女とのデュエルでは、全ての場面において彼女が仕掛けた罠の『危ない匂い』を遊良は感じ取ってきていた。
それこそ『何となく』ではなく、はっきりと彼女の狙いが分かってしまうほどに。
…それは彼女が抱いている、遊良の首を狙うという執念が強すぎるからこそ滲み出ていた、あからさま過ぎる罠の気配。
だからこそ、これほど執拗に遊良の首を狙ってくる紫魔　アカリを、これまで遊良は全て降して退けてこられたのだ。
そして、これまで『そう』だったのだから、彼女とのデュエルに全て勝利している遊良がここで、【ミラーフォース・ランチャー】と言う危険すぎるカードの危ない匂いを感じ取れないというのもおかしな話ではあるのだが…

…しかし、時間が無いと焦りすぎたのだろうか。

普段通りの遊良だったら、紫魔　アカリの伏せていた罠の危険性を、その嗅覚で感じ取って避ける手を取れていただろう。
もしも自分が焦ったあまり、彼女の伏せカードの危険な匂いを感じ取れなかったのならば、それはまさに遊良の失態とも言え…

（ッ!?…な、なんだ?この感じ…よく見れば、アイツの手札も、伏せカードも…破壊したモンスターからも…）

…いや、違う。

遊良の嗅覚が鈍っていたわけではない。

…それは、アカリのカウンターを喰らってしまった今だからこそ分かってしまった『感覚』。

そう、いくら焦っていたとしても。

一分一秒を争う時間の無いこの場面では、時間をかけている場合ではないと言う事を遊良とて痛いほど自覚しているからこそ。絶対に時間をかけてはいられないというこの焦燥の中でも、ミスを起こさないよう危険を感じるアンテナだけは普段以上に研ぎ澄ましてあった遊良。

…しかし、今はその研ぎ澄まし過ぎたソレが悪かった事を、ミスを犯してしまった後に遊良は気がついた。

…そう、遊良が犯した、その失態。

（アイツのカード、全部から嫌な感じが…）

それは、紫魔　アカリの持つ『どのカード』からも、等しく『危険な雰囲気』が漂ってきているという事に、気が付けなかったという事。

…改めてアカリの雰囲気を探ってみれば、『嫌な感じ』が漂っていなかったわけではない。

…それはまるで、彼女の憤怒が全てのカードに乗り移ったかのような『危険な雰囲気』。

彼女の操るカードが皆『等しく』、遊良の命を狙う殺意に染まった危ない雰囲気を発しているではないか。

そう、紫魔　アカリが陽動や牽制、状況を見るための静観など全く考えていないからこそ。一枚一枚、彼女の操る全てのカードに遊良の

命を狙う殺意が滲み、そして全てのカードが等しく『危ない』モノとなっていて…

…一枚一枚が放つ、鋭い殺気と恐ろしい重圧。

コレまでの彼女とは違い、たった一枚の罠だけで遊良の首を狙っているわけではない。

モンスターでも魔法でも罠でも、少しの隙でも見せてしまえば、その綻びに彼女はすかさず手を差し込んでくるだろう。

それは荒くても、雑でも、醜くても…プライドも外面も周囲の評価も何もかもを気に留めず、どれだけ不恰好となっても遊良を倒す事だけを決意したが故に発せられる、紫魔　アカリの本気の殺意。

遊良を…ただ一人を倒すというただそれだけの為に燃やされた、執念と言う名の灼熱の憤怒。

「今セットしたミラーフォースは、セットしたターンに発動できる！これでアンタの攻撃は封じたわ！」

「ッ！ま、まだだ！速攻魔法、【禁じられた聖衣】を発動！【神獣王バルバロス】の攻撃力を６００下げ、バルバロスはこのターンの間、効果破壊されなくなる!!」

「なにっ!?」

「バトルだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！」

…しかし、それでも。

例え紫魔　アカリの全てのカードから、等しく『危険な感じ』が漂っていることがわかったからと言って、遊良とてここで怯むわけにはいかないのだ。

…今まで感じ取れていた、危険を知らせるセンサーが反応しなくなっただけ。

ならば相手が取ってきた手を、真正面から乗り越えればいいだけなのだと、そう言わんばかりに遊良が発動した一枚の速攻魔法。

そのカードから飛び出した、その禁忌の衣がバルバロスの腕に巻き付き…
獣の王は宣言に従い、地鳴りを上げつつ大地を駆け始める。
「くそっ！罠発動、【聖なるバリア　―ミラーフォース―】！アンタのモンスターを全て破壊する！」
―！
ぶつかる槍と盾。
その余波は限界を超え、ひび割れつつあるアカリのバリアから、敵を貫く波動が遊良のモンスターへと襲い掛かるのか。
そのまま、遊良の場で次の攻撃の命令を待っていた鋼鉄の甲虫が、光の波動に飲み込まれて爆散してしまい…
「でもバルバロスは破壊されない！やれ、バルバロス！天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」
―！
「うぐぅぅ!?」
アカリ　ＬＰ：５０００→２６００
それでも獣の王は禁忌の衣に守られて、破壊されずに吠え猛る。
アカリの発動した聖なるバリアは、敵の戦意あるモンスターを破壊するモノではあっても、『攻撃』自体を防ぐモノではないからこそ…
聖なるバリアの破壊の光を、その禁忌の槍で切り裂いて。その勢いを失わず、アカリへと襲い掛かる。
「う…はぁ…はぁぁ…」

弱体化したとは言え獣の王の一撃を喰らい、元々ボロボロだった身体を、更に強くよろめかせてしまった紫魔　アカリ。
…リアル・ダメージルールに則って、デュエルディスクと共に腕に装着した装置からＬＰの減少に応じた実際のダメージがアカリを襲い…
…今にも倒れそうな身体、今にも手放しそうな意識。
しかし、少し肩を後ろに押せば、すぐにでも倒れてしまいそうなそんな状態であっても。
アカリは苦しげな声を漏らしながら、意地でもその意識を保って遊良の事を更に鋭く睨んでいて。

「…ま、まだ…よ…天城…絶対に、アンタを倒…して…」
「くっ、カ、カードを３枚伏せて、ターン、エンド…」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：６→３枚
場：【神獣王バルバロス】
魔法・罠：【冥界の宝札】、【冥界の宝札】、伏せ３枚
フィールド魔法：【チキンレース】

「ア、アタシの…ターン、ドロー！」

その意識を、決して手放さないように。
カードを引く手に力を込めてドローするアカリの手札からは、全てのカードから先程よりも更に強い殺意が滲みでている。
…一体彼女は、遊良と遭遇する前にどれだけの戦いをしてきたのだろう。
戦っても戦っても終わらぬ戦いの島では、ボロボロの姿を見せてしまえばきっと他の選手達からの恰好の的だったはず。

だからこそ、ここまでボロボロになっても執拗に意識を保っている彼女は今、ある意味遊良への執念だけで立っているようなモノとも言え…

「【死者蘇生】発動！墓地から【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を特殊召喚！そしてエアーマンの効果でデッキから…」

「罠発動、【蟲惑の落とし穴】！エアーマンの効果を無効にして破壊する！」

「くそっ！だったら【Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイズマン】を召喚！その効果でデッキから【融合】を手札に加える！そしてすぐに【融合】を発動！場のブレイズマンと手札のマリシャス・エッジで融合召喚！現れなさい、レベル６！【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】！」

―！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

「ガイアの効果発動！バルバロスの攻撃力を半分にして…」

「それもさせない！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！ガイアの効果を無効に！」

そんなアカリの展開も、遊良はその全てを潰しにかかるのか。

…しかし、遊良からすればそれも当然。

ルキの身に『何か』が起こったであろうこんな時に、アカリの喚きにゆっくりと付き合ってやってる時間など遊良にはないのだ。

…それは、かつて遊良が彼女にやったような、相手に何もさせないデュエルの進行。

全てを潰し、動かせもせず。昨年、遊良のこのデュエルに手も足も出なかった彼女のトラウマを呼び覚ますかのように、遊良の妨害には

全くの容赦はなく。

それでも…

「それがどうしたってのよ！魔法カード、【融合回収】発動！墓地から【融合】と【E・HEROブレイズマン】を手札に戻す！更に【強欲で貪欲な壺】を発動して、デッキを10枚裏側除外して2枚ドロー！」

「駄目だ、止まらない…」

「再び魔法カード、【融合】を発動！手札のブレイズマンと場のガイアで融合召喚！再び来なさい、レベル6！【E・HERO　ガイア】！」

―！

【E・HERO　ガイア】レベル6
ATK／2200　DEF／2600

痛む体を押し通し、飛びそうな意識を辛うじて堪えて。

遊良の張り巡らせた罠の中を、どれだけ止められても止められも展開を続けようとするアカリの場に…

―ついに現れた、大地の英雄。

…地属性の紫魔家を統括する、『地紫魔』が誇る象徴の一体。

それは遊良には、昨年度の【決闘祭】で彼女の義姉である紫魔　ヒイラギが、鷹矢との戦いの時に魅せたガイアの連打にも見えたことだろう。

昨年…1年生の頃に、遊良に何もさせてもらえずに完全敗北していた紫魔　アカリとは全くもって比べ物にならない程の力の上昇。

かつては遊良の妨害に手も足も出せず、モンスターを出すことも伏せカードを伏せることもさせてもらえなかったというのに…

「くそっ、しつこい！」
「今度こそ防げないわ！ガイアの効果発動！バルバロスの攻撃力を半分にして、ガイアの攻撃力に加える！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】レベル６
ＡＴＫ／２２００→３７００
【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００→１５００

しつこいまでの執念で、遊良の罠を掻い潜り現れた大地の英雄が放った衝撃は、ついに地面を伝い獣の王の力を吸い取ってしまうのか。
…『地紫魔』の名をこれ以上ないくらいに洗練させた、地紫魔の誇りである大地の英雄の力を最大限かつ最優先に考えたが故のデュエルの形。
そのまま彼女は、遊良の威嚇の如き妨害など通用しないかの様にして。大地の英雄の轟き共に、益々アカリはその熱さを増していくのみ。

「まだよ！更に魔法カード、【ダーク・コーリング】を発動！」
「【ダーク・コーリング】!?それって紫魔　ヒイラギの…」
「アンタが気安く姉様の名前を呼ぶな！墓地のマリシャス・エッジと、さっきアンタの【手札抹殺】で墓地に捨てた【ブロックドラゴン】を除外融合！」

更には遊良の威嚇など、己の憤怒を増す道具に過ぎないのだと言わんばかりに。
益々強くなる猛りを上げながら、一枚の魔法カードを発動した紫魔アカリ。
…それは昨年度の【決闘祭】で、彼女の義姉が扱っていた悪魔の英雄を呼び出す闇の魔術。

遊良のカードを利用してでも、遊良の上を意地でも行こうと。禁忌の力に身を染めし、もう一体の大地の英雄が…

今、ここに…

「姉様…アタシに力を！融合召喚！現れなさい、レベル８！【Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア】！」

―！

【Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア】レベル８
ＡＴＫ／　？→５１００　ＤＥＦ／　０

現れしは悪魔の如し、闇が混ざりし大地の英雄。
２体の地紫魔の象徴が、場に揃った圧力は地を轟かせ空気を震わせ…
今の彼女の実力の高さと、その溢れる遊良への殺意が相まって。その２体の大地の英雄達の放つ存在感は、他の追随を許さぬ圧倒的な重圧を持って遊良へと襲い掛かっていることだろう。

「ガイアと…ダーク・ガイア…」
「まだよ！この程度じゃまだアンタを倒せない…だから…」

しかし…２体の大地の英雄を、淀みなく揃えたというのにも関わらず。
まだまだアカリはその手を止めようとはせず、深く息を吐くようにしてその身に僅かな体力を溜め始めるのか。
…それは、これまで遊良と多くの戦いを経験し、そしてその全てを跳ね返された彼女だからこその勘。

まだまだこの程度の力では、遊良には及ばないことを彼女もこれまでの経験で理解しているからこそ。
今こそ絶対に遊良の首を取るのだとして、更にその殺意を増していき…

「だから……アタシは！ここでアンタを！絶対に倒す！これがその答えよ！魔法カード、【ミラクル・フュージョン】発動！アタシは墓地から…3体の【E・HERO　エアーマン】を除外！」
「エアーマン3体!?で、でも、そんな召喚条件の地のHEROなんて…」
「いいえ、居るわ！…これはお爺様から託された、地紫魔に代々伝わる英雄…アンタを倒す為だけに得た…アタシの力よ！融合召喚！」

遊良の唖然と驚愕など、全く持って意に介さず。
…遊良の記憶が確かなら、『地属性』の融合HEROの中にアカリの提示した条件を持つモンスターなど居ないはず。
また、古の規律を重んじる紫魔家において、複数の属性を扱えるような許しを得るには、一部の『例外』を除いてプロデュエリストの紫魔姓の人間ですら難しい事であると言うことは、最早世界の常識として知られており…
だからこそ、アカリが宣言したその召喚条件には全く『地属性』が絡んでおらず、ソレを堂々とアカリが宣言したからこそ遊良には驚愕が降りかかってきているのだ。
けれども、そんな遊良の驚きなど、知ったことではないかの如く。
アカリはどこまでも激しい憤怒を持って…遊良へと、その猛りをぶつけ…

「現れなさい、レベル9！」

―ここに、現れるは…

「【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ（コア）】！」

―！

…それは、目を疑う光景だった。
幾千の命を乗せたモノ、数多の文明を守りしモノ。
果てなき海と大地を背負いし、生命の進化を見守る化身。マグマを血とし、大気を纏い、命を持ったまさに『地の星』に…

―とても良く、似たモノ。

それは、増え続ける命の荒ぶりを、一体のモンスターに押し留めているようではあるものの…

【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ（コア）】レベル９
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２２００

「馬鹿な!?こ、これは…プラネット!?」

アカリの宣言のそのままに、確かに場に現れたのは『地属性』のＨＥＲＯ。

それは、遊良がこれまで見たことのない代物であり…
おそらく、世界中のどんな資料を探したって、この地属性の英雄を知る者などいないであろうことが遊良にだって理解できるほどに…このＣｏｒｅというＨＥＲＯが放つ存在感は、両隣に存在しているガイアとダーク・ガイアとは似ても似つかぬ異質なオーラを放っていて。
そう、感じるその押し潰されそうな強大なオーラは、まさにソレらと過去に２度対峙した遊良だからこそ理解できる代物。
とてつもなく大きなオーラを放ち、この星のモノではない強大な力と重圧を放っていた、『プラネット』と呼ばれる特殊なカードに似ていると言うこと。

―しかし…

「い、いや…違う…こいつは、プラネットじゃ…ない…」

…だけれども、遊良にはわかってしまった。
そう、それは過去に２度ほど『ソレら』と対峙したことがある遊良だからこそ感じる事が出来たであろう、『似て』はいるが『同じではない』という不思議な感覚。
たった今紫魔　アカリが融合召喚したコレが、『プラネット』とは似て非なるモノだと言う事が、言葉よりも心で遊良は理解出来てしまったのだ。
紫魔　アカリがたった今、融合召喚したこの『プラネット』に良く似たコレは…
昨年度の【決闘祭】の直後に、釈迦堂　ランと対峙した時にランが見せた『火の星』とも…
昨年度の卒業式の日に、泉　蒼人が魅せてくれた『水の星』とも…

その、本物の『プラネット』ほど強大で傲慢な我の強さを感じない、『プラネット』に良く似た性質を持った別の存在だと言う事を。
…確かに『プラネット』に近い存在感。しかし『プラネット』ほど凶悪な重圧ではない。
あの、容赦なく押し潰してくるような『プラネット』達の性質に、良く似たモノを持ってはいるのだが…
それは例えるなら、『プラネット』の持つ強大な狂気の呪縛から解放された、『この星』のもう一つの『自我』とも呼べるような独特の雰囲気とオーラとも言えるだろうか。

「お前…こんなカードをどうして!?」
「アンタに教える義理なんて無い！ＬＰを１０００払って、【チキンレース】の効果発動！【チキンレース】を破壊する！」
「くっ！」
「バトルよ！先ずはダーク・ガイアで、バルバロスを攻撃！」

…けれども、安堵なんてしていられない。
そう、いくらこの【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ】が、『プラネット』が放っていた容赦の無い異星の力とは『違う』とは言え。
この【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ】が放つ重圧も、この星のカードとは似ても似つかぬ、相当たる代物なのだ。
…それに加え、アカリの場には２体の『地紫魔』の象徴たち。
油断も隙も許されぬ、確実に遊良の命を取りに来ているその重圧。
先ずはその片方…闇の力を纏った大地の英雄が、その巨大化した岩盤の拳を天に掲げて遊良へと襲いかかり…

「させるか！永続罠、【光の護封霊剣】発動！ＬＰを１０００払い、ダーク・ガイアの攻撃を無効にする！」
「足掻くな！続けて【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】でバルバロスを攻撃！」
「再び【光の護封霊剣】の効果発動！ＬＰを１０００払って、ガイアの

攻撃を無効に！」

遊良　ＬＰ：３０００→１０００

遊良の言葉を遮って、一撃一撃が遊良のＬＰを確実に０にするであろう重い一撃を、そのボロボロの身体で繰り出してくる紫魔　アカリ。

これまで、幾度となく遊良を狙って戦ってきた経験か。

これだけ熱くなってはいても、あくまでも戦況だけは冷静に、遊良の防御の手を見越して【チキンレース】を破壊することも忘れず…

また、そんなアカリの猛攻を、どうにかＬＰを削りつつ止めている遊良ではあるものの…

そのＬＰも尽きかけてしまっては、もうアカリの攻撃を止める手立てなど遊良の場には残されてはおらず。

…【冥界の宝札】を主軸とした事が、ここへきて仇となった。

２枚の永続魔法を発動していては、遊良が伏せられるカードは３枚まで。まぁ、これまでのアカリであったならば、遊良の３枚の罠を掻い潜ることも出来なかったのだが…

憤怒の高揚、力の上昇、殺意の果てに届くその牙。

この土壇場にきて、とうとう遊良の妨害を超えたアカリの場には、まだ最後の英雄の攻撃が残っているではないか。

「…チッ、しぶといわね…でもこれで、アンタのＬＰは残り１０００！もう攻撃は防げないわ！これで終わりよ！【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ】で、バルバロスに攻撃！」

迫る大地の堅き拳、唸る星の核の一撃。

あの、憎き天城　遊良に…何度挑んでも、かすり傷さえ負わせる事も出来なかったこの忌々しい天城　遊良に、とうとう手が届くのだ。

…その少女の昂ぶりは叫びとなりて、星の英雄の拳へと届くのか。
大地の力をその手に収め、星の核の熱さを放ち…

「よし！これで終わ…」
「…ッ！ま、まだだ！攻撃宣言時に墓地の【ネクロ・ガードナー】を除外して効果発動！【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ】の攻撃を無効にする！」
「なっ!?」

―！

それでも、遊良は最後まで抵抗を止めず。
最後の最後…もしもの時の為に、デッキにたった一枚だけ入れていたその最後の守りの札によって、どうにかＬＰを守る事に成功し…
あらかじめ保険として墓地に送っておいた方が幸いし、ギリギリのところで何とかダメージを受けずに命を保ち…

「【ネクロ・ガードナー】…そんなカードいつ墓地に…【手札抹殺】か…くそっ！往生際の悪い！攻撃が無効になったらＣｏｒｅの効果も発動できない……うぐっ…ど、【貪欲な壺】を発動…墓地のガイア、ブレイズマン、エッジマン、ワイルドマン、ソリッドマンをデッキに戻して２枚ドロー…」
「こいつ、まだそんなカードを…」
「ア、アタシはカードを２枚伏せて…タ、ターン、エンド…」

紫魔　アカリ　ＬＰ…２６００→１６００
手札…６→０枚
場：【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】
【Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア】
【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ】

伏せ…3枚

やはり身体に蓄積したダメージが、もう限界に近いのか。

苦しげな声を漏らしつつ…アカリは、そのターンを終え…

(あ、危なかった…最初のターンに【ネクロ・ガードナー】が引けていたからよかったけど…もし引けていなかったら…)

そんな、憔悴しきっているアカリを前に。

体力的にはまだまだ余裕があるはずの遊良の方が、どこか追い込まれているかのようにしてその心臓が逸っている。

…そう、何とかあの猛攻を耐えたとは言え。

全ての攻撃が、遊良のLPを一撃で0にしてしまうほどの攻撃を3連続で向けてこられては、遊良の額からも止めようのない冷や汗が垂れてきてしまうのか。

「…俺のターン、ドロー!」

…かつての、『地紫魔』と言う名家に甘えていた、あの弱かった彼女からは想像もつかないほどの力の上昇。

アレだけの展開を行ったと言うのに、アカリの場には遊良の次の手に備えたであろう伏せカードが2枚に、先のターンに墓地から蘇った【ミラーフォース・ランチャー】までもが伏せてあるのだ。

遊良一人の首を狙うというその執念だけで、よくぞここまで力をつけたものだ。今の彼女は、これまで戦ってきたどの彼女よりも強い状態とも言えるだろう。

一刻も早くルキの元に駆けつけたい、時間のない遊良の前に立つのは…これまで戦ってきた、どの紫魔　アカリよりも強い紫魔　アカリ。

…簡単にケリをつけられる相手ではない。簡単に倒せる相手でも

ない。出し惜しみしている場合でもなければ、余力を残せる場合でも無い。

―それを、遊良も理解したからこそ…

「…もういい加減、時間をかけるわけにはいかないんだ！【アドバンスドロー】を発動！バルバロスを墓地に送って２枚ドロー！更に【貪欲な壺】も発動！墓地の【神獣王バルバロス】、【闇の公爵ベリアル】、【サクリボー】３体をデッキに戻して２枚ドロー！【マジック・プランター】も発動だ！【デモンズ・チェーン】を墓地に送って２枚ドロー！」

なんとしてでもこのターンで決着をつけるために、再びドローを加速して、アカリの勢いに負けないようにその勢いを増していく遊良。

…相手は、自分と戦い慣れている。それ故、アカリが遊良の基本戦術であるバルバロスの全体破壊を大いに対策してきているのならば…

「魔法発動、【ワン・フォー・ワン】！手札の【サイコ・エース】を捨てて、デッキから【サクリボー】を特殊召喚！そして特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！」

「チィッ！またそのカードか！…アタシの場には融合モンスターしかいない…アタシはガイアを選択…」

「俺はデッキから、【サクリボー】２体を特殊召喚する！再び集え、【サクリボー】達！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１

ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

再び遊良の場に集いしは、闇の悪魔の化身たる、３体の小さき毛玉達。
その小さき目を、精一杯に鋭くし…殺意を向けるアカリへと、負けじと威嚇の唸りを零す。

「…またバルバロス？無駄よ！アタシの場に【ミラーフォース・ランチャー】がある限り…」
「いや違う！行くぞ！俺は【サクリボー】３体をリリース！」

そして…
アカリの言葉を遮って、天に捧げし宣言と、天に掲げし遊良のその手。
それはアドバンス召喚のモノとは違う、特殊召喚のための生贄のエフェクトであり…
遊良の宣言によって、天にその身を捧げる小さき悪魔達の、その身に纏うは渦では無く。

「運命を切り裂く英雄よ！青き誓いをその身に刻み…天を喰らいし覇者となれ！」
「なっ、そ、それは！」

もう、出し惜しみしている場合じゃない。
一刻も早く紫魔　アカリを倒し、一刻も早くルキの元へと向かう為に…一筋縄では言う事を聞かぬ、その誇り高きカードを無理矢理にデッキから手札に呼んで。
現れるは、世界中の人間が知っている、世界に轟くその『口上』と

共に。
　そして何よりも、『紫魔』の姓を持つ紫魔　アカリにとっては…いや、『紫魔　ヒイラギ』を義姉にもつ彼女にとっては、誰よりも『特別』であろうその『口上』を、今ここに見せ付けるようにして。
【決島】へ来てから新たに得た、もう一枚の切り札を今ここに呼び出すため…

—遊良は、叫ぶ

「来い！【Ｄ—ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ—Ｄ】！」

その瞬間…

—天が、震えた。

血霧と共に降臨し、剥き出しの牙を刃へと変え…混沌渦巻く天より出でし、竜頭を纏いし運命の英雄。
　纏いし竜の咆哮で、双翼を広げ地に降りることなく空に佇み。下界を見下ろすその瞳は、一体何を映しているのか。

【Ｄ—ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ—Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

「【サクリボー】３体の効果で３枚ドロー！」
「Ｂｌｏｏ—Ｄ…姉様の…実父のカード…」

そんな、彼女にとっては別の意味で『特別』な意味を持つそのカードを見て、アカリは一体何を思ったのだろうか。
一瞬顔を伏せ地面を見たと思うと、そのままわなわなと肩を小さく震わせ始め…

「…ソレよ…そのＢｌｏｏ—Ｄのカード！」
「…え？」
「アンタ…一体そのカードをどこで手に入れたのよ！それは【紫魔】の…姉様に関係のあるカードよ！アンタが持ってていいようなカードじゃない！」

遊良の場に召喚された運命の英雄。ソレを見て、怒りを顕に声を荒げ始めた紫魔　アカリ。
その瞳には、先程よりも更に増悪した憎悪が燃え上がっており…

「アンタが姉様と血が繋がってたってことは別にどうでもいいわ。でも解せないのは、何でアンタ何かが【紫魔】のカードを持っているのかってこと…」
「それは…」
「そう、そうよ…Ｂｌｏｏ—Ｄのカードだって、元々姉様が持っていたのなら説明がつくわ…だってソレは姉様の実父の…それをどうしてアンタが…も、もしかしてアンタ、姉様に何か…」
「違う！お、俺は何も…」
「嘘よ！じゃなきゃ、姉様が突然いなくなるなんて事！そ、それに…姉様が…し、死んだなんて…」

歪む言葉を絞り出し、震える声を漏らし出し…
もう我慢がならないのだと言わんばかりに、喚き散らすかのようにして次々にアカリは放り出す。

…紫魔　アカリは認めていない。

そう、まるで認めたくないかのようにして搾り出したその声の通り。紫魔　ヒイラギが、『公的』に『死亡』した扱いになっているとはいえ…ソレを、アカリは全く認めていないのだ。
…現実を見ていないとも言えるだろうが、『ある意味』で最も『真実』に近い彼女の強いその思い。
だからこそ彼女は紫魔　ヒイラギの事を遊良から聞きだそうと躍起になっているのだし、幾度も遊良にデュエルを挑み続けてきたのであって…
『紫魔　ヒイラギ』に何があって、そして『その後』がどうなったのかを知らぬ彼女からすれば、義姉の死を絶対に認めたくは無いモノなのだ。

そして…

そんな溢れる少女の憤怒と、『間違った答え』に到達している紫魔アカリと目の当たりにして、遊良にはわかってしまった。
これまで、イースト校で戦ってきた紫魔　アカリと…『今』の紫魔アカリが放つ、自分へと向けた驚くべきほどの『憎悪』の、その違い、その正体を。
…これまでの紫魔　アカリは、遊良を倒す事に執念を持ってはいても、ここまでの『憎悪』を持ってはいなかった。
それは、義姉である『紫魔　ヒイラギ』の失踪について、遊良が何かしら知っているのではないかという、『間接的』な繋がりをアカリは疑っていたため。

しかし…

―『前【紫魔】、紫魔　憐造を！【王者】を『伯父』に持つ俺が！Ｂｌｏｏ―Ｄを召喚出来ないわけがない！』

彼女は、この【決島】で知ってしまった。
【決島】の初戦…世界中が驚いた、天城　遊良の突然の暴露。
遊良と義姉の、何かしらの『間接的』な繋がりではなく…その『直接的』な繋がりを。

「…そうよ…実は従姉弟だったってことを利用して姉様を脅したのね！この人でなし！」
「俺の話を聞けって！俺は何も…」
「うるさい！Ｅｘ適正も無い癖に、紫魔家に取り入ろうとして姉様に近づいたのね！じゃなきゃアンタが【紫魔】のカードを持ってるなんておかしいじゃない！」

『紫魔本家』が切り捨て、そしてその繋がりを隠蔽していた、遊良の母と前【紫魔】との、その濃い血の繋がりを、遊良は世界中へと向けて解き放った。
…そして、ただの学生の妄言とも取られそうなソレを、本当の事だと決定付けたのは、何を隠そう今遊良の場に居る【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】の存在。
…とは言え、別にアカリにとって義姉と天城　遊良に実は血の繋がりがあったと言うのは、それほど大した問題ではない。
自分と義姉の血が繋がっていない事など幼少の頃から知っていたのだし、そんな血の繋がりなど無くとも自分達は『家族』だったのだから。
そして、天城　遊良が義姉と血が繋がっていたとしても、そもそも天城も義姉も『別々』の人生を歩んできているのだから、二人が『他人』であると言う事は心が理解できている。
…しかし、ソレをアカリもわかってはいても。
一度でも『ソレ』を考えてしまっては、もう止める事などで出来はしない。
そう、今まで考えないようにしてきた義姉の『死』の可能性を、今まで考えてもいなかった義姉の失踪の理由の断片を、一度でも考えて

しまったら。

…溢れる憎悪は止められず、燃え上がる憤怒は収まらず。

「…全部吐いてもらうわ…アンタが姉様に何をしたのか！そして出るとこ出てもらうわよ！この犯罪者め！」

「何を言っても無駄なのか…でも、こっちだって時間が無いんだ！Ｂｌｏｏ—Ｄのモンスター効果発動！１ターンに１度、相手モンスターをＢｌｏｏ—Ｄに装備する！」

そして、こんなにも妄執に取り憑かれた少女には、これ以上話しかけても無駄だと遊良も悟ったのか。

だからこそ、１秒でも早くこのデュエルを終わらせようとして…

「やれＢｌｏｏ—Ｄ！【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ】を喰ら…」

アカリの叫びを他所に、遊良が運命の英雄へと命令を飛ばした…

—その時…

「それも読んでたわ！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！」

「なっ!?」

少女の場から飛び出したるは、神をも縛る悪魔の鎖。

今まさに、攻勢に転じ始めた遊良の攻め気を弾き返すかのように。運命の英雄へと向けて、命令を飛ばした遊良の言葉に割って入り、紫魔　アカリが悪魔の鎖を飛ばしたのだ。

そのまま、焦る遊良を他所に…紫魔　アカリが発動したその悪魔の鎖に縛られて、竜頭の運命の英雄はその翼を広げる事も出来ずに地に堕ちてしまったではないか。

「しまっ…」
「何が従姉弟よ…何が【紫魔】の甥よ…何がＢｌｏｏ―Ｄよ！アンタ程度がＢｌｏｏ―Ｄを使った所で、怖くも何とも無いのよ！」

自身の持つ『紫魔姓』の、その頂点だった男が扱っていた運命の英雄を前にしても、アカリは少しも怯んでおらず。
…そう、いくらＢｌｏｏ―Ｄが、前【紫魔】の扱っていたカードだからとは言え。
あくまでもソレは、前【紫魔】である紫魔　憐造が使っていたからこその伝説。
使うタイミングも、その真価も、そしてこのカードが持つ特別な意義すらもまだ曖昧な遊良では、同じ【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】のカードであっても、【紫魔】と同じ重圧を放つには足りないのか。
焦る遊良の隙を突き、遊良の動きを先読みし。
遊良の存在を咎めるように、アカリは増悪し続ける憤怒に任せ、更に言葉を荒げ続け…

「…アンタが姉様に何をしたのか！全部話すまで逃がさない！」
「くっ、た、頼む…時間が無いんだよ…じゃないと…」
「逃げる気!?姉様に何かした癖に…何も持ってないアンタが！これ以上一体何をしたいって言うの!?」
「話を聞いてくれ！俺は…早く行かなきゃいけないんだ！早く行かないと…俺は…幼馴染を…」
「はぁ!?何が幼馴染よ！アタシは家族を奪われたのよ！家族もいないアンタが！家族でもない奴を助けようなんて、アタシをどれだけ侮辱したいのよ！」
「…ッ!?」
「Ｅｘ適正が無くて侮辱され続けて来たからって、何よここぞとばかりに！アンタ、他人に否定され続けてきたからって、今度はアタシと姉様を否定したいんでしょ！」

「違っ…」

…言葉を遮ぎり、事情を否定し、感情すらも無視し続け。

遊良の話など聞き入れず、そのまま少女は言葉を止めず…己の間違った答えが生み出す的外れな憤怒を、真実なのだとして遊良へと噛み付き続ける紫魔　アカリ。

「許さない…許さない許さない許さない！アタシから姉様を奪ったアンタが！自分は何かを守りたいなんて絶対に許さない！絶対に行かせないから…ここで！アンタをぶっ飛ばして！アンタを気絶させてでも！絶対に行かせるものか！」

「お、俺はルキを…」

「うるさい！そんな奴より姉様の事よ！…そうよ…アンタが姉様の命を奪ったんだったら…今度はアタシがソイツの命を奪ってやるわ！」

「なっ!?」

「アタシが受けた苦しみをアンタも味わいなさい！…いいえ、同等なモノか…たかが…たかが幼馴染の命なんかで！家族を奪われたアタシの苦しみがわかるものかぁ！」

「ぐっ…ぅ…」

遊良を探しつづけて、無茶を繰り返した身体は悲鳴を上げていると言うのにもかかわらず。

まともに考えればありえないはずの間違った答えすら、今の憔悴しきった彼女ではソレを否定するつもりもなく、アカリはただただ遊良への怒りを燃やし続けるだけ。

決して褒められぬ、紫魔　アカリの濁った言動。

その言葉の荒さはボロボロの身体と、磨耗した精神の所為もあるのだろう。自分が何を言っているのかすら、今彼女には理解できていないようではないか。

「お、お前…」
「何が幼馴染よ！Ｅｘ適正もない！家族もいない！何もないアンタに…」

そして…

俯く遊良の肩が小刻み震え、食いしばった口から血滴がしたたっている事にも気づかぬアカリが、朦朧とした感情のまま。

「家族を奪われたアタシの何が分か…」

遊良へと向かって、更に喚き散らさんとした…

―その時だった。

「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

―！

突如として辺り一面に響いた、あまりの声量を持った怒号。
それに揺らされざわめく木々たち。大気が震え、小川が波立ち…
喚き散らすアカリの憤怒を、丸ごと上から押し潰すかのような重い怒号が、突然この渓流に轟いた。

「なっ!?」
「さっきからゴチャゴチャ…時間が無いって言ってんだろうがぁぁぁぁぁあ!」

…それは、紫魔　アカリも見たことが無いような…
いや、おそらく誰もが見たことの無いような、弾けるような遊良の憤怒。
怒りに顔を歪ませて、憤怒に体を震わせて。
…ここまで感情を剥き出しにした遊良は、おそらく鷹矢やルキであっても見たことが無いことだろう。
ソレほどまでに遊良から放たれる憤怒の慟哭は凄まじく、その声はまるで実体を持っているかのようにして重々しくアカリを飲み込み、周囲の空気ごと少女を潰していて。

「お前こそ…お前なんかに!・俺の何がわかるってんだぁぁぁあ!
【イービル・ソーン】を通常召喚!・そのまま自身をリリースし、相手に３００のダメージを与えデッキから【イービル・ソーン】２体を特殊召喚!」

―!!

【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００
【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００

アカリの怒りを超える怒声。
弾ける憤怒のそのままに、闇の新芽を繰り出して、遊良は更に勢いを増していく。
そう、遊良の事を何も知らぬが故に、怒りに任せて無知のまま遊良にとっての大切なモノを、あろうかとかアカリは踏み抜いてしまった

のだ。
…それは、触れてはいけない遊良の逆鱗。誰もが皆、大切なモノがある。それは、Ｅｘ適正が無い遊良であっても同様だというのにもかかわらず…
遊良にとっての大切なモノ。Ｅｘ適正も持たない、血の繋がった家族もいない、そんな遊良のこの世で最も大切なモノ。

…それを、紫魔　アカリは踏み抜いた。

「【闇の誘惑】発動！２枚ドローして【サイコ・エース】を除外！【大欲な壷】も発動！【サイコ・エース】２体、【クラッキング・ドラゴン】をデッキに戻し１枚ドロー！【トレード・イン】も発動！【モザイク・マンティコア】を捨てて２枚ドロー！」

故に…

「俺の邪魔を…邪魔をするなぁぁぁぁぁぁぁぁ！バトルフェイズに入り速攻魔法、【ライバル・アライバル】を発動！３体のモンスターをリリース！」
「なっ!?Ｂｌｏｏ―Ｄまでリリース!?」

―！

紫魔　アカリの目の前で、【紫魔】のモンスターすらも生贄に捧げ。
どうにもならない苛立ちを、虚空に向かって叫び散らす遊良の姿は…まさに獣の雄叫びにも似た、怒りの頂点の轟きの震撼。
―地を揺らし、木々を騒がせ、大気を震わし雲を散らし。
自らの邪魔をする、紫魔　アカリすらも怯えさせながらここに現れ

るは…

「来い！【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

主の叫びに呼応して、猛々しく吼えながら現れしは獣の王。
その咆哮は天を貫き、大気を震わせ大地を揺らす。
…もう、ごちゃごちゃ考えるのはやめた。
少女が自分の話を聞かず、喚き散らし、どこまでもどこまでも自分の邪魔をするつもりなのだったら…
その浅はかさごと、全て吹き飛ばしてやるのだと、まさに遊良はそう言わんばかりに…

「バルバロス！全部吹き飛ばせぇぇぇぇぇぇ！」

―！

「くぅっ!?…け、けどＣｏｒｅは破壊された時…」
「【冥界の宝札】の効果発動！俺はデッキから４枚ドロー！」
「あっ！し、しまっ…」

獣の王が放った、全てを粉砕する破壊の波に、飲み込まれていくア

カリの英雄たち。
また、破壊された時にもＣｏｒｅは効果を持っているものの…タイミングを逃してしまった為に、Ｃｏｒｅの効果は発動することはなく。

…別に、遊良はＣｏｒｅの効果の隙を狙ったわけではない。

偶然の産物、偶々の出来事。
初めて目の当たりにした【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｃｏｒｅ】の効果を、遊良が知っているわけもない。
ただ偶然に、偶々に、奇跡的に遊良の取っていた展開が、Ｃｏｒｅの隙を突けるモノだったという、ただそれだけの話。
そしてソレは、アカリの方もそう。
遊良に対する、取っておきの隠し玉として、ずっと温存しておいたが故の経験の不足が呼び起こした、Ｃｏｒｅを使った戦術の積み上げがアカリには足りなかった。
ソレらがここへきて、この一瞬で複雑に絡み合い、そうして生まれた一瞬の隙が二人の命運をわけた…

ーただ、それだけのこと。

そして…

「ダストフォースも破壊されたか…で、でも【ミラーフォース・ランチャー】の効果は発動する！墓地からランチャーとミラーフォースを…」
「それにチェーンして速攻魔法、【禁じられた聖槍】を発動！バルバロスの攻撃力を８００下げ…効果を受けなくする！」
「そんな!?」

更には【冥界の宝札】のドロー加速により、デッキの中から無理矢

理にキーカードを引っ張り出した遊良。
神によって封じられた、禁忌の槍をその手に構え。
二振りの槍を振り回せし、獣の王は高らかに吠える。

「いけ、バルバロス！」

大地を駆ける獣の王。
その手に握られし、螺旋の槍と禁忌の槍が大気を切り裂くその音は、野獣の雄叫びよりも更に鋭く反響し、鈍く少女の耳を襲う。

「アイツに…ダイレクトアタック！」

…許さぬ。
自らの感情のままに、主の逆鱗を踏み抜いたこの少女を。
まるで、獣の王自身がそう思っているかの如く。
遊良の咆哮に混ざった獣の怒りの叫びが、天を貫き空を裂き…

「天柱の崩壊！ディナイアアアアア…ブレイカアアアアア！」

―！

「あああああああああああああああああ！」

少女を貫く螺旋の槍。
少女を切り裂く禁忌の槍。
その二振りの槍の一閃が、紫魔　アカリを吹き飛ばす。

アカリ　ＬＰ…１３００→０（―９００）

「う…あ…ぅ…」

そして吹き飛ばされた少女は地面に激突し、一度地面にぶつかりバウンドしたかと思うと背中をぶつけたのか、呼吸が更に弱くなり…

息も絶え絶え、意識も朦朧。

あまりにリアルな獣の王と、【決島】のルールにより実際に発生したリアル・ダメージによって、最早アカリがその身に負ったダメージは彼女の身体の限界を超えたのか。

ーピー…

また、一瞬、静かになったかと思われた渓流に、デュエルディスクが決闘の終了を告げる無機質な機械音をかき鳴らすも…

敗者と言うにはあまりに傷付いた、土に塗れボロボロになった少女は立ち上がることも出来ずに。

その場に倒れ、虚ろな意識で天を仰いでいた。

そして…

そんな、満身創痍な少女へと向かって。

「お前が…お前が俺に、勝てるわけないだろ！なのに…何度も何度も挑んできて…」

「う…う、ぅ…」

朦朧とした意識で涙を零し、声も出せずに倒れている紫魔　アカリ

に対し…
苛立ちを含めた辛辣な言葉を、容赦なく敗者に噴射した遊良。
…しかし、遊良も単なる見下しのつもりでそんな言葉を放ったのではない。
遊良とて、何度負かしてもその度に執念という名の強さを増して向かってくる紫魔　アカリの実力が、今では自分に近い相当なモノとなっている事など、今の戦いで嫌でも理解出来ている。

だからこそ…今の遊良のその苛立ちは、まるで『そう言わずにはいられなかった』のだと言わんばかりの焦燥に満ちた代物。

遊良の、これほどまでの余裕の無さがその証拠。

あと一歩…遊良の引くカードが、あと一枚でも違ったら。あと一手…アカリの使ったカードが、あと一枚でも多かったら。
今この場で倒れていたのは遊良の方であって、今この場で天を仰いで涙を流していたのは遊良の方であった事だろう。
それ程までにアカリの執念の牙は凄まじく、冗談抜きで遊良の喉元にほんの数ミリのところにまで迫って来たのだ。
昨年の彼女からは考えられない意思の強さと、昨年の彼女からは比べ物にならない程の力の向上。
きっと、遊良には想像もつかないほどの執念が、紫魔　アカリの心には渦巻いているのだろう。それこそ、彼女がこれ程までに執着している『義姉』を、何としてでも取り返すために。

「…う……」
「…悪いけど、お前に構ってる暇なんてないんだ。…じゃあな。」
「あ…」

それでも、これはあくまでも『決闘』。
どれだけ可能性を提示しても、最後の最後にＬＰを残して立ってい

たのは遊良なのだ。
勝者は一人…
敗者は、勝者を止めてはならない。それがデュエルの定めであって、それが【決島】の掟であって…そして、それが遊良とアカリが決めた、『約束』の原則。

故に…

倒れているアカリを背に、決別の意を込めて遊良は今にも駆け出し始めようとしていて…

「…」

けれども、一瞬の躊躇いの後…

ー何故か遊良はその場に、足を止めて立ち止まった。

「…紫魔　ヒイラギは…」
「…ッ!?」
「…紫魔　ヒイラギは…きっと生きてる。…少なくとも、俺はそう思ってる。」
「ぁ……ほ……ほん、と……に…？」
「確証は無いけど…でも、紫魔　ヒイラギが死んだなんて俺も信じない。わかんないけど…そんな気がしてる…ただ、それだけだ。」
「…そ…う…」

肺の奥から絞り出すような、苦しげなアカリの声にならぬその声に

応えるように。
…何を思ったのだろうか。これまで全く話そうともしなかった『紫魔　ヒイラギ』の事を、その口から零し始めた遊良。
それは別に、あまりにしつこい紫魔　アカリに対し、『嘘』を言った…と言う訳では断じてない。
これ程までに執念深い彼女には、口だけの軽い嘘など通用するわけも無く…
…そう、あの時の師の行動と、遊良自身が知っている【黒翼】と言う男を考え、そうして遊良も『本気』でそう思っているからこそ。
紛れも無い遊良の本心。心の底から『そう』思っているからこそ口に出した、アカリへと向けた己の望み。
そして、遊良のその言葉は、紛れも無い本心からの言葉となって紫魔　アカリに届いたのか。
それ以上の反応も出来ぬほどに傷ついたアカリは、遊良のその言葉にただただ微かな安堵を覚えた様子で…

「…」

ボロボロの身体で、ギリギリでどうにか繋いでいたその意識を…

—静かに、手放した。

「くそっ、時間を取られた…急がないと…」

そうして…
アカリが地面に倒れこんだ音を聞いたと同時に、今度こそその足を勢い良く前へと出し始めた遊良。
砺波から急げと言われていたのに、思わぬ時間を食ってしまった事

を悔やみながら…
その速度を即座に最高速にまで押し上げた遊良は、静かな渓流をノンストップで駆け出し走る。
…早く、速く、疾く捷く夙く。
ルキの身に何かが起こった可能性は、例え誤報や勘違いや間違いであったとしても無視などできない。
心臓の鼓動がうるさく遊良の胸の内を叩き続け、肺の中で暴れる大気の荒ぶりも無理矢理抑え。
何かあったからでは遅いのだ。ルキが無事なら、それだけで何の問題もない。
しかし、もしもルキの身に何かあったらと思うと…
そんな恐怖が遊良を襲い、その怖れがますます遊良の足の回転を速めるのか。
…そのまま、遊良は砺波に来い指定された、その場所へと向かって…
ー必死に、走り始めたのだった。
ー…

ｅｐ７８「紫影の陰謀」

未だ静まらぬ戦いの音があちこちで鳴り響いている【決島】。
早朝から始まったこの終わらぬ戦いも、とうとう折り返しを過ぎたというのにも関わらず。まだまだその勢いは弱まるどころか、気を失わずに生き残っている参加者達の戦意は益々鋭さを増していくだけであり…
少年達の戦いの映像は、文字通り世界中を熱狂の渦に巻き込んでおり、世界中の熱はその学生達の戦いの激しさと相まって、まさにこの島がこの星で最もアツい場所となっていると言っても過言ではないだろう。
学生の数が減るたびに、選手達が倒れていくたびに…まるで選別されていくかの如く更に洗練された闘気が島の中に生まれていく現在の状況は、まさに戦いの戦いによる戦いのために用意されたこの島を、文字通り【決島】と呼ばせるに相応しい代物となりて全世界へと発信されていて。

そんな、海岸でも森でも平地でも渓流でもそこかしらでデュエルが行われている【決島】の。
その島の中でも『唯一』デュエルが行われていない、島の中心にあるたったひとつの『山』…
天に聳える休火山、天を貫く荒れた山。
その高い高い休火山の、中腹に開いた山の胎内へと誘うその『洞窟』の中で…

―それは、呟かれた。

「…この島に、こんな場所があったとはなぁ…」

山の中の洞窟の中に、重々しく反響するはあまりの重量を持った声。
洞窟の岩肌すら震えさせるその声は、本気で叫べばこんな洞窟など一瞬で崩壊させてしまいそうな程の質量を持っているのでは無いかと錯覚させるほどであり…
そのあまりに重々しい質量を持った声を出せる者など、この世界においてはたった一人しか該当しないことだろう。
決闘学園デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と呼ばれた元プロデュエリスト…

―劉玄斎、その人

しかし、本来ならばデュエリア校の学長として、各学園の理事長・学長たちのために用意された『特別観覧席』にいなければならないはずの劉玄斎が、一体どうして『特別観覧席』を離れてこんな山の中の洞窟にいるのだろう。
いくらこの山が休火山で、危険性は少ないとはいえ…この洞窟の中に入るだけでも相当の高さを歩いてこなければならず、万能端末であるデュエルディスクの電波もシャットアウトされてしまうようなこんな辺鄙な山の、しかも人の手が加えられていないような獣道を通ってまでデュエリア校の学長が訪れている、その理由とは何なのか。
また、劉玄斎が現在居るこの場所は、『洞窟』とは言え無い程に広い『大空洞』となっており…
デュエルスタジアムほどもある広々とした空間と、到底昇り切れそうもないほどに高い天井。
岩肌に囲まれたこの大空洞の、その天井の中心には巨大な『穴』が開いていて…空の明るさをこの大空洞へと降り注いでいることから、

山の胎内であるはずのこの空間は外界となんら変わりない明るさに包まれているという、どこか神秘的な雰囲気すら醸し出しているこの大空洞に、劉玄斎が居るというのも可笑しな話に違いなく。

「本当に何も知らずにこの島を所有していたのですねぇ、宝の持ち腐れとはこのことです、ええ。…まぁ、この島がどういったモノかも知らずにいたと言うのも、ある意味では幸せではあったのでしょうが。」

「…どういう意味だ？」

…そんな、重々しく響く劉玄斎の呟きが聞こえたのだろう。

どこか呆れたようにしてその口を開いたのは、この『大空洞』に居たもう一人の男…

スーツと言う名の胡散臭さに身を包んだ、『捻じれた』と言う表現があまりに似合う、長身で細身なもう一人の男が徐にその口を開いて。

「言葉の通りですよ。そもそも、デュエリアが『何の街』と呼ばれているのかを考えれば、この島を買う前に少し調べればソレは簡単に分かったと思うのですがねぇ、ええ。」

「…『決闘発祥の地』、だろうが。この街じゃ、ガキでも知ってることだぜ？」

「いえいえ、そちらではありません。デュエリアのもう一つの異名…」

「『古の神が眠る土地』…か？」

「ええ、ええ、その通りでございます。」

どこまでもどこまでも鈍重に響く、ゆったりとした話し方をする劉玄斎とはまるで真逆。捲くし立てるように、煽るように…少々早口で言葉を放る、細身で長身の捻じれた男。

また、未だその心意が明らかにならぬ彼等の会話なれど、ソレらは少なくとも他人に見られてはならない思惑を孕んでいると言うことだけは確かだろう。

…何せ何気なく話しているようにも思える彼等の会話も、絶対に他

人には聞こえないように警戒されたモノとなっているのだし…

―何よりも劉玄斎の肩には、気を失っている『赤い髪』をした少女が担がれていたのだから。

…その意識の無い赤い髪をした少女は紛れも無い、イースト校２年の高天ヶ原　ルキ。

しかし、つい先程【決島】に出場していないはずのイースト校２年のとある褐色の少女とデュエルをして、意表を突かれてその意識を手放してしまったルキが、一体どうして劉玄斎に担がれ運ばれているというのか。

…意識もなく揺られるまま、抵抗もなく眠ったまま。

しかし、そんな意識も無く運ばれているだけのルキの事など意に介さず。劉玄斎の前を歩いていた『捻じれた男』は、劉玄斎へと向かってその捻じれた口を再度開き始めた。

「その『神』の内の一体が眠っていたのが、何を隠そうこの島と言うわけでございますねぇ、ええ。」

「おいおい、この島はそんな大層な島じゃあねぇぞ？手入れもされてぇねってんで、俺が若ぇ頃に二束三文で買い叩いた…」

「ま、あくまでも神が『眠る』…ではなく、遥か大昔に『眠っていた』というだけの島ですからねぇ。『神』が居なくなって、加護が消えただの島など人々の伝承にすら残りませんし、それに神話の時代のお話など本当かどうかなど分かりません、ええ。その『神』もどんな神だったのかは今は分かりませんし、もしかしたら伝承にも残らぬ下の下の神だったのかもしれま…」

「…つまりテメェは何が言いてぇんだ、あぁ？」

「ふふ、そんなに怖い声を出すモノじゃありませんよ。貴方の後ろのお嬢さんが怖がってしまいますからねぇ、ええ。」

煽るようなイントネーションと雰囲気で話す、『捻じれた』男の声に

苛立ちを感じたのか。
少々荒い口調を交え、その声のトーンを一つ落とした劉玄斎。
…身も竦む様な声の振動、人間の本能を揺さぶる音響。
しかし、その常人が中てられれば身震いが止まらなくなるはずの劉玄斎の声を、直接ぶつけられたにも関わらず…
捻じれた男は全く臆した様子もなく、その視線を劉玄斎の後ろへと向けると、劉玄斎の陰に隠れるようにして壁にもたれかかっていた、金髪で小柄な『あまりに幼く見える少女』へと声を伸ばし…

「…アイはこの程度じゃあビビらねぇよ。何せこいつぁ…」
「ふふ…存じておりますとも。彼女もその歳では考えられない修羅場を潜ってきているのですからねぇ。私の部下に欲しいくらいの…」
「…おい【紫影】、テメェ…」
「おっと…そんな殺気を出さなくともいいではありませんか。私の狙いはあくまでも『逆鱗』、貴方が抱えている『その少女』が持つ赤き竜神だけでございますとも。貴方の生徒には…まだ、手を出すつもりはありません。…ふふ、だから貴方はまだ大人しくしていなさい。…ご自分の生徒達が可愛ければね、ええ。」
「ぐ…」

しかし、そんな【紫影】と呼ばれた捻じれた男の、言葉の間に割ってはいるように殺気を放った劉玄斎に対し。
捻じれた男は更に続けざまに言葉を放つと、それを聞いた劉玄斎は苦々しげに顔を歪めつつ、醸し出していた殺気を鎮めてしまったではないか。
…その今の劉玄斎の姿は、とてもじゃないが暴れ狂う『逆鱗』と呼ばれていた大男とは思えない姿。
そのまま固く握った拳を振るう事も出来ずに、ただただ苛立ちを飲み込んでいる様子で…
「ま、貴方も人質がある身では、今私に歯向かっても無駄だと言う事は

分かっていらっしゃるでしょうし。貴方がきちんと働いてさえくれれば、貴方の生徒も決闘市の学生達も皆無事に解放しますとも。それに…貴方が欲しがっている『情報』も、事が上手く済めばちゃんとお教えしますよ、ええ。」
「その言葉に…嘘はねぇんだろうなぁ【紫影】。屑のテメェの言葉は信用ならねぇんだ。」
「ええ、ええ、もちろんですとも。」

…一体、この【紫影】と呼ばれた捻じれた男は、何をどうやって『逆鱗』とまで呼ばれた劉玄斎を抑えこんでいるのだろう。
今の劉玄斎の姿からは、少なくとも彼が自らの意思でこの【紫影】と呼ばれる捻じれた男に付き従っている…と言うわけでは絶対にないと言う事だけは明らかではあるものの、それでもこの細身の捻じれた男が、巨大な体躯を持った劉玄斎に上から目線で従わせていると言うこの現状はあまりに不自然であまりに不可思議な現実。
…『逆鱗』とまで呼ばれた、あの触れるモノ皆砕き壊していた若かりし頃の劉玄斎を知っている者が、今の劉玄斎を見ればきっとそのあまりの腑抜け様に落胆を隠せない事は必至。

…しかしそれは子ども達の知らない、大人の都合と陰謀の契約。

一体、【紫影】と呼ばれた捻じれた男が何を持って劉玄斎を従わせているのかは、今は彼等にしか分からぬ秘密裏に交わされた契約ゆえの偽りの主従関係。
その会話は不穏に塗れた、大人同士のモノではあれど…少なくとも、不本意とは言え契約によって従う事を決めた劉玄斎は、今この場ではこれ以上【紫影】の言葉に従うしかないのだろう。
そのまま【紫影】と呼ばれた捻じれた男は、その意識を劉玄斎の後ろを歩いていたアイナ・アイヴィ・アイリーン・アイオーンから、劉玄斎に担がれている高天ヶ原　ルキへと切り替えつつ…

「…しかし、貴方も随分と丸くなりましたねぇ『逆鱗』。昔の貴方とは大違いでございます、自分の生徒のためならばまだしも、まさか天城遊良のためにここまで…」
「…んなことより、やるならさっさとしねぇか。」
「ふふ、いいでしょう…そろそろ始めましょうか。」

そうして…決して結束などしていないであろう彼等が、それぞれの思惑を胸中に秘めたまま。
【紫影】と呼ばれた『捻じれた男』が、そう呟いたのと同時に…劉玄斎はルキを担いだまま、【紫影】と呼ばれた捻じれた男と共にこの大空洞の中心へと歩き始め…
そこには人が一人寝転がれるだけの、岩を削って装飾された、『祭壇』と呼べるような台座が一つ。
天井の穴から降り注ぐ光に照らされて、形容し難い雰囲気を醸しだしていた。

「かつて、『神』とコンタクトでも取ろうとしていたのでしょう。私の経験上、こうした『神』場所の方が神を解放しやすいですからねぇ。」
「解放…随分とまぁ、物騒な事をしようとしているじゃあねぇか。」
「物騒ですよ？一人の少女を犠牲にしようとしているのですから。何の罪もないこの少女には悪いですが…ま、これも必要な犠牲と言うヤツですねぇ、ええ。」
「…犠牲…嫌な言葉だぜ。」
「おや？今更引き返したくなりましたか？でもここまで来たら貴方も最早『同罪』。後ろの小さいお嬢さんも含め、私達三人はその一人の『少女』を犠牲にしても叶えたいモノがあると言うのに。それに『逆鱗』、貴方には人質が…」
「…わかってんだよんなこたぁ！今更、引き返す気はねぇ…」

…果たして、彼等は今からここで、一体何を行おうとしていると言うのだろう。

ゆっくりと『祭壇』に運ばれる、気を失ったままのルキ。
そのルキを、口では何やら哀れんでいるような台詞を吐く【紫影】と呼ばれた捻じれた男ではあったものの…その口調には微塵もルキを哀れんでいるようなモノが無く、ただただ淡々と言葉を放るだけ。
そのまま、捻じれた男に従うように。劉玄斎は担いでいたルキを、静かに、ゆっくりと、丁寧に『祭壇』に寝かし始めた…
その時…

「…さっそく邪魔者が嗅ぎつけてきましたか。相変わらず、【白鯨】の奴は仕事が速いですねぇ、ええ。」

――…

「…砺波先生！」

【決島】の戦いの音があまり聞こえぬ、島の中心に聳える山の中腹でのこと。
砺波に指定された場所へと向かって、全力疾走をしていた遊良は…指定された場所に既に到着していた砺波を見つけるや否や、走ってきた勢いのままに砺波へと向かってそう声を放った。

「す、すみ、ません…遅れ、まし、た…」

よほど全速力でここまで駆け抜けてきたのだろう。
息を切らせ、呼吸を荒くし、掌を膝について肩で息をして…しかし遊良のその疲労も最もであり、何せ朝からずっと緊張の糸を張り詰

め、気を抜く事が出来ぬ戦いを繰り返し、それが休む間もなく常に繰り返されていたのだ。
【決島】も中盤を過ぎ、選手達にも疲れが溜まってきた頃合。
その疲れの見え始めた時間に、渓流からこの山の中腹までの獣道をノンストップで全力疾走してきたのだから、いくら遊良が未だ体力の有り余る高等部の学生とは言え、今ここで疲労の姿を見せてしまってもそれは仕方の無い事と言えるのだが…
しかし、それでも遊良は邪魔が入ったとは言え砺波から呼び出しを受けてからここまで来るのに、少々時間を食ってしまった事を悔やんでいる様子を見せていて。

「…３０分ほど前から高天ヶ原さんに付いていたデュエルドローンの映像が急に途切れました。それに伴い、現在彼女がどこにいるのかが運営にも分からなくなっています。」
「…え？」
「また、つい先程更新された公式記録では高天ヶ原さんが『失格』となっていました。運営側は、彼女がデュエルに負けて気を失い、その時に何かしらシステムの不具合が出たのだろうと考えているようですが…」
「…あ…ほ、本当だ、ルキの名前が失格者リストに載ってる…」

…また、ここまでノンストップで駆け抜けてきた己の教え子に対し、労いの言葉を全くかけるでもなく。
ただただ淡々と重々しく、状況説明のためにその口を開いたイースト校理事長、砺波　浜臣。
どこか冷たさすら感じる、あまりに冷静な砺波の口調。しかし砺波のその淡々とした態度は、来るのが遅れた教え子に叱責や小言を言う時間すら惜しいと言う事と同義とも言えるだろうか。
砺波はそのまま、余計な事を言う事も無く…ただただ時間が惜しいのだと言わんばかりに、淡々とその言葉を続けるだけ。

「高天ケ原さんが今現在、どこに居るのかを運営が把握できていないと言うのは明らかな異常事態。まだそこまで時間も経っていないため、運営もまだ危機感を感じるまでには至っていないようですが…とにかく、運営の情報を待っている時間はありません。彼女の身に『何か』があったと考えて、私達は先んじて動きます。いいですね？」
「は、はい、砺波先生…」

しかし、冷たさすら感じる砺波の淡々とした言葉の羅列は、まるで砺波も自身に『冷静であれ』と自己暗示している様にも感じられるだろうか。
それは砺波も、起こってしまった『万が一』の事態に、ここで自分が焦りや戸惑いや狂乱を教え子に見せていてはならないのだと自らを形づくっているかのようでもあり…
…そう、砺波も焦っているのだ。
『万が一』など起こりえないように、万全の準備を施したにも関わらず起こってしまった、その『万が一』の事態。
島の中と外に敷かれた、あの厳重な警備網を敵はいとも簡単に掻い潜ってルキに接触したのだ。進入できぬはずの島に潜入し、逃れられぬはずの島中のカメラに映らぬ敵。そんな得体の知れぬ敵の存在を感じ取っている砺波に、焦りが生じぬはずもなく…
そして、それは遊良も同じ事。

「でも、ルキは今どこに…」

一応、島の全てがデュエルフィールドとなっている【決島】では、万が一の事故が起こった場合にもすぐに対応できるよう、参加選手達のデュエルディスクには切断することの出来ない位置情報システムが備わってはいる。
また、リアル・ダメージルール用に選手達に渡されているリストバンド型の装置は、ダメージを与えるだけではなく選手達のバイタルも逐一測定し運営へと送信しており…つまり、【決島】の参加選手達の位

置情報は、【決島】が始まってからどういうルートで島を歩いたのか、そして現在どこに居るのかも常に運営はリアルタイムで監視しているのだ。
　それは島の全土をデュエルフィールドとしていることで伴うであろう、防ぎようのない自然事故に対抗するために運営が施した、安全面をこれ以上無いくらいに考慮した運営側の危機管理。
　それ故、【決島】の敷地内で選手達に何かしらの事故が起こったとしても、運営側にはどこで誰に何が起こったのかを把握出来ていなければならないのだ。
　…しかし、その二重に監視しているはずの選手のデータと、かつ選手一人一人に付いている放映用のデュエルドローンの映像という、『三重』の監視の全てがほぼ同時に途切れた言う事は明らかな異常事態。
　一応、救護班がルキの位置情報が切れた近辺を探していたり、ほかのデュエルドローンの映像にルキが映っていないかをチェックしたりしているらしいのだが…それでも、未だ危機感を覚えていない運営に、ルキの事を砺波が任せておけるはずもなく…
　…自然事故による行方不明ならば、ルキの位置情報を運営が捕らえられていないと言うのは明らかにおかしい。
　他の選手１９９人の三重の監視…その計５９７の監視が生きているこの現状で、『ルキだけ』の監視が効かなくなった事もそう。
　また、砺波が雇ったという島を取り囲んでいる大勢の海と空のプロの警備網と、そしてその島の中と周囲に加えて世界中の人間達がＴＶを通して島中を観ているのだから、『何者』かがルキを島の外へと連れ出そうとしていたとしても、それは根本からして不可能。
　だからこそ…この島の中に、絶対にルキは居るはず。
　そこまでは遊良にだって考え付く事だとは言え、しかしそのルキを探すにしても、島の中に居るはずなのに島の中にあるどの監視の目にも引っかからないルキは一体今どこに居るというのか。
　…ルキ自身の監視の目が途切れてしまっていては島中を探すと言ってもどうすればいいのかなど遊良にはわからない。

そんな、どうにもならない不安に包まれている遊良へと向かって…
砺波はそのまま続けて、その口を開いて…

「彼女が居るのはあの洞窟の中です。」
「え？」

砺波が言葉と共に指差したのは、木々が群生し、空からも隠れた山の中腹…野性の自然に隠されるようにして大きく口を開けていた、人の手が加えられていない野生の洞窟。
その草木に埋もれた、天然の隠し扉の奥に広がる光無き闇の中を指差し…運営ですら掴んでいないルキの居場所を、確かな確証を持って砺波は言葉にして。

「万が一の為、予め君たち3人に渡していた緊急連絡用のデュエルディスクには運営のモノとは別の位置情報システムを搭載しておきました。私個人のシステムのため、私のデュエルディスクにのみ情報が届くモノなのですが…これだけは運営側の情報が途切れても、ギリギリまで私のディスクに彼女の位置を残しています。敵もそれに気付いたのか、もう反応はありませんが…」
「ソレが…この洞窟…？」
「はい。島の他の場所ならば、まだ私の元に高天ヶ原さんの位置情報が届くはず。島の中を歩けば他のカメラに彼女の姿が映るはずですし、島の外に連れ去られたのならば警備網に必ず引っかかるはず。ソレもないと言う事は、十中八九彼女はこの洞窟の中に運ばれたと言う事で間違いないでしょう…ただでさえ電波が途切れやすい山の、しかも洞窟の中にまで連れて行かれては…彼女の位置が捕らえられなくなったとしても不思議ではありません。」
「…ルキが、こんな場所に…」

…洞窟の入り口から吹き出る生暖かい風は、木々に覆われた山森の

薄暗さと相まって、形容し難い一種の怖さを遊良へと与えていたことだろう。
山の胎内へと続いていそうな青黒い岩肌、明かりのない洞窟内の暗さ。
闇の中にルキが連れ去られたと思うだけで、こんな場所にルキが連れ去られたと考えただけで…遊良の心にはざわめきが走り、それはまさに幼少の過去、幼等部の頃にルキが連れ去られた時にも感じた逸りと焦りを心に浮かび上がらせてしまうのか。
思い出したくも無い、ルキが誘拐された過去の事件。ルキをあんな危ない目には、遊良とてもう二度と遭わせたくは無かったと言うのに…再びルキが同じような目に遭っているという現状が、遊良には許せない。
そして…

「じ、じゃあすぐにルキを助けに行かないと！」

幼少の過去、ルキが連れ去られた時の出来事と、今の現状を重ねたのか。
居ても立ってもいられない様子の遊良が、今にもルキが連れ去られたであろう洞窟へと向けて駆け出しそうになった…

―その時だった。

「…悪ぃがよぉ、ここを通すわけにゃいかねぇんだ。」
「ッ!?」

突然…
暗い暗い洞窟の中から、突如として遊良達の前に重々しい声が響き渡って。
その声はどこまでも重く響く声となりて、山の森の木々を揺らし…

自然その物すら怖がらせているかのように震えるその声の振動は、その声の主があまりに強大な『力』を持っているのだと、聞いている者全てに理解させる代物となりて洞窟の中から響き渡る。
そして、洞窟の中からその声が近づいてくるのと連動し…
大気を震わす重々しい笑い声を響かせ、ゆっくりと日の下にその姿を晒したのは…

「クハハハハ…砺波い、テメェは昔っから、俺の邪魔をする奴だよなぁおい。」
「その声は…やはり貴様が絡んでいたのか！」

戦場を駆け抜けたかのような傷跡に、まるで世紀末に生きているのではないかと錯覚する程の隆々とした巨大な体躯を持った、重厚なオーラを纏う初老の男。
それはかつて最も【王者】と拮抗した男と知られ、その実力は世界に轟く【王者】達と『同格』とまで謳われた、歴戦に名を刻む伝説の決闘者の一人。

「劉玄斎！」

ルキの身を案じ、すぐにでもルキの元へと向かいたくてたまらない遊良達の目の前に…

―『逆鱗』が、立ち塞がったのだ。

―…

ｅｐ７９「『逆鱗』ｖｓ．【白鯨】」

―かつて…決闘界を騒がせた問題児が居た。
それは誰にも媚びぬ傲慢な物言いと、後先を考えぬ喧嘩っ早い性格と、その自信を裏付けるほどに溢れた才能と、そして周囲を腕ずくで黙らせる事の出来る実力とが相まって…
誰も彼の暴れっぷりを止めることが出来ず、誰にも止められること無く『彼』はその好戦性に任せ己の本能のままに日々戦いに明け暮れていた。
かつての現役時代、幾度となくその暴虐性を持って、決闘界を『力』で荒らし回った歴戦の男…その暴走には、かつての決闘界の重鎮達も相当手を焼いていたに違いなく。
誰も彼もがその『彼』の前に蹴散らされ、一体彼によって何人の未来ある若者達が先への夢を頓挫し、一体どれほどの勲章を独り占めしたのだろう

…しかし、当時は誰も彼を咎めることをしなければ、誰もが彼を【王者】でも無いのに声高々に称えていた。

それは、『彼』の残した恐ろしいほどの実績と、純粋なる『力』を貫いて最後まで戦いぬいたからこそ。そう、引退するその時まで。世界の人々は彼の力を認め、また彼のデュエルに酔いしれ…
そして彼がコレから先、一体どれ程の偉業を達成するのかと、日々飽きる事無く声援を送り続けていたのだ。
その、彼の築いた伝説は数多く…
通算勝利数『Ｎｏ．１』。全世界プロデュエリストランキング『第１位』歴代最長。チャンピオンズ・リーグ優勝回数『歴代最多』。削値ＬＰ歴代全プロデュエリスト中『トップ』。
その他にも、賞金王やゴールデンデュエルディスク賞など…彼の伝説を上げればまだまだキリがなく、下手をすれば歴代のどの【王者】達よりも築き上げた武功は勝っているとも言えるだろうか。

―また、『彼』の残した伝説の中でも、特に有名な伝説が３つある。

―『殴り合い』…世界最強のエクシーズ使い、エクシーズ王者【黒翼】天宮寺　鷹峰との伝説の戦い。

―『潰し合い』…誇り高き歴戦の王者、シンクロ王者【白鯨】砺波浜臣との伝説の試合。

―『殺し合い』…底知れぬ恐怖、融合王者【紫魔】紫魔　憐造との伝説の一戦。

お互いにＬＰを投げ捨てながら、正面衝突で殴りあった…お互いに相手の手を潰し合い、常に戦況が一転し張り詰めていた…お互いに相手の息の根を止めにかかり、一瞬の油断でＬＰが湯水の如く消え去っていった…

世界中のオーディエンスが熱狂し、文字通りこの星全土が興奮でヒートアップしていたと言っても過言ではない、決闘界の歴史の中でも『最高』の試合に数えられている三試合。

…その戦いはまさに互角。

【王者】ではない者が、【王者】と同等の実力を持ち…どちらが勝ってもおかしくない戦いを、【王者】でない一人の男がその身一つで成し遂げたのだ。

だからこそ…

『彼』と【王者】達とのその伝説の決闘は、最早語り継がれる『歴史』の一部となっている。

―【王者】の名に最も近づいた男、【王者】に最も拮抗した男。

もしも歴史が一つ違えば、例えば微かでも道を違えていれば…彼もまた、きっと【王者】と呼ばれていたであろう、伝説に数えられる決闘者の一人

故に…世界は彼の功績を称え、こう呼んでいる。

…王座を踏みつける戦闘狂、暴れ狂う大災害。

―『逆鱗』…

―劉玄斎

「私の学生をどうした！劉玄斎！」

そんな歴戦の男を前にして。

イースト校理事長であり、元シンクロ王者【白鯨】砺波　浜臣は、目の前に突如として立ち塞がった一人の男へと向かって、荒々しく声を上げていた。

…それは留める事など出来はしない、荒ぶる感情が発した怒号。

【決島】の参加者達の誰もが近づかないであろう、島の中心に聳え立つ休火山の中腹。その木々に囲まれた、不気味な雰囲気の中にある『洞窟』の前で…

常に冷静であろうと勤めている砺波にしては珍しい、むき出しにした感情から来る本能の言葉は、確かな威力を持った刺々しいモノとなりて周囲へと響いていて。

しかし、砺波のその怒りの声も最であり…

「あぁ？…クハハハハ、あの赤い髪した嬢ちゃんか。この奥にいるぜぇ？何せ、俺が運んだんだからなぁ。」

「貴様…」

そう、荒ぶる砺波の目の前に立っていたのは、決闘学園デュエリア校学長、劉玄斎。
…そう、今すぐにでもルキの元へと向かおうとしていた砺波と遊良の目の前に、突如としてデュエリア校学長である『逆鱗』の劉玄斎が立ち塞がったのだ。
こんなにも堂々と言い放ってくる劉玄斎の言葉から、ルキを攫った犯人が『逆鱗』であるということは最早明らかな事。
それ故、ルキを攫った犯人が見知った顔であったとう事実も相まって…いつもは冷静沈着なあの砺波も、感情を剥きだしにして声を荒げている。

「…ただの一般人である少女を攫って、一体何を企んでいる！返答次第ではただでは…」
「おいおい、この期に及んでただの一般人はねぇだろぉ？あの赤髪の嬢ちゃんが何を持ってるのかなんて、こっちはとっくに知ってんだからよぉ。ま、テメェが裏で必死に動いてたのは知ってるが…クハハ、残念だったなぁ砺波ぃ！施した策が全部無駄になってよぉ！一体いくら無駄になったんだろうなぁ！」
「そんな事はどうでもいい！それより私の教え子をどうするつもりだと聞いているのだ！」
「…さぁなぁ。…少なくとも、これから『何』をするのかは…俺ぁ、何も知らねぇ。」
「そんな言葉で逃れられると思うな！貴様が私と同じく、裏で色々と動いていたというのは既に調べが付いている！貴様の姿は天城君のデュエルドローンによって既に運営側に伝えられているはずだ、もう言い逃れる事は出来んぞ！」

元とはいえ【王者】と呼ばれた者と、ソレと『同格』とまで謳われた者同士がぶつけ合う言葉の応酬。
怒りの感情が質量を持ったかのようにして、周囲の木々を激しく揺らし…益々その怒りを強くしていく砺波の怒号は、容赦なく劉玄斎へ

と襲い掛かる。
…しかし、その言葉の応酬は劉玄斎に優位に傾いているのか。
果て無き鯨の怒りなど、全くもって効いていないかのようにして。
【白鯨】の怒りを受けた劉玄斎は、どこまでも平気そうに重々しい龍の笑いを響かせるだけであり…

「クハハハハ！おいおい、俺がそんなマヌケだと思ってんのかぁ？そこの小僧のデュエルドローンの映像も、既に接続を切っちまったに決まってんだろうが。」
「接続を…切っただと？」
「あぁ、大方、騒ぎをデカくしねぇ方が動きやすいと踏んだんだろうが…テメェの動きは、最初っからこっちに筒抜けなんだよ。奴が言うには、【白鯨】のテメェが一番の障害らしいからなぁ。」
「ならばすぐにでも綿貫さんに連絡して、貴様の身柄を【決闘世界】に引渡…」
「クハハ、そりゃ無理だ。ここへ来た時点で、テメェらのありとあらゆる連絡手段は外部と切断されてんだとよ。俺には良くわからねぇが、この洞窟周辺にゃ妨害電波ってのが張り巡らされてるんだよぉ。」
「妨害？…くっ、どうりで先程からずっと天宮寺君にも連絡をしているのに、彼にだけ繋がらぬはずだ…」
「さぁて、どうすんだ砺波ぃ？外部に連絡できねぇんじゃあ、テメェが何をしようと助けは来ねぇ。綿貫の爺も、トウコのババアも、何も知らずに呑気に待ちぼうけってわけだ。俺が逃がすわけもねぇって事はテメェなら分かってるだろうしよぉ…どうする？この俺相手に、腕尽くでかかってくるかぁ？クハハハハ！」
「…」

砺波の怒りを受け止めながらも、逆にその威圧を跳ね返して更に笑いを響かせる劉玄斎。
常人ならば耐えられない砺波の威圧を、笑って受け止めているというただそれだけで…劉玄斎という男が、本当に【王者】と『同格』の

モノを持っているという事が立ち尽くすしかない遊良には一目瞭然である事だろう。
…また、砺波とてここまで入念に張り巡らせた警戒網を、いとも簡単に潜り抜けて『敵』がルキを攫った時点で『敵』の力が一筋縄ではいかない事はわかってはいた。
それでも、騒ぎを大きくすればそれだけルキの身に危険が生じやすくなるであろうと考え、こうして少数で乗り込み証拠を掴み後から即座に大軍を送り込む算段だったというのに…裏をかこうと少数で乗り込んでしまったことが逆に悪手となってしまって、挙句の果てには自らが外部と切り離されてしまっただなんて、誤算どころでは済まない事態に違いない。

故に…

劉玄斎にだけではなく、自らの失態にも怒りを覚えているであろう砺波は苦々しげに、かつ怒りの表情を浮かべながら、強い視線で劉玄斎を睨んでいて…

（…え？）

…しかし―
この場に雰囲気についていけずに、立ち尽くしているしかなかった遊良は、ふと『ある事』に気が付いた。

（あの人…何で砺波先生じゃなくて、俺を見て…）

…それは砺波と向かい合っているはずの『逆鱗』の視線が、何故か【白鯨】ではなく『自分』へと向けられているという事。
そう、『逆鱗』の意識も言葉もその体も、全てが砺波へと向けられていはいるのだが…その高い位置にある『視線』だけは、何故か怒る【白

鯨】の頭上を通り抜け、何も出来ないで立ち尽くしている遊良へと向けられてる。
歴戦を戦い抜いた重々しい佇まい、他を圧服させる重々しい雰囲気、常人を震え上がらせる重々しい声。
…しかし、何故か、不思議と。
怒り荒ぶる【白鯨】と、互角のオーラを放っている『逆鱗』の視線が…遊良には何故か、全く恐怖を感じない。
厳しい表情、重々しい雰囲気。劉玄斎という歴戦の男の、その存在全てから『圧』が放たれていると言うのにも関わらず…遊良を見ているその眼差しだけは、何故か『圧』が放たれていないのだ。
…一目見ただけで身も竦むような恐怖を覚えるであろう『逆鱗』の視線に中てられていると言うのに、遊良にはその『逆鱗』の視線に全く恐怖を感じない。
その『逆鱗』から感じるソレは、まるで意図的に敵意を向けられていないかのような…敵意の無い眼差しと、【白鯨】と『逆鱗』のぶつかり合うオーラから意図的に守られているかのような、安堵すら感じる『敵』からの視線。
幼少の頃…よほど『逆鱗』のファンだったらしい父に、何度も何度もデュエルの映像を見せられたプロデュエリスト『逆鱗』の、その正真正銘本物の本人。そんなＴＶの中でしか見たことが無いはずの本物の劉玄斎に、何故か今、見られている。
…その、どこか安堵すら感じるような視線は、何を言おうとしているのだろう。しかしこの危機的状況では、ソレを考える暇など遊良には無く…
そんな、『逆鱗』に見られている意味も分からぬ、ただただ立っているだけの遊良へと向かって。
劉玄斎と対峙している砺波が、横から遊良へと向かって『静かに』声をかけてきた。

「…天城君、私が合図したら走りなさい。」
「…え？」
「あの洞窟へ入り、高天ヶ原さんのところへ行くのです。四の五の言っている暇はありません、いいですね？」
「は、はい、砺波先生…」

一瞬だけ目的を見失いかけた遊良へと、静かに突き刺さる砺波のその声。
その、自らの使命を思い出させるかのような、砺波からの静かな指示をその耳に入れて…遊良は、再度自分のやらなければならない事を思いどしたのか。
…そう、今この場で、何よりも優先させなければならないのは紛れも無い『ルキ』の身の安全。
何故全く関わりも無いはずの『逆鱗』が、自分を敵意の無い眼で見ているのかなど今この状況においてはどうでもいいこと。
そもそも、ルキを攫った『敵』である『逆鱗』を前にして、一瞬でも気が抜けそうになった時点でソレが敵の思惑かもしれないのだ。
…だからこそ、遊良は今すぐにでも走り出せるように気を張り詰め直すと、再度『何』をすれば良いのかを自分の中で思い返して。
すると…
遊良と砺波の微かなやりとりを、遠目から見ていた劉玄斎が…目の前に勇み立つ二人へと向かって、再度その重々しい声を響かせ始めた。

「…内緒話は終わったかぁ？」
「…あぁ。貴様が意地でもそこをどかないというのなら…いいだろう、腕尽くで押し通る。デュエルで貴様を倒し、そこを押し通るだけだ！劉玄斎、私と戦…」
「…いいぜ？そのガキをこの先に行かせても？」
「なっ!?」
「え!?」

瞬間ー
―劉玄斎が、その言葉を口にしたその刹那。
あまりに突拍子過ぎる言葉だったせいか、たった今放たれた劉玄斎の言葉の意味を理解出来なかった遊良と砺波。
それは遊良と砺波の予想していなかった言葉。それは二人が予想など出来るはずも無かった台詞。
…そう、砺波の行く手を遮っている劉玄斎は、今何と言ったのか。
気を張り直した遊良の意識と、砺波の言葉の間に割って入るかのように。二人が予想もしていなかったであろう言葉を、その口から飛び出させた劉玄斎は一体何を考えているのか。
遊良はあっけに取られた顔のまま、驚きのあまりその場に固まってしまい…砺波の方はと言うと、劉玄斎へと向かって疑問の言葉を続けるしかなく。

「貴様…一体どういうつもりだ?」
「クハハハハ、なぁに、俺の仕事は砺波ぃ、テメェを止めることだからなぁ。ソレ以外は…ま、管轄外ってことかぁ?」
「…」
「…と、砺波先生…」
「…行きなさい。罠かもしれないが、ここで足踏みしている時間はありません。」
「…は、はい。」

…とは言え。
劉玄斎の言葉が何かしらの罠だとしても、ここで時間を取られている場合ではない言う事を砺波も遊良も即座に理解したのか。
…あくまでも目的はルキの救出。
わざわざルキを連れ去ったと言う事は、人目の付かぬ場所でルキの身に『何か』をしようとしていると言うこと。ルキの身に危険が迫っている以上、例え罠なのだとしても先に進まないという選択肢を取る

訳には行かないのだ。
だからこそ、劉玄斎の言葉の心意が今この場ではわらかぬとも…ルキを助けるために、遊良も先へと進むしか選択肢は無く…

―そうして…

洞窟内に入るため、遊良は劉玄斎とすれ違うようにして横をすり抜けると…

「…」
「…え？」

一瞬、劉玄斎の口から『何か』が聞こえたと思いはしたものの…
そのまま止まらずに、遊良は洞窟内へと駆け足で入っていった

…

「…行っちまったか。」
「劉玄斎、貴様は先ほどから何をしたいというのだ。行く手を遮ったかと思えば、彼だけを行かせるなど。それでは足止めの意味が無い。」
「…さぁなぁ。ワケなんて話す気もねぇし、そもそも話せるモンでもねぇが…俺にだってよぉ、事情ってモンがあんだ。」

隣を走り抜けていった遊良を重い視線で視界に捕らえつつ、改めて自分へと敵意を持って向かい直してきた劉玄斎を見て、少々怪訝な顔をしながらそう口にした砺波。
…劉玄斎の思惑が、砺波には全く分からない。
砺波からすれば、ルキを隠密に連れ去ったかと思えばソレを全く隠す素振りも無く、また行く手を遮ったかと思えば遊良をすんなりと通した統一性の無い劉玄斎の行動を、ただただ不審と怪訝に思うばかりなのだ。

…それはまるで、悪行の狭間で己の心に迷いが生じているかのような立ち振る舞い。
一体何が目的なのか。敵なのか味方なのか…いや、今この現状において、劉玄斎はまさしく砺波にとっては『敵』に違いない。しかしその『敵』である劉玄斎自身が何かに迷っているこの状況は、砺波にとってはますますその不審を煽るだけだろう。
しかし、当の劉玄斎からしても、砺波にそう思われているという事を分かっていてもなお…

「けどまぁ…砺波、テメェだけはここを通さねぇ。テメェをきっちり止めとかねぇと、『こっち』も色々とやべぇんだよ。」
「…何を企んでいるのかは知らないが、あくまでも貴様がそういう態度を取るのならば私も容赦はしない！貴様を倒して、無理矢理にでも押し通らせてもらう！劉玄斎、私と戦え！」

どうせ相容れぬのだと言わんばかりに。同時にデュエルディスクを構えつつ、戦意を剥き出しにし始める【白鯨】と『逆鱗』。
そう、何故天城　遊良を通したのかは劉玄斎にしか分かりえない事とはいえ、あくまでも彼が砺波をここから先に行かせないようにしていると言うことだけは確かな事実。
また、砺波もここから先へと向かうには、劉玄斎を倒さなければならないのだと言うことを理解しているからこそ。剥き出しの戦意を曝け出し、戦いへと臨もうとしているのか。

…【白鯨】と、『逆鱗』

一昔前なら、その対戦が発表されただけで世界中が熱狂し、その一戦を用意する為だけに大国を揺るがすほどの大金が動き、その一戦のチケットを巡って死者まで発生したという、まさに天上の決闘者同士の対戦カード。
…歴史に名を刻んだ決闘者同士。かつての彼等の戦いが、『潰し合

い』と呼ばれる伝説の試合となっていると言うことは世界中の人々が知っている。

―それが今まさに、こんな観客も居ない山中の中腹の辺境で行われようとしているだなんて。

この世界最高峰の決闘者同士の戦いが、こんな観客もいない山中で静かにひっそりと行われようとしているのは…

果たして、世界にとっては幸か不幸か。

…しかし、今ここに居るのは世界が誇ったシンクロ王者【白鯨】でも、王者と同格と謳われた『逆鱗』でもない。

―ただの、二人のデュエリスト。しかし頂点の決闘者。

一つの決闘を行うのに、何の柵も制約も無くなったただの世界最高峰の実力を持った二人の決闘者が…ただの【白鯨】と『逆鱗』が、己の目的の為にただただぶつかるだけ。

―そうして…

「…行くぞ。」

「おう。」

決して相容れぬ男達の、我を押し通すための『私闘』。それが、ギャラリーの居ない、誰にも見られていない、こんな山中の一角で。

―今静かに…しかし激しく。

誰にも知られることもなく、誰にも見ることの出来ない、そんな世界最高峰の歴戦の決闘者同士の戦いが…

―デュエル!!

今、始まる。

先攻は『逆鱗』、劉玄斎。

「俺のターァァン！俺ぁ手札から、【炎征竜―バーナー】の効果発動ぉ！手札の【炎征竜―バーナー】と【真紅眼の黒竜】を捨て、デッキから【焔征竜―ブラスター】を特殊召かぁぁん！」

―！

【焔征竜―ブラスター】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１８００

デュエルが始まってすぐ。
大気を震わせる劉玄斎の声と共に、地を割き溶岩と共に地中から飛び出したのは…
まるで火山の災害をそのまま形取ったかのような、荒れ狂う狂気を孕んだ焔の竜であった。

―征竜

それは大自然の暴走をその身に宿した、荒ぶる災害の化身たる竜の総称。
その咆哮は雲を引き裂き、周囲の大気を怯えさせる…まさに『災害』その物の化身たる、凶悪な４体のドラゴン達。
その力の凶暴さは、この世界においては知らぬ者など居ない程に有

名であり…

「続けて魔法カード、【封印の黄金櫃】を発動ぉ！デッキから【嵐征竜―テンペスト】を除外し、テンペストの効果で【風征竜―ライトニング】を手札に加えるぜぇ！更に【七星の宝刀】を発動ぉ！場のブラスターを除外して2枚ドローし、除外されたブラスターの効果で俺ぁデッキから炎属性の【タイラント・ドラゴン】を手札に加える！そして【手札抹殺】を発動だぁ！4枚捨てて4枚ドロー！」

「5枚捨てて5枚ドロー…来るか？」

「おうよ！これで準備は整ったってなぁ！たった今【手札抹殺】で墓地に捨てた、【瀑征竜―タイダル】の効果発動ぉ！墓地のライトニングとバーナーを除外しぃ！墓地から自身を特殊召喚！更に手札から【地征竜―リアクタン】の効果発動ぉ！手札のリアクタンと【仮面竜】を捨てぇ！デッキから【厳征竜―レドックス】特殊召かぁぁん！」

―!!

【瀑征竜―タイダル】レベル7
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２０００
【厳征竜―レドックス】レベル7
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／３０００

止めどなく現れる災害の竜達。噴火の化身に続きしは…豪雨を呼び込む瀑布の化身と、大地を引き裂く地割れの化身。

一つの災害だけでも人の手に負えぬであろう力を持っていると言うのに、ソレを同時に二つも従える劉玄斎のオーラはあまりに大きく重いモノとも思え…

…かつて、この災害の竜たちをその身一つで支配し、文字通り『逆鱗』を震わせ決闘界で暴れ回った男、劉玄斎。

征竜たちの凶暴さと残虐さは、かつての劉玄斎が既にプロの試合で世界に証明している。

その持ち主にすら牙を剥くあまりに強大過ぎる『力』と、災害の如く他者へと襲い掛かるあまりの凶暴性に、心を折られ精神を壊された決闘者が過去に一体何人居たことだろう。
…また、この世界において【征竜】というカードは、その凶悪さ故か使用・所持を『逆鱗』と謳われた劉玄斎を除いて、他の誰にも許されていない。

―そう、【征竜】というカードの所持も使用も複製も、【征竜】に関わることは劉玄斎以外には絶対に認められていないのだ。

それは今や、学生達の教科書にだって載っている程に、世界の常識として知られている事。
そう、たった一人の男の戦いが、世界の法にも刻まれるというその歴戦の重みは…劉玄斎という男の功績が、他に類を見ない程に大きいということの証明かつ実績であり暴虐の果ての存在の証明。
…決闘界の根幹に関わるほどの、あまりに大きいその力。
その、『逆鱗』たる劉玄斎にのみ使用を許された、もう公の場では決して見ることの叶わぬ大災害の竜たちの真価が…

―今ここに、蘇る。

「…行くぜぇ！レベル７のタイダルとレドックスでオーバーレイィ！」

水害の化身と震災の化身。その二つの災害が劉玄斎の宣言によって天を舞う。
そして、劉玄斎が持つエクシーズのＥｘ適正によって導かれし、その２つの災害が地面に現れし銀河の渦にその身を捧げ始め…
「燃えろ、真紅の玉鋼（たまはがね）ぇ！黒き焔よ大地を焦がせぇ！エクシーズ召かぁぁん！来やがれ、ランク７！【真紅眼の鋼炎竜】！」

―！

【真紅眼の鋼炎竜】ランク７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

呼び出されたのは燃ゆる黒鉄（くろがね）、真紅の眼を持つ気高き炎竜。
火花を散らせ、炎を点し、血の流れよりもなお紅いその眼で、【白鯨】を鋭く睨み付ける。

「【真紅眼の鋼炎竜】の効果発動ぉ！・オーバーレイユニットを一つ使い、墓地から【真紅眼の黒竜】を攻撃表示で特殊召喚！・更に魔法カード、【復活の福音】発動ぉ！・墓地からレベル７の【瀑征竜―タイダル】を蘇生し、そのままレベル７のタイダルと黒竜でオーバーレイィ！」

しかし、まだ止まらない。

劉玄斎の誇る竜族たちが現れては消え、消えては現れ…目まぐるしくフィールドを駆け巡るその激しい展開はまさに竜の咆哮にも似た鋭さを持って砺波へと襲い掛かるのか。
『逆鱗』の劉玄斎が放つ、あまりに重いプレッシャー。その声は天を震わせ、更に猛々しく空から降り注ぎ…

「疾れ、機鉄の天竜よぉ！・朧の現（うつつ）と空を舞えぇ！・エクシーズ召かぁぁん！」

どこまで重厚に響く劉玄斎の声に連なり、銀河が弾けその光の中から現れしは…

「現れろぉ、ランク７！【幻獣機ドラゴサック】！」

―！

【幻獣機ドラゴサック】ランク７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

鋼の黒竜に続き呼び出されたのは、命を持った機鉄の天竜。
音速を超える咆哮を響かせ、猛々しく空を舞う。

…これが、『逆鱗』と呼ばれし劉玄斎、その現役時代の二枚看板。

強固な耐性を備える天竜、相手を燃やす黒鉄（くろがね）の炎竜。
災害の竜達によって呼び出されるこの２体の竜が並び立つ光景は、現役時代の劉玄斎を良く知る砺波からしても見慣れたモノに違いない。

「相変わらずの布陣か…」
「クハハ、ワンパターンだって言いてぇのか？けどそのワンパターンにやられてった奴等が多いってこたぁ、テメェもよく知ってるだろ？」
「あぁ…」
「俺ぁドラゴサックの効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使い、２体の【幻獣機トークン】を守備表示で特殊召喚するぜぇ！更に速攻魔法、【超再生能力】発動ぉ！このターン、俺が手札から捨てたドラゴンは全部で８体！エンドフェイズに移行し、俺ぁデッキから８枚ドロー！…クハハ！ドローしすぎちまった！手札制限により、手札を２枚捨ててターンエンドだ！」

劉玄斎　ＬＰ：４０００
手札：５→６枚
場：【真紅眼の鋼炎竜】
【幻獣機ドラゴサック】

【幻獣機トークン】
【幻獣機トークン】
伏せ：無し

…そして、ようやく劉玄斎の先攻ターンが終了したそこには。
あれだけ激しい展開を行い、手札を全て使いきったと言うのにも関わらず。まさかの手札を『増やして』ターンを終える劉玄斎の姿と…
強固に聳え立った竜達による、堅牢なる『城壁』が築き上げられていた。

「貴様にのみ使用を許された【征竜】…引退したとはいえ、その力は健在のようだな。」
「あぁ。何せ俺以外にゃあ、こいつらを押さえられる奴ぁ居ねぇからなぁ。…テメェこそ引退して随分と経つがよぉ、ガラにもねぇ指導者っつー立場になって腕が鈍ってんじゃあねぇか？」
「…何だと？」
「クハハ、『デュエリストは孤高でなければならない！』、なぁんてクセェ台詞言って頑なに弟子を取らなかったあのテメェが…随分とまぁ、あの天城　遊良に入れ込んでるみてぇだからよぉ。理事長なんて地位に就いて、テメェも甘くなったもんだって思っただけだぜ。」
「…」

元シンクロ王者【白鯨】と対峙していても、全く気圧される事無く周囲へと響き渡る劉玄斎の重い声。
…今の劉玄斎の雰囲気は紛れも無く、世界に君臨する【王者】達と比べても何ら遜色無い『同等』と言える代物。
何せ、2体のエクシーズモンスターが放つ重圧もそうだが、あれだけ墓地にカードを送りあれだけの展開を行ったにも関わらず。ターンの終わりに初期手札よりも手札の枚数を増やしているという『逆鱗』の一挙手一投足は、まさに相手の心を遠慮なしに折ろうとしている暴君の佇まいそのモノなのだ。

…【白鯨】と呼ばれた砺波と対峙していても、全く引けを取らないその風格。
砺波に対してこんな言葉を吐けるのも、劉玄斎という歴戦の男が【王者】クラスの実力を持っていると言うことの証明とも言え…

それでも…

「ならばその眼で確かめてみるがいい！私のターン、ドロー！」

劉玄斎を前にして、怯むことなくカードを引く砺波。

「まずは鋼炎竜からだ！私は墓地から【ブレイクスルー・スキル】を除外して効果発動！【真紅眼の鋼炎竜】を対象に、その効果を無効にする！」
「チッ…【手札抹殺】の時か。相変わらず抜け目の無ぇ野郎だ。ならそれにチェーンして【真紅眼の鋼炎竜】の効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使い、墓地から【真紅眼の黒竜】を攻撃表示で特殊召喚するぜ！」
「だが、これで鋼炎竜の効果でダメージは発生しない！ゆくぞ！【深海のディーヴァ】を通常召喚しその効果発動！召喚成功時、私はデッキから【海皇子　ネプトアビス】を特殊召喚する！いでよ、ネプトアビス！」

―!!

【深海のディーヴァ】レベル３
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　４００
【海皇子　ネプトアビス】レベル１
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／　０

無慈悲なバーンダメージを相手に与えるはずの、鋼炎竜の効果を意にも介さず。
ターンを迎えてすぐ、即座に鋼炎竜を無効化した砺波が呼び出したのは己のデュエルの始まりとなる、深海の歌姫と海の皇子。
並の強者であれば、鋼の炎竜が放つ炎圧の回避に少なからず手間を取られるというのに…劉玄斎の『重』の威圧を、さらに『深海』の如き圧力で押し返すという暴挙は流石は元シンクロ王者【白鯨】か。
…冷たい深海の水圧の如き、砺波の放つ鯨の威圧。
いつの時代もどの戦いも、砺波のデュエルはこの歌姫から始まる。それは今現在砺波と真っ向から対峙している劉玄斎も、プロの世界でこれまで嫌と言うほど見てきた光景と言えるのであり…

「クハハ、相変わらずだなぁ砺波ぃ！人の事言えねぇじゃねぇか、テメェこそまたソイツらからかよ！」
「減らず口を…ネプトアビスの効果発動！デッキの【海皇の竜騎隊】をコストに、デッキから【海皇の重装兵】を手札に加える！コストとなった竜騎隊の効果で、更にデッキから【水精鱗―メガロアビス】を手札に！」
「お？ご自慢の氷霊神は出さねぇのか？」
「白々しいことを言うな、昔から貴様のそういうところが気に入らないのだ！私はレベル１の【海皇子　ネプトアビス】に、レベル２の【深海のディーヴァ】をチューニング！シンクロ召喚、いでよ、レベル３！シンクロチューナー、【たつのこ】！」

―！

【たつのこ】レベル３
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　５００
「続いて魔法カード、【サルベージ】を発動！墓地のネプトアビスと

ディーヴァを手札に戻す！そして手札の水属性モンスター２体を捨てることで、手札から【水精鱗―メガロアビス】を特殊召喚！自身の効果で特殊召喚に成功したため、メガロアビスのモンスター効果でデッキから【アビスフィアー】を手札に加え、更に今コストとして捨てたネプトアビスと重装兵の効果も発動！ネプトアビスの効果で墓地から【海皇の竜騎隊】を特殊召喚し、重装兵の効果で【真紅眼の鋼炎竜】を破壊する！」

「チッ！墓地の【復活の福音】の効果ぁ！鋼炎竜が破壊される代わりに、墓地から【復活の福音】を除外するぜ！」

「まだだ！レベル４の【海皇の竜騎隊】に、レベル３の【たつのこ】をチューニング！」

止まらぬ砺波の怒涛の展開。次々と現れる海の者達。

先ほどの劉玄斎の先攻ターン同様に、始まったばかりだと言うのに最初からノンストップで動き続け手札を増やしていく砺波の姿は…まるで、劉玄斎相手に様子見などする気はないのだと言わんばかりの激しいモノ。

…それは劉玄斎が、様子見など出来る相手ではないと言う事を理解しているが故の怒涛。

ここで氷霊神を召喚し、劉玄斎の手札を奪う手もある。しかし劉玄斎の駆る征竜の力は文字通り災害の如き凄まじさであり、倒されると次の自分のバトルフェイズをスキップさせられてしまう霊神の制約を考えると、今ここで霊神を使用するのは得策ではないという砺波の考えは間違ってはいないだろう。

…『逆鱗』と呼ばれた劉玄斎の恐ろしさを、砺波も良くわかっているからこそ。例え自分が元【王者】であろうとも、微塵も油断なく臨むのか。

「白き者よ、深層の海流を貫き現れよ！」

砺波の激浪の如き宣言により、天に舞う海の竜騎士とそれを追う龍

の子がその身を3つの水輪へと変えていく。
…深海の竜宮の饗宴の如き、どこまでも流麗な水の展開。
今深き海の底から、光の柱を破って飛び上がりしは…

「シンクロ召喚！レベル7、【白闘気一角】！」

――！

【白闘気一角】レベル7
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１５００

現れたのは、鋭き角を天に生やした、純白の姿持つ深海の一角。
冷たい深層海流の中でも悠々自適に遊覧せしその力で、竜族達にも怯まず空を泳ぐ。

そして…

「【白闘気一角】がシンクロ召喚に成功した時、墓地から魚族モンスターを蘇生できる！私が選択するのは…【超古深海王シーラカンス】だ！」
「…あ？シーラカンスぅ？」

砺波から飛び出たそのモンスターの名を聞いて、劉玄斎はどこか驚きを含んだ声を漏らして。
…しかし、それもそのはず。
何せ、今砺波が宣言した、【超古深海王シーラカンス】…それは過去の砺波、それもプロに成り立ての『ルーキー』と呼ばれていた、駆け出しの頃の彼が好んで扱っていたエースモンスターなのだ。
…その驚きは、昔から砺波の事を良く知る劉玄斎だからこその驚愕。
常にプロとして『新しさ』をファンに提供してきた砺波が、この場

この時この瞬間に過去のエースであった【超古深海王シーラカンス】を召喚した事が、劉玄斎にはどこか信じられない光景の様に見えているのだろう。

「おいおい、深海王たぁ…こりゃあまた、随分と懐かしいエースだなぁおい。どういう風の吹き回しだぁ？『常に新しい事でファンを喜ばせるのがプロの務めだ！』…なんて言ってたテメェが…」

「…何とでも言え、これが今の私の戦い方だ。私は墓地より、先ほど【手札抹殺】で墓地に捨てたシーラカンスを攻撃表示で特殊召喚する！出でよ、【超古深海王シーラカンス】！」

―！

【超古深海王シーラカンス】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

そんな、不思議がっている劉玄斎を他所に…空へと跳ね上がって現れたのは、深海を統べる魚の王。

…先ほどの【手札抹殺】で予め墓地に送られていた、かつての砺波のデッキの中核。

太古より生きるその岩のような鱗を煌かせ、時の流れを感じさせない迫力を持って…遥かな海の底の底から、劉玄斎へと魚眼を見開く。

「…チッ、今更になって、厄介な魚を引っ張り出してきたモンだぜ。こんな時によぉ…」

「シーラカンスの効果発動！手札を一枚捨て、デッキから【フィッシュボーグ・プランター】と【竜宮の白タウナギ】を特殊召喚！そのままレベル２の【フィッシュボーグ・プランター】に、レベル４、【竜宮の白タウナギ】をチューニング！」

…しかし、まだ止まらない。

深海王の号令によって、砺波のデッキから更に海の眷属達が呼び出され…流れるように次々とモンスター達がその姿を変えていくこの光景は、まさに竜宮の舞にも似た美しさを兼ね備えた流麗なるモノ。
…果たして、今の砺波の重圧に耐えられる者は、現役プロのトップランカーの中でも一体何人いるのだろうか。
かつて世界に君臨した、シンクロ召喚の頂点に立った伝説の王者。
引退したとは言え、歳を取ったとは言え。その力には寸分の衰えも感じさせず、寧ろ過去の力をも『今』の自分に取り込んだ砺波の迫力は、昔よりもその凄みを増しているとさえ劉玄斎に感じさせており…
「白き者よ、大いなる海原を遊び巡れ！シンクロ召喚！…出でよ、レベル6！【白闘気海豚】！」
―！
【白闘気海豚】レベル6
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１０００
「…なんだよ、随分と飛ばしてんじゃねぇか。最初からそんなに飛ばしてて大丈夫かぁ？その懐かしい懐かしいシーラカンスだってよぉ、このターン攻撃出来ないんじゃあ意味が…」
「貴様相手に出し惜しみするほど、私は錆び付いても落ちぶれてもいない！メガロアビスのモンスター効果！水属性1体をリリースする事で、メガロアビスは2回攻撃出来るようになる！私はシーラカンスをリリースし、メガロアビスに2回攻撃を可能とさせる！更に2枚目の【サルベージ】を発動！墓地より【彩宝龍】と【海皇子　ネプトアビス】を手札に戻し、墓地より手札に加わった【彩宝龍】は自身の効果で特殊召喚できる！更に【浮上】も発動！墓地から【真海皇　トライドン】を特殊召喚！」

―!!

【彩宝龍】レベル５
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／２６００
【真海皇　トライドン】レベル３
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／　８００

―さらに、続けて…
海鳴りの咆哮と共に現れたのは、竜宮に棲まう宝の龍と、蒼海の王座に鎮座せし深き海の蒼き龍の…その、嫡子であった。
そんな、次々に現れる砺波のモンスター達を見て…劉玄斎は、再度訝しげな声を漏らして…

「今度はトライドン…おいおい、マジかテメェ。同窓会じゃあねぇんだぜ？懐かしいモンスター使えばいいってモンじゃ…」
「これが今の私の戦い方だと言ったはずだ！…行くぞ！まずは【白闘気海豚】の効果発動！【真紅眼の鋼炎竜】を対象に、その攻撃力を元々の半分にする！そして【真海皇　トライドン】の効果発動！フィールドから海竜族のトライドンと彩宝龍をリリースし…デッキから、【海皇龍　ポセイドラ】を特殊召喚！」

―！

【海皇龍　ポセイドラ】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１６００

燃え盛る大地を飲み込む睨眼、高波を纏う蒼海の鎧。
その猛々しい海鳴りの咆哮は、歯向かう敵対種族を力で捻じ伏せる…海の皇族と呼ばれる【海皇】の、まさに王にして皇たる威光。

…それは先ほどの深海王、シーラカンスと同様。この蒼海王、ポセイドラもまた、砺波が【白鯨】と呼ばれる前までの…若かりし頃の彼が好んで扱っていた、エース足り得る大型モンスターの一体。

そう、シンクロ王者【白鯨】と呼ばれて数十年も経つが故に、砺波浜臣というデュエリストの切り札は【白鯨】の名を冠した巨大な純白の鯨というイメージが世界に浸透してはいるものの…

『荒くれ者』と呼ばれていた、血気盛んだった若年の砺波のスタイルは、水属性の大型モンスターをとにかく多く場に揃え相手を一瞬で飲み込んでしまう、高波のようなデュエルだった。

…一体、砺波にどんな心境の変化があったのか。

今でこそ冷静沈着なイメージが強い元王者【白鯨】とは言え、若かりし頃の砺波の事を良く知る劉玄斎からすれば…今になって昔のエースを次々に召喚して攻め立ててくる砺波の姿が、不思議でたまらないことだろう。

…しかし、そんな劉玄斎を意に介さず。砺波は場に揃えた海の眷属の強者達へ、攻め立てんとして命を下す。

「墓地より蘇った【彩宝龍】は除外され、ポセイドラの特殊召喚の後にトライドンの効果で貴様のモンスター達の攻撃力を３００下げる！」

「チィッ！」

「行くぞ、バトルだ！【白闘気一角】で、【真紅眼の鋼炎竜】を攻撃！激浪のウェーブ・ドライブ！」

―！

「ぐっ…相変わらず容赦の無ぇ野郎だぜ…」

劉玄斎　ＬＰ：４０００→２６００

先ずは深海の白き一角が激流の流れをその身に纏い鋼の黒竜を貫いて。

勢いよく鳴り響くＬＰの減少音は、劉玄斎の築き上げた城壁が崩れる音とでも例えられるだろうか。
…しかし、それだけでは終わらない。
「まだだ！【水精鱗―メガロアビス】の二回攻撃で、2体の【幻獣機トークン】にアタック！更に【白闘気海豚】で【真紅眼の黒竜】に攻撃！そして【海皇龍　ポセイドラ】で、【幻獣機ドラゴサック】に攻撃だ！」
劉玄斎の展開に負けず劣らず。砺波の海の者達の、激しい攻撃は止まる事を知らず。今と昔の砺波のエース達、その誇り高き海の眷属達が今一斉に高らかに吼え…
トライドンによる全体弱化と、白きイルカの水輪の拘束によって、その力を押さえつけられた竜族達が呻きにも似た咆哮を山森の中に木霊させようとも。
砺波はまるで容赦なく、そのまま更なる攻撃を命じるのみ。
「海鳴りの…ディープオーシャンブラストォ！」
―！
「…ぐぅっ!?」
劉玄斎　ＬＰ：２６００→２３００→１８００
そうして…海の眷属達の猛攻に、次々と蹴散らされていく竜の眷属達。
あれだけ場に居たドラゴン達が皆、４つの激流に飲み込まれていくその衝撃の余波は…容赦なしに劉玄斎へと襲いかかり、また微塵も手を緩める事無く攻勢に転じる砺波の勢いは益々その激しさを増していく。
…この容赦のない砺波の激しい連撃は、例えるならば止む事のない

嵐の雨と強い波。
　並の強者であれば、2～3回は吹き飛ばされているであろう激浪の如き連撃と言えども…それは砺波にとっても、劉玄斎という男が出し惜しみ出来る相手ではないからこその激しさと言えるのだろう。
　かつて世界を圧巻した、元シンクロ王者【白鯨】の威風堂々とした立ち振る舞いのそのままに。微塵も揺れぬ意思と強さで、どこまでも強く聳え立つのか。

「【貪欲な壷】を発動。重装兵、たつのこ、白タウナギ、竜騎隊、白棘⊠をデッキに戻して2枚ドロー。私はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ。」

砺波　ＬＰ：４０００
手札：6→3枚
場：【白闘気一角】
【白闘気海豚】
【水精鱗―メガロアビス】
【海皇龍　ポセイドラ】
伏せ：2枚

そして…
長い長い展開を終え、一瞬の高波のような攻撃を終え。
ようやく、砺波のターンは終了を宣言されたのだった。

「やっぱ簡単にゃ止まっちゃくれねぇか…つくづく融通の利かねぇ野郎だぜ…」
「…昔から貴様の事は気に食わんが、貴様とは現役時代に嫌と言うほど戦りあってきたのだ。貴様が何を企んでいようと、私が貴様相手に油断をする事は絶対にない。貴様こそ、似合わぬ地位に就いて勘が鈍っているようだな。このまま押し切らせてもらうぞ。」
「チッ…」

苦々しい声の劉玄斎に対し、凛とした声で聳え立つ砺波。
今の砺波のあまりに堂々とした佇まいは、彼が元とは言え世界中のデュエリスト達の頂点に立った元シンクロ王者【白鯨】である事の証明とも言えるだろう。
…劉玄斎の二枚看板を乗り越え、威圧を威圧で返すというその暴挙。
他者を圧倒する、その深海の水圧のような強い覇気はまさしく【王者】に相応しい代物。この攻守において統率の取れた、弱点と言った弱点を持たない総合力こそが砺波を歴代最強のシンクロ王者と成していたと言っても過言ではなく…
…生半可な実力者では、到底砺波の相手は務まらない。
今の砺波は、引退に追い込まれた時の負の『過去』を乗り越えた、『今』を生きる誇り高き【白鯨】。
かつての弱さを受け入れ、先に進む決意を持てたからこそ…今の砺波の力は、かつての現役時代をも超えた代物となりて、昔よりも更に強くなっているのだ。
『今』の砺波は、昔のスタイルに戻ったような…
いや、深海王や蒼海王といった切り札を扱っていた頃の、『荒くれ者』と呼ばれていた昔の彼の激しさと…冷静沈着な王者【白鯨】の要素を、高い純度で混ぜ合わせた代物。
そう、世界の決闘者の頂点に立った元シンクロ王者【白鯨】が、引退してからもその力を更に増しているのだ。
それは未だかつて誰も体験したことのない、新たな【白鯨】の未知なる姿とも言えるだろう。

それでも―

「こっちだってなぁ…テメェ相手に無傷で済むなんて思ってもねぇん

だよ！俺のタァァァン、ドロォォォォォォ！」

猛るオーラを飛ばしつつ、勢い良くカードをドローする劉玄斎。

そう、いくら砺波　浜臣が元王者の【白鯨】で、その力が世界中の決闘者達の中でも最上位に位置する『極』の頂に存在しているとは言え…

「速攻魔法、【ツインツイスター】発動ぉ！手札の【トライホーン・ドラゴン】を捨て、テメェの伏せカード２枚を破壊するぜぇ！」

…それは劉玄斎とて同じ事。

砺波のオーラに負けず劣らず。【王者】の放つモノと同種のオーラを猛々と放つ彼もまた、かつては【王者】と同格と謳われた元プロデュエリスト『逆鱗』なのだ。

その力が紛れも無い『本物』なのだという事は、【征竜】の使用が彼にのみ許されていると言う世界の法と歴史が既に証明している事であって。

「ならば破壊される前に罠カード、【アビスフィアー】発動！デッキから【水精鱗―アビスリンデ】を特殊召喚する！そして【アビスフィアー】が破壊されたことでアビスリンデも破壊され、破壊されたアビスリンデの効果でデッキから【水精鱗―リードアビス】を特殊召喚！」

―！

【水精鱗―リードアビス】レベル７
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１０００

「チッ、また増えやがったか！」

「簡単には巻き返させんぞ、劉玄斎！」

「…だがこれで、テメェお得意のウェーブ・フォースはなくなったぜぇ

！それに、テメェが何体モンスターを揃えようと関係ねぇんだよぉ！速攻魔法、【銀龍の轟咆】発動ぉ！墓地から【トライホーン・ドラゴン】を特殊召喚し、続けて手札の【巌征竜―レドックス】のモンスター効果ぁ！手札のレドックスと【幻木龍】を捨て、墓地から【ラビードラゴン】を特殊召かぁぁぁん！」

―!!

【トライホーン・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８５０　ＤＥＦ／２３５０
【ラビードラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２９５０　ＤＥＦ／２９００

そうして…

重々しい声に導かれ現れたのは、三叉の竜角を誇る闇竜と、雪原に生きる眩き兎竜の、効果を持たぬ２体の通常モンスターであった。

デュエルが高速化したこの時代に、効果を持たない通常モンスターを操るなど特殊なデッキを持つ者を除いてはほぼ皆無と言えど…

ドラゴン族を能動的に捨てられる【征竜】や、【手札抹殺】や【ツインツイスター】などを駆使することで、効果を持たない大型の通常モンスターの動きをも劉玄斎は自在に操れるのか。

「レベル８のモンスターが２…いや、通常モンスターが２体？…まさか！」

「そのまさかだぜ！これがテメェの馬鹿にしていた、効果を持たないモンスターの『力』だぁ！行くぜぇ、俺ぁレベル８のトライホーンとラビー、２体の通常モンスターでオーバーレイィ！」

劉玄斎の叫びに呼応して、２体の通常ドラゴンが宙を舞う。

その、天に身を捧げる２体の『通常モンスター』を見て、何やら記憶の片隅から何かを察した様子の砺波と…

それを一蹴するかのように猛る劉玄斎の叫び共に、三叉の竜角と雪原の兎竜がその身を光へと変え…

「轟け、天火の熱界雷ぃ！黒雲を引き裂き空を焼けぇ！」

地面に現れた渦巻く銀河にその身を捧げ、雷雲と共にこの場に現れるのは…

「エクシーズ召かぁぁん！来い、ランク８！【サンダーエンド・ドラゴン】！」

―！

【サンダーエンド・ドラゴン】ランク８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２０００

轟く雷鳴、唸る雷轟。乾いた爆音と共にこの地に降り立つは、終焉導く弾轟の雷竜。

それは効果を持たない通常モンスター『のみ』で呼び出す事の出来る、終焉を呼ぶ黒霆の竜であり…

その『通常モンスター』のみを素材とすることで呼び出せるこの竜は、その扱いの難しさと味方をも巻き込んでしまう制御不可の暴雷の所為で、今では扱う者の殆ど居ないエクシーズモンスターとされている、時代に忘れられてしまった存在の一体。

…しかし、砺波はこの終焉の雷竜の事を良く知っている。

そう、このモンスターも砺波のシーラカンスやポセイドラ同様。劉玄斎がまだ、『ルーキー』と呼ばれていた若い頃に使用していたドラゴンなのだから。

「サンダーエンド…通常モンスターでのみ呼び出せるドラゴンか！貴様こそ、随分と古いエースを呼び出してくるものだな！」

「クハハハハ！テメェにだけは言われたくねぇなぁ！行くぜぇ、サンダーエンドの効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使い、コイツ以外のモンスターを全て破壊する！弾け飛べぇ、破邪滅界ぃ！」

――！

そして…

敵味方問わず全てのモンスターを破壊する神鳴りの咆哮が、激しく周囲に轟いた。

あれだけ展開されていた砺波の場が、一瞬で崩壊していくその轟音。砺波の場いた海の眷属達は、全員が高い攻撃力を持っていたと言うのにも関わらず…

瞬く間に周囲は焼け野原になってしまい、残ったのは終焉導く神鳴りの竜だけになってしまったではないか。

「くっ！」

「折角揃えた魚の大軍も、コイツの前じゃあ小魚の集まりなんだよ砺波ぃ！」

「…だが！破壊された【白闘気海豚】と【白闘気一角】のモンスター効果！墓地の水属性を除外する事で、自身をチューナーと化して蘇生できる！墓地の【水精鱗―アビスリンデ】と【真海皇　トライドン】を除外し、墓地から【白闘気海豚】と【白闘気一角】を守備表示で特殊召喚！」

しかし…それでも砺波は崩れない。

そう、高い攻撃力を持った5体もの水属性モンスター達が、終焉の雷竜の轟きによって一瞬で葬り去られようとも。砺波の代名詞とも呼べる白き者達は皆、破壊されると輪廻を超えて再び蘇る事が出来るのだ。

それは例え、敵味方問わず如何なる存在をも貫く雷棘の狂い咲きであろうとも。砕けぬ魂を新たな身に宿し、主の周りを離れずにここに

蘇るのみ。

「貴様がどれだけ攻めてこようとも、私の白闘気は何度でも蘇る！」

「チッ、ぞろぞろと面倒な奴等だぜ。…けど『何度でも』ってのは違うだろ？一体いつまで持つだろうなぁ！魔法カード、【貪欲な壷】発動ぉ！墓地のドラゴサック、鋼炎竜、リアクタン、レドックス、幻木龍をデッキに戻して２枚ドロー！そして速攻魔法、【異次元からの埋葬】を発動ぉ！除外されているブラスター、テンペスト、ライトニングを墓地に戻す！そのままテンペストとタイダルを除外しぃ、墓地から【焔征竜―ブラスター】を特殊召かぁぁぁん！更に除外された２体の征竜の効果で、デッキからライトニングとストリームを手札に加え…手札のストリームの効果発動ぉ！ストリームとライトニングを捨てぇ！デッキから【瀑征竜―タイダル】も特殊召かぁぁぁん！」

―!!

【焔征竜―ブラスター】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１８００
【瀑征竜―タイダル】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２０００

それでも劉玄斎も同じく止まらず。

…決して収まらぬ災害の連続、止めどなく起こるは噴火と洪水。

終焉の雷竜に続き、２体もの【征竜】を即座に場に揃えられるその勢いはまさに、止めどなく押し寄せる災害そのモノ。

―かつて『潰し合い』と名付けられた、【白鯨】と『逆鱗』の試合があった。

今では伝説となっているその試合は、お互いがお互いの場を荒らし、潰し、蹴散らし、打ちのめし…両者共に一歩も引かない鍔迫り合

いを、世界の大舞台で己のプライドを賭け、真正面から砺波と劉玄斎は正々堂々とぶつかり合ったのだ。
それは世界中が熱狂した、伝説に数えられる世紀の一戦。
その結果はまさに互角、まさに対等、まさに同格、まさに同種と言える程の戦いであり…
そして今の二人の戦いもまた、『潰し合い』の再来とでも言わんばかりに。砺波も劉玄斎も一歩も引かず、戦いは更に激しさを増していく。

「【強欲で貪欲な壷】発動ぉ！デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！そんで【トランスターン】発動だぁ！このターン攻撃できねぇタイダルを墓地に送り、代わりにデッキからレベル８の【青氷の白夜龍】を特殊召かぁぁぁん！」
「攻撃力３０００のドラゴンを２体も揃えたか…しかし貴様が幾ら攻撃をしかけようとも、このターン私にダメージを与える事は…」
「そいつぁどうだかなぁ！装備魔法、【ビックバン・シュート】をブラスターに装備ぃ！攻撃力を４００上げ、貫通効果をブラスターに与えるぜ！」
「なっ!?ここで貫通だと!?」
「オラオラぁ！バトルだ！ブラスターで【白闘気海豚】に攻撃ぃ！焔魔崩龍波ぁ！」

―！

そうして…
激しい威圧の交錯と、叫びの木霊がぶつかり合う拮抗を崩すかのように。
劉玄斎の宣言により噴火の咆哮が放たれ、その噴火の如き焔竜の咆哮が白きイルカにぶつかった…

―その時だった。

「うぐっ!?」

砺波　ＬＰ：４０００→１８００

―突然。

そう。突然、突如、唐突、突発。

ＬＰの減少音と共に、思わずその口から途轍もない衝撃を受けたかのような声を漏らしてしまった砺波。

…大きく見開く瞼と眼、崩れかける足と膝、呼吸が詰まり飛びかける意識。

それはまるで、今の焔竜の貫通攻撃の余波が砺波のモンスターを貫いただけではなく…そのまま砺波自身をも貫いたかのような、異常と言える様な苦しみ方にも見え…

「ごふっ…な…なんだ…この衝撃は…」

どうにかギリギリでその足を留め、倒れる事だけは是が非でも拒否するも…

…突如として襲い掛かったその予想していなかった衝撃は、あまりに鋭い痛みとなりていまだ砺波の体を襲っている様子。

…リアルダメージ・ルールの適応外であるはずの砺波に襲い掛かった、腹を抉られたような鋭くも重々しい激しい衝撃。

そう、突然意識の外から襲ってきたソレは、普通であればありえないモノ。もしも何も知らぬ者がソレを受けたとなれば、あまりの痛みに我を忘れのた打ち回る事は必須とも思える重く鋭く激しい痛みがたった今砺波を襲ったのだ。

普通であれば思考が停止する。普通であれば目の前が真っ白にな

る。普通であれば痛みにのた打ち回る。普通であれば意識を飛ばす。普通であれば…

…けれども、その普通であれば混乱に陥れられるであろう『謎』の衝撃にもどうにか耐えつつ。

たった今起こった突拍子もない衝撃は、砺波に『ある可能性』を即座に思い出させ…

「…まさか…モンスターが…実体化しているのか？」

「…あぁ？……クハハハハ！おいおいどうしたぁ!?あの堅物だったテメェが、まさかそんな突拍子も無ぇ答えを出すとはなぁ！あの頭ガチガチで、融通の利かなかった堅物のテメェがぁ！そんなオカルトを真っ先に考えるなんてよぉ！」

「…」

そして、砺波の言葉を耳にしたその瞬間。まるで信じられないモノを聞いたと言わんばかりに、重厚な笑い声を放った劉玄斎。

…それは劉玄斎からしても、砺波から『そんな答え』が真っ先に聞けるとは思っても居なかったが故なのだろうか。

どこか砺波を小馬鹿にしたような台詞と、感情を逆撫でするような煽りを混ぜた劉玄斎の笑い声。かつての砺波を良く知る劉玄斎だからこそ、まさか砺波から出た言葉がソレだったことに、驚きつつも可笑しさを感じている様子を見せていて…

…まぁ、砺波とて以前までの彼だったら、モンスターが『実体化』しているといった現実味の無い可能性などは絶対に考えすらしなかっただろう。それ故、劉玄斎の笑いはある意味で当たり前ではあるのだが。

しかし…

『今の砺波』には、嫌でもそれが真実なのだと確証に至るほどの『経験』がある。そう、何も知らぬ他人からすれば、一笑されるような結論であったとしても。ソレを確かに経験した砺波だからこそ至れるその結論。

「けど…その通りだぜぇ砺波ぃ！俺とお前のこのデュエル！モンスターはソリッド・ヴィジョンじゃあなく、実際にここに居んだよ。けどアレだなぁ、テメェからそんな答えが聞けるたぁ解せねぇが…あぁ、もしかしてアレか？少し前に決闘市でドンパチあったっつぅ…」
「…知っていたか、決闘市で起こった事件の事を。」

―それは昨年度に起こった、決闘市での『異変』での経験。
そう、正体不明の『闇』によって、決闘市に実体化したモンスターが出現し…その『闇』に操られた砺波は、モンスターが実体化した危険なデュエルを自分の教え子とさせてしまったのだ。
その誇る事など出来ない、しかし確かに経験したからこその目測からくるその考察のおかげで、こんな突然な異常事態でも冷静でいられたのは皮肉なモノとも言えるだろうか。
また、劉玄斎からの肯定を聞いて。砺波には、もう一つの疑問が浮かび上がってきており…

「しかし、モンスターが実体化していたならば先程の貴様へのダメージは…」
「クハハ。まっ、こっちもこっちで決闘市みてぇに、少し前に『色々』とあったんでよぉ、こっちもこう言ったこたぁ慣れてんだわ。それに、俺ぁテメェと違って、さっきのあの程度のダメージじゃあびくともしねぇんだよ！」
「…何だと？」
「おいおい、つーか今はそんなコト関係ねぇだろうが！バトル続行！サンダーエンドで【白闘気一角】を攻撃！終焉襲雷撃ぃ！」

―！

そんな砺波の言葉を遮って、劉玄斎は更に攻撃を続ける。

…そう、いくら予期せぬ事態が起こり、そしてモンスターが実体化している事を砺波が知ってしまったとはいえ。
今はまだデュエルの途中であり、両者ともに引けぬ理由を持っているのだから、デュエルを途中で終わらせられるわけもないのだ。

「…ぐっ、破壊された【白闘気一角】の効果で、墓地のポセイドラを除外して自身を蘇生する！」
「クハハハハ、さっきの【白闘気海豚】は呼び戻さなくても良かったのかぁ？それとも、実体化した攻撃に驚いて忘れてたのかぁ？」
「…なんとでも言え。蘇らせるのは【白闘気一角】一体だけでいい。」
「そうかよ。じゃあバトルは続行だぜ！【青氷の白夜龍】で【白闘気一角】に攻撃ぃ！」
「…メガロアビスを除外し、【白闘気一角】を守備表示で蘇生…」
「クハハ、墓地からどんどん身代わりが無くなってくなぁ。俺ぁ2枚目の【七星の宝刀】発動ぉ！場のブラスターを除外し2枚ドロー！そしてカードを一枚伏せ、速攻魔法、【超再生能力】も発動だぜ！エンドフェイズに5枚ドローしてターンエンドだ！」

劉玄斎　ＬＰ：１８００
手札：6→5枚
場：【サンダーエンド・ドラゴン】
【青氷の白夜龍】
伏せ：1枚

そうして…
砺波の魚の大群を、一蹴の元に粉砕した劉玄斎はまたもや場と手札を揃えて、磐石の態勢でそのターンを終える。

「おいおいどうしたぁ？大人しくなっちまってよぉ！まっ、無理もねぇか。長ぇことお上品なデュエルばっかやってたテメェが、いきなりこんな危ねぇデュエルやらされちゃあな！」

「…その手には、乗らんぞ…うぐっ…あ、相手に冷静さを失わせる図々しい態度…貴様の常套句だ。」
「クハハ、常套句ってのは人聞きが悪ぃなぁ！これが俺の『素』なんだよ。それより随分と辛そうじゃあねぇか。そろそろサレンダーするかぁ？」
「ふざけるな…誰が貴様に降参するものか…」

予期せず襲ってきたダメージの所為か、それとも劉玄斎の猛攻の所為か。
先ほどまでの勢いが嘘のように、咳き込みながらデュエルディスクを持ち上げる砺波のその腕にはどこか力が入っておらず。それに先の砺波のターン同様。どれだけ場を整えてもその全てを蹴散らしてくる劉玄斎の戦意は、どこまでもどこまでも昂ぶりを続けるだけであり…
…先のターンの砺波の攻撃で、確かに劉玄斎にもダメージが生じていたにも関わらず。ソレを砺波に全く悟らせず、更に激しいデュエルを劉玄斎が仕掛けてきた所為で砺波も異変に気付くのが遅れてしまったのだろう。

…減らない手札、消えない竜族、場を一掃する竜の撃進。

デュエルが始まってから全く勢いを落とすこともなく、常に爆発的な攻撃を仕掛けてくる劉玄斎の轟きは例え【王者】クラスのデュエリストであっても疲弊を感じてしまう代物。
また、貫通はなくダメージは無いが、モンスターが実体化していると砺波は認識してしまったが故か。その衝撃の余波は砺波の頬を掠め、そうして生じた微かな切り傷から血が滲んでしまっている。
…しかし、ソレを気にしている余裕も無いのか。砺波は血を拭うことなく、その腕でデュエルディスクを構えるだけで…
「それに、もう時間もかけられん。【白鯨】の名に懸けて……一刻も

早く、貴様を倒す！私のターン、ドロー！」

それでも痛みをどうにか堪え、途切れかける意識を繋ぎ。戦意を無くさずターンを向かえ、一枚のカードをドローする砺波。

…強がってはいても、やはり先ほどの実体化したダメージは容赦なく砺波の体を内側から痛めつけていると言うのに…

どこか煽るような劉玄斎の口調を受けてもなお、あくまでも冷静さだけは失わぬように勤め。ルキが連れ去られてからもうかなり時間が経過していることを察し、勝利への道をただ模索するのか。

「【白鯨】、なぁ…」

静かにそう呟かれた、劉玄斎の言葉も聞こえず…

「私は【深海のディーヴァ】を召喚！」

―！

【深海のディーヴァ】レベル３
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　４００

起死回生の一手を狙い、砺波が召喚したのは先のターンでも現れた深海の歌姫。

砺波のデュエルを支える柱。いかなる佳境におかれても、このモンスターの効果があれば海の眷属達は無限とも思える展開をみせるのだ。

これまでどんな困難な場面に陥れられても、砺波はこの歌姫と共に巻き返しをみせてきた。

だからこそ…一進一退を繰り返すこのデュエルにおいても、ここから更なる逆転を目指し、前へ前へと進むのみ。

しかし…

「召喚成功時、ディーヴァの効果で私はデッキから…」
「そう何度も好きにさせるかよぉ！手札の【エフェクト・ヴェーラー】のモンスター効果ぁ！コイツを捨てて、ディーヴァのモンスター効果を無効にするぜぇ！」
「ならば魔法カード、【強欲で貪欲な壷】発動！デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！更に【強欲なウツボ】を発動し、手札の【フィッシュボーグ・アーチャー】と【サイレント・アングラー】をデッキに戻して３枚ドロー！…そして【死者蘇生】を発動する！墓地から【超古深海王シーラカンス】を特殊召喚！」
「チィッ、またソイツか！」
「シーラカンスのモンスター効果！手札を１枚捨て…」
「だからやらせるかって言っただろうがぁ！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動ぉ！シーラカンスの効果は無効だぁ！」

砺波の進撃への一手を、悉く封じにかかる劉玄斎。
それは、ここがデュエルの佳境だと劉玄斎も理解しているからこその妨害。劉玄斎は砺波の一挙手一投足を防ぎ、拒み、邪魔し、封じ…
そうして劉玄斎は優位に立とうと、荒々しく声を轟かせる。

「クハハハハ！やらせるわけねぇだろうがよぉ！ここできっちりテメェを止めて、最後に勝つのはこの俺だ！」
「…だが…これで貴様も、もう打つ手は無くなったと見た！」
「…あぁ？」
「プロの時に散々研究させてもらったから知っている！攻撃的な貴様のデッキに、守りの手はそれほど多くないと言う事を！もう貴様の手札に、身を守るカードは無い！」
「クハハ！けどそれがどうしたよ！テメェこそ、さっきのターンに全

力で展開しすぎて息切れしてきたんじゃあねぇのか？こうも出だしを止められちゃあ、今のテメェの手札からじゃあこの場を突破できる展開なんて出来ねぇだろ？これでテメェも終わりだぜ砺波よぉ！」

お互いに引かぬ物言いと、ぶつかり合うは怒号の応酬。

歌姫の効果を止められても、古代の魚王も止められてもなお…砺波は戦意を落とすことなく、どこまでも戦い抜く姿勢を貫いていて。

…確かに劉玄斎の言う通り、全く衰える事のない力で常に攻め立ててくる劉玄斎のデュエルは、砺波にとっても苦しい戦いを強いられる事に違いない。

しかし、いくら劉玄斎の場に攻撃力３０００を超えるドラゴンが２体も居て、先の２ターンでの展開によって少なからずの疲弊を砺波が見せ始めてしまっていても。

それでも砺波にデッキにおいて、この場を簡単にひっくり返す事の出来るカードは確かにあるのだ。

そう、こんな状況など、プロの世界では日常茶飯事だった。ソレ故、その歴戦を駆け抜け、そして勝ち続けてきた自負が砺波に折れぬ戦意を与えているのは先ず間違いなく…

…とは言え、それは劉玄斎とて承知のはず。

いや、寧ろこんな戦況だからこそ一際輝くと言っても過言ではないカードと共に、砺波は歴戦の戦いでもこんな場面を幾度も切り抜けてきたその砺波の『代名詞』の事を、劉玄斎が忘れているはずもないと言うのに…

「…貴様こそ、私の『名』を忘れたわけではあるまいな！この【白鯨】の名にかけ…」

「…本当にソレが出せればなぁ…」

「…何？」

「おっと、あくまでも噂だったか？けどどっかの誰かが、自分のエースを召喚出来なくなって引退したっつう下らねぇ噂が、昔チラッと流れ

たよなぁクハハハハ！」
「…」

…そんな砺波に対し。
鋭く尖った言葉を重い声に乗せ、砺波へとそう言葉を投げつけた劉玄斎。
…どこか嫌味にも聞こえるような、棘を生やした針のようなモノ。
それは紛れも無く、今も決闘界のどこかで流れている些細な『噂話』の事についての事であった。
過去、歴代最強のシンクロ王者と称えられていた【白鯨】が、謎の不調に加え【白竜】との一戦で敗北を喫し…そのまま引退を表明したという世界が震撼したあの時に、どこからとも無く流れたその『根も葉もない噂』は、過去に確かに流れた『説』の一つ。
それを聞いて、砺波はあからさまな怪訝な顔を浮かべ…

「…何が言いたい？」
「クハハ！俺ぁ知ってんだぜ砺波ぃ！テメェが今、【白鯨】を出せねぇってことはよぉ！誰からとは言わねぇが、随分と腑抜けちまってるようじゃねぇか！」
「…私が…腑抜け…だと？」
「あぁそうだ！【白鯨】が無ぇ今のテメェじゃあ、俺と渡りあうなんて最初っから無理な話だったってことなんだよぉ！」

確信めいたモノを持って、言葉を放つ劉玄斎。
砺波の引退の『真実』を知る者は、秘匿に努めた砺波の見栄という名の羞恥心によって、全世界に5人と居ないはずだと言うのに…
ソレを、一体なぜ劉玄斎が知りえたのか。
そんなこと、今この場では砺波には全く分からないものの…劉玄斎の声の棘は、砺波の琴線に悉く触れていて。

ーそれでも…

「ならばその眼で確かめてみるがいい！魔法カード、【浮上】発動！シーラカンスの効果で墓地に捨てた、【海皇子　ネプトアビス】を特殊召喚！」

―！

【海皇子　ネプトアビス】レベル１
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／　０

放たれる竜の嘲笑を、薙ぎ払うかのように鯨は叫ぶ。
…いや、薙ぎ払うだけではない。寧ろその驕りを蹴散らすかのようにして、鯨の叫びと共に海の皇子が砺波の場に蘇って。

「おいおい、無駄な足掻きかぁ？出せねぇモンスター呼ぶ準備なんざ、必死こいたって無駄なこ…」
「黙って見ていろ！そのままネプトアビスの効果発動！デッキから【海皇の竜騎隊】を墓地に送り、【海皇の狙撃兵】を手札に加える！コストとなった【海皇の竜騎隊】の効果で、更にデッキから【重装兵】を手札に加え…レベル１、【海皇子　ネプトアビス】に、自身の効果でチューナーとなったレベル７、【白闘気一角】をチューニング！」

…確かに『根も葉もない噂』であっても、火の無い所に煙は立たない。
砺波の引退の真実は、砺波と極少数の者しか知らない事実とは言え…あの時期に囁かれた噂の中に、確かな現実があった事もまた史実。
…しかし、傷心の中にあった昔の自分ならばいざ知らず。
当にソレを乗り越えている今の砺波にとっては、そんな『根も葉もない噂』になど微塵も精神を削られはしないのだ。
そう、過去を乗り越え、今を生き、未来へと進むことを決めた砺波の叫びが形となりて…

「悠久を生きる白き潮、大いなる海原から輪廻を巡れ！シンクロ召喚！」

―今ここに、現れる

「出でよ、レベル８！【白闘気白鯨】！」

―！

【白闘気白鯨】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

天に響くは鯨の叫び。深海より木霊する高らかな咆哮。
…かつて世界の頂点に立った、七つの海の君臨者。
ソレは不穏な空気に包まれた、この戦いの場であっても一片の穢れもなく。純白の海王のその姿は、かつての栄光の輝きにも負けぬ代物となりて、今孤高に天に映える。

「あぁ!?砺波テメェ！【白鯨】は出せねぇんじゃなかったのかぁ!?」
「いつの話をしている！そんな昔の出来事など、私はとうに克服している！行くぞ！【白闘気白鯨】の効果発動！」

そして…当が外れて焦ったのか。
予想に反し現れた、王者【白鯨】の姿に動揺を隠せず驚いた様子の劉玄斎。
砺波の強さをその身で理解しているはずの劉玄斎が、どうしてあれ

ほどまでに余裕を持っていたのか。それは偏に、砺波が【白鯨】を使えない事を期待していたが故に生じていた余裕だったのだろう。
…しかし今目の前の光景は、劉玄斎の余裕を打ち崩す確かな現実。
シンクロ王者【白鯨】が誇る、世界の頂点に立った【白鯨】。その白き威光は他の追随を許さぬほどの美しさを放ち、どこまでも竜族を見下ろすのか。

そうして…

「シンクロ召喚成功時…全ての『敵』を洗い流す！」

驚いている様子の劉玄斎を意に介さず。
【白鯨】が呼び出したる大地を飲み込む激流が、劉玄斎の竜族達を飲み込まんとした…

―その時だった。

「…なぁんてなぁ！だから知ってんだよ！今のテメェが、【白鯨】を取り戻してるってこともなぁ！俺のドラゴン共が破壊されるこの時！墓地から2枚目の【復活の福音】を除外だぁ！」
「なっ!?」

…一転。
そう、驚愕していたはずの表情から、まさに『してやったり』と言わんばかりに。
劉玄斎は一瞬でその顔を『動揺』から『不敵』なモノへと変化させ、【白鯨】の起こした高波を前にして一枚のカードの発動の宣言して。

劉玄斎の墓地から除外されし『そのカード』は、先ほども使用した竜族の身代わりとなる魔法カードではあるものの…

「オラオラぁ！これで俺のドラゴン共は、テメェの効果じゃ破壊されねぇ！」

劉玄斎の宣言で、【白鯨】の激流の間に割って入るように出現した竜の像。

その像が激流を二つに割り、果て無き奔流は竜族、そして劉玄斎を逸れていってしまったではないか。

「馬鹿な!?2枚目の【復活の福音】だと!?…貴様、2枚目をいつ墓地に…【手札抹殺】と【ツインツイスター】で捨てたカードは確かに確認して…」

「クハハハハ！もう俺に防御の手が無いとでも思ってたのかぁ？さっきテメェの眼の前で、堂々と捨ててたじゃねぇかよぉ。」

「何？…いや、【征竜】の捨てる効果はモンスターのみ。それ以外でカードを捨てた効果は【手札抹殺】と【ツインツイスター】だけ…それも全てモンスターカードだったはず…」

そして…

浮かび上がった砺波の疑問に対し、劉玄斎は先ほどと同様、『してやったり』の顔を崩さずにそう言葉をぶつけて。また、それを聞いて砺波は思考を一瞬で深いところまで持っていき、デュエルの流れを全て思い返し始める。

…思い出せる限りでは、劉玄斎が『効果』で捨てたカードの中には『2枚目』の【復活の福音】は存在していなかった。発動した【復活の福音】も『1枚』だけで、自分が見ている限り【復活の福音】を墓地に送るチャンスなど他には…

―『クハハ！ドローしすぎちまった！手札制限により、手札を2枚捨ててターンエンドだ！』

「…最初の【超再生能力】か…抜け目の無い男だ。」
「クハハ、やっと気付いたか。けどテメェにだけは言われたくねぇなぁ。目ざといテメェの眼を掻い潜るにゃ、こんなトリックも必要だろうが。」
「…しかし、私が【白鯨】を失っていた事だけではなく、【白鯨】を取り戻していた事まで知っていたとは…」
「テメェを相手するってぇのに、万全を整えねぇ馬鹿は居ねぇだろ。ちっと伝手を使って、きっちりと調べさせてもらったぜぇ？」

…それはデュエルの進行の意識の外。カードの『効果』の裏をかいた劉玄斎の、カードを何気なく墓地へと送った一つの行動の結果。

…別に、ルール違反ではない。
―いや、ルール違反であるはずもない。

手札をルールの範疇に収める為に、劉玄斎がそのルールに則った…ただそれだけのこと。
しかし、カード効果による入れ替えではなく、あまりに普通にデュエルの進行の為にその行為を行ったために…始めから墓地に置かれていたそのカードの存在が、砺波の意識から綺麗に外されてしまっていたのか。
…それだけではない。
このデュエルが高速化した時代に、手札の枚数が限界を超えることはあまりない。また手札の枚数制限が起こったときには、普通であれば『必要の無いカード』を捨てるのがまずセオリーのはず。

…だから、こそ。

使用すれば有利に展開できるその『蘇生系』のカードを、一つの戦略として当たり前のように捨てられる劉玄斎のその豪胆さはあまりに大胆かつ不敵。

砺波　浜臣という男のデュエルを知り尽くし、元とは言え【王者】と渡り合える程に磨き上げられた力と拮抗できる程の知略、そして恐れもなくそれを実行できるだけの度胸を持ち合わせた、洗練された確かな実力。

…そう、世紀末に生きているのかと思える程の巨躯や、その不遜な言動に勘違いをしている者も多々いるが…

そもそも劉玄斎という男は、何も野蛮な『暴力』だけで【王者】と同格にまで上り詰めたのでは無い。

…先見の明と知略に長けた【白鯨】、砺波　浜臣と、真っ向から渡り合える程の『戦略性』を持った竜。

…激しい展開と止まらぬ猛攻を行う【黒翼】、天宮寺　鷹峰と、真正面からぶつかり合える程の『実力』を持った龍。

…純粋な殺意と純然たる才能を持った【紫魔】、紫魔　憐造と、真っ当に切り結べる程の『胆力』を持った辰。

世界の頂点に君臨する【王者】達と渡り合うには、ただの『暴力』だけでは足りないのだ。その暴力性の裏に隠された、高い戦略・強い腕力・硬い胆力を兼ね備えているからこそ劉玄斎と言う男は【王者】と同格とまで謳われていて…

そしてまた、こうも称えられている。

…王座を踏みつける戦闘狂、暴れ狂う大災害。

―『逆鱗』

―劉玄斎、その人。

「だからさっき言っただろうが！これでテメェは終わりだってなぁ！折角ギリギリの手札で呼び出した【白鯨】も、この状況じゃあただの通常モンスターと変わりねぇんだよ砺波ぃ！」
「くっ…」

出方を悉く封じられ、逆転の芽を耐え切られ。
生徒を攫われた憤りと、実体化したモンスターの攻撃によって、『読み』が緩くなっていたのは自分の方だったということを砺波は今になって後悔し始めているかのよう。
…その口から漏れる静かな焦りは、砺波の甘さそのモノ。
【白鯨】と戦う事を見越して、万全の状態を整えてきていた劉玄斎と…過去の『逆鱗』との戦いの経験のみで乗り切ろうとしていた砺波。
それだけを見れば、最早どちらに勝利の女神が微笑んでいるのかは一目瞭然とも言え…

それでも…

「だがそれも一度きりだ！【シンクロキャンセル】発動！」
「あぁ!?」

そんな女神の微笑みになど、一瞥もくれずに砺波は叫ぶ。
「【白闘気白鯨】をＥｘデッキに戻し、シンクロ素材とした【白闘気一角】と【海皇子　ネプトアビス】を特殊召喚！」

―!!

【白闘気一角】レベル７

ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１５００
【海皇子　ネプトアビス】レベル１
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／　０

そして砺波が発動した一枚の魔法カードによって、その身を静かに消していく【白鯨】。【白鯨】が居たそこには、再び白き者と海の皇子が現れたではないか。
そう、例え劉玄斎が磐石を整えていたからと言って、自分の読みが甘かったからと言って…それでも砺波とて、ここでデュエルを諦められるわけがない。
…いや、決して諦めてはいけない。学生の命がかかっているかもしれないこの状況においては、負けてもいいと言う選択肢は砺波には残されてはいないのだ。
その足掻きにも似た我武者羅な姿は、かつての王者【白鯨】らしからぬ荒々しいモノとは言え…
ここで劉玄斎を倒さなければ、自分は先へは進めない。
この程度の逆境で、折れている暇などないと言わんばかりに。例えソレが、元シンクロ王者【白鯨】らしからぬ、不細工で不恰好で我武者羅なデュエルとなろうとも…
それでも砺波は構わずに、前へと向けて叫ぶだけ。

「チッ！…だがその効果で呼び出した【白闘気一角】はチューナーじゃねぇ！」
「わかっている！レベル１の【海皇子　ネプトアビス】に、レベル２の【深海のディーヴァ】をチューニング！シンクロ召喚、レベル３！シンクロチューナー、【たつのこ】！」

―！

【たつのこ】レベル３
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　５００

「つづけて墓地の【フィッシュボーグ―プランター】のモンスター効果発動！デッキの一番上のカードを墓地に送り、それが水属性だったら【フィッシュボーグ―プランター】を蘇生できる！墓地に送られたのは水属性の【シー・ランサー】！墓地から【フィッシュボーグ―プランター】を蘇生し、【たつのこ】のモンスター効果により私は手札のモンスター1体もシンクロ素材として扱える！手札のレベル3、【海皇の狙撃兵】と場のレベル2、【フィッシュボーグ―プランター】に…レベル3、シンクロチューナー、【たつのこ】をチューニング！」

砺波の叫びに呼応して、再び天に昇りし5つの光球と3つの水輪。…今の砺波のデュエルは、プロの時代に【王者】と呼ばれていた彼とは似ても似つかぬ、ただただ我武者羅な若者のような必死さを呈していることだろう。

しかし…過去を乗り越え、今を生き、未来へと進む決意を抱けた砺波にとっては、今ここで立ち止まるという選択肢は最早存在してはおらず。

―前へ…ただ、前へ。

そこに勝利があるのなら、例えこの戦いが【白鯨】らしからぬ不恰好なデュエルであろうとも。ただ守ると決めたモノの為に、ここに海の眷属の力が集約し…

今、巡りし歴戦の記憶と共に…

「悠久を生きる白き潮！大いなる海原から輪廻を巡れぇ！シンクロ召喚！」

―砺波は、叫ぶ

「再び現れよ、レベル８！【白闘気白鯨】！」

―！

【白闘気白鯨】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

再び天に現れし、純白なりし海の王。
陽の光に煌く、そのあまりに清麗なる白き姿はどこまでも王たる威厳を放ち…何度行く手を阻まれようとも、彼の者は水の煌きと共に、どこまでも優雅に空を泳ぐのか。
そう、それは同じ歴戦を戦ってきた、終焉と災害の竜を前にしても不変。
存在からして異なる【王者】の威光をありありと放ちながら、【白鯨】は堂々と天に浮かぶのみ。

「貴様が幾度も立ち塞がるのなら、私はソレを何度でも超えるだけだ！再び【白闘気白鯨】の効果発動！貴様のドラゴン達を全て…破壊する！」

―！

そして…
今度こそ守りの手が無くなったのか。
透き通るほどに清らかな咆哮によって、【白鯨】が再び大地を飲み込む高波を呼び起こし…
ついに劉玄斎の場の終焉と災害の竜が飲み込まれていくその光景は、まさしく『拮抗』が崩れた、戦況が傾いた事の証明とも言える光景と言えるだろうか。

「ぐっ…こんなトリックじゃ怯みもしねぇか…」
「これで終わりだ！バトル！【白闘気白鯨】で、劉玄斎にダイレクトアタック！」

迫る怒涛の白鯨の息吹、深海に響く王者の叫び。
その轟きは天をも揺るがし、今高らかに海鳴りが響く。
劉玄斎の場にモンスターは居らず、砺波の場には【白鯨】とその眷属の攻撃がまだ残っている。もう、時間はかけられないのだと言わんばかりに。
そのまま砺波は猛るように、今、がら空きとなった劉玄斎へと目掛け…

「喰らえ！怒涛のタイダル・ストリー…」
「けどやらせねぇっただろうがぁ！攻撃宣言時に、手札の【アンクリボー】を捨てて効果発動ぉ！墓地から【サンダーエンド・ドラゴン】を特殊召かぁぁん!!」

―！

【サンダーエンド・ドラゴン】ランク８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２０００

―咄嗟に。
そう、今まさに【白鯨】の息吹がぶつかろうとしていたその瞬間。
墓地より終焉の雷竜が蘇り、【白鯨】の怒涛の息吹の間に割って入ってその衝撃を全身で耐え始めたではないか。
…それは劉玄斎が発動した、死者を一時的に蘇らせることの出来る悪魔の使いの力によるもの。
このギリギリの状況におかれても、どうにかそのＬＰを次に繋げよ

うとして…手札に隠し持っていたソレを用い、劉玄斎は砺波の攻撃を悉く耐えようとしていて。

「…くっ、まだそんなカードを隠していたか…」
「危ねぇ危ねぇ…テメェ相手だしよぉ、一応用心しておいて正解だったぜ。」
「仕方ない…攻撃は中止し、エンドフェイズに移行する。…このエンドフェイズ、【アンクリボー】の効果で特殊召喚した【サンダーエンド・ドラゴン】は墓地に送ってもらうぞ。」
「…あぁ。」
「私はこれでターンエンドだ。」

砺波　ＬＰ：１８００
手札：４→１
場：【白闘気白鯨】
【白闘気一角】
【超古深海王シーラカンス】
伏せ：無し

―互角
そう、まさに互角の戦い。
お互いのターンに入るたびに、戦況は一転を繰り返し続けるこのデュエル。
ＬＰが並び、お互いがお互いの場を全壊させ、一つのミスが敗北へと繋がる危険を孕み、少しの油断が取り返しの付かない情況を呼び寄せ…
こんなにも張り詰められた戦いが、こんなギャラリーの居ない山奥で繰り広げられているだなんて、世界中の【白鯨】と『逆鱗』のファンが知ったら発狂どころでは済まないと言っても過言ではないだろう。

…しかし、ソレももう長くは続かないはず。
何せ二転三転を繰り返し続けるこのデュエルは、どちらも常に全身全霊であり、どちらも最初から全力疾走しているような代物。並の強者程度ならばもう2～3回は蹴散らされているほどの衝突を、この二人は毎ターン繰り返しているのだ。
また、モンスターが実体化しているというプレッシャーも相まって、その消耗は通常のデュエルの比ではない。それ故、その全力疾走を、今後のターンも続けるのが難しいということは戦っている二人が最もよく感じ取っているはず。

―早く、決着を

共通している二人の願望。そして、ターンは再び劉玄斎へと移り変わり…

「俺のターアアン、ドローオオオオ！」
「待て、劉玄斎！」
「あぁ？」

―そんな中
唐突に、劉玄斎へとデュエルを遮る言葉を投げかけた砺波　浜臣。
「貴様の腕が錆び付いていないことは、これまでの攻防で良く分かった…だからこそ解せない！『逆鱗』とまで呼ばれ、富も名声も地位も手に入れた貴様が！一体何の為に私の学生を攫った！」

…その言葉は、『昔』の劉玄斎を良く知る砺波は、どうしても『今』の劉玄斎から感じる違和感が気になって仕方がないのか。
時間が無いとはわかっていても、聞かずにはいられなかったのだと言わんばかりの砺波の声が周囲に木霊し…

「…テメェにゃ関係ねぇだろうが。」
「関係はある！私の学園の子だ…私には高天ヶ原さんを守る責務がある！貴様とてデュエリア校の学長ならば、何故学生に危害を加えようとしているのかと聞いているんだ！そこまで堕ちた理由があるはずだろう！」
「…チッ、こっちにもワケがあんだよ。」
「だからその理由は何だと聞いている！劉玄斎…先ほどからの貴様の台詞を聞いていると、黒幕が別にいるのは一目瞭然！一体誰だ、貴様の後ろにいる者は！誰が貴様の後ろで動いている！」
「だからテメェにゃ関係ねぇつってんだろうが！何も知らねぇ癖に、図々しく首つっこもうとしてんじゃねぇ！」
「首を突っ込んで何が悪い！貴様こそ、昔だったらこんな陰湿な手を取ることは無かっただろうが！」

これまでの攻防でお互いに昂ぶっているのか、二人の声はどこか喧嘩腰のようにも聞こえるモノ。
…いや、実際にお互いに喧嘩腰になっているのだろう。
現役時代の砺波と劉玄斎もよくこうして、何か在る度に衝突していたのだ。年月が経っているとは言え、衝突し合っていた時間の方が長いのだから、ソレが今この場でも再燃したとしてもそれは何ら不思議な事でもなんでもなく。
「学生を人質に取り、私を足止めし…貴様はそこまで陰湿な手を取るような男ではなかっただろう！誰だ！貴様を利用して何かを企んでいる輩は！」
「チッ…」

しかし…
喧嘩腰になっているとはいえ、それでも劉玄斎を良く知る砺波が確信を突くと。

劉玄斎はどこかイラつきながらも、今まで頑なに閉ざしていたその口をゆっくりと開き始め…

「…【紫影】…」

「なっ！…い、今、何と言った!?」

そして、劉玄斎が口にした、その『名』を耳にしたその瞬間。

全くその『名』を選択肢に入れていなかったのか、あまりの驚愕の表情を砺波は見せ始めたではないか。

…それは砺波からしても、その【紫影】という名があまりに予想外だったが為に生じた、意識の外から喰らったパンチだったのではないだろうか。

劉玄斎が告げたその【紫影】の名に、驚きつつ苦々しげにな顔をする砺波の姿は…普段の砺波からすれば考えられない程に驚いているのが誰の目にも手に取るようにわかったことだろう。

どこか過去の記憶から、思い出したくも無い名前を嫌々ながら引き出しているかのような砺波の苦い顔。

そのまま砺波は、記憶の奥の奥から思い出したくも無い激闘の記憶を呼び戻し…

「馬鹿な！…し、【紫影】…だと!?裏決闘界の融合帝…あの男が、まさか…」

自ら発している言葉が信じられないかのように、動揺を隠せていない砺波　浜臣。

…しかし、それもそのはず。

―『裏決闘界』

それは文字通り、この世界の決闘界の裏側の世界。

世界中の人々が日々見ているような、輝かしいプロの世界とはかけ離れた暗黒の場所。
…表が正々堂々の『実力』の世界なら、裏は陰謀策略の『暴力』の世界。
…表が豪華絢爛な『栄光』の世界なら、裏は陰湿悪逆な『殺伐』の世界。
力ある者のみが生きながらえ、力の無い者は生きる事すら許されぬ。悪鬼羅刹が闊歩する、混沌渦巻く負の決闘界。表の決闘界に馴染めなかったはぐれ者や、表の決闘界を追い出された乱暴者…表の決闘界に恨みを持つ者や、表の決闘界では生きられぬ者達が屯していると
される、決闘界のまさに裏側。
まぁ、裏決闘界と銘打っていても、人々に広く認知されている『表』の決闘界のように体系化されているような場所ではなく。あくまでも表に出れぬ『裏』の人間達が生きている、一つの裏社会の総称のようなモノなのだが。
…それでも危険な場所には違いなく。その実体を把握している者はこの世界においても【決闘世界】の上の者や、【王者】といった決闘界の重鎮達のような、極限られた者達だけであり…
無論、元シンクロ王者【白鯨】として、若かりし頃からプロデュエリストとして活躍していた砺波　浜臣も『裏決闘界』の事は良く知っている。
―過去…表の決闘界と裏決闘界が正面衝突をした、決して表沙汰にはならない裏側の歴史
王者【白鯨】として、『裏』の者と戦った経験。裏決闘界の三帝王…【紫影】、【白夜】、【黒獣】との、『極』の頂に至った者達との戦いはまさに熾烈を極めた苛烈な戦いであった。
それは決して表では報じられぬ、国家機密以上の機密事項。
かつてあったとされる、決闘界の命運を賭けた『表』と『裏』の戦いが、かつて確かに勃発したのだ。そしてその戦いの後、表に負けた裏決闘界は三帝王を失い、徐々にその勢力を落とし消滅したはず。
また、砺波が驚いたのは『裏決闘界』が動いていたというだけでは

なく…

「やはり裏決闘界が動いていたのか…だ、だが何故【紫影】が生きている!?あの屑は確かに憐造に負け…そう、【紫魔】に敗れ、自ら火口に落ちていったはずだ!それは貴様も見ていたから知っているはず!」

「俺だって知らねぇよ。けどあの屑が生きて俺の前に現れたってぇのも…事実なんだよ、イラつく事になぁ…」

そう、砺波も劉玄斎も『屑』と称する、【紫影】という最低最悪なデュエリストは既にこの世には居ないはずの存在だったのだから。

―【紫影】

それは世界最悪の犯罪者、性根の腐った捻じれた男。

そのおぞましき所業は最早語る事すら禁じられ、歴史の闇の片隅に追いやられているほどの代物でもあり…

それは今ここでは語ることすら出来ぬ、口に出すのもおぞましい所業ではあるものの、そんな歴史の闇に葬られた犯罪を犯して表の世界から姿を消した、世界の犯罪史上でも類をみないほどの大量の人間の命を奪った男。

下種で、小物で、狡猾な、人の命を命とも思わぬ最低最悪の思考を持った野心家。裏決闘界の頂点に君臨する、融合召喚の頂点に立つ裏社会のトップの一人。

しかし、かつて勃発した表と裏の戦争の最期に、裏決闘界の三帝王である【紫影】、【白夜】、【黒獣】はそれぞれ…

当時の決闘界の王者であった【紫魔】、【白鯨】、【黒翼】と、文字通り命を賭けた戦いを行い、敗北した裏決闘界の三帝王は皆、火口に落とされたり深海に沈められたり、遥か上空から落とされて命を落としたはず。

…そう、その当事者であった砺波だからこそ。あの戦いから２０年

以上も経っている今になって【紫影】と言う名が再び現れたことに、どうしても驚きを禁じえないのか。

―『…俺様はまたしばらくこの街を離れる、ガキ共の事は頼んだぜ。…今回の事で、色々と『勘付いた』奴もいるだろうからよ。』

―『わかっています。特に…高天ヶ原さんですね。』

―『…おう。やっぱわかってやがったか。』

―『【神】を持つ少女…【決闘世界】にも、今回の【神】出現の報告は上がっていますが…まさか、それが高天ヶ原さんからだとは思いませんでした。…ひとまずこの情報は私のところで止めていますが…しかし、『奴ら』にまで情報が行けばどうなることか…』

―『カカカッ、流石はお優しい理事長先生だ、手が早いこった』

砺波とて、『裏決闘界』の残党が何やら不穏な動きをしていると言うことの情報を掴んではいた。

しかし、ソレがよもや死んだはずの【紫影】が手引きしていただなんて、砺波からしても思いもよらなかった事に違いないこと。

…いや、決闘市の『先の異変』で、前【紫魔】である紫魔　憐造が蘇っていた例もあるにはあるのだが…

狡猾で謀略家でペテン師な【紫影】という屑の事を思うと、実は20年以上前の表と裏の戦いであの狡賢い男は自分が死んだと思わせていたのではないかと考えるほうが自然か。

また、今の話しを聞いて、砺波が最も許せないのは…

「い、いや、この際、あの屑が生きていたのだとしてもだ！　例え【紫影】が生きていたのだとしても…劉玄斎！私たち【王者】と同格とまで言われた貴様が、一体何故あの屑に…【紫影】などに従っている！そこまで堕ちたか！」

そう、砺波が最も許せないのは、仲が悪いとは言え歴戦を共に戦っ

てきた『逆鱗』の劉玄斎ともあろう男が、【紫影】などと言う最低最悪な屑の下について従っているというこの現状について。
…劉玄斎が築き上げた地位と資産と伝手と権威を行使すれば、例え【紫影】が何かしらの悪巧みを企んでいたとしても未然に防ぐか後から対処できたはず。
しかし劉玄斎がソレをしていないということは、この男は少なくとも自らの意思で【紫影】の下に付くという選択肢を取ったと言う事。
…他人の下に付くのを嫌がり、その身一つでのし上がった劉玄斎が…よもや、最低最悪の屑の下に自ら付いたという事実が、砺波には許せない。

「…」

「見損なったぞ劉玄斎！貴様ほどの力があれば【紫影】になど…」

そして…

劉玄斎に向けた砺波の言葉が、最後まで言い切られる寸前の…

―その時だった

「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

―！

突如として周囲の山林に爆音が鳴り響き、それに応じて木々が酷くざわめいて。

「なっ!?」
「さっきからゴチャゴチャ…こっちの事情も知らねぇ癖しやがってぇ!この俺が好き好んで【紫影】の屑野郎なんかに付き従ってるとでも思ってんのかぁ!」
「な、ならば何故!?」
「うるせぇぇぇぇぇ!何も知らねぇ癖に上からモノ言ってんじゃねぇぇぇ!」

…怒号。
そう、それは紛れもなく怒号であった。
噴出した怒り。爆発した憤り。溜め込んでいた鬱憤が、砺波からの言葉によって一気に放出されてしまったのか。

…言えない鬱憤、言わない葛藤。砺波の言動に、とうとう限界を超えた竜の怒り。

どこか八つ当たりにも似た今の劉玄斎の態度はまるで、【紫影】という最低最悪の屑野郎に従わざるを得ない状況にある自分自身が許せないかのようではあるものの…
…プライドを無理矢理押さえ込み、誇りをどれだけ傷つけられても。それでも【紫影】という屑に従う道しか残されなかった自分に対する怒りが、今限界を超え噴出し始め。

「【復活の福音】発動ぉ!墓地から【瀑征竜―タイダル】を特殊召喚しぃ、墓地の【厳征竜―レドックス】の効果発動ぉ!墓地の【仮面竜】と【タイラント・ドラゴン】を除外し墓地からレドックスを特殊召かぁぁん!更に墓地の【嵐征竜―テンペスト】のモンスター効果も発動ぉ!墓地のサンダーエンドとラビーを除外し、テンペストを特殊召かぁぁん!」
―!!!

【瀑征竜―タイダル】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２０００
【巌征竜―レドックス】レベル７
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／３０００
【嵐征竜―テンペスト】レベル７
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

怒号に呼応し現れる、洪水と地裂と竜巻の化身。
まるで、劉玄斎の怒りが具現化したかのようなその唸りは、先のターンまでとは比べ物にならない程に強まっており…

「何も知らねぇ癖しやがって…好き勝手言ってんじゃねぇ！レベル７の征竜３体でオーバーレイィ！」

そのまま、劉玄斎は呼び出した３体の災害の竜を天に捧げ…

「怒りに震える逆鱗よぉ！歯向かう愚者を消し飛ばせぇ！」
「…ッ!?その口上は！」

…狭間で揺れる竜の怒り。
それはまるで、何かと何かの間に囚われて、後に引けぬ場所に追いやられている窮地の叫びにも似た叫びのよう。
純粋なる怒りの豪咆、それは砺波へと向けたモノか自分へと向けたモノか…ソレが姿形となりて、今この場に降臨するのか。
銀河の渦が爆発し、３つの災害が合わさり呼び出されしは…

「エクシーズ召かぁぁん！来やがれぇ、ランク７ぁ！【撃滅龍　ダーク・アームド】ぉ！」

―！

【撃滅龍　ダーク・アームド】ランク７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００

―怒りに震える巨大な体躯、力を纏いし豪き腕。
刃翼を広げ、重い咆哮を響かせ…全身を牙と化したその姿は、まさに怒りに震える逆鱗そのモノ。
…これが、このモンスターこそが『逆鱗』と呼ばれた黒き龍。
純白の【白鯨】と対照的な、純黒なりしその姿を今ここに轟かせながら。主の怒りを体現せんと、好敵手へと向かって唸り猛る。

「『逆鱗』…」
「【撃滅龍　ダーク・アームド】の効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使いぃ…【白鯨】を破壊する！」

―！

そして…
『逆鱗』から放たれし力の波動が、刃となりて【白鯨】へと襲い掛かった。
…【王者】を恐れぬ怒りの権化。『逆鱗』の怒りは形となりて、目につく全てを壊すのか。
そのまま龍の怒りを集約した力の刃は、純白の海王の体を無慈悲にも真っ二つに切り裂いてしまったではないか。
「その後！俺ぁダーク・アームドの効果で、墓地からカード１枚を除外する！【七星の宝刀】を除外するぜぇ！」
「くっ…だが、【白鯨】は何度でも蘇る！破壊された【白闘気白鯨】のモンスター効果！墓地の【海皇の狙撃兵】を除外して、自身をチュー

ナーと化して特殊召喚！」
「しゃらくせぇ！もう一度ダーク・アームドの効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使い、もう一回【白鯨】を破壊ぃ！その後墓地から【手札抹殺】を除外だぁ！」
「墓地の【水精鱗―リードアビス】を除外し【白鯨】を蘇生！」
「３回目のダーク・アームドの効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使い、【白鯨】を破壊し墓地から【銀龍の轟咆】を除外ぃ！」
「墓地の【海皇の竜騎隊】を除外し【白鯨】を蘇生する！」
「まだだぁ！俺の墓地には闇属性が３体！俺ぁ手札から、【ダーク・アームド・ドラゴン】を特殊召かぁぁん！」

―！

【ダーク・アームド・ドラゴン】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００

―そんな攻防の最中。
続けざまに劉玄斎が呼び出したのは、猛り狂った巨大な闇の龍であった。
…それは『逆鱗』に良く似た龍。発達し隆々とした豪腕を持った、闇に染まりし進撃の轟きであり…
その、いきなり呼び出された【ダーク・アームド・ドラゴン】を見て。砺波は驚きと共に、焦りの声を漏らしつつ…

「なっ、【ダーク・アームド・ドラゴン】だと!?それは『逆鱗』へと…エクシーズモンスターへと進化して消えたのではなかったのか!?」
「テメェこそ何時の頃の話をしてやがる！木蓮の野郎にとっくに再生させたに決まってんだろうがぁ！【ダーク・アームド・ドラゴン】の効果発動ぉ！墓地の闇属性を除外することでテメェのカードを破壊する！【真紅眼の黒竜】を除外し【白鯨】を破壊ぃ！」
「ぐっ!?【白闘気白鯨】の効果発動！【フィッシュボーグ―プランター】

を除外し、自身をチューナーとして特殊召喚！」
「それがどうしたぁ！【アンクリボー】を除外して、もう一回【白鯨】を破壊だぁ！」
「か、【海皇子　ネプトアビス】を除外し自身を蘇生！」
「足掻くんじゃねぇぇぇぇ！今度は【トライホーン・ドラゴン】を除外して【白鯨】を破壊ぃ！」
「うぐっ…墓地の【シー・ランサー】を除外し、【白鯨】を蘇生…」
「砺波ぃ…テメェはやっぱりムカつく野郎だぜぇ…どこまでどこまでも俺の邪魔しくさりやがってぇ！速攻魔法、【異次元からの埋葬】発動ぉ！除外されている【トライホーン・ドラゴン】、【アンクリボー】、【真紅眼の黒竜】を墓地に戻し、そんでもう一周【ダーク・アームド・ドラゴン】の効果を発動だぁ！」
「何っ!?」
「容赦はしねぇ！【真紅眼の黒竜】を除外して【白鯨】を破壊するぜぇ！」
「ぼ、墓地の【白闘気海豚】を除外し蘇生！」
「次は【アンクリボー】を除外して【白鯨】を破壊ぃ！」
「…た、【たつのこ】を除外し…」
「【トライホーン・ドラゴン】を除外して【白鯨】を破壊ぃ！」
「ぐぅっ!?…し、【深海のディーヴァ】を除外し…は、【白鯨】を蘇生する…」

容赦の無い破壊の連撃、襲い掛かるは刃腕の轟き。
何度でも、何度でも、何度でも何度でも何度でも【白鯨】が耐えれば耐えるだけ…その度に、何度だって劉玄斎の怒りが襲い掛かって。
…既に、９回。
そう、既に９回も連続で破壊され続け、その度に海の眷属達の命を貰い輪廻を繰り返し続けている【白鯨】。その『逆鱗』の猛攻によって、砺波の墓地にはもう水属性モンスターが底をついてしまっている。
９回も【白鯨】を破壊し続けてくる『逆鱗』の怒りは、まさに災害

超えた大災害そのモノ。
　その終わる事のない連撃の嵐は、確かな重圧となって砺波を蝕み…また【白鯨】が蘇る度に逆転への足がかりとして墓地で眠っていた水属性モンスター達が瞬く間に消耗されていくこの情況は、砺波にとっても相当に劣勢に追い込まれている事の証明とも言えるだろう。
　…その疲弊は言うに及ばず。それは砺波にとっても、【白鯨】にとっても。

「そろそろ沈んじまえ！バトル、【ダーク・アームド・ドラゴン】で【白闘気一角】に攻撃ぃ！冥龍崩天撃ぃ！」

　――！

「ぐあぁぁぁぁぁあっ！」

　砺波　ＬＰ：１８００→１５００

　そうして…
『逆鱗』の元となった闇の龍が、闇の力を纏ったその刃腕を振い、白き者を一瞬の後に殴り飛ばして。
　…もう墓地に水属性モンスターが居なくなってしまったが為に、【白闘気一角】は輪廻を繰り返す事を許されもせず…
　また今の攻撃によって生じた実体化したダメージが、再び砺波の体を襲い、今度こそ内臓が傷付いてしまったのか。砺波はその衝撃によって、口から少量の血を砺波は吐き出してしまったではないか。

「ぐ…ぅ…」
「チッ、やけにみっともなく足掻くじゃねぇか、テメェらしくもねぇ。【撃滅龍　ダーク・アームド】はこのターン攻撃できねぇ。バトルフェイズを終了し、魔法カード、【貪欲な壺】を発動ぉ。ライトニング２体、

ストリーム、ヴェーラー、テンペストをデッキに戻して2枚ドロー。3枚目の【七星の宝刀】も発動し、レベル7の【ダーク・アームド・ドラゴン】を除外し2枚ドロー。…俺ぁカードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

劉玄斎　ＬＰ：１８００
手札：4↓1枚
場：【撃滅龍　ダーク・アームド】
伏せ：2枚

災害が通り過ぎた後のような、あまりに激しい劉玄斎の攻撃が終了し…何とかこのターンを凌ぎきった【白鯨】、砺波　浜臣。
…しかし情況は最悪で、このターンで墓地の水属性を悉く消し去られてしまった砺波にとっては逆転の芽が悉く潰されてしまったように感じるのか。
…痛みによって視界が揺らぎ、意識が遠のき耳が鳴る。
情況は最悪、それはデュエルも砺波自身も。
劉玄斎は毎回当然のように、万全の体制を整えてターンを終えてくるのだ。そのプレッシャーはあまりに重く、どうにか場に【白鯨】を残し大ダメージを食らう事だけは避けられたものの…
2枚の伏せカードに加え、劉玄斎の墓地に3枚目の【復活の福音】がある今の状況では、到底『逆鱗』は超えられないと言う事を嫌でも感じ取ってしまっている様子。
…それは先のターンのように、【シンクロキャンセル】のようなカードで再び【白鯨】の効果を狙おうとも同様。
シーラカンスも【デモンズ・チェーン】に縛られていてその効果は使えず、もしまた劉玄斎の手札に【エフェクト・ヴェーラー】と言ったカードまで備わっていたら一体その妨害を掻い潜るために何枚のカードを犠牲にしなければならないのだろうか…と。
…また、砺波のＥｘデッキには【白鯨】を超える攻撃力を持つモンスターが居らず。どうにかあの場を突破できたとしても、劉玄斎が再

びサンダーエンドのような高い攻撃力を持ったモンスターを咄嗟に出してきたら戦闘で無理矢理押し通る事も難しく…

「私の…ターン、ドロー…」

…絶体絶命。

砺波とて、劉玄斎が自分と同等の相手だとは理解していたとは言え…よもや自分がここまで追い詰められるだなんて、深く想像出来ていなかったのか。

…まだ戦う事を諦めてはいなくとも、その手からは力が抜けていて今にも倒れこんでしまいそうな砺波の姿。

元シンクロ王者【白鯨】が、これ程までに追い詰められている姿は現役時代には殆どありえなかった光景でもあり…

「まだ諦めねぇか。いっその事【白鯨】で相打ちでも狙うのかぁ？だがもう無駄なんだよ砺波ぃ！テメェはもうこれ以上の事ぁ出来ねぇだろうが！」

また、【王者】と呼ばれていた頃からは想像もつかないほどに泥臭いデュエルと、こんなにも必死になってまでカードをドローする砺波を見て。

…思わずその口からイラつきにも似た、荒々しい声を放った劉玄斎。

まるで勝ち誇ったようなその言動は、まだデュエルは終わっていないのだから勝ち誇るには早すぎると言えるのだが…しかしそれが確実なモノなのだと実感しているかのような物言いは、歴戦を幾度も砺波と戦ってきた劉玄斎だからこそ出せた結論でもあるのだろう。

―そう、これまでのデュエルの流れと、今の場の状況と、そしてこれからの砺波と劉玄斎の取るであろう行動を考えれば最早どちらが優位に立っているのかは一目瞭然。

…元々、砺波のデュエルはＥｘデッキのシンクロモンスターで相手を圧倒するデュエルが主体だった。
しかし切り札である【白鯨】は既に場に出ていて、展開に使う【たつのこ】は除外されている。【白闘気海豚】も【白闘気一角】も除外されていたり墓地にあったりで、【王者】ではない今の砺波は【氷結界の龍　グングニール】は持ってはおらず。残っている砺波のＥｘデッキに居るであろう残りの主力といえば、後は【瑚之龍】くらいのモノ。
そう、無効となっているシーラカンスの効果をどうにかして使っても、呼び出せるシンクロモンスターにはこの場を突破できるモノはいないはず。
また、いくら過去のエースの何かしらを再び狙おうとも、これだけの攻防を繰り返してきたのだから…この場を逆転出来る切り札を呼び出す余力など、もう砺波のデッキと手札には無いと言える。
更には―
手札には先ほども使用した、相手モンスターの効果を無効化する【エフェクト・ヴェーラー】があり、伏せているカードは【デモンズ・チェーン】と【竜嵐還帰】。
墓地には最後の【復活の福音】が用意してあるのだから、これで砺波がいかなる手を持って攻めてこようとも守りきる事が出来るだろう…
…と、劉玄斎はそう、結論つけたのだ。
「…くっ…最後に…一つ、教えろ…貴様は、どうして私を足止めしている？」
すると…
呼吸するのもままならない程に、内臓が傷付いている中で。砺波はそう、劉玄斎へと問いかけて。
「あぁ？…そりゃあ…テメェが行くと、マジでテメェ一人に全部止め

られそうだからなんだってよ。…胸糞悪ぃが、【紫影】の野郎が言うにゃあ今テメェに止められるのだけは絶対に阻止しなきゃいけねぇんだとよ。」
「…それは…『私が』止めに行った場合の話…だな？」
「あぁ。」
「…なるほど…それを聞いて安心した。私が行って止められることならば、ここは教え子に全て任せられる…」
「クハハ、あんだけ自己中だったテメェの口から、まさかそんな台詞が聞けるなんて思わなかったぜ。どういう心境の変化なんだかよぉ…けど、ようやく諦めたのかぁ？」

…一体、砺波は何を確認したかったのか。
どこかトーンが落ちていく砺波の言葉からは、ダメージの所為か今にも意識が消えかかっていそうなほどに弱っているのが劉玄斎にも手に取るようにわかり…
実体化したモンスター、容赦なく襲い掛かる実際の衝撃、そして災害の如き劉玄斎の猛攻…ソレを全てその身一つに受けてきた所為で、砺波の戦意が折れてしまったとでも言うのだろうか。
そのまま、砺波は言葉を続けようとして深く息を吸い込むと…

「…いや…」

一瞬の間の、その直後に…

―強く、眼を見開いた

「もうこの先の為に、力を温存しなくても良いと思っただけだ！出し

惜しみはせん…私の全力を持って、貴様を倒す！」
「あ？今更何を叫んでやがる！今のテメェのデッキで、そんなコト出来るはずねぇだろうが！もうテメェのＥｘデッキにゃ、俺を倒せるモンスターなんて…」
「ここで貴様を倒せるカードをドローすればいいだけの事だ！このメインフェイズ１の開始時！魔法カード、【強欲で金満な壷】を発動！」

―！

砺波の叫びに応じて、場に現れた輝く壷。
強欲と金満、二つの顔を持つその怪しくも巨大な壷は、プロの世界でも広く使われている【強欲で貪欲な壷】や【強欲で謙虚な壷】と同種のデュエリストに恩恵を与えるドローカードであり…
…しかし、元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣が場に出したその【強欲で金満な壷】を見て。劉玄斎は、驚きつつ声を漏らし…
「お、おいおい…そのカードはテメェが昔、『無価値』だっつって絶対に使おうとしなかったカードじゃねぇか。」

…そう、【強欲で金満な壷】。
それはＥｘデッキにいる、デュエリスト達の主力であるＥｘモンスターを犠牲にして手札を増やすカードなのだ。
このＥｘデッキ至上主義とも言える世界では、デュエリスト達の切り札やエース、相棒とったカードは軒並み己の『Ｅｘ適正』に応じた融合・シンクロ・エクシーズモンスターと言っても過言ではなく…
現役時代、王者【白鯨】と呼ばれていた頃の砺波もまた、【強欲で貪欲な壷】や【強欲で謙虚な壷】と違い、シンクロモンスターを裏側除外してしまうこの【強欲で金満な壷】はデッキに入れる選択肢すら浮かび上がらないほどに無価値と決め付けていたのだ。
…そんなシンクロ召喚に誇りを持ち、シンクロ召喚の王と呼ばれたあの砺波が。

―そう、シンクロ召喚の頂点を極めた、あの王者【白鯨】が。

これまでの自分の言葉を否定し、生きてきた道を断ち切り…自らＥｘデッキを放棄してでも、起死回生を狙おうとしているとでも言うのだろうか。

それでも…

「もう迷いは無い！行くぞ！…Ｅｘデッキを６枚除外し…」

確かな決意と強い意思、その双方を持ってカードをドローせんとする砺波。

その決意は、常人が考えるような生半可なモノでは断じてなく…

―身を裂く思い、心をすり減らす覚悟、己の生き方を否定する決意。

シンクロ召喚の頂点に立ったほどの男が、その誇りもプライドも投げ打って。

今この時、この瞬間の勝利の為の、ただそれだけの為だけにその『魂』をも生贄に捧げようとしているのか。

「…２枚をドロー！」

引いた、カードは…

「…来たか！」

そして、たった今ドローしたその2枚のカードに、一瞬だけ目を落とした後。

上空に浮かぶ己の『名』であり、自分自身の化身とも言える【白闘気白鯨】を砺波は見つめ始めて。

…砺波のその目は何を思い、そして何を訴えているのか。

それはどこか謝罪のような、それでいて懺悔のような…

…いや、そのどれでも無い。

弱っている身体とは裏腹に、砺波の目にはこれまで以上の戦意が宿っている。深き海の底に流れる水よりも、なお洗練されたその戦意は劣勢だという事を感じさせない【王】たる代物。

…また、【白闘気白鯨】の眼も、同じく強く砺波を見ている。

それはまるで、己自身である砺波がこれより行おうとしている事を悟り、己もまた『覚悟』と『決意』を持っているかのような姿にも見え…

『極』の頂よりも更に先…その最果てをも越えた見果てぬ場所へと、『全て』を投げ打ってでも進むのだという…勝利を渇望する事への覚悟と、王たる【白鯨】の決意の眼。

—それを、砺波もまた理解しているからこそ…

「行くぞ…」

長き眠りから目覚め、前へと進む事を決意した砺波と…

「私は【超古深海王シーラカンス】と…【白闘気白鯨】の…」

長き背反から解き放たれ、再び蘇った【白鯨】が…

「2体のモンスターをリリース！」
「なぁっ!?」

―！

天に佇む【白鯨】と、深海王が渦を纏う。
そして砺波の宣言を耳にし、これまで以上に…そう、これまでのどんな出来事よりも驚愕しているかのような驚きを見せた劉玄斎。
…しかし、それもそのはず。

今、砺波は確かに宣言した。

―『リリース』、と。

それは効果のためのリリースでもなければ、効果による特殊召喚のためのリリースではない。
天で渦を纏い浮かぶ、2体のモンスターが証明している。それは間違いなく、『アドバンス召喚』のためのリリースなのだと。
また、劉玄斎の驚き方はソレだけによるモノではない…

「馬鹿なぁ！砺波ぃ、テ、テメェがアドバンス召喚!?しかも【白鯨】をリリースしてまでだとぉ!?」

―そう、砺波は己の『名』そのモノを生贄に捧げたのだ。

【王者】の名に誇りを持ち、プライドの塊のようだったあの砺波が。まさか己の魂そのモノである【白鯨】を、生贄に捧げるだなんて。
…それが、劉玄斎には信じられない。
しかし―

「今の私は…もう昔の私ではない！貴様を倒す為ならば…私の学生を守る為ならば…その為ならば私は！【白鯨】の『名』も『誇り』も、その全てを生贄に捧げてみせる！」

―迷いは無く。
そう、今までの己を超えると決めた砺波の心意には、一片の迷いも恐れも無い。
…自分と『同等』の相手に。【王者】と『同格』の相手に。そんな『同種』の相手に、今ここで確実に勝ちたいと思うのならば、今この瞬間に相手よりも強くなるしか道はないのだ。
―砺波の決意は、【王者】を超えるということ。
それは『極』の頂よりも更に上…
過去に自分を降した、【化物】の住まう前人未到の未知なる領域へと、足を踏み入れる覚悟を決めたと言う事であって。

「アドバンス召喚！いでよ！レベル８！」

世界を統べし【白鯨】が、決意の元にその身を天に捧げる時。
深海よりも更に深い、人類が未だ見た事もない場所から『ソレ』は浮上し現れるのか。
輪廻を超える【白鯨】の、王たる魂を受け継ぎて。
―今ここに現れるは…

「【幻煌龍　スパイラル】！」

―！

…『何か』が開く、音がした。
それは誰にでも聞こえる音ではなく、おおよそ『ヒト』には聞こえない音であったことだろう。
…しかし、確かにソレは鳴った。
『誰か』が『ここ』の扉を開いて、足を踏み入れてきた音。姿が見えぬその扉の、固く閉ざされていた鍵を…
否、姿が見えぬとか、閉ざされていたとか、そんな次元の話ではない。
およそ『ヒト』には見えぬはずの場所にあった、開けられぬはずのその扉を…何者かが無理矢理に出現させ、そして無理矢理にこじ開けたような…
鳴ったのは、そんな音。

―果たして

新たに『ここ』に踏み入ってきた者に、先に『ここ』に居たモノ達は何を思うのか。
…そんなこと、ここで『彼』が来るのを待っていた、本物の【化物】達にしかわからないことであり…

【幻煌龍　スパイラル】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２９００

渦巻く天を貫いて、響くは遥か深海の唄。
形容ではない。戦い溢れる【決島】の、その中心に聳える休火山の更に上空に浮かぶ雲が螺旋の如く暴れ始め…
その螺旋の天より現れたのは、海竜より進化した…いや、海竜より浸渦した、幻の中に生きる一体の龍。海に生きる眷属達の、一つ上の段階へと至った螺旋の海神竜であり…

―また…ソレは効果を持たぬ、『通常モンスター』だった。

「馬鹿な…あの堅物だったテメェがアドバンス召喚…しかも【白鯨】をリリースしてまで呼び出したのが、テメェが馬鹿にしていた『通常モンスター』…だと…？」

そして砺波が呼び出したその『通常モンスター』を見て、劉玄斎は思わず言葉を詰まらせて。
…それは、先ほどのような演技ではない。
本当に、心の底から…砺波がアドバンス召喚した驚きと、そして呼び出したのが通常モンスターであった二重の衝撃は、劉玄斎にとってあまりに信じがたい現実だったとでも言うのだろうか。
…シンクロ召喚に誇りを持ち、その真髄を極めんとして頂点に立った元シンクロ王者【白鯨】。
しかし、１０年程前にＥｘデッキを使わぬ釈迦堂　ランに敗北し、そして敗北のきっかけとなったアドバンス召喚を心の底から憎んでいたあの砺波が…今確かに、最上級モンスターを『アドバンス召喚』し

たというのは、変えようのない紛れも無い事実なのだ。

…一体、何が砺波を変えたのか。

以前の砺波ならば見向きもしなかったであろう、効果を持たない『通常モンスター』。ソレを、まさか【白鯨】の『名』そのモノを賭けてまで、元シンクロ王者【白鯨】が『アドバンス召喚』を行うなど、一体誰が想像出来たというのか。

「…認めよう、昔の私は愚かだったと。まだ見ぬ可能性を自ら否定し、成長の余地を自ら潰していた。しかし、今の私は昔の私とは違う。更に強くなるためならば…【王者】を超えるためならば！私はこれまでの自分を否定してでも先へと進んでみせる！」

「クソが…だが、今更通常モンスターを出したところで通常モンスターは通常モンスター！見たことねぇモンスターでも、効果が無くて攻撃することしか出来ねぇんじゃ、それ以上テメェにゃ何も…」

「私がドローしたのはスパイラルだけではない！装備魔法、【幻煌龍の螺旋突】をスパイラルに装備！そしてバトルだ！スパイラルで【撃滅龍　ダーク・アームド】に攻撃！」

「あぁ!?」

―！

「ぐおぉぉお!?」

劉玄斎　ＬＰ：１８００→１７００

劉玄斎の言葉を遮って、螺旋の海竜に攻撃を命じた砺波　浜臣。

「ぐっ…だ、だが、たかが１００のダメージで何が変わる！墓地の【復活の福音】を除外する事でダーク・アームドは破壊されねぇ！コレで

テメェの攻撃は終わったぜぇ！」

しかし決意の熱意とは裏腹に、装備魔法を装備したとは言え【幻煌龍　スパイラル】には何も変化は起こらず…

劉玄斎が言った通り、ＬＰをたった１００削っただけでその攻撃は終了してしまい、スパイラルはその轟きを徐々に鎮め始めてしまったではないか。

…勇んで偉そうに吼えた割には、あまりにあっけない終わり方。

通常モンスターであるが為に、【エフェクト・ヴェーラー】も【デモンズ・チェーン】も使えないとは言え。先ほどの驚きが大きすぎた所為か、どこか拍子抜けとも思える砺波の攻撃の終わりに、劉玄斎も思わず声を大にしてしまい…

―しかし【王者】を超えると宣言した砺波が、これで終わるはずもなく。

幻煌龍の攻撃が終わった直後に、砺波は再度高らかにその手を天へと掲げる。

「いや、まだ終わらない！装備魔法、【幻煌龍の螺旋突】の効果発動！相手に戦闘ダメージを与えた時…デッキから更なる【幻煌龍　スパイラル】を特殊召喚し、このカードを装備する！」

「なぁ!?」

―！

【幻煌龍　スパイラル】レベル８

ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２９００

砺波の宣言によって、デッキから２体目の同名モンスターが現れて。

…鋭く伸びる螺旋の双角、蒼海に染まった海流の体色。
虚ろな瞳は浸渦を求め、『逆鱗』を相手に戦渦を欲し…今、天渦の名の下に、螺旋の雄叫びを上げ始める。
…そう、【王者】であった砺波が、自らの意思で【王者】を超えると宣言したのだ。
その覚悟が生半可な代物でない事は、今のアドバンス召喚の流れで既に証明されており…その覚悟の化身こそがこの【幻煌龍　スパイラル】であるのだから、例え【幻煌龍　スパイラル】が効果を『持たぬ』通常モンスターと言えども、それはつまり効果を『持てぬ』わけではないのだ。
２体目の幻煌龍に装備された、【幻煌龍の螺旋突】が…
―今、その真価を放つ。

「増えやがった…け、けどこの攻撃じゃあ俺のＬＰはまだ残る！んで他にモンスターを出してきても、まだ俺にゃ守る手立てが…」
「まだだ、まだ【幻煌龍の螺旋突】効果は終わっていない！【幻煌龍の螺旋突】の更なる効果！新たなスパイラルに装備し直した後、【撃滅龍ダーク・アームド】を守備表示にし…そして【幻煌龍の螺旋突】は、装備モンスターに貫通効果を与える！」
「な、何だとぉ!?」
「これで終わりだ！【幻煌龍　スパイラル】よ、もう一度『逆鱗』を攻撃！」

解き放つは螺旋の突撃。
果て無き深層海流を貫く、鋭き一本の海神の槍。
天に轟き、戦を求め、更なる進化を目指し続ける幻煌と…
【王者】を超えると覚悟した、砺波の信念の姿が今、『逆鱗』へと向けられ…

「轟け！渦天のスパイラル・フラードオオオオオオ！」

―！

「ぐ…うおおおおおぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

劉玄斎　ＬＰ…１７００→０（―２００）

―ピー…

天に渦巻く螺旋の雲を割って。

無機質な機械音と、ここに深海の咆哮が響き渡った時…

…それは【白鯨】と『逆鱗』の、戦いの終了を告げていた。

―…

「…ザマぁねぇな…ガフッ…自分で仕掛けといて、テメェに返り討ちにあうたぁ…」

地に背をつけ、天を仰ぎ、息も絶え絶えになりながら。

…倒れこんでいる劉玄斎が、荒い呼吸と共にそう、言葉を呟いていた。
それは実体化したモンスターの攻撃による余波が、立ちはだかった劉玄斎にも襲い掛かったのだ。今の劉玄斎の状態は、ある意味で因果応報と言えるのだが…しかし砺波と条件を揃えていたと言うことに関しては、彼はフェアでもあったと言えるだろうか。
また、劉玄斎を見下ろしている砺波の方も、今にも倒れこんでしまいそうな程にダメージを負っているものの…
砺波の方は『勝者』らしく、倒れる事を拒んで立っていて。

「…融通の利かねぇ堅物が…変われば変わるもんだなぁおい。…何がそこまでテメェを変えた？昔のテメェなら、アドバンス召喚を切り札になんか…絶対ぇに、しなかっただろうが…」
「…言ったはずだ。今と昔の私は違うと。だが…そうだな、一つだけきっかけがあったとすれば…教え子から、私も強さを教わったと言う事だろう。」
「…天城…遊良…か…」
「…あぁ。」
「クハハ…絶対ぇに弟子を取らなかったあのテメェが…教え子から教わった…ねぇ…」

これまでの砺波を知っているからこそ、砺波の口から出てくる信じられない言葉の数々に、口元を緩めながらも劉玄斎はどこか感慨深げにそう言葉を続けて。
…過去。それこそ現役時代から数えれば、星の数ほどいたであろう、数え切れない程の【白鯨】への弟子志願者たち。
それらを全て突っ放し、孤高でシンクロ召喚の頂に立ち続けた、決して弟子を取らぬことで有名だったあの元シンクロ王者【白鯨】が…ただ一人弟子であると認めたのが、この世でたった一人の、『Ｅｘ適正』の無い天城　遊良。
昨年度に紆余曲折あったとはいえ、きっと今の遊良の存在は砺波に

とっても特別なモノとなっているのだろう。
—良き師は、良き弟子を育てるモノ。しかし良き弟子もまた、良き師を育てるモノ。
…天城　遊良との師弟関係がなければ、砺波がこの場で劉玄斎に勝つことは不可能だった。
それは己の弟子に教えることだけではなく、己の弟子からも教わっている事が多々あるのだとも取れる心情の変化。その証でもあるモンスターを、最後の最後で確かに従えた砺波の心には、もう昔のように濁った心意など既に無く…
「…劉玄斎。私は貴様の苦悩など知らん。【紫影】の屑なんぞに従い、高天ヶ原さんを…我が校の学生を危険な目にあわせようとしている、貴様の苦悩など。」
「…あぁ、テメェには…分かって欲しくもねぇ。」
「だが…一つだけ、今のデュエルでハッキリした事がある。」
「…あぁ？」
「…天城　遊良は、私が責任を持って面倒を見る。あの子は…この【白鯨】の、ただ一人の弟子なのだから。」
「…あぁ、そうかよ。」
…一体、砺波は何故今ここで劉玄斎へと向けて、『天城　遊良』の名を出したのだろう。
…戦いの中で何かを知ったのか、それともただの的外れな確信か。
しかし、劉玄斎の『肯定』とも『否定』とも取れぬその『曖昧』な返事は…少なくとも砺波の言葉が、単なる的外れではないと言う事を証明しているようでもあり…
「劉玄斎、貴様はあの子の…」
「…チッ、負けた俺にゃ、もうこれ以上話すことなんかねぇよ…俺は確

かにテメエを『止めた』…そうだろ？」
「…あぁ。」
「ならさっさともう行け。早くしねぇと、あの赤髪の嬢ちゃんと…遊良が…どうなっても知らねぇぞ。」
「…わかっている。」

…砺波が『何』を知ったのか。
それはきっと、ここで問答をして聞きだすような事情ではないのだろう。衝突が多かったとは言え、長い付き合い故かソレを今ココで無理矢理に聞きだす事など砺波はせず。
過去に色々とあったとはいえ、劉玄斎とは歴戦を共に戦ってきたのだ。だからこそ、今のデュエルを通して劉玄斎が『本心』からルキに危害を加えようとしているわけでは断じてないと言う事を理解した砺波。
…何か、理由がある。最低最悪の屑である裏決闘界の融合帝、【紫影】が関わっていると言うのならばなおさらに。
…ならば、早く連れ去られた高天ヶ原　ルキを救わなければ。
ルキの持つ『赤き竜神』のカードの事もそうだが、何よりも彼女の身の安全が第一。親御から預った大切なイースト校の学生を、絶対に救い出さねばならぬ…と。

―そうして…

倒れている劉玄斎の横を通り過ぎて。

…砺波は、洞窟の中へと入っていった。

「クソッ、琥珀のボウズが言った通りだったなぁおい…砺波の野郎、昔より相当強くなってやがった…」

砺波が洞窟へと入っていった後。
今にも飛びそうな意識を堪え、どこか悔しげな声質でそう声を漏らした劉玄斎。
のっぴきならない『事情』があったとは言え、その声は『敗北』の悔しさからか微かに震えているようにも聞こえるモノ。
…手加減などはしておらず、全力で戦いそして負けてしまった。
それは幾ら押さえようとしても溢れてくる、決闘者特有の感情でもあり…
…勝つつもりだった。昔までの砺波だったら、あの場面で確実に勝利を手に入れられていた。
それを後一歩、本当に後一歩のところで砺波に押し切られてしまった悔しさは…【王者】と同格と謳われた、『逆鱗』だからこそ沸き起こる悔しさでもあるのだろう。
そのまま、ゆっくりと消え入りそうな声で。
劉玄斎は、再度天へと向かって口を開いて…

「…すまねぇなぁ遊良…こんな…こんな『…』でよぉ…」

――…

「ぐっ…ダメージを負いすぎた…」

痛むわき腹を押さえ、震える足を無理矢理動かし。
口へと上ってくる血を飲み込みながら、洞窟の中を進む砺波　浜臣。
…劉玄斎との戦いに、だいぶ時間を取られてしまった。

それ故、痛む身体を押して歩みを進める砺波の足取りには、確かな焦りが滲み出ており…

そう、ルキの身の心配もそうだが、裏決闘界の融合帝である【紫影】が関わっていると知ってしまった以上…先に向かった遊良の事も気がかりであり、一刻も早くその場に向かわねばならないのだ。

そして…

暗く滑る洞窟の岩肌を壁伝いに進みつつ、砺波の目線の先にどこか明るい光が映った…

―その時だった。

「やめろ!やめてくれぇぇぇぇぇぇぇ!」

―突如。

ダメージを負った砺波の耳にも確かに飛び込んできた、少年の『悲鳴』のような叫び声。

それが尋常じゃない事態であると言うことを、砺波は即座に理解してしまい…

「…あの声は…天城君に何か!?」

砺波は激闘を終えたばかりの胸の内に浮かび上がった、ザワザワとした嫌な感覚を感じつつ。

…痛んだ体に鞭打って、洞窟の先へと駆け出したのだった。

―…

ｅｐ８０「捻じれた狂気」

「…随分と遅いさねぇ、小龍（シャオロン）と浜臣の奴。」

各校のトップ達のために用意された、岸に停泊していた巨大なクルーザーの中にある特別観覧室。

その、全参加者たちの映像が流れている２００のモニターの前で…サウス校理事長である獅子原　トウコは、どこか呆れているような声でもう何度目かになるその台詞を再び放っていた。

…それはいつまで経っても戻ってこない、イースト校の理事長とデュエリア校の学長へと向けた苦言。

トイレに行くと言って出て行った劉玄斎の戻りが遅いこともそうだが、【決島】が始まる前は理事長としての責務がどうとか偉そうな事を言っていたにも関わらず、先程血相を変えて飛び出していった砺波に対してもトウコは顔をしかめ呆れを…いや、呆れより、苛立ちを感じている顔を見せていて。

「浜臣の奴が一人で突っ走るのは今に始まったことじゃないが…アタシに偉そうな事言った癖に、自分は随分好き勝手やってくれるじゃないさ。」

「と、砺波理事長、何やら血相を変えて飛び出していかれましたが…何かあったのでしょうか。」

「さぁね。けど戻ってきたらただじゃ置かないよあの悪ガキ。それに小龍（シャオロン）も、トイレにしては長すぎやしないかねぇ。腹下すタマかいあのデカブツが。」

「…仕事の電話でも来たのでしょう。劉義兄さんも、その…お忙しい身でしょうし…」

「ハッ、あの馬鹿も偉くなったモンさねぇ。」

「…相変わらず、機嫌が悪いと聞く耳を持たない…」

「何か言ったかい、木蓮。」

「い、いえ、何も…」

ウエスト校理事長、李　木蓮のフォローを全く耳に入れる気もなく。

時間が経つ毎に、その苛立ちを益々強くしていくトウコの言葉には棘のような鋭さが生まれ始め…

それに応じて彼女の周囲の空気が揺らめき、まるで怒りの炎のような幻覚がウエスト校理事長である李　木蓮の目に見え始めたのは、きっと錯覚ではないことだろう。

決闘界きっての女傑と恐れられる獅子原　トウコの、その怒りが織り成す『実害』はウエスト校理事長である李　木蓮も過去に何度か目にしてきた。

だからこそ、自分ではどうすることも出来ない獅子の怒りには、木蓮とてただただ冷や汗を垂らすばかりであり…

…もしこのまま砺波と劉玄斎が戻ってこなければ、トウコの八つ当たりにも似た『実害』が降りかかるのは自分自身。

木蓮とてそれだけは回避したいところではあるのだろうが、先ほどから連絡も取れず帰って来る気配もない砺波と劉玄斎に祈りを捧げたところで、それが無駄だと言う事を彼もどこか悟っている様子。

…すると、そんな冷や汗をかいている木蓮を見かねたのか。

特別観覧席で、一人置物のように座っていた【決闘世界】最高幹部…『妖怪』と呼ばれる翁、綿貫　景虎が徐にその口を開き始めた。

「フォッフォッフォ。トウコちゃんや、そんなにカリカリしとると皺が増えるぞ？」

「…ジジイ、喧嘩売ってんのかい？皺だらけのジジイに言われたくないさね。」

「まぁまぁ、落ち着けと言っとるんじゃ、そんなに気にせんでもよかろうて。…ま、気持ちはわからんでもないがのぅ。もしかしたら、どっ

かでドンパチおっ始めとるのかもしれんし、あの悪ガキ共。」
「適当なこと言うんじゃないさよ。そりゃあ、あの二人は昔からソリが合わない奴等だったけれども、幾らなんでも【決島】の最中に私怨でデュエルするような馬鹿どもじゃ…馬鹿共じゃ…」
「でもトウコちゃん、否定できんかろう？」
「…チッ、浜臣の奴はキレやすいからねぇ。何か焦ってるようだったし、小龍（シャオロン）がまた余計な事でもしたんだったら…」
「フォフォッ、小龍（シャオロン）は昔から浜臣によくちょっかい出しとったからの。」
「……はぁ…何で歳食ってからもあの悪ガキ共の心配しなきゃいけないさね。心配かけられるのは孫達だけで充分だってのに。」
「うむ、トウコちゃんや、ジジイその気持ち、よーく分かるぞい。」

決闘界の至宝とも呼ばれる【白鯨】と『逆鱗』に対して、悪ガキ扱いを出来るのも彼等を昔から良く知る『烈火』と『妖怪』だからこそなのだろう。
砺波と劉玄斎の事を、昔から良く知るトウコと綿貫。あの二人が【白鯨】と『逆鱗』と呼ばれる前からよく衝突していた事を知っているが故に、いい大人どころか壮年になった砺波と劉玄斎に対しても心配事は消えないのか。
…しかし、流石に長い付き合いの所為か。
決闘界の女傑と言えども、『妖怪』と呼ばれる綿貫　景虎にかかっては、先ほどのまでの怒りから一転。その言葉を、どこか呆れたモノへと変えるしかない様子でもあり…
綿貫　景虎がその長い髭を皺だらけの細い指で弄りながら幾つか会話を重ねると、先程までの獣の苛立ちが嘘のようにトウコはその怒りを呆れへと戻していく。
「ハッ、ジジイは昔からとことん悪ガキ共に甘いさね。」
「フォッフォッフォ。馬鹿なガキほど可愛いもんじゃて。孫が沢山おるトウコちゃんならわかるじゃろ？」

「…まぁねぇ。」
「じゃから心配せんでも、浜臣も小龍(シャオロン)もいつまでも悪ガキじゃないんじゃ。帰ってこんのも、きっと何か理由があるんじゃよ。」

すると、トウコの獣の怒りが、呆れへと完全に変わったところで。
綿貫はそのまま、どこか含みのある言い方で…

「…そう、きっと…の。」

皺だらけの瞼の奥で遠い眼をしつつ。
古くから歴戦を見守ってきた『妖怪』は、静かに静かに…
―そう、呟いたのだった。

―…

激戦が繰り広げられている【決島】の、その中心に聳え立つ休火山。
その中腹にぽっかりと口を開けた、山の胎内へと誘う洞窟の中を…
遊良は、全速力で駆け抜けていた。
…息を乱し、心臓を跳ね上げ、逸る鼓動に焦りを感じて。
しかし、それもそのはず。
…何者かによって、ルキが攫われたのだ。
敵がルキの持つ『赤き竜神』を狙っている事は明白で、もしも敵がルキの体内に宿っている『赤き竜神』を解き放ちでもすれば、それはそのままルキの『命』にも関わってくる。

…冗談ではない。いや、冗談では済まない。

幼少の過去、師である【黒翼】の元で一度だけ起こった、幼いルキの身に起きた『神』の暴走。
そのあまりに凄惨な光景は、もう思い出したくも無い程に遊良の心に深く刻まれているのだ。だからこそ、遊良とてもう二度とルキをそんな目に遭わせたくは絶対になく。
また、遊良の心にはもう一つ気になっていることがあり…
それはついさっき、決闘学園デュエリア校学長である『逆鱗』、劉玄斎の隣を走り抜けたその時に聞こえた『言葉』。
その、自分にだけ聞こえるかのようにつぶやかれた劉玄斎の重々しい声…それが何故か、今も遊良の耳に強く残っていて…

―『すまねぇなぁ…』
―『…え？』

「『逆鱗』の劉玄斎…なんであの時、俺にあんな言葉を…」
ルキを連れ去ったと自白した、『逆鱗』は間違いなく『敵』のはず。
それが一体、どうしてすれ違いざまに自分にだけ聞こえるような小声でそう言ってきたのか。
…ルキを連れ去った『敵』が、謝ってくるその意味が遊良にはわからない。
…しかし、何故か、不思議と。
劉玄斎の謝罪を聞いた遊良の心には、『逆鱗』の劉玄斎がどうしても『敵』だとは思えないのだという、自分でも理解が出来ない不思議な感情が浮かび上がってきており…
それは説明したくても説明の出来ない、言葉には言い表せない不思議な感情。
ルキを連れ去った憎むべき『敵』だというのにも関わらず、遊良にはどうしても劉玄斎が『敵』だとは思えない…そんな相反した感情が、心の中に渦巻いていて。

「…いや、今はそれ所じゃない。…早くルキを見つけないと…」

とは言え…

今はそんな事に、頭を悩ませている暇などない。

早く、ルキを助けなければ。今遊良が考えなければならない事はただそれだけであり、敵の思惑が分からない以上、ルキの身の安全がとにかく遊良には第一。

そう、ルキにとって初めての『祭典』である【決島】を、『敵』の為に台無しになどさせてはならない。例えルキが既に『失格』扱いになってしまっているのだとしても、これが非常事態であるが故に無事に救い出せばまだルキにだって『祭典』を続ける権利はあるだろう…と。

だからこそ、一刻も早くルキを助けるために。遊良は洞窟内の滑る岩肌を、とにかく全速力で駆け抜けていて…

―そして、しばらく走った後。

遊良の視界に、急に明るさが飛び込んできたかと思うと…

足を止めたそこは、山の中心…洞窟内にぽっかりと開いた、あまりに広い『大空洞』であった。

「なんだ…この場所…洞窟の中にこんな場所が…」

その『大空洞』のあまりの広さに、遊良も思わず言葉を詰まらせてしまう。

しかし、圧倒されたかのような遊良の言葉も最もであり…

…デュエルスタジアムほどもある広々とした空間と、到底昇り切れそうもないほどに高い天井。

洞窟の中だと言うのに、頬に当たる風は外界のモノ。更には岩肌に囲まれたこの大空洞の、到底登れそうにない程に高い天井の中心には、天に向かう巨大な『穴』が開いていて。
そしてその穴から降り注ぐ空の光は、この大空洞を明るく照らしており…
山の胎内であるはずのこの空間が、外界となんら変わりない明るさに包まれているではないか。
…自然に出来た空洞のような、それでいて人の手が加えられているような…そんな外界と隔絶されているが故に、どこか神秘的な雰囲気を醸し出している山の胎内の大空洞。
その、急に飛び込んできた明るさに、暗順応していた遊良の眼が一瞬だけ眩んだものの…
すぐに明るさに慣れたのか。『何か』大切なモノが目に入ったような気がして、遊良は大空洞の入り口から更にその奥へと眼を凝らし始め…

—そこには…

「ルキ!」

視界が明るさに慣れた瞬間に、思わず声を張り上げた遊良。
そう、今遊良が叫んだ通り。
下手なデュエルスタジアムよりも広いであろう、この大空洞の…その中心には、見間違えるはずもなくルキの姿があったのだ。
しかし、今のルキの状態が、紛れもなく異常事態であるコトを遊良の頭はすぐに理解してしまう。
…何故なら、大空洞の中心に設置された『祭壇』の上のルキの体が…
—祭られているかのように、宙に浮かんでいたのだから。

「ふふ、来ましたか…天城　遊良。」
「ッ!?」

すると、突然。
祭壇の向こう側…遊良が入ってきた『入り口』とは反対方向の『穴』から、突然聞いたことのない声が遊良へと届けられた。
…その、大空洞の中に反響し始めた、1人の男の声。
それは、あまりの胡散臭さを孕んだ声質であり…そのままゆっくりと祭壇へと向かって歩いてきたのは、スーツと言う名の胡散臭さを身に纏った、細身で長身の一人の男。
その姿は、『捻じれた』と言う表現があまりに似合う…
身振り手振り歩き方からして、『嘘』と『胡散臭さ』が滲み出ているかのような、得体の知れない素振りと気配を隠す気も無く。
どこまでも嘘の塊のような立ち振る舞いで、飄々とこちらへと歩いてくる。

…この男が、ルキを連れ去った犯人。

この見るからに胡散臭い捻じれた男を見れば、誰に説明されるでもなくこの男が『悪者』なのだという事くらい、遊良の目にだって明らかな事。
ソレほどまでに遊良の眼は、この男の立ち振る舞いと言動には『悪意』しかない事を感じ取ってしまい…
そんな、身構えている遊良へと向かって。
『捻じれた男』は、胸の内がざわつくような苛立つ声質で…ゆっくりと、その捻じれた口を開き始めた。
「ですが、ここから先はちょっと進まないで欲しいですねぇ。まだ準備がありますので、ええ。」
「だ、誰だお前は！ルキに何する気だ!?」

「私は【紫影】…と言っても、君のような子どもでは私の名を聞いてもピンと来ないでしょうが。」
「…【紫影】…？」
「ふふ…天城　遊良、Ｅｘ適正の無いデュエリストですか…面白い素材ですねぇ。本来ならば『神』の奪取などよりも、あの少女と君の体を解剖でもして調べたいところですが…生憎、これも私の仕事なので今回は仕方ありませんねぇ。とても残念です、ええ。」
「…な、か、解…剖…？」
「ええ、私の趣味なんですよ。他人と違うモノを持っている者の、中身を開いて見てみたい…ふふ、君の場合だと、他人が持っているモノを待っていないという事になりますがねぇ、ええ。」

放つ言葉の一つ一つが、明確な悪意を孕んでいる【紫影】と名乗る男の声。
…気味が悪い。
ここで初めて邂逅した、初対面の人間にそんな印象をハッキリと覚えたことに遊良は少々驚きを感じつつも…
しかし、そう思わずにはいられないほどに、あまりにこの【紫影】と名乗った捻れた男はその存在感が不穏なのだ。
…耳の中を直接くすぐられているかの様な、気味の悪い声の振動。
…こちらの心の内を見透かしているかのような、気味の悪い眼の動き。
形容ではない、本気で『解剖』したがってそうな【紫影】のその発言に、遊良も思わず身震いを感じてしまい…
それ故、今すぐにでも【紫影】と名乗った捻じれた男に背を向けて、この大空洞から逃げ出したい衝動に遊良が駆られてしまったとしても…それはある意味、当たり前と言えるだろう。
経験したことのない本気の悪意、悪事を悪事と思ってないかのような【紫影】の言葉を耳にしている遊良の体は、この男とはこれ以上会話を続けてはならないと警笛を鳴らし続けていて…
…しかし、連れ去られたルキを目の前にして、遊良が逃げ出せるは

ずもなく。
痛いくらいに逸る心臓を押さえつつ。遊良は、【紫影】へと向かって声を張り上げる。

「そ、それより、ルキをどうするつもりなんだ！」
「何と言われましても…見て分かりませんかねぇ？『神』を解放しようとしているだけです、えぇ。」
「…解放…そ、そんなコトしたらルキが！」
「死にますよ？当たり前じゃないですか。」
「なっ!?あ、当たり前って…じ、じゃあ知ってて何でそんな事…」
「ですからこれも仕事なんですよねぇ。仕事なんだから仕方ないじゃないですか。」
「ふ、ふざけるな！人が死ぬって言ってるんだぞ!?ルキを何だと思ってるんだ！」
「別に、何とも？」
「な…」

…話にならない…いや、話をして貰えてすらいない。
こちらの言葉など聞く気は無く、あくまでも自分の『仕事』と称した悪事を堂々と行おうとしている【紫影】からは、全く悪びれた様子も申し訳なさも感じられず。
…吐き気がするほどの『悪意』の塊と、怖いくらいの他人への無関心。
果たして、命を何だと思っているのか。その、命を命とも思っていない【紫影】の言動と立ち振る舞いは、ただただ淡々と己の仕事を遂行しようとしているだけであり…

…話し合いや説得で、どうにか出来る問題ではない。

この短いやり取りでも、遊良はソレを痛いほど理解したのだろう。
こんな相手に正論を並べたところで、そもそも会話が成立しないの

だから、捻れた男がこちらの言葉に耳を傾けてくれるはずもなく…
ならば、話の通じない相手を前にした時に…やるべき事は、唯一つ。
「だ、だったら…だったら力ずくでも止めてやる！」
「ふふ…勇ましいですねぇ。ですが…」

そうして…

無理矢理にでもルキを助けるため、遊良が【紫影】へと向かって走ろうとした…

―その時だった。

「ッ!?」

【紫影】が、その異常に細長い指を鳴らした瞬間。
突然、遊良の体に電流のような衝撃が走り…そのあまりに急に襲ってきた痛みのせいで、遊良は足を凭れさせて転んでしまったではないか。

…痺れるような鋭い痛み、全身に走る苦痛と電撃。

それはまるで、【決島】に採用されているリアル・ダメージルールによって発生する衝撃と似た…
…いや、『似た』ではない。
【決島】でのこれまでの戦いで、いやでもソレを喰らってきたからこそ分かる。
遊良の体に生じた衝撃…それは紛れも無く、遊良が腕に着けている、リアル・ダメージルール用の装置から発生したモノであった。
「…あぐっ！…な、何で…」

「ふふ…『逆鱗』にリアル・ダメージルールを行うよう進言したのは私、そして子ども達が着けているその装置も私が用意したモノ…ゆえに、コントロールは私が握っているんですよねぇ。ですから、今みたいに意図的にダメージを発生させる事も出来ますし…何なら、装着者ごと木っ端微塵に爆破する事も…ふふ、出来るのですよ、それはもう綺麗な花火のようにもねぇ、ええ。」

「な…」

「…あぁ、いい顔ですねぇ天城　遊良。その、私の言葉の真偽を疑い、それでも『その可能性』を少しでも考えてしまった顔…それにしても良い響きですよねぇ『木っ端微塵』とは…そう思いませんか？ふふ…ふふふ…」

…狂っている。

単純に、狂っている。

自分の言葉に陶酔しているような【紫影】の顔は、明らかに精神に異常をきたした者のソレ。

それは、隠す気の無い本気の悪意。見たこともない捻れた男の、聞いたこともない【紫影】と言う名の、そんな見知らぬはずの初対面の男にすらソレを感じられる程に…今遊良の目の前いる、この捻れた男は明らかに異常者。

…正気の沙汰ではない。『何か』によって発生した悪意ではなく、ただの生身の人間が正気を保ったまま、こんな駄々漏れの悪意を放っているなど。

口から出まかせを言っているだけのような【紫影】の言葉など、到底信じられるはずがないというのに…それでもこの男ならば『やりかねない』とさえ思ってしまった遊良の思考は、きっと間違ってはいないはず。

「…さて。ではそろそろ始めましょうかねぇ。早く終わらせたいですし、ええ。」

そう言って…
ダメージによって転んでしまっている遊良を、見下しながら一瞥したかと思うと。
【紫影】はそのまま遊良へと背を向けて、その異常に長細い足で歩を進め。ルキが浮いている祭壇へと近付いて、靴音を鳴らしながら歩いて行く。
一歩、二歩…
【紫影】が歩みを進める毎に、大空洞の中にコツコツと気味の悪い靴音が響き…それに連動して、冷たく重いモノが渦巻きを強くしていく遊良の胸の内。
…ルキが危ない。
遊良とて、直感でそれが分かっているというのに。突然襲いかかってきたリアル・ダメージの痺れが足から抜けず、立ち上がることがどうしても出来ずにいるのだ。
…こんな時に、鷹矢が居てくれたら。
きっとあの頑丈馬鹿ならば、ダメージを無視してでも【紫影】に飛びかかっているだろう。しかし鷹矢とは体の作りが違う遊良では、どうしても立ち上がることが出来ずにいて。

そうして…

【紫影】が、その捻れた腕を持ち上げ。そのまま、ルキに手を翳(かざ)し始めたかと思うと…
…宙に浮いているルキの体が、鈍く赤い輝きを放ち始めた。
「…な、何をする気だ…」
「ふふ、すぐ終わりますよ。…いえ、始まると言った方がいいですかねぇ、ええ。」

そして…

『何』をしたのか。【紫影】が、異常に細長い指を大きく鳴らした…

ーその瞬間

―!

弾けるような音を立てて、更に大きくなる赤い光。
その赤い光は轟音を立て、空へと向かって伸びていく。
それは、キーンと耳の痛くなるような鳴音と…
そしてその音の中に、『何か』が割れていくような乾いた音が混ざり合った奇怪な音であり…
その赤い光を見ている遊良には、その音の正体がすぐに分か…否、『ソレ』を幼少の過去に一度見た事のある遊良には、すぐにその『割れていく音』の正体が分かってしまった。

ーそう、その何かが『割れていく音』

…それは紛れもない。

赤い光の中心に居るルキの体が、文字通り『崩壊』し始めていく音だったのだから。

「ルキ!」
「ふふ、これで準備は整いました…後は、『神』が出てくるきっかけを作るだけ…さて、では私はこの辺で。」
「なっ!?ま、待て!逃げるのか!?」
「えぇ、その通りでございます。長居は無用ですからねぇ…と言うより、貴方が来るのを待っていたのですから、これでやっとこんな辛気臭い場所から帰れます。」

「…くそっ、絶対に逃がさ…」
「はいはい、そんなに勇まなくとも、貴方の相手は既に用意してありますからご安心くださいませ。…さて、では天城　遊良の相手は任せましたよ?その為に貴方を連れてきたのですから、ええ。」

全くもって悪びれもなく、飄々と遊良の怒りをすり抜けて立ち去ろうとする【紫影】。
そんな【紫影】を止めようと、痺れる足を無理矢理に立ち上がらせた遊良に対し…
【紫影】が促すようにして背後へと声をかけたかと思うと、その後ろの『穴』から誰かが歩いてきたではないか。

「なっ!?お、お前は!?」

その、暗闇から歩いてきた者を見て…思わず、声を上ずらせて叫んだ遊良。
しかし、それもそのはず。
暗闇の向こうから歩いてきたのは、『黒いフード』で顔を隠し…全身を闇に溶け込ませ、気配を消していた人物だったのだから。
その、黒いフードの人物を見て。これまで以上に大きく跳ねた心臓が、遊良の体を内側から叩く。

…忘れたわけがない。いや、忘れられるわけがない。

ー『お前の声を聞いていると虫唾が走る!お前の顔を見てると!イライラするんだよ!』
ー『どうしてお前が生きていて、何故こんなにも無様なデュエルを続けられる!こんなにも弱くて、こんなにも無様な癖に…不愉快だ…天城　遊良!お前の存在が!どうしようもなく不愉快だ!』
ー『儀式召喚!現れろ、レベル1!来い、【サクリファイス】!』
ー『消え去れぇ!天城　遊良ぁぁぁ

そう、夏が始まる前に、突如自分に襲いかかってきたフードの男。
この世界において、忘れ去られた過去の召喚法である『儀式召喚』を扱い…なぜか自分に、この世のモノとは思えない憤怒をぶつけてきた、あの謎の男の姿が遊良の脳裏をよぎったのだ。
…何故か【堕天使】のカードが言うことを聞かず、そして【堕天使】のカードが自分の元から消え去ったあの事件。
その時の恐怖と痛み、そして【堕天使】を無くした時にも感じた喪失感が、今再び遊良の心に浮かび上がってきて…

しかし…

その身覚えのあるような黒いフードの装束に、一瞬だけ遊良の心臓が大きく跳ね上がったものの…

(違う…あの時のフードの男じゃない…)

そう、一度真正面から対峙したが故に、遊良には目の前のフードの人物と自分を襲った『フードの男』が、全くの別人であると気がついた。
顔が見えぬ怪しい『フード』を深く被り、全身が漆黒のコートに包まれてはいるものの…
あの時の『男』と目の前の人物では、纏う雰囲気が似ても似つかない。
そう、襲われたあの時に感じた、恐ろしいほどの怒気と圧倒的な怨嗟、そしてそこに居るのに『居ない』と錯覚するほどの気配の無さが、目の前のフードの人物からは感じないのだ。
…それに、最も違うのは『身長』。
あの時のフードの男は自分と同じくらいの背丈だった。
しかし目の前の人物は、長身の【紫影】の腰くらいまでしかない背丈であると遊良は気が付いて。

…それはまるで、『子供』の様な背丈。

「ふふ、【デュエルフェスタ】と【決闘祭】の優勝者同士の戦い…ソレはソレで金が取れそうな組み合わせですねぇ、ええ。」

「…なぁ、ホンマにアイツを倒せば良いだけなんやな？」

「ええ、ええ、その通りでございます。貴女のお仕事はあの少年と戦って勝つことだけ。そうすれば…貴女の『願い』は、きっと『神』の力によって叶うことでしょう、ええ。」

そうして…

子供のような背丈の人物が、その特徴的なイントネーションの言葉とともに、フードを外したそこに居たのは…

煌く金髪、小鳥のさえずりのような声、初等部の学生と見間違えそうなくらいに小さい体。

昨年度デュエリアで行なわれた祭典、【デュエルフェスタ】で優勝した、紛れもない確かな強者。

―アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン

「…わかった。やるわ、ウチ。…死んだアイツを生き返らせるためなら…」

一刻も早くルキを助けたい遊良の前に…

昨年度、デュエリアで頂点に立った者が立ち塞がったのだ。

―…

ｅｐ８１「狂乱少女」

【決島】の中央に鎮座する休火山。
その中腹に位置する山の胎内の、デュエルドーム程もあろうかという広さの『大空洞』の中心で…

「…なぁ、ホンマにアイツを倒せば良いだけなんやな？」

…轟音を上げて『崩壊』を始めている、高天ヶ原　ルキを挟んで。遊良の目の前に、小柄で金色の髪をした一人の少女が立ち塞がっていた。
それは初等部の学生と見間違えそうなほどに小さな体に、太陽のように鮮やかに煌く金色の髪。
デュエリア校の制服の上に、漆黒のコートを纏っている女生徒…

―決闘学園デュエリア校、アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン

そう、【紫影】に攫われたルキを助けようと、『大空洞』の中へと突入した遊良の前に。突如としてデュエリア校の学生が行く手を遮ろうとして立ちはだかってきたのだ。
…しかし、【決島】の参加者の一人であるはずの彼女が、一体どうして悪人である【紫影】の傍について遊良の邪魔をしようとしているのか。
…どこか切羽詰ったような、しかし後に引けぬ少女の面持ち。
そのままアイナはゆっくりと、しかし決意を秘めたかのような声で。その小さい口を開き、隣に立つ【紫影】へと向かって再度声を漏らした。

「…そうするだけで…ホンマにウチの願いを…」
「ええ、ええ、その通りでございます。貴女のお仕事はあの少年と戦って勝つことだけ。貴女の実力と、貴方にお貸しした『そのカード』があれば簡単なことでしょう?…それだけで、貴女の『願い』はきっと『神』の力によって叶うのですから、ええ。」
「…わかった。やるわ、ウチ。…死んだアイツを生き返らせるためなら…」
「ふふ…ではアイさん、よろしくお願いしますよ、ええ。」

アイナに声をかける、【紫影】と名乗った捻じれた男の不気味な雰囲気も然ることながら…今のアイナの様子も、どこか切羽詰った只ならぬモノ。
その雰囲気は、どこか淀みと迷いの中に板挟みにされているかの様な、今にも壊れてしまいそうな硝子細工の如き代物であり…
それでも彼女が【紫影】の側についていると言うことは、この少女もまた先ほど立ち塞がった『逆鱗』劉玄斎と同様に、【紫影】に逆らえぬ何かしらの事情があると言うことなのだろうか。
また…

「さて、ではルールを説明いたしましょう。…天城　遊良、貴方が負ければ、無事に『神』が解放されます。あの少女を助けたければ貴方は勝つしかない…そしてアイナさんも『願い』を叶えるためには勝つしかない。ふふ、これ程簡単なルールはありませんねぇ、ええ。」

ルキの命に関わることだと言うのに、ただただ淡々と飄々と。
まるで『ゲーム』の説明をするかの如く、何の悪びれもなく【紫影】と名乗る捻じれた男は、遊良へと向かってそう告げてきて。
…人の命を命とも思っていないかのようなその言葉からは、どこまでも不穏なモノしか漂ってはこず。【紫影】の全く読めぬ言動と思想は、悉く遊良の琴線を意地悪く叩くだけで…

「ふ、ふざけるな！何がルールだ、ルキの命をなんだと…」
「ですから何とも思っていないと先ほども言ったはずですが？それに貴方がいくら喚いたところで、もう『神』の解放は始まっているんですよねぇ。貴方が戦いを放棄すれば、アイナさんの不戦勝と言うことになりますが…」

しかし、ソレを聞いた遊良が【紫影】へと向かって咄嗟に口を荒げるものの、遊良の荒い声を気にも留めず。
どこまでもどこまでもふざけた態度と、全く持って感情の篭っていない上辺だけの言葉で。言う事を言いたい放題で言い捨てて言った『捻じれた男』は、もうこの大空洞になど用は無いのだと言わんばかりに…

「あぁそうだ、あまりにモタモタしていると、私も痺れを切らして参加者全員『爆破』してしまうかもしれませんよ、ええ。」
「なっ!?」
「ふふ、その方が楽ですし、そうしたいのも山々なのですけれど…ま、折角の祭典ですし、貴方も精々頑張ってくださいねぇ。では、私はこれで。」
「ま、待て【紫影】！逃げるな！」
「いいえ、逃げます。…まだ私と貴方が戦う時ではありませんからねぇ。…それでは。」

…遊良の静止を意に介さず。飄々とこの場を立ち去っていってしまった。

「くそっ、逃がすか！」

そんな、大空洞から逃げていった【紫影】に対して。
『大空洞』の端と端で距離があった所為か、みすみす【紫影】を逃がし

てしまった事に対して、遊良の心には突発的な焦りが噴出していて。
…あの邪悪な男だけは、絶対に逃がしてはいけない。
遊良の本能がソレを告げる。言葉の真偽はともかく、少なくともあの男をココで逃がしてしまっては、取り返しのつかないことになりそうな予感が遊良を襲っているのだろう。
だからこそ、洞窟の闇に消えていった【紫影】を追おうと、遊良が『大空洞』から駆け出そうとしたのだが…

「待てや！」

遊良の足が、大空洞を駆け始めたその刹那。
甲高い声が大空洞の中に反響し、駆け出した遊良の事を遮るかの様に…突如として遊良の目の前に、金色の人影が立ち塞がって。
…そう、遊良と【紫影】の間に割って入るようにして、金髪で小柄な少女、アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンが仁王立ちで立ち塞がったのだ。

「くっ！そこをどけ！」
「どくわけないやろこのドアホが！ウチの仕事は、アンタとデュエルしてブッ倒す事や！いいからディスク構えんかい！」
「今はお前に構ってる暇なんてないんだ！いいから早くそこを…」
「あぁ!?年下のガキがウチに偉そうな口叩くなや！お前こそ、ウチから逃げられる思うな！」
「うっ…」

しかし、あまりに小さい体躯の少女だと言うのに…アイナのあまりの迫力に、思わずその場で後ずさってしまった遊良。
…とは言え、遊良が少女の迫力に気圧されてしまったのも無理は無いだろう。
何せアイナの表情は、鬼も逃げ出す鬼気迫る表情。何かを『決意』した、後に引かぬ事を決めた兵士の面持ちにも見えるモノでもあり…

…一体、この小さな体のどこにこれ程の力が備わっているというのか。
猛る彼女の甲高い声は、小鳥のさえずりのように甲高くも綺麗な声質ではあるのだが…
放たれる言葉は刺々しくもあり、重々しくも迫力ある代物。
その体格は、初等部の学生とも見間違えそうな程に小さな体だと言うのに…決して遊良を逃がさぬよう、通さぬように広げられた両の手は、見た目以上に広い範囲を塞いでいて。

―まるで『壁』。それも、とてつもなく分厚く高い壁。

それはこの少女が行く手を塞いでいる限り、絶対に先へは進めないのだということを…遊良の本能が、嫌でも察知しているようであって。

「いいから早よデュエルディスク構えろやドアホ！ウチはさっさとお前を倒さんといけんのや！」
「だからお前とデュエルしてる暇なんて無いって言っただろ！ルキが大変なんだ！それにお前も今聞いただろ？俺達が付けてる装置には爆弾が…」
「そんなコト知っとるわ！けど爆弾なんてどーでもええ！ウチの目的はあの女から『神』を解放することだけや…絶対に、ウチの願いの邪魔はさせへん。」
「何だよ願いって！ルキを犠牲になんてしていいわけないだろ！いいか、『神』が解放されたらルキの命が…」
「だからそんなモンどうでもええて言っとんねん！」
「なっ!?」

初等部の学生とも見間違えそうな程に小さな体格の少女だと言うのに、力付くでは絶対に押し通ることが出来ないとさえ思ってしまう鬼気迫る表情。

【紫影】がリアルダメージ装置に仕掛けたという爆弾の事すら意に介さず、また自分がやろうとしている事でルキが犠牲になるのだと知っていてもなお…
自らの望みを叶えんとしている彼女の怒号は、まさに後に引けぬ切羽詰った狂人のソレ。
…一体、ルキを犠牲にしてまで叶えたい彼女の『願い』とは何なのか。
普通であればありえない。他人の命を犠牲にしてまで、叶えたい願いだなんて。
それでも彼女から放たれる気迫は、紛れも無く鬼気迫るほどに畏怖を感じる代物となりて、どこまでも遊良へと襲い掛かり…
「…お前、ルキの命をどうでもいいって…人の命を何だと思ってるんだよ！」
「ふん、あんな女の命なんて知らん。けどお互い利害は一致しとるんや。…ウチはアンタを倒して『神』を解放する、アンタはウチを倒して『神』の解放を止めなアカン。…なら、やることは一つしかない。」
「くそっ…何でこんな時に…」
そんなアイナの心情を想像も出来なければ、理解したくもない遊良からすれば…
目の前の少女の狂乱の前に、ただただ言葉を詰まらせることしか出来ず…
「…ッ…ぁ…ぅ…」
「ッ!?ル、ルキ！」

また、大空洞の中央の祭壇の上で浮かべられた、ルキの声にならぬ呻きが遊良の耳にも聞こえたのか。
ルキを包む『赤い光』が、その発光の激しさを増していくに伴って…
ルキの体にヒビが入り、表面が崩れ始めていくのは文字通りの『崩壊』。
…こうしている間にも、ルキの中に居る『赤き竜神』はルキの体を破って出てこようとしているのだろう。

―このままでは、ルキは確実に死んでしまう。

…こんな時に鷹矢が居てくれたら、少なくとも片方は【紫影】を追うことが出来たというのに。
しかし現状では、戦うことでしか道が切り開けず。
それ故、いくら【紫影】の言った言葉を怪訝に思おうとも、今の遊良には目の前の少女と『戦う』という選択肢しか残されてはおらず。

「行くで。」
「くっ…」

―それは奇しくも【決闘祭】と【デュエルフェスタ】、決闘市とデュエリアにおける『祭典』の優勝者同士の戦い。
…こんな情況でなければ、【決島】の中でもダントツで注目されていたであろう対戦カード。
しかし、こんな情況だからこそ。
お互いに引けぬ理由を持った二人は、各々の感情をぶつけるためだけに。目の前の相手へと向かって、デュエルディスクを構えるだけ。
…戦っている場合ではない。けれども、戦うしかない。
そんな、ルキの『崩壊』を止めなければならない遊良と…
ルキの中から『神』を解放させて、己の『願い』を叶えたいと猛るアイナの…

その、どちらも引けぬ二人の戦いが…

―デュエル!!

今、始まる。

先攻はイースト校２年、天城　遊良。

「俺のターン！魔法カード、【成金ゴブリン】を発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！続けて【闇の誘惑】発動！２枚ドローして闇属性の【闇の侯爵ベリアル】を除外！【トレード・イン】も発動だ！レベル８の【クラッキング・ドラゴン】を捨てて２枚ドロー！…よし！【手札抹殺】を発動！４枚捨てて４枚ドロー！」

「…５枚捨て５枚ドロー。」

始めから、最初から。

デュエルは始まったばかりだと言うのに、全力でデッキを回転させ、初っ端らからギアを上げにかかる遊良。

…時間が無い。

そう、とにかく遊良には時間が無い。

…ルキの『崩壊』を止めなければ、間違いなくルキは死んでしまうのだ。

それだけは何が何でも止めなければならないことであり、その為に今の自分が出来ることは【紫影】の言った通り、アイナを倒す事だけであり…

「【神獣王バルバロス】を妥協召喚！そして魔法カード、【アドバンスドロー】を発動！バルバロスを墓地に送って２枚ドロー！…俺はカードを２枚伏せ、ターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：無し
伏せ：２枚

また、遊良には【紫影】が去り際に残した、参加者達を『爆発』するかもしれないというその言葉が、今も頭の中にこびりついている。
…そう、あの【紫影】の狂った悪意と、身震いするほど恐ろしい恍惚の表情で【紫影】が発した、『木っ端微塵』という単語がどうしても頭から離れないのだ。
何故【紫影】と名乗った捻じれた男が、何故あんなにもペラペラと自分の悪行を説明してきたのかなど遊良には理解出来ないものの…
それでも、怖いくらいに狂ったあの男ならば、本当にソレをやりかねないと遊良は感じたために。
そもそもあんな狂人の思考など理解したくもないのだが、それでも知ってしまった以上は早く何とかしなければ、他の学生達の命も危ないことに変わりはない。
それ故、微塵も気を緩める事無く、次のターンに一気に攻めるべく…
焦りつつも、デッキをフル回転させて、遊良はそのターンを終えた。

「ウチのターン、ドロー！」

しかし…そんな気概でいる遊良を意に介さず。
ルキの命を、『そんなモン』と言い放ったアイナが…
―勢いよくカードをドローした、その瞬間…
（…な、なんだ、この感じ…凄く、嫌な予感が…）

アイナの纏うオーラが鬼気迫るモノから、鬼も逃げ出すような畏怖を感じるモノへと変わり始めたではないか。
その、突如変わり始めたアイナのオーラを感じ…遊良の心臓の鼓動も、急速にピッチを上げ始め…
…それは危険を知らせるセンサーが、最大限の警笛を鳴らしているのだろう。
―この『嫌な感じ』は、以前にも感じた記憶がある。アレは確か、昨年の【決闘祭】の頃…
しかしデュエルの最中では、遊良の記憶はそれ以上の事を咄嗟には思い出してはくれず。
またソレを思い出すのを、アイナとて悠長には待ってくれない。そのままアイナは、手札から一枚のカードを取ると…

―ソレを勢いよく、デュエルディスクに叩きつけた。

「魔法カード、【魔玩具補綴】発動！デッキから【融合】と【エッジインプ・チェーン】を手札に加える！そんでそのまま【融合】発動！手札の【ファーニマル・ペンギン】と、【エッジインプ・チェーン】を融合！」

自らのターンを向かえて即座に、高らかに宣言を行うアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン。
畏怖すら感じる少女の喚きによって、神秘の渦が少女の背で蠢き。天使と悪魔という、相反する存在がそこに吸い込まれて行く。
そして…

「氷上を走る天使の羽よ！悪魔の鎖をその身に縫い付け…目に付く全てを引き千切れぇ！融合召喚！来い、レベル５！【デストーイ・チェーン・シープ】！」

―！

【デストーイ・チェーン・シープ】レベル５
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２０００

勢いよく場に現れたのは、悪魔の鎖に縛られた、羊を模した不浄の玩具。
彼女の持つ『融合』のＥｘ適正によって呼び出され、擦れ合う鎖の金属音を鳴き声へと変え…
彼女のデュエルにおいて、特攻隊長のような立場であるその玩具。その玩具とは思えぬ奇怪な姿で、怪しくソコに佇みつつ…
遊良へと向かって、怪しく笑う。

「まだや！墓地に送った【エッジインプ・チェーン】の効果で、ウチはデッキから２枚目の【魔玩具補綴】を手札に加える！さらに融像素材となった【ファーニマル・ペンギン】の効果発動！デッキから２枚ドローした後、手札を１枚捨てる！そんで今捨てたのは【トイポット】！その効果で、ウチはデッキから【ファーニマル・ドッグ】を手札に加え、そのまま【ファーニマル・ドッグ】を通常召喚！」

―！

【ファーニマル・ドッグ】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１０００

「【ファーニマル・ドッグ】の効果発動！デッキから【エッジインプ・シザー】を手札に加える！…行くで！魔法カード、【融合回収】発動！墓地から【融合】と【エッジインプ・チェーン】を手札に戻す！そんでそのまま【融合】発動！場のドッグと、手札の【エッジインプ・シザー】を融合！草原を駆ける天使の羽よ！悪魔の刃をその身に縫い付け…目に付く全てを切り刻めぇ！融合召喚、レベル６！【デストーイ・シザー・タイガー】！」

―！

【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１２００

止まらぬアイナの怒涛の展開、遊良へと襲い掛かる鬼人の憤激。
連続して現れ続ける、アイナの不浄の玩具達。
その愛くるしい玩具が、悪魔の刃と無理やりに交わっていくその様子は…まるで彼女の狂乱が、歪に混ざり合っているかのようではないか。

「シザー・タイガー…ソイツの効果は確か…」
「【デストーイ・シザー・タイガー】のモンスター効果発動！融合素材にしたモンスターの数まで、お前のカードを破壊する！伏せカード２枚を破壊ぃ！」
「させるか！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！シザー・タイガーの効果を無効に！」
「それがどうした！【死者蘇生】発動！さっきお前の【手札抹殺】で墓地に捨てた、【ファーニマル・マウス】を守備表示で特殊召喚！そんでマウスの効果発動！デッキから２体のマウスを守備表示で特殊召喚し…もういっぺん【融合】発動や！場のシザー・タイガーとマウス２体を融合！」
「と、止まらない…」

狂乱に満ちたアイナの轟きは、決して誰にも止められぬ代物となりて、遊良を襲わんと吼え続ける。
それは少しばかりの妨害では、全く止められるはずもなく…いや、少しばかり抵抗したところで、ソレはただの『無駄』に終わってしまうのだ。
遊良の場に残った、効果をなくした【デモンズ・チェーン】が無常

にもソレを証明している。
　下手な守りの一手では、抵抗にすらならないのだということを…遊良も、今まさに見せつけられていて。
「小さく転がる天使の羽よ！悪魔の玩具をその身に縫い付け…鋭い牙で全てを引き裂けぇ！融合召喚！来い、レベル８！【デストーイ・サーベル・タイガー】！」

―！

【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２０００

現れしは、体内から刃を剥き出しにした猛獣の玩具。
その不気味な視線と咆哮は、壊れた玩具を今一度この場に無理やり立たせ…
　再び壊れるまでこの遊び場で暴れさせる残虐性を持った、まさに見た目どおりに狂ったおもちゃ。
「サーベル・タイガーの効果発動！墓地からシザー・タイガーを特殊召喚！そんでサーベル・タイガーとシザー・タイガーの効果で…デストーイモンスターの攻撃力は、１６００ポイントアップする！」

【デストーイ・チェーン・シープ】レベル５
ＡＴＫ／２０００→３６００
【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／２４００→４０００
【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／１９００→３５００

「こ、攻撃力３５００オーバーが３体…」

そして…

みるみる巨大化していくアイナのモンスター達を前にしてしまっては、遊良も思わず声を詰まらせてしまうのは仕方の無いことなのか。

何せ、切り刻まれたぬいぐるみが文字通り腸（はらわた）を…いや、腹綿（はらわた）を零しながら奇怪な声で嘲笑う、その狂気に満ちた不浄の玩具はまさに可愛らしくも恐ろしいアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンの姿そのモノのようでもあり…

今の彼女の場と、今の彼女の放つオーラはとてもじゃないが常人の耐えられる限度を超えている代物。

そう、手札消費の激しいはずの『融合召喚』を、既に３回も行っているにも関わらず。

あろうことか動けば動くだけアイナの手札は増えていき、そしてアイナの場の不浄の玩具達も益々増え続けていくのだ。

…遊良も忘れていたわけではない。

この小さな体躯をした少女と対峙することが、一体どんな『意味』を持っているのかと言うことを。

…【デュエルフェスタ】の優勝者。

決闘市で言う、【決闘祭】と同じモノ。決闘学園デュエリア校というたった『１校』の中に、２０万人超の生徒達が在籍し…その全ての生徒達が参加者という、あまりに大規模で行われるデュエリアにおける学生達の祭典。

そう、彼女はその年度の初めから行われる全校生徒のトーナメントの、その中で最後まで勝ち残った昨年度の【デュエルフェスタ】の優勝者なのだ。

その力が紛れも無い本物であることは言うに及ばず。２０万人超の中から、頂点に立つということの難しさは…昨年度の【決闘祭】の

優勝者である遊良が、最もよく理解していること。

「さっさと終わらせるで！バトル！先ずは【デストーイ・チェーン・シープ】で…」

「させるか！バトルフェイズに入ったこの瞬間！罠カード、【メタバース】を発動！デッキからフィールド魔法、【チキンレース】を発動する！」

「あぁ!?」

しかし…

それでも遊良とて、簡単にやられる訳にはいかず。

…発動されたのは、遊良が好んで使用している、ドロー加速の為のフィールド魔法。

しかしＬＰが少ないデュエリストを、あらゆるダメージから守る効果も内蔵している…この情況においては、一種の防御の手としても仕える代物と言えるだろうか。

…それは先のターンに、【成金ゴブリン】でアイナのＬＰを増やしておいたからこそのＬＰ差。

そう、アイナが【デュエルフェスタ】の優勝者ならば、自分だって【決闘祭】の優勝者。

あらゆるカード効果を封じてくる、【デストーイ・チェーン・シープ】の攻撃宣言が成立してしまうその前に…

メインフェイズでは無く、バトルフェイズと言う簡単には破壊出来ないこのタイミングでこのフィールド魔法を発動し、アイナの放つ棘のようなオーラに対しても、必死になって喰らい付く。

「よし！」

「チッ、このタイミングで…面倒なカードやな。」

すると…寸前の所で攻める気概を邪魔されたのが癪に障ったのだろうか。

その可憐な顔を、どこか苦々しく歪めつつ…確かな苛立ちを感じているのだろう、声のトーンを一つ落としたアイナ。
まぁ、あれだけ猛って展開し、そして今にも爆発しそうなその勢いを寸前で止められたのだ。
その、自分の行動が思い通りにならない苛立ちは、彼女の子どものような見た目にはある意味ではマッチしたモノではあるのだが…

「けど…」

…しかし一瞬の怯みの後に、彼女は一体何を思ったのだろう。

一瞬の安堵を浮かべた遊良へと、アイナは再びその手を天に掲げ始め…

「攻撃出来へんわけやない！バトルフェイズ続行！【デストーイ・チェーン・シープ】で攻撃ぃ！」
「なっ!?」

―！

突如。
アイナの下した宣言の直後に、大空洞の中に響き渡った耳を劈く金属音。
それは【チキンレース】の効果によって作られた『見えない壁』と、【デストーイ・チェーン・シープ】の持つ巨大なチェーンソーがぶつかり合って掻き鳴らされた金属の擦過音であり…
そう、アイナが降した宣言によって、不浄の玩具が遊良へと襲い掛かったのだ。

そして【チキンレース】によって作られた、ダメージから身を守る為の見えない壁と…アイナの狂気の刃が擦れ、耳の痛くなるような金属の擦れ響く音が遊良の体を内側から震わせる。
…しかし、一体アイナは何を考えて攻撃を命じたのか。
もうこのターンの攻撃は全て無駄であるはずにも関わらず、それでも攻撃を命じたアイナの顔はどこまでも攻め気に溢れた鬼の顔のままであり…

「ダ、ダメージは受けないのに何で攻撃を…」

通らない刃、飛び散る火花。
今のアイナの、この意味のわからない行動を…
遊良が、ただただ理解できずにいた…

―その時だった

―!

ギャイン…と、チェーンソーが一層その回転を強めたその刹那。

「ッ!?」

突然…見えない壁によって守られていた遊良へと、何か振動の塊のようなモノと、チェーンソーから弾かれた『火花』が振り落ちてきたのだ。
その突如発生した衝撃波は、ダメージを感じないほどに軽いモノではあったものの…
しかし降りかかってきた少量の『火花』は上空から雨のようにして遊良へと降りかかると、火傷までは行かないものの一瞬の鋭い熱さを

遊良にぶつけてきたではないか。
…それはソリッド・ヴィジョンにあるまじき、あまりにリアルな『火花』の熱さ。
内臓を直接揺らすような、気味の悪い衝撃波もそう。金属が擦れて弾けた、火傷しかけた一瞬の『火花』もそう。
ダメージは発生しなかったとはいえ、あまりにリアルな感触を生じさせた今の攻防はまるで…

「熱ッ…い、今のは…」
「まだや！【デストーイ・シザー・タイガー】、【デストーイ・サーベル・タイガー】！アイツにダイレクトアタック！」

しかし、遊良が驚きと焦りを噛み締める暇もなく。
アイナはダメージが通らないことを承知で、先ほどと同じように連続攻撃を命じ続ける。

…迫る巨大な鋏の双刃、振り下ろされる巨大な短刀。

ソレが、遊良の体を真っ二つにせんと襲い来るのだ。
そのどれもが【チキンレース】の効果に阻まれ、ギリギリで『見えない壁』にぶつかり遊良の体には到達しないものの…
もし【チキンレース】のダメージを受けない効果が無かったら、あの刃は確実に遊良の体を真っ二つに断ち切っていただろう。
その、リアル・ダメージルールのような電撃とは違う、もっと直接的な衝撃波の恐怖が悉く遊良の体を襲っていて。

「…くっ…」
「…なんや、あんま驚かへんのやな。」
「…」
「まぁえぇわ。コレでよー『分かった』やろ。ウチはＬＰを１０００

払って【チキンレース】の効果発動。デッキから1枚ドロー…カードを3枚伏せてターンエンドや。」

アイナ　ＬＰ：５０００→４０００
手札：6→2枚
場：【デストーイ・チェーン・シープ】
【デストーイ・サーベル・タイガー】
【デストーイ・シザー・タイガー】
【ファーニマル・マウス】
伏せ：3枚

そうして…
あまりに激しい攻撃と、あまりに激しいデッキの回転によって。磐石の態勢を整えて、そのターンを終えたアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン。
下手をすれば、このターンで何も出来ずに遊良は消し飛ばされていただろう。
そんな彼女は、遊良の静かなリアクションが意外だったのか…少々不可解な顔をしたかと思うと、遊良へと『何か』を分からせたかのような言葉を発していて…

また、そんなアイナの言葉を受けた遊良の方はといえば。

その突如発生したダメージの余波と、『火花』を受けたことに『驚き』を感じていると言うよりも…
どこか『慣れ親しんだ』かのような今の衝撃と感触から、『何か』に気がついたかのような表情をしているではないか。

…そう、今の衝撃と熱さを肌で感じ、そしてアイナから発せられた言葉を聞いて、遊良は『ある事』に気がついてしまった。

それは遊良も、昨年度に嫌という程味わった事。
突如発生した、しかし『慣れ親しんだ』かのような、あまりにリアルなこのダメージの余波から確信した、その『ある事』…

―このデュエルは、『実体化』している…

「お、俺のターン、ドロー…」

怒涛のようなアイナのターンが終了し、自らのターンを終えた遊良の額に…浮かび上がってきた、止めようのない冷たい汗。
それは、どうにか直接攻撃から身を守れたとは言え…
モンスターが実体化して襲ってきたという今の攻撃によって、遊良が『ある可能性』を思い浮かべてしまったからに他ならない。
そう、チェーンソーから弾かれた、一瞬の『火花』を浴びて。そしてあまりに鋭いアイナの玩具の、悪魔の刃が目と鼻の先…
超至近距離まで襲い掛かってきたがゆえに、考えたくもなかったことが遊良の思考に浮かび上がってきてしまったから。

(ほ、本物の刃物…もしあの攻撃を直接喰らったら…)

…いくらＬＰが残るとは言え、いくらデュエルは終わらないとは言え。
人の体を簡単に切り裂き、貫き、切り刻めるような悪魔の刃。もしアイナの攻撃を止められずに、刃に体を切り裂かれれば…

―刃傷、出血…そして、最悪の場合…

一度でも直接攻撃で喰らってしまったら、デュエルの決着が着く前に自分の命が危ない…と、どうしても考えてしまったのだろう。
…一度考えてしまった事は、忘れようにも忘れられない。
モンスターの直接攻撃による衝撃と痛みは、以前襲ってきた『フードの男』とのデュエルでもう味わっているとはいえ…

―いや、一度味わっているからこそ。

波動や咆哮による衝撃ですら、死ぬかと思った程の苦しみが襲ってきたのだから、あんなに直接的に人の命を奪える刃が襲ってくる事など、遊良にとっては恐怖どころでは済まない事であって。

「なんや、ビビッとんのか自分！そんならさっさとデュエル放棄して、尻尾巻いて逃げてしまえぇ！」

そんな手を止めた遊良へと、苛立つアイナの怒号が襲い掛かる。
小さな体をした少女だとは思えない程に大きく見えるその雰囲気と、鬼も逃げ出すほどに厳しい表情をした彼女から発せられるオーラは…
とてもじゃないが、学生の域を超えている者のソレ。
何せ、ダメージを与えられないことを承知で、しかし遊良に刃物の怖さを思い知らせるというただそれだけの為に攻撃をしかけてきたアイナの行為は、とても常識から外れた狂人の思考なのだから。

…逃げ出したい。

アイナの怒号と狂乱が、遊良にはただただ恐ろしい。
こんな小さな少女…とても自分よりも年上とは思えない少女が、自らの望みのためにルキだけでなく自分の命まで奪おうとしているという事実は、遊良からすれば恐ろしくもあり信じがたい事実。

そう、アイナから、直接的な『死』をこれ程までにわかりやすく呈示されてしまっては…遊良の心の片隅に、一瞬でも逃げ出したい思いが浮かびあがったとしても、それは仕方のない事だろう。
何が彼女をここまで追い詰めたのかなど遊良には分からないものの、自分とそれほど歳が変わらないはずの少女が本気でデュエルで人の命を奪おうとしているこの現状は…
遊良からすれば、恐怖以外の何物でもない。

それでも…

「…ッ…うぁ…っぁ…」

手足がひび割れ、顔がひび割れ、唸りを上げて『崩壊』を続けるルキを見て…

「くそっ!そんな事できるわけないだろ!【チキンレース】の効果発動!ＬＰを１０００払って１枚ドロー!」

迷いを無理矢理振り払うかのように、力強くカードをドローする遊良。
…そう、ルキを見捨てて自分だけ逃げるだなんて、遊良に出来るはずがない。
いくら直接的な『死』を叩きつけられたとは言え、いくら少女の狂乱が恐ろしいとは言え。
幼少の過去、生きるのを諦めていた自分の命を繋いでくれたルキを…今度は自分が見殺しにするなんて、遊良に出来るはずが無いのだ。
幼少の過去から、『崩壊』しかけていても『暴走』を止めればまだルキは助かるということを知っているからこそ…

「続けて魔法カード、【トレード・イン】を発動!【モザイク・マンティコア】を捨てて２枚ドロー!更に【マジック・プランター】も発動!

場の【デモンズ・チェーン】を墓地に送って２枚ドロー！魔法発動、【成金ゴブリン】！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！…よし！【死者蘇生】を発動だ！さっき【手札抹殺】で墓地に捨てた、【サクリボー】を特殊召喚する！」

一刻も早くルキを助けるために、遊良はデッキをフル回転させにかかるのか。

攻撃を喰らえば自分は死ぬ『かも』しれない。けれどもここで自分が尻尾を巻いて逃げ出せば、『間違いなく』ルキは死んでしまう。

遊良にとって、それだけは絶対に出来ないこと。だからこそ、その考えてしまった嫌なイメージを払拭するように…嵐のようなドローによって、遊良はデッキをフル回転させて。

…正直、アイナから感じる『嫌な感じ』の正体はわからない。

けれども、だからと言ってルキを見捨てていい理由にはならないのだと言わんばかりに。あまりに激しくカードをドローし続ける遊良の叫びが、この大空洞に響き渡り…

「そしてこの特殊召喚成功時！速攻魔法、【地獄の暴走召喚】を発動！俺は墓地から、【サクリボー】２体を特殊召喚！集え、【サクリボー】達！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

「ウチは【ファーニマル・マウス】一体を墓地から守備表示で特殊召喚

！そんで【ファーニマル】が増えたことで、ウチのモンスターの攻撃力はシザー・タイガーの効果で更に３００アップする！…どんだけ動こうと、簡単にウチのモンスターを超えられると思うなこのタコ！」
「関係ない！手札を1枚捨てて魔法カード、【死者転生】を発動！墓地から【神獣王バルバロス】を手札に戻す！更に永続魔法、【冥界の宝札】を発動し…俺は3体の【サクリボー】をリリース！」
「あ？3体リリースやと？」

遊良の叫びに呼応して、３体の小さき悪魔達が己の体に渦を纏う。
…それはこの世界においては、使い古されたアドバンス召喚の為のエフェクト。
しかし遊良にとっては自らが誇る、自身が磨き上げた力の一端。
それはどれだけの危機的境地に立たされようとも、全てを壊す王の轟きとなりてこの大空洞に響くのか。

震える大気、獣の咆哮と共に…

―それは、現れる

「来い、【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

轟かせしは獣の雄叫び。
全てを粉砕するその槍を持って、不浄の玩具を睨みつけ…眼前に立ちはだかる者共へと、猛々しく吼えるのみ。

そして…

「…バルバロス…ソイツの３体リリースは…」
「バルバロスのモンスター効果！３体のリリースでアドバンス召喚した時…相手のカードを全て破壊する！やれ、バルバロス！」

一撃必殺の進撃の衝動。目に付く全ての敵を吹き飛ばす、その破壊の槍を高々と天に回し始める獣の王。
…相手がどれだけ攻撃力の高いモンスターで壁を作ろうとも関係ない。
そう、遊良と獣の王にとっては、如何なるモンスターが立ち塞がろうと全てを吹き飛ばせば済む話なのだ。
例え相手が強大なＥｘモンスターを、どれだけ場に揃えようとも。これがＥｘ適正の無い自分が誇る、自分自身の力なのだと言わんばかりに…

しかし…

「チィッ！やらせるかぁ！罠発動、【ブレイクスルー・スキル】！バルバロスの効果を無効にぃ！」

獣の王の雄叫びを、更なる雄叫びで返すアイナの咆哮が大空洞の中に轟いて。
…ソレはとても女性とは思えぬほどの、野獣の如き荒々しさ。
大気を震わす獣の咆哮が、アイナの更なる声量で押し潰され…そのアイナの叫びによって、効果を無くした獣の王はその場に力なく立ち尽くしてしまったではないか。

「くそっ！」

「無駄や！『破壊』狙ってくる奴とは嫌っちゅーほど戦り慣れとる！ウチにソイツの効果は通用せん！」
「…ッ、まだだ！【冥界の宝札】と【サクリボー】の効果で５枚ドロー！更に【貪欲な壷】発動！」
「あ？」

それでもアイナの咆哮を、更に叫びで返すように。
デッキの主軸である、一発逆転を狙う獣の王の効果を止められたにも関わらず。その勢いを止めまいと、増えた手札から更に動かんとしてその手を動かし続ける遊良。
…そう、遊良とて、こんな簡単にアイナの場を吹き飛ばせるとは思ってもいない。

―何せ相手は、【デュエルフェスタ】の優勝者。

『祭典』の優勝…その功績が、どれだけの苦難の果てに得られるモノで、どれだけの戦いの果てに勝ち取れるのかを、最も理解している遊良だからこそ。
アイナの轟きに、決して怯まぬように。遊良もまた、力の限り吼え続け…

「墓地の【サクリボー】３体、【モザイク・マンティコア】、【クラッキング・ドラゴン】をデッキに戻して２枚ドロー！そして２枚目の【アドバンスドロー】を発動！バルバロスを墓地に送って２枚ドロー！」
「…何やコイツ…アホみたいにドローするやん…」

また、その無理矢理に我武者羅に、必死になってでもカードを引き続ける遊良の姿がアイナの目にはあまりに異常に見えたのか。
嵐の如くドローし続ける、遊良のデッキと場と手札が…常人には追えぬほどの速度となりて、目まぐるしく変化し続ける。

「手札の【イービル・ソーン】を捨て、魔法カード【ワン・フォー・ワン】を発動！デッキから【サクリボー】を特殊召喚し、この特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！」
「もう一回!?チッ！ウチの場は埋まっとる…」
「再びデッキから2体の【サクリボー】を特殊召喚する！もう一度集え、【サクリボー】達！」

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

「またバルバロスか？けどもう召喚権は無いっちゅうんに、一体何しようと…」

しかし…小さき毛玉の悪魔達が、何度場に現れようとも。
それはアイナにとっては先ほどと全く同じ盤面であり、先ほど『もう通用しない』と宣言した通り、アイナの『バルバロスの効果は通用しない』という宣言は決して『嘘』ではない。
それはアイナもまた、一辺倒の『破壊』など本当に自分には通用しないと確信しているからこその自負。目の前の男がどれだけ獣の王の破壊効果を狙おうとも、『何』が出てくるのかが分かっているのならば…そんなモノ、喰らうはずがない、と。
そうだと言うのに、目の前の『Ｅｘ適正』の無い男の、必死な足掻きにも似たこの同じ展開がアイナにはどうにも不可解に映っていて…

「行くぞ…俺は3体の【サクリボー】をリリース！」
「あぁ!?」

それでも、アイナにバルバロスの効果が通用しないであろうと言うことを、遊良とて理解していてもなお。
…高らかに天に掲げられしその手には、一片の迷いも淀みもなく。
そう、それはアドバンス召喚のモノとは違う、特殊召喚のための生贄のエフェクト。
遊良の宣言によって、天にその身を捧げる小さき悪魔達の、その身に纏うは渦では無く。

「運命を切り裂く英雄よ！青き誓いをその身に刻み…」

世界に轟くその口上。淀みに満ちた大空洞へと、ソレは高らかに響き渡る。
そう、一発逆転の『破壊』が通用しないのならば、更なる手で攻めるのみ。
巻き上がるは【決島】に来てから手に入れた、新たな切り札を呼び出すためのエフェクト。天を揺るがすその叫び、天に轟く威光と共に…

「天を喰らいし覇者となれ！」

それは…

「来い、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！」

―！

吹き荒れるは翼の羽ばたき、飢えを零すは鮮血の滴り。
血霧と共に降臨し、剥き出しの牙を刃へと変え…混沌渦巻く天より出でしは、竜頭を纏いし運命の英雄。
纏いし竜の咆哮で、双翼を広げ地に降りることなく空に佇み。下界を見下ろすその瞳は、一体何を映しているのか。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

それはアイナの強大なる、４体もの融合モンスターの大群を前にしても慄かない正真正銘の英雄の姿。
【決島】の参加者たる学生達が、この世に生まれるよりもずっとずっと前…
文字通り己の運命を賭けた一戦で、前々の【紫魔】を相手に当時７歳だった前【紫魔】紫魔　憐造が、『決闘』の最中に創造したと言う…
世界で最も有名な、『Ｄ』の英雄の最たるエース。

「ソイツは【紫魔】のモンスター…あぁ、そういえば始まった時に何か騒がれとったな…」
「リリースされた【サクリボー】３体の効果で３枚ドロー！そしてＢｌｏｏ―Ｄが場に居る限り、相手モンスターの効果は無効になる！これでシザー・タイガーとサーベル・タイガーの効果は無効となり…お前のモンスターの攻撃力も元に戻る！」

【デストーイ・チェーン・シープ】レベル５
ＡＴＫ／３９００→２０００
【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／４３００→２４００
【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／３８００→１９００

そして…
不浄の玩具を怯ませる、血霧の英雄の竜の雄叫びが大空洞へと反響して。
攻撃力を戻しただけではない。３体融合によって絶対に壊れぬはずの【デストーイ・サーベル・タイガー】の、その絶対強度をも問答無用で下げる英雄の雄雄しき佇まいは…
元とは言え、まさに【王者】のモンスターに相応しい存在感とも言えるだろう。
…それだけではない。
【神獣王バルバロス】と、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】。
３体ものリリースを要求する、獣の王と運命の英雄。
そのデッキの中核を担う、己のデッキにおける『切り札』を、よもや１ターンで連続して呼び出すという今の遊良の勢いは、まさしく全霊をかけた全力そのモノ。
…それは出し惜しみする事無く、今の自分に持てる力の全て、その全力を出し切ってでもアイナへと牙を突きたてようとしていると言うことであって。

「…【紫魔】…ウチの方だけ【スキルドレイン】とかホンマふざけた効果やな…」
「まだだ！Ｂｌｏｏ―Ｄの更なる効果！１ターンに１度、相手モンスター１体をＢｌｏｏ―Ｄに装備できる！行け、Ｂｌｏｏ―Ｄ！【デストーイ・サーベル・タイガー】を喰らい尽くせ！」
「チッ…」
―そうして。
竜頭纏いし運命の英雄が、その威光を放ちながら天に舞い始め…
そのまま、一刻も早い決着を目指し。
遊良はその勢いのまま、運命の英雄へと高らかに進撃を命じ…

―…

「…おやおや?【紫魔】のモンスターを呼び出すとは…これはまた面白い展開ですねぇ、ええ。」

遊良が今戦っている大空洞の、その天井に開いた巨大な『穴』。
そこから、つい先ほど大空洞から飄々と立ち去っていったはずの裏決闘界の融合帝…【紫影】が、中を覗き込んでいた。
…どこか狂気を孕んだ捻じれた声で、誰にも聞こえぬようにしてソレを呟き。
捻じれた狂気を駄々漏れに、しかし薄気味の悪いにやけた口元で。自らが炊き付けた少年と少女の戦いを、あまりに不気味な捻じれた視線で、嬉々として観戦していて。

「ふふ…ドグマやドレッドと並ぶ【紫魔】の代名詞…あの忌々しい憐造の甥と言うだけあって、中々どうしていい素材を持っていますねぇ本当に。益々解剖して中身を見てみたいですけれど…」

しかし、『赤き竜神』の解放を狙うと銘打っているにも関わらず…ソレを自らの手で実行はせずに、こうして観覧に勤しんでいるのは一体どういう考えを持っているが故なのだろう。
【紫影】が言葉を紡ぐ度に、形容しがたい不穏が当たりへと撒き散らかされ…
…全く読めぬ目的と思惑。それを、誰にも見せることなく。
そのまま、【紫影】は過去に歯向かってきた忌々しい【紫魔】のモンスター…その運命の英雄へと、不気味な捻じれた視線を突き刺しなが

ら…

「…ええ、私が『許可』します。さぁ…【紫魔】を喰らいなさい。」

―…

「行け、Ｂｌｏｏ―Ｄ！【デストーイ・サーベル・タイガー】を喰らい尽くせ！」

「チッ…」

天に羽ばたく運命の英雄。

その雄雄しくも凛々しき竜の翼を翻す姿は、愚かにも群れを成して立ちはだかる玩具達に、格の違いを見せ付けるかの如く。

…狙うは、不浄の玩具達の中でも最も鋭き凶器を纏った深紫の魔獣。

それは攻撃力をどれほど上昇させようとも、どれだけ玩具らしからぬ強固な耐性を備えようとも。そんなモノ、この【王者】には通用しないのだと言わんばかりの確かな威光。

そうして…

運命の英雄が、力を無くし蠢くだけしか出来ぬ不浄の玩具達へと、その竜頭を向けた…

―その時だった

「そう簡単にやらせるかボケェ！速攻魔法、【超融合】発動！」
「なっ!?」

―運命の英雄の竜頭の咆哮を、無理矢理掻き消すかの如く。
あまりに雄雄しく猛々しく、突如としてソレの宣言を放ったアイナ。

…アイナの場で輝くソレは、『融合』の名の付いた速攻魔法。

その、通常の【融合】とは明らかに違う力を放つソレに、遊良も思わず驚愕の声を漏らしてしまい…

「【超融合】!?な、何だその融合魔法は!?」
「うっさいわ！手札を1枚捨て、ウチは【デストーイ・サーベル・タイガー】と…お前の場の、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を融合！」
「なっ!?俺のモンスターを素材に!?」

しかし、そんな遊良を意に介さず。
声高々に吼えるアイナの宣言によって、アイナの場のモンスターだけではなく、遊良の場にいた運命の英雄までもが天空に出現した魔天の渦に吸い込まれていってしまったではないか。

―それは神秘の渦の光景を超えた、魔天に渦巻く魔力の奔流。

その光景の凄まじさによって、突如として不穏なる空気の密度が増していき…
そのあまりに強大な融合の魔力は、まるで純粋なる『毒』の如き凄まじさ。そこに吸い込まれていく英雄と玩具が、遥かなる力で歪に無理矢理に混ざり合う。

そして…

「禍つ紫影の揺らめきよ！世界の全てを包み込めぇ！」

その口から、紛れも無く【紫影】の『名』を放ちながら…

「融合召喚！来い、レベル８！」

―アイナは、叫ぶ

「【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】！」

…それは、あまりに禍々しき姿であった。
毒々しさが牙を剥き、飢餓の咆哮が大気を千切り…
虚空にも似た虚ろな目で、視界に映ったモノ全てを喰らいつくさんと…見た者全てに恐怖を生じさせる、意思を持った飢餓そのモノ。
その異色で異端なる異質な異様は、毒々しくも艶かしく蠢く畏怖そのモノであって。

【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

「な、なんだ…これ…」

そんな、突如現れた紫毒の飢餓竜を見て…
思わず、言葉を詰まらせ冷や汗を垂らしてしまった遊良。
そう、今まで見たことも聞いたことも無いモンスターであっても、誰に説明されるまでもなく遊良は『理解』してしまった。
これは、このモンスターは…

―あの狂気に染まった捻じれた男、【紫影】の『名』そのモノなのだ…と。

遊良の本能が、警笛を鳴らしながら伝えている。紫毒の狂気と奇怪な咆哮、あまりに歪で異質で畏怖を駄々漏れにしている、この捻じれた蠢きを魅せる毒の竜こそ【紫影】。
決して相対してはならぬと思ってしまう狂気を放つ、あの捻じれた男と『同じ』雰囲気を駄々漏れにしている…出会ってはならぬ、毒そのモノ。
…しかし、だからこそ尚更分からない。
一目見ただけで【紫影】だと分かるモンスターを、何故デュエリア校のアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンが召喚したのか。
あの『超融合』という、これもまた見たことも聞いたこともない融

合魔法もそう。一体、どうしてアイナが【紫影】の『名』を呼び出したのか…

…遊良には、わからない。

―それでも…

「コストで捨てた【エッジインプ・チェーン】の効果で、ウチはデッキから【魔玩具融合】を手札に加える！…チッ、【紫影】から借りたカードなんか使いとぉ無かったんやけどな。さぁ、どないするんや？まだここから動けるんかお前！」

「ぐ…」

あまりに猛るアイナの叫び、不穏そのモノである【紫影】の象徴。

そんな二つの巨大な『圧』の前では、遊良もこれ以上その手を進めることは出来ないのだろうか。

…しかし、遊良がその手を止めてしまったのも無理は無い。

何せ今のデッキの切り札たるバルバロスとＢｌｏｏ―Ｄ、その双方がこうも簡単に止められたのだ。

バルバロスの『破壊』は通用しないと言われ、Ｂｌｏｏ―Ｄは【紫影】に喰われ…

また簡単そうに行ってはいるものの、そもそも遊良が３体のリリースを用意しているという行為自体、周囲が想像しているよりもずっと難しい。

ソレを『２度』…合計で６体のリリースからなる進撃をこうも完全に止められては、遊良とてその勢いを止めてしまう他ないのか。

「【強欲で貪欲な壷】を発動、デッキを１０枚裏側除外して２枚ドロー…カ、カードを３枚伏せて…ターン…エンド…」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００

手札：３→４枚

場：無し
魔法・罠：【冥界の宝札】、伏せ３枚
フィールド魔法：【チキンレース】

「ウチのターン、ドロー！」

…しかし、そんな遊良を意に介さず。
目の前の相手の命そのモノを、己の為に切り伏せんとするアイナの叫びが…
どこまでも戦意を剥き出しにして、再び遊良へと襲い掛かる。

「【魔玩具補綴】発動！デッキから【融合】と【エッジインプ・チェーン】を手札に加える！続けて【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側除外して２枚ドロー！ＬＰを１０００払って【チキンレース】の効果も発動や！デッキからカードを１枚ドローし、そんでもって【融合】発動！場の【ファーニマル・マウス】２体と、【デストーイ・シザー・タイガー】で融合召喚！レベル８、【デストーイ・サーベル・タイガー】！」

【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２０００

「まだや！サーベル・タイガーの効果は使わんと、魔法カード【魔玩具融合】発動！墓地の【ファーニマル・キャット】、【ファーニマル・ドッグ】、【ファーニマル・ペンギン】、【ファーニマル・オウル】、【エッジインプ・シザー】を除外融合！」
「ッ!?５体融合!?」
「散らかり去った天使の羽よ！再び悪魔の刃と交わり…目に付く全てを切り刻めぇ！融合召喚！【デストーイ・シザー・タイガー】！」

―！

【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１２００

先のターンに、あれだけ激しい展開を行ったというのにも関わらず。
アイナの勢いはまるで留まる事を知らず、次々と呼び出される新たな玩具たちの不気味な唸り声が益々その大きさを増していく。
…それはまるで止まれない、壊れた暴走列車の如く。
止まることなく吼え続ける、狂乱の如きアイナの叫びが絶え間なく遊良へと襲いかかり続け…

「そんで融合召喚成功時、シザー・タイガーの効果発動！お前の伏せカード３枚と【冥界の宝札】、ついでに【チキンレース】を破壊する！」
「くっ、永続罠、【デモンズ・チェーン】はっ…」
「同じ手なんか喰らうかぁ！速攻魔法【サイクロン】！【デモンズ・チェーン】破壊ぃ！」
「なっ!?」

そして…
遊良の必死の抵抗など、まるで在って無いかの様に。
アイナの叫びに呼応して、虎を模した不浄の玩具と…
突如現れた突風が、無常にも遊良の場の全てを切り刻んでいくではないか。

「くっそぉぉぉぉ！破壊される前に罠カード、【貪欲な瓶】発動！【地獄の暴走召喚】２枚、【サクリボー】、【神獣王バルバロス】、【死者蘇生】をデッキに戻して１枚ドロー！」
「足掻くなボケぇ！魔法カード、【融合回収】発動！墓地から【融合】と【ファーニマル・マウス】を手札に戻して、そんまま【融合】発動！手札の【ファーニマル・マウス】と【エッジインプ・チェーン】を融合

！」

―しかし、まだ止まらない。

実力の『壁』を超えたプロの中でも、トップランカー達が生きているその『先』の地平に、学生の身でありながら辿り着いたアイナの織り成す勢いは…

「小さく転がる天使の羽よ！悪魔の鎖をその身に纏い…羅刹となりて蘇れぇ！融合召喚、レベル８！【デストーイ・デアデビル】！」

―！

【デストーイ・デアデビル】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２２００

まだまだその勢いを落とす事無く、どこまでも遊良へと絶望を与え続けるのか。

「ゆ、融合モンスターが５体…」

そう、埋め尽くされたアイナの場の、５体もの融合モンスターの威圧感はとてもじゃないが…

この世のモノとは思えない程に、荒々しくも重々しいモノ。

―鎖の悪羊、鋏の悪虎、刃の悪獣に人形の悪魔と…そして、【紫影】。

ソレらが一同に集ったアイナのフィールドは、どれだけの混沌に満ちていると言うのだろう。

ソレらが織り成す重圧に耐え切れる者など、最早学生の中には存在しないのでは無いかと思える程に…

「今捨てた【エッジインプ・チェーン】の効果で、ウチはデッキから【デストーイ・マーチ】を手札に加える！そんでデストーイモンスターが

増えたことで、シザー・タイガーとサーベル・タイガーの効果で、ウチのデストーイの攻撃力は１６００ポイントアップや！」

【デストーイ・チェーン・シープ】レベル５
ＡＴＫ／２０００→３６００
【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／２４００→４０００
【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／１９００→３５００
【デストーイ・デアデビル】レベル８
ＡＴＫ／３０００→４６００

ソレらは容赦なく遊良へと襲いかかり、一方的な重圧がどこまでも遊良を潰しにかかる。
そう、アイナが動けば動くほど、不浄の玩具達は巨大化していく。
そしてその圧迫感は、アイナの場で怪しく蠢く【紫影】の竜の不穏さとも相まって…
益々圧倒的な存在感と、不可思議な不気味さを増していくばかりであり…

「…つ、つよ…い…」

そして―
この、足掻くことすら許されぬ、あまりに激しいアイナのデュエルの前にして…

―遊良は、今はっきりと思い出してしまった。

そう、デュエルが始まってすぐに、アイナから感じたあの『嫌な感じ』の正体。
デュエルの間中、ずっとアイナから感じ続けているこの『嫌な感

じ』。それは昨年度の【決闘祭】の準決勝で、遊良がまだ実力の『壁』すら超えていなかった時の事…

―『…1年の癖に、確かによぉやるわ。ホンマにこれで『Ｅｘ適性』が無いんやもんなぁ。大したやっちゃ。』

―『…さぁて…どうしても俺のデッキは、俺に勝たせたいみたいやしなぁ…』

―『どうにも迷ってしゃーないからなぁ…デッキに決めてもらおうとデュエルしてたんやけど…俺のデッキは『勝て』ゆーとるし。』

これは紛れも無く、当時のウエスト校3年であった竜胆　大蛇と戦った時に感じた…太刀打ちすることすら許されないのだという、切迫にも似たあの感覚と『同種』のモノ。

それは当時、既に実力の『壁』を超えていた大蛇と…まだ『壁』を超えていなかった自分との間で、痛いほど思い知らされたモノであり…

根本の実力が違う相手と対峙しているが故に否応なしに沸きあがってくる、底知れない恐怖と冷たい無常。

ソレらが混ざり合って、『勝てない』と言う感情を生み出されていると言うことであって。

（…だ、駄目だ…今の俺じゃ、コイツには…）

そう思いたくないのに、そんなこと考えたくもないのに。

遊良とて自分ではまだ自覚は薄いものの、【堕天使】を失ってもなお【白鯨】たる砺波の元での修業と、全員が強者という【決島】での連戦を経て…

今やその実力は、プロに行っても通用するというかなり高い位置にまで来ていると言うのに。

目の前に立ち塞がった少女の実力は、学生とプロを分ける実力の『壁』を超えた更に『先』…

実力の『壁』を超えてプロとなった者達が、才能に溺れず鍛錬を積み、果てしなく続く苦行を乗り越え、そこからさらに果てしない戦いを経てようやく選ばれた者だけが進めるかどうかという、無限に広がる『先』の地平に立っているのだ。

…足りない。

『先』の地平に既に立っているこの少女に勝つには、デュエリストとして最も重要な『何か』が遊良には後一歩足りない。

遊良も、これまでの【白鯨】との修業や【決島】での連戦で、その『何か』が掴めそうな感覚をこれまでも何度か感じた事はある。

しかし、『壁』を超えた今の場所から、『先』の地平に確実に一歩進む為には…どうしても後一つ、あと少しの『何か』が足りないのだ。

…それは実力の『壁』を超えるときと同じ。

そこに至ったアイナと比べ、そこに至るまでの『何か』が足りない遊良の間には…そう、今の遊良とっては、アイナは絶対に越えられないと言う事であり…

「やっとや…これでやっとウチの『願い』が叶う！よくも手間ぁかけさせてくれたなぁ！これで終いや！バトル！【デストーイ・チェーン・シープ】で…」

それでも―

「ま、まだだ！メインフェイズ終了時に、墓地の【光の護封霊剣】を除外して効果発動！」

「あぁ!?」

ギリギリ…
本当にギリギリのところで。諦めそうになる心に、必死になって抗う遊良。
…諦めるわけにはいかない、諦めてはいけない。
例え相手が、自分よりも強いのだと理解してしまっても。それでも最初のターンに【手札抹殺】で予め墓地に送っておいたそのカードを発動して、どうにかターンと命を引き伸ばす。
…それは轟音を上げて『崩壊』しかけているルキを、見捨てるわけにはいかないというその意思だけ。
そう、その意思だけで、どうにかギリギリのところで戦意をか細く繋ぎ続けていて。

「こ、このターン…相手は攻撃宣言出来な…」
「あぁもう!どこまでウチの邪魔するんやこのガキァ!ウチはカードを2枚伏せてターンエンド!」

アイナ　ＬＰ：５０００→４０００
手札：3→0枚
場：【デストーイ・チェーン・シープ】
【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】
【デストーイ・サーベル・タイガー】
【デストーイ・シザー・タイガー】
【デストーイ・デアデビル】
伏せ：3枚

…沸き立つ苛立ちを撒き散らし、渦巻くストレスを放出し。
全く衰えない猛りによって、先のターンよりも更にその圧力を増してターンを終えたアイナとその盤面。
ソレを見ている今の遊良の姿は、一撃も喰らってはならない重圧と相まって…これ以上自分が何をすればいいのか、それすらわからなく

なってきている様にも見えるのはきっと錯覚などではないだろう。

（くそっ…どうすればいい…い、今の俺じゃ…）

そう…切り札である獣の王は通用しないとまで言い放たれ、【王者】のモンスターであった運命の英雄すら、【王者】ではない自分が使用していてはアイナには通用しないのだ。

その事実がどこまでも遊良に影を落とし、どうにかここまで無傷で攻撃を凌いだとは言え、これでデッキの中にあった攻撃を『確実』に防げる防御の手は使いきってしまった遊良の心の内は、先ほどよりも大きな緊張と焦りに包まれていて。

…一応、【ネクロ・ガードナー】と言った咄嗟の防御札は、まだデッキ内にいくつか残っているとは言えども。

それでも攻撃時にこちらの『手』の全てを封じてくる【デストーイ・チェーン・シープ】がアイナの場に居てしまっては、残りの防御札は最早何ら意味を成さないと言え…

…攻めることが出来ない。守ることも出来ない。

それを悟ってしまったがゆえに、垂れ下がった遊良の手は重く…

「…っ、うっ…あぁぁあ！」

また―

…遊良の気持ちの崩落に、まるで連動したかのように。

ルキから発せられていた、『崩壊』の轟音が更に強くなり…

ルキの悲鳴が、より一層その苦しさを増して大空洞に反響し始め…

そして―

「あぁぁぁ

―『バキンッ！』…
と、『何か』が割れるような、折れるような…
そんな痛々しい音が、大空洞の中に響いたかと思うと。
なんと宙に浮かんだルキの体から、彼女の『右足』のようなモノが地面へと落ちてきたではないか。

「ッ!?ルキ！…くっそぉぉぉぉぉぉ！俺のターン、ドローッ！【闇の誘惑】発動！2枚ドローして【サクリボー】を除外！そして手札を1枚捨てて装備魔法、【D・D・R】を発動！除外されている【サクリボー】を特殊召喚！」

その光景を見てしまったが故に、止めどない焦りが遊良を襲う。
…それはルキの体の『崩壊』が、もう限界に近いということ。
文字通り足が折れ、体中がひび割れ。
よく見れば、地には指が数本落ちていて、ルキの顔の中心には斜めに大きな亀裂が走っていて…

「【サクリボー】の特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！」
「…懲りん奴やな。またそのカードか。」
「墓地から【サクリボー】2体を特殊召喚！そして永続魔法、【冥界の宝札】を発動し…3体の【サクリボー】をリリース！レベル8、【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」
「だから同じ手なんか喰らわん言うたやろが！罠発動、【ブレイクスルー・スキル】！ソイツの効果は無効や！」
「ぐっ…」

そんな焦りに塗れた遊良の、必死な喚きにも似た叫びをいとも簡単

に払い除け。
全く持って慈悲も無く、無常にも遊良の手を潰し続けるアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン。
恐ろしいほどのキレを誇る遊良の進撃を、これ程までに封じ込めるアイナの轟きは本当に彼女が学生なのかと思える程に…
とても学生の枠に収まっているのが不思議と思える程に、まるで相当な歳の差を感じさせる程の圧倒的な存在感を放って聳え立っている事だろう。
…何せデュエルが始まってから今まで、彼女の猛る雰囲気は全く衰える事を知らず。
並のデュエリストならば、これ程までに遊良の進撃を止める事は出来ないはず。
そう、例えプロが相手だとしても、こんなにも連続して現れ場を荒らしてこようとする遊良の進撃には、多少なりとも手を焼くはずだと言うのに…
―どれだけ渾身を懸けて攻め続けても、アイナの優勢は覆らない。
こうも完全に遊良の進撃を抑え込んでくるアイナの姿は、一片の慈悲もなく遊良の心を折りにかかってきているだけ。
「…【冥界の宝札】と【サクリボー】3体の効果で、ご、5枚ドロー…」
…どうすればいい。一体、どうすればいい。
このままでは、先のターンの二の舞になる。それに今の自分の力では先ほどと同様、『あと一度』しか攻め込めるチャンスは生み出せないと言うのに…
遊良自身、ソレをわかっていてもなお踏み込む事が出来ないのは…アイナの伏せているカードの一枚が、先ほど彼女のがデッキから直接

手札に加えていた【デストーイ・マーチ】だという事が分かっているから。
そう、獣の王が通用しないからと言って、次にいくら運命の英雄を呼び出そうとも…
彼女の伏せカードの中に【デストーイ・マーチ】が伏せられている限り、再び運命の英雄を呼び出しても今の遊良では無駄に終わってしまうのだ。

…バルバロスが通用せず、Ｂｌｏｏ―Ｄすら止められる。

よもやデッキの中核を担う切り札が２枚とも通用しないとなると、遊良にはこれ以上何をどうすればいいのかが全く持って浮かび上がってこないのか。
迷いが生じ、思考が渦巻き…
どうにか辛うじて思考を止めずに考え続けられてはいるものの、どれだけ考えても今の遊良の心には、これ以上アイナにどうやって立ち向かえばいいのかがわからなくなってきて…

―…

「いいですねぇいいですねぇ！漏れ出した『神』の力でモンスターも実体化！そして何より子ども達の陳腐な鬩ぎ合いのなんとまぁ見苦しいこと！面白いですねぇ！なんていい暇つぶしなんでしょう！」
大空洞の天井に開いた『穴』から、佳境へと入ったデュエルを大空洞の天井に開いた『穴』から見下ろしていた、裏決闘界の融合帝【紫影】。

その、ルキを助けるために必死になって戦っている遊良と、望みを叶えるために後に引けなくなっているアイナのデュエルを…
『陳腐』とまで言い捨てた彼の、ケラケラとした気持ちの悪い捻じれた笑い声が山の中に響いていた。
その捻じれた視線はどこまでも狂気に満ちており、不気味に釣りあがった口角はこの世のモノとは思えぬ狂気を孕んだ代物。
自らが焚き付けた子ども達の戦いを、呑気に陽気にかつ悪びれもなく観覧を決め込んでいる辺り…その性根は間違いなく腐りきっており、それを自覚しているからこそ尚更性質の悪いことこの上なく。
「ふふ、【白鯨】がしゃしゃり出てきたら、こんな面白い余興も彼一人に止められてしまいますからねぇ。『逆鱗』に足止めさせて正解でした。」
しかし…一体、この男は何を目的としてこんな事をしでかしているというのか。
『赤き竜神』を解放する事だけが目的なら、こんな回りくどいやり方をせずともいいはず。
もしも【紫影】がルキを攫った時点ですぐにでも行動していたら、とっくにルキの体からは、『神』は開放されているというのに。
それでもソレを行わず、こうして遊良やアイナを『使って』余興にも似た茶番を繰り広げさせている【紫影】の思惑は…どこまでもどこまでも不穏の空気を纏ったまま、空気の淀みを更に不快なモノへと変えているだけ。
…しかし、既に事は生易しい事態ではない。
—このままでは、間違いなく一人の少女の命が奪われるだろう。
そうだと言うのに、【紫影】は捻じれた狂気に染まった、己の捻じれ

た不敵な愉悦を、ただただ周囲に撒き散らかしているだけであり…

「…さて、そろそろ仕上げと行きましょうか。天城　遊良…貴方にはもっと苦しんでもらうとしましょうかねぇ、ええ。」

そして―

【紫影】はそのまま、大空洞の天井に開いた巨大な穴から…
眼下の少年をその瞳に映しつつ、その異常に細長い指を鳴らし…

―…

（…どうすればいい…どうすれば…）

グルグルと回って定まらぬ思考の中、震える足で立ち尽くすしかない遊良。
…どうにかしなければならない情況。しかしどうにも出来ないこの情況。
崩壊を続けているルキの体にはもう時間があまり残されてはおらず、しかし今の自分よりも一歩『先』の地平へと辿り着いているアイナを相手には、遊良の心はもう勝機を見出す事ができずにいるのか。
焦燥と悲嘆に襲われていて、今にも心を折られ膝を突いてしまいそうな…
それを悲痛なルキの叫びという、決して支えにしてはいけない最後の『支え』で、どうにかギリギリで立てているだけの様子を見せていて。

（くそっ、ゼラートと神属があれば突破できるのに…ルシフェルさえあればすぐに全部揃えられるのに…）

また、あまりに自然に遊良の脳裏に浮かび上がってきたのは…

―『【堕天使】のカードさえあれば…』

と言う、既に吹っ切れていたはずの、失った【堕天使】達への縋りにも似た

…それは決して手の届かぬ願い。

『ある事件』でソレを失って、けれども既に吹っ切れていたと思い込んでいたその思いが…

今この絶望的な状況に置かれた事で、再度再燃してきたとでも言うのだろうか。

…しかし、それはある意味しかたがないこと。

何せこれまで世界に見放されてきた中でも、それでも『いずれＥｘデッキが使えるようになる』という希望を持って生きてきた遊良が、その未来に得られたという実現するはずだった『希望』を未来永劫捨て去るという選択を経て…

そうして得体の知れぬ『何か』から、文字通り己の身を削って得たのが【堕天使】の力。

…鷹矢とルキの命を天秤にかけて、それでも迷いなく自分の『希望』を捨てられる選択を出せた遊良にだからこそ与えられた、神にも歯向かう純黒の翼が【堕天使】のカードなのだ。

…『今のデッキ』も、自分が構築できる最高のデッキに仕上げてあるとは言え。

その【堕天使】の力があったからこそ、昨年度の【決闘祭】や『異変』の時もどうにか再度まで戦い抜く事ができたと言っても過言では

無いのだから…
追い詰められている遊良にとって、段々と痺れていく頭の中で、もう縋る事すら出来ないその失ってしまった希望に手を伸ばしかけてしまうのは仕方のない事なのか。

—それ故…

（くそっ…なんで…なんで俺はこんなにも弱…）

その手を動かせなくなった遊良へと襲い掛かる、苛立つアイナの怒声すらも耳に届かず。

ルキを助けなければならないと言うのに、もう打つ手を見つけられない苦悩。そして【堕天使】の無い、『自分だけの力』の弱さに…

とうとう、遊良が押し潰されそうになった…

—その時だった

「…ッ!?」

—突如

目を閉じ、自分の力の無さを憎みうなだれ肩を震わせていた遊良の体に、得体の知れない『浮遊感』が襲ってきた。
…それは急に地面が無くなったかのような、落下にも似た不思議な感覚。
そう、足元が不安定になり、ぐらりと揺れるような気持ちの悪い感覚が、不意に遊良の体全体を包み込んだのだ。

その為、反射的にその目を開けるものの…

―その先には何も見えず、ただただ暗い黒い空虚な空間が目の前には広がっていて。

「なっ…こ、これって…」

戦いの真っ最中だったはずの、あの絶望的なアイナの盤面はどこへ行ったのか。
何も見えないだけではない。実体化したモンスター達の唸り声すら聞こえない、ただの暗闇の空間。
…一体、何が起こったのか。
普通であれば、この何もない暗闇の空間と、上下の感覚が無くなる気色の悪い浮遊感に取り乱すはずだろう。

…しかし遊良には、コレに似た感覚と空間に確かに見覚えと身に覚えがあった。

そう、ソレは昨年の事…

―『力が…欲しいか？この場を収められる力が…』
―『貴様が遠い未来に手に入れられるはずだったこの力を捨てても…貴様は今、力が欲しいと願うか？』

―『貴様は今、力を得る代償に…これから得られたであろうこの力の一切を捨てる…よいな。』
―『では、神と決別する貴様に与えるのは…』

鷹矢とルキを人質に取って、デュエルで二人の命を賭けて戦いを挑んできた、あの人形のような謎の男との戦いの最中に自分の身に起こった…

―『力が欲しいか』と自分に問いかけてきた、あの『不思議な声』の響いてきた空間と良く似たモノ。

この浮遊感も、何も聞こえず何も見えないこの空間も、ソレが追い詰められたこの絶望的な情況で起こったというのも何もかもが『あの時』と似通っている。
…まさかルキの命がかかったこの情況で、以前と同じような『謎の現象』が起こったとでも言うのか。いや、ルキの命がかかっているこの情況だからこそ、同じような現象が起こったのかもしれないという淡い希望が、不意に遊良の中に生まれ始めて。
もしそうなら、こんな絶望的な情況でも希望が生まれるではないか。もしもここで【堕天使】が、もしくは何かこの場を突破できる『力』がまた手に入るのなら…

―ルキを、助けられる

儚い希望と淡い期待。未来に得られたはずの『Ｅｘ適正』意外にも捨てられるモノなど、今の自分には何も思いつかないというのにも関わらず。
そんな不確かなモノへ縋りつきたい気持ちが、一瞬で遊良の心の中に生じ始め…

しかし―

絶望の中で、遊良の中に微かに生まれた極僅かな『希望』を掻き消すかのように…

―それは、聞こえてきた

―『遊良…』
―『遊良…』
「ッ!?」

突然…
儚い希望と淡い期待に、藁にもしがみ付く勢いで縋りつきかけた遊良の耳に…
不意に飛び込んできたのは、この何も無い『闇』のどこかから響いてきた『2つの声』だった。

「そんな…っ、この声…」

…それはあの時の『謎の声』では無い
確かに聞いたことのある、紛れも無い誰か『男』の声。
確かにどこか聞き覚えのある、紛れも無い誰か『女』の声。

…いや、聞き覚えがあるとかの話ではない。

その『２つの声』を、遊良が聞き間違えるはずもなく。

何せ聞き間違えでは無いのなら、もう二度と聞くことが出来ないであろう『男』の声が…もう二度と聞くことが出来ないであろう『女』の声が、今確かに『闇』の中から聞こえてきたのだ。

その突然聞こえてきた、もう聞く事のなかったはずの『２つの声』に対し…遊良の心臓の鼓動が一瞬で高鳴りを超え、今にもはち切れんばかりにバクバクと胸の内側で暴れ始める。

―まさか…そんな…この声は…

その声を認識してしまった瞬間、遊良の頭の中は真っ白になり…

そして―

―『遊良…』

―『遊良…』

その二つの男女の声が、徐所に大きくはっきりと遊良の耳に届き始めたことに連動し。この暗闇の空間の中に、次第に遊良の目の前に大人の姿が二つ、浮かび上がってきて…

そこに、居たのは―

「と、父さん…母さん…」

どこか潤んだような声で、涙が零れてきそうな声で。思わず言葉を漏らした遊良の声は、今にも泣き崩れてしまいそうな声質となりて、力なくその口から零れていて。

…そう、遊良の言葉の示すとおり。

―そこに居たのは紛れも無く、約１０年前にその姿を消した『父』と『母』の姿だったのだ。

…忘れるわけが無い。

…遊良が『Ｅｘ適正』を持たないと宣告されてから、突如としてその行方を晦ませた…父『天城　竜一』と、母『天城　スミレ』。

虚ろな目で宙に浮かび、暗黒の世界の中でゆっくりとこちらへと近づいてくるその姿は、今も遊良の記憶の中にある紛れも無い父と母の『当時』の姿そのモノ。

しかし警察の捜査でも見つからず、師【黒翼】の情報網にもひっかからず、今ではもう公的に『死亡』扱いされている両親が、一体どうして今この瞬間に目の前に現れたのか。その、あまりに突拍子も無い突然の再開に、遊良の頭がますます混乱を極め…

「何で…とーさん…かーさん…」

そしてあまりの事に思考が追いつかず、意図せずその口から漏れだす言葉。

その、父と母の事を呼ぶ遊良の声は…どこか幼い子どものような…

いや、確かにソレは幼い子どもが、感情のままに親を呼ぶ時のような声そのモノではないだろうか。縋りつきたい衝動と、ずっと会いたかったという思いが今にも溢れ出していそうな、小さい子どものような声。

…しかし、それも当たり前だろう。

何せ両親が姿を消したのは、遊良がまだ5歳の時だったのだ。

世界の全てが敵になったあの日、絶対に味方で居てくれるはずの両親の突然の失踪。それは幼すぎた遊良にとっては、一体どれだけの絶望となって襲いかかってきたというのだろうか。
両親に捨てられたのだと、心無い言葉で囃し立てる周囲に傷つけられても…それでも、きっと、いつか、戻ってくる…そう信じていた幼い自分の思いも、遠い昔に忘れていたと言うのに…
…そうだと言うのに、まさかその両親とこんな時にこんな場所で邂逅するだなんて。
しかし、そんな戸惑いと驚きと、そして事態を何も飲み込めていない遊良へと向かって。
遊良の両親は虚ろな瞳のまま、今、ゆっくりと息子へと向かって…

―『お前さえ居なければ…』
「…え？」
―『お前に、Ｅｘ適正があれば今も幸せに暮らせてたんだ…それなのに…』
―『お前なんて産まなければよかった。本当は産みたくなんてなかった…』
「なっ!?か、かあ…さん…？」

…虚ろな目をした父の口から、確かに告げられた存在の否定。
…消え入りそうな母の口から、言い放たれた存在の拒絶。
その理解できない突然の言葉に、遊良の思考が停止する。両親の言った言葉が上手く頭に入らず、頭の中が真っ白となってしまい…
今も記憶の中にある、あの優しかった両親からは考えられない冷たい言葉が遊良へと降りかかり…あまりに突然放たれた両親からの否定と拒絶が、遊良から更に思考を奪う。

…今、両親は何と言ったのだろう

再開を望んでいた両親から浴びせられる否定の数々に、益々遊良の頭は混乱を極め…しかし、そんな遊良の事など、全く見えていないかのように。
遊良の両親は虚ろな目のまま、更にその言葉を続けて…

―『何で生まれてきたんだ。お前ができた所為で俺はプロを諦めなくちゃいけなくなったのに…』
―『妊娠したから仕方なく産んでやったのに…こんな…こんな出来損ないだなんて…』
―『Ｅｘ適正が無いなんて…これなら堕ろした方がよかった…』
―『こんな出来損ないの所為で私は家を追い出されたの？だったら始めから産まなかったのに…』
「な、何言って…と、父さん！母さ…」
―『こんな奴が自分のガキだなんて冗談だろ…気持ち悪い…』
―『気持ち悪い…こんなの、私の子じゃないわ…』
―『なんで俺の子どもにＥｘ適正が無いんだ…それならお前なんて産まれなくてよかった…』
―『産みたくなかった…こんなの、生まれてほしくなかった…』
「あ…あぁ…」

…何か事情があるのだと思っていた。両親が姿を消した理由には。
これが…今見えている両親が、本物なのか偽物なのかなど今の遊良には到底分かりはしないものの…
それでも１０年以上も切望していた、そして再開などもう出来ないのだと子供ながらに理解をしていた、そんな会いたくて会いたくてたまらなかった両親にこんな言葉を浴びせられるなど一体誰が耐えられようか。
…約１０年ぶりに聞くことが出来た両親の、その再会の言葉がまさかこんなモノだなんて。

そして―

―『生まれてこなくてよかったのに…』
―『始めからいらなかったのに…』
―『お前さえいなければ…』
―『お前さえ産まなければ…』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』

―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
―『お前さえ』
「やめろ！やめてくれぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

―…

「何や？急に叫びだして…」

デュエルの最中に突然俯いて固まってしまったと思えば、突然発狂したようにして叫びだした遊良へと向かって。

その突然の奇行に、少々驚いた様子のアイナが…訝しげな顔をして、目の前の男の狂乱をただ見ていた。

まぁ、追い詰められて心を折られたのだと思ったら、急に対戦相手が喚き始めたのだから…それは例えアイナでなくとも、誰だって驚く事なのだろうが。

歳のわりに、『神』だとか実体化したデュエルに、少々場慣れしているようではあったものの…それでも実力の差を見せ付けられ、目の前で親しい人間の崩壊を目の当たりにしたことで発狂したのだろう。とは言え、自分だって『願い』を叶える為に容赦などしないつもりではあるが。

―デュエルを続けられない人間に、ターンは回ってこない。後はこのまま、この男のデュエルディスクが自動的にターンを強制終了させればデュエルは終わる。

頭を抱えて蹲ってしまった遊良へと向かって、アイナはそう酷評を下し…

また…

「ふふ…ふふふ…いい叫び声ですねぇ天城　遊良。…さて、もう一押しですかねぇ？」

大空洞の天井に開いた穴から、捻じれた笑みでこちらを見下ろしている【紫影】の…

歪に捻じれたその言葉は、誰にも聞こえることなく…

―…

「あぁ…うぁぁぁ…」

父と母からの、聞きたくも無かった言葉を受け…

嗚咽を漏らす遊良の膝は折れ、気持ちの悪い浮遊感の中で蹲ったように頭を抱え耳を塞ぐその姿は、小さい子どもが反射的に身を守っている姿にも似たモノにも見えることだろう。

しかし、ルキを救うために絶対に負けられないと言うのに、アイナとの実力差に心が折れかけ、そこに追い討ちのようにして両親からあんな言葉を浴びせられたのだ。それ故、今の遊良の感情は負に包まれた傷だらけの代物であり…

心が折れかかっているかのような、今にも壊れてしまいそうな。消耗に消耗を重ねた遊良の心は、既に背負えるストレスの限界を軽々と超えているかのよう。

―そんな、今にも泣き崩れてしまいそうな遊良へと…

―『遊良』

―『遊良…』

今度は、別の男女の声が聞こえてきて―

「鷹矢ぁ…ルキぃ…」

そこに居たのは紛れも無い、大切な幼馴染２人の姿。

しかし鷹矢は今も【決島】で戦っている最中で、ルキにいたっては今にでも『神』が解放しかけていて『崩壊』をしかけている。

それ故、今現れた鷹矢とルキは紛れも無い偽物か幻覚に違いないと言うのに…

それでも悲痛に塗れた声で幼馴染達の名を零す遊良の姿は、ソレを全く理解出来ていないかのように弱々しいではないか。

鷹矢とルキが、今ここに現れるわけが無い。そうだと言うのに、今の遊良の精神状況では突然現れた幼馴染２人への情況判断すら行う事すらままならないのか。

ただただ悲嘆な目線と声で、力なくうなだれているだけ。

―そして、父と母と同じく。鷹矢とルキもまた、蹲っている遊良へと向かって…

―『何故お前なんぞと一緒にいなければならんのだ。お前の存在が目障りでならん。お前さえいなければ、俺はもっと自由でいられたと言うのに。』

―『正直、遊良が居なかったら私ももっと気楽なんだよね。遊良と一緒にいる所為で変な噂もされるし、居ないほうがマシだよ。』

「…ッ!?…お前等も…そうなのかよぉ…」

それは父と母と同じく、最愛の人物達からの否定と拒絶。
両親と違い、これまでずっと共に過ごして来た幼馴染達は絶対にこんな事を言わないはずだというのにも関わらず…
…今の遊良の精神状況では、鷹矢とルキが絶対に言わないであろう拒絶の言葉にすら傷をうけてしまうのか。
しかし、蹲って悲嘆に襲われている遊良へと追い討ちをかけるかのように。
淡々と拒絶の言葉を紡ぐ鷹矢とルキの幻影は、遊良を見ているのに見ていないかのような虚ろな視線で、そのまま次々と言葉を放ち続けるだけ。

―『お前が一緒に居る所為で俺の評価がさがるのだ。お前など居なければ良かったのだ。』
―『遊良が声かけてくるせいで彼氏も出来ないなんて最悪だよ。遊良なんて居なければよかったんだよ。』
―『初めからお前など居なければよかったのだ。』
―『最初から遊良なんていなければよかったんだよ。』
―『お前などいらん。』
―『遊良なんていらない。』
―『目障りだ』
―『消えてよ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『遊良さえ』

―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
―『お前さえ』
―『遊良さえ』
「あぁぁぁ

上げだといわんばかりにその異常に細長い捻じれた指をパチンッと鳴らし…

…そして―

―『死ね。』
―『死んじゃえ。』
「あ…」

―静かに…
しかしあまりにはっきりと、幼馴染達からの非常なる拒絶が放たれた。
…いや、これを拒絶と言ってもいいのだろうか。
存在の否定や拒絶などではなく、直接的な生への否定。
およそ他人から放たれる同じ言葉よりも、確かな威力を持っているその言葉が…静かに、そして重く、容赦なく遊良へと向かって撃ち放たれたのだ。
ソレを聞いて…悲痛な目で膝を着いて頭を抱えていた遊良が、力を抜いて頭を落とし始める。
…とうとう、心が折れてしまったのか。
誰の目から見ても、遊良の心が壊れてしまったのだろうという事は最早明らかなこと。まぁ、この場には今の遊良の状況を理解出来る者など、天井の穴から意地悪く眼下を見下ろしている、捻じれた笑いを浮かべる【紫影】しかいないのだが…
しかし、その【紫影】からしてもこの情況は想定どおりの終着点なのだろう。
これで、遊良の全ての支えが折れたと思われ…

「……な…」
「あ？」

しかし―

怪訝な目で見ていたアイナを他所に。
蹲っていた遊良が、肩を震わせながらゆっくりと立ち上がり始め…
!!!

突如―

大空洞に、大気の全てが振動するほどの『音』が轟いた。

―それは間違えることなどない『怒号』。

そう、ありえない声量から放たれた、大気を揺らす遊良の『怒号』が突如として折れたはずの遊良から轟いたのだ。

大空洞の中で反響しているとはいえ、およそ人間に出せるとは思えない程の声の振動が大気を揺らし…耳を劈く咆哮が、山ごと揺らしているかの如く。

―地を震わせて響き渡る。

「かっ!?…な、なんやこの声!?」

それ故、思わず自分の耳を反射的に塞いだアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン。

しかし彼女のその行動は当然の行為であり、そうしなければ確実にアイナの鼓膜は破られていたのだろうから、たった今遊良から放たれたモノがどれほど巨大な音の塊だったのかがアイナのその行為だけでわかることだろう。

…何せ、下手をすれば鼓膜をやられるほどの声量。

もしもアイナがもっと近い距離で遊良とデュエルをしていたら、確実にしばらくは耳の機能が停止していたであろう。そんな人間の耐えられる限界以上の声量が、突然うなだれていた男から発せられ…

―それでも…

「つざけんじゃねえええええええええ！」

喉が切れても、声に血が混ざっても。それでも遊良の叫びは止まず。

しかし、それもそのはずで―

…Ｅｘ適正が無い所為で周囲から蔑まれてきた。
…Ｅｘ適正が無い所為で周囲から馬鹿にされてきた。
…Ｅｘ適正が無い所為で周囲から貶されてきた。
…Ｅｘ適正が無い…ただそれだけの理由で、周囲の人々は…いやこの世界は、いとも簡単に自分の事を見放した。

だから―
両親が自分の事を見限って、自分を捨てて行方を晦ましていたのだとしても、それは当然といえば当然だという一種の諦めが遊良の中にあったのはまた事実。
Ｅｘ適正が無いと宣告され、居なくなってしまった両親に恨まれていたとしても…両親への恨みよりも、Ｅｘ適正が無い自分が悪かったのだという両親への懺悔の方が遊良の中には大きいのだから。
そう、行方不明となり、音信不通となり、生きているのか死んでいるのかわからない両親に…先程のような拒絶をされていたとしても、それは遊良もある意味当然だと思ってしまっている部分がある。
―Ｅｘ適正が無い
それはこの世界においてはどうしようもない『出来損ない』の証。
…誰だって嫌だろう。自分の子どもに、Ｅｘ適正が無いだなんて。できて当たり前、持っていて当たり前のソレを、まさか自分の子どもだけが『持っていない』だなんて。

だからこそ、両親に本当に捨てられていたのだとしても、遊良の心はそれはある意味『当然』だと思い込んでしまっている。

―でも、鷹矢とルキは違う

…別に、心意の分からぬ両親に恨まれていてもいい。

だって、Ｅｘ適正が無い自分が悪いのだから。Ｅｘ適正が無かったせいで、両親に見捨てられたのだとしても…ソレは自分が悪い事で、仕方のない事なのだから。

しかし、いくら血の繋がった両親でも、『たった５年』しか一緒に居なかった親と『１０年以上』も傍に居続けてくれている幼馴染とでは、自分の中での存在の大きさはまるで違う。

…Ｅｘ適正が無いと宣告され、全てを諦めていた幼少の頃。

その絶望に塗れていた地獄の時期に、自分を傷つけようとしてくる『敵』の全てに牙を剥き、己の身を傷つけながらも守ってくれた鷹矢と…

生きるのを諦め、ただただ死を待つだけだった自分の命を繋げ、傍にいて救ってくれたルキ。

両親が居なくなり、世界の全てが敵となり、あまりの絶望から鷹矢とルキさえ拒絶していても。それでも傍に居てくれた幼馴染達は、自ら命を絶とうとしていた自分に『死ぬな』と言った。

だからこそ―

『あんなモノ』を見せられて、『あんなモノ』を聞かせられて。それで遊良が我慢できるがない。

それは例えこの幻覚の言った通り、自分の存在が幼馴染二人の迷惑になっていたとしても。二人の為に、自分など本当は居ないほうが良

かったのだとしても…
それでも、世界の全てを敵に回してでも自分と『一緒』に『生きてくれた』二人が…
鷹矢と、ルキが…

―『死ね』と、言うはずがない。

「鷹矢とルキを…馬鹿にするなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

もし鷹矢にどれだけ否定されても、もしもルキにどれだけ拒絶されても。

―それでも鷹矢とルキは絶対に、自分に『死ね』とは断じて言わない。

それだけの自負が遊良にはある。それだけは確信出来る誇りがある。
だからこそこの幻覚は、あろうことかよりにもよって、鷹矢とルキに『言わせてはいけない事』を言わせたのだ。
…その怒りは空を裂き、大気を揺らし。闇に囚われ沈みかけていた自らの意識を、憤怒によって遊良は無理矢理に覚醒させる。
それは、よりにもよって自分以外が、鷹矢とルキを語るなど笑止千万なのだと言わんばかりに。
そのありえない『鷹矢』と『ルキ』の幻覚を、遊良は怒りの咆哮で消し飛ばし…

「あぁぁぁぁぁ！手札を5枚捨てて永続魔法、【守護神の宝札】発動ぉ！デッキから2枚ドローッ！【貪欲な壺】発動！【サクリボー】2体、

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】、【イービル・ソーン】２体をデッキに戻して２枚ドロー！【成金ゴブリン】発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！」

あまりの怒りの奔流が、遊良を本能のままに動かすように。

デュエルの最中だという事すら放棄しそうだったというのに、まるで自然に、かつ流れるようにしてデュエルを続行し始める遊良の動きは…

まさに本能のまま体が勝手にカードを発動しているようでもあり、鷹矢とルキに『あんな事』を言わせた幻覚への怒りと共に、遊良は弱音を浮かべた自分への怒り更に強く震わし始めているかのよう。

…脈絡の無いカードを組み合わせ、我武者羅になってドローをし続ける遊良の回転は嵐そのモノ。

一体、どうしてこんなデッキがこれ程までに回るのかなど誰にも分からない。少なくとも、デッキの無駄をなくして洗練を重ね続ける『普通の感性』を持ったデュエリストには絶対に。

そのまま、遊良は唸りを上げてルキの体から漏れ出している『神』の力の奔流と、文字通り『崩壊』しかけているルキの身体をその眼に映し…

―怒りのままに、更に轟く

「【死者蘇生】発動！【サクリボー】を蘇生し、速攻魔法【地獄の暴走召喚】発動！デッキから【サクリボー】２体を特殊召喚！」

「またそのカードか！いい加減しつこいわ！」

「うるせぇぇぇぇぇぇ！【サクリボー】３体をリリース！【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を特殊召喚！」

―！

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８

ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

そうして…

再び場に呼び出されしは、竜頭纏いし運命の英雄。

鮮血に塗れたその姿は、およそ英雄の姿とはかけ離れたモノなれど…遊良の怒りを感じたのか、先ほどよりも強い圧を放っている。

「また【紫魔】のカード…お前程度が使おたとこで無駄や言うたやろ！特殊召喚成功時に罠カード、【迷い風】発動！Ｂｌｏｏ―Ｄの効果を無効化し、元々の攻撃力を半分にする！」

しかし―

再びこの場から飛び立とうとした運命の英雄の羽ばたきを、いとも簡単に奪い去ったアイナが発動した一陣の風によって。

運命の英雄は再び天に羽ばたく事なく、地へと思い切り叩きつけられてしまったではないか。

…そう、いくら憤怒によって叫びを上げようとも。

遊良の動きは先のターンと同じであり、これで先のターンと同様、遊良は２回も切り札を止められたことになる。

先のターンでは、これ以上遊良に打つ手はなかったというのに…

「こ、これは!?」

そんな遊良の背後から、聞こえてきたのはようやく到着した砺波の声であった。

…彼の目飛び込んできたのは、追い詰められている教え子の姿。

縛られた獣の王。地に落とされた運命の英雄。そしてその対面には４体もの巨大な不浄なる玩具と、紛う事無き【紫影】の竜の姿があり…

それ故、この場を一目見ただけでも、きっと砺波の目には戦況がはっきりと映ったに違いなく…

「あれは【紫影】のスターヴ・ヴェノム！なぜアレをあの少女が…」
「まだだぁ！【サクリボー】3体の効果で3枚ドローッ！そして3枚目の【貪欲な壷】を発動！【サクリボー】3体、【モザイク・マンティコア】、【デモニック・モーターΩ】をデッキに戻して2枚ドローッ！」

しかし背後に到着した砺波の事など、まるで気がついていないかのように。
怒りに任せた咆哮で、遊良はカードをドローし続けるのみ。
…そう、獣の王は通用せず、運命の英雄すらも通用しない、この先のターンと同じ情況でも。
それでも、先のターンよりもその勢いを増して動き続ける遊良の叫びは、これまでのような迷いなど微塵も感じられず。
ドローし、ドローし、ドローし…

「【モンスター・スロット】発動！場の【神獣王バルバロス】を選択し、墓地の【鉄鋼装甲虫】を除外し1枚ドローッ！」

ここで引かなきゃ勝てない。

バルバロスは通用しない、Ｂｌｏｏ—Ｄだけでも立ち向かえない。それは先のターンの攻防でも、そしてこのターンのここまでの猛攻でも証明されている事。逆転への『破壊』は通用せず、そして【王者】のカードでも未熟な自分が扱うのではアイナ相手には勝てはしない。
ならば…
例え相手が、『今』の自分より強くともそれでも勝ちたいと願うのならば、今ここで『今』の自分よりも強くなるしか道は無いのだ。

「俺が引いたのは【大欲な壷】！そのまま速攻魔法、【大欲な壷】を発動！除外されているファーニマル・ドッグ、キャット、オウルをお前のデッキに戻し…」

…これが正真正銘、手札にある最後のドローカード。
ここでアイナを超えうる『何か』、実力の『壁』を超えた『先』の地平に辿り着けるような、遊良にとっての『何か』をドローできなければ…先のターンの二の舞となり、ルキも助けられず自分も死ぬ事は確実で。
だからこそ、今この時、この瞬間に、実力の『壁』を超えた『先』の地平に、無理矢理にでも到達するしか遊良にはルキを救う可能性はなく…
そう、バルバロスは通用せず、Ｂｌｏｏ―Ｄだけでも立ち向かえないのならば。必死になってでも、這いつくばってでも、泥に塗れてでも…

―そう、例えＥｘデッキが使えなくとも、例えＥｘ適正が無くとも。
それでも命を削って、無理矢理に、力ずくにでも、自分のデッキの『限界』を超え得る、その『先』へと到達し得るモノを呼び出すしかないのだから。

―必要なカードは、引けばいいだけ。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！ドローッ！」

―引いた、カードは…

「ッ!?…ぐっ、あ…」

―ソレを手にした瞬間に、文字通りの『重力』が遊良を襲う。
それは言葉では例えようのない、今にも押し潰されてしまいそうな重圧そのモノ。そう、今にも押し潰されてしまいそうな『圧』が、遊良へと容赦なく圧し掛かってきたのだ。
その容赦なく圧し掛かってくるコレは、まるでまだ自分にはソレを扱う資格が無いのだと、ドローしたそのカード自身に言われているかのようでもあり…
…ただドローしただけでこれ程までに『押し潰され』かかっていると言うことは、まだ自分にはコレを扱う資格が足りないということなのだろう。

―しかし、遊良もソレを直感で理解してもなお。

「ぐあぁぁぁあ!魔法発動、【二重召喚】!召喚権を1回増やす!」
「あ!?【二重召喚】やと!?そんなカードをまだ隠しとって…けど、今更お前に何が出せ…」
「俺は【神獣王バルバロス】と…【D―HERO　Bloo―D】をリリィィィス!」

アイナの言葉を遮って、その重さに抗うようにして。
『崩壊』によって悲鳴を上げる、ルキの声を自らの怒りへと変え。容赦なく圧し掛かるソレを維持と力だけで押し返しながら、遊良は無理矢理に、そして思い切り叫びを上げ続ける。

…そう、引いたのは、これまでのデュエルでただの一度も引けた事の無かったカード。

【化物】たる釈迦堂　ランから預けられた、この世の誰も見たことのないであろう…全く言う事を聞かぬ、主にすら牙を剥く得体の知れぬソレ。

…普通であれば、こんな何か分からぬモノに未来を賭けようだなんて思えるはずが無いと言うのに…

しかし、今この瞬間に己の限界を超えようと誓うのならば、コレを押し返すしか残された道はないのだと言わんばかりに。

全く言う事を聞かぬソレを、遊良は己の憤怒によって無理矢理に屈服させるかの如く…その叫びに呼応して、獣の王と運命の英雄がその身を天に捧げ始め…

「現れろ！レベル１０！」

…果たして。己のデッキの切り札たるその『２体』を生贄に捧げ、今この場において遊良は一体『何』を呼び出そうとしているのだろう。

天が震え、地が揺れ。それはまるで、この星そのモノがその『何か』によって震えているようでもあり…

―今から呼び出そうとしているソレは、己を超えられるモノなのか否か。

遊良の怒りによって、無理矢理に引き出され今ここに呼び出されるは…

「【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】！」

―その時…

『何か』が、宙から降ってきた―

それは深海よりも深きモノ、海嘯よりも豪きモノ。
荒ぶる激浪をその身に纏い、四海すら凌駕する海闊の化身。
空を映し、天を彩り、宙すら飲み込むまさに『海の星』。
それはたゆたう星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

それは釈迦堂　ランから預った、この星のモノではないカード。
途方もない力と途轍もない圧力、下手をすれば相手の心を完膚なきまでに折ってしまう、間違えれば自分すら折られてしまう危ない代物。

「ぐっ…お、重い…このカード…」

その為、ソレを呼び出した瞬間に、ドローした時よりも更に重い『何か』が遊良へと襲い掛かってきて…

―いや、『何か』ではない

これは『星』の重さ。『海の星』を操るということは、これ程の重圧と重力と重責を背負うと言うことなのだろう。

…こんなモノを、ランも蒼人も平気な顔をして従えていたのか。いや、主にすら容赦なく圧し掛かってくるのは、まだ自分自身が未熟である証明なのか。

…まだ、足りない。

そう、無理矢理にデッキからこのカードを引っ張り出してきたとは言え、まだ自分にはコレを扱う資格が足りないとプラネット自身がそう言っているのだ。

寧ろ、まだ資格が無いと言うのに、無理矢理にデッキから引っ張り出してきた事によって【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】のカードはアイナではなく遊良へと牙を向けており…

それでも―

「…さ、燦然と輝くプラネットの一球…【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】のモンスター効果ぁ！ＮＥＰＴＵＮＥの攻守は、リリースしたモンスターの攻守の合計となる！」

【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０
ＡＴＫ／　０→４９００　ＤＥＦ／　０→１８００

「ソイツはプラネット!?なんでお前がプラネットを持っとるんや!?蒼

ちゃん以外にプラネット持っとる奴がなんで…お前ぇ！ソイツが何なんか分かっとんのか!?」
「うるせぇぇぇぇぇぇっ！ＮＥＰＴＵＮＥの更なる効果ぁ！アドバンス召喚に成功した時、リ、リリースしたモンスター１体と同名となり…同じ効果を得る！俺が選択するのは【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！Ｂｌｏｏ―Ｄの効果を得たＮＥＰＴＵＮＥが場にいる限り、お前のモンスターの効果は無効となる！」
「なっ!?」

【デストーイ・チェーン・シープ】レベル５
ＡＴＫ／３６００→２０００
【デストーイ・サーベル・タイガー】レベル８
ＡＴＫ／４０００→２４００
【デストーイ・シザー・タイガー】レベル６
ＡＴＫ／３５００→１９００
【デストーイ・デアデビル】レベル８
ＡＴＫ／４６００→３０００

まだ、自分は『先』の地平に辿り着いてはいない事を、重力と直感で理解しつつも。
それでも今この現状では、こんな『重さ』に負けている暇など無いのだと言わんばかりに…遊良は意地と自棄だけで、その重力を押し返す。
…そして無理矢理だったとはいえ、この星に呼び出された果て無き海の奔流は捧げられた運命の英雄の力すらも再びこの世に呼び覚ますのか。
それは何度止められようとも、何度邪魔されようとも、何度食い止められても阻まれても遮られても。それでも執念のように意地を通す、遊良の進撃を写し取ったかの如く…
『海の星』が更なる重さと共に天に吼え、それによってアイナの不浄の

玩具達は到頭その力を押し返されて縮んでいく。

「ぐっ…なんでこんな奴がプラネットを…け、けどいくらプラネットやからって、潰されかけとるお前じゃ…」

「そうだ！まだ、これじゃあお前には届かないっ！…だから…俺は絶対に！絶対にお前を超えてみせる！行くぞ！【冥界の宝札】の効果発動！」

そして―

未だ認めぬ『その意思』を、力ずくで押し返すかのように。

飲み込まれそうな海の奔流に抗いつつ叫びを続ける遊良の言葉に、先ほどよりも更なる強さが宿っていたのはきっと気のせいではないだろう。

そう…

まだ、自分は『先』の地平には辿り着いていない。怒りによって無理矢理にプラネットをデッキから引きずり出したはいいものの、ソレだけではまだ『先』に立っているアイナには勝てはしないのだ。

だからこそ―

遊良は己のデッキに指をかける。

最後のドローから繋がった、更なるドローへと未来を賭けて。己を超えると自ら誓った、その決意の言葉の下に…

…今、遊良に問われているのは、実力の『壁』を超えた『先』の地平に到達し得る、己にとっての『何か』を『決められる』かどうか。

実力の『壁』を超えるために必要だったのは、己を越えるモノをデッキが指し示してくれるか、デッキが答えるかどうかだった。

けれども、今求められている事は前とは違う。『先』の地平に足を踏

み入れるということを決めた自分が、ここから更に進むには『何』をすればいいのか…ソレを決めるのは最早デッキではなく、誰でもない遊良自身。

未だ見果てぬ『先』の地平――

そこに至れる資格があるか。そこに踏み入る決意があるか。ルキを救いたいという気持ちが、不純物のない本心なのかどうか…その気持ちが、自らを超えうるに値するのか…

「2枚…ドローッ！」

ソレを、明らかにするために…

―遊良は、引く

ただ、己を超えるため…

ただ、ルキを救うために―

そして―

「俺は墓地の【神獣王バルバロス】と【クラッキング・ドラゴン】を除

外！」

間髪入れず。
迷いなくカードをドローして、そのまま高らかに宣言した遊良。
…天に掲げた手に握られしは、たった今ドローしたカードの一枚。
そして遊良の宣言により、深き眠りについていた獣の王と機電の黒竜がその身をこの世から消し始め…

―否

この世から消え始めたのではない。
獣の王が吼える時、機鉄の竜はその身を散開させたかと思うと、２体のモンスターの姿が重なり始めたではないか。

…融合召喚ではない。シンクロ召喚でもない。エクシーズ召喚でもない。

それは単なる特殊召喚のエフェクト。しかし更なる力を求めた遊良に応える、獣の王の新たなる力。

「来い、レベル８！」

―今、己を超えた遊良の前に現れしは…

「【獣神機王バルバロスＵｒ】！」

―！

【獣神機王バルバロスＵｒ】レベル８
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／１２００

それは機電の鎧を新たに纏いし、神をも打ち抜く獣の王。
…これまでの遊良のデッキには、入っていなかったはずのカード。
しかし獣の王が主と共に、己を超えたという証となり得る、更なる力と新たな姿に違いなく。
…別に、ルール違反ではない。
デュエル中に、今までデッキに無かったはずのカードが新たに創造されることは、この世界においては稀にあること。
それは誰も知らない全く新しいモンスターであったり、既にこの世に生まれていたカードであったり…
…このカードは後者。
既にこの世に存在している、しかして使い手の少ない、大多数には見向きもされないであろうカードの一枚。
しかし…今この限界ギリギリの状況で、このカードが自分にとって必要なのだという答えを導き出した遊良の、文字通り己が『先』に進む為に必要であった、たった一枚の魂のカード。
…獣の王の破壊の咆哮も、運命の英雄の威圧も、確かに遊良には必要で。
けれども、後一つ。どうしても遊良には足りなかったのだ。
そう、立ち塞がる敵を突破し、前に前に進撃するための、敵を上から圧倒するような…
遊良に足りなかったのは、純粋なる『力』。
だからこそ―

「攻撃力３８００!?…ま、まだそんなモンスターを…けど知っとるわ！ソイツの攻撃やと、ウチはダメージは喰らわへん！」
「あぁ！だからこうするんだ！速攻魔法、【禁じられた聖杯】発動！バルバロスＵｒの攻撃力を４００アップし効果を無効にする！…これでバルバロスＵｒの、『ダメージを与えられない』効果も無効となる！」
「あ!?」

【獣神機王バルバロスＵｒ】レベル８
ＡＴＫ／３８００→４２００

獣の王の制約を、即座に無に帰す遊良の叫びが当たり一面に木霊する。
神をも撃ち抜く力を得た代償に呪われた、神によって縛られたその『枷』を…神に禁じられた天上の雫によって打ち消すその行為は、まさに背徳と言えるのではないだろうか。

「ッ、攻撃力４２００…けどまだ…」
「そう、まだだ！これが最後のカード！魔法カード、【一騎加勢】発動！バルバロスＵｒの攻撃力を、更に１５００アップさせる！
「攻撃力５７００!?」
「行くぞ、バルバロスＵｒ！【デストーイ・シザー・タイガー】に攻撃！」

そして砲塔を前へと構える、機鉄を纏いし獣の王。
そこに収束せしは純然なりし『力』。これまでの遊良に『足りなかった』、進撃の為の純粋なる『力』の集約であり…
天を撃ち抜き、神を撃ち抜き、立ちはだかる全てを撃ち抜かんとす

る獣の王の咆哮が今、解き放たれ―

「天蓋の粉砕…ディナイアー・ブラスタァァァァァァァ！」

―！

「ぐっ…あぁぁぁぁぁぁ!?」

アイナ　ＬＰ：５０００→１２００

大空洞に反響する、ＬＰが大きく削れたその音は紛れも無く、長き拮抗が崩れ去った証。

そう、狂乱していたアイナの怒涛と、ギリギリで耐えていた遊良が織り成していた攻防が…到頭その限界を超え、ダムが決壊するかのようにしてデュエルのバランスが崩れ始めたのだ。

―もう、遊良に『海の星』の重圧は圧し掛かってはおらず

それは紛れも無い。『海の星』の強すぎる我を、遊良が己の我で押し返したという事。自らの維持と力、そして指し示された遊良の『答え』である機鉄を纏った獣の王の君臨によって、外なる『星』の圧力を遊良は思い切り空へと押し返したのだ。

…遂に、遊良は見果てぬ『先』の地平へとその足を踏み入れた。

それはアイナと同じ高さの地平ではあるものの、しかしアイナとは『別の景色』を見ているが為に、今ここにデュエルのバランスは大きく崩れ去り…

―そして…

「…ゆ……ら…」

―獣の王の咆哮が、今にも崩壊してしまいそうなルキに届いたのか。

一瞬…一瞬だけその意識を戻しただろうルキから漏れた、自分を呼ぶその声を耳に入れ…

「ッ、ルキィィィイ！今助ける…俺が絶対に！お前を助ける！」

「うぐっ…な、なんなんやお前ぇ！なんでウチの邪魔するんや！ウチはただ、死んだアイツにもう一度…」

「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！お前が何をしたがってようと…ルキを犠牲になんてしていいわけがねぇだろうがぁ！【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】！【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】を攻撃ぃ！」

アイナの嘆願を遮って、更に遊良は怒り猛る。

…死んだ人間は生き返らない。それはこの世界に定められた、どうやっても変えようの無い絶対の決まり。

…昨年度の決闘市で起こった『異変』の、前【紫魔】である紫魔憐造の例とはまた別。アレは謎の『闇』の塊が、紫魔　憐造の魂を包んでいただけと言うのは遊良には知る由も無いのだが…

―それでも。一度死んだ者がこの世に完全に『生き返る』事など、絶対にありえない事。

それを子どものような癇癪で認めようとせず、挙句の果てにルキを犠牲にしてまでそんな絵空事を叶えようだなんて…そんな馬鹿なことでルキの命を奪おうだなんて、遊良が許せるわけがない。

…海を纏いし暴君が、その大鎌を宙に振るう。

形容し難い星の重力を纏ったソレは、回転を増す毎に暴力性を上昇させ…

…それはまるで慈悲無き海鳴りの狂濤。全てを飲み込む暴食の、破滅を齎す孤高の高波。

今、神の来迎、神の解放、神の暴走を押し返すため…

そう、『この星の神』に逆らう為に、遊良はこの星のモノではない、外なる『星』の圧力を持って…

「ウチはただ…アイツに…謝りたかっただけなんや…」

悲しげに呟かれたアイナの言葉が、遊良の耳に届く前に。

抵抗すら許さぬ、『海の星』の化身に相応しき圧力が…

—今、放たれる

「喰らえええええ！断海の凶刃！オーラ…トリトオオオオオオン！」

―！

「あああああああああああああああああああああああ!?」

暴君なりし破滅の鎌より、放たれるは絶対零度の斬撃の波動。それは怪しく佇む【紫影】の竜を、一刃の元に切り捨てるのか。

無言のままに切り捨てられた、【紫影】の竜が爆散するのと同時に。

アイナのＬＰが０を刻み、その巨大なる爆発に巻き込まれたアイナが勢いよく後ろへと吹き飛ばされていき…

アイナ　ＬＰ：１２００→０（―９００）

―ピー…

それに応じて、無機質な機械音が大空洞の中に響き渡ったのだった―

―…

―夢を、見ていた…

いや、ソレが夢なのだという事が、ルキには確かにはっきりと自覚

できていたと言った方が正しいだろうか。
意思だけの感覚。身体など存在しないのではないかと思えるような、ただ『見ている』しか出来ない感覚の中…
第三者のような視点…まるで古い映画を見ているかのような、色褪せた眼前にルキが見るは…

―『とーさんがエクシーズでー、かーさんが融合だからー、俺はシンクロだったら丁度いいなー。ルキは何だと思う?俺のＥｘ適正。』
―『んーとねー…わかんないや。…あ、でもシンクロだったらいいなー。私と一緒だもん。』

―幼い頃の、懐かしい光景。
楽しかった子どもの頃…未来に何の不安もなく、ただ過ぎるだけの毎日がキラキラと光り輝いていた、遊良と過ごした幼少期。

―『俺さ、おっきくなったらプロになるんだ!』
―『ゆーらならなれるよ。だって強いもん。』
―『ルキもなるだろ?』
―『え?』
―『ルキだってすっごい強いんだからさ!一緒にプロになろうぜ!鷹矢とルキと俺とさ、３人で!』
―『うん!』

この、あまりに懐かしい、けれどもとても大切だった日々の記憶を見て…ルキは、思い出す。
―果たして…毎日が楽しく煌いていたのは、ただ自分が子どもだったからなのだろうか、と。
まだ『神』の力を押さえる事が出来ず、デュエルが出来なかった幼少の頃…

周囲から変わり者だと言われていた自分を、この世で最初に認めてくれた少年と毎日一緒に居られたことは、自分にとっては何にも変えがたい大切な毎日だったのだ。
…それは他の誰でもない、遊良が居たからこその日々。
いつも皆の中心に居て、強くて優しかった遊良だからこそ…
誘拐された時…命を賭けて助けてくれた、そんな遊良だったからこそ…

（あ…そっか…私、遊良のこと…）

…

「…う…」
「ルキッ!?あ…よかっ、た…ルキィ…」
「ゆ…ら…」

目を覚ましたルキの視界に、先ず始めに飛び込んできたのは、涙を浮かべている幼馴染の少年の顔。
…遊良の眼から零れた雫が、ひび割れたルキの頬を伝う。
何があったのかは覚えていない。しかし自分の状態を感じれば、自分の身に『何』が起こったのかはルキにも簡単に想像が付くのだろう。
…今にも途切れそうな虚ろな意識、しかし取り戻した自我がルキを意識を覚醒させる。
そんな彼女は…果たして目を覚まして最初に飛び込んできた幼馴染の少年の顔を見て、一体何を思うのか。
「…泣、か…ない、で…」

片足は膝から下が欠け、指も折れ落ち、体中がひび割れているルキ。
それでも、苦しみや痛みではなく、微笑むようにして遊良を見つめるルキの表情はどこまでも穏やかであり…
―子どもの頃…命を賭けて救ってくれた少年が、また命を賭けて救ってくれた。
その思いは、子どもから大人へと変わりつつある少女の中で、一体どれほどの変化となって育っているというのか。
大人へと続く階段の途中、複雑になりすぎた感情の所為で、遊良への思いを曲解しそうになったこともあった。

…けれども、昔の夢を見たことでルキは思い出した。

幼少の頃…遊良と過ごした日々は毎日が特別で、毎日が大切な日々だったという事を。
世界の全てが遊良の敵になった幼少の頃に、遊良にＥｘ適正がなくとも彼と一緒に居たいと思った気持ちに…嘘は、ないと言う事を。

…ルキの体に、徐々に集まる光の粒子。

それは『神』の暴走が収まった証拠であり、彼女の体が静かに修復を始めていると言うこと。
つまり、もう『神』の解放は収まったのだ。昔、一度だけ『神』が暴走しかけた時も、師が『神』を抑え込んだら同じ現象が起こった。それを、過去の経験から知っている遊良だからこそ…
目を覚ましたルキを見て、その表情は今にも泣き出しそうな安堵に包まれていて…

―神の解放は…

ここに、終息したのだった―

―…

「…いやはや、やはり失敗しましたか。…いえ、成功した…と言ったほうがいいですねぇ、ええ。」

騒乱が過ぎた大空洞の上―

その天上に開いた穴から、下を見下ろしながらポツリとそう言葉を漏らした…裏決闘界の融合帝、【紫影】。

それは目的であったはずの、『神』の解放が阻まれたというのにも関わらず。口を緩ませ、目線を捻じらせ、気味の悪い笑みを零していて…

「少々予定とはズレましたが、ふふ、少し解釈違いしてしまいましたねぇ。…まっ、結果オーライと言いますか。これはこれで無事に一つ段階を昇れたようで何より何より…あの子が『神』の解放を止めたのは誤算でしたが…後は予定通り、【決島】が終わったその時に…」

そして―

自らが余興だと言い捨てた遊良とアイナの戦いを見終え、【紫影】は静かにその場から立ち去り始める。

島中には、イースト校理事長である【白鯨】、砺波　浜臣が仕掛けた

監視カメラがあると言うのに。まるで散歩でも始めるかのようにしてゆらゆらと歩き始める【紫影】の足取りには、まるで人の重さと言うモノがないかのよう。
軽い…軽すぎる。
人が一人死ぬところだった。下手をすれば実体化したデュエルと『神』の解放により、あの場に居た全員が死ぬところだったのだ。
そうだと言うのに、どこまでも【紫影】は笑いを混じらせた捻じれた声のまま…
大空洞の方…眼下を、一瞬だけ一瞥したかと思うと―

「…さて、私の『仕事』も後少しで終わりですねぇ、ええ。」

―霧散するかのように…

文字通り、その場から消え失せたのだった…

―…

ｅｐ８２「覚醒の実感」

「天城君！高天ヶ原さん！」

激闘が終息したばかりの大空洞。

その、『神』の解放を巡っての激しい戦いを終え、ルキを救い出した遊良と…

『赤き竜神』が暴走しかかり、体が『崩壊』しかけているルキの下に…イースト校理事長である【白鯨】、砺波　浜臣が、足早に駆け寄りながらそう声をかけてきた。

しかし、彼もまたデュエリア校学長である『逆鱗』、劉玄斎との激しい戦いで体にダメージを負っているのか。腹部を庇いながら、どこかふらつく足取りで遊良達へと近づいてきて…

「砺波先生！」

「一体何が…いえ、それよりも高天ヶ原さんは無事ですか!?」

「はい、何とか…一応、大丈夫そうです。」

「大丈夫…こ、この状態で…？」

遊良からの『大丈夫』だという言葉を聞いても、どこか信じられないモノを見ているかのような声と共に…そう言葉を漏らすしかない様子の【白鯨】、砺波　浜臣。

そう、遊良の『大丈夫』だという言葉とは裏腹に、砺波の目に映るのは遊良に抱えられてぐったりとしている、衰弱しきったルキの姿が。

…顔には細かな無数のヒビ。右足は膝下辺りから欠けて無くなっていて、指数本欠損し、更には体にも大きな亀裂が入っているのが今のルキの現状。

普通の人間であれば死んでいるような体の欠損。そんな、四肢が欠けているのに出血もしていないのはともかく、人間の体がガラス細工

のようにひび割れたり壊れたりしている今のルキの姿は…
とてもじゃないが、誰がどう見ても『無事』などでは断じてないことだろう。
まぁ、昔一度だけこの状態のルキを見たことのある遊良はともかく、砺波はこの状態のルキを見るのは初めてなのだから、ルキがこの状態でも生きていることには驚きを隠せずにいるのだが…

「…昔、一度だけルキが同じ状態になったんです。でも、『神』の暴走が収まったら体も少しずつ元に戻っていきました。だから…多分、今回も大丈夫だと思います。」

それでも、確かにルキは弱々しくもしっかりと呼吸をしていて、目を閉じてはいるが意識は何とか在る様子でもあるのだ。
いくら生きているのが不思議なくらいの体の状態とはいえ、目の前の現実は紛れも無い事実でもあるのだから…
砺波とて、今は自分の眼に映るモノを信じるしかなく。

「…信じられない…だが、これも『神』のカードの力と言うわけか…ともかく、君たちが無事で良かった。」

それでも驚愕を程々に、先ずは教え子達が『無事』であったと言うことが砺波にとっては何よりも重要なコトなのだろう。
…劉玄斎から、この事件には死んだはずの裏決闘界の融合帝、【紫影】が絡んでいると砺波は聞いている。
過去の戦いから、【紫影】の屑さ加減を嫌と言うほど知っている砺波からすれば…【紫影】が現れたものの、無事に教え子たちが生還した事に心からの安堵を見せていて。

「それで、一体何があったのですか?」
「それが…【紫影】って奴が、ルキから『神』を解放しようとして…」

そして…
遊良は簡潔に手短に、ここで起こった事を砺波へと説明し始めた。
…【紫影】という、得体の知れない捻じれた男が待ち受けていた事。
…ルキから神を解放しようとして、【紫影】がルキに『何か』をした事。
…ルキの『神』の解放を賭けて、デュエリア校のアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンと命をかけて戦わなくてはならなかった事。
ルキを救い出すために、強敵であったアイナとの激しい戦いを終えたばかりの遊良もまた今にも倒れこんでしまいそうなほどに疲労を感じてはいるものの。
それでも息切れする呼吸を堪え、砺波へと事の顛末を伝える遊良の姿はどれほど痛々しいモノとなって砺波の目に映っているのだろう。
しかし、そのデュエルの結末は砺波も見ていた通りであるため、【デュエルフェスタ】の優勝者に自分の教え子が勝った事と、ルキが無事であった事が砺波にとっても喜ばしいこと。
教え子の必死の訴えを、砺波は邪魔することなく全て聞き入れ…
そのまま、遊良の口から出た【紫影】という言葉を聞いて。遊良の手短な説明を聞き終えた後、砺波は苦虫を噛み潰したような顔をしながら、徐にその口を開き始めた。
「…【紫影】…やはり生きていたのか。」
「砺波先生…【紫影】のこと知ってるんですか?奴は一体…」
「裏決闘界の融合帝。かつて存在した、ならず者の集まる裏の世界…奴はそこの融合召喚の王者でしたが、３０年ほど前に憐造…前【紫魔】に敗れ、命を落としたと思われていました。」
「死んだはずの人間が…」
「いえ、性根が腐りきっている奴のことです。死んだと思わせて実は生きていたのでしょう。あの屑は根っからのペテン師…本当に、屑の中の屑…」

いつも冷静な表情を崩さぬ砺波にしては珍しく、【紫影】の事を話す今の砺波の顔は、心から【紫影】の事が嫌いなのだという事が遊良にだって分かるほどに険しい表情。
その脳裏に蘇るのは、かつてあった表と裏の決闘界の衝突であり…
きっと、砺波だって思いだしたくもないのだろう。心から『屑』だと言い切れるほどの、【紫影】などと言う捻じれた男の事など。
…そこでの【紫影】の悪行の数々は、砺波とて思い出すのも憚られるほどに残虐で最低な下種すぎる行為。
砺波もまた、親しかった人の命を【紫影】によって奪われているのだから、今【紫影】と対峙したらきっとその怒りが噴出してしまうに違いなく…

「…ともかく、事態は把握できました。とりあえず早くここを出ましょう。高天ヶ原さんも早く医療棟へ運ばなくては。いくら無事だとは言え、彼女の体は衰弱が酷い。」
「はい、砺波先生。」

…しかし、今は子ども達の生還が第一だという事を忘れるほど、砺波は怒りに支配されてはおらず。
【紫影】への懸念はある。とは言え今の自分はイースト校の理事長であるのだから、何よりもまずは学生達を守る事こそが第一であるという大人の責務を全うすべく…その痛む体を押して、砺波はゆっくりと立ち上がる。
そして遊良もまた、一刻も早くルキを休ませるべく…
修復しかけているとはいえ、手荒にすればすぐに崩れてしまいそうなルキを、今ゆっくりと抱きかかえ上げようとした…

―その時だった

―！

少しの地鳴りが聞こえたと思ったその瞬間。
遊良達の今居る大空洞が、ぐらりと大きく揺れて少しの地響きが空洞内に木霊し始めた。
それは立っていられないとか、倒れてしまうとか、そこまで大きな揺れではなかったものの…
それでも軽い地震の所為か、それとも先ほどの実体化したデュエルの所為か。大空洞の天井の岩肌がパラパラと剥がれ崩れ始め…

「このままでは崩れてしまいそうですね…早く出なくては。」

冷静に情況を鑑みた砺波が、少しの焦りと共にそう告げる。
そう、このままでは砺波の言った通り、確実にこの大空洞は崩れてきてしまうだろう。
既に地震は収まったというのに、『ピシピシッ』とした何かが割れる渇いた音は、間違いなく大空洞を構成する岩の壁が割れてきていることの証明であり…
…元々、山の中にこんな広い空洞があるコト自体、大自然の御業のようなモノ。
それ故、微妙なバランスによって保たれていた大空洞の構成が、先ほどの地震によって崩れたとしても、それは在る意味当たり前のようなモノなのだろうか。

「ま、待ってください、アイツは…」

しかし…
すぐにでも大空洞を離れようと踵を返した砺波へと向かって。
ふらつく足取りでゆっくりとルキを抱えて立ち上がりながら、少々焦りを含んだ声でそう声を上げた遊良。
…そう、遊良の視線の先には、気を失って倒れているアイナ・アイ

リーン・アイヴィ・アイオーンの姿が。
実体化したモンスターの攻撃の余波を受けて、勢いよく弾かれて壁に叩きつけられたのだろう。
うつぶせで地面に倒れこみ、意識を失いぐったりとしている彼女の姿が不意に遊良の目に映り…
…いくらルキの命を奪おうとしたとは言え、彼女も在る意味【紫影】に唆されたある意味で被害者。
無論、アイナもまた加害者である事には変わりないのだから、遊良とて同情の余地など無いとは言え…
それでも、今にも崩壊しそうな大空洞の地鳴りの中で、一人では逃げられないであろう彼女の姿はその初等部の幼い生徒と見間違えそうなほどに小さな体躯と相まって、先ほどまで狂乱していた女性とはとても見えないほどに弱々しく見える事この上なく。
…このまま置いていけば、崩落に巻き込まれて確実に彼女は死ぬ。
同情の余地は無い。けれども助かる『命』を目の前で見捨てて置いていくことは、ルキの『命』を助けるために戦い抜いた遊良にとっては後味が悪いに違いなく…

「…君は高天ヶ原さんを連れて早く逃げなさい。あの子は私が連れて行きましょう。」
「で、でもそんな事したら砺波先生が逃げ遅れて…」
「私の事はいいんです。それより君達は先に…」
「…」

遊良へとそう告げてくる砺波ではあったものの、砺波とて見るからに体を痛めているのが明らかであり…
運ぶのがアイナの様な小柄な女性とは言え、とても人を一人抱えて走れるなんて事、今の砺波には出来ないであろうと言うことは誰の目にも明白。
また、いくら修復を始めているとは言え。体が崩れかけているため

に、とてもじゃないが手荒には扱えないのがルキの現状。
…これ以上手荒に扱えば、崩壊の余波からルキの体は更に崩れてしまうだろう。
もしそうなってしまえば、修復には更に時間がかかる。
それ故、これ以上ルキの崩壊が進めば、いくら命が助かったとは言え後はルキの体力が持つかどうかの戦いとなってきてしまうのだから、ここは遊良だけではなく砺波もルキを共にゆっくり丁寧に運ぶ必要があり、とてもじゃないがアイナを運んでいる暇はないのだ。
だからこそ、揉めている時間など無いと言うのに、このままでは全員が逃げ送れてしまいそうな問答を遊良と砺波がしていた…

その時―

「…アイは俺が運ぼう。そこの赤髪の嬢ちゃんも…俺が運んだ方が早え。」

今にも崩れていきそうな大空洞の入り口から…
そう、遊良と砺波が入ってきた入り口の方から、どこか弱っている一人の男の声が聞こえてきて。

…それは聞き間違えることなど無い、この世の誰よりも重々しい声。
世紀末に生きているのでは無いかと錯覚するほどの体躯に、戦場を散歩でもしてきたのでは無いかと見間違えるほどにその身に刻まれた古傷の数々…

決闘学園デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と呼ばれた元プロデュエリスト…

―劉玄斎

しかし、つい先ほど砺波を足止めするために洞窟の入り口に立ちはだかったこの歴戦の男は、自らを超えた砺波によってすぐには立ち上がる事など出来ないであろうダメージを受けたと言うのに…
そんな満身創痍のはずの彼が、一体どうしてこの大空洞まで来られたのか。
そのまま劉玄斎は、傷付いているにも関わらず痛んだ体を押して歩いてくると、その丸太のような片腕でアイナを持ち上げるようにして抱え上げ…
続けて、ルキを抱き上げている遊良へと向かって足早に歩いて来たかと思うと、再度その重々しい声を発し始めた。

「…テメェらじゃ、ここを出る前に生き埋めになっちまうだろ。さっさとその嬢ちゃんも貸せ。」
「劉玄斎…だが貴様は高天ヶ原さんを…」
「あぁ…謝って済むとは思ってねぇ。けど、今はンな事言ってる場合でもねぇだろうが。安心しろぉ、もうテメェらと争うつもりはねぇからよぉ…つっても、無理かもしれねぇけどなぁ。」

先程とは打って変わって。
砺波と争っていた時とはまるで真逆の、全く戦意を感じさせない『逆鱗』、劉玄斎。
その言葉は、どこか心からの謝意を含んでいるかのような代物となりて遊良達へと届けられるものの…
…そんな『逆鱗』を前にしても、砺波は未だ警戒をしている様子。
まぁ、いくら劉玄斎から敵意を感じなくなったとは言え、彼のバックに居たのが宿敵である【紫影】だったというのだから、砺波にその警戒を解けと言うのも在る意味無理ではあるのだろう。
…元々敵であった劉玄斎に、アイナはともかくルキを預けると言うのはリスクが高い。
もしかしたら劉玄斎の与り知らぬところで、【紫影】が何かまた策を残しているかもしれないという…そんな、拭いきれない懸念が砺波に

はあって。
…しかし、そんな警戒を解かぬ砺波へと向かって。
少々ふらつきながらルキを抱えていた遊良が、徐にその口を開き始めた。

「…砺波先生。ルキは…『逆鱗』に運んで貰っても大丈夫だと思います。」
「しかし…」
「何か、その…上手く言えないんですけど…『逆鱗』になら…ルキを預けても大丈夫な気がして…」
「…」

…まるで確証のない曖昧な核心。
単なる『そんな気がする』だけという、とてもじゃないがソレで信頼など出来るはずも無い言葉が砺波の耳へと届けられる。
普通であれば、いくら教え子の提案とは言えそんなリスクの高い行為を砺波が了承できるはずがなく…
しかし…こんな事態だからなのか。それとも砺波もまた先の戦いで、劉玄斎の『何か』を知ったからなのか。
迷っている時間などない砺波は、教え子から発せられたその言葉を一蹴することなく。
その思考の、最も深い所で瞬間的に何かを考えている様子を見せ…

「…少しでも変な動きをしてみろ。ただでは済まさんぞ。」
「あぁ、わかってんぜ。今のテメェ相手に、下手な事ぁしねぇよ。」

…そう、これ以上問答をしている時間などない。
これ以上ここに留まっていては、全員が助からないという本末転等な結果が待っていると言うことは砺波にだって理解出来ていることであり…
あくまでも警戒は緩める事無く、こんな事態だからこそ砺波はソレ

を了承し、視線は厳しいままながらも劉玄斎の提案を受け入れた。

そして…

「さっさと出るぜ。もう持たねぇ。」

『逆鱗』はそう言うと、アイナを抱え上げている方とは逆の腕で遊良からルキを受け取り…まるで壊れ物を扱うかのようにして、優しくルキを抱え上げる。

それは例えるなら、生まれたての赤子を優しく優しく抱き上げるかの様な柔らかで丁寧な腕使い。しかし少しの揺れもルキに伝えぬ、厳重なりし腕の籠。

そのまま一同は、劉玄斎の言葉を皮切りに。崩れ始めた岩肌の雨を浴びながら、急いで大空洞を後にし始めて。

…すると、遊良達が大空洞を出てすぐに。

巨大な岩が落ちてきたような、とてつもなく大きな落音が背後から響いて来たかと思うと…

洞窟の狭い外への通路に、一瞬の突風が吹き抜けて行った…

「…危なかった。あと少し遅かったら…」

「クハハ、生き埋めどころか、岩に潰されて圧死してたなぁ。…洒落にもなんねぇぜ。」

「…礼は言わんぞ劉玄斎。貴様のやったことは許される事ではない。」

「…あぁ。別に、許しを請うつもりはねぇよ。」

ギリギリの場面を突破したからか。

砺波が再度劉玄斎へと厳しい言葉をかけ始めるものの、それはどこか切羽詰ったものから、いつもの砺波の言葉となっていたことだろう。

そう、あと少しでも劉玄斎と揉めていたり、脱出に手間取ったりしていたら…大空洞の中で圧死するか、脱出できずに餓死していたかもしれない。
…何せ【紫影】の仕掛けた妨害電波の所為で、デュエルディスクの反応はどこにも届かず。【決島】の中でも、殆ど誰も立ち寄らないこんな山の中なのだから、救助だって来てくれるか怪しいのだ。
だからこそ、過程はどうあれこうして助かったという事実は事実。誰も犠牲になっていない今の現状こそが、結果的には最良だったのだという事を…この場に居る誰もが理解している。

（…アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーン…強敵だった…本当に…）

そんな中…
洞窟の外へと繋がる長い天然通路を、出口へと向かいながら。全員助かったという少しの安堵からか、遊良は先ほどの激しいデュエルを思い出していた。
…実力の『壁』を超えたその『先』の地平に、学生の身でありながら辿り着いていた彼女。
その力はあまりに高く、またその勢いは激流の如き激しさとなりて遊良へと襲いかかって来ていたのだ。
…ある意味、既に『先』の地平に辿り着いていたアイナを相手に、最後の最後に遊良が勝つことが出来たのは、遊良自身もまた『先』の地平に辿り着いたこともちろんではあるのだが…
それ以上に、彼女のデュエルの『スタイル』が直接ぶつかり合う、あまりに攻撃的で直情的なモノだったことが大きいのではないだろうか。
…それは自らをわざと傷つけていたとも取れる、自傷にも似た彼女の狂乱の結果。
攻撃力を上げ、相手を威圧し、そして直接モンスターをぶつけ合う事で…自らもまた、傷付くことを望んでいたのかもしれない…と、自

らもまた『先』の地平に至った事で、アイナの悲嘆にも似た狂乱を遊良も無意識に感じ取れたのだろう。
…まぁ、アイナの感情など分かりもしなければ分かりたくもない遊良からすれば、彼女の事情など気に留める必要もなければ気にすることもしないのだが。

…彼女はルキの命を、自らの願いの為に奪おうとした。それだけは…絶対に、許せない事。

それは今も、そしてこれから先も―

しかし―

デュエルに負け、気を失っているアイナを見る劉玄斎の目は違う。
どこかホッとしたような、それでいて悲嘆を浮かべているような…まるで、自らの学園の生徒であるアイナが、遊良に負けることを望んでいたかのような視線をアイナへと向けているデュエリア校学長、劉玄斎。
…その重厚なりし深い瞳は、一体何を考えているのか。
それはきっと、ここでは語られぬ『他の誰かの物語』を…劉玄斎は、静かに思い出しているのだろう。
…悲しげで、しかしどこか安堵を含ませたその視線。
すると劉玄斎は、後方からアイナを見ている遊良の視線にも気がついたのか。
重々しくも、敵意の全く含まれていない声で。後ろを歩く遊良へと向かって、背中越しに声をかけてきた。

「…コイツも昔、色々あって壊れちまったんだ。だから、多分誰かに止めて欲しかったんだろうなぁ…自分じゃあ止められない呪いにかかっちまってたからよぉ…」
「…呪い…」

「…『許せ』とは言わねぇよ。アイも、自分が悪い事をしてるって事ぁ自覚していた。誰かに恨まれることを承知で、それでも叶えたい願いってモンがコイツにはあったんだ。…褒められる行為じゃあねぇし、ただ融通の利かねぇガキの我儘みてぇなモンだが…コイツにゃ、ソレに縋るしかなかったんだ。」
「…」
「コイツは…いや、コイツらは…壊れちまってんだよ。許さなくてもいい。けど…それだけは、わかっててやってくれ。」

アイナの事だけではなく、他の誰かの事も含めてどこか悲しげな顔をしている劉玄斎。
アイナを含めた他の人間の過去に、一体何があったのだろう。ソレはこの物語では語られる事のない、別の誰かの物語なれど…
ソレを知らぬ遊良からすれば、劉玄斎もまた悲痛なのだという事だけが、ただただひしひしと伝わってきて…

…そうして―

洞窟内を歩いていた遊良達の目に、ようやく飛び込んできたのは『外』の明るさ。

…沈殿していない澄んだ空気と、頬を撫でる柔らかい風。
そう、長い洞窟内をやっと抜け、ようやく遊良達は外へと戻ってきたのだ。

すると、短い時間だったとは言え命を賭けたやり取りを行った反動からか。
これまでの【決島】での戦いで溜め込んできた疲労が、一気に遊良へと襲いかかってきたのだろう。座り込むことはしないが、張り詰めていた緊張の糸が一瞬緩んだ事で…外へと出た瞬間に、足から力が抜

けたのを遊良は感じた様子。
…一息ついている暇はない。けれども、これで一応、急を要する事態は突破した。
崩壊しかけたとは言え、ルキの命は助かった。【紫影】は逃がしてしまったとは言え、きっと砺波はコレまで以上に警戒レベルを引き上げるだろう。
まだ気を緩められるほど安心できる事態ではないものの、どうにか誰の犠牲を出さずに済んだのだから、こういった修羅場の経験値が砺波達と比べれば絶対的に少ない遊良からすれば、少しだけ足の力が抜けてしまってもそれは在る意味当然と言えるのか。
そして、そんな遊良の姿を一瞥した後…
劉玄斎は優しく抱えていたルキを砺波へと預けると、その場でアイナを抱え直し始めた。

「…ほらよ。この嬢ちゃんは返すぜぇ?後、とりあえずアイは医務室へ運ばせてもらうからよぉ。…ちゃんと、コイツにも罰は受けさせる。…俺も、な。」
「…無論だ。」

ルキを受け取った砺波は、劉玄斎と、未だ気を失っているアイナへと少々厳しい視線と言葉を向けたまま。
…そう、見捨てるのではなく、不問に付すのではなく。
悪いことをしたその罰は、誰であろうと受けなければならない。いくら劉玄斎やアイナに事情があったとは言え、あくまでも悪事は悪事と言うことであり…
劉玄斎は、ルキの命を奪う悪事に加担した。それは絶対に許される事ではないのだし、アイナにしても彼女を見捨てる事は彼女にとっての罰にはならない。
そう、生還して罪を償わせる事が、ルキの命を犠牲にしようとしたアイナへの罰。
それを、あえて深く言葉にしないことこそがこの場においての砺波

の温情なのだという事を、長い付き合いである劉玄斎もまた理解しているからこそ…逃げるのではなく、まずは現状を整えるために動こうとしているだけなのだろう。
…また、劉玄斎はこの場を後にする前に。
再度遊良へと向かい直したと思うと、そのまま遊良へと向かって再びその口を開いて…

「天城　遊良…すまなかったなぁ、本当に。こんな事、本来なら言う資格なんてねぇんだが…俺を信用してくれて…ありがとうなぁ。」
「…いえ。一応、ルキも無事でしたし…それに、最後に貴方が来てくれなかったら、俺達全員助かりませんでした。…だから…ありがとう、ございました。」
「…クハハ、敵に『ありがとう』はねぇだろ?…けど…あぁ、本当に……済まなかったなぁ…」

果たして…
いつもと変わらぬ『逆鱗』の重々しい声の、その重みの中にどこかくぐもったモノが混ざっている事に…遊良は、気がついただろうか。
…敵であったはずの、【紫影】の悪事に加担したはずの、そんな敵である劉玄斎を信用しただけではなく、『礼』まで言う遊良の気持ちは、きっと誰にも理解できるはずの無い遊良だけの感情ではあるものの…
それでも、遊良からの『礼』を聞いた瞬間に、劉玄斎はどこか感極まっているかのような言葉が漏れだし…

そのまま…

会話を終えた劉玄斎は、アイナを抱えて静かに山を降りていく。

そんな劉玄斎の姿を…
遊良は、ただ静かに見ていたのだった―

―…

「…そうだ、あの、砺波先生。」
「はい、何ですか？」

劉玄斎が山を降りていってすぐ。
一瞬の安堵の空気から一転。『何か』重要なコトを思い出したかのようにして、砺波へと声をかけた遊良。

「皆が付けてるこのリアル・ダメージルールの装置なんですけど…【紫影】の奴が、この装置のコントロールは自分が握っているって…その気になれば、装着者ごと木っ端微塵に出来るとも…」

少々震える声でそう話す遊良が伝えるのは、大空洞で【紫影】と対峙した時にあの捻じれた男が告げてきた、学生たちにとっての恐怖の事実。
そう、デュエルに連動して起こる電流を、あの捻じれた男は自らの意思で自在に操ったのだ。それだけではなく、あの屑は人を爆破するという狂気を、恍惚の表情で遊良へと押し付けてきて…
…【紫影】がリアルダメージ装置を操るのを、遊良は実際に喰らったからこその焦り。
あの狂気に満ちた捻じれた男なら、本気でソレをやりかねないという危機感から…遊良は少々焦りを含ませながら、砺波へとその事実を告げ…

「…ふむ。」

しかし…

遊良から、衝撃の事実を明かされたと言うのにも関わらず。
砺波は悠然と落ち着き払い、まるで危機感を感じていないかのような雰囲気を醸し出しているではないか。
それはまさか、自分はその装置をつけていないからどうでもいい…
などと砺波が言うわけが無いことくらい、遊良にだって始めからわかってはいるものの…

「嘘ですね。」
「…え？」

遊良の浮かべる焦りと不安を、一蹴するかのごとく淡々とそう告げた砺波。
それは狂気に塗れた【紫影】と言う、あの捻じれた男を遊良よりも理解しているからこその言葉でもあり…

「【紫影】の屑が学生達を木っ端微塵にするつもりなら、もっと早くやっている。それこそ、世界中の注目が最も集まっている時…開戦の瞬間にでも、中継の前で高笑いしながら一斉に学生達を爆破するでしょう。…あの男はそういう奴です。」
「う、嘘？…だって、【紫影】のあの雰囲気は…俺も実際にこの目で…」
「真に受ける必要などありません。あの屑の言動、行動、その全てが『嘘』の塊。奴の行動は全てがペテン、きっと何かトリックがあるんでしょう。確かに奴は【王者】に匹敵する実力を持ってはいますが…その精神は劣悪そのモノ。人の死を持て遊び、血の雨に打たれて快感を得るような…我々には理解できない、あの屑はそういう男なんです。」
「…く、狂ってる…」

【紫影】の行動、思考…
かつて勃発した表と裏の戦いで、ソレを嫌という程味わった砺波だからこそこれまでの経験から砺波は予測をつけられるのだろう。

…あの男は、命を奪う『脅し』はしない。ただ無慈悲に、己の快楽の為に、ただ他人を絶望させる為に、命をおもちゃにする屑。
ただの狂った、常人には理解できるはずもない…そんな最低最悪の嗜好を持った、屑の中の屑。
…しかし、だからこそ【紫影】が『脅し』でそんな不安感を遊良へと与えてきたという事は、逆に考えれば遊良へと告げた【紫影】の言葉は口八丁の出任せ出鱈目と言うことを、砺波もまたよく理解している。
それ故…いつ爆発するか分からない、目に見えない不安を感じていた教え子へと向かって。
砺波は、ゆっくりと力強い言葉で…

「だから大丈夫、爆破などされません。そもそも、そのリアル・ダメージ装置を手配したのは【決闘世界】の綿貫さん。あの人が手配した物に、そんな爆弾を仕込めるほど…【紫影】に力はありませんよ。」

どこまでも力強い砺波の言葉は、遊良の不安を根こそぎ毟り取ってしまう程に頼もしい代物となりて遊良へと届けられるのか。
そう、今の砺波からの言葉は、何故か理屈抜きに納得してしまえる様な…何か形容し難い『力』のようなモノが宿っているのを、不意に遊良も感じた様子。
…今の砺波がそう言うのならば、きっと大丈夫。
上手く説明など出来はしないが、それを言葉ではなく心で理解できるからこそ。遊良もまた、その言葉を理屈抜きで信じられるような感情を感じ…

「さて、そんな事より…もう行きなさい天城君。君の【決島】はまだ終わってはいません。」
「砺波先生、でも…ルキは…折角の祭典だったのに、【紫影】の所為で失格に…」
「…仕方ないでしょう。いくら高天ヶ原さんが失格になったのが【紫

影】の所為だとは言え、そもそも『何か』が起こったら彼女はすぐに棄権する約束だったのです。それに今の彼女の状態では、とても【決島】を続ける事はできません。」
「…それは…確かに…」
「けれども、君はまだ失格にはなっていない。幸いデュエルドローンの接続を切られていただけで、先ほどの少女とのデュエルも祭典の範囲内…勝敗も公式なモノとして反映されている。【紫影】が何故君も失格にしなかったのかなどわかりませんが…ともかく、君の祭典はまだ続いています。」
「けど、その…【紫影】のことは…もし奴がまた襲ってきたら…」

そんな中。
こんな状態になってしまったルキを見ながらも、遊良に戦いへと戻るように促し始めた砺波　浜臣。
…それは在る意味、どこか非情なモノとなりて遊良の耳へと届けられるのか。
いくらルキの命が助かったとはいえ、こんな『崩壊』しかけているルキを放って戦いに戻れるほど、今の遊良の意識は祭典へは向かえてはいない。
…確かにルキの命は助かり、『逆鱗』の劉玄斎にももう敵意は無くなった。
けれども主犯である【紫影】はどこかへと消えたままなのだから、いくらリアルダメージ装置の爆弾への懸念が消えたとは言え、あの屑がいつまた襲ってくるか分からないのならばまだまだ安心は出来ず…
…裏決闘界の融合帝。かつて【王者】と争ったというだけで、その力の恐ろしさは言うに及ばず。
いくら砺波が元シンクロ王者【白鯨】とは言え、【王者】クラスの敵の存在と言うのはそれだけで恐ろしいというのに…

「大丈夫です。これ以上、【紫影】に好き勝手はさせません。今後は私

が高天ヶ原さんを護衛します。後は【決闘世界】の綿貫さんと協力し、厳戒態勢を敷きましょう。それに…」

しかし…

まだまだ懸念は消えないのだと目で訴えている、一つの修羅場を潜った己の教え子へと向かって。

砺波は、不敵に笑いつつ―

「今の私は誰にも負ける気がしない…そう、釈迦堂や鷹峰を相手にしても…ね。」

「ッ…」

瞬間―

そう、砺波が、遊良へと静かに告げたその瞬間。

…周囲の空気が引き締まり、雄大な大自然が文字通り怯えているかのような気配を広げ始めたのを…その肌で、その毛先で、人間の持つ潜在的な本能の部分で感じとってしまった遊良。

―砺波の放つ雰囲気が、大空洞に入る前と後とはまるで違う。

ざわめく木々を黙らせ、靡く風を静まらせるその存在感。およそ人間が放てるような雰囲気ではないソレは、この世のどんなモノとも比較が出来ないであろう不思議かつ不可思議な代物となりて遊良へと伝わり…

…一体、『逆鱗』と戦った砺波に何があったのだろう。

【王者】であった砺波の力が、人類の到達点である『極』の頂にあった事はもちろん遊良とて分かってはいたものの…
…それでも今の砺波の放つ強さは、シンクロ王者【白鯨】と呼ばれていた彼と比べても比べモノにならない程に『深い』。
今の砺波の雰囲気…
そう、師である【黒翼】や、あの釈迦堂　ランと実際に対峙した事のある遊良だからこそ分かるその違い…

それはまるで、彼等と同じ【化物】のような―

「さぁ、わかったならもう行きなさい。くれぐれも…私と李理事長と獅子原理事長を、クビになんてさせないでくださいよ？」
「…はい、砺波先生。」

今の砺波から放たれる強さの、その『深さ』がまるで違うことをこうして理解出来てしまったのは…
遊良もまた、実力の『壁』を超えたその『先』の地平に辿り着いたからなのか。
『遠すぎて』背中すら見えなかった砺波の『強さ』が、ようやく背中が見えたと思った砺波の『強さ』が…今では『深すぎて』、どの段階に存在しているのかすら分からない。
…今この時…昨年のように、砺波が『敵』でなかった事に遊良がどれだけ安堵を覚えたことか。
…そう、今の砺波が敵に回っていたら、きっと肉片すら残らず消し飛ばされていただろう。
しかし、今では確かな味方となった砺波の存在が、これ程までに遊良に絶対的な安心感を与えているなんて…昨年までの彼らからしたら、絶対に言っても信じられない事。

―【白鯨】がいれば、きっと大丈夫

【紫影】への恐怖など、最早感じていないほどに…【王者】を超えた今の砺波の存在は、最早絶対的な象徴となりて遊良の戦意を復活させるのか。

そうして…

砺波の強さが分からないという、これ以上ないほどに頼もしい恐怖を改めて感じ取り。

これ以上戦いを躊躇うことは、砺波の気遣いを無碍にするという事を心に刻み直した遊良は…

短い言葉で、しかしこれ以上ないほどの信頼を砺波へと預け。

―【決島】を続けるため、この場から勢い良く駆け抜け始めたのだった―

―そして…

『おーっっとぉ!ここで不調だった天城選手のドローンの映像が復活ぅ!しかし随分とボロボロだぁ!一体、映像が途切れている間にどれだけ激しい戦いを行ったんだぁ!?』

接続を斬られていた遊良のデュエルドローンが、その接続を復活させたのか。

突如空から響き渡ったのは、上空を飛ぶヘリから落ちてきた実況の声の大きな塊。

…確かに砺波の言っていた通り、自分はまだ『失格』にはなっていないようだ。
今の実況の声でソレを理解した遊良は、そのまま止まる事無く山の斜面を駆け下りる。
…早く戦いたい。
先ほどまでの、戦いに戻る事を戸惑っていた心はどこへやら。
砺波への絶対的な信頼感のおかげか、今の遊良の心は未だ見ぬ強者との戦いを求め、デュエルに飢えた獣そのモノ。
…アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンとの戦いは、良くも悪くも遊良に与えるモノが大きかった。
それは【黒翼】や【白鯨】などの強者から授けられる『修業』とはまた違う。実力の『壁』を超え、その『先』の地平へと辿り着いた高レベルの相手と…正面から鎬を削ったことで、遊良が『何か』を掴んだからに他ならない。
それ故…良くも悪くも命のやり取りを経て、一つの修羅場を潜った遊良の精神はこれまで以上に自らの力を試したくてウズウズしているのだろう。
『先』の地平に辿り着いたからこそ見える景色…未だ見果てぬ無限の荒野に、彷徨い始めた高揚で今の遊良の心は一杯になっている様子であり…

…山を駆け下り、森を駆け抜け。

その勢いのまま、次なる対戦相手を求めて雑草すら生えぬ荒野にまで到達する遊良。
そして、荒野に立ち入ったその入った瞬間…
一人のデュエリストと、その目を合わせた―

「ほう…お主、天城　遊良だな？…途中経過によれば、先ほどあのアイ先輩を倒したとな…相手にとって不足なし。拙者の糧になってもらうでござる。」

「…拙者？」
「拙者は決闘学園でゅえりあ校3年、決闘順位『5位』のコジロウ・ミヤモトと申す。天城　遊良…アイ先輩を倒したその力、しかと見極めさせてもらおう。拙者とでゅえるでござる。」

お互いに目が合ったその瞬間。
遊良の前に立ちはだかった、特徴的な言葉を使うその男は…まるで刀を抜くような動作と共に、自らのデュエルディスクを展開し始めて。
それは幅の広い唐傘の帽子を被り、水色の長い羽織を肩から提げた…袴を履いたその腰に、『刀の様な得物』に良く似た、よく分からないモノを差した長身の男。
しかし、その特徴的な見た目とは裏腹に。その口から放たれたの『5位』という輝かしい順位が示す通り、彼もまたデュエリア校における強者の一人であるのだろう。
纏う雰囲気は紛れも無く強者のソレ。
間合いに入ったその瞬間に、一太刀で切り裂かれてしまいそうに研ぎ澄まされたその気配を男は放っていて…

「…5位か…相当な強敵ってことだな。いいぜ、デュエルだ。」

しかし…その強者の気配に臆する事無く。
遊良の目もまた、早速出会った強者を前に、嬉々として光を灯し始める。
そう、未だ見ぬ強敵は願ったり叶ったり。
今の自分の力が、今までよりも強くなった自分の力が、『先』に辿り着いた自分の力が、果たしてどれ程の成長を自らに促しているのかを早く遊良は知りたい。
先にデュエルディスクを構えていた、武士のような相手に応じるように。
遊良もまた、武器を構えるようにしてデュエルディスクを展開し…

「行くぞ。」
「あいや、いざ尋常に…」
余計な言葉を挟まず。
【決島】のルールに則り、お互いに出会った相手との戦いへと臨むため…

―デュエル！

―…

「…む？」

島の中心に広がった森を、西に抜けた高い高い丘の上。
そこを、偶然にも通りかかった鷹矢が…
丘の下に広がる荒野で行われていた、一つのデュエルに目を留めたのか。
不意にその場に立ち止まったかと思うと、遠目からではあるもののその戦いへと向かって、鷹の様に鋭い眼を凝らしていた。
…しかし、これまでノンストップで戦いを続けていた鷹矢にしては珍しいその足止め。
他人の戦いには目もくれず、己を高める為だけに【決島】で暴れまわっていた鷹矢が一瞬でも立ち止まる事など丸一日繰り広げられてきたこの祭典でも初めてのことであり…
現在の途中経過でも、４３戦『全勝』を記録してぶっちぎりの一位をキープしている鷹矢がその足を止めることなど、これまで一度も無かったのだ。

とは言え…それは裏を返せば、丘の下の荒野で繰り広げられているその戦いは鷹矢も足を止めて魅入る価値のある戦いであると言うこと。
そう、鷹矢がその足を止めてでも観戦に徹する、その戦い…

「…うむ。ようやくやる気になったようだな、遊良の奴。」

静かな言葉と共に、鷹矢が見下ろしていた…

―そこでは…

「ぬぅ!?天城　遊良！よもやここまでとは!?」
「悪いけど、今は誰にも負ける気がしないんだ！バトル！Ｂｌｏｏ―ＤとＮＥＰＴＵＮＥで２体の【不退の荒武者】に攻撃ぃ！」
「ぶ、ぶるーでぃの所為で【不退の荒武者】の効果が…ぬぁぁぁぁぁぁぁ!?」

あまりに激しい遊良の猛攻。
どう足掻いても止められそうにない、自然災害の如き激動。
…そう、鷹矢がその足を止めてデュエルに魅入ることなど、遊良のデュエル以外に存在せず。
遊良の相手をしている、この決闘学園デュエリア校３年のコジロウ・ミヤモトとて、デュエルランキング第５位の『サムライ』と呼ばれた、ここまで３４戦『全勝』を貫いてきた紛れもない強者であるはずだというのに…
そんな強者すら相手になっていないかのような今の遊良の怒涛の

攻撃は、そっくりそのまま遊良と相手の力量の差となって、容赦なくコジロウ・ミヤモトへと襲い掛かっていて。
そのまま…相手の場に居た【クリムゾン・ブレーダー】を喰らったＢｌｏｏ―Ｄと、攻撃力３３００となった波状の暴君たるＮＥＰＴＵＮＥがその牙を剥き…
―２体の、【不退の荒武者】へと襲い掛かる。

コジロウ・ミヤモト　ＬＰ：４０００→３１００→２２００

そして―

「これで終わりだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

―！

「うぬあぁぁぁぁぁぁぁ!?」

コジロウ・ミヤモト　ＬＰ：２２００→０（―８００）

―ピー…

荒野に鳴り響く無機質な機械音は、新たな地平へと足を踏み入れた遊良へと送られる、高らかに奏でられるファンファーレの如く。
…全てを壊す獣の王。
…他者を圧伏させる運命の英雄。
―そして遊良が新たに従えた、暴君なりし『海の星』。
その３体を場に揃えた遊良の佇まいは、最早学生の域を超えているであろう相当たる雰囲気。
気を失ったコジロウ・ミヤモトの前に堂々と立っている遊良の今の

雰囲気は、昨年度の【決闘祭】よりも更に強くなっているという証明でもあり…
おそらくプロでも大成するのではないかという期待を、このデュエルを見ていた世界中の見えない観客達へと思い知らせていることだろう。
そんな、【決島】が始まる前よりも俄然強くなった遊良の事を…

―丘の上から、鷹矢が見ていた。

「…どうやら、迷いはなくなったようだな遊良。随分とすっきりした顔になったではないか。始まる前とは大違いだ。」
「…あぁ。お前だけを『先』には行かせないって決めたからな。だから思い切り張り合ってやるよ。…悪いけど、優勝は俺が貰う。」
「何を言っておるのだ。俺が居るのにお前が優勝など出来るわけないだろう、遊良の癖に。」
「お前こそ、俺が居るのに優勝なんて出来ると思うなよな、鷹矢の癖に。」
「ふっ…」
「はっ…」

今朝も一緒にいたというのに、どこか久方ぶりに顔を合わせたかのような二人の間だけに流れる…
重く、鋭く、そして冷たい意地を張り合う空気。
…それは、お互いがこれまで以上に強くなったからこそ生み出される、これまで以上に意地を張り合うという彼らなりの感情のぶつけ合いなのだろう。
生まれてからずっと一緒に居た二人なのだ。どちらか片方だけが

『先』に行く事など、遊良も鷹矢も容認など出来るはずがない。
それは子どものような意地の張り合いが、子どもらしからぬ強さの領域にまで達しても変わらない。
遊良が鷹矢の、鷹矢が遊良の強さの領域を、コレまで以上のモノなのだと理解しているからこそ。
いつもの二人の空気感の中に、いつものモノ以上の張り合いの精神が混ざっていると言うことは…きっと、遊良と鷹矢にしかわかるはずもなく。

そうして…

「勝負は明日の決勝だ。俺に負けるまで、負けるのは許さんぞ。」
「その台詞、そっくりそのまま返してやるよ。」
『時間』ではなく、『感情』が久方振りに邂逅したからこそ。
生まれた時からずっと隣に居た二人は、あえて今はお互いに近づく事をせず…
まだ戦う時ではないのだというお互いの感情のルールに則り…

—お互いに背を向けて、この場から立ち去るのだった。

…

「ちょっと待て！そう言えばルキが大変な時に何してたんだよお前は！」
「む？何のことだ…何かあったのか!?詳しく話せ！…ぬぉ!?」

…いや、ソレはソレとして。
先ほど起こった、ルキに関する『非常事態』の共有の為に。
折角の重く鋭い空気から一転。どこか締まらぬ空気感を醸しだしながら、鷹矢は勢い良く丘を駆け下り…
いや、滑り落ちたのだった―

―混戦の終わりは、もう、すぐ…

―…

ｅｐ８３「交錯する過去」

「…戻りました。」

理事長・学長たちの為に特別に作られた、『特別観覧席』のある大型クルーザー。

そこの医療室の、砺波が個人的に雇った信頼をおく医師へとルキを預けた砺波は…長く留守にしていた特別観覧席へと、痛む体を押して戻っていた。

「浜臣！アンタどこ行ってたんだい!?…って、戻ってこないと思ったら何さその有様は？そんなボロボロで一体何してたってのさ！」

「…少々ゴタゴタに巻き込まれましてね。」

「はぁ？…まぁいい。それよりアンタ、随分と勝手な真似してくれるじゃないさ。」

すると、砺波が戻ってきたその瞬間。

サウス校理事長である獅子原　トウコが、攻め寄るようにして砺波へと詰め寄ってきて。

…ソレも当然。普段から規則がどうこう立場があれこれ口煩く言っている砺波が、まさか自らソレを破って長らく席を外していたのだ。

いくら戻ってきた砺波の姿が、激闘をこなしてきたかのような汚れた姿であろうとも…

いつも砺波に色々とぼやかれているトウコからすれば、砺波の自己中心的な立ち振る舞いは相当頭に来ているに違いなく。

しかし…

「失礼、獅子原理事長。お叱りならば後で…。綿貫さん、少々二人で話したい事があるのですが…」

「フォ？なんじゃい藪から棒に。ここで話せんことか？」

「ええ。少々急を要する事態でして…」

怒るトウコを躱しつつ。

部屋の中に入ったかと思うと、そのまま置物のように静かに鎮座していた超巨大決闘者育成機関【決闘世界】最高幹部…『妖怪』と呼ばれる翁、綿貫　景虎へと向かって話しかけた砺波。

…それは砺波の言葉の通り、本当に急を要する緊急の事態。

つい先ほど判明した、イースト校の高天ヶ原　ルキを狙う『敵』の正体…その、３０年以上前に死んだと思われていた性根の腐った捻じれた男に、迅速に対応しなければならないためであり…

急いだ砺波のその態度は、その屑と過去に正面からやり合って、あの男の危険性を痛いほど知っている砺波だからこその焦り。

モタモタしている場合ではないことを、経験から理解しているために。プロ時代からの先輩であるはずのトウコの怒りを他所にしてまでも、綿貫と話を進めようとしているのか。

…けれども、そんな砺波へと向かって。

未だ怒り治まらぬ…いや、こんな態度を取られて治まるはずもない怒りのまま、トウコが後ろから再度砺波へと声をかけてきた。

「おい浜臣、戻ってきて早々それはないんじゃないかい？先ずはアタシたちに一言言うべきことがあるだろう。なぁ木蓮、アンタもそう思うだろ？」

「いえ、私は別に…」

「ほら、木蓮もこう言ってるさね。」

「…人の話を聞かない…」

「…すみませんトウコさん、少々急を要する事でして。」

「なら尚更アタシ達のいる前で説明したらいいさね。随分と立派な言い訳があるみたいだからねぇ。」

「しかし…」

時間をかけている暇は無いというのに、怒りで話しを聞かないトウ

コはどんどんと砺波を追い詰めていく。
まぁ、彼女からしてもこれだけ苛立っていると言うのに、当の砺波は先輩である自分を軽くあしらおうとしているのだから、いくら砺波が元【王者】とは言え後輩に舐められる事が何よりも嫌いなトウコからすれば、砺波の態度はまさに生意気なガキの態度ともとれるのだろう。
…だからこそ、トウコは怒りを収めない。
例え、砺波にどんな理由があろうとも。自分が納得できるような態度を取らない砺波の姿には、トウコとて賛同する事が出来ないのだから。

…そして、そんなトウコの放つ圧力の前では、流石の砺波も沈黙を貫けないのか。

若輩だった過去、トウコに幾度と無く痛い目に遭わされ…もとい、上下関係をきっちりと教えられた砺波からすれば、トウコの怒りをスルーする事はこの世の何よりも怖い事なのだが…
それでも今、『こんな態度』を取っていることでソレを察してくれないトウコの、悪い意味での勘の鈍さには少々砺波も苛立ちを覚えそうになっているのか。

―すると、トウコと砺波の間に割って入るようにして。

綿貫　景虎が、その皺だらけの細腕を伸ばしてトウコを制しつつ。徐に、その髭の奥から言葉を発し始めた。

「まぁまぁ、落ち着かんかいガキ共。…浜臣、ここはトウコちゃんの言う通りじゃろうて。急を要する話なら、尚更この場にいる全員がを共有しておいた方が話が早かろう。」
「ですが…」
「時間をかけている暇などないんじゃろう？お主がここまで切羽詰

まっておるのも珍しいしのぅ…じゃったら、一刻も早く儂らの間で情報共有しておいた方が後手後手にも回らんじゃろ。」
「…」

確かに綿貫の言う通り、迅速な対応が必要なのだとしたら決闘学園の理事長達が揃っているかの場で、全員に相談を持ちかけた方が対応は早いだろう。
しかし、どうにも腑に落ちていない砺波の顔は、言うか言うまいかまだ悩みの中にある様子を見せており…
そう、決闘学園の理事長…決闘界の重鎮とも言える者たちの協力があれば、確かにこの件に対する心持ちも強くなる。
けれども、そんな事は砺波とて最初からわかっていた事であり、それでもなおトウコを無視して綿貫にだけ話を持ちかけたのにも勿論『理由』があるのだ。
…この緊急事態であっても、それでも砺波が綿貫以外には話すのを渋るその理由。
コレを言ったらどうなるのか、ソレが簡単に想像できてしまう砺波は苦い顔を崩さず…

ーけれども、一瞬の後に

もう時間がないのだとして、砺波はどこか意を決したように。
今ゆっくりと、その重たい口を開き…

「…わかりました。トウコさんの居るまでは特に言いたくはなかったのですが…」
「…何さその言い方は。腹立つねぇ、アタシに聞かせたくない事ってのは一体…」
「…【紫影】が現れました。」
「なっ!?」

砺波の口から飛び出した、【紫影】というその名を耳に入れたその瞬間。
…驚きの声と共に、その声とあまりにリンクした驚愕した顔をみせたサウス校理事長、獅子原　トウコ。
それは、彼女が心の底から驚いているのが誰の目にも明らかなほどに…
人間がこれ程までに『驚愕』を表せるのかと思える程の、あまりにあっけに取られていると言える表情だったことだろう。
「【紫影】…裏決闘界の融合帝でしたね。しかし確か、彼は随分と昔に憐造氏や砺波理事長達が…」
「えぇ、当時の【王者】が【紫影】、【白夜】、【黒獣】を倒し、彼らは命を落としたはずでした。しかし私の学園の子が【紫影】と劉玄斎に攫われ…」
「え!?り、劉義兄さんが!?」

そして、トウコとは別のベクトルで更なる驚きを見せたのは…ウエスト校理事長、李　木蓮。
彼もまた、砺波の口から突然放たれた義兄の名に心から驚きを感じてしまったのか。信じられないことを聞いたかの様な表情で、砺波へと詰め寄ってきて…

「ど、どういう事ですか砺波理事長！劉義兄さんが…い、いえ、劉玄斎学長が学生を攫ったと!?な、何かの間違いでしょう!?」
「何やら劉玄斎の方も【紫影】に逆らえない事情があったようですが…私はイースト校の高天ヶ原さんが攫われた為、同じく当校の天城君と共に救出に向かいました。そこで私は劉玄斎と出くわし…奴と戦った…」
「そ、そんな…」
「そして私と劉玄斎が戦っている間に、先に進んだ天城君が【紫影】と対峙したそうです。…【紫影】の事など知らぬはずの彼の口から、【紫

影】と自ら名乗る男が現れたと…その特徴も一致していたことから、先ず間違いありません。」

しかし、淡々と何があったのかを話し始める砺波とは対照的に…

義理とはいえ兄弟として、劉玄斎の事をこの場にいる誰よりも知っている木蓮の表情はみるみると曇っていく。

…どんな理由があれ、劉玄斎が学生を攫ったという事実を木蓮は信じたくないのか。

以前から、義兄の様子がおかしい事を感じていた李　木蓮。その彼の、当たって欲しくない嫌な予感が的中してしまったことは…義弟である彼にとっても、相当ショックなことに違いなく…

すると、少々溜息を吐きながら。

砺波の話を聞いていた綿貫が、やれやれといった様子で。その皺だらけの口を、ゆっくりと開き始めた。

「…やっぱりのぅ。そんな気がしてたんじゃ。」

「綿貫さん、知っていたのですか？【紫影】が生きていた事を…」

「いいや、小龍の裏にいたのが【紫影】と言うのは儂も流石に知らんかった。…けど、最近の小龍の様子がおかしいと、前々から木蓮に相談されとってのぅ…儂の方でもちょこっと調べとったんじゃが、まさかソレが【紫影】の所為じゃったとは…生きておったとはのぅ、あの屑…」

決闘界の重鎮として表と裏の戦争にも深く関わった綿貫も、その口から【紫影】の名を出す度にどこか苦い顔を見せるのは…彼もまた、【紫影】の仕出かした悪行を許していないことの証明。

【紫影】の業…その深さは、到底一人の人間が背負えるモノを超えている。

それは例え、この３０年近くもの間死んだと思われていたからといって…【紫影】への恨みを持つ人間たちが、彼を許しているはずもない。

数え切れない程の人数の命を奪い、それ以上の人間からの恨みを嬉々として嘲笑い…命を命とも思わない、正真正銘真性の屑。

そして…

砺波が先ほど【紫影】の名を出した時から、怖いくらいに静かになったサウス校理事長の獅子原　トウコの方へと向くと…

そこにはー

「…」

「…ト、トウコさん？」

―真顔。

それは、疑う余地の無い程に完璧な『真顔』だった。

まるで死人のように感情の無い、固まったような無表情。

しかしソレは様々な感情がぶつかりすぎて、互いに他の感情を打ち消しあっているからこそ生み出されている複雑怪奇な感情の混成。

…普通であれば、生きている人間がここまで完璧な『真顔』になれることなどありえない。

目を見開き、表情筋が強張り、瞳孔が縮瞳して呼吸が重い、サウス校理事長の獅子原　トウコ。

それでもなおトウコがここまで感情を感情で打ち消しあっているのは、偏に【紫影】という捻れた男がトウコにとっては絶対に無視できない存在という事であり…

…トウコがこうなる事を、砺波は予測していた。

だからこそ綿貫に二人きりで話せないか持ちかけた砺波だというのに、それが叶わず話してしまったことに対して砺波はどう思っているのか。

まぁ、トウコにはいずれバレる事なのだから、こうなるのが遅いか早いかな違いしかないことではあるのだが…

そして、しばしの沈黙の後…

一つの『感情』が勝ったのか。その表情を『真顔』から変化させ始めた獅子原　トウコは、徐にその口を開き始め…

「…ハッ、生きてたのかい、あの屑ヤロー…」

―冷たい

それは、この世のモノとは思えない程に冷たい声だった。

…これは『怨嗟』。それも燃え上がるような復讐心と、凍るような無慈悲が混ざり合って生まれる…純粋なりし憎しみと、純然たりし嫌悪の声。

よもや『烈火』と呼ばれた女性が、こんなにも冷たい声を出せたのか。

あらゆる感情を淘汰した、その純粋なる『怨嗟』のみから発せられた声に…この場に居た砺波も木蓮も、思わず本能的な身震いを感じてしまい…

しかし、そんな弟分達など意に介さず。トウコは更に、言葉を続ける。

「…嬉しいねぇ…憐造に取られた時はあのガキも殺したくなったけど…どうやら、天はアタシにチャンスを与えてくれたようさねぇ…」

「トウコさん…やはり、烈火先輩の仇を…」

「当たり前さ…旦那の仇だ、今度こそ逃がさないさ…【紫影】の屑は…アタシが殺す。」

形容ではない、本当にソレを行いそうなほどに憎悪のこもったトウコの声。
３０年前…そう、『表』と『裏』の戦争時。
『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコの、その夫だった人物…『獅子原　烈火』という男の命を、よもやトウコの目の前で奪い去ったのが裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…その時の光景は、今もなおトウコの目に焼き付いて離れない。いや、忘れたくても絶対に忘れられない光景となりて、トウコの脳裏に深く刻まれているのだ。
…後一歩のところまで追い詰めたはずの、【紫影】の肩に嘲笑われながら…首から上が爆散した夫の姿が―

―獅子原　烈火

それは『烈火』に【白鯨】、【黒翼】や『逆鱗』と言った、今では伝説となっている歴戦の決闘者達がまだルーキーと言われた時代に…
その、ルーキー達の筆頭に立っていた、彼ら歴戦の決闘者達の兄貴分的存在と言える男が、その『獅子原　烈火』という人物であった。
今では『烈火』と呼ばれる女傑、獅子原　トウコが駆る【星態龍】も、元々は彼女の夫である獅子原　烈火が扱っていたモンスター。遥か過去に亡くなった人物であるため、今では獅子原　烈火というプロデュエリストの活躍など覚えている者の方が少ないとは言え…
それでも夫を殺された獅子原　トウコや、『獅子原　烈火』に大恩ある砺波　浜臣やその世代の歴戦の決闘者達からすれば。『獅子原　烈火』の命を奪った【紫影】の事は、絶対に許せるはずもなく。
「しかし【紫影】はどこかへと消えました。島中の監視カメラにも映らないところを見ると、もう島の中には居ないのかも…」

「うむ、儂の敷いた厳戒態勢の網にも引っかからんことを考えると、警備をすり抜けて逃げたと考えるのが妥当かのぅ。…生きておる事が儂らにバレたのに、のうのうと島の中に留まってはおらんじゃろうて。あの屑小僧、昔から逃げ足だけは速かったからのぅ。」
「ハッ、あの屑は見つけ次第、絶対にアタシが殺す。浜臣にジジイ…もし隠したりなんかしたら…アンタらも殺すからね。」
「なんだか…昔のトウコちゃんに戻ってきたのぅ。」
「だからトウコさんには言いたくなかったんです。…ともかく今は祭典の途中。警戒網を広げ【紫影】の捜索を進めますが、【決島】の進行に影響がないよう配慮はいたしましょう。」
「…そうじゃな。子供達とて、【紫影】の屑の所為でせっかくの祭りを止められたかはなかろうて。…トウコちゃんもそれでよかろう?」
「あぁ…」

沸々と蘇る過去の因縁。
その、大人達の過去から続くその憎しみは…この子供達の祭典にはとても似つかわしくない、決して明るみに出てはならない過去の遺物。
それが、その因縁が、今このタイミングで蘇ったこともしかしたら【紫影】の策略なのかもしれない。
そう思えるほどに、そう思ってしまうほどに…過去、【紫影】に苦しめられた大人達の感情は、到底この場ですんなりと収まるような煙管ではないのだ。
…けれども、【紫影】の事はあくまでも砺波達『大人』の世代の問題。
今はあくまでも、子供達が主役の祭典の途中なのだとして…怒りに燃えるトウコを宥めるように、砺波も綿貫も考えられる状況から最善手を導き出そうとしているのか。
それは子ども達にまで余計な負担をかけないよう、ここからは大人達が動くつもりなのだという、絶対的かつ不変的な砺波達大人の意地であって。

「あ、あの、砺波理事長…それより劉義兄さんは今どこに…」
「あぁ、劉玄斎なら…今頃はデュエリア校の生徒を医療棟に運んでいるでしょう。」
「え？」

すると、話が一区切りするまで空気を読んでいた李　木蓮が、ようやく自分の聞きたいことを聞くために砺波へと声をかけてきた。
しかし、砺波からの返答があまりに意外だったのか…砺波の告げた劉玄斎の所在に、どこかあっけにとられている様子を見せ始めたではないか。
…まぁ、義兄が悪行を仕出かして逃げたのではないかという心配をしていた木蓮からしたら、義兄は逃げも隠れもしていない上に砺波がその所在を知っていたのだ。
それ故、【紫影】のこともよく知らず、義兄の真意も不明確となって見通せない木蓮は、何が起こっているのか少々頭が混乱している様子でもあり…
そして、そんな混乱しているウエスト校理事長へと向かって。
イースト校理事長である砺波は、落ち着かせるようにしてゆっくりとその口を開いた。

「心配せずとも劉玄斎は逃げません。…そんなに弱い奴ではありませんからね、あの男は。」
「うむ…それに小龍には、事の次第を聞きださねばならぬしのぅ。とりあえず、処分はその後じゃ。」
「綿貫様、劉義兄さんの処分はいかなるモノに…」
「わからん。けど、何かしらの事情はあったのじゃろうし…そこは儂に任せておけ。悪いようにはせん。」
「ハッ、相変わらず小龍に甘いジジイさね。」
「フォッフォッフォ、皆儂の大事な可愛い子達じゃからのぅ。」

ー…

島の外れ、【決島】の範囲外である、海を背にした高台の上に…急ごしらえで建てられた、その建物はあった。
白を基調とした、清潔さが外観から滲み出ているようなその造り。
急ピッチで建てられたが故に、堅牢とは言い難いものの…それでも、およそ２００人程度なら例え重症でも延命・治療できる用意・設備がしっかりと施された、４階建ての大きな建物。
…そう、ここは【決島】でのリアル・ダメージルールによって、気絶してしまった学生達が運ばれてくる場所。
それ以外にも島中を使ったサバイバルであるために、崖から滑り落ちてしまい怪我をした生徒など…およそデュエルを続けられなくなって、『失格』となった者たちが治療を受けている場所…

ー医療棟

その、４階建ての最上階…まだ誰も搬送されていない、静かで人の居ないその廊下に…

ー決闘学園デュエリア校学長、劉玄斎は居た。

否、劉玄斎だけではない。
アイナを医療班に預け、自らにも治療を受けるように提案してきた医師を無理やり振り切って、少々医師から逃げるように廊下を歩いていた劉玄斎の前には…
…【決島】の参加者ではない、二人の男が居たのだ。
そして、その二人を見た劉玄斎が…どこか懐かしそうに、ゆっくりとその口を開く。

「森神ぃ、一文字ぃ…いぃや、今は…泉と十文字だったか。久しぶりだなぁおぃ。」
「劉玄斎学長、お久しぶりです。」

劉玄斎の言葉に反応した一人の男と、それとは対照的にそっぽを向くように顔を背けている一人の男。
一人はあまりに爽やかな容姿に、透き通るように青い髪がよく映える…穏やかな雰囲気を醸し出す、『清流』の如きデュエリスト。

―プロデュエリスト、『泉　蒼人』

一人は屈強な体つきに。黒い髪を短く切り揃えた…絶対防御と謳われる、『鋼鉄』の如きデュエリスト。

―プロデュエリスト、『十文字　哲』

しかし、昨年度に決闘市の決闘学園を卒業して、今年度からプロとなったはずのこの2人が、一体どうして【決島】の医療棟に来ているのか。
それもデュエリア校の学長である劉玄斎とこんなにも親しく…いや、どこか確執があるような雰囲気ではあるものの、それでも『部外者』であるはずの2人が【決島】に来ていることははっきり言って普通では許されないことだと言うのに。
その理由など、きっとこの場にいる3人にしかわからない事とは言え…

「哲、君も挨拶くらいしなよ。」
「…」
「いや、無理しなくていいぜぇ。いち…いや十文字、お前はまだ、俺を許してはいねぇだろうか…」

「…劉玄斎学長。アイを止めてくれたことは感謝する。アイを…焔の二の舞にしなかったことだけは…」

劉玄斎の言葉に被せるようにして、目線を合わせないようにしながらそう声を発した十文字　哲。

その言葉には、どこか深い悲しみが籠っており…

その悲しみの『理由』を、劉玄斎も知っているからこそ。余計な言葉や慰めなどはかけずに、ただありのままの事実を話す。

「…違うぜ。アイを止めたのは俺じゃねぇ…俺でも刀利でも無理だった。アイを止めたのは…」

「…遊良君ですね。【決島】の経過を見ました。映像はありませんでしたが、遊良君がアイに勝っていましたから。」

「…あぁ。」

「…僕達じゃあ、アイは止まってくれなかった…だから僕らには関係ない、全く関係ない赤の他人がアイを止める必要があった…それもアイを止められるほどの力を持った、そしてアイの『呪い』を全否定出来るような心の持ち主が…」

「…焔の『願い』がアイの『呪い』となってしまった。それを赤の他人に止めてもらうのは…」

「うん、悔しいよね。でもアイを止めてくれたのも遊良君でよかった。…流石は僕の後輩だ、彼には感謝してもしきれないよ。」

彼等の過去に、一体何があったのか。

それはこの場では語られぬ、彼等が中等部の時に経験した『別の誰かの物語』なれど…

彼らの言葉からして、複雑に絡み合い縛られた過去の鎖が、今こうして解放に向かっていると言うことだけは確かな事なのだろう。

「哲…今のアイなら、きっと僕達の声が聞こえているはずだ。アイの

目が覚めたら、君と僕と刀利君と…三人でアイに会いに行こう。焔の最期の言葉が『呪い』になっちゃってたけど…きっと、もう大丈夫だろうから。」

「あぁ、わかっている。」

もうすぐ沈むであろう陽の光が、医療棟の窓から中を照らす。

その光は果たして、過去に縛られた大人達への戒めとなるのか。それとも、過去を乗り越えつつある若者達への祝福となるのか。

窓の外を眺めるようにして、島全体を見通すように放たれた蒼人の視線が【決島】を翔ける…

それは未だ止まぬ後輩達の、終わらぬ戦いの終わりを見据えて。

激闘の終わりは…

もう、すぐ―

―…

ｅｐ８４「混戦終了、美麗のマフィアと蛟の眼」

陽も落ちてきた夕暮れ前。
もうすぐタイムリミットとなる【決島】でも、最後の追い込みにかかったように…コレまで以上の戦いの声が、島中のあちらこちらで叫ばれていた。
開始時に２００人も居た選手達は、現在では決闘市側『３７名』、デュエリア側『３８名』となっており…
―リアル・ダメージルールも相まって、終盤となって既に失格者は『１２５名』。
１日中デュエルを続けるというその過酷さは言うに及ばず。この学生達の激闘は、決闘市とデュエリアの全学生の『頂点』に立つ事の難しさをこれ以上ないくらいにＴＶの前の者達へと見せ付けていたことだろう。
…現在の順位は、イースト校２年の天宮寺　鷹矢が『７５戦全勝』と、序盤からトップをキープしたまま走り続けている。
その下には決闘学園デュエリア校、デュエルランキング第１位の、『ギャンブラー』と呼ばれるリョウ・サエグサが『６９戦全勝』で続き…
そして第３位には、まさかの『Ｅｘ適正』の無いイースト校２年の天城　遊良が『６２戦全勝』と続いていて。
…それは昨年度の遊良の躍進を知らぬ、決闘市以外の世界中の大多数の人間達からしたら信じられない現実の光景。
まさか『Ｅｘ適正』の無い天城　遊良が。【決島】の代表に選ばれたのが不思議だと思っていた天城　遊良が。すぐに無様を晒して『全敗』すると思われていた天城　遊良が。
―よもやここまで『全勝』を貫き、明日の決勝に王手をかけているだなんて。

その下にも『全勝』している者があと1名いるものの、決闘市以外の遊良の力を未だ信じきれていないであろう世界中の者達からすれば…いくら前【紫魔】の甥であったとは言え、Ｅｘ適正の無い天城遊良がこれ程までに快進撃を続けるだなんて心の底から驚いているに違いないことだろう。

…この長い長い【決島】の予選で『全勝』を貫いてきたのはその４名だけ。

この終盤において、ここまで『全勝』を守ってきた者達はケチのつけようのない紛れも無い強者と言うこと。決闘市とデュエリアという世界の中でも有数のデュエル大都市の、その中でも勝ち残ったトップクラスのデュエリストの証であり…

故に…明日の『決勝』へと進む者達は、確実にその『全勝』の者達の中から現れるであろう。

それは最早、【決島】の外から祭典を楽しんでいる見えない観客達の共通認識とも言え、誰もがもうすぐ終了となる【決島】の予選に心躍らせながらその時を待っているのだ。

…しかし、彼等とてまだまだ油断は出来ない。

そう、５位以下では『1敗』の者達が数名おり、その者達もまだまだ上位陣を食ってかかろうと、終了となるその時まで虎視眈々とその牙を潜めているのだ。

既に半数以上の学生が脱落し、『失格』となった現在においても。全勝者以外でもまだ戦いを続けられている者達は、各校の洗練された猛者ばかり。

ソレ故…

タイムリミット、その最後の最後の瞬間まで、誰が勝ち残るのかは

まだ誰にもわからず。最後の最後まで、誰もが明日の決勝を目指して次なる敵を求め島中を駆け巡り続けるのか。

―そんな、終了間際になっても未だ戦い収まらぬ【決島】…

その、少々薄暗くなり始めた森の中で…

「…フゥ…ちょっと疲れたネ。」

たった今一つの戦いを終えたであろう、1人の少女が居た。

…それはおよそ高等部の学生とは思えない程に育っている豊満な肉体を、体のラインを強調させる真っ赤な中華風のドレスで着飾った女生徒。

その金色の龍と鳳凰が刻印されたドレスのスリットから除く太股が、なんとも異性の劣情を煽るであろう…自らの武器をこの歳で熟知しているような、妖艶な色気を醸し出している…

―決闘学園デュエリア校3年、王（ワン）　ミレイ

猛者が集まるデュエリア校の、トップクラスのデュエリスト。

その妖艶な見た目とは裏腹に、あまりに慈悲無きそのデュエルから…『マフィア』と呼ばれ恐れられている、正真正銘の強者の1人。

…まぁ、彼女の父は黒社会の中でもとりわけ凶悪な噂の耐えない『樹龍会』という組織のボスなのだから、その『異名』も形容ではなくホンモノなのだが。

ともかく、そんな確かな強者であるはずの少女はたった今倒して気絶し『失格』となった決闘市の男子生徒を見下ろしながら…とても残念そうな声と共に一つ、その艶やかな唇から熱く濡れた溜息を吐き始めた。

「ハァ…コイツも天城　遊良じゃなかたネ。もう時間無いのニ…」

その艶やかな唇から、確かにイースト校２年の天城　遊良の名を零しながら。吐息一つ、身じろぎ一つ取っても、その一つ一つの動作から限りない色気を醸し出しながら艶かしく悩める様子を見せる王ミレイ。

…それは経験の少ない男ならば、我を忘れて襲い掛かってしまうのではないかと思える程の美しい所作。

誰も見ていない、誰にも見られていないこんな森の中だというのに…一つの動作がこれほどの色気を滲ませているのは紛れも無く、彼女の色気が無意識の動作にまで染み付いているが故のモノなのだろう。

しかしその焦りと共に零された言葉は間違いなく、『全勝者』…その中でも取り分け、天城　遊良を探しているという、個人に焦点を当てているが故の焦りであり…

…とは言え、こんな美女がこれ程までに焦りを魅せているのにも理由がある。

「天宮寺とはもうヤたからデキないシ…リョウとはヤりたくないシ…早く見つけないと予選終わっちゃうネ…」

そう。色気に溢れた吐息を漏らす、慈悲なき『マフィア』と呼ばれるこの王　ミレイも、現在の成績は『６５戦６４勝１敗』という現在５位タイの順位。

それは中盤でのこと…デュエリア校の猛者にふさわしく、それまで全勝を保っていたと言うのに…現在トップを走るイースト校２年、天宮寺　鷹矢と対戦して敗北してしまい、『１敗』となってしまったのだ。

それ故、彼女が明日の決勝へと進む為には『全勝者』を１人でも倒すしか道はないという焦りから、『全勝者』の中でもとりわけ勝てる確率が高いであろう天城　遊良を探しているのだろう。

極上の色気を孕んでいるその艶かしい所作で、悩める様子を隠そう

ともせず。熱く濡れた吐息から、1人の男の名を呟くその姿はとても高等部の学生とは思えぬ…そう、少女とは思えぬ、女性特有の麗しさであって。

そして…

時間的にあと1戦、もしくは2戦すればタイムリミットとなってしまうであろう、予選終了が目に見えて近づいてきた…

―その時だった

「来い！【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！」

考え事をしていたミレイの耳に、突如として近くで行われていたデュエルの声が聞こえてきて。

「Ｂｌｏｏ―Ｄッ!?…【紫魔】のカード…ソレ確か始また時に…」

そして近くで叫ばれたそのモンスターの名を確かに耳にして、ミレイは確かに心臓が跳ね上がる感触を感じたのか。

聞こえたその名は紛れも無く、前【紫魔】の扱っていたエースの名であり…そして【決島】が始まったばかりの時に、何やら実況が騒がしく叫んでいたことを連動的にミレイは思い出し始める。

そう、元とはいえ【王者】のカードであった運命の英雄…

他の誰にも扱う事など出来ないはずのソレを、召喚出来る者など…この【決島】においては、たった一人しか存在しない。

だからこそ…声の聞こえた方向へと、駆け出し始める王　ミレイ。

木々の壁の間をすり抜けるように、そのしなやかな脚で森を駆け…逸る心臓の鼓動と、迫る予選のタイムリミットに追われながら、声の

聞こえる方向へと一目散に足を向かわせる。
…それはもう決勝への進出が絶望的かと思われた矢先に幸運にも飛び込んできた、最初で最後の最大のチャンス。
明日の決勝へと進む為に、ここで目下の標的だった1人の男がこんな近くに居たことに対する高揚と…そして後1戦しか出来ないであろうこの時間ギリギリの場面で、目的の男を誰にも取られないようにするための疾走なのだろう。
そしてミレイの目に、森の中の開けた場所が飛び込んできた…

そこには―

「これでトドメだ！Ｂｌｏｏ―Ｄでダイレクトアタック！鮮血の…ブラッディ・フィニッシュ！」

―！

「うぎゃぁぁぁぁぁぁ!?」

男子生徒　ＬＰ…１５０→０

―ピー…

天に佇む竜頭纏いし、鮮血を降らせる運命の英雄が…圧倒的な存在感を放ちながら、デュエリア校の男子生徒を吹き飛ばす。
それに応じ、森の中に鳴り響いた無機質な機械音と…
リアル・ダメージ装置から放たれた電流が決闘学園デュエリア校２年、デュエルランキング第７位、『エクスキューショナー』の異名を持った男子生徒へと襲い掛かっていた。

「…く…そ…がふっ…」

そんな彼の最後の意識が紡ぐのは、どうにも無念そうな微かな吐息。

…それはもうすぐ予選終了となるこの終盤で気絶し、『失格』となってしまうことへの最後の抵抗なのだろうか。

ここまでの戦いで蓄積したダメージと、最後の運命の英雄の直接攻撃の衝撃によって…その意識を手放してしまい、その場に倒れこんでしまった男子生徒。

弱肉強食の戦いの島における混戦でここまで戦いぬいてきたというのに、この終了間際で気を失ってしまうというのは何事にも変えがたい屈辱だろう。

しかし…弱肉強食の戦いの島では、負けた方が悪い事は言うに及ばず。

そう、正々堂々の戦いで、最後まで立って戦いを続ける事こそが正義という島の掟は決して誰にも覆す事は出来ないのだ。

そして勝ったとは言え、ここまで勝ち残っていた強敵との戦いは…たった今勝利を収めた遊良にも、かなりの疲労を与えたのか。

勝ったというのに、遊良もその表情に確かな疲れを浮かび上がらせながら…

「はぁ、はぁ…つ、強かった…まさか【断頭台の惨劇】があんなに強いなんて…」

たった今終わったばかりだと言うのに、あと少しで首を落とされていたのは自分だったことを思い出すと…己の背筋に、冷たいモノが垂れるのを感じている様子の遊良。

しかし、それもそのはずで…

『エクスキューショナー』…死刑執行人の異名に恥じず、悉く遊良のモンスターを破壊してきたその勢いは、まさにデュエリア校の猛者に相応しい勢いだった。

【悪夢の迷宮】や【イタクァの暴風】を使いこなし、まるで死刑を執行するかのように【断頭台の惨劇】を発動して遊良のモンスターを悉く破壊し…モンスターを展開して攻めようにも悉く阻まれ、その全てを悉く葬られ続けられるという苦しい展開を、遊良は最初から最後まで強いられていたのだから。

だからこそ、まさか遊良も自身が得意としている絶え間ない『全体破壊』が、これ程までに敵にプレッシャーを与え続けるだなんて今更になって思い知ったのか。

それ故…

「…ふぅ…けどもうすぐ終了か。何とか全勝でいられたな。」

1人の強敵とのデュエルを終え、一日中デュエルを続けてきた疲労とも相まって。

遊良も思わず、残り時間と他の選手達の途中経過をデュエルディスクで確認しながら、一つ息を深く吐き、終了間際となったことで少々緊張の糸を緩ませ始め…

…すると、そんな一戦を終えて一息吐いた遊良へと。

後ろから…

ゆっくりと…

「天城　遊良…ネ？フフ…見つけたヨ。」

「ッ!?」

突然背後から声をかけられ、体をビクッと震わせながら。驚いた様子を見せる共に、反射的に声の方へと振り向いた遊良。

…それは緊張の糸が緩みかけた、その一瞬の空気の隙間を狙われた反動か。

狙われた野生の小動物のような警戒心の元に、警戒心を一瞬でＭＡ

Xまで引き上げ…反射的に声の方へと振り向きながら、鋭い眼で声の方を睨みつける。
…しかし突如現れた女性の、そのあまりに特徴的な赤いドレスを眼に映すとすぐにソレが誰であるのか遊良にも検討がついたのか…
遊良は、声の主…背後に突然現れた女性へと向かって、その口を開き…

「…その衣装、【デュエルフェスタ】の映像で見た…確か王(ワン)…」
「王　ミレイ、デュエリア校の3年生アル。終わたばかりで悪いケド、フフ…お姉さんの相手もシて欲しいネ。」
「…」

遊良の警戒心が高まっていることを感じながらも、男の耳を振るわせるような艶やかかつ至極の甘い言葉で…
遊良の視線にわざと入るようにして、ドレスのスリットから美しく伸びた太股をチラつかせるように、デュエルディスクを展開して構え始めた王　ミレイ。
…それは男を惑わせるかのような、欲情煽る艶かしい身じろぎ。
自分の武器を熟知しているが故の、彼女にとっての自然体。そう、戦いはデュエル外でも起こっているが故に…使える武器は使ってこその武器だという事をこの歳で理解しているミレイもまた、これまでの混戦の疲れを感じさせないような演技の元、己の色香を十二分に見せつけながら遊良へと近づいてきて…
…こんなモノを見せ付けられては、若さに溢れた男など我を忘れて飛び掛りたくなってしまうだろう。
そう、気の緩みかけた一瞬の隙に、こんなにも欲情駆り立てるような色気を浴びてしまっては…
それほどまでに王　ミレイの放つ色気は男の欲情を掻き立てるモノであり、男女の経験の浅い男ならば己の劣情を少しも我慢できずに放出してしまう事は最早必至。
また、例えその場では飛び掛るのを我慢できたとしても、とても

じゃないがデュエルに集中する事など出来はしないことだろう。

—しかし…

そんな極上の色気に中てられてもなお—

「いいぜ…アンタ、そうとう『ヤる』な?…匂いでわかる…楽しみだ。」

突然背後に現れた、極上の色気を醸しだす、欲情煽る美女に対しても。

緩みかけた緊張の糸を、一瞬で戦闘モードに切り替えつつ…全く『別』の猛りを浮かべ、不敵に遊良は笑うのみ。

それは邪な考えよりも先に、目の前に現れた見るからに『強者』な女生徒との戦いへの気持ちが勝ったのか。まるで男の本能よりも、決闘者としての本能が勝っていると言わんばかりの…戦意に満ちた強者の眼。

そう、よほど女に慣れているか、特殊な性癖を持つ者以外は逆らえぬはずの王　ミレイの、その極上の色気に中てられても遊良は惑わされることなく…

発情期の猿のような猛りより、目の前の強者とのデュエルの方が大事なのだといわんばかりの…男も女も関係なく、本能的に強者との戦いを求めている決闘者の猛りでもあって。

「…天宮寺と同じ台詞…天宮寺といいボウヤといい、そんなに女に慣れてるようには見えないノに…まぁいいネ。それならさっさと始めるアル。」

「…鷹矢と戦ったのか?」

「まぁネ。結果は確認してると思うケド…ま、ボウヤの想像通りヨ。天宮寺に負けちゃったカラ、全勝のボウヤ倒して私を決勝にイかせて欲しいアル。」
「…残念だけど、鷹矢が勝ったんなら俺もアンタに負けるつもりはない。行くぜ…」

それ故…ミレイもまた、この若い男に色香が通用しない事を早めに感じ取ったのだろう。
…何故見るからに経験の薄そうな後輩達に、己の色香が通用しないのかなど、今この瞬間には考えるべきではないこと。
その判断を即決できる彼女もまた強者であることなど言うに及ばず…ミレイは早々にその雰囲気を欲情掻き立てる艶かしいモノから、決闘者特有の鋭い戦意へと変え始めるのか。
そんなミレイの強者のオーラに応じるように…遊良もまた、本能的に『勝ち』へと向かうため、勢いよくデュエルディスクを構え…

…おそらくコレが【決島】の予選、その最後となり得るデュエル。

言葉など不要。遊良も、ミレイも、明日の決勝に進む為にお互いに絶対に負けられない。ここまで来て下手な小細工など入らないことを即座に理解した二人もまた、学生の枠に収まらないトップクラスの実力を持っていることの証明であり…
決闘市とデュエリア、双方の学園のトップクラスのデュエリスト。ソレ故、どちらが明日の決勝に進んでも可笑しくはなく。
陽も落ちかけた森の中。そこで強者同士による予選最後の戦いが…

―デュエル!!

今、始まる。
先攻はデュエリア校３年、王　ミレイ。
「ワタシのターン！魔法カード、【ワン・フォー・ワン】発動！手札のモンスター１体捨てて、デッキからレベル１の【ＸＸ―セイバー　レイジグラ】を特殊召喚！」
―！
【ＸＸ―セイバー　レイジグラ】レベル１
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／１０００
デュエルが始まってすぐ。
流れるような所作でミレイが呼び出したのは、妖艶な見た目を持つ彼女とは正反対の見た目をした荒野に生きる荒くれ者の集団…浅緑の皮を全身に纏った、獣戦士の一体であった。
…無論、遊良もデュエリアで行われた祭典、【デュエルフェスタ】の映像からミレイの事も研究した為に、この荒野の戦士集団の事はよく調べてある。
…仲間が仲間を呼ぶ、人と獣と獣人の荒くれ者達。
その荒々しくも猛々しい、猛獣のような戦士たちの強さは…昨年度の【デュエルフェスタ】で、王　ミレイが第三位となったことで証明されている。
「…【Ｘ―セイバー】…」
「フフ…お姉さんが遊んであげるヨ…特殊召喚に成功したレイジグラのモンスター効果！今墓地に捨てタ【ＸＸ―セイバー　フォルトロール】を手札に戻ス！そして【Ｘ―セイバー　エアベルン】を通常召喚シ…場に【Ｘ―セイバー】が２体以上居るカラ、手札から【ＸＸ―セイバー　フォルトロール】を特殊召喚するヨ！レベル６の【ＸＸ―セイバー　フォルトロール】に、レベル３の【Ｘ―セイバー　エアベル

ン】をチューニング！」

流れるようなミレイの展開、次々に現れる荒野の剣士たち。
そのミレイの艶やかな声に応じて、天に飛び上がる剣士の一体と…ソレを追う獣の戦士がその身を３つの光輪に姿を変えるとき、光の柱が森の中に降り注ぐのか。

「砂塵切り裂く勇将ヨ、魔境の大地を切り進メ！シンクロ召喚！」

剣士の呼び声に連なって、更なる強者をシンクロ召喚によって呼び出す【Ｘ―セイバー】の真髄が…

今、ここに―

「来るヨ、レベル９！【ＸＸ―セイバー　ガトムズ】！」

―！

【ＸＸ―セイバー　ガトムズ】レベル９
ＡＴＫ／３１００　ＤＥＦ／２６００

現れしは白銀の鎧をその身に纏った、荒野の剣士の最たる剣豪。
巨大なる体躯から繰り出される、大地をも砕くその剣撃で…荒くれ達の頂点に立ち、敵から全てを奪い去る力を秘めた、剛力なりし蛮勇の巨漢。

「ガトムズ!?そいつの効果は確か…」
「そう、ガトムズは相手の手札を奪えるネ！手札から２体目の【ＸＸ―セイバー　フォルトロール】を特殊召喚シ、【ＸＸ―セイバー　ガトムズ】のモンスター効果！場の【ＸＸ―セイバー　レイジグラ】をリリースしテ…お前の手札を一枚墓地に送るアル！まだヨ！フォルトロー

ルの効果発動！墓地からレイジグラを特殊召喚して、レイジグラの効果で墓地のフォルトロールを手札に戻すアル！そのままガトムズの効果で、場のフォルトロールをリリースして…お前の手札を更に奪ウ！」

「くっ…」

「まだまだ安心出来ないヨ？手札からフォルトロール特殊召喚シテ、レイジグラをリリースして再びガトムズのモンスター効果発動！相手から手札を1枚奪ウ！更に今特殊召喚したフォルトロールはもう一度効果を使えるネ！墓地からレイジグラを特殊召喚！その効果で、墓地からフォルトロールを手札に戻ス！」

そして…

まだデュエルは始まったばかりで、まだ先攻のミレイのターンだと言うのにも関わらず。

ミレイの流れるような展開はどこまでも止まることなく、容赦なく遊良の手札を奪い続けていくではないか。

…現れては消え、消えては現れる荒野の剣士たち。

普通であれば、相手の手札を奪いながらこれだけの展開を行えば、どこかで必ず手が切れてしまうはずだと言うのに…それでもミレイは全く息切れする気配を見せず、荒野の剣士たちの効果は噛み合い続けていて。

そう…場も、手札も、墓地も。

その合計枚数が全く変化する事無く、永遠に回り続けられるこの展開は紛れも無く…

「…無限ループか…」

特定のカード同士の効果を、これ以上無い噛み合いで組み合わせたときにのみ発生する、永遠に続く効果の回転。

一度起動すれば、後は永久機関のように延々と効果同士が起動し続ける…永遠に終わらない、完成された一つの戦術。

…しかし、一息に無限ループと言っても実力者同士のデュエルでソレを意図的に狙って、そして実行に移すという事はまず不可能に近いこととも言えるだろうか。
何せ、ソレを行う為には特定のカードを複数枚も組み合わせなければならず、そして相手もまた準備が整うのをじっと待っていてはくれず。
また、あまりに多数のカードをピンポイントで組み合わせなければならない事から、相手の妨害などでループに不具合が生じた場合には、もうその後のデュエルは目も当てられない事になるのだ。
ソレ故…一瞬の隙も許されない強者同士の戦いにおいては、安易にソレを使用することは使用者への命取りにもなりかねないことは言うに及ばず。

…しかし、先攻のターンからソレを臆せず起動して、そして遊良の手札を次々に奪い去っていくその勢いはまさに本物。

そう、一部の例外を除き、デュエルの『要』、デュエリストの『命』とも言われる『手札』を、艶かしく微笑みながら奪い去っていく彼女には…まるで慈悲というモノが無いのかと思える程に、全く持って容赦がないのだ。

だからこそ―

妖艶な見た目と仕草とは裏腹に、相手の全てを奪いつくすようなデュエルを行う彼女の事を、このデュエリアの地はこう呼んで称えている。

―触る事など許されぬ、慈悲無き高嶺のデュエリスト

―決闘学園デュエリア校、デュエルランキング『第2位』…

―『マフィア』

―王（ワン）　ミレイ

「フフ、ボウヤから全部奪てあげるヨ…さぁ、ガトムズの効果発動！フォルトロールをリリースして手札を墓地へ！そして手札からフォルトロールを特殊召喚シテ、ガトムズの効果でレイジグラをリリース！最後の手札も捨てるよろシ！」

「…」

「手札全部無くなてしまたネ？フフ、でもワタシが勝つ為だから許して欲しいネ。フォルトロールの効果で墓地からレイジグラを守備表示で特殊召喚シて、効果で墓地からフォルトロールを手札二…ワタシはコレでターンエンド。」

王　ミレイ　ＬＰ：４０００

手札：5→1枚

場：【ＸＸ―セイバー　レイジグラ】

【ＸＸ―セイバー　フォルトロール】

【ＸＸ―セイバー　ガトムズ】

伏せ：無し

そして…

最初のターンだと言うのに、後攻の遊良の手札を全て奪い去って。

どこまでも無慈悲な微笑みを零しながら、ミレイはそのターンを終え…

「俺のターン、ドロー！」

しかし―

自分のターンを迎える前に、全ての手札を奪われたというのにも関わらず。

自らのターンを迎えたその瞬間に、何の迷いも躊躇いも無く、当然のようにカードをドローした遊良。

普通であれば、手札０からコレだけの大軍を相手にするなど恐怖以外の何物でもないというのに…

そう、手札とは可能性。一部の例外を除いて、抵抗すら許されずにソレを全て奪われれば、残るのは次のドローに全てを賭けなければならないという、絶体絶命の恐怖だけにも関わらず。

「魔法カード、【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側除外して２枚ドローッ！」

「ナッ!?」

それでも当然のようにして、手札が０の状態から、手札を『増やせる』カードを引いた遊良。

即座にソレを発動し、常識的なデッキよりも相当に分厚い自らのデッキを削りながら。０枚だった手札を、突如として２枚にまで増やし始めたではないか。

「続けて【トレード・イン】を発動！【クラッキング・ドラゴン】を捨てて２枚ドロー！更に【貪欲な壷】発動！墓地の【闇の侯爵ベリアル】、【サクリボー】２体、【サイコ・エース】、【鉄鋼装甲虫】をデッキに戻して２枚ドロー！【神獣王バルバロス】を妥協召喚し、魔法カード、【アドバンス・ドロー】発動！バルバロスを墓地に送って２枚ドロー！…よし！【闇の誘惑】を発動だ！２枚ドローして【サクリボー】を除外

！【成金ゴブリン】も発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！」
「ッ…何ネ、コイツ…」
「まだだ！　２枚目の【トレード・イン】を発動！【デモニック・モーター・Ω】を捨てて２枚ドロー！」

しかし、それだけでは終わらない。
手札を増やし始めるその勢いは、とてもじゃないが常人の枠には決して収まらぬ強者の如き怒涛のドローにも見え…
…手札０枚の情況から、ドローフェイズの通常ドローと合わせて既に遊良の手札は３枚。
普通であればありえない。手札を全て奪われた情況から、ここまで怒涛の回転を見せられる者など。手札０枚で自分のターンを迎えたはずの男が、全く恐れも無く自らのデッキを回転させている光景など。
だからこそ、確かに手札を全て奪ったはずだと言うのに、次々にドローを繰り返して手札を増やし始める遊良のデッキの回転に…
演技ではなく、心からの驚きを感じている様子をミレイは見せていて…

「よし！俺は墓地から【神獣王バルバロス】と【クラッキング・ドラゴン】を除外！来い、レベル８！【獣神機王バルバロスＵｒ】！」

―！

【獣神機王バルバロスＵｒ】レベル８
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／１２００

そうして場に響き渡ったのは、機鉄の鎧をその身に纏った…神をも撃ち抜く獣の王の、猛々しく轟く力の咆哮。
…遊良が新たに得た力の一つ。
立ち塞がりし全ての敵を、正面から吹き飛ばす…純粋なる『力』を

体現した、獣の王の新たなる姿。

「手札０から攻撃力３８００…アイ倒したのはマグレじゃないてコト？」

「まだだ！速攻魔法、【大欲な壷】発動！」

「ッ…まだ引くノ!?」

「あぁ、まだ引くんだ！【サクリボー】、【神獣王バルバロス】、【クラッキング・ドラゴン】をデッキに戻して１枚ドロー！…よし！【死者蘇生】を発動だ！墓地から【デモニック・モーター・Ω】を特殊召喚！」

―！

【デモニック・モーター・Ω】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／　２０００

それだけでは終わらず。
更なるドローで加速して、続けて遊良が呼び出したのは…悪夢の駆動を掻き鳴らす、暴走しかけた悪魔の機械であった。
不気味に立ち上がる蒸気を纏いて、機鉄の獣王と並び立ち…
荒くれ集まる荒野の剣士に、今にも襲い掛からんとしていて…

「【デモニック・モーター・Ω】の効果発動！Ωの攻撃力を１０００アップさせる！…行くぞ、バトルだ！【デモニック・モーター・Ω】でフォルトロールに攻撃！」

―！

ミレイ　ＬＰ：５０００→３６００

そのまま間髪要れず。
暴走しかけた悪魔の機械が、大剣構える剣士をその重量で弾き飛ばすように勢いよく激突して消し飛ばす。
それはまるで戦車…それも重装備に重装備を重ねた、決戦兵器のように巨大化した暴走機械の如く。
それに応じて、大型モンスター同士の戦闘による一撃のダメージに似つかわしくない、決して軽くないダメージがミレイを襲い…リアル・ダメージ装置から発せられた電流がミレイのしなやかな体を駆け巡り始めたではないか。

「クゥッ…何てデタラメな奴アル…リョウといい勝負ヨ…」
「まだだ！バルバロスＵｒでガトムズに攻撃！天蓋の粉砕…ディナイアー・ブラスター！」

―！

しかし、怯んだミレイを意に介さず。
連撃の如く遊良の叫びと共に放たれた、神をも撃ち抜く獣王の一撃が白銀の鎧を撃ち抜き…そのまま巨大なる大剣ごと、一撃の下に荒野の剣豪を消し飛ばす。
…ダメージは受けないとはいえ、エースであった攻撃力３１００のガトムズがこうも簡単に撃破されるだなんて。
よもや手札も場も何もかも圧倒的だったはずのアドバンテージが、たった一枚のドローからこうも簡単にひっくり返されていくこの光景は…『マフィア』と呼ばれるミレイからしても、限りなく想定外だったに違いない。
…天城　遊良がアイナを倒したという、その途中経過を見た時点ではミレイとてまだまだ遊良の力を信じきれてはいなかった。

何せアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンは、曲がりなりにも昨年度の【デュエルフェスタ】の優勝者。
その功績だけでアイナの実力がこのデュエリアの中でも最上位に位置することはミレイとて認めているのだし、ミレイからしてみれば中等部の時から先輩であるアイナの力は嫌と言うほど見せ付けられて来ているのだ。
…何せ、中等部の時から数々の伝説を残している、一つ上の代の『森神一派』…その紅一点として名を馳せていたアイナの力は、『事情』があるとは言え今でもデュエリア校の最上位に位置していることは言うに及ばず…
それ故…そんなアイナを倒したのが、まさかの『Ｅｘ適正』の無い天城　遊良だったという事実を…
ミレイもにわかには信じられず…

しかし―

「バトルフェイズを終了し、魔法カード、【アドバンスドロー】発動。【デモニック・モーター・Ω】を墓地に送って２枚ドロー。俺はカードを２枚伏せて、ターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：４０００
手札：１→０
場：【獣神機王バルバロスＵｒ】
伏せ：２枚

ミレイだけではなく、『Ｅｘ適正』の無い天城　遊良がデュエリア校の猛者をこうも圧倒している事に、この戦いを見ている世界中の観客達が度肝を抜かれている中。
その存在感からして、圧倒的強者のような雰囲気を纏ったまま…
遊良は今、堂々とそのターンを終え…

―…

「…天宮寺　鷹矢。」
「…む？」

夕日が波に反射した、潮風が吹く浜辺でのこと。
ここまで全勝を貫き、今も1人のデュエリストを倒したばかりの鷹矢へと…
1人の女生徒が、波風に掻き消されそうな声と共に、静かに声をかけてきた。
それは夕日に煌く白い髪が麗しく揺れる、儚くも気怠げな雰囲気を醸しだした1人の女生徒。
融合の『Ｅｘ適正』を持つ、昨年度【決闘祭】のベスト8であり…今年度からプロデュエリストとなった、竜胆　大蛇を兄に持つ、決闘市が誇る猛者の1人。

―決闘学園ウエスト校3年、竜胆　ミズチ

「…【黒翼】の孫…見つけたわ、貴方を探していたの。」
「その言われ方は好きではないのだが…貴様は確かウエスト校の…そうだ、大馬鹿者の妹だったな。俺を探していたとはどういうことだ？」
「…明日の決勝に進む為に全勝してる選手を倒さなくちゃいけなく

て。…天城　遊良より、貴方と戦った方が勝てると思ったから。」
「む…」

しかし突然現れ、そして少々引っかかりを覚えるような台詞と共に…鷹矢へと向かって、そう気怠げに言葉を述べた竜胆　ミズチ。
そのミズチの放った少々ひっかかりを覚えるその物言いには、鷹矢もまたその鉄仮面のような無表情の上に、ほんの少しだけ眉を潜めたかのような雰囲気を醸し出し始めるのか。

そう…この女は、遊良よりも自分の方が倒しやすいと…自分よりも、遊良の方が『上』だと、恐れも無くそう言ったのだ。

…果たして、ミズチの言葉は単なる煽りか、それとも本気でそう思っているのか。
そんなことは鷹矢には分からないものの、それでも遊良と比べられて、そして遊良よりも『下』に見られて黙っていられるほど…ここまで勝率1位をキープしてきた鷹矢の自尊心は決して軽くなく。
…そのまま、売られた喧嘩を買うように。
鷹矢は目の前の現れた、この白髪で気怠げな儚い少女へと向かって。少々イラつきを感じたように、低い声で言葉を返し始める。

「いい度胸だ、俺を遊良の奴よりも下に見るとは。よほど俺を怒らせたいらしい。」
「…そう、天宮寺　鷹矢…貴方、自分で気付いていないのね。…自分の持っているモノに…それとも、わざと気付かないようにしてる？」
「空港の時といい今といい、一体何を言っているのだ貴様は。…まぁいい。俺もちょうど最後の相手を探してたのだ。匂いで分かるぞ、貴様も相当の実力を持っていると言うことを。」
「…私も見えるわ。貴方、また『増え』てる…」
「またわけの分からん事を…」

会話を交わしているというのに、まるでミズチとは交わす言語が異なっているのではないかと錯覚するほどに…鷹矢とミズチのその会話は、全くと言っていい程噛み合わず。

…喧嘩を売られたように感じている鷹矢と、自分の言葉だけを淡々と述べるミズチ。

一体、ミズチの持つ『見通す目』には、鷹矢の『何』が見えているのだろうか。ソレを鷹矢が理解していなくともお構いなく、ただ単々と静かに言葉を紡ぐミズチはどこまでもその儚げな雰囲気を崩す事無く。ただ、鷹矢へと向かい合っているだけであり…

…しかし、会話は交わせなくともお互いにやるべき事は同じであるが故に、言葉を紡ぎながらでも二人の動作は一致しているのか。

…そう、お互いにデュエリスト同士なのだから、この終了間際に邂逅したとしてもやるべき事は唯一つ。

お互いがお互いの強さを、言葉にせずとも感じ取っているからこそ。これ以上余計な言葉を挟む事無く、鷹矢とミズチはお互いに自らのデュエルディスクを構え始め…

「貴様ほどの相手ならば予選を締めくくるに相応しい。俺を遊良よりも下に見たことを後悔させてやる。…ゆくぞ。」

「…ええ。」

激闘が綴られた【決島】の、その最後となるであろうデュエルが…

—デュエル！

今、始まる。

先攻はイースト校２年、天宮寺　鷹矢。

「俺のターン！【ブリキンギョ】を通常召喚！その効果で【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚し、ゴールドの効果で【シルバー・ガジェット】を、シルバーの効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚する！来い、ガジェット達！」

―!!!!

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００
【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

開始早々。
ブリキの金魚から始まった効果の連鎖で、お得意のガジェットモンスター達を含めて実に４体ものモンスターを場に揃えた鷹矢。
…それはあまりに迅速なる、鷹矢のいつもの華麗なる展開。
どんな時でも変わらない、彼の立ち振る舞いをそのままに。まだ始まったばかりだというのに、手札を使いきらんとする勢いを見せ付けながら…
鷹矢のデュエルの始まりを飾る歯車達が、目の前の儚げな少女へと向かって勇み佇んでいる。

「そしてグリーンの効果でデッキから【レッド・ガジェット】を手札に加える！…ゆくぞ！レベル４のゴールドとシルバー、２体のガジェットでオーバーレイ！」

そして間髪入れずに。

銀河を生み出す高らかなる宣言を、鷹矢は天に向かって叫びだす。

…レベル４のモンスターが、２体。

そう、己の持つ、エクシーズのＥｘ適正の赴くままに。

エクシーズ名家、天宮寺一族の名の下に…鷹矢は、早々に手札も整えそのまま手を天に掲げ…

「エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！【ギアギガントＸ】！」

―！

【ギアギガントＸ】ランク４

ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

現れしは鷹矢のデュエルの始まりとなる、鋼鉄なりし機械兵。

―唸る豪腕、轟く体躯

いつでも、どんな時も、鷹矢のデュエルはここから始まるのだ。【決島】で数多の戦いを駆け抜けてきたことも相まって、その駆動音からもどこか微かなる歴戦を感じさせていて。

「まだだ！続けて【ブリキンギョ】と【グリーン・ガジェット】でオーバレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ギアギガントＸ】！そして【ギアギガントＸ】２体の効果発動！オーバーレイユニットを一つずつ使い、デッキから２体目の【ゴールド・ガジェット】と【シルバー・ガジェット】を手札に加える！更に【アイアンドロー】を発動！俺はこのターン、後１度しか特殊召喚出来なくなる代わりに２枚ドロー！【エクシーズ・ギフト】も発動！２体の【ギアギガントＸ】のオーバレ

イユニットを一つずつ使い更に2枚ドロー！…うむ！俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：5→4枚
場：【ギアギガントＸ】
【ギアギガントＸ】
伏せ：2枚

そして…
ドローフェイズの無い先攻だと言うのにも関わらず、まさかの手札を増やしながら展開を見せ付けた鷹矢はまさに磐石の態勢を整えながら。
いつものように、あまりに堂々としたその立ち姿を相手へと見せつけつつ…今、あまりに堂々とそのターンを終えた。

「…私のターン、ドロー。」

しかし磐石の態勢を整えた鷹矢に、全く臆することもなく。
海風に掻き消されそうなほどに儚げな声と共に、淡々とカードをドローしたミズチ。
…それは今にも消えてしまいそうな、海に溶けてしまいそうな儚い雰囲気。
けれどもデュエルディスクを構える彼女の存在感は、そのあまりに儚い雰囲気とは裏腹に竜胆　ミズチという女性を確かに『ここ』に刻んでいるという…矛盾しつつも絶対的な、確かなる強者の証でもあるのか。
…そう、儚げで気怠げに見えるとはいえ、彼女もこれまで【決島】で失格することなく戦い続けてきた、紛れも無い猛者の一人。
その力がホンモノだと言うことは彼女の戦績が証明しており、ミズチはそのまま鷹矢を相手に手札を見据えながら…

その儚くも麗しきその細い指で、手札から一枚のカードを取ると…

「…私は魔法カード、【捕食活動】を発動。手札から【捕食植物サンデウ・キンジー】を特殊召喚。」

―！

【捕食植物サンデウ・キンジー】レベル２
ＡＴＫ／ ６００ ＤＥＦ／ ２００

ミズチの呼び声と共に、彼女の場には意思を持った一本の野草が姿を現した。

それは草花だというのに、四肢を得たことで自らの意思で獲物を捕食できる様になった…地を這う獣の姿を模した、捕食する側の毒持つ獣草。

そして…

「…その後、【捕食活動】の効果でデッキから【捕食計画】を手札に加える。更に【捕食植物スピノ・ディオネア】を通常召喚。…その効果で、【ギアギガントX】の片方に捕食カウンターを一つ乗せる。」

「捕食カウンター…レベルを強制的に変動させる効果か。だがエクシーズモンスターはレベルを持たない。」

「…それはいいの。サンデウ・キンジーが場に居る時、捕食カウンターが乗っているモンスターは闇属性になる。…サンデウ・キンジーの効果発動。私はサンデウ・キンジーと…貴方の場の、捕食カウンターの乗った方の【ギアギガントX】を融合。」

「む!?」

―淡々と。

モンスターを呼び出しつつ、どこまでも気怠げな声のまま。さも当然のようにして、当然の事ではない宣言を下した竜胆　ミズチ。

そう…ミズチはたった今、さも当然のようにして…鷹矢の場のモンスターをも、融合召喚の素材にすると宣言したのだ。
…それは通常の【融合】の定めに反した、表に抗う裏側の戦術。
今、ミズチの宣言によって…鷹矢の場の鋼鉄の機械兵が、ミズチの草の蜥蜴と共に神秘の渦に吸い込まれていき…

「…融合召喚。レベル７、【捕食植物キメラフレシア】。」

―！

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

現れたのは、凶暴化した毒花の一房。
禍々しく蠢くその姿はまるで人食い花。それも意思を持って巨大化した、獲物を貪り喰らう花の化物が鷹矢へと今にも襲いかからんとしており…
それはいくら鷹矢が勝率１位で、現在トップであろうとも…そう、例え王者【黒翼】の孫であろうとも。
全く恐れる事もなく、ただただ鷹矢へと目掛けて蠢めくのみ。

「俺のモンスターを融合素材にするとは…」
「…バトル。キメラフレシアで【ギアギガントＸ】に攻撃。そして攻撃宣言時に、キメラフレシアの効果で【ギアギガントＸ】の攻撃力を１０００下げて…キメラフレシアの攻撃力を１０００上げる。」
「何!?」

―！

「ぐっ!?」

鷹矢　ＬＰ：４０００→１８００

そして間髪入れず。
実に攻撃力を３５００にまで上昇させた猛り狂う毒花が、その花を瞬間的に巨大化させて襲い掛かった。
そして毒の花粉によって身を蝕まれた鋼鉄の機兵が、成す術なく人食い花に捕食されてその身を粉々に砕かれてしまったではないか。
「…まだ。【捕食植物スピノディオネア】でダイレクトアタック。」

…しかし、それだけでは終わらない。
そう、ミズチの場にはまだ攻撃力１８００の草獣竜の攻撃が残っているのだ。
…鷹矢のＬＰは１８００。スピノディオネアの攻撃力も１８００。
この攻撃を喰らってしまっては、鷹矢のＬＰは綺麗に０を刻む事になり…

「くっ、だがこれ以上好きにはさせん！罠カード、【戦線復帰】発動！墓地から【ゴールド・ガジェット】を守備表示で特殊召喚！そしてゴールドの効果で手札からシルバーを、シルバーの効果でレッドを！それぞれ守備表示で特殊召喚する！来い、ガジェット達！」

―!!!

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【レッド・ガジェット】レベル４

ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００

けれども鷹矢とて、こんなにも簡単にやられるわけにはいかず。【決島】の終盤となっても衰える事無く発揮される、一瞬の判断力と瞬発力。相手のバトルフェイズだというのに、一瞬で３体ものモンスターで壁を作り上げ…ミズチの攻撃を通さぬように、その身を即座に守りにかかるのか。

…それは例え、ミズチが相手モンスターを融合素材とする意表を突いてきたとしても。

ミズチのモンスターの総数を上回る壁を、たった一枚の罠カードから作り上げ。全く動じることもなく、真正面から迎え撃つ。

「そして【レッド・ガジェット】の効果で、デッキから【イエロー・ガジェット】を手札に加える！」

「…守ってくるのはわかってた。じゃあ【シルバー・ガジェット】を攻撃。」

―！

けれども、毒花の侵食もまた止まらず。

捕食者による無慈悲な貪り。ミズチの毒持つ草花の攻撃は、どこまでも容赦の無い土流のように襲いかかるのか。

いくら広い壁を作ったからとはいえ、凶暴化した植物の勢いには鷹矢のガジェットも簡単に蹴散らされていくしかないのだろう。そう、いくら一瞬で広い壁を構築しようとも…それも長くは持たないという事を鷹矢は理解している。

…何せ先程は発揮されなかったものの、ミズチの主力である【捕食植物キメラフレシア】には恐るべき効果が備わっているのだから。

「…バトルフェイズを終了、メインフェイズ２にキメラフレシアの効果を発動するわ。キメラフレシアよりもレベルの低い…レベル４の

【ゴールド・ガジェット】を除外。」
「ぬぅ…」
「…まだ。魔法カード、【置換融合】発動。キメラフレシアとスピノ・ディオネアを融合。…融合召喚、レベル８、【捕食植物ドラゴスタペリア】。」

―！

【捕食植物ドラゴスタペリア】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１９００

また、それだけでは終わらず。
ミズチは２体の毒花たちを再度混ぜ合わせ、更なる大型モンスターを融合召喚し鷹矢へのプレッシャーを強くしていく。
…その呼び声に誘われ、場に現れたのは蠢く竜花。毒の霧にて生育せし、怪しく蠢く竜の花。
その潜在的な恐怖を煽るような鳴き声と姿で、どこまでも怪しく鷹矢を煽る。
そして…

「…私はカードを２枚伏せてターンエンド。」

竜胆　ミズチ　ＬＰ：４０００
手札：６→１枚
場：【捕食植物ドラゴスタペリア】
伏せ：２枚

どこまでも淡々と、どこまでも粛々と。
その白い髪の揺らめきを、優しく吹きぬける潮風に靡かせながら…
ミズチは勝率一位の鷹矢に全く引けを取らぬ佇まいをみせつけつつ、
そのターンを終え…

「俺のターン、ドロー！」
「…このスタンバイフェイズに、墓地の【捕食植物キメラフレシア】の効果発動。…デッキから【再融合】を手札に加える。」
「かまわん！【強欲で貪欲な壷】を発動。デッキを１０枚裏側除外して２枚ドロー。そしてリバースカードオープン！罠カード、【エクシーズ・リボーン】発動！墓地から【ギアギガントＸ】を蘇生し、このカードをオーバーレイユニットにする！そのまま【ギアギガントＸ】の効果はつど…」
「…駄目。ドラゴスタペリアのモンスター効果。【ギアギガントＸ】に捕食カウンターを乗せ、ドラゴスタペリアが居ると相手は発動した効果が全て無効になる。」
「くっ、だったらこうだ！俺は【ゴールド・ガジェット】を通常召喚！そして…」
「…速攻魔法、【捕食生成】発動。手札の【捕食植物セラセニアント】を見せて、【ゴールド・ガジェット】に捕食カウンターを乗せる。」
「ならば【死者蘇生】を発動！墓地から【シルバー・ガジェット】を守備表示で特殊召喚する！特殊召喚成功時にシルバー・ガジェットの…」
「…それも駄目。罠発動、【捕食計画】。デッキから【捕食植物コーディセップス】を墓地に送って、全てのモンスターに捕食カウンターを置く。」
「ぬぅ…」

悉く…
そう、鷹矢の行動の逐一に。
怒涛のように繰り出される鷹矢の動きの、その全てを見据えつつ。次なる行動のその全てを、己が持つ『眼』で見通しているミズチの全く容赦のない封殺が…
『捕食カウンター』という、小さくも足を持ったまるで悪魔の草の種子となりて鷹矢のモンスター達に連続して噛みつき続けているではな

いか。

…それは追撃の展開を許さない、次なる補充も許さない蛟の絞殺。

全く止まらぬ鷹矢のデュエルの、この終わらぬ展開と切れぬ手札の…

その全てをミズチは封じて、封じて封じて封じて封じて全てを封じ続けようとでも語っているのだろうか、

何しろ、鷹矢の行動のその逐一に対してオートと言えるまでの過剰なる反応。いくら彼女が静かに言葉を紡いでいようとも、ただただ淡々と鷹矢の動きに反応し続ける今のミズチの反射はまさしく…そうする事が自然であると言わんばかりの、野生に咲く儚くも美しい一厘の華の揺らめきのようなのだから。

きっと…

激闘が続いた【決島】においても、ここまで鷹矢を封じ込んできたのは鷹矢の戦った中ではミズチだけだろう。

それはこの場の示す通り、ミズチの力が鷹矢にも引けを取らぬ代物であるコトの証明とも言え…その気怠げで儚い雰囲気とは裏腹に、現在勝率1位の鷹矢を相手に全く引けを取らぬその力はまさしく嘘偽りのないホンモノの力といえるのか。

そう、ミズチはただ鷹矢のモンスター効果を封じただけではない。ただ鷹矢の展開を封じたのではない。ただ鷹矢の手札補充を封じただけではない。ただ鷹矢の行動を制限したのではない。

—ミズチの狙いは、その更に先まで見据えていて。

【レッド・ガジェット】レベル4→1

ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００
【ゴールド・ガジェット】レベル４→１
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４→１
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

そう、ミズチはただ鷹矢のモンスターの『効果』を封じただけではない。
…それはランク４のエクシーズモンスターを多用する鷹矢のデュエルでは、絶対に見られないであろう光景。
なんとエクシーズモンスターである【ギアギガントＸ】を除いて、鷹矢のモンスター達のレベルが奇怪な草の種に噛み付かれた所為で全て『１』となってしまったではないか。

「…捕食カウンターが乗ったモンスターのレベルは１になる。…これで、貴方はもうエクシーズ召喚出来ない。」
「ふん、無駄な事を。いくらレベルを変動させても、これだけレベル１のモンスターが場に揃えば…」
「…いいえ、これでいいの。…だって、貴方のＥｘデッキにはランク４のエクシーズモンスターしか居ないから。」
「…なに？」

そして…
あまりに確信を得ているかのような言葉と共に、儚く気怠げな彼女からは想像も出来ない大胆かつ不敵な断言を鷹矢へと放った竜胆ミズチ。
…普通ではれば、エクシーズ召喚を封じるためにはレベルを『変動』させるというより、レベルを『揃えさせない』ようにするのが定石だろう。
何せエクシーズ召喚とは、同じレベルのモンスターを２体以上場に

揃える事が基本的かつ最低限の条件。例えレベルを変動させても、その全てが同じレベルとなってしまえば…その揃ったレベルに応じたランクを持つエクシーズモンスターが、相手のＥｘデッキから現れてしまうのだから。
また、エクシーズの『Ｅｘ適正』を持つデュエリストの大概は、主軸や切り札となるランクのエクシーズモンスターの他にも、様々なランクのエクシーズモンスターをＥｘデッキに揃えているモノ。
…それはどんな場面にも対応出来るようにした、様々な角度からの切り込みを見据えたＥｘデッキの構築理論。
だからこそ、いくら鷹矢のモンスターのレベルを４から変動させたとは言え…それでレベル１のモンスターが３体も場に揃えてしまっては、その策は本末転等となってしまうはずなのだが…

―けれども、たった今ミズチが見通した通り…

「貴様、適当なことを…」
「…適当じゃないわ。私には見えているから、貴方の背負っているモノが…貴方、Ｅｘデッキにランク４しか入れていないのね。」
「…」

…その沈黙が、何よりもミズチの考えを認めている。
そう、普通であればデッキに柔軟性を持たせるために、多彩なランクで構成されたエクシーズの『Ｅｘ適正』を持つデュエリスト達。
しかし、世間が決めたそんな定石に真っ向から反発するかのように…

―鷹矢のＥｘデッキの構築は、たった今ミズチの言った通り。全て『ランク４』のモンスターのみで構築されていたのだ。

…確信を持ったミズチの言葉に、それ以上言葉を続けられぬ鷹矢の視線だけが海岸線に鋭く伸ばされる。
それは鷹矢のＥｘデッキの中身を、全て見通しているかのようなミズチの大胆かつ不敵な華麗なる奇策。しかし、どこか簡単そうにそう告げてくる竜胆　ミズチではあるものの…
普通であれば、常識的な考えを持った者ならば、『眼』を持たぬデュエリストであったならば。世界に轟く王者【黒翼】の、その才覚を受け継いだ天才と名高い『孫』相手に絶対にそんな対策を施すことはないだろう。
何せ歴戦に名を残す、世界最強のエクシーズ使いの…その遺伝子を色濃く受け継いだ、誰もが認める天才がこの天宮寺　鷹矢。
そんな才能と血筋と実力をこれ程までに世界へと向けて見せ付けている、いずれエクシーズ王者を継ぐであろうと思われている天宮寺　鷹矢が。
まさか己のＥｘデッキのカードを、全て『ランク４』のみで構成しているだなんて一体誰が想像できようか。

「…貴方のデュエルは手札も切れない、展開も止まらない、一見完璧に見えるけど…」
「…む？」
「…でも、パターンは同じ。ガジェットで展開して、情況に応じてランク４を出すだけ…。じゃあ、ランク４を出させなければいい。…レベル４のモンスターを揃えさせなければ、貴方はエクシーズ召喚出来なくなる。…後続も止めれば、貴方のメインデッキのモンスターだけじゃ私には勝てない。」
「ぬぅ…」

だからこそ…

プロデュエリストを兄に持つとは言え、彼女自身の力も相当たる代物。
ソレをその『眼』で見通して、最低限かつ最大限の封殺で鷹矢を封じ込めようとしているミズチの力は…幾重にも何重にも重ねられた分厚い荊の壁の如く、刺々しさを纏いて鷹矢の前に聳え立っているのだ。
的確に鷹矢のＥｘデッキの構築を見破り、そして鷹矢の行動を封じる策と重ねて、鷹矢のモンスターのレベルを『１』と変えてきたそのあまりに大胆な度胸はこの儚い立ち姿からは想像もできないほどに強く麗しい。
それは、いくら彼女が『竜胆』の娘で、いくら現在では大犯罪者の所為で地に落ちた『名』の持ち主であっても…それは彼女の『兄』が証明しているように、決して嘘のつけようの無い『力』となりてこの場に君臨し続けるのか。
…そう。今の時点でのミズチの成績は、『５７戦５６勝１敗』という『５位』タイという順位。
それは文句のつけようのない、【決島】でも上位に位置している成績であり…最も実力の層が厚いとされているウエスト校でも、彼女がトップの実力を持っていると言うことの証明とも言えるだろう。
…現在勝率トップの天宮寺　鷹矢と比べても、引けを取らぬ実力と才覚。
…ここへきて、この終盤へ来て。
この長い長い混戦の、その最後にまさかここまで天宮寺　鷹矢が苦しめられる事になるだなんて。それはここまで鷹矢のデュエルを中継で観覧してきた世界中の観客達からしても、思いもよらなかった事に違いなく…

「貴様…」

それでも―

「それだけで俺に勝ったつもりか！俺はレベル１となったモンスター３体で…オーバーレイ！」
「…え？」

そんなミズチの封殺に、真っ向から立ち向かうかのように。

―少しの迷いも淀みもなく、天へと向かって高らかに、覇道が如き鷹矢の叫びが木霊する。

驚くミズチを意に介さず。海岸線に響き渡るは、まるで小さい子どもが押さえつけられた事に反抗するかのような…我武者羅なるも我が侭な、癇癪にも似た鷹矢の叫び。
それは己の覇道を邪魔する者を、真正面から弾き飛ばすかの如き激しさ。その激しさを纏いた孤高の叫びが、この海岸線に響き渡り…

「…どうして…Ｅｘデッキにランク１なんて…」
「うるさい！ランク１を持っていないのならば、今ここでランク１を造ればいいだけのことだ！俺の力、俺だけの力、『Ｎｏ．』よ！今この時…この女をも超える力となりて、俺の元に現れろ！俺は３体のモン

スターで、オーバーレイネットワークを構築！」

―オーバーレイネットワークを、構築

それは、およそこの世界のエクシーズ召喚のためのモノではない口上。そう、この世界においては、鷹矢にのみ許されたその宣言の導くままに…

…鷹矢とて自分でも分かっているはず。Ｅｘデッキには、ランク４のエクシーズモンスターしか入っていないというのに。

―しかし、けれども、だからこそ

鷹矢は、自分が持っていない『ランク１』のエクシーズモンスターを、今ここで創り出そうとしているのか。

…それはあまりに無茶な賭け、それはあまりに無謀な狙い。

そう、いくらこれまで姿形を変えてきた『Ｎｏ．』と言えど…ソレらは全て、『ランク４』のエクシーズモンスターであった。

それは鷹矢がランク４を多用している所為か、それとも『Ｎｏ．』にはランク４のエクシーズモンスターしか存在していない所為なのか。そんなコトは、鷹矢にだって分かるはずもないのだが…

…確かに鷹矢の持つエクシーズの『Ｅｘ適正』の宣言によって、３体のレベル１のモンスター達は銀河の渦に吸い込まれはする。

だからと言って、『Ｎｏ．』のカードが今ここで鷹矢の臨む『ランク１』のエクシーズモンスターへと変化するかどうかなんて、鷹矢にだって分からないことなのだ。

このまま鷹矢のＥｘデッキに『ランク１』が居なければ、銀河の渦は弾けても何も起こることはないのだが…

「現れろ、『Ｎｏ．５４』！」

今、この時、この瞬間に。

頭の中に生まれしイメージと、脳裏に浮かび上がってきた『番号』を具現化せんと轟くは、覇道を突き進む鷹矢の咆哮。

―草など燃やし尽くしてくれる。竜など殴り飛ばしてくれる。

一体何が出てくるのかはわからない。どんな効果を持っているのかはわからない。けれども己のイメージを、『白紙』で眠っている『Ｎｏ．』に押し付けるように。

「戦いに飢えた熱き拳よ！勇猛なる心を燃やし、全ての敵を殴り飛ばせ！」

己のＥｘデッキで眠っている、『無』から生まれし『白紙』のカードに強く訴え。

そしてソレに呼応し発光している未だ眠りしその『白紙』は、一体この世界に『何』を産み落とそうとしているのか。

Ｅｘデッキに入っていないはずの、『ランク１』のモンスターを呼び出すための宣言が…

今、ここに―

「来い、ランク１！【Ｎｏ．５４　反骨の闘士ライオンハート】！」

―！

そして―

地に浮かび上がりし銀河の底から、光の爆発と共に爆誕せしは…
金色煌くたてがみ燃やす、灼熱纏いし獅子の闘士であった―
その胸元に『Ｎｏ．』の証とも言える数字…『５４』の定めをその身に刻み、この瞬間に鷹矢の魂に呼応した、誇り高き獅子の雄叫び。
それは燃える炎を拳と化し、その身一つで敵へと向かう…決して退かぬ魂を持った、鷹矢の魂を写し取ったかのようであって。

【Ｎｏ．５４　反骨の闘士ライオンハート】ランク１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　１００

「…ッ、さっきまでランク４だった『Ｎｏ．５２』が、ランク１の『５４』に…貴方、どこまで…」

そんな、突然鷹矢の場に現れた…いや、生み出された『ランク１』のモンスターを見て。
驚くというよりは怪訝な顔を見せ始めた、ウエスト校３年の竜胆ミズチ。
…確かにこの世界では、それまでＥｘデッキに存在していなかったカードが新たに創造されることは極稀にあること。しかし、普通であ

ればそんな低すぎる確率にデュエルの全てを賭けるなど、誰にだって出来るはずがないというのに。
…さりとて、別にルール違反ではない。
デュエル中に、Ｅｘデッキのカードが全く新しい別のカードに進化することだって、この世界には稀にあること。
鷹矢の咆哮に呼応するかのように、デュエルディスクが新たに生み出された『Ｎｏ．５４』に反応していることがその証拠。誰も知らぬ、全く新しいカードであっても…デュエルディスクがそのカードを正規のモノだと言っている限り、ソレは誰にも文句など言えないことなのだ。
そして、ソレはミズチも理解しているからこそ。新たに創造された『Ｎｏ．５４』に…ではなく、ソレを生み出した人物である鷹矢へと向かって…
いや、正確には鷹矢の『背後』を見ながら、どこまでもミズチは怪訝な顔で…

「…どこまで背負い込むつもりなの？」
「意味のわからん事をゴチャゴチャぬかすな！ゆくぞ、バトルだ！ライオンハートで、【捕食植物ドラゴスタペリア】を攻撃！」
「…ッ、攻撃力の低いライオンハートで…」
「かまわん！ライオンハートよ、その草ヘビを殴り飛ばせぇ！」

しかし、ミズチの言葉を遮るように。
…そのまま即座に間髪居れず、鷹矢の叫びが空を切る。
残りＬＰ１８００の鷹矢が、攻撃力１００しかないライオンハートで攻撃力２７００のドラゴスタペリアに突っ込むなど、文字通り自殺行為以外の何物でもないにも関わらず…
全く臆した様子も無くソレを命じる鷹矢と、ソレに応じる『Ｎｏ．』の、その疾走には迷いが無く。そして鷹矢の叫びに呼応して、獅子の闘士はそのまま毒撒き散らす竜の草花へと、熱く燃えるその屈強な足で力強く疾走し始めたではないか。

…燃える拳を振り上げる、走る獅子の拳闘士。
そして獅子の燃える巨大な拳が、下からの軌跡を描いて竜の草花へとぶつかった…

―その時だった

「ここだ！ライオンハートの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、俺が受けるダメージを相手に代わりに与える！」
「…え…」
「喰らえ！気炎万丈！フレア・スマッシュ！」

―！

エクシーズモンスター特有の光の球が、獅子の闘士に吸い込まれたその瞬間。
モンスター同士の戦闘によって、衝撃の波が目に見えるほどの重みとなりて辺りへと広がり…
なんと鷹矢が受けるはずだったソレはそのまま、獅子の雄叫びによって鷹矢ではなくミズチの方へと襲いかかり始めたではないか。
「…ッ、うっ…」
ミズチ　ＬＰ：４０００→１４００
そして突然襲ってきたその衝撃の余波を受け、苦しそうな声と共に

その気怠げな口から儚い吐息を意図せずして漏らしてしまった…ウエスト校３年、竜胆　ミズチ。
…しかし、それも当然だろう。
何せアレだけ展開を止めて、エクシーズ召喚も封じたと思った矢先に…まさかの『ランク１』のエクシーズモンスターをその場で創造させ、そして搦め手を張り巡らした自分に天宮寺　鷹矢は真っ向から向かってきてダメージを与えてきたのだ。
あれだけ張り巡らした策を、こんなにも直線的かつ堂々とした展開と攻撃で打ち破ってくるだなんてミズチからしても予想外だったに違いなく…
「…そんな効果が…攻撃力１００だからおかしいと思ったけど…貴方…迷いがないの？」
「うむ。何が出てくるのかは賭けだったが、上手くいったのならば問題ない。ライオンハートは戦闘では破壊されん。だがドラゴスタペリアが残ってしまったか…俺は【エクシーズ・ギフト】を発動。場にエクシーズモンスターが２体いる為、ライオンハートのオーバーレイユニットを２つ使って２枚ドロー。カードを２枚伏せ、ターンエンドだ。」
鷹矢　ＬＰ：１８００
手札：４→２枚
場：【Ｎｏ．５４　反骨の闘士ライオンハート】
【ギアギガントＸ】
伏せ：２枚
一進一退。
まさに拮抗した実力で、鍔迫り合いが続くこのデュエル。
…攻撃力の低いライオンハートで、そのまま攻撃をしかけてきたことから鷹矢が『何か』を狙っていることはミズチもわかってはいた。
それでもあまりに迷い無く突進してくる鷹矢と、全てを見通すミズ

チの眼を持ってしても何故か見通すことのできなかった『Ｎｏ．』の前では、ミズチとて思わず正面から立ち向かってしまう他なかったのだろう。
…しかし、一体どうして全てを見通す『眼』を持ってしても『Ｎｏ．』の変化…いや、転生、降誕を、ミズチは見通せなかったのか。そんなコトは幾ら考えてもわかるはずもなく、またこれまでの激戦の疲れの上に２６００もの突然のダメージを受けてしまったことはウエスト校でトップの実力を持ったミズチを持ってしても、その儚げな雰囲気をより一層消え入りそうなモノへと変えていて。

「…一体何なの、その『Ｎｏ．』ってカード…見えないし、ランクも変わるなんて…」
「俺もわからん。」
「…そう…変なカードね。…でも、貴方の方がもっと変…あれだけ背負っているのに押し潰されてない…貴方、どこまで強くなるつもり？」
「また意味のわからんことを…だが愚問だな。俺と遊良の先にはまだまだ敵が多い…だから俺は、俺の前に立ち塞がる誰よりも強くなる。」
「…それは…【王者】も？」
「うむ。今は無理だが、いずれはジジイも、そして理事長も超えてやる。誰であろうと、俺と遊良の前に立ち塞がる者は全て倒すのみだ。」
「…そう。」

そんな中…
ミズチの静かな問いに対して恐れもなくそう言い放たれた鷹矢の言葉は、彼の本心から放たれる本気の決意であった。
普通であれば、【黒翼】に【白鯨】…生きた伝説と化している、歴戦に名を残す伝説の【王者】を倒すだなんて、とてもじゃないが恐ろしくて口に出すことなど出来はしないだろう。
何せ並のデュエリストでなくとも、現在のプロのトップランカーでさえもエクシーズ王者【黒翼】との直接対決は避けているのが現代に

起こっている現象なのだ。この現代において現役のプロデュエリストの中でも、既に【黒翼】は最強の代名詞が最も似合うとされていると言うのにも関わらず…

ソレを『出来る』と信じて放つ鷹矢の言葉には、少しの迷いも戸惑いも無く。

それほどまでに鷹矢の言葉は強い意思を纏っており、『今は無理』だと素直に認めつつも、そこで折れずにその夢物語が実現出来てしまいそうだと思ってしまうのは、およそ天宮寺　鷹矢の雰囲気が学生の枠に収まらぬ程のオーラを纏っているからなのだろうか。

…口が裂けても言えるはずが無い。世界最強のエクシーズ使い、王者【黒翼】を『倒す』だなんて。

けれども、今の鷹矢のその言葉が嘘偽り無い、彼の心からの言葉だということは全てを見通す『眼』を持ったミズチでなくとも、例え対峙したのが誰であったとしても強く理解できたに違いない。

だからこそ…

どこまでも不敵に堂々と立つ、鷹矢へと向かって…

「…敵ばかりなのね、貴方の世界は…」

「ふん、遊良の敵は俺の敵だ。ガキの頃にそう決めたからな。…あぁそうだ、敵といえば、遊良とルキを傷つけた【紫影】とやらも倒すべき敵か。」

「…え？」

しかし―

鷹矢が、何気なく『その名』を放ったその瞬間―

―張り詰めた一瞬の静寂が、海岸線を包み込んだ

「…む？」

そして、この唐突に変化した周囲の雰囲気に対し…不思議そうに言葉を持たした鷹矢の声が、あまりに大きく聞こえてしまったのはきっと幻聴などではないはず。

それは波打つ波頭の音が、この海岸線から消え失せた証明。

それは風にざわめく木々の擦れが、無理矢理に張り詰めた所為で止められたことの証明。

先ほどまで、当然のように周囲に溢れていた自然の音が…

自然の音が、消え去った―

「…ッ、この感覚は…」

そして、常人であれば理解する事すら出来ないであろう、本能的な恐怖を覚えるようなこの『静寂』を感じ取って…得体の知れぬこの感覚に対し、思わずその本能的な察知能力を全開にして警戒心を顕にし始めた鷹矢。

それは鷹矢が、この自然の音が消えた『静寂』の感覚を一度感じ取ったことがあるが故の最大限の危機察知能力。

何せ夏休みに一度経験したソレは、鷹矢とて忘れたくとも忘れられない記憶となりて鷹矢の本能に刻まれているのだ。

ソレを全く同じモノではないとはいえ、およそ常人には作り出すことなど出来ないはずのソレによく似た今のこの海岸線の状況は…鷹矢にとっても、無視できる環境などでは断じて無く。

そして、そんな鷹矢の目線の先には…

「…し…え…い…」

その眼を、大きく見開いた…

コレまでの彼女の比ではない雰囲気を纏った、竜胆　ミズチがそこに居た―

「…天宮寺　鷹矢…貴方、今…なんて……【紫影】…って…」

「…う、うむ…何やら、つい先ほど遊良とルキを危険な目に遭わせた奴らしい。どうやら【王者】と同レベルの力を持っているらしいが…」

「…ッ!?つい先ほどって…うそ…だって…しえい…あいつは…ずっと昔に死んだはず…」
「む?…俺だって詳しい事は知らん。だが、この俺の知らぬところで遊良とルキに手を出したらしいのだ。その所為でルキが失格になったとか何とか…確か、捻じれたような男だと遊良の奴が…」
「…ッ!?」

鷹矢が言葉を続けた瞬間、更に大きく見開かれたミズチの眼。
…それは、まるで信じられないモノを聞いたかのよう。それは、まるで信じられない事実を知ってしまったかのよう。
【紫影】の事を影も形も知らぬ、ただ遊良から伝え聞いただけの鷹矢の言葉に…更に素早く反応して、その身を震わせ始めた竜胆　ミズチ。

…今の彼女の様子は明らかにおかしい。

確かにミズチから漂ってくる気配…ソレは憤怒…それも途轍もなく大きく熱い、蛇の執念のような禍々しい憤怒。
それが、対峙しているだけの鷹矢までひしひしと伝わってくるのだ。それはそのまま、【紫影】に対するミズチの憤怒が大きいということなのだが…
しかし鷹矢とて、見た事も無ければ遊良から状況だけを伝え聞いたその【紫影】という何気ない一つの単語を零しただけで、よもやミズチがここまでの憤怒を顕にするだなんて思いもよらなかった事だろう。

…しかし、そんな戸惑いを浮かべている鷹矢を意に介さず。

ミズチはそのまま、憤怒を浮かべたまま…

「…私のターン、ドロー！」

―！

カードをドローしただけなのに、巨大な蛇に睨まれているかのような圧迫感が鷹矢を襲う。

…先ほどまでの、儚く気怠げな雰囲気から一転。

今のミズチが織り成すオーラは、蛙を睨む蛇が如く。圧迫感を周囲へと与える、圧倒的捕食者が獲物を捕らえた、途轍もなく鋭い攻撃性を孕んでいて。

「ぐっ!?な、何だこの女…急に雰囲気が…」

「…しえい…【紫影】…生きてた！…私はスタンバイフェイズに墓地の【捕食植物コーディセップス】の効果発動！コーディセップスを除外し、墓地からスピノ・ディオネアとサンデウ・キンジーを特殊召喚！」

―!!

【捕食植物スピノ・ディオネア】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　０
【捕食植物サンデウ・キンジー】レベル２
ＡＴＫ／　６００　ＤＥＦ／　２００

「…スピノ・ディオネアの効果でライオンハートに捕食カウンターを乗せる！そしてサンデウ・キンジーは融合魔法なしで融合出来るから、私はサンデウ・キンジーとスピノ・ディオネアに…貴方のライオンハートを融合！」

「ぬぅ!?」

そして、即座に。

先程と同じく、鷹矢のモンスターに捕食カウンターを乗せ…そして

鷹矢の『Ｎｏ．』をも喰らいながら、天に出現した神秘の渦に3体のモンスターが巻き込まれていく。

…しかし、それは先程までとは比べ物にならない『闇』が混ざった、憤怒と怨嗟の混沌の渦。

そして【紫影】という単語を聞いて、【紫影】が生きていると知って…押さえきれない感情が溢れる、変貌したミズチの叫びによって…

―なんと彼女のＥｘデッキが強く大きく、そして禍々しく『光り輝き』始めたではないか。

「ぬぅ!?こ、この光は!?」

「…あの男だけは!…禍つ紫影を喰い破り、世界の果てで狂い咲け！融合召喚！」

混沌なりし禍々しい光。

それは新たなカードが、この世界に『創造』されている証の光。

…デュエリストの感情の昂ぶりによって、デュエルの最中に新たなカードが創造されることはこの世界においては極稀にあること。

それは高揚、突破、不屈のような正の感情でも起これば…怨嗟、憤怒、悲嘆といった、負の感情でも起こりえることであり…

―その叫びによって、今この地に狂い咲こうとしているのは一体『何』なのか。

竜胆　ミズチの、押さえきれない怨嗟の叫びが海岸線の果てを切り裂き…

―今、呼び出されしは…

「レベル９、【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】！」

―！

【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】レベル９
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

禍々しい―
それはあまりに禍々しい姿をした、奇怪にうねる三つの茎を持つ…怪しく蠢く毒の草でありつつも、辺り一面に毒の涎を撒き散らす、飢えた牙持つ毒の華竜であった。
…地に根を張る植物だというのに、意思を持って動き獲物を喰らう文字通りの捕食者。
その虚ろな目は本当に見えているのか。双翼に怪しく咲く禍々しい花は、草でありつつ竜であるというその異形をその身一つで体現している…
まさに異質なる雰囲気に塗れた、畏怖すら感じる異端なる重圧。

―また…鷹矢へとプレッシャーを与えているのは三叉の毒花だけではなく…

「…な、なんだ、その眼は…」

鷹矢が見据えるその先に映るは、大きく見開かれた竜胆　ミズチの…その『眼』。

…それは先程までの、儚く気怠げな眼ではない。

大きく大きく見開かれた、獲物を見据えて血走った、細く鋭く縮瞳した…人ならざる異形の眼。

縦に細く長く伸びたその瞳孔は、まるで蛇の眼のよう。

その眼の周囲には、眼を囲うように浮き出た血管が模様を作っており…

そして何よりも異常なのは、周囲は自然の音が消え去って『凪いでいる』にも関わらず。ミズチの白く美しい前髪が彼女のオーラに触れて、怪しく独りでに揺らいでいると言うこと。

「…何なのだいきなり！一体、【紫影】とやらは貴様の何なのだ！」

「…【紫影】…生きてたなんて…絶対に許さない、あの男だけは絶対に！融合召喚成功時、墓地の【捕食計画】を除外して効果発動！【ギアギガントX】を破壊する！」

「くっ、聞く耳持たんか…」

「…まだ！装備魔法、【再融合】発動。ＬＰを８００払って、墓地から【捕食植物キメラフレシア】を蘇生！そして【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】の攻撃力は、捕食カウンターが乗っているモンスターの元々の攻撃力の合計分アップする！」

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】レベル９
ＡＴＫ／３０００→５７００

ミズチ　ＬＰ：１４００→６００

そして…

先程ミズチが張り巡らせた捕食カウンターによって、【捕食植物ドラゴスタペリア】の力が養分となりて毒の華竜へと送られ始める。

その養分によって、みるみるうちに毒の華竜は巨大化していき…

その力は蘇った毒花の一房の不気味さと相まって、鷹矢のＬＰ４００を消し飛ばすには充分過ぎる力となりて鷹矢へとプレッシャーを与えているではないか。

「…バトル！【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】でダイレクトアタック！」

そして…

変貌せしミズチの叫びに、狂いながらも応じるように。

怪しく蠢く毒の草竜が、餌を見つけたかのように叫んだかと思うと…鷹矢を獲物と見定めたのか、毒の涎を零したその瞬間に、両翼の華がコレまで以上に大きく開いていく。

…それは捕食者の狩りの時間。食物連鎖の上位種による、腹を満たすための本能の性。

そのまま、両翼の華の中心に光が集まったかと思うと…

「…狂生の…プレデター・レイ！」

巨大なる毒華の中心から、どうやったって逃げられそうにないほどに太く禍々しい閃光が放たれ…

「やらせるものか！罠カード、【和睦の使者】発動！」
「…ッ、それは哲さんが使ってた…」
「うむ！俺はこのターン、戦闘ダメージを受けない！」

それでも禍々しき毒の閃光が当たる、まさにギリギリ寸前で。
なんと鷹矢の宣言に同調し、絶対不可侵の領域を作り出す集団が現れたかと思うと、そのバリアが一瞬で鷹矢を覆い、華の魔閃光をギリギリで防いだではないか。
…それはその名の通り、あらゆる攻撃から自身を1ターンだけ守る防御の罠。
そう、一撃でＬＰを０にするその閃光が、鷹矢の発動した一枚の罠カードとぶつかったのだ。
しかしバリアと閃光が激しくぶつかり、絶対無敵のはずのバリアに亀裂が生じているその光景は、まさにミズチの一撃が鷹矢を跡形も無く消し飛ばすほどの威力を持っていたということの証明でもあるのだろう。

…閃光が生み出す波動の余波が、鷹矢の頬に鋭く傷を残す。
それ故、一枚の罠でどうにかこのターンを凌いだ鷹矢も、今の一撃には少々肝を冷やした様子を見せており…
「…っ、この女…」
もし鷹矢が先程と同じく、【戦線復帰】で耐えようとすれば…蘇ったキメラフレシアの所為で、一手足りずに鷹矢はこのターンで終わっていた。

ソレを考えると、好敵手とも呼べる十文字　哲に倣って、絶対防御のカードをデッキに仕込んでおいてよかったと…

血が滲む頬を親指で拭いながら、鷹矢もこのギリギリの情況でソレを感じ取っているのか。

「…雰囲気が先程までとは別物だ…ここまでの力を持っていたとは…」

「…貴方にはもう用はないのに。早く天城　遊良のところにいかないと…私はカードを1枚伏せてターンエンド。」

ミズチ　ＬＰ：１４００→６００
手札：3→1枚
場：【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】
【捕食植物ドラゴスタペリア】
【捕食植物キメラフレシア】
魔法・罠：伏せ1枚、【再融合】（キメラフレシア装備中）

「俺のターン、ドロー！罠カード、【戦線復帰】発動！墓地から【シルバー・ガジェット】を蘇生し、その効果で手札から【イエロー・ガジェット】を特殊召喚！グリーンを手札に！」

【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【イエロー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

そしてターンが変わってすぐに。

ミズチの放つ重圧を跳ね返すように、荒々しく2体のモンスターを即座に場に揃えた鷹矢。

…それは先程、行動を悉く止められた鬱憤を晴らしているかの様にも見える展開。ミズチに止められるその前に、何が何でもモンスター

を揃えるという鷹矢の気概。
また、先ほどのターンとは打って変わって。鷹矢の行動に対して、ミズチはまだ動く様子を見せようとはせず…
不気味なほどに静かなミズチのその異形の『眼』が見据えるのは、先の『Ｎｏ.』との攻防で鷹矢のモンスターのレベルを変えても無駄だという事がわかったからなのか…
…そう、鷹矢のモンスターのレベルを変化させても、使い手の叫びに応じたモノとなって場に現れる『Ｎｏ.』。
それを完全に封じる事はミズチの『眼』を持ってしても至難の技であり、ソレこそが鷹矢の強みであると言うことをミズチも認めたからこそ…最善の策をその『眼』で見て、そして反撃する隙を淡々と見極めているかのよう。
だからこそ、彼女が次に取るべき手は…

「ゆくぞ！俺は2体のガジェットでオーバーレイ！天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれ！」

高らかに天に反響せしは、覇道を突き進む男の雄叫び。
祖父である王者【黒翼】から受け継ぎし、世界に轟くその口上とともに…満を持して、己の『切り札』たる黒き翼を、鷹矢は今ここに呼び出そうとしているのか。
…己を舐めたこの女へと、自分を力を思い知らせてやるかのように。
今、銀河の渦がその軌跡を広げていき、その中から竜の咆哮が轟いてきて…

しかし…

「エクシーズ召喚！来い、ランク４！ダーク・リベリオ…」
「…させない！【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】のモンスター効果！エクシーズ召喚を無効にして破壊する！」
「何!?」

―！

銀河の渦が爆発する、まさにその瞬間。
辺り一面に、耳の痛くなる異様で奇怪な咆哮が響いたかと思うと…
なんと鷹矢の場に形勢されていたエクシーズ召喚の為の銀河の渦が、その音波に弾かれて爆散してしまったではないか。
…それは鷹矢のエクシーズ召喚を遮るように、ミズチによって叫ばれた宣言によるもの。
獲物を押さえつける捕食者の咆哮、毒の華竜による無情の制圧。
そう、【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】となるはずだった二つの光の導きが、天に形作る前に霧散してしまったのだ。

「そんな効果が…くそっ！」
「…もう貴方に用は無いの。何もさせない…早くターンエンドして。」
「ぐっ…この女…」

…ミズチがわざわざ鷹矢にレベル４のモンスターを揃えさせたのも、『召喚させない』のではなく『召喚を無効』にして、『切り札』をＥｘデッキから墓地に遅らせる為。
今のミズチの行動からソレを感じ取った鷹矢の額には、掌で弄ばれたことに対する怒りが昇ってきているようにも見え…
そう、召喚を無効にし、そのまま墓地に送ってしまえば…蘇生もできなくなり、Ｅｘデッキにも居なくなるのだから再度召喚することはかなり困難になるという、鷹矢のデュエルの自由を奪う植物の壁。

…今のミズチから放たれる重圧は、先程までの彼女の比ではない。

モンスターのレベルを1にしても意地でもエクシーズ召喚してくる鷹矢の、その世界に轟く『切り札』を封じるための、容赦の無いミズチの一手。

それは元々、かなりの実力を兼ね備えていた竜胆　ミズチが、『何か』のきっかけで己を超えたという…

異形の『眼』を覚醒させた今のミズチの力が、先程の彼女とは比べ物にならない程に飛躍していると言うことであって。

「…天城　遊良から聞いたって言ってたわね。…早く貴方を倒して天城　遊良のところに行かないと…」

「貴様…もう俺に勝ったつもりか！」

「…早く…もし天城　遊良が【紫影】の事を隠したら、倒してでも聞き出さないといけないから…今なら、きっと貴方よりも簡単に倒せると思うし…」

「な…」

もうミズチの眼中には、鷹矢は映っていないのか。

【紫影】と彼女の関係が一体どういったモノなのかなど、鷹矢には到底わかるはずが無いとは言え…

こうも雰囲気を変貌させ、そしてその『眼』を異形のモノへと変化させた今のミズチの力は、紛れも無く実力の『壁』を超えたその『先』の地平にも匹敵していると言えるだろう。

それは、いくらここまで『全勝』を貫き通して1位をキープしてきた鷹矢を持ってしても押さえきれぬ、禍々しくも強き代物でもあり…

しかし…

「ふざけるなぁ！」

――！

自分を見ていないミズチの言葉に反応した、鷹矢の叫びが空を切る。

その怒りに震える鷹矢の叫びは、ミズチの意識を意地でも自分に向けさせてやると言わんばかりの重さを持って、既に自分を見ていないミズチの耳に投げつけられ…

「この俺を！俺を遊良よりも下に見るだけでは飽きたらず！あまつさえ赤の他人が！俺以外の奴が、簡単に遊良を倒すだと!?例え寝言でもそれだけは絶対に許さん！」

ソレと共に海岸線に響くは、ミズチの重圧を押し返す鷹矢の怒号。

…鷹矢にとって、絶対に許せない事が２つある。

一つは、遊良に仇名す者。

幼少の頃、遊良の敵の全てに牙を剥くと決めた鷹矢にとって…幼馴染であり相棒であり、生まれてからずっと共に過ごして来た片割れに害をなそうとする者は絶対に容認など出来ないのだ。

そしてもう一つ…

「遊良は【決島】の頂点の舞台で、この俺と戦うのだ！そうアイツと『約束』した…だから俺以外の者がアイツを…遊良を軽々しく倒せるなどと思い上がるな！【貪欲な壷】発動！墓地のダーク・リベリオン、ラ

イオンハート、ギアギガントＸ２体、シルバー・ガジェットをデッキとＥｘデッキに戻して２枚ドロー！」

…そう。

自分を遊良よりも倒しやすいとぬかしただけでは飽き足らず、自分と並び立つ遊良すらも簡単に倒せると口にしたミズチが、どうしても鷹矢には許せない。

…遊良を馬鹿にされる事は、自分を馬鹿にされている事と同義。

生まれた時からずっと共に過ごしてきて、常に対等に隣に並び立ってきた、己の片割れである遊良を…簡単に倒せるなどと思い上がられる事は、ソレすなわち自分と遊良の交わした『約束』を邪魔する敵であると言うこと。

「【ブリキンギョ】を召喚！その効果で手札から…」

「…無駄！ドラゴスタペリアの効果発動！【ブリキンギョ】に捕食カウンターを乗せて、発動した効果を無効にする！」

「くそっ…だが負けるわけにはいかん！俺を舐め腐り、あまつさえ遊良を簡単に倒せるなどと抜かした貴様には！魔法カード、【アイアンコール】発動！墓地から【ゴールド・ガジェット】を、効果を無効にして特殊召喚！」

…人には、絶対に譲る事が出来ない『モノ』がある。それは例え、他人にとっては『そんなことで』と思うことであっても。

だからこそ、これ程までに変貌したミズチを前にしても、鷹矢がこれ程までに怒っているのはミズチが自分の力を軽く見ているだけでなく、自分と対等の遊良を軽々しく倒すと抜かしたことに対してであり…

ここでミズチが自分と遊良を倒すという事は、勝敗によっては自分か遊良、もしくはどちらも明日の『決勝』へと進めなくなるという事でもあるが為に、鷹矢にはソレが何が何でも許せない。

…鷹矢にとって、遊良と交わした『約束』を邪魔する者は何があっ

ても許せないこと。
それは例え相手が誰であろうと、例え相手が何を思っていようとも。対峙している竜胆　ミズチと、顔も知らぬ【紫影】という敵の因縁など、鷹矢にとっては何の関係も無いこと。
そう、いくらミズチの眼が怨嗟塗れる蛇のような、異形のモノへと変貌しても…そのどれもが鷹矢にとっては関係のないことであり、鷹矢の頭の中にあるのは不遜なる態度を取ってきた竜胆　ミズチを、何が何でも倒すと決めたその意志だけ。

「【モンスタースロット】を発動！レベル４の【ゴールド・ガジェット】を選択し、墓地の【ブリキンギョ】を除外して１枚ドロー！…よし！俺がドローしたのはレベル４の【無限起動ロックアンカー】！ロックアンカーを特殊召喚し、その効果で手札から【グリーン・ガジェット】も特殊召喚！レッドを手札に！」

…そうして。
鷹矢の意思に、デッキが同調するかのようにして。次々に場に現れるは、命を持った機鉄のモンスター達。
何度ミズチに止められても、幾度ミズチに妨害されても。それでも鷹矢の展開は終わる事無く、その意思がデッキに乗り移ったかのように次々にモンスターが揃っていくではないか。

「ゆくぞ！俺はレベル４のゴールドとグリーン…２体のガジェットで、オーバーレイ！」

その異形の『眼』で立ち塞がるミズチを前にしてもなお、決して鷹矢の咆哮も止まらず。
再び２体のレベル４のモンスターが、その身を光に変えて天に舞う。それはまるで、２体のレベル４モンスターを揃える事など、どんな事よりも簡単なのだと言わんばかりの立ち振る舞いとなりて…

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれぇ！」

世界に轟くその口上。
己の身を削ってまで得た、自身にとってたった一枚の『切り札』。
自由に振舞う鷹矢のデュエルの、『砦』となるべく存在を今ここに呼び出すため…
天宮寺一族の筆頭である祖父、王者【黒翼】天宮寺　鷹峰の倣うかのように…

「エクシーズ召喚！ランク４、【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

そして…
天に羽ばたく雄雄しき翼と、全てを切り裂く鋭き牙が夕日の光に輝いて。
遂に場に現れた、世界に知られる王者【黒翼】の…文字通りその『名』となった、天で吼えるは黒翼牙竜。
その佇まいはまさに王の風格。
未だ未熟さを感じさせる鷹矢の場に現れても、その存在感は正真正銘歴戦の代物となりて天に咆哮を轟かせるのか。
ミズチの場で怪しく蠢く、３体の奇怪な植物たちを前にしてもなお。その全てを切り裂かんと、好戦的に叫びを上げていて。

「…【黒翼】…」
「【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】の効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】の攻撃力を半減させ、ダーク・リベリオンの攻撃力に加える！吸い尽くせ、紫電吸雷！」

そうして猛々しく現れた【黒翼】が、その双翼を荒々しく広げる時。
その翼から放たれた紫電の網は、捕食者であるはずの敵を逆に捕食するのだと言わんばかりの勢いを纏いて、毒の華竜へと向かって伸びていく。
…ミズチのＬＰは残り６００。
一撃でいい。とにかく、ミズチのＬＰを削りきるだけの一撃を求めて、必死さに似た諦めの悪い叫びと共に。自分と遊良を舐め腐っている、目の前の異形の眼を持つ少女へと向かって…
どこまでもどこまでも荒々しいまま、鷹矢は力の限りに叫びつづける。

それでも―

「…させない！速攻魔法、【捕食生成】発動！手札のセラセニアントを見せて【黒翼】に捕食カウンターを乗せる！」
「くそっ！これでも届かんのか！」

ミズチとてここで終わるはずもなく。
彼女が発動した悪魔の種子を生み出す一枚の魔法カードによって、なんと【黒翼】の翼にもミズチの放った悪魔の種子が弾丸となりて、勢い良く【黒翼】に噛み付いてしまったではないか。

…それは先程も鷹矢の手を潰す為に使用した、ミズチの妨害のための速攻魔法。
そう、まるで狙い済ましたかのように。ミズチの封殺の手はどこまでもどこまでも鋭い棘となりて、鷹矢の決め手へと悉く突き刺さってくるのだ。
…果たして、ミズチにはこの光景が見えていたのだろうか。そう、どれだけ手を潰しても、どれだけ押し潰しても…それでも諦める事無く向かってくる鷹矢と【黒翼】のその姿が。
そうでなければ、ここまで鷹矢の手を潰す事などできるわけが無い。鷹矢の持つ【黒翼】をこれ程までに封じ、鷹矢相手に勝利を勝ち取れると思う事など、生半可なデュエリストでは到底居るはずも無いのだから。

「…無駄。もう貴方のデュエルは見切ってる。未熟な貴方が【黒翼】を使っても怖くない」
「…なんだと？」
「…『Ｎｏ．』はちょっと予想外だったけど、でも貴方の手札は【レッド・ガジェット】だけ。『Ｎｏ．』がもう出てこないなら…私の勝ちよ。」

…淡々と。
どこまでも淡々としているものの、異質なる覇気を纏いて発せられる、異形の目を持つミズチの言葉。
ミズチが後続を呼ぶロックアンカーを無効化しなかったのは、レベル１のモンスターが２体場に揃うことを嫌ってか。
そう、鷹矢の後ろに見える『何か』を見通しているミズチからすれば、レベル４のモンスターが場に並ぶ事とレベル１のモンスターが場に並ぶ事を天秤にかけたら、何が出てくるか分からないランク１の『Ｎｏ．』よりもランク４の方が対処しやすいと取ったと思われ…
まぁ、そんな事は今この場にいるミズチにしか分からない、デュエルを肌で感じている彼女自身の思考なのだから、どれだけ考察しようと無駄なことではあるのだが。

それでも、その言葉の説得力が相当たる力を持っていると言うことは、この戦いを観覧している世界中の見えない観客達が最も強く感じており…

…何せ、現時点まで７５戦７５勝で勝率１位を突っ走ってきた、王者【黒翼】の孫である天宮寺　鷹矢をここまで押さえ追い詰め押し潰し…そして圧倒している姿を魅せたのは、何を隠そうこのウエスト校３年の竜胆　ミズチただ一人なのだ。

…他の７５人に出来なかった事を、この少女は達成しようとしている。

【王者】の孫が負ける姿。【王者】の『名』が討たれる姿―

ソレが見たい。ソレを見たい。群雄割拠のこの【決島】で、【王者】の血筋を真正面から打ち破る一人の少女の姿を、このデュエルを見ている世界中の観客達が期待していて…

しかし―

「…貴様は先程、俺がランク１を出した時に『迷いは無いの』かと聞いたな？」

「…ええ。」

突然…

そう、他者を圧伏させるような、ミズチの捕食者のオーラを前にし

て。
静かに呟かれた鷹矢の言葉は、どこか先程までの荒々しいモノから一転。声に重みを持たせ、異質な存在となったミズチの耳に無理矢理に届かせるかのようなトーンとなりて…不意に、竜胆　ミズチの耳に届けられ始めたのだ。
…それは先程までの、荒々しい言葉とは真逆、裏腹、正反対。
どこか落ち着きを取り戻したかのような言葉のトーンで、静かに言葉を発し始めた鷹矢のその姿は、まさかこの窮地に追い込まれたことで勝負をもう諦めてしまった…
と言うわけでは、鷹矢に限っては断じてないと言う事だけは確かではあるものの…それでも、どこか追い込まれたことによる精神の乱れを感じさせるような鷹矢の突然の変化は、当然ながらミズチにも多少の警戒を与えており…

「…迷いならば確かにあった。ランク1など出した事もなければ、使おうと思った事もなかったのだからな。」
「…じゃあ、どうして？」
「いい機会だと思ったのだ。…俺は去年の【決闘祭】が終わってからずっと考えていた。俺のデュエルは確かにランク4に頼りきっているが、本当にソレだけでいいのか…と。」
「…」

…けれども、そんなミズチを意に介さず。
鷹矢は淡々と静かに言葉を紡ぎ、その目はどこか遠い場所を見ているだけ。
…搾り出すようなその声は、鷹矢にしては珍しい。
いつも自信満々で不敵な態度で、不遜なる言葉使いで他者を敬わないあの鷹矢の、この搾り出すようなその声は…開始前に大見得を切って、ここまでノンストップで戦いを続けてきて、そして最後の最後でぶつかった窮地に思わず吐露してしまったとも取れる言葉だろう。
それは周囲に『天才』と持て囃され、王者【黒翼】の孫というレッ

テルを貼られ続けてきた鷹矢の、苦悩にも似た心の内だとでも言うのだろうか。

「確かに貴様の言った通りだ。俺のＥｘデッキはランク４のみ。そしてメインデッキのモンスターもレベル４のみ。これでは、貴様にワンパターンと言われても仕方がないだろう。だがこれが俺のスタイルであり、これが俺のデュエルなのだ。今更変える事もできんし、変えるつもりもない。」

「…じゃあ、貴方はここで終わ…」

「しかし！俺とて考えたのだ！このまま変わらなければ、俺はこれから『先』に進む事も難しいと！…だから考えた…考えて考えて…」

…その苦悩を表すかのように、鷹矢の場に居るのは効果を奪われた【黒翼】の他にレベル４とレベル１の２体の機械族だけ。

そもそもレベルがバラバラではエクシーズ召喚は行えず、鷹矢のＥｘデッキにあるのはランク４だけだという事を鑑みると…ミズチの度重なる妨害によって、とうとう鷹矢の万策は尽きてしまったのか。

そんな鷹矢の、鷹矢の搾り出すようなその声に竜胆　ミズチ本人も勝利を確信し…

手を止めてしまった鷹矢の姿を見て、ＴＶの前の誰もが鷹矢の負けを確信し…

「そして、至ったのだ。」

「…え？」

―否

続けて放たれたその声は、万策尽きた声ではない。

「貴様はいいチャンスを与えてくれた。俺の考えていた策を、実行させてくれるいいチャンスを。」

「…チャンス？」

「うむ。夏休みは理事長の所為で大会に出っぱなしだったからな。プロ相手では考えていても実行する暇など与えてはくれん。【決島】でも手ごたえのある者は居たが、やはり試す前に決着が着いてしまうために試す暇も無かった…だが、このデュエルでは貴様の方から俺のモンスターのレベルを変えてくれたのだ。おかげでいい実験が出来た。俺の考えていた事が実現可能だったと言う事を、実戦の中で掴めた事はこの上なく大きい。」

「…私を…利用して…」

「いや、利用ではない。元々俺の中にあった確信が、貴様のおかげで確定となっただけだ。貴様の妨害のおかげだ。ソレがなければ、俺は貴様のような強者相手に意地でもランク４で勝とうと躍起になって…そして負けていただろう。…だから感謝を述べてやる。貴様のおかげで、俺はまだまだ強くなれることがわかったのだからな。」

「…」

それは鷹矢のいつもの声。

…不遜、不敵、不敬、不屈。

ソレを聞いてしまえば、先程までの鷹矢の声も雰囲気も立ち振る舞いも、勝負を諦めた弱者のモノではないとさえ思えてきてしまい…先程の声は、決意を固める前の心の準備をしていた、嵐の前の静けさにも似た声だったのだろうか。

…そう。どれだけの困難を前にしても、どれだけの強敵を前にしても、それでも鷹矢の心は折れず。例え相手が誰であっても、どこまで

も唯我独尊を貫かんとするその姿はまさに天上天下の頂を見据える、孤高を貫く立ち振る舞い。
しかし、それも考えてみれば当たり前か。
何せ、幼少の頃に二人で誓った、遊良との『約束』の実現の前に。鷹矢の心が、折れるはずもなく…

ソレ故―

「…いいだろう！覚えたぞ、竜胆　ミズチ！貴様を大馬鹿者の妹ではなく、1人のデュエリストとしてこの頭に！その貴様に見せてやる！…本来ならば明日の遊良との戦いの為に取っておこうと思っていたのだが…修業で新たに掴んだ、俺の新たなる戦い方を！俺は場の、【無限起動ロックアンカー】の効果発動！」

今までの、ミズチに圧倒されていた鷹矢から一転。
鷹矢の宣言に反応して、ミズチのオーラに押し潰されていた2体の機械族がその身を無理矢理に押し上げ始める。
…そして軋みを上げる空気と大気、ぶつかり合うは蛇と鷹。
ミズチの放つ圧迫を、己の我が侭なるも強靭な自意識のみで押し返そうと叫ぶ鷹矢の猛りが辺りを覆っている捕食者のオーラとぶつかり…
蛇の睨みと鷹の目がその視線を改めて合わせる時、このデュエルが紛れもない『決闘』と変わっていくではないか。
鷹矢の放つ豪の覇気と、ミズチの持つ儚げな雰囲気。その双方の持つモノが激しく押し合いを始めたその瞬間に、周囲の空気が文字通り一触即発の代物へと変わっていき…

「俺はブリキンギョとロックアンカーの…元々のレベルを合成する！」

【無限起動ロックアンカー】レベル４→８
【ブリキンギョ】レベル１（４）→８

「…ッ、レベル４のモンスターがレベル８のモンスターに…レベル８のモンスターが２体…」
「ゆくぞ！俺はレベル８となったモンスター２体で、オーバーレイ！」

そうして…
そのレベルを８と変えた、２体の機械族が天を舞う。
自分自身のデュエルは紛れも無く『コレ』なのだという、その誇りが鷹矢の中に確立されているからこそ…その『先』に進む為に、鷹矢はずっと悩んできた。
ソレ故、今の自分を構築しているデュエルのスタイル、これまで共に戦ってきたデッキの相性、ソレらを今更、根本から変えることなど鷹矢には出来ず。
そう、デッキの中のモンスターのレベルをバラけさせれば、今まで培ってきたスタイルが崩れる。Ｅｘデッキに多様なランクを入れれば、必要な時に手が足りなくなる。
その悩みに、板ばさみにされてきた鷹矢だからこそ…

「…今度はランク８？けど、今『Ｎｏ．』はランク１になってるはずじゃ…」
「いや、これでいいのだ！『Ｎｏ．』はＥｘデッキに戻るたびに白紙に戻る！」
「…白紙!?…嘘、だって５４はまだそこに居…ッ、消えてく!?」
「意味のわからぬ事を何時までも抜かすな！俺の力、俺だけの力、『Ｎｏ．』よ！今この瞬間に……竜胆　ミズチを超える力となれぇ！２体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築！」

―オーバーレイネットワークを、構築
およそこの世界においては、鷹矢にのみ許されたその口上が導くままに。
もし『レベル４』だけを主軸に残したまま、様々なランクのエクシーズ召喚を行う事が出来たら…その時こそ、自分次なる段階に至る事が出来るという、その確信が鷹矢にはあった。
けれども、ただ単に様々なランクのエクシーズモンスターをＥｘデッキに入れてしまっては、肝心な場面で手が足りなくなってしまう事からソレは実現不可能なのではないかという懸念もあった。

…しかし、昨年度に決闘市を襲った『異変』。

その際に紫魔家の者たちの手にあった『闇』を『Ｎｏ．』が喰らったことで、なんと『Ｎｏ．』は再び『白紙』に戻り、そしてその姿をデュエルの度に変化させるようになったのだ。
夏休みの修業中は、レベルの高い大会に出続けだった所為で『試す』暇が無かったが…
先ほどの竜胆　ミズチの『レベル変動』という妨害のおかげで、意図せずソレを『試す』機会が訪れた。そう、『そうしなければ』負けていたあの時点で、鷹矢の元々あった『確信』は紛れも無い『確実』となったのだ。

―ソレが出来ると確定したからこそ、ソレが出来ると確認できたからこそ。

「現れろ、『Ｎｏ．２３』！」

微塵も迷いを感じさせない、鷹矢の叫びが木霊する。
…呼び出そうとしているのは、今この場を切り伏せられる力を持っ

たモノの『イメージ』と、頭の中に浮かんだ『番号』が混ざり合った、異界より出でし謎の存在。
…求めるのは、今ここでで竜胆　ミズチに立ち向かえる力と、今ここで竜胆　ミズチを超える程の己の力が具現化した存在。
それを、己の魂に強く訴え。自分が持てる力の全てを賭けてでも、今ここで絶対にミズチを倒すと誓い…その鷹矢の叫びが形となりて、銀河の渦へと吸い込まれていく。

「冥界の扉を守護する騎士よ！精魂尽きるその時まで…全ての敵を切り伏せろ！エクシーズ召喚！」

立ち塞がる者は、例え『何』であろうとも捻じ伏せる。
ソレは例え強者であっても、手の届かない【王者】であっても…そう、例えソレがどんな【化物】であっても。
覇道を突き進む鷹矢の叫びが、今ここに響き渡り…今の鷹矢の姿は、彼が最も毛嫌いする祖父にも似たモノとなりて。異形となった竜胆　ミズチの、その蛇のような『眼』に写るのか。

―ここに、現れしは…

「来い…ランク８！【Ｎｏ．２３冥界の霊騎士ランスロット】！」

―！

弾ける銀河を突き破り、この現世に現れたのは…肉体を捨てた幽世（かくりよ）の、冥府を守護せし白銀の鎧。
それはその腹部に、『Ｎｏ．』の証である数字…『２３』を刻み込んだ、この世界のモノではない全く新しいエクシーズモンスター。
命尽きてもなお戦いを止めぬその姿は、己に刻まれた定めを死してもなお全うせんと掲げる、騎士の誇りにも視える代物でもあり…
まさに鷹矢の鷹矢による鷹矢の為の、鷹矢が生み出した全く新しいカードの姿であって。

【Ｎｏ．２３冥界の霊騎士ランスロット】ランク８
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

「…ライオンハートが消えて…また新しいのが増えた…今度は…ランク８…」

そして、再びその姿を変えた『Ｎｏ．』を見て…
否、視て、思わず一歩後ずさってしまった竜胆　ミズチ。
…果たして、ミズチの異形のその『眼』には一体鷹矢の『何』が見えていると言うのか。
ここに新たに現れたランク８の『Ｎｏ．２３』の事を、見えているけれども見えていないような表情をしている竜胆　ミズチの驚き様は…
今この瞬間にまた姿を変えた『Ｎｏ．』の変化に、心から惑わされているかのようではないか。

「…けど、攻撃力２０００…それなら５４みたいな効果は…」
「いや、この攻撃で終わりだ！オーバーレイユニットを持ったランスロットはダイレクトアタック出来る！」
「…え…」
「バトル！ランスロットよ、あの女にダイレクトアタックだ！」

けれども、そんなミズチの心情に割って入るかのように。
…肉体滅びし幽なる騎士が、今高らかに天に飛ぶ。
それは単純なりしも明確な、勝利を最短で掴み取る為の無慈悲な効果。
いくら壁が分厚かろうと、いくら壁が高かろうと…肉体を持たぬその騎士は、ただただ主の為に軽やかに天に飛び上がるのか。
果たして…その切っ先が見据えるのは、ミズチかそれともミズチの持っている『何か』か。
今、幽世（かくりよ）から現れた異界の騎士が、夕日の逆光と共にその姿を陽炎のようにこの世から消し…

「…消え…」

ミズチの異形の『眼』からも、ミズチの場の捕食者達の目からも消えてしまったその瞬間に…

―ソレは、叫ばれる

「霊騎薄刃！スピニング…ディスカリバー！」

―！

「…あぁッ！」

陽炎の如く揺らめきながら、ミズチを背後から貫いたレイピアの一突き。

それはミズチの残ったＬＰを、根こそぎ貫く一閃となりてミズチの胸を貫くのか。

リアル・ダメージ装置によって、剣の一刺しの如き鋭い痛みがミズチの儚くも美しい体を貫き…

そして…

ミズチ　ＬＰ：６００→０（―１４００）

―ピー…

霊騎士の一閃が走った瞬間、無機質な機械音が海岸線に響き渡ったかと思うと…

ソレは紛れも無く、強者同士の戦いが終わったことを現していた―

―…

「…あッ…ぐ…し、【紫影】は…絶対に私が…」

「…貴様が【紫影】とやらにどんな恨みがあるのかは知らんが…【紫影】とやらは俺が倒す。…遊良とルキを傷つけたのだ。ただでは済まさん。」

砂浜にうつぶせに倒れつつ、未だ意識を失う事なく鷹矢を見ている竜胆　ミズチに対し…ソレを目線で見下しつつも、決して心では見下してはいない鷹矢の声が、この海岸線の波と交わる。

…【紫影】の名を聞いて、突然変貌した竜胆　ミズチ。

彼女がどうして【紫影】をこれ程恨んでいるのか。そんな理由など鷹矢には到底知りえる理由では無いとは言え…

この最終盤で、【決島】始まって以来の大苦戦を強いられた鷹矢にとっては、あまりの強敵だったミズチを何とか倒せた事にどこか安堵を感じているかのよう。

…ギリギリ…本当にギリギリの勝利だった。

もしもミズチが後一つ妨害できていたら。もしもミズチが最初からあれほどの『力』と異形の『眼』に目覚めていたら。もしもミズチが最後にランク1ではなくランク4を警戒してきたら。もしもミズチにロックアンカーを止められていたら。

もしも『Ｎｏ.』が、鷹矢に反して『ランク４』にしかなれなかったとしたら…

ソレを鷹矢もわかっているからこそ、ギリギリでどうにか勝ちを拾えた事に安堵を感じると共に、強敵だったミズチを決して忘れぬよう

人の顔と名前を覚えないその頭に竜胆　ミズチの名を刻み込んでいるのか。

「…覚えておくぞ竜胆　ミズチ。プロに行っても戦う事になる強敵の一人よ。…さらばだ。」

けれども、最後に勝利したのは紛れもなく鷹矢。
ソレ故、ミズチにそれ以上の言葉をかける事無く。【決島】の掟に従い、鷹矢はミズチに背を向けてこの場から離れ始め…

敗者に情けをかけぬよう。勝者は振り返る事無く、その場から立ち去るのだった。

「…ぅ…に、兄さん…兄さんに伝えなきゃ…【紫影】が…『竜胆』の汚点が…生きていたって…」

—…

「ここまでネ…」
「トドメだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

—！

「クァァァァァッ！」

ミレイ　ＬＰ：８００→０（―２２００）

―ピー…

深い森の中で掻き鳴らされた、無機質な機械音。
それは先ほどまで繰り広げられた、激しい戦いの決着がたった今着いたことを知らせる音となりて…陽も落ち暗くなってきた、二人の周囲へと響き渡る。

「はぁ…はぁ…っ、強かった…王…ミレイ…」
「ハッ…ハァッ…そ、想像以上だた…ヨ…アイ、倒したのも…な、なるほど…ネ…」

そして一つの戦いを終えて、あまりの疲労とダメージに苛まれている様子の遊良とミレイ。
何とか遊良は立っていられるものの、体を捻じらせながら天を仰いでいるミレイの意識は既に少々朦朧としてきている様子でもあり…
その荒く速く浅い呼吸は、まるで全力疾走の後の疲労にも似ている心地良い倦怠感となりて、二人の体に重く圧し掛かってきているかのよう。
何せ、ミレイが先攻1ターン目から遊良の手札を全て奪ったかと思うと、その次のターンに遊良は手札０からたった1枚のドローで戦況をひっくり返し…その次のターンには、ミレイもまたソレをひっくり返し、そうして1ターン毎に戦況がひっきりなしにひっくり返るという、あまりに激しい応酬を遊良とミレイは繰り広げたのだ。
…勝ったとは言え、遊良の残りＬＰもたったの１００。
一つ手を間違えれば、どちらが勝っても可笑しくない戦いだった。
そのギリギリの戦いを終えたばかりなのだから、遊良のその疲労している姿もある意味当然とも言え…

そして―

―!!!

―…

「…おや、予選が終わったみたいですねぇ、ええ。」

埃臭い、どこか暗い倉庫のような場所。

その、光差さぬ辛気臭い場所に…裏決闘界融合帝、性根の腐った捻じれた男…【紫影】が、居た。

…いや、【紫影】だけではない。

手に鈍器のようなモノを持った【紫影】に、見下されるようにして…無様にも地面に転がっているのは、決闘学園デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と謳われた元プロデュエリスト…

―劉玄斎、その人

「ぐ…【紫影】…テメェ…」

「ふふ、無駄な抵抗はおよしなさい『逆鱗』。いくら貴方でも、【白鯨】とのデュエルで負ったダメージが残っていてはその鎖は引きちぎれないでしょうからねぇ、ええ。」

手と足と指と。鋼鉄の鎖で縛られて、立ち上がることすらできずに転がされ…

【紫影】の持っている鈍器に、何度も何度も打たれたのだろう。頭から血を流し、体中には痛々しい痣だらけの劉玄斎。

…しかし、【決島】から姿を消したはずの【紫影】に、一体どうして劉玄斎が捕まっているのか。

どうにか上半身を起き上がらせはするものの、砺波との激闘のダ

メージもあるのか既にその身は満身創痍。
この状況を見れば、彼が紛れもなく【紫影】に捕まっているということだけはまず間違いはなく…
「何が…狙いだぁ…くっ、テメェの策略は…失敗したんだろうがぁ…」
「はぁ…呆れるほど頑丈ですねぇ貴方も。これだけ叩いてもまだ意識を保っているとは、ええ。」
「…これ以上…何しようってんだ、この…屑野郎…もう綿貫の爺にも、砺波の野郎にも…ハァ、ハァ…テメェの事ぁ…バ、バレてん…だぜぇ？」
「ええ、知ってます。なので私も『明日』の準備を始めたいですし…そろそろ落ちなさい。」

―！

そうして。
劉玄斎の言葉を、無理やりに遮るかのように。
【紫影】が思い切り鈍器のような太い棒を振り回したかと思うと、ソレが一閃となりて劉玄斎の側頭部を弾き撃ち抜いてしまって。
そして…金属の太い棒らしき鈍器で、頭部を思い切り叩かれた劉玄斎は…

その場で大きく音を立て、その場に倒れこんでしまったー

「さて、貴方には【決島】が終わるまで大人しくしていてもらいましょう。【白鯨】を止めろと命じましたが、『負けろ』とは言いませんでしたし…これは罰です、ええ。貴方はそこで大人しく、ご自分の生徒達が蹂躙されるのを…ふふ、指を咥えて見ていればいい。明日の決勝が終われば…ふふ…」

また、どこまでも飄々と、そしてあまりに悪びれもなく。

言いたい事を吐き捨てるように、倒れた劉玄斎を一瞥の元に見下しつつ…

この倉庫のような部屋から、【紫影】は出て行ってしまったではないか。

残されたのは、気を失った劉玄斎と…

「おっと、咥える指も縛られていては流石に咥えられませんかねぇ、ええ。」

嘲笑混じりの【紫影】の声が、残響するのみだったー

ー…

ｅｐ８５「嵐の前」

激闘の余韻収まらぬ、予選が終わったばかりの【決島】。
その島に停泊している、理事長達のための特別観覧用の大型クルーザーの…波の揺れを感じないよう設計された、消毒液の匂いが香る『医療室』でのこと。
カチッ、コチッ、と規則正しい時計の音が反響している、白を基調とした清潔感溢れるその部屋の中に…

「…これはまた…酷くやられものだ。」

呟くように静かに零れたのは、イースト校2年、天宮寺　鷹矢の声であった。
何やら痛々しいモノを見ているかのような、悲嘆すら感じる鷹矢の声。普段は何においてもそれほど興味を持たない鷹矢にしては珍しいその声は、目の前の現実が彼にとっても無視できないモノなのだという事を現しているに違いないことだろう。
しかし、鷹矢のその声も最もであり…

「…ガキの頃と同じか、それ以上に酷い状態だ。」
「…あぁ。」
「治ってきているとはいえ、本当に神が暴走しかけたとはな…何をしたのだ、その【紫影】とやらは。」
「…わからない。デュエルのヒートアップ以外で暴走しかけるなんて、今までなかったはずなのに…」

そう、ベッドの横の椅子に腰掛けている遊良と鷹矢の視線の先にあったのは…

―未だ意識を取り戻す事無く眠っている、高天ヶ原　ルキの姿。

【決島】の中盤に、『赤き竜神』を狙ってきた【紫影】と劉玄斎に攫われ。危うく、その身から無理矢理に『神』を解放させられそうになったルキ。
一応、かけつけた砺波と遊良の手によって、なんとか最悪の事態は免れたとは言え…
それはあくまでも『最悪』を防いだだけであって、『最善』ではないが故にルキは未だにその意識を取り戻せないままでいるのか。
…一応、砺波が個人的に雇った信頼のおける腕のいい医師のおかげで、どうにか命の危機は去ったとは言え。
それでも顔がひび割れ手足が崩れ、体にも大きな亀裂が走り深い深い眠りについているこのルキの姿を見てしまえば…
幼少の過去にソレを一度見ているとは言え、鷹矢にもその時のトラウマがフラッシュバックしてしまっていたとしても、それは仕方がない事なのだろう。

「しかし…お前がついていながらなんてザマだ。危うくルキが死ぬところだったとは。」
「……あぁ。」

そして、悲嘆の混ざった声から一転。
隣に座っていた遊良へと向けて、その声を確かな厳しさへと変え始めた鷹矢。
…【決島】の最中には、ルキが襲われたことと危機は脱したという、その『最低限』の事しか聞いていなかったが故か。
今こうして落ち着いてルキの状態を詳しく見聞きした鷹矢の意識は、どこまでも重いモノとなりて遊良へとぶつけられているようでもあり…
…痛々しい姿となって意識を失っているルキを前に、どこまでも重くなっていく鷹矢の声。
まぁ、遊良がルキを救うために戦っている間、鷹矢は何が起こって

いるのかすら知らずに【決島】で暴れまわっていたのだから、鷹矢が遊良を責めるのはどこかお門違いであるはずではあるのだが…

しかし遊良の方も、鷹矢の責め句にも反論する事無く。

足りなかった己の力に静かな怒りを感じているその様子は、ルキを救い出せたとは言えこんな状態にまでルキを衰弱させてしまった事に、今になって責任を感じている様子にも見え…

それは遊良も鷹矢も、お互いがお互いに自分達の非を理解しているが故の…遠慮も配慮も考慮も無い、片割れへと向けた容赦の無い責め句。

…そう、遊良だって逆の立場だったならば、きっとルキを最善で救えなかった鷹矢に同じ事を言っただろう。

『お前が一緒で、なんでルキがこんな目に遭うんだ！』…と。

「…当分は目を覚ましそうに無いな。折角の祭典で…ルキ、楽しみにしてたのに。」

「仕方なかろう。とにかく、命が助かっただけ幸運と思うしかない。…俺も認識が甘かった。まさか【王者】と同じレベルの者がルキを狙ってくるとは…」

ソレ故…

鷹矢とて、遊良を責めるだけではなく。

鷹矢自身もルキが大変だった時にかけつけられなかった事を、自分自身でこれ以上無いほどに責めている様子を見せており…

―『ルキならば大丈夫だろう。自分の身くらい自分で守れる。』

…確かに、鷹矢はそう思っていた。

中々本気を『出せない』とはいえ、ルキの潜在的な実力は自分や遊

良と比較しても遜色無いモノだと言う事を、鷹矢自身よく理解していたのだから。
　それがイースト校理事長である【白鯨】、砺波　浜臣の指導のおかげで、幾分かコントロールが出来るようになり…そんなルキならば、きっと名も無き『敵』などには負けはしない…と、本気でそう信じていた。
　だからこそ…
　よもやルキを狙ってきたのが、【王者】と同じ実力を持った者だったということは鷹矢にとっても想定外だったのだ。
　いくらルキの実力が学生のレベルを超えた高みにあるとは言え、【王者】達が位置している『極』の頂の力が凄まじく遠く高く強い場所に位置していると言うことは、エクシーズ王者【黒翼】を祖父に持つ鷹矢がある意味で一番よく理解している。
　…常識では測れぬ実力と、常識では理解出来ぬデッキ回しと、常識ではついていけぬ策略と、常識から外れた恐るべき運。
　ソレを当たり前のように兼ね備えているのが『極』の頂に立っている者達であり、そんな世界の頂点の実力を持っている者達が相手ではいくら【王者】やそれと同格の者にさえ不遜で不敵で不敬な態度を崩さぬ鷹矢と言えども…ただただ、相手が悪かったとしか言いようがなく…
　…ルキの命が助かったのは、偶然に幸運が重なった奇跡のようなモノ。
　もしも【紫影】とやらが、『お遊び』をする事無く本気でルキの『神』を強行で狙いに来ていたら…きっと遊良もルキも戦う事、立ち向かう事すら出来ずに、あっけなく殺されていたに違いないだろう。
　ソレを、全てが落ち着いが今になって思い知ったからこそ。ルキを最善の方法で救えなかった遊良と、あまりに不甲斐ない自分自身への怒りが、鷹矢の中には渦巻いている様子。

「【紫影】…ずっと昔に死んだって砺波先生は言ってたけど…なんで今になって…」
「そんなコトは俺達には関係ない。…とにかく、【紫影】とやらは絶対に許さん。俺の居ないところでお前達に手を出すとは…随分と舐めた真似をしてくれる。」
「あぁ…ルキをこんな目に遭わせた【紫影】だけは…絶対に許さねぇ。」

ルキをこんな目に遭わせた挙句、悪びれる事も無く姿を消してしまった【紫影】に対する怒りがふつふつと再燃してきている遊良。
顔も知らぬままではあるものの、ルキをこんな目に遭わせ、あまつさえ遊良をも傷つけた【紫影】への怒りがどうしても収まらぬ鷹矢。
…遥か昔の犯罪者である【紫影】の事を知らないという、時の流れの『幸せ』の中にいた現代の子ども達が今になって【紫影】への怒りを覚えるというのは何たる皮肉か。
確かに起こってしまった『緊急事態』を、終わった後に嘆いていても仕方が無いと言うことなど、明日の決勝に進むことが出来た二人として理解している事もまた事実ではあるのだが…

「…だが、ルキも残念だったな。俺が遊良に勝つ瞬間を見れないとは。」
「あ?逆だろ。ルキは俺がお前に勝つところを見れないんだ。」
「なんだと!?遊良の癖に!」
「んだよ!鷹矢の癖に!」
…
「…今はやめるか。病室だしな。」
「…うむ。」

その『いつもの』掛け合いの中に、どうしても『足りないモノ』があると言う事が…遊良と鷹矢の心に、拭いきれない違和感を生じさせているのか。
…いつもそこにあったはずモノが足りない。

その拭いきれぬ違和感は、どこか気持ち悪さすら感じさせる心の『穴』となりて。更なる戦いの前の、この静かな夜に…
遊良と鷹矢へと、襲いかかって来ているのだった―

―…

【決島】の敷地内にある、治療を受けている学生達が収容されている『医療棟』。
その、未だ治療を受けている生徒達のほかにも、激しい混戦を終えた学生達が就寝するために部屋を割り当てられている、簡易的なホテルの役割をしているその『医療棟』の…
裏手にある崖を降りた砂浜、その戦いの余韻をまだ感じるであろう、月明かりに照らされ波の音を感じる砂浜の上で…

「やぁ、刀利君。」
「久しぶりだな、刀利。」
「…蒼人君、哲君。」

三人の男の声が、交わされていた。
それは紛れも無く、決闘学園デュエリア校3年の鍛冶上　刀利と…
今年度からプロとして活躍している、決闘市出身のプロデュエリストである泉　蒼人と十文字　哲の三人。
…それはとても親しげな空気。壁など存在しない雰囲気。
一見すれば決闘市出身の蒼人と哲、そしてデュエリア校の刀利には関係など無いようにも思えるものの…

ここでは語られぬ別の物語を経験した彼等の生み出すその雰囲気は、共に死線を潜り抜け、切っても切れない絆で結ばれている彼等にしか生み出せない、彼等だけの会話と距離間とでも言えるだろうか。

「アイはまだ目を覚まさないようだな。…自業自得だ。」
「…ごめん、僕がアイナを止められていればこんな事には…」
「まぁまぁ二人とも。今はそんなコト言ったって仕方ない事は仕方ないんだから。…それより刀利君、決勝進出おめでとう。」
「…うん。」
「…お前が【決島】に出ると報告して来た時は一体どんな風の吹き回しかとも思ったが…無茶はしていないようで安心した。しかし下級生相手に勝ち誇ったところで意味などない。学園に残る選択をしたのはお前だが、…くれぐれも、自分が異物だという事を忘れるんじゃないぞ。」
「…うん。」

刀利の決勝進出を、心から祝っている様子の泉　蒼人と…心配しつつも厳しい言葉を投げかける十文字　哲。
こんな人の気配の無い場所で、隠れるようにして言葉を交わしているのは蒼人と哲がこの【決島】において自分達は異物だという事を理解しているが故の配慮なのか。
しかし、自分達は異物なのだという雰囲気を醸し出している蒼人と哲に同調するかのように…デュエリア校3年の鍛冶上　刀利もまた、自分自身を『異物』のように扱っているというのは、一体どうした了見なのだろう。
…それは過去にあった出来事の所為か、それとも刀利自身の性格の所為か。
デュエリア校の学生の一部に、『デュエルをしないデュエリスト』や『雑魚上』などと呼ばれ馬鹿にされている事は、もちろん刀利とて知っていることではあるのだが…それでもなお沈黙を貫いてきた鍛冶上刀利というデュエリストが、今になってこの表舞台に出てきたこと

はデュエリア校にとっても大きな話題と反響を呼んだのはまた別の話として…

ともかく、今にも波の隙間に消え入りそうな刀利のその透明な雰囲気は、蒼人と哲によってどうにかこの地に踏み止まれているようにも見える代物。

…親しみを感じる空気の中にも、存在している確かな厳しさ。

一体、彼等の過去に何があったのか。この場では語られぬ物語とは言えども、こんな歳の若者達が死線を潜った兵士のような雰囲気を持っていると言うことでさえ、どこか違和感を感じるモノだということは言うに及ばず。

…そのまま、誰に邪魔されるわけでもなく。波音と共に、3人は会話を続けるのみ。

「…天宮寺は強いぞ？昨年俺と戦った時よりも腕を上げているようだしな。ギリギリだったがアイツがミズチにも勝利したのは俺も正直驚いた。俺も試合の合間に大蛇と共に鍛えていたから知っているが、ミズチも相当強くなっていたと言うのにな。」

「遊良君もね。アイに勝ったのは偶然じゃない、彼の実力さ。どうだい、僕の後輩達も中々やるだろう？」

「…うん。だから楽しみにしてるよ…蒼人君と哲君がそこまで言う…その二人に。」

「だが、ギャンブラーの小僧もかなり強くなったみたいだからな。油断はするなよ。」

「…リョウも今ではデュエリア校のトップだからね。…二人が居なくなってから…ううん、『3人』が居なくなってから…リョウも、自分がデュエリア校を引っ張るんだって凄く頑張ってたから。」

「きっと『焔（ほむら）』も喜んでるよ。特にリョウ君とは仲が良かったからね、焔は。」

「そうだな。だから誰と戦う事になっても、お前はお前のデュエルをすればいい。明日お前と戦う『二人』は、きっとお前が全力でデュエルしても『大丈夫』なはずだ。」

「…うん。」

砂浜で静かに交わされる、どこか大人びた彼等の会話。
しかしその話の流れは、まるで明日の決勝では刀利が勝ち進む、もしくは優勝する前提で話されている様でもあり…
遊良と鷹矢の力を認めているはずの蒼人と哲でさえ、まるで刀利の勝利が初めから揺るぎ無いモノなのだという事に何の疑問も抱いていないかのようなその会話は…刀利がただ単に、強い『だけではない』と言うことを知っているが故なのか。
明日のデュエルは予選と違って、リアル・ダメージルールではなく通常通りのデュエルが行われる予定。そうだと言うのに、十文字　哲の零した『大丈夫なはず』と言う言葉に含まれた、気付く事すら難しい少しの不安が夜の波音に掻き消されていき…

「大丈夫。昔のように楽しむことだよ、刀利君。」
「あぁ、あの3人はそんなに柔じゃない。明日は精々楽しんでこい。」
「…うん。」

明日に始まる戦いの嵐。全世界の中でもトップクラスの実力を持った学生達の、その激しい戦いの嵐の前に…
一時の静けさが、夜と彼等を包んでいた―

―…

「…なるほどのぅ。【紫影】に、学生達を人質に取られておった…じゃから逆らうことが出来んかった…と？」

「あぁ。その通りだぜぇ。」

各校の理事長達がいる大型クルーザーとも、学生達がいる医療棟とも違う場所。

どこか質素でありつつも、頑強に作られたであろう【決島】の敷地内である…そのどこかの建物の、コンクリート臭さが抜け切らぬ薄暗い一室に…

歴戦を感じさせる、3人の男達の姿があった。

1人は超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の最高幹部であり、全てのプロデュエリスト達が父もしくは祖父もしくは曽祖父と慕う、年齢不詳の『妖怪』と呼ばれる翁…綿貫　景虎。

1人は決闘学園イースト校理事長であり、かつては【白鯨】と呼ばれた元シンクロ王者…砺波　浜臣。

1人は決闘学園デュエリア校学長であり、かつては『逆鱗』と謳われた元プロデュエリスト…劉玄斎。

しかし、それは顔見知り達が和気藹々と昔話に華を咲かせている…

と言った雰囲気でない事は確かであり、少なくともこの張り詰めた空気から感じ取れる事は、彼等の行っている話し合いは紛れもなく『尋問』であると言う事だけ。

「…綿貫さん。あの屑に脅された程度で劉玄斎が従うとも思えませんが…」

「ふむ…確かにのぅ。」

「クハハハハ、ま、俺も大人んなったって事じゃねぇか。」

「何じゃ？お主、この期に及んでふざけておるのか？」

「…んな怒んなよジジイ。俺ぁいたって真面目だぜぇ？…安心しろ、ちゃんと罰は受けるからよぉ。」

「無論じゃ。いくら【紫影】の小僧が生きる価値の無いミジンコ以下の屑で、今回の事件でもあの屑オブ屑が全面的に悪いとは言えども…犠

牲者が出る可能性もあったんじゃ。お主も、覚悟だけはしておけ。」
「…おう。」

その厳しい口調からも分かる通り、今行われているのは劉玄斎に対する紛れも無い尋問。

…遊良とアイナの戦いの後、『医療棟』にアイナを連れて行った劉玄斎。

そして予選終了の合図と共に、砺波からの呼び出しに『素直』に応じて…劉玄斎は、砺波に指定されたこの場所へと、堂々と1人で『赴いてきた』のだ。

そこから、まるで取り調べのように。綿貫と砺波によって、劉玄斎から【紫影】の情報を聞き出そうと尋問が始まったのだが…

「…貴様が逃げなかった事だけは褒めてやる。」
「あぁ…テメェも、悪かったなぁ砺波ぃ。」
「貴様からの謝罪などいらん。それより屑の所在と目的、洗いざらい吐け。」
「…だから、これ以上は俺も知らねぇんだって言っただろぉ？…深くは聞くな、言う事を聞かねぇと、予選の間に本土に残してきた生徒達を無差別に殺す…なんて言われちまったらよぉ。」
「ふむ…」

劉玄斎の口から語られるは、【紫影】の呈示した恐るべき脅言。

しかし先ほどから劉玄斎の口から語られるはソレだけであり…【紫影】の真の目的、【紫影】の現在の所在、【紫影】の計画の規模、【紫影】に手を貸す更なる敵の有無…

…死んだと思われていた【紫影】が、なぜ今になって姿を現したのか。

ソレら【紫影】に関する重要な情報を、劉玄斎は何一つ聞かされて

いないと言うのだから、先ほどからこれ以上尋問が進まないのが今の彼等の現状なのだ。
…まぁ、【紫影】の狂人度合いを知っている砺波や綿貫からすれば、一校の学長でもある劉玄斎に対して【紫影】が呈示した『生徒達を人質にする』という脅し文句は、ある意味納得のいく理由となり得るのだが…

…しかし、ソレを聞いてもなお。

「…」

砺波は疑惑の目を緩める事無く、どこまでも鋭く突き刺されるその視線は益々その鋭さを増していくだけ。

…それは、恐怖だけでは人を縛りきることは出来ないことを、砺波も知っているが故の疑惑の目。
またそれ以上に、劉玄斎という男を恐怖だけで縛りきることなど出来ない事を…砺波も重々承知しているからこそ、これ程までに厳しく劉玄斎へと向かって言葉の棘を投げつけているのか。
…まぁ、考えようによってはあの粗暴だった『逆鱗』が、歳を取って丸くなった…とも取れるのだろう。
しかし、少なくとも『逆鱗』と呼ばれた劉玄斎に限ってはソレは無いと言うことを理解している砺波の目は、『この場にいる劉玄斎』の内面を見透かしているかのようにどこまでも研ぎ澄まされた代物となりて…
まるで『別のモノ』が見えているかのように、鋭く目を光らせていて。

「…まぁいい、劉玄斎への処罰は明日の決勝が終わってからだ。…それより貴様も、明日の決勝が終わるまでは素直に大人しくしていることだ。あくまでも、明日の主役は子ども達なのだからな。」

「あぁ、わかってんぜ。【決島】が終わったら、大人しく連行でもなんでもされるからよぉ。」
「無論だ。【決島】の進行は予定通り行うが、明日は私が別室で貴様を監視する。…今の私から、逃げられると思わないことだ。」
「クハハハハ、心配しなくても、今のテメェ相手にゃ逃げねぇよ。」
「…ならばいい。」
「ふむ…ならば小龍の事は浜臣、お主に任せるとしようかの。【紫影】の屑の所在は儂の方で捜索を進めさせるとしよう。…世界中のどこにいても、もう二度と逃がさんわい。」
「…お願いします、綿貫さん。私の方でも…手は打っておきますので。」
「…うむ。」

冷たい…
それは学生達にはとても聞かせられないほどに冷たい声となりて発せられる、『妖怪』と【白鯨】の非情なる声。
それはそのまま、この二人が【紫影】という性根の腐った捻じれた男に、相当たる恨みを持っていると言うことでもあるのだが…
…過去、その手で２０００人以上を殺めた屑の中の屑。
その中には、『烈火』と呼ばれるサウス校理事長、獅子原　トウコの夫や…その他にも、かつての表と裏の決闘界の戦争で【紫影】に殺された親しい人間が、砺波達には多々居たのだ。
…だからこそ、砺波や綿貫に対して、【紫影】に恨みを感じるなと言う方が無理な話だということは最早語るにも及ばず。

…夜空の深さに混ざっていく、『妖怪』と【白鯨】の氷よりも冷たい声と意思。

子ども達の激闘の前だと言うのに、あまりに静かに更けていくこの夜は…明日の子ども達の戦いの前に、出来るだけ波風を立てないようにしようとしている、大人達による意地とも呼べるのか。

…まるで嵐の前の静けさ。

様々な思いが交錯する中、戦いの前の夜はただただ静かに更けていくのみであり…

戦いの余韻に、世界中が未だ静まらぬ中。明日への更なる戦いへと向けた、世界中の期待感が…

【決島】を、包んでいるのだった―

世界中で、最もレベルの高い学生同士の戦いは…

もう、すぐ―

―…

ｅｐ８６「【決島】本選―ギャンブラーｖｓ．進撃の咆哮」

激しい闘いの余韻から、一夜明けた快晴の日。
昨日、あんなにも熱狂していた世界だと言うのに…
今日というこの日に、この快晴の暑さよりもなおアツい熱気を放ち、更なる盛り上がりを見せながら世界中の誰もが『その時』を待っていた。
…これ程までに世界中が熱気に包まれる、その原因はたった一つしかない。
そう、昨日開催が宣言された、世界でも例の無い規模で行われる…決闘市とデュエリアの決闘学園の合同による、世界最大級の学生達の『祭典』の開催。
その誰も見たことがない、世界最強の学生を決めると言っても過言ではない『祭典』の予選が、とうとう昨日に行われたのだ。
…学生達の祭典が、ここまで世界中に注目されることは本当に稀な事。
そう、【決闘祭】も【デュエルフェスタ】も、知名度で言えば確かに世界にその祭典の名だけは知られてはいる。
しかし所詮は学生の祭典として見られていることも事実であり、ここまで学生達の戦いに世界中が注目することなど…近年で言えば現シンクロ王者【白竜】、新堂　琥珀がサウス校の学生であった頃の、半ば伝説となっている当時の【決闘祭】だけと言っても過言では無いだろう。
…まぁ、たった一人の選手の注目度だけであそこまで世界中が注目したという事は、それだけ新堂　琥珀の力が当時から抜きん出て世界から知られていた…と言うことでもあるのだが。

ともかく…

昨日の世界の盛り上がりは言うに及ばず。
決闘市とデュエリアという、世界が誇る2大デュエル大都市。その各決闘学園から選りすぐられた２００名の学生による混戦と言う、これまで誰も見たことがない学生達の戦いの様子が全世界へと向けて発信されていた昨日は…
まさに【王者】と【王者】の戦いの中継にも匹敵するレベルの注目度となって、世界中が祭典の予選に釘付けとなっていたのだ。
そう…【決島】の、その予選という名の大規模なサバイバル・デュエルは、まさに全世界を熱狂の渦に包み込んでいた。

…ノース、サウス、イースト、ウエスト。決闘市の決闘学園４校の、計２０万人を超える学生達の中から選ばれた実力者『１００人』。
…デュエリアの中央に聳える巨大な決闘学園デュエリア校の、２０万人を超える生徒達から選ばれたデュエルランキング上位『１００人』。

いくら彼等が高等部の学生だとは言え、プロでも無い者達が織り成した昨日の混戦、激戦、熱戦には、世界中の誰もが夢中になって戦いに釘付けになっていたに違いなく…
プロの世界でも既に十二分に通用するのではないかという逸材たちが、更にこの島で鎬を削って戦うその光景はまさに近年稀にみるレベルの高い学生達の祭典となりて世界中の人々の目に映っていたことだろう。

けれども…

そんな昨日の熱狂が、まるで涼しかったモノだと勘違いするほどに。
今日というこの日に世界中で燃え上がっているこの熱気は、昨日以上のアツさとなりてこの星全土を包み込んでいて…

…そう、遂に決まるのだ。

昨日の大混戦を最後まで戦い抜き、最後まで『全勝』を貫いてきた強者達による最後の決戦。

４０万人の中から選ばれた２００人。その中から、最後まで勝ち抜いた『４人』による…

―【決島】の決勝が、ついに始まるのだ

それは正真正銘、世界最強の学生を決める戦いと言っても過言ではなく。

…【王者】の集う町『決闘市』と、決闘発祥の地『デュエリア』。

世界有数の都市の中でも、特にデュエリストのレベルが高いデュエル大都市に数えられる２つの都市。それは必然的に、双方の決闘学園の学生達のレベルも世界有数のモノであると言う事であり…

未来の【白竜】に世界中が盛り上がった、当時の【決闘祭】の注目度にも匹敵するのが今回のこの【決島】なのだ。

その世界中が注目している、世界有数のレベルである決闘学園の…更に勝ち残った、上位の４人。

それはそのまま、彼等の実力が世界中の決闘学園の中でも最もレベルの高い学生であると言う事の証明とも言えるだろうか。

…確かに世界には、未だ見ぬ強豪と呼べる学生が多々居はするだろう。

しかし【決島】という祭典に出場できる『運』…そう、決闘市およびデュエリアの決闘学園に所属していて、なおかつソレに出場できる年代であったと言う、全てが重なった時に『ここ』に居たという『運』を兼ね備えたのが、ここに立っている４人なのだ。

…『才能』と『実力』など、持っていて当たり前。

必要なのは実力以上の『何か』。高い『実力』と『才能』を兼ね備え、なおかつソレに溺れぬ『心』と、そして【決島】に出場できる『運』を

持ち…
その『先』に到達できる、決闘者としての『器』を持った学生しか、この『決勝』の舞台に立つことは許されないことであって。

だからこそ…

きっと『この場』にいる者達は、学生という枠を超えた『先』でもきっと戦っていく事が出来るだろう。それこそ、魔境と呼ばれる『プロ』の世界…
―魔物犇めく弱肉強食、魔窟のような優勝劣敗
そんな自然界にも似た、弱きが淘汰され強き者だけが生き残れる世界でも、十二分に生き残って戦っていけると思える程に。
そんな、学生の中でも最上位のモノを持っている『４人』へと向けて。
この島には学生達と各校の理事長・学長達以外に、他の観客達など居ないはずだというのに…
確かに『聞こえる』歓声にも似たソレが、これより戦いを始める『４人』を包む音となりて…

今ここに、響き渡る―

『選手入場！』

今、【決島】全土へと向けて…否、全世界へと向けて叫ばれたのは、天高く反響した実況の声。
その実況の声に応じて、この場には居ないはずの見えない観客達の歓声が、確かに聞こえる『音』となりてこの島全土を覆い始め…

…そして今堂々と現れるは、学生らしからぬ力を雰囲気を纏った『４人』の者達。

予選１位―決闘学園イースト校２年、天宮寺　鷹矢
予選２位―決闘学園デュエリア校３年、リョウ・サエグサ
予選３位―決闘学園イースト校２年、天城　遊良
予選４位―決闘学園デュエリア校３年、鍛冶上　刀利

それは奇しくも、決闘市とデュエリアから２名ずつの決勝進出。
昨日の予選の順位と共に、その力強く恐れもなく、およそ学生とは思えぬ空気を纏いながらゆっくりと歩いてくる彼等の姿は…
学生とはいえ、彼等の実力がプロと比べても何ら遜色無い代物だという事を全世界へと向けて、これ以上ないくらいに証明していたことだろう。
…昨日の予選で、２００名もの大混戦を最後まで勝ち抜いた彼等４人。

―全員が、『全勝』

―『全勝』は、彼等４人のみ

天宮寺　鷹矢…７６戦全勝
リョウ・サエグサ…７２戦全勝
天城　遊良…６４戦全勝
鍛冶上　刀利…３０戦全勝

約１名の戦績のみ、他の３人の戦績と比べても少ないことはさて置き。
何より注目すべきは決闘市の決勝進出者２名が『イースト校』の者達であり、それが昨年度の【決闘祭】の優勝者と準優勝者であるのだから…

その光景を見るだけで、昨年度の【決闘祭】の結果が誰にもケチのつけようのない紛れも無いホンモノであったと言うことと、イースト校理事長である元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣の手腕が優れていると言うことを世界中へと証明していたに違いない事だろう。

『これより決勝の舞台は！島の中心であるこの場所、天空に聳え立つ『塔』の最上階で行われます！』

見えない観客を煽る実況の声と、選手達が入場してきた事によりさらなる加熱を続ける世界。

その実況の声に連なって、中継映像が選手達のいる『どこかの場所』から『島の中』の映像へと切り替わったかと思うと…

なんと島の中心、深い森の中に、昨日までは無かったはずの巨大な『塔』が出現しているではないか。

…昨日の予選時には無かったはずのこの『塔』。

しかしソレもそのはずで、この『塔』は今日の決勝の為に地下に埋められており…この戦いの為だけに、日が昇ると同時に地下から天へと向かって伸び上がったのだ。

…天を貫かんと高く聳える、巨大なりし白亜の『塔』。

再び中継が選手達の居る場所に切り替わると、彼等の居る『そこ』が『塔』の中であった事が一目瞭然であるかのように…『塔』の天辺、最上階、屋上、その空に一番近い場所に、彼等４人が立っていて。

そう、今彼等が居るのは、【決島】の中心―

邪魔者達から隔離されるかのように、【決島】の中央に建造された『塔』の…その、最上である、屋上に特別に作られたステージ。

―天空闘技場

『この場所』に満ちている異様な空気は、まさに本物の強者しか立ち入れない場所となっていることだろう。
それは天高く聳え立っている『塔』の、その一番高い場所でこれより行われる戦いの舞台に相応しい雰囲気となりて…まさに祭典の決着に相応しい天空の舞台と言えるだろうか。

―雲に、空に、天に、文字通り手が届きそうなほどに高く聳え立つ天空の塔

それは世界最大規模で行われる【決島】の、その『頂点』を決める戦いに相応しい『高さ』となりて少年達を天へと持ち上げていて…

…すると、この厳格なりし重みを放つ、清廉なる天空闘技場で一体何を思ったのだろう。

昨日の予選を、トップの成績で駆け抜けたイースト校2年…
世界に名を馳せるエクシーズ王者【黒翼】の孫である、天宮寺　鷹矢がその口を開き始めた。

「…寒い。」
「当たり前だろ、この高さなんだから。」
「それに腹が減った。遊良、何か食う物を…」
「あるわけねーだろ。お前…決勝なんだから少しは緊張感持てよな。」
「…朝早く叩き起こされたかと思えば控え室にカンヅメ。おまけにこの高さに寒さに加え、ルキも目を覚まさぬままなのだ。緊張なんぞする暇が無いに決まっているだろうが。」
「何が『決まっている』だ。初めから緊張なんてしない癖に…つーか、お前が去年【決闘祭】に遅刻しやがったからこんなに警戒されてるんだろ。少しは反省しろ、この寝坊常習犯。」

「全く、いらぬ心配の所為でとんだ迷惑を…」
「でも起こされなかったらまだ寝てただろ？」
「うむ。」
「はぁ…」

全世界に見られていると言うのにも関わらず、コレが世界中の決闘学園の頂点のデュエリストを決める舞台であるにも関わらず。
形容でなはく本当の意味で『空気が重い』この天空闘技場の、その真ん中に立っていてもなおもいつもの通りの鷹矢の態度。
…それは戦いの舞台が、【決闘祭】から【決島】へと変わったとしても何も変わらないのか。
どこまでもどこまでも不遜なるその立ち振る舞いは、ある意味で最も鷹矢らしい、彼が彼であることの証明であるとも思え…
…まぁ、これまでずっとソレにつき合わされている遊良からすれば、見られている規模が決闘市中から世界中へと変わった事のだから、全く変わらない鷹矢の立ち振舞いには一抹の不安を覚えそうではあるのだが。
それに加えて鷹矢の言った通り、まだルキも目を覚まさぬままであるのだから…
当の遊良も、緊張よりも様々なことへの気がかりの方が大きいといえば大きいのだが。

ともかく…

「…気を抜くんじゃねーぞ。誰が最初の相手かわからないんだ。特にお前は、昔っから肝心なとこで要らないミスするんだから。」
「お前こそ、余計な事に気を取られすぎて転ぶんじゃないぞ。お前は昔から余計な事を考え過ぎて行き詰まる。」
「何だよ、余計な事って。」
「…気付いてないのならば良い。ともかくだ。遊良の癖に、俺と戦う前に負けたら許さんからな。」

「それはこっちの台詞だっての、鷹矢の癖に。」

お互いが、お互いにやるべき事だけは見失って居ないという事を確認するかのように。

遊良も鷹矢も、これより始まる文字通り『天上の決闘』に向けて…片割れに向けている余計な気を、自分自身へと向け直そうとしていて。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！まさかこんな舞台を用意してたとはねぇ。劉玄斎学長もニクい演出してくれるじゃねぇか。なぁ、トーリ？」

「…そうだね。」

「そういえばアオトとテツには会ったのか？来てるんだろ？アイツら。」

「…うん。昨日会って話したよ。多分、どこかで見てると思う。」

「ＯＫ、ならアイツらが度肝を抜くデュエルを見せてやろーぜ？それによ…ここはＨｅａｖｅｎに近いだろ？だから…『アイツ』も見てるかもしれねーしな。」

「……うん。」

そして決闘市勢と共に並び立っていた、デュエリア勢のリョウ・サエグサと鍛冶上　刀利もこの天上の戦いに何やら思いがあるのか。

彼等もまた、自らの戦意を入れなおした様子を見せたかと思うと…纏う雰囲気を紛れもない強者のモノへと変えていくリョウ・サエグサと、その雰囲気を天に溶け込ますように更に気配を薄くしていく鍛冶上　刀利。

…ここにいる４人は紛れも無く、自他共に認める本物の強者。

誰もが皆、いよいよ始まる天上の決戦へと向けて。己の戦意を、ただただ静かに磨いている。

そうして…

『では！対戦カードの発表です！』

いよいよ発表されるソレに、一斉にざわめく世界中。
昨日のレベルの高い混戦を生き抜いた者達による、選別に選別を重ねた純粋なる強者同士による正面衝突…ソレに対する期待が世界中に充満する中、今世界中が固唾を飲んでソレを見守っていて…

…そして一瞬の後。

天空闘技場に設置された、超巨大モニターに。今高らかに、戦う者の名が映し出され―

―対戦カードは…

第一試合
『天城　遊良　ｖｓ．　リョウ・サエグサ』

第二試合
『鍛冶上　刀利　ｖｓ．　天宮寺　鷹矢』

「Ｙｅｓ！初戦とは幸先いいぜ！さーて、【決闘祭】の優勝者…アイを倒したって奴の実力を見せてもらおうじゃねーか。」
「リョウ・サエグサ…デュエルランキング第１位って奴か。」

天空のスクリーンに映し出された対戦カードを見て、お互いに視線と戦意をぶつけ…
戦いの前の威嚇を始める、天城　遊良とリョウ・サエグサ。
…ここまでくれば、誰が相手でも強者としか当たらない。
決闘学園デュエリア校、デュエルランキング『第１位』…それは２０万人を超えるデュエリア校の生徒の中の、正真正銘『トップ』だという事。
【決闘祭】の優勝者…それは２０万人を超える決闘市の４校の中で、正真正銘『頂点』に立ったということ。
ソレ故、遊良もリョウもお互いの相手である紛れも無い『強者』を見据え、既に戦いへと向けて心を燃やしているのか。

「…ふん。」
「…」

しかし、バチバチに戦意をぶつけた遊良とリョウとは違い。
第二試合となった鷹矢と刀利は、静かに視線を合わせたかと思うと、すぐにお互いにその視線を外してしまい…

「…なるほどな。」
「何が『なるほど』なんだ？」
「面白い奴が相手だと思っただけだ。…あの鍛冶上という男、雰囲気が…」
「…あぁ、かなり『おかしい』って事か。強いってことはわかるんだけど…」
「あそこまで『匂い』がしない奴は初めてだ。匂わなすぎて逆に怖いくらいだぞ。」

「…確かにな。」

それは刀利の放つ…否、刀利から全く放たれていない、居ないと錯覚するような透明なまでの存在感を鷹矢も遊良も感じ取って…否、二人を持ってしても、感じ取れなかったが故の最大限の警戒なのか。

…それはどこか『異質』な強さ。

およそこの『決勝』まで進んだデュエリストが、ここまで強さも存在感も気配も感じさせないと言う事は、それはそのまま彼の『強さ』であるという証明とも言えるのだろうが…

弱者ではここまで勝ち残れない。そう、本物の強者のみが参加できる【決島】において、参加者の誰とも強さの雰囲気が異なっている鍛冶上　刀利という男の、この『感じ取れない強さ』というどこか異質なるソレに対し…

楽観視できるほど、鷹矢も遊良も弱くはなく。

そして…

「だがお前の相手の金髪も相当『やる』ぞ?…島で戦った誰よりも匂いが強い…アレは、相当たる強者の匂いだ。」

「…わかってる。」

デュエリアの代表者である2人を見て…

遊良と鷹矢は、無意識に滲む冷や汗を感じているのだった―

―…

同刻―

沖合に停泊しているクルーザーの、理事長達の為に特別に用意され

た特別観覧席…
とは部屋を違えた、質素で簡易的な造りをした…波に揺れていないことから、少なくともクルーザーの中ではないであろう、【決島】のどこかの建物の一室。
その、ただ大きなＴＶの置かれただけのコンクリートの密室内に…
「リョウ・サエグサ…デュエリア校のトップか。」
「クハハハハ、早速面白ぇ組み合わせだなぁおい。ウチのトップとテメェのお気に入りの小僧…どっちが勝つんだろうなぁ。」
「…」
決闘学園イースト校理事長、砺波　浜臣と、決闘学園デュエリア校学長、劉玄斎がそこには居た。
しかし、それはこれより始まる戦いをただただ楽しく観覧する…
といったモノでない事だけは誰の目にも明らかであり、砺波の気を張っている表情からも分かる通り、これは劉玄斎に対する一種の『監視』だという事を砺波も堂々と隠す気もなく。
…サウス校理事長とウエスト校理事長とは、あえて席を違えたこの密室内。
それは昨日の通達の通り、『劉玄斎を別室で監視する』という砺波の言葉の通り。
このコンクリートの室内にある姿は、砺波と劉玄斎のシルエット２つだけであり…もしも劉玄斎が下手な動きをすれば、即座にデュエルによって抑え込めるようにという、砺波の警戒の現われなのだろう。
…まぁ、遊良と約束した、『ルキを護衛する』という事ももちろん砺波は忘れてはいないが。
何せこの密室は、未だ眠っている高天ヶ原　ルキの居る、『特別医務室』のすぐ隣。
深夜の内に秘密裏に、クルーザーからルキを移動させておいたおか

げで…その所在はほかには『妖怪』と呼ばれる綿貫　景虎以外に知らないのだから、内部スパイからのリークでルキの居場所が外に漏れることは決して無い。
　また、特別医務室の隣だけあって、医務室に何か異常があれば砺波もすぐに気付けるのだし…何より砺波達のいるこの部屋を通らなければ医務室へは行けないのだから、不審者が医務室に近づけば一目瞭然なのだ。
　―ソレ故
　いよいよ始まる教え子の戦いに、何気兼ねなく砺波も観覧にまわっていて。

「まだ荒削りとは言え、運だけならば『先』を越えた『極』の頂にも匹敵するかもしれぬ者…学生でそのレベルに到達していると言うのもにわかには信じがたいが…」
「ウチのトップは伊達じゃねぇってことだ。まっ、アイツらにも色々あったからなぁ。実力はホンモノだぜ？」

　己の教え子と戦う事になった、デュエリア校のトップ選手の…リョウ・サエグサの、予選での戦いを思い出している砺波の様子は、教え子の実力をよく知っている砺波からしても警戒に値するモノなのか。
　…そう、学生とプロを分ける実力の『壁』を、更に超えた位置にあるプロのトッププランカー達が身を置く『先』の地平。
　通常、高等部という年代で『先』の地平に至れる者など、よほどの才能と偶然が重なっても十数年に1人…いや、下手をすれば、数十年の1人現れるかどうかだと言うのに…
　それが決闘市とデュエリアの、双方の都市を合わせてもこの予選の結果を見ただけで１０人近くも居るという、その事実事態が現実離れした紛れも無い異常事態。
　…そしてこのデュエリア校のリョウ・サエグサ。
　彼の予選のデュエルは…否、昨年度の【デュエルフェスタ】の記録から考えても、そのデュエルが常人の域を遥かに超えたモノであると

言う事に砺波は気がついていたのだ。
…そう、【決島】の予選でも。昨年度の【デュエルフェスタ】でも。
彼のデュエルは常にＬＰがギリギリとなり、手札もギリギリで進められ…そしてその場その場の窮地から、『常に』たった1枚のドローで逆転を演じるという、心臓がいくつあっても足りないと思える程にスリルに塗れたデュエルを、ずっと彼は魅せていた。
…それはまるで賭博師のソレ。彼のデュエリアでの『異名』通り、文字通り生粋の『ギャンブラー』。
…普通であればありえない。『全てのデュエル』でギリギリからの逆転を行うことなど。
しかもソレが計算された逆転などではなく、自分の『運』に全てを任せた、たった1枚のドローによるモノだなんて。
だからこそ…
リョウ・サエグサの持つ、常人の『強運』を遥かに超えた『天運』。
それはまさしく、『先』の地平で鎬を削る、プロのトッププランカー達の持つ『豪運』をも超えた…【王者】やソレに継ぐ『異名』を持った者達―『極』の頂に立っている、頂点の決闘者達にも立ち向かうことを許されたかのような、恐るべきただの強すぎる『運』。
よもやこの年代で、この境地にまで至ることの出来る学生が居たという事実は、砺波をもってしても驚嘆の一言であるのだろうか。
リョウ・サエグサという生徒が、学生の域には収まらぬ…更に上を目指すことを天に、神に、彼の言うところの『勝利の女神』に許されたという、恐るべき才気を秘めた器ともいえるのであって。
「クハハハハ。楽しみだなぁおい。」
「…あぁ。」
目前まで迫った教え子の戦いを…
白き鯨は、ただただ深い瞳で見つめているのだった―

―…

【決島】内の最北端―その、『決勝』に進めなかった学生達が屯している『医療棟』でのこと。
決闘市の多くの学生達、そしてデュエリアの多くの生徒達が自室やロビーや食堂で、ＴＶや自分のデュエルディスクなどで『決勝』の開始を今か今かと待ち望んでいる、この開始前の時間…
…そんな、医療棟のとある一室に。

「…天城の相手はあのギャンブル狂いか…」

決闘学園イースト校２年、紫魔　アカリは居た。

「あの変態に天城が負けるのも癪だけど、アタシに勝った変態が天城に負けるってのも何か癪ね。…クソッ。」

予選での遊良とのデュエルを最後に気を失ってしまった為、失格となってしまい決勝に出られなかった紫魔　アカリ。
そんな『決勝』を観覧しようとしている彼女の言葉には、その鋭い視線と同じくらい鋭い棘のようなモノが映えており…

「天城…アタシ以外の奴に負けるなんて許さない…アンタは必ずアタシが倒す。」

しかし、それは未だ遊良を憎んでいる故の刺々しい言葉…といった感情とは、断じて違うということだけは確かだろう。
何せ【決島】が始まる前とは打って変わって、今のアカリの表情はどこかスッキリとしているのだ。

それは、予選でのとある戦いによって彼女の憑き物が一つ落ちたが故なのか…今のアカリの心にあるのは、遊良への復讐心よりも、あの『天空闘技場』に自分が立っていないことへのデュエリスト特有の悔しさだけの様子。

そう、天城　遊良との戦いで、彼女が何を知り何を感じたのかなどアカリ自身にしかわからぬ事とは言え。

それでもこうして、今の彼女が遊良のデュエルを観覧し…そして無意識とはいえ、遊良の敗北よりも遊良の勝利を望んでいるかの様な自分の言葉は、きっとアカリ自身も気がついてはいないことだろう。

…誰もいない部屋で、決意のように呟かれたその言葉。

それは、これから先を見据えている、【決島】が始まる前とは全く違う感情を持っている言葉。

これより戦う二人の男達を見据えている少女の目には、未だ消えぬ炎が宿っているのだった―

―…

天空闘技場の、戦いの舞台へと続く道。

暗い通路となっているそこは、これより戦いに向かうデュエリストの緊張がそのまま形骸化されたかのような…独特の雰囲気と冷たい空気、そして世界中の注目によって、地上よりも遥かに重い圧が充満していて。

その、天空闘技場へと続く道の途中…

（リョウ・サエグサ…デュエルランキング第1位で、【デュエルフェスタ】の準優勝者…）

ゆっくりと舞台へと向かっている遊良の頭の中は、対戦相手であるリョウ・サエグサの事で一杯になっていた。
…そう、デュエリア校のデュエルランキング、その『第1位』という功績は伊達ではない。
２０万人を超えるデュエリア校の生徒達の中の、その正真正銘文字通りの『トップ』。
一芸に秀で、個性を突き詰め…そんな曲者揃いであるデュエリア校で、デュエルの実力のみでその頂点まで上り詰めるというその行為がどれだけ難しい事なのかと言うことは…
昨日デュエリア勢と激しい戦いを繰り返した遊良も、たった一日とはいえ十二分に身に染みて理解できている。
また、いくら彼が【デュエルフェスタ】の準優勝者とはいえ、その決勝で行なったデュエルも、あまりに激しい応酬と拮抗した戦いの末にギリギリで相手が僅かに競り勝っただけという…
どちらが勝っていても可笑しくないという、あまりに白熱した戦いだったのだ。
…まぁ、その時のリョウの相手は、遊良も昨日戦ったあのアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンだったのだから…
あのアイナと最初から互角に戦っていたという事実だけで、彼がどれだけの実力を持っているのかと言うことは最早語るまでもないことなのだが。

ともかく…

曲者揃いの精鋭達の、たった一人の頂点の猛者。
その彼のデュエルが、果たしてどういったモノなのかはもちろん【決島】の前にデュエリア勢の研究した遊良の頭の中にも、強烈なインパクトとなって刻み込まれている。
―ギャンブルカードを多用する、命知らずのデュエリスト。

普通の人間では、そんな事は断じて出来ないだろう。
強者と言うのは、あくまでも運以外に確立された計算と試算、そして分析と経験によって常に変化する情況を見据えて次の行動を行うモノなのだから。
…しかし、リョウ・サエグサにはソレがない。
それはどれだけギリギリの場面でも変わらない。絶体絶命、断崖絶壁、それ外せば後が無い、慎重にならざるを得無い場面であっても。
最初から最後まで出たとこ勝負。その場その時その瞬間に、引いたカードに文字通り全てを賭けて行動しているだけの…一見すれば到底『上』になど昇れないような、そんな細すぎる綱渡りを延々と続けているというのが彼のデュエルを見た遊良の第一印象。

…しかし、それでもなお彼は強い。

そう、実力もある。精神力も強い。そしてそれ以上に、あまりに『運』が良すぎるのだ。
…あまりに使いどころが限られるピンポイントなカードを、必要な場面で必ず引く。
…発動条件が厳しいカードを引いたときには、まるでソレを引けることが分かっていたかのように準備が整っている。
…使いどころが難しいギャンブルカードを、さも当然のようにして使いこなす。
デュエリア校のトップに駆け上がれるだけの力と心と、その元々の実力に加えて更に『上』へと昇りつめる『運』という資格を持った、あまりに恐ろしい強い相手。
…ギャンブルカードという特性上、何をしてくるかわからず、何が襲ってくるかわからない。

そんな強敵を前にして…

遊良の頭の中には、その相手とどう戦うかのシュミレーションが

次々と浮かび上がっては潰されており…

そして…

『さぁ、選手の入場です！まずは予選第３位通過！まさかの『Ｅｘ適正』の無い選手が、ここまで上り詰める事など誰が想像していたのか！昨年度の【決闘祭】の優勝者！その実績が嘘でない事を、果たして世界中の目の前で証明できるのか!?』

全世界へと向けて掻き鳴らされるは、耳を劈く実況の音。
そしてソレに連動し、この場には居ないはずの世界中の見えない観客達の歓声が聞こえないのに聞こえてくるその感覚は…
まさに今の彼が、世界中の人々から見られているという証明となりて遊良へと襲い掛からんとしているのだろうか。

…どこか棘のある実教の声も、ある意味では当然の台本。

そう、いくら【決闘祭】優勝という実績があるとは言え…

それはあくまでも『決闘市』の中だけの実績であり、この広い世界からすれば、天城　遊良という人間はまだまだ『Ｅｘ適正』の無いデュエリストの出来損ないという認識が強いのだ。

『Ｅｘ適正』が無い…それはこの世界においてはどうしようもない『出来損ない』の証

いくら昨日の【決島】予選で、あれだけ激しく戦い抜き全勝で勝ち進んだとは言えども。
それでも数え切れない程の疑いの視線は、世界中から恐るべき鋭さ

となりて…今まさに、遊良へと突き刺されていて。

「…よし、行くか。」

…だからこそ、戦う。

昨年度に、決闘市の全てへと見せ付けたように…

今、全世界へと向けて。己の存在を、見せ付けるために―

『決闘学園イースト校2年、天城　遊良選手！』

続いて―

『そしてそれに続くのは、予選第2位通過！昨年度【デュエルフェスタ】の準優勝者にして、堂々のデュエルランキング『第1位』！ドラフト筆頭の彼のギャンブルは、本日も冴え渡るのでしょうか!?勝利の女神に愛された、命知らずのデュエリスト！ここに堂々の入場！』

何処からとも無く聞こえる歓声は、紛れもなく彼に向けて放たれたモノ。

この島でも最も太陽に近いこの場所で、その煌く金の髪が風にたゆたい…自らを『太陽の王子』と呼称する彼の佇まいを、どこまで照らし出しているかのようなこの歓声はきっと幻聴などではないはず。

絶対にコインが表―『太陽』を示す事から、人は彼のことを『太陽の王子』と呼び称え…

勝利の女神に愛されているかのような強運から、人は彼のことを

『女神に愛された男』と呼び称え…
あまりの女好きから、性別が女であったならば年齢見境なく口説き、あまつさえ肉体関係をも求めることから人は彼のことを『変態』と呼びたた…称え…

そう―

勝利の女神に愛された、命知らずのデュエリスト。
決闘学園デュエリア校、デュエルランキング『第1位』…

―『ギャンブラー』

『決闘学園デュエリア校3年、リョウ・サエグサ選手!』

決して聞こえぬ観客の声、しかし確かに響き渡る歓声は、きっとこの『決勝』の舞台へと勝ち上がってきた2人の学生達へと向けられた、世界中の熱狂そのモノ。
決闘市とデュエリア、計４０万人を超える者達の中から選ばれた２００人の…更にその中から、『実力』によって生き残った４人の内の、２人。
…どれだけ懸念を向けられようと、どれだけ曲者であろうと。今視線を交わした2人は、お互いがお互いを強者なのだと言われるまでもなく理解していて…
猛者であることは言わずもがな。そんな二人は、この騒がしくも静寂な天空闘技場で顔を合わせたかと思うと…
「アイを倒したんだってな?」

「…あぁ。」
「面白えじゃねぇか。野郎とヤるのはシュミじゃねぇんだが…アイを倒したって奴なら話は別だ。満足するまでヤりあおうぜ？」
「…」

少々背筋に寒気が走るような、どこか気味の悪いイントネーションで遊良へとそう言葉を投げかけてくるリョウに対し…
目の前の強者へと、警戒しながらも静かに戦意を燃やしている様子の遊良。
…そう、その言動がどれだけ軽くとも、その振る舞いがどれだけ軽薄であっても。
それでも目の前のリョウ・サエグサからは、これまで戦ってきた誰よりも濃い『強者の匂い』が伝わってくるのだから、遊良も油断など微塵もしている場合ではないのだろう。
これだけの力を隠す気もなく、それでいて己の力に全く飲まれていない。ソレは正真正銘、彼がホンモノの強者であるという証明なのだから。

…またリョウの方も、いくら実況が棘のある言葉で遊良の力を疑問視していても。

それでも、己の眼で見た『天城　遊良』というデュエリストが紛れも無い『本物』なのだという事は、彼とて十二分に理解している様子。
…そう、単なる偶然だけでは、あのアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンは倒せない。
よほど汚い手を使うか、それともイカサマでもするか…しかし目の前の少年が、そんな汚い真似をする男ではない事など遊良の戦意に満ちた眼を見たリョウにはハッキリと分かっている。

ソレ故…

「さて、じゃあヤるか。」
「…あぁ。」

男同士の戦いに、もうこれ以上余計な言葉はいらない。
これより始まるのは、世界中に見られているこの場所で、選ばれた者達の中から更に勝ち残った生き残りのうちの2人が、果たしてどちらが強いのかという男の意地の張り合い。
二人の猛者が、ゆっくりとデュエルディスクを構え始め…
ディスクが、デュエルモードへと切り替わったその瞬間。今、始まりの合図となる、実況の声と同時に…

『それではぁぁぁぁぁ!決勝戦第一試合、開始いいいいいい!』

―デュエル!!

今、始まる。

先攻はデュエリア校3年、リョウ・サエグサ。

「俺のターン!魔法カード、【カップ・オブ・エース】発動!」

デュエルが始まってすぐ。
手札から、一枚の魔法カードを発動したリョウ・サエグサ。
それは表…『太陽』のマークが出れば、自分が2枚もドロー出来るという破格の効果を持ってはいても…

裏…『月』のマークが出れば、相手に2枚もドローさせてしまうと言う恐れがあると言う、運が良ければ自分がドロー、悪ければ相手がドローと言う、純粋かつ分かりやすい運試しとも言えるようなカードであり…

運否天賦に全てを任せた、この世界では扱う者の方が珍しい、ギャンブル性が高いリスキーなドローカードなのだが…

「やっぱり来たか…」

「さぁ、運試しといくか！天に舞え、運命のコイン！」

しかしそれは、リョウにとってはいつもの如く、当たり前に使用するべきカードの1枚。

そう、このギャンブルカードを扱う事など、彼にとっては日常茶飯事なのだと思わせるほどに…宣言を行うリョウから放たれるその溢れる自信は、彼から何の恐れも感じさせず。

…そのまま、彼の持つデュエリアの『ギャンブラー』の通り名のままに。

まるでリスクなど感じさせない、心の底から明るい声がリョウから放られたかと思うと。天に浮かぶ金の杯から飛び出した、一枚の巨大なコインが宙を舞い始め…

―出た、マークは…

「Ｙｅｓ、Ｌｕｃｋｙ！マークは太陽！コインは表！俺はデッキから2枚ドロー！」

「…」

輝かしい陽の光に反射し示されるは、『表』を表す太陽のマーク。
この島の中で最も太陽に一番近い、この天空闘技場で太陽に照らされながらこの輝く太陽のマークは…まさにリョウ・サエグサという男の『運』が本日も快晴であるという証明とも言えるのか。
…聖なる杯の導きが、リョウに更なる手札を与える。
そして―

「まだまだ行くぜ！【手札抹殺】を発動し、手札を全て捨てて５枚ドローだ！」
「…５枚捨てて５枚ドロー！」
「よし、魔法カード、【死者蘇生】発動だぜ！俺が墓地から蘇らせるのはコイツだ！Ｃｏｍｅ　ｏｎ！レベル７、【ゴッドオーガス】！」

【ゴッドオーガス】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２４５０

現れしは巨大なる大剣を振り上げた、命知らずの蛮勇戦士。
まるで違うゲームから飛び出してきたかのようなその雰囲気は、今にも力のままに遊良へと襲い掛からんとしているようではあるものの…

「さぁて、続けていくぜ！【ゴッドオーガス】の効果発動！ダイスを３つロールする！さぁ…天に舞え、運命のダイス！」

そして間髪入れず。
一つのギャンブルを終えた直後に、更なるギャンブルへと身を投じ始めるリョウ・サエグサ。
天に現れた３つのダイス。その３つの黒のダイスの目を囲む星の絵柄は、どこか相手へのプレッシャーを煽るような…得体の知れぬ圧力を放ちながら、今高々と天に舞い始めたではないか。
…回転を増す黒のダイス。

何が起こるかわからないその緊張感は、デュエルとはまた一味違った焦燥を遊良へと与えていて。

―出た、数字は…

「Ｙｅｓ！今日は飛び切りツイてるぜ！３つのダイスは…全て『６』だ！」

「なっ!?」

「ＹＡ―ＨＡ―！相手ターン終了時まで、【ゴッドオーガス】の攻撃力を１８００ポイントアップする！そして３つのダイスがゾロ目だったことで…【ゴッドオーガス】の３つの効果が、全て発動するＺＥ！」

【ゴッドオーガス】レベル７
ＡＴＫ／２５００→４３００　ＤＥＦ／２４５０→４２５０

最大値を示したダイスの光が、眩き力を【ゴッドオーガス】へと与えていく。

…３つのダイスが、全て『最高の目』を出す確率など、よほどツイていたとしても到達できる代物ではないと言うのに。

運否天賦に任せた行動では、結果が予想に伴わない事は多々あれど。それでも、よもやこれ程までに『天運』が彼の為に働こうとしているこの光景は、実際にその目で見たとしても到底信じられるモノではない事だろう。

しかし、それをこんなデュエルが始まってすぐに。まるで当然のようにして見せつけてくるなど、遊良からしても想定以上であったに違いなく…

「【ゴッドオーガス】は相手ターン終了時まで、戦闘、効果では破壊さ

れねぇ！俺は更に２枚ドローし、【ゴッドオーガス】はダイレクトアタックが出来るように…なるんだが、まっ、それは先攻じゃあ使えねぇな。俺はカードを３枚伏せてターンエンドだ。」

リョウ・サエグサ　ＬＰ：４０００
手札：５→３
場：【ゴッドオーガス】
伏せ：３枚

そうして…
初動から『ギャンブラー』の名に恥じぬ振る舞いを繰り広げ。
デュエリアの『ギャンブラー』は今、満足してそのターンを終えた。

「俺のターン、ドロー！」

そして、自分のターンを迎えて。

（予想はしてたけど想像以上だ…まさかダイスが３つとも『６』を出すなんて…）

…一枚のカードを引いた遊良は、一瞬だけその手を止めて思考を巡らせる。
そう、デュエリアの『ギャンブラー』…その彼の持つ『運』が、とんでもない強運であると言う事は彼の以前にデュエルを研究した遊良もある程度は想定はしていた。
…けれども、その運がまさかここまで強いだなんて。
偶々かもしれない、偶然かもしれない。けれどもたった２回のギャンブルとは言え、ソレを今目の前で体感した感覚は、遊良の危険を知らせるセンサーの針を最大以上に振り切らせたのだ。
…昨年度の【デュエルフェスタ】の映像を見ても、彼の運はここまで強いモノではなかったはず。昨年は、確かにギャンブルカードを悉

く成功させはしても、ここまで理想的で最大の効果を発揮することはほぼ無く…
『運』の鍛え方など知らない遊良からすれば、まだデュエルが始まったばかりとは言え昨年以上のオーラを感じさせるリョウ・サエグサに対し、じわじわと鳥肌と寒気に襲われかかっていて。
…次のターンにも、『同じ様な事』が起こるかもしれない。
ソレを容易に想像させるほどに、自分には到底出来ないであろう底の見えない果てしない『運』の違いを、遊良も今まざまざと見せ付けられたに等しく…

「【成金ゴブリン】発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！続けて【トレード・イン】を発動！【クラッキング・ドラゴン】を捨てて２枚ドロー！フィールド魔法、【チキンレース】発動！ＬＰを１０００払い、【チキンレース】の効果で更に１枚ドロー！まだだ！【闇の誘惑】を発動！２枚ドローして【闇の侯爵ベリアル】を除外！」

だからこそ、そんな不安を吹っ切るように。
始めから全開で飛ばし始める遊良のドローが、嵐となりて加速する。
ドローして、ドローして、ドローする…それは先ほどのリョウが見せた、ギャンブルの波に対抗するかのような怒涛のドロー。

「魔法発動、【手札抹殺】！５枚捨てて５枚ドロー！」
「…Ｇｒｅａｔだぜ。ソレがお前の武器ってわけか。俺は３枚捨てて３枚ドローだ。」
「よし！魔法カード、【ワン・フォー・ワン】発動！手札のモンスターを１体捨て、デッキから【サクリボー】を特殊召喚する！そして特殊召喚成功時に速攻魔法…【地獄の暴走召喚】発動！」
「Ｗｈａｔ!?」
「墓地から、【サクリボー】２体を特殊召喚する！集え、【サクリボー】達！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

小さき毛玉の悪魔達が、巨剣の蛮勇と対峙する。
…一見すれば、全く相手にならないようなモンスター同士のにらみ合い。
けれども遊良のデュエルを良く知る者達からすれば、これで準備が整ったのだとすぐに理解できる場が、今ここに揃えられた。
…様子見出来る相手じゃない。ソレを、重々承知している遊良だからこそ。始めから、全力で飛ばすように加速を続けるのか。
それは、リョウ・サエグサというデュエリアの猛者が、とんでもない実力の持ち主であるという遊良の嗅覚。そう、いきなり攻撃力４３００の、戦闘でも効果でも破壊されないモンスターを場に呼び出したリョウの『運』は、ターンが変わった今でもなお常人では想像もつかぬ実際の重さを放っており…

「…俺のデッキに【ゴッドオーガス】は１枚しか入ってねぇ。だが戦闘でも効果でも破壊されねぇ【ゴッドオーガス】相手に何を出す気だ？」
「破壊できないなら、破壊しなければいいだけだ！俺は３体の【サクリボー】をリリース！」

襲いくるリョウの重いオーラと、真正面からぶつかるようにして。
高らかに天に掲げられしその手には、一片の迷いも淀みもなく…天高く聳える天空の塔の、その最も高い場所で今高らかに、遊良の叫び

が空を裂く。
…それはアドバンス召喚のモノとは違う、特殊召喚のための生贄のエフェクト。
遊良の宣言によって、天にその身を捧げる小さき悪魔達の、その身に纏うは渦では無く。
「運命を切り裂く英雄よ！青き誓いをその身に刻み…天を喰らいし覇者となれ！」
「…ッ、その口上は…」
世界に轟くその口上。今、悠久の時を経て。熱狂に湧く全世界へと、ソレは高らかに響くのか。
…そう、戦闘でも効果でも『破壊』出来ないのならば、それ以外の手で攻めるのみ。
それはこの【決島】に来てから手に入れた、新たな切り札を呼び出すためのエフェクトでもあり…
ソレはこの島の最も高い場所で、天を揺るがすその叫びと、天に轟く威光と共に…
「来い、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！」
―！
現れたのは翼の羽ばたき、血を零す飢えの滴り。
震える天を切り裂いて、今静かに降り立つは世界中がその存在を知っている【王者】の姿。
血霧と共に降臨し、剥き出しの牙を刃へと変え…混沌渦巻く天より

出でしは、竜頭を纏いし運命の英雄。
纏いし竜の咆哮で、双翼を広げ地に降りることなく空に佇み。下界を見下ろすその瞳は、一体何を映しているのか。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

それはリョウの強大なる『運』によって作り出された、巨剣振りかざす蛮勇を前にしても慄かない、正真正銘本物の英雄。
遥か昔、世界が鬼才の戦いに熱狂していた頃…
運命を貫く英雄と、運命を引き千切る英雄と共に、３体の【紫魔】の象徴として世界中が見惚れていたという…世界で最も有名な、『Ｄ』の英雄の最たるエース。

「【サクリボー】３体の効果で３枚ドロー！そしてＢｌｏｏ―Ｄが場に居る限り、相手モンスターの効果は無効となる！」
「ソイツぁ【紫魔】のカード…さすがにＧｒｅａｔだぜコイツぁ…」
「まだだ！Ｂｌｏｏ―Ｄの更なる効果！１ターンに１度、相手モンスターをＢｌｏｏ―Ｄに装備できる！【ゴッドオーガス】を喰らい尽くせ、Ｂｌｏｏ―Ｄ！」
「Ｓｈｉｔ！」

効果を無効化し、蛮勇の攻撃力を元に戻したとは言っても。既にダイスによって適応されている、【ゴッドオーガス】の破壊耐性は継続している。
…ならば、何をしても破壊出来ないのならその存在ごと喰らい尽くしてしまえばいいのだと言わんばかりに。
『先』の地平に立っているリョウ・サエグサの、強すぎる『運』が放つ重いオーラに負けぬ…まさに【王者】として戦っていたに相応しい存在感を放ちつつ、運命を切り裂く英雄が天高く舞い上がったかと思うと、その竜頭で獲物を見据えて狙いを定め始めたではないか。

…そのまま、空腹訴える竜頭の望むままに。
巨大なる蛮勇を、その巨剣ごと英雄が喰らい尽くさんとした…

その時だった―

「だが簡単にやらせるわけにはいかねぇなぁ！永続罠、【ヘッド・ジャッジング】発動！」
「なっ!?」

運命の英雄の暴食を、寸前で邪魔するかのように。
…叫ばれたリョウの宣言によって、英雄と蛮勇の間に現れたのは一枚の罠カード。
そしてその罠カードにぶつかる寸前、運命の英雄はその翼を翻し再び天に飛び立ったものの…発動されたソレを見た遊良の表情は、どこか意表を突かれたかのような驚きを浮かべており…

―別に、遊良が驚いたのはＢｌｏｏ―Ｄの効果にチェーンされた事に対してではない。

リョウが発動した永続罠。それは確かにこのタイミングで発動すれば、Ｂｌｏｏ―Ｄの効果を止められる…『かもしれない』カード。
そう、遊良が意表を突かれたのは、こんな危ない場面においてもリョウが発動したソレが『ギャンブル』カードであったと同時に…
コイントスを行うのが、発動した『自分』ではなく『相手』の運に任せるカードだった事に対してだ。

…いくら彼が、デュエリアの誇る『ギャンブラー』であるとはいえ。
この大事な場面で発動したのが、運に自信のある『自分自身』では

なく、よもや『相手』の運に流れを任せるカードだなんて。相手プレイヤーにコイントスを行わせ、相手が見事マークを言い当ててしまえば【ヘッド・ジャッジング】はただの無駄と終わるだなんて、とても正気の沙汰では発動出来ないと言うのに。

「さぁ、コインをロールして当ててみな！運が良ければ喰らわないぜ？」

「…俺は裏…『月』のマークを選択する。」

それでも、一度宣言されたカードは止められない。

それ故、デュエルディスクが導くままに遊良はコインのマークを選択するしかなく…

…もしこれで成功すれば、デュエルの流れは一気に自分に向く。そんなことはリョウ・サエグサだってわかっていることだろうに、それでもなお発動になんら躊躇いがないその態度はどこまでも遊良に得体の知れぬ怖さを与えているだけであり…

―出た、マークは…

「Ｙｅｓ、Ｌｕｃｋｙ！マークは太陽、コインは表！Ｂｌｏｏ―Ｄの効果は無効となり、コントロールは俺のモンだ！」

「くそっ！」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ、形勢逆転だな！【紫魔】のモンスターをプレゼントしてくれてありがとよ！Ｂｌｏｏ―Ｄが俺の場に居る限り、お前のモンスター効果は無効だぜ！」

ギャンブルに勝って上機嫌に、陽気に声を上げるデュエリア校のリョウ・サエグサ。

まるで、コインがリョウの味方をしているのではないかと勘違いす

るほどに…先ほどから、ことギャンブルにおいて彼の勝利は全くもって揺るがない。
これは、彼の運が強いのか…それとも、自分の運が悪いのか。
そんなコトは、今この状況においては遊良にはとても判断つかない事とは言え。それでも決定してしまった結果によって、天に佇んでいた運命の英雄が今ゆっくりとリョウの場に移動してし始め…
まさかその威光を、リョウにではなく遊良へと向け始めてしまったではないか。

「ＨＡＨＡＨＡ！【紫魔】のモンスターだろうがどうってことねぇな！そぉら、どうするんだ!?このまま成す術無しか？」
「…ぐっ…」

リョウの場へと移動してしまったその瞬間、運命の英雄より生じたとてつもない威圧感が遊良を襲う。
…それはアイナと戦った時に感じた、プラネットが放っていた重力に負けず劣らずの畏怖なる重さ。
ソレによって、遊良の全身に立っているのがキツく感じるほどの重さが圧し掛かってきて…
Ｂｌｏｏ―Ｄが生じさせる、相手プレイヤーだけに生じる封圧は、遊良が想像していたよりも生易しい代物ではなかったのか。
しかし、自分だけは無事で、相手だけ圧迫させるというＢｌｏｏ―Ｄの、この理不尽なるその効果の強力さは…『鬼才』と呼ばれ称えられた前【紫魔】、紫魔　憐造の戦いぶりが既に世界にこれ以上無いくらいに証明していることであり…
そして遊良も、この【決島】で散々頼ってきたその強力な効果を今こうして向かい合う形で向けられて、今はっきりとソレを身体で理解できたのだろう。
…そう、リョウが放った言葉の通り。遊良も、【決島】の予選中にＢｌｏｏ―Ｄに気圧されぬデュエリスト達に何度か言われたことがある。

―『…何がＢｌｏｏ―Ｄよ！アンタ程度がＢｌｏｏ―Ｄを使った所で、怖くも何とも無いのよ！』

―『また【紫魔】のカード…お前程度が使ぉたとこで無駄や言うたやろ！』

それは、その者達の言葉の通り。

【王者】と比べ…歴代最高の【紫魔】と称えられた前【紫魔】、紫魔憐造と比べても、遊良がまだまだ未熟すぎるということ。

…遊良では、まだＢｌｏｏ―Ｄの真価を発揮しきれていない。

それは、こんなにも強力な効果を持っているＢｌｏｏ―Ｄが、【決島】では悉く止められたり返されたりしているこの現状が証明している。

いくら【王者】の扱ったエースであろうとも、ソレを扱うのが未熟な者では宝の持ち腐れ。召喚するタイミングも、効果の使い所も、何もかもが甘い遊良ではその真価を活かしきれてはいないのか。

…まぁ、そもそも【王者】のエースなど、他人は召喚すら出来ないのだから…ソレを召喚出来ているという事実だけでも、遊良も大概ではあるのだが。

それでも、【王者】の持っていたカードが牙を剥くその怖さは、遊良が考える以上に凄まじい代物。

そう、いくら未熟な自分が使っていても…いや、まだまだ【王者】と比べて未熟すぎる自分が扱っているのでは相手は全く畏怖など感じず。

遊良も、ただただこの強すぎるカードに振り回されているだけとも言え…

それでも―

「…まだだ！【死者蘇生】発動！墓地から【サクリボー】を特殊召喚！そして２枚目の…【地獄の暴走召喚】発動だ！」
「Ｗｈａｔ!?２枚目!?」
「墓地から集え、【サクリボー】達！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

「チィッ！俺は再び【ゴッドオーガス】を選択！だがＢｌｏｏ―Ｄはコッチに居るってぇのに一体何を…」
「永続魔法、【冥界の宝札】発動！そして３体の【サクリボー】をリリース！」
「ッ、３体リリースだと!?」

敵に回った運命の英雄の、容赦ない威圧を押し返すように。
天空闘技場の舞台から、世界中へと響き渡るは獣の咆哮。
世界を見た運命の英雄に、その轟きを無効にされようとも…猛る力は衰える事無く、今ここにその姿を現すのか。

震える大気、獣の咆哮と共に…

それは、現れる―

「レベル８、【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／１９００→３０００　ＤＥＦ／１２００

「ッ!?…へぇ、コイツがＢｏｙの相棒ってわけか。強烈なのがビシビシ伝わってくるぜ…」
「バルバロスの効果は無効になっても、リリースされた【サクリボー】の効果は無効化されない！そして【冥界の宝札】と【サクリボー】３体の効果で５枚ドロー！」
「おいおい、何枚ドローする気なんだよこのＢｏｙ…」
「行くぞ、バトルだ！【神獣王バルバロス】で、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を攻撃！天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

―！

「クッ！」

運命の英雄の威圧の下でも、その力は衰えることなく。
…いや、寧ろ英雄の圧伏させる威圧によって、獣の怒りに火が点いたのか。
螺旋の槍の勢いが、威圧されているとは思えぬほどの勢いを持ちな

がら…そのまま、遊良へと牙を剥いていた運命の英雄を一撃の下に葬り去って。

リョウ　ＬＰ：５０００→３９００

「Ｇｒｅａｔ…切り札を奪われたってぇのに即座に攻撃に転じるたぁやるじゃねぇか。少しワクワクしてきたぜ。」

「…【貪欲な壷】発動。【イービル・ソーン】２体、【クラッキング・ドラゴン】、【鉄鋼装甲虫】、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】をデッキに戻して２枚ドロー。…２枚目の【チキンレース】も発動。ＬＰを１００払って１枚ドロー。カードを２枚伏せて、ターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：４０００→２０００
手札：６→４枚
場：【神獣王バルバロス】
魔法・罠：【冥界の宝札】、伏せ２枚
フィールド：【チキンレース】

そうして…

リョウの強すぎる『運』に、不本意ながら翻弄されながらも。

万全の力を持った獣の王が、主を守るように佇んで。今、ようやくそのターンを終えた遊良。

…正直、流れを掴めた感覚は無い。

今の一瞬の攻防で、リョウのＬＰを削ったとは言え。それはあくまでも【成金ゴブリン】で増やした分を削っただけであり、情況を整理すれば遊良はただ自分のモンスターを自分で破壊しただけなのだ。

…ソレと比べ。リョウはＬＰを１００減らしただけで、その場は先のターンを終えた時と同じく万全の状態のまま。

幾ら自分が先に攻撃に転じられたとは言えども…まだまだ遊良の警戒心は、デュエリアの『ギャンブラー』を前にして煩すぎるほどに警笛を鳴らし続けたままであり…

「俺のターン、ドロー！【チキンレース】の効果で、ＬＰを１０００払いもう１枚ドロー！【思い出のブランコ】を発動し、墓地から【クィーンズ・ナイト】を守備表示で特殊召喚！そして【キングス・ナイト】を通常召喚し…その効果で、デッキから【ジャックス・ナイト】も特殊召喚するぜ！Ｃｏｍｅ　ｏｎ！絵札の三銃士！」

―!!!

【クィーンズ・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００
【キングス・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００
【ジャックス・ナイト】レベル５
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１０００

しかし、そんな遊良を意に介さず。
ターンが移り変わってすぐ、溜め込んでいたモノを勢いよく吐き出すように…
即座に、そして激しく。目まぐるしく動き始めた、デュエリアの『ギャンブラー』ことリョウ・サエグサ。
…彼の場に揃えられたのは、絵札の三銃士と呼ばれる３体の凛々しきナイト達。
通常モンスターが２体に、それぞれのステータスもそれほど高くは無いとは言え…
３枚の絵札がその身を一つに重ねる時にこそその真価が発揮されるとされているソレらを、今の一瞬で場に揃えたリョウの素早くも淀みない展開は、まさに洗練されたカード捌きとも言えるだろうか。
「絵札の三銃士…それって確か…」
「いくぜ！魔法カード、【融合】発動！絵札の三銃士を融合し…Ｉｔ⊠s

Ｓｈｏｗｔｉｍｅ！Ｃｏｍｅ　ｏｎ、レベル９！【アルカナ　ナイトジョーカー】！」

―！

【アルカナ　ナイトジョーカー】レベル９
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／２５００

現れたのは、『天位』の称号を持つ究極の融合騎士。
天衣無縫の彼方から、騎士達の束ねられた力を剣に。
荘厳なりし魂を盾に構え、その最高位のナイトが放つ有り余る威光は３体もの正規素材を必要とする融合モンスターをこれほど容易く呼び出したリョウ・サエグサというデュエリア校トップの実力の高さを、全世界へと向けて見せ付けていて。

「攻撃力３８００…」
「まだだぜＢｏｙ！魔法カード、【サモン・ダイス】発動！」
「ッ、またギャンブルカード!?」
「Ｙｓｅ！ＬＰを１０００払って…天に舞え、運命のダイス！」

そして続け様に。
リョウが発動したのは、ダイスの出目によって効果が変わる一風変わった魔法カード。
ＬＰ１０００という安くないチップを払い、もし自分の場の条件に合わない効果が出れば、ただただ無駄にコストを払うだけになるリスキーなカードであるというのに…
リョウ・サエグサの、全く淀みない宣言によって、彼の頭上で賽が舞う。

―出た、数字は…

「Ｙｅｓ、Ｌｕｃｋｙ！出目は『４』！俺は墓地から、モンスターを１体蘇生できる！墓地より蘇れ、俺のマグナム！レベル７、【リボルバー・ドラゴン】！」

―！

【リボルバー・ドラゴン】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

蘇りしは鈍黒の銃竜。
砲音を己の咆哮とする、鈍く光る３つの銃身。
怪しく回る１８の弾倉、命を撃ち抜く形をしているソレは、禍々しい狂気を孕みつつ…あまりに洗練された銃器として、一種の美しさすら醸しだしていて。

続けて―

「いっくぜぇ！【ゴッドオーガス】のモンスター効果発動！ダイスを３つ、ロールする！」
「くそっ！何度も好きにさせるか！永続罠、【デモンズ・チェーン】はつど…」
「いいや、させないＺＥ！手札から速攻魔法、【サイコロン】発動！」
「なっ!?」
「さぁ天に舞え、運命のダイス！」

リョウの残っていた最後の手札、そのたった１枚だけの手札から発動されるは、当たり前の如くギャンブルカード。
しかし、彼の残っていたその最後の１枚…
それが『魔法カード』である【サイコロン】であった事を今考え直

してみると、もしも先程の【サモン・ダイス】で『１』・『２』・『５』・『６』の目が出ていたら…

彼は【サモン・ダイス】の効果を使用できずに、ただ１０００ものＬＰを無駄に支払っただけに終わっていた。

それだけではない。ただ魔法・罠を破壊するだけならば、無意味に終わるかＬＰを１０００失うかもしれないリスクのある【サイコロン】を使うよりも、ほぼ同じ役割を持った【サイクロン】を使用した方が安全かつ確実のはず。

…けれども、安全牌など最初から取る気などないのだと言わんばかりに。

リスクを負っていると言うのに、それでもなおどこまでも迷いなくギャンブルカードを発動し続ける彼の精神状態は、果たして一体どうなっているのか。

出た、数字は…

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！やっぱり今日はＬｕｃｋｙだぜ！出目は『３』！俺は【デモンズ・チェーン】を破壊する！」

「ま、また成功!?」

「これで【ゴッドオーガス】の効果は邪魔されねぇ！さぁ、天に舞え！３つの運命のダイス達ぃ！」

間髪入れず。

遊良の悪魔の鎖を引きちぎった蛮勇の巨漢が、その大剣を高々と振り回す。

その剣の動きに呼応し、黒き３つのダイスが空の彼方で激しく振り動き…

…それは遊良には絶望を与える、怪しく回る恐怖のダイス。しかし

リョウには希望を与える、幸に狂ったラッキーダイス。
今、狂気の沙汰に魅入られたリョウの宣言によって…

出た、数字は…

「ＹＡ―ＨＡ―！ダイスは３つとも…全て『６』だぁ！」
「ッ!?」

―！

【ゴッドオーガス】レベル７
ＡＴＫ／２５００→４３００　ＤＥＦ／２４５０→４２５０

壊れている、狂っている…
…だって、『出るわけが無い』。
これまでコインで全て成功し、直前のダイスも成功し…更には２ターン連続で、３つのダイスが全て『６』という、理想的かつ最大の値を示す事など。
…リョウ・サエグサと言う男が、『ギャンブラー』と呼ばれている事から、それなりに他人よりも運が良いと言うことなど遊良にだって調べはついていた。
けれども見たことがない、ギャンブルカードで失敗もせず、かつ２ターン連続でダイスが最大の目を示すことなど。聞いた事も無い、あくまでも『運』によって情況が左右されるギャンブルカードで、ここまで自分にとって最高の目を出し続ける者が居る事など。
…しかし、そんなありえない『運』の暴走を見た遊良の、息を飲む

声など聞こえていないかのようにして。
再び【ゴッドオーガス】が黒のダイスより降り注ぐ光に包まれ、その力を先ほどと同じく上昇させていき…
そのまま、どこまでも陽気に狂いながらリョウ・サエグサは叫ぶだけであり…

―…

「…何をやっているのだ遊良の奴は。」

天空闘技場から下に下りた、選手の為の控え室。
その、個別に用意された部屋の一つにイースト校2年、天宮寺　鷹矢はいた。
しかし、相方のデュエルを見ている鷹矢の視線はどこか厳しいモノとなっているではないか。

「遊良め…やはり僅かだがキレが悪い。…このままでは本当に負けるぞ。」

それは今の鷹矢の言葉の通り。
一見、どこか拮抗しているように見えるこのデュエル。
しかしデュエルの流れは完全にデュエリア校のリョウ・サエグサの物であり、遊良のデュエルは足掻いているように見えるだけの、相手の掌で遊ばれているようなモノとなっているのだ。
…別に、遊良の調子が悪いというわけではない。
しかし、実力の『壁』を超えたその『先』の地平に辿り着いた遊良

ならば、もっと拮抗出来てもいいはずだと言うのに…いま一つ力を出し切れていない印象の遊良のデュエルは、昨日の予選の勢いがどこか感じられず。

…何か、無意識に心に引っかかっているモノがあるのか。

本当に僅かで微かな違和感。けれども『先』の地平に到達している者同士の戦いにおいては勝敗を分ける決定的な違和感。

…それは遊良自身とて気がついていない、ほんの僅かな心の引っかかりなのだろう。気付こうにも気付くとなどできない、感じるか感じないかの瀬戸際にある微かな違和感であり…

…きっと、遊良本人も不思議に思っているはずだ。何処となく、いつものようにデュエルが進められない…と。

けれども、その違和感の原因がわからない事にはこの強敵には絶対に勝てない。

それは、いくらリョウ・サエグサの『運』が『先』を超えた『極』の頂に近づいているとは言え。双方とも『実力』自体は『先』の地平に立っている者同士なのだから、遊良自身も己だけの『武器』を最大限に発揮出来れば拮抗する事は出来るはずであり…

それが出来ていないと言うことは、いまひとつ遊良が力を出し切れていないということなのだが…

とは言え―

決勝が始まる前に鷹矢が懸念していた通り。遊良自身もわかっていない、調子がどこか尻すぼみしている原因…

それが何なのかは、鷹矢にはハッキリとわかっていて。

「…仕方ない。全く、手間のかかる奴だ。」

そのまま鷹矢は、部屋の中にポツリと言葉を残したかと思うと。
出てはならぬとキツく言われている、この選手用の控え室を…
静かに、しかし迅速に後にしたのだった―

―…

「くそっ、どうなってんだコイツの運は！」
「まだＤＡ！ダイスが３つともゾロ目だったことで、俺はデッキから２枚ドロー！更に【ゴッドオーガス】は戦闘、効果で破壊されなくなり…さっきは使えなかったがこのターン、【ゴッドオーガス】はダイレクトアタック出来るようになる！」
「くっ！」
「続けて【リボルバー・ドラゴン】の効果も発動！さぁ、またまた天に舞え、３枚の運命のコイン！」

終わらぬギャンブル、止まらぬ賭博。
己の運を、精神を、命を。
磨り減るだけで回復しないソレらを、これ程までに容易く賭け続けるリョウ・サエグサの勢いは、まるで留まる事を知らないのではないかと錯覚するほどにその勢いを増していく。
…これで何枚のコイン、何個のダイスが振られたのだろう。
デュエルディスクの下す判決は絶対で、『そこ』にイカサマの入り込む余地が無いと言うことは、この世界においては幼児から老人まで知っていること。
だからこそ、ギャンブルをサポートするようなカードを全く使用す

らしていないのに、ただただ己の『運』のみでその全てに勝利し続けている彼の今日の運勢は…
まさに『強運』を超えた『豪運』をも更に超えた、他の追随を許さぬ圧倒的な『天運』となりてその姿を全世界へと見せ付け続けるのか。

—出た、マークは…

「Ｙｅｓ！今日はとことんＬｕｃｋｙだぜ！コインは３枚とも太陽…全て『表』だぁ！」
「なんでだ！何で全部成功するんだよ！」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！野郎に褒められても嬉しくねぇなぁ！そぉら、【神獣王バルバロス】を破壊ぃ！」

どうして引ける。どうして決まる。
最早『幸運』、『Ｌｕｃｋｙ』などでは片付けられない結果の数々が、どこまでも遊良の心を追い詰めていく。

…ギャンブルカードというモノはその性質上、『決まれば』どんな強敵が相手であろうとも『勝つ』事が出来る。

そう、『決まれば』、だ。
誰もが、一度は考えた事があるであろう。運が良ければ、流れが来ていれば、ツイていれば…と。
しかし、ソレはあくまでも神頼みであり、縋る思いで必死に祈りを届ける浅ましい人間の欲深い業が生み出した、幻想への逃避とも言える非現実的かつ非効率的な確率の低いただの賭け。
ソレ故、高速化と緻密な計算の上に成り立っている現代のデュエルにおいては、こんなリスキーなギャンブルカードを自ら好み進んで使おうとするデュエリストの方が皆無と言えるはずだというのに…

「まだまだぁ！【カップ・オブ・エース】発動！」
「ッ、ま、まだギャンブルするのか!?」
「当たり前だよなぁ！さぁ、天に舞え、運命のコイン！」

…けれども、このリョウ・サエグサは違う。
普通の感性を持つデュエリストであったならば、絶対に考えることすらしないはず。自らの『運』に、デュエリストとしての全てを賭けるなど。
それでも、彼は運任せであるが故に普通であれば使用するのに一瞬の躊躇が生まれるはずの『ギャンブル』カードを、全く躊躇いもせず発動する。
…それは、『確実に決まる』との確信からでは断じてない。

―そう、本当に、今日は『偶々』全て成功しているだけ。

何せ、昨年度の【デュエルフェスタ】の時も、昨日の予選の時も。デュエルの結果だけを見れば、リョウのギャンブルとて何度か失敗はしている。
けれども、この決勝の舞台…このデュエルにおいては、本当にここまで偶々偶然、驚くべきラッキーの連続でただただ成功しているだけなのだ。
だからこそ、遊良もまさかリョウ・サエグサの『運』がここまでのモノだったという事を、今この時になって改めて思い知らされているのだろうか。
彼の態度はただただ狂った、『外れてもいい』…いや、寧ろ外れても『面白い』というだけのギャンブル狂のソレ。
この男はどこまでもどこまでもギャンブルに狂うだけであり…
デュエルの勝敗も何もかも…そう、自らの命をもチップへと変えて。
デュエルの勝敗と言うデュエリストの『命』を、全て博打で解決し

ようとしている彼の狂気の沙汰は、到底他のデュエリストには理解など絶対に出来ないことであって。

出た、マークは―

「Ｙｅａｈ――！コレだからやめらんねぇ、たまんねぇ！マークは太陽、コインは表！俺はカードを２枚ドロー！…さぁて、待たせたなぁ！バトルだ！【ゴッドオーガス】でダイレクトアタック！」
「くそっ！墓地の【ネクロ・ガードナー】の効果発動！【ネクロ・ガードナー】を除外して、【ゴッドオーガス】の攻撃を無効にする！」
「Ｏｈ、【手札抹殺】か。抜け目がねぇなぁ、だが何時まで耐えられる？次は【アルカナ　ナイトジョーカー】でダイレクトアタックだＺＥ！」
「永続罠、【鏡像のスワンプマン】発動！闇属性、悪魔族となり、守備表示で特殊召喚！」
「かまわねぇ！Ｇｏ、ナイトジョーカー！ロイヤルストレートスラーッシュッ！」

―！

「くっ、墓地の【サクリボー】を除外し、スワンプマンを破壊から守る！」
「イイ反応じゃねーか！けど言ったはずだぜ？いつまで耐えられるかってなぁ！速攻魔法、【融合解除】発動！」
「なっ!?」
「墓地から絵札の三銃士を、攻撃表示で特殊召喚するぜ！Ｃｏｍｅｂａｃｋ！絵札の三銃士！」

―!!!

【クィーンズ・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００
【キングス・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００
【ジャックス・ナイト】レベル５
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１０００

「【キングス・ナイト】でスワンプマンに攻撃！」
「２体目の【サクリボー】の効果！スワンプマンを破壊から守る！」
「まだまだぁ！Ｇｏ！【クィーンズ・ナイト】！」
「さ、３体目の【サクリボー】の…」
「けどこれで【サクリボー】も打ち止めだぜ！イッちまいなぁ！
【ジャックス・ナイト】でスワンプマンを攻撃！ジャックポットスラーッシュ！」

―！

終わらぬリョウの攻撃と、あまりに激しいモンスター達の猛襲が、遊良へと次々に襲い掛かる。
もし遊良が先のターンに引けた罠モンスターが、スワンプマンではなく守備力の高い【量子猫】や【メタル・リフレクト・スライム】だったならば…
きっと絵札の三銃士の攻撃『だけ』は防ぎきる事ができ、全ての【サクリボー】を無駄に除外する事は決して無かった事だろう。
…それだけではない。
もし先程引けた罠カードが、【デモンズ・チェーン】ではなく【和睦の使者】と言った全体の攻撃を防げる代物であったならば。もしデッキに眠っている罠カードを、もっと手札に加えられていたら。もし墓

地に送る事の出来たカードが、【ネクロ・ガードナー】ではなく【光の御封霊剣】などであったならば。

…遊良はこのターン、リョウの攻撃を確実に、かつ安全に防ぎきる事が出来たはず。

…しかし、『もしも』の話しをすればキリがない。

そう、これも『運』―

今この時、この瞬間に…どちらの『運』がよかったのかという…ただ、リョウ・サエグサという男の『天運』が、今日この時この瞬間に、途轍もなく強大であったとう、ただそれだけのこと。

…だから、強い…だからこそ、怖い。

例え誰が相手でも、恐れもなくギャンブルに身を投じるこの男の…狂気の沙汰とも思えるギャンブルを、心の底から楽しみ尽くしているその態度は常人には決して理解出来ぬ代物。

それ故―

自分の運だけではなく、相手の運すらも利用して。嬉々として己の魂を削りながら、賭博に狂って笑う彼の事をこのデュエリアの地はこう呼び称えているのか。

…勝利の女神に愛された、命知らずのデュエリスト。

決闘学園デュエリア校、デュエルランキング『第1位』…

―『ギャンブラー』

―リョウ・サエグサ

「くっ…そ…」
「Ｇｏｏｄ　Ｂｙｅ、Ｂｏｙ！もうちょい粘ると思ったんだがな！【リボルバー・ドラゴン】で…Ｂｏｙにダイレクトアタック！鋼鉄の、フルメタル・ジャケットォ！」

がら空きになった遊良の場へと、襲い掛かるは銃竜の砲声。
…螺旋に回る鋼鉄の砲弾、命を打ち抜く冷たき銃弾。
今、その砲頭から。
銃声と共に、遊良へと向かって一発の弾丸が放たれた―

このままでは、やられ…

「つかよぉ！手札の【アンクリボー】の効果発動ぉ！墓地から【神獣王バルバロス】を特殊召喚ッ！」
「Ｗｈａｔ!?」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

刹那―

アンクを纏いし小さき毛玉が、遊良の叫びと共に場より飛び出して。

そして、その悪魔が輝いたかと思うと…

墓地より、獣の王が咆哮を轟かせながら飛び上がったではないか。

「守れ、【神獣王バルバロス】！」

そのまま、遊良の叫びに呼応するように。

獣の王は螺旋の槍を振り回し始め…

―ギィンッ…

という、鋼を弾いた音が聞こえた瞬間。

なんと獣の王は、銃竜より放たれた鋼鉄の弾丸を弾き返し主の身体守りきったのだ。

「ッ、あ、危なかった…」

「Ａｍａｚｉｎｇ…この場面でよくそんなカードを温存していたモンだ。仕方ねぇ、攻撃は中止するぜ。」

…思わず零れた冷や汗を、焦燥と共に袖で拭いながら。

刹那の攻防を耐え、ギリギリのところで命を留めたことで…逸った心臓の鼓動を、どうにか抑え始めた遊良。

それは昨日の予選が終わった後に、砺波に『勉強になるから』と言われ見せてもらった…【白鯨】と『逆鱗』が秘密裏に行った、デュエルディスクに保存されていた天上のデュエルのリプレイから得た守りのヒント。

決して野良試合で行われてはいけないようなデュエルが、【決島】の

最中に喧嘩のように行われていたと言うことはさておき…
…その時の『逆鱗』のデュエルから、何か遊良はヒントを得たのか。
先の【アンクリボー】はこの決勝が始まる前に、デッキを見直して入れておいた…ギリギリの場面を想定していた、この瞬間の遊良にとっての正真正銘最後の手段だったのだ。
それは遊良が、リョウを最大限警戒していたおかげで温存という様子見をしない選択をしたが故の…先のターンの最後のドローで、たまたま手札に引き入れられていたギリギリの守りの手でもあるのだが…

…それも遊良の『運』といえば『運』。

もし砺波が、『逆鱗』とのデュエルを見せてくれていなかったら。もしその天上のデュエルから、遊良が何もヒントをつかめていなかったら。もし『逆鱗』が使ったカードを、遊良が拒否していたら。
…きっと遊良はこのターン、リョウの猛攻を防ぎきる事が出来ずにここで負けていた。
また、遊良が先のターンにチキンレースを温存していたら。最後のドローで引いていた【アンクリボー】は手札に居らず、次のドローフェイズに引くカードになっていただろう。
ソレを考えると、いくら防ぎきることが出来たとは言え…こんなにもギリギリとなった攻防に、思わずその額に冷や汗をかいてしまう他ないのか。

「バトルフェイズを終了し、メインフェイズ2に再び【融合】を発動。絵札の三銃士を融合し、【アルカナ　ナイトジョーカー】を融合召喚。そんでエンドフェイズだ。バルバロスは墓地に送ってもらうぜ?」
「…あぁ。」
「俺はこれでターンエンドＤＡ。」

リョウ　ＬＰ…３９００→１９００

手札：3→1枚
場：【ゴッドオーガス】
【アルカナ　ナイトジョーカー】
【リボルバー・ドラゴン】
魔法・罠：【ヘッド・ジャッジング】、伏せ2枚

万全に揃えられたリョウの場。全く衰えぬリョウの『運』。
よもやデュエリア校のトップが、これ程までにとんでもない男だとは遊良とて戦ってみて初めて理解出来た事実であり…
…なんとか運良くこのターンは乗り切ったとは言え。
リョウ・サエグサの『豪運』を前にしては、遊良とてこんな偶然は何度も続ける事など出来るわけもないだろう。
そう、遊良は正真正銘、最後の守りの手段を使いきってしまった。そんな遊良からすれば、確実に次のターンは耐え切れないであろうリョウの『運』の圧が今もなお容赦なく襲いかかり続けていて。

…心に微かな引っかかりが生じている事など、負けた時の言い訳にもならない。

例えその引っかかりの原因が分からずとも。それがデュエルには直接関係の無いことでも、。それでも、今この時、何があっても、負けてしまえばそこでおわりだと言うのに。
こんな強敵を相手にしては、僅かでも心に原因の分からぬ引っかかりを覚えていることは致命的な命取りとなるのだ。それ故、まったく底が見えないリョウ・サエグサと言う男の『運』には、いくら『先』の地平に至った遊良を持ってしても戦い方に迷いが生じ始めていて…
「Ｈｅｙ！これがお前の最後のドローだ！俺みたいにいいカードが引けるよう、神に祈った方がいいんじゃあないか？」
「…神に…祈る？」

しかし、リョウがそう言葉を放ったその瞬間―
…何かリョウの言葉に、強く感じたモノがあったのか。デッキに乗せかけた指を止め、眉をピクリと動かし始めた遊良。
それは何気ない男の言葉。彼がいつも言っている、自分を愛してくれる勝利の女神への愛を声高々に叫んでいるだけではあるのだが…
それでも、そんな気に留める必要も無いリョウの言葉に、どうしても遊良は何か感じるモノがあったのだろうか。
けれども、そんな遊良を意に介さず。リョウは続けて、その明るい口を開くのみ。

「Ｂｕｔ、でも祈っても無駄かもな。何故なら勝利の女神は、最後にはいつも俺の頬に祝福のＫｉｓｓをするんだ。俺を愛してくれる勝利の女神を、俺もまた愛しているからこそ！俺は『ギャンブラー』なんて異名でデュエリア校のトップに立っているんだからよ！」
「勝利の、女神…」
「さぁて、お前はどんな神に祈るんだ？お前の神は、一体どんなカードを引かせるんだろうなぁ！俺の愛する勝利の女神に、お前の神は正面から張り合ってくれんのかぁ!?」
「…」

別に、怒ったりだとか憤ったりとか、そう言った類の感情ではない。
しかし遊良には、リョウ・サエグサが次々と口にする、彼の彼による彼ための『神』への賛辞が悉く気に障っている様子を見せ始め…
…怒りを覚えるような言葉ではない。しかしどこか癪に障る。
一体、遊良はリョウの言葉の何が気に障るのだろうか。
そのまま、リョウが放ち続ける『神』への愛の言葉に。遊良の感情が、『何か』を生み出しかけた…

その時だった―

『遊良ぁ！』
「ッ!?」

…突然闘技場に響き渡ったソレは、実況の声では断じてなかった。
いや、遊良の耳にはどうにも『聞き慣れた』その声は、今確かにこのデュエルの最中に割って入るかのようにして天空闘技場に…いや、自分達のデュエルが映し出されているはずの、超大型モニターから高々と発せられたのだ。

そして瞬間的に、反射的に。

遊良が呼ばれた方…自分達のデュエルしている映像が映っている、天空闘技場の超大型モニターの方へと目をやると…

―そこに、映っていたのは…

『何をやっているのだ大馬鹿者が！さっさとカタをつけてしまえ！』
「ッ、た、鷹矢!?」

そう。
マイクを片手に、もう片手に『何か』…おそらく『カメラ』だと思われるモノを持った、天宮寺　鷹矢がそこには映っていたのだ。
「なっ、鷹矢！お前何して…ってかどこに居んだよお前！そこって…」

鷹矢の居る場所…そこは、控え室では無い場所。
自分の出番が来るまでは、絶対に外に出てはならぬとキツく言いつ

けられている控え室から、何故か外に出ている鷹矢が控え室とは別の場所にいるというこの現状も然ることながら…

…鷹矢が居るのが、白を基調とした清潔感を絵に書いたかのような『医療棟』のような部屋であった事も、遊良の頭を一瞬だけフリーズさせてしまっていたことだろう。

また、一体、鷹矢がどうやって世界中に中継されているこのデュエルの映像に横入りし、天空闘技場のモニターを乗っ取っているのかはさておき。

鷹矢のとった行動を理解出来る者など、少なくともこの場には…否、この場に居る者でなくとも、鷹矢の取った行動を理解出来る者など世界中探しても誰1人としていないことだろう。

…しかし、当の本人はそのまま悪びれる気もなく。

そのまま続けて、言葉を放つ。

『見たらわかるだろう！いつまでも寝ていて俺達の戦いを見逃そうとしているこの馬鹿を起こしておるだけだ！』

「いや起こすってお前…ルキはまだ意識が…」

『うるさい、黙ってみていろ！おいルキ！いい加減起きんか！』

その、遊良には背景を見ただけで理解できるその場所。鷹矢の居る、【決島】の敷地内にある学生達が集められている医療棟の部屋とは、どこか造りが違うこの白い部屋…

―そこは何を隠そう、そこは高天ヶ原　ルキが秘密裏に運び込まれた、特別な『医務室』だったのだ。

しかし、天空に伸びる『塔』の、最上階に近い控え室に居たはずの鷹矢が、一体どうしてこんな短時間でルキのいる特別で秘密裏な医務室に赴いているのか。

…確かに昨日深夜、砺波の指示と命令の下にルキをこの特別医務室へと密かに運んだのは他ならぬ遊良と鷹矢だとは言え。
場所が分かっていたとしても、控え室を出てからの短時間では、とてもじゃないが天空の『塔』の上方階から外へと向かって走る時間などなかったはず。
…そんな、突然中継を遮ってモニターに現れた鷹矢へと向かって。
その映像を目の当たりにしてしまったイースト校理事長である砺波　浜臣は、心の底からあっけに取られたような顔をして、どこか搾り出すようにして声を漏らし…

「…な…て、天宮寺君…いつの間に隣の医務室に…」
「クハハハハ！なんだぁこの馬鹿は！ジジイそっくりの大馬鹿野郎じゃねぇかおい！」

そう、鷹矢が、こんな短時間でルキのいる医務室へと到達できたその理由。
…それは単純明快。
そこは天空闘技場の下階、『塔』の内部…選手と砺波と劉玄斎以外には、誰も居ない決勝の舞台の中だったのだ。
『その場所』を知っているという前知識と、鷹矢の鍛えに鍛えられた肉体と…
そして何の躊躇もなく踏み入るというその度胸が相まって、これ程までに短時間で最上階近い場所からルキの居るこの地下の特別医務室へと到達出来たのか。
…まぁ、いくら見張りが居ないとはいえ、『前例』があったが故に砺波にあれほど厳重に『外に出てはならない』ときつく言われている鷹矢が、外に出たというだけでも鷹矢にどれ程の決意があったのかは彼にしかわからない事とは言え…
けれども、それでも鷹矢は砺波に叱られるであろう事を承知で。
鷹矢は己の目的の為…遊良の心の『引っかかり』を解消してやる為に…その『原因』へと向けて、声を荒げるのみ。

『さっさと起きろ！お前が起きんと、遊良の奴が心配しすぎてヘマをするのだぞ！』

それはいまだ意識を取り戻さぬルキへと向けた、覚醒を促す鷹矢の叫び。

ルキの意識が深い眠りについていると言うことは、まだルキの体力が戻りきっていないということではあるのだが…

ソレを、鷹矢もわかってはいても。

それでも叫びだけではなく、まだ細かなヒビ割れの残るルキの頬を軽くペチペチと叩く鷹矢の物理的な起床への呼びかけは、どこか幼い子どもを起こす子どもの様な仕草にも見え…

すると…

『う…』

…そんな騒がしい鷹矢の声に、無意識ながらも苛立ちを覚えたのだろうか。

眠ったままのルキは、一瞬だけどこか苦い顔をしたかと思うと…

うっすらと、微かに、僅かに。虚ろな意識のまま、その目を開け始め…

『天宮寺君！何をしている！』

『む!?しまった、もう見つかったか！い、いいか遊良！さっさと調子を取り戻せ！さもないと…』

『早く来なさい！』

『ぬぅ!?』

しかし、即座に―

飛び込むように部屋へと入ってきた砺波によって。
…鷹矢は、そのままズルズルと部屋の外まで引きずられていったのだった。

「なんだったんだ、あのＢｏｙ…」
「…」

そして、鷹矢が部屋の外へと引っ張られていった直後。
きっと砺波が、鷹矢の持っていたカメラを切ったのだろう。天空闘技場の超大型モニターに映し出されていた先程の映像が途切れたかと思うと、思わず声を漏らしてしまったリョウ・サエグサと…
呆れているのか怒っているのか、言葉を失っている遊良の姿だけが天空闘技場に残されていた。

―幸か不幸か。鷹矢が割り込んでいた間の映像は、世界の中継からは切り離されていた為…
中継を見ていた世界中の人々、および【決島】の他の参加者たちには、デュエルの途中でただ映像が途切れてしまったとしか思われてはいないのだが…
まぁ、今の衝撃的な映像を見ていた遊良もリョウも砺波も、もちろん当の鷹矢もそんなことは知る由はないだろう。
あまりに突然の鷹矢の行動に、その映像を見ていた遊良もリョウも砺波もただただ驚かされたのは事実。
ともかく…

『あ…っと、映像が回復したようです！』

再開した中継の前で。再び響いた実況の声の下で。

「…はぁ…」

遊良は一つ…
とても…とても大きな溜息を吐いたかと思うと…

「なぁ…さっき言ったな？神に祈った方がいいって…俺の祈る神は、どんな神なのかって…」
「あぁ、ソレがどうした？」

その溜息は己への失望。
自分で気付かなければならなかったはずの、勝負を分けるソレを鷹矢に気付かされたという…気恥ずかしくも悔しさの残る、助けられた事への素直じゃない遊良の反骨心。
別に、外部からカードを受け取ったとか、この情況に対するアドバイスをもらったとか…そう言った『イカサマ』などでは断じてないのだから、鷹矢の行動に対して遊良が悔しがる理由は無いと言えるのだが…

…けれども、大きな溜息によって余計な気持ちを全て吐き出し。

鷹矢の衝撃はどこへやら。先程投げかけられた、リョウからの問いに返すようにして…
ゆっくりとその口を開いた遊良の言葉は、どこか先程よりも重みを纏ったようなモノとなりて、目の前のリョウ・サエグサへと届けられるのか。

…それはどこか、先程までの遊良の言葉とは質量が異なっているかのような声の質。

先程よりも、微かに重みを増した遊良の声。ソレは何かに気付いたかのような、それでいて何かを吹っ切れたような…纏う雰囲気を一つ変えた代物となりて、静かにその口から発せられ…

「…教えてやるよ…」

そう、その方法はさて置くとして。

…本選が始まる前に、鷹矢に言われていた『余計な事に気を取られすぎて転ぶんじゃないぞ』という、遊良も気付いていなかった心の僅かな引っかかり。ソレを、鷹矢にあれほどまでに『分かりやすく』教えられては。

遊良とて、己の心の内に巣食っていた僅かで微かな『引っかかり』の正体を、嫌でも気付いてしまうしかなかったのだろう。

…その、デュエルにほとんど支障がない、ほんの僅かな心の棘。

『運』を最大限に活かしてデュエルを行うリョウ・サエグサを前に、どこか思い通りにデッキが回りきらない感触を覚えていた遊良の…実力が拮抗した強者同士の戦いでは致命的になってしまう勝敗を分けるソレ。

自分で気付かなければ、自分で乗り切らなければならなかったであろうソレを、鷹矢に教えられるなんて遊良からしても不本意ではあったものの…

それでも今、その感触の正体を理解し。そして鷹矢の行動の所為…いや、おかげで、ソレを払拭する方法も同時に理解した遊良の…

大気を震わす強い意思、静かに、しかしはっきりとした…

リョウからの問いに答える、空気を振るわせるほどに重い遊良の声が…

「俺は…神には祈らない！俺を見放した神なんかに、俺は絶対に祈っ

たりしないんだよ！俺のターン、ドローッ！」

―ここに、轟く。

「俺は！」

―引いた、カードは…

「【闇の誘惑】発動！２枚ドローして【イービル・ソーン】を除外！【チキンレース】の効果も発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！続けて【トレード・イン】も発動だ！【鉄鋼装甲虫】を捨てて２枚ドロー！」

ターンを迎えて間髪入れず、場に吹き荒れるはドローの嵐。

迷いを完全に振り切ったが故の、先のターンよりもなお淀みない…止まらぬドローとドローの応酬、決して止まぬドローの竜巻。

…そう、ルキが無事だという事で、ルキの命に別状が無いと言うことで。ルキを救えたということで、確かに遊良が『決勝』で戦うにあたり心の障害は全て取り払われてはいた。

しかしソレはあくまでも最低限の結果であったために、ルキの意識が戻っていない事が無意識のうちに遊良の心の隅には引っかかっていたのか。

そう、祭典を楽しみにしていたルキの意識が、未だ戻らない微かな懸念。

ルキの分まで最後まで戦わなければならないという、意識の先走りが生み出した…当のルキが眠ったままで、自分の戦いを見ていないという僅かな焦燥によって生じた、ほんの僅かな心の亀裂。

…そんな、他人からすれば『そんな事』と思うようなことが。こんな、他人からすれば『何の事』と思うようなことが。遊良の心には、遊良自身でも気付かぬほどに小さな棘となって刺さっていたのだろう。

けれども今の鷹矢の行動で、ルキの意識が僅かに戻った事で遊良の中に痞えていたモノが消えた。

…例えソレが、鷹矢によって無理矢理に気付かされた事でも。

…例えソレが、自分自身で気付かなければならなかった感情であっても。

それでも一つの懸念を振り切った、自らのデュエルへの答えを出した…迷いのない遊良の声が、この天空闘技場に木霊し始め…

「ッ！おいおい、いきなりどうしたってんだ!?つかさっきから何枚ドローする気なんだよＢｏｙ！」

「まだだ！速攻魔法、【サイクロン】発動！【ヘッド・ジャッジング】を破壊し、３枚目の【トレード・イン】も発動！【モザイク・マンティコア】を捨てて…」

全世界へと見せ付ける、先のターンから全く衰えないドローの嵐。

…そう、これが、これこそが。

Ｅｘ適正に、この世界に…神に、その存在を全否定された少年が、それでも戦う事を諦めないと誓ったが故の、天城　遊良にしか出来ない彼だけの戦い方。

キーカードがデッキに眠っているのならば、ドローで無理矢理に引き出せばいい。サーチが出来ないのならば、ドローによってデッキから無理矢理に引っ張ってくればいい。Ｅｘデッキが使えないのならば、それに負けないメインデッキのモンスターをドローして立ち向かえばいい。

それは勝利の女神に愛された男の、類稀なる『天運』を正面から打ち破らんとしている、地を這う獣の足掻きにも似た単なる意地。

そう、リョウのように、逆転へと繋がる一枚のキーカードを一回の

ドローで引き当てるのではない。
神が定めたその運命に、反逆してでもカードを引き続ける遊良の姿は…まさに世界の理に真っ向から反逆する、神に反する悪魔の所業の様でもあって。

「2枚…ドローッ！…来た！まずは【冥界の宝札】を発動し、続けて【黙する死者】を発動！墓地から通常モンスター、【鉄鋼装甲虫】を守備表示で特殊召喚！そして速攻魔法、【帝王の烈旋】を発動し…俺は【鉄鋼装甲虫】と…相手の場の、【ゴッドオーガス】をリリース！」
「俺のモンスターを!?」

類稀なる天運を持った、軽やかに飛び回るギャンブラーに歯向かうは。地を這う獣の足掻きにも似た、出来損ないの必死なる叫び。
それはこの世界においては、古の時代に当に使い古されたアドバンス召喚のためのエフェクト。
いくら相手のモンスターにも渦を纏わせようとも、ソレはこの世界においては扱う者などほとんど居ない、見向きもされない生贄召喚。

…ただ、それだけ。

―しかし、それでも。

「宙の彼方より現れろ、レベル１０！【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】！」

―！

遥かな空より降ってきたのは、流星なりし宙の星。
それは深海よりも深きモノ、海嘯よりも豪きモノ。
荒ぶる激浪をその身に纏い、四海すら凌駕する海闊の化身。
空を映し、天を彩り、宙すら飲み込むまさに『海の星』。
それはたゆたう星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０
ＡＴＫ／　０→５２００　ＤＥＦ／　０→３９５０

唸る外界の波動をその身に。震える衝動は飢えの証。
そう、これが、これこそが―遊良が己を超えたことで従えた、純粋なりし『力』の象徴。
実力の『壁』を超え、その『先』の地平へと足を踏み入れた事によって押さえつけた…この星ならざる外の宙の、人知を超えた『力』のカード。

「コイツぁＰｌａｎｅｔ…なるほどなぁ、マジでアイを倒せるだけの実力を持ってるってわけか。」
「燦然と輝くプラネットの一球、【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】のモンスター効果！アドバンス召喚成功時、俺は相手の墓地の【ゴッドオーガス】を選択し…」
「けどやらせねぇよ！罠カード、【無差別崩壊】発動！」
「なっ!?」

けれども、『プラネット』の重圧を全く気にする事もなく。
再び高らかにリョウが宣言したのは、相も変わらず『ギャンブル』のカードであり…
それは賽の目によって破壊できるモンスターが変動する、出たとこ勝負の破壊のカードなのだが…

この情況では、例え『海の星』を破壊できる『目』を出したとしても、自分の場のモンスターすら巻き込まれてしまう危険性があると言うのに。
それでもなお、どんな時も、こんな時も…そう、強大なりしプラネットを前にしてもなお。
展開札も妨害札も、何もかもをギャンブルに任せるリョウの狂った宣言が、猛る『海の星』の唸り声よりも更に大きく天に叫ばれる。
「そぉら、天に舞え、２つの運命のダイス！」

出た、数字は…

「Ｙｅａｈ！出目は２つとも『６』だぁ！」
「また最大値!?」
「おらおらぁ！レベル１２までのモンスターを全て破壊するＺＥ！」

――！

炸裂せし爆音が、天空闘技場から中継を通じて全世界へと轟いて。
…遊良が全ての手札を使いきって、やっとの思いで呼び出したプラネットの一球である『海の星』を破壊するだけでは飽き足らず。
自らの場の天位の騎士も、鈍黒の銃竜も。
自分のモンスターをも巻き込んで響き渡る、そのあまりの爆裂音は狂気の沙汰に染まったリョウ・サエグサという男の狂いっぷりを、そのまま体現したかの様な光景となりて全世界へと映し出されるのか。
…最初から全てのギャンブルで成功し続けている彼の運は、この佳境であっても落ちる気配がまるでない。
ソレは例え、自分のモンスターを全て巻き込んでで。文字通り無差別に全てを崩壊させるその地響きが、どこまでも激しいモノとなり

て遊良へと襲いかかり…

「まだだ、まだ止まるわけにはいかないんだよ！【冥界の宝札】の効果で４枚ドローッ！」

「チッ、そう来るよなぁ！なら【リボルバー・ドラゴン】が破壊されたことにより、俺は手札から【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】を特殊召喚する！」

「まだまだぁ！【貪欲な壷】も発動！【神獣王バルバロス】、【イービル・ソーン】、【モザイク・マンティコア】、【アンクリボー】、【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】をデッキに戻し２枚ドロー！更に魔法カード、【強欲で貪欲な壷】も発動ぉ！」

「Ｗｈａｔ!?」

それでもなお遊良は止まらず。

凶暴凶悪なプラネットを、何の抵抗も許されずに破壊されても。ソレを乗り越えるかのようにドローを止めない遊良に、思わず驚きを感じてしまったのかのような声を漏らしたリョウ・サエグサ。

…情況を見れば、ここで『海の星』を破壊することはリョウにとってもベストな選択だったはず。

何せ、そうしなければ【冥界の宝札】によって手札を増やした遊良の更なる手が、リョウの伏せカードを掻い潜ってしまう危険性があり…

更には攻撃力を５３００にまで上昇させ、【ゴッドオーガス】の効果をコピーした凶暴なりし『海の星』の海嘯が、その一撃によってリョウのＬＰを刹那の下に奪い去ってしまっていただろうから。

だからこそ、リョウは自分の場の天位の騎士と銃器の竜を犠牲にしても『海の星』を破壊するギャンブルを選んだ。

更には連鎖的に現れた自分のマグナム、【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】が少年の心臓をその銃口で狙っているのだから、これで万全を期したと、そう確信までしていたのだ。

そうだと言うのに…

「デッキを１０枚裏側除外して２枚ドロー！速攻魔法、【異次元からの埋葬】発動！除外されている【サクリボー】３体を墓地に戻す！そして【シャッフル・リボーン】発動だ！墓地から【サクリボー】を特殊召喚し…速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！」

「ッ、３枚目だとぉ!?」

「墓地から再び集え、【サクリボー】達ぃ！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

全く外れる気配もなく、目まぐるしく決まりながらも止まる気配の無いリョウ・サエグサの『天運』に、真正面から立ち向かうかのように。

ドローにドローとドローを重ねる遊良の、そのドローの嵐もまた留まる事を知らないかのような回転を続けるばかり。

【冥界の宝札】だけのドローではない。そのドローに重ねるようにして、更にドローとドローを重ねた遊良の手札が、見る見るうちに増えていく。

…そうして三度遊良の場に揃いしは、小さき毛玉の悪魔達。

がら空きになったリョウの場を見据え、その小さき体躯を奮わせていて。

そして―

「マジかよＢｏｙ、この展開は…」
「いくぞ！魔法カード、【二重召喚】発動！そしてサクリボー３体をリリィィィス！」

轟かせしは不退の雄叫び。
全世界へと見せ付ける、荘厳なりし獣の雄叫び。
…例え『ギャンブラー』が自らのモンスターを巻き込んでもなお、それでも微塵も油断はなく。
そう、この強敵相手に確実なる勝利を求める為…今この天空闘技場から全世界へと向けて、ソレは高らかに響くのか。

震える大気、獣の咆哮と共に…

それは、現れるのだから―

「【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

「チィッ！また現れやがったか！しかも今回は…」
「【神獣王バルバロス】のモンスター効果！３体のリリースでアドバンス召喚した時…相手のカードを全て破壊する！」
「Ｓｈｉｔ！」

このデュエルが始まって初めて。
今度こそ何者にも邪魔されない獣の王の咆哮が、この天空闘技場へと轟き渡る。
…相手の場に移ってしまった運命の英雄に阻まれ、リョウ・サエグサのペースに乱され。
そうして本来の力を発揮できなかったものの、それでもデュエルを諦めず今この時になってようやく進撃を始めるかのようにして…今ここに、その破壊の槍は天高く唸りを響かせ始める獣の王。
今、主の叫びと共に。
逆転へと向けた不退の雄叫び、進撃を止めぬ獣の雄叫び。
その、一瞬でデュエルの形勢を変えるであろう叫びが、世界中へと轟かけた…

「やれ、バルバロ…」

その時だったー

「なら破壊される前に罠カード、【強欲な瓶】発動だＺＥ！」

遊良の叫びを掻き消すように、叫ばれたのは賭博の轟き。
そこはデュエリア校のトップデュエリスト。『ギャンブラー』とて簡単にやられるはずもなく…

デュエリアの『ギャンブラー』…その名に恥じる事なく、狂気の沙汰に染まったリョウもまた、遊良の進撃に負けずと劣らずのその狂乱を魅せようとしているのか。

「ッ!?ここでそのカード…」

「Ｙｅｓ！俺だってタダじゃあやられねぇ！ここでお前を超えられる運を！俺は引いてみせるだけＤＡ！」

そう。

それはこのギリギリの場面においても、何を引くかわからない一種のギャンブル。

単なる起死回生のドローではつまらないという、どこまでもギャンブルに魅入られたリョウの狂宴。

こんな時でも、あくまでもギャンブルに徹するからこそリョウ・サエグサと言う男はデュエリア校でも『ギャンブラー』という異名と共に称えられており…

どこまでも己が楽しむため。精神を削り、魂を削り、そうして己を削るからこそ快楽を得るのだと言わんばかりにリョウ・サエグサは叫び続けるのだろう。

そうして―

「俺はカードを１枚ドロ…」

その宣言によって、リョウがカードを引こうとした…

その時であっても―

「だったら【強欲な瓶】にチェーンして速攻魔法、【大欲な壷】を発動

だ！そして【冥界の宝札】と【サクリボー】の効果も発動している！」
「Ｗｈａｔ!?」
「まずは【大欲な壺】の効果で、【闇の侯爵ベリアル】、【イービル・ソーン】、【ネクロ・ガードナー】をデッキに戻して１枚ドローッ！」
「ッ！おいおい、まだドローするつもりなのかよＢｏｙ…１枚ドロー！」
「まだだ！俺は【冥界の宝札】の効果で４枚ドローし、【サクリボー】３体の効果で３枚ドロー！」

『ギャンブラー』の狂った叫びを、上から覆い隠さんと大声で叫ばれるは遊良の更なる連なるドロー。
…【強欲な瓶】の効果に、上から更に割り込むように。遊良は自分だけが更に余計に、多量のドローを行い始めるのか。
…それは手札を『０』から、一瞬で『８枚』にまで増やす脅威の所業。
そう、いくらリョウの運が『先』の地平を更に超えた、【王者】達にも匹敵する『極』の頂にかなり近づいているとは言えども…
それでも運を含めたリョウの実力と、遊良の実力は共に『先』の地平に位置しているのだから、さすれば遊良の底力とてデュエリアの『ギャンブラー』ことリョウ・サエグサと比較しても遅れを取っているわけが無いのだ。
―遊良が、リョウの武器である『運』に驚いてきたのならば…
遊良の終わらぬ『ドロー』にだって、リョウ・サエグサが驚くのはある意味デュエルの当然の真理。
そして…

「これが最後だ！いっけぇぇぇぇぇ、バルバロスゥ！」

―！

獣の王が地に突き刺した、全てを壊す螺旋の槍から放たれた崩壊の衝動が、リョウ・サエグサへと襲い掛かる。

それによって、リョウの場で彼を守っていたモンスター…【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】が、成す術なく破壊されていき…

彼は何故かその効果を使わず。後に残ったのは、丸腰となったリョウ・サエグサのみではないか。

「バトルだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！」

きっとこのデュエルを見ている、決闘市を除く全世界の者達は驚愕の顔をしているのではないか。

…まさかＥｘ適正の無い『あの天城　遊良』が。

…予選の戦いも運が良かっただけか、決勝に進んだのも何かの間違いかと思われた『あの天城　遊良』が。

…いくら【決闘祭】の優勝者とは言え、所詮は『あの天城　遊良』が優勝できたレベルの決闘市の代表が。

まさか次代のプロデュエリスト・ドラフト筆頭であるデュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサを相手に勝利の目前まで迫っているなど。

それは誰もが信じられない、大物食いの大番狂わせ。誰もが驚きに襲われている、少年達の正面衝突。

今…闘技場を駆ける獣の王の雄叫びが、天を劈き地を轟かす。

類稀なるリョウの『天運』に対し、心を折られず最後まで勝負を諦めなかった少年の進撃が、ここへ来てその牙を突きたてようとしているのだ。

その、かつて世界から見放された、Ｅｘ適正が無い少年のデュエルに世界中が目を奪われ…

しかし―

「駄目よ！アイツにはアレが！」

『医療棟』―

モニターの前のアカリの声は、遊良には届かない―

そして―

「だが何枚ドローしようと無駄だぜ！勝利の女神は、最後には俺にＫｉｓｓをするんだからなぁ！手札から【煌々たる逆転の女神】の効果発動！」

―！

獣の王の進撃の刹那―

轟く咆哮を引き裂いて姿を現したのは、後光を纏う美しき女神、逆転を司る勝利の女神であった。

…そう。マグナムが破壊された時の効果を使わなかったその理由。リョウが常々言っている、彼を愛してくれる『勝利の女神』こそがこの【煌々たる逆転の女神】なのだ。

どんな時も、どんなピンチも、どんな窮地だって彼は彼だけのこの女神と共に、その全てに打ち勝ってきた。

最後の最後…激しい攻防の末にこの情況まで辿り着いた、相当たる強者であったとしても最後のこの女神の波動には叶わない。

それは正真正銘の逆転の女神。相手の希望を慈悲なく砕く、リョウを愛する天女の微笑みであって。

それでもー

「場に何も無く、俺の手札が女神だけの時！俺は女神をコストに…お前の場のカードを全て破壊するぜ！そぉら、これで終わ…」
「だったらそれを超えればいい！女神の効果にチェーンして速攻魔法、【禁じられた聖衣】発動！」
「Ｗｈａｔ!?」

女神の波動が襲いくる、まさに寸前のその刹那。
遊良が宣言をしたその瞬間に、遊良の場から禁忌の衣が解き放たれた。
…そしてぶつかる勝利の女神の波動と、神の力を宿した禁忌の衣。
それは文字通り、鎬を削った正面衝突。少年達の意思がぶつかった、諦めの悪い者同士の意地の張り合いにも見える光景とも言え…
「これでバルバロスは効果で破壊されない！いけ、バルバロス！女神の波動を…切り裂けぇ！」

―！

そのまま…女神の波動を螺旋の槍で、衝撃波と拮抗している禁忌の衣ごと貫き始める獣の王。
そして二つに割れた衝撃の余波が、遊良の場へと襲い掛かり。遊良の場にある【冥界の宝札】２枚と、【チキンレース】を粉々に砕き去っ

てしまったではないか。

「クッ、バルバロスが破壊できねぇか…だが、それ以外のカードは全て破壊するＺＥ！その後、女神の効果で俺はデッキからモンスターを１体特殊召喚する！再びＣｏｍｅ　ｏｎ、俺のマグナム！【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】！」

【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

果たして…痛み分けのような状態で一つの攻防が終わり、一瞬で情況が二転も三転もしているこのデュエルに、着いて来ている者はどれだけ居るのか。

…遊良もリョウも、お互いにプロのトップランカーが身を置いている段階…『先』の地平に至った者同士。

そんな、世界レベルで見ても強者と言えるような少年達による、この永遠に終わらぬのではないかと思える程の拮抗が今こうして天空闘技場で繰り広げられているその光景は果たしてどれだけ幻想的に映し出されているのだろう。

遊良のバルバロスが効果で破壊できない耐性を備えようとも…同時に生じた神の呪いの所為で、その攻撃力は２４００となってしまっているこの情況。リョウが呼び出した銃竜の方が、現状では攻撃力は高くとも…

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！攻撃力はコッチが上だＺＥ！」
「構うもんか！バトル続行！バルバロスで【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】に攻撃ぃ！」
「Ｗｈａｔ!?自爆するつもりかＢｏｙ!?」
「自爆なんてしない！ダメージ計算時に速攻魔法、【禁じられた聖典】発動！攻守を元々の数値に戻す！」
「ッ!?」

「いっけぇぇぇぇ！天柱の崩壊、ディナイアー…ブレイカァァァァ！」

―！

「クッ…」

リョウ・サエグサ　ＬＰ…１９００→１７００

「ッ…ＹＡ―ＨＡ―！楽しませてくれるじゃねーか！だがこれでお前のバトルは終わ…」

「まだ俺のバトルフェイズは終わっていない！このバトルフェイズに速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動ぉ！」

「ッ、まだ終わらねぇのか!?」

それでも終わらぬ遊良の進撃。

拮抗している情況を、無理矢理打破せんと叫ぶは接戦でこそ真価を発揮する魔法の名。

…確かに『運』だけでの勝負…これがギャンブルであったならば、『ギャンブラー』のリョウ・サエグサに軍配が上がるだろう。

―けれども、これはデュエル…

否、『決闘』―

単なる『運』だけで勝負を行っているわけでは断じてない。リョウが『運』で勝ちへと向かうのならば、遊良だって己の持つ最大の武器で勝負するのが決闘の真理。

決闘学園デュエリア校の、デュエルランキング第１位の…『ギャンブラー』にも負けない、遊良の武器。

強運を超えた豪運を持った、天運とも思えるリョウの『運』に対抗

できる…遊良の、遊良だけの、遊良にしか出来ない拮抗できる武器。
それはドローに重ねたドローとドロー…更にドローとドローに連なるドローでドローすることによって生み出される、終わらぬドローによる圧倒的物量、意地でも押し通る進撃の形。
あの時の一瞬の攻防で、リョウの『1枚』のドローに対し…遊良のドローは、実に『8枚』。
そう、リョウ・サエグサの『運』も大概ならば、遊良の『ドロー』だって大概なのだ。
きっと、いつもの【サクリボー】と【冥界の宝札】によるドローの枚数では…リョウの【煌々たる逆転の女神】を超え、そしてその『先』へと到達できる多数のカードを、遊良が全て欠ける事なく揃えることは決して出来なかった事だろう。
【禁じられた聖衣】、【禁じられた聖典】、【ライバル・アライバル】…
それらは正真正銘、遊良が怒涛の如きのドローで引いた、デッキから無理矢理に手札に引き入れた逆転へのカード達。
確かにこのギリギリの情況で、たった一枚のドローで逆転に繋がる【煌々たる逆転の女神】を手札に引き入れたリョウの『運』は確かに恐ろしい代物。
けれども、遊良とて僅かな可能性、希望、確率であっても、ソレを『幾重』にも重ねた事によって無理矢理に運命を捻じ曲げ、破り…
「バルバロス1体をリリース！もう一度来い、レベル10！【Ｔｈｅ ｔｙｒａｎｔ ＮＥＰＴＵＮＥ】！」
―！
【Ｔｈｅ ｔｙｒａｎｔ ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０
ＡＴＫ／ ０→３０００ ＤＥＦ／ ０→１２００
そうしてリョウの1枚の『質』に、遊良は『量』で挑んだ。

…それはこの世界の運命とも呼べる、定められた『理』にどれだけ反した行為なのだろうか。

―再び宙より飛来せしは、海嶺断ち切る『海の星』。

唸りを上げる外なる星のその姿は、無理矢理にでも未来を掴まんと足掻き続けた、あまりの必死さに塗れた小さき者の悪あがきにも見える行為。

まるで、遊良の人生の軌跡そのモノ。そう、どれだけ無駄だと言われても、どれだけ必死と笑われても、どれだけ見苦しいと言われ続けても…

それでも生きる事を、戦う事を…デュエルを、決して諦めなかった遊良が掴んだ自らが生き残る僅かな希望が形となったモノ。

…例え、必死な足掻きであろうとも。

ソレを貫き通した遊良の行為は、ここへきて決して無駄にはならず。紛れも無く幼少の頃より磨き上げた、『ドロー』の嵐による止まらぬ進撃は、世界に通用するモノへとまさに成長を遂げたのか。

「Ｏｈ、ここまでか…」

「トドメだ！【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】でダイレクトアタック！」

天高く唸る、燦然なりし『海の星』。

その手に握られし巨刃なる鎌が、外なる宙をも切り裂く時…

それは決して防げぬ海鳴りとなりて、世界中へと轟き渡るのか。

今…

かつて世界から見放された1人の少年の叫びが、その存在を見せ付けるかの様に全世界へと向けて…

ここに、響く―

「断海の凶刃…オーラ…トリトオオオオオン！」

―！

「グッ…グアアアアアアアア！」

暴君なりし破滅の鎌より、放たれるは絶対零度の斬撃の波動。
それは太陽に愛された『天運』の男を、一刃の元に切り捨てる。
そして荒々しく切り捨てられた、リョウのＬＰが０を刻んだと同時に。巨大なる爆発のエフェクトが、天空闘技場から天に立ち上り…

リョウ・サエグサ　ＬＰ：１７００→０（―１３００）

―ピー…

それに応じて、無機質な機械音が全世界へと響き渡ったのだった――

――……

ｅｐ８７「【決島】本選―破王ｖｓ・覇道」

暗い…とても暗い、どこかの部屋。
扉の小さな窓からしか光が漏れぬ、闇と埃っぽさが充満しているコンクリートの部屋の…
その、片隅に…

「…ぐっ…」

痛々しい声を漏らしたことから、たった今意識を取り戻したのであろう、決闘学園デュエリア校学長…『逆鱗』、劉玄斎が倒れていた。
…およそ人間を縛るようなモノではないであろう、とても太く頑強な鎖で縛られている『逆鱗』、劉玄斎。
その身体を自由に動かす事は叶わず、また昨日の【白鯨】と行った一戦のダメージがまだ残っているのか…
それとも【紫影】に痛めつけられた傷がまだ痛むのか、動けぬままで倒れたまま、けれどもどうにか起き上がろうと…
声にならぬ声を漏らしながら、喉を鳴らすようにして。痛む体をおして、ゆっくりと起き上がろうとしていて。

「…【紫影】の…野郎ぉ…ぐ…」

その口から漏れだすのは、自分をこんな目に遭わせた【紫影】への怒り。
昨日、アイナを医療棟へと運んだ後に砺波達のところに出頭しようとしていたところを不意打ちの如く襲ってきた【紫影】に捕まってしまい…
そして予選の終了と同時に気を失うまで、その身に拷問にも似た暴行を劉玄斎は加えられていたのだ。
それは、世紀末を生きているのかと錯覚するほどの体躯を持った劉玄斎であっても、耐え切れぬほどの危害の数々。

劉玄斎の身体には殴られた痕、叩かれた痕…打たれた痕に擦り切れた痕と、見るも無残な痛々しい傷痕の数々をその身に残しており…
人を人とも思わぬ【紫影】の、その性根の腐り具合がこれ以上ない位に表現されていると言っても過言ではないだろう。
そんな劉玄斎は、動けないままではあったものの…
どこか肌がピリつくような、それでいて歓声に中てられた感覚によって、ようやくその目を覚ましたのか。
それは、たった今終わった【決島】本選の第一戦。その激しい戦いの決着に、世界中が沸いているが故の聞こえないはずの歓声をその歴戦を戦った肌で感じ取ったが故の覚醒。
世界がデュエルによって興奮している、そのデュエルの熱を肌で感じ取った辺り…流石は歴戦に名を残した、【王者】にもっとも近づいた男と呼ばれていただけはあると言えるだろう。

しかし…

「ッ…」

昨日の【白鯨】との、野良では許されぬであろう天上の一戦。そして【紫影】から受けた一方的な暴量によって、既に劉玄斎の体は限界を迎えている様子。
自分をここまで痛めつけた、そしてどこまでも卑怯な手を取り続ける【紫影】への怒りによってどうにか一度取り戻した意識とは言え。
縛られている鎖も引きちぎれぬほどに弱っている今の劉玄斎の体力では、どうにか辛うじて目を開けているのが精一杯であり、その身体を起き上がらせることなんてとてもじゃないが出来ない様子。

そのまま…

「ゆ…ら…」

どこからともなく聞こえる気がする盛大なる歓声と、無意識にでも理解できたそのデュエルの勝敗を耳鳴りのように感じながら…
劉玄斎は、一度は取り戻したその意識を…
再び、手放してしまったのだった―

―…

「何か申し開きは？」
「ぬぅ…」

たった今終わった一戦に、世界中が沸きあがっているその最中。
天空に伸びる白亜の塔の、その一つの通路で正座をさせられている鷹矢を見下ろすようにして…
重い…それはそれは重々しく開かれた砺波の口から、そう言葉が漏らされていた。

「クハハハハ。こう見るとマジでジジイそっくりだぜぇ。鷹峰の野郎も、よくこんな馬鹿やってたなぁおい。」
「貴様は黙っていろ。これは私の学園の問題だ。…ともかく、君が割り込んだ映像は幸いにも世界の中継からは切り離されていたため、高天ヶ原さんの所在はバレてはいません。」
「うむ、ならば結果オーライということでだな…」
「何が結果オーライだ！君の行動一つで、高天ヶ原さんがまた危険な目に遭うかもしれなかったんですよ！」
「ぬ…た、確かに軽率だった…すまないと思っている…」

劉玄斎の笑い声を掻き消すように、空気を震わす砺波の怒号が通路

の内部で反響する。
しかし、砺波の怒りも最もであり…
それは先程行われていた【決島】本選第一戦…イースト校２年、天城　遊良ｖｓ．デュエリア校３年、リョウ・サエグサの試合の最中に、まさかのイースト校２年、天宮寺　鷹矢が中継モニターを乗っ取ってしまったためだ。
しかもその乗っ取った映像には、砺波が秘密裏にこの天空の塔の『特別医務室』に隠した、イースト校２年、高天ヶ原　ルキの姿も映っていたのだから…
いくらその映像が偶然にも世界中継から切り離されていたとは言え、一つ間違えればルキと『神』の所在が全世界へと知れ渡ってしまっていたのだから、『敵』が何処から見ているのか分からないことを考えると、砺波だって怒りを感じるなと言う方が無理な話だろう。
…けれども、鷹矢の方も謝りこそすれ、自分の取った行動に対して悪いとは全く思って居ない様子。
そのまま鷹矢は、何故そんな行動を起こしたのかを説明するが如く…
砺波に威嚇されている中で、再度ゆっくりとその口を開き始めた。
「だが理事長、遊良のデュエルがあまりに不甲斐ないモノでだな…」
「はぁ…ソレは確かに一理ありますが…」
「俺があそこで行動を起こさなければ、確実に遊良は負けていただろう。確かにルキを映すのは俺だってどうかとも思ったが、時間が無かったのでああいった強行策しか出来な…」
「全く、口が減らないのも祖父譲りですか。…とにかく、君への罰はおいおい考えます。まだ祭典の途中ですし、次は君の試合なんですからこれ以上絶対に問題を起こさないでください。これ以上馬鹿をすれば庇いきれません。いいですね？」
「罰…いや、俺にだって考えというモノが…」
「いいですね。」
「う、うむ…」

…いくら不甲斐ない戦いを見せる遊良に、渇を入れる目的があったとは言え。
それでも己のしでかした行為が褒められたコトではないと言う事を、必要以上に今の砺波に責められては…
いくら鷹矢の怖いモノ知らずを持ってしても、【王者】を超えた領域に到達した砺波を前にしては絶対的に逆らう事を許してはもらえないのだろう。
そうして―
鷹矢は砺波の口から告げられた、『罰』という言葉に寒気を覚えつつ…

「ではもう戻りなさい。次の君の相手も強敵だということを常々忘れないように。他人の心配をする以上に、君も自分のデュエルを心配していなさい。」
「…うむ。」

もうすぐ始まる、自分の戦いへと向けて。
鍛え上げられた逞しいはずの背中を、弱々しく丸めながら…すごすごと、引き下がっていくのだった。

「…はぁ。」
「クハハ、あんな馬鹿な生徒が居るんじゃ、さぞ気苦労が多いんだろうなぁ砺波よぉ。」
「…煩い。それより貴様も部屋に戻れ。まだ監視は続いているんだ。」
「へいへい、わかってるぜぇ、理事長先生様。」
「…」

―…

「Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ！ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！やられたＺＥ！」

ＬＰが０となり、無機質な機械音がリョウ・サエグサのデュエルディスクから鳴り響き終わった直後の事。

負けたというのに、どこまでも底なしに明るいデュエリアの『ギャンブラー』の声が…この天空闘技場に、大きく響き渡っていた。

「…ありがとうございました。」

「おいおい、いきなり敬語とはどうしたＢｏｙ？さっきまでタメ口でヤりあってたってぇのに水臭ぇ。」

「いや、デュエルの時はテンション上がってましたけど、あなたの方が年上ですし…」

「んな小せぇ事気にしてんじゃねぇよ！ガチンコでヤりあったんだＺＥ？年上も年下も関係ねぇだろ。」

「はぁ…」

「ＨＡＨＡＨＡ！俺はお前が気に入ったんだ！そんなヤツが俺に気を使ってんじゃねぇよ！」

それは遺恨も怨恨も何もない、清清しい程のスッキリした声。

負けてもなおここまで明るく振舞えると言うのは、並大抵の精神力では決して出来ない事なのだが…

それはお互いに全力を出し切り、己の武器と武器を小細工なしの真っ向勝負でぶつけ合ったからこそ生まれた…対戦相手を認めたが故の、楽しいデュエルを行えた証拠とも言えるだろうか。

…それは例え、負けた相手がＥｘ適正の無い天城　遊良であったとしても。

自分の目で見て、自分のデュエルで戦って、そうして魂と魂をぶつ

け合ったからこそリョウの心には遊良とのデュエルに対する満足感で溢れている様子であり…

「けど次は負けねぇよ。俺は先にプロに行って待ってっから、またゾクゾクする勝負をヤろうじゃねーか。」

「…はい。俺も、この一回で勝負がついたとは思ってないですし。またデュエルしましょう。」

また遊良の方も、今の一戦でデュエリア校のトップデュエリストに、完全に勝利を収めたなどとは思い上がっていない様子。

…そう、確かに勝敗は決したとは言え。

デュエルとは、『時の運』のほかにも戦術、実力の『相性』がとても大きくかかわってくるのだし、リョウ・サエグサの『運』を含めた実力だって遊良と確実に拮抗していた、相当たる代物であるのだ。

…彼もまた、正真正銘本物の『力』を持ったデュエリスト。

今回はたまたま遊良に軍配があがっただけ。『運』以外の要素、遊良のスタイルや攻勢に転じたタイミング、更にいえば心を吹っ切った場面などが絶妙に絡み合って、ソレが偶々あのターンにリョウの『運』を超えうるモノとなっただけの事。

例えデュエルの『相性』が有利でも、『時の運』が悪ければ勝敗など簡単に逆転するのだから、もう一度遊良とリョウがデュエルしたところで…遊良がまた勝てるのかと問われれば、『やってみないとわからない』と言うのが現状なのだから。

それ故…

この1回のデュエルでリョウ・サエグサというデュエリア校のトップを完全に降したなどと思いあがれるほど…遊良とて、弱者などでは断じてなく。

「まっ、とりあえず今はソレでもいいさ。けど俺がレディじゃなくて野郎を気に入るなんざ珍しいんだぜ？もっと喜べよな。Ｂｏｙなら抱いてやってもいいんだからＹＯ？」
「ッ…」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！冗談だよ冗談！でもまた必ずヤろーぜ！じゃあな、Ｇｏｏｄ　ｂｙｅアマギ・ユーラ！」

そう言って―
言葉では冗談とは言いつつも、どこか寒気を感じるような言葉を遊良に与えたと共に。
デュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサは今、堂々と胸を張って…
天空闘技場を後にしたのだった―

―…

【決島】内の最北端―その、『決勝』に進めなかった学生達が集合している『医療棟』でのこと。
決闘市の多くの学生達、そしてデュエリアの多くの生徒達が、たった今終わった【決島】本戦第１戦…天城　遊良とリョウ・サエグサのデュエルの余韻に、盛り上がりを見せている
その医療棟の…
…その、医療棟のとある個室に。
「…次は天宮寺　鷹矢のデュエル…相手はあの…歪んだ人…」
決闘学園ウエスト校３年、竜胆　ミズチは居た。

…昨日の予選で、天宮寺　鷹矢が発した【紫影】という単語に反応して思わず我を忘れてしまった彼女。
しかし予選終了と共に、激戦の疲れと受けたダメージによって気を失う様にしてすぐに就寝した彼女の気持ちは、一晩経って昨日よりはどこか落ち着いている様子であり…
今にも腰掛けているベッドに倒れこんでしまいそうな程に気怠げで儚げなミズチの姿ではあるものの、そんな落ち着きを取り戻したミズチの視線の先には、これよりデュエルを始める２人の男が対峙している画面が映っていて。

「…」

昨日の予選で、天宮寺　鷹矢と鍛冶上　刀利、その双方とデュエルを行い…結果的にその２人に敗れはしたものの、逆に言えばその２人にしか敗北していない竜胆　ミズチ。
片方はエクシーズ王者【黒翼】の孫にして、世界で彼だけが持つ特別なエクシーズモンスター…自在に姿もランクも変える、『Ｎｏ.』を操る者。
他方は学生の身分でありながら、神とも呼ばれることのある【霊神】の一柱を操り…予選でも全く底を見せなかった、全てが謎に包まれた恐るべき者。

「…やっぱり、二人ともおかしい。歪んでるし…押し返してる…」

その二人と実際に対峙し、直にデュエルと言う肌を合わせた彼女の特別な『眼』には、果たして自分に勝ったこの二人の男の行うデュエルは一体どういったモノとして写るのだろうか。
その、ＴＶ越しとは言え特別な『眼』を持った彼女にしか分からぬ、何か異様な光景を見て…
今のミズチの眼と意識は、昨日聞いた【紫影】の事よりも今にも始まりそうな戦いに興味を見出しているのだった。

―…

「…天城　遊良君…」
「え？」

リョウが舞台から去った直後。
次なる戦いのために、控え室へと戻ろうと暗い暗い通路へと足を踏み入れた遊良の前に…
暗闇の中からどこからともなく現れた、一人の男が声をかけてきた。
…それはあまりに透明すぎる、空気の中に消え入りそうな声。
そこに居るはずなのに、そこに居ないのでは無いかと錯覚してしまうほどの…まるで空気そのモノのような、消えてしまいそうな儚い雰囲気。
居ないと思えるような希薄な気迫と共に、そこに居たのは―

「えっと…鍛冶上さん…でしたよね。デュエリア校の…」
「…うん。デュエリア校の…鍛冶上　刀利です。少し…君と話をしてみたくて。」
「…俺と？」

―決闘学園デュエリア校、鍛冶上　刀利

次の鷹矢の対戦相手。昨日の予選の結果も、全勝ではあるもののその戦績は３０戦のみという、他の３人の結果と比べても異様に少ない

戦数で勝ち上がった…前情報も何も無い、全くの謎に包まれた男子生徒。
しかし、そんな彼が一体どうして面識の無いはずの彼の方から突然、遊良と話をしてみたかったと言って近づいてきたのだろうか。
たった今ひとつの激戦を終えて、疲労感が重く圧し掛かってきている遊良からすれば…その理由など考える事もできなければ、思い浮かび上がってくるはずもないと言うのに。
…しかし、そんな遊良の疑問符を感じ取ったかのようにして。
静かに流れる風の音にも似た刀利の声が、その口から静かに発せられた。

「…君の事を、蒼人君から聞いてて…」
「え、蒼人先輩から？」
「…だから、一度君に会ってみたかったんだ。蒼人君が楽しそうに君との事を話していたし…それに、アイナを止めてくれたから。謝罪と…それに御礼も言いたくて。」
「え、それってどういう…」

刀利の口から飛び出した、思いもよらぬ人物の名に対し。ますます刀利への疑問とともに、理解の出来ぬまま流れる話に遊良も頭が着いていかず。
…何故デュエリア校の鍛冶上　刀利が、昨年度にイースト校を卒業した泉　蒼人から自分の話を聞いているのか。
…何故アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンとのデュエルで、彼が自分に謝罪や礼など言うのか。
その理由を知らぬ遊良からすれば、刀利の言葉はどこまでも不思議でしかないことだと言うのに…
それでも刀利は、まるで見ている世界が違うのでは無いかと思える程に。そのまま続けて、ただただ言葉を続けるのみ。
「…僕の声はアイナには届かないし、蒼人君と哲君の声もアイナには

届かなかった。その所為で、君の彼女には迷惑をかけちゃったから…」
「いや、ルキは彼女ってわけじゃ…って言うか、蒼人先輩と知り合いだったんですか?それに哲って…もしかしてウエスト校だった十文字さんの事じゃ…」
「…うん、あの二人がデュエリアに居た頃にね。…僕の…大事な友達だ。」
「あの二人がデュエリアに…」

イースト校の先輩であった蒼人の他に、元ウエスト校の一番の実力者であった十文字　哲が元々デュエリアに居たということにも驚きを感じている遊良ではあるものの…
思い返せば、蒼人の『過去』を何も知らないということを、遊良も今になって理解したのか。
…確かに昨年度に起こった決闘市での『異変』の時にだって、やけに蒼人は修羅場に慣れており…そして当時ウエスト校3年生だった十文字　哲とも連携を取って、着実に『異変』の解決へと動いていた。
それどころか蒼人と哲が居なければ、遊良と鷹矢は先の『異変』の時に中心部まで行く事すら出来なかったのだから、ソレを考えるとあの蒼人や哲と友人だというこの鍛冶上　刀利も、蒼人達と同じ修羅場を潜り抜けてきたのだろうと言う事はもちろん遊良にだって容易に想像でき…

…それはここでは語られぬ、過去にあった別の誰かの物語。

その、一つの物語を終えた男…別の物語を紡ぎあげた男が、今再び遊良へと向かって言葉を送る。

「…だから、僕は蒼人君が認めた君とデュエルがしたい。Ｅｘ適正が無くても折れずに戦ってきた…君と。」
「…鷹矢は強いですよ?」

「…うん。彼の事も、哲君からよく聞いてる。だから…君たち二人と戦ってみたかったんだ。あの二人が認めたっていう…決闘市の子達に。」

昨年度に高等部を卒業していった泉　蒼人と十文字　哲、その双方を生徒の身分である刀利が『君付け』で呼んでいることや…

遊良と鷹矢を、『決闘市の子達』と、どこか遊良達よりもかなり大人びているような雰囲気を醸し出しながら話を続ける鍛冶上　刀利。

しかし、ソレに対して疑問を浮かべる事を許されないかのような錯覚が遊良を包み…

…その消え入りそうな言葉も、どこか壁を張り巡らせながら話をしているかのような態度も。

一見すれば、とてもじゃないがこの猛者ばかりの【決島】で勝ち残れそうとは思えないものの…けれども、そんな懸念すら抱くことを許されないような言葉に出来ない異質な雰囲気を、この鍛冶上　刀利は纏っている。

…それは矛盾した感覚の離反。錯視してしまいそうな奇妙な体感。

そんな、形容し難い不思議な感覚に包まれている遊良へと…

「じゃあ…またね。」

静かに、一つ言葉を残して。

鍛冶上　刀利は、今静かに天空の舞台へと向かっていくのだった―

―…

「Ｈｅｙ、Ｇｕｙ。ちょっといいか？」

「む？」

天空闘技場へと繋がる、暗い通路でのこと。
次なる戦いの為に、いざ天空闘技場へと入場しようとした鷹矢の前に…第一戦を終えたばかりのデュエリア校3年、リョウ・サエグサが徐に声をかけてきた。

「何か用か？」
「いや、用って程のモンじゃあねぇんだが…一言、忠告しといてやろうと思ってな。」
「…貴様はデュエリア校の者だろう？それが何故俺に忠告など…」
「Ａｈ――…まぁそうだよなぁ。普通、誰だってそう思う。けど、トーリは別だ。アイツと戦う奴にゃ、決闘市もデュエリア校も関係ねぇ。」
「…どういうことだ？」

これから戦いが始まるというのに、意味の分からぬことを鷹矢へと告げてくるリョウ・サエグサ。
それは鷹矢に肩入れしたりだとか、刀利に負けて欲しいと思っている…
といった感情では決してないと言うことなど、リョウの言葉を聞いている鷹矢にはなんとなくではあるが理解できているものの…
しかし、鷹矢の言う通り。デュエリア校の生徒であるはずのリョウ・サエグサが、一体どうして鷹矢に忠告などしてきたのだろうか。
普通であれば、敵校の鷹矢に忠告などする意味などない。いくら鍛治上　刀利が得体の知れぬ雰囲気を纏っているとはいえ、そんなことを自分にする義理などリョウ・サエグサにはないはず。
そんな、意味の分からぬ行動をしてきたリョウに、疑問符を浮かべ続けている鷹矢へと向かって。
続けてリョウは、声をかける。

「お前…『王』って分かるか？」
「俺の質問の答えになっておらん。全く意味のわからぬ事を…【王者】の事か？」
「Ｂｕｔ、お前のグランパみてぇな【王者】の事じゃねぇ。もちろん【王（ジェネレイド）】のカードの事でもねぇ…Ｋｉｎｇ…そのまんま、王サマって意味さ。」
「キング……だからソレが何だというのだ。あの男が一国の主とでも言いたいのか？」
「ＨＡＨＡ、全然違ぇよ。けど…まっ、今のを聞いて全く理解できねぇってんなら別にいいんだ。【黒翼】の孫だってぇんだから心配はしてねぇけどよ…精々、壊されないように気をつけろって…そう言いたかっただけＳＡ。」

鷹矢には全く理解が出来ぬ、リョウ・サエグサから綴られる言葉。
彼の言う『王』が、一体何を指している言葉なのかなど、今の鷹矢には全く持って理解が出来ず…
しかし、鷹矢が全く理解出来ていないと言う事を、リョウとて理解はしているのだろう。
…そのまま、リョウは最後に戦いへと出陣を始める鷹矢へと向かって。
最も分かりやすい言葉を選び、こう言葉を漏らした。
「…トーリは強いぜ？多分、デュエリアで一番…Ｂｕｔ、もしかしたら、世界で一番かも…な。」
「…」

リョウから続けられた言葉に、思わず言葉を失った鷹矢。
…それは、とてもじゃないがすぐには理解できなかったのではないだろうか。
何せ決闘学園デュエリア校の、デュエルランキング『第１位』の男が…

他人を、同じ学校の者を、そして世界中にいる他の強者と比べてそう言ったのだから。
…この男をしてこう言わしめる鍛冶上　刀利という男とは、果たして一体何モノなのか。
元々感じていた得体の知れない雰囲気、強さの匂いを感じない強さ。そんな謎に包まれた強者へと向かう鷹矢の心境は、決して他人には理解できないモノではあるのだが…
しかし、一瞬の後。
形容でもなんでもない、嘘とも思えぬリョウ・サエグサのそんな言葉を聞いてもなお、鷹矢は何を思ったのか。
リョウへと背を向け、ゆっくりと歩き始めながら…
そのまま、不敵に笑いながら―
「…ふっ、望むところだ。相手にとって不足は無い。」

そして―

『さぁ！第2試合の開戦です！第1試合では驚くべき結果となりましたが、果たして第2戦ではどんな波乱が待ち受けているのでしょうか！選手入場！』

全世界へと向けて叫ばれた、耳を劈く実況の声と共に。
導かれるようにして東ゲートからまず入ってきたのは…大胆不敵を絵に描いたような、あまりに堂々とした一人の男。
『世界に名立たる王者【黒翼】の！その血筋を正しく受け継いだのはこの男！堂々の予選第1位通過！天才の名を欲しいままにしている、この次代の【王者】候補の溢れる才能は留まる事を知らないのでしょうか！』

過大とも思える実況の叫びだと言うのに、ソレがあまりに当て嵌まっていると言うことを…この中継を見ている誰もが、『そう』思ってしまったに違いないと思える程に。
今の鷹矢のその姿は、まるで若き日の【黒翼】の姿を思い出させるかのような振る舞いとなりて、全世界へと向けて届けられていて。

…【決闘祭】の準優勝者、【決島】予選第1位。

その他にも、幼少の頃から決闘市を含めた様々な場所で行われた大会で好成績を残し…
最近ではまるで道場破りのように、若手プロ達に混ざって大会を荒しまわっていたのだから、現在中継に映しだされている男は紛れもなく、今世界で最も有名な学生と言ってもソレは過言ではないだろう。

―才華蓋世、才気煥発

鷹矢の最も嫌う呼び名…王者【黒翼】の孫という称号を、惜しみもなく実況が叫んだとしても。
それでも勝手に貼られたレッテルなど、この瞬間においては全く持って耳に届いていないかのように…ただただ目の前の恐るべき相手だけに、その意識を向けているのみ。

今、威風堂々と…

覇道を歩むかの如く―

『決闘学園イースト校２年、天宮寺　鷹矢選手！』

そして―

『続いては…あっ…え？ほ、ホントに？』

一瞬…詰まってしまった実況の声と共に入ってきたのは…

『…し、失礼しました！続くのは予選第４位通過！デュエルランキング…け、圏外でありながらも、全勝で本戦へと勝ち上がったダークホース！これまでの戦績は全てが謎！そんな謎につつまれた彼は、一体どんなデュエルを見せてくれるのでしょうか！』

デュエルランキング圏外…

それは通常であれば『ありえない』称号。

だってそうだろう。全校生徒が己の実力と戦績に応じたデュエルランキングの順位を与えら得るはずのデュエリア校で、その枠組みの中に入っていない『圏外』となっている者が存在するなど。

けれども、確かに彼の所在は決闘学園デュエリア校高等部で間違いはなく…

だからこそ、実況が感じた疑問はそのまま全世界の人々の疑問とな

りて、世界中へと向けて中継されていて。

―しかし、そんな世界中からの疑問の視線など全く届いていないようにして。

今、この天空闘技場の上に広がる遥かな空へと、吸い込まれていってしまいそうなほどに透明な気配を纏って現れたのは―

『決闘学園デュエリア校…鍛冶上　刀利選手！』

先程の第１戦とはまるで真逆。

見えない観客達から送られるエールは、その全てが決闘市の代表へと送られ…素性も成績も何もかもが謎の、デュエリア校の代表へはただただ厳しい疑惑の目だけ。

しかし、ソレも当然で…

…７６戦も行った鷹矢に対し、刀利の戦績はたった３０戦。

刀利の結果がいくら『全勝』であっても、最後まで生き残ったとは言え本戦に昇れなかった他の参加者達と比べてもあまりに少ないその戦数では…

極力戦いから逃げていて、運よく決勝に進んだと思われたとしても、それはある意味で当然の結果と言えるだろう。

しかし…

「…ジジイ、あのガキは何者なんだい？学生の癖に【霊神】を持ってるなんて、はっきり言って異常さよ。」

「フォッフォッフォ、以前、ちと関わりがあってのぅ…ま、見てたらわかるわい。」

世界の観客達とはまた、別の視点を持ってこのデュエルを観覧しようとしている、歴戦の決闘者である女傑、『烈火』。
それは刀利の予選のデュエル…たった一度だけ、ほとんどの観客達に全く注目されていない中で、彼が神にも等しいモンスターの召喚をしたのを『烈火』は見ていたから。
けれども、長らく決闘界を深いところで見守ってきた『妖怪』、綿貫景虎は、デュエリア校の鍛冶上　刀利と何やら関わりがある旨を零すものの…
もうすぐ始まる戦いの前に、これ以上余計な事を言うつもりなどないのか。
静かに戦いの舞台を見据え、その皺だらけの瞼の奥でただただ優しい目をしていて。

そして…世界中の視線を浴びている当人二人は…

「…」
「…」

言葉を発せず、視線を外さず。ただただお互い向かい合い、静かに開戦の時を待っていた。
その、鷹矢と刀利の間にある空気は、すぐにでも爆発しそうな危うさを持って天空闘技場に満ち始めており…
そう、鷹矢とて、目の前の謎に包まれた男の戦績が少ないからと言って油断など微塵もしておらず。
…予選の結果がどうであれ、他人の評価がどうであれ。
それでも己の眼で見た鍛冶上　刀利という男は、自分が今まで戦ってきた誰とも異なった異質な雰囲気を持っていると鷹矢は感じているのだから。

「ゆくぞ。」
「…うん。」

だからこそ、余計な言葉はいらない。
デュエルディスクを静かに構え、デッキが現れ手札を揃え…
世界中に見られている中で、ディスクがデュエルモードに切り替わった時…

それは―

『それではぁぁぁぁぁ！決勝戦第二試合、開始いいいいいい！』

―デュエル!!

今、始まる。
先攻はイースト校２年、天宮寺　鷹矢。

「俺のターン！【ゴールド・ガジェット】を召喚し、ゴールドの効果で【シルバー・ガジェット】を！シルバーの効果で【無限起動ロックアンカー】を！ロックアンカーの効果で【イエロー・ガジェット】を！それぞれ特殊召喚！」

―!!!!

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４

ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【無限起動ロックアンカー】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　５００
【イエロー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

開戦直後。
お得意のガジェットモンスター達による効果の連鎖で、即座に４体ものレベル４モンスターを場に揃えた鷹矢。
…いつもの様に、いつもの如く。
どんな時でも崩れない、鷹矢の立ち振舞いをそのままに。まだ始まったばかりだと言うのに、手札を使いきるかの様な激しい展開を世界中へと見せながら…
そのまま鷹矢はいつもの様に、その手を天に掲げるのみ。

「イエローの効果で【グリーン・ガジェット】を手札に！ゆくぞ！ゴールドとシルバー、２体のガジェットでオーバーレイ！」

…レベル４のモンスターが、２体。
そう、己の持つ、エクシーズのＥｘ適正の赴くままに。
エクシーズ名家、天宮寺一族の名の下に。あれだけ激しい展開の後に、鷹矢は手札も整えつつ。
そのまま手を天に掲げ…

「エクシーズ召喚、来い、ランク４！【ギアギガントＸ】！」

―！

【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

「まだだ！続けてロックアンカーとイエロー、２体の機械族でオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ギアギガントＸ】！そして【ギアギガントＸ】２体の効果発動！オーバーレイユニットを一つずつ使い、デッキから２体目のゴールドとシルバー、２体のガジェットを手札に加える！更に【アイアンドロー】発動！俺はこのターン、後１度しか特殊召喚できなくなる代わりに２枚ドロー！」

鷹矢の場に聳える、２体の鋼鉄の巨兵達。

それは予選の時から世界中が散々見てきた、全く変わらぬ見慣れた景観。【王者】の孫のいつもの展開、鷹矢の崩れぬいつもの形。

…崩れないという事は、それだけ確実な安定感を持っていると言うこと。

あれだけの展開を行って、既に２体ものエクシーズモンスターを場に揃えたと言うのにも関わらず…

いつもの様に展開しながら手札消費を実質的に０枚で押さえつつ、鷹矢はどこまでも厳しい目で刀利を見据えているのか。

「【エクシーズ・ギフト】も発動。【ギアギガントＸ】２体のオーバーレイユニットを１つずつ使って２枚ドロー。…俺はカードを２枚伏せ、ターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：５→４枚
場：【ギアギガントＸ】ランク４
【ギアギガントＸ】ランク４
伏せ：２枚

そうして…

得体の知れぬ力を持った、鍛冶上　刀利に微塵も油断することなく。

初動から万全を期したであろう鷹矢が、今堂々とそのターンを終え

―

「…僕のターン、ドロー。モンスターをセット。カードを1枚伏せてターンエンド。」

「何!?」

刀利　ＬＰ：４０００
手札：６→４枚
場：セットモンスター1体
伏せ：1枚

しかし―

そんな鷹矢を前にして、ほとんど行動を起こさずあまりに早くそのターンを終えた鍛冶上　刀利。

…カードをたった2枚セットしただけでそのターンを終えてしまうだなんて、【決島】の本戦に勝ち残った選手としては些か消極的かつ消沈的にも見える立ち振る舞い。

…この程度のモノで、【黒翼】の孫に勝てるはずが無い。

世界中の観客達がそう思ってしまうほどに、デュエリア校代表の鍛冶上　刀利の短すぎるターンはどこまでも刀利の実力への疑惑となりて歓声とは逆の声となって世界で響いているのか。

…もしここに、実際に観客達がいたらブーイングの嵐だっただろう、

何せ先程の第一試合でも、遊良やリョウは最初のターンから連続して全力の展開を見せたのだ。本戦まで勝ち上がった選手ともなれば、先の鷹矢のターンに負けず劣らずの何か行動を見せるはずだと言うのに…

ソレを期待していた世界中の見えない観客達や刀利に対して油断なく身構えていた鷹矢からすれば、どこか拍子抜けのように感じたとしてもそれはある意味当然と言えるのだから。

「…何を考えているのだこの男…だが油断はせん！俺のターン、ドロー！」

とは言え、世界が刀利を見くびってはいても。

逆の思考との元、鷹矢は油断など見せずに刀利へと向かい直すのか。

―油断大敵

そう、昨年度の彼とは違う、他人を見くびらない事を覚えた鷹矢。

そんな鷹矢にとっては、いくら刀利の展開が拍子抜けを誘うモノであったとしても…少しの油断もする事なく、気を緩める事もなく。

「【ゴールド・ガジェット】を召喚し、その効果でシルバーを！シルバーの効果でグリーンをそれぞれ特殊召喚！【レッド・ガジェット】を手札に！」

―!!!

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

「…レベル４のモンスターが３体…」

「何を企んでいようと捻じ伏せる！俺はゴールド、シルバー、グリーンの…３体のガジェットで、オーバーレイネットワークを構築！」

５つの場を埋めるほどの、容赦の無い鷹矢の展開。先のターンから全く衰えない勢いで、続けて響くは鷹矢の咆哮。

―オーバーレイネットワークを、構築

それは、およそこの世界のエクシーズ召喚のためのモノではない口上。

そう、この世界においては、鷹矢にのみ許されたその宣言の導くままに…

己の頭の中に浮かび上がるイメージと、天に怪しく輝き始めるその数字が生み出すのは果たして一体どんなモンスターなのか。

予選のときから群を抜いていた、王者【黒翼】の孫である天宮寺鷹矢の…覇道を突き進むその姿が、今形となりて…

「現れろ、『Ｎｏ．１０』！煌かせしは白き鎧！大地を駆ける蹄を響かせ…疾風を切り裂き姿を現せぇ！エクシーズ召喚！」

ここに、現れる―

「来い、ランク４！【Ｎｏ．１０　白輝士イルミネーター】！」

―！

【Ｎｏ．１０白輝士イルミネーター】ランク４
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２４００

現れしは巨馬を駆りし、光り輝く白き騎士。

その右肩に、『Ｎｏ．』の証である数字…『１０』を刻んだ、勇敢にも敵陣に意気揚々と向かっていきそうなほどに猛るその姿。

それは頂点をその手に掴み取らんとする鷹矢の意気が、そのまま形

となったかのようでもあり…

「…それが噂の『Ｎｏ．』…君だけが持つカード。」

「ゆくぞ、『Ｎｏ．１０』の効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、手札を１枚墓地へ送りデッキから１枚ドローする！まだだ！続けて魔法カード、【死者蘇生】発動！墓地から【無限起動ロックアンカー】を特殊召喚！その効果で手札から【レッド・ガジェット】を特殊召喚し、イエローを手札に！そして俺はロックアンカーとレッド…２体のモンスターでオーバーレイ！」

止まらぬ展開、終わらぬ回転。

その身を光へと変え続け、天に舞い続ける鷹矢のガジェット達。

依然として【王者】たる祖父から受け継いだその才能を、これ以上無いくらいに発揮する鷹矢のデュエルに…世界の誰もが歓声を上げているのは、最早言うに及ばず。

その、己の持つエクシーズのＥｘ適正によって、更に鷹矢の場に現れるは…

「エクシーズ召喚、ランク４！【竜巻竜】！」

―！

【竜巻竜】ランク４

ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／２０００

現れしは暴風纏いし、旋嵐を呼ぶ突風の竜。

速攻魔法、【サイクロン】がそのままモンスターとなったかの様なその姿は…

まさしく相手の仕掛けた罠を一陣の疾風の下に蹴散らしてしまう、まさに展開と除去を同時に兼ね備えた微塵も油断なき鷹矢の態度の表れでもあって。

…刀利の伏せたモンスターとカードからは、正直『嫌な感じ』は全くしない。
ソレは既に『先』の地平に至っている鷹矢からすれば、取るに足らない警戒心でもあるのだが…
それでも強さの気配を感じない鍛冶上　刀利という男に対し、完全かつ完璧に不安要素を消す為にとった鷹矢のこの展開は、戦略としては決して間違ってはいないはず。
そのまま鷹矢は、勝利へと向かって無慈悲にも竜巻の竜へとその命を下し…

「【竜巻竜】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い…貴様の伏せカードを破壊する！」

そして、暴風纏う嵐旋の竜から放たれた、一陣の疾風が刀利の１枚しかない伏せカードを無慈悲にも破壊した…

その時だった―

「…破壊されたのは【やぶ蛇】。効果発動。Ｅｘデッキから【スクラップ・ドラゴン】を特殊召喚する。」
「なっ!?」

―！

【スクラップ・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

突如―
轟く叫びと共に姿を現したのは、蒸気を纏いし鉄屑の虚竜であっ

た。
それは天を裂く咆哮を轟かせ、弾ける電光をその身に宿し…歪な命をその身に宿した、打ち磨かれた歴戦の刀。
錆びついた体の悲鳴を、耳を劈く程に軋ませているというのにも関わらず…どこか必死に生きる竜を思わせる、悲しげな咆哮を上げており…

…早計だった。

万全を期したつもりで刀利の伏せカードを破壊したつもりだったのに、その行動が裏目に出てしまったなんて。
そう、場を整えてから攻撃に転じるのではなく、先に【竜巻竜】をエクシーズ召喚してその効果で伏せカードを破壊しておけば…もう1度のエクシーズ召喚による展開で、少なくとも【スクラップ・ドラゴン】は簡単に除去できていたと言うのに。

―『…気を抜くんじゃねーぞ。誰が最初の相手かわからないんだ。特にお前は、昔っから肝心なとこで要らないミスするんだから。』

第一試合が始まる前に、遊良に言われていたことを思い出しながら…そんな先に立たない後悔が、今になって鷹矢を襲う。
一つのミスが取り返しのつかない事になりやすい強者同士の戦いでは、こんな凡ミスなどしている場合ではないと言うのに。
…しかし、『先』の地平に立っている自分が、よもや相手の罠を読み違えるだなんて。
そう、いくら相手が強さを感じさせない透明な存在感に包まれているとは言え、それでも相手がデュエリストであるならば、多少なりともその感情に起伏が生まれ『匂い』を感じさせるはずなのだ。
だからこそ、全く危険性を感じなかったはずのソレを読み間違えた事は、鷹矢にとっても予想外だったのだろう。
確信を持っていた判断を裏切られた…まさに藪を突いたら蛇が飛

び出してきたという、余計な事をしたばっかりに…

「くっ…だがソレがどうした！2枚目の【エクシーズ・ギフト】を発動し、『Ｎｏ．１０』のオーバーレイユニットを２つ使い２枚ドロー！…よし！バトルだ！まずは『Ｎｏ．１０』でセットモンスターに攻撃！」

それでも突然現れた、鉄屑の虚竜に怯む事無く。

たった今デッキから引っ張ってきた、【スクラップ・ドラゴン】を超えられるカード…【リミッター解除】へと一瞬だけ目を落とした鷹矢は、そのまま巨大なる手の『Ｎｏ．』へと攻撃を命じ始めるのか。

…そう、いくら虚を突かれたとは言え。

突然大型モンスターが現れたのだとしても、それでも自分は間違いなくソレを乗り越えられる勝機を持って攻撃に転じるのだから、ここで慄く選択をするなどそのプライドが許さないのだと言わんばかりに。

鷹矢は、勝機を持ってバトルを宣言するだけ。

「叩き伏せろ！疾風怒濤、シャイン・デュランダー！」

そのまま巨大なる馬が鷹矢の宣言と共に、天空闘技場を駆け抜ける。

そして天に飛び上がりし巨馬が落ちてくるその時、騎士の剣は光を纏いてソレを貫きにかかるのか。

ソレはまさに蛮勇の振るう豪剣の持つ、恐ろしいまでの勢い。光を纏った『Ｎｏ．１０』が、今まさに刀利のセットモンスターへと襲いかかり…

しかし…

「…セットモンスターは【メタモルポット】。」
「なっ!?」
「リバース効果が発動するよ。お互いに手札を…」

…剣とセットカードがぶつかったその瞬間。
次なる手を手札に控えていた鷹矢の虚を、死角から突くようにひっくり返ったのは…
奥底から目を除かせた奇妙なる壷のモンスターだった。
その怪しげな一つ目が鈍く輝く時、自分も相手も全ての手札を無理矢理に捨てさせられると言う…
ダメージステップであることから、止められるタイミングが極端に限られると言う、まさに鷹矢にとっては虚を突かれたにも等しい予想外のモンスター。

「くそっ!ならばダメージ計算前に速攻魔法、【リミッター解除】発動!【ギアギガントX】2体の攻撃力を倍にする!」

【ギアギガントX】ランク4
ＡＴＫ／２３００→４６００
【ギアギガントX】ランク4
ＡＴＫ／２３００→４６００

「…ダメージ計算後のタイミングにリバース効果発動。お互いに手札を全て捨てて5枚ドロー。」

ソレ故、焦りながらも手札が捨て去られる前に次なる攻撃の一手を発動する鷹矢。
…ここで手を撃たなかったら、いくら新たに5枚ドローしたからと

は言えバトルフェイズであるが故に【スクラップ・ドラゴン】を超えることは至難となる。
しかし焦りを感じたとは言え、タイミングを見失わなかった鷹矢が発動した速攻魔法によって、2体の機械兵がそのリミッターを外して暴走寸前まで力を上昇させ…
そしてお互いの手札が入れ替わった後、奇妙な壷のモンスターが破壊されていく。

「この程度で意表を突いたつもりならば甘い！続けて【ギアギガントX】で、【スクラップ・ドラゴン】に攻撃だ！」

そして間髪入れず。
このターンに決着を着ける勢いで命令を下した鋼鉄の機械兵の一体が、刀利の虚竜へと襲い掛かって。
…どこか気が抜けているような刀利のデュエルも、どこか惰性のように感じられる刀利の態度も自分にとっては関係ない事。
まるで鷹矢のその心情を感じ取ったかのような【ギアギガントX】が、暴走したその力の限り鉄屑の虚竜へとその拳を走らせ―

「鉄機爆砕！マグナム・ストレー…」
「…墓地の【超電磁タートル】の効果発動。除外してバトルフェイズを終了する。」
「ぬ!?」

それでも、その攻撃を淡々と。
攻勢に転じた鷹矢の勢いを、いとも簡単に止めにかかる刀利。
刀利の墓地から飛び出して、寸前で攻撃を止めたのは…目に見える程の磁力を帯びた、機械仕掛けの電磁亀であり…
―反発し、相殺する…その有り余る斥力で。

その、まるで放電と見間違えるような超電磁力の解放によって、鷹矢の【ギアギガントX】が天空闘技場の端まで勢い良く弾き返されてしまったではないか。

「超電磁…くっ、【メタモルポット】か…」

「…」

それは鷹矢も用いる事のある、絶対的なる防御のカード。

しかし、先程の【メタモルポット】でこのカードを墓地に送ったのならば、なんと大胆かつ最低限の守りだけでターンを終えたのだろう。

何せセットモンスターが【メタモルポット】とは知らなかったとは言え、もし鷹矢がセットモンスターを戦闘以外の方法で除去していたとしたら。もし鷹矢が伏せカードの方ではなく、セットモンスターを危険視していたら…

…刀利はこのターン何もせずに、何もさせてもらえずに鷹矢に負けていたのだ。

だからこそ刀利の取った手は、よもや【黒翼】の孫を相手にするにはあまりに消極的でありつつも、どこか高みから見透かしているかのような立ち振る舞いではないか。

そう、まるで鷹矢の攻めてくるパターンが分かっていたかのような必要最小限の立ち振る舞いは、どこまでもどこまでも薄いその存在感と混ざってより一層刀利の雰囲気を透明にしていき…

「仕方ない、俺はカードを1枚伏せ、エンドフェイズに【ギアギガントX】2体は破壊される…ターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：４０００

手札：5→4枚

場：【竜巻竜】

【Ｎｏ．１０　白輝士イルミネーター】

伏せ…3枚

どこか手玉に取るように、鷹矢の攻めを難なく防ぎ。
あまつさえ最小限の動きで、相手ターンに鷹矢のモンスターを2体も破壊した鍛冶上　刀利の怖さを…世界中の見えない観客達は未だ気付いてはいないものの、ソレと実際に対峙している鷹矢は何かを感じたのだろう。
…このターンで決着を着けるつもりではいたものの攻め切れずに止められ、たかだか2体のモンスターを破壊されただけ。
状況的にはそうだと言うのに、しかして意図せず額に浮かび上がってくる冷や汗は…『Ｎｏ．』で牽制しているとは言え、鷹矢にとっては警笛とも思える代物となりて刀利への警戒心を更に上昇させているのか。

「…僕のターン、ドロー。」

そんな彼は先程と同じく、デッキから一枚のカードをドローしたかと思うと…
その手を止め、何かを考える素振りを見せ始め…

「また少ない動きでターンエンドする気か？」
「…それも考えたけど…」
「そんなモノが何度も通用すると思うな。もし貴様が先ほどと同じような動きでターンを終えたならば…次のターン、確実に俺が勝つ。」
「…うん、そうなるだろうね。」
「随分と余裕だな。何を企んでいる？様子を見るつもりか、それとも俺を見くびっているつもりならば…」
「…別に、見くびっているつもりはないよ…ちょっと、考え事をしていたんだ。大丈夫かどうか…」

強がりではない。本気でそう思っている鷹矢の言葉が、鍛冶上　刀

利へと届けられる。
…状況的には、鷹矢が圧倒的に有利のはず。
何せ鷹矢は、刀利を最初から見くびらず。必ず次の手を用意しながらデュエルを進めて、先のターンに決着を着けるつもりではいたものの、もし止められたときの為に次なる手を確かに残しながらデュエルを進めていて。
だからこそ…もし刀利が先のターンと同じような最小限以下の少なすぎる手でそのターンをもし終えたならば、その時こそ鷹矢は刀利の手を全て打ち壊し次のターンこそトドメを刺せる確信があるのだ。
そして刀利の方も、これ以上は鷹矢を止めきれないと踏んだのか…それとも、ソレすら最初から織り込み済みだったのか…

「…でも、もう纏まったから。君なら多分…大丈夫かな。」

天宮寺　鷹矢を相手にしているにも関わらず、刀利はその言葉にどこか余裕を残したまま…

「…行くよ。墓地から【ブレイクスルー・スキル】を除外して効果発動。【竜巻竜】の効果を無効に。」
「ブレイクスルー…それも【メタモルポット】か！だが【竜巻竜】を無効にして何を…」
「…続いてフィールド魔法、【スクラップ・ファクトリー】と永続魔法、【補給部隊】を発動して、【スクラップ・ドラゴン】の効果発動。【スクラップ・ドラゴン】と君の伏せカード…【エクシーズ・リボーン】を破壊する。」
「む!?」

簡単に―
そう、まるでこうなる事が最初から決まっていたかのように、いとも簡単に【竜巻竜】を無力化してきた鍛冶上　刀利。
そして彼は何が伏せられているかわからないはずの、鷹矢の仕掛け

た罠カードの名前を言い当てたかと思うと…
　何とその宣言の通りに、鉄屑の竜の崩壊の咆哮によって、言い当てた通り【エクシーズ・リボーン】が崩壊を始めてしまったではないか。
「くっ！ならば破壊される前に【エクシーズ・リボーン】を発動！墓地より【ギアギガントX】を守備表示で特殊召喚し、このカードをオーバーレイユニットに！」
「…だけど【スクラップ・ドラゴン】は破壊される。そしてスクラップモンスターが破壊されたことにより、【スクラップ・ファクトリー】の効果発動。デッキから【スクラップ・ゴーレム】を特殊召喚。【補給部隊】の効果で1枚ドローし…ゴーレムの効果も発動。墓地から【スクラップ・ビースト】を特殊召喚。」
―!!
【スクラップ・ゴーレム】レベル５
ＡＴＫ／２３００→２５００　ＤＥＦ／１４００→１６００
【スクラップ・ビースト】レベル４
ＡＴＫ／１６００→１８００　ＤＥＦ／１３００→１５００
　先程までの消極的な彼とは打って変わった、流れるような刀利の展開。
　先のターンは一体なんだったのかと思える程の、その淀みなく滞りない流れは…まるで、最初からこういう流れになるのが決まっていたかのようにさえ思える、あまりに流麗で滑らかなカード捌き。
　そして…
「…レベル５のゴーレムに、レベル４のビーストをチューニング。…打ち鍛えられし玉鋼（たまはがね）、その慟哭で大地を砕け！シンクロ召喚、レベル９！【スクラップ・ツイン・ドラゴン】！」

【スクラップ・ツイン・ドラゴン】レベル９
ＡＴＫ／３０００→３２００　ＤＥＦ／２２００→２４００

現れしは双頭なりし、虚影積み重なった鉄屑の暴竜。
頭が一つ増えただけではない。刀利のエースであろう【スクラップ・ドラゴン】をも超える力を見せ付ける進化したその姿は…
打ち磨かれた玉鋼（たまはがね）が、一つ段階を上がったとさえ思える代物にも見えることだろう。

「攻撃力３２００…」
「…まだだよ。【死者蘇生】発動。墓地から【スクラップ・ゴーレム】を蘇生。そして再びゴーレムの効果発動。墓地から【スクラップ・ビースト】を特殊召喚して…【スクラップ・ツイン・ドラゴン】のモンスター効果。ビーストを破壊して、『Ｎｏ．１０』と【竜巻竜】をＥｘデッキに戻す。」
「ぐっ！」
「…まだだ。ビーストの効果は発動せず、速攻魔法、【スクラップ・スコール】発動。ゴーレムを選択し、デッキから【スクラップ・ゴブリン】を墓地に送って１枚ドロー。その後、ゴーレムを破壊する。…そして今、僕の墓地の地属性モンスターはスクラップ・ドラゴン、ゴーレム、ビースト、ゴブリン、そしてメタモルポットの５体。このカードは、墓地の地属性モンスターが５体の時にのみ特殊召喚できる。」
「ッ、その召喚条件は！」

…しかし、まだ終わらない。
鷹矢の場を荒しつつ、展開を止めない刀利が口にしたのは、あまりに特徴的な召喚条件。
…ソレを聞いて、鷹矢も思わず自分の耳を疑ってしまうのか。
だってそうだろう。刀利が今宣言した条件は、あまりに個性的かつ限定的な、所有する者の限られる『６体』のモンスターの召喚条件であり…

その条件の難しさと、偏に『神』とも呼ばれるそのカードは超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が許可した者にしか…そう、【王者】クラスの者にしかその所有を許されない、あまりに危険なカードであって。

今ここに、現れしは―

「…大地を…引き裂け！【地霊神グランソイル】！」

―！

【地霊神グランソイル】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

地脈を砕いて現れし、古の眠りから目覚めし大地。
下手な者では扱う事すら出来ず。にわかに手を出せば神にも等しい自然の霊から、災害の如き罰が与えられてしまうそのカードは…
偏に『神』とも呼ばれることのある代物であり、通常であればその使用を硬く禁じられている、紛れも無くこの世界に現存している『神』のカードの一種類。

「霊神だと！理事長と同じ…何故貴様がソレを！」

…だからこそ、鷹矢は信じられない。
一応、鷹矢とて修業と称して数回【白鯨】である砺波に霊神の一柱である【氷霊神】を繰り出された事がある。
…その時に感じたのは紛れも無い神圧。
ルキの持つ『赤き竜神』や、釈迦堂　ランの繰り出した【邪神】ほ

ど高圧的で高次的ではなかったものの…
　それでも神と対峙した経験が常人よりも多いであろう鷹矢からすれば、この【霊神】とて嘘偽り無い神性を持った存在であるとハッキリと理解できたのだ。
　まさか、よもや、そんな存在を【王者】でも何でもない、一生徒がこんな学生の『祭典』で繰り出してくるだなんて。

「…グランソイルの効果発動。特殊召喚成功時、墓地からモンスターを1体蘇生できる。僕は【スクラップ・ゴーレム】を蘇生。」
「ぬぅ!?」
「…そして再びゴーレムの効果で、墓地から【スクラップ・ゴブリン】を特殊召喚。…レベル5のゴーレムに、レベル3のゴブリンをチューニング。」

　そして古来より誰もが使用しているであろう、命を司る魔術と同じ効果を轟かせし【地霊神】の力によって。
　あまりに圧倒的な威圧感と共に、再び刀利の場に蘇った屑鉄で形作られた巨人がその真価を再度発揮し始め…

「…打ち磨かれし玉鋼(たまはがね)、その咆哮で天を撃て！シンクロ召喚！羽ばたけ…レベル8！【スクラップ・ドラゴン】！」

　　―！

【スクラップ・ドラゴン】レベル8
　ＡＴＫ／２８００→３０００　ＤＥＦ／２０００→２２００

「また現れたか！」
「…【スクラップ・ドラゴン】の効果発動。【補給部隊】と…君の左の伏せカード、【和睦の使者】を破壊する。」
「くそっ！さっきから何なのだ！破壊される前に罠カード、【和睦の使

者】を発動する！俺のモンスターはこのターン戦闘で破壊されず、戦闘ダメージも受けない！」

…これで、２度目。

そう、２度も鷹矢の伏せカードを見透かしたように宣言した刀利の、そのどこまでも侵食してくる破壊の波が悉く鷹矢の場へと襲い掛かる。

…それはあくまでも、鷹矢のリソースを削りにかかる抉り取るような刀利の攻め。

ダメージを与えられない事を最初からわかっていて、それでいてダメージを与えるのではなく鷹矢の用意していた策を見透かしながら一つ一つ削り取っていく刀利のデュエルの進め方は…

ある種の怖さすら感じさせるモノとなりて、鷹矢へとひしひしと襲いかかるのか。

「…【補給部隊】は破壊される。【貪欲な壺】を発動。メタモルポット、スクラップ・ドラゴン、ビースト、ゴブリン、ゴーレムを戻して２枚ドロー。…カードを４枚伏せてターンエンド。」

刀利　ＬＰ：４０００
手札：６→０枚
場：【スクラップ・ツイン・ドラゴン】
【地霊神グランソイル】
【スクラップ・ドラゴン】
伏せ：４枚
フィールド：【スクラップ・ファクトリー】

そうして…

鷹矢の場を散々荒しながらも、０からこれ程の場を構築してそのターンを終えた鍛冶上　刀利。

その淡々としつつも容赦の無い、鋭いモノで抉り取ってくるかのよ

うな刀利のデュエルは、デュエルが始まる前の彼の印象とはまるで真逆で正反対の代物であり…

…バトルフェイズも行っておらず、メインフェイズ1を終えただけでターンエンドしたと言うのに。

あれだけ頑強に整えられた鷹矢の場を、展開しながら荒しに荒らした刀利のデュエルの進展は、まさに容赦の無い強者の撃。

「貴様…どうして俺の伏せカードがわかる。」

「…なんとなく。」

「ふざけるな！弱者ならばいざ知らず、この俺を前にしてそんな狂言を…」

「…本当に、なんとなくなんだ。なんとなく、君が何を伏せて、何を狙ってるのか…なんとなく、わかってしまう。」

「ぐ…貴様…」

…用意していた守りの手を、悉く消費させられ。

更にはダメージを与えられない事を最初からわかっていたかのような刀利の、その鷹矢のリソースを削る事に焦点を当てた今のターンは、まさしく次のターンに攻め込む用意をこのターンに終えたという態度の表れとも言えるだろうか。

…普通、無限とも思えるカードの組み合わせから構築されるデッキから、何か特定のカードを言い当てる事など不可能に近い芸当であると言うのにも関わらず…

確かにソレを行った刀利のその態度に、鷹矢の記憶にはあまりに苦い思い出が沸々と蘇ってきて。

そう、立っているステージが違う場合に起こりえるソレは、鷹矢も過去に一度経験しているからこそ余計に苛立つ事でもあり…

―『なに、造作も無いコトだよ。伏せカードだけではない、君の手札も…なんなら、君がこれから引くカードも、私には全てが既に見えているだけだ。』

それは夏休みに―『Ｎｏ．』の導きによって邂逅を果たした、あの釈迦堂　ランの芸当と同じ部類のモノ。
…この男は、釈迦堂　ランと同じ【化物】だとでも言うのだろうか。
いや、アレほどの人外さは感じないものの、それでも【白鯨】からの修業によってプロのトップランカーにも引けを取らぬ実力を身につけた、『先』の地平に至った自分を前にして…
希薄すぎる気配のこの男の放った言葉は、ソレに近いモノを自分へとぶつけてきたのだ。
それは幾ら彼が【霊神】を操っているとは言え。いくら得体の知れぬ強さをまだまだ画しているとは言え。刀利のその態度は、果たしてどれだけ鷹矢のプライドを傷つけたのだろう。
それ故…あの時ランに敗北を喫した屈辱と、自分とさほど変わらない年代に居るのに自分よりも高みに立っているかもしれない刀利に対し…
鷹矢の苛立ちが、ますます強く募ってきて…

「俺のターン、ドロー！【ギアギガントＸ】の効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、デッキから【ゴールド・ガジェット】を手札に…」
「…その前に速攻魔法、【相乗り】を発動。君がデッキからカードを手札に加えるたびに１枚ドローするよ。【ゴールド・ガジェット】を手札に加えたため１枚ドロー。」
「ッ！…だが止まるわけにはいかんのだ！そのまま【ゴールド・ガジェット】を召喚し、その効果で【無限起動ロックアンカー】を特殊召喚！そしてロックアンカーの効果で【グリーン・ガジェット】も特殊召喚！」

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【無限起動ロックアンカー】レベル４

ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　５００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

刀利の発動した魔法に怯む事無く。
先のターンから全く衰えない、連続して現れる鷹矢のモンスター達。
そう、どれだけターンが進もうとも、この安定性と持久性に長けた展開をずっと続けられるからこそ天宮寺　鷹矢の強さは崩れぬ牙城の如き分厚さを持って、昨日から全世界へと発信されているのだろう。
…どんな時も、どんな情況も。
どんな場面からでも勝利を狙える、その大空を舞う鷹のような自由なデュエルに世界中が再度沸き始め…

「そしてグリーンの効果でレッドを手札に！」
「…１枚ドロー。」
「かまわん！ゴールドとグリーン、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【鳥銃士カステル】！」

【鳥銃士カステル】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

「霊神を操ろうと関係ない！そのままカステルの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、【地霊神グランソイル】をデッキに戻す！」
「…罠発動、【巨神封じの矢（ティタノサイダー）】。カステルの攻撃力を０にして効果を無効に。」
「チィ！ならば【貪欲な壺】を発動！ゴールド、シルバー、グリーン、レッド、イエロー・ガジェットをデッキに戻して２枚ドロー！そして【モンスター・スロット】も発動！レベル４のロックアンカーを選択し、墓地の【イエロー・ガジェット】を除外して１枚ドロー！…俺が

ドローしたのはレベル４の【シルバー・ガジェット】！そのままシルバーを特殊召喚し、その効果で、手札から【レッド・ガジェット】を特殊召喚！イエローを手札に！」
「…1枚ドロー。…レベル４のモンスターが３体…いや…」
「ゆくぞ！俺はシルバーとレッド…2体のガジェットでオーバーレイ！」

割り込むような刀利のカードの発動を意に介さず。
…一度エクシーズ召喚を行っていると言うのにも関わらず、次々と現れるはレベル４のモンスターの群れ。
それは刀利のモンスターがどれだけ強大であろうとも、例え神に等しいモンスターを前にしても変わらない…天上天下に喧嘩を売りし、覇道を突き進む唯我独尊。

…そう、まるでレベル４のモンスターを揃える事など、どんな事よりも簡単なのだと言わんばかりに。

天に手を掲げるその立ち姿は、天宮寺一族の筆頭である祖父、王者【黒翼】の姿に倣うかの様に…

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれぇ！」

世界に轟くその口上。【王者】から受け継いだその牙。
高らかに天に反響せしは、覇道を突き進む男の雄叫び。
祖父である王者【黒翼】から受け継ぎし、世界に轟くその口上とともに…誰が相手でも決して退かぬ自分のデュエルの『砦』となるべく存在、己の『切り札』たる黒き翼を、鷹矢は今ここに呼び出そうとしているのか。
それは己を舐めた男へと、自分を力を思い知らせてやるかのよう

に。神にも等しいモンスターを、己の獲物と見定めるかのように…

「エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！」

今ここに、現れる―

「【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天に羽ばたく雄雄しき翼と、神をも切り裂く鋭き牙が天空闘技場に輝いて。
その佇まいはまさに王の風格。未だ未熟さを感じさせる鷹矢の場に現れても、その存在感は正真正銘歴戦の代物となりて天に咆哮を轟かせるのか。
刀利の場に鎮座せし、大地の神を前にしてもなお慄かぬ…世界に知られる王者【黒翼】の、文字通りその『名』となった天に吼えし黒翼牙竜。
いよいよ現れた【黒翼】に、世界中がアツく湧く。

「…懐かしい。おじさんのカードだ。」

「ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い…【スクラップ・ツイン・ドラゴン】の攻撃力を半分にし、その数値分ダーク・リベリオンの攻撃力をアップする！吸い尽くせ、紫電吸雷！」

【スクラップ・ツイン・ドラゴン】レベル９
ＡＴＫ／３２００→１６００
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→４１００

そして…

牙竜の【黒翼】から放たれしは、神をも縛る紫電の雷鎖。

双頭の鉄竜を縛り上げ、その力を半減し…自分に楯突く愚かな竜に、身の程を知らしめようとでも言いたいのか。

猛々しく吼える黒き竜の咆哮が、天空闘技場から全世界へと映し出され…ソレを受けて、双頭の鉄竜は苦しげな鳴き声を漏らしたかと思うと力を奪われ地に伏してしまったではないか。

「まだだ！俺のプライドを賭け…全力で貴様を倒す！【アイアンコール】発動！墓地から【グリーン・ガジェット】を効果を無効にして特殊召喚！そしてロックアンカーの効果発動！ロックアンカーとグリーン・ガジェットの…元々のレベルを合成する！」

【無限起動ロックアンカー】レベル４→８
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　５００
【グリーン・ガジェット】レベル４→８
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

しかし、まだ終わらない。

続いて叫ばれし鷹矢の宣言によって、２体の機械族がそのレベルを４から８へと上昇させていく。

…それはこの【決島】において確信を得た、鷹矢の『Ｎｏ．』の新たな戦術。
遊良との決戦の為に取っておくつもりではあったものの、この強敵相手では出し惜しみしている場合ではないと悟ったからこそ。
あくまでも全力で、どこまでも全開で。得体の知れない鍛冶上　刀利を、真っ向から降しにかかるのか。

「…今度はレベル８のモンスターが２体…」
「ゆくぞ！俺はレベル８となったロックアンカーとグリーン・ガジェットで…オーバーレイネットワークを構築！」

２度、天空闘技場に響き渡るは、およそこの世界のモノではないエクシーズ召喚の為の口上。

―オーバーレイネットワークを、構築

果たして、その言葉が導き出すのは一体何か。
ランク４にのみ頼るのでは無い。無限とも思える変化を齎す、異界より出でし『Ｎｏ．』の変化を最大限に活かさんとして…

「来い、『Ｎｏ．３８』！希望を齎す銀河の竜よ！遥か星雲の彼方から…光纏いて降臨せよ！」

叫ぶは心。己の心に浮かび上がった、変化せし数字を白紙に焼き付け。
呼び出すはイメージ。己の頭の中に映し出された、目の前の男をも超え得る力の化身を、白紙に戻った『Ｎｏ．』へと押し付けるかのように。
Ｅｘデッキに戻る度に『白紙』へと還る、異界より出でし『Ｎｏ．』の新たな姿を…

「エクシーズ召喚！来い、ランク８！」

―ここに、呼び出す

「【Ｎｏ．３８　希望魁竜タイタニック・ギャラクシー】！」

―！

【Ｎｏ．３８　希望魁竜タイタニック・ギャラクシー】ランク８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

煌く星々を追い抜いて、光速を超えこの場に降臨せしはその目に銀河を宿した宙の竜。
その左肩に、『Ｎｏ．』の証である数字、『３８』を宿した…先程の『Ｎｏ．１０』からまた姿を変えた、ランクをも変えた更なる真価。
この世界にも存在する、【銀河眼】のカードの竜にも似たその姿ではあるものの…この世界のモノとは、存在からして異質なる雰囲気を纏った存在であって。

しかし…

「…数字と一緒にランクも変わった…その『Ｎｏ．』のカードは危険だね。罠発動、【強制脱出装置】。『Ｎｏ．３８』をＥｘデッキに戻す。」
「何!?」

鷹矢の全身全霊を、いとも簡単に躱すように。
こんな情況すら先見していたかのような、刀利の発動した1枚の罠の宣言によって…鷹矢が折角呼び出したランク８の『Ｎｏ．』が、何の役割も果たせずに無慈悲にＥｘデッキへと戻されてしまったではないか。

…何の手心も無い。少しの配慮も無い。

折角姿を変えて現れた『Ｎｏ．』の、見せ場も無くあまりに早すぎる退場に全世界の人間が落胆と刀利への憤りを見せ…
…いや、刀利に『手心が無い』とか『配慮が無い』と感じてしまった時点で、その思考が大いに間違っていると同時に感じてはいけなかったモノだと言うことに…果たして、自力で気付けた者は一体何人いるのか。
ソレはある意味、王者【黒翼】の孫を相手にしている、鍛冶上　刀利という『デュエリア校の一生徒』の異常性を今まさに思い知らせたにも等しいことなのだが…

「…くそっ、だが止まるわけにはいかん！バトル！ダーク・リベリオンで、【地霊神グランソイル】に攻撃！」

それでも鷹矢とて、怯むわけにはいかず。
そう、折角のランク８に変化させた『Ｎｏ．』を、何の抵抗もさせてもらえずに除去されても。ここで怯んで止まってしまうことは、敗北を認めた事と同義であるからこそ…
少しでも流れを手繰り寄せようとして、鷹矢は己の切り札へと即座に攻撃を命じるのか。

…好戦的なる牙竜の狙いは、ただただ大地の神一択。

そう、倒せば次のバトルフェイズを強制スキップさせる【霊神】を、

その神をも貫く牙を持ってして…一撃の下に葬り去り、【黒翼】は己の好戦的な渇望を満たそうとしているのだろう。

そうして…

「斬魔黒刃!ニルヴァー・ストライ…」

天空に羽ばたいた【黒翼】が、神をも貫くその牙を持ってして怒れる大地の神へと襲い掛かった…

その時だった―

「…カウンター罠、【攻撃の無力化】発動。攻撃を無効に。」
「なっ!?」

大地の神に、反旗の牙が突き刺さったと思われたその瞬間。
割って入るかの様にして発動された罠カードによって、神にも楯突く【黒翼】の牙が異次元の渦に阻まれ…
その牙が大地の化身に届く事はなく、そのまま渦から発生した衝撃波によって【黒翼】が弾き返されてしまったではないか。

「…そしてバトルフェイズを終了するよ。」
「くそっ!これでも届かんのか!…2枚目の【貪欲な壷】を発動。ギアギガントX、ロックアンカー、グリーン、ゴールド、シルバー・ガジェットをデッキとＥｘデッキに戻して2枚ドロー!…【ギアギガントX】を守備表示に変更し、カードを2枚伏せターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：５→２枚
場：【鳥銃士カステル】
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】
【ギアギガントＸ】
伏せ：３枚

…おかしい。
きっと、このデュエル中継を見ている見えない観客達も、薄々ではあるがそう思い始めてきたのではないか。
何せ、先程から鷹矢も刀利もお互いに展開してはいるものの…あの【黒翼】の孫相手に、押しているように見えるのはデュエリア校の鍛冶上　刀利の方なのだ。
…予選でも圧倒的強さを誇った天宮寺　鷹矢が、どこか手玉に取られているかのようなデュエルの進行。
その、鷹矢のデュエルを先の先まで予見しているかのような罠の仕掛け方と掻い潜り方は…とてもじゃないが、決して拮抗していると言えるような展開では絶対になく…
また、これ程までに悉く最低限の守りで攻撃を防がれ続けた鷹矢の脳裏には、一体どれほどまでの苛立ちが募ってきているのだろう。
…手玉に取られる事を、何よりも嫌う鷹矢だからこそのその怒り。
そんな、確かなイラつきを感じているであろう鷹矢へと向かって…
刀利は、静かにその口を開き始めた。

「…うん、強いね。流石は予選をトップで通過しただけのことはある。」
「貴様…どういうつもりだ！そんな見え透いた世辞などいらん！この情況を見てそんな台詞を吐くなど、俺を馬鹿にしているのか！」
「…別に…馬鹿になんてしてないよ。ただ、…君とデュエルするのが、少し楽しみだったから。哲君が話してくれた…哲君に勝ったっていう、君と。」

「哲…十文字(じゅうもんじ)の事か？…」
「十文字…うん、そうだね。あの哲君に、そこまで太鼓判を押された君なら…多分、全力でデュエルしても大丈夫かなって。」
「ふん、去年の【決闘祭】のデュエルのことなら、アレで十文字に勝ったなどと思ってはおらん。アレはまた別だ。…しかし引っかかる言い方をするな…何が『大丈夫』なのだ。」
「…僕とデュエルした子は…下手をすると、壊れちゃうから。」
「何？」

消え入りそうなほどにか細い刀利の声から、にわかには信じがたい言葉が鷹矢へと届けられ。
今…この男は何と言ったのか。
デュエルをすると、壊れる―確かに、そう言った。
それは一体どういう意味なのか。刀利の言った言葉の意味を、全く理解出来ない鷹矢の脳裏には、彼の事をよく知っている風だった『ギャンブラー』の先程の言葉が蘇りつつ…

―『…精々、壊されないように気をつけろって…そう言いたかっただけＳＡ。…トーリは強いぜ？多分、デュエリアで一番…いや、もしかしたら世界で一番かも…な。』

「壊れ…『ギャンブラー』の男が言っていた事か？まるで意味がわからん…」
「…あぁ、でもあの子は違った。予選で戦った中で一番強かったウエスト校の子…あの子は僕の事をボンヤリとだけど『視る』事が出来てたし、それでいて壊れなかった。だからあの子に勝って本戦まで来た君も…壊れないと思う。…うん、きっと、君なら大丈夫。」
「ぬぅ…」

しかし…
何を言っているのか良く理解できないはずの刀利の言葉を、頭では

なく心が無意識に理解してしまうかのように。
先程までの、透明なまでの刀利の雰囲気が、段々と心に直接恐怖を与えるような圧倒的な重さを持つモノへと…そう、圧倒的強者の持つ、他の追随を許さぬモノへと変わり始め…
それに応じて、刀利の存在感が希薄なモノから、どこか歴戦の者達が持つ絢爛としたモノへと変化し始めたではないか。
…それは屈服する以外に行動が許されないかのような、高い位の者だけが持つ異次元の威光。
まるで王様から声を賜っているかのような錯覚が、徐々に鷹矢の脳裏へと刻まれていき…

そして―

「…それに、さっきリョウに勝った天城君。あの子も強い心を持っている。…きっと、想像を絶する体験をしてきて、それでも生き抜いてきたんだろうね。」
「ッ！貴様が！何も知らぬ貴様が！軽々しく遊良を語るな！」
「…うん、何も知らない。僕は天城君の事を何も…だから、僕は彼と決勝で戦いたい。デュエルを通して、彼の生きてきた道を聞いてみたい…だから…」

先程までの、勝つ気を感じなかった刀利から一転。
今、はっきりと『勝利』を欲する言葉を漏らした、今まで透明なまでに気配のなかった鍛冶上　刀利という男の…

纏うオーラが…

変わる―

「…このデュエルは、僕が勝つよ。」
「なっ!?」
「…僕のターン、ドロー。…【手札抹殺】を発動。お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数分ドローする。僕は3枚捨てて3枚ドロー。」

―!

刀利がカードをドローした刹那。
重力が倍になったのではないかと錯覚するほどの威圧感が鷹矢へと容赦なく襲い掛かる。
…それは潰されはしないものの、急に襲ってきたその寒気すら覚える威圧感は鍛冶上　刀利という男の雰囲気を根底から覆す代物となりて…
身構えていた鷹矢へと頭上へと、勢いよく落ちてくるのか。

「ぐっ!?に、2枚ドローだ!」
「…続いて【スクラップ・ツイン・ドラゴン】の効果発ど…」
「ッ…させん!永続罠、【デモンズ・チェーン】!【スクラップ・ツイン・ドラゴン】の効果を無効にする!」
「…うん。そう来るのはわかってた。次は【スクラップ・ドラゴン】の効果発動。【スクラップ・ツイン・ドラゴン】と…ダーク・リベリオンを破壊する。」
「それもさせん!墓地から罠カード、【スキル・プリズナー】を除外して効果発動!ダーク・リベリオンを対象にした、【スクラップ・ドラゴン】の効果は無効だ!」

しかし、豹変した刀利の波状のような戦意に飲み込まれまいとして。
一つ一つの刀利の行為を、両断せんとした場から墓地から次々と展開される鷹矢の２枚の罠カード。
…いくらこの男が纏うオーラを豹変させたからと言っても、いくらこの男が勝利を宣言したからと言っても。
それで『はいそうですか』と言って負けてやるほど、鷹矢のプライドは脆くない。
…このターンをキッチリ止めて、次のターンに必ずトドメを刺してやる。
それだけの準備を整えた自負が、天宮寺　鷹矢にはあるからこそ。刀利がどれだけ動いてこようと、その全てに鷹矢は照準を合わせていて…

それでも…

「…いいね、じゃあ次は永続魔法、【補給部隊】を発動してから速攻魔法、【スクラップ・スコール】を発動。【スクラップ・ツイン・ドラゴン】を選択し、デッキから【スクラップ・サーチャー】を墓地に送って1枚ドロー。その後、【スクラップ・ツイン・ドラゴン】を破壊。」
「くそっ、まだ止まらんのか！」
「…【補給部隊】の効果で1枚ドローして、【スクラップ・ファクトリー】の効果でデッキから【スクラップ・ゴーレム】を特殊召喚するよ。」
【スクラップ・ゴーレム】レベル５
ＡＴＫ／２３００→２５００　ＤＥＦ／１４００→１６００
「くっ、またソイツが…」
「ゴーレムの効果発動。墓地から【スクラップ・サーチャー】を君の

フィールドに…」
「やらせるかぁ！罠カード、【蟲惑の落とし穴】発動！【スクラップ・ゴーレム】の効果を無効にして破壊する！」

何度でも、何度でも。
刀利の激しい展開に負けじと、鷹矢の妨害が火花を散らす。
…なんて激しい効果の応酬。
よもやプロではない学生の祭典で、ここまでレベルの高い戦いを観る事が出来るなんて世界中の観客達にとっても幸運とも言えるだろう。
どちらも一歩も引かぬこの応酬は、この戦いを観ている現役のプロデュエリスト達にとっても冷や汗を感じさせる戦いとなりて…
いずれ来るであろう新人に対し、現役の若きプロデュエリスト達の肝を、これ以上ないくらいに冷やし続けているのか。
しかし、普通であれば…いや、それなりの力をもった猛者であっても、鷹矢にここまで悉く行動を妨害されては少しはその手を止めてしまってもいいはず。
そうだと言うのに、【黒翼】の孫の抵抗を受けてもなお止まる気配を見せぬ鍛冶上　刀利の異常性は、更にその凄みを増していくだけであり…

「…これで止める物は何もなくなったね。魔法カード、【ポンコツの意地】を発動。墓地の【スクラップ・ゴーレム】、【スクラップ・サーチャー】、【スクラップ・コング】を選択し…相手が選んだモンスターを、僕か君の場に特殊召喚する。」
「ッ!?」

鍛冶上　刀利は止まらない。
どれだけ鷹矢が邪魔をしようと、どれだけ鷹矢が行く手を阻もうと。
それでも刀利の展開は終わらず、ただただ淡々と勝利へと向かって

カードを発動し続ける、デュエリア校の鍛冶上　刀利。

…一体、彼にはどれだけ鷹矢の先が視えているのだろうか。

それはまるで、鷹矢の行動を先読みしていると言うよりは、鷹矢の行動を誘導しているかのような鍔迫り合い。

蘇生効果を持った【スクラップ・ゴーレム】を選べば言わずもがな、【スクラップ・サーチャー】を選んだところで自分フィールドに出されれば…【黒翼】を含めた全てのモンスターが破壊されてしまうことは、鷹矢だって説明されずとも理解している事。

ソレ故、鷹矢にとっては最初から選択肢は一つしか与えられておらず…

「俺は…【スクラップ・コング】を選択する。」

「…ゴーレムとサーチャーを除外して、選ばれた【スクラップ・コング】を僕の場に特殊召喚。そして僕はまだ通常召喚を行っていない。【スクラップ・キマイラ】を通常召喚。その効果で墓地からチューナーモンスター、【スクラップ・ワーム】を特殊召喚するよ。…レベル４のキマイラとコングに…レベル２のワームをチューニング！」

天に昇るは鉄屑の、剛猿と歪な合成獣。

ソレを追う様にして、その身を２つの光輪へと変えた屑鉄の蟲蛇が天への道を導く時…

歴戦を感じさせる鉄屑の幻獣達は、一体この地に何を齎そうとしているのか。

「…打ち造られし玉鋼、その咆哮で天地を断ち切り…滅んだ世界で叫び狂え！……シンクロ召喚！」

世界へと叫ばれしその口上は、どこか刀利の心の深奥がそのまま顕現したかのよう。
そのまま刀利は、僅かに悲痛な顔を浮かべるように…

「…飛び立て、レベル１０！【アトミック・スクラップ・ドラゴン】！」

―！

【アトミック・スクラップ・ドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／３２００→３４００　ＤＥＦ／２４００→２６００

現れしは巨大なる遺物。
原子の力をその身に宿した、三頭蠢く先史の虚竜。
…核熱を血に、核光を意思に。
暴走寸前の叫びを上げし、命を奪う光を放つ…先史の時代に打ち造られた、世界を滅ぼす鋼の一刀。

「今度は三つ首…」
「…【アトミック・スクラップ・ドラゴン】の効果発動。【補給部隊】を破壊して…君の墓地の【ゴールド・ガジェット】と【無限起動ロックアンカー】…そして、【超電磁タートル】をデッキに戻す！」
「ぬぅ！」
「…奪え、【アトミック・スクラップ・ドラゴン】！」

そして…

原子力の鉄竜が、暴れし三頭から咆哮を轟かせたその刹那―
墓地より呼び出せば後続によって防壁を作れる、【ゴールド・ガジェット】と【無限起動ロックアンカー】だけでは飽き足らず…
―なんと鷹矢が『Ｎｏ．１０』の効果で墓地に用意していた、最後の守りの手である【超電磁タートル】までもが
何の役割も果たす事が出来ずに、無慈悲にもデッキに戻っていってしまったではないか。

…まさか、ここまでの力を隠していたのか。

その、鷹矢の全ての抵抗を奪い去らんとしている刀利のその佇まいは、先のターンまでの彼とは全くの別物。
予選の対戦数の少なさの異常性が、今になって際立ってくるほどに…
今の刀利の持つ雰囲気は、とてもじゃないが常人などでは決して受けきれないほどに重々しい代物であり、先程までの彼は一体何だったのかと疑いたくなるような、ソレはあまりに無慈悲で理不尽な強さ。

そうして―

「…【貪欲な壷】を発動。スクラップ・コング、キマイラ、ワーム、シャーク、ツイン・ドラゴンを戻して２枚ドロー。…これで最後だ。【地砕き】発動。ダーク・リベリオンを破壊する。」
「ッ!?」
【スキル・プリズナー】によって守られた【黒翼】を、無感情に飲み込むかのように。
攻撃力において刀利のモンスターの全てを超えていた、鷹矢にとっ

ての最後の砦を…
そう、世界に轟く【王者】の名、鷹矢が祖父より受け継いだその『切り札』までもが、無慈悲にも簡単に破壊されていく。
…そろそろ、このデュエルを見ている世界中の観客達も気付き始めた。
…鷹矢の全力をいとも簡単に受け止め、鷹矢の全力をいとも簡単に乗り越え。
力の差を思い知らせるかのようなこのデュエルの展開は、まさしく刀利と鷹矢の実力にそのまま大きな開きがあると言う事であり…
そう、あの天宮寺　鷹矢が。
王者【黒翼】の孫、天宮寺　鷹矢が。
昨年度【決闘祭】準優勝者、天宮寺　鷹矢が。
夏にプロの大会を荒しまわった、天宮寺　鷹矢が。
昨日の【決島】予選第1位通過の、天宮寺　鷹矢が。

まさか…
まさかこんな無名の選手に、全く歯がたたないなんて―

「クハハ、どうだぁ砺波ぃ。アイツはウチでも特別な奴でよぉ。」
「鍛冶上　刀利…あの子、学生の身で『極』の頂に…」

この戦いを天空の塔の下階の一室で見守っていたイースト校理事長、【白鯨】である砺波　浜臣もまた、このデュエルを見ていてとうとうソレに気がついたのか。
…鷹矢の仕掛けた罠を見極め。ソレを確実に超える手を揃え。

鷹矢の抵抗の一つ一つを確実に潰しながら、それでもなお勝利するまで止まらぬその圧倒的な腕前は、学生の枠には到底収まらぬ洗練された天上の実力。
そう、学生の身でありながら『先』の地平にまで到達した天宮寺鷹矢の全てを見極め…
そして猪突猛進ながらも確かな力を持って向かってくる天宮寺鷹矢を、こうまでして簡単に、そして難なくあしらう事など【王者】やそれに次ぐ『異名』を持った天上の者達の実力がないと根本からして不可能なこと。
今やプロのトッププランカー達を相手にしても渡り合えるであろう実力を持った天宮寺　鷹矢を前に、ここまで力の差を見せつけてくるというのは…よほどの『実力差』と『先見』が無ければ、そもそも不可能だというのに。

「鍛冶上　刀利…ハッ、面白い奴さね。」

呟かれるように零れた『烈火』の言葉は、1人の学生を見ているような台詞ではない。
それは新たに『極』の頂きに現れた、自分のライバルを見ているかのような視線であり…
…歴戦に名を残せし女傑、『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコがこのデュエルを見れば、鍛冶上　刀利の実力がプロのトッププランカー達と比べても頭一つ抜きん出ているどころか、ソレより更に高い場所に立っているであろう事は最早明確なこと。
そう、プロのトッププランカー達が身を置く『先』の地平…
その段階に至った天宮寺　鷹矢と、よもやこれ程までに開いた実力差を持った鍛冶上　刀利の力は、学生どころかプロどころか、そういった強者・猛者達とは比べることすらおこがましい高みに至っているのだから。

…歴戦に名を残す者のみが到達できる、最強と呼ばれることもある決闘者の棲む『極』の頂。

到達すれば、決闘界の歴史に未来永劫にその名が残ると約束された…この世のデュエリスト達の頂点であり、【王者】になれる可能性だってある、世界最高峰のデュエリストの証。

そこに、まさかこんなにも若くして到達した者が学生に現れるだなんて。

「琥珀の馬鹿以外に、学生で『極』まで到達できる奴なんて居たんだねぇ。鍛冶上ってガキも中々ぶっ壊れてんじゃないか。」

学生の年代で『極』の頂に到達できた者など、この長い長い決闘界の歴史を見てもたった1人だけ。

そう、世界に名立たる現シンクロ王者【白竜】…新堂　琥珀の存在しか、学生の年代で『極』の頂に到達した者は、世界中探しても他には誰一人として確認されてはおらず。

だからこそ…こんなにも若い年代で『極』の頂に到達するには、現シンクロ王者【白竜】新堂　琥珀のような、世界のバグのようなイレギュラーが必要だということ。

…彼もまた、想像を絶する過去を持つのか。それとも彼もまた、世界にとってのバグなのか。

新堂　琥珀を良く知るサウス校理事長、『烈火』と呼ばれた獅子原トウコには、鍛冶上　刀利のソレが容易に想像でき…

「ッ！何だ…何なのだ貴様のその力は！」

だからこそ、自分とさほど歳の変わらないこの鍛冶上　刀利の実力の凄まじさが、容赦なく鷹矢の目に映し出される。

―壊される…

あの何があっても折れない鷹矢が、無意識にそう思ってしまうほど。刀利から発せられる圧倒的強者の重すぎるオーラは、未だ『先』の地平にいる鷹矢も到底支えきれないほどに、容赦なく鷹矢の心を潰しにきており…

―圧倒的強者とは、他人を導く事もあれば…他人を、いとも簡単に壊してしまう場合もある。

刀利は、後者。

ソレは、彼がまだ若いからこそ制御できていないのか、それともまた別の要因なのか…

そのデュエルは、『極』の頂にあっても後進を教え導く立場にある【白鯨】や『逆鱗』、『烈火』とは…そして立場の違いから遊良に対しても手心があった【白竜】と比べても、根本からして戦い方が違う。

…容赦がない。手心などない。配慮などない。本気で相手を潰しにきている。本気で相手が壊れる可能性がある。

それを、形容ではなく実際にやってしまう可能性があるからこそ。普段ならば絶対に他人に畏怖など意地でも感じない鷹矢も、その覆せない絶対的な恐怖心を植えつけられそうになっているのか。

果たして…

刀利が予選でも極力戦っても潰れないであろう強者を選んで、潰れないよう願いながら戦っていたことを…知っている者は居るのだろうか。

刀利が想像を絶する過去を生き抜き、嫌々この段階に早々に昇ってしまった事を…知っている者は居るのだろうか。

刀利がどれだけデュエリア校で『デュエルをしないデュエリスト』だとか、ソレが崇って『雑魚上』などと呼ばれても抵抗を見せず…ソレが果てしない強者からの温情だということを、【決島】に参加していないデュエリア校の生徒達の中に、理解している者は居るのだろう

か。

いや、居ない。

彼が別の物語では、この世界にいる６人の王の１人…

世界を壊す、【地の破王】と呼ばれている事を…

刀利の最も親しい友以外に、この世界では…

―誰も、知らないこと

そして―

「鷹矢ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

こんな予想外の決着の仕方が、こんなあっけない相棒の敗北が。
どうしても許せなかったのか、控え室に戻っていなかった遊良の叫びが、暗い通路からただただ無情に天に消え…

「…僕の攻撃力の総合は９０００。君の残った伏せカードじゃ…もう止められないね。」

「ぐっ…まさか…こんな…」
「…これで終わりだ。バトル。【アトミック・スクラップ・ドラゴン】で、【鳥銃士カステル】に攻撃！」

原子の力をその身に宿した、核熱の虚竜が天に舞う。
…刀利の力の根源たるモノ。刀利の王たる姿を守るモノ。
かつて世界を、文字通り『壊しかけた』その古の遺物の竜は、果たして果敢にも抵抗を見せた【王者】の孫に対して慈悲は見せてくれるのか。

否…

慈悲などあるわけもない。これはデュエル…いや、『決闘』。
お互いに戦ると決めた男同士の争いに、慈悲など挟まる隙はなく。

そうして…

「ぐ…ぐぐっ……俺が……こんな、ところで…」

許容できない悔しさから、血が滴るまで唇を噛み締めた鷹矢の姿など意に介さず。
三つ首に収束せし崩壊の荷電粒子が、鷹矢のエクシーズモンスターを貫かんと…

今―

光り、輝く―

「…アルティメット…デストロイ・ブラスター！」

―その時だった

「認めるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！【ワンダー・エクシーズ】発動！」

―！

刀利の崩壊の三つ首竜の放った、終わりを告げる核雷から。
まるで自分のモンスターを守るかのように、鷹矢の喚きが反響して。
その鷹矢の宣言によって発動されたのは、刀利も、そしてソレを伏せた鷹矢も無駄だとわかっていたはずの、全く無意味なる1枚の罠カード。

―それは決して、こんな情況を見越して伏せられたカードではない。

…ただ手札で余っていたから、とりあえず伏せていただけの罠。
…もしかしたら追撃になるかもしれぬ、もしかしたらブラフになるかもしれぬと、一応前もって伏せてあった使い所など無かったはずの罠。

だからこそ、刀利とてこのカードの事は全く気になど留めていなかった。

何せ鷹矢自身が、この伏せカードはこの情況では使い所が無いと感じていたのだから…
ソレを見抜いていた刀利自身も、このカードの事など気に留める必要などなかったのだ。

それ故、それは確信を持って発動された罠ではなく―

ただ何も出来ずに負けることを、何よりも嫌う鷹矢が喚き散らす子どものように叫び…

無駄と分かっていながらも、無理だとわかっていながらも。

それでも何か行動しなければ心が潰れてしまうのだと言わんばかりに発動を宣言した、ただの条件を満たしていないはずの1枚の罠であって。

「…ッ!?な、何を…」

「こんな所で終わるわけにはいかんのだ！遊良が待っている場所に…俺が行かないわけには絶対にぃ！俺は『ランク４』のカステルとギアギガントXで、オーバーレイィ！」

馬鹿げた鷹矢の宣言が、世界中へと響き渡る。

…それは決してありえない事象。それは絶対に出来ないはずの事象。

一縷の望みに託すのではなく、無理な事を無理矢理にでも押し通すかのような鷹矢の…ソレは子どもの我が侭のような、癇癪にも似た喚きの叫び。

けれど―

けれども―

まさか―

その、鷹矢のありえない宣言によって―

２体の『エクシーズモンスター』が宙を舞う。

「…エクシーズモンスター２体でエクシーズ召喚!?そんな事出来るわけが！」

「うるさい！無茶は承知、無理なのは分かっている…だが俺は！これが無駄なことだとしても！負けるのだけは絶対に嫌なのだぁぁぁぁあ！俺はランク４のモンスター２体で、オーバーレイネットワークを構築！」

…縋るように、ではない。

…賭けるように、でもない。

何かをしなければならないという、己への強迫観念にも似た焦りと憤りから、ただただ行動を起こした鷹矢の起こした奇跡と言うにもおこがましいただの我儘。

それはエクシーズ召喚を、カードの効果で誘発するという罠カード。

だが同じレベルのモンスターが居ないという、エクシーズ召喚を行う為の罠の発動条件を満たしていないのだから、銀河のエフェクトどころかカードは発動すらしないはずだというのに。

「ぐっ!?うぐっ…が…体が…千切れそうだ…」

出来ない無駄を、ありえない無茶を。

決して発動しないはずの罠を、無理矢理に発動させたが故の反動か。

身体が、文字通り真っ二つに引き裂かれそうなほどの痛み。

そんな痛みが鷹矢の身体の内で、まるでこの世界自体が『ソレ』を拒んでいるかのような衝動となりて暴れ周り…

それでも―

「うぉぉぉぉぉお！・異界救いし希望の勇者よ！・交わらぬ世界の扉をこじ開け…」

先に行って自分を待っている遊良の居る場所に、自分がいかないわけには絶対にいかない。

鷹矢にあるのは、ただそれだけ。

しかしそんな一つの思いで、無茶をぶん殴り無理を蹴飛ばし、無駄を投げ飛ばして鷹矢は叫ぶのか。

そして頭の中に浮かび上がった、光り輝く勇者の姿と。意図せず漏れ出す無意識の言葉が、鷹矢の意識と共鳴し…

ソレは果たして何なのか。そのイメージはどこから来るのだろう。

そんなモノ、考える暇も無ければ考えるつもりも無い鷹矢の頭の中に。

『何か』とてつもなく大きく強大で巨大な顔を持った『門』のイメージが浮かび上がった…

その瞬間―

「自由の翼で天を舞えぇ！・エクシーズしょうかぁぁぁぁぁぁぁあん！」

それは―

「ランク０！未来皇ホープ！」

―！

…それは、誰も見たことが無い光景だった。
天空を踊るように駆け抜けるは、赫炎の如き紅の勇者。
その姿はまるで、本当に『世界を救った勇者』とも思える程に…
煌びやかなるも絶対なる赤き存在感を纏いて、天空に神々しく光り輝いていて。

【ＦＮｏ．０　未来皇ホープ】ランク０

ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

―『ランク０』

そんなモノは絶対にありえないコト。

だってそうだろう。同じ『レベル』を持つモンスター達によって生み出される『ランク』は、『レベル』と『レベル』を混ぜ合わせる事によって生まれるモノなのだ。

…『レベル』は決して『０』にはならない。

…『ランク』とはすなわち『レベル』ではない。

そんな事、この世界に生きる者にとっては赤ん坊の頃から知っていること。

…だからこそ、誰もがこの光景を信じられない。

まさか…まさかまさかまさか―

レベルを持たないエクシーズモンスターを重ね合わせた、『ランク０』のモンスターがこの世に姿を現しただなんて。

「ッ…なんだいあのエクシーズモンスターは！おい木蓮、あんなモンスター、アンタ知って…」

「ランク０!?レ、レベルを持たないエクシーズモンスター同士で！ランクが０のモンスターなんて作れたのか!?そんなモノ考えもしなかった！」

理事長達のいる特別観覧席―
歴戦の決闘者達ですら、その存在に対して声を荒げずにはいられないのか。
それは元カードデザイナーであったウエスト校理事長である李木蓮の、巨木の如き知識を持ってしても常識と知識と閃きの範疇を超えているモノ。
…当たり前だ。
この世界に生きる、常識を持った人間ならば、『ランク』が『レベル』ではない事など、生まれた時から知っている事。
そして『ランク』を持つエクシーズモンスターが、『レベル』と『レベル』を重ね合わせたことにより超越して現れる事も、赤ん坊だって理解している事なのだ。
だからこそ、長年カードデザイナーとしてこの世に数多のカードを生み出してきた李　木蓮を持ってしても…あの『Ｎｏ．０』の事は、理解出来ない。

「ランク０なんて作れたのか!?くそっ、何で俺が先に思いつかなかったんだ!くそっ!あんなガキに先を越されるなんて!何で俺がもっと早く思いつかなかったんだクソが!」
「ッ…木蓮の奴、久々に我を忘れて素が出てるさね…おいジジイ!アレは一体……ッ!?」

また、『烈火』が視線を横にやった…

そこには―

「な…なな…ななななんじゃアレは…」

およそ今世紀の間には誰も見たことが無いであろう、あんぐりと口を開け驚愕のため大きく口を開けていた…

心の底から驚愕を顕にしている『妖怪』、綿貫　景虎の姿があった。

「ジジイのこんな間抜けな顔初めて見たさね…ッ、それほど『ありえない』事象ってわけかい…鷹峰の孫…奴は一体…」

この世界における生き字引、悠久を生きる『妖怪』の、心の底から驚愕している顔なんて今の時代に生きる人間は絶対に見たことなどないだろう。

それほどのことが、たった今起こった。それだけのことを、あの子どもはやらかした。

…王者【黒翼】の孫とは言え、こんな事が出来るなんて誰だって信じられない。

そう、これは歴史が変わる大事件。

これまでの学術、学説、研究が、根底から覆る大惨事。

学生達の教科書が、この世にある全ての論文が、歴史に刻まれたエクシーズ召喚の定義が。

一から書き直しになる現実が、今こうして全世界の人間達の目の前で巻き起こったのだ。

きっと今この瞬間にも、デュエル学者達が悲鳴を上げていることだろう。何せ数世紀にも亘るデュエルの研究が、全てひっくり返るほどの事象がたった今全世界の目の前で起こったのだから。

…けれども、デュエルディスクの判定は絶対で、デュエルディスクが『ランク０』のあのカードを正規のモノだと認めている限り…

ソレは紛れもなく、この世界に現実のモノとして存在していると言うこと。

故に、世界中の誰もがその現実を信じられないのに信じるしかないという、理解できない大いなる矛盾に襲われていて…全世界の人間がこのありえない現実に、ただただ驚愕を顕にしていて…

「…ランク…ゼロ…？…そんな事が…き、君は…何を…」

だからこそ、まさに勝利寸前だった鍛冶上　刀利も、己の眼で見た間違えようのない現実をただただ疑うことしか出来ないのか。
絶対にありえない、『ランク０』という概念を持ったエクシーズモンスター。
その、絶対に『ありえない』事象が、確実に現界しているその姿に…このデュエルが始まって初めて、心からの驚きの表情を浮かべており…

「…わからない…あの『Ｎｏ．』のテキストが…読めない…」

そして…
鷹矢の召喚した『Ｎｏ．０』のカードのテキストを、デュエルディスクで確認しようとした刀利が…その表情に、困惑の色を見せ始めたではないか。
…しかし、それもそのはず。
そう、ランク０の『Ｎｏ．』…未来皇に刻まれたそのテキストは、これまで鷹矢が召喚した『Ｎｏ．』とは異なる…否、この世界の言語とは、根本的な部分から異なる…
丸みと棘を帯びたような、全く見た事もない文字でテキストが構成されていたのだ。
ソレ故…

「…ランクと効果が変わるだけじゃなくて、こんなカードまで生み出すなんて…ッ、Ｅｘデッキからモンスターが特殊召喚されたことで、僕は墓地から【巨神封じの矢】をセットする…カ、カードを１枚伏せて…ターン…エンド…」

刀利　ＬＰ：４０００
手札：４→０
場：【スクラップ・ドラゴン】

【地霊神グランソイル】
【アトミック・スクラップ・ドラゴン】
伏せ：2枚
フィールド：【スクラップ・ファクトリー】

存在しないはずの『ランク０』。効果も読めず、攻撃力も守備力も０。
…そんな得体の知れぬモンスターに、下手に攻撃を仕掛けるわけには絶対にいかない。
絶対に何かある―
刀利の持つ嗅覚がソレを感じたのか、それとも元々の用心深い性格のブレーキか。
そんなコトは刀利自身にもわからぬことではあるものの、少なくともこの瞬間に攻勢に転じることがどれほど危険なのかを感じ取った様子を見せた刀利は…
今、焦りを浮かべながらそのターンを終え…

「ぐっ…だ、だめだ…長くは持たん…お、俺のターン…ドロォーッ！」
そしてターンが移り変わった直後。あまりに苦しそうな声を漏らしながら、震える手でどうにかカードをドローした鷹矢。
それはまるで、心臓を直接手で握りつぶされているかのような苦しみ方。
脂汗を浮かべ、呼吸を荒くし…いつも崩れぬ鉄仮面がどこか苦しげに見えることから、ソレは相等たる苦しみなのではないか。
更に、『ランク０のＮｏ．』もまた、今にも消えてしまいそうなほどにその存在感が希薄であり…それは、今消えてしまったらもう二度とこのランク０の勇者を呼び出す事などできないのではと思える程に

…

…いや、実際に『そう』なのだろう。

何せこの『ランク０のＮｏ．』は、本来ならば『この世界』には姿を現す事など絶対に出来ないはずの存在。

それが鷹矢の叫びと、鷹矢の持つ『Ｎｏ．』との何らかの共鳴によって、一時的に、断片的に…そう、文字通り、奇跡的に一瞬だけ姿を現したに過ぎない奇跡の存在。

…だからこそ、このターンが自分に与えられた最後のチャンス。

ソレを過ぎれば、いくらデュエルが途中であっても『Ｎｏ．０』は姿を消してしまうだろう。いや、下手をすればターンが終わる前にも鷹矢の命は千切り飛んでしまうのではないか。

…一瞬だけとは言え、『世界』に『穴』を開けるというのはそういうこと。

それを言われるまでもなく感覚で理解している鷹矢も、コレを保つ事によって発生する自分の命の限界をなんとなく感じ取っており…

「…ッ！このカードは…」

だからこそ、鷹矢はたった今ドローしたカードを一瞥した後…

瞬間的に、『何か』の覚悟とイメージを固めたのか。千切れ飛びそうな身体に更に鞭打って、どこか意を決したかのように…

「…鍛冶上　刀利…お、覚えたぞ…しかとこの頭に！ッ、き、貴様は強い…今の俺より圧倒的に！だが…」

絞り出される鷹矢の声は、心臓を直接握りつぶされているかのような『Ｎｏ．０』からの痛みを我慢すると同時に…

刀利と開きすぎている己の力の無さを悔やんでいるかのような言葉となって、その口から零れるように漏らされる。

果たして…
唯我独尊を地で行く鷹矢が、他人よりも自分が劣っていると認めることがどれだけ彼に苦痛を与えるのだろう。
これまでも出会ってきた【白鯨】や【化物】達とはまた違う。同じような年代、同じような年齢の、あまりに歳が近い者との実力差が…あまりに遠すぎることなど。
けれど…

「遊良が待っているのだ…次のターンが無いのならば…俺は必ず、このターンで絶対に貴様を倒す！魔法カード、【ナイト・ショット】発動！【巨神封じの矢】を、使わせずに破壊！」

そんな自分への苦行など、今の鷹矢にとっては些細な事なのか。
…鷹矢の放ったソレは、勝利宣言などでは断じてない。
今にも消えそうな『Ｎｏ．０』。削られていく自分の命。
このターンで決着を着けられなければ、間違いなく自分は負けるだろう。
いや、このターンを超えて『ランク０』をこの世界に維持しようとすれば、間違いなくターンエンドとともに自分の命は尽きてしまう。
ソレ故…
自分に残されたターンが、命が。このターンで限界なのだという事を、苦しげながらも理解している鷹矢は…

―今、覚悟を決めて。

死角からの弾丸を、一発放ったかと思うと…
デュエルディスクのＥｘデッキを開くと、その中から１枚の『白紙』のカードを取り出し始めた。
「…ッ、それは君の『Ｎｏ．』!?…なんで…じゃあここにいる『Ｎｏ．０』は…」

「コイツは…この『Ｎｏ．０』は俺の『Ｎｏ．』ではない。どこかから一時的に俺の場に現れただけの、デッキ外のカードだ…」
「…『Ｎｏ．』のカードが２枚…でも、それで一体何を…」
「鍛冶上　刀利…貴様は強い…俺がこれまで戦ってきた誰よりも…今の…俺よりも…」
「…」
「ッ…だが！それがどうしたというのだ！他人に至れる境地ならば、この俺が至れぬわけがない！今ここで、一瞬でもいい！一瞬でも貴様の喉元に牙が届く可能性があるのならば…この『ランク０』が俺の力でなくても…俺は何を利用してでも、絶対に貴様を倒さなければならんのだ！だから…」

悲痛を纏いし鷹矢の叫び。それは学生の身分でありながらも、『極』の頂に存在している刀利への羨望。
果たしてソレは『Ｎｏ．０』を維持しているだけの痛みではないはず。
…自分よりも遥か高みに居るこの男に。普通であれば手も脚もでないであろうこの相手に。
絶対に勝ちたいと願うのならば…否、願うのではない。絶対に勝ちたいと強く思うのならば、たとえプライドを投げ打ってでも、ソレが自分の力でなくとも…使えるモノは全て使ってでも、勝利をもぎ取らなければならない。
…何でもいい、どうなってもいい。
…『約束』の舞台で、遊良が先に待っている。
そこに、自分が行かないわけにはいかないのだ…と。そう、強く心に決意して。
そして―

「…だから俺の…俺達の未来の…邪魔をするなぁぁぁぁあ！俺は『ランク０』の未来皇１体で、オーバーレェェイッ！」

「…ッ!?」

今、再び高らかに、鷹矢の叫びが空を裂く。

…ソレはあまりに予想外な宣言。

ただでさえ『ランク０』のエクシーズモンスターが現れたというだけでも理解が追いついていない者達の理解を、更に混乱させるような宣言が今再び世界中へと放たれて。

「…こ、今度は何を!?」

「こうするのだ！俺は未来皇１体で、オーバーレイネットワークを再構築！」

―オーバーレイネットワークを、再構築

およそこの世界では、決して叫ばれることのないその宣言。

今ココに、『Ｎｏ．０』がいるというのに…鷹矢の手に握られているソレは、紛れもなく彼がこれまで使用していた『Ｎｏ』のカードの原型、白紙。

世界中で鷹矢しか持っていないはずの、世界で１枚しかないはずの『Ｎｏ．』のカード。

ソレが２枚あるというのは、果たしてこの世界に何が起こっているというのか。

「来い、『ＦＮｏ．０』！縦横無尽に世界をかっ飛ぶ、世界を救いし希望の勇者よ！今ここに…天地開闢の光となれぇ！」

…変幻自在に姿を変える、謎のエクシーズモンスター『Ｎｏ．』。

…絶対にありえない『ランク０』という、突如この世に現れた謎の『Ｎｏ．０』。

この世界と、別の世界の、その２枚の『Ｎｏ．』。

ソレが鷹矢の宣言によって共鳴、共光し…

そして…

「エクシーズチェェェェンジ！現れろ、ランク０！」

ここに、重なるー

「【ＦＮｏ．０　未来龍皇ホープ】！」

―！

【ＦＮｏ．０　未来龍皇ホープ】ランク０
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２０００

現れしは龍を纏いし、希望の化身たる輝きの勇者。
…それは世界を幾度となく救ってきたかのような、歴戦を戦い抜いた王者の風格。
決して現れるはずのなかった奇跡の存在。ソレが必死の叫びと微かな希望、そして命をも削った鷹矢の意思によって…
この世界に呼び出された、ほんの小さな奇跡の欠片そのモノのよう。

「…未来皇が…姿を変えた…」
「そして…これが勝利への鍵だ！速攻魔法【フューチャー・ドライブ】

発動！」
「…ッ!?また知らないカード…駄目だ、ソレも読めない…」
「うむ！これも『Ｎｏ．０』と共にこの世界に現界した、今この時だけの力！…だがそれでも良い！これが俺の力でなくとも、俺は俺の持てる全てを賭け…遊良との約束の為に、貴様に勝ってみせる！バトルだ！未来龍皇で、【スクラップ・ドラゴン】に攻撃！」

そして間髪いれず。
鷹矢が再度読めない謎のカードを発動したかと思うと、龍を纏いし希望の勇者が先史の屑鉄の虚竜へと翔る。
…それはあまりに迷いなき、純粋なまでの美しき飛翔。
全てが謎のモンスターと、全てが謎の魔法カード。そんなモノと対峙するのは、誰だって恐怖を覚えるだろう。
しかし、共に攻撃力３０００。このままでは、鷹矢とて勝利をもぎ取るところでは…

「…相打ち狙い!?」
「相打ちなどせん！未来龍皇は戦闘では破壊されず…そして【フューチャー・ドライブ】の効果は、戦闘で破壊した相手モンスターの…元々の攻撃力分のダメージを、相手に与える！」
「…ッ!?…だったら罠カード、【聖なるバリア―ミラーフォース―】発動！攻撃して来た、未来龍王を破壊するよ！」
「無駄だ！未来龍王は効果でも破壊されん！」
「…なっ!?」

しかし、刀利の浮かべたその焦りの、その全てを超えるかのように。
敵の全てを打ち砕く聖なるバリアを、銀に煌めく双剣の剣閃によって未来皇は切り裂くのか。
そのまま、鷹矢は高らかに…

「ゆけ、未来皇！天地両断！フューチャー・ブレイドォ！」

―！

刀利　ＬＰ：４０００→１２００

そしてー
この時ーこの時初めて、鍛治上　刀利が傷ついた。
それはこのデュエル始まっての初めてのダメージ。
ここまでの攻防で、まさかこのデュエルで最初にダメージを与えたのが勝利目前だった刀利ではなく…
敗北寸前まで追い込まれたはずの、天宮寺　鷹矢だなんて。

攻撃力は同じでも、一方的に切り刻まれ破壊された鉄屑の龍の、その纏っていた電流の余波が刀利を襲う。

…それは何もかもが不明という、何もわからない効果故の奇襲の猛襲。
いくら『極』の頂にある刀利の力を持ってしても、ソレが鷹矢の力ではないからこそ。
ソレが読めぬテキスト、読めない文字で描かれた、全くもって何もわからないカードだからこそ、刀利も防ぐ事が叶わぬのか。
「…くっ…だけど破壊された【スクラップ・ドラゴン】の効…」
「まだだ！【フューチャー・ドライブ】の更なる効果！ダメージステップの間、相手のモンスター効果を封じる！」

「…なっ…」
「そしてこれが最後の効果だ！【フューチャー・ドライブ】の効果を得た未来龍皇は…相手モンスター、全てに攻撃出来る！」
「…!?」

そうしてー

「今一度飛べ、未来龍皇よ！今こそ天に踊り…大地の化身を切り裂けぇ！」

奇跡の化身たる希望の未来が、今再び天に舞う。
大地の化身たる神を前に、世界を救って未来を守った一人の勇者が…今この時、一人の男の更なる未来を作ろうとしているのか。
…けれども、例えコレがこの瞬間にのみ現れた儚き奇跡なのだとしても。
それでも鷹矢はただひたすらに、強者へと向かって吠えるのみ。

未来を紡ぎし希望の勇者の、その双剣が光を纏う。

そう、それは鷹矢の、最も大切な『約束』のため…
先で自分を待っている、遊良との『約束』のために…

ここに、轟くー

「天地開闢！フューチャー…ドラァァァァァァイブッ！」

―！

「…ッ、うわぁぁぁぁぁぁ！」

刀利　ＬＰ…１２００→０

―ピー…

―…

「まさか…刀利君が負けるなんてね。」

「…あぁ。」

終了後―

天空の塔の上階の一室…選手控え室の一室に…

プロデュエリスト、泉　蒼人と十文字　哲の姿はあった。

…いや、蒼人と哲だけではない。

この部屋にはもう一人…そう、先程まで天空闘技場でデュエルをしていた、鍛治上　刀利の姿もあり…

…明かりもつけていない暗い部屋で、椅子に座り項垂れている刀利

へと向かう蒼人と哲。
　刀利と同じ歳の友として、中等部の時から一緒に色々な体験をしてきた彼らの目には、たった今終わったばかりのデュエルの、そのあまりに予想外だった結末に果たして何を思うのだろう。
「…哲君…彼は…天宮寺君は何者なの？」
「さぁな。それは俺にもよくわからない。去年の俺とのデュエルの時も、何やら不思議な力を行使していたようだったが…だがこれだけははっきりしている。アイツは、誰が相手でも勝利を掴もうとする…どこまでも、底なしの奴だ。」
「そうだね。ただの才能だけじゃない。もっとそれ以外の…『何か』が、天宮寺君にはあるんだよ。そうでなきゃ、【地の破王】には絶対に勝てない…勝っちゃいけないはずだから…ね。」

…別に、彼らは鷹矢のデュエルを否定しているわけではない。
蒼人はイースト校の後輩として。哲は【決闘祭】で戦った経験として。もう十分に鷹矢の力を認めており、その才能も認めている。
けれど…蒼人と哲、そして刀利が不思議に思っているのは、『そういった』普通のことではないのだ。
【地の破王】…この世界に6人いるという、来るべき終末に対するこの星の王達の…その内の、一人。
　過去に彼らが体験した、別の物語でその力に覚醒した刀利には…最期の時まで、負けられない定めが…いや、『呪い』にも似た、負けてはならない運命が纏わりついてしまった。
　…だからこそ、刀利は負けないはずで、負けてはならないはずで、そう『世界』が決めていたはずだったのだ。
　刀利が背負った、王としての定め。彼等が紡いできた別の物語…ソレに関係するであろう、まだ幼かった少年が背負わされた、世界の『命運』と己の『運命』。
　…一つの物語を終えたとは言え。己の運命を乗り越えたとは言え。
　それでも残ってしまった『強さ』と、負けられない戦いを繰り返し

た所為で…負けられない身体になってしまった刀利の、背負い込んでしまった増幅した呪い。
　そんな中でも、刀利も壊れかけた自分の心を取り戻すために、長い沈黙から覚めようやく先に進もうとして祭典に参加した。選ばれた強者の中から、さらに選ばれた猛者しか出場しない【決島】ならば、きっと自分の力を受け止めてくれる者が、一人は現れるだろうと、そう信じて。

　そうだと言うのに…

「だが久々に見たな、お前の負ける姿は。」
「ふふっ、どうだい刀利君、久しぶりの敗北の味は。」
「…うん…ずっと、負けたいと思ってた。本気で戦って、負けたいって。…でも、僕は負けちゃいけないんだって…僕が負けることは、世界の最後の時だから…だから、僕は負けちゃ駄目なんだって、ずっとずっと思ってた…」

　自分の力を受け止めるどころか、自分を降す者が現れるだなんて。
　…まだ、世界は壊れない。
　…まだ、自分の最後の時ではない。
　だから、まだ負けないつもりだった。また、負けないと思っていた。
　そんな風に『世界』が決めたのだから、また自分は『勝ってしまう』のだ…と、そうやって、諦めてもいた。そうやって、許容もしていた。

「でも…」

　それでも…

「…あぁ…悔しいなぁ…負けるのって…やっぱり…」

負けるつもりもなく、負けないと思っていて、勝つと思っていて、勝つのが当たり前で、それでも心では『負けたい』と思ってはいても。
それでも、いざ負けた時に感じる感情は、あろうことか『悔しさ』だったなんて。
そんな、いざそうなった時に浮かんできた、自分の中にあった決闘者としての感情に刀利は驚きつつも…

「…そうだろう。やっと思い出せたようだな。」
「うん、ようやく君の呪いも解けた…おかえり、刀利君。」

世界はまだ壊れない。
だからこそ、この敗北には意味がある。
かつて、負け続けた少年が…その身に背負った呪いの所為で、勝つことしか出来なくなった青年が…
久方ぶりの敗北を思い出したとき、果たしてその目には世界がどう写るのだろうか。
生まれる時代を間違えた、１０００年早く生まれてしまった一人の王は…
今、静かに…

「…思い出したよ。デュエルって、こんなに…楽しかったんだよね。」

―…

「…まさか鷹峰の孫が刀利に勝つたぁなぁ。」

天空闘技場の下層、コンクリートに囲まれた重々しい一室。
そこに、決闘学園デュエリア校学長…『逆鱗』と呼ばれた男、劉玄斎の重い声が静かに零されていた。
…それはたった今終わったばかりの、『極』の頂に到達していた鍛治上　刀利と…『先』の地平に立っていた、天宮寺　鷹矢とのデュエルについての率直なる感想。
別に、プロの世界でだって『先』の地平にいるトップランカーに、『極』の頂にいる者が負けることだって稀にある。
そう、それはその時の体調だったり運だったり、相性だったり調子だったり、その『先』の者が相当たる強者であったりという、色々な要素が複雑に絡み合った末に、何かの拍子で『先』の地平の者が勝ちを拾うことだってあるのだ。
…まぁ、そんなことはよっぽどのことが無いと起こるはずもなく、先程の刀利と鷹矢のデュエルはそんな『間違い』が起こる可能性だってなかったのだから、なおさら歴戦の者達からすれば鷹矢の勝利は予想外中の予想外として映ってはいるのだが。
歴戦に名を残す『極』の頂…その場所は、到達しようと思って到達できるところではない。
永遠に語り継がれる『極』の頂…その場所に踏み入った者の強さは、生半可な強さで喰らいつけるモノではない。

ともかく…

「しかしあのガキ、中々面白ぇ中身してんじゃねぇか。…だから夏休みの間、あのガキをプロの大会に放り込んで揉んでたのかぁ？」
「…あぁ。あの子の持つ『モノ』を腐らせない為には、ああいった荒療治が必要だったからな。」
「クハハ。あのガキのこたぁ、デュエリアでもちっと話題になってたぜぇ。【黒翼】の孫がプロに混ざって、あっちこっちの大会荒らして

るってよぉ。それがまさか、刀利に勝つたぁな。予選のデュエルからは想像もできなかったぜ。」
「あぁ。」

先程の、予想外が続いたデュエル…
学生が【霊神】を使ったこと。学生が『極』の頂に到達していたこと…そして、世界がひっくり返るほどの衝撃、ランク０の『Ｎｏ．』がこの世界に現れたこと。
その全てに世界が驚き、その全てに世界が目を離せなかった。
ソレはそのまま、この星にいる全てのデュエリストが【決島】へと注目したということ。
…残すは、決勝戦のみ。
世界中でただ一人、Ｅｘ適正がない天城　遊良。
世界中でただ一人、『Ｎｏ．』と【黒翼】を持つ天宮寺　鷹矢。
その、世界で２人といない学生達の戦いに…
今再び、世界中が注目を集め…

そして…

迫る最後の決戦へと向けて。

最後に、劉玄斎は―

いや、『劉玄斎の姿をしたソレ』は。

小さく…砺波には決して聞こえないような、とてもとても小さい声で…

「…ホント…面白いガキ共ですねぇ……ええ。」

―…

「ぐっ…うぐっ…」

デュエルが終わった直後。
その、控え室へと続く暗い通路で…

「鷹矢！おい、鷹矢！しっかりしろ！」
「くっ…うぐぅっ…」

勝利したはずのイースト校２年、天宮寺　鷹矢は苦しみにのたうち回っていた。
それはデュエルが終わった後…
勝者となった鷹矢は、無機質な機械音が聞こえたと思った瞬間に、緊張の糸が切れてしまったかのようにその場に倒れ込んでしまったのだ。
それを見て、緊迫しながらデュエルを見ていた遊良かすぐさま駆け寄り、どうにか暗い通路まで戻ってきたはいいものの…
…できないはずの無茶を無理して発動させた影響か、それとも『世界』に逆らったら罰か…
今にも潰されてしまいそうな苦しさに襲われながら、鷹矢はのたうち回っていて。

「ぐっ！ぐぉ…ぁ…」
「っ！おい、ふざけんな！決勝はどうするんだ！しっかりしろ！」
悲痛を漏らす鷹矢の呻きと、必死な遊良の声が暗い通路に木霊する。
…どうしたらいい。
ルキを狙う『敵』を遠ざけるため、この天空の『塔』には参加者とルキと砺波、そして劉玄斎しか居ない。
そう、他のスタッフすらスパイになり得る可能性があることから、この『塔』には遊良たち以外には誰もいないのだ。
助けを呼ばない、このままでは、本当に鷹矢は死んでしまう。
ここまで来て、折角２人して決勝に上がって。ようやく戦えると思った矢先にそんなことになるなんて、遊良には絶対に許せるはずもないというのに。
「ッ、そうだ！『Ｎｏ．０』のカード！…これか!?」
そんな時、ふと遊良の脳裏に思いついたことがあった。
…そう、それは鷹矢にこの苦しみを与えているのが、他ならぬ『Ｎｏ．０』のカードかもしれないということ。
…昨年、遊良も【堕天使】達から似たような『罰』を受けたことがあるからこその勘。
この世界に存在しないはずのカードを持っていることが、鷹矢への『罰』なのかもしれない…と、そう思って。
鷹矢からデュエルディスクを外し、Ｅｘデッキの部分を開け…いや、遊良にはＥｘ適正がないことから、Ｅｘデッキの部分を開けられないため…鷹矢の指を認証させ、無理矢理にＥｘデッキを開けてソレを探す。
「…あった、これだ！…ソレともう一枚メインデッキに…」

そして『Ｎｏ．０』だけではなく、鷹矢が最後に使った速攻魔法…
これもまた読めない文字で書かれた、【フューチャー・ドライブ】と鷹矢が叫んでいたソレを見つけると、遊良は急いでソレを投げ捨てるように鷹矢から引き離す。

すると…

廊下に落ちた、読めぬ文字で構成された『Ｎｏ．０』と…『Ｎｏ．０』と共に鷹矢のデッキに現れたであろう一枚の速攻魔法が、光の粒子と共に消えていく。
そして、完全に『Ｎｏ．０』のカードが消えたとき…

「ぶはっ！…はぁー…はぁー…」
「鷹矢！だ、大丈夫か!?」

苦しみから解放されたように。
鷹矢が、その意識を取り戻した。

「うむ…も、もう大丈夫だ…しかし、なんだったのだ、あのカードは…」
「知るかよ！お前が出したんだろ!?ってかホントに大丈夫なのかお前！」
「うむ…あのカードが消えたら楽になった…しかし、心臓を直接握りつぶされている感覚だったぞ…」
「…なんだよそれ…」

荒い呼吸を整えながら、どうにか起き上がろうとする鷹矢。
ソレを支えながら起き上がらせる遊良も、鷹矢が意識を取り戻した事に安堵しつつ、しかしまだ油断を切らずに鷹矢へも声をかけ…
…しかし、一体あの『Ｎｏ．０』は何だったのだろうか。
ソレをこの世界に呼び出した鷹矢でさえ全く理解できてはいない

この現実に、遊良も鷹矢もただただ頭に疑問符を浮かべているばかりであり…

にわかには信じがたい…しかし信じるしかない体験をした鷹矢と…鷹矢が負けるかもしれない場面を目の当たりにして、居ても立ってもいられなかった遊良。

あんな危ないカードを…いや、危ないのは『カードの方』なのか『この世界の方』なのか…

ともかく、勝てたから良かったとはいえ。あと少しで手遅れになっていたかも知れないのだから、遊良も鷹矢の勝利を手放しで喜んでいいものか悩みどころなのだろう。

まぁ、既に『先』の地平よりも高い場所…『極』の頂に到達していた鍛冶上　刀利に、今の鷹矢が勝てたのは紛れもなくランク０を呼び出したという『奇跡』が起こったから。

普通に戦っていれば、勝ち目など無かった相手。少なくとも現状の鷹矢の力では、どう足掻いても刀利にかすり傷すら負わすことは出来なかっただろう。

…もしあの場面で、刀利のターンがもう一度来ていたら。

きっと今度こそ鷹矢は成す術なく蹂躙され、決勝に進む事が出来ずに完全なる敗北を喫していた。

それを覆す事が出来たのは、偏にこの世界のモノではないランク０という『Ｎｏ．０』のカードと…ソレと共に現れたであろう、異なる世界の速攻魔法のおかげであり…

また、『Ｎｏ．０』のカードに書かれた文字が丸みと棘のようなモノで形成された読めぬ『異界の文字』で構成されていたことによって、必要以上に刀利が『Ｎｏ．０』を警戒し…

そして刀利とて手探りをするしかなかったあの場面で、刀利の知らぬカードを使用してギリギリで鷹矢が競り勝っただけという…

鷹矢が勝てたのは、そんな奇跡に偶然が幾重にも重なった、幸運のような稀有なる軌跡。

…もう、二度とあの『Ｎｏ．０』を呼び出すことは出来ないだろう。

ソレを、はっきりと自覚できてしまうほどに。あの瞬間に現れた『Ｎｏ．０』は、この世界には現れるはずのなかった…異なる世界の交わらぬ点であったと言うことを、鷹矢とてはっきりと理解している。

また、ソレに答えた鷹矢の持つ『Ｎｏ．』…今は再び『白紙』へと戻って眠ってはいるものの、あの瞬間に鷹矢の叫びに呼応してその姿を『Ｎｏ．０』と似たモノ…そう、ランク０へと変化させた鷹矢の『Ｎｏ．』もまた、人知を超えたカードに違いないのだが…

「…ふっ、だが、俺は勝ったぞ遊良。」

ふらつきながらも、ゆっくりと立ち上がる鷹矢。

…鍛冶上　刀利に勝てたのは、自分自身の力ではない。

ソレを履き違えるほど、鷹矢は馬鹿では断じてない。

けれども、今の自分の力では到底勝てなかった相手に、しかしそれでも勝つ為に。一瞬でも掴む事が出来た力を使い倒してでも、それでも鷹矢は勝った。

…過程はどうあれ、結果が全て。

ソレを、この場にいる誰よりも理解しているであろう鷹矢は、その身に負ったダメージなど感じていないかのように…

「さぁ、決戦だ。去年の借りは倍にして返してやるから覚悟しておけ。」

「…わかったよ。けどやらせるもんか。今回も勝つのは俺だ。」

「何を言っている！勝つのは俺だ！遊良の癖に！」

「いや俺だって！鷹矢の癖に！」

「何だと!?」

「何だよ！」

昨年とは真逆…己の力で決勝へと進んだ遊良と、己以外の力で決勝へと進んだ鷹矢。

けれども去年と同じなのは、二人が決勝で戦うにあたり何のしがらみも障害も無いということ。

これが今年の、『約束』の舞台。

遊良と鷹矢、二人で作り上げた『約束』の舞台で、昨年よりも多くの人間に見られながら、果たして彼らはどんな戦いを繰り広げようとしているのか。

いよいよ最後の決戦の時。今年の二人の『約束』の舞台。

昨年とは規模が違う、今度は世界中に見られながら行う戦いは、話してどんな結末となるのだろうか。

誰もが待つ、何より遊良と鷹矢自身が待ち焦がれる…

最後の戦いの時は…

もう、すぐー

―…

ｅｐ８８「閑話ー【化物】達の追憶」

どこでもない、この世界のどこかの場所―
そこは酒の匂いと煙草の煙と、そしておよそ人のモノではないであろう雰囲気に包まれた…
人の世からは隔絶された、どこか分からないどこかの密室。
そんな、ＴＶの明かりしかついていない、漆黒が広がるとても暗い部屋の中に…

「カカッ、まさかクソガキが刀利の野郎に勝つたぁな。」

１人の男の、特徴的な渇いた笑いが響き渡った。
それは歴戦を駆け抜けたかのような渋い声と、遥かなる場所から子ども達の戦いを高みの見物でもしているかのような天上の雰囲気。
古い木製の丸テーブルに、高そうなウイスキーとグラスを無造作に置いて…たった今終わったばかりの学生達の祭典、【決島】の映像を見ながら、どこか気分がよさそうに酔いを楽しんでいたのは…

豪放磊落、天下無双、世界最強のエクシーズ使い―

―【黒翼】、天宮寺　鷹峰

「しっかしあのクソガキ、折角俺様のダーク・リベリオンくれてやったってのにボコスカボコスカいい様にやられやがって。宝の持ち腐れったらありゃしねぇぜ。」

そんな鷹峰は、酔いの混じった言葉の中に少しの不満を混ぜながら、そう感想を述べ始める。
…そう、弟子達２人の戦いを、師である【黒翼】も観覧していたのだろう。

決闘市とデュエリア、世界が誇る２大デュエル大都市である双方が、その威信をかけて選りすぐりの学生達を送り出した世界最高峰の舞台である祭典、【決島】。
そんな場所に己の弟子である天城　遊良と天宮寺　鷹矢が揃って本戦に進み、そしてその双方が勝ちあがり『決勝』へと駒を進めたのだ。
まだまだ荒さが目立つ弟子達の戦いではあるものの、弟子達が世界最高峰の舞台へと上がっていくその様子は…師としては、愉悦を感じないわけがなく。
…まぁ、鷹峰の態度は観覧と言うよりも、酒の肴に弟子達の戦いを楽しんでいたという方が正しいのだが。
それでも孫が勝った今の試合を観終わり、どこか軽くなった口調が意味するところは…もう、誰が説明するまでもない事だろう。
すると、鷹峰はテーブルに置いてあったグラスを取りつつ、ソレを傾けて残っていた酒を全て体内へと流し込んだかと思うと…
隣に座っていた、一緒にＴＶを観ていた一人の女性へと向かって。
再度、渇いた笑いと共にその口を開き始めた。

「なぁランさんよぉ、ランク０なんてモンは初めて見たが、ありゃあ一体何なんだ？」
「私も詳しくは知りませんが、この世界のカードでないことは確かですね。」
「ほぉ、お前さんでも知らねぇカードなんてこの世にあったのか。」
「えぇ、実物は私も初めて見ましたよ。ですが…」

鷹峰の声に返すようにその口を開いたのは、この部屋の暗さに溶けていってしまいそうな漆黒の髪を美しく伸ばした１人の女性。
まるで深い夜そのモノが、美女の形を取っているのだと思ってしまうほどに深い美しさを醸しだす…
誰もが見惚れるほどに美しい顔立ちと、そして誰もが魅了されるであろう魅惑的な肉体を惜しみなく全面に見せつけている、その高圧的

過ぎる存在感の所為で常人では直視することなど出来ないであろう圧倒的なオーラを纏った、およそ人とは思えぬ異質なる雰囲気。
ＴＶの光に照らされた、その浅黒い肌がなんとも艶かしさを演出していたのは…

―釈迦堂　ラン

約１０年程前、当時の王者達３人…【黒翼】、【紫魔】、【白鯨】の、世界最高峰の決闘者達を非公式ながら真正面から降したとされる【化物】。
その正体を知る者はおらず。唯一つわかっているのは、彼女がとてつもない強さを誇っているということだけであり…
…その思惑は何なのか。何を考えて世界を旅しているのか。彼女の目的は何なのか。
全てが謎に包まれた、常人では決して理解する事のできない思考と美貌を兼ね備えた、並ぶ者など居ない正真正銘の【化物】の女性。
まぁ、長年一緒になってつるんでいる鷹峰もまた、彼女と同じく既に人の枠から外れた存在へと成り果ててはいるのだが…
ともかく…

「…何故だか、記憶の片隅に引っかかるものがあります。確か…大昔にもソレを召喚した者がこの世界にも居たような…」
「へぇ…大昔…ねぇ。」
「しかし、天宮寺　鷹矢…やはり彼は面白い。一時的とは言え、異界の勇者をこの世界に呼び出すとは。私の言いつけをよく守り、着々と育ってきている…流石は貴方の孫と言った所でしょうか。」
「ケッ、異界だろうが何だろうが、あんなモン偶然に偶然が重なっただけのマグレ勝ちだろうが。あんな勝ち方で満足してるようじゃあま

だまだだぜ。」
「その割には随分と嬉しそうに見えますがね。やはり孫が【地の破王】に勝ったのは喜ばしいことのようだ。」
「あぁん？誰が嬉しそうだってんだ。あんなクソ生意気なクソガキなんざ、負けちまった方が清々したってのによぉ。」
「ふふっ、ではそういうことにしておいてあげましょうか。」
「おう。…まっ、鋼真の…【黒獣】の孫に負けなかったのだけは及第点ってとこか。」
「そうですね。今の彼等のデュエルが表の【黒翼】と裏の【黒獣】…その孫同士の対決だったと知っているのは果たして世界に何人いるのでしょう。」
「カッカッカ、さぁな。」

不穏な言葉を織り交ぜながら、会話を続ける2匹の【化物】たち。
…この世の強さの理から外れた、人外なりし【化物】達の眼から視ても今の天宮寺　鷹矢と鍛冶上　刀利のデュエルは楽しむに値するモノだったのか。
まぁ、学生の身分でありながらこの世の最高峰の実力を示す『極』の頂に到達し、【霊神】を操った鍛冶上　刀利と…
プロのトッププランカー達が身を置いているとは言え、まだまだ『先』の地平で彷徨っていた天宮寺　鷹矢の戦いなど、普通に戦えばその勝敗は始めから分かっていたようなモノなのだから。

何せこの世界の6人の王の中のその1人…【地の破王】と呼ばれる存在であった、デュエリア校の鍛冶上　刀利。

彼の正体を知っている者など、この世界に極々僅かの限られた者だけとは言え。【地の破王】とのデュエルなど、普通に戦えば天宮寺　鷹矢の敗北は始めから決まっていたはず。

…そう、『普通に戦えば』、だ。

きたるべき終末に向けて、この世界を救うべく『世界』によって選ばれるという6人の選ばれた決闘者。その内の1人であるこの世界における地属性の王…【地の破王】に勝つことなど、この『世界』自身が許さないこと。

…けれども、鷹矢は勝った。

それは鷹矢が、この『世界』すらも予想だにしなかったであろう、世界の『外』の勇者の力を借りたからこそ成しえた、許されざる勝利の道筋であり…

この世界の運命、未来として決まっていたはずの刀利の勝利を覆した、決闘学園イースト校の天宮寺　鷹矢。

彼が【地の破王】に勝つことが出来たのは、偏にこの世界には存在しないはずの『ランク０』のエクシーズモンスターの…否、モンスターエクシーズの力によるモノ。

―この世界のモノではない、謎のエクシーズモンスター『Ｎｏ．』

ソレに導かれるようにして世界に穴を開け、決して交わらぬ世界の門を一時的とは言え無理矢理にこじ開けて…

そして鷹矢は遂に、その中でも『Ｎｏ．』の枠組みの中には入らない『Ｎｏ．０』を、この世界へと限定的に顕現させた。

それは鷹矢が、いくらエクシーズ王者【黒翼】の孫だからとは言え説明がつかない事実。

今もなお世界中がひっくり返された常識によって混乱に包まれているというその中で、一際目立っている鷹矢の存在はまさに異質で異常な世界の異端。

そんな、世界中から注目を浴びている孫の姿を見て…果たして化物の一匹である【黒翼】は、祖父として何を思うのか。

…人の数倍は破天荒な人生を送ってきた、祖父が浮かべる孫への感情。そんなモノは、鷹峰自身にしかわからないこと。

そして、そんな物思いに耽っている【黒翼】へと向かって。再びラ

ンが、その艶やかな口を開き始めた。

「けれど…天宮寺　鷹矢のデュエルを見ていると思い出しますね。貴方に初めて会った時のことを。」
「あ？…あー…俺がテメェにボロ負けした時のことか？」
「ふふ、ボロ負けだなんてご謙遜を。貴方が酔って攻撃表示と守備表示を間違えなければ、まだ勝負はわからなかったじゃないですか。」
「カカッ、ンなこと言い訳にすらなんねぇっつっただろうが。負けは負けだ。ありゃあ…俺のボロ負けに違ぇねぇ。」

今の天宮寺　鷹矢の、あまりに破天荒な戦いぶりを観て…
―【化物】達の脳裏に蘇るのは、世界中の運命を狂わせた１０年前の出来事。
世界最強の３人の【王者】が、歴戦を駆け抜けた不動の【王者】が…【黒翼】、【紫魔】、【白鯨】の、歴史上でも間違いなく最強のデュエリストに数えられていたであろう【王者】が…
幼さの残る漆黒の少女に、敗北を喫したあの事件の…その、始まり。

「…初めてでしたよ。私とデュエルをしても折られず、まさか自分から『こちら側』に来る人間が居ただなんて。」
「カカッ、なぁに…俺様も丁度退屈してたところだったからよぉ。面白ぇモンが現れたと思っただけだぜ。何せあの時の俺様は、退屈すぎて死にそうになってたからなぁ。」
「懐かしいですね。もう１０年以上も前の事なんですから。」
「そうだなぁ、カッカッカ。」

１０年前…
【白鯨】が【白竜】に負け…【紫魔】の訃報が報じられ…
世界が一度大混乱に陥った、その始まりとなった日に、一体全体何があったのか。

【化物】達の脳裏には、その発端となる最初の邂逅が思い出されていた
―

物語は、一度過去に遡る。

全ての事の発端の、その始まりとなったあの日…

１０年前の、あの日へと―

―…

天宮寺　鷹峰は退屈していた。
同じように繰り返される日々。同じように過ぎ去る年月。
毎日が惰性で、毎日が怠慢で…少しの張り合いもない日々に飽き飽

きし、酒を呷るか無意味に寝るか、それとも戯れに女を抱くか…
毎日ソレしかする事が無く、そのどれにも飽きてきているのを、この時の鷹峰はいつも感じていて。

「チッ…もう空かよ。おいマスター、追加だ追加。」
「…鷹峰さん、そろそろやめておいた方がいいんじゃないかい？」
「あぁ？俺様に指図するたぁいい度胸じゃねぇか。こちとら酒呑むことしかやることがねぇんだからよぉ、いいからさっさと追加持って来いってんだ。」
「はぁ…わかったわかった。」

だから今日というこの日も、天宮寺　鷹峰は己の惰性に任せて酔いを体に染み渡らせようとしているのか。

馴染みのＢａｒ…拠点である決闘市の東地区、その外れにある知る人ぞ知る隠れ家的Ｂａｒ。

静かなジャズのしらべが、店内の暗さをより一層引き立て…
暇すぎる日々に潰されないよう、酒の酔いで頭を一杯にするために。一杯の酒が終わらぬ内に、次々と酒を呷り続ける天宮寺　鷹峰。
その通い慣れたが故に貸切りにした静かなＢａｒで、まるで鬱憤を晴らすかのように酒を呷っているこの男の姿は…
とてもじゃないが、世界最強のエクシーズ使いとまで呼ばれている王者【黒翼】の姿とは思えぬほどに哀愁に塗れていたことだろう。
他には客の居ない、静かな店内のカウンターで。鷹峰の憂さ晴らしに付き合っているここのマスターも、今の鷹峰の姿が『らしくない』という事を分かっていながらも…
それでも、ここまで退屈に塗れた男に逆らうと面倒だという事を理解しているからこそ、大人しくさせるために酒を与えるのか。
鷹峰の好みの味に仕上げつつ、度数の強い酒の入ったグラスを鷹峰へと渡しながら…

「…でもいいのかい？確か明日は久々の試合なんじゃ…【黒翼】ともあろう者が、二日酔いで試合なんてして負けでもしたら…」
「カカッ、試合なら無くなっちまったっての。だから暇も暇…俺ぁ今暇を持て余してんだ。」
「またか…」

酒臭い吐息に混ざって吐き出されたのは、渇いた笑いに負けないくらいに渇いた鷹峰の空虚な言葉。
明らかにイライラしながらそう答えた鷹峰の言葉には、発散できぬストレスが傍から見ても分かるくらいの感情が篭っていたことだろう。
…まるでストレスが目に見えるのではないかと錯覚するほどに凝縮された、鬱憤と退屈の負のオーラ。
そう、エクシーズ王者【黒翼】とまで呼ばれた男が、よもやここまでの退屈を醸し出している…
その、大きな理由とは…

「ったく、最近の若ぇのはイキが悪いったらありゃしねぇ。俺の事をやれ『伝説の王者』だの、やれ『勝てるわけが無い』だの…ンなモンどうでもいいから向かってこいってんだ。」
「…無茶言ってやるなよ。そうやって若いのをこれまで何人潰してきたんだアンタは。」
「カカッ、そりゃ向かってくる子バエは叩き潰してナンボだろ。手抜きなんざ死んでもするかっての。」
「…だから相手が見つからないんだろう？アンタに完膚なきまでに叩き折られて、絶対に勝てないって刷り込まれてプロを辞めてった若いのがこれまで何人居たことやら。」
「ケッ、劉玄斎の野郎に比べたら、俺様なんざ対して潰してねぇだろうが。」
「アレと比べるのは間違ってるだろ…アンタは【王者】、『逆鱗』はあく

までトップランカー…立場が違う。」
「いいんだよンなこたぁ。とにかくここ数年、俺ぁまともに試合すらしてねぇんだぜ？だから毎日毎日つまんねぇに決まってんだろ。」
「…そうかい。」

それは鷹峰がプロの試合をここ数年、まともに行ってすらいないことが大きな要因だったのだ。
…【王者】は立場上、若手の頃と違い一般的なプロとしての試合を特別な時を除いてほぼ組まれることがない。
…【王者】は立場上、自分から試合を申し込むことはできない。
…【王者】は立場上、世界中のあちこちで開催されている大小様々なプロによる賞金トーナメントに、参加することが許されてはいない。
また、【王者】の試合が一定間隔で組まれる特別な時期…
…プロのトップランカー達による『チャンピオンズ・リーグ』の優勝者や、世界に多々あるタイトルを持つ者達が【王者】へと挑戦してくる、『王座争奪戦』の開催時期が迫ったと思ったら…
シンクロ王者【白鯨】や、融合王者【紫魔】と違って、自分の対戦相手は逃げるようにして対戦を辞退していく。
まぁ、その原因はあまりに容赦の無い戦いぶりと、徹底的に対戦相手を叩き潰すそのスタイルが若き対戦相手に恐怖を与えているのが原因なのだが…
ともかく…
こんな事が何年も続けば、当然王者【黒翼】とはいえ退屈で仕方がなくなる事だろう。
…【黒翼】の試合が中止になることに、既に『世界』も慣れてしまった。
また、【王者】となった時点で収入は個人では使いきれないほどの大金が寝ていても転がり込んでくる為に、最早若いときのように金に困

る事すら出来ないこの不自由。
更には何をしても『力』で黙らせる生き方をしてきたために、最近ではマスコミの方すら腫れ物を触るようにしてスキャンダルを見て見ぬ振りをしてくるのだから…
折り返しに来たこの人生において、鷹峰にはもう『相手』をしてくれる者がいなくなってしまったのだ。

―相手が居ない…

『極』の頂きに至り、力を貫き通して生きてきたが故の、あまりに強すぎる者の退屈は常人には決して理解など出来ないこと。
長年の付き合いである砺波は、シンクロ王者【白鯨】として毎日毎日試合や仕事に追われ多忙を極めており…
年下の【紫魔】、紫魔　憐造に至っては、紫魔本家の長として決闘界の他にも財界や経済界に顔を出しているというのだから、子どものように気軽に会ってデュエルをするというわけにもいかず。
ついでに言えば、まだまだ子育てに追われている彼等と違い…
自分は早くして子どもを儲けてしまったが為に、自分の子ども達は既に成人して独り立ちしているため、今となっては息子達と関わることすら稀となっているのだから、本当に今の鷹峰にはやることがなく。
…まぁ若い頃から遊び歩いていた為に、子育てすらまともにした覚えなど鷹峰には無いのだが。

ソレ故…現在確か5歳となったであろう自分の孫の事すら、鷹峰には全くと言っていい程興味がない。

孫が生まれた時に、一度だけ孫を抱き上げた覚えが在るものの…最後に顔を見たのはいつだったかすら、酔った今の鷹峰の記憶では定かではなく…
だからこそ子育てとはいかないものの、孫の面倒を見るという考え

すらとてもじゃないが天宮寺　鷹峰には浮かび上がることすらないのだろう。

「あぁつまんねぇ、毎日毎日つまんねぇ…何か面白ぇ事は起こんねぇモンかねぇ…退屈すぎて死んじまうぜ。」

やることを…否、やりたいことを好きにやれず、そして新たにやりたいことを見つけられず、愚痴に愚痴を重ねながら酒を呷り続けるエクシーズ王者【黒翼】。

…エクシーズ王者【黒翼】と呼ばれ早２０年以上。

そう、既に２０年以上決闘界の頂点に立ってきたが、最近では全くと言っていい程燃えるデュエルが出来ないでいるその退屈は、果たしてどれだけの虚無を【王者】に与えていると言うのだろうか。

…昔は良かった。

酔った鷹峰の脳裏に思い出されるのは、若さに任せて戦いに明け暮れる日々。

なんとも騒がしく、それでいて楽しかった日々の思い出であり…

―『逆鱗』、『烈火』、『霊王』、『虎徹』…

かつて鎬を削った戦友たちは皆、歳やら衰えやら理由をつけて引退したり、志半ばで引退したり…その命を、落としてしまった者も居た。

また、歳も近く同じくらい長い間【王者】と呼ばれ続けてきたシンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣がまだ【白鯨】と呼ばれる前は、彼とは喧嘩をするように何のしがらみもなく気軽にデュエルが出来ていたと言うのに。

それが今の彼は、【王者】の責任がどうとか責務がアレだとか…とにかく顔を合わせば口うるさく説教をしてくるのだから、『荒くれ者』と呼ばれていたかつての砺波の面影など、今となっては全くと言ってい

い程見受けられないのだ。

最後に燃えるようなデュエルをしたのはいつだったか…

古いビデオを再生するかのように、鷹峰の頭には今でも鮮明に思い出せる刺激的だった戦いのリプレイが思い出され始め…

―２０年ほど前の、裏決闘界との戦争の時…裏決闘界のエクシーズ帝【黒獣】、鎧　鋼真との戦いは、負ければ即『死』という緊張感に心の底からとても熱くなった。

―『逆鱗』と呼ばれる男、劉玄斎が引退する前は…彼と『殴り合い』と呼ばれるデュエルを行い、その真正面からのぶつかり合いがこの上なく気持ちよかった。

―もっと前…それこそ【王者】と呼ばれる前の若かりし頃…ガキだった時分は、『天宮寺』という汚名の所為で、もうとにかく周囲が『敵』だらけであり戦いだらけだった。

だからこそ闘争が絶えず、だからこそ喧嘩が絶えず…毎日毎日退屈せずに、日々戦いに明け暮れられていたのだ。

…それが今やどうだ。

向かってくる敵を蹴散らし、立ちはだかる壁をぶち壊し…『天宮寺』の汚名を返上するだけでは飽き足らず、力によってなまじ頂点を極めてしまったが為に、寄ってくるのは戦いを求める者ではなく、金と名声と恩恵に縋るただの屑達ばかり。

そして闘争を求める自分の気持ちとは裏腹に、伸び盛りの若者達は自分を『伝説の王者』やら『生きる伝説』やら『雲の上の存在』などと…下らない言い回しで持て囃し、遠巻きにして、戦いを挑んでくることすらしてこない。

…これではあまりに退屈すぎる。これではあまりにつまらなさすぎる。

誰か…どこかに、自分を満足させてくれるデュエリストは居ないのか。

誰でもいい。どこでもいい。何でもいい―

この退屈を消してくれるなら、たとえ人間でなくともいい。死を選んでしまいそうなほどに退屈なこの世界で、自分を熱くさせてくれるモノが現れるならどんな代償を払ってもいい…

と、鷹峰の頭の中でそんな考えがぐるぐると酔いと共に回り続け…

…

「…さん、鷹峰さん。」

「…おぁ?…んだよマスター、酒のおかわりか?」

「そんなわけないだろ。そろそろ閉店だ、寝るんだったらツケでいいからさっさと帰ってくれ。」

…そんな思考が、鷹峰の頭の中で一体どのくらいの時間回っていたのだろう。

最早時間の感覚すら曖昧になったその酔った頭の回転では、それ以上のことを考える隙間すら空いておらず…

心の底から迷惑そうな顔をしたマスターに促され、無理矢理にコートを羽織らされる鷹峰。

「ケッ、テメェも俺を追い出そうってか。俺様に冷たい街だぜここはよ。」

「はいはい、またのお越しを。」

そうして…

歴戦の人間を数多く見送ってきたＢａｒのマスターに追い出され

るようにして…
鷹峰は、寒い夜の街に放りだされたのだった―

―…

「寒ぃ寒ぃ…ハァ…クソみてぇな気分だぜ。」

深夜―
いや、深夜と言うにもおこがましい程に深い、とてもとても深い夜更け―
そんな夜の最も深い時間に、漏れ出す酒気を帯びた吐息が夜の冷たい空気に白く染まるのを眺めながら…
天宮寺　鷹峰は、決闘市を一望できる高台のある場所…

―決闘市の東地区にある、故人の眠る『霊園』へと足を運んでいた。

…こんな夜の時間に、故人を祀った石碑だらけの『霊園』に踏み入るというのも、中々どうして度胸がいるであろう行為だというのに。
そんな恐怖心など端から持ち合わせていない鷹峰にとっては、最早幽霊であろうと退屈を紛らわせてくれるなら大歓迎と言わんばかりに…
知り合いだった故人の『石碑』に不敵にも腰掛け、あまりに堂々とスキットルから酒を呷りながらも愚痴を零し続けていて。

「…なぁ烈火兄ぃよぉ、アンタならこの退屈をどう紛らわしたんだろうなぁ。最近のガキ共は張り合いがねぇし、トウコの姉御ンとこの琥珀つったか？あのガキんちょは砺波に夢中で俺の誘いにゃ乗らねぇ

し…あぁ、つまんねぇぜ。」

…決して応えてはくれないにも関わらず、それでも話しかけずにはいられないといわんばかりに、石碑に愚痴を零し続ける天宮寺　鷹峰。

それは『烈火』と呼ばれた女傑、獅子原　トウコの夫であった自分達の世代の兄貴分…表裏戦争でその命を落としてしまった獅子原烈火に、昔のように愚痴を零すかのように。

…もう居ない故人、殺されてしまったあの世代の兄貴分。

獅子原　烈火に、当時若かった鷹峰はよく可愛がられていた。それこそ『天宮寺』の汚名を気にせず絡んでくれた獅子原　烈火には、子どもの頃から鷹峰もどこか気を許していたのだ。

だからこそ、今では自分の方が年上になってしまった、応えてはくれぬ兄貴分だった男に…こうして感傷的に語りかけてしまうのは、きっと酒に酔っている所為だろう。

こんな姿など、Ｂａｒで酔って荒れている姿以上に他人には見せられぬ光景だと言うのに。

それでも寒さで冷める酔いを取り戻そうと酒を呷り続ける鷹峰の姿は、どうしようもない寂しさに包まれた退屈な男の憂鬱そのモノ。

「もういっその事、アンタんとこ行った方が楽しめるのかもなぁ。そういや、そっちにゃ【紫影】の屑も【白夜】のジジイも居んだろ？…カカッ、砺波も憐造もトウコも劉玄斎も、【王者】の責務やら引退やら理事長とやらでまともに相手すらしてくれねぇ。…それに【黒獣】の野郎は、助けてやったっつうのに隠れちまってデュエル出来なくなっちまったからなぁ。だったらこっちよりも、そっちの方が楽しくドンパチやれそうだってんだこんちくしょう。」

昔…獅子原　烈火がよく言っていた。

―『鷹峰、困ったら俺に言え。なんとかしてやるから。』…と。
ソレがもう叶わぬ兄貴分の優しさなのだとしても、自分の命すらどうでもよくなりそうなほどに退屈に塗れた今の鷹峰には…
古い兄貴分の言葉を歪曲し、そのまま言葉の通りに従ってしまいそうなほどに感傷的になってしまっているのか。
けれども、本当にソレを選択肢に入れてしまっている程に…
こんなにも退屈に塗れてしまった歴戦の男が、感傷的に死者にそう語りかけてしまっても、それはある意味仕方がないことであり…

「あーあ、つまんねぇ…本当に、つまんねぇ世界だぜこの世界はよぉ。」

鷹峰が、あまりの退屈にやりたいことを見出せずに。
その【王者】の燻りが、限界を迎えそうになった…

そんな時だった―

―見つけたよ…御爺…

「あん？」

不意に―
鷹峰の耳に、何処からとも無く聞こえてきたのは…
若い…いや、若いというのも憚られる、幼い少女の声のようなモノ。

―まさか、本当に幽霊でも出たのか。

まぁ、ソレならソレで幽霊とデュエルでも出来るのではないかとい

う、下らない冗談と愉悦が鷹峰の思考に一瞬だけ浮かび上がったものの…

ソレが大いに間違っていたというのは、この時の鷹峰には気付けるはずもなく…

声のした方、夜の闇が広がるその方向へと、鷹峰が眼を凝らした…

そこには―

『やっと見つけた…ねぇ御爺、ここどこ？誰も知ってる人居ないの…』

「…ッ、冗談じゃねぇぜ…マジで幽霊でも出やがたってのか？」

『ねぇ…誰も…誰も居ないの…みんな…見つからないの…』

霊園の向こうに広がる深い森…

そこから、そう呟きながらこちらへと向かってふらつく足取りでゆっくりと歩いてきたのは…

―深すぎる空の夜を、そのまま纏ったかのような漆黒に伸びる艶やかな黒髪。

―夜でその身を染めたかのような、月明かりに照らされた浅黒い肌。

―息も白く染まるこの寒さだと言うのに、長めの黒い肌着を一枚だけ纏っただけの…あまりに常識離れした、異質で異様なその恰好。

―まさか、本物の幽霊…

何やら自分へと向かって、不気味で不穏なる言葉をつらつらと述べている様な気がするものの…ソレを深く考えられるような余裕は、今の鷹峰には全く持って存在せず。

確かに現れれば退屈が紛れるのではと思いはしたものの、まさか本当に現れるだなんて冗談じゃない。そんな、酔いも冷めるのではないかという目の前の光景に、どこまでも襲い来る驚愕が鷹峰の足をその

場に釘付けにし…
しかし、そんな鷹峰を意に介さず。
幽霊のような少女は、ゆっくりとふらふらと淡々と、鷹峰の方へと向かって歩いてくるではないか。

（…カカッ、確かにそっちに行きてえっつったが…こりゃあちと強引じゃねぇか烈火兄よぉ…）

確かに、兄貴分であった獅子原　烈火の居るであろう、あの世とやらに生きたい気持ちは鷹峰にはあった。
けれども、ソレはまだ行くかどうか迷っている段階の話であって…
よもやソレを選択肢に入れた瞬間に、向こう側からお迎えがくるだなんて鷹峰とて予想すらしていなかったのだ。
いや、こんな非科学的な現象など、誰であっても予想なんて出来るはずも無く…
未だ残る酒の酔いと、感傷に浸っていた男の追憶。
ソレらが鷹峰の『常識』という思考を更に封じ込め、目の前の幽霊的な少女への焦りだけを更に誘発し…

一歩…二歩…

ゆっくりと、少女がおどろおどろしい足取りで近づいてくる。

そして、漆黒の少女が鷹峰の数歩前で立ち止まったかと思うと…

「…おや？貴方は確か…ふふっ、これは運がいい。ちょうど貴方を探していたんですよ、天宮寺　鷹峰さん。」
「…あ？」

急に―

その雰囲気を、先程の幽体のような雰囲気から一転させたのだった。

そして…

「…あぁ、これは失礼。【王者】を前にして、初対面で名乗らないのはあまりに失礼でしたね。…私の名前は釈迦堂　ラン。天宮寺　鷹峰…エクシーズ王者【黒翼】、貴方を探していたのです。」

「釈迦堂…ラン…」

「ふふっ、貴方がこんな霊園に居るとは少々驚きでしたが…しかし逆に考えればちょうど良かったといった所でしょうか。…さて、天宮寺　鷹峰さん。私とデュエルをしませんか？」

「…」

あっけに取られている鷹峰を他所に、そのまま淡々と会話を続ける謎の少女。

それは先程の、幽霊味を帯びていたあの不気味すぎる雰囲気から一転。

まるで、先ほどの自分の行動と言動を何も覚えていないかのように…

淡々と話しを続けるこの見た目は子どもで、言葉使いは大人という少女の、そのあまりにちぐはぐな違和感はどこまでも鷹峰の怪訝さを加速させていくだけであり…

釈迦堂　ラン…とてもじゃないが聞き覚えのないその名。

こんな幼い見た目の少女が、こんなにも似つかわしくない大人びた口調で話しかけてきたという出来事だけでも、常識では到底信じられることではないというのに。

この謎で不気味な漆黒の少女は、あろうことか自分にデュエルをしようと持ちかけてきたではないか。

…しかし、どうやら本物の生きている人間のようだ。
先程焦ってしまったのも多分酔いの所為。そう思うことにした鷹峰は、月明かりのみを頼りに暗がりの中で目の前に現れた少女をまじまじと見つめ…
…不気味な雰囲気ではあるものの、よくよく観察すればかなりの美少女。
そう、得体の知れぬ存在感を放ち、他者を寄せ付けない独特の立ち振る舞いをしてはいるが…
将来的にはかなりの美女になるであろうことが、容易に想像出来るほどに目の前に居る少女は相当たる美しさを、まさかのこの歳で醸し出しているのだ。
…けれども、そんな少女の異質な美しさを感じる間もないくらいに。
鷹峰の目の前にいる漆黒の少女の雰囲気は、鷹峰がこれまで経験したことのないような異質で異様なオーラを放っており…
…それは王者【黒翼】すらも経験した事の無い、圧倒的強者の雰囲気。

まさかこんな年端もいかぬ、精々１０歳前後であろう少女からこんな雰囲気を感じるなんて。
５０年近く生きてきた天宮寺　鷹峰からしても、その歴戦にこれ程までのオーラを放った子どもの記憶など存在するはずもなく…
「ケッ、ガキの癖して俺様にデュエルを挑むたぁいい度胸じゃねぇか。テメェ、自分の言葉の意味わかってンのか？」
「もちろんです。いいじゃないですか、幸いこんな時間で誰も見てませんし。それに、もし私が貴方に勝っても…誰も、騒ぎ立てませんとも。」
「……おいガキ、今なんつった？」
「言った通りです。貴方が…王者【黒翼】が負けても、誰も知る由もな

いと、そう言ったんですよ。」
「ッ！テメェいい度胸じゃねぇかこのクソガキ！俺様を前にンな口利けるたぁ、よっぽど死にてぇようだなぁおい！」

―！

大気を揺るがす【王者】の怒号が、静かな霊園に鳴り響く。
…しかし、それも当たり前か。
何せ、この年端も行かぬ少女は王者【黒翼】へと向かって、いけしゃあしゃあと『負けても誰にもバレない』と、そう言い放ってきたのだ。
…世界に轟く王者【黒翼】を前にして、自分が言った言葉の意味を理解していると言い放った少女。
それは、少女がどれだけ得体の知れない存在で、例え幽霊と見間違えた少女であろうとも…
…そう、いくら不気味な雰囲気を醸し出している少女とはいぇ、この子どもはあろうことかエクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰に不遜にも勝負を持ちかけてきただけでは飽き足らず、世界最強のエクシーズ使いと呼ばれている自分に『勝てる』と、何の疑いも無くそう言いきった。
それはどれだけ【王者】という世界の頂点を軽く見て、そして【王者】という看板をどれだけ軽々しく扱っているのだろう。
何より、他人に舐められることを極端に嫌う鷹峰へと…その言葉使いはあまりに不敬であり、あまりに不敵でありあまりに不遜。
そうだというのに…
精神力の弱い者ならば、ソレだけで意識を刈り取ってしまう王者【黒翼】の強すぎる圧力。その、常人では卒倒してしまいそうな圧力を受けてもなお―
鷹峰へと向かって、ランと名乗った少女は再度その口を開くだけ。
「ええ、デュエルで殺してくれるなら是非そうしてください。…生憎、

こんなつまらない世界に未練なんて無いモノで。」
「…あ？」
「つまらないんですよこの世界は。出会う者みな雑魚、雑魚、雑魚…周りは全員雑魚ばかり。私の相手が務まる者は誰1人として居ない。だからこの世界の【王者】ならばもしや…と思ったんですがね。まぁ無理にとはいいません。貴方が今戦いたくないのなら、また日を改めて…」
「…」

あまりにあっさり引き下がるのは、鷹峰に恐れ慄いた…
というわけでは断じてないと言う事を、鷹峰とて少女の雰囲気から簡単に察知できている。
それは少女にとって、【王者】とのデュエルは希望こそすれ切望しているわけではないという事の証明でもあり…

普通、一般人が【王者】とデュエルを行うなんて、よほどの事態でもなければ許されない事。

だってそうだろう。【王者】の戦いは、どれ一つをとっても国を揺るがすほどの大金が動き、人が動き、メディアが動き…そうして多大なる功労を積み重ねて、ようやくセッティングされるものなのだ。
【王者】のデュエル…ソレは一つ一つの戦いが、全世界にとっての知的財産。
その戦いは最初から最後まで記録され、未来永劫保存されるモノ。
前任たちと比較され、後進達の導となり、全世界のデュエルの発展の為に、ソレは栄誉と責任あるモノでなければならないと決闘法で定義されているのだ。
まぁ、常識ある一般人ならば、例え鷹峰の方から遊び感覚でデュエルに誘われたとしても、恐れ多いと断るか、本当に恐れて逃げていくかのそのどちらかなのだが…
ともかく…

自由奔放かつ天衣無縫なる現エクシーズ王者【黒翼】と言えども、こんな夜中に年端もいかぬ少女と密会するかのようにこっそりとデュエルする事など、この世界の決闘法という常識が許さぬ事。
まぁデュエル云々以前に、こんな人の気配のない霊園で初老に差し掛かった男と幼さの残る少女が密会しているなんて、とてもじゃないが褒められた光景では断じてないのだが。
こんな時にシンクロ王者【白鯨】である砺波　浜臣がこの場に居たら、絶対に口うるさく【王者】の『責務』を偉そうに抗弁して鷹峰を止めようとしてくるだろう。
何せ『荒くれ者』と呼ばれていた過去の砺波と違い、今の砺波は人が変わった様に【王者】の責任と責務を何よりも重視してくる堅物と成り果てているのだから。
しかし、そんな【王者】のデュエルの持つ意味を、鷹峰とて分かってはいても…

「チッ、俺様を挑発するたぁ何てガキだ。…わーったよ、デュエルしてやりゃあいいんだろうが。けど1回だけだぞ。終わったらさっさと家帰って寝やがれ。」
「ふふっ、感謝しますよ【黒翼】。」
「つかテメェ、寒くねぇのか？ンな恰好して。」
「…生憎、寒さという感覚を忘れてしまったもので。ですが安心してください。ここが霊園とはいえ、私は生きた生身のモノですので。」
「見りゃ分かるってんだンなこたぁ。」
「しかし…ありがたいですね。いくら私が美少女とは言え、一介の【王者】がこんな子どもの誘いに乗ってくれるとは思いませんでした。」
「美少女とか…自分で言うか？普通よぉ…」
「ふふ、私は自覚のある美少女なもので。では…」

少女の放った『つまらない』という言葉に、同類を見つけた気持ちにでもなってしまったのか。
決して少女に煽られたからではない。自分も感じていたその感覚

を、照らし合わせたわけでもなく言い放ってきた少女と…
デュエルをする気になった…いや、なってしまった鷹峰が、その懐から長い間起動していないデュエルディスクを取り出し始める。
そして、それに応じてランと名乗った漆黒の少女も距離を取りながら、その腕に予め装着していたデュエルディスクを展開しつつ…モードを、デュエルモードへと切り替え始めて。

「感謝しろよ?んで後悔すんなよな。」
「ええ、もちろん。貴方こそ…」

こんな人の起きていない深夜に、こんな故人しか居ない『霊園』で。
世界が誇るエクシーズ王者【黒翼】と、たかだか一般人に過ぎない少女が戦うだなんて世界中の誰もが想像すらしていないこと。
果たして…
この日、この時、この瞬間に。世界が認めたエクシーズ王者【黒翼】と、釈迦堂　ランという得体の知れぬ少女が邂逅したのは、この『世界』にとっては必然だったのか…
それとも、この『世界』すら意図していなかった現象なのかは、きっと誰にも理解など出来ぬことに違いないだろう。
―けれども出会ってしまった現実だけが、ただただ無情に時間を進める。
ソレ故…
眼前に立つ、世界最強のエクシーズ使いと呼ばれている男へと向かって。
少女は、まるで祈るように…そう、プライドの高い鷹峰には、決して聞こえないような声で…

「…潰れないでくださいよ。」

―デュエル!!

そして、始まる。

先攻はエクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰。

「俺様のターン！俺ぁ【ＲＲ―バニシング・レイニアス】を召喚！」

―！

【ＲＲ―バニシング・レイニアス】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１６００

デュエルが始まってすぐ。

天宮寺　鷹峰が召喚したのは、【ＲＲ】と呼ばれる…大空の狩人たる小さな猛禽、その内の一体であった。

…それは色彩溢れる【ガジェット】と並ぶ、天宮寺　鷹峰の代名詞とも言えるカテゴリー。

そう、【ガジェット】と共に、王者【黒翼】が好んで扱う事で世界に良く知られた群れ成す鳥獣達。

燃える機械と一体化した、群れ成して獲物を狙う猛禽の恐ろしさは既に歴史の１ページとしてこの世の時代に刻まれており…

その鋭き鳴き声で仲間が仲間を呼び、その呼び声が更に仲間を呼ぶという、一度始まれば止まる事のない連鎖の呼び声によって、他の追随を許さぬ叫びを今ここに鳴り響かるのか。

世界の頂点を飛び回っている、天上の鳴き声を掻き鳴らしながら…

…更なる連鎖を、ここに生み出す。

「まだだ！メインフェイズにバニシングの効果発動！俺は手札から２体目の【ＲＲ―バニシング・レイニアス】を特殊召喚！そんで２体目

のバニシングの効果で【ＲＲ―トリビュート・レイニアス】を特殊召喚し、トリビュートの効果でデッキから【ＲＲ―ミミクリー・レイニアス】を墓地へ送るぜ！そんでミミクリーの効果も発動！ミミクリーを墓地から除外し、デッキから【ＲＲ―ネスト】を手札に加え…俺ぁレベル４のバニシング２体で、オーバーレイ！」

まだデュエルが始まったばかりの、先攻の１ターン目だというのにも関わらず。

酔っていても染み付いた動きはどこまでも止まる気配を見せず、相手が年端も行かぬ少女だろうと微塵も手加減する気も無く…

「夜闇に飛び立つ音無き狩人、漆黒の翼で空を舞えぇ！エクシーズ召喚！」

天高く叫ぶ鷹峰の声は、ソレがプロの試合なのだと言わんばかりの緊迫感を持ってこの霊園に響き渡るのか。

世界最強のエクシーズ使い、その呼び声を裏切る事無く。今、鷹峰の場に現れた銀河の渦より、この夜空に飛び立ちしは…

「来やがれ、ランク４！【ＲＲ―フォース・ストリクス】！」

【ＲＲ―フォース・ストリクス】ランク４

ＡＴＫ／　１００→６００　ＤＥＦ／２０００→２５００

飛び立ったのは無音の羽ばたき。

夜の闇の溶け込んでしまいそうな、サイレントキリングを生業とする猛禽の一体。

それはエクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰が得意とする怒涛の展開を飾るに相応しい…これより止まることの無い展開を始めるに値する、まさに始まるたるモンスターであって。

「フォース・ストリクスの効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、デッキから【ＲＲ―ファジー・レイニアス】を手札に加える！そのままファジーを自身の効果で特殊召喚し…俺ぁトリビュートとファジー、２体のレイニアスでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【ＲＲ―フォース・ストリクス】」

【ＲＲ―フォース・ストリクス】ランク４
ＡＴＫ／　１００→６００　ＤＥＦ／２０００→２５００

「２体目のフォース・ストリクスの効果も発動！オーバーレイユニットを１つ使い、デッキから【ＲＲ―シンギング・レイニアス】を手札に！更に墓地に送ったファジーの効果で、デッキから２体目のファジーも手札に加え…魔法カード、【エクシーズ・ギフト】発動だ！フォース・ストリクス２体のオーバーレイユニットを１つずつ使い、デッキから２枚ドロー！」

止まらない。
そう、まるで壊れた暴走列車の、永遠に回転する機関部の如く。
高い守備力を誇る猛禽を展開して場を整えながら、当然のように手札を増やしていくその所業。
相手が年端も行かぬ少女であろうとも、全く隙を与えぬように振舞うその姿はまさに誰が相手でも手加減などせぬ暴虐武人な男の立ち振る舞いを表しているかのようでもあり…

「これが【黒翼】の駆る【ＲＲ】…ふふっ、噂どおり、全く止まる気配のない…」
「たりめぇだろうが！【ＲＲ―シンギング・レイニアス】を特殊召喚し、魔法カード、【ＲＲ―コール】発動！デッキから２体目のシンギングを特殊召喚！そんでそのまま、２体のシンギングでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【ＲＲ―フォース・ストリクス】！」

【ＲＲ―フォース・ストリクス】ランク４
ＡＴＫ／　１００→１１００　ＤＥＦ／２０００→３０００

「３体目のフォース・ストリクスの効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、デッキから【ＲＲ―ブースター・ストリクス】を手札に加える！永続魔法、【ＲＲ―ネスト】も発動！デッキから３体目のバニシング・レイニアスを手札に！」
「手札が減らず、場には守備力３０００が３体…なるほど、次のターンに備えた手といい、確かにこれは噂に違わぬ食えないお方だ。」
「ケッ、ガキの癖に減らねぇ口だぜ。」
「いえ、褒めているんですよ。確かに貴方は私がこれまで潰してきた雑魚とは…根本的な部分が全然違う。」
「偉そうに…なに知ったような口利いてんだテメェ。」
「ふふっ、知ったような口とは言いえて妙ですね。知った『ような』、ではないんですよ。『理解した』んです。」
「あ？」

しかし、一般人が対峙すれば震え上がるほどの存在感を常に放っている王者【黒翼】を前にしてもなおも…
少女は尊大な態度のままで、【王者】に対してあまりに不敬なる立ち振る舞いをどこまでもどこまでも崩さぬまま、少女は更に言葉を続けるのか。
…それは傍若無人で知られた王者【黒翼】へと送る言葉にしては、些か尊大すぎる言葉使い。
しかし、そんな事など意に介さず。歴戦の【王者】へと向かって呟く言葉としては決して似つかわしくない声の数々が、漆黒の少女から次々と放たれ続け…
「攻撃的な態度と立ち振る舞い、そして怒涛の展開で攻撃性を全面に押し出している様で…次の私の攻撃に決して注意を怠らず、守備力の高いモンスターと罠で万全を期している…とね。」

「…」
「ふふっ、図星でしたか？」
「ならテメェの思い通りに行くか頑張ってみなぁ！俺ぁカードを１枚伏せてターンエンドだぜ！」

鷹峰　ＬＰ：４０００
手札：５→４枚
場：【ＲＲ―フォース・ストリクス】
【ＲＲ―フォース・ストリクス】
【ＲＲ―フォース・ストリクス】
魔法・罠：【ＲＲ―ネスト】、伏せ１枚

そうして…
薄気味悪い美少女を前に、あまりに激しくデッキを回転させながらも強固な守りを固めつつ。
エクシーズ王者【黒翼】は今、そのターンを終え…

「私のターン、ドロー。私は永続魔法、【真竜凰の使徒】を発動し効果発動！…【真竜凰の使徒】をリリース！」
「あぁ!?」

そして―
ターンが変わってすぐ。
耳を疑いたくなるような宣言と共に少女の場に巻き起こった光景は、【黒翼】たる天宮寺　鷹峰とて全く見たことも聞いた事もない光景であった。
…それは効果のエフェクトだとか特殊召喚の為のエフェクトだとか言った代物ではない。
天にその身を捧げる立ち上る渦―ソレは紛れもなく、アドバンス召喚の為のエフェクト。

…聞いたこともない。モンスターをリリースするわけではなく、まさか魔法カードをリリースしてアドバンス召喚を行うカードなど。
しかし、そんな意表を突かれたかのような表情をしている鷹峰を意に介さず…
少女の宣言と共に、この場に現れるは―
「レベル６、【真竜拳士ダイナマイトＫ】をアドバンス召喚！」
―！
【真竜拳士ダイナマイトＫ】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１２００
現れたのは深緑の鎧をその身に纏う、竜の力を受け継ぎし拳士。
不退の如く前線に立つその姿は、まさにその身一つで敵陣に突撃せんとしている勢いをそのままに…
漆黒の少女の前に聳え立ち、猛禽たちを見据えて構えていて。
…しかし魔法カードをリリースしてアドバンス召喚など、王者【黒翼】を持ってしても経験した事の無い代物。
…【帝王】などのカードが現存していた先史の時代ならばまだしも、このＥｘデッキ至上主義の時代にこんなトリッキーなアドバンス召喚をしてくるカードなど存在するわけも無く。
ソレ故、全く体験したことのない現象が、今鷹峰の目の前で巻き起こり…
「なんつーガキだ！初っ端から意味わかんねぇ事しやがって！」
「ふふっ、まだですよ。リリースされ墓地に送られた【真竜凰の使徒】の効果発動。貴方の伏せカードを１枚破壊する！」
「チッ！なら破壊される前に罠カード、【ＲＲ―レディネス】発動！このターン、俺の【ＲＲ】は戦闘じゃあ破壊されねぇ！」
「ならばソレにチェーンして【真竜拳士ダイナマイトＫ】の効果発動。

デッキから永続罠、【真竜皇の復活】を発動します。そして【強欲で貪欲な壷】を発動。デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！さて、戦闘では破壊されないのならば…永続魔法、【真竜の継承】を発動しその効果発動！私は【真竜皇の復活】をリリースし、レベル５、【真竜導士マジェスティＭ】をアドバンス召喚！」

―！

【真竜導士マジェスティＭ】レベル５
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

続けて―
魔法カードをリリースするだけでは飽き足らず、今度は罠カードをリリースしてモンスターをアドバンス召喚し始めた少女。
そのどれもが【黒翼】の記憶の中には存在しないカードであり、見知らぬカードの連撃に酒の酔いも冷めていく錯覚を鷹峰も感じているのか。

「リリースされた永続罠、【真竜皇の復活】の効果発動。フォース・ストリクス１体を破壊する！」
「罠もリリースできる上に除去付きかよ！」
「まだです。永続魔法、【真竜の継承】の更なる効果！デッキからカードを２枚ドロー！…ふふっ、私はまだ召喚権を使っていない。速攻魔法、【帝王の烈旋】を発動し…私は貴方の場の、フォース・ストリクスをリリース！」
「ッ!?帝王の…テメェ、そんなカードどこで…」
「貴方には関係のない事です。フォース・ストリクスをリリース。レベル６、【真竜戦士イグニスＨ】をアドバンス召喚！」

―！

【真竜戦士イグニスH】レベル５
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１０００

しかし、まだ終わらない。
原則的に１ターンに１度しか行えないはずのアドバンス召喚を、既に少女は『３回』も行っているというこの現実。
その、この世界の常識からあまりに外れたその行為と…ソレを行っているのが、こんな年端もいかない幼い少女だという現実に、酔いの残る鷹峰の理解がどうしても追いつかないのか。

…そう、このＥｘデッキ至上主義の時代においては、ありえるはずのないアドバンス召喚特化のカード達。

たった今少女が発動した【帝王の烈旋】もそう。少女が使った速攻魔法、【帝王の烈旋】―
そのカードは、歴戦を生きる鷹峰の記憶が確かならば確か古き時代に扱われていた…Ｅｘデッキを必要としない、【帝王】と呼ばれる孤高の王達によるカテゴリーのカードであったはず。
…しかし、この『Ｅｘデッキ至上主義』の時代。
数百年前の古き時代ならばいざ知らず、この『Ｅｘデッキ至上主義』の時代にこのようなＥｘデッキに頼らぬ先史に刻まれたカードは…そう、専門的な歴史書に載っている様なカード群は、軒並み時代の波に攫われてしまい現代まで現存しているカードはかなり少ないはずなのだ。
それは子どもでも持っているような、有象無象のようなアドバンス召喚サポートのカードとは訳が違う。
【帝王】に代表される、一つ一つが歴史を刻んだ古き時代の消滅したカテゴリー。
先史の時代に猛威を振るった強すぎるアドバンス召喚の系列のカードは、このＥｘデッキ至上主義の時代には存在している事事態が稀なことであり…ソレは【王者】たる鷹峰にすら手に入れることを困

難にさせるほどの代物なのだから、こんな幼い子どもがこんなにも簡単に使用していること事態がそもそもとして不自然なこと。
それ故、少女の使うカードは例え【王者】でも…いや、前線に立ち続けてきた【王者】だからこそ、その存在が信じられないのだろう。
他人よりも高い場所で、長く、そして多くのデュエルを見てきたからこそ。【王者】を持ってしても経験した事の無いこの現実は、どこまで鷹峰に混乱を与え続けており…

「意味わかんねぇモンスター使いやがって。しかもこれでレベル５のモンスターが２体…来るか？」
「…あぁ、ご心配なく。私のＥｘデッキにモンスターは居ませんから。」
「…あ？」

そして―

この世界における、エクシーズ召喚の王者へと向かって。
現代に…そう、Ｅｘデッキ至上主義時代に生きている人間からは、絶対に飛び出してこないであろう言葉が、漆黒の少女から飛び出した。
そして少女の言葉を聞いて、思わず言葉を無くし目を丸くしてしまった天宮寺　鷹峰。それは、鷹峰も自分の耳を疑っているかのような反応であり…

「テメェ…そりゃあ一体どういう…」
「そのままの意味ですよ。私はＥｘデッキを使いません。」
「…ッ！このガキ！テメェどこまで俺様を舐め腐ってやがる！俺様に勝つっつー戯言抜かしやがった上に、Ｅｘデッキも使わねぇたぁどんだけ舐めプしやがるつもりだコラァ！」

王者【黒翼】の激昂が、再び霊園に木霊する。
…しかし、それもそのはず。
何せＥｘデッキを扱う事が、呼吸する事ど同義とまで言われるこのＥｘデッキ至上主義の時代において。Ｅｘデッキを使わないと自ら宣言することなど、まともな思考をした人間なら口にする事すら出来ないことなのだ。
…『融合』、『シンクロ』、『エクシーズ』の召喚法の内、誰もがその中の一つ『Ｅｘ適正』として持っているのがこの世界のデュエリストの常識。
…誰もが己の『Ｅｘ適正』に従い、誰もが自分の扱えるＥｘモンスターを駆使してデュエルをするというのが、この世界における『デュエル』という概念。
けれども、この少女は自らその常識を嘲笑うかのようにソレを根本から否定したのだ。
これでは、この世界におけるエクシーズ召喚の【王者】へと送る言葉にしてはこれ以上無いくらいの侮辱と取られても当然だろう。
…先日、世界中で大々的にニュースになった『Ｅｘ適正を持たない少年』の例は別としても。
【王者】と対峙しているというのに、自らＥｘデッキを使わないと語ることは【王者】を相手に自らに『枷』をはめるということであり…
その言葉は、他人よりもプライドの高い天宮寺　鷹峰と言う男の歴戦という誇りを、一体どれだけ傷つけたというのか。

そうだと、言うのに―

「…別に舐めてなんていませんよ。そもそも【帝王の烈旋】を発動したターン、私はＥｘデッキからモンスターを出せません。…まぁ私のＥｘデッキには、始めからＥｘモンスターは存在しませんが。」

「な…」
「ダメージも与えられませんし、とりあえずはこんなところでしょうか。私はカードを2枚伏せターンエンド。」

釈迦堂　ラン　ＬＰ：４０００
手札：6→1枚
場：【真竜拳士ダイナマイトＫ】
【真竜導士マジェスティＭ】
【真竜戦士イグニスＨ】
魔法・罠：【真竜の継承】、伏せ2枚

そうして―
Ｅｘデッキを使わないと宣言しただけではなく。
最初から、Ｅｘデッキにモンスターなど用意していないとまで言い張った少女の言葉に、鷹峰も激昂を通り越して絶句を覚えてしまったのか。
…それは、主義や枷といった類のモノではなく。
使わなくとも、Ｅｘデッキにモンスターを用意だけでもしておけばいざという時のコストや保険になるにも関わらず…
ソレすら行わないと自ら謳った釈迦堂　ランという漆黒の少女の雰囲気が、夜の重さと交わり更に更に重々しいモノへと変わっていく。
少女から漂う得体の知れない雰囲気…それはこんな幼い少女が出せる雰囲気ではない。

…一体、彼女は何者なのか。

エクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰を前にしているというのに、あまりに堂々とした少女のその言動は、到底人間が出せるようなモノではない。
【王者】の中でも、とりわけ他者への圧力を抑えていない天宮寺　鷹峰

と対峙していて、その圧力に潰されない子どもなどこの世界に存在するわけがないと言うのに。
それは鷹峰が、意図的に圧力を押さえている…というわけでは断じてなく、いくら酔いが残っているとは言え鷹峰は本気で目の前の少女の精神を潰そうとその強すぎる圧力を駄々漏れにし続けているのだ。
そうだと言うのに、鷹峰の圧力を正面から受け止めるどころか押し返している少女の異常性は、その夜のような不気味な存在感と相まってどこまでもどこまでも鷹峰へと逆にプレッシャーをかけ続けていて。

「どうしました?…折角モンスターを1体残してあげたと言うのに、まさか【王者】ともあろうお方が、この程度で終わりに…」
「ンなわけねぇだろうが!俺様のターン、ドロー!…ケッ、そんなにブッ飛ばされてぇンなら、ガキだろうがもう容赦しねぇぜ!【RUM―レイド・フォース】発動!」

しかし、そんな少女からのプレッシャーを更に弾き返すかのように。
叫ぶようにして鷹峰が発動したのは、シンボルが光り輝く1枚の魔法カード。
それはこの世界においては、他の使い手などほとんど存在しない希少なカードであり…
そう、エクシーズ王者、【黒翼】天宮寺　鷹峰の近年における代名詞とも言えるその魔法。
それはエクシーズモンスターを素材に、ランクアップした新たなるエクシーズモンスターを呼び出すという…【黒翼】自身が戦いの中で生み出し、磨き、確立した、この世界では彼にしか出来ない戦い方。
…この少女が何者なのかなど、今この時においてはどうでもいいこと。
自分がやるべきことは【王者】を舐め腐ったクソガキに、徹底的に痛い目を見せてやることなのだと言わんばかりに…

本気の本気で少女をブッ倒すと決めた、天宮寺　鷹峰の叫びが暗い霊園に響き渡る。

「レイド・フォースにチェーンしてダイナマイトＫの効果発動。デッキから永続罠、【真竜皇の復活】を発動します。」

「構うかよ！ランク４のフォース・ストリクス１体でオーバーレイ！彼方に飛び立つ異形の翼よ！地を這う獣を撃ち殺せぇ！ランクアップ！エクシーズチェェェェェェエンジ！」

エクシーズモンスターである闇夜の猛禽が、その身を光へと変えて天空に舞う。

…ソレは紛れもなくエクシーズ召喚の為のエフェクト。

【黒翼】、天宮寺　鷹峰にのみ許された叫びに導かれ、フォース・ストリクスであった光が鷹峰の足元に広がる銀河の渦にその身を捧げ今ここに飛び立つは…

「来やがれぇ、ランク５！【ＲＲ―エトランゼ・ファルコン】！」

―！

【ＲＲ―エトランゼ・ファルコン】ランク５
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２０００

現れしは異形の隼。

赤銅の翼を翻す、彼方より飛来せし猛禽の一体。

その背に背負いし砲塔で、遥か空から獲物を狙い撃つ…際限なく進化を続ける鳥獣の、分岐する可能性のその一つ。

「…コレが【黒翼】のランクアップ戦術…なるほど、確かに壮観だ…」

「チッ、何が『壮観』だ。ガキの癖に心にもねぇことをベラベラと…すぐに黙らせてやらぁ！エトランゼ・ファルコンの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、【真竜拳士ダイナマイトK】を破壊して元々の攻撃力分のダメージを与える！」

そして異形の隼が、赤銅の翼を翻して天へと舞う。
背に構えた砲塔へと、熱を溜め始めるその姿は…猛禽らしからぬ武器ではあるものの、まさに獲物を撃ちぬくために狙いを定めた狩人のモノとも言えるだろうか。
今、異形なりし猛禽から、一筋の熱閃が放たれ―

「させませんよ。エトランゼ・ファルコンの効果にチェーンしてマジェスティMの効果発動。更にそれにチェーンして永続罠、【真竜の黙示録】も発動。ダイナマイトKを破壊し、エトランゼ・ファルコンの攻守を半分にする。そしてマジェスティMの効果で【真竜騎将ドライアスⅢ世】を手札に。」

しかし…王者の放った熱閃を、いとも簡単に躱すかのように。
自らのモンスターを破壊しつつ、エトランゼ・ファルコンの砲撃による効果ダメージからその身を守った漆黒の少女。
そのまま、対象を失った隼の熱閃が少女の場へと打ち込まれるものの…少しも動じることもなく、ただただ少女は不気味に笑みを浮かべていて。

「チィッ！だったら【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚除外し…」
「…ソレにチェーンしてイグニスHの効果発動。デッキから【真竜凰の使徒】を手札に加える。」
「それがどうした！2枚ドローし、更に【ＲＵＭ―デス・ダブル・フォース】を捨てエトランゼ・ファルコン1体でオーバーレイ！」

けれども、【黒翼】もまたその手を止めることもなく。
相手ターンであろうと行動を止めないランを意に介さず。
連撃を仕掛けるように次々と進撃を止めない鷹峰の叫びによって、再び鷹峰のエクシーズモンスターがその身を光へと変え天に舞い始め…

「天空に燃える怨嗟の翼よ！有象無象を焼き殺せぇ！ランクアップ、エクシーズチェェェェェエンジ！ランク６！【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン―エアレイド】！」

―！

【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン―エアレイド】
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／３０００

「エクシーズ召喚成功時にエアレイドの効果発動！イグニスＨを破壊して、攻撃力分のダメージを与えたらぁ！」
「ならば破壊される前に永続罠、【真竜の黙示録】の効果発動！【真竜の黙示録】をリリースし、レベル６【真竜騎将ドライアスⅢ世】をアドバンス召喚！」

―！

【真竜騎将ドライアスⅢ世】レベル６
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／２８００

「ふふっ、ドライアスⅢ世が場に居る限り、ドライアスⅢ世以外の【真竜】モンスターは効果では破壊されない！更にリリースされた【真竜の黙示録】の効果！レヴォリューション・ファルコン―エアレイドを

破壊する！」
「クソが！ちょこまかちょこまか躱しやがって！けどドライアスⅢ世は破壊できンだろうが！エアレイドが破壊されたこの瞬間！俺ぁＥｘデッキから【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン】を特殊召喚し、エアレイドをオーバーレイユニットにする！そのままレヴォリューション・ファルコンの効果発動！ドライアスⅢ世を破壊し…攻撃力の半分のダメージをテメェに与えるぜ！」
「永続罠、【真竜皇の復活】の効果発動。ドライアスⅢ世をリリースし、【真竜拳士ダイナマイトＫ】をアドバンス召喚！そして場を離れたドライアスⅢ世の効果で、デッキから【真竜皇バハルストスＦ】も守備表示で特殊召喚！」

―!!

【真竜拳士ダイナマイトＫ】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１２００
【真竜皇バハルストスＦ】レベル９
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／３０００

―それでも、喰らわない。
あまりに激しい【黒翼】の、その全ての爆撃を躱し続ける少女。
常人では決して耐え切れるはずもない【黒翼】の、この怒涛の攻勢をひらひらと躱し続けながらも…同時に次々と展開を続ける少女のデュエルは、あまりに異常であまりに不可解。
そう、こんな年端もいかない少女が、よもや歴戦の王者【黒翼】を翻弄しているだなんて。
そんな事実など、他人が聞いたとしても絶対に信じられるわけもなく…
…現れしは、深緑の鎧纏いし竜の拳士と…終焉導く水害を呼ぶ、黙示録に刻まれた竜の皇帝。
この世の終わりを呼んでくるのではないかと思える程に、あまりに

禍々しいほどにうねる水の恐怖と共に…果敢に攻める【黒翼】を、更なる高みからなお見下ろす。

「チッ！まだ突破できねぇのか！」

「…ふふっ、私を相手にここまで攻め込んできたのは貴方が始めてです。ですが…いくら【王者】と言えど、ここが限界でしょう。」

「ッ…」

どこまでも…そう、どこまでも上から目線で。

あまりに偉そうにそう呟かれた少女の言葉は、何の敬意も感じさせることなく【黒翼】へとぶつけられて。

そして、ランの放った一言が天宮寺　鷹峰の癪に障ったのか…

「まだ終わるわけねぇだろうが！墓地のレイド・フォースの効果発動！手札のファジーと墓地のレイド・フォースを除外し、墓地から【ＲＵＭ―デス・ダブル・フォース】を手札に戻す！そんで【貪欲な壷】発動！バニシング　２体、シンギング、ファジー、フォース・ストリクスをデッキに戻して２枚ドロー！…来たぜ！まずはレヴォリューション・ファルコンの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、相手モンスター全てに攻撃出来るようにする！そんで【死者蘇生】発動！墓地から【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン・エアレイド】を特殊召喚！」

【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン・エアレイド】ランク６
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／３０００

止まらぬように。終わらぬように。

強い憤慨を孕ませながら、少女の言葉を掻き消すように再度動き始めた王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰。

…ここまでの攻防で、この少女の力が途轍もない代物だということは鷹峰とて嫌でも感じ取っている。

けれども、ここでソレを認めて折れるわけには絶対にいかないのだと言わんばかりに…己の強すぎるプライドにかけて、ここで退く気など鷹峰にはないのだ。
…少女にどれだけ躱されようとも。少女がどれだけ強くとも。
自分にこれだけ偉そうな口を利いた、この身の程知らずのガキに思い知らせてやるという憤怒の元。鷹峰の場からは、再度隼たちが飛び上がり続け…

「【死者蘇生】…エクシーズモンスターに使用したところで、オーバーレイユニットが無いのならば意味など…それにレヴォリューション・ファルコンの効果も、アドバンス召喚したモンスターには意味が無…」
「わかってんだよンなこたぁ！【ＲＲ―ネスト】の効果発動！デッキからトリビュート・レイニアスを手札に加える！そんで俺ぁまだ通常召喚してねぇ！【ＲＲ―バニシング・レイニアス】を通常召喚！更にバニシングの効果でトリビュートも特殊召喚！」

―!!

【ＲＲ―バニシング・レイニアス】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１６００
【ＲＲ―トリビュート・レイニアス】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　４００

「トリビュートの効果でデッキからミミクリーを墓地へ送り、そのままミミクリーを除外しデッキから【ＲＲ―レディネス】を手札に加えるぜ！」
「止まらない…いや、止まる気が無い…」
「たりめぇだろうが！俺様を誰だと思ってやがる！」
「エクシーズ王者【黒翼】…そしてレベル４のモンスターが２体…これは…」

「いくぜ！俺ぁレベル４のバニシングとトリビュート！２体のレイニアスでオーバーレイ！」

そして―

今高らかに木霊せしは、エクシーズ召喚のための大いなる宣言。

少女にどれだけ防がれようとも、それでも止まらぬ超越の連鎖はまるでエクシーズ召喚を行うことなどどんな事よりも簡単なのだと言わんばかりの勢いとなりて…

今ここに、銀河の渦を再度呼び出すのか。

―それはエクシーズ王者【黒翼】たる、己自身を誇るかのように。

歴戦の王者、天宮寺　鷹峰は今、己の持つエクシーズのＥｘ適正が導くままにその手を天へと掲げ…

「天音に羽ばたく黒翼よぉ、神威を貫く牙となれぇ！」

世界に轟くその口上。【王者】たる由縁のその叫び。

音無き静かな霊園に、高らかに反響せしは神をも恐れぬ男の雄叫び。

まさに王者【黒翼】の証明。自らの誇りそのモノ。

世界に轟くその口上とともに、例え相手が少女であろうと決して手加減などせぬ自分のデュエルの…まさしく『切り札』と呼べる存在を、鷹峰は今ここに呼び出そうとしているのか。

それは尊大な態度を崩さぬ少女へと、自分を力を思い知らせてやるかのように。天へと響く、竜の咆哮と共に…

今ここに、現れる―

「エクシーズ召喚！来やがれぇ、ランク４！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天に羽ばたく雄雄しき翼と、神をも切り裂く鋭き牙が霊園の夜空に輝いて。
その佇まいはまさに王の風格。歴戦を共に駆け抜けし、天宮寺　鷹峰の力がそのまま具現化したその存在感は…まさに正真正銘王者の代物となりて、その咆哮を天に轟かせるのか。

…どれだけ行く手を阻まれようとも、どれだけ攻撃を防がれようとも。

それでも現れし【黒翼】が、竜の戦士たちへと向かって轟き叫ぶ。

「これが本物の【黒翼】…確かに桁違いの存在感だ…」
「何をゴチャゴチャ言ってやがる！ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、ダイナマイトＫの攻撃力を半分にする！そんでその数値分、ダーク・リベリオンの攻撃力をアップさせるぜ！喰らい尽くせぇ！紫電吸雷！」

【真竜拳士ダイナマイトＫ】レベル６
ＡＴＫ／２５００→１２５０
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→３７５０

神をも縛る紫電の雷鎖。ソレが躊躇無く竜の拳士を縛り上げ、その力を一息に半減させていく。
そう、どんなモンスターが相手でも…例え神が相手でも。
決して畏れなど抱かぬであろう、不遜なるも強靭なる黒翼牙竜がその力を上昇させる時…ソレはデュエルの終盤を現す叫びとなりて、【王者】に勝利を齎すのだ。

ところが…

「手間ぁかけさせやがって！バトルだ！まずはエアレイドで、【真竜導士マジェスティM】に攻撃ぃ！」

まさかの、攻撃力を大幅に上昇させたダーク・リベリオンではなく…
攻撃力の劣るレヴォリューション・ファルコン―エアレイドに、自爆特攻を命じた天宮寺　鷹峰。
…まるで、自棄にでもなったかのよう。
攻撃力の下がったダイナマイトKにではなく、まさかの攻撃力の高いマジェスティMへと鷹峰は攻撃を命じたのは一体何の算段か。よもや、まだ酒の酔いが残っているという言い訳をするわけではあるまいに…

―！

鷹峰　ＬＰ：４０００→３７００

…案の定、返り討ちに遭い、破壊されてしまった反旗の隼。
それに応じて、鷹峰のＬＰが減少の音を掻き鳴らし…
よもやこのデュエルが始まって最初のダメージが、少女の方ではなくエクシーズ王者【黒翼】が受けたモノだなんて、とてもじゃないが誇る事などできはしないと言うのに。

しかし―

「自爆特攻…そして先ほど手札に戻したＲＵＭ…なるほど、確かに抜け目がない…」
「いっくぜぇ！エアレイドが戦闘破壊されたこの瞬間！速攻魔法、【ＲＵＭ―デス・ダブル・フォース】発動！エアレイドを特殊召喚し、倍のランクにランクアップさせる！」
「６の倍…ダイナマイトＫの効果で、デッキから【真竜の黙示録】を発動。」
「カカッ！ソイツぁもう効果使えねぇだろうが！俺ぁランク６のエアレイド１体で、オーバーレェイ！」

たった今返り討ちにされ破壊された、革命の隼が再度蘇る。
倍のランク…それはランクを上昇させる『ＲＵＭ』の中でも、特に突出した上昇値。
『６』の倍…すなわち、『１２』。
モンスターの持つレベル・ランクの最大値は『１２』であると定められており、その枠組みの中でも最大の値を持つモンスターはもれなく強大なる力を持った切り札の中の切り札であるからこそ…

「空を翔る翼の砦よ！敵の全てを撃ち落とし…楯突く全てを消し飛ばせぇ！ランクアップ！エクシーズチェェェェェェエンジ！」

発動された速攻魔法の、ＲＵＭのシンボルが暗い霊園の中で光り輝く時。

…現れるのは強大なる力、姿を現すのは巨大なる隼。

今、天宮寺　鷹峰の持つ【ＲＲ】のモンスターの中でも、最大のランクを持った存在が…

今、ここに―

「来やがれぇ、ランク１２！【ＲＲ―ファイナル・フォートレス・ファルコン】！」

―！

【ＲＲ―ファイナル・フォートレス・ファルコン】ランク１２
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／２８００

巨大なりし砦の砲城。天空を飛び回る城砦の隼。

最早、猛禽とはとても思えないその圧倒的な体躯は…

他の追随を許さぬほどに、この世に並ぶモノなどない巨大なる天空の城となりて霊園の上を飛翔するのか。

「ランク１２…文字通り、ＲＲ最終最後の隼ですか…」

「ＲＲだけじゃねぇ！コイツぁテメェが見る最後の隼でもあんだぜ！ランクアップしたファイナル・フォートレス・ファルコンは他のカードの効果を受けねぇ上に連続攻撃出来る！」

「…」

あれだけ攻撃を躱されたというのに。あれだけ連撃を防がれたと

いうのに。
多大なるカードの効果を使用し続けたというのにも関わらず、最後の最後まで相手の息の根を止めることだけを狙って動き続けた鷹峰の場には…
―気がつけば、ランのＬＰを全て削りきるだけの力を持った牙竜と隼が揃ったではないか。
…展開を続けた【黒翼】の場には、象徴たる黒き竜と最終最後の砦の隼。
その攻撃は最早、少女を消し飛ばすには充分過ぎる力となりて…釈迦堂　ランという漆黒の少女を、力の限り葬り去ろうとしていて。

「コイツの連撃とダーク・リベリオンの攻撃でもうテメェは終わりなんだよ！バトル続行！先ずはダーク・リベリオンでダイナマイトＫに攻撃ぃ！」

そうして―

王者【黒翼】の象徴なりし、牙持つ黒き翼の竜が夜の空へと舞い上がる。
世界の頂点を極めたその牙。世界の頂点へと辿り着いたその翼。
他の追随を決して許さぬ、誇り高き漆黒のその体躯を天へと押し上げ。ソレはいたいけな漆黒の少女を、慈悲も無く一息に葬り去ろうとしているのか。

「消し飛べぇ！斬魔黒刃！ニルヴァー・ストライ…」

そのまま…
轟く叫びと猛る雷、王者【黒翼】の豪き雄叫びが、文字通り少女を貫かんとした…

その時だった―

「罠カード、【決別】発動！手札の魔法カードを1枚墓地へ送り、バトルフェイズを終了する！」
「何ぃ!?」

刹那―
【黒翼】と少女の間に現れた一枚の罠カードが、ダーク・リベリオンの斬撃の軌道を無理矢理に逸らしてしまった―
…それは対価を払いバトルフェイズを終了させる、迫り来る相手モンスターとの文字通り『決別』を表す一風変わった罠カードではあるのだが…

「ッ！テメェ、まだそんな手を…」
「危ない危ない…流石は【黒翼】、あそこまで徹底的に躱してもなお息の根を止めにくるとは…念を入れておいて正解でした。」
「グッ…」

もし鷹峰がエアレイドでの自爆特攻を初撃に選ばず、ダーク・リベリオンでの攻撃を初撃にしていたら…少女は、もっと早くに【決別】を発動していただろう。
…それは単純に、鷹峰にダメージを与えるため。
たった３００…されど３００のダメージ。
拮抗していた状態で、ダメージが発生したということは少女と【王

者】、どちらが競り勝ったのかの証明。例えそれが鷹峰の自爆特攻であろうとも、それ以上のダメージを鷹峰が与えられないと言う事は…デュエルの流れが、どちらに傾いたのかと言うことが、今はっきりしたという事なのだから。

それは【王者】と少女がデュエルを行っているとは到底思えない光景。

まさか歴戦の王者【黒翼】ともあろう男が、こんな年端もいかぬ少女を相手に押されているなど決してあってはならない事実。

あれだけの妨害と、あれだけの回避の果てに…自分を相手に、こんな最後かつ最硬の守りの手を用意していたのか―

ソレを理解してしまった鷹峰の背筋に…ゾクッとするような寒気が一瞬走る。

「クソが！…カードを２枚伏せてターンエン…」

「エンドフェイズに【真竜皇の復活】の効果発動。墓地より【真竜騎将ドライアスⅢ世】を守備表示で特殊召喚。」

「チッ、また増えやがったか。ターンエンドだクソガキ！」

鷹峰　ＬＰ：４０００→３７００

手札：５→１枚

場：【ＲＲ―ファイナル・フォートレス・ファルコン】

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】

【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン】

魔法・罠：【ＲＲ―ネスト】、伏せ２枚

こうして…長い長い展開を終え、再びターンを受け渡した【黒翼】。

しかしエクシーズ王者【黒翼】ともあろう者が、まさか全力で攻め込んだにも関わらず相手のＬＰを削る事すらできなかったなんて。

しかもソレは歴戦のプロデュエリストならばともかく、よもや年端も行かぬ幼さの残る少女のＬＰだなんて…例え素面であったとしても、鷹峰とて絶対に他言など出来ないであろう。

「私のターン、ドロー！」

そんな、どこか違和感を感じている鷹峰を意に介さず。

先ほどと同じように、勢いよくカードをドローしたかと思うと…

「…」

何かを考える素振りを見せつつ、釈迦堂　ランは徐にその手を止めてしまった。

「あ？テメェ何止まってんだ？」

「いえ、少々考え事をしていまして…手札にはブースター・ストリクス。墓地と場には【ＲＲ―レディネス】。そして効果を受けないファイナル・フォートレス・ファルコンと、攻撃力３７５０となった【黒翼】…あれだけ邪魔したと言うのに、ここまでの場を作り上げるだなんて…ふふっ、【王者】の力が、ここまで相当たるモノとは恐れ入りました。」

「ケッ、心にもねぇ事をよく言えるモンだぜ。」

…さっきまでの、あの不遜なるも不敵な態度は一体どうしたというのか。

また先のターンと同じような怒涛の展開で鷹峰を襲うのかと思えば、打って変わって何かを考えているような素振りを見せ始め…

…まさか、ここへきて突破口が見つからないとでも言うつもりか。

まぁ、例え『そう』だとしても少女の相手は王者【黒翼】なのだから、ここへきて少女がそうなってしまったとしてもソレはある意味当然ではあるのだが…

何せあれほど尊大な態度で【黒翼】を煽り、王者の怒涛の攻めをか

わし続けはしたモノの、それでも止まらなかった【黒翼】は先のターンにおける3体のフォース・ストリクスによる猛禽の壁よりも、更に強固な守りを建造してそのターンを終えたのだ。
　それはランのＬＰを０に出来るだけの展開だけでは収まらない。あれだけの目まぐるしい攻防を繰り広げ、あれだけの攻勢を貫いたというのに…攻撃一辺倒では終わらない場を残した【黒翼】の、その守備はまさしく万全の一言。

―特殊召喚されたモンスターとの戦闘では、無敵を誇るレヴォリューション・ファルコン
―効果を受けない耐性と高い攻撃力を備えた、ランク１２のファイナル・フォートレス・ファルコン
―そして攻撃力を３７５０にまで上昇させた、【黒翼】たるダーク・リベリオン

　攻撃力３０００を大幅に超えるモンスターというのは、そもそもとして限りない強者。
　それらを戦闘によって突破することは、普通であれば限りなく困難な所業であり…効果による除去を試みても、それはダーク・リベリオンかレヴォリューション・ファルコンを除去することしかランには許されてはおらず…

―けれどもダーク・リベリオンを除去できたところで、残るファイナル・フォートレス・ファルコンの除去は限りなくは困難。

　何せ、『効果を受けない』というのは耐性としては文字通りの最強クラス。
　そんな何の除去も弱体化も効かないという、攻撃力３８００のモンスターを…突破できる策など、例えプロデュエリストであろうとも限りなく少ないに違いないだろう。
　だからこそ、【真竜】永続罠の効果でダーク・リベリオンを除去して

はいけない。それでは鷹峰に、戦闘でダメージを与えられなくなってしまうから。
またＲＲの戦闘破壊を試みようとも、鷹峰の手札には攻撃してきた相手モンスターを無慈悲に破壊してくるブースター・ストリクスがあり…
例え攻撃力の低いレヴォリューション・ファルコンへと攻撃を仕掛けたところで、【ＲＲ】への戦闘すらも難しいということは誰にだってわかりきっている。

つまり…ランが攻撃を仕掛けるなら、ダーク・リベリオンへの攻撃一択。

けれども、ダーク・リベリオンへの攻撃で鷹峰のＬＰ３７００を一撃で０にしたいのならば、【真竜の黙示録】による攻撃力半減効果を計算に入れたとしても、実に５５７５以上もの攻撃力が必要不可欠。
…そんな桁違いな攻撃力を用意することなど、『特殊』なデッキでなければ根本的に不可能なこと。
そう、ここまでのデュエルの流れを見れば、ランの操る【真竜】というデッキはアドバンス召喚と除去に長けてはいるものの…
強大なる極端な攻撃力を持つモンスターを用意できないであろうと言うことは、王者【黒翼】天宮寺　鷹峰の先見によれば最早明確なことなのだ。
まぁ、そもそも鷹峰の墓地には除外すればこのターンのダメージをすべて０にする【ＲＲ―レディネス】があるのだから、根本からしてこのターンで鷹峰にダメージを与えることは歴戦の者であろうとも途轍もなく困難な所業なのだが。
更に言えば、鷹峰の場には先ほどデッキから手札に加えていたソレがもう一枚場に伏せてあり…それは何らかのアクシデントがあっても、もう一枚レディネスが使えるということ。

…これではあまりに堅牢すぎる。これではあまりに強固すぎる。

それはあまりに堅牢に建造された、天下無双の無敵の城砦。
誰が相手であろうとも、この状況で出来ることと言ったら精々多大なる犠牲を払って【ＲＲ―レディネス】を消費させることが限界に違いない。

ソレ故―

鷹峰も、相手の動きを見極めてから墓地でレディネスを発動できるというその余裕があるからこそ…得体の知れない漆黒の少女に、一歩も退かぬその佇まいはまさに最強のエクシーズ使いの名に恥じぬ佇まいとなっていて。
そう、このターンでエクシーズ王者【黒翼】のＬＰを０にするなんて、例え同じ【王者】クラスの者を持ってしても困難を極めるに違いないことであって。

…そうだと、言うのに―

「いえ、本心ですよ。これまで私が潰してきた有象無象と貴方とでは、デュエリストとしてのあり方がまるで違う。【真竜】のカードだけでは、王者【黒翼】は倒せないと…理解したのです。」
「あぁ？また意味わかんねぇことを…」
「流石は【王者】…世界の頂点。となれば、こちらもそれ相応のカードでお相手せねば失礼と言うモノ。…見せて上げますよ、私の力の一端を！永続罠、【真竜の黙示録】の効果発動！ダイナマイトＫを破壊し、相手モンスター全ての攻守を半減させる！」

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／３７００→１８７５　ＤＥＦ／２０００→１０００
【ＲＲ―レヴォリューション・ファルコン】ランク６
ＡＴＫ／２０００→１０００　ＤＥＦ／３０００→１５００

そして―
何やら考えが纏ったのか。
先ほどよりも更に尊大なる態度を増し始めた少女は、纏っていた雰囲気を先のターンとは比べ物にならない程に重々しいモノへと変え始め…
突然に、そして激しく動き始める。

「来やがったか！だがファイナル・フォートレス・ファルコンは効果をうけねぇ！」
「わかっていますとも。永続魔法、【真竜の継承】の効果発動。デッキから1枚ドロー！更に【マジック・プランター】を発動し、【真竜の黙示録】を墓地へ送って2枚ドロー！そして墓地に送られた【真竜の黙示録】の効果で、レヴォリューション・ファルコンを破壊する！」

ソレは先の鷹峰に負けず劣らずの、あまりに激しい初動からの連鎖。
一つの動きが、二つも三つにもアドバンテージを稼ぐという…到底こんな歳の少女が行うデュエルにしては、あまりに似つかわしくないその効果の連鎖が、再び鷹峰を襲い始めるのか。
ドローを加速し、除去を織り交ぜ…
そして…

「ふふっ、来たか…私は永続魔法、【冥界の宝札】を発動し…マジェス

ティＭと、ババルストスＦをリリース！」

何やら子どもでも持っているようなアドバンス召喚用のカードを発動したかと思うと、先ほどまでの【真竜】のアドバンス召喚とは異なったエフェクトがランの場に顕現したではないか。

…それはこれまでの【真竜】のアドバンス召喚とは異なった、『召喚権』を使用した正真正銘正規のアドバンス召喚のエフェクト。

魔法・罠のリリースではない、モンスター２体の魂を天へと捧げるその渦は…この世界ではほとんど見られることは無い召喚法ではあるものの、古の時代より確かにこの世界に存在している、紛れも無いアドバンス召喚の為のエフェクトであって。

果たして…

２体の生贄がその魂を天へと捧げるとき、果たしてソレはこの地に一体何を齎すというのか。

今、釈迦堂　ランの呼び声によって…

「アドバンス召喚！現れよ！」

ここに、現れしは―

「レベル８、【Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ】！」

―！

その時…

『何か』が、宙より現れた―

それは天空よりも高きモノ、天涯よりも遠きモノ。
遥かな宙より彼方を統べる、天象すら凌駕する廻天の化身。
空の果て、天の外、宙の向こうのまさに『天の星』。
それは絶望なりし星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２３００

「ッ!?何なんだこのデカブツはぁ！」

襲い来る圧力―
それはエクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰を持ってしても耐え切れるか怪しいほどに強大な、外なる星から襲いくる圧力。
エクシーズ王者である鷹峰とて、他人を卒倒させるような圧力を持っていると言うのに…
ソレすら凌駕しているかのようなこの存在感は、久しく感じていなかった感情を天宮寺　鷹峰に無理矢理思い出させようとしているよう。

そう、王者【黒翼】が久しく感じていなかった感情…
それは、歴戦の果てに久しく忘れていた…

『恐怖』という名の、屈辱的な―

「ふふっ、最後は貴方の好きな殴り合いで降して差し上げましょう。燦然と輝くプラネットの一球、【Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ】のモンスター効果！ＵＲＡＮＵＳの攻撃力は…自分フィールドの表側の魔法・罠カード１枚につき、３００ポイントアップする。」

【Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ】レベル８
ＡＴＫ／２９００→３８００

「グッ…デ、デケぇナリして、随分と地味な効果じゃねぇか…」
「ほう、私の操るプラネットを前にして、まだそんな言葉を吐けるとは驚きました。…まぁ、ＵＲＡＮＵＳにはまだ隠れた効果があるのですが…今この場では、これだけでも充分と言うモノ。さて、貴方はどこまで耐えられるか！【冥界の宝札】の効果で２枚ドローし、【真竜皇の復活】の効果発動！墓地からダイナマイトＫを守備表示で特殊召喚！」

しかし、そんな潰されかけている鷹峰を意に介さず。
まだまだ動きを止めないランの場に蘇るは、再度深緑の鎧を纏った竜の拳士。
けれども、いくら数を増やしたところで鷹峰ＬＰを削りきるにはまだ攻撃力が足りず…

「まだですよ。装備魔法、【団結の力】をＵＲＡＮＵＳに装備！攻撃力を３２００上げ…ＵＲＡＮＵＳ自身の効果で、更に攻撃力をアップする！」
「ッ!?」

【Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ】レベル８
ＡＴＫ／３８００→７３００

簡単に―
そう、いとも簡単に。
鷹峰のＬＰを削りきるのに必要な攻撃力５５７５を、あまりに簡単に超えてきた釈迦堂　ラン。

しかし、簡単に超えたようにも見えるが…そもそもランはこのターン、手札０枚からスタートしたのだ。
ソレを考えると、ドローを加速したとは言えあれだけの動きの中で必要なカードを全てピンポイントで手札に加えたのか。
…例え歴戦のデュエリストであろうと、この情況では多少なりとも心に焦りが浮かび上がるはずだというのに。
そう、一つでもドローが狂えば、動いたところで鷹峰には絶対に勝てないというのにも関わらず…【王者】を前に、これだけの事を難なく行ってみせる少女の存在は、あまりに不自然かつあまりに不気味。

ソレ故―

「攻撃力７３００だと!?クソが!墓地から罠カード、【ＲＲ―レディネス】を除外して効果はつど…」
「無駄だ!速攻魔法、【抹殺の指名者】発動!私が宣言するのは…【ＲＲ―レディネス】!」
「あぁ!?」

当然の事ながら、鷹峰の最後の防御の手段である【ＲＲ―レディネ

ス】すら、奈落の果てへと追いやってしまった釈迦堂　ラン。
ランの発動した速攻魔法…それは彼女がこのターンのドローフェイズに手札に加えていたであろう、『指名者』と呼ばれる特定のカードを完全に無効化するカード群の中の1種類。
いくら【ＲＲ―レディネス】が2枚あろうと、このターンの【ＲＲ―レディネス】の効果自体を全て無効にしてしまうという…
発動できれば、この上ない封殺を相手へと突きつけるというカードであって。
しかし…

「なっ!?テメェ！何でテメェがレディネスを持ってやがんだ！」
「ふふっ、何故でしょうね。けれども【黒翼】を相手にするのに、この程度の想定をしておくのは当然でしょう？」
「ッ、テメェ…」

ランが、何の詰まりもなく【ＲＲ―レディネス】を指名したその現実に、あまりの驚きの声を上げてしまったエクシーズ王者【黒翼】。
しかし、ソレもそのはず。
確かに、【抹殺の指名者】は発動さえ出来ればこの上ない封殺を相手へと与えるカード…

―そう、『発動できれば』…だ。

ランが無効にするために、自分のデッキから除外した【ＲＲ―レディネス】のカード。そのピンポイントなカードを、一体どうしてランはデッキに入れていたのか。
無効にするカードが…『指名』したカードが、その辺のガキでも持っているような二束三文のカードであったならば、鷹峰とてここまで驚きを浮かべはしない。
だからこそ、鷹峰が驚いてしまったのはランが【真竜】という特異

なカテゴリーのデッキの中に、ピンポイントで【ＲＲ】のカードを入れていたというその事実に加えて…
　こんな幼さすら残る少女が、【真竜】という聞いた事も無いカテゴリーで統一したデッキを組んでいるという現実の中に、高価であるはずの【ＲＲ】のカードを入れていたというその真実について。
　―そもそもこの世界においては、特定のカテゴリーで統一したデッキを組めている人間の方が少数なのだ。
　流石にプロになれる程の力を持った者ならば、カードの方から主を見極め集ってくるのだが…
　この世界に住むその他大勢、ランが有象無象と言い放った大多数の人間達は、特定のカテゴリーの統一デッキではなく、寄せ集めにも似たデッキを持っているのがこの世界における確かな実情。
　統一されたカテゴリーのデッキは高価であり、またその中でも強力な効果を持ったカードは現存する枚数も少ない。

　そして…

【王者】が好んで扱うテーマカードというのは、もれなく途轍もない値が付いている物が多い。
　それは無論、【ＲＲ】のカードもそう…【ＲＲ―レディネス】という罠カード１枚であろうと、それはこんな子どもが手に入れられるはずも無い希少かつ高額な１枚となっているのだ。
　だからこそ、鷹峰は信じられない。
　こんな子どもが、このカードをデッキにいれていたこともそう…
　対策の為に【ＲＲ】のカードを入れすぎれば、【真竜】のデッキのバランスが崩れる。ソレ故、きっとランのデッキに入っている【ＲＲ】のカードは【ＲＲ―レディネス】１枚だけだろう。
　そんな、少女のデッキにとっては何の意味も無い【ＲＲ―レディネス】をただこの瞬間のためだけにデッキに入れていたことを…

この瞬間の攻防すら、既に見越していたのかと疑いたくなる、少女のその先見が…

鷹峰には、信じられない―

「俺様が…こんなガキに…」

「さて、これで殴り合いに水を差す無粋なカードは無効となった。貴方の残った伏せカードは【ＲＵＭ―ラプターズ・フォース】…そんなカードでは、もう貴方は何も出来ないが…まぁ、一応除去しておきますか。」

「ッ!?」

あまりに冷たいランの声が、焦りを生じている鷹峰を襲う。

…ありえるわけがない。王者【黒翼】が、こんな簡単に少女においつめられるなど。

まさか、こんなガキに…Ｅｘデッキを使わないと抜かしたデュエリストに、エクシーズ王者【黒翼】が負けるのか。

あんなにも強固なる城砦を築き、万全の体制を作り上げたと思っていたというのに…

どうしてこんなにも簡単に、このガキは全てを簡単に乗り越え、押さえつけ、容赦なく潰そうとしてくるのか。

…鷹峰の思考がぐるぐると、そんな負を抱えて回り始める。

分からない…分からない分からない分からない―

どうしてＥｘデッキを使ってないのに、エクシーズ召喚の王者をここまで追い詰められるか。頂点を極めたと思っていた、誰にも遅れを取らないと思っていた、力で全てを捻じ伏せて来た自分が、何も出来ずに負けるだなんて―

…そんな負の感情に囚われかけている、エクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰。

その【王者】らしからぬ焦燥は、まるでこの世界の理が、決まりが、常識が…まるで世界そのモノが、壊れ始めているかのようでもあり…

―Ｅｘデッキを使わないデュエルで、ここまで人は強さを突きつけられる。

その信じられないけれども目の前で起こっている現実は、先日世界中で大々的にニュースにもなった『Ｅｘ適正の無い子ども』の存在を否定しているこの世界の方こそが間違っているかのような錯覚を鷹峰へと与え…

負けるのは、自分が少女よりも弱いから…Ｅｘデッキを多量に使った自分が、Ｅｘデッキを使わない少女よりも弱い…

理解したくないのに、無理矢理にソレを理解してしまった鷹峰の脳裏には、唐突にとある思考が閃いてしまい―

そう―

それはまるで、『Ｅｘデッキ至上主義』というこの世界の『常識』こそが間違っているかのよう―

「【黒翼】…貴方も、私の探している存在ではなかった。…これが貴方の限界のようです。【サイクロン】発動。貴方の伏せカード…ラプターズ・フォースを破壊する！」

慈悲など無いランの言葉が、霊園に放たれる。

ランが発動した速攻魔法によって、解き放たれた一陣の竜巻が鷹峰の場に残った最後の伏せカードへと迫り…

それと同時に、形容し難い『恐怖』そのモノが鷹峰へと容赦なく迫りくる。
…王者【黒翼】をも『恐怖』させる、あまりに異質な漆黒の少女。
それは少女の持つ、『邪なる神』のカードによる威圧だということは…この時の鷹峰は、まだ知らないコト。

そして―

「限界だと?……これが…俺の…」

鷹峰の場に残った最後の伏せカードを、無慈悲なる竜巻が呆然と立ち尽くす鷹峰ごと貫かんとしたその時…

天宮寺　鷹峰は―

「カカッ…」

渇いた笑いを、響かせた。

「つざけんじゃねぇぇぇぇぇ!リバースカードオープンッ!」

突如―
怒り狂った叫びを上げて。轟かせるは憤怒の雄叫び。
…それは【王者】の高すぎるプライド。
ランへと向けた怒りではない。ソレは他人に舐められることを何

よりも嫌う、天宮寺　鷹峰の己への憤怒。
…自分を舐め腐る者は、誰であろうと許さない…それは例え、自分自身であろうとも。
そう、己の心の久々に浮かび上がった、『恐怖』が鷹峰には何よりも許せない。
他人に与えられた『恐怖』に、慄いてしまう自分自身が鷹峰にはどうしても許せなかったのだ。
いくら目の前の少女が自分よりも強く、そして得体の知れない『恐怖』を与えてこようとも…
それでも他人に媚びることを絶対に嫌う、何か行動を起こさずにはいられなかった天宮寺　鷹峰が行った…
悪あがきにも似た、怒り任せのカードの発動。

しかし…

―鷹峰によって発動されたのは、紛れもなく【ＲＵＭ―ラプターズ・フォース】であって…

「ッ!?」

否…
―断じて否
それは【ＲＵＭ―ラプターズ・フォース】では無い。
いや、確かに【ＲＵＭ―ラプターズ・フォース】ではあったのだが…それは少女の目の前で、【ＲＵＭ―ラプターズ・フォース】ではなくなっていくではないか…

そう、釈迦堂　ランの目の前で…

カードが、書き換わっていく―

「速攻魔法、【ＲＵＭ―ファントム・フォース】発動ぉぉぉぉ！」

―！

「ッ!?ファントム・フォース!?…カ、カードが書き換わっていく…」
「ざけんじゃねぇぞゴラァ！俺様の限界を決められるのはお前さんでも俺でもねぇ！俺の限界を決められんのんは、俺様のデッキだけだぜ！墓地のフォース・ストリクスを除外し…ダーク・リベリオン１体でオーバァァァレェェイッ！」

漆黒の光へとその身を変えて、夜の闇へと舞い上がる【黒翼】。
夜の闇よりもなお黒いその翼は、この世の何よりも深い黒となりて星々を覆い隠すのか。
猛禽のシンボルから書き換わりし、幻影なりし新たなシンボルに導かれ…

「天音に羽ばたく黒翼よぉ！神威を貫く牙となりて…見果てぬ未来を切り開けぇ！ランクアップ！エクシーズチェェェェェェェェンジ！」

響き渡るは【王者】を超えた、その『上』にまで届く反旗の叫び。
まるで反逆…
この世界の『理』を、怒りによって砕き壊す【王者】をも超えた存在の轟き。
それは誰も知らない雄叫び。それは誰も知らない超越。
この世界において、【黒翼】自身すらも知りえなかった存在が…

「来やがれぇ！ランク５！」

ここに、現れる―

「【アーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

…ソレは、誰も見たことのない姿だった・

誰も…【黒翼】も【化物】も、そしてこの世界すら予期しているはずのなかった、全く新しい未知なる牙。

エクシーズ王者たる天宮寺　鷹峰が、【王者】と呼ばれる前に自らの手で創造し…そして歴戦を戦い抜き、そうして王者【黒翼】となったのが鷹峰の『名』である【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】。

奇しくもエクシーズ召喚の名を関しているその牙竜は、鷹峰自身の手によって生み出された、まさしく彼だけに許された彼の相棒。

だからこそ、そんな牙竜に新たなる進化の道が切り開かれただなんて…この世界の誰だって、知りえるはずも無かった真実なのだ。

…それはデュエルの頂点を極めた王者【黒翼】に、まだまだ先の道

があったという確かなる道標。
…【王者】の『名』となったモンスターに、『先』があっただなんてこの世界の誰も知らないこと。そう、ソレは【王者】自身である天宮寺　鷹峰ですら知らなかったこと。

ソレは奇しくも、天宮寺　鷹峰の代名詞とも言える【ＲＲ】の機翼と、天宮寺　鷹峰の『名』である【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】が、その身を一つに重ねたかのような雄雄しき姿。

そんな、黒き翼の新たなる進化の可能性が…

天宮寺　鷹峰の頭上で、歓喜に震え轟き叫ぶ。

【アーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク５
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

突如現れた新たな進化。【黒翼】の更なる可能性が具現化したことにより、勝負の行方はまだわからなくなった。
そう、新たに現れた、誰も見たことのない進化した黒き翼が鷹峰を『守る』限り…
根源たる恐怖を与えてくる【化物】のような少女を前にしても、まだまだ【黒翼】は立ち向かえるとも言え…

「バトル！ＵＲＡＮＵＳで攻撃！」

―！

「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

鷹峰　ＬＰ：３７００→０

―ピー…

いや…
それはあくまでも、アーク・リベリオンが『守備表示』で特殊召喚されていればの話。
いくら進化した【黒翼】であろうと、ソレが攻撃力３０００で留まり攻撃表示であったならば…
いくら誰も見たことの無い、鷹峰自身すらもソレに対する理解が追いついていないままでは…
エクシーズ王者【黒翼】のＬＰが０を刻み、霊園に無機質な機械音が鳴り響いたとしても、それは誰にも変えようの無い、着いてしまった決着の行方であって…

…

「…カカッ…なんて日だ。久々のデュエルだと思ったらガキにボロ負け…けど相棒は進化するしよぉ…意味わからなすぎて面白すぎだろ、カッカッカ…」

霊園に木霊する渇いた笑い。
それは敗北した【王者】が零していいような誇り高いモノではない。
エクシーズ王者【黒翼】が負けた―
それは果たして、世界にとってはどれだけの損失となってしまうのだろうか。
歴戦の王者【黒翼】が、こんな年端もいかぬ少女に敗北を喫してしまったなんて、この世界の住人からすれば絶対に理解できないこと。
いくらこの場にギャラリーがいないとは言え、世界中にとっての宝とも言える【王者】のこんな野良デュエルでの敗北など、絶対にあってはならない事だと言うのに。
けれども…
そんな小さな世界で留まっていたプライドなど、最早捨て去ったのだと言わんばかりに。
天を仰ぐ今の鷹峰から漂ってくる雰囲気は、今までの【王者】のモノとはまるで次元が異なっている代物となっており…

そんな、草の背にして天を仰いでいる鷹峰へと…

「…凄い…」
「あ？」
「凄い！貴方は本当に！わかってくれる者などいないと、理解してくれる者など居ないと思っていた私の元に！貴方は自ら足を踏み入れてくれた！初めてだ！私を理解してくれる、私についてこられる…私と並べる所まで来てくれた人は！鷹峰さん、貴方はなんて凄い人なんだ！」
「…なんだ？テンション高けぇな、おい…」
「これが押さえられると思いますか!?だって…私、ずっと1人だったんですよ？有象無象ばかりのつまらない世界で、ずっと1人彷徨って

…でも貴方は違う！私の元に、自分から進んで来てくれた！ただの人間が！人間の枠を自ら超えたんですよ!?」
「カカッ、ご大層な文句だぜ…けど、なんだろうな。よくわからねぇが…今ならテメェの言ってる事、ちったぁ理解できる気がするぜ。」

…『邪なる神』が与える、逃れられぬ恐怖をこの男は自分の力で貫いた。
それはずっと孤独だった少女の目に、いかなるモノとして映ったのか…
決して理解してくれる者など、現れないと思っていた自分の世界に…まさか、自分自身の力で踏み入ってくる者が現れるだなんて…
そんな同族が現れたという現実に、少女の感情は昂ぶりを覚えているのか。

「さてと…おいラン、もっかいだ、もっかいヤんぞ！」
「おや、一回だけではなかったんですか？」
「カカッ、忘れちまったぜンな昔の話はよ！けど折角新しい切り札が手に入ったんだ！次は勝てそうな気がすんだよ！いいからもっかいヤんぞ！」
「ふふっ、良いですよ。私も、丁度もう一戦したいと思っていたところです。」

そして敗北を喫したというのに、跳ね起きるようにして飛び起きた鷹峰は先ほどまでとは打って変わって…自ら、再戦をランへと申し込み始めたではないか。

―この世界はやはり面白い

それが今の鷹峰の頭の中にある一つの答え。
Ｅｘデッキを使わないデュエリストが、エクシーズ王者たる自分よりも強い。それは相手になる者が居らず、退屈に塗れていた天宮寺

鷹峰にどれほどの悦楽を与えたのだろう。
…頂点を極めたと思っていた。デュエルを極めたと思っていた。
そうだと言うのに、ここにきてランのような【化物】が出てきたことはずっと燻っていた天宮寺　鷹峰に、『恐怖』以上の『希望』を与えたのだ。
…そんな存在とデュエルできることが、楽しくないわけがない。
例え自分から人間の域を超えようとも。それでも心から戦いたくなるような相手が現れたことに、この上ない嬉しさを鷹峰は感じながら…

―デュエル!!

夜の深まる霊園に、二匹の【化物】の楽しげな声が…
いつまでも、響くのだった―

―…

「【王者】は皆こうなんですか？でしたら、是非とも他の2人にもこちら側に来ていただきたいのですが…」
「カッカッカ。れんぞーの奴はともかく、砺波の野郎はちと難しいかもなぁ。昔の奴ならいざ知らず、砺波の野郎は昔と違って…随分と、堅物になっちまったからなぁ。」
「では、次は【紫魔】から誘ってみるとしましょうか。」
うっすらと明るくなってきた、朝日の昇る前の霊園。
小鳥のさえずりと、朝露の落ちる音が聞こえてきそうなその静かな

霊園で…
　まるで友人同士が語り合うかのようにして、不敬にも石碑に腰掛けた少女と初老の男の姿が、そこにはあった。
　…それは人間の枠には収まらぬ、【化物】同士のろくでもない話し合い。
　今この時…この場所で、このような会話が行われていなかったら、きっと世界はもう少し平穏で居られたに違いないと言うのに。
　けれども、そんな世界の平穏など知ったことではないかのように。2匹の【化物】は己の愉悦ために、ろくでもない話を続けるだけ。
「まっ、れんぞーの野郎にも期待はすんなよ？アイツも、ガキが出来た所為か昔とは変わっちまった。今のれんぞーは、『鬼才』じゃあねぇ。」
「…そうですか。まぁいいでしょう、とりあえず戦ってみないことには。」
「そうだな。もしかしたらアイツらも…お前さんとデュエルしたら、昔みてぇなバカに戻るかもしれねぇしな。」
「ふふっ、でしたら期待するなと言う方が無理でしょう。何せ貴方が『こちら側』に来たのだから。」
「カカッ、違ぇねぇ。」
　この夜…
【化物】と【黒翼】が出会ってしまったことにより、世界の歴史は大きく動いてしまった。
　けれども、その重大性と重要性を理解している者は今この世界においてはどこにも居らず…
　この時の邂逅によって、これから先この世界がどういった未来を辿ってしまうのかは、今この時点では誰にも見通す事などできないこと。
　しかし、確かに確定しているのは…この時のランと鷹峰の行動に

よって、多くの人間の運命が同時に大きくうねり始めてしまったということだけ。

世界が、動く―

退屈なるも平穏な時代から、大きく蠢く波動の時代へと。
たった2匹の【化物】の行動によって、この世界は正史から大きくズレ始めてしまった。
それは誰も知らない、誰にも修正できない、誰にも変えることなどできない時代の変化…ソレがいかなる未来をもたらすのかは、今この時には誰にも分からないことであって。

そして…

朝日と共に立ち去ろうする、釈迦堂　ランへと向かって…
鷹峰は、徐にその口を開いて―

「ラン。れんぞーと砺波にアポ取れなくて困ったら俺様ンとこ来い。何とかしてやっからよ。」
「ふふっ、では早速でもお願いしましょうか。晴れて私の同類となってくれた…心強い同士に。」
「おう、精々楽しもうじゃねぇか。カッカッカッカッカッカ…」

―…

そして物語は、現代へと戻ってくる―

「よかったですね鷹峰さん。」
「あぁん？何がだ。」

どこでもない、この世界のどこかの場所―
酒の匂いと煙草の煙と、そしておよそ人のモノではないであろう雰囲気に包まれた…
人の世からは隔絶されたどこかの密室、ＴＶの明かりしかついていない、漆黒が広がるとても暗い部屋の中で…
昔を思い出していた２匹の【化物】が、会話を続けていた―

「【白鯨】も…こちらにようやく来たということです。ずっと待っていたんでしょう？砺波さんのこと。」
「カカッ、何で俺が砺波の野郎を待ってねぇといけねぇんだっての。…まっ、自力で『こっち』に来たってぇのは評価してやってもいいけどなぁ。」
「ふふっ、そういうことにしといてあげますよ。」

昔を思い出した彼らの、次なる話題は昨日新たに『こちら側』へと自ら足を踏み入れてきた【白鯨】について。
…【白鯨】とて、元々人間の枠を超えられる素質は持っていた。
何せ【黒翼】天宮寺　鷹峰と、【白鯨】砺波　浜臣はそもそもからして同種の者。若かりし頃から『力』で生きてきた天宮寺　鷹峰と、砺波　浜臣は同種の『力』を持って決闘界で暴れてきたのだ。
だからこそ…『荒くれ者』と呼ばれていた、若かりし頃の砺波　浜

臣…そんな鷹峰と同種だった人物ならば、自分から【化物】の領域に…『こちら側』に来るものだと、１０年前のあの日、ランはそう期待もしていた。
いや、もし彼が鷹峰と同じく、若い頃の性格をそのままに【王者】まで上り詰めていたら。きっと１０年前のあの夜、砺波も確実に己を超え自ら嬉々として【化物】の領域まで踏み入ってきていただろう。
けれども長きに亘る【王者】としての生活と責務と、そして責任を重く見ていた砺波はとうとう【王者】のまま散ってしまった。砺波が１０年前の段階で【化物】となれなかったのは、砺波が長きに亘る【王者】の責務に…実直に、そして真っ直ぐに取り組んでいたから。

だからランは、もう砺波に興味など沸かない…と、そう思っていた。

過去に自分が降し、そして勝手に折れた【白鯨】になど…一度折れた者が、再び立ち上がり興味の持てるモノになるなど、彼女は決して期待も想像もしていなかったのだから。
…ソレを信じていたのは、彼と同じ時代を生きてきた【黒翼】だけ。
そして昨日、ついに【白鯨】は自ら人間の域を超えて『こちら側』へとやってきた。
染まりきった常識と、凝り固まったプライドと…
そして退屈という名の平穏を、心の底から受け入れていたあの砺波浜臣が、まさか世界の理から外れた【化物】の領域に足を踏み入れてきたなんて。

砺波が『扉』を開けた瞬間の事は、鷹峰もランもはっきりと知覚していた。新たな【化物】が生まれた瞬間を…いや、元々存在していた【化物】が、とうとう硬い殻を破ってこの世界に解き放たれた、その瞬間を。
ソレ故…
昨日の衝撃は、釈迦堂　ランにとってどれほどのサプライズとなったのだろう。

一度潰した相手とはいえ、【化物】の領域に足を踏み入れた砺波　浜臣のことは…ランとて、もう無関心ではいられない。

「【紫魔】は残念でしたが…砺波さんは晴れて『こちら側』へと来てくれた。ふふっ、面白くなってきましたね。」
「カカッ、れんぞーの奴もなぁ…紫魔本家頭首なんていらねぇ肩書きが無かったら、喜んで『こっち側』に来たんだろうがよ…しきたりだ何だっておめおめと死んじまった癖に、自分の所為でヒイラギにいらねぇ迷惑残したってぇんだから…駄目な父親だったぜ、アイツぁよぉ。」
「憐造…あぁ、そんな名前でしたね。」

昔を懐かしみつつ、進む時代の流れに身を任せてきた2匹の【化物】。
そんな彼等が体験してきた退屈は、常人では決して理解など出来ない深すぎる空虚であり…
相手がいない…それはこの世界においてこの上ない退屈。
だからこそ、こんな退屈な世界で相手が務まる存在が新たに現れたことは、どれだけ【化物】達の歓喜に繋がるのか。
そんな狂った【化物】の切望など、常人は絶対に理解できない…いや、理解してはいけないことでもあるのだが。

ともかく…

「さて…では賭けでもしますか？天城　遊良と天宮寺　鷹矢…我々のお気に入りでもある彼等の決勝戦、どちらが勝つのか。」
「カカッ、ガキ共のお遊びを賭けの対象にするたぁシュミが悪いじゃねぇか。…いや、この場合は『人が悪い』、か？」
「ふふっ、『人が悪い』とはこれまた人聞きが悪い。とうに人をやめた

我々が、『人が悪い』だなんて言うものじゃありませんよ。」
「カカッ、違えねぇ。…じゃあ負けた方が酒奢るってのでどうだ？ンで、どっちに賭けんだいランさんはよぉ。」
「そうですね…では私は…」

果たして…
【化物】に気に入られているという少年達は、幸運なのか不運なのか。
昨日の、自分の行っていた賭博遊びを棚に上げて…暗闇の中に木霊するは、2匹のこの世ならざる【化物】達の享楽の声。その目に映る少年達の戦いは、一体どんな決着を見せてくれるのだろう。
…どちらも王者【黒翼】の弟子。どちらも【化物】が気に入った少年。
こんな退屈だらけの世界で、そのもうすぐ始まる少年達の戦いの行方を…
2匹の【化物】は、少しばかり待ち遠しそうにしながら—

笑みを、浮かべているのだった—

—…

ｅｐ８９「【決島】、決勝―前編、激闘の前に」

そこは、穏やかな風が吹いている場所だった。

天に聳える巨大な塔。その雲にも届きそうな塔の…頂上。

人工的な音などない。人為的なざわめきなどない…天空に流れる風の音だけが、やさしく吹き荒れながら『その時』を待っているだけであり…

それは誰もが落ち着かない気持ちで待っている世界中のざわめきとは裏腹に、これよりこの場で戦いを始める彼等２人を迎え入れるために、邪魔な音を全てシャットアウトしているかのような自然の静けさ。

…邪魔なモノはいらない。邪魔な音はいらない。

歓声も、視線も、感情も、熱意も。

世界中から中継を通じてこの島へと届けられる、世界中の見えない観客達の期待と羨望…

そして戦いを待ちわびている世界名の人間達の逸る心臓の鼓動すら、この戦いの場には全くと言っていい程届けられてはおらず。

まるで学生の頂点を決めるこの天空の戦いにおいて、無粋となるであろう全てのモノをこの天が排除しているかのようでもあり…

…そう、これよりこの『天空闘技場』で始まるのは、文字通り世界一の学生を決める為の天上のデュエル。

決闘市とデュエリア―

世界が誇る２大デュエル大都市の、その未来のプロデュエリストを育てている決闘学園の…４０万人を超える全校生徒の中から、選ばれたのは２００名の者達。

―恐るべき才能と、恐るべき精神力と、恐るべき運と、恐るべき実

力。
全員が、強者。
そんな猛者のみが集まる修羅の島で昨日、選りすぐられた２００名の者達が血で血を洗うサバイバルデュエルを行った世界最大規模の祭典、【決島】。
その、昨日行われた生き残りを賭けた【決島】の予選を…そう、『２００名』の強者の中から、更に勝ち抜いた上位『４人』の、その『４人』の中から更に先に進んだ『２人』が、これよりこの天空闘技場にて鎬を削らんとしているのだ。
…全世界に無数に存在する同じ世代の学生達の、その頂点に立つ２人。
それは形容ではなく、言葉の通り学生の中の頂点だと言うこと。
そう…
４０万人以上の学生の中から、上位２名に昇り詰めることが出来るその『実力』。
世界で始めて思案された合同祭典【決島】が、自分達が学生の間に開催されたという…【決島】が決闘市とデュエリアの合同開催と決まった時に、決闘市かデュエリアの決闘学園に在籍していたという『時の運』。
全世界中継という、多すぎる観戦者の数と高すぎる注目度の中であって、己のデュエルを行えるという『精神力』。
４０万人超の中から選ばれた、１９９人という本物の猛者を相手に…たった一人で、日がな一日戦い抜いたデュエルに対する『体力』と『集中力』。
ソレら全てがこの戦いを巡り合わせ、ソレら全てを兼ね備えた学生達が鎬を削ってきたからこそ。この天空闘技場にこれより現れる２人は、文字通り学生達の『頂点』と言えるのだ
ここに上り詰めたその２人は、世界中の学生達の中でもトップクラスの力の持ち主と言うこと。

昨日の激しい蹴落とし合いをみてきた観客達は知っている。
プロでも通用するのではないかと思える力を持った２００人が、正面衝突でぶつかり合った昨日の『予選』…
その『予選』の時から一際目に付く活躍をしてきた者達が、とうとう頂点を決める戦いまで昇り詰めたのだと言う事を。
ソレが奇しくも、同じイースト校の２年生同士であろうと…ソレが【王者】の孫と、世界を騒がすデュエリストの出来損ないのデュエルであろうと…
…ここまで到達した者達に、異議を唱える者などこの場には居らず。

そんな、コレより始まる戦いの前の一時の静寂の映像が映されているモニターの前…

コンクリートに囲まれた、無機質なりし閉鎖的空間。
これより決勝戦が行われる、『天空の塔』の内部のとある一室に…

「クハハ、いよいよ決勝かぁ。ここまで長かったなぁおい。」
「…あぁ。」

決闘学園イースト校理事長と、決闘学園デュエリア校学長…
【白鯨】砺波　浜臣と、『逆鱗』の劉玄斎の姿が、そこにはあった。

「しかし、まさかイースト校同士の対決になるとはなぁ。俺ぁてっきり、デュエリア同士の対決になると思ってたんだがよぉ。」
「…私の教え子達だ。当然だろう。」
「クハハハハ、ランク０なんてモンを作った鷹峰の孫はともかく、まさかＥｘ適正の無ぇ出来そこないまで勝ち上がるなんて思わねぇだろ普通。」
「…」

しかし、モニターの映像を眺めながらどこか愉悦を感じさせる劉玄斎の声に対し…
砺波の声はまるで鋭い針のように棘を孕んだまま、監視対象である劉玄斎へとどこまでも厳しく突き刺さるのか。
少々過剰とも思える砺波の厳しい監視の目。ソレは昨日悪事を働いた劉玄斎が、【決島】が終わるまで逃げ出さぬようにしているという名目。
…とは言え、砺波も厳しい声とは裏腹に、その視線を劉玄斎ではなくモニターの方へと固定しているのを見る限り…
彼もまた、遊良と鷹矢の決勝戦を心待ちにしているのは間違いない様子。

「まっ、どっちが勝ってもいいけどよぉ、精々楽しませて貰いてぇモンだぜ。なぁ、砺波よぉ。」
「…Ｅｘ適正の無い出来損ない…か。」
「あぁ？何か言ったかぁ？」
「いや、貴様には関係のない事だ。」

コレより始まる少年達の決戦を前に。
少年達の師となった【白鯨】もまた、その時を待っていた―

―…

―理事長達の為に特別に造られた、大型クルーザー内の特別観覧席。

「結局決勝は鷹峰の孫と天城の試合かい。浜臣の奴もさぞ鼻が高いだろうねぇ、また自分とこのガキ同士で決勝やるんだから。」
「そうですね。砺波理事長の手腕がソレほど優れているということで

しょう。」
「ハッ、なんだい、アタシへの嫌味かいソレは。流石一昨年の【決闘祭】で優勝と準優勝掻っ攫ってったウエスト校の理事長は言う事が違うさね。」
「…はぁ、また始まった。」

そこに、各学園の理事長達…
と言っても、ここにはサウス校理事長の獅子原　トウコと、ウエスト校の理事長の李　木蓮しかいないのだが…
その、歴戦を見てきた者達が、コレより始まる戦いの前に何やら話し込んでいた。

「ま、いいさ。愚痴はこんなとこにしておいてやるよ。それより…どうなるかねぇ。アタシが鍛えてやった甲斐あって、天城は順当に決勝まで進んだが…」
「…我々の進退ですか？」
「あぁ。上の老害共は、さぞ苦い顔して決勝を見ているに違いないだろうが…天城に課せられた『しかるべき結果』ってのが、具体的にはどんなモンかってのはアタシらも知らないからねぇ。」
「…そうですね。」

そう。
彼ら理事長達が話しているのは、自分達の『進退』について。
本来ならば、【決闘世界】に反対されていた天城　遊良の【決島】への出場…いくら昨年度の【決闘祭】の優勝者だからといえ、Ｅｘ適正の無い天城　遊良の祭典への出場を【決闘世界】の上層部は頑なに容認しなかったのだ。
それは遊良が、未だ世界からみればＥｘ適正の無いデュエリストの出来損ないと見られているということ。
…いや、これまでの『常識』を変えたくない一部の上層部の者達による、変革を嫌った頑固で古臭い、時代遅れの年老いた思考。

けれどもソレがまかり通ってしまっていたのは、【決闘世界】の上層部がそれだけ権威を誇っているということでもあり…
更に言えば、そんな上層部の決定を覆したのは紛れも無い、決闘学園の理事長達、歴戦の者達による推薦があったからこそ。
―イースト校の砺波　浜臣。サウス校の獅子原　トウコ。ウエスト校の李　木蓮。デュエリア校の劉玄斎。
元【王者】を含んだ、決闘界における重鎮の猛者。そんな決闘界における重役達が、そろって天城　遊良の出場を推薦したとなれば、ソレは【決闘世界】の決定にすら異議を唱えられる代物となったのだ。
…それは偏に、天城　遊良の力をその目で確かめた者と、そうでない者の差。

Ｅｘ適正の無い天城　遊良の力を認める事に、何の抵抗も感じなかったのは流石は最前線で歴戦を駆け抜けた者達と言えるだろう。
しかし、その代償に…
天城　遊良が【決島】で『しかるべき結果』を出せなければ、遊良を推薦したイースト、サウス、ウエスト、そしてデュエリア校の理事長・学長が、その地位を失ってしまうというのだ。
…普通、決闘学園の理事長達…『決闘界』において多大なる功績を残した歴戦の者達が、たった一人の学生の為にその身を切ることなんて絶対にあってはならないこと。
…常識で考えれば、Ｅｘ適正の無いデュエリストの勝敗に決闘学園の理事長の『クビ』をかけるだなんて正気の沙汰ではない。
けれども、それをも承知で彼らはこんな常識ハズレの負け戦と言われた契約を何のためらいも無く結んだのだ。
果たして…
獅子原　トウコや李　木蓮といった、決闘界の重鎮達はＥｘ適正の無い天城　遊良に一体『何』を見つけたのか。
決闘学園の理事長という、あまりに巨大な地位とも呼べるポストを賭けてでも天城　遊良がこの【決島】に参加する意義があると感じた

彼らの思考など…きっと、彼らにしか理解できないことではあるのだろうが。

そんな、自分達の進退がかかった天城　遊良の決勝を前に…

獅子原　トウコと、李　木蓮へと向かって。

この部屋に居た、『もう1人』の老人が…

「フォッフォッフォ。ま、それもこの試合次第じゃろうて。とりあえず、お主等は肩肘張らんと、気楽に見ておればよかろう。」

トウコと木蓮へと向かって、徐にその口を開き始めたのは悠久を生きたと思わせる白い髪と白い髭に隠れるようにして、椅子に腰掛けていた小柄な老人。

それは超巨大決闘者育成機関【決闘世界】、最高幹部…

プロデュエリスト達からは、『妖怪』と呼ばれて親しまれている翁…

―綿貫　景虎

「ハッ、無責任な事言うもんじゃないさよジジイ。」

「いやいや、戦うのはあくまでも少年達じゃ。年寄りがアレコレ騒いだところで、コレはお主らが勝ってに決めたこと。彼らには何の関係も無い。」

「それもそうなんだけどねぇ…」

「この決勝のデュエルが、『しかるべき結果』に値するのかどうか…そんな重いモン、あんな子どもに背負わせてどうする。いい大人は自分のケツくらい自分で拭くモノじゃよ。」

「ま、アタシは別にサウス校の理事長クビになったところで、食うには困らないから痛くも痒くもないんだが…」

「…私は困ります。我が社の経営に大きく響くので。」

「フォフォッ、木蓮も大変じゃのう。」

「…」

決闘界の重鎮達へと向かって、子ども扱いをするかのような言葉を放てるのも世界では綿貫　景虎ただ一人だけだろう。

それだけの時を生きてきた『妖怪』は、これまで数々の戦いを見てきており…

そんな『妖怪』と呼ばれている翁の目には、これより始まる少年達の戦いは一体どんなモノとして映るのだろうか。

「そう怪訝な顔をするモンではないわい木蓮。儂ら大人がどれだけ裏で喚こうと、子ども達には何の罪も無いのじゃから。」

「それは…そうですが…」

「それに、お主も天城君を信じて自分の首を賭けたんじゃろ？じゃったら四の五の言わんと、あの子を信じて待っておればよい。」

「ハッ、たまには良い事いうじゃないかジジイ。ま、アタシは最初から天城を疑っちゃいないけどねぇ。…あの子の力を直接見たから分かる。あの子の力は、Ｅｘ適正の有無程度で測れるほど単純でもなけりゃ…生易しいモンでもない。」

「フォッフォッフォ。生まれも育ちも才能も互角。とにかく互角の子ども同士の戦い…まるで去年の【決闘祭】の決勝の再現じゃが…どことなく、去年よりも逞しい顔つきになっておるのぅ。フォフォッ、あの子達の戦いは儂も本当に楽しみで仕方ないわい。」

どことなく異質な緊張感に襲われている、ウエスト校理事の李　木蓮を他所に。

綿貫の言葉に共感する部分があったのか、獅子原　トウコはやや気楽な声へとその態度を改め始め…

また、過去から現在まで、長きに亘り子ども達のデュエルを見守り続けてきた『妖怪』の目から見ても…昨年の【決闘祭】の決勝と同じこの対戦カードは、その皺が深く刻まれた顔を綻ばせるに応しいモノとなっているのか。

…どこと無くワクワクしている様にも見える、『妖怪』と呼ばれる翁、綿貫。
そんな、若手に極端に甘いと有名な翁へと向かって。
獅子原　トウコが、再度投げかけるようにその口を開いて…

「…ンで、ジジイはどっちが勝つと思うんだい？」
「そうじゃのう……儂にもわからん。実力も才能もほぼ同じ…鷹峰の孫がいくら規格外とはいえ…しゃ…天城君の方も、Ｅｘ適正が無いとは思えんデュエルを見せてきたからのぅ。…去年は下馬評を覆して天城君が勝った…はてさて、今年はどうなることやら。」
「ハッ、アタシとしては天城が勝つ方が好ましいんだがねぇ。何せアタシが直々に鍛えてやったんだ、これで鷹峰の孫にむざむざ負けたら承知しないさ。…木蓮、アンタはどう思う？」
「…どうでしょう。確かに天城君の実力は、本当にＥｘ適正が無いとは思えないほどに群を抜いていますが…天宮寺君も、昨年から幾度と無く想像を超えるカードを見せてきましたから…」
「そうじゃのう…ランク０なんて儂も驚いたわい。寿命が縮んだらどうするんじゃ。」
「…何言ってんだいこの妖怪ジジイは。ジジイが死ぬとこなんて想像できないさよ。…けど、確かに鷹峰の『ダーク・リベリオン』を持ってるってのに、毎回変化する『Ｎｏ．』とさっき見せたランク０…どれもこれも、一介の学生が持ってていいようなカードじゃない。鷹峰の孫だからって理由じゃあ説明がつかないさね。」
「そうですね…」
「なぁジジイ…鷹峰の孫…あのガキは一体『何』なんだい？」
「さて…何なんじゃろうなぁ…儂にはもうよぅわからん。ま、鷹峰と浜臣の悪ガキどもはなにやら検討がついておるようじゃが…」

数々の修羅場を潜ってきた歴戦の者達。
そんな歴戦の者達の目から見ても、コレより始まる遊良と鷹矢の戦いは、その決着がどうなるのかなど全く持って想像できないのか。

…そう、歴戦を戦いぬいた女傑の目でも。歴戦を見てきた巨木の目でも。悠久を生きてきた妖怪の目でも。
その常人を超えた者達の目と経験を持ってしても、これより始まる戦いの決着の形が全く持って見えてこないのは…きっと、遊良と鷹矢の力が、限りなく拮抗しているからに違いなく。
…たかだか、『先』の地平で競い合っている若きデュエリストの戦い。
けれども目を離すことが出来ない、
そんな、歴戦の者達にも見守られながら…

いよいよ、その時は―

『それではぁぁぁぁぁぁぁぁ!選手入場ぉぉぉ

て。逸る鼓動を抑えていた世界中の見えない観客達が一斉にその歓声を【決島】へと向けて轟かせ…

…それはこの舞台まで到達した、頂点を掴むに相応しい２人の学生を迎え入れるため。

今、全世界からこの天空闘技場へと向けて。その揺れは世界全体に広がり、まるで文字通りこの星全体が震えているかのような振動となりて、歓声を【決島】へと届けるのか。

全世界の轟きが、少年達への歓声となりて…

その歓声は、観客達の声を代弁する実況の声となりて…

―ここに、響く

『ます先に入ってきたのはこの男！昨年度の【決闘祭】の優勝者！デュエリア校の『ギャンブラー』を倒したその勢いは、果たして決勝でも通用するのか！『Ｅｘ適正』が無いというのに、ここまでのデュエルが出来るなど誰が期待していたのでしょう！』

耳を劈く実況の音が、全世界へと向けて掻き鳴らされる。

その声が響いたと同時に、東側のゲートからこの天空闘技場へと向かってゆっくりと歩いてきたのは決闘学園イースト校２年…

―天城　遊良

１０年程前、世界中に『悪い意味』でその名が知られた…世界でたった一人だけのＥｘ適正を持たない少年。

…このＥｘ適正の無い少年が、学生の頂点を決める最後の戦いまで到達することなど世界中の誰もが想定なんてしていなかった。

―何せ、天城　遊良にはＥｘ適正が無いのだ。

Ｅｘ適正が無い―それはどうしようもない出来損ないの証。
誰もが出来て当たり前の事を、誰もが当たり前のように使えるモノを…世界でただ一人だけ出来ない、デュエリストの成り損ない。
昨日の『予選』でも、全勝を貫いて決勝へと駒を進めたというのに…第一試合で、正々堂々とリョウ・サエグサを倒したというのに…
未だどこか棘のある実教の声は、そのまま遊良の実力を疑問視する声となりて世界中に響き渡るのか。
…確かに『予選』の結果と先ほどの『第一試合』を見せつけられたことによって、デュエリストの『出来損ない』という天城　遊良へのイメージは覆りつつある。
けれどもこの広い世界には、天城　遊良はＥｘ適正の無いデュエリストの『出来損ない』という認識を捨てきれずに居る人間がまだまだ沢山、大勢、大多数存在するのだ。
…そう、いくら【決闘祭】優勝という実績があるとは言え。いくら【決島】の予選を3位通過したとは言え、いくらデュエリアの『ギャンブラー』を倒したとは言え…
それでも世界中から向けられる、数え切れない程の疑いの視線は…恐るべき鋭さを持ちながら、遊良へと突き刺され続けているのか。

…だからこそ、戦う。

再び、全世界へと向けて。
己の存在を、見せ付けるために―

『決闘学園イースト校２ねぇぇぇぇぇん、天城　遊良選手うううううう！』

そして…

『続いて現れるは王者【黒翼】の正当なる血統！前代未聞、ランク０という概念をこの世に生み出した規格外の男は、果たして決勝戦では一体何を見せてくれるのか！まさに天才！まさに逸材！天はこの男に、一体幾つの才能を与えれば気が済むのかぁ！次代の【王者】、ここに降臨！』

あまりに過大と思えるほどに、仰々しい言葉を並べられ。

けれども、その言葉があまりに当て嵌まっていると言うことを…この中継を見ている誰もが納得してしまうような、漂ってくるのはそんな風格。

けれども、そんな世界中の期待をその背に受けながら、全く意に介していないかのようにして。

対面側のゲートから、この天空闘技場へと向かってゆっくりと歩いてきたのは決闘学園イースト校２年…

―天宮寺　鷹矢

…【決闘祭】の準優勝者、【決島】予選第１位。

その功績を誰もが認める確かなるモノとしているのは紛れも無く、彼の祖父の名が世界にとってあまりに大きな意味を持っているからに違いなく。

誰もが羨むその出生、エクシーズ王者【黒翼】の孫。しかし鷹矢とっては忌むべき称号、天宮寺　鷹峰の孫。

過去に【ＲＵＭ】という概念を祖父が生み出したように…先ほど行われた『第二試合』で、鷹矢は【ランク０】という概念を生み出した。

…それは鷹矢の思いに反し、祖父に通ずる覇道の道筋。

ソレ故、今の鷹矢の姿はまるで若き日の【黒翼】の姿を思い出させるかのような立ち振る舞いとなりて…
あまりにも堂々と、微かな歴戦を感じさせるその姿を全世界へと向けて届けるのか。

―天上天下、唯我独尊

豪放磊落、天下無双の祖父の姿を彷彿とさせる、そのあまりに堂々とした立ち振る舞いをそのままに…

今年こそ、頂点を掴むため…

覇道を歩むかの如く―

『決闘学園イースト校２ねぇぇぇぇぇん、天宮寺　鷹矢選手うううううう！』

…

しかし、全世界の熱狂の渦とは裏腹に…
戦いの舞台である天空闘技場には、少年達を包む風の音以外に、何の音も聞こえては来ない。

…歓声なんて聞こえない、とても静かな天空闘技場。

この島の外では、世界中が大熱狂の渦を巻き起こしてはいるのだが…

外界と隔絶されている孤島であるが故に、島の中はどこまでも自然の音のみが包み込む、とても穏やかな空間となりて遊良と鷹矢の戦いの始まりを待っているのか。
…あまりに違う島の中と外。世界の熱狂から隔離された異質な空間。
そんな場所にいるが故に、これが決勝の舞台だというのに…遊良と鷹矢の様子はとても落ち着いているようにも見え、緊張なんて微塵もしていない様子が誰の目にも明らかであることだろう。
…確かに高揚はある。けれども高揚より更に強いのは、他の邪魔もなくお互いと戦れるという集中力のみ。

そう、邪魔者が居ない…それはこれより戦う彼らにとっては、あまりに好条件かつ好都合。

これまで散々、戦いの場にいらない野次を飛ばされてきたのだ。
そんな野次なんて、到底聞く耳など無いとはいえ。直接スタジアムに響くのと、間接的にＴＶの前で叫ばれているのでは…遊良も鷹矢も、デュエルに対する集中度が違うのだろう。
…彼等の戦いに異議を唱えたいのならば。彼等の戦いに野次を飛ばしたいのならば。これより始まる戦いの舞台に、直接乗り込むしか方法はなく…
けれども、世界中の見えない観客達の誰であろうとそんなコトなど出来ないからこそ。彼らも何一つ邪魔される事無く、純粋なる戦意のみで目の前の戦いへと臨もうとしていて。

一歩…二歩…

世界中の熱狂に、相反するかのように。
遊良も、鷹矢も。ゆっくりと歩みを進めつつ、お互いに中央部まで近づいて…
そして、特設されたデュエルフィールド…天空闘技場の、自分の陣

地まで到達したかと思うと…

視線を、合わせた―

「もう体は大丈夫なのか？さっきまで立つのもやっとだったんだろ？」
「いらん心配だ。それよりも自分の心配をしていろ。いつから対戦相手の心配まで出来るほど強くなったのだ、遊良の癖に。」
「んだよ、折角人が心配してやったってのに。少しは感謝を覚えろよな、鷹矢の癖に。」
「ふん、今度はルキの事を言い訳には出来んぞ。」
「言い訳なんてするわけ無いだろ。…ルキは大丈夫。さっき自分の目で見てきたからな。」
「うむ。」

交わす言葉は何のしがらみもない、どこまでも日常的なる彼らの声。

…いつもの遊良と、いつもの鷹矢。

何の対立もない。何のしがらみもない。何のいがみ合いもない。
普通、これから学生達の頂点を決める戦いが始まるのだから、多少なりとも戦意がぶつかったり火花を散らしたりしていてもよさそうだというのに…
まさか観客達が見えないからと言って、心が緩みきっている…というわけでは無いにしろ、今の普段通り過ぎる遊良と鷹矢の姿を見れば誰だって、彼らが集中していないのではないかと思ってしまうのではないだろうか。

しかし、これでいい…

―そう、これが彼らの集中の証。

こんな学生達の頂点を決める場におかれても、それでもお互いにお互いのことしか見えていないからこそ。

遊良も鷹矢も、溢れ出る言葉が『普段』のモノとなっているのであり…

それはお互いが、お互い以外を見る必要がないからこそ。

生まれた時から隣にいる、この家族よりも近い場所で育ってきた遊良と鷹矢の間に流れる雰囲気は、世界中のモノとはかけ離れた『いつもの』雰囲気。

頂点を決める場所に、たった2人だけしかいない…

遊良も、鷹矢も、お互いにお互い以外を見なくてもいい。こんな極限の場におかれているというのに、彼ら2人に障害などない。

それは果たして、彼ら2人に『普段通り』を振る舞わせるという…どれだけ深い集中を、遊良と鷹矢に与えているのか。

昨年よりも深い集中の元、遊良も鷹矢もお互いにお互いを倒すことしかその頭の中には存在せず…

けれども彼らに確かにあるのは、お互いがお互いには絶対に負けたくはないという…意地を張り合う子どものような、意思と意地のぶつけ合い。

「だが、去年とは違い随分と自信に溢れているではないか。」

「当たり前だろ。去年はまだお前が一歩先に行ってたけど…でも、今は互角だ。俺も、【決島】で色んな相手と戦って、そして強くなった。」

「だろうな。予選の前と顔つきが違う。…相当の強敵と戦ってきたのだろう、言われずともわかる。」
「それはお前も同じだろ?さっきの鍛冶上さんとのデュエルだって、負けるんじゃねーかって思ったけど…それでもお前は勝った。自分の力じゃなくたって、それでも俺と戦う為に。」
「ふっ、去年と逆だな。去年のお前は本当ならば準決勝で負けていた。そして俺も、本来ならばさっきの第二試合で負けていた…」
「あぁ…世界はまだまだ広いってことだ。俺達の知らないところに、まだまだこんなに強いデュエリストがゴロゴロいる…」
「うむ。」

昨年と、対極―
そう、まさにそれは昨年の【決闘祭】の彼らとは対極の立ち位置。『己の力』のみで決勝の舞台まで駆け上がってきた遊良と、『己以外』の力に助けられ決勝の舞台まで進んだ鷹矢。
けれども鷹矢の勝利が自分の力によるモノでなかったとしても、そんなコトは今の遊良と鷹矢にとってはどうでもいいこと。
この決勝の舞台に、二人で勝ち進む…
その過程がどうあれ、二人がお互いに誓い合った『約束』を守り、こうして頂点の舞台で顔を合わせたという結果だけが、今の現実を作り上げているのだ。

「だけど、こうしてお互いに決勝まで進んだんだ。俺もお前も、去年よりも数段強くなった…だから見せてやるよ。去年とは違う俺のデュエルを。」
「うむ。俺も見せてやろう。去年の俺よりも強くなった俺のデュエルを…去年のようには行かぬということを。」

だからこそ、過程がどうあれ結果がすべて。
それはこの一時だけのことでは無い。これまでも、そしてこれから

先も。ずっと続いていく戦いの道筋において、如何なる過程を踏んでも最後の最後に勝った方が勝者と呼ばれるのだから。
それを誰よりも理解している遊良と鷹矢の心には、これより始まる戦いに懸念など無く…
世界中から見られていると言うのに、彼らの間に交わされる会話は良くも悪くもいつもの通り。観客達の姿が見えないからか、彼らの間に流れる雰囲気は紛れも無く、いつもの遊良といつもの鷹矢。

ソレ故…

「けどこれだけは去年と同じだ！俺の持てる全力で…お前を倒す！」
「うむ！」

―跳ねる声は対決の証。弾ける声は開戦の狼煙。

もう既に、遊良も鷹矢も臨戦態勢。
デュエルディスクを展開し、デッキが現れ手札を揃え…お互いのデュエルディスクがデュエルモードへと切り替わると、ソレに応じて世界中から歓声が沸き立ち始めるのか。

今―

全世界の学生達の、その頂点を決めるための戦いが…

「行くぜ鷹矢…お前にだけは…」
「ゆくぞ遊良…お前にだけは…」

遊良と鷹矢…

二人の、今年の『約束』の舞台が…

「お前にだけは絶対負けねぇ！」
「お前にだけは絶対負けん！」

今、始まる―

『最終試合、開始いいいいいいいいいいいい！』

―デュエル!!

ｅｐ９０「【決島】、決勝―後編、激闘の果てに」

「行くぜ鷹矢…お前にだけは…」
「ゆくぞ遊良…お前にだけは…」

今年も始まる…

遊良と鷹矢…

二人の、今年の『約束』の舞台が…

「お前にだけは絶対負けねぇ！」
「お前にだけは絶対負けん！」

―デュエル!!

先攻はイースト校２年、天城　遊良。

「俺のターン！魔法カード、【トレード・イン】発動！【クラッキング・ドラゴン】を捨てて２枚ドロー！続けてフィールド魔法、【チキンレース】も発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！魔法発動、【成金ゴブリン】！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！よし、【闇の誘惑】を発動だ！２枚ドローして、【闇の侯爵ベリアル】を除外！」

デュエルが始まってすぐ。

いつもの様に、いつもの如く…始めから全開全力で、デッキをフル回転させにかかる遊良。

それは昨日の予選から全く衰える気配を見せない、天城　遊良独自のスタイル。

猛者ばかりの【決島】において、これ程までにドローに全力を賭けるデュエリストなど、彼以外には存在せず…

その、終わらぬドローによって最初からデッキをフル回転させる、この動きこそが自分のデュエルなのだと言わんばかりのそのドローは…

全世界に見られているというプレッシャーをまるで感じない、どこまでも遊良の自然体と言えるだろうか。

「【手札抹殺】を発動！手札を全て捨てて４枚ドロー！」

「ふっ、始めから飛ばしているではないか。５枚捨て５枚ドロー。」

「当たり前だ、お前相手に出し惜しみなんてするわけないだろ。【死者蘇生】発動！墓地から【イービル・ソーン】を特殊召喚して、そのまま【イービル・ソーン】の効果発動！【イービル・ソーン】リリースし、相手に３００ポイントのダメージを与えてデッキから【イービル・

ソーン】２体を攻撃表示で特殊召喚！」

―!!

【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００

鷹矢　ＬＰ：５０００→４７００

そして遊良の場に現れる、歪で奇怪な２本の植物。
【成金ゴブリン】で１０００回復しているため、たった３００のダメージなど鷹矢にとっては痛くも痒くも無いとはいえ…
それでも先攻１ターン目からダメージを負わされたことを、鷹矢はどう捕らえるのだろう。
どれもが特定のカテゴリには属さぬ、寄せ集めにも似たデッキ。しかし多量のドローによって無理矢理にフル回転を始める、恐るべきキレを見せるデッキ。
そんな、何が飛び出してくるのか全く分からないであろう遊良のデッキの、激しすぎる動きを静かに見据え。鷹矢もまた、身構えるような構えを取り始め…

「ぬぅ、リリース素材が２体…来るか…」
「行くぞ！永続魔法、【冥界の宝札】を２枚発動し、俺は【イービル・ソーン】２体をリリース！レベル８、【モザイク・マンティコア】をアドバンス召喚！」

―！

【モザイク・マンティコア】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

現れたのは継ぎ接ぎされた、禍々しく歪んだ合成獣。
レベル８の最上級モンスターだけあって、高い攻撃力を誇るモンスターではあるのだが…
しかし、攻撃が許されてはいない先攻１ターン目に呼び出すようなモンスターとしては、場を制圧するような特殊な効果は備えておらず。
…ただの、攻撃力高いモンスター。
Ｅｘ適正が無く、Ｅｘデッキが使えないことから、好きなモンスターを自由なタイミングで呼び出す事を遊良は出来ない。
ソレ故、これまで遊良は数多の他人から言われようのない蔑みを受けてきた。
しかし…
たった今遊良が呼び出した、この大型モンスターを見て。
鷹矢は更にその視線を鋭いモノへと変え始め、より一掃身構えた手に力を入れ始めたではないか。
そう、遊良が『先攻』の１ターン目で、このモンスターを呼び出したという…
ソレにこそ、意味があるのだから。

「そして【冥界の宝札】２枚の効果で４枚ドロー！」
「マンティコア…次のお前のターンに、リリース素材を復活させるモンスターか。」
「あぁ、次の俺のターン、全力で攻め込ませてもらうためにな。」
「…この俺が、ソイツを次のターンまで残すと思っているのか？」
「思ってないさ。だから全力で守らせてもらうだけだ！俺はカードを３枚伏せてターンエンド！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：５→１
場：【モザイク・マンティコア】
魔法・罠：【冥界の宝札】、【冥界の宝札】、伏せ３枚

フィールド：【チキンレース】

先攻1ターン目から、自分の魔法・罠ゾーンを全て埋めるほどのデュエルの進行。

それは遊良が、最初から全力で鷹矢に立ち向かうという決意の現れでもあり…

そのあまりに激しい展開は、遊良にＥｘ適正が無いというデメリットを全く持って感じさせないほどの勢いとなりて、今はっきりと全世界へと見せ付けるのか。

…何がＥｘ適正の有無か。たかだかＥｘデッキからモンスターを自由に呼び出せない程度で、自分は弱者になんてならない。

遊良のあまりに堂々とした立ち姿が、まるで『そう言っている』かの如く。

未だ遊良の力を認めようとしない、世界に多々いる者達へと向かって…遊良の無言の宣言が、世界中へと映し出され…

そして…

遊良が紛れも無い強者であることを、鷹矢も嫌でも知っているからこそ…

「ならばお前の考えなど蹴散らしてくれる！俺のターン、ドロー！」

実力の『壁』を更に超え、その『先』の地平にまで到達した遊良を相手に。鷹矢もまた、始めから全力で向かい合おうとしているのか。

勢いよくデッキからカードをドローし、一枚増えた手札を見据え…

「…どうせお前の事だ、【デモンズ・チェーン】でも伏せてあるんだろう？魔法カード、【ナイトショット】発動！その左端の伏せカードを、使わせずに破壊！」

発砲―

ターンが変わって即座に響き渡ったのは、紛れも無い発砲音だった―

鷹矢の好んで扱う魔法。相手の伏せた策を、使わせること無く破壊してしまう無慈悲なる銃声。

…撃ちぬく弾丸、死角からの一発。

そして鷹矢の宣言通り―

破壊されたのは、遊良もよく使用している悪魔の鎖、【デモンズ・チェーン】だったではないか。

「くそっ！相変わらず、勘のいい奴だな！」

「うむ！これで思う存分動けるというモノ！【チキンレース】の効果発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！そして【死者蘇生】を発動！墓地から【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚し、その効果で【シルバー・ガジェット】を特殊召喚！更にシルバーの効果で【レッド・ガジェット】を特殊召喚！イエローを手札に！」

―!!!

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【レッド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００

そして即座に並び立つは、鷹矢お得意のガジェットモンスター達。

金と、銀と、赤―

その彩色溢れる歯車の兵士たちが一瞬で場に揃う場面は、もはや天宮寺　鷹矢の代名詞とも言える程に世界が見慣れた、あまりに安定した磐石の展開。

…良くも悪くも、戦い慣れた相手同士。鷹矢には、遊良の力が良く分かっている。

遊良の伏せた罠を見抜いたその嗅覚もそう。遊良の思考を読み、これまでの経験から遊良が何を狙っているのか…

ソレを見抜き、ソレを超え、そうして優位に立つのだと言わんばかりの勢いで、鷹矢も激しく展開を始めて。

「一瞬でガジェットが3体…相変わらず、馬鹿げた展開力だなお前も！」

「うむ！だがこんなモノではない！魔法カード、【モンスター・スロット】発動！場のレベル4、【ゴールド・ガジェット】を選択し、墓地の【ブリキンギョ】を除外し1枚ドロー！…よし、俺がドローしたのはレベル4の【無限起動ロックアンカー】だ！」

「ロックアンカー…レベルを8にしてくる奴か。まさかお前がレベルチェンジ戦術を使ってくるなんてな。」

「ふっ、いつまでも昔の俺とは違うという事だ！【モンスター・スロット】の効果で、今ドローした【無限起動ロックアンカー】を特殊召喚！そしてロックアンカーの効果発動！手札から【イエロー・ガジェット】を…」

「それなら効果を使わせなきゃいいだけだ！ロックアンカーの特殊召喚成功時！罠カード、【奈落の落とし穴】発動！ロックアンカーを破壊し除外する！」

―！

しかし、逆もしかり―

…良くも悪くも、戦い慣れた相手同士。遊良には、鷹矢の力が良く分かっている。

鷹矢が召喚してくるであろうモンスターに、照準を合わせていたその先見もそう。鷹矢の思考を読み、これまでの経験から鷹矢が何を

狙っているのか…
ソレを見抜き、ソレを超え、そうして優位に立つのだと言わんばかりの勢いで、遊良も鷹矢に好きにさせる気などなく。
後続を呼び、レベルを上昇させる効果を持った【無限起動ロックアンカー】が…狙っていたレベルアップを果たせずに、跡形もなく爆散してしまって…

「…ロックアンカーに照準を合わせてきていたのか…」
「当たり前だろ。つーか、俺に黙ってそんなモンスター準備してやがったのかお前は。第二試合で見ておいたから良かったけど。」
「…お前との決勝まで取っておこうと思ったのだが…相手が相手だったからな、そう簡単にはいかなかっただけだ。まぁいい、召喚に成功したため【イエロー・ガジェット】を特殊召喚してグリーンを手札に。」
「けど、これでお前はランク8を出せない。どうする？先生の『ダーク・リベリオン』を出すか…後のお前のランク4の主力はカステルにダイヤウルフにアイアン・ヴォルフにヴェルズ・ビュート…だけど去年と同じような主力じゃ、もう俺には勝てないぜ？」
「ぬぅ…」

王者【黒翼】の孫に向かって、あまりに堂々と放たれるは自信に溢れた遊良の言葉。
…昨日の予選でも、鷹矢を研究し、対策してきたデュエリストは沢山いた。
何せ王者【黒翼】の孫―
幼少の頃より、各地の大会を幼いながらも荒しまわり…初等部、中等部と、その年代における決闘市の学生タイトルを総ナメにし続け…何より有名なのは、昨年度の【決闘祭】準優勝と、今年の夏休みにプロも参加するレベルの高い大会を荒しまわっていたというその噂。
だからこそ、これまでそれだけ派手に結果を残してきた鷹矢を、【決島】に参加する選手達が対策してきたのはある意味で当然であり…
そして、その相手の全てに。鷹矢は真正面から打ち勝ってきて、真

正面から力で捻じ伏せて来た。
…それはまるで、祖父である天宮寺　鷹峰が歩んできた覇道そのモノ。
立ち塞がる全ての邪魔者を、己の力で蹴散らし爆進する…誰であろうと止められない、本物の強者にしか出来ない生き方。

しかし…

そんな他人の行う対策と、遊良が見ている世界は根本からして違う。
そう、他人が、鷹矢のこれまでのデュエルを研究し、理論的に対策を講じてくるのならば…
遊良は、鷹矢のデュエルのみならず、性格から思考、果ては日常的な癖をも感覚的に理解して、そうして反射的・直感的に向かってくるのだ。
それは誰にも真似出来ない、天宮寺　鷹矢への深い理解。
これまで幼馴染として、長い間共に過ごして来たが故の…遊良にしかできない、鷹矢への対策。

「…去年と同じでは勝てないと言ったな？ならばコレではどうだ！俺はシルバーとレッド、２体のガジェットでオーバーレイ！」

けれども、そんな遊良の対策を更に力で上回らんと。
鷹矢の叫びに呼応して、２体のガジェット達がその身を光へと変え天に舞い始め…
鷹矢の持つ、エクシーズのＥｘ適正の導くままに。足元に広がる銀河の渦より、この天空闘技場の大空へと羽ばたきしは…

「エクシーズ召喚！来い、ランク４！【竜巻竜】！」

――！

【竜巻竜】ランク４
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／２０００

…現れしは暴風纏いし、吹き荒ぶ突風と疾風の化身。
吹けよ嵐、暴れよ竜巻―
速攻魔法、【サイクロン】がモンスターとして具現化したかの様なその姿は…ランク４を多用する鷹矢が、好んで使っているエクシーズモンスターの１体。

「トルネード…【サイクロン】内蔵モンスターか！」
「うむ！【竜巻竜】の効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、【チキンレース】を破壊する！まだだ！【アイアンコール】発動！墓地から【シルバー・ガジェット】を、効果を無効にして特殊召喚！そのままゴールドとシルバー、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ギアギガントＸ】！」

―！

【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

続けて…
鷹矢の場に現れたのは、天宮寺　鷹矢というデュエリストを現すに相応しいとさえ言われる…鷹矢のデッキの先発、先鋒、鋼鉄なりし機械巨人。
唸る豪腕、轟く体躯―
鷹矢のデュエルの始まりを示す、その駆動音を猛りへと変え。戦い慣れた遊良へと、いつもの様に向かい合う。
「この情況での【ギアギガントＸ】？…けどソイツじゃ、【モザイク・

マンティコア】は突破できないってのに…」

けれども、どれだけ戦意の駆動音を唸らせようと。

たった今遊良が言った通り、この状況下での【ギアギガントX】のエクシーズ召喚は些か戦法としては物足りないのではないかとさえ思える展開。

一体、何を企んでいるのか。

思考停止で、ただとりあえずいつもの様に【ギアギガントX】をエクシーズ召喚した…というわけでは、断じてないということを遊良も理解しているからこそ。

世界中に蔓延する興奮とは裏腹に、どこまでも冷静な思考の元、遊良は鷹矢の狙いを解析し始め…

…しかし、そんな遊良の疑問を意に介さず。

まるでこの展開こそが、自分にとっての最適解なのだと言わんばかりの確固たる信念と迷い無き眼。

そう、どれだけ周囲に疑問に思われようとも関係ない。鷹矢は、全く崩れる事無くこう叫ぶのだから。

「いや、これでいいのだ！【ギアギガントX】の効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い、デッキから【穿孔重機ドリルジャンボ】を手札に加える！そして俺はまだ通常召喚しておらん！今手札に加えた、【穿孔重機ドリルジャンボ】を通常召喚！」

――！

【穿孔重機ドリルジャンボ】レベル４

ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　１０００

現れたのは、巨大なるドリルを２つも構えた屈強なりし重機の１

体。
…機械族でレベル４、属性も地属性でとはいえ。それはこれまでの鷹矢のデッキには、入ってすらいなかったはずのモンスターなのだが…

「ドリルジャンボ…ソイツも見た事無いモンスター…」
「俺のレベルチェンジ戦術が、ロックアンカーだけだと思うな！ドリルジャンボの効果発動！召喚成功時、俺の機械族のレベルを１つ上げる！」

―！

【穿孔重機ドリルジャンボ】レベル４→５
【イエロー・ガジェット】レベル４→５

叫ばれるは己を超える、鷹矢の新たな戦術の狼煙。
レベル４を多用する鷹矢が、レベル４にこだわりながらもランク４という枠組みを超えるために編み出した…【決島】で確立した新たな戦術であり、去年までの鷹矢とは一戦を画す、新たな鷹矢の強さの境地。

…それはある意味、祖父の生み出した戦術に通ずるような、擬似的なランクアップ戦術とも言える戦術。

そう、様々なランクを多用しようとすれば、それだけメインデッキのバランスが崩れる。そうなる事を嫌って、ランク４という縛りの中で強さを磨いてきた鷹矢の…
その殻を一つ破らせたのは、何を隠そう他でもない…

「レベル５のモンスターが２体!?ランク８だけじゃなかったのか！」
「当たり前だろうが！俺はレベル５となったイエローとドリルジャン

ボで、オーバーレイネットワークを構築！」

―オーバーレイネットワークを、構築

それは、およそこの世界のエクシーズ召喚のためのモノではない口上。

そう、この世界においては、鷹矢にのみ許されたその宣言の導くままに…

「現れろ、『Ｎｏ．６１』！怒り猛るは火山の如く！燃え上がる灼熱をその身に宿し…怒りを噴火し目を覚ませぇ！」

…己の頭の中に浮かぶイメージと、天に怪しく輝くその数字を、Ｅｘデッキにて眠る『白紙』に焼き付け。

今ここに呼び出されようとしているのは、果たして一体どんなモンスターなのか。

鷹矢の強さの殻を破り、一つ上の段階へとその強さを押し上げた根源…

その、この世界においては鷹矢しか持っていない、特別なエクシーズモンスターが…

今、ここに―

「エクシーズ召喚！来い、ランク５！【Ｎｏ．６１ヴォルカザウルス】！」

―！

【Ｎｏ．６１ヴォルカザウルス】ランク５
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１０００

溶岩と共に現れしは、燃え上がりし火山恐獣。
焼けつく咆哮、轟く爆風―
その左胸に、『Ｎｏ．』の証である数字…『６１』の定めを刻んだ、灼熱に燃え盛る太古の獣。
先の第二試合において、【ＦＮｏ．０　未来龍皇ホープ】へとその姿を変えていたのだが…
鷹矢がこの世界に一時的に呼び出した『未来皇ホープ』が消えた事により、その姿を再び『白紙』へと戻したのだ。
そんな、鷹矢の力を更なる段階へと押し上げた…
特別なるエクシーズモンスターが、世界へと向けて荒れ叫ぶ。

「また新しい『Ｎｏ．』…一体どれだけ変化するんだよ！」
「そんな事、俺の知ったことではない！ゆくぞぉ！俺は『Ｎｏ．６１』の効果発動！」
「ッ、来るか!?」
「うむ！オーバーレイユニットを一つ使い…【モザイク・マンティコア】を破壊し、元々の攻撃力分のダメージをお前に与える！」
「なっ!?」
「喰らえ遊良ぁ、溶岩濁流！」

―！

火山恐獣より放たれた、灼熱の大波が遊良へと襲い掛かる。
…それは避けようにも避けられない、あまりに激しい溶岩の高波。
それだけではない。モンスターを破壊するだけでは飽き足らず、なんとその攻撃力分のダメージをも相手に与えるその凶悪な効果は…
まさに変幻自在、予測不可能な『Ｎｏ．』の、決して逃れられぬ怒涛の攻撃と言えるのであって―

けれども…

「なんてな！ソレも想定済みだ！速攻魔法、【禁じられた聖衣】発動！【モザイク・マンティコア】の攻撃力を６００下げ、効果破壊耐性を与える！」

「何ぃ!?」

【モザイク・マンティコア】レベル８
ＡＴＫ／２８００→２２００

刹那―
そう、【モザイク・マンティコア】が溶岩濁流に飲み込まれんとした、その刹那の瞬間―
遊良の場から放たれた、神に使用を禁じられた聖なる衣が合成獣の尾に絡みついたかと思うと…
なんと【モザイク・マンティコア】は、溶けてしまうほどの熱を持つ溶岩の高波を、その身一つで耐え切ってしまったではないか。

灼熱の濁流をその身に受けても、なお原型を留める合成獣。

特殊な金属で構築された、その体がやや溶けかけているようにも見えるものの…それでも、『Ｎｏ．』の激しい効果を受けても倒れぬその姿は、まさにＥｘモンスターにも引けをとらぬ大型モンスターと言え…

「馬鹿な…変幻自在の『Ｎｏ．』を読んでいただと？俺でさえ、『その時』にならんと『何』が出てくるのか分からんと言うのに…」
「読んでたっていうか、そんな気がしてただけだ。…どうせお前の事

だ、『破壊』と同時にダメージを効率よく与えようとしてくるんじゃねーかってな。」
「む…」

それは鷹矢を研究してきた、他の学生達よりも深い理解。鷹矢の戦術を見通してきた、竜胆　ミズチよりも鋭い読み。
鷹矢でさえ、その時になってみないと何が出てくるのか分からない『Ｎｏ．』の変化を…使い手である鷹矢よりも先に見抜き、そしてソレに対して手を打っておくなど、普通であれば出来ない事だというのに…
鷹矢の行動パターンを見据え、鷹矢の戦術パターンを感じ、鷹矢の展開パターンを先読みし―
残っていた最後の伏せカードを、まさに『この時』の為に用意していたという遊良の守りは、まさに磐石の一言と言えるだろうか。
そう…いくら『Ｎｏ．』がＥｘデッキに戻る度に、その身を『白紙』に戻すとは言え…
新たに場に出すとき、それを創造しているのが鷹矢自身なのだから、だったら何が出てくるのか分からない『Ｎｏ．』であろうとも、読めないことなど無いのだという遊良の狂った正確なる暴論。
…幼馴染は伊達じゃない。
この世の、誰よりも鷹矢を理解している自負が遊良にはあるからこそ。
鷹矢が理解するよりも、一歩早く鷹矢の創造しようとしたモノを見抜き…考えるよりも先に、鷹矢の気配を感じ取って読みきるという、遊良にしか出来ない経験からくる予測なのであって。
「変幻自在だろうが何だろうが、創造するのがお前なら俺に『Ｎｏ．』は通用しない！去年と同じ戦術じゃ、俺には通用しないって言っただ…」
「ならばその台詞、そっくりそのままお前に返してやろう！俺とて、お前が『そのカード』を使ってくると思っていたのだからな！」

「何!?」
「これで【モザイク・マンティコア】の攻撃力は、【ギアギガントX】をも下回った！バトル！『Ｎｏ．６１』で、【モザイク・マンティコア】を攻撃！」

それでも―
遊良の読みに反発するように、鷹矢の方もまるで遊良が、『こう動く』事を予測していたかのように即座に攻撃を宣言して。
…そう、先に攻撃力の劣る【ギアギガントX】を展開したとは言え、鷹矢にもここまでの道筋は実は見えていた。
それは遊良が、単純に破壊耐性を与えるのではなく…攻撃力を下げる【禁じられた聖衣】を使ってくると踏んでいたからこそ。鷹矢は何の迷いもなく、攻撃力の劣る【ギアギガントX】を展開したのだ。
鷹矢の宣言が天に轟き、『Ｎｏ．６１』が天に叫び―
そのまま、火山恐獣が一目散に遊良の場の合成獣へと襲いかかり始め…

しかし…

「甘い！墓地の【サクリボー】のモンスター効果！【サクリボー】を除外して、【モザイク・マンティコア】は戦闘では破壊されない！」
「むっ、【サクリボー】!?…チッ、【手札抹殺】か、相変わらず用意のいい奴だ！だがダメージは受ける！続けて【ギアギガントX】で攻撃！」
「２体目の【サクリボー】の効果！戦闘破壊の身代わりに！」
「なっ、２体目だと!?」

遊良　ＬＰ…３０００→２７００→２６００

火山恐獣の熱閃と、機械巨人の鉄腕を受けてもなお倒れない、歪なりし合成獣。
…ダメージを負ってしまうとは言え。遊良もまた、鷹矢がこう攻撃してくると読んでいたのか。
鷹矢の攻撃までをも見通して、予め墓地に送ってあった『２体』の【サクリボー】が身代わりとなりて…【モザイク・マンティコア】を、戦闘破壊から完璧に守りきって。

「対象耐性に効果耐性…そして戦闘耐性…ぬぅ、硬い…」
「当たり前だろ。お前相手に、俺が守りきるって言ったんだ。そう簡単にやらせるかよ。」
「攻撃回数まで読んでいたとは…仕方ない、ダメージを返しただけでも良しとしてやる。バトルフェイズを終了し、【エクシーズ・ギフト】発動。【ギアギガントＸ】と『Ｎｏ．６１』のオーバーレイユニットを１つずつ使い２枚ドロー。【強欲で貪欲な壷】も発動。デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー。…カードを２枚伏せて、ターンエンドだ。」

鷹矢　ＬＰ：４７００→３７００
手札：６→２枚
場：【ギアギガントＸ】
【Ｎｏ．６１ヴォルカザウルス】
【竜巻竜】
伏せ：２枚

互角―
まさに互角のぶつかり合い。
お互いに、どこまで見えているのかと思える先見の凌ぎ合いをぶつけ合い、そうしてお互いに拮抗したまま長い長いターンが終わる―
…これ程までの攻防を、学生が行えるなんて―
もし今の攻防を見て、つまらないだとか無駄が多いとか、そんな無

粋なる言葉を述べる観客が居たら…きっと、その観客自体が嘲笑されることだろう。
何せ今の攻防は、遊良も鷹矢も他人では決して見通せないほどに深い相手の思考の領域まで読んでいたからこそ…今の攻防が繰り広げられ、そして今のぶつかり合いが繰り広げられたのだ。
だからこそ…
思考の果て、先見の顕現…あまりに深いところで繰り広げられた、今の攻防の意味を理解できる者の目には…
遊良と鷹矢の行った今の鬩ぎ合いが、ただただ恐ろしいモノとして映っており…

「俺のターン、ドロー！このスタンバイフェイズに【モザイク・マンティコア】の…」
「ならばその前に【竜巻竜】の効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、【冥界の宝札】１枚を破壊する！」
「ッ、早速動いてきたか…」
「うむ。アドバンス召喚する度に手札が馬鹿みたいに増えていくなど、容認できるわけが無かろう。」
「…【モザイク・マンティコア】の効果で、墓地の【イービル・ソーン】２体を効果を無効にして特殊召喚。」

【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／３００
【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／３００

行われているのは、幼い感情にまかせたぶつかり合いでは断じてない。
一手一手が、互いのリソースを削り合うという…あまりに細い綱渡りを、何の恐れもなく互いに繰り広げ続けているという、にわかには信じられない読み合いの嵐。

…例え、対処できるのが僅かだけでもいい。
その後の展開を見据えつつ、今のこの時の僅かな妨害が、後から大きな逆転の一手になるのだと。
お互いが、お互いに何をしてくるのか。これまで過ごして来た日常から、それを的確に予測できるからこそ…
遊良も鷹矢もお互いに、一歩も引かぬ削り合いを繰り広げていて。

「…けど、それだけじゃ止まってやるもんか！魔法カード、【アドバンスドロー】発動！【モザイク・マンティコア】を墓地に送って２枚ドロー！続けて速攻魔法、【大欲な壷】発動！【闇の侯爵ベリアル】、【サクリボー】２体をデッキに戻して１枚ドロー！【トレード・イン】も発動！【デモニック・モーターΩ】を捨てて２枚ドロー！…よし！【冥界の宝札】を発動！」
「くそっ、３枚目を引いたか！」
「行くぞ！２体の【イービル・ソーン】をリリース！レベル８、【鉄鋼装甲虫】をアドバンス召喚！」

―！

【鉄鋼装甲虫】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００

再び加速し始めた遊良の場に現れたのは、鋼鉄纏いし堅牢の虫、重甲なりし鉄の蟲。
…これは遊良が幼少の頃に使っていた、効果を持たぬ通常モンスター。
そう、高い攻撃力を持つとはいえ、初戦は子どもの使うような通常モンスターなど、世界中の観客達の大多数からすれば嘲笑にすら値する代物ではあるのだが…
しかし、このデュエルの『本質』を理解できる一握りの者達からすれば…

「アドバンス召喚成功時！【冥界の宝札】２枚の効果で４枚ドロー！」
「チィッ、手札が減らん！」
「まだまだぁ！手札を１枚捨てて魔法カード、【ワン・フォー・ワン】発動！デッキから【サクリボー】を特殊召か…」
「ならばその前に罠カード、【戦線復帰】発動！墓地から【ゴールド・ガジェット】を守備表示で特殊召喚する！」
「けど止まるもんか！【サクリボー】を特殊召喚し、速攻魔法【地獄の暴走召喚】発動！デッキから【サクリボー】２体を特殊召喚！」

―!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

「俺が選択するのは【ゴールド・ガジェット】！デッキからもう一体の【ゴールド・ガジェット】を守備表示で特殊召喚！…３体の素材…来るか!?」
「残念だけどハズレだ！俺は３体の【サクリボー】をリリース！」
「【二重召喚】を使わないだと!?まさか!?」

世界中の誰とも違う反応を見せた鷹矢に対し、高らかに天に叫ばれる遊良の宣言。
…召喚権は既に使った。【二重召喚】を使わなければ、Ｅｘデッキの使えない遊良はもう大型モンスターを出す事など出来ないと言うのにも関わらず…

―小さく奮える悪魔達の、その身に纏うは渦ではなく。

「見せてやるよ！これが【決島】に来てから手に入れた…俺の切り札の『１枚』だ！運命を切り裂く英雄よ！青き誓いをその身に刻み…」

「ッ、その口上は…」

世界に轟くその口上。かつて世界の頂点にいた、１人の『鬼才』が放った叫び。

３体のリリースを要求してはいても、これはアドバンス召喚とは違う、特殊召喚のエフェクトであり…

それはこの【決島】に来てから手に入れた、新たな切り札を呼び出すためのエフェクト。

高らかに天に掲げられしその手には、一片の迷いも淀みもなく…

天高く聳える天空の塔の、その最も高い場所で、遊良の叫びが空を裂く。

「天を喰らいし覇者となれ！来い、レベル８！」

今、悠久の時を経て。

熱狂に湧く全世界へと、ソレは高らかに響くのみ。

この島の最も高い場所で、世界で最もアツい場所で…

天を揺るがすその叫びと、天に轟く威光と共に…

それは、現れる―

「【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！」

―！

震える天を切り裂いて、降臨せしは飢えの滴り。
血霧と共に降臨し、剥き出しの牙を刃へと変え…混沌渦巻く天より出でしは、竜頭を纏いし運命の英雄。
纏いし竜の咆哮で、双翼を広げ地に降りることなく空に佇み。下界を見下ろすその瞳は、一体何を映しているのか。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

それは鷹矢のエクシーズモンスター達を前にしても、決して慄かない正真正銘の英雄の姿。
遥か昔、世界が鬼才の戦いに熱狂していた頃…
運命を貫く英雄と、運命を引き千切る英雄と共に、３体の【紫魔】の象徴として世界中が見惚れていたという…
世界で最も有名な、『Ｄ』の英雄の最たるエース。

「そして【サクリボー】３体の効果で３枚ドロー！」
「【紫魔】だった男のカード…遊良め、【王者】のカードを使ってくるとは…」
「お前だって先生の【黒翼】持ってるんだからイーブンだろ？…行くぞ！Ｂｌｏｏ―Ｄの効果発動！１ターンに１度、相手モンスター１体をＢｌｏｏ―Ｄに装備できる！俺が選択するのは…『Ｎｏ．６１』！」
「ぬぅ!?」

―！

竜頭構えし運命の英雄が、飢えと共に襲い掛かる。
…無慈悲にも相手モンスターを喰らい尽くす、この暴食の竜の飢えを止められるモノなど存在するのだろうか。

否―
今この場においては、誰であろうと止められない。
運命の英雄の放つ、【王者】の如し威圧によって。今、鷹矢の全てのモンスター効果は無効となっているのだから。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００→３１５０

「まだまだぁ！【貪欲な壷】発動！【サクリボー】３体、【イービル・ソーン】、【モザイク・マンティコア】をデッキに戻して２枚ドローッ！【成金ゴブリン】も発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！」
「ッ、相変わらず馬鹿げたドローだ…こうなると手がつけられん…」
「よし！【二重召喚】を発動して、速攻魔法【帝王の烈旋】発動ぉ！俺は【鉄鋼装甲虫】と…お前の、【ギアギガントＸ】をリリィースッ！」
「っ!?」

あまりに目まぐるしく入れ替わる、遊良の手札と遊良の場。
果たして加速し始めた遊良の展開を、追えている者は観客達の中に一体どれだけ居るのだろう。
あまりに激しく、あまりに流れ、まるで止まらぬ気配を見せぬ…Ｅｘ適正が無いからと見下されてきた、天城　遊良の怒涛のデュエル。
一度始まったら止まらない。その加速を続ける遊良の勢いは、まさに壊れた暴走列車の如く。
ドローにドローとドローの連鎖で、更なるドローでドローを繰り返すその勢いは…到底、Ｅｘ適正が無いという『世界の常識的な弱者』には、絶対に出来ないデュエルであるはずだというのに。
…まさかＥｘ適正の無い男が、【黒翼】の孫相手にここまでのデュエルを見せてくるなんて。
それは実力の高い者ほど思い知らされる事実。

プロの中でも…いや、プロのトップランカーになればなるほど嫌でも理解してしまうコト。

―Ｅｘデッキを使ってないのに、こんなにも恐ろしいキレを天城遊良は魅せるのか…

そう、今まで気にも留めなかった…今まで蔑みすらしていたＥｘ適正の無いデュエリストの出来損ない…

そんな男に、背筋が凍るほどの寒気を感じさせられることになるなんて―、と。

続けて、呼び出されしは―

「来い！レベル１０！【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】！」

―！

―その時…

『何か』が、宙から降ってきた―

それは深海よりも深きモノ、海嘯よりも豪きモノ。

荒ぶる激浪をその身に纏い、四海すら凌駕する海闊の化身。

空を映し、天を彩り、宙すら飲み込むまさに『海の星』。

それはたゆたう星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０

ＡＴＫ／　０→５１００　ＤＥＦ／　０→３０００

「ぐぅっ!?こ、攻撃力５１００…」
「これが新しく従えた、俺のもう一枚の切り札だ！」
「ＮＥＰＴＵＮＥ…まさかこれ程のプレッシャーを放つモンスターだったとは…釈迦堂　ランめ、余計なカードを…」
「行くぞ！燦然と輝くプラネットの一球、【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】のモンスター効果！ＮＥＰＴＵＮＥの攻守は、リリースしたモンスターの攻守の合計となる！更にアドバンス召喚成功時、ＮＥＰＴＵＮＥは【ギアギガントＸ】と同名となり、同じ効果を得る！そして【冥界の宝札】２枚の効果で４枚ドロー！」
「ぐっ、また手札が増え…」
「よし、バトルだ！まずは【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】で、【竜巻竜】を攻撃ぃ！」

王者【黒翼】の孫を前に、元とはいえ王者【紫魔】であった男のエースのその瞳に映るのは…立ち塞がる者を蹴散らすというその煌々とした戦意のみ。
…Ｅｘデッキから自由にモンスターを呼び出せないことが、一体何のデメリットになるというのだろう。
今、観客達の目の前で多量のドローを繰り返したこの男こそ、メインデッキから自由にモンスターを無理矢理引っ張り出してくるという、狂っているとさえ思える男ではないか。
そんな、一部の『気付き始めた』観客達の目の前で…
今…
運命の英雄が、高らかに天へと舞い上がり…

「鮮血の、ブラッディ・フィニッ…」
「させるものかぁ！バトルフェイズに入ったこの瞬間、墓地の【超電磁タートル】を除外し効果発動！バトルフェイズを終了する！」

―！

それでも、喰らわない―

…血霧の槍雨から主を守るは、墓地より飛び出した電磁の亀。

相殺し、反発する…その有り余る斥力で。

それは鷹矢が用いる事の多い、守りの手段のその一つ。

バトルフェイズを強制的に終了させる、その力にはこれまで鷹矢も幾度と無く救われてきた。

だが、何故か―

攻撃を止めたはずの鷹矢のほうが、どこか『苦い顔』のような雰囲気を漂わせていて…

「くそっ、こんなにも早くコイツを使わされるとは…」

「よし、これで厄介な奥の手は無くなったな。」

「まさか、これも分かっていたとはな…」

「あぁ、どうせお前の事だ。【手札抹殺】で墓地に送ってると思ってたからな。これで【超電磁タートル】も使わせた…後は削り合いだ。俺とお前、どっちが先に音を上げるかのな！」

「むぅ…」

苦々しい言葉を零した通り。

まさか鷹矢も、先ほどのターンに先んじて用意しておいた【超電磁タートル】を、こんなにも早く使わされる事になるなんて想定外だったのか。

…使うとしても、もっと後のギリギリの場面。

そんな情況を想定して用意しておいたというのに、遊良にソレを見

破られて無理矢理に使わされたことは、鷹矢にとっても不本意だったに違いなく。

「何が削り合いだ…手札が６枚…動けば動くほど手札が増えていくなど本当に理解できん。」

「メインフェイズ２だ。【暗黒界の取引】発動。お互いに１枚ドローして１枚捨てる。【チキンレース】も発動。ＬＰを１０００払って１枚ドロー！俺はカードを２枚伏せて、ターンエンドだ！」

遊良　ＬＰ：２６００→１６００
手札：２→３枚
場：【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】
【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】
魔法・罠：【冥界の宝札】、【冥界の宝札】、【Ｎｏ．６１ヴォルカザウルス】（Ｂｌｏｏ―Ｄ装備中）、伏せ２枚
フィールド：【チキンレース】

ＬＰの差は着実に開いていくのに、ソレに反してデュエルの流れはどこか遊良に分があるようにも見える。

…きっと、そう感じた観客達が居たことは何らおかしいことではないだろう。

そう、プロの目から見ても…いや、例えプロでなくとも。

ごくごく『一般的な実力』を持っている者であれば、天城　遊良が今のターンに、この決勝の舞台で『何』をやっているのかが…嫌でも、察知してしまって…

―何せ今のターンにおける、遊良のキレはまさに『凄まじい』の一言

…時代遅れのアドバンス召喚を、ここまで使いこなしているその技量。

…展開すればするほど、逆に増えていくその手札。
…Ｅｘモンスターに引けをとらぬ、圧倒的な力を持った切り札足り得るその最上級の大型モンスター達。
…鷹矢の手札が透けて見えているのでは無いかと、そう思えるほどの未来視にも似たその先読み。

そのどれをとっても、遊良が魅せた鋭すぎるキレは学生の枠を大きく超えているのだ。
…一度回転を始めたら、決して止まらぬ嵐となりて繰り返されるドローもそう。
相手を力で圧倒する、Ｅｘ適正が無いとは思えない程に洗練された…あまりに高いデュエルの腕と、あまりに強い心の証。

…本当に、この男は１０年前にＥｘ適正が無いと大々的に報じられた、あの出来損ないの天城　遊良なのだろうか。

普通、常識的に考えて、このＥｘデッキ至上主義の時代にＥｘ適正を持たないということは、そのままの意味で『人間以下』だというのにも関わらず…

そんな人間以下の屑であるはずの、デュエリストにすらなれないはずの出来損ないが―

―まさかこの学生の頂点を決める、大舞台の中の大舞台において、こんなにもわかりやすい『強さ』を見せてくるだなんて。

信じられない―信じたくない―信じられるわけがない―

予選の結果は、何かの間違いか奇跡か、それとも『祭典』を盛り上げるためだけの演出だとでも思っていた者も居たのだろう。
しかし、プロの間でも有名なデュエリアの『ギャンブラー』に競り

勝った先の第一試合もそう。
王者【黒翼】の孫相手に、ここまで正面から己の力のみでぶつかり合い…そして正々堂々と圧倒しかけている、今の天城　遊良の力を見て。
世界中の観客達が、言葉を失いかけ己の常識を疑い始め―

「俺のターン、ドロー！」

けれども、そんな遊良に圧倒されることもなく。
運命の英雄と『海の星』が放ってくる重圧を切り裂くように、鷹矢の叫びが木霊する。

「これ以上お前の好きにはさせん！お前のＬＰは残り１６００！一撃が通れば…俺の勝ちだ！墓地の【ブレイクスルー・スキル】を除外し効果発動！Ｂｌｏｏ―Ｄの効果を無効に！」

―！

ターンが移り変わってすぐ。
【手札抹殺】で墓地の送っていたカードの中から、一枚の罠カードの発動を宣言した鷹矢。
…相手にのみ【スキルドレイン】と同じ効果を無理矢理与えてくる前【紫魔】のエースに、威圧され続けるつもりはないのだと言わんばかりのその対処。
鷹矢の発動した罠によって、運命の英雄がその翼を力なく垂れ落としてしまったではないか。

「ッ、簡単に超えて来やがって！用意がいいのはどっちだよ！」
「『Ｎｏ．６１』は破壊され、俺の墓地へ送られる！更に【チキンレース】の効果発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！そして【ゴールド・ガジェット】２体でオーバーレイ！エクシーズ召喚！来い、ランク４！【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】！」

―！

【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】ランク４
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／　２２００

そして即座に現れしは、鉄の狼たる装甲列車。
世界のどこへでも突撃してしまいそうなほどに蒸気を噴出しているその姿は、まさに荒々しくも猛々しい出で立ちと言えるだろう。
どれだけ強力なモンスターで身を守ろうとも、それを蹴散らしながら相手へと直接ぶつかることのできるその効果はあまりに有用。何しろ劣勢でも一撃で勝負をつけられる直接攻撃は、ただただ強力の一言であるのだから。

…そう。強力の、一言なのだが…

「やっぱりな！そう来ると思ってたよ！【奈落の落とし穴】発動！アイアン・ヴォルフを破壊し、除外する！」

―！

遊良へと突撃を仕掛ける前に、遊良によって爆散させられてしまっ

た鉄の狼。
　その無慈悲なる宣言は、鷹矢に好きにはさせないという遊良からの宣戦布告なのか…
　一発逆転を狙える直接攻撃を、何の役割も果たさせてもらえず破壊されてしまうその気持ちは果たして…コレを見ている観客達には、決して理解できるはずも無く。

「ぐっ…だが俺にはわかる！永続カードを多用するお前は、伏せられる枚数に限りがあるからな！もうお前は、俺を邪魔するカードを伏せられてはない！」
「それがどうした！俺には【チキンレース】がある！これがある限り、ＬＰが少ない俺はダメージを受けないんだぜ？それに…」
「わかっている！【チキンレース】の他に、お前の墓地には【手札抹殺】か【ワン・フォー・ワン】で用意した【ネクロ・ガードナー】があるのだろう？」
「ッ、気付いてたか…」
「当たり前だ！俺が墓地に策を用意していたのだ…お前が用意してないわけがないだろう！だからこそ一撃、お前を倒すのには、一撃さえ届けば充分！【貪欲な壺】発動！『Ｎｏ．６１』、ギアギガントＸ、ゴールド、シルバー、イエロー・ガジェットを戻して２枚ドロー！」

　遊良が、鷹矢の手を読みきっていたように。
　鷹矢もまた、遊良の手を読んでいるのだと言わんばかりの勢いを放ったかと思うと、遊良に負けじと加速を始めて。

「お前のことだ、どうせモンスターに耐性を与える速攻魔法でも伏せたのだろう？ならば手札の【グリーン・ガジェット】を捨て、速攻魔法【ツインツイスター】発動！俺が破壊するのは、【チキンレース】と【冥界の宝札】だ！」
「ッ、【チキンレース】が？！」
「俺は止まらん、お前を倒すまでは！俺はまだ通常召喚しておらん！

【爆走軌道フライング・ペガサス】を通常召喚！その効果で、墓地より【古代の歯車機械】を、効果を無効して特殊召喚する！」

――!!

【爆走軌道フライング・ペガサス】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００
【古代の歯車機械（アンティーク・ギアガジェット）】レベル４
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／２０００

そして…
鷹矢の場に連続して現れるは、２体のレベル４、機械族モンスター達。
そのどれもが、これまでの鷹矢は使用していなかったモンスターであり…
そのモンスターを見て、不意に遊良も少々焦りながら声を荒げ…

「アンティーク・ギアでガジェットモンスター!?お前、そんなモンスターまでデッキに入れてたのか!?」
「当たり前だろう？お前と戦うのだ！展開ルートはどれだけ用意しておいても足りんくらいだからな！そのまま【機械複製術】を発動！デッキから【古代の歯車機械】２体を、守備表示で特殊召喚する！」

――！

【古代の歯車機械（アンティーク・ギアガジェット）】レベル４
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／２０００
【古代の歯車機械（アンティーク・ギアガジェット）】レベル４
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／２０００

「ぐっ、アンティーク・ギアだからソイツの効果は確か…」

「うむ！特殊召喚成功時に、【古代の歯車機械】２体の効果が発動する！俺が宣言するのは、『モンスター効果』と『魔法』カー…」
「くそっ！それにチェーンして墓地の【ネクロ・ガードナー】を除外して効果発動！このターン、１度だけ相手モンスターの攻撃を無効にする！」

鷹矢の放つ無慈悲な宣言…それは鷹矢の攻撃時に、ダメージステップ終了時まで遊良の『モンスター効果』と『魔法カード』の発動を禁じるという【古代の機械】特有の搦め手。
…遊良が墓地に仕込んだ【ネクロ・ガードナー】と、伏せてあるであろう『禁じられた』系列のカード。ソレを完全に読み取り、嗅ぎ取り、そして看破したその自信の表れは、まさに鷹矢の激しくも迷いない展開に現れていて。
ソレを避けるように、遊良も用意していた守りの手をここで発動して鷹矢からの攻撃に備えるものの…
ここで使っておかなければ、遊良の行動に応じて鷹矢は展開ルートを無限に変化させるだろう。だからこそ、鷹矢に無駄に効果を『使わされた』感を遊良は拭いきる事が出来ず。
ソレ故、このギリギリで、拮抗し続けている状況下において。鷹矢の放った無慈悲な宣言は、遊良からしたらただただ脅威と言えるのか。

「よし、これで厄介な奴が全て消えた！ゆくぞ遊良！俺は【古代の歯車機械】２体で、オーバーレイネットワークを構築！」

再びこの場で叫ばれし、天を劈く鷹矢の宣言。
―オーバーレイネットワークを、構築
この世界においては、鷹矢にのみ許されたその宣言が再び天空闘技場から全世界へと響く時、またしても誰も見たことの無いモンスターがこの世界に生まれようとしていて。

「来い、『Ｎｏ．６０』！時の狭間に彷徨いし悪魔よ！久遠の時にその身を任せ…時間の果てより姿を現わせぇ！エクシーズ召喚！」

己の頭の中に浮かんだ、そのイメージを『白紙』に焼付け。
空に浮かび上がる『数字』と共に、今ここに現れしは―

「【Ｎｏ．６０　刻不知のデュガレス】！」

―！

【Ｎｏ．６０　刻不知のデュガレス】ランク４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

それは時間の狭間にて怪しく笑う、揺らめく時の流れの悪魔。
その左翼に、『Ｎｏ．』の証である数字―『６０』を宿した、一時の揺らめきのような歪なるその佇まいで、どこまでも不気味に揺れていて。

「また新しい『Ｎｏ．』…一体どれだけ変化するんだよ！墓地の【迷い風】の効果発動！【迷い風】を俺の場にセットする！」
「かまわん！『Ｎｏ．６０』の効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い…次の俺のドローフェイズをスキップする代わりに、デッキから２枚ドローし１枚捨てる！」
「なっ、ドローフェイズをスキップ…お前、そんなデメリットを覚悟で…」
「言っただろうが！お前の言う削り合いとやらには付き合ってはやらんと！このターンで決着をつければいいだけだ！２枚…ドロー！……うむ！手札を１枚捨て、再び【貪欲な壺】を発動！」
「ッ!?」

「ドリルジャンボ、アンティーク・ギア、ゴールド、グリーン、レッド・ガジェットをデッキに戻して2枚ドロー！」

止まらない―

「【モンスター・スロット】発動！場のフライング・ペガサスを選択し、墓地の【古代の歯車機械】を除外し1枚ドロー！…よし！俺が引いたのはレベル4の【イエロー・ガジェット】！守備表示で特殊召喚し、レッドを手札に！そのままフライング・ペガサスと古代の歯車機械でオーバーレイ！」

止まらない―

「エクシーズ召喚！ランク4、【ジェムナイト・パール】！」
「効果を持たないエクシーズモンスター…なんで今ソイツを…」
「決まっている！コイツが必要だからだ！【エクシーズ・ギフト】発動！パールのオーバーレイユニットを2つ使い2枚ドロー！…来たぞ！最後の【アイアンコール】発動！」
「なっ!?お前、何枚引くんだよ！」
「決まっている！…お前に、勝つまでだ！墓地より【古代の歯車機械】を、効果無効にして特殊召喚！」

【古代の歯車機械】レベル4
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／２０００

止まらない―

そう、全く持って止まらない―

遊良の連続したドローも大概ならば、あまりに的確にカードをド

ローする鷹矢も、常軌を逸した狂気のドロー。
普通であれば、こんな綱渡りの連続のようなドローなど、絶対に繰り返す事などできないと言うのに…
…しかし、天宮寺　鷹矢は恐れない。
次にドローするカードで、展開が台無しになってしまう可能性があっても…
それでも鷹矢はドローを止めず、ただただ遊良に向かい合う。
…なぜなら、鷹矢もこれまでの人生で、ドローに全てを賭けて戦ってきた男を1人知っているから。
その男のデュエルを、この世の誰よりも近くで見続けてきたからこそ…天宮寺式高等計算術によって導き出されたその解に従い、どこまでも激しく動くのか。

そう…

遊良に出来ることならば、自分に出来ないわけがない―と。

「レベル4のモンスターが2体…」

このデュエルで…いや、これまでも鷹矢のデュエルにおいて、一体どれだけレベル4のモンスターが揃えられてきたのだろう。
それを数える事すら億劫になるほど、これまで気が遠くなるほどの回数、鷹矢はレベル4のモンスターを揃えてきた。

それはまるで、レベル4のモンスターを揃える事など、どんなことよりも簡単なのだと言わんばかりに―

「うむ！やはりお前との戦いには、このカードが必要だろう！俺はレベル4のイエローとアンティーク・ギア…2体のガジェットで、オーバーレイ！」

叫ばれしその宣言には、少しの迷いも淀みもなく。
今、エクシーズ名家、天宮寺一族…その筆頭である祖父、王者【黒翼】に倣うかのように。
鷹矢は、その手を天に掲げ―

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれぇ！」

世界に轟くその口上。祖父より受け継ぎしそのカード。
レベル４を多用する、自分のデュエルを飾るまさに『切り札』。
覇道を突き進む己のデュエルの、『砦』となるべく存在をここに呼び出すために…
天を劈く鷹矢の叫びが、全世界へと木霊したその時。ソレは果て無き頂の上から、少年達の場へと降り立つのか。

「エクシーズ召喚！来い、ランク４！」

既に天宮寺　鷹矢の象徴とも言える、世界の頂点を見た大いなる力が…

満を、持して―

今、ここに―

「【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天に羽ばたく雄雄しき翼と、神をも切り裂く鋭き牙が全世界へと輝いて。
その佇まいはまさに王者の風格。これまでの激戦を戦ってきた、天宮寺　鷹矢の元で荒々しくも吼えるのか。
正真正銘『歴戦』の牙竜。天に轟く咆哮を、世界中へと轟かせ…
少年達の『約束』の舞台。今年も巡ってきたこの大舞台に、【黒翼】の叫びが木霊する。

「ッ、現れたか！」
「ゆくぞぉ！ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、ＮＥＰＴＵＮＥの攻撃力を半分にし…その数値分、ダーク・リベリオンの攻撃力をアップさせる！『海の星』を縛り上げろ、紫電吸雷！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→５０５０
【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０
ＡＴＫ／５１００→２５５０

放たれるは紫電の雷鎖。神すら縛る反逆の轟き。
いくら遊良の繰り出したプラネットの一球が、とてつもない攻撃力と重圧を端って来ようとも…
神にすら嬉々として牙を突きたてる、この『ダーク・リベリオン』の

好戦的な咆哮の前では『海の星』すら無力と化すのか。
どんな相手であろうとも…そう、例え神が相手でも―
全ての強者は、もれなく自分の獲物なのだと言わんばかりに、どこまでも歓喜に震える牙竜が、その黒翼を羽ばたかせ。

「ぐっ、攻撃力５０５０…やっぱり強すぎだろその効果！」
「まだだ！墓地から【スキル・サクセサー】を除外し、ダーク・リベリオンの攻撃力を更に８００アップ！」
「攻撃力５８５０!?ッ…さっきの【暗黒界の取引】か！ホントに油断ならねぇ奴だなお前は！」
「当たり前だ！俺の全力で、お前を倒すと宣言したのだからな！バトル！先ずは『Ｎｏ．６０』で、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を攻撃！」
「くそっ、【ネクロ・ガードナー】の効果によって、『Ｎｏ．６０』の効果は強制的に無効になる！」
「うむ！」

攻撃宣言時に発動できたのならば、確実にダーク・リベリオンの攻撃を無効化できたというのに。
ソレを想定して用意していたはずの【ネクロ・ガードナー】。しかしそれを鷹矢によって不本意なタイミングで『使わされた』、【ネクロ・ガードナー】の効果によって…
―このターンの最初の攻撃は、強制的に無効となってしまう
また、例え無駄だと分かってはいても。それでも己の引き出せる全身全霊を賭けると宣言した鷹矢が発動した罠カードの効果によって、ダーク・リベリオンが更にその攻撃力を上昇させていく。
だからこそ…

「これで終わりだぁ！【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】で、【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を攻撃ぃ！」

届く―
―まさに鷹矢の宣言通りに。
まさに一撃。まさに反撃。圧倒的な境地までその攻撃力を上昇させた、【黒翼】ダーク・リベリオンが天に舞う。
…運命の英雄へと襲い掛かるその牙は、かつて15年以上前に繰り広げられたエクシーズ王者【黒翼】と、融合王者【紫魔】の対決の再現だとでもいうのか。
…神魔を断ち斬る黒き刃と、鮮血に塗れる血霧の槍雨。
今、竜頭構えし運命の英雄へと、黒翼を広げし牙竜がその牙を光らせながら…

世界を貫く、その攻撃宣言と共に―

「喰らえぇ！斬魔黒刃！ニルヴァー…ストライィィィィィクッ！」

その時だった―

「っかよぉ！罠発動、【攻撃の無敵化】！戦闘ダメージを0にする！」
「なっ!?」

―！

刹那―

そう、まさに遊良のＬＰが０を刻みかけた、瞬き以下のその一瞬の刹那―

攻撃宣言と同時に、突如として遊良の伏せカードが光り輝いたかと思うと…

なんと遊良のＬＰを０にするはずだった、実に３９５０ものダメージの余波を、発生した見えない壁が完全に守りきってしまったではないか。

…それは、普段の遊良ならば使用したところを見たことの無いカード。

しかし、虚を突くようにして発動されたそのカードの効果によって、これで０となるはずだった遊良のＬＰが無傷で１６００も残ってしまったなんて。

「な、【攻撃の無敵化】…だと？罠カード…そんな、馬鹿な…」

「いや、お前が勘違いしたのも無理はない。だって俺もこのカードを、【禁じられた聖衣】だと思い込んで伏せたんだからな。」

「なん…だと？」

「用心を重ねておいて正解だった。お前は、俺の伏せたカードを見破ってくるんじゃないかって思ってたから…だからお前の嗅覚の裏を取れるように、俺もギリギリまで【攻撃の無敵化】を【禁じられた聖衣】だと思い込んで伏せた。そのおかげで、お前はちゃんと勘違いしてくれたからな。」

「ぐ…」

今の遊良の防衛は、鷹矢からしてもあまりに予想外だったのか。

…当たり前だ。

最大限の攻撃を仕掛けたつもりが、まさかダメージを与えられなかったなんて。
折角ここまで遊良の思考を読みきり、そして遊良の用意した妨害の手を全て乗り越え…
そうしてようやく決着となり得る、トドメの一撃を繰り出せたかと思ったその先に、遊良はまだ最後の守りの手を用意していたことなど、鷹矢にとっても予想外だったはずなのだから。

「くそっ！【ジェムナイト・パール】で【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】を攻撃ぃ！」

予想を崩され、予測を外され…
このデュエルが始まってから、初めて本物に見える焦りの冷や汗を浮かべた鷹矢。
…その焦りは、本当に今の攻防が鷹矢にとって想定外だったことの証明と言ってもいい程。
そう、これまで遊良の策を感じ取り、的確にデュエルを進めていたからこそ浮かび上がったその焦り。
それゆえ、どうにか『海の星』も戦闘破壊するものの…次のドローフェイズがスキップされる制約の所為で、焦りを浮かべたまま鷹矢はそのターンを終えてしまって…

「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ！」

鷹矢　ＬＰ：４７００→３７００
手札：３→２枚
場：【竜巻竜】
【Ｎｏ．６０刻不知のデュガレス】
【ジェムナイト・パール】

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】
伏せ：2枚

なんて…なんて先の読めない少年達のデュエル。
このデュエルを見ている世界中の見えない観客達も、思わず決着となりそうだった今の攻防を息を止めて観ていたものだから…
鷹矢の悔しげなターンエンドの宣言と共に、思わず止めていた息を吐き出しながら苦しそうに再呼吸を始めた者達が世界中に一体何人いたことやら。
先の第二試合で鷹矢が創造した、『ランク0』が出てこないことへの疑問など全くもって思い浮かべる暇など無い程に…
観客達の興奮のピークは、今まさに最高潮へと達したと言っても過言ではないはず。

…デュエルの間に、彼らの実力が更に更に上がっていくと錯覚するほどのこの熱気。

それはまるでミックスアップ。同等の実力を持った少年同士が、己の全てを賭けただひたすらにぶつかり合っているこのデュエル。
そう、このデュエル自体が、天城　遊良と天宮寺　鷹矢の力を更に更に引き出しながら高め合い…そしてデュエルが始まる前よりも今の遊良と鷹矢はきっと始まる前よりも数段強くなっているのではないのか。
この戦いを観ている者達の多くが、無意識にそんな事を頭の片隅に思い浮かび…
プロ同士の戦いでも、中々観れないこの凄まじい少年達の戦いに、更に興奮を高め続けていて。

しかし、そんな興奮のピークを迎えた観客達とは裏腹に…

「なぁ、鷹矢…」
「む？」

自分のターンを迎える前に…
遊良は、鷹矢へと。
静かに、語りかけた

「楽しかったよな？【決島】は…ルキは襲われるし、俺もルキに死にそうな目に遭ったけど…でも、色んな相手と戦って、全員恐いくらい強くて…」
「…うむ。」
「それに、戦った相手全員がなんて言ったと思う？…俺を見て、俺を相手にしてさ、Ｅｘ適正が無いからって馬鹿にするんじゃなくて…【決闘祭】の優勝者だからって、舐めずに全力でぶつかってくるんだ！全員…そう、皆がだ！俺と…俺とデュエルするのにだぜ？初戦の相手なんか、俺の事を調べ尽くして、全力で対策までしてきたんだ！」
「うむ。」
「ホント…初めてだったよ…こんなに…強い相手が全員、最初から俺と全力でデュエルしてくれるなんて…」
「うむ…」

吐き出されるのは遊良の思い。
どこか感極まった様にも聞こえる、感情を吐露する遊良の想い。
…これまで、Ｅｘ適正が無い、Ｅｘデッキが使えないからと言って、長きにわたり天城　遊良という少年は酷い迫害を受けてきた。
世界中でただ一人、誰もが持っているＥｘ適正を…持っていないという、デュエリストではない人間の最底辺、生きる価値のない人間の屑。

世界中から…そう、世界中から。Ｅｘ適正を持っていないという、ただそんな理由で、幼い少年は世界にただ一人取り残され、そして世界から見放されてきたのだ。
そんな、地獄ともいえる幼少期を…苦痛とも思える学童期を…悪夢のような少年期を、遊良は過ごして来た。
デュエルだってまともにやらせてはもらえず、大会には出場させてもらえず…
戦う相手は自分を舐めきっているせいで、負けても敗北を絶対に認めようとはせず…あげくは学園でも遠巻きにされ、教師たちからも煙たがられてきた。
そんな人生を送ってきた遊良が、ここへきて初めて。そう、初めて、大勢の猛者に囲まれた祭典に出場し、そして全員が自分を強者と認めて始めから全力で全開で立ち向かってきてくれたのだ。
…デュエリア勢も、決闘市勢も。
全員が猛者で、全員が強者で…そんな強いデュエリスト達が、自分を強者と認めてくれる。
それは遊良にとって、どれほど嬉しかったことなのか。
今まで蔑まれこそすれ、認められることなどほとんど無かった。だからこそ、全員と全力でぶつかり続けた【決島】が…
遊良は、心の底から楽しかったのだろう。

そう、だから…

「だから…俺は強くなった！全員が恐いくらいに強かったこの島で！６４戦もして！死にそうな目にもあって…でも、それでも分かったんだ！俺はまだまだ強くなれる…俺は、まだまだ先にいけるんだって！」
「…む？」
「見せてやるよ…お前に、俺が【決島】で得た…俺の全力を！俺のター

ン、ドローッ！」

―！

感情を爆発させる勢いで、激しく引くは1枚のドロー。
鷹矢の激しい猛攻を、凌ぎきった遊良の始まる攻勢。

「【貪欲な壷】発動だ！【イービル・ソーン】2体、【デモニック・モーターΩ】、【D―HERO　Bloo―D】、【The　tyrant　NEPTUNE】をデッキに戻して2枚ドロー！そして【ワン・フォー・ワン】を発動！手札を1枚捨て、デッキから【サクリボー】を特殊召喚！」

―！

【サクリボー】レベル1
ATK／　300　DEF／　200

デッキから飛び出してくるは、小さく奮える毛玉の悪魔。
…これぞ遊良のデッキのメインエンジン。
最早観客達とて、説明されずとも理解している。これまでのデュエルでも、この毛玉の悪魔達が現れたときにこそ遊良のデュエルの進撃が始まってきたのだということを。
…そう、天城　遊良のデュエルにおける、最大最強のモンスターはまだこのデュエルには出てきていない。
【D―HERO　Bloo―D】と、【The　tyrant　NEPTUNE】という、遊良のデッキの切り札が2体も先のターンに召喚されていても…

天城　遊良は、まだ【神獣王バルバロス】を召喚していないのだ―

だからこそ―

「ッ、来るか!?」

「あぁ！速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！デッキから【サクリボー】２体を特殊召喚！」

―!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

「くっ、俺はダーク・リベリオンを選択！…ッ、【サクリボー】が、３体…」

「行くぞ鷹矢ぁ！俺は【サクリボー】３体をリリィースッ！」

響き渡るは獣の如き、猛々しく轟く遊良の咆哮。
これまで、幾度と無く召喚してきた。これまで、幾度と無く共に戦ってきた。
その、自らが最も信頼する絶対の、唯一無二なる魂のカードが…

今、現れる―

「レベル８！【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」

―!

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

この終盤において…
ようやく全世界へと轟いた、天を突き抜ける獣の咆哮。
…アドバンス召喚でその真価を発揮するという、時代に置いていかれたこのカード。
しかし、天城　遊良というデュエリストがこの獣の王と共に戦うからこそ。このＥｘデッキ至上主義の時代においても、獣の王の力が全世界へと見せ付けられているのだ。
この時代においては、絶対に見ることなど叶わないであろうその効果…3体ものリリースを要求するというその効果…

そう、観客達も理解した…鷹矢の全てが破壊されると。
それは、これまで保たれてきたデュエルの均衡が―

「アドバンス召喚成功時！バルバロスの効果発動ぉ！いっけぇ！バルバロ…」
「させるものかぁ！【ブレイクスルー・スキル】発動ぉ！」

しかし、喰らわない―

そう、鷹矢だって、『はいそうですか』とやられてやるわけにはいかないのだ。
この情況を予期していた鷹矢の、寸前で発動した罠の光が獣の王の放った破壊の波動とぶつかり合い…
そして、全てを壊す破壊の衝撃から完全に鷹矢を守りきって。

「バルバロスの効果は使わせん！ソレで去年痛い目に遭ったのだからな！」
「だけど【冥界の宝札】と【サクリボー】の効果で5枚ドロー！そして【アドバンスドロー】も発動！バルバロスを墓地に送って2枚ドロー！」
「くそ！まだ止まらんのか！」

「当たり前だ！お前に勝つまで…止まってたまるかぁ！墓地の【神獣王バルバロス】と【クラッキング・ドラゴン】を除外！」
「なっ!?」

それでもなお、間髪入れず。
一枚のカードを天に掲げながら、そのまま高らかにそう宣言した遊良。
そして遊良の宣言により、眠りについた獣の王と機電の黒竜が、その身をこの世から消し始め…

―否

この世から消え始めたのではない。
獣の王が吼える時、機鉄の竜はその身を散開させたかと思うと、２体のモンスターの姿が重なり始めたではないか。
…それは融合召喚ではない。シンクロ召喚でもない。エクシーズ召喚でもない。
それは単なる特殊召喚のエフェクト。しかし更なる力を求めた遊良が手に入れた、獣の王の新たなる力であって。

「バルバロスを除外するだと!?」
「見せてやるっていっただろ？俺の手に入れた力の全てを！来い、レベル８！【獣神機王バルバロスＵｒ！】」

―！

【獣神機王バルバロスＵｒ】レベル８
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／１２００

現れしは機電の鎧をその身に纏いし、神をも打ち抜く獣の王。
…『海の星』と同様に、実力の『壁』を超えた『先』の地平へと遊良が至るための結論として導き出した…純粋なりし、『力』のカード。
しかし、攻撃力が不安定な『海の星』とは存在からして異なる『力』…そう、召喚権を使わずに現れる、遊良の欲する『力』の象徴そのモノ。

「バルバロスＵｒ!?補正なしで攻撃力３８００…お前、こんなモンスターを一体どこで！」
「予選の、一番の強敵と戦ったときに手に入れた！コレが俺自身の、最大最強のモンスターだ！」
「戦闘ダメージを与えられないモンスター…だが、遊良ならば【禁じられた聖杯】で…」
「まだまだぁ！速攻魔法【大欲な壷】発動！バルバロス、クラッキング、ネクロ・ガードナーをデッキに戻して１枚ドロー！【闇の誘惑】も発動！２枚ドローして【イービル・ソーン】を除外！」
「ぐぅっ、と、止まらん…」

止まらない―
あれだけドローしてきたというのに、これだけ展開してきたというのに。
それでもなお遊良のドローは止まる気配を見せず、その勢いは更に強いモノへと変わっていくのみであり…

そして―

「だがお前は先のターンで【二重召喚】を使った！知っているぞ、【二重召喚】はデッキに１枚だけだと！それに俺には…」
「わかってるよ、お前の伏せカード、【和睦の使者】なんだろ？」
「ッ!?」

鷹矢がまだ発動すらしていないカードを、ピンポイントに指名した遊良。
そしてソレを聞いて、明らかに動揺した様子を鷹矢は見せ…
「で、デタラメを！」
「いいや、わかってるんだ！お前が最後に何で守ろうとしているのか！俺には、お前の守りがはっきりと！」
「ッ、だ、だがソレが分かったところで…」
「そして俺の手札には、【抹殺の指名者】がある！」
「なっ!?」

そんな鷹矢へと、追い討ちをかけるように。その鷹矢の最後の守りすら超えられるカードの存在を、あまりに堂々と遊良は言い放ったではないか。
…それは鷹矢の知る限り、遊良のデッキには無かったはずのカード。
確かに強力な効果を持っているカードではあるものの、しかしこれだけピンポイントな妨害効果を持つそのカードは、遊良とてこれまでデッキに入れようとすらしていなかったはずなのだ。
…何せ寄せ集めにも似た、何故回転しているのかすら理解出来ない遊良のデッキ。

そんな鋭すぎるキレを持ったデッキを回すためには、ピンポイントな妨害の手など入れている隙間など無いはずなのだから。
だからこそ、鷹矢は驚いている…
これまでの遊良とは違う、新たな強さを―
「ま、【抹殺の指名者】だと!?」
「あぁ、デュエリアの『アナライザー』に教わったからな！例えピンポイントな対策でも、情況を支配すればそれは最大の対策に出来るんだって！」

そう…

【決島】が始まる前よりも、数段強さを上昇させた今の遊良。

それは初戦で戦った、デュエリアの『アナライザー』とのデュエルも。

その後に戦った、『ボマー』や『レーサー』と言ったデュエリアの猛者達とのデュエルも。

紫魔　アカリを始めとした、決闘市側の猛者達とのデュエルも。

先ほどの第一試合で戦ったデュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサとのデュエルも。

そして何より、予選で戦った最も強かった相手…

狂乱少女、アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンとのデュエルの経験の、その全て今の遊良の力となっているのだ。

…今の遊良の力は、鷹矢が知っているこれまでの遊良のどれよりも強い。

その力の凄まじさが、中継を通して全世界へと映し出され続けており…

「ッ！だ、だがＬＰさえ残れば…」

「いいや、これで終わりだ！【黙する死者】を発動し、墓地から【鉄鋼装甲虫】を守備表示で特殊召喚！更に【ワーム・ベイト】発動！【ワーム・トークン】２体を特殊召喚する！」

―！

【鉄鋼装甲虫】レベル８

ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００

【ワーム・トークン】レベル１

ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

【ワーム・トークン】レベル１

ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

「リリース素材が３体だと!?もう召喚権はないと言うのに！」
「あぁ、これでいいんだ！バトル！」
「ッ!?」

今―
高らかに宣言されたのは、遊良の進撃の最後の叫び。
連続して現れた昆虫達を、守備表示で据え置いたままではあるものの…
それはここで、この情況で。鷹矢の残った最後の守りの手を、全て読みきったからこその遊良の宣言。

…ソレは、これまでの【決島】のどれとも異なるデュエルの流れ。

【黒翼】の孫、天宮寺　鷹矢をこの世の誰よりも理解している、遊良だからこそ捕らえる事の出来たデュエルの展開。
…実力の『壁』を超え、その『先』の地平へと辿り着いたからこその先見の鋭視。
鷹矢のデュエルを…そのパターン、戦術、思考、カード…その全てを誰に説明されずとも理解できてしまう遊良だからこそ。
この世の誰にも出来ない先読みによって、完全に鷹矢を読みきったのか。
そう、先ほどの攻防で、ソレはもうハッキリしている…

この、デュエルの―

均衡は、崩れている―

「そしてこのバトルフェイズに速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動ぉ！」

これまでの【決島】で天城　遊良のデュエルを、６０戦以上も見てきた観客達は知っている。先の第一試合を見たであろう、世界中の見えない観客達は理解している。

これまで…ここまで…そしてこれから先―

天城　遊良の力を、誰にも文句の言わせないモノとした、その象徴を。

Ｅｘ適正が無いはずの天城　遊良を、デュエリスト…否、決闘者たらしめているその『根源』…いつだって、どんな時だって、どのデュエルだって―

常に遊良と共に戦っていた、このモンスターの『力』を―

「俺は【鉄鋼装甲虫】と2体の【ワーム・トークン】をリリィィィス！」

轟かせしは進撃の雄叫び。

天に一番近い場所から、全世界へと響き渡る獣の咆哮。

…これまで世界中から見下されてきた、その鬱憤を晴らすように。

そう、天宮寺　鷹矢という、最も戦い慣れた相手だからこそ。この最も強い好敵手へと、ソレは高らかに叫ぶのか。

震える大気、獣の咆哮と共に…

それは、現れるのだから―

「【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

幾度阻まれても。
それでも絶対に轟かせるは、神をも打ち崩す王の雄叫び。
天城　遊良の魂のカード。どれだけ邪魔されようとも、それでも絶

対に彼の場に現れる、遊良を守りし獣の王。
…これまで、ずっと遊良を守ってきた。これまで、ずっと遊良と共に戦ってきた。
だからこそ、鷹矢との決着をつけるため。
今ここに、神をも破壊せんとする螺旋の槍を…

「行っけぇぇぇぇぇ!バルバロスゥ!」

―!

爆音―
世界中へと轟き渡る、獣の王の発した爆音―
それは地面に突き刺されし螺旋の槍より放たれた、獣の放った衝動。
…鷹矢が、どれだけエクシーズモンスターを揃えようと。いくら王者【黒翼】の名を召喚していようと。
全てを飲み込む破壊の波動が、全世界へと向けて放たれ―
鷹矢の、全てのカードが破壊されていくその光景が誰の目にも映り―

そして、鷹矢はその中で…

「…うむ。」

静かに、そう呟いた―

「そう、それを待っていたのだ！リバースカードオープン！速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動！」
「なっ!?」

否―
全てのカードが破壊されていくわけではない。
崩壊に抗うようにして、鷹矢が発動したのは自らのモンスターに渦を纏わせるカード。
それは鷹矢が、後攻の1ターン目から伏せていたカード…
しかしそれは、遊良が先ほど宣言した【和睦の使者】ではなく…

たった今遊良が発動したカードと、『同じカード』―

「【和睦の使者】じゃない!?そんな馬鹿な！」

「お前が勘違いしたのも無理は無い！俺とて…このカードを、【和睦の使者】だと思い込んで伏せたのだからな！同じことを考えていたとは驚いたぞ！」
「ッ!?」
「だから…待っていたのだ！この瞬間をぉ！俺はダーク・リベリオンと『Ｎｏ．６０』の…２体のモンスターをリリィィィィス！」

…止められない。
手札に構えた【抹殺の指名者】では、鷹矢の【ライバル・アライバル】は止められない。
何せ、たった今遊良も【ライバル・アライバル】を使ったのだ―
もうデッキに【ライバル・アライバル】は無く、鷹矢の【ライバル・アライバル】を無効にできず…
だからこそ鷹矢の場の【黒翼】と『Ｎｏ．６０』は、ほかのカードとは違いその身に纏いし渦によって破壊の衝動から身を守り…
「お前がアドバンス召喚!?け、けど何でこのタイミングで!?」

しかし、わからない―

一体何故、鷹矢がこのカードを伏せていたのか。
アドバンス召喚などしたこともない鷹矢が、何故後攻の１ターン目からこのカードを伏せていたのか。
自分が本気で【和睦の使者】だと思いこんでしまうほどに『匂い』のしていたそのカードを、鷹矢がどうして自分自身でも【和睦の使者】だと思い込むようにして伏せたのか。
どうして【神獣王バルバロス】によって全てが破壊されるタイミングで、そのカードを発動したのか―

―それが、遊良には分からない。

それでも…

「見せてやる！これがお前に勝つ為の…俺の力だぁ！アドバンス召喚！」

―ここに、現れるは…

「【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】！」

―！

その時…

―『何か』が、宙から落ちてきた

それは岩盤よりも硬きモノ、黄金よりも重きモノ。
崩れぬ地殻をその身に纏い、陸地すら生み出す大地の化身。
空と対峙し、天を撃ち抜き、宙をも落とすまさに『土の星』。
それは幾重にも積み重なった星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

それは、鷹矢の最初のターンからずっと手札に持っていたカード。
それは、鷹矢の最初のターンからずっとその手札に存在していたカード。
ここまでの果てしない攻防の末に、まさかこんなカードをここまで隠し通していたのか。
そんな衝撃が遊良を襲い、ソレと同時にプラネット特有の重圧が容赦なく遊良へと襲いかかり…

「プラネット!?ど、どうしてお前が!?…けどいくらプラネットだろうと、バルバロスの効果で全て破壊する！やれっ！バルバロスッ！」

しかし―
それでもなお遊良は怯まず。
突如現れたプラネット、押し潰してくる『土の星』。
そんなイレギュラーを前にしても、自らの勝利を確信しているからこその遊良の叫びが獣の王とリンクする。
…そう、いくら鷹矢が謎のプラネットを繰り出してこようと、この

情況では何ら意味はない。
既に獣の王の全体破壊は発動しているのだし、それに例え『土の星』が如何なる耐性を持っているのだとしても…
その攻撃力は２８００。獣の王たちの攻撃力は３０００と３８００で、それ更に上昇させる手立ても相手の耐性を無効させる手立てもこの後のドローで引く自信があるのだから、次の戦闘でも勝てるのだとして―

―！

抗うことなど許されない、凄まじい威力の獣の波動。
ソレが一瞬の躊躇もなく、鷹矢の場に現れた『土の星』を他の全てのカードごと慈悲もなく全て崩壊させていく。

…そう、折角このギリギリの場で呼び出した、『土の星』ごと、だ。

一体、鷹矢は何を狙っていたのか。むざむざ破壊されていくだけならば、虚を突いたように今召喚しなくともよかったはずだというのに…

しかし―

「【冥界の宝札】の効果で２枚ドロー！」
「うむ！この瞬間を待っていた！遊良よ！お前に勝つために、俺も無傷で済ますつもりは無い！破壊された、【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】の効果発動！」
「なっ!?」

突如…
破壊されたはずの『土の星』が、燃え上がりながら蘇る。
…いや、コレを蘇ったといってもいいのだろうか。
何せ、壊れかけ―
到底蘇ったとは思えぬ、到底まだ戦えるとは思えぬ…オーバーヒートして壊れている、燦然なりし『土の星』。
どこか、場には居ないとさえ思えるその燃え上がった『土の星』が、怪しく天へと飛び立って―
そして―
―『叫べ…天宮寺　鷹矢…燦然と…ジオ・インパクト…燦然と…燦ぜ…』
意識に直接語りかける、他の誰にも聞こえない『土の星』の意思を…
「さんさんさん煩い！黙って俺に従えぇ！ＳＡＴＵＲＮが相手によっては破壊された時…俺とお前にＳＡＴＵＲＮ　の攻撃力分…つまり、２８００のダメージを与える！」
「ッ!?」
「喰らえ遊良ぁ！天宮寺…ビックバァァン！」
―

閃光―

モニターに映し出されていたのは、ただただ真っ白な閃光だった―

轟く爆音が大きすぎて、音声を伝える機能の限界を超え―

世界中の観客達の、見ているモニターにはただただ白くなった画面のみが映し出されているだけ―

そんな、中で―

鷹矢　ＬＰ：３７００→９００

遊良　ＬＰ：１６００→０

―ピー…

ＬＰの減少音と、戦いの終わりを告げる無機質な機械音だけが―

モニターの向こうから、聞こえてきたのだった―

…

ｅｐ９１「祭典の終わり、災転の始まり」

閃光―

観客達に見えていたのは、ただただ真っ白な閃光だけだった。
たった今激しい攻防が繰り広げられていた、世界最大規模の祭典、【決島】。
その決勝戦で、最後の最後に天宮寺　鷹矢が『アドバンス召喚』した…世界のほぼ全員が見たことも無い、この星のモンスターではない【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＴＡＵＲＮ】が、モニターを真っ白にしてしまうほどの大爆発を起こしたのだ。

それは超新星の爆発にも似た、あまりに激しい暴発だったのか…
轟く爆音が大きすぎて、音声を伝える機能の限界を超え―
世界中の観客達の、見ているモニターにはただただ白くなった画面のみが映し出されているだけであり…

…決着はどうなったのか。
…一体、何が起こったのか。

決勝戦のデュエルの、あまりに先の読めない激しい少年達のデュエルに見惚れていた多くの観客たち。
その観客たちが、どうなったのか分からない決着に固唾を飲んで息を殺し…
戻らない画面に、次第にざわざわと声を漏らし始め…

すると…

鷹矢　ＬＰ…３７００→９００

遊良　ＬＰ：１６００→０

―ピー…

永遠と思える刹那の一瞬。
その一瞬の後に聞こえてきたのは紛れも無いＬＰの減少音であった―

…そうして告げられたのは、戦いの終わりを告げる無機質な機械音。

そう、白くなったモニターの向こうから、今確かに聞こえてきたのはデュエルの終わりとなるその音であり…

そして、次第に画面が元に戻り始めた…

そこには…

『あっ…き、決まったァァァァ！これが王者【黒翼】から受け継いだ才能かぁ！』

モニターの画面が元に戻った、その瞬間に思い出したかのように。
世界中に響き渡るようにして叫ばれたのは、仕事を忘れてデュエルに魅入ってしまっていた実況の声。
そして画面の向こうでは、最後の攻防によって生まれた勝者と敗者が…それぞれ勝者と敗者らしい恰好のもと、モニターへと映し出されており…

…LPを９００残し、天を仰いで立っている鷹矢。
…LPが０となり、地に片膝をついてうな垂れている遊良。
その姿は、まさにデュエルの決着がついた証とも思えるモノ。
凄まじい爆発の果てに、ついてしまった決着。言葉を無くし立っている勝者と、言葉を失い立っていない敗者の姿は…
まさに彼らの戦いが、彼らにとっても神経を削るほどに凄まじい闘ぎ合いだったということを表しているかのよう。
すると、実況の声で思い出したかのように…
―
一瞬の溜めの後に、全世界で歓声が爆発し始めて。
…拍手喝采。
誰もが素晴らしかった少年達の試合に、歓喜の声と賞賛の嵐を送り始め。
止まぬ拍手と歓声は、今の戦いが誰の目から見ても素晴らしいと感じるほどの戦いだったという証明とも言えるだろうか。
…しかし、それも当たり前だ。
何せ、プロでもここまでの攻防を繰り広げられる者などそうはいないのだ。
まるでトップランカー達の激闘か、それよりも『上』の者達が行った歴史に残る試合のような喝采。
お互いに相手の手が透けているのではないかとさえ思える鋭すぎる読み合いの末に、学生達がこれ程の攻防を繰り広げたというその事実は…

世界中の観客退の大多数を虜にする激闘となるには、あまりに充分すぎた戦いとなりて、今決着の時を迎えたのだから。

…きっとプロの中でも、これほどの歓声と賞賛を浴びられる者などそう多くはいないはず。

例えソレが王者【黒翼】の孫と、Ｅｘ適正の無い天城　遊良の試合だったとしても…

お互いの実力が拮抗し、どちらも全力でぶつかっていた今の試合は、到底学生達が行ったとは思えない程の興奮を観客達に与えていた。

中には、今の凄まじく拮抗していた試合に感動し、涙を流している者も居り…

今の試合の価値を嫌でも理解してしまった、ごくごく一般的な実力を持っているデュエリストならば…自分達にこの興奮を与えたのが、他でもないＥｘ適正の無い天城　遊良だったという事実にも、もう何の疑問も抵抗も抱いてはいないのか。

…そう、最後の瞬間に、世界中の誰もが確信していたのだ。Ｅｘ適正のない、天城　遊良の勝利を。

王者【黒翼】の孫を、勝利寸前のところまで追い詰めたその勢い。その高い実力は、八百長だとか演出だとか、そういった下賤なモノの入り込む余地の無い純粋なる戦いだったということを、世界中の前で証明してみせた。

そして、開会式のときにあれだけの『豪語』をし、勝って当然というレッテルを貼られていた天宮寺　鷹矢の方も。

今の、天を仰いで呆然と立ち尽くしている彼の姿からも分かるとおり…

あれほどの苦戦の末に、それでも最後の最後まで勝利を諦めずに戦い続けるという、その勝利への執念と天才の苦悩を、今はっきりと世

界中に教えていたことだろう。
…王者【黒翼】の孫とて、勝つ為にはあれだけの必死さが必要。
世界中から与えられる、あれだけのプレッシャーの中で勝利を掴み取ることがどれだけ難しいのかを…その身で、強く表現していて。
中にはまだ、天城　遊良の敗北を嬉々として叩いている者も居るのだろうが…
そもそも学生の頂点を決める【決島】の決勝まで勝ち上がって、そして今こんな試合を見せつけた遊良の事を今なお叩いている者など、器の底が知れるというもの。

ともかく…

勝者となった天宮寺　鷹矢。敗者となった天城　遊良。
その双方の健闘を、世界中が称えている。
そう、興奮に興奮をぶつけて、熱く沸き立っている全世界が…素晴らしい戦いを見せてくれた少年達に、勝者と敗者を分け隔てなく称えているのだ。
王者【黒翼】の孫だから勝って当たり前だとか、Ｅｘ適正が無いのだから負けて当たり前だとか…
そう言った下賤なる感情など抜きにして、世界中の大勢の人々が遊良と鷹矢の今のデュエルを、素晴らしい戦いだったと認めていて…

そんな、中で…

『何たる余裕！何たる悠々！　Ｅｘ適正のない者では、【王者】の孫の相手など務まらなぁぁぁい！何たる堂々とした勝利！やはり出来損ないなど、相手にならないということかぁぁぁぁぁぁ！』

まるで、『そういう台本』が決まっていたかのように。
…世界から聞こえる賞賛の声とは裏腹に、食い気味に叫ばれたのは実況の声だった。
勝者を賞賛し、敗者を貶す…
しかしその言葉は、王者【黒翼】の孫を持ち上げていると言うよりかは、Ｅｘ適正の無い少年の価値を更に下げようとしているかのような乱暴な言葉であり…
…今の戦いを見て、こんな言葉を少年達に投げかけるなど一体どんな神経をしているのか。
そう、いくらＥｘ適正が無いとはいえ、あれだけの戦いを見せた天城　遊良に対し。
こんな言葉を投げつけることはおかしい事なのではないかと、実況の声を聞いた大勢の者が今の台詞にそんな違和感を覚え…
しかし、雇われているに過ぎない実況はそのまま、渡されている『台本どおり』に…
更に言葉を、続けるように…

『何たる泰然自若とした勝者の姿か！今ハッキリと！出来損ないに格の違いを教え…』
「ふ、ふふ…ふはははは！どうだ、見たか遊良ぁ！去年の雪辱を果たしたぞ！これで一勝一敗、イーブンだ！」
『…え？』
しかし―
そんな実況の声を、まるで遮って響き渡るかのように。
「見たか世界中の者達よ！俺の！この俺のゆるぎない勝利を！俺は！

遊良に！勝ったのだ！ふはははははは！」
『…あ、か、格の違いを…え？』

歓喜の声を思い切り上げた、鷹矢の声が中継を通して世界中へと映し出されて。
…それは先ほど実況が称えていた、『泰然自若』の鷹矢の姿を根底からして裏切る振る舞い。

冷静沈着、悠々自適、勝って当然という【王者】の孫に相応しい男は一体どこへやら…

今の鷹矢の、Ｅｘ適正の無い男に勝ったことをこれほどまでに喜び、噛み締め、はしゃいでいる王者の孫の姿は、とてもじゃないが『勝って当然』と思っていたような立ち振る舞いでは断じて無く。

「いつまで調子に乗ってんだこの野郎！」
「むっ!?何をするのだ！馬鹿になったらどうする！」
「元々馬鹿だろうが！いいからみっともない真似すんなって！見られてんだぞ？」
「むぅ…」

そして…
あまりの鷹矢のはしゃぎようを見かねたのか。
片膝を突いて、うな垂れていたはずの遊良が…
天空闘技場の中心まで来てはしゃいでいた鷹矢へと向かって、まるで諭すように静止を促し始めたではないか。
…それは王者【黒翼】の孫を相手にするリアクションとしては、些か距離が近すぎるような気もするコミュニケーション。
そのあまりに親しすぎるかのようなその雰囲気は、遊良と鷹矢の関係性を知らぬ者達からすれば意外も意外だったのだろう。
王者の孫とＥｘ適正の無い少年が、親しげに壁もなく会話をしてい

るその光景を見て…観客達の多くも、意外性を感じており…

「だがこれで通算７４５２５戦３７２６３勝３７２６２敗！うむ！俺が一歩リードしたのは変わりない！」

「ッ、ちょっと待てふざけんな！３７２６３勝３７２６２敗なのは俺の方で、お前は俺よりまだ一敗多いはずだろうが！」

「ぬ!?ふざけた事を抜かすな！勝っているのは俺の方だ！遊良の癖に、俺に勝ち越しているなど片腹痛いわ！」

「それはこっちの台詞だ！鷹矢の癖に、何勝手に自分の勝率高くしてんだよ！」

「なんだと!?」

「なんだよ！」

『あ、か、格の…ちが、えと……』

しかし、そんな観客達と実況を置いてけぼりにして。

誰もが聞き間違いかと思えるような、途方も無い数字をソラで言いつつ…

何かに火が点いてしまったのか、遊良も鷹矢もその歳の少年達らしい雰囲気で言い争いを始めてしまったではないか。

…実際に周囲に観客達が居ないために、そしてスタッフなども居ないために。戦いが終わってから、どこか緊張感がなくなってしまった彼ら２人。

こんな時、ルキが目を覚ましていたら絶対にこう言ったことだろう…

―『…本当は７４５２５戦３７２６２勝３７２６２敗１分けじゃん。ホント譲らないんだから、もう。』

…と。

デュエルディスクに記録されているため、これまでの戦績を見返すことは簡単だとは言え。とても正気とは思えない程の回数、戦ってきた遊良と鷹矢。
…それは彼らが、それだけ長い間共に過ごして来たというなによりの証。
お高く留まっている王者の孫ではない。孤独に塗れたＥｘ適正の無い者ではない。
世間のイメージからかけ離れた、その少年達の言い合いは…
一度火が点いてしまったためか、更にヒートアップしていって。

「しかし【抹殺の指名者】には本当に驚いたぞ。一体いつそんなカードを手に入れたのだ？調整用のカードにもそんなカードは持っていなかったはずだが…」
「あぁ、昨日の夜に、デュエリアの『アナライザー』に無理言って１枚借りといたんだ。試合が終わったらすぐに返せって言われてるけど。…ってそれより、何でお前がプラネットを持ってるんだ！知らないぞ、お前がそんなカード持ってたなんて！」
「ふん！お前が釈迦堂　ランにプラネットを貰っていたのだ！ならば俺も奴からプラネットを貰っておかないと不公平ではないか！」
「なっ、ランさんに会ってたのか!?聞いてないぞ!?」
「言っておらんからな！言ったらバレるだろうが！」
「ふざけんな！そんな大事なことを黙ってやがって！」
「何を!?そんなこと俺の勝手だ！」

『あの…格の…違い…違いぃ…』

…王者【黒翼】の孫である天宮寺　鷹矢の勝利を騒ぎたて、Ｅｘ適正の無い天城　遊良の敗北を叩きたいメディアの思惑に反し…
未だ全世界へと向けて流されている遊良と鷹矢の戦いの後の、あまりに壁の無いその会話…いや、他愛も無い喧嘩は、彼らの関係をその

まま表しているかの如く全世界に見られている。
…これでは、天城　遊良の敗北が引き立たない。
才能溢れる王者の孫に、Ｅｘ適正の無い出来損ないは手も足も出ずに負け…惨めな姿を世界に晒し、王者の孫に全面的に敗北を認めるはずだった。
…それが、用意されていたはずのシナリオ。
一体誰がソレを依頼したのかなど、今は誰も知りえることではないとは言え…
しかし今の彼らの仲は、そんなメディア的演出をしてくれそうには無いほどに親しすぎる代物と言えるのだから。
…まさか決闘学園イースト校理事長である【白鯨】砺波　浜臣が徹底されせた、『生中継』という制約がこんな結果を生むだなんて…メディア側も今ごろ困惑していることだろう。
天宮寺　鷹矢の勝利を称えるために、そして天城　遊良の敗北を貶すため中継を切りたくとも…【白鯨】の指示により、まだソレをする事ができず。
つまりは、全世界がその目で見ている。
王者【黒翼】の孫の勝利は才能の違いによる圧倒的な勝利ではなく、また敗北した天城　遊良の姿は惨めで悲惨な愚者の姿でもなく…
彼らの戦いは、紛れも無い互角の勝負で…紛れも無く、対等の者同士の戦いだったのだ、と。
…まぁ、ごくごく一般的な実力を持ったデュエリストであったならば、メディアに惑わされること無く遊良と鷹矢の戦いの意味を理解しているのだが。

そう…

鷹矢の手を、思考を、戦術を。
そのほぼ全てをほぼほぼ完璧に読みきった遊良の先見は並のプロの比ではない。
鷹矢のみにしか通用しないような、あまりに限定的な先読みであろ

うとも…それでも、プロのトッププランカーですら出来ないような、心を見透かしているかのような先見は到底常人には出来ぬ真似事。
鷹矢の方もそう。
遊良の手を、策を、進撃を。
予測と予想と経験と、これまで培ってきた全てを持ってして立ち向かい、最後の最後に遊良のソレを上回る驚愕の一手を隠し通してきた恐るべき策略家。
…予選であんなにも苦しめられた竜胆　ミズチとの戦いでも。
…負けがほぼほぼ確定していた鍛冶上　刀利との決闘でも。
それでも鷹矢は最後の最後まで、最後の決め手となった『プラネット』の事を隠し通し、それを最後の最後に遊良へとぶつけた。
それは鷹矢が、この展開までを予想…いや、ここまでの展開を直感していたからこその決着の着き方。
まぁ、直感と言っても、あれほどの実力とキレを誇った遊良の…ドロー1枚で全てが変わる、遊良のデュエルの全てを理解することなど、他の誰も出来ないことなのだが…
だからこそ、ソレを実現したのは生まれた時からずっと共に過ごして来た鷹矢だったからこそ。
遊良が鷹矢のほぼ全てを見通していたのならば、鷹矢だって遊良の進撃を見透かしていた。

…その戦いはまさに互角、まさに同格、まさに同等。

勝敗を分けたのは、まさに最後の一瞬の読み合いの交錯の末に起きた、最後の最後の『直感』の差。
全力を出し切り、持てる力、得た力の全てを持ってここまで上がってきた遊良と…
他の力を見せてでも、『プラネット』という力だけは遊良のためだけに隠し通してきた、『最後の奥の手』を今ここで爆発させた鷹矢。
勝敗を分けたのは、ただソレだけ。そしてソレが最後の最後に、鷹矢に一瞬だけ軍配を傾けたという…

まさにこの決着は、そういうこと―

そんな、対等の勝負を繰り広げた少年達を…

「…ハッ、あの調子じゃ、アタシらのクビも繋がってそうさねぇ、なぁ木蓮。」

「そうですね。今の勝負の価値は大勢の人がわかってくれていることでしょう。…きっと、『上』の者達も。」

沖合いに停泊中のクルーザーから、サウス校とウエスト校の理事長達がモニター越しにソレを眺めていた。

…遊良の結果に、自分達の『進退』がかかっている彼ら決闘学園の理事長達。

今の勝負では、確かに天城　遊良は負けてしまった…

けれども、『しかるべき結果』と言うのが『優勝』と明記されていない以上、天城　遊良の敗北が『みずぼらしいモノ』なのか『そうでない』のかなど、今の彼らを見ていれば愚人であろうと理解できること。

誰の差し金かは知らないが、天城　遊良を必死になって扱き下ろそうとも…

今の遊良と鷹矢の雰囲気がそのまま世界中へ中継されている以上、情報操作は叶わないだろう。

ソレ故…

「フォッフォッフォ。ま、そういうことじゃのう。素晴らしい勝負じゃった。もしこれでお主らの首をまだ取ろうとしてくる者が居ったら…そのときは、儂に任せておけばよい。」

「おや、随分頼もしいことを言ってくれるじゃないかジジイ。」

「なぁに、儂も今の彼らの戦いを素晴らしいモノじゃと感じたまでの

こと。じゃから、あの子も正等に評価されるべきじゃと思ったんじゃよ…そろそろ、の。」
「…そうだねぇ。」

…純粋な『力』は嘘をつかない。
例え周りが何を企もうとも、正々堂々行われた戦いの純粋なる決着には…誰の画策も思惑も、入り込む余地はないのだから。
…戦いのみで己を証明してきた、決闘界の重鎮達はソレを良く知っている。
だからこそ…
今は他のどんな思いも余計なのだとして…

「…しかし、本当に鷹峰の孫が優勝するとは、のぅ…」

ぽつりと呟かれた綿貫の言葉に、この場にいる誰も気が付かぬまま。
少年達の戦いに、賛美を送っていたのだった―

―…

天空の塔の内部―

「クハハハハ！派手な終わり方だったなぁ！」
「…あぁ、そうだな。」

そこに、決闘学園デュエリア校学長と、決闘学園イースト校理事長である…
劉玄斎と、砺波　浜臣の姿があった。

「しっかし、鷹峰の孫もまさかあんな勝ち方をするたぁなぁ。奴の孫のことだから、てっきりモンスター同士の、正面衝突の殴り合いにこだわるのかと思ってたのによぉ。」
「…いや、彼は勝ち方にはこだわらない。彼は、寧ろ『勝つ』ことにこだわる子だ。彼は…『負け』がどういう意味を持っているのかを、よく知っている。」
「あぁ?…クハハ、よくわからねぇが、テメェが鍛えたっつーだけあって、確かに良いモン持ってるってぇのは良く分かったがなぁ。」
「…そうか。」

今の戦いの終わりを見て、どこか気分よくテンションを上げている様子の劉玄斎と…
声のトーンを、この『本戦』が始まる前から全く変化させていない砺波。
その姿はどこか対照的ではあるものの、砺波からすればあれだけ賞賛されている戦いを繰り広げた直属の教え子たちに対し、少しは気分を上げて褒めてやってもいいはずだというのに…
今の砺波の態度は、まるでモニターの向こうの遊良達を見てはいないかのよう。
いや、デュエルの最中は、ずっと遊良と鷹矢のデュエルをしっかりと見守っていたのだから、教え子達の戦いに興味がない…と言うわけでは断じてないのだが。

そして…

「…ま、とりあえず無事に終わって何よりだぜ。こんな規模の祭典だと、無事に終わらせるのも難しいからなぁ。」
「…あぁ、そうだな。」

【決島】における最後の試合が終わったことで、どこか気を緩ませた雰囲気を見せた劉玄斎へと向かって。

砺波は、一呼吸置いたかと思うと―

「…では、そろそろこちらも決着を着けようか、【紫影】。」
「…あぁ？」

はっきりと―
劉玄斎へと向かって、そう告げた砺波。
今、砺波は何と言った―そう、劉玄斎へと向かって、確かに【紫影】の名を呼んだのだ。
あまりに違う体格差をした劉玄斎と【紫影】は、誰であっても見間違えるはずもないというのに…
いや、そもそも劉玄斎は、『本戦』が始まる前からずっと砺波に監視されていたのだから、砺波が劉玄斎を【紫影】と間違えているというのも可笑しな話であるはず。

「…おいおい、テメェ何言って…」
「茶番は終わりだ。わざわざ貴様の方から現れてくれて探す手間が省けたんだ…逃がすわけがないだろう？」

しかし…
あまりに強い鯨の瞳は、劉玄斎の『姿』よりもその『中』をハッキリと見据えているかのよう。
…迷い無く告げられる砺波の冷声。全てが見えているかのような鯨の視線。

きっとここに第三者が居たら、砺波の頭がおかしくなったのでは無いかと疑ってしまうことだろう。
何せ、ずっと不機嫌な顔をして冷たい言葉を述べていたと思えば、劉玄斎へと向かって感情の無い声で【紫影】の名を呼んだのだから。
…きっと劉玄斎の方も、突然の砺波の狂言に意味がわからなくなっているのではないだろうか。
そう、これでは、砺波がただただ狂った人間のようにしか映らず…

…

「…なぁんだ、気付かれてましたか。」

突如―
一呼吸の沈黙の後に、砺波に視線に打ち破られたかのように。
劉玄斎だった巨漢の体が『闇』のように霧となって霧散したかと思うと―
劉玄斎が立っていたはずの場所には、突如として『別の男』の姿と声が現れたではないか。

…それは、あまりの胡散臭さを孕んだ声質。

そこに現れたのは、スーツと言う名の胡散臭さを身に纏った、『捻じれた』と言う表現があまりに似合う細身で長身の一人の男であり…
身振り手振り歩き方からして、『嘘』と『胡散臭さ』が滲み出ているかのような、得体の知れない素振りと気配を隠す気も無く。
どこまでも嘘の塊のような立ち振る舞いで、飄々と他人を小馬鹿にしたような声と目つきで、砺波へと向かい合っていたのは…

―裏決闘界の融合帝、【紫影】

３０年以上前…表と裏の決闘界との間で勃発した、通称『表裏戦争』で前【紫魔】、紫魔　憐造に敗れて死んだはずの人物。
【決島】においては、『逆鱗』の劉玄斎とアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンに命令を下していた…
ルキを連れ去っただけでは飽き足らず、ルキの体から『赤き竜神』を解き放とうとした、性根の腐った捻じれた男。

しかし…

遊良や劉玄斎から話を聞いていただけの砺波が、一体どうして劉玄斎に化けていた【紫影】の事を見破れたのか。
『変装』というレベルではない。最早『変身』していたと言っても過言ではないほどの変化をしていた【紫影】のことなど、どうやっても疑うことすら難しかったはず。
何せ見た目から声色、果ては記憶に到るまで。【紫影】は劉玄斎の全てを真似て、そうして砺波の前に現れたのだから。
ソレ故、【紫影】の方も少々疑問の残る表情を見せており…
けれども、そんな【紫影】へと向かって。
再度、砺波がどこまでも冷たい声で…まるで深海の深層海流のような、あまりに冷たすぎる声をその口から発し始めた。

「歳を取っていない、か…なるほど、大体理解した。久しぶりだな【紫影】。貴様の顔など、もう二度と拝みたくはなかったが。」
「ふふ、奇遇ですねぇ、私も同じ気持ちです、えぇ。…しかし、一体何故わかったのですか？私が『逆鱗』に化けていると。」
「なんとなく見えていただけだ。劉玄斎の姿をした『靄』の中に…貴様の、捻じれた姿がな。」
「…おやまぁ…となると、もしかして最初から…」
「あぁ、最初からだ。予選が終わって、貴様が劉玄斎に化けて私と綿貫さんの前に現れた時から…私は一度も、貴様を劉玄斎と呼んではいな

い。」
「…」

およそ、人間技とは思えない言葉を並べ始める【白鯨】、砺波　浜臣。
それはとてもじゃないが、常人のソレとはかけ離れた言葉の数々であり…
いくら砺波が『極』の頂をも超えた、【化物】の領域に到達したとは言え。
よもや、これ程までの芸当が出来るだなんて、誰が聞いても信じられるはずもないだろう。

「まぁ、気付く要素は他にも多々あったがな。」
「ほぅ…わりと、自信あったんですがねぇ…」
「随分と甘い変装だった。言葉選びから何から、先ほどの天宮寺　鷹矢への印象からな。特に…劉玄斎に化けるなら、天城　遊良への言葉選びには最上の注意をするべきだった。間違っても、あの子を出来損ないとは言わない方が良かったな。」
「おや…確か『逆鱗』は隠し通そうとしてたはずですが…」
「私はもう見抜いている。そしてそれは、奴も承知の上だ。」
「あぁ、なるほど…」

つらつらと述べられる、【紫影】へのダメ出しにも似た砺波の言葉。
それは、初めからその気になればいつでも【紫影】を見破り、捕まえられたという砺波の自信の表れなのか…
…ソレをしなかったのは、あくまでも子供たちが主役となる『決勝戦』を、大人が勝手な都合で邪魔しないため。
しかし決勝戦が終わった今となっては、最早砺波も【紫影】を逃がすつもりなど毛頭ないのか。
砺波の冷たい嫌悪の視線と、どこまでも強く述べられる言葉。
…そんな中、砺波の言葉を聞いて。
【紫影】の方も、どこか納得のいったような言葉を漏らし始め…

「…ふふ、なるほど。本当に【化物】になってしまったのですねぇ貴方も。」
「貴様に言われたくはない。さて…」

そしてー
飄々と、今にも逃げ去ってしまいそうな【紫影】へと向かってー

―!

「ぐっ!?うっ、手、手が早いですねぇ…えぇ…」
「当たり前だろう?貴様の犯した罪は、例え蘇ったとしても消えるわけがない。」
「ぐっ、うぐっ…」

徐に、突然に、勢いよく。
首をへし折らん程の勢いで、【紫影】の首を力一杯に掴み取った砺波浜臣。
…それはまさに勢いに任せた、静かに燃える鯨の怒り。
砺波にしては珍しく、しかし砺波らしい冷たい怒りが、今にも逃げようとしていた【紫影】の首を掴んで離さず…
苦しげに声を漏らした【紫影】ではあったものの、それでもなお砺波はその手に込めた力を全くもって緩めるそぶりを見せないではないか。

「このまま首を圧し折ってやってもいいんだが…生憎、貴様を一番殺したがっている人がこの島に来ているからな。とりあえず、拘束させてもらうぞ。…貴様に相応しい、荒っぽいやり方でな。」
「ウ…」

冷たい声…

まるで、本当に【紫影】をこの場で殺してしまいそうなほどに…砺波の声はどこまでも冷たく、怨嗟が強くこもっている。
…本当に、心の底から【紫影】に恨み事があるのだろう。
しかしソレをしないのは、砺波が自分よりも【紫影】を自らの手で殺したいと願っている一人の女性を知っているから。
自分よりも、復讐するに値する人間に、【紫影】を引き渡すのが最優先。例え自分が、【紫影】の『正体』に気付いていても…それでも、自分が居れば【紫影】を無力化できるのだと、そう砺波は確信しているから。

そうして…

砺波がそのまま、【紫影】を掴みながら何処かへと連絡を取ろうと。
自らの懐から、デュエルディスクを取り出すために一瞬だけ【紫影】から視線を切った…

その時だったー

『仕方ありませんねぇ…』

不意にー
そう、どこからともなく。
首を掴まれ、声など出さないはずの【紫影】の声が…
否、声と言っていいのかもわからない、不快感すら覚える『音』が、どこからともなくこのコンクリートの部屋の中に聞こえてきたのだ。

それは間違いなく、【紫影】の声色ではあったのだが…

砺波が掴んでいるはずの【紫影】の喉は、全くもって動いておらず。
どこから聞こえているのかもわからない、気色の悪い感覚だけが砺波

へと聞こえていて…

「…これは憐造と同じ…やはり…」

『ふふ、予定より早いですが…』

気味の悪い【紫影】の『音』。そんなモノを聞きながらも、どこまでも砺波は冷静なままで、その『音』に対し何か心辺りがあるような素振りを見せるものの…

聞こえてくる【紫影】の声…いや、『音』は、次第に遠くなっていく。

そして…突如として。

なんと、砺波が掴んでいたはずの【紫影】が、その体を闇の『靄』へと変え始めて霧散し始めたではないか。

「ッ!?逃げるつもりか、【紫影】！」

『仕方ないでしょう?だって本物の【化物】になってしまった貴方が居たんじゃ、私だって逃げるしか手はありませんからねぇ…えぇ。』

確かに掴んでいる【紫影】の首が、次第に崩れていく感覚。

ソレは砂の塊を、力いっぱいに掴んでいる感覚にも似ているだろうか…

力の限り握りしめても、指の隙間から逃げていく闇の『靄』。

その気持ちの悪い、形容し難い感覚だけが砺波の手を襲い、そのまま【紫影】の身体全てが『靄』となって消えていって。

そして…

【紫影】の身体が、完全に霧散してしまった…

その時だったー

―！

突然ー

響き渡ったのは、途轍もない地響き。

そして、その地響きとともに…

島全体が、揺れ始める―

「ッ!?【紫影】！貴様、一体何を…」

いくら【化物】の領域へと至った砺波を持ってしても…いや、【化物】となった砺波から逃げおおせたからこそ。

逃げてしまった【紫影】の異常性は、更に人間味を失いながらどこまでも不気味ならモノへと変わっていくのみであり…

…あまりに強い大地の揺れ。あまりに酷い地の揺れる音。

そんな、突然襲い掛かってきた地響きに隠れるようにして。

姿を消した【紫影】は、地響きと共にその『音』だけを響かせながら…

『ふふ、貴方のいう通りにしてあげるのですよ【白鯨】…『茶番』を、

終わりにするのです。』

……

―

突発―

【紫影】の声色をした『音』が、その気配とともにコンクリートの部屋から消え失せたと思ったその刹那。

いきなり、塔の外…いや、島の外から、自然災害のような音の塊が地響きと共に襲いかかってきたのだ。

…轟き始めた轟音、それはまるで地響きのような、大地が揺れる『地震』の音。

それはまるで洪水のような、押し寄せる『水』の音。

ソレでいて、超巨大台風が襲ってきたかのような…吹き荒れる、『風』の音。

…そんな、突如として襲い掛かってきた『音』の数々を聞いて。

わらわらと、『医療棟』にいた学生達が外へと飛び出してきて…皆、一目散に音のする方向…島の外へと、その視線を同時に向け始める。

すると―そこには、誰もがその目を疑う光景が広がっているではな

いか―

何故なら…

「なっ、なんだんだぜアレは！」
「た、竜巻の…壁？」
「おい、どうなってんじゃい！アレは一体何なんじゃ!?」
「面妖な…竜巻が島を覆っておる…」

そう、学生達の目に飛び込んできた、目を疑うような光景…それは、あまりの轟音と共に天へと登るようにして…

島を、丸ごと超巨大な『竜巻』が取り囲んでいたのだから―

…海を巻き上げ立ち昇る、超巨大な水柱。
…雲を突き抜け舞い上がる、超巨大な風の塔。
…地鳴りにも似た耳を劈く、超巨大な音の塊。

学生達の目に飛び込んできたのは、そんな自然界ではありえない自然現象。そう、これ程の規模の竜巻が、何の前触れも無く突如として出現したのだ。
…移動してきたわけではない。島を飲み込むわけでもない。
ただ、ソコに留まり…島の浜と沖合いに、『壁』を作っているかのように。ただただ激しい轟音を上げて、天に向かって吹いているだけ。

…一体、突然に何が起こったのか。

決勝戦が終わったばかりだというのに、突如として島の外と隔離されるようにして立ち昇った超巨大な竜巻に、学生達の理解は全く追いついておらず。
しかし、それも当たり前だろう…

凄まじかった天城　遊良と天宮寺　鷹矢の、デュエル後の余韻に浸る暇もなく。突然、こんな超常現象が…いや、現象というにもおこがましい、超常災害が島を取り囲んだのだから。
皆、全員が突然立ち昇った超巨大竜巻に対し…恐れだとか驚きだとか、それでいて理解できないソレに、疑問符を浮かべている者達ばかり。
…理解出来ない…一体、何が起こっているのか。
不意に、いきなり、突発的に、島を取り囲むようにしてどこからともなく現れたこの『竜巻』。
そんな竜巻に対し、ただただ呆然と言葉を無くし、思考を停止して立ち尽くしている学生達の耳に…
―再び突発的に、どこからとも無く『声』が聞こえてきた。

『あーあー、マイクテスマイクテス…おっほん！えー、学生諸君、お疲れ様でしたぁ。以上を持ちまして、【決島】の全デュエルが終了した事を私からお伝えさせていただきまぁす、ええ。』

島を取り囲む超巨大竜巻に対して、全く理解が追いついていない学生達へと向かって。
突如として聞こえてきたのは、心の底から嫌悪感を感じるような、あまりに捻じれた声であった。
そして、全員が反射的に。
声のした方…超巨大竜巻の轟音が響く、その竜巻の上部…そう、空を見上げると…

そこには―

『それではコレより、主催者である私、【紫影】から、次のプログラムを発表させていただきまぁす！ふふっ、まだまだ、【決島】は終わりま

せんよぉ、ええ。』

見るからに胡散臭そうな、気色の悪い捻じれた笑みを浮かべた1人の男が。

まるで竜巻をスクリーンのようにして、不穏なる言葉と共にどこかから『映像』を配信していた―

…誰だ、この男は。

きっと、この場にいた大多数の学生達は瞬間的にそう思ったに違いない。

聞いたことのない、【紫影】という名など…

そう。一部の『知っている者』を除き、彼ら学生達の目に映ったのは全く見た事もないような…

誰かも分からぬ、捻じれた男だったのだから。

…しかし、確かに主催者と名乗った男は、学生達から向けられる怪訝の視線など意に介さず。

『それでは、これより…』

ただただ飄々と、ざわめく学生達へと向かって―

『【裏決島】を、開催します…ええ。』

――…

ｅｐ９２「裏決島」

『これより…【裏決島】を、開催します…えぇ。』

響き渡ったのは、そんな意味不明なる宣言であった。

…【決島】が行われていたこの無人島。決闘市とデュエリアの学生達総勢２００名と、その他のスタッフが数人いるだけのこの島。

そんな、激戦を終えたばかりでようやく世界最大規模の学生達の『祭典』が終了したかと思われた矢先に…

なんとこの孤島を突如として、超巨大な『竜巻』が壁を作るようにして吹き荒れ始めたかと思うと、突如として姿を現したその男はそんな『宣言』を今確かに行ったのだ。

…島と外界を隔離するかのようにして吹き荒れる竜巻を、スクリーン代わりにするかのように。

突然姿を見せた、【紫影】と名乗ったこの捻れた男は、確かに今そう言った。

【裏決島】…と。

…全く意味がわからない。

きっと、【紫影】を見ている多くの学生達…否、全ての学生達がそう思ったことだろう。

何せ、たった今【決島】の決勝戦が終わったばかりなのだ。凄まじかった天城　遊良と天宮寺　鷹矢のデュエルの、その余韻に浸っていたはずの今の学生達の頭では…

突発的に巻き起こったこんな意味のわからない超常現象の数々に対し、冷静に理解を示せるような時間など、少しの暇も与えられておらず。

しかし…

ざわざわざわとざわめき始めた、唖然としている学生達を意に介さず。

竜巻のスクリーンに映し出されている、【紫影】と名乗った胡散臭さ全開の男は…

ただただ愉悦に淡々と、捻れた言葉を述べるだけ。

『ルールは簡単。解き放たれた裏決闘界の刺客、総勢２００名が次々と襲いかかってきますので…学生の皆さんは、裏決闘界の刺客から生き延びていただきまぁす。貴方達学生の勝利条件は２つ。裏決闘界の精鋭２００名を全て降すか…私、【紫影】を直接倒すか。そのどちらか片方を達成した時点で、貴方達全員の解放を約束いたしましょう。…ま、私の居る場所は明かせませんので、頑張って探してくださいねぇ？協力するもよし、１人だけ逃げ隠れしてもよし…学生諸君か裏決闘界の刺客、どちらかが０になるまで終わらない、生きるか死ぬかのサバイバルデュエルと洒落込もうではありませんか。』

つらつらつらと述べられる、【紫影】の捻れに捻れた言葉。

それは、誰が聞いても『狂っている』としか思えないほどに…

自己満足に塗れたあまりに狂った言葉であり、学生達も理解が追いつくはずもなく、ただただ胡散臭さしか感じられない事だろう。

その、突如発せられた【紫影】の言葉に対し…学生達はその説明を理解できないまま、その場に立ち尽くしているだけ。

…裏決闘界の刺客？生き延びてもらう？生きるか死ぬかのサバイバルデュエル？

一体、【紫影】は何を言っているのか。多くの学生達の頭の上には、そんな疑問符がいくつも浮かび上がっているばかりであり…

「何なんだよ！目的はなんだ！」

そんな折、竜巻のスクリーンへと向かってそう叫んだのは決闘市の学生かデュエリア校の生徒のどっちだったのだろう。

それは果たして勇敢な叫びか、それともただの阿呆の喚きか…
普通、こんな場面に遭遇すれば、ただただ言葉をなくして呆然としてしまうのが人間の性だというのに。しかし反射的にそう声を荒げてしまったその学生の叫びは、ただただ竜巻の轟音と混ざってさらに掻き消える。

しかし…

そんな1人の学生の叫びを、確かに耳に入れてしまったのか。
スクリーンに映し出されていた男【紫影】は、益々薄気味悪い笑みを零しながら…質問に答えるようにして、その口から気持ちの悪い声を放ち始めた。

『目的ぃ？ふふ…我々裏決闘界の目的は唯一つ…貴方達学生の中に、私達が探している者が1人紛れ込んでいます…私達は、その1人を探しているだけなんですよねぇ。そのついでに、大暴れさせていただこうかと思いまして、ええ。』
「つ、ついで…？」
『そう、ついでもついで！実は貴方達の中に、『神』のカードを持っている方がいらっしゃいましてねぇ！いやぁー、貴方達の中で、一体誰が『神』のカードを持っているんでしょうねぇ！暇つぶしに、しらみつぶしさせてもらいますよぉ？』

―！

そして、【紫影】が言い終わったのと同時に。
再び学生達の間にざわつきが生じ始め、ソレにも増して驚きの声があちこちから挙がり始めて。
『神』のカード…【紫影】は確かに、そう言った。
…この世界における、御伽噺だとか伝承だとか、そう言った古い言い伝えや口伝やらで現代までその存在が伝えられている『神』のカー

ド。
しかし、かつて存在したとされている『神』のカードの現物など、この時代に生きる一般的な者達は誰一人としてその影も形も見たことすらないはずだというのに。
…学生達の中に、本当に『神』のカードを持つ者がいるのか。
もしソレが本当なら、その1人を差し出せば自分達はこんな馬鹿げた事から開放されるのでは無いだろうか…
そんな思惑を、誰もが瞬間的に思い浮かべ―

『あ、ちなみに…』

けれども―

【紫影】は、一呼吸置いた後。
心の底から愉悦を感じている、どこまでも気味の悪い捻じれた声と共に…

『生き延びると言うのは言葉の通りです…ふふ、ここにいる皆さんは知ってる方ばかりですよねぇ？これからのデュエルは、モンスターが実体化して襲い掛かるので…学生の皆さんは、精々死なないように頑張って下さいねぇ？あと、デュエルに負けた学生は裏の世界に攫わせていただきますので…ふふふ…洗脳して、裏決闘界の尖兵に調教してさしあげましょう。精々気を失わないよう頑張ってください、ええ。』
―
!!!!!!!!!!
ザワッ…という擬音が、目に見えるのではないかと錯覚するほどのどよめきとなりて。

【紫影】がそう言いきったその瞬間に、学生達の驚愕が島の全土へと響き渡った。
それは学生達の思い浮かべた、敵が探している『神』のカードを持つ者を1人差し出せば、自分達は無傷で助かるのではないかという…
そのあまりに甘い考えを、根底から一蹴するかのように。どこまでも底意地の悪い宣告となりて、学生達へと襲い掛かるのか。

…性根の腐った【紫影】の告げた、慈悲もない恐怖を煽る言葉。

それによって、学生達には押さえきれないほどの焦燥が溢れ出し…子供たちは今まさに、錯乱に任せて飛び出しそうになっているではないか。
そう、この島にいる、各学園の選ばれた強者達は知っている…いや、経験したことがある。モンスターが実体化した、人知を越えた危険なデュエルを。
…一枚のカードで、全身が焼け焦げてしまうことがある。
…一体のモンスターの攻撃で、消えぬ裂傷を負うことがある。
…強大なモンスターの攻撃によって、全身が潰されることもある。

そして、最悪の場合は―

…その実体化したデュエルの恐さと痛みを、ここに居る全員が知っているからこそ。
無慈悲にただただ淡々と、そう告げてくる【紫影】の冷たい捻じれた言葉は…どこまでもどこまでも学生達の心に、恐怖そのモノをただ植えつけているだけであり…

『それでは早速始めましょうか。そうですねぇ…まずは学生達が大勢集まっている、『医療棟』からでも襲撃いたしましょうかねぇ。では裏決島…スタートでぇぇぇす!』

「うわぁぁぁぁあ！」
「いやだぁぁぁぁあ！」
「冗談じゃねぇぞ！冗談じゃねぇぞぉ！」

そして…蜘蛛の子を散らすかのように。
苛立ちを感じそうな【紫影】の捻じれた開会宣言と同時に…一目散にバラバラに、逃げ出し始めた多くの若き学生達。

…しかし、ソレも当たり前か。

何せ、考えを整理する暇も無く。たった今【紫影】の口から、この『医療棟』を最初に『襲います』と宣言されたのだ。
…得体の知れない相手。知らされたのは敵が犯罪者集団だということ。
ソレの真偽を確かめる暇もなければ、【紫影】と問答をする時間も学生達には与えられず…
平和な世界で長く生きてきた多くの学生達からすれば、得体の知れぬ相手が襲ってくる恐怖は、まだまだ精神的に若すぎる学生達にとっては決して計り知れぬ代物なのだから。
犯罪者が襲いくる焦り。
実体化したデュエルが襲いくる驚き。
そして犯罪者達に攫われるという恐怖が、間髪いれずに襲い掛かってきたこの現状は…形容するとしたら、純粋なる恐怖そのモノであり…
…もしここで、普通の生活を送っていた者ならば実体化したデュエルと言われたところで全くピンとはこなかったことだろう。
【紫影】の宣言を理解できず、実体化したデュエルなど信じる事もできず。ただただ呆然と立ちすくみ、何が起こっているのかも理解できないままに突っ立っていることしかできないだけ…

しかし、ここにいる学生達は皆、過去の経験からなまじソレを知っている学生達ばかり。そう、実体化したデュエルの恐さを、心の底から知っている者たちばかりだったのだ。

…ソレは決して良い経験などではなく、過去に植えつけられた逃れられぬトラウマ。

焼かれた事もある。切られた事もある。貫かれた事もある―

その、昨年に起きた決闘市での『異変』や、ここでは語られぬデュエリアで起きた『事変』での経験が、今まさに学生達の脳裏にフラッシュバックしてきているのか。

ソレ故…

多くの学生達がパニックとなりて。

バラバラに、逃げるようにして散らばり始めてしまって―

…

「残たのはどれぐらいネ?」

「3年が30人、2年が6人、あとは治療中で動けぬものが棟内に…両校合わせて、およそ10人と少しといったところで候。」

「ま、妥当なとこネ。…下手に動くの逆効果ヨ。敵さんがココ狙てくる言うなら…待ち構えて、篭城戦でもするのが得策アル。」

「同感でござる。多数を相手に、1人で逃げきることなど叶わぬゆえ。」

冷静に―

しかし、パニックになった学生達の姿が見えなくなった頃。

そう、こんな情況だと言うのに。
どこまでも冷静な声で、そう発言したのは決闘学園デュエリア校３年。デュエルランキング第２位、慈悲無き『マフィア』と呼ばれる女生徒…

―王　ミレイ

彼女はどこまでも冷静に、その艶やかな声を持って隣に立つ同級生…デュエルランキング５位の『サムライ』へと、そう語りかけたかと思うと。
…その身に纏った、体のラインを強調させる真っ赤な中華風のドレスを翻しつつ。
周囲へと一瞬だけ視線を回して、再びその麗しき唇を開き始めた。

「…『アナライザー』、居るアルネ？敵さんがどんな奴等か、『ハッカー』と一緒に…」
「ヌフッ、もう調べ始めてるよ。『ハッカー』が島の監視カメラをハッキングした。今、上陸してきた奴等の顔を、僕の端末のデータベースに照会中さ。」
「相変わらず、仕事の速い男達ネ。」
「でも悪い知らせもあるザンス。とりあえずこれで島の中の様子はわかるザンスが…ワガハイを持ってしても、外にはどうやっても繋がらないザンス。完全に隔離されてしまったようザンスね…」
「内部システム乗っ取っただけでも上出来アル。…あの竜巻ネ、多分そうダトは思てたカラ。」
「よし、出たよ。裏決闘界の残党だったっけ？…ヌフッ、僕のデータベースによると、本当にほとんどの奴が犯罪者だねぇ。…ニュースになってないような、ものすごーくヤバい奴もいるねぇ…。」
「…ワガハイからも、もう一つ悪いニュースザンス。海岸の監視カメラの映像だと、どこから現れたのか確かに島を取り囲むようにして浜

に無数の船が停泊してるザンス。それで、島に上陸してきた敵は確かに２００人ちょうどだったザンスが……でも……」
「でも…何ネ？」
「…まだ船に、犯罪者達が大勢残ってるみたいザンス…デュエルディスクの反応を数えてみた限りだと…その数およそ……さ、３００ほど…」
「ッ…冗談じゃないネ…『シールダー』を先頭に篭城するアル。敵さん、後から頭数増やしてくつもりヨ。」
「よっしゃ！任せとくんだぜ！犯罪者なんて、俺が一歩も通さないんだぜ！」
「実体化してるなら寧ろ都合がいいネ。『ボマー』、罠仕掛けるの頼んだアルよ？…援軍が来るまで、拠点を取られるわけにはいかないアル。」
「了解だＹＯ！予備のボムの罠カードゥ、多めに用意しといて正解だったＹＯ！」
「後方支援は『ドクター』に任せるヨ。２年生連れて、前衛のフォロー頼んだアル。」
「ン了解さ、『マフィア』。デュエルが実体化しているンなら、ン怪我人がどれだけ増えるかわからないからね。」

即座に―
そう、焦燥に駆られて逃げ出した者達がいなくなった直後に。
流れるように連携を始め、見る見るうちに方向性を整えていく…どこか場慣れしている雰囲気を醸しだし始めた、デュエリア校の３年生達。
…普通、こんな情況に陥ったら誰だって恐怖と焦燥に塗れて錯乱してしまうのが常だというのに。
皆が皆、己のやるべき事を言われる前に理解し…今、この情況で、自分達が何をしなければならないのかを的確に理解しつつ。
即座に敵の襲撃に備えて、着々と仕事を遂行し始める彼らの手際の良さは、本当に高校生なのかと疑いたくなるほどの、まさに『その道』

のプロの仕事のようではないか。

…こんな、非日常的な危機的状況だというのにも関わらず。迅速に動き始める、デュエリア校の3年生達。

それは彼らが、過去にとある『事変』に巻き込まれたが故の経験なのか…

逃げ出してしまった者達とは違う。ここに残った者達は、過去に似たような情況を生き抜いた者達。どこまでも冷静に、どこまでも沈着に…

かつて『異常』を経験した猛者達が、こんな情況に置かれても冷静に立ち向かい始めて。

「ヌフッ、ねぇ『マフィア』…僕のデータベースにも【紫影】って奴の事は入ってないんだけど…それって、おそらく裏の人間の中でも大物中の大物ってことだよね？君なら何か知ってるんじゃあないかい？」

「…まぁネ。ワタシも詳しく知てるワケじゃないケド…【紫影】…裏決闘界の融合帝。パパに聞いた話だト、ずっと昔に死んだはずの男アル。屑の中の屑…だけど気持ち悪いくらい強かたて…パパ、言てたヨ。」

「裏世界の融合帝…死んだはずの男…ヌフッ、キナ臭くなってきたねぇ…恐い恐い…」

「マ、気になるのはわかるケド、余計な事には首つこまない方がいいアルヨ？…お前に言ても無駄だとは思うケド。」

「…ヌフッ。」

【紫影】…デュエリアの『アナライザー』を持ってしても知らなかった、裏社会の大物中の大物。

それは黒社会の中でも、とりわけ凶悪な噂の耐えない巨大組織、『樹龍会』のボスを父に持つ王　ミレイだからこそ知っている裏世界の情報ではあるのだが…

『敵』の正体を、知っているのと知らないのでは心の持ちようが段違いだということをミレイも理解しているからこそ。
敵の親玉の正体を隠すことなく、近くにいる誰にでも聞こえるような声で【紫影】の事を話し始めるミレイの声は、全く持って震えてはおらず。

…あまりに学生離れした統率力で、この場を冷静にまとめ上げた女生徒、王　ミレイ。

そして彼女の指示に従い始める他の生徒達もまた、選ばれた猛者らしく全員が全員冷静なままで、自らの仕事へと向かっていくのみ。

「さてト…」

…すると、デュエリア勢の統率力を見て、あっけに取られている決闘市側の学生達へと向かって。
ミレイは、高等部の学生とは思えない程に育っているその豊満な肉体を揺らしながら…
なんとも異性の劣情を煽るであろう、そのしなやかな太股を見せ付けつつ。決闘市側の学生達へと近づくと、吐息と共に再びその口を開き始めた。

「決闘市の子達も安心していいアル。逃げ出した奴等は残念だたケド…残った子達はちゃんと守てアゲルから、ここは私達に任せテ…」
「舐めないでくれる？自分の身くらい自分で守れるわ。」

しかし…
ミレイの言葉を、途中で遮るようにして。
気の強い言葉と共に、義姉に似せたポニーテールを揺らしながらミレイへと向かってそう言い張ったのは決闘学園イースト校２年…

―紫魔　アカリ

同性からしても気後れしそうな、有無を言わさぬ妖艶な美しさを押し出してくる王　ミレイに対しても。

アカリが正面から啖呵をきって言葉を挟めたのは、ミレイよりも強く美しいと思える理想の女性像がアカリの中にはあるからなのか。

…こんな情況に置かれても、どこまでも気を張り強気のままで。

デュエリアの『マフィア』を相手に、決闘市の『地紫魔』が言葉を返す。

「篭城するんでしょ？ならアタシも前衛に加えてもらえるかしら。…予選は失格になったけど、腕に覚えはあるから。」

「…威勢のいい小娘ネ。ケド、実体化したモンスターて結構恐いアルよ？それに、コレは冗談じゃなくてホントにモンスターが実体化して襲て…」

「知ってるわ。去年、ここに居る全員が体験したもの。…これが冗談じゃないって事も…アタシたちは分かってる。」

「フーン…ちょと意外だたネ。」

「だから、アンタ達だけに仕事をさせるつもりなんてない。アタシ達も戦えるってことよ。それに、大人しくやられるのを待つだけなんて性に合わないのよね。」

「マ…それなら戦力になるかもネ。こうなた以上、決闘市もデュエリアも関係ないシ…じゃあ、ワタシの指示に従てもらうヨ。この情況で、持ち場に不満言てる暇無いのも分かてるだろうからネ。」

「…わかったわ。」

そういって…決闘市とデュエリア側で迅速に話が纏ったのか。

…『医療棟』の中に向かう、残った少数の学生達一同。

逃げ出してしまった者達は仕方が無い…

そう、こんな情況なのだ。あれだけパニックになって散り散りに逃げ出してしまった、他の学生の全員を救う事は誰であろうと難しいこ

とであり…
…しかし、残った戦力はデュエリア勢が約３０に決闘市勢がおよそ１５。
篭城して、援軍を待つ選択をしたとは言え。
それは襲いくるという犯罪者集団２００名と、今後密かに増えるであろう残り３００の敵を相手にするにはあまりに矮小な集団ではないか。
それでも…
この場に残った少数の学生達は、遅い来るであろう犯罪者達に負けるつもりなど無いのだと言わんばかりに。
残った心を奮わせて、敵の襲撃に備え動き始める。
そう、この砦を守ることに専念しなければ、数の波に飲まれてしまうことを言われるまでもなく理解しているからこそ。
逃げ出してしまった者たちの事を気にする余裕もなく、敵の襲撃に備えようとしているのだろう。

（デュエリア３０、決闘市１５…篭城しても正直ジリ貧ネ…）

…そんな中。
敵の襲撃に備えて、無理矢理に奮起している他の学生達の中で。
あくまでも冷静に思考を巡らすミレイの脳裏には、到底勝ち目の無い戦いが迫っているという…学生の熱とはかけ離れた、冷たい結論が既に見えてしまっていた。

…それは先ほど、デュエリアの『アナライザー』が出した敵のリストに、目を通してしまったが故の結論。

そう、表情には決して出さぬものの、この場に居る誰よりも裏社会の事を知っているミレイだからこそ…
ざっと目を通しただけでも、この島に上陸した敵の面々の中には到底学生程度では立ち向かえないような、裏決闘界の大物が紛れ込んで

いたからであり…
―サイレント・ジョー
―『毒尾』
―ヒル・ブラザーズ
―黄昏のアカツキ
どれもこれもだれもかれも、かつて『表』の決闘界を追い出されたり追放されたりした、一昔前の大物デュエリスト達。
それは裏決闘界で、ひいては裏社会でもその名を知られた、【紫影】、【白夜】、【黒獣】の三帝王に次ぐと言われた裏のトップランカー達であり…
…そうした、『表』に馴染めなかった隠れた強者が、裏社会に流れてきていることはミレイも知っていたとは言え。
祖父や父といった前時代の、ピークは超えたとは言え未だ恐るべき実力を持った強者達が犯罪者というゴロツキデュエリスト達に混ざって襲い掛かってくるというのは…
『先』の地平に至っている、デュエリアの『マフィア』を持ってしても分が悪いと判断せざるを得ないのか。
…デュエリアの『マフィア』たる自分ならば、１ｖｓ．１ならば互角に戦う事は出来る。
…いや、デュエリアのデュエルランキング上位者達ならば、１ｖｓ．１でなら裏のトップランカー達ともいい勝負が出来る。
しかし、いい勝負では駄目なのだ。
そう、いくら実力の『壁』を超え、『先』の地平に至っている者が自分を含めて数人こちら側にも居るとは言え。
敵側の方が圧倒的に物量が多いため、数の暴力の前では押し潰されてしまう危険性があるのだから…敵が増援を寄越す危険性のある現状では、分が悪いどころの話ではなく…
また、裏のトップランカー達以上に、ミレイが焦りを覚えているのが…

（…『七草』が４人も居ルとか冗談じゃないネ…ワタシ１人だけじゃ相手も出来ないの二…アイが起きてたラ…せめて、リョウが居たラ…）

ミレイが何より頭を悩ませているのは、裏決闘界の猛者達の名が霞むほどの『４人の敵』。

ー『七草』

それは、デュエル傭兵集団―

裏の世界で、組織の代デュエルやら違法な賭けデュエル、果ては命を賭けた死のギャンブルや国同士のデュエル戦争でその名を轟かせているという…

『極』の頂に位置する、７人の恐ろしき猛者達の総称。

…ミレイも、中等部時代にデュエリアで起こった『事変』で邂逅したことがある。『七草』と呼ばれる、その恐ろしき敵たちと。

かつて、デュエリアの街が炎に包まれた悲劇の『事変』ー

それを巻き起こした原因である『七草』達が、『４人』もこの島に現れたのを見た瞬間に…

ミレイは、この戦がどれだけ敵の有利に作られているのかを理解してしまっていたのだ。

…なまじ裏世界を知っているばかりに、嫌でも理解してしまう己の知識を恨みすらしている様子の王　ミレイ。

刀利の『事情』を知っているが故に、最も頼りになるであろう【地の破王】の助けが最初からありえないことを理解しているからこそ…

男子学生の欲情を駆り立てる、憂いを帯びた悩み姿を無意識に見せ付けつつ。

今のミレイの頭には、この分が悪すぎる戦をどうして切り抜けるか…ただただその思考をフル回転させ、敵の襲撃に備えて指示を飛ばしていて。

そして―

「もっと資材持って来るんだぜ！窓とか全部塞ぐんだぜ！」

「ちんらたしとる暇なんてないじゃけぇ！手が空いた奴は他手伝わんかい！」
「ン備品確保急いでくれ！ン怪我人は上層階に移動さ！」
「…どうだい『ハッカー』、外に連絡は出来そうかい？」
「まだ無理そうザンス…ワガハイの個人回線をどうにかつなげようとはしているザンスが…時間が…」

およそ高等部の年代とは思えない程の手際の良さで、各々自らの仕事を迅速に遂行していく決闘市の学生達、デュエリアの生徒達。
…手分けして窓という窓を閉じ、補強し、塞ぐ。
…表と裏の２つの入り口に、罠を仕掛けその上からバリケードを造り始める。
…昨日の予選での怪我人、意識の無い者、心折れて戦えない者を、上の階へと避難させる。
…怪我人が出たときの為に、応急手当の準備を整える。
…侵入してきた敵を捕らえる為の、捕縛の準備を整える。
…外に助けを求めるために、隔離された情況からの脱出を試みる。

誰もが皆、この情況を冗談だとは微塵も思っていないからこそ…いずれ絶対に襲ってくるであろう、敵の襲撃に備えて覚悟を入れていて。

そんな中―

正面入り口のバリケードが、完全に完成する前に。
この篭城の拠点である、『医療棟』を出て行こうとしている人影が…１つ。

「お、おいアンタ！どこ行くつもりなんだぜ!?」
「…どこって…外？」
「いや何でなんだぜ！話聞いてたのかぜ!?これから篭城するんだぜ！いいから早く中に戻るんだぜ！」
「…うん。大丈夫。」
「いや何が大丈夫なんだぜ！意味わかんねーんだぜ！お遊びじゃないんだぜ!?」
「…うん。」

バリケード造りにやっきになっている、デュエリアの『シールダー』の叫びにまるで応えるつもりもなく。
砦であるはずの『医療棟』を出て、どこかへと行こうとしていたのは決闘学園ウエスト校３年…

―竜胆　ミズチ

…一体、彼女は何を考えているのか。
これから敵が襲ってくるというのに、自分から外に飛び出すなど正気の沙汰ではない。そう感じた『シールダー』が静止をかけたというのに、彼女はそれを分かっていてもなおその足を止めることなく外へと出て行ってしまうだけであり…
パニックになって逃げ出した、他の学生達とは違う…自らの意思で、敵中へと向かい始める竜胆　ミズチ。
…まるで、外の竜巻に当てられて飛ばされそうなほどに細いその体だと言うのに。
その、どこまでも儚げに風に揺られる彼女の姿は、どこから犯罪者が襲い掛かってくるか分からない島の中に放りだすにはとてもじゃないが不釣合いなる儚く気怠げな立ち振る舞い。
だからこそ、出て行くミズチを見つけてしまった『シールダー』は、声を荒げて静止を訴えてはいるのだが…

…しかし、そんな『シールダー』の静止を意に介さず。
外へと出たミズチは、『医療棟』に一瞬だけ振り向きながら…
どこか決意に満ちたような『眼』で、再度自分へと声を荒げている『シールダー』へと言葉を残して―
「…でも、行かなきゃいけないから…【紫影】の所に…」
「ッ…ア、アンタ…あの【紫影】って奴の事なにか知ってんのかぜ？」
「…私が倒さないといけないの…【紫影】は…私が…」
「あ、お、おい！待つんだぜ！戻るんだぜ！おーい！」
そうして―
どこか、血走った『蛇のような眼』を一瞬だけ見せたかと思うと。
ミズチは、デュエリアの『シールダー』の静止を振り切り…
どこかへと、去ってしまったのだった―

―…

天空闘技場―
たった今激しい激闘が終わったばかりの、まだ決勝の『熱』が残っている空に最も近い場所で―
「な、なんなのだ今の男は！」
「【紫影】だ！アイツ、また現れやがったんだ！」

遊良と鷹矢が、突然島を取り囲むように巻き起こった『竜巻』と、突如姿を現した【紫影】に対しそう声を荒げていた。

「奴が【紫影】…ぐっ、思い出しても胸糞悪い声だったぞ…『神』のカードを持つ者を探しているだと？しかし奴は…」

「あぁ、【紫影】は知っているはずだ。『神』のカードを持っているのはルキなんだって。なのに…」

「誰が『神』のカードを持っているか分からぬから、しらみつぶしに探すと言っていたな。…何が目的なのだ…」

「わかんねぇよ…それに、裏決島ってのも…意味がわかんねぇ…」

「うむ…」

しかし、【紫影】の放った『神』のカードを持っている者を探すという、その不可解な敵の目的に対し。心の底から、違和感が生じている様子を見せる遊良と鷹矢。

…そう、【紫影】が『神』のカードの所在を知らないなどありえない。何せ、あの男は予選のときにルキを攫って、『赤き竜神』を無理矢理に解放しようとしたのだ。

だからこそ、ルキが『神』のカードを持っていることなど当然【紫影】は知っているはずだと言うのに…あたかも余興のような言動で、しらみつぶしに『神』のカードを探すと言い放った【紫影】の捻じれた言葉には、遊良も鷹矢も違和感しか感じはしないのか。

また、襲い来るという２００人の犯罪者集団…それは【決島】に参加している学生達と、同じ人数ではあるのだが…

昨日の予選の傷がまだ癒えていない学生もいることを踏まえると、実質的に戦力は互角でも何でもなく敵側が断然有利。【裏決島】と題してはいても、あの捻じれた男は始めから対等な勝負を仕掛けてきているわけではなく…

…ただの、蹂躙。それも、犯罪者達による容赦の無い襲撃。

そんな、突如始まってしまった【裏決島】に対し…遊良も鷹矢も、決勝戦で帯びた熱が一瞬で冷めていく気持ちの悪い感覚に襲われてい

て。

「…天城君、天宮寺君、こちらに来てください。」

そんな、突然のことに立ち尽くしていた遊良と鷹矢に向かって―

天空闘技場の入り口から、二人へと声をかけてきたのはイースト校理事長…【白鯨】、砺波　浜臣であった。

…遠目からでも分かるほどに、苦虫を噛み潰したような顔をしている砺波。

それはまるで、この情況に対する懺悔のような雰囲気。そんな砺波へと、遊良も鷹矢も急いで近づき…

「…砺波先生、一体何が…」

「私の責任です。ずっと【紫影】を監視していたというのに、寸前の所で逃がしてしまった。」

「待て、では奴は最初から俺達の近くに居たということか？理事長が監視していたのは確か『逆鱗』では…」

「奴は劉玄斎に化けていたのです。それは最初からわかってはいたのですが…奴もどうやら人外になって戻ってきていたらしく、靄のように消えてしまいまして。」

「…じ、人外だと？」

「靄って…それって【紫魔】の時の…」

「…おそらくは。」

砺波の零した苦い顔。それはこの情況を作ってしまった原因が自分だという後悔なのか。

逃げる前の【紫影】の言動から、あの捻じれた男が始めから『事』を起こそうとしていたことは確かなのだが…

それでも、【紫影】を拘束するつもりではなく始めから消滅させるつもりで捕まえていれば、この事態は防げたのではないかという後悔が砺波の中にはあるのだろう。

「砺波先生、俺達はどうすれば…敵は【紫影】だけじゃなくて、ほかにも２００人居るって…こっちは、怪我をしてる学生もいるっていうのに…」
「外に連絡は出来んのか？敵が犯罪者ならば、警察なり何なりに連絡して一網打尽に…」
「Ｂｕｔ、ソレは出来ねぇ相談だぜ。」
「…え？」

そんな、聞くからに気落ちした声を漏らしていた遊良達へと。
更に声を届けてきたのは、決闘学園デュエリア校の『ギャンブラー』、リョウ・サエグサであった。
その後ろには、同じくデュエリア校の鍛冶上　刀利の姿もあり…
彼は刀利を連れて遊良達へと近づいてくると、情況の悪化を告げる言葉と共に再度その口を開き始めて。

「あの竜巻が完全にｓｈｕｔ　ｏｕｔしてるみてぇだ。外に連絡なんて繋がらねぇよ。」
「そんな…」
「あとミレイから連絡が来てたぜ。医療棟の方は、襲撃に備えて篭城するってよ。…けど、ｅｓｃａｐｅかました奴等もかなりいるみてぇだ。…パニくっちまったんだろうな。」
「…無理もありません。突然こんな情況に放りこまれたら、平静を保てる者の方が少ないでしょう。」

外界と完全に隔離されてしまったのならば、外からの援軍は期待出来ない。
…何せ篭城とは守り主体の策であり、守備に徹し敵と消耗戦をした後に援軍の増援によって勝利を期待するのが基本なのだ。
しかし『竜巻』によって外界と隔離されてしまったこの現状では、島の外からの援軍など待っている間に物量で押し切られてしまう危険

性の方が大きく…
ソレ故、篭城という策を取った王　ミレイが期待しているのは、天空闘技場にいるこちら側の戦力…特に、【白鯨】と『逆鱗』という強すぎる切り札なのだろう。
…まぁ、天空闘技場に居た劉玄斎は【紫影】の化けていた偽者であり、本物の『逆鱗』は今現在どこに囚われているのか分からないのだが―

「何を迷っている暇があるのだ。一刻も早く、あの【紫影】とやらを倒せば全て済む話なのだろう？」
「…あの男が簡単に約束を守るとは思えません。犯罪者達が２００人というのも…きっと嘘でしょう。最低でも、敵の数はその倍以上いると考えておかなければ。」
「じゃあ医療棟の方が危ないんじゃ！篭城するって言ったって、敵の数がそんなに多いんじゃ…」
「むぅ…ならば【紫影】の討伐と医療棟の増援、二手に別れるしかあるまい！こうしている間にも、敵は島中に攻め込んできているのだからな！」
「…【紫影】の狙いは『神』のカード…ならば高天ヶ原さんを置いていくわけにはいきません。彼女はまだ、ここを動けるような状態ではない。」
「な、ならば三手に…」
「駄目だ、それじゃ手が足りなさすぎる…敵が大勢でここに乗り込んで来たら、ルキがまた攫われることになって…」
「ぬぅ…」
「本来ならば、私が【紫影】を直接叩きに行くのが最善なのでしょうが…しかし敵が物量で攻めてきたら、ここを守れるのも私しかいません。」

しかし、医療棟で篭城を選んだミレイの期待に反し。
最大戦力である【白鯨】はここを動く事が出来ず、もし動けたとし

ても医療棟の援軍に向かうよりも【紫影】を叩きに行く事の方が先決であるのだから、到底【白鯨】が医療棟を救いに行く事など叶うわけも無く…

犯罪者集団２００人を全て倒すと言っても、もし砺波の読み通り【紫影】が敵の数を増やしたら…完全なる量の差で、学生達に勝ち目など無い。

…だからこそ、叩くならば黒幕である【紫影】一択。

【紫影】が約束を守る保障などどこにも無いとは言え、この情況を作り出した張本人を叩けば、少なくとも事態は好転に向かう事は間違いないのだ。

「ならば俺が【紫影】を倒す！初めからそのつもりだったのだ、奴は俺の手で倒すとな！」

「駄目です。…あんなふざけた男ですが、それでも【紫影】は今の君よりも遥かに強い。全盛期の前【紫魔】…憐造ですらギリギリの勝利だったのです。天宮寺君が、たった一人で【紫影】を倒せるわけがありません。」

「ぐっ…しかし…」

「お、俺も一緒に行きます！アイツがルキにやったことは絶対に許せない！俺も、この手で【紫影】を直接…」

「しかし…敵の数が数です。【紫影】の居場所がわからない現状では、いくら君達でもアレだけの数の敵がいたら【紫影】の元に辿り着く前に…」

けれども、逸る気持ちに反して情況は悪化していくばかり。

そう、【紫影】を直接叩きたくとも、島の中に敵が２００人…いや、下手をすればそれ以上の数が解き放たれてしまったこの現状では、【紫影】を探すだけでもどれだけの敵と戦わなくてはならないのか数えられたモノではないのだ。

…終わり無き連戦の疲労と過酷さは、昨日の予選で誰もが身に染みて理解している。

ひっきりなしに敵が現れ、何時まで戦っても敵が湧き続けるというのは…想像するよりも、ずっとずっと過酷なモノなのだから。
…どうすればいい。手が…手が足りなさ過ぎる。
敵の数に対して、味方側の戦力があまりに少なすぎる。個々の戦力だけならば、決して裏決闘界の犯罪者達に引けを取らない猛者がこちら側にも揃っているというのに…
予選のダメージだったり決勝の疲労だったり、果ては精神的な余裕の差などによってあからさまに敵の方が有利すぎるこの現状。
そんな、始めから勝負の行方が分かりきっているかのような戦いを仕掛けてきた【紫影】に対し…
頭を悩ます遊良達の脳裏には、【紫影】への憤りがただただ募っていくばかりで時間だけが過ぎていくだけであり…

「…僕も、彼らと一緒に行きます。それなら…」

…そんな折。
これまで口を噤んでいた、鍛冶上　刀利が…
静かに、その口を開いた。

「…それなら多分、彼らを無事に【紫影】の元に送り届ける事も…出来ると思います。」
「鍛冶上君…確かに、君ほどの者が一緒ならば…」
「Ｂｕｔ、いいのかトーリ？送り届けるっったってオマエ、もうゴタゴタには首突っ込めないんだろ？…今はまだ『その時』じゃねーはずじゃ…」
「…うん。そうなんだけど…でも…」

鍛冶上　刀利…
彼の親しい友しか知らない事実ではあるのだが、『この世界』その物に選ばれた【地の破王】と呼ばれる青年。
そんな彼の背負ってしまった『事情』を知る、親しい友の１人であ

るリョウ・サエグサが何やら遊良達には理解出来ない言葉を刀利へとかけたものの…
刀利は、己の背負った『運命』を分かっていながらも。そのまま視線を、鷹矢の方へと動かしながら…

「む？」
「…天宮寺君には、大きな借りがあるから。だから…まぁ別にいいかなって。」
「…ＨＡ、ンだよ、ちょっと昔のオマエに戻ってきてんじゃねーか。…待たせやがって、馬鹿野郎。」
「…うん。」

ここでは語られぬ、別の物語を経験したデュエリア校の者達。
彼らの過去に、一体何があったのか。そんなコト、今この現状では悠長に語っている暇など無いとは言え…
それでも、刀利の過去を知るリョウ・サエグサの目には、何やら無意識に込み上がるモノが浮かんでしまいそうになっているのか。
そんな、何か特別な感情を抱いている様子のリョウを他所に…

「そんな事より、とにかく問題は医療棟だ。ルキは理事長。【紫影】は俺と遊良と鍛冶上　刀利…流石に、『ギャンブラー』１人だけを医療棟に向かわせるというのも…」
「Ａｈ－…まぁなぁ、俺１人だけ行ったところで、俺は助かっても全員助けるっつーのはちと無理があるってもんだ。何せ、『運』が悪い奴らもいるだろうからなぁ…」

確かに鷹矢の言う通り、味方が少なく敵が多すぎるこの情況では…篭城を選んだ医療棟の学生達、全員を助け出すことなどほぼ不可能に近いことだろう。
何せ『天運』を持つリョウ・サエグサと言えど、彼１人だけでは多勢に無勢…その運をもってしても、数の暴力の前にはどこまでカバー

しきれるかなど彼自身にだって分からず…
【白鯨】は天空闘技場を動けない、他3人は【紫影】の討伐に向かう…
これでは、医療棟の学生達を見捨てると言っているようなモノ。いや、実際に『そう』しなければ、この情況を打破することなど出来ないという現実がただただ遊良達の肩に重く圧し掛かり…

そんな、どうしても医療棟を助ける選択肢が取れないために…篭城している学生達を、犠牲にするしかないという選択肢を取らざるを得ない情況に遊良達が追いやられてしまった…

その時だった―

「僕たちが行くよ。」
「話は聞こえていた。医療棟は任せてもらおう。」

不意に―
聞こえてきたのは、どこまでも頼もしさを覚えるような力強い声。

「え?こ、この声って…」
「…貴様ら…何故居るのだ。」

そして、その声に反応して…反射的に声の方へと振り向きつつも、思わず己の目を疑ってしまっている様子を見せる遊良と鷹矢。
…しかし、それもそのはず。
なにせそこには、この島には居るはずのない見知った顔が2人も居たのだ。
この危機的状況においては、その行動力と経験が何よりも頼りになることを知っている…昨年も、大いに助けられた…2人の男が。

「あ、蒼人先輩…」
「やぁ、遊良君。久しぶりだね。」

「十文字…何故貴様がここに？」
「…事情があってな。帰りそびれたと言うやつだ。」

泉　蒼人―
十文字　哲―

それは、1人でも多くの手を借りたいこの情況においては、これ以上ないくらいの心強い味方。
裏世界の犯罪者にも引けを取らない、強い心の持ち主。裏決闘界のデュエリストとも渡り合えるであろう、確かな実力の持ち主であり…
そう、プロデュエリストの新進気鋭…昨年度起こった決闘市の『異変』において、遊良と鷹矢を『異変』の中心まで送り守ってくれた…

眉目秀麗、『清流』のデュエリスト―
絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト―

かつて決闘市の『異変』やデュエリアの『事変』を経験した、こんな事態に最も頼りになるであろう味方が…

蒼人と哲が、現れたのだ―

―…

同時刻―

「なんだいあの竜巻は！ジジイ！どうなってるさね！」

沖合に停泊していた、突如荒れ狂った海に揺さぶられているクルーザー。

その、理事長達の為に特別に用意された特別観覧席の中で…

急変したこの事態に、決闘学園サウス校理事長、『烈火』と呼ばれる獅子原　トウコがその声を荒げていた。

…しかし、それも当然。

たった今『決勝』が終わり、今年の祭典も無事に終了したかと思われたその刹那―

遊良と鷹矢を映していたはずのモニターに突然白黒の砂嵐が吹き荒れたかと思うと、何の冗談か突然海から超巨大な『竜巻』が立ち昇り…

周囲の海域を荒れに荒れさせながら、『決島』を取り囲んでしまったのだから。

…あんな巨大な『竜巻』が、何の予兆もなく突然現れるなどありえない。

しかも、そんな災害があろうことか『決島』を取り囲むように停滞するなど、普通であればありえない現象なのだ。

自然災害と呼ぶには、とてもじゃないが説明できないその光景―

それはつまり、人知を超えた『何か』があの竜巻を発生させたということであり…人知を超えた『何か』が、あの竜巻を操作していると言うこと。

…常人であったならば、その光景を目の当たりにしたところで『こんな考え』など浮かび上がりはしないのだろう。

しかし、昨年度の決闘市で『異変』を経験した事が、この船に乗っている決闘界の重鎮達にその『人知を超えた何か』をその肌で感じさ

せているのか。
突如として発生した竜巻に激しく揺られ、転覆しないようバランスを取るので必死な船の中で…
「駄目です、砺波理事長にも劉義兄さんにも連絡がつきません…完全に、島の内部と切り離されてしまっているようです…」
「何が起こったってのさ…いや、『誰』があんな真似を…」
「…浜臣め、しくじりおったな…おそらくは…【紫影】の奴じゃ。」
「ッ!?」
綿貫が発した、【紫影】という名を耳に入れたその瞬間。
―!
先ほどの焦りはどこへやら。即座に特別観覧席のドアを蹴破り、部屋の外へと飛び出してしまった獅子原　トウコ。
…それはまるで条件反射の域。
夫の仇の名を聞いてしまったその瞬間に、体が勝手に動いてしまったのだと言わんばかりの迷いの無さで…
船の中を駆け出して、そのまま荒れ狂う海の見える船の甲板へと到達して。
「待てトウコ!どこへ行く気じゃ!」
「決まってんだろ!あの島さ!」
「なっ、あの竜巻じゃぞ!?船もヘリも突入できんし、海流が乱れておるせいで潜水艇も出せん!」
「わかってるさよ、んな事は!けどねぇ…止めたって聞かないのは、ジジイもわかってんだろ?」
「ぬぅ…」
今のトウコのその様子は、【紫影】の名を耳に入れてしまい居ても

立ってもいられないかのよう。
その雰囲気は、今にも海に飛び込みそうなほどに危ういモノを纏っており…
しかし、この海の様子を見れば、誰だって島に行けるはずがないと言うことを理解してしまうだろう。
…立ち昇る『竜巻』の巻き上げた海水が、豪雨となりて降りしきる。
…立ち昇る『竜巻』の巻き起こす風が、暴風となりて吹き荒れる。
…立ち昇る『竜巻』の乱す海流が、波と波を大きく乱す。
船も飛行機もヘリも潜水艇も、何もかもが通用せず。こんな荒れ狂った海の前では、この大型クルーザーとてバランスをとるのに全力を注ぐしかないと言うのに。

それでも…

「船で行けないんだったら、意地でも泳いでいくだけさ！」
「バカモン！無理に決まっておろうが！」
「知ったこっちゃないさ…あそこには【紫影】の屑が居んだろ？あの屑野郎は…アタシが殺す。」

―！

そしてー
着衣のまま、怒りのまま。
なんとトウコは、綿貫の制止を意に介さず、そのまま勢いよく海に飛び込んでしまったではないか。
…無茶だ。
この海の前では、飛び込みなどただの自殺行為にしかならないと言うのに。
それはあまりに無謀な行動。とてもじゃないが無茶な行為。
しかし、綿貫や木蓮の想像に反し…
トウコは荒れ狂う海に飛び込んだかと思うと、なんとその道のプロ

よりも凄まじい勢いで思い切り泳いでいて。

…そうしてー

「トウコ、戻れ！戻るのじゃ！」
「獅子原理事長！無茶です！」

波と風とに掻き消され、もう届かないその叫び。
そんな叫びを送ることしかできない綿貫と木蓮は、波間に消えていく獅子原　トウコを…
ただただ、見ているだけしか出来ないのだった―

―…

ｅｐ９３「荒ぶる『烈火』」

【決島】…

その、決勝戦が終わった直後。

天城　遊良と天宮寺　鷹矢の戦いに、異様な盛り上がりを見せていた世界は…

―突然途切れてしまった中継の映像に、にわかにざわめき立っていた。

何せ決勝戦が終わったばかりで、まだ3位決定戦も終わっていないこの現状。

それに表彰式も閉会式も、【決島】の全プログラムがまだ終了していないのだから、今この中途半端なタイミングで全チャンネルの中継が途切れてしまったというのも可笑しな話であり…

急遽ニュースに切り替わった番組もあれば、対応できずに暗転したままのチャンネルもある。白黒の砂嵐が吹き荒れているだけのモノもあれば、場繋ぎのためだけの音楽と静止画だけの映像もある。

…そう、メディアも混乱しているのだ。

現地にいるスタッフからは、妨害でもされているのか全くもって連絡がつかず…現状を理解できないメディア側からすれば、ただただ現況を調べるのに必死になっているばかり。

そんな、突如として途切れてしまった【決島】の中継に対し。

世界中の観客達は、意味も分からずただただ困惑しているだけで、推測と憶測とに忙しくなるしかなく…

…Ｅｘ適正のない天城　遊良の戦いが目を見張るモノだったから、その腹いせに中継を切ったのか。いや、一つ二つの局ならばいざ知らず、そんな小さな理由で全メディアが中継を切るものか。

…メディア側に、一斉に機器の不備が出たのか。いや、全局の機器が一斉に壊れるなど、根底からしてありえない。

ならば…何だ…

その真相の分からぬ突然の切断に、世界中の観客達がざわめき立ち…

…けれども、世界中の観客達は知らない。

一体今、【決島】で何が起こっているのかを。

今、【決島】の決勝戦が終わったばかりの島で…誰が、何をしたのかなど。

まさか、誰もが思うまい―

【決島】が今、超巨大な『竜巻』によって取り囲まれ、外界から隔離されてしまっているなんて―

そんな、世界中が知りえるはずも無い…巨大な『竜巻』に囲まれた、外界から隔離されてしまった【決島】。

その、突如発生した人知を超えた災害の中に、取り残されてしまった島の中に…

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

「や、やめてくれぇぇぇぇぇ！」

―!!!

それは主催者を名乗った謎の男、【紫影】の放った『裏決島』の開会宣言と共に、突如島の中に解き放たれてしまった、２００人の裏世界のデュエリスト達による容赦の無い襲撃。
そんな、突如として襲いかかってきた犯罪者達にいきなりデュエルを仕掛けられ…
学生達は次々に蹴散らされていくばかりであり、更には若き学生達が倒されては、犯罪者達に担がれどこかへと『連れ去られ』ていくではないか。

…いくら敵が、犯罪者だとは言え。

その犯罪者達は全員が【裏決闘界】を隠れ蓑にしていた者達ばかりであり、その実力は並のプロかそれ以上と、ピンからキリとはいえ全員が一筋縄ではいかない曲者達ばかりなのだから…
…いくら学生達が、各学園から選りすぐられた猛者ばかりだとは言えども。
突然島が外界と隔離され、いきなり犯罪者達が実体化したデュエルと共に襲い掛かってきてしまっては、とてもじゃないが【決島】の参加者達と言えどその若すぎる精神力では落ち着いてデュエルなど出来るはずも無いのか。
…精神的に一歩出遅れてしまっている、逃げ惑う学生達。
そしてソレを、嬉々として追い回すのは喧嘩慣れした…と言うよりは、人を傷つけ慣れ過ぎている、裏側の世界に住まう者達。
…その中には、実際に人の命を奪ったことのある者も居るのだろう。そんな、学生相手でも容赦の無い実体化した攻撃に…次々に学生達は倒されていくばかりであり、そして攫われていくばかり。
まさに地獄、まさに奈落、まさに阿鼻叫喚の生き地獄―
煌びやかな祭典から一転。
現在、この島は文字通りの地獄となっていて―

「バトルだ！【炎星侯―ホウシン】でダイレクトアタック！」

―！

そんな、海岸近くの…砂浜が見える、森の中。
自身を追ってきた、1人の犯罪者を相手に。デュエルを行っていた、1人の学生の姿があった。
…それは【決島】に参加していた、炎のように赤みがかった茶色い髪をたてがみの様にして後ろに流した1人の少年。
どこか幼さの残る顔立ちをした、決闘学園サウス校1年…

獅子原　炎馬―

「はぁ…はぁ…な、何なんだよコイツら…うぐっ…」

苦しげに呼吸を乱しながら、痛みに顔を歪めつつ。
デュエルディスクを装着した左腕を重そうに垂れ下げ、そのまま左腕を痛そうにして押さえた…サウス校1年の、獅子原　炎馬。
…この海岸近くまで逃げてくるのに、炎馬は一体どれだけ戦ってきたのだろう。
倒したばかりの、気絶している裏決闘界のデュエリストを見下ろしつつ。乱れた呼吸と吹き出る汗、そして脈打っているのが分かるのでは無いかと思える程に鳴り止まないその心臓の鼓動は、炎馬の抱いている恐怖を傍から見ても分かってしまうほどに現しており…
…一緒に逃げてきた他の3人の学生は、皆裏決闘界の者達に敗れ気を失い…そして散り散りに、犯罪者達にどこかへと攫われてしまった。
何とか自分だけは運良く突破できたものの、目の前で他の学生が実体化したモンスターに弾き飛ばされ、そして意識を失い犯罪者達に連れて行かれてしまったあの光景は、まだまだ若すぎる炎馬にとっては恐怖以外の何物でもないのか。

そう、実体化したデュエルによる恐怖、犯罪者が追いかけてくる恐怖、負ければどこかに攫われてしまうという恐怖、そして最悪の場合は命すら危ないというその恐怖は、例えまだ経験の浅い獅子原　炎馬という少年でなくとも恐怖を覚えてしまうモノなのだ。
…まるで今の炎馬の雰囲気は、今にも恐怖に駆られ泣き叫びたくなっている小さな子どもの姿のようにも見え…

「…何なんだよ…意味わかんねーよ…うぅぅ…」

負ったダメージと極限状態による焦燥の中、自分がデュエリストであるという誇りのみで、どうにかここまで犯罪者デュエリスト３人をデュエルで弾き飛ばせはしたものの…
…派手にデュエルを行えば、そこに新たな敵が現れる。
１ｖｓ．１では何とか戦えるとは言え、相手は法の通じぬ裏社会の者達。もしも出会ったのが複数人で、その多人数がもし一気に襲い掛かってきてしまえば…
その考えたくも無い最悪の展開と、極限の緊張感と負った怪我の所為で。炎馬は、益々その呼吸を荒くしてしまうのか。
逃げれば逃げるほど現れる敵…何度倒しても現れる敵。
その実力も決して低くはなく、下手をすれば自分なんて足元にも及ばない敵が無慈悲に現れるかもしれない恐怖と…
この海岸近くまで逃げてきたとは言え、そもそも『逃げる』という選択肢が正解だったのかがわからない今の炎馬にとっては、あとどれくらい逃げれば助かるのかなど全くもって見通すことなどできはしないのだ。
そもそも海にはあの竜巻が壁を作っているのだから、泳いで逃げられるわけもないというのに…
パニックに呑まれ、必死に逃げ続けてきた炎馬の体力は既に限界が近いこの現状は、まだ若いというよりは幼さの残る高等部１年の炎馬にとってはあまりに酷な現実に違いないことだろう。
そんな、助かるのかどうかも分からない、ただただ増し続ける恐怖

に…
炎馬の目に、大粒の涙が零れそうになった…
その時だった―
「おっ、またまたガキ一匹はっけーん！」
「ひゃひゃひゃ、これで５匹目だな！ボーナス期待できそうだぜ！」
「ッ!?」
突然―
森の奥から響いてきたのは、聞くからに下品な男達の声であった。
パキパキと、地に落ちている枝を折りながら…
ニタニタと、ガラの悪さが顔に張り付いた笑みを浮かべながら近づいてくるのは、見るからに人相の悪い２人組の男達。
下品な顔と雰囲気を駄々漏れにして、炎馬へと近づいてきて…
「げひゃひゃひゃひゃ、ボウヤ、ここまで逃げてきてごくろーさん。」
「たった一人で今まで逃げ切ってたのは褒めてやるよ。けどオマエもここまでだなぁ。プススス…」
「あ、あぁあ…」
自分達が悪人だということ、おおっぴらに見せつけながら。
森から現れた２人の男たちは、デュエルディスクを構えて炎馬を視野に捉えている。
…最悪だ。
ようやく海岸近くまで逃げてこられたというのに、ココへ来て敵が２人も同時に現れるだなんて。
炎馬の脳裏に、そんな弱音が浮かび上がるものの…
学生側に不利に作られたこんな状況では、いくらここまで逃げてこられた炎馬とて敵の襲撃を回避できたわけもないというのは今の炎馬には知る由もなく…

だからこそ炎馬も、体力な限界が近いこの状況で現れた2人の敵に対し。
思わず、反射的に逃げ出そうと振り向きざまに走りかけ…
しかし…
―ドンッ！
という、『肉壁』にぶつかった様な感触が顔面一杯に広がったかと思うと。
冷たいような熱いような、そんな鼻に生じた痺れる痛みと共に…炎馬は、勢い余って尻餅をついて転んでしまった―
…突然のことに、頭が真っ白になる。
…突然の変化に、思考が吹き飛んでしまう。
何せ、壁などなかったはずの背後に。急に、音もなく『肉壁』の様なモノが現れたのだ。
逃げ出そうとした瞬間に、全ての勢いをその『肉壁』の様なモノに弾かれた驚きは…極限状態だった炎馬の思考を、一瞬で漂白するには十分過ぎる衝撃であり…
その、壁など無かったはずの背後に突如現れた『肉壁の様なモノ』に対し。
炎馬が、反射的に見上げた…
そこには…
「ッ！で、でか…」

思わず炎馬も、そう叫んでしまうほどに大きな男が1人、立っていたのだった。
そう、炎馬が見上げたそこには、後ろの2人とは比べ物にならない雰囲気を醸しだす…1人の、屈強なスキンヘッドの『巨漢』が音も気配もなく立っていた。
…現れたのは、『逆鱗』の劉玄斎にも匹敵するほどの鍛え上げられた体躯をした、スキンヘッドの大男。
丸太のような太い腕、鉄板のように硬い腹筋…
戦場を棲み家としている兵士のような、平穏からかけ離れている物々しい雰囲気と…
何より特徴的なのは、顔を斜めに両断する程に大きなその古い傷跡―

…敵だ―

炎馬が、一瞬でそう悟ってしまうほどに。
突然背後に現れたこのスキンヘッドの巨漢が持つ雰囲気は、自分を助けにきた救援などでは絶対にないと断言できるほどに冷たい雰囲気ではないか。

…任務をこなす兵士の面持ち。心を捨てた職人の面持ち。

そんな筋骨隆々なスキンヘッドの巨漢が、音もなく背後に現れていたのだ。逃げようとしたこの時に、こんな背ろのチンピラ2人組が霞んでしまうほどのオーラを持った男を見上げてしまっては…
絶対に見逃してはくれないであろうことを、炎馬もその一瞬で悟ってしまって…

「げひゃひゃ！運がなかったなぁガキんちょ！もう逃げらんねぇぜ！さっさとディスク構えな！それとも、デュエル無しでぶっ飛ばされる方がいいかぁい？」

「プッスッス、3対1とはまた運がなかったなボウヤ。プススス…」
「うっ、くぅぅ…」

そして、急いで立ち上がった炎馬へと。下品な表情で近づいてくる、2人の裏社会のデュエリスト達。
…前門の虎、後門の狼。
否、醸し出されるオーラを比べたら、例えるなら2匹の前門の子ハイエナと、1匹の後門の巨大マウンテンゴリラといったところなのだが…
はっきり言って状況は最悪。逃げ出そうにも、後ろには物言わぬまで道を塞いでいる、圧倒的な巨漢の壁が立ち塞がっており…
前面にはチンピラ崩れとは言え、2人組の犯罪者デュエリストが有無を言わさず襲いかかろうとしてきているのだから、体力も限界が近い炎馬からすればもう逃げられはしないことを嫌でも悟ってしまう他ないのか。
しかし…
逃げられないことを悟っていても。

「ッ…」
「お？いっちょまえに戦る気だぜこのガキんちょ。げひゃひゃ、勇ましいねぇ。」
「3対1だってのに健気だねぇ、プススのス…」

震えながら、怯えながら。
それでも残ったデュエリストの本能で、どうにかデュエルディスクを構えようとしているサウス校1年の獅子原　炎馬。
…例え、敵が3人で襲いかかってきても。
自分はデュエリストであるという、たった一つのその誇りのみで。
無意識に、炎馬はデュエルディスクを構え…

「…こんな少年に3人で戦う意味などない。私は失礼させてもらお

う。」
「お？アンタはヤんねーのかい？ガキ一匹につき１００万だぜ１００万。」
「…あぁ。確かに仕事は請けたが、私の目的は別にあるのでな。この少年が探し人に似ていたから来てみたが…どうやら、人違いだったようだ。」
「げひゃひゃ、意識がお高いこった。そのスキンヘッドが眩しいぜ。」
「ま、それならこのガキは俺達が貰ったからな。後からくれっったってもう遅いぜ。」
「…あぁ。構わん。」

そんな折に、一体何を思ったのか。
この場で最も強者のオーラを持ったスキンヘッドの巨漢が、この戦いに興味などないのだと言わんばかりの落胆ぶりを見せたかと思うと…
犯罪者側の敵だというのにもかかわらず、この場から立ち去ろうとし始めたではないか。

「さーて、そろそろボコらせてもらうとするぜガキンチョ！」
「プスス…これで５００万…ガキ攫うだけで５００万…ボロい商売だぜ。」

…それでも、状況が悪いことに変わりはない。
何せ、最も危ないオーラを放つスキンヘッドの男が襲いかからないとわかったとは言え。
敵が３人から２人に変わっただけで、炎馬が多人数を相手にしなければならないことになんら変わりはないのだから。
…まぁ、目の前のハイエナのような２人組のチンピラなどより、この筋骨隆々のマウンテンゴリラのようなスキンヘッドの男の方が何倍も強者のオーラを醸し出しているのだから…
絶対に勝てそうもない圧倒的強者が、この場から去ってくれるとい

うだけでもまだ炎馬にとっては幸運と呼べるのだろうが。
しかし、それでも疲弊しきっている炎馬にとっては。まだまだ状況は、最悪中の最悪のままでもあり…

そして…

「行くぜぇガキんちょ…」
「プスス…５００万…５００万…」

炎馬の意思に反して、不条理なデュエルが今にも始まりかけたー

その時だったー

「ア　タ　シ　の　孫　に　何　し　て　ん　だぁぁぁ

海岸近くの森に響き渡ったのは、紛れも無い咆哮であった。

…否、咆哮だけではない。

怒り狂った女性の咆哮と共に、解き放たれたのは巨大なる『炎の弾』

―

そう、女性の怒りの声が、実際に燃え盛るかのように。炎馬を襲おうとしていた一人の男を、爆音と共に、１つの『炎の弾』が弾き飛ばしたのだ。

…男１人を弾き飛ばし、森の奥深くにて爆発するその巨大なる炎弾。

その、瞬間的に通り過ぎた炎弾の、軌道線場を辿った…

そこには―

【星態龍】レベル１１

ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００

「せせせ【星態龍】ぅぅぅ!?な、なんであンなモンが！ありゃあ確か『烈火』の…っ、あれは!?」

また、残ったチンピラの片割れが叫んだ、煌々と燃える星の龍の下。

海水と砂浜の境界線、その波打ち際へと視線をやったそこには…先ほどの咆哮の主であろう、ずぶ濡れになった壮年の女性の姿が。

「れれれ『烈火』ぁぁぁぁぁ!?うっそだろおい！なんで『烈火』のババアがここにいんだ！」

「誰がババアだぁぁぁぁ！アイツも蹴散らせ、【星態龍】！」

―！

燃える炎弾が、残った1人の男も弾き飛ばす。
それは明らかに実体化している、現実離れした壮絶な光景ではあるものの…
しかし、見るからに怒り狂った女性の叫びは何の躊躇も感じさせずに、無慈悲にもチンピラの片割れを巨大なる炎弾にて森の奥へと弾き飛ばしてしまったではないか。
その、海から現れた、まるで『泳いできた』かのようにずぶ濡れになったその女性の雰囲気は…
見るからに怒り狂った、野生の獣のソレと同じモノ。
この世界において、こんな怒りの野獣のオーラを醸し出せる人物など、世界中探したってたった1人だけしか該当しないに違いない事だろう。

そう、この場に現れたのは紛れもない…

決闘学園サウス校理事長、かつては『烈火』と恐れられた元プロデュエリスト…

獅子原　トウコ―

「っ、ばあちゃぁぁぁあん！」
「ゼィ…ゼィ…炎馬…無事かい？」

絶体絶命の窮地に、突如現れた祖母に飛びつく炎馬。
…ずぶ濡れの祖母に力の限り、自らが濡れることも構わずに。
ただただ必死に、自分を救いに来てくれた祖母にしがみ付く炎馬の

その姿は…心なしか、どこか小さな子どものように見えることだろう。
しかし、それも当然か。何せ【決島】がようやく終わったと思った矢先に、理解する暇もなく『こんな目』に遭わされたのだ。
犯罪者たちに襲われかけ、負ければ攫われるか『最悪の場合』も有り得たこんなときに…祖母が助けに現れた事で、孫がホッとしないわけもないのだから。

「ばあちゃん何でいるんだ!? 俺めっちゃ危ないとこで！うわぁぁぁぁぁぁ！」
「落ち着きな、男だろ！ゆっくりでいいから、何があったのか説明しな！」
「あ、え、えと…」

しかし、一体あの『竜巻』の壁を彼女はどうやって超えてきたのだろう。
島の外に居たはずの獅子原　トウコが、あの『竜巻』を超えられるはずも無いと言うのにも関わらず。
短く整えられた、ウェーブのかかった髪が顔に張り付くほどにずぶ濡れになってまで。いや、髪から服から、何もかも全身くまなくずぶ濡れになってまで砂浜に登ってきたということは…
彼女は間違いなく島の外から泳いで来たのだろうが、しかしその方法がまるで思いつかぬ孫からすれば、今ここに現れた祖母の姿は幻とさえ思ってしまうかのような現実離れした確かな現実。
けれども…今それを炎馬へとゆっくり説明している暇などトウコには与えられないのか。
何せ、獅子原　トウコの頭上にて煌々と燃えていた【星態龍】が消えていくのと同時に。
少々離れた所に居た、この場を立ち去ろうとして距離を取っていた巨漢が…ゆっくりとトウコたちに近づいたかと思うと、徐に声をかけてきたのだから。

「【星態龍】を操る御夫人…なるほど、『烈火』とお見受けする。」
「あ？何だいアンタ。」
「敵だよ、貴女達のな。…つまらない任務に飽きていたところだが、貴女ならば子ども相手をするよりよっぽど意義のある相手だろう。是非お相手願いたい。」
「…」

自分から堂々と敵だと言うことを認めながら、不遜にもデュエルディスクを構え始めたスキンヘッドの大男。
普通、目の前の女性が歴戦の決闘者である『烈火』本人であったのならば…先ほどの吹き飛ばされたチンピラ達のように、多少なりとも慄きを感じてもいいはずだと言うのに。
けれどもトウコの前に立ち塞がるように、壁のようにして立ち塞がったこのスキンヘッドの男からは恐れなど少しも感じられず…

…それは、単なる無知の戯言などでは断じてない。

そう、それほどまでに、己の力に自信があるということの表れでもあり…既にこの世界の歴史に刻まれている歴戦のデュエリスト、燃え盛る女傑と恐れられた『烈火』を前に、この大男も己の力に相当たる自身があると言うことに違いないだろう。

…現代に生きる者ならば、誰だって知っている『烈火』の高名。

女性でありながらも、その身一つで決闘界の頂点に上り詰めた伝説の決闘者。
この世界においては、古の時代から続く『獅子原家』の総本山にして…【黒翼】や【白鯨】や『逆鱗』、果ては【白竜】と言った歴戦の者達すら頭が上がらないとされている、決闘界きっての姉御肌の御仁。
そんな女性を前にしても、少しも引かぬこの男の精神力が並外れた

モノだということなど、最早説明するまでもないこと。

…そんな男を前にしては、いくら歴戦の『烈火』とは言えども。

こんな意味のわからぬ状況に放り込まれ、そして島についてまず始めに飛び込んできた光景が孫のピンチだったのだから、いきなりデュエルを挑まれたとしても、相当に混乱してしまうに違いないことだろう。

…けれども、ずぶ濡れになっている服を重そうにしつつ。

慌てふためくこともなく、獅子原　トウコは息を整えながら…

「スキンヘッドにその顔の傷…それにその雰囲気…なるほどねぇ。アンタ、知ってるよ。ホトケ・ノーザンだろ？『七草』の…」

「ほう、我々を知っているとは驚いた。」

冷静に―

少しも、混乱している様子もなく。

今始めて会ったはずの、そして敵であるはずの男の事を…その特徴から所属、果てはコードネームのようなモノまで、ピタリと言い当てた獅子原　トウコ。

『七草』―

―それは、デュエル傭兵集団

裏の世界で、組織の代デュエルやら違法な賭けデュエル、果ては命を賭けた死のギャンブルや国同士のデュエル戦争でその名を轟かせているという…

決して表には出てこない、『極』の頂に位置する7人の恐ろしき猛者達の総称。

しかし、あくまでも裏社会の猛者であるために、その存在を知っている表の者は少ないはずなのだが…

「な、ななくさ?ばあちゃん、アイツ誰なんだ?」
「デュエル傭兵集団『七草』…上の方じゃちったぁ名の通った…金でどんな仕事もする、いわゆる裏社会のデュエリストってヤツさ。」
「意外だ、ずいぶんと詳しいのだな。」
「ハッ、アタシも若い頃は色々と危ない橋を渡ったクチだからねぇ。だから未だにアタシの元には、そのあたりの情報も入ってくんのさ。…でも最近じゃめっきり『七草』の噂を聞かなくなってたから、アタシゃてっきり解体されたんだと思ってたんだが…」
「最近は平穏が続いていたのでな。我々も長い休暇を持て余していたのだよ。…そして久々の仕事が舞い込んできたと思えば、裏決闘界の小間使いで子どもを襲えときた。時代も随分変わったモノだ。」
「【紫影】か…なるほどねぇ…ハッ、あの屑ヤローの考えそうな事さよ。『七草』ほどの手練れが雇われたってだけでだいたい理解できた。…あの屑ヤロー、ガキ共使って表裏戦争の再現でもおっぱじめようってのかい。」

そして、絶対にこんなにも迅速に理解出来るはずもないと言うのに、島の雰囲気と『黒幕』の情報だけから。
『烈火』と呼ばれし獅子原　トウコは、『何か』を即座に把握した様子を見せ始めたではないか。
…その迅速すぎる状況把握能力は、彼女が『過去』にこの事態の黒幕と一悶着あったが故の経験からくる予測なのか…

「…なら、どうせ逃がしちゃくれないんだろ?だったらやることは一つさ!」
「…っ、ば、ばあちゃん、何を…」
「ハッ!決まってんだろ?デュエルで、コイツを倒して押し通るのさ!」
「流石は決闘界の女傑と恐れられたご夫人だ。話が早くて助かる。では…」

目の前に立ちふさがった、常人ならざる雰囲気を醸し出す巨漢のスキンヘッドを前にしても。
即座に状況を把握して、少しも恐れることもなく…『烈火』と呼ばれし女傑もまた、孫を背に庇いながらデュエルディスクを構え始めるのか。
…お互いに多くは語らない、並外れた『力』を持ったデュエリスト同士。
そんな者たちの戦いが、こんな唐突に始まってしまうのは果たして世界にとっては幸か不幸か…
しかし、言葉よりも先に手が出るタイプの女傑と…仕事を遂行する傭兵とが出会ってしまったのならば、この戦いは誰に求めることなどできはしないのだ。
それ故…

「行くさよ!」
「あぁ…」

こんなにも突然に。
しかして戦うことでしか我を通せない者同士の…
避けられない戦いが…

―デュエル!!

今、始まる。

先攻は『烈火』、獅子原　トウコ。

「アタシのターン！【炎熱伝導場】を発動！」

―！

デュエルが始まってすぐ。

トウコが発動したのは、『烈火』の異名に相応しい…煌々と燃え上がる一枚の、灼熱を放つ魔法カードであった。

それは、獅子原　トウコの現役時代に掲げていた彼女のポリシー…怒涛の展開、怒涛の攻め、怒涛の召喚のまさに始まりとなるに相応しい始まりのカードであり…

「アタシはデッキから【ラヴァルのマグマ砲兵】と【ラヴァル炎火山の侍女】を墓地に送る！そして墓地に送られた侍女の効果で、２枚目の侍女を墓地に送り…２体目の効果で３体目の侍女を！そして３体目の侍女の効果で２体目のマグマ砲兵を墓地に送る！」

「一枚の魔法カードで５体のモンスターを墓地に…早いな、流石は『烈火』だ。」

「ハッ！お褒め頂き光栄さね！けど容赦しないさ！続けて魔法カード、【真炎の爆発】発動！墓地から守備力２００のモンスター…つまり、５体の『ラヴァル』を特殊召喚するよ！」

―!!!!!

【ラヴァルのマグマ砲兵】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００

【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァルのマグマ砲兵】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　２００

一瞬…
そう、瞬きほどの一瞬で。
陽炎と共に、『烈火』の場に姿を現したのは炎の化身たる５体ものモンスター達であった。

―【ラヴァル】

それは灼熱の炎が命を持った、火山と共に生きる者達の総称。
『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコが、プロ時代に好んで扱っていた事はあまりにも有名。そう、弾ける火花のように激しく、流れる溶岩のように熱く…
燃え上がる炎をその身と化して、決して消えぬ灯火となりて怒涛の展開を魅せるその激しさは、かつて世界一の攻めと謳われた『烈火』の異名をそのままに。

…攻めることこそ美学なり。その、唯一無二なる理念と共に。

燃え上がる女傑、世界最強の攻めと謳われた『烈火』のデュエルが…

今、始まる―

「行くよ！レベル４のマグマ砲兵に、レベル１の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】！」

【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】レベル５
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１８００

「まださ！もう一度レベル４のマグマ砲兵に、レベル１の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ラヴァル・ツインスレイヤー】！」

【ラヴァル・ツインスレイヤー】レベル５
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／　２００

連続して現れる、獅子原　トウコのシンクロモンスター達。
元シンクロ王者【白鯨】と同時期のプロデュエリストであったために、彼女が【王者】と呼ばれることは無かったものの…
それでも彼女もまた、『極』の頂に上り詰めた、この世の歴史に名を刻んだ伝説のデュエリストの１人。
当時の【王者】達を、そして【王者】と同格と謳われた『逆鱗』をも差し置いて…『世界一の攻め』と称えられたその実力は、まさに彼女も天上の実力を持った歴戦のデュエリストであることの証明とも言えるだろう。
だからこそ、シンクロモンスター２体を呼び出した程度で。『烈火』と呼ばれた女性のデュエルが、終わるはずもなく…

「ライブラリアンの効果で１枚ドロー！続けて速攻魔法、【紅蓮の炎壁】発動！墓地のマグマ砲兵２体を除外し、【ラヴァルトークン】２体をアタシの場に特殊召喚するよ！そのままレベル１の【ラヴァルトークン】に、レベル１の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル２！【フォーミュラ・シンクロン】！」

【フォーミュラ・シンクロン】レベル２
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／１５００

「まだまだぁ！ライブラリアンとフォーミュラの効果で２枚ドロー！更にレベル１の【ラヴァルトークン】にレベル２のシンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】をチューニング！シンクロ召喚、レベル３！【武力の軍奏】！」
「止まらないな…」
「当たり前さ！アタシを誰だと思ってんだい！ライブラリアンの効果で１枚ドローし、【武力の軍奏】の効果も発動！墓地から【フォーミュラ・シンクロン】を、効果を無効にして特殊召喚！」

―!!

【武力の軍奏】レベル３
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／２２００
【フォーミュラ・シンクロン】レベル２
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／１５００

止まらない、止まれない、燃え上がり続けるトウコのデュエル。
初動からして最高速、しかして更に加速し続ける彼女のデュエルは…どこか現シンクロ王者【白竜】、新堂　琥珀の止まらないデュエルにも似た展開とも言えるだろう。
何せこの一瞬で自分の場をモンスターで埋め、更に連続的なシンクロ召喚で強固な布陣を即座に揃えるそのスタイルは…
まさに現シンクロ王者【白竜】にも通ずる、あまりの加速と激しすぎる展開力のなせる芸当であり…

…いや、それは大きな間違いか。

そう、『烈火』のデュエルが【白竜】に似ているのではない。
【白竜】のデュエルの方が、『烈火』のスタイルに似ていると言った方が正しいのだから。
…何せ、現シンクロ王者【白竜】新堂　琥珀は、決闘学園サウス校

の出身者。
　光る原石であった新堂　琥珀の、その有り余る才能を誰よりも早く見つけ出し…在学中から、『烈火』と呼ばれる獅子原　トウコが直々に鍛え上げ、そうしてその才覚を覚醒させたのが現シンクロ王者【白竜】と呼ばれる新堂　琥珀なのだ。
　ソレ故、【白竜】の魅せるあの加速し続けるデュエルの基礎は紛れも無く、『烈火』と呼ばれる獅子原　トウコによって築かれたといっても過言ではなく…

「アタシはまだ通常召喚していない！【ラヴァル・ガンナー】を通常召喚！その効果で、デッキトップから５枚を墓地へ送るよ！墓地に送られた【ラヴァル】モンスターは４体！よってガンナーの攻撃力は８００ポイントアップし…そのままレベル４の【ラヴァル・ガンナー】に、レベル２の【フォーミュラ・シンクロン】をチューニング！シンクロ召喚、レベル６！【ラヴァルバル・ドラグーン】！」

―！

【ラヴァルバル・ドラグーン】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１２００

　現れしは、溶岩より生まれし灼熱の翼竜。
　噴火寸前の火山にも似た、その噴煙の如し叫びを上げて…『七草』と呼ばれし猛者を相手に、喰らいつかんと天を舞う。
　そして…

「ライブラリアンの効果で１枚ドロー！んでメインフェイズに【ラヴァルバル・ドラグーン】の効果も発動！アタシはデッキから【ラヴァルバーナー】を手札に加え、その後手札から【ラヴァルロード・ジャッジメント】を墓地に送る！そして墓地のラヴァルが３種類以上いる為、手札から【ラヴァルバーナー】を特殊召喚するさよ！レベル５の

バーナーに、レベル３の【武力の軍奏】をチューニング！」

まだ、止まらない。

…一体、この展開に終わりはあるのか。

かつて、ここまで長く連鎖する展開を続けた者などプロの世界にだって存在はしなかった。そう、現シンクロ王者【白竜】がプロの世界に現れるまでは、『烈火』と呼ばれし獅子原　トウコ以外にこれ程の展開の連鎖を見せた者など存在すらしなかったのだ。

…歴戦のデュエリストの名に相応しい、燃え上がり続ける『烈火』の展開。

かつて『世界一の攻め』と謳われた栄光は、この現代においても燃え盛り続け…

「燃え上がる鉄火よ！戦乱を切り開く刃と共に、仇なす敵を切り倒せぇ！」

溶岩の化身が、その身を５つの燃える星へと変える時。

軍歌を奏でし武将が、新たなる戦士をこの地に呼び出すため、光の輪となり天を舞う。

今、『烈火』と呼ばれし女傑の、現役時代に最も武功を上げた者の姿が…

今、ここに―

「シンクロ召喚！来な、レベル８！【クリムゾン・ブレーダー】！」

―！

【クリムゾン・ブレーダー】レベル８

ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２６００

現れしは、双剣振るいし赤炎の剣士。
『烈火』と呼ばれる獅子原　トウコが、好んで扱うモンスターの一体であり…
その高い攻撃力による攻撃が通れば、相手の展開を封じてしまう効果を持つという、トウコのデュエルにおけるまさに特攻隊長たるエースの1体。

「ライブラリアンの効果で1枚ドロー！…ハッ、いいカードを引いたさ。【死者蘇生】発動！さっき墓地に送った【ラヴァルロード・ジャッジメント】を特殊召喚するよ！そしてジャッジメントのモンスター効果！1ターンに1度、相手ＬＰに１０００のダメージを与える！」

―！

そして…
『烈火』の場を最後に埋めるようにして現れた、溶岩の化身たる長が放った炎弾によって。先攻1ターン目だと言うのにも関わらず、ＬＰに傷を負ってしまったホトケ・ノーザン。
その小さき炎弾は、まるで『実体化』しているかのように巨漢の体躯にぶつかって…兵装のような装いにぶつかり、焦げた匂いを撒き散らかす。

「ぐっ…」
「…ま、こんなトコかね。アタシはカードを2枚伏せてターンエンド。」

獅子原　トウコ　ＬＰ：４０００
手札：5→3枚
場：【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】
【ラヴァル・ツインスレイヤー】
【ラヴァルバル・ドラグーン】

【クリムゾン・ブレーダー】
【ラヴァルロード・ジャッジメント】
伏せ：2枚

そうして…
長い長い展開を終え、怒涛の展開をようやく終え。
ようやくそのターンを終えた、『烈火』と呼ばれし獅子原　トウコ。
…かつて伝説の【王者】達と共に駆け抜けし、歴戦の経験は伊達じゃない。
それを、目の前の巨漢へとまざまざと見せ付けるように…
先攻1ターン目だというのに、場に4体ものシンクロモンスターと1体の大型モンスターが並んでいるこの状況は、まさに攻めることに美学を見出した獅子原　トウコという女傑のデュエルを、華々しく飾り立てている事に違いないだろう。

「私のターン、ドロー。」

しかし、獅子原　トウコの怒涛の攻めを目の当たりにしても。
あくまでもどこまでも冷静に、カードをドローしたホトケ・ノーザン。
…普通、先攻の1ターン目からこれ程までに激しい展開を目の当たりにし、そして効果ダメージを受けてしまったら次の自分のターンの展開に多少なりとも迷いが生じてもいいはずだと言うのに。
けれども、先のダメージなど応えていないかのように。彼のこの落ち着きようは、『烈火』の展開力など取るに足らないと言わんばかりの落ち着きようにも見え…
「『烈火』…世界最強の攻めと言われたからどんなデュエルを行うのかと思えば…随分と不合理なデュエルをするのだな。」
「あ？なんだい、喧嘩売ってんのかい？」

「喧嘩なら当に売っているだろう？こんな状況で勝負を挑んだのだ、お互いに敵同士なのだから。」
「ハッ、それもそうさねぇ。けどアタシのデュエルを不合理だなんて、どんだけ自分に自信があるってのさ。」
「フッ、デュエルとは合理的に進めてこそ勝利へと繋がるのだよ。それを今からお見せしよう。私は【ワイトプリンセス】を召喚！」

―！

【ワイトプリンセス】レベル３
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／　０

静かに…
ホトケ・ノーザンの場に現れたのは、肉片すらその身に残ってはいない、骨のみとなった一族の姫であった―
―【ワイト】
それは古の時代からこの世界に存在している、効果を持たぬ弱小モンスターの名。そしてその名を冠したモンスター達で構成される、墓場に住まいし骸骨の一族であり…
ホトケ・ノーザンの場に現れたのは、その内の一体…骨犬愛でし溺愛を受ける、骸骨族の深層の姫。

「【ワイト】…随分と珍しいカードを使うじゃないさ。」
「これこそが私の合理的なデュエルに相応しいカードだ。【ワイトプリンセス】の効果発動。デッキから【ワイトプリンス】を墓地に送る。そして墓地に送られた【ワイトプリンス】の効果で、更にデッキから【ワイト】と【ワイト夫人】を墓地へ。」
「…ワイトモンスターがこれで３体…」
「いや、４体だ。【ワイトプリンセス】の更なる効果！自身を墓地に送る事で、ターン終了時までフィールドの全てのモンスターの攻守をそのレベルに応じてダウンさせる！」

【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】レベル５
ＡＴＫ／２４００→９００　ＤＥＦ／１８００→３００
【ラヴァル・ツインスレイヤー】レベル５
ＡＴＫ／２４００→９００　ＤＥＦ／　２００→０
【ラヴァルバル・ドラグーン】レベル６
ＡＴＫ／２５００→７００　ＤＥＦ／１２００→０
【クリムゾン・ブレーダー】レベル８
ＡＴＫ／２８００→４００　ＤＥＦ／２６００→２００
【ラヴァルロード・ジャッジメント】レベル７
ＡＴＫ／２７００→６００　ＤＥＦ／１８００→０

そして…骸骨達の姫が、その身を墓場へと捧げたその瞬間。
なんとアレだけの力を誇っていたトウコのシンクロモンスター達が、その力を吸い取られ…みるみるうちに、地面にへたり込んでしまったではないか。
…合理的を謳ったわりに、あまりに大胆かつ大味なデュエルの展開。
たった1体のモンスターの力で、よもやここまで相手モンスター全てを弱体化してしまうだなんて。ソレを目の当たりにしたトウコからしても、この戦法は少々意表を突かれたに違いなく…

「チィッ！何が合理的なデュエルさ！えらい大胆な手じゃないさよ！」
「フッ、少ない労力で最大の効率を。実に合理的だ。これで、1撃でも喰らえば貴女は終わりなのだから。」
「あ？まだ墓地のワイトは4体、それにキングがまだ出てな…」
「心配御無用。魔法カード、【闇の誘惑】を発動。2枚ドローし、闇属性の【ワイトキング】を除外する。そして手札の【ワイトメア】の効果発動。【ワイトメア】を捨て、除外された【ワイトキング】を特殊召喚！」

―！

【ワイトキング】レベル１
ＡＴＫ／　？→５０００　ＤＥＦ／　０

続けて―
地の底より蘇るようにして這い上がってきたのは、文字通りの地位を持った骸骨の王であった。
―その攻撃力、実に５０００
…そう、これぞ【ワイト】というデッキにおけるエースであり切り札。
その力は単純にして明解。墓地に骸骨達が眠っていればいるほどその力を上昇させるという…まさに武骨たる武勇を誇る、王の中の王にして亡者の長であり…

「…おいおい、こんな簡単に攻撃力５０００とは…」
「少ない手数で最大の攻撃を。実に合理的だ。労力は少ない方がいい。大量展開などせずとも、勝負を決める一撃を用意すれば自ずと勝利は見えてくる。」
「ハッ、アタシとは真逆のデュエルさねぇ。もっと豪快にデッキを回したくはならないのかい？例えば【隣の芝刈り】なんか使って…」
「フッ、ランダム性に身を委ねるなど実に不合理だ。必要な時に、必要な攻撃力を、必要なタイミングで用意する。それが合理的と言うモノ。不合理を排除し、合理性を突き詰める…つまるところ、デュエルとはそういうことだろう？」
「アンタ…随分とつまんなそうなデュエルしてるじゃないさ。デュエルってのは何が起こるかわからない、何をするかわからないから面白いってのに。」
「平行線だな。こんな状況でなければ、貴女とはとことん語り合ってみたいモノだが…あいにく、今はお互いの理念を語り合っている場合

ではないのでな。では行こう、バトルだ！【ワイトキング】で【ラヴァルロード・ジャッジメント】を攻撃！」

そして、即座に。

すかさずバトルフェイズへと入ったホトケ・ノーザンが、骸骨の王へと攻撃を命じて。

攻撃力が２７００から、６００にまで成り下がってしまった溶岩族の長へと…攻撃力５０００もの骸骨の王がその力を増しながら迫り来るこの勢いは、迫り来るのが本当にレベル１のモンスターなのかと疑いたくなるほどの恐ろしさを醸し出しているに違いない。

…そう、このままでは、最初の彼の宣言の通りに。成す術なく、『烈火』が一撃の下に粉砕されてしまうではないか。

「そう簡単にやられるかぁ！罠発動、【パワー・ウォール】！デッキからカードを９枚墓地に送り、このダメージを０にする！」

…けれども、『烈火』とてそう簡単にやられるはずもなく。

『烈火』のデッキから、実に９枚ものカードが勢い良く墓地へと送られていくのと同時に…なんと【ラヴァルロード・ジャッジメント】とトウコの間には、見えそうで見えない波動の壁が作られていく。

そして、ぶつかる…骸骨の王の武骨なる拳。

ソレが無慈悲にも溶岩族の長を粉砕してしまったものの、そのバトルにより生じたダメージは、【パワー・ウォール】によってトウコへと届く事はなく霧散していき…

「流石は『烈火』、守りも大胆な手を取るのだな。」

「ハッ、また不合理なデュエルだって言いたいのかい？けど勝負を決める一撃つったって、その一撃を止められちゃどうしようも無いだろうが。だからアタシは全力で展開してんのさ。」

「なるほど、一理ある。…私はカード２枚伏せ、エンドフェイズに貴女のモンスターの攻撃力は元に戻る。ターンエンドだ。」

ホトケ・ノーザン　ＬＰ：３０００
手札：６→２枚
場：【ワイトキング】
伏せ：２枚

淡々と…そう、どこまでもあまりに淡々と。
ただただ仕事を遂行せんとする兵士の面持ちで、鋭すぎる攻撃をしかけてきた『七草』の一葉、ホトケ・ノーザン。
…デュエル傭兵の名も伊達ではなく。
そう、歴戦の猛者である『烈火』を相手に、一撃で勝負を決めかねない攻撃を仕掛けてきたその大胆勝つ合理的な精神力は…
並大抵の者が実行できるような戦法ではないと言うのにも関わらず、ソレをいとも簡単に押し通してきた彼のデュエルの流れはまさに無駄を省いた仕事人の流儀とも言えるだろう。

「アタシのターン、ドロー！」

そんな、初撃から一筋縄ではいかない攻撃を仕掛けてきたスキンヘッドの巨漢を前に…

（【ワイトキング】単騎…やっかいさね、確かにアタシに喧嘩売ってきただけはある。）

ホトケ・ノーザンに、ギリギリ聞こえない程度に舌打ちを奏で。
獅子原　トウコの心の中では、先の一撃で目の前の敵がどれだけ危ない相手なのかを嫌でも理解してしまって…

そう…合理性を謳うホトケ・ノーザンのデュエルは、淡々と進んでいるように見えるものの、実に重々しい圧を放っているのだ。

…戦闘破壊されても自己蘇生効果を持った骸骨の王を、単騎で構えてきたという事はそれだけ守りの手も少なくて済むということ。
何せ、あれだけ高い攻撃力を持った【ワイトキング】を戦闘破壊することは困難であり…効果破壊しようとも、エースの単騎待ちであれば必要最低限の札で事足りるのだ。
下手に大量のカードを使って、相手を封じ込める必要もない。全てを託せるエースを、少ないカードで守りきれば防御すら事足りる。ソレ故、付与された効果破壊耐性をリセットする為に戦闘破壊する…と言った手順すら、あの高い攻撃力の前では無意味であり…
戦闘破壊は厳しく、効果破壊も困難…
となると、取れる手は…

「まいったね…単騎対決は苦手だってのに…」
「何か言ったかな？フッ、まさか『烈火』ともあろう御仁が畏れを成したとは言うま…」
「ハッ！心配ご無用さ、行くよ！速攻魔法、【紅蓮の炎壁】発動！墓地の【ラヴァルロード・ジャッジメント】を除外し、【ラヴァルトークン】1体を自分フィールドに特殊召喚！そして【武力の軍奏】でシンクロ召喚した【クリムゾン・ブレーダー】はチューナーになってる！アタシはレベル1の【ラヴァルトークン】に、レベル8の【クリムゾン・ブレーダー】をチューニング！シンクロ召喚、レベル9！
【灼銀の機竜（ドラッグ・オン・ヴァーミリオン）】！」

―！

【灼銀の機竜（ドラッグ・オン・ヴァーミリオン）】レベル9
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１８００

爆発音にも似ているであろう、獅子原　トウコの叫びと共に。彼女の場に現れたのは、灼熱を撃ち出す竜の戦車であった。
…それは『烈火』の異名に相応しい、赫炎の如き燃え上がる装甲。

そう、ターンの始めからシンクロ召喚を決めて来たと言うことは、彼女の中でどう攻めるかが確定したという事。
先のターンに、アレだけ激しいシンクロ展開を魅せたというのにも関わらず…まるで衰える気配のない『烈火』の叫びが…
炎の揺らめきのように、更に燃え上がる―

「早速動いてきたか…」
「ライブラリアンの効果で1枚ドロー！そんでもって【灼銀の機竜】のモンスター効果！墓地のチューナーモンスター、【ラヴァル炎火山の侍女】を除外して【ワイトキング】を破壊するよ！」
「無駄だ！罠カード、【ディメンジョン・ガーディアン】発動！【ワイトキング】に戦闘および効果破壊耐性を与える！」
「やっぱりか！だったら速攻魔法、【大欲な壷】発動！除外されている【ラヴァル炎火山の侍女】と、【ラヴァルのマグマ砲兵】２体をデッキに戻して1枚ドロー！そして２枚目の【真炎の爆発】発動！墓地から【ラヴァル炎火山の侍女】を特殊召喚！レベル６の【ラヴァルバル・ドラグーン】に、レベル1の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル7！シンクロチューナー、【シューティング・ライザー・ドラゴン】！」

―！

【シューティング・ライザー・ドラゴン】レベル７
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１７００

「…シューティング・ライザー？それは確か【白竜】の…」
「アタシには出来の良い教え子が居るモンでねぇ！あの馬鹿から無理矢理…じゃなかった、ご厚意を貰ったのさ！シューティング・ライザーの効果発動！デッキから【紅蓮地帯を飛ぶ鷹】を墓地に送り、シューティング・ライザーのレベルを1つ下げる！そしてライブラリアンの効果で1枚ドローし…【ラヴァル炎火山の侍女】を通常召喚！

そのままレベル５のライブラリアンとツインスレイヤーに、レベル１の侍女をチューニング！」
「レベルの合計が１１…これは…」

そして、先のターンと同様に…

いいや、先のターン以上に。

激しく燃える『烈火』のデュエルは、まるで常識という名のブレーキが壊れているのではないかと思ってしまうほどに…どこまでも加速を続けたまま、少しも止まる気配を見せず。
…そのまま、『烈火』の宣言のままに。
３体ものモンスター達が、その身を炎へと変え始め…

「烈火！舞い上がりて宙をも焦がす！燃える星々を喰らい尽くせぇ！」

響き渡るは歴戦の叫び。世界に轟くその口上。
それはかつて世界の頂点を争い、この世の最も高い場所から世界を見続けてきたモンスターを呼び出すために叫ばれる、誇り高き女の咆哮。
そう、悠久の時を経て、『烈火』と呼ばれしデュエリストの最も愛したモンスターが…
燃え盛る女傑と恐れられた武人の、切り札たるモンスターが…

今、ここに―

「シンクロ召喚！来な、レベル１１！【星態龍】！」

―！

そして…

宙が、震えた―

それは形容でも何でもなく、確かに目に飛び込んできた現実の光景。

そう、曇天に広がる雲が散り、空の更に向こうから現れたのは…光輝くと太陽と、見間違う程に燃え盛った一体の龍。

…それは歴戦を戦い抜いた強者の姿。数多の敵を打ち崩してきた巨大なる姿。

宙をも焦がす星々を模した、煌々と燃え盛る巨大なる龍の姿であって。

【星態龍】レベル11

ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００

かつて、このモンスターを最初にエースとしていた男がいた。

獅子原　烈火―黄金世代と称されたプロの若手の中でも、時期【王者】筆頭と呼ばれたその男の活躍はそれはそれは凄まじいモノであったのだが…

若くしてその命を落としてしまったが為に、その男の活躍の記憶などもうこの世界の人々の記憶にはほとんど残ってはおらず。

…けれども、その男が生きた証を決して絶やさぬように。

自らを『烈火』とした、煌々たる星の龍の威光と…燃え盛る女傑の手によって、その『名』は今なお消えずに燃え上がる。

「これが『烈火』と呼ばれしモンスターか。なるほど、確かに相当たる圧力を放つ…しかし戦闘破壊も効果破壊も出来ぬ【ワイトキング】を前にどう動いてくるか…他のシンクロモンスターで除外でも狙うか、それとも次のターンに備えて守りを固めるつもりか。まぁ、まずは【ディメンジョン・ガーディアン】をどうにかするのが定石だがな。」
「ハッ！誰がンなコトするもんかい！アンタが【ワイトキング】に自信を持ってるってんなら…アタシは意地でも、ソイツを真正面から、バトルでブチ破ってやるだけさ！」
「…実に不合理な答えだ。」

　すると…猛るように問いに答えた、獅子原　トウコの言葉を聞いて。
『七草』の一葉、ホトケ・ノーザンはどこか呆れ気味に更にその言葉を返してしまったではないか。
　…しかし、それも当然か。
　何せ戦闘破壊も駄目、効果破壊も駄目という、骸骨の王の高い攻撃力を前にして。それでも『烈火』は、真正面からバトルで打ち破ってみせると、そう宣言をしたのだから。
　…それは『七草』と恐れられしデュエル傭兵の男からすれば、あまりに馬鹿げた女の妄言にも聞こえたことだろう。
『歴戦』に名を連ねた者らしからぬ、あまりに強情なその一本主義。確かに燃え盛る女傑と恐れられた『烈火』の、あまりに激しい攻めの凄まじさは賞賛に値するモノではあるのだが…
　こんなデュエルを続けていては、裏世界の猛者には通用しない事は必至だというのに。

「ならば次のターンで私の勝ちだ。いかに名高い『烈火』と言えど、私の相手にはならなかっ…」
「なんだい、もう勝った気でいるのかい！傭兵だ何だって名乗ってても、『七草』ってのは随分と甘い連中の集まりみたいさねぇ！」
「…負け惜しみか？」

「誰が負け惜しみなんて言うもんかよ！生憎、生粋の負けず嫌いなタチでねぇ…さぁ、とくと味わいな、アタシのデュエルを！【貪欲な壷】発動！墓地の【炎熱刀プロミネンス】、【紅蓮地帯を飛ぶ鷹】、【灼熱工の巨匠カエン】、【ラヴァルの炎車回し】、【クリムゾン・ブレーダー】を戻して２枚ドロー！…よし！３枚目の【真炎の爆発】を発動ぉ！墓地からラヴァル・ランスロッドとツインスレイヤーを特殊召喚するよ！そのままレベル５のツインスレイヤーに、レベル６となったシューティング・ライザーをチューニング！シンクロ召喚、レベル１１！【星態龍】！」

【星態龍】レベル１１
ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００

「…２体目だと？」
「まだまだぁ！手札から【ラヴァル・コアトル】を特殊召喚し…レベル９の【灼銀の機竜】に、レベル２のコアトルをチューニング！」
「…これは…」

しかし、そんな『七草』の一葉の言葉を遮るように。
決して止まらぬ勢いのまま、『烈火』たる獅子原　トウコはその炎圧を更に増し続ける。
…三度空へと舞い上がりしは、合計『１１』のレベルの同調。
そう、それだけ不合理だと言われようとも。己のデュエルを貫き続ける『烈火』の叫びが、どこまでも消えぬ灯火を燃やしながら…

「烈火！舞い上がりて宙をも焦がす！燃える星々を喰らい尽くせぇ！シンクロ召喚、レベル１１！【星態龍】！」

――！

【星態龍】レベル11
ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００

普通であればありえない。レベル１１という、最上級にも数えられるシンクロモンスターが３体も場に揃うことなど。
…それは『烈火』と呼ばれし女傑の、恐るべき展開力が成せる御業とも呼べるだろうか。
その攻撃力、実に３２００―
そう、３２００もの攻撃力を持ったシンクロモンスターが、３体も場に勢揃いしたのだ。１体だけでも他の追随を許さぬほどの体躯を誇る星の龍が、既にトウコの場には３体。
空を覆うのではないかと思える程に、巨大に燃える星の龍たち。そんな、生半可なデュエリストでは揃えることすら困難な完成された場に…星々の龍が、燃える咆哮を轟かせていて。

「【星態龍】の３体連続シンクロ召喚だと？…フッ、噂通りの馬鹿げた展開力だ。だが合理的には程遠い。いくら『烈火』を３体並べたとはいえ、【ワイトキング】の攻撃力には届かない…攻撃力が中途半端に高いだけの、実に不合理なモンスターだ。」
「…アンタ、友達居なそうさねぇ。不合理不合理って…デュエルってモンを心から楽しめた事、一度でもあるのかい？」
「無論、あるとも。私にも友は居る…５年前にデュエリアの地で戦った、ダ・イーザ使いのとある少年…戦いの中で理解しあえた、私のかけがえのない唯一の友だ。」
「あ？ダ・イーザ使いのって…ハッ、唯一の友がガキだってのか。」
「フッ、歳の差など気にならない程に理解し合えたのだよ。ホムラ少年の『ダ・イーザ』と私の『ワイトキング』のぶつかり合いは…私も、年甲斐もなく熱くなれたものだ。」
「ッ、焔……ダ・イーザ使いの、焔…ねぇ。まさか、ここでその名を聞かされるとは。」

そして…どこか感慨深げに言葉を漏らした、ホトケ・ノーザンの言葉を聞いて。
心の底から意を突かれたかのように、不自然に息を零した獅子原トウコ。
それは今のデュエル傭兵の漏らした名が、彼女にとってあまりに意外すぎる名前だったことの証明とも言えるだろうか。
…いや、トウコだけではない。
祖母の背に守られるようにして、今までこのデュエルを安全圏から眺めていたサウス校１年の獅子原　炎馬も…
『七草』の零したその名を聞いて、あまりに驚いている顔を見せているではないか。

「ば、ばあちゃん…ダ・イーザ使いのホムラって…も、もしかして…」
「悪いね炎馬、今はそれ所じゃないさよ！それよりアンタ…随分アタシと【星態龍】を舐めてるみたいだけど…それならその体に教えてやるさ！アンタが中途半端だって言い放った【星態龍】の攻撃力をねぇ！魔法カード、【シンクロ・ギフト】発動！【星態龍】１体の攻撃力を０にして、【ラヴァル・ランスロッド】の攻撃力を【星態龍】の攻撃力分…つまり、３２００アップする！」

【ラヴァル・ランスロッド】レベル６
ＡＴＫ／２１００→５３００

けれども、今はデュエルの最中。
この切羽詰った状況においては、戦意以外の感情に囚われてしまう事がどれだけ危険なのかを知り尽くしている獅子原　トウコだからこそ…
再度孫をその背に隠し、今一度戦いへとその意識を戻し始める。
…発動されしは、シンクロモンスターの力を自軍へと分け与える譲渡の魔法。

力の集約、炎圧の収束―

【星態龍】の誇る、素の攻撃力３２００という凄まじい数値が炎となりて溶岩族の槍使いへと与えられ…

「ほう、攻撃力５３００…」

「まだまだぁ！２枚目の【貪欲な壷】を発動！墓地のヴァーミリオン、ツインスレイヤー、侍女３体を戻して２枚ドロー！…よし、来たよ！２枚目の【シンクロ・ギフト】発動！２体目の【星態龍】の攻撃力を０にして、【ラヴァル・ランスロッド】の攻撃力を更に３２００アップさ！」

「これで攻撃力８５００…しかし、伏せカードを全く気にしないとはな。」

「ハッ！どうせまた【ワイトキング】を守るカードなんだろ？だったらンな逃げ腰の伏せカードなんかもうどうでもいいさよ！…アタシは逃げに回るなんて真っ平御免さ。モンスターが正面衝突でぶつかり合うことこそデュエルの真髄に決まってるからねぇ！」

「不合理な…貴方こそ攻撃力上昇しか仕掛けてこないが、相手を弱体化させる手などは考えないのか？」

「おうとも！誰がンな事するもんかよ！敵の全力を、真正面から意地でも超えてやるのがアタシのデュエル！敵が攻撃力を上げるなら…アタシは意地でもその上を行ってやるだけさ！」

「ふむ、やはり不合理な答えだが…これは…」

「そうさ！これで【ワイトキング】の攻撃力とアンタの残りＬＰはを超えた！そんでアンタの【ワイトキング】は戦闘破壊されず、出来たとしても蘇るが…そんならアンタがさっきやったように、『一撃』で敵をブッ飛ばせば済む話！ランスロッドの攻撃でアンタは終わりなのさ！バトル！【ラヴァル・ランスロッド】で、【ワイトキング】を攻撃ぃ！」

敵の場に伏せられた、最後の伏せカードには目もくれず。
これまでのデュエルの流れから、ホトケ・ノーザンが『除去』や『カウンター』と言った一般的な手よりも…
【ワイトキング】を守りきる手を重視すると見抜いた『烈火』だからこその、怒涛の展開が火を噴き続けて。
―攻めることこそ美学なり。
いかなる逆境も、攻めなければ覆せないことをその身で体現してきた女傑の叫び。その咆哮が炎となりて、更に激しく燃え上がるのか。
そのまま…
…下手に守ることを良しとせず、あくまでも攻めきることを己の主義に。
意地でも美学を貫く女傑の、あまりに強情な炎が化身となりて…2体の『烈火』より力を授与された溶岩の槍士が、骸骨の王へと襲いかかり…

しかし…

「だが攻撃力対決は私に分がある！攻撃宣言時に罠カード、【アームズ・コール】発動！」

迫り来る溶岩の槍士の猛りを邪魔するように。
ホトケ・ノーザンが発動を宣言したのは、【ワイトキング】を守るためのカードではなく…『装備魔法』をデッキから呼び出すという、一風変わった罠カードであった。
…いや、このカードもある意味では、【ワイトキング】を守るためのカードとなり得るのか。
何せこれは、デッキから『装備魔法』を直接自分のモンスターに装備できるという、使いどころが難しい罠カードではあるのだが…

「なっ、【アームズ・コール】だって!?」
「私が妨害に重きを置かないことを見抜いた目は流石だが…状況に応じた装備魔法を発動できるこのカードこそ我が合理的デュエルの要！私はデッキから手札に加えるのは装備魔法、【孤毒の剣】だ！」

自分の好きなタイミングで、デッキに眠る『任意の装備魔法』を装着できるというその合理性の名の元に。
この状況に最も適したと傭兵が判断したのは、他者を寄せ付けぬ『毒』を発する孤高なる一本の剣であり…

「ッ、そ、ソイツは！」
「いくら『烈火』と言えど、私に攻撃力で勝負を仕掛けるなど笑止千万！【アームズ・コール】の効果により、手札に加えた【孤毒の剣】を【ワイトキング】に装備！そしてダメージステップだ！【ワイトキング】の攻撃力はダメージ計算時に…元々の『倍』となる！」

【ワイトキング】レベル1
ＡＴＫ／５０００→１００００　ＤＥＦ／　０→０

「攻撃力1万だとぉ!?」
「返り討ちにしろ、【ワイトキング】！ナイトメア・ゴッドフィスト！」

―！

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！」

獅子原　トウコ　ＬＰ：４０００→２５００

骸骨の王の武骨なる拳骨が、巨大化した溶岩族の突撃槍を思い切りぶん殴る―
…その攻撃力、実に１００００。

そう、【ワイトキング】の上昇した攻撃力は『元々の攻撃力』扱い…【孤毒の剣】の効果によって、倍まで膨れ上がった攻撃力の凄まじさをそのまま骨の拳へと乗せて。
そのまま殴り飛ばされた【ラヴァル・ランスロッド】は、欠片も残さずに塵となって粉砕されてしまったではないか。

また、それだけではなく―

「がっ…あ…くっ…な、なんだこりゃ…」
「ッ、ばあちゃん！」

【ラヴァル・ランスロッド】が粉砕され、その衝撃がダメージとなりて獅子原　トウコを襲うのか。
それはまるで、実際に骸骨の王に殴られたかのような打撃の衝撃であり…
―いや、実際に『そう』なのだ。
そう、この竜巻に囲まれた島で行われているデュエルは、全て実体化しているデュエル。
それは【裏決島】が始まる前に【紫影】が宣言した通りの、無慈悲なるも躱すことのできない絶対の決まりであり…
しかし、あらかじめ【紫影】に説明という名の一方的な宣言を受けていた学生達と違って、突然島に現れていきなり戦いに巻き込まれた獅子原　トウコからすれば。
突如として実体化したダメージが襲い掛かってきたその衝撃は、実際の数値よりも更に鋭いモノだったに違いなく…

「ばあちゃん！だ、大丈夫か!?」
「ぐっ…さ、騒ぐんじゃないさよ…これっぽっち、屁でもないさね…」

「なるほど、アレだけの実体化したダメージを受けても倒れぬか。流石は女傑と呼ばれていただけのことはある。」
「ッ…女はねぇ、男より痛みに強いのさ…それより…実体化したダメージだって？」
「今頃気付いたのか？この島で行われるデュエルは全て実体化している…ダメージも、それ相応のモノとなって襲いかかるのだよ。」
「…」

ソレ故…実体化した１５００ものダメージと相まって。
先ほどまでの昂ぶりが、一瞬の陽炎だったかのように…爆炎にも似た先ほどまでの『烈火』の戦意が、どこか鎮火されたかのようにその勢いを落とし始めてしまったではないか。
…そう、強がっていても、意図せずして襲い掛かってきた殴打にも似た衝撃は常人に耐え切れるモノではないのだ。
たかが１５００のダメージとは言え、相当の衝撃が体の内部を襲ったのだろう。少々青白くなっているトウコの顔がソレを物語っており…粗くなった呼吸が、見るからに内蔵へのダメージを表しているのだから。

「いくら『烈火』とて、攻撃力１万のモンスターなど早々お目にかかれるモノではないだろう？」
「…ハッ！その程度の攻撃力なんざ、夏休みに嫌ってほど見てきたよ…【強欲で貪欲な壷】を発動…デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー…チッ、【サイクロン】発動、【孤毒の剣】を破壊する…」
「フッ、一手遅かったな。」
「ぐっ…ア、アタシはカードを１枚伏せて…エンドフェイズに【星態龍】達の攻撃力は元に戻る…ターンエンドさ。」

獅子原　トウコ　ＬＰ：４０００→２５００
手札：４→０枚
場：【星態龍】

【星態龍】
【星態龍】
伏せ：2枚

強がってはいるものの、見るからにダメージを負っている様子の獅子原　トウコ。
確かに夏休みに、天城　遊良とともに鍛えてやったイースト校の高天ヶ原　ルキのおかげか、高い攻撃力のモンスターの攻撃は『烈火』とて見慣れてはいるとは言え。
それでもその攻撃力を1万まで上昇させた骸骨の王が、実体化してぶつかってくる経験など『烈火』をもってしても皆無だったのだろう。
いや、そんな非現実的な経験など、例え歴戦の『烈火』でなくとも体験した者の方が少ないことなのだが…
ともかく、手札を使いきるまで展開をし、そうして作り上げた決定打をこうも簡単に返され…あまつさえ迎撃によってダメージまで受けてしまった『烈火』の心内は、果たしてどれだけの焦燥に塗れてしまっているというのか。

「私のターン、ドロー！」

しかし、そんな『烈火』を意に介さず。
ただただ淡々とドローを行い、デュエル傭兵の増えた手札が更に『烈火』へとプレッシャーを与えてくるばかりであり…

「さて、後は私の持てる最上の一撃で【星態龍】葬り去るのみ。ソレが『烈火』たる貴女への礼儀だ。」
「…アンタこそ、アタシの伏せカードを無視すんのかい？」
「フッ、破壊をトリガーとする罠の可能性もあるのだ。ならば伏せカードの除去に重きを置くよりよりも、【ワイトキング】を除去から守った方が合理的だとは思わないか？…まぁ、展開力に振り切った貴女のことだ。どうにか【孤毒の剣】を破壊したとは言え、【ディメン

ジョン・ガーディアン】を破壊できなかったことと、私との相性と貴女のデッキタイプから考えても…この場に見合った守りの手など、もう用意できてはいないのだろう？」
「ぐっ…」
「図星か。ならばこれでデュエルは終わりとなる。【おろかな埋葬】を発動。デッキから【ワイトプリンス】を墓地へ送り、その効果で最後の【ワイト】と【ワイト夫人】を墓地へと送る！」

【ワイトキング】レベル１
ＡＴＫ／５０００→８０００

更に墓地へと送られし、骸骨族の王子によって。
骸骨の王の攻撃力が、更に上昇の一途を辿り始める。
…レベル１のモンスターが、ここまでの攻撃力を誇ることなど、普通に考えればあってはならないこと。
けれども、そんな常識に囚われぬ者だけが辿り着ける境地によって…
実にその攻撃力をデュエリスト２人分の命の数値までパワーアップさせた骸骨の王が、その骨身を鋼鉄よりも更に硬いモノへと造り変えていくではないか―

「攻撃力８０００…」
「先ほどのターン、貴女は【星態龍】を３体も出す必要は無かった。だが自らの力を過信し、驕り、無駄に派手な展開をした所為で貴女の手札は０でデッキは残り僅か…しかし裏腹に、私の【ワイトキング】は破壊耐性を備え攻撃力は合理的に８０００…勝負あったな。」
「ッ…」

見くびっていた―
今の『烈火』の表情は、勢いで戦いを受けたものの裏社会の猛者の力を見誤っていた自分を、今更になって後悔しているかのよう。

…垂れる冷や汗、引いていく血の気。
まさか、意気揚々と受けた戦いで負けるのか―
己のプライドと、背に隠した孫の安否と…己の無力と、夫の仇と。
そんな入り混じった感情が、焦りとなりて『烈火』の表情へと出てきており…

「やはりデュエルは合理的な者が勝者となるのだ。…では改めて名乗ろう。私は『七草』が一葉、ホトケ・ノーザン。覚えておきたまえ、貴方を倒す男の名だ！バトル！【ワイトキング】で【星態龍】を攻撃！」

迫り来る骸骨の拳―
それは実にデュエリスト2人分の命を消し飛ばすほどの轟きを纏いて、歴戦の『烈火』へと襲い掛かるのか。
躱せない、逃げられない、避けられない…
決して逃れられぬ一撃が、悪夢の如し威力を纏いて【星態龍】へと襲いかかり…

そして―

「『烈火』よ、砕け散れ！ナイトメア・ゴッドフィスト！」

その、迫る威圧を前に―

「…ありがとうよ、真正面からぶつかってきてくれて。」

『烈火』はそう、呟いた。

「罠カード、【反転世界（リバーサル・ワールド）】発動！」

―！

一瞬…

そう、瞬きよりも短い一瞬の後に。

『烈火』の場に発動されたのは、たった1枚の罠カードであった―

それは攻守を上げるとかダメージを軽減させるだとか、そういった類のカードでは談じてない。

攻撃力と守備力を入れ替えるという…あまりに使いどころが難しい、そしてあまりにトリッキーな罠カードなのだが―

「何!?リ、【反転世界】だと!?」

「そうさ！【反転世界】の効果により、全ての攻守は逆転するよ！」

【ワイトキング】レベル1
ＡＴＫ／８０００→０　ＤＥＦ／　０→８０００

【星態龍】レベル11
ＡＴＫ／３２００→２８００　ＤＥＦ／２８００→３２００

【星態龍】レベル11
ＡＴＫ／３２００→２８００　ＤＥＦ／２８００→３２００

【星態龍】レベル11
ＡＴＫ／３２００→２８００　ＤＥＦ／２８００→３２００

しかし、今この状況においては。
ソレはトリッキーで使い所が難しいどころか、この状況にこそピッタリと当てはまるカードとさえ思える程の輝きを放っているではないか。
反転せし世界のうねり…その不快感すら覚える歪みが、一瞬で全てのモンスターの攻守を入れて変えてしまう。
すると、このカードを発動した『烈火』へと。『七草』の一葉、ホトケ・ノーザンが焦燥と共に言葉を漏らす。

「馬鹿なッ！れ、『烈火』よ！相手の攻撃力を、正々堂々真正面から意地でも超えるのが貴女のデュエルではなかったのか!?」
「ハッ！言ったっけかねぇンなこと！」
「なっ!?」
「綺麗に引っかかってくれてありがとよ！何せ『七草』クラスの猛者を相手にするには、こんな引っ掛けも必要だからねぇ！おかげでアンタは馬鹿正直に正面から向かって来た…デュエルに美学を持った奴ほど、決着を美しく仕上げたいモンだからね！」
「ぐっ…」

けれども、そんなホトケ・ノーザンを意に介さず。
悪びれもなく、罪悪感もなく、してやったりの表情で…
先ほどまでの『焦り』の表情はどこへやら。今の『烈火』の顔は、文字通り悪戯が成功した子どものように晴れやかに澄み渡っているではないか。
あれだけ拘っていた真正面からのぶつかり合いを、こうも簡単に捨て去って。トリッキーな攻防へと、戦いのステージを変化させた獅子原　トウコの轟きが…
先ほどよりも更に強い戦意となりて、モンスター達を飲み込んでいく。

…そう。

何も『烈火』は、単純なる『攻撃力』のみの突貫で歴戦に名を連ねたのではない。

『攻めることこそ美学なり』―

その理念は、単純な攻撃力のぶつかり合いにあらず。

複雑な攻防の果て、重なり合う効果の向こう…そんな、幾重にもぶつかり合った応酬を超えてもなお相手に競り勝ち、そして生き残るのが『烈火』の掲げる美学。

…単純な『攻撃力』のぶつかり合いによる、正面衝突のデュエルだけでは歴戦に名を連ねることは出来ない。

―瞬間的な爆発力ならば、エクシーズ王者【黒翼】がいる。

―永遠に終わらぬ激震ならば、王者と同格の『逆鱗』がいる。

―知略に長けた先見ならば、元シンクロ王者【白鯨】がいる。

けれども、そんな歴戦のデュエリスト達を差し置いてもなお獅子原トウコが『世界最強の攻め』と謳われているのは、何が起こっても、そして相手がどれだけ千差万別の戦術を取ってきても、最後の最後に彼女が競り勝ってきたからに他ならないのだ。

…長きに亘るプロの世界の戦いにおいて、千差万別の戦術のその全てに競り勝ってきたなど【王者】にだって不可能な事。

それでも、複雑怪奇な一つの攻防において『烈火』が遅れを取ることなどありえない。だからこそ【王者】やソレと『同格』の者達を持ってしても、彼女には頭が上がらないと言われており…

…それは恐ろしいまでの女の度胸と、決して躱せぬ女の直感。

勝てば官軍、『本当の強さ』…ソレが何なのかを、獅子原　トウコは知っている。きっとデュエルという争いにおいて、『何』が正々堂々で何が正義なのかをこの世で最も知り尽くしているのは、この獅子原トウコという女性なのではないか。

「ダメージと迎撃で戦意を削がれてしまったのではないのか!?た、確かに勝負を諦めた顔を…」
「ハッ!誰が諦めるモンかよ!覚えておきなぁ…女ってのは、生まれついての役者なのさ!」

そう、もし先のターンに、トウコが【星態龍】の展開を3体ではなく2体に留め、次のターンへの準備や守りの手を増やしていたら。ホトケ・ノーザンは、絶対にここまで『烈火』への警戒を緩めることはなかったことだろう。
…それは大きすぎる注意の穴。しかして絶対に気付く事など出来ないであろう、巧妙に隠された演技の罠。
攻撃力対決に拘ったのも。不合理で無駄だと言い放たれた展開をやめなかったのも。伏せカードを無視して攻撃をしかけたのも…
全てはホトケ・ノーザンという、自分の美学を持ったデュエリストに、この一撃を喰らわせるため。

…その為には、注意を逸らす番外戦術や視線誘導さえもいとわない。

それは『勝利』という、デュエルにおける唯一つの正義に向かう為に。どこまでも貪欲に『攻め』続ける彼女の強さは、単純なるぶつかり合いには収まりきらないほどに千差万別かつ縦横無尽となり得るのであり…

ソレ故…

いかなる状況からでも、『勝利』へと向かって攻め立て続ける彼女のことを、世界はこう呼び恐れているのだ。

王座を燃やす女武人、燃え上がる戦いの鬼…

決闘学園サウス校理事長、天下に轟く燃え盛る女傑―

『烈火』―

獅子原　トウコ―

「ッ、だがまだ私のＬＰは…」
「いいや、これで終わりさよ！ダメージステップ開始時にリバースカードオープン！速攻魔法、【イージーチューニング】発動！墓地のシューティング・ライザーを除外し、【星態龍】の攻撃力を…２１００アップする！」

―！

【星態龍】レベル１１
ＡＴＫ／２８００→４９００

逆立つ―
トウコの赤みがかった、短く切りそろえられた茶色い髪が。
炎の如く―日の光に反射し、まるで本物の炎のように揺らめき立ち始めるトウコの髪。
それはまるで炎髪…
獅子原の血を持つ猛者が本気を出した時にのみ見られるその現象は、まさに古の時代から受け継がれし獅子原家の盟約が成せる、まさしく獣の血が成せる御業であって。

「攻撃力４９００!?」
「アタシの名前を覚えておきなぁ…獅子原　トウコ！アンタを倒す女の名さ！やれ【星態龍】！【ワイトキング】を迎撃ぃ！」

もしもトウコが、先のターンまでに戦術を切り替えて攻め方を変えてしまっていたら。
きっとホトケ・ノーザンは、より一掃警戒心をより強め…その後にトウコが仕掛けてくるであろう、逆転への一撃を最大限に警戒してしまっていたことだろう。
何せホトケ・ノーザンの謳う合理的なデュエルは、相手の出方に合わせてその動きを柔軟に変化させる事が出来るのだ。先ほど彼が発動した【アームズ・コール】だってそう。トウコの動きに合わせ、【孤毒の剣】ではなく状況に応じた『装備魔法』を装着させることだって、彼は出来たのだから。
…しかしソレは、あくまでも対応出来る手を揃えていた場合の話。
そう、『七草』の一葉であるホトケ・ノーザンが、『烈火』のデュエルをプロの時代まで全て遡って調べ上げてきていたら。今この場における、獅子原　トウコというデュエリストの行った戦法に、少なからず違和感を抱けたことに違いないと言うのに…
攻撃力の対決にこだわり、意地でも相手モンスターの攻撃力を『正攻法』のみで超えようとしている…その、あまりの不自然さを。
…しかし、ホトケ・ノーザンはソレを知らなかった。
彼が知っていたのは、世界に名を馳せる『烈火』というそのビッグネームと、『烈火』と呼ばれる【星態龍】の印象のみ。そう、獅子原　トウコという、歴戦のデュエリストのその深い内面までは調べる時間もなかったのだ。
獅子原　トウコの掲げる『攻め』の真髄を、ホトケ・ノーザンは知らなかった…
ソレ故…トウコの出方を見誤り、己の美学に乗っ取り勢い余って攻撃を仕掛けてしまった今の彼には…もう、この状況で取れる手立てな

ど微塵も残されてはおらず。
ただ、それだけのこと―
だから、こそ―
「蹴散らせぇ！星痕のぉ…グランド・ノヴァァァァァァァァ！」
―！
「ぐぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
ホトケ・ノーザン　ＬＰ：３０００→０
―ピー…
煌々と燃える星々の龍の、惑星すら消し飛ばす紅の炎弾―
それが攻撃力８０００から一気に０へと転落してしまった骸骨の王を、一撃の下に消し飛ばすのか。
それは【ワイトキング】のみならず、主であるホトケ・ノーザンをも飲み込む巨大なる爆炎となりて…
無機質な機械音と共に、この海岸に鳴り響くのだった―
―…

「アンタがデュエルに美学を持った男で助かったよ。…なりふり構わない奴だったら、アタシももっと手を焼いただろうからね。」
「ぐっ…」

デュエルが終わった直後―
爆炎が消え、焦げた大地に横たわる『七草』の巨漢へと向かって…『烈火』は静かに声をかけたものの、その言葉は賛辞というよりは『甘さ』を見せたデュエル傭兵に戒めを与えているかのような声となりて、『七草』の一葉、ホトケ・ノーザンへと届けられていた。
…傭兵らしく、防炎加工の施された兵装を着込んでいたのだろう。【星態龍】の一撃により、大地が焦げ周囲の木々がなぎ倒されていたものの…意識を保ち、未だ起き上がろうとする意思を見せるのは、デュエル傭兵の名に恥じぬタフさとも言えるだろうか。
…しかし、全力の一撃に凄まじいカウンターを喰らった衝撃は計り知れず。
焦げた地面に手を突き、混濁しかける意識の中でふらつきながら上半身をどうにか持ち上げるホトケ・ノーザンの姿は、見るからに痛々しい敗者の姿にも見え…
しかし、そんな敗者を意に介さず。
更に『烈火』は、慈悲無く言葉を続ける。

「…一つ教えろ。あと何人の『七草』がこの島に居る?『七草』が、1人だけ雇われたってこともないだろうからねぇ。」
「…3人。」
「さんっ…チッ、面倒さね…犯罪者だけでもガキ共には荷が重いってのに、その上『七草』があと3人も居るとは…」
ホトケ・ノーザンから聞き出したその情報に、思わず苦い表情を見

せる獅子原　トウコ。
とは言え、それも当然であり…
最後の攻防において、壮絶なカウンターによって『七草』を倒したとは言えども。
歴戦のデュエリストである『烈火』を持ってしても、今の勝利は簡単に手に入ったものではなく…触れれば終わりという骸骨の王のプレッシャーの中で、ギリギリの攻防を凌いで掴み取ったモノだったのだから。
…『七草』と呼ばれる、7人のデュエル傭兵たち。
その力の一端は凄まじいの一言であり、ここに倒れているホトケ・ノーザン1人を例に出しても、およそ学生レベルや生半可なプロでは立ち向かうことすら許されずに、成す術なく蹴散らされてしまうだけ。
…己の美学を貫きながら、これほどまでに危険なデュエルを仕掛けてくる尋常ではない力の持ち主。
『烈火』が勝てたのは、ただ相性が良かっただけ…いや、相性など決して良くはなかったが、『烈火』の誘導が上手くはまって最後の最後の攻防で獅子原　トウコがギリギリで競り勝っただけ。
ソレを履き違えるほど、獅子原　トウコという女傑は事態を甘くは見ておらず…
ソレ故、こんなレベルの裏社会の猛者が最低でもこの島にまだ3人も残っているという事態は、歴戦のデュエリストたる『烈火』を持ってしても危機的状況だということを感じずにはいられないのか。
そんな『烈火』は、騒ぎを聞きつけた新たな敵が群がってくる前に。孫を連れ、この場を立ち去ろうとしてホトケ・ノーザンへと背を向け始め…
「…」
…しかし、一体何を思ったのか。
『烈火』はこの場を立ち去る前に、再度『七草』の一葉へと振り向いた。

「…あぁそうだ、もう一つ…アンタ、子供達を何人襲った？」
「…1人も…私の目的は、たった1人の少年だけだ…それ以外を襲うのは…私の主義ではない…」
「ハッ、そうかい。…随分と甘いんだねぇ『七草』ってのは。」
「…フッ…私だけ…だがな…」
「まっ、いいだろ。アンタの真っ直ぐなデュエルに免じて…アンタのその主義、一応信じてやるよ。…だから一個教えてやる。デュエルの最中にアンタが言ってた、ダ・イーザ使いの『ホムラ少年』って子のことだがねぇ…それ、煉獄園　焔のことだろう？」
「ッ!?ぐっ…あ、あぁ、そうだ…我が友、ホムラ少年…た、確かに煉獄園家の嫡子だが…な、なぜ貴女がソレを…」
「ソレ、アタシの孫さよ。」
「なっ!?」

…獅子原　トウコの放った言葉が、あまりに衝撃的であったのか。
失いかけたその意識を、驚きと共に鮮明なモノへと蘇らせた『七草』の1人、ホトケ・ノーザン。

…それも当然か。

何せ、たった今『烈火』が孫と言った少年の持つ『名字』は、この世界に生きる者ならば知っていて当然…いや、知っていなければならない程に恐れ多い『名字』であったのだから。
それは、先ほどのデュエルの最中にホトケ・ノーザンが零した、年の離れた『友』の名でもあり…

煉獄園　焔―

この世界における三大貴族のうちの一つ。『白桜院』、『天津間』に並ぶ…『煉獄園』の名前を持った、相当たる地位を確約された少年の名。

三大貴族…それはこの世界の支配者的階級に位置する、上位の血筋の名の一つ。
政界、財界、決闘界…多岐に渡るこの世界の本筋において、その特権を思うがままにしている、雲の上に住む上流階級の者達の総称。
その三大貴族においても、特にその名が世界中に幅広く知られている『煉獄園家』の、その嫡子を『烈火』は今確かに『孫』と、そう言い放ったのだ。

…普通であれば、三大貴族の血筋を持った人間と親類ということなど、恐れ多くて言葉にすることすら憚られること。

まぁ、歴史にその名を刻んだプロデュエリストである『烈火』においては、三大貴族など恐るるに足らずと言ったところなのだが…

「煉獄園家に嫁に行った、アタシの一番下の娘の子どもさ。…アタシの…15人の孫の1人。」
「な……フッ、ハハ…世界は狭いな…しかし…納得した…彼が『烈火』の孫だったとは…道理で、あの歳でアレだけの才覚を見せたわけだ…か、彼は、今どこに…私は、彼と戦いたくてこの仕事を…」
「…死んだよ。」
「……は？」
「4年前にね。…事故、だそうだ。『アタシでさえ』それ以上は知らされてない…ソレがどういう意味か、理解できないわけじゃないだろう？」
「な…ば、馬鹿な！私と戦った1年後じゃないか！そんな…馬鹿な…」

続けられた『烈火』の言葉が、あまりに衝撃的だったのか。
確かに耳にいれつつも、ホトケ・ノーザンの表情は信じがたい事実を聞いたかのように…みるみるうちに、その表情が焦燥に包まれていくではないか。

「第一、あの子が生きてたらとっくに高等部卒業してる歳さ。【決島】に出てくるわけないだろう？」
「…おかしいと…思っていたんだ…アオト少年もテツ少年もプロになっていたのに…トーリ少年とアイナ嬢はまだ学生…プロになっていなかったから…もしかしたら彼も【決島】に出るのではないかと…だから、私は…」

…それは、本気でショックを受けているかのような面持ち。
ポツリ…ポツリと…言葉を漏らす巨漢の意識は、衝撃により覚醒したにも関わらず再度ドロ沼の中に沈みかけていくのか。
三大貴族の少年と、裏社会のデュエル傭兵が『友』であったという事だけでも信じがたい言葉ではあるのだが…
けれども、裏世界の男がこれ程のショックを受けているというその不自然なりし現実は…彼が、確かにその煉獄園　焔という少年と友であったという証明でもあるのだろう。
…限界ギリギリの意識の中で零される言葉には、嘘はつけない。
ソレを、長い人生の経験から知っている獅子原　トウコだからこそ。自分の孫の1人と友人であったと言う裏社会のデュエル傭兵の言葉も、一応は信じるに値する言葉として聞き入れているのだろうか。
そんな、悲観的な現実を突きつけられたであろう『七草』の一葉、ホトケ・ノーザンへと向かって…
『烈火』は続けて、どこか呆れたように…

「はぁ…大の男が仕方ないねぇ…その情けない姿に免じて、もう一個教えてやるよ。」
「な、なにを…」
「…アタシも、孫の死を『事故』で片付けられたことに納得出来てなくてね。小龍を締め上げ…じゃなかった、劉玄斎学長の手を借りて調べたんだが…あの子は…孫はね、命を賭けたデュエルで仲間を救ったんだとさ。…そのおかげで、今も生きてるガキ共がいる。孫1人の犠牲

で…大勢のガキ共が、ね。」
「命を賭け……は、はは…そ、そう…か……仲間を救うために…はは…勇気に溢れた…優しい…実に彼らしい、最期だ…そうか…実に、合理的な…」
「ハッ、随分あの子の事を知ってるみたいだねぇアンタ。孫のことを…よく、わかってくれてるじゃないか。」
「…当たり、前だ…任務とは言え、僅かの間、教鞭を取っていたのだ…そうか…我が友は、もう…」

そう言って…デュエルで受けたダメージのせいか。
焦げた地面に横たわったまま、ホトケ・ノーザンはその意識を…
静かに、手放したのだった―

そして―

「…ばあちゃん、今の話って本当なのか？焔兄ちゃんが死んだのって…事故じゃなくて、命を賭けてって…」
「炎馬、今言ったこと全部忘れな。焔のことはアンタには関係無…」
「ばあちゃん！」

いつどこから敵が現れるか分からないというのに、いてもたってもいられないと言わんばかりに。
徐に、祖母へと向かってその若すぎる声を張り上げてしまった獅子原　炎馬。
…当然だ。
何せ名字が違うとは言え、身分が違うとは言え。獅子原家と深い繋がりを持った、『焔』という一人の少年の『死』は今なお獅子原家の人間にも大きなダメージを与えているのだから。
獅子原の…『烈火』の血を受け継いだ、才能溢れる愛すべき従兄弟…
身分の違いなど気にすることもなく、家族のように…いや、実際に

家族として、短い人生を親族達と共に過ごして来た少年、『煉獄園焔』。
　それは偏に、三大貴族すら敬意を払う歴戦のデュエリスト、『烈火』たる獅子原　トウコの持つ威光の大きさもあったのだが…
　それでも、そんな従兄弟である彼とは炎馬も歳が近かったというだけあって、そして姉と同い年であったと言うこともあって、これまで特に近い場所で過ごす機会が多かったのだ。
　そんな愛すべき従兄弟の死は…まだ幼かった炎馬にとっても相当にショックを受けた出来事だった。
　だからこそ、今まで知りもしなかった従兄弟の死の真相を、突然知ってしまった炎馬からすれば。祖母から『忘れろ』と言われたところで、『はいそうですか』と納得できるはずもなく。

「…わかったわかった。アンタがもっと大人になったらちゃんと教えてやるさよ。だから…他の親族には言うんじゃないよ?…特に、煉獄園の方にはね。」
「…約束だぞ。俺だって焔兄ちゃんが死んだの、未だにショック受けてんだから。俺だけじゃない。姉ちゃんも、親族みんなも…今も、引きずってる。」
「あぁ、アタシもさ…けど、今はそんなコトでグダグダしてる場合じゃないってことも…わかっておくれ。」
「…うん。」

　…それはここでは語られぬ、過去にあった別の誰かの物語にて語られる出来事。
　現代よりももっと前…過去にデュエリアで起きた『事変』に関連した、闇に隠された非現実的なる確かな現実。
　…しかし、今この場で起こっている『事態』においては、ソレは本筋から外れた話になってしまうために。
『烈火』もまた、これ以上は話をするつもりのない事を孫へと伝え。そして、今成すべき事をハッキリさせるために…

「さて…炎馬！何があったのか説明しな！」
「あ、う、うん…【紫影】って奴が…」

この、あまりの危機的状況を素早く把握するために。
渦中にいた孫へと、この状況を説明させるのだった。

「【裏決島】…なるほどねぇ。【紫影】…あの屑ヤローが…またこんな悪さするとは…」
「あれ、そういえば…ばあちゃん、島の外に居たんじゃなかったっけ。どうやって来たんだ？」
「ハッ、泳いできたに決まってんだろ？」
「およっ!?は？え、だって、あの竜巻が…」
「あぁ、とりあえず竜巻に突っ込んでから考えようとも思ったんだけどね。でも急にディスクが光ったと思ったら、【星態龍】が飛び出してきて竜巻突き破ったのさ。…今思えば、島に近づいたから実体化したんだねぇアレは。結果オーライって奴さねぇ、ハッハッハ。」
「…め、めちゃくちゃだ…なんでそんな危ないこと…」
「あ？ンなモンお前たちを助けるために決まってるさよ。」
「…」

にわかには信じがたい、けれども信じなければ説明も出来ない事を、さも当然の様にして言い放ってくる獅子原　トウコ。
先ほどの『炎髪』のせいか、全身ずぶ濡れになっていたはずのトウコの体は、既に水滴の一滴すらも残ってはおらず…
…しかし、祖母が口より手が先に出るほどの短気だと言う事は、孫である炎馬も知っていたとは言え。
島の外がどうなっているのかなど知らない炎馬からしても、祖母のあまりに危険かつ短絡的な直情行動は一歩間違えれば自ら命を捨ててしまう行動となっていたのだから…
そんな危ない行動を後先考えずに取った祖母に対し、思わず苦い顔

を零した炎馬の表情もまた、祖母の身を案ずる孫の顔と言えるのだが。
…まぁ、あそこでトウコが助けに来てくれなかったら、炎馬は今頃犯罪者デュエリスト達に負けて攫われていたのだから。一概に、祖母のとった危険かつ短絡的な直情行動は孫とて一方的に咎める事など出来はしないのだが。
ともかく…

「ばあちゃん、なんでそんなに落ち着いていられるんだ？俺、まだよく分からなくて恐いってのに…」
「ハッ、充分驚いてるよ。けど慌てふためくのを後に取っておいてるだけさ。今は…ソレどころじゃないからねぇ。」
「後に取ってるって…意味わかんねーよ…」
「それより大体理解したよ。行くよ炎馬、ついておいで！」
「え、行くってどこにだよ！」
「決まってんだろ？【紫影】のとこさ！頭を叩けば終わるんなら…アタシが、ヤツを倒すだけさ！」

迅速かつ的確に。
今この島で起こっていることを即座に飲み込んだ『烈火』の、そのあまりに早い状況適応が行動を起こそうとして…
未だ混乱が続いているであろう孫を他所に、トウコは島の内部へと踏み入ろうとその足を前へと進め始めたではないか。
…【裏決島】、実体化したデュエル、人知を超えた竜巻の壁に、裏決闘界の刺客とその黒幕である【紫影】。
普通、こんな意味のわからない事が連続している状況に突然放り込まれれば…頭が理解することを拒んでしまうことは必至であり、常人であればこの状況を一片たりとも理解することなど出来ないはずだというのに。
それでも歴戦の経験か、はたまた人生の引き出しか…または、その両方を持ってして『烈火』は孫への説明も後に、海岸を背にして森の

中へと踏み入っていくのみであり…

そして―

「あの屑野郎は…アタシが、この手で…」

歩みを続ける祖母の口から零された、その聞いた事もないあまりに冷たい声に…

炎馬は、一抹の恐怖を感じるのだった―

―…

ｅｐ９４「伝説に選ばれし者」

未だ収まらぬ『竜巻』に囲まれた、地獄が続いている【裏決島】。
その、犯罪者デュエリスト達が溢れかえる深い深い森の中で…

「行け！　バルバロス！」

―！

「蹴散らせ！ダーク・リベリオン！」

―！

出会った犯罪者たちを吹き飛ばしては、全くスピードを緩めずに森の中を駆け抜けていた少年達がいた。

それは紛れも無く決闘学園イースト校２年、天城　遊良と天宮寺　鷹矢。

…彼らは、一体どこへ向かっているのだろうか。

森の中を全速力でかけぬつけつつ、ひっきりなしに襲い来る犯罪者デュエリスト達を相手に…
獣の王と咆哮と、黒翼牙竜の轟きを響かせながら、少しも怯むことなく幾度も速攻を仕掛け、寄せ来る敵を蹴散らし続けている少年達。
…かつて師である【黒翼】に、地図に無い地区に連れて行かれて似たような修業をした甲斐があった。
そこで行った、浮浪者デュエリスト達との連続した荒っぽいデュエルの経験が幸を成しているのか…

裏社会の犯罪者デュエリスト達を相手にしても、二人は一歩も引かずにスピードも緩めず。ただただ前へと向かって、進撃を続けているのみ。
また、昨年度に決闘市で起きた『異変』での経験が、こんな非常事態でも自分達を迷い無く前進させてくれていることに、遊良も鷹矢も複雑な心境を感じつつ。
それでも迷っている暇などないのだと言わんばかりに、森の中を前へと進み続けていて。

「はぁ…はぁ…くそっ、どれだけ居るんだ…」
「止まるな遊良！次から次へと出てくるのだ、さっさとここを離れるぞ！キリがない！」
「あぁ、わかってるよ！」

倒し、走り、蹴散らし、走る―
それを、もう１０回以上は繰り返しているのではないか。拠点であった『塔』を出発してから、まだそんなに時間は経っていないとはいえ…
若いというのに確かな疲労の汗が見える遊良と、それを叱咤激励する鷹矢も、体力馬鹿にしては珍しく既に遊良と同じくらいの疲労を感じている様子をみせており…
…しかし、それも当然か。
何せ【裏決島】で行われているデュエルは、モンスターが実体化した油断のならない緊迫したデュエル。
一撃でも喰らえば、下手をすればその場で戦闘不能となってしまうこともあり…もしＬＰが０となるほどの攻撃を喰らってしまえば、確実にこの先へは進めなくなってしまうことは確実なのだから。
…そんな緊迫し続ける戦いを、遊良も鷹矢もこの短時間で既に１０回以上も行っているのだ。
いくら全てを速攻で、迅速に蹴散らしているとは言えども。
相手も相手で、実力はピンキリとは言え全員が並のプロかそれに近

い力を持っている犯罪者達ばかりなのだから、遊良も鷹矢もそれ相応の疲労を見せてしまっているのも、ある意味仕方のない事とも言えるのだろう。
そんな中…
少しも止まる事無く、森の中を全速力で駆け抜けながら。
鷹矢が、後ろをついてきているもう『1人の男』へと徐に声をかけ始めた。

「貴様も少しは戦ったらどうなのだ？」
「…ごめんね。僕は、無駄に争いをしちゃいけないから…」
「ならば何故着いてきた。別に貴様の助けなどなくとも、この調子ならば俺と遊良だけでも辿り着ける。ならば貴様は十文字たちと一緒に医療棟に…」
「…ううん。『まだ』、僕の助けは要らないけど…この先に、ちょっと危ない気配があるから…」
「ぬぅ…」

苦言を零すようにして言葉をかけた鷹矢へと、そう言葉を返したのは同じく決勝の『塔』からついてきた1人の男であった。
それは今にも消えてしまいそうな希薄な存在感を纏っている、どこか透明な気配をしたデュエリア校の生徒であり…
静かに流れる風の音にも似たその声で、鷹矢へと言葉を返したのは紛れも無く…

決闘学園デュエリア校、鍛冶上　刀利―

今にも大気に溶け込んでいってしまいそうなほどに、重さを全く感じない声なれど。
その、決して逆らってはいけないような雰囲気を感じさせる刀利の言葉には、相手が誰であろうとも常に不遜なる態度を崩さぬ鷹矢を持ってしても引き下がる他ないのか。

…それは鍛冶上　刀利という男の力を、その身を持って体感した鷹矢だからこその勘。
そう、これ程までの力を持つ男が、『危ない気配』とまで言い放ったその敵は…きっと、相当に危険な者に違いないと、鷹矢の野生的勘が即座に刀利の言葉を肯定していて。
「…それに、医療棟の方は蒼人君と哲君に任せておけば大丈夫。…あの二人はとても強いから…」
「けど、こんなに敵が居たんじゃいくら蒼人先輩たちでも…医療棟に行く途中にも敵がどれだけいるか…」
続けて。疲れと共に遊良が零したのは、医療棟へと向かった泉　蒼人と十文字　哲への心配であった。
…そう、医療棟とは別方向へと向かっていてこの敵の数。
もし【紫影】が最初に宣言した通り、敵が医療棟を襲撃していたら…
学生達が篭城戦をしているとはいえ、相当数の敵が医療棟に詰め掛けているかもしれないのだから、その周囲にはこの辺りとは比べ物にならない数の敵が蠢いている可能性が高いのだ。
…蒼人と哲が、こんな切迫した状況に慣れているとは言えども。
それでも、ひっきりなしに現れ続ける敵を押しのけ続けるというのは、相当の体力と精神力を消耗するものであり…
「ふん、十文字たちならば俺達が心配せずとも上手くやるに決まっているだろうが。奴め、去年よりも相当力を高めたようだ…進化したあの男の『絶対防御』は、こんな雑魚どもに傷をつけられる代物ではない。今の俺とて…」
「…天宮寺君の言う通りだよ。蒼人君と哲君はとても強い…こんな状況だからこそ、誰よりも頼りになる。」
「確かに…そうですね。蒼人先輩なら、きっと何とかしてくれる。」
「…うん。」

けれども、蒼人と哲の力を誰よりも知っている様子の刀利と。十文字　哲に一度勝利しているとはいえ、その勝利を勝利と認めていない鷹矢の言葉によって、遊良も医療棟へと向かったのが『どんな者達』だったのかを今一度思い出した様子。

…蒼人と哲は強い。

それは彼らと実際に対峙し、正面からぶつかり合ったことのある遊良と鷹矢だからこそ理解できる確かな信頼。

自分達よりも場数を踏んでいる先達達。彼らが味方であると言う安心感は、遊良も鷹矢も昨年度に多いに助けられたのだから…

そんな彼らならば、きっと自分が心配する事なの何もないのだということを、遊良も今一度己の心に刻み直して。

しかし…

「それより文句を言いたいのは先ほどの『ギャンブラー』だ。あの男、ふざけた真似を…」

敵をなぎ倒しつ進む遊良達とは別働隊で、医療棟へと向かった泉蒼人と十文字　哲への心配とは違い。

鷹矢は、『塔』を離れる直前の…

勘に障ることを言っていた、1人の男の事を思い出していた―

―…

時は少々遡る。

「僕たちが行くよ。」
「話は聞こえていた。医療棟は任せてもらおう。」
「え？こ、この声って…」
「…貴様ら…何故居るのだ。」

【紫影】に『医療棟』への救援と、全く手が足りずに焦燥に駆られていた遊良達へと。
不意に聞こえてきたのは、どこまでも頼もしさを覚えるような力強い声であった。
そして、その声に反応して…反射的に声の方へと振り向きつつも、思わず己の目を疑ってしまった遊良と鷹矢。
…しかし、それもそのはず。
何せ、そこにはこの島には居るはずのない2人の男が立っていたのだから。
この危機的状況においては、その行動力と経験が何よりも頼りになることを知っている…昨年も大いに助けられた、こんな状況だからこそ信じられる2人の男が。

「あ、蒼人先輩…」
「やぁ、遊良君。久しぶりだね。」
「十文字…何故貴様がここに？」
「…事情があってな。帰りそびれたと言うやつだ。」

それは、圧倒的に味方が足りないこの状況においては、これ以上ないくらいの心強い味方であったに違いなく。
何しろ、現れたのはプロデュエリストの新進気鋭として、今最も勢

いのある若手として有名になっている2人の男。
実力的な面からみても、精神的な面からみても、裏決闘界のデュエリストになど決して遅れをとらないであろう、確かな心と力の持ち主であり…
何より、昨年度起こった決闘市の『異変』においては、遊良と鷹矢を『異変』の中心にまで送り届けてくれた…

―眉目秀麗、『清流』のデュエリスト…泉　蒼人
―絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト…十文字　哲

かつて決闘市の『異変』やデュエリアの『事変』を経験した、こんな事態に最も頼りになるであろう味方が。
そう、蒼人と哲が現れたのだ。

「泉君、何故君がここに？」
「砺波理事長、お久しぶりです。…実は劉玄斎学長に無理言って、こっそり入れてもらっていたんです。色々と…気になることがありまして。」
「…そういえば、君達はデュエリアの出身でしたね。…まぁいいでしょう。こんな事態なのです、余計な詮索はしません。」
「ありがとうございます。では、僕と哲が医療棟へ向かいます。篭城している学生達と合流し、機会を見計らい攻めに転じようかと。」
「…助かります。君の仕事ぶりは学生時代からも群を抜いていましたが…まさか生徒会業務のみならず、こんな事態でも助けられるとは。」

また、それはイースト校の学生であった頃から蒼人を知っている砺波からしても、これ以上無いくらいに心強い味方であったのか。
…何せ学生時代から、泉　蒼人は高等部の学生とは思えぬ仕事ぶりを遺憾なく発揮し。成績面やそれ以外でも、歴代トップクラスの学績を刻んで彼はイースト校を卒業していったのだ。
また、学校が違うとは言え…ウエスト校の筆頭であった十文字　哲

にしても、2年時に【決闘祭】の優勝、3年時に3位入賞と、誰もが認める輝かしい成績を残してプロの世界へと踏み込んだ猛者の1人。
そんな、今ではプロの世界で連戦連勝を積み重ねている彼らが救援に来てくれたことは…この1人でも多くの手を借りたい状況においては、安心して仕事を任せられるほどに適任と言えるのだから。
…素早い状況判断と、少ない説明で全てを理解してくれる飲み込みの良さ。
卒業生である彼ら2人の登場は、一刻を争うこの場面においてはまさにこれ以上無いくらいに頼もしい味方であり…

「…蒼人君、哲君。そっちも気をつけて。何だか、嫌な気配がするんだ…前にも、こんな感じがした後…大変なことが起きたから。」
「…お前がそこまで言うとはな。以前と似たような嫌な感じ…まさか『七草』か?もしそうなら事態は悪化する一方だが…」
「けど、刀利君がそういうなら警戒をしておこう。もし『七草』が現れたのなら…僕たちも、油断なんて絶対に出来ないから。」

即座に話がまとまったのか。
刀利と蒼人と哲。
かつてデュエリアで寝食を共にしていた仲間同士が、過去にデュエリアが大炎上を起こした『事変』にも似た感覚から…
各々、それぞれの気持ちを引き締めにかかり。

「…以上が【紫影】のデッキと戦法の特徴です。しかしそれ以上にあの男の言動、行動、その全ては嘘の塊だということを肝に銘じておきなさい。身振り手振りからして嘘。奴の言葉は、決して何も信じてはいけません。いいですね?」
「はい、砺波先生。」
「うむ、承知したぞ。」

遊良と鷹矢。

共に【紫影】を討つと決意した相棒同士が、元シンクロ王者【白鯨】から出発前に最後の教えを授かっていて。
…およそ高等部の学生と、高等部を卒業したばかりの若人とは思えない程の冷静さをみせる、こんな状況にもどこか『慣れて』いる者たち。
それはある意味、彼らのこれまで生きてきた短い人生が波乱に満ち溢れた過酷なモノだったということの証明でもあるのだが…

「本当に申し訳ない。本来ならば、私が奴を討ちにいかなければならないのですが…頼みましたよ、天城君、天宮寺君。君達二人ならば…きっと…」

プロとして、【王者】として。そして教育者として長い人生を生きてきた砺波からしても、心強い味方であると同時にこんな若者達に手を借りなければならない状況は、どうしても歯がゆさを感じてしまうモノなのか。
そう、【紫影】を取り逃がしたのが、己の不甲斐なさの結果だという事を理解しつつも。
それでも、学生達が全員助かる為に最善で尽力を尽くさなければならないという責任感から…砺波もまた、己の無力さに対し歯軋りをしているかのようでもあり…
けれども、この状況を何とかしなければならないという強い使命感の元、砺波は教え子達へと【紫影】の情報の知る限りを伝えているのだろう。

…裏決闘界の融合帝。

その称号の恐ろしさは、かつて『表裏戦争』と呼ばれた表と裏の決闘界の衝突で、【紫影】の残虐さを目の当たりにした砺波だからこそ間近に感じられる緊迫感。
その時の経験を思い出すようにして、【紫影】に対する情報がコレ以

上無いくらいの危機感を持って教え子達へと伝えられ…

…血の雨に打たれながら悦楽を得る男。妻の目の前で夫の首から上を爆破する男。子どもの目の前で親の首を刎ねる男。人間を爆破し芸術を謳う男。

その汚れた手は、一体どれだけの人間の命を奪ってきたのか―

数えられる限りでも、【紫影】の罪はまだまだあり…

もっともっと多くの罪を積み重ねている【紫影】という男の、常人には決して理解できない非道さはソレを目の当たりにした者でなければ決して理解など出来るはずも…いや、誰であっても、理解など出来るはずもなければ、絶対に理解したいわけがなく。

正真正銘、屑の中の屑。生きていてはならない、恨まれ続ける『捻じれた男』。

いくら『赤き竜神』を持つ少女の護衛のために、この『塔』を離れられないとはいえ。

自分の教え子達を、そんな男の下に差し向けなければならない砺波の心境は、決して晴れやかなモノでは絶対になく…

そして…

「決まったな。【紫影】は俺と遊良と鍛冶上　刀利。『医療棟』は十文字と青髪とギャンブラー、そしてルキの護衛には理事長が…」

一刻も早くこの事態を収束する為、役割が決まったことにより鷹矢が行動のスタートを切ろうとした…

その時だった―

「アオトとテツが行くってんなら安心したぜ。じゃあ俺はゆっくり、ＳｉｅｓｔａでもさせてもらうとするかＮＡ。」
「なっ、貴様！この非常事態に一体何を！」

不意に―
纏りかけた役割分担を、根底からしてひっくり返すかのように。投げやりに、そう言葉を漏らしたのはデュエリア校３年…
デュエルランキング第１位の『ギャンブラー』、リョウ・サエグサであった。

…一体彼は、この非常時に何を思ったのか。

先ほどまでは自身も、『医療棟』に救援に行く気であったはずだと言うのに。ここへ来て、まさかデュエルランキング第１位ともあろう者が臆病風に吹かれたとでも言うのか…
１人でも多くの者の手が必要なこんな事態で、彼の放った言葉は誰が聞いても褒められる代物では断じてない。
そうだと言うのにも関わらず、彼はそのままどこ吹く風で…
気ままなデュエリアの『ギャンブラー』は、続けて言葉を発するのみ。

「そもそも俺のキャラじゃねーんだよ。暑苦しい真似して、敵とガチンコでＢａｔｔｌｅなんてやってらんねぇ。【白鯨】が守ってくれるってんなら、安心して休めるわけだしよ。」
「馬鹿なことを言うな！貴様！今何が起こっているのかわかっていないわけでは…」
「…天宮寺君…いいからもう行こう。時間がない。」
「ぐっ…」

しかし…
今にも『ギャンブラー』の首元に掴みかかりそうになっていた鷹矢

を制するように。
鍛冶上　刀利が、鷹矢とリョウの間に割って入り。そのまま静かに言葉をかけつつ、天空闘技場から地上へと向けて出発し始め…
デュエリアの『ギャンブラー』…
第一試合での遊良とのデュエルから、その力が『本物』であると鷹矢も認めていたからこそ。
この非常事態において、今のリョウ・サエグサが放った言葉が鷹矢にはどうしても気に食わなかったのだろう。
けれども、今ここで彼を責めて時間を取られることが、最も時間の無駄だという事を鷹矢も理解しているからこそ…
…一刻でも早く行動を起こさなければならない。本当に、時間がない。その焦りから、去り際の視線を鋭くリョウへと差し込みつつ、鷹矢も刀利と遊良の背を追って『塔』を出発し始めるのか。

そうして…

遊良達が、天空闘技場から居なくなった後。

「…リョウ君。君は…もしかして…」
「Ｗｈａｔ？何だよアオト。…さっき言った通りだぜ？暑苦しいのは苦手だって、アオトも知ってるだろ？」
「…なるほど。変わらないな、お前のそういうところは。」
「ＨＡＨＡＨＡ、何言ってんだよテツ。いいからさっさと行ってくれ。俺は早くＳｉｅｓｔａしてーんだからよ。」
「…そうだな。行くぞ、蒼人。」
「うん。」

蒼人が、リョウへと何やら声をかけようとした素振りをみせたものの…
リョウはこれ以上、何も言うつもりは無いのだと言わんばかりの態度を崩さずに、立ち振る舞いを変えないまま。

…しかし、先ほどの鷹矢の言葉とは裏腹に。
中等部の時から付き合いがあるからか蒼人と哲は、リョウの言葉に何か思い当たる節がある様子。
まぁ、泉　蒼人と十文字　哲もまた、この場で余計な時間を食う問答をこれ以上この場で続けるつもりもないのだろう。
先に出発した遊良達に続くように、蒼人と哲もまた天空の『塔』を後にし始め…

「…私は外で敵の襲撃に備えます。君も、無理はしないように。」
「ＨＡＨＡＨＡ。【白鯨】まで何をいいますやら。俺はこれから、ゆっくりＳｉｅｓｔａとシャレ込ませてもらうだけだぜ。」
「…フッ。」

最後にこの場に残った砺波と、リョウは静かに言葉を交わすのだった。

―…

遊良達が『塔』を出発してから、およそ1時間ほど経った頃だろうか―
「…今頃は森を抜けた辺りだろうか。」

天空に高く聳える『塔』の、正面入り口の前。
その、地上にたった一つしかない『塔』への入り口の前に立ち塞がるように…
決闘学園イースト校理事長、元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣は1人、立っていた。

…それは何人たりとも正面から『塔』には入れさせないという、大きすぎる鯨の分厚すぎる城壁。

絶対に現れるであろう【紫影】からの刺客を、真っ向から迎え撃つという気迫の元に…
デュエルディスクを装着し、戦意を剥き出しにして聳え立つその鯨の姿は、誰が見たってこの世の何よりも堅牢な城壁に見えるに違いないことだろう。
…そう、【紫影】は知っている。この『塔』に、奴が探していると宣言した『神』のカードを持った少女が匿われていると言うことを。
だからこそ、犯罪者デュエリスト達による島の中での学生達への無差別襲撃、そのドサクサに紛れて【紫影】は刺客を絶対にこの『塔』に送り込んでくるに違いないのだ。
それは【紫影】の行動パターンや思考、戦術などを嫌と言うほど知っている砺波だからこその経験と勘。
一度死んだ男とは言え、あの捻じれた男の根本が変わっていなかったことを先ほどのやり取りで砺波も確信しており…
また、この島に解き放たれた裏決闘界の刺客の中には、学生レベルではとてもじゃないが太刀打ち出来ない程の恐るべき実力を持った者達が紛れ込んでいるという事を…砺波は、その【化物】の如き鯨の超聴覚でとうに察知している。
…学生達に『塔』の警備を任せるのではなく、自分がこの『塔』の護りを請け負ったのもソレが起因。
もし自分が『医療棟』への救援や、【紫影】の討伐に乗り出せば。
その隙を狙って、【紫影】からの刺客は必ず『塔』を襲撃してくるだ

ろう。
それも、学生達では太刀打ちできない程の力を持った…恐るべき強者が、いとも容易く高天ヶ原　ルキを攫っていってしまうだろう…と。

「…来たか。」

…だからこそ、【白鯨】は城壁のように立ち塞がる。
そう、既にこの『塔』へと向かってきている、『恐るべき力』を持った敵の気配を砺波は察知している。
ゆっくりと近づいてきている、およそ学生達では太刀打ちできないであろう、その恐ろしい敵のことを。
それも、生半可な力の気配ではない。気配だけだと言うのに、そのオーラは実力の『壁』を超え、その『先』の地平すらも更に超えている…
まさに『極』の頂に位置しているという、およそ学生達では蹂躙されてしまうであろう敵の気配が…

―実に、２つ

「…思った通りだ。天城君達では、ここの守りは荷が重過ぎる…」

思わず、砺波がそう言葉を漏らしてしまうほどに。
森の中からゆっくりとこちらへ近づいてきているのは、学生達では到底…
いや、学生どころか、例えプロの猛者であったとしても蹴散らされてしまうのではないかと思える程に重々しい、それでいてとてつもなく冷たい強者のオーラ。
…それが、２つ。

そう、紛れも無く『極』の頂に位置するほどの力を持っているであろう敵が、2人も同時にこの『塔』へと向かって歩いてきているのだ。
プロと学生のレベルを分ける実力の『壁』を超え、プロのトップランカー達が巣食う『先』の地平を更に超え…
【王者】やそれに匹敵する『名』を持った、決闘界の歴史に名を刻んだ歴戦の者のみが到達出来る『極』の頂。
その、最強のデュエリストに数えられる者のみが到れる天上の場所に、裏社会の者ながら到達している者が2人も同時に現れようとしているのだ。

…それは、常人にはあまりに恐ろしい出来事。それは、常人ではあまりに酷な現実。

常人であれば、『極』の頂に到っている者を相手にするなど、根本からしてままならない事。
一騎当千、国宝と称されることもある『極』の頂の力、その天上の実力を持った者を相手にすることなど、例え歴戦のプロであっても難しいことこの上なく…
そんな一騎当千の力を持った敵が、1人ならばまだしも2人も揃って襲ってくるプレッシャーは、果たしてどれほどの重圧となりて天空の『塔』へと向かってきているというのか。
…だからこそ、元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣は待ち構える。
この島においては、『極』の頂に到った者を2人同時に迎えられる者など、元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣をおいて他に存在しないからこそ。そう、己しか、ここを守れる者は居ないのだと理解しているからこそ…
『極』の頂に位置する力を持った敵を、2人も前にしてもなお。決闘学園イースト校理事長として、護るべきモノのために…
砺波は、ただただ待ち構える。
恐るべき力を持った敵が、この場に現れるのを。

そして―

「およよよよぉ？【白鯨】にガン待ちされちゃってんじゃーん！チャン僕たちが来る来るのバレバレちゃってたかーんじぃ？」
「みたい。でも、別に…関係ない。」
「それな！むしろチャン僕たちの手間手間てーまが省けてラッキー＆クッキーってかーんじぃ！」
「ギョウさん、意味わかんない。相変わらず。」
「フゥー！ロナロナってば手厳しぃーねぇー！」

森の奥から、ラフな言葉と静かな言葉を交わしながら。
強者の気配も消さずに、戦意を駄々漏れにして現れたのは、２人組みの男女のデュエリストであった―

それは短髪を逆立てサングラスをかけた、アロハシャツにビーチサンダルというラフな恰好この上ない、良く日に焼けた肌を見せ付ける言動も振舞いもラフすぎる１人の男と…
化粧で肌を塗り固め、さらにはゴシックでロリータな白黒のドレスを、とても安全とは呼べないほどに大きな安全ピンでゴテゴテに装飾した１人の女性。
…待ち構えていた【白鯨】を、一目見てもなお。
全く慄きもせずに歩みを止めない彼らの振る舞いは、まさに自分達が『敵側』であると言う事を【白鯨】に隠す気もないと言わんばかりの雰囲気であり…
…まぁ、アレだけの殺気を駄々漏れにして『塔』へと向かってきていたのだから、彼らも端から自分達の存在を隠す気などなかったのだろう。

そう、彼らの言動はまるで、自分達は『塔』を襲撃するのではなく【白鯨】と戦いに来たのだとでも言っているようでもあり…

…そんな、見るからに怪しすぎる『敵』の姿を視界に入れてから。

突如現れた謎の敵へと向かって、砺波は静かにその口を開き始めた。

「貴様らは…なるほど、その顔には見覚えがある。『七草』のゴ・ギョウとスズシ・ローナだな？」

「ほ？…けひゃひゃ！まーさか【白鯨】さまさまがチャン僕達のコト知ってるなんてうれしういーねぇー！そのとりとーり！チャン僕は『七草』の一葉、ゴ・ギョウ！」

「『七草』、スズシ・ローナ。」

「しかしかかし意外だねぇ！チャン僕達の事、名前だけじゃなくて顔まで知ってたなんてビックリ＆ドッキリｗｉｔｈチャッカリってカーンジぃ？」

「相手、元シンクロ王者。流石の情報網。」

「それなー！」

「…」

どこまでもうるさいラフな男と、恐怖を煽るドレスの女を前にして。

今初めて邂逅したはずの敵の正体を、さも当然のようにして言い当てた元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣。

『七草』—

—それは、デュエル傭兵集団

裏の世界で、組織の代デュエルやらマフィアの用心棒、果ては命を賭けた死のギャンブルや国同士のデュエル戦争に雇われその名を轟

かせているという…
決して表には出てこない、七人全員が『極』の頂に位置するという恐ろしき傭兵達の総称。
しかし、『七草』はあくまでも裏社会の猛者であるために、その存在を知っている表の者は限りなく少ないはずなのだが…
…まぁ、女手一つで大家族を養う為に、裏社会の仕事も請け負ったことのある『烈火』と違って。
砺波が『七草』を知っていたのは、かつて取り憑かれていた釈迦堂ランへの異常なまでの恨みから、彼女を探す為に『表』・『裏』問わず強いデュエリストの情報をなりふり構わずかき集めていたという…
少々、他人に誇っていいのか分からない結果故の知識ではあるのだが。

ともかく…

「…【紫影】の屑め、『七草』を雇ったとは。よほど私と戦いたくないとみえる。」
「けひゃひゃひゃひゃ、チャン僕だって【白鯨】の相手なんてホントはめんめんめんめんメンドクサイなんだけどもねぇ。いっぱいお金貰っちゃった以上は？仕事だからちゃんちゃんちゃんとやりますよっと。」
「嘘。ギョウさん、さっきから煩かった。【白鯨】と早くデュエルしたいって。」
「ちょいちょいロナロナー、ソレ言っちゃいやーん！…まっ、てなわけで？ここに居るっていう？神のカードの持ち主？頂きにあがりましたって事でひとつシクヨロでゅーす！」
「シクヨロ。」

どこまでもふざけた態度を崩さず、好き勝手に振舞い続ける傭兵、『七草』。

元シンクロ王者【白鯨】を前にしてもなお、彼らがここまで自由に振舞えるのはまさしく自らの力に相当の自信があるからなのだろうが…

しかし…ふざけた言動をしていても、纏うオーラは殺気そのモノ。

そう、先ほどから砺波にぶつけられている彼らの戦意は、ふざけた言動と恰好とは裏腹にあまりに鋭い刃となりて砺波へと向かってきており…

…生半可な実力者では、醸しだす事などできないであろう強者のオーラ。

それは紛れも無く、彼らの力が『極』の頂に位置していることの証明となりて、今まさに【白鯨】へと襲い掛からんとしていて。

そのまま…

『七草』の2人は、【白鯨】へと向かってデュエルディスクを構え始め…

「仕事だから、2対1。早く蹴散らす、早く帰る。」

「ホントはタイタイマンマン張りたいトコなんだけどけど？ま、仕事だからごめんでーすってことで。」

順番に戦うのではなく、裏の世界の流儀とでも言いたげに。当然のように、2人同時にデュエルディスクを構え始める『七草』の2人。

すると…

なんとこの場に居る者達のデュエルディスクが、そのデュエルモードを個人用の通常ルールから複数人仕様の特別ルールへと変更を示し始めたではないか。

それは紛れも無く、『七草』2人のタッグに対し…【白鯨】が、1人で戦わなくてはならないとデュエルディスクが指し示しているとい

うこと。
…デュエルディスクが提示したルールは絶対。それがどれだけ理不尽なルールであろうと、一度ディスクが決めたルールは変えられない。
それは、この世界のデュエリストであれば常識中の常識ではあるのだが…
しかし指し示されたルールは、『全員』が『初期手札５枚』、『初期ＬＰ４０００』、『初ターンドロー無し』、『初ターン攻撃無し』という…
誰がどう見てもどこから考えても、あまりに砺波だけが不利なルールに設定されてしまったではないか―
これでは、いくら砺波が元シンクロ王者【白鯨】とは言え。あまりに不利すぎるルールであり、こんな設定ではいくらなんでもまともなデュエルなど出来るはずがないではないか。
何せタッグデュエルとは違って、２対１ではあるものの敵の男女はそれぞれが自分のデッキ、手札、場、墓地、ＬＰを持っているのだ。それは純粋に考えても、敵側の手札も場もＬＰも何もかもが『倍』となっていると考えられる状況でもあり…
それに加え、敵はプロのトップランカーすらも蹴散らすことの出来る実力…そう、『極』の頂に位置した、恐るべき力を持った２人なのだ。
それを考えると、いくらデュエルディスクが提示したルールとは言えども。
こんなルールを呈示されては、例え現役の【王者】であったとしてももまともに勝負をする事は難しいと言え…
「フッ…」
しかし…
こんなにも一方的に、自分に不利すぎるルールを押し付けられても

なお。
デュエルディスクを構えつつ、どこまでも冷静に、そしてどこまでも沈着に…

砺波は、不敵に笑うだけ―

「いいでしょう、そちらがその気ならば2人纏めて相手をしてあげます。…そして後悔するがいい。今の私相手に、『七草』とはいえ『たった2人』で向かってきた事を。」
「けひゃひゃひゃひゃ、言う言う言うねぇ【白鯨】さまさま。…調子ノリノリ過ぎて、ちょっとチャン僕カッチーン来ちゃった。」
「凄い自信…凄い、ムカつく。行くよ…」

裏世界に名を馳せる圧倒的強者を、不利なルールで2人同時に相手をすると言うのに。
…一体、この溢れ出る砺波の自信は何なのか。
ソレを知らぬ『七草』の2人からすれば、相手が元シンクロ王者【白鯨】の見せるあまりに不遜なるその態度は…彼らも腕に相当の覚えがあるからこそ、余計に琴線に触れるモノがあったのだろう。

そのまま…戦う事に何の疑問も抱かずに。
この場に居る3人は…否、2人の強者と、1匹の【化物】は…
今、ゆっくりとデュエルディスクを構え…

―デュエル!!!

そして、始まる。

先攻は『七草』、スズシ・ローナ。

「私のターン。【隣の芝刈り】発動。対象はギョウさん。デッキから２０枚墓地に送る。」

―！

デュエルが始まって即座に。

『七草』が一葉、スズシ・ローナが発動したのは、文字通り伸びた芝を刈るが如き動きを見せる…ピーキーな性能を持った、一枚の魔法カードであった。

それは自分と相手のデッキ枚数の差分を、一気に墓地へと送る効果を持った恐るべき効力を発揮するカード。

…その数、実に２０枚。

そう、自分のデッキの枚数が多ければ多いほど、より多くのカードを墓地に送れるこのカードはランダム性こそ高いものの…

この序盤で、実に２０枚ものカードを墓地に送れるというのは、紛れも無く大きなメリットと呼べるに違いないことだろう。

…恐るべき勢いで削られていく、スズシ・ローナの分厚いデッキ。

そのまま、潤いに潤った墓地を見て…『七草』が一葉、スズシ・ローナが…

更に、動き始める。

「準備完了。【ゾンビ・マスター】召喚。効果発動。手札１枚捨てて墓地から【ユニゾンビ】特殊召喚。次は墓地の【馬頭鬼】除外して【ゴブリンゾンビ】も蘇生。手札１枚デッキに戻して【ゾンビキャリア】も蘇生。」

―!!!!

【ゾンビ・マスター】レベル４
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／　０
【ユニゾンビ】レベル３
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／　０
【ゴブリンゾンビ】レベル４
ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１０５０
【ゾンビキャリア】レベル２
ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／　２００

一瞬で…
そう、瞬きほどの一瞬で。
死霊使いに導かれるようにして、墓地よりぞろぞろと地を割いて現れたのは…朽ち果てた身体を持った、アンデット族のモンスター達であった。
…それはスズシ・ローナの纏う危険な雰囲気にマッチした、継ぎ接ぎだらけのゾンビたち。
『ゾンビ』と言う名で括られてはいても、特定のカテゴリーに属しているわけではないソレら。しかしこのアンデット族に共通している再生能力は、他のどの種族よりも優れているとさえ言われており…
そう、他の種族よりも圧倒的なる、その再生能力をフルに活かし。
瞬間的に４体ものモンスターを揃えるその速度は、並大抵の者ではついていくことすらままならず…

「デュエルは墓地…墓地のカードの多い方が勝つ。」
「…随分と極端な思想だが…なるほど、アンデット族らしく大した展開力だ。」
「ふふ…ふふふ…かわいい…ゾンビかわいい…」
「…」
「行くよ…レベル４の【ゴブリンゾンビ】にレベル２の【ゾンビキャリア】チューニング。シンクロ召喚、レベル６、【蘇りし魔王　ハ・デ

ス】。」

―！

【蘇りし魔王　ハ・デス】レベル６
ＡＴＫ／２４５０　ＤＥＦ／　０

「墓地行った【ゴブリンゾンビ】の効果。デッキから【馬頭鬼】手札に。次は【ユニゾンビ】の効果発動。デッキから【馬頭鬼】墓地に送ってハ・デスのレベルを１上げる。もう一回【ユニゾンビ】の効果で、手札の【馬頭鬼】も墓地に送ってハ・デスのレベルをもう１つ上げる。次、今墓地に送った【馬頭鬼】の効果。【馬頭鬼】除外して、墓地から【ゴブリンゾンビ】蘇生。またレベル４の【ゴブリンゾンビ】に、レベル３の【ユニゾンビ】をチューニング。シンクロ召喚、レベル７、【真紅眼の不屍竜】。」

―！

【真紅眼の不屍竜】レベル７
ＡＴＫ／２４００→３６００　ＤＥＦ／２０００→３２００

淡々と、しかし確かな激しさを纏いて。
連続して現れるは、スズシ・ローナのシンクロモンスター達。
現れたのは、真紅の眼を持つ黒き竜の…その身朽ち果て、屍と成り果ててもなお飛翔する、怨嗟の炎にその身を焦がした一つの姿。
…まだ最初のターンのために、全てのプレイヤーに攻撃が許されていないとはいえ。

手札からの展開ではなく、墓地のカードをフル活用して展開を続ける彼女の動きは、まさに墓地がそのまま手札となったかのような流れる展開と言えるだろう。
彼女がその手を上げる度に揺れる、とても安全には見えない安全ピンがより一層彼女のアンデット族モンスター達の迫力を恐ろしいモノへと昇華させ続け…
彼女の纏う、危険な香りのするドレスと相まって。朽ちた者達の雄叫びは、どこまでもどこまでも恐怖を煽る。

「ヒィーアー！ロナロナ今日もノッてんねぇ！」
「墓地のカードは手札と一緒…墓地が多ければ…手札が多いのと一緒。墓地に行った【ゴブリンゾンビ】の効果で、デッキから【ユニゾンビ】を手札に加える。３枚目の【馬頭鬼】も除外して効果発動。墓地から【ゴブリンゾンビ】を守備表示で特殊召喚。【強欲で貪欲な壺】発動。デッキ１０枚除外して２枚ドロー…」
「フゥー！凄まじぃーねぇー！」
「ふふ…ふふふ…墓地の【アンデット・ストラグル】と【リターン・オブ・アンデット】の効果発動。除外されてる【馬頭鬼】２体をデッキに戻して、【アンデット・ストラグル】と【リターン・オブ・アンデット】を場にセット…１枚伏せてターンエンド。」

スズシ・ローナ　ＬＰ：４０００
手札：5→2枚
場：【蘇りし魔王　ハ・デス】
【真紅眼の不屍竜】
【ゾンビ・マスター】
【ゴブリンゾンビ】
伏せ：3枚

そうして…
ゴ・ギョウの合いの手に乗せて、始めから恐ろしいまでの速度を魅

せて。
先攻1ターン目から、凄まじいまでの展開を見せ付けつつも…
攻撃の許された次のターンへの余力を残しつつ、『七草』が一葉、スズシ・ローナは今、静かにそのターンを終え…

「さてさてさーて！お次はチャン僕のトゥァーン！」
「スタンバイフェイズに罠カード、【破壊指輪】発動。【ゴブリンゾンビ】を破壊。全員に１０００ダメージ。」
「ひょ？」

―
!!!

否…

終わっては、いない―

爆ぜる…

この場に居る、『全員』の足元が。
それはスズシ・ローナがたった今伏せたばかりの、ダメージを伴う罠カードがいきなり爆発したことによる衝撃であり…

スズシ・ローナ　ＬＰ：４０００→３０００
ゴ・ギョウ　ＬＰ：４０００→３０００
砺波　ＬＰ：４０００→３０００

その、いきなり爆発した爆炎の衝撃と熱風、そして地面から放たれた石つぶてと土煙が塊となりて。

この場にいる『全員』に突如として襲い掛かり、全員のＬＰを実に１０００も削り取ってしまったではないか。

「がっ!?…ッ…ば、爆発が…」

そして爆発の衝撃と、突如襲い掛かった熱波と石つぶての飛来を受けて。思わず、苦しげに声を漏らしてしまった【白鯨】、砺波　浜臣。

…しかし、ソレも当然か。

何せ、既に砺波は気付いていたが、この島で行われるデュエルは全て実体化しているのだ。

つまり今の１０００ダメージを伴う爆発は、ソリッド・ヴィジョンによる映像ではなく現実に爆炎を伴ってデュエリストを襲ったということ。

その実際に巻き起こった爆発の凄まじさは、始めからそこに『地雷』が埋まっていたが如き驚きと共に…

たかだか１０００のダメージとは言え、少々歳を感じてきた砺波を後ずさりさせるにはあまりに充分過ぎた威力となりて、意識の外から砺波の身体を襲ったのか。

また、砺波がそれ以上に衝撃を受けたのは…

「ぐっ…お、お互いにダメージを受けるカードだと?…なぜだ、相手にのみダメージを与える方が簡単だというのに…」

そう、それはスズシ・ローナが発動したのが、相手だけではなく『自分』までもがダメージを受けてしまう罠カードだったという事に対して。

…一般的にバーンカードと言うのは、相手にのみダメージを与えるカードが主流。

ソレ故、自分もダメージを負ってしまうカードと言うのは、普通ならばあまり使われないと言うのに。

また、いくら自分の【ゴブリンゾンビ】を破壊したかったのだとし

ても、『極』の頂に到った者であればその方法はもっと簡単かつ安全に遂行できるはずなのだから…
こんな、『極』の頂に到った者が使うようなカードではない効果を直に受けてしまった衝撃は…
実体化した爆炎の凄まじさと相まって、相当の衝撃を砺波に与えたに違いなく…

しかし…

「あぁ…いい…これ、ゾクゾクする…一緒のダメージ…一緒の苦しみ…おんなじ痛みを受けてるときが…生きてるって感じする…」
「…」
「ッ…けひゃひゃ、相変わらずキメちゃってんねぇロナロナ。…つかつかつーか、チャン僕も喰らってんだけど…痛ってぇ…」
「みんな…一緒の傷…ふふ…ふふふ…」
「…わーお、もうトリップキメちゃってんよ…」

…返ってきたその答えは、砺波の想定のあまりに外。
そんな刹那に幾重にも巡らせた鯨の戦術と思考の網の、そのどれにも引っかからぬ『その答え』を本能のみで漏らしたスズシ・ローナに対し…
砺波も思わず、その言葉を詰まらせてしまったとしても、それはある意味当然といえば当然か。
…砺波とて思うまい。まさか『極』の頂に到っている者が、戦術ではなく性癖に任せた突貫を貫いてくるなど。
爆発の衝撃とその衝撃。巻き起こった二重の衝撃は、今まさに元シンクロ王者【白鯨】の思考に乱れを生じさせていて。

「【ゴブリンゾンビ】効果。【グローアップ・ブルーム】を手札に。」

しかし、そんな砺波を意に介さず。

スズシ・ローナは、そのゴテゴテしかドレスからぶら下がる安全ではない安全ピンを揺らしつつ…

淡々と、己の愛でるゾンビの効果の発動を宣言し、デッキからカードを手札に加えるのみ。

…まぁ、単なる趣味だけでは終わらせず、その後のケアまで抜かり無く繋げて来る辺りは流石は有象無象とは一線を画す実力の持ち主と言うことではあるのだが。

それでも、間髪いれずの衝撃と、予想外すぎたその答えに…砺波が受けた衝撃は、実際の数値以上の爆風となりて襲いかかってきたことに違いなく。

ともかく…

「フゥー…ま、別にいいんだけどもだっけぇーどぅー。それにロナロナには悪いけど？チャン僕ってばメンヘラ女のヘビー＆ウエイトな趣味に付き合ってやる気は無し無しのナッシングなのよね！とりま、さっさと終わらせちゃいまー！チャン僕は５枚のカードを伏せて？そう！トゥァーン、エーン！」

「何!?」

ゴ・ギョウ　ＬＰ：４０００→３０００

手札：５→０

場：無し

伏せ：５枚

先ほどの、スズシ・ローナの激しい展開とは打って変わって。

ドローの許されていない自分の手札を、５枚全て伏せてしまい…

何の迷いも無く、そのターンを終えた『七草』が一葉、ゴ・ギョウ。

「…手札を全て伏せただと？…何を狙って…」
「けひゃひゃひゃひゃ！チャン僕のモットーは？そう！チャラく、うるさく、いやらしく！ホントごめんだけど？いやいやいやいやいやがらせ、させてもらいまー！」

…一体、何を思っての戦術なのか。
このデュエルが高速化した時代においては、モンスターによる展開を何もせずにターンを終えることはかなり珍しい展開と言えるというのに。
そう、よほどの手札事故であったとしても、壁モンスターなり何なりの必要最低限の展開をするのがある程度の力を持ったデュエリストのセオリーであり…
…ましてや今ターンを終えたのは、裏社会でその名を轟かせているデュエル傭兵、『七草』が一葉。
そんな説明不要の実力者が、手札事故など起こすはずは絶対になく…
つまり元シンクロ王者【白鯨】を前に、何の迷いも恐れも無く手札を全て伏せたゴ・ギョウのソレは、あまりに見え透いた『罠』の束ということでもあるのだが…

「…まぁいい。私のターー…」
「へいへいへーい！このスタンバイフェーイズ！リバースカードオープンプーン！速攻魔法、【アーティファクト・ムーブメント】と罠カード、【アーティファクトの神智】はっつどぅー！」

―！

だからこそ…

ゴ・ギョウもまた、即座に動き始める―
砺波が警戒していた通りに、ゴ・ギョウはターンが移り変わってすぐ、スズシ・ローナと同じく即座に伏せたカードの発動を宣言して。

降り注ぐ…

遥か空から、数多の巨大なる武具たちの幻影が―
そして、もう一つ…
ゴ・ギョウの場に現れた、古代の叡智の歯車より巻き上がりし竜巻が。先ほどゴ・ギョウが自分で伏せた、伏せカードの一枚を破壊していくではないか。

「アーティファクトだと!?まさか…」
「そのとりとーり!まずは神智の効果で?デッキから【アーティファクト―カドケウス】を特殊召喚しちゃいまー!そしてチャン僕が破壊した伏せカードは?そう!モンスターカードの【アーティファクト―デスサイズ】!デスサイズを破壊しちゃってぇ、デッキから【アーティファクト―モラルタ】をセッティング&ゲッティング!そんでもってデスサイズも特殊しょーくぁーん!」

―!

【アーティファクト―カドケウス】レベル５
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／２４００
【アーティファクト・デスサイズ】レベル５
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／　９００

ゴ・ギョウの場に降り注いだ、巨大なる幻影の武具の中から。実体を持って飛び出したのは、人の影に持ち上げられた巨大なる杖と巨大なる鎌。

『アーティファクト』―

それは古代の叡智によって生み出された、人知を超えた幻の武具の総称。

古の戦いの記憶から、幻影の人影に自らを振るわせ…

その形の多様さから、個々の武具にそれぞれ特別な力を宿していると言われる、まさに神の知識によって作られた、人に与えられし特別な武器であって。

「けひゃひゃひゃひゃ！デスサイズの効果でこのターン、【白鯨】はＥｘデッキからモンスターを？そう！シンクロ召喚できむぁすぇーん！そんでもってカドケウスの効果で１枚ドロドロー！」

「Ｅｘデッキを封じる効果か…」

「そのとりとーり！デュエルってのは？そう！邪魔してナンボ！ちょっかい＆妨害が大事大事ちょー大事ってのがチャン僕のポリスィーてなわけで！ま、悪く思わないでちょ？」

そして…

元シンクロ王者【白鯨】に対し、なんの悪びれもなく得意げにそう告げてくる『七草』が一葉、ゴ・ギョウ。

…『Ｅｘデッキ至上主義』のこの時代において、Ｅｘデッキを封じるというのは得てして外道の行う禁忌とされる傾向がある。

まぁ、別にソレもルールの範疇であるのだから、別段ソレが禁止行為であるというわけではないのだが…

しかし、どこか暗黙の了解として、この世界に生きる人々の中にはＥｘデッキへの干渉を嫌う傾向があるコトもまた紛れも無い事実なのだ。

…ましてや、砺波は元とは言え一度シンクロ召喚の頂点に立った誇り高き男。

『依頼主』から与えられていた、シンクロ召喚に異様なまでの執着を見せるという【白鯨】の『前情報』に乗っ取って…
あえて【白鯨】が最も嫌がるであろう対策を施し、砺波の精神を揺さぶりにかかっている様子で…

（…ってかまっ、これこれくらいやんないと？コッチがヤババババーイなんだもんねぇ…【白鯨】…ひゃひゃ、マジモンのバケモンじゃねーか。）

しかし…
今までのラフすぎる言動とは裏腹に。
ゴ・ギョウの心の内では、全く正反対の考えと共にデュエルが始まってからずっと…いや、下手をすればデュエルが始まる前から、ずっと消えぬ焦りを感じている様子であり…
…しかし、それもある意味で当然か。
『七草』が一葉、ゴ・ギョウ。
ふざけた言動と、煩い言葉を羅列してはいても。裏社会で名を馳せた歴戦の者らしく、その嗅覚は人並み以上。
…そう、砺波が『七草』の気配を感じ取ったように、彼もまた感じ取っているのだ。
『極』の頂に位置している力を持ったデュエル傭兵『七草』を、２人も同時に相手にしているというのに…
深海の水圧の様に、どんどんと深く、重く、そして暗くなっていく…

【白鯨】の、恐ろしさを―

「さてさてさーて？どうするんでしょうねー【白鯨】様はー！シンクロ召喚封じられ？【白鯨】なんて出っせますぇーん！」

「…墓地、妨害…ふむ、また随分と極端な思考の者達だが…」

また、ゴ・ギョウの焦りを肯定するかのように。
シンクロ召喚を封じられたというのにも関わらず、全く焦りも怒りも感じていない様子の元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣。
…それは外敵のいない楽園にて泳いでいる魚達よりも、なお穏やかに浮かび上がる平常なりし面持ち。
『極』の頂に到っている者達を2人も相手にしていてもなお、ここまで砺波を冷静にさせるモノは一体何なのか。
…数々の修羅場を潜ってきた『七草』達にすら、焦りを生じさせる砺波のこの落ち着きよう。
それは生きるか死ぬかの舞台で生きぬいてきた『七草』にとっては、とある感情を浮かび上がらせるには充分過ぎる雰囲気となりて…この一帯の空気を、更に冷たく重く変え始めるのか。

そのまま…

これまでの砺波では、絶対に口にしないであろう言葉と共に―

「実に面白い。このような思想を持って『極』の頂に至った強者が、この世界にまだ居たとは。」

こんな危機的状況だと言うのに、それでもどこか強者との戦いに楽しさを感じている砺波の心は…
【王者】であった時のような堅苦しさから、完全に解放された昔の彼の心意のようではないか。
…いや、昔のような負けん気や、無茶を楽しむ無謀さと無鉄砲さなど今の砺波にはない。
あるのは、『極』の頂に達した者達を2人同時に相手にしていても全

くブレない、恐ろしいまでの、【化物】の余裕だけであり…
何せ『極』の頂に達した者を、２人同時に相手にすることなど人間には不可能なこと。そんな芸当など、人間を超えたモノにしか出来ぬ…

そう、それは文字通りの【化物】―

「いいだろう、そちらがその気ならば見せてやる！シンクロ王者ではない、今の【白鯨】のデュエルを！【深海のディーヴァ】を召喚！」

―！

【深海のディーヴァ】レベル２
ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　４００

現れたのは、深海にて響くアリアの歌い手。
それは【白鯨】たる砺波のデュエルを、飾るに相応しい始まりのモンスターであり…

しかし…今の砺波は、気付いているのだろうか。

そう、今この時も島の中では、学生達が襲われ続けているというのに…
デュエルが始まってから切り替わった、純粋にこのデュエルに楽しさを感じているという…
その、『異常』なまでのデュエルへの執着を―

「ひょ？ちょちょちょー！チューナーモンスター出したって無駄無駄なんですけどけどー！」
「フッ、シンクロ召喚するだけが能ではない。ディーヴァの効果発動！デッキから【海皇子　ネプトアビス】を特殊召喚！そしてネプトア

ビスのモンスター効果！デッキの【海皇の竜騎隊】をコストに、デッキから【海皇の狙撃兵】を手札に加える！そして竜騎隊の効果で、更にデッキから【水精鱗―メガロアビス】を手札に！【強欲で貪欲な壺】も発動！デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！そして今手札に加えたメガロアビスの効果発動！手札の【海皇の竜騎隊】と【海皇の狙撃兵】をコストに、【水精鱗―メガロアビス】を特殊召喚！」

―!!

【海皇子　ネプトアビス】レベル１
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／　０
【水精鱗―メガロビス】レベル７
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１９００

流れるような砺波の展開、流麗なりし海流の転回。
シンクロ召喚を封じられているというのにも関わらず、ソレを全く意に介していないかのような砺波のデュエルの切り替えしは…
かつてシンクロ使いの頂点と称えられた、元シンクロ王者【白鯨】とは思えぬほどに淀みのないメインデッキ回しと言えるだろうか。
そう、今の砺波のデッキは【海皇】というカテゴリーを中心に据えてはいるものの、その他にも水属性の多種多様なモンスター達によって構成されているのだ。
それは無限に広がる遥かな海の、眷属達による終わらぬ展開。
かつての自分を超え、さらには【王者】の領域をも超えた今の砺波の力によって…
海の眷属達の展開は、更にその凄まじさを増し続けるのみであり…

「コストとして墓地に送られた、２体の海皇モンスターの効果発動！まずは狙撃兵の効果で、ゴ・ギョウの右端の伏せカードを破壊だ！」
「ッ!?おいおいマジマージかよ！そんなら破壊される前に速攻魔法、【サイクロン】をはっつどぅ！チャン僕の伏せカードを１枚破壊する

よん！」
「だが竜騎隊の効果でデッキから【氷霊神ムーラングレイス】を手札に！更に特殊召喚成功時に、メガロアビスの効果でデッキから【アビスフィアー】を手札に加える！」
「ひゃひゃひゃ！マージで止っまんねぇなぁ！けど、今破壊した【アーティファクト―モラルタ】の効果もはつどぅーしちゃいまー！モラルタを特殊召喚しちゃって？カドケウスの効果で1枚ドローした後にメガロアビスを破壊しちゃい…」
「よし、メガロアビスが破壊されたこの瞬間！私は手札より、【氷天禍チルブレイン】を特殊召喚する！出でよ！」
「ひょ？」

―！

【氷天禍チルブレイン】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／　２００

そして…
ゴ・ギョウの『アーティファクト』モンスターが伏せられた、大量のリバースカードの束の中から。
破壊しても全く痛手にならない1枚を選び取り、何も恐れることもなく伏せカードの破壊を宣言した【白鯨】、砺波　浜臣。
また、ソレに即座に反応し…
ゴ・ギョウもまた、伏せていた【サイクロン】を破壊される前に発動して躱しにかかるものの、しかし大型モンスターの破壊すらも砺波にとっては規定事項だったかのように。
…連鎖するようにして、砺波の場には遥か空にて霰を司る、冷たい氷の麗人たる精霊が現れたではないか―
「そして特殊召喚されたチルブレインのモンスター効果！相手の手札を1枚、ランダムに墓地に送る！対象はスズシ・ローナ、貴様だ！」

「ッ!?」

止まらない―

一つ一つの展開が、全て次なる行動へと繋がりつつ。

続いては、『墓地』を多用する『七草』が一葉、スズシ・ローナの手札をまさかの墓地へと送る宣言を砺波は行って―

―3枚の手札の中より選ばれ、凍結されしは魔法カードの【生者の書―禁断の呪術】。

しかし、先ほど彼女がデッキから手札に加えていた情報から、彼女の手札は1枚の不明なカードの他には墓地にて真価を発揮する【グローアップ・ブルーム】と、墓地に送られてもなんら痛手にならない【ユニゾンビ】であったと言うのに…

…ランダムとは言え、ソレらを綺麗に躱しつつ。

スズシ・ローナの次なる展開札を打ち抜いた、その鋭利なる氷柱の如き貫きは、本当にソレがランダムに選ばれたのかと疑いたくなるほどの、凄まじいまでの正確性を持っていたではないか。

ソレ故、手札を打ち抜かれたスズシ・ローナにとっても。

今の砺波からの氷撃は、痛手と共に相当な驚きであったに違いなく…

「…【グローアップ・ブルーム】も、【ユニゾンビ】もあったのに…運の良い…」

「フッ、運で片付けている内はまだまだだ。続けて私は【深海のディーヴァ】と【海皇子　ネプトアビス】をリリース!手札より、【城塞クジラ】を特殊召喚!」

―!

【城塞クジラ】レベル7

ＡＴＫ／２３５０　ＤＥＦ／２１５０

けれども、まだ終わらない。

続けて砺波が呼び出したのは、【白鯨】と呼ばれた砺波の『名』とは体色が正反対と思える程に対照的なる…

漆黒の体色に身を包まれた、一体の巨大なる鯨のモンスターであった。

―その背に砲台を、その体内に拠点を。

かつて要塞として、七つの海に君臨していたのではないかとさえ思えるその体躯で…２人がかりで立ち向かってくる『七草』たちへと、その砲塔で狙いを定める。

「鯨…【白鯨】じゃない…黒い鯨…」

「ひゃひゃ…マジマジマージか…シンクロ止めたのに止まんないとか、これもうバグ＆エラーだーよね…」

「特殊召喚成功時に【城塞クジラ】の効果発動！デッキから【潜海奇襲】を場にセット！更にコストとしてリリースされたネプトアビスの効果も発動！墓地より【海皇の竜騎隊】を特殊召喚し…そして今のこの時！私の墓地の水属性モンスターは５体となった！このカードは、墓地の水属性モンスターが５体の場合にのみ特殊召喚が出来る！」

「ふぇ!?」

そして…

―まだ、終わるわけがない。

まるで、先のゴ・ギョウの行った、モラルタによるモンスター破壊すらも規定事項だったかのように。

…砺波の墓地には、いつの間にか『５体』ちょうどの水属性モンスターがその魂を揺らめかせているではないか。
それはいつもの【白鯨】による、シンクロ召喚を交えた展開による調整などでは断じてない。
相手の妨害すらもルートに含めた、始めからこの展開が決まっていたかのようなその雰囲気。
そう、『極』の頂よりも更に高い―いや、更に『深い』ところから、当然のようにして墓地に揃った５体の水属性モンスター達の魂に導かれる様に…

それは―

「出でよ！【氷霊神ムーラングレイス】！」

―！

【氷霊神ムーラングレイス】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

現れしは、世界を凍てつかせる氷の霊神。
元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣にのみ所持と使用を許された、一説には『神』にも等しいとさえ言われるモンスター。
この世界においては、『神』のカードに通ずる特別な存在とさえ言われている…『現存』しているカードの中では、まさに規格外の力を誇るモンスターであって。

「これが霊神…【白鯨】の持つ神…」
「ひゃはは…神じゃないけど、神にいっちゃん近いモンスターだっけか？…セリが欲しがってたよなぁ…」

「何をゴチャゴチャ言っている！特殊召喚に成功したムーランングレイスのモンスター効果！相手の手札をランダムに2枚捨てさせる！次はゴ・ギョウ、貴様が手札を捨てろ！」
「ほ!?」
「まだだ、まだ終わらん！魔法カード、【サルベージ】発動！墓地より【深海のディーヴァ】と【海皇子　ネプトアビス】を手札に戻し、そのまま【強欲なウツボ】を発動！手札の水属性モンスター2体をデッキに戻し3枚ドロー！よし、【海竜神の激昂】を発動！デッキから【激流葬】を手札に加える！」

まだ…
まだ、止まらない―
そう、シンクロ召喚を封じたのに、元シンクロ王者のデュエルが。
一体、砺波の展開に終わりはあるのか。
普通、この『Ｅｘデッキ至上主義時代』に生きる人間であったならば、Ｅｘデッキを封じられれば手が止まるか、多少なりとも展開に手間を取られるはずだというのに…
…それでも、全く怯んだ様子もなく。
怒涛の展開を続ける砺波のデュエルには、迷いも怒りも憤りも何もかもが些細なことなのだと言わんばかりの流れとなりて。どこまでもどこまでも激しい展開となりて、有利な立ち位置であるはずの『七草』たちを襲おうとしているではないか。

そして…見える―
『七草』たちの目にも、はっきりと。
そう、砺波の持つ、深海の如き深いオーラの先に…『七草』たちがまだ見ぬ、もっと恐れ多いモノが…
それは深き海の暗き底の、更にそのまた向こうから―

腹を空かせて『餌』を見ている…

文字通りの、【化物】の目のようなモノ―

「ッ!?…フゥー…マジマジマージか…シンクロ召喚止めたら雑魚だって言ったのだーれだよ。ガセ＆ウソ掴ませやがってあの屑…」

「…ふふ…ふふふ…【白鯨】、危険…Ｅｘデッキ使えないのに、恐い…ギョウさん、【白鯨】にシンクロ召喚させちゃ、ダメ…シンクロ許したら…私達、死ぬ…」

「…それなー…」

そして、ここへきて『七草』たちも気付いてしまった。

今の砺波　浜臣が、元シンクロ王者【白鯨】と呼ばれていた彼とは、その実力も存在も何もかもがかけ離れた規格外の存在であると言う事を。

…何せ砺波が、自分達と同じく『極』の頂に位置しているだけの存在であったならば、ここまでの恐怖心をデュエル傭兵である自分達が感じるはずもないのだから。

有象無象の凡才とは違い、歴戦の経験からソレを『七草』たちも感じ取ったのだろう。長きに亘り裏社会で生きてきた経験からか、一般人よりも相当に優れた危機察知能力を有しているという自信が自分達にはあるからこそ…

今の【白鯨】から感じる雰囲気は、実体化しているこのデュエルの重圧と相まって、歴戦のデュエル傭兵である『七草』たちにも、『死』の恐怖をこれ以上無くいらに与えており…

…そう、『不幸』にも、『極』の頂に位置している彼らには見えてしまっているのだ。

元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣の持つ、【化物】の如きオーラ

の向こうに巣食うモノの…そのあまりの恐ろしさと、危うさが。

それは人間に見える領域の、更に更に遠い向こう―

そこから覗き込んできているのは、見間違いようのない『目』。

およそ、『人』程度では抗うことなど許されないであろう、人間を超えた圧倒的存在。

その、文字通りの【化物】が、『七草』たる自分達すらも『餌』として見ているという…

それは、まさしく『恐怖』そのモノ。

「フィールド魔法、【伝説の都　アトランティス】を発動。カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

砺波　ＬＰ：３０００

手札：5→1枚

場：【氷天禍チルブレイン】

【城塞クジラ】

【氷霊神ムーラングレイス】

【海皇の竜騎隊】

伏せ：3枚

フィールド：【伝説の都　アトランティス】（『海』）

『極』の頂に到った者達へと、さらに異次元からの恐怖を与えて。

今、圧倒的余裕を醸し出しながらもそのターンを終えた、【白鯨】砺波　浜臣。

「さて、少しは楽しませてもらえるのでしょうね。…『七草』…『極』の頂に到った者を、2人も同時に相手をする事など初めてだ。今の私

の力を確かめるには、お前たちは丁度いい相手といえるだろう。」
「けひゃひゃ…と、とんでもねーバケモンだなマージで…」

…当初の予定とは違う。
こうなってしまっては、よもや『七草』たちにとっても元シンクロ王者【白鯨】とのデュエルは想定外かつ規格外。
【白鯨】と呼ばれた砺波　浜臣が、これほどまでの【化物】であったことは彼らにとっても相当に想定外なことだったのだろう。
当初、【白鯨】と戦うという仕事に人員が『2人』も当てられた時には、彼らも依頼主である『捻じれた男』に不満を言ったのだが…しかし、今この時になってから彼らもその理由が痛いほど身に染みて理解できたのか。
演技ではない、本物の修羅場にぶち当たったかののような冷や汗を垂らしているゴ・ギョウと…
数々の修羅場を潜り抜け、生き残ってきたはずのスズシ・ローナが、まだ1ターン目だと言うのにこれ程までのプレッシャーを与えられていることがその証拠。
【白鯨】…歴代最強のシンクロ王者と称えられていたその輝かしい功績は伊達ではない。
その表の決闘界の【王者】の名前が、看板や誇張などでは断じて無く…紛れも無い『本物』であると言う事を、対峙して始めて理解した様子の『七草』の二葉。
まぁ、この【決島】で砺波に『何』があったのかを知らぬ『七草』達からすれば、デュエル傭兵として『極』の頂に到っているはずの自分達の力を疑いたくなっていたとしても、それはある意味で仕方のないことなのだが…

しかし…

「けどまっ、楽しんでるトコ悪いんだけども?【白鯨】様もさー、悠長にチャン僕たちの相手してていいのかなぁ?」

「何？」
「こっちの仕事、【白鯨】と戦うこと…『神』の少女、他のヤツの仕事…」
「足止めか…」

それでも、自分達が雇われたからには仕事を遂行する『傭兵』だという、その自覚とプライドからか。
身震いするような【白鯨】の、【化物】のようなオーラを間近で中てられていても…
退く気などさらさら無いままの態度で、なおも【白鯨】の邪魔をする気を隠す気もなく。逃げ出す事などはせずに、デュエルディスクを構え続ける『七草』たち。
…それは決して褒められるような行為ではない、悪人ゆえの開き直り。
そう、裏社会で生きてきた、デュエル傭兵『七草』だからこそ。こんな汚い手を取る事にすら、なんの躊躇も戸惑いもないのだと言わんばかりの態度で…

…別に、明かしたところで何の支障も無い。

何せ自分達が【白鯨】と戦いを始めた段階で、既に『塔』の中には別の者が忍び込んでいる手筈となっているのだ。
『塔』の入り口で陣取っていた【白鯨】へと、わざと見せ付けるように戦意を駄々漏れにして現れたのも…全ては、こっそりと忍び込ませる者の気配を、感知させないため。
…だからこそ、自分達の作戦を【白鯨】へと晒したところで、既に『事』は進んでいる。
もしもここで【白鯨】がデュエルを放棄して、一目散に『神』のカードの持ち主の元へと駆けたとしても。既に、内部に送り込んだ刺客が、『神』のカードの持ち主を攫っているであろう…だから、自分達は自分達の仕事を遂行せんと、ただ【白鯨】の前に立ち塞がるのみなの

だ…と。

けれども…

少しは焦りを感じるであろう、衝撃的な事実を突きつけられたというのに。

「なるほど。…まぁ、そうだとは思っていましたが。」

敵側の思惑を、真正面から突きつけられてもなお…

砺波は、どこまでも落ち着いたまま…

「心配ない。高天ヶ原さんには護衛がついている…素直じゃない、『強運』の持ち主がな。」

―…

激闘が行われた、『塔』の最上階に位置する天空闘技場…

そこから、階下にいくつか下りた…吹き抜けのある『中層階』。
その、『神』のカードの持ち主である少女以外には、誰もいないはずの天空の『塔』の内部に―

ペタリ、ペタリ…

という、静かかつ湿った足音が『塔』内部の階段を降りていた。
エレベーターなど無い『塔』の内部を、明らかに『忍び込んだ』と思えるような足取りで。少々慎重になっていることが容易に伺える、爬虫類のようなその足音。
その足音の主は、細身だが長身の、全身を真っ黒な服に包んだ長髪の男であり…
黒の長袖、黒の長ズボン。首元から除く、全身に走っている様な『鱗』のような刺青をさらしながら…
脂ぎった黒い髪を、顔を隠すほどに伸ばし。口元だけを覗かせて、不気味な笑みを浮かべていて。
…きっと、この男は『塔』に一つしかない正面入り口ではなく、もっと別の場所から忍び込んだのだろう。
そう、【白鯨】が守っている、この『塔』唯一の正面入り口…それ以外に『塔』の内部に侵入できる場所など、この『塔』には後ひとつしか存在してはおらず…
それすなわち、この男は紛れも無くこの男は最上階の天空闘技場から『塔』の内部に忍び込んで階段を降りてきたということ。
どうやって空を突き抜ける高さを誇る『塔』の最上階に外部から辿り着いたのかは知らないが、『塔』の内部を『上』から降りてきたということは正真正銘この男は『塔』の上から来たに違いない。

ペタリ、ペタリ…

その、まるで床に張り付くように足音は…

靴を履いているというのに、まるで素足のような不気味さを醸し出しながら。どこか不気味さを感じさせる足取りとなりて、『塔』の内部を目的の場所へと向かって歩いている。

…長い手をぶら下げながら、不気味に揺れる長髪と両碗。

長身だと言うのに、骨が無いのでは無いかと錯覚するほどに…異常なまでに曲げられた猫背が、どこまでもその身の不気味さ演じており…

また、口元しか見えないほどに伸ばされた脂ぎった長髪は、なんともその男の不気味さを必要以上に増幅しているではないか。

…一体、この黒ずくめの男はどこへと向かっているのか。

まるで『塔』の内部を予め知っているかのようなその足取りは、全く迷い無くこの長身の男を目的の場所へと向かわせていて…

また、外では何やら異様なまでに重々しい鋭すぎる2つのオーラと、それを全くの異次元から弄ぶように眺めている異質すぎるオーラがぶつかり合って…いや、一方的に『別次元』のオーラが圧倒してはいるものの…

その、頂上的なる2つのオーラと、超常すぎる1つのオーラに隠れるようにして。

この長身の黒ずくめは、その歩みを進めるのみであり…

そして…

ペタリ、ペタリと。

足音の主は、その爬虫類のような張り付く足音を、『塔』の内部の中層階に差し掛かった辺りで止めたかと思うと。

『塔』の内部…外から見るより圧倒的に広さを感じる、どこか迷路染みた『塔』の中の一つの通路を確認し…

そのまま、爬虫類のような男は迷う事無く『そこ』へと向かって歩みを再開し始めたではないか。

「ひ、ひひ…」

零れる不気味な男の笑い。蛇の『うねり』のように蠢く不気味な指。
それは自らに指示された仕事を、こうも簡単に遂行できるということに限りない悦を感じているのだろうか。
不気味すぎるその笑みは、彼の脂ぎった長髪の黒さと相まって…
どこまでも不気味な雰囲気を、『塔』の中へと零していて。

そのまま…

一歩、二歩…
忍び込んだ男が、目的であろう一つの通路へと指しかかった…

その時だった―

「Ｈｅｙ、レディのお迎えにしちゃ、随分とムサい奴じゃねぇか。」
「…ひひ？」

差し掛かった通路の奥から、不気味の男へと向かって投げかけられたのは一人の男の陽気な声。
不気味な男の目的地であったであろう、『特別医療室』の扉の前にもたれかかるようにして…
腕を組み、扉を塞ぎ。まるで『誰か』がここに現れることを、予め知っていてかのような口ぶりで声を放ったのは他でも無い…

決闘学園デュエリア校３年、デュエルランキング『第１位』…

―『ギャンブラー』、リョウ・サエグサ。

「な、ななんだ、ガガ、ガキか、ひひ…」
「…首に見える鱗のタトゥー…テメェ、『毒尾』だな？全身に鱗のタトゥー彫るなんざシュミが悪ぃ。」
「ぼ、ぼぼ僕を知ってるの…ひひ…」
「まぁな。ちと裏社会に詳しいツレが居るもんでよ…思った通りだぜ。外でドンパチやってる隙に、こそこそとレディを攫いに来るんじゃねーかってな。」
「ひひ…かか、勘のいいガキも居るんだ、ね。…ひ、ひひ…」

突如現れた敵の正体を、一目見ただけで見抜いたリョウ・サエグサ。

『毒尾』…

それは一昔前に、表の決闘界でもその名が知られていた決闘界の元トップランカー。
今の学生達が生まれる以前に、とある事件を起こし決闘界を追放され…表舞台から完全消え去ったはずの、かつての決闘界の猛者の1人。
しかし、以前まで表社会で知られていた彼は『毒尾』とは呼ばれていても、もっと清潔感に溢れた男であったというのに…
…裏社会に堕ちて、精神までも汚れたのか。
まぁ、過去の『毒尾』の姿など、見た事もなければ見る気もないリョウからすれば、この場に現れたのがかつてのプロデュエリストであったとしても、ソレは全くもってどうでもいいことではあるのだが。

ともかく…

「悪ぃが、オヤスミ中のレディを起こすのは俺のポリシーに反するんでな。レディの安眠の為に、テメェにはここで退場してもらうとするぜ。」

「…ひひ？」

つい先ほどの、『ゆっくり休ませてもらう』と言っていた彼の言動とは裏腹に。

紛う事なき戦意を纏い、デュエルディスクを構えるリョウ・サエグサ。

…それはまるで、始めからこうなる事がわかりきっていたかのような立ち振る舞い。

そう、鷹矢に詰め寄られても、崩そうとしなかったあの態度からは考えられない覇気と共に…

目の前に現れた敵が、かつて決闘界で強者に数えられていた元トップランカーであっても。そして裏社会に堕ちてもなおその力を失ってはいないであろう、恐るべき古豪であったとしても。

それでも、『最初から』こうするつもりだったのだと言わんばかりの戦意を持って、敵の前へと立ち塞がるのか。

「しょしょ、正気かい？ひひっ、ぼぼ僕を『毒尾』って知ってて挑んでくるなんて…ひひ、ひひひひひ…命知らずだ、ね…」

「正気？…ＨＡ！ンなモンは生まれた時に、Ｍｏｔｈｅｒの腹に置いてきちまったに決まってんだろうＧＡ！あいにく、根っからのギャンブル狂いでな…レディの安眠のためなら、俺の命なんざただのチップＳＡ！」

「ひひ…そそ、そんなに大事な子ってわわ、わけか…ひひ…そこに居る、子…」

「いいや？会ったこともなけりゃ喋ったこともねぇ。オマケに、顔も直接見たことすらねぇ。」

「…ひひ？じゃ、じゃあなんでそんなに…」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！ンなこと決まってんだろ！この世の全てのレディは、全員俺の愛すべき恋人！例えまだ見ぬレディでも…この世の全てのレディの為なら、俺はどんな事でも命を賭けて戦うだけＤＡ！」

「…ひひ…意味、わからな、い。」

それは男の曲げぬプライド。自らが決めた誇りと信念。
例え、その女好きが行き過ぎて周囲に『変態』と呼ばれていても…
それでも彼は己を曲げず、ただただ自分の信念を貫く為に自ら進んで女性の盾となろうというのか。

…そう、彼にとっては、女性の命は何よりも重いモノ。

例えソレが、つい先ほど初めて顔を知った少女であっても…
今ここに『女』の危機がせまっているのならば、怯むこともなくただただリョウは立ち塞がるだけなのだから。

そして…

「…きき君、い、いい度胸してるね…ひひ、う、裏決闘界向きだよ…」
「野郎に褒められても嬉しくねーよ！…行くＺＥ！」

ルキの眠っている医療室の前で、ルキを攫いにきたであろうこんなにも不気味な敵を前にしてもなお。
表で始まったであろう天上の戦いの、その裏に隠されるようにして…己の戦うべき相手へと、すぐさまデュエルディスクを構えるデュエリアの『ギャンブラー』。
また、それに応じるように…『毒尾』と呼ばれた男もまた、ゆっくりとデュエルディスクを構え始め…

…こんな、誰も見ていない場所で。

しかし、誰かがやらなくてはならない戦いが…

―デュエル!!

突如、始まる。

先攻は、『毒尾』。

「ひひ…ぼぼ、僕のターン…モンスターをセット、カ、カードを2枚伏せて、ターン、エンド…」

『毒尾』　ＬＰ：４０００
手札：5→2枚
場：セットモンスター1体
伏せ：2枚

のっそりと…
どこか苛立ちすら感じそうな、不気味でゆったりとした手付きで。
…必要最低限の所作のみを行い、静かにそのターンを終えた裏決闘界の猛者、『毒尾』。
それは、本当に過去の決闘界でその名が知られた、かつてのトップランカーなのかと疑いたくなるほどに少ないアクションではあったものの…

「俺のターン、ドロー!魔法カード、【カップ・オブ・エース】発動!」

―!

しかし、ソレを見て油断するほど、デュエリアの『ギャンブラー』は甘くなく。

…ターンを迎えてすぐ、いつもの様に手札から一枚の魔法カードを発動したデュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサ。
それはデュエリアの『ギャンブラー』の名に相応しい、己の運によって効果が変わるというギャンブル性が高いリスキーなドローカードであり…
聖なる器から飛び出したのは、『太陽』と『月』が刻印された運命を決める一枚のコインであって。

「へ、へぇ…ギャギャ、ギャンブルカード…」
「コレだけが取り柄なモンでな！さぁ、天に舞え、運命のコイン！」

いつだって、どんなデュエルだって。リョウ・サエグサという男のデュエルは、ギャンブルに始まりギャンブルに終わる。
ソレを体現しているかのような初っ端のギャンブルカードと、何の迷いもなくギャンブルに身を投じるリョウの声からは…
まるでリスクなど考えてもいないかのように、生き生きとした声が放たれるのみであり…
そのまま一枚の巨大なコインが宙を舞い始め…

出た、マークは―

「Ｙｅｓ、Ｌｕｃｋｙ！マークは太陽！コインは表！俺はデッキから２枚ドロー！続けて【予想ＧＵＹ】を発動！デッキから【クィーンズ・ナイト】を特殊召喚し、【キングス・ナイト】を通常召喚！その効果で、更にデッキから【ジャックス・ナイト】を特殊召喚するＺＥ！Ｃｏｍｅ　ｏｎ！絵札の三銃士！」

―!!!

【クィーンズ・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００

【キングス・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００
【ジャックス・ナイト】レベル５
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１０００

続けて。
一瞬でリョウの場に現れたのは、絵札の三銃士と呼ばれる３体の凛々しきナイト達であった。
…通常モンスターが２体に、それぞれのステータスもそれほど高くは無いとは言え。
３枚の絵札がその身を重ねる時に、真の力が発揮されるとされているソレらをこうも容易く場に揃えるその技量は…まさにデュエリア校のデュエルランキング第１位に相応しい、相当たるカード捌きと言えるだろうか。
そのまま、少しも加減などするつもりもなく。
デュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサは、更に続けてカードを掲げ…

「え、え、絵札の三銃士…ひひっ、ははは、早いね…」
「野郎に褒められても嬉しくねぇＮＡ！魔法カード【融合】発動！俺は場の、絵札の三銃士を融合するＺＥ！Ｉｔ☒ｓ　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ！Ｃｏｍｅ　ｏｎ、レベル９！【アルカナ　ナイトジョーカー】！」

―！

【アルカナ　ナイトジョーカー】レベル９
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／２５００

現れたのは、『天位』の称号を持つ究極の融合騎士。
天衣無縫の彼方から、騎士達の束ねられた力を剣に。
そして荘厳なりし魂を盾とした、その最高位のナイトが放つ有り余

る威光はまさに切り札の名に相応しいジョーカーと呼べるモンスターでありつつも…
召喚の難しい指定融合、しかも3体もの素材を指定している【アルカナ　ナイトジョーカー】を、こうも自在に呼び出す彼の実力は言わずもがな。
『運』だけではなく、素の実力の高さが伺えるその速攻の展開で…リョウはそのまま、即座に攻撃を命じるのみ。

「レディの安眠の為だ、速攻でカタをつける！Ｂａｔｔｌｅ！まずは【アルカナ　ナイトジョーカー】で、セットモンスターに攻撃！」

瞬撃―
元トップランカーであった『毒尾』に、少しも好きにさせるつもりもなく。
勢い良く天位の騎士に攻撃を命じたリョウの叫びが、『塔』の内部に反響して。
…初撃から、攻撃力３８００
ソレに耐え切れる守備力を持ったモンスターなど、ノーアクションで出すことなど出来はしない。
それにリバースカードによる何らかのアクションを起こそうとしても、【アルカナ　ナイトジョーカー】には相手の出方を見てから対処出来る力を備えているのだから…
そう簡単にはやられはしないという自負の元、今、天位の騎士の剣閃が『毒尾』のセットモンスターへと襲いかかり…

しかし…

「ひひ…セセ、セットモンスターは【レプティレス・ナージャ】。せ、戦闘では破壊されないよ…」

「ｗｈａｔ!?」

『毒尾』を守るセットモンスターへと、騎士の剣撃がぶつかった刹那。

【レプティレス・ナージャ】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

セットモンスターが反転したそこに現れたのは、下半身に蛇の身体を持った異形の姿の邪なる者であった―

…その攻守、たったの０。

けれども、小さき蛇のその異形は、圧倒的攻撃力を持った天位の騎士の攻撃で破壊されないばかりか。

何やらニヤリと笑いながら、攻撃を仕掛けてきた天位の騎士へと。その口から、勢い良く毒霧のようなモノを浴びせてしまったではないか。

「ひひひ…速攻がなな、何だっけぇ?ひひ…バトルフェイズが終わったら…アア、【アルカナ　ナイトジョーカー】のここ、攻撃力が、０になっちゃうよぉ?」

「Ｓｈｉｔ…」

『レプティレス』…

それは女の怨嗟が姿を変えた、異形なる蛇の女神達の総称―

…凄まじいまでの私怨、恐ろしいまでの執念。

攻撃力『０』にまつわる、珍しい効果を多用するその戦い方は…まるで、獲物を毒で嬲り殺す蛇の邪悪さそのモノとさえ言われており…

…迂闊だった。

相手の出方を伺うのならば、融合せずとも絵札の三銃士でまずは様子を見てから、必要に応じて次のターンに追撃を仕掛ける形をとって

も遅くは無かった。
しかし、チンタラしていると新たな敵がぞろぞろと後から現れるのではないかという焦りから…リョウはどうしても、速攻で決着を着けたかったのだろうか。
また、手札というギャンブルを挟むものの。擬似的な対象耐性を備えた天位の騎士は、生半可な事ではやられないという自信がリョウにはあった。
それに加え、手札にある追撃の為のカードの存在が、リョウの速攻への焦りをより強い者にしていたのだから…
攻撃を逸って、最高位の力を持った天位の騎士で速攻をしかけてしまったという後悔が、今更になって、『ギャンブラー』を襲っていて…

「ひひっ、ど、どうしようねぇ、どどどうしようねぇ？」
「チッ…けどまだ終わらねぇよ！速攻魔法【融合解除】発動！」
「ッ!?」

―!!!

【クィーンズ・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００
【キングス・ナイト】レベル４
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００
【ジャックス・ナイト】レベル５
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１０００

しかし、それでも。
少々目論見が外れたくらいで、止まる気は無いのだと言わんばかりに。
再びリョウの場に現れたのは、先ほどその身を重ねていた３体の絵札の三銃士―

いくら攻撃力が天位の騎士に届かないとは言え、いくら効果モンスター1体に通常モンスターが2体とは言え。
…数の暴力、多勢に無勢。
全く持って容赦はしないという、リョウの気概が化身となりて。3体もの騎士達が、再び猛り剣を構える。

「そして速攻魔法、【エネミー・コントローラー】発動ＤＡ！【レプティレス・ナージャ】の表示形式を、攻撃表示に変更する！」
「ひひ…ガガ、ガキなのに…中々…」
「戦闘で破壊されなかろうが、ダメージは受けてもらうＺＥ！Ｂａｔｔｌｅ続行！【クィーンズ・ナイト】で、【レプティレス・ナージャ】を攻撃ぃ！」

再度煌く切っ先の剣閃。前線にて戦う女王の力を、その身に宿した絵札の化身。
…まだまだ、敵は数を増やしながら攻め込んでくるかもしれない。
ソレ故、一人の敵に時間をかけている余裕などリョウ・サエグサにはないからこそ…
…少々目論見が外れたくらいでは、速攻でケリをつけるという当初の目的を覆すことなく。
今、絵札の三銃士の一体…
その中でも、勇猛果敢なる女剣士が、『毒尾』の場の異形の蛇女神へと向かいつつ剣を振りかぶった…

その時だった―

「ひひひ！トト、罠カード、【死のデッキ破壊ウイルス】発動！」
「ッ!?」

「…ひひ、【レプティレス・ナージャ】をリリースし、ここ、攻撃力１５００以上のモンスターを、手札も含めて全部破壊する。場の絵札の三銃士と…い、居たね…てて、手札の【ゴッドオーガス】を破壊！」

―！

女剣士の剣撃が、蛇女へと振り下ろされたその刹那―

…瞬きほどの一瞬で、巻き起こったのは病変罹患。

それは感染が感染を呼ぶウイルスの猛威。そう、攻撃を仕掛けた女王の騎士も、後に控えた王冠の剣士も…

そして勇敢なる剣士の王子も、さらにはリョウの手札で出番を待っていた巨大なる蛮勇の剣士さえもが。

なんとその身を病変が襲い、ウイルスに蝕まれて見る見るうちに溶かされていってしまったではないか―

「ウイルスカードだと!?そ、そんなカードを持ってやがったのか!?」

「ひひ…ぼぼ、僕は現役時代に【死のデッキ破壊ウイルス】を創造し再生させた…だだ、だから『毒尾』って呼ばれたんだよ…ひひ、今の若い子は、しし、知らないだろうけど…」

「ｓｈｉｔ！」

…リョウが驚いたのも無理は無い。

ウイルスカード―この世界には、『魔』、『闇』、『死』、『悪』と言った、相手の場や手札やデッキを蝕んでしまう、病変を撒き散らかすカードがある。

しかしそれらは古の時代に、現実に飢饉やパンデミックを巻き起こしたという伝説があるためか…

今この時代においては、ソレらの暴走は伝承で伝わってはいても。現存するカード事態を見ること自体が難しいさえ言われる、かなり珍しい部類のカードなのだから。

「ひひ…まま、まだだよ…その後…お、お前のデッキの中から、攻撃力１５００以上のモンスターを3体まで破壊する…ひひひ、自分で選びな…」
「…クソが…俺が選択するのは【サイコロプス】、【ブローバック・ドラゴン】、そして【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】。だが、ソレを逆に利用させてもらうＺＥ！【デスペラード・リボルバー・ドラゴン】が墓地に送られたこの瞬間！俺はデッキから、【ツインバレル・ドラゴン】を手札に加える！…チッ、カードを1枚伏せてターンエンドＤＡ！」

リョウ・サエグサ　ＬＰ：４０００
手札：5→1枚
場：無し
伏せ：1枚

まさか、『レプティレス』という搦め手を仕掛けてくるカードのみならず。
半ば伝説級となっている、希少な『ウイルス』カードを裏決闘界のデュエリストが使ってくるだなんてリョウからしても想定外であったのか。
…このターンで仕留めきれなかった後悔もそう。
時間をかければ、それだけこちら側が不利となる多勢に無勢な今の状況は…デュエリアの『ギャンブラー』からしても、相当の焦りを感じてしまっているのだから。

「ぼ、ぼぼ、僕のターン、ドロー、ひひっ…」

しかし、そんな焦りを感じているリョウ・サエグサを意に介さず。
蛇の『うねり』のように蠢く不気味な手付きで、『毒尾』はゆっくりとデッキからカードをドローするだけであり…

…攻撃力を０にしてくる、レプティレスによる０の毒。
そしてソレを耐え切ってもなお襲いくる【死のデッキ破壊ウイルス】という…２重の『毒』の後引く尾は、まさに相手をじわじわと溶かさんとする爬虫類の持つ毒そのモノのよう。
…【死のデッキ破壊ウイルス】の効果によって、このターンはリョウへのダメージは０となっているとはいえ。
不気味に蠢く『毒尾』の姿は、その長身と脂ぎった長髪に隠された素顔とが相まって、あまりに不穏にリョウを襲う。

「ぼぼ、僕は、ね…相手をゆっくり甚振るのが好きで、ね…ひひ…じっくり、じっくり…溶かしてあげる、よ…ひひひ…や、【闇の誘惑】発動…２枚ドローして、【レプティレス・ナージャ】を除外…リバースカードとモ、モンスターをセットして…タタ、ターンエンド、ひひひ…」

『毒尾』　ＬＰ：４０００
手札：３→１枚
場：セットモンスター１体
伏せ：２枚

…このターンでは、目立ったアクションを何も起こさず。
先のターンと同様に、再び必要最低限の動きをイラつくほどにゆっくりとした手付きで終えた裏決闘界の猛者、『毒尾』。

…それは、『塔』の入り口で行われているであろう天上の戦いが、自分の戦いの時間稼ぎとカムフラージュをしてくれているという自信と安心からか。
リョウに時間がない事を理解しつつ、それでいてリョウの焦りを見抜きながら…意地悪く時間を消費するだけの彼の手付きは、底意地の悪さがデュエルにまで滲み出ているようではないか。
…そんな『毒尾』は、一体何を思ったのか。
自らのターンを終えてすぐに、リョウへと向かってその不気味な口

を開いて。蛇の奇声のような吐息と共に、徐に言葉を発し始めた。
「…ひひ…おお、女の子…なんだって、ね。そそ、そこで寝てる子、って…」
「あ？」
「…ひひ…若い子、若い、女の、子…ひひひ…いいね…いいね…じょじょ、女子高生の中は、ひひ…柔らかくて、ああ、温かいんだ…ひひ…」
「Ｏｈ…」

それは下種な舌なめずり。
自らが裏社会に生きている、およそ真っ当な人間ではないことを全面に押し出した悪人らしい下賤な思想。
獲物を前にした蛇のような、チロチロと下品に揺らした『毒尾』の口元は彼の不気味な姿と相まってより一層気味が悪く…
…今の学生達が生まれるよりも前に、『毒尾』が不祥事により表の決闘界を追放されたその理由。ソレは、現代では覚えている者の方が少ないだろう。
だからこそ、『毒尾』とまで呼ばれたかつてのプロのトップランカーが裏社会に堕ちてしまった理由など、リョウ・サエグサには知る由もないのだ。
…けれども、もし知ってしまったら、きっとリョウは我を忘れるほどに激昂を見せたであろう。
何せ女性という女性の全てを愛していると豪語しているリョウ・サエグサにとっては、女性への直接的な乱暴と性的な暴行による不祥事で表世界から追放された『毒尾』は…絶対に、許せる相手ではないはず。
…『毒尾』の過去の罪を知らぬことが、リョウ・サエグサにとってのラッキーか。
もしもここでリョウ・サエグサが、我を忘れるほどに怒りってしまっていたら…そう、冷静さを欠いて怒り狂っていたら、後は『毒尾』

に手玉に取られ、やられるがままになっていただろうから。

「尚更テメェに渡すわけにはいかねぇＮＡ！なんせここでオネンネしてんのは俺の愛すべきレディであると同時に！俺の、ダチの女なんだからＹＯ！俺のターン、ドロー！魔法カード、【カップ・オブ・エース】発動！」

しかし、目の前で女性に危害を加えると豪語した『毒尾』に対し。我を忘れ激昂するとまではいかなくとも、絶対に負けられない気概をリョウが背負ったのもまた事実。

再びターンを向かえてすぐに、先ほどと同じくギャンブルカードを即座に発動し…

…デュエリアの『ギャンブラー』、命知らずのデュエリストの呼び声のままに。

今再び、金色のコインが空中で勢い良く舞い始める。

「まま、またそのカードを引いたのか…ひひ、運がいい…けど…ひひ、そんなに何回も上手くいくはずが…」

「ＨＡＨＡＨＡ！それはどうかな！再び天に舞え、運命のコイン！」

高らかに叫ぶリョウの叫び。それはギャンブルに狂った男の叫び。

そう、リスクの高いギャンブルカードを使うことに、全く恐れを抱いていない男の叫びが『塔』の中に木霊して…

出た、マークは―

「Ｙｅｓ！マークは太陽！コインは表！俺はデッキから２枚ドロー！」

「…ひ？」

これで、２回連続…
そう、全く畏れる事もなく、２回も連続でギャンブルカードを成功させたリョウに対し…
ソレを見た『毒尾』は、脂ぎった髪に隠れた素顔に少々驚きの色を感じさせながら声を漏らして。
…普通の感性を持ったデュエリストならば、そもそもからしてリスクの高いギャンブルカードを使おうとすらしないはず。
しかし、学生の身分でギャンブルカードを嬉々として使用し、そしてたった２回とは言えソレに全て成功している目の前の学生の度胸と運は…
例えプロの世界にだって匹敵する者などいないであろう、確立された彼だけのスタイルだという事を、元プロであった『毒尾』もたった今気がついたのか。

「ひひ…な、なるほど、ね。…そそ、そういうスタイル、か…」
「まだまだぁ！【ツインバレル・ドラゴン】を召喚し効果発動！もう一度天に舞え、２枚の運命のコイン！…Ｙｅｓ！２枚ともマークは太陽、コインは表！セットモンスターを破壊するＺＥ！」
「…破壊されたのは【レプティレス・ガードナー】…デデ、デッキから【レプティレス・ヒュドラ】を手札に…」
「今度はナージャじゃなかったか…だがこれで、テメェの場はがら空きになった！【死者蘇生】発動！さっきテメェに破壊された、【ゴッドオーガス】を墓地から特殊召喚！そのまま【ゴッドオーガス】の効果発動ＤＡ！ダイスを三つ、ロールする！」

終わらぬギャンブル、止まらぬ賭博。
勢いに乗るリョウの場に現れたのは、巨剣携えし巨大なる蛮勇。
まるで違うゲームから飛び出してきたかのようなその雰囲気は、今にも力のままに『毒尾』へと襲い掛からんとしているよう。
…そして蛮勇の雄叫びによって、天に現れたのは３つの黒き巨大な

るダイス。
その、ダイスの出目を囲む星の絵柄は相手へのプレッシャーを煽るような得体の知れぬ圧力を放ちながら、高々と高速で天に舞い始め…
…回転を増す黒のダイス。
相手へとプレッシャーを与えるその回転は、リョウの猛りを具現化しているかのような勢いとなりて。
『毒尾』へと、デュエリアの『ギャンブラー』のデュエルの真髄を見せつけんとしているようでもあり…

―出た、数字は…

「ＹＡ―ＨＡ―！　３つのダイスは全て『６』だ！相手ターン終了時まで、【ゴッドオーガス】の攻撃力を１８００ポイントアップする！」

【ゴッドオーガス】レベル７
ＡＴＫ／２５００→４３００　ＤＥＦ／２４５０→４２５０

なんと出目の合計は、最大最高最強値である『１８』の値。
それはまるで、今日の午前中に天城　遊良と戦っていた時の『運』の勢いが全く衰えていないかのような、恐ろしいまでの強すぎる運。

…まさに幸運、まさに豪運、誰もが認める恐るべき『天運』。

３つのダイスが、全て『最高の目』を出す確率など、よほどツイていたとしても到達できる代物ではないと言うのに…
最大値を示したダイスの光が、眩き力を【ゴッドオーガス】へと与えていくその光景は…嘘偽りの無い正真正銘の現実となりて、『毒尾』へと向かって轟くのみ。
…運否天賦に任せた行動では、結果が予想に伴わない事は多々あれ

ど。
　それでも、よもやこれ程までに『天運』が彼の為に働こうとしているこの光景は、実際にその目で見たとしても到底信じられるモノではない事だろう。

　しかし…

　そんな、かつてのプロの世界でも並ぶ者など居なかったほどの、人の身では操りきれぬほどの運を目の当たりにしてもなお。
『毒尾』は、不気味なほどに冷静なまま…

「ひひ…やっぱり…う、運に振り切ったタイプ…ひひひ…面白い、ね…」
「そして3つのダイスがゾロ目だったことで、【ゴッドオーガス】の3つの効果が全て発動する！【ゴッドオーガス】は相手ターン終了時まで戦闘、効果では破壊されなくなり、更に俺は2枚ドロー！そしてこのターン、コイツは相手にダイレクトアタックが出来るようになる！」
「ひひ…凄い、ね…凄いねぇ…」
「なにニヤついてやがる！これで壁モンスター出したって、【ゴッドオーガス】を破壊しようとしたってテメェは終わりなんだよ！行くＺＥ！【ゴッドオーガス】、ダイレクトアタックＤＡ！」

　動く…
　巨剣を振りかぶった、剣より巨大な鎧の蛮勇が。
　破壊されず、戦闘でもほぼ無敵のモンスター…戦闘、効果への耐性というのは、今のリョウに与えられる最大級の護りの手。
　そしてダイレクトアタックを可能にする蛮勇の突進の勢いは、例え『毒尾』がギリギリで壁モンスターを用意したとしても無駄となる、まさに『運』によって掴んだ最上の決め手となり得るのか。

今、巨大なる剣を振りかぶる【ゴッドオーガス】。
…『毒尾』を見下ろし、剣を持ち上げ。
忍び込んできた下賤なる者を、一撃の下に両断しようとしている巨大なる蛮勇の、実体化した巨大な剣の勢いは、実際に対峙していたら恐怖以外に何も感じることなど出来ないはずで…

「ひひひひひ…甘い、甘い、甘いねぇ…リ、リバースカードオープン！トト、罠カード、【墓地墓地の恨み】発動！」
「ｗｈａｔ!?」

それでも…
そう、巨大なる剣に、両断されかかったこの瞬間であっても。
全く焦りを浮かべることなく、どこまでも気味が悪いほどに冷静に…伏せてあったカードの中から、不気味なエフェクトと共に一枚の罠カードを発動した『毒尾』。
すると、辺り一面から幽霊のような人魂が漂い始め…
リョウの場のモンスター達の周りを飛び回ったかと思うと、なんと蛮勇の振りかぶった巨剣は『毒尾』へと届く前に、自らの剣の重さを支えきれずに地面に倒れこんでしまったではないか。

「おお、お前の墓地にカードが８枚以上あるため…ひひ…お前のモンスターのこ、攻撃力を全て０にするよ…ひひ…」

【ツインバレル・ドラゴン】レベル４
ＡＴＫ／１７００→０
【ゴッドオーガス】レベル７
ＡＴＫ／４３００→０

それは墓地に眠る魂達の怨念によって、相手モンスターの攻撃力を

強制的に『０』としてしまう恐ろしい罠。
…そう、いくら破壊耐性を備えても、いくらダイレクトアタックが出来ても関係ない。
破壊も出来ず、攻撃を止められないのならば、その攻撃力自体を『０』にしてしまえばいいのだという…
恐ろしくも気味が悪い、纏わりつくような湿った搦め手。

「ひひ…か、壁モンスターが、何だって？破壊したって、何だってぇ？」
「Ｓｈｉｔ…バトル終了だ。仕方ねぇ、カードを１枚伏せてターンエン…」
「…ひひ…【サイクロン】発動…い、今伏せたカードを破壊…」
「ぐっ！」

そしてソレはバトルだけではなく。
少しずつ、少しずつリョウの場を荒しながら追い詰めていく『毒尾』の取る手は、どこまでもリョウの気分を害しながら着実に沼の底へと誘うのか。
巻き起こる竜巻が、無慈悲にもリョウの伏せた【ヘッド・ジャッジング】を破壊していき…

「ターンエンドだ…」

リョウ・サエグサ　ＬＰ：４０００
手札：２→２枚
場：【ツインバレル・ドラゴン】
【ゴッドオーガス】
伏せ：１枚

じわり、じわりと。
文字通り、『毒』が侵食してくるかのような不気味な感触。
その、まるで『毒』によって少しずつ痛めつけてくるかのような、つ

かみどころの無い、『毒尾』のデュエルに対し…異様なまでの嫌悪を、リョウは感じているのだろうか。
…そう、一瞬の攻防による、激しい応酬ではなく。
『毒尾』の仕掛けてくる、じわじわと命を削り取ってくるかのようなデュエルの流れは…リョウ・サエグサが、最も苦手としている戦い方と言え…
基本的にリョウのデッキは、特定のカテゴリーに属した構築ではなく、少しの汎用的なカードも入ってはいるものの、デッキの多くは多種多様なギャンブルカードと、強い効果ではあるもののリスキーなデメリットも備えているクセの強いカードで占められている。
そして、その時に引いたカードでその時に出来る最大の戦い方を突き詰めているのが、デュリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサというデュエリストなのであり…
しかし、彼のデュエルは確かに己の『運』に相当の自信が無いリョウ自信にしか出来ない芸当ではあるのだが、言い換えればソレはほとんどの場面で『出たとこ勝負』だということ。
つまりは、一瞬の攻防で全てが終わる激しい応酬ではなく。
長期戦によって、こちらのチップをジワジワと削り取ってくる『毒尾』のようなデュエルは、リョウからしてもかなりやりにくい部類と言えるのであって。

「ぼ、僕のターン、ドロー…ひひ…いいい、勢いだけの奴は、相手にするだけ無駄無駄無駄…【死者蘇生】発動…墓地から【レプティレス・ガードナー】を特殊召喚…」

【レプティレス・ガードナー】レベル４
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／２０００

しかし、そんなデュエリアの『ギャンブラー』を意に介さず。
ただただ淡々とカードの発動を宣言する『毒尾』の声が、コンクリートで囲まれた『塔』の内部に反響し…

「そそ、そしてこの瞬間に速攻魔法…じ、【地獄の暴走召喚】発動。」
「ｗｈａｔ!?」
「デデ、デッキから【レプティレス・ガードナー】を2体、特殊召喚するよ…ひひ…お、お前も選べ…」
「チッ、俺はデッキから【ツインバレル・ドラゴン】を2体、守備表示で特殊召喚するぜ。」
「ひひ…【ツインバレル・ドラゴン】の効果が、きき強制的に発動しちゃうねぇ…」

空中に現れたのは、リョウの意思に反して舞い始めた4枚もの運命のコイン。
ここで、デッキに1枚しか入っていない【ゴッドオーガス】ではなく、あえて【ツインバレル・ドラゴン】を選択したリョウの思考は彼にしか理解しえぬモノだとは言え。
…壁を増やす算段か、それともギャンブルを外す事を期待してか。
相手の場に現れた、後続を呼ぶ3体もの【レプティレス・ガードナー】を破壊する可能性を孕んではいても。
強制的に誘発された、2丁のデリンジャーの弾倉をリロードする音はリョウにも決して止められず…

出た、マークは…

「…コインは全て表だ。【レプティレス・ガードナー】を2体破壊するぜ…」
「ひひひひひ…うう、運が良すぎるのもかか、考えモノだねぇ…ひひっ、は、破壊された【レプティレス・ガードナー】2体の効果で、ぼぼ僕はデッキから【レプティレス・スキュラ】と【レプティレス・ヴァースキ】を手札に…ひひっ、ガードナー1体だけを対象にしておけばよかったものを…」
「ッ、しまった…」

「ひひひ！運が良すぎて焦ったねぇ？【ツインバレル・ドラゴン】を対象に、てて、手札の【レプティレス・ヒュドラ】の効果発動…１７００のダメージを受けてヒュドラを特殊召喚…ツインバレ、ルの攻撃力を、ゼゼ０に…」

【ツインバレル・ドラゴン】レベル４
ＡＴＫ／１７００→０
『毒尾』　ＬＰ：４０００→２３００

「Ｓｈｉｔ！攻撃力がまたＺＥＲＯに!?」
「ひひひ…レベル４のガードナーに…レレ、レベル２のヒュドラをチュ、チューニング…」

ねちっこく、それでいて纏わりつくような声と共に。
リョウのモンスターの攻撃力を、再び０へと落としながら…同時に展開を続ける『毒尾』のデュエルは、リョウからすれば本当につかみどころの無い底なし沼のような感触。
…そうして天に飛び上がりしは、４つの星と２つの蛇輪。
その、不気味なほどに気味の悪い、あまりに不愉快な宣言と共に…
弾ける光と共に、今ここに現れしは―

「シンクロ召喚、レベル６…【レプティレス・ラミア】…」

―！

【レプティレス・ラミア】レベル６
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１５００

現れたのは、５つの頭を持った蛇の邪女神。
怨嗟に取り付かれた女の執念が、そのまま蛇へと姿を変えたかのような…

あまりに禍々しきその姿は、とてもじゃないが直視など出来ない程に醜くありつつも。それでも狂った美しさを孕んだ、矛盾した神々しさを纏っていて。
ヒステリックな金切り声を、目の前の相手へとぶつけつつ。今にも飛び掛りそうな狂気と共に、リョウ・サエグサを睨みつける。

「Ｏｈ…レディの守備範囲は広い方だが、コイツァちと専門外だぜ…」
「ひひ…シシ、シンクロ素材になった【レプティレス・ヒュドラ】の効果…残ったツインバレルの攻撃力も０に…そそ、そして【レプティレス・ラミア】の効果発動…相手の、こ、攻撃力０のモンスターを…ひひひっ、全て破壊するよ！」
「ッ!?」

そして…
響き渡るは蛇の女神の、怒り狂った５つの嬌声―
それによって、３体もの【ツインバレル・ドラゴン】が同時に爆散していくその光景は…
男の本能に潜在的な恐怖を与えてくるかのような、形容し難い恐怖を孕んでいたことだろう。
また、先ほどのダイスロールによって、どうにか破壊耐性を得ていた【ゴッドオーガス】は嬌声に耐えその場に残りはしたものの…
しかし、蛇に睨まれた蛙のように。巨剣を落とした蛮勇も、どこか怯えたように立ち竦んでおり…
そうして…

「ひひひ…はは、破壊した数だけドローする…３枚ドロー…ひひ…【レプティレス・スキュラ】召喚…ババババトル！ラミアとスキュラで、ゴゴゴ【ゴッドオーガス】を攻撃ぃ！」

―!!

異形なる蛇身の者達が、満を持して蛮勇へと襲い掛かって。

「ッ!?ぐ、ぐあぁぁあっ！」

リョウ・サエグサ　ＬＰ：４０００→１９００→１００

襲い来るは牙の咬撃、逃れられぬ蛇の絞撃。

先ほどのギャンブルにて得た、戦闘では破壊されぬ【ゴッドオーガス】へと襲い来る蛇の女神達の攻撃は…

毒に蝕まれたかのような、実体化したダメージとなりて。そっくりそのまま、リョウ・サエグサへと襲いくるのか。

…破壊こそされなかったものの、攻撃力０という無いに等しい値の補正もあってか。

ダイレクトアタックを喰らったにも等しい痛みが現実となりて、無慈悲にも『ギャンブラー』へと襲いかり…

「ＧＡッ!?…ぐ…クソが…な、舐めやがって…」

しかし、３９００ものダメージを受けつつも、どうにかその意識を飛ばさずにその場に踏み止まったリョウの口から零れたのは…

…『毒尾』へと放たれる、沸々と湧き上がる怒りの言葉であった。

…そう、リョウの零した悔しげな言葉の通り。

『毒尾』の手札には、先ほどデッキから加えた【レプティレス・ヴァースキ】があったはずだというのに…

『毒尾』は、あえてリョウを甚振るためだけに。特殊召喚の条件を満たしていたはずの、攻撃力２６００の最上級の蛇の女神を召喚せずに攻撃を仕掛けてきたのだから。

―リョウのＬＰを、１００残したのがその証拠。

ここで【レプティレス・ヴァースキ】を特殊召喚して、リョウのＬＰを一気に０にする選択肢だって『毒尾』にはあったはず。

それは、ここまでクセの強いデュエルを行ってきた『毒尾』なのだから、彼がここへ来てリョウの伏せカードを警戒した…といった事だけは、絶対にないということはリョウにだって分かりきっており…

しかし、あまりに運が良すぎる為に。そして『毒尾』とのデュエルのやりにくさに、【ツインバレル・ドラゴン】のギャンブル効果による破壊を当たり前のように捕らえていた部分がリョウにあった事もまた事実。

…そう、対象を２体の【レプティレス・ガードナー】に分けるのではなく、１体のガードナーに絞っておけば少なくともレプティレスのサーチ効果は１体だけで済んでいた。

ソレ故、この非常事態においてリョウの気持ちの揺らぎは、取り返しのつかない大きなミスに繋がる恐れがではあるのだが…

けれども、リョウのその大きな気持ちのミスを、あえて逆撫でするように。

あえて【レプティレス・ヴァースキ】を出して決着を着けず、もう一体サーチした方の【レプティレス・スキュラ】で攻撃し、わざと勝負を長引かせてリョウを肉体的にも精神的にも追い詰めようとする『毒尾』の…

このどこまでも卑劣で下種で外道な、気味の悪いデュエルはリョウからしても不愉快極まりない事に違いなく。

しかし、そんなリョウの怒りに反して。『毒尾』のニヤける口元は、あまりに不気味に開かれたままで…

「ひひひ…ああ、後１ターンの命…精々足掻き、な、ガキ…ひひっ、カカ、カードを２枚伏せて…ターン…エンド…」

『毒尾』　ＬＰ：２３００

手札：4→2枚
場：【レプティレス・ラミア】
【レプティレス・スキュラ】
伏せ：2枚

明らかにリョウを舐めている、裏決闘界の猛者『毒尾』。
しかしソレは、デュエリア校のデュエルランキング第1位を前にしてもなお『舐める』ことの出来る力を『毒尾』が持っているということの証明とも言えるだろうか。

（ひひひ…もう何をしても無駄無駄無駄…モンスター並べても、【墓地墓地の恨み】で0にして、次のターンに【レプティレス・ヴァースキ】でリリースできるし…ガキのＥｘ適正は『融合』…ひひっ、あの手札じゃ、融合モンスターは精々出せて1体…次のターンで…終わり、終わり…）

そう、表社会を追放されても、裏社会で身も心も腐っても。
それでも、腐っても元プロのトップランカーとして名を知られた『毒尾』の力は、まさしくデュエリア校のトップを相手にしてもなお上を行かんとする実力を持っているということでもあり…
…それは表で戦った戦いの経験と、裏で生き延びてきた生存への道しるべ。
そんな、生きてきた年数の多さから修羅場を潜ってきた数が段違いに多いであろう『毒尾』には、いくらデュエリア校のデュエルランキング第1位、『ギャンブラー』のリョウ・サエグサを持ってしても…
分が悪いばかりではなく、一方的にペースを持っていかれてしまうほどに練磨された力と言えるのであり…

「ぐっ…やっぱ、元トップランカーはマジモンってことか…」
「やや、やっとわかった、の？ひひ…ガキ…も、もう、終わり、だ…精々、ひひっ、絶望しろ…」

「Ｓｈｉｔ…」

掴みどころのない底なし沼のような、あまりに苦手で嫌悪すら感じる相手。

そう、覇気の無い、掴もうとしてもスルスルと逃げてしまう『毒尾』のデュエルは…リョウからしても、本当に苦手な部類にはいるやりにくい事この上ない相手なのだ。

…アレだけの豪語を放って、天宮寺　鷹矢を怒らせたのに。

…アレだけカッコつけて、遊良や蒼人といった味方たちを送り出したというのに、

張った見栄を貫きと通せず、あまつさえ遊良と鷹矢の大事な女性を守りきれなかったなど…そんなこと、リョウのプライドが絶対に許さぬことだと言うのに。

しかし、このままでは絶望的。

そう、『紫魔家』が独占している【ＨＥＲＯ】や、その他の『名家』と呼ばれる一族が所有している『融合召喚』に長けたカテゴリーと違って。

この世界に多々ある融合モンスターのほとんどは、魔法カードの【融合】と、『素材』となる2体以上のモンスターを必要とすることから…そのディスアドバンテージはシンクロやエクシーズとは違い、より多くの手札を必要とするのがこの世界における融合召喚の定義。

…ソレ故、特別な場合を除いて、手札の数はそのまま融合使いの強さにも直結すると言っても過言ではなく。

辛うじて何かしらの融合召喚を決められたとしても、ソレが状況を一変させつつ決め手となるような、あまりに強烈なモンスターでなければこの場は絶対に切り抜ける事などできず…

（どうする…勘がいい所為で、女神の効果は使わせてくれねぇだろうし…【時の魔術師】か【時の魔導士】…ダメだ、手が足りねぇ上に決

め手にもならねぇ…それに、確実に止められる…）

足りない…

圧倒的に、手が足りない。

このデュエルが高速化した時代においては、特殊な事情や戦法を取る相手を除いては戦いが持久戦となることはほとんどない。

ソレ故、始めから全力全開でギャンブルに没頭し、そして全速力でぶつかり合うデュエルこそが『ギャンブラー』、リョウ・サエグサの得意とするデュエル。

だからこそ、確実に搦め手を纏わり付かせ、ジワジワと痛めつけてくるこの『毒尾』のデュエルは…本当に、やり辛いことこの上なく。

…どうする、どうする…どうするどうするどうする―

浮かび上がっては実行に移せぬ、自分に出来る残された手。

ソレを、必死になって考えに考え抜いているデュエリア校の『ギャンブラー』、リョウ・サエグサは―

「ＨＡ…」

自分を焦りを感じ悦に浸っているであろう、目の前でニヤついている『毒尾』を前に…

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

突如、笑い始めた―

「…ひひ?きき、気でも狂っ、た?」
「いや、ごちゃごちゃ考えるのを止めただけＳＡ。…らしくねぇってな、色々考えて、ドツボに嵌るなんざ俺らしくねぇ。」
「…ひひ、意味、わからない…」

それは今まで浮かび上がっていた、自らの頭への思考の放棄。
残された手に活路を見出せなかったのか、ヤケになったかのような高らかな笑い。
…まさか、本当に諦めてしまったのか。
まぁ、この状況を見れば誰だって全てを諦めてしまいたくなるような、あまりに絶望的で勝ち目の無い悲惨な場ではあるのだが…

しかし…

「仕方ねぇ…やってやるよ!俺だけが楽してる場合じゃねぇんでな!いくＺＥ!俺のターン、ドロー!【ゴッドオーガス】の効果発動!ダイスを３つロールする!」

諦めではない、決意の声で。
ターンを迎えてすぐに、再びデュエリアの『ギャンブラー』がその勢いを取り戻さんとして…攻撃力０となってしまった蛮勇の剣士へと、ダイスを回すように命令を下したリョウ・サエグサ。

「ひひ?…無駄無駄無駄!デデ、【デモンズ・チェーン】発動!効果は使わせない、よ…」

「チッ！だったら【強欲で貪欲な壷】発動！デッキを１０枚裏側除外して、２枚ドロー！…来たＺＥ！魔法カード、【カップ・オブ・エース】発動ＤＡ！」
「…ひひ…また…」

それは決して折れてはいない、前進し続ける彼の生き様そのモノなのか。
蛮勇の、一発逆転を狙える可能性を秘めた効果を止められてもなお。それでも、なお止まらぬのだとして…
―リョウの場に現れたのは、三度目となる金色の聖杯。
デュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサの代名詞。勝者に与えられる黄金の杯のような、その煌びやかな輝きは選ばれし者に『２枚』のドローというこの上ない恩恵を無条件で与えるのだ。

「さぁ…天に舞え、俺の運命を決めるコインよ！」

一体、何を持って彼はこの状況を吹っ切れたのか。
それは阿呆の自暴自棄か、それとも馬鹿げた馬鹿の愚直か…
しかし、自分はソレのどちらでもないのだと言わんばかりに。
『運』の良い者へと与える祝福のように…
これで、三度目となるギャンブル、その最後の黄金の聖杯から、今一度天空に運命のコインが舞い上がり…

出た、マークは…

「ひひ…ひひひひ！とと、とうとう尽きたねぇ！おお、お前の、運！」

高らかに叫ばれたのは、『ギャンブラー』のモノではなかった―
そう、『塔』の内部に高らかに響いたのは、『毒尾』の放った気味の悪い笑い声であり…
…しかし、彼が思わず叫んでしまったのも無理は無い。
何故なら…

「…マークは月、コインは裏だ…相手が２枚、ドローするＺＥ…」

コインは裏…『月』のマークを、示していたのだから―

「ひひひひ！あ、ありがたく、ほほ僕はデッキから２枚ドローするよぉ！」

とうとう…

とうとう、『運』が尽きたのか―

いや、ここまで…それこそ昨日の【決島】の予選と、午前に行われた天城　遊良との第一試合で、アレだけの強烈なる運を見せ付けていたのだから…
ここへきて、ようやく彼の運が落ち目に傾いたとしても、それはある意味で当然といえば当然ではあるのだが…

しかし、タイミングは最悪…
そう、逆転の為には、大量の手札が必要なのではないかと思えるこのタイミングで。
２枚のドローを賭けたギャンブルに失敗し、よもやこの圧倒的窮地で相手に２枚ものドローを許してしまった今の【カップ・オブ・エース】は、誰が見たって『失敗』以外の言葉が浮かび上がらないほどの失策であったといえるのだから。
まぁ、この場には戦っている彼ら２人の他に、見ている者など誰もいないのだが…
ともかく、一発逆転のために発動したであろうギャンブルカードを、ここぞという時に外してしまったであろうリョウ・サエグサの心持ちはいかがなものか。
…不気味な声で、悦に浸りながらドローをする『毒尾』。
ソレを静かに見ているだけのリョウの視線は、あまりに細められたモノとなりて…

しかし…

『ギャンブル』に失敗したであろう、その時であっても―

「何勘違いしてやがる！コレが俺のＬｕｃｋｙなんだよ！カードを１枚伏せて魔法カード、【エクスチェンジ】発動！テメェと俺の手札を１枚、Ｃｈａｎｇｅする！」
「ッ!?え、えええ【エクスチェンジ】!?」
悦を感じている『毒尾』の声を、横から裂く様にして放たれしは。
ギャンブルに失敗したとは思えない、あまりに高らかなリョウの咆哮。

発動されたのは、文字通りお互いの手札を1枚交換するという…ほとんど…いや、プロの間でも使われることなど皆無と言える、あまりに珍しくもクセの強すぎる、一枚の魔法カード。
一体、何を思ってこんなカードを発動したのか。
そもそもからして、『Ｅｘ適正』の異なる相手と手札交換などしても、逆転への手など手に入れられるはずもないというのに―
…そのまま、【エクスチェンジ】の効果によって。
リョウと『毒尾』の頭上に、公開されたお互いの手札が映し出され…

「Ｙｅｓ！やっぱりドローしたな？…俺がＳｅｌｅｃｔするのは罠カード、【死のデッキ破壊ウイルス】ＤＡ！」
「ひひっ!?…けけ、けど今更、そそそんなカード奪ってなにを…【速攻のかかし】を貰うよ…」

お互いに、選んだカードを。その場から、勢い良く相手へと飛ばしあうリョウと『毒尾』。
…リョウが選択したのは、先ほど『毒尾』に使われた『ウイルス』カード。
けれども、いくら相手の場と手札を一層出来るであろうこのカードを手札に加えたところで…
攻撃力１５００以下の闇属性モンスターがコストとして必要であるという発動条件も満たしていないのだから、これでは宝の持ち腐れどころか全くの無駄な手となってしまうというのに。
また、リョウが渡したのは…というよりも、リョウに一枚しか残っていなかった手札は、あろうことか強烈なる守りの手。
これでは、一体何のために手札を交換したのかとも言え…

それでも―

「Ｂｕｔ、俺はこれが欲しかったんだよ。リバースカードオープン！罠カード、【無謀な欲張り】発動！」
「ッ!?」

続けてリョウが発動したのは、目先の2枚のドローを許す代わりに次のドローフェイズを飛ばすという…あまりにリスキーな効果を持った、1枚の罠カードであった。
…それは最初のターンから伏せてあったリョウの罠。しかして『毒尾』が見向きもしなかった、取るに足らない罠カード。

「ドド、ドローフェイズをスキップするカード…ひひ…確かに、無謀、だ…」

そう、いくらここで2枚のドローをしたとしても、リョウに残されているたった1枚の手札が【死のデッキ破壊ウイルス】だという事は既に確定情報。
だからこそ、2枚のカードをドローしたところで眼の目のガキが逆転を狙える融合召喚など出来ないであろうと言うことは『毒尾』もとっくに見抜いているのか…
その無謀とも思える苦肉の策を、脂ぎった髪の奥からどこまでも見下した視線で見つめている『毒尾』。
そんな、『毒尾』の視線に貫かれていてもなお…

（頼むぜじゃじゃ馬達…来てくれよ？）

まるで、本当に『何か』に語りかけているかのようにして、リョウ・サエグサはデッキへと手をかける。

…これだけの絶望的状況だというのに、それでも諦めずにデッキに手を伸ばす彼のその姿は、紛れも無く『ギャンブラー』でありつつも本物のデュエリストの証。
一体、彼は何を狙っているのか。
リョウの思惑など、全く理解していないであろう『毒尾』を前に…
今、追い詰められたリョウ・サエグサが―

「2枚…ドロー！」

カードを、引く―

引いた、カードは…

「Ｙｅｓ！【サイコロン】発動！ダイスロール！…イイ子だ！出目は４！テメエの伏せカードを破壊するＺＥ！」

２枚ドローしたうちの一枚を、即座に発動したリョウ。
その迷いの無さは果たして諦めか、それともまた別のモノか…
…リョウの場に現れしサイコロより、放たれしは一陣の突風。
それが、『毒尾』の場に伏せてあった【墓地墓地の恨み】を飲み込み破壊していく。

「ぼぼ、【墓地墓地の恨み】を破壊してきたか…ひひ…けけ、けど今更どうにも…ゴ、【ゴッドオーガス】が何も出来ないんじゃ…」

しかし、それでも『毒尾』は揺らがない。
…そう、運の落ち目のようにさえ思えるここで、１０００のダメージを受ける可能性もある【サイコロン】を迷い無く発動できるリョウの精神力は確かに相当なモノ。
けれども、ソレだけでは『毒尾』の優位はまだまだゆるぎないモノなのだ。
何しろ、折角ドローした2枚のカードの中から1枚をリョウはたった今発動してしまったのだ。融合召喚の為に、多量の手札が必要となってくるであろうこの場面で…あろうことか、ドローしたのは【サイクロン】にも劣るギャンブル性の高い【サイコロン】であったこと。
そして、残ったリョウの手札は、今ドローした残りの1枚と【死のデッキ破壊ウイルス】の2枚だけ。
これでは、最早リョウ・サエグサに残された手がないと言う事を…『毒尾』もまた、強く確信していて。

…そうだと言うのに―

「…本当は、使うつもりなんて無かったんだがよ。…けどまっ、仕方ねぇよなぁ…四の五の言ってる暇はねぇし…誰も見てねぇしよ…」
「ひひ？なな、何ごちゃごちゃ言って…」
「【決島】はＳｏｕｌとＳｏｕｌのぶつかり合いだ。だから俺も、俺だけの力で戦うって決めていた。…けどよ、テメェは別だ。テメェみてぇな下種野郎には、死んでも負けるわけにはいかねぇ…だから、俺も覚悟を決めるぜ…コイツを使ったら、俺もただじゃすまねぇからなぁ…」
「…はい？」
誰に求められたわけでもないと言うのに、まるで自分に言い聞かせるようにして。

何やら、静かに言葉を発し始めたデュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサ。
…一体彼は、ここへ来て何をドローしたというのか。
【エクスチェンジ】という、使いどころに困るようなカードを使って、わざわざ使えないはずのカードを敵から奪い。
そして次のドローフェイズをスキップしてしまう無謀なドローによって、折角ドローした2枚の内も…既に1枚使ってしまったことによって、リョウに残されている手札はウイルスカードを含めてあと2枚。
…けれども、こんな状況に陥ってもなお。
彼はまだ、諦めてはいないのだとして。元プロのトップランカーを前にしても、決して戦意を失わずに立ち向かわんとしているのか。

そのまま、リョウは決意を決めたかのように。

今、ゆっくりと手札から1枚のカードを掲げ…

「…いいか、誰にも言うんじゃねぇぞ?そんで、俺を舐めたことを精々後悔するんだNA」
「ささ、さっきからな、何をブツブツ…」
「見せてやるよ…これがデュエリアの『ギャンブラー』の、正真正銘Ｊｏｋｅｒの中のＪｏｋｅｒ!…俺の……とっておきＤＡ!魔法カード発動!」

それは―

「Ｌｅｔ☒ｓ　Ｇｏ！【クリティウスの牙】！」

―！

咆哮―

それは紛れも無く、『塔』の内部に響き渡った竜の咆哮であった―

リョウ・サエグサの場に発動された、一枚の魔法カードから放たれし光…その光の向こうから、響いてきたのは神聖なりし竜の声であり…

飛び出してきたのは、黒き鱗を煌かせた一体の牙持つ竜―

モンスターではない。発動されているのは紛れも無く魔法カード。そう、黒い鱗の牙の竜をよくよく見れば、それは半透明で実体を伴っていないかのような不思議な姿。

…まるで、魂だけの存在。しかし、あたかもモンスターを召喚したかのようなその迫力は…紛れも無く本物の命を持っていると思えるような、正真正銘のドラゴンでもあって。

「まま、魔法カードからドド、ドラゴンが飛び出した!?みみ、見た事無い、こ、こんなドラゴン…」

「ぐっ…!ッ…や、やっぱり言う事きかねぇ奴だぜ…がっ…」

そして、ソレを発動した瞬間に。何やらリョウは苦しげに、陽気な

顔を苦痛に歪め始めたではないか。
胸を押さえ、膝が折れかけ…
それはまるで、このカードを使うための代償を己の身体で支払っているかのような苦しみ方。いや、彼の苦しみ方を見るに、実際に『そう』なのではないか。
何せ、それを容易に想像できるほどに…今のリョウが漏らす苦痛の顔は、演技などではない相当たる苦痛を帯びている様子にも見える代物。

…一体、このカードは何なのか。

突然現れた謎のドラゴン。かつてのプロのトップランカーであった『毒尾』を持ってしても見覚えのない、その竜の咆哮はあまりに厳格かく壮麗なる響きとなりて容赦なく主であるはずのリョウ・サエグサを襲い続け…

けれど…それでも―

「うぉぉぉぉぉぉ！俺は伝説の竜『クリティウス』と、手札の【死のデッキ破壊ウイルス】を融合ぉ！」
「ッ!?トト、罠カードと融合!?そそ、そんなカード聞いたこと無…」
「あるわけねぇだろ！Ｃｏｍｅ　ｏｎ！融合召喚！」

それはこの世界の常識における、『融合召喚』の定義とは異なった常識外れの融合の宣言。
そう、素材となるモンスターを何も捧げずに、発動した『魔法カード』と手札の『罠カード』を天へと掲げ…

―混ざり合う、黒きドラゴンと病変のウイルス。
その、あまりに異常なる融合召喚の光景に…
対峙している『毒尾』も、言葉を無くし魅入りながら…
ここに、呼び出されるは―
「レベル4、【デス・ウイルス・ドラゴン】！」
―！
…
…それは、見たことのないモンスターであった。
そう、元プロのトップランカー、『毒尾』を持ってしてもソレは今までの人生において、一度だって見たことの無い異様な姿をした融合モンスターであり…
現れたのは、先程場に姿を見せた黒き鱗を煌かせる牙の竜ではない。
取り込んだ【死のデッキ破壊ウイルス】が、竜の姿となったかのような…全身から『毒』を撒き散らかさんとしている、歪な紫色に変色した禍々しいまでの姿の竜。
こんな…こんなモンスターなど、この世に存在していたのか。
それはまるで、古の時代にこの世界で猛威を振るった、【死のデッキ破壊ウイルス】が本来の姿を取り戻したとさえ思えるような―

【デス・ウイルス・ドラゴン】レベル４
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１５００

普通であればありえない。
罠と魔法が融合して、新たなモンスターが誕生するということなど。
そもそも『融合』というのは、決められた融合素材のモンスターを混ぜ合わせることによって生まれるモノ。
だからこそ、己の眼を疑っている『毒尾』の態度は、この世界に生きる人間であればなおの事当然と言えるのであって。

「…うぐっ!?……チッ、グズグズしてられねぇ…さっさとケリつけねぇと、俺がオダブツしちまう…」
「なな…ななな…しし、【死のデッキ破壊ウイルス】が…ドド、ドラゴンになった…」
「ＨＡ！そ、そうＳＡ！コレが『クリティウス』の力！『クリティウス』は罠カードと一体化し、罠カードに命を吹き込む事が出来るんだＺＥ！」
「いいい命って…そそ、そんな芸当、まるでかか、『神』のカードじゃ…ッ！け、けけ、けどそれがどうした！な、何が出てくるかと思えば、ここ攻撃力１９００の雑魚モンスターじゃないか！そんなカード出したって…」
「ソイツぁＮｏだ、もうテメェは終わってんだよ！【デス・ウイルス・ドラゴン】のモンスター効果発動ぉ！融合召喚成功時！相手の場と手札の…攻撃力１５００以上のモンスターを、全て破壊する！」
「ッ!?」
「やれ、クリティウス！パンデミック・オーバードライブ！」

―！

そして…
放たれたのは、無見の毒響。
リョウ・サエグサの宣言と共に、【デス・ウイルス・ドラゴン】が放ったとてつもなく強烈な咆哮によって…
…広がる病変、朽ち果てる蛇たち。
そう、それは先程、『毒尾』がリョウにやったように。
『毒尾』の場で不気味にうねりを見せていた攻撃力１５００以上の【レプティレス・ラミア】も【レプティレス・スキュラ】も…そして手札の、【レプティレス・ヴァースキ】までもが…
なんとその身を病変が襲い、ウイルスに蝕まれて見る見るうちに溶かされていってしまったではないか―

「ぼぼ、僕の【死のデッキ破壊ウイルス】と同じ効果!?」
「ソイツもＮｏだ！同じじゃねぇ…オリジナルの【死のデッキ破壊ウイルス】と違ってこのターン！テメェは、ちゃんとダメージを受けんだＺＥ！」
「ひひっ!?」
「一つだけ礼を言う！俺がコイツを出せたのは、テメェが【死のデッキ破壊ウイルス】を持ってたおかげだ！そのおかげで、俺は『クリティウス』の発動条件を満たせたんだからなぁ…何せ俺のデッキには、『クリティウス』の融合素材になる罠なんて１枚も入ってねぇんだからＹＯ！」
「ッ!?」

また、続けざまにリョウが放ったのは…元プロ『毒尾』すらも驚きを隠せないような、あまりに衝撃的な言葉であった。
ソレを聞いて、今日一番の驚愕の声を『毒尾』は漏らしたものの…
しかし、元プロのトップランカーであった裏決闘界の猛者『毒尾』を持ってしても、たった今リョウが放った言葉はあまりに衝撃的すぎたのか。

…当たり前だ。

素材となるモンスターも無しに、『魔法カード』と『罠カード』が融合して、新たな竜が現れただけでも信じられる光景ではないというのに。

あろうことか目の前のガキは、元プロのトップランカーを前にして恐れもなく堂々とそう言い放ってきたのだから。

…強者になればなるほど、デッキと言うのは無駄が無くなり洗練されていくモノ。

けれども、リョウが放ったのはソレとはまるで真逆。ドローしたところで無駄となるようなカードをデッキに入れているという、それはこのレベルに到っている強者とは思えない程に傲慢かつ無駄なデッキの組み方。

…普通であればありえない。デッキに無駄なカードを入れることなど。

そう、いくら【クリティウスの牙】と叫ばれたそのカードが、『毒尾』が見たことも聞いた事もないようなカードであったとしても。

それでも、自分のデッキだけでは使うことも出来ず、あまつさえ相手に依存するかのようなそのカードを…

あまりに堂々と使ってきたリョウの態度が、どうしても『毒尾』には理解できず…

「ふふふざけるなぁ！つつ、使えないカードをデッキに入れるばば、馬鹿がどこに…そそ、それに、僕が【死のデッキ破壊ウイルス】ドローする確率なんて…もも、もし違うカード引いてたら…」

「あ？『もし』…だと？」

「そそそそうだ！おおおお前！もも、もしかしてイカサマ…」

「ＨＡ、裏社会のデュエリストがイカサマ疑って怒るたぁ面白ぇじゃねぇか。腐っても元プロってわけかよ。だが…」

そんな、徐に言葉を荒げた『毒尾』に反し。
眉を微かに動かしながら、『毒尾』が放ったその言葉に強い引っかかりを覚えたような反応を示したリョウ・サエグサ。
それはあまりに狂ったリョウの度胸に対し、驚愕を隠しきれない『毒尾』へと向けた…己の力を疑っている相手への、一蹴と同時に浮かび上がった呆れにも似た感情。
そう、自分のデッキでは仕えないカードを、堂々とデッキに入れていたその度胸も。相手に依存しているどころではなく、相手がドローしているかも相手のデッキにまだ残っているかも分からないカードを欲しソレを引き抜いたことも。
リョウ・サエグサの取ったプレイングは、その全てが偶然にしては出来すぎている、まるでイカサマでもしたのではないかとさえ疑いたくなる代物ではあるのだが…

しかし…

『たら』、とか『れば』とか、『もしかしたら』とか。そんな言葉は『この男』に限っては当てはまらない。
そう、デュエルディスクがイカサマの類に反応しないことは、この世界に生きるデュエリストであるならば当たり前以前の常識中の常識であるのだし…

それに加え、この男は―

「Ｓｏｒｒｙ！生憎、『運』だけは誰にも負けねぇ自信があんだよ！何せ俺には、勝利の女神がついてるんだからなぁ！まだだＺＥ！さっき伏せた魔法カード、【成金ゴブリン】発動！」
「なな成金!?けけけどソレで何が出来る！【ゴッドオーガス】は攻撃力

０…ぼぼ、僕のＬＰはこれで残り３３００に…」
「ＨＡ！アマギとデュエルしておいてよかったＺＥ！ホント良いドローカードだぜコレはよ！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！…ぐッ！ＨＡ、イイ子だぜ、ったく！魔法カード！【ヘルモスの爪】発動！」
「ッ!?ままた知らないカード！いいい、今引いたのか!?」
「Ｙｅｓ！その通りＳＡ！…ぐっ…さぁこい、伝説の竜『ヘルモス』よ！Ｉｔ☒ｓ　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ！」

―！

恐るべき程に良すぎる『運』で、必要なカードをピンポイントで手に入れる。
そんなこと、デュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサにとっては当たり前すぎるいつものスタイルなのであり…

…そうして、主の命を燃やして発動されしは、朱に映える巨大なる爪竜。

それは先程の『クリティウス』同様、封印されし魔法カードから飛び出した実体を持たぬ半透明の爪竜。
しかし、確かなる存在感と魂を燃やしソコに存在しているドラゴンは…
牙の竜と同様に、リョウの身体に相当の負担を強いながらも、今ここに高らかに吼えるのみ。
…そのまま、巨大なる朱の爪竜が。
巨大なる蛮勇へと向かって高らかに吼え…

「俺は伝説の竜『ヘルモス』と…場の【ゴッドオーガス】を融合！」
「こここ今度はモンスターと魔法カードの融合!?」

「融合召喚！Ｃｏｍｅ　ｏｎ！レベル４！【女神の聖弓―アルテミス】！」

―！

【女神の聖弓―アルテミス】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００

そうして…
爪竜と蛮勇が混ざり合い、作り出されたのは聖なる女神の一対の武具。
ソレは形容し難い美しさを放っている、天にも届きそうなほどの聖なる弓矢であり…
まさか、『毒尾』も思ってはいなかっただろう。先の『クリティウス』の衝撃も相当だったというのに、まさか今度は融合素材モンスター『1体のみ』で新たな融合召喚を決める学生がいただなんて。
しかし、この圧倒的窮地から少ないキーカードをピンポイントなドローで引き当て続ける彼の『運』は相当なモノ。
…いや、彼の『運』を褒めることなど、誰が口にしてもおこがましいことこの上ないことではあるのだが…
それでも落ち目と思われた先の【カップ・オブ・エース】での失敗すらも、リョウにとっては成功だったのだと言わんばかりのこのデュエルの流れ。自分ではなく、相手に『キーカード』をドローさせると言う、常識離れしたとてつもない『運』。
それは紛れも無く、リョウ・サエグサという男の『運』の凄まじさを、まざまざと『毒尾』へと見せ付けていることだろう。

そう…それは紛れも無く―

この男の持つ『天運』は、まだまだ落ち目などでは断じてないと言う事であって―

「…ゆ、弓？…攻撃力１５００…だだ、だけど僕にはさっき奪った【速攻のかかし】が…」

「そいつもＮｏだ！なぜなら勝利の女神は、最後はいつも俺に祝福のＫｉｓｓをするんだからなぁ！【女神の聖弓―アルテミス】の効果発動！融合召喚成功時、コイツを【デス・ウイルス・ドラゴン】に装備する！…いくぜ、Ｂａｔｔｌｅだ！【デス・ウイルス・ドラゴン】で、『毒尾』にダイレクトアタック！」

「ッ!?」

…かつてデュエリアで起こった『事変』により、リョウ・サエグサという少年の手に渡った『伝説の竜』のカード。

それはデュエリア本土に封印されていた、古の『神』とも呼ばれる存在の力が分離した…古の時代にデュエリアの地に封印されし『神』から分かたれた、３体の『名を忘れ去られた竜』の力の結晶でもあり…

…一体、そんなカードを何故リョウ・サエグサが持っているのか。

それは今ここでは語られぬ、別の誰かの物語なれど―

今、病変宿せし一体の竜の、その背に構えられし聖弓が『毒尾』へと狙いを定め…

「ばば、馬鹿が！【速攻のかかし】を捨てて効果発ど…」

「馬鹿はどっちＤＡ！この瞬間、【女神の聖弓―アルテミス】の効果発動！相手の発動した効果を…１度だけ無効にする！」

「ひひっ!?」

「言ったろうが！テメェはもう終わりだってな！撃てぇヘルモス！ア

ルテミア・ショットォ！」

――！

「ぎょわぁぁぁぁ!?」

『毒尾』　ＬＰ：３３００→１４００

毒を帯びし聖なる矢が、『毒尾』の足を貫き刺さる。
それは実体化しているからこそ、逃れられぬ一撃となりて『毒尾』を後方へと弾き飛ばすのか。
リョウが取られた【速攻のかかし】すら、止める手立てにすらならないのだとして…毒撒き散らかす深紫の竜が、更に猛り叫びを漏らす。

「ぐ、ぐぐ…けけけど、こここれでお前の攻撃はおわ…」
「まだだぜポイズンテール！ヘルモスが相手のカードを無効にしたターン…装備モンスターは、２回攻撃が出来るようになる！」
「ほへっ!?」

無慈悲なる連撃の宣言が、リョウの口から叫ばれて。
その、どうしようもない避けられぬ連撃に対し…『毒尾』の焦りが見る見るうちに募ってきており、ソレは先程リョウを見くびってトドメを刺さなかったことを今更になって後悔でもしているかのようではないか。
…しかし、もはやソレは後の祭り。そう、後悔先に立たず。今更過去を悔やんでも、もう取り返しなど付かないのだ。
…ここで『毒尾』には、リョウから奪った【速攻のかかし】を使用しないという手もあった。

そうしたならば、ダメージはあくまでも１９００のままにとどめられて、現実となった弓矢に撃ち抜かれたとは言え『死ななければ』次のターンを迎えられたのだから。
けれども、見た事も聞いた事もない『伝説の竜』のカードと…そして『実体化』しているモンスターによる、ダイレクトアタックを喰らうという焦りが『毒尾』に【速攻のかかし】を使わせた。

…デュエルとは、すなわち知識。

そう、この世界に星の数ほどある様々なカードに、強き者ほど数多く精通し…知識を溜め込んだ者ほど、どんなカードを使われても即座に対応して見せるもの。
それは言い換えれば、相手の全く知らないカードを使えることはそれすなわち一つの強さということでもあるのだが…
誰も知らぬ『伝説の竜』、この追い詰められた窮地で。ソレを使えたリョウ・サエグサもまた、言い換えれば土壇場で『毒尾』を超えたということでもあって―

「Ｂｙｅ、下種野郎。レディの敵は…容赦しねぇ！クリティウス、連撃ＤＡ！ウイルス・バースト・ストリーム！」

―！

「ぎょぴゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

『毒尾』　ＬＰ：１４００→０

―ピー…

容赦なく放たれしは、病を集めし脅威の熱線。
その、古の力を取り戻したウイルスカードの化身より放たれた一撃が…
無機質な機械音と共に、残ったＬＰごと『毒尾』を飲み込んだのだった―

「はぁ…はぁ…ＨＡ、汚ぇ悲鳴だぜ…」

そして…デュエルが終わってすぐ。
焦げながらも意識を無くし、泡を吹いて倒れこんでいる『毒尾』を他所に…
消えていく伝説の竜達を見送りながら、苦しげに胸を押さえつつリョウは声を漏らしていて。

「…Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ、お前ら…ったく、ピンチになんなきゃ助けてくれねぇとか、とんだじゃじゃ馬だがよ…」

それは、デュエルの疲労やダメージだけではない。
もっと直接的な…それこそ、自らの寿命を縮めでもしたかのような倦怠感を全身に感じながら、その場に座り込んでしまったリョウ・サエグサ。
…よほど無理をしたのだろう。
今すぐに立ち上がることは到底無理そうであり、あまりの疲労感に飛びそうな意識をリョウは無理矢理に繋いでいる。
本当に、彼の過去に一体何が…
いや、このデュエリアの地で起こったという、『七草』によって引き起こされしデュエリアの地が炎上した『事変』で、かつて何が巻き起こったのか―
それは、今この場では決して語られぬ別の誰かの物語ではあるものの…

「…それに、アマギにも感謝しとかねーとな…【成金ゴブリン】、トレードしといて助かったぜ…」

…最後の【成金ゴブリン】は、先の【決島】決勝第一試合でのデュエルでリョウが自らのデュエルに取り入れるに値すると認めたが故に、彼が先ほどデッキに仕込んでおいたカード。

その、彼の新たなカードの扱いは…どこか、決闘市のＥｘ適正の無いデュエリストにも通ずるモノを見え隠れさせ…

まぁ、遊良とリョウが、試合の後にお互いに予備の余っていたカード…【カップ・オブ・エース】と【成金ゴブリン】をトレードしていたことは、また、別の話ではあるのだが。

ともかく…

「…ぐっ…ＨＡ、スマートじゃねぇなぁ…こんな泥臭い仕事、俺のシュミじゃねーってのに。」

「ほう、『毒尾』を相手に勝利を収めるとは。流石はデュエリア校のトップですね、リョウ・サエグサ君。」

「ｗｈａｔ？」

ダメージに呼吸を荒くしていた、デュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサへと向かって。

…静かに、声をかけてきたのは紛れも無く【白鯨】、砺波　浜臣であった。

しかし、砺波はつい先ほど表で恐るべき敵から入り口を守っていたはず。

そんな砺波の両の手には、引きずられるようにして沈黙している２人の者達の姿が―

「ッ…そいつらは『七草』の…Ｕｎｂｅｌｉｅｖａｂｌｅ…ま、まさかとは思うが、そいつ等を１人で？」

「えぇ、まぁ。」

「ＨＡＨＡＨＡ…とんでもねー化物だぜ【白鯨】…し、死んでるのか？」
「いいえ。殺してはいません。彼らには、まだ話したいことがありますからね。気絶させただけですよ。」
「そうか…」

『塔』の入り口、正面から向かってきていた敵が、天上の力を備えた恐るべき者であるということを…無論、リョウとて察知くらいはしていた。
しかし、ソレがまさかかつてデュエリアの地を大炎上させたデュエル傭兵集団、『七草』の内の２人だったなんてリョウからしても想定外過ぎる敵であったのか―
砺波に引きずられるようにして連れてこられた、意識を失っている『七草』の内の２人。
そんな、かつてデュエリアの地で大暴れした『七草』達が、【白鯨】にやられ気を失っているのを見て…
リョウはどこか、今戦った敵が『七草』出なかったことに心から感謝しているかのような雰囲気を醸し出していて。
…当然だ。
もしも現れたのが『毒尾』ではなく、『七草』の内の誰かだったならばきっと今頃自分は当にやられており…
もしそれが因縁の相手、『伝説の竜』を欲していた『七草』のリーダー、セリであったならばきっと有無を言う暇もなく死んでいたのだから―
…
そのまま砺波は、気を失っているゴ・ギョウとスズシ・ローナを、コンクリートの一室に閉じ込める。
そして、『七草』を２人も倒してきたとは思えぬほどに疲れを見せないままの姿で…
ルキの眠っている医療室の前で、疲労で座り込んでいるリョウへと向かって、労わるように口を開いた。

「さて、まだまだ敵は忍び込んでくるでしょう。ここは任せましたよ。私は入り口の守りを固めます。何かあれば呼んでください。」
「…ＯＫ。」

未だ疲労が凄まじいであろうに、ゆっくりと立ち上がるデュエリアの『ギャンブラー』。
それは、今この非常事態において、自らに出来る仕事を最大限遂行しようとしている男の決意そのモノであり…

「…さぁて、これから何人忍び込んでくるのかねぇ。ま、何人でもいいけどよ…レディを守るのが、男の役目だからＮＡ。」

―…

「えっ!?じゃあリョウさんはルキの護衛に!?」
「ぬぅ…そう言われれば、確かに理事長１人で『塔』を守るのは少々厳しいとは思っていたが…」

敵が溢れた森を抜け、見晴らしのいい高台の下に広がる『草原』へと辿り着いた遊良達一行。
走り続けているその足を、決して緩めぬままで…
刀利から『何か』を聞いたのだろうか、遊良と鷹矢が少々驚いたように声を漏らしていた。
「…多分ね。敵がこれだけ多ければ…ドサクサに紛れて、忍び込んでくる敵もいるはずだから。」

「ならばあの時に何故ハッキリとそう言わんのだ！ちゃんと言っていれば俺とて…」
「…リョウは、素直じゃないから。それに…君達に借りを作りたくなかったんだと思う。」
「借り？」

それは出発の際に、喧嘩別れのような形で袂を分かったリョウ・サエグサに対するフォローでもあるのか。
刀利の口から語られたのは、どこまでも素直じゃない1人の男のカッコつけたがる意地であり…

「…うん。リョウは、君達をすごく気に入ってたみたいだから…きっと、貸し借り無しの対等でいたかったんじゃないかな。」
「貸し借りなし…確かに、リョウさんなら言いそうですけど…」
「ふん、ならば俺も感謝などせんぞ。奴は奴の仕事をした…だから俺達も止まらずに前へと進む。それで良いのだろう？」
「…うん。それでいい。」
「だが、奴1人で本当に大丈夫なのか？いくら理事長が付いているとは言え、敵の中にも相当の手練が…」
「…大丈夫だよ。リョウは強いし…それに…」
「『運』が良いから、ですよね？」
「…ふふ…うん、そうだね。」

短い間とはいえ、魂と魂をぶつけ合いデュエルをした遊良には、リョウ・サエグサという男の力も誇りも大いに理解できているのか。
そう、リョウと付き合いが長い刀利が、リョウを『大丈夫』と言うのならば…それは確かな信頼となりて、遊良達もまたその足を更に前へと進められる。
…彼ならば、きっとルキを守ってくれている。
その確信が遊良にはある。そして遊良が確信を得たのならば鷹矢もまたリョウを信用する。

だからこそ、【紫影】を倒すという最大の目標のために。遊良も鷹矢も、気を取られずに全力で前へと進めるのだろう。

そんな、未だ全速力で『草原』をかけていた遊良達の前に―

突如、高台の上から大きな2つの声が響き渡った。

「まてまてまてぇーい！」
「あ、ここをとおりたければぁー！」
「我らを！」
「あ、倒してからいけぇーい！」

どこか演劇染みたクセのある言葉使いと共に、崖のような高台から飛び降りてきたのは…

顔を白粉で塗り固め、仰々しい着物を着込んだ2人の男達であった―

真っ白に塗られたその顔に、大きな隈取と派手派手な模様を書き刻み…カクカクと顔と手足を動かしながら、遊良達へと向かって威嚇するように立ち塞がって。

「こいつら…今までの敵とは違う。」
「うむ、有象無象どもとは違う…これは、強者の匂いだ…」

…しかし、突如現れた2人組みの敵の特徴的過ぎる恰好に惑わされることなく。

針が振り切るほどに反応している遊良と鷹矢の危機を知らせるセンサーが、目の前に現れた歌舞伎役者のような大男たちに対し、少年達に冷や汗をかかせるくらいに大いに反応しており…

…地獄のような【裏決島】においては、あまりにふざけた恰好と言葉使い。

それでも、突如現れたその敵の纏うオーラは紛れも無い本物で…遊

良と鷹矢の体内では、センサーがずっと煩いくらいに警笛を鳴らし続けているのだ。
…一刻も早く【紫影】の元へと向かわなければならない遊良達からすれば、戦っている暇など無いであろう恐るべき敵。
だからこそ、どうせ逃がしてはくれないのであろうが。それでも、こんな強敵と戦っている場合ではないからこそ…
遊良達には、ここで一目散に逃げつつ回り道をして、目的の場所へと迂回しながら向かうという手もあるのだが…

「鍛冶上　刀利、こいつらか？貴様の言っていた危ない気配とは…」
「…違う。もっと危ない気配が、この先に…」
「ならばこんなところで足踏みしている暇など無い！理事長の言っていた、【紫影】の居場所までもう少しなのだからな！」
「あぁ！蹴散らして…前に進む！行くぞ鷹矢！」
「うむ！」

けれども、ソレがどうしたと言わんばかりに。
掻き鳴らされる煩いセンサーを、無理矢理に押さえつけながらも…戦意を駄々漏れにしながら、勢い良くデュエルディスクを構え始める遊良と鷹矢。

…そう、回り道など、している時間すらも今の彼らには惜しいのだ。

こうしている間にも、学生達は襲われ続けている。ソレ故、遊良も鷹矢も一刻も早く【紫影】を倒して、この地獄のような【裏決島】を終わらせるのだとして…
やるべきことは唯一つ。
立ち塞がる敵を蹴散らし、前へと進むのみ。

そして―

「おうおうおうおう！その意気や良し！」
「我等を、あ、ヒル・ブラザーズと知らずに立ち向かうその意気や良し！」
「タッグ・デュエルのすぺしゃりすとぉ～！」
「あ、ヒル・ブラザーズが相手だぁ～！」

―デュエル!!!!

「『大空洞』に急ぐんだ！」
「うむ！」

戦いは、続く―

―…

ｅｐ９５「竜胆」

いつだって思い出してしまうのは、震えて泣いていた母の姿。
どうして、自分達だけがこんなにも不幸なのか―
そんな思いを常に抱いていた少女の脳裏に焼きついて離れないのは、他人に傷つけられて悲しい顔をしていた母の姿であり…

『…なんでみんな私達をいじめるの？』

…幼いながらに、母に聞いた事がある。どうして、自分達は周囲に嫌われているのか…と。
何もしていないのに。誰も傷つけていないのに。周囲の人間は自分達家族に石を投げ、言葉をぶつけ、生きている事すら強い言葉で否定されたこともあった。
そう、少女の記憶の中には、誰かに何かをした覚えも無いのに…どうして、何故か、一方的に、周囲に嫌われている自分とその家族が物心付いたころからそこには存在していたのだ。
煌びやかな世界とはかけ離れた、ゴミ溜めのような暗い世界に閉じ込められていると言うことにだって疑問を抱ける年齢ではないというのに…
それでも、理由も無く傷つけられ続けることに対し。少女は、母がこんなにも悲しい顔をし続けているのかがどうしても気になったのだろう。
父を知らず、母と兄と3人で、世界の裏側にひっそりと隠れるようにして…
そうやって逃げ隠れするようにしてこれまで生きてきた幼い少女にとっては、理由もわからないのにどうして自分達だけが、そして母がこんなにも周囲から傷つけられるのかがどうしても理解できず…
そんな少女へと、母が言った言葉はこう―

―『…ごめんね…ごめんね…』

…ただ、それだけ。
涙を流しながら、声を震わせながら。
優しく抱きしめてくれた母が、こんなにも哀しんでいると言うことに…驚きを感じつつも、同時にとても悲しくなってしまったのを、少女は覚えていて。
…そう、その時にようやく幼い少女は気が付いたのだ。
涙を流し、崩れ落ちながら自分を抱きしめ震えている母を見たその時に初めて…自分の人生が、『普通』ではなく『異常』なのだという事に―
ゴミ溜めのように暗く、汚い社会の裏側の生活。
それは物心付いた時からソレしか知らない少女にとっては、ある意味『普通』の事ではあったのだろう。
けれども、一度ソレが『異常』なのだという事を理解してしまっては…最早、何故自分達がこんな生活を強いられているのか、そして何故周囲の者達が自分達家族を傷つけるのかが。ソレが、どうしても少女には納得が出来ず…

そうして…

暗く汚い社会の隅で、母は死んだ。
それがいつ頃のことだったのかすら、まだ暦すら理解していなかった少女の記憶は曖昧で。
病気だったのだろう。汚い小屋のような場所で、冬を越せずに野垂れ死ぬようにして…母はある日、事切れてしまっていたのだ。
その、なんともあっけない母の最後を見て…最早少女は、涙も出なかったことを良く覚えている。
当然、この生活を最初から『異常』だと知っていた兄もそう。母の骸を前に、少女の横に立ちながら、涙も枯れ果てたような濁った目で…

―『見返したる…俺らを馬鹿にした奴等を、全員ぶっ飛ばして…そんで、謝らせてやるんや。』
―『…どうやって？』
―『強ぉなるしかない…デュエルで強ぉなって…【王者】になるんや。俺が…お前を守らなアカンのや…』
―『…そう。』

そう、誓った―

それは母のような人生を歩みたくはないという、凄惨な人生を生きてきた子ども達が誓った濁った決意。
けれども、純粋に力を求めるという…ある意味で最も子どもらしい、頑固なまでの純粋な決意。

だから、力を磨いた。母が残してくれた、『この名』が受け継いできたというデッキと…この名が受け継いでいかなければならないという『眼』を頼りに、向かってくる敵の全てに牙を剥き。
だから、命を繋いだ。母のような、暗く汚い社会の裏側で野垂れ死なないように、何をしてでも少女と兄は生き延びた。

暗く汚い世界で、誰にも知られずに死ぬのだけは絶対に御免なのだと…ソレも全ては、かつて『名家』とまで呼ばれ繁栄を極めた『この名』を、地の底よりも更に下にまで貶めたある男の所為。

母が苦しんだ原因。自分達がこんな目に遭っている原因―

いつしか…

生きる事に必死になり続けた少女と兄の心には、母の命を奪った原因、自分達が苦しんだ原因となった…
もうこの世には居ない元凶たる男への…

それはそれは深い…深い深い、深い深い深い

いたあの狂人染みた態度が始めから嘘だったかのような…いや、先ほどの態度と今の態度、そのどちらが『嘘』なのかなど、【紫影】本人以外には絶対に誰にも理解出来ないことではあるのだが…

ともかく…

外ではいまだ学生達が阿鼻叫喚の地獄を奏でているというのにも関わらず、そしてソレを巻き起こしたのが自分だと言うのにも関わらず。

他に誰にも見られていないからか、今の【紫影】の姿と態度は…いつも他人に見せる胡散臭さのみの捻じれた笑みでは断じて無く、外の地獄になど全く興味が無いかのような無気力な表情をしており…

「さて、『七草』で【白鯨】をどれだけ足止めできますかねぇ。もって2時間…いえ、1時間半がいいとこでしょうか。…それまでに間に合えばいいんですけど、ええ。」

彼から零された言葉は、今この島で起こっている犯罪者達による学生の襲撃など、微塵も重要なコトではないかのようにして何やら別の事を考えている様子にも見える代物。

この洞窟のようなだだっ広い空間の中央…何かの儀式に使いそうな造りをした、その台座に力なく寄りかかり…

…【紫影】が今いるのは、『竜巻』吹き荒れる島の、そのさらに『中心』。

外で繰り広げられる喧騒から、どこか隔離されているかのような静けささえ滲み出ている、島の中央に位置する休火山の中腹…

いや、中腹などではない。正真正銘、山の胎内と言ったほうが正しいとさえ思える、そこは文字通り山の内部、体内、胎内と言える、岩肌に囲まれた広い空間…

『大空洞』―

しかし、【紫影】が今現在居る『この場所』は紛れも無く、昨日の予選時にイースト校の天城　遊良とデュエリア校のアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンが戦った場所ではないか。

そう、ほんの少し前に、『ここ』で激しい戦いが行われていたかのような大空洞の岩肌に刻まれた戦いの傷跡は…あまりに真新しく、それでいてあまりに生々しい深い爪痕であるのだ。

ソレは紛れも無く、【紫影】が今居るこの『大空洞』が、昨日に遊良とアイナが戦っていた場所と同じ空間であると言う事の証明であり…

―けれども、高天ヶ原　ルキの『神』の解放を賭けて戦った後、激しい音を立てて崩れ落ちてしまったはずだと言うのに。

そうだと言うのに、今の『大空洞』の様子は崩落など少しも起こった様子も無い、まるで遊良とアイナが戦っていたときの状態そのまま。

まぁ、その真実を知る者などこの場には【紫影】以外に居ないのだから、この場に聞き手が居ない以上は【紫影】とて誰に説明するまでもなく当たり前のように『大空洞』の中で立っているだけなのだろうが。

…下手なデュエルドームよりも広いと思える空間の、天上に空いた穴から注ぎ込む自然光だけが岩肌の空間で広がり、散り、暗いはずの空洞内を照らしているこの空間。

ここが【決島】の中であることだけは確かなものの、島のあちこちで掻き鳴らされている犯罪者達の蹂躙の音が、一切聞こえてこないこの異様な空間。

そんな『大空洞』の中心で、ただ一人立っている『捻じれた男』の表情は…

「…」

ただただボーっとその場に無気力に立っているだけであり、まるでこの地獄を巻き起こした張本人とは思えぬほど、にその顔からは罪悪感も高揚感も感じられないモノとなっていた。

…どこまでも退屈そうに、どこまでも気怠そうに。

こんな地獄を作り上げた者が、こんなにも外の地獄に興味を見せないという事など、あってはならないことだと言うのに。

まるで、自分には全く関係のない事のようにして…一体何を待っているのか、ただただボーっと台座に寄りかかって暇を持て余しているだけ。

…時間を持て余し、暇を持て余し。

何の目的を持ってこの捻じれた男がこんな事をしでかしたのか。それすらも不明瞭なままで、【紫影】はただただ無気力に大空洞の天上を仰いでいるだけであり…

そうして…

一つのあくびを漏らした後に、本当に何もやることがないのか再度【紫影】が虚無に包まれそうになった…

その時だった―

「…おやぁ?ようやく最初のお客様ですか。」

「…」
「ふふっ、おめでとうございます。貴方が到着者第1号ですねぇ。さぁ、どうぞこちらへといらしてください、ええ。」

一転…

そう、今まで浮かべていた無気力な雰囲気から一転。
『誰か』の気配が大空洞に現れたと察知した瞬間に、表情も言葉も雰囲気も、己の何もかもを即座に一転させて、ようやく普段通りの『捻じれた男』へとその身を変貌させ始めた【紫影】。
…それは、この『大空洞』に誰かが近づいてきている気配を察知したからなのか。
『大空洞』の外へと繋がる洞窟のような通路へと、徐に声をかけ始め。
この『大空洞』に到着した、一人の侵入者を手招きするように…

そして…

【紫影】に声をかけられた者が、狭い洞窟の通路から姿を現した…

そこには―

「…【紫影】…見つけた…本物の…【紫影】…」

大空洞に現れたのは、儚く気怠げな1人の少女であった―
それはこの地獄のような【裏決島】では、到底生き残ることなど出来ないとさえ思える程に華奢な体付き。
風に揺れる白髪が、彼女の雰囲気をより一層気怠く儚げなモノと変えている…

―決闘学園ウエスト校3年、竜胆　ミズチ

「おやおやぁ？随分と意外な方が1番乗りでいらっしゃいました

ねぇ。ええと…学生さんですか？ふふっ、よくぞここまで1人で来られましたねぇ、それも貴方のような少女が、ええ。」
「…」
「ふむ…貴方、決勝には出ていませんでしたよね？それなのに、誰よりも早くここまで来られたとは少々驚きました。一体、あれだけの数の敵をどうやって…」
「…隠れるのは得意なの。そうやって、生きてきたから。…でも、流石に数が多かったから、3人と戦ったわ。」
「それでも無傷…ふふっ、いいですねぇいいですねぇ、決勝に出ていないとは言え、中々いい筋してますねぇ貴方。」

誰よりも早くこの大空洞へと辿りついたであろうミズチに対し、どこかミズチを小馬鹿にしているかのような態度と雰囲気でありつつも…
それでも、確かに無傷でここまでたどり着いたミズチの事を、多少なりとも認めているかのような言葉を漏らした、裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…それは【紫影】からしても、まさか大空洞に一番に現れたのが決勝にも出ていなかった少女であったと言うことを意外と思っているからなのか。
阿鼻叫喚と化している島の中を、ほとんど見つからずにここへとたどり着いたそのステルス性は言わずもがな。
ピンキリとは言え、学生レベルでは到底太刀打ち出来ない実力を持った裏決闘界の者達を…3人も相手にしてもなお傷一つ負わずにここへとたどり着いたというだけでも、この場に一番に現れた少女の力が学生レベルを当に超えたモノとなっていることを、【紫影】もまた理解したのだろう。
そして…
「しかし、どうして私がここに居ることを？私の居る場所、ノーヒントなんですけどもねぇ。」

「…山の中に、黒いのが見えたから…」
「ほ?それはどういう…」
「…私には視えるから。そういうのが…」
「はぁ…そうですか…よくわかりませんが……まぁいいでしょう。…さて、私を見つけた貴方には選択肢があります。一つは私と戦うこと。もし私を倒せたら…ふふっ、【裏決島】は、見事あなた方学生達の勝利となります。そしてもう一つは…ここまで来られる力を持った貴方を歓迎いたします。どうでしょう、我々の仲間になりませんか?貴方のような実力を持った子ならば、裏決闘界でも特別な待遇をご用意いたします。力さえあれば、金も命も…何でも、貴女の思うがままに…」
「…いらない。私が望むのは唯一つ…貴方の、死…」
「……」

どこまでもあまりに胡散臭い、【紫影】からの問いかけにミズチが『そう』答えたその瞬間―
なんと【紫影】は、先ほどまで抱いていた少女への興味を…凄まじくわかりやすく急転落させて、見るからに面倒くさいと言わんばかりの顔をし始めたではないか。
…ソレは、ミズチの放った言葉が【紫影】にとってはあまりに聞き飽きた脅し文句だったためか。
先程のテンションから一転。【紫影】は胡散臭い表情から、どこまでも面倒臭いと言わんばかりの表情を醸し出し始め…

「あぁ、貴方、『そっち』の方でしたか…それはそれは、ご苦労様ですねぇ、ええ。」
「…貴方の所為で私も兄さんも…それに、母さんがどれだけ苦しんだか…だから【紫影】、貴方は、私が殺さないといけないの…私が…」
「はいはい、飽き飽きなんですよねぇ本当に。口を開けば『殺す』、『許さない』、『罪を償え』、『謝罪しろ』…私を恨んでいる者は本当に同じ事ばかり言う。復讐の殺意なんてもう浴び飽きてるんですがねぇ…」

「…」

【紫影】の口から発せられるは、反省の色からは真反対の代物。

しかし、明確な敵意をぶつけられ、明確な復讐心からくる殺意を中てられていてもなお…どうしてこの男は全く悪びれる様子もなく、自らの悪行をこれっぽっちも反省する色を見せないのだろうか。

…どんな人生を送ってくれば、嬉々として悪行を重ねるこんな男が出来上がるのか。

自分へと向けられる他人からの殺意も敵意も、自分には関係ないのだと言わんばかりの無責任な態度を崩さず。

まるで、自分の起こした悪行が『悪いことでは無い』かのように振舞い続けるこの男の態度は、どこまでも被害者達を馬鹿にし続ける代物でしかないというのに…

ソレ故、誰にも理解出来ないであろう【紫影】のこの悪びれもせず飄々とした態度は、【紫影】への恨みを持つ人間が見ればきっと我を忘れて怒りのままに襲い掛かるに違いなく…

しかし…

「まぁいいでしょう、一応聞いてあげますよ。それで、貴方は私に誰を殺されたんですか？家族ですか？友ですか？まぁ貴方の歳ですから、親かそれ以上の…」

「…竜胆（りんどう）　蛇蝎（だかつ）。」

「ッ!?」

初めて…

そう、この時初めて―
興味を無くしたかのような表情から再度一転…
まるで、心の底から驚いた様子の表情へと、その顔を再々度変化させた裏決闘界の融合帝、【紫影】。
しかし、それは今【紫影】が聞いた、『誰を殺されたのか』という問いに対する答えなどでは断じて無く…

「貴方…どこでその名を…」
「…私の名前、竜胆　ミズチ…母の名は、ウワバミ。」
「ウワバッ!?……あぁ…ふ…ふふっ…そうですかぁ…そうだったんですかぁ…貴方…いえ、貴女はウワバミの…ふふふ…なるほどなるほど、それはそれは…ふ、ふふっ…でしたら、確かに『貴女だけ』は私を殺してもいい理由を持っていますねぇ…えぇ…」

そしてミズチが、何やら自らの名と、そして何故か『母』の名を【紫影】へと告げると。
徐に、【紫影】は不気味に笑いながら『そう』呟き始め…
…それは、自らの罪を全く他人事のように吐き捨てていた先程の【紫影】の言葉とは１８０。方向が向き変わった言葉。
そう、他人を殺したと言うのに悪びれもせず、寧ろソレを嬉々として語っていた屑の態度とは正反対…まるで、自らの『罪』を認めているかのような【紫影】の言葉。それが、ウエスト校３年の竜胆　ミズチという少女へと向かって、ゆっくりと吐き出され始めたではないか。
…しかし、【紫影】は何故ミズチからの殺意だけを受け止める気に

なったのだろうか。
なにせ、この島にはまだ【紫影】を心から殺したがっている者が他にも居るはずだというのに…
…そう、【紫影】はとうの前から感じている。島の中から、自分へと向けられている、巨大な『炎』のような殺意があるということを。
いや、感じているというよりは、無視していても感じてしまう程に大きな殺意がこの島の中で更に大きくなり続けていると言った方が正しいだろうか。
何せ、徐々にこの『大空洞』へと近づいてきているその『炎』のような殺意。それはよほどの実力を持った者が、よほど大きな恨みを【紫影】へと持っているが故に発せられる文字通り地獄の『炎』のような恨みなのだろう。
けれども、徐々にこの大空洞に近づいてきている、『炎』のような強大な殺意を感じていてもなお…
そんなモノなど、どうでもいいかのように…そう、目の前の少女以外から向けられている他人からの殺意など、『どうでもいい事』のように言い捨てながら。
ミズチから告げられた『名』と、竜胆　ミズチという少女への興味のみを表面上へと浮かび上げつつ…

…【紫影】は、不気味に笑うだけ。

「いいですねぇ…いいですねぇ、面白いですねぇ！いいでしょう、まさかこんな面白いことが起こるなんてサプライズでしたねぇ。ふふっ、生き返った甲斐がありました…でしたら、尚更貴女の相手をしてさしあげなければ。」
「…容赦はしない…貴方は…私が、殺さないと…」
「えぇ、えぇ、もちろんですとも！貴女にはその権利がある、貴女にはそうしなければならない理由がある！ふふふ…恨めしいでしょうねぇ、憎いでしょうねぇ、この私が…ふふ…ふふふ…」

ミズチと【紫影】、二人の間に交わされる言葉には一体どんな意味が込められているのか。
【紫影】に恨みを持つ少女と…少女に殺されるだけの理由を持つ【紫影】。
果たして、ソレらがどういった意味を持っているのか。しかし、ギャラリーの居ないこんな『大空洞』では、そんな事を疑問に思えるような無粋な輩は存在すらしておらず…

こんな、誰も知らない場所で。
誰にも、見られていない戦いが…

―デュエル!!

今、始まる。

先攻は裏決闘界の融合帝、【紫影】。

「私のターン!モンスターをセットしてターンエンドでぇーす!」

【紫影】　ＬＰ：４０００
手札：５→４枚
場：セットモンスター１体
伏せ：なし

デュエルが始まってすぐ。
あまりに少ない動作だけで、そのターンを終えた裏決闘界の融合

帝、【紫影】。
それは、手札が悪かったからこれしか取れる行動が無かった…
とう言うことでは断じてないと言う事が、捻じれた【紫影】の不気味な笑みから誰の目にも明らかな程に…あまりに不気味に、ミズチへと向けられる。

「ふふ…さぁーて、チャンスですよぉ?特別大サービス、千載一遇…まーさーに絶好の機会!私は今、手札事故起こしちゃいましたからねぇ。もしここで、貴女が私のＬＰを削りきれるだけの展開が出来れば…速攻で貴女の勝利が決まります、ええ!」
「…そう。」
「おや、嬉しくないんですか?こんなチャンス、１００年に一度あるかないかの…」
「…私のターン、ドロー。」

しかし…そんな【紫影】を意に介さず。
ただただ静かに淡々と、デッキからカードをドローしたミズチ。
こんなにも胡散臭い【紫影】の雰囲気と、あまりに不気味な【紫影】の佇まいに対し…怯む事も無い彼女の姿は、あまりにも肝が座った学生らしからぬ立ち姿と言えるだろうか。
…ミズチの持つ、【紫影】への恨み。
こんな儚く気怠げな少女が持つには、あまりに大きすぎる怨嗟の炎が目に見える程に…
そのまま、ミズチは手札から1枚のカードを取ると…
「…【捕食植物オフリス・スコーピオ】召喚。その効果で、手札からモンスター1体捨ててデッキから【捕食植物ダーリング・コブラ】を特殊召喚。」
―!!

【捕食植物オフリス・スコーピオ】レベル３
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／　８００
【捕食植物ダーリング・コブラ】レベル３
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１５００
「ほう、【捕食植物】…なるほどなるほどぉ…これは確かに、ウワバミの娘だと言うのも間違いなさそうですねぇ、ええ。」
「…ダーリング・コブラの効果発動。デッキから【融合】を手札に加える。…そのまま【融合】を発動。ダーリング・コブラとオフリス・スコーピオを融合。」

ミズチの頭上に現れる、禍つ揺らめく神秘の渦。
それは竜胆　ミズチという少女が持つ、『融合』のＥｘ適正によって導かれる特殊なる召喚の特別なエフェクトであり…
ミズチの呼び声によって、異なるモンスターが混ざり合いここに現れるは…
「…融合召喚、レベル７、【捕食植物キメラフレシア】。」

―！

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

現れたのは、凶暴化した毒花の一房。
禍々しく蠢くその姿は、まるで牙もつラフレシア。それも意思を持って巨大化した、獲物を貪り喰らう花の化物が、今にも【紫影】へと襲いかからんと滴りを零し…
植物であるにも関わらず、意思を持ち獲物を喰らう、紛れも無い捕食者側に立ったモンスターであって。

「まずは一体…さて、どんどん召喚してきてくださぁい？上手く行けば、このターンで私を倒せるかもしれま…」
「…バトル。キメラフレシアでセットモンスターに攻撃。」
「ほ？」

そして―
【紫影】の意表を突くかのように、毒花の一房へと攻撃を命じた竜胆ミズチ。
そのまま、キメラフレシアがセットモンスターへとその太い蔓を鞭の如く撓らせ打ち鳴らし…
「セットモンスターは【シャドール・ヘッジホッグ】。リバース効果発動。デッキから【影依融合】を手札に加えまぁす。」
「…カードを1枚伏せてターンエンド。」

竜胆　ミズチ　ＬＰ…４０００
手札…6→3枚
場：【捕食植物キメラフレシア】
伏せ…1枚

そのまま、反転した影の針鼠を意識することもなく…
【紫影】へと傷を負わせることもなく、ミズチは今、静かにそのターンを終えたのだった。

「私のターン、ドロー。…貴女、やけに慎重ですが…もしかして、意気込んできた割りには相当恐がってます？まぁ、その気持ちも分からなくもありませんが…貴女のような少女が、1人で私に挑むなんて無謀も無謀ですからねぇ、ええ。」
「…別に。」
「ふふ、隠さなくても大丈夫ですよぉ？折角の忠告を無視して、私にダ

メージを与えることなくターンを終えたのがその証拠…更に融合召喚していれば、このターンで貴女は勝てていたと言うのに。」
「…」

すると、ターンが移り変わってすぐに。
儚く気怠げなミズチを煽るように、棘のある言葉をミズチへと投げつけた【紫影】。
それは、どこまでも竜胆　ミズチという少女を下に見ているという、緩みきった【紫影】の歪んだ気分が口に出ていると言うことなのだがろうが…
…しかし、【紫影】の言った通り。
【紫影】のセットモンスターは、場に影響を与える事の無い【シャドール・ヘッジホッグ】であったのだから、更に展開していればこのターンに【紫影】のＬＰを０に、もしくは大ダメージを与えられていたというのに。
…恨んでいる人間を前にして慎重になっているのか、それとも復讐心だけが先行して自身の気持ちがついて来ていないのか。
まぁ、いくらミズチが学生レベルを超えている力を持っているとは言え、そしていくらその見た目から感情を読み取ることが出来ないとは言え…
彼女もまだ１８歳という、うら若き少女であるのだから、【裏決島】という惨状を巻き起こした張本人を前に、多少なりとも恐れを感じていたとしてもソレはある意味当然とも言えるのだが…
「…無駄。どうせこのターン、ダメージは通らなかったから。」
「ほ？」

けれども…
どこまでも苛立ちを覚えそうな、【紫影】の言葉をその耳に入れても。
ミズチはどこまでも冷静なまま…

「…貴方、手札に【バトルフェーダー】を持ってる。だから、ダイレクトアタックしても無駄。」
「随分な自信ですねぇ。何故そこまで言い切れ…」
「…私には『視える』って言った。言葉の通り…貴方は、『この意味』をわかってるはず。」
「…」

裏決闘界の融合帝を前にしてもなお、恐れも無くそう断言するミズチの言葉。
それはミズチの『眼』に、常人では視えないモノが見えているが故の自信なのか…
…果たして、竜胆　ミズチには『何』が見えているのか。
そんなこと、見えざるモノを見通す『眼』を持った竜胆　ミズチ自身にしかわかりえぬことではあるのだろうが…
しかし、ミズチの持つその『眼』に対して『何か』を知っている風な【紫影】が、その捻じれた口を閉ざした様子から考えれば。彼女の言ったことが、紛れも無い本当のことなのだという事は誰の目にも明らかであると言えるだろう。
…そう、普通であればありえない。見えないはずの相手の手札を、カード名ごと断言することなど。
そして、これまでの竜胆　ミズチにもこんな芸当など出来なかったはずではあるのだが…
しかし、ソレを疑わせぬ異様な重圧を放ち始めている今の彼女。そう、もしきっかけがあったとすれば。昨日の【決島】の予選の時、イースト校２年の天宮寺　鷹矢とのデュエルが彼女にとっての分岐点だったのだろう。
その証拠に、彼女の『眼』が昨日ほどとは行かぬまでも、少々大きめに見開かれ始め異様に光りつつ…
「何を言っているんですかねぇさっきから。貴女の言ってることはよ

く理解できませんねぇ、ええ。」
「…苛立たせようとしても無駄。貴方の命を取るまで、私は油断しない。」
「…はぁ、可愛げがありませんねぇ。少しくらい右往左往してくれた方が可愛げを感じますのに。…まぁいいでしょう、魔法カード、【影依融合】発動。デッキから【シャドール・リザード】と【ペロペロケルペロス】を融合。融合召喚、レベル１０！【エルシャドール・シェキナーガ】！」

―！

【エルシャドール・シェキナーガ】レベル１０
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／３０００

それでも、そんなミズチからの殺気を躱すかの様に。
【紫影】の場に現れたのは、巨大なる要塞に縛り付けられた巨大なる操り人形のモンスターであった。

―【シャドール】

それは影に囚われた者達の魂が反転し、操り人形へと姿を変えてしまったモンスター達の総称。
多種族達を影へと引きずり込み、深淵の融合にて混ざり合い…
闇を齎す影の如き、混沌なりし力を持ちて。世界の終焉を呼び覚まさんと、不気味に漂い光を覆う。

「さぁて、行きますよぉ？墓地に送った【シャドール・リザード】の効果発動！デッキから【シャドール・ドラゴン】を墓地に送りまぁす！そして【シャドール・ドラゴン】の効果も発動！貴女の伏せカードを１枚、破壊しちゃいまーす！」
「…破壊される前に罠カード、【捕食計画】発動。デッキから【捕食植

物コーディセップス】を墓地に送って、【エルシャドール・シェキナーガ】とキメラフレシアに捕食カウンターを置く。」
「ふふっ、でしたら続けて魔法カード、【融合】発動！手札の【シャドール・ビースト】と【バトルフェーダー】を融合！」
「…【バトルフェーダー】を？」
「どうせバレてるのなら使わせてくれないでしょうから、持っていても意味ないですからねぇ。さぁ、現れなさい！融合召喚、レベル５！【エルシャドール・ミドラーシュ】！」

―！

【エルシャドール・ミドラーシュ】レベル５
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／　８００

―更に、続けて。
【紫影】の場に現れたのは、少女の姿を模したような…奇怪な竜の背に立った、影の操り人形の１体。
まるで世界の終焉を呼んでいるかのようなその姿は、見る者全てに恐怖を与え…

「【シャドール・ビースト】の効果で１枚ドロー！…ふふっ、【エルシャドール・ミドラーシュ】が居る限り、お互いに１度しかモンスターを特殊召喚出来ません。そしてミドラーシュは効果では破壊されない…更に更にシェキナーガは、相手がモンスター効果を発動したらソレを無効にして破壊できる！これでキメラフレシアは効果を使えませんねぇ…貴女のような華奢な少女が、この実体化したデュエルにどれだけ耐えられますかねぇ、ええ。」
「…」
「では行くとしましょう！【ドーピング】をミドラーシュに装備してバトルフェイズ！ミドラーシュで、キメラフレシアに攻撃ぃ！」

―！

「…ッ！」

ミズチ　ＬＰ：４０００→３５００

襲い来るは５００のダメージ。しかして大きな針が刺さったような、鋭い痛みがミズチを貫く。

そう、影に囚われし人形から放たれた、紫の閃光がキメラフレシアを一瞬の内に貫き消し去ったのだ。

そしてミズチへと襲い掛かる、ソリッド・ヴィジョンではない実体化した本物の衝撃の余波。

…それは、たかだか５００のダメージとは言え。

リアル・ダメージルールの時とは比べ物にならない程に痛みを増した、この実体化したデュエルの衝撃は容赦なくダメージを受けた者へと襲いかかり…

…そのまま、間髪入れずに。

続けて、影の人形要塞がその砲門を開き始める。

「…このくらい…」

「ほう、この程度ではまだ声を上げませんか…しかしコレではどうでしょう！【エルシャドール・シェキナーガ】でダイレクトアタック！」

「…させない、直接攻撃宣言時、手札から【捕食植物セラセニアント】の効果発動。セラセニアントを守備表示で特殊召喚。」

【捕食植物セラセニアント】レベル１

ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　６００

しかし…

ミズチとて、ただでやられるつもりは更々無く。

影の人形要塞から、紫の砲撃が放たれる前に…身を守らんと自身の

場に特殊召喚せしは、小さき緑の草たる葉蟻、しかして毒持つ捕食の草花であった。
…それは、いくら【紫影】の操るシャドールモンスターが強力であろうとも。
そして自らが傷付く事すらもいとわず、この微塵も怯まぬミズチの立ち姿はどこまでも冷たい目線で【紫影】の命だけに狙いをすましているのか。
…破壊されれば手札を増やせ、あわよくば【エルシャドール・シェキナーガ】も道連れにでき…場に残れば、次のターンに融合召喚の素材にも出来るこのカード。
そう、己が駆る、捕食植物モンスターの力を最大限に発揮せんと。
ミズチはどこまでも静かに、どこまでも冷静に…

「ま、いいでしょう。素材を残してターンを終える方が面倒な事になりそうですし…シェキナーガの攻撃続行！セラセニアントを攻撃！」
「…ダメージ計算後、セラセニアントの効果発動。【エルシャドール・シェキナーガ】を破壊…そして破壊されたセラセニアントの効果で、デッキから【捕食生成】を手札に加える。」
「はいはい、構いませんよ。ですが私もシェキナーガの効果で、墓地から【影依融合】を手札に戻しまぁす！私はモンスターを裏守備表示でセット、カードを1枚伏せてターンエンドです。」

【紫影】　ＬＰ：４０００
手札：6→1枚
場：【エルシャドール・ミドラーシュ】
【セットモンスター】
魔法・罠：【ドーピング】、伏せ1枚

そうして…
【エルシャドール・シェキナーガ】を、微塵も守る素振りを見せず。
自軍を破壊されたことを気にも留めることなく、ミズチの抵抗を二

タニタした捻じれた笑みで見下しつつ…【紫影】は再び、そのターンを終えた。

「…私のターン、ドロー！墓地のキメラフレシアの効果発動！デッキから【再融合】を手札に加える！そのまま装備魔法、【再融合】発動！ＬＰを８００払って、墓地からキメラフレシアを特殊召喚！」

―！

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
ミズチ　ＬＰ：３５００→２７００

そして、ターンが移り変わってすぐに。
再び、凶暴化せし毒花の一房を地中から呼び出した竜胆　ミズチ。
…しかし、それは少々大きな代償。
そう、いくら自らＬＰを減らす行為には痛みを伴わないとはいえ、どんどんと開いていく【紫影】とのＬＰの差は…
そのままミズチの求める【紫影】への勝利への距離が文字通り遠のいていくことにもなるというのに。

「ほう、自らＬＰを減らすとはいい度胸ですねぇ…」
「…もう【バトルフェーダー】はない、なら攻め方を変える。キメラフレシアの効果発動。【エルシャドール・ミドラーシュ】を除外！」
「罠発動、【堕ち影の蠢き】！デッキから【シャドール・リザード】を墓地へ送り、セットモンスターを表側守備表示にしまぁす！」
「…だけどミドラーシュは除外される！」
「ええ、ええ、良いですとも。リバースした【シャドール・ファルコン】と、墓地に送られた【シャドール・リザード】の効果発動。まずはリザードの効果でデッキから【シャドール・ハウンド】を墓地に送り、ファルコンの効果で【シャドール・ビースト】を墓地から裏側守備表

示で特殊召喚！更に更にぃ、リザードの効果で墓地に送られたハウンドの効果も発動！キメラフレシアを守備表示にしちゃいますよぉ！」
「…」

一つ一つの行動が、連鎖となりて繋がる【紫影】のシャドールモンスター達。
シンクロやエクシーズと比べて、アドバンテージを失いやすい融合召喚を補うかのように、行動すればするだけ効果が連鎖するこの展開は…
まさに相手の心を揺さぶる術に長けた【紫影】らしい、どこまでも捻じれた行動とも言えるだろう。

裏決闘界の融合帝―

その称号は飾りではない。
怒りを煽る言動と、恐怖を煽る捻じれた佇まい。あまりに不気味なその雰囲気は、誰だって相手をしたくないとさえ思わせる異様な気持ち悪さを相手へと与え続けており…
そしてそれ以上に、純粋なる『力』によって裏世界の者達をひれ伏せ続けていた【紫影】の実力とカリスマ性は、死んだとされてから30年以上経った現在においても、相当たる力の象徴となりて発揮され続けるのか。
…じりじりと開いていく【紫影】との差。
それはまるで、一介の学生が裏決闘界の融合帝へと1人で挑んできたことへの罰を、【紫影】自らが与えているかのようでもあり…

それでも…

「…装備魔法、【捕食接ぎ木】発動！墓地から【捕食植物サンデウ・キンジー】を守備表示で特殊召喚！」
「サンデウ・キンジー…あぁ、最初のオフリス・スコーピオですか。抜

け目がありませんねぇ、ええ。」
「…サンデウ・キンジーの効果発動。【融合】なしで融合召喚できるから、私はキメラフレシアとサンデウ・キンジーを融合！融合召喚…レベル８！【捕食植物ドラゴスタペリア】！」

―！

【捕食植物ドラゴスタペリア】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１９００

ミズチとて、止まるつもりはないのだと言わんばかりに。
大空洞に反響するようにして現れたのは、竜を模した毒花の一声…
蠢く竜花、飛び立つ蛇華。毒の霧にて生育せし、怪しく蠢く竜の草花。

…そう、たとえ相手が、表の【王者】に匹敵する裏世界の帝王なのだとしても。

そして【エルシャドール・ミドラーシュ】や、【紫影】のシャドールモンスター達の多彩な効果のうねりによって、思うようにデュエルが進められずとも…
自らが抱える、燃え上がるような復讐心によって怯むことなく。
【紫影】への強い恨みから、毒の竜花が叫びを上げる。

「…まだ。墓地の【捕食計画】の効果発動。融合召喚に成功したから、【捕食計画】を除外して裏側表示の【シャドール・ビースト】を破壊する。」
「ですがビーストの効果発動！デッキから1枚ドローしちゃいまぁす！」
「…構わない！バトル、ドラゴスタペリアで、【シャドール・ファルコン】に攻撃！」

―！

そうして…

竜が如き草花の、毒の咆哮が大空洞に轟いて―

しかし、その毒の咆哮は【紫影】に届く事はなく…【紫影】の場にて身を守っていた、守備表示の【シャドール・ファルコン】にぶつかり…

「…ふふっ、残念でしたねぇ、また私にダメージを与えられなくて。」

「…まだ、いい。その時じゃないから…」

「強情ですねぇ。まっ、自分だけＬＰ減ってきているのでは慎重になるのも当たり前でしょうが。しかし貴女、意気込んできた割にはイマイチですねぇ…最初の勢いはどこへ行ったんでしょう。私を殺すとかなんとか息巻いていませんでしたっけぇ？期待はずれもいいとこですねぇ、あぁ恥ずかしい恥ずかしい。」

ミズチからの攻撃を受けてもなお、忌々しいその捻じれた口を閉じることなく。煽りを含んだ捻じれた言葉を、ただただ放り続ける捻じれた男、【紫影】

…一体、どうしてこの男は相手を苛立たせるような言葉を選んで、わざと相手を煽ろうとしてくるのか。

まさに性根が腐っているとしか思えない、下種で下品な人間の屑。流石はかつてそう言われ続けて来たことだけはある、とことん低俗なりし裏の人種であり…

…戦う相手への敬意などない。対戦相手への礼儀などない。

こんな不愉快な戦いを、デュエルと呼んでもいいのだろうか。【紫影】の言動、行動、その全ては、ただただ相手をイラつかせ不愉快にさせるだけ。どこまでも捻じれた、あまりに無作法な代物ではないか。

しかし…

「…まだデュエルは終わってない。」
「ええ、ええ、わかりますよお？貴女、さっきからどこか余力を残してターンを終えていますものねぇ。待っているんでしょう？私に牙が届く時を…私に隙が出来るのを。ま、そんなモノありませんが、ええ。」
「…」

そんな中でも、【紫影】の放った言には一概に斬って捨てられない部分も確かにあるのか。
そう、ミズチが、いくら攻撃を仕掛けているとは言え…
ここまでのミズチのデュエルの流れは、攻めていると言うよりもどこか守りに身を置いているかのような、デュエルが始まる前に放っていた怨嗟の強さとは裏腹に、少々その攻撃は抑え気味となっているのだから。
それは、【王者】に匹敵する裏決闘界の融合帝を相手に、防戦一方になっている…
というわけでは断じてないものの、その姿はまるで『何か』を待っているかのような態度にも見える立ち振る舞いであり…

「…カードを2枚伏せてターンエンド。」

ミズチ　ＬＰ：３５００→２７００
手札：3→1枚
場：【捕食植物ドラゴスタペリア】
伏せ：2枚

【紫影】の言葉が本当ならば、一体ミズチは『何』を待っているのか。
己の持つ見通す『眼』で、【紫影】のデュエルを見極めつつ。いやらしく攻め立ててくる【紫影】からの攻撃を、ＬＰを減らしながらも綱渡りのようなデュエルで守りながら…

ミズチは今、再び自らのターンを終えた。

「私のターン、ドロー！」

「…このスタンバイフェイズにキメラフレシアの効果発動！デッキから【プレデター・プライム・フュージョン】を手札に加える！」

「ふふ、頑張りますねぇ…では行きますよぉ？魔法カード、【終わりの始まり】を発動！墓地のリザード2体、ビースト、ドラゴン、ハウンド、計5体の『シャドール』を除外して3枚ドロー！そして再び【影依融合】発動！」

けれども、【紫影】もミズチの狙いなど意に介さず。

終焉を呼ぶ漆黒の魔法カードによって、早々に手札を補充したかと思うと…

先のターンと同様に、デッキからの融合を行えるその『影』なる融合魔法によって。再び【紫影】の場に、歪んだ神秘の渦が渦巻き始めて。

「デッキから【シャドール・リザード】と【ライトロード・ライデン】を墓地に送り融合！来なさい、レベル8！【エルシャドール・ネフィリム】！」

―！

【エルシャドール・ネフィリム】レベル8

ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

現れたのは、影の糸にて吊り上げられし…無表情なる無機質な人形、神をも落とす巨大なる無情。

…それは先のターンに【紫影】が呼び出していた、【エルシャドール・シェキナーガ】の上部に縛り付けられていた巨大なる操り人形の本体。

ソレが、今度はその身にて降臨し…その、圧倒的なる『無』の重圧にて、どこまでもどこまでもミズチを攻める。

「融合召喚成功時にネフィリムの効果発動！そして素材となったリザードの効果も発動しちゃいまぁす！」

「…させない！ドラゴスタペリアの効果発動！ネフィリムに捕食カウンターを乗せて、発動した効果を無効に！」

「しかしリザードの効果は発動しますねぇ！デッキから【シャドール・ファルコン】を墓地に送り、続いてファルコンの効果で自身を墓地から裏守備表示で特殊召喚！そして【シャドール・ドラゴン】を通常召喚でぇーす！」

―！

【シャドール・ドラゴン】レベル４
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　０

そして止まらない。

連鎖する影の効果の数々、増え続ける【紫影】の影のモンスター。

シンクロやエクシーズと比べ、多用すればアドバンテージを失いやすい融合召喚をすればするほど…

【シャドール】の効果は連鎖していき、それはそのまま【紫影】の勢いとなりてミズチを無情に襲い続けるのか。

ソレを、どうにか『眼』で見極めつつ的確に抵抗を見せるミズチではあるものの…

「さて、また【エルシャドール・ミドラーシュ】で封じてもいいんですが…それでは面白くありませんよねぇ？…匂いますよぉ？貴女、先程からずっと『待っている』ようですし…」

「…」

「ふふ、図星ですか。…まぁいいでしょう、では見せてあげましょうか

ねぇ！【紫影】と呼ばれる、この私の『名』を！行きますよぉ、【融合回収】を発動し、【融合】と【バトルフェーダー】を手札に戻す！そして魔法カード、【融合】発動！場のドラゴンとファルコン…2体の闇属性モンスターを融・合！」

【紫影】もまた、ミズチの待っている『狙い』を既に感じ取っているのか、先程まで行っていた融合召喚とはどこか雰囲気を画しながら。

ミズチの狙いに気付いてもなお、しかしあえてソレに乗っかるようにして…

【紫影】の捻じれた宣言が大空洞へと木霊し始めたではないか―

そして―

「禍つ紫影の揺らめきよ、世界の全てを包み込めぇ！」

叫ばれしは狂言、木霊せしは凶声。

それは禍々しく凶暴な、そしてあまりに捻じれた歪なるオーラ。

昨日も、この『大空洞』に召喚された存在。しかして昨日の少女が呼び出したモノとは、圧倒的にその存在感が違う存在を、【紫影】は今まさに呼び出さんとしているのか。

歪み捻じれる神秘の渦より、禍々しく呼び出されし【紫影】の『名』が…

今、ここに―

「融合召喚！現れなさい、レベル8！【スターヴ・ヴェノム・フュージョ

ン・ドラゴン】！」

―！

【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

…それは、あまりに禍々しき姿であった。
毒々しさが牙を剥き、飢餓の咆哮が大気を千切り…
虚空にも似た虚ろな目で、視界に映ったモノ全てを喰らいつくさんと…見た者全てに恐怖を生じさせる、意思を持った飢餓そのモノ。
その異色で異端なる異質な異様は、毒々しくも艶かしく蠢く畏怖そのモノであって。

…そう、これが、このモンスターこそが。狂気に染まった捻じれた男、【紫影】の『名』そのモノ。

対戦相手の本能へと、直接訴えかけるかのような紫毒の狂気と奇怪な咆哮。この、あまりに歪で異質なる畏怖を駄々漏れにしている、この捻じれた蠢きを魅せる毒の竜こそ…
かつて世界が畏れた、世界がその存在を抹消した【紫影】と呼ばれた存在そのモノなのだ。
決して相対してはならない狂気を放つ、捻じれた男と『同じ雰囲気』。そんなモノを駄々漏れにしている、出会ってはならない毒そのモノであり…

「…スターヴ・ヴェノム…これが、【紫影】の…」
「ふふっ！私がこの子を出すのを待っていたんでしょう？墓地に送ら

れた【シャドール・ドラゴン】と、融合召喚に成功したスターヴ・ヴェノムの効果発動！ドラゴンの効果で伏せカードを1枚破壊し、スターヴ・ヴェノムの攻撃力をドラゴスタペリアの攻撃力分アップしますよぉ!?」

「…ッ！破壊される前に速攻魔法、【捕食生成】発動！手札の【プレデター・プライム・フュージョン】を見せて、スターヴ・ヴェノムに捕食カウンターを乗せる！そしてスターヴ・ヴェノムの発動した効果を無効に！」

「いいですねぇいいですねぇ！ですが効果は無効となりますが、攻撃力は2体とも充分！ではバトルです！まずはネフィリムで、【捕食植物ドラゴスタペリア】に攻撃ぃ！」

―！

「…くぅっ…」

ミズチ　ＬＰ：２７００→２６００

先ず始めに襲い掛かったのは、無慈悲なる無表情の無機質なる人形。

いくらドラゴスタペリアの効果によって、発動した効果が無効となってはいても…

攻撃力はミズチの場のドラゴスタペリアを、たった１００とはいえ超えているのだから、その衝撃の余波が実体化した衝撃となりて、華奢な体躯をした竜胆　ミズチへと襲い掛かって。

「…墓地の【捕食生成】を除外して、戦闘破壊の身代わりに…」

「おや、まだ耐えますか…健気ですねぇ。ですがまだ終わりませぇん！スターヴ・ヴェノムでドラゴスタペリアに攻撃、デッドリー・フレア！」

―！

「…うあっ!?」

ミズチ　ＬＰ：２６００→２５００

そして続けて襲い来るは、【紫影】なりしスターヴ・ヴェノムの、火よりも熱い毒咆の響き。

…たった、２００のダメージ。

しかし昨日のリアル・ダメージルールのモノとは比べ物にならない重い衝撃が、２重となりてミズチを襲うその痛みは…

果たして、一人ＬＰを減らし続けるミズチに、どれだけの痛みを与え続けているのか。

もしもミズチが、【捕食生成】を使用してダメージを２００に抑えていなかったとしたら…きっとミズチは、スターヴ・ヴェノムのダイレクトアタックをその身に受けていたことだろう。

…それは、２８００という額面上の数値で片付けられる状況ではない。

これは、実体化したデュエル―

スターヴ・ヴェノムが放った毒の炎をその身に喰らえば、いくらＬＰが残っても良くて意識不明…いや、確実に死んでしまうのではないかとさえ思える威力を、まざまざとミズチへと見せ付けてきたのだ。

…【紫影】の名、スターヴ・ヴェノム。

【紫影】の邪念が、そのまま形となったかのような禍々しきそのうねりは…【エルシャドール・ネフィリム】から受けたダメージよりも、さらに重いモノとなりてミズチを襲った。

そう、【紫影】の歪なる捻じれた雰囲気が、そのまま形を得たかのよ

うなこの紫毒の竜は…どこまでもミズチへと牙を剥き、まるで【紫影】という男その物のような光の無い目で竜胆　ミズチを見下し続けていて―

ソレ故…

直撃ではなかったにしろ、ダメージを与えられた所為か、あまりに強い憎しみの視線で、スターヴ・ヴェノムを睨みつける竜胆　ミズチ。

それは、【紫影】の名が出てくるのを彼女は『待っていた』ということでもあり…そして、それ以上に強い憎しみを【紫影】と【紫影】の名に抱いているということでもあって。

「ふふ、そんなに見つめられると照れますねぇ。【強欲で貪欲な壷】を発動。デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー。…カードを３枚伏せてターンエンドです。」

【紫影】　ＬＰ：４０００
手札：３→１枚
場：【エルシャドール・ネフィリム】
【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】
伏せ：３枚

そうして…

どこまでもミズチを舐めた態度で、しかし重厚にその場を整えて。

再度、油断だらけの口調のままでそのターンを終えた【紫影】。

普通であれば、デュエルの最中に油断を態度に表してターンを終えることはただの命取りであるはずだというのに…

けれども、そんな油断をあえて見せ付ける【紫影】の態度は、どこまでもどこまでも竜胆　ミズチという少女を舐め腐っているということでもあるのだろう。

…まぁ、ソレも当然か。

何せ、デュエルの流れは完全に【紫影】のモノ。ミズチとて、なんとか耐えてはいるものの…それでも、ジワジワと広がるＬＰの差が、

【紫影】とミズチの距離を文字通り広げているのだ。
そう、いくらミズチが、ギリギリで【紫影】の攻撃を耐えているとは言え。
ミズチの取っている手は、全てが最小限かつ最低限であり…守り主体であったとはいえ、一つ間違えれば直撃を食らってしまうような攻防を、最初のターンからミズチはずっと続けているのだから、裏決闘界の融合帝である【紫影】からすればこのデュエルは遊び半分で群がる羽虫を手で払っているにも等しいとさえ感じているのか。
ミズチと【紫影】の差は広がるばかり。だからこそ、【紫影】はどこまでもミズチを見下した態度のままで…

「しかし、よくこんなギリギリの手でここまで耐えますねぇ。まるで綱渡りを見ているようです、ええ。」
「…見えてたから…貴方の手札…どんな展開をするのかも…その光景が…」
「ほう?」

それでも憎むべき【紫影】に、こんな態度を取られてもなお。
ミズチはまだまだ戦意を捨てず、傷付きながらもデュエルディスクを構える腕に力を込め続けるのみ。
…そう、元より決闘界の【王者】と同じ力を持つとされる、裏決闘界の【三帝王】を前に。
ミズチとて、無傷だとか快勝だとか、そういった自分に有利すぎる結末などそもそもからして想定してなどはいない。
…いや、今の彼女の実力では、勝てる見込みすら見つけられていないのかもしれない。
けれども、ミズチは【紫影】への恨みも戦意も捨てないまま…そう、【紫影】へと抱いている深い深い恨みを胸に、ただただ【紫影】の命を狙う蛇の牙を研ぎ澄まし続けているのだ。
…プロデュエリストの兄を持つとは言え、一介の学生でしかない彼女がここまで【紫影】と戦えているのも、偏に彼女の持つその『眼』に

よるモノが大きいのでは無いか。
そう、彼女の持つ、全てを見通すと伝えられるその『眼』。この【決島】で更なる覚醒を見せたその『眼』を頼りに、裏決闘界の融合帝を前にしても必死になって喰らい続ける。

「…貴方が伏せたのは【デモンズ・チェーン】が2枚と【瞬間融合】！この『眼』があるから、私はまだ戦え…」
「ご大層な自信ですねぇ。貴女、その『眼』が何なのか知ってるんですかぁ？その、得体の知れない、不気味な『眼』のことを…」
「…知ってる癖に…この『眼』は竜胆が受け継いできた力…いつかくる『日』のために…未来のために、竜胆が受け継いでいく世界を救う為の…」
「…ぷっ、ぷぷぷぷぷぅ！もういいですよぉそんな力説しなくても！笑わせないでくださいよぉ！」

しかし…ミズチが放った言葉に対し。
嘲笑というにもおこがましい、下品な捻じれた笑いが大空洞へと響き渡った―
それはミズチの零した、『竜胆』が受け継ぎ続けているという役目の伝承に対し…
『竜胆』のことを何故かよく知っている風の【紫影】が、根底から嘲笑っている笑いとなりてミズチの耳へと届けられたということではあるのだが…

「ぷぷぷぅ！そんな『眼』に世界がどうとか未来がこうとか、そーんなご大層な役目なんてあるわけ無いじゃないですかぁ！本当に何も知らないんですねぇ、ええ。」
「…何を…」
「ま、どうせ分家筋に、名家と呼ばれていた頃の間違った伝承でも吹き込まれたんでしょう。…健気ですねぇ、そんな『眼』にそこまでの夢を持つだなんて。ま、そもそも貴女のような少女では、その『眼』の

力を最大限に引き出す事など出来ないでしょうが。」
「…うるさい！…貴方に何がわかるの？元はと言えば、貴方の所為で竜胆の『名』が…」
「ふふふふふ！結構結構実に結構！膨れ上がった力を勘違いしている家なんて、潰し甲斐がありますからねぇ、ええ！」

しかし、一体どうして【紫影】がここまで『竜胆』の名についてミズチへと一方的に語れるのか。
裏決闘界の融合帝…彼への恨みを持つ者は、世界中にいまだ数多く存在しているというのに。命を命とも思わぬ屑の中の屑である【紫影】が、唯一自分への復讐の権利を持つと認めたのは…何を隠そう竜胆　ミズチただ一人。
そんな、かつて世界中から嫌われた、現代ではその存在その物が無かったことにされている男が。
今こうして、1人の儚く気怠げな少女に殺意を向けられているという光景だけでも異常であると言うのに。
それでも、こんなにも強い殺意の中でも。【紫影】の纏う雰囲気は、どこか子ども相手に手抜きをしているような態度のままで…

「…私は諦めない…貴方を殺して、竜胆の罪を清算して…兄さんと一緒に、竜胆の『名』を復興してみせる！」
「こんな糞のような名前によくもまぁそこまで…それに貴女とは初対面なのに、よくもまぁここまで私に恨みを抱けますねぇ。」
「…ッ…とぼけないで…貴方にはわかってるはず…私が、貴方を憎む理由を…」
「…」

果たして、竜胆　ミズチをここまで突き動かす深い恨みとは一体『何』なのか。
現在高等部3年の竜胆　ミズチが生まれるより、ずっと前に死んだとされて…今この時まで、表社会から完全に抹消されていたはずの

【紫影】へと抱くは、決して消えぬ怨みの炎。
【紫影】からの嘲笑によって、ミズチの脳裏にはかねてから抱いていた【紫影】への恨みが更に強くなり続けるのみであり…
それと同時に、ミズチの脳裏には【紫影】への恨みを抱くに到ったきっかけが、無意識に浮かび上がり始め…

―…

母がこの世を去った後も、少女は兄と共に必死に生きた。
暗く汚い世界の裏側から、煌びやかな表の世界に飛び出す為に…母の墓前…いや、墓などない、乱雑に埋めた母の骸が埋まっている場所の前で、自分達だけは絶対にこんな死に方などしないと誓いを立てて。
そう、生きる術など知らない少女と兄は、それでも死を待つだけの社会の裏側から、その身一つで逃げ出したのだ。
…当てなどない、金などない、頼りなどない子どもだけで。
それは長らく裏社会の隅に隠れ住んでいた幼い兄妹からすれば、一体どれだけの心細さに襲い掛かられたことだろう。
…何せ、法と秩序が闊歩する表社会。戸籍も何もない幼い兄弟に対し、世界は決して優しく手を差し伸べてくれるわけもないのだ。
だからこそ、幼い子どもだった少女と兄が社会の裏側から表側に出て生きていくには、それはそれは大変な目にあった事だろう。
まぁ、戸籍や金といった懸念よりも、少女達にとって最大の懸念であった『元凶』は表社会の歴史では既に『無かった事』にされていたため…
『元凶』がこの世界から居なくなって２０年以上経っていた事もあり、少女達の『名』に対して過剰に反応する者は表の社会にはかなり少な

くなっていたのだが。

…それでも、少女と兄の『名』を聞いただけで、過剰に反応する輩は表社会にはまだ居た。

当たり前だ。

いくら『元凶』が、２０年以上も前に表社会の歴史から完全に抹消されて、人々の間から完璧に存在を消されていたとは言え。それでも、『元凶』に個人的な深い深い怨みを持った人間は、この世界にまだまだ数多く存在していたのだから。

何せ、世界最悪の大犯罪者。犠牲者の人数など、わかっているだけでも１０００人をゆうに超えており…

夫を殺された者。妻を殺された者。子どもを殺された者。親を殺された者。兄弟を殺された者。姉妹を殺された者。友を殺された者。心を殺された者。

そうした『元凶』に直接的な怨みを持った人間が、世界にはまだまだ数多く生きているのだ。

だからこそ、『元凶』に深い怨みを持つ者達が、突如表社会に現れた『元凶』と同じ名を持つ少女と兄に対し…どんな行動に出たのかなど、最早言葉にする必要すらないだろう。

そう、今までどこかに隠れていた、『元凶』と同じ名前を持った幼い兄妹。そんな憤りをぶつける恰好の『的』に対し、怨みを持つ者達がどんな『行動』を取ったのかなど…

だからこそ…今まで社会の裏側に隠れ住んでいた幼い兄妹が、表の社会で生きていくことは本当に大変な事だったのだ。

奇跡的に決闘市に居た分家筋…とうの昔に自分達の『名』を捨てた者の一人が、これまた奇跡的に本家筋である少女と兄を発見し、そして奇跡的に保護してくれるような善人であったからこそ…どうにか少女と兄はその命を繋ぐことを許されたのだが、それでも少女と兄は表社会へと出てきていやと言うほど思い知ったのだ。

そう、いくら保護してくれた親類のおかげで、法と秩序に乗っ取り

表社会で生きることを許されたとはいえ…

…自分達の持つ『名』が、表社会にどれだけの傷跡を残しているのかという事を。

…自分達がその『名』を持っている限り、幸せになってはいけないという事を。

…自分達がその『名』を持ってしまったが故に、表社会に生きる同年代たちとは根本からして背負う罪が異なっているのだという事を。

そう、決闘学園に通いながらも、少女と兄は常に表社会に生きる者達との『差』を常々感じさせられ続けた。

…特に、『紫魔』の名を持つ者達との『差』。

元は同じ融合召喚の名家だったはず。しかし『紫魔』は成功し『自分達の名』はこんな扱いを受ける羽目に…

だからこそ、表社会で生きている学友達と、裏から這い出てきた汚い自分達を比べるたびに…少女と兄は、常に『怨み』を思い出し続け…

―『竜胆（りんどう）　蛇蝎（だかつ）…この名前を、絶対忘れたらアカンで。』

―『…りんどう　だかつ…』

―『そうや…全部…全部全部コイツが悪いんや！俺らがこんな目にあっとんのも、みんなが『名前』を捨てる羽目になったんも…母ちゃんが死んだんも全部…コイツの所為や…』

―『…誰なの？その人…』

―『母ちゃんの父親…俺等のじいさんらしいけど…けど、けどや！こんな奴、家族やない！いっぱい人殺して、俺らをこんな目にあわせとる奴なんか！』

―『…りんどう　だかつ…お母さんを殺した…私達を苦しめる原因…』

―『そうや！絶対に許さへん！コイツは…自分だけ先に死んで逃げた…ただの屑や！』

―『…りんどう…だかつ…ぜったいに…ゆるさない…』

どこで得たのか、何故知りえたのか。
兄が、常々憎しみを込めた声でそう教えてくれたその『名』が、少女はずっと忘れられない。
時が流れ、更に『元凶』への怨みを持つ者が少なくなってきても…成長と共に兄が強くなり、世間に注目されて自分達の『名』が許されかけてきても…

それでも、ずっと少女と兄の心には…

絶対に許してはいけないその名前が、刻まれていて―

―…

「…絶対に許さない…絶対に！私のターン、ドロー！墓地のコーディセップスの効果発動！コーディセップスを除外して、墓地からセラセニアントとサンデウ・キンジーを特殊召喚！」

―!!

【捕食植物セラセニアント】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　６００
【捕食植物サンデウ・キンジー】レベル２
ＡＴＫ／　６００　ＤＥＦ／　２００

「…サンデウ・キンジーがいる限り、捕食カウンターの乗ったモンスターは全て闇属性にできる！」
「知ってますよぉ？ソレ、元々私が使っていたデッキですし。」
「…けど今は私のデッキ！続けてサンデウ・キンジーの効果発動！サ

ンデウ・キンジーは融合魔法なしで融合できるから、私はサンデウ・キンジーと闇属性にしたネフィリムを…」
「永続罠、【デモンズ・チェーン】発動。サンデウ・キンジーの効果を無効に。」
「…ソレも視えてた！【再融合】発動、ＬＰを８００払って、墓地から【捕食植物キメラフレシア】を特殊召喚！」

―！

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
ミズチ　ＬＰ：２５００→１７００

弾けるように、燃え上がるように。
先程までの消極的な展開から一転、ここが待ち望んだ正念場なのだと言わんばかりの勢いで…復讐の炎が燃え上がるように、怒涛の展開を続ける竜胆　ミズチ。
…血走る『眼』で【紫影】を見据え、突き上げる怨みで【紫影】を貫き。
この場、この時、ターンを待っていたのだという雰囲気で…機は熟したとして、持てる力を振るい続ける。

「懲りませんねぇ、ＬＰを減らしてまたキメラフレシアとは…」
「…キメラフレシアの効果発動！レベル１になってる【エルシャドール・ネフィリム】を除が…」
「２枚目の【デモンズ・チェーン】発動です。キメラフレシアの効果を無効に。」

しかし、そんなミズチに対して。【紫影】はあくまでも飄々と、ミズチの展開を止めつつ嘲笑を交えるばかり。
【紫影】の行う妨害が、いくら先程ミズチが宣言していたカードばかり

だとは言え…
　それでも確実にミズチの手は止められ続けているのだから、ミズチとて【紫影】の整えられたこの場に対し、これだけ妨害されれば戦局は依然として苦しいままであり…

「…けど、これで【デモンズ・チェーン】はなくなった。後は、止めるモノは何も無い。」
「ですが貴女も、これ以上何が出来るんでしょうねぇ？…知ってるんですよぉ、貴女の【捕食植物】では、もうこれ以上この場をどうにか出来る融合モンスターなど出せはしないと。」
「…何を根拠に…」
「ぷぷっ！根拠って言われましても、そもそもそのデッキ、元々は私のデッキでしたし！私がスターヴ・ヴェノムを持っている限り、貴女のデッキには『切り札』と呼べるモンスターなんて存在しないんでしょう？えぇ！」
「…」

　そう、ミズチが【紫影】の手を、その『眼』で見通していたように。【紫影】もまた、ミズチのデッキを何故か知り尽くしている様子を先程から零し続けているのだ。
　…ミズチを完全に舐めていたのも、対峙しているのが見知ったデッキであったが故の余裕であったのか。
　ここまで効果の応酬を続けたミズチに対し、【紫影】はどこまでも嘲笑ったままで…

「よくここまで足掻いたと褒めてあげましょう！さぁ、大人しくターンエンドを宣言なさ…」
「…速攻魔法、【プレデター・プライム・フュージョン】発動！私はセラセニアントとサンデウ・キンジー、そしてキメラフレシアで融合！」
「ッ!?」

しかし…
【紫影】に、どれだけコケにされようとも。
それでも、決して怨嗟を捨てないミズチの叫びが、大空洞に木霊する。
それはミズチのデッキを知り尽くしていると豪語した、【紫影】の結論を真正面からブチ破る蛟が如き激しい叫び。
…今、【紫影】の油断の隙をこじ開け。
どこまでも濃い殺意の元、ミズチの叫びが―

「さ、3体融合!?な、何ですかそのモンスターは!そんなモンスター、そのデッキには居ないはず…」
「…これが…貴方を倒すために目覚めた、私の力!禍つ紫影を食い破り…世界の果てで狂い咲け!融合召喚!」

ここに、轟く―

「レベル9、【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】!」

―!

【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】レベル9
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

禍々しい―
それはあまりに禍々しい姿をした、奇怪にうねる三つの茎を持つ…怪しく蠢く毒の草でありつつも、辺り一面に毒の涎を撒き散らす、飢えた牙持つ毒の華竜であった。

…地に根を張る植物だというのに、意思を持って動き獲物を喰らう文字通りの捕食者。
その虚ろな目は本当に見えているのか。双翼に怪しく咲く禍々しい花は、草でありつつ竜であるというその異形をその身一つで体現している…
まさに異質なる雰囲気に塗れた、畏怖すら感じる異端なる重圧。

「な、なんなのですかそのモンスターは!?そんなモンスター、私が使っていたときにはいなかったはず…」

初めて…
そう、今までミズチを見下し続けていた【紫影】が、この時初めて――意表を突かれたかのように、焦りと共に正真正銘驚きの声をその口から上げたのだ。
…それは【紫影】からしても、ミズチが召喚したモンスターが本当に想定外だったからこそ零された言葉であったのか。
ミズチの私怨を取り込んで生まれた、歪に蠢く三叉の華竜。それはまるで、【紫影】への強い怨みを持った竜胆　ミズチという少女の、歪んだ復讐心が具現化したかのような禍々しさであり…
その圧倒的捕食者足り得る存在が、【紫影】へと向かって強大なるプレッシャーを放っているその姿。
また、【紫影】へとぶつけられている、激しいまでのプレッシャーを放っているのは三叉の毒花のみならず…

「ッ!?そ、その『眼』は…」

そう、【紫影】の視線の先にいる竜胆　ミズチの目が、先程までの儚く気怠げなモノから一転…
限界を超えてもなお大きく見開かれた、獲物を見据えて血走った…細く鋭く縮瞳した、常人ならざる異形の眼へと変貌を遂げているではないか―

『眼』の周囲には、眼を囲うように浮き出た血管が模様を作っており…縦に細く長く伸びたその瞳孔は、まるで本物の蛇の眼のよう―

それはまるで、悪魔宿りし異形の眼。

おそよ人間の目ではないソレが、竜胆　ミズチという少女の目から飛び出さんとしているのだ。

そして、何よりも異常なのは…大空洞には風など吹いていないにも関わらず、ミズチの白く美しい前髪が彼女のオーラに触れて、怪しく独りでに揺らいでいると言うこと。

一体、彼女の身には何が起こっているのか。

まさに異形、まさに異質。竜胆　ミズチの身に、まさに人知を超えた悪魔が宿る。

「その『眼』は…あ、貴女本当にウワバミの…だ、だから私のデッキに私の知らないカードが！」

「…言ったはず、今は私のデッキだって！セラセニアントの効果で、デッキから【捕食接ぎ木】を手札に加える！そして装備魔法、【捕食接ぎ木】を発動して…墓地から、【捕食植物ドラゴスタペリア】を守備表示で特殊召喚！」

竜胆の名を持つ者が、来るべき日へと向けて次世代へと受け継ぎ続けているという、人知を超えたその異形の『眼』。

果たして、ミズチの持つその『眼』とは一体何なのか。

その正体も、その本質も…そして、一体どうして竜胆がその『眼』を受け継ぎ続けているのかという、その理由を知る者はもうこの現代においては存在しておらず…

けれど、今この瞬間において。ミズチからすれば、この『眼』の正体が『何』なのかなど些細なことなのだと言わんばかりに…ただただ純粋に、【紫影】への怨みを果たすのみなのか。

…そう、ミズチの目的は唯一つ。【紫影】の命を、自らの手で刈り取

る事。
その為に、蠢く竜華が今再びミズチの場へと蘇って―
「…し、しかしどうして【プレデター・プライム・フュージョン】でスターヴ・ヴェノムを素材にしなかったのですか!?スターヴ・ヴェノムを片付け、再びキメラフレシアを特殊召喚していれば！貴女はキメラフレシアの効果でネフィリムを除去でき、そのままキメラフレシアとトリフィオヴェルトゥムによる私へのダイレクトアタックで勝負は決まっていたはず！」
「…私、忘れてない。貴方、【バトルフェーダー】を手札に戻してる…だから、ダイレクトアタックじゃ貴方に勝てない。」
「ッ!?」
「…それにダイレクトアタックじゃ意味がない…スターヴ・ヴェノム…【竜胆】から【紫影】に成り下がったその子を倒して、貴方を倒さないと意味がないの！トリフィオヴェルトゥムのモンスター効果！捕食カウンターの乗っているモンスターの攻撃力を全て、トリフィオヴェルトゥムの攻撃力に加える！」

【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】レベル９
ＡＴＫ／３０００→８６００

巨大化せしは竜の雄叫び、狂い咲きしうねりの轟き。
先程までの消極的な、守り主体のギリギリのデュエルから一転…
始めから、最初から。この瞬間を待っていた、この瞬間を見据えていたようにも見えるミズチの宣言によって、三叉の毒華がみるみる巨大化していくではないか。
…その攻撃力、実に８６００。
それはどれだけＬＰ差を広げられても、どれだけ直接攻撃に対する妨害を用意されても。それでも、【紫影】を倒す事を決して諦めなかったミズチの怨念を取り込んだように…
三叉の毒華もまた、その牙を更に飢えさせ滴らせるのみ。

「攻撃力８６００!?ま、まさかそんな効果を!?で、ですが私にはまだ【瞬間融合】がある！いくら貴方が何かをしようとも、これで【エルシャドール・ミドラーシュ】を守備表示で出せば私へのダメージは…」
「…無駄。視えてるから…貴方のＥｘデッキには、もう【エルシャドール・ミドラーシュ】は無いって。だから、もう出せるモンスターなんて貴方には無い。」
「ッ!?ふ、ふふ、何を根拠に…まま、まるでここまでの展開が全て貴女の想像通りだとでも言いたげな…」
「…言ったはず、全部視えてたって！だからここまで耐えただけ…そして、もう耐える必要もない！…これで終わり！【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】で、【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】に攻撃！」

迷いのない攻撃宣言が、大空洞へと木霊する。
そう、先程までとは根本からして違う、戦意と殺意に塗れたミズチの叫びが、満を持して大空洞へと響き渡って―

ずっと、ミズチは待っていた…

例えダメージを受けてでも、例えギリギリの攻防が続いても…それでも、【紫影】を一撃で殺せるタイミングを、竜胆　ミズチはずっと待っていた。
それが、【紫影】の油断からくる最初で最後のチャンスであっても。
それでも、油断していた【紫影】の喉元に…無慈悲に牙を突きたてられる今この時が、ミズチにとっては最大で最高のチャンス。
息の根を止めるほどの実体化した、【王者】に匹敵するといわれている相手に…自分の毒の牙が届くその時を、ミズチはずっと待っていた。

そう、ミズチは掴み取った―

元々、一族の象徴であったはずの【竜胆】の蛇竜。しかし犯罪者の所為で、裏決闘界の融合帝、【紫影】の『名』と成り下がってしまった【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】…

その、あまりに忌々しいソレを…

【紫影】ごと、消し飛ばすその瞬間を―

それは、今―

「…狂生の…プレデター・レイ!」

―!

巨大な毒の双翼に生えし、二つの毒華から解き放たれるは禍々しくも輝く閃光。

今、復讐の怨嗟を纏った魔閃光が、【紫影】へと向けて解き放たれたのだ―

…もう、【紫影】に成す術などない。

ソレを『眼』で見抜いているミズチの目には、今まさに閃光に貫かれる【紫影】の姿がはっきりと映り―

そう、映っていたのだが―

「…なぁんてねぇ！速攻魔法、【超融合】発動！」
「…え!?」

―否…

断じて、否―

貫かれてなどいない。ミズチの目に映ったはずの、閃光に貫かれた【紫影】の幻影が、【紫影】の捻じれた声と消えていく。
そして、ソレと同時に…そう、ミズチの叫びを遮るように、再度どこまでも底抜けに不気味な【紫影】の嘲笑が、再び大空洞へと響き渡った次の瞬間。
【紫影】の場には、彼に残っていた最後の伏せカード…ミズチの『眼』には、発動も出来ないブラフであったはずの【瞬間融合】に見えていた伏せカードが…
あまりに禍々しい光と共に、怪しく光り輝き始めたではないか―

「ふふふふぅっ！勝ったと思いました？勝てたと思っちゃいまし

たぁ?ざぁんねぇん!そんなワケないじゃないですかぁ!」
「…【瞬間融合】じゃない!?な、何なのその融合魔法…そんなカード、見たことな…」
「ふふっ、私の手を全て見通し、私の知らないカードを自力で生み出したその執念はご立派ですが…すみませんねぇ、そもそも私には『その眼』は効かないんですよねぇ、ええ!」
「…な…」
「っていうかダメでしょう?『前任者』に同じ力で挑んでくるなんて。だからわざと見間違えさせることも出来たんですが…さぁて、私は手札を1枚捨て、闇属性のスターヴ・ヴェノムに貴女の場の『捕食植物』モンスター、トリフィオヴェルトゥムを超・融・合!」

大空洞の上空に、【融合】魔法とは比べモノにならない程のエネルギーを持った神秘の大渦が現れる。
…そして、その神秘の大渦の荒れ狂う轟きに誘われるようにして。
【紫影】の場のスターヴ・ヴェノムと、ミズチの場のトリフィオヴェルトゥムが吸い込まれていくと同時に―

「流石は私の『孫』ですねぇ!私をサポートしてくれるとは感謝の極みです、ええ!」
「…ッ!」
「さぁて…行きますよぉ!」

【紫影】の纏う雰囲気が、禍々しく…今よりも更に禍々しく…

変わる―

『禍つ紫影の揺らめきよ！この世の全てを包み込みぃ…数多の命で腹を満たせぇ！ユウゴウショウカァン！来なさい、レベル１０！【グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】！』

―！

…轟いたのは、飢えを通り越した飢餓の咆哮だった。

どれだけ食しても収まらぬ、どれだけ貪っても満たされぬ…轟いたのは、そんな叫び。

捻じれたうねりを纏いし【紫影】が、自我を持った毒の華すらも喰らい尽くし…【融合】を超えた【超融合】によって、毒牙の竜の体が更に巨大と化して生まれ変わったその姿。

…その翼はまるで開いた花弁。美しさの中に存在する、毒と言う名の畏れを纏い。

生きとし生ける者全ての命を、根元から喰らい付くさんとしている、暴食なりし飢えた牙。

それはまるで、【紫影】という男の抱える『闇』が、ここに具現化し

たような存在とも言えるのであって。

【グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／３３００　ＤＥＦ／２５００

「…グリーディー・ヴェノム…な、なに、ソレ…そんなモンスター、私が『視た』中には…」
『負不っ、だから言ったでしょう？貴女の『眼』など、私相手には役に立たないと…しかし…いやぁ、生き返った甲斐がありました！まさか私に孫が居たとは！ウワバミ…私の娘が、また子ども産んでいたとは驚きましたねぇ！だってあんな失敗作、どこかで野垂れ死ぬのがオチだと思ってましたから！あ、野垂れ死んだんでしたっけぇ!?ちょーウケますねぇ！負不腑訃怖ぅ！』
「…ッ!?」

そして…
ついに【紫影】の口から放たれたのは、目の前の少女との関係性を【紫影】自らが認めた言葉であった。

しかしソレは、感動の再開などでは断じてない―

そう、【紫影】の口から飛び出たソレは、あろうことかミズチの母親を…自らの娘をよもや『失敗作』と罵り、そして娘の命を軽視している、親としての愛情の欠片もない下種な言葉であったのだから。
『失敗作』…自分の娘に対し、その言い捨ては何なのか。
どこまでもふざけた、性根の腐った【紫影】の言葉。ソレを聞いてしまった竜胆　ミズチが、瞬間的に湧き上がる怒りによってその『眼』を更に大きく見開きながら…

「…ふざけないで！お母さんが死んだのも、元はと言えば貴方の…」
『えぇそうですよぉ！全部ぜぇーんぶ私のせぇーい！貴女の母が死ん

だのも？貴女が地獄を見たのも？そう、全部ぜぇーんぶ私のせぇーい！ま、その時私死んだことになってましたし、私には関係ないんですけどねぇ、ええ！』

「…関係ないって…全部貴方の所為なのに…ッ、血の繋がりなんていらなかった！貴方みたいな、犯罪者との繋がりなんて！」

『訃怖（ふふ）っ！いいですねぇいいですねぇ！孫からの心地よい恨み、血の繋がった者からの怨嗟とはかくも心地よい！あぁ！なーんて気持ちの良い怨嗟なのでしょうねぇ！…ええっと…そういえば貴女、なんて名前でしたっけぇ!?ミミズでしたっけぇ？浮腐婦膚斑（ふふふふふ）ぅ！』

「…ッ…」

けれども、【紫影】もまた自らの思想が腐っていることを大いに自覚していてもなお。

どこまでもふざけた態度を崩さず、下賤なる言葉を吐き続けるのみ。

…竜胆　ミズチからしても、世界最大の犯罪者とまで言われた男が血の繋がった祖父であったという事実など抹消したい繋がりに違いないというのに。

それでも、【紫影】はそんなミズチの気持ちを最初から理解しつつも彼女を馬鹿にし続け…そして自らの娘、ミズチの母に対しても下卑な言葉を投げ捨てた。

果たして…一体どんな性根をしていれば自分の娘や孫にそんな言葉が吐けるのか。

娘をけなし、孫を馬鹿にし…自らに課せられた大罪を、嘲笑いながら一蹴するその腐った性根。

それは、いくら血の繋がりを持っているといミズチからしても理解できない…

いや、理解できるはずもなく、それ以上に理解したくもない、正真正銘『屑』の中の『屑』。

狂っている…

話が、通じない―

「…ぼ、墓地のトリフィオヴェルトゥムの効果発動…捕食カウンターの乗ったネフィリムがいるから、トリフィオヴェルトゥムを守備表示で特殊召喚…ドラゴスタペリアの効果で、グリーディー・ヴェノムに捕食カウンターを乗せて…タ、ターン、エンド…」

ミズチ　ＬＰ：２５００→１７００
手札：３→１枚
場：【捕食植物ドラゴスタペリア】
【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】
伏せ：１枚

突如として更に禍々しく変化した【紫影】の雰囲気の前には、あれほど殺気立っていたミズチも気後れしてしまうしかないのか。
…まるで、人外のモノへとその雰囲気を変貌させた【紫影】。
発せられているのは人間の『言葉』ではなく、頭に直接響いてくるような気持ちの悪い嫌な『音』。
そんな、得体の知れぬ恐怖を駄々漏れにし始めた【紫影】に対し…
竜胆　ミズチが、形容し難い恐怖を感じ始めたとしても。それは本能的に、仕方のないことであり…

『私のターン、ドロー！　ほらほらぁ、視えますかぁミミズちゃーん？私がドローした、たった１枚の私の手札が何なのか！』
「…【融合】…」
『ぶー！大はっずれー！婦負っ、所詮貴女の『眼』はその程度だってことです…さぁて、お涙頂戴、感動の対面を果たした『孫』に、もう一つ教育を施してあげましょうねぇ！墓地のカードを７枚除外し、【妖

精伝姫―シラユキ】の効果発動！シラユキを墓地から特殊召喚しまぁす！』
「…シ、シラユキ!?」
【妖精伝姫―シラユキ】レベル４
ＡＴＫ／１８５０　ＤＥＦ／１０００

しかし、そんなミズチを更に馬鹿にしながら。
【紫影】が発動を宣言したのは、心の捻じれた男には全く持って似つかわしくない、おとぎの国の姫の一体であった。
しかし、ミズチの記憶が確かならば…

「…シラユキって…そ、そんなカードいつ墓地に…だって、シラユキを墓地に送るタイミングなんてなかったはず…」

そう、この【妖精伝姫―シラユキ】は、【紫影】の墓地には存在しないはずのカードなのだ。
…【紫影】の墓地に送られたカードを、ミズチは全て把握している。
それはデュエルが始まってからずっと、【紫影】のカードを血眼になって見続けてきたミズチだからこその記。
ミズチの記憶によれば、このデュエルに記録では【紫影】が融合召喚の素材以外で、非公開情報のカードを墓地に送るタイミングなどたった１度だけだったはず。

―『…なぁんてねぇ！速攻魔法、【超融合】発動！』

そう、【超融合】…
ミズチには【瞬間融合】に見えていたソレを【紫影】が発動した時、間違いなく【紫影】は手札から１枚のカードを墓地へと捨てた―

シラユキを捨てるタイミングがあるとすれば、その1度だけであり…

しかし…よくよく考えればそれも可笑しな話か。

何せミズチの『眼』には、【紫影】の手札が全て視えていたのだ。いくら【紫影】が能動的に非公開情報のカードを墓地に送れたタイミングは、【超融合】の時のそのたった1度だけだったとは言え…

あの時の【紫影】の手札にあったコストは、ミズチの『眼』によれば確実に【バトルフェーダー】だけだったのだから、【紫影】の墓地に【妖精伝姫―シラユキ】が存在しているという現実は、ミズチからすれば相当にありえないコトであるはず。

けれども、そんな混乱に陥ったミズチへと向かって…

『おや、面白いことを言いますねぇ。シラユキを墓地に送ったタイミングぅ?そんなの、ネフィリムを出したときの【影依融合】に決まってるじゃないですかぁ!貴女の目の前で、あんなにも堂々とデッキから素材にしたと言うのに。』

「…嘘!だ、だって素材は【ライトロード・ライデン】のはず…」

【紫影】の口から発せられたのは、あまりに信じられない言葉であった。

何せ、【紫影】が【エルシャドール・ネフィリム】を融合召喚した時。彼は間違い無く、デッキから【ライトロード・ライデン】を素材にしていたはずなのだ。

…それはミズチも自分の『眼』で見ていた。間違い無く自分の耳で宣言を聞いていた。

だからこそソレはありえない。故にミズチには、【紫影】の言葉が何も信じられず…一体、目の前の男は何を言っているのか、と。

しかし…

『だから言ったじゃないですかぁ。『眼』に頼りすぎですよぉって。』

「…ッ!?」

【紫影】がそう告げたその瞬間―

―『そして再び【影依融合】発動!デッキから【シャドール・リザード】と【ライトロード・ライデン】を墓地に送り融合!来なさい、レベル8!【エルシャドール・ネフィリム】!』

ミズチの脳裏には、【エルシャドール・ネフィリム】を融合召喚するときの光景がフラッシュバックのように思い出され…

ソレと同時に、その時の光景がガラスを割ったように割れ始めたかと思うと。

ザザッ…ザザッ…と。

ＴＶの砂嵐のようなモノが流れ込んでくる―

―『そして再び【影依融合】発動!デッキから【シャドール・リザード】と【ライトロード・ライデ…』

―ザザッ、ザザッ…と。

『そして再び【影依融合】発動！デッキから【シャドール・リザード】と【ライトロー…シラユキ】を…』

―ザザッ、ザザッと―

崩れ、落ちる―

―『そして再び【影依融合】発動！デッキから【シャドール・リザード】と【妖精伝姫―シラユキ】を墓地に送り融合！来なさい、レベル8！【エルシャドール・ネフィリム】！』

―！

「…ッ!?あっ…ぐ…」

瞬間的に、耐え難い頭痛がミズチを襲う。

それは針を直接脳に刺したかのような鋭い痛み。頭の中で何かが崩れ落ちたかのような耐え難い痛み。

一瞬だけであったために、何とか消えかけた意識を繋ぎ続けることは出来たものの…

しかし、自分の目ではなく『眼』で見ていた光景が、記憶ごと崩れ落ちたその感覚は…自分の視ていたモノが、【紫影】の言った通り『偽物』であったという感覚を、ミズチの本能的な部分に理解させてしまったのか。

ミズチの記憶と光景が、今…完全に崩れ落ちた―

あの時聞こえた宣言は、確かに【ライトロード・ライデン】だった。けれども、しかし実際にデッキから墓地に送られていたのは【妖精伝姫―シラユキ】であり…

そう、どうやったのか、【紫影】はミズチの『眼』に、現実とは異なる光景を視せており…謎の力を持った『眼』は、ミズチの視覚以外の感覚も掌握していたのか、『眼』に視えていた光景が、そのまま耳も騙していた。

つまりは…ミズチが視ていたその光景も、その宣言も。視えていたモノ、聞こえていたモノ、全てが幻まやかしまほろば。

それは、きっと『眼』を持つミズチにしか通用しない手なのだろうが…しかし、視えていた光景と、異なる現実が【紫影】の場にて繰り広げられるその違和感の奔流は、記憶の混同となりて頭痛となりてミズチの頭に襲いかかり…

『負訃っ、『眼』になど頼らず、自分の目で見てデュエルをしていればもう少し早く気付けたのですがねぇ…本当、期待はずれです。幻魔眼の見せているモノが、この世の現実なワケないじゃないですか。』

「…あっ…くぁっ…ぁ…」

痛い…痛い痛い痛い―

『眼』による力の奔流と、【紫影】に与えられた力の阻害がぶつかりあって、ソレが頭痛となりてミズチの身体に還元され続ける。

…それは想像を絶する痛み。

痛みには慣れているはずの竜胆　ミズチが、思わず膝を突いて倒れこんでしまいそうなほどに襲いくるその痛みは…果たして、どれほどの苦痛となってミズチを襲っているのか―

視えない…

全てを見通すはずの、『眼』が―
自分が視ていたモノは、自分が見通していたのではなく…【紫影】が見せていた、ありもしない幻影だったとでも言うのか。
…そんな焦りがミズチを襲う。頭痛が直接ミズチを襲う。
見えていたはずのモノが、視えていなかったというその事実は、己の眼に誇りを持っていたミズチには相当の絶望を与えながらミズチの『眼』から光を奪い…
何も、見えなくなっていく―

「…うぐっ…ぁ…はぁ…はぁ…」
『ほう、『眼』を引っ込めましたか…一応、自分の意思で操れるレベルではあるようですねぇ…でも良い勉強になったでしょう?そんな悪魔の眼に頼りすぎていると、本当に見たいモノが見えなくなってしまいますよ、と。…さぁて…では行きますよぉ!?シラユキの効果発動ぉ!ドラゴスタペリアを裏守備表示にしちゃいまぁす!』
「…ド、ドラゴスタペリアの効果発動!シラユキに捕食カウンターを…」
『いいですねぇその諦めの悪さ!耐え難い苦痛を堪えてまで、最後まで私への復讐心を捨てないその心!セラセニアントを手札に構えた、意地汚く生き残ろうとする生への執着!まさに穢れた竜胆の血に相応しい態度ですねぇ!ですがこれでドラゴスタペリアはもう効果を使えなぁい!イコール貴女はもう何もできなぁい!ということはもう貴女はコレで終わりでぇーす!』
「…ば、馬鹿に、しないで…まだ、私のＬＰは…」
『いいえ、馬鹿にしまぁす!魔法カード、【守備封じ】発動!』
「…ッ!?しゅ、守備ふう…」

またもや、ミズチの予想…いや、視えていたモノとは異なったカードを発動する【紫影】。
先ほど、ミズチの『眼』には確かに【融合】をドローした【紫影】が

視えていたというのに…
シラユキだけではなく、ドローカードすら欺いていたというのか。…いや、もしかしたら、始めから自分の視ていたモノ、今見ているモノすらも『本当』の光景なのだろうか。

そんな恐怖が、今になってミズチへと更に襲いかかり―

ソレを嘲笑うかのように、【紫影】が発動したのはこのデュエルが高速化した時代において、あまり使われなくなった前時代的なカード。
そう、最初から馬鹿にされ続け、自分の縋る力をコケにされて。そしてこの佳境において、【守備封じ】というあまりに単純な前時代的なカードによってその勝敗を決定付けられる屈辱は…
果たして、【紫影】にこれまで馬鹿にされ続けたミズチに、どれだけの屈辱を与えるというのか。

『負腑腐っ、コレも『視えなかった』んでしょう？いかがでしょう、こんな前時代的なカードで敗北する気分は！手札に持っているセラセニアントも、使えなければ意味なんてありませんねぇ、えぇ！』
「…う…あ…ぁ…」
『苦しいですか？痛いですかぁ？…さて、愚かな『孫』に、一つ大事なコトを教えてあげましょうねぇ！貴女、私がスターヴ・ヴェノムを出すのを待っていたのもいいですけど…殺したいほど憎む相手を前に、手段を選ぶ余裕なんてないんですよぉ？トリフィオヴェルトゥムを攻撃表示に変更し、更に墓地から【ブレイクスルー・スキル】を除外して効果を発動！ドラゴスタペリアの効果を無効にぃ！』
「…ッ、ブレイク…スルー…そ、それも…」
『えぇ、何時墓地に送ったカードなんでしょうねぇ！もしかしたら、さっきの罠も【デモンズ・チェーン】じゃなかったりして！浮賦っ、なーんて…それでは続けてグリーディー・ヴェノムの効果も発動！トリフィオヴェルトゥムの効果を無効にし…その攻撃力を０にする！』

【捕食植物トリフィオヴェルトゥム】レベル９
ＡＴＫ／９１００→０

けれども、しかし、あろうことか―

そう、こんな性根の腐った人間の屑が、あろうことか『強い』のだ。

卑怯な手や、小癪な手を自ら好んで使用しようとするその捻じれ腐った心の裏に、幾重にも積み重なっている相手を超えうる確実な手。

そのカード選び一つ一つをとっても、ミズチの守りを確実に超えられる手筈をこうも確実に揃えきっていたという事実は、紛れも無く揺ぎ無い現実。

それは例え、【紫影】がどれだけ汚い手を取ってきても…いや、本当は『何もしていなかった』のだとしても…

そう、【エルシャドール・シェキナーガ】をいとも簡単に破壊させたり、【エルシャドール・ミドラーシュ】を微塵も守る気がなかったり、ミズチの手を止める素振りをほとんど見せなかったり…

そういった、【紫影】のこれまでのプレイングの雑さを見ても。【紫影】がミズチに対し、どこまでも手を抜いていたのは一目瞭然といえるだろう。

しかし、それでも…それでもこの勝敗が、最初から決していたかのように。ミズチの全てを嘲笑いながらも着けられる、このデュエルの正式な決着はあまりにレベルの違う力の証明となっていることは間違い。

…そう、全くもって本気ではない【紫影】の、このふざけた態度の裏に隠されているのは根本的な『力』の部分。

卑怯な手とか、小癪な手を取ることもいとわず。しかし根本的な『力』の部分すらも紛れも無い実力を持っているからこそ、下種で小物であるはずの【紫影】が、屑であり続けながらも裏決闘界の帝王とま

で呼ばれているのだ。
犯罪者達すらも『力』で黙らせる、汚い手段の裏に確立された自身の実力。
それは紛れも無く、この世界最悪の犯罪者と呼ばれている男も、根本的な『力』の部分は間違い無く世界最高峰の力を持ってしまっていると言うことであり…
だからこそ、今では表の歴史からその存在を抹消されてはいても。30年以上も昔において、この男は表と裏でこう称えられ、そしてこう蔑まれていて―

かつて栄華を誇った融合名家、『竜胆家』の本家当主。
しかし大虐殺を犯し表社会を追放された、生まれついての屑の中の屑。

性根の腐った捻じれた男、世界最悪の大犯罪者。

裏決闘界融合帝…

【紫影】―

―竜胆（りんどう）　蛇蝎（だかつ）

「…ッ！許さない…【紫影】！絶対に貴方を許さな…」
『孫に許してもらわなくて結構でぇす！バトル！グリーディー・ヴェ

ノムで、トリフィオヴェルトゥムに攻撃ぃ！蠱毒のぉ…デッドリー・フィアンマー！』

―！

「…ッ、あぁぁぁ

らった気分はどうですかぁ？ねぇねぇミミズちゃぁん、ねぇねぇ！」

いや、どうにかミズチも死んではいない。

けれども、それでもミズチの命の灯火は今にも消えてしまいそうなほどに…彼女がひどく傷付いているのが、傍からみてもおおいに分かることだろう。

しかし、そんなミズチに対する【紫影】の言葉は、決して再開を果たした血縁者に対する者の言葉では断じてないことに違いなく…

「…許…さない…【紫影】…絶対、に…」

「ふふ、そこまで悪態をつけるなら大したモノです。流石は私の血を引く者ですねぇ、ゴキブリ並みにしぶといしぶとい…ま、貴女程度がそのデッキで『切り札』足り得るカードを自分で創造するなんて少々意外でしたが…それにしても残念でしたねぇ。こんなに手を抜いてあげたというのに、まさか私の血縁ともあろう者がこんなに弱いとは。もっと他に戦い様はあったはずでしょう？」

「…ぅ…」

「おや、流石に限界でしたか…では、一思いに楽にしてあげましょうかねぇ。私に敗けた者には『死』を…ソレが、私の決めた【裏決島】のルールです、ええ。」

…狂っている。血の繋がった者に、ここまで嬉々としながら危害を加えられるなんて。

一体、【紫影】という男の精神状態はどうなっているのか。他人の命を奪う事に、何の抵抗も持たないどころか…寧ろ、命を奪うことに快楽を得るという異常な精神を持った、この男の心の中は。

まぁ、そんなモノ、誰であろうと理解できるはずもなく…それ以上に、理解など絶対にしたくはないだろうが。

そうして…

「ふふ、流石の私も、自分の孫を手にかけたことはありませんから

ねぇ。初体験はいつ味わっても面白いです、ええ。」

あまりに狂いながら。どこまでも壊れながら。

今、ゆっくりと。【紫影】が、ミズチの首に…

そう、自らの孫の首に手をかけようとした…

その時だった―

「しえいいい

！」

叫ばれるは怒り狂った、野生の獣と同じ咆哮。
この世界において、こんな怒りの野獣のオーラを醸し出せる人物など、世界中探したってたった1人だけしか該当しないに違いない事だろう。

そう、この場に現れたのは紛れもない…

王座を燃やす女武人、燃え上がる戦いの鬼…決闘学園サウス校理事長、天下に轟く燃え盛る女傑―

『烈火』、獅子原　トウコ―

「…誰ですか貴女？私、ババアの知り合いなんて居ないんですけど、ええ。」
「とぼけてんじゃないさよ！ここで逢ったが１００年目…骨も残さず、ぶっ殺ぉぉぉぉぉぉおす！」

戦いの余韻が充満する大空洞に…

『烈火』の叫びが、轟いたのだった―

―…

ｅｐ９６「【紫影】ｖｓ．『烈火』」

暗い…とても暗い、どこかの部屋。
およそ人が居住することを想定されてはいないであろう、その闇と埃っぽさが充満しているコンクリートの部屋の片隅に…

「…ッ…」

小さく零した呻きと共に、決闘学園デュエリア校学長…

『逆鱗』、劉玄斎が、そこには居た―

「ぐ…ぁ…」

…痛む体に鞭打って、動かぬ手足に活を入れて。
縛られていてもなお、ゆっくりとその巨体を起き上がらせている『逆鱗』、劉玄斎。
しかし、とても人間を縛るようなモノではない、太く頑強な鎖で縛られている所為か…
ふらつきながら、倒れながら。それでもどうにか立ち上がろうと、劉玄斎はその体をゆっくりとゆっくりと起き上がらせようとしており…
…鎖に縛られ、顔を腫らし、痛々しい痣だらけのその体。
そう、昨日【白鯨】と行った、実体化していた凄まじき一戦のダメージも去る事ながら。
それに加え、【紫影】によってその身に拷問にも似た暴行を加えられていた劉玄斎の体に蓄積したダメージは…とてもじゃないが、動けているのが不思議なくらいに痛々しいモノとなりて、どこまでも立ち上がるのを邪魔しているのか。
【紫影】から受けた暴行の数々…それは世紀末を生きているのかと錯

覚するほどの体躯を持った劉玄斎であっても、とても耐え切れぬほどであった凄惨な出来事だったのか。
劉玄斎の身体には殴られた痕、叩かれた痕、打たれた痕に焼かれた痕、それに切られた痕に撃たれた痕まで数多く浮かび上がっており…
それは見るも無残な痛々しい傷痕、動けているのが奇跡の状況。
…きっと、劉玄斎でなければ死んでいたであろう。
それは決して比喩ではなく、実際に『そう』なのだと納得してしまうほどの拷問の痕。そう、もしここに誰かが来て、劉玄斎の状況を見れば誰だって劉玄斎が生きているのが不思議に思うに違いないほどに…
ソレほどまでに、今の劉玄斎の状態は『酷い』の一言であり、その所為で一晩経っても劉玄斎の身体は、こうして自由に動かす事が叶わずにいて。
「ぐっ…うぉお！」
…それでも、ここで動き出さねばならぬのだとして。
今こうして、湧き上がる痛みを抑え込みながら。劉玄斎は唸り叫んで、手放しそうになる自我を繋ぎ続け…
…自分が幽閉されている上で、『何』が起こっているのかなど劉玄斎は知りはしない。
けれども、『何か』が確かに起こっていると言うことをその野生の感覚で察知したからこそ―
このまま閉じ込められているわけには行かないのだとして、傷付いた体が痛む事も辞さず劉玄斎は今自らの足で立ち上がり―
「【紫影】の野郎ぉ…絶対ぇ…ぶっ殺してやる…」

怒りによって目を覚ました、傷付いたことで更に怒りを燃やした…

…暴れ狂う大災害と呼ばれていた、暴竜なりし1人の男が―

竜が、動き始めた―

―…

山中―

「ばあちゃん、どこ向かってんだよ!?」

【裏決島】の喧騒と、学生達の悲鳴がどこか遠くに聞こえてきそうな山の中でのこと。

決闘学園サウス校1年、獅子原　炎馬は何やら疲労が混ざった荒い呼吸を搾り出すように…

前を走る祖母、『烈火』と呼ばれる獅子原　トウコへと向かって、そう言葉を投げつけていた。

それは先程、【紫影】の居る場所へと向かうと言った祖母の言葉―『行くよ炎馬、ついておいで!』―その言葉のままに祖母の後ろを追いかけてはいたものの、未だ到着せぬ目的の場所に不安と疲れが見え隠れしてきたからなのか。

…目的地がまさかの山の中、そして自分は体力の限界。
そう、若さが取り得の炎馬とて、元々体力の限界だった所を祖母に救われ、そのまま海岸から山の中をずっと駆け続けてきたのだから…
いくらこの【裏決島】においては、祖母の背が最も安全な場所とは言え。目に見える疲労感を漏らしてしまったとしても、それは仕方の無いことと言えるのだから。

「ハッ、アンタは黙って着いて来りぁいいのさ！それより急ぐよ、もう少し先だからね！」
「ってまだスピード上げるのか!?お、俺もう限界…」
「だらしないさよ！男がコレくらいで音を上げてんじゃないよ全く！」
「ぐ…」

しかし…
前を走る獅子原　トウコは、凹凸だらけの山の斜面だと言うのにも関わらず。
全くスピードを落とす事無く、スルスルと山の斜面を駆け上がっていくだけであり…
…これが、還暦を過ぎた女の走りか。その道のプロも真っ青になるであろう凄まじきスピード。
炎馬とて、祖母がアスリート顔負けの身体能力を持っていることは昔から知っていた。けれども、まさか祖母がこれ程までの足とスタミナと有していたなんて、孫である炎馬からしても初めて知ったことなのか。
…流石は荒れ狂う海を泳いで、そして竜巻を突き破って『決島』に上陸したとんでもない女傑。
『烈火』の異名は伊達ではない。そんな祖母の凄さをその身で嫌と言うほど味わいながら…それでも全くスピードを緩めぬ祖母に炎馬は必死になってただただ着いて行くことしか出来ず…

…けれども、一体、トウコはどこに向かっているのか。

この状況を未だ飲み込めていない炎馬からすれば、島の外に居たはずの祖母が突然現れたかと思うと説明もなく付いて来いの一点張り。

それに加え、アスリート顔負けの体力を持つ祖母のスピードは、まるで何かに取り憑かれているかのようにしてただただ加速の一途を辿っているのだから…

【裏決島】での緊張感も相まって、炎馬はずっと形容し難い不安に襲われ続けていて。

「大体【紫影】の居場所に向かうったって、肝心の【紫影】がどこに居るのかばあちゃん知ってんのか!?」

「知らないさよ、ンなモン。」

「はぁ!?じ、じゃあ俺達、どこ向かって走ってんだよ!その【紫影】の居場所がわからないんじゃ意味無いじゃんか!」

「安心しな、予想は立ててる。あの屑のことだから多分…」

「多分ってなんだよ多分って!こうしてる間にも、みんなが敵に襲われてるんだぞ!?せ、先輩達だって攫われて…ばあちゃんならみんなを助けられるだろ!だからまずはみんなを…」

「アンタは黙って着いてこいって言ってるさよ!」

「ッ!?」

「説明してる暇なんて無いさ…とにかく、アタシが今出来ることは一刻も早く【紫影】を倒す事だけなんだからねぇ…」

それでもトウコは孫に対し、その威勢を変えぬまま。

…そう、トウコとて、孫がこの状況に対し恐れを抱いて不安に駆られていることなど、とっくの昔に気が付いている。

それでも、今は一分一秒すら惜しいのだとして。更に加速を続ける『烈火』の足は、宿敵であり復讐の標的である【紫影】の下へと、その体を前へ前へと進めるのみであり…

…別に、トウコは学生達を見捨てているわけではない。

決闘学園サウス校理事長である立場や、裏決闘界の猛者に太刀打ち出来る元プロデュエリスト『烈火』の立場が自分にある事だって、獅子原　トウコはもちろん理解している。

それでも、孫1人だけを助けた後に宿敵へと向かって直進し続けているのには理由があるのだ―

それはトウコ自身、【紫影】を倒す事がすなわち学生達を救うことだと理解しているからこその疾走。

元プロデュエリスト『烈火』や、決闘学園サウス校理事長と言う立場をかなぐり捨てててでも…それでも、己の今出来る最善はコレだとして。今は自分の孫だけでも守りつつ、諸悪の根源を叩かねば鳴らないのだと獅子原　トウコは燃え上がるだけ。

…獅子原　トウコの、熱くなりつつも恐いくらいに冷静なそのトリアージ。

そう…いくらトウコが歴戦に名を連ねた、『烈火』と呼ばれし伝説のデュエリストとて。

こんな状況では、全ての学生は守りきれない…それに、自分の学園の者すら全員は無理…ならば、手に届く範囲だけ、せめて孫だけでも守りつつ、大局を収めるために全力を尽くすしか今のトウコに取れる手立てはないのだ。

…残酷ではある、しかし大局のためには仕方の無い行為。

そんな、迷い無く行動している今のトウコの疾走は、例え誰であっても止めることなど出来はせず。

「くそッ…」

…そして、そんな祖母の考えを先ほどの一喝から炎馬も感じ取ったのだろう。

これ以上祖母に口を出せるほど、自分には力が無いことを炎馬とて痛いほど理解している。そう、海岸で敵に襲われたときに、祖母が駆

けつけてくれなかったら…自分も今頃は敵に攫われて、どうなっていたか分からないのだから…と。
ソレ故…
炎馬はソレ以上口を開かず。とにかく祖母に置いていかれないよう、ただただ必死に走り続ける。

…植物生い茂る険しい山道、人が踏み入っていない野生の獣道。

そんな危ない斜面を、『烈火』は文字通り直進し続けどんどんと山を登っていき…
時折、どこか遠くで戦いの音や学生の悲鳴が聞こえてくるものの。それでも立ち止まることはなく、諸悪の根源へと向かって走り続けるその燃え上がる獅子の姿はまさに鬼気迫る怒りの獣そのモノのようで。

そして…

山道を駆け上がり続け、どれくらい経った頃だろうか。

「…この辺りか。」

まだ山の中腹であると言うのに、何やら少々木々の開けた場所に到着したかと思うと。
突然、獅子原　トウコは突然その足を止めたのだった。

「ぜぇ…ぜぇ…こ、この辺り…って…ばあちゃん…この辺、何も無…」
「いいや、この辺りさ。間違いない、奴はこの近くにいる…」
「な、なんでわかんだよ…はぁ…はぁ…」
「昨日、この辺で浜臣と小龍が戦り合ったらしい。」
「えっ!?は、【白鯨】と『逆鱗』が!?…うっそだー…【白鯨】と『逆鱗』がこんなとこでデュエルするわけ…」

そう、獅子原　トウコが足を止めた『そこ』…
それはトウコが今言った通り、昨日に【白鯨】と『逆鱗』がデュエルを行った場所のすぐ近くであった。
…木々の開けた山の隙間、中腹に不自然に出来た空間。
そこは木々が折られ、草が潰され…まるでこの場で、何か巨大なモノが『暴れた』後のような自然には出来ない造りをしており…

「な、なんだ…ここ…」

ソレ故、呼吸を落ち着かせてよくよく周りを観察してみればみるほど…その異様な光景に、思わず寒気を覚えてしまったサウス校1年、獅子原　炎馬。
…一体、この場で何が起こったというのか。
木々生い茂る山の中腹の、こんな中途半端な場所にこんな開けた場所が現れたというだけでも不自然だというのに…
ソレ以上に不気味なのは、あまりに不自然になぎ倒された木々が地面に無造作に転がっているその光景と、よく見れば近くの崖には抉られたり削られたりした痕があったり、地面には焦げている箇所があったりと…
何やら、人知を超えた力によって付けられたであろう傷跡が、所々に残っているのだ。
…木々や崖の傷が風化や劣化していないことから、この場で起こったその不自然な状況はつい近日に起こったということ。
いや、祖母の言葉を思い返した炎馬は、ソレが『昨日』起こったのだとすぐに理解してしまって―

―『昨日、この辺で浜臣と小龍が戦り合ったらしい。』

昨日はまだ【決島】の予選中。そんな時間にイースト校理事長の【白鯨】とデュエリア校学長の『逆鱗』がデュエルしていたというだけで

も信じられる話ではないにも関わらず。
この場所の惨劇と、そして今現在【決島】で起こっている惨劇―【紫影】による突然の襲撃と、実体化したデュエルを照らし合わせれば…
昨日ここで『何』があったのかが、炎馬にもおぼろげながら見えてきて…

「ほ、ホントにここで【白鯨】と『逆鱗』が…？で、でもなんで…」
「だからそれも【紫影】の所為さ。小龍の奴…【紫影】なんかにいい様に使われやがって…。だからアタシには分かる。奴はコトを起こす前に、必ず自分の拠点を決めるからね、小龍にここを守らせてたって事は、奴はこの近くで『何か』をしようとしていたってことさ。」
「な、何かって…？」
「さぁね。あの屑の考えてる事なんて知りたくもないさよ。でもこの近くに絶対に奴は居る…小物らしく穴倉を好む奴のことだ…この近くに隠れられそうな場所と言ったら…ほら、あったよ。」
「え？」

…そして、徐にトウコが指差したそこには。
崖のふもとで、野性の自然に隠されるようにして…大きく口を開けていた野生の洞窟の、その入り口が草木に埋もれるように鎮座していたのだった。
…見るからに人の手が加えられていない、天然製造の野生の洞窟。
入り口からでも、とても深いことが容易に分かるほどに…暗闇の奥の奥からは、何やら異様で不気味な雰囲気が漂ってきており…

「こ、こんなところに洞窟が…」
「行くよ炎馬。【紫影】はこの先さ。」
「え、ほ、ホントに行くのか!?っていうか、【紫影】が本当にこんなとこに居るってのか!?」
「当たり前さよ。どうやら、アタシらより先にここを通った奴も居るみたいだしねぇ…【紫影】を渡してなるものかい。グズグズしてると

置いてっちまうよ。」
「あ、ちょ…」

洞窟から漂う雰囲気に戸惑い、足が竦んでいる炎馬を意に介さず。トウコは何の躊躇もなく、草木を押し分け洞窟内へと入っていく。
…その足取りに迷いはなく、その気概に燻りはない。
そう、この先に夫の仇が居ると確信しているからこそ。その屑の命を、今度こそ自分の手で引きちぎってやるのだとして…燃える怒りを未だ内に潜めながら、どんどんと進む獅子原　トウコ。
…そんな危なげな祖母の背中に、孫は一体何を思うのか。

「い、行くよ、行くって！待てよばあちゃん！」

慌ててトウコを追いかけ始める、サウス校1年の獅子原　炎馬。
まぁ、こんな島に1人で居ることほど心細いことはないのだから、初めから炎馬にはついていく以外の選択肢はなかったのだが…
それでも、危険だとわかっていて死地に飛び込む祖母の後に、すぐに炎馬がついていけなかったのも無理はないだろう。
…何せ、得体の知れない洞窟の中に飛び込むだけならいざ知らず。祖母の話によるとこの先のこの地獄を作り出した張本人、【紫影】がいるというのだ。
そんな、二重に折り重なった不穏なる敵地。いくら『烈火』の後ろ盾があるとはいえ、まだ幼さの残る顔立ちをした炎馬からすれば…敵陣に向かうという行動など恐怖以外の何物でもなく…

…光届かぬ山の胎内、不穏な空気の流れる洞内。

反響する足音が、先の見えぬ暗闇をより一層不安なモノへと変えていき。万能端末であるデュエルディスクのライトで照らしているとはいえ、足場の悪い洞内ではどうにも思うようにすすむ事ができないでいる炎馬。

…しかし、大人1人が悠々と通れるほどの広さを持った洞窟が、こんなにも見事に出来上がるモノなのか。
まるで、誰かに誘っているかのようなその道筋は…獅子原　炎馬の心に、どこか気持ちの悪い感覚をジワジワと与え続けており…

そして…

洞窟内をしばらく進んだ炎馬たちに、向こう側から吹いてきた風が当たったかと思うと―

『バトル!グリーディー・ヴェノムで、トリフィオヴェルトゥムに攻撃ぃ!蠱毒のぉ…デッドリー・フィアンマー!』

紛れも無い、『デュエル』の音が聞こえてきた―

「ッ!?あの胸糞悪い声は【紫影】の奴だ!間違いない!」
「あ、ば、ばあちゃん!」

今確かに、【紫影】の声が聞こえたその瞬間。
まるで、弾けた火薬のように…いきなり全速力で走り出し始めた、『烈火』と呼ばれし獅子原　トウコ。
…怒りによるそのスピードは、並のアスリートを置き去りにするほどの瞬発力。

そう、洞窟内の悪い足場を、怒りによって踏みしめるそのダッシュによって…後ろをついてくる孫を置き去りに、全力疾走にてトウコは駆け出し始めたのだ。

…これ程までに逸る祖母を、炎馬は今まで見たことない。

そんな、怒気を纏って自ら敵地へと飛び込んでいった祖母を追って。炎馬もまた、引き離されながらも追いかけるように一本道を駆け出し始め…

そして、炎馬の目に洞窟の終わりが見えてきた頃…

暗い洞窟の先に、何やら光のようなモノが見えてきた…

そのとき―

「しいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいえ！」

―！

轟く咆哮、響く爆音。

突如洞窟内に響き渡ったのは、大地を揺らす燃え上がる叫びであった―

…それは紛れも無い人間の雄叫び、しかしとてつもない憎しみの叫び。

そう、炎馬が洞窟の終わりに…『大空洞』にたどり着くその直前に。トウコがようやく見つけた仇へと向かって、爆発音にも雄叫びを大空

洞の中に轟かせたのだ。
…こんな声、孫である炎馬とて聞いたことのないに違いなく。こんな、恩讐に塗れた祖母の声なんて。
そして、その絶叫に答えるようにして。叫びを上げた獅子原　トウコへと、大空洞の向こうから言葉を続けたのは…
「…騒がしいですねぇ。次は一体誰ですか？」
「見つけたよ…この屑野郎がぁぁぁ

「…誰ですか貴女？私、ババアの知り合いなんて居ないんですけど、ええ。」
「とぼけてんじゃないさよ！ここで逢ったが１００年目…アンタはここで、アタシが確実に殺してやる！旦那の仇だ！欠片も残さずぶっ殺してやる！アンタは、アタシがこの手で絶対に殺す！そこに寝転がってるガキをどかしな！構えろ【紫影】！デュエルだ、絶対に逃がさないよ！」
「…」

殺す…殺す…殺す―
獅子原　トウコから発せられるは、威嚇にも似た強い同じ言葉。
…一体、どれほどの怨みを込めればこんな声が出せるというのか。
獅子原　トウコから放たれるソレは、脅迫だとか恫喝だとか…そんなレベルの低い形容句とは、込められた意味からして断じて違う。
純粋なまでの殺意―
そう、野生の獣の怒りを纏う、今の『烈火』から放たれているのは混じり気の無い純粋なまでの【紫影】への殺意。

ただ、殺したい…【紫影】の屑を、肉片も残さず―

トウコにあるのは、ただソレだけ。そう、出来うる限り惨たらしく、力の限りただ無慈悲に…目の前で旦那の首を爆破されたその怨みは、たった３０年ぽっちじゃ薄れることなど絶対に無いのだとその声で現しながら…
あまりに濃すぎる怨みと辛み。その、とても一人の人間が抱えきれないであろう恐ろしいまでの殺意の重量を、燃え上がる怒りによって軽々と持ち上げ。
抑え切れない漏れ出す殺意が、どこまでも激しく【紫影】を襲う。
「…殺す、許さない、仇だ…どれもこれも聞き飽きた言葉なんですがねぇ…はぁ、本当に面倒くさい、ババアなんて招待した覚えはないん

ですが。どこから入ってきたんですかこのババア。」

しかし、そんな殺意に真正面から中てられていてもなお―

…目の前の女性にぎりぎり聞こえないような、しかし怒り狂った女性の耳には届いていそうな気のする程度の音量で。

ポツリとそう零された【紫影】の言葉は、どこまでも捻じれに捻じれて大空洞へと消えていく。

…全く怯む事無く、ただただ飄々とその場に佇み。憎たらしいまでに無表情に、その捻じれた態度を変えないままの【紫影】。

一体、これだけ他人に恨まれる事をしたというのにどうしてこんなにも悪びれずに居られるのか。

その、誰であっても理解できないであろう【紫影】の態度は…どこまでもどこまでも悪意に塗れ、そのまま怨みに取り付かれている女性を前に…

【紫影】は先程倒した女生徒を、その細腕で軽々と遠目に投げ捨てたかと思うと。徐に、デュエルディスクを構えつつ…

「っていうか私、ババアの知り合いなんて居ないんですけどもねぇ、えぇ。」

「なら…すぐに思い出させてやるさ！旦那の仇を、ここで討つ！」

「仕方ないですねぇ。はいはい、行きますよぉ。」

「行くさ！骨も残さず、ぶっ殺ぉぉぉぉぉぉおす！」

―デュエル!!

それは、突如始まる。

先攻は、【紫影】。

「私のターン、モンスターをセットしてターンエンドでえす。」

【紫影】　ＬＰ：４０００
手札：5→4枚
場：【セットモンスター】
伏せ：無し

…迅速。
そう、猛り狂った『烈火』を前に。
あまりに少ない手数を終えて、そのターンを終えてしまった裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…いくら目の前の女性に見覚えがなく、そしてあまりに浴びなれた言葉を喚くように叫んでいたからとは言え。
【王者】と同等の力を持つとされる、裏決闘界の融合帝ともあろう男が。まさか目の前の女性の力を読み間違ったなんて言い訳をするとは思えず、かといって理解できないその思考は一体何を考えているのか。

「な…アイツ、ばあちゃん相手にあんな適当に…」

ソレ故、祖母の後ろで先のやり取りを眺めていた炎馬が、思わずそう零してしまったとしてもソレはある意味当然と言えるだろうか。
…何せ、祖母は歴戦に名を残した伝説のデュエリスト『烈火』。
いくら【王者】とは呼ばれなかったとは言え、その力は【王者】や元【王者】達すらも認めている…かつては【王者】と同じ目線で鎬を削った、紛れも無い歴戦の猛者であるのだ。
…時代が時代なら、祖母も間違い無く【王者】と呼ばれていたデュエリスト。
そんな、決闘界の女傑と恐れられた圧倒的強者の1人であるその祖母に対し…【紫影】はこんな舐めた展開でターンを渡してきただから、

孫である炎馬が【紫影】のデュエルにそんな感想を抱いてしまったとしてもそれも当然に違いなく…
しかし…

「おや、お孫さんも同席ですか…ふふっ、」
「くっ…や、やっちまえばあちゃん！あんな奴、速攻でぶっ飛ばして…」
「アンタは黙ってな！」
「ッ!?」

チャンスなのだと叫んだ孫に対し、トウコの厳しい声が大空洞に木霊する、
そして、祖母の一喝を浴びて…炎馬は思わず、背筋が凍ってしまったかのような感覚を覚えてしまったのか。
…今の祖母の声が、聞いたことの無い威力を伴っていたというのもあるのだろう。
それに加え、見るからにチャンスであるのに…【紫影】に怨みを持つはずの祖母が、その言葉を【紫影】ではなく自分に向けたことに対し、炎馬は意味が分からず立ち尽くしてしまい…

「こんなモン奴の常套句さ。アレに油断して中途半端に回すと、痛い目見させられるっていう…汚い奴の考えそうな、クソみたいな煽りってねぇ。」
「…ほう、どこぞのババアだと思ってましたが、中々どうしていい嗅覚をお持ちのようで…」
「ハッ！アンタに褒められても気分悪いだけさよ！アタシのターン、ドロー！」

けれども、固まっている孫を意に介さず。
【紫影】の策略などお見通しなのだと言わんばかりに、高らかに弾ける『烈火』の声。

…そう、【紫影】に対し、積年の怨みを募らせてきた獅子原　トウコからしてみれば。
【紫影】の狙いなど、ただただ乗り越え踏み潰すのみなのだとして。
【紫影】の企んでいるであろう、底意地の悪い下種な思考をとことん見据え…
…ただ、激しく燃え上がるのみ。

「アンタに対するアタシの答えはコレ一択さ！魔法カード、【炎熱伝導場】発動！」
「炎熱…なるほど、【ラヴァル】…では、最初からフルスロットルと言うことですか。」
「当たり前さよ！骨も残さずぶっ殺してやるって言ったからねぇ…躊躇無く焼き殺してやるさ！デッキから【ラヴァルのマグマ砲兵】と【ラヴァル炎火山の侍女】を墓地に送る！そして侍女の効果で２体目の侍女を！２体目の効果で３体目の侍女を！そして最後の侍女の効果で２体目のマグマ砲兵を墓地に送る！」

そして、即座に。たった１枚の魔法カードで、実に５体のモンスターを墓地へと送った『烈火』、獅子原　トウコ。
それは『烈火』の異名に相応しい、煌々と燃え上がる１枚の魔法カードであり…
それは獅子原　トウコが現役時代に掲げていた彼女のポリシー…怒涛の展開、怒涛の攻め、怒涛の召喚のまさに始まりとなる、まさに彼女の初動を飾るに相応しい魔法カードであり…

「…早いですねぇ、ええ。」
「まだまだぁ！【真炎の爆発】発動！墓地からラヴァル５体を特殊召喚！」

―!!!!!

【ラヴァルのマグマ砲兵】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァルのマグマ砲兵】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　２００

さらに、続けて…
一瞬…そう、瞬きほどの一瞬で。陽炎と共に『烈火』の場に姿を現したのは、たった今彼女が墓地へと送ったばかりの炎の化身たちであった―。
…５体ものモンスターを、同時に場に揃えるなどコレもまさに破格のカード。
それはまさに、これより始まる『烈火』の展開を彩る花火のように…弾ける炎の爆発によって、『烈火』は呼び出されしモンスター達と共に…
加速し始める―

「行くよ！レベル４のマグマ砲兵に、レベル１の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】！」

【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】レベル５
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１８００

「まだまだ！もう一度レベル４のマグマ砲兵に、レベル１の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ラヴァルバル・ドラゴン】！」

【ラヴァルバル・ドラゴン】レベル５
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１１００

連続して現れる、獅子原　トウコのシンクロモンスター達。
…激しく派手な展開に裏打ちされた、あまりに安定したその初動。
そう、この安定感のある一瞬の爆発は、プロ時代でも並ぶ者のいない『世界最強の攻め』とまで称えられており…
そのまま、一度始まれば永遠に止まらないとさえ比喩されることもある、加速し続ける展開の要をトウコは即座に呼び出しつつ。シンクロモンスター２体を呼び出しただけで、『烈火』と呼ばれた女性の展開がこの程度で終わるはずもなく…

「ライブラリアンの効果で１枚ドロー！続けてドラゴンの効果も発動！墓地の侍女２体をデッキに戻し、セットモンスターを手札に戻ぉす！」
「ならば【エフェクト・ヴェーラー】のモンスター効果！手札から捨てる事で、【ラヴァルバル・ドラゴン】の効果を無効に！」
「それがどうしたぁ！【ラヴァル・アーチャー】を召喚し、その効果で【ラヴァル】の召喚権を１回増やす！そのままレベル４のアーチャーに、レベル１の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ラヴァルバル・ドラゴン】！」
「…２体目ですか。」
「ライブラリアンの効果で１枚ドロー！そしてアタシは増えた召喚権により、【ラヴァル・ガンナー】を通常召喚！その効果でデッキから、カードを５枚墓地に送るよ！…よし、墓地に送られた【ラヴァル】は５体！よってガンナーの攻撃力を、１０００ポイントアップさせる！」
「…ッ、中々激しいですねぇ。」
「ハッ！まだこんなモンじゃ終わらせないよ！再び【ラヴァルバル・ドラゴン】の効果発動！墓地の【ラヴァル・ランスロッド】と【ラヴァ

ル・バーナー】をデッキに戻して…【紫影】、アンタのセットしたモンスターを手札に戻おす！まだまだぁ！【ラヴァル・コアトル】を特殊召喚し、レベル５のドラゴンにレベル２のコアトルをチューニング！」

叫ばれるは怒り狂った、野生の獣の同じ咆哮。
それはまるで、至近距離に雷でも落ちたか、ダイナマイトでも爆発したのではと錯覚するほどの爆音であり…
…現シンクロ王者【白竜】、新堂　琥珀を鍛え上げたその力は今でも健在ということなのか。
まさに、怒りに燃える野獣のオーラと言えるモノが、１人の女性から放たれ続け…
そう、かつて『世界最強の攻め』と称えられた、そのあまりに激しいにはまるで終わりが無いかのように。
本物の炎を纏っていると錯覚するほどの、人間離れした怒りのオーラをただ漏れに。『烈火』と呼ばれた１人の女傑が、更に猛って怒りをぶつけ…

「真紅に燃える灼熱よ！戦乱に轟く雄叫びを上げ、マグマと共に舞い上がれぇ！」

彼女の怒りが具現化し、今ここに現れしは―

「シンクロ召喚！燃え上がれ、レベル７！【ラヴァルバル・サラマンダー】！」

―！

【ラヴァルバル・サラマンダー】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／　２００

現れたるはマグマの化身。灼熱に燃える溶岩の翼竜。
まるで、獅子原　トウコの怒りそのモノのような熱く燃えるその姿は…
ただただ純粋なまでの殺意となりて、目の前の【紫影】を燃やしにかかる。

「サラマンダーの効果発動！2枚ドローして、炎属性を含む手札2枚を墓地に送る！更にライブラリアンの効果で1枚ドロー！」
「…よくドローしますねぇ。何をそんなに必死になって…」
「ハッ！アンタをぶっ殺すためだからねぇ！手加減なんてするもんかい！サラマンダーの効果で墓地に捨てた、【ジェット・シンクロン】の効果も発動！手札を1枚捨て、墓地から【ジェット・シンクロン】を特殊召喚！そのままレベル4のガンナーにレベル1の【ジェット・シンクロン】をチューニング！シンクロ召喚、レベル5！【ラヴァル・ツインスレイヤー】！そしてライブラリアンの効果で1枚ドローし【貪欲な壷】を発動！侍女、マグマ砲兵2体、ドラゴン、コアトルをデッキに戻して　2枚ドロー！」

しかし、まだ止まらない獅子原　トウコ。
…一体、どうして『烈火』はここまでドローを繰り返しているのか。【ラヴァルバル・ドラゴン】の効果によって、すでに【紫影】の場には何もなく…自軍モンスターの総攻撃力も、４０００をゆうに超えているというのに。
それでもなお狂ったように、ドローを繰り返している彼女の勢いは確かに凄まじいの一言であり…
ソレはまるで、デッキから何かを無理矢理引っ張りだしているかのような…

「激しいドローですねぇ。しかし何をそんなに必死に…」
「…よし、来たよ！永続魔法、【禁止令】発動さ！」

「なっ、【禁止令】ですって!?」

そして…

トウコが発動した、その一枚の永続魔法を見て―

思わず、驚いたかのように声を漏らした、裏決闘界の融合帝【紫影】。

【禁止令】…それはその名が示す通り、宣言した『カード』をこのデュエルにおいて文字通りに『禁止』してしまうというシンプルなカード。

しかし、シンプルすぎるが故に…【禁止令】1枚につき、『禁止』出来るカードは1枚だけという、使いどころがあまりに難しいとされている、ピンポイントなメタカードであって。

…そう、『禁止』出来るカードは1枚だけ。

相手が『何』を使ってくるのか分かっている場面ならば良い。けれども、こんな序盤で…しかも、相手のデッキが未だ明確になっていないこの状況で、こんなピンポイントなカードを使用するだなんて。

…常人であれば選択出来ない、正気の沙汰では使用すらできない。

いくら歴戦の『烈火』と言えども、この場面で何の迷いもなくソレを使用するだなんて…とてもじゃないが、正常な精神状況とは思えなく…

それでも…

「アタシが宣言するのは【バトルフェーダー】!どうせその手札に持ってんだろう?いつもの事だからねぇ!」

「ッ…ま、まさかそんな無理矢理な手で来るとは…馬鹿正直すぎて逆に驚いてしまったじゃないですか…」

「ハッ!馬鹿で結構、アンタを殺せるんなら本望さよ!これで終わりだ屑野郎ぉ!まずは【ラヴァルバル・サラマンダー】で、【紫影】にダイレクトアタック!」

獅子原　トウコは迷わない。

微塵も宣言に躊躇などせず、ただただ奮える怒りのままに…

３０年以上に亘り募らせてきた、【紫影】への怒りを爆発させんと。

今、その歴戦の経験から、『烈火』の渾身の怒りが焔となりて―

「消し飛べぇ！灼熱のぉ…ギガ・フレイィィイムッ！」

一直線に、【紫影】へと襲いかかり…

しかし―

「…残念、ハズレです。ダメージ計算時に手札の【スモーク・モスキート】の効果発動。」

「なっ!?」

「ふふっ、中々鋭い読みでしたが…当てがハズレましたね？ダメージを半分にして【スモーク・モスキート】を特殊召喚！」

―！

【スモーク・モスキート】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【紫影】　ＬＰ：４０００→２７００

しかし、灼熱の炎弾を真っ二つに切り裂くように。
【紫影】の手札から飛び出したのは、１体の小さき蚊のようなモンスターであった―
そのまま、半分になった炎弾は片方は【紫影】へと向かうものの、もう片方は逸れて大空洞の壁へとぶつかり…

―そして、２つの爆発音が大空洞に響いたかと思うと。
半分になったとは言え、受けたダメージもまるで応えていないかのように…炎の中から、傷一つ負っていない【紫影】が姿を現したではないか。

「ふふっ、【スモーク・モスキート】の効果により、このターンのバトルフェイズは終了…残念でしたねぇ。今の私のデッキ、【バトルフェーダー】は入っていないんですよねぇ。」

淡々と、飄々と。
どこまでも底意地の悪い捻じれた声で、煽るようにトウコへと向かってそう言葉を述べた裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…いくら半分になっていたとはいえ、それでも１３００ものダメージを与える炎の半塊に飲まれたのだから、少しくらい火傷を負っていてもおかしくはないはずだというのに。
それでも【紫影】はどこまでもかわらず、捻じれた笑みを浮かべるだけ。

「…チッ、読み間違えたか。」
「いやぁ危ないところでした。一つ前のデュエルで、【バトルフェーダー】をかなり警戒されていたものでして…おかげで、デュエルの寸前にカードを入れ替えておいた甲斐がありました。何やら私を狙う者達はとことん【バトルフェーダー】を警戒していらっしゃる様子でしたので、ええ。」
「…仕方がない、アタシはカードを２枚伏せてターンエンドだ。」

獅子原　トウコ　ＬＰ：４０００
手札：６→２枚
場：【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】
【ラヴァルバル・ドラゴン】
【ラヴァルバル・サラマンダー】

【ラヴァル・ツインスレイヤー】
魔法・罠：【禁止令】、伏せ2枚

…間違いなくトウコはこのターンで決着を着けるつもりだった。
そう、激しい展開に加速する場、そして燃え上がる怒りによって【紫影】の守りの手を封じたトウコのデュエルの流れは、一見すれば完璧にさえ思える仕上がりであったのだ。
…それは過去の経験から、【紫影】という男のデュエルを知り尽くしている『烈火』だからこそ迷わなかった歴戦の勘。
何しろ、もしも【紫影】が『烈火』とデュエルする前に、ウエスト校の少女とデュエルをしていなかったら…先程の攻撃の時に、【紫影】の手札にあったのは間違いなく【スモーク・モスキート】ではなく【バトルフェーダー】であったはずなのだから。
…それも『運』と言ってしまえばそこまでではあるものの、しかし紛れも無くこのターンの攻撃で命拾いしたのは【紫影】の方。
迫り来る『烈火』の半端ないプレッシャー。ソレを真正面から受け続けるなんて、例え【王者】クラスであっても耐え切ることなど難しいことであり…

「私のターン、ドロー！ふふふっ、それなりにやるババアみたいですからねぇ…少々こちらも本気で行かせていただきますよぉ？モンスターをセットして魔法カード、【太陽の書】を発動！【メタモルポット】をリバースしちゃいまぁす！2枚捨てて5枚ドローでぇす！」

だからこそ、即座に。
自分のターンを迎えてすぐに、【紫影】は迅速にリバースモンスターの効果を発動しにかかるのか。
今のターンの攻防で、遊んでいる暇など無いことを【紫影】もどこか理解した様子であり…
発動されたのは、怪しく輝く呪術の書と…怪しげな瞳を除かせる、壷のようなモンスターの効果。

【メタモルポット】を掴んだ手札の位置から、ソレは紛れも無く最初のターンに【紫影】が場にセットしていたモンスターなのだろう。リバース効果という発動のし辛さを、【太陽の書】によって迅速に行い。その効果によって、相手の手札すらも巻き込んで全ての手札を入れ替えにかかり…

また、【シャドール】というデッキにおいて【メタモルポット】というカードは、融合素材になることもさる事ながら手札交換以上の力を持ち合わせており…

「チィッ！全て捨て５枚ドローだ！」

「ふふっ、そして墓地に捨てた【シャドール・ビースト】と【シャドール・ファルコン】、の効果がそれぞれ発動しますよぉ？ビーストの効果で１枚ドローし、ファルコンの効果により自身を裏側守備表示で特殊召喚！まだまだ行きますよぉ？【手札抹殺】を発動でぇーす！５枚捨てて５枚ドロー！」

「ハッ！どんだけ手札交換するってのさ！よっぽど手札が悪いみたいさねぇ！５枚ドローさよ！」

「ふふふっ、ババアの煽りなど聞く耳持ちません。【影依融合】発動！デッキの【シャドール・リザード】と光属性の【妖精伝姫―シラユキ】を融合！融合召喚、来なさい、レベル８！【エルシャドール・ネフィリム】！」

―！

【エルシャドール・ネフィリム】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

そうして現れる、巨大なりし影の人形。
悲しさを匂わせる無表情の顔と、無機質なるも悲嘆に暮れているかのようなその静けさがなんとも不気味な…
揺らめく悲痛の糸に縛られ、感情も無く焔を見下ろす。

「チッ、面倒なのが出てきたね…」
「ふふっ、融合召喚成功時、ネフィリムのモンスター効果発動！デッキから【シャドール】モンスターを墓地に送りま…」
「させないよ！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！ネフィリムの効果を無効にする！」
「おや…ですが無駄ですねぇ！ネフィリムの効果は無効になりますが、融合素材となったリザードの効果で私がデッキから墓地に送るのは【シャドール・ドラゴン】！そしてドラゴンのモンスター効果！【デモンズ・チェーン】を破壊しちゃいますよぉ！」
「チィッ！」
「まだですよぉ？【強欲で貪欲な壷】を発動し、デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！そして【融合】を発動し、場の【シャドール・ファルコン】と【メタモルポット】を融合！現れなさい、レベル１０！【エルシャドール・シェキナーガ】！」

―！

【エルシャドール・シェキナーガ】レベル１０
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／３０００

さらに、続けて―
『烈火』の手を交わしつつ、地属性の力を取り込んだ影のモンスターを即座に場に呼び出した裏決闘界の融合帝、【紫影】。
その姿は、ネフィリムが更に巨大なる要塞のような機械に縛り付けられたような出で立ちであり…
次々と増えていくその融合モンスター達の圧力は、『烈火』のシンクロモンスター達にも負けず劣らずの迫力を醸しだしていて…
「大型の融合モンスターが２体か…けど、この程度で終わらせるような奴じゃ無い…」

「ふふっ…よぉく分かっているじゃないですか…貴女がどこのババアかは知りませんが…中々骨のあるお方みたいですからねぇ！こちらも少々本気にならねば失礼と言うモノでしょう！【死者蘇生】を発動し、墓地から【シャドール・リザード】を特殊召喚。そして再び魔法カード、【融合】を発動！私は【スモーク・モスキート】と【シャドール・リザード】…2体の闇属性モンスターを融・合！」

そして、【紫影】もまたこれだけでは終わらず。
トウコの怒りを煽るように、更に炎を扇ぐように…
【紫影】の捻じれた宣言が大空洞へと木霊し始めて。

「禍つ紫影の揺らめきよぉ、世界の全てを包み込めぇ！融合召喚！」

叫ばれしは狂言、木霊せしは凶声。
それは禍々しく凶暴な、そしてあまりに捻じれた歪なるオーラ。
怒りに震える強き淑女を前にして、ソレに対抗せんと【紫影】は今己の名を呼び出さんとしているのか。
歪み捻じれる神秘の渦より、禍々しく呼び出されし【紫影】の『名』が…

ここに、現れる―

「現れなさい、レベル8！【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】！」

―！

【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル8
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

…現れたるは歪み捻じれた、あまりに禍々しき紫影の毒竜。
毒々しさが牙を剥き、飢餓の咆哮が大気を千切り…
その異色で異端なる異質な異様は、毒々しくも艶かしく蠢く畏怖そのモノ。
虚空にも似た虚ろな目で、視界に映ったモノ全てを喰らいつくさんと…それは見た者全てに恐怖を与える、意思を持った飢餓の化身であって。

…獅子原　トウコは知っている。これが、このモンスターこそが狂気に染まった捻じれた男、【紫影】の『名』そのモノなのだ、と。

対戦相手の本能へと、直接訴えかけるかのような紫毒の狂気と奇怪な咆哮。
この歪で異質なる畏怖を駄々漏れにしている、捻じれた蠢きを魅せる毒の竜こそ…彼女の旦那のその命を、嘲笑いながら奪い去った屑の『名』となった飢餓の毒竜であり…

「現れたか、忌々しい蛇ヤローが！」
「ふふふふっ、スターヴ・ヴェノムの効果発動！【ラヴァルバル・サラマンダー】を対象に、サラマンダーの攻撃力分、スターヴ・ヴェノムの攻撃力をアップさせる！攻撃力、２６００ポイントアップでぇーす！」

【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００→５４００

奇怪なる咆哮が反響する。大空洞の大気を揺らす。
その、命そのモノを喰らいつくさんとしているかのような滴る毒の涎は…【ラヴァルバル・サラマンダー】へと狙いを定めているのか、どこまでも不気味な空腹感を思わせていて。

そうして…

「攻撃力５４００…」

「そして最後に墓地のシラユキの効果も発動でぇす！墓地のカード７枚を除外し、シラユキを墓地から特殊召喚！その効果により、【ラヴァルバル・サラマンダー】を裏守備表示に！」

「くっ！」

「ではバトル！シラユキで裏守備表示のサラマンダーを！シェキナーガでライブラリアンを！ネフィリムでツインスレイヤーをそれぞれ攻撃ィ！」

―!!!

「ぐっ！」

獅子原　トウコ　ＬＰ：４０００→３８００

『烈火』展開に負けず劣らず、４体ものモンスターを揃えた【紫影】のその宣言によって、まず襲い来るは３体のモンスターによる容赦の無い実体化した攻撃の数々。

…たかだか３００のダメージ、しかして実体化したリアルダメージ。

その、鋭い針が幾重にも襲い来る様なダメージがモンスターから直接獅子原　トウコへと襲いかかり…

それによって、トウコもまた少々苦しげな表情を浮かべてしまい…

「ふふっ、ネフィリムが戦闘ダメージを与えられないモンスターで助かりましたねぇ？ですがコレは耐えられますかねぇ！スターヴ・ヴェノムで【ラヴァルバル・ドラゴン】に攻撃！デッドリー・フレアー！」

―！

「ぐあぁぁぁぁあ！」

獅子原　トウコ　ＬＰ：３８００→４００

そして…

最後に襲い掛かった、恐るべき数値のダメージによって―

そのまま、後ろに弾き飛ばされるようにして。何と『烈火』が、大きく吹き飛ばされてしまったではないか―

「ッ！ばあちゃん！」

…ソレ故、思わず炎馬が取り乱したように叫んでしまったのも無理は無い。

そう、重く圧し掛かったのは、実に３４００ものダメージ。ＬＰは０にはならぬものの、それでもほとんどのＬＰを削り取ってしまうその衝撃は…

ＬＰが残るとはいえ、とてもじゃないが意識を保ち続けることすらも難しそうな痛みとなりて『烈火』へと襲い掛かったのだから。

けれども、孫の叫びが耳に届いたからか。地面を擦るようにして、弾き飛ばされた獅子原　トウコは…

意識を持っていかれそうな衝撃波を何とか耐えつつも、ふらつきながらどうにか立ち上がり…

「ぐっ…テメェ…」

「おや…生きてましたか。…ババアの癖にタフですねぇ。とっととくたばった方が楽になれると言うのに…」

「…ッ…ハッ！ア、アタシがこの程度で、くたばるわけないさよ！こんなダメージ屁でもないさ！」

「…そうですか。まぁいいでしょう、次はありませんからねぇ。【終わ

りの始まり】を発動。墓地のハウンド2体、ファルコン、リザード2体を除外し3枚ドロー。…私はカードを2枚伏せてターンエンドです。」

【紫影】　ＬＰ…２７００
　手札…3→2枚
【エルシャドール・ネフィリム】
【エルシャドール・シェキナーガ】
【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】
【妖精伝姫―シラユキ】
　伏せ…2枚

「アタシのターン、ッ…ドロー！」
「おやおやぁ？随分苦しそうですねぇ、ええ！」
「五月蝿いよ！魔法カード、【貪欲な壺】発ど…」
「おっと、ソレにチェーンして永続罠、【影依の偽典】を発動！墓地のシャドール・リザードとハウンドを除外融合！融合召喚、レベル５！【エルシャドール・ミドラーシュ】！」

―！

【エルシャドール・ミドラーシュ】レベル５
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／　８００

そして、ターンが移り変わってすぐに。
ダメージの残るトウコを、更に追い詰めるがの如く…【紫影】が発動したそのカードによって、【紫影】の場には更なる融合モンスターがその姿を現して。
…それは影の糸で操られた、竜に乗った少女のような人形。
その不気味な佇まいと、行使する影の魔術によって…相手の展開を封じ込めてしまうという、恐るべき効果を持ったモンスターであり…

…これで【紫影】の場には、融合モンスターが3体。
―特殊召喚されたモンスターとの戦闘では、無類の強さを誇る巨大な光の人形。
―どれだけ強力なモンスター効果でも、無慈悲に粉砕してしまう巨大な地の要塞。
―効果で破壊されない上に、相手の展開を慈悲なく封じ込めてしまう闇の人形。

…これでは、いくら歴戦の『烈火』とて先程のような加速する展開など出来るはずもなく。

そんな、一筋縄ではいかないであろう【紫影】の融合モンスター達の、不気味な重圧がどこまでもどこまでも気味悪くトウコへと伸びていき―

「チッ!ライブラリアン、ドラゴン、ツインスレイヤー、サラマンダー、アーチャーを戻して2枚ドローだ!」
「ふふっ、けれどシェキナーガとミドラーシュがいる限り、もう先程のような馬鹿げた展開は封じ…」
「しゃらくさぁい!【サンダー・ボルト】発動!」
「ッ!?」

けれども…

それがどうしたと言わんばかりに―

叫ばれし『烈火』の宣言によって、凄まじき落雷が【紫影】の場へと襲いかかる。

「【禁止令】と言い【サンダー・ボルト】と言いなんと馬鹿正直な…で、ですがミドラーシュは効果で破壊されな…」
「そして【サンダー・ボルト】にチェーンして速攻魔法、【禁じられた聖杯】も発動さ!ミドラーシュの効果を無効にぃ!」
「なっ!?」

増えし手札をフルに活かして、【紫影】に抵抗を許さぬ叫び。
…そう、【紫影】の手札交換効果の恩恵は、【紫影】だけではなくトウコにも齎されていたのだ。
最初のターンのドロー加速に加え、あれだけデッキからカードを引き出した『烈火』なのだ。どれだけ【紫影】が対抗しようと、そんなモノ微塵も気にはならないのだとして…
全てを、破壊し尽くす―

「くっ!ならば墓地から【復活の福音】を除外することで、スターヴ・ヴェノムの破壊を防がせていただきますよぉ!」
「何ぃ!?そりゃ小龍の…【復活の福音】なんてモンがなんでアンタのデッキに!?」
「ふ、ふふ…『逆鱗』のデッキから適当に拝借したカードなのですが、使えないカードでしたので捨ててておいて正解でした…」
「屑野郎が舐めやがって…だがこっちも、アンタが手札交換連発したおかげで手札と墓地はもう充分!そんでもう一度【貪欲な壷】を発動さ!ガンナー、アーチャー、バーナー2体、そして妖女をデッキに戻して2枚ドローだ!」
「止まらない…全く、展開に振りきった輩はコレだから性質が悪…」
「聞こえないねぇ!【炎熱伝導場】を発動!もう一回デッキからマグマ砲兵と侍女を墓地に送りぃ…侍女の効果で侍女を!最後の侍女の効果でマグマ砲兵を墓地に送る!そんでもってもう一度魔法カード…【真炎の爆発】発動ぉ!」

!!!!!

【ラヴァルのマグマ砲兵】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァル炎火山の侍女】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　２００
【ラヴァルのマグマ砲兵】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　２００

…再び、瞬きほどの一瞬で。トウコの場に燃え上がり現れる、５体の炎の化身たち。

…普通、先のターンの動きと全く同じ展開を行えるなんてありえない事。ましてや、同名モンスターを交えたこんな一瞬の展開なんて。

それでも、ソレをいとも簡単に行う『烈火』のデッキ回しは、流石は歴戦を戦い抜いた決闘界の女傑とも言えるだろうか。

「…また同じ展開ですか…全く、芸が無い…」

「ワンパターンで結構さ！止められるモンなら…止めてみろぉ！マグマ砲兵に侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ＴＧ―ハイパー・ライブラリアン】！」

「…これ以上煩く回られても面倒です。シンクロ召喚成功時に、墓地のシラユキのモンスター効果発ど…」

「五月蝿いのはソッチさよ！速攻魔法、【墓穴の指名者】発動！シラユキを除外ぃ！」

「なっ!?」

「これで五月蝿いのは居なくなったよ！もう一度マグマ砲兵に侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル５！【ラヴァル・ツインスレイ

ヤー】！」

―!!

【ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン】レベル５
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１８００
【ラヴァル・ツインスレイヤー】レベル５
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／　２００

【紫影】の妨害など意に介さず、悠々と展開を続ける獅子原　トウコ。
…その加速度は、先のターンとは比べモノにならない程に激しい代物。
そう、自分の展開と【紫影】の効果、その双方によって蓄えたカードによって最早トウコの今の勢いは、到底【紫影】が追いつけぬ領域にまで燃え上がっているのだ。
…例え初動がワンパターンでも、突き詰めればソレは究極の安定系。
黄金パターンとも称されるその動きを貫き通せば、ソコから無限大とも思えるシンクロ召喚のルートが幾重にも広がるのであり…
受けたダメージも、更なる【紫影】への怒りへと変え。そのまま『烈火』は、更なる展開を行わんとその手を天高く掲げ続けるのみ。

「ライブラリアンの効果で１枚ドロー！更に速攻魔法、【紅蓮の炎壁】発動！墓地のマグマ砲兵を除外し、【ラヴァルトークン】１体を特殊召喚する！そのままレベル１の【ラヴァルトークン】に、レベル１の侍女をチューニング！シンクロ召喚、レベル２！シンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】！ライブラリアンとフォーミュラの効果で２枚ドロー！」
「展開しながら手札を増やすとは…全く、本当にとんでもないババアですねぇ…」
「まだまだぁ！【死者蘇生】を発動！墓地から【ラヴァルロード・ジャッ

ジメント】を特殊召喚！その効果で、墓地の侍女を除外してアンタに１０００のダメージを与えるよ！」
「ぐっ!?」
「隙を見せたね！【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！そして最後の【真炎の爆発】を発動さ！墓地からマグマ砲兵を特殊召喚し、レベル４のマグマ砲兵にレベル２のフォーミュラをチューニング！シンクロ召喚、レベル６！【ラヴァル・グレイター】！」

―！

【ラヴァル・グレイター】レベル６
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／　８００

「グレイターのシンクロ召喚成功時！手札を１枚墓地に送るが、ライブラリアンの効果で１枚ドロー！」
「くっ…本当にとんでもない人ですねぇ…よもやここまでやるとは…」

果たして…これ程までに激しい展開を、勢いを加速させながら更に激しくし続けるデュエリストは彼女以外に存在するのだろうか。
現シンクロ王者【白竜】、新堂　琥珀も彼女によって磨かれた原石ではあるものの…
…それでもこのスタイルの元祖、原点と言える存在の勢いは、引退してもなお健在であると言わんばかりに。
…【王者】とは呼ばれなかったものの、その領域に間違い無く踏み入っている力を隠す気もなく。誰も触れぬ加速を帯びて、『烈火』は更に熱く燃え上がり続けるのみであり…
「はぁ…仕方がない…」

そんな激しく燃え上がる、目の前の女性のデュエルをその身で味わってか。
見知らぬババアとまで言い捨てた相手に対し、【紫影】が何やら不気味に呟いて…

…

「す、すげぇ…これが…ばあちゃんの本気…」

目の前で繰り広げられている、尋常じゃないアツさを帯びている祖母の姿をその目で見て…
思わず、このデュエルに目を奪われていたサウス校1年、獅子原炎馬。
…しかし、ソレも当然か。
何せ【紫影】という男の力は知らなかったものの、歴戦のデュエリストである祖母がこれ程までに本気でアツくなっている姿をデュエルの最初から炎馬は見続けているのだ。
先程のデュエル傭兵、ホトケ・ノーザンとのデュエルも凄まじきモノだった。けれども今の祖母のデュエルは、【紫影】への怒りも合わさってか孫である炎馬も見たことのないほどに凄まじく激しい代物となっており…
…こんな荒々しく燃え上がる祖母のデュエルなんて、炎馬からしても未知の領域。
何故そこでそのカードが繋がるのか、何故ソレをその場面で引けるのか、何故ソレをそこに合わせられるのか、何故ソレが当然のように手札にあるのか。
そんな、今の彼では到底理解など出来ぬであろう、激しすぎる流れが現実となりて繰り広げられるこのデュエルは…

未だ成長途中にある獅子原　炎馬からすれば、教科書以上の圧倒的役割となりて彼の脳裏に焼き付き続けており…

…初めて見る祖母の本気、隠す気もない本気の殺意。

これが、この激しさが。『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコの、歴戦に名を残した伝説たる由縁の力なのだとして。

まだまだ加速途中である祖母のデュエルに、炎馬もまた1人のデュエリストとして心から魅入っていて―

―そう、魅入ってしまったからこそ…

炎馬は―

「イケる！これなら絶対【紫影】を倒せ…ッ!?うわぁぁぁあ!?」

自分にも手が回っていたことに、気がつかなかったのだ―

「ッ!?炎馬!?」

「うわぁ!?な、なんだこれぇ!?」

突然…
そう、突然に―
激しい加速を続ける獅子原　トウコの、その叫びの間に割って入るようにして…
突発的に大空洞に響き渡ったのは、このデュエルに関係無いはずのサウス校1年、獅子原　炎馬の驚愕と焦燥の喚き超えであった。
そして、孫の叫び声に対し。トウコが、反射的に視線を背後へと切ったそこには…

なんと、炎馬の体が宙に浮いているではないか―

「炎馬ぁ！」
「な、なんだよこれぇ！どど、どうなってんだぁ!?」

突然の事に、一瞬思考が白紙になってしまったトウコ。
突如の出来事に、わけもわからず慌てふためく獅子原　炎馬。
…しかし、それも当然だろう。
何せ、デュエルに集中していたトウコの耳に、突然安全圏に居たはずの孫の悲鳴が聞こえてきたのだから。
また、炎馬からしてもデュエルに魅入っていたらいきなり空中に体が浮いてしまい、そして身動きが取れなくなってしまったのだから、ソレで驚くなと言う方が無理な話に違いなく。
すると、その2名の獅子原家の者の驚嘆の声を耳にして…
何やら、【紫影】が捻じれた笑みを浮かべつつその口を開き始めた。

「ふふっ、驚きましたかぁ？実は先程、こっそり『糸』を絡まさせていただきましてねぇ！お孫さんは捕まえさせていただきましたよぉー！」
「ッ、糸だって!?」
「えぇ、えぇ！この島ではカードが実体化していますからねぇ…【エル

シャドール・ミドラーシュ】を出したときに、気付かれない様に仕掛けを施しておいて正解でした！いやぁー貴女が孫と一緒で助かりましたよ！おかげで、貴女の手を止めることに成功したんですからねぇ！」

そう、よくよく見れば。

炎馬はいきなり宙に浮いたわけではなく、その体を良く見てみれば…この大空洞の、薄暗さ紛れるようにして。なんと炎馬の体には、『細い糸』のようなモノが絡まっているのだ。

…炎馬の体を宙吊りにしている、その細く見えぬ糸。

ソレが炎馬を宙吊りにし、そのままゆっくりと【紫影】の傍まで炎馬を運び…

【紫影】はそのまま、まるで炎馬を盾にするかのように…トウコへと向かって、捻じれた笑みを浮かべつつ…

「ほらほらぁ、どうしたんですかぁ？展開止めちゃうんですか？もうすぐ攻撃仕掛けてくるんでしょぉー？私を殺す大きなチャンスじゃないですかぁ！まぁ私に攻撃すれば、今なら孫ごと一緒に吹き飛んでしまいますがねぇ、ええ！」

「ッ！【紫影】ぃ！アンタまたこんなゲスい手を！」

「ふふふっ！下種だなんて光栄ですねぇ！そんなに褒めないでくださいよぉ！…あぁ、そういえば以前にも同じような事しましたっけ。ふふっ、アレも似たような展開でしたねぇ…夫の目の前で妻を人質に取ったら、途端に威勢が小さくなってしまったんですからぁ！」

「ッ!?な…アンタ…ソレって…」

「いやぁーアレはホント傑作でしたねぇ！自分の命よりも、妻の命を優先させた夫婦の愛がまた笑えて笑えて！ふふふっ、夫の首がボンッ！って吹っ飛ばされた時の妻の顔ときたらホント滑稽でしたねぇ…いやぁ人間ってあんな顔が出来るモンなんですねぇ！絶望と悲嘆と逃避と絶叫の入り混じった、気持ちの悪いぐしゃぐしゃな顔！あぁ、また見て笑いたいですねぇ！あの歪んだ泣き顔を、ええ！」

【紫影】の口から語られるのは、聞くことすら憚られるような下賤なる言葉の数々。
…見るからに卑怯な手だというのに、ソレを全く恥じること無く。
一体、どんな人生を送ればここまでの罪を重ねながらその罪を面白半分で蹴飛ばせる人間が出来上がるというのか。
そう、ここまでの悪意を撒き散らしながら、本人は全く悪びれることなく嬉々として己の罪を喜んでいるという…その人間の汚い部分を凝縮して煮詰めたような、下種で下賤で下卑た思考の、行動言動がまるっきり小物な卑怯な人間が。
…狂気に塗れた【紫影】の言葉。イカれた精神の【紫影】の言動。
そんな気色の悪い言葉の羅列が、この世のモノとは思えない程の狂気となりて…どこまでもどこまでも不気味なままに、大空洞に木霊し続ける。

「ふふ…ふふふ…どうしますかぁ？私を炎で焼き殺しに来ますかぁ？ですが燃え死ぬ苦しみは尋常じゃないほどに苦しいですからねぇ…お孫さんにソレを味わわせますかぁ？ふふふふふぅ！お優しいお婆ちゃーん！ほらほらぁ、どうするんですかぁ？自分で孫を殺しますかぁ!?ねぇねぇ！早く決めてくださいよぉー！」
「テメェ…どこまで腐ってやがる…旦那を殺しておいて、次は孫を盾にするたぁ…」

また、【紫影】の言動を耳に入れた獅子原　トウコが、何やらワナワナと肩を震わせ始めており…
…そう、たった今【紫影】が語った昔の出来事をその耳に入れて。トウコの脳裏には、かつての出来事が昨日の事のようにフラッシュバックしてきてしまったのか。
今のトウコの脳裏には、とても鮮明に映し出されている。過去、自分が人質に取られた所為で…勝てていたはずのデュエルで負けてしまい、目の前で首から上を爆破されて殺された夫の姿が。

「ふふっ、私はいいんですよぉ?別にキレて攻撃してきたって。今の貴女が取れる行動は2つに1つ…孫かわいさに、このままターンエンドしてしまうか…更に展開して、孫ごと私を焼き殺すか…」
「ぐ…」
「ほらほらぁ、どうするんですかぁ?早く決めてくださいよぉ!私を殺したいんでしょぉー?なんでしたっけ?旦那の仇でしたっけぇ?ふふふっ、どうせ殺された旦那っていうもの、顔も名前も覚えていないような有象無象でしょうけれどぉ!」
「ッ…この屑野郎が…」
「おおっ、来ますか?来ますかぁ?ふふふっ!孫を犠牲に旦那の敵討ちしちゃうんですかぁ?自分で孫を殺しちゃうんですかぁ!?ふふふふふっ!」
「うっ…」

けれども、それでもなお怒りのままに行動することなど今のトウコには出来はせず…
…自分の後ろに置いておけば、そこが最も安全な場所だと自負していた。
だからこそこんな敵の胸元まで孫を連れて進んできたというのに…ソレが、今この時になって思わぬ手で利用されてしまうだなんて―…そんな後悔がトウコを襲う。見通しの甘かった自分を呪う。
過去の経験から、こんな状況に陥るかもしれないことは十二分に予測は出来たはず。しかし強すぎる怨みと怒りによって、ソレを失念してしまったことがまさかこんな状況を生み出してしまうだなんて…と。

そうして…

「ぐっ…くそが…クソがぁ…」

旦那のみならず、孫まで失うわけには行かないトウコが。
今ゆっくりと、構えていたデュエルディスクを下へと降ろし始め…

「……じゃ…え…」

しかし…

「…までも…」
「ほ？」
「いつまでも調子に乗んじゃねぇえ！【真炎の爆発】発動ぉ！」

―！

突如―
そう、突如として―
空中で縛られ宙吊りにされていた獅子原　炎馬が、思い切り叫んだと同時に。
食い込む糸を無理矢理捻り、デッキから引いた1枚のカードを己のデュエルディスクに叩きつけたかと思うと…

何と、【紫影】ごと巻き添えにして。突如として、炎馬の体の周囲に弾けるような小さな爆発が巻き起こったのだ―

無論、それはトウコから飛び出た炎ではない。
そう、それは実体化しているからこそ取れた手段。カードが現実になっているからこその、逆に意表を突いた炎馬の抵抗であって―

「なっ!?」
「実体化してるって言ったのはお前だ馬鹿野郎！ばあちゃん、こんな屑さっさとやっちまえぇ！」
「ハッ！いい子だ炎馬ぁ！【紅蓮地帯を飛ぶ鷹】を通常召喚！レベル５のライブラリアンとツインスレイヤーに、レベル１の【紅蓮地帯を飛ぶ鷹】をチューニング！」

そして、糸を焼ききって逃げ出した炎馬を再び庇いつつ。
水を得た魚の様に…いや、油を得た炎の様に、再び『烈火』の叫びが空を裂き…

逆立つ―

トウコの赤みがかった、短く切りそろえられた茶色い髪が。
それはまるで炎の如く。薄暗い大空洞を照らすように、トウコの髪まるで本物の炎のように揺らめき始め…
―言葉で例えるならば、『炎髪』。
獅子原の血を持つ猛者が、本気を出した時にのみ見られるその現象は、まさに古の時代から受け継がれし獅子原家の盟約が成せる、まさしく獣の血が成せる御業であって―

「烈火！舞い上がりて宙をも焦がす！燃える星々を喰らいつくせぇ！」

叫ばれしその呼び声に呼応して、宙に舞い上がる２体のシンクロモンスターがその身を１０の炎球へと変える時。
導きの炎鳥が炎輪となりて、今こそ怒りの化身をこの大空洞へと呼び出さんとしているのか。
かつて世界の頂点を見た、今なお語り継がれる伝説と共に…

それは―

「本気でキレたよ！骨も残らないと思えぇぇぇぇ！シンクロ召喚！来な、レベル１１！【星態龍】！」

―！

【星態龍】レベル１１
ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／２８００

現れたるは星を喰らいし、煌々と燃え盛る１体の巨龍。
…それは歴戦を戦い抜いた強者の姿。数多の敵を打ち崩してきた巨大なる姿。
そう、まさに宙をも焦がす星々を模した、『烈火』と呼ばれし歴戦のモンスター。その巨大なる存在が、かつて戦った【紫影】とその竜を見下ろしながら…
主の炎髪に呼応するように、怒りのままに轟き叫ぶ。

「なっ、そそそれはしし獅子原　烈火の【星態竜】ぅ!?な、何故貴女がソレを…はっ!?そそその髪はままままさか貴女トトトトウコさ…」
「今更気付いても遅ぉぉぉぉぉぃ！【受け継がれる力】を２枚発動！【ラヴァルロード・ジャッジメント】と【ラヴァル・グレイター】を墓地に送り…【星態龍】の攻撃力を、５１００アップする！」

―!!

【星態龍】レベル１１

ＡＴＫ／３２００→８３００

更に燃え上がるトウコの炎髪。そしてそれに呼応して更に巨大化する【星態龍】。

炎を纏う主のように、『烈火』の龍もまた纏う炎を更に盛らせ…滾る怒りを昂ぶらせ、大地を揺るがす叫びを上げて。

それは今の主たるトウコの怒りを、【星態龍】もまた感じているかのような燃え盛り方。そう、かつて【紫影】に殺された、獅子原　烈火の無念をこの龍もまた晴らさんとしているかのようでもあり…

その巨大なる瞳に、屑とその毒竜をしっかりと映し出し。

積年の怨みを今、『烈火』と共に―

「馬鹿な…なな、何故トトトウコさんがここここに…どどどどうして貴女がせせ、【星態龍】を！」

「ごちゃごちゃうるさぁぁぁぁぁい！死ねぇ【紫影】！バトル！【星態龍】で、スターヴ・ヴェノムを攻撃ぃ！」

「ひぃっ!?」

唸る慟哭、弾ける衝動。

トウコも『烈火』も、もう我慢なんて出来はしない。

募り募った殺意と怒りを、ただただ純粋な焔へと変え。ただただ目の前の屑を焼き殺さんと、ソレは咆哮と共に放たれるのか。

…攻撃力８３００、そしてあえて【紫影】の竜を残したその選択は大いに正しかった。

そう、【紫影】も、もうその手にある【スモーク・モスキート】では防げはしない。

ソレを、トウコも見抜ききったからこそ…今、３０年あまりに亘って募らせ続けた怨みの叫びが、止め様のない火球となりて―

「蹴散らせぇ！星痕のぉ…グランド・ノヴァァァァァァァァ！」

ここに、放たれる―

―その時だった

「…なぁんて、まだバトルにはいかせませぇん！メインフェイズ終了時に罠カード、【誤爆】発動！」
「なっ!?」

―！

今にも放ちかけた炎弾を、無理矢理押し返すようにして。
逸って攻撃宣言を先走ったトウコから、デュエルの流れを巻き戻すように…叫ばれたのは、【紫影】の1枚の罠カード。
そのまま【紫影】は、トウコと【星態龍】を見据えつつ…
顔を捻じらせ、不気味に笑う。

「ふふっ、トウコさん、昔から自分に害のないカードにはとことん興味持ちませんよねぇ…だから旦那にトドメをさしたこの罠を除去し忘れるんです、ええ。」
「お前っ、最初からアタシに気付いて…」
「当ったり前じゃないですかぁ！トウコ先輩…私が貴女の事を忘れる

とでもぉ？そんなことより【誤爆】の効果ぁ！スターヴ・ヴェノムをあえて破壊しま…」
「ッ!?」
【誤爆】…ソレは自分のモンスターを破壊するという、一見すればディスアアドバンテージにしかならない罠。
しかし、ことスターヴ・ヴェノムと組み合わせれば、ソレは恐るべき爆弾となりて襲い掛かる事をトウコは知っている。
…かつて優位に立っていた旦那の場を、無抵抗にさせた上に一層して決着を着けたその罠。
そう、忌々しいソレが、３０年の時を経て―
どこまでも底意地の悪い演出と共に、ここに弾け…
「させるかぁ！カウンター罠、【炎渦の胎動】発…」
「おや？…ならば…」
また、それに喰らいついた獅子原　トウコが、カードの発動を言い終える前に…
―パチィンッ！
…と、【紫影】が指を鳴らした…
その瞬間―
―ドォンッ！
…という、とてつもなく大きな爆発音と共に。

巨大な『落石』たちが、大空洞の天井から…

『炎馬』の上に、落ちてきた―

「ッ！炎馬ぁぁぁぁぁぁ！」

―！

…それは一瞬の出来事だった。

果たして、この攻防の刹那に何が起こったのか。この場に他にギャラリーが居たら、ソレを目で追えては居たのだろうか。

…いや、居ない。この一瞬の出来事は、この場にギャラリーが居たとしても誰も決して追えはしなかったことだろう。

そう、まさかトウコと【星態龍】が、驚愕している【紫影】攻撃を仕掛けたかと思ったら…

ソレすら演技だった【紫影】が、攻撃を巻き戻すように罠を発動し…

更にソレに対し、トウコがカウンターを合わせたかと思われたその刹那に。なんと今度は、『炎馬』へと向かって巨大な『落石』が襲い掛かってきただなんて―

…一体、どうなったのか。

パラパラと天上から崩れてくる小石の音や、立ち込める砂埃が晴れてきた…
そこには…
「…ッ、ば、ばあちゃん!?」
そこには、炎馬を庇ったトウコの…
炎髪が消え、【紫影】が放った崩落から孫を庇い、頭から血を流して倒れている…
岩に潰された獅子原　トウコが、そこには居た―
「ぐっ…え、炎…馬…無事…かい？」
「あ…ば、ばあちゃ…あ…あぁぁぁ…」
…生きてはいる。
しかし、辛うじて―
そんな、素人目にもあまりに酷い祖母の状況に…思わず、固まり動けなくなってしまっているサウス校1年の獅子原　炎馬。
…何が起こったのか、ソレすら炎馬には理解できなかった。
しかし、目の前の光景が信じたくも無い現実を物語っている。そう、祖母は自分を助け、岩に潰されたのだ…と。
「…カウンターを用意していた辺り、流石にトウコ先輩も昔のままではありませんか。しかし…」
「ぐっ…ッ…ぁ…」
「ッ！ばあちゃん！ばあちゃん！し、死んじゃいやだぁぁぁあ！」
「ハッ、生きてる…さ…屑を殺すまで…死ねる…かよ…うぐっ…」

けれども、それでも…それでもまだ―
トウコは戦う気概を捨ててはおらず、およそ本能のみで岩の間から抜け出そうとしていて…
…そう、岩に潰され、意識が混濁し朦朧としてきていても。
それでもまだデュエルは続いていて、カウンター罠、【炎渦の胎動】によって【誤爆】は確かに打ち消されまだタイミングはメインフェイズ1。
攻撃力８３００の【星態龍】の攻撃、トウコの怨みの一撃を喰らわす状況は、まだ確かに残っていて…目前まで掴んだ、【紫影】を消し飛ばすその瞬間のただソレだけのために。３０年以上に亘って燃やし続けた怨みの炎を、命の灯火へと変え燃やし続けているのだ。
トウコはまだ、戦う事を放棄してはおらず…
…頭から血を流し、岩に潰され。それでもなお生きてデュエルを続行しようとしている、『烈火』と呼ばれし獅子原　トウコ。
…落石が巨大だったからか、潰されているとは言え体の大半は岩と岩の隙間に挟まれているだけの状態。だからか、その強すぎる【紫影】への怨みが彼女の消えぬ執念となりて、まだその命を繋いでいて―
そして、どうにか攻撃宣言を続行しようと。トウコはその朦朧としている意識の中で、必死に【星態龍】の姿を探し…

「私のターン、ドロー！【ファイヤー・ボール】ッ！」

―！

「ぐぁぁぁぁぁ!?」

獅子原　トウコ　ＬＰ：４００→０

―ピー…

しかし…

そんなトウコを、切って捨てるかの如く―

突然自らのターンを宣言した【紫影】が、ドローしたカードをそのままデュエルディスクに叩きつけたかと思うと。

なんと【紫影】から放たれた大きな火の弾が、獅子原　トウコをその岩ごと大きく弾き飛ばしたのだ―

…そして悲鳴と同時に無慈悲に鳴り響くは、デュエルの勝敗を告げてしまう無機質な機械音。

その音が大空洞へと反響し、そして突然の事に一瞬の静寂が大空洞を包み込み…

そこには、立っている【紫影】とへたりこんでしまっている炎馬と…

気を失い倒れている、獅子原　トウコの姿があった―

「ふぅ、危ない危ない…ふふ、動けないデュエリストにターンは回ってこない…トウコ先輩、貴女はすでに負けていたのですよ、ええ。」

…どこまで腐っているのか。

『こんな勝ち方』をしたにも関わらず、どこまでも勝ち誇った佇まいを崩す気も無く『烈火』を見下ろしそう呟いた裏決闘界の融合帝【紫影】。

その言葉に敬意はない。自分を寸前まで追い詰めた相手に対しても、【紫影】はとことん見下したままで…

何故、そこまで勝ち誇れるのか。

こんな勝ち方、決して褒められたモノではないと言うのに。そう、

不利になったから人質を取って、仕込んだ策が破られたから強攻策を取るという…こんな、勝ち方で。

「ッ!?ばあちゃん!…お…お前ぇ!ま、まだばあちゃんのターンは終わってなかったってのに!何でこんな…」

だからこそ、炎馬が弾けるようにしてそう叫んだとしてもソレは当然の事だろう。

へたりこんでいた炎馬が、反射的に立ち上がったかと思うと。どこか子どもが癇癪を起こすように、弾けるようにして【紫影】へと浮かぶ怒りをぶつけ始め…

「卑怯な手ばっかり使いやがって!普通に戦り合ったら、勝ってたのはばあちゃんだったんだ!それなのに、お前はあんな卑怯な…」

「…卑怯?」

「そうだ!お前なんか…お前なんか卑怯な手しか使えない、最低最悪な屑野郎じゃないか!負けそうだからって人質取って!裏までかいたのにばあちゃんに全部破られて!完全にお前の負けだったじゃないか!負け犬の癖に、卑怯な真似して勝って嬉しいのかよぉ!」

…祖母は勝っていた。そう、あのままなら完全に祖母の勝ちだった。

そう、既に勝敗は限りなくハッキリしており、【紫影】のデュエルを完全に上回っていた祖母が勝つのは最早孫である炎馬の目には明確に映りこんでいたのだ。

…だからこそ、炎馬にはどうしても許せない。

負けそうだからと言って、どこまでも卑怯な手に縋って。そしてソレを全て打ち破られていたこの屑が、勝者であっていいわけがないのだ…と。

しかし…

「卑怯者！この卑怯者ぉ！お前なんか負け犬だ、デュエルで勝てないからって、どこまで卑怯な真似ばっかりすれば気が済…」
「そのとぉぉオぉぉぉ

狂っている…
思わず炎馬が、畏れを感じ後ずさりしてしまったほどに―
今の【紫影】から感じさせられたのは、ただただ狂った危ない存在だという…決して触れてはいけないモノと対峙しているという、今にも逃げ出せという無意識の衝動。

…負け惜しみだとか葛藤だとか、そう言った感情は【紫影】には無い。

卑劣な手で快楽を感じ、卑怯な手に悦楽を見出す。そう、【紫影】にあるのは相手を馬鹿にし、全てを小馬鹿にし…人の命も感情も、何もかもを自身の悦楽の道具にするという、狂いに狂った狂人の矜持だけ。
…薄汚れた屑の権化、恥知らずの下種人種。
勝利を手にするためならば、卑怯な手を取ることすらも嬉々として選ぶ…欲深く、罪深き、最低最悪で下劣なる、大物ぶった小物のイキり。

「勝負とはすなわち生きるか死ぬか！どんな手を使ってでも、最後に勝てばいいんですよぉ！あー快感ですねぇ！勝てると確信していた相手に、くっだらない手で馬鹿を見させるこの快感！普通にデュエルしてたんじゃあ味わえませんねぇふふふふぅ！」

しかし…あろうことかそんな小物が、このデュエルに勝ってしまった―
そう、過程がどうあれ、デュエルディスクによる判定で最終的に【紫影】が勝ってしまったからこそ…この屑は『勝利』という大義名分を振りかざしながら、どこまでも調子に乗ってしまったのだ。
普通の感性を持ったデュエリストならば、絶対にこんな勝ち方で喜べはしない。

けれども、ソレを嬉々として喜び調子に乗っている【紫影】の態度は、どこまでも捻じれに捻じれさらに上がり続けるのみであり…

…プライドなど無い、誇りなど無い。正真正銘、性根が腐りきっている屑の中の屑。

そんな屑のこの態度は、果たして【紫影】に敗北を喫したデュエリスト達の傷口をどれだけ抉るのだろう。ソレが誇り高い人種にとっては、これ以上無い心のダメージなることを【紫影】は知っているからこそ…

こんなにも汚い手を、この屑は全く躊躇なく取れるのか。

「どれだけ優位に立って居ようと?所詮負ければそこでお終い!そこに転がっている負け犬はデュエルに負けたんですよぉ?だから現実は私のかーち!しかし烈火先輩同様、甘いですねぇ貴女も!孫の為に自分を犠牲にするとは…それで夫の仇を逃すんですから、鬼のトウコも弱くなったものです、ええ!」

けれども、確かなる結果においては。

確かに【紫影】のいう通り、過程はどうあれ最後までLPを残し立っていた者が決闘における勝者なのだという…ソレは誰であろうと変えようのない、この世に定められた絶対の決まりでもあり…

その『勝者の定義』に則ってしまえば、立っている【紫影】と気を失っている『烈火』の姿を見比べればどちらが勝利したのかは誰の目にも明らかと言えば明らかでもあるのか。

…命を賭けたやりとりで、意識の無い『敗者』は『勝者』には絶対になれず。

どれだけ卑怯な手を使ってでも、最後にLPを残して立っていた者が偉いのだと言わんばかりに…【紫影】の立ち振る舞いは、絶対に非を認めぬ悪人の中の悪人そのモノ。

【紫影】の態度が物語っている…『勝負』とはただの力比べにはあらず。勝者が絶対。立っていた者だけが偉いのだ、と。

それはそれだけ議論を交わそうとも、常時とは決して交わらぬ平行線。
その平行線を辿るその真理の違いは、まさに『表』と『裏』の定義の違いとなってしまうのだ。
…いくら卑怯な手を使おうと…いや、あえて卑怯な手を取り続け…そうして悦楽を感じながら勝利を手にした【紫影】の中には、ただただ『勝った者だけが偉い』という定義が渦巻いていて…
だからこそ、どれだけ卑怯な手を使おうとも。
表と裏の戦いで、勝ってしまったのが裏であったのだから。それすなわちどれだけ異議を唱えようとも、正しいのは最後にＬＰを残していた【紫影】ということになるのは摂理とも言え…

…否―

否、否―

断じて否―

こんなことが、あっていいものか。

勝敗を決したのが、『デュエル』の中での流れならば表だろうが裏だろうが誰であっても納得がいく。
しかし、このデュエルにおいて勝負を決めたのは間違い無く『デュエル以外』の出来事ではないか―

…落石を起こし、相手を潰れさせ、動けなくなった相手からターンを奪い。
抵抗も出来ない相手から、掠め取るようにして勝利を奪ったこの勝敗の着き方など、断じてデュエルによる決着とは言えないはず。
…デュエルの内容、中身、流れを完全に無視し。デュエルに全く関係のない部分で、相手を追い詰め相手を苦しめ…そして本来ならば、力によって完全に捻じ伏せられていたところを、物理的な妨害によって無理矢理掴んだその勝利。そんなデュエルとは呼べない行動の上で掴んだ勝利など、一体何の意味があると言うのだろう。
…こんな勝利は、デュエルによる勝利とは断じて呼べない。
デュエルによる決着ではない。デュエル以外のモノで勝者になったところで、ソレは断じてデュエルによる勝利などではない。

けれども…

「ふふっ、ふふふっ！ふふふふぅ！あぁー気持ちいいですねぇ！卑怯な手で、一方的に勝てるなんて！本当ならば勝てていたと言うのに、最後の最後に負ける気分を味わわせるのはなんて快感なんでしょうねぇ！」
…常人であろうと悪人であろうと、そして狂人であったとしても異議を感じるこの勝敗に対し。
それでもなお【紫影】は酔いしれたまま、下種な勝利を勝利と呼び続ける。
…何を言っても無駄、何を説いても無駄、何を反論しても無駄―
この狂い過ぎている男は、最早何を言っても聞く耳すら持つ事はないのだろう。この屑に正義を押し付けたいのならば、どれだけ卑怯な手を使われてもこの屑に勝つしか道はなく…
…けれども、屑で下種で小物とは言え。

それでもこの屑は裏決闘界の融合帝で、卑怯な手を使われたら『極』の頂きに位置する歴戦の者でさえ手を焼いてしまうというのだから。果たして【紫影】を従えられる者など、この世に居るのかすら怪しいとさえ言え…

…今の【紫影】の姿を見て、炎馬もそれを感じてしまったのだろう。恐い…ただただ狂った【紫影】が怖い。捻じれ曲がった口角と、捻じれた【紫影】の姿が…

炎馬は、怖い―

「…ま、『この私』ではトウコ先輩に勝てるわけないですからねぇ。本当にどこから入ってきたのやら…幻術も呪術も効かない相手なんて本当に性質が悪い、おかげで無駄な労力を使わされたじゃないですか……さて、お孫さんは後でゆっくり洗脳するとして…トウコ先輩、貴女は旦那の元にでも行ってもらいましょうかねぇ。ふふっ、獣の獅子原…その名を持つ者を2人も手にかけられるなんて光栄です、えぇ。」

「あぁ…あ…あ…」

やられる―

炎馬の本能がそう告げる―

自分は命だけは助かるかもしれない、しかし【紫影】の言葉からこの先に待っているのはただの地獄。

そして祖母は間違い無く殺される…この男ならば何の躊躇もなくそうしてくる―

ソレを、容易に理解出来てしまうほど―【紫影】という屑の本質を、このデュエルの間だけでも嫌と言うほど炎馬は味わってしまった。

…今なら、すぐにでも【ファイヤー・ボール】によって岩から弾き飛ばされた祖母を抱え、ここから逃げ出す選択肢だって炎馬にはあっただろう。けれどもソレすら思い浮かべられないほどに、今の炎馬の

心には【紫影】への恐怖が重く圧し掛かり続けており…
だからこそ、ゆっくりと近づいてくる【紫影】から、恐怖の所為で炎馬は逃げる事すらままならず…

そうして…

「私に負けた者には『死』を…それが私の決めた【裏決島】のルールです…では…」

炎馬とトウコの前に立ち、不気味に捻じれた笑みを浮かべた【紫影】がその手をトウコへとかざそうとした…

その時だった―

「待て!ゴラァァァ

恐怖による一瞬の静寂が流れた大空洞へと、突如として轟き震え響き渡ったのはこの世のモノとは思えない程の重々しくも猛々しい質量を持った声の爆弾。
…まるで、逆鱗に触れられた竜の怒り。
そんな常人では決して発せられないであろう代物が、突如としてこの大空洞に破裂音と共に弾かれ大気をビリビリと振るわせたのだ。
そして、その声の方へと…

「…呆れましたねぇ。アレだけ痛めつけたのに地下牢から自力で脱出したとは。」

【紫影】が、呆れながらゆっくりと振り向いた…

そこには―

「【紫影】…テメェぇぇぇぇぇぇぇぇ!」

世紀末に生きているのではないかと錯覚するほどの隆々とした体躯。丸太のような太い腕。
戦場を駆け抜けたかのような傷跡に、この世の何よりも重厚なオーラを纏う初老の男。
そう、【紫影】と『烈火』の間に割って入るようにして、その声の爆弾を轟かせたのは紛れも無い―

…王座を踏みつける戦闘狂、暴れ狂う大災害。

【王者】と『同格』と謳われた男、決闘学園デュエリア校学長―

―『逆鱗』

「ぶっ殺してやらぁぁぁぁ！屑野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

劉玄斎が、轟いた―

―……

ｅｐ９７「告げられしモノ」

「【紫影】…テメェェェェェェェェェェ！」

絶叫…

いや、轟いたのは絶咆―

『烈火』と【紫影】の戦いが終わった直後の、激戦の余韻残る大空洞に…大気を振るわせながら轟き渡ったのは、およそ人間が放っていると は思えない程に重々しい声をした紛れもない絶咆であった。

それは【紫影】が、気を失って倒れている『烈火』、獅子原　トウコへと手を伸ばしかけた寸前の事。

そう、あまりに卑怯な罠によって、頭から血を流し倒れている『烈火』が殺されるまさに寸前の所で…

この大空洞に現れたのは他でもない、決闘学園デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と呼ばれた元プロデュエリスト…

劉玄斎―

「…呆れましたねぇ。アレだけ痛めつけたのに地下牢から自力で脱出したとは。」

「随分ナメた真似してくれたなぁこの屑野郎ぉ！俺だけじゃねぇ！ガキ共にまで手ぇ出しやがるたぁ、本気で死にてぇってことで良いんだろうなぁ！」

「…それもこれも、貴方が【白鯨】に負けたのがいけないんですがねぇ。貴方が【白鯨】勝っていれば、私だってこんな手荒な真似なんて…」

「つざけたこと言ってんじゃねぇぇぇぇ！初めからこうするつもりだったんだろうが！『赤き竜神』を解放出来なかった時点で…いぃや、今なら分かる！【決島】が始まった時点で、テメェは最初から仕掛けてくるつもりだった癖によぉ！俺との約束なんて、初めっから守るつもりなんざ無かったんだろうがぁぁぁぁぁぁ！」

轟く…この世のモノとは思えない、まるで逆鱗に触れられた竜の怒りが。
それはまさに一触即発。これ以上少しでも触れたら、凄まじき爆発が起こってしまうのではないかと錯覚するほどの劉玄斎の怒りの咆哮が大空洞に響き渡り…
今の劉玄斎から醸し出される、その凄まじき怒りのオーラは。ただただ【紫影】への怒りとなりて、大空洞の大気を振るえさせていて。
「…ふふっ、何を今更。貴方だって私の事を信用していなかったくせに…知っているんですよぉ？貴方、【決島】が始まった瞬間に私が仕込んだ刺客を悉く消し去っていますよねぇ？ふふっ、本土にはもう実力者は居ないと思っていましたが、中々どうして貴方も良い手駒をお持ちのようで…」
「うるせぇぇぇぇ！テメェと一緒にすんじゃねぇ…これでテメェにゃもう人質を取られちゃいねぇ！もうテメェに、付き従う理由なんざ俺にゃねぇんだよぉ！俺ぁとっくにキレてんだよ屑野郎ぉぉぉぉぉ！」

そう…劉玄斎がここまで怒り狂っているのは、何も拷問を受けたからとか【決島】を地獄に変えたからとかだけではない。
それは、【紫影】と『逆鱗』の会話から分かるとおり…
【王者】と同格とまで謳われたほどの『逆鱗』、劉玄斎が、【紫影】の手駒として動かされていたその理由に関連する…卑怯で卑劣なことをした【紫影】に対して、劉玄斎の堪忍袋の緒が既に弾け飛んでいるからに他ならないのか。
…デュエリア本土に残してきた他の生徒達の命を天秤にかけられ、準備が整うまで【紫影】に従うしかなかったデュエリア校学長、劉玄斎。
そう、【決島】で【紫影】に付き従わねば、本土に残してきたデュエ

リア校の生徒達を順に殺していくと劉玄斎は脅しをかけられていたのだ―

【紫影】は、学生達に刺客を放ったと…そう言った。それすなわち、【紫影】は『逆鱗』を従えるために、デュエリア本土に残った学生達を無差別に人質に取っていたと言うことであり…

…それは『逆鱗』や教員、生徒まで含めたデュエリア校の実力者達のほとんどが、【決島】に上陸してしまっているが故の手薄を狙った、どこまでも汚い【紫影】の策。

自分は【決島】に居る所為で助けには行けず。かと言って本土を優先させれば今度は【決島】にいる学生達が危険にさらされるという…

どちらを優先させても待ち受けるは地獄、周到に施された【紫影】の策に、生徒達を守るために劉玄斎は従うほかなかったのか。

…決闘界の風雲児、暴れ狂う大災害とまで呼ばれていた『逆鱗』、劉玄斎を、顎で使っていたその真実。

そんな、どこまでも汚い手を使ってくる【紫影】に対し…劉玄斎とて予め伝手を使って『手』を打ってはいたものの、ソレが達成されるまでどうしても【紫影】に従うしか出来ることはなかったわけであって―

「…覚悟しやがれぇ…今、ここで！俺が！テメェを！ぶっ殺してやらぁぁぁあ！屑野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

―！

…だからこそ、つい先程デュエルディスクに入っていた連絡によって。すでにデュエリア本土に放たれた【紫影】の刺客は、全て駆逐されていることを劉玄斎は知っている。

それはこれまで決闘界、ひいてはデュエリア校学長としてデュエリスト達を引っ張り続けてきた劉玄斎の信頼が成せる人の輪による功績であり…

そして何より、今世紀最大の大犯罪者と呼ばれた【紫影】に、これ以上勝手な真似などさせないために。

怒れる竜もまた、もう我慢などしなくてもいいのだとして―今、絶咆と共に。その怒号と共に、その痛んだ体を逆にフル稼働して劉玄斎は走り出す。

…ソレはまるで巨龍の突撃。

その丸太のような太い腕に、純粋なりし『力』を込めて…

今、【紫影】という屑の中の屑を。文字通り粉砕せんとして、恐るべき竜の一撃が捻じれた男へと襲いかかり…

「おっと…ふふっ、恐い恐い…筋肉お化けに殴られてたまるものですか、ええ。」

しかし…

突進してきた劉玄斎を、闘牛しの様に避けるように。

『烈火』から離れつつ、横っ飛びに『逆鱗』を躱すかの如く飛び跳ねると…そのまま『逆鱗』から逃げつつ、距離を開けて再度劉玄斎へと向かい合った【紫影】

―そして、【紫影】が立っていた場所に劉玄斎の拳が空振りする。

しかし、それは空振りと言ってもいいのだろうか―

そう、その音はまるで鋼鉄のハンマーを思い切り振り回したかのような、尋常ならざる恐怖の音。【紫影】に当たらなかったその拳は、大空洞の地面を思い切り叩き…岩が、地面が、そして山の一部が、形容では無く本当に砕ける音と共に地面にめり込んだのだから。

…こんなモノ、人間が喰らっていい代物ではない。

そんなモノをぶち当てられたらと思うと、誰であっても人間の頭な

ど簡単に吹き飛んでしまうのではないかというイメージが簡単に浮かび上がってくるに違いなく…

けれども…恐怖も抱かずソレを避けた【紫影】の態度もまた、あくまでもどこまでも小癪で小賢しいモノ。

そう、怒り狂う劉玄斎を、更に煽るだけのふざけた態度で。ニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべ、ソレは【紫影】の捻じれた佇まいと相まってあまりに不気味ではあるものの、ソレ以上の不快感をただただ相手へと与えているだけではないか。

…そんな【紫影】に避けられては、劉玄斎の怒りはどう転ぶというのか。

怒りの呼吸と共に、劉玄斎はゆっくりと拳を地面から引き抜き…

「チィッ…屑野郎がぁ…」

怒りが更に激しく燃え上がるのか、限界を超えて爆破するのか…

その【紫影】へと向けて発せられる闘気は、まさに触れたら爆発しそうな爆弾そのモノと言え…

しかし…

「…おい、獅子原の小僧ぉ…」

「ふぇ!?は、はひ…」

【紫影】へと向けられた、爆弾の様な怒りはそのままに。

劉玄斎は、ゆっくりと【紫影】に向かい合うようにして。そして『烈火』とその孫を、大きな背に隠すようにして…

決して【紫影】には聞こえないような声を、その背に隠したサウス校1年、獅子原　炎馬へと向かわせながら…

振り返らずに、声だけを届け始めた。

「姉御を連れて早く逃げろぉ…ここは…俺が食い止めてやる…」
「…え？」
「…顔に出すな、奴に気取られるだろうが…いいか、デュエルが始まったら、姉御を背負って逃げ出すんだぜぇ…このままじゃ、マジで姉御が死んじまうからよぉ…」
「あ…は、はい…」

…それは【紫影】へと向かわせている怒りとはまるで真逆。
そう、マグマの様な怒りを【紫影】に向けてはいても、背中に向けた劉玄斎の感情はどこまでも穏やかさを感じさせる…
本当に怒り狂っているのかと疑いたくなるほどの、『怒り』と『理性』が完全に離別したあまりにミスマッチで混ざり合わない感情の相反であったのだから。
…【紫影】へと向けている怒りだってもちろん本物。そうでなければ、これだけ【紫影】に警戒させることなど出来るはずも無く。
…しかし背後へと向けている理性だって、紛れも無く『逆鱗』から醸し出されている代物に違いない。

—そう、劉玄斎だってわかっているのだ。

今の自分の状態では、【紫影】には絶対に勝てないであろうと言う事を。
…自分は【紫影】から受けた拷問の所為で、立っていることすらやっとの状態。血を流し過ぎたせいか視界は歪み、怒りを静めれば今すぐにだって意識が飛んでしまうような感覚に襲われ続け…
燃え上がる【紫影】への怒りによって、今は一時的に行動出来てはいても。こんな今の状態では、到底【紫影】に勝つことなど出来るわけもないだろう…と、いうことを。
その怒りの中でも冷静な判断力は、これまで歴戦を戦い抜いてきた『逆鱗』の持つ武器の一つでもあるのだろう。怒りと同時に発現させ

た理性によって、無理矢理自分の感情を２つに分けてこの場に立っている歴戦の男、劉玄斎。
…勝算などない、自分だって死ぬかもしれない。けれどもここで行動しなければ、【紫影】への怒りが収まらない―
そんな、相反する感情を歴戦の経験で無理矢理にコントロールして。
例えその身が、限界を超えてもなお無茶を強いている身であっても…
怒りのままに【紫影】に一矢報いるため、そして同時に今にも死に掛けている『烈火』を救うために、劉玄斎はここで時間を稼ぎ人柱になろうとしているのか。

「だったらデュエルだ屑野郎ぉ！今度はちょこまか逃がしゃしねぇぜぇ！」
「ふふっ、死に損ないの癖に元気ですねぇ…ま、いいでしょう。そんなに死に急ぐのならば、今ここで私の手で楽にしてあげましょうねぇ、ええ！」

そして…

『怒り』と『理性』、そんな相反する二つを感情を無理矢理に分け隔てた元プロデュエリスト『逆鱗』が。

今、猛りを上げ…

再度、【紫影】へと向かって―

「覚悟しろよ…この屑野郎ぉぉぉぉぉ！」
「ふふっ、またズタボロにしてあげましょうねぇ…」

―デュエル!!

―…

―医療棟

「しぶてぇガキどもだなぁ！【マルチ・ピース・ゴーレム】で攻撃！」
「とっととぶっ飛べボーナス共！【隻眼のスキル・ゲイナー】で攻撃！」
「あはは！あはははは！【ハイパーサイコガンナー】！アターック！」
「やらせないんだぜ！【Ｄ２シールド】発動だぜ！」
「一歩も通さないＹＯ！【炸裂装甲】発動だＹＯ！」
「ヌフッ、やられるわけがないよねぇ！罠発動、【聖なるバリアー―ミラーフォース―】！」

―!!!!!!

激しい戦いの音と、人とモンスターの叫びあう声が入り混じったここ医療棟の前…
そこで、混戦に混戦と混戦が混戦した、どこで誰がどれと戦い何が起こっているのかが混乱に困窮を極めた戦いが…医療棟を取り囲むようにして、凄まじい勢いで起こっていた。
…それは混戦や乱戦と言うよりは、誇張なしの『デュエル戦争』。
そう、学生の数に対し、ソレをゆうに超える程の裏決闘界の刺客た

ちが学生達へと戦をしかけ…それを数で劣る学生達が、医療棟を死守する気迫を持って必死になって押し返しているこの状況は、まさにデュエルによる表と裏の者による数の暴力は凄まじく…

しかし、流石に裏の戦争のような代物となっていたのだから。

既に何人かの学生は、倒されてしまい地面に転がってしまっている現状。いくらモンスターが入り混じる混戦のおかげで連れ去れる事は無いとは言え…それでも必死に耐え忍んでいる学生達は、ジリジリと裏決闘界の刺客たちに押され続けてしまっているのか。

けれども、学生達もまた仲間が倒されようとも、ソレ以上の敵の返り討ちにしてここまでずっと粘り続けており…

敵の数は膨大。最初からここまで防戦一方。それでも学生達は応援が来るまで、そして事態が良い方に急転するまで必死になって戦い続けていて。

…いつ救援が来るのか分からない。もしかしたらこのまま事態は最悪のままかもしれない。

そんな負の感情に囚われそうになる感情を、闘志と若さによって無理矢理に抑え込み。学生達はこれまでずっと、裏の猛攻に耐え忍び続けているだけ。

しかし、その中で―

「隙在り也…【沈黙のサイコウィザード】でエアーマンを攻撃。」

「少女らよ、そろそろ観念したらどうだ？【カオス・ダイダロス】で【E・HERO　クレイマン】に攻撃！」

「きゃあっ!?」

「アカリ！クッ…やっぱ厳しいアルか…」

医療棟の中央入り口。

その最も重要かつ、最も攻撃を受けているであろう場所で…

裏決闘界の刺客の中でも、周囲の有象無象たちとは明らかに纏うオーラの違う恐るべき猛者の２人が、２人の少女へと向かって凄まじき攻撃を仕掛けていた。
…攻撃を受けていたのは紛れも無く、決闘学園イースト校２年の紫魔　アカリと、決闘学園デュエリア校、デュエルランキング第２位、『マフィア』と呼ばれる王　ミレイ。
そんな、このデュエリア校のＮｏ．２とイースト校の融合クラス上位に対し…こうも圧倒的かつ高圧的に攻勢に出ているこの２人の男達の纏うオーラは、他の有象無象の犯罪者達よりも明らかに群を抜いた強さをまざまざと照らし出しているではないか。

「痛ッ…何なのよコイツら、めちゃくちゃ強いじゃない…」
「サイレント・ジョー、黄昏のアカツキ…裏でも名の知れた奴らアルが…まさかここまでヤるなんて予想外だたヨ…」
「それにしたって、他の奴等と全然違うわ…このままじゃ…」

まさに一方的なデュエル展開、圧倒と言うよりただの蹂躙。
しかしミレイもアカリも、特に『マフィア』と呼ばれる王　ミレイに関して言えば。
彼女はこの島の中にいる学生の中でも、トップレベルの実力を兼ね備えているはずなのだから…いくら裏社会の猛者を相手にしているとは言え、こんなにも一方的にやられているなんて考え難いと言うのに…
…いや、それも仕方が無いのか。
何せ今、【裏決島】で行われているデュエルは普通のデュエルではない。
実体化したデュエル…それも【裏決島】が始まってからこれまで、彼女らはずっと医療棟を死守する為に裏の者達と休む間も無く戦ってきたのだ。
ソレ故、数の暴力で押してくる敵側とは違い…昨日の予選も相まって、学生達の体には相当の疲れもあるのだから、いくら若い学生達と

は言え、これだけの猛攻を受け続けていれば相当のダメージが蓄積しているに違いなく。
　それに加え、この敵味方入り混じるバトルロイヤルかつサバイバルデュエルのルールの中で、敵側から悠々と現れたのが裏社会の中でも相当な力を持つとされている『サイレント・ジョー』と『黄昏のアカツキ』であったのだから…
　王　ミレイも、紫魔　アカリも。並の学生では相手にすらならないであろう圧倒的猛者をダメージが蓄積した身で、逆に寧ろよくぞここまで耐えたと言えるレベルであり…

「妖艶な少女よ、貴様も余所見をしている場合ではないぞ？【カオスソルジャー―開闢の使者―】で、【Ｘ―セイバー　ウェイン】に攻撃！」
「南無…トドメ也、【サイレント・マジシャンＬｖ．８】で【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】に攻撃。」
「クッ…まずいネ…」

　そんな、既に満身創痍に近いであろう２人の少女へと向かって―
　今、裏決闘界の猛者、サイレント・ジョーと黄昏のアカツキが、トドメとなるであろう一撃を少女たちに与えんと―

「うぉぉぉお！２人はやらせないんだぜぇぇぇぇぇ！【シフトチェンジ】を２枚発動だぜ！その攻撃を、俺の【千年の盾】に変えるんだぜぇぇ！」
「『シールダー』!?なに無茶してるネ！」
―!!
「うわぁぁぁあだぜぇぇぇ!?」

けれども…それを寸前の所で。
ミレイとアカリと、敵との間に割って入るかのように…体を…いや、自分と繋がったモンスター無理矢理ねじ込んで少女達を庇ったのは、決闘学園デュエリア校３年、『シールダー』と呼ばれしアキレス・ヤクモ２世であった―
…それはサバイバルかつバトルロイヤルという、通常のデュエルではない状況が許した第三者による介入。
文字通り体を張って、自身のエースで少女達を守り。【シフトチェンジ】の効果によって、【カオスソルジャー―開闢の使者―】の攻撃を相殺させ…２枚目の【シフトチェンジ】の効果によって、【サイレント・マジシャン　Ｌｖ８】の攻撃を受けつつも、守備に特化したそのスタイルによってダメージ受けずに抑えていて―

「ダメージは無し…南無。」
「ほう、勇敢だな。やるではないか盾の小僧よ。」
「何やってるネ『シールダー』！お前が倒れたら、誰がここを最後まで守るアルか！」
「う…るさい…んだぜ…何が無茶だぜ…ここでリーダーが倒されたら、誰がここを死守するっていうんだ…ぜ…それに、俺は決めたんだぜ…今度こそ、皆の盾になるって…」
「『シールダー』…」

自分が傷付くこともいとわず。ＬＰへのダメージが無いとは言え、連戦の疲労と実体化した衝撃は否応なしにプレイヤーを襲うというのにも関わらず。
過去に起こった出来事のトラウマからか、この場にいる全員を守るのだと言わんばかりの気概の下に…ふらつきながらも、どうにか立ち上がったデュエリア校の『シールダー』。
…それはおよそ学生らしからぬ、しかし大いに学生らしい無茶と無謀。
常識ある大人であれば絶対にしないであろうその無茶を、ノータイ

ムで行えるのはまさに学生達がそれだけ必死でそれだけ本気ということでもあるのだろう。
まぁ、かつてデュエリアで起こった『事変』を経験した今のデュエリア校の3年生達からすれば、こんな事態に対してもそれぞれがそれぞれの役割を果たそうとこれまでずっと奮闘し続けていることに変わりは無いのだが。
しかし…

「…全く仕方の無い奴ネ、ホントにウチの男共は無茶ばかりアル。」
「当たり前なんだぜ…無茶ばっかの先輩達見てきたんだからぜ…コレくらい…」
「ミレイ、お話中のトコ悪いけど…状況は最悪のままよ…」
「チッ、そうだたネ…」
「フッ、おしゃべりは終わったか？残念だが、１度止めた程度では変わらぬぞ！これで終わりである！【混沌魔龍　カオス・ルーラー】で【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】に、【カオス・ソーサラー】で盾の小僧に攻撃！」
「諸行無常…【サイレント・ソードマンＬｖ．７】で【Ｘ―セイバーウェイン】に攻撃。」

そんな学生達を意に介さず。再び攻撃に転じた裏社会の猛者、サイレント・ジョーと黄昏のアカツキ。
…まさに容赦の無い攻撃。実に無慈悲の冷徹な一撃。
その裏社会の者らしく、全く手加減の無い攻撃は…学生達にダメージが蓄積して居るからとはいえ、全く手を緩めるつもりはないのだと言わんばかりの勢いとなりて…

「ここまでアル…」
「そんな…」
「くっそぉぉぉお！」

凄まじき3撃が、今度は3人の学生達に襲い掛かった…

その時だった―

「罠発動、【和睦の使者】。全てのダメージを0にする。」

―!

突如…

聞こえてきたのは、凄まじき衝突音が『何か』にぶつかったという激しい激突と爆発の音であった―

…それは、学生達に実体化した攻撃が当たった音などでは断じてない。

そう、トドメを刺されかけていた3人の学生達に、攻撃が当たるまさに寸前…

少女達の前に、まるで『見えない壁』が出現したかのようにして―凄まじきモンスター達の攻撃が、誰も居ない場所で爆発して辺り一帯に土煙と爆煙を立ち上らせたのだから。

そして、ゆっくりと土煙が晴れ…

『マフィア』、『シールダー』、そして紫魔　アカリの前に立っていたのは―

「全員無事だな？」
「あ…あぁぁ…まさかこの声はぜ…」
「『シールダー』、よくここまで皆を守った。流石は俺の認めた…デュエリア校の絶対防御だ。」
「い、一文字せんぱぁぁあい！ホントに一文字先輩が居るんだぜぇぇぇ!?」

戦乱の中、爆炎の向こうで…現れたのは、『鋼』のような立ち振る舞いに『鉄』のような佇まい。
そう、この大混戦の中に現れて、凄まじき者達からの攻撃を難なく『防いだ』のは他でもない…
短く切り揃えられた黒髪は戦風にも揺られず、この乱戦の中でも楔の如く『そこ』に立つその姿はまさに不撓不屈の『折れず』の象徴。
およそプロデュエリストの中でも、これ程までに重厚かつ不動のオーラを持った者など他に該当する者が居ないのではないかと思える程の…

絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト…

十文字　哲

「また新手か。全く、次から次へと…おいサイレント・ジョー、蹴散らしてしまえ。」

「色即是空…【ライトニング・ボルテックス】発ど…」

しかし、突然現れた謎の新手にも怯まず。

…強者らしく、あくまでも冷静に場を進めようとする黄昏のアカツキの声に応えるように。

サイレント・ジョーが、敵の全てを消し去る迅雷を即座に唱え、学生達に襲い掛からせようとした…

その時だった―

「悪いけどそうはさせないよ！【ナチュル・ビースト】のモンスター効果発動、【ライトニング・ボルテックス】の発動を無効にする！」

―！

その迅雷を、更に掻き消す様にして―

新たに、どこまでも澄み渡る水のような透明感のある美声と、雄雄しくも気高く孤高に吼える一体の獣の凛々しき雄叫びがこの場に響き渡ったかと思うと…

サイレント・ジョーの放った凄惨な迅雷が、瞬く間に獣の咆哮によって消し去られてしまったではないか―

そして、雷が完全に消えたのと同時に。守護獣と共に、この場に現れたのは紛れもなく―

「みんな、無事かい？」

「…泉…先輩？」

「やぁ紫魔さん、久しぶりだね。それにミレイにヤクモ君も。」

「…全く、やっときたのネ…来るのが遅い先輩ヨ。」

戦場の中、戦火を越えて…現れたのは、全てを包み込む『清』らかなるその雰囲気に、『流』麗なりし美しさをその身の全てで体現している存在感。
そう、この大混戦の中に現れて、全てを破壊してしまう迅雷から学生達を『守った』のは他でもない…
野蛮なる戦場の風であっても、その青髪を爽やかに揺らし。この乱戦の中でも、救世主の如く『そこ』に現れた姿はまさに一縷の望みの『希望』の象徴。
およそプロデュエリストの中でも、これ程までに流麗かつ爽快なオーラを持った者など他に該当する者が居ないのではないかと思える程の…

眉目秀麗、『清流』のデュエリスト…

泉　蒼人

「こここ、こんどは森神先輩ぃぃぃぃ!?なな、なんで先輩達がここに居るんだぜ!?」

また、突如現れた泉　蒼人を見て。
驚愕を隠しきれていない『シールダー』が、この乱戦の音よりも大きな声でそう叫んだ…

その瞬間―

「森神先輩!?ねぇ今誰か森神先輩って言った!?」

「ね、ねぇアレじゃない!?キャー!・うっそぉー!・ホントにホンモノの森神先輩よー!」
「キャー!・イヤー!・ホンモノー!・ホンモノの森神せんぱぁぁぁあい!」
「キャー!・アレ泉せんぱいよぉぉお!」
「うっそー!・え!?・え!?・なんでー!?・泉先輩なんでー!」
「せんぱぁーい!・泉せんぱぁーい!」

―!

発狂…いや、突然沸きあがったのは紛う事なき『歓声』。
そう…こんな地獄のような、最悪の状況だというのにも関わらず。
突如として医療棟の上層階から響き渡ったのは、医療棟の中でサポートに回っていたり戦えずに守られていたりした女生徒たちの…

本能による押さえきれない、純粋なまでの黄色い声援であったのだ―

…誰もが皆、混戦の中に現れた一人の青髪のデュエリストを見つけ。
そして感極まったかの様子で、黄色い声援をその本能で飛ばしていて―

「…相変わらずだな蒼人。」
「ハハ…みんな元気そうでなによりだよ。それより哲、コイツらは…」
「サイレント・ジョーに黄昏のアカツキ。裏社会で名の通った猛者だ。気は抜けんぞ。」
「だね。気を引き締めていこう。」

島の中央の天空の塔から、ここまで雑兵を蹴散らしながら。ノンストップで医療棟へと駆けつけた、プロデュエリストの蒼人と哲。

そんな彼らもまた、ギリギリのところで後輩達を救ったとは言え…目の前に立つ2人の猛者に対し、気を引き締めて向かい直した辺り微塵も油断などはしていないのか。
…今年度からプロになったばかりの新人プロとは言え、その辺りはやはり流石の者達。
そんな、かつてその身に起きた出来事、そしてデュエリアの『事変』に決闘市の『異変』を経験した紛れも無い猛者である2人が…
医療棟の最重要地点、そして最も危険である裏の刺客2人に対し…どこまでも、頼もしき雰囲気のままに向かい合う。

「おい、サイレント・ジョー、なんだこやつ等は。」
「『鋼鉄』、『清流』…プロの…新人也…」
「ほう、新人の癖にその若さで異名持ちとは…中々やるというわけか。面白い…」

また、突然現れつつも周りの学生達とは一風変わった雰囲気を醸しだす蒼人と哲を見て。
裏決闘界の猛者の2人、黄昏のアカツキとサイレント・ジョーも、目の前の若造2人が一筋縄では行かない相手であると、裏社会を生き抜いてきた者として即座に理解したのか。
…新手とはいえ若造が現れたというのに、全く油断などしていないその様子は流石は裏社会の中でも名の通った者達か。
だからこそ、そんな裏の者達の危険性を蒼人と哲も即座に理解したのだろう。
全く気を緩めていない裏の猛者達に対し、蒼人と哲はデュエルディスクを構えなおしながら…

「さぁ行くよ、僕達が来たからには…」
「貴様等には、これ以上好きにはさせん！」

―…

山中―

「遊良！大空洞とやらにはまだ着かんのか」
「もう少しだ！この先をもう少し上れば…」

襲いくる裏決闘界の雑兵たち、そして草原で出会った裏決闘界の刺客『ヒル・ブラザーズ』を倒した遊良と鷹矢と…
そして、2人の後ろを着いて走っていたデュエリア校の鍛冶上　刀利が、【紫影】が居ると言われたポイントまであと少しのところまで差し掛かっていた。

…それはイースト校理事長、砺波　浜臣から聞かされた元凶の居場所。

そう、遊良は嫌でも覚えている。忘れたくても忘れられない、迷うはずなどありえないその場所を…
昨日…【紫影】によって連れ去られたルキを取り戻す為に、デュエリア校の狂乱少女、アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンと命を賭けて戦ったあの『大空洞』。
遊良達は現在、その『大空洞』の入り口を目指して…まずは山の胎内へと誘う洞窟を目指して、一心不乱に山の中を駆け抜けていたのだ。
また、砺波が一体どうやって【紫影】の居場所を見抜けたのかなど、遊良達には全く持ってわからないものの…
しかし現状では、ソレに従う以外の選択肢が無いのだとして。遊良達はこれまで少しも足を緩めず、ペースを落とさず、ここまで全力で

敵を蹴散らしながら走り続けていて―

…一体、ここにたどり着くまでに遊良と鷹矢はどれだけの敵を蹴散らし、どれだけの距離を走り抜けてきたのだろう。

乱れた息と微かな傷が、彼らのここまでの道筋の過酷さをまざまざと語り…しかし全く止まらないその足が、彼らの強い意思を反映してどこまでもどこまでも前へ前へと進ませている。

もうすぐ…この先に、この地獄を作り出した元凶、【紫影】が居る。そう、元凶である【紫影】を倒せば、この地獄を終わらせる事が出来るのだとして―

遊良も鷹矢も、そしてその後ろをついて走る鍛冶上　刀利も。誰もが山道の中をスピードも緩めず、その場所目指して駆け抜け続けるのみ。

そして、出発からどれだけ走り続けたのか…

もうすぐ大空洞の入り口がある、しかし未だ木々が生い茂る山の中腹をまだまだ駆け抜け続けようと遊良達がその足を速めていた…

―その時だった。

「ごめんなんし…坊達、止まってくれるとありがたいでありんす…」

「ッ!?」

「むっ!?」

突如…

遊良達の耳に聞こえてきたのは、静かではあるものの身震いするほどの寒気を孕んだ…

あまりの悲恋に満ち満ちた、この世の何よりも悲しげであると思えるような殺気を含んだ女の声であった―

…それは遊良と鷹矢が、思わず全力で身構えてしまうほどの悲哀に

満ちた『敵』の声。

そう、遊良と鷹矢の耳に聞こえてきたその声は、例えるならばこの世の悲恋を凝縮したかのような重々しくも華々しい…

それでいて、どこまでも冷たくどこまでも妖艶な、遊良と鷹矢が無理矢理に臨戦態勢を取らされたほどの『敵』だと分かるような声であったのだから。

…思わず感じた寒気と悪寒。

そんな、初めて感じる得体の知れないモノを思わず感じてしまった遊良と鷹矢が声の方…自分達が走ってきた方とは別の森の方向へと、反射的に視線をやった…

そこには…

「あふっ、よくぞここまでお出で下さいました…中々、骨のある坊達でありんすなぁ…」

大空洞へと続く道筋の、生い茂る木々の影の中から今ゆっくりと陽の下へと歩いてきたのは声の印象から感じた通りの1人の女性…

鮮血のように真っ赤な着物を着崩して、キセル片手にゆったりと歩き…大きなかんざしで髪を結った、化粧で顔を隠した『花魁』のような女性であった。

…しかし、こんな女がただの『女』であるはずもなく。

そう、この女の声を一聞きしただけで、そしてその姿を一目みただけで。

遊良と鷹矢の寒気と悪寒が、【裏決島】始まって以来の『警笛』を2人の心に大音量となりて掻き鳴らし始めたのだから―

「ッ…こ、この女…」

「ヤバい…な、なんだコイツ…こ、こんな奴がこの島に…」

止まらない身震い、収まらない寒気。
まるで『死』が着物を着て歩いているかのような、悲哀に満ちたその女性。
その姿は、どこか花魁を思わせるような化粧と出で立ちではあるものの…しかしその腕に装着された華を模したデュエルディスクが、紛れも無くこの女もデュエリストであるのだと否応なしに証明しており…
…今まで島で戦ったデュエリストと、この女は根本的に『何か』が違う。
そう、遊良と鷹矢が、即座にソレを感じてしまったほどに—彼らの目の前に現れたこの花魁のような女が醸しだす、その『死』の雰囲気は途轍もなく危ない代物となりて遊良と鷹矢を襲ったのだ。

…冗談ではなく、本気で『死』を着飾っているかのようなその佇まい。
…形容ではなく、実際に『死』で化粧をしているかのようなその雰囲気。
…例えではなく、現実に『死』を受け入れているかのようなその気配。

それでいて、この女から感じられるオーラは正真正銘本物の『強者』のオーラなのだから…
遊良も鷹矢も、目の前に立つこの女の実力が今の自分達では到底立ち向かえ無い程の代物であるということを、誰に教えられるよりも前にその本能で理解してしまっていて。
…何せ彼らは、王者【黒翼】を祖父に持つ天宮寺　鷹矢と、【黒翼】と【白鯨】を師に持つ天城　遊良。
そんな他の誰よりも身近に【王者】を感じてきた少年達には、今目の前に現れた花魁がどれほど危ない存在であるのかがこれ以上無いくらいに理解出来ており…

しかし、そんな圧倒的に危ないオーラを持った女性が、一体どうしてこの場に現れたのだろう。
すると、その女性を見たデュエリア校の鍛冶上　刀利が…
どこか神妙な顔つきと声質のままに、花魁のような女性へと向かってゆっくりとその口を開き始めた。

「…ナズナ先生、なんで貴方がここに…」
「おや、主さんも居たでありんすか…随分と久しぶりでありんすなぁ刀利坊…まだわっちを『先生』と呼んでくれるなんて…任務だったとは言え、『あんなこと』をしたこのわっちを…」
「…」
「殿方がそんな恐い顔しなさんな…わっちも所詮は雇われの身…これも、仕事なんでござりんす。詮索はよしておくんなんし…」
「…そうか、ナズナ先生が居たから嫌な感じが…ッ、まさか他の『七草』も…まさか、セリ先生もこの島に来てるんじゃ…」
「さぁ、どうでござりんしょ…気になるのなら、その目で確かめに行けばよいかと…」
「…」

何やら、この花魁のような女性と旧知であるかのように会話を重ねる鍛冶上　刀利。
しかし、彼らの間に流れる空気はお世辞にも親しいモノであるとは言いがたく…
…そう、刀利から発せられているのは紛れも無い怒りと怪訝。
それはかつて、この花魁のような女性と…いや、彼が呟いた『七草』という集団と、刀利との間に『何か』とてつもない確執があったとでも言いたげな雰囲気でもあり…

『七草』―

―それは、デュエル傭兵集団
裏の世界で、組織の代デュエルやらマフィアの用心棒、果ては命を賭けた死のギャンブルや国同士のデュエル戦争に雇われその名を轟かせているという…
決して表には出てこない、七人全員が『極』の頂に位置するという恐ろしき傭兵達の総称。
そんな裏の世界の者の名を、旧知の名のようにして零した刀利は目の前に現れた花魁に対し、どこまでも警戒心を緩めずに怪訝な視線を伸ばすのか。
一体、なぜ刀利が『七草』を知っているのか…それは今この場ではこれ以上語られる事のない、『別の物語』ではあるのだろう。
それでも唯一つ確かなことは、鍛冶上　刀利という男にとってこの花魁のような女性は、観て見ぬ不利など絶対に出来ない彼の『敵』であるということだけ。
…そして、花魁に対し怒りと怪訝を隠さぬまま。
刀利は、遊良と鷹矢の前へと出るようにして…そのまま、年下の2人へと向かって再度口を開き…

「…天城君、天宮寺君、ここは僕が引き受けるから…君たちは先に行って。」
「鍛冶上　刀利…貴様、この女と知り合いなのか？」
「…昔、ちょっと…とても、強い女性だよ。」
「だ、だったら全員で戦った方が…」
「うむ。この事態なのだ、卑怯もへったくれも…」
「…駄目だよ。あの人との勝負は全員で勝負したら絶対に駄目だ…全員ここで足止めをくらって手遅れになる…それに、ただ攻めるだけだとあの人には絶対に勝てない…昔、アイナが手も足も出ずに負けてる…」
「な…貴様が、そこまで言う女だと…？」
「ア、アイツが…あのアイナって奴が…て、手も足も…？」
「…だから、この人の相手は3人より僕1人の方が戦りやすい。それ

に、正直『この人』が相手だと僕以外の味方は全員足手まといになるから…だから先に行って。君達のやるべきことを…忘れないで。」
「ぬぅ…」

鍛冶上　刀利から語られるは、およそ【地の破王】と呼ばれる彼からは考えられない程に冷静かつ冷徹なる冷たい言葉の数々。
それは一見すれば、遊良と鷹矢を突き放すあまりに冷たい言葉でもあったことだろう。
…しかし、今の刀利の言葉を聞いて。遊良とて、そしてもちろん鷹矢とて、刀利の言葉の真意など既に分かっている。
そう、【地の破王】と呼ばれる、鍛冶上　刀利の実力をその身で体感した鷹矢だからこそ…そしてアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンと直で戦った遊良だからこそ、この花魁はあの鍛冶上　刀利がよもや『ここまで言う』相手であるという『敵』であるのだという、そのあまりに危険な現実を。
…この花魁は、自分達の手におえる相手ではない。
それが理解出来ないほど、遊良も鷹矢は愚かでは断じてなく。ソレ故、刀利の『やるべきことを忘れるな』という言葉の意味も勿論彼らだって理解しており…だからこそ、状況が状況であることと、己の力量と相手の力量を見分けられぬほど愚かではない遊良と鷹矢からしても…
刀利の言葉には、これ以上反論など出来ない様子を見せており…

「…でも、この人がすんなり通してくれるかは…」
「あふっ、良御座んすよ…わっちの請け負った仕事は刀利坊、主さんの足止めだけ…まぁ、主さんが来なかったらそこの坊達を止めていたかもしれないでありんすが…さっきも3人程素通しさせたでありんすが、別に雇い主からは文句も無し…」
「…ってことだから、僕の事は気にしないで。きっと後から追いかけるから。」
「わかりました…行こう鷹矢。俺達がここに居ても、出来る事は何も

無い。」
「…うむ。」

…そうして。
ここで文句を言い合っている場合ではない状況だと言うことを、充分に理解している遊良と鷹矢が、自分達が今やるべき事を思い出し、確かに浮かぶ悔しさを力ずくで抑え込み…
自分達が認める実力者に、こうもハッキリと足手纏いだといわれてしまえばソレ以上遊良も鷹矢も口を挟めはしないのか。
そのまま、本当に刀利以外は足止めする気も無い様子の、ナズナと呼ばれた花魁の横を通り抜け…
遊良と鷹矢は、再度大空洞を目指して駆け抜け始めたのだった―

「若い若い…でも、若くとも中々肝の座った坊達でありんすなぁ…さて…では刀利坊、主さんだけは、ここでお引止めいたしんす…これも、仕事で御座んすから…」
「…ナズナ先生…いや、ナズナ太夫。なんで『七草』がここに居るのかはわからないけど…僕も通してもらうよ、貴方を倒して。」
「あふっ、刀利坊もわっちのデッキ、知っているじゃござりんせんか…蒼人様なら別として…刀利坊ならわっちのお相手……ずぅっと…しておくんなんし?」

―!

揺れる…
山の木々が、『死』の風で―
別段、何が起こったというわけでもない。ただ、花魁が冷たい微笑みをその顔から零しただけ…
そう、ただ微笑んだだけで―命あふれる山の自然が、突如漂った『死』の気配に怯えて揺れて震え始めたのだ。

そしてその風が、どこまでも冷たいモノとなりて…
臨戦態勢を取った鍛冶上　刀利へと、否応無しに襲いかかり…

「…ッ、相変わらずだね…」
「あふっ、そちらは随分と成長した御様子で…では、『七草』が一葉、ナズナ・ハイラ…坊のお相手、よろこんで…」
「…いくよ！」

―デュエル!!

「わっちのターン。ＬＰを２０００払い【終焉のカウントダウン】を発動。ターン、エンド…」
「…く…」

―…

「…鍛冶上さん、大丈夫かな…」
「あの男が心配いらんと言ったのだ…ならば、俺達が心配する必要などない。あの男は、とんでもなく強い男なのだからな。」
「…それは…そうだけど…」

背後で始まった、鍛冶上　刀利と花魁のデュエルの気配を感じ取ってか。
再び全速力で山の中を駆け抜けていた遊良と鷹矢が、背後を決して

振り返らずにそう言葉を漏らしていた。
…普通に考えれば、1人よりも3人で立ち向かった方が数の暴力で勝利は手に入りやすいのは当たり前のこと。
しかし、鍛冶上　刀利が言うにはあの花魁はただ大勢で『攻める』だけでは絶対に勝てないと言うのだから…
それだけで鍛冶上　刀利ほどの実力者が臨戦態勢に入るほどのあの花魁は、到底自分達の手に負える相手では無いと言うことを遊良も鷹矢も嫌でも理解させられたのだ。
また、その敵も鍛冶上　刀利の足止めにしか興味がないのだと明言したのだから、あの場に自分達が残ったところで出来ることなどありはしなかったのだというコトなど、無論この2人とてわかっているのだろう。
だからこそ、自分達は自分達のやるべき事を…そう、元凶である【紫影】の元に一刻も早く辿り着き、この地獄のような【裏決島】を今すぐにでも終わらせるために。
遊良と鷹矢は、更にその足取りを速めながら目的の場所へと全力で急ぎ…

そして…

花魁が現れた場所から、5分ほど全力で駆け抜けた頃だろうか。
「ここだ！ここで昨日、砺波先生と『逆鱗』がデュエルを…」
「…酷い有様だ。【白鯨】と【逆鱗】が実体化したデュエルをしたというのならばこの惨劇も納得だが…」
遊良と鷹矢が辿り着いたのは、木々の開けた山の隙間…この自然溢れる尼中の、その中腹に不自然に出来た広い空間であった。
そこは木々が折られ、草が潰され…まるでこの場で、何か巨大なモ

ノが『暴れた』後のような自然には出来ない造りをしており…
『ここ』で何が起こって、そしてどうなったのかを知っている遊良はともかくとして。初めてこの光景を見た鷹矢が、この場で起きたであろう惨劇を想像したのか…鉄仮面には珍しく、少々冷や汗を浮かべている様子を見せ始めて。
…当たり前だ。
あまりに不自然になぎ倒された、辺り一面に転がる木々たち。あまりの力で押し潰された、無造作に潰れた草花の数々。
崖は崩れ、地面は穿たれ…焼け焦げた痕に切り刻まれた痕、凍った痕に洪水の痕まであるこの不自然な空間を一目見れば、鷹矢でなくともこの場で起きた『惨劇』を想像すらしたくはない事に違いないのだから。
…それは、いくら昨日【白鯨】と『逆鱗』がここで戦りあったと聞いているとは言え。
現場に残された数々の傷痕が、想像していた以上のデュエルがここで起こったのだとして。鷹矢の脳裏に、ここで起こった天上の戦をおぼろげながらに浮かび上がり…

「鷹矢、こっちだ。あの崖のところに、大空洞の入り口がある。」
「うむ。ならばさっさとゆくぞ。一刻も早く【紫影】を倒さねば…」

そして、2人は一瞬だけ止めていた足を即座に動かし、更に先へと進もうとする。
…そう、まだ、【紫影】が居るであろう場所の入り口についただけ。
数多の敵をなぎ倒し、時折現れた手強い敵を打ち倒し…危険な敵を仲間が引き受けてくれ、どうにか無事に目的の場所へと辿り着いたとは言えども、まだまだ本当の戦いはこの先に待ち受けていることを無論2人とて忘れてはおらず…
…崖のふもとで、野性の自然に隠されるようにして大きく口を開けていた野生の洞窟の、その入り口が草木を掻き分けつつ。
誰かが先に入っていった痕跡が残っているものの、そんなモノなど

気にせずに。
遊良と鷹矢が、そのまま洞窟の中へと入ろうと…
「ッ、まて鷹矢！誰かくる！」
「む!?敵か!?」
「い、いや…アレは！」
いや、洞窟に入ろうとした、まさにその寸前の瞬間。
遊良の耳に、今確かに洞窟の向こうから弱々しい足音が聞こえてきて―
そして瞬間的に、鷹矢を制して立ち止まる遊良。そのまま目を凝らしつつ、洞窟の奥へと視線を伸ばした…
そこには―
「炎馬！」
「あ…あぁ…あああ天城せんぱぃぃぃっ…」
「炎馬！無事か!?なんでこんなとこ…ッ、し、獅子原先生…」
そう、洞窟の奥から現れたのは敵では無い、サウス校1年の獅子原炎馬。
そしてその背に背負われるようにして、意識の無いサウス校理事長、『烈火』と呼ばれた獅子原　トウコが洞窟の中から現れたのだ。
…しかし、炎馬の怯えたその姿と、大怪我をして意識のない『烈火』を一目見て。
この先の大空洞で一体何があったのかが、遊良には簡単にわかってしまって―
（…【紫影】の奴…獅子原先生をこんな目に…）
そう…『烈火』は、間違いなく【紫影】と戦ったのだ。

そして、負けた―
いや、獅子原　トウコに稽古をつけてもらったこともある遊良からすれば、正々堂々の真っ向勝負で『烈火』が【紫影】に負けたなんて到底信じられるわけもなく…
だからこそ、遊良にはわかってしまう。【紫影】はきっと、とてつもなく汚い手を使って『烈火』を貶めたのだ…と。
…師である【白鯨】、砺波　浜臣から聞かされた、悪質なる【紫影】の汚い本性。
その情報を照らし合わせつつ、あの『烈火』がこれ程までの大怪我を負いながらも【紫影】に負けてしまったというコトに対し…遊良の中には、更なる【紫影】への怒りが浮かび上がりつつあるのか。
「『烈火』がこんな目に…一体何があったのだ。詳しく話せ。」
また、現状を把握し切れていない鷹矢が、炎馬へと迅速に言葉をかけ…
炎馬もまた、逃げ出した先に見知った顔が居たという安心感からか、背負った祖母を気遣いつつも迅速にかつ簡潔に『何』が起こったのかの説明をし始め…
「それで…『逆鱗』が助けてくれて…今も、『逆鱗』が【紫影】の奴と…」
「ぬぅ…【紫影】という奴はそんなに汚い奴なのか…気に食わん、そんな汚い手を使ってまで得た勝利に何の意味があると言うのだ。」
「だけどソレでも汚い手を使ってくるのが【紫影】だ…砺波先生にも言われただろ？絶対に気を抜くな、どんな手を使ってくるのか分からないから…って。」
「ぬぅ…」
「あ、天城先輩…行くのか？【紫影】のところに…ア、アイツ、本当に狂ってるってのに…」

「あぁ、わかってる。でも行かなきゃいけないんだ。【紫影】を倒すために…俺達は、ここまで来たんだから。」
「うむ。そんな汚い手を使う屑には死んでも負けん。俺が【紫影】を倒して、このふざけた【裏決島】を終わらせてやる。」
「お…俺は…こ、恐い…アイツが、めちゃくちゃ恐いんだ…俺、何も出来なくて…お、俺のせいでばあちゃんが…」
「…炎馬、ここから東に真っ直ぐ進めば、決勝で使ってた『塔』がある。そこには砺波先生も居るし、ルキが眠ってる医療室もあるから…砺波先生ならきっと助けてくれる。敵がまだ居るかもしれないけど、今獅子原先生を助けられるのはお前だけだ…頼んだぞ炎馬。」
「あ…わ、わかった…先輩達も…気をつけて…し、死ぬなよ？」
「あぁ。」
「うむ。」

そうして…

「行くぞ鷹矢！【紫影】はこの先だ！」
「うむ！」

怯える炎馬を見送りつつ、遊良と鷹矢は洞窟の中へと突入していく。
…昨日崩れたはずの、しかし今は全く崩れてはいないこの洞窟を、デュエルディスクのライトで照らし。
大人が悠々と通れる広さがあるおかげで、足場は悪いものの若さゆえの勢いに任せて遊良と鷹矢はどこまでもどこまでも走り続けるのか。

…光届かぬ山の胎内、不穏な空気の流れる洞内。

【白鯨】から逃げ仰せ、『烈火』をあんな目に合わせたという屑の中の屑がこの先に待っているとは言えども…

けれども、この先に居る元凶を倒すのだとして、遊良と鷹矢は更にその勢いを増しながら大空洞目指して駆け抜けるのみ。

…絶え間なく揺れる微かな地響きが、この先で『逆鱗』が今も【紫影】と戦っていると言うことを遊良たちへと教えてくれる。

しかし、炎馬から『逆鱗』の状態も聞いているからこそ—『逆鱗』とて長くは持たないであろうという危機感の元、持ち得る全力疾走にて遊良と鷹矢は走り続け…

そして…

洞窟の終わり、大空洞の入り口の光が遊良達の目に飛び込んできた…

そこには—

「全く、本調子ではないというのに向かってくるからですよぉ。ええ。」

「ぐ…ぁ…」

デュエルが終わり、倒れている劉玄斎の頭を…

その捻じれた汚い足で、グリグリと踏みつけている【紫影】の姿が、そこにはあった—

「血を流し過ぎたせいですかねぇ？思考もままならない、フラついた貴方など相手にもなりません。ホント、手ごたえ無さ過ぎでしたねぇ。」

「…」

「おやぁ？気を失ってしまいましたかぁ…ふふっ、まだ生きているとは呆れましたが…この様子じゃ、放っておいてもいずれ死にますか

ねえ、ええ。」

…酷い有様で地面に倒れる、デュエリア校学長、劉玄斎。

その体は酷く傷付き、痛々しい傷跡と痣が劉玄斎の体が既に限界であったことを証明しており…

頭から血を流して倒れているその姿は、生きているのがやっとの…否、死んでいてもおかしくない怪我となりて、劉玄斎の意識すらも刈り取ってしまったのか。

…そう、【紫影】に受けた拷問に加え、満身創痍の体でトウコと炎馬を逃がすために実体化したデュエルを【紫影】相手に行った劉玄斎。

その体は既に限界を超えているのだろう、【紫影】に頭を踏まれていても、既に払いのける力も無く…朦朧とした意識すらも、既に手放してしまっている様子で…

また、そんな状態の劉玄斎を踏みつけ続ける【紫影】も、いくら敵対しているとは言え相手の頭を不遜に踏みつけるその姿は礼儀も何もあったモノではなく。どこまでも不躾な態度のままに、傷付いた『逆鱗』を更に甚振っているだけであり…

すると、そんな『逆鱗』を甚振っている【紫影】へと向かって。

大空洞に飛び込んできた遊良が、その光景を一目見ると…まるで弾けるようにして、その声を荒げたのだった。

「ッ！【紫影】！今すぐその足をどけろ！」

「おやぁ？貴方方は…」

確かな怒気を孕んだ遊良の声が、大空洞の中に反響しつつ…瞬間的に火が点いたように、【紫影】へと向かってぶつけられる。

果たして…遊良のソレは、一体何に対する【紫影】への怒りなのか。

昨日ルキを酷い目に遭わせた怒りなのか、自分に両親や幼馴染のありえない幻影を見せた怒りなのか…【裏決島】という地獄を作り出し

たことへの怒りなのか、それとも―

…すると、自分へと向けて放たれたその声を聞いた【紫影】が。

勇敢にも大空洞へと飛び込んできた、２人の学生達をその視界に入れたのか。意識の無い劉玄斎から、その捻じれた足をゆっくりと降ろしたかと思うと…

大空洞に現れた２人の少年達へと向かって。その捻じれた口から、更に続けて言葉を発した。

「ふふふふっ！やぁっっっっと来ましたかぁ貴方達！もぅ待ちくたびれましたよぉ本当に！」

「…何？どういうことだ！何故俺達がココに来ると…」

「あー長かったですねぇ、これでようやく面倒事が１つ終わります…さぁて、じゃあさっさとデュエルしますか。貴方方もさっさと終わらせたいでしょう？こんな、下らない茶番劇など。」

「む…」

「…」

しかし、鷹矢の問いを全く聞かず。

【紫影】の口から語られる言葉は、この地獄を作り出した張本人とは思えないような言動が何の悪びれも無く語られて。

「実を言うと私もさっさと帰りたかったんですよねぇ。いやぁ、本当に面倒でした。貴方達が遅いせいで、いらない労力を使わされましたからねぇ、えぇ。」

「…ふざけるな！貴様がこの現状を作り出したのだろうが！」

「何が茶番だ！お前のせいで、どれだけの人が傷付いてると思ってるんだよ！一体何が目的でこんな事を！」

「ふふっ…目的…目的、ねぇ…どうせ、貴方方に言っても意味など無いことですし、そんなモノどうだっていいじゃないですかぁ。それよ

りぃ…さっさとデュエルするんでしょう？えぇ。」
「ぐっ…何なのだ、コイツは…」

…外の状況など我関せず、傷付いている人々の事などどこ吹く風。
全く悪びれもなくそう言い捨てる【紫影】の言葉は、どこまでも悪意のままに無責任の限りを尽くして放たれ続け…
…一体、どんな人生を送ったらこんな無責任な悪意を振りまける人間が出来上がるのだろう。
そんな誰であろうと理解出来ない、そして絶対に理解したくないであろう【紫影】と言う男の…
純粋なまでの悪意に満ちた、反吐が出るほどの自己中心的言動が、遊良と鷹矢の琴線に悉く触れ続けるのみであり…

そして―

「【紫影】！お前だけは絶対に許さない！今ここで、絶対にお前を倒してや…」
「もぉー、そんなにピーピー騒がないでくださいよぉ。…天城　遊良、あなたもすぐに、ここで倒れている祖父と同じ目に遭わせてあげますから、ええ。」

…

……

……

「……え？」

【紫影】の言葉を聞いた瞬間に、思わず言葉を失いそのまま固まってしまったイースト校２年の天城　遊良。

今…【紫影】は、『何』と言ったのだろうか。

聞き間違いでないのなら、【紫影】は今間違い無く…

「おっと失敬。口止めされていたと言うのに、うっかり口を滑らせてしまいました。」
「え…そ…祖父って…」
「おや、そんなに衝撃的でしたかぁ？まぁ、『Ｅｘ適正』の無い貴方が孫だなんて、『逆鱗』だって隠したい事なんでしょうから…貴方が知らなかったのも当たり前でしょうねぇ、ええ。」
「あ…」

そう、【紫影】は劉玄斎を指して、今その口から間違いなく…

―『祖父』

…と、そう言ったのだ―

―…

ｅｐ９８「【裏決島】、決戦――ｖｓ．【紫影】」

―『劉玄斎プロはなぜ結婚されないのですか？』

最後にそう質問した記者が居たのは、もう何年前のことだろうか。

それは、今でこそ噂されることの無くなった話題ではあるものの…

―『…あぁ？何だテメェ、喧嘩売ってんのかぁ？』

―『ひっ!?い、いえ！そ、そういうわけじゃ…』

２～３０年ほど前に、一時期世間で騒がれていた、『逆鱗』と呼ばれる劉玄斎の家族観に対する、世間の下世話な噂話。

そう、彼が引退して久しい今でこそ、『逆鱗』が独身であるというのは騒がれもしなくなった世界の常識ではある。

けれども、『逆鱗』が現役のプロデュエリストであった頃には…その収入の多さに対し、あまりに『浮いた話』が少ないという事が世間を一時期大いに賑わせていたのだ。

現役時代から数えても、スキャンダルが多すぎて記者が着いていけなかったエクシーズ王者【黒翼】と違い…女性関係で、浮いた話が『全く』と言っていい程出てこなかった歴戦の男、劉玄斎。

収入は膨大、功績は多大…その容姿は確かに世紀末を生きているのではないかと錯覚するほどに巨大なる体躯をしてはいるものの、それでも戦場を匂わせる凛々しさと相まって女性から生理的に嫌われるような風貌などでは断じてなく。

それどころか、古の武将の血を引いているとされているだけあって、寧ろ彼自身の容姿は整っているとさえ言われる部類であるのだから、その巨大な体躯と筋骨粒々な見た目を含めてもなお世間では良い男の部類と言われているほどであり…

そんな彼の野性的であるのに整った外見と、【王者】でないのに【王者】と同格と謳われるほどの業績を考えれば、女性からのアプローチはきっと数え切れないほどあったはずなのだ。

…それでも、彼は『全く』と言っていい程に女性関係を匂わせはしなかった。

特定の女性と関係を噂されれば、女性側のメンツなど意にも介さず高笑いで『全否定』する。

下賤な記者に記事を捏造されれば、冗談ではなく文字通りに記事を書いた記者本人を『捻り潰し』、『叩き潰し』、命が危ぶまれるまで『殴り潰す』。

大手の局に捏造を大々的に報道されれば、その報道した局と責任者を稼いだ金と腕力によって力技で壊しながら、公衆の面々で大々的に謝罪させ責任を取らせる。

暴力行為を法廷に訴えられれば、【王者】に匹敵する収入によって得た金にモノを言わせて訴えてきた側を法外的に返り討ちにする。

そんな、どこからどう見ても『異常』と思えるほどの『純潔』を誇りながら…

『逆鱗』と呼ばれた劉玄斎は、現役時代から引退した今の今まで、『結婚』や『交際』と言った女性問題の全てを、自らを遠ざけているのではないかと思える頻度で全て『否定』してきた。

…スキャンダルが多すぎるエクシーズ王者【黒翼】と違い、『浮いた話』のひとつも無く、引退していった男、劉玄斎。

それは彼の収入、知名度、貢献度、活躍の大きさから考えれば、ある意味異常であるとさえ思える程。

【王者】と同格と謳われた男であるのだから、女性側からは引く手数多であるはずだと言うのに…

…しかし、それでも彼は頑なに所帯を持とうとは絶対にせず。

一時は『男色』だとか『女性が苦手』だとか、『隠し子』や『内縁の妻』が居るとまで憶測が飛び交った事もある。

けれども、そんな噂のどれもが信憑性に欠け…捏造が即『命取り』になることを理解している記者達がどれだけ奮起しても、その真相を解

き明かす事はできなかったのだ。
ソレ故、引退する最後まで潔癖を誇った彼だからこそ―
彼がプロを引退して久しい現代においては、最早その話題は盛り上がることすらなく世界の常識とまでなっているのか。
…特定の女性と関係を持たず、彼が生涯『独身』を貫いているというのは、『逆鱗』を良く知るファンにとっては常識中の常識以前の常識とも呼べない常識以下の基礎知識。
だからこそ、その頑なに所帯を持たないことで有名であった『逆鱗』に対し。
今では世界の方が彼に対する憶測をすることを辞め、引退してもなお多大なる影響力を持つその名に対し、好き勝手にモノを言うことを世界の方が諦めたのだ。
世界に勝った…大衆に勝った…
そんな、『潔白』を常に証明し続けていた歴戦の男、劉玄斎。

そんな、結婚すらしていない、特定の女性の影すら見えなかった男、劉玄斎が…

【決島】の中央、『大空洞』…

そこで、裏決闘界の融合帝、【紫影】に頭を踏みつけられながら…

「え…そ…祖父って…」
「おやおや?まだ何も聞いていなかったみたいですねぇ…ふふ、まぁ『Ｅｘ適正』の無い子どもが孫だなんて、『逆鱗』だって隠したい事だったんでしょうし、当然でしょうが。」

「あ…」

【紫影】に頭を踏まれ倒れている、デュエリア校学長の『逆鱗』を見て。
決闘学園イースト校2年、天城　遊良の思考は、【紫影】が今先ほど放った言葉によって、何もかもが真っ白の状態になってしまっていた。
…そう、それは【裏決島】の終結を目指して、この『大空洞』へと飛び込んできた天城　遊良へと向かって【紫影】のが放ったある言葉のせい。
【紫影】は言った…遊良の思考を、真っ白にしてしまう衝撃的な言葉を―

―『…天城　遊良、あなたもすぐに、ここで倒れている祖父と同じ目に遭わせてあげますから、ええ。』

…と。

「な…ば、馬鹿なことを言うな！『逆鱗』が…お、俺の祖父だなんて…そんなこと…あるわけが…」
「ふふっ、本当に何も知らないんですねぇ。けど残念ながら本当の事なんですよねぇ！あ、天涯孤独の貴方にとっては、残念ではなく喜ばしいことですかねぇ？ええ。」

そう…たった今【紫影】は、倒れて気を失っている劉玄斎を踏みつけながら、そして天城　遊良を嘲笑いながら、彼らを指して信じられるわけもない『関係性』を嬉々として宣言したのだ。

『祖父』…

それは紛れも無く、天城　遊良と『逆鱗』の劉玄斎に、『血の繋がり』があると言う事の照明。
『母方』ではない…紫魔家の血を引くと判明した『母方』の血では絶対にない、エクシーズ召喚の使い手である劉玄斎は紛れも無く『父方』の祖父であると言う事。
そう、荒々しくも優しかった父、天城　竜一の…
けれども、とても遊良には【紫影】が今言った言葉がどうしても信じられない。いや、信じられるわけがない、信じたくとも飲み込めないと言った方が正しいだろうか。

…天涯孤独。

両親も親類もいない、血の繋がりこの世界に1つもないというその孤独。
その、『血の繋がった者』がこの世界に誰1人としていないその孤独感を…遊良は幼い時分から、これまでずっと抱いて生きてきたのだ。
１１年前…『５歳』の時に『Ｅｘ適正が無い』と宣告され、ソレと同時に行方が分からなくなってしまった自分の両親…父、天城　竜一と、母、天城　スミレ。
その厳しくも優しい、大好きだった両親が自分の前から居なくなったときの寂しさと悲しさと孤独と絶望は…とてもじゃないが、当時５歳だった遊良には抱えきれないほどの感情となりて、幼い遊良をいとも簡単に殺そうとしてきていた。
…だからこそ、今でこそ多少吹っ切れているとは言え。
遊良がこれまで抱いてきた『孤独』という名の感情は、胡散臭い【紫影】の言葉という、信憑性に欠けるこんな些細な事でさえも押さえきれない程に溢れ出してしまうのか。
…しかし、ソレも仕方のない事だろう。
何せ、遊良が両親をなくしたのはまだ『５歳』の時。甘えたい盛りの、精神的にも自立などしていないそんな幼少の頃に両親が居なくなり…

５歳という幼さで世界にたった一人だけ取り残された、血の繋がりを他に知らぬというその『孤独』は、遊良に相当の絶望をずっと与えていたのだから。
それは鷹矢が居たとは言え、ルキが居たとは言え。幼馴染２人が自分の傍にずっと居てくれたとは言え、これまでずっと拭いきれない孤独感を遊良が感じていたことは紛れも無い事実。

信じられない…けれども、信じてしまいたい…いや、信じられるわけがない…けど…だけど…だって―

そんな何気なく呟かれた【紫影】の言葉に、心を強く揺さぶられる天城　遊良。

いくらソレを明かしたのが、胡散臭さが服を着ているような捻じれた男、裏決闘界の融合帝【紫影】の言動とは言えども。いや、ソレが【紫影】という、使えるモノは何でも使うどこまでも『卑怯』な屑であるからこそ―
『逆鱗』が自分の祖父であるというその言葉が、【紫影】の『嘘』である可能性と同時に…自分を動揺させるための本物かもしれないという、その『もしかしたら』という思いも遊良も心の奥底で浮かび上がってしまっていて。
そう、『思ってしまった』のだ…
信じてはいけない、そんなこと遊良にだってわかっている。けれども『理性』とは遠く離れた『本能』…いや、遊良がこれまでずっと押さえてきた『孤独』という感情の前では、こんな事態とは言えとても遊良にはソレを押さえる事など出来はせず。
だからこそ、その時点で【紫影】の思う壺だというコトは遊良だって理解はしていても。それでも遊良の心には、どうしようもない動揺と焦燥が抑える事など出来ずに生み出されてしまっていて。
…もしかしたら、『逆鱗』は『血の繋がった』家族かもしれない。
そんな淡い期待が、【紫影】の放った何気ない言葉によって…天涯孤

独という、これまで押さえてきたはずの孤独感と絶望感と共に。
『こんな時』に、遊良の心にまるで洪水のように溢れ出してしまって―

「遊良！惑わされるな！」

しかし…
淀みが生じた遊良へと、活を入れなおすかのように。
混沌渦巻くこの大空洞に、高らかに響き渡ったのは誰にも染まらぬ鷹矢の叫び。
それはこの【裏決島】の元凶である【紫影】を前にして、思わぬ形で動揺させられた相棒を正気に戻す鋭い言葉の厳しい鞭でもあるのか。
…そう、【紫影】の言葉の『真偽』はどうあれ、今この現状においては遊良の感情よりもなお優先するべき事があるのだとして。
この世の誰よりも遊良の傍に居続けた男が、相棒の孤独感を遊良と同じくらいに理解しつつも。今、真っ先にやることを明確にして…
遊良へと向かって、激を飛ばす。

「何を動揺しているのだ！俺達が今やるべき事は一体『何』だ、余計な事に囚われている暇などないのだぞ！」
「鷹矢…」
「理事長から言われたであろう！あの男の言動、行動、その全てが嘘！奴の言葉は、何も信じるなと！」
「で、でも…」
「『でも』も『けど』も無い！アイツが何者だろうと、お前と誰が血が繋がっていようと！そんなこと、今は『どうでもいい』ことではないか！」
「ッ…」

『どうでもいい』…鷹矢のその言葉は、天涯孤独の遊良に対するモノとしてはどこか冷たさすら感じる代物にも聞こえたことだろう。

何せ、血の繋がりを他に知らぬ遊良に対し…父母が居て、祖父が居て、他にも親族が大勢いる立場からの鷹矢の言葉は、ある意味で天涯孤独の遊良へと向ける言葉にしてはどこか真逆の立場からの言葉となってしまうのだから。

…血の繋がった家族の居ない天城　遊良。血の繋がった親族が大勢いる天宮寺　鷹矢。

その立場はまるで真逆。いくら生まれた時から一緒に過ごしている幼馴染同士とは言え、これでは遊良の戦意を削ぐだけの…遊良の心に、ダメージを与えるだけの言葉になるとさえ思えるモノだと言うのに。

「奴の言葉など聞くな！その口から出るモノ、その全てが『嘘』だと割り切ってしまえ！そして真偽は奴を倒してからハッキリさせればいい…だから俺達の、今やるべき事を忘れるな、遊良！」

「…そ、そうだった…あぁ、そうだよな、あんな奴の言う事なんて嘘に決まってる！」

「うむ！奴はお前を動揺させるつもりなのだ！いや、仮に『本当』なのだとしても、今はソレをとやかく言っている暇などない！わからぬことに惑わされるな！奴を倒すこと以外、今は全てどうでもいいことだ！」

…けれども、鷹矢の言葉からはそう言った『余計』な感情の混ざりなど一切感じず。

そう、鷹矢にあるのは、ただただ自分の相棒たる遊良に対し。片割れとして、自分の片翼が折れかけたこの時に異なる精神面からただ支えているという、どこまでも2人で1つの強固な絆、ただそれだけ。

…別に、鷹矢とて【紫影】の言葉に驚かなかったわけではない。

生まれた時から遊良と共にいる鷹矢なのだ。この世界の誰よりも

遊良を理解している彼にとっては、遊良と『逆鱗』に血の繋がりがあるかもしれないという【紫影】の言葉は遊良と同じくらいの衝撃を与えられたのだから。

―鷹矢は知っている…いや、一緒に経験している。

遊良の味わってきた苦しみを。遊良が抱いてきた悲しみを。遊良が感じていた寂しさを。

そんな抱えきれない負の感情に苛まれていた遊良を、誰よりも近い場所でルキと共にずっと見てきたのは他ならぬ天宮寺　鷹矢なのだ。

幼少の頃に、自らの命すらも捨てようとしていた遊良を見て、一緒に逝ってやろうと考えていた時期も鷹矢にはあった。

けれども、そんな遊良の弱い部分を…ある意味、遊良以上に知っている天宮寺　鷹矢からすれば…いや、遊良の抱いた負の感情を、遊良本人と同じくらいに理解している他ならぬ天宮寺　鷹矢だからこそ―

遊良と『逆鱗』に血の繋がりがあったという、その【紫影】の言葉に遊良と同じくらいの衝撃を受けつつも。片割れの遊良が動揺させられてしまった今、片割れの自分は動揺するわけにはいかないのだとして。

どこまでも精神的支柱となりえるべく、揺れず曲がらず遊良を支え、諸悪の根源にただ立ち向かうだけ。

「だから思い出せ遊良！俺達の今やるべき事は何だ！奴の話など何も聞かず、耳を貸さず！」

「有無を言わさず…【紫影】を叩き潰す！それだけだ！」

「うむ！」

「はぁ…酷い言われようですねぇ。私、生まれてこの方『嘘』なんてついた覚えがないんですがねぇ、ええ。」

そして、揺さぶられ、折れかけていた少年が、完全に支えられて立

ち直ったその場面を見て。
溜息混じりに、そしてとてもつまらなさそうに。反吐を吐くようにして、そう言葉を漏らした裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…ソレが、その吐く言葉が。
その全てが『嘘』だというのに、ソレを自分でわかっていつつも呼吸をするように嘘を吐く彼の思考には…一体全体、『何』が詰まっているのだろうか。
常人では理解出来ないその思考。常人は理解したくもないその思想。
およそ常人と呼べるだけの精神状態では断じてない、このどこまでも捻じれた男は卑怯な手を使うことに何の抵抗も見せようとはせず…
そのまま、【紫影】という性根の腐った下種は。嬉々として、下卑たる言葉を更につらつら述べるだけであり…
「それよりいいんですかぁ？貴方達がこうしている間にもぉ…『赤き竜神』の少女の下には私が忍び込ませた刺客が迫って…」
「俺達を舐めるな、この屑野郎！」
「そんな脅しなど効かん！既にルキの無事は証明されている！」
「…ほ？」

しかし…
今度は完全に立ち直った遊良と、初めから揺さぶられもしかなった鷹矢が。
再度揺さぶりにかかった【紫影】の言葉に、揺さぶられることなく薄汚い下種の言葉を一蹴の後に切って捨てる。
「ルキは今、強い味方が守ってくれている。それに、そこには砺波先生も居る…だから俺達は、なんの迷いも無くお前と戦えるってことだ！舐めるなよ、【紫影】！」
「脅し、陽動、虚言、幻惑！そんなモノに惑わされる俺達ではない！ル

キを人質にしようとしても無駄だ！あの理事長が任せろと言って俺達を送り出したのだぞ？貴様の放った刺客程度が、ルキをどうこうできるわけがない！」

「へぇ…」

迷いのない彼らの声から察するに…彼らは本気で高天ヶ原　ルキの無事を信じて…いや、『わかって』いるのだろう。

そう、どこまでも迷いの無い遊良と鷹矢の言葉には、【紫影】の言葉に惑わされそうになっていた先ほどまでの危うさなど既に微塵も感じられず。

ソレはここまで来る間に、彼らの中でルキの安全がこれ以上無いくらいに確立されたが故なのか…

【王者】のレベルを超え、【化物】となった【白鯨】砺波　浜臣があの天空の塔を守っているというその信頼。そしていくら【紫影】が数で攻めようとしたところで、【白鯨】の守りの奥に底抜けに『運』の良い男がルキを守ってくれていると鍛冶上　刀利に教えられたのだから…

これ以上、【紫影】がどれだけ揺さぶりをかけてこようとも。ルキを守ってくれている者達の力を誰よりも知っている遊良と鷹矢からすれば、ルキの安全はもう確保されているようなモノなのだから。

「なぁんだ…騙されやすい子どもかと思えば、意外と『分かってる』じゃないですか。…ま、確かに貴方達のいう通り、忍び込ませた刺客はあっけなく『運』のいい子どもにやられたようなんですよねぇ…だからシンクロ崩れの分家なんて信用ならないんです、ええ。」

ソレ故、【紫影】もまたこれ以上の精神への揺さぶりは無駄だと理解したのだろう。

…【紫影】の目に映るのは、思ったよりも強い絆と理解で結ばれた青く若い子ども達の姿であり…

そのまま、【紫影】は『塔』への襲撃が失敗に終わっているというの

にも関わらず。
宣言した『目的』であるはずのソレすら、まるでどうでもいいことのように捻じれた吐息を漏らしながら…
遊良達ではなく、使えない『駒』への失望を顕にしつつ。どこまでも飄々とした佇まいを変える事無く、戦意を全開にしている若者2人へと向かって気怠そうに言葉を続けるだけ。

「まぁいいでしょう。でしたらさっさとお相手してあげましょうねぇ。けど、面倒なので2人してかかって来てください？どうせ、最初からそのつもりだったんでしょうし。」
「…あぁ、悔しいけど、今の俺達じゃ1人で向かって行ってもお前には勝てない。」
「こんな事態なのだ、俺達のやるべきことは貴様を一刻も早く倒すという事のみ！2対1だが、卑怯な貴様に卑怯と言われる筋合いもないぞ！」
「ふふっ、卑怯も何も…『逆鱗』や『烈火』を相手にするんじゃないんですから、別に2人でかかってきたって構いませんよぉ？それとも、もっとハンデをあげた方がよろしかったですかねぇ。なんなら、手札0からスタートしてあげてもいいんですよぉ、ふふふふっ。」

吐き出されるは下種の煽り、粘度の高い悪意の言霊。
2対1だというのにも関わらず、大空洞へと吐き出される【紫影】の言葉はどこまでも胸糞の悪い煽りとなりて少年達へと届けられる。
…しかし、そのあからさまに遊良と鷹矢を舐めているような言動は、彼が遊良と鷹矢を軽く見ている証拠でもあるのか。
そう、世界最強の【王者】に匹敵する、裏決闘界の【三帝王】の1人として。いくら2人かがりとはいえ、学生程度では相手にもならないのだと言わんばかりの屑の態度はどこまでもどこまでも遊良と鷹矢を煽るだけであり…

「ふん、そうしてくれるならば大いに助かる。楽にお前を倒せるのだ

からな。」
「なりふり構ってられない状況なんだ。卑怯者のお前がハンデをくれるっていうならありがたく貰う。」
「…チッ、可愛くないガキですねぇ。もっと憤慨しなさいよ、えぇ。」

けれども、遊良と鷹矢は揺さぶられない。
そう、『もう』揺さぶられない―
皮肉に皮肉を返す遊良と鷹矢の精神は、彼ら2人が揃って【紫影】に対峙しているからこそ立ち向かえる強靭なりし無敵の矛ともなりえると言える代物となりて、【紫影】の捻じれた煽りを真正面から切って捨てる。

…遊良1人ならば、【紫影】の言葉に惑わされた時点で終わっていた。
…鷹矢1人ならば、【紫影】相手に実力が足りずに終わっていた。

しかし、今立っているのは折れてはいない2人のデュエリスト。
そう、彼らは【決闘祭】を優勝した天城　遊良と、【決島】で優勝した天宮寺　鷹矢。その世界中の学生の中でもトップレベルの実力を持った、唯一無二なる2人のデュエリストが2人揃って【紫影】へと立ち向かおうとしているその雰囲気はプロにも劣らぬ圧巻の一言であり…
いくら【紫影】が、【王者】と同等の力を持つとされている、裏決闘界の【三帝王】の1人と言えども。
遊良も鷹矢も、お互いがお互いに一緒に戦うという意思を1つにしているからこそ…その彼ら2人の雰囲気が1つとなった圧力は、歴戦のプロにも負けず劣らずの相当たる『強者』の重圧となりて【紫影】へと向かっているのだから。

…遊良、鷹矢も。この地獄のような【裏決島】の状況が分かっていないほど、馬鹿でもないし無能でもない。

それは、確かに悔しさを感じながらも…今の【紫影】は少なくとも、自分達よりも『格上』だと認めているからこその冷静なる判断能力。

…いくら【紫影】が屑で、小物で、下種で、卑劣な、どうしようもない卑怯な奴なのだとしても。

それでも、この男は紛れも無く『極』の頂に立っている―

ソレが分からぬほど遊良たちは馬鹿ではないし、ソレを理解出来ぬほど鷹矢たちは子どもでもない。だからこそ、例え2対1で戦うしかなかろうとも。遊良も鷹矢も、この地獄の様な【裏決島】を一刻も早く終結させるために…

他人を小馬鹿にし続ける下種。他人を下に見続ける屑。そんな性根の腐った捻じれた男【紫影】に対し、少年達は『もう』下手な怒りを感じることもなく。自分達に出来ることを、ただひたすらに実行するだけであり…

「ゆくぞ【紫影】！貴様を倒して…」

「この馬鹿げた地獄を、今すぐ終わらせてやる！」

…お互いにデュエルディスクを構え始める、【紫影】とイースト校の少年達。果たして、コレが【裏決島】最後のデュエルとなるのだろうか。

ピピッと言う聞きなれない機械音の後に、デュエルディスクがルールを決める…複数人という状況下で、自動的にそのルールを。

…日常ではほとんど見かけないものの、デュエルディスクが判定する自動ルール設定にはまだまだ謎が多い。

そんな中で呈示されたのは『全員が先攻ドロー無し』、『初ターンの攻撃無し』という、多対一においてはあくまでも普通なルール設定であり…

しかし、タッグデュエルと根本的に違うのは、【紫影】の『普通』の場に対し…遊良も鷹矢も、それぞれ自分の『フィールド』と『デッキ』が許されている上で『タッグ』を認められていると言うことだろう。

つまりは、【紫影】の５枚の初期手札と５つのモンスターゾーンと５つの魔法・罠ゾーンと１つのフィールドゾーンとデッキに対し…
遊良と鷹矢は、共有の場と墓地とに合わせて計１０枚の初期手札と計１０のモンスターゾーンに、計１０の魔法・罠ゾーンと計２つのフィールドゾーン・デッキを持っていると言う事。

…ディスクに呈示されているのは紛れも無く、【紫影】ｖｓ．『遊良＆鷹矢』の文字。

それすなわち、デュエルディスクの自動判定がそれだけ【紫影】と少年達との間に力の差があると判断したということでもあるのだが…

まぁ、１０のモンスターゾーンと魔法・罠ゾーンとは言え、流石に１人の領域は５つずつであり、自分が出していないモンスターの攻撃宣言や魔法・罠の効果発動・使用は出来ず、遊良と鷹矢のＬＰはそれぞれに４０００ずつではあるのだが。
…それでも、２ｖｓ．１と言うのは単純に考えても２人組に相当の有利が働くはず。
そんな自動ルール判定の結果に何の疑問も抱く暇もなく…２ｖｓ．１という変則的なデュエルを前に、遊良も鷹矢もただただ目の前の【紫影】を睨みつけながら、全く怯むことなく立ち向かう。

…デュエルディスクを構え、現れたデッキから手札を引く遊良と鷹矢。

他の学生達の命運もかかっている、この大空洞の重い空気の中…
構えている遊良と鷹矢に応じるように、ニヤニヤとした捻じれた笑いを零す【紫影】もまた同じく手札を引いたかと思うと…

「若い子はイキがいいですねぇ…では…」

この重々しい空気が充満する『大空洞』の中で、ソレはどこまでもハッキリとした宣言となりて―

―デュエル!!!

それは、轟く。

先攻は、【紫影】。

「私のターン！モンスターとカードを1枚ずつセットしてターンエンドでぇーす！」

【紫影】　ＬＰ：４０００
手札：5→3枚
場：セットモンスター1体
伏せ：1枚

デュエルが始まってすぐ…
あまりに少ない行動で、そのターンを終えてしまった裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…それは全員が初ターンの攻撃を許されていないとは言え、あまりに少なすぎる高慢な初動。
そう、彼が今相手をしているのは、世界中の決闘学園の学生の中でもトップクラスの実力を持っていると言っても過言ではない学生であると言うのに。

「貴様、随分な自信だな。バトルが出来ないとはいえ、たったソレだけでターンを終えるとは。」
「おや、私のスタイルがお気に召しませんか？ふふっ、心配御無用で

す。コレが私のヤり方ですので…まぁ、馬鹿正直に展開してしまうと貴方達のターンに荒されてしまいますからねぇ。とりあえず、先攻はこの程度でしょう、ええ。」

しかし、【紫影】はどこまでもその捻じれた態度を崩すこと無く。あくまでもどこまでも、飄々と気色の悪い捻じれた笑みを浮かべながら、掴み所なくユラユラ佇んでいるだけであり…

…複数人を相手にするというのは、傍から見ているよりもずっと難しい。

だってそうだろう。通常であれば1人にのみ注意していればいいはずの展開も、2人同時に相手をしなければならないこの状況においては片方に集中してしまえばもう片方を止められずに攻められてしまうのだから。

…しかも、今【紫影】が相手にしているのは、取るに足らない有象無象とは訳が違うのだ。

【紫影】が同時に相手をしているのは昨年度の【決闘祭】でも今回の【決島】でもそれぞれが優勝と準優勝を飾った、世界中の学生の中でも最上位と言ってもいい程の実力を持ったイースト校の恐るべき2年生達。

学生とプロを分ける実力の『壁』を超え、プロのトップランカー達が身を置いている『先』の地平に学生の身でありながら辿り着いた…イースト校2年の、天城　遊良と天宮寺　鷹矢であるのだ。

相手にもならない有象無象が相手であれば、確かにこの程度でもどうとでもなる。けれども、今対峙している少年達はこの歳の学生にしてはあまりに恐るべき才能を持った、１００年に1人現れるかどうかというその稀有なる才のデュエリスト達。

そんな才覚を備えた伸び盛りの少年達が、揃って対峙しているのだから…1人ずつ相手にするのとはわけが違い、【紫影】とてこの状況は相当のプレッシャーになっているはずだと言うのに…

それに加え、今回のルールは遊良と鷹矢にそれぞれモンスターゾーンと魔法・罠ゾーンが与えられている、【紫影】にはとことん不利なルール。これでは、幾ら【紫影】が決闘界の【王者】達と同じ頂きに位置している裏決闘界の【三帝王】とは言え。

向かってきているプレッシャーは、相当たる代物になっているに違いなく…

「ならば望み通り、がら空きでターンを迎えるがいい！俺のターン、俺は【ブリキンギョ】を召喚し、その効果で【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚！そしてゴールドの効果で【シルバー・ガジェット】を！シルバーの効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚する！来い、ガジェット達！」

―!!!!

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００
【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

それ故、ターンを迎えて迅速に。一瞬の刹那に、実に４体ものモンスターを場に呼び出したイースト校２年、天宮寺　鷹矢。

…それはどんな時でも変わらない、彼お得意のガジェットモンスター達による迅速なるいつもの展開。

そう、いくら【紫影】が得体の知れぬ存在で、そして学生である自分達をとことん舐め腐っているのだとしても。それでも、敵の策略に

乗っかってアツくなる事が、果たしてどれだけ危険なのかを本能で理解している鷹矢だからこそ…

相手が油断なら無い相手であろうと、いや祖父と同じ頂きに立っている【紫影】であるが故に。下手に身構えるのではなく、あくまでも自分の力をぶつけるのだと言わんばかりの勢いが形となりて…

「そしてグリーンの効果で、デッキから【レッド・ガジェット】を手札に加える！」

「…ふふっ、ガジェットとは、若い頃の【黒翼】を思い出させますねぇ。果たして祖父のような才が貴方にありますかねぇ、ええ。」

「俺をジジイと比べるな！俺はゴールドとシルバー、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ギアギガントＸ】！更にブリキンギョとグリーンでオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランク４、【ギアギガントＸ】」

―!!

【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００
【ギアギガントＸ】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

現れたるは鋼鉄の機兵。鷹矢のデュエルの始まりを飾る、２体の強き鉄機兵。

…轟く豪腕、唸る体躯。

ソレが、２体…一瞬で並び立った４体ものレベル４モンスター達の展開から間髪入れず、更に２体のエクシーズモンスターを揃えるその速さは彼がこれまで培ってきた崩れぬ強さをありありと見せ付けており…

そのまま鷹矢は、目の前の捻じれた男を見据えながら。

どこまでも舐めた態度を取り続ける、裏決闘界の融合帝【紫影】へ

と向かって。次に備えながらも油断もなく向かいつつ、威風堂々と吼えるのみ。

「【ギアギガントX】2体の効果発動！オーバーレイユニットを1つずつ使い、デッキから2体目のゴールドとシルバーを手札に加える！」

「同じモンスターを2体…ですがそのモンスターでは、私の場を空ける事は…」

「いいや、これで良いのだ！俺は俺に出来る事を、俺の手が回らぬところは遊良が！それぞれ解決すればいいのだからな！」

「…ほう？」

「続けて【エクシーズ・ギフト】発動！【ギアギガントX】2体のオーバーレイユニットを1つずつ使い2枚ドロー！【アイアンドロー】も発動！2枚ドローだ！」

【紫影】の言葉を遮って、更に猛るは鷹矢の宣言。

…それは良くも悪くもいつもと変わらぬ、先攻における鷹矢のいつもの流れ。

お得意のガジェットモンスター達を駆り、鋼鉄の機兵を呼び出し次に備えるという…【紫影】を前にしてもなお、いつものデュエルと変わらぬ展開を鷹矢は堂々と繰り広げ続けて。

…普通、目の前の相手が油断ならぬ強者であると分かっているのならば、もう少し警戒を強くしていつもと展開を変えるのが人のサガだというのに。

けれども、天宮寺　鷹矢は慄かない―

そう、例え目の前の相手が、祖父と同じ頂を見たほどの相手であったとしても…否、目の前の相手が、恐るべき強者であると理解しているからこそ。

下手に手を変えてジリ貧になるのではなく、己の持てる力をそのままぶつけるだけなのだとして。いつもと何も変わらない不遜なる大

胆な自信の下に鷹矢はどこまでもいつも通りの展開と行動を魅せ続け…

しかし…

「よし、魔法カード、【ナイトショット】発動！何か知らんが、貴様のその危なそうな伏せカードを使わせずに破壊する！」

撃ち抜く弾丸、死角からの一発。

自らの宣言の１つを実行すべく、鷹矢が【紫影】の伏せカードへと狙いを定めた…

―その時だった。

「…ま、そう来ると思ってましたが。破壊された【やぶ蛇】の効果発動。Ｅｘデッキから融合モンスター、【異星の最終戦士】を特殊召喚します。」

「何!?」

―！

【異星の最終戦士】レベル７

ＡＴＫ／２３５０　ＤＥＦ／２３００

突如…

【紫影】の場に現れたのは、破滅した星に１人佇む孤独なる異形の戦士であった―

…それは素材にそれぞれ指定のモンスターを要求する、召喚するのが難しい部類の融合モンスターの一体。

けれども、確かに難しい召喚方法に相応しい重圧を持つ…孤独になったが故に、ソレを全てのデュエリストにも強要してくるという、恐ろしき効果を持った最後の戦士。

「【やぶ蛇】だと…？馬鹿な…」
「さて、【異星の最終戦士】が特殊召喚に成功したので、私のセットモンスターが破壊されます。…破壊されたのは【シャドール・ヘッジホッグ】。その効果により、デッキから【シャドール・ファルコン】を手札に加えさせていただきましょう、ええ。」
「ぬぅ…」

…迂闊だった。
理事長である【白鯨】砺波　浜臣から、【紫影】は喰えぬ男だと注意を受けていたと言うのに。
あんなにも分かりやすい罠に引っかかり、手を出さなければ害はなかったであろう罠を自ら踏んでしまったなんて…それは鷹矢本人からすれば、屈辱以外の何物でもないことだろう。

…しかし、ソレは言い換えれば、天才の名を欲しいままにしている天宮寺　鷹矢ほどの『嗅覚』を持ったデュエリストであっても、【紫影】の伏せていたカードは嗅ぎ分けられなかったというコト。

そう、プロのトッププランカー達が彷徨っている『先』の地平に、学生の身で辿り着いている天宮寺　鷹矢を持ってしても。その鷹矢をいとも簡単に手玉にとってしまった【紫影】の行為は、とてもじゃないが並の強者では到底出来ない攻防であるのだから。
…もしここに他のギャラリーが居たら、今の【紫影】と鷹矢の行動と結果が理解できただろうか。
いや、出来はしない―
きっと、ギャラリーの目には鷹矢があっさりと罠に引っかかってしまったようにしか見えないだろう。
けれども、その結果に至るまでの見えない『攻防』の意味を理解できる者であれば…きっとこの攻防だけで、【紫影】と鷹矢の力の差を嫌でも理解してしまうはず。

撃ち抜かれた【やぶ蛇】も、破壊された【シャドール・ヘッジホッグ】も。それ自体は守りに適したカードとは言えず、2対1という状況下で守りに適さない『2枚だけ』を場に伏せてターンを終えるなんて、常人では考えようともしないはず。

けれども、あまりに堂々とソレだけを伏せてターンを終えるものだから…鷹矢の嗅覚は、【紫影】の罠を『破壊するべき』として嗅ぎ取ってしまったのだろう。

それは鷹矢の嗅覚を逆手に取ってしまうほどに、【紫影】の立っている『場所』は鷹矢が居る『先』の地平よりも更に高いというコトであり…

「ふふっ、こんな分かりやすい手に引っかかってくれてありがとうございます。おかげで適当にＥｘデッキに入れていたモンスターも出すことが出来ました。いやぁ、儲けモノですねぇ、ええ。」

「ぐっ、貴様ぁ…」

「おやおやぁ？最初の勢いはどうしたのでしょうねぇ？えっと、私の場を…何でしたっけぇ？ふふふっ、貴方が余計な事をした所為で、天城　遊良が不利になってしまいましたねぇ。」

「チィッ！遊良、アレを何とかしろ！俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：5→3枚
場：【ギアギガントＸ】、【ギアギガントＸ】
伏せ：2枚

そうして…

不快感しか抱かぬ【紫影】の言葉に煽られながら、文字通りやぶを突いて蛇を出してしまった鷹矢が。

【紫影】の捻じれた雰囲気を、無理矢理に引き剥がすように声を荒げつつ…

遊良を不利にしてしまったことに対し、どこか言葉を荒げながら今、そのターンを終え…

「俺のターン！」

すると、相棒がそのターンを終えた瞬間に。

【紫影】の出した、【異星の最終戦士】に怯む事無く…

今度は遊良が弾けるように、勢い良く手札からカードを掲げて。

「魔法カード、【トレード・イン】発動！【デモニック・モーターΩ】を捨てて２枚ドロー！続けて【闇の誘惑】も発動！２枚ドローして【サクリボー】を除外！フィールド魔法、【チキンレース】発動！その効果で、ＬＰを１０００払って１枚ドローする！【成金ゴブリン】を発動だ！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！」

始めから、最初から。

ターンを迎えたばかりだと言うのに、激しいドローによって初っ端らからギアを上げにかかる遊良。

…全力でデッキを回転させるその姿は、この【決島】においても彼がこれまで幾度と無く見せ付けてきた彼独自の独特のスタイルと言っても過言では無いだろうか。

それはいかなるデュエルにおいても不変。Ｅｘ適正が無いというハンデを物ともせず、メインデッキをフル回転させて【紫影】に立ち向かうその姿はまさに進撃を止めぬ激しき雄叫びの様でもあり…

…召喚、特殊召喚を封じている、【異星の最終戦士】を前にしていると言うのに。

全く怯んでも慄いてもいない遊良のドローが、嵐となりて加速する。

「…前から思っていましたが、ずいぶんと見苦しいデュエルですよ

ねぇ。そんなに必死になってドローするなんてなんとまぁ節操のない…まぁ、お気持ちは分かりますが。使えない相方の所為で面倒な事になっているんですから、自分が頑張らないといけないのは心中お察しします…」
「2枚目の【トレード・イン】を発動！【闇の侯爵ベリアル】を捨てて2枚ドロー！…よし、【禁じられた聖杯】を発動だ！【異星の最終戦士】の効果を無効にする！」
「ほ？」

そして、【紫影】の言葉を遮る様に―
遊良は繰り返したドローによって、金色に輝く神聖な聖杯の力を使い…いとも簡単に、孤独な戦士の力を消し去ってしまったではないか。
…それは彼が好んで扱う、神にその使用を『禁じられた』アイテムの中の一つ。
そう、バトルフェイズを行えない初ターンにおいては、あまりに厄介な効果を内蔵した【異星の最終戦士】の効果に対し。
神々の力すら封印してしまう、その聖なる杯から零れた雫を用いて…まるで何事もなかったかのように、孤独なる星の最後の戦士から召喚を封じる重圧が消し去れられていく―

「何か言ったか【紫影】？…悪いけど、鷹矢が伏せカードを消してくれたおかげでお前にはモンスターを守る魔法も罠も無いことが分かってる。だったら、次は俺がお前の場をがら空きにする番だ…鷹矢が『何とかしろ』って言ったからな、何とかしてやるのが俺の仕事だ。」
「ほう、相方が余計な事をした所為で手間を取らされたというのに、ソレを意に介さないというコトでしょうか？」
「鷹矢を見くびるなよ？この程度の面倒事、いつものコイツの馬鹿さ加減からしたら可愛いモノだからな！」
「うむ。この程度、迷惑にもならな…」
「これで邪魔するモノは何も無い！手札を1枚捨てて装備魔法、【D・

D・R】を発動だ！除外されている【サクリボー】を特殊召喚し…特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！集え、サクリボー達！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

遊良の場に揃いしは、３体の小さき悪魔の毛玉達。
それは遊良のデュエルの要でもある、リリースされてこそその力を発揮するモンスターであり…
【地獄の暴走召喚】を使ったところで、【紫影】の場にいるのが【異星の最終戦士】のみであるこの状況では、更なるモンスターなど出てこないことを遊良もわかっているからこそ。
先の鷹矢と同じように、遊良もまた止まる事無く己のデュエルを貫きながら、その展開を止めることなくどこまでもどこまでも動き続けるのか。
そう、敵はどこまでも卑怯な屑と、【白鯨】である砺波から言われているからこそ。どこまでも油断せず、始めから全開で…ドローを加速し続ける遊良の叫びが、木霊となりて空を裂く。
…【紫影】という、途方も無い高みにいる相手に対し。その重圧を受けながらも、自分達のデッキが果たしてどれほど回転するのかなど、遊良達にだってまだ分からぬこと。
けれども、それでも無理矢理に―
先攻の攻撃は許されてはいないものの、だからと言って【紫影】の場にカードを残したままでターンを渡してやる気など無いのだと言

わんばかりに…デッキを回転させ続ける遊良の場に、悪魔の毛玉が３体揃った時点で。遊良もまた、これより更なる展開を始めようとしているのか。

「リリース素材が３体…」

「行くぞ！【サクリボー】３体をリリース！」

轟かせしは進撃の雄叫び。

地の底に近い大空洞から、天へと突き抜ける渡る獣の咆哮。

どこまでも不敵な態度を取り続ける、【紫影】へとその怒りをぶつける様に…ソレは【紫影】の陳腐な妨害を、根底から全て崩しさるために響き渡るのか。

…この地獄を作り出した諸悪の根源、ルキを苦しめた下種の極み。

そんな屑の中の屑を消し飛ばすため、どこまでも遊良は叫ぶのみ。

震える大気、獣の咆哮と共に…

それは、現れる―

「【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

大気を震わし、大地を揺らし。

全てを破壊する獣の王の、雄々しき咆哮が大空洞へと轟いて―

それは主たる遊良が抱く、【紫影】への怒りをそのまま具現化したかのような激しき轟き。

そう…獣の王も忘れてはいない。ルキが、遊良が。この大空洞で【紫影】から受けた、その苦痛、憂悶、悲嘆、倒懸を。
だからこそ、獣の王は【紫影】の場に佇む孤独の戦士を見据えながら…
【紫影】の全てを壊さんと、更に轟き吼え猛る。
「まだだ！【サクリボー】3体の効果で3枚ドロー！そしてバルバロスのモンスター効果！3体のリリースでアドバンス召喚した時…相手のカードを、全て破壊する！やれぇ、バルバロス！」

―！

凄まじき衝動が響き渡る。【紫影】の全てを飲み込みながら。
あくまで遊良と鷹矢はタッグであるため、鷹矢の場には何の干渉も起こさずに…獣の王の破壊の衝動は、そのまま【紫影】の場に居た孤独なる星の最後の戦士を、肉片1つ残さずに崩壊させていくのか。
…そうして、飲み込まれていく孤独なる戦士。
そう、伏せカードもモンスターも、【紫影】の場には何もなくなってしまったのだ。
しかし、【紫影】の場ががら空きになってもなお。遊良も鷹矢も、まだまだコレで終わりにはしないのだと言わんばかりの勢いのまま…
「ふむ、確かにコレで私は丸裸になりましたが…バトルが出来ない先攻では、とりあえず貴方に出来るのはコレくら…」
「まだだ、まだこの程度じゃ終わらせない！鷹矢ぁ！」
「うむ！ダメージは与えられないが、ならば貴様が簡単には突破できない場を作り上げ迎え撃つのみ！罠カード、【戦線復帰】を発動！墓地から【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚し、その効果で手札から【レッド・ガジェット】を特殊召喚！レッドの効果でイエローを手札に！遊良、使え！」
「おう！【アドバンスドロー】を発動し、バルバロスを墓地に送って2

枚ドロー！そして【冥界の宝札】を２枚発動し、【二重召喚】を発動してゴールドとレッド、２体のガジェットをリリース！」
「ほ？」
「レベル８、【クラッキング・ドラゴン】をアドバンス召喚！【冥界の宝札】２枚の効果で４枚ドロー！まだだ、【貪欲な壺】発動！サクリボー３体、バルバロス、デモニック・モーターΩをデッキに戻して２枚ドロー！よし、【死者蘇生】発動！【闇の侯爵ベリアル】を墓地から特殊召喚！」

―!!

【クラッキング・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／　０
【闇の侯爵ベリアル】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

しかし、まだまだ。
止まらないドロー、止まない召喚。遊良の場に現れしは、強大なりし２体の闇。
これで２連続…いや、先の獣の王と合わせると、遊良は実に３連続で大型モンスターを呼び出したというコトになる。それはＥｘ適正が無く、Ｅｘデッキを扱えない者とは思えない程のメインデッキの回転とも言え…
獣の王が消えてもなお、遊良の場に現れるは２体もの最上級モンスター達。
…ダメージと弱体化を相手に与える、電子世界の黒き機龍。
…その身で敵の注意を引く、夜を纏いし闇羽の侯爵。
遊良が呼び出したソレら２体は、流石はレベル８の最上級モンスターだけあってその存在感は遥かに高く。
それぞれが高い攻撃力と、【紫影】にプレッシャーを与える効果を持ち合わせ。そのどれも簡単に無視は出来ないであろうモンスター達

が、どこまでも【紫影】へと重圧をかけ続ける。
しかし、【紫影】の繰り出した【異星の最終戦士】に怯む事無く、即座にここまでの展開を成しえた遊良の雰囲気は…先ほどまでの、【紫影】に揺さぶられていた遊良とはまるで違う代物とも言えるだろうか。
そう、【紫影】の言葉に心揺さぶられ、手玉に取られようとしていた先ほどまでの遊良であったならば、きっと【異星の最終戦士】を越える事は出来ずに何も行動できる事無くターンを終えるしかなかっただろう。
…それは偏に、デュエルの前に鷹矢に活を入れられたが故の覚醒。
まぁ、鷹矢が【やぶ蛇】を破壊しなければ、【異星の最終戦士】も出て来なかったのは事実ではあるのだが…
それでも、鷹矢をも手玉にとってしまう【紫影】の伏せカードが場に1枚あるのとないのでは、遊良が感じたであろうプレッシャーには天と地との差があったはずなのだ。
…だからこそ、天城　遊良は怯まない。
鷹矢のおかげで気持ちを切り替え、鷹矢が伏せカードを破壊しておいてくれたからこそ。【紫影】の場に邪魔する伏せカードがないと分かっているのならば、後は全力で展開するだけであり…

「そういえば貴方、あの憐造の甥なんでしたっけ？言われてみれば、確かにあの嫌われ者の【紫魔】に良く似て…」
「俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ！」
「…聞く耳持ちませんか。」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
手札：5→1枚
場：【クラッキング・ドラゴン】、【闇の侯爵ベリアル】
魔法・罠：【冥界の宝札】２枚、伏せ３枚
フィールド：【チキンレース】

そうして、【紫影】の言葉に聞く耳を持たず。遊良はどこまでも落ち着いたまま、そのターンを今終える。
デュエル前の動揺はどこへやら。鷹矢の言葉によって、気持ちを完全に切り替えた遊良の激しいターンが終わり…
伏せカードが3枚…【冥界の宝札】があるとは言え、初ターンに伏せるには多いとさえ思える罠を、【紫影】へと向かって張り巡らし。
次から始まるであろう【紫影】の攻撃に対し、身構えながらも肩の力が抜けている遊良の今の姿は…先ほどの揺さぶられていた姿とは打って変わって冷静そのモノ。
…ソレはある意味、この歳の少年にしては似つかわしくない、恐るべき精神状況が成せる御業とでも言えるのではないか。
だってそうだろう。先ほど遊良の心に生じた動揺…ソレは普通であれば、こんな短時間で持ち直す事など出来ないレベルの衝撃的事実であったのだから。
…大の大人ですら難しい、自らの出生に関わる衝撃的事実。
その真偽はともかくとして、そんなモノを明かされては例え誰であろうとその心には大きな動揺が生じ続けるはずなのだ。
ソレ故、一度揺さぶられ心が折れかけたというのにも関わらず…そこからいとも簡単に持ち直し、普段通りの調子を取り戻して【紫影】に立ち向かっている遊良の様子は、傍から見ても『異常』の一言。

…なんて恐るべき場慣れと手馴れ、なんて末恐ろしい才覚と胆力。

遊良も鷹矢も、歳が歳なのだからこうしたゴタゴタに巻き込まれてもう少し慌てていてもいいだろうに…特に彼等の相手は、【王者】と同等の立ち位置にいる裏決闘界の【融合帝】。そんな相手が敵なのだから、常人であればもう少し慎重なったり警戒して展開を変えてしまうのが当然の摂理ともいえるはず。
けれども、歴戦の者ですら難しい精神の掌握を、遊良は鷹矢の言葉によって簡単に取り戻し…
次に備え、遊良の展開を補助しつつ攻めに重きを置いた鷹矢と…

【紫影】の動きを警戒し、プレッシャーをかけにきた遊良の手は、それぞれ思惑がバラバラなれどあまりに息の合った身構え方。
…それは言ってしまえば、その道のプロ以上の出来栄えと共鳴。
楽しいはずの【祭典】がいきなりこんな『地獄』へと変貌し、そして日常を生きていれば出会うはずも無い犯罪者集団に襲われ続け…それに加えデュエルが『実体化』をきたしているこの状況で、たった17年しか生きていない少年達が『いつもの』調子を崩さずにデュエルを進めているだなんて。
その展開は、彼らが本当に17歳前後の少年なのかと錯覚するほどの強さとなりて…今、まざまざと【紫影】の目へと映し出されていて―

「私のターン、ドロー!…はぁ…さて、どうしましょうかねぇ…」

そんな、2対1とは言え落ち着き払っている少年達を見て…
デッキから1枚ドローしつつ、何やら呼吸をゆっくりと吐き出し始めた裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…その捻じれた思考の中では、一体何が考えられているのか。
およそ常人では理解など出来ない、そして決して理解などしたくはないその頭の中。憂いを帯びたその溜め息は、周囲の大気とは決して交わらずに捻じれて霧散していくだけであり…
そのまま、考えが纏ったのか。目の前の少年達を見据えつつ、【紫影】はその口から不敵に捻じれた笑みを再び零しながら…

「まだ様子を見てもいいんですが…ゆっくりデュエルする気が無いみたいですし、でしたらこちらもさっさと決めてあげましょうかねぇ!」
「ッ…来るぞ、鷹矢!」
「うむ!」
「ふふっ、身構えても無駄でぇす!魔法カード、【ブラック・ホール】発動!全てのモンスターを破壊しちゃいまぁす!」

―！

そして…

突如として現れたのは、強大なりし重量の渦―

憂いを帯びた溜め息から一転。身構えていた遊良と鷹矢を、真正面から嘲笑うかの如く…

―【紫影】の発動した超重力の渦によって、遊良と鷹矢のモンスターが全て破壊されてしまったではないか。

ソレは自分も、相手も…全てのモンスターを破壊する魔法カードとして知られる、強大なりし古代魔法の一枚。

…シンプルに、強い。故に、希少。

現存するカードは想像以上に少ないとされている、高価で希少でレアな代物。唯一汎用化し成功し世に出回っている【死者蘇生】とは違い、【サンダー・ボルト】や【強欲な壷】と同じくあまりに強大すぎる力を持っている所為か、【決闘世界】の取り決めにより量産することは許されてはおらず…

そう、『名家』や『裕福』の象徴とも言われる、その希少なる『古代魔法』の力をありありと見せつけながら。

現存するモノが少ないカードを『持っている』というのも1つのステータス、1つの強さと言われているこの時代において、【紫影】もまた確かに【王者】と同等の力を持った裏決闘界の融合帝と言えるだけのカードを使用し…

身構えていた遊良達の気概を、まるで嘲笑うかのようにして。少年達のモンスターを、いとも簡単に破壊していく―

「ぬぅ！奴め、こんな簡単に！」

「ふふふふっ！2対1でチマチマやってられませんからねぇ！さぁて、では行きますよぉ！手札からモンスターをセットし魔法カード、【太陽の書】を発動！今伏せた【メタモルポット】を、表側守備表示にしまぁーす！」

―！

【メタモルポット】レベル２
ＡＴＫ／　７００　ＤＥＦ／　６００

「【メタモルポット】…だと？」
「ふふっ、リバースモンスターの【メタモルポット】の効果発動！全員、手札を全て捨てて新たに５枚をドローしちゃいますよぉ！２枚捨てて５枚ドロー！」

…更に、続けて。
リバースモンスターをセットしたその刹那、光来する太陽の書物によって、【紫影】の場には怪しげな壷の如きモンスターが現れて。
…その行動は即断即決。
初めから『こう動く』と決めていたかのようなその行動の早さは、遊良と鷹矢の備えなど在って無いようなモノなのだと言わんばかりの雰囲気となりて、更にその怪しさを増していくだけであり…

「そして効果で捨てた２体のシャドールモンスターの効果が発動しまぁす！まずは【シャドール・ファルコン】を、自身の効果で裏守備表示で特殊召喚！そして【シャドール・リザード】の効果で、デッキから【シャドール・ビースト】を墓地に送りまぁす！そしてそしてそしてぇ？今墓地に送ったビーストの効果で１枚ドロー！」
「シャドール…遊良が昔いくつか使っていたが…」
「あぁ…だけど【シャドール】として作られたあのデッキは油断できないぞ。効果が連鎖して、融合モンスターも強力なモノばかりだ。」
「うむ！」
「ふふっ、いいですねぇいいですねぇ、身構えちゃってかわいいですねぇ！ではでは続けて【チキンレース】の効果を発動しまぁす！　ＬＰを１０００払って１枚ドロー！そして【手札抹殺】を発動！またま

た全員、手札を全て捨て捨てた枚数分だけドローしますよぉ？私は6枚捨てて6枚ドロー！そしてお次はドラゴン、ヘッジホッグの効果が発動しまぁす！ヘッジホッグの効果で【シャドール・ハウンド】を手札に加え、ドラゴンの効果で天城　遊良、貴方の伏せカード1枚を破壊しちゃいますからねぇ！」
「くそっ、【デモンズ・チェーン】が！」
「効果が止まらん…」

連鎖する効果、補い合う影の糸。
初動で、たった2体のモンスターが墓地に送られただけだと言うのに…実に3つもの効果が連鎖し繋がり、そしてそこから更に効果が連鎖していくその光景は、端的に表しても『異常』の一言と表せるだろうか。
…元来、融合召喚を得意とするカテゴリーは総じて手札消費が激しいとされてきた。
けれども、その俗説をひっくり返した【シャドール】というデッキの力を、【紫影】はこれでもかと言わんばかりに次々発揮し。リバースしても効果で墓地に送られても、アドバンテージを稼ぐのが特徴的な『シャドール』というカテゴリーを存分に駆使しながら…
手札3枚からスタートしたというのに、実に7枚にまでその手札を増やしつつ…
そのまま、更に動き続けていく―

「まだまだでぇす！装備魔法、【捕食接ぎ木】を発動して墓地から【捕食植物サンデウ・キンジー】を特殊召喚！」

―！

【捕食植物サンデウ・キンジー】レベル2
ＡＴＫ／　６００　ＤＥＦ／　２００

そうして…
続けて【紫影】の場に現れたのは、動けぬはずの植物が獣の形を得た生きた植物の一体であった―
しかし…

「【捕食植物】!?」
「な!?貴様が何故そのカードを!」

【紫影】が墓地より繰り出したそのモンスターを見て、思わず驚きの声を上げてしまった遊良と鷹矢。
…しかし、それも当然か。
何せ、遊良と鷹矢は【紫影】が今繰り出したモンスターの事を知っている。
特に、ソレと直接戦った経験のある鷹矢からすれば…

「ソレは竜胆　ミズチのカードのはずだ!何故貴様が持っている!」

そう、鷹矢には、このモンスターによく見覚えがある。
忘れるはずがない…それは【決島】予選の最終デュエルで、自分を最も苦しめた相手、ウエスト校3年の竜胆　ミズチが使ってきたカードなのだから。
…『カテゴリー』として纏ったデッキを組むこと自体が難しいとされているこの時代においても、特に竜胆　ミズチの持つ【捕食植物】というカードは存在が珍しいとされている、誰もが持っているようなカードでは断じてないのだ。
ましてや、その【捕食植物】というデッキの中でも、中核を担うこのモンスターを持っている者など遊良も鷹矢も『竜胆　ミズチ』ただ一人しか思いつかないというのに…
…一体、どうして【紫影】がこのモンスターを持っているのか。
…一体、何故【紫影】がこのモンスターを使っているのか。
そんな、驚きに包まれてしまった遊良と鷹矢へと向かって…

「竜胆　ミズチ……ミズチ？……あ、あぁー！そうそう、ソレですソレ！ミミズじゃなくてミズチでした！いやぁうっかりうっかり！」
「質問に答えろ！何故貴様がそのカードを持っているのだ！」
「えぇー？何で持っているのかですってぇ？…ふふっ、そんなの決まってるじゃないですかぁ…こういうコトですよぉ！」

【紫影】が、徐に瓦礫の中から『何か』を持ち上げた…

そこには―

「ッ!?あ、あれは！」
「竜胆　ミズチ!?【紫影】、貴様一体その女に何をした！」

そう、遊良と鷹矢の目の前…
瓦礫の中から【紫影】が持ち上げたソコに居たのは、紛れも無くウエスト校3年の竜胆　ミズチの姿であったのだ―
…しかし、その姿は『酷い』の一言。
何せ彼女の今の姿は、本当に息があるのかと思える程に傷付きに傷付いた…意識を失い、傷だらけの、あまりに酷い姿であったのだから。
腕は折れ、足は折れ…ダラリと垂れ下がった片腕と、持ち上げられた片腕にはまるで生気と言うモノが無く、額から流れる血が彼女の凄惨さを物語っている、土と血に塗れた痛々しい姿。
辛うじて、生きているというのは分かる。けれども、生傷だらけで痣が出来ている少女の姿は…遊良と鷹矢からしても、見るからに痛々しい状態となりて映し出されていて。
「ふふっ、見てわかりませんかぁ？デュエルで私が勝ったので、返すモノ返してもらった後とりあえず甚振ったに決まってるじゃないですか、ええ。」

「何を考えているのだ！相手は女だぞ！」
「ふふふっ、自分の所有物をどう扱おうと私の勝手でしょう？【捕食植物】は元々私のカードで、彼女も私の血を分けた実の孫なんですし。」
「孫!?竜胆さんが、お前の!?」
「戯言を…どうせそれも嘘なのだろう！」
「はいはい、どう思おうと自由ですがね。しかしウケますねぇ、私の孫に【黒翼】の孫に『逆鱗』の孫…さっきは『烈火』の孫もいましたっけ。…もうそんな時代なんですねぇ、少々寂しさすら感じますねぇ、ええ。」

傷付いた少女を乱雑に持ち上げているというのにも関わらず、何やら寂寥を感じている【紫影】の姿は不気味の一言。
…【紫影】の言葉が真実であるのならば、実の孫をこんなにも傷つけておいてどの口が哀愁を語るのか。
傷付いた孫を片手に、星霜を感じている捻じれた男の行動、言動…その全てが遊良達からすれば、どこまでも不気味でどこまでも不快であり…

「まっ、そう言う事で、自分のカードを使わさせて頂いているだけでぇす！サンデウ・キンジーの効果発動、このカードは【融合】魔法無しで融合召喚を行う事が出来ます！私はサンデウ・キンジーと裏守備表示のシャドール・ファルコンを融合！融合召喚！現れなさい、レベル７！【捕食植物キメラフレシア】！」

―！

【捕食植物キメラフレシア】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

そうして…
孫を投げ捨てた【紫影】の場に、凶暴化せし毒華の一房が現れる。

…それは紛れも無く、竜胆　ミズチが得意としていた融合モンスターの一体。
その恐ろしさは昨日彼女と戦った鷹矢が最もよく知っており、戦闘では無類の強さを誇る竜胆　ミズチのエースと呼べるモンスター…
…しかし、それだけでは終わらない。
現れた毒花を見て、より一層身構えた少年達へと向かって…【紫影】はまだまだ、止まる様子を見せる事なく…

「ふふっ、身構えちゃって可愛いですねぇ！魔法カード、【融合】発動！手札の【シャドール・ハウンド】と場の【メタモルポット】を融合！融合召喚、レベル１０！【エルシャドール・シェキナーガ】！そして【融合回収】を発動でぇす！墓地から【融合】とサンデウ・キンジーを手札に戻し、そのまま再び【融合】発動！場のキメラフレシアと手札のサンデウ・キンジーを融合！融合召喚、レベル８！【捕食植物ドラゴスタペリア】！」

―!!

【エルシャドール・シェキナーガ】レベル１０
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／３０００

【捕食植物ドラゴスタペリア】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１９００

「まだまだ終わりませんよぉ？【龍の鏡】を発動！墓地の【モリンフェン】２体を除外融合し、【始祖竜ワイアーム】を融合召喚！【円融魔術】も発動し、墓地のシャドール・ファルコンとサンデウ・キンジーも除外融合して【エルシャドール・ミドラーシュ】も融合召喚！」

―!!

【始祖竜ワイアーム】レベル９
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２０００
【エルシャドール・ミドラーシュ】レベル５
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／　８００

止まらない融合、終わらない展開…
【紫影】の場に現れるは、４体もの融合モンスターたち。
手札消費が激しいとされている融合召喚において、ここまで融合展開を続けられるというだけでも賞賛に値する怒涛の展開だと言うのに…

「融合モンスターが４体…シャドールだけじゃなくて、それ以外の融合まで使いこなすなんて…」
「…展開が止まらん…がら空きの場からこれ程とは…」

４連続…いや、キメラフレシアの展開から考えると、実に５連続で融合召喚を行っている【紫影】の戦術は…
この男が屑で卑怯で下劣な男だというコトを差し引いても、裏決闘界の融合帝と呼ぶに相応しい力となりて容赦なく遊良達を襲い続ける。
…融合召喚の名家として有名な、ＨＥＲＯ使いの『紫魔家』ならばいざ知らず。
場を埋めるほどの連続融合召喚という、ここまでの展開を続けながらもまだまだ余裕しか見せない【紫影】の雰囲気。それは対峙している少年達からすれば、予想していた以上の圧力となりて襲いかかって来ているのか。

「【終わりの始まり】を発動！墓地のシャドール・ハウンド、リザード、ビースト、ヘッジホッグ２体を除外して３枚ドロー！【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側除外して２枚ドローしちゃいまぁす！」

だからこそ、ソレと直に対峙している遊良と鷹矢も、自分達が今現在一体『何』と対峙しているのかをその身を持って思い知られていて。

…尽きない手札、減らない場、【紫影】の場には実に４体もの大型融合モンスター達。

…特殊召喚されたモンスターの効果を無効化し破壊してくる、攻撃力も守備力も高い『攻撃表示』の【エルシャドール・シェキナーガ】。

…捕食カウンターを押し付け、効果を無効化しレベルを１にしてくる『攻撃表示』の【捕食植物ドラゴスタペリア】。

…モンスターの効果を一切受け付けず、効果モンスターとの戦闘では決して破壊されない、あまりに堅い壁と化している『守備表示』の【始祖竜ワイアーム】。

…相手の効果では破壊されず、【異星の最終戦士】のようにこちらの展開を制限してくる、『攻撃表示』の【エルシャドール・ミドラーシュ】。

どれもこれもあれもそれも、一筋縄ではいかない強力な融合モンスターたち。

そんなモノをいとも簡単に場に揃え、その強烈な力を持った融合体を１ターンの間に実に４体も融合召喚した【紫影】の力は…確かに『その名』に恥じぬモノであるとその、融合モンスターたちが自ら証明していることだろう。

そんな、見ているだけでプレッシャーを与えてくるかのような【紫影】の容赦のないデュエルの流れは…高名なプロの試合でも滅多に見られるモノではない、確かなる天上に位置している者の途轍もない圧力と重圧とも言えるだろうか。

…がら空きの場から、手札を増やしながら展開を続ける【紫影】の圧力はどこまでも捻じれた重々しい代物。

それに、墓地にいる【捕食植物キメラフレシア】の効果も、次の鷹矢のターンのスタンバイフェイズにその効果を発動することが決まっているのだから。４体もの融合モンスター達の圧力、それに４連続で行われた融合召喚の圧力は、遊良と鷹矢にどこまでもどこまでも容赦なく襲いかかっているのだ。

すると…

徐に、臨戦態勢に入った【紫影】が。

まるで獲物を見定めた蛇のように、その視線を少年の片方へと向け始めると…

「さて、複数人を相手にするときの心得を教えて上げましょうかねぇ…それは、『弱い方』から片付けるんですよぉ！バトル！【捕食植物ドラゴスタペリア】で、天宮寺　鷹矢に攻撃ぃ！」

吠える…毒々しい色合いをした、命を持った竜の草花が。

その叫びはまさに毒の咆哮。一発でも喰らってしまえば、いくらＬＰが残るとは言え全身が毒にまみれてしまうのでは無いかという恐怖の叫びが…今、大空洞の上空へと、轟きながら天に舞う。

…【チキンレース】に守られている遊良ではなく、ＬＰが同じ数値の鷹矢から狙うというのはある意味セオリー通り。

けれども、いくらこの攻撃では鷹矢のＬＰが残るとは言え。

この実体化したデュエルにおいては、一発でもモンスターの攻撃を喰らってしまえば命が危ういことは明白であり、ソレを連撃で喰らってしまえば１人の命など簡単に消し飛んでしまう危険性があるのだ。

…けれども、【紫影】は躊躇しない。

少年に危害を加えることなど、微塵も躊躇わない【紫影】の宣言によって―

命をも奪う危険性のある攻撃が、躊躇いなく鷹矢へと向かって放たれ―

しかし―

「いつまでも…俺を舐めるなぁ！墓地より【超電磁タートル】の効果発動！バトルフェイズを終了する！」

―！

…巨大なりし竜の草華が、その口から死の毒咆を解き放たんとするその直前に。

鷹矢の墓地から、一体の機械仕掛けの亀が飛び出し…毒の竜の草花の咆哮を、電磁の力で掻き消したのだ―

反発し、相殺する…その有り余る斥力で。

そう、【捕食植物ドラゴスタペリア】が、鷹矢に直接攻撃を行うまさに寸前…焦ったような声と共に、鷹矢と【紫影】の間に機械仕掛けの亀が割って入り、【紫影】からの攻撃の手を電磁力で弾き返してしまったのだ。

それは鷹矢が、【メタモルポット】か【手札抹殺】で墓地に容易していた守りの手。

転んでもタダでは起きないことに定評のある鷹矢が仕込んでおいたその手によって、どこまでも舐めてかかってきた【紫影】の意を真正面から弾き返し…

…しかし、攻撃を止めたというのに。呼吸を少々乱し、焦りと共にどこか苦々しげに【紫影】を睨みつけている鷹矢。

…まぁ、鷹矢の焦りも当たり前と言えば当たり前なのか。

何せこの紫魔のデュエルは、実体化している恐ろしきデュエル。その攻撃の１つをとっても、実体化したモンスターの攻撃はいくらＬＰが残るとは言え…

…一撃を喰らえば、下手をすれば死んでしまう可能性だってあるのだから。

だからこそ、竜の草花の毒の咆哮など喰らってしまえば、いくら鷹矢とて悶え苦しみ毒殺されてしまう危険性があった。ソレ故、どうにか【紫影】の攻撃を食い止めたとは言えども。
鷹矢の額には、隠しようのない冷や汗が浮かび上がってきている様子であって。

「おや…まっ、流石にこのくらいは備えていますか。その伏せカードが役に立たないモノだとはわかっていましたが…一応あの【黒翼】の孫なんですし、このくらいやってもらわないと、私も張り合いがないというモノですからねぇ、ええ。」
「…貴様、俺をどこまで舐めれば気が済むのだ。」
「えぇ、えぇ、舐めたくもなります。自分だけ守りを固めた天城　遊良と違って、貴方の方は伏せカード1枚しかないんですから。それに、その1枚ではこれだけの攻撃を止められない…あ、もしかして、天城　遊良に守ってもらう気満々でしたぁ？」
「…む？」
「ふふっ！でしたら残念でしたねぇ！彼の伏せカードの感じからプンプン匂いますよぉ？貴方を守るカードなんて伏せられてありませんって！彼も薄情ですよねぇ、流石はあの自己中な紫魔　憐造の甥です！自分だけが助かればいい！それ以外はしーらないってって事ですもんねぇ！」
「…」
「ま、あの憎たらしい紫魔　憐造の甥なら当たり前ですが…ふふっ、人間性が露わになってきますねぇ、ええ！」

また、たった1枚のカードに攻撃を全て止められたというのにも関わらず…【紫影】はどこまでも飄々と言葉を捻じらせ、歪んだ態度を崩さないまま。
…その滲み出る余裕の態度は、たかが学生2匹など相手にもならないと言っているかのような不遜なる佇まい。
それはまるで、攻撃を止められることなど折込済みだったかのよう

に。そのまま、少年達のＬＰを減らす事が出来なかったというのに…
【紫影】はただただ淡々と、自らのターンを終えるだけであり…
「では【大欲な壷】を発動し、リザード、ヘッジホッグ、ビーストをデッキに戻して1枚ドロー。私はカードを2枚伏せてターンエンドです。」

【紫影】　ＬＰ…５０００→４０００
　手札…4→2枚
　場…【エルシャドール・シェキナーガ】
【捕食植物ドラゴスタペリア】
【始祖竜ワイアーム】
【エルシャドール・ミドラーシュ】
　伏せ…2枚

そうして―
あれほど融合したというのに、あれほど激しく動いたというのに―
手札も、場も、伏せカードも、何もかもに『余裕』を見せつけながらそのターンを終えた裏決闘界の融合帝、【紫影】。
なんて…なんて規格外のデュエル。
プロのトッププランカー達が位置しているとされる『先』の地平に、学生の身でありながら至った2人を同時に相手取っているというのにも関わらず。
手札消費の激しいはずの融合召喚を、あれほど激しく行ったと言うのに。それでも【紫影】の手札は尽きず、その場にはどれもが一筋縄どころか『強敵』とさえ言える融合モンスターが4体も勢揃いしてしまっており…
…そして、ソレを更に重々しく見せ付けるのは【紫影】の場の伏せカードに残った手札。
これだけの現状を見れば、【紫影】の素の実力が並外れたモノであると言う事など遊良と鷹矢からすれば一目瞭然。

あれほどの展開をしてもなお、伏せカードを伏せる余裕に手札を残す余裕さえも【紫影】は見せ付けてきているのだから…

そんな光景を目の当たりにしてしまっては、果たして遊良と鷹矢は一体どれほどのプレッシャーを感じさせられているというのだろう。

「ぐっ…俺のターン、ドロー！」

「ふふふっ！このスタンバイフェイズに墓地のキメラフレシアの効果発動でぇす！デッキから【影依融合】を手札に加えちゃいますよぉ？さぁて、貴方達にこの場が突破できますかねぇ、えぇ！」

だからこそ、ここぞとばかりに【紫影】は煽る。

この歳からは考えられない程の死線を潜り抜けてきた少年達に、そのどれよりも重い死線を見せ付けるかのように。【紫影】の捻じれた口からは、苛立ちしか感じないであろう腐った言葉と捻じれた声質が発せられ…

…まぁ、とは言え。ある意味【紫影】がこれほど余裕を見せ付けているのも、当然と言えば当然なのか。

そう、何せこの屑は腐っても表の【王者】と同等の力を持っているとされる、世界の猛者達から恐れられた裏決闘界の【融合帝】。

…どれだけ言動が小物でも、どれだけ行動が下種あっても、どれだけ思想が屑であっても。

それでも…あろうことかこの屑は、途轍もなく『強い』のだから。

…それは、並のデュエリストでは立ち向かえないほどに捻じれたオーラ。

…それは、『壁』を超えた程度の強者では相手にもならない才覚。

…それは、『先』の地平に踏み入っている猛者でも手玉に取られてしまう程の力量。

…それは、『極』の頂きに君臨している者であっても苦戦してしまう程の実力。

（ぬぅ…墓地の【ブレイクスルー・スキル】1枚ではあの場を突破できん…ドラゴスタペリア…効果を無効にするだけではなくレベルを1にしてくるとなると…あと1体、少なくともあと1体の効果を無効にしなければ…）

鷹矢の苦言がその証拠、【紫影】の場にいる4体もの融合モンスター達が証明している。

いくら【紫影】が屑で下種で、どうしようもなく生きる価値などない最低最悪の犯罪者であっても…それでもこの屑は、決闘者の頂点とも呼べる立ち位置に紛れも無く立ってしまっているのだ…と。

鷹矢が心の苦言を漏らすのも当然。融合モンスター達の内の一体…【捕食植物ドラゴスタペリア】の厄介さを、鷹矢も昨日その身に染みて思い知っているからこそ。

ただ攻撃力が高いだけのモンスターなどでは断じてない、その強力な融合モンスターたちの圧力。そして【紫影】の持つ純粋な『力』の部分が、想像していた異常に少年達に重く重くのしかかってきており…

それでも―

いや、だからこそ―

「怯むな鷹矢！罠カード、【迷い風】発動！ミドラーシュの効果を無効にし、元々の攻撃力を半分にする！」

「ほ？」

「これで良いんだろ？思う存分やれ！」

「でかした遊良！必ずやってくれると思っていたぞ！俺は墓地から

【ブレイクスルー・スキル】を除外し効果発動！ドラゴスタペリアの効果を無効にする！そして【ブリキンギョ】を召喚し、その効果で【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！」

―!!

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

そう、【紫影】の力が予想以上の代物であったという、この状況だからこそ―

ソレがどうしたと言わんばかりに、少年達の声が弾け飛ぶ。

鷹矢がターンを向かえてすぐに、弾けるようにして１枚のカードを発動した遊良の罠と…ソレに連なるようにして、すぐさま動き始めた鷹矢の叫びが大空洞へと木霊し始め…

…それは先ほどの、突然の【ブラック・ホール】のお返しなのだと言わんばかりの少年達の反逆の雄叫び。

鷹矢が欲しいタイミングで、鷹矢の欲しかった効果を炸裂させた遊良によって。そしてソレに連なった鷹矢の叫びによって、【紫影】の全てのモンスターに効果は及ばないもののそれでも鷹矢の展開を邪魔するであろう２体の大型モンスターが―

やや強引なるも、その力を無くしていく―

「おや…二人ともそんなカードを仕込んでいたとは…」

「貴様は先ほど、遊良を『薄情』や『自己中』と言ったな！だがソレは断じて違う！俺達は、自分の身くらい自分で守れる！」

「あぁ！だからお前が何を企もうと、俺達は全力で叩くだけ…俺が伏せたのは、攻撃が出来る２ターン目から全力でお前を叩くためのカードだ！」

「うむ！あえて貴様に好きに動かせたのも、手の内を読ませないため！下手に妨害しては、先回りして削られてしまうからな…貴様を倒す為、攻める事に全力を注ぐ！俺達のやることはただソレだけだ！ゆくぞ、グリーンの効果でレッドを手札に加える！どうする【紫影】、シェキナーガで無効にするか!?」
「…いいえ、まだしません。」
「だろうな！そのまま俺はレベル４のブリキンギョとグリーンでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【鳥銃士　カステル】！」

―！

【鳥銃士　カステル】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

「…なるほど、カステル…効果を使わせに来ますか。全く、ガキらしくない手を取りますねぇ、ええ。」
「カステルの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、【エルシャドール・シェキナーガ】をＥｘデッキに戻す！」
「はいはい、こうして欲しいんでしょう？その効果にチェーンして、シェキナーガの効果発動！カステルの効果を無効にして破壊します！その後、手札から【シャドール・ビースト】を捨て、その効果で１枚ドロー！」
「だがこれで、貴様のモンスター達はことごとく木偶の坊となった！これで邪魔するモノは何もない！リバースカードオープン、罠カード、【エクシーズ・リボーン】！墓地より【ギアギガントＸ】を特殊召喚し、このカードをオーバーレイユニットにする！そのまま【ギアギガントＸ】の効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、デッキから【ゴールド・ガジェット】を手札に加える！」

跳ねるように弾ける鷹矢の声は、厄介な枷から解き放たれた証。
連続して現れる鷹矢のモンスター達は、強大な融合モンスターたち

を前にしてもなお慄かない奮いを見せつけながら場に現れては勇み立ち…

…鷹矢は前のターンに、【ブレイクスルー・スキル】を墓地に送っていた。けれども用意できていたのはその1枚だけであり、ソレでミドラーシュの効果を無効にしたとしても残るシェキナーガやドラゴスタペリアの厚い壁を突破することは鷹矢を持ってしても困難であった。

…もしブリキンギョをドラゴスタペリアで止められていたら。もしギアギガントXをシェキナーガで止められていたら。

鷹矢の展開はそこで終わっていて、このターン鷹矢は何をする事も出来ずにただただ無駄にターンを終えるしかなかった。

けれども、ソレを察した遊良が発動した罠によって―

展開を阻む厄介な敵が3体から1体に減ったことは、鷹矢にとってはどれだけ動きやすくなるというのだろう。

…これで、厄介なモンスターはいなくなった。

そのまま鷹矢は、鳥かごから解き放たれ大空に舞う鳥のように―

止まらずに、動き続ける―

「【二重召喚】を発動し、【ゴールド・ガジェット】を通常召喚！その効果で手札からレッドを特殊召喚しイエローを手札に！更に【貪欲な壷】を発動！墓地のゴールド・シルバー・グリーン・レッド・イエロー、5体のガジェットをデッキに戻して2枚ドロー！…うむ！【モンスター・スロット】を発動！レベル4のレッドを選択し、墓地のブリキンギョを除外し1枚ドロー！…俺がドローしたのは、レベル4の【無限起動ロックアンカー】！そのままロックアンカーを特殊召喚！」

「…ッ、流石は【黒翼】の孫…激しいですねぇ、全く可愛げが無い…」

「ロックアンカーの効果発動！手札から【イエロー・ガジェット】を特殊召喚しグリーン手札に！」

場を埋める鷹矢のモンスター達。がら空きの場から、一瞬の攻防で場に揃ったのは実に5体ものモンスター。

その激しい展開は、まるで先ほどの【紫影】の展開に対する意趣返しなのだと言わんばかりの激しさとなりて…鷹矢の決意が乗り移ったかのように、デッキとカードが驚くほどに噛み合い弾け轟くのか。
…これで、鷹矢の場にはレベル４のモンスターが４体。
ランク４のエクシーズモンスターを多用する鷹矢の、怒涛なりしその展開。それはまるで、レベル４のモンスターを揃えることなど、この世のどんな事よりも簡単なのだと言わんばかりに…

「俺はレベル４のゴールドとイエローでオーバーレイ！」

放つは轟き、猛るは剛毅。大空洞に響きしは、天をも揺るがす鷹矢の叫び。
遊良のサポートを受けて、展開に何の制限も無くなった鷹矢の叫びが…混沌渦巻く大空洞に、木霊となりて空を裂く。
今、エクシーズ名家、天宮寺一族…その筆頭である祖父、王者【黒翼】に倣うかのように。
鷹矢は、その手を天に掲げ―

「天音に羽ばたく黒翼よ、神威を貫く牙となれ！」

世界に轟くその口上。祖父より受け継ぎしそのカード。
それはレベル４を多用する、鷹矢のデュエルのまさに『切り札』と呼べる存在であり…
覇道を突き進む己のデュエルの、『砦』となるべく存在をここに呼び出すために。天を劈く鷹矢の叫びが、大空洞を揺るがした時…
ソレは果て無き頂から、因縁の屑の前に立ちはだかるのか。

「エクシーズ召喚！来い、ランク４！」

かつて世界の頂点を見た、祖父の名の象徴とも言える大いなる力が…

今、ここに―

「【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天に羽ばたく雄雄しき翼と、神をも切り裂く鋭き牙が大空洞へと輝いて。
その佇まいはまさに王者の風格。これまでの歴戦を感じさせながら、その竜は天宮寺　鷹矢の場で荒々しく吼えるのみ。
正真正銘歴戦の牙竜。天に轟く咆哮を、目の前の屑へと轟かせ…
強大なりし融合モンスターたちに慄くこと無く、蘇った強敵に対し【黒翼】の叫びが木霊する。

「現れましたか【黒翼】…全く、孫程度が彼の『名』をよくもまぁここまで自在に出せるものです。」
「ゴチャゴチャ抜かすな！ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、ドラゴスタペリアの攻撃力をダーク・リベリオンに加える！喰らい尽くせ、紫電吸雷！」

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→３８５０
【捕食植物ドラゴスタペリア】レベル８
ＡＴＫ／２７００→１３５０

そして…牙竜が、その黒翼を開く時。
弾けるようにして広がる紫電が、瞬く間に竜の草花を掴み上げたかと思うと…
その毒気など意に介さず、みるみる内のその力を【黒翼】が吸い取っていくではないか―
…これこそが【黒翼】の真骨頂。いかなる敵であろうとも、真正面から断ち切って見せるその勢いはまさに世界一のエクシーズ使いの竜に相応しき佇まいと立ち振る舞い。
かつて世界の頂点を見た、今でも世界の頂点に飛ぶ、その存在感を大に現し…
そして、ソレに満足すること無く。更に鷹矢は、動き始める―

「まだ終わらん！レベル４のロックアンカーとレッドでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【ダイガスタ・エメラル】！」
「まだ止まりませんか…」
「当たり前だ！【ダイガスタ・エメラル】の効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、墓地のゴールド・シルバー・グリーン、３体のガジェットをデッキに戻し１枚ドロー！…うむ！【死者蘇生】を発動！墓地より蘇れ、レベル８！【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】！」

―！

【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

まだ、終わらない。
蘇りたるは宙の一球、鷹矢が得た更なる力。
それは岩盤よりも硬きモノ、黄金よりも重きモノ。
崩れぬ地殻をその身に纏い、陸地すら生み出す大地の化身。
空と対峙し、天を撃ち抜き、宙をも落とすまさに『土の星』。

それは幾重にも積み重なった星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

「…ほぅ、プラネット…大型モンスターを揃え、一気に叩きに来るつもりですかねぇ…ふふっ、ではそろそろ来ますか？」

「まだ終わらんと言ったはずだ！遊良ぁ！」

「おう！罠発動、【戦線復帰】！墓地から【クラッキング・ドラゴン】を守備表示で特殊召喚！…鷹矢、使え！」

「うむ！俺は闇属性レベル８のＳＡＴＵＲＮとクラッキング・ドラゴンで…オーバレイネットワークを構築！」

「ほ？」

そう、まだ終わらない―

間髪入れず、【紫影】の言葉を遮るように…続けて遊良が、カードの発動を宣言したと思ったその刹那。

鷹矢のターンだと言うのに、突如として遊良の場に黒き電子龍が蘇ったかと思うと。これまた間髪入れずに、続けて鷹矢が先ほどの遊良と同じように―

自らのＥｘ適性による宣言を、今ここに連続して解き放ち始めたのだ。

…オーバーレイネットワークを、構築。

それはおよそこの世界のモノではない、異界のエクシーズ召喚の為の宣言。

そんな、この世界においては天宮寺　鷹矢にのみ許されたその宣言を高らかに放ち…

鷹矢のデッキでは揃え難い、『闇属性・レベル８』のモンスターの召喚条件を声高々に叫びながら。

遊良とのコンビネーションによって、まるで【決島】の決勝の再現

のようにしてソレはこの大空洞に響き渡り…

「来い、『Ｎｏ．２２』！腐り果てるは血肉の恩讐！決して鎮まらぬ怒りを持って…楯突く全てを捻り潰せぇ！」

脳裏に浮かび上がった次なる『数字』と、心に浮かぶイメージをＥｘデッキにて眠る『白紙』に焼付け。

この世界に現れるはずのないソレは、再びこの世にその姿を変えて現れようとしているのか。

混沌渦巻くこの大空洞で、この世界のモノではない存在が…今再び、その姿を根底から変貌させながら―

「エクシーズ召喚！来い、ランク８！」

それは、現れる―

「【Ｎｏ．２２　不乱健】！」

―！

【Ｎｏ．２２　不乱健】ランク８
ＡＴＫ／４５００　ＤＥＦ／１０００

現れたるは腐りし巨漢、継ぎ接ぎだらけの筋骨隆々。

纏いしフードの前面に、『Ｎｏ．』の証である数字『２２』の記録を刻み込んだ…

誰の手によって造られたのか、その存在自体が不気味さを表してい

るであろう、見た目通りのフランケンシュタイン。
…見た目どおりの凄まじきパワー。そして相手を圧倒してしまう厳かな存在感。
そんな、決して生者たりえぬ存在が…
常識外れのパワーを持って、鷹矢の前に聳え立つ。
「これは少々驚きですねぇ…いえ本当に。貴方達、ちょっとコンビネーション良すぎじゃありませんか？」
そんな、連続して現れた鷹矢のモンスター達を前に…【紫影】は徐に、ポツリと言葉を漏らし始めて。
それは１ｖｓ．２だと言うのに、まるで強者との『１対１』をしているかのような錯覚を【紫影】が覚えたからなのだろうか。
…そう、遊良と鷹矢の息の合い過ぎているコンビネーションは、対峙している【紫影】からしても心から驚愕に値する代物であったのだろう。
それは血の繋がった者よりも息が合っているのではないかと思えるような、あまりに見事なコンビネーション。お互いがお互いの展開をサポートし、１人が思い切り展開し…
痒いところにもう１人が率先して手を届かせ、一人では手の届かない場所にも二人ならば届くのだと言わんばかりのそのデュエルは、とてもじゃないが『先』の地平に位置している１人が到達できる場所を大いに越えて積み重なっているのだから。
なんて恐るべき子ども達―
きっと、この光景を有識者が見れば誰だってそう感想を抱いてしまうことだろう。
…何せ、いくら２人がかりだとは言え。
所詮は高等部２年に過ぎない程度の、こんな年端もいかない少年達が歴戦のデュエリストにも匹敵する戦意を纏いながら…歴戦のタッ

グデュエリスト達も真っ青になるであろう展開を、いとも簡単に続けているこの光景はまさに異常な光景、異質な展開、畏怖すら感じる異次元の同調。
…先のターンからもそう。
このデュエルにおける遊良と鷹矢の息の合いようは、双子の歴戦のタッグデュエリストですら醸し出せない、文字通り『一体化』しているような見事なコンビネーションなのだから。
複雑怪奇な複数人用のルールを、打ち合わせも作戦会議もましてやデュエルの最中に声を掛け合ってもいない少年達がよもやこの歳でこんなにも簡単に適応し。こんなにも凄まじい『同調』を見せつけてくるだなんて、まさしく【紫影】からしても予想外のことであったのか。
そんな、『他人同士』であるにも関わらず…
この世の誰よりも『一体化』しているであろう今の少年達のデュエルは、まさに【紫影】の予測の上にあるということであり―
「…確かに、これではヒル・ブラザーズなど相手にならないはずです。練習させなくても良かったですかねぇ…今の貴方達、タッグデュエルなら今すぐにでも世界一になれそうですねぇ、ええ。」
「敵の世辞など聞く耳持たん。冗談ならば尚更だ。」
「喋るな屑野郎。不快なだけだ。」
「…酷い言われようですねぇ。冗談では無く、これでも本気で驚いているんですが…貴方達、どこでそんなコンビネーションを?」
「ふん、遊良がどう動くかなど考えるまでもない。」
「鷹矢の考えそうな事なんて、考えなくてもわかるだけだ。」
すると、そんな【紫影】の問いに対し。
聞く耳を持たないというスタイルを崩さないまま、彼等にとっては当たり前の常識以前の呼吸と同義のその返答を、【紫影】へと向かって素早く返した遊良と鷹矢。
そう…遊良も鷹矢も、別に互いに合わせようとしているのではな

い。
何も特別な事をしてはいない―
遊良も、鷹矢も、お互いに『合わせる』だとかそんなコトを考えるまでもなく。
やろうと思って合わせているのではなく、ただただ自分がやりたい様に勝手に動き、その結果として自分の行動が必然的に２人にとっての最善手となっているだけなのだ。

…先のターンに鷹矢がリリース素材に使わせた【ガジェット】だって、彼がいつも使っているモンスター。
…今の展開の為に遊良が使わせた【クラッキング・ドラゴン】だって、今のデッキになってから遊良が好んで使っている最上級大型モンスター。

デッキを変えているわけでもない、サポート用のカードでデッキを調整したわけでもない。
お互いがお互いの『いつもの展開』を繰り返しながら、ソレがお互いのデッキにとっての最適解になるのだという…遊良と鷹矢にとっての、これは最早当たり前と言える展開であるのだ。
そう…何せ彼らは生まれてからこれまで、ずっと共に過ごして来た間柄。
下手をすれば、実の家族よりも過ごしている時間は長いのだし…実際にこの１７年の歳月をお互いの親よりも近い距離で過ごし続けてきたのだから、これまで幾千のデュエルを戦ってきた経験と幾万のデュエルを行ってきたその共感、更にはこれまでの日常生活から感じ取れる微細な動きが、彼等にとっては次なる行動の予測となっているという、ただそれだけのこと。

先ほど行われた決勝で、対峙しているのとはまた別…
『対決』が『共闘』に変わったというだけで、こんなにもこの二人はお

互いがお互いを当然のように支えあえる。それは単純にデッキが二つ、場が倍、墓地が倍、手札が倍になったのとはワケが違う。
遊良と鷹矢の息が、『合っている』のは最早ただの当たり前。デュエルの呼吸を合わせる事など、どんなことよりも簡単に違いないのだろう。
その、タッグデュエルのスペシャリストを謳っていた本物の双子デュエリストすらも凌駕する、遊良と鷹矢のコンビネーション。相手に合わせようとしているのではなく、自分が勝手に『こう動こう』と思ったその動きが、相手側にとっての最善となっているというその暴挙。
『１』＋『１』は『２』ではない…遊良の『１』と鷹矢の『１』が、それぞれ相乗効果を生みその力を１０にも１００にも膨れ上がらせているのだ。
そんな、好き勝手に動いた結果で『息が合っている』だけという、他の誰にも真似出来ない芸当をいとも簡単に行うこの２人はまさに…
タッグデュエルの理想形とも言える、比類なきコンビネーション。生まれた時から共に居る遊良と鷹矢だからこそ出来る、今の彼等の怒涛の展開は見るからに学生の枠組みから大きく外れていて―
「ですが惜しいですねぇ。【黒翼】の孫…天宮寺　鷹矢、貴方のデュエルはどこまでも惜しい、惜しすぎます。」
「む？」

しかし…
そんな学生離れしたコンビネーションを見せた、天城　遊良と天宮寺　鷹矢へと向かって。
いや、正確にはその片割れである天宮寺　鷹矢の事を名指しして、徐にその捻じれた口を開き始めた裏決闘界の融合帝、【紫影】。
その言葉は、彼等コンビネーションを目の当たりにしたばかりだと言うのにも関わらず…どこか残念そうな、それでいて勿体無いと言わんばかりの声質となりて、憎たらしげに鷹矢へと届けられているでは

ないか。

『惜しい』…一体、【紫影】は何を思って鷹矢へとそんな言葉を吐いたのだろう。

何せ【紫影】が『惜しい』と言い放ったのは、まさかのＥｘ適正の無い天城　遊良ではなく…

あろうことか、王者【黒翼】の孫として幼き頃から数々の大会でその名を轟かせてきた、天才の名を欲しいままにしてきた天宮寺　鷹矢であったのだから。

…その実力の高さは折り紙つきで、去年の【決闘祭】や今年の【決島】でも輝かしい成績を刻んできた鷹矢のデュエル。

そんな、およそ生半可な者では太刀打ちできないほどに洗練されている鷹矢のデュエルを名指しして、あろうことか【紫影】はそのデュエルを『惜しい』とまで言い放ち…

「…どういうことだ。俺のデュエルを『惜しい』などと…」

けれども、ソレが有象無象の他人ではなく、屑なるも天上の実力を持ってしまっている【紫影】から放たれたということが…どこか鷹矢の琴線に、触れるモノがあったのだろうか。

…屑の戯言には聞く耳を持ってはいけないと、理事長である砺波浜臣からアレだけキツく言われていたにも関わらず。

疑問系にて【紫影】に聞き返してしまった鷹矢の言葉に、【紫影】はニタリと気持ちの悪い捻じれた笑みを浮かべながら…

そのまま、言葉を止めることなく、再び、鷹矢へと向かって言葉を続け…

「いえいえ、どうにもこうにも、思った事をそのまま口に出させていただいただけですよぉ？惜しい…貴方のデュエルが、本当に惜しいくらいに無様に行われているなぁと…そう、思いましてねぇ、えぇ。」

「それは俺の実力が貴様の想像よりも低いと言う事か？舐められたモノだ、言っておくが俺の実力はこんなモノでは…」
「あぁ、違います違います。逆ですよ逆…甘い、甘すぎます。貴方、どうしてそんなに手を『抜いて』いるんですか？天城　遊良に合わせようとして、そんなに軟弱な手を取って…」
「む？」

【紫影】の放ったその言葉…
　それは鷹矢の実力を『低い』と思って放たれた言葉ではなかった。
　そう、【紫影】が『惜しい』と言ったのは、鷹矢の実力が想像よりも低いという意味ではなく…
　…これまでの鷹矢の出した手が、その実力に見合わない甘い手ばかりであった事に対して。
　まぁ、鷹矢のデュエルを見て『手を抜いている』、『甘い』、『軟弱』と感じたのは、あくまでも【紫影】が抱いた感想ではあるのだが…
　それでも、今の遊良や鷹矢では到達出来ないであろう『極』の頂きに位置している、裏決闘界の融合帝【紫影】からすれば。
【決島】の予選や決勝の天宮寺　鷹矢のデュエルを見てきたが故に、鷹矢のデュエルに常人とは違った感想を抱いたとしても、ソレはある意味当然といえば当然で…

「ふふ、貴方のデュエルを見ればわかります。貴方…今までも、今も、わざと手を抜いてデュエルしてきたんでしょう？相手に合わせ、相棒の低いレベルに合わせ…【決闘祭】も【決島】も、自分の退屈を紛らわせるために天城　遊良に合わせて手を抜いて…そうしないと、デュエルと言うモノがとてつもなくつまらなくなってしまいますからねぇ…」
「…何？」
「見ていましたよぉ？予選のデュエルも、天城　遊良との決勝も…そして、【地の破王】とのデュエルも！ふふっ！予選のデュエルで、雑魚相手に苦戦する場面がいくつもありましたねぇ…天城　遊良との

デュエルでは、まるで互角を装い中継を盛り上げてくれていましたねぇ！そして何よりも【地の破王】とのデュエル！予選で苦戦する程度の実力で！天城　遊良と拮抗するレベルの実力で！そう、その程度の実力で、【地の破王】に勝つことなど出来ないと言うのに！それでも貴方は勝った！地上を破壊し尽すと言われる【地の破王】に、正々堂々と勝ってしまった！ソレがどういう意味かわかりますかぁ!?」

興奮気味に喋る【紫影】の、その言葉が大空洞へと木霊する。

…ソレは遊良と鷹矢からすれば、意味など理解できるはずもない世界の真理と歴史の刻み。

そう、一度死んで蘇ったと豪語する【紫影】にしか理解出来ていないであろう、『王』とソレにまつわるルールの話であり…

一体、【紫影】は何を知っていて言葉を放ち続けているのか。けれども確実に言えることは唯一つ…遊良と鷹矢の間の絆を、鋭く引き裂きにかかっているであろう【紫影】の言葉は、どこまでも無情な指摘となりて２人の少年へと向かっていると言うことだけ。

「未だ未熟な『王』とは言え、世界に選ばれた『王』にモブ程度が勝つなどありえない！ありえるとしたら、未熟な『王』よりも成熟した歴戦の者か…はたまたモブ以外か…」

「さっきから『惜しい』だとか『手を抜く』だとか『王』だとかモブだとか…貴様は何を言っているのだ？」

「ふふっ！気付いていないとはまた性質が悪い！いいえ、ソレとも低レベルな相棒には隠しておきたいことなのでしょうか？…ふふふっ、貴方、自分でも分かっているんでしょう？自分の才能がありすぎて、実力も精神力も何もかもが有象無象とは違うというコトが！退屈ですよねぇ？退屈ですよねぇ!?レベルの低い者達とのデュエルは！だからわざと『手を抜いて』拮抗させ、デュエルを少しでも楽しもうとしているんでしょう？本当は『地の破王』にも匹敵する力を、弱すぎる相棒には隠しておきたいんでしょう？ええ！　」

「…」

裏決闘界の融合帝…表の【王者】と同等の力を持っているとされている、裏社会の決闘界の帝王の目には、王者【黒翼】の孫のデュエルが一体どのようにして映っているというのだろう。
およそ常人では理解など出来ないであろう、理解したくもないであろうその思考から導き出されたその言葉はどこまでもどこまでも捻じれに捻じれ…
そう、予選での鷹矢のデュエル…【決島】の参加者達のレベルが高いこともあったのだろうが、そのデュエルは接戦が多かった。

…そう、全て『ギリギリ』での勝利なのだ。

【決島】に出場している猛者を相手に、鷹矢は観客達を盛り上がらせるようにギリギリの勝利をいくつも収めてきた。
また、その傾向は【決島】だけではない。去年の【決闘祭】でもその傾向は証明されており、去年の【決闘祭】の2回戦の紫魔　ヒイラギとのデュエルや準決勝の十文字　哲とのデュエル…
紆余曲折あったとはいえ、自ら死地に飛び込んでいるかのようなデュエルを、鷹矢が時折見せているという現実もまた事実。ソレすなわち、確かに【紫影】の言う通り鷹矢が本来の実力を隠し、どこかギリギリの勝負を演出していると疑われても仕方がないと言え…

そして、ソレを【紫影】に『確定』付けたのは何を隠そう…天空闘技場で午前に行われた、天宮寺　鷹矢の『あるデュエル』。

そう、ソレは紛れも無く、『地の破王』と呼ばれるデュエリア校の鍛冶上　刀利とのあのデュエルでの出来事なのだ。
圧倒的な力を見せ付けてきた鍛冶上　刀利に。一時は鷹矢を降しかけた鍛冶上　刀利に。鷹矢は前代未聞の『ランク０』という謎の力を使い、窮地からギリギリで逆転勝利を収めた。

…【決島】の他のデュエルで、『ギリギリ』の勝負をしていた鷹矢が、だ。

『地の破王』と呼ばれる鍛冶上　刀利に勝った男が、他の学生に『ギリギリ』の勝負をすることこそが強烈なる違和感。つまり鷹矢のコレまでのデュエルは、確かに【紫影】のいう通り…

『ギリギリ』の勝負を演出するための、わざとらしい手抜きとも言え―

「貴様…」

しかし…

まるで的確にさえ思える、【紫影】のソレを聞いてもなお―

「なにを言っているのだ?·まるで意味がわからんぞ。」

「…ほ?」

はぐらかすように…ではない。

誤魔化すように…でもない。

ただただ本気の本気の本気で、【紫影】の言葉の意味が『わかっていない』かのように…

頭に幾つも疑問符を浮かべながら、首を傾げてそう呟いたイースト校2年、天宮寺　鷹矢。

的確にさえ思えた【紫影】の言葉を聞いてもなお、鷹矢には全くピ

ンと来ていない…そう、演技だとか図星だとか、そう言った雰囲気が天宮寺　鷹矢からは全く感じられないのだ。
…それすなわち、【紫影】が興奮気味に口走った言葉など、鷹矢には心当たりなど全く持って無いというコト。
多少でも図星の事があれば、ソレは微細な表情の変化などによって無意識にも表面に出てくるはずだと言うのに。
そんなモノを微塵も感じさせることなく、そのまま鷹矢はどこまでも【紫影】の言葉を『理解できず』に…
続けて、口を開くだけ。

「俺の実力は俺と遊良が最もよく理解している。大体、俺にそんな隠された実力があるのならば何故俺は【決闘祭】でも【決島】でもそれ以外でも遊良に苦戦しなければならぬのだ、なぁ遊良。」
「あぁ。お前が鷹矢の『何』を感じ取ったのかは知らないけど、この馬鹿が『手を抜く』なんて器用なマネ出来るわけないだろ。もしコイツが俺より遥かに強いんだったら…いつだって、容赦なく叩き潰してくるに決まってる。」
「うむ。遊良とのデュエルは毎回毎回苦労していると言うのに、手を抜けるはずないだろうが。他の奴ともそうだ。手強い奴らばかりだった【決島】で、手を抜けたデュエルなど1つもなかったというのに。お前の言っていることはよく理解できん。」
「おや…そうですか…それはまた、解釈違いしてしまいましたかねぇ…」

【紫影】が話術を繰り出してきても、天宮寺　鷹矢は揺らがない。
そう、遊良とのデュエルも、【決島】でのデュエルも。例えその全てが『ギリギリ』であったとしても、1つ1つのデュエルにおいて鷹矢が紛れも無く『必死』になって勝利を掴もうとしているその感情に、嘘偽りは何一つないのだ。
…他人からどう思われようとも、ソレらはあくまでもデュエルの『結果』。

いかに他人がとやかく考察を述べようとも、その時に鷹矢が何を考えどう動いたのかはあくまでも鷹矢自身の問題。その場、その時、その瞬間に鷹矢が何を考えどうカードを使い、いかにデッキが応えたのかなど…『その場面』の鷹矢にしか、わからないことなのだから。
そして、唯我独尊を地で行く鷹矢の思考・感情・行動を、この世の誰よりも理解しているのはきっと【紫影】ではなく…
生まれた時から隣に居る、紛れも無い『天城　遊良』自身に違いないのだ。
幼馴染は伊達じゃない。実に17年にも亘る人生を、大半どころか『全て』において共に過ごしてきた天城　遊良と天宮寺　鷹矢。
その、生まれた時から共に過ごした、決して揺るがぬ間柄の二人にとっては…血の繋がった親よりも、お互いの事がお互いよりも理解出来てしまっているのは先ず間違いなく。
だからこそ、どれだけ【紫影】が二人を揺さぶろうとも。
そして、どれだけ二人の絆を壊そうと試みても…

「調子に乗るなよ【紫影】。俺と鷹矢を仲違いさせたいんだろうけど、お前の下手な話術なんて俺達には通用しない。」
「うむ。俺のことを最も理解しているのは貴様ではない、遊良だ。貴様程度が何を言おうと、そんなモノなど見当違いにすぎん。」
「ふむ…」

【紫影】の陳腐な考察など、鷹矢自身と鷹矢のことをこの世の誰よりも理解しているであろう遊良からすれば。
嘲笑にも値する、何も知らない部外者の戯言と言えるのであって―

「少しも動揺してくれないとはますます厄介ですねぇ…仲違いもすれ違いもしないとは、これだから穢れを知らない子どもは入り込む余地がない…」
「余計な時間稼ぎなど見苦しいぞ！屑め、これで終わりだ！【チキンレース】の効果発動！　ＬＰを１０００払って【チキンレース】を破

壊する！そしてバトル！まずは『Ｎｏ．２２』で…」

…だからこそ、これ以上【紫影】の戯言になど耳を貸すつもりなどないのだと言わんばかりに。

引き込まれかけた【紫影】のペースから、再度流れを引き寄せるべく…鷹矢は呼び出しし『Ｎｏ．』に、高らかに攻撃を命じようとしているのか。

走る…腐乱した巨大なる孤独な益荒男が。

まだ主が攻撃対象を選んでいないにも関わらず、【紫影】へと向かって走るフランケンシュタインの姿はホラーの一言であり―

無言の巨漢がシリアルキラーにも似た勢いを持ってして、奪われかけたデュエルの流れを一瞬で自分の下へと引き戻すその勢いは、まさに大地を揺らす巨漢の足取り。

…猛る腐乱の巨大なる剛腕、巨木すらなぎ倒す恐るべき腕撃。

ドシドシと鈍い音を立てて、本能のままに『Ｎｏ．２２』が【紫影】の融合モンスターの１体へと襲い掛からんとした…

その時だった―

「仕方ありませんねぇ！バトルフェイズに入ったこの瞬間！速攻魔法、【超融合】発動でぇす！」

―！

突如…

いきなりの鷹矢の攻撃の出だしを、更に上から切り裂くように。

【紫影】の捻じれた宣言によって、屑の場には突然１枚の速攻魔法が光り輝き始めたかと思うと―

「ッ!?アレはアイナって奴が使ってた…」

「ソレがどうした！そんなモノ『Ｎｏ．２２』の効果で…」

「無駄無駄無駄無駄でぇす！【超融合】の発動には、一切のカード効果の発動が封じられます、ぇぇ！」
「チェーン封じだと！」
「ふふっ！そして折角なので、そこのデカい『Ｎｏ．』を頂いちゃいましょうかねぇ！手札を１枚捨て【超融合】の効果発動！場のミドラーシュと…天宮寺　鷹矢の場の、『Ｎｏ．２２』を超・融・合！」

何と、突如現れた凄まじき勢いの神秘の渦に、鷹矢の『Ｎｏ．』が吸い込まれていくではないか―
…抵抗も空しく、反撃することも出来ず。
鷹矢のターンだと言うのにも関わらず、『融合召喚』を宣言し始める【紫影】。それは昨日、この大空洞でアイナ・アイリーン・アイヴィー・アイオーンが使用していた、『相手』のモンスターをも融合素材にしてしまう恐るべき融合魔法であり…
融合を超えた融合、その名の通りの『超融合』。
相手の抵抗の一切を禁じ、何者にも止められることなく轟く魔力の奔流は、とてもじゃないが常人が操る融合の魔力の域を軽々と超えていて。

そして―

「禍つ紫影の揺らめきよ、世界の全てを包み込めぇ！」

叫ばれしは狂言、木霊せしは凶声。
禍々しくも凶暴な、あまりに捻じれた歪なるオーラ。
歪み捻じれる神秘の渦より、【紫影】は自らの『名』を禍々しく叫びながら…

「融合召喚！現れなさい、レベル８！」

ソレは、明確な『悪意』を持ってして…

ここに、現れる―

「【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】！」

―！

【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

神秘の渦より現れたるは、『歪み』と『捻じれ』そのモノであった。
…それは深紫の体を蠢めかせた、あまりに禍々しき紫影の毒竜。
毒々しさが牙を剥き、飢餓の咆哮が大気を千切り…
その異色で異端なる異質な異様は、毒々しくも艶かしく蠢く畏怖そのモノ。
虚空にも似た虚ろな目で、視界に映ったモノ全てを喰らいつくすその姿は…まさに見た者全てに恐怖を与える、意思を持った飢餓の化身と言える存在。

昨日…遊良は、その目でしかと見た。

この、恐怖を駄々漏れにして蠢く紫影の竜を。狂気に染まった捻じれた男、【紫影】の『名』そのモノと呼べるモンスターの事を。

…対戦相手の本能へと、直接訴えかけるかのような紫毒の狂気と奇怪な咆哮。
歪で異質なる畏怖を駄々漏れにしている、捻じれた蠢きを魅せる毒の竜…その不気味な飢餓の咆哮を、遊良は確かに昨日この大空洞で体験しており…

「ッ!?現れたか!鷹矢、油断するなよ!」
「う、うむ…コイツが【紫影】の…」
「ふふっ、では行きますよぉ!融合素材になったミドラーシュの効果で、コストで捨てた【影依融合】を手札に戻し…スターヴ・ヴェノムの効果も発動!【黒翼】の攻撃力を、スターヴ・ヴェノムの攻撃力に加えまぁす!」

【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル８
ＡＴＫ／２８００→６６５０

そして…猛る。
【紫影】の飢餓の毒竜が、その咆哮を大空洞へと反響させた時。仇敵とも言える黒翼牙竜へと目掛けて、その虚ろな視線を突き刺すように怪しく輝かせ始めたのだ。
そして、まるでその力をそっくりそのままコピーするかのように…
鷹矢のターンだと言うのに、スターヴ・ヴェノムがその力を上昇させていく―

「攻撃力６６５０だと!?」
「…ッ、だけどスターヴ・ヴェノムの融合召喚成功時に、墓地の【迷い風】を俺の場にセットする!」
「ですがソレはこのターン使えませぇん!さっき使っちゃいましたもんねぇ?伏せたターンには使えませんもんねぇ?」

相手モンスターを無理矢理素材にしてしまうという、見るからに危

険な力を持ったカードを惜しみなく見せつけながら…どこまでも怪しく蠢く竜を従えて、捻じれた笑み浮かべる裏決闘界の融合帝、【紫影】。
その飄々とした態度は、『Ｎｏ．２２』と【黒翼】の攻撃により【紫影】のＬＰを０にする算段をしていた鷹矢の思考を嘲笑っているかのよう。
そう、攻撃力４５００の『Ｎｏ．２２』を融合素材にし、ソレ以上の攻撃力を持ったモンスターを呼び出すというその暴挙は、まさに理不尽が服を着て歩いているような【紫影】の性格がデュエルにも現れているかのようではないか。
…【紫影】の名その物である、飢餓の化身たるスターヴ・ヴェノム。【黒翼】と同じく召喚法の名を関しているとは言え、その存在感はまるで真逆の禍々しき代物であり…
ソレが自力を更に超える力を見せ付けてきているこの状況は、とてもじゃないが常人には耐えられないであろう異質な重圧が漂っている。

「さぁて、どうしますかぁ？ふふっ、流石に【黒翼】１体ではこの場をどうにかする事など出来はしないでしょう？ええ。」
「くっ…」
「ぬぅ…」

これだけ攻めているというのに。
これだけ力をぶつけているというのに。
２対１のアドバンテージを得てもなお、手玉に取られているかのような錯覚を少年達が覚えてしまうのも無理はない。
どれだけ場を固めても簡単に壊され、攻撃をしかけようとも飄々と交わされ…
屑で下種な立ち振る舞いの裏に隠された、その本質たる力の高さが徐々に浮き彫りになって行くこの展開はまさに…少年達と【紫影】との間に、これだけの地力の『差』があるということなのだから。

けれど…

それでも―

「だから俺を舐めるなと言っているのだ！速攻魔法、【ドロー・マッスル】発動！【ダイガスタ・エメラル】を対象に取り1枚ドローする！」
「ふふふっ、防御用のカードで苦し紛れのドローなど恐くもなんともな…」
「うむ！速攻魔法、【コンセントレイト】発動！ダーク・リベリオンの攻撃力を、その守備力分アップさせる！」
「なっ!?【コンセントレイト】!?」

【ダーク・リベリオン】ランク４
ＡＴＫ／３８５０→５８５０

止まらぬ轟き、終わらぬ連撃。
どれだけ【紫影】が場を乱そうとも、それでも怯まぬ鷹矢の叫びが、木霊となりて空を裂く。
…舐められたままでいられるか。調子に乗らせていられるか。

ソレは手段を問わない攻撃への専念、なりふり構わない勝利への執念。他人に見下されることを、何よりも嫌う鷹矢だからこそ―
その怒りはすでに限界を超えているのだと言わんばかりに、ただひたすらに勝利を目指す鷹矢の足掻きがデッキからそのカードを引かせたのか。

「慢心していたな！貴様は俺を舐めすぎた…【超融合】の発動時に、俺はまだ攻撃宣言を完了していない！」
「こ、攻撃力５８５０ですと!?」
「これで終わりだ！バトル続行！ダーク・リベリオンよ、ドラゴスタペリアを断ち切れぇ！」

天高く舞う【黒翼】が、その力を更に上昇させていく。
それはまるで噴火の如し、沸き上がる苛立ちの最たる叫び。
…鷹矢は決して慄かない。
そう、彼にとっては、祖父以外に慄いている暇などないのだ。
ソレ故、【紫影】がどれだけ舐めた態度を取ろうとも…例えソレが、【紫影】の慢心からくる綻びような僅かな『隙』であったとしても…
それでも小さな勝利への糸口を、決して見逃さぬ鷹の目が光り。飢餓の毒竜には未だ及ばないとは言え、それでも【紫影】のＬＰを０にするには充分過ぎる力を得た牙竜が勝利を掴む為、手段を問わない咆哮を響き渡らせるとき…

それは、屑を葬る一筋の閃光となりて―

ここに、轟く―

「斬魔黒刃、ニルヴァー…ストライィィィィクッ！」

―！

「っ…ぎょひいいいいいいいい！」

爆ぜる…

漆黒の牙竜に貫かれた、毒持つ竜の草花が。

…ソレはとても小さな油断、【紫影】に怯まぬ少年の奮起。

モンスターが爆散するその光景は、攻撃に邪魔が入らなかった何よりの証拠。その爆風は、実体化した４５００のダメージとなりて瞬く間に【紫影】へと襲いかかり…

「殺ったか!?」

「うむ！間違いない！」

手応えアリ…

攻撃を仕掛けた鷹矢だからこそ理解できた。今の攻撃で、【紫影】を確実に『殺った』という…その、確信を。

そう…【紫影】がどれだけ話術で乱してこようと、屑がどれだけ地力の差を見せ付けてこようと、奴がどれだけ飄々と攻撃を躱してこようとも。

それでも遊良とのコンビネーションによって、そして真正面から小細工なしに上昇させた『力』によって…逃れられない一撃を、今確かに【紫影】に与えたのだと、そう鷹矢は確信めいたモノを掴み取ったのだ。

…その勝利は、【紫影】の醸しだす不気味な重圧を少年達が一蹴し続けたが故の代物。

真正面から、小細工なしに。突如現れ、意味深に蠢いていた【紫影】

の『名』など相手にする気もなく…
僅かなに生じた勝利への隙間を、強い意思によって無理矢理にこじ開け。これまで培った力を存分に注ぎ、そうして今の攻撃で【紫影】を倒したのだと鷹矢はこれまでの経験から理解出来た。
…【紫影】は、攻撃宣言字に伏せカードを発動させる素振りを見せなかった。それすなわち、今の攻撃に対し【紫影】には取れる手がなかったというコト。
それは【白鯨】から、【紫影】が必ず手札に隠し持っているであろう【バトル・フェーダー】には注意しろとキツく言われていたからこそ…
ずっと狙っていた、相手モンスターへの一撃でＬＰを０にするという狙い。
ソレをここぞという場面で爆発させることに成功した鷹矢の心には、この攻撃にて【紫影】を倒したという確信が沸々と湧き上がってきていて―

しかし…

モンスターの爆発によって生じた土煙が、漂いながら段々と晴れてきた…

そこには―

「なぁんて、まだ終わってませんがねぇ、ええ。」

【紫影】　ＬＰ：４０００→１７５０

「なっ!?」

「何故だ!何故ＬＰが残っているのだ!」

　ＬＰが一撃で０になる、４５００ものダメージが発生したはずだというのにも関わらず。

　未だＬＰを残しつつ、どこまでも不快な捻じれた顔を崩さずにそこに佇んでいた裏決闘界の融合帝、【紫影】。

　…飄々と佇んでいるその姿はまるで、少しの焦りもなかったかのよう。

　それは奇襲にも似た鷹矢の攻撃、ＬＰを完全に０にする先の一撃を向けられてもなお防ぐ手段を隠していたという何よりの証明。

　そして、土煙が完全に晴れた【紫影】の場には…

　奇怪な格好をした、１体の羽虫の姿が。

【スモーク・モスキート】レベル１

　ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

「ダメージ計算時、【スモーク・モスキート】の効果を発動しました。私へのダメージは半分となり、バトルフェイズは強制的に終了となります。」

「スモーク…モスキート?」

「【バトル・フェーダー】ではない…貴様、そんなモノを隠し持っていたのか…」

「ふふっ、勝ったと思いましたぁ?一瞬だけですが良い夢見られましたかぁ?まったく、どうして私とデュエルする人達は皆【バトル・フェーダー】を警戒するんでしょうねぇ。ま、大方【白鯨】の入れ知

恵でしょうが…でしたら1つ教えてあげましょうかねぇ。私のデッキ、【バトル・フェーダー】入っていないんですよねぇ、ええ。」
「ぬぅ…」

予想に反し、想定と違う。
ＬＰを０には出来なかったとは言え、それでも遊良とのコンビネーションによって『極』の頂きに位置している者にダメージを喰らわせた今の鷹矢の一撃は、決して小さくはない確かな手傷であると言うのに…
それでも、確実に『殺った』という確信を難なく躱され…今のダメージすら想定の範囲内であったと言わんばかりの【紫影】の態度は、揺ぎ無い強者にのみ醸しだすことが許される孤高の余裕ではないか。
そんな敵に、どこか手玉に取られているかのような感覚を覚えてしまったイースト校２年の天宮寺　鷹矢。
二人がかりでもなお遠い、『極』の頂きというその場所に位置している目の前の敵に対し…鷹矢は、今改めて『極』の頂きに位置している者の底知れぬ力をひしひしと感じているのか。

「…チィ！俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ！このエンドフェイズに、ダーク・リベリオンの攻撃力は３８５０に戻る！」

鷹矢　ＬＰ：４０００→３０００
手札：６→１枚
場：【ギアギガントＸ】
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】
【ダイガスタ・エメラル】
伏せ：２枚

目の前の敵は、これまでの相手、これまでの敵、これまでの壁とは

大きく異なる『力』と『悪意』を持った恐るべき障害。
その、生まれて初めて対峙する『本物の敵』の雰囲気は…果たして、経験の少ない少年達にどのような感情を与えているのだろう。
…本物の『死』がすぐ傍まで迫っているという緊迫。
…隠す気のない『悪意』が次々に襲い掛るという圧迫。
…『極』の頂きの圧倒的な実力差を見せ付けられるという切迫。
そんな、普通の少年であれば決して味わうことのない非日常的な状況の中で彼らはデュエルをしているのだ。
これでは、いくらこの歳で死線を潜り抜けてきた経験のある遊良と鷹矢とは言え…
初めて対峙する『本物の敵』の前には、少なからず重圧を感じてしまっているはずであり…

「すまん遊良、倒しきれなかった！任せたぞ！」
「あぁ！任せろ！俺のターン、ドロー！」
「はぁ…元気ですねぇ。全く、折れる気配すらない…」

しかし、それでもなお折れない少年達を見て。
徐に、感嘆と呆れを含んだ吐息を1つ、その捻じれた口から漏らした裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…その溜息に隠された本心は、一体何を感じているが故のモノなのか。
4体も揃えていた強大な融合モンスターたちが、1体増えたとは言え3体もこのターンで消されてしまったこの状況を…果たして、【紫影】はどう読み取るのだろう。
あれだけ力の差を見せつけ、あれだけ心を揺さぶろうと試みたというのに。全く怯む事無く向かってくる少年達の姿は、これまで数多の人間を絶望させてきた【紫影】からすれば少々予想外の出来事でもあったのか。
裏決闘界の融合帝…表の【王者】と同等の力を持つと言われている屑の目には、依頼主からの『前情報』があったとは言え、手を取り合っ

た少年達の力が普段の彼らよりも数倍高まっている事が映像で見るよりもハッキリと映りこんでいることは先ず間違い無く…

「…少々予想外なんですよねぇ。まさかタッグを組んだらココまでヤるとは…予定よりＬＰ削られてしまいましたし…」

【紫影】から零れる呆れの溜息、しかし『余裕』ではない小さな呟き。

確実に『殺り』に来ていた鷹矢の攻撃を難なく躱し、ダメージを最小限に抑えつつターンを終えさせたとは言えども…

少年達には見せない、聞こえさせない声で漏らすその言葉は、誰も知る事のできないであろう紛れも無い【紫影】の本音。

少年達には聞こえない声で、しかし言葉にせずにはいられないかの様な声で…ポツリと言葉を漏らす【紫影】の佇まいは、今の攻撃で半分以上のＬＰを削られてしまったことに対し少々驚きを感じているかのよう。

…そう、【紫影】の予定では、こんなにＬＰを削られるはずではなかったのだろう。

１人１人は取るに足らない、『先』の地平で足掻いているだけの幼い子ども。そんな者達がタッグを組めば、ここまで力を相乗させてくる今の状況は【紫影】からしても相当予定を狂わせられているに違いなく。

ソレ故、いくらダメージを負う事は最初から想定済みだったとは言え。そして２ｖｓ．１で戦う事を、最初から予定していたとは言えども…

…Ｅｘ適正を持たない少年の魅せる進撃が、【王者】の孫の少年の進む覇道が。

決して交わらないと思われた、その二つの人生が組み合わさった時。まさか自分の想像を超える程の力となり得るだなんて、【紫影】からしても想定外であり予想外であったのだから。

…力を『抑え』られていても、もう少し余裕の予定であった。

そうだと言うのに、よもや人間では無くなった自分がこんな少年達

のタッグに流れを奪われかけているだなんて。こんな状況、『依頼主』たちが聞いたら、それこそ小馬鹿にしながら笑ってくることだろう。
それに、きっと次の天城　遊良のターンにも彼らは想定外のコンビネーションを見せてくるに違いない。
そうなると、いくら裏決闘界の融合帝たる身分であろうとも2対1という状況とが合わさって、少年達に圧されてしまうことは明白であり…

その光景が、容易に想像できる【紫影】だからこそ…

「やはりキーは天宮寺　鷹矢…貴方が厄介な存在でしたねぇ…こうなったら予定より早いですが…」

何やら不敵な笑みを浮かべる【紫影】が、そのネットリとした蛇のような視線をターンを迎えた遊良ではなく…
ターンを終えたばかりの鷹矢へと、徐に向けたかと思うと。

「流石に、そろそろキツくなってきましたし…」

遊良が、ターンを進めるその直前にゆっくりと…
そう、ゆっくりと…
【紫影】が、怪しくその手を持ち上げ…
「いくぞ！【テラ・フォーミング】はつど…」
「…おっと。」

―パチィンッ！

…と、細く捻じれたその指を打ち鳴らした―

その刹那―

―ドオン！

…という、一瞬の爆発音が鳴り響き―

そして―

「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！」

崩れ落ちてきた、巨大なる岩の数々が…

『鷹矢』を、飲み込んでしまった―

「…え？」

唖然…

その、あまりに突然の光景に…

何が起こったのかわからずに、思わず言葉を失い固まってしまった

イースト校２年、天城　遊良。

しかし、それもそのはず。

一瞬。たった一瞬の出来事。
たった今ターンを終えた鷹矢に連なり、これより自分が動き始めようとしていたその瞬間に…
『落石』が、鷹矢を飲み込んでしまうだなんて…
一体、誰が想像できたと言うのか―
「…あ…え…？」
だからこそ、目の前の光景が遊良には飲み込めない。あまりに突然の出来事に、遊良の思考が停止する。
思わず零された、遊良の間の抜けた吐息が物語っている…
今、何が起こったのか…遊良にも、わからなかったのだ…と。
だってそうだろう。一体誰が予想など出来るものか。これから更に勢いに乗ろうと、ターンを迎えたことによりカードを発動しようとしたその刹那…
爆発音のようなモノが少年達の頭上から鳴り響いたかと思うと、岩が崩れ落ちてきて鷹矢を押し潰してしまうなんて―
「あ…た、鷹矢ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！おい！返事しろ！鷹矢ぁ」
「ふふふっ…相棒、つぶれちゃいましたねぇ？」
「ッ!?」
「ふふふっ、貴方達がいけないんですよぉ？私の想定以上のデュエルをするなんて、予定外も甚だしいったらありゃしません。全く、ホント手間をかけさせてくれるガキ共ですよねぇ。ま、これで少しは静かにデュエル出来ると言うモノですが、ええ。」
「な…これ…お前が…？」
そして…
今の【紫影】の口ぶりから、遊良は嫌でも理解してしまう―

この、鷹矢を押し潰してしまった突然の落石は…紛れも無く、【紫影】が巻き起こしたのだ…と。
爆薬でも仕込んでいたのか、それとも他に仕掛けを施していたのか。どうやったのかはわからないものの、鷹矢を飲み込んでしまったこの『落石』はこの屑が『狙って』やったことだけは間違いようのない事実であり…
…信じられない、信じたくない、信じられるわけがない、信じたくも無い。
この世界における絶対の取り決めである『デュエル』の最中に、こんな卑怯な手を使ってくる屑が存在していることに。
【白鯨】から散々口うるさく聞かされていた、【紫影】の屑さ加減の『真実』を目の当たりにして、遊良の体が一瞬で沸騰しかけるくらいに熱くなる。
…なんて卑怯な奴…少しでも状況が危なくなれば、迷い無く無粋な手を取ってくるなんて―
…なんて卑劣な奴…天上の実力を持っている癖に、学生に押されたからと言ってデュエリストの風上にも置けない策を弄してくるだなんて―
…なんて屑…いけしゃあしゃあと、鷹矢を岩で押し潰すだなんて―
この世の何よりも優先される『デュエル』という行為に、こんなにも無粋で屑な邪魔を用いてくる信じる事の出来ない屑の中の屑。そんなプライドの欠片もない【紫影】への怒りが遊良の中で湧き上がる。
そしてソレ以上に、目の前で鷹矢を傷つけられたその怒りが遊良の中で煮えたぎり始め―
そうして…
「さぁて、後はゆっくりと残りを片付けるだけ…」

「…エ…」

「ほ？」

昨日の『ルキ』に続いて…

自分にとって、この世の何よりも『大切なモノ』のひとつを目の前で傷つけられた遊良が…

俯きながら、一瞬肩を震わせた…

その瞬間―

「テメエエエ

大空洞の中で反響しているとはいえ、およそ人間に出せるとは思えない程の声の振動が大気を揺らしながら。
その口ぶりから、鷹矢をわざと岩で潰した【紫影】に対し…
―地を震わせて、響き渡る。

「ざけんなクソ野郎ォォォォォォォォォォォォォォォォッ！」
「ふふっ、うるさいうるさい…本当にキレ方が祖父そっくりですねぇ。はてさて、ではどうしますか？まだ戦いますか？それともここでデュエルを放棄して、相棒を岩の中から掘り起こしますかぁ？今ならまだ助かるかもしれませんが…ま、そうなれば貴方はいい的。相棒の無念も、師からの命令もこなせず…私に撃ち抜かれて、無駄死にするだけですが。」
「ッ!?」
「さて、もう一度聞きます。貴方はどうしますか？相棒を殺され、祖父を傷つけられ…それでも貴方はまだ戦いま…」
「黙れぇぇぇぇぇ！何が『相棒を殺され』だ！鷹矢が…あの馬鹿がこんな簡単に死ぬわけねぇだろうがぁ！【テラ・フォーミング】発動ぉ！」

―！

叫ぶ…
喉が裂け血を吹こうとも。
この屑にだけは負けられない、この屑だけは許してはいけない。
その感情が遊良を飲み込み、そうして叫ばれるは【紫影】の言葉を真っ向から打ち返す轟きと化して大空洞に響き渡るのか。
…そう、許せるわけがない。
すぐにでも鷹矢の元へと駆け寄りたいという衝動を超える、遊良の中に湧き上がる【紫影】への怒り。
それは今にも本能的に【紫影】を殺してしまいたいと湧き上がる、押さえられない果てしない憤怒。

これまで散々揺さぶられ、そして大切なモノを傷つけられ…
それでもなお平然としているこの屑の中の屑のことを…
遊良が、許せるわけも無い―

「【チキンレース】を加えてそのまま発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！」
「ほう、相棒の命よりも師からの令を取りますか。ふふっ、流石は憐造の甥…やはり薄情者ですねぇ。」
「黙れって言ってんだろうがぁぁぁぁぁぁ！テメェをさっさと倒して鷹矢を助ける！アイツが勝手に死ぬわけねぇんだよぉ！3枚目の【トレード・イン】発動！【モザイク・マンティコア】を捨てて2枚ドローッ！」

そんな、無理矢理に叫ぶ遊良の声は…どこか目の前の現実を認めないようにしているかのような、悲痛な叫びにも聞こえる必死な声でもあったことだろう。
隣の惨状…いくら『あの鷹矢』とは言え、重さ数トンはあるであろう巨大なる落石の数々に押し潰されてしまった現状を見ては―
…そんな最悪の結末を、絶対に考えないようにして。
それは心の支えでもあった鷹矢の姿が消えてしまい、ここぞとばかりに話術を仕掛けてくる【紫影】の声に決して耳を貸さないように。
この世の誰よりも鷹矢を知っている遊良だからこそ、あの鷹矢がこんなところで『最悪』な状況になっているわけがないと言い聞かせながら…
湧き上がる殺意と燃え上がる怒りで、必死になって遊良は叫ぶ。

けれども―

「それに何が『祖父を傷つけられ』だ！お前の嘘なんて聞く耳持つわけねぇだ…」

「天城　イノリ…」
「ッ!?」
「えぇ、えぇ！もちろん聞き覚えがありますよねぇ！貴方の祖母…父の母親の名ですし！」
「それがどうした！そんなこと、調べれば誰だって分かることだろ！お前がその名前を知っているからって…」
「私、会った事あるんですよねぇ。イノリさん本人に。」
「なっ!?」

揺さぶられる…
揺さぶられて、しまう―
遊良がどうすれば耳を貸すのかを、遊良がどうすれば揺さぶられてしまうのかを。昨日を含めたこれまでの戦いで、ソレを解析しきっている【紫影】の言葉が無慈悲に遊良の心を揺さぶってしまう。
天城　遊良が最も心揺さぶられる話題…そう、『血縁』の話題を嬉々として持ち出しつつ。
心の支え、話術を邪魔する精神的支柱でもある、血縁に関しては『部外者』とも言える天宮寺　鷹矢を除外し…
遊良の心を折ることに、愉悦を感じているかの如く。【紫影】は今こそ好奇と言わんばかりに、遊良を更に揺さぶりにかかって。

「こう見えて私、元々は『表』のプロで【白鯨】や『逆鱗』は同期なんですよねぇ。当然、若い頃の『逆鱗』とも交流がありまして…ふふっ、しかし懐かしいですねぇ、あの『逆鱗』が天津間…いいえ、天城　イノリにデレデレしているときの顔と言ったらもう傑作で傑作で…」
「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！」

―！

しかし…それでもなお遊良は思い切り叫ぶのか。
…喉を引き裂き、無理矢理に叫び。

【紫影】の心を揺さぶる言葉を、圧倒的声量にて思い切り掻き消し…
「さっきからごちゃごちゃうるせぇんだよ屑野郎ぉぉぉぉぉぉ！魔法カード、【闇の誘惑】発動ぉ！２枚ドローして【ネクロ・ガードナー】を除外ぃ！」
「ふふっ、揺れた心を無理矢理奮わせましたか…流石に同じ手には引っかかってはくれませんねぇ…ま、悪手ですが、ええ。」
「手札を１枚捨て、魔法カード【ワン・フォー・ワン】発動ッ！デッキから【サクリボー】を特殊召喚し…特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発ど…」
「ですがさせませぇん！カウンター罠、【見切りの極意】発動！」
「【見切りの極意】!?」
「何を驚いているのですか？馬鹿の１つ覚えのように【地獄の暴走召喚】ばかり使うからですよぉ。【地獄の暴走召喚】は無効でぇす！ふふっ、ワンパターンな戦術など簡単に対策でき…」
「ッ！それがどうしたぁ！【貪欲な壷】発動！ベリアル、サクリボー、イービル・ソーン、マンティコア、ＮＥＰＴＵＮＥをデッキに戻して２枚ドロー！そして【イービル・ソーン】を通常召喚！【思い出のブランコ】も発動！墓地から【鉄鋼装甲虫】を守備表示で特殊召喚！」
「おや…ま、アレだけドローしているのでやはり止まりませんか。ふふ、天城　遊良…もっと怒りなさい。その怒りこそが貴方を強くするのです…」
「行くぞ！【成金ゴブリン】を発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドローッ！リバースカード、【迷い風】も発動！【始祖竜ワイアーム】の効果を無効に！そしてバトルフェイズだ！速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動ぉ！【サクリボー】、【イービル・ソーン】、【鉄鋼装甲虫】をリリィィィスッ！」

叫ぶは衝動、轟くは怒号。
【紫影】の不敵な声すらも届かぬ、燃え上がる遊良の怒りの咆哮。
それは目の前の屑を、絶対に消し飛ばしてやるというただその一点

のみに集約された…これまでで最も強い怒りが見せる、全てを破壊せしめる獣の雄叫び。
…絶対に許せるわけがない。絶対に許してはいけない。
鷹矢とルキを傷つけた、この屑の中の屑のことを…
決して逃さず、己の手で消し飛ばしてやるという怒りによって、その手に掲げられしカードには、更に強い怒りを纏い―

奮える大気、獣の咆哮と共に…

それは、現れる―

「レベル8、【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚ッ！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル8
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

現れしは進撃の轟き、全てを無に帰す破壊の雄叫び。
主の怒りと同じ怒りを抱いている獣の王もまた、目の前の屑を己の手で屠らんとして怒り猛り叫び…
そして―

「【冥界の宝札】２枚と【サクリボー】の効果で５枚ドローッ！そして【神獣王バルバロス】のモンスター効果ぁ！３体リリースでアドバンス召喚した時…相手のカードを全部破壊する！やれ！バルバロスゥ！」

―！

獣の王が怒りのままに、その槍を地面へと突き刺した時。
凄まじき衝撃が波となりて、大地を砕きながら【紫影】の場の全てへと襲いかかり始めたではないか。

…全てを、破壊する…抵抗するモノの、全てを飲み込んで。

怪しく蠢く【紫影】の竜も、強固な耐性を持っていた原初の竜も、巨大なる人形要塞も小さき虫も。
何もかもを飲み込み、砕き、壊し、粉砕し、破壊していくその光景は、まさに遊良の怒りが具現化したかのようでもあって。

「…スターヴ・ヴェノムの効果で破壊できるのは特殊召喚されたモンスターだけ…なるほど、シェキナーガもそうですが、アドバンス召喚主体の貴方には色々と『通用しにくい』ですねぇ、ええ。」
「これで終わりだ屑野郎ぉ！バトルだ！【神獣王バルバロス】でダイレクトアタック！」

そうして…遊良の怒りの咆哮が、大空洞を響かせ揺らす。
破壊された【紫影】のスターヴ・ヴェノムが、苦し紛れに鷹矢の場のモンスター達をその毒で道連れにしてしまったものの…
アドバンス召喚…つまり特殊召喚されていない獣の王はその存在感を失わせずに、飢餓の毒を消し飛ばすのみ。

―だからこそ、猛る。

【紫影】にトドメを刺す攻撃を、獣の王に叫び命じ。
その宣言は咆哮となりて、ビリビリと大気を振動させながら今まさに獣の王が大空洞を駆け始めるのか。
コイツはルキを傷つけた…目の前で鷹矢を傷つけた。
その、絶対に許せるわけがない怒りが遊良の中で更に強く燃え上がり―

「天柱の崩壊！ディナイアー・ブレイ…」

ＬＰ残り２７５０の【紫影】へと、命をも奪う螺旋の一撃を遊良が放たんとした…

その時だった―

「ま、無駄なんですけどねぇ。直接攻撃宣言時、手札から【バトル・フェーダー】の効果発動です。」

「なっ!?」

―！

【バトル・フェーダー】レベル１
ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

瞬間…
獣の王の螺旋の槍を、弾き返しながら現れたのは…
無機質な黒き体色をした、鈴をぶら下げた小さき悪魔のモンスターであった。
それはがら空きで攻撃された時にこそ真価を発揮する、最上の守りの一手にも数えられるモンスターの１種であり…
しかし…そのモンスターが現れたことで、更に心臓が大きく跳ねる感触を覚えてしまった天城　遊良。

…それもそのはず。先ほど鷹矢の攻撃を、【スモーク・モスキート】で防いだ時に【紫影】は言っていた…

―『私のデッキ、【バトル・フェーダー】入っていないんですよねぇ、ええ。』

…と。

だからこそこの攻撃を邪魔されることはないのだとして遊良は攻撃を仕掛けたのだし、もしまた【紫影】が【スモーク・モスキート】を使ってきたとしても直接攻撃自体は成功しているのだとして…そのまま、怒りのままに【紫影】を刺し殺してしまうつもりが遊良にはあった。

…だからこそ、焦る。

ここで、ここへきて…

【バトル・フェーダー】によって、攻撃を無傷のままに止められたことに―

「ふふっ、攻撃を無効にし、【バトル・フェーダー】を特殊召喚してバトルフェイズを終了します。」

「テメェッ！【バトル・フェーダー】はさっきデッキに入れてないって…」

「え？あぁ…ふふふっ、もしかして私の言ったこと信じてたんですかぁ？敵のいうコトを素直に信じるなんてお馬鹿さんですねぇふふふふっ！」

「…ッ!?」

しかし…

そんな遊良を、どこまでも小馬鹿にしたように―

捻じれた声を吐き出す【紫影】の態度は、遊良の焦りを更に焦がしにかかるのか。

迂闊だった、早計だった―

どうして、あんな屑の言葉を真に受けてしまったのか―

天空闘技場を出発する前に、【白鯨】から散々『奴は必ず【バトル・フェーダー】を持っている』という注意を言われていたにも関わらず…

【紫影】の戯言を真に受けてしまい、まんまと屑の術中に嵌ってしまったなんて、遊良からすれば一体どれほどの屈辱であると言うのだろう。

弄ばれた屈辱が遊良を襲う。燃え盛る怒りが更に煮え滾り、どこまでも嘘の塊である【紫影】への嫌悪と憎悪が遊良の中で更に大きくなっていく…

しかし…それと同時に浮かび上がるのは、【紫影】にまんまと弄ばれた自分の弱さ。

警戒していたはずなのに。注意していたはずなのに…何故【紫影】の言葉を真に受けてしまったのか。信じるつもりなどなかったのに…いや、そもそも信じているつもりもなかったというのに、それでも、『無意識』を意図的に誘導されるだなんて、一体どれだけ心に隙間があったというのか。

そんな弱さが浮き彫りになる度に、遊良の心には腸が煮えくり返る感触が浮かんでは燃え上がる。

攻撃する前に、もう少しドローを加速していてもよかった。そう、【抹殺の指名者】で【バトル・フェーダー】を封じ込める算段だって、ココに来る前に鷹矢と打ち合わせていたはずなのに…

怒りに任せた攻撃と、鷹矢を失った精神的ダメージが緒を引いて、アツくなりすぎた所為でこのターンに【紫影】を仕留めきれなかったことが、怒り狂っていた遊良に今更になって途轍もなく重く圧し掛かってきてしまって。

「くそっ！カードを３枚伏せてターンエンドだ！」

遊良ＬＰ：３０００→２０００
手札：５→２枚
場：【神獣王バルバロス】
魔法・罠：【冥界の宝札】、【冥界の宝札】、伏せ３枚
フィールド：【チキンレース】

届かない…これだけやっても、届かない。
それはまるで、掌の上で遊ばれているかのような薄気味の悪い奇妙な感覚。
ここまでの攻防も全て見透かされていたとさえ思える【紫影】のデュエルの、その一つ一つの所作がどこまでも遊良の体に纏わりつく。怒りは決して収まらないとは言え、それでも今の攻撃を難なく躱した【紫影】の余裕が遊良にはどこまでも気持ちが悪く…
…この後やってくる【紫影】のターンを考えると、後１枚は伏せカードをセットしておきたかった。
そんな考えを浮かばせながら、自分の手札を見据える遊良。
…手札はまだあるとは言え、ソレも場に出せなければ意味が無い。そう、【冥界の宝札】は確かに遊良のデッキにとっての大きなエンジンではあるものの、永続魔法であるが故に魔法・罠ゾーンを圧迫し、現状遊良が伏せられる伏せカードは最大で３枚まで。
並の相手であれば、３枚の伏せカードだって多大なる威力を持つとは言え…
今対峙しているのは並の相手などでは断じてないからこそ、万全を期したはずなのに纏わりついてくるこの気持ちの悪い雰囲気が、どこまでも遊良の焦燥を駆り立ててくる。
…そして、遊良の不安は伏せカードだけではない。
場に揃えたモンスターは、攻撃力３０００の獣の王のみ。一撃にて

【紫影】のＬＰを０に出来る攻撃を仕掛けたとは言え、逆に言えば、遊良の場に居るモンスターはそのたったの１体だけと言う事。
…それはＥｘ適正を持たない遊良にとっては、大型モンスターを場に揃えるのだってソレ相応の対価が要るという事でもあるのだろう。
それゆえ、今の自分に出せる万全を期したはずなのに…それでも焦りを感じてしまうのは、一体どうしてなのだろうか。
いかに攻撃力３０００の大型モンスターを場に呼び出しているとは言え、湧き上がる怒りとは裏腹にどこか焦りすら感じてしまっている今の遊良の感情は…
怒りと焦り、憎悪と嫌悪…鷹矢が居た場所に積み重なる『岩』を視界に入れるたびに暴発しそうになる怒りが、同等の焦りと交わりどうにかギリギリ理性を保てているだけのようではないか。

「私のターン、ドロー！」

しかし、そんな遊良の感情の流転を、嬉々として見下し弄びながら。
遊良からの殺意など何処吹く風で、飄々とその捻じれた姿を見せつけながらカードをドローした裏決闘界の融合帝、【紫影】。
…溢れ出る余裕。まるで、既にこのデュエルの終着が【紫影】には視えているかのよう。
遊良の怒りをヒラりと躱し、遊良の守りをニタニタと小馬鹿にしながら…
なおも高いところから、今ゆっくりと動き出す。

「さて…ではそろそろ終局としましょうかねぇ。魔法カード、【終わりの始まり】を発動。墓地のシャドール・ドラゴン、ビースト、おまけにミドラーシュとスモーク・モスキート、そして【捕食植物セラセニアント】を除外し３枚ドロー！そして手札を１枚捨て速攻魔法、【ツインツイスター】を発動。貴方の伏せカード２枚を破壊します！」
「ッ!?」

巻き起こる双頭の竜巻が遊良を襲う。
…それは【紫影】の攻撃に備えて、硬く身構えていた遊良を果てしない『上』から摘み上げて小馬鹿にするが如く。
３枚の伏せカードが、なんの牽制にもなっていない。そのまま、なんともあっけなく…遊良が伏せていた守りのカード、【攻撃の無敵化】と【光の護封霊剣】が破壊されていく―

「続けて【召喚師アレイスター】を召喚！その効果で、デッキから【召喚魔術】を手札に…」
「アレイスター!?ソイツは確か【召喚獣】！くそっ、させるか！永続罠、【デモンズ・チェーン】発動！アレイスターの効果を無効に！」

また、続けざまに動く【紫影】の場に現れたのは、杖を構えし孤高の魔術師であった。
【召喚獣】という、異界の強大な獣を呼び出すとして知られているその主核の魔術師の事は…
遊良も知識として知っており、それ故にアレイスターの効果を通すわけにはいかないのだとして、即座に止めんと反射的に動きを見せるのか。
…魔術師を止める悪魔の鎖。遊良が好んで使うその永続罠の力によって、縛られ地に伏す召魔の主。
そう、アレイスターの効果を許してしまえば、更に強大な融合モンスターが現れてしまうことは必至。
ソレを遊良が懸念する事は至極最もであり、【チキンレース】の効果を含めても【紫影】の残りの手札を考えると、これ以上の展開からこのターンの決着はまだ着かないと…状況からして、そう遊良が踏んだとしてもソレは何ら可笑しなことではない事だろう。
しかし…

（なんだ…この嫌な感じ…あの屑…まだ何か隠して…）

溢れでる冷や汗が止まらない。遊良の危険を知らせるセンサーが、更に激しく震え上がる。
…アレイスターは止めた。それは確実に止めるべくして止めなければならない最良の一手だったはず。
そう、それは残り1枚の【紫影】の手札から出せるモノには、限りがあると踏んだ遊良の思考が導き出した反射の一手であり…
残り1枚の手札が何かはわからない。だからこそ現状でアレイスターを止めていなければ更に状況が悪化してしまうことを懸念することは、『そのレベル』に達しているデュエリストならば当然の如くたどり着く思考ともいえるはずのだ。
だからこそ、残った守りの最後の一手…悪魔の鎖をアレイスターへと向けた事への正当性を信じたい遊良が、大きくなり続ける焦りの鼓動を無理矢理に押さえつけながら必死になって視線を外さず。
けれども…
そんな、必死になっている遊良へと向かって…

「健気ですねぇ。精神的支柱を失ってもまだ勝機を見出そうと頑張っているんですから。」
「だ、誰が諦めるもんか!お前をブッ殺すまで、絶対に諦め…」
「ですが貴方の伏せカードはこれで0、場には何の効果も持たないただのモンスターが1体…この程度で生き残れると思えるなんて、なんてお気楽な頭をしているんでしょうねぇ。魔法カード、【龍の鏡】発動!」
「【龍の鏡】!?」
「ふふっ!貴方程度の実力でこのターンを生き残れるわけないでしょう?墓地からキメラフレシアとドラゴスタペリアを除外融合!」

やはり【紫影】は止まらない。
先ほども使った融合魔法…別次元へと繋がる鏡を用い、【紫影】の場に浮かび上がるは竜の陰影。

そう、アレイスターはあくまでも、遊良に【デモンズ・チェーン】を使わせるための捨ての一手。アレイスターを止めておかないと、更に状況が悪化するということを遊良へと見せつけ…

先ほども使った、１枚で『融合召喚』を行えるその魔法をありありと掲げながら…

「禍つ紫影の揺らめきよぉ！この世の全てを包み込みぃ…数多の命で腹を満たせぇ！」

自らの『名』を呼び出す先ほどの宣言よりも、なお凶悪なオーラをその身に纏い。

竜の陰影が渦巻く神秘の渦へと、２体の捕食植物を捧げ…

それは、現れる―

「融合召喚！現れなさい、レベル１０！【グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】！」

―！

【グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／３３００　ＤＥＦ／２５００

…轟いたのは、飢えを通り越した飢餓の咆哮だった。

どれだけ食しても収まらぬ、どれだけ貪っても満たされぬ…轟いたのは、飢饉とも思えるそんな叫び。

交わる２つの毒の草花が、捻じれたうねりを纏いし紫影の竜によく似た姿となりて…【龍の鏡】という、竜の幻影を呼ぶその鏡の魔力によって生じたのは、生まれ変わったそ異形の姿。

…その翼はまるで開いた花弁。美しさの中に存在する、毒と言う名の畏れを纏い。

生きとし生ける者全ての命を、根元から喰らい付くさんとしている…飢餓すら通り越した、まさに飢饉と言える暴食の牙と言えるのであって。

【グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／３３００　ＤＥＦ／２５００

「グリーディー…ヴェノム…」
「ふふっ、グリーディー・ヴェノムの効果発動でぇす！このターン…【神獣王バルバロス】の攻撃力を０にする！」
「なっ!?」

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００→０

そして…
怪しき花弁から放たれし、飢饉の毒が獣の王へと襲い掛かる。
それは生きている者ならば決して逃れられぬであろう、無理矢理に飢餓を与える病的なまでの毒の雨。
問答無用。いかなる相手でさえも…例え神であろうとその力を文字通りの『０』にしてしまうその力によって…
神をも貫く槍を持った獣の王までもが、飢えに耐え切れず槍を落としてしまったではないか―

「な…こんな…簡単に…」
「これで終わりだと言ったでしょう?貴方程度の力で、まだ抵抗できると思っているなんて…ふふっ、脆い、脆い、脆いですねぇ。相棒を失ったことで簡単に壊れてしまうなんてどれだけ脆い心なんでしょう…だから、貴方は負けるんです、ええ。」

どうしようもない虚無が遊良を襲う。【紫影】の言葉がどこまでも

遊良に纏わりついて、その膝を折ろうと迫り来る。
…どうしてこんなにも簡単に全力を超えてくる。
…どうしてこんなにも力の差がある。
今の遊良の心に襲い掛かるは、認めたくないのに目視せざるを得ないこの現実と現状の悲嘆な光景。
守りの手を当然のように蹴散らされ、妨害すらも奴の想定の内…抵抗することすら許されないという力の差に、その自分の弱さにどうしようもない絶望が怒りを超えて遊良の心を圧し折りにかかる。
…鷹矢のように、墓地に攻撃を防ぐ何かを用意できていればまだ違っていた。
そう、遊良は先ほどの【闇の誘惑】で、墓地にて真価を発揮する【ネクロ・ガードナー】を除外してしまった。
それは遊良自身が熱くなりすぎていたことも原因のひとつ。先のターンで、【紫影】を確実に殺すという猛りの元に動いた結果が、今こうして悪手となって遊良へと圧し掛かってしまっているのだ。
…その場、その時、その瞬間に、デッキがどんな動きをするのかは誰にも分からない。
だからこそ、今ココで遊良の墓地に守りの手が無いこともまた1つのデュエルの流れでもあるのだが…

「さて、もう防ぐ手立てなど無いんでしょう?では折角ですし、【チキンレース】の効果を発動しLPを1000払って1枚ドローしておきましょうかねぇ。…ではバトル!グリーディー・ヴェノムで、【神獣王バルバロス】に攻撃ぃ!」
「ぐっ…くっそぉぉぉお!」

けれど、今更どれだけ悔やんでも遊良にはもう手が残されてはいない。
大空洞へと浮かび上がる飢饉の竜の飛翔を、ただただ見ていることしか出来ない遊良が零すその慟哭もまた…
どうしようも出来ない勝負の流れの、無慈悲なる決着の行方を告げ

る宣言となりて…

「蠱毒のぉ…デッドリー・フィアンマー！」

ここに、轟く―

その時だった―

「ぬぉぉぉお！【和睦の使者】発動っ！」

――！

突如…
最後の攻撃が解き放たれた、まさに一瞬のその刹那。
飢饉の竜が放った炎砲が、突如として『見えない壁』へとぶつかってしまったのだ。

…霧散、爆散、四散する毒の炎。

そう、遊良がもう駄目だと思ってしまったその時に、突如として弾けた『ある声』が紛れもなく遊良のことを守ったのだ。
…この声を、聞き間違えるはずがない。その声を、聞き逃すわけがない。
そして、遊良が反射的に…
『ある声』が聞こえた方…紛れもなく『岩』が積み重なっている自身の隣へと視線をやった…

『そこ』には―

「ッ！た、鷹矢ぁ！」

それは、あまりに奇妙な光景だった。
…見間違えるはずもない、見誤るはずもない。
そう、『その顔』を、遊良が間違うはずも無いのだ。何せ、『そこ』に居たのは紛れも無く…
重さ数トンはあろう巨大なる岩の数々に押し潰されているというのに、岩々の隙間から這い出るようにして『顔』とデュエルディスクを装着した『左腕』だけを外へと出した…

紛れもない、『鷹矢』の姿があったのだから―

「天宮寺　鷹矢！貴方まだ生きていたのですか!?」
「当たり前だ！ぐっ…こ、こんな『軽石』で！俺を殺せると思ったかぁ！遊良がまだ戦っておるのに！お、俺が先に倒れてなるものかぁ！」

鷹矢が『岩』に潰されているのは間違えようのない現実の光景。
しかしその岩を『軽石』と言い放ったように、鷹矢は岩に挟まれてはいても完全に『押し潰されて』はいないよう。
まぁ、それでもやはり岩に潰されているだけあって、どこか苦しげな呼吸が醸し出されてはいるものの…
それでも、【紫影】の策略によって死んだと思われた鷹矢が。今この瞬間に遊良を守り現れ、飢饉の毒竜の炎砲を完全に遮断し始めたのも間違いようのない確かな現実であり…

「【和睦の使者】の効果により、バルバロスは破壊されず遊良へのダメージは０になる！」
「…し、信じられません、なんて生命力なんですか！…あ、そ、それより天宮寺　鷹矢！貴方は先ほど、『自分の身は自分で守る』と言ったはず！今になって天城　遊良を守るなんて、ずいぶんと虫のいい…」
「なにを言う！岩の中で聞こえていたぞ…先ほど貴様が言っていたはずだ！敵の言う事を、素直に信じる馬鹿がどこにいると！」
「ッ!?」

それは一種の意趣返し。【紫影】の下賤な行いに対する、これ以上ないくらいの鷹矢の仕返し。
…因果応報、自業自得。
【紫影】の尊大な行いを、そっくりそのまま返すかの如く…岩に挟まれ動けない中でも、強気な態度を崩さないイースト校２年、天宮寺　鷹矢。
だからこそ、これで勝負が着くと思われたギリギリの状況においても…また遊良のＬＰは０を刻まずにいて、【紫影】の攻撃を防ぎながらその命を後へと繋いでいて。

「随分と舐めた真似をしてくれたな！もう許さん、貴様を完全に倒すまで、倒れてなどやらんぞ！」
「くっ…無様な恰好の癖になんて強気な…一体どうして生きて…」
「普段から鍛えているからな！当然だ！」
「な…」
「ッ…やっぱり、あのくらいでお前が死ぬわけないよな！最初からそうだと思ってたんだよ！」
「ふん、遊良の癖に、俺を心配するなど片腹痛いわ！この程度の『軽石』で、俺が死ぬわけがない！」
「なんだよ、鷹矢の癖に、折角心配してやったのに失礼な奴だな！」

だからこそ、鷹矢がいつもの様な軽口を叩いた事に対し、遊良もまた当然のようにいつもの返しを放つのか。
…しかし、岩に押し潰されたはずの鷹矢が一体どうして本当に生きているのだろう。
岩に挟まれている所為か多少苦しげではあるものの、数トンはあろう岩々の山に押し潰されている割には鷹矢の姿はあまりに健常であり…
それは鷹矢が言った、『軽石』という言葉が鍵なのかもしれない。け

れども、この緊迫し続けている状況においては、そのことについて深く探求する暇など遊良にも鷹矢にも存在しておらず。

「仕方ありません…【強欲で貪欲な壷】を発動、デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！…私はカードを２枚伏せてターンエンドです！」

【紫影】　ＬＰ：２７５０→１７５０
手札：２→０枚
場：【グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】
【バトル・フェーダー】
【召喚師アレイスター】
伏せ：２枚

また、ここで鷹矢が蘇り遊良を救ったことは…【紫影】にとっても、本当に計算外のことだったのだろう。
飄々としていた態度から一転。その、とても演技には見えない焦りを微かに表情に浮かべながら…
今再び、【紫影】はそのターンを終えるしかなく。

「ですが天宮寺　鷹矢！動けないデュエリストにターンは回ってきません！ドローも出来ないその身では、貴方のターンはスキップされてしまいますねぇ、ええ！」
「ぬぅ…」

…とは言え。
遊良と鷹矢側からしても、鷹矢が復活したとは言え状況が一転したとは言いがたく。
そう、なにせ今の鷹矢の姿は、『頭』と『左腕』だけを解放させただけで…残る右腕及び他の全身は、まだ岩の山の下にあって挟まれたままであるのだから。
強がって見せているとはいえ、今もなお必死に身を捩る鷹矢の姿か

らわかる通り。彼もどうにか頭と左腕だけを岩から抜け出すことには成功したものの、完全に岩から抜け出すのにはまだまだ時間がいる様子。
　まぁ、あの状況でもどうにか顔と左腕を抜け出させられたからこそ、鷹矢もあの瞬間に遊良をギリギリ救うことが出来たのだが…
　それでも、デッキからカードをドローすることが出来ないこの状況では。いくら鷹矢が死んでいなかったとは言え、状況は変わっていないのとも言えるのだろう。
　…動けず、ドローできず、何も出来ない天宮寺　鷹矢。
　こんな状況のままでは、【紫影】の言った通りデュエルディスクが自動で鷹矢のターンをスキップしてしまうのもある意味当然とも言えば当然で…

「だが、今度こそ貴様のターンは回ってこん！ゆけ遊良！」
「あぁ！俺のターン、ドロー！」
「おっとぉ！スタンバイフェイズに速攻魔法、【瞬間融合】発動です！アレイスターとバトル・フェーダーで融合！融合召喚、レベル４！【召喚獣カリギュラ】！」

―！

【召喚獣カリギュラ】レベル４
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１８００

　それ故、これ以上少年達に好きにさせるわけにはいかないのだと言わんばかりに。
　即座に行動を起こしつつ、想定外と予想外が一緒になって起こるこのデュエルを、ここへきて本気で終わらせに向かっている様子を見せ始める裏決闘界の融合帝、【紫影】。
　…守備表示で現れしは、闇属性の異界の悪魔。
　最初に呼び出した【異星の最終戦士】同様、前に呼び出した【エル

シャドール・ミドラーシュ】同様…
相手の行動を制限するモンスターを呼び出しつつ、次の自分のターンに確実に消し飛ばすため。どこまでも、少年達の邪魔をし始める。

それでも…

「カリギュラが場にいる限り、1ターンに1度しかモンスター効果を発動できず攻撃も1体でしか行えません！」
「ぬぅ…奴め、まだこんな手を…」
「問題ない！【マジック・プランター】発動！【デモンズ・チェーン】を墓地に送り2枚ドロー！」

未だいやらしい手を魅せる【紫影】を前に、それでも天城　遊良は止まらない。
…先ほどまでの、追い詰められていた表情はどこへやら。
鷹矢の無事がわかったその瞬間に、重く圧し掛かっていたモノを全て忘れ去ったかのように…
そう、嵐のようにドローし始める遊良の姿は、例えるならば籠から飛び出た鳥のよう。
まるで追い詰められてなどいないかのようにドローを行い、生き返ったように遊良はドローを重ね始め…

「…わかりやすいですねぇ。相棒が生きていて息を吹き返すとは…」
「何とでも言え！鷹矢が無事だったんだ…だったら後はお前を倒すだけだ、覚悟しろ【紫影】！」
「…ですがグリーディー・ヴェノムとカリギュラを前に何をしようと？」
「力で叩く！それだけだ！【黙する死者】発動！墓地から【鉄鋼装甲虫】を守備表示で特殊召喚し…俺はバルバロスと鉄鋼装甲虫をリリー

スッ！」

羽ばたきを取り戻した遊良の叫びは、迷いの感じられない晴れやかな轟き。

アレだけ湧き上がっていた重い怒りと、アレだけ込みあがっていた強い焦りが鷹矢の無事という現実によって、両方同時に解消されたからこそ遊良もまた吹っ切れたのか。

…もう、惑わされる事は無い。

余計な焦りが消え、視野が狭くなる怒りが冷め。【紫影】がどんな妨害を企もうと、純粋なる『力』で吹き飛ばせばいいことを遊良も『昨日』この大空洞で実行したからこそ。

【紫影】が崩した空洞の上…空が見えるほどに開いた穴を視界に入れ、今再びこの大空洞で手に入れた新たな『力』を…

ここに、呼び出す―

「来い、レベル１０！【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】！」

―！

遥かな空から降ってきたのは、流星なりし宙の星。

それは深海よりも深きモノ、海嘯よりも豪きモノ。

荒ぶる激浪をその身に纏い、四海すら凌駕する海闊の化身。

空を映し、天を彩り、宙すら飲み込むまさに『海の星』。

それはたゆたう星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０
ＡＴＫ／　０→５８００　ＤＥＦ／　０→２７００

飢饉の毒竜の唸りを切り裂く、鋭き牙と鎌を構え。
そう、これが、これこそが―
昨日…ルキを救うため、遊良が己を超えたことで従えた純粋なりし『力』の象徴。
実力の『壁』を超え、その『先』の地平へと足を踏み入れた事によって押さえつけた…この星ならざる外の宙の、人知を超えた『力』のカード。

「ＮＥＰＴＵＮＥの攻守増強は永続効果で発動する効果じゃない！そしてＮＥＰＴＵＮＥの更なる効果が発動するけど、この攻撃でお前を倒せばいいだけだ！」
「プラネットを呼び出しましたか…ふふっ、この攻撃で倒せれば…ですけどねぇ！」
「むっ！あの男、まだ何か隠しているぞ！油断するな、遊良！」
「あぁ、まだ油断はしない！それで散々痛い目に遭わされてきたんだ…トドメを刺すその時まで、もう絶対に油断なんてするもんか！ＮＥＰＴＵＮＥの効果が発動し、墓地のバルバロスと同名となり同じ効果を得る！そして【冥界の宝札】２枚の効果で４枚ドロー！…よし、【サイクロン】発動だ！【紫影】の伏せカードを破壊ぃ！」

また、プラネットの召喚にて見えた勝機に甘える事無く。
【紫影】の残る伏せカードにも視線を伸ばし、確実にソレを破壊しにかかる天城　遊良。
…鷹矢が埋もれたままだったら、きっとこれ以上冷静にはなかっただろう。ドローと同時に攻撃を仕掛け、そしてまた【紫影】に返り討ちにされていたのではないか。
それに、もしまたここで【紫影】が【やぶ蛇】のようなカードを使っ

てきたとしても…自ら出した【召喚獣カリギュラ】の制約がある以上、ここで下手な行動など【紫影】にだって出来ないはず。
だからこそ、攻める…
ここが勝機、ここが転機。【紫影】の予想を超えられる、最初で最後の最大の好機。
この流れを、決して逃さぬように。これ以上デュエルが長引いては、決して【紫影】には勝てないことを理解している遊良の旋風が大空洞を疾り抜け―

しかし…

「チッ、素直にバトルフェイズに入っていればいいものを！罠カード、【誤爆】発動！グリーディー・ヴェノムを破壊します！」
「なっ、【誤爆】!?」
「自分のモンスターを破壊するだと!?」

―！

遊良の予想に反して。
【紫影】が叫んだ事によって巻き起こったのは、予想もしていなかった光景であった。
…それは、爆発。
しかも、ただの爆発ではない。
この爆発は紛れも無く、遊良や鷹矢の場で起こった爆発ではなく【紫影】自身の場に起こった代物。
そう、【紫影】の場にて怪しく蠢いていた、飢饉の毒竜がその身を【紫

影】自身によって大爆発させられたのだ―
…けれども、一体どうして【紫影】は自らのモンスターを破壊したのか。
あのモンスターは攻撃力３３００という破格の数値と恐るべき効果を持った、正真正銘【紫影】最大の切り札であったはず。あのままではいくら伏せカードが破壊されるとは言え、寧ろ攻撃力５８００のＮＥＰＴＵＮＥのダイレクトアタックを喰らうよりは破壊などしない方がまだマシであったはずだと言うのに。
ＮＥＰＴＵＮＥの攻撃を喰らってもＬＰが０になるとはいえ、最後に伏せていた伏せカードが何故に相手ではなく自らのモンスターをただただ破壊するだけの罠カードであったのか。
すると、爆発に気を取られている少年達へと向かって…
続けて、【紫影】はその口から捻じれた言葉を放ち―
「ふふっ、そして破壊されたこの瞬間、グリーディー・ヴェノムの効果が発動しまぁす！全てのモンスターを…破壊しちゃいますよぉ！」

―！

巻き起こるは更なる爆発、続けて連なる真なる爆破。
…自分も、相手も。
文字通り、転んでもただでは起きない【紫影】の放った、『全て』を破壊する大爆発によって…
なんと、勝機をつかみかけた遊良達の最後のモンスター、【Ｔｈｅ ｔｙｒａｎｔ ＮＥＰＴＵＮＥ】までもが飢饉の毒竜の爆発に巻き込まれ無惨にも弾け飛んでしまったではないか―
「ぐっ…ぜ、全体破壊…」
「奴め…ま、まだこんな真似を…」
「苦労して出したプラネットも破壊されちゃいましたねぇ！残念でしたねぇ！」

「…ぬぅ…だ、だが、これで貴様も自ら丸裸になった！今のカード、貴様にとっても諸刃の剣だったようだな！」
「ふぅ…岩に挟まっている癖に喚かないでくださいよ。グリーディー・ヴェノムの更なる効果！墓地のワイアームを除外して、自身を特殊召喚しちゃいます！グリーディー・ヴェノムを守備表示で特殊召喚！」
「なっ!?」
「なんだと!?」

【グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／３３００　ＤＥＦ／２５００

「残念でしたねぇ！グリーディー・ヴェノムは何度だって蘇る！討たれる度に、全てを道連れにしてねぇ！ふふふふっ！残念でしたねぇ、ええ！」

そして…それだけでは、終わらない。
どこまでも往生際悪く、どこまでも纏わりつくように…今再び、【紫影】の場にて蘇る最大最凶の飢饉の毒竜。
…しかも、今度は『守備表示』で。
これでは、モンスターへの攻撃によって【紫影】のＬＰを０にすることは出来ない。
しかもそれだけではない…【紫影】の言う事が真実であるならば、もう一度あの飢饉の毒竜を破壊すればまた全体破壊に復活が繰り返されてしまうのだ。
いや、仮にソレが嘘だったとしても…そもそも切り札の１枚たるＮＥＰＴＵＮＥが破壊されてしまったこの現状では、守備力が２５００もあるグリーディー・ヴェノムの戦闘破壊すらも一からプランを立て直さなければならず…

「何度でも復活するモンスターだと…？」

「アイツ、まだそんな力が…くそっ…」
「貴方達が何をやっても無駄だというのはそう言う事です！やっと力の差を理解しましたかぁ？全く、手間取らせてくれる子ども達ですねぇ！」
「くっ…」
「ぬぅ…」

その、初めて対峙するモンスターを前に。
絶望的な状況が遊良達へと圧し掛かり、その所為で遊良の手が止まり鷹矢の威勢が止まってしまったのは、とてもじゃないが仕方のないことなのか。
…攻撃しても追撃できず、返しのターンにまた蘇ったグリーディー・ヴェノムに攻撃されてしまう。
…かといって、グリーディー・ヴェノムを放っておく事もできない。
…このままターンを渡せば、がら空きのまま攻撃されてしまう。
…守備で凌ぐ事も、きっと奴は許してはくれない。
破壊しても駄目、場に残しても駄目。バウンスや除外と言った手も最早残っていないという、そんな状況下に挟み込まれてしまった遊良と鷹矢の手が止まり…無残にも、呼吸の音だけが大空洞に漏れ出して。
そして…
そんな、静まり返ってしまった少年達へと向かって―

「天城　遊良！貴方はもう召喚権を使いきった！これまでの傾向から【二重召喚】はデッキに1枚のみで、お得意の【地獄の暴走召喚】も決勝戦で使った【帝王の烈旋】も【手札抹殺】の時に墓地に送られているのは確認済みです！聖杯でモンスター効果を無効にしても、墓地で発動するグリーディー・ヴェノムの効果は止められない…そして残りのデッキ枚数から、これ以上のリリースを用意するのは困難…ふふっ！ふふふっ！万策尽きたとはこの事ですよねぇ？ねぇねぇ！万策尽きちゃってますねぇ！えぇ！」

捲くし立てるようにそう荒立てた【紫影】の言葉は、ようやく沈黙した少年達に下種らしい嬉々を感じているかのよう。
大の大人が少年達に対し、勝ち誇ったように煽り立てるなんてとてもじゃないが褒められたモノではないと言うのに…
（…全く、本当に嫌な『制約』ですねぇ…毎回ギリギリとは本当に嫌になります、ええ…）

それでも、逸る言葉とは裏腹に。
その心の内に、焦りや逸りとはまったく違った別の感情を抱いている【紫影】の中には…少年達とのデュエルの流れ、展開に対する、また別の思考を分けて進めている様子。
まぁ、逸ったように声を荒げる【紫影】の本心…その心の内、本当の感情など【紫影】本人にしかわからないことなのは確かではあるのだが…
ともかく…

「何が【黒翼】の孫ですか！何が【白鯨】の弟子ですか！何が【紫魔】の甥ですか！何が『逆鱗』の孫ですか！貴方達のような子どもが、私に勝とうなんて１００年早いんですよ！子どもの癖に大人に楯突くんじゃありません！表裏戦争の時もそうです…大人に楯突く生意気な子どもはどこまでも余計なことをする！だから子どもは嫌いなんです！ええ！」
「ぐ…奴め…これだけの力をまだ持っていたとは…」
「ふふっ、ようやく理解しましたかぁ？貴方達はこれ以上何も出来ない！これ以上どうしようも出来ない！２０年も生きていない子どもが生意気なんですよぉ！」
「ぬぅ…」

何やら焦燥を前面に押し出している【紫影】の口から、殺気立った

言葉が更に荒げられる。
それは、そう言わずにはいられないかのようなある種の必死さを含んでいたようにも思える、デュエルの佳境の様な叫びとも感じられるだろうか。
…何が【紫影】をここまで荒立てるのか。何が【紫影】をここまで逸らせるのか。
ソレが【紫影】の本心なのかどうかはともかく、今この大空洞で少年達へと見せている【紫影】の態度は…少なくとも、【王者】に匹敵する裏決闘界の【三帝王】と呼ばれるような人物の立ち振る舞いと余裕と言った、ソレ相応のモノを全くと言っていい程感じられず。
…紛れもなくここが佳境、間違いなくここが終盤。
けれども最後の最後、佳境も佳境へと来て。天上の力、『極』の頂に位置している【紫影】にここまで全力で立ち向かってきた遊良と鷹矢も…
そろそろ限界が近いのか、最期に聳え立った【紫影】の切り札に隠せない疲弊を見せ始めていて。

「ま、【黒翼】や【白鯨】を師に持つ貴方達なら理解出来ますよねぇ…【王者】に匹敵する力を持つとされる、裏決闘界の【三帝王】の力！ソレがどれ程のモノなのか！ようやく理解してくれましたよねぇ！【黒翼】の孫なら理解できましたよねぇ？【白鯨】の弟子なら理解してくれましたよねぇ？私と！貴方達の！埋めようの無い力の差を！えぇ！」

煽る…
ここぞとばかりに、【紫影】は煽る。
成す術なく佇んでしまった少年達に、あまりに見苦しい叫びをこれでもかと声を荒げて。
自分よりも相当歳の低い少年達に勝ち誇る男の姿はあまりに醜く。
けれども、ソレに鷹矢が言い返せないのは…目の前の屑が、その言動を帳消しにするほどのデュエルをありありと見せ付けてきている

が故なのだろう。
…力の差があるとは言え、イースト校のトップ2を相手に2対1で優位に立つ。
どれだけ言動が下卑ていても、どれだけ行動が下種であっても、どれだけ態度が屑であっても。
それでもデュエルというこの世の何よりも重要視される行いに対して、今最も『勝利』に近い場所にいる【紫影】は、確かに少年達よりも優位な立ち位置に居る事は先ず間違いないことなのだから。

勝者こそ正義…

ソレは古の時代から変わらない、絶対で不変の『決闘』のルール。
まぁ、今こうして鷹矢が岩に埋もれ、無慈悲にターンをスキップされてしまったのはデュエル外での【紫影】のあまりに醜い行動の所為であったことはこの際ともかくとして…
それでも、目の前の性根の腐った人間の屑を、真っ向から否定したいのならばその屑に真正面から『勝つ』しか方法がないということを、岩に埋もれている鷹矢も理解しているからこそ。
どれだけ卑劣な行動を取り、どれだけ下賤な言動を【紫影】が繰り返してきても…今この終盤の状況においては、追い詰められているが故にソレ以上を言い返すことが出来ず…

しかし―

そんな、勝ち誇っている【紫影】に対し。

「…そうか…今わかった…」

静かに…

そう、静かに、何やら1つの疑問が解消したかのような表情を見せたイースト校2年、天城　遊良。

「何であのカードが俺の下に来たのか…このタイミングで、何で俺のデッキに入ったのか…ずっとわからなかったけど、お前を見ていてやっとわかった…」

その言葉は、およそ【紫影】の煽りを混ぜた勝ち誇りなど全くもって効いていないかのような、落ち着き払った悟りのようにも感じられたことだろう。

この状況下に置かれても、逆に取り戻したその落ち着き。それは【紫影】の煽りを聞いて、逆に何か理解した事があったかのような腑に落ちている表情でもあり…

…一体、遊良は何に気付いたのだろう。

攻めても駄目、守っても駄目という、進むも戻るも地獄な絶体絶命の状況下、この切羽詰った状況で…天啓のように遊良の脳裏に浮かび上がったのは、一体どんな事なのか。

そのまま、【紫影】に対し言い返せなくなっている相棒を横目に。

1つ…

呼吸を1つ、大きく吐いた遊良が。今再び、『理解』した答えと共にその口を開き…

「…それは、お前を倒す為だったんだ！『もう一度』、今ここで、お前を倒す！その為に！」

「はぁ?頭でも狂いましたぁ!?私を倒す…ぷぷぷー!貴方の力でそんなこと出来るわけがな…」
「あぁ、『俺の力』じゃ無理だった!だからわかったんだよ…今ここで、お前を倒す為に必要なモノが何なのか!この瞬間の為に、『あのカード』は俺のデッキに来てくれたんだって!」
「ッ…は、はぁ!?そんなモノ、貴方のデッキにありましたっけぇ!?」
「とぼけるなよ【紫影】!砺波先生から聞いたぞ…お前に『勝った』、1人のデュエリストの事を!」
「ッ!?」

そう…

追い詰められたこの状況、切羽詰ったこの戦況、最後の最後のこの場面だからこそ遊良は気が付いたのだ。
この絶望的な状況下においても…いや、この絶望的な状況下だからこそ『希望』と成り得るモノの存在に。

…全ての事には意味がある。

『あのカード』が、一体どうしてこの祭典の『あのタイミング』で自分のデッキに入ったのか。『あのカード』が、一体どうして自分の言う事を聞いてくれるのか。
その、今まで特に気にしていなかった事や、今まで何となくで理解していた事に対し…
その全てが、今まさに遊良の中で完全に繋がったのだ。
全ての事には意味がある…ここで、ここへきて。その意味を完全に理解した遊良の思考は、追い詰められているとは思えない程に晴れ晴れとしていて―

「そ、それがどうしたと言うのです！先ほども言ったはずですよ、貴方の残りのデッキでは、もう『リリース素材』の用意など出来はしないと！それに私にはわかっている！今の貴方の手札に、『あのカード』が無いと言う事を！」
「あぁ！だから…今、引くんだ！【カップ・オブ・エース】発動！」

―！

故に…
今こそ遊良は動き出す。
遊良の発動した魔法…それは【決島】決勝第1試合の後に、リョウ・サエグサとトレードしていたカードの1枚。
『2枚』ものドローを得られるものの、絶対ではなく不確定な確立によってドローする者が決まるという…
ハイリスクハイリターンを地で行くような、デュエリアの『ギャンブラー』が好んで扱うドローカード。
…しかし、いくら手札に必要なカードが2枚も足りなかったからとは言え。
普通、勝機が見えたこの状況下での最後のドローを、『運』に任せることなど誰にだって抵抗があるはずだと言うのに…
そう、それはデュエリアの『ギャンブラー』、リョウ・サエグサほどの『天運』があればこそドローに繋がるリスキーなカード。
彼のような『天運』など、遊良は持っていないと言うのに。『極』の頂きに位置している者に、そんなリスキーな勝負を挑むなんてとてもじゃないが危ない選択とも言え…

それでも―

「ギャンブルカード…ぷぷっ！無駄無駄無駄でぇす！学生の貴方程度の力で、私にギャンブルカードで勝負を挑むですってぇ!?残念でした

ねぇ、もう展開は見えていますよぉ！その効果で貴方がドローすることは叶わない、２枚ドローするのは私のほ…」
「否！ドローするのは貴様ではない！」
「ほ？」

【紫影】の笑いを引き裂くように、今度は鷹矢が高らかに叫ぶ。
…先ほどまでの、追い詰められていた雰囲気から一転。
遊良が『何か』を悟ったその瞬間に、遊良の目指しているモノが『何』なのかを鷹矢も瞬時に理解したのか。その声はいつもの威風堂々とした、決して慄かないいつもの鷹矢の声に戻っていたことだろう。
…自信満々、傲岸不遜。
岩に挟まれ身動きは取れずとも、相棒の『何か』を誰よりも早く深く理解した鷹矢だからこそ。
天に舞う、『運命』を決める黄金のコインの軌跡を追いながら…既に勝利を確信している【紫影】の言葉など、真っ向から否定するのみ。

「確かに貴様の地力は俺達の遥か彼方にあるのだろう…だが！しかし！それでも！」

そう、鷹矢は知っている。
…確かにコレが単純なる『運』の勝負であったならば、間違いなく軍配は【紫影】に向いていた。
何せ、奴がいくら屑の中の屑であっても。それでも目の前の相手は、【王者】にも匹敵する『極』の頂きに位置した裏決闘界の融合帝であり…
それ故、いくら『格下』の者が一発逆転を狙い『運』の勝負を挑もうとも。勝負の行方は天命によって決められているかのように、『運』ではなく『力』によって強者がソレを無理矢理引っ張ってしまうと言う事を、幼き頃より祖父である【黒翼】の戦いを見てきた鷹矢は重々承知していて。

…だからこそ、『極』の頂きに位置している者に『運』の勝負を挑みたいのならば、リョウ・サエグサのような『天運』が必要不可欠ということも鷹矢は知っている。
アレほど勝利の女神に愛された男ならば確かに『運』によって勝負は出来る。しかしソレ以外の者は勝負すら出来ないのだから。

しかし…

それはあくまで、『運』での勝負に限っての事。
そう、既に鷹矢は気付いている。これは『天運』を持っている男との『運』の勝負などでは断じてない。決まるべくして決まる『ドロー』の勝負なのだ、と。
ギャンブルの処理などただの通過点。遊良の見据える勝利への『運命』は…いや、この絶体絶命の『運命』を真正面から切り裂くためには、この【カップ・オブ・エース】で確実に遊良は『2枚』をドローしなければならない。
それ故に、ギャンブルになど躓いてはいられない。その先に見据える『2枚』のドローで、必要なカードをドロー出来るかどうかという、遊良にとっては『いつもの勝負』を、自らにデッキに仕掛けたのだから。

だからこそ―

遊良は『運』には頼らない。ソレはＥｘ適正が無く、世界の全てからその存在を否定されてきた遊良だからこそ磨いてきた、誰にも負けない遊良だけの武器の証。
あの『天運』を持っている、このカードの本来の持ち主があくまでもギャンブルとしての勝負を仕掛けてくるのとはわけが違う。存在を否定され、デュエルを否定され、生きる事すらも否定され続けてき

た遊良は『運』になんて頼らない。
頼るのではなく、遊良は『誇る』。自らの運命を切り裂き、存在を否定され続けてもこれまで突き進んできた遊良だからこそ…
例え相手が誰であろうと…そう、例え【王者】であろうとも。
1枚のドローに命運がかかる状況であっても、頼るのではなく文字通り『命』を乗せてカードをドローしてきた遊良が。他のギャンブルカードと違い、どちらが『ドロー』するのかを競うこのカードの勝敗において…

そう、『ドロー』で…

「遊良にドローで勝てると思うなぁ！」

遊良が、負けるはずがない―

出た、マークは―

「マークは太陽！コインは表！俺はデッキから2枚ドローする！」
「なぁっ!?」

驚く【紫影】とは裏腹に、ギャンブルの成功に喜びもしていない天城　遊良。
それは、ここで自分がドローすることを初めから知っていたかのような当然の如し流れる所作であり…
流れるように、当然のように。遊良は自らのデッキに指をかけ、この後に控える更なるドローに、更に力を込め始める。

「で、ですがそのドローで『アレ』が引けるかどうかなんて…」
「否！引けるかどうかではない！今！ここで！絶対に！引くのだ！」
「ッ…ですが言ったはずです！もう彼にリリースを用意する力は残っていない！それに、そもそもドローできなければここで終…」
「ふん！そんなことで遊良が臆すると思うな！その程度のプレッシャーなど、遊良にとってはいつものことだからな！」

…ここで引けなければ負ける。
それは間違えようの無い確かな現実。
しかし、鷹矢の言った通り『そんな重圧』など遊良にとっては『いつもの』ことなのだ。
Ｅｘ適正が無く、メインデッキのみで戦うという事を決めた幼少の時から…
これが、このスタイルが自分にとっての生きる道、自分が生き延びる道であるのだとして磨いてきた、遊良の確立した遊良の形、遊良のデュエル。
デッキにかける指の力を、決して緩めることをせず。ここまで、『ドロー』という力を磨いてきたからこそ、絶望的な状況下であろうとも

―

「引け、遊良ぁ！」
「おう！２枚…ドローッ！」

天城　遊良は迷わない。
カードを、ドローすることに―

引いた、カードは―

「よし！俺は墓地のバルバロスとクラッキングを除外ぃ！」

ドローした中の一枚を、高らかに天に掲げながら。そのまま更に叫ぶように、高らかにそう宣言し始めたイースト校２年、天城　遊良。
そして遊良の宣言により、墓地にて眠っていた獣の王と機電の黒竜がその身を現世から消し始め…

―否

現世から消え始めたのではない。
眠りについた獣の王が、再び高らかに吼える時。機電の竜はその身を散開させ、そのまま２体のモンスターはその姿を重ね始めたのだ。
…それは融合召喚ではない。シンクロ召喚でもない。エクシーズ召喚でもない。

それは単なる特殊召喚のエフェクト。しかし更なる力を求めた遊良が、昨日にこの大空洞にて手に入れた…

「来い、レベル８！【獣神機王バルバロスＵｒ】！」

―！

【獣神機王バルバロスＵｒ】レベル８
ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／１２００

現れたのは、機電の鎧をその身に纏いし神をも打ち抜く獣の王。
…『海の星』と同様に、実力の『壁』を超えた『先』の地平へと遊良が至るための結論として導き出した…これもまた、遊良の純粋なりし『力』のカード。
召喚権を使わずに出せる、実に攻撃力３８００の相応たる『力』。立ち塞がるモノを、純粋なる『力』で粉砕せんとする、遊良の欲する『力』の象徴そのモノであり…
しかし…
いくら『力』があったとしても。
今この状況においては、ダメージを与えられずその他に効果を持たない【獣神機王バルバロスＵｒ】が逆転へと繋がる切り札かと聞かれれば、誰だって少なからず疑問を感じるに違いないのだが…

「ふ、ふふっ！い、今更そんなモノを呼び出しても意味など無…」
「意味ならある！遊良が命を賭けて戦っているのだ…俺だけが、このまま動けないままでいいはずがない！動け、俺の右腕よ！【紫影】を倒す道筋に…遊良の道を切り開けぇ！ぬぉぉぉお！罠発動、【戦線復帰】ぃ！」
「馬鹿な！手札と右腕が埋まっていては、行動なんて出来ないはずじゃ…」
「『出来ない』ではない！『やる』のだ！うぉぉぉぉお！」

けれども、コレが終わりではないからこそ。
現れた獣の王に連なるように、更に鷹矢が雄叫びを上げる。
いくら『軽石』と言い放ったとは言え、ソコから動けていない以上は鷹矢を押し潰しているこの岩々も相応の重さを持っているはず。

…けれども、ソレを承知で。

雄叫びを上げ、力任せに無理矢理に。遊良の描く道筋を、鷹矢もまた共に描くために…
岩の中から、無理矢理『右腕』を鷹矢は引き抜き。引き抜いた手が岩で裂け、擦り、切り、潰れても…
そう、自らの血に塗れてもなお―

「墓地より【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚し、その効果で手札から【グリーン・ガジェット】を特殊召喚！レッドを手札にぃ！」

―!!

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【グリーン・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／　６００

それでも痛みを放り投げ、宣言したカードによってガジェット達が蘇る。

そして―

「これで『3体』だ！遊良、使え！」
「おう！俺は3体のモンスターをリリース！」

叫ばれるは迷いの無い、天に轟く咆哮の宣言。
召喚権は既に使っていて、Ｅｘデッキを使えない遊良は【二重召喚】と言ったカードを使わなければそもそも大型モンスターを召喚することすら出来ないと言うのにも関わらず…
遊良の放ったリリースという宣言、その宣言に導かれる様にして。
機電の鎧の獣の王と、金と緑のガジェット達の、その身に纏うは渦ではなく―

「運命を切り裂く英雄よ！」

叫ぶ…
その血に刻まれた、自分の『運命』を知り―

「青き誓いをその身に刻み…」

猛る…
この地に来て培った、自分の『力』を信じ―

「天を喰らいし覇者となれぇ！来い、レベル８！」

今、悠久の時を経て。

怨敵と再び対峙した、この深遠の大空洞に…
天を揺るがす叫びによって、ソレは天より降りる威光と共に遥か彼方より現れるのか。

かつて世界の頂点にいた、かつて【紫影】を葬った天上の存在が…

今、羽ばたく―

「【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！」

―！

その時…

天が、震えた―

現れしは鮮血の羽ばたき、降臨せしは飢えの滴り。
血霧と共に降臨し、剥き出しの牙を刃へと変え…混沌渦巻く天より出でしは、竜頭を纏いし運命の英雄。

纏いし竜の咆哮で、双翼を広げ地に降りることなく空に佇み。下界を見下ろすその瞳は、一体何を映しているのか。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

それは怨敵である飢饉の竜に対峙しても、決して慄かない英雄の姿。

遥か昔、世界が鬼才の戦いに熱狂していた頃…

運命を貫く英雄と、運命を引き千切る英雄と共に、３体の【紫魔】の象徴として世界中が見惚れていたという…

世界で最も有名な、『Ｄ』の英雄の最たるエース。

「ぐ…Ｂｌｏｏ―Ｄ！忌々しい憐造の力ぁ！貴方はどうしてまた私の邪魔をするんですか！天城　遊良、私と彼の因縁を知っていてこのカードを出すなど、貴方本当にいい度胸して…」

「うるせぇぇぇぇぇぇ！俺は紫魔　憐造じゃない…だから、お前と【紫魔】との因縁なんて知るもんかぁぁぁぁぁぁ！Ｂｌｏｏ―Ｄの効果発動ぉ！グリーディー・ヴェノムを…喰らい尽くせぇ！」

そして…羽ばたく。

運命を切り裂く英雄が、【王者】たる重圧で飢饉の竜を抑え込みながら。

…ここで【紫影】に立ち向かうために、遊良にはこのカードがどうしても必要不可欠だった。

そう、遊良は理解する。【決島】が始まる直前に、このカードが自分のデッキに入ったその意味を…このカードが、自分に従い召喚出来るわけを…まだまだ未熟な自分に、どうしてこのカードは付き従ってくれるのか。

…それは【紫影】を倒す、まさに今『この時』のため―

破壊してはいけない飢饉の毒竜を、破壊せずにどうにかしてしまうという、このＢｌｏｏ—Ｄこそ遊良にとっての最適解。
他に手が残されていない遊良の手に、最後の最後に舞い降りた、正真正銘英雄のカード。
かつての表裏戦争で、【紫影】に打ち勝ったという前融合王者【紫魔】、紫魔　憐造…その血を分けた、甥という立ち位置である遊良だからこそ勝ち取る事が出来た、これまでの戦いのこれは軌跡であり…
きっと、奇跡のような巡り合いだったのではないだろうか。昨年度の決闘市の『異変』で知った、忌むべき血の繋がりが今こうして【紫影】から遊良を守っているだなんて。
…こんな光景、昨年度の遊良からすれば絶対に想像すら出来なかったはず。
しかし…その血の持つ意味が、遊良にとっては決して『良いモノ』ではなかったとしても。
それでも、今こうして助けられているというその事実こそが…奇跡のような巡り合わせの、紛れもない遊良の軌跡。

…相手の力を０にしてしまう飢饉の竜のその毒を、【王者】たる英雄がその重圧で丸ごと全て押し潰し。
運命を切り裂く英雄は、そのまま天高く飛び上がったかと思うと…全てを喰らう竜の腕を構えつつ、一直線に飢饉の竜へと向かい急降下を始める。
…怪しくうねる毒の竜にも、全く退かずに立ち向かう運命の英雄。それはまさしく英雄と呼ぶに相応しい立ち回りであり…
…『破壊』ではない。これは『捕食』。
そのまま、飢饉の竜をその毒ごと骨も残さず喰らい尽くし。
怪物を倒した英雄は、その力を自らの力へと変え始め—

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００→３３５０

そんな中で…

「ぐ…ぐぐぐぐぅ…ど、どこまでも生意気な…」

どこまでも…どこまでも往生際悪く。
本当にもう手が無いのか、何やら【紫影】が捻じれた体を静かに奮わせ始めたではないか。
…まだ、何かよからぬことを企んでいるのか。
少年たちを前に、どこまでも往生際悪く足掻こうとするその姿は…とてもじゃないが、いい大人が見せるにはあまりに醜い姿だと言うのに…

「【紫影】よ、覚悟しろ！これで貴様も終わりだ！」
「行くぞ！ＬＰを１０００払って【チキンレース】を破壊しバトルだ！
【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】で…」
「させるわけないでしょう！もう一度、今度は貴方達２人とも岩で潰してさしあげ…」

そして…

最後の決着に繋がるその瞬間―

遊良の攻撃宣言に割って入るように、叫び声をあげながら再び【紫影】がその細長く捻じれた指を打ち鳴らそうとした…

その時だった―

「いつまでも…つまんねぇ事してんじゃねぇ屑野郎ぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

―！

轟く…

【紫影】が指を打ち鳴らす直前の、その一瞬の刹那の前に―

何と【紫影】の背後、【紫影】の足元から。突如として『何か』が飛び上がり、徐に【紫影】へと殴りかかったのだ。

…轟く爆音、響く轟咆。

そう、遊良と鷹矢と、気を失っている竜胆　ミズチと【紫影】の他に…この大空洞には、確かに『もう一人』の人間が居た―

それはどれだけ傷つけられようとも、どれだけ痛めつけられようとも決して死なない規格外の生命力。

間違えるはずも無い…何を隠そう、【紫影】の背後で起き上がったのは他でもない―

「『逆鱗』!?あ、貴方まだ動け…」

「ったりめぇだろうがぁ！いい加減…吹っ飛びやがれぇぇぇぇ！」

―！

「ふぐぅっ!?」

不意をついて起き上がった『逆鱗』が、その丸太の様な腕に渾身の力を全て込め。力の限り思い切り、【紫影】の腹を殴り飛ばす。

…それはジェット機のような綺麗なアッパー、天にも昇る龍の拳。

まるで天を翔ける龍が如し、閃く突きが天を割る。

…そして、虚を衝かれたからか。

下から思い切り殴り飛ばされた【紫影】は、今度こそ『逆鱗』の渾身の一撃を避けることは叶わず。人間1人など簡単に粉砕できそうなほどに爆裂した、その規格外のアッパーをまともに喰らい天を舞い…

…竜巻のように回転し、思い切り上空に殴り飛ばされたかと思うと。

もう一度その指を打ち鳴らすことは叶わず、一瞬の大ダメージよって空中でその自由を失っていて―

「今だぁ!やれぇ、遊良ぁ!」

「ッ!?」

そうして…

反射的に叫ばれた、劉玄斎の叫びに呼応するように。

最後の卑怯な手を、渾身の力で打ち破られた【紫影】へと…

そう、殴り飛ばされ空を舞う、丸腰となった【紫影】へと―

「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇ！Ｂｌｏｏ―Ｄで、【紫影】にダイレクトアタック！」

ソレは、轟く―

「鮮血の…ブラッディ・フィニィィィィィィィィィシュッ！」

―！

鮮血を固めし槍雨が、無限となりて【紫影】を貫く。
その勢いは豪雨を超え、凄まじき勢いと化して大空洞の岩肌を貫いてもなお止まらぬ威力となりて…

「ぎょぇぇぇぇぇぇぇぇ

そのまま、大空洞を貫く血の槍雨が外界まで到達し。
血霧の槍雨の嵐に飲み込まれた『何か』が、この上ない汚い悲鳴を大空洞へと残響させたかと思うと―

【紫影】　ＬＰ：１７５０→０

―ピー…

千切れ飛んだ【紫影】の腕と、その場に落ちたデュエルディスクによる無機質な機械音が。
今度こそ、ソレが『本物』の【紫影】の悲鳴だということを知らせながら…

紛れも無く、デュエルの終着をここに知らせていた―

―…

ｅｐ９９「裏側の真実」

暗い…とても暗いどこかの場所。
ここが『どこ』であるのか。ソレを知る者などこの世界には居ないのではないかとさえ思える、暗闇がどこまでも広がっているそんな『とある場所』に…

「戻りましたよぉ、ええ。」

１人の男の、捻じれた声が零された。

「いやぁ、ホント疲れましたねぇ。やる事の多いこと多いこと…けどやぁっと終わりました。はぁ、これで少し休めますかねぇ。」

飄々と、それでいてどこか疲れているかのように。
胸糞悪くなる声質でそう言葉を零すこの男の声は、どこからともなくこの漆黒の空間に現れたにしては嫌に馴染んでいるかのような闇との一体化を見せながら…
何やら一仕事終えてきたかのような態度を見せたかと思うと、深く溜息を吐き始め…

「…さて、これで『契約』は果たせましたかねぇ。全く、面倒な仕事を押し付けられたものです、ええ。」

それはこの世の誰よりも捻くれているとさえ思える、性根からして捻じれきっているであろう他人に苛立ちを与える不躾な声。
およそ『人間』が発しているとは思えないような、耳に入れた瞬間に嫌悪を覚えてしまうようなその声はあまりに耳障りでどこまでも気分が悪く…
…そんな捻じれた声の持ち主など、この世界には該当する者は１人しか存在しない事だろう。

そう、この光なき漆黒の空間に現れたのは他でもない…

胡散臭さを具現化したような、悪意に満ちた紫のスーツ。
異様に長いその手足と指と、骨と言っても差し支えないほどに絞り込まれたその肉体には『無駄』を通り越して『必要』なモノすら追いついてはおらず…
そして、ソレ以上に特徴的なのは…何処からどう見ても第一印象が『捻じれている』と思ってしまう、その気持ちの悪い佇まいだろうか。

そう、このどこかもわからぬ漆黒の空間に、慣れ親しんだように飄々と現れたのは他でもない…

世界最悪の大犯罪者、性根の腐った捻じれた男、裏決闘界融合帝―

【紫影】―

―竜胆　蛇蝎

「しかしまぁ、流石に人使い荒すぎじゃありませんかねぇ？不意に目が覚めたかと思えば、いきなりあんな大仕事を押し付けられるとは…全く、自分が生き返ったという事実を飲み込む暇もありません、ええ。」

しかし、一体【紫影】は『何』へと向かって声を漏らし続けているのだろう。
現在の時間で言えば、未だ【決島】の中継が急に途切れ世界が混乱の中にあり…そしてソレ以上に、【決島】が行われていた島はまだまだ乱戦の中にあるはずだと言うのに…

―そう、ついさっき、今この瞬間まで、【紫影】は紛れも無く【決島】

の中にいたはず。

いや、【決島】の中と言うか…そもそも刹那の寸前まで、【紫影】は間違い無くイースト校の２人の少年達とモンスターが実体化した中で命がけのデュエルをしていたはずなのだ。

…そうだと言うのに、全くもって傷付いてもいない裏決闘界の融合帝、【紫影】。

デュエルディスクを装着していた左腕は、最後の【Ｄ―ＨＥＲＯ Ｂｌｏｏ―Ｄ】の実体化した攻撃によって千切り飛ばされたはず。

けれども、ここにいる【紫影】は五体満足であり…学生達の【決島】を滅茶苦茶にした罰を受けたはずなのに、どうして【紫影】は何事もなかったかのようにして謎の空間に『帰って』きたと言うのか。

突如としてこんな空間に現れ、そしてこの空間に居るであろう『誰か』へと向かってそう口を開いている様子は…

間違いなくこの世のモノとは思えない程の狂気となりて、どこまでも虚無の中へと放り続けられていて…

すると…

【紫影】が、その言葉を吐ききったからか―

突如として、何もなかった黒の空間の中にもう１つ濃い『黒』の何かが現れたかと思うと。

どこから、ともなく…

更なる声と姿が、現れた―

「カカッ、生き返らせて貰ったっつーのに文句言ってんじゃねーよ。つーか、勝手にコトをデカくしたのはテメーだろうが。」
「…まさかあそこまで大規模になるとは想定外だったんですよねぇ。時の流れは恐ろしいモノです、私の時代とは大違いですねぇ、えぇ。」
「ま、けどとりあえず及第点の出来だったって言っといてやるぜ。今だけはテメェを褒めてやってもいい。感謝してもいいんだぜ？」

【紫影】の言葉に応えるように、現れたのは『人』の姿。
それは漆黒の空間の虚無に良く響く、特徴的なる渇いた笑いと…
そして、この暗闇の空間の向こうから。まるで『酔っている』かのようにしてフラりと現れたその姿は、どこか歴戦を感じさせるような歴戦の男の声であり…
また、【紫影】の捻じれた声にぶつかってもなお折れることも曲がる事も歪む事もなく。その声は、他の誰にも染まることの無い強い芯のようなモノが感じられるではないか。

…そう、現れたのは、歴戦を感じさせる凄まじき存在感。

この漆黒の空間に現れ、【紫影】と会話し始めたのは紛れもなく―

豪放磊落、天下無双、世界最強のエクシーズ使い…

―エクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰

「…貴方に褒められるなんて違和感しかありませんねぇ。元々敵同士だったというのに。」
「おうおう、相変わらずの捻くれモンだなテメーは。折角俺様がテメェみてぇな屑を褒めてやったっつーのによ。」
「ソレですよソレ。私の感覚では、ついこの前まで殺し合いをしていたと言うのに…いきなり老けた貴方が現れたかと思えば、フレンドリーに接してくるなんて鳥肌しか感じませんって。」
「カッカッカ、別にフレンドリーになんて接してねーだろーが。テメーだって自分が死んでたってことをすぐ飲み込みやがってよぉ…狂って襲ってきたら躊躇無くブッ殺してやろうと思ってたってのに、流石は『狂人』の蛇蝎坊だこったぜ。」
「…ま、歳を取っていても『貴方』だとすぐに分かったから大人しくしていたんですが…しかし、いきなり生き返ったかと思ったら【黒翼】、貴方の弟子を鍛える踏み台になれだなんて一体何の冗談かと思いましたがねぇ。貴方が弟子…ふふっ、時の流れを感じましたよ、ええ。」

しかし、【紫影】の言った通りに元々は敵同士だったはずの【黒翼】と【紫影】が、一体どうしてこんな場所で落ち合い会話を重ね始めたのか。
決して相容れぬはずの間柄、表と裏の頂点として文字通り『殺しあった』はずの仲。
鷹峰がどうやってこの漆黒の空間に現れたのかは定かでは無いが、その口ぶりから察するにおよそ【黒翼】が【紫影】と繋がっていたのは最早確実絶対であり…
【裏決島】という、学生達にとって地獄を作り出した張本人である裏決闘界の融合帝【紫影】に対し…よもや表の王者たる【黒翼】が、裏で繋がっていただなんて、決して許されざる事実ではないと言うのに。
けれども、そのまま鷹峰はどこまでも普段通りに乾いた笑いを零しつつ。
正反対の世界に生きるはずの二人は…いや、二匹は…

更に続けて、言葉を交わす。

「カカッ、生き返れたってんだから文句言うんじゃねぇってんだよ屑野郎。つーか、俺が鍛えろっつったのは遊良だけだっただろうが。任せろっつーから任せたけどよ、相変わらず余計な事ばっかしやがって。」

「おや、派手にやって良いと言ったのはそちらのハズですがねぇ。…ふふっ、折角の【決島】と言う舞台、コレを利用しない手はありません。…ま、【白鯨】の邪魔が入るのは予想していましたが、まさかトウコ先輩までしゃしゃり出てくるのは私も予想外でした。おかげで余計な労力を使わされました、ええ。」

「んで苦し紛れに岩で押し潰したってか？屑らしい下らねぇ手だぜ。」

「だって仕方ないでしょう？貴方達に科せられた『制約』の所為で、思うようにデュエルできなかったんですから。なんですか、『リーシャドール』や『ノエルシャドール』、その他色々使わせてもらえないなんて。」

「カッカッカ、それぐれーしねーとテメエ、好き勝手にやりすぎるだろーが。ガキ相手には良いハンデだったろ。」

話す…

「…モノは言い様ですねぇ。子ども達の相手ならまだしも、『烈火』や『逆鱗』を抑えるのは本当に大変だったんですからね？使えるモノかき集めてようやくでしたよ、ええ。」

「まっ、トウコのババアが出しゃばって来るのはコッチも誤算だったがなぁ。けど無理もねぇか。烈火兄ぃの怨みはとんでもなく深いみてぇだしよ。カカッ、何ならそのまま消されてても良かったんじゃねぇか？」

「…簡単に言ってくれますねぇ。トウコ先輩とのデュエル、本気でどうしようかと思ったんですからね？貴方達に課された『誓約』の所為で本当にギリッギリで…ま、『制約』のせいで誰も殺せないし、あんな

子供だましの『軽石』ではどうせ死なないのはわかってましたが…殺す気で動かないとコッチが消されてしまいましたからねぇ、あの時。」
「あ、つーかテメェ、トウコのババアだけじゃなくウチのまご…クソガキまで潰しやがったろ。」
「だから別にそれぐらいいいじゃないですか。あんな『軽石』じゃ、どうせ潰されたって死なないんですし。それに貴方の孫なら殺しても死ないでしょう?…しかし、たかが孫と正直侮っていましたが、私の方と違い中々どうしていい素材をお持ちのようで、そちらの孫は。」
「ケッ、あんまりクソガキを褒めるんじゃねぇよ。デュエルの最中も言ってやがったけど、あんまり言うと調子に乗るだろうが、あのクソガキ。」
「…と言うより【黒翼】、そもそも貴方の弟子を鍛えるだけなら何も私でなくとも良かったのでは?【黒獣】でも【白夜】でも、裏の適当な実力者を生き返らせてあてがえば…」
「いいや、テメェだからこそだぜ【紫影】。テメェが一番下種で小物で性根が腐ってて…そんでもって『悪意』しかねぇテメェだからこそだ。ぬるま湯しか知らねぇ遊良やクソガキの相手をさせるには、屑のテメェが一番持ってこいだったんだよ。」
「ふふっ、褒められている気がしませんねぇ。」

話す…

「ま、それに【白夜】のジジイは生き返らせたとこで砺波への恨みしかねぇし…【黒獣】の野郎にいたっては、奴さんまだ生きてっからなぁカッカッカ。」
「ほ?【黒獣】…え、鋼真さん、生きてるんですか?」
「おう、奴ぁ今もデュエリアに隠れ住んでんぜ?テメェも【決島】ん時に【黒獣】の孫のデュエル見てんだろうが。」
「孫…あぁ…あぁ!だから鍛冶上　刀利に何やら見覚えがあったんですねぇ。【地の破王】…確かに彼、雰囲気が鋼真さんに似ていましたものねぇ、ええ。」

「つーか、そもそも【白夜】も【黒獣】もガキにぶつけたら抵抗も出来ずに潰されしまうだろうが。だからガキを甚振る趣味のあるテメェが適任だったってだけで、最初からテメェ以外にゃ選択肢が無かっただけだっての。カッカッカ、流石は世界最悪の犯罪者だこった。２００人以上殺した奴は躊躇無くガキども甚振りやがる。屑過ぎて反吐がでらぁ。」
「…私も、自分勝手な貴方にだけは屑だなんて言われたくないんですがねぇ…まぁ、否定はしませんが。」
「カカッ、しかもご丁寧に、遊良だけじゃなくウチのクソガキも底上げしてくれるたぁ、俺様からしても嬉しい誤算だったぜ。…岩で潰した事は置いといても、おかげで予想していたよりも早く階段を上がってきたぜ、あのガキ共。」
「…貴方の孫は勝手にしゃしゃり出てきただけでございます。…それより底上げも何も、予選の時点での天城　遊良の実力がまさか『壁』を超えた程度だった事の方が驚きました。貴方の弟子と言うから期待していたと言うのに…」
「あぁ？そりゃどう言う意味だ。」
「そのままの意味ですよ。いくら貴方に依頼された事とは言え、『壁』を超えた程度の実力では適当にデュエルしたところで簡単に潰れてしまってましたからねぇ…少なくとも『先』には進んでいてくれないと、私も甚振るにも甚振れなかっただけでございますよ、えぇ。」

話す…

何もない空間で、交わされる会話は宿敵との話し合いと言った雰囲気などでは断じてなく…
どこか懐かしさを交わしているかのような、どこか同窓会のような雰囲気にも似たモノとなりて重ねられていることだろう。
まぁ、その会話の中には馴れ合いや気を許しているような素振りは無く、お互いに心を全く許さずにただただ威嚇し合っているだけにも見えるものの…

「…ま、ルキをあんな目に遭わせるたぁ俺様もちっと想定外だったがな。…ルキになんかあったら俺がテメェを殺してたぜ。まっ、俺様の弟子ならテメェの愚策ぐれぇ捻じ伏せるなんざわけねぇがな。」
「ふふ、結果的にあの少女も生きているんだからいいじゃありませんか。」
「おう、ソレだソレ。何が『結果的に』だ。昨日、ルキの奴ぁガチで死にかけてたじゃねーか。制約だ何だつって誤魔化そうとしてんじゃねぇよ。俺様は誰1人として『殺すな』…そう言ったはずだぜ？」
「そう言われましても…『赤き竜神』の少女が死にそうになった事に関しては、別に私の所為じゃありませんし。今回彼女に関しては私、完全にノータッチですからねぇ、ええ。」
「あ？テメェがルキに何かしたから神が暴走したんじゃねぇのか？」
「ふふっ、ソレとコレとはまた別問題なんですよねぇ。その辺りは【無垢】と世界のソレはソレはややこしい話がうんぬん…」
「あー…またテメェら『裏』の訳わかんねぇ事情って奴か？表裏戦争ンときもゴチャゴチャ言ってたが…」
「ええ、ええ、その通りでございます、ええ。」

それでも、何もない『黒』の空間で淡々と交わされているのは、他の誰も知らない『裏側』の真実。
…あの地獄の様な【裏決島】を体験していた当事者たちがソレを聞いたら、怒り狂うどころの話ではない。

そう、誰が気付けるものか―

学生達が犯罪者たちに襲われ、今もなお混乱が続いている最中の【裏決島】…
その地獄を作り出した張本人である【紫影】に、あろうことかソレを指示したのがエクシーズ王者【黒翼】だったという、その事実に。
…いや、鷹峰の口ぶりと、【紫影】の悪気の無い物言いから。

あくまでも【裏決島】の惨劇は【紫影】が勝手にやっただけで、【黒翼】が直接あの惨劇を指示したわけではないのだろう。
それでも、多数の怪我人に攫われた学生達、下手をすれば死傷者が出ていたであろう【裏決島】に、エクシーズ王者【黒翼】が関わっていただなんて決して許されざる事ではないはずであり…
…また、どこまでが真実でどこまでが嘘なのか分からぬ【紫影】の言葉が、更につらつら述べられるものの。
【黒翼】と【紫影】の会話の中に、何やら反応するワードが出てきたからか。
不意に、重ねられ続ける会話に割って入る様に…

『もう1人』の声が、闇から聞こえてきて―

「別にいいじゃないですか鷹峰さん。昨日も今日も、中々に面白い見世物だったんですから。」

鷹峰たちの会話に割って入る様にして、突如この漆黒の空間に現れたのは対照的なる『女性』の声。
そう、先の天宮寺　鷹峰のように…この空間に、新たにもう1人の…否、もう1匹のモノが、不意に声をかけてきたのだ。
それはこの漆黒の空間だからこそ余計に映える、夜よりもなお深い漆黒の髪と…
暁よりも影に溶け込む浅黒い肌が、その美しい顔立ちと魅惑的な肉体をより一層妖しく見せつけている、あまりに高圧的過ぎる存在感を持った存在。
かつて当時の王者であった前【紫魔】である紫魔　憐造と、【白鯨】と呼ばれる砺波　浜臣、そして鷹矢の祖父である【黒翼】天宮寺　鷹峰までをもその手で降したという正真正銘の【化物】…

―釈迦堂　ラン

「【無垢】…懐かしい名だ。」
「あぁ、そういえば釈迦堂　ラン…貴女、【無垢】を倒してしまったんでしたっけ？ホント、とんでもない事をしてくれましたよねぇ、ええ」
「そう言われてもね。年甲斐もなくはしゃいでしまった結果だよ。…そう言えば貴方は【無垢】を蘇らせると『アレ』に言っていたが…」
「あぁ、ソレは言葉の方便というモノですよ。それに、あながち間違ったことはやっていませんし。【無垢】は蘇らせるとかではないですからねぇ…あくまで概念といいますか記録と言いますか…」
「あぁ…フフッ、確かに。」
「何言ってんだテメェら…理解できねぇ。」

不意に現れた釈迦堂　ランと、それに応じる【紫影】との会話は、理解し難い内容となりて漆黒の空間に消えていく。
その会話の内容を理解出来る者など、およそこの世には居ないのではないかとさえ思え…
…釈迦堂　ランのみが知る、裏決闘界の皇帝【無垢】の最期。
…一体、過去に何があったのか。一体、【無垢】とは何なのか。
それは今この場ではこれ以上詳しく語られぬ事とは言え、それでも裏決闘界の【三帝王】として【無垢】に関わりがあった【紫影】もまた、ランと同じだけの見解を持ちつつそれに同調する素振りを見せつけるだけであり…
…すると、【紫影】へと視線を向け直した釈迦堂　ランが。
再度、目の前の捻じれた男へと向かってその口を開き始めた。

「フフッ、【紫影】、やはり貴方を蘇らせて正解だった。鷹峰さんの言う通り、面白いモノが見れたからね。」
「…【邪神アバター】…便利なカードですよねぇ。死者の魂を呼び戻し、闇で仮初の肉体を造り死者をこの世に生き返らせるとは。」

「蘇ると言っても、半分は私の操り人形のようなモノだがね。それに、誰でも蘇らせられるわけでもない。」
「あー…邪神に魅入られる程の実力と、現世に相当の執念を持った魂だけが肉体を与えられる、だったか？…カカッ、れんぞーと言い【紫影】と言い、スマした顔してても実は執念たらたらじゃねぇか。」
「やれやれ…【黒翼】、やはり貴方は苦手です。私はまぁ…別にこの世に未練なんてありませんでしたけどもねぇ、死など単なるアクセサリー…死んだら死んだで、私という存在がこの世に生きていたという証明をしてくれるだけの話ですので、ええ。」

また、ランたちの会話からは俄かには信じがたい事実が淡々と零されるものの…
今この空間には、『蘇らせる』だとか『生き返った』だとか言った超常的なる非現実的な『異常』に対し、口を挟む者など存在すらしないのか。
釈迦堂　ランの持つ『邪神』…一度だけ、天宮寺　鷹矢とのデュエルにて使用したソレとはまた違う『神』の名を1つあげつつ。
この『異常』な事態を引き起こしたであろう張本人、釈迦堂　ランは更に続けて…

「昨日の『赤き竜神』を賭けた天城　遊良のデュエル…それに『王』と弟子達の決勝に【裏決島】…この二日間の催しは実に良い退屈凌ぎになった。いい見世物だったよ、【紫影】。」
「釈迦堂　ラン…貴女も実に物好きですねぇ。出来るだけ『派手』にやれと言ってくれたのも、単なる『退屈凌ぎ』だったとは。」
「ふふっ、あなたのおかげで天城　遊良と天宮寺　鷹矢…彼らが着実に育ってきているのがわかった。この先が実に楽しみだ。」
「ケッ、あの馬鹿弟子ども、俺様から言わせればまだまだだぜ。手ぇ抜いた【紫影】相手にいい様にボコられやがって。」
「…私も何度か死にかけたんですがねぇ。それに手を抜いたも何も、ソレもコレも【黒翼】、貴方の『誰も殺すな』という制約と、誰が相手

でも『ギリギリ』になってしまう枷を掛けられた所為なんですが…」
「あぁ？蘇らせたつっても、別にテメェに好きにさせるつもりなんざハナからねぇんだよ。自分が昔何やってきたのか忘れたわけじゃねぇだろ？」
「…だから昔と言われても、ついこの間のような感覚なんですがねぇ…」

そう…誰も知らない真実が、ここにはある。
それは紛れも無く、今回の学生達の祭典を襲った恐るべき事態の元凶が、紛れも無く釈迦堂　ランの指示であったということに他ならない。
しかも、ランは言った…『良い退屈凌ぎになった、いい見世物だった』…と。
アレだけの惨劇、アレだけの惨状を【紫影】に指示しておいて、まさかその実態がよもや【化物】の退屈凌ぎであっただなんて、きっと誰であろうと納得できるわけがないと言うのに。
退屈に塗れた【化物】の渇望、学生達の身に何が起ころうとも、自分には関係無いのだとして…
自分の欲求の結果あの地獄が生み出された事に対し、犯人である【化物】はどこまでも悪びれも無く。寧ろ清清しいまでの満足感を得ながらも、どこまでもただ虚無に塗れるのみ。

「しかし、流石は裏決闘界の融合帝だよ【紫影】。制約を掛けられてなおアレだけの催しが出来るとは恐れ入った。」
「…ふふっ、ご主人様に楽しんでいただけたのなら幸いでございます。…とは言え、私の描いたプランからは大きく外れてしまいましたが…」
「あ？おいおい、あんだけ好き勝手やってた癖に、最初はどんな筋書きだったんだ？」
「えぇ…私の描いたプランでは、目の前で幼馴染の少女を失った天城遊良はその怒りと絶望で一度は心折れるものの、私への復讐心に

よって『先』へと至り…怨嗟に飲まれ、私を殺しに向かってくる…と言ったモノだったのですがねぇ。まさか『プラネット』を従え自力で『神』を抑え込むとは驚きました。」
「フッ、こんなにも早く私が預けた『プラネット』を扱えるようになるとは。だから鷹峰さんの弟子達は面白い。…さて、コレで貴方もとりあえずは合格と言った所か…」
「…恐縮ですねぇ、ええ。」

そして…
未だ謎を数多く残しつつも。
ソレらをこれ以上この場で語り合う気は【化物】達にら無いのか、それとも漆黒の空間で交わされる密会もどうやらそろそろ終演の時間が近づいてきたのか。
人間ではない【化物】達も、話の区切りがついた雰囲気を見せ始めたかと思うと…
徐々に…そう、ゆっくりと。
この『どこでもない』謎の空間が徐に揺らぎを見せ始め、ソレに応じて【紫影】が仕事を全うしたかの様な開放的な気持ちを見せ始めたではないか。
そのまま、最後に再度。
【紫影】は、2匹の【化物】達へと向かって口を開き始め…

「では【黒翼】、貴方と交わした契約はコレでひとまず果たしましたよ？ふぅ、やぁっと自由になれますねぇ。『弟子とデュエルして鍛えろ』という、貴方らしくもないぬるい契約はこれで終…」
「いいや、まだ終わってねぇぜ？」
「…はい？」

いや…
まだ、終わってはいない―

「【紫影】、貴方には【決島】の他にまだまだ働いてもらう事がある。…いや、蘇らせたのは鷹峰さんではなく私なのだから、寧ろこっちが『本命』だがね。」
「あぁ…なるほど…ふふ、あの【無垢】を倒したという【化物】…いいでしょう、デュエルで私を再度冥界に送り返すというわけですか…生憎、デュエルディスクは置いてきてしまったわけですが…」
「いいや、それも違う。」
「…ほ？」

契約完了に際し、どこかへと消えていこうとした【紫影】を天宮寺鷹峰が止めたかと思うと。
徐に、今度は釈迦堂　ランが【紫影】へと向かって声を投げかけ…
「私は『合格』と言ったはずだよ？【紫影】…死すら自らのアクセサリーと言い張る、捻じれた思想を持つ貴方とのデュエルもそそられるが…ソレは私の『願い』が果たされてから、ゆっくりと味わわせてもらうとしよう。」
「…願い？」

謎の空間の揺らぎを止め、【紫影】に再度『話』を持ちかけ。
…一体、ランは【紫影】に再び何を命じようと言うのか。
【裏決島】という、ろくでもない最低最悪の地獄を作り出した張本人へと…更なる仕事を命じるなど、とてもじゃないが正気の沙汰とは思えないと言うのに―

そうして…

「カカッ、そもそもディスク置いてきたのもわざとの癖によ。お前さ

ん、スターヴ・ヴェノム置いてくるのも目的の一つだったんだろ？」
「えぇ、まぁそうなんですが…それで釈迦堂　ラン、貴女の願いとは一体…」
「ふふっ、ゆっくりと説明してあげるよ。折角『仲間』になったのだから。」

誰も邪魔者が居ない漆黒の空間、およそ常人は存在できない謎の場所で…

ランは怪しく…そして妖しく、『何か』を待ち遠しく望みながら―

「さぁ、共に世界を面白くしよう。」

…と、危なげにそう語り始めたのだった―

―…

ｅｐ１００「終局、そして…」

【決島】の中継が切れてから数時間。
島の外部に居る【決島】の関係者たちは、一体【決島】で今何が起こっているのかも分からずに、ただただ狼狽えているばかりであった。

…何せ、あの規模の『竜巻』。

そう、一体誰が予想できたというのか。【決島】の決勝戦が行われ、とうとう決着となったと思われたその直後に…

突如として、巨大な竜巻が【決島】を飲み込んでしまうだなんて―

島の外のスタッフ用のクルーザーで、中継や配信、スケジュール管理やその他諸々の仕事をしていたスタッフ達だって自分達の目を疑ったに違いない。突然『島』との連絡が取れなくなったと思ったら、『島』がいきなり竜巻に飲み込まれたのだから。
沖合いに停泊していたからか、スタッフ達のクルーザーに一応被害は無いものの…
それでもスタッフ達とて、あの竜巻に対し『島』に強行突入できるはずもなく。島の外から干渉も出来るはずがなく、内部に連絡を取ろうとも何故か『島』の中にいる者たちに連絡がつかないためにただただ狼狽えるしか出来る事がなかったのだ。
…衛星回線よりも確実な強度を誇るはずの、デュエルディスクの連絡回線すら島にアクセスは出来ず。
凄腕のエンジニアばかりが呼び寄せられているというのに、この海洋にいる誰もがあの竜巻の中、島の内部がどうなっているのかを理解出来ないで居て―
それに、全世界…
突然中継が切れてしまった、【決島】を見ていた全世界の観客達もま

た『何』が起こっているのかを知りえるはずも無いために…一部地域では、中継を回復させないＴＶ局に対し直接抗議から暴動にまで発展している地域もあるとかないとか。
それ故…本社からは、早く中継を復活させろという圧がかかるのみ。
しかし、そんな事を言われてもどうする事もできない現場スタッフ達もまた…
黒雲と荒波と轟音だけが暴れ狂っている、この危険な海に浮かんでいるしか現状は取れる行動が無く。

…けれども、きっとスタッフ達も夢にも思うまい。

そう、今、現在、あの島を飲み込んだあの『竜巻』の中で…
島に取り残された学生達が、犯罪者たちに襲われているという、地獄のような【裏決島】なるモノが行われているだなんて―
…スタッフ達は知らない、世界中の観客達も知らない。
今現在、あの島の中では突如島を乗っ取った【紫影】と名乗る男によって、学生達と犯罪者集団達が実体化したデュエルにて戦っている事なんて、島の外にいる者たちは誰１人として知る由がないのだ。
それ故、竜巻を消し飛ばす方法などあるはずもないこの現状では、目の前の現実すら理解できずにただ荒れた海から離れることしか取れる行動がないままであり…
解決の目処など立たないままに、すでに数時間経過していて。
…もうすぐ日が落ちる。本当ならば、既に閉会式まで終わって撤収しているはずだった時間帯。
島の中は、一体どうなっているのか…学生達は無事なのか…

何もわからぬ、何も出来ぬ、島の外の海洋では、そんな無力な時間だけが刻一刻と過ぎていくのみであり…

そんな、外からは何が起こっているのかもわからぬ【決島】の『内部』。

その、竜巻に隔離された【裏決島】が行われている島の海岸に…

『…出でよ。』

―突如として誰かの…いや、『何か』の声が零された。

そして―

―！

響くは轟音、それも竜巻の風の音など掻き消すほどの猛々しい音の圧。

海岸に立ったその『何か』が、島を取り囲んだ竜巻を見据え…そして、ポツリと言葉の様なモノを零したかと思ったその刹那に…

なんと島を覆っている竜巻が、悲鳴のような唸りを上げて更に激しく暴れ始めたではないか―

…しかし、『倍』になった風の音に反し。

竜巻の勢いはむしろ『倍』になってはおらず。悲鳴のような風の唸りとともに、寧ろみるみるうちにその勢いを弱めていっているようでもあり…

「…さて、ひとまずコレでいいでしょう。あの竜巻を起こした張本人が消えたのだ。制御されていないモノならば消すのは容易い。」

そんな、悲鳴を上げて弱まっていく竜巻を見て。再度小さく、海岸に立っていた『その人物』がそう呟いた。

そこに居たのは紛れも無い、イースト校理事長…

元シンクロ王者【白鯨】、と呼ばれたイースト校理事長の砺波　浜臣であり…

けれども竜巻を見据えている砺波の雰囲気は、およそ人間の物とはとても思えない程に静かなるも深く重く。

あの人知を超えた竜巻を、まるで己の力で消してしまったかのような言動と共に、あまりに異質なるモノを纏っていて。

…そして、ゆっくりと消えていく竜巻。

島の中に居る人間は、学生や犯罪者たちを含めてもれなく全員その光景に魅入っているに違いない。そう、竜巻が消えていくその光景は、最初に竜巻が巻き起こった時と同じような衝撃となりてソレを見ている者の目に映っていることは言うに及ばず…

島の外、海洋で、力なく消えていく竜巻を見ているスタッフや関係者も。

島の中、戦場で、轟音と共に徐々に消えていく竜巻を見ている学生達も。

誰もが消えていく竜巻を見て、何が起こっているのかわからぬものの…

それでも、確かに消えていく竜巻が紛れも無くこの騒動の1つの終わりを表しているのだろうと言う事は、渦中にいた学生達の誰もが感じているに違いないことだろう。

…一体、砺波は『何』をしたのか。

その口ぶりから、あの島を取り囲んでいた竜巻を消したのは間違い無く砺波　浜臣ただ一人。

しかし、人知を超えた巨大なる竜巻を、砺波がどうやって消したのかは今の段階では誰にも知る由もないことであり…

そうして…

「予想通り【紫影】は逃げたか…まぁいい、また現れるだろう。その時こそ…」

1つ…ただならぬ圧力を持った声を、ポツリと1つ零した砺波は。なんと初老も過ぎたその片腕で、海岸近くに倒れていた自分よりも一回り大きな『スキンヘッドの大男』を軽々と抱えたかと思うと…

自身が消した竜巻を、深い海から覗き込んでいるような鋭き視線でどこまでも重々しく見据えながら。

ゆっくりと、森の方へと戻っていったのだった―

―…

山中―

「…バトルだ！【スクラップ・ドラゴン】でダイレクト…」

「あふっ、そうは問屋が卸しませぬ。3枚目の【速攻のかかし】の効果はつど…」

「…そうはさせない！速攻魔法、【抹殺の指名者】を発動！デッキから

【速攻のかかし】を除外して…」
「でしたら【見切りの極意】を発動でありんす。【抹殺の指名者】の効果を無効にいたし…」
「…それもさせない！カウンター罠、【神の宣告】を発動！ＬＰを半分払って、【見切りの極意】を無効にする！」
「おや…」

野生の木々が群生する、自然生い茂る山肌の斜面の途中。
そこで、まさしく天上の者同士のあまりに激しいデュエルが…ギャラリーの一人も存在せずに、ただただ激しさのみを増しながら行われていた。
…それは紛れも無く、決闘学園デュエリア校の青年、鍛冶上　刀利が戦っているが故の壮絶なる決闘の軌跡。
この世界における６人の『王』の１人、地属性を統べる『地の破王』と呼ばれる鍛冶上　刀利は…
イースト校２年の天城　遊良と、同じくイースト校２年の天宮寺　鷹矢をこの【裏決島】の諸悪の根源へと送り届けるべく。
島の中央に聳える高い山にまで付き添いつつ、ここへきて満を持してとうとう目の前に立ちはだかった恐るべき強敵、デュエル傭兵集団『七草』が１人、ナズナ・ハイラと終わりの見えないデュエルをずっと行っていたのだ。

「…これで【スクラップ・ドラゴン】の攻撃は有効！今度こそ食らってもらうよ、崩壊のデストロイ・ブラス…」
「いいえ、それは遠慮申し上げるでありんす…ダメージ計算時に手札の【クリボー】の効果を発動。【クリボー】を捨てダメージを０に…」

―！

しかし…
『地の破王』と呼ばれる、この世界に選ばれた６人の『王』の１人であ

る刀利の攻撃を激しい攻防の末に難なく防ぎながら。
刀利と対峙している花魁…『七草』が一葉、ナズナ・ハイラの顔色は、その化粧に隠され全く持って変わりもせず。
…その、圧倒的なる花魁の立ち振る舞いと佇まい。
それだけで、ここまで刀利の攻撃の全て防ぎつつ…ここまでＬＰを『1』も削らせず、淡々とデュエルを続けているこの花魁の力が果たしてどれだけの『高み』にあるのかを…ギャラリーのいない山奥なれども、きっと誰の目にも明らかに写していたに違いないことだろう。
まぁ、この場には刀利とナズナの他に、デュエルを観戦するようなギャラリーなど居はしないのだけれど…
それでも、刀利の激しい攻撃を前に眉1つ…瞼1つ動かさぬ花魁のその落ち着き様は、このナズナ・ハイラと名乗った女性もまた相当の修羅場を潜り抜けてきたという証明となりながら『地の破王』の行く手を悉く封じ続けているのか。

「あふっ…『あの時』から5年…良い、良い顔をするようになりんしたなぁ刀利坊。」
「…ナズナ先生、貴女は相変わらずですね…相変わらず、誰にも心を許していない…」
「おや、いっちょ前にイイ台詞を吐くようにもなりもうしたか…坊の成長は早い早い…わっちも歳を取ったはずでありんす…」
「…」

平行線、水平線。
誰にも心を許さぬ花魁と、誰とも分かりあえない孤独なる『王』の会話は決して交わることはなく…
過去…デュエリアの街が大炎上を起こした、デュエル傭兵集団『七草』による襲撃事変。
その、過去に交わった事のある因縁のある者同士のデュエルが、今こうして時を経て【決島】にて行われているのは果たして一体なんの運命の悪戯か。

それは今この場では語られぬ、『別の誰かの物語』での出来事なれど…それでも、この花魁は一体これで『何度』刀利の攻撃を凌いできたと言うのだろう。
そう、このデュエルが始まってからずっと『そう』。
２０ターン耐えれば自動的に勝利となる、【終焉のカウントダウン】を発動してからずっと刀利の攻撃を耐え続けてきた『七草』が一葉、ナズナ・ハイラ。
…これで、実に１６ターンが過ぎた現状。
いくら【終焉のカウントダウン】を発動したことにより、守りに特化すればいいと言えども。この世界によって勝利することを義務付けられている『地の破王』を相手に、それ以外のデュエリストがこれだけの守りを見せているというのも…
ソレはソレで現実離れした状況であることに違いは無く、学生の枠には収まらないほどの実力を持った刀利と、ソレに拮抗しているナズナ・ハイラのデュエルはまさに規格外の一言と言えるのであって。

「…とは言え、些か成長しすぎているようでありんすなぁ…これはもう…わっちでは、主さんには勝てないかと…」
「…貴方達『七草』がデュエリアを襲ってから、僕達にも『色々』とあったんだ。今度はもう、『七草』の好きにはさせないよ。」

…まぁ、それでもお互いに天上の力をその身に宿す規格外のデュエリスト同士。
これまでの状況と、今現在の状況と…そしてこれからの状況を全て分析した結果、この１６ターンの間に守りの札を多量に使わされたナズナ・ハイラには自分の方が分が悪いということが既に見えている様子。
後は、刀利が最後の攻撃に用意している手札によって…
きっと、次の１８ターン目の刀利の攻撃によって、ナズナのＬＰは０にされてしまうと言う事を、当人であるナズナ・ハイラも、そして

怒涛の攻撃をずっと仕掛け続けた刀利も深い思慮にて理解しているからこそ。

「…僕はカードを1枚伏せてターンエン…」

もうすぐ…もうすぐ決着となるこのデュエルに対し。

刀利が、最後となるであろう次のターンへと向けて、万全を期してターンを終えようとした…

―その時だった。

―！

突如…

激しいデュエルを行っていた彼らの耳に、凄まじい轟音が飛び込んできた。

…それは紛れもなく、島の周囲を取り囲んでいる巨大なる『竜巻』そのモノから聞こえてきたであろう、この世のモノとは思えないほどに凄まじい『風』と『風』の争いの音。

そう、何やら、島を囲んでいる巨大な竜巻に『何か』が起こったのであろうと言う事が、誰の目にも明らかである程に…

巨大なる風の悲鳴の音が、あの巨大なる竜巻から聞こえ始めたのだ―

そして―

「…竜巻が…消えていく…？」

「おや、そろそろ時間切れでありんすか…あふっ、久々の教え子とのデュエル、大層楽しめたでありんすよ刀利坊…では、わっちはそろそろ…」

「…ッ、待って、まだデュエルは途中…」

「いいえ、これにて終幕でありんす。わっちの仕事は刀利坊、主さんの足止めだけ…あふっ、別に勝てなくとも問題は無し…では…『七草』が一葉、ナズナ・ハイラ、この仕事、確かに完遂したでありんす。」
「…待っ…」

―!

何やら、人知を超えた竜巻が消滅していくのを見届けたその刹那。
ソレが『合図』であるのだと言わんばかりに…
デュエルの途中であると言うのに、突如、瞬間的に、反射的に。花魁…ナズナ・ハイラは、刀利とのデュエルの最中であるのにその場に『煙玉』を叩きつけたかと思うと。
視界全土を覆うほどの『煙幕』が、刀利の視界を飲み込み覆い…
そのまま、デュエル傭兵集団『七草』、その1人である花魁、ナズナ・ハイラは…

「…それでは…蒼人様にも、よろしく伝えておくんなんし?」

姿見えぬまま、捨て台詞と共に…

刀利の前から、消え失せたのだった―

「…『七草』…やっぱり一筋縄じゃいかなかった…」

煙が晴れ…誰も居なくなった正面を見据えながら。
苦々しげに、そう言葉を漏らしたデュエリア校の鍛冶上　刀利。
その表情は、どこか過去を思い出しつつ…悔しげであるかのようにも見える代物となりて、無人の周囲に無為に零されており…
…忘れられるわけも無い、デュエル傭兵集団『七草』との過去の因縁。
それは今ここでは語られぬ『別の誰かの物語』とは言えども。その

張本人の1人である花魁とここで再会したことは果たして刀利の記憶をどれだけ逆撫でしたというのだろうか。

「…時間稼ぎって言ってたけど…竜巻が消えたって事は…」

けれども過去は過去、今は今として己のやるべき事を忘れてもいない刀利は、消えたナズナ・ハイラの最後の言葉を思い出しながら…

「…そっか、やったんだね、天城君、天宮寺君…」

信じて送り出した少年達、親友の後輩達の目的の達成を…

山の風から、感じ取ったのだった―

―…

「はぁ…はぁ…た、倒した…のか？」

「…うむ、デュエルディスクが終了の合図を出したのだ…今度こそ…間違いない…はずだ。」

「そっか…やっと…」

戦いの残響が未だ響く大空洞。その、デュエル終了直後のこと。

無機質な機械音が鳴り止んだ大空洞で、満身創痍で立ち尽くしていたイースト校2年天城　遊良と…

積み重なった岩に押し潰されている、同じくイースト校2年天宮寺鷹矢が、今まで『怨敵』が居たその場所を呆然と見つめながらそう

言葉を漏らしていた。
…反響するデュエル終了の合図を聞きながら。外界まで突き抜けた大空洞の岩肌を眺めながら。
それは紛れも無く、今の今まで行われていた死闘…裏決闘界の融合帝【紫影】との、【裏決島】最後の戦いにようやく終止符が打たれたための安堵と放心であり…
紆余曲折あったとはいえ、確かに【紫影】のLPを0にしたという紛れも無い証明の『音』の残響が耳に残っているということから、どうにか遊良もソレを現実のモノとして受け入れ始めている様子を見せていて。

「…2対1でこれか…勝てたから良かったけど…」
「ギリギリだ…ギリギリすぎる…【王者】と同等の力がこれ程とは…正直、こんなに苦戦するとは思わなかったぞ。」
「あぁ…正直、倒せた気がしない…いや、勝ったんだけどさ、なんかスッキリしないっていうか…」
「うむ…煙に撒かれたような奇妙な感覚だ…まだデュエルが続いている感覚さえ残っている…」

そんな遊良と鷹矢の口から零されるは、紛れも無く『極』の頂きに位置していた力への喫驚…
【白鯨】や『烈火』と言った、手心のある者達から受ける施しなどでは談じてない。本物の『悪意』を持って自分達を殺しにかかっていた、裏決闘界の融合帝【紫影】に対する畏怖と懐疑であった。

強かった…

2人かがりとは言え、卑怯な手で鷹矢を潰したとは言え。
それでも純粋なまでの【紫影】の『力』は、今の少年達とは住んでいる世界が違うのではないかと思える程の力をありありと見せ付けてきた。

…それでいて、格下相手にも清清しいほどに卑怯な手や精神の揺さぶりをかけてくるその腐った性根。
アレほどの力を持っていると言うのに、ソレを表舞台ではなく『裏』の世界で堂々と発揮しているという理解し難い生き方もそう…
未だ短い人生しか歩んでいない若い遊良と鷹矢からすれば、【王者】にも匹敵する力を持っている【紫影】がどうして裏決闘界に堕ち堂々と卑怯な手を取り続けるのか、全く持って理解が出来ないのだ。
…いや、もしかしたら、あの捻じれた男を理解出来る存在などこの世界には居ないのかもしれない。
そんな、決して理解出来ない、理解したくもない【紫影】の消えた大空洞で…
確かに【紫影】を倒した少年達は、この戦いで一体『何』を得たのだろう。

…【紫影】に勝てたのは、鷹矢と二人がかりだったからと言う事を遊良は履き違えてはいない。

もちろん鷹矢だってそう。遊良が居なければ、【紫影】に勝てなかったであろうことは、先の戦いで充分その身で思い知ったのだ。
勝てたのはそう…ミズチが戦い、トウコが戦い…そして劉玄斎が戦って、【紫影】を消耗させていたからこそ。砺波に刀利、それに蒼人、哲、リョウが味方し、何の憂いもなく【紫影】と戦えたからこそ…遊良も鷹矢も全霊で【紫影】に立ち向かうことができ、そして鷹矢と遊良の『2人』だったからこそ【紫影】に勝つことが出来た。
…ソレを履き違えるほど、遊良も鷹矢も弱くはなく。
自分一人の力、自分達だけの力で【紫影】を倒したなどと、遊良も鷹矢も思い上がっては断じていない。
まぁ、それでもこれまで戦ってきた中で最も強く、やりにくく、憎く、容赦のない【紫影】という敵を、デュエルの正式な決着の形で倒せた事は間違いなく遊良と鷹矢2人の多大なる功績ではあるのだが…

ソレ以上に、これまで対峙したことのなかった『本物の敵』を倒したことは、遊良と鷹矢の心にどれだけのモノを与えているのか。
…初めて抱いた本気の殺意、初めて食らった本物の悪意。
これまで浮かんだ事のない感情、これまで味わったことのない感覚を、確かにこの戦いで遊良と鷹矢は身に受けて。未だ未熟なその心には、確かな『戦歴』がまた刻まれていて…

「これで、他の学生達も助かるはずだ。」
「あぁ…あの屑野郎の言った事が本当ならな。アイツを倒せば、【裏決島】も終わりだって言ってたけど…どこまで本当なのか…」
「その辺りは問題ないだろう。【紫影】を倒したのならば、今度は理事長が好きに動けるようになる。…あの理事長が本気で怒れば…」
「…考えたくないな。今の砺波先生が本気で怒ったら…多分、冗談抜きで死人が出そうだ。」
「…うむ。」

けれども、紛う事なき本当として、2人も【紫影】を倒した事がようやく現実のモノとして飲み込めたのだろう。
…あまりにふざけた催しである【裏決島】も、これで終着となるはず。
浮かび上がってくるのは、【紫影】を倒した安堵と…【白鯨】がいると思えることで生じる、これ以上無いくらいの安心感。
そんな、これまで対峙したことのなかった悪意塗れの本物の『悪人』とのデュエルを終えた遊良と鷹矢も…デュエルの最中…いや、それこそ【裏決島】が始まったその時からの緊張の糸が、ここへきてようやく緩んできたのだろう。
…どこか軽口にも思える彼らのソレは、本当に彼らがようやく一息つけたことの証明。
1つの激闘を終えた少年達へと、圧し掛かるは心地よい疲労と優しい空気。ソレらが少年達を優しく包み込み始めたのも無理はない。何せ彼らは【決島】の決勝からここまで、ずっとノンストップでデュ

エルをしっぱなしで駆け抜けてきたのだから…
…日常を生きるこの年代の少年達にしては、到底味わうことのない裏社会の激しい戦いを終え。
決着となった最後の切り札、消え行く【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を見つめながら…
自分達の多大なる所業を、どこか信じきれていないかのような心持ち。そんな表情をしている遊良と、どこか疲れ果てた顔をしているような気もする鷹矢の鉄仮面が、残響跳ねる大空洞に刹那の時間を映し出しつつ…
そのまま、遊良はゆっくりとその場にへたり込んでしまったのだった。

「おい遊良、座っていないで早く岩をどけてくれ。挟まって動けんのだ。」
「…無事なんだろ？じゃあ少し休ませてくれよ…塔からここまでずっと走りっぱなしで、やっと【紫影】に勝てたってのに。」
「…『軽石』とは言ったがそれなりに重さはあるのだ。生きてはいるが、このまま潰され続けるのは気分が悪い。」
「はぁ、わかったわかった。」

…まぁ、緊張の糸が緩んだとは言え。
鷹矢が『岩』に潰されているのは未だ変わらないのだから、彼らもまだ完全に一息つけるというわけではないのだが。
ともかく…

「っていうか自分で出れないのか？顔と両腕は出てるんだし。」
「無理だ。岩が絶妙にバランス良く組み合わさっているのかビクともせん。正直、肺が圧迫されていて結構息苦しいのだ。これ以上力が入らん。」
「パズルかよ…まぁいいや、じゃあ上の岩から降ろして…」

動けない鷹矢を解放しようと、遊良は鷹矢が潰されている岩の積み重なった上へと昇り始めて。
その足取りは、疲れている以上に慎重であり…
下に体重をかけると、ぐらりと揺れそうな巨大なる岩。それは確かにこの大きさの岩からは考えられないほどの質量の少なさであり、全体重をかけると簡単に崩れ下に落ちてしまいそうなほどに絶妙なバランスで積みあがっているのだろう。
また、岩に潰され、顔と両腕だけが外に出ているという、何とも情けない恰好だというのに。
偉そうな態度を崩さぬ鷹矢も、どこか余裕そうに見えるものの…まぁ、一度は『最悪』を考えてしまった遊良も、鷹矢が無事に生きていたことにはこれ以上無いくらいの安堵を感じてもいるのは先ず間違い無く。
疲弊しきった体に鞭打って、岩山に上る遊良もまた、鷹矢を救出しないと言う選択肢は無いのだから、どれだけ鷹矢が偉そうな素振りを見せても仕方なしとして岩を登って。
そして、頂上に着き…
遊良が、徐に両手両足を岩の隙間に入れて、鷹矢を押し潰している岩を持ち上げようと…

しかし…

「ぐっ…だ、だめだ、ビクともしないぞ…軽石だって言ってたけど結構重い…」
「鍛え方が足りぬのだ！だから普段からトレーニングを怠るなとアレほど…」
「ッ…一度も言ってねーだろ！ぐ…暇があれば、筋トレしてるお前と、一緒に、すんな…っ…重…それに、デカくて…持ちにく…」
頂上から岩を持ち上げようとして、思わず驚いてしまった遊良。
岩山の頂上にある巨大な岩を持ち上げようとしても、遊良にはソレ

を持ち上げることは出来ず…
多少は動く…けれどもソレ以上動かすことは叶わず。
そう、確かにこの岩は見た目よりも驚くほどに軽い部類とは言え、ソレを『軽石』と言い放った鷹矢の言葉が嘘に思えるくらいにその岩は遊良にとっては『重い』部類であったのだ。
…確かに遊良も全力を込めれば動かせそうではある辺り、見た目以上にこの岩に質量は伴ってはいないのだろう。
けれども、空いた時間があればダンベルを担いだり、やる事がなければ筋トレを日々行っている鷹矢とは違って…
日々の家事や学業に加え、師となった【白鯨】から出される膨大な量の課題…それに、最も手がかかる鷹矢の世話を日常的に行っている遊良には、鷹矢のような必要『以上』の筋肉などついてはいないのだから、岩山を崩さずに頂上から岩を持ち上げ投げ捨てるといった救出方法はどう足掻いても取れそうにはないのか。
いや、それは単純に鷹矢が同性代の男子と比べても規格外なだけなのだが…
それでも、天空の塔からこの大空洞まで走りっぱなし、戦いっぱなしで進んできた遊良の体力は既に限界が近く。【紫影】を倒した安堵も相まって、鷹矢が『軽石』と言い捨てる岩一つとっても、遊良からすれば持ちにくい大きさも相まって持ち上げることが叶わずにいて―

「だ、駄目だ…確かに見た目ほど重くはないけど、岩がデカすぎて俺の力じゃ持ち上げられない…押せば動かせるけど、バランスが崩れたらお前がまた潰される気がする…」
「ぬぅ…」

まぁ、こんなにも積み重なった岩々に押し潰されているというのに、ケロッとして生きている鷹矢の存在から、ソレは確かに本当に確実に紛れもなく『軽石』には違いないのだろう。
とは言え、平均的な筋力しかない遊良からすれば、大きな岩など持

ち上げる事すらできないのは当然と言えば当然であり…
…崩れやすい岩山の頂上で、思い切り踏ん張って岩を圧せば全体のバランスが壊れ瞬く間に崩壊してしまいそう。
そうなれば、再び鷹矢は岩に飲まれてしまい…絶妙な隙間によって無事を保てている現状が壊れてしまえば、いくら軽石とはいえ今度こそ鷹矢の命すら危なくなってしまうに違いない。
どうする…せっかく【紫影】を倒したというのに、こんなつまらないことで鷹矢を再び危険な目に遭わせるわけにはいかない…
外から応援を呼んでくるか…いや、他の学生は全員それどころではないはず。島の外から救助が来るのを待つのも、何時間かかるのかわからない…
そんな、デュエル外のことで再び頭を悩ませ始めた遊良が。岩山を崩さぬように、一度下に降りた…

—その時だった。

「貸しなぁ…俺が、どかしてやるからよぉ。」

ゆっくりと…
動けないでいる遊良と鷹矢へと、弱っているのに芯のある声がかけられて—
それは紛れもなく、この場にいたただ一人の大人が発したこの世の何よりも重々しいとさえ思える重厚なる声であり…
発したのはただ一人。デュエリア校学長、かつては『逆鱗』と呼ばれた元プロデュエリスト…

劉玄斎、その人—

「…よくやったなぁ…【紫影】を倒すたぁ驚いたぜ…」
「ッ…」

そんな劉玄斎は、傷付いた足取りのまま、ゆっくりと遊良達に近づいてきたかと思うと。
無意識なのか、それとも意識的になのか…
徐に、遊良の頭を優しく撫でたのだった―
（あ…）
…ソレはその重々しい見た目からは、想像もつかないような優しい所作。
割れ物を扱うような、どこまでも慈しむかのような優しい力で…遊良の頭を、小さな子どもを褒めるように一撫でしたデュエリア校学長、劉玄斎。
そしてその動作1つ、その声1つで…自分に向けられている感情が、限りない慈愛に満ちていると言うことを遊良は無意識に感じ取ったのか。
…遊良に無意識に込みあがる、押さえきれないほどの『何か』。
そう、5歳にして両親を失い、他の血の繋がりを知らぬまま生きてきた遊良の心に…流れ込んできたのは、これまで考えないようにしていたある『感情』。
気を緩めれば、途端に決壊してしまいそう。そんな洪水のように溢れかえりそうな『感情』が、【紫影】を倒した安堵と相まって遊良の心へと押し寄せてきていて―
「ここは俺に任せときな。オメェのダチは…無事に、出してやるからよぉ。」
そのまま、感情が溢れ出しそうになるのを堪えている遊良を背に。
…劉玄斎は、鷹矢を潰している岩山を登っていくのだった。
そして―

「クハハハハ、岩に潰されても死なねぇなんて、流石は鷹峰の孫だなぁおい。」
「む…この状況とあのジジイが何の関係があると言うのだ。」
「関係大有りだぜぇ？昔、あの馬鹿もこんな風に岩に押し潰されて身動きとれなくなった事があってよぉ。…ま、そん時はこんな軽石じゃあなく、本物の重てぇ岩だったが…そん時も俺が出してやったっけなぁクハハハハ。」
「ぬぅ…あんなジジイと一緒にするな。」

遊良では大きすぎて持ち上げることすら叶わなかった巨大な岩を、劉玄斎はその丸太のような腕で軽々と持ち上げ始める。
持ち上げては投げ捨て、持ち上げては投げ捨て…
いくら軽石とは言え、あれだけ高く積みあがっていた巨大な岩々が見る見るうちに小さくなっていくその様は…とてもじゃないが、世紀末を生きているかのような体躯をした劉玄斎でなければ行えない流石の御業と言えるだろうか。
…【紫影】に受けた傷だって、決して軽いモノではないと言うのに。
いや、その傷を見れば、むしろ立っているのだってやっとのはずだと言う事が誰の目にも明らかな程に傷付いていると言うのに―
それでも、劉玄斎は瞬く間に鷹矢の上から岩をどかし続ける。
血を垂らしても、岩を持ち上げた時に多少ふらついても。それでも、迅速かつ丁寧なる仕事運びによって…
鷹矢の上から、岩がどんどんと無くなっていき…

「もう良い、後は自分で出られる…とりあえず、礼は言っておいてやる。」
「クハハ、生意気なのもジジイそっくりだなぁおい。んじゃ…後は、自力で出るこったぜぇ？」

そうして…

祖父の話を持ち出されて、ムキになった鷹矢がそう言ったのを皮切りに。
岩山を崩すことなく、ある程度の岩を退かし終え…後は鷹矢が自力で出られるほどの高さにまで小さくなった岩山から、劉玄斎はゆっくりと足を降ろし始めたかと思うと。
…流石の劉玄斎も、とうとう力尽きたのか。
徐に、鷹矢たちから離れていき…少し離れた場所で、ゆっくりとその場に腰を下ろし―

「あの…」
「…あ？」
「その…色々と、ありがとうございます。」
「…昨日もそうだったがよぉ…俺ぁ元々テメェらの『敵』だったんだぜぇ？赤髪の嬢ちゃん攫ったのも俺だしよぉ…そんな俺に礼言うなんて…」

すると、即座に。
鷹矢を救い、少し距離を取った劉玄斎へと今度は遊良が近づいて。
…それは礼を言うというよりは、まさしく『詰め寄る』と言った方が正しいとさえ思えるくらいの距離の詰め方とも言えるだろうか。
そう、少々弾けるようにして放たれた遊良の言葉は、劉玄斎に対し『何か』を言いたいのだという事を隠す気もなく。
岩から自分の体を引き抜こうともがいている鷹矢を他所に、遊良はそのまま疲れ果てて座り込んでしまった『逆鱗』へと向かって…
居ても立ってもいられないかのように、更に続けて言葉を発して。
「…ッ、そ、それでも…それでも、貴方は俺達を助けてくれた…昨日もルキを外まで運んでくれて、今だって鷹矢も助けてくれて…それに、最後の【紫影】から俺を…俺達を守って…」
遊良の口から零れるは、自らを『敵』と言い張る劉玄斎の言葉を真っ

向から否定する詰め寄る言葉。
それは、いくら劉玄斎が自らを遊良の『敵』と言い張っても…
それでも、これまで幾度も劉玄斎に助けられた遊良からすれば。とてもじゃないが、どうしても劉玄斎を『敵』だとは思うことが出来ないのか。
口から出る言葉の羅列は、『敵』とは思えない程に救いの手を差し伸べてくれた劉玄斎への感謝の意。
敵であるはずなのに、自分に謝ってきたり…崩れかけた大空洞から、ルキを優しく運んでくれたり…今だって鷹矢を岩山から出してくれただけではなく、デュエルの最後の瞬間に何かをしようとしていた【紫影】から、間違い無く自分を守ってくれていた。
ソレゆえ、言動と行動が乖離している劉玄斎を…
遊良が、『敵』と思えるわけもなく…

けれども…

「だから…その…何度も…助けてくれて…」

…遊良の口から零れるのは、自らの『本懐』とはかけ離れた全く別の事柄と言葉。
どこかしどろもどろに零される遊良の言葉は、まるで自身の『本心』とは裏腹に口が勝手に別の言葉を述べているかのような…噛み合わないチグハグさとなりて、流水の様に次々と流れ出る。
それはどこか、遊良の心がまだソレを聞く勇気がないということでもあるのだろうか。

そう…遊良が聞きたいのは、遊良が言いたいのは。感謝の意だとか労いだとか、『そう言う事』では断じてない。

どうしても、遊良には『確かめたいこと』がある。デュエルの最中は考えないようにしていた事、鷹矢に言われ気にしないようにしてい

た事が。
遊良が聞きたいその『本懐』…
ソレは偏に、【紫影】の言っていたことは本当なのかどうか…

―『天城　遊良、あなたもすぐに、ここで倒れている祖父と同じ目に遭わせてあげますから、ええ。』

あの屑の言葉の真意など、遊良には決して分からない。
けれども、その場凌ぎの嘘にしてはあまりにしつこく【紫影】はソレを遊良へと執拗に言い続けていたからこそ。
【紫影】を倒したこの場で、屑の邪魔が入らないこの状況で。遊良は一刻も早く、ソレをはっきりとさせたいのだ。

【王者】と同格と謳われた、歴戦に名を残した『逆鱗』の劉玄斎…

彼は、本当に自分の『祖父』なのかどうか―

「あ、あの…俺…」

そして―

遊良が、とうとう意を決したのか。
傷付き、疲れ果て、朦朧としかけている『逆鱗』の劉玄斎へと…
「俺、貴方に聞きたい事が！」
再び、弾けるようにして言葉を発しかけた…
その時だった―
「すまねぇなぁ…」
「え？」
「すまねぇ…何を聞きてぇのかはわかってる…けど…まだ、言えねぇ…言う資格が…ねぇんだ。」
遊良の本懐を遮って…零されたのは、謝罪の言葉。
…朦朧とした意識の中で、それでもハッキリとした意思を持って。
『逆鱗』と呼ばれた男、劉玄斎の口からは、遊良の感情を理解しつつもソレに応えることが出来ないのだと言わんばかりの言葉がゆっくりと零されたではないか。
「…し、資格？な…なんですかソレ！俺…俺は…」
「すまねぇ…本当にすまねぇ…今の俺にゃ、本当に言う資格がねぇんだ…」
そんな、焦燥と動揺に駆られている遊良を見てもなお、劉玄斎は真実をその口から言う事をどこまでも拒み。
…一体、どうして真実を教えてくれないのか。
…一体、何故はぐらかすのか。
一体…劉玄斎の言う、『資格』とは何なのか。
ソレを全く知らぬ遊良からすれば、どうして真実を教えてくれない

のかと言う事に対し…落胆と憤りが一緒になって喉まで出掛かり、今にも喚き散らして攻め寄りたい感情が瞬間的に沸きあがり…

それでも…

「…言えねぇ…言う、資格がねぇ…俺には…」

朦朧としている意識の中で、謝るようにそう言い続ける劉玄斎の…

そのあまりに痛々しい姿を見て、どうしても遊良は理解してしまう。

『逆鱗』の劉玄斎…彼の過去に一体何があったのかなど自分にはわからないものの、それでも劉玄斎は今この場では決して『真実』を口にしてはくれないだろう…と。

攻め寄っただけで真実を教えてくれる程、今の劉玄斎の口は軽くはない。

…劉玄斎の言う、告げるための『資格』とは一体何なのだろう。頑なにソレを口にしない、口に出来ない様子の劉玄斎は、一体何を思って遊良の『本懐』に応えようとしないのか。

そんなコト、到底今の遊良には知りえるコトではないとは言え…

朦朧とした意識の中でも、頑なにソレを言わぬ劉玄斎の決意は固く。劉玄斎の言う、その『資格』とやらがハッキリしないことには、例えここで今生の別れとなろうとも劉玄斎は口を閉ざしたままに違いないと言う事を、遊良も感覚的に理解してしまったのだ。

とは言え、何も知らぬ、何もわからぬ遊良からすれば…真実を教えてくれない劉玄斎の態度は、どこまでも煮え切らない感情を遊良に与えているに違いないのだが…

それでも、全ての『真実』は劉玄斎のみ知ることであるのだから、今この場では遊良に『真実』を知る術は無く。

「…わかりました…じゃあ、今はもう聞きません。」
「すまねぇなぁ…本当に…」
「いえ…じゃあ…一緒に外に出ましょう。早く治療を…」
「俺の事はいい…先に…そこの嬢ちゃんを運んでやってくれ…嬢ちゃんの方が、重症だろうからよぉ…」
「で、でも…」
「…クハハ…すまねぇなぁ…俺も、少し無茶しすぎたみてぇで…流石に、ちっとばかし疲れてよぉ…安心しろぉ…この程度じゃあ、俺ぁ死なねぇからよぉ…」
「ッ…」

しかし…遊良の頭の上に置かれる、劉玄斎の大きな手はどこまでも優しくどこまでも暖かで。
撫でられる…割れ物を扱うように優しく、壊れ物に触れるように柔らかく。
…その所作、その行為、その感情だけで、明らかな『真実』を告げているようなモノだと言うのに。最も重要なソレを、決して口にしない劉玄斎は果たしてどれだけのモノを背負って遊良と言葉を交わしているというのか。
言動と行動の乖離…劉玄斎の行動と行為から感じられる暖かさは、遊良に確かな『確信』を与えてもいる。だからこそ、その劉玄斎の所作1つで遊良の感情はいとも簡単に決壊してしまいそうだと言うのにも関わらず…
そんな少年の姿を見てもなお、それでも頑なに真実を口にしない辺り、本当に劉玄斎は果てしなく重いモノを背負っているのだろう。

だからこそ…

「わかりました、すぐに応援を呼んできます。」

「あぁ…頼む…」
「鷹矢！ここを出るぞ！竜胆さんを頼む！」
「うむ！」

これ以上、ここで問答を繰り広げても無駄だと言う事を遊良も把握したのだろう。
それに【紫影】を倒したとは言え、まだまだ現状では解決すべき事案が多々あるのだと言うことを遊良も忘れていないが故に。劉玄斎に対しても、一刻も早く救援を呼んでくるべく…
岩山から脱出した鷹矢に、手早く指示を出したかと思うと、そのまま鷹矢が倒れている竜胆　ミズチを素早く背負い、急いで大空洞から脱出し始める。
そして、遊良もまた鷹矢を追い大空洞から出て行こうとして…
後ろ髪を引かれる重いで、ゆっくりと劉玄斎に背を向け歩き始め―

「なぁ…遊良…」
「ッ!?」

いや…

大空洞から、遊良が完全に立ち去る前に。
振り絞るような声で、劉玄斎から遊良へと再び言葉が零されて。
そして、反射的に遊良が劉玄斎の方へと振り向くと―

「…俺にはまだ、こんな事言う資格はねぇんだが…その…もし…もしまた会えたら…その時ぁ、全部話す事を約束する…もし俺を待っててくれるってんなら…コイツを、受け取ってくれねぇか？」
「…え？」

そこにはあったのは、朦朧とした意識と手つきで遊良へと向かって『何か』を差し出している劉玄斎の姿。
…劉玄斎の差出たるソレは、紛う事なき1枚の『カード』。
そう、劉玄斎は自身のメインデッキから、徐に一枚のカードを抜き出したかと思うと…ソレを、遊良へと差し出していたのだ。
また、差し出されている劉玄斎の手と、振り絞るようにして零されるその声が…微かに震えていることに、遊良は気が付いただろうか。
それはきっと、ダメージの所為だけではないのだろう。そう、振り絞るようにして吐き出される劉玄斎のその言葉には、『真実』を告げられぬ自分への憤りの様な…何やら、悲痛なモノが入り混じっており…

「こ、このカードって…」
「今の俺にゃ、こんなことしか出来ねぇ…すまねぇなぁ…」
「…」

また…その声を聞いて、その手を見て。
傷だらけでもなお、言葉以外で遊良に『何か』を伝えたいと言わんばかりの劉玄斎のその姿は、果たして遊良の眼にはどのように映るというのだろう。
言葉では何も教えてくれない劉玄斎に対し、遊良が何を感じたのかなど遊良本人にしか決して分からぬことではあるものの…

…それでも、差し出されたその手に応えるようにして。

ゆっくりと…自然な所作でカードを受け取った遊良は、確かに言葉以外の『何か』を劉玄斎から受け取ったのだろう。

そうして…

遊良がカードを受け取ったのを見届けた劉玄斎が、ゆっくりと眼を閉じた後に…

「ッ…」

眼から何かが溢れ出しそうな感覚を、唇を噛み締めることでじっと耐えた遊良は…

今度こそ、背を向けて大空洞を後にするのだった―

―…

大空洞、その出口―

「…ごめんなさい、迷惑かけて…」

「む？」

山の胎内たる大空洞から、外の山へと出た鷹矢がミズチの折れた手足に応急手当を施し始めたその直後。

目を覚ましたのか、木にもたれかかっていた竜胆　ミズチが…

ボロボロになった体で、ゆっくりと眼を開けつつ少々苦しげにそう言葉を漏らした。

…それは腕も足も折れ、動けないでいる自分を運んでくれた鷹矢に対する少女の心からの謝意の様。

ミズチは知らない、自分が倒れてから【紫影】がどうなったのかを。

けれども、今こうして生きて大空洞から脱出し、そして大空洞のす

ぐ出口で手当てを受けていると言うことから…
全身の痛みでまだ意識はぼんやりとしてはいるものの、ミズチも事の顛末をおぼろげながら把握し始めているのだろう。
すると、そんな目覚めたばかりのミズチへと向かって。鷹矢が、ミズチの手足に添え木をしながらその口を開き始め…
「…迷惑も何もない。あのまま貴様を放置していたら確実に死んでいたからな。ならば運んでやるのは当然だ。」
「でも…私は…」
「ふん、怪我人が何を言っても無駄だ。大人しく手当てされていれば良い。……【紫影】とデュエルをして返り討ちに遭ったらしいな。俺達が2人がかりでやっとだった相手だと言うのに、貴様が1人で挑む方が無謀と言うモノだろう。なぜこんなになるまで無茶をしたのだ。全く…もう少し冷静な女だと思っていたのだがな。」
「…」

鷹矢の口から零されるは、どこか厳しいミズチへの叱責。
折れた手足に添え木を巻くその所作は続けながらも、その言葉は手足を折られボロボロになった少女に対する言葉としては少々言い過ぎであるとさえ思えるような厳しい言葉であり…
…とは言え、鷹矢の言葉もある意味では最もなのか。
そう、鷹矢が厳しい言葉をかけるのは、何もミズチを責めているからではない。
それは竜胆　ミズチと、【決島】の予選にて全力で戦った鷹矢だからこそ浮かんでしまう僅かな苛立ち。
竜胆　ミズチほどの実力者が、【紫影】との力の差を理解出来ないほど愚かではないはずだと言う事を…真正面から彼女と戦った鷹矢も理解しているからこそ、自分が名を覚え認めた女がどうしてこんな無茶をしたのだということを鷹矢は押さえる事が出来ないのだ。
…まぁ、ソレはデュエルに最中に【紫影】が言っていた、ミズチと【紫影】の『血縁』が深く関係しているのだろうと言う事など鷹矢だっ

て無論分かってはいる。
けれども、1つ間違えば本当に死んでいたかもしれない無茶をした、竜胆　ミズチの状態はあまりに酷く。好敵手と認めた相手のソレを目の当たりにした鷹矢には、無茶をしたミズチがどうしても許せないに違いない様でもあって。

「…【紫影】は…どうなったの？」
「無論、俺と遊良が倒した。」
「…そう。」

だからこそ、ミズチの儚く気怠げな言葉に微かな『やり切れなさ』と僅かな『やるせなさ』が入り混じっていようとも。
鷹矢はただただ淡々と、事実のみを伝えるだけであり…

「…よし、とりあえずはこれでいいだろう。運ぶと痛むだろうが自業自得だ。我慢しろ。」
「…ええ。」

…
……
……

沈黙…
手当てが終わり訪れるは、何やら気まずい揺れる沈黙。
鷹矢の言った、『無論、俺と遊良が倒した』という言葉を聞いて…何やら、目に見えてその気分を落とし始めたウエスト校3年、竜胆　ミズチ。
…その姿は、とてもじゃないが下手に言葉を掛けられないほどに思い詰めているかのよう。
そう、【紫影】は倒されたというのにも関わらず、どこか納得のいっていないかのように彼女はその気分を落としていっているのだ。

木陰に揺れる彼女の影が、彼女の儚さをより一層引き立てている。このまま放っておけば、跡形もなく消えてしまうのではないかとさえ思える程に…

彼女の気配が、みるみる淡く儚くなっていき…

…一瞬の沈黙が、永遠に感じられるほどの気まずさと息苦しさ。

傷だらけの少女の白髪が、山風に晒され無抵抗にただ揺れる。

そんな永遠にさえ思える短い時間が、ほんの一瞬だけ鷹矢たちの間に流れ―

「…そういえば、貴様の『捕食植物』が勝手に【紫影】に使われていたぞ。奴のデュエルディスクも回収してきた。あとで、自分のデッキを確認しておくことだ。」

「…そう。」

「…あぁ、それとだな…」

すると、この一瞬の沈黙に耐えかねたのか。

しゃがんだ鷹矢が、ミズチへと言葉をかけつつ再び向かい直したかと思うと…

懐から『何か』を取り出しつつ、再度淡く儚い雰囲気のミズチへと言葉をかけ始めたではないか。

「あと、これだけは直接貴様に渡したほうがいいと思って抜き出しておいた。受け取れ。」

「…これは…【紫影】のスターヴ・ヴェノム…」

「どうせ奴のディスクもカードも理事長に回収されてしまうだろう。だがこのカードは理事長に渡すより貴様が持っていた方が良いと俺は判断したから今渡しておく。…奴が言っていたぞ。貴様、【紫影】の孫らしいな。」

「…」

鷹矢から手渡されたカードを、折れていない方の手で受け取りつつ。
受け取ったカードを、じっと見つめるミズチの眼には…確かな憎しみのせいか、蛇のような異形の眼が僅かに表に出始めて。
―【スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン】
かつての『竜胆』が代々受け継いできたという、『融合』をその名に持つ特別な竜。一説には、遥か昔にこの世の頂点であったデュエリストのカードの1枚であったとも言うそのカードは…
来るべき未来まで受け継がなければならないと言われている、竜胆家における家宝のようなカードであると言う事を、この時代では覚えている者はかなり少数であると言えるだろう。
…ミズチも幼少の頃に、世話になった親戚の家で何度も聞いた。自分の祖父が、竜胆の家宝と共に姿を消し…犯罪に手を染め、大虐殺を行ったために竜胆家の人々は名を変え隠れるしかなくなり…
そして、滅びたのだ…と。
「…ええ、そう。…私には【紫影】の血が流れている…だから…私は…」
だからこそ、鷹矢の言葉を肯定しつつ。
彼女の心の内には、これまで生きてきた『人生』とこれまで受けてきた『処罰』とが頭の中に浮かび上がっているのか。
…それなりの歳をした大人は忘れてはいない。【紫影】…『竜胆　蛇蝎』という男に『何』をされた『誰』を奪われたのかを。
それは【紫影】の悪行が薄れた現代でも変わらない。いや、寧ろ年月をかけた現代の方が、【紫影】本人よりも『竜胆』という名前に対する大人達の怨みは熟成されていると言えるのが現状なのだ。
ミズチは思い出す…
幼少の頃の、世間から隠れ汚い場所で生きていた記憶。兄と共に、

大人達からの怨みに耐え続けた記憶を。
…彼女の存在感が儚く気怠げなのも、きっとこれまでの人生がそうさせているのだろう。
彼女の兄が、どこまでも道化を演じているのもきっとそう。世界の無慈悲に晒され続け、世間の理不尽に攻められ続けてきた彼女には…社会が自分達をどのように思っているのかをよく知っている。そのため、淡く儚い雰囲気を纏うことで周囲の悪意を受け流してきたに違いない。
また、ソレらが全て【紫影】の孫という忌むべき血筋によって生み出されたということを、彼女自身もまた心から憎んでいると同時に逃れられぬ現実だと諦めてしまっているからこそ。
…己の忌むべき血筋に対し、彼女の中で怒りが更に大きくなりながらも。
それと同時に、自分の血筋が他者からどのように思われているのか。自分はどうやってソレを償えばいいのか…
その『答え』を知っている少女は、搾り出すようにしてその口から…

「…私は、幸せになってはいけないの。」

…と、短く言葉を漏らしたのだった。

しかし…

「ふん、くだらん。」

「…え？」
「貴様が…いや、お前が【紫影】の孫だったから何だと言うのだ。俺とてあんなクソジジイの孫なのだぞ？それに大差など無いだろうが。」
「…でも、【紫影】は犯罪者で…【黒翼】は王者…」
「だから、それがどうしたと言っているのだ。ウチのジジイが金で揉み消した事件が一体どれだけあると思っている。その度に親父や家の者が苦労をかけられていると言うのに、あのクソジジイは知らん顔ばかりだ。だからあのジジイの事は俺には関係ない…ならば【紫影】が何をしでかしたのであろうと、そんな事お前とは関係のない事ではないか。」
「…じゃあ、どうして【紫影】のスターヴ・ヴェノムを私に…？」
「そんなこと決まっているだろう。お前がそれを使えるようになれば、次にデュエルする時の楽しみが増えるからな。むしろ【紫影】の孫で良かったくらいだぞ、俺はもう一度お前と戦いたい…更に強くなったお前とな。」
「…」

忌むべき血筋、責められるべき人種だという理由を告げてもなお。
鷹矢から飛び出したのは、ソレを一蹴するかのような強い言葉であった。

鷹矢は否定する…竜胆　ミズチが、【紫影】の所為で自分までをも否定することを。

公衆の面前で２０００人以上を爆殺し、公共の電波で血に塗れ高笑いし…そして将来有望なプロの若手たちを、『表裏戦争』の舞台にて嬉々として殺しまわっていた、あの性根の腐った人間以下の腐った屑の、その直系の『孫』である竜胆　ミズチが抱くべきである『責務』と『責任』を、どこまでも鷹矢は真っ向から全て否定する。
…それも、何も知らぬが故の無責任から出ている言葉ではない。
鷹矢だって、遊良とルキを【紫影】に傷つけられたのだ。ルキはあ

と下手をすれば死ぬところだったのだし、遊良だって一歩間違っていたら命を失っていたのだから、鷹矢だってある意味で【紫影】の被害者であるはずなのに。
そう、【紫影】の孫であるミズチに対し、鷹矢が他の大人達と同じく彼女に『責任』を取らせたいと思ったって、それはある意味当然と言えば当然の事のはず。
それでも―

「もう一度言ってやるぞ。祖父のやらかしたことなどお前の罪でもなんでもない。俺とて、あのクソジジイの罪など庇うつもりも無いのだからな。だから向こうが知らん顔をするのならば…こちらも、知らん顔しておけば良い。」
「…知らん顔…」

それでも、けれども、あくまでも。
忌むべき人種として扱われ、それを自分で認めているミズチの事を、鷹矢はどこまでも否定し続ける。

そう…それは鷹矢が、『竜胆　ミズチ』という女性を名を覚えるに値する1人の強きデュエリストとして認めているからこそ―

【黒翼】の孫としてしか見られてこなかった事や、Ｅｘ適正が無いだけで周囲から認められない遊良の葛藤をずっと近くで見てきたからか。きっと鷹矢は、誰よりも人を『個』で見ることが出来るのだろう。
血筋や人種や個性など関係ない、ただ人を『個』として見ている鷹矢だからこそ…【紫影】の血筋というだけでミズチがどれだけ自分を責めていようとも、そんなモノは自分には全く関係ないのだとただただ真っ直ぐに伝えているだけであり…
…自分の認めたデュエリストが、【紫影】の孫だったから何だと言うのだ。そんなこと、気にする事でもないではないか…と。
確かに【紫影】への恨みから、【紫影】のみならずその血縁に至るま

で怨んでいる者達もいるのかもしれない。それでも、誰もが皆その『血筋』を問題視しているわけではなく…
少なくとも自分が至る答えは違うのだと、鷹矢は己の言葉によってミズチへと伝えようとしていて―

「…なにそれ…ふふっ…そんな事…考えた事もなかった。」

…そんな鷹矢の言葉を聞いて、ミズチは何を思うのだろう。
【紫影】から受けたダメージの所為で、朦朧としつつあるその思考の中で…鷹矢の言葉に少女が何を感じたのかなど、ミズチ自身にしかわからぬことではあるものの。
それでも、自分が【紫影】の孫だと言う事を、鷹矢が全く気にしてもいないと言う事だけは確実に感じたであろうミズチは…

ただ、淡く、儚い笑みを零し―

「だから今は眠れ、竜胆　ミズチ。下らん事など今は忘れろ…【紫影】は【紫影】、お前はお前だ。」
「…ええ……うん…ありがとう…」

そのまま、気を失ったのだった。

「悪い、待たせた。」
「うむ。」

そして、そのあとすぐに。
大空洞の出口から出てきた遊良が、鷹矢たちと合流して。

「竜胆さんは？」
「応急処置をして気を失ったところだ。さっさと理事長のところまで運ぶぞ。」
「あぁ。けど大丈夫か？お前だって岩に潰されてたんだ。軽石だって言ってたけどそこそこ重かったし…」
「要らぬ心配だ。遊良の癖に、俺の心配をするなど１０年早い。」
「んだよ、鷹矢の癖に、折角心配してやってるのに失礼な奴だな。」
「ふん、あんな岩など軽石も同然だ。…まぁ、頭にぶつかった所為か多少ふらつくが…」
「おいおい…」
「まぁ大丈夫だろう。右腕も痛いが、竜胆　ミズチ１人担ぐくらいならば問題ない。お前はどうなのだ、少し休ませろと言っていただろう？」
「大丈夫だ。お前が岩から出してもらってる間に体力は回復したから。じゃあ行くぞ、砺波先生に早く報告しないと。」
「うむ。」

そのまま２人は、簡単にお互いの状態を共有したかと思うと。激しい戦いが終わったばかりだと言うのにも関わらず、休憩も取らずに出発し始めて。
…【紫影】と戦う前に大空洞まで走りっぱなしで、【紫影】との激闘の余韻もあって体は相当重いはずだと言うのに。
それでも、下りの山道という険しすぎる帰り道を…来た時よりは遅いペースとは言え、遊良と鷹矢はなるべく急いで下山し始めるのか。
…それは脅威は去ったとは言え、【紫影】を倒したばかりで現状がど

うなったのかを未だ把握できていないからこその急ぎ。
【紫影】が言っていた、『自分を倒せば【裏決島】は終了』という言葉も本当かどうか分からない。そう、敵はあくまでもルール無用の犯罪者集団なのだから、敵の親玉は倒したけれども残党たちは約束を守らずに襲い掛かってくるかもしれないという懸念を遊良達は密かに感じているのだ。
…【紫影】の言葉は信用ならない。絶対に信じてはいけない。
先の戦いで、ソレを嫌と言うほど味わい身に染みて理解したからこそ…
周囲を警戒し、なるべく急いで。遊良と鷹矢は、険しい山道を注意して降り始める。

「そう言えば遊良よ、【カップ・オブ・エース】などいつ手に入れたのだ？」
「あぁ、決勝の1戦目が終わったときにリョウさんとトレードして…俺も【成金ゴブリン】1枚余ってたし、向こうも沢山持ってるからって。」
「そうか。…しかし、先ほどは『ああ言った』が…」
「あぁ…正直、リョウさんみたいに使えるかって言ったらかなりキツいな。ノータイムで使うにはリスクが大きすぎる…さっきのデュエルはアレしか選択肢がなかったけど、俺にはアレを使いこなせる気がしない。」
「うむ。」

…とは言え。
周囲を警戒しつつも、【紫影】を倒したという1つの大きな目標を達成した事もあり…遊良と鷹矢の会話に、行きよりも確かな気楽さが感じられるのはこの歳の少年達としてはある意味当然の事とも言えるのだろう。
…本当に強かった…1対1では、決して勝つ事など出来なかった。
そんな、これまで戦ったことのなかった本物の悪意を持った【紫影】

とのデュエルを、２人はもう振り返りつつ。
張り詰めた緊張とは違う、警戒心の中にも余裕のある会話を挟みながら…
「アレはあのギャンブル狂いだからこそ後先考えずに発動できるカードなのだろう。奴以外が使うには相応のリスクが伴う…使いどころを見極めねば…自滅するだけだ。」
「…そうだな。」
確実に、かつ着実に。
遊良と鷹矢は、登ってきた山道を迅速に下りて行く。
そして…
―！
何やら、大きな『音』が竜巻の方から聞こえたかと思うと。
突如、遊良たちの視界から…
竜巻が、消えていくではないか―
「ッ、鷹矢、見ろ！竜巻が…」
「消えていく…【紫影】を倒したからか？」
思わず足を止めた遊良達の視界に飛び込んできたのは、あの超巨大な竜巻が更なる轟音を立てて消えていく脅威の光景。
遊良達は知らない…
いや、思いつくはずも無い―
あの竜巻を『消して』いるのが、自分達を送り出したイースト校理事長、【白鯨】と呼ばれし砺波　浜臣であると言う事を。

足を止め、魅入りながら…遊良達は見る、時間もかからず竜巻が完全に消えていくのを。

「そういえば鍛冶上さんは大丈夫かな。あの花魁、かなりヤバそうな感じだったけど…」

「鍛冶上　刀利ならば心配いらんだろう…と言いたいが、確かにあの花魁も相当の手練れのようだったからな…正直、【紫影】を相手にするのと変わらぬ感じがした。」

「あぁ…世界は広いってことだな。よし、とにかく先に鍛冶上さんと合流しよう。」

「うむ。」

そして、完全に竜巻が消えたのを見届けた後に…

再び山道を下りながら、刀利と別れた場所まで急ぎ始めるのだった

―

―…

「ひゃはは、チャン僕達もトゥートゥー年＆貢の収め時かーもねー。」

「かもね。」

「さてさてさーて、一体どんだけ懲＆役ｗｉｔｈ罰ｏｒ罪くらうのかなぁひゃはははは。」

「ギョウさんは死刑。」

「フゥー！ロナロナってば手厳しぃーねー！」

決勝戦が行われていた天空の塔…その、正面入り口のすぐ前でのこと。

２対１で砺波に敗れ、グルグルに縛られたデュエル傭兵『七草』のメンバー…ゴ・ギョウとスズシ・ローナは、同じく『烈火』に敗れ気を失っているホトケ・ノーザンを横目に、どこか軽めにそんな言葉を漏らしていた。

…それは彼らが、裏社会の人間であるが故の顛末の予測と諦めの潔さ。

裏社会でもトップクラスの実力を持っていると言うことで、一般人には言えないような汚い仕事も多々請け負ったことのある彼ら『七草』だからこそ…

これまで裏社会で相当の場数を踏んできたことにより、今ココで仕事に失敗し捕まってしまった事でこれからどうなるのかの事の顛末が先まで読めてしまっているのだろう。

…ソレはこの【決島】での失敗だけに収まらない。これまで『やってきた事』の制裁も含めて、きっと『責任』という名の罰を表社会に与えられるに違いなく…また、先ほど【白鯨】がポツリと零したところによると、あの巨大な竜巻が消えたことで海洋に待機していた警察やら軍隊やらが一挙に押し寄せてきているらしいではないか。

それも公の部隊ではなく、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】直属の私設軍隊やら、デュエリアの秘密警察と言った滅多に表には出てこない部隊が揃って出てきているというのだから…裏の者達からすれば大変も大変、最初に屑に聞いていた話とまるで状況が異なっているとパニックになっている頃に違いない。

きっと今頃、島の中で学生達を襲っていた有象無象の犯罪者たちは根こそぎ検挙されている頃だろうし、学生を攫って島からさっさと逃げだそうとしていたそれなりの者達も軒並み逮捕されている頃。

それに裏の猛者達とて、どれだけの者が逃げおおせるのかはわからない…それは『七草』たる自分達だってそう。となれば、この検挙によって裏社会の縮図は大きく変化してしまうことになる…

それを容易に想像できる、裏社会のデュエル傭兵集団『七草』だからこそ。

今更じたばた抵抗したり、往生際悪く泣き叫んだりすることが無駄

だと言う事をいち早く理解し、清清しいまでに諦めモードに入っている様子であって。

「しっかしさー、まーさか【白鯨】があーんなバケモンだったとはねー。」

「同感。アレ、規格外。誰来てても、多分こうなってた。」

「それなー！マジマジマージでチャン僕達クジ運ナッシング過ぎだっつーの。ちゃんヴェラに変わってもらえばよかったってねー！」

「嘘。ギョウさん、最初喜んでた。【白鯨】とデュエル出来るって。」

「ひゃはは、ソレを言うなっつーの！」

…とは言え。

彼らも元シンクロ王者【白鯨】が、よもやここまでの怪物であったとは思いもよらなかったのか。

そう、『極』の頂きに位置している、裏社会の猛者の2人からすれば…いくら砺波が元【王者】だったとはいえ、2対1の状況であんなにも一方的に蹂躙してくるだなんて信じられなかったに違いない。

『七草』が一葉、ゴ・ギョウとスズシ・ローナ…彼らも、これまで幾度も死線を潜ってきた紛れも無い強者。

そんな彼らでさえ、とてもじゃないが今の砺波は自分達と同じ『人間』であるとは思えない様子であり…

…あの、遥か深遠から覗き込んいるような目…アレは人間の眼ではない、あれでは【白鯨】は正真正銘の【化物】ではないか…と。

まぁ、とは言え彼らも、流石は若くして裏社会を生き抜いてきた猛者の中の猛者らしく。これからの自分達の処遇を理解しているはずだと言うのに、どこまでも軽口を叩ける辺り…彼らの精神力は、およそ並外れたモノではないのだが。

「…はい…そうですか、医療棟は全員無事…はい、それは良かったです。泉君と十文字君には感謝しきれませんね…今のところ死者も行

方不明者もなし…はい、奴が出てきたというのに上出来でしょう。行方は追々…はい、それはもちろん…」

また、少し離れた場所でどこかへと電話をしている砺波の口から零されたのは…今まさに救援が駆けつけた、『医療棟』の現状についてであった。

島を襲った犯罪者たちの大半が押し寄せていたという医療棟…決闘市とデュエリアの学生達が篭城していたというその拠点は、まさしく島の中でも屈指の激戦区として相当激しいデュエルが行われていたという。

…島中で行われていた戦いとは違う、ある意味本物のデュエル戦争。犯罪者たちの中にはその道で有名な裏の猛者が数人居たらしく、更にデュエルが実体化していたその中で学生達に死者が出なかったのはまさに奇跡としが言い様がないだろう。

だからこそ、そんな危険な爆心地で死者が出なかったのは、偏に途中から救援に駆けつけたプロデュエリストの泉　蒼人と十文字　哲の力があったからこそ。

砺波に上がってきた報告によると、蒼人と哲の２人が敵を一挙に引き受けていたらしい。そして学生達の援護を受けながら、彼らは２人で１００名を超える敵の悉くを返り討ちにしていたと言うのだから…彼らなくしては学生達の無事はなかったのだと、報告を受けた砺波も胸を撫で下ろしたに違いなく。

…島を囲んでいた竜巻が消えた今。既に警察やら軍やらが島に上陸し、犯罪者たちを捕まえるために奮闘している。

先に砺波に届いた連絡によれば、急いで船で逃げようとした敵も全員その場で捕縛されたらしい。

また、島の中で攫われた学生達も全員救出済みで、各校の名簿と照らし合わせても行方不明の学生は居ないというのだから…怪我人が出たとは言え、結果としては上々も上々、学生側の完全勝利を疑う余

地もない。
…それもこれも、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の最高幹部である『妖怪』、綿貫　景虎が迅速なる指示と指揮を執っているからこその掌握と鎮圧。
元々安全面を考慮して、警備隊を付近に待機させておいたとは言え。『妖怪』の一声で大部隊がこぞって島に救援にやってきたのだから、その迅速さには例え【紫影】の集めた猛者達であろうと逃げられないに違いない。
いずれ警察や軍がこの塔にもやって来る…後は、後はこの塔を襲いに来て返り討ちにした者達を引き渡せばとりあえず自分の仕事も終わる…
…そんな事を考えながら電話を切った砺波は、ふと大空を見上げつつ。
「…では綿貫さん、後のことはよろしくお願いします、はい…では……ふぅ、どうにか無事に終わりそうですね。」
深い…それはそれは深い溜息を1つ吐いたかと思うと。
そのまま、少々疲れたかのように振り返り…
返り討ちにして縛り上げた『七草』の元へと、ゆっくりと歩き近づいてきた。
「さて、お待たせしましたね。『七草』が一葉、スズシ・ローナ、ゴ・ギョウ。」
「ひゃは…別に待ってないけどねー…」
「…」
眼下で縛られ大人しくしている、ゴ・ギョウとスズシ・ローナを見据えつつ。
そう言葉をかけた砺波の視線は、確かに『七草』の2人に向けられてはいるものの…

砺波の思考は遥か彼方で全く『別の事』を考えているかのように、『七草』の2人を見ているようで見ていない不思議な視線となりて眼下の2人に向けられる。
そして、そんな不思議な視線…と言うよりは、値踏みされているかのような『不気味な視線』を、見られているギョウとローナも感じているのだろう。
眼を向けられ、声をかけられ、そして傍に立たれているというただソレだけの行為に…歴戦を生き抜いてきたはずのゴ・ギョウは冷や汗をかき、ローナは声を失い身構えていて―

「デュエル傭兵集団『七草』…金を払えばどんな仕事も請ける裏社会の猛者、か。ふむ…」

しかし、そんな『七草』を意に介さず。
…ただただ砺波は淡々と、何かを考える素振りを見せ始める。
それは自分の視線が、『七草』に何を感じさせていようとお構いなしの強者ゆえのゆとりある長考。
それは時間にして1秒と満たない短い思考だったのだろう。それでも砺波の見ているようで見ていない不気味な視線を浴びせられ続けているギョウとローナからすれば、それは永遠よりも長い一瞬だったに違いなく…
…ゴ・ギョウを見透かす鯨の眼差し、スズシ・ローナを値踏みする鯨の鋭視。
警察や軍に引き渡すよりも前に、自分の手で処罰を降そうとでもしているのだろうか。いや、それとも自分達が無法者の裏の者であるのを良い事に、良識を超えた拷問でも行おうと画策しているのか…
そんな、死刑執行が確定しているかのような気分が『七草』の2人を襲い…およそ人間からは漂わないはずの『恐怖』の圧が、確かに今の砺波から発せられ。
ただの一瞬、ほんの1秒…
けれども、永遠よりも長い刹那の時の中で。

このまま、『七草』に圧力がかけ続けられるのかと思われた…
その時…

「よし、決めました。『七草』、その力、このまま警察に引き渡すのも惜しい。どうでしょう、私が貴方達を雇わせていただくというのは。」
「……ひょ!?」
「…え?」

一転…
そう、冷徹なまでの深遠の1秒、その永遠のような鯨の圧力から180。一転し。
刹那の後に、砺波の口から飛び出してきたのは…歴戦を生き抜いてきた『七草』を持ってしても耳を疑ってしまう、とても信じられない言葉であった―
…しかし、彼らの同様も当然か。
何せ彼らの耳に聞こえてきたのは、とてもじゃないが常識から外れすぎている…常人であれば提案すらしようともしないような、あまりに突拍子もない話の持ちかけであったのだから。
砺波は言った…『雇う』…と。
それは【白鯨】が、『七草』に対し金を出し仕事を依頼すると言っていると言うこと。決闘界で頂点にまで昇り詰め、表社会のみならず裏社会においても知らぬ者など居はしない、元シンクロ王者【白鯨】が…
交わるべきでは断じてない、裏社会の者達に対して今間違い無くそう言ったのだ―
…一体、砺波は何を思ってそんな事を口にしたというのか。
裏社会の者と言えば、それすなわち法を犯している『犯罪者』と言う事と同義…そんな者を雇うだなんて、表社会において地位を積み上

げた【白鯨】の汚点にしかならないと言うのに。
それでも―
「直にデュエルをしてハッキリと感じました。裏の者とは言え、『極』の頂に至っている者がそこに倒れている者も含め3人…いや、この島にはあと1人いるんでしたね。あなた達のその実力、そのまま野放しにするには惜しいと言っているんです。あなた達を、我が決闘学園イースト校の『特別講師』として雇いましょう。その力、是非とも我が校の為に使ってもらいます。」
「…ちょいちょいちょーい！いきなりなーに言っちゃってんのさー！講＆師ぃ!?いきなりすぎて理解できてないっつーの！」
「理解などしなくても良い。あなた達の雇い主が【紫影】から私に変わるだけです。どうせ、私に捕縛された時点で【紫影】から金も貰えないんでしょう？」
「…まー確かに？そうっちゃーそうだけどもだっけーどぅー…」
「でしたら何も問題はない。あなた達の仕事はここで終わり、私はフリーの傭兵を金で雇うだけ、ただそれだけです。私は腐っても元王者、金ならいくらでもありますからね。無論、報酬は弾みますよ？」
「…でも私達、一応犯罪者。潜入して偽装するのとは違う。」
「そーそー、チャン僕達？教＆員ｗｉｔｈ免＆許も持ってないすぃー？それに学校に？犯罪者雇っちゃってもういーのー？天下の【白鯨】サマサマがさー。」
「フッ、そんな些細なことなど問題ではありません。私の一声でそんなモノはどうとでもなる。必要なモノはこちらで準備しておきます。それにあなた達の出自を知るのは学園内でも私だけ…他の先生方は、あなた達をただの新任教師としか思わないでしょう。」
「…」
「ひゃはははは！流石は【化物】様様だねぇ…言ってる事がとんでもないーねぇー…」
砺波の口から語られるは、常識破りかつ良識を欠いたあまりに突拍

子も無い提案の数々。
才識に長けた砺波からは、考えられもしない提案が次々と彼の口から語られ始め…
しかし、砺波とて自分がルールを破ろうとしていることを理解しながら『七草』にこの話を持ちかけているのだろう。
『七草』を誘うその表情は、一昔前の常識に縛られたお固いモノなどではなく…むしろ、殻を破ったようにどこか生き生きとしていて―

「つーかてーかなんてーか？流石にトンデモ過ぎだとチャン僕思うんだけどもだっけー…」
「…わたし、やる。」
「ほい!?」

そして、そんな砺波の提案に対し。
了承の意を持ってして、そう答えたパンクでロックなゴシックでロリータのドレスを着た女性、『七草』が一葉、スズシ・ローナ。
とても安全には思えない巨大な安全ピンの装飾を、ドレスの至るところに付けているという、ある意味最も教職から遠いとさえ思える恰好をしているというのに…
縛られたままの彼女から感じられる返事には、その場凌ぎのような適当さなどは断じて感じられず。ただただ砺波からの持ちかけに、己の意思で返事をしている。

「前、ノーザンとナズナとセリが先生やってたの、凄く面白そうだった。私もやってみたい。」
「ちょいちょいちょーい！ロナロナーってばマジ？ソレ、マジマジマージで言ってんの？デュエリアん時のやつはさー、仕事ｏｆ潜入だったじゃんかよー。」
「…でも、一回やってみたかった。面白そう。」
「面白そうってソレマジー…？チャン僕ビックリなんですけどけどー…えー…ロナロナＯＫしちゃうカーンジィ…？」

また、相方が適当ではなく本気で【白鯨】の提案に乗っかったのを、同じく『七草』のゴ・ギョウも感じ取ったのだろう。
しかし、ローナの返事に驚きこそすれ…
ゴ・ギョウはあくまでもどこまでも、砺波からの提案に限りない疑惑の目を向けたままで。
…そう、世間に興味がほぼなく、どこか抜けているスズシ・ローナとは違って。成人するよりも前から裏社会で戦ってきたゴ・ギョウには、【白鯨】からの提案に疑いと警戒の目をどうしても向けてしまっているのだろう。
裏社会の猛者、デュエル傭兵集団『七草』…その経験は伊達じゃない、軽い言葉とチャラい態度を取ってはいても、その反面で考えている事は冷静無比なる真意の探り。
―この提案は話が旨過ぎる…
ゴ・ギョウが感じていたのは、自分達にメリットしかないこの話への違和感と不快感。
かつて、旨い話に乗り痛い目にあった事が何度あったか。若輩だった頃に、こういった旨い話には必ず裏という裏を超えた裏の中の裏に更なる裏が潜んでいるのだと言う事を…ゴ・ギョウは、その経験則から知っているからこそ。

「ひゃは、長い付き合いだけどさー、未だにロナロナの考えてること？理＆解できねーってカーンジィ？でもま、ロナロナには悪いケドー…この話、チャン僕はご遠慮しておこっかなー。」

直感的に話に乗っかったスズシ・ローナを他所に、ゴ・ギョウはこの話を断るべく…

「ま、ケーサツでも何でも？しょっ引かれる方がチャン僕の性に合ってるってゆーかー…」

1人だけ、そう言葉を続けようとした…

その時だった―

『…まだわかっていないようですね。』

「ひょえ?」

…不意に。

暑いくらいの周囲の空気が、一瞬の後の凍りついた―

…その原因は紛れも無い、砺波が零した口調の変化の所為。

そう、砺波の声の質感が、先ほどまでの生き生きとしたモノから再度一転…真夏に近い気温の空気すら凍てつかせるほどの、遥か深海の水温のように果てしなく低いモノへと変化したのだ。

…それはおよそ人間が発せられるとは思えぬほどの、人外染みた『何か』の声。

そのまま、砺波はどこまでも冷たい声で…

自分の提案を断ろうとした、『七草』が一葉、ゴ・ギョウへと向かって―

『私に乗るか…ここで死ぬか…選べ、ゴ・ギョウ。』

「ッ!?」

耳元で…囁かれる選択肢など与えていない、あまりに冷たい鯨の音波。

形容では無い、本物の『死』が実際に目に見える形で迫ってきているという…およそ『人間』には発する事など出来はしない、異質なる恐怖の音がゴ・ギョウへと向かって零される。

ゴ・ギョウは見た…砺波の声の中に、目に見える形の『死』の存在を―

そして、ソレと同時に嫌でも理解してしまったことだろう。そう、砺波の話が旨過ぎるのではない…元から、自分にはコレしか選択肢が用意されていなかった。【白鯨】はただ、傭兵たる自分たちに、体裁として表面上のルールを呈示しただけに過ぎなかったのだ…と。

…これは交渉などでは断じてない、提案などでも断じてない。

圧倒的強者からの…いや、【化物】からの、有無を言わせぬデッドｏｒアライブ。

断ることなどできはしない…断れば、自分が想像している『死』よりも惨い『死』が襲い掛かる。

それを、この刹那の時より短い一瞬で。走馬灯よりも濃厚な思考にて、『理解』が脳内に全速力で駆け巡ったからこそ―

ソレを本能にて『理解』してしまったゴ・ギョウの頭の中には、本能的に『生』を選択することしか行動が出来ず…

「よ…喜んでお受けしちゃいまーす…」

『よろしい。』

…と、無意識にそう零していたのだった。

「しかし、どうせなら7人全員雇っておきたいですね。貴方たち、他のメンバーに連絡は…」

「セリは、駄目…セリ、悪魔。子ども達、死ぬ。」

「…ほう？」

「そ、それなー…ナッズーナとちゃんヴェラ辺りならまだアレだけど？セリだけはダメ＆ノーだよねぇマジマージで…」

「スズは？」

「…アレはセリにベッタリ＆ペッタリだから無理ｗｉｔｈ無駄っしょー。」

「確かに。あとノーザン、多分この話受ける。この人、子どもに甘いから。でもナズナ、きっともう島に居ない。あの人捕まる人じゃない…それに他のみんな、多分この話受けない。」

「ほう?」

また、雇い主が変わったからか。

砺波の零した構想に、ローナは即座に反応を入れる。

それはある意味、傭兵らしからぬ変わり身の早さとも取れるのだが…しかし組織内の身内の情報を端的にとはいえここまで簡単に喋ってしまうあたり、彼女もまたゴ・ギョウへと向けていた【白鯨】の雰囲気をその肌で感じ取っていたのだろう。

…逆らうのは無駄、嘘も通用しない。

だったら、本当の事を伝えるのが最も最善であるのだと…彼女もまた、これまでの経験からそう察知していたとしても、ソレはある意味当然と言えは当然で…

「セリ、残った人と他の仕事するって言ってた。だから、みんなもう他の仕事行ってる。ナズナも、多分ソレに合流するはず。」

「なるほど…それは惜しい…まぁいいでしょう、ここで『七草』を3人も雇えるのならば上々です。ひとまず、あなた達だけで良しとしましょうか。」

そして、砺波もローナの言葉が彼女の知りえる『本当』の情報であるということを、その深海の闇が如き深い鯨の目で見透かしているからこそ。

無い物ねだりをすることなく、かといって無茶を押し付けるわけでもなく…

すぐさまローナの言葉を簡単に受け入れつつ、しかし将来的なるどこか碌でもないヴィジョンを張り巡らしつつ。かつての理知的な砺波からは考えられないような、常識から外れすぎている自由な言葉を漏らすのだろう。

…この島で行った、『逆鱗』の劉玄斎とのデュエルでの変化が砺波に『何』をもたらしたのか。

かつての『荒くれ者』と呼ばれていたときの破天荒さ、シンクロ王

者【白鯨】であった頃の誠実さ、理事長であることに対する理性…
ソレらの全てを複合し、ソレらの全てを超越し…かつ、ソレらの全てを調律したような今の砺波の雰囲気は、常識も非常識もその全てを『ある目的』の為にのみ向かわせているかのような唯一つの野心を抱いているようでもあって。
ともかく…

「さて、トウコさんも無事のようですし…1つだけ【紫影】に感謝しなければな。あの屑でも多少は役に立つものだ。」

先ほど血相を変えて飛び込んできた『烈火』の孫と、その『烈火』本人の怪我の状態も命に別状は無かったことから。
…これ以上【裏決島】で心配すべき事項は無いであろうと、砺波は緊張の糸を緩めつつ。
終局へと辿り着いたこの【裏決闘】、その大きな戦いの1つを無事に教え子たちが乗り越えたことに対し…
砺波はその口から、実に理事長らしい…と言うよりも、実に『今』の砺波らしい言葉を漏らしながら―

「実にいい拾い物をした。これで教え子たちの修業の幅が広がると言うものです。…フッ、これで来年の【決闘祭】の表彰台も、我がイースト校が全て頂きですね。」

全ては教え子を強くするためという、単純なるも絶対なる理事長としての思想の中で…

【紫影】を倒した教え子たちの帰還を、悠々自適に待つのであった―

ｅｐ１０１「決島、終戦」

【決島】の終局から3日後―

「では、通信障害は事故だった…と？」

「はい。孤島であることが災いし、予期せぬ機器の不調が重なったと共に、復旧まで時間を要した…そう、報告を受けています。」

日も落ち、既に満天の星空が輝くような時間に…

…デュエリア本土にある高級ホテル、その広い広いパーティールームの一室にて。

大勢集められた記者達の中で、決闘学園イースト校理事長である砺波　浜臣がマイクに向かって、淡々とそう返答をしていた。

…それは何処からどう見ても『記者会見』。

そう、3日前に終着を迎えた【決島】、その決勝戦の直後に起こった中継の切断の釈明と…そしてこの3日間で尾ひれがついて広まってしまった、【決島】についてのアレコレについての説明のために。

紛れもなく、決闘学園イースト校理事長の砺波　浜臣が、大勢の記者たちの前で説明責任を果たしているところであったのだ。

…しかし、ソレも仕方ないことなのか。

何せ3日前、凄まじい激闘を魅せ世界中に大熱狂の渦を巻き起こしたイースト校2年の天城　遊良ｖｓ．天宮寺　鷹矢の決勝戦のデュエル…その決着となった盛り上がりの直後に、突如として【決島】の中継が全世界から切り離されてしまったのだから、中継が突如途切れてしまったあの瞬間に世界中がどれだけブーイングを起こしたのかは言うに及ばず。

確かに準決勝の天城　遊良とリョウ・サエグサのデュエルのときにも、数瞬だけ中継が途切れるという謎の通信障害が起こっていたのもまた事実とは言え。世界中の観客達が楽しんでいた祭典のクライ

マックスに、あんな不手際を起こされれば…
心から【決島】を楽しんでいた観客達に、怒るなと言うほうが無理な話であるのだろう。
だからこそ、今はまさに運営側である決闘学園からの説明と言う名目で、集められた記者達の前で砺波　浜臣は対応させられているまさに最中。

しかし…

単なる機器の不調であった事を報告するだけならば、こんな決闘学園側も記者会見など開きはしない。
そう、わざわざデュエリアの高級ホテルで、元シンクロ王者【白鯨】が決闘学園側を代表し…大勢の記者達の前で、質疑応答をさせられているのには『そうせざるを得ない理由』があるためなのだ。
―それは紛れもなく、【決島】の中継が切れている間に、あの島で起こっていたことに対し…
世界中で様々な憶測が飛び交っているからであって―

「しかしですね、目撃者の証言によると島に竜巻が直撃したと聞いておりますが…」
「そんな災害が起こったのならば、世界的に大きな問題となっているはずです。しかし、気象庁などからはその様な災害が起こったという説明はありません。それに私も島に居ましたが、そんな災害に見舞われた覚えもありません。」
「で、では島を大地震が襲い学生達が大勢犠牲になったのいうのは…」
「デマです。地震など観測されておりませんし、学生達に死者や行方不明者は居ません。何より、あの島に居た全員が何事もなく島より帰還しております。」
「…し、しかし、実際に災害が起こっているのを見たと言う人がですね！」
「一体、そのような突拍子もない情報はどこから来たモノなのでしょ

うか？それは、実際に島に居た私の目よりも確かな情報なのでしょうね？現地にいた私は見ておりません。島は災害や襲撃になど、襲われませんでした。」
「う…」
「砺波理事長！セントラルニュースの者ですが質問よろしいでしょうか！　この度の【決島】ですが、決勝の直後に島が襲撃を受けたというのは事実なのでしょうか！」
「闘都ＴＶです！こちらにもその様な情報が入ってきております！噂では、大勢の犯罪者たちが徒党を組んで学生達を襲っていたとの声が…」
「それもデマです。学生達は誰にも危害を加えられておりませんし、犯罪者集団など現れておりません。」

事実と異なるデマと共に、確かに起こった『真実』を…砺波は同時に否定しながら、淡々と質疑応答を続ける。
しかし、その記者慣れしている表情とは裏腹に…

（…これだからマスコミは困る…一体どこから嗅ぎ付けてきたのやら…）

砺波の心の内では、デマの中に時折現れる紛れも無い『真実』に対し…ハイエナのように情報を嗅ぎ付けてくる記者たちに、悪態を付きたくなるのを必死で抑えているようではないか。
…そう、どこから情報が漏れたのか。
【決闘世界】が情報規制を行ったというのに、様々なデマが飛び交う中に時折本当に起こっていた『真実』が記者達の口から飛び出してくるのだ。
火のない所に煙は立たないとはよく言ったモノ。【裏決島】の終結から、たった3日しかたっていないと言うのにも関わらず…
デマの中に混ざるその『真実』は、誰がどう調べたどう広めたのかすら分からぬほどに世界中の野次馬たちによってぐちゃぐちゃにか

き混ぜられていて。

…【裏決島】で起こった『真実』は、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が敷いた情報規制により、あの時あの島ではあくまでも『何も』起こらなかったということになった。

そう、あの島で起こった非現実かつ反社会的な『真実』など、平穏なる表社会には出してはいけないとのことから。【決闘世界】の働きかけにより、あの島で起こった『真実』は国の上層部と言った一部の限られた者にしか明かしてはならないと明記されたのだ。

しかし、それでも『真実』を探ろうとする輩が現れてしまっていることもまた事実。隠されれば隠されるほど、『真実』を知りたくなってしまうのが人間の性とも言えるのだから、悪意あるデマと共に紛れも無い『真実』を独力によって得てしまった人間が居るのもまた人間の業とも言えるのか。

…きっと情報規制を課した【決闘世界】が、これ以上の情報の統制を行おうとすれば世界の野次馬たちがさらに躍起だってしまうことだろう。規制されたソレこそが、紛れも無い確実なる『真実』なのだ…と。

…ソレ故、【決島】が終わってまだ3日しか経っていないと言うのに。【決闘世界】も、これ以上世界に対し『真実』を下手に隠すことなどは出来はせず。

だからこそ、世界が【決島】の真実に躍起になっているこのタイミングで―

長年のプロでの経験から、最もメディアの対応に慣れているであろう元シンクロ王者であり現決闘学園イースト校理事長の【白鯨】砺波

浜臣が…集められた記者たちの前で、会見を取り行う流れとなったのだ。

（…全く、何故私がこんなことを…）

しかし…

記者達に質問攻めされ続ける砺波の心は、この状況にほとほとウンザリしているかのよう。

…そう、砺波に課せられたのは他でもない。

『真実』を下手に隠すのではなく、デマも真実もその他諸々…その全てを、真っ向から全否定してしまえという、【決闘世界】上層部からの無茶な要求だったのだから。

…半ば強引な騒ぎの鎮圧、砺波1人への白羽の矢。

先ほどから、記者達の質問に対しその全てデマと否定し続けている砺波の表向きの表情は全く変わらない冷静そのモノなれど…

それでも、あまりに面倒な厄介事を押し付けられている砺波の心は、この状況を自分一人に対処させている【決闘世界】に怒りすら感じているようでもあり…

…【決島】が終局した後、【決島】を襲った『竜巻』を見たスタッフや関係者たちには【決闘世界】から口止めがかけられた。

それは表向きには、世間を下手に混乱させないようにせよという、もっともらしい『上』からの伝令。

しかし、島の外に居た関係者達は知らない…あの島を襲っていたモノは『竜巻』などでは断じてなく、もっと恐ろしく汚らわしいモノであったのだということを。

…真なる理由は、竜巻の内部で行われていた【裏決島】なる催しを微塵も露見させないため。

そう、手配書が出回っている未だ捕まっていない犯罪者から、表社会では到底指名手配が出来ないレベルの裏社会の者までもが一同に

介し学生達を襲っていた地獄のような【裏決島】…
未来ある学生達が、そんな危険な目に遭っていただなんて露見すればきっと世間は面白おかしく囃し立てるに違いないだろう。
…下手をすれば、５００年以上に亘って積み上げてきた『決闘学園』の歴史がそこで終わる羽目になる。
もしそうなってしまえば、最も困るのは超巨大決闘者育成機関【決闘世界】であり…その為、スタッフや関係者のみならず、学生たちにも緘口令が敷かれたのは言うまでもなく。
まぁ、それ以前に【裏決島】に巻き込まれた張本人である、各校から選ばれた強者たる学生達からすれば。本当に地獄のようだった【裏決島】を、自ら武勇伝のように語ろうとする愚か者など居はしないのだから…
学生達から『真実』の情報が漏れることなど、そもそもからしてありはしないのだが。

ともかく…

「では質問を変えますが、この度の祭典によって学生達に多くの怪我人が出たのは本当なのでしょうか!?」
「やはりサバイバルデュエルというのは無茶だったんじゃないんでしょうか?島を駆け巡るなんて危険としか思えません!」
「中には、怪我をして今も意識不明の重態となっている学生もいらっしゃるとか!」
「これは安全面の考慮に欠陥があったということに他なりません!開催前からリアル・ダメージルールの採用に反対意見が多数出ていたのは当然ご存知だと思いますが!」
「やはり世間の意見を無視した結果でしょうか!そうなれば決闘学園側の責任問題かと思われますがいかがでしょうか!」
「となればリアル・ダメージルールは時代にそぐわない欠陥ルールと言う事になりますが!」
「なぜ今回の【決島】でわざわざリアル・ダメージルールを採用された

のでしょうか！説明をお願いします！」
「怪我人はどれだけいるのでしょうか！氏名と状態の公表は必須かと思われます！」
「世間は真実を知る権利があるんですよ！包み隠さず公表してください！」
「どうなんですか砺波理事長！運営側の責任は誰が取るんでしょうか！」
「これはリアル・ダメージルールを採用した運営側の責任です！」
「これは決闘学園の責任問題かと！」
「砺波理事長！責任を！」
「砺波理事長！」
「砺波理事長！」
「…」

来た…
そう、とうとう『来た』のだと砺波は感じて。
…矢継ぎ早に繰り出されるは、数にモノを言わせた質問の嵐。
それはハイエナ…もとい、記者達が、巷で噂されている島を襲った出来事を『否定』しつづける砺波に、とうとう業を煮やし始めたからなのだろう。
…確かに関係者たちに緘口令が敷かれている今、あの『島』に居たという【白鯨】の言葉は世間にとってはこれ以上とない『真実』となってしまうのは最早仕方の無いこと。
けれども、それでは『困る』のだと言わんばかりの逸りと焦りで…先ほどとは打って代わって、記者達は一挙に押し寄せるかの如く決闘学園側の『責任』を求め攻め寄り始める。
…砺波も【白鯨】であった現役時代から、幾度となくその悪意に晒され続けてきたからこそ分かる。
この矢継ぎ早に繰り出される質問の嵐、しかも段々と問題を間違った方向へと向けてくるコレこそがマスコミの得意とする手法なのだ…と。

…これまでは世界最大規模の祭典である【決島】を、好意的かつ祭事的に大いに取り上げていたと言うのに。
今度は掌を返したように、『一方的』に責任問題を強く訴え始めるその姿はとてもじゃないが『公正さ』など感じられない、肉にかぶりつくハイエナそのモノ。

「そもそもの発端は砺波理事長、決闘市側が【決闘祭】を開催出来なかったからとお聞きしておりますが。」
「【決闘祭】が執り行えないのは決闘市側の問題です！でしたら、今回の祭典の合同開催は決闘市側に問題があったと言う事になりますよね！」
「劉玄斎学長はどうしたんですかぁ？砺波理事長だけが表に出てきていると言うことは、運営側も今回の責任は決闘市側にあると認めていると言うことですよねぇ？」
「未来有望な学生達に多くの負傷者を出した責任はどう取るおつもりなんですか？具体的なお答えをお答え願います！」
「砺波理事長、どう責任を取るおもつもりですか!?」
「砺波理事長！一言！」
「具体的なお答えをお願いしまぁす！」
「今すぐ具体的な責任を取ってくださらないと、有権者の怒りが収まりませんよ！」
「砺波理事長！」
「砺波理事長！」

しかし…そんな体裁などお構い無しに―
更に過熱し始めるハイエナ…いや、記者たちの勢いは、人と人の声が連鎖を繰り返しながら益々大きくなり続ける。
…【白鯨】と呼ばれた元シンクロ王者である砺波　浜臣に対し、不躾に責め寄り続けるその姿はあまりに醜いと言うのに。
それはまるで、恰好のエサである【決島】に『何』も起こりませんでしたでは彼らも面白くないのだと言わんばかりに―

…いつしか会場内の空気は、今回の【決島】は大失敗をし、そしてその責任は【白鯨】である砺波　浜臣ただ一人にこそあるのだと断定しているかの雰囲気となりて中継をいつまでも流し続ける。

そう、あれだけ話題となり、あれだけ盛り上がり、あれだけ世界を熱狂させた【決島】が―

今では記者達の手によって、あたかも『大失敗』かのように扱われ始めてしまったのだ。

…それは正確な情報を世間に伝えるという大義名分、しかし裏を返せば配慮の無い土足の踏み込み。

記者達の悪意ある魂胆など、これまでシンクロ王者【白鯨】として日々メディアと戦ってきた砺波はよく知っている。政治的なモノも絡んでいるのだろう、誰の指示かは分からぬが、記者達にこう言わせている存在を考えるとある意味言われるがままに仕事を遂行している記者達もまた、ただの駒に過ぎないといえばそれまでなのだが…

しかし、そんな砺波を意に介さず。記者達はどこまでもどこまでも、不躾な無配慮のまま自分達こそが正義、大衆の代弁者なのだと言わんばかりの不相応なふんぞり返りを見せ続けるのみ。

大衆に情報を発信する側ということから、自分達が安全圏にいると思い込んでいるのだろう。まるで正義は報道する側の自分達にこそあるのだと言わんばかりのその問い詰め方は、とてもじゃないが滲む悪意をまるで隠す気もなく放たれ続け…

（…そろそろ時間か…もういいだろう。）

しかし…

そんな、加熱し始めている記者達へと向かって。

砺波はその掌で、ゆっくりと制止を促しながら…

『…お静かに。』

…

……

……

—ピタッ…と。

砺波が、あまりに冷たい声でそう言ったその瞬間—

なんと、アレほど騒がしかった記者達が、まるで何かに押し潰された様にして…

生中継の前だと言うのにも関わらず、突如として記者達の全員が黙りこくってしまったではないか—

そう、決闘学園イースト校理事長、砺波　浜臣が言葉一つで制したその瞬間に。アレだけ過熱していた記者たちの熱が、砺波の冷たい声に一瞬にして冷まされ冷やされ凍らされたかのように…

—誰もがいきなり止まってしまい、その口を噤んで声を閉ざしてしまったのだ。

それは例えるならば、調子に乗りすぎた子どもが大人に制されたかのような状態とも言えるだろうか。

まるで『砺波』という逆らってはいけないモノの前に、突然差し出された生贄のように不意に感じさせられたソレによって…

記者達は、わけがわからぬまま本能によって静まり返ってしまっていて—

そして…

『怪我人が出たのは確かに運営側も不手際です。しかし現状では意識不明の者は誰1人としていません。全員無事、もしくは軽快に向かっている者がほとんどです。』

語る…

『今回の祭典は合同開催に大人数と、これからの決闘学園の祭典のあり方を考えさせられるとても有意義なモノとなりました。リアル・ダメージルールに関しても、学生達に普段以上の緊張感を生み出したと共に…彼らの集中力をこれまで以上に引き出すきっかけにもなり、大いに成長した学生たちが大勢見受けられました。これらの成功、反省、色々な箇所を踏まえ、今後の祭典に大いに役立てたいと思います。』

邪魔者が居なくなった壇上で…

『最後になりますが、表彰式は明日執り行われます。終了時に不手際や不調が相次いだために、表彰式が延期になっていましたが…学生達の栄誉を称えるためにも、表彰式は明日の正午に決闘学園デュエリア校にてしかと執り行われる予定です。皆様、【決島】を戦いぬいた学生達に、祝福の言葉を是非ともよろしくお願いします。』

砺波はただただ淡々と、冷たい声で語り続ける―

記者達に反論を許さない、理解させるためだけの冷たい言葉。ただ聞かせるために放たれる砺波のソレは、記者たちに苛立ちを感じていたが故の重く冷たい静止でもあるのか。

…先ほどまでの記者達の質問に、何一つ答えていない。

それどころか、【決島】を失敗に陥れたい記者達の意を嘲笑うかのようにして…砺波の口から語られるは、【決島】は成功したのだというただソレだけの事後報告。

果たして…この会見の中継を見ていた、大勢のＴＶの前の者たちは気付く事が出来ただろうか。

…砺波　浜臣が発した、異常なまでの冷たいその言葉を伴った『無

言の圧力』に。

きっと、世界中のその他大勢、大多数の者達は気付くことすら出来はしなかったに違いない。果たして、今の砺波の声の本質に気付く事すら出来なかった者達は、自分たちの立ち位置が一体どれだけ幸せなモノなのかと言う事を理解出来るのだろうか。

…いや、出来はしない。

砺波の会見を見て、『何』にも気付く事が出来ずに好き放題言えるような…そんな圧倒的に弱いその他大勢の、有象無象の、自分が大多数に数えられていることにも気付かぬ程度の弱者たちは、今の砺波の会見を見てもＴＶの前で批判という無知を晒しているに違いない。

けれどもＴＶの前の赤ん坊や犬や猫…それに勘の鋭い幼い子どもや、多少腕に覚えがあったり多少の歴戦を生きたりした大人は気付いている。

そう、今の砺波　浜臣…前シンクロ王者【白鯨】、現決闘学園イースト校理事長の肩書きを持った男から感じられるモノが、紛れも無い圧倒的なる『恐れ』そのモノであるのだということを。

赤ん坊は泣き喚き、犬猫は震え隠れ…才能ある幼い子どもはその場で固まってしまい、腕に覚えのある大人は自分の耳を疑い…

そして歴戦を知っている少ない猛者は、【白鯨】が最早この世において逆らってはいけない、圧倒的高みに位置している恐るべき者であると言う事に、この会見を見て気が付いてしまった。

…だからこそ、ＴＶの前ならいざ知らず。

中継の爆心地、この記者会見に参加している記者達は、軒並み漏れなく全員が今自分達が置かれている状況をこの一瞬で嫌でも理解してしまったことだろう。

…震えが止まらない、声が出ない…あぁ、【白鯨】に逆らってはいけない…と。

まるで生身で深海に放り込まれたかのような絶望感、巨大な深海生物が足元で口を開けているかのような切迫感。

今まで、自分達は『何』に対し調子に乗っていたのだろう…そんな

急転換した思考を思い浮かべることすら許されず、砺波の声に晒され続ける単なる一般人に過ぎない『記者』という職業であるだけの単なる有象無象達は、砺波から感じさせられている圧倒的な『圧』の前でただただ椅子に固まり座らされているだけであり…
今ここで下手に動けば、たちまち命が散ってしまう…それを言葉や心や本能ではなく、『無意識』に刻まれたからこそ―

『では、これにて記者会見を終了とさせていただきます。』

一方的に、砺波が記者会見を打ち切った事にすら誰も反応出来ないまま…

『…ないとは思いますが、何か最後に質問のある方は…』
「…あ、あの、さ、最後に1つ、質問…よ、よろしいでしょうか…」
「…はい？」

いや…
深海の如き砺波の『圧』が、まだ消えていないと言うのに1人だけ。
砺波の言葉に反応した勇気ある記者…いや、命知らずな記者が、口を震わせながら言葉を漏らし…

「貴方は？」
「ちゅ、中央決報のサエグサと申します…あ、あの…3位決定戦の結果は…あ、その…む、息子が、【決島】に出ていましてですね…い、一応、け、結果を知りたくて…その…」
「サエグサ？…あぁ…」

しかし…
一人の勇気ある記者が、『そう』名乗った瞬間に―
今まで醸し出していた、深海の水温が如き冷たい声を一転…
何やら砺波の態度が少々和らいだと同時に、記者達へと向けていた圧を徐に説き始めたではないか。
それはこれまで、誰も名乗らなかった記者達の中で唯一その男が名を名乗ったからなのか…
まぁ、規格外の圧を放つ砺波に促され、記者も名乗らざるを得なかったのもあるのだろうが。それでも、その中央決報の記者の『名前』と『見た目』に何やら見覚えと聞き覚えがあるのだと、そう言わんばかりに砺波は反応しながら。
先ほどまでの、記者たちを押さえつけていた圧を解きつつ…
その最後の質問に対し、中継に聞かせるようにではなく…ただ一人、名を名乗った勇気ある記者の1人に伝えるように、声を和らげながら砺波は再度その口を開き始め―

「そうですね、3位決定戦の結果をお伝えするのを失念しておりました。機器の不調により、3位決定戦が放送出来なかったことはこちらの不手際です。ですので、この場を持ちまして3位決定戦の結果を発表させていただきます。【決島】における3位決定戦は、デュエリア校のリョウ・サエグサ選手と鍛冶上　刀利選手によって行われ……その結果、リョウ・サエグサ選手が3位入賞となりました。」

無論、方便だ。
雰囲気の変わった砺波の発表によって、ほんの少し会場がざわつきを取り戻したとは言え。
【裏決島】という、アレだけの騒ぎがあった中で『3位決定戦』が行われていたはずもなく…
ただの、方便。そう、うやむやになってしまったとは言え、【決島】

の結果は決闘学園のみならずプロの世界の事情にも関わってくるために…最後の結果に関しては、【決島】が終局した後すぐに当事者たちを交えて話し合いが行われた。
…優勝はイースト校２年の天宮寺　鷹矢。準優勝はイースト校２年の天城　遊良。
それは絶対に覆せない不変の結果なれど、まだ決まっていなかった３位についてはその限りではない。

…あの騒動のあと、デュエリア校の鍛冶上　刀利は自ら３位を辞退した。

果たして、鍛冶上　刀利が何を思って３位を辞退したのかは彼のみぞ知ることなれど…それでも、本来ならば決闘学園を既に『卒業』しているはずの歳であることを、彼が自覚しているのもその要因のひとつなのか。
…『留年』が認められないはずの決闘学園の校則において、別の誰かの物語にて形式的に『留年』という例外を認められた鍛冶上　刀利。
その彼が３位を辞退したが故に…自動的に、【決島】の３位入賞は決闘学園デュエリア校３年、デュエルランキング第１位、『ギャンブラー』のリョウ・サエグサに決定したというわけだ。
まぁ、デュエルもしていないのに３位にされたリョウは、若干納得がいっていないような事も言ってはいたのだが。
それでも鍛冶上　刀利の『事情』を知る数少ない友人であるリョウ・サエグサからしても、鍛冶上　刀利が何を思い何を考え自分に３位を譲ったのかをよく理解しているからこそ。
刀利の気持ちを無碍にすることなく、甘んじてその結果を受け入れたのはまた別の話で…

ともかく…

「Ｗｏｗ！Ｉｔ☒ｓアメイジん…あ、し、失礼しました…」

「いえ、元シンクロ王者の私からしても、リョウ・サエグサ選手のデュエルには目を見張るモノが感じられました。息子さんの3位入賞、おめでとうございます。彼のプロの世界での活躍を、私も楽しみにしています。」

記者会見の最後に、他の誰でも無いたった一人の記者の男へと向けてそう言葉を残して。

未だ静寂が包む、中継が繋がったままの記者会見場を…

「それでは、私はこれで。」

砺波は、後にしたのだった…

―…

デュエリアの街、そのどこかの病院…

その、一室にて。

「…アイは、まだ眠ったままかい？」

「あぁ。命に別状はないそうだが…目を覚まさないのは、精神的なショックが大きいのだろうと医者は言っていた。」

「そっか…」

ベッドにて死んだように眠っている少女を見つめている、神妙な面持ちをした2人の男の姿があった。

…それは今年からプロデビューを果たした、新進気鋭のルーキーの2人。

短く切り揃えられた黒髪と、不倒を思わせる佇まいから今では『鋼鉄』と呼ばれている決闘学園ウエスト校出身の男と…
整えられた青髪と、どこまでも清く爽やかな印象を思わせる風貌からプロの世界では『清流』と呼ばれている決闘学園イースト校出身の男…

―『鋼鉄』、十文字　哲
―『清流』、泉　蒼人

「アイ、本気で焔のことを生き返らせようと…」
「…無駄なことを。死んだ人間は生き返らない。それは奴との…『霊王』との戦いで、嫌と言うほど思い知らされた現実だろう?」
「…うん…でも、もし僕達がアイの立場だったら…僕達も、どうしていたかな。『霊王』との戦いに置いていかれて、『神』の力を持ってしても死んだ人間は生き返らないことを受け入れられないところに…甘い言葉を、持ちかけられたとしたら。」
「…アイと同じ行動をしただろうな。間違いなく。」
「そうだね。僕もそう思うよ…だから、僕達でアイを止められなかったのが…本当に、申し訳ないよね。アイにも、アイを止めてくれた遊良君にも…」
「…そうだな。」

そんな彼らは、目を覚まさぬ友の前にて…
かつてその身に降りかかった、決していい思い出ではない大切な友の1人を失った苦い思い出…『霊王』と呼ばれていた者との戦い、『別の誰かの物語』を今再び心の奥で噛み締めつつ。暴走してしまったアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンが未だ眠りに付いていることに、気落ちしている表情を見せていて。
…別の誰かの物語にて、かつてはこのデュエリアの地で決闘学園デュエリア校中等部に通っていた泉　蒼人と十文字　哲。
故郷であるこの地にて、今の彼らが思うことは何なのか。1つの物

語を終えたと言うのに、その爪痕で未だ苦しみ続ける旧友を見舞いつつ…

己の無力さを嘆いているかのような今の彼らの雰囲気は、およそ【裏決島】が終結したとは思えない程に重々しいではないか。

…彼らが【決島】に御忍びで来ていなかったら、きっと学生側の被害は更に甚大なモノになっていたはずだと言うのに。

そう、医療棟に篭城していた学生達が全員無事なのも、偏に彼らが大勢の犯罪者たちや裏の猛者達を相手に、学生達を守り戦ってくれていたからこそ。

そんな彼らの功績を考えると、もっと彼らは称えられていてもいいはずで…大きな仕事を終えた彼らの表情も、もっと晴れていても可笑しくはないはずなのだ。

…しかし、依然として蒼人と哲の表情は重いまま。

眼下にて眠り続けるアイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンの、実年齢よりもかなり若く…いや、幼く見えるその寝顔を見続ける彼ら2人の心には、彼らもまた『かつての戦い』の痛みが浮かび上がってきているかのよう。

ソレは偏に、過去に囚われ続けている大切な仲間を自分達の手で救い出せなかった後悔と…

大人になりかけていると言うのに、いまだに過去の傷を思い出してしまう自分達の弱さに打ちひしがれているかのようで―

「刀利君もようやく『呪い』が解けたんだ。だから…アイが目を覚ましたら、全員でもう一度ちゃんと話し合おう。その時は頼んだよ、哲。」

「あぁ、それが俺の役目だ。今度こそ…アイを救ってみせる。」

「うん。」

もう子どもでは無い、大人への階段を上がり始めた蒼人と哲。

いつまでも少年のままではいられないからこそ、自立を始めた大人

としての責務を今一度その心に刻み直し…
既に一度区切りが付いている過去の物語から、今こそ全員の完全なる解放を目指して。蒼人と哲は、未だ眠り続けるアイナをどこまでも慈しみながら見守っていて…

そんな、アイナ・アイリーン・アイヴィ・アイオーンが眠り続ける病室の…

…ドアの外、そのすぐ横の壁にもたれかかるようにして。

決闘学園デュエリア校、鍛冶上　刀利は沈黙していた。

「あれ、鍛冶上さん…？」
「…天城君、どうしたの？こんな時間に。」

すると、沈黙していた鍛冶上　刀利へと。
偶然鉢合わせたのだろう、病院の階段を『上がって』きたイースト校２年の天城　遊良が…徐に、刀利へと向かって声をかけて。

「あ、えっと…ちょっとルキの様子を見にきてて…それで、そろそろ帰ろうかと…」
「…そうなんだ。…無事に目が覚めてよかった。アイナに代わって…お詫びします。」
「別に鍛冶上さんが悪いわけじゃ…全部…全部、【紫影】の所為です。アイナって奴があんなことをしたのも…ルキがあんな目に遭ったのも…全部、【紫影】が…」
「…うん、そうだね。でも、アイナのせいで君の彼女が傷付いたことに

は変わりないから。…アイナがあんな風になっちゃったもの…僕のせいだから。」

３日前の【裏決島】において、お互いに手を組んで騒動の解決の為に奔走していたことから…そう、一緒に大きな悪へと立ち向かったその経験から、遊良の中には鍛冶上　刀利という年上の男に対しても精神的な壁などは既になく。

偶然鉢合わせたタイミングなれど、遊良と刀利の重なる会話には歳の差はあっても同じ困難の乗り越えた共通の意識があるようでもあり…

…そう、遊良も、刀利に大いに助けられたからこそ。自分達では立ち向かえなかった恐ろしい花魁に、たった一人で立ち向かい道を作ってくれた刀利を確かな強者として遊良も心から認めているのだろう。

だからこそ、刀利の歳が本当ならば既に高等部を卒業しているはずの年齢であったとしても。刀利の実力が、想像もつかないくらいの高みに位置しているのだとしても。

あくまでも、戦友のような面持ちで遊良は刀利と会話を続けるのみであり…

「いや、だからルキは彼女ってわけじゃ…」

「…それで、本当はどうしたの？」

「…え？あ、それはその…」

しかし…

帰るところだったと述べた遊良へと、鋭く言葉を返した刀利。

そう、高天ヶ原　ルキのお見舞いの帰りと言う割には、遊良の雰囲気は未だ病院から抜け出ておらず。何やらルキのお見舞い以外にも、『何か』この病院に強い遺り残しを抱えているかのような様子を見せているのだ。

何せこんな夜も遅い時間、とっくに一般の面会時間を過ぎてしまっている時間にも関わらず遊良がわざわざ病院にまで足を運んできた

と言う事も然る事ながら…
―帰ろうとしているはずなのに、遊良が上層階へと階段を『上がって』きた事が何よりの証拠。
だからこそ、単なる幼馴染への面会だけではない。彼にはもっと『別』の目的…一般の来客が少なくなる、面会時間が終わったこの時間だからこそ病院に現れた別の理由があるのだろうと言う事は、付き合いの短い鍛冶上　刀利にだって把握できてしまうほどに今の遊良の雰囲気が表しているのであって。

「…いえ、別に大した用事じゃないんです。本当に、もう帰ろうかと思ってたところで…」
「…劉玄斎学長の病室は面会謝絶になってたよ。」
「え？」
「…【決闘世界】の人間以外立ち入り禁止みたいだから…多分、誰もまだ学長には会えないと思う。僕も、さっき見てきたら入れてもらえなかったから。」
「そ、そうですか…」

ソレ故、そんな遊良の心を見透かしたように―その口から続けられた刀利の言葉は、遊良へと向かって鋭く伸びる。
…また、刀利があまりに唐突に的確な『答え』を述べたからか。
遊良もソレを否定することが出来ずに、反射にて刀利の言葉をただただ飲み込んでしまったではないか―
けれども、遊良と劉玄斎の『関係』など刀利は知らないはずだと言うのに…
そう、あの『大空洞』で【紫影】が言った、天城　遊良と『逆鱗』の劉玄斎との関係性…その明確な答えは未だ龍の心の奥底にしか無いとは言え、遊良はソレを軽々しく他人には話してはいない。
…いや、話せるはずもない。
Ｅｘ適正を持たない自分が、よもや【王者】と同格と称えられる伝

説のデュエリスト『逆鱗』と血の繋がりがあるかもしれないだなんて…それが真実ならば心から嬉しい事実である反面、【紫影】が言っていたようにＥｘ適正を持たない自分なんかと血の繋がりがあるだなんて『逆鱗』の迷惑にしかならないのではないかと…そう、遊良が考えてしまっているのもまた仕方のないことなのか。

だからこそ、他言していないソレ…遊良と劉玄斎に『繋がり』がある可能性を知るのは、あの時あの場にて【紫影】の言葉を聞いた遊良と鷹矢しか居ないはずだというのに。

それでも、突然かけられた言葉に思わず声を失っている遊良を意に介さず。

デュエリア校の鍛冶上　刀利は、更に静かに言葉を続け…

「…僕のおじいちゃんさ…」

「え？」

「…僕のおじいちゃん、デュエルをしちゃいけない人なんだけど…でも、本当はとても強いデュエリストで…一度だけ、僕らを助けるためにデュエルしてくれたんだ。」

「…えっと…ごめんなさい、意味が良くわからな…」

「…簡単に言えない事情は、きっと誰でもあるんだよ。…でも大丈夫。いつか、必ず教えてくれる日がくる…家族なら、絶対に。」

「ッ…」

どこまでも静かに語られる刀利の言葉は、透明な音となりて遊良の心に伝えられる。

…一体、この男はどこまで遊良の心を見透かしているのだろう。

潜り抜けてきた死線の数か、これまでの経験か…はたまた、常人とは異なる運命を背負っているが故か。

脈絡がないように思われる話の中から、遊良に響く言葉を選び…

遊良よりも重ねてきたほんの数年、しかしてこの年代ではとてつもなく大きな歳の差によって。彼にしか伝えられないモノを、遊良の心へと伝えようとしている様子。

「…焦っても仕方がないよ。今は…待つしかないんだから。」
「……はい。」

…それでも釈然としていないのは、遊良がまだまだ子どもだからなのだろう。
そう、何せ遊良が大空洞に突入したときに、『逆鱗』はすでに酷いくらいにボロボロの状態だったのだ。
【紫影】から拷問を受けていたらしいし、衰弱した状態で【紫影】と実体化したデュエルもして…出血が酷いにも関わらず、巨岩から鷹矢を救うために体に鞭を打ち続けてくれていた。
ソレ故、別れ際に眠るように気を失っていた劉玄斎の事を見てしまえば―
いくら次に会う約束をしたとは言え、あの瞬間が『今生の別れ』になってしまうのではないかと遊良が心配してしまうのも無理はなく…

―『焦っても仕方がない』

その刀利の言葉を聞いて、自分の心に『焦るな』と遊良も言い聞かせてはいる。
それでも、心に大きなざわめきが残ったままなのは遊良のこれまでの『孤独』の人生を考えれば当然と言えば当然で。
『天涯孤独』…血の繋がった家族の居ない、この世界に一人ぼっちで取り残されている感覚はその境遇に陥った者しかきっと理解できない。
まぁ、それでも遊良が刀利の言葉を聞き入れられるのは、偏に鍛冶上　刀利という男の人生もまた壮絶なモノであったからに他ならないのだろう。
そう、境遇は違えど、お互いの人生に通ずるモノがある刀利の言葉だからこそ―
理屈ではなく、刀利の言葉は他の誰の言葉よりも確かな重みを持っ

て…
逸り焦る遊良の心を、ほんの僅かに鎮めているのだった―

―…

深夜…
それも、夜更けをとうに過ぎた時間。
「さて、概ねこんな感じで大丈夫じゃろ。では表彰式は予定通り、明日の正午から執り行うこととしようかの。」
「そうですね。これも砺波理事長が会見で上手く言ってくださったおかげです。」
「フォッフォッフォ、流石は浜臣じゃ。やはり木蓮ではなく浜臣に任せて正解じゃったわい。何せお主、ワリと簡単にキレるからのぅ木蓮や。」
「…お恥ずかしい限りです。」

決闘学園デュエリア校、その広大な校舎のどこかの会議室の1つに…
明らかな疲れの表情を見せている、3人の男の姿があった。
1人はこの場の誰よりも歳を重ねた皺だらけの老人…白い髪と白い髭、そしてその深い皺に眼を隠した、しかしてこの世の誰よりも決闘界を見てきた超巨大決闘者育成機関【決闘世界】最高幹部…
―『妖怪』と呼ばれし翁、綿貫　景虎。
1人は太い樹木の様な芯のある声に、その内側に限りない熱を内包

しているような…死線を潜り抜けたモノしか発せられない雰囲気を持ち合わせた、ざわめく木々のような男…

―決闘学園ウエスト校理事長、李　木蓮。

1人は…

およそ、この世にある言語では形容し難いモノであると思えるような…あえて言うならば、この世の何よりも深く冷たい深海のような雰囲気を纏っていると思える、元シンクロ王者【白鯨】…

―決闘学園イースト校理事長、砺波　浜臣。

しかし、夜更けも過ぎ、もうすぐ日が昇ってくるような時間帯であると言うのにも関わらず。

お世辞にも若いとは決して言えない、壮年もしくはソレを過ぎた歳である男達3人が今の今まで会議室に篭って何やら話し合いをしているこの光景は…

それだけ、他の人間に聞かせるわけには行かないような話しを、この3人がしていたに他ならないと言う事でもあり…

「ところで浜臣、子ども達の様子はどうなっておる？」

「はい、攫われかけた学生達のほとんどが後遺症もなく全快に向かっています。…しかし、数名にＰＴＳＤといった後遺症が残る可能性が…特に、1年生で代表に選ばれていた生徒にその傾向があるかと思われます。」

「ま、突然あんな目に遭えば無理もあるまいて。生徒達の心のケアと、事実の隠蔽を怠るでないぞ？後々面倒な事になればまたハエ共が騒ぐからの…未来ある子ども達に、これ以上余計な負担をかけさせてはならん。無論、その親御さん達にもの。」

「承知しております。それともう1つ…医療棟で篭城していた学生達ですが、彼らの方は全員が無事に生還し、後遺症などもなく現在は全

員が全快しているとのことでした。これも泉君と十文字君の尽力のおかげですね。彼らが居なかったら一体どうなっていたことか…」
「うむうむ、流石は『清流』と『鋼鉄』の２人じゃ。儂の目から見ても、彼らは若手の中でも一際輝いておる。２人ともいずれ【王者】となれる資質を秘めておるしのぅ…流石はお主らの学園の卒業生たちじゃ。儂も鼻が高いわい。」
「いえ、これも彼らが自主的に行動してくれたからこそでしょう。私は何もしていません…むしろ、泉君があんなにも頼もしい子だったのを私もあの場で初めて知りました。」
「フォッフォッフォ、『清流』は『虎徹』の息子じゃからのぅ、虎太郎の息子ならば荒事に慣れているのは当然じゃろうて。『鋼鉄』も霊峰を守る一族の出身…じゃったら、医療棟で戦っておった者達は心配いらなさそうじゃな。……うむ、流石は強い子たちじゃ。誰１人として欠けず本当によかった、あの屑に好きにされるほど、【決島】の子達は弱くないからの。」

まぁ、とは言え会議自体は既に終わったのか。
少々緩んだ雰囲気の中で、談笑を交えて言葉を交わす３人の男達の間にはつい先ほどまで漂っていた堅苦しいモノは既になくなっており…

…今後の方針、ひいては明日の『表彰式』に関する取り決めを完全に決めきった後に話されるのは、主に【裏決島】によって傷付いた大勢の学生達のことについて。

確かなる安堵とともに零されるその言葉からは、途轍もない気苦労を超えた安堵の溜息のようなモノが感じられ…
そう、倒され気を失った学生こそ居るとは言え、裏社会に連れ去られた学生達が誰１人としていなかったのは上出来も上出来。
【裏決島】の終局から３日経った今、おおよその状況と状態が把握できたからこそ砺波たち【決島】の責任者、ひいては主催である【決闘世

界】側からすれば…
決闘市とデュエリア、総勢２００名の学生達が誰１人として欠ける事なく無事に生還したことは、最早一種の奇跡と呼んでもいい程に上出来すぎる結果となっているに違いないのだ。
…パニックになり散り散りになった学生達は、敵の船によって連れ去られかけていたところを竜巻の消滅と同時に突入した警察やら軍隊によって、海岸線にて即座に救出された。
…医療棟にて篭城戦を行っていた学生達は、夥しい数の敵たちを相手に一歩も引かずに立ち向かい続けていた。
それもこれも、篭城戦にて耐え忍んだ決闘市およびデュエリアの学生達の忍耐と…
なにより、途中から救援に駆けつけたプロデュエリスト、『清流』の泉　蒼人と『鋼鉄』の十文字　哲の尽力があってこそと言えるに違いないことだろう。
ゆうに１００を超える数の犯罪者たちが、医療棟を集中的に襲ってきていたと言うのにも関わらず…裏決闘界の名のある猛者を相手に、一歩も引かずに押し返していた泉　蒼人と十文字　哲。

その力は、彼らが学生だった頃と比べても段違いに磨かれていた。それはまさに、彼らがプロの世界でどれだけの戦いを送っているのかを他の学生達も大いに理解したに違いなく…
…蒼人と哲が来てくれなかったら、もっと早い段階で医療棟を責め崩されていたに違いないだろう。
そうなっていれば、きっとあの場にいた全員が犯罪者たちによって蹂躙され…医療棟が、【裏決島】の中でも最大の地獄絵図と化していたに違いない。

…抵抗していた学生達に、下手をすれば死者も出ていたかもしれない。
…戦えずに守られていた女生徒達たちが、下種な犯罪者たちによって酷く汚されていたかもしれない。

…怪我をして治療中だった学生達も、その場で攫われるか殺されていたかもしれない。

だからこそ、【裏決島】において最も功績ある仕事をしたのは他でもない。『清流』の泉　蒼人と『鋼鉄』の十文字　哲だというのが、砺波や綿貫たち【決闘世界】側からの認識でもあるのか。

…また、ソレとは別に。

此度の騒動において、最も驚愕を受けたのは学生でも関係者でもギャラリーでもなく…島を襲ってきた、雑兵のような犯罪者たちであると言えるだろう。

…そう、島を襲っていた犯罪者たちも、終盤になって度肝を抜かれたに違いない。

何せ、竜巻が消えたそのすぐ瞬間に。恐ろしいまでの数の警察やら軍人やらが、こぞって島を包囲し海中を網羅し、更に空中までをも制圧していたのだから。

…子どもをデュエルで倒し連れ去るだけと聞いていた、簡単な仕事がまさかこんな形であっさりと終わりになってしまうだなんて話が違う…

楽に逃げ切れる、捕まることなどない、簡単に大金が手に入る、本当にイージーな仕事だと聞いていたのに…捕まるなんて話が違う、あっさり捕まってしまうだなんて聞いていない…と。

きっと、雑兵のような有象無象の犯罪者たちの誰もがそう思っていたことだろう。

そう…まさに一網打尽。

およそ警察たちにとっては、初めて味わうほどの数の大量検挙。中にはその場で捕まらずに島の中に逃げた猛者もいるらしいが、おおよその犯罪者たちはその場で逮捕された。

また、どうにか逃げようと画策し逃亡を図った裏の猛者達も、完全包囲された島からは脱出する事は叶わず。軍と警察による人海戦術

とローラー作戦によって、一人一人また一人と島の隅々から炙り出され…今では島には、誰1人として隠れられていないのだ。
　それもこれも、砺波が待機させていた海上および海中そして空上警備隊の迅速なる仕事っぷりと…綿貫の持つ【決闘世界】の私設軍隊と、ソレに加え綿貫が前もって呼んでいた大勢の警察が海の上にて待機していたからこそ。
　大量検挙、大量逮捕。裏社会の縮図を大幅に変えるほどの今回の捕獲劇は、言うまでもなく裏社会に大きな影響を与えており…

「これでしばらくは裏の連中も静かにする事じゃろう。今回の件で、相当数の者達が捕まったのじゃからのぅ。木蓮、お主からも『樹龍会』を大人しくさせておけ。しばらく、『下手な動き』はするな…との。」
「綿貫公…私は既に『あちら側』からは手を引いているのですが…まぁわかりました。王（ワン）の奴に確かに言いつけておきます。」
「うむ。……浜臣や、お主も、くれぐれも『余計な事』はするなよ？」
「…ええ、わかっていますよ。『余計な事』は何もしていません。全て、『必要な事』です。」
「ならば良い。お主のことじゃから心配はしておらぬが…ま、一応、一応じゃ。何やら、『面白いモノ』を拾ったと聞いたもので…の？」
「フッ。」

　まぁ、敵の中にはアレだけ包囲網の中からそれでも逃げおおせたほどの規格外の者や、秘密裏に取引されて捕まらなかった者がほんの数名居るらしいのだが…
　…寒気すら覚える『妖怪』の小言を、深層海流のように流す【白鯨】。
　世の中が決して綺麗事だけで動いている訳ではない事を知る大人達は、ソレはソレとしてお互いにこれ以上言葉を交わさずとも『何か』を交わしあっている様子を見せていて―

　ともかく―

「のぅ浜臣、明日の表彰式はトウコちゃんも出られるんじゃろう？」
「はい。獅子原理事長はすでに意識を取り戻し、明日の最終検査が終われば退院できるとのことです。炎馬君が獅子原理事長を塔に担ぎ込んできた時には驚きましたが…幸い、頭部以外の怪我自体は大したことはありませんでしたので、塔の医療室でも充分な治療が出来たのが良かったのでしょう。また、頭部の怪我も昨日の精密検査で異常なし…流石の回復力ですね。」
「フォフォッ、何せアスリート並の体力しとるからのぅトウコちゃん。ま、滅多な事じゃ死なんじゃろ。しかし蛇蝎坊め…まさか烈火のみならずトウコにまで手をかけるとは…それにトウコも、年甲斐もなく馬鹿な真似をしたものじゃ。」
「…無理もありません。烈火先輩を目の前で殺されたんですから、【紫影】への怨みは未だ相当のモノなのでしょう。」
「…そうじゃな。」

理事長や幹部が集るこの場に居ない、決闘学園サウス校理事長のことを話題にあげつつ。
昔の【紫影】を知る綿貫や砺波が、『烈火』と呼ばれる獅子原　トウコへの心配を見せているのもソレはソレである意味仕方の無いことであり…
…まぁ、とは言えたった今砺波が言った通り。
『烈火』は無事…というか、すでにピンピンしているのだから、これ以上の過剰な心配など必要ないことは彼らも理解はしているのだろうが。
そう、3日前の【裏決島】で、『烈火』が【紫影】から受けた落石のダメージは同じ攻撃を受けた天宮寺　鷹矢同様…岩自体が軽石であったためか、肉体が受けたダメージは思ったよりも軽くで済んでいたのだ。
…また、最後に【紫影】が使った【ファイヤー・ボール】による実体化した効果ダメージも、重なり合った岩が盾になったのか直撃はしておらず。

火傷も軽度、骨折などもなく…迅速な処置が良かったのか、騒動が終わってからすぐに意識を取り戻し、現在はほぼほぼ完治していると言っても過言ではないほどに回復しているのであって。

…とは言え、獅子原　トウコが最後に弾かれた時に頭を打っていたのはまた事実。

頭部を強打し、そのまま気を失って…岩で切ったのか、頭から血を流していたのは事実であるのだから、あのまま放置されていればそのまま死んでしまっていた可能性もまた否定できない事実に違いないことだろう。

だからこそ、【裏決島】の最中に意識の無かった獅子原　トウコが、迅速に治療を受けられたのは運が良かった。

『逆鱗』のおかげで、彼女の孫の獅子原　炎馬がすぐに祖母を運べたのもそう。医療室のある天空の『塔』までの真っ直ぐな道筋に、『敵』が居なかったのも天城　遊良と天宮寺　鷹矢と鍛冶上　刀利がそのルートを真っ直ぐに進んできたからこそ。

様々な要因が重なって、今こうして『烈火』が何事もなく目を覚ます事が出来たのも、偏に色々な要因が重なった結果とも言えるのであり…

「まぁよい、子ども達も無事、スタッフも無事、我々も無事じゃったんじゃ。終わりよければ全てよし、では浜臣、明日の最終確認の方は任せたぞ。木蓮、学生達の引率の手筈も抜かるでないぞ？」

「はい。」

「承知しました。」

そして…

そろそろ夜も明けてきた時間帯で、ようやく運営側の話も全てが纏ったのだろう。

秘密の会議も終わり、この場にいた3人が…会議室から出ようと、重い腰を持ち上げ立ち上がり始める。
2時間は仮眠を取れるであろうことから、もう若くない3人は重い瞼をどうにか持ち上げ続けながら。ようやく取れる睡眠へとその意識を向け始めているのだろう、資料を手早く片付けつつそそくさと会議室から出ようとしていて…

「…しかし、少々厄介なことになったのぅ…いやはや、まさかこんなに『上手く』いくとは思わなんだ…」

いや…
何やら、去り際にポツリと『妖怪』が零したと思うと。

「綿貫さん、何か言いましたか？」
「まだ何か懸念が？」
「フォ？い、いや、何も言っておらんぞ？」

無意識だったのか、砺波と木蓮の声かけに思わず大げさなリアクションを取った『妖怪』が…

とても…とても面倒そうな感情の言葉を…

窓から覗く、昇り始めた朝日の光に吸い込ませ、消していくのだった—

—…

翌日…

「…砺波先生、おはようございます。」

「おはよう。」

まだ朝も早い時間、朝食を取るにもまだ食堂が開いていないような時間のこと。

イースト校の学生が宿泊しているホテルのロビーにて、スタッフもまばらな中で…

よほど早起きしたのか、それとも眠れなかったであろうイースト校2年の天城　遊良が。丁度エレベーターから出てきた、明らかに仮眠を取っていない様子の疲れが見えるイースト校理事長へと…

そう、砺波　浜臣へと向かって、駆け寄るようにして声をかけていた。

「早いですね天城君。昨日の帰りも遅かったと先生から聞いていますが…」

「はい、昨日はルキの病院に行っていて…すみません、こんな朝早くから声をかけて。少し聞きたいことが…あの、今ってお時間は…」

「大丈夫ですよ。表彰式の準備に向かうには少々早く下りてきてしまったので。」

砺波が仮眠も取らず、続けて仕事に向かう事を遊良は知らない。

とは言え、砺波の仕事の忙しさを知っていたとしても…どこか待ち伏せするようにして砺波を待ち構えていた遊良も、ここで引く気はないのだろう。

…連日の事後処理の対応で、多忙に追われている砺波の表情は見るからに疲れている。

けれども、連日の対応に追われ捕まらない砺波と話をする、『聞ける』のはもうこのタイミングしかない事を遊良もわかっているからこそ―

焦りながら、逸りながら。遊良はどうしても、砺波を問い詰めようとしているのか。

「それで、何を聞きたいんですか？まぁ、粗方予想は付いていますが。」
「はい、えっと…その…『逆鱗』の様子は…」
「まだ目を覚ましません。よほどのダメージを受けていたのでしょう。」
「…そうですか。」
「ええ、ですから当分は面会謝絶のままです。それに目を覚ましても、【決闘世界】からの取調べやら処罰やらでしばらくはゴタつくでしょうから…少なく見積もっても、次に会える時間が取れるのは目覚めてから2か月以上先でしょうね。」
「しょ、処罰…それに2か月以上って…も、もし目覚めなかったら…」

まぁ、遊良が昨日の夜にルキのお見舞いに行ったという情報から、砺波も遊良が抱いているその『真意』は容易に予測していたに違いなく。

ソレ故、少々淡々にて伝えられるその通達は…嘘偽りがない分、余計に無慈悲な通告となりて遊良へと伝えられる。

…昨晩、デュエリア校の鍛冶上　刀利に、『焦っても仕方がない』と窘められたばかりだと言うのに。

それでも、未だ高等部2年生のという大人になりきれない天城　遊良という少年の心は…どうにも落ち着く事などできない様子で、その焦燥を抑えることが出来ないでいるのか。

…そう、これまで歩んできた『孤独』の人生、その『天涯孤独』というこの世の何よりも恐ろしい恐怖に常に苛まれている遊良の心に

は、最悪の考えが頭にこびりついて、そしてどうしても消えてくれないのだろう。
　１０年前に両親が突然消えてしまったこともあって、これが『逆鱗』との最後の別れになってしまうかもしれないと遊良もどうしても考えてしまっている様子であり…
　ソレ故、逸りに逸る遊良の心は。どうしても早く答えが欲しいのだと、そう言わんばかりの焦りを生じていて―

「…あの、どうにかして面会は…」
「出来ません。」
「…ッ…」

　砺波の淡々とした現状の通告が、遊良に余計に焦りを与える。
　…確かに、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】がそう決めたのならば、ソレは誰にも覆せない絶対なる決まりであるとは言え。
　ここまで遊良が必死にならざるを得ない『事情』と、そして『逆鱗』の劉玄斎との繋がりを砺波が確かに知っているのであれば…己の教え子に、ほんの少しでも希望を持たせるような言葉を投げかけてやってもいいはずだと言うのに。
　まぁ、砺波が『逆鱗』と天城　遊良の繋がりを知っていると言うのは、遊良自身は分かってはいない事なのだが…
　…しかし、『逆鱗』と自分の繋がりが未だ『可能性』の段階であるが故に、遊良もまた無慈悲に通告してくる砺波にこれ以上の言葉を投げる事は叶わず。
　―今生の別れになる前にどうしても『逆鱗』にもう一度会いたい、けれどもこれ以上下手な迷惑をかけて【白鯨】を困らせるわけにもいかない…
　そんな、感情と理性との間で板ばさみにされてしまった遊良は。
　言葉を詰まらせたまま、ソレ以上の言葉を続かせることがどうして

も出来ないでいる、癇癪を無理矢理に抑え込んでいるかのような様子で固まってしまっており…

「…安心しなさい。あの男は死にませんよ。」
「え？」

しかし…
そんな教え子を見かねたのか、それとも初めからかける言葉が決まっていたのか。
うつむき、言葉を詰まらせ混乱している教え子へと…ゆっくりとそう言葉を述べた、イースト校理事長、砺波　浜臣。
そう…砺波もまた、無慈悲とも思えるソレを聞かされた己の教え子が、どういった感情の下落を見せるのかを初めからわかっていたのか。
…自分が『逆鱗』と教え子の繋がりを知っている事を、砺波はまだ遊良には言っていない…いや、言うつもりがない。『逆鱗』自身が過去に決着をつけ感情を清算しない限りは、【白鯨】もまたソレをただ一人の弟子に伝えるつもりのないのだろう。
けれども、今こうしてただ一人の弟子に声を届けた【白鯨】の眼は…
およそ無慈悲とは到底思えぬ、深海よりもなお慈悲深い色となりて目の前の教え子へと向けられており…
そのまま、限りない『真実』を知る者の1人であるイースト校理事長の砺波　浜臣は。孤独に苛まれつつある教え子を、決してただ無慈悲にあつかうわけではなく…
更に続けて、言葉を発する。

「昔、その身1つでマフィアを壊滅させて回っていたほどの男です。銃弾に撃たれても、刀で切られても、何をしても死ななかったあの男が…【紫影】から拷問を受けた程度で、死ぬわけがない。」
「え…マフィアを壊滅させて回っていたって…」
「若気の至りと言う奴です。昔は木蓮とよくつるんで…まぁ、ソレは今は置いておいて…ともかく、あの男は今はただ眠っているだけです。良くも悪くも付き合いの長い私には分かります…あの男が、あの程度のダメージで目覚めぬわけがない。それに…」
「そ、それに…？」
「今回の事件、悪いのは全て【紫影】です。目が覚めたら【決闘世界】の取調べが始まると言いましたが…まぁ、その辺りは綿貫さんが『任せろ』と言っていたので大事にはならないと思いますよ。」
「…そうなんですか？」
「えぇ。悪評もあれど、あの男が決闘界に残した純粋な功績はかなり大きいですからね。【決闘世界】から何らかのペナルティは言い渡されるでしょうが、その辺りを無碍にする程【決闘世界】の上層部は鬼ではないはずです。ですから、後は綿貫さんに任せておけば大丈夫です。昔から、あの男は綿貫さんに気に入られていましたから。」
「それなら…よかったです…」

砺波の口から伝えられるは、およそ部外者が聞いてはならないような上層部の裏の話。
しかし、ソレを何の躊躇もなく『今は』部外者である遊良へと伝える砺波の口ぶりは…
とても嘘を言っているような素振りもなければ、遊良を安心させるように話を盛っているわけでも断じてなく。
…そう、『逆鱗』と教え子の『繋がり』を、完全に自力で理解できた砺波だからこそ。
若かりし頃の『逆鱗』と、その愛した女性の事を『同期』ゆえによく知っているがゆえに…そしてこれまでの教え子を見てきたがゆえ

に、自力で『真実』に辿り着いた砺波はただただ自分の思う事実のみを端的に遊良へと伝えているのだろう。
嘘偽りなど1つもない、紛れも無い真実の現実。砺波の予測の範疇とは言え、きっと誰よりも正確なるその事実はどこまで限りない予言となりて…
未だ焦燥に駆られている遊良へと、ゆるり穏やかに伝えられるのか。

「だから今は落ち着きなさい、いずれ全て知る時が来ます…きっと、近いうちに。」
「…近いうちって…」
「確かに、君が歩んできたこれまでを考えると、一刻も早く『答え』が欲しいのは私だって理解できます。しかし、こればかりはどうしようもありません…周りからではなく、直接あの男から答えを聞かないことには君も先には進めないでしょう…だから釈然としなくとも、納得できなくとも。今はそれを、無理矢理に飲み込みなさい。大丈夫です、きっと全てを知るときが来ることを…私が、保証してあげますから。いいですね？」
「……はい、砺波先生。」

焦りは消えない、逸りは収まらない。
けれども、ソレでも『どうしようもできない』事は大人の世界には多々あるのだから、と…
砺波に…人生の先達でもある『師』に、強くそう教えられてしまっては。他人の何倍も過酷な人生を歩んできた遊良もまた、これ以上の駄々を捏ねるられほど子どもではないのだから。
…これ以上、自分に出来ることは『待つ』ことだけなのだと、そう無理矢理に自分に言い聞かせつつ。悔しさと無力さに、血が滲むほど下唇を噛み締めながら。それでも、師の言いつけ通りに…

「では私はこれで。表彰式でまた会いましょう。」

「はい…お時間を取らせてすみませんでした…」
「いいえ。天宮寺君のこと、頼みましたよ？必ず、叩き起こして連れてきてください。」
「はい、砺波先生。」

これより続く日常へと向けて、どうにか自分を無無理矢理に押さえつけているのだった―

そして―

ホテルのレストランで朝食を取り、学園からの連絡事項や色々な伝達事項を聞いたりして。
チェックアウトの準備や片付け、余計な荷物を預けたり手続きをしたり…
未だ起きてこない鷹矢を叩き起こしたり、寝ぼけてボーっとしている鷹矢にどうにか朝食を取らせたり…帰りの為に荷物を纏めてやったり、二度寝しようとしている馬鹿を着替えさせたり、移動中も寝ぼけているデカいのの引率をしている内に…

―いよいよ、その時がやってきた。

―『ただいまより！表彰式を執り行います！』

大量の中継カメラを通して、全世界へと響き渡ったのは世界最大規模の学生達の祭典、【決島】の最終工程となるその宣言。

…とても長い戦いだった気もする。けれども時間にしては２日間の出来事だった気もする。

そう、終結から3日ほど時間が空いてしまったとは言え、実際に戦いが行われていたその短い時間の間に…

大いに盛り上がりを見せた【決島】と、そして当事者たちしか知らない【裏決島】の本当の終わりが、いよいよ目前へと近づいてきたのだ。

世界中の人々は見た…

―『宣誓……俺が優勝する。』

エクシーズ王者【黒翼】の孫の、大胆不敵なる開会の宣誓と共に始まった…この激戦となる戦いの、その全てを。

決闘市とデュエリア、２大デュエル大都市に数えられる、世界でも有数のデュエリストレベルを誇る決闘学園同士の戦い…各校から選ばれた、強者達２００名によるあまりに激しい戦いは、間違いなく全世界を熱狂の渦へと巻き込んでいたに違いなく。

そう、他のどの決闘学園の組み合わせとも違う、決闘市の４校とデュエリア校との戦いはまさに『過激』の一言。２０年ほど前に行われた伝説の『５大都市対抗戦』を彷彿とさせる、世界中を大いに盛り上がらせたその戦いは間違いなく決闘界の歴史に刻まれる偉業となりて学生達を後世まで語り継ぐ事だろう。

…いつの時代も、どの世代も。未来有望な学生達の戦いは、世界中をいつだって熱狂へと導いてくれる。

だからこそ、この誉れ高き世界最大の学生達の祭典の終わりを…
中継を見ている、世界中の見えない観客達は最後の最後まで見届けるため、その視線をＴＶへと釘付けにしていて―

…そんな、世界中に見られている中で。

「…遊良、腹が減ったぞ。」
「黙ってろ。起きてこなかったお前が悪い。」
「しかしだな、朝も満足に食えず昼もまだ食えないとなると腹の虫がだな…」
「だから黙ってろって。大体チェックアウトギリギリまで何で寝てられるんだよお前は。」
「ぬぅ…ホテルのベッドに慣れてきてしまったのがいけないのだ…慣れた枕に捕まると容易には抜け出せ…」
「ハァ…この後の記者の質問が終われば裏に行けるから、そしたら何か摘めるだろ。もう少しなんだから我慢してろ。」
「…うむ。」

表彰台の上、まだ音声が届いていないことを良い事に。
最上段に立っている、【決島】優勝者である決闘学園イースト校２年の天宮寺　鷹矢は…
一段下に立っている、同じく決闘学園イースト校２年の天城　遊良へと向かって。そう、言葉を零していた。
…いくらマイクが付いておらず、音声は中継の向こうには届かないとは言え。
世界中から見られているこの膨大な数の視線の中で、よくもまぁここまで気の抜けた態度を崩さずにおれる辺り流石は鷹矢とも言えるのだが…

とは言え、その声は他の人間達には決して届いていないのだから、いくら鷹矢が気の抜けた言葉を漏らそうとも遊良以外には判別できぬその鉄仮面が幸いし、見えない観客達は誰もが表彰台の上でそんな会話が交わされているとは分からないのだが。

ともかく…

「遊良よ、これで去年の【決闘祭】の借りは返したぞ。１勝１敗だ、高等部の決着は来年の【決闘祭】で着けてやる。」
「望むところだ。今度こそ俺が勝つ。」
「フッ、遊良の癖に、俺に勝ちこせるなどと淡い期待を抱いているのではないだろうな？」
「あ？鷹矢の癖に、俺に連勝できるわけないだろ。」
「なんだと!?」
「なんだよ！」
「…Ｈｅｙ、Ｂｏｙ達、そろそろ黙っといた方がいいＺＥ？」

観客達の誰にも聞こえていないせいか、邪魔する声が少ないために遊良もまた鷹矢の『いつもの』様子に引っ張られてしまうのはどこか仕方の無いことなのか。
そろそろ記者たちからの質問が始まるであろうことから、リョウ・サエグサが静止を促さなかったら…遊良と鷹矢は表彰台の上だと言うのに更に喧嘩を始めていたことだろう。
…首から下げたそのメダルは、総勢１０万を超える決闘市とデュエリアの決闘学園の全校生徒の『上』に立っていることと同義だと言うのに。
こうも日常的な言い合いを繰り広げかけるあたり…それはイコール彼らの『若さ』の証明となりつつも、遊良と鷹矢が心からお互いにお互いをライバルと認めていると言うことの証明でもあるのだろう。
…昨年の【決闘祭】とは入れ替わったその順位。
それは紛れもなく、遊良と鷹矢の力が本当に拮抗していることの証

明となりて…
　全世界の見えない観客達に、決闘市の学生の頂点の力をありありと見せ付けていて―
「天宮寺選手！この度は優勝おめでとうございます！」
「選手宣誓の宣言通りに優勝を飾った今の心境を一言お願いします！」
「【黒翼】のお孫様としてのプレッシャーもあったとは思いますが、不安などはあったのでしょうか!?」
「やはりエクシーズ王者【黒翼】の血は健在ですね！高等部２年という年齢での優勝おめでとうございます！選手宣誓の誓いを見事実行されましたが、優勝者として是非一言コメントを！」
「今回の【決島】で最も印象に残っているデュエルはどの戦いでしょうか！」
「やはり再来年の卒業後にはプロに挑戦されるんですよね？偉大なお爺様の跡を継ぐのが目標なんですよね？」
「プロになるまであと１年の猶予がありますが、来年度の具体的な目標を一言でお願いします！」

　また、司会進行が全項目を終えたアナウンスを放ったその直後。
　詰め寄るように、駆け寄るように…群がるように、わらわらと表彰台へと向かって押し寄せてきたのは様々な局の大勢の記者たち。
　その全員が、まずは形式美として優勝を飾った王者【黒翼】の孫である天宮寺　鷹矢へと一斉に質問を投球しつつ…
　記者たちの誰もが、【黒翼】の孫らしい『ＴＶ向け』のコメントを期待している口調をありありと鷹矢へとぶつけ始めたではないか。
「…いいか、絶対に下手な事は言うなよ？」
「うむ、わかっている。」

　そんな鷹矢が喋る前に…念押し、釘押し…全世界へと中継が繋がっ

ている中で、1つのコメントが再び世界中に混乱を起こす懸念があるからか、鷹矢の隣に立つ遊良がマイクがギリギリ拾わない程度の小声で鷹矢へとそう注意を零しつつ。

…開始前の、選手宣誓のときも『やらかした』鷹矢を遊良は心底信用しておらず。

今再び、念押しで釘を刺す遊良の言葉は、この喧騒の中でも確かに鷹矢の耳へと届けられていて。

そして―

「2年生での祭典の優勝おめでとうございます！【黒翼】のお孫様として、TVの前の視聴者に是非一言お願いします！」

マイクを向ける若い女記者の1人が、思い切り鷹矢へとマイクを突き刺した…

その直後―

「うむ、これで心置きなく来年からプロになれると言うモノだ！」

…

……

……

「…え？」

固まる…

この場にいた記者たちも、ＴＶを見ていた観客たちも、周囲を囲んでいた学生達も…

隣に立っていた遊良やリョウも勿論のこと、離れた場所でインタビューを見守っていた砺波たち学園側の理事長達の誰もが…

たった今鷹矢が放った『言葉』によって、時間空間この場の全てごと固まってしまったではないか―

天宮寺　鷹矢は今、何と言ったのだろうか…

聞き間違えでないのなら、言い間違えでないのなら…

高等部２年という、来年度もまだ学生であるはずの天宮寺　鷹矢は間違いなく…

高等部３年になるはずの『来年度』に…

『プロになる』…と…

そう、言った―

「お、おい！ちょっと待て鷹矢、な、なんだよ来年からプロになるって！」

そして、その硬直をこの世界の誰よりもいち早く解いたのは他の誰でもない…彼の隣に立った、イースト校２年の天城　遊良であった。

…遊良のその言葉はきっと、この光景を見ている誰しもの言葉を代

弁しているに違いなかったことだろう。
何せ、鷹矢が放ったのはあまりに常識はずれのありえない言動。
高等部2年である天宮寺　鷹矢がプロになる為には、最低でもあと1年の学生生活を全うした後でなければそもそもとしてプロ試験の参加資格は与えられないはず。
そう、決闘学園の高等部を卒業しなければ、プロになる『資格』は与えられないというのはプロの世界では常識中の常識だと言うのにも関わらず…
そうだと言うのに、そんな常識を知って知らずか無視してか。鷹矢はさも『当たり前』のようにして、続けてその口を開くのみ。
「む？言った通りだ。お前に勝って優勝したら、来年プロにしてやると言われていたのだ。」
「はぁ!?だ、誰から…」
「あそこのジジイだ。」
「…え？」

そして、鷹矢が指差した…
そこには―

「フォ？なんじゃなんじゃ、皆して儂を見おってからに…」

この場にいる全員の視線が『そこ』へ向く。
そう、関係者席、その中央に置物のように鎮座していた…白髪と白髭に隠れた、『妖怪』という呼び名がよく似合う1人の老人の下へと、世界中からの視線が一挙に向く。

…それは紛れもなく、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】最高幹部…『妖怪』と呼ばれし翁、綿貫　景虎へと向けられた、太い太い視線の束。

…誰もが見る…天宮寺　鷹矢が指差したただ一人の老人を。
表彰台からやや離れた関係者席、その中央に座った置物の様な老人に、この場にいる選手やスタッフや関係者や記者、それに中継カメラもＴＶを見ている観客達も、全世界からその視線を集めているのだ。
…しかし、それも当然で。
これまで幾度となく破天荒な言動・行動を繰り返してきた王者【黒翼】の孫なれど、先のあの発言は先日彼が魅せた『ランク０』の衝撃と同じくらいの驚きを全世界へと与えたのだから…
鷹矢が指差したこの老人が、鷹矢の言動の『真実』を知っているはずだというのは最早誰の目にも明らかなことでもあるのか。
ソレ故、記者たちも観客たちも学生達もスタッフ達も…
もちろん、『妖怪』の隣に座っていたイースト校理事長である【白鯨】砺波　浜臣も…その視線を、白髪白髭に隠れた皺だらけの『妖怪』へと突き刺し続け―

「綿貫さん…彼に…何を吹き込んだんですか？」
「な、なんじゃ浜臣、恐い顔しおって！」
『いいから、彼に何を言ったんですか？』
「フォッ!?き、急に寒気が……い、いや、の？実は…」

―…

…時は少々遡り、まだ決闘学園が夏休みであった頃。

―『ほう、この私を目の前にして、臆する事も無く『丁度良い』とまで言い放つか。なるほど、鷹峰さんの孫と言うだけはある。』

―『天宮寺　鷹矢、君にもう一度だけチャンスをあげよう。自分から喧嘩を売っておいて、この程度で終わることなど君もしたくはあるまい？』
―『…早くここまで来たまえ天宮寺　鷹矢。早く祖父と同じ道を辿り、私ともっと遊ぼう。』
―『いでよ！【邪神ドレッド・ルート】！』
―『さぁ、これで終わりだ！バトル！【邪神ドレッド・ルート】で、【ダーク・リベリオン】に攻撃！砕け散れ！フォール…パンドラァァァァァ！』

…

「…む!?こ、ここは!?」

時速数百ｋｍで走っている『新幹線』の車内…
そこで、ガバッ…と、まるで跳ね起きるようにして目を覚ました天宮寺　鷹矢は、目を開けた瞬間に飛び込んできたその光景に対し…そう、『新幹線の席』に座っている自分の現状に対し、思わず驚愕の声を漏らしていた。
…しかし、ソレも当然か。
何せ、たった今目を覚ましたばかりの鷹矢の感覚では、今の今まで自分は深い深い森の中に居たはず。
そう、自身の持つ『Ｎｏ.』のカードに導かれるようにして邂逅した、【化物】たる釈迦堂　ランと自分は今までデュエルをしていたはずだと言うのに…
気を失う寸前に、何かとてつもなく強い衝撃を受けたと思ったその刹那。意識が遠くなったかと思えば、突然目の前の光景が『新幹線の車内』…しかも、時間で見れば自分が予約していた通りの新幹線の車両・座席であったのだから…
隣の席の老人に、自分はいつ新幹線に乗ったのかを聞いても『そういえばいつのまにか乗っていた』という答えしか帰ってこないことも

また鷹矢の混乱を誘いつつ。
森から新幹線という、その突然の光景の変化は一体鷹矢にどれだけの驚きを与えたというのだろう。
（なぜ俺は新幹線に乗っているのだ…いや、それより…）
…けれども、突然の光景の変化に対しての驚きもそこそこに。
何やら、『それ以上』の心の引っかかりを鷹矢は覚えている様子を見せ始める。
（負けた…手も足も出せずに負けた…）
そう、目を覚ましたばかりの鷹矢に浮かび上がるは、彼にとっての最大級の大きな悔しさ。
突然の光景の変化など些細な事のようにして、その心に浮かび上がる紛れもない『敗北』を鷹矢は今一度深く噛み締め始めており…
…夢などでは断じてない。【化物】と邂逅したのだという実感が確かに鷹矢にはある。
紛れもなく、自分はつい今の今まで釈迦堂　ランという女とデュエルをしていた。そして、完膚なきまでに負けてしまったのだ…と、その悔しさが実感を伴って確かに鷹矢の心に深く突き刺さっているのだ。
…負けた…負けて、しまった―
先ほどまで戦っていた相手が、祖父と同種であり相棒を軽くあしらう程のモノであったと理解はしていても。
そう、ソレが例え、人知を超えた力を持つ【化物】であったとしても―
誰が相手であろうと、負けたいと思って戦うデュエリストなどこの世には居ない。常にそう思ってデュエルをしている鷹矢だからこそ、

相手が誰であれ負けたという事実に対して、これ以上無いくらいの悔しさが彼の心には浮かび上がってきているのか。
…何せ、『負ける』という行為が『空腹』と並んでこの世の何よりも嫌いな天宮寺　鷹矢。
そんな彼にしてみれば、『敗北』してしまったという実感は何よりも許容できない苦い苦い感情の淀みとなりてその心に重く重く圧し掛かっているに違いなく。

また、釈迦堂　ランが最後に出したあの【邪神】…

容赦なく心を折りに来ていた釈迦堂　ランの、その感じさせられた『恐怖の根源』そのモノであったドレッド・ルートと呼ばれていたあの存在。その禍々しいまでの存在感を、鷹矢は目の前で直に受けてしまったのだから…
いくら恐い物知らずで知られる、あの不遜なる天宮寺　鷹矢であったとしても。
最後の最後のあの瞬間に、鷹矢が無意識に慄きを感じてしまっていたのもまた隠しようのない事実であり…

（面白い…まさかあそこまで力の差があるとはな…ならば、俺もまだまだ強くなれるということか。）

しかし…
ランへの『恐怖』が、未だ消えていないと言うのにも関わらず。
負けた悔しさと、心を折りにきていた恐怖を抱きつつ…何やら、鷹矢の中にはソレらを超える感情が沸々と浮かび上がってきているではないか。
―確かに悔しさはある。消えぬ恐ろしさもある。
そう、腸が煮えくり返るような、敗北特有の苦く渦巻くモノと…も

う二度と戦いたくはないと感じさせてくる、絶対的なる力の差を鷹矢は確かに感じてはいる。
けれども、その感情とは切り離したところに―
いや、ソレら負の感情を、覆いつくしてしまうほどに大きな『ある感情』が、今の鷹矢の心には浮かび上がってきているのだ。
…それはこの夏休みの間中、理事長である【白鯨】から課せられレベルの高い大会に出場し続けている事により、今の自分の力量を客観的に捕らえられるようになったが故なのか。
そう、心折られるほどの力の差も、恐れを抱かされた恐怖の化身も。
そのどれもが鷹矢の心を折るには叶わず。今の鷹矢にあるのは、現時点での自分の力量が把握できたという収穫と…『頂』を超えた見果てぬ場所に、【化物】が巣食う領域があるのだという1つの『目標』、ただそれだけ。
…悔しさや情けなさに、心押し潰されている暇などない。
自身の最大の目的…相棒と交わした『約束』の舞台へと辿り着く為に、敗北の悔しさなどに押し潰されている暇など自分には無いのだとして…
容赦なく心を折りにかかっていた、【化物】の重圧の残滓を未だ感じてはいても。それでも鷹矢は、この敗北が自身の力になることを理解し受け入れつつ…更に開かれた領域の力を、いずれ我が物とせんとして【化物】の恐怖を掌握しつつあるのか。
(…面白い。ジジイ以外にも本当にあんな【化物】が居たとはな。他人に至れる境地が、この俺に至れぬはずがない。待っていろ釈迦堂　ラン、そしてジジイ…俺もソコへ行って、いずれ貴様らを叩きのめしてやる。……む?)
―『そうだ、君は天城　遊良がどうとか言っていたね?うん、確かに彼にだけカードを預けておいて、君にも預けないのは不公平だ。…コレを、君にも預けておこう。いつか私が取りに行くか、君が返しに来るまで預っておいてくれ?』

…また、気を失う直前に聞こえた釈迦堂　ランの最後の言葉を思い出しながら。
ふと、自身の懐に1枚のカードが入っていることに鷹矢は気が付いて。

「これは…【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】…遊良が預かったと言っていた『プラネット』と言う奴か。遊良の『ＮＥＰＴＵＮＥ』とは違うカードだが…しかし、これは…」

そして、ソレを手に取った瞬間に…
鷹矢は、そのカードがまるでこの星のモノではないかのような圧を放ち続けていると感じ取った様子を見せ始める。
そう、ふと手に取っただけだと言うのに、このカードからは形容しがたい『重さ』を感じるのだ。
不用意に手放してしまえば、この星を丸ごと押し潰してしまうのではないかという文字通りの『圧』…とても1人の人間が背負いきれぬほどの『圧』が、たった1枚のカードから漏れ出そうとしているというのも可笑しな感覚ではあるのだが…
しかし、それは【黒翼】や『Ｎｏ.』と言った『意思』を持っているカードを、他人よりも多く所持しているであろう鷹矢だからこそ鋭敏に感じ取れるモノでもあるのだろう。
鷹矢にはわかる…手に取っただけでこのような『圧』を感じてしまうと言う事は、それすなわち釈迦堂　ランから預かったこの【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】と言うカードは現時点では自分を全く認めていないと言う事。
そう、癖の強い、我が強いカードを持っている鷹矢だからこそ分かる。きっとこの【Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ】は、まだ自分の言う事を聞いてはくれないだろうと…デッキに入れても、召喚することは出来ないであろう…と。
それはきっと、この『土の星』のカードが求める強さに自分が到達

していないと言う事でもあるのか。
けれども、それを本能的に感じ取ったであろう鷹矢はまだまだ自分の力量に成長する余地があり溢れているということに対し、悔しさ以上に大きな嬉しさを感じている様子で…

「待っていろ…遊良…」

まだまだ強くなれると気付いた、自分の実力の伸びしろに希望を載せて。
思わずその口から、決闘市で帰りを待つ相棒の名を零しつつ…
負けた悔しさ以上の奮起を、己の心へと映しながら。決闘市への帰路に、鷹矢が一息つこうとした…

その時だった―

「のう、若いの。」
「む？」

隣の席から、聞こえてきたのは1人の老人のしわがれた声。
それは紛れもなく、つい先ほど鷹矢が一言会話を交わした見知らぬ老人であり…
…背の低い、腰の曲がった、皺だらけの手に皺だらけの顔。顔を覆い隠すその白い髪は、長く伸びたその白い髭と同化し地面につきそうなほどに垂れ下がり…
例えるならば、『妖怪』―

無意識にそう呼びたくなるような、そんな見知らぬ老人が突然鷹矢へと向かって声をかけてきたのだ。

「ほう、やっぱり思った通りじゃ。お主、鷹峰の孫じゃろ？フォッフォッフォ、久しぶりじゃのう。」

「…誰だ貴様は。」

「なんじゃい、儂のこと覚えておらんのか。儂じゃよ儂、綿貫のジッちゃんじゃ。」

「知らん。」

「薄情じゃのぅ…オムツを変えてやったこともあると言うのに…」

…しかし、綿貫と名乗った老人の言葉を聞いても。

その名に、その顔に…全く見覚えもなければ聞き覚えも無いのか、あまりに馴れ馴れしく声をかけてくる老人に対し鷹矢の顔はどこか怪訝な表情を見せようとしているではないか。

…まぁ、ただでさえ他人の顔を覚えるのが苦手な鷹矢なのだ。

覚える価値のないデュエリスト同様、戦える様には見えない皺だらけの老人の顔など一々覚えてもいないのだろう。いくらこの老人の身なりが上品で、どこか上流階級に位置していそうな雰囲気を醸し出してはいても。それでも、まるで旧知の仲のようにして離しかけてくる老人に対し…

鷹矢は、どこまでも心当たりがないままで…

「まぁ良い、お主の噂は儂のトコまで届いておるぞ？鷹峰の孫が、各地の大会を荒しまわっておるとのぅ。若いプロ達に泣き付かれたわい、学生に負け、プロとしての面目丸つぶれじゃと。」

「ふん、そんなこと俺の知ったことではない。これも理事長から言い渡された修業だ。文句があるのならば【白鯨】に言えとそのプロ共に言っておけ。」

「無茶を言うでないわ、若輩のプロが浜臣に文句など言えるはずもなかろう。」

「ならば尚更俺の知ったことではない。俺に負けたプロが悪い。文句があるのならば、俺より強くなればいい話であろう。」
「ま、それもそうなんじゃがのぅ…」

…また、そんな鷹矢の雰囲気を綿貫と名乗った老人も感じ取ったのだろう。
老人もまた、鷹矢が自分の事を思い出そうが忘れていようが今この場ではソレを問い詰めるような素振りは見せず。
…老人の口から語られるは、何やらプロの世界の細かな事情。
その口ぶりから、この老人がプロの関係者であることは鷹矢にだって容易に理解できること。しかし、ソレを承知でもなお鷹矢が態度を改めることをしないのは、例えプロであっても自分に負けた格下の戯言に一々構う気がないことの現われでもあるのか。
…そう、レベルの高いプロと、この夏休み中ずっと戦いを繰り広げてきたからこそわかる。
プロと言えども実力はピンキリ。そして新人が多かったとは言え多くのプロと戦ったこの夏の経験から、今の自分の実力が紛れもなくプロの世界に行っても通用するという確信と自信を今の鷹矢は得ているのだろう。
ゆえに…いくら相手がプロとは言え、実力の世界に身を置いている人間が弱音と泣き言を漏らしたところで微塵も鷹矢には興味などない。
どこまでも不遜に、どこまでも横柄に…
有象無象など意にも介さず、更に言葉を続けるのみ。

「俺は誰であろうと容赦はせん。俺の邪魔をする者がいるのならば…例えプロでも、蹴散らすだけだ。」
「フォッフォッフォ、威勢がいいのぅ。流石は鷹峰の孫じゃわい。しかし、このままじゃと少々プロの体裁が悪いのも事実じゃ。……のぅ、どうじゃ？お主、今すぐにでもプロにならんか？」
「む!?」

しかし…
そんな鷹矢へと向かって、老人から届けられたのは鷹矢でさえ驚くような提案であった―
そう、思わず聞き間違えかと思ってしまうほどに…ソレを聞いた鷹矢でさえも、今の老人の言葉があまりに現実味のないモノであると無意識に即座に認識している様では無いか。

いや、確かに今この老人は言った…『今すぐにでもプロにならんか？』…と。

…普通、学生がプロになることは出来ない。
だってそうだろう。プロ試験は『年齢制限』もあり、かつプロ試験の『参加資格』は決闘学園の高等部を『卒業』もしくは『卒業見込み』である者でなければ与えられないと言う事は…無論、世間に疎い方である鷹矢だって、常識として知っていることだと言うのに。
…また、そもそも高等部卒業と同時にプロになるためにだって、学園側からの『許可』が絶対に必要。
学生の内にプロ試験を受けるためには、卒業見込みである立場と同時に『切符』とも言えるプロ試験の『本試験推薦』が必要であり…
昨年、イースト校ではここ十数年該当者０だったソレが、泉　蒼人と虹村　高貴の『２名』に与えられたことすらも大々的なニュースであったのだから、それだけで学生の内にプロに内定することがいかに困難な道なのかは誰にだって容易に想像できるに違いないことだろう。
そう、イースト校においては、ここ最近では十数年は与えられなかったというプロへの『本試験推薦』。それは学園側に認められるほどの功績…『祭典』での結果は勿論のこと、日々の生活態度や学業の累積…それに大多数の教師たちからの推薦もなければ、勝ち取る事は絶対に出来はしないのだ。
だからこそ、昨年度に卒業と同時にプロになった先輩、元エクシー

ズクラストップであった虹村　高貴の厳しくも規律正しい学徒としての姿を見ている鷹矢も、ソレがいかに大変な道であるのかをよく分かっている。
まぁ、生活態度や学業が振るわない方である鷹矢が、自信満々にプロ試験への『推薦』を貰えると思っている事もまたおこがましいことではあるのだが…
ともかく、現在高等部2年の鷹矢は、最低あと1年経たないとプロにはなれないのが決闘界における厳格なルール、規律、法律。
…しかし、プロの事情に詳しいと思われるこの老人は、あろうことかその法律を軽々しく捨て置いて鷹矢をプロへと誘ってきた。
…ただの爺の戯言か、耄碌ゆえの妄言か。
目の前の老人が、そんな低俗な翁ではないことは鷹矢にだって感じ取れている。得体の知れぬ『妖怪』のような雰囲気の奥底に、確かなる『権力』という名の力を持っているであろうこの老人は…自分に対し、確かにソレを実現できる気でそう提案してきているのだと、鷹矢の本能はそう感じ取っているのだ。
ソレ故…

「そんな事が出来るのか？」
「うむ。腐っても王者【黒翼】の孫ということで特例にしやすい。ま、これ以上お主に好き勝手に暴れられると周りもうるさくなりそうじゃしのぅ…。一応、【決闘祭】で準優勝したという功績もあることじゃし、意外となんとかなるじゃろうて。」
「貴様は一体何者なのだ…だが、俺は学校を辞めるつもりは無いぞ。」
「フォッフォッフォ、なにも別に退学せんでもよかろう。史上初、学生プロの誕生ということで話題としやすいしの。後々の面倒なことは浜臣になんとかさせれば良い。」
「しかしだ、そんな簡単にプロになっても良いのか？十文字という男が今年プロになったが、奴は【決闘祭】で優勝と3位を勝ち取り無試験でプロになったと聞く…しかし俺は【決闘祭】の準優勝しか無い。コレでは、うるさく言う輩も出てくるだろう。」

「ふむ、確かに一理ある。そうじゃのぅ…じゃったら次の祭典…【決島】で優勝したらでどうじゃ？」
「む？」
「しかも、ただ優勝するだけではない。【決闘祭】でお主が負けた相手、天城　遊良君に、【決島】の決勝で勝って優勝するのが条件じゃ。お主1人だけでは達成できん条件じゃし、デュエリアとの合同開催で強い子が沢山出てくるからのぅ…どうじゃ？相当難しいぞ？こんな難しい条件をクリアしたら、きっと皆も認めざるを得んじゃろ。そして達成するまで口外するのは駄目じゃ。誰にも言ってはいかん。誰にも知られずにこの全てが達成出来たら、儂が無試験で学生プロにしてやる…どうじゃ？」
「…」

あまりに滅茶苦茶なその提案、あまりにハチャメチャなその立案。
確かに『良い話』ではあるのだろうが、あまりに話が旨すぎるために…どこか鷹矢も、少々神妙な顔つきをその鉄仮面に浮かばせようとし始めたではないか。
…そう、確かにこの提案は、学生の身からすれば信じられない程の幸運に違いないだろう。
けれども、旨い話には必ず裏がある。しかもソレを提案してきたのが、鷹矢からすれば全く見知らぬ謎の老人であるのだから…いくらこの老人が自分の事や祖父の事を知っているかもしれぬとは言え、鷹矢も二つ返事でソレに飛びつくことなどしたくはないのか。
まぁ、そもそも世界中を飛びまわりデュエルをするプロの忙しさを考えると、学業との両立など出来はしないのだから…
老人のこの旨すぎる話に対し、鷹矢も普段の彼らしからぬ神妙な面持ちで深く思考を巡らしつつ、綿貫と名乗ったこの老人のことを疑いにかかっているこの光景もまた当然と言えば当然であり…

（面白い…）

いや…全くもって疑っていない―
老人から投げかけられた、あまりに旨すぎるその話を全く持って疑っていない思考を鷹矢は浮かべていて。
…そう、鷹矢の思考は至極単純。今より強くなれる環境が与えられるのならば、ソレが例え罠であったとしても飛び込み突破し喰らい尽くし、全てを己の力へと還元してやろうという、ただそれだけ。
それはつい先ほどの【化物】との邂逅で、自分はまだまだ強くなれることを知ったからこそ…
学生よりも強者の密度の濃い、プロの世界に今すぐにでも行けるのならばきっと自分は今よりもっと強くなれる。それが例え、どれだけ甘い見通し、甘い覚悟、甘い決意であったとしても…
…幼き日に遊良と交わした、最高の舞台で頂点を賭けて戦うという『約束』の為に。
利用できる物は、全て利用しようとしていて―
そして…
…一瞬の思考の後、どこか軽はずみにプロを志すことを今この場で決めてしまった鷹矢は。

「うむ、乗った。」

どこか無茶な要求とも思える、老人の課した条件に対し…
二つ返事で、そう答えたのだった―

―…

「…なるほど。私に断りも無く勝手に話を進めたというわけですか。」

「フォッフォッフォ…わ、儂もな？こう都合よく行くとは思わなんでのぅ…ほら、あの、アレじゃ、刀利君もおったし…それがまさか、本当に天城君と決勝戦やって優勝するとは思わなんで…まさか、こんなに上手いこと話が進むとは…の？」
「…」
「いやいや、儂だって半分冗談のつもりじゃったんじゃ！世間知らずの鷹峰の孫に、『手に入らんモノ』もあると教えるつもりで…」
「…では、半分は本気だったと？」
「ま、まぁのぅ…ホントに学生プロが生まれれば面白…大きな話題となると思って…」
「…手続き、学業、その他もろもろの面倒事を全て私に押し付けて…ですか…」
「な、なんじゃなんじゃ浜臣、そんな恐い顔して…」
『…とにかく、この話は後でゆっくりと…』
「フォ!?な、なんじゃ？急にまた寒気が…」

『妖怪』の口から語られるは、ソレを提案した綿貫自身も少々予想外だったであろう結果論。
…自分からソレを鷹矢へと投げかけた癖に、半ば無茶を言っていることを綿貫自身もわかっていたのだろう。
だからこそ、まさか本当に自分の出した条件を鷹矢が完全にクリアしてしまった事に対し…軽はずみに特例を生み出す羽目になってしまったことに、綿貫も今更になって頭を抱え始めているのか。
隣に座った砺波からの、無言の圧力によって冷える空気もまた恐ろしくもあるものの…
しかし、これだけの観衆の中で鷹矢が宣言してしまったことは撤回できない。
そう、アレだけの熱狂を魅せた【決島】で優勝した鷹矢が、全世界へと向けて堂々とプロになると言ってしまったのだ。今更大人の事情で『やっぱりダメ』などと言ってしまえば、いくら【決闘世界】と言えども世間から袋叩きにされてしまうに違いなく…

それ故、どう転んでも崖っぷちに立たされたであろう綿貫が。紛れもなく怒っているであろう砺波に、無言の圧力をかけられ続けていて―

そうして…

「本社に連絡だ！明日の一面見出しは決まったぞ！」
「夕方のニュースで特番を組むぞ！出られるプロランカーに声かけろぉ！」
「天宮寺選手！プロ入りについてこの後じっくり取材させてください！」
「ずるいぞ中央決報！この特ダネはウチによこせぇ！」
「天宮寺選手！決意表明を！一言！一言ぉ！」
「天宮寺選手ぅ！」

『妖怪』が零す言い訳を、固唾を飲んで見守っていた世界も次第に驚きを取り戻し。

徐々に火花が連鎖するようにして、ざわめきが驚きへ、驚きが喧騒へ。そして喧騒が歓声となりて、今再び世界中で興奮が過熱し始める。

―『せ、静粛に！静粛に――！記者の皆さん落ち着いてくださぁい！あ、せ、選手はひとまず控え室に帰ってくださぁい！』

また、運営側もイレギュラーすぎる鷹矢の宣言の所為で、予想外のパニックに対処しなければならなくなったのは言うまでもなく…

予定より早く会見を切り上げ、選手達を大急ぎで会場から撤収させんとして…押し寄せる記者の波をガードマンが塞き止めている間に、表彰台に昇っていた遊良達もまたスタッフに案内され裏方へと移動し始めて。

「つーか、なんで俺に勝ったらプロになれるって条件なんだよ。」
「お前に勝ったらではない。『決勝』で、お前に勝って優勝したらだ。そうだと言うのに、お前と来たら気が抜けていたりルキに気を取られすぎていたりでどうなる事かと思ったぞ。」
「…おい、もしかして張り合えって言ってきたりリョウさんとのデュエルで出しゃばってきたのって…」
「無論、お前に活を入れるためだ。俺の為に、負けてもらっては困るからな。」
「…はぁ、お前なぁ…」

そして、混乱の最中に裏方へと移動し始めた中で…遊良と鷹矢は、ふとそんな会話を交わし始めたではないか。
そう…遊良もまさか、鷹矢が柄にもなく『やる気』になっていると思えば裏にそんな事情が隠されていただなんて思ってもみなかったのだろう。
しかし思ってみれば、確かに鷹矢が選手宣誓で自ら退路を断ったり、誰よりも勝利という結果を求めるだなんて普段の鷹矢からすれば考えられないこと。
そう、夏休みの修業で、何か心境の変化があったのだろうということは遊良だって気が付いてはいた。けれども、まさかソレが予想の範疇をこんなにも大きく超えていただなんて、誰よりも付き合いの長い遊良からしても驚きであったに違いなく…
…まぁプロ入りの話云々以前に、『決勝』の舞台で戦うのは遊良と鷹矢にとっては今年の『約束』でもあったのだから、鷹矢のプロ入りの話が鷹矢にとっても『オマケ』であることは遊良にだってわかってはいるがゆえに、それ以上鷹矢を叱るとかいったことは遊良もする気もないのだろうが。

ともかく…

（…終わったな。【決島】が…）

表彰式が終わり、1つの区切りが付いたことで…深く…それはそれは深く、まるで肩の荷が1つ下りたかのようにして、深い溜息を吐ききった遊良。

デュエリア校の校舎の隙間から覗く、青く透き通った大空を見上げながら…

混戦を極めた【決島】も、混乱を極めた【裏決島】も…その一つ一つの戦いのどれもが油断ならぬ相手との戦いばかりであり、加えてこの『2日間』に起こった全ての出来事は果たして遊良にどれ程の疲労を与えているのか。

…【決島】に、【裏決島】と。本当に色々な事が起こりすぎた。

随分と長く戦っていた気がする―

たった『2日間』だけの戦いであったはずなのに、そう感じてしまう遊良の感覚は決して間違いではないはず。

―『前【紫魔】、紫魔　憐造を！【王者】を『伯父』に持つ俺が！Ｂｌｏｏ―Ｄを召喚出来ないわけがない！』

開幕で、全世界へと明かした自らの血縁。

―『お前が…お前が俺に、勝てるわけないだろ！なのに…何度も何度も挑んできて…』

中盤に、物凄い執念を持った紫魔　アカリと行ったデュエル。

―『ッ！ルキィィィイ！今助ける…俺が絶対に！お前を助ける！』

死地で、ルキの命を救うために狂乱少女と戦った激闘。

―『俺は…神には祈らない！俺を見放した神なんかに、俺は絶対に祈ったりしないんだよ！俺のターン、ドローッ！』

本戦で、最強の天運を持った男との武器と武器のぶつけ合い。

―『喰らえ遊良ぁ！天宮寺…ビックバァァン！』

決勝での、鷹矢との戦い。

―『…天城　遊良、あなたもすぐに、ここで倒れている祖父と同じ目に遭わせてあげますから、ええ。』

性根の腐った捻じれた男から聞かされた、自らも知らなかった血の繋がりの可能性。

そして…

―

『ぎょえええええええええええええええええええええええええええええええええええっ！』

これまで戦ってきた中で最凶の敵…『極』の頂きに位置している、本物の悪意を持った正真正銘の『敵』…

裏決闘界の融合帝、【紫影】との【裏決島】最後の戦い。

そのどれもが遊良にとっては衝撃であり、どれもが遊良に並々ならぬ試練となって圧し掛かってきたからこそ。

全ての日程が終了した今この瞬間に、『祭典』のプレッシャーから解き放たれた遊良の心境は果たしてどのようなモノとなっているのだろう。

こうして…

開会式でも爆弾発言をしたというのに、最後の最後にとてつもなく大きな爆弾を爆発させた鷹矢を他所に。

決闘市とデュエリア、２大デュエル大都市に数えられる街同士の合同開催の祭典、【決島】…

蘇った裏決闘界の融合帝、【紫影】による学生ｖｓ．犯罪者たちによる戦い、【裏決島】…

世界最大規模の学生達の『祭典』、およびソレを狙った悪逆非道な『策略』の、その全てが今ここに終戦したのだった―

（『逆鱗』は、本当に俺の…）

最後の最後まで、遊良の心に消えぬ懸念と…

（家族…なんだろうか…）

そして吹っ切れていたはずの、『ある感情』を呼び覚ましながら―

⋮

ｅｐ１０２「閑話ー天城　遊良、後編」

地獄を見た。
世界の誰にも見向きもされず、世界そのモノからはじき出されてしまったかのような感覚を『この時』の遊良は感じていたことだろう。
それは『Ｅｘ適正が無い』と宣告された直後…
周囲の人々が突然『敵』となり、突如として自分を傷つけ、痛めつけ、蔑み、虐げてくるというその日常の変貌が…果たして、幸せな日常を生きていたはずの幼い遊良に、一体どれだけの地獄を見せたというのか。

…昨日まで親しかった近所の人が、ゴミを見る目で離れていく。
…昨日まで親しく接していた同級生たちから、心無い言葉をぶつけられる。
…昨日まで接点など無かった街の人から、駆除されることを願われる。
…昨日まで関わることなど無かった悪人たちから、幼いその身に暴行を受ける。
…昨日どころかコレからも関わることなど無いはずの者たちから、メディアを通じて見下される。

下等で、劣種で、低レベルで底辺。Ｅｘ適正の無い者など自分達と同じ世界に住む資格など無いのだと…まるでそう言わんばかりに人々は声を荒げ、誹謗中傷と罵詈雑言の津波をある日から突然一人の少年へとぶつけ始めたのだ。
…その侮蔑と侮辱に塗れた言葉の嵐は、幼い遊良を簡単に飲み込んでしまった。
一時はその才能から、将来はプロ確実と勝手に盛り上がっていた周囲だったと言うのに…『Ｅｘ適正』が無いと分かった瞬間に、遊良の

全ての才能を無価値と決め付け、遊良にはもう価値が無いものだと決め付けて離れていったのだ。
…一体、自分が何をしたと言うのか。
しかし、そんな疑問を持つことすら許されず…幼い日の遊良は、ただただ突然変貌してしまった世界に地獄を見せられ続けた。
…味方などいない。誰も助けてはくれない。
両親が失踪し、幼馴染も現れてはくれないその数日はまさに地獄のピークだった。蔑まれ、虐げられ、傷つけられ、痛めつけられ…命からがら自宅に戻れば、大事な家は心無い他人によってボロボロに壊されていた。

だから…そこで遊良の心は、一度折れてしまった。

それ故、自分がどうやって生き続けられたのを…この時の遊良は、全く覚えていない。
ただ、壊れた部屋の隅で小さく固まって…
食べることも眠ることもせず、呆然とした虚ろな目で意識もなくただ固まっていた。それはまるで無機物のように、幼い遊良は『何』もせず命がただただ消えるのを待っているだけだったのだ。

…ゆえに、遊良は覚えていない。

記憶もないあの頃、ただ死ぬのを待っていたあの頃に、どうして自分は死なずに生き長らえ続けたのか。
…遊良は知らない。面白半分で自分を虐げようと現れる、性根もガラも悪い大人達に…幼い鷹矢が牙を剥き、命を賭して輩を追い返していたことを。
…遊良は知らない。眠ることも食べることもせず、死んだ魚のような虚ろな目でただそこに小さく固まっていた自分の命を…幼いルキが、どうにかして繋いでいてくれたことを。

…時には鷹矢が大怪我を負う事もあった。それでも鷹矢は何度だって立ち上がり、ひっきりなしに現れる敵から遊良を守ることをやめなかった。

…時には、本当に命の灯火が消えかけた事もあった。それでもルキは決して遊良を見捨てず、口移しで食べ物を押し込んだり、介護をするようにして食から排泄までの世話をしたりした。

それは他の誰も出来ることではなかっただろう。少なくとも決闘市中から『死んでほしい』と言われていた遊良に、心の底から『死んでほしくない』と鷹矢とルキが願っていたからこその献身。

だからこそ、世界の全てが敵になるという地獄に放り込まれた遊良が…微かにこの世界に戻ってこられたのは紛れもなく、全てを諦め死のうとしていた幼少のこの頃に鷹矢とルキが決して遊良を見捨てずにいたからこそに違いない。

それ故、今この場では遊良が覚えていない『絶望』の日々は語られず、そして【黒翼】に引き取られるきっかけやその経緯はまた別の機会にて描かれるのだとしても。

それでも地獄のような幼少期を過ぎた後も、天城　遊良という『Ｅｘ適正』の無い人間が受けてきたこれまでの人生における『迫害』は決して軽いモノでは断じてなく…

――…

夏も終わったとある日。

―『決まったぁぁぁぁぁぁ！優勝はまたもや『逆鱗』！怒涛のチャンピオンズ・リーグ４連覇達成だぁぁぁぁぁぁぁぁ！』

決闘市東地区にある、遊良と鷹矢の自宅…そのリビングに置かれているＴＶから、『古い映像』の音声が響いていた。

…それは２０年以上も昔の映像。

そう、王者と同格と称えられていた伝説のデュエリスト、『逆鱗』の劉玄斎がまだ現役時代の映像であり…

―『いやぁ圧巻のデュエルでしたねぇ！急上昇中の世界ランク５位、『鮫肌』を物ともしない快進撃！天宮寺さん、【王者】の立場からして今回の『逆鱗』のデュエルはいかがでしたか？』

―『ケッ！今の奴とまともにデュエルできんのは俺らかトウコか不死川くらいだっていっつも言ってんだろうが。朴城（ほおじろ）のヤローとの結果が見えてるデュエルなんざ見ててなんも面白くねぇってんだよ。』

―『ハハ…さ、流石は【王者】と同格と謳われるデュエリストのデュエルでしたね。ではＣＭです。』

―『…では、【白鯨】は最後の【巨竜の羽ばたき】ではなく、最初のターンの【手札抹殺】こそが勝負の決め手であったと睨んでいるということでしょうか。』

―『はい。初手で発動した【手札抹殺】で、『逆鱗』の手札にはすでに【巨竜の羽ばたき】が手札に加えられており…それを、最後のターンまで『鮫肌』は見抜けなかった。これがデュエルの明暗を分けたのでしょう。』

―『なんとハイレベルな攻防なんでしょう。朴城（ほおじろ）選手も世界ランク５位であると言うのに、やはり『逆鱗』の進撃を止められるのは【王者】以外には居ないと言う事なのでしょうか。ではこの後もシンクロ王者【白鯨】の解説と共にデュエルを振り返っていきましょう。一旦ＣＭです。』

その中でも、ＴＶに映っていたのは４年に１度開催される世界最大級のプロデュエリスト達の祭典、『チャンピオンズ・リーグ』を通算で６連覇した『逆鱗』の最盛期とも呼ばれる最も激しいデュエルが行われていた１つの試合。

古い録画であるためか、所々映像が掠れはしても。それでも、所々に聞こえるＭＣや解説も、『逆鱗』の偉業を称えるモノばかりとなっていて…

…しかし、それも当たり前か。

何せ、かつて世界の頂点に確かに君臨していた男の現役時代かつ全盛期の激しいデュエルの映像は、その戦いから３０年以上経った今でもなお色褪せない…あまりにハイレベルかつあまりの迫力となりて、遊良達の家のリビングにありありと映し出されているのだから。

…また、その映像に見入るようにして。

ソファに腰掛け、目を見開いて『逆鱗』のデュエルを眺めていたのは他でもない…

この家の家主とも呼べるであろう、決闘学園イースト校２年の天城遊良であった―

―『前人未到の４連覇、おめでとうございます！この勢いなら貴方が【王者】になることに誰も反対しませんよ!?』

―『クハハハハ！何度も言わせるんじゃねぇぜぇ？【王者】になんか興味ねぇよ！』

―『流石のコメントです！４年後の『チャンピオンズ・リーグ』も勿論出場なさるんですよね？』

―『終わったばっかだってぇのに気が早ぇ奴等だぜ！けど任せときなぁ、次も優勝は俺のモンだからよぉ！』

ソファに腰掛け、力なく座り。

学園が休みの日曜日、それももう昼間だと言うのに食事を取った様子もなく…

古い録画から流れ出る、祖父かもしれぬ人物の声を聞き逃さぬようにＴＶの前に居座り映像を眺め続けるイースト校２年、天城　遊良。

…一体、遊良はいつからＴＶの前に鎮座しているのだろう。

折角の休日、それも【決島】の喧騒がようやく落ち着いてきた静かな日曜日であるにも関わらず。

テーブルの上に置かれた、飲まれた形跡の無い麦茶のグラスの氷は全て溶け…結露がガラスのテーブルに広がっているその様は、およそ遊良が何時間も前からこのリビングでＴＶを見ていたということに他ならない。

また、遊良の目の下に出来た隈が物語っている。

きっと、学園の事や家の事以外に使える『自分の時間』の、およそほとんどを遊良は…

今の状況と同じように。ＴＶの前に座って、『逆鱗』の映像を見ていたに違いないのだろう…と。

そう…

…遊良はここ１ヶ月間、暇を見つけては父の遺品である『逆鱗』の過去の映像を無作為に見続けていた。

…中には、父がまだ生まれてもいなかった頃の映像もあっただろう。

一体、なぜそんな古い映像まで父が持っていたのか。そんなこと今の遊良には分からない事とはいえ、それでも遊良は父の遺品である『逆鱗』の映像に没頭することで…自分と、父と、そして『逆鱗』に、本当に『繋がり』があるのかどうかを遊良はその目で確かめようとしているとでも言うのか。

この日は鷹矢が『プロ入り』の件で朝から学園に呼ばれているためか、朝早くから邪魔者のいないリビングでただただ食い漁るようにして…『逆鱗』の映像を見続ける遊良の姿は、とてもじゃないが寝不足の常人の集中力とは思えない程に発揮されていて。

「おじゃましまーす！って遊良！また『逆鱗』のビデオ見てたの!?」
「…これまだ見たことない奴だったから。」
「…最近ずっとじゃん、夜更かししてまで見続けるなんて体壊しちゃうよ、もう。」
「…あぁ、気をつけるよ。」

また、来訪してきたルキに対しても、返す言葉がどこか生返事のような実入りの無いモノとなっている辺り…
【決島】で知った劉玄斎との『繋がり』の可能性は、遊良の中にある『ある感情』を今再び呼び起こしているのは最早間違いなく。
…編集された録画が次の場面に切り替わる間に、来訪したルキの為にコーヒーを入れようと立ち上がりつつ。
キッチンへと向かう遊良の足取りが、少々フラついているように見えるのは遊良が寝不足であり空腹であるということの何よりの証明。
そう、肉体的疲労がピークであるにも関わらず、体の悲鳴であるソレらに対して遊良が全く興味を抱いていないその様子は…遊良が、本気で寝食を忘れて『逆鱗』に没頭している何よりの証拠でもあり…

「それより今日は1人で来れたんだな。おじさん、もう外出許可出してくれたんだ。」
「ぜーんぜん！今日だって家出るときうるさかったんだから！『怪我が治ってないでしょ！家から出ちゃいけません！』って騒いでさ。もう完全に治ってるのに。お母さんが止めてたけど、お父さん下手したらまた着いてくるとこだったよ。」
「…仕方ないだろ。『本当』のことは言ってないけど、【決島】で怪我して入院したって聞いておじさんもおばさんも相当心配してたみたいだし。」
「流石にホントのことなんて言えないよ。理事長先生からもホントのコト言っちゃダメって言われてるし。あ、でもさ、お母さんはちょっと感づいてるみたいなんだよね。ヒビも残ってないのに何でわかる

のかなー…」
「…そりゃそうだろ、親子なんだから。」
　果たして…そんな状態であるにも関わらず、どこか普段通りに振舞おうとしている遊良の今の姿はルキの目にはどのようにして映っているというのだろう。
　…心ここにあらずの様な、気の抜けている風な遊良。
　いくら【決島】での戦いが激しすぎるモノだったとは言え、普段から気を張って生活をしている遊良がよもやここまで何か1つの事に囚われていると言うのは…これまでの遊良を良く知るルキからしても、どうにも違和感を感じてしまうに違いないと言うのに。

　…あの激闘が繰り広げられた『決島』から、1ヶ月が経った。

『決島』の余韻も既に落ち着きを見せ始め、現在の決闘市の話題は専ら『学生プロ』になると公言したイースト校2年の天宮寺　鷹矢の話題で持ちきりとなっている。
　…しかし、それも当然か。
　何せ『開会』と共に世界に波乱を巻き起こした選手宣誓から始まり、『閉会』の時にはまさかのプロ入りを公言したのだ。
　世界初となる、決闘学園の学生が『学生のまま』でプロデュエリストになるというその暴挙は…最初から最後まで騒動を起こし続けた鷹矢らしい宣言であると言えばそうなのだが、それでも世間は休む事を知らずに新たな騒ぎに噂を広げ続けていて…
「…でも、本当にもう何ともないのか？ほら、後遺症とか治りきってないとことか…」
「だから大丈夫だよって言ってるじゃん。もう全快しました。遊良までお父さんみたいなこと言わないでよ、もう。」

「…そう言うなよ。目の前でまたアレ見ちゃったんだから。」

また、『決島』にて【紫影】の策略により…その体から『神』が解放されかけたルキも、この1ヶ月の間に健康体と言えるまでに完全に回復していた。

一応、『決島』のあとの3日の休養で、崩れていた体は見た目的には元に戻り…意識も問題なく回復していたために、【白鯨】による護衛の下にルキは決闘市の自宅へと無事に送り届けられたルキ。

…しかし、それでも少女の体から『神』が解放されかけた代償は軽くなく。

そう、いくら見た目的には行く前となんら変わりない状態であったとは言え、決闘市に帰ってきたばかりのルキの体の中のダメージは、完全には回復しきれていなかったのだ。

…表向きには怪我による跛行。しかし実際には『神』降臨の代償。

決闘市に帰ってきた当初のルキは、歩く事すらままならない状態であった。無論、ルキの両親にはイースト校理事長である砺波　浜臣が自ら謝罪すると共に説明がなされたのだが…

…それでも、ルキの体の『事情』を誰よりも良く知る両親が、砺波の説明から何を思い何を感じたのか。この1ヶ月間、ルキは学園にもほとんど登校せずに休養をさせられていた。

出席日数や単位的なことに関しても特例が認められたのも大きかったのだろう。ことイースト校においては、理事長たる砺波の一声により『決島』にて負傷した学生には登校免除の期間が一定数認められ…

…それによって、ルキはこの1ヶ月間、ほとんど家から出ることなく生活させられていた。

だからこそ、遊良と鷹矢が毎週お見舞いに行っていたとは言え。学園が休みの日曜日に、遊良と鷹矢が住むこの『家』に1人で来たのだってルキにとっては久方ぶり。

先週は父親が送り迎えをすると言って聞かず、門限も決められていた為にルキからすればそれはそれは窮屈であったに違いないことだろう。
…まぁ、とは言えルキも、【決島】で『あんな目』に遭って文字通り死にかけた身であると言うのにも関わらず。
全快した今では、何事も無かったかのようにして振舞えている辺り…彼女もまた、相当な胆力の持ち主であると言う事には変わりないのだが…

ともかく…

「…それで、遊良昨日は何時に寝たの？」
「…あー…えっと…あれ、そう言えば何時だっけ…」
「…ベッドで寝た？」
「…いや、ここで…」
「…」
「い、いや、ちゃんと寝たって。部屋に戻るのが面倒でここで寝たけど…」
「…ねぇ遊良、最近ちょっと変だよ。いつもは１０時にスイッチ切れる癖に、最近ずっと夜更かししてるなんて。それにこの前鷹矢が愚痴ってたよ？最近、遊良のご飯が手抜きだって。」
「う…」

来たばかりだというのに、どこか怒っているかのように責め口調で遊良に攻め寄り始めるルキ。
そう、いくら遊良に遭うのが1週間ぶりとは言え…今の遊良の状態が明らかにおかしいと言う事は、長い付き合いであるルキにはすぐに理解できるのか。
普段通りに振舞おうと取り繕っては居ても、隣に腰掛けた遊良の表情が明らかな疲労を抱いているのはルキの目には一目瞭然。普段の遊良をよく知るルキからすれば、遊良がココ最近夜更かししていると

いうことでさえ違和感を感じてしまうのだから。

…【決島】が終わってから、ここ最近の遊良は明らかに以前とは違う。

鷹矢の生活には支障をきたさないようにしてはいるものの、自分自身は食や睡眠に興味を失ったかのようにして1つの事に没頭するという、普段の規則正しい生活を送る遊良からすれば考えられないその変化。

…ルキだって、【決島】で遊良に何があったのかは本人から聞いている。

敵の策略で死にかけたことも、鷹矢との決勝の行方も…その後に、島に『何』が起こったのかも。

そんな、自分が気を失っている間に起こったことをこと細かく全て聞いているために…ルキもまた、遊良が今現在『何』でこうなってしまっているのかは無論よく理解できていて。

「私だってさ、『逆鱗』が遊良のお爺ちゃんかもしれないっての、すっごくビックリしたけど…でもさ、理事長先生も言ってたじゃん、後から絶対分かる時がくるって。」

「…わかってる。だから別にヤケになったわけじゃないって…ちょっと気になっただけだよ、なんで父さんがこんなに『逆鱗』の試合の映像持ってたんだろうなってさ。」

「…おじさんも知りたかったとか?自分と『逆鱗』が親子なのかもしれないの。」

「どうだかな。父さんは本当の事を知ってたのかもしれないし…普通に、ただの大ファンだったのかもしれない。今じゃ、もう分からないけど。」

「…」

けれども、こうして話している間にも遊良の雰囲気は落ちていく。

…ルキは懸念していた。
【堕天使】を失った時に現れた『昔の遊良』の雰囲気が、今再び蘇ろうとしていることを。
今の遊良の姿に、ルキは見覚えがある。そう…『生』を捨てた様に振舞う今の遊良の姿は、弱り傷付いていた昔の遊良の姿そのモノなのだ。
生への執着を捨て、命を削りゆくその姿は…かつての幼少期に、家族というかけがえのないモノを無くしたばかりの幼いときの遊良の姿そのモノであり…
似ている…寝食を忘れ何かに没頭し、不安を払拭しようともがいている今の遊良は、家族をなくし天涯孤独となってもソレを受け入れられずに苦しんでいた、幼少から中学まで遊良が纏っていた『孤独』の雰囲気に良く似ている。
…遊良がこうなってしまった原因はきっと、【決島】で戦ったという【紫影】という敵のせいなのだろう。戦いが終わった後もこうして遊良の心を蝕む敵の言葉に、ルキは会ったことも無い【紫影】に対する怒りすら感じており…

…きっと、遊良は悩みすぎて夜も満足に眠れていないはず。

食事も満足に喉を通らず、時間が空けば『逆鱗』と自分の共通点を見出そうと必死になって過去の映像にしがみ付く。しかし確証が得られず、ただ時間だけが過ぎていくそのもどかしさの所為で…また、眠れぬ夜に襲われ続けて…
…そんな状態になっていることが、ルキには容易に想像できる。
そしてこの状態を放っておけば、きっと間違いなく遊良は『昔の遊良』にまた戻ってしまうと言う事も…

だからこそ―

「はいはい、色々余計なこと考えちゃって寝れなくなってるんでしょ？でもダメだよ、ちゃんと寝ないと。」
「…いや、それはわかってるんだけど…」
「ダメダメ、わかってないじゃん。もー、仕方ないなー。ほら、枕貸してあげるから、今から少し寝ておきなよ。」
「…え？」

名案が浮かんだようにして、自らの腿を軽く叩きつつ…徐に、遊良へと寝転がるように促し始めたルキ。
しかし、このリビングには枕などあるわけがなく…
そう、ルキの体勢からもわかる通り。それはどこからどうみても、『膝枕』の体勢となっていて―

「…いや、なんで膝枕？」
「昔こーやって寝かしつけてあげたじゃん。」
「いつの話だよ…」
「先生のとこに行く前くらい？」
「あー…俺が覚えてない時か…」
「そうだよ。あの時だって遊良こーしないと寝なかったんだから。ほらほら、いいから寝なさい！」
「あ、おい…」

また、いくら幼馴染とは言え。
年頃ゆえか、少々の気恥ずかしさを抱いている様子の遊良を意に介さず…ルキは少々強引に遊良の頭を引き倒したかと思うと、自らの脚の上へと遊良の頭を寝転がらせてしまったではないか。
…他に見ている者が誰もいない空間で、ルキに膝枕される形で…半ば無理矢理に、寝転がされてしまった遊良。
造りの違う体付き、衣越しでも伝わる柔らかな感触。子どもの頃とはまるで違う、年頃の男女が膝枕をしているというその光景。

それは、いくら2人が幼馴染だとは言え…
あまりに近すぎる距離と距離であり、決して他人には…特に、ルキの父には見せられない光景であるとも言えるというのに。
「…ちゃんと治ってよかった。心配だったんだ、手も、脚も…治るのか…」
「子どもの頃に一回見てるじゃん。」
…まぁ、とは言え遊良も真っ先に感じることが男女のアレコレではなく。
覚えていないどこか懐かしい感触に対し、真っ先に思い浮かぶのが【決島】で崩れ落ちたルキの肢体がちゃんと『治って』いることへの安堵でもあるのだから…
この近すぎる距離は、遊良に対する『ある感情』を自覚したルキにとっては遠すぎる距離とも言えなくも無いのだろうが。

…そうして―

穏やかに揺れるカーテンの動きと、微かに差し込む日の光が夏の終わりと共にリビングに流れ込み…
静かな日常の僅かな音が、遊良を眠りへと促すと…
「…」
「あ、もう寝ちゃった。」
よほど寝不足が続いていたのだろう、ルキが遊良の髪を一撫でしたその瞬間に。
ルキから感じる温かな体温のおかげか、気落ちしていたはずの遊良はどこか安堵した表情を浮かべながら…

すぐに、眠りについたのだった―

「…寝顔、昔とおんなじ。」

子どものようにすぐに寝付いた、遊良の寝顔を眼下に見下ろしながら。

穏やかに眺めるルキの表情は、決して子どもと呼べる段階などでは断じてなく…

徐々に大人へと変わりつつある、成長途中の子どもの年代。しかし、ずっと子どもでは居られないことをルキは理解しているからこそ…【決島】の時に気付いてしまった、遊良に抱く自分の『感情』に対し。果たしてソレが何なのかを、ルキは既に気付いてはいる。

けれども、あえてその感情に『名前』をつけないように努めている彼女もまた…まだまだ、大人にはなりきれていないと言う事なのだろう。

…遊良の髪を優しく撫でつつ、ルキは静かに思いに耽る。

傷付きながら、遊良はこれまでずっと戦ってきた。

認められぬ日々を耐え、立て続けに襲い来る障害を乗り越え。それが今こうして身を結び始めた事で、少なからず世界は変化してきている。

…しかし、遊良がここに至るまでに一体どれ程の苦労があったというのか。

天涯孤独…血の繋がった家族の居ない、世界に1人取り残されているという物悲しさ。

頭ではわかっていても、心では納得できていない。それは遊良もまだ16歳という、決して大人にはなりきれない年齢であるがゆえに…血の繋がった家族がいるかもしれないという可能性を、少しで与えら

れればソレに縋りたくなってしまうのもまた当然で…
すでに振り切ったはずの遊良のソレが、今再び浮かび上がってきているのは偏に【紫影】という敵によって、遊良が微かな揺らぎを与えられてしまったからに違いない。
そんな、せっかく良い方に変化してきている世界の中で。【紫影】の所為で再び『孤独』に苛まれ始めた今の遊良の姿は、果たしてルキの目にはどう映るのだろう。

孤独…それは遊良がずっと抱えている、決して逃れられない深すぎる闇。

それが、ルキにはよくわかる。だって、ずっと遊良を見てきたのだから。
それ故、心をすり減らしても『孤独』に抗おうとしている今の遊良の姿を見て…優しく遊良の髪を撫でるルキの目には、かつて遊良が受けてきた仕打ちが痛いほど思い出されているのか。
…遊良は、強くなった。
それこそ、かつての遊良からは考えられない程に―心も体もデュエルの実力も、今の遊良は段違いに強くなった。
しかし、今でこそ『Ｅｘ適正』を諦め、前に進む事を決めた遊良も昔は…それこそ『中学』の時は、周囲の醜悪さに本気で心を折られかけていた。
…その頃の遊良が何を感じていたのかは、もちろんルキだって良く知っている。
もし去年に遊良が【堕天使】の力を得なかったら、きっと今も遊良はあの頃のままだったに違いないのだから。

…そよ風がカーテンを揺らす音すら、静寂のリビングでは良く聞こえる。

戦いに疲れ、心をすり減らし…疲れ果てて寝息を立て、安心しきっ

たように眠る遊良の顔を眺めるルキの表情はどこまでも穏やかで…
そんな、これまでの遊良の、その全てを近くで見てきたルキが…
今再び『孤独』を感じているであろう、穏やかに眠りに着いた遊良へと…
何かを思い出しながらも優しく…とても、慈しむような声で―

「おやすみ、遊良。」

…と、静かに零したのだった―

―…

ルキは思い出す。
どこか世を捨てたような雰囲気の今の遊良と、良く似ていた『中学』の頃の遊良の事を。
…そう、幼少期の頃の迫害ももちろん酷いモノだったが、遊良の精神的なダメージで言えば中学の頃が最も酷かったといえるだろう。
当然だ。心が大人になりつつある高等部生と違って、体の成長に心がついて来ていない中学の年代と言うのは、子どもの無知なる残虐さに大人の性悪な残酷さが複雑に絡み合う特別な年代であり、子どものような幼稚な心で大人のような洒落にならない事をしでかす年代なのだから。
…その頃に受けた周囲からの酷い仕打ちは、過ぎ去った過去とは言え今もなお遊良に深い傷を与えている。
ルキが思い出すのは、遊良が最も深い『孤独』に苛まれていた頃…

子どもの幼稚な憎たらしさと、大人の汚い性根が入り混じった腐臭に苛まれ続けていた『中学』の頃のこと。
一人になる時間が増えてしまったために、孤独に押し潰されそうになっていた…遊良が、最も孤独を感じていた頃。

…物語は、一度過去へと遡る。

遊良が世界から見放された後…

遊良が、最も孤独を感じていた日々へと―

―…

「またフッたの!?これで何人目!?」
「しかも今度は3年の花見川先輩でしょ!?」
「…だって興味ないんだもん。」

肌に纏わりつく湿気が、もうすぐ夏が訪れることを告げているような梅雨のある時期の事。
初等部を卒業し、この春から決闘市内の公立中学へと入学したばか

りの高天ヶ原　ルキは…

未だ馴染まない中学校の制服に、微かな違和感を抱きながらも。放課後の教室にて、２人のクラスメートと雑談に花を咲かしていた。

「勿体無いなー、花見川先輩、もう決闘学園の推薦決まってるって噂なのに。彼氏が決闘学園なんて自慢できるのになー。」

「仕方ないよ、だってルキには天宮寺君が居るんだもんねー。」

「だから鷹矢はただの幼馴染だって言ってるでしょ？鷹矢と付き合うとか冗談じゃないよ、もう。」

「もーテレちゃってー。【黒翼】の孫と幼馴染とか勝ち組じゃん！」

「…本気で嫌なんだけど、鷹矢の面倒見るの。」

「またまたー。羨ましすぎだよ、天宮寺君と幼馴染で、今日だって３年生に告白されたのに。どうやったらそんな人生歩めるのか不思議すぎー。」

「これで天宮寺君が【王者】になったらホント勝ち組だよねー。【王者】の奥さんになれたら人生イージーモードすぎー。」

「…」

しかし、当のルキの反応など何処吹く風で。ルキの感情を置いてけぼりに、どこまでも無意味な妄想を膨らませ続ける２人のクラスメート。

…女３人寄れば姦しいと言うが、他人の色恋沙汰をここまで誇張して盛り上がれるのは一種の才能か。

鷹矢の面倒を見ることに、ルキが本気で嫌がっていることにも気付けず…しかも将来的にずっとなんて、心の底から遠慮したいことに違いないというのに。

…何が勝ち組か。何がイージーモードか。

あのグータラでだらしない鷹矢の世話を、今後ずっと人生を捧げて行うなんて考えたくも無い。そんな【王者】の孫という栄誉に隠された当人の事実を、全くもって見ようともしないクラスメートたちの姦しい会話に溜息を吐きたい衝動をルキは抑えつつ…

ふと、窓の方を見て…

「あ、そういえば目黒君が皆でカラオケ行こうって言ってたじゃない？ルキも誘われてたでしょ？ねぇねぇ、私たちも一緒に行っても…」
「ごめん、私そろそろ帰るね。」
「え？カラオケ行かないの？」
「うん、断ったの。じゃあまた明日。」

そして、窓の外に『何か』を見つけたのか―
ルキは突然立ち上がったかと思うと、そそくさと帰り支度を済ませ…同級生への別れのあいさつも手短に、カバンを背負うと何やら急ぎ足で教室を後にしてしまったではないか。
…引き止める時間もありはしない。
きっと2人の同級生もあっけにとられてしまったことだろう。何やら急に急ぎ始めたルキの様子に、名残惜しいと思う暇も無かった事を同級生たちは感じつつ…
ルキの居なくなった教室で、少女達は再び会話をし始める。

「ルキちゃん、急ぎの用事でも思い出したのかな？カラオケ行かないなら一緒に帰りたかったのに。」
「そういえばルキっていっつも1人で帰ってるよね。あーあ、ルキがカラオケ行かないなら私も行けないじゃん。いいよねー、入学早々モテる子は余裕でさー。」
「カラオケ行きたかったの？」
「違うでしょ。どうみても合コンじゃん。目黒君、最近ルキにアタックしてるし。」
「ルキちゃんモテモテだね。あ、でも1人で帰って大丈夫なのかなー。ほら、最近アレに付きまとわれてるって…」
「え？アレって？」
「ほらー、天城だよ天城。なんかさ、最近ルキちゃんに付きまとってるって噂なってて…」

「あー知ってる！一昨日もルキに付きまとってたんだってー！先輩が帰り道に見たって言ってた！気持ち悪いよねー！」
「やだー、気持ちわるーい！」

山の天気よりも変わりやすい、変化し続ける少女達の話題は留まる事を知らずに放課後の教室で花を開き続ける。
しかし、たった今変わったその話題に…子どもらしからぬ強い嫌悪が入り混じっていたことを、少女達は気付けているのだろうか。
…伝え聞いただけの噂話と、見てもいないその光景が果たして事実であるのかすら考えることもせず。
それが、事実無根であるかもしれぬ事になど気付けるはずもなく…本当の事を何も知らぬ女子生徒達は、ただただ嫌悪のままに言いたい放題で好き勝手に言葉を交わすだけで―

―…

校門―

「あ、いたいたー！もー、何で先に行っちゃうの？一緒に帰ろって言ったじゃん、もう！」
「…あぁ、ルキか。」

急いで教室を出てきたルキは、急ぎ足で校門の所まで走ったかと思うと…
目の前を歩いていた、1人の少年へと向けてそう声を投げかけていた。
…しかし、ルキに声をかけられた少年の雰囲気はどこか暗く。
見るからに重々しい雰囲気。他人から話しかけられるのを拒否しているかのような佇まい。梅雨の空気よりもなお重く暗く湿っていると感じてしまう少年のその雰囲気は、まるで自ら気配を消そうとしているかのような立ち振る舞いにも見える代物であり…

きっと、帰路についていた他の生徒達も思ったに違いない。一体なぜ、こんな可愛い少女が『こんな男』に自分から声をかけたのだろう…と。

そう、とてもじゃないが、ルキが声をかけた少年はこの決闘市東地区第1中学校においても『悪い意味』で有名な生徒であり…何より、先ほどルキのクラスメートが噂していたような、悪い噂のある生徒であったのだから。

そんな男が、なぜ高天ヶ原　ルキという入学早々から男子生徒の噂になるほどの容姿を持った少女と近づいているのか。そんな分際ではないはずなのに…と、帰路についていた他の生徒ならば誰しもがそう思ってしまったに違いない。

…けれども、そんな風に周囲に思われていることなど意に介さず。

高天ヶ原　ルキはその赤い髪を揺らしながら、暗い雰囲気の少年へと向けて更にその口を開き続ける。

「ねぇ遊良、なんでいっつも先行っちゃうの？一緒に帰ろうよ。」

「…俺といると色々言われるだろ。」

「別に気にしないのに。」

ルキが話しかけた、『悪い意味』で有名な男子生徒。それは紛れもなく、ルキと同じくこの春から中学に入学した同級生である『天城　遊良』であった。

しかし、ルキと話している男子生徒が天城　遊良であることを認識した途端…他の生徒達の視線があまりに分かりやすく変化し、また所々から隠そうともしない陰口が何処からともなく囁かれ始めたではないか。

…なんで天城みたいな奴が高天ヶ原と帰ってるんだ？

…身の程を考えろよ屑野郎。

そんな、所々から聞こえる陰口が天城　遊良の学校での立場を表している。人通りの少ない校門近くで、その場にいたほぼ全員から敵意の目を向けられることがまるで正しい光景かのようなソレは…まる

で、この場には天城　遊良への陰口を言う者しか居ない様。
けれども、誰もがその態度を改めようとはしない。それは、天城遊良は悪く言われるのが当然だというのが生徒達の常識であるのだと言わんばかりに―

―当然だ。何せ天城　遊良は『Ｅｘ適正』を持っていないのだから。

…Ｅｘ適正を持っていない、デュエリストの出来損ない。
…融合召喚も、シンクロ召喚も、エクシーズ召喚のどれも使う事が出来ない落ち零れ。
…皆が当たり前に出来ることが出来ない、底辺以下の最下層。
…生きている価値のない、屑の中の屑。
それが、この場にいる生徒達の常識。
誰もがみな天城　遊良に侮蔑の目を向け、蔑み見下し嫌悪を抱きながらその視線を1人の少年へと突き刺していて―

「…ほら。こうなる。ルキだって嫌だろ、こうなるの。」
「だから抗議しようって言ってるじゃん。言われ放題なんて嫌だよ、鷹矢にも手伝ってもらってさ…」
「…いいよ別に。それより鷹矢とルキに迷惑かけない方がいい…だから、学校じゃ俺に関わらない方が…」
「遊良…」

そんな、言いたい放題の周囲と…多勢の悪意に押し潰された遊良に対し、歯がゆい思いと苦い悔しさがルキを襲う。
…小学生の頃は、遊良に対しここまで陰口を言われる事は少なかった。
何せ、小学生の頃は登校するよりも師である【黒翼】との修業の時間の方が長かったために、遊良はほとんど小学校に通ってはいなかったのだ。
まぁ、登校した時は登校した時で、子どもの純粋な悪意に晒されて

いたのだから…遊良にとっては学校にいい思い出などなく、また小学校側からしてもトラブルの元となる天城　遊良が登校してくるよりは居ないほうが何かと都合が良かったのもあったのか、遊良の登校の少なさには目を瞑っている節がった。
東地区にある【黒翼】の持ち家の1つに引き取られ、そこで鷹矢と共に日々修業に明け暮れ…後見人がエクシーズ王者【黒翼】という後ろ盾もあってか、ほとんど小学校には通わなかった幼い頃の遊良。
…小学校の頃はそれでもよかった。
荒みきった社会との隔離と、【黒翼】からの厳しすぎる修業は幼い遊良に余計な事を考えさせないようにするためには必要なことだったから。デュエルの知識と力を無理矢理祖の小さな体に詰め込む毎日に加え、なぜか【黒翼】に『質の高い料理』を要求されたために遊良のデュエルの腕と料理の腕はメキメキと上達していき…
また、最低限の基礎知識は身につけておけと、デュエルの他に学校で習う初等教育も独学で勉強させられていた遊良は、小学校の間はあまり外の悪意に触れることなく過ごす事が出来ていた。

しかし、中学に入った途端…なぜか【黒翼】は、家を空けることが増えてしまった。

ろくに説明もせず、あるのは必要最低限の連絡と入金のみで…対面で修業していた小学生のときとは違い、今の修業は最低限の指示を己が読解し、独学と我流にて手探りで進めるのみ。
また、運の悪いことに。遊良が入学した中学の教師陣が、軒並み小学校教諭ほど不登校に寛容ではなかったことと…
保護者のいない1戸建てに、中学生が1人で住み着いているといる苦情が近隣から中学に寄せられたことも災いしてか、現在遊良は半強制的に中学校に登校させられてしまっていて。

…そして、遊良を待っていたのは小学校以上の『悪意』の嵐。

中学生と言うのは、体付きは大人へと変わる成長段階にあっても…その心と言うのは到底大人にはなりきれないモノであり、ある意味子どもと大人の悪い所を混ぜ合わせたような醜悪さを見せてしまうモノ。

それ故、子どものような純粋な悪意に混ざって。大人に変わりつつある者達から遊良が受けるのは、汚泥のような粘つく悪意。

しかも、ソレが毎日なのだ―

…周囲からは常に陰口が聞こえ、その中身は全てが侮蔑や中傷、否定や拒絶のモノばかり。

…無視されるだけならばまだ良い。体格の良い者からわざとぶつかられる事はしょっちゅうで、言いがかりを付けられ暴力を受けることだってある。

…そんな陰湿な行為に対しても、教師たちは誰も助けてはくれない。

悪意の伝染、協調意識。遊良への醜い仕打ちに対し、生徒達も教師たちも誰もが我関せず。

無理矢理学校に登校させているのは学校側の癖に、その遊良がどんな犯罪まがいの事をされたとしても…他の生徒達には何のお咎めもなく、他の生徒が調子にのって更に悪意は増長する。

…だから、遊良は早々に理解した。学校に、自分の居場所など無いのだ…と。

中学校入学からもうすぐ2ヶ月。吐き気を催すほどの邪悪な空気を、入学して早々に中てられてしまった遊良の表情はどこまでも暗く…

「早く帰ろう？気分悪いよ。」

「…あぁ。」

そうして…

眩暈がする、吐き気がする…人の性根が腐ったような、そんな醜悪な腐臭がするこの場から…
早く遊良を連れ出そうと、ルキが遊良の手を引いて歩き出そうとした…

その時だった―

「おい高天ヶ原!なんでそんな奴と一緒にいるんだよ!」

…遊良への陰口しかない校門に、突如として響いたのは癇癪のような声。
そして、その声に反応して…思わずルキが反射的に振り返ったソコには、何人かの仲間を引き連れた1人の男子生徒が怪訝な目でルキの方を見ているではないか。

「…誰?」
「あー…同じクラスの人。なんか最近しつこくて…」

それは最近、ルキによく絡んでくる…もとい、よく話しかけてくるクラスメートの内の1人。
確か初等部の全国的な大会でベスト8に入ったとか何とか、そんな様なことを誇らしげに自慢していた事をルキはふと思い出しつつ…
…しかし、そんな男子生徒はルキが見るからにうんざりした顔をしていることに気付いていないのか。
声を荒げた男子生徒は、今まさに帰ろうとしていたルキへと向かって。集団の中から一人飛び出すと、見るからに苛立っている様子を隠す気もなく…
続けて声を荒げながら、周囲の注目を受け早足でルキの方へと近づいてきて―

「約束があるから俺とは遊べないって断ったくせに、何で天城なんか

と帰ろうとしてんだ？おかしいじゃねーか！」
「…目黒君には関係ないじゃん、私が誰と帰ったって。」
「関係あるだろ！お前、俺と付き合ってんじゃないのかよ！」
「は？付き合った覚えなんて無いんだけど。勝手なこと言わないでよ、もう！」
「付き合ってるようなもんだろ？クラスみんなが俺達のこと付き合ってるって思ってるのに。」
「何それ…知らないし、そんなこと…」

ルキの言葉に聞く耳持たず。あまりに勝手な言動を、男子生徒は恥ずかしげもなく述べ続ける。
…事実無根、虚偽の拡散。
ルキの気持ちを無視したその言動は、どこか周囲に自分の意思を見せつけているかのよう。そう、男子生徒の物言いは、高天ヶ原　ルキという入学早々男子生徒の間でも噂になるほどの容姿を持ったクラスメートは…他ならぬ『自分のモノ』なのだという事を、大声で周囲にアピールしたがっている様にも見える代物。
数人の男子生徒を引き連れていたことから、彼はクラスの中でも中心的な人物であるのだろう。しかし、あまりに勝手なことを述べる男子生徒の言葉に、当のルキは明らかな苛立ちと呆れの表情を浮かべているというのにも関わらず。
こんなにも分かりやすくルキに拒絶されていることにも気付かずに、男子生徒は更に言葉を荒げ続けるだけ。

「何言ってんだよ！この俺が付き合ってやるって言ってんだから喜べよな！俺は全国大会ベスト８だぞ？それに兄貴は決闘学園に通ってるんだ、すげーだろ！何が不満なんだって！」
「はぁ…あのさ、私よりデュエル弱い男は嫌って言ったはずだよ。」
「う、うるせー！授業のデュエルなんか本気でやるわけねーだろ、アレは負けてやっただけって言ってるだろーが！そ、それよりなんでよりにもよって天城と一緒に居るんだよお前！そんな屑にやさしくして

やる必要ないだろ！」
「私が誰と居たって私の勝手でしょ！それより遊良を屑って言わないで！」
「はぁ!?なに天城なんか庇ってんだ！Ｅｘ適正無い奴なんて人間じゃねーじゃんか！それより女の癖に俺に逆らうなよな！いいからこっち来いよ！みんなでカラオケいくんだ、俺の彼女なんだからお前も来い！」
「ちょっ、やめて！」

すると、男子生徒は何を血迷ったのか―
癇癪と、見栄と。ルキの事を、まるで自分の所有物かのように言い捨てた男子生徒がなんと嫌がるルキを無理矢理に―
強引にその腕を掴んで、引っ張っていこうとした…

その時―

「…やめろ。」
「…あ？」

…それまでルキの後に居た、男子生徒に屑といい捨てられ蚊帳の外においやられていたはずの天城　遊良が。

横から、ルキを庇うようにして…
男子生徒との間に、割って入ったのだ―

「ッ…テメ触んじゃねぇ！気持ち悪ぃんだよ天城の癖に！」
「…ルキが嫌がってる。」
「あぁ!?喋んじゃねーよ屑！天城の癖にキモいんだよ！つーか俺の女に触ってんじゃねぇ！ぶっ殺すぞ！あぁ!?」
「…」

しかし、遊良の行為に対してもなお自分の行為を悪いとも思っていない男子生徒は、あろうことか遊良に対して侮蔑を吐き捨てる。
…簡単に吐くその言葉は、自分の言葉に一体どれ程の棘があるのかを理解出来ていないのだろう。
そのまま男子生徒は、掴んでいたルキの腕を離しつつ…
今度は遊良へと向かって威嚇を見せたかと思うと、まるで自分が悪い事を言っている自覚など微塵も感じていない様に遊良へと向かって、逆に激昂を見せ始めて。

「どうしたんだ目黒君！」
「おい天城ぃ！目黒君に何しようとしたんだよ！」
「目黒君に手ぇ出そうとしてんじゃねぇよ屑野郎！」
「ぶっ殺すぞ天城テメェ！」

また、男子生徒の後ろから。
ぞろぞろと、彼の取り巻きらしき男子生徒の幼い集団が現れ始め…
これまた口々に、汚い言葉にて遊良へと攻め寄り始めたではないか。
…その誰もが未だ幼さの残る顔立ちをしているにも関わらず、しかも着慣れぬ制服に逆に着られている風体であるにも関わらず。
集団ゆえの同調意識から、恐い物知らずの子犬のように更に激しく吠え続ける。

「テメェ目黒君の女になに手ぇ出そうとしてんだコラァ！」
「テメ天城ぶっ殺すぞ、あぁ!?」
「高天ヶ原は目黒君と付き合ってんだよ！屑野郎が近づいていい女じゃねーんだよ！」
「ちょっと！私がいつ目黒君と付き合ってることになったの!?勝手なこと言わないでよ、もう！」
「クラスで話し合ったんだよ、高天ヶ原と目黒君くっつけよーぜって。な、目黒君！」
「そう言う事だ。だからお前は俺の女なんだよ！」

「は!?何それ信じらんない！」
「女は黙ってろよ！それより天城ぃ！テメェ勝手に俺の女に近づいてんじゃねーよ！この屑！」
「…」

話にならない…
全く持って、話が通じない―
会話が成立しないというのは、こういう事を言うのか。言語は一緒のはずなのに、理解のレベルが異なっている錯覚を遊良が覚えたのも無理はない…
それはまるで、大人と幼児では会話が成立しないかのように。大人になりきれない体付きで、どこまでも幼稚な言葉を並べる男子生徒達は遊良とルキの言葉を聞こうともせずに好き勝手に騒ぐだけなのだ。
…このままでは埒が明かない。
多勢に無勢。いくら子犬の様な集団でも、数が集れば厄介な事この上ない。話も通じず、聞く耳も持たない…
そんな自己中心的な物言いしかしてこない男子生徒達に対し、遊良は一体何を思ったのか。
何やら遊良は、そっとルキに顔を近づけると静かに耳打ちをし始め…

「…ルキ、親玉のこいつ、強いのか？」
「去年初等部の全国大会でベスト8なったんだって。」
「あぁ…鷹矢が優勝したやつか…じゃあアイツにこう言ってくれ…、…、…」
「え？で、でも…」
「…いいから、その方が手っ取り早い。」
「お、おい！テメェ俺の女に何して…」
「…はぁ、わかったよ。……ねぇ目黒君、あのさ、もう埒が明かないからさ、手っ取り早くデュエルで話付けようよ。あなたが遊良に勝ったらカラオケでもなんでも付き合ってあげるよ、もう。」

「マジか!?」

すると、遊良に何を言われたのか。

何やら観念したかのような言葉を、深い溜息と共にルキは零し始めたではないか―

…そして、その言葉を聞いて。激昂していたはずの男子生徒は一転、ルキの提案に飛びつくようにしてその態度を変え始めた男子生徒。

それは彼からしても、ルキが提示したこの『提案』は彼にとってはあまりに『有利』な提案であったに違いない事であり…

―これで名実ともに高天ヶ原　ルキを手に入れられる。

きっと、彼は今こう考えているに違いない。

ルキの零した、『遊良に勝ったらカラオケでもなんでも付き合ってあげる』という言葉の中から…『遊良に勝ったら』と、『付き合ってあげる』という単語を都合よく抜き出し。

高天ヶ原　ルキの呈示した、あまりにか弱い抵抗に対し…既に勝利を確信している雰囲気を隠す気もなく、ニタニタと下種な表情を浮かべ始めている様子にも見え…

―負けるはずがねぇ。

―何せ、相手は『あの』天城　遊良なんだ。

―Ｅｘ適正の無い雑魚なんか相手じゃねぇ。

―勝ったら高天ヶ原は俺のモノ。

―そんな簡単なことでいいのか、楽勝すぎじゃねーか。

―勝ったら高天ヶ原は俺のモノ…ぐふふ…

…と、思春期特有の性欲に駆られた下世話な妄想に思いを馳せつつ。

デュエルもしていないのに、天城　遊良という『Ｅｘ適正』の無い底辺以下のデュエリストに既に少年は何やら勝ち誇りながら…恥ずかしげもなく、顔をどこまでも緩めたままで…

しかし…

「でも遊良に負けたら二度と近づかないで。ゆ、遊良…て、程度に負ける男なんてだいっっっっっキライだから！」

下世話な妄想に緩んだ男子生徒へと向かって、嫌悪を乗せたルキの言葉がぶつけられる。

『遊良程度』…ルキらしからぬ、どこか言いたくなさそうに放られたソレは、今さっきルキが遊良に耳打ちされていたモノで…

―『こう言ってくれ…天城程度に負ける男とは付き合いたくないって。俺とデュエルするように仕向けて…』

―『え？で、でも…』

―『…いいから、その方が手っ取り早い。』

―『…はぁ、わかったよ。』

ルキだって、言うのは嫌だったに違いない。嘘でも建前でも仕方なくでも、遊良の事を、『程度』と言い捨てるだなんて。

けれども、確かに遊良の言う通り。激昂し、話の通じない精神年齢の低いこの男子生徒から手早く手を切るには、こうする事が最も早いのだとルキだって理解したからこそ本当に仕方なくルキはソレを口にした。

なぜなら、ここは決闘市…

デュエリアと並んで、2大デュエル大都市に数えられるほどの世界有数のデュエルが栄えている都市の一つ。

この世界においては、デュエルにおける約束は絶対であるからこそ…最もシンプルかつ最も分かりやすい方法をとることが、この場を切り抜ける為の最適解といえるのであり…

そう、最適解であるのだが…

「ぶひゃはは！目黒君がＥｘ適正無い雑魚に負けるわけないだろ！」
「冗談キツいぜ高天ヶ原！目黒君と天城じゃ勝負にもなんねーよ！」
「つーか天城ってデュエルできんのかよ！Ｅｘ適正無い癖にルール知ってんのか？」
「いいじゃねぇか！その話乗ったぜ！　Ｅｘデッキ使えないとかそれデュエリストじゃねーし、ンな屑野郎なんてソッコーでワンキルしてやるよ！」
「…」
「ダッセェな！ビビッて声もだせねーのか？デュエリストじゃねー癖にデュエルディスク構えてんじゃねーよ！この出来損ない！」
「雑魚が調子乗ってんじゃねーよ！」
「Ｅｘ適正無い奴にどうやったら負けるってんだよ！負ける方が難しいぜ！」

まだデュエルをしていないのにも関わらず、既に勝った気でいる男子生徒とその取り巻きはどこまでも陳腐な挑発を繰り返すのみ。
…そんな彼らは気付いていない。
そう、どれだけ大声を荒げて、遊良を威嚇している気になってはいても…その言葉では、遊良は全く慄いていないと言う事を。
…汚い言葉を並べただけの、その幼稚で陳腐な子犬の威嚇に遊良は決して慄かない。
何しろ、『本物』の大人の、『本物』の悪意によって幼少期に地獄を見てきた天城　遊良が…この程度の精神年齢の相手に、恐れを抱くはずもないのだから。

…陳腐な挑発を繰り出してくる、男子生徒の言葉を無視しながら。

淡々と…遊良はカバンを下ろすと、その中から自らのデュエルディスクを取り出し始め―

「おっ、野良デュエルか？」
「いきなりどうした？誰が戦るんだ？」
「なんかさー、天城　遊良がデュエルするんだってよ。」
「マジか!?天城　遊良ってあのＥｘ適正無いやつだろ!?デュエルできんのかよ！」

人通りの少なかった放課後の校門に、次第に形成される人だかり。
わらわらと円を形成していくその様は、これより始まるデュエルに対し誰もが足を止めその戦いを見ようとしているからなのか。
…何しろ、いくら決闘市には決闘学園『中等部』が無いとは言え。
そこは天下の２大デュエル大都市に数えられる決闘市。いくら公立校であろうとも、生徒、教師、用務員、職員、事務員から部外者にいたるまで誰もがデュエリストであるのは当然で…
放課後に当然、何も無い場所でデュエルが始まるのであれば。それは誰が戦う場合であっても、一時注目を受けるのは至極当然ともいえるのか。
そう…
それは例え、Ｅｘ適正の無い天城　遊良であっても―

「…行くぞ。」
「おい約束だぞ高天ヶ原！俺が勝ったら、お前は一生俺の女だからな！」

円の中心、人だかりの真ん中で。
既に勝った気でいる男子生徒が、注目を浴びる自分に酔いしれつつ…
現れたデッキから手札を引くと、目の前に対峙している天城　遊良を全く視界にも入れないまま―

―デュエル!!

それは、始まる。

先攻は、男子生徒。

「俺のターンだ!雑魚なんてソッコーで蹴散らしてやるぜ!【ヘル・ドラゴン】を通常召喚!それを除外して手札から【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を特殊召喚する!」

―!

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

デュエルが始まってすぐ。
男子生徒が呼び出したのは、漆黒の鋼を纏った１体のドラゴンであった―
それは『真紅眼』の名を持った、ドラゴン族おける強力なカードの１枚であり…
…有名ゆえに高額、高額ゆえに希少。
Ｅｘデッキ至上主義時代のこの時代においては、メインデッキには大型モンスターをあまり入れないことが定石とされている。
しかし、そんな時代であっても容易な特殊召喚の条件と、そして類稀なる展開力を授けるこのカードの効果は…ドラゴン族を扱う大勢の者にとっては、喉から手が出るほどのカードである位置づけにこの【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】のカードはカテゴリ化されているのだ。

…それはいくら原典と呼ばれている『白と黒』の御伽噺にて、敗者と扱われている『真紅眼』のカードであっても関係無い。
そう、希少なカードを持っていると言うことは、それだけの金を持っている家の息子であると言う事。そんな紛れもないレアカードに数えられるソレを、男子生徒は早々に呼び出しつつ…

「うおっ、さすが目黒君！いきなり攻撃力２８００のダークネスメタルだぜ!?」
「すげーレアカードだ！これでＥｘ適正ない雑魚なんてイチコロだぜー！」
「最初の【ヘル・ドラゴン】もレベル４なのに攻撃力２０００だったし…やるなあの１年！」
「あいつ、イースト校行った目黒先輩の弟なんだってよ。只者じゃないな…」
「もう勝負は見えてんだろ。Ｅｘデッキ使えないのにダークネスメタルに勝てるわけねーもんな。」
「それな。Ｅｘデッキつかえなくてどうやってデュエルすんだって話。」

また、ざわざわと…
デュエルが始まったばかりだというのに、男子生徒の呼び出した１体の大型モンスターによって…少年の取り巻きや上級生達の声が、放課後の校門にざわめきを起こし始めて。
…それは始まったばかりだというのに、もう攻撃力の高い大型モンスターを呼び出したが故の盛り上がりなのか。
一般家庭では手に入れられない希少なレアカードを見た、未だ幼さの残る中学生たちの目には…真紅に輝く攻撃力２８００の大型モンスターの姿が、どこまでも雄々しく映っている様子で―

「ははは！最初から俺の勝ちは決まってんだよ！【竜の霊廟】発動！デッキからチューナーモンスター、【ギャラクシー・サーペント】を墓

地に送って、更に【アックス・ドラゴニュート】も墓地におくる！そしてダークネスメタルの効果発動だぜ！墓地から【アックス・ドラゴニュート】を特殊召喚！【死者蘇生】も発動！【ギャラクシー・サーペント】を特殊召喚！」

【アックス・ドラゴニュート】レベル４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１２００
【ギャラクシー・サーペント】レベル２
ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／　０

少年の場に出揃う３体のモンスター。一息にこれだけの展開を見せるその腕前は、およそ中学生になりたての少年が見せるデュエルとしては確かに評価に値する代物とも言えるだろう。
…下級としては破格の攻撃力を持ったモンスターと、それに続けてチューナーモンスターを揃え。
そのまま、男子生徒は盛り上がりの中で更に己の気分を上げつつ…

「天城なんて相手にもなんねーぜ！いくぜ、レベル４の【アックス・ドラゴニュート】に、レベル２の【ギャラクシー・サーペント】をチューニング！混沌より生まれし闇の炎が腐った世界を焼き払う！血の契約に従い我と共に覚醒せよ！我が魂！最強の切り札！ここに降臨！」

仰々しい台詞に導かれ、男子生徒のモンスターが空へと舞い上がる。
空に向かう４つの星が、２つの光輪に包まれた時…
それは空から落ちる光の柱を突き破って、夕暮れの空に現れるのか。
今、男子生徒の場に現れるのは…

「シンクロ召喚！来い、レベル６！【レッド・ワイバーン】！」

―！

【レッド・ワイバーン】レベル６
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２０００

現れたのは燃える翼竜。灼熱を喰らう小さきドラゴン。
炎を纏いし翼を広げ、夕暮れの空に鳴き声を響かせ…
呼び出されし轟きを、対戦相手へと雄々しく向ける。

「どーだ！どんな強いモンスターも殺す俺の最強の切り札だぜ！まっ、天城程度じゃ俺のモンスターの攻撃力超えるなんて最初っから無理なんだけどな！はははは！」
「アレが切り札…」
「これでお前は終わりなんだよ！次のターンに【アックス・ドラゴニュート】も蘇生できるし…Ｅｘデッキが使えないんじゃ何も出来ねーだろ！雑魚が何しようと終わりだ！ターンエンド！」

男子生徒　ＬＰ：４０００
手札：５→１枚
場：【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】
【レッド・ワイバーン】
伏せ：なし

そして…
やりたい事をやりえたのか、どこか満足気にそのターンを終えた男子生徒。
確かに初っ端から大型モンスターと、彼が自信満々に切り札と呼ん

でいるモンスターを揃えられる腕前を持つ辺り…小学生から上がったばかりの年齢にしては、それなりに腕に自信があるのも頷けると言えるだろうか。
とは言え、いくら勝ちを確信しているとは言え。伏せカードも無しでそのターンを終えるというのは、些か油断しすぎとも言えなくもないのだが…

…しかし、今のこの場にはソレに引っかかる生徒達は居はしない。

そう、誰もが大型モンスターと切り札を揃えた男子生徒に関心し、既に決着は付いているのだと思い込んでいる。
何しろ、相手はあのＥｘ適正の無い天城　遊良。Ｅｘデッキが使えない雑魚には、この場をひっくり返す事など出来ないはずで…
きっと天城は今頃になって力の差に気付き、強者に喧嘩を売った愚かさを悔やんでいる頃だろう。この場にいる部外者の誰もが、そう思っていて―

「…俺のターン、ドロー。【手札抹殺】を発動。お互いに手札を全て捨てる。」
「あ？」

しかし、そんな周囲を意に介さず。
自らのターンを向かえ、周囲の思惑など全く気にも留めずに…淡々と、１枚の魔法カードを手札から発動した天城　遊良。
…それは自分と相手の手札を、丸ごと全て入れ替えてしまうという手札交換用の魔法カード。
けれども、ソレは通常ならば手札事故のときに使うような、起死回生を賭けた一か八かのカードであると少年達は授業で習っているために…
遊良が使ったそのカードに対し、周囲からは嘲笑と失笑が零されつつ。対峙している男子生徒もまた、遊良へと向かって更に煽りを強め

始める。

「初っ端から手札事故かよ！・やっぱ雑魚だな！・おらよ、１枚捨てて１枚ドローだぜ！」

「５枚捨て５枚ドロー。続けて【トレード・イン】を発動。レベル８の【マスター・ジーグ】を捨てて２枚ドロー。【闇の誘惑】発動。２枚ドローして【終末の騎士】を除外。【調和の宝札】も発動、【亡龍の戦慄―デストルドー】を捨てて２枚ドロー。」

「あ？・【調和の宝札】？」

けれども、いくら男子生徒が煽ろうとも―

それでも遊良のドローは止まらない。恐るべき勢い、恐るべき速度で見る見るうちに入れ替わっていく遊良の手札と、次々と引かれていく遊良のデッキの勢いはカードを発動するたびに更にその速度を増し続けるのか。

…ドローに、ドローと、ドロー。

多彩なドローソースを使用し、遊良の手札が次々に入れ替わっていく―

「おい！・いつまで手札交換してんだこのクズ！・つかデストルドーはチューナーじゃねーか！・何でテメェがチューナーモンスター使ってんだよ！・シンクロ召喚出来ねぇ雑魚が！」

「２枚目の【闇の誘惑】発動。２枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外。」

「チッ、ウゼェな。シカトかよ天城の癖に。」

（あ…）

そして…苛立ちを隠さぬ男子生徒を他所に。

次々とドローを繰り返してきた遊良を見て、観戦に回っていたルキはふとこのデュエルの展開が既に見えてしまっていた。

…そう、この場にいる誰もが皆、手札を入れ替え続ける遊良のデュエルの本質に気付いていない。
遊良のやっている事の意味、遊良のデッキ捌き、遊良が行っているデュエルを見てもなお…中学生たちの誰もが皆、遊良のことを小馬鹿にしたり見下したり野次を飛ばし続けているが…
誰も…誰も気付いていない…

（気付いてなさそう。もうこのターンで終わりなのに。）

誰もが男子生徒の勝利を確信して居る中で、ただ一人このデュエルの勝敗を限りなく正確に予測している様子の高天ヶ原　ルキ。
それはきっと、幼少の頃から遊良を見てきたルキだからこそ感じ取れるモノなのだろう。
そう、一見無意味に思われている連続ドローも、遊良にとってはデッキをフル回転させている証。初期手札と合わせて、遊良は既にデッキの約半分…実に１９枚ものカードをデッキから引っ張り出しており、ルキとてその動きを見れば既にこの勝負の行方がハッキリとその目に見えてしまっているのだ。
それはＥｘ適正が無いと言われてから今まで、修業によって鍛え上げた遊良のデュエルのいつもの流れであり…
…この場でただ一人、ルキだけが理解出来ている。
遊良がデュエルの流れを掌握していることも、遊良のデッキが既に温まっていることも…
もう、遊良の準備が整っていることも―

「…そろそろいいか。俺の墓地にはモンスターが５種類。手札からレベル８、【影星軌道兵器ハイドランダー】を特殊召喚！」

―！

【影星軌道兵器ハイドランダー】レベル８

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１５００

瞬間…

遊良の場に現れたのは、星の軌道を回る宙からの狙撃者。

触手のような多腕の先から、今にもレーザーを撃ち放たんとしているその姿は…およそ機械だとは到底思えぬ、異星からの侵略者のようにも見える代物であり…

…墓地のモンスターの名前が、全て異なる場合にのみ呼び出せるその特異な召喚条件も去る事ながら。

攻撃力３０００、それをいとも簡単に場に呼び出して。自分のモンスターを誇っていた男子生徒へと向かって、多腕の触手が怪しく蠢く。

「攻撃力３０００!?天城の癖に調子乗るんじゃねぇ！ンなモンスターぶっ殺してやる！レッド・ワイバーンの効果はつど…」

「遅い。破壊される前にハイドランダーの効果発動。デッキを上から３枚墓地に送って、【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を破壊する！」

「なっ!?」

また、いきり立つ男子生徒が自らの切り札に命じるよりも早く―

そう、火炎の翼竜のその口から、マグマの炎弾が放たれるよりも前に…チェーンに乗せて発動を宣言した遊良によって、影星軌道兵器はその多腕の触手から一瞬の後に多数のレーザーを放ち始めるのか。

…狙いは、黒竜。

これもまた、墓地のモンスターの名前が全て異なる場合にのみ扱える効果ではあるものの。それをいとも簡単に行いつつ、男子生徒が自信満々に呼び出した大型モンスターを無慈悲にもレーザーで簡単に撃ち抜き…

そのまま、【レッド・ワイバーン】の放った炎弾によって。ハイドランダーは破壊されてしまったものの、それでも自慢のドラゴンをこん

なにも簡単に破壊されてしまった男子生徒が何やら焦ったような声を荒げてしまうのも無理はなく。

「くそがっ、天城の癖に俺のダークネスメタルを…けど所詮はその程度だ！まだ俺の場には我が魂が…」

「まだだ。墓地の【リ・バイブル】の効果発動。俺のＥｘデッキの枚数は０枚、ＬＰを２０００払って墓地から【リ・バイブル】を特殊召喚する。更に墓地のデストルドーの効果も発動。【リ・バイブル】を対象に、ＬＰを半分払って墓地からデストルドーを特殊召喚。そのレベルを１下げる。」

「はん！Ｅｘ０の雑魚は自分からＬＰ３０００も減らすのかよ！やっぱ雑魚だな、まともなデュエルなんて出来な…」

「永続魔法、【冥界の宝札】を２枚発動。そして２体のモンスターをリリース。レベル８、【フォトン・カイザー】をアドバンス召喚。」

―！

【フォトン・カイザー】レベル８
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２８００

…そして、止まらない。

男子生徒が低俗な煽りを漏らそうとも、遊良は止まらずに動き続ける。

…一見すれば纏りの無いようにも思えるデッキを、まるで嵐のようにして無理矢理に回転させて。

連続して連続してモンスターを呼び出していくその様は、およそ先のターンの男子生徒の動きとは比べ物にならない程に洗練されたデッキ捌きとも言えるだろうか。

…一体、校門に集った中学生たちの何人がソレに気付いているのだろう。

そう、場に伏せカードもなく、墓地に防御札もなく、そして手札に

何も用意していないであろうこの状況で男子生徒が…
もう、遊良を止められないことに―

「【フォトン・カイザー】の効果により、デッキから2体目の【フォトン・カイザー】を特殊召喚する。」
「2体目!?で、でもレベル8が2体いたって、お前エクシーズなんて出来ねーだろーが!」
「…【冥界の宝札】2枚の効果で4枚ドロー。続けて【アドバンスドロー】を発動。【フォトン・カイザー】1体を墓地に送って2枚ドロー。【貪欲な壷】も発動。ハイドランダー、ギルフォード・ザ・ライトニング、フォトン・カイザー、マスター・ジーグ、ガンナードラゴンをデッキに戻して2枚ドロー。」
「なっ、何枚ドローして…」
「…よし、手札を1枚捨てて装備魔法、【D・D・R】を発動。除外されている【堕天使アスモディウス】を特殊召喚する。」

―!

【堕天使アスモディウス】レベル8
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

「ま、また攻撃力３０００だと…け、けどそれがどうした!まだ俺のＬＰは残…」
「いいや、このターンで終わりだ。【死者蘇生】発動、墓地から【神獣王バルバロス】を特殊召喚!」

―!

【神獣王バルバロス】レベル8
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

連続して現れる、遊良の大型モンスター達。
その数実に３体…まさに一瞬の出来事のように、実に３体もの最上級モンスター達が勢揃いするその流れに果たして観客に徹している中学生たちは着いてこれているのだろうか。
…攻撃力の高いレベル８のモンスターが３体。
Ｅｘ適正が無いために、エクシーズ召喚をする事はできないとは言え。その必要性すら感じさせない場が完成した今となっては、３体もの最上級モンスターが揃ったこの場はまさに圧巻とした言い様がないことだろう。
…そう、アレだけ動いて、これだけ召喚して…それでもなお手札に余裕を残しつつ、墓地にもまだ何かを仕込んでいるその佇まいは圧倒的実力差がなければ出来ない芸当なのだ。
それはまるで、Ｅｘデッキなど使う必要が無いかのように―

―もう勝負はついている。

「こっ、攻撃力３０００が２体ぃ!?」
「バトルだ！【神獣王バルバロス】で【レッド・ワイバーン】に攻撃！そしてフォトン・カイザーとアスモディウスでダイレクトアタック！」
―!!!
「うわぁぁぁぁぁぁ!?」
男子生徒　ＬＰ：４０００→０

―ピー…

一蹴…まさに、一蹴するかの如く。

校門に鳴り響いた無機質な機械音は、紛れもなくデュエル終了を告げる合図となりて放課後の学校に反響する。

…それは正真正銘、このデュエルの勝者と敗者がきっかりと別れたと言う事。

この場に集った誰もが皆、己の目を疑っている。そう、決着は次のターンになるであろうと誰もが思っていたところで、突如としてデュエル終了を告げる合図が鳴り響いたことにこの場にいる中学生の誰もが驚きを隠せない様子で…

…どうしてこのデュエルの勝者が『天城　遊良』と表示されているんだろうか。

…一体何が起こったんだ。

…天城は意味のわからない動きをしていたのに、いつのまにデュエルが終わったんだ。

…なんで天城が勝っているんだ。

まだ後攻の1ターン目で、これからデュエルが盛り上がるところだったはず。次のターンに男子生徒が更に大型のドラゴンを呼び出して、天城を完膚なきまでに蹂躙するはずだったというのに…

…きっと、この場の誰もがそう思っているに違いなく。

「お、お前ふざけんなよ!あんなデュエルなんて授業じゃ習ってない…あんな…滅茶苦茶なデュエル…」

…そして、敗れた男子生徒の方はと言えば。

無機質な機械音が響き終わったその直後に、力なく地面に尻もちをつき…何やらブツブツと、俯きながらその声のトーンを次第に落としていくだけではないか。

…気まずい沈黙に包まれた校門では、その情けない声がよく通る。
しかし、それも仕方がないのか。何せあれだけ馬鹿にしていた天城遊良に、凄まじい勢いで蹴散らされたのだから…
想像していた結果とは正反対の現実を飲み込めず、その反動でプライドが大きく傷つけられてしまっているのも仕方がないと言え…
すると…

「あ、あんなにドローしたら誰だって…俺だって…あんだけドローしてたら勝てるに決まってる…なのに…」
「だったら…」

負け惜しみにもならない情けない声で、ブツブツと泣きそうな声を漏らし続けるこの男子生徒の声が気に障ったのか。
帰り支度を始めていた遊良が、ふと男子生徒へと向かってその口を開き…

「だったら…お前もすればいいだけだろ。俺と同じ事。」
「なっ!?」

遊良の声に反応し、思わず顔を上げてしまった男子生徒。
…その表情は驚きと憔悴、そして悲嘆と絶望が入り混じったかのようなモノとなりて、自身の敗北を受け入れられずに感情がごちゃ混ぜになっているかのようにも見える。

—無理だ…

きっと、遊良にそう言われた男子生徒の心中は『こう』なっているに違いない。
—関連性のないカードばかりを使って、あんな暴風雨のようなドローを繰り返せるわけがない。

―Ｅｘデッキを使わずに、レベル８の最上級モンスターがあんなに連続で出せるわけがない。
―手札を整えながら同時に墓地や除外に必要なカードを用意するという、あんな凄まじいデッキ捌きなど出来るわけが無い。
それは無意識の感情の露出。どう足掻いても自分では出来ないモノを目の前で見せ付けられてしまった男子生徒の頭の中には、嫌でも感じさせられた圧倒的な『差』と言うモノがグルグルと渦巻いており…
そう、デッキを手足のように扱うセンス、妨害を乗り越えて展開する技量、Ｅｘデッキを使えないのに次々に現れる大型モンスターと、そんな質の高いデュエルの基礎に加えて…
１ターンでデッキの半分以上を引くといった、ソレらを纏める『ドロー』と言うまるで天城にだけ許されたかのような『芯』のあるデュエルなんて自分に出来るわけが―
「あ、あんなデュエル出来るわけが…ッ!?」
そして…
そう言いかけて、男子生徒は『そこ』で気付いてしまった―
そう、『出来るわけがない』と認めてしまった瞬間に、自分の何もかも終わってしまうのだ、と。
それは紛れもなく、デュエルが始まる前にこの男子生徒が自分の口で言っていたことに起因する。
―『Ｅｘデッキ使えないとかそれデュエリストじゃねーし』
―『Ｅｘ適正無い奴にどうやったら負けるってんだよ！負ける方が難しいぜ！』
己が口にしたことに、今更になって襲われている男子生徒。

Ｅｘ適正が無い…それはどうしようもない出来損ないの証。
融合も出来ない。シンクロも出来ない。エクシーズも出来ない。
Ｅｘデッキからモンスターを呼び出すことが出来ない、そんな底辺以下のデュエリストのデュエルに対して…
そのカスより優れているはずの自分が、天城のデュエルに対し『出来るわけがない』と認めてしまうことは男子生徒にとってどれだけ屈辱的なことなのだろう。
…Ｅｘ適正の無い天城　遊良に、デュエルで負けるなんておかしい。けれどもどうやったって、負けた理由が他に思いつかない。
屈辱と、怒りと…そして止めどなく襲い来る情けなさが、男子生徒の口から負け惜しみを言わせようとしている。けれども男子生徒がソレを出来ないのは、天城　遊良というＥｘ適正の無い出来損ないにどうしても負けを認めたくないからで…

「遊良、もういいでしょ？行こ？」
「…あぁ。」

そして…
敗北により沈黙してしまった周囲を一瞥して。
デュエルディスクを仕舞った遊良が、ルキに引っ張られるようにしてこの場から去ろうとした…

その時だった―

「い、イカサマだ！」
「…え？」
「お前！イカサマしたんだろ！じゃないと…じゃないとお前が俺に勝てるわけない！」

沈黙していた校門に突如響いたその声。
それは紛れもなく、たった今敗北したばかりの…涙を浮かべながら

立ち上がった、敗者であるはずの男子生徒から放たれた声であった。
しかし、何を血迷ったのか…
敗者であるはずの男子生徒は、口を噤む事もなく…自分がどれだけおかしな事を口走っているのかにも気がつかぬまま、更にその口を開くのみ。

「この勝負は無効だ！無効！無効！無効！」
「ちょっと！何勝手なこと言ってるのよ！もう！」
「うるさい！イカサマしてないとおかしいじゃないか！自分が有利になるカードをどこかに隠し持ってたんだ！じゃないとあの場面で都合よく【死者蘇生】と【Ｄ・Ｄ・Ｒ】が手札にあるわけない！」
「…俺、２７枚ドローしたんだけど。」
「ざっけんな！何が２７枚だ！普通そんなにドロー出来るわけないだろ！それにあんな都合よく墓地と除外に切り札が用意してあるわけない！隙を見て墓地に仕込んだんだ！それかデュエル始まる前に墓地に置いといたに決まってる！」
「…」

荒唐無稽、支離滅裂。
デュエルディスクが判定を行う正式なデュエルにおいて、イカサマの入り込む余地が無いことなど幼等部の子どもだって知っていることだと言うのにも関わらず。
そう、遊良の行ったドローは全てカードの効果による正しい処理。墓地と除外から呼び出したモンスターだって、【手札抹殺】や【闇の誘惑】やその他のカードを駆使して準備したちゃんとした戦術。デュエルディスクが展開する前では、墓地にカードなど仕込めるはずもないのだ。
デュエルディスクには、しっかりとログも残っている。それにこんな大勢の観衆の前で誰にもバレずにイカサマを行うなんて出来るわけもない。
それに、そもそもデッキ以外から取り出したカードがデュエルディ

スクに反応しない事は、説明されるまでもない常識以前の問題だと言うのに…

…そんなありえない声を上げる男子生徒に、呆れてモノも言えない遊良とルキ。

しかし…

「おいおいマジかよ！やっぱりイカサマだったのか！」
「だよな！じゃないと天城が勝てるわけないじゃん！」
「正々堂々戦った目黒君に謝れ！卑怯者！屑野郎！イカサマ野郎！」
「Ｅｘモンスター使えない癖に勝つなんておかしいと思ったんだ！この卑怯者！」
「雑魚が！そこまでして勝ちたいのかよ！」
「…やっぱイカサマだったのかよ。」
「そういえばおかしかったもんな、天城のあの動き。」
「あんなのイカサマしねーと出来ねーもんな！Ｅｘ適正無いからって卑怯なデュエルしてんじゃねーぞ！」
「不愉快なんだよお前ぇ！」

次々と…
負けた男子生徒のみならず、その取り巻きから始まって…一体何を見ていたのか。ついには関係の無い生徒たちまで口々に遊良のデュエルをイカサマと断定し始めてしまったではないか―
…多勢に無勢。
Ｅｘ適正の無い天城　遊良が、デュエルで勝てるわけが無いと言う…自分達の常識に縛られているからこそ、こぞって天城　遊良のデュエルの勝利をイカサマだと断定しその声を荒げ続ける中学生たち。
その言葉の嵐が、果たしてどれだけ真実から程遠いのかを未だ彼らは知らず…

「な、なんでみんな遊良がイカサマしたって思ってるの？ね、ねぇ遊良、流石に私ももう我慢できな…」
「…いい、もう行こう…」

…そんな周囲の暴言の嵐に、遊良は一体何を感じるのだろう。
集団に背を向け、ルキを連れて…

「おい逃げるなイカサマヤローー！」
「お前なんか死んじまえーー！」
「学校来んな出来損ないがーー！」
「まともにデュエルできねーのかーー！」

遊良は、その場を後にしたのだった―

―…

…余談だが、ルキを所有物扱いしたあの男子生徒は後日、公衆の面前でルキにこっぴどく拒絶され…本気で嫌われたために、それからルキにちょっかいを出してくることはなくなった。
まぁ、ルキの気持ちを無視して、無理矢理にルキをモノにしようとしていたのだから…ルキから本気で嫌われるたのも自業自得、当然の報いではあるのだが。
しかし、この日の彼の言動がきっかけとなって、遊良への風当たりが更に酷く醜くそして強くなってしまったこともまた事実。
そう、遊良のデュエルを『イカサマ』と言い放ったこの男のせいで、それから遊良の中学生活が更に酷いものになったことは紛れも無い事実であり…

「ルキちゃん、あんまり天城に近づかない方がいいよ？」
「そうだよ、アイツやばい奴じゃん。」
「なんで!?別に遊良悪い事してないじゃん！」
「だってイカサマしてるんだよ？授業のデュエルでも平気でイカサマしてるんだって…」
「イカサマなんてしてないよ！だって遊良は…」
「ねぇルキ、なんで天城を庇うの？正直趣味悪いよ。折角モテるのに。」
「そうだよ、天城なんてルキちゃんが庇ってあげる必要ないじゃん。」

（何…言ってるの…？）

怖い。何も知らないくせにそこまで言える周囲が、ルキは怖い。
…迫り来る同調の圧、押し付けてくる余計な非常識。
遊良の事を何も…何も知らない癖にどうしてそこまで言えるのか。
何度説明しても聞き入れてくれない。自分と遊良が幼馴染で、遊良は皆が思うような酷い人間では断じてないと言う事を…ルキが何度説明しても、何度説得しても、何度訴えても周囲は誰1人として聞き入れてはくれず。
そう、誰もが皆、天城　遊良はデュエリストの出来損ないで最底辺の落ち零れで、生きる価値のない屑としか思っていないのだ―
―全ては、天城　遊良がＥｘ適正を持って無いから。
ＴＶがそう言い、大人がそう言い、これまで自分達もそう扱ってきたから。その常識を帰られず、これまでもこれからも天城　遊良は『そういう存在』なのだと、誰もが思い込んでしまっているこの現状では…
いくらルキ一人が足掻いても、どうしても周囲は変わろうとはしてくれず…

「ね、ねぇ！あれ天城じゃない!?」

「うわっ！コッチ見てる！やだー気持ち悪いー！ルキ、行くよ！アンタ見てるんだよきっと！」
「え、ちょ、ちょっと待っ…」

そんな、友人を名乗る女生徒に引っ張られていくルキの目には…
遊良がまるで、『学校では自分と関わるな』と言っているようにも見えていて―

そして…

その日から、ルキは学内で遊良を見かけることが極端に減ってしまった。
…そう、鷹矢は嫌でも目に付くというのに、遊良はどこを探しても見つからなくなってしまったのだ。
学内の集会などでもそう。全校生徒が集っているはずの中に、どれだけ探しても遊良の姿が見つからない。少し前までは遊良の周囲は生徒達が避ける所為か、少し空間が開いていてすぐに見つけられたというのに…

学校行事もそう。中学の大会もそう。遊良は出てこない。見つからない。

学校にはちゃんと行っていて、同じクラスの者に聞けば一応授業には出てきているそう。それに放課後に家に寄れば、ちゃんとそこに遊良は居て…敵の居ない家の中での遊良の様子は普段通りであり、そこは少なからずルキも安心できる点ではあるのだが…
でも、それ以外の時間はどこにもいない。探しても探しても、ルキには遊良の事がどうしても見つけられず。
それはまるで、この時間だけ遊良が世界から消えてしまっているかのように―

―…

…血の繋がった家族がいれば、この孤独を慰めてくれたのだろうか。

電気もつけない自宅のリビングで一人、ぼんやりとそんな事を考えている遊良。

敵だらけの中学校、味方になってくれない教師、それに同調する生徒達。そんな者達から身を守るためとは言え、自分の気配を押し殺し誰にも見つからないように姿を消し続ける毎日を送っていると…本当に、この世界には自分の居場所も味方も何一つないのではないかという錯覚が、遊良の中では日々大きくなってきているのか。

世界にただ一人取り残されている感覚…それはきっと、本当の意味で『天涯孤独』になった者にしか理解できない絶対的な永遠の孤独。

…きっと、鷹矢やルキにだって理解など出来はしない。

父がいて、母がいて。他にも血の繋がった親族が分かる場所にいる者には、ソレが例え幼馴染達だろうとも自分が抱いている孤独を決して理解してもらえないだろうと…ふと、遊良は考えてしまっていて。

…頭ではわかっている。鷹矢とルキが、どれだけ自分を大切に思ってくれているのか。

…自分だって分かっている。鷹矢とルキが、どれだけ自分にとって大切な存在であるのか。

けれども、遊良が感じてしまう孤独はそう言った類のことでは断じてないのだ。世界にたった一人、血の繋がった者が居ないという孤独は―

…世界の外に弾かれてしまった感覚、手を伸ばしても誰にも触れられない虚無。

頭ではなく、魂がそう感じている…誰も、本当の意味で自分とは『繋がって』はくれていないのだ…と。

…誰もいない、電気のついていないリビングでそんな感覚に苛まれ続けている遊良。

師の居ない事が増えたこの家は、中学生が一人で住むにはあまりに広すぎた。鷹矢もルキも放課後は必ずこの家に寄っていってはくれるものの、日も落ちてくれば必ず自宅に帰らなければならない。
…そう、鷹矢にもルキにも、自分の生活があるのだ。実家で、家族と共に、毎日を過ごすという当たり前の生活が。
しかし、遊良にはソレが無い。迎えてくれる家族もいない、生まれ育った生家もない…
そんな、鷹矢とルキが去った家の、冷たいソファで1人膝を抱える遊良のその様は…
かつての幼少期に小さく固まって命をすり減らしていた、いつかの彼の様でもあって―

…そんな時代が確かにあった。

誰からも認められず、世界からも見捨てられ…神に見放されたかの様な、言葉に出来ない地獄の日々が。
…一応、中学生活も後半に差し掛かれば周囲も多少は飽きたのか、遊良も当初ほど酷い言われようはされなくはなった。
けれども、その代わりに増えたのは無視という無関心…誰もがみな遊良を見ないようにし、関心を向けない者達が多く増えていき…
まぁ、とは言えそっちの方がうるさくない分、遊良のストレスは少しは減ったのだろう。口々のその存在を否定されない分、以前ほど遊良もふさぎ込むことは少なくなり…学校にいる間でも、少しは磨り減った遊良の心も回復はしてきてはいた。
…けれども、根本的なモノは何も変わってはいない。
そう、環境が変われば態度も変わる。
中学生活が終わり、決闘学園高等部に進学したあとも…しばらく遊良は、以前のように学園では自分の気配を殺す日々を送っていたのだ。

…そうしなければ、またルキと鷹矢に余計な迷惑をかけてしまうことを、遊良は知っていたから。

だからこそ、もしも高等部1学年の『あの日』に―

―『もう俺を…出来損ないとは言わせない！ＥＸデッキが使えなくても、俺の存在を否定させない！』

【堕天使】を得た『あの戦い』が無ければ、きっと遊良の心はずっとずっと永遠に荒みきったままだったに違いないことだろう。

ほんの少しだけ捨て切れなかった、『いずれＥｘ適正が手に入る』という一縷の望みすらも全て捨て去ったあの戦いで…

あの人形のような『謎の男』との戦いで、遊良がその望みを全て捨て去ってでも鷹矢とルキを救うことを選び、己の存在をもう誰にも否定させないという決意の元に【堕天使】を使い続けることを選ばなければ、きっと遊良は吹っ切って前へと進むことを選びはしなかったはず。

…まぁ、なぜか現在では遊良の【堕天使】はなくなってしまってはいるのだが…

…そう、物語は、次第に現代へと戻ってくる。

―『もう、認めてもらうのを待つのはやめる…これからは、認めさせてやるんだ。』

【堕天使】を手に、Ｅｘ適正への望みを全て捨て去った事で遊良は『耐える』ことを辞めた。自分の存在を否定してくる敵の全てに牙を剥くことを遊良は選び、自らの力で自分の存在を世界に認め背させてやるのだと、とうとう遊良は決意したのだ。

…選んだその道が、どれだけ険しいモノであろうと。
それでも遊良は、自らの足で立って戦う事を選び…

―その後の物語は、既に記されている通り。

大激戦が繰り広げられた【決闘祭】。そこで優勝したことで、世界は一気に変化の兆しを見せた。
決闘市を襲った『異変』。そこでの混乱が、遊良自身も知らなかった繋がりを思い知らせた。
大混戦が巻き起こった【決島】。そこでの戦いの全てが、遊良の血肉となり強さへと変わった。
屑の策略に立ち向かった【裏決島】。そこでの出来事が、遊良に衝撃の真実を落としてきた。

色々な事が起こった…
本当に、色々なことが起こった。
とても険しい戦いだった。そのどれもが簡単には解決できない道であり、けれども決して諦めることなく前へと進んできた遊良だからこそこれまでの戦いの全てに立ち向かうことが出来ていた。
その全てが遊良の軌跡。これまで遊良が戦う事を諦めなかったからこその身に舞い降りてきた、これらの全てが遊良の戦いの軌跡であり遊良の歩んできた人生の1ページであり…
…果たして、『これまで』の出来事が『これから』の遊良に何をもたらすのか。
それは未だ誰も知らない未来であり、過去があるからこそ今があるのだということが限りない真実となりて…
次第に、物語は現代へと移り変わってきて―

―…

「…ん…」
「あ、起きた？おはよ、遊良。」

見上げたそこにいる、優しく微笑むルキの顔を視界にいれながら。
目を覚ました遊良は、いまだ虚ろな思考の中でぼんやりと眠気の残滓を感じつつ…
なぜ自分がルキに膝枕をされているのかについて、眠る前の記憶を必死になって呼び起こしていた。

「あれ…ルキ…あ、そっか…俺…」
「よく寝てたよ。３時間くらい。」
「そんなに…ごめんな、枕にして。」
「大丈夫大丈夫。それよりよく寝れた？ちょっとうなされてたから。」
「…多分、昔の夢見てた…中学の頃かも…」
「あー…酷かったもんねー、あの頃。」

ルキの下肢の上で、片手で目を覆いながらそう言う遊良。
…一体、どんな夢を見ていたのだろうか。
その寝覚めの憂鬱さと、寝ている間にうなされていたというルキの証言から、既に忘れかけている夢の内容を思い出そうとしつつも思い出したくない衝動に遊良は駆られつつ…寝起きで動かせない体をだらりとルキへ預けつつ、惰眠の余韻に浸っていて。
けれども、不思議と頭はすっきりしている。
そう、３時間ほどとは言え、これまで碌に眠れていなかった遊良にとっては、ルキの膝枕の上という懐かしい安らぎの中での仮眠は、よほど質の良い睡眠となりて遊良の体を回復させたのか。

…寝る前まえ感じていた、体の重さも気分の憂鬱さも今は感じない。
その体調の改善に、遊良自身も驚きを感じている様子。アレだけ悩んでいた憂鬱な気分が、たった3時間の質の良い睡眠でこんなにも改善するものなのか…と。

…また、同じ時をともに過ごして来たルキからしても。

遊良がなぜうなされていたのかを即座に理解しながら、それでもソレを乗り越えてきた今の遊良に向けるその眼差しは優しさに満ち溢れており…
そう、かつて孤独を感じていた彼が、なんの恥ずかしげもなく幼馴染の少女にそう言えるのは偏に彼の心がかつての中学の時よりも確実に強くなっている証拠でもあるのだろう。
…少し昔を思い出していたルキにはソレが良く理解出来る。
睡眠不足により張り詰めていた遊良の顔色が、しっかりと睡眠をとれたことで晴れていると言うことに。

すると…

「それより腹が減ったぞ。いつまで俺を待たせる気だ。」

不意に…
寝起きの遊良の耳へと、隣のソファから聞きなれた声が聞こえてきて。

「あれ、鷹矢が何で居…あぁ、帰ってたのか。」
「1時間くらい前かなー。帰って早々『腹が減ったぞー!』ってうるさかったから黙らせてたの。」
「…うむ。ルキに凄まれたから何事かと思ったが…まぁ最近のお前はよく眠れていないようだったから寝かせてやっていたのだ。どうだ、

偉いだろう？」
「はいはい、待てが出来て優秀ですねー鷹矢さんはー。偉い偉い。」
「おい待てルキ、なんだその犬扱いは…」

その声は紛れもなく、この家のもう一人の住人である鷹矢のモノであった。
…中等部の時の夢を見ていた所為か、少々記憶と現実の境界が曖昧になっているとは言え。
次第に覚醒しつつある遊良の思考は、高等部に入ってからずっと鷹矢とこの家で暮らしていることを忘れているわけでは断じてなく…
はっきりしつつある意識の中で、残った眠気をしっかりと切り離し。
ゆっくりとルキの膝枕の上から起き上がった遊良は、1つ伸びをしたその後に徐に鷹矢へと向かってその口を開く。

「何だよ、腹減ってるお前にしては随分気が利いた気遣いじゃねーか。」
「うむ。遊良を寝かせておいてやれば、起きた時に好きなモノを作ってくれるだろうとルキに言われたからな。1時間くらいならばギリギリ耐えられた。」
「…ごめんね遊良、鷹矢普段からうるさいからさ、こうでも言わなきゃ大人しくしなくて。」
「いや、ルキもありがとな。寝かせてくれて。」
「うん、どういたしまして。」

3人の間に交わされる言葉は、すっかりと普段通りの彼らの代物。
…頭が冴えている、気分が晴れている。
睡眠が大切だと言う事を、3時間ほどしっかり仮眠できた事でようやく遊良も理解したのだろう。そう、追い詰められているような感覚と、切羽詰っているような動悸の大部分が睡眠不足から来る思考の濁りだったと言う事を、眠れた今になって遊良もその身で自覚したの

だ。
…余計な事を考えすぎて睡眠不足になり、その睡眠不足が思考を妨げ、妨げられた思考が遊良の気分を落としていたさっきまでの遊良の表情と…3時間ほど仮眠を取れた遊良の表情は全然違う。
人肌の温度の温かさのおかげか、ルキの膝枕でしっかりと睡眠が取れた今。久々にゆっくりと寝られた為に、どことなく思い詰めていた遊良の気分もかなり晴れ晴れしているようであり…

「よし、久々に良く寝れたから頭がすっきりしたよ。ゴチャゴチャ考えるのはもうやめるか。鷹矢、何が食いたい？気分がいいから今なら何でも作ってやるよ。その方がストレス発散にもなるしな。」
「カレーだ！肉をたっぷり入れた奴で頼む！」
「今から仕込めるわけねーだろ！…ったく、この前作った即席のやつでもいいか？少しは手間かけてやるけどさ。」
「うむ！アレはアレで旨かったからな！もっと旨く仕込んでくれるならば文句はない！物凄く食うぞ！俺は腹が減っているのだ！」
「わかったわかわった。…ルキも食ってくだろ？」
「もち！」

嫌な夢も見た気がする。
けれども睡眠の質自体は良かったおかげか、悩んでいたことの多くに何やら踏ん切りが遊良の中ではついた様子。
…根本的な問題は解決してはいない。けれども悩みすぎていても仕方が無い。
その答えに至るまで1ヶ月かかってしまったが、それでもたった数時間の睡眠が気分を晴らすことにある種の感動すら覚えそうな感覚を遊良は抱きつつ…

「けど少し時間かかるぞ？」
「うむ。遊良のカレーが食えるのならば何時間でも待ってやる。さて、ではカレーが出来るまでテレビでも見て時間を潰してやるとす

…」

良い方に変わったリビングの空気の中で、鷹矢がふとリモコンでTVの電源を入れた…

その時だった―

『…警視庁は本日、決闘市在住の天城　遊良容疑者を全国的に指名手配すると発表し…』

…

……

……

「…え？」

「…む？」

「…は？な、何これ…な、なんで遊良が？」

夕方のニュースから聞こえてきた、耳を疑う突然の声に…

その、予想もしていなかった突然の事に…

遊良も。鷹矢も。ルキも。

3人は、固まってしまうのだった―

⋮

ｅｐ１０３「指名手配」

『警視庁は本日、決闘市在住の天城　遊良容疑者を全国的に指名手配すると発表しました。天城容疑者は現在決闘市で多発している失踪事件に関与しているとされており、警察が捜査を…』

何気ない日曜日の夕方のニュース。
その、普段通りに過ぎていたはずの一日の終わりに…

「…え？」
「…む？」
「…は？な、何これ…な、なんで遊良が？」

突然聞こえてきた、耳を疑うあまりに不可解な言葉を聞いて…遊良も、鷹矢も、ルキも、思わずその場に固まってしまっていた。
…それはこの場に居る誰もが予想していなかった突然の出来事。
そう、ただ何気なくＴＶをつけただけだと言うのに…
何の前触れもなく、いきなりアナウンサーがそんな馬鹿げたことを言い始めたのだから、遊良達に襲い掛かった驚きはきっと想像を絶するほどに大きかったことだろう。
…しかし、その衝撃も当然のことなのか。
何せ、遊良には身に覚えが全く無いのだ。驚天動地、晴天の霹靂。脈絡も予感も思い当たる節もなく、いきなり『指名手配』されたという事実のみが遊良へと襲い掛かったものの…
…何の罪かもわからない、何をした覚えもない、指名手配される覚えが無い。
犯罪に手を染めた覚えもなければ、悪いことをした覚えすらない遊良からすれば。全くもって身に覚えのない突然のソレは、遊良の思考にただただ混乱を与えているだけで…

…一体、誰がこんな事を予想できたと言うのだろう。
まるで意味が分からない、どうやったって飲み込む事が出来ない。
そんな、あまりに突然の出来事に対し…
ただただ混乱することしか出来ない遊良達の思考は、ＴＶの前でどうする事もできずにただ固まっているだけ。

…すると、一瞬の間の後に。

不意に、遊良のデュエルディスクに一本の『電話』がかかってきた。

「ッ、も、もしもし!?」
『天城君、ニュースを見ましたか!?』
「は、はい…」
『やっかいな事態になりました。まさかこんな馬鹿げたことをしてくるとは…』
「え？」

電話をかけてきたのは他でもない。
決闘学園イースト校理事長、かつては【白鯨】と呼ばれていた元シンクロ王者である砺波　浜臣であった。
…しかし、いつも冷静な砺波にしては珍しく、焦燥に駆られた声で怒りを露わに。
何やらその口ぶりから、この事態に対して『何か』を知っている様子を砺波は電話の向こうから感じさせるものの…

「あ、あの、砺波先生、これは一体どういう…」
『説明している暇はありません、とにかく君は絶対に家から出てはいけない！私が迎えにいくまで絶対に外に出ないようにしてください！間違っても記者に捕まったり、警察に対応しないようにしなさい！』

「え、あの…」
『それと連絡は最低限に！どこから居場所が漏れるかわかりません、最悪、盗聴されている可能性も考えなさい！いいですね！』
「は、はい、砺波先生！」

手短に、端的に、即座に。
明らかに焦燥に駆られている砺波は必要最小限、最低限の事だけを電話口から叫んだかと思うと。そのまま弾けるようにして、自分から電話を切ってしまったではないか―
そして、今の砺波の態度を感じて…
真っ白だった遊良の頭は、唐突に理解してしまった。
そう、砺波の焦りが遊良へとひしひしと伝えてきた。コレがドッキリやイタズラの類ではなく、今確かに自分の身に起こっている不測の事態である…と言うことを。
砺波の焦りは、この突然の事態が幅広い情報網を持っている砺波からしても予想外で急すぎたと言う事の証明。砺波のあの焦燥は演技ではない。方々にコネクションやツテを持っている砺波を持ってしても、遊良の指名手配の知らせはまさに寝耳に水の出来事だったのだろう。
…そんな師である【白鯨】の焦りから、真っ白だった頭がようやくソレを理解した様子の遊良。
とは言え、いくらこれが現実に起こっていることなのだと理解した所で。それでもなお現状を把握し切れていない遊良は、どうする事も出来ずにその場に立ち尽くしているだけであり…

「遊良、理事長は何と？」
「…迎えに行くまで外には出るな、マスコミに捕まるな、警察には対応するな…連絡は最低限に…そう言われた。」
「け、警察って…ね、ねぇ、コレ、何かの間違いなんだよね？だって遊良が指名手配されるわけな…」
「砺波先生もかなり焦ってた。多分…砺波先生にとっても急な事だっ

たんだと思う。」
「ぬぅ…」
「そんな…」

…

……

……

…沈黙。

静まり返ったリビングに、ニュースの続きが流れ続ける。
沈黙が痛いというのはこのことか。言葉を失ってしまった3人の間に流れるのは、ただただ重くなっていく空気が発する、耳鳴りにも似た不快な沈黙だけであり…
…沈黙。
テレビの音が流れているはずなのに、まるでこの部屋の中に音という音が消えてしまったかのようにして…
鷹矢も、ルキも、そして遊良も。徐々に現実味を帯びてきたこの事態に対し、何も分からぬままで何も口にすることができないでいるその様子は、一体これから自分達はどうすればいいのか分からぬままでただただ呆然と立ち尽くしてしまっているかのよう。
…沈黙。
耳鳴りにも似た沈黙の音は、まるで樹海か山奥か孤島にでも置き去りにされてしまったかのような喪失感を遊良達へと与えてくる。
遊良の中にあるのは、意味も分からず指名手配されてしまった混乱と…鷹矢とルキの中に浮かぶのは、遊良の指名手配に対する腑に落ちない、理解できない、納得など出来ない憤り。
…意味がわからない。なぜ遊良が指名手配されなければならないのか。
敵の思惑すら分からないこの事態に対し、噴火しそうな怒りが鷹矢とルキの中に浮かび上がる。けれども、【白鯨】すら予測できなかった

この事態においては、彼より力のない自分達に出来る事などたかが知れていることになんとも歯がゆい思いを浮かべるしかなく…
　そんな、何が起こっているのか全くわからぬままで過ぎる沈黙の時間は…3人の雰囲気を、ただただ重くしていく。
『こちらが犯行があった3日前の現場付近の監視カメラの映像です。失踪した男性が路地に入っていった後、フードを被り顔を隠した天城容疑者と思われる男が同じ路地に入っていったのがわかるでしょうか。この数時間後、男性の物と思われる所持品が散らばっていると通報があり、警察が捜査を進めたところ容疑者に天城容疑者が浮上したということです。なお、男性は未だに行方がわかっておりません。』

チャンネルを変える。

『1～2ヶ月前にもありましたよねぇ、決闘市での失踪事件。先生はそちらとの関連もあると?』
『いやー間違いないでしょうねぇ。前回も10名が謎の失踪を遂げ、そして今回も10人目が失踪していますから。未だその手口は不明とのことですが、前回と今回の失踪事件にこれだけ多くの共通点が見られることを考えるとその可能性は大きいかと思われます。何よりこの監視カメラの映像が動かぬ証拠でしょう。』
『一部からは、この映像では顔を確認できないため証拠として不十分だとの声もありますが…』
『そんなことありませんよぉ、警察の調べは絶対ですから、天城容疑者が犯人でまず間違いありません。』

チャンネルを変えても…

『天城容疑者の犯行が明らかになったことで、失踪した人達は全員無事に帰って来るんでしょうか?』
『それはわかりません。天城容疑者が一線を超えていないことを願う

しかありません。』
『もし全員が既に亡くなっているとすれば、天城容疑者は１６歳にして２０人を殺害した大量殺人鬼じゃないですか！』
『怖いですねー、Ｅｘ適正が無い人間っていうのは平気でこんなことをするんですか？』
『犯人はこの間の【決島】で準優勝したらしいじゃないですかー。それで調子に乗っちゃったんでしょう？嫌ですねー、今時の若者は何をしでかすか分かったものじゃない。』

どれだけ変えても…

『３０年ほど前にも大量虐殺事件が起こりましたが、今回の事件はまさにそれに次ぐ最悪の事件という見方もあり…』

変えても、変えても、変えても。
ＴＶに映るのはどれも同じ。口々に遊良を犯人と決め付け、全国放送の場で有識者を名乗る仰々しい肩書きをした大人達による、晒し上げにも似た緊急放送という名の井戸端会議。
…一体、いつこんな準備をしていたのだろう。
どの局のチャンネルに合わせても、その内容は等しく遊良を口々に犯人だと決めつけているモノばかり。そう、警察が指名手配を発表したばかりだというのに、一体いつこんな準備をしていたのだろうか、どの局からも流れ出るのは遊良が指名手配された事に対して組まれた特番だけであり…
…それはまるで、予め『こうする事』が決まっていたかのよう。
未成年であるはずの少年を実名報道し、まるで前から準備していたかのようなコメンテーターたちの台詞回しのソレは、口裏を合わせているとしか思えない、あまりに不自然なほどに準備されたとしか感じられない代物となりて全国の家庭へと放送され続けるのか。
…そして、そんなＴＶに嫌気が差したのだろう。
ゆっくりとＴＶに近づいた遊良が、そのままＴＶの主電源を切った

かと思うと…
立ち尽くしている鷹矢とルキへと振り返りつつ、徐にその口を開き始めた。
「鷹矢、ルキ…お前らは今すぐ家に帰れ。」
「え!?な、なんで!?」
「このままじゃ二人にも迷惑がかかる。それに、おじさん達にだって…」

搾り出すように零された遊良の言葉は、悲痛と悲嘆を必死になって堪えているような代物。
しかし、それでもなお鷹矢とルキにそう言う遊良の言葉は…嘘偽りなく吐き出されつつ、鷹矢とルキの身を心から案じているが故に零されたモノでもあるというのか。
そう、なぜ自分が指名手配されてしまったのかなど、遊良には全く持って分からないままではあるものの…
それでも唯一つ分かるのは、『敵』は警察やマスメディアにまで手を回せる恐ろしいまでの権力を持っている相手だと言う事。
警察の指名手配は本当の事で、メディアをも意のままに操る権力…そんな権力者に目をつけられてしまっている可能性がある以上、自分と居ればそれだけ鷹矢とルキにまで危険が及ぶ可能性はかなり大きいと言える。
それだけではない。身寄りのない、単なる学生の身に過ぎない自分とは違い…鷹矢もルキも、それぞれに大切な家族が居るのだから、もしかしたら自分のせいで鷹矢とルキの家族にまで危険が及ぶかもしれないのだ。
それは社会的な事かもしれない。それは直接的なモノかもしれない。鷹矢の両親が危害を加えられるかもしれない。ルキの両親が路頭に迷わされるかもしれない。もしかしたら、最悪の場合もあるかもしれない―
…ソレを、遊良もわかっているからこそ。

鷹矢とルキを、これ以上危険に晒すわけには行かないのだとして…
更に遊良は、言葉を続け…
「だから、ここは俺一人の方が…」
しかし…
遊良が、そう告げても―
「うむ、断る。」
と、鷹矢は間髪いれずにそう答えた。

「…なんでだよ。」
「今の俺の家はここだ。なぜ俺が出ていかなければならん。」
「なぜって…俺と一緒に居たらお前まで巻き込まれ…」
「そもそもソレが間違いと言っているのだ。巻き込まれるも何も、指名手配に納得していないのは俺も同じ…それに何だ、迷惑をかけたくないだと？お前は何を言っておるのだ、まだ寝ぼけているのか？」
悲嘆に塗れた遊良の言葉を、どこまでも真っ直ぐに否定する鷹矢の声。
それは遊良の人生に、この世の誰よりも寄り添ってきた鷹矢だからこそ間髪入れずに発せられた…あまりに迷いも淀みも無い、鷹矢の真っ直ぐな感情そのモノでもあるのだろう。
…遊良が自分達の身を案じていることは、鷹矢にだって良くわかっ

ている。
いや、良くわかっているからこそ―
今の遊良が発した言葉は、鷹矢からすれば絶対に容認などするつもりが無いモノでもあったのか。
そう、自分やルキが傷付くことを、遊良が極端に恐れていることを鷹矢は知っている。これまでだって『そう』だった。特に中等部の時など、遊良は鷹矢やルキに学校で迷惑をかけないようにするために自らの存在をとことん消して過ごし続けていたことを鷹矢は覚えている。
故に…どれだけ遊良が自分だけ犠牲になろうとしても。どれだけ遊良が身を引こうとしても。
鷹矢は、ソレをどこまでも否定しながら―

「迷惑くらいかけろ。俺とお前はそういうモノだろうが。」
「鷹矢…」

鷹矢の口から紡がれる言葉は、どこまでも真っ直ぐな本心となりて遊良の耳へと伝えられる。
それは遊良がどんな立場に追いやられたとしても、決して遊良の敵には回らぬという子どもの頃から変わらぬ鷹矢の信念の表れのようでもあり…
…生まれてからこれまで、ずっと共に過ごしてきた仲なのだ。家族よりも長い時間、一緒の時間を過ごして来たからこそ…遊良が絶壁に立たされていたとしても、遊良の隣に並び立つことに対し鷹矢には何の抵抗もないのだろう。
…遊良の重荷を共に背負う事に、鷹矢には何の抵抗も無い。
そんな鷹矢の気持ちを、その短い言葉だけで遊良はきっと完璧に理解してしまったはず。そう、周囲からは理解されにくい鷹矢の感情を、この世の誰よりも理解しているのも遊良なのだから…
今の鷹矢の言葉が、生半可な決意で述べられたモノではないのだと遊良には充分わかっていて。

…だからこそ。
ここはルキだけでも無事でいてほしいと言わんばかりに。遊良は、今度はルキの方へと向き直しつつ…
「ルキ…ここはお前だけでも…」
「嫌だよ。」
けれども、ルキだけでも無事に逃がそうとした遊良の言葉を即座に否定しつつ。
遊良の目をまっすぐ見据えながら、強い瞳で間髪いれずにそう即答したルキ。
…ルキから向けられるのは、強い意思の篭った決意の言葉と…あまりに真っ直ぐに遊良を見つめる、迷いの無い済んだ瞳。
そう、先の鷹矢と同じように―
強い目をしている彼女から伝わるのは、自分も鷹矢と同じなのだという強い意思と、何があっても遊良から離れないという、慈愛に満ちた抱擁の雰囲気。
…遊良に何を言われても、ルキの心は既に決まっていたのだろう。
それこそ、子どもの頃から…
遊良を決して一人にはしない…ルキの真紅の瞳が、遊良へとそう伝えている。迷いの無いその澄んだ赤い目が、混じり気なく真っ直ぐに遊良を見据えているからこそ…
その気持ちが嘘ではないことを、彼女もまたゆっくりと言葉に変えるだけ。
「子どもの時に決めたから。ずっと、遊良の味方でいるって。」
「ルキ…」
…一人じゃない。
Ｅｘ適正が無いと宣告された、一人だった子どもの頃とは違う。
指名手配が現実のモノであると理解したときに感じた、あの世界か

ら切り離されてしまった感触がゆっくりと遊良の中から溶け出して消えていく。
…それは自分が鷹矢とルキに傷付いて欲しくないと願うのと同様に、鷹矢とルキも自分に傷付いてほしくないと思っているのだと遊良が実感できたからこそなのだろう。
一人で絶望を味わい、孤独に心を閉ざしてしまった幼少の時とは違う…
あの頃より確実に遊良が精神的に強くなれていることと、すぐ傍でルキが支えてくれていることと、地獄まで鷹矢が付き合ってくれるという事が合わさって。
余裕の無かった遊良の心には、先の見えない闇の中であっても少しの余裕が生まれつつあるのか。

「…ありがとう。」

だからこそ、絶望を感じたその刹那に。自分を大切に思ってくれている人がすぐ傍に居てくれることは、果たして遊良の心にとってどれだけの救いになるのだろう。
全てを無くし、絶望に塗れた幼少の頃を経験しているからこそ…
今再び襲い掛かってきた、世界が敵になる感覚の中にあってもなお遊良の心は簡単に崩れることはなく―

「よし。では脱出するぞ。」
「…え？」
「なに言ってるの？お馬鹿なの？理事長先生に外に出るなって言われたじゃん、もう。」

そして、そんな遊良の感情の持ちなおしを鷹矢も察したのだろう。
何を考えているのか、ついさっき砺波から『家から出るな』と言いつけられたと言うのにも関わらず…
砺波からの命令を、即座に反故にしようとした鷹矢はそのまま呆れ

顔をしている遊良とルキを一瞥すると。

「馬鹿はどっちだ。早く脱出しないともっと大変なことになると言うのに。…これを見ろ。」

それでもなお『脱出』すると言い放った鷹矢が、ゆっくりと…

それこそ外界からは分からぬ程度にほんの少しだけカーテンを開いた…

そこには―

「ッ…」

「なにあれ…全部…マスコミ？」

「うむ。」

そこに居たのは蟻のように群がる、マスコミ達の織りなす人の群れ―

押し寄せる人の波、陣地を取り合うケダモノの押し引き。そう、おおよそすぐには数え切れぬ程の人数が、この住宅街のど真ん中にひしめき合うようにして大集合していたのだ。

…それは近所の野次馬などでは断じてない。

何せ、その場に集ったケダモノたちが持っているのは、明らかにメディア側の人間だと自ら証明しているような持ち物ばかりだったのだから。

…報道用のテレビカメラを抱えているスタッフ、マイク片手に何やら喋っている女性記者、プロが使うようなしっかりした本格カメラを構えた群衆。

一体、いつこんな数が集ったのだろうか。少なくとも鷹矢が帰ってきた1時間前には、こんな人だかりは勿論存在すらしていなかったはずであり…

また、穏やかなはずだった住宅街の雰囲気の中で、遊良の指名手配

が発表されたこの瞬間にこれだけ多くのマスコミが即座に集うなど平時では絶対にありえない。つまり、この住宅地の真ん中に近所迷惑も考えずにマスコミが群がっていると言うことは、すなわち彼らはここに遊良が居ると確信を持っていということ。

それこそ監視や張り込みでもしていたのか、今日は遊良が家からまだ一歩も出ていないことを分かっていなければこんな数のマスコミが家の周りに群がれるはずもなく…

…はっきり言って『異常』の一言。警察が到着する前にマスコミが集っていることもそう。警察が指名手配を発表した直後にマスコミがこれだけの動きを見せていることもそう。

全てが何者かの思惑通りに動かされているような、作為的な気持ち悪さが一連の動きには隠されているのだ。

そんな大手から弱小まで、ＴＶ局から出版社まで、近所迷惑な数のマスコミがマイクやカメラや電話を片手に遊良達のいる家の四方八方を取り囲んで群がっているその光景は…

見るからに作為的に用意された、気持ち悪いくらいに『異常』な光景であって。

「このままではいずれ家の中に進入してくる輩もいるだろう。マスコミはここがジジイの持ち家だと知っているからか、まだ手荒な真似はしてこない様子だが…」

まぁ、それでも一応マスコミたちがまだ家の外で大人しく蠢いているだけなのは、偏に鷹矢が言った通り『ここ』がエクシーズ王者【黒翼】の所有する個人的な一宅であるのが大きいのだろう。

…そう、門に攻め懸けるようにしてマスコミたちが張り付いてはいるものの、それでも社会人としての分別がまだ彼らの中にはあるおかげか、群衆の全てはまだ敷地内には入っては来てはいない。

それはいくら彼らが無礼なマスコミで、いくら『正義』と『報道』の為という薄っぺらい大義名分を勝手に掲げているとはいえ…

たかが一企業の雇われサラリーマンに過ぎない、一般人にカテゴラ

イズされる彼らマスコミがもし【王者】の持ち物を勝手に傷つけでもして…その結果、もし【黒翼】がキレでもしたら、その圧倒的なる権力によって次に消されるのは自分達であることをマスコミは誰もが理屈で知っている。

過去、それで物理的に消された記者が一体何人いた事か…

半ば都市伝説となっているソレが、決して冗談ではない事をマスコミも理解しているからこそ。ある種の治外法権を許されている王者【黒翼】の後ろ盾の前に、彼らもまだ無理矢理な不法侵入はしてはこないのか、外から家を取り囲み家の中の様子をどうにか伺っているだけで…

…けれども、それも何時まで持つか。

そう、群衆の数が増えていく毎に過熱していく野次馬の熱は、次第に彼らマスコミから倫理観と理性を奪い去っていくモノ。

…かつてメディアにおもちゃにされた遊良と、ソレを間近で見てきた鷹矢やルキは分かっている。

どれだけ拒否しても、どれだけ抵抗しても、それがどれだけ犯罪まがいの事であっても、そしてここが【黒翼】の所有物であろうとも。

マスコミという人種は、目的の為ならば手段を選ばずどこまでも汚い真似をするモノであり…絶対に隙を見せてはならない、油断ならない下賤なる者達である…と言う事を。

何せ、マスコミが我慢できるはずがないのだ。

【決闘祭】や【決島】を経て、最近はめっきり『弄れ』なくなった良いおもちゃ…もとい、Ｅｘ適正のない天城　遊良に、こんな爆弾級の特ダネが舞い降りたのだから、かつて幼い遊良から人権を取り上げ、差別を先導し、世界中から蔑まれる原因の一旦を担った、捨ててはいけない人の倫理観を捨てているマスコミが警察の到着まで大人しく待っていられるはずもない。

それ故、この家が【黒翼】の所有物であろうとも…マスコミに充満している、狂気染みた熱が彼らから理性を取っ払った時に、彼らがど

ういった行動を取るのかは遊良には容易に想像できる。
燃え上がっていく野次馬根性、倫理観の無い出歯亀根性。
人としてのマナーなど元から持っていないマスコミが、このまま大人しくしているはずがなく…

「わかったか？理事長がいつ迎えにくるのかもわからんと言うのに、ここでじっとしていても事態は悪化するだけだ。それにいずれ警察も押し寄せてくれば…法を盾に、突入してくるに決まっている。」
「でもさ、外に出たら見つかる可能性高くなっちゃうじゃん。だったら家の中にいたほうがあんぜ…」
「…いや、鷹矢の言う通りだと思う。砺波先生も対応に追われてこっちに手が回らないだろうし…家に入ってこられたら…捕まって終わりだ。」
「遊良…」
「うむ。ルキよ、お前も覚悟を決めろ。奴らが話しの通じぬ輩だと言う事は、お前だってよく知っているだろうが。」
「…わかってるよ、もう。…でも脱出するってどうやって？外でたらマスコミに絶対捕まっちゃうよ？」
「あぁ、家の周りは全部取り囲まれてるし…外に出たらすぐに見つかっちまう。」

けれども、いくら逃げだすと言っても。
これだけの数のマスコミに囲まれてしまっているこの現状では、遊良とルキの懸念も最もな事と言えるだろう。
…多勢に無勢。いくらこの指名手配が仕組まれたモノであったとしても、ソレに嬉々として食いついているマスコミにとってはそんな事は関係ない。
いつものように面白おかしく、事実を捻じ曲げ虚偽を正義のようにして報道するに決まっている。それこそ昔、遊良にＥｘ適正がないことをまるで『悪い事』のようにして報道したマスコミが反省しているはずもなく…

そんな者達が、家の周りを隙間無く埋め尽くしているのだ。これでは、いくら家から抜け出そうとしても…
顔を出した瞬間に、誰かの目に捕まってしまうのは至極当然の事と言え…

しかし…

「脱出路ならある。」

鷹矢が、不意に地面を指差したかと思うと。
打開策が思い浮かんでいない様子の、遊良とルキへと向かって…
徐に、その口を開き始めた。

「地下のデュエル場だ。」
「は？意味わかんないんだけど。地下からどうやって逃げるって言うの？」
「この家はジジイの避難場所のひとつなのだぞ？地下からの抜け道くらいあって当然だろう。」
「なんだそりゃ…いくらなんでも、地下室に抜け道なんてあるわけないだろ。」
「いいから来い。時間が無いのだ、俺に任せておけ。」

そして…
鷹矢に連れられるようにして。
これ以上問答をしている暇などないのだと、身支度をする暇も無くルキは自分の手荷物を、遊良と鷹矢はデュエルディスクだけをその手に取ると…
そのままと3人は、地下室の鍵を手に静かにリビングを出て廊下の

方へと歩き始める。
半信半疑、鷹矢の言葉を鵜呑みにしたわけではないものの、それでも現状では鷹矢以外に打開策を思い浮かんでいる者が居ないために。遊良とルキは、鷹矢の言葉を半分信じつつ…
階段の裏、小さな物置の床にある長方形の地下室への入り口、その重い扉の鍵を開け…
子どもの頃は一人で持ち上げられなかった鉄の扉を鷹矢が持ち上げると、そのまま3人は冷たい地下の空気が流れ込んでくる感覚を肌で感じながら、入り口を閉めつつゆっくりと地下への階段を降り始めるのか。

…鷹矢の言った地下のデュエル場。

それは幼少の過去に遊良達が【黒翼】との修業によく使っていた、割と本格的な造りをしたデュエルフィールドが置かれている広い地下施設の一室のこと。
師である【黒翼】が趣味で購入し設置したというソレは、遊良が弟子入りするまで全く持って使われていなかったそうなのだが…
下手をすれば地方の小スタジアムなどよりも高額な機器を置いているコンクリート部屋のデュエル場が、まさか住宅街のど真ん中の一軒家の地下にあるなんて誰も思うまい。鷹矢とルキにとっては昨年度の【決闘祭】の時以来、遊良にとっては数年振りとなるその地下室へと、彼らは久方ぶりにその足を踏み入れて。

すると、遊良達が地下デュエル場の扉を開けたその直後に―

上で、ガラスが割れる音がした。

「ッ!?も、もう入ってきたのか!?」
「うそ…」

また、そのすぐ後。
ガラスの割れた音がしたその瞬間に、ドタドタとうるさい音が上の階で叩き鳴らされ始めたのが遊良達の耳へとはっきりと届けられ始めたではないか。
…それは大勢の人間が、一挙にこの家に押し入ってきたという紛れも無い証明。
そう、ガラス戸を割り、土足で屋内に踏み入りつつ…大勢の人間が1階と2階を家捜しするかのようにして、無礼極まりない侵入の仕方にて踏み入ってきたのだ。

また、激しい足音と同時に…

―天城　遊良がいないぞ！
―そんなはずない！探せー！
―特ダネを逃がすなー！
―どこ行ったクソガキー！犯罪者が逃げるなー！
―探せー！探し出して引きずり出せー！

そんな、怒号にも似た大人達のけたたましい声が上の階から響き渡る。
…足音に混ざって微かに聞こえるその怒号が、更に遊良の逸りを誘発する。
大の大人達が、怒号を飛ばしながら自分を探しているというその光景を思い浮かべただけで…絶対に捕まるわけにはいかない、捕まったら何をされるか分からないという恐怖が沸々と遊良の心には浮かび上がってきているのだろう。
…それは過去、同じように大人達に傷つけられた経験が遊良にはあるからこそ。
その時の恐怖を微塵も忘れていない遊良にとっては、土足で家に踏み入ってきた記者たちに嫌悪の感情意外を抱くことが出来ず…

「声を出すな。ゆっくりと扉を閉めろ。俺達がここに居ることはしらばくはバレんだろう。」
「でも、砺波先生が盗聴されてる可能性も考えろって…」
「俺は『地下から出る』と言っただけだ。その詳細も方法もまだ説明しておらんだろうが。それにこの家のことを知らん奴等が、この地下室を見つけるのにはまだ時間がかかるはず…鍵もかけていることだ、今の内にさっさと逃げるぞ。」

しかし、ある意味コレが想定内であったことが功を奏したのか。
あのままリビングで問答を続けていたら、きっとこの瞬間にも遊良はマスコミたちに捕まっていたはず。それこそ問い詰められるだけに留まらず、興奮した記者たちに暴力的な捕まり方をして外へと無理矢理引きずり出されていたに違いない。
だからこそ、鷹矢が有無を言わせず遊良とルキを即座に連れ出したのがよかったのだろう。ギリギリのところで間に合ったその判断は、ある意味『勘』の働く鷹矢だからこそ成し得たファインプレーだとも言え…

そうして…

デュエル場の地下の一隅、そこで立ち止まった鷹矢が説明も無しに迅速に。
何やらスタジアムの音響機器の１つを触り始めたかと思うと、いくつかのボタンを押し始めたそのすぐ後に…
ゴゴゴゴ…
と、ゆっくりとコンクリートで出来た壁の一部が上に開いていく―
「…何これ…初めて知ったよ、こんなの…」
「俺も…１０年以上住んでるのに初めて知った…なんでお前がコレ知ってるんだよ。」
「ガキの頃、ジジイがここからこっそり出て行くのを見たのだ。後日

問い詰めたら、親父に内緒にする代わりに白状したぞ。何でも、追っ手や記者を撒くときによく使う抜け道らしい。同じモノが他の持ち家にもあるそうだ。」
「先生らしい…」
「ねー…先生ってば狡賢いんだから、もう。」
「だが、今この時だけはジジイに感謝してやっても良い。用意周到なジジイのおかげでこの場を切り抜けられるのだからな。それに一度使ってみたかったのだ、この抜け道とやらを。」
「あぁ…こんな面白そうなモノが家にあったなんてな。どこに繋がってんだろ…」
「…え、遊良？」
「…なんでもない、行こう。」

そして、アクション映画かＳＦ映画に出てくるような、本物の地下からの抜け道を前に。
鷹矢と、アレほど切羽詰っていた遊良の心の中に、少しばかりの躍動が生まれてしまうのは彼らも男だからなのだろう。そう、男という生き物の本能として、この様な代物にワクワクしてしまうのは人種関係なく男の遺伝子に規定事項として既に刻まれてしまっているから。
…こんなモノを仕込んでいるなんて師らしい。
師である【黒翼】が一体何の目的でこんな物を作ったのかは容易に想像できるものの、それでもアクション映画かＳＦ映画のような、日常を生きていれば絶対に目にすることの無いであろうコンクリートの壁が開いていく非現実的な光景は…ある意味追い詰められていた彼らの心の、少しばかりの余裕を取り戻させた様子。
…少女のルキには理解できない、少年心をくすぐるロマン。
スパイ映画さながらの、そのコンクリートの壁が再び岩音と共に閉まるまで…マスコミたちは、地下のデュエル場の存在に気付く事も無く…

地下への抜け道へと足を踏み入れた遊良達は、足早で地下の抜け道を外へと向かって走りだす。

…そのまま、駆け足で数分走った頃だろうか。

突き当たりにて壁梯子を見つけ、そのまま梯子を上り出口らしき蓋を開けたそこは…

―家から少し離れたところにある、住宅街の隅にある空き地であった。

「…こんなところに繋がってたのか。」
「…うむ、周囲に人は居ないようだ。記者たちの気配もない。」
「…ホントに抜け道だったんだ…少しは先生見直したかも。いや褒めることじゃないんだけどさ。」

空き地の隅に、目立たぬように設置されているマンホールのような蓋から這い出る遊良達3人。
工事現場の資材置き場に使われているのか、土管やフェンスなどが置かれているためにすぐさまその影に身を隠し…
すぐさま周囲を警戒しつつ、どうにかマスコミの包囲網を突破した事で安堵したのだろう。緊張状態を解くために、大きく息を吐いた遊良達は一度落ち着くためにその場に力なく座り込み始めたかと思うと。
遊良はすぐさま、砺波へと電話し始めた。

『どうしました！何かあったのですか!?』
「いえ…あの、砺波先生、すみません、家に記者が突入してきて…」
『なっ!?』

電話越しでも容易に分かるほどの焦りを見せながら、即座に遊良からの電話に出た砺波。
…当たり前だ。
つい先ほど指示を出し、連絡は最低限にと念押しして電話を切ったばかりだと言うのにも関わらず。こんなにも早く教え子から電話が掛かってきたかと思うと、その第一声が『記者に突入された』だったのだから。

「…でも入れ替わりで脱出したので大丈夫です。それで、今鷹矢とルキと近くの空き地に隠れてるんですけど…近いし、とりあえずイースト校にでも向かおうかと…」
『…わかりました。私も現在対応に追われイースト校に居るので丁度いいでしょう…むしろ、私の傍に居るのが最も安全です。ですがイースト校にも記者が詰め掛けていますので、ひとまず私が気を引きますから君たちは人の居ない場所から忍び入って理事長室まで来なさい。その間、決して誰にも見つかってはいけません、いいですね。』
「はい、砺波先生。」

まぁ、とは言え落ち着いた声で電話してきた教え子の声を聞いたことで、砺波もその焦りを収めるのは容易でもあったのだろう。
…未だ対応に追われている忙しい身である中、こうして遊良に的確な指示と確かな避難先を用意できる辺り流石は百戦錬磨の元シンクロ王者【白鯨】か。
そのまま、再び短いやりとりにて砺波との電話を切った遊良も…砺波が昨年のような『敵』ではなく、これ以上無いくらいの『味方』で居てくれることに一体どれだけ救われたことか。

…何が起こったのかはわからない。何が起きようとしているのかも分からない。

何もかもが分からないままで、突如こんな事態に放り込まれた遊良が感じる街の風はどこか昔のような厳しい冷たさを感じさせるものの…

「遊良…大丈夫？」

「あぁ…とにかく急ごう、早く砺波先生と合流しないと。」

「うむ。…こんなふざけた真似をした奴を俺は許さん。直接会ってぶん殴ってやらなければ気がすまんぞ。」

それでも、自分の為に動いてくれる人が居ることと、自分を思い傍に居続けてくれる人の温かさに触れながら。

昔とは違う、『味方』で居てくれる人に強く支えられている事を実感しつつ…

誰にも見つからぬように、遊良は顔をフードで隠し…

（…何が起こってるんだろうか…）

遊良達3人は、静かにイースト校への道筋を駆け始めるのだった―

―…

どこかの路地裏…

「ぐっ…うっ…」

そこで、小さく蹲っている人間が居た。

「あぐっ……くそっ…もう少しだってのに…」

全身を黒ずくめのコートで隠し、フードで顔を隠し…

一体、何に苦しんでいるのだろうか。嗚咽を漏らしながら今にも倒れこんでしまいそうなその姿は、全身をコートで隠しているその怪しさと相まってあまりに不恰好なことこの上なく…

しかし、周囲に誰もいない状況ゆえか、弱った体をどうにか支えながらこのフードの人物はズリズリと地面を這い始めたかと思うと。

若者なのか老人なのかもわからぬ、意図的に変化させているであろう雑音混じりの声で苦しみを吐き出し続けながら…

汚い路地裏の建物の壁に寄りかかりつつ、ゆっくりと立ち上がり始める。

「…やはり、無理があるかと。既に貴方の体は限界を向かえています…1度だけでも限界だったのに、2度目となると…」

「うるさい…もう少しなんだ…もう少しで…全てを…」

「…貴方の器では、最初から扱いきれる力ではなかったのです。もう、いつ消えてしまってもおかしくはな…」

「わかってる!…けどもう少しなんだよ…あと一回…あと一人…それで、全てが終わる…」

そして…

一体どこから現れたのか、今の今まで全く周囲に居なかった一人の少女がフードの人物へと声をかけたかと思うと。

フードの人物は、途端にあまりの憤怒をそのフードの隙間から突如として漏らし始めたではないか。

…果たして、この二人は何を話しているのだろうか。

およそ他人は理解出来ぬであろう、彼らにのみ共有されている事項のみで2人は会話を交わしつつ。決して他人には理解してもらうつもりのない、彼らにのみ理解できる共通の事象で2人は更に会話を終

わらせるだけ。

そのまま、突如現れた少女は…

そう、決闘学園イースト校の制服を着た少女、『釈迦堂　ユイ』はポツリと言葉を漏らしたかと思うと。

「努々忘れる事なかれ。自分が一体何なのか…」

まるで、始めから居なかったかのようにして…

再び、その姿を消してしまうのだった―

そして―

「あと一人…どうでも良い奴を消せば、それで全て終わらせられる…もう、手段は選ばない…」

釈迦堂　ユイが姿を消したその刹那、力なくその場に座り込んでしまったフードの人物。

…一体何を考えているのだろう。一体何を狙っているのだろう。

その正体も目的も行動も、その何もかもが謎のままであるフードの人物は押さえきれぬ憤怒をどこまでも駄々漏れにさせ隠さぬまま…

「天城　遊良…今度こそ…消してやる…」

…と、そう呟いたのだった―

―…

ｅｐ１０４「決闘市、消滅」

ざわめきが収まらぬ決闘市。
つい先ほどニュースがソレを報じるまでは、いつもと変わらぬ退屈を感じる穏やかな日常が流れていたはずだと言うのに…

「ちょっと奥さん、ニュース見た？」
「見たわよー、天城　遊良でしょー？」
「怖いわよねー、殺人犯だったんですって？」
「残念よねー、【決闘祭】の感動返して欲しいわよねー？」

「天城　遊良やべーよな。殺人犯だぜ殺人犯。」
「この近く住んでるらしいぜ？」
「マジかよ！超コエー！」
「俺らで捕まえ行くか？」
「逆に殺されそー！ギャハハ！」

「寄り道してないで早く帰るわよ！」
「あまぎ　ゆーらにころされちゃうから？」
「どこでそんな言葉覚えたの！いけません！」
「でもたっちゃんママが…」
「ダメなものはダメなの！」

軒差の前で。何気ない住宅街の通りで。
井戸端会議中の主婦や学校帰りの若者、果ては保育園帰りの幼子に至るまで…
つい先ほど夕方のニュースが報道した、天城　遊良の『指名手配』によって。決闘市の至るところで、その風景は一変した様子を見せていた。
遊良に対する指名手配…それは夏が始まる前に決闘市内を密かに

騒がせていた、そして最近になってまた表立ち始めていた『失踪事件』に関すること。
そこに居たという痕跡だけを残して、人が煙のようにして居なくなってしまったというその事件は…少し前のニュースでは未だ証拠が見つからず、全てが謎に包まれたままの事件であったはず。
しかし、下手に影響力のあるＴＶによって報じられた、ほとんどの局による作為的に思える報道や放送によって、決闘市内での遊良の印象があたかも犯罪者であるかのように報じられてしまったのだ。
そう、遊良の現状は、捜査段階で容疑をかけられているだけに過ぎないと言うのにも関わらず。街の人々が口々にしているのは、既に遊良が『殺人犯』であるかのような悪意ある言動ばかり。
…偏向報道、情報交錯。
それもこれも、遊良が殺人犯で確定したかのように報道をしたＴＶのせい。まだ罪状は確定してはおらず、失踪事件の容疑をかけられている『容疑者』の段階であると言うのに…ソレほどまでに衝撃的だったニュースは、これまで改善を見せてきた遊良への印象という世間の目をいとも簡単に崩し去ってしまっていて―
そしてその声は、顔を隠しイースト校への道筋を急いでいる遊良の耳にだって容易に届いており…

「…ＴＶの影響ってやっぱ凄いんだな…」
「感心してる場合じゃないでしょ、もう。」
「…だが指名手配されたばかりだと言うのに、扱いは既に大量殺人を犯した犯人のようだな。ろくな証拠もないというのにメディアに影響される…これだから大衆と言うのは嫌いなのだ。」

フードで顔を隠し、目立たぬように鷹矢とルキに挟まれ…イースト校へと向かっている容疑者、天城　遊良。
人通りの少ない道を選んでいるおかげか、ほとんど人とすれ違うことは無いとは言え…
それでも時折すれ違う人々が口にしているのが、自分に関する

ニュースの事であるのだから、身に覚えの無い罪に追われている遊良からしたら気分など絶対に良いわけがないはず。
口々に聞こえる事実無根を耳に入れつつ、逃走劇の緊張感の中…イースト校までの道のりを、見つからぬように歩き続ける。

「でもさ、なんで遊良が犯人にされちゃってるんだろ。失踪事件ってさ、前に鷹矢が見たって奴でしょ？」
「うむ。デュエルの痕跡と、人が居た痕跡だけが残されていたアレに間違いないだろう。とすれば…」
「あぁ、もしこの事件が前の事件と同じ奴の仕業だったら…犯人は多分…」

…そして、これだけ騒ぎが大きくなった事で。
遊良には、ある懸念が生まれつつあった。
そう、それは遊良も以前に、この『失踪事件』に関連すると思われる出来事を…実際に、その身に受けたことに他ならない。
それは1ヶ月前に開催された、決闘市とデュエリアの合同祭典、【決島】が始まる前のこと…

―『うるさい…うるさい煩い五月蝿い！お前の声を聞いていると虫唾が走る！お前の顔を見てると！イライラするんだよ！』
―『…デュエルだ…お前を…消し飛ばしてやる！』
―『…不愉快だ…天城　遊良！お前の存在が！どうしようもなく不愉快だ！』
―『消え去れぇ！天城　遊良ぁぁぁぁぁぁぁぁ！』

（アイツが…また…）

遊良は、思い出す。
指名手配される原因となった、『失踪事件』の真犯人と思わしき男のことを。

…確証はないが確信はある。
なぜかデュエルが実体化し、負けた時に本気で『消滅』するかと思った…あの時に襲ってきたあのフードの男が、失踪事件を起こしている犯人である…ということを。
なぜなら、フードの男に襲われたあの時のデュエルで遊良はその身で思い知ったのだ。歴史の中に忘れ去られた、使い手など居ないはずの『儀式召喚』を使ってきた…あの謎のフードの男と、実体化したデュエルをして―
―遊良は、冗談抜きで本気で消されかけたのだ。
骨身が溶ける感触に襲われ、この世のモノとは思えない痛みに襲われるあの感覚。燃え上がるような苦しさの中で、自分の体が溶けて消えていってしまうのではないかというあの体験はおよそ普通に生きていては絶対に経験することなどないであろう。
そう、あの時の痛みは酷い拷問にも似た苦痛…いや、きっとそれ以上の恐怖、本当にこの世界から消えているという、自身の『消滅』という恐ろしさを骨身に痛感させられたほどの恐怖であったのだ。
…鷹矢が見たと言う、人が『デュエルをしていた痕跡』だけが現場に残っていたのはきっとあのフードの男とデュエルをして負け、そして本当に『消されて』しまったからなのだろう。
そんな、にわかには信じられない事実に確信を得ているのは…偏に、遊良もまた本気で消されかけてしまったから。
…しかし、どうしてあの時に自分は消えなかったのか。
そんなこと、今の遊良には決して分かりはしないこととは言え。それでも遊良からしたら、本気の本気で消滅してしまうのではないかという恐怖と、永遠に続く苦しみがずっと襲い掛かってきていたあの時の恐怖は決して忘れられるモノではきっとないはず。
そう、あの時のデュエル、忘れられるわけがない…
あの時のデュエルで、遊良は『堕天使』をなくしてしまったのだから―

「お前を襲ったというフードの男か？」
「あぁ…」
「だが奴はお前を襲ったのを最後に決闘市から居なくなったのだろう？その後の理事長の調査にも引っかかっていない事を考えると…なぜ今になってまた決闘市に現れたと言うのだ。」
「わからない…でも、あの時アイツは執拗に俺を怨んでるみたいだった…だから…」
「遊良がなんでか消えてないからまた来たのかもしれないって…こと？」
「…かもな。」
「…全く、理事長も何をやっているのだ。そんな危険な奴をみすみす決闘市に侵入させソレに気付かんなど。」
「お前のプロ入りのせいで忙しくしてるんだろ。」
「じゃあ鷹矢のせいじゃん、もう。」
「ぬぅ…」

とは言え、見つかるわけにはいかない緊張感の中にあっても。こうして幼馴染同士で会話を重ねられるだけ、3人揃っている彼らの心は負担に押し潰されてはいないのだろう。
緊張はしている。いつ誰に見つかるかもしれない切迫感と、見つかったら『終わり』なのだという絶望感はそう簡単に拭い切れるモノではない。
だからこそ、そうした悲嘆を少しでも感じぬように会話を挟む彼らの無意識はきっと行動としては間違ってもいないはず。
何しろ、人通りの少ない道筋を選んでいるとは言え、無言で顔を隠して急ぐよりもこうして何気ない会話をしている風に装う分…周囲の目も、少しは誤魔化せるはずなのだから。
「…そんな事はどうでもいい。それより問題はフードの男だ。もしこのデマを流したのが奴なのだとしたら、いったいどう言う手口で…こ

んな真似、普通の奴には絶対にできんぞ。」
「あぁ…警察とマスコミに手回しして動かせるなんて相当の権力がないと…」
「でもさ、こんな事が出来るならなんで失踪事件なんて起こしてるんだろね。遊良だけ憎いんだったらさ、関係ない人消さずに遊良だけ狙ってきそうだけど。」
「…そうだな。前の事件の被害者にも共通点なんて無いし、失踪してるのは俺も知らない人ばかりだった。なのに、なんで俺をあそこまで怨んでたのかが全くわからない。」
「ぬぅ…遊良はこれまで馬鹿にされる事は多くとも、人に怨まれるような事はなかったというのに。」
「あぁ。怨むより蔑む方にみんな行くからな。ソレはソレで割りと楽だったけど。」
「…ヤな慣れだね。…あとさー、わっかんないのは何で今になって失踪事件再開させたかだよ。意味ないことしすぎじゃない？しかも前と違って、今回は失踪事件起こってたのもニュースになってなかったじゃん。１０人だよ１０人、前と合わせて２０人も行方不明なっててさ、ニュースになってなかった方がおかしいじゃん。ちょっとでもニュースなってたらこっちも絶対もっと早く動けたのに…」
「マスコミが隠してたんだろうな。んで、指名手配されるタイミングで騒いで…」
「こちらが油断しきったところで詰め掛け逃げ道を無くす算段だったのだろう。報道直後に家に詰め掛けていた記者共がその証拠だ。」
「あぁ…砺波先生まで欺くなんて相当本腰入れてたみたいだな。」

けれども、会話を重ねる中で。彼らの話題はどうしても、遊良の指名手配とその原因となった失踪事件に引っ張られてきてしまうのか。
…当然だろう、いくら緊張感に押し潰されないように、無意識に普段通りの会話を重ねようとしたとしても。
それでも事態は悪化する一方、事の渦中の真っ最中にいる彼らが、今の出来事に対し完全に意識の切り替えを出来るわけがない。

油断した…

遊良も、あの時の自分への襲撃を最後に失踪事件が鳴りを潜めていたからこそ、『指名手配』されるまで完全に油断してしまっていた。

…遊良の頭の片隅にあるのは、起こってしまったこの事態に対する自身の認識の甘さについて。

そう、世界中に幅広い情報網を持つ【白鯨】、砺波　浜臣を持ってしても失踪事件の犯人と思わしきフードの男が未だ掴めて居なかった時点で…再びあの敵が襲ってくるかもしれない事は、遊良だって一度は想定していたはずだというのに。

いや…事の顛末を師である【白鯨】に報告し、後の調査は【白鯨】が受け持ってくれていたからこそ…遊良は、ある意味で考えないようにしていたのかもしれない。

何せ襲撃を受けたその後も、すぐに合同祭典【決島】が控えていたのだ。更に言えばその【決島】での激しい戦いの数々と、ルキを救うために奮闘した事と鷹矢との決勝戦…そして裏決闘界の融合帝【紫影】が巻き起こした【裏決島】と、遊良には息継ぎする間もなく激しい戦いが待ち受けていたのだから…

色々ありすぎた【決島】での出来事と、それの余韻が冷め切らぬ中でどうしても考えずにはいられなかった『逆鱗』と自分の関係の可能性のことで…遊良の頭の中から、失踪事件とフードの男との出来事が薄れてしまっていたとしても、それはあまりに仕方の無いことと言えるのではないだろうか。

そうして…

「…うむ、どうにか見つからずにここまで来られたな。後は大通りを迂回して裏から…」

「…まて鷹矢。」

「む？」

誰にも見つからず、誰にも怪しまれず。

自宅からイースト校までの道のりを耐え切った遊良達が、イースト校へと続く最後の通りへと差し掛かったその時…
学園へと続く大通りから裏へと回ろうと、大通りへと差し掛かろうとした鷹矢を遊良が制したかと思うと。校門へと続く大通りの様子を、遊良が建物越しに物の角から伺った…
そこには―

「天城　遊良を出せー！」
「凶悪犯を匿う気かー！」
「お、落ち着いてくださーい！天城はここには居ませーん！学園は日曜で休みです！学生は誰1人学園には来てませーん！」
「ふざけるなー！自宅に居なかったんだぞー！」
「街にも目撃情報がないんだぞー！学校に隠れてるに決まってるだろー！」
「いませーん！天城は来てませーん！ほんとうでーす！本当なんでーす！」
「うるせぇー！犯罪者を出せー！警察に突き出せー！」
「これ以上被害を増やすなー！殺人犯を出せー！警察に引き渡せー！」
「居たらとっくに引き渡してますよぉー！なんで私がこんな目にぃー！」
「なんで俺が天城のせいでこんな目に遭わなくちゃいけないんだぁー！」

人、人、人…
そう、そこには見るからに記者ではない、明らかに一般人であろう決闘市の住人が数え切れない程の群れとなりて…
イースト校の校門へと、大勢詰め掛けていた―
…それは数にして、１００や２００では収まりきらぬ数であったこ

とだろう。
　ソレだけの数の近隣住民が、つい先ほどのニュースに影響され奮起して…自分達の生活をいち早く守ろうと、全く意味がないであろう集団となりて決闘学園イースト校へと詰めかけていると言うこれは紛れも無い証拠の光景。
　いくら天城　遊良が所属する決闘学園イースト校に詰め掛けたって、事態が改善するはずがないと言うのに…

「テメェらも同罪だからな！殺人犯がいる学校の先公も犯罪者同然だ馬鹿野郎！」
「ひぃっ!?わ、私達は関係ありません！」
「あ、あくまで天城が勝手にやったことで…」
「だったらココ開けろぉ！校内探させないのが証拠なんだよ！」
「天城が隠れてるから開けないんだろー！匿ってんじゃねー！」
「門を開けろぉー！」
「そ、そんなことできませーん！り、理事長に殺されるぅー！」
「うわぁぁぁぁ！全部天城のせいだぁー！」

　けれども、近隣住民たちはそんな事も理解できずに。
　自分達の生活が脅かされる事を何よりも危惧して、閉められた校門へと攻め寄って…事態を理解出来ていない無関係な教師たちへと向かって、罵詈雑言を浴びせ続けている近隣住民たちの怒号は更に激しさを増すばかり。
　…きっと急遽呼び出された教員も、自分達がなぜこんな対処をさせられているのか理解も納得も出来ていないことだろう。
　何せ、若手の教師たちは門を閉めつつも、どうして無関係の自分達がここまで攻められなければならないのかと言わんばかりに…
　受け持った事もないたった一人の学生のせいで、こんな理不尽な目に遭っている事に対し半泣きになりながら、門をこじ開けようとしてくる近隣住民たちが学校に入らないようにしろという、逆らえない理事長からの命をただ無意識に実行しているだけなのだから。

そう、たった一人の学生のせいで…それもＥｘ適正の無い問題児のせいで。
天城　遊良のせいで、関係のない自分達がどうしてこんな目に遭わなくてはならないのか。
そんな、この状況を若手の教師たちにはどうにも納得いっていないようで―

「…正門はダメだ。裏門に回ろう。」
「うむ。」
「…そうだね。」

とは言え、遊良がこれだけの人だかりの中に出て行く事など出来るけがなく。
…しも奮起している住民たちに見つかってしまえば、たちどころに囲まれ何をされるか分かったモノではない。
何せ、あれだけの興奮状態にある住民たちが遊良の姿をその目に捉えてしまったら…きっとその勢いのまま、遊良に直接的な危害を加えてくるに違いないのだ。
…だからこそ、再び遊良達は建物の陰に隠れながら移動を開始する。
多少遠回りをしつつも、広大なイースト校の敷地をグルッと回りこむように…普段はあまり使われていない裏門の方へと、少々時間をかけながら見つからないよう細心の注意を払って。

しかし、正面の校門の真反対…
普段は使われていない裏門に、遊良達が次第に近づくと…何やら正門の喧騒にも似た叫び声や人だかりが見え聞こえ始めたではないか。
そう、それは紛れも無く―

「砺波理事長！イースト校から犯罪者が出た責任はどう取るおつもりですか!?」
「一言！責任者として何か一言！」
「何度説明させる気ですか！これまで被害があったと思われる時間、天城　遊良が学内にて授業を受けていたことは既に証明されていると何度言えばわかる！物理的に犯行は不可能だ！」
「ですが防犯カメラの映像が証拠として上がってるんですよ！これはどう説明されるおつもりですか！」
「学園側もグルということでしょうか!?グルなんですよね！」

裏門にて騒いでいたのは他でもない。
近隣住民たちとは明らかに違う、報道用の装備を纏ったソレは紛れも無くマスコミの記者たちであった。
…また、徒党を組んで学園内に攻め入ろうとしている記者たちの意識を引きつけようとしているのだろう。裏門ではイースト校理事長である砺波　浜臣が、直々に記者たちの相手をしていて。

「なぜそうなる！監視カメラの映像の方が偽装かもしれないと言うのに！」
「けど警察の調べがついているんですよぉ？【白鯨】は警察が偽装を見抜けないマヌケだと言いたいんですかぁ？」
「砺波理事長！天城　遊良を擁護するなら『やってない証拠』を出してから言ってくださぁい！こっちは『やった証拠』を出してるんですからねー！」
「ご自身の発言に責任を持ってください！砺波理事長！責任をー！」
「天城　遊良を擁護しようとした責任をー！」
「―！」

裏門に詰め掛けた記者たちを相手に、真っ向から反論を見せること

で…
誰一人として学園内に入らせず、記者たちの注意を自分へとひきつけて口論しているイースト校理事長、砺波　浜臣。
この事態を生中継している局もあるのだろう。冷静沈着として知られた元シンクロ王者【白鯨】が、これだけ記者たちと真っ向から向き合い戦りあっている光景は中々撮れる絵ではない。
…だからこそ、記者たちはどこまでも『報道』と言う名の体を成したバッシングを盾に。悪魔の証明を強要しながら、まるでこれまで面白くない絵しか撮れなかった【白鯨】を撮ることに夢中になっているかのように…
学園内に立ち入るよりも、免罪符を得たのだと言わんばかりの意地汚さで一方的に【白鯨】を攻め立てまとわりつくのみ。

（話にならない…これだからマスコミは…）

そんな砺波の心の内は、ハイエナの如く群がる記者たちに対し明らかに苛立っているに違いないことだろう。
…砺波とて、先月デュエリアで行った記者会見のときのように、群がり調子に乗っている記者たちを無理矢理『圧』で黙らせることは簡単に出来る。
そう、人間を超えたその深海が如き圧力を用いれば、この場に群がった有象無象にデュエリアのとき以上の強制的な『沈黙』、一瞬で全員の意識を落とすことだって今の砺波には出来てしまうのだ。
けれども、今ソレをしないのは―
偏に、今の『この事態』が単純な力で黙らせたところで収まらないことを砺波もよく理解しているからこそ。
…一時的に黙らせるだけでは意味が無い。
一瞬黙らせるだけでもよかったデュエリアのときと、天城　遊良へのバッシングが行われている今ではまるで状況が違う。生中継もされているこの場で、記者たちを無理矢理黙らせるようなコトをしてしまえば…

きっと数瞬の後に、他の記者や視聴者のヘイトが更に増大するだけで…おそらくその後もひっきりなしに、別の記者たちが更に恐れを圧して向かってくるに違いないだろう。
だからこそ、後々の事態を考慮するためにも…今は下手に手を出してはいけないことを、砺波はこれまでの人生における経験則から理解している。
それに、自分の目的はここで記者たちの目を惹くこと。そう、すでに近くに来ているであろう教え子たちが、見つからずに学園内に忍び込めるように、と…
砺波は、どこまでも記者たちと正面衝突を続けるだけで…
それ故―

「やっていない証拠は既に呈示している通りだ！学園側の防犯カメラには、犯行時間とされているタイミングで彼が授業を受けているのがしっかりと映っている！出席確認も取れており、学生教師問わず目撃者も多数いるのが紛れも無い証拠でしょう！」
「ですが学園側が録画を偽装した可能性だってありますよねぇ！」
「ならば犯行現場のカメラも偽装されている可能性がある！とにかくこちら側も独自に調査を進めている最中だ、不確定な要素で我が校の学生を不当に貶める事はやめていただきたい！」
「ぐっ…で、ですけど警察の調べでは…」
「そうだそうだ！指名手配犯を擁護している学園なんて視聴者は信じませんよぉー！」
「この責任はどう取るおつもりですか！一言！一言！」

…真っ向から、真正面から。
言っても引かぬ、言い聞かせても納得せぬマスコミに対し。砺波は、あえて正面衝突を続けるしかなく…

「うぇー、理事長先生大変そう…」

「…砺波先生、記者の注意を引くって言ってたからわざと…」
「うむ。理事長の犠牲を無駄にするな。今の内に校内に入るぞ。」

そんな、裏門にて記者達に直接対応して気を引いてくれている砺波の姿に対し。

遊良達は、心の底から申し訳なさを感じつつ…砺波の意図を汲み、今度は記者たちに見つからないように迅速にかつこっそりと。

人が踏み入らないであろう藪の中を通りながら、広大なイースト校を取り囲む塀をどうにかして乗り越え…そのまま学園の敷地内へと、速やかに忍び込む。

…決闘学園のセキュリティは万全。それは記者たちもおいそれと忍び込む事は許されないほどに。

だからこそ、近隣住民も記者たちも誰もが塀を乗り越えることはせず、誰しもが正門もしくは裏門へと詰め掛けているのだが…

遊良達がセキュリティに引っかからないように、予め砺波が設定でもしておいてくれたのだろう。近隣住民たちや記者たちの意識の外を突いた侵入の仕方によって、どうにかイースト校内へと入る事が出来た遊良達はそのまま…

砺波に指示されていた通りに、最上階にある理事長室目指して速やかに移動し始めるのみ。

……

……

気配が無い。

教師たちも外での対応に出払っているのか、学園内には全くと言っていいほど人の気配が無い。

それはつまり、記者や住民が不法に侵入もしてきていないということでもあるのだが…

…まぁ、外の彼らからしても、個人かそれに近い人数でこっそり学園内に侵入して大量殺人犯の疑いがある遊良を探そうなんて度胸の

ある者は居はしないのだろう。
しかし、例え学園内に人の気配がなくとも。遊良達はあくまでも警戒心を緩めぬまま、理事長室目指して学園内を移動し続ける。
…遠目から発見されぬように、窓のあるところは身を屈めて外から見えないようにして移動する。
…階段では上と下に細心の注意を払いつつ、音を立てぬように忍び足で階段を上がる。

そうして…

本棟の最上階、遊良も数度しか入った事のないソコへと。
そう、荘厳なる装飾が施された、見るからに重々しい扉が出迎える『理事長室』へと辿り着いた遊良達は即座に室内へと入り込むと…
厳重なるその扉を閉めた後、ようやく大きな溜息を吐けたのだった

―

「…はぁー…すっごい疲れたよ、もう…」
「そうだな…これでようやく一息つける…」
「…しかしよく見つからずに辿り着けたものだ。流石に何度かヒヤヒヤしたぞ。」

ソファに雪崩れ込み、思い切りうなだれ。天井を仰ぎ、大きな溜息を何度も吐きつつ疲労感を見せ始める遊良と鷹矢とルキたち3人。
…それもそのはず。ここまでの道のりにおいて、彼らも相当の緊張感をずっと張り詰めていたのだから。
見つかるわけにはいかないために、顔を隠し道を選ぶ。怪しまれないように、漂わせる雰囲気を街に溶け込むモノにする。濡れ衣を着せられた事を声高々に叫びたいのに、それをあえて我慢する。
…一体、ここに辿り着くまでにどれほどの苦労が遊良達にはあった

のだろう。
およそ普通に生きていれば絶対に経験しないであろう状況に陥り、その中でも一筋の希望を目指してここまで辿り着いた遊良達の疲労感は…およそ常人が考えている、数倍も数十倍も重々しく圧し掛かってきているに違いないのだ。
だからこそ、あまりの精神の磨耗に遊良達は思い切り脱力を露わにする。
理事長室の厳かな雰囲気が、どこか外界の喧騒から守ってくれているかのような感覚を僅かに抱きつつ…
その緊張の糸をようやく緩められる場に辿り着けたことで、これまで押さえていた心労が一挙に彼らに押し寄せてきている様子を遊良たちは見せており…
…グッタリとする。気苦労に押し潰された体に、少しでも力を戻す為に。
…うなだれる。これから先のことを考える為に、僅かでも思考を回復させるために。
…倒れこむ。恥も外聞も捨て去って、一筋の光明を逃さぬように。

—そして、理事長室に着いてからどのくらい休んでいたのだろうか。

…時間的には1時間も経っていない、しかし疲れきった感覚的に数時間は休んでいた気もする。
肉体と精神の両方の疲労感から、時間の感覚が遊良達から綺麗さっぱり抜け落ちてしまったそんなタイミングで…不意に、理事長室の厳かな扉が開く音を鳴らしたかと思うと。

扉を開けたそこには…

明らかに疲れた顔をした、イースト校理事長である砺波　浜臣が立っていた。

「…君たち、無事で何よりです。」

「砺波先生…あの、ご迷惑をおかけして…」

「謝罪はいりません。この事態には私も納得が言っていない…こんな馬鹿げた事、君が受け入れる必要は全くありません。」

「でも…」

すぐさま立ち上がり、砺波へと向かってそう謝罪の言葉を述べた遊良に対し。

あまりの疲労に塗れてもなお、自身の教え子を気遣う優しきを感じさせながら…大らかな鯨の声にも感じられる、どこか優しさを滲ませたイースト校理事長、砺波　浜臣。

…【決島】が終わってから、鷹矢のプロ入りの件で限りない忙しさの中にあると言うのに。

それでも、教え子が不当な事件に巻き込まれていることに対し…こうして前線に立ってくれて、解決に向けて動こうとしている砺波が味方でいる事は果たして遊良にはどのように映るのだろう。

…砺波から零される言葉は、心の底から自分を案じてくれている代物。

それを遊良も感じられたからこそ、遊良は見るからに疲労に塗れている砺波へと向かって…

「俺のせいで、砺波先生まで…」

搾り出されるようにして零される遊良の声は、震えそうな体をどうにかして無理矢理抑え込んでいるかのよう。

そう、正門にて教師たちが、近隣住民に怒号を浴びせられていた光景は別にどうでもいいとしても。

裏門にて、砺波が記者たちと真っ向からぶつかり合っていた光景を

あぁもハッキリと見てしまっては…自分を庇おうと、自分を守ろうして、記者たちからあれだけ好き勝手に言われている師である砺波を見てしまっては、遊良もどうしても申し訳なさが浮かび上がってきてしまうのか。

…それは鷹矢とルキに迷惑をかけるのとではまるで違う。

自分を引き渡す気満々だった正門側の教師たちには別に何も感じないとは言え、社会的立場のある人間、それも元シンクロ王者【白鯨】であり、決闘学園イースト校の理事長でもある砺波がその身を呈して自分を庇い続けてくれていることは、遊良からしても確かに嬉しくもあり心強くもあるのだが…

それでも、それ以上に遊良が砺波に浮かぶのは、心からの申し訳なさ。

遊良が思うのは、これ以上自分を庇い続けていれば砺波もまた社会的制裁を受けてしまうのではないかという危惧。そう、これまで一緒に生きてきた、これからも一緒に生きてくれると言ってくれた鷹矢とルキと、既に自らの地位を確立している砺波へと遊良が抱く感情は全くの別物なのだ。

かつては敵どうしだったとは言え、己の弱さを乗り越え過去を踏み越え師となってくれた【白鯨】が、こうした事態になってもなお庇おうとしてくれているのは遊良からすれば嬉しくもありつつも…

それ以上に、【決島】でも【裏決島】でも本当の味方であり続けてくれた砺波の今後を、どうしても遊良は案じてしまうのだろう。

…砺波にだって自分の生活がある。

養う家族や、守るべき家…学園の責任者として、教師たちや学生達の身の安全に加え、元王者としての決闘界での立場と言った大人の責任が砺波はきっと他人よりも多いはず。

…だからこそ、遊良は危惧してしまう。

元々は何の関係も無い間柄。元々は敵対していた間柄。ここに砺波の関係者が居たら、きっと自分を庇うことに反対の意を見せるはず…

身に覚えが無いとはいえ、元凶となってしまった自分を、自らを危険に晒してまで庇う道理など砺波にはないはずだ…と。

しかし…

「はぁ…何を言うのかと思えば…」

そんな教え子が何を考えているのか、ソレを師である砺波も察知したのか。

疲労しているはずの砺波はそのまま、呆れを浮かべながらも…

遊良へと向かって、再度その口を開き始くのみ。

「『でも』じゃありません。そんな事を君が言う必要はないと言っているでしょう?…君はもっと、この【白鯨】の教え子だという自覚を持ちなさい。今回ばかりは相手が相手とはいえ、この私の直々の教え子がこんな理不尽を受けること事態が間違っていることなんですよ。」

「ッ…そ、それでも…さっき、外の状況を見ました。俺のせいで、砺波先生に迷惑をかけて…」

「この程度、君を弟子にした時点で既に想定していました。それより腸が煮えくり返っているのはこちらの方だ…この私の教え子に、こんなにもふざけた真似をした者を…この私が、許しているとでも?」

「ッ…」

奮える…

厳かな理事長室の、悲嘆に塗れていた重々しい空気が。

—それは紛れも無い怒気…

そう、深い深い海の底にて、この世の頂点を極めた鯨が誰も見たことのないほどの怒りを押さえきれずに露わにしているのだ―

果たして…【王者】を超え、正真正銘の【化物】の領域へと至った【白鯨】が抱いている怒りはどれほどのモノなのだろう…

…有無を言わさぬ怒轟の集圧、横槍を許さぬ覇者の重圧。

何やらこの事件の『真相』を知っているような言葉を砺波は口にするものの、しかし到底ソレを聞けるような雰囲気ではない今の砺波の放つモノは、渦中の遊良でさえも宥めることなど出来はしない代物となりて真正面から中てられるのか。

そんな、深海にて震える鯨の怒りを受け止めきれる人間などすでにこの世界には存在せず…決して誰にも受け止めきれないであろう程の怒りを内包した白き鯨は、見るからに怒りの表情を未だ見ぬ敵へと向けるだけ。

「君が心配しなくとも、これは既に私の戦いでもあるのです。大体君が私の心配をするなど１０年早い。だから君も下らない事ばかり考えていないで、事態の改善だけを考えて行動しなさい。いいですね？」

「は、はい…砺波先生…」

だからこそ、そんなモノを間近で中てられた遊良からすれば。

こんな果て無き怒りを抱いている者を気遣うことが、果たしてどれだけ間違いであるのかを無言にて理解させられてしまうのも無理はなく―

そうして…

必要の無い責任感と、背負う必要の無い責務を勝手に抱こうとしていた教え子を一喝しつつ。

ようやく本題に入れると言わんばかりに、砺波は苦々しい顔をしながら言葉を続ける。

「…そんな事より、少々まずい事になりました。」
「まずい事？それは一体なんなのだ？」
「確かな筋からの情報に寄れば、先ほど警察が君たちの家に突入したそうなのですが…しかし逃げた形跡があることから厳戒態勢を強め、これより決闘市の境に大規模な検問を敷き始めるそうです。」
「理事長先生、検問って…じゃあ遊良はもう決闘市から出れないってこと？」
「…そうですね、正攻法ではまず無理でしょう。しかしあまりにも動きが早すぎる…指名手配を発表してから、この短時間でこんなにも大規模な作戦を警察が取るのはあまりにも不自然です。」
「ぬぅ…ならば決闘市の中に隠れているしかないだろう。それこそこのまま学園の中で…」
「いえ、検問と同時に、警察は決闘市全域に捜索隊を編成し動き始めるそうなのです。おそらく、天城君と関係のある場所は真っ先に警察が来るはず…ここへも、すぐに警察が駆けつけてしまうかと…」
「ッ、そんな…」
「じゃあ逃げ場所なんてないじゃん！どうすればいいの!?」
「ぐ…八方ふさがりと言う奴か…」

砺波が放った言葉…それは紛れも無く、事態が悪い方へと向かっていると証明でもあった。
国家権力による、逃げ場のない包囲網。指名手配されたばかりの少年に対する仕打ちとしては、あまりに迅速かつやりすぎであるとさえ思えるソレは…鼠一匹逃さないと言わんばかりの通達となりて、あまりに無慈悲に遊良達へと伝えられるのか。
…まぁ、砺波がどうやってその情報を入手したのかはともかくとして。
確かに砺波の言う通り、指名手配が発表されてから2時間も経って

いないこの短時間で、警察が広大な決闘市全域に包囲網と検問を敷くと言うのは些か迅速すぎる行動と言えるだろう。
…何せ、いくら遊良が２０人あまりを失踪させた疑いのある凶悪犯と認識されているとは言え。
もし遊良が本当にそんな大犯罪を犯した凶悪犯であったのならば、マスコミが大々的に報道するよりも前に警察が何かしらの動きを見せているのが普通と言えるのだから。
そう、そもそもからして、指名手配をマスコミが大々的に発表したコト自体があまりにも不自然。また、普段の生活において、警察が大々的に指名手配を発表することなど極々稀な出来事であり…
更に言えば、日常におけるほとんどの犯罪者は指名手配されるよりも前に捕まる事が大半で、たとえ指名手配が生じたとしてもソレが大々的にＴＶで発表されるコトもまた稀と言うより『無い』に等しいことであるはず。
…しかし、今回はソレが生じた。そして、瞬く間にメディアがソレを取り上げて、決闘市内の騒動は更に大きくなってしまった。
マスコミの動きから考えて、指名手配の報道が成された時点で遊良が家に居たのはきっとマスコミたちにはとっくにバレていたのだろう。それこそ予め示し合わせて待機していたと考えられるほどに、あの時のマスコミたちの動きは迅速そのモノであった。

…だとすれば、ここで更なる疑問が生じる。

そう、ソレはたった今砺波が零した通り…警察の動きが、あまりにも早すぎるということ。
普通であればありえない。マスコミが大々的に指名手配を発表するまで動きを見せなかったほどに『鈍足』だった警察が、指名手配の発表から2時間も経たない内に大規模な布陣を敷くと言う事など。
…良くも悪くも、警察は大きな『組織』。
無論、マスコミも1つの組織的な集団といえばそうなのだが…しかし、メディアは警察と比べてもその『規模』はあまりにも違いすぎる。

国家の『安全』という名の正義に基づき、全国的に統率され訓練されている警察と…利益を求めて視聴率を貪るハイエナのようなマスコミは、根本からしてその『統率力』の大きさが異なっているのだ。

…つまりは、組織が大きくなればなるほど『事』を成すには時間がかかってくると言うこと。それは伝達にかかる手間の数一つとっても、許可を出す責任者の数一つとっても。

そう、組織が国家に近づけば近づくほど、規模が大きくなればなるほど命令を下すまでにはいくつもの摩擦が生じるのが常であり、組織の統率力が大きくなればなるほど実際の行動が実行されるまではソレ相応の『時間』が必要になってくるはず。

…しかし、今度は次なる一手をこんなにも『急速』に打ち始めた。

マスコミが指名手配を発表してから動きを見せた鈍足なる警察が、今度はあまりにも大規模な作戦をもう実行に移し始めるなどあまりにも不自然すぎる急な展開。それを踏まえれば、砺波が警察の動きを早すぎると言ったのも当然と言えば当然で…

巨大な組織である警察がマスコミとほぼ同じ側でこれほど大規模な作戦を展開出来ていることこそがあまりにも不自然。

短絡的に、反射的にエサに群がるマスコミという名のハイエナの行動とは違う…こんな事態になる前兆も予兆もなく、いきなり指名手配を発表した警察が広大な決闘市全土に包囲網を急いで敷くだなんて、巨大な組織にしてはあまりにも杜撰かつ粗雑な突貫工事のような動きとさえ思えてしまうことだろう。

それはまるで、この事態を引き起こした者、この事件の裏で糸を引いている者が、『警察』と『マスコミ』に同時に無茶な『指示』を直接出しているのではないかとさえ思える荒い動きとも思え…

何やら理知的なモノとは遠くかけ離れた、どこか私的な『感情』さえも思わせる粗さを滲ませていて―

しかし…

（どうする…これじゃ逃げ様がない…決闘市を出るにも時間が…）

砺波の言葉を聞いて、見る見るうちに大きくなっていく世間の動きを肌で体感し…心の内の焦りが、益々強くなっていくのを感じ始めている様子の遊良。
…このままでは、事態はどんどん悪化する一方。
そう、いくらマスコミと警察の動きが不自然だとはいえ、それでも確実に自分が追い詰められてきていることを遊良もひしひしと感じているのだろう。
…敵の動きが早ければ早いほど、焦りはさらに誘発される。
追い詰められてくるその感覚が襲ってくるたびに、遊良の心には次第に自分の所為でこれ以上どれだけ周囲の大切な人に迷惑がかかるのかが塊となって浮かび上がってきているのか。
…家から抜け出るときに、鷹矢とルキが言ってくれたことを遊良は決して忘れてはいない。
けれども、いくら隣に立ち続けてくれる人が傍にいるとは言え…どんどんと悪化し続ける現状に対し、遊良の心が折れかかってきているのもまた事実で…

「…そんな顔をしてはいけません。私は『正攻法では無理』と言ったはずです。」
「…え？」

けれども、遊良のあからさまな気落ちを見てもなお。
更なる手を打ってあるのだと言わんばかりに、何やら考えがあるかのごとく…
砺波は、更に言葉を続けて―

「先ほど『逃がし屋』を手配しました。君たちは今すぐ決闘市を脱出してください。」
「逃がし屋？何だソレは…と言うより、なぜ理事長がそんな奴を知っているのだ。」
「あぁ、それはトウコさ…いえ、ソレを君が知る必要はありません。ですが信用に足る人物です。それより君たちは逃げた後、しばらく身を隠す必要があるでしょう。」
「身を隠す？どこかに隠れると言う事か？」
「近くの町にでも隠れるの？」
「下手に街に隠れるのも悪手です。木を隠すには森の中とは言いますが…天城君の場合は【決闘祭】や【決島】で広く顔が割れていますからね、寧ろ人の居ない場所に隠れるのが最も効果的かと。ひとまずは決闘市の東…市外の近くの山にでも隠れなさい。あそこには、確かほとんど使っていない鷹峰の隠れ家があったはずだ。」
「あー…覚えてる、昔一回掃除に行かされたよね。」
「あぁ、確かロッジみたいな別荘だった。」
「えぇ、あそこはギリギリ決闘市外と言うことで、警察の意識から上手く外れているので隠れるのにはピッタリでしょう。何なら近隣の土地も鷹峰個人のモノなので、滅多に他人は近づかないでしょうし。」
「…理事長、やけにジジイの事情に詳しいのだな。」
「…それも遠い昔の話です。鷹峰があの辺の土地を買ったのも私や小龍との賭けに負けた罰ゲー…って、そんな事はどうでもいいんです。とにかく、今すぐにでも動き始めますよ。早く行動を起こさないと手遅れになりますからね。」
「…はい、砺波先生。」

そうして…
気落ちに潰されかけた遊良を、いとも簡単に引っ張り上げた砺波はそのまま理事長室の扉を開けて行動し始める。
…座る事もせず、休む間もなく即行動を起こし始める砺波の動きはまさに迅速。

色々と気になる過去を漏らしながらも、ソレを面白可笑しく話している暇など無いのだと言わんばかりに…
短い時間で話を纏め、時間がない事を行動で示し。そのまま遊良達を促すように、自ら理事長室を出て誰かへと電話をかけ始めて。
「…理事長先生ってさ、なんかウチの先生に似てるかもね。」
「うむ。まともだと思っていたが意外と侮れん過去を持っているようだ。」
「…そう言えば昔の砺波先生って『荒くれ者』って呼ばれてたって…」
また、今の砺波からは考えられない過去について、遊良達も色々な思いを抱きつつ。
それでも意識だけは現状をしっかりと見据えているため、遊良達3人もまた砺波に続いて迅速に理事長室を後にしようとし始めるのか。

そうして…

「まぁよい、今回ばかりは理事長が味方でつくづく良かったぞ。」
「ねー、去年は散々だったもんね。でもよかった、どうにかなりそうで。いこ、遊良。」
「あぁ。」
先に出た鷹矢とルキに続いて、遊良が理事長室の厳かな扉を潜ろうとした…

その時だった―

―『うわぁぁぁぁあ!うそだぁぁぁぁ!』

―『どうして…なんでこんな事に…』
―『消えろぉ！消えてしまええ！全部全部全部ぅ！』

「ッ!?」

突如…
瞬間的に襲ってきた、針を刺したような鋭い頭痛と共に―
遊良の脳裏に、記憶には無い謎の光景と…ソレに伴う酷い悲しみ、心に穴が開くほどの喪失感と虚無感が、突如として浮かび上がってきた―
…それはノイズのかかったような、砂嵐の走るテレビを見たような感覚。
一瞬のことで、その光景も感覚もすぐに消えてしまったとはいえ…

―見えたのは、何かが炎上している光景と…
―鮮血に塗れながら、誰かを抱えている両手と…
―そして酷く荒廃し倒壊した、見慣れないどこかの街の景色。

（なんだ…今の…）

頭痛がする…
全く覚えのない映像が突然見え、それに伴い生じる頭痛が何やら遊良の心に深く突き刺さるような悲しみを生じさせる。
そう、何やら心を直接傷つけられたかのような気持ちの悪い感覚が、遊良の心に残像のようにして反響し始めるのか。
…記憶にも無い光景だったと言うのに、なぜか自分が体験したことのように感じたソレに吐き気を催し。波のように向かってくる酷い

喪失感と虚無感が、足を止めてその場に膝を突かせようとしてくる。
見えたのは見覚えのない場所、聞こえたのは聞き覚えのない言葉。しかし粗いノイズのかかった光景と叫びだったとは言え、なぜか酷く理解できるような悲しみを中てられた遊良は一瞬その場に足を止めてしまい…

「天城君、どうしました？」
「あ、いえ…すみません、すぐ行きます。」

…しかし、この現状においてはそんなことに気を取られているわけにはいかず。
突然見えた謎の映像に、遊良も一瞬だけ足を取られたとは言えども。すぐさまソレを振りきって、砺波に連れられるようにして遊良達は無人の校舎を素早く見つからないようにして移動し始めるのか。
…下に向かって階段を降り、外へと向けて物陰に隠れ。
そのまま、砺波に連れられ校舎の外に出た遊良達は…
『逃がし屋』が待機しているという出口、『裏門』を目指しつつも…
今一度、校舎の物陰に隠れつつ。慎重になりながら、その足を止めたのだった。

「…先程よりも記者が増えているか？」
「みたいだな…多分、このままじゃもっと増えそうだ。」
「理事長先生、逃がし屋さんってどこに来てるの？」
「記者たちの車に混ざって門の近くに停まっているはずです。…ほら、あの黒いワゴンがそうですね。」
「なるほど、記者たちに混ざれば車も目立たぬと言うわけか。」
「けどさ、マスコミがあんなに居たんじゃ車に乗れなくない？」
「あぁ…ここから飛び出しただけで囲まれそうだ…」

足を止めた遊良達の目に飛び込んできた光景…
それは見ての通り、先ほどよりも大軍となりて裏門に詰め掛けてい

る記者たちの姿であった。
…まるで、砂糖の山にウジャウジャと群がる蟻のよう。
そう、少し時間を置いたために、先ほど砺波が対応していた時よりも更に多くの記者たちが再度【白鯨】の面白い絵面を撮ろうと、更なる群れとなりて押し寄せてきたのだろう。
…これでは、『逃がし屋』の所まで辿り着けない。
遠回りをしようとも、正門は未だに近隣住民たちが攻め懸けてきており…塀から外へと忍び出ようとも、校内に忍び込んだ時とは異なり無人の校内から大衆の居る外へとこっそり出るのは至難の技。
そう、校内に忍び込むときは、正門も裏門も教師たちや砺波が住民や記者たちの気を引いてくれていて…校内側の目を気にする必要も無いために、あくまでも遊良達は忍び込む所だけを見られないようにすればよかった。
…しかし、外に出るのは違う。
人気の無い所へと忍び込むのは内部の人の目が少ないために簡単であっても、人の少ない内側から多い外側へと見つからずに出るのは難しいこと。
ましてや、時間を負う毎にどんどんと住民たちや記者たちが増えてきている今となっては…
塀を乗り越えたところに、門から溢れた住民や記者がウロウロしていたとしても可笑しな話では断じてなく…

だからこそ…

「私が道を開きます。その隙に君たちは門を飛び出し、あそこに止まっている黒い車に乗り込んでください。」

あくまでも、取れる策はひとつなのだと言わんばかりに。
遊良達へと向かって、一瞬だけ腕時計を見た砺波が遊良達にそう告げたと同時に…遊良達もまた、砺波の言葉を何一つ疑うことなくすぐさま行動を始めようと身構え始めるのか。

そう、先ほどは『あえて』実行しなかった、人の意識すら簡単に押し潰して奪う深海が如き圧力。ソレを、今度は何の遠慮もなく砺波は放とうとでもしているのだろう。
…人間を超えた、正真正銘の【化物】のみが持つ人知を超えた圧倒的覇気。
そんなモノを常人、それもその他大勢の一般人に過ぎない記者たちがまともに中てられればどうなるのかは、遊良も鷹矢もルキも師である【黒翼】の姿を見て否応にも理解している。

そのまま…

これ以上時間はかけられないのだとして、裏門に群がっている記者たちに対応しようと。
砺波が、先立って物陰から出ようとした…

その時―

「お、おい！天城　遊良が発見されたってよ！駅前だ！」
「なに!?ここじゃないのか!?」
「くそっ！出遅れた！邪魔しやがって【白鯨】の馬鹿野郎！」
「いくぞ！逃がすな―！」

…
……
……

一瞬で…
そう、何が起こったのか一瞬で―
アレだけ蠢いていた記者たちの姿が一転。何やら意味深な捨て台詞と、【白鯨】に対する的外れな文句を誰もが口々に垂れ流しつつ…
裏門から、誰一人として記者たちがいなくなってしまったではない

か―

「えっと…どういうこと？」

「遊良が駅前に居たらしい。」

「…なんにせよ、記者たちが離れた今がチャンスです。警察が検問を敷き終わる前に決闘市から出ましょう。」

…果たして、彼らの情報網には一体どんな情報が入ってきたのか。

しかし、そんな光景にいつまでもあっけに取られているわけにはいかない遊良達は、明らかに変な行動をしていた記者たちを意に介さず。

裏門近くに唯一つだけ残っていた黒いワゴンへと…

そう、砺波が手配したという『逃がし屋』の車へと向かって。手早く裏門から出て、乗り込むために手前でその足を止めて。

…ここまで綺麗さっぱり記者たちが居なくなってしまうと、逆に一台だけ残ったワゴンが悪い意味で目立ってしまう気もするとは言え。

一挙に隙が出来たこの現状を見逃す手は遊良達には存在しないのか、何やら砺波が運転席に座っていた男へと声をかけたかと思うと…

ワゴンの後部座席のドアが自動スライドし始め、『乗れ』というジェスチャーを受けて砺波を先頭に遊良達はワゴンへと乗り込み始めて。

そうして…

一体、どのくらい車に揺られていたのか。

時間にしては３０分にも満たない時間だっただろう。亀のような体型をした、蛇のように細い目をした『逃がし屋』の運転に運ばれ…

警察も張らないような細い裏道を巧みに抜けつつ、幾重にも張り巡らされた警察の検問をまるで予知しているかのようにして。『逃がし屋』の車はスイスイと、決闘市の『外』へと向かって走り続ける。

…向かって居る場所からして、その場所は真っ直ぐ向かえば車だと１０分もかからない場所。
そう、知る人ぞ知るような裏道を使い、警察の検問を交わしながら進んでいるためにここまで時間がかかってはしまったものの…
しかし、驚くべきはただの一度も警察とすれ違わなかったこと。
何せ少し視線を窓から除かせれば、ひとつ隣の道路で警察が何台も車を止めている光景がチラホラ見え隠れもしている箇所があったと言うのに。
まるで草の間をうねり抜ける蛇のようなドライビングテクニックを駆使し、表社会では決して味わう事の出来ないであろう『逃がし屋』の持つ『裏』のテクニックによって…
遊良達は安全かつ迅速に警察を交わしつつ、決闘市から出られるという『その場所』目指して、どこまでも車に揺られるのか。

走り続ける…

警察の網を、蛇のように掻い潜り。外からは見つからぬブラインドに隠された黒い車は、まるで亀の甲羅に守られているかのような安心感を遊良へと与えていることだろう。
そのまま、遊良達を乗せた車はしばらく走ったかと思うと…

「はい、着きましたよ、いひひっ…」

…という、どこかネバつくような声を逃がし屋が零したと同時に。
そう、その声質や雰囲気から、何やら【裏決島】で戦った性根の腐った捻じれた男の影が僅かに遊良達の脳裏にはチラついたものの…
しかし、確かに『着いた』と述べた逃がし屋が、車を止めたその場所は紛れも無く―

「情報によれば、ここはまだ警察さんが到着してない場所です。いっひひっ、警察さんも墓場には中々来たがらないんでしょうねぇ。とり

あえず、ここから街の外に出られれば…ひとまず、時間は稼げると思いますよ。」
「…助かりましたよ『ブラックタートル』、報酬は後日指定の口座に。」
「毎度どうも。それではまたのご利用お待ちしてますよ、【白鯨】さん。」
「フッ、もう利用したくはないんですがね。では『劫火』の彼にもよろしくお伝え下さい。今回の件、色々と情報をありがとう、と。」
「ええ、ええ、確かに伝えておきます。」

逃がし屋が車を止めたソコは、決闘市の東地区にある丘の上の森との境目…

『霊園』…故人が眠る場所であった―

遊良も、これまで『ここ』には幾度となく足を運んだ場所でもある。…何せ、ここには遊良の両親の墓があるのだ。まぁ、公的に死亡扱いされているとは言え、今もなお行方不明のままで死体も骨も何もかもが見つかっていないが故にいくら墓の下に両親が眠っていないとは言えども。
それでも、遊良にとってはある意味特別な場所でもある『ここ』に連れて来られた事は…果たして、遊良の両親もまた息子を決闘市から逃がしたいとでも言っているのだろうか。
…だが、確かに盲点と言えば盲点。
この東地区の霊園は決闘市の外れにある立地に加え、森と隣接しそのまま山に繋がってもいる場所。
そう、森も山も自然のまま手付かず。人の通りを想定されていない、開拓などされていない自然のままの野生の森と山に囲まれているこの霊園は…ある意味で、決闘市と市外の境界線の役目を果たしているとも言えるだろう。
つまりは、外に繋がる道など無いと判断され警察も検問を敷きよう

がない。道路や港や空港とも違い、陸海空、車も船もヘリや飛行機も使えないこの霊園はある意味『徒歩』で逃げるには持ってこいの抜け道とも言えるのだから。

「では子どもさん達……天城さん、ご武運を。」
「あ、はい…あの、ありがとうございました…」
「いえいえ…お礼を言うのは寧ろこちらです。」
「え？」
「ま、それはおいおい…それでは、私はコレで失礼いたします。」

そうして…
逃がし屋が何やら遊良をじっと見て、少々物悲しげな顔浮かべつつ去っていったのを見届けた後。

「…さて、では行きましょう。ぐずぐずしている暇はありません。」

先陣を切って歩き出した砺波に連れられるように、霊園の丘を登り始めた遊良達一行。
その砺波の足取りは速く、まだ警察の手が入っていないとは言え緩やかな上り坂になっている丘を早足で上る姿から、砺波も常に緊張感を切らしていない様子。
…まぁ、確かにまだ霊園には警察の包囲網は届いていないとは言え。いずれ警察が捜査の網を伸ばし、決闘市全域を取り囲むようにして人手を配置することは明らかなのだから、少しでも早く決闘市から出ようとしているのは説明するまでもないのだが。
そう、まだ包囲網の手が伸びていないこの瞬間だからこそ、徒歩にて山に逃げられる今の内に霊園から決闘市外に抜け出すのは出来るだけ早い方がいい。少しでも警察の手が遠いうちに、見つからない場所へと早く辿り着く事こそが現状においては最も優先すべき事なのだから。

…決闘市の喧騒が、丘の下から遠目に聞こえる。

けれども、街の喧騒に気を取られることもなく。そのまま４人は、霊園の丘を登りつつ…

途中で通った、天城　竜一と天城　スミレの名が刻まれた墓の前を立ち止ることもなく。

遊良達は霊園の端、墓も置かれていない草原を踏み進み…遠回りになるものの、【黒翼】の別荘がある２つ先の山を目指して覚悟を決め、無言でその足を進め続け…

いよいよ、遊良達の目に決闘市の境界線である『森』が見えてきた―

その瞬間―

「いたぞー！天城　遊良だー！」

「【白鯨】も一緒だぞー！やっぱり匿ってたんだー！逃がすなー！」

「止まれー！止まらんと撃つぞー！」

「ッ!?」

…背後から。

突然、いきりたったような大勢の声が…

複雑に絡み合いながら、遊良達へと向かってきて―

「ぐっ、もう見つかったぞ！」

「そんな！どうしよう!?」

「逃げるしかありません！走って！決して捕まらないように！」

「は、はい！」

…それは紛れもなく街の住人たち。
そう、いきり立った近隣住民、ハイエナのような記者たち、銃を持った警察官。
それが、大勢…大勢の者達が徒党を組んで、一目散に遊良達目掛けて物凄い勢いで走り近づいてきたのだ―
…まさか、もう見つかったのか。
霊園に着いたときに、僅かでも見られていたのか。折角決闘市から出られそうなここまで辿り着いたと言うのに、こんなところであんなにも大勢の人間に追いかけられたら森や山に逃れるどころではないと言うのに。
…そう、状況は極めて最悪。
決闘市から出るところを見られたら、どの方向へ逃げたのかが丸分かり。
それだけではない。あの勢いのまま追いかけられたら、きっと森の中で追い詰められて囲まれてしまうに違いないのだ。
捕まれば終わり…あれだけいきり立った住民たちに捕まれば、何をされるか分かったモノじゃない。
だからこそ逃げる…必死になって追いかけてくる住民たちから。
全速力で駆ける…捕まるわけにはいかないのだとして、ひとまず身を隠せそうな森へと向かって一目散に。
…飛び交う怒号、迫り来る轟き。
殴り殺しにかかってきているような住民たちから。エサにかぶりつこうとしている記者たちから。本気で銃を撃つ気でいる警察官から。
捕まるわけには決していかない。追いつかれるわけには絶対にいかない。ただただその一心で、遊良達は限界を超えてもなおその足を更に回転させ森の方へと走り続け―

そして…

遊良と、鷹矢と、ルキと、砺波が。
地図上にて決闘市の境界線となっている、霊園を越えた先にある『森』に飛び込んだ…

その時だった―

―!

突如…

そう、森に飛び込んだその瞬間に―

ありえない程の轟音が霊園の方から轟いたかと思うと、あまりに規格外な逆光が遊良達の背側から放たれ始めたのだ―

…それは、『光』…天へと立ち昇る真っ赤な重光。

思わず反射的に振り返った遊良は見た…
天へと立ち昇る真っ赤な重光が、霊園と森の境目からまるで決闘市を取り囲むようにして…
…否、高台になっているこの霊園の丘からは、『ソレ』がはっきりと見えてしまった。
紛れもなく、決闘市をぐるりと取り囲むようにして…
立ち昇る光の境界線が、決闘市全域から放たれて居る光景を―

すると―

「ひぃっ!?な、なんだこれぇー!?」
「いっ、痛いいいいいい！焼けるぅぅぅぅ！」
「ひぎぃいいいいいい！た、たすけてえええええ！」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！溶けるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！」

高台になっている森から眺める限り、およそ決闘市『全土』を覆ったその光の中で―

遊良も、鷹矢も、ルキも、砺波もはっきりと…

そう、振り返ったその目で、４人はハッキリと見てしまった。

住民が…記者達が…警察が…

立ち昇る赤い重光の中で、あまりに悲痛な声を上げて―

―うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！
―助けてえええええええっ！
―痛いい！痛いいいいいいいいいいいっ！
―ひぎいいいいいいいいいっ！

粒子となって、消えていくところを―

…

……

……

…絶句。

まさしく書いて字の如く、それは言葉には到底出来ない光景であった。

人が、溶けた…

立ち昇る赤い重光の中で、人間が光の粒子となりて霧散していく光景を目の当たりにして。遊良も、鷹矢も、ルキも、そして人間を超えた存在となった砺波　浜臣でさえも…

ありえない光景をその目に映してしまったことで、彼らの口は言葉を忘れてしまったかのようにしてただ呆然として開いたままで…

…時間にて１０秒にも満たない時間。

そんな短い時間の中で、しかしあまりに長く感じた１０秒あまりの中で。

ゆっくりと…赤い重光の境界線上の『外』にいた遊良達は、轟音を上げて立ち昇っていた赤い重光がその勢いを弱めながら徐々に消えていくのを何が起こったのかもわからずに…

ただただ立ち尽くして眺めているだけ…

…そして、決闘市全域から立ち昇っていた、決闘市全土を取り囲んでいた赤い重光が完全に消えたのと同時に。

「…え？」
「ぬぅ…」
「な、なんだ…今の…」
「…」

ルキも、鷹矢も、遊良も、砺波も。
決闘市全域から立ち昇っていた赤い重光が消えたと同時に、あまりに静まり返った決闘市をその目に映しながら…
…そう、自分達を追いかけてきていた住民たち、記者たち、警察たちが『服』や『装備』などを残して肉体が消えたその光景を見たと同時に。
決闘市全域から感じられていた、人の営みの音が完全に消えたあえりない『沈黙』をその目で見ながら…

「…消えた…決闘市から、人の気配が全て…」
「と、砺波先生、き、消えたって…」

砺波が思わず零した、その言葉の意味も誰も理解できずに…
ただただ、立ち尽くしてしまうのだった―

―…

ｅｐ１０５「現れたモノ」

決闘市の東地区、街の外れにある『霊園』でのこと。
突如として警察から謎の『指名手配』を受けてしまい、決闘市から今まさに逃げ出そうとしていた遊良達は…

「え…？」
「ぬぅ…」
「な、なんだ…今の…」

たった今目の前で起こった、あまりに『ありえない光景』を目の当たりにしてしまったことで…
言葉を失い、思わずその場に立ち尽くしてしまっていた。
―そう、遊良達が目撃したのは他でもない。
近隣住民や記者や警察…遊良達を追いかけてきていた者達が、遊良達の目の前で―

―うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！
―助けてぇぇぇぇぇぇぇっ！
―痛いぃ！痛いいいいいいいいいいっ！
―ひぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！

書いて字の如く、粒子となって『消えて』しまったのだ―

…一体、誰が信じられるか。

突然、決闘市内全域から『赤い重光』が立ち昇ったその瞬間に…人が、溶けて消えてしまうだなんて。
…重光が立ち昇ったのは、時間にて１０秒にも満たない時間だった。

しかし、あまりに長く感じたその１０秒あまりの中で、人間が光の粒子となりて霧散していくのを見てしまったなんて、たとえその光景を見ていたとしても一体誰が信じられると言うのだろうか。
ありえない…人間が、光の粒子となって霧散してしまうだなんて。
そんな、あまりにありえない光景を目の当たりにして…遊良も、鷹矢も、ルキも、そしてこの場で最も年長者であるはずの砺波でさえも。
ただ呆然と口を開いたままで、その場に呆然と立ち尽くしてしまっており…

…そして、ゆっくりと。

決闘市全域から立ち昇っていた、決闘市全土を取り囲んでいた赤い重光が完全に消えたその後に。
イースト校理事長、かつては【白鯨】と呼ばれていた砺波　浜臣が…徐に、その口を開き始めた。

「…消えた…決闘市から、人の気配が全て…」
「と、砺波先生、き、消えたって…」

重々しくその口を開いた砺波から飛び出してきたのは、にわかには信じられないような言葉であった。
きっと、砺波もまだ混乱しているのだろう。迷いの見える、少々震えているようにも聞こえるその口調は…彼もまた、今の非現実な光景をまだ完璧に飲み込めてないというのが誰にだって分かるほどに…
そう、人間を超え、【化物】の領域に足を踏み入れている【白鯨】を持ってしても。たった今起こった、『人が消えてしまった光景』はあまりに衝撃的な光景となりて…この場にいる４人の目に、確かにハッキリと映りこんでしまったのだから。

「言った通りです…君たちも感じるでしょう？遠目からでもわかった人のざわめきが…決闘市の中から、全て消えてしまっていると…」

「…」

しかし、それでもなお真っ先に口を開いた砺波は、大人の責務としてこの場にいる誰よりも現状をいち早く飲み込もうとしているのか。

現状に混乱しているだけの子ども達とは違って、いち早く現状を把握しようとしている鯨の目は決闘市全域へと向けて遠目に放たれており…

…そして、遠目で街を眺めている砺波に倣って。

遊良達もまた、よくよく目を凝らして…そして耳を澄ませば、たった今砺波が言ったことを、嫌でも少年達は理解してしまう。

「え、な、なに、これ…」

「なんか…気持ちわるいくらいに…」

「…静かだ…静かすぎるぞ…」

そう、遊良達もまた、理解してしまったのだ。

…それは先ほどとはまるで違う街の気配。そこに街はあるのに、そこから感じられるはずの人の気配や生活のリズムが…

人が醸しだす鼓動、『音』という『音』の全てが決闘市内から全て消えてしまった、という事を—

…ありえない。あれほど騒がしかった街の『音』が、日常を感じる生活の音が、人が鳴らす微かな気配の何もかもが全て消えてしまうだなんて—

一体、何が起こったのか。いや、原因など、説明されずとも遊良立ちにはわかりきっている。そう、たった今目の前で立ち昇った『赤い重光』が、追いかけてきていた記者や警察のみならず…

決闘市の中にいた『全て』の人を消してしまったのだ…と。

何せ、それ以外に原因がない。追いかけてきた住民が、攻め懸けてきた記者が、迫り来た警察官が『赤い重光』に溶かされ、光の粒子となって霧散し消えてしまったのと同じ。

決闘市内にいた全ての老人が、大人が、子どもが、赤ん坊に至るま

でが―

全員、光の粒子となって消されてしまった―

「…駄目です。誰も電話に出ません。おそらく、決闘市の全ての人間が消えてしまった…いや、消されてしまった…」

「…え？そ、それじゃ私のお父さんとお母さんも!?」

「俺の親父やお袋もか!?」

「おそらくは……私の家族も、消されているでしょう…」

「そんな…」

「ぬぅ…」

そして…

何やら各所に電話をかけつつも、苦々しくそう言葉を漏らした砺波の言葉を聞いて。

鷹矢とルキが、驚いているような声を零したと共に…特にルキが、見る見るうちにその表情を悲痛なモノへと変えていく。

そう、人の気配の消えた決闘市の様子と、そして今の砺波の言葉を聞いて。鷹矢とルキもまた、『最悪』の想像をしてしまったのだろう。決闘市内の人間が消えてしまったと言う事は、それすなわちこの場にいる者の『家族』…

…大切な人までもが、例外なく『消えて』しまったと言うこと。

そんな、誰もが自分の『家族』が消えてしまったという事実に対し…

鷹矢も、ルキも、そして砺波までもが悲痛な表情や切羽詰った雰囲気、そして痛々しい程の沈黙を醸し出してしまっている中で―

「砺波先生、『消された』っていうことは…今のって、もしかして誰かが意図的にやったってことですか？」

唯一、『家族』のいない遊良だけが。

他の3人とは異なり、どこか冷静に言葉を発した。

「…多分、そうでしょうね。」

「でも、一体どうやって…だって犯人は…俺を襲った奴だったら、消すのは一人ずつだったっていうのに。」

「…それは…わかりません。」

絶望に掴まれている他の3人とは違い、微かな冷静さを残している様子の遊良。

…別に、遊良とて人が『消えた』今の現象に驚いていないわけではない。

無論、知っている人達が消えてしまったという可能性…いや、限りない事実は、いくら血の繋がった家族の居ない遊良とて驚きを感じるとともに悲しさを感じてはいる。

そう、鷹矢の両親やルキの両親は勿論のこと、少しずつ良い方へと変わってきていた決闘市内には多少なりとも交流を持った知人が確かに生きて存在していたのだから。

…だからこそ、遊良もまた知っている人間が消えてしまったことに対し、物悲しさを確かに感じてはいる。

しかし、それでもなお実際に『家族』が消えてしまった鷹矢やルキと比べれば…感じているであろう絶望に、どこか差が生まれてしまっているのはある意味仕方のない事とも言えるのか。

まぁ、それはどこか少年らしからぬ割り切り方とも言えばそうなのだが…

それでも、誰もが絶望に塗れて動けなくなってしまうよりは幾分マシとも言えるのもまた事実で。それ故、そんな遊良の言葉を聞いて…

砺波もまた、少しだけ冷静さを取り戻したように—

「誰がどうやって、何の目的でこんな事をしたのか……まるで検討がつきませんが、今の感じと似た感覚を…たった今、思い出しました。」

「え、似た…感覚？」

そんな砺波の言葉は、一体何を感じて放たれた言葉なのだろう。
普通、変哲の無い日常を生きていればあんな非現実的なモノに対して、覚えなど思い浮かぶはずがないと言うのに…
未だ混乱の中にあっても、何やら思うところがあるかのように。遊良へと向かって、そんな言葉を漏らしたイースト校理事長、砺波　浜臣。
…それは的外れでいい加減な大人の虚言では断じてない。
あくまでも冷静を努めようとしている砺波の眼は、一切のごまかしも憚りもなく。その記憶の中を手探りし、こんな非現実的な現象に何やら思い当たる節のある顔をし始めるのか。
そう…砺波には覚えがある…
それは今の人が消滅したという現象に対してではなく…もっと根源的なモノ、もっと根本的なモノ…
そして、ソレは砺波だけではなく―

「えぇ。君も覚えがあるはずです…昨年に君もソレを間近で見ているはず…人知を超えた、」
「ッ…も、もしかして…」

だからこそ、砺波に促されるようにして―
砺波と『同じモノ』を見たことがある遊良にも、瞬間的にある記憶が蘇るのか。
…なにしろ、ソレは遊良にとっても忘れたくても忘れられないであろう記憶。
人の枠を超えた存在となった砺波のように、根源的なモノを肌で感じ取るような真似は出来なくとも…
それでも、過去に一度その見たことのある理解を超えた出来事と、そしてその場で感じた説明しようのない潜在的な『怖れ』にも似たモノを、確かに遊良は直面したことがあるのだから。

遊良の思い出したソレ…
それは紛れもなく、昨年度に対峙した決闘市に生じた『異変』における…

―『何故世界はこうも醜い！敗北した私ならばともかく、何の罪も無い我が娘が、何故私の娘と言うだけで虐げられなければならないのだ！』
―『だから私は蘇った！失意のうちに今にも消え行く命だった私の魂と、ばらばらになった私の体を【神】が繋ぎ合わせ…私に、娘の『復讐』を実行できるだけの力をくれた！だから私は世界を飲み込む！釈迦堂も、『奴』も！全ての人間を私は許さん！娘を絶望させた人間など全て消し去り、娘一人のために世界を造り変えてやるのだ！』
―『増大した『闇』で『この国』を飲み込む…そして最後には、『世界』の全てを飲み込む！そうすれば、全ての人間はこの世から消え去るのだ！』

…そう、遊良が思い出したのは他でもない。
人の理を超え蘇った『鬼才』が、神にも等しい力を持ってして世界の人々を消滅させようとしていたという…
昨年度における決闘市の『異変』、死より蘇った前【紫魔】、紫魔
憐造が巻き起こした、決闘市が大混乱を巻き起こしたあの『異変』での出来事。

…前【紫魔】は言っていた。娘一人の為に、全世界の人間を『消し去る』、と。
人々の中で増大した悪意…『闇』を持ってして、世界の全てを消滅させるということを、あの時の紫魔　憐造は本気で行おうとしていたのだ。

あの時は、憐造の闇が爆発する寸前で【黒翼】が止めたから何事もなかったものの…しかし、もしも昨年のあの時に紫魔　憐造の暴走を止められていなかったとしたら。もしかしたら今の光景と同じくらいの惨劇が、去年の決闘市にも起こっていた可能性がある。
そして、その時の同じような恐怖を、遊良は確かに今の現象からも感じた。

それが導くひとつの答え…
それはつまり―

「じゃあ、もしかして今回の犯人も…や、『奴』も…紫魔　憐造みたいな力を持ったやつってことに…」
「…」

最悪の想像が遊良の脳裏をよぎる。
もし昨年度の紫魔　憐造のような、人の理を超えた存在が再び決闘市に現れたのだとすれば…それは到底『人間』などには手に負えない災悪を引き起こす、止める手立てなどない敵であると言う事。
何せ、去年の『異変』でさえありえない出来事だったのだ。１０年以上も前に既に死んでいるはずの人間が蘇って襲ってきて、それに加え既に人の枠組みから外れ【化物】の領域に踏み込んでいた【黒翼】と互角の戦いをしていた紫魔　憐造の規格外な力は…
全世界の人間を消し去るという言葉とともに、あまりの人外さをありありと遊良や砺波へと見せ付けてきたのだから。
…だとすれば、今回の事態を引き起こした犯人…それが遊良の『思い浮かべている人物』であるならば、その犯人もまた昨年度の紫魔　憐造と同じような力の持ち主だとでも言うのか。人々を消し去ってしまうという、人知を超えた力を携えた、そんなありえない力を。
いや、確実にそうなのだろう。何せ、遊良もその人物とのデュエルに敗れ…そして、本当に『消滅』しかけたのだから。
それ故…

敵の力が、手に負えないほどのモノであるかもしれない可能性を考えてしまった遊良が。更なる絶望に押し潰されそうになったとしても、それはあまりに仕方のない事とも言え…

「…私は一度市内に戻ります。君達はこのまま、当初の目的どおり…」
「嫌！私も家に帰ってみる！だ、だってお父さんとお母さんが…」
「…うむ。俺も自分の目で確かめねば納得できん。」
「高天ヶ原さん、天宮寺君…気持ちはわかりますが、いつ敵が襲ってくるのかも…今みたいな光が、いつまた襲ってくるのかも分からない状況では全員で動くのはあまりに危険すぎます。」

だからこそ、そんな得体の知れない敵が相手ともなれば。いくら人間の枠組みを超えた領域に立っている砺波であっても、警戒せざるを得ないのか。
…家族が消えてしまった可能性に逸る鷹矢とルキを宥めつつ、自身も平常心を保つのが精一杯であろう砺波もまた見るからに困った顔を浮かべながら。
今度は自分達もあの赤い重光から逃れられないかもしれないという、最悪の想定すら砺波には思い浮かんでいるのだろう。
情報が少なすぎる…動こうにも動けないこんな状況では、誰もどう動けばいいのかが全くもって分からないままで―

そうして―

「だが、このままここで何もせずにいるわけにもいかんぞ！」
「そうだよ！それに、もしかしたら街に生き残った人がいるかもしれないし！」
「ですが…」
「…鷹矢、ルキ…一旦考えを纏めよう。砺波先生、もしさっきの光を犯人が出したんだとしたら…元凶を倒さないと、いつかまたどこかで同じような事が起きる可能性もあるってことですよね。」

「ええ、そうですね。しかし、そんな存在と戦える者などごく僅か…となれば、君たちが叶う相手では…」

家族が消された可能性に逸る鷹矢とルキを、この場にて唯一冷静さを持っているとも言っていいであろう遊良が少々制しつつ。

今の状況を、一旦落ち着いて整理しようと砺波へと語りかけた…

その時―

―『…ですから申し…たはず…貴方に扱い…れる力ではないと…それを、こんな…に扱…など…』

―『わかってる！けど、も…時間…なかっ…んだ…でも、ま…かコレで…消え…かったなんて…』

―『…そ…も貴方…しいと…えば…貴方ら…いですが。わか…ました、ですが…方に残…れた時間は…う僅か…でしたら、そ…時間をどうぞ…好きに使…て下さい。…それと、力…行使…きる…は精々あ…1度…努々忘れ…ことな……自…が一体…なのか…』

―『あぁ、今度…そ間違えな……今度…そ…』

（ッ…）

不意に、突発に、意図せず―

襲ってきたのは、学園を出る時と同じく鋭い痛みを伴った頭痛―

また、見えた…今度は、更にはっきりと。

そう、あの鋭い痛みを伴った頭痛の中に、再び遊良の脳裏にはあるイメージが浮かび上がってきたのだ。

今見えたのは、先ほどの頭痛の時に見えた見慣れない光景とは違う…何やら見慣れた光景と、先ほどのイメージよりも更にはっきり聞こえた、誰かと誰かが会話をしていたその内容。

…誰の声かまでは分からない。何せ、あまりにノイズが酷かったから。

けれども、どこかで聞いた事のあるような気もしないでもないその声と、どこかで聞いたことのあるような気もする言葉が…

どこか悲痛なモノとなりて、遊良の心に哀しみという名の共感を少なからず与えようとしているかのよう。

そして…

突然見たその光景と会話を見聞きして、遊良ははっきりと理解してしまう。そう、学園を出る時に見えた光景と違い、たった今見えたモノは紛れもなく…今この時この時間に、『誰か』と『誰か』が決闘市内で話しているモノである、と言う事を。

…確証はない。確信もない。

あるのは単なる勘…見えたのが紛れも無い『今』の光景であるという、確証も確信もないたなる『理解』だけ。

まぁ、学園を出る時に見えた荒廃していた謎の場所とは打って変わって、たった今見えたのは遊良も見知った『決闘市内』の駅前の光景であったのだから…何の根拠もなく遊良がそう『理解』してしまったしても、この混乱した状況の中ではソレはある意味仕方のないこととも言えるのだろうが。

ともかく…

「天城君！どうしました!?」

「あ、いえ…一瞬頭痛が…」

再び謎の光景を見て、ふらつき倒れそうになってしまう遊良。

急に鋭い頭痛が襲ってきて、そして見知らぬ聞き知らぬ光景と声が

突然聞こえて見えたのだからそれも当然と言えば当然ではあるのだが…
　しかし、今の光景を見て。遊良には、ハッキリと理解できた事がもうひとつあり…

「あの…砺波先生、気配が無いってことは…犯人ももう決闘市から居なくなったってことですか？」
「いえ、そこまではわかりません。ですが、憐造でさえ決闘市を消すために決闘市内に居た事を考えると…おそらく、まだ犯人は市内に潜んでいると考えるのが妥当でしょう。」
「…じゃあ…多分、今みたいな危ない光はすぐには襲ってこないと思います…」
「ほう、それは何故？」
「なんでか分からないけど、でもそんな気がするんです…今度は、もっと確実な手を取ってくるって……確証はないけど、でもそう確信できるんです。」
「…」

　遊良の語ったその言葉…ソレはとてもじゃないか、到底信用するには値しない希望的観測にも似た妄言とも取られる代物だったことだろう。
　何しろ、遊良の言葉を聞いて…鷹矢もルキも、遊良に対し『突然何を言い出したのか』と言わんばかりの視線をまじまじと向けているのだから。
　それはルキからしても、そして遊良をこの世の誰よりも理解しているであろう鷹矢をもってしても理解しきれなかった突然の発言。
　しかし、それもそのはず。人間を粒子と化して消してみせたあの赤い重光と、そして決闘市内の全ての人間が消えたかもしれぬ人知を超えたあの光景を見て…
　一体、誰が遊良の『勘』にも等しいソレを素直に信じられると言うのか。

果たして、今の遊良の言葉に一体どれほどの説得力があるのだろうか。何しろ、誰だって今この状況に置かれたらこう思うはず…

今再び、あの赤い重光がすぐにでも襲ってくるかもしれない…と。

しかし…

嘘偽りなくそう告げる遊良の目に、砺波は一体何を感じ何を考えているのか。

遊良の言ったことが本当ならば、決闘市の人々や鷹矢やルキの家族…それに砺波の家族が消えてしまったのは遊良の所為とも言えるのだが…

しかし、今ソレを感情的になって責め立てるような真似をする者などここは居らず。まぁ、そもそも今の非現実的な現象が本当に遊良を狙ったモノだったのかなど、ここに居る者達には分かり得ることでは断じてないのだから…

鷹矢も、ルキも、そして砺波も。遊良を責める言葉など言うはずもないのだが。

そして…

遊良の言った言葉に対し、砺波は少々考える素振りを見せつつ…今再び、ゆっくりとその口を開き始める。

「…わかりました。おそらくもう記者たちに見つかる心配もしなくても良いでしょう。そして全員で固まりすぎるのも逆効果…なので二手に分かれます。私は一度学園に戻りますので、君たちは無理のない程度に街の状況を調べて下さい。ですが必ず3人で行動すること…もし何かあれば、すぐに私に連絡をしなさい、いいですね？」

「はい、砺波先生。」

人知を超えた現象を目の当たりにして、それでもなお自分の教え子を信じる事を取った砺波の選択は果たして正しいのか間違っている

のか。
そんなコト、今この場にいる誰も知りえることでは無いとは言え…
それでも、砺波の許可によってはっきりしたことは唯一つ。そう、何もわからない現状において、この場で口論している事こそが最も無駄なことなのだという事だけはこの場にいる誰しもが共通の認識として抱いている確かな事。
…他に選択肢も無い。ただ混乱して時間を経たせることはこうした状況においては絶対にしてはならない。
ソレを、昨年度の『異変』や【決島】と【裏決島】で遊良達もまた身に染みて学んでいるのだろう。学生という年代には似合わぬ、その『非常時』に対する経験則は伊達ではない。そんな遊良達の強さを砺波もまた理解しているからこそ…
砺波は少々悩みつつも、お互いに『何か』あった時の為に念のための集合時間と集合場所を決め。渋々ながらも、街に戻る事を遊良たちへと許可し…

そうして―

遊良達は、逃げ出してきたはずの決闘市へと今再びその足を踏み入れる。

…人の気配の消えた決闘市、霊園の入り口にて遊良達は【白鯨】と別れ。

すぐに連絡を取れる準備だけは怠らず、別行動にて決闘市内へと今一度その歩を進め始めるのか。

そして…その代わり果てた光景を、すぐに遊良達は理解する事となる。

―気配が無い。

人の気配が、全く無い―

そう…誰も、いない。

道端にも、街角にも…店内にも屋内にも公園にも軒先にも河川敷にも車内にもどこにも人の姿がひとつも無いのだ。

…また、そこら中に散らばっている、『人の形』をした衣服が証明している。

遊良達の視線の先、その衣服が落ちているそこには…今の今のたった今まで、確かに『人』が居たのだと言う事を。

…公園では子ども達が遊具で遊んでいたのだろう。道端では主婦が井戸端会議をしていたのだろう。河川敷では学生がデュエルをしていたのだろう。

今の今まで、誰が何をしていたのかが分かる程に―

落ちている衣服に触れれば、人のぬくもりがまだ残っているソレは…まるで日常の中から人間だけをそのまま切り取ったかのようなその光景であり、その不気味さは、ただただ遊良達へと不安と気持ち悪さを与えるだけ。

人間だけが切り取られたその光景…それはＳＦ映画で観たような終末感。

そんな無人と成り果てた決闘市を進めば進むほど、先頭を歩く遊良の心臓はその鼓動を増していくばかりで…

…それに伴い市内を進む遊良達に浮かんでくるのは、鷹矢やルキの両親と言った見知った顔である人達も同じく『消えて』しまった可能性。

考えたくもない嫌なイメージ。想像したくもない最悪の展開。

そんな心の不安感が、ただただ遊良達の中では増していくばかり。

そう、これだけ人に会えず、喚く声も泣く声も聞こえないと言う事は…おそらく、砺波の言っていた通り。本当に決闘市の全ての住人が例外も特例もなく全員『消滅』してしまったと言うことにまず間違いなく…

それはつまり、鷹矢やルキの両親も―

―無人となった決闘市の、見慣れているはずの東地区を歩き続ける遊良たち。

街の外れにあった『霊園』から出発し、学園までの道のりを経て…

…人の気配が消えたために、もう隠れる心配も無いいつもの当校ルートを逆行し。会話もなく、遊良たちは早足にて帰路を急ぐのか。

あちこちに散らばった、衣服やデュエルディスクやその他の所有物などが視界に入りつつも…

遊良も、鷹矢も、ルキも。ただただ、その歩を進め続け…

そうして…

東地区の住宅街、その見慣れた街の景色の中で。

遊良たちはまず、ルキの家に到着した。

「…ルキ、鍵開けてくれ…」

「うん…」

ゆっくりと…

ルキが自宅の鍵を開け、そのまま遊良達は高天ヶ原家へと足を踏み入れる。
家の中はあまりに静か。すでに日も暮れ始めている時間帯だと言うのに、家の中には生活の音らしき音が何一つとして感じられない。
…いつも出迎えてくれるルキの母親の優しい声も。いつも気さくに話しかけてくれるルキの父親の声も。
家の中にはまるで音はなく、ただただ無音の重みがどこまでも遊良達に重く圧し掛かっていくだけではないか。
また、この無音のせいなのか…
遊良も、鷹矢も、ルキも。3人は下手に声を出せず、無言にて家の中にてルキの両親を探し始めるのは彼らもまた『最悪』を思い浮かべてしまっているが故の仕方の無い行動なのか。
…ルキがリビングを。鷹矢が風呂場の方へと。
そして遊良が、階段を上がって2階の方へとそれぞれ無言で探し始め…

そして…

二階に上がってすぐに、遊良が見たモノは—

「ッ!?お、おじさん…おばさん…」

…遊良が思わず息を呑んでしまったのも無理は無い。
何せ、それは『想定』していたとは言え…2階に上がったばかりのそこにあったのは紛れもなく…
階段を上がってすぐの廊下に…
直前まで、ルキの父母が身に着けていただと思わしき…

『服』が、人の形をして落ちていたのだから。

「どうしたの!?お父さんとお母さんいた!?」

また、息を呑むようにして零された遊良の声が、無音の家内では少々響きやすかったのか。

遊良の絶句を耳に入れてしまったルキが、弾けるようにしてリビングを飛び出し…

そのまま、駆け足にて階段を駆け上がってきてしまったではないか。

「ッ、来るな、ルキ!」

「なんで!?何で止めるの!?」

そして、遊良の静止も虚しく。

階段を駆け上がってきたルキが、遊良の手を払いのけて…

その光景を、見てしまった―

「あ…」

…絶句。

目を見開き、言葉を失い…

「あ…あぁ…」

そう、両親だったであろうモノを、あまりにハッキリとその眼に映してしまったルキは言葉を失い…

その場に、崩れ落ちそうになってしまって―

「見るな!」

「っ…だ、だって…い、今のって…」

「まだそうとは決まってない！とにかく一度出よう、家の中には…誰もいないみたいだから…」

茫然自失…

あまりにショックな光景を目の当たりにしてしまい、足に力の入らなくなってしまったルキを支えながら。

どうにか高天ヶ原家の外へと出た、遊良と鷹矢とルキ達一行。

そのまま、遊良がルキを玄関先に座らすと…ルキは力なく玄関前に蹲って、静かに泣き始めてしまい…

…当たり前だ。

何せ血の繋がった両親が消滅してしまった痕跡を、ルキは確かにその目で見てしまったのだから。

赤の他人が消えてしまっているのとは訳が違う。ここまでの道のりで見た決闘市の状況を考えれば、ある程度は予想できていたとは言え…

あれほどハッキリと親が消えてしまったであろう光景を見てしまっては、相当の衝撃と絶望感がルキを瞬間的に襲ったに違いないのだから。

ルキにとっては誰よりも消えて欲しくなかったはずの、血を分けた自分の両親が消えてしまっていたというそのショック。それは果たして、どれほどの絶望となりて今のルキを襲っているというのだろう。

…ルキのすすり泣く声が、門の外へと離れた遊良達にも聞こえてくる。

そんな、両親を失ってしまった今のルキの気持ちは…少し離れた遊良も鷹矢も、きっと理解出来ているはず。

何しろ、遊良は幼少の頃に両親を失くしているのだし…鷹矢だって、言葉と態度に出していないだけで両親の状況はきっと今のルキと同じなのだから。

だからこそ、すすり泣くルキの姿を一応視界に捉えつつも…遊良も鷹矢も、今は少し離れてそっとしてやるのが正解なのだという事を無言にて把握しつつ。
ルキには聞こえないように気遣いながら、隣に立つ鷹矢へと…
遊良は、ゆっくりと言葉をかけ始めた。

「…鷹矢、次はお前の実家に行ってみるか？」
「無駄だ。街の現状と、ルキの家を見て確信を得た。親父もお袋もツボ…他の親戚や使用人たちも、確実に全員消されている。」
「…そっか。」
「仕方なかろう。理事長の見立てでは、決闘市の全ての人間が消されているのだ。俺の親父たちやルキの家族だけが…そう都合よく、生き残っているはずがない。」
「…それ、ルキにはそんなハッキリ言うなよ？」
「うむ。」
「あと…そんな不安そうな顔、ルキには見せるなよな。お前が不安そうな顔してると、こっちまで不安になっちまう。」
「む…そんな情けない顔などしておらんぞ。」
「してるって。」
「しておらん。」
「してるだろ。」
「しておらん！」
「…そうかよ。なら、そういう事にしておいてやる。」
「…うむ。」

まるで動揺しているようには到底見えない、鷹矢の鉄仮面ぶりを見てもなお鷹矢へとそう言葉をかける遊良。
…今の鷹矢の顔が、遊良にはどのようにして見えているのだろう。
それはきっと、幼少の頃からこれまでの間…ずっと鷹矢と共に過ごしてきた遊良だからこそ見える、幼馴染特有の特別な見え方に由来するモノに違いなく。

…他人には無表情にしか見えない鷹矢へと、そう言葉をかけられるのは全世界探しても遊良一人だけのはず。
すると、遊良と鷹矢の会話が途切れた時点で。
彼らの後ろから、涙で眼を腫らしたルキが…
門の外に居た二人へと、鼻水混じりに声をかけてきて…

「…ごめん、少し落ち着いた。」
「ルキ…大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃないけど…でも、泣いてたってお父さんとお母さんは帰ってこないから……ねぇ、これやった犯人捕まえたら…みんな、元に戻るのかな？」
「…わからない。けど可能性はある。だって俺が無事だったんだ…消されなかったのか、一回消されたけど元に戻ったのかはわからないけど…もし俺も一回消されてるんだったら、おじさんたちも元に戻せる可能性はあると思う。」
「一回消されてるとか…怖いこと言わないでよ、もう。」
「…だから可能性の話だって。でも可能性が無いよりマシだろ。」
「…うん。」

明らかにショックを隠しきれていないルキの目は、今にも再び涙が溢れ出しそうなほど。
しかし、それでもなお涙を塞き止めて遊良へと声をかけたルキの言葉は少々震えつつも…涙と共に哀しみを少しは外へと吐き出したからか、多少は現状の見通しを考えられるまで気持ちを立ち直らせている様子。
…普通の女学生であれば、アレほどショッキングな光景を見てこんな短時間で気持ちを切り替えられるはずがないと言うのに。
それでも、すすり泣きの後に自らの足で立ち上がりそう言える彼女は、確かに自らの意思によって立ち上がった。それは彼女の持つモノによって与えられた、人とは異なる運命によって培われた心の強さでもあるのだろうが…

けれども、人知を超えた現象に見舞われ、両親が文字通り『消滅』してしまったであろう光景を目の当たりにした今この場においては。果たして、こんな少女に立ち上がれるだけの強さが備わっていることが良いのか悪いのかなど…

決して、誰にも分かりはしないのだが。

ともかく…

「よし、では理事長に連絡を入れろ。こっちの用事は済んだとな。」

「あぁ。」

もうこれ以上の散策は無駄だと判断したのか、ソレとも自分の家族の惨状を見たくはないからなのか。

こちら側の決闘市の散策は終了したのだとして、鷹矢の言葉の後に遊良が砺波へと電話をかけようとした…

その時だった―

―『…おい、ここがわかるか?』

（ッ!?）

不意に…

襲ってきたのは、これまで以上に強い頭痛。

それ以上に『視えた』のは、これまで以上にハッキリとした『意思』と『光景』。
そう、ノイズがかかっていた今までとは違い、これまで以上にはっきりと聞こえたその声は…
まるで、その光景が視えた遊良自身へと語りかけているかの様な代物となりて。遊良の脳裏へと、再び突如襲い掛かってきて…

(こ、これは…)

…否―

語りかけている『かの様な』ではない―
ソレが視えた遊良は、無意識にてハッキリと理解してしまった。
そう、今の声は…
間違いなく、今ここにいる自分自身へと語りかけてきていると―

そして―

―『オレには分かる…オマエ、見てるんだろ?だったら『ここ』に来い…オレと戦え…今度こそ、オマエを消し去ってやる。』

これまで以上の頭痛に思わず頭を抱え、地面に膝を突いてしまった中で。
ノイズの無い、あまりにクリアな映像の中に…遊良の目に映ったのは、あまりに『見慣れた』どこかの光景と…
そして視えたのは、『そこ』に大胆不敵にも腰掛けた、今までノイズに隠れてたからこそ見えなかった…

しかし、遊良にとっては決して忘れられぬであろう人物の姿が―

そう…

それは―

「ッ…ぁ…」
「遊良！どうしたのだ！」
「だ、大丈夫!?ねぇ遊良！」
「あ…い、今のは…」

視えた…
聞こえた―
その場所も、声も、姿も―
今までノイズに隠れていたモノが、全て視えた遊良の脳裏には。あまりにハッキリとしたモノが、どこまでも確信めいたモノとして視えてしまったのだ。
そのまま、ふらつく足で立ち上がり…よろける足取りで少しずつ歩き始めてしまった遊良を、後ろから鷹矢とルキが動揺した声で制止するも…

「行かなくちゃ…俺を、呼んでた…」
「えっ!?急にどうしたの!?ねぇ遊良！なに言ってるの!?」

「一体どこに行くと言うのだ！」

鷹矢とルキの心配する声も、今の遊良には聞こえない。

…ふらふらと、よろよろと。

歩き出した遊良に浮かび上がってしまったのは、確信めいた嫌な予感と…

そして、呼び出されたままにソコへ向かわねばならないと言う、何故か裏切れない強制的な責任感。

「アイツの背に…アレが見えた…」

そう、遊良に視えたのは他でもない―

「アイツは今、父さんと母さんのところに居る…行かなくちゃ…あそこに…」

―…

…日が落ちる。

夕日が完全に山に隠れ、黄昏も次第に夜を迎えようとしているそんな時間帯。

無人と成り果ててしまった決闘市内の散策を終えた鷹矢とルキは、『何か』を感じ取ったとみられる遊良に導かれるままに…

とある場所まで、『戻って』きていた。

…そう、『戻って』、きたのだ。

何せ、つい先ほどまで遊良達は確かに『ここ』に居たのだ。
それは決闘市の散策を始めた場所、決闘市から逃げ出すために向かっていた場所…
鷹矢とルキも、なぜ遊良が再び『ここ』に戻ってきたのかの理由を知らない。遊良が突然謎の頭痛に襲われたかと思うと、説明もなしに『ここ』に戻ると言い始めたのだから…
遊良に何が視えたのかを知らぬ鷹矢とルキからすれば、遊良の行動には疑問を感じないわけがなかったことだろう。

そう…

何のつもりか、遊良と鷹矢とルキの3人は…

砺波に指定されている集合場所へと戻らずに、今再びこの場所へと…

『霊園』へと、戻ってきていた。

風が吹く…

侘しさを伴う『霊園』に―
それはまるで、無人となってしまった決闘市を憂いているかのような寂しい風。
夜を迎える寸前の、孤独という名の渇きを帯びたどこまでも哀愁を感じさせる風が静かに霊園を吹き抜けており…
…そんな霊園の中を、遊良を先頭にして歩き進める3人の子ども達。
なぜ遊良がふらつく足取りで霊園に戻ってきたのかを鷹矢とルキは知らない。けれども、止めても止まらぬ遊良の足取りを鷹矢たちは止めることが出来ず…
それ故、遊良の目的も思考も分からぬ鷹矢とルキは下手に口を開く事が出来ず。ただただ、遊良が向かおうとしている先へと異様な雰囲気のまま着いていくだけしか出来ないのか。
…そう、何故か遊良の行動を、鷹矢たちは止める事ができず。
それは静止しても止まらず、何かを感じた故に『そこ』に向かわねばらないとして歩き出した遊良の歩みが無意味、無目的なモノではない事を鷹矢とルキにも分かったからこその先導の任せなのか。
そう、先の頭痛で、遊良には一体何が視えたのか、そして一体何を感じたのかが鷹矢とルキには分からぬとも、
それでも、幼馴染達は何かを感じたのであろう遊良の行動を止めることはせず…
何時またあの赤い重光が襲ってくるかも分からぬ切迫感と、未だ姿形も見えぬ敵の影と…そして血の繋がった家族が消されてしまったショックとが纏わり付いている今の鷹矢とルキからすれば、何もわからぬまま決闘市を練り歩くのはただただ負担なだけだと言うのに。
現状を打破する事を何も思い浮かべられない鷹矢とルキは、ただ遊良の後を着いていくだけで…

そして…

不意に立ち止まった遊良達の前に―

「…来たか。待ってたぜ。」

…と、静かにそんな言葉が放たれた。

「よく逃げなかったな。まぁ逃げたところで逃がすわけないけど。」

それは、ノイズ…
フードの奥から漏らされる、ノイズに隠された歪な声。
…また、そう告げてきたのは他でもない。
辛うじて男だと言うことだけが分かるノイズ混じりの声で、不躾にも遊良の両親の墓に腰掛けた…
故人に対しあまりに無礼な振る舞いを恥じぬままの、あまりに異質な雰囲気を纏った一人の人間の姿。

そう、そこに居たのは紛れもなく…

全身を覆いつくすほどに長い、黒いフードを纏った…

異様な雰囲気の、謎の男であった―

「…まさかアイツが、遊良を襲ったというフードの男か？」
「きっとそうだよ…だって…凄く、怖い…」

また、現れたフードの男を見て。
鷹矢とルキが直感的にそう感じたのも無理はなく、それほどまでに彼らの前に現れたフードの男の纏う雰囲気はこれまで彼らが出会ったことの無い程に異質なモノとなって放たれているのだ。
…感じるのは、、恐ろしいほどの怒気と圧倒的な怨嗟と…そしてそこに居るのに、まるで『居ない』のではないかと錯覚するほどの気配の無さ。
それは遊良から聞いた証言と一致する、あまりに不気味な気配と装用。それ故、異様に遊良を敵視しているかのようなフードの男を一目見ただけで…
鷹矢とルキには、目の前のフードの男が紛れもなく遊良の『敵』であるのだと頭で考えるよりも先に理解出来てしまっていて。

そして―

「なんだよ、今度は鷹矢とルキも一緒なのか。…相変わらず、一人じゃ何も出来ない屑だな、オマエ。」
「…お前こそ、何が目的でこんな事を…」
「ハハッ、『目的』？そんなこと……オマエが一番よく知ってるだろ！」

―！

奮える…
ノイズの怒号により大気が奮える―
…それはまるで怒り狂った獣のソレ。
放たれた紛れもない怒り、フードの男が放つ怨嗟の篭った怒号によって…霊園の大気が震えて痺れ、草木が怯えざわめき立ち始めてし

まったのだ。
…尋常じゃない、常人じゃない。
およそ人間を超えたモノでも、ここまでの『怒号』を放てる者などそうは居ないに違いない。
それほどまでに、このフードの男が放った怒号は明らかに常人を超えたモノとなりて遊良と鷹矢とルキの3人へと容赦なくぶつけられ―

「…ッ!?」
「今度こそオマエを消し去ってやる！骨も残さず、肉片ひとつ残さず！オマエを消す為だけに、オレは今まで耐えてきたんだ！」
「ぐっ、き、貴様は何者だ！何故そんなに遊良を敵視している！」
「あなたは誰なの!?何でみんなを消しちゃったの!?」

それ故、そんな『怒号』をいきなりぶつけられたが故に。鷹矢とルキも、返す刀で反射的に声を上げずにはいられなかったのだろう。
…大気が震え上がる怒号の中で、反射的にそう言葉を返した鷹矢とルキ。それは熱湯を触ったときの脊髄反射にも似た、人間の持つ反射運動の一種が如き速度と反応。

しかし、普通であればこんなにも激しい『怒号』を受ければ身が竦み体が奮え…とてもじゃないが声を上げることなど出来はしないはずだと言うのに。
そう、常人であれば、こんな凄まじき怒りに中てられれば怖れから動けなくなってしまう事は必至。野生の獣にも似た、空腹の龍にも似た…こんな怒号を中てられれば、例え誰であろうと思考が吹き飛ばされてしまうはずだと言うのにも関わらず…
それは鷹矢とルキが常人離れしているだとか、この怒号を跳ね返す精神を持っているとかでは断じてない。

咄嗟に、反射的に―
ただ、鷹矢とルキは『初めから』この怒号にが『効かない』かの様な反応を示しただけ―

「…『誰』…か。オマエらにそんな事を聞かれるなんて…凄く、不思議な気分だな。」

だからこそ、凄まじき怒号のその直後に。
鷹矢とルキにそう聞かれたフードの男は、一体何を考えたのだろうか。

…怒りから、消沈へ。怒号から、静寂へ。

相反する感情を即座に入れ替えたフードの男は、まるで先の怒号が嘘のように…
フードの奥から覗くその見えない視線にて、遊良ではなく鷹矢とルキをあまりに真っ直ぐに見つめながら―

静かに…

腰を降ろしていた遊良の父母の墓から降りたかと思うと。

今…

ゆっくりと、そのフードを取り―

そして―

「…ッ!?」
「う、うそ!?」
「ぬぅ!?」

現れたその顔を見て、遊良達3人は思わず驚愕を呈してしまった―

…それもそのはず。

何せ、遊良達の目の前に現れたその顔は…そこには絶対に『居ないはず』の人間の顔だったのだから。

そう…

そこに居たのはありえない人物…

そこには、絶対に『居ない』はずの人物―

そのまま、フードを取った男は…

「オレだよ…」

静かに…

あまりに静かに、『その名』を零し―

「オレはアマギ　ユーラだ。そこにいる…ソイツ自身だよ。」

そう、そこに居たのは紛れもなく―

鷹矢とルキの間に立っている者と、全く同じ者…

顔も、声も、何もかも同じ…

もう一人の天城　遊良が…

そこには、居た―

―…

ｅｐ１０６「もう一人の天城　遊良」

「そこにいる…ソイツ自身だよ。」

ゆっくりと…

そう告げてきたフードの男の言葉を、遊良と鷹矢とルキは理解出来なかった。

そう、誰が信じられるものか―

余りに信じられない目の前の光景と、ソレを聞いた遊良達３人が言葉を失い固まってしまったのも当然と言える程の衝撃が、今遊良達の目の前に現れたのだから。

…それは絶対にありえない光景。それは絶対に信じられない発言。

たった今フードの男から零されたのは、彼らにとってはあまりに『ありえない』名前で…

…フードの男は今、確かに自分の事をこう名乗った。

―『アマギ　ユーラだ』…と。

「な……ふ、ふざけるな！そ、そんなはずないだろ！天城　遊良は俺だ！お前は一体誰なんだよ！」

だからこそ、一瞬の後に。

自分と同じ名前を名乗ったフードの男に対し、弾けるようにしてそ

う口を開いた遊良の声がどこか震えていたのは仕方が無いことなのか。
…動揺を隠せていない、驚愕と不信に駆られた奮える声。
そう、以前自分を襲ってきたフードの男が、どうして自分と同じ顔と名前をしているのか。その理由も真相も何もかもわからぬ遊良からすれば、突然現れた因縁の相手が自分と同じ顔と名前をしていたことに対し、その驚きを隠せるわけもなく…
…衝撃で心が揺さぶられる。驚愕に動揺を隠せない。
そんな、激しく動揺している遊良へと向かって。
フードを取った、自らを『アマギ　ユーラ』と名乗った男は…
更に続けて、その口を開く。

「言った通りだ。オレはアマギ　ユーラ…Ｅｘ適正の無い…正真正銘、このクソみたいな両親が産んだな！」

―！

そして…
淡々と、そう言い捨てて―
苛立ちを隠さぬままに、遊良の両親の墓を思い切り『蹴飛ばした』
フードを取った方のアマギ　ユーラ。
…それは明らかに苛立ちを隠せていない、感情に任せた突発的な行動。
遊良と同じ顔をした者が、遊良の両親の墓を苛立ちのままに蹴り飛ばすというその光景は遊良をよく知る者であればきっと違和感を生じさせる光景であるはずだと言うのに。

「お前…父さんと母さんの墓に…」
「うるさい！何が墓だ…どうせここにコイツ等は居ないんだ！オレを置いて、どこかに逃げたクソみたいな両親の！誰も居ない、空っぽの墓を蹴り飛ばして何が悪い！」

「ッ、なんで墓が空っぽだって知って…」
「まだ理解出来ないのかクズ野郎！理解力も無い、判断力も無い、Ｅｘ適正も無いオマエの存在が世界にとってどれだけのゴミなのか！オマエは何もわかってない！」
「…」

けれども、アマギ　ユーラの怒りは更にそのボルテージを上げていく。
…遊良と同じ顔をしていても、全く別の感情にて動くその様は明らかに異質。両親の墓を蹴り飛ばすのも、決闘市の人々を消し去るという残酷なまでの所業をしでかしたのも、普段の遊良は絶対にしようとも思いつこうともしないモノに違いないはず。

…それでは、一体このアマギ　ユーラは『何』なのか。

…いくらフードの男が自分と同じ顔をしていても、それが『自分』ではないと言う事など遊良本人は勿論わかっている。
だって、『天城　遊良』は今ここにいるのだから。
だとすれば考えられるのは変装か、整形か…自分自身が紛れも無く『自分』であるという意思がある遊良には、目の前の自分そっくりな男がどうしても『そう』としか考えられず…

「なぁ、鷹矢、ルキ…オマエらならわかるだろ？オレが、誰なのか…」
「ぬぅ…全く理解できん…だが、例え遊良と同じ顔をした貴様が遊良を名乗ろうとも！この世に遊良はただ一人！俺の隣にいる遊良が、紛れもなく本物の遊良だ！」
「そ、そうだよ！遊良が２人いるわけないじゃん！」
「…あ？あぁ、そうか、そうだよな…『今』のオマエらからしたら、確かにソイツが本物と言えば本物か…けど…」

そして、自らをアマギ　ユーラと名乗った男は。続けて、驚きのあ

まり言葉を無くしていた鷹矢とルキへと向かって…声のトーンを変えて、語りかけ始める。
しかし、それは遊良へと向けられていた苛立ちと怒りの視線とは、根底からして違う異なる声質。
そう、遊良へと向かって向けられていたモノから一転。鷹矢とルキへと向けられるユーラのソレは、まるで遊良がいつも鷹矢とルキへと向けるモノそっくりとなりて二人の耳へと届けられるのか。
そのまま、遊良と同じ名前を名乗った同じ顔をしたアマギ　ユーラは…更に静かに、言葉を零し始めるのみ。

「オレは確かにアマギ　ユーラだが…正確に言えば、『ひとつ前』のアマギ　ユーラでもある。」
「え？ひ、ひとつ…前？」
「どういうことだ！一体何を言っている！」
「そのままさ。それに、鷹矢、ルキ…オマエらならわかるはずだ。オレが…いや、オレも、『本物』だって…」
「む…」
「…え？」

…一転。
そう、遊良へと向けていた苛立ちの視線から即座に。
『ひとつ前』という不可解な言葉と共に、鷹矢とルキへと向けられたアマギ　ユーラのその視線は遊良へと向けられていた『敵意』を孕んだモノとは全くもって別物の…
慈愛すら感じられる、驚くほどに柔らかな代物となりて鷹矢とルキへと向けられる。
果たして…そんな視線を向けられた鷹矢とルキは何を感じるのだろうか。
声の質も、視線の感触も…そう、アマギ　ユーラから、その声と視線を向けられれば。鷹矢とルキもまた、きっと感じるモノは同じはず

で…
…そのまま、鷹矢とルキは。
自分の感覚すら信じられない動揺の中で、目の前の光景に対しそれでも言葉を零すしかなく。
「ね、ねぇ鷹矢…」
「ぬぅ…遊良だ…俺が言うのだから間違いない…アレは…遊良だ…」
…それは他の誰も理解出来ないモノであっても、鷹矢とルキにはどうしてもわかってしまう微細なる感覚。
何せ、二人はこれまでの人生の大半を遊良と共に生きてきたのだ―
遊良が2人居るこの光景が信じられなくとも、アマギ　ユーラから感じるモノが遊良そのモノであるという『確信』が…どうしても、鷹矢とルキの中には浮かび上がってきてしまうのだろう。
特に、鷹矢…
生まれた日は一日違いなれど、たった数時間の差により生まれた瞬間から共に過ごしてきた遊良と鷹矢。そんな、お互いがお互いの事を理屈ではなく感覚で理解し合っている自負が鷹矢にはあるからこそ…どうしても、鷹矢は理解してしまう。
纏う雰囲気、小さな身じろぎ…
声のトーンから感じられる微かな感情の上下や、呼吸の深さや瞬きの仕方に加え、風に揺れる髪の毛一本の揺らぎ方ひとつとっても…
フードを取り正体を現した『アマギ　ユーラ』は…
間違いなく、『遊良』である…と、言う事を。

アマギ　ユーラの、その『目』を見てしまった鷹矢がそう感じてしまったのだからそれは仕方の無いこと。
それは自分達の横に、正真正銘本物の遊良が居るとしても。それでも、『そう』としか思えない程に瓜二つな目の前のアマギ　ユーラを見て…無意識の内に鷹矢とルキそう感じてしまったのならば…特に、生まれた時から共にいる鷹矢さえもがそう感じてしまうのならば…
この光景がいくらありえないモノなのだとしても、それは例え鷹矢とルキの隣に遊良が居るとしても。
それでも、目の目のアマギ　ユーラを『本物の遊良』と感じてしまうのであって―

「鷹矢！お前何言ってんだ！」
「む…し、しかし……い、いや、そんなはずは無い、遊良はここにいる遊良のみ、し、しかし、奴も…」
「何だよそれ！ルキ、お前もアイツが本物だって思うのか？」
「だ、だって…だってぇ…」
「流石だな、オマエらなら分かってくれると思ってた…流石は、オレの幼馴染だな。」
「ッ、お前ぇ！鷹矢とルキに何をした！それに『ひとつ前』ってどう言う意味だよ！お前は何者なんだ！一体何処から来たんだよ！」
「だから言っただろ、『ひとつ前』だ。それ以上でも以下でもない…いや、以上は無いか、だって『ここ』が『今』だってアイツも言ってたしな…」
「だから意味がわからないんだよ！パラレルワールドとか、別の世界線とか、そういうのから来たって言うのか!?」
「プッ…ハハッ！パラレルワールド？別の世界線？…あぁ、そりゃそうだよな。『世界』の事を何も知らないオマエからしたら、そんな単純で幼稚なことしか思いつかないよな。」
「だったらお前は本当に何なんだよ！俺と同じ顔したお前は、どうしてここに現れたんだ！一体何の目的があって『こんな事』をしたって言うんだ！」

悲痛とも思える遊良の叫びが、夕暮れの霊園に木霊する。
…何せ、誰よりも自分の味方であるはずの鷹矢とルキさえもが目の前の自分そっくりな男を紛れも無く『天城　遊良』だと認めてしまっているのだ。
認めたくない…認められるはずが無い。
『天城　遊良』はただ一人、ここに居る自分だけ。それは自分自身を紛れも無く『天城　遊良』だと分かっている遊良本人であれば尚更強く理解出来ていることだと言うのに…
それでも、誰よりも信じて居る鷹矢とルキがここまで惑わされていること自体が遊良にとっては屈辱でもあり、そして耐え難い苦痛でもあるのだろう。
目の前の偽物は、鷹矢とルキに何をしたのか。意味のわからない事ばかり述べて勝手な怒りを露わにし続ける目の前のアマギ　ユーラに対し、つられる様にして遊良もまた沸きあがる怒りを感じているのか。

…だからこそ、叫ぶ。

自分と同じ見た目をした、まったくの別人に―

遊良が、更にその声を荒げようとした…

―その時だった。

「なんで街の人達を消し…」
「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！」

―！

「…ッ!?」

「うるさい…うるさいうるさいうるさい！前にも言ったはずだ、オマエに知る権利なんてないって！オレの癖に喚くな…オマエが、オマエみたいな奴がオレだと思うと虫唾が走るんだよ！オマエの存在がオレをずっとイライラさせる…今のオマエの存在が、どうしようもなく不愉快なんだよ！どうして今のオマエだけが良い目に遭ってる！どうしてオマエだけがぁ！」

「な、何言って…」

「うるせぇぇぇぇ！オマエに知る権利なんてない…何も知らず、何も知ることのないまま！オレの前から消え失せろぉぉぉぉぉぉ！」

揺れる…振るえ、上がる―

突発的に放たれた、大気を震わすその叫びは紛れもなくキレた遊良の叫びそのモノ。

ビリビリと空気が弾け、音の振動が直に肌にぶつかるその叫び…それはおよそ常人には轟かせることなど出来はしないであろう、あまりに人間離れした咆哮となりて遊良達へと向けられて。

そして、切り替わる―

鷹矢とルキに向けられていた、慈愛を感じる柔らかなモノから切り替わり。遊良へと向けられるユーラの視線には、確かな苛立ちと怒りを内包していく。

そんな静寂と爆発が即座に切り替わる、怒り狂うアマギ　ユーラが一体『何』を言っているのかが…

遊良には、分からない―

「もう時間がないんだ…だから構えろ！デュエルだ、今度こそお前を消し去ってやる！」
「ッ…」

怒りのままに、苛立ちのままに。
もう我慢ならないのだと言わんばかりに、デュエルディスクを構えるアマギ　ユーラの雰囲気はまさに一触即発の爆発物そのモノ。
…しかも、遊良にとっては一度負けている相手。
その時はいくら『堕天使』を使えなくてまともなデュエルが出来はしなかったとは言え、あの時に向けられた敵意と殺意は紛れも無い本物であり、負けた代償の『消滅』の苦しみは尋常では無い程の苦痛を与えてきた。
しかも、このデュエルは前回と同じで確実に『実体化』したデュエルとなる。
…そんな、苦い思い出しかない相手との再戦は一体どれだけのプレッシャーを遊良へと与えていると言うのだろう。
更に言えば、目の前のアマギ　ユーラは昨年度の『異変』での紫魔憐造と同じような力を持っているかもしれない…
そんな、規格外かもしれない相手にもしまた負ければ…

待っているのは、確実なる死―

「やめろ遊良！本当に奴と戦うと言うのか!?」
「そ、そうだよ、逃げよ!?理事長先生に来てもらった方が…」
だからこそ、目の前のアマギ　ユーラが遊良本人だと言うことを理解してもなお。
それでも、遊良を止めにかかる鷹矢とルキの感情は紛れもなく今こ

こで戦いを起こす事がどれだけ危険なのかを、遊良と同じように理解しているからこそなのだろう。
…鷹矢もルキもわかっている。いくら目の前のアマギ　ユーラもまた『本物の遊良』であるのだとしても、それでも自分達にとっての『あまぎ　ゆうら』はこれまで共に過ごしてきたこの遊良であるのだと。
だからこそ、止める…得体の知れないユーラと、ソレに一度負けている遊良が戦うことがどれだけ危険なことなのかを。
いや、ソレは単純に、遊良同士の悲しい戦いなど見たくはないからなのかもしれないのだが…
まぁ、どちらにせよ決闘市中の人間を消してしまった力を持つアマギ　ユーラと、ここで突発的に戦うことはあまりにも危険だと言うことを、鷹矢とルキも理解しているからこそ。
今ここで突発的に戦うよりも、ここはひとまず逃げに走り…何とかしてくれそうな【白鯨】に救援を求めることが、何よりも得策だと言うことを前面に押し出しているに違いなく。

しかし…

「…で、でも…俺が…俺が戦らなきゃ駄目なんだ。アイツは俺を狙ってこんなことをした…ここで逃げたら…いや、逃げられない…アイツは…俺を、逃がさないから…」

アマギ　ユーラに応じるように、遊良もまたデュエルディスクを静かに構え始めるのみ。
鷹矢とルキの静止も虚しく…否、鷹矢とルキの思いなど、遊良には痛いほどよく分かっている。
けれども、遊良がここで逃げられるわけがないのだ。今ここで、あの自分そっくりな男と戦う運命に自分はあるのだと言うことを、遊良もまた直感的に理解しているが故に。
それは理屈ではない本能的な直感、理性などでは止められない血に

刻まれた根源的な衝動。ここで、この自分そっくりな男と戦うのは、逃れようの無い自分の運命―
何故かは分からないものの、ソレをはっきりと深く理解してしまった遊良は鷹矢とルキの静止を振り切ってでもデュエルディスクを構えるしかなく。得体の知れない謎の存在かつ、決闘市の全ての人間を消し去ってしまった謎の力を持っている相手に、逃げてはいけないということをその魂が感じてしまっていて。

だからこそ、静かに…そして、ゆっくりと。

鷹矢とルキの静止を振り切って、鷹矢とルキから一歩踏み出し。遊良もまた、アマギ　ユーラへと向かってその歩を進め始める。
また、そんな遊良の姿を見て…この戦いは止められないと言う事を、鷹矢とルキも察知してしまったのか。
それは遊良をよく知る鷹矢とルキだからこそ嫌でも察知してしまう悲しい理解。自分達の遊良も、現れたユーラも、どちらも『あまぎ　ゆうら』だと感じているからこそ…
『あまぎ　ゆうら』という存在が本気で戦おうとしているその硬い決意と2つの意思には、いくら鷹矢とルキであっても口を挟む事など出来はしないのか。

そして―

静かな風が、霊園の中を吹きぬける。
そんな、陽も落ちかけ、暗くなっている霊園…どこか不気味さを感じるような、しかしそれ以上の寂しさを感じさせる夕暮れの中の霊園で…

…そう、両親の名が刻まれた、しかし空っぽであるその墓の前で。

何の因果か、何の運命か。同じ名前、同じ声。同じ姿に雰囲気、そして所作までもがそっくり同じな遊良とユーラが…

互いに戦う運命にあると言う事を理解しながら、とうとうデュエルディスクを構えつつ…

お互いに、睨み合いながら―

―デュエル!!

それは、始まってしまう―

先攻は、アマギ　ユーラ。

「オレのターン！魔法カード、【儀式の下準備】発動！」

―！

デュエルが始まってすぐ。
ユーラの発動した1枚の魔法カードが、悲しき霊園に鈍い光を上げて輝き始めた。
それは現代では見ることすらないであろうモノであり、また一度ソレを見ている遊良とは違って…生まれて初めて実物を見た鷹矢とルキが、思わず無意識の内に声を漏らしてしまって。

「ほ、ホントに儀式!?遊良の言ってた通り…」
「奴め、本当に『儀式召喚』を…」

しかし、鷹矢とルキが思わずそう漏らしてしまったのも仕方がないのか。
…それもそのはず。たった今ユーラが発動したそのカードと、それに刻まれた『儀式』という文字は…
現代を生きる鷹矢とルキにとってはあまりにも聞きなれぬ、しかしあまりにも見知った…そして、あまりにも意表を突かれたカードであったからに他ならない。

―儀式召喚

この世界には、先史の時代から戦法の一つとして確立されていた『儀式召喚』と言う召喚法が存在している。
それは『融合魔法』とは異なる、専用の『儀式魔法』を用いて『特別』なモンスターを異界から降臨させる、Ｅｘ適正を必要としない召喚法として伝わっており…
…しかしそれを専門に扱う者など、既に現代においては存在すらしていない『Ｅｘデッキ主義時代』と呼ばれるこの時代。

そう、様々な戦術が繰り広げられているプロの世界においても、アドバンス召喚よりも太古の召喚法である儀式召喚を扱う選手など決闘界には存在しないほどに…

時代の流れに置いて行かれたという意味では、遊良が進んで扱うアドバンス召喚と似たようなモノではあるものの、この『誰もが知る召喚法』である儀式召喚は、今のこの『Ｅｘデッキ主義』である現代においては誰もが使え、しかしアドバンス召喚よりも人々の選択肢には浮かび上がらないほどの、それほど太古の召喚法となっているのだ。

…それは悲しき時代の成れの果て。そして哀しき時代の無情な流れ。

確かに『儀式』に関連したカードはこの時代にだって存在していて、そして新たな儀式に関連したカードだって僅かながらも製造されてはいる。

けれども、この時代においては儀式召喚はプロの世界においても扱う者など一人も居らず。

『Ｅｘデッキ至上主義』時代と呼ばれる現代においては、世界の人々の関心は『儀式』には向かず…Ｅｘデッキから飛び出してくる様々なＥｘモンスターにのみ注目を集めている世界の流れの中では、『儀式』に関連したカードの流通はとても低く、またその存在は実物その物すら見ることがほぼ皆無というのが現状とも言えるのだ。

それもまた、この世界が歩んできた歴史の流れと言えるのであり…

「オレが加えるのは【竜姫神サフィラ】と【祝祷の聖歌】！続けて手札の【魔神儀―ペンシルベル】の効果発動！手札の【竜姫神サフィラ】を見せ、手札からペンシルベルを、デッキから【魔神儀―タリスマンドラ】を特殊召喚！さらにタリスマンドラの効果で、デッキから儀式モンスター、【デーモンの降臨】を手札に加える！まだだ！【魔神儀―ブックストーン】の効果も発動！手札の【祝祷の聖歌】を見せ、手札からブックストーンを、デッキから【魔神儀―キャンドール】を特殊

召喚！キャンドールの効果でデッキから【奈落との契約】を手札に！」

―!!!!

【魔神儀―ペンシルベル】レベル３
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【魔神儀―タリスマンドラ】レベル６
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【魔神儀―ブックストーン】レベル５
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【魔神儀―キャンドール】レベル４
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

しかし、それでもなおその『儀式』に関連した効果を凄まじい勢いで発動しつつ。一瞬で、４体ものモンスターを展開してしまったアマギ　ユーラ。

彼の場に現れたのは、魔具に命を吹き込む創造主の手によって生み出された…歪な姿と成り果てた、神に捧げられるための小さき使い魔であり…

…羽とペン先、草の根と守護石、本と栞石、蝋燭と燭火。

２対で１体のソレが、４体―

そう、手札と、場と。目まぐるしく動くその激しいカード捌きは、扱うカードは違えども確かに彼のデュエルの勢いもまた『あまぎ　ゆうら』のデュエルなのだと言う事を、鷹矢とルキの目にありありと見せ付けているのか。

また、一度フードの男と戦っている遊良からしても…

以前のデュエルよりも凄まじい勢いで展開されるユーラのデュエルに対して、驚きこそ無いものの苦い記憶から冷や汗を垂らしつつ身構えていて。

「一瞬で４体のモンスター…」

「『魔神儀』が場に居る限り、オレはＥｘデッキからモンスターを出せない…ま、オレ達には関係のない制約だよな。Ｅｘ適正の無いオレには。」
「…」

そして、そのまま激しい展開を終えたユーラは。
これで準備が整ったのだと言わんばかりに、一瞬だけ手を止めると…

その手から、１枚の魔法カードを天へと掲げ始める―

「行くぞ…儀式魔法、【奈落との契約】を発動！【魔神儀―タリスマンドラ】を生贄に！」

灯る…
―現れし祭壇に、怪しい灯火が。
意味は同じなのに、『リリース』ではなく『生贄』に捧げるという太古の宣言を叫んだアマギ　ユーラによって。歪なるマンドラゴラがその魂を奈落へと捧げられてしまった時、青き灯火と共に妖しき魔法陣が一層その光を強め始めたではないか。
そう…天に召されるモンスターの魂を糧として、ここに新たなるモンスターを呼び出すこれこそがまさに歴史に忘れ去られた『儀式』の手順。
…命の生贄、捧げし犠牲。
今、代償を払いしアマギ　ユーラの宣言によって。暗き奈落の底より、次元を超えて今ここに降り立つは…

「レベル６、【デーモンの降臨】を儀式召喚！」

―！

【デーモンの降臨】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１２００

降臨せしは迅雷を纏いし、狂骨に塗れた歪な悪魔。
文字通り奈落の底の向こうから出現したその姿は、見る者全てを震え上がらせるほどの存在感をまざまざと見せ付けており…
古の時代から存在する、『召喚』されし悪魔と同等の力を示しつつ。『顕現』でもない、『招来』でもない、『超越』でもない力を誇り今ここに『降臨』するのみ。

「【デーモンの降臨】は場に居る限り【デーモンの召喚】として扱う！まだだ、続けて【祝祷の聖歌】を発動！ペンシルベルとブックストーンを生贄に、レベル６、【竜姫神サフィラ】を儀式召喚！」

―！

【竜姫神サフィラ】レベル６
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２４００

しかし、１度だけでは終わらない。
続けてユーラの場に降臨したのは、遊良との最初のデュエルにも呼び出された光り輝く竜族の姫であり…
一説には融合召喚よりもカードの消費が激しいされる儀式モンスターを、初ターンだと言うのに２体も場に揃えつつ。光と闇という相反するオーラを纏う２体の大型モンスター達が、ユーラの意思に呼応してどこまでも遊良へと立ち塞がって。

「儀式モンスターが２体…」
「何を驚くことがある。このくらい出来なきゃ、デュエルする価値も資格もないだろ…オレ達には。」

「…」
「オレはカードを1枚伏せ、エンドフェイズに【竜姫神サフィラ】の効果発動。2枚ドローして1枚捨てる。」

そうして…
奈落の闇と対比している、審美を体現しているかのような竜の姫の効果を惜しみなく発揮し。エンドフェイズに入ったユーラの場には、2体もの儀式モンスターが立ち塞がりつつ、その威圧を未だ丸腰の遊良へと向けている。
…迅雷を纏いし歪なる悪魔が、まるで門番のように立ち塞がる。
…光り輝く竜の姫が、前回のデュエルと同じく怪しく微笑み遊良へと向かい合う。

果たして…

この、見慣れぬはずのユーラのデュエルを見て。そう、遊良と同じ顔、同じ声、同じ雰囲気、同じ佇まいをしたユーラの激しいデュエルを見て…
複雑な感情に苛まれているであろう鷹矢とルキは、その心の奥底の最も深い部分で一体何を思い浮かべるのだろう。
これまで遊良と共に過ごしてきた幼馴染達。この世の誰よりも遊良のデュエルを間近で見続けてきたはずの鷹矢とルキの目に、『儀式』を使うユーラのデュエルはどのように映るというのか…

「なんだろ…全然違うのに…遊良が儀式使ってるのなんて全然見慣れないのに…」
「うむ…似合わぬはずなのに、あまりに似合っているように見える…まるで、奴のデュエルをずっと見てきたかのように…しっくりきてしまっている…」

…自分達のよく知る遊良のデュエルとは、全く別の形を取るユーラ

のデュエル。
しかし、儀式という時代に忘れられた古き召喚法を駆使して戦ってはいても…
ユーラの見せる、まるで『足掻き』にも似た激しいデュエルのその姿は、これまで遊良が見せてきたモノと全くの同種、同類、同然、同様のようにして、鷹矢とルキの目には映っている様子。
そう、Ｅｘデッキを使う事ができず、大型モンスターをメインデッキからしか呼び出すことが出来ない遊良にとって、強大なモンスターを並べると言うのはこの世界に生きるどの人間よりも難しいことであるのだ。
そうだと言うのに、数多のカード効果を組み合わせつつ、無理矢理な効果の連続によって必要なカードを手札に加えるという…
自分のデッキを手足のように操って回転させる、効率化を目指してきた歴史の流れに反するようなそのデュエルは、姿形は違えども確かに『あまぎ　ゆうら』のデュエルとして彼らの眼には見えてしまうのだろう。
…当然のように大型モンスターをメインデッキから呼び出す遊良のデュエルは、今のこの『Ｅｘデッキ至上主義』の時代においては異質も異質。
そう、高速化した現代のデュエルにおいては、Ｅｘデッキのモンスターを切り札にすることが主流。つまり切り札級の大型モンスターをデッキに複数入れる事は推奨されていないのが、現代におけるデュエルの基本・基礎として広く教育されているのだが…
しかし、Ｅｘ適正を持たないことにより、まるで時代に逆らっているかのような遊良のデュエルはそのスタイルゆえに忌避されつつも活路を見出してきた。
…そして、それは後攻の遊良のみならず。
先攻を取ったユーラに関してもまさにそう。儀式召喚という自らの生きる道に必死になって縋りつき、まるで足掻くようにしてデュエルを続けるその姿はデュエルの形が違えどもまさに『あまぎ　ゆうら』のデュエルそのモノとも言え…

そんなＥｘ適正が無いというハンデを負っている中で、自らの生きる道を必死になって探し身につけたと言う事があまりに伝わってくるユーラの戦い方。それはまさしく、例え儀式召喚という召喚法を駆使しているとしても、鷹矢とルキにはユーラのデュエルがどうしても遊良のデュエルと『同じようなモノ』として感じられてしまっているに違いなく―

「ねぇ！ほ、本当に貴方が遊良なら、なんで街の人達を消しちゃったの!?どうして…私と鷹矢のお父さんとお母さんまで…」

だからこそ、突発的にそう叫んだルキの言葉を、この場の誰が止められようか―

ルキが思わずそう叫んでしまったのも無理はない。突如現れた、決闘市の人々を消してしまった、儀式召喚を操るユーラを目の当たりにしてもなお…

それでも、そのユーラもまた遊良なのだと感覚で理解している彼女がそう叫んだのは最早必然といえば必然で。

…ルキには、目の前の遊良と同じ顔をした人間に対しどうしても我慢ならなかったのだろう。

『ひとつ前』というそれ自体は理解できなくとも、ユーラもまた遊良なのだとしたら。いくら街の人々によくない感情を持っていたとしても、一体どうして決闘市の人々を消し去るという真似をしてしまったのか…

どうして、遊良の味方のはずの自分と鷹矢の両親まで消してしまったのか…と。

しかし…

「その理由なら、オレの前にいるソイツに聞けばいい。」

「ッ！な、何言って…」

「良い子ぶるなよ。オマエだって所詮はオレと同じ『あまぎ　ゆうら』

だ。オマエだって同じだろ？オマエにとって、鷹矢とルキ以外の人間は正直どうでもいい…鷹矢の両親も、ルキの両親だって…別に、消すことに抵抗なんてない程度の人間だって。」
「え…ゆ、遊良…う、嘘だよね？だ、だってお父さんとお母さん、いつも遊良のこと気にして…」
「ッ…」

淡々と、吐き捨てるようにして投げられたユーラの言葉に…
遊良は、即答できなかった。

「…ど、どうでもいいわけないだろ…ルキの両親はいつも俺を気にかけてくれていた。それを、どうでもいいなんて…」
「嘘だな。いつも一言余計なルキの父親にはイラッとしていた。恩着せがましいルキの母親だってウザいって感じていた。鷹矢の両親だって同じだ。正鷹おじさんも、アキラおばさんもほとんど顔合わせない癖に偉そうに保護者面して小言を言う…それがウザくなかったとは言わせない。オマエはオレだ、少しもそう思わなかったなんて言わせない。」
「…そんなわけ…」

そして搾り出すようにして言葉を返すその姿は、まるでユーラの言葉を少なからず肯定してしまっているようにさえ見えてしまう光景となっていることに…遊良自身は、気がついておらず。
淡々と、しかし確かな怒りを感じさせながら本質を口にしているかのようなユーラに対し、少なからず反論を躊躇ってしまったのは偏に遊良も心の奥底ではユーラの様な感情を抱いていないと断言できないからなのか。
まぁ、それでもユーラの言葉を己の言葉で否定している辺り、少なくとも遊良が抱く鷹矢とルキの両親への印象はユーラのような歪曲した感情などでは断じてない様子なのだが…
…そう、いくらユーラの言葉の中に、多少なりとも遊良が理解出来

るモノが混ざっているとは言え。
　それでも、自分を気にかけてくれる大人に対してあんな『残酷な真似』など、自分だったらしたいとも思わないという気持ちが確かに遊良の心の中にはあるからなのか、ユーラの言葉に自分の意思で否定の意を見せる遊良。
　…そんなわけがない。
　そう、そんな事、自分だったらするわけがない―
　ユーラの言葉を聞いた後でも、遊良は強くそう思える自分の心を確かに感じている様子。
　大体、自分だったら『たったそれだけ』の理由で鷹矢とルキの両親まで消すわけがない…ルキの両親が消えてしまっている場面を目の当たりにしてショックを受けたのも本当だし、鷹矢の両親も同じ目に遭っていることを確信した時にだって同じようなショックを受けたのだから…『自分』だったら、こんな真似など絶対にしない、と。
「そんなわけ…そんなわけないだろ！大体、お前の目的は俺一人なんだろ!?だったら俺だけを狙えばよかったじゃないか！」

　だからこそ、叫ぶ。
『ひとつ前』の意味も、ユーラがなぜ自分を狙うのかも分からないままではあるものの…
　アマギ　ユーラが、一体どうしてこんな事をしてしまったのかを…遊良は、理解できないから。

「あぁ。それで失敗したから計画を変更しただけだ。まぁ、どうせお前を消した後にこの世界も全部消すつもりだったんだから…順序を逆にしたに過ぎない。」
「ッ…世界を全部消すって…」
「言った通りだ。こんなイラつく世界を残すわけがない…何も知らないで、お前がぬくぬく暮らしてたこんな世界なんて！存在してていいわけがないだろ！」

―！

けれども、遊良の言葉に更に苛立ちを感じた様に。

再びその怒りを露わにしつつ、その怒号で大気を揺らし木々を騒がせ続けるアマギ　ユーラ。

…最初の戦いの時も、今も。どこまでも遊良を否定し続けるユーラの怒りの、その根源は一体何なのだろう。

決闘市の人々を全て消しただけでは飽き足らず、この世界をも消してしまうというユーラの発言は危険極まりないあまりに狂った暴走せし怒り。

それは昨年度の『異変』の時の紫魔　憐造と同じ…その結論に至るまで狂ってしまった男の叫びは、どこまでも悲痛なモノとなりて人の消えた決闘市へと駆け抜けていくだけ。

そしてその怒りの今の矛先は、紛れもなく遊良ただ一人へと向けられているのは最早言うまでもない。自分と同じ顔をしたこの男は、一体どんな生き方をしてきてこの結論に至ったのか…それが、遊良にはわからない。

そうして…

「既に第一段階は終わってる。後はお前をブッ飛ばせばオレの願いは叶う…もう、オレには時間が無いんだ…ターンエンド。」

ユーラ　ＬＰ：４０００

手札：５→２枚

場：【竜姫神サフィラ】

【デーモンの降臨】（デーモンの召喚）

【魔神儀―キャンドール】

伏せ：１枚

今、世界を消滅させるという宣言の元。
現代では使い手が居ないとさえされている儀式召喚と、現代では見ることすら皆無とされている儀式モンスターを2体も場に揃えつつ。その絶対的な対象として、必ず遊良を消すと怒り来るっているユーラは怒りのままにそのターンを終えるのみ。
…そんな自らのターンを終えたアマギ　ユーラの今の姿は、逸る苛立ちをどうにか押さえ込んで遊良のターンを見据えているかのよう。

また、ターンが移り変わったと言うのにも関わらず…

対峙している遊良もまた、正体を現したユーラを前に一体何を考えているのか。その手を止め、沈黙を呈しながら…
以前のデュエルでも思い出しているのか、静かにユーラとその儀式モンスターを睨んでおり…

(儀式モンスター以外には破壊されない【デーモンの降臨】と、儀式モンスターを破壊から守る【祝祷の聖歌】の布陣…アイツ、明らかにバルバロスの効果を意識しているみたいだ…)

いや…
これだけの布陣を前にしてもなお、前回アレだけの惨敗を決していてもなお―
遊良の思考は以前の敗北に引っ張られてはおらず。ユーラの怒気に気圧されずに、俯瞰的に今の状況を飲み込もうとしているかのよう。
そう、目の前に現れた因縁のフードの男と、その正体であった自分と全く同じ容姿をしたアマギ　ユーラに驚きこそすれ…それでも静かに2体の儀式モンスター達を見据えつつ、目の前のアマギ　ユーラが怒りつつも自分のことを確かに調べてきていることを遊良は僅かにだが見抜いていている様子を見せるではないか。
…ユーラの先攻の動きと完成した場から、ソレが嫌と言うほど伝

わってくる。
それは扱うデッキは違えども、考え方やデュエルの姿勢などが同じ人間であるが故の深い理解なのか。デッキの動かし方から狙いを読み取り、展開方法から過程を読み解き…
相手がどれだけの準備をしているのかが、『同じ事』をしてきた遊良には痛いほどよくわかってしまって。
だからこそ―

(…時期的にみて【決島】を観てたのか…じゃあ、多分今のデッキも相当調べてきているはず…でもこっちも…だったら…)

そう、言い換えればソレは遊良とて『同じ事』。
元来、遊良は決まっている相手とのデュエルを行う前に、やりすぎとも思えるくらいの下調べをする。昨年度を例に出せば、【決闘祭】のイースト校代表戦の時に『泉　蒼人』や『紫魔　ヒイラギ』を始めとした、代表候補のデュエルを事前に入念に調べていたこともそう…
…【決闘祭】の時だって、無論【決島】の時だって。
出場選手が決まっている場においては、遊良は戦う可能性がある相手を丸裸にする勢いで調べようとする節がある。
…それはある種の切迫障害にも似た、過剰なまでの強迫観念が成せる行き過ぎた対策。
Ｅｘ適正が無いことが原因で、遊良はこれまで常に拭いきれないデュエルへの不安が付きまとってきたのだから、その過剰なまでの下調べこそがその不安の唯一の解消法でもあるのだろうが…
まぁ、それでも【決島】の初戦で戦ったデュエリアの『アナライザー』の分析レベルと比べると、遊良の分析は幾分甘い点は多い。それでも、そもそもからして遊良という人間は根本的な性格からして、過剰なまでに入念な準備を怠らないモノなのだ。
つまりそれは、遊良も心のどこかでフードの男に負けたままでは終われないという思いを抱いていたが故なのか。
…だからきっと、アマギ　ユーラもきっとそう。

だからこそ【決島】でのデュエルを警戒しているかのような先攻のユーラの強固な布陣は、十中八九バルバロスでの全体破壊に重きを置いた『凌ぎ』の布陣とも遊良には読み取れる。

そして、そこまで読み取れているのならば…

これより、遊良がやるべき事はひとつ。そう、目の前の奴と同じく、自分もこれまで調べてきた『儀式召喚』に関する知識を総動員し…

いつもの通り、今の自分のデッキを逆算し…

導き出される勝利への道筋を、ただひたすらに突っ走るだけ―

「なんだよ、やっぱりまともなデュエル出来ないのかお前。どうせ、また無様な醜体を晒すだけだろ。」

「ッ…俺のターン、ドロー!」

そして、自分と全く同じ顔をしたユーラの煽りに感化されるようにして。

弾けるようにしてカードをドローした遊良が、1枚のカードを天へと掲げる。

「魔法カード、【トレード・イン】発動!レベル8の【デモニック・モーター・Ω】を捨てて2枚ドロー!続けて【テラ・フォーミング】を発動し、デッキから【チキンレース】を手札に加えてすぐに発動!そのまま【チキンレース】の効果も発動だ!LPを1000払って1枚ドロー!よし、【闇の誘惑】を発動!2枚ドローして、闇属性の【イービル・ソーン】を除外!」

自らのターンを向かえてすぐに、巻き起こすはドローの嵐。

以前にフードの男と戦った時とはまるで違う、あまりに激しいそのカード捌きは…まさしく【決島】と【裏決島】を経て、このデッキが完全に自らのデッキとなった証でもあるのだろう。

―何しろ、これは乗り越える為の戦い。
いくら自分と同じ名前を名乗った目の前の男が、決闘市の全ての人間を消し去ってしまう謎の力を持っているとしても。
それでも、今こうして再戦を果たした相手にまた負けないように、遊良はただただ立ち向かうしかないのだ。
…凄まじき勢いで回るデッキ、恐るべき勢いで入れ替わっていく手札。
そのまま、遊良は止まる気配を微塵も見せず…
更に激しく、動き続ける。

「【成金ゴブリン】発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！【手札抹殺】も発動！５枚捨てて５枚ドロー！」
「２枚捨てて２枚ドロー。…醜いデュエルだな。なりふり構わず、馬鹿のひとつ覚えでドローしまくるなんて。」
「うるさい！２枚目の【チキンレース】を発動！その効果により、ＬＰを１０００払って１枚ドロー！よし、【死者蘇生】発動だ！墓地から【サクリボー】を特殊召喚し…その特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動！デッキから【サクリボー】２体を特殊召喚ッ！」

―!!!

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

遊良の場に集いしは、３体の小さき悪魔達。
その意匠はどこかフードの男が…アマギ　ユーラが以前トドメを刺してきた、あの『異形の目の悪魔』の意匠にどこか近いモノを感じ

させはするものの…
それでも『堕天使』を失ってからこれまで…それこそ、【決島】と【裏決島】においても。
このモンスターは遊良のデュエルの要として呼び出されてきた実績を持つ、遊良のデュエルには欠かせない存在となっている小さき悪魔達であって―

「オレはキャンドールを選択する！デッキから【魔神儀―キャンドール】2体を特殊召喚！そしてデッキから特殊召喚したキャンドール1体の効果で、オレはデッキから儀式魔法、【エンド・オブ・ザ・ワールド】を手札に加える！」
「それがどうした！俺は3体の【サクリボー】をリリース！」

そうして響くは先進の雄叫び。
寂しき霊園を振るわせる、遊良の叫びが木霊する。
それは以前のデュエルにて、フードの男に全く立ち向かうことが出来なかった自分の弱さを…心から払拭したがっている、ユーラへと向けられたはち切れんばかりの雄叫びに違いないだろう。
また、その雄叫びに呼応して…
3体の小さく悪魔達の、その身に纏うは渦ではなく。

「運命を切り裂く英雄よ！青き誓いをその身に刻み…天を喰らいし覇者となれ！」
「ッ、それは…」

今、寂しき霊園にて呼び出される…王者の威光を持つソレは、天を揺るがす雄叫びと共に黄昏の空より現れるのか。
…運命への慟哭。命運への恫喝。
かつて世界の頂点にて叫ばれた、冷酷無比なる王の圧力と…かつて世界の頂点にいた、『鬼才』と恐れられた男の切り札の1枚が…
そう、運命の英雄の名を持った、世界の頂点を見てきた力が…

今、羽ばたく―

「来い、レベル８！【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】！」

―！

現れしは鮮血の羽ばたき、降臨せしは飢えの滴り。
血霧と共に降臨し、剥き出しの牙を刃へと変え…混沌渦巻く天より出でしは、竜頭を纏いし運命の英雄。
纏いし竜の咆哮で、双翼を広げ地に降りることなく空に佇み。下界を見下ろすその瞳は、一体何を映しているのか。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】レベル８
ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／　６００

それは時代に忘れら去られた、対峙したことがないであろう儀式モンスターを前にしてもなお怯まぬ正真正銘の英雄の姿。
遥か昔、世界が鬼才の戦いに熱狂していた頃…
運命を貫く英雄と、運命を引き千切る英雄と共に。３体の【紫魔】の象徴として、世界中が見惚れていたという…
世界で最も有名な、『Ｄ』の英雄の最たるエース。

しかし…

「チィッ、ソイツを出させるわけないだろ！罠発動、【奈落の落とし穴】！Ｂｌｏｏ―Ｄを破壊し除外する！」

―！

あっけなく…

そう、あまりにあっけなく―

空に佇む運命の英雄を、突如現れた穴から飛び出した悪魔の手が掴んだかと思うと…そのまま、運命の英雄は何の抵抗も見せぬままに。

流れに身を任せるが如く、どこか悲痛な雰囲気を感じさせつつも悪魔の手に引きずり込まれてしまったではないか―

…１枚で戦況を変えられるほどの力を持った『切り札』の１体が、こんなにもあっけなく退場してしまうのもまたデュエルの流れといえばそうなのだが…

けれども、無抵抗にて奈落へと落ちていった運命の英雄の姿はまるで、２人の甥の戦いを見たくないかのようにして。

…そう、前【紫魔】の操った、世界の頂点を見た歴戦のカードが。

あまりに早く、あまりにあっけなく…

遊良の場から、退場していく―

「何が【紫魔】のカードだ…そんな大層な代物を、オマエ程度がデッキに入れてること自体が間違いなんだよ！身の程を知れ屑野郎！」

「いや、これでいいんだ！これでお前を守る伏せカードはなくなった！サクリボー３体の効果で３枚ドロー！」

「チッ、どこまでもウザい奴だ…【紫魔】のカードを囮に使うなんてな。けど高い代償だ、儀式モンスターを持たないオマエじゃ、もう【デーモンの降臨】は突破できない！」

「だったらソレを超えればいい！速攻魔法、【禁じられた聖杯】発動！【デーモンの降臨】の攻撃力を４００アップさせ、その効果を無効にす

る！そして装備魔法、【継承の印】発動だ！墓地から【サクリボー】を特殊召喚し…特殊召喚成功時に速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動ぉ！」

「ッ、また同じカードか！だけど…」

それでも、切り札の１枚たる運命の英雄を失ったばかりだと言うのにも関わらず。

【Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】という、歴戦のカードを『囮』に使ったと堂々と言い放つ遊良の手は、全くもって止まる気配を見せずにただただ激しく動き続ける。

その手を止めずに動き続ける遊良の手は、切り札を１体失ったとは思えない程に淀みも迷いも見せてはおらず…

まるでＢｌｏｏ―Ｄがここで退場することが規定事項だったかのようにして、どこまでも怯まず加速するのか。

…しかし、それはユーラもそう。

まるで『最初』からＢｌｏｏ―Ｄに照準を合わせていたかのようにして発動された罠がソレを証明している。それはユーラも遊良も、予め展開が『こうなる事』を分かっていたかのような振る舞いでもあり…

…この布陣に対し相手が取ってくる手はこのはず、だからソレを見越してアレを用意しておくのが最善手…

…と思っているだろうから、次はこう動くために先手を打つ…

遊良も、ユーラも。お互いに言葉はないのに、そう言っているかのような動きを見せるそんな中で。

「オレはキャンドールを選択する！」

「俺は墓地から2体のサクリボーを特殊召喚！永続魔法【冥界の宝札】を発動し、そのまま3体のサクリボーをリリース！」

止まらぬ…留まらぬ…全くもって減速せず。

ユーラの狙いを見据えてもなお、更に遊良のデュエルは激しさを増していく。

…それは以前の敗北が、よほど遊良には堪えているからこそ。

そう、最初から全力、始めから全速力。端からフルスロットルで繰り出され続ける遊良の怒涛は、前回の惨めさを払拭させるほどの激しさとなりてこの霊園に響き続け…

…叫ぶは戦気、轟くは剛毅。

悲しき空気が充満する、厳かな場である霊園の中にあっても。

そう、例え一度負けている相手を前にしてもなお慄かない誇り高き雄叫びを響かせ…

奮える大気、獣の咆哮とともに…

それは、現れる―

「【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

轟かせしは獣の雄叫び、敗北を経て立ち上がった不退の叫び。
それは以前の敗北の惨めさを、獣の王もまた微塵も忘れてはいないかのように…
主と同じ声、同じ姿、同じ雰囲気をした相手を前にしてもなお全く怯む事もなく。
苦痛を味わわされた儀式モンスター達に立ち向かい、どこまでも激しく咆哮を響かせる。

「バルバロスの効果発動！３体のリリースでアドバンス召喚した時…相手のカードを全て破壊する！いっけぇ！バルバロスゥ！」

―！

そして…
全てを無に帰す破壊の衝動が、螺旋の槍より放たれて―
妥協召喚された以前の戦いの時とは、根本的に異なっている獣の王のその力。ソレはまさしく、神をも滅ぼす力を秘めた激しさとなりてどこまでも激しく霊園の大地を抉り飛ばすのか。
そのまま、バルバロスの放った破壊の衝動が…
ユーラの場の、２体の儀式モンスターと３体のキャンドールへと襲いかかり…

「ケダモノが調子に乗るなぁ！墓地の【祝祷の聖歌】の効果！【祝祷の

聖歌】を除外することで、デーモンとサフィラの破壊を防ぐ！」
「だけどキャンドール３体は破壊される！そして、これでお前のモンスターを守る物も全てなくなった！【冥界の宝札】と【サクリボー】３体の効果で５枚ドロー！…よし、バトルだ！バルバロスで【竜姫神サフィラ】に攻撃！天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

―！

ユーラ　ＬＰ：５０００→４５００

「くっ…」

そうして…
破壊の衝動が防がれることすらも、初めから想定の範囲内に収めていた遊良が。
このデュエルの最初のダメージをユーラへと与えつつ、しかしこれだけでは終わらないのだと言わんばかりに続けてデッキからカードをドローしつつ…

「まだだ！このバトルフェイズに速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動ぉッ！」

更に、叫び続ける―

「バルバロス１体をリリースし、レベル１０、【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】をアドバンス召喚！」

―！

現れしは絶海の荒波、天より降り注ぐ海の煌き。
それは深海よりも深きモノ、海嘯よりも豪きモノ。荒ぶる激浪をその身に纏い、四海すら凌駕する海闊の化身。
空を映し、天を彩り、宙すら飲み込むまさに『海の星』。
それはたゆたう星の荒ぶりを、一体のモンスターに押しとどめているようであって。

【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】レベル１０
ＡＴＫ／　０→３０００　ＤＥＦ／　０→１２００

遊良が続けて繰り出したソレは、釈迦堂　ランから預ったこの星のモノではないカード。
途方もない力と途轍もない圧力、下手をすれば相手の心を完膚なきまでに折ってしまう、間違えれば自分すら折られてしまう危ない代物ではあるものの…
しかし、【決島】における狂乱少女とのデュエルにて完全にソレを掌握したからこそ。
持てる力を全てつぎ込んででも、全力で立ち向かうだけ。

「チィッ！クズ野郎如きがプラネットを！ソレがどういう存在なのかも知らない癖にぃ！」
「うるさい！ＮＥＰＴＵＮＥはバルバロスと同名となり同じ攻守を得る！そのまま連撃だ！【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】で、【デーモンの降臨】に攻撃ぃ！」

弾ける進撃、轟く叫び。
まともにデュエルできなかった前回の戦いとは違い、持てる力を全てつぎ込んで立ち向かう今の遊良のデュエルはまるで留まる事を知らずにその激しさを増すばかり。

そう、始めから全力…
１ターンの間に、自身の切り札たる『３体』のモンスターを総動員するという暴挙を意図も簡単に達成し。前回の時よりも、正面切って立ち向かえているその勢いを落とさぬように、どこまでも激しく轟く遊良のデュエルは常軌を逸した凄まじさを感じさせているではないか。
…そのまま、大海を引き裂く一筋の大鎌が。
海洋を切り裂く勢いを帯びて、天に向かって振り上げられる。

「断海の凶刃、オーラ…トリトォォォン！」

―！

「ぐあぁぁっ!?」

ユーラ　ＬＰ：４５００→４４００

そして…
遊良の連撃が、確実にユーラを捕らえた―
それはダメージにしてたったの６００…【成金ゴブリン】で与えた１０００のＬＰを考えれば、まだ遊良とユーラのＬＰ差は大きく広がっているとも言えるのだが…
けれども、前回手も足も出なかった遊良からしたら。自らの力で確実に与えた、間違いの無い先手の一撃の衝撃は決して軽くない威力となりて、確実にアマギ　ユーラの体に届いたのだ。
また、合計６００のダメージを受けたユーラが軽く後ろに吹き飛ばされたことが証明している…
そう、このデュエルは、実体化しているのだ…と。

そんなことは遊良にとってもユーラにとっても説明不要のこと。更に鷹矢とルキも驚いていない事から、この場にいる全員がこの異様な雰囲気の中で行われているデュエルに対し実体化への疑問は抱いていない様子。

…まぁ、ソレを当然の事として受け入れている辺り、彼らの態度はこの歳の子ども達らしからぬ修羅場への慣れでもあるのだろうが…

それでも、以前の敗北を経て決して軽くない数々の戦いを経験してきた遊良の刃が。今確かに、ユーラの喉元へと僅かに届いたことには変わりなく。

「ぐ…だけど想定通りだ！【デーモンの降臨】が破壊されたことにより、オレはデッキから【デーモンの召喚】を特殊召喚する！」

「…バトルフェイズを終了して【貪欲な壷】発動。バルバロス、サクリボー3体、デモニック・モーター・Ωをデッキに戻して2枚ドロー…俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：４０００→２０００
手札：6→2枚
場：【Ｔｈｅ　ｔｙｒａｎｔ　ＮＥＰＴＵＮＥ】（神獣王バルバロス）
魔法・罠：【冥界の宝札】、伏せ2枚
フィールド：【チキンレース】

戦える…

以前の時より、断然立ち向かえているこのデュエル。

ユーラの場にモンスターを残してしまったとは言え、2体の儀式モンスターと3体の壁モンスターの悉くを破壊した遊良のデュエルの激しさは…

前回の戦いの時の出来とは、確実かつ根本的に意味合いが違っていることだろう。

…破壊耐性を持った相手すらも、無理矢理に破壊するというその暴

挙。破壊に備えた相手の策を、更に超えて攻め続けたその快挙。
以前の時の萎縮などまるで無い。ＬＰを減らす事にも何の抵抗も見せないのは、相手の攻撃を捌ききってみせるという遊良の決意の表れでもあるはず。
そんな、動揺とは別に思考を巡らす遊良のデュエルに対する冷静な視線は…以前の敗北からこれまで調べ上げた儀式召喚に対する知識を総動員しつつ、自らの取るべき手を静かに模索しているようでもあり…

「必死になりやがって…そんなに前回とは違うってことを見せつけたいのか。」
「あぁ。おかげで随分と儀式召喚について調べたよ。そっちも…随分と俺のデュエルを調べてきたみたいだな。」
「チッ…考えることは同じってことか…オマエも…」
「あぁ、だから今回は絶対に遅れをとらない。」
「…」

そう、先の攻防の読み合い…思考の探り合いを経て、遊良もユーラもお互いにソレを察知した様子。
それはユーラがおそらく遊良の【決島】でのデュエルを警戒しているであろう事と同様に、遊良もまたフードの男との再戦を想定してこれまで合間の時間に『儀式』の事を調べ上げてきたと言うこと。
そして遊良が至った結論としては、いくら儀式召喚が歴史に忘れ去られた古い召喚法で、いくら儀式召喚を用いたデュエルの記録が少なすぎるとは言え…
それは言い換えれば、儀式への対抗策自体はそれほど過剰にならなくても良いと言うこと。つまりは、言い換えればそれは現代において現存している儀式関連のカードが少ないのだから、それだけ調べる情報自体は少なくて済むと言うことでもあるのだ。
そしてアマギ　ユーラの繰り出した儀式モンスターは、どれもその少ない既存情報に記されている、現代でも『現存』している儀式モン

スターばかり。それ故、遊良の考えが正しければおそらくユーラのデッキは想定の範囲内…現代で手に入るカードのみで構築されているはず。
　それは前回の戦いを経て、そして前回の戦いの悔しさを忘れず反芻してきた遊良にとっては…
　めぐり巡ってきた今回の戦いにおいて、遅れを取らないという自負を持っていると言う事でもあって―

「けど……所詮、オマエはどこまでいっても天城　遊良だ！オレのターン、ドロー！」

　それ故、前回の戦いの時に遊良のデュエルを無様だと言い捨てたユーラの目には。
　今の遊良のデュエルは、一体どのようにして映り込んでいると言うのだろう。

「必死になりやがって…オマエ程度が…オマエなんかが必死になったって、実力はたかが知れてるんだよ！【チキンレース】の効果発動！ＬＰを１０００払い１枚ドロー！そして手札の【魔神儀―ペンシルベル】のモンスター効果！手札の儀式モンスター、【終焉の覇王デミス】を見せて手札からペンシルベルを！デッキからタリスマンドラを特殊召喚！タリスマンドラの効果で【破滅の美神ルイン】を手札に！」
「…ッ、また儀式召喚か…」
「あぁ、また儀式召喚だ！【終焉の覇王デミス】は、手札で【終焉の王デミス】として扱う！儀式魔法、【エンド・オブ・ザ・ワールド】発動！手札のレベル１０、【破滅の美神ルイン】を生贄に！レベル１０、【終焉の覇王デミス】を儀式召喚！」

―！

【終焉の覇王デミス】（終焉の王デミス）レベル１０

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「覇王デミス！儀式モンスターを素材として呼び出したそいつは確か…」

「そうだ！儀式モンスターのみを素材としているとき、デミスの効果に必要なＬＰを払う必要がなくなる！全体破壊がお前だけだと思うなぁ！デミスの効果発動、相手のカードを全て破壊し…１枚につき、２００ポイントのダメージを与える！」

「させるかぁ！罠発動、【迷い風】！デミスの効果を無効にし、その攻撃力を半分にする！」

「それがどうした！【貪欲な壷】発動！サフィラ、キャンドール２体、タリスマンドラ、ブックストーンをデッキに戻し２枚ドロー！続けて【儀式の下準備】を発動！デッキから【祝祷の聖歌】と【竜姫神サフィラ】を手札に加え…【儀式の準備】も発動だ！デッキから【魔神儀―カリスライム】を、墓地から【高等儀式術】を手札に加える！」

「ッ、と、止まらない…」

「当たり前だ！止まってたまるか…オマエだけは、絶対にこの手で消してやるんだからな！儀式魔法、【高等儀式術】発動！デッキから【真紅眼の黒竜】を生贄にぃ！」

轟く叫びは止まることなく、どこまでも厳しく霊園の空を駆け巡る。

一説には融合召喚よりも手札消費の激しいとされている儀式召喚を、まるで手足のように操りモンスターを繰り出し続けるユーラのデュエルもまた…

遊良に負けず劣らずその激しさを増してくばかりであり、ありとあらゆる儀式モンスターを呼び出せる禁忌の儀式術をも用いてユーラは一体何を降臨させようというのだろうか。

同じ顔をした遊良へと向けられる、収まりきらぬ敵意を露わに。

今ここに、現れるは―

「レベル７！【魔神儀―カリスライム】を儀式召喚！」

―！

【魔神儀―カリスライム】レベル７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１８００

降臨せしは異形の軟体、無機から生み出された悪魔の命。
しかし、これまでサポートに徹していた、効果モンスターたる他の【魔神儀】とは違い…
一際異なる存在感を放つ【魔神儀】の名を持ったこの儀式モンスターは、これまで遊良が調べた中にはなかった遊良も知らぬ儀式モンスターでもあり…

「【魔神儀】の儀式モンスター!?そんなモンスターが居たのか！」
「どうせオマエは知らないだろうな！これまで儀式を使ってこなかったオマエじゃ、この短期間で儀式を研究するって言っても限度がある！行くぞ、カリスライムの効果発動！場のペンシルベルを墓地に送り、ＮＥＰＴＵＮＥを破壊する！」
「くっ!?」

そして…
ユーラが宣言した次の瞬間―
軟体が大きく体積を増やし、なんと膨張によって巨大に膨らんだかと思うと。そのまま、命を吹き込まれた悪魔の軟体は恐るべき勢いを伴って、瞬く間に海の星を飲み込んでしまったではないか―
…常に相手を押し潰す圧力を放ち続けているプラネットを、真正面から向かいうち破壊してしまうその存在感はあまりに『本物』。
そう、遊良が調べ上げた中にも見つけられなかったその【魔神儀】の名を冠した儀式モンスターが放つソレは、まるで本当に忘れ去られた

『古の時代』から蘇ったかのような迫力を醸し出しているのだ。
それはユーラの一日の長。おそらくずっと儀式召喚を使ってきたであろうユーラと…フードの男に敗北してから儀式を研究し始めた遊良との、埋めることの出来ないそれは『差』。
…しかし、それだけでは終わらない。
遊良の考えには無かったモンスターを繰り出し、意表を突いたユーラはそのまま…
海の星を破壊したその刹那に、次なる宣言を行うのみ―

「まだだ！【祝祷の聖歌】を発動！場のタリスマンドラを生贄に、【竜姫神サフィラ】を儀式召喚！…これで終わりだ！墓地の【ギャラクシー・サイクロン】を除外し、その効果で【チキンレース】を破壊する！」
「なっ!?」
「よし！カリスライムの効果を止められなかったってことは、その伏せカードは攻撃反応系か攻撃を止めるカード…そういえば、【決島】じゃ罠モンスターを使ってたっけ。」
「…」
「図星なんだろ！やっぱりこの程度なんだよオマエは！そのたった1枚の伏せカードで何が出来る！これで終わりだ、一斉攻撃！先ずは【デーモンの召喚】で、アイツにダイレクトアタック！」

先の攻防と同様、遊良の策を見抜きにかかり。
そのまま宣言されたユーラの叫びによって、先陣を切った狂骨の悪魔に続いて他3体もの儀式モンスターたちまでもが丸腰の遊良へと襲い掛かり始める。
…それは塵すら残さぬ波状攻撃、息をつかせぬ一斉攻撃。
たったの一撃で、遊良のＬＰを確実に０に出来る攻撃を連続で繰り出せようとも…
それだけでは終わらせない、出来るだけ多くのダメージと苦しみを与えるのだとして襲い掛かる、ユーラの意思を反映したかのような４

体の大型モンスター達の攻撃は微塵も手加減などは感じさせず―
…そして、ユーラの読み通り。
遊良が伏せたのは、罠モンスターの【量子猫】。つまり先のターンに【サクリボー】を全てデッキに戻してしまった遊良は…
【量子猫】1枚だけでは、4体ものモンスターの連続攻撃を止めることはできず―

「終わりだぁ！死ねぇ、天城　遊良ぁ！」

このままでは、やられ―

「つかよぉ！墓地から【光の御封霊剣】の効果発動ぉ！」
「なっ!?」

―！

否…

やられは、しない―

遊良の墓地より飛び出した、光の剣が盾となりてユーラの4体のモンスター達を弾き返したのだ―
…発動したのは、【手札抹殺】で墓地に送っていた1枚の永続罠。
それは場にあるときは、LPを代償に何度だって相手の攻撃を凌ぐ剣となる罠ではあるものの…しかしその真価は、墓地に存在している

ときにこそ発揮される絶対無敵の盾となることにあるのだ。
…まさに、守護の霊剣。
どれだけのプレッシャーを持って相手モンスターが襲いかかろうとも、その全ての攻撃を遮断する光の剣の盾に守られ。
攻撃を仕掛けたユーラの４体の大型モンスター達が、衝撃によって後ろへと弾き飛ばされていく。

「このカードを除外することで！このターン、相手はダイレクトアタック出来ない！」
「ぐっ…意地汚く足掻きやがって…」

応酬…
余りに激しい、カードの応酬。
遊良もユーラも、相手の備えを覆すほどの激しいデュエルを展開しつつ…それでいてギリギリの所で相手の攻撃を凌ぐか耐え切る場を準備し形成している、同じ顔をしているこの２人のこのデュエルはまさに一触即発、微細な均衡。
…扱うデッキは違うはずで、繰り出すモンスターだって全く異なると言うのに。
それでも、遊良もユーラも得てして大型モンスターを連続して繰り出しながら怒涛の進撃を見せるそのスタイルは…本質的に似通っているとしか思えぬ、まさに同じ人間が戦っているかのような錯覚を起こしているに違いないことだろう。

そんな、寂しさを伴う黄昏時の霊園にて…

同じ顔をした遊良とユーラのデュエルを見ている鷹矢とルキは、一体その胸中に何を感じ何を思うのか。

「ぬぅ…」
「なんだろ…何か…怖いよ…どっちが勝っても、どっちが負けても…

何か、凄くやだ…」
「…俺には今も遊良が２人居るように思えてならん…儀式を使うアイツなど見慣れぬはずだと言うのに…遊良も、もう一人の遊良も、どちらも俺以外の奴に負けるなどゆるせんと思ってしまうのは俺がおかしいのか？」

複雑な顔をしてこのデュエルを観ている、鷹矢とルキの顔はどこまでも優れず。
それはきっと、鷹矢とルキの心は今もなお儀式召喚を扱うユーラもまた確かに遊良なのだと思ってしまっているからなのだろう。
自分達の知らぬところで、ユーラがどうやって生きてきたのかを鷹矢とルキは知らない。けれども、ユーラからも確かに遊良を感じてしまうからこそ…これまでずっと辛い思いをしながらもデュエルを続けてきた遊良と同様に、ユーラのデュエルからも彼が背負ってきた悲嘆な重さをどうしても理解してしまっている様子の鷹矢とルキ。
遊良には絶対に負けてほしくない。けれどもユーラだって負けてしまうのは悲しい…
これまでずっと遊良と共に生きてきたが故に、そんな説明のつかない感情が鷹矢とルキを覆っている。その視線はどこまでも遊良を見るモノと同じと化して、ただこのデュエルの勝敗を考えたくないモノとして複雑な感情に駆られているようで…

「くそっ！エンドフェイズに、サフィラの効果で２枚ドローして１枚捨てる…オレはこれでターンエンドだ！」

ユーラ　ＬＰ：４４００→３４００
手札：４→２枚
場：【魔神儀―カリスライム】
【デーモンの召喚】
【終焉の覇王デミス】
【竜姫神サフィラ】

伏せ…なし

また、渾身の連撃を初弾で弾き返されてしまったことにより。

そのターンを悔しげに終えたユーラは、どこまでもその苛立ちを隠さずに…苦々しげに遊良を睨んで、怒りと共に言葉を吐き捨てるのか。

…しかし、攻撃を止められてしまったとはいえ。

それでもユーラの場には3体もの儀式モンスターに加え、通常モンスターながら高い攻撃力を持った大型を1体揃えているのだ。そう、先のターンよりも備えられた布陣を見てしまえば、遊良が安心できるわけもなく。

（さっきよりも強固な布陣…あれだけ儀式召喚したのに…）

一説には融合召喚よりも手札消費が激しいとされている儀式召喚を、あんなにも繰り返しながら大型モンスターにて盤面を作り上げるそのデュエルはまさに遊良も見知った進撃のデュエルと同型、同系。

そう、最初の師であるエクシーズ王者【黒翼】により磨かれた、強大なＥｘモンスターにメインデッキのみで立ち向かうための…ソレは遊良がずっと磨き続けてきた、Ｅｘモンスターではない大型モンスター達による、時代に逆らう反旗のデッキ捌きと同じ雰囲気を醸し出しているのだ。

先のターンと同様に、墓地には儀式モンスターを守る【祝祷の聖歌】を備えつつ…4体もの大型モンスターがプレッシャーを放っているその場は、本当に儀式召喚が歴史に忘れ去られた召喚法なのかと疑ってしまうくらいに凄まじいの一言。

…生半可な突撃では崩れもしない。中途半端な展開は撃墜される。

ならば…どうする…

Ｂｌｏｏ—Ｄは除外された、ＮＥＰＴＵＮＥも破壊されてしまった。

バルバロスも今はデッキに眠ってしまっていて、相手の墓地に先の

ターンと同じく【祝祷の聖歌】があることを考えるとバルバロスの一撃だけでは相手の場は崩す事は出来ない。
遊良の思考の中に浮かび上がるのは、相手の盤面を前にしたそんな焦りであり…
…つまりは、追い込まれてしまっている。
先のターンの無抵抗の退場を見るに、このデュエルにおいてＢｌｏｏ—Ｄには期待は出来ないだろう。前【紫魔】のカードだけあって、そんな微細な感情を感じ取れるほどの自我を持っているカードの感情を先の攻防で確かに感じた遊良。
ならば力で押し切ろうとも、ＮＥＰＴＵＮＥだけでは手が足りない。バルバロスの全体破壊を決めようにも、【祝祷の聖歌】を踏み越えてもう一度繰り出さなければならない事を考えると相当に厳しいと言え…

「ハン、やっぱり息切れか！所詮オマエ程度じゃ、【紫魔】のカードもプラネットも過ぎたカードだったってことだ！身の丈に合わないデュエルを望むんじゃない！」
「くっ、俺のターン、ドロー！」

しかし…それでも遊良とて、今更逃げることなど出来るわけもなく。
どこまでも煽りを交え悪態を吐き続ける同じ顔の敵に立ち向かうため、デッキから勢いよくカードをドローした遊良は決してその足を止めぬよう、ただひたすらに動くしかないのか。

「【闇の誘惑】発動！２枚ドローして【闇の侯爵ベリアル】を除外！【成金ゴブリン】も発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！【量子猫】も発動だ！獣族・地属性となり俺の場に特殊召喚し…魔法カード、【マジック・プランター】を発動！【量子猫】を墓地に送り２枚ドロー！」

そして先のターンと同様に…いや、先のターンよりも更に激しく。

剛健なる場を揃えたユーラを見据えつつ、ドローを加速させその激しさを増していく遊良。
…Ｂｌｏｏ―Ｄという切り札の１枚が使えないこの流れで、果たして遊良に勝算はあるのだろう。
獣の王も、運命の英雄も、そして海の星といった『３体』の切り札を全てぶつけたというのに…それでも、先のターンに与えたのは多少のダメージだけ。
それは先制した流れとしては悪くないとは言え、遊良のデッキの爆発力を考えると決して最良とも言えない。
だからこそ一瞬も気を抜けない、少しも油断できない…一度負けているが故に、それをデュエルが始まる前から理解しているからこそ。
ドローを加速する遊良の手は、微塵も止まる気配をみせずに動き続けるのみ。
そうして…

「手札を１枚捨てて魔法カード、【ワン・フォー・ワン】発動！デッキから【サクリボー】を特殊召喚し…速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動ぉ！」
「チッ、性懲りもなく同じカード使いやがって…オレはデミスを選択する！」
「俺はデッキから更に２体の【サクリボー】を特殊召喚！そしてそのままサクリボー３体をリリース！レベル８、【神獣王バルバロス】をアドバンス召喚！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

轟く雄叫びを撒き散らし、再び現れる獣の王。
２度目の登場にも関わらず、全く持って衰えていないその昂ぶりは

今にもユーラへと向かって襲い掛かっていきそうな迫力を醸し出しており…

「3体のリリースでアドバンス召喚したため、相手のカードを全て破壊する！」

そして、放つ…全てを壊す破壊の衝撃波を―
螺旋の槍より放たれし、獣の怒りがユーラの場のモンスター達へと襲いかかる。

「何度やっても同じだ！墓地の【祝祷の聖歌】の効果！【祝祷の聖歌】を除外し儀式モンスターの破壊を防ぐ！」

しかし、通らない―
通常モンスターである【デーモンの召喚】は破壊出来ても、儀式モンスターまで届かない。
遊良のデッキの主軸の攻撃が、遊良が頼る逆転への一撃が…ユーラ相手では、何度やっても通る気が遊良にはしてこない。
…それは例えるならば怨念のよう。
まるで意図的にバルバロスの全体破壊をシャットアウトしにかかっているかのような、そんなユーラの雰囲気がどうしても遊良にそんな感情を抱かせてしまい…

「くっ…どうしても通らない…」
「当たり前だ！通してたまるか…オマエには少しの希望も与えない！オマエは、希望を持っちゃいけない人間なんだよ！いい加減身の程を知れ！」
「…だ、だったらお前はどうなんだ！お前は自分の事を俺だと言った！じゃあお前が言っている事は全部、お前自身も『そう』だってことじゃ…」
「うるせぇぇぇぇぇ！何も知らない奴が知ったような事言うんじゃ

ねえっ！」
「…ッ!?」
「何も知らない癖に…こんな温い世界で生きられたオマエにオレの何が分かる！……オマエはこれで【地獄の暴走召喚】を3枚使いきり、前のターンで切り札を全て使いきった。【貪欲な壷】で戻したって、また無理矢理ドローしてこなきゃいけないなんて無駄が多すぎる。だからオレにはわかる…オマエのデュエルは、もう終わりなんだって。」
「くっ…」

…時間が経つに連れ、ユーラの纏う苛立ちも益々迫力を増していくばかり。
先のターンに飛ばしすぎたのもあるだろうが、それでもここまで遊良にバルバロスが『通用しない』と思わせるユーラの雰囲気はどこまでも異質。
…それは怨念にも似た、遊良には絶対に勝機を与えないというその覚悟が成せる所業でもあるのだろう。
そんなアマギ　ユーラという人間が歩んできた、絶望を見たという人生が成せる執念にも似たその所業は、およそユーラに何があったのかを知らぬ遊良からすればあまりに異質に違いなく。
…なぜそこまで怒り狂っているのか。なぜそこまで遊良を目の敵にするのか。なぜそんなにも遊良を消そうとしたがるのか。
理解できない、理解したくもないユーラの激しい感情に晒されている遊良からすれば、あまりに理不尽に怒り狂い続けるユーラの圧力は受け止めきれないはずで…

しかし…

それでも―

「まだだぁ！バルバロスの召喚成功時に、俺は【冥界の宝札】と【サク

リボー】の効果で5枚ドローするっ！そして【アドバンスドロー】発動！バルバロスを墓地に送って2枚ドロー！2枚目の【トレード・イン】も発動だ！レベル8の【クラッキング・ドラゴン】を捨てて2枚ドロー！…よし！俺は墓地のバルバロスとクラッキング・ドラゴンを除外ぃ！」
「ッ!?」

それでも決してその手を止めず。
ユーラの迫力に気圧されぬように、更に宣言を続ける遊良もまたその声を大気に震わせどこまでも天高く叫ぶのか。
ドローした中でも、最後に引いた一枚を天へと掲げながら高らかにそう宣言し…その遊良の宣言によって、墓地にて眠る獣の王と機電の黒竜がその身をこの世から消し始め―

―否

この世から消え始めたのではない。
獣の王が吼える時、機鉄の竜はその身を散開させたかと思うと、2体のモンスターの姿が重なり始める。
…それは融合召喚ではない。シンクロ召喚でもない。エクシーズ召喚でもない。
それは単なる特殊召喚のエフェクト。しかし更なる力を求めた遊良が手に入れた、獣の王の新たなる力の呼び声でもあって―

「来い、レベル8！【獣神機王バルバロスＵｒ】！」

―！

【獣神機王バルバロスＵｒ】レベル8

ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／１２００

現れしは機電の鎧をその身に纏いし、神をも打ち抜く獣の王。
『海の星』と同様に、実力の『壁』を超えた『先』の地平へと至るための結論として、遊良が自ら導き出した純粋なりし『力』のカード。
しかし、攻撃力が不安定な『海の星』とは存在からして異なるとも言える…そう、召喚権を使わずに現れる、遊良の欲する進撃のための『力』そのモノ。

「馬鹿が！ダメージを与えられないそんなケダモノ１体で何が出来る！所詮ソレがお前の限界なん…」
「いや、まだだ！まだ終わらせない！最後の【闇の誘惑】発動ぉ！２枚ドローして【イービル・ソーン】を除外！そして３枚目の【成金ゴブリン】も発動だ！更にＬＰを１０００与えて１枚ドロー！」
「ッ、まだ引くのか!?もうオマエじゃ何も出来ないだろ!?」

けれども、まだ、終わらない。
まだまだこんなモノでは終わらないのだとして、更にその手を緩めずに激しくカードをドローし続ける遊良の姿もまたその迫力を増していくばかり。
…遊良のデッキを前もって調べてきているからこそ、【貪欲な壷】や【大欲な壷】を使っておらず切り札を使いきっている遊良のこのドローが、一体どれだけ無駄な行為なのかをユーラは理解していると言うのに。
Ｂｌｏｏ―Ｄは初めから戦う気がなく、『海の星』も倒した。『獣の王』の破壊もたった今耐えたばかりだし、今のアイツの残る切り札はダメージを与えられない獣機の王だけのはず。だからどれだけドローしたって逆転への切り札なんてくるはずがない―
ユーラの脳裏には、そんな思考が渦巻いている。それは同じ顔をしていても、遊良とはデュエルに対する焦点が違うからなのだろう。

しかし…

同じ顔をしていても、扱うデッキが違うことによりデュエルの『どこ』を見ているかによってデュエルに対する姿勢は変わる。
つまりそれは、ユーラには無駄に思えるこの激しいドローも、当の本人である遊良には見ているモノが違うと言うことでもあるからこそ。
果たして今の遊良の眼には、自分のデッキのこれまでとこれからが如何なる形で見ているのか。遊良はそのまま、繰り返すドローによって次々とデッキからカードを引き続け―

「よし、来た！このカードは、俺の墓地の闇属性が3体だけの場合にのみ特殊召喚できる！」
「なっ!?オマエ、そ、その召喚条件は…」
「そうだ！切り札を使いきったなら…新しい切り札で立ち向かえばいい！これが俺の新しい切り札だ！行くぞぉっ！」

そうして…

今ここに高らかに、遊良が叫ぶは竜の雄叫び―

轟かせしは不沈のいななき、溢れんばかりの竜の息吹。
それは真実の血の繋がりを知らぬままでも、内に秘めた『本性』は紛れもなく『巨龍』なのだという事を見せ付けるが如き轟きとなりて霊園へと響き渡るのか。

…天に掲げるその手が行き着く先は、Ｅｘでは決してあらず。

そう、遊良は知らない事ではあるものの、三代に渡ってソレを従えてきた確かなる血の『繋がり』は決して切れることはなく…

轟々とした迫力を纏い、類稀なる竜の叫びを体現しつつ。天に掲げたその手と意思は、竜の雄叫びとなりてＥｘデッキではなく手札へと向かっていて―

そして―

「怒りに震える逆鱗よ！歯向かう愚者を消し飛ばせぇ！」

轟く咆哮、震える大気。重々しく変わっていく、天城　遊良のそのオーラ。

神秘を感じさせる儀式の者達にも慄かない、今は小さき竜のその姿は彼が本当に『龍』の血を引いているのではないかと錯覚するほどの圧力となりて…

人々が消え去ってしまったここ決闘市の霊園においても、その存在の証明を確かに故人たちへと高々に見せ付けていて。

…聞こえてきたのは、かつて『逆鱗』と呼ばれていた歴戦のデュエリストが放っていた、世界に轟いていた『あの口上』と一字一句同じモノ。

そう、雰囲気までもが瓜二つの、大気を震わす咆哮に導かれ。Ｅｘ適正を持たぬ少年の新たなる切り札として、歴戦を知る龍の叫びが…

「来い、レベル７！」

今、ここに―

「【ダーク・アームド・ドラゴン】！」

その時…
大地が、震えた―
現れたのは黒き暴竜、怒りに震える巨大な体躯。
力を纏いし豪き腕を、その身に秘めた怒りによって振り下ろし全てを壊し尽くすという…まさに暴力が化身となった、怒り狂う『力』の象徴として名高き一体の巨大なる竜の姿。
…Ｅｘモンスターでもないこのモンスターの事は、きっと世界中の誰もが知っている。
そう、このモンスターがエクシーズモンスターへと進化した【撃滅龍　ダーク・アームド】は、何を隠そう【王者】と同格と称えられし『逆鱗』の『名』そのモノ。
つまりは、この【ダーク・アームド・ドラゴン】こそ…『逆鱗』と呼ばれし劉玄斎の、若かりし頃の切り札として広く知られたモンスター。
天を裂き、地を引き裂き、人をも裂き潰すその力はまさに『逆鱗』の名の原型となりえるに相応しい力と言えるのであって―

【ダーク・アームド・ドラゴン】レベル７

ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００

…遊良は、まだ知らない。

古の時代から受け継がれる、『劉』の血に刻まれたその運命と…その血がもたらす、『龍』の力を。

―遊良は、知らない。

『竜』の名を持つ自分の『父』もまた、かつて『このカード』を切り札にしていたことを―

そんな遊良自身も知らない血の巡りによって、太古の昔から『劉』の一族に確かに受け継がれてきたこのカードはまさに『この戦い』にこそ最も力を発揮するべきカードなのだという事を、『今の遊良』は決して知りえることはなく。

でも…

それでも―

「それは『逆鱗』のカード!?ま、まさかオマエもアイツから色々貰っていたなんて…」

「ッ…お前もって事は…まさか調べても出てこなかった【魔神儀】の儀式モンスターをお前に渡した人って!?……だ、だけど今はそんなことどうでもいい！行くぞ、ダーク・アームドの効果発動！墓地のサクリボーを除外し…【竜姫神サフィラ】を破壊する！」

「くそっ！墓地の【祝祷の聖歌】を除外して、サフィラを破壊から防ぐ！」

「３枚目!?…あ、さ、さっきのサフィラの効果か！でも止まるもんかぁ！２体目のサクリボーを除外しデミスを破壊！更に３体目も除外してサフィラを破壊だ！」

―!!

闇を纏いし力の竜より、放たれしは神をも殴り倒さんとする腕刃の凄まじき波動の刃。
それは例え一度防がれようとも、何度だって襲いくる無限の連撃となりて儀式の者達を切り刻むのか。
そう、全体破壊とはまた違う…例え一度止められようとも、標的を断ち切るまで叫ぶのを辞めない刃の雄叫びは決して収まることはなく。
今、遊良の新たなる切り札によって。遊良の得た『力の獣』と、【裏決島】終結の折に『逆鱗』より賜った、新たなる切り札の力のおかげで遊良の進撃は更なる激震を見せ続けるだけ。

「くっ!?」
「よし、バトルだ!バルバロスＵｒでカリスライムに攻撃!天蓋の粉砕、ディナイアー・ブラスター!」

―!

まずは先陣を切るように、機鎧を纏った獣の王が恐るべき威力の砲撃を放つ。
…攻撃力３８００は伊達じゃない。
補助も無く、他の効果も何も無く自身の力のみで攻撃力３８００を叩き出すその迫力は他の追随を許さぬ圧倒的『力』の象徴となりて、この実体化したデュエルをどこまでも激しく演出するのみ。
…それもこれも、遊良が戦う事を諦めずドローを続けたからこその快挙。
バルバロスをも糧として、墓地の闇属性の数を調整する役目も持ちながら…そう、それはいくらダメージを与えられないとはいえども、生半可なモンスターでは決して太刀打ち出来ない現実をまざまざと相手へと見せ付けているかのような迫力を醸しだしながら。
『海の星』を飲み込んだ異形の軟体を、跡形も無く獣の機王の砲撃が消

し去っていく―

そして―

「ダメージを与えられなくてもモンスターは倒せる！これでがら空きだぁ！【ダーク・アームド・ドラゴン】、アイツにダイレクトアタックだ！喰らえぇぇぇぇぇぇ！冥龍崩天撃ぃ！」

―！

「ぐあぁぁぁぁぁあっ！」

ユーラ　ＬＰ：５４００→２６００

とうとう…

とうとう、想像を絶する大ダメージがユーラを襲った―

それは実に２８００の大ダメージ。いや、遊良が3枚の【成金ゴブリン】で与えた３０００のＬＰのアドバンテージを考えると、未だユーラのＬＰが６００ほど優勢とは言えるのだが…

しかし…けれども…それでも―

これまで微細なダメージしか発生しなかったこのデュエルにおいては、初めて発生した初期ライフの半分以上を削る確かなる大ダメージ。

それも、自らＬＰを削ることはあっても全く『ダメージを受けていない遊良』が、微細な『ダメージを受けて続けてきたユーラ』にここで更に尋常じゃないほどのダメージを与えたのだ。

…それは明らかに、緩やかに進んでいたデュエルがここで一気に動

いたということ。
特にこの実体化したデュエルにおいては、初期ＬＰ半分以上のダメージを一挙に受けてしまうというのは…想像を絶する痛みを、一瞬で受けてしまうということでもあるはずで。

また…

得体の知れない力に身構えていた、デュエル前の気負った姿から一転。
これまでのデュエルの流れと、たった今与えた２８００という大ダメージによって…主導権を握りつつある遊良には、ユーラに対して一つ『気付いた』事があった。

そう、それは紛れもなく―

「弱い…」
「…ッ!?オ、オマエ…い、今…オレに向かって…なんて…」

ボソッ…と…
ユーラへと向けて、遊良の口から呟かれたのは正真正銘の嘘偽り無い、本心からの遊良の言葉であった。
それはこの攻防にて遊良が抱いた、紛う事なき遊良の本心。思わず口を衝いて零された、嘘偽りなき真意の呟き。
そう、決闘市の全ての人間を消してしまった、謎多き　アマギ　ユーラへと…
昨年度の決闘市の『異変』の犯人である前【紫魔】紫魔　憐造のよ

うな力を持っているのではないかと思われたアマギ　ユーラへと、思わず呟かれてしまった本心からの遊良の言葉であったのだ。

…しかし、それもそのはず。

確かに、時間が経つにつれ、ユーラの纏う苛立ちは確かに増していってはいる。

けれども、遊良が感じたのはただ『それだけ』なのだ。

確かにユーラからは、バルバロスの全体破壊を絶対に通さないという強い意思は感じられる。それはきっと、遊良が最も信頼をおくモンスターが【神獣王バルバロス】であるからなのだろう。

遊良が全身の信頼を置く、相棒と呼べる切り札だけは絶対に好きにはさせない。そんな気概をユーラからは感じられるのだが…

しかし、それは裏を返せばユーラのデュエルは、あくまでも天城遊良のこれまでのデュエルを研究してきたに過ぎないという…どことなく、努力と執念によって『辿り着いた』という印象を与えるに過ぎない代物。

そう、ＮＥＰＴＵＮＥはまだなんとか対応できる。Ｂｌｏｏ―Ｄが使えないのは嬉しい誤算だったのだろう。そして獣の王だけは何があっても通さないという気概の元に組み立てられたユーラの今のデュエルへの姿勢は、『逆鱗』の力を新たなる切り札とした遊良からすればどれも足りない、中途半端、やや拍子抜けと感じてしまうような生ぬるさとなりてその目に映ってしまったのだ。

…一見綿密に組み立てられているようで、【ダーク・アームド・ドラゴン】という新たな切り札が1体出ただけでユーラが大ダメージを喰らったのがその証拠。遊良は『魔神儀』の儀式モンスターという隠し玉を繰り出されても対処したと言うのに、ユーラはソレが出来ていない。

…遊良がダメージを受けていないと言うのに、ユーラだけが既に3

６００ものダメージを受け続けていることが紛れもない証明。遊良は自らのＬＰを削ってもダメージは受けないのに、ユーラは回復こそすれダメージを微塵も与えられていない。

あれだけの迫力を持ち、あれだけの執念を見せ、あれだけの激しさを見せ付けてくるのに…付け入る隙が大きすぎる。そこまでの力を感じない。

それは、もしユーラが昨年度の紫魔　憐造のような、立ち向かうことすらおこがましい程の圧倒的な力を持っているのではないかという予測を立てていた遊良からすれば…

一体、どうしてユーラが決闘市の全ての人を消し去れたのか疑問に思ってしまうレベルに違いなく―

「前に戦ったときは気付けなかったけど、今こうして普通にデュエルしてみて気付いたんだ。お前が…あまり、『強くない』…って…」

「ッ…」

また、遊良のソレは何も『慢心』からくる言葉ではない。

遊良には確かなる確信がある。以前にアマギ　ユーラに襲われてデュエルした時は、【堕天使】が使えないという突然の衝撃と圧倒的不利に動揺して気付く事ができなかったが…

しかしソレを乗り越え、自らのデッキを1から創り直し。【決島】と【裏決島】での激しい戦いを経て成長した遊良は、『決闘市の人々が消えた』ことや『自分と同じ顔の人間が現れた』という非現実的な状況下に置かれても、どこまでもデュエルだけは冷静に行う事が出来ている。

そんな、以前よりも成長した遊良だからこそ…ユーラの実力について今ここにハッキリと気付いてしまったのだろう。

そう、儀式召喚を駆使するアマギ　ユーラ…

その実力が、怒りに追いついていないほどに…

―『弱い』…

と、言う事を。

普通であればありえない…昨年度の『異変』のように、決闘市の全てを混乱に落とすほどの所業を見せ付けてきたアマギ　ユーラにまさか遊良が『弱い』と感じてしまうだなんて。

通常であれば絶対にない…押さえられないほどの怒りを持って、衝動的にデッドｏｒアライブのデュエルを仕掛けてくるアマギ　ユーラが、まさか復讐の相手よりも『弱い』だなんて。

けれども、今この場においてはソレが紛れも無い真実でもあるのだ―

遊良の抱いた感覚に嘘はない。以前にフードの男に敗れ『堕天使』を失ってしまってから立ち直り、【決島】と【裏決島】を経て確かな高みに昇華されつつある今の遊良の嗅覚は生半可なモノでは決してない。

この感覚は信頼に値するモノ。何せ【裏決島】の時に『極』の頂きに立っていた最凶の敵【紫影】相手にも正確に発動していたソレは、明らかに【紫影】よりも弱いアマギ　ユーラ相手に狂うはずもないのだから。

だからこそ、遊良は確信を持つと共に混乱を抱きつつも。それでも見えてしまった確かなる『真実』に、遊良の頭もまた混乱を感じ始めているのか。

「なんでその程度の力で世界を消すなんて言った！なんでその程度の力しかないのに紫魔憐造の様な雰囲気を纏えた！なんでその程度なのに、決闘市の人々を消し去れたんだお前は！」

「ぐ…ぐぐっ…オ、オマエェ…」

そして、遊良に『弱い』とまで言われてしまったユーラは…

怒りに歪めたその顔の奥…その脳裏に、一体何を思い浮かべるのだろう…

―…

…『あの日』、全てを失った。

そう、Ｅｘ適正がないと宣告された『あの日』、そこから彼の人生は大きく狂い始めてしまった。

それまでは儀式召喚の歴史を復活させる天才少年だとか、プロになれる才能の持ち主だとか、大人顔負けの実力だとか言って盛大に持て囃していたくせに…

一人の医者の、たった一つの宣告だけで、彼の人生は最悪と言っていい程にマイナスへと狂い初めてしまったのだ。

…周囲から人が消え、友が消え、親まで失った。

しかし、それでもどうにか彼が生き長らえたのは、偏に彼を見捨てずに命を繋げてくれ守ってくれた２人の幼馴染が居たからこそ。

救ってくれた師など居ない。大人が全員敵である世界で、それでも生き長らえることができたのは全てを投げ打ってでも傍に居てくれた２人の幼馴染のおかげ。

けれども、それでも彼が『こうなって』しまったのは…

『あの日』の宣告以上に、彼の全てを狂わせた『２つ』の出来事であり…

―『うわぁぁぁぁぁ！うそだぁぁぁぁ！』

ユーラの脳裏に浮かび上がるのは、全てを燃やし尽くした憎き業火―

―『鷹矢！鷹矢ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』

中等部の時に…鷹矢が、死んだ―

誰かがイタズラで放火したのだろう。天宮寺家のご厚意で置いてもらっていた家に、誰かが火をつけたことが周囲の住宅まで巻き込む大火災が引き起こされたのだ―

そして犯人はすぐに捕まったものの、逃げ遅れた彼を庇って…

燃え盛る隠れ家に取り残されて、鷹矢は『焼け死んだ』。

それだけではない―

―『嫌だ！し、死なないでくれ！ルキィ！』

高等部の時に…ルキが、死んだ―

いや、正確には高等部には進学を許されなかったために、高等部の年代で路頭に迷っていたのだが…

自分の人生を棒に振ってまで傍に居続けてくれたルキが、運悪く錯乱した男の凶刃をその胸に受けてしまったのだ―

それは彼の目の前での出来事。それは彼を庇っての出来事。名前も知らぬ、精神異常を来たしていた男に…

何の因果か、ルキは『刺し殺された』。

…ユーラの脳裏に浮かぶのは、何よりも大切だったはずの幼馴染を救えなかったという、身を捩られるような苦しい記憶。

…守れなかった、鷹矢とルキを。

皆が持っている『当たり前』を持っていない自分に、手を差し伸べてくれるほど世界は優しく出来ていない。そんなＥｘ適正がない自分と一緒に居た所為で、世界に嫌われ命を落とす羽目になった大切な幼馴染の最期の姿が…どうしても、ユーラの脳裏からは消えてはくれない。

そして、遊良からの『弱い』という最大級に屈辱的な言葉を聞いてしまって……

更に、ユーラは思い出してしまう。

それは断片的ではあるものの、彼があまりの絶望的な人生に自ら幕を下ろそうとしていた時のこと…

そう、彼が、自らその命を絶とうとしていた時。

この世界は奪うばかりで、弱者に施しを与えてくれるほど上手く出来てはいない。だからこそ奪われ尽くされた自分はこれ以上生きていてはいけないのだと、幼馴染を失った絶望からそう言われている気がして…

誰も知らぬ世界の片隅で、彼は…自らその命を絶ったはずだった。

そう、絶った、はずだった―

しかし…

世界に対する怨嗟の中で、消え行く命の灯火をじわじわと感じていた彼の下に…

『ある存在』が、唐突に語りかけてきた―

―アマギ　ユーラ…『何』ヲ望ム

…と。

それは死に行くだけだったユーラの脳裏に、直接語りかけてきたような声であった。

心の深層へと直接響いているような、そんな不可思議なモノではあったものの…

その時の声は、今にも事切れそうだったユーラに、永遠とも思えるような『この世界の真実』を事細かに見せ付けてきたのだ―

そう、理解させられたのは、鷹矢とルキが死ぬという運命は彼が何度人生をやり直したって根本において『決まって』しまっている天城遊良の運命であると言う事。

『正史』…例え何度繰り返したって『そう進む』ことが決められている正しい進みは、これまで繰り返されてきたソレにおいても全てにおいて鷹矢とルキをあそこで殺していたと言うではないか。

果たして…ソレを知った彼は、この世界に対しどれほどの憎しみを抱いたのだろう。

なんだソレ…そんなコトがあっていいのか―

それは誰にも理解できない、想像を絶する怨嗟であったに違いない。『ある存在』に全てを教えられ、全てを奪われ続けてきた少年はこれまでにないほどの絶望を死の間際で再び抱いてしまったのだ。

けれども、その時の事をユーラは断片的にしか覚えていない…また、今にも死にゆこうとしていた為に、いきなり見せられた『真理』に対しても違和感を感じるような命は最早ユーラの中には残っていなかった。

だからこそ…

思い知らされた『世界の真実』、自分達の決められた『運命』、永遠に殺され続ける鷹矢とルキ。そんなモノを死の間際で思い知らされれば、真っ暗な意識の闇の中でユーラが憎しみと共に『ある存在』に返事をしてしまったのも最早必然だったのだろう。

―アマギ　ユーラ…『何』ヲ望ム

（…復讐を…オレたちをこんな目に合わせる世界に…運命に…復讐を…）

一体、この時に聞こえてきた声は『何』だったのか。それは後になって分かったことではあったものの、それでも死のうとしていた『この時』のユーラにとってはその声の正体などどうでもいいことだった。

…ただ単純に、ただ純粋に。

望んだのは、自分達を殺し続けるこの世界に対する復讐…ただそれだけ。

――ヨカロウ…望ムモノヲ…与エテヤル…シカシ…ソノ『代償』ニ…

そうして、『声』が最後の審判を下しながら…

―オマエ自身ヲ…頂ク…

…と、そう言ったことだけを、ユーラは覚えていて―

そして…

ユーラは、蘇った。

一度自ら命を絶った少年は、絶望の淵で『世界の真実』を知ってしまい、あまりの憎しみから再びその命を燃やし始めてしまったのだ。

だから、滅ぼした―

断片的ではあるものの、確かに覚えている『世界の真実』と『正史』に怒りを覚え。自分に力を与えるという『ある存在』の力を用いて、鷹矢とルキを何度も殺してきたこの世界を、自分が今いる世界をユーラは全て消滅させた。

けれども、全てを消し去る力を持ってしまったが故に少年は理解してしまった…

それは、今の自分が居る場所が決して『最も新しい』ところではないと言う事を。

…まだ、鷹矢とルキが死ぬ世界がある。

全てを無くした少年に残っていたのは、ただそれだけの思い。この世で最も大切な2人が、永遠に死に続ける運命なんて許せるはずがない―

だからこそ、『向こう』から現れた迎えに連れられて…1つ先の、最も新しい『ここ』に来たと言うのに…

ユーラは、見てしまった―

正しく決まっているはずの流れに、『次』の奴らは従っていないと―

中等部の時に焼け死ぬはずの鷹矢が、生きて高等部に進学している。

刺されて死ぬはずのルキが、無事に生きて高等部に進学している。

そして…

全てを奪われ、全てを失うはずのアイツが―

天城　遊良が、笑っている―

高等部に進学を許されなった天城　遊良が、普通に高等部に進学している―

1年時の【決闘祭】で、あろうことか優勝している―

決闘市の人々に、受け入れられている―

なぜ…なんで、どうして―

そんな未来は教えてもらっていない。そんな未来があるわけがない。

天城　遊良の人生とは奪われ続けるだけの悲惨な人生。それは気の遠くなるほど繰り返されているこの世界においては絶対に不変であるはず。

そう、ありえるわけがない―

鷹矢が、焼け死ななくてもいい未来なんて…

ルキが、刺し殺されなくて済む未来なんて…

自分が、上手く行っている未来なんて―

許せ…ない…

―…

「オマエに…オマエに何が分かる！鷹矢とルキが居て、決闘学園に通っていて！【決闘祭】に優勝した？【決島】で準優勝した？おかしいんだよ！なんでオマエがそんなにも上手くいっている！」

遊良に『弱い』と言い捨てられ、ユーラが吐露するは羨望の毒吐き。

…小さな子どもの癇癪の喚き。我慢ならない無意味な弾劾。

ユーラの見た絶望とは一体何なのか。しかし彼の脳裏に浮かぶ、極めて『断片的』でしかない絶望の記憶からではその全てを理解することは誰にも叶わず…

しかし…それでもあまりに見苦しく叫び続けるユーラの喚きは、彼が遊良達の思い浮かべる絶望を超えたモノを見てきたが故のどうしようもない咆哮でもあるのか。

アマギ　ユーラに何があったのか…それを天城　遊良は何もしらない。けれども唯一つ、一つだけ確かなことは…

今を生きる遊良とは、全く別の人生をアマギ　ユーラは歩んできたと言うこと。Ｅｘ適正だけではなく、鷹矢とルキまでをも失うという、生きることを諦めそうになるほどの絶望をアマギ　ユーラは歩んできたと言うことなのだろう。

いや…ユーラの知る『知識』によれば、本来であれば『天城　遊良』という人間はその人生において悉くを奪われるだけの存在であるはずだと言うのに。

だからこそ、ユーラには許せなかったのだろう。自分が全てを奪われ続けてきたのに…それが正しい運命だと理解させられたのに…

自分が鷹矢とルキを失ったのに、『次』のコイツは鷹矢とルキを失っていないなんて…と。

「こんな世界は偽物なんだ！全部…全部全部偽物なんだよ！鷹矢とル

キが生きていて、オレが上手く生きられている世界なんてあるはずがない！だって、アイツはオレにそう言ってきたんだ…天城　遊良は、どうでもいいゴミなんだって！だからこんな世界なんて偽物なんだ！間違いなんだよ！」
「な、何言って…た、鷹矢とルキが『生きていて』ってどういうことだよ！」
「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！何も知らないくせに…本当なら！正史なら！なにもかも失って、誰からも認められなかったオレが何でこんなに良い目にあってるんだ！」
「正史…ま、またソレ…何なんだよ、【紫魔】も【紫影】も言ってたけど！正史って一体何なんだ！」
「うるさいうるさいうるさぁぁぁ

手札：3→2枚
場：【ダーク・アームド・ドラゴン】
【獣神機王バルバロスＵｒ】
魔法・罠：【冥界の宝札】、伏せ1枚

遊良は、ユーラがどんな人生を歩んできたのかを知らない。
だからこそ、見苦しくともあまりに必死になって憤慨しているユーラの気概に…強さ以上の『何か』を感じてしまったかのようにして、どこか気圧されるように遊良はそのターンを終えるしかなく。

…一体、ユーラの見てきた絶望とは何なのか。

けれども、この男は間違いなく耐え難い絶望を見てきたのだろう。ソレを即座に理解できてしまうのは、遊良自身も『そう』だったからに他ならず。
しかし、ここへきて対極的な立場に置かれたことで遊良が理解してしまったのはもっと本質的なこと。そう、ユーラが言った、『鷹矢』と『ルキ』の事で遊良はユーラの言った『正史』の本質的な断片をほんの少しだけ理解してしまったのだ。
それは遊良が腐らずに今この時まで生きられたのは、偏に鷹矢とルキという存在が生きて傍に居続けてくれたからこそと言うこと…
…だからこそ、嫌でも理解できてしまう。
もし自分も、ユーラと同じように鷹矢とルキを失っていたら…きっと、自ら命を絶つかユーラと同じ様になっていただろう…と。

「おかしいだろ！鷹矢とルキの運命は不変の運命だって言われたんだぞ！全部オレの所為だって言われたんだぞぉ！なのに…なのにどうして今のオマエはこんなに上手くいっている！ただのゴミのはずが！関心にも値しない不必要なバグが！そんなどうして『オレ』が上手く行っているって言うんだ！どうしてオマエには鷹矢とルキがいる

んだよおおおおおおおおおおおおお！」

しかし、そんな遊良を意に介さず。どこまでも喚くユーラの叫びは、どうしようもない感情の昂ぶりとなりて更に激しく感情を纏う。

それは上手くいっている遊良への怒り。自分が…いや、『あまぎゆうら』という存在が背負うべき正しい道筋、『正史』の悉くを無視し今こうして上手くいっている遊良へと対する、ユーラの憤慨はまさに対峙している遊良そのモノへの押さえきれない怒りなのか。

…一度この世から魂を切り離したが故に悟ってしまった、『正史』と呼ばれるモノを知っている風のユーラにはどうしても遊良が許せない。

そう、どうしてもユーラには許せないのだ。正しい道筋だと言われた理から外れ、自分が欲しかったモノの全てを失っていない遊良の存在そのモノがどうしても。

だからこそ、ユーラはどこまでも猛り続ける。

遊良の全てを否定し、拒絶し、糾弾し、反論し、非難し、否認し、批判し、反対し、拒否し。

遊良から全てを奪って、その存在そのモノを奪って、奪って、奪って、これまで築いてきたであろう遊良の全てを無に帰す事でしか、その怒りは決して収まることはしないのだから。

歯止めが、利かない―

「あぁぁぁ

【魔神儀―ペンシルベル】レベル３
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【魔神儀―ペンシルベル】レベル３
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
【魔神儀―キャンドール】レベル４
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

そうして…
再びユーラの場に現れしは、これまで幾度となく呼び出してきた儀式をサポートする魔導具たちであった。
…しかし、その手の内も実力の底も遊良に知られてしまった今となっては、これ以上の抵抗をどれだけ行おうとも無駄なはず。
そう、気概だけでは戦況はひっくり返らない。それは紛いなりにも『あまぎ　ゆうら』であるユーラも、この状況は自分が不利だと言う事くらい分かっているはずだと言うのに…

そう、遊良との力の差は、ユーラとて分かっているはずだと言うのに―

「ッ、まだ【魔神儀】の儀式モンスターが居たのか!?け、けど3体のモンスターを並べて一体何を…」
「何が【決闘祭】だ…何が【決島】だ！何が【黒翼】と【白鯨】の弟子だぁぁぁぁぁぁ！オマエなんかが…オレには絶望しかないのに、オマエが恵まれてるなんて全部おかしいんだよぉ！神よ、この命なんてくれてやる！だからオレに……このオレにいいいいい！」

噴出せしは暗黒の轟き、止めどなく溢れる混沌の漂い。
その手に掲げし1枚のカードに、己の怒りの、いや命の全てを込め

るかのようにしてユーラは更に激しく猛り続け…
また、その怒りの根源を再燃させるユーラの怒りに。まるで呼応するかのようにして、掲げられし1枚のカードからは昨年度に遊良達が嫌と言うほど見た『黒い靄』のようなアレが噴出し始めたではないか―

そして―

「アイツヲ消ス力ヲヨコセェェェェェェェェェェッ！」

―！

「きゃあっ!?」
「ッ!?な、なんだ!?」
「むっ!?こ、この感じはまさかっ!?」

突然巻き起こった突風に、ルキと遊良が一瞬怯み。
しかし、ソレと『一度だけ』対峙したことのある鷹矢が『何か』に気付いた…

その瞬間―

「ウォオオオオオオオオオオオオオッ！オレハ3体ノモンスターヲ『生贄』ニィィィィィィィッ！」

それは儀式召喚のためのモノでは断じてない。

天に捧げる生贄と、その身に纏う天の渦。そう、それはユーラが忌み嫌っていたはずの、遊良が扱う紛れも無い、アドバンス召喚のためのエフェクト。

…しかし己の全てを捧げたユーラの、混沌に触れる叫びが霊園へと轟き。

無駄な詠唱など必要なく。無駄な口上など存在せず。あまりに純粋な怒りと共に、虚無へと誘う宣言を高々とユーラは叫ぶだけで…

大気が暴れ、大地が揺れ。この霊園…否、星その物が怯えながら。今、あまりに溢れ出る怒りと闇によって…

ここに呼び出されし…

それは―

「【邪神イレイザー】ッ！」

―それは、『何か』の蠢きだった。
人間が触れてはならない領域。人間が感じてはいけない存在。
存在そのモノがただの『空虚』で、存在そのモノがただの『虚無』。
…音を消し、心を消し、命そのモノを消してしまう純粋なる消滅の化身。
あまりに虚ろで、あまりに虚空な、あまりに暴悪な泡沫の根源。その神性は直視した者の心を、、直接削り取っていくような絶望を誰しもに抱かせるのか。
その蠢きの一波に触れただけで、霊園の木々が次々と消滅していくその光景は…この存在から駄々漏れている、ただ純粋なる『消滅』の余波そのモノであって。

そう、神に見放されているはずの、『あまぎ　ゆうら』の手によって。

アマギ　ユーラの手によって、今ここに…この、霊園に―

【邪神イレイザー】レベル１０
ＡＴＫ／　？→４０００　ＤＥＦ／　？→４０００

邪なる神が…

『邪神』が、降臨した―

ｅｐ１０７「翼」

―それは、『何か』の蠢きだった。
人間が触れてはならない領域。人間が感じてはいけない存在。
存在そのモノがただの空虚で、存在そのモノがただの虚無。
…音を消し、心を消し、命そのモノを消してしまう純粋なる『消滅』の化身。
あまりに虚ろで、あまりに虚空な、あまりに暴悪な泡沫の根源。その神性は直視した者の心を、直接削り取っていくような絶望を誰しもに抱かせるのか。
その蠢きの余波に触れただけで、霊園の木々が次々と粒子となりて『消滅』していくその光景は…
この存在から駄々漏れている、ただ純粋なる『消滅』の力そのモノ
―

【邪神イレイザー】レベル１０
ＡＴＫ／　？→４０００　ＤＥＦ／　？→４０００

―『アイツヲ消スカヲヨコセエエエエエエエエエエッ！』

その叫びによって霊園に降臨したのは紛れもなく、この世のモノとは思えないほどの悪意を纏っている、歪なるも蠢く『消滅』の神威であった。

「な…なんだよ、コレ…」

そして、ユーラが繰り出したソレを目の当たりにして…遊良が思わず、無意識に後ずさりしてしまったのを一体誰が責められようか。

…ソレほどまでに『邪神』の圧は強大で、ソレほどまでに『イレイザー』と叫ばれた存在の神威はこれまで遊良が対峙してきたどの存在をも超えている。
その蠢きを一目見ただけで心が消されていくような…その姿を一目見ただけで存在が消されてしまいそうな…
そんな、形容し難い不安感が沸々と湧き上がってくるような、まるで抵抗することすら許されずに『消滅』させられそうになる神の威圧が目の前の『邪神』から駄々漏れにされているのだ。
…一体、【邪神イレイザー】とは何なのか。
何やらルキの持つ『赤き竜神』と、同じような感覚だけは遊良も辛うじて理解できるものの…これ程までの圧倒的な圧力を感じてしまうのは、きっと遊良が実際にこの神と対峙しているが故なのだろう。
…伝わってくるのは、この神が司る『消滅』の力。
しかし、それ以外の何もかもがわからない…
思考を巡らす端からその全てを『消されて』しまうようなその感覚は、『邪神』と対峙している遊良から何もかもを奪い去ってしまいそうな威圧となりてどこまでも妖しく蠢くだけで…

「こ、この感じは間違いない…同じだ…や、奴の繰り出した『邪神』と…」

また、ソレと『一度だけ』対峙したことのある鷹矢だけは…目の前に現れたソレの正体に、いち早く理解出来てしまった。
そう、鷹矢は…鷹矢だけはこの存在と『同種』のモノと対峙したことがある。
それはきっと、この世界においては鷹矢だけなのだろう。少なくとも有史以来で、おそらく初めてソレと対峙したのは世界中探しても天宮寺　鷹矢のみのはず。
…鷹矢が対峙したのは、この『消滅の神』と同種の『恐怖の神』。
しかし、釈迦堂　ランが持っていたあの【邪神ドレッド・ルート】と同種のモノを、一体どうしてアマギ　ユーラが繰り出せたのか。

そんな事など鷹矢には全く持って検討もつかず、それでいてこの混沌とした場では鷹矢が零した『核心』に迫るそんな言葉も誰にだって伝わることもなく。

しかし…

「ハァ…ハァ…グッ…ァ…アァァァ

「さ、させるか！罠発動、【メタバース】！デッキから【チキンレース】を発動する！」

―！

瞬間、寸前、咄嗟、刹那。

狂い狂ったユーラの叫びと同時に、邪神の口から放たれた消滅の重光の波動が見えない壁に阻まれて―

それは遊良がデッキより発動した、【チキンレース】の効果による戦闘ダメージ軽減効果。

そう、いくらこの戦闘による邪神からのダメージが２００で、いくらＬＰが残るとは言え…それでも、神よりの一撃はほんの少しでも受けてはいけないと…そう、遊良は判断したからこそ。

バルバロスＵｒの破壊は免れなかったものの、しかしそれ以上に邪神からのダメージを『受けてはいけない』と感じたが故の判断であり、結果的に切り札の１枚は破壊されてもなお、どうにか遊良はダメージを受けず。

しかし…

『命』だけは守れた状況にホッと胸を撫で下ろす感覚を覚えたのも束の間。

…邪神の攻撃が直撃した、【獣神機王バルバロスＵｒ】のカードが―

消滅、していく―

「なっ、カ、カードが!?」

あまりに衝撃的な光景に、思わず動揺を隠せない様子を見せる遊良。

…当たり前だ。

何しろ、邪神の一撃によって直撃を受けた【獣神機王バルバロスＵｒ】が、カードごと跡形もなく消滅してしまったのだから―

…一応、戦闘破壊され墓地に送られたという状況だけは成立しているとは言え。それでも獣の機王が消滅してしまったその光景は、遊良からすればあまりにショッキングなモノであったに違いないはず。

そう、自分のカード、それも切り札足り得る１枚が、邪神の攻撃をその身に受けカードごと消されてしまったというその事実は…

邪神を前にしている遊良に、更に酷い恐怖心を与えたにまず間違いなく。

（ヤバイ…あのモンスターは本当に…）

…だからこそ、遊良は理解してしまう。

今の一撃は、本当に受けてはならない一撃だったのだ…と。

もしほんの僅かでもダメージを喰らっていれば、いくら２００のダメージとは言えとんでもない衝撃が襲いかかって来ていたのではないだろうか。

それだけではない。あの『消滅の神』の放った赤い重光のブレスの、その余波でも掠っていれば…今頃自分は、ユーラと同じく体の端から霧散してしまっていたはず…

もし、あんなのを…ダイレクトで、喰らってしまえば―

遊良の心に浮かび上がるは、払拭しきれないそんな思い。

走馬灯にも似た高速化したその思考は、まさにこの攻防が遊良にとって『生き死に』を左右するモノであったという証明となりて…

「なんなんだよソレは！その『邪神』ってのは一体…」

「ウ　　ル

セエエエ

！」
「ッ!?」
「喚クナ！足掻クナ！抵抗スルナァァァァァァァ！オマエハ消ス！オレノコノ手デェェェェェェェェェェェェェ！」

けれども、遊良の声など聞く耳持たず―
狂い狂ったユーラの叫びは、邪神の呼応に反応して更にどこまでもその激しさを増していくばかりではないか。
飲み込まれていく…あまりに激しい、邪神が織り成すその悪意に―
そのまま、攻撃宣言を終えたユーラは…
消滅の神の咆哮に合わせるように…否、『邪神』の咆哮に従うように。
更にその叫びを、激しく轟かせるのみ。

「ウォォォォォォッ！邪神ヨ、マダ足リナイ！マダ、コノ程度デハ！モット、モットダ！モット『力』ヲヨコセェェェェェェェェェェェッ！【貪欲な壷】ヲ発動ォ！カリスライム、クリオルター、キャンドール、ペンシルベル2体ヲデッキヘ戻シテ2枚ドローッ！【チキンレース】ノ効果デＬＰヲ１０００払ッテ1枚ドロー！【トレード・イン】発動！【輝神鳥ヴェーヌ】ヲ捨テ2枚ドローッ！」
「なにっ!?」

そんなユーラが巻き起こすはドローの嵐。自分がバカにしていたはずの、遊良を模した連続のドロー。
そう、連続して行われる、何の脈絡も無いカード達を組み合わせて行われるソレは紛れもなく…遊良が得意とする、メインデッキの無理矢理な回転と同じモノにも見える行動ではないか―
何の因果か、邪神の力によって増幅された怒気を纏いて行われるユーラのソレは奇しくも遊良と同じデッキ回しとなりて、遊良と同じ所作にて連続のドローを行い続ける。
…まぁ、遊良であればそのドローの嵐は、本来であればメインフェ

イズ1に行っているとは言え。
　それでも、本能を駄々漏れにしながら行っているかのようなそのデュエルはまさしく、『あまぎ　ゆうら』という人間のデュエルの本質がまさにソレなのだと言わんばかりに…
　―狂ったように、暴れるように。
　どこまでも激しく、ただひたすらにカードをドローし続けるだけ。

「マダダァ！【星呼びの天儀台】発動ォ！【竜姫神サフィラ】ヲデッキノ下に戻シ2枚ドロー！【闇の誘惑】モ発動ォ！2枚ドローシ【魔神儀―ブックストーン】を除外ィ！」
「こ、こいつ…まだ、こんなドローを…」
「グッ…ァ…っ…はぁ…はぁ…ぐっ…こ、これが代償だ……命を削り、邪神に身を食われ…そうしなければオレは…『あまぎ　ゆうら』ってのは本来この程度なんだよ！オマエだってそのはずだろ！なのに、なのになんでオマエは平然とこんな真似が出来る！なんでオマエだけが決闘学園に入学できた！どうしてオマエなんかが【黒翼】や【白鯨】に師事出来るっていうんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！グッ…ウッ…ウォォォォォォォォォォォォォッ！2枚目ノ【闇の誘惑】発動！2枚ドローシテ【デーモンの降臨】ヲ除外ィ！…タ、ターン…エンド…」

ユーラ　ＬＰ：２６００→１６００
手札：3→3枚
場：【邪神イレイザー】
伏せ：なし

そうして…
妖しく蠢く『邪神』を呼び出し、連続のドローと共にターンを終えたユーラの姿はまさしく満身創痍。
消滅を司る神を場に呼び出した代償か、その体からは赤い重光がまばらな粒子となりて少しずつ霧散し始めており…
連続したドローを繰り返したその体は、無茶を押し通しているかの

ようにして疲労困憊な姿となっている。
…それはユーラの一連の行動が、己の力量を超えた行動となっていたことの紛れも無い証明なのか。
『邪神』の召喚も、連続のドローも。そのどれもが、ユーラの器には収まりきらない分を超えた行動とでも言わんばかりに…
デュエルも、そして自分自身も。今にも崩壊してしまいそうな危うさを滲ませながら、ふらつく足取りでユーラは自らのターンを終えるだけ。

…そんな満身創痍なユーラの姿を見て、遊良は一体何を思うのだろう。

ユーラが歩んできた道筋も、その人生に何があったのかも遊良は知らない。
また、Ｅｘ適正を与えられなかったという、神に見放されているはずの『あまぎ　ゆうら』の人生において。一体、どうしてユーラが『邪神』という神の力を持っているのかも…遊良には、微塵も検討もつかず。
…ユーラは言った。『あまぎ　ゆうらとは本来この程度』…と。
ユーラが文字通り身を削って見せたあのドローの嵐は、遊良からすれば日常茶飯事。それが自分の力なのだとして、これまでずっと磨き続けてきた、遊良のデュエルの根幹とも言えるデッキ捌きがすなわちあの形。
しかし、ユーラはそれすら否定した。それは自分よりも世界の『真実』を知っているであろうユーラの、遊良には知りえぬ『あまぎ　ゆうら』の真実でもあるのだろうが…
…けれども、それでも『邪神』を目の前にして。
まだ遊良も戦意自体は失っておらず。遊良がこの場に立てているのは、偏に目の前に立つアマギ　ユーラというデュエリストが自分と比べてもなお未熟な部分を残すデュエリストであるからなのか。
…対峙しているだけで、あの『消滅の神』の危うさはひしひしと伝

わってくるものの。その使い手自体が力を御しきれずにふらついているのならば、まだ自分は立ち向かえるのだ、と…
まだ、遊良もそう思えているが故に…

（…あの【邪神イレイザー】がとんでもなくヤバイ奴だってのは分かる…で、でも、アイツの調子があんなだったら…まだ、付け入る隙はある！）

遊良とて、突如目の前に現れた『邪神』が人知を超えた厄災であることを本能で理解しつつも。
それでも、ここで引くわけには行かないのだと―
己を鼓舞し、心を奮わせ。切り札の1枚を消滅させられた動揺を、無理矢理にでも抑えながらも…
どうにか『邪神』に立ち向かおうと、自らのターンを迎えようとするのみ。

しかし―

「…俺のターン、ドロー！」

遊良が、ターンを迎えてすぐに…

邪神が…

吠える―

―！

「ぐっ!?」

遊良　ＬＰ：２０００
手札：２→３枚
場：【ダーク・アームド・ドラゴン】
魔法・罠：【冥界の宝札】
フィールド：【チキンレース】

「なッ!?タ、ターンが勝手に!?」
「神ノ前デ足掻ケルト思ウナ屑野郎！ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！オレノタァァァァン！ドロオオオオオオオオオッ！」

自らのターンを迎えてすぐに、なぜか強制的に終了してしまった遊良のターン。
それは『邪神』の咆哮に、遊良が怯んでしまったが故の強制的なターンの終了なのだろうか。
…デュエル続行の意思がない者に、デュエルディスクが強制的にターンを終了させる現象はしばしば確認されている事例だとは言えども。
それでも、立ち向かう意思を見せていた遊良のターンが強制的に終了させられたことはどうにも説明がつかない。心を折られていない遊良のターンが、勝手に終了することなど本来ありえてはいけない現象だと言うのに…

これではまるで、デュエルディスクが『邪神』の意思に従ったかのようではないか―

いくらユーラの力量に付け入る隙があろうとも、行動することを許されなければ遊良とて何も出来ない。

そんな今の遊良のターンの終了は、コレ以上無いくらいの同様を遊良へと与えつつ…

「オカシインダヨォ、オマエナンカガ生キテル事自体ガァ！【儀式の下準備】発動ォ！デッキカラ【闇の支配者との契約】ト【闇の支配者―ゾーク】ヲ手札ニ加エ、ソノママ儀式魔法【闇の支配者との契約】発動ォ！手札ノ【終焉の王デミス】ヲ生贄ニィィィィィィィイ！」

ユーラの怒気を、更に上昇させるだけで―

「レベル８、【闇の支配者―ゾーク】ヲ儀式召喚！」

―！

【闇の支配者―ゾーク】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／１５００

現れたのは、暗黒世界を統べる覇王。

『邪神』の悪意と同調せし、異世界に君臨するその暗黒闘気を駄々漏れにし…

破滅へと誘う危うさを纏いて、どこまでも不気味に闇に佇む。

「全部…全部全部間違ッテルンダヨ、オマエノ世界ハ！【闇の支配者―ゾーク】ノ効果発動ォォォォォオ！ダイスロォォォォォォルッ！」

そして…

運否天賦に身を任せる、破滅への効果が天に舞う。
それは天運に愛された者でもないと迂闊には使用出来ないような、一種のギャンブル性を帯びた効果ではあるものの…
…しかし、怒り狂ったユーラの声に同調するかのようにして。
今一度、『邪神』が天に吠えた…
その、結果は―

「ダイスノ目ハ『4』！【ダーク・アームド・ドラゴン】ヲ破壊スル！」

―！

デュエルディスクが判定するはずのダイスの目すらも、邪神がコントロールしているのではないかと思えるほどに。
ユーラが叩き出したのは最善の目、それも『死』を連想させる『4』の目を鈍く妖しく光り輝かせ、その威光を遊良へと向けて見せ付けるのか。
…いくら遊良の場のモンスターが【ダーク・アームド・ドラゴン】の1体だけで、ユーラは『6』以外の目を出せば良いだけだったとは言え。
それでも万が一という可能性があるデュエルにおいては、おいそれと発動できない効果に何の恐れもなく…
ユーラはそのまま、激しく攻撃を命じるのみ。

「クタバレェ！【闇の支配者―ゾーク】デ奴ニダイレクトアタック！」
「くそっ！攻撃宣言時に手札の【アンクリボー】の効果発動！【アンクリボー】を手札から捨てて、墓地から【モザイク・マンティコア】を特殊しょうか…」
「無駄ダァァァァァァ！」

―！

【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００

また、遊良の意に反し。
そう、『邪神』の咆哮と共に、遊良の宣言に反して場に現れたのは【モザイク・マンティコア】ではなく…
他に墓地に存在していた、異なるカードの１枚であって。

「なっ!?今度は【イービル・ソーン】が勝手に!?」
「言ッタハズダ！神ノ前デ足掻ケルト思ウナァァァァァ！【闇の支配者―ゾーク】ヨ、ソノ雑草を蹴散ラセェ！」

―！

そのまま成す術なく破壊される、遊良の場に現れた【イービル・ソーン】。
…魔人の手刀、閃光の一撃。
一応、ギリギリでの悪あがきなのか。遊良の場に特殊召喚された【イービル・ソーン】も、守備表示であったことが幸いし…どうにか遊良も、ＬＰを減らさずにはいられた。
けれども、ターンのスキップに続いて宣言とは異なるカードが勝手に現れた今の現象は、いくらデュエルディスクによる判定だとは言えども奇怪すぎる現象ではないか。
…これではまるで、不可侵領域であるはずのデュエルディスクの判定すらも遊良の不利に働いているかのよう。そんな説明のつかない今の状況は、デュエルの流れや行動すらも『邪神』が全て支配していると錯覚するほど。
…相手に抵抗を許さない威光。相手にデュエルをさせない怒号。
その『消滅の神』の轟きは、例え誰であろうとも自由にデュエルすることを許していないかのようでもあり…
…『邪神』と、ユーラと。

それぞれの激しい叫びが歪に交わり、今にも周囲一帯全てを消し飛ばしてしまいそうな危うさを駄々漏れにし続けているその姿はまさに一触即発、爆発寸前。
…遊良の守りの手を、ギリギリまで消費させるその勢いはまさに悪魔の如し。このままでは、『邪神』の攻撃はいずれ確実に遊良を消し飛ばしてしまう事に違いなく…

そして―

「マダ足掻ク意思ガアルノカ！ケドコレデ終ワリダァァァァァァ！【邪神イレイザー】デ天城　遊良ニ攻撃ィ！」

今、更に激しく。
残りの遊良のＬＰの数値である２０００と、同じ攻撃力となっている『邪神』へと向かって…
ユーラは、再び『邪神』に攻撃を命じ―

「消エ去レェ！ジェノサイド・ディオガブラス…」
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！墓地の【ネクロ・ガードナー】のモンスター効果ぁ！コイツを除外し攻撃を１度だけ無効にぃ！」

―！

否―
それでも、足掻く―
遊良の墓地から飛び出した、１体の戦士が勇敢にも『邪神』の攻撃の前に立ちはだかったかと思うと…消滅の波動を纏いし赤い重光なるブレスを、その身全体で受け止め始めて。
…今の遊良の切羽詰った表情は、とても攻撃力『２０００』程度のモンスターの攻撃を喰らう者の慄き方では断じてない。
そう、攻撃力なんて関係ないのだ―

『邪神』の攻撃力が増減していることにも、今の遊良は気付いてはいない。いくら『邪神』の攻撃力が増減しようとも、『邪神』の攻撃自体を喰らってしまった瞬間に全ては終わり。『邪神』の放った重光のブレスが、もし直撃してしまえば…

その瞬間に、遊良は文字通り『消滅』してしまうのだから。

…それを、誰に説明されるまでもなく遊良は理解しているからこそ。

闇に隠れた『邪神』の効果を読み取ることも遊良には出来ず、それ以上に『邪神』の威圧の前に今にも潰されてしまいそうになる体をどうにか支えながらも…

ギリギリで…そう、自分に残されたギリギリの所で。ユーラの激しさに気圧されつつ、遊良もまた必死になって喰らい付き続けるだけで…

しかし…

(どうすればいい…もう手がない…も、もしまたターンがスキップされたら今度こそ…)

意気消沈。これで遊良は、用意した全ての守りの手を使いきってしまった。

そう、【ネクロ・ガードナー】は先のターンの最後に、【手札断札】で墓地に送っておいた最後の防御札だった。『邪神』の咆哮によって、前のターンに行動を許されなかった遊良が用意できていた…

ソレは正真正銘、遊良にとっての最後の守り、最後の砦であったのだ。

…けれども、『邪神』の攻撃を食い止めた【ネクロ・ガードナー】までもが。

『邪神』の波動の攻撃の、その重光の余波によって…

カード自体を、消滅させていくではないか。

「ッ、【ネクロ・ガードナー】まで消えて…触れちゃ駄目なのかよ…ど、どうすれば…」

どうにか『邪神』の攻撃を止め、どうにかＬＰと共に命を守れたとは言え。それでも遊良とて疲労困憊、満身創痍。

全ての守りの手を使いきってしまい、そして満足に行動すらさせてもらえないこの状況は、遊良にとっては最悪どころではなく…

「マダ足掻クカ、コノ出来損ナイノ屑野郎ガァァァァァァァ！……グッ!?タ、ターン…エ、エンドォ…」

ユーラ　ＬＰ：１６００
手札：４→２枚
場：【邪神イレイザー】
【闇の支配者―ゾーク】
伏せ：なし

触れても駄目、足掻いても駄目。ターンを迎えることすら許されず、例え足掻こうとしても自分の意思とは異なる動きとなってしまうカードの流れをこれ以上どうすればいいのだろうか。

…遊良に浮かぶは、絶望にも似たそんな感情。

こんな戦いは、これまで体験してきたどの苦境にも当てはまらない。それ程までに苦しい今の状況は、デュエルにすらならないという絶望となりてどこまで遊良の心に切羽詰った逆境を与え続けていて。

…あの『邪神』の前では、きっと次の自分のターンも成す術なくスキップされてしまうことだろう。

それを、容易に想像できるからこそ―

もしまた次のターンも強制的にスキップされてしまえば、もう遊良には打つ手がない。

…このままでは、次のターンに確実に『邪神』の攻撃は自分を直撃してしまうことだろう。もしそんなことになってしまえば、消滅の神の力によって自分はきっと跡形もなく光の粒子となりて霧散してしまう…

…それは以前の敗北の時に、自分の全てが『消滅』していく感覚を一度味わっているからこその遊良の恐怖。

あの時はどうして消滅せずに生き残ったのかをまだ理解出来ていないとは言え。それでも、存在が消されていくあの絶望と…

そして虚無に誘われるあの恐怖を再び味わうのではないだろうかという気持ちが、どこまでもどこまでも遊良へとにじり寄ってくる。

（どうすればいい…い、一体どうすれば…）

このまま無策でターンを迎えるわけにはいかない。そんなことは遊良にだって分かってはいる。

けれども、何とかしたくても…もう、手がないのだ―

ドローフェイズのドロー以外に、自分は行動が許されてはいない。そんなデュエルにもならない棒立ちの状況で、ただ消滅させられるのを待つなんて遊良からしても絶対にしたくはないはずだと言うのに。

…何か…何か手はないのか。ただ消されるなんて冗談じゃない。どうにか出来ないか、何か策はないのか…

ターンを迎える前に、ソレを必死になって考える遊良。それは幼少期の【黒翼】との修業や、これまでの【白鯨】との修業によって培われた高速化した思考の成せるギリギリまで生きる悪あがきでもあるのだろう。

…Ｅｘ適正を持たない自分は、他人より深く深く考えることでここまで生き残ってきた。

その経験からか、恐怖と絶望の板ばさみの心の中であっても―

その中の切り離した別領域にて、遊良は足掻きにも似た高速思考を止めずにただひたすらに考え抜く。

考えて、考えて…

高速化の中で、この思考を止めてしまえばその瞬間に自分は終わり。だからこそ、ほんの少しの希望、小さなキッカケでも何でもいいから何か手は無いのかと、遊良は脳をフル回転させ高速思考を繰り返し―

そして―

「お、おい！どうしてだ！どうしてお前はそんなに全てを消そうとしてるんだよ！」

「…ア？」

ほんの少しでもいい…怒り狂ったユーラへと、会話を試みようとしてそう問いかける必死な遊良。

…それはあまりに見苦しい悪あがき。デュエルに関係のない盤外の閃き。

けれども、会話が出来れば少しは怒りが逸れるだろうと…

ソレが淡い期待であろうとも、ほんの少しだけでも気を逸らせればチャンスが生まれるのではないかという希望的観測を遊良は持ちながら。遊良は、ユーラへと向かってそう声を放ち…

「さっき見えたあのイメージ…あれはお前の記憶だったんだ！鷹矢が焼け死んだシーンと、ルキが刺し殺されたシーン…あれは…お前が体験した…だ、だったら尚更おかしいだろ！い、いくら鷹矢とルキがこ、殺されたからって…今『ここ』には、鷹矢とルキはちゃんと生きてるのに！なのにお前はそんな世界ごと消そうとして…」

「ウ　ル

セエエエ

しかし、叶わない。

「全部…全部偽物ナンダヨオオオオオオオオ！オマエノ世界ハ全部全部全部ウウウウウウウウウッ！」

怒り狂ったユーラの怒号が、『邪神』の叫びと相まって更に激しく遊良を貫く。

…会話も、説得も、声をかける行為そのモノが無駄。

キレたユーラに、少しでも冷静さを与えようと『鷹矢』と『ルキ』の名を出したと言うのにも関わらず…

（だ、駄目だ…は、話が通じない…）

そのまま、ユーラの怒りと狂乱は遊良の声を皮切りに、更にその激しさを増していくばかりではないか。

…しかし、それは考えてみれば当たり前。

数々の絶望を味わった先に、ユーラは世界に復讐するために『ここ』に現れたのだ。そんなユーラが、あろうことか遊良に『弱い』とまで言われ、その身を投げ出す覚悟を持ってして『邪神』を召喚したと言うのだから…

今、ここで。まだ会話が出来るのではないかという淡い期待など、遊良が抱くことすら『邪神』の前ではありえない事に違いなく―

…会話が出来ないのならば、もう本格的に遊良に取れる手立てはない。

打つ手なし、万策尽きた。

このままでは、『邪神』の意思のままに成す術なくただターンをスキップされ…抵抗も許されぬまま、遊良が『消滅の神』に消されてしまうことは最早必至とも言える運命。
…逃れられぬ消滅の定め、納得できない敗北の取り決め。
これでは、ユーラの怒りをその身に受けることこそが遊良の決まっている運命なのだと言わんばかりに…
この寂しき霊園に、『邪神』がただただ吠え続けるだけで…

…一体、どうしてこんな事になってしまっただろう。

遊良には、ユーラの怒りがわからない。ユーラがなぜ自分にこんなにも怒り狂っているのかも、鷹矢とルキを失った後にユーラに何があったのかも…
そんな、何もかもわからないまま消されるなんて遊良からしても冗談じゃない事であるはずだと言うのに。しかしそんな理不尽をあまりにも激しく押し付けてくるユーラの圧に、遊良は現状何も出来ないまま呆然と立ち尽くしているだけ。
…もう、全て諦めるしかないのだろうか。
Ｅｘ適正がないと周囲に知られた幼少の頃に、その存在自体を否定されていた頃と今は似て居る。
そう、他人に『生きる事』すら否定されていたあの頃と、ユーラから存在を否定されている今の現状はあまりに酷似しているとさえ遊良は感じてしまっている様子。
…ユーラの言っていた、『ひとつ前』の意味すらわからないままとは言えども。それでも、他の誰でもない『自分自身』すらこれ以上自分が生きることを否定してくるのならば…
本当に、天城　遊良という人間はこれ以上存在して居ること自体が間違っているとさえ遊良は思ってきてしまっていて―

しかし―

「ダカラ『オマエ』ヲ消シテ、『鷹矢』ト『ルキ』モ消シテヤルンダ！偽物ノ『鷹矢』ト『ルキ』モ！オレノ目ノ前デ死ンダ『鷹矢』ト『ルキ』ガ生キテルナンテ奇怪シインダヨォォォォォオッ！」

「……え？」

「殺ス！コンナ偽物ノ『鷹矢』ト『ルキ』ナンテ、存在シテル事自体が奇怪シイ事ナンダ！ダカラ殺ス！『鷹矢』ト『ルキ』モ殺ス！コノオレノ手デェェェェェェェェェェッ！」

まるで、『邪神』に乗っ取られたかのように。

狂乱の最高潮に達したユーラが、己の手でここにいる『鷹矢』と『ルキ』も消すと…

自分の手で、鷹矢とルキを『殺す』と…

ユーラが、そう叫んだ…

その直後―

「なんだよソレ…」
「…ア？」

…今の今まで、『消滅』を受け入れようとさえ思っていたその弱った思考から一転。

『邪神』の唸りに呼応して、叫ばれたユーラの言葉に遊良は一体何を思ったのか…

今まで『邪神』に気圧されていた、ターンを迎えることすら戸惑っていた遊良が…

「…今…はっきりわかった…お前なんか…鷹矢とルキを殺そうとしてるお前なんか…」

そう、ユーラの怒気に圧され、どうにもならなかったはずの遊良が震えながらデッキに指をかけたかと思うと…

遊良のデッキが…

遊良、自身が―

「お　前　な　ん　か　…　お　前　な　ん
かぁぁぁ

「俺のターンッ！ドローッ！」

―引いた、カードは…

「【堕天使の追放】発動ォッ！」

―！

眩き一瞬の輝きと共に、邪神の圧を跳ね返しカードの発動を宣言した遊良。

そして、宣言したそのカード名は紛れもなくかつて遊良が使っていた『あの』―

『堕天使』のカードで―

「ナッ!?ダ、堕天使ダト!?何故ダ!ドウシテ神ノ前デ動ケ…」

「う　る

せえええええええええええええええええええええええええええええええええ!」

「ッ!?」

「俺はデッキから【堕天使スペルビア】を手札に加える!続いて【トレード・イン】を発動ッ!スペルビアを捨てて2枚ドロー!そして今引いた【堕天使イシュタム】の効果発動!手札の【堕天使アムドゥシアス】と共に捨て更に2枚ドロー!【闇の誘惑】も発動!2枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外ぃ!」

ユーラの怒りを更に上回る、遊良の怒りが天を裂く。

そしてその怒りに応じるように、次々と遊良の手には失ったはずの『堕天使』のカード達が集ってくるではないか。

…しかし、一体どうして失ったはずの『堕天使』の力が今ここに蘇ったのか。

しかも、失う直前に全く言うことを聞かなかった『堕天使』の効果も、怒りのままに発動させる姿から察するに完全完璧に蘇っている様子。

…『堕天使』が消えた理由も蘇った理由も、その詳細を知る者は今この場には誰もおらず。

しかし、唯一つだけ確かなことは…

今確かに、確実に。遊良に、『堕天使』が再び集っているという、ただソレだけ―

「何故ダ!?ド、ドウシテ動ケ…」

「知るかンな事ぉぉぉ

ユーラの怒りの理由とか、『ひとつ前』の意味とか、『正史』とか存在の否定とか。
そんな『どうでもいい事』なんて、難しくゴチャゴチャ考えることなんてなかったのだ―
ユーラの轟く激情を、激怒をもって凌駕する。
遊良に必要だったのはただそれだけの事。ユーラが怒り狂って威圧してくるのならば、ソレを上回る怒りと共に圧を返せばそれで済む話…例えソレが、『邪神』の圧と混ざりて襲ってこようとも。ユーラ本人の『圧』を更に上回るほどの『圧』で押し返せば、必然的に遊良にターンは巡ってくるという…ただ、それだけ。

今…大気を揺るがす遊良の怒号は、ユーラの怒りを完全に弾き返した。

それは紛れもなく、今の遊良は『邪神』に怖れを抱いていないと言うこと。
そしてそれ以上に、ユーラの怒りの根源も『正史』や『ひとつ前』という意味のわからない世界の真実も何もかも…
今の遊良にとっては、微塵も『どうでもいい事』と言うことであって―

「堕天使!?ねぇ、戻ってる!遊良に堕天使が戻ってるよ!」
「うむ!」

また、後ろから聞こえる鷹矢とルキの声を聞いて。
更に、心に強い感情を遊良は覚える。

そう…誰が許せるものか―

鷹矢とルキを傷つける者は、例え誰であろうと許せるわけがない。

遊良はそうして生きてきた。遊良にとって、鷹矢とルキは何にも変えがたい大事な存在。
しかも、けれども、あろうことか―
鷹矢とルキを『殺す』と、そんなふざけた事を抜かしたのがまさか、まさか、まさか…

『あまぎ　ゆうら』であるなんて…

遊良が、許せるわけがない―

「鷹矢とルキを殺すなんて冗談でも言うんじゃねえええええええええええええええええええええええええええ！【堕天使イシュタム】のモンスター効果発動ぉッ！」

世界を揺るがす激しき叫び、獣の範疇を超えた雄叫び。
大気を震わす遊良の声が、虚空を劈き雲を割る。
そして遊良の叫びが届いたのか、または遊良自身が自分とユーラは『違う存在』なのだということを、はっきりと堕天使達に分からせたためか。
失った『あの時』とは違い、ユーラと戦っているというのに堕天使達の力は確かに遊良へと戻っていて。
…堕天使が蘇り、勢いを吹き返し。

目の前で蠢く邪なる神をまるで意に介さず…
遊良は、更に高らかに吠え続けるのみ。

「お前なんか俺じゃない！俺はアイツとは違う…俺は…『俺』はここにいる俺一人だけだぁぁぁぁ！【堕天使イシュタム】の効果により、俺はＬＰを１０００払って墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！【堕天使ルシフェル】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキへ戻す！」

果たして…
そう叫ぶ遊良の声に応えるようにして、天に舞う魅惑の堕天使の表情が以前のフードの男とのデュエルの時とは違う事に…この場に居る者達の誰かが、気が付けただろうか。
…いや、誰も気付けるはずがない。
堕天使達が欲しかったのはその『言葉』。
以前のデュエルで、堕天使達が遊良に従わなかったその理由。それは『邪神』…いくらソレが邪なる存在であろうとも、『神』に見放されたデュエリストであるはずの『あまぎ　ゆうら』が、『神』の力を所持しているという事象を…堕天使達は、決して許しはしなかった。
『神』に飲まれた『アマギ　ユーラ』と、存在を『同じく』している者などに自分達は従わない。
まるで、そう言わんばかりに姿を消していた堕天使達が…今ここへ来て、完全にユーラを否定した遊良の下へと還ってきたのはおそらく…いやきっと、いや確実に『そういう』ことなのだろう。
…そう、あくまで黒き翼持つ者達が主と認めている者は、この世界においては神に反旗を翻す唯一つの存在のみ。
それは自らの希望、願望、切望、熱望、渇望、羨望、懇望の…
その一切の全てを捨て去る覚悟を、決意を見せた、この場にいる『天城　遊良』ただ一人だけなのだとして。

「俺は2体の堕天使をリリース！」

遊良は、叫ぶ。

自分を見限った堕天使達に、己が主の姿を今一度刻み込むように。

「神に背きし反逆の翼、その姿を今ここに！」

遊良が、轟く。

堕天使達を失ってからも、多くの戦いで培った自分自身の力を…強く、堕天使達へと見せ付けるかのように―

「来い、レベル11！」

今、満を持して。

かつての己を超え、以前の自分とは比べ物にならない程に強くなった自分自身を、今ここに君臨させ。

『邪神』の…邪なる神の前であろうとも、押さえつけられないほどの怒号をこの霊園にて轟かせながら…

両親の墓の前で、更に己を超える宣言の元に遊良の呼び声に応えるのはまさしく―

「【堕天使ルシフェル】！」

―！

その時…

天が、割れた―

決闘市全域を覆っていた曇天の、暗き雲が切り裂かれ。光芒差し込む空の果てより現れたるは、神聖とは真逆な漆黒なる者の唯一つの姿。

そう…

清廉なる天の光、それを遮る黒き姿。

世界の全てを消滅させんとする邪なる神を前にしても、決して引けを取らぬその佇まいはまるで神か悪魔か天使か人か…

儚くも憤るその姿は、天使と呼ぶにはあまりに混沌。しかして悪魔と呼ぶには、あまりに荘厳なる存在が禁忌を打ち破る反旗の翼を広げ、今ここに天空より降臨する。

その姿を、一体誰が見間違えようか…

それは邪なる神に立ち向かわんとしている、今の『遊良』の姿そのモノであって―

【堕天使ルシフェル】レベル１１
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「な…なンダこのモンスターは！オ、オレは知らナいゾ…オ、オレが、『オマエ』がこんなモンスターを持ッテいルなん…」

「う　る

せええええええええええええええええええええええええええええええええええええっ！」

―！

怒気に塗れていたはずのユーラの声を、更に押し潰すは完全にキレた遊良の雄叫び。

…それは怒号と波動の意趣返し。やられた事の完全なる仕返し。

今のユーラの戸惑う声の質は、『邪神』に飲まれていた時とはまるで違う。

そう、『堕天使』の再臨と、遊良の怒号に完全に押されたユーラの動揺は、彼と『邪神』との接続を切り離しかけているかの様ではないか。

「鷹矢とルキを死なせたお前なんか…鷹矢とルキを殺そうとしてる『お前』なんか絶対に『俺』じゃねえええええええ！お前の場のモンスターは【邪神イレイザー】と【闇の支配者―ゾーク】の２体！【堕天使ルシフェル】のモンスター効果！アドバンス召喚成功時、デッキから【堕天使ゼラート】と【堕天使マスティマ】を特殊召喚ッ！」

―！

【堕天使ゼラート】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２３００
【堕天使マスティマ】レベル７

ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２６００

だからこそ、動揺に塗れたユーラを意に介さず。

堕天の王の力によって、続けざまに遊良の場には血に染まったかのような真紅の装束を纏う赤衣の堕天使と…

白き獣のような堕天使が、その姿を現して。

「そして【冥界の宝札】の効果で２枚ドローッ！まだだ！【堕天使ルシフェル】の更なる効果！デッキからカードを３枚墓地へ送る！墓地に送られた『堕天使』カードは３枚！よって俺はＬＰを１５００回復し、速攻魔法【ツインツイスター】発動！手札を１枚捨てて【チキンレース】と【冥界の宝札】を破壊する！」

「ッ!?」

「これで『邪神』の攻撃力はルシフェルと並んだ！行くぞ、バトルだ！【堕天使ルシフェル】で、【邪神イレイザー】に攻撃ぃ！」

また、『怖れ』という名の闇に隠された『邪神』の効果…その攻撃力の神秘も、既に遊良は看破している。

それ故、神なるも邪な存在の【邪神イレイザー】の攻撃力を逆に利用し…ここへきて、遊良はなんの怖れもなく高らかに『神』へと戦いを挑むのか。

…召喚時のルシフェルの効果を使用せずに、【チキンレース】を自壊させ『邪神』の攻撃力を下回らせて攻撃する手だって遊良にはあった。

しかし、ソレをしなかったのは他でもない―

例え相討ちになろうとも、自分の『力』をセーブするのではなく…

現状における己の力の全てを発揮し、『邪神』の力のその全てを真正面から受け止め、ぶつかり、拮抗し、そうして全ての力を持ってして『打ち破る事』こそがこの状況下において『真』に『邪神』を『倒す』ことなのだと…

そう遊良が判断したからこそ―

そう…

この世界における、『神を倒す』というその『意味』を、堕天使の導きにより直感的に『真』に『正しく』理解した遊良の判断だからこそ―

「神だろうがぶった斬れえええええええええっ！」

今ここに、『邪神』へと向かって堕天の王が天に舞う。

その手に握られしは二振りの劒。神に反旗を翻す、堕天使の王のみが持つことを許される人知を超えた二振りの宝剣がそれぞれ闇の光を眩く放ち…

…神をも殺す禁忌の剣、しかして神域に届き得る唯一つの闇の力。

そんな、神聖なるも神性からは余りにかけ離れた剣を…神域を壊す、神威を断ち切る、神をも殺す力を、堕天の王は高々に掲げながら―

「背徳の一閃、バニッシュ・プライドオオオオオ！」

―！

ぶつかる…

消滅を司る邪なる神と、神に反逆する堕天の王が。

…蠢く邪神に果敢に挑み、凄まじき剣撃にて神を切り裂くその様はまさに反逆。

例えソレが邪なる神であろうとも、『神』に立ち向かう堕天使の進撃はまるで神話の戦いの様でもあり…

…そして、人の命の気配の無い決闘市の霊園にて。

今…

ここに…

消滅を司る『邪神』の首が…

地に、落ちて―

「ばっ、馬鹿なぁ!?か、神があんなモンスターと相討ちになるだなんて!?」

「これで『邪神』は消えた！いや、倒したんだ！続けて【堕天使ゼラート】で…」

「だ、だけど【邪神イレイザー】が破壊されたこの瞬間、神は最後の効果を発動する！フィールドの全てのカードを破壊する……でもそれだけじゃねぇ！オマエも…そこの鷹矢とルキも！全部全部吹き飛

ばしてやる！オレも、この世界から完全にぃ！」
「なっ!?」

しかし…
例え歪でも神は『神』―
その力は、例え死しても抑えきれるモノではない。
特に神の力によって実体化しているこのデュエルにおいては、全てを『破壊』する効果とはすなわち…周囲の物『全て』を、実際に巻き添えにしてしまう実物の破壊となってしまうのだ。
しかも、司る力は『消滅』の力―
ただの物理的破壊とはワケが違う。粒子となって消えた人々の姿や、余波で霧散していった周囲を見ればわかる通り…
【邪神イレイザー】の力に触れたモノは、例え如何なるモノであろうとも粒子となりて文字通り『消滅』してしまう。
…そんな神の最後の力を、ユーラは自分も巻き添えになってしまうことを微塵も厭わずに宣言するのか。

「神は全てを消し去るんだよぉ！お前も…この世界の鷹矢とルキも！この世界も全部全部全部ぅ！全部消し去ってや…」

けれども…

それでも―

「やらせるかぁぁぁ

「ッ！やめろぉぉぉ

…ならば、一体どうして鷹矢とルキは無事でいられたのか。
そして、鷹矢とルキが正面へと目を向けた…
そこには―

「ぬ!?こ、これは…」
「え…黒い…は、羽?」

片方で、鷹矢とルキを守るように―
片方で、自分の身を守るようにして―

目を向けた鷹矢とルキの眼前…

神に立ち向かう、『遊良の背』から…

2枚の、大きな『黒い翼』が生えていた―

「な…なんだその翼は…オ、オマエェ!オマエはオレと同じで、ただの人間のはずだろぉ!な、なのになんで生き残って…な、なんでオマエも鷹矢もルキも…オ、オレも、生きて…」

また、遊良が完全に『邪神』の消滅の力を受け止めたことで…邪神の力が分散し、ユーラも消えずに済んだのか。
しかし、今の遊良の姿をその目に映した事で、これまで以上にその動揺を強くしたようにして声を荒げ始めるアマギ　ユーラ。
…当たり前だ。
『ひとつ前』の世界を消滅させた『邪神』の力の事はユーラもよく理解している。だからこそ、今のコレは止められるような力では断じてなかったはず。
つまりデュエルの中で『邪神』が破壊されたと言う事は、今まで溜めに溜めた『消滅』の力が爆発的に解放されると言うこと。それはすなわち解除不可能の二重の罠、強き者であればあるほど逃れられぬ消滅の定め。
そう、『邪神』に教わったからこそ―
ユーラは、自分までもが消えることを承知で破滅への衝動にその身を委ねようとしていた。
けれども、一体どうして天城　遊良はソレを止められた―
ソレがユーラにはどうしても分からない。神の波動を受け止め凌ぎ切ったあの『堕天使』は何なのか。神に反逆の意思を見せるあの堕天使達とは一体何なのか。一体どうして鷹矢とルキが原形を保てたのかも、一体どうして遊良の背から翼が生えたのかも、一体どうして自分も消滅しなかったのかも…
それが、ユーラには分からない。今のユーラには、遊良も堕天使も何もかもが分からないままで―
「…え？…あ、な、なんだこれ…つ、翼？」
また、あまりに動揺し過ぎているユーラを他所に…遊良もまた、自らの身に起きた現象に対し意味も分からず混乱を見せていた。
…これは紛れもなく『翼』。しかも自分の背から『生えて』いる。
感覚的に、ソレを理解してしまう遊良。しかし、まるで堕天使のモノのような漆黒の『翼』が自分の背から生えているだなんて、突然の

こと過ぎて遊良にも理解が追いつかず…

そうして…

…まるで、ソリッド・ヴィジョンのように。

遊良の2枚の大きな翼は、次第に透けて消えていき…

「ねぇ鷹矢！い、いま、遊良の背中から黒い羽生えてたよね？」

「うむ。」

「な、なんだったんだ今の翼…」

鷹矢も、ルキも…当然ながら、遊良本人も今の現象をよく理解できていない。

そう、誰が理解出来るモノか―

今、遊良の背から生えていた巨大な黒き2枚の翼のことを…神の消滅の波動、決闘市の全ての人間を消してしまった赤き重光と同じ位のプレッシャーを放っていた、消滅の邪神の断末魔の波動を防いだ堕天使によく似た漆黒の翼の事を…

未だ何も知らぬ未熟なままの『今の彼ら』の、誰もが理解できるはずもなく。

けれども…

「不思議だ…遊良に『堕天使』が戻った瞬間…俺には、完全に奴が遊良には見えなくなった。いや、奴が『邪神』を召喚した時からそんな感じはしていたのだが…」

「…うん、なんかわかるかも…」

「やはり、遊良は一人だけだったと言うことか……いや、違う。ここにいる『俺達』にとっての遊良は、やはり『俺達の遊良』だけなのだ。奴にとっての俺達は…」

「もう死んじゃってるから…だから、あっちの遊良はああなっちゃったって事？」
「…うむ。」
「でもさ…それって…」
「うむ…」

今の遊良と、そしてユーラを見比べながらそう呟いた鷹矢。
そして、その言葉が理解出来るのだと言わんばかりに続くルキもまた、遊良を見た後にどこか悲しげな目をユーラへと向け始める。
…先ほどまでは鷹矢でさえ曖昧になっていた『遊良』と『ユーラ』の違いが、今ではハッキリし過ぎている程に今の鷹矢とルキには分かってしまう。
ソレは遊良が、ユーラとの違いを完全に証明したからか。それとも、ユーラがハッキリと『今』の鷹矢とルキが『偽者』だと言ったからなのか…
…しかし、それは果たして鷹矢とルキにとっては幸なのか不幸なのかどちらかなのだろう。
自分達にとっての『遊良』を理解出来てしまうことが、ユーラの狂いの原因を理解してしまった事に繋がることを…鷹矢とルキも、理解してしまうからこそ…

…鷹矢も、そしてルキも。

あれだけハッキリと遊良だと認識出来ていたユーラが、今の鷹矢とルキにはハッキリと別人だと言うことが理解出来てしまっていて―

そして…

「嘘だ…嘘だ嘘だ嘘だ！どうして『オマエ』程度が邪神に逆らえる！ただのバグのはずがどうして！どうして…オレの癖に…」
「ッ、ま、まだバトルは終わっていない！【堕天使ゼラート】でダイレ

クトアタックだ！」
「ッ!?」
動揺に忘れず、衝撃に気を取られすぎず。
『邪神』の余波でがら空きとなったユーラへと向かって、赤衣の堕天使が飛び上がる。
…抜きしその剣に纏うは、血塗れを連想させる真紅の迅雷。
そのまま、赤衣の堕天使はこの戦いに終止符を打つべく…
「真紅の断罪、バニッシュ・レヴィアアアアアア！」
ユーラのＬＰを超える力を込めて、銀に煌くその剣を真っ直ぐに振り下ろし―
「や、やらせるかぁぁぁぁぁぁぁぁ！手札から【バトルフェーダー】の効果発動！このカードを特殊召喚し、攻撃を無効してバトルフェイズを終了する！」
―！
【バトルフェーダー】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
いや…
…終わりは、しない。
どこまでも遊良が足掻いたように、ユーラもまた神を打ち倒された衝撃に我を忘れることもなく、最後の最後まで戦いを続けるつもりなのか。
…それはどこか悪あがきにも似た、持たざる者の必死な行為でもあ

るのだろう。
　しかし、その必死さこそが紛れもない『あまぎ　ゆうら』の証明。まるでそう言わんばかりに、ユーラもまた必死になって遊良へと喰らい付き続ける。

「まだそんなカードを…俺はこれでターンエンドだ。」

遊良　ＬＰ：２０００→２５００
手札：２→２枚
場：【堕天使ゼラート】
【堕天使マスティマ】
伏せ：なし

「く…」

先ほどまでとは一転。
今度はユーラの方が、あまりに苦々しげにその表情を曇らせていく。
…ターンを迎えたくてもその手は重く。『邪神』に飲まれていた時と比べても、あまりに小さく見える今のユーラの姿は怒ることすらも忘れたようにしてただ呆然と立ち尽くすしかないのか。
…そう、ユーラも気が付いている。
自分は、【邪神】に飲まれる事によってその力を跳ね上げた。その結果がアレだけのドローと威圧であり、それはＥｘ適正を持たない『あまぎ　ゆうら』という人間が強者と渡り合うだけの力を得るには、ソレだけの代償が必要だと言うことを。
…しかし、目の前に立つ『今の天城　遊良』は違う。
『神』に見放され、『神』を恨み…そして『神』への復讐の手段として【邪神】を利用した自分と、『神』に反旗を翻したまま強くなった目の前の男は、いくらＤＮＡを同じくしていても『存在』その物が異なっている。

…アイツは自らの努力だけでアレだけの『力』を身につけた。自らの怒号だけで『邪神』の圧を跳ね除けた。
そして今、目の前の『天城　遊良』は自分の目の前で『神』を打ち破った―
得られたであろう『力』を捨て、その代償として得たはずの力を一度失ったというのに…ソレを再び掴み取り、到底到達できるはずの無かった地平に、アイツは自らの力のみで羽ばたいて『そこ』に足を踏み入れた。
そして、何をどうしたのかは理解できないが…『邪神』の最後の怒りの波動を、目の前のアイツはその身1つで受け止め、そして鷹矢とルキを守りながらその身1つで耐え切った。
それはまさか、Ｅｘ適正を持たない『あまぎ　ゆうら』に、アレだけの可能性が秘められていたとでも言うのか―
だとしたら、自分はこれまで何をやってきたのか…自分のやってきた事も、自分の抱いてきた感情も、自分の行ってきた行為もその全てが無駄であったのか…自分も、アイツみたいに諦めなければ『あそこ』まで至れたのだろうか…

―そうしたら、自分も鷹矢とルキを失わずに済んだのだろうか…

そんな、どこまでも惨めな気持ちが今のユーラの中には渦巻き続けている。
遊良の姿を見て、遊良の行動を見て…今の自分が、どれだけ矮小な存在であるのかを、ユーラはひしひしと強く痛感している様子でもあり…

しかし…

それでも―

「そ、それでもオレは…オレは今更戻れないんだよ！俺の所為で死んだアイツらの…鷹矢とルキの断末魔が、今もオレの耳からは消えないんだ！だから全部消し去る…オレは絶対に、全部消し去らないといけないんだ！偽者の鷹矢とルキも！オレにならなかったオマエも！全部全部全部ゥ！」

「…」

もう、後戻りなんて出来はしない。

自分の世界は終わってしまって、もう『次』が始まってしまっている事をユーラもまた理解しているからこそ…

自分が『ここ』へきた使命…導かれし『邪神』の意思によって、ユーラが出来るのは自分が終わらせた世界と同じく今のこの世界を消滅させることだけなのだから。

…悲痛な叫びに呼応して、さらに粒子化していくユーラの体。

もう長くは持たない…それは誰の目から見ても明らかな事であり、このままではいくらデュエルに勝利出来たとしてもユーラは消えてしまうに違いなく。

そんな、歪んだ心に至ってしまったユーラを見て…

対峙している遊良は一体、何を感じ何を思うのか。

…一つ間違えば、自分だって『こう』なっていたかもしれない…そうならない自負だって遊良には『ある』には『ある』とは言え、ユーラの言う正史…『あまぎ　ゆうら』の決まっている運命とやらによれば、遊良にだって『こう』なっていた可能性の方も少なからず存在しているのだ。

けれども、遊良は『こう』はならなかった…

それは一体どうしてなのか。そんなこと、『今』の遊良には決して分かりえることでは無いとは言え。それでも自分だってユーラのよう

に全てに怒り全てを憎む人間になっていたかもしれないという可能性を、遊良も少なからず考えてしまうからこそ。
とても…とても悲しい目で。遊良は、ユーラを見ているだけで…

「負けなんて認めるもんか…アドバンス召喚に逃げたオマエに！『正史』じゃないオマエなんかに！正しくない天城　遊良なんかにぃ！オレがこんな目に遭っているってのに、『堕天使』なんてモノを得て、鷹矢とルキが居て、生きる事を許されて呑気に笑ってるオマエなんかに！…み、皆から認められてるオマエなんかに、オレは負けちゃいけないんだ！絶対に！」
「…お前、まだ戦う力が…」
「当たり前だ！オマエを消して、そして『最後』のこの世界を消し去れば…そしたらもう全部終わるって！クソッタレな『世界』の奴も消えてしまうって『邪神』がそう言ったんだ！鷹矢とルキが死に続ける世界は終わるんだよ！だからオマエだけは…オレが、絶対に倒さなくちゃいけないんだ！オレの……タァァァァァン！」

―！

そうして、ユーラがカードをドローした刹那。

「…ッ!?」

そして、その瞬間…遊良の脳裏には、まるで走馬灯にも似た『記憶』の光景が流れ込んでくるではないか―
…いや、これは遊良の走馬灯などでは断じてない。
何しろ、この『記憶』は遊良のモノではなく…
流れ込んでくるのはユーラの『記憶』。例え異なる人間だとは言え、それでも遊良もユーラも『あまぎ　ゆうら』だからこそ繋がったであろう、それはユーラの歩んできた記憶の断片。
遊良に見えるのは、ノイズ混じりの曖昧な光景ではなく…

鷹矢とルキを亡くした光景の、ハッキリとしたユーラの絶望。
―『生きろユーラ！お前だけは…死なせはしない！』
―『鷹矢！鷹矢ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』
燃え盛る業火に焼かれながらも、それでもユーラだけは助けた鷹矢の姿と。
―『…生き…て…ユー…ラ…』
―『嫌だ！し、死なないでくれ！ルキィ！』
血が止まらぬまま、鮮血に塗れてもなおユーラの身を案じ続けたルキの姿。

遊良に見えたのは、ノイズのないハッキリとしたそんな光景。
…炎に焼かれ焼死した鷹矢。胸を刺され刺殺されたルキ。
もしコレが本当に、ユーラの言う本来の『あまぎ　ゆうら』に起こりえるべき『正しい出来事』なのだとしたら…
Ｅｘ適正が無いと宣告され、人々から忌避され、それでも傍に居てくれると言ってくれた鷹矢とルキを亡くす流れこそが天城　遊良の人生の奔流なのだとしたら、それは一体どれだけ悲しい人生だと言うのだろう。
…そして、遊良の目の前のアマギ　ユーラは、ソレを確かに経験してきた人間。
だからこそ、流れ込んできたユーラの記憶を見て…遊良は、咄嗟に考えてしまう。
自分だって、ユーラと同じように鷹矢とルキを失っていたら…目の前にて喚くアマギ　ユーラと同じように、世界に対し憎悪を抱いていた可能性が大きいだろう…と。
…それはあくまでも可能性の話だとは言え、遊良がそう感じてしまう程に鷹矢とルキを失ったショックはユーラにとっては大きな問題。

そう、遊良とユーラには相違点が多いとはいえ、それと同じくらい類似点は多い。だからこそ、ユーラと同じ目に遭っていたとしたら。遊良もまた、『こう』なっていた可能性の方があまりに大きいと言え…

そして―

「…やっぱり『お前』だけだ…『お前』だけがオレを裏切らない…オレに残っているのは、もう…」

ドローしたカードを見て、とても悲しそうに…そう、呟いたアマギユーラ。

そして、カードを一瞥した後に発動するのは…

「儀式魔法、【イリュージョンの儀式】を発動だ！【バトルフェーダー】を生贄にぃ！」

それはこれまで彼が発動してきた『儀式魔法』とは、どこか形質の異なったモノ。

これまで『高レベル』の儀式を行ってきたユーラの場に灯るは、その道筋とは真逆の光を点す『一つ』の命であり…

…ユーラの記憶を垣間見た、堕天使を駆る天城　遊良には理解できる。

そう、アマギ　ユーラが呼び出そうとしている、そのモンスターこそ―

「儀式召喚！こい、【サクリファイス】！」

―！

【サクリファイス】レベル１
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０

闇の中から降臨するは、真理を見通す異形の眼。
…悪魔よりもなお異質、悪霊よりもなお異物。
その形容しがたい異界の瞳は、遊良を見据えながら一体何を考えているのだろう…

「サクリファイス…やっぱり、ソイツがお前の…」

…その異形なる目から、遊良は目がそらせない。
そう、最初の戦いにてトドメを刺されたモンスターであること以上に、遊良には【サクリファイス】が抱いているであろうモノが感じ取れてしまうのだ。
遊良には何故か伝わってくる…【サクリファイス】が抱く、その感情が。

「ねぇ鷹矢…あの【サクリファイス】ってモンスター…なんか…すごく、悲しそうな目をしてる…」
「うむ…」
「なんでだろ…見慣れないモンスターのはずなのにさ、あの【サクリファイス】見てると…なんだか、こっちまで悲しくなってくるよ。」
「…うむ。」

また、本物の目では無いはずの、【サクリファイス】から伸びた異形の目は遊良を超えて『鷹矢』と『ルキ』も見つめていて。
それ故、伝わってくる…
鷹矢とルキからしても、【サクリファイス】というモンスターは初めて見るはずの、全く見慣れぬ異形のモンスターであるはずだと言うのに。

…それでも、鷹矢とルキは感じてしまう。
この土壇場に、まるでユーラを守るかのようにして現れた【サクリファイス】というモンスターが…
一体、『どんな存在』であるのかを―

「アレはバルバロスと同じだ。遊良にとってのバルバロスが、奴にとってのサクリファイスなのだろう。」
「じゃああのサクリファイスって…もしかしてずっとユーラを？ユーラと…私達を？」
「うむ…見てきたのだ。ずっと…ずっとだ。」

鷹矢とルキとて、他のモンスターでは絶対に感じ取れない微細なソレ。
それはまさしく、【サクリファイス】がユーラにとっての魂のカードであると同時に、遊良にとっての【神獣王バルバロス】と同じ立ち位置に存在しているモンスターであると言うことにまず間違いはなく…

そう、まるでカードが意思を持っているのではないかと錯覚するほどのその感覚は、使い手となるデュエリストの『全て』を『最初』から見てきたモンスターでなければ決して生まれない感情。
だからこそ、鷹矢とルキもまた遊良のデュエルをずっと見てきた者として…ユーラの【サクリファイス】が、どんな感情を抱いているのかが。どうしても、鷹矢とルキの二人には分かってしまうのだろう。
…それはきっと、かつて二人を救えなかった悲しみを『今』の鷹矢とルキに重ねているから。
そしてユーラを『こう』してしまった後悔を…【サクリファイス】もまた、感じているからなのか。
ここに居る鷹矢とルキが、ユーラの知る二人とは別の存在なのだとしても。それでも主の大切な存在へと向けたその物悲しさは、押さえきれぬ感情となりて…
現れし異形の目からは、見えぬ涙のようなモノが零れ落ち…

それでも―

「オマエだけは絶対に…絶対に許すもんか！行くぞ、【サクリファイス】の効果はつど…」

それでも、デュエル続行の意思を崩さぬユーラの声によって。
今、【サクリファイス】はその異形の目を妖しく輝かせ始め―

しかし―

「【堕天使マスティマ】の効果発動。」

―！

妖しく輝くその光も…
淡々と宣言された遊良の声によって、遮られるのだった。

「ＬＰを１０００払い、墓地の罠カード、【神属の堕天使】の効果を得る。サクリファイスの効果を無効にし…このカードを、デッキに戻す。」
「なっ…」

遊良　ＬＰ：２５００→１５００

「そ、そんな…サクリファイス…お、お前までオレを…」

「俺のターン！ドロー！」

そして、自動的に。

そう、先ほどの現象と同様に、デュエルディスクが強制的にユーラのターンを終了させたかと思うと、自動的に遊良のターンを告げ始めて。

…それは戦う意思を完全に無くした者に、ターン続行は許されないということなのか。

しかし、一体どうしてデュエルディスクがそんな判定をユーラに下したのかはさておき。勢いよくカードをドローした遊良もまた、自分がドローしたカードを見ると…

静かに、何かを考え始め…

「…そうだな…この決着は、『お前』が着けないとな…」

そして、ドローしたカードを一瞥すると。

たった今ドローしたカードを見つめながら、遊良はゆっくりとその手を天へと掲げ―

「俺は2体の堕天使をリリース！」

今、遊良の宣言によって。2体の堕天使達がその身に纏うは、天に身を捧げるための神秘の渦。

…それは特殊召喚のモノではなく、紛れもなくアドバンス召喚のための代物。

そう、ユーラが【サクリファイス】を呼び出したのならば、この戦いの決着のために遊良の場に現れる存在など決まっている。

今、悲しき空気が充満する、故人の眠る霊園に…

奮える大気、獣の咆哮と共に…

…それは、現れるのだから。

「来い、【神獣王バルバロス】！」

――！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

それは全てを破壊する咆哮などでは断じてない。
現れた獣の王が発するは、異形の目と同じく…どこか物悲しさを感じさせる、厳かなるも悲痛なる咆哮。

「バル…バロ…ス…」

だからこそ、遊良と対峙している、【サクリファイス】を駆るアマギユーラからすれば。

遊良が召喚したこの獣の王は、先の戦いにて彼が『ケダモノ』と言い捨てた、確かに見慣れぬモンスターであるはずだと言うのにも関わらず…

最初の邂逅のときに感じたモノとは、全く別のモノをその冷たい心に浮かび上がらせてしまっているのか。

「何で…何でオレをそんな目で見るんだ！ケダモノの癖に、一体どうしてそんな悲しい目でオレを見る！オレにとって、一体何なんだよ『お前』はぁ！」

それは、目の前で対峙してしまったからこそ理解してしまった…彼もまた、確かに本物の『あまぎ　ゆうら』だからこそ理解出来てしまう、理解の追いつかぬ獣の感情。

果たして…

遊良との最初の邂逅で、『ケダモノ』だと言い捨て…そして何の戸惑いも無く屠った、取るに足らないはずの獣の王を見てユーラは何を感じたのか。

また、獣の王の方も。主と『同じ顔をした他人』を見据えながらも、一体何を思っているのだろう…

いや、獣の王が思うことなど、たった一つしかないはず。そう、その姿形が違えども、その種族が違えども、その効果が違えども…

その『魂』は違えども、きっと共に戦ってきた相棒にかける『思い』は異形の目と同じはずで―

「行くぞ…バトルだ！【神獣王バルバロス】！」

駆ける…獣の王がその足で、異形の眼へとその槍を向けて。

…【サクリファイス】がユーラのことをずっと守ってきたように、この【神獣王バルバロス】だってこれまでずっと遊良と共に戦ってきた。

だからこそ、主の『魂』が異なるモノであったとしても。それでも獣の王も、異形の目も、世界に見捨てられた幼い相棒をこれまでずっと守ってきた者同士。
姿形は違えども内に秘めたモノは同じ…
遊良もユーラも等しく『あまぎ　ゆうら』だと言う事を、それぞれの存在が理解出来てしまうからこそ…

「アイツの…【サクリファイス】に攻撃！」

駆け続ける…
獣の王が、何の躊躇もなく。
各々それぞれ思惑はあれど、それでもこの戦いに一刻も早く終止符を打つべく。異形の目へと向かって、獣の王は力の限り駆けるだけ。

そうして…

絶望の果てに、アマギ　ユーラの『これまで』の全て見てきた異形の目は…

「天柱の崩壊、ディナイアー・ブレイカー！」

今、『閉じられるはずのない』その目を静かに…

静かに、閉じたのだった―

―！

「ぐ…ぐぁぁぁ

…風が、吹いていた。
日も落ち、完全に闇に染まった霊園に。
それは今の今までここで激しいデュエルが行われていたとは到底思えない程に穏やかな、しかして戦いの激しさを物語るほどに厳しい冷たさを纏った静かな風。
そして、そんな静かな風の吹く霊園の中で…

「…オレは……オレはどうすればよかったんだ…どうしてオマエが上手くいってて…オレが…こんな目に…」
「…知るかよ、そんなこと…」

へたり込んでいるユーラを、遊良が見下ろしていた。
…今ここに、決着はついた。
ポツリとそう零すユーラの体からは、赤い粒子がゆっくりと天に立ち昇っているのが見てわかり…
意気消沈。敗北によって完全に己が分からなくなってしまっている今のユーラの姿は、あまりに痛々しいモノとなりて霊園の空に消えようとしているかのようではないか。
果たして…
そんなユーラの姿を見下ろしながら、遊良が考えるのはどのようなことなのだろう。
ひとつ道を間違っていれば…いや、『あまぎ　ゆうら』という人生を『正しく』進んでいれば、確実に遊良だってこうなっていた。
だからこそ、ユーラからのその問いには遊良だって正しい答えなんて出せるはずもなく。
『今』の自分は間違っている存在なのか…だとしたら、今こうして鷹矢とルキが居てくれる自分とは一体どんな存在なのか…

けれども、世界の仕組みも、世界の謎も、そして自分自身すらも何もかもが分からない遊良だからこそ。
遊良は、へたり込んだままのユーラへと向けて…
ユーラから問いかけられた、正しい答えなどないその問いへ向けて遊良は…

「けど…」

静かに…
一呼吸、置いて…

「俺なら…俺だったらどんな目に遭ったって鷹矢とルキは絶対に見捨てない…鷹矢が焼け死ぬ運命だっていうなら、俺も鷹矢と一緒にその場で焼け死んだ……ルキが刺し殺される運命だっていうなら、どんな手を使ってでもルキだけは庇うか…ルキと一緒に、刺し殺されて死ぬ……俺だったら…『俺』だったら。例え二人に生きろと言われても、自分一人だけ生き残るなんてしない……絶対に。」
「あ…」

それが遊良の出した答え。
例え鷹矢とルキが自分を『生かそう』としてくれたとしても、それでも鷹矢とルキをただ死なせるなんて自分はしないという…
それは依存という言葉では表しきれない、世界に見放され続けてきた遊良だからこそ抱くことを許される究極完全の自暴自棄。
…『堕天使』の力を得ることになった謎の男との戦いの時だって、二人に『逃げろ』と言われても遊良は逃げなかったのだ。
だからこそ、鷹矢とルキの命を貰ってまで生き続けはしない。だったら、鷹矢とルキと一緒に自分も死ぬ…
『今』の遊良が出したのはそんな結論。鷹矢と、ルキと。二人と共に生き、二人と共に死ぬと…そう、誓っているからこそ…

遊良は、どこまでもユーラを見下ろしたままで…

「あ…あぁぁ…」

鷹矢とルキが遊良に近づき…そして、ユーラを見る。
そんな、遊良に寄り添う鷹矢とルキを見上げながら…
ユーラは、一体何を思うのか。

「や、やめろ…やめてくれぇっ！恨んでるのか!?オレの所為で死んだから、オマエらを助けられなかったからって、オ、オレを恨んでるのか!?」

喚く…
自我を失った狂人のように。

「だ、だってお前たちが言ってくれたから！オ、オレに生きろって…お、お前たちがそう言ったからオレは！」

騒ぐ…
間違っていると思いたくないのに、自分が間違っているのだという現実を突きつけられた子どものように―

「やめろぉ！鷹矢！ルキぃ！…そ、そんな目で…」

今、戦いに敗れたユーラが…

アマギ　ユーラが、粒子となりて…

「そんな目でオレを見るなあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

―！

―あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…

消える…

『ひとつ前』から来たというアマギ　ユーラが、赤い粒子となって消えていく。

それは彼が選んだ代償。邪なる神の司る『消滅』の力を行使した彼の身に降りかかる、逃れられぬ最後の運命の…その、代償。

…ユーラだって、どこかで違う選択を選んだら『こう』はならなかったのだろうか。

そんな事など、今この場にいる遊良にも鷹矢にもルキにも…誰にも、絶対に分かる事はないのだが。

すると、ユーラが消滅していく光景を見てしまって…

ルキが、泣き崩れてしまって。

「…なんでルキが泣いてんだよ。」

「だ…っで…ひぐっ、ゆ、遊良が…遊良がもしこ、こうなってたら…っで…思、うど…」

「…アイツは俺じゃない。もし俺が道を間違っていたとしても…俺は

絶対に、アイツみたいにはならない。」
「…うむ。アイツは最後に言っていた…俺とルキに、『恨んでいるのか』、と。……馬鹿な男だ。例え何があろうとも……例え世界の全てが敵に周り、遊良の所為で世界が滅ぶことになろうとも。それでもこの俺だけは絶対の絶対に遊良を恨むことなどあるはずがない…世界でただ一人、この俺だけは遊良を憾むことなど無い……遊良を怨むなど、絶対に『無い』というのに。」
「鷹矢…」
「だからどうでもいいのだ。ソレがわかっていなかった時点で、アイツは絶対に遊良ではない……ただの……ただの、どうでもいい『別人』だ。」

しかし、泣き崩れるルキを他所に。
こんな場面を目の当たりにしたというのに、鷹矢の表情は相変わらずの鉄仮面で…全く変わらずその場に立って、ユーラが居たところをただ見下ろしているのみ。
…遊良ではないアマギ　ユーラ…彼が『正史』と呼んでいた彼の人生を、鷹矢は知らない。
そうして、鷹矢は『いつもと同じ』に聞こえるトーンで…静かに、その口を開いて。

「どうでもいい有象無象にすぎん赤の他人が消えたところで俺は何も思わん。所詮は…どうでもいい奴の、ただの自業自得だ。」
「…だったら、なんでお前も泣きそうな顔してんだよ。」
「しておらん。」
「してるって。」
「しておらん。」
「してるって！」
「しておらんと言っているだろうが！」
「……そうかよ。…わかった、じゃあ…そういう事にしておいてやる。」

「…うむ。」

…誰の目にも、今の鷹矢の顔は表情の無い鉄仮面だというのに。
遊良の目には、きっと今の鷹矢の表情の変化がはっきりと見えているのだろう。
いくら『他人』からは鷹矢に表情が無い様に見えたとしても、鷹矢自身には思うところがきっとあるはず。
それ故、遊良にしか読み取れない鷹矢の表情は彼が何を思っているのかをいとも簡単に遊良へと伝えている。
…遊良が最初に堕天使を得た『あの時』、鷹矢もまた遊良の身を案じて真っ先に遊良を逃がそうとした。
ゆえに、鷹矢には『わかって』いる。ユーラと共に居た自分も、『焼け死ぬ』その時だってきっとユーラの身を案じ…
ユーラが助かった事を誇りに思い、ユーラの命だけを思い…
ユーラを恨むことなく、死んだのだろう…と、言うことを。
鷹矢にとって、遊良とはそう言う存在。それはこの世界だろうと、違う歴史だろうと、『正史』であろうとも。
だからこそ、鷹矢にはわかっている…いや、確信がある。天宮寺鷹矢という存在が、いかなる歴史においてもどのような思いを抱きどのような行動をとったのかを…
それ故、『アマギ　ユーラ』がこうして『暴走』してしまったことに対して…遊良と最も一緒に過ごしてきた自負のある鷹矢が、何も思わないなんて絶対に無いのだから。
…鷹矢のそんな感情を、静かに感じ取った様子の遊良。
そして、ユーラが消えたその場所から…
遊良は、ふと『1枚』のカードを拾い上げ…

「…俺とは違うカードを選び、俺とは違う人生を歩んだアマギ　ユーラ…でも、確かにアイツも…」

…遊良は見つめる。

ユーラが赤い粒子となって消えてしまったその場に落ちていた、ユーラのデッキであった散らばったカード達の中から、『1枚』のカードを。

すると、そのぼろぼろになったカードを拾った瞬間に…

流れ込んでくる…

『誰か』の、記憶が―

―『行くぜたかや！デュエルだ！』

―『うむ！きょうこそはオマエとサクリファイスにかってみせるぞ！』

―『無駄だっての！オレとサクリファイスに勝てるわけないだろ！今日もオレ達の勝ちに決まってるって！』

―『わらわせるな！おれもあたらしいカードをジジイにもらったのだ！これだ、【生贄封じの仮面】！これさえあれば、きょうこそまけるのはおまえたちのほうだぞ！』

―『は!?おいなんだよそのカード！くそっ、ズルいぞたかやの癖に！』

―『なにをいう！そっちこそかちこしているからといってちょうしにのるな、ゆーらのくせに！』

―『もー！デュエルの前からケンカしないの二人とも！』

「ッ…」

見えたのは幼少の頃の彼の光景。

それはきっと、拾い上げたその『1枚』の最も幸せだった頃の―

「アイツも…確かに生きてきたんだ。俺とは違うカードを選んだ『ひとつ前』のアマギ　ユーラ…まだよく理解出来ないけど…確かに俺とアイツは別人だけど…でも…それでも、アイツも確かに『あまぎ　ゆうら』だったんだ。鷹矢とルキと一緒に生きた…アイツも…」

Ｅｘ適正を持たないと宣告され、全てが狂い始めたあの日から確かに遊良もあらゆる物を奪われ続ける人生を送ってきた。
…だからこそ、遊良には分かる。
ユーラもまた、どんな人生を送ってきたのかが。

―！

突風が吹く…
雨をまとって天に吹き抜ける突風が、地に散らばったユーラのカード達を天へと運んでいく。
遊良が持った『１枚』以外のユーラのカード達を、まるで後を追わせるかのように天へと運んでいき…
それと、同時に―

「ねぇ…あれってさ…」
「あぁ…これできっと、決闘市の皆も元に戻るはずだ。…そんな気がする。」
「…うむ。」

…夜が訪れた空に見えるは無数の流星。
それがおそらく、決闘市の人々の魂だと言うことが何故か遊良達には理解出来る。
…それは『邪神』を倒したが故の理解なのか。
消滅を司る邪なる神を倒した事によって、消滅したはずの決闘市の人々の魂が蘇り還っていくと思われるその光景は…
どこまでも美しき流星群のようになりて、いつまでも決闘市の方へと降り注ぎ続け…

そんな、光景の中で―

「…お見事でした、天城　遊良。」
「ッ!?」

遊良たちの背後から、急に『誰か』の声が聞こえてきた。

そこには―

「お、お前は!?」

そこに居たのはありえない人物。

浅黒い肌、漆黒の髪…
それは遊良が知る、『あの女性』によく似た、しかし『あの女性』よりも確実に若く見えるあの―

「なんでお前がここに居る、釈迦堂　ユイ！」

―釈迦堂　ユイ

夏ごろに決闘学園イースト校に転入してきた謎の少女が…

突如、姿を現したのだ―

ｅｐ１０８「終息と真相」

「…お見事でした、天城　遊良。」

「ッ!?」

どこからか現れた、もう一人の『あまぎ　ゆうら』との激闘を終え。

そう、ユーラが呼び出した、この世ならざる存在である『邪神』との戦いが終着を迎えた…その、すぐ後のこと。

束の間の安堵を感じていた遊良達の背後から、不意に『誰か』の声がし…

そして反射的に遊良が振り返ったそこに居たのは、遊良にとってありえない人物であった。

「お、お前は!?なんでお前がここに居る、釈迦堂　ユイ!」

そう、この場に現れたのは紛れも無い。

それは遊良が知る『あの女性』によく似た、しかし『あの女性』よりも確実に若く見える人物でもあり…

…暗くなりつつある霊園の、黄昏の闇に溶ける褐色の肌。霊園が迎える夜よりも、なお深いその漆黒の髪。

それは夏ごろに決闘学園イースト校に転入してきた人物。そして師である【白鯨】の個人的な理由から近辺調査をさせられた人物。しかし目立った行動を全くとって居なかったために、遊良も今の今までその存在をすっかり忘れていた人物。

そう、それは遊良にとっての指標とも言うべき存在である釈迦堂ランと、まったく『同じ』ような雰囲気を持った一人の少女。

―釈迦堂　ユイ

そんな彼女は、一体どのような目的を持ってこの場に現れたのか。

釈迦堂　ユイはゆっくりと…まるで、不気味に傅く人形のような素

振りを見せながら…
徐に、その口を開き始め…
「…全て、見ておりましたから。」
「見てただって?そ、そんなわけないだろ!大体、決闘市の人間は全て消えて…」
「…はい。ですが貴方が『邪神』の一柱を打ち倒したおかげでその問題は解決されました。…やはり、見込んだ通り…いえ、私などでは見抜けなかった本物の『……』、ですね…」
「な、何を言って…」

突如姿を現しながら、まるで理解出来ない言動にて淡々と言葉を紡ぐだけの釈迦堂　ユイ。
その声は夜風に流され、上手く聞き取る事が出来ない錯覚を遊良へと与えているようでもあり…
そう、釈迦堂　ユイの言葉を聞いている遊良には、まるで目の前の少女が同じ言語を使っていないかのような感覚を覚えてしまっているのだ。
…何しろ、いくら『邪神』を倒し人々の魂が流星となりて決闘市に還っていっているとは言え。まるでこの戦いを見ていたかのような彼女の口ぶりは、およそ今まで消されていたと思われる決闘市民の口からは絶対に零れてこないような…
あまりに冷静、あまりに淡々、あまりに沈着としているような代物であったのだから。
…決闘市の人々は、未だ全て消えてしまっているはず。
何せ、『神』の力の影響を受けた人間が元に戻るためには一定の時間が必要であるということは、この場にいる『神』に関する人物である高天ヶ原　ルキがその身で証明していること。
【邪神イレイザー】と呼ばれていた神がどんな理屈で決闘市の人々を消して、そしてソレを打ち倒した今どのような原理で人々の魂が戻っていっているのかは遊良達には定かではないものの…

…決闘市の人々は全員確実に消えていた。それは自らの目と足で確認したから間違いないはず。
だからこそ、もし釈迦堂　ユイが真っ先に蘇ったのだとしても。まずその心に感じるのは、突然の事への『混乱』であるはずなのだ。
…普通であればありえない。『あんな目』に遭ってこんなにも冷静な言葉を述べられる人間など。
だからこそ、遊良とユーラと、そして鷹矢とルキの他には誰の気配もなかったはずのこの『霊園』に釈迦堂　ユイが気配もなく現れ。そして先ほどの赤い重光による混乱もなく、最初から全てを見ていたかのような言動をするのをどうにも遊良には理解できず…

…すると、突如現れた釈迦堂　ユイへと向かって。

遊良と同じく、驚いた様子を見せていた鷹矢が…
釈迦堂　ユイへと向かって、その口を開いた。

「誰だ貴様は！釈迦堂と名乗ったが、もしやあの釈迦堂　ランの関係者か!?」
「え？」

しかし…
開口一番、鷹矢の口から飛び出してきた言葉もまた、遊良にとっては驚きに値する言動であった。
…しかし、それもそのはず。
何しろ、いくら他人の顔を忘れっぽい鷹矢であったとしても。その名に『釈迦堂』を持つ彼女を、鷹矢が忘れるわけがないのだ。
…転入生というインパクトもそうだし、リベンジを誓っている釈迦堂　ランに容姿がそっくりなのもそう。
それに授業で何度も顔を見ているのに加えて、これまでも何度か夕食時の話題として鷹矢の方から名が挙がっていたくらいなのだから、いくら他人に興味を持たない鷹矢であったとしても、その外見も名前

も鷹矢が覚えていないわけがないと言うのに。
けれども、そんな遊良の驚きなど関係ないかのようにして…鷹矢は、更に言葉を続けるだけ。

「釈迦堂の関係者ならば一体何の目的で現れたというのだ！ぬ…もしや貴様、さっきの遊良の偽者の仲間か!?遊良が手負いになるのを狙ったのだとしたら、今度は俺が相手になってやるぞ！」
「鷹矢！お前なに言ってんだ!?アイツは釈迦堂　ユイ！【決島】の前に転入してきた…」
「む？転入…？一体何の事だ？」
「ッ!?お、お前…」

今の鷹矢の振る舞いを見れば、『これ』がいつもの他人の顔を覚えていない鷹矢の振る舞いではないことなど遊良には手に取る様にわかってしまう。
そう、今の鷹矢の振る舞いは、本気の本気で釈迦堂　ユイが誰だか分かっていないかのようではないか―
…完全に知らない人間に向ける目。完全にその記憶にはない人間を見る目。
鷹矢の目を見ただけで、ソレを直感的に把握してしまう遊良。生まれた時からの幼馴染ゆえの感覚により、鷹矢が本当に釈迦堂　ユイの事を忘れてしまっていることに遊良は驚きを禁じえず。
また、ルキの方も―

「ルキ、もしかしてお前もアイツの事が…」
「あ、えっと…ゴメン、誰かわかんない…転入生って何のこと？あの人…誰？」
「ッ…」

…鷹矢のみならず、ルキまでも釈迦堂　ユイの事を忘れてしまっている。

いや、ルキの場合はそれだけで済む話ではない。そう、これは遊良は知りえぬ事ではあるのだが、ルキは【決島】において一度、釈迦堂　ユイとデュエルを行っているのだ。
まぁ、ルキはその『直後』に【紫影】によって、体内に宿る『赤き竜神』を解放されかけた事でその前後の事を鮮明には覚えていないのだが…
しかし、それでも。
他人の顔を覚えない鷹矢とは違って、ルキが確実に顔を合わしたことのある相手にその反応を見せるのは明らかに奇怪。
…自分がしっかりと覚えているのに、鷹矢とルキが釈迦堂　ユイの事を忘れてしまっているのは何か裏がある。
それは先の決闘市の人々を消滅させた赤い重光を見た衝撃と、同じくらいの衝撃を遊良の心へと与えていて。
そして、決闘市の人々の消滅と『邪神』との戦いを見てもなお全く混乱していない様子を見るに…おそらく、いや確実に釈迦堂　ユイには『何か』ある。
それを、瞬間的に理解したからこそ―
遊良は、釈迦堂　ユイへと向かって身構え…

「…ご安心を。事を荒立てるつもりはありません。私はコレを…『邪神』のカードを回収しにきただけですので…」

しかし…
全く敵意を感じさせない声と共に。
釈迦堂　ユイが見せた、その手に持っていたのは―

「ッ!?お、お前!どうしてそのカードを持っている!だ、だってそのカードはたった今風に飛ばされて…」

何を隠そう、風によって天に舞っていったはずの【邪神イレイザー】のカードであったのだ。

…遊良とて、散らばったユーラのカードの中から、【邪神イレイザー】のカードを回収し損ねたことを気にかけてはいた。
何しろ、この世ならざる邪なる『神』のカード。
その危険さは遊良とてその身を持って体験したのだし、同じく『神』のカードを持つルキの体の事も知っていることから下手に『神』のカードが他人の手に渡る事の無いようしっかりと回収し、そしてその後に師である【白鯨】に邪神の事を相談しようと思っていたくらいなのだ。
…だからこそ、この後すぐに遊良は散らばったユーラのカードを全て探し『回収』するつもりだった。
けれども、そんな遊良に先んじて―
わざわざ最も危険な『邪神』のカードを手に取っている釈迦堂　ユイの存在が、遊良の目にはどこまでも不気味なモノにしか映らないのか。

そして…

釈迦堂　ユイが、【邪神イレイザー】のカードを遊良と鷹矢とルキへと見せた…

その瞬間―

「……ぐッ!?な、なんだこの記憶は…そ、そうだ！貴様は遊良の言う通り転入生…ッ!?…あ、頭が…わ、割れそうに痛いぞ…」
「うぅっ…ぁ…ち、違う…わ、私、知ってる…あの子と…私、【決島】でデュエルを…うぁ…」
「鷹矢!?ルキ!?」

急に…

そう、急に―

鷹矢と、ルキが。急に、その頭を抱えて苦しみだしたのだ―
…それはあまりに異常な光景。
何しろ、ルキはともかくとして、意地でも風邪を引かない、食べ過ぎ以外でここ十年ほど全く体調を崩した事のないあの鷹矢が。
頭痛を感じているその姿にさえ違和感を覚えそうになる、あの鷹矢が頭痛で頭を抱え…それに加えルキまでもが今にも膝から崩れ落ちそうになっているその光景は、遊良からしてもどうにも奇怪しな現象にしか思えることが出来ず。
一体…一体、何が起こっているのか。
ひとつの戦いが終わったばかりで、満足に頭が回らない遊良の前で次々と奇怪な現象が起こり続けるこの場はまさに混沌。
常識が働かず、理性が理解を諦めているかのようなこの場の状況は…『邪神』との戦いを終えたばかりの遊良では、どうにも収拾させることなど敵わないモノとなりてその眼前に広がるだけ。
…すると、そんな混乱だらけの少年達へと向かって。

「…なるほど。天宮寺　鷹矢…一時的とは言え、自力で『世界』に穴を開けられた者と…高天ヶ原　ルキ…あのルキアの遠き子というだけはありますね…まだ私を覚えていられるとは恐れ入りました…しかし、それもすぐに忘れることになりましょう…」

釈迦堂　ユイは、鷹矢とルキに意味深な言葉を投げかけたかと思うと…
そのまま、遊良達の元から去ろうとゆっくりと振り向こうとし…
そして―

「ま、待て！お前が何者なのかはこの際どうでもいい！だけどその『邪神』のカードを持っていかせるわけにはいかない！そ、そのカードは危険なカードだ！お前、そのカードが何なのか知っているのか!?」
「…はい。このカードを『ここ』に持ってきたのは私ですので…それよ

り…」
「ッ!?」

…徐に。
釈迦堂　ユイが、指を天へと向けたそこには―
先ほどまでとはまるで規模が違う量の、夜を引き裂くような圧倒的物量の光り輝く流星のような『モノ』が…
決闘市へと向けて飛び散っていき、街に帰っていく光景があまりに幻想的に広がっていて。

「…貴方が感じた通り…『邪神』が喰らった街の人々の魂は神を倒した事により解放されました…よくやってくれました。それでこそ貴方は『……』。その『翼』が育つことを…努々、願っております。それでは…お疲れさまでした…」

そうして…
ポツリと。最後まで、どこまでも理解出来ぬ言葉を静かに紡ぎ続けた釈迦堂　ユイは…

―努々忘れることなかれ…自分が一体何なのか…貴方は歴史の革新者…『翼の……』…

…遊良達が空に目線を切ったその瞬間に、遊良達には聞こえない声で『何か』を呟いたと同時に。
音も無く、その場から消え失せたのだった―

「な、なんだったんだよ、ホントに…」
「……ぬ？急に頭痛が治まったぞ？…む!?奴が居なくなっているではないか！あの謎の女は何処へ消えた!?」
「あ、ほんとだ……ねぇ、遊良は知ってるの？さっきの女の子のこと…」

「鷹矢…ルキ…お前ら、本当にアイツの事覚えてないのか？」
「えっと、覚えてないって言うか…さっきの、ホントに誰？初めて見た人だったけど…」
「…うむ、一体何の話だ？俺からすれば、お前がなぜ奴の事を知っているかの方が不思議だぞ。あんな奴、初めから俺の記憶には無い。」
「…」

…そして、釈迦堂　ユイが去ったそのすぐ後に。
頭痛が治まったのか、先ほどの苦しみ方がまるで嘘のようにして立ち上がると…遊良へと向かって、釈迦堂　ユイの事を問いただし始めた鷹矢とルキ。
…しかし、その記憶から完全に釈迦堂　ユイへの記憶を失った素振りを見せながら。
それが頭痛が治まった『代償』なのか、それともまた別の要因の所為なのかまでは遊良には分からない。
けれども、確かに自分は覚えているあの釈迦堂　ユイという転入生の事を鷹矢とルキが忘れ去ってしまっているという事はおそらく…あの釈迦堂　ユイという女は、およそ人間の理解には当てはまらぬ『人外』であると言う結論に、遊良も嫌でも至ってしまうのか。
…そうした結論に遊良が至れるのも、偏にこれまで紫魔　憐造や【紫影】と言った文字通りの『人外』と出くわした経験が成せるモノ。
…まぁ、果たしてソレが他人に誇れるような経験であるのはかともかくとして…
突然の指名手配と、決闘市からの脱出と…そして『邪神』を繰り出してきたユーラとのデュエルに加えて、今の釈迦堂　ユイとの邂逅。
そんな、あまりに多くの騒動に次ぐ騒動の連続の中で。釈迦堂　ユイが最後に残した『お疲れさまでした』という言葉が、遊良からすればどこか1つの区切りのようにして…
「…はぁ…とりあえずその事は後で話すから、今は早く砺波先生と合流しよう。今も電話が鳴りっぱなしだ。何があったのか説明しない

と。」
「…怒るかなぁ、理事長先生…」
「うむ…確実に怒るだろう。なぜ連絡しなかったと攻め寄ってきそうだ。」
「…想像したくないな。」

デュエルモードが終了したことで、万能端末であるデュエルディスクの電話機能に鬼のようにかかってくる『砺波　浜臣』の着信画面に、遊良達は若干引きつつも。
『霊園』から遠目に見える決闘市の雰囲気が、静寂から徐々にざわめきを取り戻しつつある光景に対し…
安堵が半分、不安が半分。そういった感情が入り混じった疲れの表情を見せるのは、きっとこの戦いがひとつの大きな山場であったということを、その肉体が理解しているが故なのか。
降り注ぐ流星のような人々の魂を見ながら、ようやく緊張の糸を遊良は緩めつつ…

「何か、どっと疲れた感じだ。指名手配されるし、フードの男は俺そっくりだしで…意味がわからなさすぎていい加減疲れた…」
「…そうだね。何か色々ありすぎて疲れちゃったよ、もう。」
「うむ。」
「…お父さんもお母さんも…これで、元に戻るんだよね？」
「うむ、そんな気がするぞ。」
「あぁ…そんな気がする。」

ひとつの戦いが終わり、明らかに疲れた表情を見せる遊良達。
指名手配の件がどうなるのかは、今の遊良達は知る由もないことではあるのだが…
それでも、街に帰る人々の魂の流星が…

いつまでも、決闘市へと降り注ぐのだった―

―…

数日後―

―『この度は不確定な情報を発信し、国民の皆様に多大なるご迷惑をかけたとともに―』

―『1人の少年に、謝罪では済まない迷惑をかけてしまったことを深くお詫びし―』

―『大変申し訳ありませんでした。今後はこのような事態にならぬよう、全身全霊で正確な報道に勤めていく事を皆様に誓い―』

―『先日の天城　遊良氏の指名手配は、警察側の不手際であったと警視庁が認めたことにより完全に撤回されました。繰り返します、天城　遊良氏の指名手配は間違いであったとのことです。国民の皆様におかれましても―』

天城　遊良の『指名手配』の報道がされてから、数日たったとある日のこと。

決闘市に放映されているＴＶは、どのチャンネルに回しても皆等しく…先日の耳を疑うような『報道』に関する、『間違い』を重点的に伝えているモノばかりであった。

それは、『謝罪』…それも、放映している全ての局が―

普通であればありえない。どの局のどのチャンネルのどの時間帯も、皆同じようにＴＶ局の面々や警察の謝罪会見の映像や、自分達の『間違い』を認めているような報道をしているだなんて。

何せ、『報道の自由』という理論を勝手に解釈し捻じ曲げ事実を面白おかしく報道することが日常茶飯事のマスコミの方から、『自責』の発言をするだなんて一体どうした了見だというのだろうか。
…だからこそ、このマスコミの急すぎる掌返しには、今もネット上にて様々な憶測が飛び交い続けている。
それは『天城　遊良が金を積んだ』とか、『某国の陰謀』だとかその他色々…
しかし、そのどれもが的外れかつ、あまりに現実味の無い憶測ばかりであり…その『真相』を知らぬ者達からすれば、一体どうしてメディアや警察が急に『こんな事』をし始めたのかが、まるで理解できないままただただ混乱に陥ってしまっていて。
そう…この1日たらずの突然の『騒動』は、世界に大きなざわめきと疑問とを巻き起こしたと言うのにも関わらず。メディアと警察が、自分達が広めた騒動を半ば強制的に終了させてしまったのだ。
まぁ、とは言え天城　遊良の指名手配が、例え『誤報』であったと警察やメディアが謝罪したとしても…
普通、人々が一度抱いた見識は簡単な事では書き換えられる事は無いのだから、決闘市『以外』の街や他国ではまだそれなりに天城　遊良という少年に対し、少々反意的な意見を持っている者もチラホラ見かけられているのが現状と言え…

しかし…

他の街とは違い、遊良が住む決闘市においては。
この報道がなされる前から…それこそ、ユーラとの戦いが終わったその日から急に…
『遊良』に対する接し方や言動が、ガラっと変化を見せ始めたのだ―
それは『悪い意味』で…ではない。『良い意味』で、だ。
そう、それは他の街の者たちとは違い、『邪神』によって文字通り『消

滅』させられた決闘市の住民達だからこそ抱く事を許された特別な感情。
なんと決闘市の住民達は、誰もが皆おぼろげながらも天城　遊良に『助けられた』という感覚を無意識に覚えていたのだ。
…果たしてソレがどこから来る感情なのか、そして『何』から助けられたのかを決闘市の住民達は決して知らない。
いや、むしろ住民達は遊良に救われたということを自覚することはない。
あるのは、なぜ天城　遊良に対して敵意を抱いていたのかという疑問だけ。Ｅｘ適正が無いとは言え、【決闘祭】に優勝し、【決島】に準優勝した決闘市が誇るイースト校の学生という…
そう、遊良に助けられたという『自覚』は住民達には無い。あるのは、敵意を向ける必要がないという『無自覚』だけであり…
確かに自分達を襲った謎の『苦しみ』から、天城　遊良が『救って』くれたという無意識だけは確信を持って決闘市の住民全員が覚えている。
それこそ、決闘市における老若男女、その全ての者達が無意識の内に遊良に『救われた』という感覚を覚えているからこそ―
あの騒動から数日たった今では、こと決闘市内においては指名手配された直後とは打って変わって…
遊良への攻撃の声は、全くと言っていい程なくなっていて。
…まぁ、とは言え現状の把握と整理が出来るまで、遊良の身は【白鯨】によって手厚く保護されているのだから、遊良本人が決闘市の変化を知るのはもう少し後になってしまうのだが…
それでも、決闘市の住人たちの意識が遊良への敵意を無くしたのと同時に。
畳み掛けるようにして警察が指名手配の撤回をしたり、マスコミが次々に天城　遊良への謝罪報道をしたりしたその『贖罪』によって、少なくとも決闘市内では誰一人として遊良へと非難の声を上げる者は居なくなった。
それは誰も自覚はなくとも、理屈はわからなくとも…それでも、誰

もが天城　遊良に救われたという『無意識』を心の隅に引っ掛けているが故の心境の変化。
すでに決闘市内では、遊良が指名手配された事に対してとやかく言っている者など居ない。
謎の『苦しみ』に襲われる前と同じ…いや、それ以上に。天城　遊良は【決闘祭】に優勝し、【決島】に準優勝した決闘市が誇るイースト校の学生という認識が、決闘市内の人々の中では前よりも大きくなっており…
…後は、時間が解決してくれる。
特に渦中の決闘市でこの調子ならば、騒動が本格化する前に鎮圧してしまった諸外国でもこの件を再び騒ぎ立てでもしない限りは、僅かな時間と共にこの件への興味もすぐに薄れていくに違いない。
そう、つまりは決闘市が、一時的に世間をほんの少し騒がせただけ。メディアからの『贖罪』の後に、この話題に触れずに何もしなければきっと…2～3日も経てば、世間はこの件を綺麗さっぱり記憶に残さないはず。

そんな、ようやく平穏を取り戻した決闘市の…

その、決闘学園イースト校の理事長室にて…

「どうだい、アタシが紹介してやった『逃がし屋』…真蒸（まむし）の奴は、良い腕だったろう？」
「はい…流石はかつて決闘市の四天王と呼ばれていただけはありますね。ですが、まさか【紫影】の甥である彼の事を獅子原理事長が頼るとは少々予想外でしたが。」
決闘界における二人の重鎮が、およそ他人には聞かれるわけにはいかないような危ない内容を話し合っていた。

「ハッ、【紫影】は【紫影】、アイツはアイツってことさ。アタシが恨みを持つのはあくまでも【紫影】の屑ただ一人…いくら真蒸の奴が『竜胆』の血を持つ男だろうが、そこんとこを履き違えるほどアタシも落ちぶれちゃいないさね。だからウエストのガキ共…大蛇やミズチが『竜胆』を名乗って出てきた時も、アタシは別に何も言わなかっただろう？」

「そう言えばそうでしたね。…しかし今回は火鳥（かとり）君…息子さんにも、相当危ない橋を渡ってもらいました。彼には感謝してもしきれません。彼が居なかったら、天城君たちを決闘市から出すことなんて出来ませんでしたから。」

「ま、警察も一枚岩って訳じゃないからねぇ。火鳥の奴も、天城の逮捕にゃ納得してなかったんだろ。だからアンタに内部の情報流し天城を逃がした…ただ、それだけの事さ。」

しかし、彼らの内容はどこかフランクな雰囲気ではあるものの、決して軽い内容ではない。

何しろ、傍から見れば…いや傍から見なくても、その内容は他人には聞かせられないような危ない内容となっているのはきっと聞き間違いではないはず。

その内容も、そしてソレを話している人物も。まるで世間で騒がれているモノの真実を知っているかのような、どこまでも事情の裏側に立つモノばかりであるのだから。

そう、イースト校の理事長室にて会話を交わしているのは紛れも無い…

…一人は苛烈な火花を纏っているかのような、それでいて確かなる威厳を醸し出している女性。

『逆鱗』や【黒翼】、果ては【白竜】と言った、決闘界の大物たちすら彼女には頭が上がらないとされている決闘界きっての姉御肌の御仁であり…

王座を燃やす女武人、燃え上がる戦いの鬼。天下に轟く燃え盛る女傑、かつては『烈火』と呼ばれた歴戦のデュエリスト。

―決闘学園サウス校理事長、獅子原　トウコ。

そしてもう一人は、およそこの世にある言語では形容し難いモノであると思えるような…

あえて言うならば、この世の何よりも深い海のような…そう言った人間らしからぬモノの雰囲気を纏っているとさえ思える、人の領域からは観測できない場所に棲んでいるような不思議なモノを醸し出している一人の男。

そう、それは元シンクロ王者【白鯨】…

―決闘学園イースト校理事長、砺波　浜臣。

そんな決闘学園の理事長を務める砺波とトウコは、色々な憶測が今もなお繰り広げられていると知っていながらも。

真実を『何』も知らぬネット上の民とは違い、この件における限りない『真相』について…

そう、ソレを知る者として、誰に聞かれるわけもいかない話を、誰にも聞かれる事の無いこの部屋でただただ繰り広げ続けるのみ。

「けどま、少しはアタシにも感謝してほしいモンさね。『煉獄園家』に無理言わせるなんてホント嫌な後輩さアンタは。生まれて初めて娘に頭下げたさ…あんな事、二度と御免さね。」

「申し訳ありませんトウコさん…今回の件は本当に助かりました。逃がし屋の件もそうですが、今回の件に『天津間家』が絡んでいると知った時に…頼れるのは、『煉獄園家』にパイプを持つトウコさん以外には居ませんでしたから。」

「ハッ、鷹峰といいアンタといい、アタシをいい様に使うとはご立派に

なったモンさねぇ。…ま、別にいいけど。あんまり覚えちゃいないが、天城に『救われた』ってのだけは理解してるんだ。まさかメイコに頭下げる羽目になるとは思いも寄らなかったが…アタシの頭1つで済むんなら安いモンさ。『去年』の憐造の時みたいなアレが…また、起きたんだろう？」
「はい。…しかしソレを抜きにしても、今回の件は色々と奇怪しな点が多く目立ちました。天城君の指名手配にしても、警察も普通であれば指名手配を全国公開する前にもっと早く動いているはず…特に、所在が分かっている天城君を前もって逮捕しておくことなど、警察からすれば簡単でしたでしょうし。」
「あぁ、けど警察はソレをしなかった…と言うより、出来なかったんだろうさ。火鳥の奴も、『あの日』に天城が突然指名手配されたことをテレビで知って驚いていたからねぇ。アレでも警察内部でそこそこの地位にいるアイツが、ソレを直前まで知らされてなかったってことは…」
「…警察とメディアの最上層部に直接モノを言え、まかり通らない無茶を無理矢理通せるような者がありえない『無茶』を行わせた…となれば、そんな無茶を通せる者は限られてくる。そして、天城君の繋がりを遡ると該当するのは…」
「…んで、『天津間家』ってわけか。ハッ、どこのどいつが天城みたいなガキにあんな馬鹿らしい真似するんだって思っちゃいたが…アンタの話じゃ、10年くらい前の天城の大々的な報道も、【決島】ン時の馬鹿らしい実況も、『天津間』の手回しだったってことだろう？」
「…ええ、まず間違いないかと。」
「チッ、こうなってくると、アタシも段々ムカっ腹が立ってきたってもんさ。…アタシはねぇ、竜一のことは抜きにしても、鍛えてやった事もあってこれでも天城の奴は結構気にいってたんだ。それをあのヒステリババア…とんだ『おふざけ』してくれたもんさ。随分と…舐めた真似してくれたもんさね。」
「…そうですね。」

彼らの間に繰り広げられるは、一般の人間は知らぬ騒動の裏側。そして一般人には決して聞かせられないような、とても危うい上層の会話。

その彼らの話の中に出てくる単語の1つ1つを取っても、そのどれもがおよそ常人には理解できない代物かつ、常人が知ってはならないような危ない繋がりを持ったモノばかりであり…

今でもネット上では、様々な憶測やフェイクニュースが飛び交い続けていると言うのに。ソレらとはまるで異なる雰囲気にて砺波とトウコが会話を交わせるのはまさしく、自分達が『真実』を知る者だからこそ交わせる混じり気のない答え合せのようなモノなのか。

…砺波やトウコの口から、この世界における絶対的権力者たる『三大貴族』の名がポンポンと飛び出てきているのもそう。

三大貴族…

それは『白桜院』、『天津間』、『煉獄園』の3家からなる、この世界の支配者的階級に位置する上位の血筋の名。

政界、財界、決闘界…多岐に渡るこの世界の本筋において、その特権を思うがままにしている、雲の上に住む上流階級の者達の総称であり…

…その全貌を知る者は居らず。その深遠に辿り着いた者はおらず。

どこかでは『三大貴族』、【決闘世界】、【王者】がいわゆる『3竦み』として扱われているという噂もあるにはあるのだが…

それは今は語られる事ではなく、そんなおよそこの世の表における『権力』と言われているモノの、その全ての『上』にあるとさえ言われているその家の名はおよそ一般社会に生きる人間においては、まず目にするコト自体が稀であるとは言うに及ばず。

…まぁ、2代前のシンクロ王者【白夜】の姓が『白桜院』だったりだとか、一般社会に『煉獄園家』の人間がたまに混ざっていたりだとか、本当に極偶に『三大貴族』の者が一般社会に下りてくることはあるにはあるとは言え。

それでも、普通であれば一般社会において関わり合うことなど皆無であろう、そんな者達の名を口々に交えつつ…

砺波とトウコの二人は、およそ彼らにしか共有していないであろう情報を…次々と、交換しあうだけで…

「とにかく『天津間家』がメディアと警察に指示させた今回の騒動は、『煉獄園家』と『白桜院家』が撤回を要求したおかげですんなりとカタが付きましたが…しかし、まさか綿貫さんが『白桜院家』を動かしてくれるとは思いませんでした。こっちからしても嬉しい誤算です。」

「ハッ、あのジジイも『白桜院家』に身内潜り込ませてるからねぇ。それに【白夜】のジジイの一件もあるし、意外と三大貴族の中でも白桜院だけは言う事聞かせやすいのさ。」

「…簡単に言わないでください。それは身内が三大貴族に居る綿貫さんやトウコさんだけが言える台詞でしょう?……こちらとしては『煉獄園家』の声明と、【白鯨】だった頃のツテを使った根回しでどうにか数ヶ月中にケリをつけるつもりだったんですから。」

「それが数日で収まったんだ。むしろコトが公になりすぎた所為で、警察とマスコミの『膿』もそこそこ駆除できたし…ハッ、むしろ結果オーライって奴さね。」

「…少々やりすぎた気もしますが…」

「なんだいなんだい、これまで散々ハイエナ…じゃなかった、マスコミに噛みつかれたアンタにしては随分と『らしくない台詞』じゃあないか。アンタだって、ふんぞり返ってた『上』の奴等が軒並み消えて、少しはざまぁみろって思っただろう?」

「それは…そうですが…」

…また、獅子原　トウコの言った通り。

警察とメディアが揃って天城　遊良への『謝罪』を公に行った裏では、ソレに見合うだけの『粛清』も同時に行われていた。

そう…

未成年の、それも【決闘祭】や【決島】での功績を世間に知られて

いる少年に対し。これだけの『誤報』や『誤審』を行ったメディアや警察も、それをただの『間違い』だったで許されるほど世間の目は甘くはなかったのだ。

…大きな『騒動』には、それだけ大きな『責任』も伴う。

メディア側には、今回の騒動に際しいち早く天城　遊良の指名手配を発信した局…そう、『天津間家』の息がかかっていたと思われる大手の局の、その上層部は軒並み総辞職させられたという。

また、今回の騒動に便乗していた中小企業の中には、解体された会社が複数もあると言うし…そうでなくとも、今回の騒動に際し少しでも関わりがあったメディアの関係者には『煉獄園家』と『白桜院家』の名においてソレ相応の『罰』が与えられえたと言うではないか。

…そして警察側にも、同じような『罰』が与えられることとなった。

政界における警察の長の辞職会見から始まり、およそ『天津間家』と繋がりがあると見なされた派閥の人間は軒並み警察から文字通り排除され…

あの『騒動』からたった数日しか経っていないこともあり、警察もメディアも今は謝罪会見に再編成に大忙しとなっており、世間からすればこれ程滑稽な事はないといわれるまでに警察とメディアの信用は地に落ちてしまっていて。

…そんなメディアや警察のトップを、文字通り『操作』したり『排除』したりする事が可能なほどの権力を持った存在が『三大貴族』と呼ばれる者達。

まぁ、普段であれば『三大貴族』側とて、こんなにも大掛かりな騒動を起こすといったことな皆無なのだが…

何しろ『三大貴族』という括りの中にはあっても、3家とも決して相容れぬ間柄であるが故に…彼ら『三大貴族』の鬩ぎ合いは、天上のモノ過ぎて最早一般の社会にはほとんど関わってこないのが普通なのだ。

…つまりは、一般的な生活を送っている者達からすれば、『三大貴

族』とはまず関わり合う事もない存在。
政界や財界や決闘界のトップクラスの面々の言動や行動だって、一般人からすれば『そういうモノ』としか感じられないもそう。その存在を知ってはいても、まず関わり合うことがないのが『三大貴族』と言われる者達なのだから。

だからこそ…

通常であれば一般人が逆らえるわけもない、今回の事の発端である『三大貴族』の内の1つ、『天津間家』のソレに対し…
今回のような迅速なる撤回と謝罪がなされたのは、偏に『三大貴族』である『天津間家』と同じだけの権力を備えた家が力を回したからに他ならない。
…それは遊良のことを庇ってくれた『大人達』による、多大なる尽力による功績の結果。
今もなお決闘界で絶大な力を誇る元シンクロ王者【白鯨】が方々へと手回しを行い、貴族の1つ『煉獄園家』に深い関わりを持つ『烈火』が動き…
そしてどういうわけか、砺波の予想外の場所から『白桜院家』までもが動きを見せてくれたおかげで、今回の突然の『騒動』はあまりにあっけなく無理矢理な終焉を迎えてしまったというわけだ。
…けれども、こんな事は普通であればありえない。
何しろ上流階級の者でもなければ、Ｅｘ適正が無いことで知られる天城　遊良という少年に【白鯨】や『烈火』と言った決闘界の重鎮たち…果てはそこから広がった、『三大貴族』の内の２つまでもが味方しただなんて。
…通常であれば、貴族たちの争いとは陰謀策略に満ち混沌迷宮と化した、一般人には到底及びもつかぬ、もっと雲の上にて行われているはずの代物。ソレがこんな下界にて、『煉獄園』と『白桜院』ｖｓ．『天津間』という2対1の構図になるなんて…常時であれば本当にありえないコトなのだ。

だからこそ、『天津間家』にただ従わざるを得なかった警察側はまだマシだとしても―

『天津間家』に指示を背景に…いや『天津間家』からの勅命を大義名分に。『１０年程前』も、そして『今回』も…これまで好き勝手にしてきたメディア側からしたら、今回の『仕打ち』はとてもじゃないが信じられなかったに違いない。

…何せ１０年ほど前に、天津間家の指示によって『Ｅｘ適正の無い少年』を大々的に取り上げ、売り出し、偏向報道し、世論を誘導し、世間を使って叩き、そうして視聴率を稼ぎとことん儲けさせてもらった…

あの人間以下の出来損ないに過ぎないただの『金づる』を再びオモチャにしたら、まさか今度は自分達が人生を破滅させられる程のしっぺ返しを喰らう羽目になっただなんて―

…何も知らない、騒動にも関わってもいなかった職員達は助かった方。

…上からの指示に従い、現場に出たり番組を制作したりした、事情を知らずに関わった者達も更迭で済んだだけまだマシな方。

寧ろ事情を知った上で金儲けのために動いた、今回の件を『指揮』し騒動をわざと『大きく』したＡ級戦犯の張本人たち…

メディアの『上』の者達の方が、きっと今頃は想像を絶する仕打ちを喰らっているに違いないのだ。

…それは貴族からの命を後ろ盾に、好き勝手に儲けた報い。

因果応報、自業自得。

今回の件における、『天津間家』と通じていた者達…報道界の重鎮、企業の長、政界と通じている幹部、果ては国の中枢に関わるような人

物といった…そういった権力に塗れた者達、いわゆる安全圏にいたはず権力者達の何人かは、きっと今頃は今回の失敗の責任を負わされ…
騒動から数日経った今となっては、『天津間家』からの逃れられぬ八つ当たりに遭っている頃だろうから。

果たして…
貴族から受ける『罰』、それは如何なる仕打ちなのだろう。
そんなこと、普通の生活を送る者達からすれば到底関係の無い事であり…
そして少なくとも、『罰』を受けた者達が再びどこかで日の目を見る事は決してないという事だけは確かなことでもあるのだろうが。

ともかく…

「しっかし、『天津間家』がなんで天城みたいなガキを貶めようとしたのか不思議だったが…小龍と関わりがあるって知って納得したよ。天城の奴、まさかあの『イノリ』の孫だったとはねぇ…道理で何か見覚えがあるはずさ。となると竜一の奴も…チッ、もっと早く気付いてやれてればねぇ…」
「…イノリさんが決闘市に身を隠していたことと、天城君の父、天城竜一がイノリさんの息子であったという事実…そして思い返せば、かつて中央校筆頭と呼ばれていたあの天城　竜一が劉玄斎にあまりに『似ていた』ことを考えると…」
「ハッ、小龍もヤる事ヤッてたってことさ。何が生涯独身さよ、未練がましい男だったってだけじゃないか。なぁ浜臣？」
「…そう言わないでやってください。劉玄斎が『荒れた』時期…考えてみれば、丁度イノリさんが劉玄斎の元から去った時期…そして天城竜一の年齢と一致します。いくら劉玄斎の『アレ』が若気の至りだったとはいえ…」
「わかってるさ。アイツは何も知らなかった…だから暴れることしか出来なかったってのはねぇ…けど小龍の野郎、八つ当たりでアタシの

ことを本気で殴り飛ばしたんだ。そのこと、未だに怨んでんだよアタシゃ。」
「あれはトウコさんがからかったのが原因では…？女々しいとか何とか、傷口に塩を塗りこむような…」
「あ？何か言ったかい浜臣。」
「…」

…点と点が繋がった様子の、そんな彼らが思い出すのは若かりし頃。
それは歴戦のデュエリスト達が、まだルーキーと呼ばれていた頃に彼らの間で繰り広げられた出来事であり…
…かつての記憶、これまでの軌跡。
若かりし頃の劉玄斎と、その恋人だったイノリという女性の事をどこか遠い思い出のようにして砺波もトウコも思い出しつつ。
劉玄斎…いや、彼がまだその名で呼ばれる前の、若造だった彼が彼女だと言って仲間達に『ある女性』を紹介してきたその時の衝撃は…
砺波も、トウコも。４０年近く経った今でも、鮮明によく覚えていて。

そうして…

「ま、それはいいとして…んで、肝心の『失踪事件』の犯人の方はどうなったんだい？確か【決闘世界】が諸々持っていったはずだろ？」
「それは…すみません、口止めされていまして。トウコさんなら、この意味がご理解いただけるかと。」
「チッ、また綿貫のジジイか…ホント秘密主義なジジイさよ全く。」
「…ええ、それだけ、今回の『騒動』は綿貫さんからしても…いえ、【決闘世界】からしても、無視できない案件だったということでしょう。」
「ハッ、【決闘世界】の秘密主義は今に始まったことじゃないからねぇ。けど何が『決闘者育成機関』さ。秘密結社の方が似合ってるんじゃあ

ないかい？」
「…獅子原理事長…そう言う事はあまり大きな声で言うモノでは…」
「わかってるさ。しっかし…決闘市の『失踪事件』は無関係の第三者がしでかした犯行、天城の指名手配は天津間のヒステリババアのおふざけ…どうりで今回のこの２件、コッチで調べても何も繋がらないはずさ。何せ、元々この二つに共通点っつーか…繋がりなんて、始めから『なかった』んだから。」
「…そうですね。」

１つの答え合わせを終えた彼らの意識は、再び先の決闘市に起こった『失踪事件』へと舞い戻る。
そして、ソレはたった今トウコが言った通り。
今回の件…決闘市で起こった大量の『失踪事件』と、その失踪事件の犯人として扱われた天城　遊良への『指名手配』。
一見すれば絡み合っていると思えるこの件は、事の顛末と真相を知る『上』の者からすれば実は何も『繋がり』が無かったという終わり方として報告されていた。
…確かに世間やネット上では、未だこの二つの騒動に関して陰謀論や憶測などが飛び交わされてはいる。
しかし、何も知らぬ一般人やネットの住人たちとは異なり…今回の件について、詳細な報告を受けられる立場の者達からすれば、今回の失踪事件と指名手配には『関わり』など無かったとして処理されているのだ。
…今年の夏前頃から始まった、実に２０名もの行方不明者を出した決闘市における『失踪事件』。
そしてその犯人として、天城　遊良の名が挙がったことは…
実は何の関係もなく、ただただこの『失踪事件』を三大貴族のひとつ、『天津間家』の現当主である女性がが利用し、何の罪もない一人の少年を陥れようとしただけという結論を超巨大決闘者育成機関【決闘世界】は最終報告としたのだから。

とは言え…

今回の件において、『現地』にてその顛末を自分の目で見聞きした、今回の『騒動』の真実の更にその『奥』を知っている砺波からすれば。

今回の二つの事件に、繋がりが『ない』と言うのは少々語弊があるのだろうけれども。

…そう、ここから先は本当に限られた一握りの者しか知り得ない情報。

砺波とて『現地』でその事象に巻き込まれ、そして自らの身を持ってして得たモノだからこそ【決闘世界】の上から直々に『口止め』を言い渡された真実の最奥であり…

今回の件…

それは失踪事件と指名手配は、厳密に言えば繋がりが無いわけではない。

むしろ、『あまぎ　ゆうら』が点と点となることによって、今回の件は繋がっているということ。

確かに事の発端は、正史から来たというもう一人のアマギ　ユーラが起こした失踪事件…そして『天津間家』は、この失踪事件に託けてこの世界の天城　遊良を嵌めたという…

果たしてソレがどんな因果にて繋がりを持ってしまったのかは、複雑に絡み合いすぎた個々の事情がこんがらがってしまったが故の偶然の産物ではあるものの、しかし奇妙な因果と世界と真理とが絡み合った結果生まれた、決して簡潔には言い表せない複雑な事象。

…ソレらが1つ1つ紐解かれるのには、もう少し時間がかかる。それはこの物語の間か、それとも更に過去と未来の物語が紡がれる時か…

…それ故、今回のこの複雑化した真実の最奥について。

その全てを知りえた砺波からすれば、『気にかかる』のはむしろ三大貴族の『天津間家』などではなく―

(…『ひとつ前』から来たというアマギ　ユーラ…その彼を、なぜ劉玄斎が『匿っていた』のかはまだ分からないが…)

それは現時点では、砺波しか知り得ない真実の最奥の更に最奥。
一体どうして砺波が『そんなコト』を知っているのかはともかくとして。

(だが…やっとこれで、天城君は全ての真実を知ることになるのだろう。)

アマギ　ユーラが消えたことによって、これでやっと【決島】の時に劉玄斎が言っていた『真実を語る資格』が『逆鱗』には与えられた。
いや、真実を語る時が来た…語らねばならぬ状況が来たと言った方が正しいか。
…先の『邪神』との戦いに打ち勝った…いや、もう一人のアマギ　ユーラとの戦いに打ち勝った天城　遊良には知る権利がある。そしてユーラが消えたことによって、劉玄斎には真実を言う資格が…いや、遊良へと真実を伝える『義務』が、これによって生まれたのだ。

…これより先は、真実の最奥の更に奥の、当事者である『逆鱗』の口から語られることになる。

そんな他人には知り得ないソレを、人知を超えたから【化物】だからこそ見通せてしまえる遠い目で…
砺波は、どこまでも深い溜息を1つ零したのだった―

⋮

ｅｐ１０９「閑話―劉玄斎、前編」

―デュエリエア、某所。

「…なるほど、それがお主の主張かの。やはり…変えることはない、か。」

「…あぁ。今更弁明する気はねぇよ。」

その世界最大のデュエル大都市であるデュエリアの、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の本部の一室では…

…現在、【決闘世界】最高幹部、『妖怪』と呼ばれし翁、綿貫　景虎が直々に、とある一人の男の取調べを行っていた。

それは約１ヶ月前に起こった世界最大規模の学生達の祭典、【決島】における騒動の重要参考人として【決闘世界】に連行された大男であり…

世紀末を生きているのではないかと思えるような巨大な体躯に、戦場を生身で駆け抜けてきたのではないかと錯覚するほどの傷跡の数々。

この星の重力のような重々しさを感じるようなその声は、およそこの男が確かな歴戦を潜り抜けてきたモノであることを誰しもに示しているに違いない事だろう。

…そう、この【決闘世界】デュエリア本部の取調室にて、【決闘世界】最高幹部である綿貫　景虎の取調べを受けていたのは他でもない。

かつては【王者】と同格と称えられていた、今もなお世界最高峰の実力を持つとの呼び声高い、王座を踏みつける戦闘狂。

決闘学園デュエリア校学長、『逆鱗』と呼ばれていた伝説のデュエリスト―

―劉玄斎、その人。

「…しかしのぅ…もう少し言い訳とかしたらどうなんじゃ。何せ黒幕

があの【紫影】じゃったんじゃし…いくら本土の生徒達が人質に取られていたとはいえ、お主が【紫影】に心から従うわけがない事くらい、儂ら幹部連の全員が知っておる。」
「クハハ、相変わらず俺には甘ぇジジイだなぁおい。…何度も言ってんだろ、言い訳する気なんざねぇよ。俺がやったことは…間違いなく、犯罪行為だからよぉ。」

そんな劉玄斎は、【決島】でのダメージが回復したそのすぐあとに。
その身柄を【決闘世界】に、名目的には『拘束』という形でおよそ1ヶ月にもわたる取調べを受けているところであった。
…まぁ、拘束や取調べと言っても、それはどこか形ばかりの形式だったモノなのだが。
何しろ。今回の【決島】における騒動の原因は、【決闘世界】の『上』の者達であればその真相を知っている。
それは３０年よりもさらに前に、非人道的な大虐殺を嬉々として行い決闘界から追放され、そして通称『表裏戦争』にて時の【紫魔】紫魔　憐造によって倒され命を落としたはずの男…何故か蘇った裏決闘界の融合帝、【紫影】による、大規模犯罪が行われたと言う事は、既に【決闘世界】は把握していることなのだから。
…だからこそ、この『逆鱗』の拘束や取調べとて。言ってみれば、たかだか『逆鱗』に対する事情聴取のようなモノ。
多少の厳罰は言い渡されているとは言え、その全責任は【紫影】にあると既に【決闘世界】は決定している。それ故、今回で何度目かになる『逆鱗』への取調べとて…
自ら担当を申し出た『妖怪』からすれば、単なる事情の確認と、今後の進退についての相互理解になるだけのはずだったと言うのに。
しかし…
普通であれば、既に厳罰も言い渡され釈放されているはずの『逆鱗』への処遇が、ここまで長期に渡って長引いているのも理由がある。
それは現在も綿貫　景虎が頭を悩ませているように…

「だから俺は『罰』を受ける。…しかるべき罰ってぇのを受けなきゃ…俺ぁ、俺の気が収まらねぇんだ。」
「ふむ…」

何を隠そう、『逆鱗』本人が、自らの罪を重く認めているが故の釈放の難航であった。
…通常、如何なる温情や取引があったとしても、自らの罪が軽くなったと言うことは喜ぶべき事のはず。
けれども、逆に自らの罪を重く受け止めている劉玄斎は【決闘世界】の言い渡した軽すぎる厳罰に自ら異議を申し立て…
その結果として、表向きは3か月の謹慎処分…その本筋は、【裏決島】での怪我の療養と『逆鱗』本人の釈放拒否から、現在はデュエリア校の学長を長期休業して劉玄斎は自ら【決闘世界】の牢に留まっているというわけで。

「…永いこと尋問官やってきたが、自分から罪を重くしろと言ってきた奴は初めてじゃわい。」
「当たり前えだろうが。今回、俺ぁ取り返しのつかねぇ事に加担しちまった…それにおぉ、前々から思っちゃいたが…『征竜』ン時も、マフィアぶっ潰し回ってた時も…それに『今回』だって、大体何でジジイは俺にこんなに甘ぇんだ？今回の事だって、俺ぁ懲役か決闘権『剥奪』ぐれぇの罪を覚悟してたってのに…ほとんどお咎め無しとか何の冗談だよおい。」
「…別にお咎め無しというわけじゃないじゃろ。しかるべき罰はもう与えた。3か月の謹慎処分に、向こう1年間の『決闘禁止』…そして減俸を踏まえた上でデュエリア校の学長の座に、今後10年は嫌でも就いて【決闘世界】のために働いてもらうという確約…結果的に実害が出てない以上、【紫影】の罪を考えるとお主には充分過ぎる『罰』のはずじゃろ？」
「けど俺ぁ、事実上イースト校の嬢ちゃんを殺しかけたんだぜ？それだけじゃねぇ…『焔』の時だって…俺ぁ消されててもおかしくなかっ

たってのに…」
「それもお主の罪ではない…3年前の煉獄園の倅のときの事も、お主にはどうにも出来ん状況じゃったしのぅ……それに今回の『鳴神』の…いや、今は高天ヶ原じゃったか。あの子の事とて、全ては【紫影】のやった事。まさか蛇蝎坊が生きておったとは驚きじゃったが、その行方は【決闘世界】が全力を持って捜索しとる。じきに見つかるじゃろうて。」
「…けどよぉ…」

そんな綿貫の告げる『逆鱗』への罰に、どうしても納得の言っていない様子を見せ続ける劉玄斎。
それは『あれだけの事』をしておいて、この程度の処分で済むとことが…どうしても、彼は彼自身を許せていないが故に生まれる葛藤と困惑でもあるのだろう。
…理由はどうあれ、自分は【紫影】に手を貸し…その結果、大勢の学生達の危機を招いてしまった。
決して許される罪ではない。それこそ、この程度の罰で済むような事ではないと言う事を劉玄斎も自分自身で分かっているからこそ…自らを罰するかのように、どこまでも劉玄斎は自分で自分を苦しめ続けようとしているのか。
そう…劉玄斎は、自分自身が許せない。
なぜなら、この程度の『罰』で許されてしまっては胸を張って決闘市に『会い』に行けるわけが―

しかし…

自らの罪を重く受け止めている劉玄斎を意に介さず。
『妖怪』と呼ばれし翁、綿貫は更に続けて…
幼い頃より知っている、自らの心を痛め続けている大きな体の小さな龍へと向かって更に言葉を続けるのみ。

「ともかく、いつまでも『牢』に居座られてこっちも迷惑なんじゃ。全治に1年以上はかかる怪我を1ヶ月で治すその体力は健在のようじゃしのう…とっととデュエリア校に帰って、溜まった仕事をさっさと片付けんかい。」
「…そうかよ。…なら…あと、1つだけ教えてくれ。」
「…なんじゃ？」
「俺の……決闘市への『出禁』を解いたのもジジイなのか？」
「…」
「いや、絶対にジジイなんだろぉ？なんせ俺の『出禁』は三大貴族のお達しだったんだ…三大貴族の決定を覆す事ができる奴なんざ…俺の知る限り、ジジイかトウコの姉御ぐれぇのモンだけだからよぉ。」
「ふむ…」

最後の劉玄斎からの問いを聞いて、ふと綿貫は考える。
…それは、ここで全てを伝えても良いが、ソレが劉玄斎にとってどう転ぶのかを綿貫は慎重になって考えているが故の熟考でもあるのだろう。
劉玄斎の決闘市への『出禁』…
それは実に40年近くも昔に、当時のルーキーたちが酒の勢いで『とある』馬鹿騒ぎ…と一言では言い表せない程の若さゆえの暴走をしてしまい、その結果として最も被害および損害を出した小龍が貴族連…ひいては三大貴族の怒りを買ってしまったが故の処罰でもあったのだが…
…しかし、一生解かれることのないと思われていたソレが、今年に入って急に解かれたのだ。
ソレは長らく決闘市から追放され続けてきた劉玄斎からしても突然の事かつ、あまりに突発的な許しであったために意味もわからず混乱を引き起こす原因にもなってしまっていた。
…だからこそ、劉玄斎は『妖怪』へと尋ねる。
自身が知る限り、自分の関係者で『三大貴族』へのパイプを持っているのは『妖怪』の綿貫　景虎と『烈火』の獅子原　トウコのみ。

そしてトウコが今更になってリスクを負いつつ動いてくれるわけも無いと言う事を、劉玄斎も長い付き合いからよく分かっているからこそ…その思い当たる最後の節に、どうしても聞かずには居られなかったのか。

そして、綿貫の口から語られる…

その、答えは―

「…ま、確かに儂も多少手回しはしたが、お主の『出禁』を解くのに尽力したのは鷹峰の奴じゃ。」
「…あ?なんであの野郎が…それに、なんで今更になって…大体、俺が決闘市『出禁』になったのはもう４０年近くも昔の事なんだぜ?」
「…ま、去年の【決闘祭】の時期に鷹峰と色々話しをしてのぅ。しかし大変じゃったわい、貴族連が決めたお主の『出禁』を解かせるのぅ…あぁ、これは儂らが勝手にやったことじゃから、お主が気にすることではないがの。」
「だから何なんだよ、その『色々』ってのは…」
「…残念じゃが、それ以上は儂の口からは言えんわい。それに、お主もさっさと仕事を片付けて一刻も早く決闘市に行きたいんじゃろう?…『あの子』が、待っておるのじゃから。」
「ッ…ジジイも知ってたのかよ……砺波から聞いたのか?」
「いや、これも鷹峰からじゃ。」
「あ?…なんで…あの野郎が知って…」
「フォフォッ、どうせ近いうちに決闘市に行くんじゃろう?じゃったら、その時に鷹峰に直接聞いてみるがいい。」
「…」

全てが腑に落ちない中、綿貫の口から語られたソレを劉玄斎はどう受け止めるのか。
それは今回の件に関して、全くの無関係と思われた【黒翼】からの

まさかの手助けがあったという…劉玄斎自身も知らなかった、予想すらしていなかった人物の関わりに、本気で混乱しているが故の思わぬ沈黙。
…そして、その龍の沈黙を持ってして今回の件の全ては終了なのだと言わんばかりに。
そのまま、『妖怪』と呼ばれし【決闘世界】最高幹部、綿貫　景虎は静かに…

「うむ、ではこれにてお主の尋問および拘束を終了とする。それじゃ、儂は帰るからの。お主もとっとと帰るがよい。」
と言って、取調室を出て行くのだった―

―…

…送迎用にと用意された、一目で高級車と分かる黒塗りのリムジンの中。
半ば強制的に【決闘世界】の牢を追い出された劉玄斎は、車の窓から見慣れたデュエリアの街の様子をボンヤリと眺めつつ…

「イノリ…」
ポツリと…
かつて愛していた、今でもなお愛し続けている女性の名を零したかと思うと。
何やら、思いを馳せるようにして…
自分の過去を、ゆっくりと思い出していた。

…全てが黄金に輝いていた、ルーキーと呼ばれていた頃。
…憎まれ口を叩き合いつつ、互いに実力を高め合っていた同期のライバル達。
…自分にとってかけがえのない、愛する女性との出会い。
そして、愛していたのに…ある日突然、自分の前から姿を消してしまったその女性。

車の窓に流れる風景が、龍の記憶を呼び覚ましていく。そんな物思いに耽る、これまでの自分の人生を思い返している様子の龍の姿はその巨体からは考えられない程に静かであり…
また悲嘆に暮れているような雰囲気はその体躯を考えればあまりに女々しくもあり痛々しくもあるものの…

…しかし、劉玄斎はどうしても考えてしまう。

これまでに自分に起こった事と、そしてどうして『こう』なってしまったのかを。

…物語は、一度過去へと遡る。

歴戦のデュエリスト達が、まだ『ルーキー』と呼ばれていた時代…

決闘界が、最も熱狂していた頃へと―

―…

いつの世も、『黄金期』と呼ばれるような世代が確かに存在している。

それは学生の実力が『豊作』である世代であったり、プロに実力者が多数存在している世代であったり…

その中でも、『この時』ほどプロの新人たち…ルーキーと呼ばれる者たちが世間を騒がせていた時代も、そうそう無かったに違いないことだろう。

そう、この当時は、近年でも特に【王者】の交代が長い間見られなかった、圧倒的な力を持った3人の【王者】達による絶対王政が敷かれていた時代でもあり…

―融合王者【紫魔】、紫魔　憐太郎（れんたろう）
―シンクロ王者【白夜】、白桜院（はくおういん）　貞光（さだみつ）
―エクシーズ王者【黒猫】、皇（すめらぎ）　大和（やまと）

既に老年を迎えていると言うのにも関わらず、この3名の【王者】はそれぞれが30～40年以上も王座を守り続けているという、正真正銘の強者として世間から広く浸透されていた。

…特に、シンクロ王者【白夜】。

もうすぐで在位50年という、この【王者】制度が敷かれてから誰一人として達成したことのない『永世王者』の称号にもうすぐ手が届くとされている彼は…この時代において、歴史上最強のシンクロ王者、ひいては最強のデュエリストの呼び声を欲しいままにしていたの

だ。
…また、ある事情から【紫魔】は置いておいたとしても。
エクシーズ王者【黒猫】も、【白夜】に次ぐ就任年数から彼もまた『永世王者』の称号を充分に狙える豪の者として知られていることや…
その少し下の世代である壮年達の中にも、『霊王』や『鉄錆』、『爆走』といった猛者が犇めき合っていることから、この時代の決闘界は特に老兵が強い力を持っているというのが当たり前の認識とされていることは言うまでもなく…

しかし…

つい最近になって、世間を大いに賑わしていたのは時の【王者】達だけではなかった。
それは、ついに若き世代に次代の【王者】を狙えるであろう、待望の才能を持った者たちが多々現れ始めたと言うことでもあり…
…何しろ、その当時は近年稀に見る若き世代の『大豊作』時代。
１０代～２０代におけるルーキーたちの、リーダー格であった鳳凰堂　烈火…後の獅子原　烈火を筆頭に、１０年に一人と言われる程の天才たちが同じ世代に集うという、ルーキー黄金期と呼ばれていたのだ。

…いわずもがな、幼少の頃から天才として知られている『不死鳥』の鳳凰堂　烈火、２４歳。
…女性らしからぬ激しいデュエルで、『鬼』として恐れられ始めた獅子原　トウコ、２３歳。
…激流の如き荒々しさで、格上相手にも全く怯まず喧嘩を売りまくる『荒くれ者』として知られる砺波　浜臣、２１歳。
…暴れ狂う龍として、ヤクザやマフィア達からも一目置かれていたという、デュエル以外の場でも恐れられていた巨漢、小龍（シャオロン）　２１歳。
…貴族でありながらも高い実力を持ってして、一躍日の目を浴び始

めた竜胆家の若き嫡男、竜胆（りんどう）　蛇蝎（だかつ）、２１歳。
…先の世界大戦における戦犯の家系ながらも、エクシーズ王者【黒猫】の弟子として知られる若き天才、天宮寺　鷹峰、１９歳。
それ以外にも『鮫肌』の朴城（ほおじろ）　範真（はんま）や、『竜殺し』の異名を持ったバスター藤堂、自称『マグネットマスター』岩切（いわきり）　透（とおる）といった、簡単に数えただけでも近い将来確実に【王者】に手が届くとまで言われていた確かな逸材たちが、近い世代に揃って頭角を現し始めたのだ。
…世はまさに、『老』と『若』が凌ぎを削りあう大決闘時代。
世代交代を狙う若き才能たちと、遥か高みに立つ老兵たちの激しい戦い。
それは長らくマンネリ化していた決闘界を、久方ぶりに多いに賑わす代物となりて…
久々に熱狂の渦を巻き起こしている世間において、特に若い世代の活躍が大きく取り上げられ始められていて―

そんな、激しい戦いが日夜繰り広げられている決闘界。

そのとある日。決闘市で行われていた賞金トーナメント、通称『金林檎杯』の…

本日の試合が全て終了した、そのすぐ後の控え室での事…

「待ちな小龍…アンタ、今なんつった？」

世間から『鬼』と呼ばれる事もある女性、若き女帝と世間に知られ始めた獅子原　トウコが…

…あまりに『意外』な事を言った、弟分である小龍に対し。

その長く切り揃えられた赤みがかった茶色い髪を、陽炎のように揺らしつつ。やや強めの口調にて、そんな言葉をぶつけていた。

「アタシの聞き間違いかねぇ。『何』が出来たって？」

「いや、だからよぉ…」

それは小龍をよく知るトウコからしても、あまりに意外な言葉であったからこその問い詰め。

そう、若いとは言え、鍛えすぎている所為で筋骨粒々で規格外な体躯をしているために、常々『モテない』と小龍が愚痴を零していることをトウコは知っているからこそ―

そんな弟分が、あろうことか急に『ありえない』事を伝えてきたのだから…ソレを聞いた獅子原　トウコも、思わず自分の耳を疑ったに違いないが故に小龍を問い詰めているのであって。

しかし…

獅子原　トウコの強い圧に気圧されつつも、目の前に立つ小龍はとても『小き龍』と呼ばれているとは思えないその大きな体躯をモジモジとさせながら。

ハッキリとした意思で、ソレを目の前の姉貴分へと再度伝えるのみ。

「だからよぉ…彼女が出来たって言ったんだぜ。」

「ハッ、馬鹿も休み休み言うもんさ。アンタみたいなデカブツに惚れる女が何処にいるってんだい。」

「姉御のいう通りだぜ小龍。お前、鏡見た事あんのか？女できる図体じゃねぇだろ。」

また、それを横から茶化したのは…『荒くれ者』として世間から知

られている、喧嘩っ早い男、砺波　浜臣であった。
　そんな彼は、どこのチーマーかと思えるような真っ黒なレザージャケットにレザーパンツ、そしてトゲトゲした装飾のレザー手袋を嵌めた手で…
　自前の白髪をオールバックに固めながら、その独特のファッションセンスを見せ付けながらトウコに倣って小龍を小馬鹿にしつつ…

「だから冗談はお前の馬鹿みたいな図体だけにしとけよな、この木偶の坊が。」
「クハハハハ！砺波よぉ、テメェこそ女の一人でも作ってから偉そうなコト言えってんだぜぇ？ファッションセンス皆無のクソダサ小魚がよぉ！」
「あぁ!?ンだとテメェ喧嘩売ってんのかトカゲ野郎！Ｅｘデッキ使わねぇ雑魚の癖しやがって！殺すぞ！」
「その雑魚にこの前負けたのはどこのどいつだぁ!?Ｅｘ使われずに負けるなんてテメェの方が雑魚じゃねぇか！コロコロとデッキ変える節操無しの癖しやがって！」
「あぁ!?やるかトカゲぇ！」
「クハハ！勝ってくれるってぇんなら遠慮なく売りつけるぜこの小魚野郎ぉ！」

　それは売り言葉に買い言葉。
　そのまま、同期ゆえか全く遠慮もなしに…お互いに煽り合う形で、小龍と砺波は何故か喧嘩を始めてしまったではないか。
　しかし、どちらが悪いとかは関係なく…顔を合わせれば毎回始まるいつものこの光景は、最早彼らと同じ世代でプロの世界に入った若手ならばあまりに見慣れた光景に違いないこととも言えるのか。
　何しろ、お互いがお互いに喧嘩っ早い性格で、かつ腕っ節でのし上がる生活をしてきた所為か…
　プロ入りも同期で、デュエルの腕も互角と言う事もあり。そして片やＥｘデッキを縛ることで自らを鼓舞するスタイルと、片やシンクロ

召喚に特化することで自らを鼓舞するスタイルのぶつかり合いがよほど相性悪いのか…

小龍と砺波の２人の仲の悪さは、既にプロの世界においては自他共に認める常識とまでなってしまっているのだから。

「カカッ、馬鹿どもが今日も騒がしいったらありゃしねぇぜ。」

「まぁまぁ…お二人とも、仲がよろしくていいじゃありませんか、ええ。」

「聞こえたぞ鷹峰！誰が馬鹿だ誰が！こんなデカブツと俺を一緒にするんじゃない！」

「そうだぜ！それに蛇蝎よぉ、誰と誰が仲が良いってんだぁ？」

だからこそ、同じ控え室に居た天宮寺　鷹峰と竜胆　蛇蝎もまた…

あまりに見慣れた小龍と砺波の取っ組み合いを、いつもの光景の如く少々呆れた目で見ているだけで…

「アンタらいい加減にしな！…小龍、そこまで言うんだったら証拠を見せてもらおうじゃないさ。そこまで意地になるってんなら、すぐに証拠を見せられるんだろう？」

「あー…それはだなぁ…」

「ハッハー！やっぱ嘘なんだなトカゲ野郎！すぐバレる嘘なんてつくんじゃね…」

「アンタは黙ってな！」

「ッ!?痛ってぇな！なにすんだ姉御！」

そして、あまりに見苦しいその喧嘩を、いつものようにトウコが仲裁しつつ。

余計な事を言い喧嘩を続けようとした砺波を、トウコは拳骨で無理矢理黙らせたかと思うと…

再度、小龍へと向かい直しつつ。弟分が見栄だけでここまで意地を張り続けるような男ではない事を知っているトウコは、再び小龍へと

向かってその真偽をハッキリさせるように言いつける。

そうして…

「…その……初めっから会わせるつもりで外に待たせてんだよ…でもよぉ、心の準備というか何というかだなぁ…」

「ハッ、肝っ玉の小さい男さねぇ。デカイ図体は見掛け倒しかい？アンタの心の準備とかどうでもいいから、さっさとしな。」

「わーったよ……ほら、入ってきていいぜ。」

静かに…

乱雑ないつもの小龍からは考えられないような、どこか優しい声が彼の口から控え室の外へと発せられたかと思うと。

―ギィッ…

と、控え室のドアがゆっくり丁寧に開けられ…

そして、そこに居たのは―

「みなさん、初めまして。天津間　イノリと申します。」

…

……

……

現れた女性を見て、誰もが言葉を失っていた。

…しかし、それも当然か。

だってそうだろう。顔は整っている部類ではあるものの、趣味で体

を鍛え過ぎている所為か筋骨隆々が度を越している、その巨大なる体躯はおよそ同年代の女性達からすればどこか敬遠されがちな風体として世間からは評価されているあの小龍の…
あの、酔えば必ず『モテない』と言って泣き言を漏らす、そのデカイ図体からは考えられない繊細な感性の持ち主である小龍の…
仲間内からもネタにされる程に、これまで一向に女性の影が皆無であったあの小龍の…

その、小龍の彼女がまさか…

まさかまさかまさか―

絶世の、美少女であったのだから―

いや、それどころか―

「…待ちな小龍、アタシの危機間違いかねぇ…アンタの彼女、今とんでもないモン名乗らなかったかい？あまつ…いや、聞き間違いさね絶対。あま…なんだって？」
「言い間違いかもしれないぞ姉御。天津原とか天の川とか天城とかだぜ絶対。あぁ、絶対にそうだと俺は思う。」
「…ほーん、小龍にしてはえれぇ別嬪さん捕まえたじゃねぇか。」
「た、鷹峰君、そ、そうではなくてですね……し、しかし驚きですねぇ、えぇ…」

紹介された小龍の彼女が、絶世の美少女であったこともさておきな

がら。
事の『重大さ』をよくわかっていなさそうな、この場における最年少の天宮寺　鷹峰は別として…
紹介された女性の見た目の美しさ以上に、この場にいる者たちは目の前の女性が名乗った『名』に対し、あまりの衝撃を感じてしまっている様子。
…そう、ソレは聞き間違いや言い間違いでなければ、あまりに衝撃的過ぎる恐れ多い『名前』。
それ故、女性の名乗りを聞いた…一般常識を身につけている獅子原　トウコ、砺波　浜臣、竜胆　蛇蝎に、大きな衝撃が走ったのは言うまでもなく―

「聞き間違いでも言い間違いでもねぇよ。コイツぁ天津間　イノリ。俺の彼女だ。烈火兄ぃにも紹介したかったぜ、クハハハハ。」
「お恥ずかしいです。でも劉さんからいつも皆様のお話を聞いていたので、是非ご挨拶したいと思ってお伺いさせていただきました。」
「ちょ、ちょい待ちな…なぁアンタ…天津間って名乗ってたが……本当に、あの三大貴族のあの天津間かい？確か、『天津間』の姓を名乗るのは宗家だけって烈火から聞いた覚えが…」
「はい。私は宗家当主、天津間（あまつま）　祈祷（きとう）の娘です。」
「おいサソリ…これってマジな話か？」
「砺波さん、サソリはやめてください……で、でも間違いありませんねぇ…あ、あの私、い、以前に父に連れられて貴族のパーティーに参加した事があるんですが…確かその時に、天津間家の２人のご令嬢方にご挨拶させて頂いた覚えがあります…えぇ…」
「ふふ、私も覚えていますよ。竜胆家の当主、柄（がら）様のご子息、蛇蝎様ですよね？」
「あわわ、きょ、恐縮です！私なんかの事を覚えてくださっておられるとは…」

そう、小龍の彼女として紹介された女性が名乗ったのは他でもない

―

それは『煉獄園』、『白桜院』に並ぶ、この世における特権階級の最上位として君臨していることで知られている…

『三大貴族』として世間に知られている特別なる家の一つ、『天津間』の名であったのだから。

三大貴族…

それは『白桜院』、『天津間』、『煉獄園』の3家からなる、この世界の支配者的階級に位置する上位の血筋の名。

政界、財界、決闘界…多岐に渡るこの世界の本筋において、その特権を思うがままにしている、雲の上に住む上流階級の者達の総称であり…

…その全貌を知る者は居らず。その深遠に辿り着いた者はおらず。

そんな、およそこの世の表における『権力』と言われているモノの、その全ての『上』にあるとさえ言われているその家の名は、およそ一般社会に生きる人間においてはまず目にするコト自体が稀であるとは言うのに。

しかし、その内の1つの家の息女が、あろうことかプロの中でもまだ新人の部類に入る小龍の彼女として紹介されたとあっては。一般常識を知るトウコや砺波、果ては貴族ではありつつもその『位』が全く持って異なる位置にある竜胆　蛇蝎に、一体どれ程の衝撃を与えたというのだろうか。

…特に、貴族の一端を担っている竜胆家の嫡男である蛇蝎のこの怯えよう。

それはまさしく、小龍の紹介したこの女性が紛れも無い三大貴族の令嬢であるという何よりの証拠でもあって。

「…おい砺波。貴族ってぇのはンなに偉いのか？」

「鷹峰テメェ、いい加減年上には敬語使えって何度言ったらわかるんだ。つーか貴族を知らないとかマジモンの馬鹿かテメェは……

あぁ、馬鹿だったな。大和さんから教えて貰ってたりしないのか？」
「そう言う事は大和爺も教えてくんねーんだよ。なんなんだよ、貴族とか天津間とかって…そういや、烈火兄ぃと蛇蝎ンとこも貴族なんだっけか？」
「大まかにはそうだが中身は全然違う。鳳凰堂や竜胆など、貴族に数えられる家は多々あるが…『三大貴族』に数えられる『天津間』、『煉獄園』、『白桜院』はその実状が他の貴族とはかなり異なっている。俺らとは、住む世界が違う生き物だぜ三大貴族ってのは。」
「白桜院……あり？【白夜】のジーさんと同じ名前じゃねーか。」
「そうだが？まさか今更気がついたのか？【白夜】は『貴族であり王者』だってずっと言われているだろうが。」
「はー、ウチによく顔出して大和爺と酒飲んでるあのジーさんがねぇ。ただのヨボヨボじゃねぇってわけか。」
「お前、さては全く分かっていないな。元々テメェの天宮寺家だって貴族だったんじゃねーのか？」
「カカッ、小難しい話はよくわかんねぇ。家の事だって俺にゃ関係ねぇしな。」
「…そうかよ。」

…まぁ、出自ゆえの無知ゆえに、貴族やらその辺りの事を全然知らない鷹峰はひとまず置いておいて。
ともかく、小龍の彼女を名乗ったこの女性の『名』は、紛れもなくこの場に居るほとんどの者に強い衝撃を与えたのだ。
…普通であればありえない、『三大貴族』の血を持つ者と一介のプロが恋仲であるだなんて。
しかも、ソレは『三大貴族』の名を持つ側からすれば何もメリットなどない事。
そんな、プロの中でもルーキーの部類に入る小龍が、『三大貴族』をどうこうする権限など持っていない事を考えると…ソレはお互いにメリットや策略など無い、ただの若い男女のカップルとしか言い様がなく…

「でも劉さん、本当に良かったの？部外者の私がプロの皆様の控え室にお邪魔するなんて…」
「クハハ、良いに決まってんだろぉ？別に【王者】の控え室でも何でもねぇんだ。その…お前は俺の、か、彼女なんだし、よぉ…」
「まぁ、劉さんったら。」

それ故、小龍と天津間　イノリの間に漂う、その砂糖を吐きたくなるような甘ったるい雰囲気が証明している。
それは紛れもなく、小龍と天津間　イノリは間違いなくお互いがお互いを好き合っているという…
付き合いたての男女から感じられるような、お互いに思い合っているからこそ滲む初々しくも微笑ましい雰囲気となっていて。

「しっかし…なんで天津間のお嬢様が小龍みたいなデカブツと付き合うなんて事になったのさ。」

だからこそ、トウコもまたソレに対し、どうしてもツッコミを入れなければならない衝動に駆られたのか。
…百歩譲って、小龍に彼女が出来たことはまぁいい。
しかし、一体全体どうして『その相手』がよりにもよって三大貴族の天津間家の宗家という、あまりに雲の上の存在過ぎる人であるのか、と。
そう、普通の貴族ならばまだしも…いや、貴族に普通も何も無いのだが、ともかく貴族の中でも特に最上位に位置している存在である『三大貴族』の女性と、一介のプロに過ぎない弟分がどうやって知り合いどうして付き合うに至ったのかを獅子原　トウコはどうにも納得できていない様子。
…何しろ、相手が三大貴族。
先の世界大戦よりも前からその座にいた、歴代最長就任記録を未だ更新し続けている生ける伝説のシンクロ王者【白夜】はまだしも…

『三大貴族』の名を持つ人間が、こんな下々の民の前に姿を現す事など基本的には『皆無』と言っていい程の存在。それほどまでに『三大貴族』という人種は住む世界が違うとされる、まさに天上の人であるはずなのだから。

…すると、そんな事を聞いてきた姉貴分に対し。

小龍は、どこまでも気恥ずかしそうに…

しかし、付き合いたての男子特有の、どこか蹴りを入れたくなるような浮かれ具合で。

ゆっくりと、その口を開き始めた。

「おう…なんでも、テレビで偶然俺の試合を見たらファンになったらしくてよぉ…ンで半年ぐれぇ前のティマイオス杯ン時、試合終わりに楽屋に来てくれて…そうこうして何回か会う内に、色々話してたら…ってなぁ、クハハハハ。」

「…その節は不躾で本当にすみませんでした。最初はテレビで御試合を応援するに留まっていたのですが…一度この目で御試合を拝見したくなりまして。ですがまさか主催者様に希望を伝えたら楽屋に案内してくださるとは思いもよらず…」

「いやアンタ、そりゃ天津間のお嬢様が一声出したら通すに決まってるさね。」

「主催者も驚いたでしょうねぇ…まさか天津間家のご令嬢から直接お願いされるだなんて、ええ。」

「けど何で小龍なのさ。もっと良い男なんていくらでも居るじゃないか。それに天津間家のお嬢様ともなれば、親が許婚とか決めてるんじゃないのかい？」

「その……大変お恥ずかしいのですが……ひ、一目惚れ…して、しまいまして…」

「…はい？」

「い、今まで社交界などで多くの殿方とお話させていただいてはいた

のですが、劉さんほど凛々しいお方には今まで出会った事が無く…その…一目見て衝撃が走ったと言いますか、私には運命的なモノを感じたと言いますか…」
「凛々しい…しゃ、小龍の奴が…かい？」

顔に手を当て、頬を染め。一人のうら若き少女が照れるその様子は、この場にいる令嬢が本当にあの『三大貴族』のお嬢様なのかと錯覚してしまうような…
それこそ、一般人となんら変わらない反応を見せるその様子は、まさに恋する乙女その物のようではないか。
要するに…
偶然偶々、ＴＶでプロの試合をやっていたのが令嬢の目に留まり…その映像に映っていた小龍に、天津間家の令嬢が一目惚れしてしまったとのこと。
…それは普段から社交界で身なりの整った礼儀正しい紳士達としか接してこなかった令嬢にとって、小龍のこの人間離れした雄々しい体躯とＥｘデッキに頼らない豪快なデュエルがあまりに衝撃的なモノであったと言う事なのか。

―人間は誰もが皆、好みのタイプは異なると言うが…

どこで自らの運命を感じるのかも人それぞれ。本当に偶然、偶々、天津間家の令嬢の好みの男性像が小龍であったという…蓋を開けてみればなんともまぁ貴族らしからぬ、しかしあまりに人間味に溢れた色恋の話であるという…
ただ、それだけの事のようで―

「し、しかしですねぇ…えぇと…しゃ、小龍さんの方はだ、大丈夫なんですか？」
「あ？何がだ、蛇蝎よぉ？」
「いえ…三大貴族のご令嬢とお付き合いなさるなんて、小龍さんは恐

ろしくならなかったのかと……あっ、い、いえ！あの別に、恐ろしいといってもその天津間家の事を悪く言ったわけではなくてですね！そ、その…お、恐れ多いといいますか、なんと言いますか…」
「クハハハハ！俺がンな事気にするタマだと思ってんのかぁ？貴族が何だってんだ、イノリがどこの誰だろうが関係ねぇよ！惚れたから付き合う、それだけだぜ？」
「…その割には、告白してくださるまで随分待たされましたけど。」
「お、おいイノリ…そりゃねぇぜ…」
「ふふっ、冗談です。」

また、小龍の方も。
相手が三大貴族の令嬢と言うよりは、ただただ本気で彼女という一人の人間を心の底から単純に好いているかのような様子。
…まぁ、一般的な常識を持った人間であれば、『三大貴族』の人間と付き合うだなんて、竜胆　蛇蝎が零したように恐れ多くて躊躇してしまうのが普通であるはずだと言うのに。
それでも、小龍も令嬢も身分の差など関係なしに、どこまでも甘ったるい雰囲気を醸しだす様子を見る限り…
その接し方は身分を越えた、むしろ身分など全く気にしてもいない様な、ただただ普通の付き合いたてのカップルとしか言い様がなく。
それ故―

「はー、こりゃマジでマジみたいさね。まっさか、小龍に彼女が出来るとはねぇ。」
「クハハ、どーだ、信じたかよ」
「信じられねぇ…小龍の野郎に女が出来るとかマジ信じらんねぇ…」
「カカッ、男のやっかみはみっともねぇって大和爺が言ってたぜ？まぁテメェも女作りゃ良いだけだろ。そのクソダサファッションセンスを直してからだけどな。」

相手が三大貴族の令嬢であったという事実はひとまず置いておい

ても。
誰もが信用していなかった、小龍に彼女が出来たというソレを事実として目の当たりにしてしまっては…
…トウコも、蛇蝎も、鷹峰も、そして最も信用していなかった砺波でさえも。
ソレがいくら信じがたい出来事であったとしても、事実を現実のモノとして信じる他なく…

…そういう時代も確かにあった。

全てが桃色に輝いていた、若く甘く楽しい時間だけが過ぎていた頃も。

―…

また、それから少し経った頃―

「へぇ、コイツがオメェが初めて作ったカードってわけか。」
「おうよ！これで兄貴がソレ使って許可されれば、俺も一気にトップデザイナーの仲間入りってな！」

とある日。
うるさい大衆酒場の酒の席で、一人の若き青年が小龍へと何やらいくつかの『カード』を渡していた。
「しかしやるじゃねぇか。８種類を３枚ずつで２４枚…デビューした

ての癖して、こんな枚数の試作が許可されたなんてよぉ。流石は俺の弟分じゃねぇか木蓮。」
「まぁな！伊達に『神の手』の家系やってねぇってんだ！俺もゆくゆくは『神の何とか』って称号も狙ってんだしよ…だから頼むぜ劉の兄貴！俺の作ったソイツらで大暴れしてくれ！」
「クハハ、わかったぜ。んじゃ、ありがたくコイツらは貰っておくが…ま、けど期待しすぎんなよな。俺ぁ最近ちと勝率が伸び悩んでんだ。」

それは一人の新人カードデザイナーが、試作許可のおりたカードのテスターとして小龍にその使用を依頼している場面。
…そして小龍にカードを渡していたのは、彼と幼少の頃からの知り合いでもある弟分の李　木蓮であった。
小龍の１つ年下である木蓮は、この春に大学を卒業した後…見事カードデザイナーの資格を取得し、そして入社早々に実に『８種類』ものカードの新規作成を許されたとあって、その試作カードを小龍に渡していて。

…カードデザイナー。

それはデュエルにおける最も重要な存在である、『カード』の『作成』を許された特別な者達。
社会においてその重要性はプロデュエリストに並んで高く、加えて子どもにも人気の職業の１つであり…

…しかし、その道は狭き門。

年間合格率１％以下といわれるデザイナー試験は、才能無き者を容赦なく蹴落とし続けているのだし…
また、その狭すぎる試験を突破し、晴れてカードデザイナーの資格を得た者であっても。そこから長い長い下積みを経て修業を重ね、独立を経て自分の製作したカードを世に出すまでデザイナーとして耐

え切れる者は極々僅かと言われているのだ。
…まぁ、確かに過去には『神の手』や『神の筆』、『神の腕』や『神の指』といった、カードデザイナー最高位の称号を与えられた天才的な腕前を持った者も歴史上には確かに存在していたとは言え。
それでも、資格を取得しても一枚も新規カードを世に生み出せずに…厳しい社会の現実に心居られ、志半ばでこの業界から消えていく者だっている。
ソレを踏まえると、つまりカードデザイナーと言うのは専門の知識を学び、プロデュエリスト試験にも匹敵する難関中の難関である厳しい試験を突破し、長い下積みを耐え、その間もセンスを失わなかった者だけが世界中に自分の作ったカードを披露することを許されるという、あまりに厳しすぎる現場で生きる者たちのことを言うのだが…

―しかし、そんな厳しい世界の中の中で。

新人である木蓮が、実に『８種類』もの新規カードの申請を【決闘世界】に許されたと言うのは、カードデザイナー業界からしてもかなりのニュースであった。
…どれだけカードをデザインしても、【決闘世界】の許可が下りずソレを世に出せないデザイナーも世界には多々居ると言うのに。
まぁ、過去には若くしてテーマ単位のカード作成を、企業にも所属せずたった一人で成し遂げていた伝説的な逸話を持つカードデザイナーも居たと言うが…
それでも、資格を取得したての、大学を卒業したての新人である木蓮がこれだけの枚数の新規申請を通したと言うのもデザイナー業界からしてみれば１００年にあるかないかの大々的な大事件。
つまりは、【決闘世界】がそれだけ木蓮の才能を認めたと言う事でもあり…
それすなわち、近年においては少々動きの少なかったデザイナー業界が久々に賑わう事にも繋がるのだから、デザイナー業界に突如新風を巻き起こした李　木蓮もまた、この時代においては『老』に立ち向

かう新たな『若』として多方面から期待の眼差しが向けられていて。
…とは言え、木蓮が今渡したのは正式な許可が下りる前の『試作段階』のカード達。

そう、デザイナーがデザインしたカードは、そのまますぐに世に出回るわけではない。
カードをデザインし、ソレを【決闘世界】に提出し…【決闘世界】が法の下、申請された新規カードの是非を決定し、そうしてようやくカードはまず『試作』を許される。
そして、試作を許可されたカードは次の段階…
作られたカードは、作成したデザイナーが『選んだデュエリスト』、もしくは【決闘世界】が指定したデュエリストがその試作カードをしばらく使用し、その決闘記録を元に更に【決闘世界】が色々な審査を行うのが基本的な流れとなっている。
そうして数々の実戦を経て、その試作カードがデュエルの秩序を崩壊させないと【決闘世界】が最終判断をした後に…ようやく、デザイナーが作った『新カード』は世間に一般流通することを許されるのだ。
それ故、遥か過去に『神の手』と呼ばれていた李　木魚という人物を祖先に持つ、この若き新人デザイナーである李　木蓮もまた―
晴れて第一段階をクリアしたカードのテスターに、真っ先に兄貴分である小龍を選んだと言うわけで。

「情けない事言わないでくれよ！・せっかく兄貴の為にデザインしたんだぜ？『征竜』ってんだ！・絶対ぇ兄貴と相性抜群なはずだからよ！」
「クハハ！・ありがとよぉ木蓮！・折角オメェがここまでやってくれたんだ、宝の持ち腐れにならねぇようにしねぇとなぁ！」

まだ世界の誰も持っていない、全く新しいカードが日の目を見る事を夢見てカードを託した弟分の木蓮の思いを受け止め。
小龍もまた、最近の成績がやや落ち気味になってきているとはいえ

…
木蓮がわざわざ自分の為にデザインしてくれたという『征竜』の名を持った新たなカード達と共に、ここから戦績の巻き返しを硬く決意していて―

しかし…

―『おぉーっと！まさか！まさかまさかまさかぁ！実に！実に３０年ぶりに！お、王者【黒猫】がルーキーに土を付けられましたぁ！』

強すぎた…

『征竜』は、強すぎた―

いや、正確には『征竜』と、ソレを操る小龍の相性があまりに『合い』過ぎていたために…
そう、カードデザイナーの李　木蓮が、あくまでも小龍の為にデザインしたという『征竜』は。そのカードをデザインした木蓮の想像をも超えて、小龍にあまりにも『合い過ぎ』ていたのだ。
それはここまで、少々成績を落とし気味だった小龍が爆発的に勝率を伸ばした事に始まり…
そして、あろうことか。まさか他のルーキーの誰よりも早く、小龍が【王者】の一人に勝利してしまったことがその最たる例。
それこそ、当時のエクシーズ王者であった【黒猫】にすら土をつけ…一時はいよいよ老兵の一角が崩れるのか、エクシーズ王者が交代するのではないかと、世界中が大騒ぎになるほど多いに賑わったのだ。

…ついに、世代交代が起こるのか。

長き『老』の時代に、ついにヒビが入るのかとその当時の世間の賑わいはおよそ近年まれに見る大熱狂を迎えていたといっても過言ではなく。

だからこそ、決闘法に則ってもしその当時に小龍が【白夜】に負けなければ…もしくは【紫魔】が勝負を受けてくれていれば。小龍はきっと、新たなエクシーズ王者と呼ばれていたに違いないことだろう。

そして小龍と、彼に使役される征竜の暴れ具合を見た誰かが、小龍のデュエルをこう称した。

噴火、瀑布、竜巻、地割れ。その自然災害にも似た『征竜』の恐るべき力と、ソレを平然と従える小龍の事を…暴れ狂う、『大災害』のようだ…と。

…けれども、強すぎる力と言うのは時として意図しない枷を嵌められてしまうモノ。

そう、出る杭は早めに打っておくに越した事がないように…

小龍の駆る、あまりの征竜の力を危惧した【決闘世界】は李　木蓮のデザインした『征竜』のカードたちに対し、『流通』および『量産』の許可を出さなかったのだ。

…まぁ、【王者】に土をつけるまでに至った『征竜』の存在自体は、その衝撃もあってか世間にも広く浸透してしまったために…その時に『試作』された『征竜』のカードには、【決闘世界】も処分の指示は出さなかったのだが。

そう、小龍が持つ、試作段階であった『征竜』のカードだけは【決闘世界】は封印せず。寧ろ、小龍以外の使用を禁ずるという、決闘法における例外的な措置を取られるということに留められたのだ。

…普通であれば、『試作』段階で【決闘世界】が不可を突きつけられたカードは、試作されたカードであってもその全てが処分対象になるはずだと言うのに。

それは世間の目を気にしての措置か。何しろ、長き『老』の時代に亀裂を入れた、【王者】に土をつけるに至った小龍の、もはや代名詞ともなりつつある『征竜』を処分したとあっては【決闘世界】も世間に『何』を言われるかを気にしたのだろう。

それ故、普段は厳格な【決闘世界】にしては珍しく…

小龍と征竜のあまりの相性の良さ、魂と魂が合致しているとしか思えない程のオーラに、『征竜』自体の封印だけはせず。

つまりは、小龍の持つ『征竜』のカードだけがこの世に存在する唯一の『征竜』。その使用も複製も何もかも、今後一切『征竜』に関する事柄を小龍以外には『禁止』するという異例の処置がとられたのであって。

そして、一時は【王者】にも土をつけた小龍はいつしか小さな龍ではなく…

新たに『劉玄斎』と言う通名と共に、こう恐れられるようになった

―

暴れ狂う大災害…

…『逆鱗』、と。

それはまさにプロとしての絶頂期。

その年は惜しくも【王者】交代とはならなかったものの、これから

先に伸び代しかない小龍…改め、『逆鱗』の劉玄斎の活躍に、当時の世界は大いに賑わっていた。

…『逆鱗』はこれから、彼だけに許された『征竜』と共に更に名を上げていくだろう。

まぁ、とある年に彼が酒に酔って取り返しのつかない失態を決闘市で犯してしまったために、貴族連の怒りを買って決闘市を『出禁』となってしまったのも当時は一種の武勇伝として扱われたりもしたことはさておき。

【王者】にだって土を就かせた彼は名実共に、世界が最も注目している…最も勢いのある、規格外のルーキーと言われていたのは嘘偽りなく。

他のルーキーたちとは一線を画すほどに人気と声援が、いつしかルーキー筆頭として『逆鱗』の劉玄斎を応援し…

世界は一時、『逆鱗』人気一色となっていた時代も確かに存在していて―

しかし…

『征竜』を従え、メキメキと頭角を現し始めた、そんなプロとしての絶頂期に…

イノリが、姿を消してしまった―

それは突然の出来事だった。

ある日、突然、何の前触れも無く。
それまでは常に寄り添っていた天津間　イノリが、ある日突然『逆鱗』の前から忽然と姿を消してしまったのだ―

…一体、その当時に天津間　イノリに何があったのか。

これから先、きっと【王者】になると思われたルーキー筆頭の…決闘界の中でも着実に力を増していき、いずれはきっと三大貴族の令嬢と並んでも遜色無い立場の男になると思われていた劉玄斎の前から、ある日忽然と天津間　イノリの消息が途絶えてしまった。
それは劉玄斎からしても、あまりに突然の出来事であり…
別段変わった様子も無かったというのに。その愛は本物であると思っていたのに。
何も言わず、突然音信普通になってしまった彼女に…プロとしての絶頂期にあった劉玄斎は、大いにショックを受けてしまったのだ。

…だから、荒れた。

劉玄斎は、大荒れした。
苛立ちの余り、目に付く全てを破壊し…触れるモノ皆傷つけるかの如く、とにかくその焦りと苛立ちを暴力に訴え、暴れまわるという発散方法しか劉玄斎には自らを抑える術を見つけられなかった。
だからその当時…劉玄斎の八つ当たりで、力任せに壊滅させられた『組』や『ファミリー』が一体幾つあったことだろう。
それこそ、弟分である木蓮と共に、デュエルヤクザやデュエルマフィアを壊滅させまくっていた劉玄斎は裏社会では一時『暴双龍』とも呼ばれ…力が支配するはずの裏社会においても、その存在自体が恐怖の対象ともなっていた。
また、イノリの消息を探って四方八方手を尽くしても、三大貴族の家の事情に新人の部類に位置する一介のプロが介入できるはずもなく…

それ故、一時はルーキー筆頭とまで呼ばれていた劉玄斎は、一時『謎』の不調によりその成績を大きく落としてしまう羽目に陥ってしまった。

…心の動揺がデッキに伝わり、試合でもデッキの動きが安定せず。

勝つとしても征竜の暴力によってどうにか勝つか、しかし征竜を扱いきれずに酷い負け方をしてしまうか…

それは劉玄斎の活躍を楽しみにしていたファンにとって、一体どれほどの衝撃と落胆が襲い掛かったというのか。

しかも、世間には公表されていない『謎』の不調の原因が、最愛の女性を無くしたショックというなんともまぁ情けない理由であるだなんて…その当時の人々は知りえる事は無い事実だったとは言え、しかしソレほどまでに活躍を期待されていた劉玄斎の滑落は世間からすれば大きなショックであったに違いなく…

…けれども、そんな世間からの鋭い視線を受けながらも。

この時の劉玄斎の心にあった思いは唯一つ…

マフィア相手に大暴れしている時も、デュエルしている時も、大事な試合が控えている時も―

劉玄斎の心にあったのは…

「イノリ…今、お前はどこに居るんだ…」

自分が愛した女性…今でもずっと愛し続けている女性の事、ただそれだけに思いを馳せながら。

大荒れしている龍の心には、いつの時も一人の女性の事だけが重く圧し掛かり続けるのだった―

⋮

ｅｐ１１０「閑話―劉玄斎、中編」

最愛の女性が消えてから、1～2年ほど経ってもなお劉玄斎は荒れていた。

「若頭ぁ！ぼ、『暴双龍』のカチコミです！」
「オヤジを逃がせ！あのオカマの用心棒はどうした!?」
「ハコはノされました！」
「くそっ！使えねぇ用心棒だな！ッ!?うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「若ぁ！」

『ファーザー！『暴双龍』が現れました！』
「撃ち殺せぇ！オレのファミリーに舐めた真似した馬鹿をさっさと撃ち殺さねぇか！」
『だ、ダメです！『逆鱗』の奴、いくら撃っても死にませ……ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』
「お、おい！どうした！返事をしねぇか！」
『…』

ヤクザやマフィア相手に暴力で暴れ回り、銃で撃たれようとも刀で切られようとも微塵も怯まず。
…それはまるで『死にたがり』の所業。
徹底的という表現が生ぬるいとさえ感じるほどに、行き場のない鬱憤を暴力という仕方でしか発散できぬ劉玄斎は、弟分である木蓮を連れて毎日のように裏社会にて非合法な人間達を暴力で叩きのめし続けていたのだ。
しかし、自ら死へと向かっているような彼のその蛮行も、その強靭な肉体が邪魔をして一行に彼の命の灯を消すことはなかった。
そう、自ら傷付きに向かう癖に、裏社会の誰も『暴力』では狂乱した龍を仕留めることはできなかった。

また…

「劉の兄貴…まだ飲むのか？そろそろ体壊しちまうぜ？」

「…あぁ？うるせぇよ…俺の事ぁほっとけ…」

夜は夜で、最愛の女性を失った酷い喪失感から目を背ける為に。

大量かつ高純度の酒を、意識がなくなるまで呷り続けむりやり眠るという所業を繰り返し…

なまじ体躯が強靭かつ大柄な為に、常人には取り込めない濃度のアルコールを毎日のように飲み続ける彼の体は、悲鳴を通り越した悲痛な姿となっているのにも関わらず。本人はソレを、全く止める気配を見せなかったのだ。

更に…

「バトルだぁ！ブラスター！テンペスト！タイダル！レドックス！ダイレクトアタック！」

「ひっ、ひぃぃぃぃぃ!?」

―!!!!

対戦相手　ＬＰ：２０００→０

試合でも、相手との対話を望むのではなく…

自らの鬱憤を晴らすかのような暴力的なデュエルにて、勝敗が決していると言うのに追い討ちをかけるかのごとく完膚なきまでに相手を叩きのめすデュエルをしたかと思えば。

―『どうしたどうした！デッキに振り回されてるぜ小龍！【バハムート・シャーク】でダイレクトアタックだオラぁ！』

―『劉玄斎…かつての面影がまるで無いな。【竜破壊の剣士―バスター・ブレイダー】で、【トライホーン・ドラゴン】に攻撃！』

―『今の君はまるで怖くない。【超電導戦機インペリオン・マグナム】でダイレクトアタック。』

その『征竜』の力を持て余す事も最近は増え、そのポテンシャルを上手く引き出すコトが出来ずにデッキに振り回され、自滅を繰り返す日々を劉玄斎は送り続けていた。

…それは格下を甚振っているようにも見えるデュエル。同等もしくは格上には歯が立たないようにも見えるデュエル。

まさに典型的な『小物』に成り果ててしまった今の劉玄斎のプロとしての戦績は、一言で表せば『酷い』の一言であり…

そんな今の彼の姿は、少し前まで次期【王者】筆頭と呼ばれルーキーたちの誰よりも早い覚醒を見せていたとは到底思えぬ、劉玄斎に期待を寄せていた多くのファン達からすればあまりの有様と成り果ててしまっていて。

そう、その当時の彼は、調子に波はあれどかつてエクシーズ王者【黒猫】にすら土をつけたほどのデュエルとは打って変わって…

彼だけに許されたはずの『征竜』を扱いきれずに自滅していくその姿に、多くのファンは試合の度に落胆と溜息を吐き続ける日々を余儀なくされていたのだ。

…かつてはルーキーながら【王者】の一人に土をつけた、若手筆頭だったはずの男のこの落ちぶれよう。

まだギリギリで世界ランクの上位にしがみ付いているとは言え、この調子では後1年もすれば世界ランキングも一気に下位へと下げてしまうことだろう…と、この時のファン達やその他のプロ達の中には、謎の不調に喘ぐ大きな龍を見限る者も出始める始末で…

「無様だなぁトカゲ野郎。」
「あぁ？砺波…テメェ、死にてぇんなら他所行きなぁ…今は…手加減できそうにねぇんだからよぉ…」
「うるせぇよ、元から手加減なんて器用な真似できねぇ癖に。…お前がここで潰れちまっても、俺は構わず置いてくぜ。俺はやる……次こそ【白夜】のジジイに引導渡して、シンクロ王者の座を無理矢理奪ってやんだ。お前はそこで一生ウジウジしてやがれ。俺は構わず先に行く。」
「…」

だからこそ、悪友からの言葉も今の劉玄斎には届かない。
突発的な力によって目覚めた自分と違い、順当に覚醒しメキメキと力を上げついには【王者】に届きえる力を得始めた他の仲間達を他所に…劉玄斎はその堕落を止められることなく、失意と喪失の狭間にて最愛の女性を想い続けるも叶わぬ日々に、その若い時間をただただ無駄に過ごし続けるだけ。
龍は落ちた…
いずれ天上に昇りうるとされた小さき龍が、世間から多大なる期待を寄せられていたのとは裏腹に。その身を地に失墜させてしまった今の大きな龍の有様は、とてもじゃないが人間としても堕落しきったそれはそれは無様な有様であったに違いないことだろう。
…このまま、『逆鱗』と呼ばれたデュエリストは歴史に名を残すことなく消えていく。
その当時は、誰もがそう感じていた。いや、劉玄斎自身だってそう思っていただろう。
何しろ、たった一人の女性を失ったという、ただソレだけの理由で…どうしてプロになったのかという、その根源たる理由すらも忘れただただ苦しみ続ける日々を送る今の彼はあまりに無様であまりに愚か。
…天宮寺　鷹峰がよく女性トラブルを起こすのも無理はない。女

と言うのは、それほどまでに男を狂わせる。
まぁ、劉玄斎の場合は、最愛の女性を失ったショックが大きすぎた所為か、その他の女に向かう気持ちすら失ってしまっているのだから、その鬱憤を晴らすために暴力を仕掛けられるヤクザやマフィア達からすれば堪ったものではないのだが…

…もう、龍が飛ぶ事は無いのか。

何にも成れず、何も成せず…
他のルーキー達が輝かしい成績を残し続ける一方で、一度失墜してしまった龍は再び飛ぶ事など叶わないと…
このまま、歴史の影に埋もれていく有象無象のように…誰の記憶にも残らないような、微々たる存在と成り果ててしまうのだろうかと…
その当時の人々は、誰もがそう感じてしまっていて―

しかし…

そんな劉玄斎に転機が訪れたのは、一体いつだったのか。

「シャハハハハ、こりゃまた酷え有様だなぁ。どうしちまったてんだ？なぁ小龍よぉ。」
「大和の爺さん…」

とある日。
荒れ果てた劉玄斎の自室へと訪れた一人の男が、酒に塗れて自分を見失っている劉玄斎へとそう声をかけていた。
…ソレはおよそ、こんな荒れた汚い部屋に訪れてもいいような人物では断じてない。

そう、散らかった劉玄斎の部屋現れたのは他でもなく…
纏う雰囲気からして強者の面持ち、しかして年老いた猫のように鋭くも乾いた笑いを響かせた一人の老人。
真っ黒なトレンチコートがよく似合う、歴戦を感じさせた決闘界における『最強』の一人であり…
シンクロ王者【白夜】と並ぶ『老』の決闘者の中でも、最も好戦的な御仁として知られる―

―現エクシーズ王者【黒猫】、皇　大和

かつて、一度はその経歴に土をつけられた男の、その落ちに落ちた姿をわざわざ見に来た【黒猫】の猫のような鋭い眼には。一体、今の劉玄斎の姿はどのようにして映りこんでいるというのだろう。
酒に溺れ、暴力で自我を保ち…
しかし埋めようの無い喪失感で自分を見失い、果ては自分のデッキすら満足に操るコトが出来なくなってしまった小さき龍。
そんな、プロとしての頂きから滑落してしまった今の酷い有様の劉玄斎に対し…
エクシーズ王者【黒猫】は、ただただ静かにその口を開くだけで…

「俺の後釜にゃあ、てっきりお前さんか鷹峰のアホが座ると思ってたのになぁ。一体全体どうしちまったってんだ？」
「俺を…叱りに来たのかぁ？」
「シャハハ！誰がンな面倒な事しにくっかよ！生憎、俺ぁお前さんの保護者でもなんでもねぇ。手のかかるガキは、鷹峰の一羽だけで充分だぜ。」
「じゃあ…何しに来たってんだ…」
「ま、ある奴によ、ちと様子を見て来いって頼まれてな。…お前さん、綿貫のジジイをあんま心配させるんじゃねーぜ？今のお前さんが酷え有様だってんのは見りゃ分かんだが……けどよ、マフィア相手に暴れ回るぐれぇ力有り余ってンなら、デュエルに全部ぶつけりゃい

いだけじゃねぇのか？」
「けど…俺ぁ…俺と、ダーク・アームドだけじゃあ…征竜を押さえらんなくなっちまって…」
「シャハハ、馬鹿言っちゃあいけねぇよ。マグレでも何でも、この俺に一回土ぃつけた奴が弱くなるなんて事あるわけねぇだろこんちくしょう。若造の癖して憎まれ口叩いてんじゃねぇぞべらぼうめぇ。」
「…」

そんな、遥かな高みからキツめの言葉を打ちおろしてくる【黒猫】の言葉を、劉玄斎はただただ静かに聴いている。
…いつもならば、憎まれ口を叩いてくる奴には暴力で返すのが当たり前になっているというのに。
目の前の御仁が、確かな歴戦を潜り抜けたエクシーズ王者【黒猫】であることからか…
裏社会で恐れられている劉玄斎を持ってしても、今はただただ彼の言葉を静かに受け入れるしか道がない様子ではないか。
…そう、おそよ、この世における酸いも甘いも熟知した人物が、今こうしてわざわざ一人のルーキーの為に出向いたのだ。
それ故、いくら酒の酔いで体の自由が利かなくとも…それでも、誰からの叱責を受けても聞く耳を持たなかった劉玄斎が。あの誰からの言葉も聞き入れなかった劉玄斎が。王者【黒猫】の言葉には、どうにかその耳を傾け続けるのか。
…それが、一度土をつけた人物だとは言え。
【王者】との歴戦の差は、勢いだけで埋められるような代物ではない。現に、絶頂期でも劉玄斎は決闘法による【王者】交代の資格を達成できなかったのだから…
一度土をつけられてもなお調子を崩さず、今も王座を守り続けている【黒猫】の存在感は巨大なる体躯を持った小さき龍にも全く怯むことなく、ただただ言葉を続けるだけで—
「なぁ小龍よぉ…お前さんは、なんでプロになったんだ？」

「俺が…プロになった理由……わかってる、わかってんだ…けど、それでもよぉ…俺は…俺はぁ…」
「おぅおぅ、こりゃ随分と重症なこった…なら、お前さんがそれでもデュエルを続ける理由ってのは何なんだ？」
「…あ？」
「そんだけ落ちぶれても、それでもみっともなくデュエルを続けてるってこたぁ…大方、テメェのデュエルを『誰か』に見せたいってことなんじゃあねぇのか？」
「…ッ、それは…」

【黒猫】から伝えられる言葉…
それは酔った劉玄斎の意識を、再びハッキリさせるには充分過ぎる言葉となりて深く龍の心に突き刺さる。
…まるで図星か核心か。
劉玄斎にとって、目を背けようとしていたその深層まで全く容赦の無い爪を突き立ててくる【黒猫】の鋭い指摘は…劉玄斎からしても、分かっていたようで分かっていなかった事実を彼へと再度わからせる。

「シャハハ、図星かこの野郎？……ま、そこまで気付けたんなら、後は自分でどうにかするこったぜ。鷹峰のアホに言われて来てみたが…どうもお前さんにゃあ、これ以上俺の助言なんて必要ねぇみてぇだしよ。…ンじゃ、そろそろ俺は帰るとすっぜ。この部屋はいい加減、安酒臭くてたまらねぇってんだ。お前さんも飲むならもっと上等な酒にするこった。キメラ・ダーティの１６１０年物なんてオススメだぜ？」
「…」
「…あぁそうだ、最後に１つだけ、【王者】からのアドバイスだ。……お前さん、『征竜』が操れなくなってきたって言ってたろ？ンなら、お前さんもそろそろ変わる時期が来たってことなんじゃあねぇか？」
「…変わる…時期？」
「おぅ。今まで、極力Ｅｘデッキを縛るスタイルで戦ってきたが…け

ど、お前さんと『逆鱗』だけじゃあ征竜を抑えらんなくなってきたってこたぁ…お前さんも、そろそろ自分の殻をもっと破らなきゃ…スタイルを、変えなきゃいけねぇって、『征竜』がそう言ってんのかもしれねぇなぁ。」
「征竜が…」
「ま、おあつらえ向きに、お前さんの弟分はカードデザイナーと来たもんだ。だからよ、今一度よくよく考えてみるこったぜ？お前さんのデュエルは…一体ぇ、誰に見せてぇモンなのかってのを…お前さんのソレは、今みてぇな無様なモンでいいのかってことを…よ。」
「大和の爺さん…」

そのまま…
ただ一方的に、ただ高圧的に。
言いたい事を言い終えたのか、エクシーズ王者【黒猫】は猫のように静かに音も立てずに部屋から出て行って。

「俺のデュエル…俺の姿を……俺を…見せるには…」

そして、一人部屋に残された劉玄斎は…
【黒猫】に言われた言葉を反芻するように、酒の酔いでグルグル回る思考の中でも一つの『何か』を確かに考えている様子で―

そうして…

…劉玄斎に『転機』が訪れたのは、最愛の女性が消えてから実に3年の月日が経ってからの事だった。

『レベル７のタイダルとレドックスでオーバーレイィ！燃えろ、真紅の玉鋼ぇ！黒き焔よ大地を焦がせぇ！エクシーズ召かぁぁん！来やがれ、ランク７！【真紅眼の鋼炎竜】！』

【真紅眼の鋼炎竜】ランク７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

『ブラスターとレドックス、２体の征竜でオーバーレイィ！疾れ、機鉄の天竜よぉ！朧の現と空を舞えぇ！エクシーズ召かぁぁん！現れろ、ランク７！【幻獣機ドラゴサック】！』

【幻獣機ドラゴサック】ランク７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

『タイダルとテンペスト、２体の征竜でオーバーレイィ！駆けろ、黒き龍の騎士ぃ！五つの蹄よ大地を穿てぇ！エクシーズ召かぁぁん！現れろ、ランク７！【黒溶龍騎ヴォルニゲシュ】！』

【黒溶龍騎ヴォルニゲシュ】ランク７
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２１００

『ブラスターとテンペスト、２体の征竜でオーバーレイィ！飛べ、疾風切り裂く迅雷よぉ！楯突く全てを突き抜けろぉ！エクシーズ召かぁぁん！現れろ、ランク７！【迅雷の騎士ガイアドラグーン】！』

【迅雷の騎士ガイアドラグーン】ランク７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２１００

いつぞやの荒れっぷりから一転。
それまでの惨敗が嘘のように、再起した劉玄斎はまるで吹っ切ったかのようにしてその戦闘スタイルを今までのモノから『一新』し、再び決闘界にて暴れ始めたのだ。
…それはこれまでの、Ｅｘデッキを極力縛り自らを鼓舞するモノから大きく反転。
これまでも、窮地で『逆鱗』やその他のエクシーズモンスターを多少使う事はあったとは言え。それでも、征竜と、自身のエクシーズのＥｘ適正をフルに活かすスタイルへと…

『いくぜぇ！俺ぁブラスター、タイダル、テンペスト、レドックス！４体の征竜でオーバーレイィ！怒りに震える逆鱗よぉ、歯向かう愚者を消し飛ばせぇ！』

そう、征竜の暴力的なまでの回転を、『逆鱗』以外にも多くのエクシーズモンスターを咬ませることによって再度従えさせ。
征竜だけではなく、これまでの敗北を屈服させるかのごとき爆発的な勝率を、『逆鱗』は再び見せ始めたのだ―

…それは彼の活躍を信じ、再起を願っていたファン達からすれば願ってもないこと。

そして、それに呼応するようにして…世界は再度、暴れ狂う大災害の活躍に熱狂し始めた。
暴れる４つの災害に振り回されることもなく、そのポテンシャルを大きく引き出し。更に自らのエクシーズという力によって、劉玄斎は再び征竜を無理矢理『屈服』させるという荒技を披露し始めて。
それはまさに、彼自身が災害をも超えた文字通り『暴れ狂う大災害』の名の元に―
更に激しさを増したその凄まじきデュエルは、再び彼を決闘界の『上』のステージへと押し上げるには充分過ぎる力となりて、みるみる

内に世界ランキングを駆け上がらせた。
…とは言え、それまで自分自身を鼓舞するためにＥｘデッキを縛っていた戦闘スタイルを、かなぐり捨ててまで戦う彼のその姿に対し。
周囲の…特に、古くから『逆鱗』のファンだった者達から、色々な憶測や言葉が投げかけられたのもまた事実なのだが…

―どうして戦闘スタイルを変えたのか。どうして再び奮起したのか。何故今更プロの世界に戻ってきたのか。

中には、ここには記せないほどに醜くえげつない言葉もあったことだろう。
しかし、それでも劉玄斎はその全ての言葉の一切を気に留める事も無く。それまでの『酷い』戦いぶりが嘘のように、彼は誰が相手でも連戦連勝を続けていった。
それはかつての比ではない。むしろ征竜とエクシーズ召喚の凄まじき親和性が、更に彼の暴力性を増すばかりの戦いぶりとなり、まさに『逆鱗』のデュエルは竜の怒りそのモノのようにして、激しいの一言となりながら全世界へと再び彼の活躍が映し出され始めたのは言うまでもなく。

だからこそ、２７歳の時にチャンピオンズ・リーグにて初めて『優勝』を飾った時は…

『暴れ狂う大災害』の再臨だとして、見事再起を果たした『逆鱗』の復活に世界中が大いに沸き立った。
まぁ、その翌年に砺波が【白夜】を倒し新たなシンクロ王者となったり、鷹峰が【黒猫】との師弟対決を制し見事エクシーズ王者へと任命されたりと…
劉玄斎が調子を崩している間に、他にも多くの『黄金世代』のルーキーたちが『老』の者達を押しのけ、自分達の時代を築き始めていたのだから…

一概に『逆鱗』の活躍だけに世界が熱狂していた訳ではないのだが、それでも劉玄斎の再起を願っていた根強いファン達からの圧倒的な支持は、新たな【王者】となった砺波　浜臣や天宮寺　鷹峰に負けず劣らずの歓声となっていたのだが。

けれども―

『蹴散らせぇ！ダーク・リベリオン！』
『ぶっ飛ばせぇ！ダーク・アームドォ！』
―『殴り合い』…世界最強のエクシーズ使い、エクシーズ王者【黒翼】天宮寺　鷹峰との戦い。

『【白闘気白鯨】の効果発動！全ての敵を洗い流す！』
『喰らうかよぉ！墓地の【復活の福音】を除外してドラゴン達を破壊から守る！そんで【崩界の守護竜】発動だぁ！トライホーンをリリースしてテメェの魚共もぶっ潰す！』
―『潰し合い』…誇り高き歴戦の王者、シンクロ王者【白鯨】砺波　浜臣との試合。

「【Ｄｒａｇｏｏｂ　Ｄ―ＥＮＤ】よ！『逆鱗』を消し飛ばすがいい！」
「それがどうしたぁ！【エクシーズ・リボーン】発動だぜぇ！蘇れ、ダーク・アームドォ！」
―『殺し合い』…底知れぬ恐怖、融合王者【紫魔】紫魔　憐造との一戦。

再起を果たした『逆鱗』は、およそこれまでの歴史上でも類を見ないほどの壮絶な戦いを世界中へと披露したのだ。
それはお互いにＬＰを投げ捨てながら、正面衝突で殴りあった…
それはお互いに相手の手を潰し合い、常に戦況が一転し張り詰めていた…
それはお互いに相手の息の根を止めにかかり、一瞬の油断でＬＰが

湯水の如く消え去っていった…

【王者】達と行ったその3つの試合は、過去に類を見ないほどの『伝説的』な試合となりて世界が大熱狂を起こした。

そう、再起を果たし、世界ランキングを再び恐るべき速度で駆け上がった『逆鱗』は、超新星と呼ばれていた3人の新たな【王者】達に、自ら煽るようにして嬉々として戦いを挑んでいったのだ―

それは世界中のオーディエンスが熱狂し、文字通りこの星全土が興奮でヒートアップしていたと言っても過言ではない程に…ソレほどまでに盛り上がったデュエルだったと言うことは、最早言うまでも無いことであり…

きっと、誰もが思ったはずだ。その試合は、この後の決闘界の歴史の中でも『最高』の試合に数えられるに違いない試合である…と。

何しろ、その戦いはまさに互角。

【王者】ではない者が、【王者】と同等の実力を持ち…どちらが勝ってもおかしくない戦いを、【王者】でない一人の男がその身一つで成し遂げたのだ。

だからこそ…

最初の【白鯨】との『潰し合い』に見事勝利し、次の【紫魔】との『殺し合い』には敗北を喫したものの、しかし最後の【黒翼】との『殴り合い』に真っ向から殴り勝った『逆鱗』は。

世間からの大きな声によって、特例中の特例として『4人目の【王者】』として殿堂入りに認定されるという事態にまで発展した。

…決闘法によれば、【王者】となるには自身のＥｘ適正の【王者】を含む2名の【王者】に『連勝』することが必要だと明記されている。

まぁ、『その他』にも当人の引退やら死亡やら掟やら誓約やら、決闘法の明記以外にも【王者】になれる条件はまだ『色々』とあるのだが

…

しかし、この当時。

【王者】との『3連戦』という偉業を成し遂げ、しかも【白鯨】に勝ち、【紫魔】に負け、しかし【黒翼】に勝った『逆鱗』は、紛れも無く【王者】と同等、同種、同格の存在と言っても過言ではなかったはず。

もし【紫魔】に勝っていたら、もしくは戦う順番が違っていたら。『逆鱗』の劉玄斎は、確実に次のエクシーズ【王者】を名乗っていたに違いないのだから。

だからこそ、再び覚醒した『逆鱗』の活躍に熱狂した多くの世間の声は、【決闘世界】をも動かすことになった。

…世界ランク1位、『逆鱗』の劉玄斎。

他の追随を許さぬその暴虐性。暴れ狂う大災害とまで呼ばれる、【王者】と同じ実力を持つ彼を、特例として4人目の【王者】として認定するという【決闘世界】の声明は…決して、間違っている判断ではなかったはず。

また、その【決闘世界】の声明に対し、世界中のファン達が大賛成を示したからこそ—

【王者】と同じだけの歓声を浴びながら連戦連勝を重ねる『逆鱗』が、特例として4人目の【王者】となる事に、世間の誰もが反対の意など示しはしなかったのだが…

しかし…

歴史上初となる、『4人目』の王者が誕生するのではないかと世間が多いに賑わったその時であっても—

—『俺ぁ【王者】になんざならねぇよ！ンなモンに興味ねぇからなぁ！クハハハハハ！』

『逆鱗』は、自らに用意された【王者】の座を蹴り飛ばしたのだ―

【王者】と同格と呼ばれし者が、自ら王座の席を蹴り飛ばすというその愚業。

…一度任命されれば、決闘界の歴史に未来永劫その名を刻めるというその栄誉を。

…一度就任すれば、使いきれない金が手元に次々流れ込んでくるというその誘惑を。

…一度その座に座れば、絶対的な権力を手にする事が出来るといわれるその名誉を。

その、勝者として約束された未来を―

あろうことか、『逆鱗』は嬉々として蹴り飛ばしたのだ。

果たして、その時の劉玄斎の愚考を一体どれほどの人間が馬鹿にしたことだろう。何しろ、世界中のデュエリストの頂点の座に、『特例』という他に類を見ない特別待遇にて与えられるという、一般人では到底及びもつかない名誉な所業を成し遂げたと言うのに…

それを、自ら捨て去るなんて、一体どういう思考回路をしているのだろうか…と。

けれども、そんな『声』などどこ吹く風で。

『逆鱗』の劉玄斎は、その【王者】と同格の実力と同等の人気と同量の声援を、余すことなく世間へと向けて発信し続けた。

それは下手をすれば、【王者】の面々たちよりも世に顔を出すことが多かったはず。

何しろ、【王者】の試合は『特別』なモノとされていることから、注目度は高くとも【王者】自身は一般的な試合に出る事はほぼ無いと言うのに…

片や【王者】と同格の男は、自身が世界ランキング第1位ということから、『出禁』となっている決闘市以外の世界中のありとあらゆる大会…試合、トーナメント、リーグ戦、タイトル戦、果ては野良試合ま

でをも、休むことなく繰り広げ続けたのだ。
そんな、休み無く自ら嬉々として最前線へと身を投じ続ける彼の事を…王座を踏みつける戦闘狂と、呆れながらもそう呼ぶ者も居た。
しかし、下手をすれば【王者】よりもメディアに露出する機会の多かった彼には、【王者】と同じかそれ以上のファンの声も多く着いて回った。
それは【王者】よりも戦っている姿を見る機会が多いと言う事もであり、彼が快進撃を続ければ続けるほど。『逆鱗』の高名は【王者】の名にも引けを取らぬモノとして…
…そうして、彼は誰にも真似出来ない数々の伝説が打ち立て続けた。

―４年に一度開催されるチャンピオンズ・リーグの『６連覇』。
―ゴールデン・デュエルディスク賞『最多』受賞。
―世界ランキング『第１位』保持年数歴代最長。
―通算『勝率』全プロデュエリスト中トップ。
―獲得賞金額史上最大の『賞金王』。
―削値ＬＰのデュネス世界記録保持者。
―出身国である龍華中央決闘帝国…龍国における、決闘国宝。
―【王者】に幾度も勝利した男。
―最も多くの【王者】に勝利した男。
―ｅｔｃ…ｅｔｃ…

晩年にまで打ち立て続けた彼の偉業は、最早人間技では断じて無く。
およそ人間の領域を超えているまでに打ちたて続けたその偉業は、表社会・裏社会関係なく世界中のどこへ行っても『逆鱗』の劉玄斎の名を轟かせる事となりて…雲の上、天上にまで届き得る存在として、世界中に知れ渡った。
…それは伝説の３試合だけではない。
それ以外にも、幾度も幾度も【王者】と戦い互角の戦いを繰り広げ

…【王者】を相手に、勝ったり負けたりとまさに『同格』の存在感を放ち続ける彼の姿は、およそ【王者】と『同じ』存在だとして知らぬ者など居ないとまで謳われたものだ。

…一説によると、大会賞金や報奨金などを合わせるとその収入は【王者】にも引けを取らないとまで言われている。

だからこそ、【決闘世界】も面子を保つ為に、『逆鱗』に何度も何度も【王者】就任の要請を…いや、命令を下し続けていたと言うのに。

その度に『逆鱗』はソレを笑いながら払いのけ、ついには【決闘世界】という巨大なる『組織』の方が根負けしてしまうという状況にまでなってしまったのだ。

…【決闘世界】でも御しきれない、規格外の存在。

一体、何故『逆鱗』の劉玄斎にだけそんな無茶な我儘がまかり通ったのかは今となっては定かではないものの…それでも、数々の偉業を次々と打ちたて続け、膨大な収入を得てもなお彼は戦いを止めなかった。

また、彼は何故か一向に所帯を持つような事をせず。女に縛られる事も無く、その身1つで日々戦いに明け暮れ続けていた。

そう、『逆鱗』の劉玄斎の、その『正妻』の座を狙う女性も当時は多々存在してはいたのだが…

しかし、彼は全くと言っていい程『女性』に興味を示すことなかった。浮かび上がった下賤な噂話や疑念や女性の影を、自ら切って捨てるかの如くその悉くを否定し続け…『独り身』を貫き続けているその覚悟は、ある種の伝説となりて今もなお語り継がれていて。

…けれども、その真相は誰も知らない。

彼が、戦いの最中もずっと『最愛の女性』を探し続けていたことを。

彼が、自分の姿を少しでも多く『最愛の女性』に届くように戦いに明け暮れていたことを。

彼が、頑なに【王者】にならないのは…
【王者】になれば試合数が減って、自分の姿を多く『届けられなく』なってしまったり、象徴として扱われる為に、自由に行動できなくなったりするからと言う事を。
…それは悪友だった『荒くれ者』が、【白鯨】になった時の変わりようを見ているからこその【王者】への拒絶。
まぁ、【黒翼】という悪い例も存在はしていたのだが…
それでも、【決闘世界】の打診にしたがい『特例』という立場で４人目の【王者】になってしまったとすれば、【黒翼】のような好き勝手な振る舞いは許されず『首輪』を嵌められることになる。
それを、劉玄斎はわかっていたからこそ―
彼は、戦い続けた。
不自由な【王者】などではなく、常に映り続ける最前線で、『最強』のまま戦い続ければきっと愛する女性が世界のどこかで見てくれている…
きっと…愛した女性と再会できると…心から、信じて。

―ずっと、最前線で。
―ずっと、頂点で。

常に戦いの現場に立ち続ける最前線、世界ランキング『第1位』の座にて、【王者】たち以上にＴＶで自分の戦いを見せ続けようと…

―俺はここに居る…ここで、戦って居る…と。

だからこそ―

そんな、悲痛な叫びにも似た、狂ったように戦い続けた勇猛なる龍

が…

決闘界を『引退』したのもまた、突然のことであった―

―…

ｅｐ１１１「閑話―劉玄斎、後編」

『逆鱗』の引退―

それは、あまりに突然の事であった。
何しろ、前代未聞、空前絶後の大記録である、『チャンピオンズ・リーズ』の『６連覇』を成し遂げたそのすぐ後のこと…
まだまだ上り調子、毎日が全盛期とまで言われ最高潮を日々更新し続けていた『逆鱗』の劉玄斎が、ある日突然何の前触れも前置きもなく…
何の声明もなく、あまりにあっさりと決闘界からの『引退』を表明したのだ。

…一体、『逆鱗』の劉玄斎に何があったのか。

別段調子を崩しているわけでもなければ、かつてのような謎の『不調』によって崩れ落ちたわけでは断じてない。
【王者】よりも試合を行う回数は桁外れに多いのに、その全てに勝利し紛う事なき『最強』の一人に数えられている最中でのその突然の引退表明は…
決闘界のみならず、政界や財界、果ては彼の本拠点であるデュエリアや、祖国である龍華中央決闘帝国、通称『龍国』の国家経済をも揺るがす大事件となりて、大々的な騒動となったのだから。
…誰もが止めた。『逆鱗』の引退を。
何しろ、『逆鱗』は【王者】と『同格』の男。そのデュエリストとしての資質は、長い決闘界の歴史においても類を見ない代物であり…
彼の行うデュエルの一戦一戦が、【王者】と同じ価値のあるモノだとして決闘界においての宝とさえ言われていたのだから。
…だからこそ、当時の人々はこぞってその理由を知りたがった。

一体、どうして『逆鱗』は引退なんて真似をしてしまったのか。
決闘界における最高峰のタイトル、４年に一度開催される『チャンピオンズ・リーグ』で６連覇という…
…実に四半世紀近くにも及ぶ長い間、【王者】を除く決闘界の者達の中でも頂点に立ち続けたという偉業を達成し。
この調子ならば７連覇…いや、８連覇は確実とされていた、【王者】と同じ価値のある決闘界きっての至宝の、あまりに突然の引退の事実を人々はこぞって知りたがったものだ。

…しかし、『逆鱗』はそれを頑として聞き入れなかった。

何も言わず。何も告げず、誰にも何も心の内を明かすこともないままに。
彼が何を考えているのかすら分からないまま、誰の静止も聞くことなくある日突然『逆鱗』の劉玄斎はプロの世界からその身を引いてしまったと言うことは、今もなお語り継がれる不可思議なモノとされており…
そして、彼の引退の真実を全て知る者は、決してこの世には存在するはずもない。

そう…

…それは、誰も知らないこと。
…それは、誰も知ってはならないこと。

一体、誰が想像できようか。『逆鱗』が、プロとして誰も真似できないような偉業の数々を未だ成し遂げ続けている最中に…
劉玄斎の元に、『ある知らせ』が届いていたことなど―

…それは、劉玄斎の下から最愛の女性が姿を消して、実に『２０年以上』もの月日が経ってからのことだった。

―イノリが、亡くなった。

最愛の女性が自分の前から姿を消してからも、ずっとその消息を捜し求めていた劉玄斎。
しかし、四方八方手を付くし、稼いだ金を惜しげもなく投資し、決闘界での地位も獲得し【王者】にも負けない権力を許されていた彼でも…それまで、天津間　イノリの消息はずっと掴めないままだった。
だからこそ、全く持って消息を掴めなかった最愛の女性の―

そのやっと入ってきた情報が…

まさかの、彼女が亡くなった報せであったなんて―

そんな、信じがたい結果を知ってしまって…劉玄斎が、一体どれほどの喪失感を覚えたのかは言うに及ばず。
…また、彼女が亡くなったからか。
彼女に関する情報は、それまで隠されていたのが嘘のようにして…
劉玄斎は、それまでの彼女の足取りを知る事が『出来て』しまった。

…自分の前から姿を消した後、名を天津間から『天城』へと変えて

決闘市で暮らしていたらしいこと。
…彼女が、子どもを一人産んでいること。

その情報のどれもが、劉玄斎にとってはとてもじゃないが『ダメージ』が大きすぎた。

…自分が『出禁』となっている決闘市に住んだのは、自分から逃げるには丁度良かったからなのか。
…名を天津間から変えたのは、自分に探されるのを嫌ったからなのか。
…愛していたのに、誰の種かも知れない子どもを産んだのか。
…と。

故に…劉玄斎はそこで、折れてしまった。

もう、自分の戦いを見せる相手がこの世に居ないことを知って。
そして、自分が最愛の女性だと思っていた人にとって…自分は、最愛ではなかったのだと言う事を悟ってしまって。
そう、今まで自分の姿が彼女に届くようにと最前線に立ち続けてきたことは、全部無駄であったのだ。
その時の劉玄斎には、かつてのように自暴自棄にも似た感情と形容し難い喪失感が再び襲い掛かってしまっており…
…きっと彼女は、自分などよりも愛する男を見つけ、結婚し、その子どもを産み、幸せに暮らしていたのだろう。
そんな事を、簡単に想像出来てしまったからこそ―
『逆鱗』と呼ばれし劉玄斎は、これ以上戦う事を簡単にやめる決断を下してしまい…常に絶頂期を更新し続けていた戦い盛りの真っ最中にも関わらず、あまりにあっさりとプロの世界からその姿を消してしまったのだ。
まぁ、彼女がそれまでどう暮らしどう生きたのかなど、調べようと

思えば『それ以上』のことまで当時の劉玄斎は調べるコトが出来たのだが…

しかし、埋めようの無い喪失感に苛まれていた劉玄斎は、早くこの苦痛から解放されたい一心で。それ以上、『天津間　イノリ』の…いや、『天城　イノリ』の事を、調べる事をやめてしまった。

そして…そこからの1年間の記憶は、劉玄斎には『無い』。

何しろ、『引退』を表明した後の劉玄斎の私生活は、かつて最愛の女性を失ったショックで自暴自棄になってしまったのよりも更に酷い…

そう、あまりに酷い有様となりて、自堕落を通り越した『何もしない』生活を彼は送っていたのだから。

…眠り、起き、酒を飲み、眠り、起き、酒を飲み、泣き、眠り、起き、泣き、酒を飲み、眠り。

そんな、眠るか泣くか酒を飲むか、およそ知性のある人間が送るようなモノではない生活を劉玄斎は送り続けていた。

それはまさに堕落を超えた、あまりに酷すぎる『崩落』の一言。

誰の声も聞き入れることのない。誰の助けも届く事の無い生活。かつて同じような窮地から引っ張りあげてくれた、恩人である【黒猫】はもうこの世には居ない。

それ故、このままただ何もなく朽ち果てるだけ…

そして、それで良いとさえその時の彼は思っていたのだから、本当にその喪失感で一杯だった一年間の事を、劉玄斎は全く持って覚えていないのだ。

…まさに、無駄の極み。

記憶するに値しない無駄な1年を、ただただ『崩落』して過ごしていた劉玄斎。
自ら嬉々として戦場に赴いていたあの戦意が嘘のように。誰にも真似出来ない偉業を次々と達成し続けていたあの伝説が嘘のように…
…何もせず、何もできず。
このまま腐り果てるのを待つだけの行為を、劉玄斎はただただ無駄に過ごし続けて…

だからこそ、かつては決闘界の至宝とも呼ばれた、【王者】と同格の男をこのままにはしておけないとして―

崩落していた劉玄斎を、彼を幼少の頃より知る【決闘世界】最高幹部である『妖怪』、綿貫　景虎は、心の底から『不憫』に思ったのだろう。
彼がどんな手を使ったのかは分からないが、そのあまりに痛々しい『逆鱗』の姿を憐れに思った【決闘世界】の翁は方々に手を回して…
1年間の『崩落』の後に、なぜか丁度、あまりに良すぎるタイミングで席の空いた『決闘学園デュエリア校』の学長の椅子に、『逆鱗』の劉玄斎を本人の了承もなく座らせるというとてつもない『荒業』をやってのけたのだ。
まぁ、綿貫がそんな事を成し遂げられたのも、他の決闘学園の理事長や学園長に引退した決闘界の猛者が就任したこともあるという『前例』があったからこそなのだが…
そう、今はもう解体されてしまったが、かつて決闘学園中央校の学園長には元エクシーズ王者の【黒猫】が死ぬ時までその座について業務を全うしていた事。
そして現役の理事長で言えば、決闘学園サウス校の理事長に『烈火』と呼ばれし獅子原　トウコが就いていることや…劉玄斎と同じ時期に、決闘学園ウエスト校にデザイナー業界で『神のペン』と呼ばれる

までの偉業を成し遂げた男、『樹龍会』の李　木蓮が就任予定だったと言う事も相まって。
『逆鱗』と呼ばれた男、劉玄斎は、半ば無理矢理に決闘界にその籍を残す運びとなったのだ。

…とは言え、元来『事務作業』など得意ではない劉玄斎が、あまりに突然デュエリア校の学長の椅子に座らせられるというのも中々どうして無謀な賭けではあったのだが。

それでも、綿貫に喝を入れられながら…

1年という時間を無駄に『崩落』していた劉玄斎もまた、差し伸べられた手に抵抗する気力を見せることもなく。半ば流されるままに、気がついたら日々忙し過ぎる『仕事』に没頭させられる日々を送っていたのだ。
そう、それは1年間の記憶が無い劉玄斎からしてみれば、本当に気が付いたら学長に就任していたという奇妙な気付きでもあったのだろう。
まさに荒療治…
忙し過ぎる仕事に没頭させる事で、悲しみを感じさせるよりも仕事を優先させる体質にする事で…心を、自我を取り戻させるという、精神科医もビックリするようなあまりにスパルタかつ他人には推奨できない『喝』を、綿貫は劉玄斎に入れてみせた。
まぁ、学長としての忙し過ぎる仕事を、綿貫のサポートありきとは言え1年間も無意識下で行っていたのだから…それに気付けたと言う事は、それだけ劉玄斎も『自我』を取り戻すコトが出来たということでもあったのだが。
…とは言え、劉玄斎がなぜ自分がデュエリア校の学長になっているのかを悟った頃には時既に遅し。
もう逃げられないほどの仕事量が毎日のように襲い掛かるデュエリア校の学長として、彼は自我を取り戻した後もそのままデュエリア

校の学長を続ける他なかった。
…まぁ、そこで綿貫と劉玄斎には一悶着が起こったり起こらなかったりとしつつも。
それでも、デュエリアにおける幼・小・中・高等部における、全責任者の仕事を劉玄斎は半ば無理矢理にやらせられる羽目になったとは言え。
忙しすぎる『仕事』を前に、劉玄斎も少しずつ少しずつ悲しみを心の隅へと追いやれるようにはなってきていた。
それは忙しすぎる『仕事』に没頭することで、彼も少しは愛した女性への未練を忘れようとしていたのだろう。毎年のように起こる問題、学生同士のいざこざや教員たちの権力争いに加え…
デュエリアにおける学生の祭典である【デュエルフェスタ】の運営や、その他のイベントごとなど。デュエリア校の学長に迫りくる仕事の多さは、およそ他の学園と比べても『多い』の一言であった。

そして…

自我を取り戻すまでに回復した事で、それまでは綿貫　景虎がサポートしていた学長としての仕事を、今度は劉玄斎一人でこなす日々が始まった。
…慣れない事務作業に四苦八苦しながらも、劉玄斎の忙し過ぎる学長業務に没頭する日々。
それは『逆鱗』と呼ばれた劉玄斎を知るファン達からすれば、とてもじゃないが信じられない龍の一面であったに違いない。
何しろ、劉玄斎と言う男は決闘界を力で荒しまわっていた文字通りの『暴漢』。それはデュエルにおける『実力』であったり、それ以外における『暴力』や『圧力』と言ったりと様々でもあるのだが…
それでも、決闘界における『力』の象徴が、まさかの子ども達を導く立場に立つだなんて、当時のファン達からすれば到底信じられる事でなかったのは言うまでもないこと。
だからこそ、そんな男がデュエリア校の学長に就任したことを心配

してか忌避してか、『逆鱗』がデュエリア校学長に就任してからの1～2年間におけるデュエリア校の進学率が少々落ち気味になってしまったのもまた紛れも無い事実でもあるのだが…

けれども、そんな声すら仕事に没頭するしかなかった劉玄斎にとってはどうでも良い事であった。

毎日毎日、ひっきりなしに起こるトラブルの連続。幼・小・中・高という、1つの学園にとんでもない数の学生が在籍するという、そのあまりに巨大すぎる決闘学園デュエリア校の学長としての仕事は、劉玄斎に外部からの余計な声を聞かせる暇も無いくらいの忙しさを与えていたのだから。

…それは自分が戦いに明け暮れる日々を送るのとは、まるで違う毎日の連続。

幼等部から高等部までの全責任者に就任したからこそ、毎日のように起こる学園トラブルの対処に追われたり…

その他にも様々な業務が日々山のように積み重なって迫り来たりするのだから、かつて暴れ狂う大災害、王座を踏みつける戦闘狂とまで呼ばれた男も、自分よりも弱く、か弱く、そして庇護しなければいけない対象でありつつ育成の対象でもある多すぎる子ども達に対し、『大人』の対応をする日々を送ることになっていて。

そうして…

劉玄斎がデュエリア校の学長に就任してから、およそ3年ほど経った頃だろうか。

ある日突然…『とあるニュース』が、全世界に向けて発信された―

それは忙しすぎる毎日を送る劉玄斎の耳にも、否応にも届いたほどの世界にとっての衝撃的かつ大々的な『大事件』。

そう…

その日、決闘市において―

『Ｅｘ適正の無い子ども』が、発見されたというニュースであった―

世界は大々的にソレを報じた。

世界は、大々的にソレを騒ぎ立てた。

それはまるで、その決闘市で発見された『Ｅｘ適正』の無い子どもが、世界にとっての『悪』なのだと言わんばかりの偏向報道となりて―

毎日のように、Ｅｘ適正の無い子どもを誹謗中傷するような、人権を無視したような報道が流れ続けた。

…だからこそ、そんな世界中で大ニュースとなった決闘市のＥｘ適正の無い子どもの話は、ニュースを見る暇すらなかった劉玄斎の耳にも不意に届いてしまった。

いや、届いたのではない…

その当時は、どこへ言っても何をしても、誰かが必ず『その話題』を出すモノだから、仕事に追われ世間の情勢に疎かった劉玄斎にもどうしてもその話題は耳に入ってきてしまったのだ。

…だからこそ、最初はほんの『興味本位』だった。

当初、Ｅｘ適正の無い子どもが発見されたというのは劉玄斎にとっては『どうでもいい事』だった。

…世間がどうしてその『Ｅｘ適正の無い子ども』に対し凄惨な言葉を投げるのか。世間がどうしてそこまで『Ｅｘ適正の無い子ども』を嫌うのか。世間がどうして『Ｅｘ適正の無い子ども』を攻撃するのか。

それが、劉玄斎にはまるで『理解』が出来なった。

そう、当初そのニュースを耳にした劉玄斎からしてみれば、別に『Ｅｘデッキ』が使えないことが何の『ハンデ』になるのだろうかと思ったはず。

何しろ、彼がまだプロの世界で『小龍』と呼ばれていた時代は…

Ｅｘデッキを自ら縛り、極力Ｅｘデッキを使わないことで自らを鼓舞するスタイルで戦っていたのだから、いくら『征竜』を屈服させるためにそのスタイルを変えたとは言え、劉玄斎自身からしてみれば『Ｅｘデッキ』が使えないことなどまるでハンデにはならないのではないかとすら考えていたのだから。

…しかし、世間ではそうとは成らなかったらしい。

その報道の仕方に『違和感』を感じるほどに、毎日のように流れてくるニュースはまるで『Ｅｘデッキ』を使えないことが『悪』であるかのように報道するような代物モノばかり。

これまでもＥｘデッキを使わないデュエリストは、自分を含めてプロの世界にだってそれなりに居たはずだと言うのにも関わらず…

…世間は、世界は。

Ｅｘデッキを使えない事は『ダメ』なのだと。
Ｅｘ適正が無いことは『悪い事』なのだと。

何故か、『わざと』そうしているかの様に報道をし続けたのだ―

偏向報道にも程があるソレ。たかがＥｘデッキが使えないくらいで、そんなに騒ぎ立てる事など無いだろうと、その話題を遠巻きに耳にする度に劉玄斎は感じてもいた。

だから…
本当に『偶然』だったのだ―

…偶々、偶然。
ほんの少し仕事に余裕が出来たという、わずかばかりの『休憩』の時間に気まぐれでＴＶをつけた時に…

件の、『Ｅｘ適正を持たない子ども』の顔がＴＶに映ったのは―

そして…

劉玄斎は、確かに見た。
今、世間で騒ぎになっている、『Ｅｘ適正』を持たない少年だという存在の…

その、『顔』を―

きっと…
この時感じた衝撃は、劉玄斎もこれまでの人生で体験したことのないくらいの、それ程までに大きなモノとなりて彼の身に降りかかってきたに違いない。

そう…

劉玄斎は、そこで『理解』ってしまったのだ。
今、世界で騒がれているＥｘ適正の無い子どもが…

今、世間から酷く責め立てられているＥｘ適正の無い子どもが…

そう、『天城　遊良』は―

イノリの、『孫』なのだ…と。

いや…それだけではない。

ＴＶに映った天城　遊良の顔を見て。
ＴＶに映し出される、天城　遊良の姿を見て。
その網膜にまざまざと焼きついた、『天城　遊良』の顔を見て―

劉玄斎は、理屈ではなくその『本能』で理解してしまった―

それは紛れもない。今、世界の『異物』扱いをされている天城　遊良が…

自分の…『血』を、分けた者であると言う事を。

…それは血を分けた者だからこその直感か。
…はたまた、今もなおかつての恋人が最愛の女性であると思っているからか。

そんな、理屈では説明できない天啓にも似た直感的な『理解』。ソレを、この時の劉玄斎は悟ってしまったのだ。

…だから、調べた。

それまで避けていた、天津間　イノリが『天城　イノリ』になってからの『これまで』を。

…だから、知った。

天城　イノリが、自分の前から姿を消した後も…誰とも結婚しておらず、貴族と『縁』を切って、たった一人で決闘市で『息子』を育てていたと言う事を。

…だから、分かった。

天津間　イノリの…いや、天城　イノリの息子である、『天城　竜一』という男が…

紛れもなく、自分の『息子』であったという…その、『真実』を。

…決闘学園中央校筆頭。

…中央校における最後の卒業生。

【決闘祭】の優勝経験もあり、『5大都市対抗戦』という今では伝説となっている学生達の試合にも選手として選ばれた経歴もあり、しかし何故かプロにはならなかったという異色の経歴を持つ、それまで知らなかった自分の『息子』の、これまで知らなかった輝かしい数々の記録。

そして、イノリが名付けたであろう息子の『竜一』と言う名前…

その由来が、間違いなく自分の『名』から来ているという事を、劉玄斎は理屈ではなく本能で分かってしまったのだ。

また、それ以上に…

かつて愛した最愛の女性が、自分の前から突然姿を消したその『理由』も…決闘界においてそれなりの地位を確立してしまっていた劉玄斎は、そこでついに『知って』しまった。

そう、イノリが突如自分の前から姿を消してしまったその理由が…

それが、『自分』の所為だと…いや、自分の『為』であったと言う事を…

劉玄斎は、『知って』しまったのだ…

泣いた…

龍が、泣いた―

最愛の女性が消えた全ての『真実』を知って。
最愛の女性が何故自分の前から姿を消したのかという、その『思い』を知って。
誰も入れない自室にて…デュエリア校の学長室という、他の誰も入れないその固く閉ざされた閉鎖空間にて、大きな龍は声を上げ、誰も見た事も聞いた事もない声で…
かつて暴虐の限りを尽くした巨大なる龍は、まるで小さい子どものようにして誰もない部屋で延々と泣きはらした。
…それを言葉で言い表すならば、まさに涙で部屋を埋め尽くすほど。
形容ではない。本当に、それまでの自分の愚かさと馬鹿さ加減を悔やむようにして…かつて小さき龍と呼ばれた男は、ただひたすらに泣き腫らし続けたのだ。
…自分はどれだけ愚かだったのだろう。
最愛の女性が、何を思って自分の前から姿を消したのかも知らずに勝手に潰れ…
一人よがりの戦いを続けるだけで、『親』としての責務を何も果たそうとせずただ勝手に戦い続け…
そして、どれだけ愚かな人生を歩んでいたのだろうか…
…と。

…だからこそ、劉玄斎はすぐにでも行動を起こそうとした。

世間から…世界から傷つけられている、自分の『息子』とその嫁と、そして『孫』を救おうとして。

…しかし、行動を起こそうとした時には時既に遅し。

息子と、その嫁はどれだけ探しても『消息不明』と成り果ててしまっており…

また、『孫』だけでも救おうと動こうとしたものの、デュエリア校学長としての仕事の多さと、かつて自らが犯した愚かな行為による決闘市への『出禁』が尾を引いてしまっていた事が、ここへきて呪縛のようにして彼の行動を悉く縛りにきてしまったのだ。

そして、それ以上に…

まるで話しを聞かない周囲の『反対』によって、劉玄斎は思うように動く事が出来なかくなってしまっていた。

そう…

決闘学園デュエリア校で、天城　遊良を保護する案を提唱するも、劉玄斎を除いた役員全員の満場一致で、その案は『否決』されてしまったのだ。

…その理由は単純明快。

世間から『出来損ない』の烙印を押されている屑を、どうしてデュエリアが保護しなければならないのかという…頭の固い大人達の、大多数の反対によるモノ。

しかも、ライバル都市である決闘市の、そんなお荷物をどうしてデュエリアが保護しなければならないのかという…もっともらしい理由をつけて、とにかく劉玄斎の思いは多くの邪魔者によって悉く無碍にされてしまった。

…また、説得するために天城　遊良が自分の孫だと説明するも、何の証拠も出せないままでは誰もソレを信じようとはせず。

だからこそ、そのまま劉玄斎は満足に動けないままに…ただただ歯

がゆい日々を送るしか、許されはしなかった。
まぁ、それでも『孫』が決闘市で今もどうにか生きていると言う情報だけは入ってきていたため、劉玄斎もどうにか動ける『時』が来る機会を虎視眈々と狙い続けはしていたのだが…

…しかし、どうにかしようと足掻き続けるも、満足に動けることもない日々が続いていたある時。

自身が治める決闘学園デュエリア校において、3年連続で大きな『事件』が勃発してしまった―

1年目…特待生として迎えた中等部一年生が、地属性の『霊神』を召喚したという事により、【決闘世界】が騒ぎ立てる事態が起こった。
2年目…『七草』と名乗る謎のテロリスト集団により、デュエリアの街が『大炎上』を起こすほどの『事変』が起こった。
3年目…炎上の爪痕が残っているというのにも関わらず、大勢の生徒達の集団失踪から始まった末に…特別に預かっていた三大貴族の内の1つ、『煉獄園家』の嫡子が、まさかの『命を落とす』という『大事件』が起こってしまった。

そんな、事後処理すら大変な事件が3年も連続で起こってしまったために…

劉玄斎は、『孫』の事をどうこうする暇もなく、これまで以上の壮絶な仕事に明け暮れなければならなくなってしまっていた。
…まぁ、その頃は『孫』が【黒翼】に引き取られているという情報も彼の元に入ってきていたため、少々『孫』の事に対しては少しの余裕が出てきてはいたのだが。
とは言え、旧知の間柄でも自由奔放すぎる【黒翼】には連絡も取れず所在も転々としすぎていて、邂逅すら出来ないままであったのだから…

彼もまた、『孫』の事を【黒翼】に聞けるはずもなく。ただただ忙しい日々、ただただ大変な日々を、劉玄斎もまた数年に渡り送る羽目になったことはひとまず置いておいて。

…しかし、そんな忙しい日々の中でも、一時も彼は『孫』の事を忘れた日はなかった。

だからだろう。『ある年』において、劉玄斎は決闘市における学生の祭典、【決闘祭】を、誰にも邪魔されないように…

学長室にて、一人食い入るように観ていたのを知る者は誰も居ない―

…それは誰にも邪魔されることなく。

…それは誰にも余計な事を言われないように。

決闘学園デュエリア校学長が、他国の、しかもライバル都市であるはずの決闘市の『祭典』を食い入るように見ている姿など、デュエリアの誰にも見せられるはずもないと言うのにも関わらず。

それでも、『逆鱗』の劉玄斎は年末に食い入るようにして…【決闘市】の中継映像を、瞬きも忘れて魅入っていたのだ―

そして…

その年の【決闘祭】にて、彼が見たのは紛れもなく―

―『それでは、選手の入場です！イースト校1年、天城　遊良選手VS、サウス校3年、獅子原　エリ選手！』

―『バトル！【堕天使スペルビア】で【星態龍】を攻撃！』

竜は見た…
その眼で、兄貴分と姉貴分の『孫』である少女相手に…そう、『烈火』の『名』を相手に、一歩も引かずに戦い抜いた彼のデュエルを。
―『くっ、だったら【堕天使イシュタム】でダイレクトアタック！』
―『もういっちょ罠発動！【ガード・ブロック】！ダメージを０にして、デッキから１枚ドロー！』
―『まだだ！【堕天使ディザイア】でダイレクトアタック！』
―『おっとぉ！直接攻撃宣言時、手札から【速攻のかかし】を捨ててその攻撃を無効に！そのままバトルフェイズは終了や！』
―『くそっ…やっぱり持っていたのか…』

龍は見た…
仇敵と同じ名字を持つ少年との、その『実力』の差は明らかなれど…
それでも、最後まで諦めずに戦う彼のデュエルを。

―『皆様！とうとうこの瞬間がやってまいりました！』
―『誰が想像した！誰もが知る１０年前！世界にただ一人、『Ｅｘ適正』を持たない人間として世に知られた名を！それが、その人物が！今夜この【決闘祭】の！決勝のステージへと昇ってくることなど！誰が想像したというのか！しかし彼はその戦いを我々に見せつけた！Ｅｘデッキを使わない戦いで！それでも彼はここまで進んできた！』
―『決闘学園イースト校１年！天城ぃ！遊良選手ぅぅぅぅぅぅ！』

辰は見た―
群雄割拠の猛者の中に放り込まれたと言うのに、それでも『頂点』の

舞台まで昇ってきた彼の姿と…

―『…でも…俺は、負けたくない！お前に負けても悔いは無くたって…だからって負けていいわけじゃ絶対にないんだ！』

―『俺は…俺は！Ｅｘ適正なんか無くたって、俺の存在を否定させないために！俺は！お前に勝ちたい！先に行ったお前に！俺は！』

―『いくぞ鷹矢！俺は３体の堕天使をリリース！』

【黒翼】の孫を前にしてもなお、ボロボロに傷付きながらも必死になって戦うその姿と―

そして―

―『【神獣王バルバロス】！』

まるで、かつての『自分』を思わせるような、Ｅｘモンスターではない『切り札』によって戦況を一変させるという、その懐かしくも誇らしい、そして自分が諦めたデュエルによって『頂点』に挑むその勢いと。

そして、Ｅｘデッキなど使わなくとも最後の最後まで戦い抜き、ついには【決闘祭】の頂点の座を掴み取った…

その、彼の全てのデュエルを…

劉玄斎は、観つづけた。

…だから、泣いた。

涙が、止まらなかった。

自分の『孫』が、世界の全てを敵に回してもなお折れず、諦めず…決闘市の学生の頂点に立ったことに、強く心を打たれて。

それ故、彼は何もしてやれなかった自分を恥じた。何も出来ない自分を、これまで以上に歯がゆく思い…

自分が手間取っている間にも、生きる事を諦めずに最後まで【決闘祭】を戦い抜くまでに成長した『孫』を、どうにかして称えてやらないといけないと…そう、なんとしてでも、『孫』の為に『何か』をしてやらなければという思いが、劉玄斎の中でより一層強くなったのだ。

…今でも尾を引く決闘市への『出禁』の命。

若いときの酒の失敗が、こんな時にありえない程に足を引っ張っていることを、この時の劉玄斎はどれほど悔やんだ事だろう。

同じ酒の席に居た者たち…　兄貴分(烈火)や悪友(砺波)や同期(蛇蝎)や後輩(鷹峰)は、『妖怪』の叱責を恐れてしらばっくれたと言うのに…

当事者というか、最も被害を出した自分だけが決闘市を『出禁』になってしまうほどの失態を犯し、そしてソレから逃れられなかった若い時分の失敗に、今更になって心の底から悔やみを見せて。

だらこそ、どうにかして…

どうにかして、決闘市に入れるようには出来ないモノか―

この時の劉玄斎の頭にあったのは編にその思い唯一つ。自分が決闘市へとどうにか入れるようになり、自分がこの手で直接『孫』を救ってやらなければという強い思い、ただそれだけ。

しかし、『貴族連』が一度決めた事は簡単には覆す事は出来ない。それは【王者】と同格の『逆鱗』とまで呼ばれた劉玄斎をもってしてもなお、思うように進められない堅い『禁』であり…

そうして…

そんな、歯がゆくも行動を許されない日々が、一体どれほど続いた後だろうか。

…何故か、急に、突然に。

そう、何故か、劉玄斎の元へと、決闘市への『出禁を解く』という知らせが舞い込んできたのだ。

…それは寝耳に水だった。

だってそうだろう。いくら酒に酔った若き時分の失敗とは言え、決闘市の象徴でもあるセントラル・スタジアムを、泥酔に任せてボロボロに壊してしまったのだから―

…その時の『貴族連』の怒りが半端なモノではなかった事を、劉玄斎もよく分かっているからこそ。

消されていてもおかしくなかった失態を、決闘市への『出禁』だけで済んだと言うのは彼からしてもある意味『幸運』の部類であったはずなのだから。

…だからこそ、今更になって決闘市への出禁が解かれたのは一体どうしてなのだろう。

劉玄斎も、ソレをすぐに調べたかったはずではあるのだが、しかし決闘市への『出禁』が解かれたと知った彼は、ソレよりも先にまず真っ先に『ある行動』を反射的に起こしていた。

そう…

劉玄斎は、真っ先に『決闘市』へと向かった。

実に２０年以上も足を踏み入れる事が許されなかった、あまりに懐かしき決闘市。
聞くところによると、数年前まで『不良時代』の全盛期であったという懐かしきこの街は、かつて劉玄斎が活動していた頃とはその造りも雰囲気もかなり変化してしまっていた。
…当たり前だ。何しろ、２０年以上も時間が過ぎ去ってしまっているのだ。
記憶にある場所などは一新されたり再開発されたりして風変わりしていたし、昔なじみの店も多くが当に無くなっていた。
…けれども、そんなことなど劉玄斎にとってはどうでも良かった。
そう、決闘市への『出禁』が解かれ、お忍びで決闘市へと踏み入ったその時の彼の目的は唯一つだったのだから。

彼の目的は唯一つ…

自分の『血』を分けた『孫』の姿を、遠目からでも一目でいいからその眼に写したかった。

…目立つ風貌をしている事は彼も自覚していた。だからなるべく目立たぬように時間帯を見計らって。
…自分の知名度を彼も理解していた。だからなるべく見つからぬよう細心の注意を図って。

まぁ、この時の決闘市は年始に起きた『とある事件』によってかなりの被害が出ていたのだから、混乱も充分に収まっていない復旧段階の決闘市では誰も劉玄斎に気がつく事はなかったのだが…
それでも、一応は決闘市の公的機関へ黙認の『仕事』を装いつつ。劉玄斎は極力どうにか目立たぬようにして、２０年以上ぶりとなる決闘市へとその足を踏み入れつつ自らの『目的』の為に動いたのだ。

そうして…

彼は、そこで改めてその目に『孫』の姿を写した。
遠目から…見つからぬようにして…
自分の『血』を分けた、愛する女性との間に生まれた息子の、更にその息子の姿を…彼は、ようやくその眼に映すことが出来た。
…涙が、出そうになった。
遠目から本物の天城　遊良をその眼に映した瞬間に、劉玄斎の胸の内には込み上げてくるモノが感じられていたはず。
…何しろ、自分の血を分けた本物の『孫』。
すぐにでも邂逅し、自分が祖父だと伝えてやりたかった。今まで何もしてやれなかった事を謝り、孫のためならば何でもしてやりたい衝動をこの時の劉玄斎が感じた事は言うまでもなく…

とは言え…

その時の劉玄斎は、それ以上の行動を起こせるはずもなかった。
…当然だ。今更、どんな顔をして孫の前に顔を出せると言うのか。
せめて、もっと早くイノリが決闘市に居る事が分かっていれば…
いや、イノリが自分の前から姿を消した理由を、もっと早くに調べられていれば。きっと『息子』とその嫁が行方不明になるような事態にはさせないように動けたはずで、『孫』もあんな酷い目にあわせなくて済んだはず。
…孫の姿を見た瞬間に、劉玄斎の心に同時に浮かび上がってきたのはそんな感情。
２０年以上もの長きに渡り、彼は『真実』を知らずに見当違いの行動を起こし続けていたのだから…こんな自分が、今更『祖父』だと胸を張って会いにいっていいわけがない…
そんな『資格』など、無いのではないか…
血を分けた『孫』の実物を遠目から見て、そんな思いが心に溢れて

しまったからこそ劉玄斎はどうしても思ってしまったのだ。

こんな自分が…こんな、馬鹿な男が―

今更、『孫』にどんな顔をして自分が『祖父』であるなどと告げられようか…と。

何もしてやれなかったこんな自分など、『孫』にとっては邪魔な存在なのではないだろうかという思いに陥って。

…そして、劉玄斎は『孫』と邂逅することもなくデュエリアへと帰るしかなかった。

控えているデュエリア校の卒業式等の仕事もあったことで、元々長居している暇もなかったのだから、２０年以上ぶりとなる決闘市を懐かしむ間もなかったのはこの際仕方がないとしても…

それでも、直接『孫』を一目見たことによって、劉玄斎の心の内には更に『孫』への感情が大きくなっていたのは当然と言えば当然で。

…こんな自分が、孫のためにしてやれることは何かないのか。

あんな目に遭ってもなお折れず、【決闘祭】に優勝した誇らしい自分の孫に…なにか…してやれることはないだろうか、と。

そして、劉玄斎に悩める日々が続いていたある日…

そう、デュエリア校の卒業式も終わり、来年度へと向けてまた忙しくなってくる時期。そんな、毎日の仕事に追われている劉玄斎が、いつもの様に他に誰もいない学長室にて一人仕事に勤しんでいたある時に―

―『ふふっ、まさか本当に貴方が学長なんてしているとはねぇ、ええ。』

「ッ!?」

…それは、突然現れた。
聞こえてきたのは誰かの『声』。龍の耳に聞こえたのは、どこか聞きなれた…性根の腐ったような、心の底から捻くれているかのような捻じれた声であり…
…しかし、劉玄斎はその突如聞こえてきた声に自分の耳を疑った。
何しろ、自分の耳が確かならば…
その声の主は、とっくにこの世から居なくなっているはずの人物の声であったのだから。

そして、他に誰もいない学長室にて。突然聞こえたその声に、混乱している様子を見せている劉玄斎の目の前に『靄』と共に姿を現したのは―

「ふふっ、お久しぶり…と言うのも奇妙な感覚ですねぇ、お元気そうで、『逆鱗』。」

そう…

劉玄斎の目の前に突如現れたのは他でもない―
３０年ほど前に繰り広げられた、表と裏の決闘界による戦い、通称『表裏戦争』にて前【紫魔】、紫魔　憐造に敗れ、火口にその身を落とされて確かに死んだはずの男…
性根の腐った捻じれた男、裏決闘界融合帝―

【紫影】が、現れたのだ―

そして―

「な…て、テメェ!な、なんでテメェが!?ど、どっから現れやがった!

いや、それよりなんでテメェが生きてやがる！」
「まぁまぁ、積もる話もあるでしょうが…それより、私も少々忙しい身でして…用件だけ手短に話させて頂きますよ？」
「ッ！誰がテメェと話すかよぉ！生きてたってぇんなら、今すぐ殴り倒して綿貫のジジイに引きわた…」
「デュエリア校の各所に爆弾を仕掛けました。」
「なっ!?」
「ふふっ、これで少しは話を聞く気になってくれましたかぁ？」

存在からして嘘の塊のようなこの男の今の言葉が、例え嘘偽りだったとしても…
それでも、そこで一瞬だけ怯むと言う、屑には見せてはいけない『隙』を見せてしまった劉玄斎。
…だからこそ、その隙を見逃さなかった性根の腐った捻じれた男に、劉玄斎は畳み掛けられるようにして。
喋る事を許してしまったのは、劉玄斎の人生においても大きな失敗の1つ出会ったに違いない。
…何しろ、劉玄斎も【紫影】の残虐性は『表裏戦争』の時に嫌と言うほど目にしている。
デュエリア校に『爆弾』を仕掛けたという言葉も、嘘と片付ければ今すぐにでも【紫影】を殴り飛ばすことができる。しかし、もしソレが『本当』だったならば―
自分の判断1つで、デュエリア校に在籍している幼・小・中・高等部の大勢の学生が危険な目に晒されてしまう。これまでも大きな『事件』に巻き込まれ続けた学生達に、これ以上の危険が降りかかる可能性を万が一にも考えてしまっては…
ソレが『嘘』だと、頭では分かっていても。
それでも、今すぐ確証を得られるモノがなければ、劉玄斎とて下手に出る他なく…下手に【紫影】に手を出すことが、この時の劉玄斎にはどうしても出来ず…

「…驚きました。本当に『彼』の言った通り、随分とお優しい大人になったご様子で。ま、それはいいでしょう。さて、ではお仕事のお話と参りましょうか…ねぇ、お優しい学長先生？」
「…」

そして…『紆余曲折』を経て。
そう、本当に『色々』あった挙句に、デュエリア校の学生を人質に取られている所為で、【紫影】の話に劉玄斎は乗るしか選択肢を与えられなかった。
そんな【紫影】の提案は、なんでも学生の【祭典】をもっと大々的に、もっと大規模に行うというモノであり…それは決闘市をも巻き込んだ、世界でも類を見ないほどの豪華な祭典にするのだと言うモノだった。

そう…その裏で、決闘市代表の『とある少女』から、『竜の伝承』に伝わる『赤き竜神』を解放するという『真の目的』の為に…
大々的なカモフラージュを手伝えと、そう【紫影】は劉玄斎へと告げてきたのだ。
そして、祭典の運営にも関わる超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の方は、つつがなく手を回しているため問題は無いと言うことから…
…劉玄斎もまた、【紫影】の提案に乗る事以外に選択肢は与えられず。
まぁ、そんな、劉玄斎と【紫影】との間に、どんな攻防があったのかはまた別の機会に語られる話ではあるのだが。

…ともかく、劉玄斎は追い詰められていた。

どうすればいい…

何も打つ手がなく時間が過ぎるばかりでは、すぐに【決島】が始まってしまう。このまま【紫影】の言いなりになるばかりでは、何の罪も無い『赤き竜神』を持つ少女の命が危うくなってしまう。

…しかも、その『とある少女』は『孫』の幼馴染だというではないか。そんな少女に『最悪』の事態が降りかかる事になってしまえば、尚更『孫』に顔向けなんて出来なくなってしまう事は必至で…

けれども、【紫影】に今逆らえば、デュエリア校の大勢の学生の命が危うい。

そんな、螺旋に渦巻く苦悩の蔦と…どちらにも転べぬ重すぎる天秤によって、苦渋の板ばさみにされていた【決島】が始まる前の劉玄斎。

せめて、デュエリア本土の学生の身に安全が保障されれば。それならば劉玄斎も、【決島】の間だけでももう少し【紫影】に好き勝手はさせないように動けると言うのに…

しかし、【決島】が始まる前の現段階では、下手な動きをすれば【紫影】は感づいてしまうだろう。それこそ、見せしめに何人かの学生の命すら奪う行動に出るかもしれないという事を劉玄斎も分かっているからこそ、下手な行動を起こす事は出来なかった。

…だからこそ、せめてもの抵抗として。イースト校理事長の砺波浜臣を挑発し、『孫』を【決島】に出場せざるを得なくしたのは劉玄斎にとって一種の賭けだったのだろう。

『赤き竜神』の事情を知る者が、少しでも多く【決島】に出場すれば…【紫影】の野望も、断ち切れる可能性が大きくなるから…と、

それに、自分の『孫』ならばきっと—

…まぁ、【紫影】の『真の目的』が『赤き竜神』ではなく別の所にあったとか、天城　遊良の【決島】の出場が【紫影】にとっては確定事項であっただとか、そもそもこの時の【紫影】には誰一人として『殺せなかった』と言うことは…

この時の劉玄斎にとっては、知る由もなかったことではあるのだが。

ともかく…

仇敵である【紫影】の残虐性を、過去からよく分かっていたからこそ。

【紫影】に好き放題にされる事と、こんなときに無力な自分への苛立ちが、この時の劉玄斎の心にはひしひしと重く圧し掛かり続けていたのだ。

それはどれほど重い苦悩だったのだろう。

それはどれだけ苦い思いだったのだろう。

―しかし、彼の『苦悩』の種はそれだけでは終わらなかった。

そう、それは【決島】が始まる少し前…

【紫影】にいいように使われる苦しみによって、劉玄斎もまた焦燥に塗れどうにもならなくなっていた時に…

―ソレは、現れた。

「へぇ。本当に本物の『逆鱗』だ。」

…それは劉玄斎が、デュエリアにある自宅で頭を悩ませている最中でのことであった。

他に誰もいないはずの、広いが孤独を感じる寂しいリビングで一人、【紫影】への怒りと自分への苛立ちによって焦りを感じていた劉玄斎の目の前に…

「あ…あぁあ…ゆ、遊良…」

そう、あろうことか、そんなどうにも行かなくなってしまっていた『こんな時』に、劉玄斎の目の前に現れたのは他でもない。

―アマギ　ユーラ

決闘市にいるはずの、自分の『孫』と同じ顔をした…いや、自分の『孫』そのものが、突然何の前触れもなく現れたのだ。

「おい、勘違いするなよ。オレとアイツを一緒にするな。俺は確かにアマギ　ユーラだが…『今』のお前と、オレには何の繋がりもない。」

「…ッ…あぁ、そ、そうだなよなぁ…今更、どの面下げて俺がお前の…じいちゃんだって、言えるわけが…」

「違う。『そんな事』はどうでもいい。『今』のこの世界に生きる奴等なんて、どうせ全部偽者なんだ。アンタだけじゃない。オレにとっては、『今』のこの世界の奴等の誰とも…繋がりなんて無いってことだ。オレは『今のアンタ』の孫じゃない…『アンタの孫』は、今も決闘市でのうのうと暮らしているよ。何も知らずに、な。」

「な…い、一体どういう意味なんだそりゃ…ゆ、遊良が、２人居るってことかぁ？」

しかし、突然目の前に荒われたユーラが淡々と続ける言葉のどれもが、劉玄斎には理解出来なかった。

…ソレも当たり前か。

何しろ見た目からして同じ、名前も同じだと言うのに…目の前の『孫』そっくりな少年は、自分の事を『あまぎ　ゆうら』ではあっても天城　遊良では無いと意味のわからない事を言ったのだから。

…彼の言い分だと、遊良が２人居る事になる。

いや、はっきりと『そう』言っているかのような彼のあまりに堂々

とした言葉に、劉玄斎の頭はただただ混乱してしまうだけで―

そして―

「ソレをアンタに説明する義理もオレにはない。ユイが勝手に『ここ』に連れて来ただけだからな。」

突如現れたアマギ　ユーラが、同じく急にここに現れたもう1つの『気配』へと向かって声をかけたかと思うと。

「…初めまして、劉の一族の末裔。神に喧嘩を売り、名を隠した『龍超将軍』の遠き子よ。」

「…ッ!?」

もう一人…

この部屋に、別の誰かが現れて。

「…私はユイ…現在は訳あって、釈迦堂　ユイと名乗っておりますが…」

「ま、待て、テメェは一体何なんだ?遊良をここに連れて来たつったが…それに、何で『劉』の隠し名の事まで知って…」

「…ソレを貴方に説明したところで理解は出来ないでしょう。…貴方にしていただきたい事はひとつ。彼を…『アマギ　ユーラ』をここに匿っていただきます。同じ存在が、同じ時間に同じ場所に長く存在すると『私』にも色々と不都合が生じるので…」

「い、意味がわからねぇんだが…」

けれども、突然現れた謎の少女もまた、劉玄斎にはとても理解できない言葉をつらつらと並べるだけではないか。

…あまりに突然の状況に、ただただ混乱するばかりの劉玄斎。

何がどうなって、どういう事が起きているのか。

それが、劉玄斎には分からない。そう、自分の理解の範疇を超えた事が起こりすぎていて、劉玄斎には全く何もかもが理解できずにいるだけで…

「だから言っただろ？アンタは深く考えないでいい。どうせ理解出来ないだろうからな。とりあえず…オレが『事』を成すまで、ここを隠れ家にさせてもらうって事だ。決闘市じゃ【白鯨】が色々と探っているみたいだし…だから分かってるとは思うが、この事は他言無用だ。」

「あ、あぁ、そりゃ全然構わねぇが…け、けどよぉ、他言無用つっても今の俺は訳あって監視されて…」

「…それは問題ありません。【紫影】には既に通達済みです。」

「ッ!?テメェ、【紫影】と繋がってんのか!?」

「…それも貴方には関係の無い事です。…努々忘れることなかれ…今の貴方には、選択肢など用意されてはおりません…ご自分のやるべき事、それを遂行なさることだけをお考えください。では…私はこれで…」

「あ、おい待て…ッ、き、消えた？」

そうして―

のっぴきならない状況に置かれながらも、劉玄斎には背負うモノが更に増えてしまった。

…遊良、【紫影】、そしてユーラ。

『孫』の事と、仇敵の事に…そして、突然現れた孫と同じ顔をした謎の少年。そんな、誰にも言えない３つのことで…劉玄斎は、ずっと悩み苦しんできた。

…まぁ、とは言え【紫影】の方は、【決島】で何があったのかは既に記されている通りではあるのだが。

そう、本土に残ったデュエリア校の学生の安全は、【決島】の最中に水面下で劉玄斎が『手』を回していた甲斐あって、ここでは語られな

い劉玄斎の『協力者』によって全員の無事が確保された。
それはデュエリア校の学長として過ごした期間に、信頼の置ける腕利きの卒業生が【紫影】の放った刺客の悉くを打ち倒したおかげでもあるのだろう。そんな、表に記されている戦いの裏で、どんな攻防があったのかはまた別の機会に語られる事として…

…次に劉玄斎に衝撃が走ったのは、【決島】が終わってしばらくたった頃だった。

「…私が連れてきたアマギ　ユーラは消えました。」
「ッ!?き、消えたって…ど、どういう事だ!?」
「…言った通りです。先ほど、決闘市にて天城　遊良とアマギ　ユーラが戦いを行い…この世界の天城　遊良は…貴方の孫は、無事に勝ち残りました。」
「な…」

いきなり知らされたソレは、【決闘世界】の牢の中でのこと。
そう、名目的な『拘束』という名の、自分で自分を罰し続けていた劉玄斎の元に…初めて現れた日のように、いきなり何の前触れもなく釈迦堂　ユイが現れてそう告げてきたのだ。

「…良かったですね、実の孫の方が生き残って。…これは私としても喜ばしい事です、何しろ、貴方の孫の方が負けていればその場で『今』の世界も終わりでしたので。」
「…」

そして、何の感情もなく淡々とそう告げるだけの釈迦堂　ユイに対し。

何の前触れも無く、いきなりそう告げられた事によって複雑な感情に襲われてしまっている様子を見せる劉玄斎。
…当然だ。
『前の世界』から来たという、自分とは何の関係も無いと言い張ったアマギ　ユーラ。しかし『孫』と名も顔も全く同じ少年を、接触も会話もほとんど無かったとは言え劉玄斎は数ヶ月の間、自宅で匿っていたのだ。
それはいくらユーラが、食事などを必要とせず『異常』なまでに『眠り続ける』という、およそ人体には不可能で不可解な状態であったとしても。それでも、これまでずっと一人で暮らしてきた劉玄斎は初めて『他人』と暮らすという…
…そう、少なからず、『孫』と暮らしていたという感覚を、劉玄斎は感じてもいたのだから。
だからこそ、いくら自分とは関係の無い存在だと『向こう』が勝手に言っていたとは言え。それでも確かに少しの間同じ空間で暮らした『孫』と同じ名前、同じ顔、同じ声、そして同じ雰囲気を持っていた少年に、劉玄斎が何の感情も抱いていなかったわけがないのだ。
…弟分である李　木蓮に無茶を言って、現代では入手困難な『儀式』関連のカードを作成させたのだってユーラに対する劉玄斎の一種の親心…いや、祖父心のようなモノ。
まぁ、その祖父心は【決島】で天城　遊良にも自分のカードを渡すという行為にて発揮されていると言う事は今はひとまず置いておいても。
それでも、ほんの少しの間だけでも共に暮らした少年が消えてしまったという事実は…
そう、この世界の『孫』が生き残り、前の世界の『孫』が消えてしまったという釈迦堂　ユイからの淡々とした言葉は…
劉玄斎の心に、確かに複雑な感情を抱かせていて―
「俺ぁ…また何もしてやれなかった…ずっとうなされながら眠り続けるだけのアイツにだって…もっと、何かしてやれることがあったはず

だってぇのに…」
「…いいえ、貴方には何もすることはありませんでした。彼が眠り続けたのは彼が『邪神』を操りきれる『器』ではなかったためです。…自らの世界の終局を超え、次なる『今』に来た時点で…彼は、既に人間ではなかった。」
「ッ！けどよぉ！それでも…アイツは…ユーラは…」
「…不思議な人ですね。自分の孫が勝ち残り、この世界も消滅から逃れられたと言うのにそんな顔をするなど…『私』には、理解できかねます。努々忘れる事なかれ…では、私はこれで。もう、二度と顔を合わせる事は無いでしょう。」
「ッ、ま、待ちやがれぇ！まだ話は終わってな…」

それは劉玄斎が『牢』から出る、たった1日前の出来事。
出会いもまた急だったと言うのに、別れもまた急すぎる宣告を一方的に突きつけられ…

そうして、物語は現代へと戻ってくる―

―…

―決闘市の東地区、そのとあるＢａｒ。
時間にして深夜に差し掛かりそうな、そんな都会の喧騒もやや落ち着きを見せ始めたそんな時間に…

そう、人々の多くも既に寝静まっているであろう時間帯、通行人もほとんど見かけないような暗い道。そんな、決闘市の東地区の外れにある、小さいながらも立派な佇まいをした、通が好みそうな隠れ家的Ｂａｒの中で…

「…やっぱ、テメェの作る酒は美味ぇな。」
「お褒めいただき光栄です。」

劉玄斎は一人、飲んでいた。
…しかし、酒を嗜む者ならばまだまだ飲み明かすであろう、この休日前の深夜だというのにも関わらず。
不思議なことに、普段は常連で一杯になっているこのＢａｒにはカウンターに座った劉玄斎以外に誰１人として客は居らず…それは劉玄斎が人目につく事を嫌って、このＢａｒを貸切にしたが故の静かで孤独な一人飲みでもあるのか。
そんな劉玄斎の体から発せられる無意識の圧は、久々に訪れた決闘市とこの店をどこか懐かしむ雰囲気が漂いはしているものの…
しかし、それ以上に何やら悲痛なモノを秘めているかのような、どことなく寂しさのようなモノが滲み出ているのはきっと気のせいなどではないはずだろう。
…劉玄斎にとっては、久々に訪れた決闘市。
年明けに一度、『孫』の顔を一目見るためにお忍びで…
数ヶ月前に一度、『仕事』の為に各決闘学園へ…
そして、今。
出禁が解かれてから、実に３度目となる決闘市の地を…劉玄斎は、この昔なじみのＢａｒでその空気を懐かしんでいるのだろう。
そう、若かりし頃…それこそ、決闘市を出禁になる前まで。ルーキーと呼ばれていた時分に、仲間内で幾度となく通いつめた行き着けであるこのＢａｒに今…劉玄斎が訪れて酒を飲んでいるのも、きっと自然に彼の足がこのＢａｒへと向いてしまったからこその来店のはず。

…つい先ほど、飛行機の最終便で決闘市に到着したばかりの劉玄斎。

きっと、Ｂａｒの店主も驚いたに違いない。何しろ、ずっと昔に決闘市を出禁になったはずの男から…何の因果か、久々に来店の電話を貰ったかと思うと、店を貸切にして欲しいというのだから。

まぁ、確かに『逆鱗』の劉玄斎が、一般客に混ざって酒を飲むような事になれば、軽くこの辺一体がパニックになると言う事はこの店主とて分かっているからこそ…店主もまた、店を貸切状態にすると言う事を快く承諾してくれはしたのだが…

…とは言え、たとえこの店内に他の客が居たところで劉玄斎に声をかけられるはずもなく。

そう、まるで世紀末を生きているのではないかと錯覚するほどに鍛え上げられた巨大なる体躯と、その丸太のような四肢の放つ圧迫感はこの隠れ家的Ｂａｒにはあまりに似合わない。

それに加え、今の劉玄斎の醸しだす『孤独』なオーラはきっと…一般人であっても『何か』を察してしまうような、話しかけてはいけないような雰囲気となりてこの店内に充満しているのだから。

…だからこそ、今の悲嘆に暮れているかのような劉玄斎に話しかける者が居るとしたら、長年Ｂａｒのマスターとして客の相手をしてきた歴戦の店主か…

…はたまた、『逆鱗』の劉玄斎にも引けを取らぬ、『よほどの者』だけ。

そう、『よほどの者』でない限りは―

「カカッ、ほらみろ、やっぱ『ここ』に居やがった。賭けは俺様の勝ちだぜ？」

「…はぁ、わかりましたよ。奢ればいいんでしょう？奢れば。しかし劉玄斎がここまでヘタレだったとは。」

「…あ？」

『孤独』なオーラにて、一人酒を飲んでいた劉玄斎へと向かって。
『本日貸切』の看板のかかった店の入り口がいきなり開いたかと思うと、突然劉玄斎へと向かってかけられた声が『２つ』あった。

…そう、店の外まで醸し出されている、他者を寄せ付けない『孤独』のオーラを意に介さず。

『逆鱗』の劉玄斎へと向かって、声をかけてきた『よほどの者』とは他でもない―

「…テメェら、なんでここに…」
「デケェ図体してセンチメンタルなテメェのこった。すぐに遊良に会いに行く勇気もねぇってんで、色々浸りてぇテメェが久々の決闘市で来るとこつったら…このＢａｒしかねぇだろ？」

それは歴戦を駆け抜けたかのような渋い声に、特徴的な渇いた笑いを響かせた一人の男。
真っ黒な帽子とトレンチコートがよく似合う、それでいて大空を自由に飛びまわる鳥のような雰囲気をしているものの、しかしおよそ人間には近寄りがたい独特の鋭い目をしている…
豪放磊落、天下無双、世界最強のエクシーズ使い―

―【黒翼】、天宮寺　鷹峰

そして…

「私はすぐに彼に会いに行った方に賭けたんですがね。おかげでこのバカに奢る羽目になるとは。」
「カッカッカ、だから読みが甘ぇつったんだ。」

「貴様にだけは言われたくないがな。」

もう一人は深海が如き深さを感じさせる声で、少しの呆れを交えた言葉を放った男。

それは大海を自由に泳ぎまわる巨魚のようでありつつも、それでいて隣の巨大なる力に全くもって慄いていない、遥か深みから大空に跳ねあがることすらも厭わない雰囲気すら感じさせる…

そう、【黒翼】に連れ立って、高級感のある上品な白いコートを脱ぎつつ劉玄斎へと近づいてきたのは…

誇り高き歴戦の王者、決闘学園イースト校理事長―

―元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣。

そんな【黒翼】と【白鯨】の2人は、それぞれこの店に慣れた様子で劉玄斎を挟むようにしてカウンター席に腰を下ろすと。

「マスター、いつものだ。」

「かしこまりました。砺波様もいつものでよろしいですか？」

「ええ、お願いします。」

突然現れた顔なじみに、混乱の色を見せている『逆鱗』の劉玄斎を他所に…

鷹峰は度数の強いウィスキーをロックで。砺波はここのマスターオリジナルのカクテルを注文しつつ。

手早く出された酒にそれぞれが一口だけ口を付けると、一息つくかのようにしてそれぞれが静かな吐息を漏らして―

…

そして、一瞬の静寂の後。

ジャズの調のみが聞こえる静寂を破るように口を開いたのは、【黒

翼】天宮寺　鷹峰であった。

「ふぅ…まっ、とりあえず孫同士の対決はこれで一勝一敗のイーブンってとこか？カカッ、ガキの頃からのを数えたらキリがねーがな。」

鷹峰から零された言葉…

それは紛れもなく、劉玄斎の秘めている『真実』を知っているからこそ発せられる何の遠慮も無い確信を堂々と突く言葉であった。

…事の張本人である劉玄斎でさえ、長きに渡る情報収集と、そして偶然が重なってようやく知りえた『真実』であると言うのにも関わらず。

ソレを、まるで劉玄斎が知るよりも前から知っていたかのようにそう言葉を漏らす天宮寺　鷹峰の言葉は…あくまでも静かではあるものの、しかしどこまでも鋭い言葉となりて劉玄斎へとゆっくりと届く。

…とは言え、デュエリアにて綿貫から『直接本人に聞いてみるが良い』と言伝を預かっている劉玄斎も、鷹峰からのその言葉を聞いても動揺する様子は見せず。

そのまま、劉玄斎は鷹峰の言葉が終わるのを待ってから…

再度、鷹峰のよりも更に度数が強い自分の酒をゆっくりと一口飲みつつ、ゆっくりとその口を開き始めて。

「鷹峰…テメェ、いつから知ってやがった。俺と…遊良の事をよぉ。」

「あぁん？カカッ、ンなモン、遊良が生まれる前からに決まってんだろーが。何しろ俺の息子が昔、お前さんに似たガキとよくつるんでたからなぁ。…まっ、ソイツはお前さんみてーなゴツい男じゃなく、似ても似つかねぇ優男だったがよぉカッカッカ。」

「イノリの方に…似たんだろうなぁ。俺に似なくて良かったぜ。」

「カカカッ、違ぇねぇ。」

「…優男？中央校の天城　竜一が…優男……まぁ、別にいいですが…」

また、そんな重々しい会話のすぐ隣で。
なにやら鷹峰の言った、『優男』という言葉に強い引っかかりを覚えた様子を見せるイースト校理事長、砺波　浜臣。
…そう、昔からずっと決闘市を拠点にしていた【白鯨】は知っている。いや、嫌でも耳に入ってきていた。
『族』が幅を利かせていた過去の決闘市で、半ば伝説となっている決闘学園中央校の天城　竜一と言う男の事を…
【決闘祭】で『優勝』の経験もあるその男が、かつては毎日のように決闘市を騒がせていたと言う事は、過去の決闘市をよく覚えている大人からすればある意味懐かしさすら覚える出来事なのだろう。
それ故、その当時『族』を纏め上げていたその男を指して、『優男』と称するのは砺波からすれば特に引っかかることなのだろうが…
ともかく…

「…つぅかよぉ、ンな昔から分かってたんなら、何で俺にもっと早く教えてくんなかったんだ？」
「あー…そりゃアレだ…ま、色々あったんだよ、イノリの奴にもよ。…俺ぁ昔、一度だけこの街でイノリに会ってんだ。その時に色々…あの女に、頼まれてな。『今』のお前さんならこの意味、わかってんだろ？」
「あぁ…そうか…そうだなぁ。」

つらつらと語られる鷹峰の言葉を、劉玄斎は酒と共に静かに飲み込むだけ。
そう…最愛の女性が、何故自分の前から姿を消したのか。その真の理由を既に知りえている劉玄斎は、鷹峰が過去にイノリに会っていると聞いても最早取り乱すような事はしないのだろう。
「俺はイノリを守れなかった…ソレだけじゃねぇ…息子と、その嫁も守ってやる事が出来なかった…孫と…アイツも…」

だからこそ、酒の効いたその口から発せられる巨大なる龍のその言葉は、この世の何よりも重々しい言葉となりて静かに静かにＢａｒの中へと零されるだけであり…

…その言葉の中には、最愛の女性の思いをその最期まで感じ取れなかった自分の不甲斐なさが滲み出ている。

それだけでは無い。劉玄斎の言葉の中には、自分の息子とその嫁となった女性への懺悔の気持ち。そしてそれ以上に、これまで悲惨な目にあってきた孫と…

他人には零せないものの、確かにもう一人の孫であった『彼』のことを強く思っている様子が垣間見える。

…龍の口から零される、強い懺悔と後悔の念。

これまで何もわかっていなかった、不甲斐なさ過ぎる自分がどうしても劉玄斎には許せない。それこそ、最愛の女性が自らの前から消えた後から…劉玄斎の人生は後悔の連続であり、全ての真実に手が届いた時には『時既に遅し』という場面ばかりであった事が、劉玄斎には何よりも許せないのだ。

「…だがソレは仕方のないことでもある。何せ相手が相手だ、今の貴様ならばまだしも…昔の貴様では、天津間家に楯突く力が足りなかった…それだけのことだ。」

「まっ、遊良の両親の事はれんぞーの野郎がランに潰されちまったってのも原因のひとつだけどな。」

「…」

しかし、それでも遥か過去から遊良と劉玄斎の繋がりを知っていた様子の鷹峰と、【決島】にてソレを知ったであろう砺波はこの酒の場の雰囲気を借りつつ、静かに劉玄斎へと語りかけ続けるのみ。

…そうして、静かなジャズの調がＢａｒの中に静寂を広げていく。

きっと、赤の他人の第三者がこの場を見たら驚く事に違いない。

だってそうだろう。彼らがルーキーと呼ばれていた時分ならばいざしらず、今では決闘界における重鎮となった、それぞれが比類なき伝説を打ちたて続けた歴戦に刻まれし『逆鱗』、【黒翼】、【白鯨】の三人が…

まるで若き日のように、こうして肩を並べてＢａｒのカウンター席で酒を飲んで話しているだなんて、一体誰が想像できようか。

こんな光景、若い人間が見たら感涙にむせび泣くか…彼らをよく知る歳の者ならば、心に熱いモノが込み上げるに違いないこと。

それ故、貸切となっているこのＢａｒにおいて。この光景をその目に映す事が出来るのが、ずっと昔から彼らを見てきたＢａｒのマスターだけというのもまた…勿体無くもある意味で正しい、約束された星霜の時間と言えるのだろうが…

…

静寂。

それでも、１つの会話を終えた彼らの間に流れるのは、ジャズの旋律すら空気を呼んだどこまでも張り詰めた異様な雰囲気。

…店内に他に誰もいないことを考えても、これ程の静寂が広がっているのはある意味異様と言えば異様。

それは融けた氷がグラスに当たる、『カラン』とした音が店内によく響くほどに鎮まりつつも張り詰めた…それぞれが戦いの中で、デュエルを通して会話を重ねてきた人種であるが故に生じるであろう、切れた会話の中で次の一手を考えているかのような静かな雰囲気。

また、Ｂａｒのマスターは耳を傾けてはいない。

そう、それが『矜持』なのだと言わんばかりに、居るのに居ない存在感にて静かに邪魔をせず仕事を全うし続けているだけのＢａｒのマスターもまた…『逆鱗』、【白鯨】、そして【黒翼】だけが居る店内にて、どこまでも仕事に徹底していると言うのがまた店内の静寂を広げているだけ。

…そして、しばらくの沈黙の後に。

ぞれぞれのグラスが、丁度空になったタイミングで…

再び口を開いたのは、『逆鱗』の劉玄斎で―

「鷹峰、砺波ぃ…今まで遊良のこと、面倒みさせてすまなかっ…」
「ンなモンはいらねぇ。…別に、お前さんの為じゃねぇからよ。」
「…それ以上の言葉はあの子を侮辱することになる。別に、あの子が貴様の『何』であろうが関係は無い…あの子は自らの意思で立ち上がり、自分の足で道を進み、そして自らの力で強くなった…ただ、それだけだ。」
「けどよぉ…テメェらにも『上』から色々…」
「カッカッカ、『奴ら』も俺様に手ぇ出すほど馬鹿じゃねぇよ。」
「同じく。それに私はこの奔放男とは違って社会的地位もそれなりに持っているからな。下手に手出しはしてこないさ。」
「あぁ？誰が奔放男だってんだコンチクショウ。」
「フッ、心当たりがある分、昔よりはマシのようだがな。」
「チッ、『こっち側』に来たからって調子乗りやがって…」

しかし、重々しく発せられたその劉玄斎の言葉を、砺波と鷹峰は即座に『否定』する。
…それは彼らが、彼の『孫』を己の弟子として認めているが故の『否定』の言葉に違いない。
天城　遊良という、『Ｅｘ適正の無い』、この世界においてはどうしようもない『出来損ない』として扱われてしまう少年を…【黒翼】と【白鯨】という、この世の頂点を知るデュエリストがそれぞれ彼のことを『弟子』と認めているのだって、事情を知らない者からすれば一体何がどうなって『そうなった』のかすら理解出来ぬほどの、あまりに信じられない奇跡だと言うのに。
そう、自分の子どもすらまともに育てた試しがない、あの自由奔放が度を過ぎていることで有名な天宮寺　鷹峰と…星の数ほどいた弟

子入り志願者を片っ端から無視していた、弟子を取らないことで有名だったあの砺波　浜臣が。
何の因果か、天城　遊良という『Ｅｘ適正』のないデュエリストを弟子として認めているだなんて…およそ他人からすれば、決して理解できるはずもなく…
それでも、確かに『天城　遊良』のこれまでを知る砺波と鷹峰の口からは、天城　遊良という少年を微塵も憐れんでいるような言葉は聞こえず。
発せられるその声は、自らの道を必死に生き抜いてきた少年の軌跡を…決闘界の頂点を知り、そして人外の領域にまで至ったモノたちが、ただただ認めているだけという、それだけの言葉。
…それは別に、彼らの『弟子』が『誰の孫』であったからと言っても何も変わらないのだろう。
だからこそ…

「劉玄斎、貴様は知らないだろう？彼は時々…自分の事を、『恵まれてる』などと言うのだ。Ｅｘ適正もなく、散々絶望を味わってきた子どもが…私や鷹峰やトウコさんに鍛えられる事を…恵まれている…とな。」
「カカッ、自分の境遇考えりゃ、その程度で恵まれてるなんて死んでも言えねぇだろうってのによぉ。」
「だが、それでもあの子は絶望を乗り越え、そして何が幸せなのか感じる心を失わずにここまで成長した…それに関しては、私達も何もしていない。全てあの子が乗り越えた、あの子の人生の軌跡だ。」
「そうか…アイツぁ…一人でそんなに強く…」
「けどまっ、Ｅｘデッキ使えなくてもそれなりのモン持ってんのは、間違いなくテメェの血だろうなぁカッカッカ。」
「フッ、若いころ貴様がよく言っていたな。『Ｅｘデッキを使わずに勝つ方が凄いだろうが』、と。」
「おうおう、そういや、テメェらよくソレで喧嘩してたよなぁ。ソリが合わなくて殴りあってよ、ンでよくトウコの姉御に拳骨喰らってた

けっかぁ？」
「…クハハ、今更、昔の事引っ張り出してくんじゃねぇ。」
「…若気の至りと言う奴だ。」
【黒翼】と【白鯨】は、かつてのような壁のない言葉で…少しの静寂を織り交ぜながら、『逆鱗』へと語りかけ続ける。
…ルーキーと呼ばれていた時代に、幾度となくこの店で酒を交わしながら、色々な言葉を紡き合った仲。
そう、酒の切れ目に、少しの静寂が流れようとも…しかし、これまで過ごして来た時間によって、会話などあってもなくても彼らには何かしらの『言葉』のようなモノが交わされているのか。
…少しの会話のその後に、また少しだけ訪れる静寂の音。
そして静寂の後に、また再び誰かが口を開くだけ。

「…まっ、ずっとウチのクソガ…孫やら、ルキの奴が傍に居たからな。遊良がひねくれなかったのはソコんトコがデケェんだろうよ。…おう、アイツはお前さんが思ってる以上に強ぇぞ？何せこの俺の弟子なんだからなぁカッカッカ。」
「そして今は私の教え子でもある。だからあの子は益々強くなるだろう…それこそ、全盛期の貴様を超えるかもしれない程にな。」
「だからよ、お前さんがどんだけ遊良に負い目を感じてもいいが…それでも、きっとアイツはお前さんの孫だって事も…カカッ、『誇る』、だろうぜ？」
「…あ？」
「そうだな。貴様がどれだけあの子に負い目を感じているのだとしても。ソレが先日の大きな力の衝突によるモノなのだとしても…それでも、きっとあの子は『誇る』だろう。貴様の孫だという自分を…『逆鱗』と呼ばれた貴様のことを、な。」
「…」

夜が更ける…

ただただ静かに、夜が少しずつ更けていく。
グラスの氷が、酒によって少しずつ融かされていくように…どこまでも静かに更けていく夜の空気が、もうすぐ訪れるであろう冬の寒さをただただ静かに街の中へと運んでいく。

…もうすぐ、翼の少年へと全ての『真実』が伝えられることだろう。

その資格を龍は得た。その義務を竜は持った。
そうして…

【黒翼】と【白鯨】という、2人の旧友からその言葉を送られた大きな龍は何を思い何を感じたのだろう。

覚悟を決め、決意を秘め。その分厚い手で、顔を覆い隠した小さき竜の手の向こうからは…

透き通った雫が…

静かに、零れていたのだった―

―…

ｅｐ１１２「休話―酒の席にて」

…物語は、一度過去へと遡る。

それは昨年度の【決闘祭】…

その、『前日』のこと―

「しかし、天城　遊良、か……まさかあの浜臣が、あのＥｘ適正の無い子をイースト校代表として出場させるとはのぅ。」
「お、そうだ。その遊良のことだが……アイツ、劉玄斎の孫だぜ？」
「ブッ！…お、お主今何と言った!?」
「カカッ、言った通りだ。そのまんまの意味だっての。」

決闘市、その中央地区にある会員制、完全個室のとある特別なＢａｒの一室。
他に誰も聞いている者が居ないそこで、エクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰が静かに呟いたその言葉を聞いて…
『妖怪』と呼ばれる翁、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】最高幹部である綿貫　景虎は思わず飲んでいた酒を噴出してしまっていた。
…それは祭典の前日に、人知れず夜の街へと消えていった『妖怪』綿貫　景虎へと、エクシーズ王者【黒翼】天宮寺　鷹峰が誰も邪魔の入らぬところで酒を酌み交わしていた途中での事。
そう、【王者】やその道の著名人、有名人などが秘密裏に利用する事でも知られているそのＢａｒで、心から驚いた表情を見せる綿貫の顔は決闘界の生き字引としても知られる彼を持ってしてもあまりに衝撃的な事実であったからに他ならない。
何しろ、この男と来たらそんな大事な事をこんな酒の席で思い出し

たように告げてくるものだから…
　自らも知らなかった劉玄斎とＥｘ適正の無い少年のその繋がりを、思わぬところで知らされた綿貫の心情は果たして如何なるモノとなっているというのだろう。

「ゴホッ…な…い、いや、しかし……ま、まさか天城　竜一！あやつ、もしかしてイノリの子か？」
「あぁ。劉玄斎とイノリのガキの、そのまたガキが遊良だ。」
「なんと……じゃ、じゃが解せぬ、天津間　イノリがなぜ決闘市に…いくら名を変えていたとは言え、決闘市に居たのならば儂の情報網に引っかからぬはずがないと言うのに…」
「カカッ、そこんとこは『天津間』の隠蔽工作に決まってんだろうが。いくらジジイでも、三大貴族の『本気』の根回しを気付けるわけもねぇってか？ま、イノリの方も、劉玄斎の野郎が出禁くらってたから寧ろ丁度よかったんだろ。」
「ぬぅ…天津間　イノリ…天津間家から追放されたとは知っておったが、まさか決闘市に居たとは何と言う盲点じゃ…し、しかし、じゃ。鷹峰、お主、どうしてソレを知っておる？この儂でも知らなんだ事を…」
「実はよぉ…俺ぁ、この街で一回イノリに会ってんだ。」
「なっ!?」

　しかし、そんな綿貫の事を意に介さず。
　次々と綿貫の度肝を抜き続ける天宮寺　鷹峰は、どこまでもあっけらかんとした態度を崩さぬままに酒を交えてただただ言葉を続けるだけ。
　そんな鷹峰は、酒の入ったグラスを見つめながら遠い目をしつつ…
　一度だけ…生涯でたった一度だけ、本当に気まぐれで自分の息子を幼等部に送っていった時のことを思い出しながら―
　―『おいおい…ンでテメェがここに居んだ？あの野郎、ずっとテメェのこと探して…』

―『ごめんね鷹峰君、誰にも言わないで…私、あの人の足枷にはなりたくないの。』

「強ぇヤツだったぜ、あの女は。三大貴族の地位を捨ててまで、愛した男の為に泣き言も言わず、たった一人で劉玄斎のガキを産んで育てやがった。…遊良が生まれてすぐ、病気で死んじまったらしいがな。」

「鷹峰…お主、ソレを知っておったと言うのになぜ儂にすぐ教えなんだ。儂が把握しておれば、小龍もあそこまで荒れることは無かったはずじゃ。」

「おぅおぅ、ちったぁ落ち着けってんだよジジイ。殺気が駄々漏れてんぞ？」

「…茶化すでない。」

「チッ、わーったよ。俺様だってなぁ、イノリの事を劉玄斎に教えてやろうと思っりもしてたんだぜ？けどあの女に頼まれてな…何でも、イノリの奴ぁ劉玄斎の子を産む代償に、今後一切劉玄斎の野郎と会う事も、自分の事を知らせるのも天津間家から禁じられたんだとよ。その結果がアレだ…イノリは三大貴族を追放。当ても無く黙って一人で劉玄斎のガキを育て…劉玄斎の野郎は女々しいほどに荒れちまって、立ち直ったがまた荒れて…難儀なモンだぜ。」

「…何と言う事じゃ…その時に、儂が介入出来ておれば…」

「カッカッカ、無茶言うんじゃねーよ。貴族の『禁』を破った代償が『どんなモン』なのかは…ジジイだって、【白夜】のジーさんの一件でよーく知ってんだろ？」

「ぬぅ…」

「ま、あの頃は俺様も色々と忙しかったからなぁ。劉玄斎の野郎に構ってる暇も無かったし、正直言って遊良を引き取るまですっかり忘れてたってのもあるが…カカッ、後にも先にもイノリだけだぜ、この俺様が女なんかを『凄ぇ』なんて思ったのは。」

「…」

口惜しげに漏らされる綿貫の苦言は、きっと自分の力の足りなさを

痛感しているからこその苦々しげな溜息でもあるのだろう。
…しかし、それも当然か。
何しろ、綿貫はこれまでずっと苦しみ続けてきた劉玄斎を見てきた。しかも、ソレがある理由から特に可愛がっていた小龍であるのだから…
イノリを失った小龍が苦しみ悶え、そしてどうやってソレを乗り越え、しかし再び折れてしまった劉玄斎その一部始終をずっと見続けてきた綿貫からすれば。もっと自分がどうにかしてやれなかったモノかと、どうしても考えてしまうのだろう。

また…

【決闘世界】の最高幹部として、貴族ひいては『三大貴族』をよく知る綿貫だからこそ。天津間　イノリの身に起こった事が、綿貫には痛いほどよく分かってしまう。
イノリが劉玄斎の前から姿を消したその時…それはきっと、イノリ一人の問題では決してなかったはず。
ソレこそ、この世の特権階級に位置する三大貴族の…その一角の正統なる血を引く令嬢が、どこの馬の骨とも分からぬ男に孕まされたと言うのは、その当時はきっと天津間家でも大きな問題となったに違いないのだ。
それ故…天津間　イノリが劉玄斎の子を産むために、一体どれほどのやり取りが天津間家で行われたのだろう。
おそらく、天津間　イノリは自ら貴族の地位を捨てる覚悟を見せたはず。しかし、それだけは怒りが収まらぬ天津間家の当主は、あろうことか娘が腹の子の父親と結ばれる事を断固として拒否したと思われ…そして、貴族から追放される娘に、様々な『禁』を与えたというのがその時に起こった事と思われ…
三大貴族の科した『禁』…それすなわち、世界の法よりも重い処罰であるソレは貴族から追放される少女が一人では覆す事などできない絶対の『憲』。

もしソレを破れば、愛する『逆鱗』にまで危害が及ぶ…いや、きっとそれ以上―

彼の知人・友人・関わりのある者、それに親類である彼の妹やその夫、それに加えそこから関わりのある人々の命…そしてそれ以上に、自分の息子にまで危険が及ぶ可能性があると言う事を、天津間　イノリはそこで理解したはずで。

だからこそ天津間　イノリは…いや、天城　イノリは、たった一人で劉玄斎の子どもを産み、誰にも頼らずに息子を育て…そして、最期の最期まで劉玄斎に会うことなく亡くなってしまった。

果たして…

天城　イノリという女には、どれほど強い覚悟があったのだろう。

鷹峰から、思いがけない事実を聞かされ、瞬間的にそこまで『理解』してしまった『妖怪』綿貫　景虎だからこそ―

三大貴族の令嬢と言う、なに不自由無い暮らしをしていたはずの箱入りのお嬢様が庶民にまでその地位を落とし、愛した男に会う事も許されず、しかし愛する男とのたった一つの繋がりである息子を大切に育て上げ、最期の時だって愛した男に真実を告げられず一人で逝ってしまったその女性の…

その、恐るべき『覚悟』と凄まじいまでの『強さ』を、一瞬で深く理解出来てしまった『妖怪』は…

その目に、隠す気もない大粒の雫を浮かべつつ…

「…天津間家め…この儂をコケにしよってからに…」

「カカッ、だから殺気が駄々漏れだぜジジイ。【決闘祭】の前だってぇのに人でも殺すつもりかよ。」

「安心せい、今すぐ感情に任せて動くほど儂も若くはないわい。…じゃが、この仕返しはいずれ果たさせてもらうわい…いずれ、の。……ん？待て、するともしや、１０年前の天城君の『あの』馬鹿馬鹿しい報道も…」

「あぁ、天津間家の、ヒステリーな妹の方がやらかした事だ。ま、イノリが生きてりゃ遊良の扱いももう少し違ったんだろうが…イノリが

死んじまった事で、嫌がらせも度が過ぎるぐれぇになっちまったって感じだろ。遊良の親の事ぁまだよくわからねぇが…もしかしたら、ソレも…ったく、本当に胸糞悪ぃ話だぜ。何せ遊良がここまで扱き下ろされてんのも、元を辿りゃ天津間家の嫌がらせだってんだからよ。」

「やはり…そういう事じゃったか…」

鷹峰からの言葉を聞いて、何やら色々な事が『腑』に落ちた様子を見せる『妖怪』、綿貫　景虎。

…一体、その白髪と白髭に隠れた彼の素顔は今、いかなる表情となっているのだろう。

綿貫だって、ここで鷹峰から事の真実の欠片を伝えられるまでは、Ｅｘ適正の無い少年に対し過度な興味は抱いては居なかった。

そう、誰も信じられるはずがない…三大貴族の１つが、たった一人の少年を貶める為だけにメディアを掌握し印象を誘導するなど。

けれども、今まさに『点と点』が『線』として繋がったからこそ―

「うむ、相分かった。天津間家が１０年前にメディアを使い天城君を叩いたのも、ソレが大いに『間違い』であったことも…よく分かったわい、憑き物が落ちた気分じゃ。」

超巨大決闘者育成機関【決闘世界】の最高幹部として、そして全ての若きデュエリスト…ひいては、彼がこれまでその成長を見守ってきた、およそこの世の全デュエリスト達の父として。

綿貫もまた、どこか霧が晴れたかのように少々スッキリとした表情を見せていて―

しかし―

「…それで？」

「あ？」

…そこまで事の顛末を理解した綿貫はそこで、１つゆっくりと言葉を発しつつ。

静かに、一端『話』を区切り始めた。

「この儂に、お主は『何』をさせたいんじゃ？いきなりこんな事を話して、儂を炊き付けてそれで終わりと言うわけではあるまい？」

「カッカッカ、話の早ぇジジイで助かるぜ。……劉玄斎の『出禁』を解く。アイツを、決闘市に入れるようにする。」

「…貴族連の決定に逆らうつもりか？…まぁ、【王者】であるお主ならば可能といえば可能じゃが…」

「あぁ。けど、いくら俺様でも流石にお貴族様に真正面から喧嘩売ってたら時間がかかりすぎる。だからジジイに頼むんだぜ？『白桜院家』に口聞いて、劉玄斎の出禁を解かせろ。」

「儂を何じゃと思っておるんじゃ…いくら儂でも、三大貴族に口聞きなど…」

「出来ねぇとは言わせねぇぞ。白桜院家に親類潜り込ませてるじゃねーか。」

「何故ソレを知っておるのじゃ……なるほど、トウコちゃんから聞いたのか。…まぁ、確かに出来んこともない。しかし、じゃ。白桜院家が口出ししたところで、あの天津間　ネガイが真っ先に反対を示すことは目に見えておるじゃろ。何せ、ちょっとした事でいきなりヒステリー起こすからのぅあの小娘…」

「カカッ、ネガイのババアも綿貫の爺にかかりゃ小娘と来た。ま、確かにそれだけじゃ足りねぇ…けど、俺様にもちと思い当たるツテがある。ホントならトウコの姉御からも煉獄園家に口利かせてぇ所だが…ま、姉御はまだ意識が戻ってねーからソレどころじゃねーがな。」

「それはお主がやりすぎたからじゃろ…トウコちゃんをあんなにボコしおって。」

「カカッ、そりゃ仕方ねーだろ。何せ相手が相手だ。いくら姉御がれんぞーの『闇』のせいで弱くなってたっつっても…その辺の雑魚と違って、本気で俺様のこと殺しにかかる姉御が相手じゃ、俺様だって手加減なんざしてる暇ねぇっつうの。…久々だったぜ。あんなに殺気駄々漏れの姉御とデュエルすんのはよ。俺様を【紫影】の野郎と間違えてるみてぇだったぜ。」
「ぬぅ…憐造め、トウコちゃんまで操るとはのぅ…」

彼らの口から語られるは、この【決闘祭】の盛り上がりの『裏』で暗躍している前融合王者【紫魔】、突如として蘇った『鬼才』紫魔 憐造の事ついて。
それはこのもう少し『後』に決闘市に起こる『異変』について、先んじて事情を『知って』いる鷹峰と綿貫だからこそ交わされる会話の内容でもあるのだが…
とは言え、【決闘祭】も始まっていないこの段階では、今の彼らに出来る事は限られていることもまた事実。
…この時点において、綿貫も鷹峰も知っている。蘇った『鬼才』が『何』をしようとしているのかを、『彼の娘』という内通者から聞いているから。

それ故、そのまま綿貫は静かにグラスに残った酒を一息で呷った後に―
短く息を吐いたかと思うと、先ほどと『同じ言葉』にて鷹峰へと続けて言葉を発するのみ。
「…それで？」
「あ？」
「その続きは？お主は、儂に見返りに『何』をくれると言うんじゃ？三大貴族に口を聞くという、とんでもなく危ない橋を渡るこの儂に…」

『妖怪』の口から零される、酒の混じった言葉と共に伝わってくるのはどこか冷たい、それでいて相手を対等な者として認めているからこそ零される『妖怪』の正当なる報酬の確認。
…そう、ソレがいくら可愛がっている小龍に関わる事であるとは言え。綿貫だって、危ない橋を渡る事に違いは無いのだ。
三大貴族に口を聞く…いや、言う事を聞かせる。
三大貴族でもないモノが、三大貴族と同じだけの権力を発しようとしている。ソレが果たしてどれだけのリスクを負うのか、そしてソレがどのような結末を齎すのかは、三大貴族ではない者からすれば想像することすら憚られるとてつもない危険な行為であることは言うまでもない事であり…
そして、鷹峰は『ソレ』を承知で綿貫へと『ソレ』を頼んだ。
だからこそ、綿貫もまた天宮寺　鷹峰へと対し、相応たる『報酬』を望むのは極々自然な当たり前の行動と言えばそうであり…

そして…

綿貫からそう問われた鷹峰は、少し考える素振りをみせつつ…
何か1つ、良い考えが浮かんだのか。
徐に、『妖怪』と呼ばれる翁、綿貫　景虎へと向かって今堂々と―

「ここ奢ってやんよ。」
「ブッ!…そ、それだけか!?」
「あぁん?たりめーだろうが。俺様が奢るなんざ相当ラッキーなことじゃねぇか。元々ジジイに奢らせるつもりだったってーのによ。」
「…お主のぅ…」

鷹峰からの提案に、思わず噴出してしまった綿貫　景虎。
…しかし、それも仕方がないのか。
何しろ、自分は半ば『命』すら賭けるという危ない橋を渡ると言うのに…
その『見返り』があろうことか、このＢａｒでの会計を持つという、ただソレだけの行為にて済まそうとしている鷹峰の、そのどこまでもふてぶてしくも図々しい、しかしソレが最良の『見返り』だと信じて止まない鷹峰の姿に、綿貫が思わず噴出してしまうのも当然と言えば当然で。
…けれども、鷹峰の方もまた綿貫に対し。
『見返り』がソレで充分なのだと言わんばかりの確証を、どこまでも鋭く突きつけるだけで…

「大体よ、今起こってるれんぞーの野郎のゴタゴタだって、元を辿れば全部ジジイの所為なんだぜ？ジジイがちゃんと『地紫魔』にヒイラギを届けねぇで、適当な紫魔の奴に引き渡すなんて手抜きしやがった所為でれんぞーの野郎が…」
「わかった！わかったわい！その事は儂だって悪かったと思っておる！ヒイラギの事は全部儂が悪かった事じゃ！それは儂だってわかっておるわい！まったく…『憐造』の事といい小龍の事といい、お主、儂を顎で使う気満々じゃのう。」
「カカッ、それだけ頼りにしてるって事だ。なぁに、れんぞーの事ぁこの俺様に任せとけ。だから『この後』のゴタゴタの後片付けと、劉玄斎の『出禁』の件は頼んだぜ？何せここ奢らされるんだからよぉ。」
「全く、仕方ないのぅ…」

そう、綿貫だって分かっている。今この時、決闘市にて様々な『異変』が起こっていることの…その『根本』が、紛れもなく自分にあると言う事を。
それは蘇った『鬼才』が今現在、決闘市のあちこちに『闇』をばら撒き…【決闘祭】の後に大きな騒動を起こそうとしているという、そ

の杜撰なるも防ぎようの無い計画の根底にあるのが、他ならぬ彼のたった一人の娘の処遇を忙しさにかまけて適当なモノにしてしまった綿貫の所為なのだから。
全ては１０年前のあの日に…綿貫が紫魔　憐造との『約束』を、キッチリと遂行していればこんな事にはなってはいなかったはず。
だからこそ、そんな鷹峰から突きつけられた見返りに…

「その代わり、今日はキッチリと対価を貰うとするわい。お主の驕りでたらふく飲ませてもらう…後で泣き言言っても助けてやらんからの？」
「カカッ、好きにしろ。」

綿貫は不本意ながらも了承し、そのまま注文用のマイクへと向かってニヤリと笑みを浮かべつつ―

「フォフォッ、言ったな？…マスター！『ブルーアイズ・ホワイト・ペリーニュ』を持ってこい！ボトルでの！」
『かしこまりました。』
「ッ、おぉい！待てこらジジイ！そいつぁ一本３０００万もする酒じゃねーか！何ふざけた注文してやがる！」
「言質は取ったわい！追加で『紅き眼の煌き』もじゃ！ボトルじゃ！」
「待ちやがれぇ！それも２４００万はくだらねぇボトルじゃねぇかぁ！」
「言質は取ったと言ったはずじゃぞ！もう遅い！泣き言は言わせんぞ！」

先ほどからの、自分に非があるといった態度から一転。
鷹峰を前にして、綿貫は嬉々としながらこれでもかと言わんばかりに普段はおいそれと飲めぬ高すぎる酒を注文し始める。
この会員制のＢａｒは、選ばれた者しか入れない代わりに…その立場の人間に見合った酒を置いていると言うことでも有名であること

から、こうした馬鹿げた値段の酒であろうが取り揃えているのは『ここ』を利用している者からすれば既知の事実。
けれども、鷹峰の奢りと聞いて何の躊躇もなくそんな馬鹿げた値段の酒を注文する綿貫もまた―
ソレが適正な報酬なのだと言わんばかりの態度を崩さず、遠慮もなく馬鹿高い酒の注文を取り消すこともなく居座るだけ。

「あーくそ！ンなら俺様もチビチビ飲んでられっか！おいマスター！俺のキメラ・ダーティの１６１０年物のボトル持って来い！」
『かしこまりました。』
「ほう、１６１０年モノとな？世界１０大名酒にも数えられる良い酒ではないか。確か【黒猫】の大和が最も好きじゃった酒じゃのう。」
「カカッ、こうなりゃヤケだ。今日はとことん付き合ってもらうぜジジイ。」
「ヒヨっこが、儂を誰じゃと思うておる。お主がオムツをしておる頃からの酒飲みじゃぞ儂は。とりあえず、天津間家への怒りは一先ずこの酒で鎮めてやる。じゃから今日はとことん飲むぞい！」
「おうおう、折角の祭りの前だ、そうこなくっちゃなぁカッカッカ！」

そんな、昨年度の【決闘祭】の前日に【黒翼】と『妖怪』の間にこの様なやり取りがあった事は…

誰も、知らず―

―…

ｅｐ１１３「第２章最終話ー祝福の風」

年も明け、冬も終盤に差し掛かり…すっかり寒さが芯まで届くようになった、とある休日。

「…寒い。何故この寒い中実家に帰らねばならなぬのだ。」

「…文句言うな。俺だって寒いんだ。」

遊良と鷹矢は、鷹矢の父である天宮寺　正鷹に呼び出され…雪の積もった鷹矢の実家への道筋を、寒さゆえか重い足取りで歩んでいた。

…しかしその道筋は、いつもの遊良達の『家』から向かうルートではない。

そう、遊良と鷹矢が歩いている今のルートは、決闘学園イースト校から直接天宮寺家の本家へと向かう道筋。

それも学園を出たばかりの、雪が詰まれた大通りを寒さのせいか重い足取りにて向かい始めたばかりの出だしも出だしであり…それは偏に、今日が休日であると言うのにも関わらず、遊良と鷹矢がイースト校に居たということに他ならない。

…けれども、今の彼らの服装は学園の制服では断じてなく。

休日の学生らしく私服に身を包み、その上から学園指定のモノではない自前のコートを着ている遊良と鷹矢。そんな彼らの姿から、彼らもまた今日が休日であることをわかっているのは明白の理とも言えるはずで。

また、イースト校理事長である元シンクロ王者【白鯨】との修業時は制服着用で指導を受けていることから、遊良と鷹矢が私服を着ていると言うことは本日は修業もなく完全なる休日であるはずだと言うのにも関わらず…

では、一体どうして遊良と鷹矢はこんな修業も無いであろう休日に、自宅からではなくイースト校から私服で出てきて鷹矢の実家へと

向かっているのか。
　それには、先の決闘市に起こった『騒動』が深く関係してしまっていて―

「そう言えば『家』はまだ直らんのか？そろそろ修復も終わるはずだろう？」
「昨日業者から連絡きてた。来週にはまた住めるようになるってさ。無くなった物とかも全部保障されるって。盗られたカードとかも全部返還されたし…お金はまぁ、盗られた額よりも多い額が支払われたから、当面の生活費は問題なさそうだ。」
「…全く、ハイエナ共の所為で学園に寝泊りする羽目になるとはいい迷惑だ。」
「…そうだな。」

　そう、遊良と鷹矢がイースト校から私服で出てきたのには、先の決闘市に起こった『騒動』が深く関係している。

　…あの突然の『指名手配』から始まった、決闘市に起こった『騒動』から既に2ヶ月近くが経った。

　あの日、何気ない日常を過ごしていた遊良の身に…ＴＶのニュースが、決闘市で頻発している『失踪事件』の容疑者として警察が天城遊良を『全国指名手配』したと報道した。
　無論、身に覚えもない遊良からすれば、ソレはあまりに突拍子もない出来事であった為に、遊良と鷹矢とルキは砺波の指示の元、決闘市から一時脱出しようとして行動を起こしたりもしたのだが…
　…しかし、遊良と鷹矢とルキと砺波が、追われながらも決闘市の範囲から一歩外へと出たその直後。
　突然、決闘市全域に『赤い重光』が立ち昇ったかと思うと。決闘市に住む全ての人間が、文字通り『消滅』してしまうという事象が起こってしまったのだ。

…そして、邂逅した。

決闘市にて『失踪事件』を起こしていた犯人、決闘市の住民を全て『消滅』させた張本人…

そう、天城　遊良と同じ顔、同じ声、同じ姿、同じ気配、同じ雰囲気を持った人物…

前の世界から来たという、『アマギ　ユーラ』と遊良は邂逅を果たしたのだ。

…そして、遊良は戦った。

この世界では既に忘れ去られた太古の召喚法である、『儀式召喚』を扱ってくるアマギ　ユーラと、真正面からぶつかって。

そして、『邪神』と呼ばれる神のカードまで繰り出してきた荒ぶるアマギ　ユーラと、遊良は一歩も引かずに戦い抜いたのだ。

そして、その決着は遊良が今こうして普通に歩いている通り…

最初のアマギ　ユーラとの戦いの後に姿を消した『堕天使』のカードが蘇った事により、遊良は『邪神』の1体を倒すという快挙を成し遂げ、見事アマギ　ユーラを正々堂々と打ち破り決闘市を救ってみせた。

…そして、アマギ　ユーラによって『消滅』してしまった決闘市の人々も、『邪神』を倒した事により無事に復活した。

たった数時間にも満たない時間だけの消滅であったことも幸いしたのか、復活した人々には大した混乱もなく、決闘市はすぐに平穏を取り戻した。

また、夏ごろからの『失踪事件』の被害者たちもその時に全員が無事帰還し、その後すぐに警察やメディアが天城　遊良への指名手配の『撤回』と深々とした『謝罪』を行った為に…

騒動が起こった決闘市も、晴れて平穏を取り戻すことが出来たのであって。

…だが、問題はこの後だった。

あの日…遊良が指名手配されたと報道された、あの日。

無理矢理押し入ってきた記者たちが、遊良達の家の中で大暴れしたために…

【黒翼】天宮寺　鷹峰の所有する遊良達の家は、およそ半壊と言っていいまでに荒されてしまったのだ。

…当然、遊良達の家に不法侵入し、あまつさえ家のあちこちを壊しまくった記者たちは軒並み新体制になった警察に逮捕されたり、決して軽くない『罰』を受けたりしたそうなのだが…

それでも、もう一人の自分とも呼べる人物との死闘を終え、満身創痍になった遊良がようやく休めると思い自宅へと帰ってきたときに見た『家』のあまりの有様は、１０年程前に『自宅』を同じように心無い者達に壊された経験のある遊良からすれば心の奥底に眠っていたトラウマが再び浮かび上がってくるのには充分だったのだろう。

…荒され、壊され、無残な姿に成り果ててしまった家の有様は、遊良を哀しませるには充分過ぎた。

下手をすれば、ようやく乗り越えかけていた過去の遊良がまたフラッシュバックしてきてもおかしくはなかった。まぁ、ギリギリでそうならなかったのは、偏に遊良が着実に成長していたのに加え、鷹矢とルキが傍にいてくれたのが大きかったのだが…

しかし、見るも無残に壊された家ではゆっくりと寝ることすらままならない。

そこで、遊良達は師である元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣の指示の下…

遊良と鷹矢は『家』が完全に修復されるまでの間、『合宿』という態で決闘学園イースト校に寝泊りしつつ授業に出席し、そのまま【白鯨】との修業という生活を送っていたのだった。

そして記者たちに荒らされた家も、家具家電盗品盗カード、その他

諸々全部含めて全額全部『向こう持ち』で完全に修復が成されるそう。
まぁ、ソレも当然だろう。何せ記者たちのあの行動は、ある意味『強盗』のようなモノ。完全に不法侵入に器物破損、それ以外にも罪が重すぎるために、遊良達からしても庇う余地などない程に今回のメディア側の行動は酷いの一言であったのだから。
そのため、自分達の家が破壊されてしまった遊良と鷹矢は、混乱が収まるまでという名目で…【白鯨】の下にて、決闘学園イースト校に1ヶ月以上もの間、『合宿』のような生活をしているのであって。
まぁ、朝は遅刻の心配がないからと言って、朝に弱い鷹矢が更に朝寝坊をする癖が付いてしまったのは遊良からしても誤算ではあったのだが…
そして、『家』の修復や補填も来週には全て終了すると知らせを受けた翌日。
この、修業も無い完全なる休日である本日に…
遊良と鷹矢は、鷹矢の父、天宮寺　正鷹に呼び出され…寒い中、天宮寺家の本家へと向かっているのであり…

そうして…

遊良と鷹矢は、天宮寺家へと向かって雪の積もった道筋を転ばないようにして歩き続ける。
…途中、商店街を抜けるときに鷹矢が『腹が減った』と言って買い食いを始めた所為で、思ったよりも余計に時間を取られたりもしながら。
また、騒動が収まってから2ヶ月も経っていないというのにも関わらず、街行く人々の目は遊良を『悪人』だとは全く思っていないモノとなりて、誰も遊良達の邪魔をする者はいなかった。
そう、遊良にかけられた指名手配も完全に撤廃され、ソレに加え決闘市の住民全員が遊良に『救われた』という無意識を持っている中では、もはや誰も遊良に余計な事を言う者など決闘市には存在すらしていないのだろう。

だからこそ、ようやく『平穏』となった決闘市の、冬の寒さの中を遊良と鷹矢はただひたすらに歩き続け…

そして、しばらく歩いた後に。

遊良と鷹矢は、目的の場所へと辿り着いたのだった。

「来たか二人とも。寒かったろ、早く入れ。」

遊良と鷹矢が到着するや否や、鷹矢の父、天宮寺　正鷹が出迎えた。

今日と言う休日に、遊良と鷹矢を呼び出した本人。その声は心から2人の息子を待っていた声となりて、寒い道筋を歩いてきた2人を優しく迎え入れるのか。

「親父、何の用だ。」

「何の用だとは何だこの馬鹿息子。お前のプロ入りの件で色々こっちも大変なんだからな。」

「ぬぅ…」

「とりあえず鷹矢は奥の部屋へ行け。色々と書かなきゃいけない書類が山積みになってるぞ。母さんと一緒に書いてこい。」

「何故俺がそんなことを…」

「全部お前の事だろうが。四の五の言わずさっさと行って書いてこい。」

「…うむ。」

また、やさしく出迎えられたと言うのにも関わらず。

鷹矢が相変わらずの憎まれ口を叩いたものの、しかし鷹矢の父である正鷹はそれにも慣れた様子で息子を軽くあしらいつつ…

鷹矢を奥の部屋へと向かわせると、今度は遊良へと向かい直して再度その口を開き始めて。

「…よし、じゃあ遊良は俺とこっちに来い。お前にも話したい事がある。」
「…え、俺も？」
「当たり前だ。じゃなきゃわざわざお前にも来るよう言わないだろ。」
「てっきりまた鷹矢を連れてくるだけかと思ってた…」
「あぁ、それは感謝してる。あの馬鹿、お前の言う事じゃないと聞きやしないんだからな。誰に似たんだか、全く。…と、それより早く上がれ。立ち話で済ますような話じゃない。」
「でも…いいの？俺が上がっても…その…また、ツボネおばさんが…」
「安心しろ、アイツは今日は出ていて家には居ない。…本当なら、アイツにとやかく言われるような事でもないんだが…すまないな、余計な気を使わせて。」
「…いいよ、慣れてるし。」

厄介な口うるさい叔母が居ないことに遊良もどこかホッとした顔をみせつつ。
遊良は鷹矢の父、天宮寺　正鷹に連れられて、いつぶりかになる天宮寺家の本家の家内へと久方ぶりにその足を踏み入れる。
最後にこの家の中に上がらせてもらったのはいつ頃だったか…
遊良の記憶が確かならば、小学生の高学年のときに師である【黒翼】に連れられて上がったのが最後だったか。まぁ、その時もその時で、鷹矢の叔母である天宮寺　ツボネがキーキーとヒステリー気味な文句で騒ぎ立てたために長居は出来なかったというのを…遊良も、どこか遠い思い出のようにして思い出している様子を見せており…
…そのまま、しっかりとした造りの、和風チックな豪邸と呼ぶに相応しい廊下を正鷹に連れられて歩く遊良。
しかし、数年振りとなる天宮寺家の本家の中を歩いていると…遊良は、どこかこの家が以前来た時よりも少々狭いというか、何やら以前よりも『大きい』と感じなくなったと言うことに気がついた様子。
そう、Ｅｘ適正が無いと診断されるよりも前の、何もしがらみが無かった子どもの頃にはとても広く感じた天宮寺家の本家が…今の遊

良にはどこか狭くなったかのようにも感じられるのも、きっと遊良の気のせいではないはず。
それは遊良が、高等部生になって確実にその体が大人へと成長してきているのが原因だろう。いつまでも子どものままでは居られない、確実に大人へとなりつつある今の遊良には…
いや、体の成長以上に、高等部に入ってからとにかく『色々』な事が起こりすぎたために…『体』だけではなく、その『心』もまた大人へと近づいているが故の余裕を遊良は感じているに違いなく。

そうして…

子どもの頃には延々と歩いた記憶のある廊下を、ものの数歩にて目的の場所に到達し。
そのまま、遊良は正鷹の自室に通されたのだった。

「さて、じゃあそこに座れ。……いきなりだが、『色々』と大変だったな、今回は。」
「うん。指名手配されるとは思ってもみなかった。」
「だろうな。俺も驚いたんだぞ？ＴＶ見てたらいきなりお前が指名手配されたって出て、そのあとによくわからないことになって…そしたら、次の日には急に全て間違いでしたって警察とマスコミの謝罪会見ときた。そしたらお前らには一切連絡つかなくなるし…随分と心配したんだぞ。『家』もあの有様だったしな。」
「…ごめん。砺波先生から、『混乱が落ち着くまでは余計な事をしないように』ってキツく言われててさ。」
「まぁ、それはいいんだ。一応、【白鯨】からお前たちが無事だと言う事は聞いていたし、もうすぐ『家』も元通りになるってんだからな。それに外出の許可も貰えたってことは…もう、大丈夫ってことなんだろう？」
「うん。」

そして鷹矢の父、正鷹の自室に通されてすぐ。
座布団の上に座った遊良へと、正鷹はどこか保護者らしい台詞とともに、遊良へと近況の確認を取り始めた。
…その口ぶりから、正鷹も相当息子たちの事を心配していたと言う事が読み取れる。
まぁ、ソレも当然か。何しろ、警察の上層部ですら把握していなかったというあの日の突然の遊良の指名手配は、遊良に近しい者達からすれば特に驚愕に値する出来事であったはずなのだから。
しかも、遊良の指名手配に混乱しているそのすぐ後に、突如として謎の苦しみに襲われたかと思うと…
気がついたら全てが終わっていて、かつ遊良の指名手配もまた撤回されていたという、なんとも奇妙な体験を決闘市の住民達はしてしまったのだから、
また、遊良に近しい者達に関してはそれだけでは終わらず。
遊良への指名手配が撤回された上で、遊良の安否を気にして遊良や鷹矢に連絡を取ろうとしても…
何故か息子たちには一向に連絡が繋がらず、代わりにイースト校理事長である元シンクロ王者【白鯨】からの業務連絡的なモノが返ってきただけで終わってしまったのだから、遊良の安否が気がかりだった鷹矢の父からすれば、詳しい事が分からない現状はとにかく気が気でならなかったはずで。
…それ故、鷹矢の父、天宮寺　正鷹は遊良が親友の息子であるということ以上に。
もう一人の息子の無事を今日、その目で確認できた事に、確かな安堵を感じたのも当然と言えば当然の事であり…
「それで、話って何？鷹矢のプロ入りの事なら俺より先生に聞いた方が…」
「あぁ…いや、鷹矢の事はいいんだ。今日は…お前の事について話そ

うと思ってな。」
「…え？」

鷹矢の父、正鷹より零された言葉に思わず固まってしまった遊良。
それは遊良からしても、正鷹が発した言葉が思ってもみなかったモノであったが故の思考の停止でもあるのか。
…何しろ、今までこうして正鷹と面と向かって話した事は遊良からしても記憶にはない。
Ｅｘ適正が無いと宣告されてから、とにかく遊良の人生は周囲が敵だらけだった。それ故、小学生の頃は【黒翼】の庇護の下、そして中学の頃は遊良も自分の身を守るために殻に閉じこもることがほとんどだったために、今こうして面と向かって鷹矢の父と話すと言うこと自体が遊良にとっては初めてのことであるのだから、
…一体、正鷹は何の思惑があって今こうして面と向かっているのか。
正鷹の心の内などわからない遊良からすれば、鷹矢の父からの声かけにもただただ混乱してしまっているだけであり…
しかし、そんな遊良の混乱を理解してか。
鷹矢の父、天宮寺　正鷹は…再び、遊良へと向かってその口を開くだけで…

「遊良…お前、卒業したらどうするつもりなんだ？」
「え？どうするって…」
「お前、これまで3者面談とか全くやらせてもらえなかっただろう？」
「あー…うん。中学の頃とか、『Ｅｘ適正の無い人間に進路なんて必要ないだろ』って言われたりもしたし…」
「あぁ。俺が行くって言っても取り合ってもらえなかったし、お前も乗り気じゃなかったから今まで黙認してたが…けど、今は違う。【決闘祭】の優勝に【決島】の準優勝。これだけの成績を残しているんだ、いくらお前にＥｘ適正がないからと言っても…おそらく、プロの世界から声がかかると思う。だから、お前は今の自分の現状をどう考えて

るのかって思ってな。竜一とスミレが居ない今、大人としてお前の進路を俺は把握しておく義務がある。お前…高校卒業したら、具体的にどうしたい？」

「具体的に…？俺は…えっと…どうしたいって急に言われても…」

鷹矢の父から零されるのは、『普通』の高校生ならば極当たり前に家族と話しているような『そんな事』。

しかし、『普通』の家庭ならば『普通』にしているはずのそんな会話でさえも…思わず遊良は言葉に詰まってしまい、改めて自分の現状を上手く整理出来ていないかのようなうろたえぶりを見せ始めたではないか。

…無論、遊良とて自分の将来について何も考えていないわけではない。

幼い頃に鷹矢と『約束』した、プロの頂点の舞台で戦うという誓い。その『約束』の為に【決闘祭】や【決島】を戦い抜いてきたのだし、遊良からしても卒業後の『プロ入り』と言うのはどこか現実的な将来として考えているのもまた事実ではあるのだが…

…けれども、今まで大人達からソレを『全否定』されてきた遊良からすれば。

今更、改まって自分の今後を言葉にしろと言われても…ソレを上手く言葉に出来ないという感覚に陥ってしまったとしても、それは当然と言えば当然で。

「…よくわかんないや。一応、プロになりたいって思ったりはしてるけど…でも、現状をどう思ってるのかって聞かれたら…ちょっと、よくわからない。漠然とプロになりたいってだけで、具体的にって聞かれても…今まで、そんなこと考えもしてこなかったし…」

「…そうか。」

それ故、『漠然』とした将来へのビジョンはあれど。

それでも正鷹より呈示された、『具体的』な将来像を聞かれても今の

遊良にはすぐに答える事ができはしないのか。
…今は自分の将来像すら具体的にイメージできない。
それは偏に、遊良がこれまで心無い大人達によって自分の『将来』を潰されてきたが故なのだろう。
Ｅｘ適正が無いというだけで、これまで遊良は聞くにも絶えない不当な扱いを受け続けてきた。それはこれまでの物語にて多々描かれている通り、彼の人生にはこれまでも多くの障害が立ち塞がってきていたのだ。
だからこそ、それまでの彼の人生の軌跡は、まだ高等部２年生の遊良に具体的な将来像を描かせることすら困難にさせてしまっているといっても過言ではなく…

「あ、そうだ…おじさんは何でプロにならなかったの？」
「…俺か？」

それ故、遊良はここで１つ、鷹矢の父へと問いかけた。
…そう、鷹矢の父は【黒翼】の息子でありながらも、自らの意思でプロ入りしなかったという経歴を持つ、大人として１つの『選択』をした確かな人物。
その結論に至るまでに、一体何があって何を感じ何を考えたのだろう。
今の将来像がぼやけていて、具体的な未来を想像できない遊良からすれば…正鷹の『選択』の意味は、自分には無いモノを見てきてその結論に至った確かな人生の先達として重要なモノを握っているはず。
そんな、今後自分が『選択』をする上で、正鷹の結論はいい参考になるはずだと遊良は判断したからこそ…今まさに、遊良は正鷹へと問いかけた。
…そして、遊良からそんな事を問いかけられた正鷹は。
少々考えるような素振りを見せつつも、しかしソレが遊良の為にな

ることなのだと理解した様子で…

再度、言葉を発するのみ。

「そうだな…俺は、まぁ親父への反抗心ってのもあったんだが…あの頃、親父の所為でウチは色々と面倒事を多く抱えていてな。その先導を切って指示を出す人間が俺しかいなかったんだ。親父の名声に縋って擦り寄ってくる奴等や、一度は名を捨てたが今更になって天宮寺をまた名乗りたいって奴等がぞろぞろ出てきて…ほら、天宮寺家ってのは…親父よりも『上』の世代で色々あってゴタゴタしてんだよ。お前も知ってるだろ？世界大戦の話。」

「うん。大きな戦争があったんだよね。歴史の授業で習ってるから知ってる。」

「あぁ。だからそんな親戚連中を纏めたり、天宮寺家の家督やら本家やらそういったゴタゴタを引き受ける当主が必要でな。だが親父は『アレ』だし、ツボネなんかにやらせるわけにはいかないってんで俺はプロになれなかった…いや、ならなかった。そういう事だ。ま、当時は周りからも色々言われたけどな。『【黒翼】の息子なのに何故プロにならないんだ！』とか、『偉大な父親の顔に泥を塗る気か！』…とかな。」

「…おじさんも苦労してきたんだね。」

「まぁな。けど今はこれでよかったとも思っている。俺はプロにならない選択をした自分を責めてはいないし、後悔もしていない。自分で選んだ道だ、俺の親父が誰だろうが関係ない、これが俺の選択なんだって今は胸を張って言える。それに親父も『好きにしろ』って言ってたしな。まぁ、あの人の場合は多分『どうでもいい』って意味だったんだろうが。」

「…」

鷹矢の父、正鷹から語られる言葉は、確固たる人生を生きてきた者の言葉となりて、どこか重く遊良の心に確かに響く。

…正鷹は、自らの意思を強く持って『プロ』への道を断った。

それはエクシーズ王者【黒翼】の息子として、果たしてどれだけ勇気のいる選択だったのだろう。
そう、良くも悪くも、『親』と言うのはどれだけ仲違いしていたとしても自分の人生に付きまとってきてしまうモノ。親が犯罪者であったならば、例えその子どもは犯罪を犯していなくとも周囲から『そのような目』で見られるモノだし…親が偉大であればある程、その子どもにも『同じような期待』が否応なしにかけられてしまう。
…それはどうしようもない人間の性で、変えようのない世間の理。
だからこそ、周囲に何を言われようとも…そして、エクシーズ王者【黒翼】の息子として周囲にどれだけ期待をかけられていようとも。
自らの道を自分で決めて進む事を選んだ正鷹の選択は、未だ迷いのある遊良にさえも確かな説得力を感じさせる代物ともなっているはずであり…

しかし…

ここで、正鷹が『親』について言及したからか。

ふと、『将来』の事とは別に…

そう、遊良の心に、『別』の感情が浮かび上がってきてしまい…

「…俺は…父さんと母さんに…本当に愛されていたのかな？」

ポツリと…
遊良は発してしまったその『言葉』は、遊良からしても無意識に零れた言葉であった。
意図なんてない、本当にただ心の中で浮かんだ思いが、無意識の内に口から零れでただけ。それ故、そんな言葉を零してしまった遊良自身も、たった今自分が『何』を口走ったのかを全く理解している様子がないではないか。

…けれども、ソレを聞いてしまった正鷹の方はそうもいかない。
遊良の心の吐露を聞いて、鷹矢の父は神妙な面持ちをし始める。
それは生まれた時から遊良を知っている鷹矢の父からしても、信じられないような驚きの言葉だったのだろう。
何しろ、Ｅｘ適正が無いせいで想像を絶する地獄を味わってもなお強く生きてきた、これまで弱音という弱音など聴いたことのない、およそ同年代の子ども達と比べても大人びている部類に入るあの遊良が…よもや、『こんな事』を言うだなんて…と。
そして…
正鷹がそんな顔をしているのを見て、遊良もまたようやく自分が何を口走ったのかを理解してしまった様子。
けれども、ハッとした時にはもう遅い。心の中に留まらず、思わず口にしてしまったその言葉は確かに正鷹に聞かれてしまった。
…誰にも聞かせるつもりなど無かった、遊良の心の奥底に沈んでいたその思い。
それは偏に、【決島】の時に【紫影】に見せられた幻覚が緒を引いているのだろうか。

―『お前に、Ｅｘ適正があれば今も幸せに暮らせてたんだ…それなのに…』
―『お前なんて産まなければよかった。本当は産みたくなんてなかった…』

アレは【紫影】が見せたただの幻覚。自分の心を折ろうとして【紫影】が仕掛けた、ありえない幻覚なのだという事は遊良も確かにわかってはいる。
それでも、父と母の姿をしたモノの口から、存在の否定と拒絶を聞いてしまったことが―【裏決島】という壮絶な戦いが終わった今もなお、どこか遊良の心に影を落としているのだろう。

…だからこそ、不安になる。
Ｅｘ適正のない自分が、本当に両親に愛されていたのか…もしかしたら【紫影】が語らせた通り、自分の存在は両親にとって『邪魔』であったのではないか…自分にＥｘ適正が無いから、両親は１０年前に自分を捨てたのではないか…
と、遊良もおぼろげながら考えてしまって。
そう、心の隅に沈んでいたその考えを、一度浮かび上がらせてしまってはもう取り消す事はできない。
それほどまでに、両親以外の血の繋がりを知らない遊良が『血縁』にかける思いと言うのは…他人が想像するよりも、ずっと重い物なのだから。
天涯孤独…
他に血の繋がった者の居ない孤独と言うのは、温かい日常を生きる他人には決して理解してもらえない永遠の冬。そんな孤独が確かに遊良の中にあるが故に、例えソレが性根の腐った屑の仕業であろうとも。
それでも、その時の『言葉』は、戦いが終わった今もなお遊良の心に影を落としていて…

しかし、そんな遊良へと向かって。

鷹矢の父、天宮寺　正鷹は、神妙な面持ちのすぐ後にどこか『呆れた顔』をしたかと思うと。
諭すように…
いや、その表情と同じく、心から『呆れ』果てたようにして―

「お前…何を言ってるんだ？そんなの、『愛されていた』に決まっているだろうが。」

…と、遊良の心の影を一蹴したのだった。

そして―

「でも、父さんと母さんにとっては…俺は、生まれない方が良かったんじゃないかって…」
「だから、お前はさっきから何を言っている。大体、お前が生まれた時に竜一とスミレがどれだけ舞い上がってたと思ってるんだ。」
「舞い上がってた？」
「親馬鹿も親馬鹿だったぞあの二人は。見ているこっちが恥ずかしくなるくらいにな。」
「でも、母さんは俺ができたから紫魔本家を追い出されたって…」
「それは違う。スミレが紫魔本家を出たのは結婚するよりも前で、お前には何も関係がない。何よりアイツは自分の意思で家を出た…自分の意思で竜一と一緒になることを選んで、自分の意思でお前を産んだ。それは俺が保障してやる。何しろ、紫魔本家を抜ける抜けないであの家と一悶着あったんだからな。その所為で、俺と竜一とアキラとスミレの４人で【紫魔】とデュエルする羽目にまでなったんだぞ？」
「え、おばさんまで？」
「まっ、４人がかりだったのにあのシス…紫魔　憐造にはボコボコにやられたけどな。後はスミレと【紫魔】の兄妹喧嘩だ。最後は【紫魔】の方も仕方なく折れたって感じだった。」
「じゃあ父さんは？俺が生まれた所為でプロを諦めたってのは…」
「…誰にそんなデタラメを吹き込まれたのかは知らないが、竜一の事もお前には全く関係がない。そもそも、竜一がプロを諦めたのだってお前が生まれるよりもずっと前…スミレとの結婚が理由だ。」
「え？」
「言ったろ？あのへんた…紫魔　憐造と一悶着あったって。高等部を卒業する少し前だったか…結婚を許してやるかわりに、竜一にプロを諦めろって【紫魔】が言ってきたんだ。それが結婚の条件だとな。その後も色々あったんだが、それでも竜一はソレを受け入れた…だから、竜一はプロにならなかった。【決闘祭】を優勝した事もある、プロチームや有名事務所からスカウトも来ていた有望株だったアイツが

な。」
「そんなことが…」
食い下がる遊良を一蹴し、どこまでも『真実』を告げてくる鷹矢の父、天宮寺　正鷹。
それは確かに『その場』を見てきた者だからこそ発する事が許される、他の何よりも正確無比なる『真実』の記憶。
…【紫影】の幻覚など比ではない、『真実』だからこそ納得せざるを得ない説得力がそこにはある。
きっと、天宮寺　正鷹ほど遊良の両親を語るにふさわしい人物はいないはず。何しろ鷹矢の父は、幼等部の頃より遊良の父とは無二の親友であり…遊良の母とも高等部で同級生として関わってきた、遊良の両親とは切っても切れない縁で結ばれた人物であるのだから。
そのまま、正鷹は遊良の不安など簡単に払拭するようにして…
更に、『真実』の言葉を続けるだけで…
「全て本当のことだ。『誰』に何を吹き込まれたかは知らんが、一部始終をこの目で見てきたこの俺が言うんだから絶対に間違いない。スミレは自分の意思で紫魔家を抜けた。竜一は自分の意思でプロにならなかった…どれも、お前には全く責任なんて無いことだ。」
「…」
自分の知らない両親の過去。
その、遊良自身も知らなかった『真実』の全てを正鷹より聞いて…【紫影】によって植えつけられた不安と怪訝が、遊良の中から消えていく。
そう、遊良の父、天城　竜一の幼少の頃からの友として。そして竜一、スミレ、遊良と、天城家のこれまでをずっと共に生きてきた正鷹だからこそ語る事が許される…
それは誰にも捏造する事など出来はしない、確かなる『真実』とな

りて不安が募る遊良へと伝えられるのか。

「じゃあ…なんで父さんと母さんは居なくなったりしたんだろ…」
「すまん、それは俺にもわからない。だが、少なくとも俺はあの二人が居なくなった理由が…お前にＥｘ適正が無かったからだなんて、絶対に思っていない。」
「…え？」
「スミレは強い女だった。お前にＥｘ適正がなかったくらいで、お前を捨てるなんてありえない。寧ろアイツなら、お前にＥｘ適正が無いことすら武器にするよう厳しく育てただろう。お前ならわかるだろ？スミレはそう言う奴だったって。」
「あー…言われてみれば確かに。母さん、かなりマナーに厳しかったし…」
「それに竜一の奴もそうだ。お前は知らないだろうが、竜一のデュエルスタイルはＥｘデッキを殆ど使わない、通常モンスターのドラゴン族デッキ…そうだな、昔の『逆鱗』みたいなスタイルだったんだぞ？知ってるだろ？竜一の奴、昔から『逆鱗』の大ファンだったって。」
「ッ…『逆鱗』の…」

けれども、正鷹がそう告げたそのすぐ後に…
遊良は、正鷹の言葉の『裏』に隠された、正鷹自身が『言うつもりの無い』その後の可能性に気が付いてしまった―

『逆鱗』の、大ファンだった…

確かに遊良の父の遺品には、『逆鱗』のデュエルに関する資料が数多く残っている。
そして、『逆鱗』との関係性の『欠片』を知ってしまっている遊良からすれば―正鷹の言葉の『裏』に隠された、限りない『真実』に近いモノを否応なしに察知してしまうのも仕方のないことなのか。

…きっと鷹矢の父、天宮寺　正鷹は『知っている』。

遊良の父、天城　竜一の無二の親友として。彼もまた、大人の事情により遊良の『血縁』に関しての『何か』を隠していると、そう遊良は感じ取ってしまったのだ。

…遊良には、正鷹の言葉の『裏』に隠されたモノがどことなく分かってしまう。

しかし、全てが明らかになっていない今の状況では…そう、『本人』の口から、ソレを語られていない今の状況では―

遊良もまた、『この件』に対しては部外者に入る正鷹から『真実』を聞いてはならないと判断してしまったのだろう。正鷹の言葉からそれを感じ取れはするものの、しかしそれを正鷹の口から聞くべきではないことを理解しているからこそ…

遊良も、今は静かに口を噤んでいて。

「それとな……あぁ、これは言葉じゃなく直接見た方が納得しやすいだろう。少し待ってろ。」

そして…

正鷹もまた、天宮寺家の『上』に立つ者として、遊良の反応から『何か』を察知したのだろうか。

少々話題を変えるかのように、徐に座布団の上から立ち上がったかと思うと…

彼は自室の本棚の前に立ち、その中から少々古めの一冊のアルバムを取り出しつつ。

いくつか、ページをパラパラと捲り始め…

「あぁ、あった…これだ、懐かしいな…ほら、コレを見ろ。」

ものの数秒で目的のページが見つかったのか。

ソレを、ゆっくりと遊良へと差し出し始めたのだった。

「…誰、これ…」

しかし…

差し出されたアルバムに挟まれた写真を見てもなお、そこに写っている人物が遊良には一瞬『誰』だか分からなかった。

…いや、頭では分かってはいる、

しかし、まるで遊良の思考がその人物の事を理解するのを『拒んで』いるかのように―

それほどまでに、写真に映っていた『ある人物』のその表情は、遊良の知る『その人物』とはあまりにかけ離れていた姿であったのだ。

そう…

正鷹が差し出してきたアルバムの、『そこ』に写っていたのは他でもない―

「これって、もしかして紫魔　れん…いや、でも…」

「…信じられないのも無理はない。だが、そいつは正真正銘『紫魔　憐造』だ。何せその写真を撮ったのは俺だ。そのだらしのない顔で赤ん坊をだっこしている、デレデレして腑抜けた顔をしている男は…間違いなく、紫魔　憐造に違いない。」

「いや…だって紫魔　憐造のこんな笑顔なんて資料でも見たことないし…えっとさ…この抱っこされてる赤ちゃんって、もしかして…」

「お前だ。」

「やっぱり…」

遊良が見せられたアルバム…

そこに挟まれた写真に写っていたのは紛れも無く―

『鬼才』とまで呼ばれ恐れられた、歴代最強の【紫魔】と名高き前融合

王者【紫魔】、紫魔　憐造の若き日の姿…いや、昨年度の『異変』の時の姿そのままであった。
けれども、その写真に写っている彼の表情はこれまで遊良が資料などで見てきたどの顔にも当てはまらないほどに砕けた…
それこそ、世に広く知られている冷徹なる『鬼才』と同一人物とは到底思えないような、あまりに人間臭いと言えるだらしなくデレデレとした表情であったのだから…
昨年度に実際に前【紫魔】と対峙して恐怖を抱いた遊良からすれば、この写真に写っている彼の表情はおよそ遊良からしても信じられないほどに砕けていたに違いなかったことだろう。

「あの変態…シスコン…いや、紫魔　憐造はな、スミレ曰く、『血の繋がった親類』にはとことん甘いんだそうだ。シスコンだけかと思えば自分の娘にもお前にもデレデレだったし…わかりやすく言えばファミリーコンプレックス…略してファミコンだ、ファミコン。」
「ファミ…コン…？」
「あぁ、それはそれは信じられないくらいの…」

しかし、驚きの表情をしている遊良を意に介さず。
そのまま、鷹矢の父、天宮寺　正鷹はどこか遠い目で…
そう、何やら遠い目で、過去に確かにあった思い出してはいけない『何か』を無意識に思い出している様子で―

―『だこぉ！』
―『む!?ハハハ！貴様ぁ、この紫魔本家当主にして融合王者【紫魔】に抱っこをせがむとは恐れ多くもいい度胸ではないか！全くしつけがなっていない甥だなぁ！これでは親の程度も知れると言うモノだぞ！ほら、たかいたかーい！』
―『きゃっぴゃー！』
―『ハハハハハ！そうか嬉しいのか遊良！全く仕方のない奴だなぁ

！本当にかわいい奴だお前は！ハハハハハハ！』

「…いや、なんでもない。流石にこれ以上は故人と言えど沽券に関わる…まぁ、お前や鷹矢が生まれたばかりの頃、天城家に行けば必ず娘を連れたあのシスコ…へんた…【紫魔】が、あの家に居たくらいだ。そして奴は、紛れもなくお前を可愛がって…いや、スミレや自分の娘と同じくらい溺愛していた。これは本当の話だ…何せ、その場面を何度も見た俺が言うんだから間違いない。」

「…溺…愛…」

にわかには信じられない正鷹の言葉を聞いて、思わず驚きを隠せない遊良。

…しかし、それも当然のことか。

何しろ、遊良には正鷹の言っているような時期の記憶がない。まぁそれは乳児期特有の健忘による記憶の定着が出来ていない所為でもあるのだろうが、しかしそれを踏まえてもなお昨年度に起こった決闘市の『異変』で実際に前【紫魔】、紫魔　憐造と対峙した経験のある遊良からすれば…

そう、紫魔　憐造の、あの冷徹かつ残酷な、あまりに冷たい怨嗟の声を聞いてしまった遊良からすれば―

実物とイメージのギャップがあまりにありすぎてしまい、どうしてもこの写真のような紫魔　憐造が想像できなくなってしまっていても、それは当然と言えば当然で。

けれども、正鷹が見せてきた写真と、かけてきた言葉をふまえて。遊良が、今一度昨年度の『異変』での紫魔　憐造の言葉を振り返ってみると―

―『なぁ、可愛い可愛い我が甥よ。』

もし彼が『闇』に染まり、邪悪に支配されていたのだとしても…

それでも、あの時零したアレがもし、本当に『言葉通り』の意味だったのだとしたら…

…【決闘祭】に出させられたのではなく…出してくれた。

…【決闘祭】の準決勝で竜胆　大蛇を負けさせたのではなく…自分を、勝たせた。

『闇』の根源となっていた所為で、怨嗟に塗れていたとしても。それでも、吐露された言葉の中に少なからず真実があったのだとしたら…もしかしたら、『闇』に飲まれた中に、肉親へとかける思いが少なからずあったのかもしれない。

何しろ『あの時』、紫魔　憐造は遊良との邂逅を…『これが初対面』だと言った。

けれども、この写真が示すとおり―

紫魔　憐造と遊良の邂逅は、あの『異変』の時が初めてでは決してない。

それ故、悪意にそまり悪意を暴走させ、悪意のままに世界を滅ぼしかけていた紫魔　憐造の中に…ほんの少し…ほんの僅かでも、『肉親』を思う気持ちが残っていたとしても。

それは、なんら不思議な事ではないのだから。

(…じゃあ俺がＢｌｏｏ―Ｄを召喚出来るのも本当にあの人が……まさかな。そんなわけないか。)

…まぁ、その真意は今となってはもう誰もわからない事でもあるのだが。

ともかく…

「遊良…お前は両親に愛されていた。竜一とスミレをずっと見てきたこの俺が保障するんだ、それだけは間違いない…それだけじゃない、

お前と血の繋がった者、血が繋がってない者…鷹矢やルキちゃんはもちろん、俺やアキラや高天ヶ原さん達だってそうだ。ついでに【紫魔】も…お前は1人じゃない。お前を大切に思っている人間だって居る…お前にとっては大人の俺達の思いなんてお節介かもしれないし、何ならいい迷惑かもしれないが…それでも俺達は…少なくとも俺自身は。お前を鷹矢と同じく、自分の子どもと同じくらい大切に…自分の息子のように思っている。それだけは、わかっていてくれ。」

「…うん、ありがとう、おじさん。」

鷹矢の父、天宮寺　正鷹の心の底からの言葉を聞いて。

そう、【紫影】のようなハッタリではなく、限りない『真実』を知る正鷹からの言葉を胸に。

「まだ進路はハッキリしないけど、また相談に来るよ。」

「あぁ、待っているぞ。」

ここに来る前よりも、どこかスッキリした表情をした遊良は…

血の繋がらない、もう一人の父へと向かって。

そう、伝えたのだった―

―…

冬。

もうすぐ春休みに入る、年度も替わりかけているこんな時期に…

決闘学園イースト校には、『とある変化』が起こっていた。

「…であるからして、１４世紀のデュエル学者チェインハートはこう

言っている。『逆転のドローはまるで閃光のようだ』と…これは接戦におけるデュエルディスクのカード創造に関連があるとされており……おっと、もう時間か。では今日はここまでにしておこう。各自、来週の授業までに２９０ページから２９５ページまでを予習しておくように。次回、授業の始めに小テストを行う。なに、予習しておけばなんら問題ではない。各々、合理的に勉強してきてくれたまえ。」

「ほい、そんじゃ全員レポートの提＆出よろよろのよろってことでー。『ダメージステップの５つのタイミング』と？『強制効果以外のダメージステップに発動できるカード』と？『５つのタイミングで発動出来る効果の違い』と？あとついでに『【ポールポジション】が無限ループ発生させるコンボ』調べてきてねぃん！ひゃは！最後のはチャン僕の趣味趣味しゅーみだけどもだっけーどぉ、ここもテストに出っかもよ的な的なテキーラってことで！」

「ふふ…それじゃ今日の実技はここまで…掲示板に結果出したから、得失点差の大きい人から順に課題取りにきて…」

それは来年度から『正式』に赴任してくるという『３人の特別講師』による特別授業が、卒業を控えた３年生を除く１・２年生達に試験的に施されているところであった。

そう、つい先日まで手続きやら何やらの諸事情でデュエリアに居たという、イースト校理事長であり元シンクロ王者でもある【白鯨】が特別に雇ったと噂されるその３人の講師は…

何やら他の教諭たちとは一線を画す実践的かつ実用的な知識と実力を用いて、それでいてとてつもなくスパルタな授業を行うとして、突如イースト校の１・２年生達をしごきにしごき始めていて。

…死屍累々。

きっと、この３人の『特別講師』たちのスパルタ過ぎる特別授業を受けた学生達の、その全員がそのレベルの高さに度肝を抜かれたに違いない。

並々ならぬ実力を兼ね備えているのが、少しの授業でひしひしと感じられるくらいの圧倒的なその力量。他の教師たちとは比べモノに

ならないソレは、下手をすれば一介のプロですら足元にも及ばないとさえ感じる天上の代物であり…

それほどまでに、突然やってきたこの3人の特別校師達の試験的な授業を受けた多くの学生達が、日々の授業よりも密度の濃い内容に頭から煙を上げていて。

…ホトケ・ノーザン特別講師による、合理性を主軸にしたデュエル理論。

デッキ構築から始まりドローの確率までを自らの意思で操るかのようなその授業内容は、わかりやすくはあるものの高度すぎる理論であるが為に【決島】に出場した選手ですら着いていくのがやっと。

…ゴ・ギョウ特別講師による、実戦における妨害戦術。

一口に『妨害』と言っても、状況に応じて常に変化する盤面を見据えながら積み上げるその戦術は、一朝一夕では身につかない実戦への『慣れ』が特に必要で。

…スズシ・ローナ特別講師による、墓地活用術とその有用性について。

【決島】に出場するレベルの選手達は別としても、その他多くの学生達…特に1年生たちが『墓地』の真価を理解していなかった為に、それまで自分のデュエルに自信を持っていた学生達が価値観を壊され心が折れかかる事態になってしまった。

そんな、あまりに突然始まった、この特別講師たちによるレベルの高い授業は—

それまで学生レベルの生ぬるい授業しか受けてこなかった学生達に、強すぎる『喝』を入れるカンフル剤のようなモノとなりて。

多くの学生達に、色々な意味での衝撃を多々与えているのはまず間違いなく。

…試験的な授業の内容でこのレベルと言う事は、来年度から本格的に指導が開始されれば一体どれほど過酷なカリキュラムとなるのだろうか。

先駆け的に彼ら3人の授業を受けた1・2年生達は、そのあまりにレベルの高い授業と来年度への不安が募ってきている様子でもあり…ソレに加えて、1・2年生の中でもこの授業についていっている、いわゆる『上位』の成績陣たちとの『差』をひしひしと感じ初めていることだろう。

しかし…

そこは腐っても決闘学園。

全員が全員、一度は本気でプロになろうと決意してこの学園にやってきた者ばかりであるのだから…

今までは成績が振るわず、『祭典』などの代表やその候補にもなれずに腐ろうとしていた者達の中に、特別講師達の授業を受けてなにやら『きっかけ』をつかみ始めた者もチラホラ見受けられていた。

…特に、過去に一度『教鞭』を取ったこともあるというホトケ・ノーザン特別講師の授業。

彼の授業は古今東西、様々な学者たちが導き出した理論を解説しつつ展開されるモノであったために、少々哲学的な意味合いも強い授業でもあったのだが…

しかし『均一化』されている高等部の授業で『きっかけ』を掴み損ねていた学生達からすれば、多方面に展開するノーザン講師の授業はこれまで見えなかった自分達の光明が一気に開けたと感じる者が多く出始めたのだ。

また他の二人は少々『感覚的』にモノを教える風があるものの、しかしそもそもの前提としてその内容自体のレベルがこれまた『高い』ものだから、特にこの伸び盛りの段階である学生達も、今は着いていくのがやっとでも少しずつそのレベルが上がっていくのをその身を持って体験してきているに違いなく。

そう…これまでの自分のデュエルがいかに拙いモノであったのかを理解し、しかしこれからどうすれば自分がもっと強くなれるのかを

的確に理解し。
そうした学生達のレベルの上昇が、このイースト校においては恐るべき密度で起こり始めていたのだ。
…それは例えるならば、局地的に発生した大ハリケーンの如く。
また、ソレは今まで『芽』が出なかった学生達ばかりではない。
元々素質のあった者達…特に、【決島】に代表として出場していた学生などがその良い例。彼らもまた、【決島】と【裏決島】にて壮絶な体験をした事に加え、一挙にレベルの高い授業を受けたのが功を奏したのか…
それまで『あと少し』の所で『壁』に行き詰っていた学生達が、こぞって殻を破ったかのようにしてその頭角をメキメキと現し始めていたのだ。
…この調子だと、来年度のイースト校は近年まれに見る『大豊作』時代になるかもしれない。
それこそ、誰が【決闘祭】に出場しても可笑しくないレベルの学生が多々現れるかもしれないし…イースト校からプロになる者が、数年に渡り後を経たないかもしれない。一介の教諭たちとは次元の違う天上の力を持った特別講師たちの手ほどきを先んじて受けられたイースト校の学生達は、果たしてどれだけ幸運な者達なのだろう。
そんな、もうすぐ春を迎える時期に…
様変わりしたイースト校の教育風景が、本日も終わりの鐘とともに終了を迎えた…

とある日の、放課後―

「バトル！【サンダー・ユニコーン】で、【ワイトキング】に攻撃だよ！」

「なるほど、攻撃力８０００…中々いい攻撃力だ。しかしまだ甘い！罠カード、【反転世界】発動！」
「え!?自分から攻撃力０に!?」
「そうだ、この効果により攻守を逆転する。そしてダメージステップだ、こちらも速攻魔法、【コンセントレイト】発動！【ワイトキング】の攻撃力は現在０だが、そこに入れ替えた守備力１００００を加える！」
「攻撃力１万に戻った!?」
「迎撃だ、ワイトキング！ナイトメア・ゴッドフィスト！」

―！

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

ルキ　ＬＰ：４０００→０

「【愚かな埋葬】発動！デッキから【シルバー・ガジェット】を墓地へ送る！続けて魔法カード、アイア…」
「ダメ。【シルバー・ガジェット】が墓地に行った時、墓地の【異界のバンシー】の効果発動。デッキから【アンデット・ワールド】発動。機械族はアンデット族になる。」
「ぬぅ!?これでは【アイアンコール】が…くっ、ターンエンドだ！」
「私のターン、ドロー。【ゴブリンゾンビ】召喚して罠カード、【破壊指輪】発動。今召喚した【ゴブリンゾンビ】破壊。お互いに１０００のダメージ。」
「なにっ！」

―！

スズシ・ローナ　ＬＰ：３０００→２０００
鷹矢　ＬＰ：１０００→０

「アドバンス召喚成功時、【神獣王バルバロス】の効果発動！相手のカードを全て破壊する！」
「はいはいゴクローでゅーす！破壊された４枚の？『アーティファクト』の効果が？そう、ぜーんぶはっつどぅー！」
「くそっ！今度は全部『アーティファクト』か！」
「ブッ放せばいいってモンじゃありますぇーん！カドケウス、モラルタ、ベガルタを順＆番に特殊召喚！そんでもって神智の効果でバルバロス破壊しちゃって？カドケウスの効果で２枚ドロドローして？ついでにモラルタで堕天使ディザイアも破＆壊ｗｉｔｈベガルタでセットカードもブッ飛ばＳａｙ！」
「くそっ！ターンエンド…」
「ンじゃチャン僕のトゥアーン、ドロー！そのままバトゥー！モラルタで？そう！ダイレクトアタッー！」

―！

遊良　ＬＰ：１８００→０

…ピー

ほぼ同時に。
イースト校の実技用スタジアムに、３つの無機質な機械音が鳴り響いていた。
…それは紛れもなく、イースト校２年の天城　遊良、天宮寺　鷹矢、高天ヶ原　ルキの３人が、イースト校理事長である【白鯨】、砺波　浜臣からいつものように修業を受けている時間体での事。
しかし、いつもの【白鯨】からの修業とは違って…
遊良達は、３人の特別講師達によるデュエルの指導を受けており…

「ふむ、やはり『七草』を雇って正解でした。実に良い修業になる。」

また、教え子たちの負けっぷりを見て。

スタジアムから一人離れたそこには、決闘学園イースト校理事長…元シンクロ王者【白鯨】と呼ばれた男、砺波　浜臣が、観戦席から一人でそう呟いていた。

…満足そうに手で顎を触り、充分そうに頷いて。

そう、砺波がわざわざ【裏決島】にて、デュエル傭兵集団『七草』のメンバーを3人も自腹で秘密裏に雇ったのは偏に『このため』だったのだろう。

無論、多くの学生達のレベルアップ、イースト校全体の実力の底上げも目論見としては勿論のことなのだが…

しかし、それ以上に。その実力が『極』の頂きに到っている者達を、3人も確保できるというのは【白鯨】である砺波　浜臣からしてみてもコレ以上ないくらいに良い『買い物』でもあったはず。

何しろ、『極』の頂き…

長い長い決闘界の歴史を見ても、『そこ』に到達できる者というのは得てして限りない強者や一握りの選ばれし者達のみ。

幾億の凡人と、幾万の実力者と、幾千の天才と、幾百かの怪物の中から選りすぐられた…

【王者】にもなることの出来る素質を持った、『極』の頂きに到達できるデュエリストと言うのはいつの時代だってその人数は数えるほどしか出現しないモノなのだ。

それ故、そんな人種を一気に3人も手元に置く事が出来る今の砺波の度量は、確実に『ニンゲン』のソレを超えているはずで…

だからこそ、【裏決島】にて砺波が『七草』と対峙したときには、彼らがどのように映っていたと言うのだろう。

「学生達のレベルの底上げ、天城君たちの良い修業相手。そして私の暇つぶし…彼らほど適任はいませんね。実にいい拾い物をした。そこだけは【紫影】の屑に唯一感謝してやってもいい。」

ポツリと呟かれた一匹の【化物】の、公務と私情が混ざったそんな言葉を聞いている者はこの場には居らず。
【化物】となった己を測る良い実験体、ていの良い暇つぶしの相手…手懐ければ学生達、ひいては直々の教え子の良い修業相手となる…
おそらくシンクロ王者【白鯨】と呼ばれていた頃の彼を知る者が、何かの例えでここに同席していたら…きっと、今の砺波の言葉を聞いて自分の耳を疑った違いない。
そう、それほどまでに今の砺波の零した言葉は、【王者】の責務を第一に考えていたかつての【白鯨】からは考えられない程に―
それほどまでに、全てが彼の掌の上であるかのような、一種の不気味さを漂わせていたのだから。
けれども、【王者】を超えた一匹の【化物】が、2階席にて満足そうに不敵な笑みを零していることなど露知らず…
講師として、そして弟子達の修業相手として捕まった…もとい、雇われたデュエル傭兵集団『七草』は、雇われた仕事内容に従って。他の学生達とは一線を画す【白鯨】の教え子たちへと、デュエル後の指導を続けるだけで…

「高天ヶ原女史、君は少々、攻撃すること自体に気持ちが行き過ぎている。ソレが悪いとは言わないが、今のように相手がダメージステップで仕掛けてくる場合も想定し、攻撃力上昇のカードを使う場面を慎重に選びたまえ。折角上げた攻撃力も、攻撃を仕掛けるタイミングを見誤れば取り返しのつかないことになるのだから。」
「あ、はい…わかりました…」

「単調。」
「…む？」
「天宮寺　鷹矢。あなたのリズム、単調すぎる。出すエクシーズモンスター変えても、レベルチェンジさせても…基盤が『ガジェット』や『機械族』だから、リズムが読みやすい。もっと、メリハリつけるの。

そうしないと、いい的。」
「ぐ…返す言葉もない…」

まぁ、それでも彼ら『七草』にとっては、いくら鷹矢やルキが他の学生とは一線を画す【白鯨】の教え子であろうとも、自分よりも弱い相手には違いないのだろう。

他の学生達とは確かに違う、【白鯨】が教え子に認めるのも納得のモノを持ってはいる。けれども、他の学生達を教えるのと同じように彼らを冷静に降しつつ的確な指導を行える辺り…

それはそっくりそのまま『七草』と呼ばれるモノたちの実力の高さを物語る代物となりて、鷹矢やルキに『極』の頂きへの『遠さ』を実感させてもいるのだが。

また…

「くそっ…やること全部が裏目に出た…」
「ひやはは、ユラちんってば分かりやすスギィ！確かにかーに？『堕天使』はケッコーケッコーコケコッコーにソレナリのモンだけどもだっけーどぅー？ンでもちーっと素直過ぎーってカーンジィもすんだよねー。」
「…素直すぎ？」
「狙いがミエミエでー？迷いも相手にミエミエーって事よん。あとユラちん、迷ったらとりまバルバロスでブッ飛ばＳａｙ！って思ってるっしょ？」
「あ…それは…」
「ひやは、それじゃーイカンのよー！親父はもっとこー…」
「…え？」
「おっとっと、何でもナッシンーグ！それよりよーり？【やぶ蛇】に引っかかる率メニーメニーなのよチミ！めんどいからバルバロスでゼンブッパー！じゃなーくてさー、もっとこー、狙いを定めてシューティングる事も覚えとけ的な的なテキーラってかー？一＆点ｗｉｔ

ｈ集＆中！見極めってーの？もっともーっと研ぎ澄まＳＡＹ　ｈｏｏｏｏ！」
「は、はい、ギョウ先生…」

遊良の方も、【裏決島】以来となる『極』の頂きに位置している者との戦いに、改めて今の自分の実力との『距離』を強く痛感している様子。

圧倒的強者から手玉に取られるこの感覚…【決島】の前に戦ったシンクロ王者【白竜】もそう。夏休みに修業をつけてもらった『烈火』もそう…

そして【裏決島】で戦った、性根の腐った捻じれた男、あの屑の中の屑である【紫影】もそうだが、得てして『極』の頂きに到った者達を相手にすると途端に自分の攻撃の何もかもが手玉に取られているかのような感覚を遊良は覚えてしまうのだ。

それは偏に、『先』の地平に立っているだけの自分と、『極』の頂きとの距離がそれほどまでに遠いという事。

そう、いくら【決島】、【裏決島】を戦い抜き、そして先のアマギユーラとの戦いで『邪神』と呼ばれる神のカードを倒した経験が確かに遊良の糧となっているとは言えども…

それでも、本物の『極』の頂きに立つ者たちと比べれば…

まだまだ、遊良とて未熟さな部分が多いということであって―

「…前から聞きたかったのだが、何故貴様らはプロにならんのだ？」
「ひょ？」

そして、放課後の修業が終わってすぐに。

帰り支度をしながら、3人の『七草』へとそう質問を零したのはイースト校2年の天宮寺　鷹矢であった。

「俺には分かる。悔しいが、貴様らの力は今のトップランカー達より優れている…それだけの力があれば、裏社会などで稼がなくともプロ

で充分稼げるはずだろう?…いや、【王者】だって狙える力があると言うのに、どうして貴様らはプロにならんのだ。」

それは偏に、来年度からプロデュエリストになることが確定している鷹矢だからこそ零す事が出来た質問。

そう、夏休みの間にプロに混じって様々な大会に参加し、今も【白鯨】の命によりプロ候補生として時折授業免除で大会に出ている鷹矢だからこそ―

肌で感じたプロの世界の空気、そして現役のプロの世界を誰よりも感じた事のある鷹矢は、『七草』の力を同じくその肌で感じたからこそそんな質問をしたのだろう。

デュエル傭兵集団『七草』…

この3人の特別講師ではないが、同じく『七草』が一葉の一人と【裏決島】にて鷹矢と遊良は対峙している。

まぁ、その時はデュエリア校の鍛冶上　刀利がその場を引き受けてくれた為に大事には至らなかったものの…

それでも、その時に感じた『七草』の途轍もない実力…底の見えない、天井の見えない、本物の強者が発する『七草』の殺気は、その場にいた鷹矢と遊良に恐怖を与えるには十二分すぎる代物であったのだから。

…だからこそ、鷹矢は問いかける。

裏社会などに身を落とさなくとも、表社会の、なんなら正式なプロとして充分日の当たる場所で脚光を浴びれるだけの実力を持ったこの3人の特別講師達が。なぜ、真っ当な道を歩まずに、裏社会などでデュエル傭兵なんてしているのか…と。

そして…

一介の学生とはいえ史上初の高校生プロになる事が決定している、現エクシーズ王者【黒翼】の孫である天宮寺　鷹矢からの質問に、『七草』のメンバーたちは一体何を思うのだろう。

鷹矢から投げられた、『どうしてプロにならないのか』という質問を受けて…
『七草』が一葉、ゴ・ギョウとスズシ・ローナ、そしてホトケ・ノーザンは、どこか遠い眼をしながら―
「ひゃはは、そいえばむかーしむかし？『アイツ』が同じよーな事言ってたっけねー。」
「うん、言ってた。…それに、『正しい力は正しい場所で使わなきゃダメだ』ってのも言ってたね。」
「…フッ、懐かしいな。」

裏社会に身を置いている者らしく、その真意は明らかにはしないものの。
それでも、鷹矢からの質問を受けた『七草』のメンバーは…何やら、鷹矢からの言葉に各々思うところがあるかのような雰囲気を醸し始めたではないか。
…今この物語では語られぬ、『別の誰かの物語』にて出会い、そして『ここ』に至るまでの選択をしてきた彼らデュエル傭兵集団『七草』。
きっと、その思いは目の前の学生達には想像もつかないような道筋であったに違いない。それ故、彼らの壮絶なる人生の追憶は、およそ十数年しか生きていない鷹矢たちには想像も出来ない深さを持ちながら、どこまでも未熟な若者達へと発せられるのか。
すると、『七草』の中で最も思慮に長けているであろうホトケ・ノーザンが…
質問主である鷹矢へと向かって…
いや、この場を同じくしている遊良とルキにも同じように向けて。
ゆっくりと向かい直すと、その口を開き始めた。
「いいか、天宮寺少年…いや、高天ヶ原女史と天城少年もだ。良く覚えておきたまえ…誰もが皆、正しい場所で正しく力を振るえるモノではないのだと。」

「正しい場所で正しく力を…？まるで意味がわからんのだが…」
「ふっ、今は分からなくとも良い。いずれ分かるさ、いずれな。」
「ぬぅ…」

しかし、ホトケ・ノーザンから授けられた言葉に対し。
一人だけ意味のわかっていない雰囲気を醸しつつ、混乱してしまっているのは鷹矢が先んじて1人だけプロになったてしまったが故なのか。
…鷹矢には、どうしても腑に落ちない。
これほどまでの力を持ちながら、『プロ』という真っ当な道を選ばなかった者達…
それはエクシーズ王者【黒翼】を祖父に持つ鷹矢だからこそ理解する事が出来ない、表に生きる者がゆえの見解の相違。そう、真っ当ともいえる『覇道』を歩んでいる鷹矢には、どうしても『裏』の者達の『意味不明』な選択の意味が理解できず…

けれども、同じ言葉をかけられた鷹矢とは違い…

(正しい道は誰でも歩めるわけじゃない…だって、俺も…)
(なんか、わかるかも…私だって、『コレ』が無かったらもっと普通に…)

ホトケ・ノーザンの言葉の『真意』を、遊良とルキは理解していた。
…そう、才能があり、実力もあるのに。
その力を公の場で発揮する事を許されなかったり、認められなかったりする者が…この世界には、確かに存在しているのだと言う事を。

…『Ｅｘ適正』が無く、世間からデュエリストとして認められてこなかった天城　遊良。
…『赤き竜神』をその身に宿すが故に、思うようにデュエルが出来なかった高天ヶ原　ルキ。

一般的な、普通の者達が悩む必要の無い事も、特殊な事情を持つ彼らは『常』にソレに悩まされてきた。
それ故、鷹矢が全く理解を示せない特別講師ホトケ・ノーザンの言葉の意味…ソレが、遊良とルキには、痛いほど理解できてしまう。

つまりは、彼らも―

そして―

「話は終わりましたか？」
「あ、砺波先生…」
「ぬぅ…釈然とせんが、とりあえず今日はこの辺りにしておいてやる。」
「はぁ…なんで鷹矢はいっつも上から目線なのよ、もう。」

観覧席から降りてきたのだろう。通常の修業時間も終了となったことで、砺波がいつものように場を締めにかかって。

「では天城君、天宮寺君、高天ヶ原さん。君達は今日のデュエルに対しそれぞれレポートを書いてくるように。先生達はこれで上がってもらって結構ですよ。今日も一日お疲れ様でした。明日もよろしくお願いします。」
「承知した。」
「…ひゃは、了解でゅーす。」
「ゴさん、相変わらず【白鯨】にビビリすぎ。」
「…うぇーい、りじちょーのアレ喰らってない奴に言われたくなういーねー…」

そうして、帰り支度をしている学生を他所に…『七草』の3人は、静かにドームを去っていく。
その後ろ姿には裏の者らしく一分の隙もないものの、しかし一日の終わりにどこか疲れた雰囲気を感じさせるのは彼らもまた偏に人間である証拠でもあるのだろう。
…裏の世界で生きてきた彼らもまた、慣れない教員生活を強いられている為に疲弊していないと言えば嘘になる。
そう、それが、いくら【白鯨】からの逃れられぬ圧による脅迫にも似た依頼であったとしても…それでも、文字通り命を賭けて仕事をしてきた裏の人間である彼らにとっては、『今』のこの生ぬるくも経験した事の無い職場は、これまでとは違った難しさを感じているはずなのだから。

「よし！では帰って飯だ飯！今日は肉祭りをすると遊良と約束していたのだ！たらふく食うぞ！」
「…ホントにそんな約束したの？」
「…この前の大会で優勝したらって軽い気持ちで約束したら…」
「あー、凄い勢いで優勝してたね、確かに。」
「せっかく家が綺麗になったのに鷹矢のせいですぐ肉臭くなっちまう。」
「む？それの何がいけないのだ。」
「はいはい、鷹矢は早く帰ってご飯食べたいんだよねー。ホント食いしん坊なんだから、もう。」
「うむ！今日は食うぞ！どうせ俺の賞金で買った肉だからな！遠慮などしなくとも良い！」
「今日『は』じゃなくて今日『も』だろ。大体お前、飯食うのに遠慮なんてした事無いくせに。まぁお前が稼いだ金だから仕方ないけど。」
「うむ！」

また、遊良達の方も。
ちょうど帰り支度が済んだのだろう、鷹矢の空腹による夕飯への期

待値が上がっていくと共に…ソレを用意する遊良の気持ちが、別の意味で重くなってきていて。
…まぁ、ソレも当然か。
何しろ学業生活に放課後の修業、毎日の家事に課題にその上鷹矢の食事の用意に加え身の回りの世話までこなさなければならない遊良の大変さは、きっと同じ年代のどの学生よりも大変な部類に入るはず。
それに加え、最近では鷹矢が大会やらプロ入り前の研修やらで自分で稼ぐようになってきた所為で少々わがままも増えてきてしまったのだ。食事のリクエストにしたってそうだし、デュエルの研究と銘打ってこれまで以上に鷹矢が夜更かしするようになった所為で…特に最近の鷹矢は朝寝坊も増えてきてしまっているのが現状でもあり…

…とは言え、これもまた彼らが取り戻した日常には違いなく。
【決島】が始まる前から起こっていたゴタゴタも先日全てが片付き、【決島】と【裏決島】で起こった壮絶な戦いも終わり…遊良の指名手配騒動も終息し、騒動ばかりが起きた今年度もようやく終わりが見えてきた。
それはもうすぐ3年生になる彼らにとって、どれほどの経験値となりてその成長に繋がったのだろう。
…今はまだ、彼らも最高学年になるという自覚はない。
けれども、ようやく落ち着きを取り戻してきた日常は彼らなくしてはありえなかった平穏であるが故に…ゆっくりと過ぎる毎日の平穏は、きっと彼らにとってもかけがえのないモノに違いないことであって。

そんな、ようやく取り戻した日常の中で…

遊良達もまた、本日の修業を終えた満足感の中で帰路につこうとし

た…

―その時だった。

「…あぁ、天城君、君はもう少し残って下さい。」

「え？」

いきなり…

今にもドームを去ろうとしていた遊良達へと向かって、突然静止を促し始めたイースト校理事長、砺波　浜臣。

いや、正確には遊良達を止めたのではなく、遊良一人だけを名指しで止めたのだが…

しかし、今まさに3人揃って帰ろうとしていたそんな矢先に、突如遊良だけが呼び止められては。

その両隣にいた鷹矢とルキも立ち止まってしまうのは極自然の事であり、そのまま声をかけてきた砺波へと向かって…

呼び止められた遊良ではなく、何故か鷹矢が先んじてその口を開き始めた。

「理事長よ、それは火急の用事なのだろうな。この俺の腹具合よりも優先するべきほどの。」

「…当たり前でしょう？と言うより、どうして君の腹具合が私の用事よりも優先されるべき事になるのかが疑問なんですが。」

「理事長こそ何を言っているのだ？俺は修業後で腹が減っている、だから遊良の作った飯を迅速に、火急に、一刻も早く食うのは何よりも優先されるべき事に決まっているはずなのだが？」

「…いや、だから何でお前の腹具合が最優先になるんだよ、この馬鹿野郎。」

「はぁ…ホントお馬鹿なんだから、もう。」

そんな鷹矢の零す言葉は、【白鯨】の呆れた声など意に介さず…どこ

までも己の腹具合を主張し食い下がり続けるだけの代物となりて、砺波の苛立ちへと変えていく。
…一体、どうしてこの男はここまで傲岸不遜に振舞えるのだろう。
砺波の脳裏に浮かぶのは、彼の祖父の若い頃そのままであり…まるで若い頃のあの男が今自分の目の前にいるような錯覚を砺波が覚えそうになったのも、きっと気のせいだけはないはずで。
…また、遊良の方も。
修業終わりに名指しで砺波に呼び止められた事に対し、またレポートの増大と言ったような少々の不安が脳裏をよぎったものの…
けれども、砺波にわざわざ呼び止められてソレを無視することも遊良に出来るはずもなく。
そのままルキと、少々ふて腐れている鷹矢へと向かって…

「二人は先に帰っててくれ。」
「ぬぅ…仕方がない、だが俺は腹が減っているのだ。早く帰ってきて飯にしてくれ。頼んだぞ?」
「わかったわかった。」
「本当に分かっているのか?俺は物凄く腹が減っているのだぞ?それは言葉では現しきれないくらいの…」
「はいはい、じゃあ行きますよー。鷹矢が居ると邪魔になるだけなんだしさー。」
「ぬ?おい待てルキ、襟を引っ張るな!おい!聞いているのか!ル…」

そうして…
ルキに雑に引き摺られ、鷹矢はドームから出て行ったのだった。

「さて、では行きましょうか。」
「え…行くってどこに…」
「…先ほど、私のディスクに連絡が来ました。君に…逢いに来た人物が居ます。」
「俺に会いに…ッ、それって…いや、でも…」

そして、鷹矢とルキがドームから居なくなってすぐに。
頃合を見計らって本題を告げてきた砺波の言葉を聞いて、思わず息を飲んでしまった遊良。
自分に客…この数ヶ月、『ソレ』で悩みっぱなしだった遊良にとっては、ソレが誰かのかを砺波が告げなくともおおよその見当がつくと共に、言葉にならない期待のようなモノが浮かび上がってきている様子。
けれども、ソレと同時に…
過度な期待をした分だけ、ソレが見当違いだった場合のショックも大きくなってしまうことを遊良も分かっているために、ぬか喜びをしないように遊良は逸る心をどうにか抑えようともしているのか。
(しかし劉玄斎め…まさかここまでヘタレだったとは。アレからもう2ヶ月も経っているのだぞ?)
砺波がそんなコトを考えていることも露知らず。
すでに夕方も終わりかけで、誰もいなくなっている校内を…砺波に連れられ、遊良は静かに歩きはじめて。
その間二人に会話はない。ただただ静かに、どこか重い空気の中で…遊良は砺波に連れられて、静かな校内を歩き続けるだけで…
…そのルートから、向かっているのはおそらく理事長室に違いない。
まだ、ぬか喜びはしない。予想と違った場合に、どうせ傷付く事になるのだから。しかし、それでもなお理事長室へと向かっている遊良の心臓は押さえようとしてもなお…理事長室に向かう階段を上がるたびに、更にその激しさを増していくのみ。
…そして、最上階へと辿り着いたとき。
ここまで会話を挟まなかった遊良は、厳かな理事長室の扉の前で…

ようやく、砺波へと向かって口を開いた。

「あ、あの…俺に会いにきた人ってもしかして…」

「えぇ、そのまさかです。人物が人物なだけに下手な部屋を用意するわけにもいかなかったもので……では、入りなさい。」

「し、失礼します…」

…厳かな扉の前、そこでゆっくりと砺波は扉を開き始める。

そんな重々しい扉の向こうからは、まるでここと異なる空間があるのではないかと思える程に重々しい空気が部屋の中からもれ出てきており…

…糸をピンと張り詰めたかのような空気感、逸る心臓が飛び出るほどに強く打ちつける。

ドアを開け、先んじて入った砺波はそのまま遊良の為に重い扉を押さえており…

そして、続いて理事長室へと入った遊良の目に…

飛び込んで、来たのは—

「あ…」

遊良の目に飛び込んできたのは、砺波以外にこの部屋に元からいた『2人』の人の姿。

一人はしわがれた小柄な人物、長く伸びた白髪と白髭によって、顔だけでなく体までも隠した異様な雰囲気をした老人であり…

それは超巨大決闘者育成機関【決闘世界】最高幹部にして、多くのプロデュエリスト達から『妖怪』と呼ばれし翁…

—綿貫　景虎。

そして—

それ以上に遊良の網膜に強く映りこんだのは他でもない。
…それは遊良が待ち望んでいた人物。それは遊良がずっと待ち焦がれていた人物。
まるで世紀末を生きているのではないかと思える程に鍛えあげられた肉体と、丸太のような腕…その鋼鉄のような筋肉は、およそこの世の誰よりも鍛え上げられている代物と思えるくらいの隆起となりて、この理事長室の中で最も重々しい存在感と共に一際異なった存在感を放っていて。

そう…

そんな重々しい雰囲気と、人間離れした肉体を持った人物など、この世界においてはたった一人しか存在しない。
それは【王者】と『同格』と称えられし男。世界最強の一人に数えられる伝説のデュエリスト。

王座を踏みつける戦闘狂、暴れ狂う大災害…

『逆鱗』…

―劉玄斎、その人。

そんな待ち焦がれた、しかしどこか邂逅を諦めてしまっていた人物とようやく再開を果たしたと言うのに…
何の前触れもなく現れた劉玄斎を前にして、遊良はただただ固まってしまっているだけではないか。
…しかし、それも仕方がないといえば仕方の無いこと。
何しろ、【決島】が終わってから既に4か月以上も経っているのだ。

年も明けてしまったし、【決島】が終わってからも遊良の身には『色々』な事が起こっていた。
それ故、それまでずっと悩み、苦しみ、時には体調を崩すまで思い詰めていた遊良からすれば…
近いうちの邂逅を諦めつつあったために、今こうして予期せぬタイミングで前触れもなく現れた劉玄斎に対し、何を言っていいのかわからなくなっている様子でもあり…

…また、劉玄斎の方も。

理事長室に入ってきた遊良に対し何を言うでもなく、その太い腕を組みただただ俯いて座っているだけではないか。
…沈黙が重い。
遊良が理事長室に入ってから、まだほんの数秒しか経っていないと言うのにも関わらず。まるで永遠にさえ感じられるその重い沈黙の部屋の空気は、形容し難い気まずさとなりてこの部屋の４人に重く圧し掛かり続けるだけ。

「…フム、では儂らは退散といこうかの。儂らが居ると話せないこともあるじゃろうしな。」
「そうですね。」

だからこそ、この部屋の沈黙に耐えかねたのか…はたまた、自分達の仕事はもう終わったと判断したのか。
【白鯨】砺波　浜臣と、『妖怪』綿貫　景虎は、固まっている遊良と劉玄斎を他所に…
理事長室から外へと出ると、静かに理事長室の扉を閉めこの場を離れ始めるだけであり…

「…ようやく心の準備が整ったようですね、あのヘタレは。」

「いんや、今日もまだウジウジ言っとったから、儂もいい加減キレて無理矢理連れて来たんじゃ。デカい図体して…本当に肝っ玉の小さい奴じゃわい、小龍の奴。」
「…そういえば昔、イノリさんも告白まで随分待たされたと言っていた記憶があります。」
「天城　竜一やあの子の『心』の強さは絶対にイノリの血じゃな。小龍に似なんで本当によかったわぃのう。」
「えぇ、本当に。」

ゆっくりとこの場を後にする彼らから零されるはそんな会話。
その出所は違えど、『逆鱗』の事情を知る【白鯨】と『妖怪』は遊良と劉玄斎の二人を理事長室へと置いたままに…
そのまま、校内へとその姿を消していくのだった。

そして…

理事長室に置き去りにされた、遊良と劉玄斎の方はと言えば。
遊良がこの部屋へと足を踏み入れた時の恰好そのままに、二人ともにただただその場に固まったまま動きを見せていないではないか。
…何と言っていいのかわからない。何と切り出していいのかわからない。
あまりに唐突の邂逅に、遊良の思考は完全にストップしてしまっているかのよう。そして劉玄斎の方もまた、腕組みをし俯いたまま…ただただ、重苦しい沈黙が続いているだけ。

そのまま…

二人して固まったままで、どれだけの時間が経っただろう。
…時間にして一瞬だったかもしれない。
…けれども永遠に近い静寂だったかもしれない。

そんな、異様な緊張感が張り詰めているイースト校の理事長室の中で…

ゆっくりと…

その口を開いたのは、『逆鱗』と呼ばれし劉玄斎からであった。

「ユーラの奴ぁ…逝っちまったか？」

「ッ…」

しかし…

開口一番、ようやく口を開いた劉玄斎から飛び出してきたのは、遊良が予想もしていなかった言葉と名前ではないか。

…目を合わせず、体勢を崩さず。

遊良に視線も合わせずにそう零した劉玄斎は、一体何を思って『その名』を遊良へと向かって零したというのだろう。

「それって…俺と同じ顔をした、『前の世界』から来たっていうアイツの事…ですか？」

「…あぁ。お前と戦った…もう一人の、アイツの事だ。」

「ど、どうして貴方がアイツの事を…それに、何で俺と戦ったってことも…」

そう、劉玄斎からの言葉を『期待』していた遊良からすれば、劉玄斎がまず初めにその人物の名前を出してきたのはどう感じられたのだろうか。

…意外だったかもしれない、拍子抜けだったかもしれない。

それとも、思っていたのとは違う言葉に落胆すら感じたかもしれない。

けれども、劉玄斎は『ソレ』もまた必要な事なのだと言わんばかりの雰囲気をどこまでも崩さぬまま…

遊良へと向かって、更に言葉を続けるだけで―

「…それも話さなきゃなぁ…」

ゆっくりと…

それまで組んでいた腕を解き、ようやく今度は確かに遊良へと向かい直しつつ立ち上がり始めた男、劉玄斎。

それはようやく『決心』がついたのか、それともこれ以上情けない自らを少年へと見せたくないが故の決意なのか…

…重い足取りで、入り口にて固まったままの遊良へと静かに近づき。

震えている様にも見えるその手で、遊良へと触れようとしてやはり止め…

その場に跪いて、ゆっくりと息を吐き、遊良と、視線を合わせたのだった。

「目が…イノリの目にそっくりだ。」

「…天城　イノリは祖母の名です。俺が生まれてすぐに病気で亡くなったって…」

「あぁ…情けねぇことに、俺はその時まで知らなかったんだ…俺に息子が居ることも……『孫』が居ることも…なぁ…」

「ッ…」

劉玄斎から零れる言葉は、明言しなくともソレが真実であるのだと言うことを遊良へと伝えてくれる。

しかし、その言葉を漏らす劉玄斎の方からはどこかまだ遊良への遠慮と言うか懺悔というか、何やら煮え切らない『葛藤』の様なモノが入り混じったままにポツリポツリと零されるだけであり…

「聞いてくれるか？…昔の…話だ。」

そして…
劉玄斎は、語りだす―
己の人生に起こった軌跡、これまで何を体験しどんな経験をし、そして何を思いどんな行動をしてきたのか…を。

…それは一人の男の濃い半生。

―激動と情熱に満ちた若かりし頃の運命の出会い。
―失意のうちに荒廃してしまった絶望。
―立ち直り再び戦いの日々に舞い戻る選択をしたその意味。
―全てを捨てるほどの喪失感に心を壊してしまった晩年。
そして、幼い孫が地獄を味わっている日々に何も出来なかった無力な日々に加え…
アマギ　ユーラとの、短い日々―

…その1つ1つを、遊良は黙って聞いていた。

記録には刻まれていない、伝説に残るほどの偉業を残した男の隠された秘密。
その感情も、その選択も…
その行動の何もかもがリアルに語られるソレは、世間一般に知られている『逆鱗』の勇姿とはかけ離れたモノに違いなかったものの…
けれども、遊良はただただ静かに聞いているだけ。自分が知りたかった、自分が知らなかった『逆鱗』の…その、この世の誰も知らない真実を、遊良は静かに聞いているだけ。

「これで、全部だ…これが俺の…情けねぇ、人生だ…」
「そんな…事が…」
「情けねぇ話だぁ…若ぇ頃の女を忘れられず、捨てられたと勘違いして荒れて…けど、どっかで見ててくれると思って、必死になって前線に立ち続けて…何も…俺ぁ、大切なモノを何一つこの手で守る事が出来なかった…」

それは『後悔』…
もう取り返しのつかない過去へと向けた、全てが後手後手に回ってしまっている自分の人生を劉玄斎は悔やみ続けている。
…戻りたくても戻れない、取り戻したくてももう遅い。
きっと、劉玄斎はこれまでずっと自分を責め続けてきたのだろう。イノリという最愛の女性を守れなかった弱かった自分を責め、最愛の女性と自分の息子に『何』もしてやれなかった自分を責め…
そしてそれ以上に、孫をこれまで待たせてしまった自分をずっと、ずっと責め続けているに違いなく。
だから―

「俺には…資格が無えんだ…胸張ってお前の……じいちゃんだって言える…資格が…」

だから、こそ。
遊良がずっと知りたがっていた、その『答え』を言った時であっても―

「俺ぁユーラの奴を救えなかった…それだけじゃねぇ、お前の事も、もっと早く何とかしてやることだって出来たはずなのに…今更になってお前をにもホントの事を言う勇気も出なかった…俺ぁ、怖かっ

たんだ…イノリにも、息子にも、孫にも、何も出来ないこんな自分が不甲斐なくてよぉ…俺ぁ、こんなどうしようもねぇ…ダメな、男なんだ…」

劉玄斎の言葉にはどこまでも懺悔が付きまとっており、それ以上の『後悔』の念が今もなお彼を雁字搦めにしたままずっと彼を苦しめ続けているのだろう。

…きっと、その思いは消える事はなく劉玄斎の心に巣食い続ける。

懺悔の思も、後悔の念も。ずっと大切なモノを守れなかった劉玄斎にとって、自分を責め続ける事だけが唯一自分に出来る贖罪なのだと…

そう、思い込んでしまっている様子で―

けど…

それでも―

「それ、でもっ…」

再び俯いてしまった劉玄斎へと、搾り出すようにして零されるは嗚咽が混じった遊良の言葉。

「俺は…ッ、嬉しかった！俺に、ち、血の繋がった、か、家族がいるかもしれないって…ひ、一人じゃないって思って、嬉しかったんだ！」

搾り出されるようにして零された遊良の言葉は、まさしく遊良の心からの吐露そのモノ。

…考えて放ったのではない。

自分を責め続け、懺悔と後悔の念に押し潰されている劉玄斎へと向

かって…それでも遊良は、どうしても言葉を発せずには居られなかったのだ。
そう、例え劉玄斎のこれまでがどうであろうとも、劉玄斎がどれだけ己の事を責め続けていても…
「だから…貴方が、祖母や父の事で、ッ…どれだけ、責任を感じていても…でも…それでも！」
それでも、遊良もまた…
これまで溜め込んできた、己の心の内を曝け出すように―
「それでも、あ、貴方のことを…か…家族だって！…お、思っても……い、いいです、か…？」
「ッ…」
だからこそ…
劉玄斎のその行動は極自然なモノだった。
そう、遊良の…『孫』の悲痛な叫びを聞いて、突発的に立ち上がった劉玄斎が取った行動を、一体誰が攻める事が出来ようか。
「すまねぇ…本当にすまなかったぁ！ゴメンなぁ遊良ぁ！」
「ッ…ぅ…ぁ…」
立ち上がり、遊良を抱きしめ…言葉と共に涙を零し、感情を押さえる事が出来ない劉玄斎。
力強くも慈しむように、優しく孫を抱きしめるその姿は、彼もまた心から孫を思っているからこそ反射的に動いた心からの行動。その

行為は、確かに彼らが『血の繋がった者』であるからこそ止める事が出来なかった、肉親ゆえの反射的な代物であったに違いなく。
そう…劉玄斎がどれだけ過去の事で己の事を責めていようとも、それでも『今』ここにいる遊良にとっては確実な『血の繋がり』を受け入れられないはずがないのだ。

天涯孤独…

その孤独は、およそ常人には計り知れないほどに深い寂しさに違いない。
それ故、それまで血の繋がった者のいない孤独に苛まれ続けていた遊良の感情は、今、確かに彼の口から『血の繋がり』を認める言葉を貰ったことによって…
その、力強くも優しい祖父の腕の中で…
流れ出る涙と共に、もう、止めることなど出来はしないのだった―

―…

「…なぁ…良ければなんだけどよぉ…ユーラの奴の…墓ぁ、作ってやりてぇんだ。」
「え？」
「アイツはここと違う世界から来たつってたが…でも、アイツも竜一とスミレさんから生まれたっつーからよぉ…だから…お前にゃ迷惑な話かもしれねぇが、その隣に墓ぁ、作ってやりてぇんだ。俺にとっちゃぁ…アイツも、孫に違いねぇんだ…」
「…」

しばらくして。
涙の後に、お互いが言いたかったおよそ全ての事を伝え終えた遊良と劉玄斎が、イースト校の屋上にて夕日に包まれていると…
唐突に、遊良へと向かって劉玄斎がそんな事を言ってきた。

…それは『前の世界』から来たと言っていたアマギ　ユーラも、少しの間生活を共にした劉玄斎にとっては限りない『身内』に違いないと思っての言葉なのか。
そう、アマギ　ユーラの方からは、『繋がりなんてない』と言われていたにも関わらず…それでも彼の為に何か行動してやりたいと願う劉玄斎の心は、確かにあのアマギ　ユーラもまた見て見ぬ振りなどできない存在であったに違いないことであり…

「わかりました。俺も…アイツを、父さんと母さんの隣で、眠らせてやりたい。」
「遊良…ありがとうな…」

また、遊良の方も。
きっぱりと存在の相違を宣言したとは言え、それでも確かに『あまぎ　ゆうら』として生きていたあのアマギ　ユーラの事を無碍には出来ず…
それも偏に、いくら敵であったとは言えども自分と同じ孤独を味わい、自分よりも酷い喪失を味わい、そして他の誰にも関わる事なく『天涯孤独』のままに消えていったアマギ　ユーラに対し…遊良もまた、思うところがあるが故なのだろう。
…劉玄斎からの申し出に対し、それを拒否することもなく受け入れ。
同情などでは断じてない。『この世界』においては他の誰にも感知されていないあの男の事を…
消滅する最後の時まで『孤独』のままであったあの男を、少しでも弔ってやりたいという気持ちは、確かに遊良の中にだってあるのだから。

そして―

「そうだ…なぁ、遊良…俺の名前なんだけどよぉ…劉玄斎っつーのは

…まぁ、なんつーか、芸名みてぇなモンだってのは…知ってっか？」

ほんの少しの間の後。

唐突に、劉玄斎が夕日に包まれながらも遊良へと向かってそんな事を聞いてきた。

「はい、知ってます。本名を知る者は少ないって…」

「あぁ、俺の『本当の名前』を知ってんのは俺の妹と綿貫のジジイと…あと、イノリぐれぇだった。それだけ、『劉』の一族っつーのは…自分の本名を、隠さなきゃいけねぇ決まりがあんだ。一説には、遥か昔に神に喧嘩を売った所為だって逸話もある…ま、古ぃ話だ。俺の生まれた龍国…龍華中央決闘帝国の、創世記に書かれてるぐれぇの…古い話だぜ。」

「…龍国の創世記…母さんが喜びそうな話ですね。母さんは絵本作家だったんですけど、歴史の研究が趣味だったみたいで。」

「そうかぁ…なら、直接会って話してみたかったなぁ…」

…それは世間でも『謎』とされている、劉玄斎という人間の『本名』について。

そう、『小龍』という名は幼名の頃の通り名。かつての幼少の頃、他人よりも人一倍小さかった彼を見て『とある老人』がつけたという、あだ名のようなモノであり…

また、『劉玄斎』という名もそう。

小さき龍が『逆鱗』と呼ばれるようになってから、最早小さき龍ではなくなった彼自身が自らに課した…『龍を従える者』という意味を持ったとある国の言葉からきた芸名のようなモノだと言う事は、彼が引退した今でも広く世間一般に知られている。

「だからよぉ、お前にも知っておいてほしいんだ…家族として…俺の、本当の名を…」

「え…」

だからこそ、ようやく出会えた『家族』として。

劉玄斎は、一族の『掟』によって禁じられているはずの自らの名を、何の恐れもなく孫へと伝えようとしているのか。

…そう、これは『繋がり』。

確かに血の繋がっている、ようやく出会えた孫へと向けた…祖父の、決意表明のようなモノ。

…自らの本名を明かすその意味の重さを、劉玄斎は理解している。かつての古の時代に、『神』に喧嘩を売り目をつけられている『劉の一族』が自ら名を明かすと言う事は、それだけ『神』に狙われる事になるのだと言い伝えられているのだから。

しかし、それでもなお劉の一族の掟に反してでも―

劉玄斎は、どうしてもソレを遊良へと伝えたかったのだろう。

そのまま、劉玄斎は静かに1つ息を吐くと…

ゆっくりと…

遊良へと、向かって―

「俺の本当の名前は……良玄……劉　良玄ってぇんだ。んで、多分イノリは、俺の本名を息子に…竜一に、伝えたんだろうなぁ。」

「え…じゃあ…俺の、名前って…」

「あぁ…俺の『良』の字を…つけて、くれたんだろうなぁ…多分だけどよぉ…そんな気がすんだ…」

「…ッ…父さん…」

ゆっくりと伝えられた劉玄斎の真の名と、そして自分自身の名に付けられた『意味』を心の中でゆっくりと感じ。

それだけで、どれだけ自分が親から愛されていたのかを遊良は再確

認するかのように…
そう、遊良の目に浮かぶ涙は、決して哀しみからくるモノではない。それは少し前に悩んでいた、親からの愛情の『真の意味』を今ここで本当の意味で理解したが故に浮かんできてしまう、哀しさではない涙に違いないのだ。
…繋がっている…親から受けた愛情と、受け継がれた意思はちゃんと自分にも繋がっている―
誰に何を言われなくとも、確かに遊良にはソレが分かる。父の思い、祖母の思い…ソレが偶然などでは断じてないという、確信めいた実感を遊良は今確かに感じた。
そんな、今はもう居ない父と、そして記憶には無いが写真で見た事のある祖母の思いを…遊良もまた、夕日の中で確かに感じ―

「あ、そういえば…」

しかし、それとは別に。
夕日が沈み行く屋上で、遊良は滲んだ涙を拭ったかと思うと…
ふと思いついたように、劉玄斎へと…祖父へと、1つ言葉を投げかけて。

「おう、どうした?」
「あの…アイツとは、デュエルしたりしてたんですか?」
「あぁ、ユーラのことか……一回だけな。俺が渡した『儀式』関連のカードを試したいって珍しくアイツの方から言ってきて…」
「じゃあ…あの…」

そして、祖父からの返答を聞いて。
遊良は何を思ったのだろうか、どこか言い難そうに…
しかし、言わずにはいられないようにして…

「お、俺とも、デュエルしてもらえませんか!?」
「…あ?」

遊良の口から飛び出したその言葉。
それは祖父へと向けた、孫の初めての我が侭のようなモノでもあった。
…まだその心の距離に距離はあれど。
それでも、ようやく血の繋がりを手に入れた遊良からすれば…ここで、ようやく出会えた祖父に対し、どうしてもそう言わずにはいられなかったのだろう。
…【王者】と同格と呼ばれた伝説のデュエリスト『逆鱗』。
その伝説も、その経歴も、その偉大さも何もかも。『逆鱗』とデュエルすると言う事が、果たして『どういった意味』を持つのかも、遊良とて勿論理解はしている。
その存在からして【王者】と同じ。簡単にデュエルする事など許されることではなく…ソレはいくら肉親であろうとも、おいそれと口にしてはいけない事であるコトくらい、遊良だって形として理解してはいるのだ。
けれども、それでもなお口にしなければならなかったのだと言わんばかりに…
遊良はただ、ようやく出会えた祖父と…家族として、何のしがらみもなく、ただ何気なくデュエルをしたかった。
それは例えるならば鷹矢のように…
そう、鷹矢のように、相手が【王者】だとか関係なく。ただ『家族』として、当たり前のように祖父とデュエルするという事を、遊良は言わずには居られなかったのだろう。
まぁ、遊良が祖父へとそう言った背景には、少なからず『前の世界』から来たアマギ　ユーラの存在もあるのだろうが…
何しろ、『前の世界』から来たといって、自ら『今の世界』に繋がり

などないと豪語していたアマギ　ユーラとは言えども…それでも、自分と同じ顔や声をした存在が、短い期間とは言え自分よりも先に祖父と共に暮らし、そして一度だけとはいえデュエルをしていたという事に、遊良も何か感じるモノがないと言えば嘘になるはず。

…だからこそ、遊良は祖父へと向かって。

少し震えている声で、勇気で一歩踏み出した言葉を祖父へと投げかけ―

「けど…いいのかぁ？俺ぁ、てっきりお前には恨まれてるもんだと…」

「…恨んでなんかいません。けど…ズルイなって…だって、アイツはあなたとデュエルしたことがあるのに…俺は…」

「あぁ…そうか……クハハハハ、そうだよなぁ、そりゃズリぃよなぁ。よし！デュエルすっか！」

また、劉玄斎の方も孫からの申し出を断ることなどするはずもなく。

そう、【王者】と同格の者としての肩書きだとか、伝説に数えられるデュエリストだとか…

デュエリア校学長としてのメンツだとか、向こう1年間の決闘禁止を言いつけられているだとか、そんな『縛り』程度で劉玄斎が孫からの申し出を断るわけがないのだ。

…劉玄斎からしても、孫との邂逅は望んでいたこと。

随分と、待たせてしまった―

それが、己の決心がつかない所為で先延ばしになってしまっていた、情けない理由からくる懺悔だとしても。

それでも、折角の孫からの誘いに…

祖父として、劉玄斎もまた応えないわけにはいかないのだから。

…そうして、二人は距離を取る。

それは心の距離ではない。デュエリストとして、心をぶつけ合う為に必要な間合いを取るだけ。

夕日だけが見ている、他に誰も見ている者など居ない屋上で…二人はデュエルディスクを装着すると、デッキが現れ手札を引いて…

…今、誰も居なくなったイースト校の屋上で。

『逆鱗』という肩書きも、Ｅｘ適正のないデュエリストだとかいうレッテルも、その何もかもが関係の無い…

ただの、孫と祖父のデュエルが―

―デュエル!!

今、始まる。

先攻は、劉玄斎―

「俺のターン!行くぜぇ、俺ぁ手札から【水征竜―ストリーム】の効果発動ぉ!手札のストリームと【エクリプス・ワイバーン】を捨て、デッキから【瀑征竜―タイダル】を特殊召かぁぁん!」

―!

【瀑征竜―タイダル】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２０００

デュエルが始まってすぐ。
大気を震わせる劉玄斎の声と共に、天より降り注ぐ豪雨のエフェクト共に空から降りてきたのは…
まるで大瀑布がそのまま竜の形と成ったかのように荒れ狂う姿をした、流れの化身たる水害の竜であった。

―征竜

それは大自然の暴走が化身となった、荒ぶる災害の竜達の総称。
噴火、洪水、竜巻、地割れ…その咆哮は雲を引き裂き、周囲の大気を怯えさせるとまで言われた…まさに『災害』その物でもある、凶悪なる４体のドラゴン達。
その力の凶暴さは、この世界においては知らぬ者など居ない程に有名であり…

「凄い…これが本物の…征竜…」

遊良も、映像ではなく『本物』を見るのはこれが初めて。
その迫力は遊良が想像していたよりも圧倒的に凄まじいモノであり、その圧力は遊良が予想していた遥か上をいく代物となりて、今まさに遊良の目の前にその姿を現しているのか。
何しろ、この世界において【征竜】というカードは、その凶悪さ故か使用・所持を『逆鱗』と謳われた劉玄斎を除いて他の誰にも許されていない。そう、【征竜】というカードの所持も使用も複製も、【征竜】に関わることは劉玄斎以外には絶対に認められていないのだ―
それ故、過去の映像ではなく、正真正銘ここに召喚された『生』の征竜たちを見て…

遊良は思わず感嘆の声を漏らしていて―

「続けてエクリプスの効果発動ぉ！俺ぁデッキから【真紅眼の黒竜】を除外し、そのまま魔法カード、【七星の宝刀】を発動ぉ！場のタイダルを除外して２枚ドロー！そんで除外されたタイダルの効果で【青氷の白夜龍】を手札に加えるぜぇ！更に【手札抹殺】を発動だぁ！４枚捨てて４枚ドロー！」

「５枚捨てて５枚ドロー！…【手札抹殺】を使ってきたってことは…」

「よぉし！これで準備は整ったってなぁ！たった今【手札抹殺】で墓地に捨てた、【嵐征竜―テンペスト】の効果発動ぉ！墓地のエクリプスとストリームを除外し墓地から自身を特殊召喚！そんでエクリプスの効果で除外されていた、【真紅眼の黒竜】も手札に加え…更に手札から【地征竜―リアクタン】の効果発動ぉ！手札のリアクタンと【真紅眼の黒竜】を捨てぇ！デッキから【厳征竜―レドックス】特殊召かぁぁん！」

―!!

【嵐征竜―テンペスト】レベル７
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００
【厳征竜―レドックス】レベル７
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／３０００

しかし、それだけでは終わらない。

止めどなく現れる災害の竜達。洪水の化身の後に続きしは…旋嵐を呼ぶ竜巻の化身と、大地を引き裂く地割れの化身。

一つの災害だけでも、人の手に負えぬであろう力を持っていると言うのに…ソレを同時に二つも従えるなんて、劉玄斎の力は一体どこまで計り知れないと言うのだろうか。

そう、遊良も父の遺品の中にあった映像でずっと見ていた…これが、これこそがかつて災害の竜たちをその身一つで支配し、文字通り

『逆鱗』を震わせ決闘界で暴れ回った男、劉玄斎のデュエル。
たった一人の男の戦いが、世界の法にも刻まれるというその歴戦の重み。それは劉玄斎という男の功績が他に類を見ない程に大きいという事の証明かつ実績となりて、その凄みと共に孫の前で繰り広げられているに違いなく。
…決闘界の根幹に関わるほどの、あまりに大きいその力。
その、『逆鱗』たる劉玄斎にのみ使用を許された、もう公の場では決して見ることの叶わぬ大災害の竜たちの真価が…

―今ここに、蘇る。

「遠慮は無しだ！行くぜ遊良ぁ！俺ぁレベル７のテンペストとレドックスでオーバーレイィ！」

旋風の化身と震災の化身。その二つの災害が劉玄斎の宣言によって天を舞う。
これが自分の…祖父の生き様なのだと言わんばかりに増していくその勢いは、例え孫がＥｘ適正を持たぬデュエリストであったとしても関係なくその宣言を高らかに行うだけなのか。
劉玄斎が持つ、エクシーズのＥｘ適正によって導かれし…その２つの災害が、地面に現れし銀河の渦にその身を捧げ始め…

「燃えろ、真紅の玉鋼ぇ！黒き焔よ大地を焦がせぇ！エクシーズ召かぁぁん！来やがれ、ランク７！【真紅眼の鋼炎竜】！」

―！

【真紅眼の鋼炎竜】ランク７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

呼び出されたのは燃ゆる黒鋼、真紅の眼を持つ気高き炎竜。

火花を散らせ、炎を点し…血の流れよりもなお紅いその眼で、劉の血を引く少年を鋭く見据える。

「まだだぁ！【真紅眼の鋼炎竜】の効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使い、墓地から【真紅眼の黒竜】を攻撃表示で特殊召喚！更に魔法カード、【死者蘇生】発動ぉ！墓地からレベル７の【厳征竜―レッドツクス】を蘇生し、そのままレッドツクスを除外して手札から【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を特殊召喚だぜ！」

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】レベル１０
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００

しかし、それだけでは終わらない。

【征竜】だけではない。劉玄斎の場には、それぞれが『真紅眼』の名を持った３体もの黒き竜たちが揃い踏みし夕焼けの空へと大きく羽ばたいたではないか。

そう、『逆鱗』の劉玄斎…

その高名は確かに【征竜】によって一躍広まったとは言えども、劉玄斎と呼ばれしデュエリストの力は何も【征竜】しかないわけでは断じてないのだ。

ドラゴン達を従える暴君、彼がまだ小さき龍と呼ばれていた頃から、真紅眼だけに留まらず劉玄斎が従えていたドラゴン達は多岐に渡る。その中には古の【王者】の名も含まれていたりと、とにかく近代における代表的なドラゴン使いと言えばこの劉玄斎の事を指すと言われても過言ではない。

そのまま、展開する手を休めることなく。劉玄斎は、更にその激しさを増していくのみ。

「レドツクスの効果で【グランドタスク・ドラゴン】を手札に加える！そんでダークネスメタルの効果も発動だぁ！墓地から【パンデミック・ドラゴン】を特殊召喚しぃ、そのままレベル７【パンデミック・

ドラゴン】と【真紅眼の黒竜】でオーバーレイィ！」

止まらない―

劉玄斎の誇る竜族たちが現れては消え、消えては現れ…目まぐるしくフィールドを駆け巡るその激しい展開は、まさに竜の咆哮にも似た鋭さを持って留まる事をまるで知らず。

『逆鱗』の劉玄斎が放つ、あまりに重いプレッシャー。その声は天を震わせ、更に猛々しく空から降り注ぎ…

「疾れ、機鉄の天竜よぉ！朧の現と空を舞えぇ！エクシーズ召かぁぁん！」

どこまで重厚に響く劉玄斎の声に連なり、銀河が弾けその光の中から現れしは…

「現れろぉ、ランク7！【幻獣機ドラゴサック】！」

―！

【幻獣機ドラゴサック】ランク7
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

鋼の黒竜に続き呼び出されたのは、命を持った機鉄の天竜。
音速を超える咆哮を響かせ、猛々しく空を舞う。

…これが、『逆鱗』と呼ばれし劉玄斎、その現役時代の二枚看板。

強固な耐性を備える天竜、相手を燃やす炎竜。
災害の竜達によって呼び出されるこの２体の竜が並び立つ光景は、現役時代の劉玄斎の映像を穴が開くほど見続けた遊良からしてもどこか見慣れたモノに違いない。

それだけではなく、今の劉玄斎の場には2体のエクシーズモンスターに囲まれるように超大型のダークネスメタルドラゴンまでもが陣取っているのだ。
そんな、実に3体もの強大なる竜たちを前に…

「ドラゴサックの効果発動ぉ！オーバーレイユニットを一つ使い、2体の【幻獣機トークン】を守備表示で特殊召喚するぜぇ！これで最後だ！速攻魔法、【超再生能力】発動ぉ！このターン、俺が手札から捨てたドラゴンは全部で7体！エンドフェイズに移行し、俺ぁデッキから7枚ドロー！手札制限により、手札を2枚捨ててターンエンドだ！」

劉玄斎　ＬＰ：４０００
手札：5→6枚
場：【真紅眼の鋼炎竜】
【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】
【幻獣機ドラゴサック】
【幻獣機トークン】
【幻獣機トークン】
伏せ：無し

いや、ドラゴン達だけではなく、ドローの無い先攻1ターンのエンドフェイズだと言うのにも関わらず、ターンを終える瞬間にまさかの手札を『増やす』という所業を難なく行いながらターンエンドを宣言した劉玄斎の佇まいは…
これまで映像で何度も見てきたデュエルの形だと言うのにも関わらず、実際に対峙するとここまでの圧力を放つのだと言う事を遊良へとひしひしと伝えていて―

「さぁ、かかってこい遊良ぁ！俺の全力で、お前の全力を受け止めてやらぁ！」
「よし！俺のターン、ドロー！」

けれども、劉玄斎から発せられるソレは、過去の対戦相手たちへと向けていたような、押し潰すかのような圧力では断じてなく。
凄まじく放たれる強者の圧…しかして慈愛と抱擁に満ちた、天上のデュエリストからの力強いソレは間違いなく遊良の全てを受け止める家族からのメッセージとも言えるのか。
そう…これだけ激しい展開を前に、それでもなお遊良の心臓は高揚に満ちて爆発寸前。
ようやく出会えた祖父とのデュエル、その一挙手一投足にどこまでも遊良は心の底からの『高揚』を感じながら…
意気揚々と、自らのターンを向かえるだけなのだから。

そんな、二人のデュエルを―

「良いのですか?確か劉玄斎は向こう一年間の『決闘禁止』を受けたはずでは…」

校内にて…
屋上がよく見える最上階層の窓から、イースト校理事長である砺波浜臣が。
隣に立つ『妖怪』、綿貫　景虎へと向かって、静かにそんな言葉を漏らしていて―

「確か『決闘禁止』の禁を破った者は如何なる場合でも有罪…綿貫さんしか劉玄斎を止められないから監査官として一緒に来たのでしょう?」
「…はて、儂には何も見えんがのぅ。ここの窓は儂にはちと高すぎるし…年のせいか耳も眼も悪くなってきおったわい。…おや、何か言っ

たか浜臣や。」
「…いえ、何も言っていません。では私もそろそろ仕事に戻らねば。なにぶん、誰かさんのプロ入りの所為で仕事が山積みでして。」

しかし、どこか惚けたようにしてそう言葉を返す綿貫の目は、本当に屋上の方に視線をやる事もなくただただ静かに廊下を歩いているだけ。

だからこそ、砺波もまたそんな綿貫の思いを察知したのだろう。口元にほんの少しの笑みを浮かべながら、砺波もすぐに窓から視線を外し…

…そう、決闘世界の幹部として、ここで何かを言う事など『無粋』なのだという、それは綿貫からの粋な計らい。

別に、今日くらいいいではないか―

まるで、そう言わんばかりに慈愛に満ちた綿貫の雰囲気は、大きな組織の幹部としてはあるまじき言動なのだろう。しかし人の『心』が機械には計れないように、あくまでも『見聞きしていない』デュエルに関して綿貫は…

そう、自分の見知らぬ所で、『どんなデュエル』が起こっていようとも。今日くらいは、ここでとやかく何かを言うつもりなど微塵も無いかのように…

「フォッフォッフォ。なら、儂もそろそろ帰るとするかのぅ。」
『…おや？綿貫さん…私に全てを押し付けておいて…自分だけ先に帰るおつもりなんですか？』
「フォ!?な、なんじゃ浜臣…きゅ、急に怖い顔しおってからに…」

…そのまま、静かにその場を去っていく砺波と綿貫。

それはこれ以上、無粋な真似をしないかのように。これ以上、接触しないかのように。

…折角邂逅を果たした祖父と孫を、これ以上邪魔しないように―

ただただ、静かに。

この場を、去っていくのだった―

そして―

「さっき【手札抹殺】で墓地に送られた、【ブレイクスルー・スキル】の効果発動！このカードを除外して、【真紅眼の鋼炎竜】の効果を無効にする！」

「クハハ！すぐに対応してくるたぁ、流石は砺波に鍛えられてるだけあるじゃねぇか！しかも方法まで同じたぁ面白ぇ！」

「よし、これでダメージは受けなくなった！【堕天使の追放】発動！デッキから【堕天使イシュタム】を手札に加え、そのままイシュタムの効果発動！手札の【堕天使スペルビア】と共に捨てて２枚ドロー！【成金ゴブリン】も発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！フィールド魔法、【チキンレース】発動！ＬＰを１０００払って１枚ドロー！…よし！【トレード・イン】も発動だ！レベル８の【堕天使ネルガル】を捨てて２枚ドローし、そのまま【闇の誘惑】発動！２枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外ぃ！」

巻き起こるはドローの嵐。先の竜たちの展開にも劣らない、激しく吹き荒れる遊良のドロー。

それはアマギ　ユーラとの戦いにより戻ってきた、『堕天使』達のドローの回転も去る事ながら…

それ以上に、『堕天使』を失っている時にも磨き続けた遊良の力が確かにプラスされた、最早手の着けられないほどに洗練され始めたドローの乱舞となりて激しく己のデッキを回転させるのか。

「【堕天使の戒壇】発動！墓地から【堕天使スペルビア】を守備表示で特殊召喚し、その効果で【堕天使イシュタム】も攻撃表示で特殊召喚する！羽ばたけ、２体の堕天使達よ！」

―!!

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

そうして現れる２体の堕天使。
取り戻したことで更にその神々しさを増している、異形の堕天使と魅惑の堕天使が今高らかに遊良の場へと舞い降りて…

「【堕天使イシュタム】のモンスター効果！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を…」
「おっとぉ！そうはさせねぇぜぇ？手札から【エフェクト・ヴェーラー】を捨てて効果発動ぉ！【堕天使イシュタム】の効果を無効にぃ！」
「くっ！だけど止まるわけにはいかない！魔法カード、【アドバンスドロー】発動！スペルビアを墓地に送って２枚ドロー！そして【死者蘇生】発動！墓地からスペルピアを攻撃表示で特殊召喚し、もう一度その効果で【堕天使ネルガル】も特殊召喚する！再び羽ばたけ、２体の堕天使達よ！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使ネルガル】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２５００

だが、それだけでは止まらない、
一度効果を止められてもなお、異形の堕天使に呼び戻され再び遊良の場に髑髏の堕天使と合わせて２体の堕天使が即座に蘇る。
…その鋭きデッキ回しは、昨年度までの遊良とは一味違う。

そう、昨年度までの『堕天使』を使っていた遊良と、今年度の『堕天使』を失っていた遊良の、その双方の力が今の遊良を形作っているのだ。
『堕天使』を得て、殻を破り。『堕天使』に助けられながらも、自分の意思で『壁』を乗り越え…
そして『堕天使』を失っても戦う事を諦めず、ついには自分の力だけで『先』の地平へと到達した遊良の下に、再び『堕天使』が集ったことでその力は更に留まる事を知らずに伸び続けている。
…おそらく、遊良の力は現段階でも学生レベルには留まらない代物に違いない。
1年生にして【決闘祭】に優勝し、2年生にして【決島】に準優勝した事がソレを証明している。それでいて、まだまだ遊良は伸び盛りで…まだ高等部2年生の年齢にして、更に伸び代があると言うのだから、果たしてその先に待っている光景にはどれだけのモノが待っていると言うのか。

「ネルガルの効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！」
「ほぉー、自分からＬＰをギリギリまで削ってまで全力で展開してくるたぁやるじゃねぇか。」
「折角のデュエルなんです、全力でぶつからないと意味がない！デッキから【堕天使マスティマ】を手札に加え、そのまま永続魔法、【冥界の宝札】を2枚発動！そして…3体の堕天使をリリィィィィスッ！」

だからこそ、遊良は手を抜かない。
いや、そもそも初めから手など抜ける相手ではないのだし、折角出会うことが出来た血の繋がった祖父を相手に…
そう、自分よりも遥かに高みに位置している、天上の力を持った祖父相手に。ここまで成長した自分の全てをぶつけてみたいと言うのは、デュエリストとして当たり前の本能なのだから。

叫ぶ…

強大なる竜達を従える、天上の力を持ったデュエリストを相手に。
一歩も引かず、地に足を踏みしめ…
それはようやく出会えた肉親を前にしても留まらない…いや、ようやく出会えた肉親であるからこそ、全ての力をぶつけるために。夕日に包まれたこの屋上に、今高らかに鳴り響くのか。

震える大気、獣の咆哮と共に…

それは、現れるのだから―

「【神獣王バルバロス】！」

―！

【神獣王バルバロス】レベル８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

轟かせしは不退の雄叫び。
主の叫びに呼応して、猛々しい竜達を前にしてもなお慄かずに現れるは百戦錬磨の獣の王。
その咆哮は天を貫き、大気を震わせ大地を揺らし…
ようやく出会えた主の血の繋がりを持つ者へと、意気揚々とその槍

を向ける。

「来やがったか！…あぁ、良いモンスターだぜ、本当に…」

そんな、孫をずっと守ってきた事が一目見て伺えるモンスターの勇ましさを見て…祖父は一体、獣の王にどんな感情を向けるのだろうか。

「バルバロスのモンスター効果！3体リリースでアドバンス召喚した時…相手のカードを、全て破壊する！」

そうして…

獣の王がその槍を、今高らかに振り回すと同時に。

勢いよく地面へと突き刺すと、地面からあまりに激しい爆発音と共に、凄まじき破壊の衝撃波が3体の強大なる竜達へと向かって放たれ始めたではないか。

…獣の王が地面へと突き刺した槍から発せられる凄まじい衝撃波は、およそどんな敵であっても『全て』破壊してしまう恐るべき代物。

それは例え神であっても逃れる事はできはしない、天上の者達すら歯牙にかける獣の咆哮にも似たモノとなりて3体の竜と2体のトークンたちへと襲いかかり―

「いっけぇ！バルバロ…」

「だがそうはさせねぇ！墓地の【復活の福音】の効果ぁ！コイツを除外することでドラゴン達を破壊から守る！そんでドラゴサックも、トークンが居ることで破壊されねぇ！」

「だけど【幻獣機トークン】は破壊する！更に【冥界の宝札】の効果で4枚ドロー！　よし、手札の【堕天使ユコバック】と【神属の堕天使】を捨てて、手札から【堕天使マスティマ】を特殊召喚！さらに速攻魔

法、【禁じられた聖杯】をマスティマに発動！その攻撃力を４００アップ！…バトルだ！バルバロスで【真紅眼の鋼炎竜】に！マスティマで【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】に攻撃だ！憤怒の慟哭、バニッシュ・ラース！」

―!!

劉玄斎　ＬＰ：５０００→４８００→４６００

また、それだけでは終わらない。

竜達が破壊の衝動を乗り切ったそのすぐ後に、即座に獣の王と獣の堕天使へとすぐさま攻撃を命じた遊良。

…その攻撃は素早く鋭く。

ＬＰが回復しているとはいえ、天上の力を持った相手にも確かな傷を与えるその連撃の鋭さは…3体もの強大なる竜達を蹴散らしながら進撃を続ける、まさに遊良のデュエルを体現しているに違いないことだろう。

「まさかここまで強くなってるたぁなぁ…【決島】ん時よりもずっと強くなってやがる。」

「まだだ！俺の全力は…まだ終わっていない！このバトルフェイズに速攻魔法、【ライバル・アライバル】発動！俺はバルバロスとマスティマをリリース！」

「お？バトルフェイズ中にアドバンス召喚するたぁ…クハハ！やるなぁ！面白ぇじゃねぇか！」

けれども…

まだまだ、遊良は止まらない―

まだ、自分の全力はこんな物ではないのだと言わんばかりのその雄叫びは、全てを話してくれた祖父へと向けた孫からの全力のメッセージなのだろう。

…自分は、こんなに強くなった。
ソレを、後悔と懺悔の念に囚われている祖父へと伝えるように―
ここまで強くなった、ここまで成長した、ここまで生き抜いてきた自分を見せるかのようにして―

「神に背きし反逆の翼！その姿を今ここに！」

叫ぶは心、放つは魂。
己の持てる全力を、全身全霊にて竜へとぶつける遊良の叫びが天に響く。
…それは遊良のこれまでの軌跡。
全てを失い、全てを否定され…それでも希望を捨てずに生き抜いてきた、ソレは遊良の限りない人生の軌跡となりて、今まさに祖父の目へと映し出されるのか。
真っ赤に燃える夕日を背に、天を劈く叫びが轟き。
今ここに、現れるは―

「来い、【堕天使ルシフェル】！」

―！

清廉なる天の光、それを遮る黒き姿。
天上の力を持った伝説のデュエリスト『逆鱗』を前にしても、決して引けを取らぬその佇まいはまるで天使か悪魔か…
儚くも猛るその姿は、天使と呼ぶにはあまりに勇ましく。しかして悪魔と呼ぶには、あまりに不屈なる存在が漆黒の翼を広げ、今ここに天空より降臨する。

その姿を、一体誰が見間違えようか…

それは巨大なる竜に立ち向かわんとしている、今の遊良の姿そのモノであって―

【堕天使ルシフェル】レベル11
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「コイツぁ…クハハ、こりゃまた、凄ぇモンスターを従えたモンだぜ…」

「【堕天使ルシフェル】の効果発動！アドバンス召喚成功時、相手フィールドの効果モンスターの数だけ堕天使を特殊召喚出来る！集え、【堕天使テスカトリポカ】！そして【冥界の宝札】の効果で４枚ドロー！そのまま追撃だ！テスカトリポカで、【幻獣機ドラゴサック】を攻撃！革命の業火、バニッシュ・グリード！」

―！

劉玄斎　ＬＰ：４６００→４４００

そして、すかさず―

続けざまに攻撃を命じた遊良の声に呼応して、まずは悪魔の様な堕天使が残っていた機鉄の天龍を夕日以上の煌々とした革命の業火によって葬り去る。

…これで、劉玄斎の場はがら空き。

あれだけ強大な力と堅牢なる強固さを見せ付けていた３体もの巨大なる竜達を全て蹴散らし。まだＬＰは０に出来ないとは言え、それでも天上の力を持った者を相手にここまでの立ち回りを見せる遊良の勢いはまさに留まる事を知らない突風そのモノ。

「【堕天使ルシフェル】でダイレクトアタック！」

狙うは祖父…
ようやくめぐり合えた血の繋がった偉大なる祖父に、今の自分の全力を持ってして攻撃を叩き込むソレこそがデュエリスト同士の思いをぶつけ合うことになるからこそ―
そう、【王者】と同格の男、『逆鱗』の劉玄斎に…いや、自分の祖父に、今の自分の全力を見せ付けてやりたい。ここまで成長した、ここまで力をつけた自分の実力で、祖父とこれだけ戦えるのだと言う事を思い切りぶつけるのだとして。

「背徳の一閃、バニッシュ・プライドォォォォォォッ！」

今、堕天の王より。
凄まじき剣閃が、劉玄斎へと向かって解き放たれ―

それでも、なお―

「クハハハハ！だが簡単にやらせるわけにはいかねぇなぁ！【アンクリボー】の効果発動ぉ！コイツを捨て、墓地から【青氷の白夜龍】を特殊召かぁぁぁぁん！」

―！

【青氷の白夜龍】レベル８

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

遊良の全力の攻撃を、更なる力を持ってして往なした劉玄斎。
堕天の王の攻撃との間に、即座に墓地より攻撃力３０００ものドラゴンを蘇らせ…射線上に新たなモンスターが現れた事で、堕天の王の剣閃が歪な方向へと逸れてしまったではないか。
…流石は【王者】と同格の男。
実力の『壁』を超え、『先』の地平に辿り着き更に力を増し続けている遊良の攻撃にも難なく対処し…激しさを増すばかりであった遊良の攻撃に対し、どこまでも冷静なる対応を見せる姿は紛れもなく彼が天上の実力を持った歴史に名を残すほどのデュエリストである証明となりて遊良の前に佇むのか。

「凄い…流石だ…映像で見るのとは迫力が全然違う…これが、本物の『逆鱗』のデュエル…」

遠い―

やはり、とてつもなく遠い―
映像でしか彼のデュエルを知らない遊良からすれば、本物の『逆鱗』の…祖父のデュエルは、果たしてどれだけの迫力となりて映り込んでいるというのだろう。
…最初の【エフェクト・ヴェーラー】の効果だって、スペルビアではなくイシュタムにあわせてきたその判断は並大抵の者は即座に判断なんて出来はしない。何しろ、ＬＰを減らさせるためとは言えその後の展開や相手の手札を達観した経験則と嗅覚で見据えていないと、あの場であの判断を即座に出来るはずはないのだから。
それ故、今の自分に出せる全力を難なく受け止め、それでいて息切れ１つせずこうして佇む祖父を見て…【王者】と同格と呼ばれた男、『逆鱗』の劉玄斎の力がまだまだ途轍もなく遠いところに位置していると言うことを、今の攻防にて遊良もハッキリと思い知った様子。

だからこそ、遊良は誇らしい―

祖父が、こんなにも凄まじい実力の持ち主であることが、ただただ遊良は誇らしい。それは奇しくも、数ヶ月前に決闘市のＢａｒにて【黒翼】と【白鯨】が言った通りの代物となりて…

どこまでも、遊良の目には祖父の姿が誇らしく映っており…

…そして、遊良の攻撃の手が止まったのを見て。

劉玄斎は…ゆっくりと、その口を開き始め…

「なぁ…こんな時になんなんだけどよぉ…いっこ、いいか？」

「あ、は、はい…」

「遊良…俺と一緒に、デュエリアで暮らすつもりは…ねぇか？」

「…え？」

劉玄斎から飛び出した言葉…

それは遊良からしても、あまりに驚きを禁じえない一言であったと共に、一瞬その思考が混乱を及ぼしてしまうほどに衝撃的な言葉であった。

…だってそうだろう。

これまで、『家族』と暮らすという、極々当たり前の生活を送る事すら許されなかったのがこれまでの遊良の人生の軌跡。それが、何の巡り合わせかこうして血の繋がった『祖父』との邂逅を果たす事が出来たのだ。

それだけでも奇跡のようなモノだと言うのに、ソレに加えてまさかその『家族』から一緒に暮らさないかと持ちかけられるなんて…
それは今まで『血縁』というモノに憧れすら抱いていた遊良からすれば、一体どれだけ嬉しい申し出であったというのだろうか。

「罪滅ぼしって意味で誘ってるんじゃあねぇ。けど、これまで何もしてやれなかった分…少しでも、お前に何かしてやりてぇと思って……どうだ？」

「…」

だからこそ、遊良は混乱してしまう。
…折角の祖父からの申し出。
それこそ、今まで『家族』と暮らすという、他の人間達が当たり前のようにしている生活をこれまで送る事が出来なかった遊良にしてみれば…祖父から持ちかけられたソレは、今すぐにでも飛びつきたくなってしまうほどに嬉しい申し出であったに違いなく。
けれども、ソレにすぐさま飛びつかないのは偏に―
そう、それは偏に、遊良がこの生まれ故郷である決闘市に対し、ある種特別な感情を抱いているからに他ならない。
蔑まれた、侮辱された、たくさんたくさん傷つけられてきた決闘市…
それでも、そんな街であっても簡単に捨てる事が出来ないのは、遊良もまたこの街で生まれ育ったという誇りがあるから。
父が居た、母が居た、そして何より鷹矢とルキという2人の幼馴染達が暮らすこの決闘市が…遊良にとっては、簡単に捨てられるはずも無いくらいの居場所となっているからなのだろう。
だからこそ、そんなすぐにでも飛びつきたい祖父からの申し出に対し…
遊良は、ほんの少しだけ考えた後に―

「行けません。俺の家は…俺がいる場所は、決闘市なんです。」

と、そうハッキリと伝えたのだった。

「あぁ、そうだよな…あぁ、そう言うと思ってたぜ。」
「…すみません。」
「いや、謝る必要なんかねぇ。それがお前の出した結論だってぇのはよく分かってるし、少しでも『迷って』くれただけでも俺ぁ充分嬉しいんだ。そうだよなぁ…この街は、生まれ育った街ってぇのは…そんだけ、特別なんだ。よく…わかるぜ。」

遊良からの返答を聞いて、別段落ち込むとかはせず。
寧ろ、ハッキリとした遊良からの答えを聞いて、劉玄斎の表情がどこか清清しい顔をしているのは…
きっと、彼もまた孫が自らの意思でこの街に残る選択をした事が、孫が自らの故郷に誇りを持っていると言う事が、先程よりも強く理解できたからこそなのだろう。
…自らの意思を、自らの思いを。そして自らの誇りを強く抱いて、ハッキリと物を申せるまでに成長した孫が劉玄斎には誇らしい。

「じゃあ…あといっこだけ…もういっこだけ、言わせてくれ……俺ぁ…俺ぁ本当に…」

だからこそ、劉玄斎はこんなにも強く成長した誇らしい孫へと…
そう、デュエルの実力も、心の強さも。そして何より、地獄のような日々を味わってでもこれまで生き抜いてくれた、この世の何よりも大切な存在である孫へと向かって…

感極まった感情を抑えきれず、その瞳に薄っすらと涙を浮かべながら―

「お前が生まれてくれて…お前がいてくれて、本当に良かった。」

「ッ…」

果たして…

慈愛に満ちた微笑みと共に届けられる、その祖父からの優しい言葉は…その『逆鱗』からの言葉は、世界から拒絶され続けてきた遊良にどれだけの重さとなって響くのか。

…幼馴染たちとはまた違う、『血の繋がった者』からの絶対的なる存在の肯定。

地獄を見た。世間から拒絶される地獄を―

地獄を生きた。鷹矢とルキ以外に、心を開けることのない地獄を―

そんな、全てを否定されながら生きる事しか許されなかった、その存在そのモノが『邪魔』なのだとして生き続けてきた遊良にとって…

血の繋がった『祖父』からの、その存在の『全肯定』と言うのは、一体どれほど嬉しい言葉であるというのだろう。

…きっと、その嬉しさは遊良にしか理解出来ぬはず。

何しろ、その言葉をかけてくれたのは他でもない、遊良がずっと待ち望んでいた『血の繋がった家族』であったのだ。

天涯孤独…そのどうしようもない哀しさと虚しさに押し潰されそうだった遊良からすれば、満面の笑みの下に伝えられた劉玄斎の言葉は、この世の何よりも嬉しい言葉であったに違いない。

…劉玄斎の言葉はこれまで聞いた他の誰の言葉よりも確かな家族

の『愛』に溢れた重みとなりて遊良の心に強く響く。
それ故、祖父と同じく。遊良の目からも、今にも涙が零れそうになってきて―

「ッ…まだまだ行きます！」
「よっしゃあぁぁぁぁ！来い、遊良ぁ！」

まだ、その心には微かな距離はあれど。

それでも涙を拭い、更に吠えて。感極まった感情を、このどうしようもない嬉しさを。その心の底からの思いを、デュエルでまだまだ伝えたいという思いの下に…

夕焼けが見守る中、微かに吹き始めたもうすぐ春を連れてくる暖かな風が…

血の繋がりを確かめた祖父と孫を…

どこまでも、祝福していたのだった―

―…

遊良と劉玄斎の織り成すデュエルの、その一つ一つが彼らを祝福する調（しらべ）となりて、暖かな風と共に空に舞う。
…もう、一人じゃない。
血の繋がりを知って、これまで渦巻いていた孤独感から解放された少年の未来は、きっと今よりもっと明るいモノになるに違いない。
そう、遊良は、ついに最も欲しかったモノを自らの手で掴み取ったのだ。

…掴んだ平穏、辿り着いた真実。

Ｅｘ適正がないという、ただソレだけの理由で生きる事さえ否定された遊良は…その長い地獄の中で、ようやく『血の繋がり』という絶対不変の『繋がり』を自らの力で掴み取った。

だからこそ、地獄を味わいながらも生きる事を諦めず、地獄の中でも戦い続けてきた少年がようやく祝福を受けることに、一体誰が横槍を入れられるというのだろう。

…まだまだ、長きに渡る人生の途中。

けれども、その中でもコレは少年の人生における確かな転換期となりて、これからの彼の人生に大きな導きを示してくれるはず。もう孤独ではないというその思いは、きっと何物にも変えがたい宝物となって彼の中に輝き続けるのだから。

これから先、これまで以上の困難が待ち受けていようとも…

それでも、ようやく掴んだ孤独からの脱出は、これまでずっと孤独に苛まれ続けた少年に、これまで以上の生きる喜びを与えているはずで―

―季節が、変わる。

長い冬が終わり、新たな芽吹きの季節へと。

―世代も、変わる。

いつまでも子どもではいられない。子どもから大人へ、目まぐるしく変わり続ける成長の中で、彼らもまた次の世代へとその歩みを進めなければならないのだから。

…こうして、彼らの物語は続いて行く。

…これからも、ずっと。

―まだまだ、ずっと。

遊戯王Ｗｉｎｇｓ「神に見放された決闘者」

第二章…

『完』

―…

どこかの場所―

「なるほど、『世界の外』の次は『前の世界』にあったのか。」

ソレがどこかはわからない、辺り一帯が異様な雰囲気となっている、どこか『遺跡』にも見えるそのどこかの場所で…

静かに、目の前の人物へと向かって手を差し出している、一人の女性の姿があった。

それは紛れもなく、この空間よりも異質な雰囲気を醸し出している、上から下まで『黒』に染められている一人の女性であり…

…その姿を、一体だれが見間違えようか。

そう…

夜よりも黒い漆黒の髪、闇によく馴染む褐色の肌。

その美しい顔立ちは、彼女の持つ魅惑的な肉体をより一層妖しく見せつけているものの…

しかしてその姿を直視出来る者は居ないのではないかとさえ思わせるほどに、ソレほどまでに圧縮された存在感を持った、文字通り【化物】の如くあまりにも高圧的過ぎる存在―

―釈迦堂　ラン

「全く、本当に色んなところに逃げる神だ。５０年もかかってようやく3枚揃えられるなんて苦労させられる…だが、ようやくこれで全て集ったよ。君のおかげだ。」

そんなランは、遺跡のような場所の中で、目の前に居る一人の少女から何か『カード』の様なモノを受け取ると…

その絶世の顔を惜しみなく微笑ませながら、受け取ったカードをどこか嬉しそうにしてクルクルと回し。そのまま、そのカードをはち切れんばかりの胸の中心へと刺し込み仕舞いこんでしまったではないか―

そして、カードを受け取ったランは…
そのカードを自分へと渡してきた、目の前の『少女』の様な姿をしたモノへと向かって…
ゆっくりと、その魅惑的な唇を開いて…
「では、これで契約は終了かな。」
「…確かに約束は果たしましたよ、釈迦堂　ラン。『邪神』はお渡ししました…後は、よろしくお願いいたします。」
「あぁ。」

この直視するだけでも難しい、およそ人間のモノとは思えない存在感を駄々漏れにしてる釈迦堂　ランと話しているのは誰なのか。
その事務的な口ぶりから、彼女と親しい人物では決してないはず。だとすれば少女のような見た目でランと話せるモノなど、およそ『人間』らしからぬ存在であるに違いなく…
そう…
釈迦堂　ランの目の前に居たのは他でもない―

それは釈迦堂　ランと『同じ』く、夜のような漆黒の髪に、暁に溶け込む褐色の肌をしたランそっくりの一人の少女。
まるで釈迦堂　ランをそのままやや幼くしたかのようなその姿は、どこからどう見ても釈迦堂　ランとその少女が『同一人物』であるかのような見た目となりて…見る者すべてに違和感と混乱を与える代物となりて、どこまでも妖しく佇んでいるだけ。
だからこそ…
そんな姿をした少女など、たった一人しか存在しないはず―

―釈迦堂　ユイ

夏頃に、決闘学園イースト校に突如転入してきた謎の少女…
しかして『いつの間にか』その姿も痕跡も全て消し去りイースト校

から姿を消し、アマギ　ユーラと行動を共にしていた…
　そしてそれ以上の『謎』を持った人物が、今こうして釈迦堂　ランと会話を重ねているのは一体どういった因果だと言うのだろう。

「あぁ、確かに【邪神イレイザー】のカードは受け取った。しかし本当に良いのか？私は本気でこの世界を壊してしまうかもしれないのだよ？」
「…ええ、そうなるのならば、それもまた今の世界の流れ…次は、もっと…」
「フフッ、それは本当に『次』があればの話だろう？すでに『世界』は限界を迎えている…そうだろう？私の名を借りる小さな少女よ。」
「…釈迦堂　ラン…貴女は、どこまで知って…」
「さて、どこまで知っているのだろうね？フフッ、箱庭の成り立ち、君の正体…邪神は色々な事を私に教えてくれた…私が、『ここ』へ来た理由も、ね。しかもご丁寧に私の名前と同じ『釈迦堂』を名乗るなんて嬉しいことをしてくれる。」
「…別に、なんでも良かったのですが…最も印象に残っていたのが貴女のお名前でしたので、お借りしただけのことです。」
「フフッ、ならば尚のこと光栄なことだ。何故なら私は『世界』にとって、これ以上ない爪痕を残せたと言うことなのだから。」
「…ええ、ですから感謝はしています。…貴女のおかげで、どうにもならなかった歴史が動いたのですから。例えソレが……私の知らぬ場所からの、来訪者であったとしても。」
「…フッ…」

　…一体、彼女らは『何』を話していると言うのか。
　あまりに混沌としたその会話。いや、果たしてソレが会話と言っていいのかすら分からないほどに淀んだ言葉の中で交わされる彼らの『音』は、およそ人間には聞き及ぶことなど出来はしないモノとなりて彼女らの間で交わされ続けるだけだり…
　おそらく…いや絶対に。彼女らの会話の全てを理解出来る者など、

今この現代には存在しないはず。

そうして…

「…努々忘れる事なかれ…自分が一体何なのか…努々忘れることなかれ…貴女は、『悪災』…漆黒の…化物…」

…人外同士の、『会話』ならざる『会話』が終わったのか。

釈迦堂　ユイは、最後にソレだけを風の中に残しながら…

音も無く、この場から消え失せたのだった―

「フッ、囚われの癖に、偉そうに『忘れる事なかれ』、か……だが、あいにく忘れてしまったよ。私が『何』なのかなど、遥か昔に『ここ』に来た時からな。」

すると、そのすぐ後に。

ランは自分の幼き頃の姿をしていた釈迦堂　ユイから渡された、『あるカード』をその胸の間から取り出すと…

「…【邪神イレイザー】…フフッ、やった！コレでやっと揃った！やっと3枚全部揃ったんだ！」

かつて【邪神アバター】を手に入れたときのように、どこか幼い少女のような振る舞いを一瞬だけ見せたその刹那。

すぐさまその雰囲気をいつもの『人外』のモノへと変貌させつつ、その場でゆっくりと振り向き…

遺跡のような建物の下、その下階に集ったあまりに多い『雑兵』を一目その視界に入れた後に。

自らの後ろに控えていた、４人の『同胞』達へと向かい直して。

「いよいよですね。これで、我々の計画も最終段階へとようやく歩み

を進める事ができます。」
「カカッ、やっとかよ。」
「ふふっ…待ち望んでおりました、ええ。」
「…」

そこに居たのは紛れも無い。
エクシーズ王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰。
裏決闘界の融合帝【紫影】、竜胆　蛇蝎。
…そして、何故か現融合王者【紫魔】、紫魔　恋介の姿が、そこにはあった。

…いや、彼らだけではない。

そのままランは、3人の【王者】格の男達の後に立っている…
まるで『悪魔』のような存在感を駄々漏れにしている、一人の男へとゆっくりと声をかけ始めて。

「しかし、まさか『君』まで私についてくれるとは思わなかったよ。セリ・サエグサ……君には、嫌われていると思っていたから。」
「…あぁ、嫌いだよ、お前なんか…」

それは煌く金髪を夜闇に靡かせる、見るからに聡明そうな一人の男性。
しかしてその纏うオーラからして、およそ人間には耐え切れない程の『悪意』を纏った…一目みて『悪魔』と言ってしまいそうなほどに淀んだ存在感を醸し出している、異様な雰囲気をした男がそこには居て。

…デュエル傭兵集団『七草』のリーダー、セリ・サエグサ。

一体、どんな繋がりを持ってセリ・サエグサと言う男は【王者】格

の男達に混ざって釈迦堂　ランの下に集っているのか。
いや、そもそもからして正真正銘の【王者】の内の２人が、こんなどこかも分からない遺跡のような場所にて【化物】と邂逅しているなんて異常な光景であるのだから、ソレに加えて裏社会におけるデュエル傭兵集団『七草』のリーダーが同じ場所に居るという光景もまた異常のうちの１つであると言えばそうなのだが…
けれども、そんな裏社会の傭兵の上に立つ金髪の男へと向かって。
更に漆黒の【化物】は、続けて言葉を発するだけで…

「フフッ、私に負けてから随分と面白い『力』を身につけたらしい…今すぐに自分の手で確かめられないのが残念だが、それは『事』が済んだらに取っておこう。何しろ、この後はもっと世界が面白くなる予定だからね。」
「…御託はいい。それより、契約はしっかりと守ってもらうぞ。『事』が済んだ後に…俺と戦え。」
「あぁ、勿論わかっているとも。だが、その分しっかりと君達には働いてもらうよ。…鷹峰さん、恋介君、そして【紫影】に『七草』のリーダー。フフッ、私に賛同してくれて嬉しいよ。琥珀君の事は残念だったが、彼の立場を考えると仕方がない。しかし裏決闘界の雑兵がこれだけ集ってくれたのも嬉しい誤算だった。流石は裏決闘界の融合帝と言った所かな、【紫影】。」
「お役に立てて光栄です、ええ。」

果たして…
今の彼女らが話していることは、一体どういった意味を持つのだろうか。
けれども、ソレがこの世界にとって『良くない』ことであると言う事だけは、彼女の下に集った面々を見ればすぐに理解出来てしまう。
そう…【黒翼】と【紫魔】は別にしても、裏社会におけるデュエル傭兵に、裏決闘界の融合帝とソレが集めた裏の雑兵達…
そんな危ない肩書きを持った者たちが、こぞって釈迦堂　ランの下

へと集っているのだ。そしてランが言った、『世界が面白くなる』というその言葉…それを聞けば、例え誰であろうともこの後に彼女が行おうとしている事に限りない恐怖を覚えるはずなのだから。

そうして…

何を思ったのか。釈迦堂　ランは、遺跡のような建物の上階部分から身を乗り出しつつ…

そのまま、下階にて蠢いている大勢の『雑兵』たちへと向かって―

「同胞たちよ、もうすぐ時は満ちる。新たな世界を共に造ろう、この世界をすべて壊して。」

と、叫んだのだった―

―…

―物語は、終わらない

第三章へ…

最終章へ、続く―

第３章
ｅｐ１１４「第３章プロローグ－忘却の夢」

君が居た場所。君が居る場所。

もう、帰れない。

どこに帰るのかを、忘れてしまったから。

―…

漆黒の闇の中で、『誰か』が夢を見ていた。

何もない、何も思い出せない…経年的な記憶の劣化のせいか、それとも別の何かが原因なのかはそのモノにも分からないものの…

それでも、全てを忘れてしまった闇の中で。その『誰か』も、忘却に抗いながらどうにかつなぎ続けているソレに縋る思いを抱いてしまうのは、偏にその夢がその誰かにとってかけがえのないモノなのだという証明でもあるのだろう。

…繋ぎ止めているのは、忘れたくない『３人』の記憶。

そう、もう顔も、名前も、姿も、声も、何もかもを思い出せないほどに劣化してしまった断片的な記憶で…この誰かに、だって決して忘れたくない存在の記憶が、３つだけあった。

一人の少年と、一人の少女と…そして、一人の老人。

ソレが誰なのかは分からない。コレが誰なのかはもう思い出せない。

それでも、この漆黒の黒の中、全てが消え去っていく無限の闇の中で…忘却に抗い、神に抗い、いつまでも記憶に杭を打ち続け、消えさらないようにしているのは、最早意地とも呼べぬ執念にも似た何かなのだろうか。

…一体、どうしてこの3つの記憶を忘れないように抗っているのかすら、この夢の見ている誰かもまた長く生き過ぎたせいで忘れてしまったと言うのに。

そう、どうせ、目が覚めれば簡単に忘れてしまうと言うのに…

それでも、この夢の中でのみ会えるこの3つの記憶に会いに来てしまうのは、この夢を見ている誰かにおいても、この夢がその無意識の中における最も重要な部分となっているからに違いないはず。

気を抜けば、忘れてしまいそう…けど、忘れたくない。

一体いつぶりになるのだろう。起きている時には認知しない、深く眠っている時にしか認知出来ない無意識の中でのみ抗う事が出来るソレに数年振りに会いに来たからこそ…

まだ忘れていなかったこの夢を、この夢を見ている誰かはひどく懐かしく感じた共に…

…『自分』が、深く眠っていることを自覚してしまったからこそ。

いつ振りかも思い出せぬこの眠りから、無理矢理引き剥がされる感触を覚えてしまい―

―…

『…以上、興奮冷めやらぬチャンピオンズ・リーグの特集でした。では続いてのニュースです。シンクロ王者【白竜】が失踪し、シンクロ召喚の王座が空位となってから今日で2ヶ月。決闘界では未だ混乱が続いており…』

暗い部屋に静かに流れる、雑音のようなＴＶの声で釈迦堂　ランは目を覚ました。

机の上に肘をつき、ゆっくりとその両の瞼を持ち上げ…
その仕草はおよそ常日頃から【化物】らしい立ち振る舞いをしているランが見せるにはあまりにも人間染みた、彼女らしからぬ惚けた仕草とも思える代物ではあるのだが…しかし今この場においては、ソレを誰に見られるわけでもないのだから、自分という存在が眠っていたという珍しい現象に対し、【化物】と呼ばれる彼女はその覚醒しつつある意識の中で一体何を考えていると言うのだろう。
覚醒する直前に、何かの『夢』を見ていたような気もするものの…しかし覚醒と同時に泡沫の『夢』のことなど綺麗さっぱり忘れてしまったランからすれば、自分が夢を見ていたという感触を何やら物珍しく感じている様子でもあり…

「…フッ、珍しい事もあるものだ。この私が夢を見るとはな…まだそんな部分が残っていたとは。」

ポツリと呟かれたランの言葉は、薄暗い部屋の中でＴＶの雑音に掻き消されて消えていく。
彼女が何を考えているのか。彼女が何を感じているのか…
…果たして、『彼女』は一体『何』なのか。
ソレらの全てを知る者は今ここには居らず。それは彼女自身を含めて、『誰一人』としてここにいる漆黒の【化物】が『何』なのかを、知っている者は何一つとして存在していないのだ。
しかし…
そんな中でも唯一つだけ、分かっている事がある。

「さて…ではそろそろ始めるとしよう。新たな世界をここに創ろう…この世界を全て壊して。」

眠りから覚め、ゆっくりと立ち上がった漆黒の【化物】の意識があまりにも…
あまりにも冷たい眼で…

この世界へと、向けられていた――

物語は、この半年前から始まる――

ｅｐ１１５「新たなる舞台へ」

天城　遊良は落ち零れだ。

少なくとも、そう言われていた頃が確かにあった。

この世界に生きる者ならば、誰だって持っているはずの『Ｅｘ適正』を世界でただ一人持っていないデュエリスト…

この世界でだた一人だけ、皆が出来て当たり前のこと、呼吸をすることと同義のことが、どう足掻いても出来ないそんな人間の底辺…

そんな意味で、そうした言葉で。天城　遊良という少年は世界中の誰からも口々に『こう』言われ続けていた。

―デュエリストの『出来損ない』…と。

『融合召喚』も『シンクロ召喚』も『エクシーズ召喚』も、そのどれもが出来ないというデュエリストの成り損ない。

いくらデュエリストの真似事をしていても、所詮はただの出来損ないと誰もが天城　遊良の事を蔑み…見下し、侮蔑し、侮辱し、誰もが天城　遊良のデュエルを認めようとはしなかった。

そう、Ｅｘ適正という、当然のように誰もが持っているソレを持っていない天城　遊良という人間はまるでそう言われ続けることが義務付けられているのだと言わんばかりに―

それほどまでに、この世界において天城　遊良という少年はずっと世界中から蔑まれ続けてきたのだ。

―しかし、ソレも最早『過去』のこと、

そう、天城　遊良が高等部に進学してからのこの『２年間』におい

て、彼はとてもじゃないがデュエリストの出来損ないとは決して呼べないような『偉業』の数々を達成してきた。
それは大衆の言うような、デュエリストの出来損ないには決して達成出来ないような…
イカサマや八百長の入り込む隙など無い、誰にも有無を言わせぬ輝かしくも素晴らしい功績の数々。純然たるその力を、彼は決闘市のみならず全ての世界に見せ付けてみせたのだ。

1年時…決闘市にて行われた学生達の祭典、【決闘祭】にて、王者【黒翼】の孫を退け見事『優勝』を飾って見せた。
2年時…決闘市とデュエリア合同開催の祭典、【決島】にて、プロ顔負けの戦いを繰り広げ『準優勝』してみせた。

その戦いのどれもが彼の実力の高さを裏付ける代物となりて、全世界に己の存在を刻み込むほどの存在感を彼は見せ付けていたに違いないことだろう。
そしてその他にも、公にはなっていないが決闘市を襲った『異変』や…突然の指名手配から始まった、決闘市を揺るがす『事変』にも彼は自らの力で真実まで辿り着き。彼は、人知れず数多くの決闘市に住む人々を救って見せたこともあったのだが…
まぁ、ソレを知っている者は数少ないのだから、ソレは一先ず置いておいたとしても。
それでも、【決闘祭】の優勝や【決島】の準優勝以上に彼に対する下卑の声を黙らせたのは他でもない…それは彼の、『出自』に関係するその血筋にあるとも言えるだろうか。

…何せ近年になって明らかになった彼の血筋は、一般人からすれば信じられないような出自であったのだから。

ただ、『Ｅｘ適正』が無いだけ…それ以外に持つモノ、彼が勝ち取ったモノ、彼が積み上げてきたモノは紛れも無い本物。

紫魔本家の歴史の中でも歴代最高との呼び声の高き前【紫魔】、紫魔憐造を伯父に持ち。幼少の頃には世界最強のエクシーズ使いと呼ばれる王者【黒翼】、天宮寺　鷹峰の指導を受けているというだけでは飽き足らず…

まだ公には公表されてはいないものの、世界最強の【王者】達と『同格』とされる元プロデュエリスト『逆鱗』、劉玄斎を祖父に持ち、現在では元シンクロ王者【白鯨】、砺波　浜臣の直接の指導の下、学生とはとても思えないような実力を日に日に磨いているというのだから…

血筋、才能、実力、修練…彼が世界に見捨てられたあの日からおよそ１０年、その１０年で明らかになった天城　遊良というデュエリストの持つモノは、一体どれほどのモノとなっていると言うのだろう。

果たして…

彼が『ここまで』辿り着く為に繰り広げてきた数々の戦いは、一体どれほど苦行に満ちた道のりだったのか。

その全てはこれまで紡がれてきた物語に記してある通り。今までに紡がれてきた彼の軌跡は、そのどれもが壮絶なる戦いの果てであった事は最早語るにも及ばないと言えるのだろうが…

その中で彼は数々の敵と対峙し、それと同時に傷付き続けてもきた。けれどもその戦いを経て成長した天城　遊良という少年の事を、今の時点で『出来損ない』と呼ぶ者はもう世界にはほとんど居らず。

…そう、彼は証明し続けてきた。

『Ｅｘ適正』が無いことなど、何もハンデには成り得ないのだとして。

きっと、それでも彼の事を今でも『出来損ない』と呼ぶ者は少なからずいるはず。

…しかし、ソレ以上に。

今、現状、現時点においては。天城　遊良という少年の事を、きっと認めている者の方が世界には大半のはずで―

そんな、自らの手で勝ち取った己の存在を胸の内に仕舞い込み。

高等部３年生という、最上級学年へと進級を果たした決闘学園イースト校３年、天城　遊良は…

「すっかり春だな。ちゃんと寝たのにあったかくて眠くなってくる。」
「ねー。授業中とか寝ないようにするの結構大変だよね。」

昨年よりもどこか大人びてきた顔つきで、桜も散り終え既に葉桜となったいつもの通学路を…
幼馴染である、高天ヶ原　ルキと共に歩き、登校していた。

「鷹矢はちゃんと起きれたのかなぁ。任命式、今日の朝からだったよね？」
「竜胆さんにも頼んであるし、一応さっきコールした時は起きて電話に出たから大丈夫だとは思うけど…でもどうだろうな。アイツの事だから二度寝してるかもしれない。…っていうか、あの声の調子だと絶対に二度寝してるだろうな、あのバカ。」
「プロの任命式って欠席も遅刻も絶対にダメなんでしょ？プロになったのに自覚ないんだから、もう。」
「砺波先生も心配してたよ、アイツがまた何か『やらかす』んじゃないかって。ここ最近、砺波先生もずっと胃痛そうにしてるし…昨日だって、綿貫さんにも『要注意するように』って何回も釘刺してた。」
「でもさー、鷹矢だよ？」
「鷹矢だもんなぁ…」

…誰にも絡まれることなく、学園へと続く桜並木を歩き続ける遊良

とルキ。
体付きも顔つきも、入学したてから見ると随分と大人へと近づいた彼ら2人ではあるものの…
しかし体の成長以上に、入学したてから最も変化した事と言えば、それは会話を重ねる彼ら2人の足取りが昨年までとはまるで違う、随分と『軽いモノ』となっている事とも言えるだろうか。
そう、それは今こうして誰にも邪魔されることなく、そして誰の目も気にすることなく2人揃って登校できると言う事に遊良もルキもまた無意識ながらも喜びを感じているのだろう。
何しろ遊良にＥｘ適正が無いという、ただソレだけの理由で去年、それに一昨年にはいつもこの時期にこの辺りで遊良は誰かから絡まれていたのだ。
1年生の時は同級生から、2年生の時は後輩からと…とにかく、遊良とルキが並んで歩く事を、快く思わない人間が昨年までは確かに存在していた。
けれども、遊良が高等部の『3年生』、つまり最高学年となった今年度においては。最早こんな早朝から、遊良に絡んで来ようとする輩はすっかりと居なくなった様子。
それは遊良とルキが幼馴染であるという認知を、2年かけて周囲が理解したのもあるのだろう。
そしてそれ以上に周囲が遊良とルキに対し何も言わなくなったのは、偏に遊良が一昨年の【決闘祭】の優勝者であると言う事に加え…去年の【決島】の準優勝者であるという、その実力を否応なしに周囲に見せ付けたからこその対応の変化とも言えるはずで。
…特に、遊良が通う決闘学園イースト校においてはそれが顕著に現れている。
そう、この学園に通う学生の誰もが暗黙の了解として知っている。【決闘祭】に優勝し、【決島】に準優勝した、イースト校どころか世界的に見てもすでに学生の枠に収まっていない『天城　遊良』という

デュエリストに対し…
『Ｅｘ適正が無いから』という、ただその程度の理由で上から目線で喧嘩を売る事は…自分の身の程を知らない、自分と相手の力量を測る事が出来ない『弱者』が行うこととされているのだから。

…遊良の高等部入学から２年。

もう、遊良とルキが並んで歩いていることに、とやかく言う輩はイースト校には存在しない。

それ故、もう誰にも邪魔されることなく。遊良とルキは、桜並木が栄えるイースト校への道のりを春の陽気と共に歩き続けるだけであり…

今この場に居ないもう一人の幼馴染…エクシーズ王者【黒翼】の孫として知られる、もう一人の学生の枠に収まらないイースト校の３年生である『天宮寺　鷹矢』は、本日はプロデュエリスト達が一同に介する『任命式』に出席するためこの場には居らず。

だからこそ、遊良とルキが口々に鷹矢の事を話しているのは、一人デュエリアの地に飛び任命式に出席する予定の鷹矢の身を案じているが故の…否、鷹矢が寝坊して他の人達に迷惑をかけないかと、別の意味で心配しているが故なのか。

そうして…

周囲に怪訝な目を向けられるわけでもなく、誰に何を言われるわけでもなく、ましてや鷹矢に直接的な迷惑をかけられる事もなく。

穏やかな気持ちで、通いなれたイースト校の校門を潜り。ルキと共に、遊良が校内の玄関へと入った…

その時だった。

―『天城　遊良、至急理事長室まで。』

「…え？」

いきなり…

そう、登校していきなり。

まるで、遊良が登校してきたのを監視でもしていたかのようなタイミングの良さで…イースト校内に、『ある人物』の声が全校放送となって鳴り響いたのだ。

…そして、その放送が切れたその刹那。

その、あまりに意外過ぎる人物の校内放送を聞いて…既に登校していた学生達の誰もが、普段は声も聞けないその『ある人物』の突然の放送にザワザワと混乱を呈し始めたではないか。

…当然だ。

何せ今の放送は、紛れもなく決闘学園イースト校理事長の…元シンクロ王者【白鯨】としても知られた、イースト校理事長を務める砺波浜臣の声であったのだ。

理事長という立場から、普段は決して校内放送を使うはずも無いと言うのにも関わらず…その【白鯨】が、一体どうしてこんな朝っぱらから学生一人を名指しして理事長室に呼び出したのかなど学生達に分かるはずもないために、その意外すぎる人物の直接の校内放送に自分達の理事長をどれだけ伝説的な人物かを知っているイースト校の学生達はにわかにざわめき始めていて。

…そして、ソレは呼び出しを喰らった当の遊良本人からしてもそう。

「…理事長室？」

「遊良…なに怒られるような事したの？」

「何もしてないけど…」

いくら遊良が、理事長である砺波から直々に修業をつけてもらっている直属の教え子という立場にあるとは言え。
あくまでもここが『学校』であると言う事から、遊良も学務時間内は他の学生達と『同じ立ち位置』にあるはずだと言うのに…
そう、これまでも砺波から何か重要な連絡や通達を言われるときは、決まって遊良の
『修業』の時間に行われてきた。
それは1つの決闘学園を預かる立場にある砺波からの、他の学生達への配慮と言う点も勿論なのだが…しかしそれ以上に、遊良もまた学内においてはイースト校における学生の一人であるという、その当然のようで今まで当然ではなかった、Ｅｘ適正が無い所為でこれまで立つ事が出来なかった『普通』の立場に、遊良もようやく立たせてもらったという砺波からの計らいでもあったはず。
だからこそ、デュエルディスクでの業務連絡ではなく。こうした、理事長直々の校内放送による呼び出しは遊良からしても想定外中の想定外。他の学生達同様に、遊良にしたって登校早々に呼び出された理由など全く分からないのだから…
内履きに履き替えてもいない玄関先で、いくら呼び出されたその理由を考えたところで無駄だというコトは理解しているのだろうが…
「この前の修業のレポート出し忘れてたとか?あ、理事長先生に生意気な口聞いたとか。」
「いや鷹矢じゃないのに…ッ、まさか鷹矢がまた何かやったとか!?」
「嘘!?ちょ、遊良早く理事長先生とこ行って!鞄持っとくから!」

しかし、ほんの少しの思考の後に。
彼らにとって、呼び出されても当然かもしれない『最悪』の原因のひとつがふと頭を過ぎったのか。
あまりに突拍子もない理事長室への直々の呼び出し。ソレは言い換えれば、それだけただ事ではない事が起こったのかもしれないという恐れを想像するにはあまりに容易。

…自分は何もヘマをした覚えがない。昨日も、修業は通常通り終わりレポートだって不備なく提出し『可』を貰った。
そんな、自分には呼び出される覚えなど微塵もない遊良だからこそ―
いつも問題を起こす方…鷹矢が、プロの『任命式』で何かをやらかしてしまったのではないかという恐れが遊良の心に焦燥となりて襲い掛かる。
―それ故、遊良はすぐに内履きへと履き替えると。
同じクラスのルキに鞄を預け、すぐさま玄関から足早に廊下を駆け始め。理事長室のある最上階を目指して、一目散に階段を上り始めて。
…途中ですれ違う学生達からは、色々な視線を向けられもした。
遊良と同じ戸惑いの視線であったり、得体の知れない呼び出しに対する同情の視線であったり…中には、【白鯨】に名指しで呼び出される事に対する羨望の眼差しも混ざっていたことだろう。
けれども、『それどころ』ではない遊良はただただ必死に。そんなモノには一切構わず、足を止めずに走り続けるだけ。
…朝から全力で階段を駆け上がり、切れる息にかまう事も無く走り続ける遊良。
そして、校内放送がかかってから数分の後に。
『悪い予感』と共に階段を駆け上がった遊良は、決闘学園イースト校、中央校舎の最上階、最上階にある、普段なら学生は愚か平の職員すら近づくことを恐れるような場所にある理事長室の前で…
一呼吸置いて、立ち止まった。

「はぁ…はぁっ…」

一つ…二つ…

遊良は理事長室の厳かなる扉をノックする前に、荒い呼吸をひとまず整える。

それはここまで急いで走ってきた所為もあるのだろうが、しかしそれ以上に何やら衝撃に備えた心の準備をしているかのような…そう、ソレはいくら砺波からの火急の呼び出しとは言え、疲労困憊のままで更なる衝撃を受けたくないが故の防衛本能が成せる技なのだろう。

…鷹矢は何をやったのだろうか…正式なプロのスタートの場でまた何か『盛大』にやらかしてしまったのだろうか。

そんな、最早自分ではフォローしきれない場所に行ってしまった鷹矢への心配が遊良の心に襲い掛かるものの。それをしかと受け止める準備もまた必要になってくるという事をこれまでの経験で痛いほど遊良も分かっているために、理事長室に入る前に手早く遊良は深呼吸を繰り返し…

…そして、ほんの十数秒の後。

呼吸をどうにか落ち着けたのか、意を決したようにして遊良が荘厳な扉を3度ノックし―

「…入りなさい。」

「し、失礼します…」

理事長室の中から、イースト校理事長である砺波　浜臣の声が入室の許可を出したのと同時に。

遊良は、理事長室へと足を踏み入れたのだった。

「…来ましたか。」

重々しい空気の中、他に誰も居ない理事長室にて佇んでいたのは、遊良を呼び出した張本人。

それは昨年度の【決島】での『ある出来事』を境に、およそこの世にある言語では形容し難いとさえ言える雰囲気を纏い始めた一人の男であり…

その彼の持つモノをあえて例えるとするならば、この世の何よりも深い海の底の底…海淵からコチラを見ているかのような、そう言った人間らしからぬ【化物】のような雰囲気を纏っているとさえ思える、人の領域からは観測できない場所に棲んでいるような不思議な雰囲気を醸し出していると言えるだろうか。

そう、この決闘学園イースト校の理事長室にて遊良を待っていたのは他でもない。

かつては元シンクロ王者【白鯨】と呼ばれていた、歴戦に名を残す伝説のデュエリスト…

―決闘学園イースト校理事長、砺波　浜臣。

そんな砺波は、部屋へと入ってきた遊良の方へと振り向く事もせず。

理事長室の大窓から、カーテン越しに校庭の方を見続けたまま。ただそれだけの言葉を遊良へと零すと、外界から隔離された理事長室にほんの数瞬重々しい雰囲気が漂い始め…

…それは時間にして数秒あるかないか。

しかしあまりに重々しいために、その数瞬は呼び出された遊良にとっては果てしない時間にも思えたことだろう。

何しろ、砺波の雰囲気が雰囲気だ。

いくら遊良も日々の修業で砺波と接する機会が多いからとは言え、こうして改まって話をするとなると話は別。砺波の持つ、人間のモノとは到底思えない佇まいを前にしては…遊良でなくとも、誰であろう

と遊良のように緊張が全身を包み込んでしまうはずで。

「あ、と、砺波先生！鷹矢の奴、任命式で何かやらかしましたか!?もしかしてまた遅刻したとか…」

「いえ、彼なら大人しく出席させ…しているそうです。まぁ、開会ギリギリまで寝ていたようですが、今は一先ず大人しく出席しています。」

「そ、そうですか…」

だからこそ、そんな空気感に遊良が耐え切れずにそう言葉を発してしまったのも当然と言えば当然だろう。

けれども、そんな遊良の予想に反し…

背を向けたままの砺波から帰ってきた言葉は、どこか遊良の焦りを空振りさせるような言葉であった。

…では、砺波は一体『何の用』でわざわざ朝から遊良を校内放送で直々に名指しで呼び出したりしたのだろうか。

予想を外され拍子抜けしている遊良の表情から分かるとおり、遊良にとって最悪とも思える鷹矢の『やらかし』は無いと砺波は言った。それ以外に砺波を怒らせるような事をした覚えなどない遊良からすれば、ではどうして自分が呼ばれたのが分からなくなっていると言っても過言ではなく…

…再び、ほんの数瞬の重々しい静寂が理事長室を支配する。

その間も砺波は何を考えているのだろうか、遊良に背を向け窓の外をカーテン越しに眺めているだけであり…

一秒…また一秒と時間が過ぎる度に早くなる遊良の心臓の鼓動は、砺波に何をいわれるか分かったモノではない緊張から来る逸りでもあるのだろう。

そして…

いつまでこの緊張感が空気を張り詰めるのだろうかと、遊良が思ったその刹那。
ゆっくりと…
砺波は、朝日を背に遊良の方へと振り向きつつ。ようやく遊良と視線を合わせながら、何やら真剣な面持ちで…
再び、遊良へと向かってその口を開き始めた。

「さて、登校早々に君を直々に呼び出したのは他でもありません…天城君、近々開催される『世界最大のイベント』について、君は何を感じていますか？」
「…え？えっと…」

こちら側を向いた砺波の表情は、先ほどまでの重々しい【化物】のような雰囲気から一転。いつもの、修業で相対する砺波のモノとなっていて。
…そのいきなりの変化には、流石の遊良も思わず戸惑いを抱いてしまうのか。
けれども、砺波の雰囲気の変化に戸惑いを感じてばかりもいられない。一瞬だけ戸惑いを感じてしまったものの、すぐに遊良は砺波からの問いに対し思考を巡らせ始めるだけであり…

砺波は言った…『近々』開催される、『世界最大のイベント』…と。

今はまだ新学期、新年度が始まって1ヶ月も経っていない春の最中。
無論、年末に行われる【決闘祭】はまだまだ先の話だし、文化祭や体育祭といった各学園規模で行われる小さなイベントは砺波のいう世界最大のイベントとは程遠いと言えるはずで…昨年度の【決島】ような、他国の学園との大々的な合同祭典の話だって、今年は全く出てきてすらいないはず。
また、砺波の口ぶりから察するに、ソレは既に世間的にも周知の事

実であるのだろう。だからこそ、昨年度に聞かされた【決島】のように、まだ一般に公表されていないようなイベントの事では断じてないと言うのは遊良にだって容易に想像がつく事でもあるのか。
…それ故、遊良はソレ以外に思いつくイベントをその記憶の中から探し出す。
最近話題になったこと…ソレこそ世界最大規模のイベントであるならば、ニュースにだってなっている様な…
そんな、『世界最大のイベント』と言われてその他に遊良が思い当たる節といえば唯一つ。
そう、本来ならば昨年度に開催予定だった、プロのトップランカーたちによるプロデュエリストの祭典。
その、４年に一度開催される、『チャンピオンズ・リーグ』が…
運営を行う【決闘世界】の諸事情によって、今年度に『開催延期』を発表していて―

「…それって…『チャンピオンズ・リーグ』の事…ですか？」
「そうです。では、その『チャンピオンズ・リーグ』について君が知っている事を述べて下さい。」
「は、はい…４年に一度開催されるプロの祭典で、優勝者は【王者】への指名挑戦権を得る事が出来る歴史ある大会です。出場者は１２名と決められていて、世界ランクの上位順に出場資格を得る事ができ…」

しかし、砺波の意図が全く分からない遊良を他所に。砺波は、更に遊良へと問いを投げかけるだけではないか。
…遊良が説明するまでもなく、チャンピオンズ・リーグの事ならば元プロデュエリストどころか元シンクロ王者【白鯨】と呼ばれていた砺波が誰よりも詳しいはず。
何しろ、長きに渡り決闘界の頂点に立っていた程のデュエリスト。現場を知り尽くし、最前線で戦い続けていた、歴代最強のシンクロ王

者とも言われていた砺波にとっては『チャンピオンズ・リーグ』の見解１つとっても、遊良のうろ覚え程度の知見よりも相当深い理解を持っているはずなのだ。
…そうだと言うのに、砺波は一体何を思い遊良にこのような事を聞いているのか。
４年に一度開催されるだとか、１２名のトッププロが出場資格を得るだとか…
そんな、『誰』だって知っているような当たり前の事しか知らない遊良の話を、ただただ砺波は聞いているだけで…

しかし…

「では、近年の『チャンピオンズ・リーグ』の優勝者は分かりますか？」
「はい。前回、前々回が現２位の『雷獣』の鳴神プロ…その前が【白竜】の新堂さん…その前は…２４年間、『逆鱗』が６度の優勝を続けていました。」
「そうです。そして新堂君が出場したのは、彼がまだサウス校の３年生の時でした。プロに内定していたとは言え、まだプロではない学生が『チャンピオンズ・リーグ』に出場すると発表された時は大きな騒動にもなっていました。懐かしいものです。さて……天城君。ここまで話してきて…何か、気付く事はありませんか？」
「え？き、気付く事…」
「…君はさきほど言いましたね？『チャンピオンズ・リーグ』の出場選手は、『１２名』と決められている、と。」
「はい…」

先ほどから、何か含みがあるような態度と言葉を零し続けるイースト校理事長、砺波　浜臣。

何やら不敵な笑みを浮かべている砺波の表情はどこまでも怪しく…

いや、怪しいと言えば語弊が生まれるものの、しかしその顔からはいつも厳格な砺波にしては珍しく、何かの『企み』すら感じさせられるモノとなりて遊良の目へと映っているのか。

…そして、ソレは表情だけでは断じてない。

普段から砺波の下について修業をつけてもらっている遊良には覚えがある…こうして、砺波が質問攻めしてくるときは、決まって遊良に自分で『何か』に気付かせたがっていると言うことを。

だからこそ―

「え?あの、砺波先生…も、もしかして…」

「フッ、察しのいい教え子で助かります。そう…今朝、【決闘世界】から通達が届きました。兼ねてから打診していた甲斐があったと言うものです。」

そう…砺波にここまで言われて、遊良は気がついた…いや、気付かざるを得なかった。

…それは本来ならば、思考の選択肢にすら入らないような想像…いや、妄想。

誰だって子どもの頃に一度は妄想するような、現実的には到底ありえない事。『チャンピオンズ・リーグ』をどこか遠い世界の出来事だと捉えていた、ある意味学生らしいと言えば学生らしい遊良が、そんな事は『ありえない』とまた考えてしまっていたが故の気付きの遅れ。

…だから、遊良も中々ソレに気付けなかった。

最初から、『そんなわけがない』と無意識に選択肢から外していたから。

けれども、砺波がここまで勿体ぶって遊良に気付かせようとしていたと言う事は…つまりは、『そういう事』に違いないのだろう。

…ここまで砺波に言われて、遊良は気付かざるを得なかった。
『１２名』が出場予定のチャンピオンズ・リーグの出場選手のうち…現在発表されているのが、まだ『１１名』だと言う事に。
そして、ソレをわざわざ砺波がここまで勿体ぶって『仄めかす』と言う事はもしかして―

「天城　遊良、我が教え子よ。君を…」

そのまま、砺波は言葉を選ぶように。
そして、ソレをまだ信じ切れていない遊良へと向かって…
不敵な笑みを崩さぬまま、ゆっくりと一呼吸置いて―

「君を、『チャンピオンズ・リーグ』に出場させます。」

…と言う、とんでもない事を言い放つのだった―

ｅｐ１１６「チャンピオンズ・リーグ」

チャンピオンズ・リーグ…

それは世界最大のイベントと言っても過言ではない、『４年に一度』のデュエルの祭典。

世界中のプロデュエリストの中でも、『トップランカー』と呼ばれる者しか出場することを許されない…世界最強のデュエリストである、【王者】への挑戦権を賭けた紛れもなく世界最高峰の戦いの呼び名である。

…学生達の『祭典』とはワケが違う。

その規模も、そのレベルも、世界からの注目度も盛り上がりも何もかもが学生の『祭典』とは桁が違う。

２大デュエル大都市として名高い決闘市の【決闘祭】、デュエリアの【デュエル・フェスタ】や…その他の大都市で行われている、【デュラーズ・ニーク】や【フェスティ・ドゥエーロ】や【龍節戦】と言った、数々の学生達の祭典のどれとも比べても文字通り『桁が違う』のが『チャンピオンズ・リーグ』と呼ばれる世界最大の祭典であるのだ。

何しろ、プロのトップランカーたちの直接のぶつかり合い。

世界に轟くトップランカーたちによって全てのデュエルが組まれるという、そのあまりの豪華さも勿論のことながら…

それ以上に世界が盛り上がりを見せるのは、その戦いの後に『更に』大きな戦いが待っているからとも言えるだろうか。

そう…

『チャンピオンズ・リーグ』が特別な祭典といわれる由縁はもう１つある。

―【王者】を引き摺り下ろす挑戦者…

『チャンピオンズ・リーグ』の優勝者は、世間からこう呼ばれることになる。
それすなわち、『チャンピオンズ・リーグ』の優勝者には【王者】と戦う権利を与えられると言う事。
ただ【王者】と戦うだけならば、それなりにプロを長く続けて上位へと上がればさほど難しい話ではない。長い年月をかけプロのトップクラスに定着し、地道な努力によって実力と知名度と人気を上げ続け…
【王者】と戦うに相応しいと、【決闘世界】と世間とから認められるようになれば、プロである内に『いつか』は3人の【王者】の内の『誰か』とは戦うことが出来るようになる可能性は確かにプロの誰にでも存在はしている。
しかし、こと『チャンピオンズ・リーグ』の優勝者においては―
その定説は、全くと言っていい程当てはまらなくなると言えることだろう。
そう、『チャンピオンズ・リーグ』の優勝者と【王者】との戦いは、普段の試合とはまるで意味合いが異なってくるのだ。

…『チャンピオンズ・リーグ』の優勝者に与えられるのは、【王者】への直接の『指名挑戦権』。

『チャンピオンズ・リーグ』に優勝した者は、期限のない【王者】への『指名挑戦権』を『1つ』だけ得る事ができる。また【王者】はソレが行使された場合、無条件でその戦いを受けなければならないと決闘法に明記されており…
つまりは、4年に一度の『チャンピオンズ・リーグ』で優勝する事ができれば、一度に限りいつだって【王者】に挑むことが出来るようになるのだ。
【王者】ではなく、チャレンジャーの好きなタイミングで。自らが選んだ【王者】の一人に、一方的に戦いを挑む。

それは自らが【王者】を超えたと自信をつけてからでも良い。獲得した勢いそのままに、すぐに【王者】に挑戦してもいい。【王者】が不調をきたしていると言われている、首を取るには絶好の機会を狙い済ましてもいい。

まぁ、一昔前は『逆鱗』の劉玄斎が『チャンピオンズ・リーグ』の優勝を6度も連続で取り続けていたせいで、一時期『チャンピオンズ・リーグ』は【王者】への挑戦権を賭けた戦いではなく世界ランク1位の『逆鱗』に挑戦する戦いの代名詞となっていたり…

『指名挑戦権』を行使すると宣言してから試合が組まれるには、双方のスケジュールや世界情勢や会場の手配や宣伝期間と言った、諸々の大人の事情を擦り合わせてからになるのが仕方無かったりする事は一先ず置いておいても。

それでも、『逆鱗』が引退して久しい今。ようやく『チャンピオンズ・リーグ』は、本来の形を取り戻した。

普通に戦うにはあまりに長い順番待ちをしなければならない3人の【王者】に、一方的に宣戦布告する権利を得られると言うのはそれだけでその人物が世界でもトップクラスに上り詰めたことの証明とも言えるはず。

何しろ、『チャンピオンズ・リーグ』に出場すると言う事だけでも弱肉強食のプロの世界で地獄を勝ち抜き、生き残り続け、上位へと上り詰めソレをキープし続けた者がようやくソレを許されるれっきとした偉業の1つであるのだから…

蹴落とし合い、喰らい合いが日常となっているプロの世界と言う地獄において、4年に一度しか開催されない『チャンピオンズ・リーグ』に出場すると言う事は、生半可な者ではそもそも到達する事さえ出来はしない。そしてそれ以上に、自らが【王者】を名指しで指名し戦いを挑めるという賞金以上の報酬は、全プロデュエリスト達の夢でもあり目標でもあるはずで。

それ故…

「俺が…『チャンピオンズ・リーグ』に？」
「そうです。【決島】後から談判していた結果が今朝ようやく実を結びました。…しかし長い道のりでした、何しろ【決闘世界】の上層部は頭の固い者があまりに多いですからね。」
「あの、砺波先生…本当に…ほ、本当なんですか？だって、俺まだ学生で…」
「本当のことです。学生の出場は既に『前例』がありますので、学生の君が出場することに関しても特に規定に問題はありません。」
「でも…ほ、本当に…」

たった今、砺波の口から告げられた、『君を、『チャンピオンズ・リーグ』に出場させます。』という言葉を未だ上手く飲み込めていない様子の遊良。

…当たり前だ。

遊良だって、自分の耳を疑ったに違いない。
『チャンピオンズ・リーグ』に出場すると言う事は、世界のトップランカーたちに混ざって戦うということ。
４年に一度しかチャンスのない、【王者】への指名挑戦権を奪い合う世界最高峰の戦いに…学生の身でありながら出場を許されたと言う事など、一体誰がすぐに飲み込めると言うのだろう。
誰だって一度は妄想した事がある。プロのトッププランカーたちに混ざって、プロの最高の舞台の１つである『チャンピオンズ・リーグ』で活躍する自分の姿を。
そう、この世界に生きるデュエリストならば、子どもの頃に誰だって一度はソレを思い浮かべるものなのだ。
そんな、夢まぼろしのような現実離れした舞台に、まさか自分が立

つだなんて。確かに学生の出場という『前例』があるにはあるとはいえ、今の遊良の心の中はソレを素直に受けいれることが出来ていないに違いなく…

遊良は思い出す…

砺波が言ったように、確かにこれまで学生が『チャンピオンズ・リーグ』に出場した例はたった『1例』だけ存在している。

そう、それは現シンクロ王者【白竜】、新堂　琥珀。

彼が学生時代に立てた偉業の1つである、3回前の『チャンピオンズ・リーグ』に彼が学生の身で出場し、そのまま『優勝』したという伝説・逸話が、確かに『チャンピオンズ・リーグ』の歴史には特異点のように存在してはいる。その前例があるからこそ、今再び学生が『チャンピオンズ・リーグ』に出場出来ると言う事なのだろうが…

しかし、ソレが決定事項だと言う事をひしひしと痛感すればするほど、遊良の身にはとてつもないプレッシャーが実体を伴ったかのようにして圧し掛かってきているのだろう。

…何しろ、今再び『学生』が『チャンピオンズ・リーグ』に出場を許されたと言うことはすなわち。

かつての新堂　琥珀のように、天城　遊良にも『チャンピオンズ・リーグ』の優勝を期待されているということなのだから。

「あの…また何か『条件』とかあるんですか？」

「…『条件』とは？」

「【決闘祭】とか【決島】の時みたいな…」

だからこそ、遊良は砺波に問いかける。

確かにコレは遊良にとっても願っても無い幸運、思いもよらなかった僥倖に違いない。

けれども、うまい話には必ずと言っていい程『裏』があると言う事を遊良もこれまでの経験で嫌と言うほど身に染みて分かっているか

らこそ…
砺波から告げられたこの話にも、何か『裏』があるのではないかと遊良は勘ぐってしまっているのだろう。
…【決闘祭】の時は自身の退学がかかっていた。
…【決島】の時は砺波やトウコと言った理事長達のクビがかかっていた。
そして今回の話はそれ以上の『祭典』への関わりなのだから、もしや大人達の間ではこれまで以上の『何らか』の思惑が動いているのではないか…と。
そう、思ってしまっていて…

けれども…

これまでの経験から、何か『裏』を勘ぐってしまっているそんな遊良の問いかけを。
砺波は、鼻で笑うようにして―

「あぁ…フッ、ありませんよ。君の退学や、私のクビをかけるような時代はもうとっくに終わっている…君は既に、色々な場所で認められているのです。」

…と、何の憂いもなくそう言うのだった。

そして―

「でも…今までは、俺にＥｘ適正がないからって…」
「…ま、君がそう感じてしまうのも無理はありませんね。何しろ今まで『その所為』で不当な扱いを受け続けてきたのですから。しかし【決闘祭】の優勝、【決島】の準優勝…この２年でこれだけの成績を修めているのです。Ｅｘ適正が無いことなどはもう反対意見にすらなりま

せん。」
「…そうなんですか？」
「既に色々なところで認められていると言ったでしょう？君は相変わらず自己評価が低いですね。君も少しは天宮寺君の不遜を見習ったほうがいい…まぁ、彼は少々調子に乗りすぎではありますが…ともかく、これは既に決定している事項なのです。君の一存で出場を辞退することなど出来ません。」
「わ、わかりました…」

遊良の卑屈で弱気な心を、言葉で一蹴するイースト校理事長、砺波浜臣。
認められている…砺波は今、遊良へとそう言った。けれども、ソレを素直に受け入れられない遊良の心は、きっと彼の今までの経験が尾を引いているが故なのだろう。
…これまで、遊良は全くと言っていいほど認められていなかった。
幼少期も、小学生の頃も、中学生の頃も、そして【決闘祭】の時も【決島】の時も。Ｅｘ適正が無いからと言って、遊良は色々な場所で様々な不当な扱いを受け続けてきたのだ。
しかし、ソレゆえに未だ戸惑いの中にある遊良の心を知っていてもなお―
どこまでも力強く、そしてどこまでも遊良を認めている砺波が、何の『裏』もない言葉にて遊良へとそう告げる声を聞いてしまっては。
遊良とて、否応なしに砺波の言ったソレを無理矢理にでも飲み込むしか道は残されてはいないのだろう。

…確かに、未だに驚きの中にある遊良。

それでも、砺波の言葉により自らの口から了承を零したことで。ようやく、ソレを飲み込み始めた様子で…

「精一杯頑張りま…」

「何を言っているのですか？『頑張る』だけではまるで足りません。『チャンピオンズ・リーグ』で、君がもし無様な負けを世界中に見せてしまえば…新堂君が作ってくれた前例を壊した罰として、きっとこの先『チャンピオンズ・リーグ』に学生が出場する機会は０となってしまうでしょう。つまり…」
「わかってます。四の五の言わずに優勝してこい…って事ですよね、砺波先生。」
「よろしい。ちゃんと分かっているじゃないですか。それでこそ【白鯨】の弟子です。」

砺波に倣い、不敵に笑い。
プロのトップランカーたちの中に放り込まれることが決まったばかりだと言うのに、『優勝』を自らの口で発した遊良の雰囲気が、先ほどまで漏らしていた弱気な心を討ち取っていく。
そんな、驚きに包まれながらも不敵に笑う遊良の雰囲気は…２年生までの彼とはまるで違う心の余裕をどこか思わせる代物となりて、先ほどまでの戸惑いを既に自らの意思で制御しつつある様子。
…３年生になって、明らかに雰囲気が増した遊良。
そう、砺波からソレを聞かされたときには確かに驚きを感じてはいたものの、しかしこれまでいくつもの修羅場を潜り抜け経験を積んできたが故に、もう遊良は自らの置かれた状況を早くも飲み込みつつあるのか。
…どうせ、辞退なんて許されない。それに、辞退するつもりもない。
それにこんなチャンス、もう二度と巡ってはこない。ソレを遊良もわかっているからこそ、いくら心が驚いていてもソレに囚われすぎるわけにはいかず。
何も『思惑』が無いのならば、何の憂いもなく思い切り戦える。そう、自らの力が認められ、出場を許されたことは今の遊良にとっては…遊良からしても、嬉しいことでもあるのだから。
「では今日から君は特別カリキュラムです。他の３年生とはカリキュ

ラムが異なりますが、出席日数や単位の辺りは何とかしましょう。」
「え、いいんですか？そんな事して…また色々と事務作業とか手続きとかが大変なんじゃ…」
「…そんなモノ、天宮寺君に現在進行形でかけられている面倒に比べれば雲泥の差です。」
「それは…確かに…」
「それに今回の件は私が以前から考えていた事ですので、最初から君に心配される事は何もありません。君は自分の心配だけをしていればいい…プロのトッププランカーたち相手に戦うのは君なのだから。」
「は、はい…ありがとうございます…」
「と言うことで早速始めますよ。開催まであと2ヶ月、それまでに君の実力を底上げしなければなりませんからね。…フッ、最近はずっと『七草』の先生達ばかりに修業をつけさせていましたが、今日は久々にこの私自ら君の力を見てあげましょう。さぁ、スタジアムに行きますよ。」
「え…い、今から…ですか？」
「言ったはずです、本番まで時間がありません。私も1時間ほどしか時間がとれないのでサクサク行きますよ。返事は？」
「は、はい、砺波先生。」

そうして…

砺波に連れられて、理事長室から出るとそのままイースト校のメインスタジアムへと向かい始めた遊良。
まだ始業前である事から、登校している学生達の中を【白鯨】と共に逆走している為に大勢の学生達から注目を浴びつつ…密かにざわめき始める学生達を他所に、どんどんと歩みを速める砺波に遊良は小走りになってついていくだけ。
…きっと、ソレを目にした学生達は自分の目を疑ったことだろう。
何しろ、こんな朝早くから【白鯨】が学生の波の中を歩いているのだ。それも遊良を連れ立って、どこかへと向かおうとしている様子な

のだから…
朝も早いこんな時間帯に、事情を知らない大勢の学生達からすれば。何が起こったのかすら理解できずに、滅多に見られない生の【白鯨】をただただ見送るだけで…

…そのまま、砺波と遊良は階段を降りると1階へと到達し。

校舎とは別の建物…
通常の授業では使われる事はまず無い、【決闘祭】の代表選抜戦やその他の重要行事で使われるイースト校で最も大きなメインスタジアムへと入ると。慣れた様子で、中央のデュエル場へと上がりつつ距離を取り始めて。

…他に人が居ないこのメインスタジアムは、2人で使うにはあまりに広い。

それは『無音』という音が聞こえてくるほどに広く、選抜戦や修業等で何度かここでデュエルした事がある遊良からしても少々の緊張を伴っている様子。

そして…

「では行きますよ。私を落胆させないでください？」
「は、はい、よろしくお願いします。」

慣れた様子で向かい合い、デュエルディスクを装着し。
こんな朝も早い時間に、ギャラリーもいない大スタジアムで向かい合った砺波と遊良が―

―デュエル!!

今、闘う。
先攻は、遊良。

「俺のターン！魔法カード、【闇の誘惑】発動！２枚ドローして【堕天使アスモディウス】を除外！続けて【堕天使イシュタム】の効果発動！手札の【堕天使ネルガル】と共に捨てて２枚ドロー！【トレード・イン】も発動！レベル８の【堕天使ゼラート】を捨てて２枚ドローし…そのまま【手札抹殺】も発動！手札を全て捨てて４枚ドロー！」

デュエルが始まってすぐ…
凄まじき勢いにて、始めから全開全力でデッキをフル回転させ始めた遊良。
巻き起こるはドローの嵐。
それは一昨年の【決闘祭】、そして昨年の【決島】を経て更に進化した、これまでの遊良のデュエルよりも更に激しき嵐のようなドローの乱舞とも言えるに違いないことだろう。
しかし、並の相手ならば、初手から手札全てを入れ替えさせる【手札抹殺】は時として大きな妨害札になりえるモノなのだろうが…
強者になればなるほど墓地をリソースとして扱える者が増えることから、使用する相手やタイミングをひとつ間違えれば相手に大きなメリットを与えてしまう諸刃の剣でもある【手札抹殺】を、遊良は何の恐れもなく初手から戸惑うことなく発動して。

「５枚捨て５枚ドロー。…私の手札を恐れることなく【手札抹殺】を使ってきましたか。」
「はい、砺波先生相手にはデメリットの方が多いかもしれないですけど…でも、ここで中途半端に動くよりは思い切って動くほうが重要だと思って…」
「…フッ、そうです。相手にアドバンテージを与えることを恐れていては格上相手に立ち向かえません。そのデメリットを帳消しにするような動きを持って、全力で立ち向かってきなさい。」

「はい！魔法カード、【成金ゴブリン】発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！…よし、フィールド魔法、【チキンレース】発動だ！その効果で、ＬＰを１０００払って１枚ドロー！」

遊良　ＬＰ：４０００→３０００
砺波　ＬＰ：４０００→５０００

けれども、そんな事など百も承知で。
『堕天使』の力のみならず、自らのＬＰを減らす事すら、そして相手のＬＰを増やす事すら厭わないドローにて、更に勢いを増し続ける遊良のデュエル。
…昨年の『ある出来事』によって『堕天使』のカードを失っていた時に培った、遊良のデュエルの発展系とも言えるであろう怒涛の回転力にて更に強く動き続け。
そして一度失ってもなお、その上で更に力を磨き、そうして再び取り戻した『堕天使』の力と…
磨き上げ、研ぎ続けた『自らの力』とを合わせながら繰り出されるそのドローの激しさは、まさに手の着けられないほどに洗練されつつある乱舞となりて、激しく彼のデッキを回転させている。

「【堕天使の追放】を発動し、デッキから【堕天使の戒壇】を手札に加える！そのまま魔法カード、【堕天使の戒壇】発動！墓地からスペルビアを守備表示で特殊召喚し、その効果でイシュタムも守備表示で特殊召喚する！羽ばたけ、２体の堕天使達よ！」

【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使イシュタム】レベル１０
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２９００

現れるは２体の漆黒。

遊良のデュエルの始まりを飾る、異形の堕天使と魅惑の堕天使が天高らかに宙を舞う。

「まだまだ行きます！【アドバンスドロー】を発動し、スペルビアをリリースして２枚ドロー！そして【堕天使ユコバック】を通常召喚！その効果で、デッキから【堕天使アムドゥシアス】を墓地に送る！魔法カード、【死者蘇生】を発動！もう一度スペルビアを攻撃表示で特殊召喚して、その効果でネルガルも攻撃…いや、守備表示で特殊召喚する！更にイシュタムの効果も発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の戒壇】の効果を得る！墓地からアムドゥシアスを守備表示で特殊召喚！」

―
!!!!

【堕天使ユコバック】レベル３
ＡＴＫ／　７００　ＤＥＦ／１０００
【堕天使スペルビア】レベル８
ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／２４００
【堕天使ネルガル】レベル８
ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２５００
【堕天使アムドゥシアス】レベル６
ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／２８００

遊良　ＬＰ：３０００→２０００

しかし、まだまだ…それだけでは、終わらない。
瞬きほどの一瞬で、遊良の場には更に４体の堕天使がその漆黒の羽を広げ場へとその姿を現し始めたではないか。
…まだデュエルは始まったばかりだと言うのに、これで遊良の場には堕天使が５体。
次の砺波の攻撃を最大限に警戒してか、そのほとんどが守備表示だ

とは言え…
先のドローの乱舞といい、この怒涛の展開といい。まるで初めからフルスロットル、最初からクライマックスなのだと言わんばかりの勢いで、開始からあまりに激しい姿を見せながら遊良は砺波へと立ち向かっているではないか。

「その後、【堕天使の戒壇】はデッキに戻る！よし！俺はカードを２枚伏せてターンエンドです！」

遊良　ＬＰ：４０００→２０００
手札：５→０枚
場：【堕天使イシュタム】
【堕天使ユコバック】
【堕天使スペルビア】
【堕天使ネルガル】
【堕天使アムドゥシアス】
伏せ：２枚
フィールド：【チキンレース】

そうして…
先攻１ターン目から、あまりに激しいカード捌きにて怒涛の展開を見せ今そのターンを終えたイースト校３年、天城　遊良。
途中、少々の迷いを見せてはいたものの…しかし最初から手札を全て使いきってまで全力で砺波へと向かい合う今の遊良のその姿は、昨年度までの彼とは比べ物にならない程に洗練された、大人になりつつある佇まいと言えるに違いない事だろう。
そう、それはその顔つきが子どもから大人へと近づいているのと同様に、デュエルの実力も心の強さも成長してきているからこそ。
…１年生の時とは比べ物にならない程に強くなった。２年生の時に更なる激闘を経て強さを増した。
そして、３年生になった今。

遊良の実力は、遊良の心は。理事長である砺波を前にしても、恐れることなく立ち向かえるまでに大きく強く成長していて―

「ほう…堕天使が5体に伏せカードが2枚、オマケに【チキンレース】…今の手札で引き出せる全力で来きましたか。」

「…」

「…フッ、いいでしょう、まずは合格です。ここで余力を残してカードを温存してくるようならば、次のターンに容赦なく木っ端微塵にしていたところでした。」

「やっぱり…」

「では行きましょう。私のターン、ドロー。」

…そんな遊良へと向かって。

一言…しかしとてつもなく不穏な笑みと、冗談では断じてない言葉と共に。自らのターンを、砺波は静かに迎え始める。

…今の砺波の言葉を聞いて、遊良の背筋が凍ったのは言うまでも無いこと。

だってそうだろう。最後の最後で悩んだ末に遊良が取った、手札を全て伏せるという行為が正解であった事に…一体、遊良がどれほど安堵を覚えたことか。

砺波の言った、『木っ端微塵』と言う言葉が冗談などでは断じてない事をこれまでの修業にて遊良も嫌と言うほど叩き込まれている。それ故、厳しすぎるとも思える砺波の『指導』と言う名のスパルタを察するのに、遊良は常に神経を張り詰めて挑んでいるのだから。

「私は【深海のディーヴァ】を召喚！」

―！

【深海のディーヴァ】レベル2

ＡＴＫ／　２００　ＤＥＦ／　４００

砺波の場に現れるは、深海にたゆたうアリアの歌い手。
彼のデュエルの始まりを告げる、まさに代名詞とも呼べる歌姫がいつもの様にして静かに呼び出され…

「行きますよ、召喚成功時にディーヴァの効果はつど…」
「永続罠、【デモンズ・チェーン】！ディーヴァの効果を無効に！」

…けれども、ソレに即座に反応した遊良が放った、悪魔の鎖が歌姫を縛り上げる。
そう、それは砺波とのデュエルにおいて、まず初めにディーヴァの効果を止める事が最重要課題であると言う事を遊良もわかっているからこその反応。
歌姫から始まる無限の展開の、初動を止められなければまず話にはならない。つまりは、砺波とのデュエルにおいてはコレが定石なのだと言わんばかりに遊良はノータイムでディーヴァの歌声をせき止めるだけ。

「まずは定石どおりですね。では次は【チキンレース】の効果を使用します。ＬＰを１０００払い１枚ドロー！そして手札の水属性モンスター２体を捨てることで、手札より【水精鱗―メガロアビス】を特殊召喚する！」

―！

【水精鱗―メガロアビス】レベル７
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１９００

だからこそ、砺波もまた教え子の動きを最初から分かっていたようにして。
縛られた深海の歌姫を意に介さず、何の淀みもなく次なる一手を打

ちつつ更に動き続けるだけ。

「さて、この効果で特殊召喚したメガロアビスには更なる効果が発生しますが…どうしますか？【神属の堕天使】で無効にしＬＰを回復しますか？」

「ぐっ、バレてる…ま、まだしません。」

「よろしい。この後も展開はまだ続くため、咄嗟に、闇雲に、ただ手当たり次第に妨害していては手が足りなくなりますからね。」

「相手のカードからその先を常に考え、止めるべきところを見極める…」

「そうです。何が自分にとっての致命傷になりえるのかを見極めるのです。ではメガロアビスの効果により、デッキより【アビスケイル―クラーケン】を手札に加える。更にたった今手札より捨てられた、【海皇の竜騎隊】と【海皇の重装兵】の効果も発動します。竜騎隊の効果で【海皇子　ネプトアビス】を手札に加え…重装兵の効果で【チキンレース】を破壊する！」

「…ッ？」

そして…

砺波のモンスターが放った、海中よりの一撃によって遊良の場の【チキンレース】が破壊されていく。

けれども、破壊されたのが【チキンレース】であった事に対し…

遊良は何やら、少々意外であったかのような反応を見せ始めたではないか。

そう、高い攻撃力と優秀な効果を持った堕天使ではなく、何故に砺波はフィールド魔法の【チキンレース】を破壊したのだろう。砺波ほどの者になれば、展開の途中でついでのように当たり前に【チキンレース】を破壊するのは呼吸するよりも簡単なことのはず。

何しろ、砺波はかつて【白鯨】と呼ばれていた、一度はシンクロ召喚の頂点に立っていたほどの世界最高峰の実力者の一人であり…

更に最近ではその領域から更に『上』の…いや、『別』の次元へと到

達したほどの、規格外の力を持っているのが今の砺波のはずなのだから、そんな者が狙うのならば破壊するのならばいつでも対処出来る置物ではなく、変幻自在に飛びまわる堕天使達をまず対処しようとするのが普通のはず。
　そうだと言うのに、堕天使達には目もくれずに最初に【チキンレース】を狙ってきたのが、遊良には少々意外であったようで…

　しかし…

「堕天使じゃなくて【チキンレース】を…」
「考えなさい。相手の行動、ひとつひとつをその目に焼付け…そこから生じる可能性を刹那に熟考するのです。即座に予測し、咄嗟に予想し、絶えず連想し続けなさい。」
「はい、となみせ…」
「まぁ君の予想は当たりませんが。【サンダー・ボルト】発動。」
「…へ？」

　―！

　瞬間…
　予想外に、予測不可に。古代魔法に数えられる、砺波の放った雷撃が遊良の予測の範疇の上から猛々しく堕天使達へと襲い掛かる。
「ちょ、そんな突然!?だ、【堕天使イシュタム】の効果発動！ＬＰを１０００払って墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！デッキから【堕天使テスカトリポカ】を手札に加えて、そのままテスカトリポカを捨てることで堕天使達を破壊から守る！」
　そんな、突然襲い掛かってきた瞬撃の雷霆に驚きを感じつつも…雷

撃が完全に落ちてくる前に、どうにか寸前の所で堕天使達を守りにかかった遊良。

遊良　ＬＰ：２０００→１０００

…羽ばたくは、守りの力を持った悪魔のような見た目をした更なる堕天使。

その革命の業火を十字に広げ、降り注ぐ無情な雷撃を真正面から受け止め…全てのモンスターを粉砕する古代魔法を受けてもなお、砕かれる事なく仲間を守る。

「ふむ、咄嗟の予想外にも即座に対応してみせますか。まぁ私の教え子ならば、この程度など軽く躱せて当然でしょうが。」

「いや、突然すぎて驚いたんですけど…砺波先生、【サンダー・ボルト】なんて持ってたんですか？」

「当たり前でしょう？私を誰だと思っているんですか。」

「だって一回も使われた事無いし、使ってたとこも見た事ないですし…ビックリした…っていうか何でこのタイミングで？」

…しかし、どうにか堕天使達を守ったとは言え。

これまでの砺波との修業では、そしてこれまでの【白鯨】のデュエルでは全くもって見た事もなかったカードを…こんな予期せぬタイミングで使われた遊良の心臓の鼓動は、今の驚愕の所為で波打つほどに強く打ちつけられている様子ではないか。

…しかし、それも当然か。

確かに砺波ほどのデュエリストになれば、古代魔法と呼ばれる複製不可指定のカードを所持していても可笑しな話ではない。けれども、例えソレを持っていたとしても…

ソレを使うかどうかは全く別の話であり、『海』…いや、水属性とソレに関連したカードを使うことを美学としている元シンクロ王者【白鯨】が、あろうことかこれまで一度も使ったところを教え子に見せた

事すらない【サンダー・ボルト】をこんな雑に使用してくるだなんて、一体誰が予測出来ていたというのだろう。
…遊良の記憶が確かならば、砺波が【サンダー・ボルト】を使用した場面は一度も無いはず。ソレは遊良達との修業の最中も勿論のことだが、それ以前の【王者】であった頃…いや、それ以前から数えても皆無だったはず。
…それ故、砺波がその魔法を持っていたことよりも使われたことに大いに驚いている遊良の心には。
使われた事以上に、砺波の放ったソレを自分が躱せたと言う事自体に対し、少々の引っかかりを覚えている様子で…
そう、普通に戦っても自分を圧倒できるほどの力を持った【白鯨】が、まさか自分の意表を突くためだけにこんな雑なタイミングでこんな強力なカードを無駄撃ちしてきたとは遊良には到底思えない。
何しろ【サンダー・ボルト】を使う前に、先ほどメガロアビスの効果で手札に加えていた【アビスケイル―クラーケン】を場に出していれば…今の【サンダー・ボルト】は、確実に遊良の場の堕天使達を木っ端微塵に粉砕しきっていたはずなのだ。
だからこそ、あえて『躱してみろ』と言わんばかりに雷撃を放ってきた砺波の今の行動を見て…
遊良はふと、先のターンに砺波に言われたことを思い出す。
―『まずは合格です。ここで余力を残してカードを温存してくるようなら、次のターンに容赦なく木っ端微塵にしていたところでした。』
そう、砺波があえて【アビスケイル―クラーケン】を先に使用しなかったのは、おそらくデュエルが始まってすぐの砺波の課題を遊良が正しく察したが故なのだろう。
もっと、ギリギリまで…追い詰めて、抵抗させる。
それはある意味で偏った教育的指導にも思えるものの、しかしこの

デュエルが勝敗を重要視するデュエルではない『修業』の一環である事を考えると、その行為はまたある意味では当然とも言える措置とも言えるのではないだろうか。
意表を突いた雷撃も、抵抗の余地を残した展開も。どれもこれも、ただただ『修業』の一環に過ぎない。
それ故、雷撃を躱したものの驚きを禁じえていない教え子に対してもなお。
砺波は、手を休めずに動き始めるだけ。

「この程度で驚いている暇なんてありません。装備魔法、【アビスケイル―クラーケン】をメガロアビスに装備。そして【強欲で貪欲な壷】を発動し、デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー。フィールド魔法、【伝説の都　アトランティス】を発動。続けて魔法カード【魚群探知機】も発動しましょう。デッキから【デス・クラーケン】を手札に加え、アトランティスはルール上『海』として扱う。デッキから【幻煌龍　スパイラル】を特殊召喚！」

―！

【幻煌龍　スパイラル】レベル８→７
ＡＴＫ／２９００→３１００　ＤＥＦ／２９００→３１００

そうして…
砺波の場に現れしは、海竜より進化した…いや、海竜より浸渦した、幻の中に生きる一体の龍。
…逆巻く海流を統べる王。１つ上の段階へと到った螺旋の海王。
また、何よりも特徴的なのは…
元シンクロ王者【白鯨】が、効果を持たぬ『通常モンスター』を呼び出したと言う事であって―

「攻撃力３１００!?しかも通常モンスター!?」

「まだ終わりません。私の場のディーヴァと君の場の【堕天使アムドゥシアス】を対象に、手札の【デス・クラーケン】のモンスター効果を発動！クラーケンを特殊召喚し、ディーヴァを手札に戻し…同時に、アムドゥシアスを破壊する！」
「くっ、今度は手札で発動するモンスター効果…」
「【神属の堕天使】があるのが分かっているのです。ならばコチラはソレを躱すように動くに決まっているじゃないですか。」
「分かってるって…って言うかそれは砺波先生だからじゃ…」
「四の五の言わない。【強欲なウツボ】発動、手札のディーヴァとネプトアビスをデッキに戻し３枚ドロー。そして装備魔法、【幻煌龍の螺旋絞】をスパイラルに装備し攻撃力を５００アップ！ではそのままバトルフェイズです！まずはスパイラルで、【堕天使ユコバック】へと攻撃！」
「ト、罠発動、【神属の堕天使】！ユコバックを墓地に送り、メガロアビスの効果を無効にしてＬＰを３０００回復する！」
「フッ、結局メガロアビスに【神属の堕天使】を使わされてしまいましたね。まぁ結果的にＬＰを多く回復出来たので及第点でしょう。では攻撃対象を【堕天使ネルガル】へと変更し攻撃続行です！渦天のスパイラル・フラード！」

―！

強烈なりし波動の一撃。螺旋の王の轟きが、髑髏の堕天使を破壊する。
その螺旋の渦に、髑髏の堕天使も一度は抵抗を見せたものの…
しかし強烈なる螺旋の波動は、堕天使の羽ばたきを持ってしても耐え切る事など出来はしない凄まじさとなりて一撃の下に堕天使を撃って落とすのか。
…しかし、それだけでは終わらない。
そう、海竜より浸渦した、王の本領はここからなのだから。

「まだだ！スパイラルに装備された【幻煌龍の螺旋絞】の効果発動！デッキから2体目の【幻煌龍　スパイラル】を特殊召喚し、このカードをそのまま2体目に装備！更に君に１０００のダメージを与えます！続けて2体目のスパイラルで【堕天使スペルビア】へと攻撃！メガロアビスで【堕天使イシュタム】に攻撃！そしてクラーケンでダイレクトアタック！」

―!!!

遊良　ＬＰ：４０００→３０００→２３００→７００

「ぐっ…」

波状の連撃、怒涛の襲撃。

海の者たちの容赦なき激浪が、遊良の堕天使達へと襲い掛かる。

…もし砺波が手心を加えていなかったら、先ほどの宣言通りこのターンで遊良のＬＰは木っ端微塵に全て消し飛ばされていた。

そう、万全を期して、全力で抵抗するために手札を全て使いきってまで遊良はこのターンに備えたと言うのに…

手心を加えながら、いとも簡単にソレを超えてくる砺波の波状攻撃は。およそ遊良の想像を遥かに超える迫力を持ってして、津波のように襲い掛かってきたのだ。

「堕天使の攻撃力を過信せず、私の攻撃を最大限に警戒し守備表示を多めにしたのは正解でしたね。ネルガルかイシュタムまで攻撃表示で呼び出していたらこのターンで終わりでした。【白闘気白鯨】を視野に入れ、テスカトリポカを手札に加える算段も整えていたのは評価してあげてもいいでしょう。まぁ墓地の【巨神封じの矢】が腐ってしまったのはまだまだ甘いですが。」

「は、はい…」

「さて、この辺りがいい塩梅ですかね。手札０、ＬＰも残り７００で、

【チキンレース】も堕天使の効果に必要なコストも払えない。ではここから返してみなさい。私はカードを1枚伏せてターンエンドです。」

砺波　ＬＰ：５０００→４０００
手札：6→1枚
場：【水精鱗―メガロアビス】
【幻煌龍　スパイラル】
【幻煌龍　スパイラル】
【デス・クラーケン】
伏せ：1枚
フィールド：【伝説の都　アトランティス】

そうして…
怒涛のような攻撃を終え、今静かにそのターンを終えたイースト校理事長、砺波　浜臣。
遊良の全力を軽く乗り越え、遊良の全霊を簡単に利用し…遥か彼方の高みから、遊良のデュエルをデュエルの最中に批評し、評価し、さらには課題すら与えてくるその圧倒的なる砺波の佇まいはどこまでも余裕綽々で。
…その姿は言うなれば、どこまでも不敵なる強者の温情。
荒ぶる遊良の全力を、まるで片手で軽く捻るようにして蹴散らしたその余裕溢れる佇まいはまさしく天上の力をも超えた、およそ常人には決して理解することすら出来ない領域に達している事の証明とも言えるに違いないことだろう。
そう…遊良をこのターンで倒すことだって簡単に行えたはずだと言うのに、あくまでも『修業』であると言う事からわざと砺波は遊良に課題を与え続けているのだ。
それは【サンダー・ボルト】をあえて遊良に耐えさせたのもそうだし、わざとＬＰが残るように展開も攻撃も調整したこともそう…

そして、ソレ以上に―

砺波の限りない手心など、遊良もとっくに気が付いている。

何しろ、元シンクロ王者【白鯨】とまで呼ばれた、現在もなおシンクロ使いとしては頂点に位置しているはずの砺波　浜臣が…

まだ、一度だって『シンクロ召喚』を行ってすらいないと言う事を。

「俺のターン、ドロー！」

だからこそ、そんな砺波に『返してみろ』と指示された遊良もまた、ターンを迎えてすぐに勢いよくカードをドローするのか。

手札が０だと言うのに、微塵も恐れを抱いていない様子にてカードを引く遊良の手は…僅かな淀みも感じさせない自信に満ちた動きとなりて、閃光のようにカードをドローしながらも。その目は真っ直ぐと砺波の場を見据えており、ソレは遊良が砺波を前にしても恐れを微塵も感じていないが故なのだろう。

そう、実力差に慄くことなど遊良はしない。最初から、砺波との力の差がありすぎている事など遊良も理解しているからこそ。

そして、そんな人物が忙しい時間を割いて直々に修業をつけてくれているというこの状況に、深い感謝すら抱きながら…

「よし！【マジック・プランター】発動！【デモンズ・チェーン】を墓地に送って２枚ドロー！【貪欲な壺】も発動！イシュタム、ネルガル、テスカトリポカ、アムドゥシアス、ゼラートをデッキに戻して２枚ドロー！【強欲で貪欲な壺】発動！デッキを１０枚裏側除外して２枚ドローし…魔法カード、【成金ゴブリン】も発動！ＬＰを１０００与えて１枚ドロー！」

少しの戸惑いも躊躇もなくドローされた遊良のカードが、そのまま勢いよくデュエルディスクへと叩きつけられる。

それは手札０からスタートしたと言うのにも関わらず、手札を一気に４枚まで増やす脅威の所業。
動けなくなることなど全く持って恐れていない遊良の進撃、先ほどと同じ様にデッキを回転させんと、再び暴れ始めるだけ。
「【堕天使の追放】発動！【堕天使ネルガル】を手札に加え、そのまま【トレード・イン】も発動！レベル８のネルガルを捨てて２枚ドロー！更に手札を１枚捨てて魔法カード、【ワン・フォー・ワン】発動！デッキから【サクリボー】を特殊召喚し…速攻魔法、【地獄の暴走召喚】発動ぉ！」

―！

【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００
【サクリボー】レベル１
ＡＴＫ／　３００　ＤＥＦ／　２００

そうして…
デッキと墓地から連続して現れたるは、その名に犠牲を背負った３体の小さき悪魔達。
遊良が堕天使を失っていたときに、己のデュエルの根幹を改めて見つめ直したことにより彼が見つけた…堕天使ならざる悪魔の存在、しかして遊良の武器たるドローを支える、遊良自身の武器の１つ。
「私は【幻煌龍　スパイラル】を選択します。デッキから３体目のスパイラルを特殊召喚。…さて、来ますか。」
「行きます！俺はサクリボー３体をリリース！」

そして…

【白鯨】を前に、遊良の叫びが響く時。

ソレは無人のスタジアムであろうとも、轟く雄叫びと共に今ここに現れようとしているのか。

そう、例え海の眷属達が、海流を統べる螺旋の王が恐るべき重圧と共に鎮座していようとも関係ない。全てを、神をも滅ぼす雄叫びを伴い現れる力は、何が相手であろうとも恐れ慄くことは決してないのだから。

震える大気、獣の咆哮と共に…

それは、現れる―

「【神獣王バルバロス】！」

―！

轟く咆哮、弾ける爆風。

遊良の叫びに呼応するは、激戦駆け抜けし獣の王。

幼少の頃から、遊良を守り…遊良と共に成長し、そして遊良と共に数々の戦いを生き抜いてきた獣の王が、海の者たちへと立ち向かう。

【神獣王バルバロス】レベル８

ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１２００

「バルバロスのモンスター効果！３体のリリースでアドバンス召喚し

た時！相手のカードを全て破壊する！」
「ですが【アビスケイル―クラーケン】の強制効果により、バルバロスの効果は無効化されます。その後、【アビスケイル―クラーケン】は墓地へと送られる。」

けれども、獣の王のソレは最初から轟かないことが決まっていたかのように―
赤鮫の戦士が纏った鎧が砕け散ると同時に、獣の王の咆哮を掻き消す共鳴波を鳴らしたかと思うと…
なんと全てを破壊し尽す衝動の波が、海の高波に押し返され凪のように静まり返ってしまったではないか。

しかし…

「でもこれで制限は無くなった！サクリボー3体の効果で3枚ドロー！　3枚目の【トレード・イン】発動！【Ｄ　ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ】を捨てて2枚ドロー！【アドバンスドロー】も発動！バルバロスをリリースして2枚ドロー！…よし！【堕天使の戒壇】を発動します！墓地からスペルビアを特殊召喚し、その効果でネルガルも特殊召喚する！再び羽ばたけ、2体の堕天使達よ！」

遊良はまだまだ止まらない、
そう、場にある確定情報から、獣の王の衝動が止められる事は遊良には最初から分かっていたこと。
だからこそ、手札0から呼び出した獣の王の轟きをあえて止めさせた上で…更に強く攻め続けるべく、遊良は動き続けるだけなのだから。

【堕天使スペルビア】レベル8
ＡＴＫ／2900　ＤＥＦ／2400
【堕天使ネルガル】レベル8

ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２５００

再度飛び立つ２体の堕天使。獣の王が居なくなってもなお、異形の堕天使と髑髏の堕天使が天高らかに空を舞い海の威圧を軽やかに躱し…

「永続魔法、【冥界の宝札】と通常魔法、【二重召喚】を発動し、そのままスペルビアとネルガルをリリース！」

そして、叫ぶ。

３体揃う螺旋の王にも、深海を守る赤鮫の戦士にも。そして死を呼ぶ烏賊にも慄かずに叫ばれるは、天空に響く遊良の叫び。

「来い、レベル１１！」

…例え相手が、シンクロ召喚を使ってこない、本気では無い砺波であろうとも。

それでも、遥か彼方に位置している師の背中に、少しでも追いつかんとして…

そしてそれ以上に、人間の理を超えた師より『期待』されていると言うことが、遊良の魂に火をつけたのか。

「神に背きし反逆の翼、その姿を今ここに！」

今、新たなる決意と共に。

想像のつかない上のステージへと、自らの意思で出場することを決めた遊良の心が形となりて。一昨年と、そして昨年までの己を超えた自分自身を、今ここに誇るかのように…

【白鯨】を使ってこない【白鯨】の…しかして【白鯨】を超えた異次元の強さを持った【化物】の前であろうとも。

そんな師の前でもなお、遊良の呼び声に応えるのはまさしく―

「【堕天使ルシフェル】！」

―！

清廉なる天の光、それを遮る黒き姿。
海淵に潜む【化物】を前にしても、決して慄きはしないその佇まいはまるで神か悪魔か天使か人か…
儚くも君臨するその姿は、天使と呼ぶにはあまりに深淵。しかして悪魔と呼ぶには、あまりに煌々たる存在が、神をも撃ち破る反旗の翼を広げ今ここに天空より降臨する。

その姿を、一体誰が見間違えようか…

それは新たなる段階へと進もうとしている、今の『遊良』の姿そのモノであって―

【堕天使ルシフェル】レベル11
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

「…獣の王を囮に、堕天の王を呼び出しましたか。」
「行きます！【冥界の宝札】の効果で２枚ドロー！そして【堕天使ルシフェル】のモンスター効果！アドバンス召喚成功時、相手の効果モンスターの数だけ堕天使を呼び出す！集え、【堕天使マスティマ】！【堕天使ゼラート】！」

―!!

【堕天使マスティマ】レベル７
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２６００
【堕天使ゼラート】レベル８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００

「まだだ！【堕天使ルシフェル】の更なる効果発動！１ターンに一度、堕天使の数だけデッキからカードを墓地に送る！…墓地に送られた『堕天使』カードは２枚！よって俺はＬＰを１０００回復！」
「ほぅ…私を前にしてＬＰを１０００も回復できるとは。」
「続けて【堕天使マスティマ】の効果発動！ＬＰを１０００払い、墓地の【堕天使の追放】の効果を得る！デッキから【堕天使エデ・アーラエ】を手札に加え、【堕天使の追放】をデッキに戻す！」

遊良　ＬＰ：７００→１７００→７００

そうして…
獣の王から繋がり、堕天の王から始まった更なる展開により、遊良の手札とＬＰが目まぐるしく変化を繰り返す。
それは手札が０からスタートしたとは思えない程に洗練された、かつ遊良をよく知らない他人からは想像もつかない卓越したカード捌きと言えるに違いない事だっただろう。

…そう、遊良は、このターン手札を０枚からスタートさせたのだ。

かつて、誰かが言った…手札とは、すなわち可能性である…と。
手札とは、選択肢のようなモノ。ある特殊な効果を持ったカード群を除いては、手札が『無い』と言う事はそれだけ取れる選択肢が無くなってしまうことに等しいといえるのだ。
…遊良のデッキが、今ここでどういう動きを見せどう回転するのかなど誰にもわからない。そして、ドローしたカードでどう戦うのかを決められるのも、戦っている遊良だけ。

それ故、砺波に対峙している遊良が考え、導き、そして立ち向かっているこの流れこそがこのデュエルの全て。
だからこそ、遊良も砺波の軍勢を前に、手札０から遊良が取れる選択肢があまりに少なかったはずだと言うのに…
瞬間的に手札を４枚へと増やしたかと思うと、止められるのを前提で『獣の王』を繰り出しつつ。それを超える動きにて堕天使を連続的に召喚し、果ては『堕天の王』とその重臣たちによって一挙に形勢逆転を狙えるところまで場を進めたこの流れもまた、遊良の持てる全力の展開と言えるに違いないことだろう。
果たして…
今の天城　遊良という少年の実力は、一体どれほどのモノとなっているのだろうか。
既に学生の枠には収まらないことは必至。これだけの展開力、これだけのカード捌き、これだけの攻撃能力に加えて、その窮地を窮地とも思わぬ精神力から魅せる危機回避能力と…
Ｅｘ適正がないからこそ磨かれた、絶対に相手を乗り越えるという覚悟は、それだけ今の遊良の力が果てしなく、そして凄まじく洗練されつつあると言う事と同義でもあるはずで。

「ふむ…」
「よし！そのまま【堕天使ゼラート】の効果も発動だ！手札のエデ・アーラエを捨てて…砺波先生のモンスターを、全て破壊する！」

…だからこそ、再び遊良は全力で叫ぶ。
赤衣の堕天使が導いた黒き雷撃が、轟音と共に海の者たちへと襲い掛かるその光景は…
まさに、先ほどの【サンダー・ボルト】のお返しなのだと言わんばかりの威力を持ってして。
猛々しくも荒々しく、海王の眷属達を破壊せんと広がり始めるのみであり―

しかし…

「よし！これで砺波先生の場はがら空きになっ…」
「なるわけないでしょう？墓地から【海竜神の激昂】を除外。水属性をその破壊から守ります。」
「なっ!?」

それでも砺波は崩れない…
いや、崩せるわけがない。
さも当然のように、さも当たり前のようにして…
先の遊良と同じように、全体破壊にも対応する身代わりの効果を使用し。砺波がソレを宣言したと同時に、彼の墓地から浮かび上がった海竜神の幻影が海王の眷属達の全てを守り始めたではないか。

「くっ…【手札抹殺】の時にそんなカードまで…」

遠い…
真正面に立って対峙していると言うのに、遊良には砺波の背中があまりに遠すぎてその欠片ほども見えてこない。
そして、それは比喩的表現だけでは断じてない。
実力的な面でも、思考的な面でも、精神的な面でもそうだが…それ以上に遊良には、砺波の操るカードの部分部分が時折見えなくなる錯覚を覚えていて。
それはたった今遊良が、砺波の墓地のカードを見落としてしまっていたのもそう。この世界におけるデュエルにおいてはある意味仕方の無いことのひとつなのだが、圧倒的強者との戦いにおいてはデュエルディスクが相手のカードを上手く認識できなくなることが時たまに起こってしまうモノなのだ。
しかし、それを含めてもなお遊良のカードを当然のように利用し、

遊良の渾身の一撃を何食わぬ顔で２度も止めてくる辺り…

遊良には、砺波の背中がまだまだ見えず…

「どうしました？この程度で終わりですか？」

「ま、まだです！【貪欲な壷】発動！墓地のスペルビア、ユコバック、ネルガル、エデ・アーラエ、そしてＢｌｏｏ—Ｄをデッキに戻して２枚ドロー！…ッ、き、来た！このカードは、墓地の闇属性が３体のみの場合に特殊召喚出来る！」

「おや、その召喚条件は…」

けれども、これだけでは終わらせられないと言わんばかりに。

今ここに、遊良は高らかに竜の雄叫びを上げ始めるのか。

…轟かせしは不沈のいななき、溢れんばかりの竜の息吹。

それは【化物】に気圧されているままであったとしても、内に秘めた『本性』は紛れもなく『巨龍』なのだという事を見せ付けるが如き轟きと響き。

…天に掲げるその手が行き着く先は、Ｅｘでは決してあらず。

そう、確かなる血の『繋がり』から受け継いだ、その轟きの指し示すままに。轟々とした迫力を纏い、類稀なる竜の叫びを体現しつつ…

天に掲げたその手と意思は、竜の雄叫びとなりてＥｘデッキではなく手札へと向かっていて—

そして—

「怒りに震える逆鱗よ！歯向かう愚者を消し飛ばせぇ！」

轟く咆哮、震える大気。重々しく変わっていく、天城　遊良のそのオーラ。
歴戦を超えし【化物】と、その眷属達にも慄かない小さき竜のその姿は彼が本当に『龍』の血を引いている証明となりて声高々に響き渡る。
…聞こえてきたのは、かつて『逆鱗』と呼ばれていた歴戦のデュエリストが放っていた、世界に轟いていた『あの口上』と一字一句同じモノ。
そう、雰囲気までもが瓜二つの、大気を震わす咆哮に導かれ。Ｅｘ適正を持たぬ少年の場へと、歴戦を知る龍の叫びが…

ここに、現れる―

「来い、レベル７！【ダーク・アームド・ドラゴン】！」

―！

…現れたのは黒き暴竜、怒りに震える巨大な体躯。
力を纏いし豪き腕を、その身に秘めた怒りによって振り下ろし全てを壊し尽くすという…まさに暴力が化身となった、怒り狂う『力』の象徴として名高き一体の巨大なる竜の姿。

【ダーク・アームド・ドラゴン】レベル７
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００

咆哮を轟かせ現れるその姿はまさしく、彼の『血』によって引き出された雄々しき竜の姿に違いなく。
…Ｅｘモンスターでもないこのモンスターの事を、対峙している砺

波もよく知っている。
そう、砺波も、この『逆鱗』の名の原型であるモンスターと一体何度戦ってきたと言うのだろう。
エクシーズモンスターではないこの姿と、そしてエクシーズモンスターへと進化した【撃滅龍　ダーク・アームド】と…砺波は、長い歴戦の中でずっと戦ってきているのだから。

「…この私を歯向かう『愚者』と称するとは…中々いい度胸ですね。」
「あ、いや、それは…」
「フッ、冗談です。しかし獣の王、堕天の王…そして『逆鱗』。手札０から、切り札を3体も呼び出すとは。さて…」
「…行きます！ダーク・アームドのモンスター効果！墓地のサクリボー3体を除外し…3体の【幻煌龍　スパイラル】を破壊する！」

―!!!

そうして…
砺波に対し、『歯向かう愚者』と言い放ったことを少々気にはしていつつも。
それでも、遊良の叫びと共に黒き龍が大きく猛りを見せたと同時に…その刃腕より放たれた衝撃波が、一瞬で3体もの螺旋の海王の首を荒々しく切って落としたではないか。
…墓地のコストが必要とは言え、コスト1つで無条件にフィールドのカード1枚を破壊できるその効果はまさに破格の一言。
まさに、暴れ狂う巨龍が如く。
難しい召喚条件だと言うのにも関わらず、この場面で『逆鱗』の血を引く少年を守るようにして現れたソレは、荒々しくも頼りになる姿となりて海の者たちへと襲いかかるだけ。
そのまま、無理矢理にでも押し通る進撃を見せ続けた遊良が…
今、満を持して砺波に攻撃をしかけんとその意識を前へ前へと進め始め…

「よし！バト…」
「ほぅ…」
「ッ!?」

否…
今まさに、遊良が砺波へと攻撃をしかけんとしたまさにその刹那―
ポツリと…
そう、あまりに小さく浮かべられた不敵な笑みと、あまりに小さく呟かれた砺波のソレを…遊良は、決して見逃さなかった。
だから、止める…
攻撃に逸る気持ちも、今まさに進撃を始めようと猛るモンスター達も。そして、早計すぎる己の感情も何もかもを、遊良は無理矢理に引き止める。
何しろ、攻撃に移行する刹那に目に入った砺波の姿を見て…
遊良の脳裏には、一瞬で『ある光景』が思い出されてしまったのだから。

―『私を舐めるな釈迦堂ぉ！罠発動、【波紋のバリア―ウェーブ・フォース―】！』
―『【波紋のバリア―ウェーブ・フォース―】を発動！君の場の【重装甲列車アイアン・ヴォルフ】と【竜巻竜】をデッキへ戻す！』

遊良は思い出す…自分も、鷹矢も、そして大勢居た砺波への挑戦者たちも。過去、砺波が得意としているその罠に引っかかり、何度痛い目に遭わされてきたのだろう…と。
幾重にも続いた展開を耐え切り、厳重に聳えたモンスター達を掻い潜り、卓越した戦略を乗り越えようやく攻撃を許された場面で、砺波の最後の罠に消し飛ばされたデュエリストは今も昔も数多い。
それ故、攻撃をしかける寸前で…まだバトルフェイズに移行するギ

リギリで、どうにかソレに思い至った遊良が今一度メインフェイズ続行の意思をディスクへと伝え―

「そうだった…砺波先生にはウェーブ・フォースがあるんだ！メインフェイズ続行、【堕天使イシュタム】の効果を発動します！手札の【魅惑の堕天使】と共に捨てて２枚ドロー！そして再びダーク・アームドのモンスター効果！墓地のイシュタムを除外して…砺波先生の伏せカードを破壊する！」

今一度、黒き暴龍が激しく吼える。

それは万全を期した安全策、寸前で思い出した打開策。

過去に、実際にソレを食らい痛い目を見た事のある遊良だからこそ…ようやく攻撃を仕掛けられる場面になっても油断せず、あくまでも慎重を期しているのか。

そして、黒き龍から放たれた鋭き衝撃波が宣言通りに砺波のカードへとぶつかったかと思うと…

砺波が伏せていた罠カード…

【ポセイドン・ウェーブ】が、破壊されていく―

「【ポセイドン・ウェーブ】!?」

「フッ、少しは成長しているようでなによりです。あのまま攻撃して来ていたら、１６００の効果ダメージで終わりでした。」

「ウェーブ・フォース以上に危ないカードが伏せてあったなんて…で、でもこれで攻撃は通るようになった！バトル！マスティマで【デス・クラーケン】に攻撃！」

「【デス・クラーケン】の効果発動、このカードを手札に戻す事でその攻撃を無効にします。」

「だったら次はゼラートで【水精鱗―メガロアビス】に攻撃だ！真紅の断罪、バニッシュ・レヴィアー！」

―！

「…」

砺波　ＬＰ：５０００→４８００

そして…

幾重にも積みあがった攻防を経て。

今、赤衣の堕天使の解き放った、迅雷纏いし剣閃が…砺波の場に残った赤鮫の守護者を、一撃の下に切り伏せて。

「あ…と、通った！砺波先生にダメージが！」

そして生じる、２００のＬＰへのダメージ…

それはたかが２００のダメージ、されど２００のダメージ。

そう、遊良の【成金ゴブリン】にて、開始時よりも多くなっているとは言え。それでもここへ、来てようやく遊良が砺波へと目に見えるダメージを与えることが出来たのだ。

…昨年度の【決島】を経てから、【化物】の領域に到った砺波。

そんな、【王者】を引退してもなお更に強さを増している砺波を相手に…わずかでもＬＰへのダメージを与えるだけで、一体どれほどの苦労が遊良にはあったと言うのだろう。

何しろ昨年度までの普段の修業でも、一回のデュエルで砺波にダメージを与えられない事など日常茶飯事であった遊良からすれば…

いくらこのデュエルが手心を加えられているとは言え、数々の攻防を経て実際に今２００のダメージを与えられたことは心から湧き上がる事象であったに違いないはずで―

しかし…

「よ、よし、続けてダーク・アームドで砺波先生にダイレクトアタックだ！冥龍崩て…」
「ですがソレもそこまでです。墓地より【光の護封霊剣】を除外し効果発動。ダイレクトアタックを封じる。」
「ッ!?」

その勢いも長くは続かず。
追撃を完全にシャットアウトされてしまった遊良の前に、遊良もよく使用する守りに長けた守護のカードが煌々と光り輝いたではないか。

「護封霊剣…そ、それも最初の【手札抹殺】で…」
「確かにコレは君もよく使うカードですが、なにも君の専売特許というわけではありません。こうなる事を見越して用意しておいただけです。」
「くっ…エンドフェイズに、【堕天使ゼラート】は自身の効果で破壊されます…俺はカードを2枚伏せてターンエンド…」

遊良　ＬＰ：７００→７００
手札：1→0枚
場：【堕天使マスティマ】
【堕天使ルシフェル】
【ダーク・アームド・ドラゴン】
伏せ：2枚

だからだろう。気落ちを隠せず、意気消沈し。しかしそれ以上取れる手立てが無い以上、静かにそのターンを終えるしかなかった様子の遊良。
折角巡ってきた攻撃のチャンスを、たった２００のダメージのみで終えるしかなかった遊良の心情は…見て分かるとおり、先ほどとは

打って変わって下り坂へと差し掛かってしまったのだろう。
まぁ、とは言え全体破壊を優先し全てのモンスターを破壊しきってから攻撃していたら、砺波にダメージを与える事すら出来なかったのだから…
これはこれで、今まで戦闘でまともなダメージを与える事すら出来ていなかった遊良からすれば限りない成長の証とも言えるに違いない事なのだろうが。

「…私の場を一層するだけではなく、御封霊剣を使わせる所まで来ましたか。フッ…」

そう…遊良に聞こえないほどに小さく呟かれたソレと、見えないほどに小さく零された笑みは教え子の成長を感じている師だからこそ浮かぶ確かな感情。
与えたのは確かに小さな傷だったとは言え、それでも今の自分へと地力で確かなダメージを与えてきた教え子の成長は…砺波も、その身でしっかりと感じている。何しろ弟子にとった1年時よりも、自らが鍛えてきた2年時よりも…今の遊良がどれだけ努力を重ね成長したのかが、師である砺波には目に見える程に、手に取るように分かってしまっているのだから。
…確かにその師弟関係に至るまでに、紆余曲折あったとは言え。
それでも、限りなく成長し続けている自らの初めての教え子へと…
砺波もまた、色々な感情を浮かび上がらせており―

そして…

「私のターン、ドロー。…しかし、手札0からここまでの布陣を作り上げるとは。守りの方はまだまだですが、攻撃は相変わらず光る物がある。順当にレベルアップしているようで安心しました。ところどこ

ろ気を抜くところが玉に瑕ですが…まぁ、これならチャンピオンズ・リーグでも、トッププロ相手に攻撃で引けは取らないでしょう。」
「…え？」

無人のスタジアムに、今度は遊良に聞こえるほどの声で零された砺波の言葉…

それは紛れもなく、遊良の事を『褒める』言葉であった。

…だからこそ、遊良も己の耳を疑ったに違いない。

何しろ、弟子入りしてからこれまでの間、普段の修業から砺波にここまで直接的な言葉で褒められたことなど遊良にはまるで覚えがないのだ。
呆れられたり、溜息混じりに駄目出しされたりしたことは多々あれど…そう、厳しさと過酷さが度を越している元シンクロ王者【白鯨】から、ここまで直接的な言葉にて褒められた事など、今まで遊良は体験したことがない。
そんな、砺波が…
あの、他人を認めることなど皆無であろう、不遜が服を着て歩いているようなあの砺波が。
しかし確かに『頂点』を知っているからこそ『上』の厳しさを誰よりも知っている、それ故に他人を褒めることなど全くと言っていいほどしないあの【白鯨】、砺波　浜臣が…
まさか、直接己の口から弟子を賞賛する言葉を投げかけるだなんて

―

それ故…

「あ…と、砺波先生…ありがとうございま…」

今の砺波から発せられた、混じり気のない純粋なる『賞賛』の一言を貰った遊良が…
デュエルの最中であるにも関わらず、思わず嬉しさから礼を言おうとした…

―その時だった。

「だがまだ甘い。【海竜神―リバイアサン】を召喚。」
「…え？」

【海竜神―リバイアサン】レベル５→４
ＡＴＫ／２０００→２２００　ＤＥＦ／１７００→１９００

遊良の感動を遮るように、現れたのは激浪のうねり。
それは海嘯を統べる王の一体。荒ぶる波のさざめきを、まるで唄の様にして現れたその姿は…
紛れもなく、広い海の１つを統べる王たる威厳を持ち合わせているであろう、強者にしか扱う事を許されない、強靭なりし王の姿に違いなく。

「リバイアサン!?」
「気を抜くなと言っているでしょう？だから守りがまだまだと言ったんです。リバイアサンのモンスター効果、【海】扱いのアトランティスが存在するため、水属性以外は１体しか存在できなくなる。」

「しまっ…」

そして、荒ぶる…

嵐の海の波のように、『海』となっている砺波のフィールド魔法が激しく暴れ始めたその刹那。

全てが、流される…陸をも飲み込む海嘯に―

発動する効果ではなく永続効果のため、出現したタイミングでは遊良も行動することすら許されることなく…そのまま成す術なく、獣の堕天使も、黒き暴龍も、その激しさの前で抗うことなど出来ずに海中へと飲み込まれてしまったではないか―

そうして…

遊良の場からは堕天の王たる【堕天使ルシフェル】以外のモンスターの全てが波に攫われ消えてしまって…

「そしてこれで終わりです。【死者蘇生】を発動、墓地から【大要塞クジラ】を蘇生。」

「大要塞!あ、そ、それも最初の【手札抹殺】で!?まさかここまでの展開を全部見越してたんですか!?」

「当然です。【大要塞クジラ】の効果発動。フィールドに『海』が存在するため、このターン私の水属性モンスターはダイレクトアタック出来るようになる…これで、【闇次元の解放】と【量子猫】では防ぎきれません。」

「全部バレてる!?」

「ではフィニッシュです。リバイアサンでダイレクトアタック!狂海のラグーン・サブメイション!」

―!

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

遊良　ＬＰ…７００→０

―ピー…

無人のスタジアムへと、無情に鳴り響くはデュエルの終了を告げる無機質な機械音。

最初から最後まで、何から何まで…

砺波の掌の上で転がされた遊良のデュエルは、今ここに終了したのだった―

―…

デュエル終了後…

「最初の【手札抹殺】で【巨神封じの矢】ではなく、君も【光の護封霊剣】を用意出来ていればまだ耐えられたかもしれませんね。あとはこの前試していた【ロスタイム】もいい凌ぎ方の一つだったのですが…」

「…いや、その時はその時で、絶対に別の方法でトドメさしてくるじゃないですか。」

「勿論。君がどれだけ臨機応変に対応しようしても、私の攻撃を止められるわけありません。」

「ありませんって…砺波先生…」

「それより【決島】の時から言っているはずです。攻撃はともかく、君はもっと守備と言うモノに意識を持たせた方がいい。前よりは幾分成長しているようですが、君の守りへの意識はまだ低い、低すぎます。」

「守備の意識…」

「まぁＥｘ適正が無い分、攻撃に特化する事でこれまで勝ち抜いてきたと言うのはわかりますが…これまではそれで良くとも、これから先

の相手に今のままでは立ち向かえません。これから君が挑むのは、世界でも有数の力の持ち主たちなんですから。」
「は、はい、砺波先生…」

一戦を終えた遊良は、砺波からの駄目出し…もとい、今のデュエルに対する批評を受けていた。
しかし、格上の相手とアレだけ激しいデュエルを行ったからか…たった一戦しかしていないと言うのに、遊良にはどこか疲労の色が見え隠れしているではないか。
…けれども、ソレも当然のこと。
言うまでもなく、遊良は全力で立ち向かっていた。あの場、あの時、あの瞬間に出せる全力を引き出し…あの状態で持てる力の全てを使い、遊良は全霊で砺波に立ち向かっていたのだ。
そうだと言うのに、砺波の方は余裕綽々。もっと簡単に遊良を蹴散らすことも出来ていた中で、修業のためにあえて遊良に耐えさせつつ…攻防の毎回で遊良を追い込み、考えさせ、驚かせてきていたのだから、そんな濃い一戦を終えて遊良も疲れていないはずがないのだろう。
…そんな今の遊良からすれば、最後に『褒められた』事すらも緊張を乱す砺波の策だったのではないかと疑ってしまっている様子。
そう、いくら褒められた時は嬉しかったとは言え。デュエル後に、これだけ駄目出しをされ続けてしまっては…その疲れた頭と心が、せっかくの賞賛の言葉も素直に受け取れていないはずで…
…とは言え、そんな教え子の表情から砺波もソレを感じ取ったのだろうか。
批評の後に、砺波は再び疲労困憊の様子の教え子へと向かって…
「…ですが君の攻撃能力を褒めたのは本心ですよ？『堕天の王』に『逆鱗』…『運命の英雄』に『海の星』、そして『獣の王』。【邪神】に消された『バルバロスＵｒ』はさておき…今回は負荷を与えたのでアレでしたが、これだけの切り札を場面によって連続で使い、絶えず全力で

攻めてくる今の君の攻撃を耐え切れる者なんて…世界には、そう何人もいないことでしょう。」
「…え？」
「誇りなさい。それだけ、今の君の力は『上』を狙えるモノとなっていると言うことです。」
「あ、ありがとう…ございます…」

デュエルの最中と同じく、混じり気のない純粋なる賛辞が砺波の口から語られる。それは紛れもなく、心から信頼できる師からの言葉となりて遊良の心へと伝わるのか。
果たして…批評から一転、世辞などでは断じてない師からの褒め言葉を貰った遊良はその心の内に一体何を感じるのだろう。
一時代を築いたあの伝説のシンクロ王者【白鯨】をして、今の天城遊良の攻撃能力はプロ相手でも引けを取らないというお墨付きを貰ったのだ。それはこれまで他人に認められてこなかった遊良からすれば、痛いほど心に染み入る言葉であったに違いなく…

「砺波先生…そういえば、あの【サンダー・ボルト】は何だったんですか？」

けれども、砺波のその言葉にただ舞い上がるわけにも遊良はいかず。
飛びあがりたい気持ちを抑えながらも、折角の砺波の貴重な時間を使って修業を行っている事を忘れていない遊良が、先のデュエルにて疑問に思った事を砺波へと伝えるのか。
…それは先ほどのデュエルにて、唐突に砺波が使った【サンダー・ボルト】という魔法カードについて。
古代魔法に分類されるソレは、古来から複製不可のカードに指定されている為に、現代において現存するカードは極めて少ないのだ。まぁ、シンクロ王者【白鯨】と呼ばれていた砺波が希少なカードを持っている事はありえる事なのだとしても…

それでも、現役時代から水属性や海といったイメージを持つカードを使用することに定評のあった砺波　浜臣が。そう、過去の映像でも、修業の時でも、砺波がこの【サンダー・ボルト】という雷のカードを使用していた記憶は遊良にはないために、その砺波らしくないカードをいきなり使ってきたことをどうしても疑問に思ってしまうのだろう。

…そして、教え子からそんな疑問を投げかけられて。

答えるべく、砺波は徐にその口を開き始めた。

「…君は、プロの中での【サンダー・ボルト】の使用率を知っていますか？」

「いえ…」

「複製不可カードの為、現存するカードは世界中でも１００から２００枚程でしょう。現に私も、使うかどうかは別として１枚持っていましたが、逆に言えば私でさえもこの１枚しか持っていないのです。ですが…プロには、このカードをデッキにフル投入し、ソレ以外にも【ライトニング・ストーム】や【ライトニング・ボルテックス】と言った雷撃の力を惜しげもなく使ってくるプロがいます。」

「…世界ランク２位、『雷獣』の鳴神　久遠プロ…」

「そうです。普段から中々見ることの少ないカードと言うのは、使われた時にそれだけ対応が遅れがちになりますからね。まぁ今日の君を見る限り、対応策もありそうなので一先ずは安心しましたが。」

「じゃあ、アレも修業の一環だったって事…ですよね。」

「勿論です。」

砺波の口から語られるのは、今回のデュエルの真意について。

そう、先のデュエルの内容も、実戦を想定した修業であったのだろう。遊良の全力をいなしながらも、本番も想定して日常ではあまり目にすることのない希少なカードに対する教え子の咄嗟の対応を見極めていたと言う…

それは誰にでも出来る事ではない、決闘界の頂点を見てきた砺波だ

からこそ与えられる教え子へのこれ以上ない指導でもあるのか。
…確かに同じ古代魔法に数えられる中でも、汎用化に成功している【死者蘇生】と違って。【サンダー・ボルト】や【ブラック・ホール】と言った、シンプルが故に強力すぎる力を持ったカードと言うのはそれだけ世に出回っている絶対数があまりにも少ないモノと言えるだろう。
下手をすれば、こういったカードを一度も目にする事無く人生を終える者だっているはず。
ソレは古代魔法といった括りのカード群だけではない。この世の中には、『貴族』や『王族』に献上されるためだけに作られたような、一般庶民には決して降りてこないような超がつくレベルの希少なカードだってあるのだから…それほどまでに、強力が故に希少性のあるカードと言うのは特に超巨大決闘者育成機関『決闘世界』によって、流通が厳しく管理・制限されていて。
…そして、たった今砺波が言った通り。
そうした強力ゆえに希少なカードと言うのは、それだけ相対する機会が少ないと言う事。
つまりは、そう言ったカードを不意に使われた時こそがデュエリストの本領が試されると言う事であって―

「あれ…でも…」

しかし…

「今回、『雷獣』は出場しないんじゃ…」
「…」

…

……

……

「では今日の修業はここまで。レポートは１０倍です。」

「じゅっ!?」

「提出は明日の正午です。では私はこれで失礼させていただきますよ。何しろ忙しい身ですからね。それでは。」

「あ、ちょ、砺波先生!明日までって冗談ですよね!?先生!先生!?」

ふと、遊良がそんなコトを思い出したその直後に。

一体何を思ったのだろう、弁明するわけでも、何か追加で遊良に伝えるわけでもなく…

あまりに理不尽な課題のみを己の教え子へと押し付け。砺波は、そそくさと…

その場から、去っていったのだった―

―…

―帰宅後。

「…で、レポートが終わんないってわけ?」

「いや、だって１０倍だぞ１０倍…１戦しかしてないのに…しかも明日までって…」

修業を終え、自宅へと帰った遊良は…

夕食時だと言うのにも関わらず、砺波から言い渡された理不尽とも思える量のレポートを纏めながら、食事も取らずに必死にペンを走らせていた。

「でも珍しいよねー。理事長先生がシンクロしないで通常モンスター使ってくるなんて。」

「【決島】の時におじ…えっと、『逆鱗』とデュエルした一度だけしか使ってないみたいだし、俺も完全に予想外だった…あ、デュエル中に使われたから【サンダー・ボルト】についても纏めなきゃ…鳴神プロの映像あったかな…」

「あ、鳴神ってウチのお母さんの旧姓だ。」

「…そうなのか？」

「うん。でもその『雷獣』って人、別に私の親戚ってわけじゃないよ？親戚の集りでも見たことないし、鳴神さんって結構沢山いるっぽいし。知らないけど。」

「ふーん。…あ、そう言えば【魚群探知機】も『リバイアサン』も【大要塞クジラ】も【海】に関連するカードか。『海』になるフィールド魔法は…」

「【デス・クラーケン】もだね。あと『海』になるの、フィールド魔法だけじゃないよ？」

「そうだ…それも調べないと…」

そんな遊良の隣には、既に夕食を食べ終えたルキが…食後のコーヒーを飲みながら、必死になって課題を進めている遊良を眺めつつ、時折手助けしつつホッと一息ついていて。

…しかし、流石の遊良をもってしても通常の１０倍のレポートと言うのは些か厳しすぎる課題なのだろう。

何しろ、提出が明日の正午まで。いくら今日から授業免除の特別カリキュラムとなったとは言え、明日も朝から『七草』の特別講師たちとの修業が控えているそうなのだから、これなら通常の授業を受けていた方が楽だと思える程のプレッシャーが襲い掛かっているといっ

ても過言ではないはずで…

「でもビックリだよねー。遊良がチャンピオンズ・リーグに出るなんてさ。」

「あぁ、俺も驚いた。砺波先生の言い方だと、結構前から話進めてたみたいだけど…あと、俺を『チャンピオンズ・リーグ』に推薦してくれたのは砺波先生だけじゃないんだってさ。【決島】ん時と同じでサウス校の獅子原先生にウエスト校の李理事長…あと…『逆鱗』も。」

「そりゃそうでしょ。理事長先生1人だけじゃ許可貰えるわけないと思うし。でもよかったじゃん、ウエスト校の理事長先生はよく知らないけどさ、獅子原先生だけじゃなくてお爺ちゃんも一緒に推薦してくれて。」

「…お爺ちゃんって…」

「お爺ちゃんでしょ？遊良の。」

「…そうだけど。でも、そんな前から打診してるんだったら、出る出ないに関わらずもっと早めに知りたかった。いきなりすぎてまだ信じられないしさ。」

『…なるほどな。』

すると…

遊良のデュエルディスクの向こうから、咀嚼音を追えたらしき一息が聞こえたと思えたと同時に。

この家には居ない、遠いデュエリアの地にてプロの任命式に出席している男の声が…遊良のデュエルディスクから、静かに聞こえてきた。

『だから綿貫のジジイ、プロテストの時に遊良が『それ所じゃなくなる』などと…』

「プロテスト？……あぁ、お前が参加させてもらった奴か。」

「鷹矢が期末サボって行った奴だね。」

『うむ。…む？おいルキ、サボったとは何だサボったとは。俺はテス

トを受けられなくて残念だったと言ったはずだぞ？』
「はいはい。」

それは任命式を終え、明日の帰宅を前に『暇だ』というその理由だけで電話をかけてきた紛れも無い鷹矢の声。
デュエルディスク越しに、テレビ電話にて姿を写し。まるで『ここ』にいるかのごとく。本格的に始まるプロの日々の前に、遠い海の向こうのデュエリアの地のホテルにてルームサービスで夕食を食らいつつ、遊良とルキと日常の雰囲気にて会話を続ける。

『ふん、しかし解せんな。そして気に食わん。何故チャンピオンズ・リーグに出るのが俺ではなく遊良なのだ。』
「っていうかさ、そもそもまだ世界ランク『圏外』じゃん鷹矢。どうやってもチャンピオンズ・リーグに出れるわけないじゃん、もう。」
『そんな事は関係ない。遊良が出れるのに俺が出れん。俺はソレが納得いかんのだ。』
「何がだよ。俺の出場に何か文句あんのか？」
『逆に無いと思うのか？百歩譲って【白鯨】に『烈火』に『逆鱗』、あとウエスト校の理事長がお前を推薦したのは別に良い。だがなぜ遊良だけなのだ？戦績だけで言えば、俺も【決闘祭】の準優勝と【決島】の優勝でお前とイーブンのはずだろう？』

そんな鷹矢は、電話越しだと言うのに明らかな不服の声を漏らしつつ…
費用は全て超巨大決闘者育成機関【決闘世界】持ちだということを良い事にルームサービスにて特上のステーキを幾つも幾つも頬張りながら。既に決まっている遊良のチャンピオンズ・リーグへの出場へと文句を垂れ流し、まるでストレス発散なのだと言わんばかりにこれ見よがしに更にステーキを食い続けていて。
…とは言え、特例とは言えあくまでもプロの新人の一人でしかない鷹矢が今ここで文句を垂れ流したところで、遊良のチャンピオンズ・

リーグ出場が覆るわけでも断じてない。
何しろ、遊良の出場は【白鯨】と謳われたイースト校理事長の砺波浜臣に加え…デュエリア校学長たる『逆鱗』の劉玄斎、『烈火』と呼ばれしサウス校理事長の獅子原　トウコ、そして『神のペン』の称号を持つウエスト校理事長の李　木蓮からの推薦という、決闘界において伝説となっているビッグネームがこぞって推薦の手を上げたからなのだ。
それ故、元とは言え【王者】による推薦と、【王者】と『同格』の地位にいた男と…【王者】たちすら頭が上がらない決闘界の女傑と、そしてデザイナー業界に多大なる影響力を持つ者が賛成の意を示し、【決闘世界】が出場を決めたことは例え貴族連の要望であっても覆る事はない。
しかし、ソレを知ってか知らずか…
いや、分かっているからこそ、どこまでも不服な態度を崩さず…
鷹矢は、まるで『ずるい』と言わんばかりに。更に、ステーキを一切れ飲み込みつつその口を開くのみ。

『それにチャンピオンズ・リーグには『奴』も出場するのだぞ？俺との決着がまだ着いていないと言うのに、遊良と先に戦うなど容認できるわけがない。』
『『奴』？あれ、ねぇ遊良、今年のチャンピオンズ・リーグって誰が出るんだっけ？」
「えっと…確か…」

すると、流石に鷹矢の拗ねた絡みがうっとおしくなってきたらしいルキが話題を逸らすかのように遊良へとそう問いかける。
そして、ルキにそう言われて…遊良は、思い出す。
先日正式に発表された、チャンピオンズ・リーグの出場選手を。

世界ランク1位…『孤高』の烏丸　千鳥
世界ランク3位…『妖精女王』、クィーン・アネモネ

世界ランク４位…『ニンジャマスター』、サイゾー・ハットリ
世界ランク５位…苛烈爆熱大爆発、『ダイナマイト』、ダイナマイト近藤
世界ランク７位…『道化師』マスカレード・クラウン、フール・ピエール・アルレッキーノ、通称ピエロ
世界ランク８位…『宝弓』の蜂須賀　ビィナ
世界ランク９位…妖艶、『淫靡』なるシャルア・エロティカ
世界ランク１０位…『嵐紫魔』、紫魔　亜嵐
世界ランク１２位…煌めく『ルビーアイ』、紅い悪魔のフレア・リリイ
世界ランク１３位…『スラッシャー』、ジン・キリサキ
世界ランク１５位…絶対防御、『鋼鉄』のデュエリスト、十文字　哲

新進気鋭から古豪まで、誰もがその名を世界に知られたプロのトッププランカーたち。
その順位は常に激しく変動するとは言え、【王者】を除いた世界でも指折りのトッププランカーたち全員がそのスタイルに見合った『異名』を持ち合わせ…
かつプロの世界という地獄にも似た『魔境』に身を投じ生き抜き続けている怪物たちが【王者】への挑戦権を賭けて出場するのが『チャンピオンズ・リーグ』という名の祭典…いや、饗宴…否、狂宴。
無論、他のトッププランカー達の中には残念ながらスケジュールがどうしても合わず、出場見送りとなってしまった選手もいる事だろう。しかし、それもでなお自他共に認める強者達が織り成す狂宴に…
学生の身でありながら、遊良は立ち向かおうとしているのだ。

「あーわかった、十文字さんが出るから鷹矢は文句ばっかなんだね。」
『うむ。十文字の奴も出場すると言うのに、遊良だけ出場してこの俺が出れんのは納得がいかん。俺は早く奴と決着を着けねばならんのだぞ？』
「知るかよそんな事…」

「はいはい、鷹矢もプロになんなきゃもしかしたら出れたかもしれないのにねー。あー勿体なーい。調子乗るからだよねー。ざまーみろー。」
『く…一生の不覚だ…こんな事ならプロになるのではなかったぞ…』
「これだけ我儘きいてもらっておいて図々しい奴だな。」
『ぬぅ…全く、俺より先にチャンピオンズ・リーグに出場するなど一体どういうつもりなのだ、遊良の癖に。』
「んだよその言い草は。大体、今回の事はお前が勝手にプロになったのもいけないんだろうが。見栄張って先にプロになりやがって、鷹矢の癖に。」
『なんだと!?』
「なんだよ!」
「はいはい、電話越しでも喧嘩しちゃうなんてホント飽きないよねー、遊良も鷹矢も。」

しかし、その魔物達の饗宴に放り込まれる事にまだ実感を覚えないからか。
トップランカーたちに戦いを挑むという事実を、どこか現実のモノと受け取れていない様子にて…緊張感もなく、歳相応と言えば相応の、恒例のくだらない言い合いを始めてしまった遊良と鷹矢。
これでは先が思いやられる…プロのトップランカーと戦うと言うその意味を、遊良も鷹矢もまだ真の意味で理解してはいない。
それ故、出場の決まった今からこんな浮ついた様子、もっと言えば緊張感もなく過ごしている暇など遊良には決してないはずで…
今からこんな調子で過ごしていては、苛烈な環境に身を置き続けるプロのトップランカーたちに対峙など出来るはずがないのではないと言うのに。

…まぁ、とは言え。

昨年、そして一昨年までの、あまりに現実離れした戦いに身を投じ

ていた遊良達からすれば。何の憂いもない現実の『祭典』に出場することは、喜びこそすれ余計な重荷を覚えることなど無いにも等しいのか。

…それは年齢に見合わない異常な落ち着き。他の誰にも誇れない、誇ってはいけない異質な場慣れ。

そう、学生の祭典である【決闘祭】や【決島】はさて置き…遊良だって、決闘市を襲った『異変』や裏決闘界の融合帝【紫影】が起こした【裏決島】、果てはもう一人のアマギ　ユーラが繰り出した【邪神】との戦いを経験し生き残ってきた紛れも無い『強者』。

それに加え、遊良は約１０年前に『Ｅｘ適正』が無いと宣告され日常が地獄と化してもなお今まで生き抜き…そしてここまでの軌跡を生き抜き続けてきた、誰が何と言おうと紛れも無い『生存者』。

その地獄の日々は言うに及ばず。きっと、プロのトップランカーもこれほど壮絶な経験をした者などそうは居まい。

それ故、高揚はしても重圧に押し潰されてはいない一種の『日常』のような雰囲気にて。この場に鷹矢が居ないとはいえ、ある種『当たり前』の言い合いを行う遊良と鷹矢はあくまでもいつも通りで変わりなく。

「緊張感ないんだから、もう。」

…そんな、くだらない事でまた喧嘩を始めた男どもを他所に。

食後のコーヒーで、再びホッと一息つくルキの目は…

成長しているようで変わらない、幼馴染二人を大人びた視線で眺めているのだった―

修業が、始まる――

――……

ｅｐ１１７「閑話ー天才のある一日、その２（前編）」

時は少々遡り、『春休み』の少し前。
冬が終わり、雪は融けたが…
まだ卒業式も終業式も終わっていなかった、まだ寒さも残ったとある春の初め頃。

「明日、プロテストに行ってくるぞ。」
「…は？」
「…え？」

遊良の指名手配騒動も完全に落ち着き、鷹矢のプロ入りへの話題も少し落ち着きを見せてきた、そんなとある日。
その、もうすぐ一日も終わる夕方・団欒中の夕食時に…
唐突に、遊良とルキへと向かって。鷹矢が、幼馴染二人にそんな事を言ってきた。
しかし、鷹矢からの突然のソレを聞いて…思わず、箸を止め鷹矢の言葉を理解出来ないかのように固まってしまった遊良とルキ。
当然だ…
鷹矢の言うプロテスト…それは勿論、この時期における世界的な大イベント、『プロデュエリスト試験』の事であったのだから。
そう、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が定めた規定により、決闘学園高等部卒業見込みの学生の中から学園側に特別的にプロテストの受験許可をもらえた者…
あるいは決闘学園高等部の卒業生や決闘大学のプロデュエリスト学部の者、またあるいは学園の卒業者でなくとも数々の公式大会などの結果から、【決闘世界】に受験資格ありと認められた選ばれし者が受けるという、この世界に生きるデュエリストならば誰もが一度は目指すであろう、プロの世界への入り口のことである。
そんな、受験資格を持った多くのデュエリストが毎年プロの世界を

夢見て数多く挑戦してくるソレは、この時期特有の一種のイベント事のような扱いとなりてその結果をメディアが大々的に取り上げる事もあるのだが…

しかし…

「プロテストって…お前、試験免除でプロ入りするんだろ？」
「うむ。」
「じゃあ何でプロテスト行くの？そんな必要ないはずでしょ？」
「そうもいかんのだ。これには深いわけがあってだな…」

そう、それはあくまでも、『普通』にプロになろうと言う者たちにとっての話。
それ故、遊良とルキが鷹矢の言葉に思わず引っかかってしまったのは他でもない…
偏に、鷹矢が既に『無試験』にてプロデュエリストの資格を有する事が決定しているが故の疑問であったのだ。
何しろ、数ヶ月前に行われた決闘市とデュエリアの決闘学園が合同開催した世界最大規模の学生達の祭典…
【決島】において、鷹矢は全世界へと向けて大々的に言い放った。

―『うむ、これで心置きなく来年からプロになれると言うモノだ！』

【決島】の表彰式で叫ばれた、天宮寺　鷹矢の突然の宣言。
まだ決闘学園高等部の２年生で、規定によりプロ入りするにはあと１年の猶予があるはずの少年が零した…世界の法をも揺るがした、前代未聞のあの宣言には世界中がどよめいていた。
しかも、ソレが歴史上初となる『ランク０』のエクシーズ召喚を行った天宮寺　鷹矢であったのだから―

【決島】の終了後に、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】が正式に天宮寺　鷹矢の無試験でのプロ入りを発表した事で。その熱は、一気に加速の一途を辿ってしまったのだ。
　それは世界中のメディアが連日ざわめき、どよめきを見せた事が証明している。遊良の指名手配の一時の騒ぎを除き、先日まで毎日のように天宮寺　鷹矢のプロ入りの件や『ランク０』のエクシーズモンスターに関する番組を報道しつづけていたのだから…
　前代未聞の学生プロ。それも学園には在籍したままでプロになるというだけではなく、法整備された戦後初と言うだけではなく大戦前から数えてもなお史上初となる、決闘学園の長い歴史の中で見ても史上最年少のプロデュエリストの誕生に世界は大いに賑わいを見せていて。
　…だからこそ、事の重大さを全く重く捕らえていない鷹矢本人はともかく。
　遊良も、そしてルキも。改めて鷹矢が、どれだけ破天荒な事をしようとしているのかを日に日に目の当たりにし続けているのだろう。
　それ故、鷹矢がたった今零した、『プロテストに行ってくる』という言葉に対し。
　遊良とルキは箸を止め、どこまでも怪訝な目で鷹矢を見つめており…

「…なんだよ、深いワケって。」
「無論、修業と後学のためだ。この俺と同期となる奴らがどのような者達なのかを早めに知っておきたいからな。それに、俺のプロ入りに関してまだ煩く言っている奴らも居るみたいなのだ。ならばこの俺にプロ入りの資格は充分にあるのだと、正々堂々プロ試験を突破し証明してやろうと思ってな。いい考えだと思わんか？」
「…あれ？でもさー、プロ試験って明後日だったよね？しかも次のって最終試験じゃなかったっけ。毎年テレビで中継されてる、プロとデュエルするやつ。」
「うむ。」

「なんで明日行くの？それに鷹矢ペーパーテストも二次試験も受けてないじゃん。」
「そうだよな。なんでいきなり最終試験からなんだよ。」
「フッ、その辺りも綿貫のジジイに話をつけてあるに決まっている。何しろ俺も忙しい身だからな、こまごました余計な試験など受けている暇もない。ならば手っ取り早く結果が出て、これ程までに分かりやすく俺の実力を見せ付けられるのはプロ相手に戦う最終試験をおいて他にはないと言うわけだ。無論、プロが相手ならば修業にももってこい、デュエリアも遠いしな、遅刻するわけにもいかんから明日に出るというわけなのだ。うむ、これ以上ないくらいにいい考えだ。思いついた自分が誇らしい。」
「…ソレ、よく砺波先生が許可してくれたな。」
「あ、私もソレ思った。理事長先生、絶対に許可くれなさそうなのに。」
「む？理事長には何も言っておらんぞ？」
「…は？」
「綿貫のジジイに直接相談したのだ。そうしたら話題アップも兼ねて良いだろうという事で特別に許可をもらった。無論、理事長の方には綿貫のジジイから今頃話が行っているはずだぞ。」
「今頃ってお前…」
「えー…大丈夫なの？ソレ…」
「綿貫のジジイが大丈夫と言ったのだぞ？だから大丈夫に決まっている。それに俺も春から正式なプロだからな、話題を作るのもプロの仕事だ。だから、これも少し早いが仕事の一環というわけなのだ、うむ。」
「…」
「…」

しかし、遊良とルキの怪訝な視線を浴びてもなお。
そして遊良とルキからの、沈黙と言う名の呆れを浴びてもなお。
もっともらしい理由をつけて、鷹矢は夕食である遊良謹製の下準備から手間隙かけて仕込みをした揚げたてエビフライと本格メンチカツ

を手作りソースと共に飲み込むようにして次々に頬張りながら…
どこまでもただただ雄弁に、ソレを語り続けるだけではないか―
…その態度は傲岸不遜。
ただでさえ在学中の高等部2年の学生が無試験でプロになると言うだけでも反感が多いのに、火に油を注ぐような真似をよくもまぁ思いつくものだと遊良とルキが半ば呆れ果てているのも意に介さず。
どこまでも不敵に、どこまでも不遜に。あくまでも食事する手を止めはせず、若さに任せて常人の3倍の量の揚げ物を食らいつつ自らの道を我が物顔で突き進み続ける鷹矢の態度は…
自由奔放と言うよりは、傍若無人に近いモノとなっているに違いなく…

「ねぇ鷹矢…まさかとは思うけど…」
「いいよルキ、ここは俺が言う。」

けれども…
何やら鷹矢の余裕綽々という態度から、ふと遊良とルキは『何か』を悟ったのだろうか。
ふんぞり返り、揚げ物をオンした後の白米を美味そうに掻き込みながら偉そうに余裕を垂れ流している鷹矢へと向かって…
徐に、遊良がその口を開き始めた、

「おい鷹矢…お前がプロテスト行くのって、明日から期末テスト始まるからってのがホントの理由じゃねーよな?」
「…ブッ!?」
「きゃっ!?ちょっと鷹矢!汚いんだけど!もう!」
「ゴホッ……ゆ、遊良が変な事を言うからだ…ッ、そ、それより遊良、俺が…何だと?」
「お前の事だ、どうせ期末テストよりプロテストの方が楽だって考えたんだろ。相手がプロでも、デュエルしてる方がお前にとっちゃ楽だもんな。会場はデュエリアだし、試験も明後日なのにご丁寧に明日出

発するって言ってるし…んで明日出発して、明後日プロ試験受けたら帰って来る頃には期末テストも終わってるしで…ホント、何でこういう悪知恵だけは頭働くんだよお前は。」
「なっ、何を言うのだ！そんなわけな…」
「えー、だって鷹矢、今日も私と遊良が勉強してる横でずっとデッキ弄ってたし…」
「先月からずっと勉強しろって言ってやってんのに随分と余裕そうだったしな。」
「ねー。毎回赤点ギリギリなのに。ふーん、随分ズルい手使うんですねー鷹矢さんはー。」
「ぬ、ぬぅ…」

幼馴染は伊達じゃない。
鋭い切り口で、言い訳する余地を全く与えず。咀嚼していたモノを噴出した鷹矢を意に介さず、問い寄るように怪訝な視線のままで詰め寄り始めた遊良とルキ。
また、あまりに核心を突かれたからか…思わず鷹矢の言葉が詰まり、そして箸を持つ手も止まってしまったことで…
その鷹矢の態度がより一層、遊良とルキの確信を強固なモノへと変えていく。
こうも簡単に言葉に詰まると言う事は…つまりは、『そう言う事』に違いないのだろう。
幼少の頃からこれまで、ずっと鷹矢と共に過ごして来た遊良とルキなのだ。無論、遊良とルキはこれまでの鷹矢の学業における成績の全てを見てきていているわけなのだし…
テストの成績だけではなく、日々の宿題や授業態度など、とにかく勉強嫌いの鷹矢をこれまで見続けてきたからこそ。遊良とルキも、今の鷹矢の態度がいつものテスト前の態度とはあまりに違う事に嫌でも気がついてしまっていて。
…そう、遊良とルキの目は誤魔化せない。

どれだけ鷹矢がポーカーフェイス…もとい、鉄仮面をしているとしても…

鷹矢がどれだけ悪知恵を働かせ言葉を選び、もっともらしい理由をつけたとしても…

それでも、これまでの鷹矢の、あまりに酷い勉強嫌いを誰よりも傍で見続けてきた遊良とルキに対しては。

いくら鷹矢とて、隠し事を隠し通せるはずもなく―

「そ、そんなわけないだろうが！一体何を言っているのだお前らは！だ、大体だな、期末テストを受けられなくて一番残念なのはこの俺なのだぞ!?日々の勉強の成果を見せられなくてこんなにもショックを受けているというのに…」

「お前が…テストを受けられなくて残念？」

「鷹矢が…勉強の成果？ずっと勉強してないのに？授業中も寝てるのに？ねぇいつ勉強してるの？」

「ぐ…いや、その…それはだな…夜中に…」

「夜中？でも最近は修業終わったら疲れてご飯食べたらすぐ寝ちゃってるじゃん。お風呂だって朝入ってるんでしょ？その所為で毎日遅刻ギリギリなのに。ねぇねぇ、鷹矢さんはいつ勉強してるの？ねぇってば。」

「ぬぅ…」

「…はぁ、やっぱりか…砺波先生に通さず、直接綿貫さんに話つけたのもつまりは『そういうこと』なんだな。ただでさえランク０の事で色々目ぇ付けられてるってのに…」

「…ホンッットおバカなんだから、もう…」

目論見を看破され、言葉を失い。

遊良とルキに論破され、完全に後手に回ってしまったイースト校２年、天宮寺鷹矢。

…その甘すぎる見通しで、よくもまぁここまで自信満々にプロテストに行くなどと豪語できたモノだ。
しかも、遊良とルキにはもう完全にバレている。そう、プロテストに行く鷹矢の目的が仕事というプロ意識などではなく、ただ単に期末テストをサボりたいだけ…と言う事を。
だからこそ、呆れを通り越し。溜息交じりで鷹矢を睨む遊良とルキの視線が、どんな刃物よりも鋭い代物となりて鷹矢へと突き刺されていて…

「と、とにかく、これはもう決まった事なのだ！だから俺は明日デュエリアに行ってくる！遊良！明日は朝8時に起こしてくれ！弁当も忘れるな！唐揚げは絶対入れるのだぞ！」
「…偉そうに。っていうか8時だと俺がもう出てるっての。明日から期末テストなんだぞ？」
「ならば7時だ。余裕を持って出発したいからな。それともお前も一緒に行くか？祖父に会いにデュエリアに一緒に…」
「だから期末だって言ってんだろ！それに『あの人』も…そんな気安く会えるわけねーだろ。デュエリア校の学長なんだから、そんなホイホイ会うわけにはいかねーんだよ。はぁ…ホントに仕方ない奴だなお前も。」
「知らないよ？理事長先生に叱られても。」
「ふん、俺はプロになるのだぞ。いつまでも理事長を怖がってばかりも居られん。だからおかわりだ！こうなったら明日のプロテストで暴れまくってきてやる！プロ入り前に、プロの奴らに目に物見せてやるのだ！」

それ故、鷹矢は隠し事のバレた子どものように。
そう、どこまでも不遜な態度を崩さぬまま、どこか開き直ったように…
再び、夕食へと止まっていた箸を動かし始めるのだった―

―…

翌日―

「ふむ…浜臣に随分と大目玉くらったようじゃの、鷹矢や。」
「…うむ。」

決闘市から飛行機に乗り、早朝の便で【決島】以来となるデュエリアの地に足を踏み入れた鷹矢は…
到着早々、超巨大決闘者育成機関【決闘世界】幹部である『妖怪』綿貫　景虎に連れられて。
送迎用の高級リムジンにて、明日開催されるプロ試験に参加するべく会場近くのホテルへと送迎されていた。
…しかし、試験の本番はまだ明日だと言うのにも関わらず。
鷹矢はどこかグッタリと、それでいて既に疲れきっているかのような…高級リムジンの、高級そうな座席に座っている綿貫の対面にて、すでに相当の精神的疲労を抱えているかのような姿を見せているはないか。

「全く、寝坊しなかったと言うのに何故あんなにも叱られなければならんのだ…」
「ま、当然じゃろ。何しろ浜臣に黙ってプロテストに来ようとしとったんじゃから。」
「それはジジイが任せろと言ったからだろうが。何が大丈夫だ…全然大丈夫ではなかったぞ。」
「儂だけのせいにするでないわ。大体この話はお主の方から持ちかけた物じゃったろうが。おかげで儂まで浜臣に叱られたわい…何故今日から期末テストじゃと言う事を黙っておったのじゃ。」

「聞かれなかったからに決まっている…しかしまだ調子が戻らん…これでは試験にも影響してしまうぞ…全く、理事長の奴め…」

…そう、試験は明日だと言うのに、鷹矢がすでに疲れきっているのは他でもない。

それは鷹矢の出発前…

よほど期末試験を受けたくなかったのか、鷹矢にしては本当の本当に珍しく寝坊せず起床し、今まさに空港に向けて出発しようとしていた…

その、出かけ寸前でのこと。

――…

「では遊良、行ってくるぞ。」

「…あっちで迷惑かけるんじゃねーぞ？」

「うむ。安心しろ、ちゃんと土産も買ってきてやる。」

「そういう心配じゃねーよ…」

早朝。

昨日の宣言通り、プロテストに行く鷹矢は珍しく寝坊せず、寧ろ期末試験を受けなくても済むという余裕からか、遊良よりも早く家を出ようとしていた。

しかし、その雰囲気は他の受験者たちとはまるで違う、どこか気楽さすら感じさせるおだやかな代物。

そう、自らの人生がかかっている、気を張り続けていると思われる他の受験者たちとは違い…今の鷹矢の雰囲気は、まるで旅行にいくかのような気楽さとなっているではないか。

…テスト会場のあるデュエリアには泊まりとなることから、その手に遊良が昨夜用意してくれた荷物入りのキャリーケースをしっかりと持ち。

期末試験をサボ…もとい、特別に休ませてもらい、殺伐とした雰囲

気で行われるプロ試験に特別に参加させてもらう立場であると言うのにも関わらず…

行きの道中で食べるであろう、大好物でもあるリクエスト通りの遊良特製低温からじっくり火入れし高温にて堅めに2度揚げした醤油と塩の2味が楽しめる大ぶりモモ肉の唐揚げ弁当を遊良から嬉しそうに受け取りながら…

そう、その手に大事そうに持った唐揚げ弁当から、あまりにも美味そうな匂いが漏れ出しつつ。朝っぱらから鷹矢の為に唐揚げを揚げてやる遊良も遊良ではあるものの、しかし鷹矢もまたソレは当然の事なのだとしてどこまでも当然のように弁当を受け取るのか。

荷物よりも、大事そうに弁当を抱えながらどこまでも…どこまでも、気楽な雰囲気を崩さぬ天宮寺　鷹矢のその態度。

それ故、そんな鷹矢の不遜な態度は、同じく家を出ようとしている遊良の目から見てもあまりに不躾に映ることこの上ないと言うのに…

「他の受験生に迷惑かけるなって言ってんだ。ただでさえ無試験のせいで目の敵にされてるってのに…そんなお前がプロ試験に来るとか、受験生からしたら冷やかしも良いとこだろ。お前のせいで調子崩して落ちたとか言われたらどうすんだよ。」

「ふん、それがどうしたと言うのだ。俺は俺の戦いをしにいくだけだ…この程度で調子を崩す弱者など初めからプロになどなれん。己の敵を見誤る雑魚になど興味などないからな。」

「だからその態度が反感買うって言ってんだって。ホント分かんない奴だな、下手したら刺されるぞ？」

「だからそんな事は俺の知ったことではないと言っている。お前こそ分からん奴だな、何故俺が有象無象共に気を遣わねばならぬと言うのだ。…まぁいい、そろそろ出ねば飛行機に間に合わんからな。では行ってくる。」

「…あぁ。」

それ故、受験生たちから怨みを買いそうな鷹矢に対し、遊良も釘を刺すように口出しするものの。
しかし当の鷹矢は何処吹く風で、あくまでも自らの不遜を崩そうとはせずただただ自己中心的に振舞い続けるのみ。

そして…

遊良の心配を他所に、デュエリアに、ひいてはデュエリア行きの便に乗るため、空港へと向かおうと鷹矢が自宅の玄関の扉を開けた…

そこには―

「…おはようございます。」
「む!?」
「砺波先生!?」

玄関の扉を開けた瞬間に飛び込んできた声に、思わず驚きの声を上げてしまった鷹矢と遊良。
…当然だ。
何しろ、まだ早朝という時分であるにも関わらず。
今まさに出かけようとした矢先に、家の外にはあろうことか―

およそ今の鷹矢が絶対に顔を合わせたくは無かったであろう人物…イースト校理事長である、砺波　浜臣が立っていたのだから。

…しかも、その砺波の表情は見るからに晴れやかなモノでは断じてない。
早朝と言う事もあり、隠そうともしていない鯨の不機嫌がその透明感を感じる朝の空気とが相まって…
玄関前に佇んでいる砺波の雰囲気を、より一層近づきがたい代物へ

と変えており…

「な、なぜ理事長がここに…」

「何故？その理由を説明しなければ理解できませんか？」

「う…いや…その、だな…」

そんな、自家用車か公用車か分からぬ黒塗りの高級車の前に立つ、あまりに不機嫌そうな砺波が家の前で待ち構えるようにして佇んでいたのだ。

それはいくら悪い事をしていない遊良でも思わず焦燥を感じてしまう驚きであり、とすれば当然の事ながら怒られるような事しかしていない元凶である鷹矢にとっては…あまりにも不穏な気配を感じてしまうのも、当然と言えば当然で。

果たして…

昨日の今日で、綿貫　景虎から鷹矢のプロテスト参加を聞かされた砺波の心中は、一体どのようなモノになっていると言うのだろう。

容認できない重度の怒りか、はたまた迷惑ばかりかける男への失望か…

そのどちらにせよ、およそ鷹矢本人にとっては良いモノとは言い難いはず。

確かに既にメディアにも、そして『決闘世界』の試験委員会にも話を通してしまっているが故に、いくら元シンクロ王者【白鯨】である砺波を持ってしても前日になって『キャンセルさせます』だなんて出来るはずもなかったのだろう。けれどもソレが逆に砺波の怒りを大きくさせたのか、溢れんばかりの苛立ちは砺波の周囲の空気を歪ませている錯覚を遊良と鷹矢へと見せており…

それ故、突然現れた砺波の、あまりに不穏なる空気を感じ取った鷹矢が。

思わず反射的に、家の中に戻ろうと玄関のドアをゆっくりと閉め始

めたものの…

『閉めるな。』

「ッ!?」

…砺波から発せられるは、この世のモノとは思えない深海の水圧のような重苦しい声。

それは誰にも逆らうことなど出来はしない代物。逆らってはいけないとさえ感じてしまう人外の響き。

一体、どこからこんなにもドスの効いた声を出せると言うのか。

それはいくら傍若無人な鷹矢であっても、思わず身震いを感じてしまうような波響となりて砺波の言う通り閉めかけたその手を止めてしまい…

そして、完全に鷹矢が静止したのを確認してか。

ゆっくりと…まるで、噴火する寸前の海底火山のような雰囲気のまま…砺波が、その細腕からは考えられない力にて玄関のドアを引き、開けると。

先ほどよりは少々マシなものの、それでも微かにドスを感じる声のままにて。鷹矢へと、声を投げつけてきて。

「さて…では行きますか。私が直々に車で送っていってあげましょう。」

「…い、いや、俺はタクシーでも使おうかと…」

「何か…言いましたか?」

「…」

そうして…

先ほどの気楽さはどこへやら。

決して逆らうことを許されず、そのまま鷹矢はまるで連行されるようにして…

大人しく砺波の車へと乗せられると、苛立ちのアクセル音と共に砺

波は車を発進させたのだった―

「…砺波先生、完全に怒ってたな…鷹矢の奴、無事に行ければいいけど…」

そして、そこから車中であったことはおよそ語るに及ばず。

そう、逃げ場の無い車の中、それも砺波と鷹矢の二人しか乗車していないこともあり…空港に向かう高速道路で、鷹矢は延々と砺波に小言を浴びせられ続けたのだ。

しかも、ただの小言ではない。その言葉の一つ一つが形容し難い重みを孕ませていたものだから、これでは唯我独尊を地で行く鷹矢を持ってしても相当辛い道中だったに違いないことだろう。

…いっそのこと、一思いに怒りを爆発させて叱ってくれた方が楽なのではないだろうか。

きっと、鷹矢もそんなコトを感じてしまったに違いない。

ソレほどまでに、延々と続く逃げ場の無い小言の猛襲は、鷹矢から楽観を奪い去るほどの精神的疲労を確実に与え続けており…

…すでに参加が決定してしまっていることは覆すことは出来ない。しかし、これからプロになろうとしている人間の立ち振舞いの重要さを理解していない様子が少しでも会場先から伝わりでもしたら、当然こちらにも考えがある。なんなら期末試験を追試扱いで受けさせるのも検討している。当然、出題問題を特別に作り直し、他の学生達とは別の日程で一人だけ再試験を受けてもらう。大体、ランク０の件もあるのに悪目立ちするなど何を考えて…

等々…

そんな事を…いや、『それ以上』の事を。

空港に着くまでの間、鷹矢は延々と叩きつけられ続けた。

また、鷹矢の方にも自分に比があるという自覚だけはあったのか、砺波の小言には反論する事さえ出来ないままに…

それ故、どうにか砺波から解放されたその後も。
遊良の唐揚げ弁当と、飛行機の中で多少眠ったとは言え。砺波から与えられたその精神的疲労は、当然のことながら完全には回復しておらず…

―…

「一生分の小言を言われた気がするぞ…いや、帰ってからもまだ続きそうだ…」
「ま、しばらくは続くじゃろうな。何しろ儂もさっきまで電話越しに叱られまくっとったからのぅ…全く浜臣の奴め、【決島】の時からなーんか強いんじゃよなぁ…」
「ぬぅ…」
「だから儂でも今の浜臣は宥められん。とりあえず、怒りが冷めるまで大人しく謝っておけ。」
「他人に謝るなど容認できんが…この際仕方あるまい。今の理事長に逆らうと冗談抜きで殺されそうだ。」
「そうじゃな。」

…疲労困憊、意気消沈。
強制的にメンタルをやられた鷹矢は、試験会場へと向かう道すがらもグッタリとシートに体を預けたまま。だからこそ、プロ試験が今日ではなく明日であった事は鷹矢にとっても幸運であったに違いない。
…このままの状態でデュエルなどすれば、調子が出ずに無様な戦いを見せてしまう可能性もある。
何しろ、いくら想定している相手が下位のプロとは言え、それでも対戦するのはプロデュエリストなのだ。
油断していると足を掬われるどころではない。例え相手が下位のプロであったとしても、それでもプロの世界で戦ってきた経験のある者は学生とはまた違った強さがあると言う事は夏休みに多くのプロと戦ってきた鷹矢も重々承知していることであり…

「しかし惜しいのぅ。」
「…何がだ？」
『ランク０』のエクシーズモンスターのことじゃよ。お主がアレを自在に操れておれば、お主の注目度も更に高くなったと言うのにのぅ。もうこの世に無いとは…勿体無いことこの上ない。」
「…無茶を言うな。アレは俺の力ではない。いくらこの俺でも、あんなモノを２度も使えば今度は確実に死んでしまうぞ。」
「ま、この儂でさえ見たことのない代物じゃったしのぅ。研究者やデザイナー達が必死になって研究をしておるが全く上手く行っておらぬようじゃし…せめて現物が残っておればと泣き付かれたわい。」
「ふん、それこそ俺の知ったことではない。大体何なのだ、研究とは。アレは俺だけに許された俺の力、俺だけのモノを他人が研究しようなど片腹痛い。」
「…」

また…
鷹矢と向かい合うようにして座っている綿貫の口から零されたのは、鷹矢が【決島】にて呼び出した『ランク０』のエクシーズモンスターについての言葉であった。
そう、鷹矢の【決島】の決勝戦・第一試合…デュエリア校の鍛冶上刀利とのデュエルにて、鷹矢がこの世界の理に反しながら呼び出した『Ｎｏ．０』への反響はそれはそれは凄いモノだったのだ。
…何しろ、史上初となる『ランク０』のエクシーズモンスター。
長い長い決闘界の歴史においても、そんな常識外れの存在など誰も見た事も聞いた事もない代物であったのだから…
これまでの学説、学術、研究結果が、根底から覆される事態になってしまったあの時のデュエルの衝撃は、それはそれは計り知れないモノとなりて世界中が震撼したと言っても過言ではなく。
…連日、メディアも騒ぎ何度も『あの試合』の『あの光景』がＴＶで流された。

また、それだけでは終わらず。他の誰も成しえなかった、他の誰も想像もしなかった、他の誰も思いつきもしなかったソレを歴史上初めてエクシーズ召喚した鷹矢の事を、過激な研究者や学者たちが必要以上に追い回した事もあったのだ。

…無論、表向きは鷹矢への『ランク０』の再現への協力の要請。

しかしそれは傍から見れば、マッドサイエンティストたちによる人体実験の被験者の捕獲にも見えるほどに必死なる追い掛け回しだったのだから…

自身だけに許された『Ｎｏ．』を研究しようとしている無礼者達に鷹矢が憤慨を覚えたのは当然と言えば当然であり、それ以上に鷹矢の学業への妨げになるとしてイースト校理事長である【白鯨】砺波　浜臣によってそのマッドサイエンティストたちが駆逐されていなかったら…鷹矢とて、いまごろ研究者たちの手にかかりどうなっていたか想像もつかない事だろう。

また、ソレらが今では落ち着いているのは他でもない。それは偏に、追い掛け回されることにウンザリした鷹矢が、【白鯨】や綿貫を通じて超巨大決闘者育成機関【決闘世界】から当事者たちに伝達し思い知らせた『ある言葉』のおかげか。

そう、鷹矢は言った…もう、『ランク０』のＮｏ．のカードはこの世に存在してはいないのだ…と。

鷹矢のその言葉を聞いて、メディア関係者や研究者たちがどれだけ落胆を示したことか。そしてソレらが、【決闘世界】直々の回答であったために…恰好の報道対象を、そして恰好の研究対象を失った彼らは、そうしてようやく鷹矢を追い掛け回すのを諦めたのだ。

まぁ、もうこの世に『ランク０』のエクシーズモンスターが存在していないのだとしても。それでも公の場で歴史的快挙を成し遂げた鷹矢に対し、もう一度『ランク０』のエクシーズモンスターの召喚を熱望している声が未だ多いこともまた事実。

そう、【決島】が終わってからまだ数ヶ月しか経っていないために、世間からしても『ランク０』が呼び出されたあの興奮がまだ冷めやらぬままなのは当然と言えば当然で…

…そして、ソレは明日のプロ試験のエキシビジョンでも期待されている事だろう。
もう召喚出来ないであろう幻の存在に期待をかけられるプレッシャー。そしてこれまた史上初となる高校生プロへの期待と怪訝。
そんな色々な視線を常に浴び続ける事になる事と、そして理事長から受けた小言のダメージとが相まって。尚更、鷹矢は簡単には回復しないであろう精神的疲労を感じているのであり…
…だからこそ、理事長に削られた精神を少しでも回復すべく。
明日のプロ試験へと向けて、鷹矢は全力でシートに体を預け怠ける姿勢を見せるだけ。

「まぁ良い、無いモノねだりをしてもどうしようもないからのぅ。それに、どうせ試験は明日なんじゃ。お主の順番も一番最後じゃし…それまでしっかり休み、他の受験生のデュエルを見ておれば良い。」
「そうするぞ…」

送迎の高級リムジンの座り心地を感じる余裕もなく。
試験会場であるデュエリアの特設スタジアムに併設された高級ホテルへと向けて、鷹矢はただ成すがままに運ばれて―

―…

翌日。

肌寒さすら感じた昨日の気温から一転。

…受験生たちを待ち構えるかのごとき、春の陽気すら感じられるであろう見事な快晴の中。
デュエリア屈指の高級ホテルにて、招待選手の待遇にて一泊した鷹矢は…あの鷹矢にしては珍しく、超高級が売りの朝食バイキングもそこそこに。試験会場のドームスタジアムへと続く、長い長い大通りの…
他の受験生たちが緊張の中会場へと向かっている…

その、最後尾に居た。

「ぬぅ…理事長に小言を喰らったからか、他の奴らの余裕の無さが痛いほど伝わってくるぞ…」

しかし、理事長の小言を受けた時間からほぼ一日経っていると言うのにも関わらず。
昨日受けた理事長からの小言がまだ緒を引いているのか、受験者たちがぞろぞろと列を作っているその最後尾…その最後尾にて、どこか疲れた顔を残す鷹矢の雰囲気は未だ重く。それでいて精神的疲労からか、朝食もそこそこした食べられなかった事から未だに鷹矢には理事長から受けた攻撃…いや、口撃が、まだ深く根付いている様子。
…また、他の受験者たちが重い足取りにて、会場へと向かっていくのを眺めている鷹矢の目に映っているのは紛れも無い。
それはそれは重い空気、それも目に視えるほどのプレッシャーに苛まれ続けている、受験生たちの憂鬱な雰囲気が鷹矢の目には映り込んできているのだ。
…しかし、それも当然か。
何しろ鷹矢と違い、彼らは一次試験と二次試験、その過酷なプロ試験を最後まで通り抜けたものの、下手をすればこの最終試験でその全てがパーになってしまうかもしれないのだから、既にプロ入りが決まりこの最終試験すらただのエキシビジョンでしかない鷹矢と比べれば他の受験生たちのプレッシャーはおよそ測りきれる代物では断じ

てない。
…己の人生を賭けて最終試験へと望もうとしている、その憂鬱なるも緊張に包まれた、目に見える程に重苦しくなったその空気。
その足取りは誰もが重く。そう、まだ会場とは距離があると言うのにも関わらず、デュエリアの街の一角にはあまりに重い空気と息苦しい雰囲気が充満しており…
それは例えるならば通夜や葬式。そう例えたいほどに、緊張からかどこまでも暗い表情をしている受験者たちの織り成す列はただただ沈黙と焦燥に塗れていて。

「…なるほど、遊良が言っていたのはこう言う事か。下手したら刺される…確かに今のコイツらならやりかねん。余計な事は言わないようにしなければ…」

だからこそ…
昨日の不遜で不躾な態度から一転。受験生たちの切羽詰った姿を目に写し、素直に自分の非を認め口を慎む今の鷹矢には、受験生たちの弱った悲哀が痛いほど理解出来てしまう。
…きっと砺波に口撃を喰らう前の鷹矢であったならば、そんな受験者たちの重苦しい空気を全く気に留める事もなく、吐き捨てるように彼らを抜き去って言ったに違いない。
それこそ、受験者たちの列のど真ん中を我が物顔で…
自分だけは既にプロになることが決定しているという優位を見せびらかすようにして、この程度の試練に切羽詰っている弱者たちとは格が違うのだと態度で語りつつズカズカと追い抜いていったはず。
けれども、砺波よってこの受験者たちと同じ程度の精神的疲労を喰らわせられた今の鷹矢には…受験者たちの緊張、葛藤、憂鬱、切迫が、肌で感じられるほどに痛いほど伝わってきているのだろう。
…それはある意味で成長の証か。
理事長から精神を削られたおかげとはいえ、普段からおよそ他人など端から気遣うつもりも無い『あの鷹矢』が、こうして少々他人を気

遣う素振りを見せている事はある意味で確かに鷹矢もまた成長している証でもあり…

そうして…

「…さて、俺もそろそろ行かねばな。」

受験者たちが充分に離れたその最後尾で。

一人、誰も刺激しないように慣れない気遣いを見せた鷹矢が、自分も試験会場へと向けて今まさに歩きだそうとした…

―その時だった。

「…天宮寺　鷹矢…あなた…どうしてここに？」

「む？」

突然…

まだホテルの横、最後尾に居るはずの鷹矢の背後から、唐突に何やら聞き覚えのある声が聞こえてきた。

…そして、鷹矢が瞬間的に振り向いたソコにいたのは他でもない。

他の受験者たちの誰よりも遅くこの場に到着したのは、鷹矢もよく見知ったある人物。そう、それはあの他人の顔と名前を全然覚えない鷹矢が、自らの意思で顔とフルネームを覚えた数少ない一人の女性であり…

それは魔窟のようなプロの世界に飛び込もうとしているとは到底思えない、あまりに華奢な体付き。

デュエリアの風に揺れる白髪と、走ってきたのか少々乱れている吐息がその雰囲気をより一層気怠く儚げなモノと変えている…

鷹矢が数ヶ月前に【決島】で戦った、儚く気怠げな一人の少女。

そして鷹矢が【裏決島】で戦った怨敵である、裏決闘界の融合帝【紫影】を祖父に持つという…

しかして彼女自身も【紫影】に多大なる怨みを持つ人物でもある、決闘学園ウエスト校3年筆頭…

―竜胆　ミズチ

「なんだ、竜胆　ミズチではないか。久しぶりだな。今到着したのか？」
「…ええ。空港からの電車が少し遅れて……【決島】では迷惑をかけたわ。あれからお礼も言えずにごめんなさい。」
「気にするな。お前もお前で忙しかっただろうしな。だが怪我はもう良いのか？両手両足の骨折とかなりの重症だっただろう？」
「…昔から、怪我の治りは早いの。3年生だし、授業もあまりなかったのも幸いしたわ。」
「そうか、ならば良い。しかし、まさかお前もプロテストを受けるとはな…【決島】の時はプロに興味があるようには見えなかったが…」
「…【決闘祭】と【決島】に出場したから許可が貰えたの。李理事長から、プロテストを受けてみないかって…それに…少し、プロに興味が沸いたから……ところで、どうして試験会場にあなたがいるの？あなた、試験を受ける必要ないはずじゃ…」
「うむ。まぁ、その、アレだ…色々と事情があってだな…」
「…そう、期末試験を受けたくなくて…」
「む!?…くっ、そういえばお前の眼はいろいろと『視える』のだったな。」
「…フフッ、相変わらずなのね、あなた。」

そんなミズチは、試験会場に赴こうとしている鷹矢を少々驚いた表情で見た後に。
鷹矢がどうしてここにいるのかを即座に見抜いたかと思うと、その理由に少々呆れた顔を零しつつ優しく鷹矢へと微笑みかける。
…それは切羽詰った他の受験者たちとは違った、落ち着きすら感じられる優しい微笑。

しかし、今ここに普段の彼女をよく知る者が居たとしたら…
きっと、誰しもがその目を疑うに違いない。
そう、それこそ、彼女の兄のような人物がもし、この場に居て今のミズチと鷹矢を見たとしたら―
普段の、物憂げで儚げな振る舞いしか見せないあのミズチが、こんなにも優しい微笑みを零しているだなんて。彼女を見知った者の、一体誰が信じられると言うのだろう。
そして、その微かな桃色に染まった頬と穏やかな微笑みが、まさかの鷹矢だけへと向けられているというその事実に…今、この時、この場所においては。気付いている者は、この本人たちを含めて誰一人としては存在しておらず。
だからこそ、竜胆　ミズチは今の自分がどういった表情を目の前の男性も向けているのかも理解しないまま。ただ無意識に、その頬に浮かぶ儚くも可憐なる微笑みを自然と零したまま…
他の誰にも向けることの無いであろう柔らかくも優しい声にて、更にゆっくりと言葉を紡いで…

「…じゃあ…私も、合格したらあなたと同期になれるのね。頑張るわ。」
「うむ。プロの世界でお前とまた戦える日を楽しみにしているぞ。」
「…私も。…試験前にあなたと話せてリラックスできたわ、ありがとう。…じゃあ、またね。」
「うむ。」

果たして…
ほのかに頬を染めつつ、そう言いながら小さく手を振り小走りで去っていく竜胆　ミズチから向けられているその感情に…当の鷹矢は、何を感じるのだろう。
可憐な、しかして今にも風に散ってしまいそうな春の花弁にもよく似た、薄く儚い麗しき微笑。
…彼女の頬がやや赤みを帯びていたのは、きっとこの春の陽気の所

為だけでは断じてないはず。
それは【決島】での…いや、【裏決島】での出来事が関係しているのか。
そんな、普段から笑みなど浮かべないであろう少女が見せる、男であれば心臓が飛びあがる感触も覚えるであろうその微笑みを真正面から受けた鷹矢の顔は…
あくまでもいつも通りの鉄仮面なれど、しかして去っていくミズチの背中を遠目から眺めている鷹矢の雰囲気は、名を覚えるに値する強敵の一人が同期でプロになろうとしている事に対し…
どこまでも、嬉しそうな空気を醸し出していて―
「…竜胆　ミズチならば受かるだろう。強敵が同期となる…うむ、楽しみだ。」
それは鈍感か、それともあえての反応なのか。そんな、ミズチから向けられているであろう感情とは、また別ベクトルで楽しそうな感情を…
鷹矢は、向けているのだった。
そして―
「おっといかん、俺も遅刻などしたらまた理事長から叱られ…」
ミズチの背中が見えなくなってから、鷹矢もまた会場に向かおうと今まさに歩きだし―
「おい待て天宮寺！何でお前がここにいる!?」
「…む？」
否―

再び、歩き出そうとした鷹矢を呼び止める声が鷹矢の後から響いてきて。
それは先ほどの竜胆　ミズチのモノとはまた違った、低くも重く聞こえる男の声。
そして、再び背面から声をかけられた鷹矢が瞬間的に振り向いたそこには―

「なんだ、虹村ではないか。卒業式以来だな。何故お前がここにいるのだ？」
「だからそれはこっちのセリフだ！何でお前がここにいるんだよ、ここ、プロテストの会場だぞ？」
「俺は色々と事情があるのだ。まぁアレだ、エキ…エキシ…エキシポーションと言う奴だ。」
「…エキシポ…？もしかしてエキシビジョンって言いたいのか…？」
「うむ、そうとも言う。」
「…だからソレが意味わかんねぇんだって。」

鷹矢へと声をかけてきたのは、鷹矢もよく見知った一人の男の姿であった。
それは鷹矢がまだ高等部一年生であった昨年度に、同じエクシーズクラスに所属し鷹矢の2代年上の先達として何かと鷹矢の事を気にかけてくれていた面倒見の良い先輩であり…
既に今年度からプロの世界で戦ってもいる、新人ながらメキメキと頭角を現している事でその名を上げてきていると言う、決闘学園イースト校の誇りでもある卒業生…

―プロデュエリスト、虹村　高貴。

そんな虹村は、久方ぶりに邂逅した問題児…もとい、手のかかる後輩がこんな場所にいる事が信じられないのか。
鷹矢へと向かって、怪訝な顔をして更に言葉を紡ぎ始める。

「ったく、相変わらず意味わかんねぇ奴だなお前…」
「それで、虹村の方はどうして会場に来ているのだ？お前の方こそもうプロなのだから無用のはずだろう？」
「…あぁ、俺はちょっと『ある奴』の応援に…って、俺の事はどうでもいいんだよ、それより…【決島】、見てたぞ。お前、まだ学生の癖にもうプロに殴りこんでくるんだってな。」
「うむ。」
「…ったく、昔からめちゃくちゃな奴だったが、本当に変わらないなお前は。」
「む？お前こそ何を言っているのだ。去年の卒業式のときに言ったはずだぞ、お前はプロに行く、そして俺もいずれプロとなる…とな。だから喜べ虹村。約束どおり、プロの世界でまた俺と戦えるのだから。」
「いや随分と早いだろ。はぁ…イースト校の事、任せたって言っただろうが。お前が居なくなったらエクシーズクラスがどうなるのか分かってんのか？」
「だからお前は何を言っているのだ？俺は学園から居なくなったりなどせんぞ？」
「は？だってお前…学校辞めてプロになるんだろ？」
「違う。学生のままだ。学生のまま、プロになるのだ。」
「はぁ？そんなわけあるかよ。大体、そんなことしたら先生達にどれだけ迷惑がかか…」
「ふん、そんな事は俺の知ったことではない。」
「…」

鷹矢から零される言葉を聞いて、何やら悩ましそうにその眉間を押さえ始めた虹村　高貴。
…きっと、おそらく虹村は今、相も変わらずハチャメチャな事を自主的にやらかす後輩に頭痛を感じてきているのだろう。
いや、そうに違いない。
何しろ在校中から、礼儀も何もあったモノじゃない不遜すぎる後輩

には虹村もとにかく手を焼いてきていたのだ。それがあろうことか、卒業してようやく1年も経とうとしたこんな時期に…昨年度の再現のようにして、再び礼儀知らずな後輩が各所に多大なる迷惑をかけている事が分かってしまえば…

既に卒業しているとは言えども、元エクシーズクラスのトップとして。直属の後輩に対し、責任感の強い虹村が責任を感じてしまうのもある意味仕方の無いことと言えば当然で―

「やっぱりもっとキツく叱っとくべきだったか…ホント自由すぎる奴だな、お前。」

「フッ、そんなに褒めるな。気色悪いぞ虹村。」

「いや褒めてねぇだろ！大体お前は去年も…」

「む？すまんな虹村、俺もそろそろ行かねばならんのだ。積もる話もあるだろうが、続きはまた今度と言う事にしてくれ。ではな。」

「あ、おい待て天宮寺！」

しかし…

久方ぶりとは言え、虹村からの説教の気配をいち早く察知したのか。

去年と同じように、いや去年よりも素早く虹村から逃げるようにして…

鷹矢は、走り去っていったのだった―

「…後で教頭先生に連絡取ってみるか…ったく、あんな馬鹿をもうプロにするとか、理事長は何考えてんだよ…」

―…

プロテスト…
それは生半可な者では受かる事など絶対に出来はしない狭き門。
そう、カードデザイナーと同様に、あまりに多い受験者数に対しその合格率はあまりにも低い。才能無き者をふるい落とし、才能ありし者を選別し続けるソレは、古き時代から選ばれた強者にしか受験する事を許されず。
…プロテストは、全部で3つの関門がある。

一次試験…『筆記試験』。

その筆記試験のレベルは相当に高く。細かなルールへの知識だけではなく、時には決闘法やその他の法律関係にも精通していなければならないのは当然の事ながら、それ以上にこの世に存在している膨大な枚数のカードへの知見を問われるその筆記試験は、一流決闘大学の入学試験にも引けを取らないとまで言われていて。
そして、筆記試験を突破したとしても。その先に待っている次なる試験は、筆記以上に受験者をふるい落としにかかってくると言われている。

二次試験…『決闘世界』の構成員による、『実技試験』。

超巨大決闘者育成機関『決闘世界』のプロ試験課の試験官チームには、現役を引退した元プロの者が多く在籍している。
それも生半可なプロだった者たちではなく、『鮫肌』や『ジュエルマスター』と言った、かつては一時代を築いた誰もが知る歴戦の元プロデュエリストを筆頭に、挙ってトッププロと呼ばれていた者たちばかりで構成されているのだ。それ故、その試験官チームは現役のプロチームに匹敵、もしくはそれ以上の力を持っているとさえ言われており…
そんな試験官チームの人間達と1対1で実技を行うのが、鬼門と呼

ばれる2次試験。
けれども、ここで問われるのは勝ち負けではあらず。
…問われるのは、『将来性』。
元プロの目から見て成長性や将来性、精神性や向上性などを事細かに審査され、受験者側からは何が正解かも分からぬ答えを試験官へと見せた者のみが最終試験へと進むことを許される。
…だから、例えここで負けたとしても、試験官の目に止まるデュエルを行う事が出来れば先へと進める。
しかし逆に言えば、例え試験官に勝ったとしても試験官の目から見て『先』が無いと判断されれば、その時点でその受験者のプロテストは終了してしまうのだ。
そして、その二つの試験を突破した者だけが…その先にある、『最終試験』へと進むことを許される。
最終試験…『現役のプロ』を相手に戦う『デュエル』。
ここでは、『勝利』こそが絶対の合格条件。
しかも、相手は経験の浅い新人プロなどでは断じてない―
満身創痍で最終試験まで辿り着いた受験生たちを待ち受けているのは、年数と言う場数を踏み、プロの世界の酸いも甘いも知り尽くした、いわゆる『ベテラン』に数えられるプロの世界を知り尽くした者たち。
まぁ、とは言えここで言う『ベテラン』とは、いわゆるトッププロなどではないのだが…
そう、受験生たちの相手をするのは、悪く言えば成績不振などでスポンサーが離れてしまったり、契約を打ち切られようとしている…成績が落ちもう後が無い、いわゆる『落ち目』に差し掛かった者たちでもあるのだ。
…ある者はスポンサーへの最後のアピールの場として。ある者は

契約打ち切り後に他の事務所にスカウトしてもらうため。ある者はただただ憂さ晴らし等々…

そんな、もう後に引くことが出来ない立場に追いやられた者達が、最終試験にまで上り詰めた数少ない受験生たちの相手に宛がわれる。それ故、いくら相手がベテランのプロとは言え…二次試験にて『将来性』を見込まれた受験生たちにとっても、充分に勝機はあるはずで。

…けれども、そうは言ってもプロはプロ。

ここで敗北すれば後が無いのはプロ側も一緒。メディアで生中継もされているこの『プロテスト』の最終試験が、ベテランと候補生たちとの入れ替わり戦とも例えられている通り…

彼らもまた、このプロテストの試験官という世間への最後のアピールの場で、自らの価値を関係者やスポンサーや、ＴＶを見ているファンなどに見せつけようと戦いに望んでいるのだ。

そう、過去に『同じ試験』をクリアし、既にプロの世界の厳しさを経験してきた、一筋縄ではいかない者達が更に必死になって戦いに望んできている。当然の事ながら、プロ側も本気で勝利を狙って受験生を仕留めにかかっている。

それ故、そんな彼らに『勝利』することが出来なければ、受験生たちもまた来年度からプロデュエリストになる事は決して許されはしない。

プロ相手に勝てない者が、この先のプロの世界で戦えるはずもなく…落ち目のプロを容赦なく叩きのめせない者が、蹴落とし合いが日常となる魔境で生き抜くことなど出来るはずもないのだから。

…残留を賭けたベテランの執念か、プロへの道を志す新進気鋭か。

常に世間に見られているというプレッシャーの中で、本来の実力を発揮できる受験生はそう多くはない。ソレを証明するかのように、既に開始されている今年の最終試験での受験生の合格率もまた例年に漏れず未だおよそ3割にも満たないほどで…

やはり残留に賭けるベテランの執念は凄まじく、もう終盤に差し掛

かった最終試験では今年もまた多くの受験生たちが生中継の場にてその夢を打ち砕かれ続けており…

そんな殺伐とした混沌が充満している、この試験会場のスタジアム。

多くの報道陣がカメラを向けているアリーナ…ではなく、観戦者や関係者などが座っている観客席。

その、一席に…

応援者や関係者、スタッフに混ざって。もうすぐ終わりを迎えるであろう、最後の受験者のデュエルを…

決闘学園イースト校2年、天宮寺　鷹矢は一人、遠目から眺めていた。

「うむ。ライバルになりそうな奴らは大体分かった。やはり注意すべきは竜胆　ミズチとデュエリアの『ギャンブラー』あたりか…だがその他にもチラホラ面白そうな奴が居たな。…フッ、収穫はあった、来年度が楽しみだ。全員、『新人戦』でこの俺に倒されるのを待っているが良い。」

値踏みするように。品定めするように。

これまで数々の試験のデュエルを眺めた上でそんなセリフを零した、イースト校2年、天宮寺　鷹矢。

先ほどまでの精神的疲労も回復したのか、そのセリフからは彼らしい不遜な気配が蘇っている様子でもあり…

そんな鷹矢は、これまでの試験を見てきた感想をぽつぽつと思い出しているのだろう。その脳裏に思い出されるのは、既にプロに勝利し『合格』を掴んだ者たちの中から彼の目に止まった実力を持った者たちの顔と名前。

…いや、元々他人の顔と名前を覚えるのが苦手な鷹矢の脳裏には、

面識のある竜胆　ミズチとデュエリアの『ギャンブラー』ことリョウ・サエグサ以外の顔はおぼろげであり、覚えているのはデッキとデュエルの内容だけであるのだが、ともかく鷹矢の目に止まったのは誰しもがこの最終試験まで上り詰めた受験生だけあって、相当な実力の持ち主ばかりであったのだ。

そう、【決島】にて実際に対峙しその実力を痛いほどよく知っている竜胆　ミズチや、遊良と接戦を繰り広げたリョウは勿論のこと。世界中から集った受験者の中には、鷹矢も見知らぬ若者の姿が何人か見受けられた。

…それ故、今から鷹矢はワクワクしている。

世界は広い。決闘市と、デュエリアと。多くの実力者を見てきたつもりだった自分の目の前に、まだまだ見知らぬ実力者が現れ続けるというその嬉しい現実に対し…鷹矢の心は、今から戦意に逸っている様子にも見受けられる。

そうして…

「さて、では帰るとするか。もうここに用は無い。」

見るモノを見て満足した様子の鷹矢が、会場から帰ろうとして徐にそう言いつつ立ち上がろうとした…

その時だった―

「帰るな馬鹿もん！」

「…む？」

デュエルを観覧し終え、満足そうに帰路に着こうとしていた鷹矢へと向かって。

響いたのは、このプロ試験を司っている超巨大決闘者育成機関『決闘世界』の最高幹部による…呆れと疲れが混ざった老人の、渇いた声の一喝であった。

「お主一体ここに何しに来たんじゃ？特別に実技試験行うためじゃろぅ！」
「む……そうだった、忘れていた。」
「忘れっ…全く…さっき浜臣の奴に電話で釘刺されたから儂もまさかと思ったが…本当に試験の事を忘れておったとは…」
「…理事長に何と言われたのだ？」
「お主がのう、『暇を持て余し、実技試験受けるのを忘れて帰ろうとするだろうから注意しろ』とな。そんな馬鹿な話があるかと思って一応見に来たらまさかじゃわぃ。はぁ…のぅ鷹矢…お主、若い頃の鷹峰と同じくらい…いんや、それ以上の馬鹿もんじゃわぃ…」
「ぬぅ…」
「ほれ、思い出したなら早ぅアリーナに降りんかい。あの最後の試験の子が終わったらすぐじゃぞ、お主の番。」
「うむ。」

しかし、叱りを飛ばした『妖怪』、綿貫　景虎の怒りを他所に。
当の鷹矢本人は、いきなりぶつけられた一喝に対してもなお淡々と悪びれもなくそう言うと…本来の自分の目的を思い出したのか、ディスクを手に持ちゆっくりと立ち上がり始める。
…そんなマイペース過ぎる鷹矢を見て、長い歴史を見てきた『妖怪』は一体何を思うのだろう。
若い頃の【黒翼】によく似た、世間知らずかつ傲岸不遜なその態度。まるで【黒翼】をそのまま若くしたかのような、それでいて祖父以上に自尊心に溢れる今時の若者に対し…
綿貫もどこか、力が抜けるように深く溜息を１つ吐いており…

「では行ってくる。」
「あ、ちょっと待てぃ。」
「ぬ？」

…いや、試験会場へと降りていこうとする鷹矢へと向かって。

何かを思い出したのか、再び綿貫がその口を開き始めた。

「浜臣からもう一つ伝言じゃ。これに勝てんかったら、期末の単位は『なし』じゃそうじゃ。」

「なんだと!?」

「当然じゃろ、何驚いとるんじゃ？負けたら追試決定、試験範囲も増大すると言っとったわい。」

「ぐ…理事長の奴め…ふざけた事を…」

綿貫からの伝言を聞いて、何やら不服そうな声を漏らした鷹矢。

しかし、鷹矢は何を憤慨しているのだろう。そう、本人の憤りを他所に、綿貫は砺波からの伝言に対しさも当然の事のようにしてソレを伝えているのみであり…

…何しろ、鷹矢は期末テストをサボってプロ試験を受けているのだ。

だからこそ、砺波からのその通達も当然の事。鷹矢のこの試験が期末テストの代わりなのだとしたら、この試験で負けると言う事はつまりテストで赤点を取り単位を落とすと言う事と同義であるはず。

いや、寧ろ鷹矢は、既に試験免除にてプロ入りが決まっているのだ。それ故、『勝利＝合格』、『敗北＝不合格』という他の受験者たちを差し置いて…ここで鷹矢が試験官相手に負けるわけには、評判的にも世間的にも絶対にいかないのは当然の摂理なのだから。

それ故、ここで負ければ単位なしというのも当然の事であろうと、綿貫もまた思っているはずで…

「…フン、あの程度の相手に俺が負けることなどまずありえん。相手側のプロの実力も大体測れている…あの程度のは夏休みに戦ったプロ以下ばかりだ。」

「フォフォッ、そう上手く行くかのぅ…」

「何か言ったか？綿貫のジジイ。」

「いんや、なんにも。」

「…」

そうして…

今、予定されていた全てのプロ試験の日程が終了し。

最後の受験生の試験が終わったそのタイミングで、これからが本番なのだと言わんばかりにアリーナに多くの報道陣が機材と共に入ってきたではないか。

…それは例年の報道陣の数のおよそ3倍以上。

そう、今回のプロ試験、その最大の注目は受験生ではあらず。大勢の報道陣が、『このデュエル』を映しにきたのだと言わんばかりにざわめき始めたそこでは、これより始まるエキシビジョンこそがメインイベントなのだという事を大勢の関係者や受験生たちに否応なしに伝えていて。

そう…史上初、高校生プロという称号を作り出した【黒翼】の孫、天宮寺　鷹矢。

先の祭典、【決島】では、優勝のみならず世界の歴史をも変える『ランク0のエクシーズモンスター』を作り出したことでも知られている、現在最も世間から注目されているその高校生が、プロ試験の場にてその実力を世界に再度見せつけようとしているのだ。

そんな、恰好の話題の的を…

当然、メディアが撮り逃すわけがなく…

…観客席からアリーナに繋がる階段を、ゆっくりと降りてくる鷹矢へと降ってくるはカメラのフラッシュの雨霰。

そして、それ以上の視線の嵐。受験生と、試験官と、スタッフと、観客と、そして集ったメディアとＴＶの前にいる見えない観客達の、様々な感情が篭った視線の槍がカメラのフラッシュ以上の数となりて鷹矢へと突き刺されていて。

もし…この場にて、これ程多くの感情と視線にさらされながら歩けと言われたら。果たして平静を保ったまま歩みを進められる人間が、

世界に何人いる事だろう。
そう、それほどまでの圧倒的重圧が、多くの視線によって形作られているのが今のこのスタジアムのアリーナ。まるでプロのビッグタイトルを賭けた戦いのような注目度にも似たソレは、好奇の視線も多いとは言え異質な雰囲気となりてデュエルスタジアムを包み込んでおり…

しかし…

そんな、場数を踏んだ者であっても気後れしてしまいそうな雰囲気の中でもなお。
そんな他者からの注目など、全く意に介していないかのようにして…
鷹矢は、ただただ淡々とステージへと向かっていく。

「…しっかし浜臣の奴、鷹矢によほどの自信があると見える…この儂を相手に、『相手は誰を選んでも良い』などと抜かしおってからに…フォフォッ、じゃったら、鷹矢にも少しは灸を据えてやらんとのぅ。」

離れた観客席で、綿貫が意地悪い笑みを浮かべながらそんなコトを言っていることなど露知らず。
階段を上がるその一歩を踏みしめるたびに、マスコミたちの激しいフラッシュが更に激しさを増して弾かれるものの…
しかしそんな閃光の雨など何処吹く風で階段を上り続ける鷹矢の姿は、まだまだ学生だと言うのに彼の祖父のような一種の風格さえ漂わせているとも言えるのではないだろうか。
…そう、負けたら単位なしという脅しをかけられたにも関わらず。
確実に、かつ着実に。まるで自らの祖父を倣うかのような、他人への無関心と己の闘争心のみを高め続けながら…
鷹矢はただただ淡々と、己の覇道を進むかのごとき落ち着きでステージへと上がっていくだけ。

（…全く、負けたら単位なしだと？理事長め、それではまるで俺があの程度のプロ相手に負けるかもしれぬと思っているようではないか。俺の力を知っている癖に…気に食わん…）

いや…負ければ単位なしという脅しなど、端から脅しとも感じてない様子にて。鷹矢の内心は、これから戦う相手ではなくふざけた条件を出してきた理事長である【白鯨】へと向けられているのか。

…そして、鷹矢はただただ階段を上り続ける。

このフラッシュと視線の中を、あまりにも堂々と歩くその姿は…

まさしく、鷹矢もまた学生離れした強靭な精神力を持っていることの証明となりて、彼の覇道を指し示していて。

（しかし叱られるのを承知でここへ来たと言うのに…まさかプロの中でも弱い奴等が相手をしているとは誤算だった。これではわざわざ来た意味がない。）

…今まで見学したこれまでの試験の内容から、受験者の相手は中堅、または落ち目のプロ。その実力もピンキリであったとは言え、全体的にあの程度ならば全く相手にならないだろう。

今の鷹矢の雰囲気からは、どこかそんな感情が読み取れる。

それは彼の真の思惑がどうであれ、落ち目とは言えプロをあまりに舐め過ぎていると言えばそうなのだが…しかしそれはある意味、【決島】の前の夏休みに大勢のプロ達を相手に大会で暴れまわっていた経験則が成せる、一種のプロの風格と言えばそうとも取れる落ち着きようとも言えるのだろう。

おそらくきっと…いや、確実に。

鷹矢の感じているソレは他の学生の誰よりも、もっともプロの世界の空気を肌で感じ続けてきた他ならぬ天宮寺　鷹矢だからこそ感じ取れているであろう、紛れもなく今の自分の力がプロと遜色無い代物となっている事への揺ぎ無い自信と自負と自尊に違いない。

…その歩みはあくまでも威風堂々。

他者の目に映るは、世界最強のエクシーズ使いと呼ばれる彼の祖父の掲げる生き様…豪放磊落、天下無双に瓜二つ。

そう、例え誰が相手であろうと、容赦なく叩き潰すのみ。その纏う雰囲気が語る今の鷹矢の歩く姿は、どこまでも不遜であくまでも不敵で…

…天上天下、唯我独尊。

覇道を歩む、かの如く―

「…む？なんだ…この気配は……ッ!?」

しかし…

ステージ上へと上がったタイミングにて、対戦相手の顔も名前もまだ確認していない鷹矢へと不意に伝わってきたのは…

紛れも無い、『プレッシャー』であった。

それは水面に張った氷のような、凍てつきを覚えるかのような冷たい圧迫。

そう、鷹矢の相手をするであろう一人の女性プロが、鷹矢と同じタイミングにてステージ上へと到着した所で…

鷹矢の目の前に立っていたのは、他でもない―

「うぉぉっ！見ろよすっげぇぇ！本物の『薄氷の麗人』だぜアレ！」

「マジかよ！あれホンモノの雪霜プロ!?」

「やっぱ天宮寺選手のエキシビジョンだから特別ってことだよな！」

「雪霜プロ…すっごい綺麗…」

そして鷹矢の対面、その立ち位置に立っている一人の女性の姿を見て。
にわかに、そしてザワザワと。観客達が、突然大きく騒ぎ始めたではないか。
それはこの鷹矢のエキシビジョンを見に来たであろう一般人たちが、突然のサプライズに会場内を激しくざわめき立った証明でもあるのだろう。
…いや、一般人だけではない。
ざわめいているのは受験生やメディア、それに試験官に選ばれた落ち目のベテランプロ達も同じく…
そう、試験官を務める、ベテランのプロ達もがざわめいているのだ―

しかし、それも当然のことか。
何しろ、観客席から聞こえた、『薄氷の麗人』という呼び名が指し示した通り…他の受験者たちの相手は、少なくとも世界ランク４００～５００位以下の者たちばかりであったと言うのにも関わらず。
まさか…
この、鷹矢のエキシビジョンの相手はまさかの―
「綿貫さんにも困ったものですわ。…若造に、プロの厳しさを教えてやってくれだなんて。」
現れたのは凍れる微笑み。
水晶のように透き通った雰囲気、初雪のような佇まい。

そしてそれ以上に美麗なるは、誰の目にも止まるその整った容姿と姿勢が成せる、圧倒的なるプロポーション。
ホワイトアウトよりもなお白い、タイトなワンピースにその身を包み。スレンダーな体躯に付随している、その圧倒的な存在感を放つ女性の武器はまさに理想の女性像そのものとも言えるだろうか。
まさに立てばカトレア、座ればビオラ、歩く姿はローズマリーとも称されるその美しき姿は…
およそ他の追随を許さぬほどの注目を、その一身に集めている事は言うに及ばず。
…寒冷地にて流れる滝のように、美しくも真っ直ぐに伸びたその長い髪は彼女の氷のような美しさをより一層彩っている。
そんな、明らかに他の試験官プロ達とは存在感からして異なっている、その対戦相手を一目みてしまっては…
鷹矢も、嫌でも気が付いてしまう他なく…

そう、鷹矢の相手はまさかの―

―世界ランク11位、凍れる白き『薄氷の麗人』

雪霜（ゆきしも）　スノウ…

…という、まさかのトッププロであったのだから―

―…

ｅｐ１１８「閑話ー天才のある一日、その２（後編）」

「初めまして。雪霜　スノウと申しますわ。天宮寺さん、お噂はかねがね。」
「…」

…雪霜（ゆきしも）　スノウ。
それは遥か過去から多くのプロデュエリストを排出してきた名門、『雪霜家』の令嬢と言うだけではなく…
『薄氷の麗人』の異名よろしく、母親譲りのその見目麗しき容姿で世界的モデルとしても活躍している、デュエル以外でも世界的な知名度を誇る自他共に認める令嬢でもある。
そう、現れたのは凍れる微笑み、水晶のように透き通った雰囲気。初雪のような佇まいと共に、それ以上に美麗なる誰の目にも止まるその整った容姿と姿勢が成せる圧倒的なるプロポーションを自他共に見せつけながら…
ホワイトアウトよりもなお白い、タイトなワンピースにその身を包み。スレンダーな体躯に付随している、その圧倒的な存在感を放つ女性の武器はまさに世の中の人々の理想の女性像そのものとも言えるだろうか。
寒冷地にて流れる滝のように、美しくも真っ直ぐに伸びたその長い髪は彼女の氷のような美しさをより一層彩っている。まさに立てばカトレア、座ればビオラ、歩く姿はローズマリーとも称されるその美しき姿は…およそ他の追随を許さぬほどの注目を、その一身に集めている事は言うに及ばず。
そんな、歴戦のデュエリストに数えられる現世界ランク第３位、『妖精女王』の名を持つクィーン・アネモネこと『雪霜　アネモネ』氏を母に持つこの雪霜　スノウもまた…

昨年の最終成績は過去最高の世界ランク『８位』、そして今シーズン終盤となる現在の成績も世界ランク『１１位』という堂々たる実力者。
また、彼女は『ルビーアイ』紅い悪魔のフレア・リリイや、『鮫姫』と呼ばれる朴城　マリンと同じく…現シンクロ王者【白竜】新堂　琥珀と同期にてプロになった、いわゆる『【白竜】世代』とも呼ばれるまだ若い時分。
そうだというのに、その若き年代にて既に【白竜】にも届きうるトッププランカーという高みに身を置いている彼女はまさしく…紛れも無い、トッププロの一人であると言えるに違いないのだ。
無論、現段階で世界ランク１１位に位置する彼女も、もうすぐ選手の選考が終了する『チャンピオンズ・リーグ』への出場もほぼ確実なモノとなっている。それ故、史上初となるクィーン・アネモネとの親子での『チャンピオンズ・リーグ』同時出場に、世間も注目しているというのは最早言うまでも無い事とも言えるだろう。
そんな自他共に認める『トッププロ』の一人が何の因果か、こうしてプロテストの会場にて受験生と対峙しているというのは一体どうした了見か。
そうした、例年のプロテストでは絶対に見られないこの光景があまりにも不自然なモノとして、例年以上の台数のカメラから世界へと向けてＴＶ中継されており…

「フッ…綿貫のジジイめ、やってくれるではないか。この女、有象無象の試験官どもとはレベルが違う…まさかこんなサプライズを用意してくれていたとはな。」
「あらまぁ…お噂どおり、少々教育が足りていらっしゃらないようですわね。綿貫さんをジジイ呼ばわりはともかく…いくら【黒翼】のお孫様だとは言え、仮にも先輩に当たるプロの皆様を有象無象呼ばわりだなんて。うふふっ、そんな事では、貴方の偉大なるお爺様の名に泥を塗るだけではなくて？」
「ふん、ウチのジジイの事などどうでもいい！それより貴様のようなトッププロが出てくるとは嬉しい誤算、これでこそ期末をサボってわ

ざわざ来た甲斐があったと言うモノだ！貴様ほどの奴ならば、相手にとって不足はない！」
「あら…」

それ故、鷹矢もまたこの場に用意されたこの光景の異常さにはすぐに理解をした様子。
そう、目の前の女性デュエリスト…世界ランク１１位だという雪霜スノウの、その纏う雰囲気が周囲のデュエリスト達とは根本からして別物だと言う事を、世界初の高校生プロとなる天宮寺　鷹矢は誰よりも早く察知してしまった。
…だからこそ、だろう。
先ほどまでの、どこか気の抜けていた、消化試合に向かうかのような抜いた雰囲気から一転。
お互いに既にデュエルへの立ち位置に付いている事もあり、デュエルディスクを構え始めた鷹矢はすぐさまその気持ちを最大限の警戒モードへと引き上げつつ…
同じくデュエルディスクを構え始めた、目の前に用意された極上の相手に対し…その戦意を、沸々と燃やし始めるのみ。

そして…

「…全く、無礼にも程がありますわ。…まぁいいでしょう、それでは始めます。貴方に、プロの厳しさを教えてあげなさいと言われていますので…手加減はしませんわ。どうせ、貴方ももうすぐ『こちら側』に来るのですから。」
「うむ！手加減などいらん、それよりトッププロの実力とやらを、この目でとくと見せてもらうぞ！」

大勢のカメラに写されている事も気に留めず。中継の前で、前線に生きる本物のトッププロと…
来年度から、世界初の高校生プロという鳴り物入りでプロ入りする

恐い物知らずの高校生が今向かい合い―

―デュエル!!

それは、始まる。

先攻は受験者…天宮寺　鷹矢。

「俺のターン！【ブリキンギョ】を召喚！その効果で【ゴールド・ガジェット】を特殊召喚し、ゴールドの効果で【シルバー・ガジェット】を！シルバーの効果で【レッド・ガジェット】を特殊召喚する！来い、ガジェット達！」

―!!!!

【ブリキンギョ】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／２０００
【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【シルバー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００
【レッド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１５００

デュエルが始まってすぐ…

ブリキ仕立ての金魚から始まる、連鎖の効果でお得意のガジェットモンスター達を含め実に４体ものモンスターを一挙に場に揃えたイースト校２年、天宮寺　鷹矢。

…それはあまりに不変なる、鷹矢のいつもの迅速なる展開。

そう、誰が相手でも慄かない、彼の立ち振る舞いをそのままに。相手がどのようなデュエリストなのかまだ分からなくとも、手札のほとんどを使うことすら厭わずに…

まるでそれが生き様なのだと言わんばかりに、怒涛の如き激しさを伴いその勢いを増しながら。まだ始まったばかりだというのにも関わらず、鷹矢のデュエルの始まりとなる歯車達が目の前の『薄氷の麗人』へと向かって戦意を燃やす。

「そしてレッドの効果で、デッキから【イエロー・ガジェット】を手札に加える！」

「あらまぁ…噂では聞いていましたけれど、なんとまぁ慌しい…小さな子どものように落ち着きのないデュエルですこと。」

「落ち着きなど知ったことか！俺はゴールドとシルバー、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚、来い、ランク４！【ギアギガントX】！更に【ブリキンギョ】と【レッド・ガジェット】でもオーバーレイ！ランク４！【ギアギガントX】！」

―!!

【ギアギガントX】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００
【ギアギガントX】ランク４
ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００

そうして、続けざまに。

鷹矢の場へと現れたるは、鷹矢のデュエルの起点を飾る、鋼鉄なりし機械兵。

―唸る豪腕、轟く体躯

いつでも、どんな時も、鷹矢のデュエルはここから始まるのだ。普通、並みの受験者ならば相手がプロデュエリストである事に対し、舞い上がるか慄くかして、いつも通りの実力を発揮できなくなるモノだと言うのに…

しかも、鷹矢の相手は並のプロでは断じてない。世界的に有名なトッププロ、それも誰しもが知る『薄氷の麗人』が相手であるのだか

ら、そんなデュエリストが相手となれば誰であろうと多少なりとも気後れを感じてしまうのは普通のはず。
…けれども、天宮寺　鷹矢は慄かない。
そう、初手の展開に差異はあれど、それでも慣れ親しんだかのように行われる鷹矢のこのいつものデュエルの流れは…まさしく天宮寺　鷹矢の駆る『ガジェット』デッキにおいては、最早定番の初手とも言える安定した定石とも言えるに違いない。
例え誰が相手であろうとも、何時如何なる時も崩れる事のない鷹矢のこの序盤の動き。それはまさに黄金パターンとも呼べるであろう、どこまでも安定した初手と呼べる代物にまで仕上がっていると言っても過言ではなく…
…何しろ、鷹矢は分かっている。相手が誰であろうとも。『ある種の例外』を除いてその場その場の行き当たりばったりの展開しか出来ないようなデッキでは…一定のラインから、その『上』へは決して上ってはいけない、と言う事を。
…問われるのは、『再現性』と『安定性』。
多少の差異はあれど、どんなデュエルでも序盤に安定した動きを見せられる展開を持っているか。何時如何なる時も、最初から再現性のある動きを継続して出来るかどうか。
特定のカテゴリーに属したデッキを扱うのならば、ソレら『安定性』と『再現性』を常に維持できるかどうかがそのままデュエリストの力量に直結していると言ってもいい程に…
…そう、それ故、どこまでも不変に。
そしてあくまでも普通に、【白鯨】からの命令でプロも参加する各地の大会に出ずっぱりだった経験が鷹矢にプロ相手への『慣れ』という名の落ち着きを与えているかの如き安定性を齎しながら。
これまで幾度も共に戦場を駆けてきたその駆動音が、未だ高校生であるはずの鷹矢にそこはかとない歴戦を纏わせているのはきっと気のせいなどでは断じてないはずで―
「【ギアギガントX】2体の効果発動！オーバーレイユニットを1つず

つ使い、デッキから2体目のゴールドとシルバーを手札に加える！そして【エクシーズ・ギフト】を発動！【ギアギガントX】2体のオーバーレイユニットを1つずつ使い、デッキから2枚ドローする！【アイアンドロー】も発動！場の機械族が2体のみのため更に2枚ドロー！…うむ！俺はカードを2枚伏せターンエンドだ！」

鷹矢　LP：4000
手札：5→4枚
場：【ギアギガントX】
【ギアギガントX】
伏せ：2枚

そうして…
トッププロである『薄氷の麗人』、雪霜　スノウに最大限の警戒を見せながらも。
それでも、変に崩れることなく自分のデュエルの展開を貫いた鷹矢が今、そのターンを終え―
「私(わたくし)のターン、ドロー。さて…相手は怖いもの知らずの、血気盛んな高校生…ですが、些か調子に乗りすぎている様ですわね。」
「む？」
「私はフィールド魔法、【六花来々】を発動し…そのまま、貴方の【ギアギガントX】1体をリリースいたします！」
「何!?」

突然…
ターンが移り変わってすぐに、あるカードの効果で唐突に『その宣言』を唱えた『薄氷の麗人』、雪霜　スノウ。
それは普通であればありえない、何もない所から鷹矢のモンスターをリリースするというまさかの宣言。

「俺のモンスターをリリースだと!?まさか『壊獣』か!?」

…だからこそ、だろう。

その突然の、相手モンスターの『リリース』という宣言を聞いて…鷹矢が、突発的に『壊獣』を連想してしまったのは、偏に彼の記憶に同じような宣言にて簡単にモンスターを葬られたという苦い経験があるが故なのか。

そう…鷹矢が、忘れられるわけがない。

布陣を整え、迎え撃つ気満々でターンを渡してソレを簡単に突破されたという…夏休みに修業していた時期に戦った、『あの』、苦いデュエルの記憶を。

―『この私を相手に、何を思ってそれだけでターンを終えたのかは知らないが!その程度で牽制をしたつもりならば随分と甘い!君の場の、『泥睡魔獣バグースカ』をリリース!』

―『天宮寺　鷹矢、君にもう一度だけチャンスをあげよう。自分から喧嘩を売っておいて、この程度で終わることなど君もしたくはあるまい?』

―『せめて少しは抵抗して私の退屈を紛らわせてくれ!君の場の、【ダーク・リベリオン】をリリース!』

…忘れられるわけがない。忘れられるはずがない。

それは夏休みに邂逅し戦った漆黒の『化物』、釈迦堂　ランとのデュエルにて味わった…何もかもが超えられるという、鷹矢にとっての苦々しい記憶。

その時の、どんなモンスターを出しても『リリース』されるという経験が、この状況にて即座に鷹矢に『壊獣』という選択肢を浮かび上がらせたのだろう。それ故、突如としてリリースされていく鋼鉄の機械兵を見て…

鷹矢は、身構えるような素振りを見せ始め…

しかし…

「あら…あんな美しくない獣と一緒にしないでくださるかしら。私は手札の【六花精スノードロップ】の効果を発動！手札から【六花精スノードロップ】と【六花精ヘレボラス】を特殊召喚！」

―!!

【六花精スノードロップ】レベル８
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／２６００
【六花精ヘレボラス】レベル８
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／１２００

「む…『六花』…だと？」

鷹矢の苦い経験に反して。
鋼鉄の機兵をリリースしながら雪霜　スノウが呼び出したソレは、あの忌々しい『壊獣』などとは到底違った…粉雪のような粒子のエフェクトと共に現れた、２体の美しき花の精であった。

『六花』…

それは雪霜　スノウというトッププロが好んで扱っていることでもよく知られている、植物族をベースにしたエクシーズモンスター達のデッキである。
２輪で１対ともなるその花の妖精達は、雪の中でも揺れ咲く花の如き可憐さと、そして冬の寒さの中でもその美しさを損なわぬ確かなる強さを秘めているとされており…
そう、雪霜　スノウの薄氷的な美しさと相まって、彼女の駆る『六花』というカードは世界的にもかなりの知名度を誇っている。そんな、美しき二輪の花の精たちを即座に呼び出した雪霜　スノウが…

天才と呼ばれ持て囃されている高校生へと向かって、更に動き始める。

「さて…では参りましょう！フィールド魔法【六花来々】の効果発動！場に『六花』が存在するため、私はデッキから【六花絢爛】をセットいたします！そして手札より【六花のしらひめ】を自身の効果で特殊召喚！そして今セットした【六花絢爛】も発動！しらひめをリリースし、デッキから【六花精プリム】と【六花精シクラン】を手札に加えさせていただきますわ！そして今手札に加えたプリムのモンスター効果！しらひめがリリースされた為、プリムを自身の効果で特初召喚し…そのままシクランも通常召喚ですわ！」

「ッ…慌しいのはどっちだ！この展開力、俺とそう変わらんではないか！」

「あら、心外ですこと。貴方のような、幼子の騒がしいデュエルと一緒にしないで頂きたいですわ。流れるように華やかに、優雅に、華麗に、美しく！それが私のプロとしての信条なのですから！私はシクランとプリムでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【六花聖ストレナエ】！」

―！

【六花聖ストレナエ】ランク４
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２０００

現れたのは可憐なる一片、ひらひらと舞う花の精霊。
鷹矢と同じく、エクシーズのＥｘ適正を持った雪霜　スノウの宣言によって粉雪と共に現れて…
そのまま、スノウに祝福を齎すようにしながら楽しそうに宙を舞い。戦意を駄々漏れにしている少年へと、クスクスと笑みを零していて。

「まだですわ！ストレナエの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、墓地から【六花絢爛】を手札に戻させていただきましょう。そして永続魔法、【六花の風花】を発動し…レベル８のスノードロップとヘレボラスでオーバーレイ！」

そして、止まらない―

現れては消え、消えては現れる美しき花の精たちが…互いにその手を取り合って、『薄氷の麗人』の宣言によって仲睦まじく舞い続ける。

それはまさに、秘園に咲いた百合の花。いや、寒冷地にて咲き誇る強さを秘めた、互いに咲き合う二輪の花とも例えられるだろう。

そして、そのまま大地に現れた銀河のエフェクトに向かって…

再び２輪の花の精たちが、その身を１つへと重ねその身を投じ始め…

「光り煌く雪のしずくよ！秘めたる想いをその胸に、静寂の中に咲き誇りなさい！」

雪霜　スノウの場に、現れしは―

「エクシーズ召喚！現れなさい、ランク８！【六花聖ティアドロップ】！」

―！

降臨せしは涙のしずく。美しきブーケを携えし、凍れる白き麗しの姫君。

…氷の結晶で出来た傘を広げ、微笑みながらこの場へと降り立ち。

主であるスノウによく似た微笑みと、まるで全てを慈しむかのような慈愛の眼差しを対戦相手へと向けながら。蒸気を纏う２体の機械兵の前で、ひらひらと軽やかに佇んでおり…

【六花聖ティアドロップ】ランク８
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２８００

「ランク８…」
「うふふ…美しいと思いませんこと？では行きますわよ、【六花聖ティアドロップ】のモンスター効果！オーバーレイユニットを一つ使い、フィールドのモンスター１体をリリースいたします！」
「くっ…また俺のモンスターをリリースするつもりか！」
「あら、早合点する男は頂けませんわね。私がリリースするのは貴方のモンスターではなく私の場の【六花聖ストレナエ】です！」
「何？自分のモンスターをリリースするだと…」
「うふふっ、ご安心を。勿論、それだけでは終わらせません！リリースされたストレナエの効果を発動！Ｅｘデッキから【六花聖カンザシ】を特殊召喚し、ストレナエをオーバーレイユニットにいたします！」
「ッ…ランク４がランク６に変化した…」
「まだですわ！モンスターがリリースされたため、ティアドロップの攻撃力はターン終了時まで２００ポイントアップいたします！そして『六花』がリリースされたため、永続魔法、【六花の風花】の効果も発動いたしましょう！貴方のモンスターをもう１体リリースいたします！さぁ、最後の【ギアギガントＸ】もリリースあそばせ？」
「ぬぅ…」

また、それだけでは終わらず。
次々と繰り出される展開の最中で、ついでのように鷹矢のモンスターを『リリース』という破壊ではない方法で除去しながら…トッププロである雪霜　スノウは、自分の花を咲かせ続けつつ鷹矢の場を壊滅的なまでに荒らしてみせたではないか。
『リリース』という除去を行えるカードは、この世界を探してもそう多くはない。それはつまり、『リリース』という破壊でも除外でもない強制除去はそれだけ希少なる効果でもあるということだし…そしてそ

れ以上に、『リリースされない』という耐性を持っているカードも、この世界にはそう多くはないと言う事もであるのだ。
無論、鷹矢の駆るモンスターがそんな耐性を備えているはずもなく…
いくら強固な耐性を備えていても、そんなものは花の精たちには通用しないのだと言わんばかりに。自分のモンスターが次々と勝手にリリースされていくその様は、心の弱い者ならば一種のトラウマすら植えつけられてしまいそうなほどに無慈悲なる、容赦のないプロの洗礼に違いない。
だからこそ、鷹矢も夏休みに釈迦堂　ランの駆る『壊獣』とのデュエルを経験していなければ。きっとこの無慈悲な光景に怒りを覚えていたに違いなく、だからこそ自分のモンスターが『リリース』されていくこの光景にも鷹矢がある種の落ち着きを見せられているのは、偏に鷹矢のこれまでの戦いの経験がプロにも引けを取らないと言う事でもあるのだろう。
それ故…

「ではバトルです！まずはティアドロップでダイレクト…」
「だがタダではやられん！罠発動、【一色即発】！手札からゴールドとイエロー、２体のガジェットを守備表示で特殊召喚！」

―！

【ゴールド・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／　８００
【イエロー・ガジェット】レベル４
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

そう、鷹矢もただではやられない。
相手は身震いすら覚えたトッププロ。そんな相手に、ただいつも通りの展開だけをしてターンを返すほど今の鷹矢には驕りはなく。

…相手ターンでも、一挙に展開することが出来る防御札。
様子を見るためだけの罠ではない。返しの守りを見据えての万能な札によって、鷹矢の場に一瞬の後に2体のモンスターが同時に現れて。

「そしてイエローの効果で、デッキからグリーンを手札に加える！」
「…でしょうね。史上初の高校生プロ、この程度で簡単にダメージを受けてくれるほど、素直で聞き分けの良いお子様だと思ってはいません。ではそのままティアドロップで【イエロー・ガジェット】へ攻撃！そしてカンザシで【ゴールド・ガジェット】へ攻撃いたします！」
「だが戦闘破壊されたゴールドの効果発動！デッキからシルバー・ガジェットを守備表示で特殊召喚！そしてシルバーの効果でグリーンも特殊召喚！レッドを手札に！」
「ではバトルフェイズを終了し、私は【強欲で貪欲な壷】を発動いたします。デッキを10枚裏側除外し2枚ドロー。カードを1枚伏せてターンエンドですわ。」

雪霜　スノウ　LP：4000
手札：6→2枚
場：【六花聖ティアドロップ】
【六花聖カンザシ】
魔法・罠：【六花の風花】、伏せ1枚
フィールド：【六花来々】

そうして…
鷹矢の抵抗に苛立ちを覚えるわけでもなく、驚きも感じていないことからこの程度の抵抗は最初から織り込み済みだった様子にてそのターンを終えたトッププロ、雪霜　スノウ。
…その落ち着き払った振る舞いは、まさに寒風に揺られてもなお美しさを損なわない根強い冬の花の如し。
淡々と…しかし悠々と。

最後まで美しい所作のまま、優雅にそのターンを終えるその佇まいからは終始余裕が感じ取れるではないか。
…これが、トッププロの立っている立ち位置なのか。
それは血気盛んな、恐い物知らずの若造に最前線の力を見せ付けるかのごとく…
どこまでも、精神的にも優位に立ち続けているかのようであり…

「俺のターン、ドロー！魔法カード、【貪欲な壷】発動！【ギアギガントX】２体、ゴールド、シルバー、レッド・ガジェットを戻して２枚ドロー！そして速攻魔法、【ツインツイスター】発動だ！手札を１枚捨て【六花来々】と伏せカードを破壊する！」
「でしたら破壊される前に罠カード、【六花深々】を発動いたします。【六花来々】の効果で【シルバー・ガジェット】をリリースし、墓地からスノードロップとプリムを守備表示で特殊召喚！」

【六花精スノードロップ】レベル８
ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／２６００
【六花精プリム】レベル４
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／１８００

「そしてモンスターがリリースされたため、ティアドロップの攻撃力が２００ポイントアップいたします。」
「それがどうした！【六花来々】は破壊される！俺は【シルバー・ガジェット】を通常召喚し、その効果でレッドも特殊召喚しイエローを手札に！そのままシルバーとレッド、２体のガジェットでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク４！【竜巻竜】！」

―！

【竜巻竜】ランク４
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／２０００

しかし、再びターンが移り変わってすぐさま。
一瞬で激しい応酬が繰り広げられたかと思うと、余裕すら見せるトッププロ相手に…鷹矢は暴風の化身たる一体の竜を呼び出した。
そう…
終始精神的余裕を見せる、自他共に認めるトッププロ相手に。一介の高校生が一歩も恐れることなく自らの力を証明するかのようにして立ち向かい続けているのだ。
それはこの場にいるスタッフも、受験者たちも、そして下位のプロ達もメディアの人間達も…更にはＴＶこの中継を見ている者たちの目にすらも、確かなる事実として映りこんでいるはず。
…相手は世界ランク１１位のトッププロ、『薄氷の麗人』。そんな雲の上の存在に、一介の高校２年生である学生が真正面から慄く事なくぶつかり合い応酬している。
果たして…
世間を騒がせ続ける【黒翼】の孫に、いまだ懐疑的な意見を述べている者達はトッププロとの応酬を目の当たりにして一体何を思うのだろう。
そんな、自分の力を未だに疑問視している輩へと見せ付けるかのようにして…
鷹矢は、更にそのデュエルを加速し続けるのみ。

「トルネード…サイクロン内蔵のエクシーズモンスターですか。」
「ゆくぞ、【竜巻竜】の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、【六花の風花】を破壊する！そして罠カード、【戦線復帰】発動だ！墓地から【ゴールド・ガジェット】を守備表示で特殊召喚し、その効果でイエローも特殊召喚！グリーンを手札に！」
「…本当、止まらない子ですこと。まるで生き急いでいるみたい。何をそんなに焦っているのかしら。」
「焦りもする！俺には時間がないのだ…命を賭けて強くなり続けるアイツの隣に立ち続けるために、俺も生き急いででも！何が何でも強く

なり続けなければならんのだ！」
「…意味がわかりませんわ。」
「理解などされなくて良い！【強欲で貪欲な壷】を発動！デッキを１０枚裏側除外し２枚ドロー！そしてレベル４のゴールドとグリーン、２体のガジェットでオーバーレイ！」

天宮寺　鷹矢は、止まらない。
最前線で戦うトッププロを相手に、全く慄かずに立ち向かい続ける鷹矢の姿は本当に彼がまだ高校２年生であるのかと疑ってしまうほどに…
それほどまでに、この場に集まった同じ年代の受験生たちの目からしても、この天宮寺　鷹矢という男は規格外として映っているのではないだろうか。
…普通であれば、学生がトッププロと戦うなんてとても正気じゃいられない。
それこそ、どんな学生だってきっとこの場面に置かれれば誰だって緊張と動悸でとてもデュエルどこじゃないはず。
そうだと言うのに、鷹矢は勝負を諦めないどころか更にその意思を加速させながら。一体何を欲しているのか、まるで自らを追い込んでいるかの様に今高らかにその手を天へと掲げ―
「俺の力、俺だけの力、『Ｎｏ．』よ！今この時、この瞬間に…あの女をも超える力となれ！俺は２体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築！」

…オーバーレイネットワークを、構築。

それはこの世界のエクシーズ召喚の為のモノではない、およそこの世界においては彼だけに許されたそのキーワード。
トッププロなんかに怯えている暇など無い。自分の道筋を邪魔する者達を、一人残らず黙らせるほどの圧倒的な『力』を鷹矢はただた

だひたすらに欲し…
求むは『力』。どれだけの逆境に置かれてもなお、ソレに抗うかのように強くなり続ける相方の様に。
望むは『実(まこと)』。常に進化を続け強くなり続ける片割れの隣に、対等に立ち続ける為に。
他者からの常識的な言葉などに、耳を傾けている暇など無いのだと言わんばかりの猛りを持ってして…今、鷹矢のモンスターが、銀河の渦で弾けて重なる。

『Ｎｏ．』…

それはまさしく、現時点ではイースト校の２年生、【黒翼】の孫である天宮寺　鷹矢しか持ち得ない彼だけに許された特別なカード。
呼び出されるカードは、世間の誰もが全く見た事も聞いた事もないような強力な効果を持ったエクシーズモンスター達ばかり。昨年度の【決闘祭】での『Ｎｏ．８０』の創造に始まり、これまで色々な『数字』を持った彼だけのエクシーズモンスター…いや、モンスターエクシーズを、鷹矢は召喚し続けてきた。

…それはこれまでも、そしてこれからもそう。

だからこそ、天宮寺　鷹矢は疑わない。
自らにのみ許された特別なカード。特異な力と数字を持った『Ｎｏ．』こそ、強敵に立ち向かう為に自らの思いに応える自分だけの『力』。
自分自身が従えている、特別な『力』なのだ…と。

しかし…

「…『俺だけの力』…うふふ、本当にそうかしら。」

ぼそりと…
雪霜　スノウがそう呟いた声が、鷹矢に聞こえるはずもなく―

そして―

「来い、『Ｎｏ．１０３』！」

頼るように、ではない。求むように、でもない。
自分の我が侭を、無理やり押し付けるかのように。Ｅｘデッキにて眠りについている、白紙の『Ｎｏ．』に出番が来たのだと叩き起こすかのようにして宣言を行い始めた天宮寺　鷹矢。
…それはトッププロと言う恰好の強敵に対し、出し惜しみなどするつもりも無いのだという逸る轟き。
そのまま、何かに導かれるようにして。
今ここに、鷹矢は高らかにその宣言を天へと奮わせ―

「風花をも葬る薄氷の刃！驕り者よ、己の罪でその身を滅ぼせ！」

自分のやるべき事のために、ただひたすらに求める強さ。
鷹矢の叫びに応え、鷹矢の魂を映しだし、鷹矢の力を具現化し…
―弾ける銀河と共に、この場に現れるは…

「エクシーズ召喚！現れろ、ランク４！【Ｎｏ．１０３　神葬零嬢ラグナ・ゼロ】！」

―！

【Ｎｏ．１０３　神葬零嬢ラグナ・ゼロ】ランク４
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１２００

現れたのは妖しき凍てつき、儚げな凍気を纏う令嬢。
…それは過去に一度、鷹矢が釈迦堂　ランとの戦いにおいて紅蓮に対抗する為に呼び出したことのある既知なる姿の一体であり…
けれども、呼び出してみるまで何が出てくるか分からない、この『Ｎｏ．』というカードにおいては。その時の鷹矢の叫びに応じた存在が姿形を持つために、こうして一度呼び出したことのある『Ｎｏ．』が再び呼応して現れる事もままあるのだ。
そのあまりに透明感のある立ち振る舞いは、猛る鷹矢とは正反対なモノではあれど…
鷹矢の闘気に呼応して、その凍気を更に強大なモノへと変えていく。

「ッ、う、美しいですわ！こんな『Ｎｏ．』も居ましたの!?」
「む？隙を見せたな！そこを逃さん！【エクシーズ・ギフト】発動！【竜巻竜】と『Ｎｏ．１０３』のオーバーレイユニットを１つずつ使い２枚ドロー！そして『Ｎｏ．１０３』の効果発動！オーバーレイユニットを１つ使い、攻撃力の変化しているティアドロップを破壊し１枚ドローする！」

また…
現れた『Ｎｏ．１０３』をみて、何やら感情に起伏を見せた『薄氷の麗人』、雪霜　スノウ。
そう、よほど『美』への拘りがあるのか、その美的センサーに反応

した『Ｎｏ．１０３』に対し。見惚れるような目線と共に、彼女は思わず驚いた様な声を上げたのだ。
だからこそ、その一瞬の感情の起伏を、鷹矢は見逃さなかった。
即座に、かつ迅速に。
巡ってきた機会を逃さんとして、鷹矢は『Ｎｏ．１０３』へと命令を下し…
「氷の花をも凍てつかせろ、インフィニティ・ブリザー…」

しかし…

「あら、心外ですこと。隙なんてありません！墓地の【六花のしらひめ】のモンスター効果！しらひめをデッキに戻し、プリムをリリースし『Ｎｏ．１０３』の効果を無効にいたします！」
「何!?」

それでも、『薄氷の麗人』は簡単には崩れず。
『Ｎｏ．１０３』に見惚れてはいても、さすがはトッププロとして最低限の注意を怠ってはいない様子にて…いや、それとも鷹矢が行動する直前に発動した【エクシーズ・ギフト】のタイムラグにて反応できたのか、彼女の墓地より小さく白い花弁が舞い上がったかと思われたその刹那…
その動きに呼応して、小さき白い姫が微笑みと共に現れたかと思うと。凍てつく吹雪を放とうとした、『Ｎｏ．１０３』の前に立ち塞がり始めたではないか。
…そして、消えて行く小さな花弁の可憐なる精霊。
残された場には、吹雪を炸裂させられなかった『Ｎｏ．１０３』が静かに粛々と取り残されてしまっていて。

「ぬぅ…」
「うふふ、『Ｎｏ．１０３』…美しいカードですこと。気に入りましたわ。なのでティアドロップの攻撃力が２００アップした後、そのままティアドロップの効果を発動いたしましょう。オーバーレイユニットを一つ使い『Ｎｏ．１０３』をリリースいたします。」
「ッ、またリリースか…」
「まだですわ。ティアドロップの攻撃力が更に２００アップし、モンスターがリリースされたこの瞬間、私は【六花聖カンザシ】のモンスター効果を発動いたします！オーバーレイユニットを一つ使い、貴方の墓地からその美しい『Ｎｏ．１０３』を私の場に特殊召喚いたしましょう！」
「なんだと!?」

…また、それだけでは終わらず。
何と、たった今リリースされてしまった鷹矢の『Ｎｏ．１０３』が…
深緑の蔦を纏いながら、雪霜　スノウの場へと現れてしまって―

【Ｎｏ．１０３　神葬零嬢ラグナ・ゼロ】ランク４
ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１２００

「この効果で特殊召喚したモンスターは植物族になります。美しいカードは、美しい私の場でのみ輝きを増すの。そうでしょう？」
「ぐっ…貴様、よく自分のことを美しいなどと自惚れられるものだな…」
「うふふっ、私は自覚ある美女ですの。この美しさは誤魔化せるものではありませんので…貴方もそう思いませんこと？いいえ、お思いあそばせ？」
「…」

屈辱…

モンスターを次々とリリースされるだけでは飽き足らず、あまつさえ自分だけの『力』である『Ｎｏ．』のカードすらも奪い去ってしまわれた鷹矢の心情はこれいかに。

いや、察せずともハッキリしている。そう、スノウの零す戯言はさておき、鷹矢の表情はあくまでもいつもの鉄仮面ではあるものの、しかし微かに眉間に力が入っているその様子と、そして苦虫を噛み潰したかのようなその小さき呻きが鷹矢の感情を表しているのだから。

…きっと、腸が煮えくり返るほどの怒りが沸きあがっているに違いない。

それが容易に想像できてしまうほどに、今の鷹矢の体には怒りによる瞬間的な熱さが漏れ出している。けれどもソレは、それだけ鷹矢が自分の生み出した力に誇りを…『自分だけの力』に、プライドを持っていると言うことでもあるのだろう。

だからこそ…

「さっきからわけのわからんことをゴチャゴチャと…だがソレは俺のカードだ！『Ｎｏ．』は返してもらうぞ！【モンスター・スロット】発動！レベル４のイエローを選択し、墓地の【ブリキンギョ】を除外し１枚ドロー！…うむ！俺がドローしたのはレベル４の【穿孔重機ドリルジャンボ】！そのままドリルジャンボを特殊召喚する！」

「あら、まだ動けましたの…またレベル４のモンスターが２体…」

「俺を舐め腐る貴様にもう容赦はせん！この俺の全力を持って…何がなんでも、貴様を叩く！レベル４のモンスター２体で、オーバーレイ！」

だからこそ、今こそ怒りの思うままに。

今声高らかに、鷹矢はその手を天へと勇ましく掲げ始めるのか。

偶発性の高い魔法を使用してもなお、それでも鷹矢の場に現れるはいつものようにレベル４のモンスター。それはまるで、レベル４のモ

ンスターを揃える事など『どんな事』よりも簡単なのだと言わんばかりに…
そう、叫ばれしその宣言には、少しの迷いも淀みもなく。
今、エクシーズ名家、天宮寺一族…その筆頭である祖父、王者【黒翼】に倣うかのように。
鷹矢は、その手を天に掲げ―

「天音に羽ばたく黒翼よ！神威を貫く牙となれぇ！」

世界に轟くその口上。祖父より受け継ぎしそのカード。
レベル４を多用する、鷹矢のデュエルを飾るまさに『切り札』。
覇道を突き進む己のデュエルの、『砦』となるべく存在をここに呼び出すために…
スタジアムに木霊する鷹矢の叫びが、中継を通じて全世界へと響き渡るその時。ソレは果て無き頂の上から、『薄氷の麗人』の首を狙い今この場へと降り立つのか。

「エクシーズ召喚！来い、ランク４！」

【決闘祭】にて覚醒し、それから数々の戦いにてその牙を研ぎ続けた大いなる存在。
もう既に、天宮寺　鷹矢の象徴とも言える世界の頂点の一角…
今ここに、現れる―

「【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】！」

―！

【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

天に羽ばたく雄雄しき翼と、神をも切り裂く鋭き牙がスタジアムにて輝いて。
その振る舞いは王の風格。全世界に知られた『王者』の名に相応しき咆哮にて、担い手として認めし天宮寺　鷹矢の場でもソレは荒々しくも吼えるのか。
正真正銘『歴戦』の牙竜。天に轟く黒き叫びを、今戦場へと轟かせ…
自他共に認めるトッププロ、世界ランク１１位の『薄氷の麗人』を前にしても慄かず。ただただ得物の首を狙い、猛々しく羽ばたき始める。

「【黒翼】…実物をこの目で見るのは初めてですわ。…中々やりますわね、あそこから更に動いて【黒翼】を呼び出すとは。」
「容赦はせん！ゆくぞ、ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイユニットを２つ使い、ディアドロップの攻撃力を半分にし…その数値分、ダーク・リベリオンの攻撃力をアップさせる！喰らい尽くせ、紫電吸雷！」

―！

【六花聖ティアドロップ】ランク８
ＡＴＫ／３４００→１７００
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】ランク４
ＡＴＫ／２５００→４２００

そして…
猛々しく吼える【黒翼】が、その黒き両翼を広げ紫電の網雷を迸らせるとき。
この場で最も攻撃力の高いスノウのエース…『六花聖ティアドロップ』がソレに捕まってしまい、緊縛と言うにも生易しいほどに縛り上げられ。無慈悲に、そして生々しく。その花弁が、儚く傷つけられていくではないか。
…そうして、迸る紫電によって成す術なく攻撃力が半減されていく涙のしずく。
それは例えソリッド・ヴィジョンの映像であったとしても、一見すればあまりにも見難い残酷な光景にも見えたことだろう。何しろ漆黒に染まりし牙の竜が、美麗なる雪の女王に対し決して弱くない雷撃を浴びせ続け縛り上げているのだから。
しかし、目の前の相手が決して手加減など出来る相手ではない事を、これまでの攻防にてよく理解した鷹矢はそんな残酷な光景にも全く動じる事も無く。
ただただ逸るかのように、続けて攻撃を命じるのみであり―

「ッ…攻撃力４２００…」
「よし、バトルだ！【竜巻竜】で【六花聖ティアドロップ】に！そしてダーク・リベリオンで、『Ｎｏ．１０３』に攻撃！」

弾ける…
まずは暴風纏いし竜巻の竜が、攻撃力の半減した涙のしずくを容赦なく蹴散らし吹き飛ばす。
それは災害に巻き込まれた小さな花が、抵抗空しく空に飛ばされ圧力にてバラバラに千切られてしまう光景にも似ていたに違いなく…
けれども、それだけでは終わらず。
例えこのデュエルを見ている観客達が、先のディアドロップが破壊される光景に小さい悲鳴や怪訝な声を漏らしたとしても。
それでも、全く動じていない鷹矢は更に続けて己の切り札へと攻撃

を命じるだけなのだから。
「腑抜けた『Ｎｏ．』を叩っ斬れ！斬魔黒刃、ニルヴァー…ストライイイイイイイイクッ！」
―！
「くぅっ…」
雪霜　スノウ　ＬＰ：４０００→３６００→１８００
そうして…
奪われた『Ｎｏ．』諸共、怒りの刃にて強烈な攻撃を叩き込み。
自他共に認めるトッププロ、世界ランク１１位の『薄氷の麗人』…雪霜　スノウに決してもなお、決して少なくないダメージを叩き出しながら。
「うむ！バトルフェイズを終了し、２枚目の【貪欲な壷】を発動。『Ｎｏ．１０３』、ゴールド、シルバー、グリーン、レッド・ガジェットを戻して２枚ドローする！」
「あら…『Ｎｏ．１０３』がＥｘデッキに戻されてしまいましたわ。残念…」
「もう取られるわけにはいかんからな。俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ。」
いや、寧ろ鷹矢が大きな先制ダメージを与えた事に、受験生たちも観客達も、そしてスタッフ達もこのデュエルを見ている一般人達も、その誰もが驚きの声を上げている中で…
今、鷹矢は堂々とそのターンを終えるのだった。

鷹矢　ＬＰ：４０００
手札：４→３枚
場：【竜巻竜】
【ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン】
伏せ：１枚

「…私のターン、ドロー。私も【貪欲な壷】を発動いたします。ヘレボラス、シクラン、プリム、ストレナエ、そしてティアドロップをデッキに戻して２枚ドロー。さて…どうしたものかしら。」

すると、ターンが移り変わったと言うのに。
先ほどまでの余裕から一転、何やら考え込むようにしてその手を止めてしまった『薄氷の麗人』、雪霜　スノウ。

「止まらない後続に減らない手札…展開力も対応力も、とても高校生のレベルではありませんわね。確かに…お噂に違わないかと。新堂君ほどではないしにしろ、私が高校生だった頃より格段に強いですわ。本当、末恐ろしいこと…ですわね。」
「む？」

その漏れ出す言葉はプロの賛辞。それも最前線で戦っているトッププロが漏らした、およそ一介の高校生にはあまりも勿体無いであろう強者からの賛辞と賛美。
トッププロからの賛辞…もしソレを受けたのが鷹矢以外の高校生であったならば、そのリップサービスにまず間違いなく舞い上がってしまっていることだろう。
しかし、ソレを聞いてもなお鷹矢は怪訝そうな声を漏らすだけ。そう、目の前の美しい対戦相手の容姿に惑わされることもなく。『何を企んでいるのか』が、鷹矢には気になっている様子なのだから…
猫に小判か、豚に真珠か。それともトッププロであろうとも、ソレを全く光栄とも思っていない恐い物知らずが成せる強すぎる我が鷹

矢をそうさせているのだろうか。
また、これまでの攻防にて、鷹矢が並の高校生などではないことを『薄氷の麗人』も強く理解したであろうからこそ…
彼女もまた、一体何を考えて言葉を漏らしているのだろうか。プロからの賛辞を全く喜んでもいない、常識知らずかつ常識外れの時期高校生プロに対し…
再び、先ほどよりも1トーン低い、力を込めている強者の声を発しながら。
そのまま、何か手順を確認するかのようにして…

「ですが、少々はしゃぎ過ぎでもあります。綿貫さんからも『灸を据えてやれ』と言われていますし…普通にデュエルするよりも…やはり、どこまでも折れない貴方に灸を据えるには、綿貫さんの言った通り『アレ』を使うしかないのかしら。」
「何を企んでいる…だが、例え何が来ようと関係な…」
「うふふ、果たしてそうかしら。」
「…」

何やら、『あえて』スノウはプロとして鷹矢へと『何か』を行おうとしているようであり―

「では…参りますわ！私は【テラ・フォーミング】を発動し、デッキから【六花来々】を手札に加えそのまま発動いたしますわ！更に魔法カード、【六花絢爛】を発動！」
「くっ、また俺のモンスターをリリースする気か！」
「うふふ、ご名答。私は【竜巻竜】をリリースし、デッキから【六花精プリム】と【六花精のしらひめ】を手札に！」
「ッ…ダーク・リベリオンではなく、竜巻竜をリリースするだと？」
「えぇ、まぁ。別に、どっちでもよかったのですけれど…うふふ、どうせなら、と思いまして。それでは続けて、【ローンファイア・ブロッサム】を召喚しその効果を発動！自身をリリースし、デッキから【イー

ビル・ソーン】を特殊召喚いたします！」
「【イービル・ソーン】…それは確か遊良の奴が使っていた…」
「あら、ご存知でしたの。だったらその効果も当然知っていますわよね？【イービル・ソーン】の効果発動！自身をリリースすることで、デッキから【イービル・ソーン】２体を特殊召喚いたします！その後、貴方に３００ポイントのダメージを！」

【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００
【イービル・ソーン】レベル１
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００

鷹矢　ＬＰ：４０００→３７００

そして燃える蕾から連続特殊召喚の後に現れるは、弾ける小さな黒き蕾。
【決島】の時に遊良も使用していたために、鷹矢も見慣れたそれが数個…雪霜　スノウの場に、満を持して現れる。
そして、弾け飛んできた種子が鷹矢へと小さく傷をつけたものの…けれども、たった３００のダメージ。その程度のダメージで怯むはずも無い鷹矢が、少々強きに言葉を返して。

「ふん、今更この程度のダメージなど痛くも痒くもな…」
「ええ、ですがこれからですわ！モンスターがリリースされたため、プリムを自身の効果により守備表示で特殊召喚することができます！そして私は【六花精スノードロップ】の効果を発動！【イービル・ソーン】２体とプリムのレベルを、スノードロップと同じ８に変更いたしましょう！」

【イービル・ソーン】レベル１→８
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００

【イービル・ソーン】レベル1→8
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００
【六花精プリム】レベル4→8
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／１８００

しかし、雪霜　スノウとてソレで止まるわけもなく。
先ほどの短い熟考にて思い浮かべた手順をなぞる様にして、スノウの場には次々と小さき花たちが現れ始めるのか。
…そうして揃い踏むのは、レベル８となった植物族モンスター達。
一瞬で場を埋めるほどの植物族達がスノウの場に勢揃いするその光景は、植物族という展開にも秀でている種族の恩恵でもあるのだろうが…それ以上に雪霜　スノウという、プロの最前線で戦うデュエリストの地力が高いことの証明でもあるはずであり…

「レベル８のモンスターが４体…」

…だからこそ、スノウの呼び出したモンスターを見て。
鷹矢が小さくそう漏らしたのも、当然と言えば当然と言えるはず。
何しろ、鷹矢もまたスノウと同じく『エクシーズ』のＥｘ適正を持っているからこそのその勘。
同種から感じる展開の予測、同類だからこそ感じ取れる危機の察知。同じレベルのモンスターが揃ったその光景を一目見れば、これより彼女が行おうとしている展開が鷹矢にだって読めているのだろう。
…そして、ソレはスノウにだって分かっている。
目の前の高校生が、これから先の自分の展開を見据え構え直しているのと同時に…しかし先のターンにも似た展開を見せられたために、それに身構えてはいないのだ、と言う事を。
けれども…

「さて…では始めましょうか！コレを見れば、少なくとも貴方は平気ではいられないはず…私はレベル８となったイービル・ソーン２体で

…オーバーレイ！」

それでもなお雪霜　スノウは、これより行おうとしている自分の行動に対し。確信にも似た自信を揺るがなきモノとしながら、更にその戦意を上げていくだけ。

それはまるで、この場にいる他の誰も知り得ないことを…彼女だけは全て知っているかのような意地悪な微笑みとなりて、どこまでもどこまでも鷹矢へと向かって悦を感じながら昂ぶるのか。

鷹矢が自分を恐れていないことすら意に介さず。寧ろ、驚くのはこれからなのだと言わんばかりに…

鷹矢に『何か』を与えんとして、雪霜　スノウは今高らかに―

そして―

「現れなさい！『Ｎｏ．２３』！」

「なッ!?」

雪霜　スノウから放たれた言葉…

それは誰の耳にも信じられない、衝撃的な宣言であった―

…だってそうだろう。

何しろソレは、今までこの場にて彼女に対峙している時期高校生プロ、【黒翼】の孫である天才、天宮寺　鷹矢からのみ放たれる宣言のはず。

そうだと言うのに、まさかソレが鷹矢ではないデュエリストから放たれるだなんて。一体全体、誰が想像できたと言うのか。

…完全に予想の範囲外、完璧に予測の範疇外。しかし、その現実を今ここに打ち破り…今、この女は『何』と言ったのだろう。

鷹矢の耳が確かならば、『薄氷の麗人』はまず間違いなくこう言ったはずだ。

『Ｎｏ．』…と。

「き…貴様！い、今何と言った!?ナ、『Ｎｏ．』だと!?」

「ええ、その通りです。さぁ、その目を見開き、しかと見据え、驚きあそばせ！この、エクシーズモンスターを！」

しかし、鷹矢の驚きを全くもって意に介さず。

そしてざわめく観客達の度肝を抜き続けながら、ただただ己の宣言の通りに…

スノウは、当たり前のようにしてその宣言を続けるだけで―

「冥界の扉を守護する騎士よ、精魂尽き果てるその時まで…全ての敵を切り伏せなさい！」

…スノウの足元に生まれし銀河の渦へと吸い込まれていく、レベル

８となった２体の小さき黒い種子。
そしてそれ以上に放たれるは、かつて【決島】にて天宮寺　鷹矢が彼女の宣言した…
『Ｎｏ．２３』を呼び出す為にこの世界に解き放った、あの叫ばれし召喚口上と全く同じ、同様の代物。

今、光が弾けると共に…

「エクシーズ召喚！さぁ、現れて！」

彼女の場に、呼び出されしは間違いなく―

「ランク８！【Ｎｏ．２３冥界の霊騎士ランスロット】！

―！

【Ｎｏ．２３冥界の霊騎士ランスロット】ランク８
ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

…顕現せしは揺れ動く怨魂、守護の念に駆られた魂の騎士。
それはその腹部に、『Ｎｏ．』の証である数字…『２３』の罪を刻みこんだ、儚く佇む霊騎士に瓜二つのエクシーズモンスター。
…その姿は紛れもなく本物。
かつて鷹矢が【決島】にて確かに一度呼び出した、禍々しいまでの雰囲気を醸しだす魂の騎士が今不気味に宙に浮かび…

「なっ!?ば、馬鹿な…こ、これは…この感じは、本物の…?」

そして…

驚きにざわめき、どよめいている観客達を他所に…鷹矢には、『わかって』、しまった。

そう、過去にＴＶ中継の前で堂々と鷹矢が呼び出していた、あの『Ｎｏ．２３』と瓜二つの姿にて降臨したソレは間違いなく―

『Ｎｏ．』のオリジナルを持つ鷹矢の目からしても、即座に否定する事が出来ない程に『本物』としか思えない程の存在である…と、言う事を。

鷹矢はしかと覚えている…

かつて自分がこの『Ｎｏ．２３』を呼び出したデュエル…【決島】の予選時の最後に行ったあのデュエルを。

忘れられるわけがない。決闘学園ウエスト校の竜胆　ミズチとのあの戦い…自身が『ランク４』以外の『Ｎｏ．』を出すキッカケと踏ん切りと、そして確信を得ると同時にミズチの顔と名前を覚えるに到ったあのデュエルを、鷹矢は決して忘れてはいないのだから。

だからこそ、鷹矢にはわかってしまったのだ。

このデュエルを見ている誰にも理解出来ないこと。鷹矢以外には絶対に理解出来ないこと。

そう、世界ランク１１位、『薄氷の麗人』、雪霜　スノウの呼び出したこの【Ｎｏ．２３　冥界の霊騎士ランスロット】…

自分が呼び出したモノではないこの冥界を守護する鎧騎士もまた、紛れもなく自分の持っているオリジナルとその存在を『同じく』している、正真正銘の『Ｎｏ．』であると言う事を…

他ならぬ誰でもない、『Ｎｏ．』のオリジナルを持っている鷹矢だからこそ嫌でも理解してしまったのだ。

…それは『Ｎｏ．』のオリジナルを持っている鷹矢だけが感じられるであろう微細な感覚。

きっと、他の誰でも分かるはずが無い。なぜソレが分かるのかと問われても、『何故か分かる』としか言い様のない感覚が確かに鷹矢へと教えてしまう…目の前の冥界の霊騎士が、『本物のＮｏ．２３』であると言う事を、鷹矢へとひしひしと伝えてきてしまう。

そう、スノウの召喚したこの【Ｎｏ．２３　冥界の霊騎士ランスロット】…

感じられる雰囲気、気配、吐息、圧…

そしてその魂までもが、自身がかつてこの世界にたった１度だけ呼びだした『ソレ』と、全く同じ存在であると言う事を、『Ｎｏ．』のオリジナルを持つ、オリジナルを駆る鷹矢だけはどうしても理解してしまうのだろう。

「なぜ…貴様のような奴が、『Ｎｏ．』を…」

それ故、鷹矢は聞かずにはいられない。

…自分以外の者が『Ｎｏ．』を呼び出したこともそう。

…自分以外の場に、『Ｎｏ．』が現れたこともそう―

一体、どうして自分の敵のフィールドに『Ｎｏ．』が召喚されたのか。鷹矢が心から驚いているからこそ、それが鷹矢には心からショックを感じてしまう出来事なのだ。

そう、鷹矢しか持っていない『Ｎｏ．』のカードを、一体どうして一介のプロデュエリストに過ぎない雪霜　スノウが持っているというのだろうか。

この世で自分だけが持つ特別なカード、自分だけに与えられ勝ち取った誇りある自分自身の特別な力。

その、『自分だけ』のはずの力の一端が目の前に現れたことが、どうしても鷹矢には納得が行かず…

しかし…

「何故…何故ですって？あなたこそ、何時まで調子に乗っているつも

りなの！あなたが造った『Ｎｏ．』は、もうあなただけのモノではありませんのよ!?」
「な…なん…だと？」
「貴方が『Ｎｏ．』を初めて創造してから約1年…その間に、随分と色々な『Ｎｏ．』を創造し続けていたようですわね。けれど、一度この世に現れ世間の目に触れたカードが、いつまでも貴方だけの傍にいると本気で思っているのかしら。」
「そ、それはどういう意味だ！俺が聞いているのは、一体どうして貴様が『Ｎｏ．』を持っているのかと言う事だぞ！『Ｎｏ．』のオリジナルは俺が持っている…だと言うのに、俺以外の者がどうして『Ｎｏ．』を…」
「まだ分かりませんの？これまで貴方が創造してきた『Ｎｏ．』は、既に『量産化』され始めているのですわ！」
「なっ!?」

そんな鷹矢を意に介さず。
雪霜　スノウから放たれた言葉は、鷹矢の心臓を大きく跳ね上げさせるほどの衝撃を纏いて鷹矢へと襲いかかってきたではないか―
『量産』…
それは『Ｎｏ．』という、世界に1枚だけの『力』を自負していた鷹矢にとってはどれだけの衝撃であったのだろう。
だってそうだろう…自分自身が生み出した、この世界にて『自分だけ』が持っていると自負していた特別なカードが、まさか自分の知らない場所で勝手に『量産』され見知らぬ他人が使うかもしれないと言う事など、ソレは例え鷹矢でなかったとしても良い思いはしないはず。
けれども、雪霜　スノウはあくまでもソレは当然なのだと言わんばかりの剣幕のまま。
あっけにとられている鷹矢へと向かって、更に言葉を続けるだけで…

「私が召喚したこの『Ｎｏ．２３』も、量産化計画の先駆けとして試作されたカードの一枚。プロとして、私がテスターを勤めているだけですわ。」
「りょ、量産…馬鹿な…な、何を勝手にそんな事をしている！俺の許可もなく、何故俺のカードを他人が勝手に…」
「あら、お勉強不足ではありませんこと？これは決闘法にキチンと明記されている事だと言うのに。確かに、デュエルディスクが『創造』したカードの所有権は創造したデュエリストにあります。しかしこの世にない全く新たなカードが初めて創造された場合、ソレは【決闘世界】の審議の元…解析と試作の後に『量産』する権利が【決闘世界】に生まれるのです。でなければ、新カードの独占によりデュエリストのバランスが崩れてしまいますもの。まぁ、流通数は始めは微々たるモノでしょうけれど…うふふ、カードデザイナーの皆様は『Ｎｏ．』に興味深々でしたわ。彼らの手にかかれば、『Ｎｏ．』とて一般流通までそう時間はかからないことでしょう。ご理解なさって？」
「くっ…」

そう、雪霜　スノウの言った通り。
カードデザイナーたちが『作成』した新カードとは違い、デュエルディスクとデュエリストがデュエルの最中にて『創造』したこの世における全く新しいカードと言うモノは、確かに創造を行ったデュエリストのモノであるコトに違いないのだろうが…
けれども、それは別の言い方をすれば。この世界の誰も知らない全く新しいカードと言うモノは、『決闘界』においても貴重なる財産でもあるのだ。
ソレ故、現代では超巨大決闘者育成機関と名乗る組織『決闘世界』は、この世界に『稀』に現れる創造されし新カードについても法を定めて細かく管理・監視を行っている。
その一部はたった今スノウが言った通り。新カードを解析し、ソレが決闘界に『悪影響』を与えないカード…ひいては、大勢のデュエリスト達の為になるモノだと判断された時。創造されし新カードは、

『決闘世界』の管理の下で量産され世間に流通し始めると言っても過言ではなく…

…まぁ、世の中には複製不可に認定されているカードや、王家にのみ献上されたカード…その他にも製作コストが高すぎるカードだったり、かの『逆鱗』の持つ『征竜』などの決闘法によって使用者が限られていたりするカードと言った、その他にも色々と特別な事情などで『量産できないカード』も、この世界には多々あるとは言え。

…それでもこの世界には、プロデュエリストと同じくらいの重要度を誇るカードデザイナーと呼ばれる人種が存在している。

それはプロデュエリストとは別ベクトルの天才たちの集団でもあり、そんな別枠の天才たちと企業という後ろ盾の手にかかれば、きっと鷹矢がこれまで呼び出した『Ｎｏ．』の悉くは丸裸にされているはず。

だからこそ、今こうして鷹矢の『Ｎｏ．』を他人である雪霜　スノウが召喚したと言う事は、つまりはカードデザイナーたちの手により量産化までは『秒読み』と言った所か。

…また、雪霜　スノウの言い分から、量産されているのはきっと『Ｎｏ．２３』だけでは断じてないはず。

それは【決闘祭】で初めてその存在が確認された、この世に始めて現れた『Ｎｏ．８０』もきっとそう。

それだけではない。【決島】の予選で使っていた『Ｎｏ．５２』や『Ｎｏ．７０』、『Ｎｏ．４４』、『Ｎｏ．５４』もその例外ではないはずであり、更には鍛冶上　刀利との戦いで見せた『Ｎｏ．１０』や『Ｎｏ．３８』も当然の事ながら、遊良との決勝戦で使用した『Ｎｏ．６１』や『Ｎｏ．６０』も、既にカードデザイナーの協力の元で量産化に向けて開発が進められている恐れがある。

…とは言え、過去に鷹矢が一度召喚した事のある『Ｎｏ．１０３』をスノウが知らなかった辺り、量産化され始めているのはおそらく鷹矢が公の場のデュエル…『公式戦』にて呼び出した『Ｎｏ．』だけなのだろうが…

「うふふ…美しい『Ｎｏ．１０３』も、量産された暁には私の手に来ることでしょう。いいえ、試作カードのテスターは絶対に私が務めて見せますわ。私の為に、こんなにも美しい『Ｎｏ．』を創造してくださり感謝いたします。」
「ぬぅ…」

そうとは言えども、鷹矢は『Ｎｏ．１０３』を公の場で呼び出してしまった。
それ故、一縷の例外もなく…『Ｎｏ．１０３』も、今この瞬間からカードデザイナーや研究者たちによる解析が始まり、時期に量産される手筈となるはずで―

「…あら、余程ショックだったようですわね。ですが…驚くのはまだ早いですわ！続けて私はレベル８のスノードロップとプリムでオーバーレイ！さぁ…現れなさい！『Ｎｏ．３８』！」
「ッ!?」

しかし、見るからにショックを受けている鷹矢へと間髪居れず。
続けざまに、そして畳み掛けるように…
『薄氷の麗人』のその麗しく美しき小さな口から、再び『ありえない宣言』が声高らかに飛びだして。

「希望を齎す銀河の竜よ！遥か星雲の彼方から…光纏いて降臨なさい！エクシーズ召喚！お出でなさい、ランク８！【Ｎｏ．３８　希望魁竜タイタニック・ギャラクシー】」

―！

【Ｎｏ．３８　希望魁竜タイタニック・ギャラクシー】ランク８
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００

現れたのは弾ける銀河、希望の欠片の神々しき宙の竜に瓜二つの…
いや、その存在感から察するに、鷹矢が召喚したソレと全くの同一の存在であるモンスターが、再びスノウの場に現れて。
そう、それは鷹矢だからこそどうしても理解出来てしまうこと。
今この場に現れたこの『Ｎｏ．３８』もまた、先に召喚された『Ｎｏ．２３』と同じように…
紛れもなく、鷹矢の手を離れた『本物』の『Ｎｏ．』なのであって―

「馬鹿なっ！今度は『Ｎｏ．３８』!?『Ｎｏ．』が２体…だと？」

信じられない…
信じられる、わけがない。
自分以外が『Ｎｏ．』を呼び出したことだけでもありえない光景であると言うのに、あろうことかソレが２体…『Ｎｏ．』が２体も、自分の目の前に召喚されることなど。
…きっと、今の鷹矢の心にはそんなコトが浮かび上がっているに違いない。
『Ｎｏ．』の２体同時召喚と言うのが、それだけの衝撃となりて鷹矢へと襲い掛かってしまったのは言うに及ばず。何しろ『Ｎｏ．』の原型（オリジナル）を持つ鷹矢でさえ、持っているのはＥｘデッキに戻るたびに『白紙』に戻るたったの『１枚』のみ。
つまりはその性質上、『Ｎｏ．』の原型（オリジナル）を持つ鷹矢は『Ｎｏ．』をたったの『１体』しか場に呼び出す事は叶わないのだ。
だからこそ、創造主たる自分ですらも成しえない盤面をいとも簡単に見せてくるこのトッププロ、雪霜　スノウのあまりにも高圧的な雰囲気と相まって…
ソレはどこまでも鷹矢へと精神的、そして肉体的にも決して軽くないダメージを、鷹矢へと与えているに違いなく…
そして▪―

「うふふ、綿貫さんの言った通り…効果覿面、ですわね。よほど他人に

よる『Ｎｏ．』の登場、それも２体同時召喚よほどが応えた様子ですこと。」
「ぬぅ…」
「でも同情なんていたしませんわ！プロならば弱肉強食は当たり前、喰らわれる方が悪いのです！それが、貴方の来ようとしているプロの世界なのですから！ではバトル、オーバーレイユニットを持った『Ｎｏ．２３』はダイレクトアタックが出来る！『Ｎｏ．２３』でダイレクトアタック！」

雪霜　スノウは容赦しない。
その可憐なる容姿と相反した、しかして最前線を生きる豪き花の誇りを全面へとお品出しながらソレは猛々しくも放たれるのか。
…命ずるは、一撃で相手のＬＰに致命傷を与える事の出来る霊騎士への直接攻撃。
そのまま、鷹矢も見たことのある動きにて。冥界の霊騎士が、鷹矢の目の前から一瞬で消え失せたかと思うと。
刹那に…鷹矢の背後に、音も無く現れ剣を構え―
「ぐっ、させるか！罠カード、【和睦の使者】はつど…」
「無駄ですわ！ソレを無効に！」

―！

…そして、攻撃に転ずる刹那の半ば。
そう、鷹矢が『Ｎｏ．２３』の攻撃に反応したその刹那の丁度真ん中で―
何と鷹矢の発動した【和睦の使者】に連なるようにして、突如構えを変えた冥界の騎士から放たれた霊圧が。無情にも、鷹矢の罠から出現した使者達を軒並み弾き飛ばしその効果までをも掻き消してしまったのだ。

「何!?なぜ【和睦の使者】が無効に!?」
「うふふっ、『Ｎｏ．２３』の効果は、あらゆる効果に連動しソレを強制的に無効化する効果!オーバーレイユニットを一つ使い、【和睦の使者】は無効となります!」
「馬鹿なッ!『Ｎｏ．２３』がそんな効果を持っていることなど俺は知らないぞ!」
「自分が創造したのに知らない貴方が悪いのですわ!さぁ、攻撃ぞっこ…」
「くそっ!ならば墓地の【超電磁タートル】を除外し効果はつど…」
「無駄だと言ったはずです!手札の【六花のしらひめ】の効果発動!しらひめをデッキに戻し、カンザシをリリースすることで【超電磁タートル】を無効に致します!」
「ッ!?」
「さぁ、これで邪魔するモノはありませんわ!今度こそお喰らいあそばせ!霊騎薄刃、スピニング・ディスカリバー」

―!

「ぐわぁぁぁぁぁ!」

鷹矢　ＬＰ３７００→１７００

「まだですわ!『Ｎｏ．２３』の更なる効果!『Ｎｏ．２３』がダメージを与えたため、貴方の場のダーク・リベリオンを破壊いたします!」
「ッ、な、なんだと!?」

―!

止まらない…
たった一度の攻撃で、実に『３つ』の効果を同時に適応させ…創造

主である鷹矢へと、決して少なくない確実なるダメージとアドバンテージを叩き出した雪霜　スノウの『Ｎｏ．２３』。
直接攻撃によるＬＰへの大ダメージと、あらゆる効果を連動的に無効にしてしまう圧伏の霊圧。そしてダメージの余波による、モンスター破壊という無慈悲なる破壊効果。
一体で３つのアドバンテージ…それは平時で言ったら中々お目にかかれないであろう、あまりに恵まれた効果の応酬とも言えるのではないだろうか。
だってそうだろう、一つの攻撃に対し、これ程までに噛み合った効能を発揮するモンスターなどそうは居ない。
そして鷹矢の切り札である『ダーク・リベリオン』すらも破壊してしまったその無慈悲なる効果は、まさしく彼女の召喚した『Ｎｏ．』がこの世のモノではない鷹矢のカードと同一の存在であると言う事を鷹矢へとまざまざと証明しているはず。
…いや、それだけではない。
それは過去に一度、『Ｎｏ．２３』を呼び出した事のある鷹矢でさえも驚いているこの状況が証明している。
そう…
それはまさしく―

「馬鹿な…なぜ『Ｎｏ．２３』にそんなにも多くの効果が…だ、だが、どうして俺でも知らなかった『Ｎｏ．』の効果を貴様が使える！俺が『Ｎｏ．２３』を呼び出したのはデュエルの最後、最後の最後のトドメの瞬間にのみ現れただけで、俺も『Ｎｏ．２３』にそんな効果があったとは知らなかったのだぞ!?いや、本当にそんな効果があったのかすら怪しい！創造した俺が把握していない効果を、他人が扱えるなど奇怪しな事ではないか！」
それは新たなカードの創造主としてはあるまじき事態。
…そのカードを創造した本人が、そのカードの『本来の力』を知らないなど、決してあってはならないことのはず。

…普通であればありえない、自分がデュエルの最中に力を欲し生み出した、自分の望みの結晶とも言える新カードの全貌を創造主が理解していない…と言う事など。

何しろ、デュエルの最中にデュエリストの渇望に呼応してデュエルディスクが創造する新たなカードと言うのは、偏にその場その時その瞬間にデュエリストの強い渇望・切望が反映されて生み出されることがほとんどなのだ。

つまりは、コレは鷹矢があの【決島】の時のあのデュエルのあの場面においての望みが顕現した姿と効果であるはず。

…そう、『Ｎｏ．２３』が現れたのは鷹矢の【決島】の予選、その最終デュエルでのこと。

忘れもしない、ウエスト校の竜胆　ミズチとのデュエルの時…あの盤面での鷹矢の思いが結晶化した存在が、数字を纏いて現れたのが紛れも無くこの『Ｎｏ．２３』というカードであるはずなのだから。

だからこそ…

強力なモンスターを従え向かい合っていた竜胆　ミズチの隙間を縫ってダイレクトアタックを決めるためだけに呼び出された自身初の『ランク８』の『Ｎｏ．２３』に、カード効果の無効とモンスター破壊という更なる２つの効果までもが内蔵されていたことを…鷹矢は、どうしても容認できない。

…それだけ多くの効果を持ち合わせ、更なる転用が望める強大な存在がどうしてあんなピンポイントな場面でたった一度だけ現れたのだろう。

それならば、もっと適した場面で『Ｎｏ．２３』が現れてもいいはず。それこそ、もっとその別の効果を切望していた他のデュエルの場面で初めて現れてもいいはずではないか…と。

しかし…

そんな、自身が一度呼びだした『Ｎｏ．』の全容をしらないままの鷹矢へと向かって―

更に、雪霜　スノウは呆れながら言葉を続けるだけで…

「…本当に、宝の持ち腐れ、ですわね。先ほど私は言いました。貴方の『Ｎｏ．』は、既に解析されている、と。」

「し、しかし創造した俺ですら知らない効果を持っているなどありえ…」

「ですから言ったはずです！最早『Ｎｏ．』は貴方だけのモノではない、そして宝の持ち腐れとも！」

「ッ…」

「私の言う『解析』とは、そんなに浅いモノではありません。その手のスペシャリストたちが細部まで、それこそ創造主である貴方ですら知らない部分までをも調べ、見透かし、予測し、再現する！それは例え、たった一つしか効果を使用しなかったモンスターであっても例外ではないのです！貴方が公式戦で使用したカード、その結果、記録、あらゆる情報を解析するのがカードアナライザー！その情報を駆使しカードを作成するのがカードデザイナー！それを実戦で使用するのがプロデュエリストと呼ばれる人種なのですわ！なので貴方がこれまで公式戦で使用してきた『Ｎｏ．』は、貴方が気付けなかった効果までも解析されているのです！」

「な…し、しかし…」

「貴方…少々、他人を舐めすぎてはいませんこと？カードの『量産』とはそんなに簡単にいく行為ではありません。そのカードの全てを分析し、一字一句までをも正確に抽出し、効果の詳細からエフェクトの細部に到るまで完全に、完璧に再現しなければデュエルディスクは反応すらしてくれない…なので今こうして、私が実際に召喚できる『Ｎｏ．』が作成されるまでも多くの天才たちの努力があってこその奇跡の結晶。私を含め、『Ｎｏ．』の製作に関わっている人たちの、その全てがその道のプロでありその道のベテランなのです。だから言ったのです、先達たちを、あまり舐めるモノではありませんと！貴方より

も長い人生を生きているスペシャリストを、あまり舐めないことですわ！」
「ぬ、ぬぅ…」

ぶつけられるは先達の教鞭。
…圧倒、叱責、圧伏、叱咤。
自分の世界でのみ生きている、身の程知らずの恐い物知らずへと叩き込む躾けにも似た大人の鬱憤。
大人の世界のルールも知らない天宮寺　鷹矢へとぶつけれる、その苛立ちにも似た大人の女性からの言葉はどこまでも鷹矢の心を抉り取らんとして刃と化して襲い掛かるのか。
そう…これは圧倒的な強者からの教育と言う名の慈悲ではない。
どうして鷹矢が『Ｎｏ．』の効果の詳細を把握出来ていなかったのかなど些細な事。その苛立つ感情のままにぶつけられるソレは、言葉による単なる暴力であり…
しかしてトッププロという戦場の最前線で戦っている人種にとっては、日常茶飯事とも言えるまさしく『心』を折るための容赦ない折檻がどこまでも強く鷹矢を襲う。
…折られる方が悪い。
他者を蹴落とし、弱者を喰らう。プロの最前線と言うのは弱肉強食と言う事を、スノウは鷹矢よりも分かっているからこそ―
プロに甘えは許されない。デュエルを生業にしているプロデュエリストという人種にとっては、知らないカードを前にして狼狽える事など愚の骨頂。自身の勉強不足を露呈するだけの最低の行為と言えるはずであって。

…カードの効果を知らない方が悪い。

ただ、それだけ。
だからこそ、どこまでも遠慮なく。そしてどこまでも無慈悲に、既にプロの世界の関係者である鷹矢の心を、スノウはただただ折りにか

かるだけ。

「…まぁ、『ランク０』のアレだけは別みたいですけれど。でも、史上初の高校生プロと言う割りには意外とあっけなかったですわね。」

「ぐっ…馬鹿な…こんな、事が…」

「では…これで終わりですわ！『Ｎｏ．３８』でダイレクトアタック！」

そうして…

２体の『Ｎｏ．』によって、鷹矢の心もフィールドにもＬＰにすら傷を付けることをスノウは微塵も躊躇せず。

そう、攻撃を命じるスノウの宣言には、哀れみも憐憫も戸惑いもない。

ただ、いつもの通りに弱者を喰らい勝ちを得るだけ。それは最前線で戦い生きる者のみが持ち得る心の強さなのか、それとも身の程知らずの若者に対する確かな苛立ちの所為なのかは彼女以外にはわからないとは言え…

…それでも、間髪居れずに。

がら空きとなった鷹矢へと…そう、今、史上初の高校生プロ、天宮寺　鷹矢へと向かって。

世界ランク１１位、『薄氷の麗人』、雪霜　スノウが。格の違いを見せ付けるかのごとく、トドメの一撃を『Ｎｏ．３８』へと高らかに命じ―

「大人しく散りなさい！銀河天翔、ギャラクシアン・ストリー…」

ソレが、鷹矢へと今まさに襲いかからんとした…

その時だった―

「いつまでも調子に乗るなぁ！直接攻撃宣言時！手札から【ＳＲメンコート】の効果を発動！」
「ッ!?今度は『ＳＲ』…」

―！

しかし…
それでも鷹矢は、諦めない。
現れたのは小さき機札。銀河を翔ける天昇の龍の方向をその身で受け止め、鷹矢を守りながらその場へと現れて―

「メンコートを攻撃表示で特殊召喚し、相手モンスター全てを守備表示にする！」
「…まだ抗う気力があったとは驚きですわ。けれどもガジェット、無限起動、統一性のないランク４と『Ｎｏ．』に【黒翼】と来て次はＳＲ…なんとまぁ…」

いや、それだけではない。何とその回転により巻き起こされた風によって、スノウの場に居た２体の『Ｎｏ．』までもが巻き込まれその表示形式を守備表示へと変え始めたのだ。
…噴出し、回転し、弾き飛ばす。
その凄まじき旋風は竜巻を帯びて、スノウの２体の『Ｎｏ．』の全て

を跪かせたかと思うと。これ以上の追撃を封じる守護の風が、どうにか鷹矢のＬＰを寸前の所で守りきった。
けれども、ギリギリ…
そう、本当に、ギリギリのタイミングだった。
もし鷹矢が『Ｎｏ．』の事にもっと気を取られ過ぎていて、攻撃に反応するタイミングがもっと遅かったとしたら。鷹矢のデュエルディスクは鷹矢が勝負を放棄したと断定し、鷹矢は【ＳＲメンコート】の効果を使うタイミングを逃し『Ｎｏ．３８』の直接攻撃でそのまま敗北してしまっていたことだろう。
だからこそ、本当にギリギリのタイミングで。何とか反応して攻撃を防いだのは他でもない、これまで確かな戦績を刻んできた鷹矢の咄嗟の場面の反射運動とも言えるはずでもあり…

「本当、節操のないデュエルですこと。…仕方がありません。『Ｎｏ．２３』が無効化するのは１ターンに１度…その『ＳＲ』の効果は無効にできませんわね。ではバトルフェイズを終了し、私はカードを１枚伏せてターンエンドといたしましょう。」

雪霜　スノウ　ＬＰ：１８００
手札：３→０枚
場：【Ｎｏ．２３　冥界の霊騎士ランスロット】
【Ｎｏ．３８　希望魁竜タイタニック・ギャラクシー】
伏せ：１枚
フィールド：【六花来々】

そんな、完璧にトドメを刺すはずだった攻撃を止められて。
世界ランク１１位の『薄氷の麗人』は、一体何を思うのだろうか。
（…苦し紛れに延命したところで私の勝利は揺るぎませんわ。『Ｎｏ．２３』には無効効果、『Ｎｏ．３８』の効果を彼は知らない…この先の展開で怖いのはダイレクトアタックできるアイアン・ヴォルフとバー

ンダメージを与えてくる『Ｎｏ．６１』ですが…前者は『Ｎｏ．３８』の効果で無効化でき、後者は伏せた【安全地帯】で対策は万全。ここで『Ｎｏ．２３』を出せたとしても止めるのは容易く…ダメージを与えられないヴェルズ・ビュートではトドメを刺す事は出来ず、今の心境では新たな『Ｎｏ．』も出せるわけもなく。…うふふ、勝負、ありましたわね。）

その心境は落ち着きそのモノ。

渾身の攻撃を止められてターンを終えなければならない悲壮感など微塵も感じさせず、寧ろトッププロらしくバックアップは完璧なのだと言わんばかりの雰囲気にてどこまでも落ち着き払いターンを受け渡し。

まさにコレが最前線で戦うトッププロの姿なのだと言わんばかりの冷静さは、およそ若輩の者が醸し出せるはずもない程の精神性となりてどこまでも鷹矢へと突き刺さるのか。

あまりに激しい展開と、有り余るほどの分厚いデュエル。見目麗しき『薄氷の麗人』と呼ばれてはいても、魅せるそのデュエルは確かな才能と実力がなければ披露出来ない芸術的なデッキ回しに違いなく…

次に迎えるであろう鷹矢のターンを、完全に見据えた布陣にて。今、雪霜　スノウはそのターンを終えたのみ。

そして―

「俺のターン、ドロー…」

何とか『Ｎｏ．』たちの猛攻を防ぎきった鷹矢は、先ほどまでの勢いから一転…

動揺からＬＰに大ダメージを受けてしまったことも相まって、何やらその手を止め冷や汗を拭うような動作にて自らのターンを沈黙と共に向かえていた。

…しかし、その沈黙も当然のことか。
だってそうだろう、先のスノウのターンに、鷹矢とて予想だにしていなかった『Ｎｏ．』が牙を剥いて襲い掛かってきたのだから。
しかも、ただの謀反ではない。創造主たる鷹矢とて知り得なかった真価を発揮し、創造主であるはずの鷹矢でさえも躊躇なく襲いかかり…
まるで戦いの為に生まれた特別な存在が、その力を振るうためだけに襲い掛かってきたというその衝撃は、鉄の心臓とも呼ばれる鷹矢に決して小さくない動揺を生み出しつつＬＰと同時に心にまでダメージを与えてきたのだ。
（危なかった…『七草』との修業で守りの手を増やしておいたから助かったものの…まさか、『Ｎｏ．』が敵に回るとは…ぬぅ…）
そう…鷹矢は、『Ｎｏ．』の登場に少なからず動揺してしまっていた。
何しろ、鷹矢は『Ｎｏ．２３』の直接攻撃宣言時のあのタイミングでもメンコートの効果を発動する事もできた。
そうすれば少なくとも、ここまでＬＰを減らされることはなかったはずであり、けれども『Ｎｏ．２３』の隠れた効果に動揺してしまった事と、『Ｎｏ３８』にも隠れた効果があるのではないかという焦りとが相まって、鷹矢にあの攻撃でのメンコートの使用を一瞬だけ躊躇させてしまった。
だからこそ、鷹矢の迷いからか彼のデュエルディスクはメンコートの発動タイミングを逃してしまった。ソレ故、鷹矢は本来ならば受けなくても済んだ大ダメージを受けてしまったのであり…
…それは若さゆえの焦りと過ち。取り返しのつかない攻防の後悔。
この場、この時、この瞬間に、デュエルをしている彼らのデッキがどう応えどんな動きをして繰り広げられるのかは誰にも分からない。
だからこそ、今こうして繰り広げられているこのデュエルの内容こそが嘘偽り無いリアルな彼らのデュエルの全てでもありつつ…
ソレ故、過ぎてしまったことはもう誰にも取り返せない。鷹矢のＬ

Ｐが元に戻らないように、このデュエルの流れも相手が『Ｎｏ．』を使ってきたという事実もまた消し去りようのない確定した事実とも言えるのだろう。
…だからこそ、鷹矢も余計なダメージを受けたとはいえ。それでもどうにか先の『Ｎｏ．』の攻撃をどうにか凌げたのは、ある意味では幸運であったとも言えるはず。
そう、『七草』の特別講師たちとの修業にて思い至った、鷹矢のデッキに無理なく組み込めるであろう守りに特化した機械族レベル４の守りのカード。カテゴリー的にはシンクロ召喚に特化している『ＳＲ』というシリーズに属するモンスターではあるものの、【超電磁タートル】と同じく『いざという時』の意表を突く奥の手の一つとして鷹矢がデッキに忍ばせていた、こうした場面にて輝くまさに九死に一生の守りの手が功を奏し、どうにかあのギリギリの場面で鷹矢のＬＰを守りきったのだ。
しかし、それは言い換えれば…
鷹矢が、奥の手を２つも消費させられるほど追い詰められてしまっていたとも言えるのではないだろうか。
…そう、流石は世界ランク１１位の『薄氷の麗人』。
押している様に見えた鷹矢の心と盤面を、意外なる切り札にていとも容易く荒しに荒し。
今こうして、鷹矢をデュエルでも、そして精神的にも追い詰めようとしている今の彼女の姿は、その身目麗しい佇まいに比例した恐ろしいまでの猛者となりて鷹矢の目には映っているはずで…

ソレ故―

「まだ『Ｎｏ．』が使えるのかしら？新たな『Ｎｏ．』を出した瞬間！その瞬間から、貴方の『Ｎｏ．』は貴方だけの『Ｎｏ．』ではなくなるのだから！それとも今まで呼び出したことのある『Ｎｏ．』をまた呼び出すのかしら。うふふっ、それでしたら現在解析中の『Ｎｏ．』のデータがより鮮明なモノになりますわね。量産化の時期が早まることで

しょう！」
「ぬぅ…」
追い討ちをかけるように、駄目押しをするように。
鷹矢の動揺を見透かしているかのように叫ぶスノウの声は、鋭利な針となりて鷹矢の心に突き刺さり続ける。
そう…スノウの言った通り。
鷹矢の心は、もう新たな『Ｎｏ．』は使えないと判断してしまっている。
…もし自分がここでまた『Ｎｏ．』を使い、新たな『Ｎｏ．』がこの世に生み出されてしまえば。その瞬間から、ソレはもう自分だけのモノではなくなってしまう。
それが、鷹矢には許せない。
…自分だけの力…自分だけが扱える、この世界で自分だけに許されたと思っていた特別な『力』。
それを、赤の他人が扱っているのだ。それもこの場限りの事などではなく、時間が経てば目の前の女以外にも更に多くの人間に『Ｎｏ．』が行き渡ってしまう…そんな屈辱と焦りと怒り、形容し難い憤りが鷹矢の中に渦巻き始め、それに応じてターンを迎えた鷹矢の手が止まってしまったのは、ある意味仕方のないこととも言えるはずで。
…いや、誰だってそうだろう。
何しろ、『そういった思い』を抱くのはきっと鷹矢だけでは決してないはず。
そう、世界で、『自分だけ』が持っているカード。『自分だけ』しか使い手が居ない特別なカード…『自分だけ』が手にしている特別な力と言うのは、誰であろうと永遠に『自分だけ』のモノであり続けて欲しいと、人間ならば誰しも感じてしまうに違いないのだ。
けれども、ソレが勝手に他人の手によって突如何の前触れもなくばら撒かれたら…
例え鷹矢でなくとも、誰であろうと動揺と同時にショックを感じてしまうはず。

だからこそ、鷹矢はこれ以上『Ｎｏ．』を使うことを踏み切れない。鷹矢だけの力が、敢え無く有象無象共が群がる一般的なカードに成り下がってしまうと言うのは…これまで『Ｎｏ．』という特別な力に誇りを持っていた鷹矢にとっては、屈辱以外の何物でもないのだから。

…自分だけが持っていると思っていたカードを、他者が勝手に解析し、増産し、量産しようとしているだなんて。

自分の知らないところで勝手に話が進んでいるだなんて、例え鷹矢でなかったとしても憤りを感じるに違いない事。

だからこそ、鷹矢もまた憤りを感じると共に…それ以上に、鷹矢の心にはこれ以上『Ｎｏ．』を使うことへの『迷い』が生じてしまっているのだろう。

これ以上、他人の目に映る場所で『Ｎｏ．』を使い続ければ…その場で『Ｎｏ．』は解析され、しばらくの後にカードデザイナーたちによって量産され、世界にばら撒かれてしまう。

もしそうなってしまえば、最早『Ｎｏ．』は鷹矢だけの力ではなくなってしまう。誰でも『Ｎｏ．』というエクシーズモンスターの中でも『別枠』の力を扱えるようになり、その力は今この時の戦いの様にいつかそのまま鷹矢自身へと牙を剥く危険性さえある。

果たして…

その先兵とも言うべき2体の『Ｎｏ．』が、既に敵対していると言うこの状況。

その、自分以外の者が『Ｎｏ．』を扱っているというこの事実に…刻々とドローフェイズ、スタンバイフェイズが進んでしまうこの沈黙の中で、鷹矢は一体何を思うのだろうか。

（…『Ｎｏ．２３』の無効効果…そして効果の分からない『Ｎｏ．３８』…）

…今、鷹矢の脳裏には『迷い』が生じてしまっている。

『Ｎｏ．』を使うわけにいかなくなった焦り。『Ｎｏ．』を使ってはならないという自責。
そんな負の感情が、鷹矢の心に『迷い』というこれまで味わった事のない未知の選択を鷹矢へと突きつけているのは誰の目にも明らかで―

「動かないと言う事は試合放棄するのかしら？でしたら、ご自分で宣言された方がまだ恰好がつくというものではなくて？」
「くっ…ロックアンカーを召喚！そしてその効果で…」
「そうはさせません！『Ｎｏ．２３』の効果発動！ロックアンカーの効果を無効にいたします！」
「ぐ…ならば魔法カード、【取捨蘇生】を発動！俺は墓地からゴールド、そして２体のシルバーを選択し…」
「それも無駄ですわ！『Ｎｏ．３８』のモンスター効果！魔法カードを無効にしそのカードをオーバーレイユニットにいたします！」
「ッ…や、やはりそんな効果が…魔法無効だと…くそっ！」

止められる…
鷹矢の行動が、悉く―
その行動はどれもが苦し紛れの醜い足掻き。そう、今の冷静な判断が出来ない鷹矢にとっては、今の行動は攻め立てられるようにデュエル続行を強いてくるデュエルディスクに咄嗟に従った故の未熟な行動でしかないのだろうか。
そう…もし鷹矢がもう少し冷静に場を把握し、ロックアンカー先行ではなく魔法カードである【取捨蘇生】から動いていれば…
少なくとも【取捨蘇生】を無効にしたのは『Ｎｏ．３８』ではなく強制効果を持った『Ｎｏ．２３』の方となり、スノウの言い方から次のロックアンカーの効果は無効化されなかった可能性が高かった。
そうすればロックアンカーからの展開でレベル４のモンスターを更に並べる事ができ、そこからのエクシーズ召喚によっては更なる展

開だって出来ていたはず。

…それだけ展開できれば、まだ鷹矢にも動く目があった。しかし、鷹矢はソレができなかった。

それは鷹矢が、『Ｎｏ．３８』の効果を完全に把握していなかったのも原因の一つではあるのだが…しかし、『Ｎｏ．３８』は【決島】の鍛冶上　刀利との戦いの場面にて、効果を使用・確認する暇もなく葬られてしまったのだから、それはある意味仕方のないことでもあるのだろう。

…とは言え、デュエルの最中においてはソレは何の言い訳にもならず。

そう、ことデュエルという行為の最中において、ミスと言うのは得てして『ミスした方』が悪いのだ。

相手モンスターの効果を把握していなかった鷹矢のミスもそう。『Ｎｏ．』の敵対に心を揺さぶられてしまった鷹矢の動揺もそう。自業自得、無知は罪。例えどんなカードであろうとも、そのカードの効果を知らない無知な方がただただ悪く…

…このレベルの相手を前に、これは手痛い痛恨のミス。

一応、鷹矢の場にはレベル４のモンスターが２体いるものの。しかしＥｘデッキの内容から考えれば、この場を突破し勝利を掴むことの出来るモンスターは限られてしまっている事もまた鷹矢は分かってしまっている。

…デュエルと言うのは行動が全て。その流れ、その動き、一つ一つのカードの応酬からデュエリストの思考一つに到るまで、確定してしまったその場面は誰にも取り返しは付かない。

…だからこそ、このシーン、この状況に至るまでの彼らのデュエルの、これまでの流れがこのデュエルにおける全てでもあるはず。

鷹矢が、そして雪霜　スノウが何を考え、どの思考に到りこの状況になったのか。

それが、このデュエルの全てであるからこそ―

「さて、どうするのかしら。ガジェットの回転を重要視する貴方の手札の情報はまるで筒抜け。なので今の貴方の残りの手札は【グリーン・ガジェット】１体のみ…もうこれ以上の展開は出来ず、この状況で貴方が出せるのはランク４かランク８、しかしランク８で出せるのは『Ｎｏ．』のみ！そしてランク４でも８でも新たな『Ｎｏ．』を出せば、それはもう貴方だけの力ではなくなるのです！それでも新たな『Ｎｏ．』を出せますか？うふふ、それとも、また『ランク０』のモンスターを呼び出すのでしょうか！」

「ぐ…」

「もし呼び出されるのならデザイナーの方たちが喜びますわね。あの特別なモンスターのデータが増えることで、ランク０を再現できる可能性が大きくなるんですもの。貴方も時期プロらしく、決闘界に貢献なされてはいかが？」

…スノウの高圧的な煽りに対し、どうしても鷹矢は動けない。

（ヴェルズ・ビュート…駄目だ、破壊したところでダメージを与えられないのならば次のターンへの対処ができん。リリースされるのならば『Ｎｏ．４１』も無駄、それに『Ｎｏ．４１』も出せば量産される…）

迷い…

（既存の『Ｎｏ．』だと『Ｎｏ．６１』で勝てるがドリルジャンボはもうない、残る手段は俺も『Ｎｏ．２３』を出すか『アイアン・ヴォルフ』でのダイレクトアタックのみ…だが奴のあの雰囲気…駄目だ、『Ｎｏ．２３』もダイレクトアタックも通用せん…）

迷い…

（しかも俺の『Ｎｏ．』は出すまで何が出てくるか全くわからん、既存の『Ｎｏ．』が上手く出てくるかもわからんとは…くそっ…）

迷い、迷い続ける―

…堂々巡り、窮地に陥り。

残りの手札と、デッキと、Ｅｘデッキを思い直しても。これ以上の手立てが、鷹矢にはどうしても思い着かない。

それは自身のデッキを深く理解している鷹矢だからこその理解。

自分の限界を決めるのは自分ではなくデッキの方であると分かってはいても、しかし無限の可能性を指し示す『Ｎｏ．』を使えないとデッキに『枷』を嵌めてしまっては…いくら鷹矢を持ってしても、それ以上の選択肢を思い浮かべる事は出来はしないのか。

そう…

自由に姿を変え、状況に応じて形を変える『Ｎｏ．』は、まさしく天宮寺　鷹矢にとって理想とも言うべきジョーカーであったのだ。

しかし、その自分だけのジョーカーはもう自分だけの力ではない。

それが、どうしても鷹矢には容認できない。ソレ故、打つ手立てがないこの状況に対し…

鷹矢の心は、苛立ちにも似たザワザワした気持ちが渦巻き続けているのであり…

「くっ…」

零されるのは苦々しい吐息。

…歯がゆいのだろう、窮屈なのだろう。

自由で奔放なデュエルが信条の天宮寺　鷹矢にとって、動きを制限され行動を誘導され、挙句の果てに『自分だけの力』を愚弄し続けるスノウとのこのデュエルは、一言で表せば『窮屈』なデュエル以外に形容する言葉が見つからないほどに…

それほどまでに、『やりづらい』デュエルに違いない。

…けれども鷹矢には分かっている。このデュエルを『窮屈』にしているのは、他ならぬ自分自身であるのだ…と。
そして、それ以上に鷹矢は理解させられてしまった。
これより自分が喧嘩を売り込みにいくプロの世界…その最前線で戦っているトッププロという人種が、その見た目に反し…
これ程までに容赦のない闘士、洗練された戦士。そしてこれまで戦ってきた学生達や並のプロとは、一線を画すまさに『怪物』である…と言う事を。
…慈悲のあるイースト校理事長の【白鯨】や、特別講師『七草』とはまるで違う、全く容赦のない正真正銘の『強者』の一人。
そんな、これまで戦ってきた者の中でも純粋な『強さ』を魅せる、この世界ランク11位に位置する『薄氷の麗人』を前に…

(俺の…俺のデュエルとはこの程度のモノだったのか?…俺の力とは…俺に、今出来ること…は…)

完全に沈黙してしまった鷹矢の手が、ゆっくりと力なく重力によって降ろされていき…

そして…

「…もういい。」
「あら…」

鷹矢から零された言葉…

それは、あの我が強すぎる天宮寺　鷹矢から発せられたとは思えない程に弱々しく零された、あまりに信じられない言葉の吐露であった。

…だってそうだろう。

あの豪放磊落、天下無双、世界最強のエクシーズ使いと呼ばれしエクシーズ王者【黒翼】の血と才能を受け継いだ孫、誉れある天宮寺家の嫡子が。

あの学生最大の祭典となった【決島】にて優勝を飾り、歴史上初めてとなる高校生プロとなる事を許されたあの規格外の高校生が。

あの、誰にも真似出来ない謎の存在であるエクシーズモンスター、ランク０の『Ｎｏ．０』を呼び出し世界を震撼させ、これまでのデュエルの常識を覆し新たな歴史を刻んだあの天宮寺　鷹矢が。

そんな、常識という名の『檻』をこれまで悉く壊しながらあくまでも『真っ直ぐ』にその覇道を進み続けてきた鷹矢から、あろうことかそんな弱々しい吐露が零されるだなんて…一体、誰が自分の耳を信じられると言うのだろう。

世界ランク１１位の雪霜　スノウを前にしても、あまりに堂に入った戦いぶりを魅せていた前半から一転…

まさかスノウが『Ｎｏ．』を２体同時に呼び出したことで、鷹矢がここまで弱気になってしまうだなんて、一体誰が想像できたというのだろうか。

だからこそ、観客や受験生やスタッフは勿論、中継カメラを構えているメディアまでもが沈黙してしまっている。

…一体、彼はどうしてしまったのだろうか。一体、何を考えているのだろうか…

沈黙の中で、強く何かを考えているかのような鷹矢の雰囲気を目の当たりにして。今まで彼のこんな姿と言葉など見た事も聞いた事もない周囲の人間達からすれば、これまで常識を覆し続け、破天荒であり続けてきた天宮寺　鷹矢のこんなにも弱々しい姿に対し信じられないようなモノを見る目を向け…

誰もが、言葉を無くし彼の『敗北』を静かに悟り始め…

「うふふ、戦意喪失？それとも試合放棄？潔くご自分から降参なさるのかしら？けれどもサレンダーとは少々残念ですわね。随分とあっけない幕引きでし…」

唯一言葉を発せる相手。鷹矢の対戦相手である『薄氷の麗人』、雪霜スノウが鷹矢へと最後の通達を発したかと思われた…

…その時だった。

「試合放棄？いいや……それは違う！」

「…え？」

瞬間…

鷹矢から飛び出したのは、あまりに力強く空気を震わす覚悟の声であった。

そう、まるで先ほどの脱力は、今ここでこの言葉に力を込めるためにあえて脱力したのだと言わんばかりの迫力を持ってして。

周囲からの敗北ムード一色を、その我の強さだけで鷹矢は一瞬で払拭したのだ。

…そして、完全に意表を突かれ驚いた表情をしている雪霜　スノウを意に介さず。

当の鷹矢は、何やら意を決したように深く…

それはそれは深く、一つ大きく深呼吸をし…

更に続けて、その言葉に力を込めて続けて口を開くのみ。

「ここで…今ここで！貴様に勝てなければ、俺のこれからには何の意味もない！力を発揮できず、自ら負けを認めるなど俺のプライドが絶対に許さん！だから俺はサレンダーも試合放棄もせん…俺は今、勝つ！何をしてでも、何を『犠牲』にしてでも！それが、誰にも譲れぬ俺のデュエルだ！」

「『犠牲』…そうですか、今、この場で勝てれば、全てはどうでも良い事だと？」

「うむ！貴様は言ったな、『Ｎｏ．』は、もう俺だけの力ではないのだと！だがそれも違う！貴様らが、いくら俺の造った『Ｎｏ．』を使おうとも…今！この時！この瞬間に！また新たなカードを俺は生み出す、生み出し続ける！そうして進化し続けるからこそ…やはり『Ｎｏ．』は俺の、俺だけの力となるのだ！俺の後を、コソコソと追い続けたければ好きにするが良い！だが俺は常に先に行く…誰にも追いつけない先へと、ただ突き進むだけだ！」

叫ぶは奮起、響くは活気。

自身のやるべき事の為に、『何』が必要なのかを今再び思い出した鷹矢の叫びが更に激しく響き渡る。

それは見得などでは断じてない、本気の本気で『覚悟』を決めた男の叫び。

ソレが、行動となりて再び鷹矢の戦意を増し続け…

「ゆくぞ！ロックアンカーの効果発動！ロックアンカーとメンコートのレベルを…合成する！」

【無限起動ロックアンカー】レベル４→８

【ＳＲメンコート】レベル４→８

そうして、再び動き出した鷹矢の宣言によって。

２体の『Ｎｏ．』を前に燻っていた鷹矢の２体の機械族たちもまた、その猛りに応えるかのように再びその駆動音に力強さを取り戻し始

めたではないか。
レベルが変化する…
それは鷹矢が、『決島』にて確立した彼のデッキの戦術の一つ。レベル４とランク４を多用し強固な安定性を持っている彼のデッキにおける、場を切り崩す為のメリハリの一つ。
そう、ランク４のみで構成されている鷹矢のＥｘデッキにおいて、ランク４以外のモンスターを出す瞬間などたった一つしかない。
そして、ソレを雪霜　スノウも分かっているからこそ…

「レベル８のモンスターが２体…貴方、やはりどれだけプロを舐めているのかしら！貴方もこれからプロになるのでしょう？これからの要所ならばいざ知らず、何の益もない今この瞬間の勝利を掴む為だけに色々なモノを『犠牲』にするなんて、愚の骨頂以外の何物でもありませんわ！貴方もプロになるのならば、自分だけが持つ力に少しは誇りを持ったらどうですの！そんな気持ちで、軽々しくプロの世界に入ってくるつも…」
「うるさい…うるさいうるさいうるさい！これは俺の、俺だけの戦い！もう量産でも増産でも好きにするが良い…だがこの勝負だけは譲らん！ここで貴様に勝てなければ、俺には何の意味もないのだ！」

しかし、スノウの言葉を無理矢理遮ってでも。
それでも鷹矢は叫びを止めず。その咆哮に呼応して、鷹矢の場のレベル８となったモンスター２体が、更に激しく駆動する。
…確かにスノウの言うように、これからの鷹矢の人生は長い。その長い人生で考えれば、これから鷹矢にはプロの人生の中で絶対に負けられない『要所』と言うのが重要な場面で再現なく襲い掛かってくることだろう。
だからこそ、もしこれから鷹矢がまた新たな『Ｎｏ．』を生み出すのならば、ソレは絶対にその『要所』であるべきなのだ。
…そして、スノウの感覚ではソレは絶対に今ではない。
そう、例えその後にその新たな『Ｎｏ．』が量産されるのだとしても、

それでもその力はその『要所』でのみ発揮されるべきであると言うのが、スノウが抱いていた極々普通の感覚に違いなく…

…これは、ただのエキシビジョン。

例えここで鷹矢が負けたとしても、それで鷹矢のプロ入りがなくなるわけでもなければ…多少メディアは騒ぐだろうが、それで鷹矢に不利益が生じると言う事も起こるはずもなく…

だからこそ、彼女の感覚ではこれは鷹矢にとっては『負けてもいいデュエル』のはず。

その、『負けてもいいデュエル』と言うのは人生において多々存在していることであり、ソレを的確に見極めるのがプロで上に上っていくには重要でもあり普通の事でもあるのだから。

しかし…

けれども―

それ、でも―

「今この瞬間の、このデュエルこそが俺のデュエルの全て！俺のデュエルの邪魔は誰にもさせせん…ソレが例え、俺の『Ｎｏ．』であろともだ！うぉぉぉぉぉぉっ！」

今、この時、この瞬間において。

鷹矢にとっては、このデュエルは『負けてもいいデュエル』などでは絶対にないのだ。

ヒリつくような強敵との戦い、色々な人間に見られている中でのデュエル…

そんな、恥ずかしい戦いが出来ないこの状況に置かれて、自分から『負け』を認めることなど天宮寺　鷹矢が出来るはずもなく…

…負けてもいいデュエルと、負けてはいけないデュエルの違いなど、誰に言われるまでもなく鷹矢はとうに理解出来ている。

何しろ、『負けてはいけないデュエル』ばかりを強いられてきた片翼を…鷹矢は、常に誰よりも一番近くで見続けてきたのだ。

だからこそ、鷹矢には『負けてもいいデュエル』と、『負けてはいけないデュエル』の違いと言うモノがきっと雪霜　スノウよりも明確にハッキリと、そして誰よりも厳しく定義されている。

…それはこれまで遊良のデュエルを、人生を共に見続け、歩んできたからこその覚悟と自責。

修行や遊びとはまるで違う、『ソレ以外』のデュエル、人生において。

絶対に『負けられない』戦いを常に強いられてきた遊良と並び立つ為には、自分もまた『ソレ以外』のデュエルで簡単に負けを認めるわけには行かないのだとして…

そう…

あらゆるモノを犠牲にしてまで生き抜き続けている遊良の隣に立ち続けるためには、自分もまた『この程度』の『犠牲』を払う事など簡単なのだと言わんばかりに―

「俺の力、俺だけの力、『Ｎｏ．』よ！今この瞬間に…あの女をも超える力となれぇぇぇぇぇぇ！レベル８となったモンスター２体で、オーバーレイネットワークを構築！」

今…

常識をぶん殴り、理性を蹴飛ばし。

『Ｎｏ．』を惜しむという弱い心、少しでも浮かぶ自らの弱い心を、その強靭なまでの意思によって今まさに完全に踏み潰し…

後悔なんて投げ飛ばし、改めて覚悟を振り切った鷹矢の宣言が、このスタジアムへと木霊する。

…オーバーレイネットワークを、構築。

まるで、『本物のＮｏ．』を呼び出す為の宣言はこうなのだと言わんばかりに―

「来い、『Ｎｏ．１５』！」

「ッ!?」

叫ばれるは未知なる『数字』。

これまでの鷹矢の『Ｎｏ．』にはなかった、全く新しい未知なる数字が、鷹矢の口から宣言される。

…そして、その宣言を行う鷹矢には躊躇も後悔も微塵もなく。

もう鷹矢の心は、新しい『Ｎｏ．』を量産され他人に使われるという恐れなど微塵も感じてはいないのか。それだけの覚悟を感じさせられる強き宣言が、鷹矢のＥｘデッキにて眠りに付いている『白紙』の『Ｎｏ．』に強く呼応し…

そう…例え誰が相手でも。

例え、敵がデュエリストのみならず、デザイナーや研究者たちであったとしても。

「…『Ｎｏ．１５』…新たな『Ｎｏ．』ですわね！うふふ、ソレもこの瞬間から貴方の手を離れることにな…」

「それがどうした！そんな事、最早どうでもいい！ただこの瞬間、このデュエルで貴様に勝つ為に…俺も、そして俺の『Ｎｏ．』も全力で！ただ全力で全力を尽くすだけだ！それが俺の全てなのだぁぁぁぁぁ！ゆくぞぉっ！」

それでも鷹矢は省みない。

己に与えられた力を、存分に発揮する事を鷹矢は決して厭わない。

…例えこれから先、自分の行動の所為で多くの『Ｎｏ．』が敵に回ることになろうとも。

それでもその全てを蹴散らし、そして他の誰も追いつけない速度にて『Ｎｏ．』を最前線で使い続けるその覚悟、その決意、その決心を今ここで、突発的にも恒久的に確かなる意思を持ってして心に強く決めたからこそ。

自身の力、誇りであるはずの『Ｎｏ．』さえも『犠牲』にしてでもなお…

それ以上に強くなり続ければいいだけだと、今ここで強く思い至ったからこそ…

…今、声高々に。

鷹矢が叫ぶは、紛う事なき―

「来い、『Ｎｏ．１５』！妖しく笑うは怪奇の響き！尽きぬ欲望で刃を剥き出し…聳える恐怖で敵を飲み込めぇ！エクシーズ召喚！」

…叫ばれるは定め。

Ｅｘデッキで眠る『白紙のＮｏ．』に、新たな定めを数字として刻み込み。

…呼び出すは我が侭。

未知なる姿と力を持ってして、『Ｎｏ．』に対し心の赴くままに我儘に、己の心を投影し今この瞬間の全て詰め込みながら。

この場、この時、この瞬間に―

誰も見たことがない姿にて、満を持してソレは現れ―

「ランク８！【Ｎｏ．１５　ギミック・パペット―ジャイアント・キラー】！」

―！

【Ｎｏ．１５　ギミック・パペット―ジャイアント・キラー】ランク８
ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／２５００

現れたのは巨大なる人形、不気味に聳える黒の粉砕機。
それはその額当てに、『Ｎｏ．』の証である数字『１５』の運命を掘り込まれた…
正真正銘、本家本元。鷹矢の持つ『原典（オリジナル）』から呼び出された、紛う事なき『Ｎｏ．』の一体。

「ヒッ!?…なっ、なんですの、この不気味な『Ｎｏ．』は!?ま、全く美しくありませんわ！」
「黙れぇ！美しいだの美しくないだの、『Ｎｏ．』は貴様のカードでは断じてない！これは俺の、俺だけが生み出す事を許される俺だけの力だ！だから俺は迷わん…『Ｎｏ．』を解析し、量産したければ好きにするがいい！だが最前線の、最新鋭の、この瞬間の…この勝負の結末だけは、絶対に俺が手に入れてやる！『Ｎｏ．』だろうが、トッププロだろ

うが俺の！俺達の…邪魔をするなぁぁぁぁぁぁ！『Ｎｏ．１５』の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、相手の場の特殊召喚されたモンスター１体を破壊する！」
「破壊効果ですって!?けど、それだけのはずが…」
「うむ！対象は『Ｎｏ．３８』！ソイツを破壊し、破壊したのがエクシーズモンスターであった場合…『Ｎｏ．１５』は、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！」
「ッ!?」

そして、間髪居れず―
『Ｎｏ．１５』の周囲を回る光球の一つが、その体内へとエフェクトと共に吸い込まれたかと思うと。
鷹矢の、デュエル決着まで到達するであろうあまりに強力な効果の宣言と共に…不気味な蠢きにて、運命の糸に操られた巨大なる漆黒の人形がゴゴゴゴと音を立てて動き始め…
そのまま、緩徐にその大きな手を『Ｎｏ．３８』へと向けて動かし始め。その身柄を粉砕し砲弾にすべく、無感情にスノウへと迫り始めたではないか―
「む、無駄ですわ！永続罠、【安全地帯】を発動！『Ｎｏ．３８』は効果の対象にならず、戦闘・効果では破壊されなくなります！」
「ぐっ…」

けれども…
それでも、スノウも綻びない。
発動されしは万全の守り。その名の通り、その文字通り…あらゆる策略からモンスターを守る【安全地帯】を、『Ｎｏ．３８』の周囲に展開させ。
キッチリと、完全に―鷹矢の『Ｎｏ．１５』の蠢きから、対象となった『Ｎｏ．３８』を守りきったのだ。

「ふふ…うふふ！これで勝負ありましたわ！ふ、不気味すぎて少々驚きましたが、所詮はその『Ｎｏ．１５』もランクの違う『Ｎｏ．６１』の模造品！それも効果は劣り攻撃力も低い劣化版だったというわけですわね！」

…そう、この程度の対策は彼女も既に対処済み。

新たな『Ｎｏ．』が出てくる事は彼女にとっても予想外ではあったものの、しかし鷹矢の攻めが当初から想定していた範疇に収まっていただけに、咄嗟の判断であったとしてもスノウは華麗にソレを捌いてみせるのか。

…これで、勝負あった。

この攻防を捌いてみせたスノウの心は、もう勝利を確信して揺るがない。何しろ鷹矢の残りの手札を見抜いているスノウからすれば、鷹矢はもうこれ以上の展開を行う事は出来はしないはずなのだから。

そして新しく呼び出された『Ｎｏ．１５』も、その効果が彼女の予測の範疇に収まっていたからこそ…

ソレがいくら苦手としているホラーテイストの人形の見た目をしていたとしても、もう自分の勝利は揺るがない、揺るぐはずがない…

…と、確信を超えた自信にて高らかに喜びを露わにしているのであり…

しかし…

「うふふっ、やはり創造主が幼稚な貴方では、生み出される『Ｎｏ．』も似たり寄ったりの…」

「…かかったな。」

「…え？」

それは、鷹矢も同じ事。

静かに零すは確信の呟き。喜びを露わにしたスノウとは対照的な、あまりに静かな逆転の閃き。
ＬＰを守りきったと安堵するスノウに相反し、鷹矢の落ちることなく言葉を発し…
そのまま、更に再び。
どこまでも、どこまでも猛々しく―

「伏せていたのが全体保護ではなく、対象を取る【安全地帯】で助かったぞ！そのおかげで、俺は『Ｎｏ．１５』で勝利する事が出来るのだからな！『Ｎｏ．１５』は、１ターンに２度まで効果を使用出来る！」
「１ターンに２度!?ふ、ふざけないで！効果破壊にバーンダメージ、普通、そんな強力なエクシーズモンスターの効果は１ターンに１度でしょう!?何をそんな勝手なことを…」
「誰が！いつ！『Ｎｏ．１５』の効果が１ターンに１度だと言った！そんな常識で『Ｎｏ．』を測るな…やはり『Ｎｏ．』の真価は、この俺が使ってこそ輝くのだ！再び『Ｎｏ．１５』の効果発動っ！オーバーレイユニットをもう一つ使い…がら空きとなった『Ｎｏ．２３』を破壊し、その攻撃力分のダメージを雪女！貴様に与える！」
「ッ!?」

スノウの叫びを意に介さず。
その予測と予想を裏切るかのようにして、鷹矢の宣言を受け残った光球が吸い込まれたかと思われたのと同時に…
再度蠢き始める『Ｎｏ．１５』。漆黒で無表情の操り人形が、あまりに不気味に再び立ち上がり起動を開始し始める。
…そして、その動きを見て顔を引きつらせ始めた『薄氷の麗人』、雪霜　スノウ。
当然だ…
何せ、一度止めて安堵していたところに再び恐怖が…
そう、常々から美しいモノしか視界に入れたくないと決めている彼

女の目に、あろうことかこの世で彼女が『最も苦手』としているシリアルキラーテイストのホラー人形が、無表情のまま再び蠢きながら迫りつつあるのだから。
果たして…
この世で最も嫌うホラーなキラードールが、自身に襲い掛かろうとしているその光景はソレを最も苦手としている彼女の目にはどのように映るのだろう。
…逃れられないリアルな恐怖、逃げても逃げても追ってくる死の人形。
そんな、理屈では説明できないトラウマとなっている、この世で最も恐怖を感じるホラー人形に文字通りＬＰという名の命を狙われ…
「ヒッ!?い、いやぁぁぁぁぁ!」
「うむ!ようやく乱れを見せたな!だが容赦はせん…貴様が言ったのだ!プロならば弱肉強食は当たり前、喰らわれる方が悪いのだと!ゆけぇ、『Ｎｏ．１５』!」

けれども、全く慈悲もなく。
先ほどスノウが言った通り、プロデュエリストにおいては蹴落とし合い、潰し合いは当たり前…
単純明快、直截簡明。心の弱い者が得てして悪く、負ける方が『悪い』のだ。
そう…真剣勝負の戦いの場では、折られる方がただただ悪い。
だからこそ、全くの容赦なしに。涙を流し、悲鳴を上げるスノウへと向かって…
全く無慈悲に、全く戸惑う事もなく。彼女の苦手なモノですら、全く手心を加えることなく迫らせる鷹矢の姿勢はまさしく弱肉強食の世界に飛び込むに相応しい、忌々しいまでの強者の風格。
…それは例えるならば、立ち入り禁止の花園ですら土足で踏み入る無法者。
そう、誰もが踏み入るのを躊躇するような特別な空間であろうと

も、己の覇道をただただ突き進み続ける鷹矢が…
今更スノウに対し気遣いだとか敬意だとか、『そんな事』を気にするわけがないのだ。
ただ、ひたすらに…ただ、真っ直ぐと。
己の目的のためだけに、立ち塞がるモノは全て粉砕する。その思いの化身と化した『Ｎｏ．１５』が、怯えるスノウに対し無感情のまま砲台を向け始めたかと思うと…
恐怖の根源に訴えかける恐ろしき黒の人形が、冥界を守護する魂の騎士を木っ端微塵に削り落とし。
そのまま、彼女の場に残った銀河の竜さえもその波動で吹き飛ばしながら…
『Ｎｏ．１５』の名の通り、今まさにジャイアント・キリングを達成せんとして―

「俺達に楯突く敵を…『Ｎｏ．』を……消し去れぇぇぇぇ！悪夢壊砲、ナイトメア・テラーカノォォォォォンッ！」

―！

「ッ…キャアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」

雪霜　スノウ　ＬＰ：１７００→０

放たれる凶弾、慈悲なき砲弾。

見目麗しき『薄氷の麗人』の、その怯えた悲鳴もろとも吹き飛ばす一撃はあまりに凄まじき光景となりて…

ピー…

無機質な機械音と共に、高校生がトッププロに勝利した事を周囲の人間達へと伝えていた―

―…

終了後。

「スノウちゃんや…だ、大丈夫かいのぅ…」
「…」
「わ、悪いのは儂じゃ、儂が全部悪いんじゃ！貧乏くじ引かせてしまって済まなんだ…まさか、お主が負けてしまうとは…」
「…」
「じゃから気落ちするでない！儂が悪いんじゃ…儂が、『Ｎｏ．を使って鷹矢にプロの厳しさを教えてやれ』と頼まんかったら…『Ｎｏ．』はお主のデュエルの邪魔をせず、いつもの様に『六花』本来の力を存分に発揮し決してあのような結果にはならんかったはず…」
「…」

スタジアムから控え室へと繋がる、光源のない暗い通路。
そこには、たった今デュエルを終えたばかりの『薄氷の麗人』を慰めている一人の老人の姿があった。
…長巨大決闘者育成機関『決闘世界』最高幹部、『妖怪』と呼ばれし翁、綿貫　景虎。
その白髪と白髭に隠れた小さな体躯で、廊下に座り込み見るからに落ち込んでいる『薄氷の麗人』へと寄り添いながら。まるで孫か曾孫を慰めるかのように、優しく頭を撫でていて。
そして、頭を撫でられている雪霜　スノウもまた…
いい歳であるが故に、少女のように泣き腫らしてはいないものの。けれどもその表情はどこまでも暗く、今のデュエルの敗北を必要以上に重く受け止めているのだろうか。
そう…トッププロである自分が、まさかまだプロにもなっていない高校生に搦め手を使った挙句に真正面から叩き潰されるだなんて…
…と、トッププロにあるまじき失態を見せてしまった自分を、スノウはどこまでも責めている様子で…

「…綿貫さん…私、今度のチャンピオンズ・リーグは辞退いたしますわ…」
「ぬぉ!?」

だからこそ、鼻を啜りながらもようやく言葉を漏らしたスノウのその発言に、綿貫が驚いてしまったのも無理はない。

「な、何を言うんじゃスノウ！お主の出場は既にほとんど決定しておるんじゃぞ!?」
「でも、まだ確定してはいませんわ。それに、噂では学生を…天城　遊良を出場させるというじゃありませんか…」
「そ、それは…」
「天城　遊良と言えば、さっきの天宮寺　鷹矢と互角の力を持つ子だ

とか…私、完全に自信をなくしてしまいましたわ。正直、今学生と…天城　遊良と当たったら、きっとこのデュエルを思い出してしまいそう…」
「じゃが、お主の出場は世界中が熱望しておる。アネモネちゃんに何と言ったら良いか…」
「いいえ。母ならきっと、こんな不甲斐ない結果を見せた私に出場を辞退するよう勧めてくるでしょう…むしろ、もう『決闘世界』に提言されていらっしゃる頃かも…お母様なら、やりかねませんわ。」
「む、むぅ…」
「…それに、言い訳できませんわ。彼が『Ｎｏ．１０３』の効果を発動した時…私が『しらひめ』ではなく『カンザシ』の効果でソレを受けていれば…彼のダーク・リベリオンの効果も『しらひめ』で防ぐ事ができ、結果は変わっていたかもしれませんもの。それに、『Ｎｏ．１０３』が現れたとき…彼には『隙などありません』と言いましたけれど、実は『Ｎｏ．１０３』の美しさに心奪われ動揺してしまいましたの。だから『Ｎｏ．１０３』をリリースし奪ってしまった…あそこでティアドロップの効果を使わなければ、ダーク・リベリオンをリリースできていた。でも、ソレを私はできなかった…それは言い訳の仕様が無い私のミス、プロとしてあるまじき失態です。これもお母様が許してくれるはずありません…確実に叱れることでしょう。」
「スノウちゃんや…」

しかも、ソレが単なる自暴自棄などでは断じてなく…
スノウが自らの失態とミスと、そしてトッププロとしての不甲斐なさを客観的に理解し、把握し、そして受け入れてしまったからこそ―
スノウが、選出がほぼ確定していた『チャンピオンズ・リーグ』への出場を辞退するなどと口走ったことを、綿貫は痛く理解してしまったのだ。
そう、あのデュエルの決着を見たときに、綿貫だって思ってしまった。もしスノウが『Ｎｏ．』に拘らず、『六花』としての動きで終始攻めてきていたら…デッキの動きがチグハグになってしまう『Ｎｏ．』に

囚われることなくデッキのポテンシャルを発揮しきれ、鷹矢に遅れを取るなんて姿は決して見せなかったはず。
…それはあらゆる効果に連動して自分のカードまでも無効化してしまう『Ｎｏ．２３』との噛み合いの悪さもそう。そのせいで彼女も行動が制限されたり、逆に『Ｎｏ．』を使うことを頭に入れすぎて『植物族』のみしか呼び出せなくなる『六花』の強力な効果との噛み合いがわるくなったりと…
とにかくあのデュエルは、トッププロが高校生相手に見せるようなデュエルではなかったと言う事を客観的にデュエルを見ていた綿貫も、そしてデュエルをしていたスノウもまたわかっているのだろう。
…しかし、その言い訳が通用するのは精々アマチュアまで。
例えプロならば、どんなカードを渡されてもそのポテンシャルを発揮し周囲の望むデュエルを行わなければならない。それがプロとしての努めであり、プロとしての誇りであり…プロであるが故の、逃れられない責任でもあるはずで。
それもスノウはただのプロなどではなく、最前線で戦うトッププロであるのだから…
そんなデュエリストが、鷹矢を陥れる為だけに使った『Ｎｏ．』の所為で逆に負けましたなどと言う事など。例えデュエル終了後の誰もいない廊下であったとしても、口が裂けても言えるはずもないのだから。

だからこそ…

「じゃったら、儂からアネモネちゃんに一言…」
「綿貫さんが…お母様に進言？え、出来るのですか？不機嫌なお母様に…綿貫さんが。」
「あ、いや……む、無理…じゃな……不機嫌な時のアネモネちゃんは誰にも…トウコ以外には誰も…手が、つけられん…」
「でしょう？ですから無理な話ですわ。お母様が尊敬されている『烈火』様のお話ならばともかくとして、例え私が抵抗してもお母様の手

で結局は私のチャンピオンズ・リーグ出場は白紙に戻される…でしたら、せめてケジメは自分で取りますわ。私も…一人のプロなんですもの。」
「わかった…お主の決意がそこまで固まったのならばもう儂からは何も言うまい。スノウちゃんや、来期が始まるまで少し戦場を離れて休むが良いぞ。お主、ここの所働き詰めじゃったからのぅ…この機会に、少しくらい羽を伸ばしたところで誰も文句は言えんじゃろうて。」

全てのプロデュエリストの父であり祖父であり曽祖父でもある古老の『妖怪』が、心を傷付けられた可愛い可愛い娘へと…
慈しみの心にて、少しばかりの休息を提案した…
その時だった。

「え、休んでもいいんですの!?でしたら是非ともやりたいことが出来ましたの!さっきの『Ｎｏ．１０３』！あのお美しいカードの開発を今から打診いたしましょう!?ね？ね？お願いしますわ綿貫さん！私、あのカードがどうしても欲しいんです！私がテスターに立候補しますから、決札社の玖我社長にご連絡とっていただけませんこと!?」
「フォ!?」

一転…
先ほどまでの、今にも泣き崩れそうだった表情から即座に一転。
銀幕の女優も顔負けの表情の切り替わりを持ってして、今度は何やら綿貫に対し辛抱堪らんと言わんばかりの剣幕にて攻寄り始めた雪霜　スノウ。
…休んでも良いと言われた途端に、この切り替わりの良さは流石は最前線で戦っているトッププロとしか言いようがないものの…
けれども、既に言質は取ったと言わんばかりのままに。
スノウはそのまま、幼子の時分を再現するかのようにして…全てのプロの祖父でもある老人へと、猫撫で声で甘えるだけ。

「ね？ね？おじいちゃまなら出来るでしょう？ねぇお願いですわぁ！私に『Ｎｏ．１０３』を一刻も早く下さいまし？」
「お、お主…も、もしかしてチャンピオンズ・リーグに出るより、一刻も早くさっきの『Ｎｏ．１０３』が欲しくなっただけなんじゃ…」
「あら、心外ですわ。それはそれ、これはこれに決まっているじゃないですか。でも…うふふ、あの美しい『Ｎｏ．１０３』に関しては、誰にも先は越させませんと決めましたの。だからお願いいたします、決札社が一番仕事が速いんですの、私の為にお願いいたしますわおじいちゃまぁ。」
「お、おじいちゃまは止めんか…お主にそう言われると断れんの知っておるじゃろうに…と言うか、なんで儂から玖我君に話を通すんじゃ？お主なら、マネージャーから一報でも入れさせれば手続きなしで優先的にテスターに…」
「いいえ、いくら婚約者相手でも、正式な依頼は手順をちゃんと踏まないと。向こうも仕事ですし。」
「ブッ!?こ、婚約者ぁ!?雪霜家のお主が、く、玖我家の栄震君とこ、婚約じゃとぉ!?」
「あら、言ってなかったかしら。」
「聞いておらんわ…こ、これも時代かのぅ…玖我と雪霜がくっ付くなぞ、お主らのご先祖たちが聞いたら卒倒するぞい…」
「それより早く玖我社長にご連絡してくださいまし？ねぇ早く早くぅ！」
「わ、わかったわい、引っ張るでないわ……全く、したたかなのは母親譲りじゃのう…」

心機一転。
先ほどまでの落ち込みようはどこへやら。これまで碌に休みも取れていなかったゆえの反動か、綿貫に『休んでも良い』と言われたことに対しスノウは少々過剰な反応を見せながら…
新しく見つけた目標の為に、再びその足で立ち上がったのだった。

―…

その夜…
すっかり日も落ち、これから深夜にかけて益々夜も更けていくであろう時間帯。

「ほれ、着いたぞい。…全く、遠慮なしにバクバク食いおってからに。」
「ジジイが好きなだけ食えと言ったからだ。言質は取ってある。」

プロテストの喧騒も一段落し、トッププロに勝利したご褒美という名の名目でデュエリアにある超高級レストランで綿貫に夕食をご馳走してもらった鷹矢は…
明日の決闘市への帰還に向けて休む為、昨日から宿泊しているホテルに到着していた。

「ま、アレだけ食べればお主も満足じゃろうて。何しろあの店のシェフは若いながらもデュエリアの美食コンクールで何度も優勝しておる。実力は折り紙つきじゃ。」
「うむ、中々良い味だったと思うぞ。だがスープと肉料理の深みは遊良の作った飯の方が上だったな。特に肉料理だ…ワインと肉のマリアージュは無限にあるが、あの牛肉を煮込むのならばもっと南の方の重めの赤で煮込み仕上げるのが正解だった。だがあの店のは少々ソースがフレッシュ過ぎた所為もあって口当たりにほんの少しだが余韻が足りていない。遊良ならば、もう数年熟成させたワインで煮込みつつソースにも手を加え完璧に仕上げていただろう。」
「…何を知ったか振りしとるんじゃこのド阿呆、お主に美食の何がわ

かるんじゃ。」
「む？事実を言ったまでだが？ジジイこそ遊良の料理の何を知っている。」
「酒も飲めんガキが知ったかぶりをするなと言っておるんじゃ。大体お主、良いワインなんぞ飲んだ事もないじゃろ？」
「だから何を言っているのだと言っている。ウチにはジジイが集めた酒が飲み切れんほど大量にあるのだぞ？あの酒道楽が集めた古今東西、あらゆる種類の酒が専用の地下室に保存されている…それを遊良が料理に使っている、正直に言って、さっきのレストランよりも扱っている酒は上等のモノばかりだ、ウチにある酒は。」
「む…確かに鷹峰の集めた酒ならば…って、そんなコトはどうでも良いんじゃ、それより儂が言いたいのはじゃな、何でお主のようなガキが酒の味を知っておるのかと言う事であって…」
「指摘する点はまだまだあるぞ。見栄えも食事の一つだ、食器の磨き方も丁寧だったが少々甘い部分があり新人の教育が足りていない点とそれから…」
「わかったわかった！…そう言えば【王者】の孫じゃったのお主…どうりで目と舌が肥えておるはずじゃ、赤子の頃から余程美味いモン食って育ってきたんじゃな…じゃから、そんなお主がそれほど絶賛する天城君の料理に儂の方が興味沸いてきたわぃ。」
「わかればいい。だが中途半端に美味い飯を食ったおかげで腹が減ってきたな…遊良の飯を思い出したら、早く家に帰って飯が食いたくなったぞ。」
「…お主…アレだけの料理をアレだけ食っておいてまだ食い足りんじゃと？…仕方ないのぅ、後でルームサービスでも頼むが良い。どうせお主にかかる料金は全て『決闘世界』持ちじゃからな。」
「うむ。」

そして、車を降りつつロビーに入りながら…そんな他愛無い話を続けている、天宮寺　鷹矢と綿貫　景虎。
鷹矢を送り届けるために一緒にロビーを歩く綿貫の姿は、傍から見

れば曽祖父と曾孫の微笑ましい一時のようにも見えるものの…
しかし、ソレはあくまでもプロデュエリスト達の父であり祖父であり曽祖父のような存在と呼ばれている綿貫が、彼の本当の祖父ではありえない様な甘すぎる対応にて鷹矢に寄り添っているからこそ繰り広げられているとも言えるのだろう。

「それより鷹矢…お主、春の任命式だけは『絶対』に遅刻するでないぞ？ぜぇっっったい、じゃぞ？」
「む？」

すると、鷹矢を送り届け終わったであろう綿貫が。
高層ホテルゆえに到着まで時間がかかっているエレベーターの前で、鷹矢へと向かって明らかに念を押すようにして…ふと、そんな事を言ってきた。

『任命式』…

綿貫の言ったソレは、新年度の始まりと同時に行われる新人プロの最初の仕事でもある。
感覚としては、新社会人たちが行う入社式に近いモノとも言えるだろうか。厳しいプロテストを合格し晴れてプロデュエリストの資格を得た者達が、全国に散らばる前に一度デュエリアの地にて一同に集い…
プロデュエリストを統括している超巨大決闘者育成機関『決闘世界』により、大勢の来賓たちの前でプロデュエリストとして『任命』されることで初めて新人たちは正式な『プロデュエリスト』と名乗る事が許される、古来より続く正式な式典。
…それが、いわゆる『任命式』と呼ばれるモノ。
そして、綿貫が念を押して鷹矢へとソレを伝えてきたのにも理由がある。
そう、式典と言うだけあって、その場には毎年多くの著名人や各界

の有名人なども招待されている。それは現役のトッププロデュエリスト達は勿論のこと、政界の重鎮や財界のドン達、諸外国からの使者だったり時には王族やロイヤルファミリーや貴族だったり…

更には、稀に都合のついた【王者】も招待されていたりと、とにかく決して無碍には出来ない者達が来賓として大勢招待されているモノだから、そんな者達の前で主役である新人プロが『欠席』や『遅刻』と言った失態を犯すわけには断じていかないのだ。

かつて…その場にて、若さに任せた勢いにて『とある来賓』の怒りを買った生意気な新人プロが居たと言う。しかし、その新人プロはいつの間にか文字通り『消えて』しまっていたらしく、様々な容疑者が浮かび上がったもののその全員が簡単には裏を暴けるような立場ではなかったために、その事件はいつの間にか自然と闇に消えてしまったと言う事もあった。

…だからこそ、綿貫は念を押す。

普段から遅刻の常習犯、誰に対しても不遜な態度しかしないこの恐い物知らずは、そんな都市伝説を知っていてもなお態度を改めるはずもない。ソレ故、悪い意味で祖父を超える器を持ったこの若き大馬鹿者にはいくら釘を刺しても刺したりないのだとして…

本気の声にて、冗談では無いのだとして声をかけているのであり…

しかし…

「わかった。出来る限り善処する。」

「ぜんっ!?ば、馬鹿モン、何が善処するじゃ！『出来る限り』じゃ困ると言っとるのがわからんのか!?…全く、本当に鷹峰にそっくりな奴じゃわい…いんや、大和の目が光っとった分、大人しくさせられとった鷹峰の方がまだ幾分マシじゃったわぃのぅ…」

「む…あんなクソジジイと俺を比べるな。しかもクソジジイの方がマシだっただと?ジジイ、笑えぬ冗談は言うものじゃないぞ。」

「そういうところじゃぞ。じゃが本当にどうしたもんかいのぅ…誰かお主を見張り、ちゃんと目を光らせてくれる者がおらんと任命式に本

当に遅刻してきそうじゃ。」

それでも、事態を全くもって重く受け止めていない鷹矢に対して。

呆れつつも見捨てられるわけもない綿貫が、どうしたモノかと頭を抱え悩み初めてしまう。

「見張り…遊良ではダメなのか？」

「ダメに決まっとろうが！その頃は新学期が始まっておるんじゃぞ？…それにその頃は天城君もそれ所じゃなくなる頃じゃろうし…」

「む？それ所ではなくなる…それはどう言う事だ？」

「お主には関係ないわい。それより…うぅむ…大和の猫の目のようなモノを持つ者となると…」

その小柄な体躯を更に折り曲げ、頭を抱え本気で悩み始めてしまった『妖怪』綿貫　景虎。

…白い髪と白い髭に覆われたその奥底にある今の彼の表情は、果たして一体どのようなモノとなっているのだろう。

未だかつて、ここまで決闘界の父と呼ばれる『妖怪』を悩ませた者は居たのだろうか。いや、これまで存在していた聞かん坊や暴れん坊、やんちゃ者や無法者であろうとも、きっと綿貫をここまで悩ませた者は居なかったのではないだろうか。

そう思えてしまうほどに悩んでしまっている綿貫の姿は、およそ誰も見たことのない姿となりて夜の静かなホテルのエレベーター前で小さく鎮座してしまっており…

すると…

悩みで頭を抱えている綿貫と、ソレを全く気にも留めていない鷹矢へと向かって。

…不意に、そして静かに。

彼らの後ろから、儚くも小さな声がかけられて―

「…私が付き添うわ。」
「ほ？」

背後から、鷹矢と綿貫へと向かってかけられた声。
それは儚さの中に確かな可憐さを感じさせるような、うら若き乙女の声であった。
…そして、反射的に。
綿貫と鷹矢が、その声のする方へと振り向いた…
そこに、居たのは―

「私も、決闘市から行くから…私なら、彼を一緒に会場まで連れていける。」

決闘学園ウエスト校３年、竜胆　ミズチ。
今日のプロテスト最終試験にてプロに勝利し、堂々の『合格』を勝ち取った白髪で華奢な体躯をした少女が、そこには立っていた。
外で夕食でも取ってきたのだろうか、鷹矢たちの後から現れつつ…
学生らしくウエスト校の制服を身に纏い、話は聞いたと言わんばかりに声をかけてきた今のミズチの表情は…プロテストに合格したという自信も相まって、どこか堂々としている風にも見える。

「竜胆　ミズチ…お前もこのホテルだったのか？」
「…ええ、アナタと一緒。…一泊して、明日の便で決闘市に帰るの。…今日はお疲れ様。トッププロ相手に良いデュエルだったわ。」
「ぬぅ…俺としてはあまり良いデュエルだったとは思えんのだが…」
「…いいえ、凄かったわ。あの『薄氷の麗人』に勝ったんだもの。本当に良いデュエルだったわ…流石ね。」
「フッ、お前にそう言われると少しは気が紛れる。ならば素直に褒め言葉として受け取っておくぞ。」
「…ふふっ、ええ。」

…そして、現れたミズチは鷹矢へと向かって、先の『薄氷の麗人』と鷹矢のデュエルの感想を述べたかと思うと。
そのまま、先ほどまで頭を悩ませていた綿貫へと向かって…
その儚くも気怠げな雰囲気を持ってして、続けて口を開くのみ。

「…私が彼の家に迎えに行って、そのままデュエリアまで付き添う…会場は今日のスタジアムだし、泊まるところもこのホテルだから…朝、私が彼を起こせば多分…大丈夫。」
「お主は…ほっほ、大蛇の妹のミズチじゃな？なんじゃなんじゃ、お主ら知り合いじゃったのか。しかしなるほど…確かに、竜胆の『眼』を持つお主ならばある意味適任かもしれん。それに来年度の決闘市出身のプロはお主ら2人だけじゃしのぅ…うむ、お主が引き受けてくれるならば任せられそうじゃ。」
「…それと、明日の帰りも空港まで私が一緒に行くわ。私には視えるの…あなた、明日の朝も寝坊して…飛行機に乗り遅れる。」
「なんだと!?」
「待てい…鷹矢、お主どこまでポンコツなんじゃ。」
「…安心して。ちゃんと私が起こしてあげるから。それに…朝に弱いところも…」
「む？」

しかし、言葉を続けるに連れて。
何やら、鷹矢へと向けていた視線を不意に逸らしつつ…次第に、その言葉を小さくしていきながら俯いてしまったウエスト校3年、竜胆ミズチ。
俯き加減に隠された、その白髪と同じくらい白い彼女のその頬が…ほんのりと赤みを帯びているようにも見えるその姿は、果たして見間違いなのかどうなのか。
…しかし、当の鷹矢はと言えば。
何やら全く何もかも分かっていなさそうな雰囲気にて、突然声を窄

めてしまったミズチに対し…図太くも鈍感に、その頭上に疑問符を浮かべているような素振りを見せているだけではないか。
…それは若さゆえの特権か、はたまた甘酸っぱい1ページか。
夜のホテルのエレベーターの前で、制服を着た高校生の男女二人が妙な雰囲気にて向かい合うその光景は何とも筆舌に尽くし難い、それでいて誰もが一度は目にしたことあるであろう柔らかい雰囲気を纏っているのはきっと気のせいなのでは断じてないはず。
そんな、何やらむず痒くなるような若者特有の空気感を纏う二人を見て…

「フォフォッ、若いのぅ、若いのぅ。」

…と、悠久を生きている『妖怪』は…
何やら微笑ましそうに、しかしどこか嬉しそうにその口を緩めていたのだった―

―…